



聖クルアーン

The Holy Qur'ān

JAPANESE TRANSLATION

ISLAM INTERNATIONAL PUBLICATIONS



聖クルアーン

The Holy Qur'ān

JAPANESE TRANSLATION

ISLAM INTERNATIONAL PUBLICATIONS

目 次

章	項 目	頁
1.	アル ファーティハ 開扉 Al-Fātihah	1
2.	アル バカラ 牝牛 Al-Baqarah	5
3.	アール イムラーン イムラーン家 Al-Imran	86
4.	アン ニサー 女 Āl-Nisā	134
5.	アル マーイダ 食卓 Al-Mā'idah	176
6.	アル アンアーム 家畜 Al-An'ām	203
7.	アル アーラーフ 高壁 Al-A'raf	236
8.	アル アンファール 戦利品 Al-Anfāl	272
9.	アル タウバ 改悛 Al-Taubah	287
10.	ユースス ヨナ Yūnus	312
11.	フード フード Hūd	332
12.	ユースフ ユースフ Yūsuf	355
13.	アッラード 雷 Al-Ra'd	374
14.	イブラヒーム アブラハム Ibrahim	384
15.	ヒジル ヒジル Al-Hijr	394
16.	アンナハル 蜜蜂 Al-Nahl	406
17.	バニーイスラーイール イスラエル Bani Isrā'il	425
18.	アル カハフ 洞窟 Al-Kahf	445
19.	マルヤム マリア Maryam	465
20.	ター・ハー ター・ハー Tā Hā	477
21.	アル アンビヤー 預言者 Al-Anbiyā'	492
22.	アル ハッジ 巡礼 Al-Hajj	508
23.	アル モーメヌーン 信者たち Al-Mu'minūn	524
24.	アン スール 光り Al-Nūr	538
25.	アル フルカン 識別 Al-Furqān	553
26.	アッショアラ 詩人 Al-Shu'arā'	563
27.	アン ナマル 蟻 Al-Naml	582
28.	アル カサス 物語 Al-Qasas	596
29.	アル アンカブト 蜘蛛 Al-'Ankabūt	610
30.	アツ ルーム 羅馬人 Al-Rūm	621
31.	ルクマーン ルクマーン Luqman	631
32.	アツ サジュダ 叩頭 Al-Sajdah	637
33.	アルア クザーブ 同盟 Al-Ahzāb	641
34.	サバ サバ Al-Saba'	656
35.	ファーティル 天使 Al-Fātir	666

36.	ヤー・スィーン	ヤー・スィーン	Yā Sin	674
37.	アッサーファート	整列者	Al-Sāffat	684
38.	サード	サード	Sād	699
39.	アッヅマロ	群れをなして	Al-Zumar	709
40.	アルモメン	信者	Al-Mu'min	721
41.	ハーミーム・アッサジュダ	詳細	Hā Mīmsajdah	733
42.	アッ シューラ	相談	Al-Shura	742
43.	アッ ゾフロフ	黄金の装飾	Al-Zukhruf	751
44.	アッ ドハーン	煙	Al-Dukhān	761
45.	アル ジャーシア	跪坐	Al-Jāthiyah	766
46.	アル アフカーフ	砂丘	Al-Ahqāf	771
47.	ムハンマド	ムハンマド	Muhammad	777
48.	アル ファトホ	勝利	Al-Fath	784
49.	アル ホジョラート	私室	Al-Hujurāt	790
50.	カーフ	カーフ	Qāf	794
51.	アッ ザリヤート	まき散らす風	Al-Dhāriyāt	799
52.	アッ トウーロ	山	Al-Tūr	805
53.	アッ ナジュム	星	Al-Najm	810
54.	アル カマル	月	Al-Qamar	816
55.	アッ ラフマーン	慈悲深き神	Al-Rahmān	822
56.	アル ワケア	不可避	Al-Wāqiah	830
57.	アル ハディード	鉄	Al-Hadīd	837
58.	アル モジャーダラ	訴える女	Al-Mujādilah	843
59.	アル ハシル	追放	Al-Hashr	848
60.	アル ムムタヘナ	試女	Al-Mumtahanah	853
61.	アッ サッフ	隊伍	Al-Saff	857
62.	アル ジュモア	集礼	Al-Jumu'ah	861
63.	アル ムナフェクーン	似非信者ども	Al-Munafiqun	864
64.	アッ タガーブン	損得明示	Al-Taghābun	867
65.	アッ タラーク	離婚	Al-Talāq	870
66.	アッ タフリーム	禁止	Al-Tahrīm	873
67.	アル ムルク	大権	Al-Mulk	877
68.	アル カラム	筆	Al-Qalam	881
69.	アル ハーカ	必然の運命	Al-Hāqqah	886
70.	アル マアーリジュ	登昇	Al-Ma'ārij	890
71.	ヌーフ	ノア	Nūh	894
72.	アル ジン	妖霊	Al-Jinn	897
73.	アル ムザンメル	外套をまとう者	Al-Muzzammil	901

74.	アル	ムダッセル	かぶる者	Al-Muddathir	904
75.	アル	キヤーマ	復活	Al-Qiyāmah	909
76.	アッ	ダハロ	人間	Al-Dahr	913
77.	アル	ムルセラート	遣わされた者	Al-Mursalāt	917
78.	アン	ナバ	知らせ	Al-Naba'	922
79.	アン	ナーゼアート	引き抜く者	Al-Nāzi'at	926
80.	アバサ	眉をひそめて	'Abasa		930
81.	アッ	タクイール	包まれる時	Al-Takwīr	934
82.	アル	インフェタール	割れる時	Al-Infitar	937
83.	アッ	タトフィーフ	量目をごまかす徒輩	Al-Tatfiif	939
84.	アル	インシカーク	破裂	Al-Inshiqāq	942
85.	アル	ブルージュ	星座	Al-Buruj	945
86.	アッ	ターリク	明けの明星	Al-Tāriq	948
87.	アル	アーラ	いと高き	Al-A'la	950
88.	アル	ガーシア	圧倒的災難	Al-Ghāshiyah	952
89.	アル	ファージル	暁	Al-Fajr	954
90.	アル	バラード	邑	Al-Balad	957
91.	アッ	シャムス	太陽	Al-Shams	959
92.	アル	ライル	夜	Al-Lail	961
93.	アッ	ドハー	朝	AAI-Duha	963
94.	アル	インシラー	心を開く	Al-Inshirah	965
95.	アッ	ティーン	無花果	Al-Tin	967
96.	アル	アラク	凝血	'Al-Alaq	969
97.	アル	カドウル	定め	Al-Qadr	971
98.	アル	バイエナ	明証	Al-Bayyinah	973
99.	アル	ズイルザーロ	地震	Al-Zilzal	975
100.	アル	アーデアート	軍馬	Al-Adiyāt	977
101.	アル	カーレア	大災難	Al-Qarī'ah	979
102.	アッ	タカーソル	競い合い	Al-Takāthur	981
103.	アル	アスル	時間	Al-'Asr	982
104.	アル	ホマザ	中傷者	Al-Humazah	983
105.	アル	フィーロ	象	Al-Fīl	985
106.	クライシュ	クライシュ族		Al-Quraish	986
107.	アル	マウーン	施し	Al-Mā'un	988
108.	アル	コーサル	潤い	Al-Kauthar	989
109.	アル	カーフェルーン	不信者ども	Al-Kāfirūn	990
110.	アン	ナッスル	助け	Al-Nasr	991
111.	アル	ラハボ	腐ってしまえ	Al-Lahab	992

112.	アル	イフラス	独一者	Al-Ikhlās	994
113.	アル	ファラク	黎明	Al-Falaq	996
114.	アン	ナース	人類	Al-Nās	997

序 文

慈悲深く、恵み^{あまね}遍くアッラーの御名^みにおいて。

聖クルアーンはイスラーム教の聖典である。凡そ1400年前、アラビアにおいて、全能なる神アッラーがその使徒であるムハンマド（彼に平安あれ）に啓示したものである。

この啓示は、ムハンマドが四十才の時に始まり、爾来23年間断続的に授けられた。これ等一連の啓示は、その都度、使徒側近の者たちの手によって記録され、後に聖典として編纂されたのである。筆者として、この聖なる仕事に従事した者たちの中には、アブー、バクルやアリ、ザイド・ビン・サーベッド、ズベール・ビン・アルアワツム（彼等に恵みあれ）たちがいる。この外、多くの弟子たちが使徒に啓示された通り、聖章節を一字一句違えることなく暗誦していたのである。ちなみに、当時のアラビア人は、卓越した記憶力の持主ぞろいで、アラブの詩を十万節以上も暗誦している者も稀ではなかったという。このように聖クルアーンは、口述筆記と暗誦という二つの方法の集積によって、使徒に啓示された通り、一語たりとも遺漏なく記載^{かいざん}されている。欧米の学者たちは、これまでにさまざまな角度から、聖クルアーンの改竄を立証すべく試みてみたが、皆ことごとく失敗した。

ウィリアム・ムイール卿(Sir William Muir)はその著書「ムハンマドの生涯」(ロンドン、1912年、第1巻)の中で、次のように述べている。

ムハンマドの死後、二十数年後に、オスマンの暗殺に端を発して興った諸宗派は、争いを繰り返し、互に敵意をつのらせた結果、ムハンマドが苦勞してうち建てたイスラーム共同体を分裂させてしまった。しかし、彼等は、常に一つのクルアーンを用いた。今日に至るまで、どの時代の人々も同じクルアーンを用いたということは、不運なカリフの命のもとに編纂された啓典と全く同じ聖典が、今日まで伝えられているという動かしがたい証拠である。12世紀もの長きにわたって、これほど純粋に伝えられている文献は、他に例をみない。

また、E・M・ウエーリー(E・M・Wherry)は、その著書「クルアーンについての総合的考察」(ロンドン、1986年、第一巻P 349)の中で、次のように書いている。

クルアーンの記事は、古典の中でも最も純粋なものである。

レーン・プーレ(Lane Poole)もその著書「精選クルアーン」(ターンバー、ロンドン、1879年、序章Cページ)の中で述べている。

クルアーンが本物であるということは、疑念の余地なき事実である。(中略)すべての言葉は、1300年経た今でも、全く変らざりしか、との確信をもって読むことができる。

ボスワース・スミス(Bosworth Smith)また然り。その著書「ムハンマドとイスラーム教」(ロンドン、1974年、P 22)の中で書いている。

クルアーンの中にあるものは、まさしくムハンマドの言葉そのものであり、全く加筆も削除もされていない。

最後に、T・W・アーノルド(T・W・Arnold)教授がその著書「イスラーム教の信仰」(ロンドン、P 9)の中で以下のように述べていることを紹介する。

この改訂版のテキストには、ムハンマド自身が実際に云った言葉が書かれている。この奇跡的な聖典について、その特徴をすべて詳細に説明することは不可能であるが、イスラーム

教についての知識をほとんど持ちあわせていない読者のために、いくつかの注目すべき点を挙げてみたいと思う。すなわち、聖クルアーンはアラブだけを対象にしたものではなく、人類すべてを対象にしている。そして、使徒ムハンマドは全人類のための預言者であるとしている。

聖クルアーンは神の掟の最後の言葉であり、人類の指針となる完全無欠の聖典である。

また、クルアーンは、預言という現象が日常的な事柄であると認める唯一の聖典である。さまざまな人種、さまざまな国に属する人々が、人間の歴史の中で幾度も神の啓示を授けられて来た、と繰り返し述べている。すなわち、聖クルアーンは次のように明白に説く。原文（警告者が遣わされざりし民はなし。）〔35：25〕

原文（われわれはそれぞれの民の中から一人の使徒を選び、説かしめたり、「アッラーを崇拜し、邪神を避けよ」と。）〔16：37〕

つまり、クルアーンは、預言の現象が、新約並びに旧約聖書に書かれている預言にとどまるものではないとしている。また、聖クルアーンは、公正で、慈悲深く、恵み深い普遍の神という概念を主張し、すべての人間を人種、国籍にかかわらず公平に扱っている。そして、繰り返し強調していることは、神は分かつことも、併せ祀ることもできないその獨一性である。

聖クルアーンによれば、神と生きとし生けるものとの間には、ただ一つの関係しか存在しない。すなわち、創造主と創造物との関係である。どんな形に被造されとも、神の栄光と偉大さ並びにその永遠さを讃える書は、クルアーンを惜いて他にあらうか。また、クルアーンは、三位一体の考えを明確に否定する。神には配偶者も子もないのである。

原文（云え、「彼こそはアッラー、獨一者にして自存者、もろ人の依り頼む御方なり。彼は産み給わず、また産まれ給わず。彼と比肩し得る者、何処にも非ず。」と。〔112：2～5〕

聖クルアーンは、六つの基本的な理念を信ずることを説いている。すなわち、神の存在を信ずること、天使の存在を信ずること、神の啓示されたすべての聖典を信ずること、すべての預言者を信ずること、復活の日と審判の日を信ずること、すべてを包括する神の経綸を信ずることである。

また、聖クルアーンは性悪説を否定する。人間はすべて汚れなく生まれ出で来たとの性善説を採る。そして、神は公正であり、慈悲深く、寛容であり、情け深く、万物の主であり、宥恕者であらせられる。故に、もし神が僕たちの悔悟を受容するならば、その罪は悔悟の涙によって洗い流されるのである。

聖クルアーンの説くところによれば、贖罪とは、己が所業を悔い改め、真摯な心で神に縋ろうとした瞬間にそれはなされるとされている。人間は過去に犯した罪の如何にかかわらず、この瞬間、精神的に新しく生まれ変わり得るのである。

また、聖クルアーンは、イエス・キリストを、高貴にして尊敬せらるべき預言者なりとは云うが、ユダヤ教徒やキリスト教徒が主張するが如く、神の御子であり、人類の贖罪のために十字架の上で死んだという考え方は否定する。キリストに敵対する者どもは、十字架上で仮死状態にあったキリストを見て、すでに死せりと判断したのである。事実ユダヤ人たちは、為政者ポンティウス・ピラトにキリストの軀を引き渡してほしいと懇請し、許されて引き

取った時、わき腹の傷から新たに血が吐き出^いでるのを見て、死に至らざることを確認しているのである。また、クルアーンは、マリアの処女受胎によってキリストは生まれたとし、マリアの処女性を疑う主張を否定している。

この他、聖クルアーンは、諸聖典の中でも、他の宗教に対する見解の点で、独特なものがある。すなわち、聖書における預言を認めているばかりか、何処に降った預言であろうと、信仰の基本として信じるようイスラーム教徒に説いている。

原文（不変の掟がその中にある聖典を。）〔98：4〕

聖クルアーンによれば、すべての宗教の根幹となる神託はもともと同じものであった。すなわち、独一の神を信じることは、遵奉の誠を尽し、神の嘉賞^{かしやう}を得んために謙^{へりくだ}って、篤信^{とくしん}たることである。しかるに、イスラーム以外の宗教によれば、その道義的、社会的教えは、時代と共に、また状況に応じて書き換えられている。旧約聖書並びに福音書は、他の聖典同様神の啓示せるものとされているが、完全にもとのままであるとは云い難い。それ等は不幸にも、歴史の流れの中で、加筆改竄^{おしよ}がなされている。クルアーンはその証拠に、これ等聖典の中にはさまざまな不一致や矛盾が多すぎると看破する。

クルアーンは、人間創造の究極の目的は神を崇拜することであると説く。そして、神を崇拜するということは、単に叩頭礼拝するだけでなく、神の特質を体得しようと努力し、神の啓蒙の光と美德を具現化し、地上において神の代理者となろうとすることである。

確かに、人間は宇宙における神の最も高尚な創造物である。すべての創造物の中でも、威厳と名誉ある地位を占めている。人間は他の生物に優る地位を与えられているけれども、人間同志の間にはいささかも優劣は存在しない、とクルアーンは教える。創造主の目から見れば、身分の上下とは、人格が示す徳の有る無し、高潔か否かによって決まるのだ、と更に説く。

聖クルアーンの教えは、普遍的に行える、宗教的、社会的、経済的、道德的体系として、人間のすべての興味と活動の領域を包括している。しかし、如何に素晴らしい体系であろうとも、絶対的な道德的価値感を遵守することなしには、うまく働き得ないと厳命する。

更に聖クルアーンは、社会の様々な階層の人々の権利と義務を説き、社会的秩序と調和をもたらし、人間どうしの摩擦のもとをすべて取り除いてくれる。従って、クルアーンは、階級闘争や人間が人間を搾取するという考え方を退ける。

また、聖クルアーンは、すべての聖典の中でも、特に女性の権利を確立し、女性に対し、社会の中で尊敬されるべき高い地位を与えたという卓越性を持っている。たとえば、女性が相続する権利を保護し、その相続法を明示している。

また、信仰の自由は、クルアーンの教えの中でも特に重要な項目である。人間は、神によって、信ずるか拒否するか意志の選択をまかされている。従って、信仰を無理強いすることは、何人たりともこれは認められない。そればかりか、如何なるイデオロギーも無理に押しつけることはできないし、その人の信仰を捨てさせることもできない。或る人に、物の考え方に变化をもたらす方法が許されるとしたなら、それは説得し、彼を納得させることのみなのである。

原文（宗教は強制するものに非ず。）〔2：257〕

原文（死ぬ者にアッラーの明証を見させて死なせ、生き残る者にアッラーの明証を見させて生き残らしめんがためなり。）〔8：43〕

聖クルアーンによれば、人間は死後、その魂は復活せしめられ、それからの運命^{きだめ}は生前の所業によって決定されるという。すなわち、人の善行、悪行によって、死後の新しい生命の状態が決まるのである。

聖クルアーンの説くところによれば、イスラーム教は長い戦いの末、必ず暗闇を打ち破り、勝利をおさめ、如何なる宗教やイデオロギーにも増して世界的に理解され、全人類の指針光明となるであろう。聖預言者ムハンマドの伝承によれば、「我が弟子と目されるマハディーすなわちメシアによって、論理、道理、説得を通してイスラームの使命は大願成就されるであろう」と語り伝えられて来た。

1935年、インドのカーディアンに生まれたハズラト・ミルザ・グラーム・アハマドは1889年神の啓示により、沈滞腐敗するイスラーム教を改革すべしと命ぜられた。彼は直ちに神命に服し、「ブラヒーン・アハマディア」の名のもとに、宗教改革運動に邁進したのである。そして、自らは、「メシア」（救世主）であり、「マハディー」（神により正しく導かれた者）であると宣言した。今日、イスラーム教アハマディア派として、広く世界にその名を知られているのは、この運動の名称に由来する。

アハマディア運動は、当初より、平和的に説得すること、納得させること、世界の各地でムスリム兄弟たちに奉仕することを通して、イスラームの神託^{めしあ}を遍く世界に知らしめんと奮闘努力した結果、今日の隆盛をみたのである。現在世界 100 ケ国に運動の拠点を持つ。

此の度、日本語による聖クルアーン翻訳という偉業が成し得たのも、偏^{ひとえ}に、日本におけるアハマディア兄弟たちの努力の結晶のたまものに外ならない。

神よ、これ等僕ら^{しもべ}に一層の御加護と、お恵みを降し賜わらんことを。

1988年6月24日

アハマディア出版局事業部長 ムバーラク・アハマド・サーキ



アル・ファアティハ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く(注1)アッラーの御名
において。(注2)

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

1

注1 アラフマン(「慈悲深く」)及びアッラヒーム(「恵み遍く」)の二語は共に、彼は慈悲を示し給うた、彼は愛情深く善である、彼は許し給うた、という事を意味するラヒマを語源としている。

アラフマンとはすべての創造物に対し、その努力の如何にかかわらず、隅々まで与えられる無償の慈悲を意味するのに対し、もう一方のアッラヒームは人間の行動に対する見返りとして与えられる慈悲であるため、すべてのものに与えられるわけではないが、これを享受する者には、くり返し、あふれんばかりに与えられる。前者は神のみが示される美徳であるが、後者は人間も持ち得ることのできる美徳である。前者の慈愛は信者にも不信者にもそしてあまねく全ての創造物に与えられるが、後者の慈愛が対象とするのは、大体に於てその信者達である。聖なる預言者の言葉に従えば、前者の美徳は一般的に現世に関してであり、神から与えられる後者の美徳は来世に関連している。即ち、現世は、ほぼ行動の世界であり、来世は行動に対しての報いの世界であるが、神の美徳のアラフマンは人に現世において恵みを与え、神の美徳のアッラヒームは人に来たるべき世においてその報いを惜しみなくもたらすのである。我等が必要とし、生活の基盤とする全ては、神の恩恵に他ならず、我等がそれに値せずとも、又、我等が生まれる以前より、有難くも恵まれたものであり、来世に約束される恩恵は、我等の行いの報いとして与えられるものなのである。この事からアラフマンは生まれるより前より与えられる恩恵であり、アッラヒームは行為の結果として与えられる恩恵である事が解る。9章以外のクルアーンの全ての章は第一節の「慈悲深く、恵み遍く…」で始められるが、これは、9章は独立した章ではなく8章の続きとなっているためである。イブン・アッバスに依れば、新しい章が始められる時は必ず第一節「慈悲深く…」で始められ、それなしでは、聖なる預言者は章を始める事はなかったという事を意味する言い伝えがある。この言い伝えから判る事は(1)「慈悲深く…」という節はクルアーンの一部であり何ら余分な部分ではないという事、そして(2)9章は独立した章ではないという事である。また、このいわれは、「慈悲深く…」は、アル・ファアティハの章(第一章)の一部のみを形成し全てのクルアーンの章の一部を形成するものではないと信じこんでいる一部の人々の思い込みに対する反証ともなる。聖なる預言者は、更に「慈悲深く…」の節は全てのクルアーン中の章の一部を成すものであると言ったと伝えられている。(ブハリとクトゥニ) 全ての章の最初にこの節が存在するという事には以下の様な意味を持つ。

クルアーンは聖なる知識の宝典であり、神の特別な御加護なくしては、手をふれる事は出来ない。「清められし者以外、触れる事なかれ」(56:80)その為、ビスミッラー(「慈悲深く…アッラーの御名において」)が全ての章の始めに置かれ、イスラム教徒に、クルアーン中の神の知識の宝庫に近づく為に又その益を受ける為には、純粋な心でクルアーンに近づくだけでなく、神の助けを常に祈念せねばならない事を思い起させる。道徳や精神的事柄に關した全ての問題は何かの形で基本的な神の美徳である「慈悲」と「恵み」に關係している為、各々の独立した章の持つ意味への鍵ともなる。実際に於て、この節に述べられる神の美徳の幾つかの面を詳細に渡って示しているのが各章なのである。この決まり文句の「慈悲深く…」は聖典に先立つ聖書より取られたという論争がある。セールはZend Avestaを出典としていると主張し、ロッドウェルはイスラム以前のアラブ人達がユダヤ人の真似をし、それが最終的にクルアーンに組み込まれたとの意見を主張しているが、両者の見解共、明らかに正しくない。先ず第一にイスラム教徒達は、この形式、或いは類似の形式中の文句がクルアーンの啓示以前に知られていなかったとは、主張していないし第二に、その常とう句が、同一或いは類似の形式で、イスラム以前のアラブ人達に、たとえクルアーン中に示される以前に使われたとしても、その事が理由で、神より出でし言葉である事を否定する事は出来ないのである。実際にクルアーン中でも、ソロモンがシバの女

2. 讃えあれアッラー、万物の主、

الْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٢﴾

3. 仁慈、慈悲の主、(注3)

الرَّحْمَنُ الرَّحِيمُ ﴿٣﴾

4. 審判の日の主宰者。^{しゅふさいや}(注4)

مَلِكُ يَوْمِ الدِّينِ ﴿٤﴾

王宛に送った手紙の中に、この文句が使われている。(27:31) イスラム教徒が主張するのは、クルアーンこそ、その言葉をそうあるべき形で使用した、初めての啓示された聖典であるという事でこの主張は未だかつて論破された事がない。また、イスラム以前のアラブ人の間に、この言葉が流布していたというのも正しくない。何故なら、アラブ人達が神に対しアラフマンの名称を使用するのを嫌っていた事は周知の事実だからである。再度繰返すが、もしこの言葉が以前より知られていたとしても、その事実は、どんな民にも必ず指導者が遣わされたという事 (35:25) と、クルアーンこそ、それ以前の啓示された聖書に包括される全ての永遠に変わらぬ真実が網羅されている書である (98:5) というクルアーンの教えの真実を確認するにすぎないのである。

注2 アッラーとは、完全な美徳を有し、何ら誤ちを持たぬ唯一無比の存在である。アラビア語でアッラーが他の意味で使用される事はない。他の言語でこれに該当する言葉は全て修飾的且つ説明的であり、往々にして複数の形を取るが、アラビア語の「アッラー」が複数形を取る事は絶対にない。アッラーとは、単一の実存であり、派生したものではなく、資格を示す言葉でもない。日本語ではアッラーに匹敵する言葉がない為、アラビア語の専門家に従い、翻訳ではそのままアッラーの訳が与えられる。アッラーの最も正確な解釈としては、アルとは切り離す事が出来ず、全ての完全なる美徳を有する必然の結果として何にも依存しない存在に対し与えられた名称ということである。

注3 この節は現世の進化の法則を指している。即ち、全ての事物は発達を続け、この発達は漸進的で段階を経てもたらされ、「万物の主」こそ事物を段階的に発達、進化させる存在であるとの意味を表わしている。この行は又、進化の法則は神への信仰と矛盾しない事をも指摘している。しかし、ここで言及されている進化の過程は、一般に理解されている進化論と同一という訳ではない。進化という言葉は一般論的な意味で使われているのである。更にこの言葉から解かるのは、人は限りなく前進する為に創造されたという事実である。何故なら「アッラー、万物の主」という表現は、神は森羅万象を低い段階から高い段階へと発達させるという事を意味しており、これは全ての段階が終わった後に、果てる事のないもう一つの段階がある場合にのみ可能なのである。

注4 神の四つの美徳、即ち、“全世界の主たる事”、“愛に満ちている事”、“慈悲深き事”、そして“終末の日の、主宰者たる事”は、神の神たる礎の美徳である。その他の美徳はこれら四つの美徳の説明或いは注釈にすぎず、四つの美徳こそ、全能の玉座がまします四本柱なのである。

これらの四つの美徳が述べられる順序で、人間に与えられる神の美徳が明らかにされる。即ち、「万物の主、アッラー」とは、神が人間を造られたのと同時に、人間が精神的に前進し発達するのに必要な環境をも創られた事を意味し、アラフマン（慈悲溢る神）たる美徳は次に来る段階であって、慈愛に満ちた美徳を通して神は、いわば、人間に対しその道徳的又精神的前進に必要とされる手段と材料を手渡されるのである。そして人が手渡された手段を正しく使う事が出来れば、アッラヒームの美徳が人の為した事に対する報いを与えてくれる。そして最後に「審判の日の主宰者」が人の為した事に対する最終のそして集団としての結果を生みだし、然るべくしてその過程が完結するのである。最後の完全なる報いは最後の審判の日に下されるのであるが、一時的な報いは現世でも与えられる。但し現世での人間の行動はしばしば、他の人間、王、支配者等によって判断され、報いが与えられるという違いがあるが故に、常に間違いの起こる可能性がある。最後の審判の日に、神が裁きに出でます事は絶対の事であり、全ては神の手に委ねられる。そこでは何の間違いも、不当な罰も、不当な報いもない。又、「主宰者」という語を使うのも神が裁きを与えられる時は、定められた法律に従って審

5. 我等は汝にのみ仕え、汝にのみ救い^{こいねが}を希う。

(注5)

6. 正しい道に導き給え、(注6)

7. 汝の怒りを蒙^{かぶ}りし人々や踏み迷えし人々の道ではなく、汝が恵みを垂れ給えし(注7)

人々の道に。(注8)

إِيَّاكَ تَعْبُدُ وَإِيَّاكَ نَسْتَعِينُ ۝

إِهْدِنَا الصِّرَاطَ الْمُسْتَقِيمَ ۝

صِرَاطَ الَّذِينَ أَنْعَمْتَ عَلَيْهِمْ ۚ غَيْرِ الْمَغْضُوبِ

عَلَيْهِمْ وَلَا الضَّالِّينَ ۝

判を下す裁判官の如くではないという事を示す為である。神は主宰者であるが故に許し給い神の望まれる方法で望まれる所に慈悲をお示しになる。デーンという語を信仰を意味する語と考えれば、「審判のHの主宰者」は、真実の信仰が示される時には、人類は類いまれなる神の力の顕現を目のあたりにするが、信仰が衰えると、まるで、宇宙がその創造者である主の手をはなれ何のきまりもなくただ機械的に動くだけになってしまうという事を意味する。

注5 「我等は汝にのみ仕え」という言葉は、人が神の偉大な美德に気付いた後に第一に心を動かされるのは神への礼拝であるという事を示す為「汝にのみ救いを希いねがう」という言葉の前に置かれている。神の助けを祈念するのは信仰の衝動の後に来るもので、人は神を礼拝する事を望むが、そうする為には神の助けが必要である事に気付くのである。又、この言いまわしの中のアラビア語に複数形が用いられているのには二つの重要なポイントがある。即ち(1)人はこの世に只一人の存在ではなく自分を取り巻く社会の一部である、その為、人が神への道を歩む時には、己のみではなく他の者とも連れ立つべきである事。そして(2)人は自分を取り巻く環境を改革しない限り安全ではないという事である。

又、神が最初の四行では三人称で表わされているが、この行で突然二人称になっている事は注目に値する。これは、神の四つの美德を瞑想する事で人に創造主を拝するという押えがたい熱望が生まれ、心から神に献身したいと強く願うが為、そしてその心の満足を得んが為に、最初の四行での三人称がこの行では二人称となるのである。

注6 祈りは人の物質的、精神的、また現在及び未来の必然の全ての分野に渡っている。信者は、真直な道—最も近い道を示してくれる様祈る。時々、人は真直で正しい道を示されても、その道まで導かれる事がなかったり、導びかれても、正しい道を仙り最後まで行きつく事が出来なかったりする。祈りは人に、道を示された事で、或いは道まで導びかれたとしてもそれだけで満足せず、最後の目的地に到達するまで従い続ける事を要求する。これこそ、正しき道を示し給え(90:11)、正しき道に導き給え(29:70)そして正しき道を歩ませ給え(7:44)という意味を表わすヒダヤの意義である。実際人はあらゆる段階で神の助けを必要としており、いかなる時にあっても、この節に具体的に表わされている祈願を神にささげ続けなければならないのである。故に常に祈る事が必要である。望む事が成就されず、必要が満足されず、目標が達成されない限り、我々には祈りが必要なのである。

注7 真の信者は、正しき道に導びかれ、幾つかの方正なる行為を為すだけで、満足するものではない。真の信者は、目標をより高く掲げ、神がその下僕に、特別の恩寵を贈り始められる地位を得ようと努力する。真の信仰者は、神が選ばれし者に与え給うた神の恩寵の例を崇め、彼等に勇気づけられる。しかし単にそれだけに停まらず一層の努力をして神が恩寵を与えし者達の中に加えられる様、彼等の内の一人となる様、祈るのである。これらの「恩寵を賜わった者達」については4:70で触れられている。又、祈りは一般的であり何ら特定の恩寵に対し祈られるものではない。信仰者は、神が彼に最高の神聖なる恩寵を与えて下さる事を懇願し、神は、適切と思われ又その信者がそれに値するだけの恩寵を、神の御意志により与えられるのである。

注8 アル・ファアティハの章(第一章)の言葉と文章の配列の順序は実に美しい。前半は神について、後半は人についてであるが、互いの色々な部分が驚嘆すべき形式で関わり合っている。前半に書かれている全ての高貴な美德を有する存在を意味する“アッラー”に対応し、後半には、我等は、「汝にのみ仕え」という文章が配されている。熱心な信者は神を何の欠点もなく全ての完全な美德を所有する存在と思えば、直ちに、心の奥底から自ずから、「御身のみを崇拝します」という叫びがわき出るのである。又、「全世界の主」という神の美德に対しては、「汝にのみ救いを希い願う」という文章が対応している。イスラム教徒は、神こそ、世界の創造主にして支持者、そして全ての発展の源である事を知れば、「御身のみに助けを願います」と言い、神の庇護を直ちに求めるのである。数知れぬ程の恵みと我等の日の糧を惜しみなく与えて下さる主である、アラフマンの美德に対応して“我等を正しい道に導びき給え”の語句が配されている。何故なら人に与えられる神よりの最大の御恵みは、神の使者達を通しての天啓による導きに他ならないからである。人の為した事への最上の報いを与えるアッラヒームの美德に対応するのは、「御身が恩寵を与え給ひし者達の道」という語句で、これは、神が恩寵を与え給ひし下僕に報いのある祝福を授けられるのはアッラヒームだからである。そして、「審判の日の主宰者」と対を為すのは、「御身の怒りにふれざる者、そして迷いを生じなかつた者」の行である。人は行為を為す時失敗を恐れる者である。故に人は、「審判の日の主宰者」たる美德に考えをめぐらし、神の怒りにふれぬ様、又、正しい道をふみはずさぬ様、神に祈り始めるのである。

この章の祈りのもう一つの特徴は、祈りが人の内なる本能に、全く自然な形で訴えるという事である。人には、即、従がわざるを得ない、愛と恐怖という二つの基本的な動機がある。ある人は愛に心を動かされ、又、ある人は恐怖につき動かされる。愛に依って行動をする事は高貴な事であるが、実際には、愛が何の影響も与えない人々もいるのである。そういった人々は恐れから行動を起こすのである。第一章では両方の人の心の動きに訴えている。即ち、先ず最初に「万能の主」であり「慈悲深き」「恵み偏く」愛を心にふきこむ神の美德が述べられ、而るべき後に、「審判の日の主宰者」が続き、これが人に悔い改め愛にこたえなければ、神の前で、己の行為の報いを受けねばならない事を思い起こさせている。この様に、恐怖の動機づけが、愛の動機づけと並べて導入されるのである。しかし、神の慈悲は、神の怒りより、はるかに抜きん出た美德である為、唯一恐怖を呼び起こす様意図されたこの属性ですら、神の慈悲についての言及を伴っているのである。実際、ここでも又、神の慈悲は、神の怒りを超越している。何故なら、この美德には、我々人間は裁き主の前ではなく、絶対的な罰の必要な場合のみに罰を与える、許す力を持つ主宰者の前に身を委ねるのであるということが暗示されている。

手短かに言えば、第一章は、形而上的知識の素晴らしい宝庫である。簡単な七つの節からなる短い章ではあっても、真実の知識と知恵がつまっている。「經典の母」と呼ばれるのも、この章がクルアーンの集大成だからである。全ての恩寵の源泉であるアッラーの名前で始まるこの章は、神の神たる四つの美德の説明へと移ってゆく。即ち、(1)世界の創造主で支持者たる、(2)人の努力にかかわらず、人が生まれる以前より、人の求める全てを与える慈愛に満ちた、(3)人の行動への一番よい結果を決定し分け隔てなく報いを与える慈悲深き、(4)我等が我等の為した事をその目前にさらさなければならでない。また、その被造物に対し単なる裁き手ではなく、主宰者として接せられ、慈悲をもって裁き、許す事が良い結果となる場合には常に許しを与えて下さる審判の日の主宰者である、という四つの美德である。これがクルアーンが一番始めに描かれた、無限の力と王国を持ち、限りない慈悲と恩寵を与えて下さる、イスラムの神の像なのである。そしてその後には、神は以上に述べた高遠な美德を有するが故に、人は今や、心より熱望し神を崇拝し、絶対の服従を約束して足許にひれふすとの人間の側からの言明が続くのである。しかし、慈悲深き神は人が弱い存在で間違いを犯しやすい事を、御存知の為、神の御園に近づく途中のあらゆる段階で人の直面する困難の全てに神の助けを願う様熱心に説かれるのである。そして最後に、統合的で尊大な祈りが示される。この祈りは、人が創造主に、精神的であれ世俗的であれ又、現在であれこれ、未来であれ、全ての事柄につき、正しい道をお導き下さいと嘆願する祈りである。人は訓練に首尾よく耐えるのみでなく、神に選ばれし者達と同様に、神よりの惜しみない恩寵に授けられる様にと心から願う祈りなのである。一生間違わずに正しい道を歩める様、先人達同様、主である神に途中でつまづかず神により近づける様、人は神に祈るのである。これが、第一章の主題であり、聖クルアーンの中で色々な形を変えながらも、常に繰り返される主題なのである。

سُورَةُ الْبَقَرَةِ مَدَنِيَّةٌ

アル・バクラ
(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ﴿١﴾

2. アリフ・ラーム・ミーム。(注1)

الْم ﴿٢﴾

3. これこそは疑惑を容れざる經典なり、(注2)
正しい者への嚮導なり、(注3)

ذَٰلِكَ الْكِتَابُ لَا رَيْبَ فِيهِ هُدًى لِّلْمُتَّقِينَ ﴿٣﴾

4. 見るあたわざるものを信じ、(注4) 礼拝を
遵守し、(注5) われらが人々に降せしもの
を(注6) 信ずる人々への。

الَّذِينَ يُؤْمِنُونَ بِالْغَيْبِ وَيُقِيمُونَ الصَّلَاةَ وَمِمَّا

رَزَقْنَاهُمْ يُنفِقُونَ ﴿٤﴾

注1 われはアッラー、全知者なり。

アリフ・ラーム・ミームのような略語はアル・ムカッタート(分ち書きして切って読む)として知られていて、28章までの初めに書かれている。またこの略語はアラビア文字の一語から五語までの語数から成っている。このような略語を作る語は次の十四語である。アリフ、ラーム、ミーム、サード、ラー、カーフ、ハーヤ、アイン、ター、シーン、ハアー、クアーフ、ヌーン、このうちクアーフとヌーンは50章と68章の初めにだけ書かれている。その他の語はそれぞれ決まった章の初めに二つまたはそれ以上の組合せて書かれている。アラビア人の中でムカッタートの使用が流行している。詩や会話に使用されている。ムカッタートは神の美德に対する略語であり、各章の初めに書かれていてその主題をあらわすとともに神の美德に深いかかりをもっている。略語は無意味に各章つけていないし、略語の組合せにも意味がある。アリフ・ラーム・ミームはここに書かれているが、クルアーンの3、29、30、31、32の各章では「私は全能のアッラーである。」の意味である。

注2 「疑惑」は心の不安、疑念、苦悩、不幸、悪意、責任転嫁、中傷を意味する。この文章は今までにクルアーンに疑念をもった人がひとりもないといっているわけではない。ただこの教えは道理にかなっているので曲解せずに正しく考えれば、確かな指針となり、平安が与えられると言っている。

注3 ムッタキ(「正しい者」)はワカーという語源から出た言葉で、災難から守る意味がある。「正しい者への嚮導なり」というのはクルアーンに記された導きは際限のない導きであることを含著する。クルアーンは、人々に無限の精神的向上への導きを与え、神の恩寵によりふさわしい者となるよう導く。

注4 「見るあたわざるもの」というのは人知を越えているが、それにもかかわらず理性や敬虔で確証され得るものである。認知できないもの、知覚できないものが必ずしも非合理とは限らない。イスラム教徒が信じるべき「見るあたわざるもの」の何一つとして理に反するものはない。世界には知覚できなくともその存在を否定できない未知なるものがたくさんある。

注5 「礼拝を遵守し」は定められた法則にすべて従って祈禱式を行うという意味である。礼拝は人間の神に対する内なる関係を外に向って表現することである。それ以上に神の恩寵が心ばかりでなく身体をも包むことである。だから心身相伴って完全なる礼拝が可能となる。心身なくして真の霊的礼拝は守れない。靈魂による礼拝は中身であり、肉体による礼拝はその器である。中身はその器なくしては保存され得ない。器が壊されればその中身も同様の道を辿る。

5. また、汝に啓示せしもの、(注7)並びに汝以前に啓示せるものを信じ、(注8)且つ来る世(注9)を固く信ずる人々への嚮導なり。

6. 主の導きに従う人々、そは必ず成功せん。

7. 信ぜざる者どもは、汝之を警告するも、せざるも、彼等は信ぜざるべし。(注10)

8. アッラーは彼等の心と耳を封じ眼には庇覆をほどこせり。(注11) 彼等には重き罰あり。

وَالَّذِينَ يُؤْمِنُونَ بِمَا أُنْزِلَ إِلَيْكَ وَمَا أُنْزِلَ مِنْ
قَبْلِكَ ۖ وَالْآخِرَةُ هُمْ يَرْجُونَ ⑤

أُولَٰئِكَ عَلَىٰ هُدًى مِنْ رَبِّهِمْ وَأُولَٰئِكَ هُمُ
الْمُقْلِحُونَ ⑥

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا سَوَاءٌ عَلَيْهِمْ أُنْذِرْتَهُمْ أَمْ
لَمْ تُنْذِرْهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ⑦

خَتَمَ اللَّهُ عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ وَعَلَىٰ سَمْعِهِمْ وَعَلَىٰ
أَبْصَارِهِمْ عَسَاوَةً ۖ وَلَهُمْ عَذَابٌ عَظِيمٌ ⑧

注6 この節では三つの事柄を人間の霊的幸福の三つの面から次のように述べている。(1)人は目に見えない真実―五感ではわからない真実があることを信じるべきである。たとえば、人間は正義感をもっていると信じられることでもわかる。(2)天地創造を考えてもすばらしい秩序と計画がある。その思いが創造主の存在を確信させ、人間を制している神との真実の交わりを切望させる。この交わりは祈禱の成就によってなされる。(3)最後に信者が自らの創造主と真のふれあいを確立できたなら、その人は進んで同胞に仕えたくなるであろう。

注7 モハammad預言者を信じるのが、この中心になっている。(2:286; 4:66, 137)

注8 汝一神はすべての人々にその使者を送られたのだから今まですべての預言者の教えの聖なる源であるモハammad預言者を後に続く者は信じるべきである。(13:8, 35:25)

注9 (1)最終地すなわちあの世また(2)従うべき啓示のこと、を意味する。第(2)の意味ではクルアーン62:3, 4に記述されている聖なる預言者の二回にわたる降臨についての箇所が詳述されている。一度目は7世紀おけるモハammadの到来であり、その時クルアーンが神から聖なる預言者(モハammad)に啓示された。二度目は、近年における彼の弟子の一人の到来を指す。即ちアハマディア運動の創設者であり約束されたメシアであるアハマドその人である。

注10 この節は警告を受けようが受けまいが気にもとめない真実に対して無関心な信仰を持たない者について語っている。現状が続く限り彼らは信じないだろうと言明している。

注11 器官は長い間使わずにいとと養えて使いものにならなくなる。信仰を持たない者は真実を理解しようとする心と耳をもつことを拒んでいる。その結果彼らの聞いたり、理解したりする力は失われると述べている。「アッラーは封印をなされた」の句で述べられているようにわざと無関心になれば当然それだけの結果になる。すべての法は神に由来し、すべての理由は当然神の意志に従属するので信仰を持たぬ者の心と耳を閉ざすのも神に帰する。

第二項

9. また人々の中には「我等はアッラーと末日を信ず」と云うが、その実彼等は全く信者に非ず。(注12)
10. 彼等はアッラーと信者を欺かんとし、実は己れ自身を欺くにすぎず。しかも自ら之に気づかざるなり。
11. 彼等の心には病あり。アッラーはその病を重からしむ。(注13) 而してその嘘ゆえに、彼等は厳しい罰を受けん。
12. 「世を紊すなかれ」と云えば、彼等は云う、「我等は秩序を正さんとす」と。
13. 用心せよ、彼等こそ紊乱者に非ざるか。しかも自ら之に気づかざるなり。
14. また彼等に向って「信ぜよ、人々が信ぜし如く」と云えば、彼等は云う、「愚か者の如く我等に信ぜよとな？」と。げに愚かなる者は、彼等なり。されど彼等はそれを知らず。(注14)
15. 彼等は信者たちに会えば「我等は信ず」と云うが、その実不埒な仲間だけになれば「我等はお前たちの仲間なり。我等は信者たちをただ愚弄したまで」と云う。

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَقُولُ آمَنَّا بِاللَّهِ وَيَا أَيُّهَا الْفَجْرُ
وَمَا هُمْ بِمُؤْمِنِينَ ④

يُخَدِّعُونَ اللَّهَ وَالدِّينَ آمِنُوا وَمَا يَخْدَعُونَ
إِلَّا أَنْفُسَهُمْ وَمَا يَشْعُرُونَ ⑤

فِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ فَزَادَهُمُ اللَّهُ مَرَضًا وَلَهُمْ
عَذَابٌ أَلِيمٌ ⑥ بِمَا كَانُوا يَكْذِبُونَ ⑦

وَإِذَا قِيلَ لَهُمْ لَا تُفْسِدُوا فِي الْأَرْضِ قَالُوا إِنَّمَا
نَحْنُ مُصْلِحُونَ ⑧

إِلَّا أَنْهُمْ هُمُ الْمُفْسِدُونَ وَلَكِنْ لَا يَشْعُرُونَ ⑨

وَإِذَا قِيلَ لَهُمْ آمِنُوا كَمَا آمَنَ النَّاسُ قَالُوا أَنْتُمُ
كَمَا آمَنَ السَّافِهَاءُ ⑩ إِلَّا أَنْهُمْ هُمُ السَّافِهَاءُ وَلَكِنْ
لَا يَعْلَمُونَ ⑪

وَإِذَا لَقُوا الَّذِينَ آمَنُوا قَالُوا آمَنَّا بِحَيْثُ خَلَوْا إِلَى
شَيْطَانِهِمْ قَالُوا إِنَّا مَعَكُمْ إِنَّمَا نَحْنُ مُسْتَمِئُونَ ⑫

注12 神と終末の日が来ることだけを信じてその他のイスラムの信仰を忘れていることを意味している。イスラムの信仰形式では神を信じるのが最初に出てくる事柄であり、終末を信じることは最後に出てくる事柄である。その両者を信仰告白すれば、そのこと自体ですでにイスラムの他の事柄を信仰告白したことになる。ここ以外でも終末を信じることは聖典を信じること同様、天使をも信じることでであるとクルアーンは述べている。(6:93)

注13 神はイスラム教徒を守っているという御印をたくさん示されている。その御印は次第に力を増してきたので偽善者たちは次第にイスラム教徒を恐れはじめた。その結果彼らはますます偽善の度を増した。

注14 偽善者はイスラム教徒をとり憑かれた愚者の一団とみなしている。道理のないものに生命と財産を捧げることは無意味と考えている。しかし、彼らこそが愚者であり、イスラムの道理が繁栄への道であることは確かである。

16. アッラーは彼等の嘲りを罰し、しばし彼等を迷誤の中に留めしめん、暗闇をさまよう如く。(注15)

اللَّهُ يَسْتَهْزِئُ بِهِمْ وَيَمُدُّهُمْ فِي طُغْيَانِهِمْ
يَعْمَهُونَ ⑮

17. 彼等は御導きの代りに間違いを購えし者、その取引は彼等を何も益することなく、また決して正しく導かれることなし。(注16)

أُولَئِكَ الَّذِينَ اشْتَرَوُا الضَّلَالَةَ بِالْهُدَىٰ فَمَا
رَبِحَتْ تِجَارَتُهُمْ وَمَا كَانُوا مُهْتَدِينَ ⑯

18. 彼等のことをたとえれば、火を灯し(注17)辺りが明るくなりたる時、その火をアッラーに奪い取られ、暗闇に取り残されし者の如し。なにも見得ざるなり。

مَثَلُهُمْ كَمَثَلِ الَّذِي اسْتَوْقَدَ نَارًا فَلَمَّا أَضَاءَتْ
مَا حَوْلَهُ ذَهَبَ اللَّهُ بِنُورِهِمْ وَتَرَكَهُمْ فِي ظُلُمٍ
لَا يَبْصِرُونَ ⑰

19. 彼等は、聾で啞で盲なり。されば引き返すことかなわず。

صُمٌّ بُكْمٌ عُمْيٌ فَهُمْ لَا يَرْجِعُونَ ⑱

20. またたとえれば、暗雲たれこめ、雷、稲妻をともないて降りしきる豪雨にも似たり。彼等は死を怖れて、雷鳴におののき、思わず両耳に指を差し込む。されどアッラーは不信心者どもを取り囲む。

أَوْ كَصَيْبٍ مِنَ السَّمَاءِ فِيهِ ظُلُمٌ وَرَعْدٌ وَنُقُورٌ
يَبْعَثُونَ أَصَابِعَهُمْ فِي آذَانِهِمْ مِنَ الصَّوَاعِقِ حَذَرَ
المَوْتِ وَاللَّهُ حَاطٌّ بِالْكُفْرِينَ ⑲

21. 稲妻は目を眩ますばかり。閃くたびに歩みを進めども、闇にたち戻ればそこに立ちどまる。もしアッラー欲しなば、必ず彼等の耳目を奪わん。げにアッラーは万能にまします。

يَكَاذِبُونَ يَخْضَعُونَ أَبْصَارَهُمْ كُلَّمَا أَضَاءَ لَهُمْ مَشْهُورٌ
فِيهِ ۖ وَإِذَا أَظْلَمَ عَلَيْهِمْ قَامُوا وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ لَذَهَبَ
بِإِسْمَاعِيلَ وَأَبْصَارَهُمْ ۚ إِنَّ اللَّهَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ⑳

第三項

22. 汝等人々よ、お前たち主を崇拜せよ。お前たちを創り、お前たちの前に人々を創り給えし主を、義しい人たらんために。

يَا أَيُّهَا النَّاسُ اعْبُدُوا رَبَّكُمُ الَّذِي خَلَقَكُمْ وَالَّذِينَ
مِنْ قَبْلِكُمْ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ ㉑

注15 ここでは、神が猶予を与えて偽善者の罪が深まってゆくのを許しているといっているのではない。もしそのように誤って解釈すれば35章38節と矛盾してしまう。そこでは神は信仰を持たない者に改心する猶予を許している。と述べられている。

注16 (1)よき導きを捨てて代わりに誤りをとる。との意味である。(2)よき導きと誤りの両方が与えられるが、誤りを取り、よき導きを拒む。との意味である。

注17 「火」という語は戦争の意をもつことがある。ここで「火を灯した」というのは偽善者が信仰を持たぬ者達と共に謀ってイスラム教徒に対して戦争をしかけるという意味で使われている。「火を灯す」は、他に聖なる預言者が神の命により聖なる光を灯すという意味で使われている箇所もある。次のような箇所がある。『私の場合は火を燃やす人のようである。』(ブハリ)

23. 主はお前たちのために臥所^{ふしど}として大地をつくり、屋根として大空をおき、(注 18) 水を雲より降らせ、かくしてお前たちの糧^{かて}なる果实を实らせ給えし御方なり。されば、故意にアッラーに同位者を配するなかれ。
24. もしお前たちが、われらの僕^{しもべ}に降せし啓示を疑わば、お前たち之に類する一章を作り、アッラー以外にお前たちの助け手となる者をここに喚べ、もしお前たちの言葉が真実ならば。(注 19)
25. それがなし得ずば、絶対に出来はしまいが、その時は不信心者どもに用意せらるる人と石とを燃料とする業火に対してその身を守れ。
26. されど信じて、善行を積む者には、河川流れる樂園ありとの朗報を伝えよ。彼等そこで果实を賜わるたびに、「これは我等が以前に賜われるものなり」と云う。彼等は之に類するものを賜わるなり。またそこでは、清浄無垢^{せいじようむく}なる配偶者に連れ添われ、(注 20) 末久しく樂園に住み留まらん。(注 21)

الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ الْأَرْضَ فِرَاشًا وَالسَّمَاءَ بِنَاءً ۖ
وَأَنزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَأَخْرَجَ بِهِ مِنَ الثَّمَرَاتِ
رِزْقًا لَّكُمْ فَلَا تَجْعَلُوا لِلَّهِ أَندَادًا وَأَنتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٢٣﴾
وَأَن كُنْتُمْ فِي رَيْبٍ مِّمَّا نَزَّلْنَا عَلَىٰ عَبْدِنَا فَأْتُوا
بِسُورَةٍ مِّن مِّثْلِهِ وَادْعُوا شُهَدَاءَكُمْ مِّن دُونِ
اللَّهِ إِن كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٢٤﴾
فَإِن لَّمْ تَفْعَلُوا وَلَن تَفْعَلُوا فَاتَّقُوا النَّارَ الَّتِي وَقُودُهَا
النَّاسُ وَالْحِجَارَةُ ۖ إِذْ ذَاكَ لَئِكَفِيرِينَ ﴿٢٥﴾
وَبَشِّرِ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ أَنَّ لَهُمْ جَنَّاتٍ
تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ كُلَّمَا رَزَقُوا مِنْهَا مِنْ
ثَمَرَةٍ رَّزَقُوا قَالُوا هَذَا الَّذِي رَزَقْنَا مِن قَبْلُ وَ
أُتُوا بِهِ مُتَشَابِهًا وَلَهُمْ فِيهَا أَزْوَاجٌ مُّطَهَّرَةٌ وَهُمْ
فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٢٦﴾

注 18 この表現は建物や屋根のようなものでその中や下にいる生きものが保護されていることを意味する。同様に宇宙の離れた部分が私達の惑星を保護してくれている。星、雲その他宇宙の現象を科学的に研究している人は他の天体がいかに重いか、また地球のすべての側から高く上がって、果てしない広がりをもって軌道を通って、しかもいかに安全に安定しているかを知っている。ここではまた天と地の力の均り合いにより物質世界が完全になっていることを暗示している。

注 19 クルアーンの比類ないすばらしさについての事柄が五ヶ所でとりあげられている。それは 2:24、10:39、11:14; 17:89、52:34、35 である。これら五つの節の内 2 つでは、問いかけは同一であり、残り三つの節では、信仰を持たぬ者からの三つの別個の問いかけ(要求)が出されている。それぞれに異なった箇所、問いかけの形をとったこの相異は、一見つじつまが合わぬ様に思われるがそうではない。実際に、これらの節にはいつの時をも象徴する要求が含まれており、それらの問いかけは聖なる預言者の時代と同様に、今日に於てもクルアーン中にそれぞれ違った形で提示されているのである。詳しくは、英版参照。

注 20 クルアーンでは、全ての被造物には、その完全な発展の為に連れ合いが必要であると教えている。楽園では、品行方正な男子と女子は、汚れない連れ合いとなり精神的に発達し、幸福を全うするのである。どのような連れ合いになるかは、来世でのみわかる事なのである。

注 21 この節では、信者が来世に報われる事が簡単に説明されている。イスラム教を批判する人々はこの説明に対しあらゆる反対を唱えているのであるが、それは彼等が、天からの御恵みについてのイスラムの教えを

27. アッラーは、蚊ほどの小さいもの、またそれより更に小さいものでも例証してはばからず。信ずる者は、それが主の降せし真理なることを知るも、不信心者は云う、「かかる例証をみせて、アッラーは何事を教えんとするか?」と。(注22) かくして主は、多くの人々を迷わせ、また多くの人々を導き給う。されど主は、不信心者以外は何人も迷わせ給わず。

28. アッラーと契約しておきながら、後で之を破り、アッラーが提携せよと命ぜしものから離叛し、世を^{みだ}素す者ども、彼等はみな滅び行く。

إِنَّ اللَّهَ لَا يَسْتَحْيَى أَنْ يَضْرِبَ مَثَلًا مَّا بَعُوضَةً
فَمَا فَوْقَهَا فَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا فَيَعْلَمُونَ أَنَّ الْحَقَّ مِنْ
رَبِّهِمْ وَأَمَّا الَّذِينَ كَفَرُوا فَيَقُولُونَ مَاذَا أَرَادَ اللَّهُ
بِهَذَا مَثَلًا يُضِلُّ بِهِ كَثِيرًا وَيَهْدِي بِهِ كَثِيرًا وَمَا
يُضِلُّ بِهِ إِلَّا الْفَاسِقِينَ ﴿٢٧﴾
الَّذِينَ يَتَّقُونَ عَهْدَ اللَّهِ مِنْ بَعْدِ مِيثَاقِهِ وَ
يَقْطَعُونَ مَا أَمَرَ اللَّهُ بِهِ أَنْ يُوصَلَ وَيُفْسِدُونَ
فِي الْأَرْضِ أُولَئِكَ هُمُ الْخَاسِرُونَ ﴿٢٨﴾

注22

完全に誤解している点に端を発する。クルアーンでは、神の恩寵の本質を把握する事は人の力の及ばぬ所であると強く主張しており(32:18)、聖なる預言者も以下の如く語ったと伝えられている。即ち、「目で見た者も、耳で聞いた者もない、まして人の心のはるか及ぶ所ではない。」(ブハリ)と。神の恩寵に、何故現世の具体的な事物名をはめるのか疑問は当然生じるが、これはクルアーンを読む者が必ずしも知的に高いレベルの人々ばかりではない為である。誰にでも判る平明な言葉がクルアーンでは使われているのである。神の恩寵を説明するにあたり、クルアーンでは、現世で一般的に善いとみなされる事物名を用い、信者に来世に於てよりよい形でこれらの物を全て得る事が出来ると説くのである。身近な言葉が使われているのは、この重要な対比をもたらす為であり、そうでなければ、現世の喜びと来世の恩寵との間に共通物など何もないのである。更にイスラムに依れば、来世が精神的状態のみで成り立っているという意味でなら、霊的であるとはいえない。来世に於てでも、人間の魂は、一種の肉体は持つが、その肉体を物質的なものではない。これは夢を想起せば思い当たる事で、人が夢で見る場面は、夢遊状態では人の肉体を持ち、小川の流れる園にいたり果実を食したり乳を飲んだりしていたりするという意味から、純粹に精神的或いは霊的であるとはいえないのである。夢の中の乳はまぎれもなく実際の経験なのであるが、誰もこれを現世で人が実際に飲んでいる本当の乳であるとはいわない。来世に於る霊的恩寵とは現世で神が我々にお与え下さる御恵みが、単に主観的に実現されるものではない。我々が今ここで手にしている物は、来世で人が気付く神の真実の天恩の一例にすぎない。又、“園”は信仰を表わし、“小川”は、善行を表わす。それで人々は、信仰や善行が無駄にならない事を知るのである。故にクルアーンの中の“これは前世で我々に与えられていた物である”という語句から、天上では、信仰深き者達には、この世で手にした果実等が与えられるという結論をひき出す事は間違いない。何故なら、説明のあった通り、この二つは同一の物ではないからである。来世で手にする果実とは、自分達の信仰のあかしなのである。人がそれを口にする時、即座にその果実は現世での彼等の信仰の実りである事に気付くのである。この喜びの為、“これは以前、我等に与えられし物である”と言うのである。この表現は又、“我等に約束されし物”との意味をも有する。

注22 神はクルアーン中で天国と地獄を暗喩と直喩を用いて説明されている。直喩と暗喩を用いなければ、深い意味を適確に表わす事が出来ず、霊的な事柄については、この方法によらねばを得て伝わらず、それ以外で天を形容すれば、蚊のように取るに足らなくなってしまう。又、この場合に蚊の例えを使うのはアラブ人の間では、蚊はひどく弱い生き者と考えられるからである。しかしながら、比喩から天の像を浮かびあがらす事もできる。信者はクルアーンの語句が暗喩にすぎずその深い意味を伝える為に使われている事を知っているが、信仰を持たぬ者はその事が間違っていると行って、誤りや間違った導きを増長させるのである。

29. お前たちどうしてアッラーを信ぜずにいら
れようか？ 彼は命なきお前たちに生命を
与え、(注 23) 次いでいつかは死に至らし
め、再び甦らせ、やがてお前たちを己が許
に連れ戻さん。(注 24)
30. お前たちのために地上に一切のものを創造
せるは彼なり。然る後に天に及び、之を七
層の天となせり。(注 25) 彼は万事を
(注 26) 知る。

第四項

31. 汝の主は天使たちに云えり、(注 27) 「わし
は地上に代理者を置かんとす」と。天使たち
は云えり、「世を^{みだ}し、流血の災^{わざわい}を (注 28)
惹き起す如き者を置かんとするか？ 我等
は汝の神聖さを賞揚し、讃美してやまず (注
29) というに」と。主は答えて云えり、「わ
しはお前たちの知らざることを知る」と。
(注 30)

كَيْفَ تَكْفُرُونَ بِاللَّهِ وَكُنْتُمْ أَمْوَاتًا فَأَحْيَاكُمْ ثُمَّ
يُمِيتُكُمْ ثُمَّ يُحْيِيكُمْ ثُمَّ إِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٢٩﴾
هُوَ الَّذِي خَلَقَ لَكُمْ مَا فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا ثُمَّ
اسْتَوَى إِلَى السَّمَاءِ فَسَوَّاهُنَّ سَبْعَ سَمَوَاتٍ وَهُوَ
بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿٣٠﴾
وَإِذْ قَالَ رَبُّكَ لِلْمَلَائِكَةِ إِنِّي جَاعِلٌ فِي الْأَرْضِ خَلِيفَةً
قَالُوا أَتَجْعَلُ فِيهَا مَنْ يُفْسِدُ فِيهَا وَيَسْفِكُ الدِّمَاءَ
وَمَنْ نُسَبِّحُ بِحَمْدِكَ وَلُقَدِّسُ لَكَ قَالَ إِنِّي أَعْلَمُ
مَا لَا تَعْلَمُونَ ﴿٣١﴾

注 23 この節では人の生命が物質的肉体の消滅や崩壊で終わるものではなく、生命には余りにも重要な意義がある為、肉体の消滅で終わる事なく、物質的消滅後も育まれる事を表わしている。もし生命に偉大なる目的がなければ、神は生命など創造さならなかったはずであるし、来世がなければ死すべきものとされないはずである。もし死が全ての生命の終りとすれば、人間の創造とは、「単なる娯楽と時間つぶし」で神の知恵の偉大さを示すものにすぎなくなってしまふ。全ての知恵と英知の源である神が人間をお創りになったという事は取りも直さず、人がたつた 60 年や 70 年生きた後に塵に戻るべく創られているのではないという事である。それどころか、人は、その靈魂の借りの宿である肉体から抜け出た後に生きなければならない、より良い、より充実した永遠の生命の為に創造されたのである。

注 24 人の魂は死の後にすぐ天国や地獄へ行くのではなく、バルザフという中間地点で自分の行いの良い結果と悪い結果の幾つかを吟味させられる。然る後、完全な報いの前ぶれとなる復活に到るのである。

注 25 アラビア語では‘7’は通常、完全である事の象徴として使われ“70”とか“700”を用いる言葉は大きな数を意味している。これら三つの数字は、数的に大きいという意味でクルアーンの中に使われている。(9: 8, 15: 45) 他の箇所では 23 章 18 節にも記されている。

注 26 太陽や月、及びその他の天体は人間に多大な益をもたらすものであり、近代科学はそういった意味での発見をしてきたし現在も更に解明されている。これら全ては、クルアーンの教えの真実と普遍性を証明する事に他ならない。科学はまた、地球の特性についてもより多くの発見をし続けており、以前は不用と思われていた事物が今では人にとり、非常に有用であると気付かれてきた。

注 27 神と天使の会話の描出は実際に書かれている言葉通りに理解される必要はない。ここに使われている「云えり」は、実際の文字通りではなく、比喩的な表現であり、言葉で表わされているのと等しい状態や態度を示すにすぎない。而してこの節は単に、その態度や状態で天使達は、ここに言葉で示されている返答を暗黙の内に示した事を意味している。

32. 主はアダムに万物の名前を教え、(注 31) し
 かる後に天使たちの前にそれ等を示し、「も
 し自分たちの言葉が正しいと思わば、これ
 等のものの名を告げよ」と云えり。

وَعَلَّمَ آدَمَ الْأَسْمَاءَ كُلَّهَا ثُمَّ عَرَضَهُمْ عَلَى الْمَلَائِكَةِ
 فَقَالَ أَقْبُلُوا مِنِّي بِأَسْمَاءِ هَؤُلَاءِ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٣٢﴾

注 28 天使達は、神の為さんとする事に反対したり、アダムより自分達の方が優れていると主張した訳ではない。この問いかけは神が代理者を指名すると仰せられた為、促された結果である。秩序を維持し、法を實行するには地上の代理者が必要である。天使達の反対は、地上に無秩序を生み、血を流す者達が出現する事への懸念から出たものである。人は、事の善と悪を為す大きな力を与えられているので、天使はその悪い面について語ったのであるが、神は人は神の美德の映し鏡たるべき高い道德に達し得る事を御存知だったのである。この人間の素晴らしい特性については、神が“私はお前達の知らない事を知っている”で言及されている。

注 29 天使達の質問は神の御業に異議を唱えるものではなく、その指名の本質と英知についてよりよく解ろうとする為に、投げかけられたのである。57:2も参照の事。

注 30 ほぼ 6000 年前に生存したアダムは、神が地上に創られた最初の人間であると世間では信じられている。しかし、クルアーンでは、この考えを確認してはいない。世界は何度も創造と文明の輪環を繰り返して、現在の人類の先祖とされるアダムは、現在の輪環の最初のつなぎめにすぎず、神の創造した最初の人間ではないのである。国が興り、そして亡び、文明も又然りであった。何人もその輪環にアダムが存在し、今のアダムに到っているのである。人以外の種族が繁栄し消滅し、そして違った輪環の文明が起りつぎまたかもしれないのである。偉大なイスラム教徒の神秘学者であるムヒユッディーン・イブン・アラビはかつて、カーバの巡礼を演じている自分自身を夢に見た事があると語った事がある。その夢の中で、彼の祖先の一人であるという男が彼の前に現われた。イブン・アラビが“貴方が死んでからどの位になるのか”と尋ねたら、その男は“5 万年以上にもなる”と答えた。“しかしこの期間は、我々とアダムの隔たりよりも長い。”とイブン・アラビが言うと、“どのアダムの事をお前は話しているのだ。お前に一番近いアダムなのか、それとも、他の誰かに一番近いアダムなのか？”と答えた。“そこで私は思い出したのです。聖なる預言者が、神は少なくとも何十万ものアダムをお創りになったと言った事を。そして私は、自分自身につぶやいたのです。多分この男は私の祖先といっているが、今のアダムより以前のアダムの一人なのだろうと”とイブン・アラビは語ったのである。(フトウハート 2 巻)

アダム以前に生きた種族が、アダムが生まれる以前に、全く絶えてしまったとは主張されていない。最も可能性があるのは、以前の種族が衰退してしまい、僅かに生き残った者の内の一人がアダムとなったのであろうという事である。神は然る後に、彼を新しい種族の先祖、そして新しい文明の先駆者に選ばれたのである。彼は、あたかも死せる者達の中から創造された、生命の新しい時代の夜明けを表わしている。カリファーは後継者という意味を表わす事からも、彼が引き継いだアダム以前に地上に存在し生きた人々がいた事は明確であり、アメリカやオーストラリア、又その他の国の元々の居住民が、一番近いアダムか、今のアダム以前のアダムの先祖かどうか、確信をもって言う事は出来ない。

アダムがどこで生まれ、改革者としてどこで育てられたかについては、諸説があるが、最も受け入れられているのは、彼は元々楽園にいたが、後にそこから出され、地上のどこかに置かれたという説である。しかし“地上に於て”という語句は、この見解に矛盾し、明らかにアダムは地上で暮らし、改革者として育てられたのは地球であった事を示している。可能性としては彼は先ずイラクに住まわされ、然る後に、近隣の土地に移されたと考えるのが最も妥当であろう。

注 31 神はアダムに言葉の仕組みをお教えになった。人が文明化されるのに言語は不可欠であり、神がアダムに言語の仕組みを教えられた事はまぎれもないが、クルアーンには、人が、その道德を完全な物とする為に学ばねばならぬアスマー（名前或いは属性）があると 7:18 に記されている。このため、人は神の美德を正しく認識し理解しなければ、神の知識に達する事が出来ず、且つ、神の美德は神によってのみ教えられ得る事が

33. 天使たちは云えり、「汝に栄光あれ！我等は汝に教えられたるもの以外は如何なる知識もなし。げに汝は、全知、全能にまします」と。(注32)
34. 主は云えり、「これアダムよ、彼等にそれ等の名を告げよ」と。そこでアダムが彼等にその名前を告げると、(注33)主は云えり、「わしはお前に、天地の秘密を知りつくし、お前たちが露に見せることも隠すことも、すべてを知る者ぞと告げざりしか？」と。
35. われらが天使たちに向って、「アダムに服従せよ」(注34)と命ぜし時のことを思い起せ。天使たちは皆従いしが、イブリースのみは従わざりき。(注35)彼は傲慢にもそれを拒み、不信心者の仲間となれり。

قَالُوا سُبْحَانَكَ لَا عِلْمَ لَنَا إِلَّا مَا عَلَّمْتَنَا إِنَّكَ أَنْتَ الْعَلِيمُ الْحَكِيمُ ﴿٣٣﴾

قَالَ يَا آدَمُ أَنْبِئْهُمْ بِأَسْمَائِهِمْ فَلَمَّا أَنْبَأَهُمْ بِأَسْمَائِهِمْ قَالَ أَمْ أَقُلْ لَكُمْ إِنِّي أَعْلَمُ غَيْبَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَأَعْلَمُ مَا تُبْدُونَ وَمَا كُنْتُمْ تَكْتُمُونَ ﴿٣٤﴾

وَإِذْ قُلْنَا لِلْمَلَائِكَةِ اسْجُدُوا لِآدَمَ فَسَجَدُوا إِلَّا إِبْلِيسَ أَبَى وَاسْتَكْبَرَ وَكَانَ مِنَ الْكَافِرِينَ ﴿٣٥﴾

解る。それ故に、その一番最初に、アダムが神を知り、認識し、神に近づく様、そして神から離れていってしまわぬ様、アダム（人）に神の美德についての知識をお与えになることが必要だったのである。クルアーンに依れば、人と天使の違いは、人は、全ての完全な神の美德であるアスマー（名前）、フスナー（美）の形象、或いは反映であるのに対し、天使は神の美德の内の幾つかを表わしているにすぎない点にある。天使達は自分達の意志を持たず、受動的に、神の与えられた機能を果すだけであるが(66:7)、それに反し、人は自由意志と自由な選択の権利を与えられており、自分を神の美德の完全な顕現としうる能力を有しているという点に於て天使と違っている。簡潔に言えば、この節の意味しているのは、神は先ずアダムに、色々な神の美德を理解するのに必要な、自由意志と必要な能力を植えつけられ、然る後にこれら美德が何たる物であるかの知識を与えられたという事なのである。また、アスマーとは、自然界の色々な事物の性質をも意味している。人は自然の力を利用するべく運命づけられている為、神は人に自然の性質と特性を知る能力と力を与えられたのである。

注32 天使達は自分達の限界を認識していたので、自分達が人の様に神の全ての美德を反映する事が出来ないと率直に告白している。即ち彼等は、神が、神の永遠の英知に於て、天使達に定められた神の美德を反映する力を賜ったのである。

注33 天使達がアダムの実現出来る神の全ての美德を、彼等自身の内には顕現出来ないと言った時、アダムは、神の御意志に従い自分の中に生得の異なった自然の能力を表わし、天使達にその広大な特質を啓示したのである。それによりアダムは、自由意志と決断する力を与えられ、それらを使う事で、神の栄光と偉大さを啓示する事の出来る人間の創造の必要性を証明したのである。

注34 アダムは神の美德の象徴となり、預言者の位を得たので、神は天使達にアダムに服従せよと命じられた。アラビア語のウスジュドゥーは“アダムの前に平伏せよ”という事を意味するものではない、何故ならクルアーンでは、はっきりと神以外の者に平伏する事を禁じているし(41:38)、そういう意味での命令は天使達に下されていないからである。命令は“私がアダムを創造した事への感謝のしるしとして、汝ら自身を神の前に、平伏せしめよ”との意味なのである。

注35 イブリースはしばしば、サタンと同一に考えられるが、幾つかの場合そうであるとはいえない。先ず、イブリースは天使ではなかった事が理解されねばならない。天使達は、ずっと“従順”で“忠実”であると表

36. われらは云えり、「アダムよ、汝は妻と共に
楽園に住み、(注36) いずこなりと好きな
ところで腹^{つみひ}いっぱい食すがよい。(注37)
されど、罪人とならざらんがために、この
木(注38)に近づくなかれ」と。

وَقُلْنَا يَا آدَمُ اسْكُنْ أَنْتَ وَزَوْجُكَ الْجَنَّةَ وَكُلَا مِنْهَا
رَغَدًا حَيْثُ شِئْتُمَا وَلَا تَقْرَبَا هَذِهِ الشَّجَرَةَ فَتَكُونَا
مِنَ الظَّالِمِينَ ﴿٣٦﴾

現されているのに(66:7)、イブリースは神にそむいたと書かれているからである。彼もアダムにつく様命ぜられていたのに、それにそむいた(7:13)ので神が怒りになったのである。その上、イブリースへの別個の戒めがなかったとしても、天使は宇宙の色々な場所での保護者である為、天使に与えられた戒めは、全ての生きとし生ける者にも自動的に向けられたものとなるのである。今まで述べた様に、イブリースとは、実際にはその語の語源に基づき、天使に対しはむかった悪しき精霊に対して与えられた名前である。彼は、列記された属性、特に、善を放棄し、路頭に迷い、神の慈悲を遺棄するという属性を有するが故に、そう名付けられたのである。クルアーンでは、アダムの話のある所で 常に二つの名前が並んで述べられるが、イブリースが2:37で言われている様に サタンではないという事はどの場合にもこの二つの名前には明確な区別がみられる事からもわかる。天使と異なり、アダムに仕える事を拒否した者を指す時は常にイブリースで、アダムを欺き、“園”を出される原因となった者を指す時は常に“サタン”という名が示される。非常に重要で、クルアーンを通して常に変らぬこの区別は、少なくとも10ヶ所に現われ(2:35, 37; 7:12, 21; 15:32; 17:62; 18:51; 20:117, 121; 38:75)、はっきりと、イブリースとサタンとは別個であり、アダム自身と同様の人々の一人であったサタンがアダムを欺いた事が明らかである。クルアーンの他の箇所では、イブリースは神の秘密なる創造であり、天使と違って、神に仕える事もそむく事を出来ると示されている。(7:12; 13)

注36 この節に現われる「楽園」という言葉は、天或いは天国ではなく、単に、アダムが最初に住まわされた園の様な場所を意味している。この言葉が天を表わさない理由は、先ずアダムが最初に住まわされたのは地上であった事(2:37)、第2に、天とは、一旦そこに入ると決して出される事のない場所である事(15:49)である。何故なら、アダムはこの節で楽園を出されたと言っているからである。これは、アダムが最初に住んだ園は、その土地の肥沃さと、溢れるばかりの新緑の草木故にそう呼ばれた事を表わしている。最近の研究では、イラクかアッシリアのパビロンの近くのエデンの園であるとされている。(Enc. Brit “Ur”を参照)

注37 “好きな所で存分に食べよ”との表現から、アダムの仕んでいた場所は誰が治めている所でもなく、言わば、自分の検分した所全ての領主となるべく創られたアダムに与えられた“神の土地”と言えよう。

注38 聖書に依れば、禁断の木は善悪の知識の木であった(創生記2:17)。しかしクルアーンでは、禁断の実を食べてしまったアダムとイブは裸となったという事から、この木は善の源である知識ではなく、アダムにその弱さを暴露させた悪の木であった事を意味している。クルアーンの見解は明らかに正しい。何故なら、人から知識を取り去ってしまうという事は人が存在するにいたる、まさにその目的を駄目にする事である事に他ならないからである。しかしながらクルアーンと聖書はこの木が実際の木ではなかったという点では同一の見解の様である。人を裸にしたり、人に善と悪を教えたりする特徴を持った木など、この地上には存在していないのだから、これは何かを象徴していると考えられる。シャジャラ(木というアラビア語)は口論やいさかいをも意味している。そしてクルアーンの他の箇所では二種類のシャジャラ(木)の事が述べられている即ち(1)美しく純粋な善の木と(2)汚れた悪の木である。これに関しては、14:25と27を参照するとよい。純粋な事と純粋な教えは前者になぞられ、不順な事柄や考えは後者になぞらえられる。これらの説明から考え、この節の意味しているのは(1)アダムは口論(げんか)をさける様命ぜられた (2)彼は悪に対し、注意を促されたという事である。

37. しかるに、悪魔が彼等兩人を踏みはずさせ、その住めるところより逐われる身に至らしめり。(注 39) さればわれらは云えり、「出て行け。お前たち互に敵となれ。地上に。(注 40) お前たちの住居あり、かりそめの楽しみのために」と。
38. その時アダムは、主より祈禱の辞を聞けり。而して主は、アダムに情けを垂れ給えり。げに主はたびたび憐れみに転じ、慈悲深き御方にまします。
39. われらは云えり、「お前たちここから出て行け。他日わが嚮導がお前たちに降る時、之に従う者は恐怖も悲嘆もなからん」と。
40. されど信ぜずして、われらの神兆を虚偽なりと云う者は、業火の住人となりて、その中に久しく住み留まらん。(注 41)

第五項

41. イスラエルの子孫よ、(注 42) わしがお前たちに授けし恩恵を思い起し、わしとの契約を履行せよ。(注 43) さすればわしもお前たちとの契約を果さん。わしのみを畏れ敬え。

فَأَزَلَّهُمَا الشَّيْطَانُ عَنْهَا فَأَخْرَجَهُمَا مِمَّا كَانَا فِيهِ
وَقُلْنَا اهْبِطُوا بَعْضُكُمْ لِبَعْضٍ عَدُوٌّ وَلَكُمْ فِي
الْأَرْضِ مُسْتَقَرٌّ وَمَتَاعٌ إِلَىٰ حِينٍ ③

فَتَلَقَّىٰ آدَمُ مِنْ رَبِّهِ كَلِمَةً فَتَابَ عَلَيْهِ إِنَّهُ هُوَ
التَّوَّابُ الرَّحِيمُ ④

قُلْنَا اهْبِطُوا مِنْهَا جَائِعًا وَقَمًا يَأْتِيَنَّكُمْ رِيٌّ هَدَىٰ
فَمَنْ يَتَّبِعْ هَذَا يَفْلاخُفْ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ⑤
وَالَّذِينَ كَفَرُوا وَكَذَّبُوا بِآيَاتِنَا أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ النَّارِ
هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ⑥

يٰبَنِي إِسْرَءِيلَ اذْكُرُوا نِعْمَتِيَ الَّتِي أَنْعَمْتُ عَلَيْكُمْ
وَأَوْفُوا بِعَهْدِي أُوفِ بِعَهْدِكُمْ وَإِيَّايَ فَارْهَبُونِ ⑦

注 39 この節の最初の二つの文はサタンの存在がアダムとその妻を彼等がそれまで住んでいた場所から誘惑し、それによって二人が今まで楽しんでいた心地よさを失わされた事を意味している。2:35で説明されている様に、アダムを欺き、苦悩をもたらしたのは、サタンであって、アダムに仕える事に従わなかったと言われているイブリースではない。故にここではイブリースを指すのではなく、アダムの時代にいた人々の中でアダムの敵であった他の誰かを指している。この推論は、イブリースがアダムに対しては何の力も持たなかったという事を示す 17:66でも支持される。サタンという言葉はイブリースより、ずっと広い意味を持つ。というのはイブリースは神霊に属し、アダムに仕える事に従わなかった、悪霊に与えられた名前であり、その為、宇宙の悪の力の旗頭で代表となった者である。しかしサタンは、それが霊であろうと、人、動物、病氣、或いはその他のどんなものであってもあらゆる悪又は善のある存在或いは事物に対し使われるのである。故にイブリースは“サタン”であり、イブリースの仲間や結託者は“サタン達”であり、真実の敵、有害な動物、有害な病氣も全て“サタン達”なのである。クルアーン、ハディースそしてアラビアの文学では、“サタン”という言葉が、これらの一つ又は全てについて自由に使われている例が、至る所にみられる。

注 40 クルアーンでは生きたまま天に上る者はいないと主張されている。この節で、はっきりと、地上を人の生涯の住家と定め、イエス或いは、その他の誰も、生きたまま天に昇ってはいないと主張している。

注 41 イスラムでは、地獄が永遠に続くとは信じておらず、地獄を、罪人が、定められた期間、精神を治療し回復させる為に居る一種の悔悟の場とみなしている。(11:100)

注 42 “イスラエル”とは、イサクの息子であるヤコブの別名である。イスラエルとは神が後にヤコブに与えられた名である(創生記 32:28)。元々のヘブライ語ではイスラーとエイルから成る複合語で、(a)神の王子、

42. お前たち、聖書の確証のためにわしが降せしものを信じ、これを疑う最初の者となるなかれ。またわずかな価でわしの神兆を売るなかれ。このわしのみを守護者とせよ。

وَأْمِنُوا بِمَا أُنزِلَتْ مُصَدِّقًا لِّمَا مَعَكُمْ وَلَا تَكُونُوا
أَوَّلَ كَافِرِيهٖ وَلَا تَشْتَرُوا بِآيَاتِي شَيْئًا قَلِيلًا وَإِنِّي
فَاقْتُونُ ﴿٤٢﴾

43. 虚偽を以って真理を混乱させ、故意に真理を隠すなかれ。

وَلَا تَلْبِسُوا الْحَقَّ بِالْبَاطِلِ وَتَكْتُمُوا الْحَقَّ وَأَنْتُمْ
تَعْلَمُونَ ﴿٤٣﴾

44. 礼拝を遵守し、喜捨を惜しまず、跪拝する人々と共に跪拝せよ。

وَأَقِيمُوا الصَّلَاةَ وَآتُوا الزَّكَاةَ وَارْكَعُوا مَعَ الرَّاكِعِينَ ﴿٤٤﴾

45. 経典を読み、(注44) 他人に善行を勧めながら、自らは之を行うことを忘れたるか? それとも、理解し得ざるか?

اتَّخِذُوا النَّاسَ بِالْبِرِّ وَتَسْأَلُونَ أَنْفُسَكُمْ وَأَنْتُمْ
تَتْلُونَ الْكِتَابَ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ﴿٤٥﴾

46. 忍耐と礼拝とによって佑助を求めよ。されど謙虚者ならでは、それは得難し、

وَاسْتَعِينُوا بِالصَّبْرِ وَالصَّلَاةِ وَإِنَّهَا لَكَبِيرَةٌ إِلَّا عَلَى
الْخَاشِعِينَ ﴿٤٦﴾

47. やがてその主に見え主の御許に帰り行くことを固く信ずる人々ならでは。

الَّذِينَ يَظُنُّونَ أَنَّهُمْ مُلْقَوْنَ رَبَّهُمْ وَإِنَّهُمْ إِلَيْهِ
رَاجِعُونَ ﴿٤٧﴾

٤٧
ع
ع
ع

勇士又は兵士を意味している。(Concordance by Cruden & Hebrew-English Lexicon: 著者W. Gesenius)イスラエルという言葉は(1)ヤコブ自身(創世記32:28)、(2)ヤコブの後裔(中命記6:3、4)そして、(3)全ての方正で神を畏れる人々という、それぞれ異なった三つの意味を表してしる。(Hebrew-English Lexicon)

注43 アブラハム以降、“契約”は、ユダヤ人達によって更新された。ここでの“契約”は聖書の数ヶ所で(出エジプト記20章、申命記5、18、26章)触れられている。“契約”が為されシナイ山に神の栄光が顕現した時、ユダヤ人達はこれに併なった“雷と稲妻とトランペットの音に、山から煙が立つ”(出エジプト記20:18)のを見て、余りにも恐れをおぼえたので、モーゼに「貴方が話してくれば聞きますが、我々が死なぬ様、神が我々に話さないようにして下さい。」と叫んだ。(出エジプト記20:19)これらの無分別な神への言葉は彼等の運命を封印してしまい、その為神はモーゼに、これより後には、ユダヤ人の中からはモーゼの様な、律法を与える預言者は現れない事を告げられたのである。その様な預言者は、後にユダヤ人の同胞であるイシュマエルの末裔から出現するのである。この様に、この節では、神はイスラエルの子供達に、神がイサクと“契約”をし、イサクの子孫が、神との“契約”を果たし、神の十戒に従うのなら、神は彼等に恩恵を与え続け、もし果たさないのであれば、恩恵ははく奪される事を思い起させているのである。今では、ユダヤ人達は、“契約”を守っていない為、神は、既に約束された通りイシュマエルの後裔より約束された預言者を出現させたので、“契約”は、新しい預言者に従う人々に譲渡されたのである。

注44 ここで経典とは聖書を指している。しかし「経典を読み」という文は、聖書の全ての内容が真実であると認められている事を意味するものではない。

第六項

48. イスラエルの子孫よ、わしがお前たちに授けし恩恵とお前たちを万民に優りて高めしことを思い起こせ。(注 45)
49. 何人も、他人の身代りにはなり得ず、執り成しも(注 46) 容れられず、贖いもきかず、如何なる助けも得られざるその日を恐れよ。
50. また、われらがファラオの民より(注 47) お前たちを救いたる時のことを思い起こせ。彼等はお前たちを苛酷な責苦で苦しめ、お前たちの息子を殺害し、女たちを辱めたり。(注 48) あれば主の降したる大いなる試練なりき。

يٰۤاَيُّهَا اِسْرَآءِيْلُ اذْكُرُوْا نِعْمَتِيَ الَّتِيْ اَنْعَمْتُ عَلَيْكُمْ
وَ اٰتٰنِيْ فَضْلَكُمْ عَلٰى الْعٰلَمِيْنَ ۝۳۸

وَ اتَّقَوْا يَوْمًا لَا تَجْزِيْ نَفْسٌ عَنْ نَفْسٍ شَيْئًا وَلَا
يُقْبَلُ مِنْهَا شَفَاعَةٌ وَلَا يُؤْخَذُ مِنْهَا عَدْلٌ وَلَا هُمْ
يُبْصَرُوْنَ ۝۳۹

وَ اِذْ جَعَلْنَاكُمْ فِرْنَ اِلٰى فِرْعَوْنَ يَوْمُؤْكُمْ سُوْءَ الْعٰلٰبِ
يُنٰدِيْ بِحَوْنِ اِبْنَاءِكُمْ وَ يَسْتَحْيِيْوْنَ نِسَاءَكُمْ وَ فِىْ ذٰلِكَ
بَلَاءٌ مِّنْ رَّبِّكُمْ عَظِيْمٌ ۝۴۰

注 45 この節の意味するのは、ユダヤ人が優っていたのは、彼等の時代の他の人々に対してだけでなく、クルアーンでは、全ての民の中で永久的に優越である民を伝えようとする為、3:111の様に、イスラム教徒が“最も秀れた人々”であるとの表現をしている。

注 46 執り成しは次の条件でとり行なわれる。先づ(1)とりなしをする人は、とりなしてやりたいと思う人と特別なつながりがなくてはならず、その人から特別の恩恵を受けている事そうでないと、とりなしをする人はあえてとりなしをすることはせず、とりなし自体も災い多きものとなりえないからである。(2)とりなしをうける人は、とりなしてくれる人と真実の関係を有していなければならない。後者が、前者と真実の関係になれば、誰も他の人の為にとりなしをしようなどと思わないからである。(3)とりなしを施してもらう人は、普通神の喜びを勝ちえるのに正直な努力をした人でなくてはならない(21:29)(4)とりなしは、神の明白な許可なしには為されない。(2:256; 10:4) イスラム教で表現される「執り成し」とは、実際には、つぐないの形を変えたものにすぎない。何故なら「つぐない」とは、こわれた絆を直すとか、ほどけかかった絆をしめるの意味を表わすからである。それ故、償いの罪が死によって閉ざされても、「執り成し」の罪は開かれているのである。そして「執り成し」は神の慈悲の顕現の方法であり、神は裁き手ではなく主宰者である為、神がそうされようと思われた者に、慈悲の手を指しのべられるのを阻む物は何もないのである。

注 47 ファラオとは特定の王の名前ではなく、ナイル川流域とアレキサンドリアを治める者が、ファラオと呼ばれていたのである。モーゼはファラオであるラムセスII世の統治する時代に生まれ、彼の息子メンフエタII世の君臨時に、ユダヤ人達を連れて、エジプトを出なければならなかった。ラムセスII世は圧政のファラオと呼ばれ、彼の後継者であるメンフエタII世が「出エジプトのファラオ」として知られているファラオである。(Enc. BibとピークによるCommentary on the Bibleを参照)

注 48 ファラオは、ユダヤ人に、つらく屈辱的な労働をさせて、苛酷な苦役を課した上、ユダヤ人の息子は虐殺し、娘達は生かしておくと命令も下した。こういった方法で彼はユダヤ人の人間性を破壊させようとしただけでなく、彼等の気高く勇壮な特質の抹殺まで企てたのである。

51. あの時われらは海を分けてお前たちを救い、お前たちの目前にてファラオの民を溺死せしめたり。(注 49)

وَاذْفَرَقْنَا بَيْنَكُمْ الْبَحْرَ فَأَجْبَيْنَكُمْ وَاعْرِقْنَا آلَ فِرْعَوْنَ
وَأَنْتُمْ تَنْظُرُونَ^{⑤①}

52. また、われらがモーゼと(注 50)四十日にわたる(注 51)契約を結びし時のことを思い起せ。その間、モーゼの不在に乘じ、お前たちは^{ごうし}贖を(注 52)拝し、罪を犯したり。

وَاذْءَعَدْنَا مُوسَىٰ اَرْبَعِينَ لَيْلَةً ثُمَّ اتَّخَذْتُمُ الْعِجْلَ
مِنْ بَعْدِي ۚ وَأَنْتُمْ ظَالِمُونَ^{⑤②}

53. それでもわれらはその時、お前たちを救したるは、お前たちをして感謝せしめんがためなり。

ثُمَّ عَفَوْنَا عَنْكُمْ مِّنْ بَعْدِ ذَلِكَ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ^{⑤③}

注 49 この事件は、モーゼが神の命によりユダヤ人をエジプトからカナン^{⑤④}の地へ脱出させた時の事である。ユダヤ人達は秘密裏に夜脱出し、ファラオがこれを知り家来達と後を追った時、紅海で海にのまれたのである。この偉大な神の啓示の持つ本質的意味を理解するには、類似した節である 20:78; 26:62-64; 44:25 をも併せて読む必要がある。これらの記述から判る事は、クルアーンが述べる様に(1)モーゼが杖で海をうった時或いは聖書が述べる様にモーゼが海に手をかざした時、丁度引き潮であり、海はその海床を表わし、後退してゆく時であった。(2)モーゼは神に、向かう岸まで急いで渡る様、神に命じられた。(3)しかしファラオの一族が海に着いた時は丁度満潮時にあっており、彼等はユダヤ人に追いつく事に夢中で、何の考えもなく海にとびこんだ。(4)戦車の重装備や、重い武器等をつけていた為、ファラオの軍隊の進み具合が非常に遅く、まだ海中にいる折、満潮となって、全員、溺れてしまったらしい。という事である。モーゼが杖で海の水をうった事と海が分かれた事には何の因果関係もないのである。引き潮時であった事と、ユダヤ人達は太急ぎで海を渡れという事が、モーゼへの神兆、或いは神からのお告げであったからにすぎない、神がそうなるべく図られたから、モーゼ達が紅海に着いた時、潮が引き潮となり、神が命じられた通りモーゼが、杖で海をうつと、潮が引き始めユダヤ人達が渡る為の道が出来たのである。引き潮とモーゼの打ちおろした杖は偶然重なったのであり、神のみが引き潮となる事を御存知でモーゼに丁度その時水をうつ様命ぜられていた為、奇跡となったのである。

モーゼがエジプトからカナンに脱出する為に渡った、紅海の正確な地点については、歴史家達の意見は異なっている。ある歴史学者は、その場所がダムシラートの谷或いはトゥミラートの谷とも呼ばれた、ファラオ族の首都のあった(聖書百科辞典、第4巻4012項“ラムセス”の項)ゴシェン地域であると指摘している、他の学者は、モーゼはもっと北へ上り、地中海の近くのカナンと向かいあったゾアンのまわりをまわっていったと考えている。(聖書百科辞典、1438項)しかし一番高い可能性としては、モーゼの時代のファラオ族の都のあったタル・アビー・スレイマーンから出てユダヤ人達は先ずティムサハ湾の北西部まで行ったが、湾が網の目状に手行を阻んでした為南に戻り、幅が2~3マイルしかないスエズの街の近くの紅海を渡り、カダスへ向かったと考えられる。(聖書百科辞典、1437項)

注 50 ユダヤ教の始祖であるモーゼは、ユダヤの民をファラオの独裁から逃れさせた、ユダヤ人の最も偉大な預言者である。聖書の記載に依れば、アブラハムの死後 300 年程の後、そしてイエスに先だつ事 1400 年の頃生きたと言われている。彼は律法を与えた預言者であり、その他のユダヤの預言者は彼の確立したシステムの後継者にすぎない。

注 51 7:143を参照の事

注 52 人は自分のまわりを取り巻く環境に隷属している、これは特に、支配をうける人々に特有で、彼等は自分達の支配者のやり方や習慣を大体に於いて真似る。ユダヤ人達は長い間、ファラオ族の奴隷であった為、自然にエジプト人達の偶像崇拜を受け入れていた。彼等は、モーゼに連れられてエジプトを出てから途中で偶像崇拜をする人々に出会った時、モーゼに、似た様な礼拝をする事を許してくれと、頼んだのである。(7:139)

54. またわれらがモーゼに、經典と(注53)識別の基準を授与したるは、お前たちが正しく導かれんがためなり。

وَرَادَّ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ وَالْفُرْقَانَ لَعَلَّكُمْ تَهْتَدُونَ ﴿٥٤﴾

55. その時、モーゼはその民に云えり、「我が同胞よ、お前たちは愼を拝し、自らに罪を犯したり。されば悔い改めてお前たちの創り主に慈悲を請い、その邪欲を断て。その方がお前たちの創り主の御心にかなう」と。その後主は、お前たちへ憐れみの顔を向けたり。げに主はたびたび憐れみに転じ、慈悲深くまします。

وَرَادَّ قَالَ مُوسَى لِقَوْمِهِ يَقَوْمُ إِنَّمَا ظَلَمْتُمْ أَنْفُسَكُمْ بِاتِّخَاذِكُمُ الْعِجْلَ فَتَوْبُوا إِلَىٰ بَارِكِكُمْ فَاقْتُلُوا أَنْفُسَكُمْ ذِكُّكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ عِنْدَ بَارِكِكُمْ فَتَابَ عَلَيْكُمْ إِنَّهُ هُوَ التَّوَّابُ الرَّحِيمُ ﴿٥٥﴾

56. その時、お前たちは云えり、「モーゼよ、我等はアッラーをこの目で見ずば、汝を信ぜず」と。すると、お前たちが見ている前で、落雷がお前たちを襲いたり。

وَرَادَّ قَلْتُمْ يٰمُوسَىٰ لَنْ نُؤْمِنَ لَكَ حَتَّىٰ نَرَىٰ اللَّهَ فَرَجًا فَأَحْلَيْتُكُمْ الصُّعُقَةَ وَأَنْتُمْ تَنْظُرُونَ ﴿٥٦﴾

57. われらがお前たちを死(注54)から甦らしめたるは、お前たちをして感謝せしめんがためなり。

ثُمَّ بَعَثْنَاكُمْ مِنْ بَعْدِ مَوْتِكُمْ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿٥٧﴾

58. 而してわれらは、お前たちの頭上を雲で(注55)覆い、マンナ(注56)とサルワを(注57)降し、「われらが用意せる佳きものを喰へ」と云えり。彼等はわれらを害したに非ず、害したるは、彼等自らなり。

وَظَلَلْنَا عَلَيْكُمُ الْغَمَامَ وَأَنْزَلْنَا عَلَيْكُمُ الْمَنَّاءَ وَالسَّلْوَىٰ كُلُّوا مِنْ طَيِّبَاتِ مَا رَزَقْنَاكُمْ وَمَا ظَلَمُونَاوَلَكِنْ كَانُوا أَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ ﴿٥٨﴾

注53 モーゼに与えられた十戒の書かれていた“牌”。7：146、151、155を参照の事。この節では、神はモーゼに經典或いは石碑に書かれた十戒を与えられたのみでなく、善悪をはっきり区別できる様な天啓や神兆、そして規範をお与えになった事が述べられている。

注54 この節は、不遜に示された不当なユダヤ人達の要求が、彼等の肉体的な死ではなく精神的な死をもたらしたる事を意味している。この意味は次の節で神が抑せられる、“一旦死んだ汝らをよみがえらせた”即ち、自分達の失ってしまった尊厳と名誉を再び与えられたの意味を持つ節で確証されている。「死」とは成長の力の終息、(57：18)；感じる力の損失(19：24)；解明する力の損失(6：123)；人間の生活をみじめにする悲しみ(14：18)；肉体的死(レーンによる語い辞典)を意味している。

注55 出エジプト記、40：34-38を参照の事

注56 「マンナ」とは好意或いは贈り物、何の苦勞や問題もなく手に入る物、はちみつ或いは露を意味している。

注57 「サルワ」とは(1)アラビアの地域や近隣の国々にいるうずらに似た白色の鳥、(2)それが何であれ、人を満足させ幸せにする物；はちみつなどを表している。マンナとサルワを天から授かったとの表現はクルアーン

59. また、われらは云えり、「お前たちこの邑に入り、(注58)いずこなりと好きなところで腹いっぱい食せよ。頭をたれて門を入り、「我等の罪を許し給え」と唱えよ。われらはお前たちの罪を赦し、善行者には報奨を増さん」と。

60. しかるに不義なす徒輩が、自分たちに告げられし言葉を他の言葉に変えたり。さればわれらは、罪を犯せし者どもに天罰を加えたり、命に背きし故に。

第七項

61. またモーゼが己が民のために水を求めて祈りし時、われらは云えり、「汝の杖でその岩をうて」と。すると、そこより十二の泉が湧き出で、各支族は自分の飲むべき場所を知りたり。(注59)「アッラーが賜えるものを食い且つ飲め。されど地上に騒乱を起し、邪悪な行いをするなかれ」。

62. 思い起すがよい、お前たちの言葉を。「モーゼよ、我等は唯一種食物では満足できぬ。大地で育つものを我等に授け賜わらんことを、主に祈れ。すなわち、青菜、胡瓜、麦、そら豆、玉葱など」モーゼはそれに答えて、

وَإِذْ قُلْنَا ادْخُلُوا هَذِهِ الْقَرْيَةَ فَكُلُوا مِنْهَا حَيْثُ شِئْتُمْ رَغَدًا ۖ وَادْخُلُوا الْبَابَ سُجَّدًا ۖ وَقُولُوا حِطَّةٌ نَعْفُكُمْ ۖ خَطِيئَتُكُمْ وَسَتْرِيذُ الْحَسَنِينَ ۝٥٩

فَبَدَّلَ الَّذِينَ ظَلَمُوا قَوْلًا غَيْرَ الَّذِي قِيلَ لَهُمْ فَأَنْزَلْنَا عَلَى الَّذِينَ ظَلَمُوا رِجْزًا مِنَ السَّمَاءِ بِمَا كَانُوا يَفْسُقُونَ ۝٦٠

وَإِذِ اسْتَسْقَى مُوسَى لِقَوْمِهِ فَقُلْنَا اضْرِبْ بِعَصَاكَ الْحَجَرَ ۖ فَانْفَجَرَتْ مِنْهُ اثْنَا عَشَرَ نَبِئًا ۖ قَدْ عَلِمَ كُلُّ أُنَاسٍ مَشْرِبَهُمْ ۖ كُلُوا وَاشْرَبُوا مِنْ رِزْقِ اللَّهِ وَلَا تَعْتُوا فِي الْأَرْضِ مُفْسِدِينَ ۝٦١

وَإِذْ قُلْتُمْ يَسُوسِي لَنَا نَصِيرٌ عَلَى طَعَامٍ وَاحِدٍ فَادْعُ لَنَا رَبَّنَا يُخْرِجْ لَنَا مِمَّا تُنْتِجُ الْأَرْضُ مِنْ بَقَرَاهَا وَنَتَائِجِهَا وَقَوْمِهَا وَعَدَسِهَا وَبَصَلَهَا ۚ قَالَ اسْتَبِدُّونَ

ンでは三ヶ所に見うけられる。当節はその一つである。(7:161も参照)その三つの節全てに「我等が授けたよき物を食べよ」との訓令が続いている。この事からシナイ山の荒地で幾種類かの健康に良く美味な食べ物があることがエダヤ人達に授けられた事がわかるが、それは主としてマンナとサルワであった。出エジプト記の16:13-15を参照の事

注58 「邑」は特定の街を指す必要はない。シナイ山からカナンに向かう途中にあった近くの街、或いは最も近くにあったどの街であってもよい。エダヤ人達は自分達の送っていた生活レベルに達する施設や快適な環境や、以前の生活様式を持つ街に住みたいという欲望が強かったので、私有権のない砂漠ではごく当たり前、好きな所で食べる事ができ、住宅地の生活と砂漠の生活とを融合した様などこか近隣の村に入る事を試みた。しかしこの変化は自分達を他の人々と接触させる事となり、ひいては自分達の道徳律にも影響が生じる為、自分達自身に関して注意深く、又神に対しても従順であろうと努力した。

注59 この場合のモーゼの奇跡は、自然の法則にさからった事をしたというのではなく神がモーゼに彼が杖でたたけばすぐ溢れる様になっている特定の位置を啓示なさったという事なのである。地質学者に知られている事であるが、時々、小高い土地や岩の下の浅い所から水が湧き、岩が何か重い物で、たたかれたりつかれたりすると瞬時に水がほとばしる事があるのである。

云えり、「お前たちは優れるものの代りに劣れるものを求むるか？ ならば、エジプトに降り行け。しからばお前たちが求むるものを得ん」と。(注60) かくて彼等は屈辱と困窮を被り、またアッラーの激怒に遭えり。こは彼等がアッラーの神兆を拒否し、預言者たちを不当にも殺せるが故なり。こは彼等が叛いて、罪を犯したるが故なり。

第八項

63. げに信ずる人々、ユダヤ教徒、キリスト教徒、並びにサービア人たち、(注61) そのいずれたるを問わず、アッラーを信じ、最後の審判の日を信じ、善行を積む人々は、主より必ず報奨を賜わらん。而して彼等には、恐ろしきこと悲しきこと起らざるべし。

الَّذِي هُوَ أَدْنَىٰ بِالَّذِي هُوَ خَيْرٌ إِنْ هِيَ إِلَّا حِسَابُهُمْ وَإِنْ لَكُم مَّا سَأَلْتُمُوهُ وَصَرَّيْتُمْ عَلَيْهِمُ الذِّلَّةَ وَالْمَسْكَنَةَ وَبَاءَ وَنِعْظِهِ مِنَ اللَّهِ ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ كَانُوا يَكْفُرُونَ بِآيَاتِ اللَّهِ وَيَقْتُلُونَ النَّبِيِّنَ بِغَيْرِ الْحَقِّ ذَلِكَ بِمَا عَصَوْا وَكَانُوا يَعْتَدُونَ ﴿٦٣﴾

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَالَّذِينَ هَادُوا وَالصَّابِرِينَ
الَّذِينَ آمَنُوا بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ وَعَمِلُوا
صَالِحًا فَلَهُمْ أَجْرُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ وَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ
وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿٦٤﴾

注60 長い間の奴隷生活と、隷属の日々が続いた為、ユダヤ人達は臆病で怠惰となってしまっていた。神は、ユダヤ人達が自分達の臆病さと怠惰さをうちすてる事が出来る様にと、しばらくの間、砂漠で野草と狐獣に頼る生活をおさせになった。そうする事で生氣を取り戻したユダヤ人達は、約束された土地へと導びかれ、パレスチナの統治者となったのである。しかしユダヤ人達は神の本当の御心を理解できず又、理解したとしてもその意味を深く考える事をせず、街に住む事を主張した。神は彼等が約束された土地を支配出来る様に準備させたかったのに、これらの御心を損ねた不運な人々はいろいろな作物を耕作する事に固執した為、望むものの得られる街へ戻る様に告げられた。

注61 サビという言葉はもともと自分の信仰を新しい信仰の為に捨てる者を指す。しかしここのサービア人というのはサビ教徒を指し、アラビアの一部の地域とその周辺の国々に存在する特定の宗教グループを意味している。その名称は、(1)メソポタミアに住んでいた星を拝む人々(ギボンの“ローマ帝国”ムルージュ・アル・ザハブと倫理宗教百科辞典、8巻の“Mandaeans”の項参照)(2)イラクのムサルムの近くに住み単一神と全ての神の預言者を信じていたが、經典を所有しなかった人々に対して用いられる、彼等はノアの信仰に従うと主張している。しかし彼等と、聖書の注釈者が、古代イェメンに住んでいたとして説明するサービア人とを混同しない事。この節は、神と終末の日を信じる事のみで救われる、と間違えて理解されていることがあるが、そういう事を意味している訳ではない。クルアーンが強く主張しているのは、聖なる預言者を固く信ずる事が本質的な必須の事であり(4:151, 152; 6:93)、その信仰が神への信仰の肝要を為し、来るべき世を信ずるという事は、神の啓示を併せ信ずる事をも意味している(4:151, 152; 6:93)。他でも、イスラムこそが疑いもなく、宗教として神に認められていると明言されている(3:20, 86)。ここで、クルアーンは、神と終末の日を信じる事の言明に局限している。これは啓示と聖なる預言者を信じる事が必須ではないという理由ではなく、神と終末の日を信じる事には神の啓示と聖なる預言者を信じる事が内包されているからである。この4つは本質的に切離す事が出来ないのである。実際には、この節はユダヤ人の“我等こそ神に選ばれし者達である”そしてそれ故救いの対象となる選民である、という間違った信仰をうちこわす様意図されている。この節が言わんとしているのは、救われるべき者が、ユダヤ人、キリスト教徒、サビ教徒、或いはイスラム教徒であろうと構わないという事なのである。信仰が口だけのものであるのなら、それは生命や人をつき動かす力のない死したもとなってしまう。そしてこの節は、預言を具体的に表わす為、イスラムの真実を試す安全な規準

64. またわれらが、お前たちと契約を結び、お前たちの前に山を聳え立たせ、(注62)「われらがお前たちに授けしものを護持し、その中に記されたることを銘記せよ」と云いし言葉を思い起せ。
65. しかるにその後、お前たちはまた背けり。もしアッラーの恩恵と慈悲なかりせば、お前たちは必ず失敗者のうちに入りしなり。
66. お前たちは、お前たちのうち安息日の掟を破りし者あるを知る。さればわれらはその者どもに告げて、云えり、「猿に墮ちよ(注63)、蔑まれよ」と。
67. かくしてわれらは、彼等並びに彼等の後に来る人々のために、神を畏れる人々への戒めとなせり。
68. モーゼが己れの民に「アッラーがお前たちに牝牛を一頭犠牲に供えんことを命ず」と告げたる時、彼等は云えり、「汝は彼等をからかうか?」と。モーゼは云えり、「アッラーよ我を守り給え、我を愚者の一人たらしむるなかれ」と。

وَإِذْ أَخَذْنَا مِيثَاقَكُمْ وَرَفَعْنَا فَوْقَكُمُ الطُّورَ خُذُوا
مَا آتَيْنَاكُمْ بِقُوَّةٍ وَادْكُرُوا مَا فِيهِ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ ﴿٦٤﴾

ثُمَّ تَوَلَّيْتُمْ مِّنْ بَعْدِ ذَلِكَ فَلَوْلَا فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكُمْ
وَرَحْمَتُهُ لَكُنْتُمْ مِنَ الْخَاسِرِينَ ﴿٦٥﴾

وَلَقَدْ عَلِمْتُمُ الَّذِينَ اعْتَدُوا مِنْكُمْ فِي السَّبْتِ
فَقُلْنَا لَهُمْ كُونُوا قِرَدَةً خَاسِرِينَ ﴿٦٦﴾

وَجَعَلْنَاهَا نَكَالًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيْهَا وَمَا خَلْفَهَا وَ
مَوْعِظَةً لِّلْمُتَّقِينَ ﴿٦٧﴾

وَإِذْ قَالَ مُوسَى لِقَوْمِهِ إِنَّ اللَّهَ يَأْمُرُكُمْ أَنْ تَذْبَحُوا
بَقَرَةً قَالُوا أَتَتَّخِذُنَا هُزُوًا قَالَ أَعُوذُ بِاللَّهِ أَنْ أَلُونَ
مِنَ الْجَاهِلِينَ ﴿٦٨﴾

としても取り上げられている。預言は、即ちイスラムが真実の信仰(宗教)として勝利を得るとの預言である。規準は、預言が、イスラムがまさにその生存をかけて戦っている時に為されたという事実に基づいている。この節の言わんとしている事は、ユダヤ人、キリスト教徒、サビ信徒等、宗教に関してはそれがどの宗教であろうと、彼等が神と終末の日への、深く正直な信仰を持つのなら、そして、真の宗教(信仰)即ち、絶対的な師依—「イスラム」の真髄である善い行ないを為すのであれば、彼等が嘆く事も、彼等に恐怖が訪れる事もない。ということである。

注62 この語句はシナイ山が実際にユダヤ人の頭上にそそり立った事を意味している訳ではない。これはユダヤ人がシナイ山のふもとにたたずんでいた時、聖約が起こった事を意味しているにすぎない。又、ユダヤ人がふもとで野営していた時、シナイ山に地震が起こった情景とも考えられる(出エジプト記19:2)そういう場合には、高い山の山頂がゆれると頭上にまるでかぶさっている様にもみえるであろう。

注63 「猿」という言葉が比喩的にイスラエル人の卑屈さと醜さを表わす為に使われているが、これは形質的なものではなく性格と精神の構造が猿のようであるとの意味である。彼らの心が猿の様になってしまったのである。それを示すのに神は比喩的な表現をお使いになるのである。もしクルアーンで肉体的な猿への変形を意味しているのであればアラビア語でハセヤという言葉を使うはずであり、合理的な存在に対してのハセインという語は使用しないのである。この言葉を使う事で、イスラエル人がいくら富や教育があっても猿同様世間でさげすまれ、地上で強大な力を得る事がない事が指摘されている。「猿」という語の持つ原義は、ごみの中に屈伏するという内容の他に、卑屈さとさげすみという意味がある。5章61節も参照の事。

又すべてのユダヤ人を指すのではないという点で当章75節(注68)参照のこと。

69. 彼等は云えり、「お前の主に祈り、如何なる牝牛なのか我等に明示せしめよ」と。モーゼは答えて、云えり、「神は仰せられたり。老い過ぎて、若過ぎて、その中間で丁度年頃の牝牛なりと。さればお前たち、命ぜられしことをなせ」と。

70. 彼等は云えり、「我等のために主に祈り、牝牛が如何なる色かを我等に明示せしめよ」と。モーゼは答えて、云えり、「神は仰せられたり、そは焦げ茶色で、鮮明に^{あざやが}研え、見る人をば喜ばしむる牝牛なり」と。

71. 彼等は更に云えり、「我等のために主に祈り、如何なる牝牛なるかを我等に明示せしめよ。我等にはどの牝牛も同じように見える故に。アッラーの御意志ならば、我等は必ず捜し当てん」と。

72. モーゼは答えて、云えり、「神の仰せは、大地を耕し、作物に水を灌ぎて疲れざる牝牛。完全無傷の色の牝牛なり」と。彼等は云えり、「いまようやく汝は真実を告げたり」と。そこで彼等は心ならずもその牝牛を犠牲に供えたり。(注 64)

第九項

73. 思い起せ、お前たちが人を殺し、(注 65) その加害者について相い争える時、アッラーはお前たちが隠せしことを(注 66) 明白にせり。

قَالُوا ادْعُ لَنَا رَبَّكَ يُبَيِّنْ لَنَا مَا هِيَ ۚ قَالَ إِنَّهُ يَقُولُ
إِنَّهَا بَقَرَةٌ لَا فَارِصٌ وَلَا بَكْرٌ عَوَانُ بَيْنَ ذَلِكَ ۖ
فَاعْمَلُوا مَا تُؤْمَرُونَ ﴿٦٩﴾

قَالُوا ادْعُ لَنَا رَبَّكَ يُبَيِّنْ لَنَا مَا لَوْهَا قَالَ إِنَّهُ يَقُولُ
إِنَّهَا بَقَرَةٌ صَفْرَاءٌ فَاقِعٌ لَوْنُهَا تَسُرُّ النَّاظِرِينَ ﴿٧٠﴾

قَالُوا ادْعُ لَنَا رَبَّكَ يُبَيِّنْ لَنَا مَا هِيَ ۚ إِنَّ الْبَقَرَ تَشْبَهُ
عَلَيْنَا ۚ وَإِنَّا لَنَ شَاءُ اللَّهُ لَنُهْتَدُونَ ﴿٧١﴾

قَالَ إِنَّهُ يَقُولُ إِنَّهَا بَقَرَةٌ لَا ذَلُولٌ تُثِيرُ الْأَرْضَ
وَلَا تَسْقِي الْحَرْثَ مُسَلَّمَةٌ لَا شِئْءَ فِيهَا قَالُوا لَئِنْ
جِئْتَ بِآيَةٍ فَقَدْ بَهِرْهَا وَمَا كَادُوا يَفْعَلُونَ ﴿٧٢﴾

وَإِذْ قَتَلْتُمْ نَفْسًا فَادْرَأْتُمْ فِيهَا وَاللَّهُ خَرَجَ مَا
كُنْتُمْ تَكْتُمُونَ ﴿٧٣﴾

注 64 イスラエル人達は牛を非常に尊敬するエジプト人に混じって長く暮らしてきていた故に牛に対する尊敬の念はイスラエル人の心にすみついてた。これが、彼らが偶像を造った際、牛の形を用いた理由である(2章52節、出エジプト記32:4)。心からその念を呼び起こす為、何度も、牛をいけにえにする様にと彼らは命令された(民数記19:1-9; レビ記4:1-21; 16:3, 11)。彼らは、愛が用にて特殊な牛を飼っていた様でありそうすべき神命があるとの誤解をしていた。故に、彼らは、何度も、モーゼに、神がいけにえにせよと命ぜられた牛に関し、詳しく指定をするように迫り、その質問の結果として、モーゼから動物を指定する為の、幾らかの条件が加えられた。

注 65 前途の章で、ユダヤ人の邪悪な風俗や罪惡が述べられたが、この章では、十字架上でイエスを殺そうとした最大の罪が述べられており、その為、聖書に依れば、そのユダヤ人は、偽りの預言者であった事が示されている(申命記21:23)。この極悪なユダヤ人の計画は、全くの失敗に帰したのである。イエスは十字架から、まるで死人の様ではあったが、まだ生きている状態でおろされた。この歴史的事実に関しては、23:51を参照の事。

74. 而してわれらは云えり、「その一部を以て死体を打て」と。かくしてアッラーは死者を甦らせ、お前たちが納得ゆくようにその神兆を示したり。

75. しかるにその後、お前たちの心は岩の如く硬くなり、いや岩石よりも硬くなれり。(注67) その岩石の中には河川が湧き出でるものもあり、また岩が裂けて水が溢れ出るものもあり。またアッラーを畏れて自ら恭謙するものもあり。(注68) アッラーは決してお前たちの所業を見過し給わず。

76. お前たち、彼等ユダヤ人に、お前たちを信ずることを期待するのか？ 彼等の或者はすでにアッラーのお言葉を聴き、それを理解しながら、しかもその大切なことを知りつつ、後で改竄せり。

77. 彼等は信者に会えば、云う、「我等もまた信ず」と。されど仲間同士になるや、「アッラーがお前たちに打ち明けしことを彼等に教え、主の前で彼等と論争するつもりか？ お前たち、それがわからざるか？」と云う。

(注69)

فَقُلْنَا اضْرِبُوهُ بِبَعْضِهَا كَذَلِكَ يُعَذِّبُ اللَّهُ الْمُنَافِقِينَ
وَيُرِيكُمْ آيَاتِهِ لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُونَ ﴿٦٧﴾

ثُمَّ قَسَتْ قُلُوبُكُمْ مِنْ بَعْدِ ذَلِكَ فَهِيَ كَالْحِجَارَةِ
أَوْ أَشَدَّ قَسْوَةً وَإِنَّ مِنَ الْحِجَارَةِ لَمَا يَتَفَجَّرُ مِنْهُ
الْأَنْهَارُ وَإِنَّ مِنْهَا لَمَا يَسْقَى فَيْخَرُجُ مِنْهُ الْمَاءُ
وَإِنَّ مِنْهَا لَمَا يَهْبِطُ مِنْ خَشْيَةِ اللَّهِ وَمَا اللَّهُ
بِقَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿٦٨﴾

أَقْتَضِعُونَ أَنْ يُؤْمِنُوا لَكُمْ وَقَدْ كَانَ فَرِيقٌ مِنْهُمْ
يَسْمَعُونَ كَلِمَ اللَّهِ ثُمَّ يَنْجِرُونَكَ مِنْ بَعْدِ مَا عَقَلُوهُ
وَهُمْ يَعْلَمُونَ ﴿٦٩﴾

وَإِذَا اتَّعَا الْقَوْمَ الَّذِينَ آمَنُوا قَالُوا آمَنَّا وَإِذَا خَلَا بِغَضَمٍ
إِلَى بَعْضٍ قَالُوا أَتُحَدِّثُونَهُمْ بِمَا فَتَحَ اللَّهُ عَلَيْكُمْ
لِيُحَاجُّوكُمْ بِهِ عِنْدَ رَبِّكُمْ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ﴿٧٠﴾

注66 この節は、イエスの死に関する真実が明るみに出て、この事件を長く隠し続けてきた糺いが取りはらわれる時がくる事を示している。

注67 前節で言及されている無実のイスラム教徒の殺人は、メディナのユダヤ人達の運命を封印する所となった。彼らの心は後にはどんどん柔軟性を失い、まるで石か、もっとひどくかたくなになってしまうのである。この節では、石の様に生命のないものでも、まだ、何らかの役にたつのに、有徳な事をしようとする心から遠くはなれてしまったユダヤ人は、あまりにも墮落してしまい、高潔な所業など、命ぜられてもしなくなっているのである。石ですら、そこから水が湧いて人の為になる事があるのに、彼らは石以下であるといえる。

注68 ユダヤ人に関する比喩的表現で「隄」(当章66節)や、「岩石より硬く」(当節)というのは、ユダヤ人全体にあてはめられるものではない。何故なら、ユダヤ人の幾らかは、紛れもなく、神の畏敬に心がゆれ動くからである。これについてこの節で「彼ら(ユダヤ人)の中には、アッラーを畏れて謙る者もいる」と表現されている。

注69 この節では、常に偽善者ぶった行動をする他の階層のユダヤ人について述べている。彼らはイスラム教徒と混じると、世俗的な目的から和し、自分達の經典中の聖なる預言者に関する預言を確認するのである。しかし自分達と同種の者達と交わる時は、自分達の共同社会中の他の者達から、神が彼らに啓示した事について、イスラム教徒達を啓蒙する事を叱責されるのである。即ち聖書の中の聖なる預言者についての預言をイスラム教徒に知らせる事についての叱責である。

78. 彼等はアッラーが、彼等の隠すことも、表わすことも併せ知ることを知らざるか？

79. 彼等の中には無知文盲な徒輩あり。その者たちは經典も知りもせず、ただ誤った概念で憶測するにすぎず。

80. 自らの手で經典を記し、「こはアッラーより降されるものなり」と称し、(注70) 僅かばかりの金子を得る者どもに災いあれ。己が手で記したるが故に、また利益を得るが故に彼等に災いあれ。

81. 彼等は云う、「業火が我等に触れるは、数日にしかすぎず」と。(注71) 云え、「お前たちアッラーと約束を結びたるか？ 果して然らば、アッラーは約束を破らざるべし。それともお前たちは、アッラーについてお前たちが知らざることを語るに非ずか？」と。

82. 悪行を重ね、その罪に囲まれて身動きできぬ者、彼等は業火の住人となりて、永劫にその中に住み留まらん。

83. されど信じて善行を積む者、彼等は楽園の住人となりて、永劫にその中に住み留まらん。

第十項

84. われらがイスラエルの子孫と契約を結びし

أَوَلَا يَعْلَمُونَ أَنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا يُسِرُّونَ وَيَأْخُفُونَ ﴿٧٨﴾

وَمِنْهُمْ أُمِّيُونَ لَا يَعْلَمُونَ الْكِتَابَ إِلَّا أَمَانًا وَإِنْ هُمْ

إِلَّا يَظُنُّونَ ﴿٧٩﴾

قَوْلٍ لِلَّذِينَ يَكْتُمُونَ الْكِتَابَ بِأَيْدِيهِمْ ثُمَّ يَقُولُونَ

هَذَا مِنْ عِنْدِ اللَّهِ لِيَشْتَرُوا بِهِ ثَمَنًا قَلِيلًا قَوْلٍ

لَهُمْ مِمَّا كَتَبَتْ أَيْدِيهِمْ وَوَيْلٌ لَهُمْ مِمَّا يَكْسِبُونَ ﴿٨٠﴾

وَقَالُوا لَنْ تَنَسُّنَا النَّارُ إِلَّا أَيَّامًا مَعْدُودَةً قُلْ

أَتُخَذَ ثَمَرُ عِنْدَ اللَّهِ عَهْدًا فَلَنْ يُخْلَفَ اللَّهُ عَهْدَهُ

أَمْ تَقُولُونَ عَلَى اللَّهِ مَا لَا تَعْلَمُونَ ﴿٨١﴾

بَلَى مَنْ كَسَبَ سَيِّئَةً وَأَحَاطَتْ بِهِ خَازِنَتُهُ فَأُولَٰئِكَ

أَصْحَابُ النَّارِ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٨٢﴾

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ الْجَنَّةِ

هُم فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٨٣﴾

وَإِذْ أَخَذْنَا مِيثَاقَ بَنِي إِسْرَءِيلَ لَا تَعْبُدُونَ إِلَّا

注70 ユダヤ人の中には、神の言葉と称して本を作ったり、それらの一部を作った者達がいた。この様な行為はユダヤ人達により、しばしば行われ、その上、正統な聖書の他に、ユダヤ人達が、啓示された本であるとしている数冊の本があるため、啓示されなかった本と啓示された本との区別をする事が今では不可能になってくれている程である。

注71 ユダヤ人の幾つかの悪習を述べた後に、クルアーンは、ユダヤ人のごうまんさと、心のがん迷さの根本的原因を説明している。クルアーンの指摘する所によれば、これらは罰をうけないという間違った一般概念、(Jew, Enc-Gehenna参照) 或いは、もし罰せられる様な事があっても、その期間は極端に短く、極く小さい罰であるという誤解に起因している。聖なる預言者の時代には、一部のユダヤ人は、自分達の罰は40日間以上続くまいと思っていたくらいである。ある者達などは、それを7日間などと、勝手に短縮していた。目下の所、ユダヤ人があまねく信じているのは、どのグループに属しているようが、いかにひどい人間であっても、無神論者でない限り、11ヶ月、或いは、いくらか長くとも、1千年以上、地獄にとめおかれる事はないという事である。こういう者達は地獄で、一生責苦を負うものであるが。

時を思い起せ。「お前たちアッラー以外何者も崇拜するなかれ。而して、両親、親戚、孤児、貧者を親切にせよ。人々に優しく言葉をかけ、礼拝を遵守し、喜捨を惜しむな」しかるにお前たちは、僅かな一部の者を除いて、他は顔をそむけたり。

85. またわれらは、お前たちと契約を結びし時、云えり、「お前たち、己が血を流すなかれ。また己が民をその家より追放するなかれ」と。その時お前たちは、これを是認し、自らその証人たりしなり。

86. しかるにお前たちは、己が同胞を殺し、且つ同胞の一部をその住居から逐い、あまつさえ相い謀って、悪と憎しみを以て彼等に敵対せり。彼等が俘囚となりてひかれてくると、追放そのものが違法なるにもかかわらず、身代金を要求せり。お前たちは経典の一部を信じ、他を拒むか？ お前たちのうちかかる行為をなせる者の報いは、現世においては恥辱、審判の日には極刑に処せられるべし。げにアッラーはお前たちの所業を見過し給わず。(注 72)

87. かくの如き徒輩は、来世より現世を選ぶ者なり。彼等は懲罰を軽減せられず、また如何なる佑助も得ざるべし。

اللَّهُ وَالَّذِينَ أَحْسَنَآ وَذِي الْقُرْبَىٰ وَالْيَتَامَىٰ
وَالْمَسْكِينِ وَقُولُوا لِلنَّاسِ حُسْنًا وَقَبِلُوا الصَّلَاةَ
وَآتُوا الزَّكَاةَ ثُمَّ تَوَلَّيْتُمْ إِلَّا قَلِيلًا مِّنْكُمْ وَأَنتُمْ
مُعْرِضُونَ ﴿٨٥﴾

وَإِذْ أَخَذْنَا مِيثَاقَكُمْ لَا تَسْفِكُونَ دِمَاءَكُمْ وَلَا
تُخْرِجُونَ أَنْفُسَكُمْ مِنْ دِيَارِكُمْ ثُمَّ أَقْرَرْتُمْ وَأَنتُمْ
تَشْهَدُونَ ﴿٨٦﴾

ثُمَّ أَنْتُمْ هَؤُلَاءِ تَقْتُلُونَ أَنْفُسَكُمْ وَتُخْرِجُونَ فِرْيَقًا
مِّنْكُمْ مِنْ دِيَارِهِمْ تَظَاهَرُونَ عَلَيْهِمْ بِالْإِثْمِ
وَالْعُدْوَانِ وَإِنْ يَأْتِوكُمُ اسْرَىٰ تَقْدُوهُمْ وَهُمْ
مُحَرَّمٌ عَلَيْكُمْ إِنْخَرَجَهُمْ أَفْنَوْهُمْ مِّنْ بَعْضِ
الْكِتَابِ وَتَكْفُرُونَ بِبَعْضِ فَبِأَجْنَءٍ مَّنْ يَّفْعَلُ
ذَٰلِكَ مِنْكُمْ إِلَّا جُزْءٌ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَيَوْمَ الْقِيَامَةِ
يُرَدُّونَ إِلَىٰ أَشَدِّ الْعَذَابِ وَمَا اللَّهُ بِغَافِلٍ عَمَّا
تَعْمَلُونَ ﴿٨٧﴾

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ اشْتَرَوُا الْحَيَاةَ الدُّنْيَا بِالْآخِرَةِ فَلَا
يُخَفِّفُ عَنْهُمْ الْعَذَابُ وَلَا هُمْ يُنصَرُونَ ﴿٨٨﴾

注 72 聖なる預言者の時代のメディナには、三つのユダヤ人の部族、バヌー・ケーヌカ、バヌー・ナズィールとバヌー・クレーズと、二つの異教徒の部族アウスとカズラッジュが住んでいた。アウスの隣にバヌー・ケーヌカとバヌー・クレーズの二つのユダヤ人の部族が、又カズラッジュには、バヌー・ナズィールが隣接していた。この為、異教徒間の戦争が始まるとユダヤ人達は自動的にまきこまれてしまう。しかし戦争中に、異教徒がユダヤ人を捕虜にするとユダヤ人達は寄付を集め身代金を支払った。ユダヤ人達は異教徒の捕虜として拘束される事は不当であると考えたのである。クルアーンはこの風習には反対で、彼らの信仰が、ユダヤ人の奴隷化を禁止するのみでなく、相互の戦争関係とあからさまな殺人を禁じており、聖書（又は経典）の一部だけを受け入れて、残りを否定する程悪い事はなく、このように、一部を受け入れないというのは、墮落した心の証拠であるとしている。ユダヤ人の奴隷化禁止に関しては、レビ記 25 : 39-43, 47-49, 54, 55 ; ネヘミア記

5 : 8 参照。

第十一項

88. げにわれらはモーゼに経典を与え、彼の後に幾多の使徒を継がしめたり。またわれらは、マリアの子のイエスに明証を与え、聖靈に(注73)よって彼を強固ならしめり。しかるにお前たちは、使徒がお前たちの意にそまぬ啓示をもたらすたびに、お前たちは横柄に振る舞い、或る使徒をば嘯つきとののしり、また或る使徒をば殺害せるに非ずや?

89. 彼等は云う、「我等の心は覆われているなり」と。然らず! アッラーはその不信心の故に彼等を呪詛せり。信ずる人々の寥々たることよ。

90. さて、彼等の手許にある聖書を完全ならしめる経典がアッラーより彼等に降されると、かつて彼等は不信心者どもに対する勝利を祈願しながら、来るものが来ると、信ずることを拒みたり。(注74)されば、アッラーの呪詛、不信心者どもの上にあれ。

91. 災いは、彼等が自分の魂を賣り渡せしことなり。つまり、彼等がアッラーの降せし経典を信ぜざるは、アッラーが僕らの中でお気に入りの方に恩寵を垂れ給うことを妬むが故なり。かくて彼等は、主の怒りの上に更に怒りを招けり。不信心者どもには恥ずべき懲罰あり。

92. 彼等に向って「アッラーの降せしものを信ぜよ」と云うと、彼等は答えて云う、「我等は我等に降されたるものを信ず」と。され

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ وَفَقَيْنَا مِنْ بَعْدِهِ بِالرُّسُلِ
وَآتَيْنَا عِيسَى ابْنَ مَرْيَمَ الْبَيِّنَاتِ وَأَيَّدْنَاهُ بِرُوحِ الْقُدُسِ
أَفَكُلَّمَا جَاءَكُمْ رَسُولٌ بِمَا لَا تَهْوَى أَنْفُسُكُمْ اسْتَكْبَرْتُمْ
فَصَرِيقًا كَذَّبْتُمْ وَفَرِيقًا تَقْتُلُونَ ﴿٨٨﴾

وَقَالُوا قُلُوبُنَا غُلْفٌ بَلْ لَعَنَهُمُ اللَّهُ بِكُفْرِهِمْ فَقَلِيلًا
مَّا يُؤْمِنُونَ ﴿٨٩﴾

وَلَمَّا جَاءَهُمْ كِتَابٌ مِنْ عِنْدِ اللَّهِ مُصَدِّقٌ لِمَا مَعَهُمْ
وَكَانُوا مِنْ قَبْلُ يَسْتَفْتِحُونَ عَلَى الَّذِينَ كَفَرُوا ۖ
فَلَمَّا جَاءَهُمْ مَا عَرَفُوا كَفَرُوا بِهِ فَلَعْنَهُ اللَّهُ عَلَى
الْكُفْرِينَ ﴿٩٠﴾

يَتَّبِعُوا شَرًّا بِمَا نَفْسُهُمْ أَنْ يَكْفُرُوا ۖ إِنَّمَا أَنْزَلَ اللَّهُ
بَيِّنَاتٍ لِيُزِيلَ اللَّهُ مِنْ فَضْلِهِ عَلَى مَنْ يَشَاءُ مِنْ
عِبَادِهِ ۖ فَبَاءُوا بِغَضَبٍ عَلَى غَضَبٍ وَلِلْكَافِرِينَ عَذَابٌ
مُهِينٌ ﴿٩١﴾

وَإِذَا قِيلَ لَهُمُ امْنُوا بِمَا أَنْزَلَ اللَّهُ قَالُوا نُوْمِنُ بِمَا

注73 「聖靈」とは天使長ガブリエルの別名として広く知られている。ルフル・クドウス（「聖霊」）とは神の聖なる又は、祝福された言葉との意味も表す。

注74 この節では、ユダヤ人達は、異教徒のアラブ人達には、自分達の経典である聖書中に、世界中に真実をひろめる事となるであろう預言者の到来について、知らせない様にしていたということが表されている。或いは、その解決の仕方としては、聖なる預言者の到来以前に、ユダヤ人達は、神に熱烈に、まちがった信仰にうち勝つ真実の信仰をもたらす預言者を出現させるよう祈願していたのであるといえる。しかし、自分達の祈願していた預言者が実際に出現し、虚偽にうちかつ真実の優勢（支配）がはつきりすると、ユダヤ人達は、預言者を受け入れる事を拒否した。その結果、自分達の上に、神の呪いをうける事となったのである。

ど、その後に降れるものは、たといそれがすでに授かりし經典を完全ならしめる真理であろうと、彼等は之を信ぜざるなり。云え、「お前たちもし信者ならば、何故アッラーの預言者たちを殺害したるか？」と。

93. かつてモーゼが、お前たちのところへ数々の奇跡をもたらせし時、お前たちはモーゼの留守に、憤を拝して罪人となれり。
94. 思い起せ、われらがお前たちと契約を結び、お前たちの上に山を聳え立たせ、(注75)「われらがお前たちに与えしものを堅持し、耳を傾けよ」と云える時のことを。すると彼等は、「我等は聴く、されど従わず」と答えたり。彼等は信仰心を持たぬが故に、その心は憤の愛に蝕ばれたり。云え、「お前たちの信仰の命ずるものは、それが信仰だというなら、言語道断なり」と。
95. 云え、「アッラーと御一緒できる来世の住処が、すべて他の人々を排除して、お前たちだけのものとするなら、本当にそう思うなら、死を望め」と。(注76)
96. しかし彼等は、決して死を望まざるべし、すでに送りし己が罪故に。アッラーは不義なす者どもをよく知り給う。
97. 汝は、彼等が、多神教徒にも(注77)増して生に執着すること最もはなはだしき民なることを必ず知るべし。千年も生き長らえようと望む者あり。されど、たとい長寿を授かろうと、そは懲罰を免れざるべし。アッラーは彼等がなせることをすべて知り給う。

أَنْزَلَ عَلَيْنَا وَكَفَرُونَ بِمَا وَرَّاءَهُ وَهُوَ الْحَقُّ مُصَدِّقًا لِّمَا مَعَهُمْ قُلْ فَلِمَ تَقْتُلُونَ أَنْبِيَاءَ اللَّهِ مِنْ قَبْلُ إِنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿٩٣﴾

وَلَقَدْ جَاءَكُمْ مُوسَى بِالْبَيِّنَاتِ ثُمَّ اتَّخَذْتُمُ الْعِجْلَ مِنْ بَعْدِهِ وَأَنْتُمْ ظَالِمُونَ ﴿٩٤﴾

وَلَا أَخَذْنَا مِيثَاقَكُمْ وَرَفَعْنَا فَوْقَكُمُ الطُّورَ خُذُوا مَا آتَيْنَاكُمْ بِقُوَّةٍ وَاسْعَوْا لِقَالُوا سِعْنًا وَعَصَيْنَا وَأَشْرَبُوا فِي قُلُوبِهِمُ الْعِجْلَ بِكُفْرِهِمْ قُلْ بِئْسَمَا يَأْمُرُكُمْ بِهِ إِيَّائِكُمْ أَنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿٩٥﴾

قُلْ إِنْ كُنْتُمْ تَحِبُّونَ الدَّارَ الْآخِرَةَ عِنْدَ اللَّهِ خَالِصَةً مِنْ دُونِ النَّاسِ فَتَمَنَّوْا الْمَوْتَ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٩٦﴾

وَلَنْ يَتَمَنَّوْهُ أَبَدًا بِمَا قَدَّمْت أَيْدِيهِمْ وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِالظَّالِمِينَ ﴿٩٧﴾

وَلِيُخَذَّ لَهُمْ أَحْصَى النَّاسِ عَلَى حَيَاتِهِ وَمِنَ الَّذِينَ أَشْرَكُوا أَجْ يَوْمَ أَحَدُهُمْ لَوْ يُعْمَرُ أَلْفَ سَنَةٍ وَمَا هُوَ بِمُزَحَّزَجَةٍ مِنَ الْعَذَابِ أَنْ يُعْمَرَ وَاللَّهُ بَصِيرٌ ﴿٩٨﴾

بِمَا يَعْمَلُونَ ﴿٩٩﴾

注75 2:64を参照の事。

注76 この意味は、もしユダヤ人が、神が彼らのみに神の恵みを与えられたという主張が正当で、聖なる預言者の主張がまちがっていると確信するのなら、彼らはうそをついたことにより死と破滅を求めるべきだとの意味である。

第十二項

98. 云え、「ガブリエルに(注78)敵対する者は誰か? ガブリエルこそはアッラーの命を奉じ、以前に降^{くだ}されたる^{きようどう}經典を完全ならしめ、また信者への嚮導^{きようどう}並びに朗報として汝の心に啓示を降^{くだ}す者なり。
99. アッラー、諸天使、諸使徒並びにガブリエルとミカエルに(注79)敵対する者は、誰れであれ、そのような不信心者に対しては、アッラーは敵となる」と。(注80)
100. げにわれらは、数々の明白なる神兆を汝に降したり。而して之を拒む者は、不信心者ばかりなり。
101. なんたることか! 契約を結ぶたびに、何故彼等の中の或る者はそれを破棄するの^{しか}か? 然らず、彼等の大方はもともと信ぜざるなり。
102. それ故この度、彼等の經典を完成すべくアッラーより使徒が遣わされると、經典を賜りたる人々の一部は、なにも知らぬげに装い、アッラーの經典を背後に投げ捨てたり。

قُلْ مَنْ كَانَ عَدُوًّا لِجِبْرِيلَ فَإِنَّهُ نَزَّلَهُ عَلَى قَلْبِكَ بِإِذْنِ اللَّهِ مُصَدِّقًا لِمَا بَيْنَ يَدَيْهِ وَهُدًى وَبُشْرًا لِلْمُؤْمِنِينَ ⑧٨

مَنْ كَانَ عَدُوًّا لِلَّهِ وَمَلَائِكَتِهِ وَرُسُلِهِ وَجِبْرِيلَ وَمِيكَلَ فَإِنَّ اللَّهَ عَدُوٌّ لِلْكَافِرِينَ ⑧٩

وَلَقَدْ أَنْزَلْنَا إِلَيْكَ آيَاتٍ بَيِّنَاتٍ وَمَا يَكْفُرُ بِهَا إِلَّا الْفَاسِقُونَ ⑩٠

أَوْ كُنَّا عَلَيْهِمْ وَاعَهْدًا أَبَدًا فَرِيقٌ مِنْهُمْ بَدَّلْ أَلْفَهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ⑩١

وَلَمَّا جَاءَهُمْ رَسُولٌ مِنْ عِنْدِ اللَّهِ مُصَدِّقًا لِمَا مَعَهُمْ نَبَذَ فَرِيقٌ مِنَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ كِتَابَ اللَّهِ وَرَاءَ ظُهُورِهِمْ كَأَنَّهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ⑩٢

注77 ユダヤ人と比べ、多神教徒の方が、現世の生活に屈從的ではない、何故なら、ユダヤ人と違って異教徒達は、死後の人生の存在を信じていず、その為、死後の罰を恐れる事もないからである。

注78 「ガブリエル」とはガブルとイルの合成語で、神の勇やかな下僕、或いは、神の召使いの意味をもつ。ヘブライ語のガブルは、‘召使い’を意味し、イルは‘強人な’‘力強い’の意味を表す。イブン・アッバスに依れば、ガブリエルのもう一つの名前はアブドゥウッラーである。天使の内にあって中心的存在であるガブリエルはクルアーンの大啓の担い手であった。聖書でも、ガブリエルの役割は、神の伝言を神の下僕に伝える事であるとしている。(ダニエル書8:16; 9:21とルカによる福音書1:19) 現節で指摘される様に、クルアーンでもガブリエルに同じ役割りを課している。しかし後になってのユダヤの書物では、彼は、火と雷の天使と表現されている。聖なる預言者の時代には、ユダヤ人は、ガブリエルを、彼らの敵であり、戦争、災いそして困苦の天使とみなしていた。

注79 ミカエルも主要な天使の内の一者である。これはミークとイルの合成語と考えられ、‘何ものも神に似る者はない’との意味を表している。ユダヤ人はミカエルを、好ましい天使とみなしており、ミカエルは、平和と豊かさ、慈雨と牧草の天使としてとらえ、世界を支える仕事を主としてなしていると考えていた。

注80 天使達は、精神的つながりの中で重要な輪であり、精神的つながりの輪の一つですら、こわしたり、精神システムのたった一つの単位に対してでも悪意を明らかにする者は、實質上、全てのシステムとのつながりを自ら断つ事となるのである。こういった者は、神の真実の下僕に与えられる恵みやいつくしみを、はく奪され、罪人に下される罰に値するところとなるのである。

103. 而して彼等は、ソロモンの統治に反逆せる者どもが従いし行動を追う。ソロモンは不信心者に非ず。不信心者は、人々に虚偽や欺瞞を教えし反逆者どもなり。彼等はバビロンで、二人の天使、(注81) ハールートとマールートに(注82) 降されたるものを人々に教えたり。されど両天使は、「我等の方術は誘惑なり。されば、不信心者となるなかれ」と前置きせずには何人にも教えざりき。かくして反逆者どもは両天使より、夫と妻の仲をさく術を習いしが、彼等反逆者としてアッラーの許しなしには何人をも之によって害することはなかりき。しかるに、預言者に敵対する者どもは、自分を害し、益なきことばかりを学べるなり。(注83) そんなものを購える者に来世の福が分け与えられざることを知りながら。げに災いは、彼等が自分の魂を売り渡したることなり。彼等、もしもこの事を知りたりせば！

وَاتَّبَعُوا مَا تَتْلُوا الشَّيَاطِينُ عَلَىٰ مُلْكٍ سُلَيْمٍ ۖ
مَا كَفَرَ سُلَيْمٌ وَلَٰكِنَّ الشَّيَاطِينَ كَفَرُوا يُعَلِّمُونَ
النَّاسَ السِّحْرَ وَمَا أُنْزِلَ عَلَى الْمَلَكَيْنِ بِبَابِلَ
هَٰرُوتَ وَمَٰرُوتَ وَمَا يُعَلِّمُونَ مِنْ أَحَدٍ حَتَّىٰ
يَقُولَا إِنَّمَا نَحْنُ فِتْنَةٌ فَلَا تَكْفُرْ فَيَتَعَلَّمُونَ مِنْهُمَا
مَا يُفَرِّقُونَ بَيْنَ الْمَرْءِ وَرَوْحِهِ ۖ وَكَانَ بَيْنَهُمَا
بِئْسَ مَا يَفْعَلُونَ ۚ إِنَّ اللَّهَ وَيَعْلَمُ مَا يُصْنَعُهُم
وَلَا يُنْفَعُهُمْ ۚ وَلَقَدْ عَلِمُوا لَمَنِ اشْتَرَاهُ مَا لَهُ فِي
الْآخِرَةِ مِنْ خَلَاقٍ ۚ فَتَوَلَّوْا بَيْتَهُم بِأَنفُسِهِمْ
لَوْ كَانُوا يَعْلَمُونَ ﴿١٠٣﴾

注81 このでの「二人の天使」という表現は、二人の聖人を指す、何故なら、ここでの二人の天使は人々に何かを教えると述べられており、天使は人々に混じって暮らさない為、人間と自由に往来する事はないからである。(17:95; 21:8)

注82 これらの名前は、この二人の聖人が出現する目的が、イスラエル人の敵である王国の栄光と威光を打ち破り、バラバラに裂く事にあるという事を象徴している。これらの聖人は、始めて出会う場合の相手には、自分達は善悪の区別をつけさせる為に神からの試練として下された存在なのであると語り、自分達の仲間を男子のみに制限した。然るにこの節の言わんとする所は聖なる預言者の時代のユダヤ人達は、ソロモンの時代の彼らの祖先がしていたのと同様に、有害な習慣にふけっていたという事である。更に言わんとしているのは、ソロモンの時代の害悪をまきちらした者達というのは、ソロモンを不信者であると決めつけた無法な者達でありここでソロモンが信仰を持たぬ者と責められる事に反論し、事実はどうではないという事を明確に記している。また彼の時代のこういった輩は人々をだまし自分達の意図する所を糊塗する為、一般に理解されているのとは違った意味合いで相手にその内容が伝わる様な形でその時代の人に教唆したのである。この節では、ソロモンに敵対する者達が、彼に対して、仕掛けたワナと、そうすることで、ソロモンの王国をつぶそうとした陰謀について語っている。ソロモンの時代の状況を語る事により、メディナのユダヤ人も、それと全く同様の下劣な策を聖なる預言者に仕掛けてきているが、彼らの邪悪な目的が実を結ぶ事は絶対にありえないという事を表しているのである。

注83 ユダヤ人達は、イスラムの威光が着実に拡がり、アラビアに於ける、反イスラムが完全に覆がえされ、イスラムの発展を自分達で止めたり縮めたりする事が出来ない事に気付いてからは、部外者達を反イスラムへと扇動し始めた。キリスト教徒の支配者に抑圧、迫害された彼らはペルシアに亡命し、自分達の信仰の拠点をユダからバビロニアへと移した (Hutchinson 16-3 著、History of the Nations、P550 16-3)。次第にペルシアの帝王達の宮廷に影響力をふるい始めたユダヤ人は、イスラムへの陰謀を企て始めたのである。彼らの扇動は功を奏し、チョスロス II 世が、イスラムを受け入れる様にとの聖なる預言者からの手紙を受け取った時、

104. もし彼等が信じて、正しく行いたれば、アッラーより更に佳き報奨を得たりしものを。
彼等、もしもこの事を知りたりせば！

第十三項

105. 汝等信徒たちよ、ラーイナー※と云うなかれ。ウンズルナー※と云え。而して耳を傾けよ。不信心者どもは酷刑あらん。

※ラーイナーとは「我らを見よ」の意。しかし、ちょっとアクセントが変ると、「愚か者」「うぬぼれ屋」となる。

※ウンズルナーとは、「我らを見つめよ」の意。

106. 經典の民の中の不信心者どもや多神教徒たちは、主よりお前たちに下すものは、如何なる良きものでも、望まざるなり。されどアッラーは、誰れにもせよ、お気に召さば、慈悲を垂れ給う。アッラーは大いなる慈悲者にまします。
107. 以前に啓示せるものを廃棄し、また忘却せしむる時は、われらはそれに優るか、又はそれに等しきものを授く。汝、アッラーが全能にましますことを知らざるか？
108. 汝、天地の大権がアッラーの所有なることを知らざるか？ アッラーを措いて、お前たちには如何なる守護者も、佑助者もなし。
109. かつてモーゼが問われし如く、お前たち、己が使徒を詰問する気か？ 信仰の代りに不信心を選ぶ者は、正しい道より迷い去れる者なり。(注 84)

وَلَوْ أَنَّهُمْ آمَنُوا وَاتَّقَوْا لَمَثُوبَةٌ مِّنْ عِنْدِ اللَّهِ خَيْرٌ
لَّوْكَانُوا يَعْلَمُونَ ﴿١٠٥﴾

10
11

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَقُولُوا رَاعِنَا وَقُولُوا انظُرْنَا
وَأَسْمِعُوا وَلِنُكْفِرَنَّ عَذَابَ الْيَمِينِ ﴿١٠٦﴾

مَا يَدْعُوا الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ أَهْلِ الْكِتَابِ وَلَا الشِّرْكَاءِ
أَن يُنَزَّلَ عَلَيْهِمْ مِّنْ خَبَرٍ مِّن رَّبِّكُمْ وَاللَّهُ يَخْتَصُّ
بِرَحْمَتِهِ مَن يَشَاءُ وَاللَّهُ ذُو الْفَضْلِ الْعَظِيمِ ﴿١٠٧﴾

مَا نَسْخُحُ مِنْ آيَةٍ أَوْ نُنسِهَا نَأْتِ بِخَيْرٍ مِنْهَا أَوْ
مِثْلَهَا أَلَمْ تَعْلَمْ أَنَّ اللَّهَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿١٠٨﴾

أَلَمْ تَعْلَمْ أَنَّ اللَّهَ لَهُ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ ط
وَمَا لَكُمْ مِّنْ دُونِ اللَّهِ مِنْ وَلِيٍّ وَلَا نَصِيرٍ ﴿١٠٩﴾

أَمْ تَرِيدُونَ أَن تَسْأَلُوا رَسُولَكُمْ كَمَا سَأَلُوا مُوسَىٰ مِّنْ
قَبْلُ وَمَن يَتَّبِعِ الْكُفْرَ بِلَا إِيمَانٍ فَقَدْ ضَلَّ سَوَاءَ
السَّبِيلِ ﴿١١٠﴾

チョスロスII世は、なぜ自分がイスラムを受け入れる必要があるのかと、当時はペルシアの領地であったイエメンの総監バードハームに、聖なる預言者を捕らえ鎖につないでペルシア宮廷に連れて来いとの命令を出させるに到った。この節が言及しているのは、聖なる預言者の時代のユダヤ人達のこういった、策謀や陰謀である。彼らが注目したのは、自分達の祖先達も同様に先ずソロモンに対し、ユダヤ社会の数名が、秘密の暗号や記号を伝えあう結社を作って、謀り事をめぐらしたという事実である。(列王上 11: 14、23、26、29-32、11: 14、23、26、歴代 志下 10: 2-4)。ユダヤ人が秘密結社を二度めに作ったのはネブカドネザル王の時代に、バビロンで捕虜となっていた時である。この節で言及されている聖人は、ハガイ、そしてイッドの息子であるゼガリヤである(エズラ 5: 1)。これらの聖人達は秘密結社の会員を男子に限り、新しい会員の入会時には、彼らは自分達を神からの試練であると云ったがイスラエル人は、彼らのいうことを信じなかった。

注 84 この節では聖なる預言者の使命をくつがえすためにユダヤ人が用いた巧妙な計略について述べている。彼らは宗教に関係ないばかげた質問をした。それはイスラム教徒に愚問の精神を植えつけるためであり、そのために信仰の權威は傷つけられ、不信のとりこになるのである。

110. 經典の民の多くの者は、真理が証明された後でも、ただ自らの嫉妬心故に、すでに帰信せるお前たちを再び不信心者たらしめんと願う。されど許してやれ、顧みるな、アッラーの判決が下るまでは。げにアッラーは全能にまします。

111. 礼拝を遵守し、喜捨をせよ。お前たちが自らのためになしたる善行は、すべてアッラーの御許に届かん。げにアッラーはお前たちの所業をみそなわし給う。

112. 彼等は云う、「ユダヤ教徒、又はキリスト教徒以外は何人も樂園に入るを得ず」と。それは彼等の虚しい希望なり。(注85)云え、「お前たちの云うことが本当なら、その証拠を示せ」と。

113. 否、アッラーに全く服従し、善行をなす者は、必ず主より報奨を受けん。かかる人々には、恐怖も悲しみも起らざるべし。
(注86)

第十四項

114. ユダヤ教徒は云う、「キリスト教徒には拠り所なし」と。キリスト教徒は云う、「ユダヤ教徒には拠り所なし」と。両者は共に同じ經典を誦する者なり。また知識を持たざる人々も同じことを云う。いずれ復活の日に、アッラーが彼等の論争に判決を下すべし。

وَدَكْثِيرٌ مِّنْ أَهْلِ الْكِتَابِ لَوْ يَرُدُّونَكُمْ مِن بَعْدِ
إِيمَانِكُمْ كُفَّارًا مِّمَّنْ حَسَدًا مِّنْ عِنْدِ أَنْفُسِهِمْ
مِّنْ بَعْدِ مَا تَبَيَّنَ لَهُمُ الْحَقُّ فَاعْتُوا وَاصْفَحُوا
حَتَّى يَأْتِيَ اللَّهُ بِأَمْرِهِ إِنَّ اللَّهَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿١١٠﴾
وَأَقِمُوا الصَّلَاةَ وَآتُوا الزَّكَاةَ وَمَا تُقَدِّمُوا لِأَنْفُسِكُمْ
مِّنْ خَيْرٍ نَّجِدْهُ عِنْدَ اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ بِمَا تَعْمَلُونَ
بَصِيرٌ ﴿١١١﴾

وَقَالُوا لَنْ يَدْخُلَ الْجَنَّةَ إِلَّا مَن كَانَ هُودًا أَوْ
نَصْرًا يَٰلَيْكَ أَمَّا بَيْنَهُمْ فُلٌّ هَٰؤُلَاءِ بُرْهَٰنُكُمْ إِن
كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿١١٢﴾

بَلَىٰ مَن أَسْلَمَ وَجْهَهُ لِلَّهِ وَهُوَ مُحْسِنٌ فَلَهُ أَجْرُهُ
عِنْدَ رَبِّهِ وَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿١١٣﴾

وَقَالَتِ الْيَهُودُ يَسِيْرُ النَّصَارَىٰ عَلَىٰ شَيْءٍ وَقَالَتِ
النَّصَارَىٰ يَسِيْرُ الْيَهُودُ عَلَىٰ شَيْءٍ وَهُمْ يَتَّبِعُونَ الْكِتَابَ
كَذَٰلِكَ قَالَ الَّذِينَ لَا يَعْلَمُونَ مِثْلَ قَوْلِهِمْ قَالَ اللَّهُ
يُحْكُمُ بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيَمَةِ فِيمَا كَانُوا فِيهِ يَخْتَلِفُونَ ﴿١١٤﴾

注 85 ユダヤ教徒もキリスト教徒も、自分達だけが救いを手にしているという思い違いをしている。

注 86 この節では、完全正義に至る重要な三段階のことをほのめかしている。即ち、ファナー(死)、バカー(再生)、リカー(神との一致)である。「アッラーに完全に服従する」という言葉の意味は、我々の力、器官その他すべてが完全に神に屈服し、神の奉仕に捧げられるという事である。この状態がファナー、即ち真のイスラム教徒が自分に課す死のことである。第二節の「彼は善の実行者である」という言葉はバカー、即ち再生の状態を指している。それは、人が神の愛の中で迷い、世間的な計画や欲望が消えるとき、あたかも新しい命が与えられたように感じ、それがバカー(即ち再生)と呼ばれる。それから人は神のため、人の奉仕のために生きるようになる。結びの言葉は正義の第三にして最高の段階を描写している。即ちリカーの状態、神との一致の状態「休息している魂」、といわれる状態である。(89章28節)

115. アッラーの礼拝所でその名を讃えることを拒み、あまつさえ之を壊さんとする者、これ以上の不屈きがあるか？(注87)かかる者は本米、恐怖なしには礼拝所に入ることを許されぬ筈なり。彼等は現世では恥辱を、来世では酷い罰を受けん。

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنْ مَنَعَ مَسِيحَ اللَّهِ أَنْ يُذَكِّرَ فِيهَا
أُسْمَهُ وَسَعَى فِي خَرَابِهَا أُولَئِكَ مَا كَانَ لَهُمْ أَنْ
يَدْخُلُوهَا إِلَّا خَائِفِينَ لَهُ لَّهُمْ فِي الدُّنْيَا خِزْيٌ وَلَهُمْ
فِي الْآخِرَةِ عَذَابٌ عَظِيمٌ⁽¹¹⁵⁾

116. 東も西もアッラーの所有なり。(注88)故にお前たちいずこに転じようとも、そこに必ずアッラーの慈顔あり。げにアッラーは慈悲深く、すべてを知り給う。

وَلِلَّهِ الشَّرْقُ وَالْمَغْرِبُ فَأَيْنَمَا تَوَلَّوْا فَجْهَ
اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ وَاسِعٌ عَلِيمٌ⁽¹¹⁶⁾

117. 彼等は云う、「アッラーに御子あり」と。(注89)聖なるかな、アッラー！断じて然らず。天地に在るすべてのものは、アッラーの所有なり。皆ことごとくアッラーに服従す。

وَقَالُوا اتَّخَذَ اللَّهُ وَلَدًا سُبْحَنَهُ بَلْ لَهُ مَا فِي السَّمَوَاتِ
وَالْأَرْضِ كُلُّ لَهُ فَيَتَوَكَّلُ⁽¹¹⁷⁾

118. 彼こそは天地の創始者なり。彼ものごとを決め、ただ「在れ！」と云えば、すなわちその通りになるなり。(注90)

بَدِيعُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَإِذَا قَضَىٰ أَمْرًا فَإِنَّمَا
يَقُولُ لَهُ كُنْ فَيَكُونُ⁽¹¹⁸⁾

注87 この節は、他の宗教の祈り場に暴行を加えることまでする過激な行いに対する強い怒りを表している。彼らは聖なる場所で神を礼拝することを妨げ、寺院を破壊することまでする。そのような暴行は強い言葉で非難され、忍耐と寛大さの教訓が説かれている。クルアーンはすべての人に祈りの場で神を礼拝する自由で制限されない権利を認めている。なぜなら寺院やモスクは神を礼拝するために捧げられた場所であり、他の人が神を礼拝するのを妨げる人はその破壊と荒廃に手を貸しているのであるから。

注88 この節は、イスラムがはじめ東洋に広められ現代になって西洋に普及していくという預言を包含している。

注89 「アッラーに御子あり」という語はユダヤ教の宗教文学において「神の愛するしもべ」あるいは「預言者」の意味で比喩的に使われている。(ルカ20章36節マタイ5章9節、45節、48節中命記14章1節出エジプト記4章22節、ガラテア書3章26節等) 神に息子があるならば、神は性的欲求に支配され妻を必要としその美德を息子と共有しうものになる。なぜなら息子は父親の体の一部だからである。神は死に支配されねばならない、なぜなら種の生殖は滅びゆくものの特徴だからである。イスラムは、このような考えすべてを拒否する。イスラムの教えによれば神は聖なる方でどんな欠陥も持たない方だからである。

注90 この特質はキリストの神性というキリスト教の教義に矛盾するばかりでなく、魂と物質は大昔からあり永遠に存在するというヒンズー教の理論をも拒否している。(1)神は天と地の創造者で、神は息子や他のいかなる者の助力も宇宙の創造に際して必要としなかった事を意味している。(2)神は宇宙の創造者である、即ち神は無からすべての物を創造したのであって既存のモデルも既存の物質も必要としなかった。(3)神は全能である、即ちある物に「存在せよ」と命ぜられると、常に神の命令と計画に調和する形で存在するようになる。この節では、時々間違っ理解されているが、神が存在せよと命ぜられた時、すぐに存在するようになると必ずしも意味しているわけではない。ここで言われているのは、神が命ぜられると何者もその命令を妨げることができないという事である。

119. 知識を持たざる者どもは云う、「アッラーは何故に我等に話しかけざるか、また神兆を(注91)授けざるか?」と。以前にも彼等と同じことを云える者どもあり。彼等の心は同じなり。われらはすでに、確固たる信仰を持つ民にはさまざまな神兆を明らかにせり。
120. われらは汝を、朗報の伝達者として、また警告者として、真理を持たせて派遣せり。故に地獄に墮ちる者どもについて、汝に責任なし。
121. ユダヤ教徒は、汝が彼等の宗旨に従わざる限り、満足せざるべし。キリスト教徒もまた然り。云え、「アッラーの嚮導こそが真の導きなり」と。もし汝、知識を授けられながら邪な彼等の考えに従わば、汝はアッラーの怒りの前で、友も援助者も持たざるべし。
122. われらから経典を授けられ、正しく之に従う者、これ等の人々こそ信者なり。(注92)されど之を信ぜざる者ども、彼等は失敗者なり。

第十五項

123. イスラエルの子孫よ、わしがお前たちに垂れたる恩寵を思い起せ、また万民の上にお前たちを高めたるそのことを。
124. 何人も他人の身代りになれず、如何なる賠償も受入れられず、またどんな執り成しも無益で、誰の助けも得られざるその日を、畏れ慎め。

وَقَالَ الَّذِينَ لَا يَعْلَمُونَ لَوْلَا يُكَلِّمُنَا اللَّهُ أَوْ تَنْزِيلًا
آيَةً كَذَلِكَ قَالَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ مِثْلَ قَوْلِهِمْ
تَشَابَهَتْ قُلُوبُهُمْ قَدْ بَيَّنَّا الْآيَاتِ لِقَوْمٍ يُوقِنُونَ ﴿١١٩﴾

إِنَّا أَرْسَلْنَاكَ بِالْحَقِّ بَشِيرًا وَنَذِيرًا وَلَا تُسْئَلُ عَنْ
أَهْلِ الْجَنَّةِ ﴿١٢٠﴾

وَلَنْ تَرْضَى عَنْكَ الْيَهُودُ وَلَا النَّصَارَى حَتَّى تَتَّبِعَ
مِلَّتَهُمْ قُلْ إِنَّ هُدَى اللَّهِ هُوَ الْهُدَىٰ وَلَئِنَّ
أَتَّبَعْتَهُمْ لَهَوَّاءَ هُمْ بَعْدَ الَّذِي جَاءَكَ مِنَ الْعِلْمِ
﴿١٢١﴾ مَا لَكَ مِنَ اللَّهِ مِنْ وِزْرٍ وَلَا نَصِيرٍ ﴿١٢٢﴾

الَّذِينَ اتَّبَعَتْهُمْ إِكْتِبَ بَيِّنَاتُهُ حَتَّى تَلَاوِيَهُ أُولَئِكَ
يُؤْمِنُونَ بِهِ وَمَنْ يَكْفُرْ بِهِ فَأُولَئِكَ هُمُ الْخَاسِرُونَ ﴿١٢٣﴾

يٰٓبَنِي إِسْرَءِيلَ اذْكُرُوا نِعْمَتِيَ الَّتِي أَنْعَمْتُ عَلَيْكُمْ
وَأَنِّي فَضَّلْتُكُمْ عَلَى الْعَالَمِينَ ﴿١٢٤﴾

وَاتَّقُوا يَوْمًا لَا تَجْزِي نَفْسٌ عَنْ نَفْسٍ شَيْئًا وَ
لَا يُقْبَلُ مِنْهَا عَدْلٌ وَلَا تَنْفَعُهَا شَفَاعَةٌ وَلَا هُمْ
يُنصَرُونَ ﴿١٢٥﴾

注91 信じない者が「しるし」を求めると言われる時はいつでも「しるし」は自分たちで考案した「しるし」か罰の「しるし」のことである。(21章6節、6章38節、13章28節、20章134節、135節、29章5節)

注92 この言葉はムスリムについて述べているのであって、ユダヤ教徒やキリスト教徒のことではないである。なぜならクルアーンの真に誠実な信奉者はムスリムであって、ユダヤ教徒やキリスト教徒のことではない。彼らはクルアーンを信ずる事を拒否し、クルアーンをでっちあげの作品として拒んでいる。

125. アブラハムが主の命によって試めされ、而して彼がそれを果たしたときのことを思い起せ。主は云えり、「わしは汝を人々の導師たらしめん」と。そこでアブラハムは、「願わくは我が子孫からも導師を」と奉^{つみびと}上せり。主は云えり、「わしの契約は罪人には及ばず」と。
126. またわれらが、聖殿を（注93）人類の集合の場所、並びに安全地域（注94）と定め、アブラハムの立てる処を礼拝の場所とせよと告げたときのことを思い起せ。われらはアブラハムとイシマエルに命じて、云えり、「ここに巡遊する人々や、お籠りに来る人々、跪^{ひざは}拝叩頭しにくる人々のために、わしの聖殿を掃き清めよ」と。
127. その時、アブラハムが祈って、云えり、「主よ、ここを平安の地となし、アッラーと末日を信ずる住民のために果実を賜え」と。主は云えり、「不信心者どもにもしばし恩恵を与えてやるが、後に之を業火の刑罰に突き落さん。そは悲惨な行き先なり」と。
128. またアブラハムと（注95）イシマエルが聖殿の基礎を置き、祈りしときのことを思い起せ。「我等の主よ、我等よりこの家を受け給え。げに汝はすべてを聴き、すべてを知り給う。

وَإِذْ أَسْأَلُ رَبَّهُمْ رَبَّهُ يَكَلِّمُ قَاتِلَهُنَّ قَالَ إِنِّي
جَاعِلُكَ لِلنَّاسِ إِمَامًا قَالَ وَمِنْ ذُرِّيَّتِي قَالَ
لَا يَتَّبِعُ عَهْدِي الظَّالِمِينَ ﴿١٢٥﴾

وَإِذْ جَعَلْنَا الْبَيْتَ مَثَابَةً لِّلنَّاسِ وَأَمَّا وَابْنُ
مِنْ مَّقَامِ إِبْرَاهِيمَ مُصَلًّى وَعَهِدْنَا إِلَىٰ إِبْرَاهِيمَ
وَأِسْمَاعِيلَ أَنَّ طَهِّرَا بَيْتِيَ لِلطَّائِفِينَ وَالْقَائِمِينَ
وَالرُّكَّعِ السُّجُودِ ﴿١٢٦﴾

وَإِذْ قَالَ إِبْرَاهِيمُ رَبِّ اجْعَلْ هَذَا بَلَدًا آمِنًا وَارْزُقْ
أَهْلَهُ مِنَ الشَّرَائِطِ مَنْ آمَنَ مِنْهُمْ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ
الْآخِرِ قَالَ وَمَنْ كَفَرَ فَأُمَتِّعُهُ قَلِيلًا ثُمَّ أَضْطَرُّهُ
إِلَىٰ عَذَابِ النَّارِ وَبِئْسَ الْمَصِيرُ ﴿١٢٧﴾

وَإِذْ يَرْفَعُ إِبْرَاهِيمُ الْقَوَاعِدَ مِنَ الْبَيْتِ وَإِسْمَاعِيلُ
رَبَّنَا تَقَبَّلْ مِنَّا إِنَّكَ أَنْتَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿١٢٨﴾

注93 カーバ（聖殿）は伝説で言われているように、又、クルアーン自体が暗示しているように、はじめアダムによって建てられ（3章9節）、ある期間彼の子孫の礼拝の中心地であった。それから時が経つにつれて、人々は種々の小社会に分かれ、礼拝のためには別々の中心地を用いるようになった。その後アブラハムがそれを建て直し、彼の息子イシマエルを通して彼の子孫に代々礼拝の中心地として残された。しかし時が経つにつれて、そこは偶像崇拜の家にえられていった。その数は30にもなつて、ほとんど1年の日数と同じ位になった。聖なる預言者の到来で、そこは再びすべての国の礼拝の中心にされた。聖なる預言者は、アダム以後分散してしまっていた人類を1つの人類共同体にまとめるために、預言者として遣わされた。

注94 メッカの町であるカーバは、平和と安全の場であると宣言した。力ある帝国はぼろぼろに崩壊し、歴史が始まって以来はじめて広い地域が荒れはてた。しかし、メッカの平和は物質的には乱されなかった。他の宗教の信仰の中心地は、危険時にこのような平和と自由を手にしたことはなかった。しかし、メッカは保護と安全の町としてとどまった。外国人の侵入もなかった。メッカは常に至高なる方の手の中にあった。

注95 アブラハムはカーバの創立者であったのか、それともただの再建者にすぎないのかは多くの議論を引き起こしてきた。アブラハムがその場の創立者であるという人もいるし、その起源はアダムにまで逆のぼると

129. 主よ、なにとぞ我等を汝に服従帰依せしめ、我等の子孫も服従帰依する民たらしめよ。我等に祭儀を教え給え。慈顔を向け給え。げに汝はしばしば憐れみに転じ、慈悲深くまします。

رَبَّنَا وَاجْعَلْنَا مُسْلِمِينَ لَكَ وَمِنْ ذُرِّيَّتِنَا أُمَّةٌ مُسْلِمَةً لَكَ وَأَرِنَا مَنَاسِكَنَا وَتُبْ عَلَيْنَا إِنَّكَ أَنْتَ الرَّحِيمُ ۝

130. 主よ、彼等の中から一人の使徒を興し、汝の啓示を彼等に読誦せしめ、經典と知恵を教え、彼等を浄めしめよ。げに汝は偉大にして、賢哲にまします」。 (注 96)

رَبَّنَا وَابْعَثْ فِيهِمْ رَسُولًا مِنْهُمْ يَتْلُو عَلَيْهِمْ آيَاتِكَ وَيُعَلِّمُهُمُ الْكِتَابَ وَالْحِكْمَةَ وَيُزَكِّيهِمْ ۝ إِنَّكَ أَنْتَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ۝

第十六項

131. その心愚かに非ざれば、誰かアブラハムの宗教を棄つものぞ。彼こそはわれらがこの世で選びし者、来世においても必ず義しき人の仲間となさん。

وَمَنْ يَرْغَبْ عَنْ قَوْلِ إِبْرَاهِيمَ إِلَّا مَنْ سَفِهَ نَفْسَهُ وَلَقَدْ اصْطَفَيْنَاهُ فِي الدُّنْيَا وَإِنَّهُ فِي الْآخِرَةِ لِمِنَ الصَّالِحِينَ ۝

132. 主が彼に向って「服従せよ」と告げると、彼は「我は服従す、万物の主に」と答えたり。

إِذْ قَالَ لَهُ رَبُّهُ أَسْلِمْ قَالَ أَسْلَمْتُ لِرَبِّ الْعَالَمِينَ ۝

いう人もいる。クルアーン（3章9節）と信頼できるモハammad預言者の伝承は、アブラハムによってこの地に建物が建てられる前に、何か建物が存在していたが、それは廢墟になってその跡だけが残っていたという見解を支持している。この節にある「基礎」という語は、アブラハムとイシュマエルが建てた家の基礎はすでにあった事を示している。さらに、メッカで子供のイシュマエルと母と別れた時のアブラハムの祈り、即ち、「主よ、私はあなたの聖なる家の近くの荒れた谷に、我が家を定住させたまえ（14章38節）」は、カーバが、アブラハムがメッカの谷で一家をかまえる前にすでに存在していた事を示している。ハディースもこの見解を支持している（ブハリ）。歴史の記録も、カーバの起源は古代にさかのぼるという見解を支持している。権威のある歴史家やイスラムに敵意を持つ批評家のうちですら、カーバが古代からある場所であり、大昔から聖なる場とされていた事を認めている。現在ヒジャーズとして知られている地域の事をディオドウルス、シクルス、シシリ（60 B. C.）は、「そこは住民に特別に尊敬されていた」と言い、又、「堅い石で建てられたとても古い祭壇がそこにあり……近隣の民族が四方から群がってきた」とつけ加えている。（C. M. オールドファーザーによる翻訳、ロンドン、1935、Book III、第2巻42章、211ページから213ページ）また他の書物によれば、「この文はメッカの聖なる家のことにちがいない、アラビア全土からこのように尊敬されている地は他に知られていないからだ。…伝承によるとカーバは大昔からアラビア中からの巡礼地になっている」とある。

注 96 この節では本章全体の主題の要約をしている。当章ではこの節で述べられている順序で種々の主題を扱っている。即ち、最初に「しるし」について、次に「聖典」について、それから「法の知恵」、最後に「国家の進歩的手段」という順である。（詳細は英版参照）

133. アブラハムはおなじようにすることを自分の子供たちに命じたり、「我が息子たちよ、アッラーはお前たちのためにこの宗教を選びたり。さればお前たち、帰依者にならずしては死ぬなかれ」と。するとヤコブは之に倣^{なま}いたり。(注 97)

134. お前たち、ヤコブが臨終の時に、その場に在りしか? その時ヤコブは息子たちに、「我が亡き後、お前たちは何を拝むか?」と訊けり。息子たちは答えて、云えり、「我等は汝の神、汝の父祖の神。(注 98) アブラハム、イシマエル、イスアークの神なる唯一の神を拝さん。我等はその神に絶対服従す」と。(注 99)

135. これらのことは過ぎ去りし民族のことなり。彼等は彼等が稼^{かせ}ぎしものの報いを受け、お前たちはお前たちが稼^{かせ}ぐものの報いを受けん。彼等の所業に対して、お前たちが問^{たづ}ひ質^{たづ}されることなかるべし。

136. 彼等は云う、「汝等ユダヤ教徒がキリスト教徒となれ。然らば正しく導かれん」と。云え、「否、我等は常に神のみを思う、偶像崇拜者の類^{たぐひ}に非ざりしアブラハムの宗教を奉ず」と。

137. 汝等云え、「我等はアッラーを信じ、我等に啓示されたものを信じ、アブラハムとイシ

وَوَضَىٰ بِهَا إِبْرَاهِيمَ بَيْنَهُ وَيَعْقُوبُ يُبَيِّنُ إِنَّ اللَّهَ اصْطَفَىٰ لَكُمْ الدِّينَ فَلَا تَمُوتُنَّ إِلَّا وَأَنْتُمْ مُسْلِمُونَ ﴿١٣٧﴾

أَمْ كُنْتُمْ شُهَدَاءَ إِذْ حَضَرَ يَعْقُوبَ الْمَوْتُ إِذْ قَالَ لِبَنِيهِ مَا تَعْبُدُونَ مِنْ بَعْدِي قَالُوا نَعْبُدُ إِلَهَكَ وَإِلَهَ آبَائِكَ إِبْرَاهِيمَ وَإِسْمَاعِيلَ وَإِسْحَاقَ إِلَهًُا وَاحِدًا وَنَحْنُ لَهُ مُسْلِمُونَ ﴿١٣٨﴾

تِلْكَ أُمَّةٌ قَدْ خَلَتْ لَهَا مَا كَسَبَتْ وَلكُمْ مَا كَسَبْتُمْ وَلَا تُسْأَلُونَ عَنْهَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٣٩﴾

وَقَالُوا كُونُوا هُودًا أَوْ نَصَارَى تَهْتَدُوا قُلْ بَلْ مِلَّةَ إِبْرَاهِيمَ حَنِيفًا وَمَا كَانَ مِنَ الْمُشْرِكِينَ ﴿١٤٠﴾

قُولُوا آمَنَّا بِاللَّهِ وَمَا أُنْزِلَ إِلَيْنَا وَمَا أُنْزِلَ إِلَىٰ

注 97 いつ死ぬか分からないのだから、すべての時を完全に神に委ねてすごさなければならない。この節は、又、真の信徒は常に完全に神の意志に従うべきであり、又完全に神の報いを勝ち取るべきなので、神は無限の寛大さで人が神の意志に全く従った時に死がもたらされるように配慮されたのかも知れないという事を意味している。

注 98 イシマエルはヤコブのおじであつた。しかしここに出てくるヤコブの子供達は、イシマエルを彼らの祖先としている。それはアブ(父)という語が時にはおじという意味で使われた事を示している。ヤコブの息子たち、即ち、イスラエル族はイシマエルを非常に尊敬していた。

注 99 我々の父ヤコブがこの世を去る時、彼は 12 人の息子を召集して彼らに、彼らの父イスラエルの言う事を注意して聞くようにと言った(創世記 49 章 2 節)。心の中で聖なるお方に關して疑問を持たないか。彼らは言った、我らの父イスラエルよ、聞け、汝の心の中にも、我々の心の中にも疑いはない。主は我らの父だからであり、神は一人だからである。

マエルとイサアークとヤコブとその子孫^{こども}（注100）に啓示されたるものを信じ、モーゼとイエスに賜われるものを信じ、またすべての預言者たちに神から与えられたるものを信ず。我等はそれ等の間に差別をつけず、ただアッラーに服従^{しもや}し奉る」と。

138. しかして、彼等もしお前たちが信ずる如く信じなば、彼等は正しく導かれん。されどもし背を向けなば、すなわち彼等は分裂を策したことになる。アッラーは彼等に対して汝を護るに足り給う、すべてを聞き、すべてを知り給う御方なるが故に。（注101）

139. 云え、「我等はアッラーの宗教^{しんじょう}を選ぶ。誰かあらん、信仰の教えてアッラーに優る者は。我等はアッラーのみを崇拜し奉る」と。

140. 云え、「お前たち、アッラーについて我等と論争せんとするか？ 彼は我等の主であり、且つお前たちの主に非ざるか？ 我等には我等の事あり、お前たちにはお前たちの事あり。我等はただ彼のみに誠を尽くし奉る」と。

141. お前たちは、アブラハム、イシマエル、イサアーク、ヤコブ並びにその子孫^{こども}が、ユダヤ教徒かキリスト教徒なりしと云うのか？（注102）云え、「最も良く知る者は、お前たちか、又はアッラーか？」と。アッラーが降せる証^{しん}拠^こを有しながら、之を隠さんとする者、これ以上の不屈^{ふく}き者は誰か？ アッラーはお前たちの所業^{しんごう}を看過せず。

إِبْرَاهِيمَ وَإِسْمَاعِيلَ وَإِسْحَاقَ وَيَعْقُوبَ وَالْأَسْبَاطَ
وَمَا أُوتِيَ مُوسَى وَعِيسَى وَمَا أُوتِيَ النَّبِيُّونَ مِنْ رَبِّكَ
لَا تَفَرِّقَ بَيْنَ أَحَدٍ مِنْهُمْ بَطِيلٌ وَنَحْنُ لَهُ مُسْلِمُونَ ﴿١٣٨﴾

فَإِنْ آمَنُوا بِبَطِلٍ مَّا آمَنْتُمْ بِهِ فَقَدْ اهْتَدَوْا وَإِنْ
تَوَلَّوْا فَإِنَّمَا هُمْ فِي شِقَاقٍ فَسَيَكْفِيكَهُمُ اللَّهُ وَهُوَ
السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿١٣٩﴾

صِبْغَةَ اللَّهِ وَمَنْ أَحْسَنُ مِنَ اللَّهِ صِبْغَةً زُودْنُوهُ
لَهُ عِبْدُونَ ﴿١٤٠﴾

قُلْ إِنَّمَا حُجَّتُنَا فِي اللَّهِ وَهُوَ رَبُّنَا وَرَبُّكُمْ وَلَنَا
أَعْمَالُنَا وَلَكُمْ أَعْمَالُكُمْ وَنَحْنُ لَهُ مُخْلِصُونَ ﴿١٤١﴾

أَمْ تَقُولُونَ إِنَّ إِبْرَاهِيمَ وَإِسْمَاعِيلَ وَإِسْحَاقَ وَ
يَعْقُوبَ وَالْأَسْبَاطَ كَانُوا هُودًا أَوْ نَصَارَى قُلْ
ءَأَنْتُمْ أَعْلَمُ أَمِ اللَّهُ وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنْ كَتَمَ
شَهَادَةً عَنْدَهُ مِنَ اللَّهِ وَمَا اللَّهُ بِغَافِلٍ عَمَّا
تَعْمَلُونَ ﴿١٤٢﴾

注100 ここで子供達と言われている語は、ヤコブの12人の子供達にちなんで名づけられたイスラエルの12の族のことである、即ち、ルーベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサーカル、ゼブルン、ヨセフ、ベンジャミン、ダン、ナフタリ、ガッド、アシェル（創世記35章23節-26節、49章28節）。

注101 ムスリムはここで次のように述べている。ユダヤ教徒とキリスト教徒が、宗教は世襲のものではなく啓示された導きを受けいれる事にあるという考えに同意するなら、彼らの間に根本的な違いはない。そうでなければ、彼らは別々で深い溝がその間にある。分裂の責任とこの場合結果として起こる敵意はユダヤ教徒とキリスト教徒にあり、ムスリムにあるのではない。

注102 ユダヤ教徒とキリスト教徒は、間接的に次のように言われている。彼らが主張するように救いが彼らだけに与えられるものならば、アブラハムとその子孫はキリスト教やユダヤ教がまだ存在しないモーゼ以前の時代に生きていたのだから、どうやって導かれたのだろうか。

142. これらのことは過ぎ去りし民族のことなり。
彼等は彼等が稼ぎし報いを受け、お前たちはお前たちが稼ぐ報いを受けん。お前たちは、彼等のなせることに對して問われざるべし。(注 103)

第十七項

143. 人々のうちの愚者は訊ねん、「何故に彼等はずかつて守れる礼拝の方角を変えたるか？」と。答えよ、「東も西もアッラーの所有なり。彼は御心のままに誰でも正しい道に導き給う」と。(注 104)
144. かくてわれらは、お前たちを立派な民となせり。そはお前たちをしてすべての人々の証人となし、(注 105) 使徒をしてお前たちの証人となさんがためなり。われらは前に、汝が以前に守れるところの礼拝の方角を定めたる(注 106)は、誰が使徒に従い、誰が踵を返すかを知らんがためなり。(注 107) こはアッラーに導かれし者以外には、一大事なり。されどアッラーはお前たちの信仰を虚しくせず。げにアッラーは人間に對してあわれみ深く、慈悲深くまします。

ذَٰلِكَ أُمَّةٌ قَدْ خَلَتْ لَهَا مَا كَسَبَتْ وَلكُمْ مَّا كَسَبْتُمْ وَلَا تَسْأَلُونَ عَنَّا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٤٢﴾

142
143
144

سَيَقُولُ السُّفَهَاءُ مِنَ النَّاسِ مَا وَلَهُمْ عَن قِبَلِهِمُ الَّذِي كَانُوا عَلَيْهِمْ قُلْ لِلَّهِ الْمَشْرِقُ وَالْمَغْرِبُ يَهْدِي مَنْ يَشَاءُ إِلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿١٤٣﴾
وَكَذَٰلِكَ جَعَلْنَاكُمْ أُمَّةً وَسَطًا لِتَكُونُوا شُهَدَاءَ عَلَى النَّاسِ وَيَكُونَ الرَّسُولُ عَلَيْكُمْ شَهِيدًا وَمَا جَعَلْنَا الْقِبْلَةَ الَّتِي كُنْتَ عَلَيْهَا إِلَّا لِنَعْلَمَ مَن يَتَّبِعَ الرَّسُولَ مِمَّن يَنْقَلِبُ عَلَى عَقْبَيْهِ وَإِنْ كَانَتْ لَكِ لُكُوفٌ إِلَّا عَلَى الَّذِينَ هَدَى اللَّهُ وَمَا كَانَ اللَّهُ لِيُضِلَّ إِيْمَانَكُمْ إِنَّ اللَّهَ بِالنَّاسِ لَرُءُوفٌ رَّحِيمٌ ﴿١٤٤﴾

注 103 ユダヤ教徒とキリスト教徒は又、彼らが神の預言者の子孫であるからといって、そのことを報いが決められる際に斟酌されることはないと警告されている。彼らは自分の十字架を背負うべきである。他人の重荷を肩がわりできる人はいないのだから(6章165節)。

注 104 この先の数節では、アブラハムが神の計画を模索しながら、メッカの荒涼たる不毛の谷で妻ハガーと子イシュマエルと共に住んだ事実注目している。イシュマエルが大きくなった時、アブラハムはイシュマエルの助けを得てカーバを再建した。その間にアラブ族の間から偉大な預言者、即ち、いつの世にあってても人間性の導き手で指導者となるべき預言者を育ててくれるように祈った。しかし、時が満ち偉大な預言者が現れた時、神の永遠の計画は働き始め、カーバは人類全体のキブラ(礼拝の方向)にされた。しかしメッカにいる間、聖なる預言者は古い習慣と神の命令に従ってイスラエルの預言者のキブラであるエルサレムの寺院で祈っていた。メジナでも彼は顔をエルサレムに向け続けた。しかし2、3か月後、彼は神の啓示に命じられて顔をカーバの方に向けた。このことはユダヤ教徒に反対された。この節は彼らの非難に対する答であり、キブラの方向を変えるための命令の内面に光をあてている。しかし、クルアーンは決して突然新しい命令を与えるのではない。好ましい議論を起こすことで受け入れられる下地を準備し始め、反対意見に答える。キブラの変化に関する命令はある人々の精神を不安定にすることがあるので、この節では礼拝する時に特別の方向を選ぶことは重要ではないという点に関して、一般的な見解を述べることで下地を準備している。真に重要な事は神への従順の精神であり信徒の間の一致である。「東も西もアッラーの所有」という節は、東か西かの選択はさして重要ではない事を示している。真の目的は神だけなのだから、特定の方向を選ぶ事は一致の精神をつくり出す目的が第一なのである。この節は又、いつかカーバがムスリムの所有になることを告げている。

145. われらは汝が、しばしばその顔を天に向けるを見る。(注108)ではここで、汝が欲する礼拝の方角(注109)を汝に示さん。汝の顔を聖殿に向けよ。お前たちいずくに在りとも、その方角に顔を向けよ。經典を授けられたる人々なら、これ主よりの真理なることを知る。アッラーは彼等の所業を看過せず。

قَدْ نَرَى تَقَلُّبَ وَجْهِكَ فِي السَّمَاءِ فَلَنُوَلِّيَنَّكَ قِبْلَةً تَرْضَاهَا فَوَلِّ وَجْهَكَ شَطْرَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ وَحَيْثُ مَا كُنْتُمْ فَوَلُّوا وُجُوهَكُمْ شَطْرَهُ ۚ وَلِئِنَّ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ لَيَعْلَمُونَ أَنَّهُ الْحَقُّ مِنْ رَبِّهِمْ وَمَا اللَّهُ بِغَافِلٍ عَمَّا يَعْمَلُونَ ﴿١٤٥﴾

注105 ムスリムはここでそれぞれの時代に生きる人は、次の世代の人々を保護し守らなければいけないと言われている。最良の民族であるために、彼らに期待されている高い生活水準から落ちないように常に警戒する責任があり、次の世代の人々が聖なる預言者の高尚な交わりを楽しんだ人々によって探求された道に従うようにする責任がある。このように、聖なる預言者は彼に直接従う人々の保護者でなければならず、世代から世代へとそれは続いていくべきなのだ。命ぜられたように、ムスリムは人類の指導者になるべきであり、彼らのすばらしき行いによって神の特別な恩恵の享受者となるべきである。このようにして他の人々も真の宗教に従っているという結論にならざるを得なくなるのである。このようにして、彼ら(ムスリム)は、他の人々に対してイスラムが真実であるという証人になるのである。それは聖なる預言者が彼らに対して真実の証人であったのと同じ事である。

注106 この節の言葉で聖なる預言者が神の命令によってエルサレムの寺院を彼のキブラに選んだ事が分かる。しかし、それは一時しのぎのキブラであって、永久に人類のキブラになるのはカーバであると神は言われている。

注107 アラブ族はメッカにある古代の祈りの家カーバに多くの攻撃を加えられた。カーバはアブラハムの時代にまでさかめる国立寺院であった。それ故に、イスラムの非常に初期の段階から、聖堂(ブハリ)に出てくる民族のキブラであるエルサレムの寺院に味方して、カーバを捨てるように言われたのは、苛酷な試練であった。そして後に、メジナでエルサレムの寺院からカーバへとキブラを変えたことはユダヤ教徒にとってもキリスト教徒にとっても大きな試練となった。このように、この変化が「經典の民」とムスリムの両方に又、メッカの偶像崇拜者にとっても試練となった。

注108 メッカにいる間に、神の命令によって聖なる預言者はエルサレムの寺院の方へ祈りの際顔を向けた。しかし心の底から、カーバを自分のキブラにしたいと望んだ。しかも彼はある種の直観で遂には彼の望みがかなえられるであろうと思い、彼はエルサレムの聖なる寺院と彼の前にあるカーバの両方を保つことのできる場所を礼拝の地に選んでいた。しかし、彼がメジナに移住したとき、町の位置を考えてエルサレムの寺院の方にだけ顔を向けた。キブラの変化に伴って彼の内的欲求は強くなった。神の命令に服従して彼は実際にはその変化のために祈らなかったが、そのための天からの命令を熱心に待ち望んでいた。

注109 この語は、普通の状況では、ムスリムは祈りを唱える時にカーバに顔を向けるが、しかし方向が一番重要なわけではないことを意味している。ここでの、方向の変化はムスリムの兄弟たちの間の一致と同一性を保つためにもたらされた。

146. たとい汝が經典を授けられたる人々に一切の神兆を示すとも、彼等は決して汝の礼拝の方角に従わざるべし。また汝も彼等の礼拝の方角には従わず。彼等は仲間うちですら他人の礼拝の方角には従わざるなり。汝知識を授けられながら、もし彼等の欲するところに従わば、必ず汝は罪人の仲間たるべし。

وَلَيْنَ آتَيْتَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ مِنْكَ آيَةً مَا يَتَّبِعُوا فِئْتَاكَ وَمَا أَنْتَ بِتَابِعٍ قَبْلَهُمْ وَمَا بَعْضُهُمْ بِتَابِعٍ لِبَعْضٍ وَلَئِنِ اتَّبَعْتَ أَهْوَاءَهُمْ مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَكَ مِنَ الْعِلْمِ إِنَّكَ إِذًا لَمِنَ الظَّالِمِينَ ﴿١٤٦﴾

146

147. われらが經典を授けしあの者どもは、自分たちの息子たちの顔を認める如く、この事を承認す。されど彼等の一部の者は、承知しつつ真理を隠す。

الَّذِينَ آتَيْنَاهُمُ الْكِتَابَ يَعْرِفُونَهُ كَمَا يَعْرِفُونَ أَبْنَاءَهُمْ وَإِنَّ فَرِيقًا مِنْهُمْ لَيَكْتُمُونَ الْحَقَّ وَهُمْ يَعْلَمُونَ ﴿١٤٧﴾

147

148. 真理は汝の主より出でたるものなれば、疑惑者の仲間となるなかれ。

الْحَقُّ مِنْ رَبِّكَ فَلَا تَكُونَنَّ مِنَ الْمُمْتَرِينَ ﴿١٤٨﴾

148

第十八項

149. 人にはそれぞれ自分の目標あり。(注110) 互に善行を競い合せ。何処に在ろうとも、アッラーはいずれお前たちをことごとく召集すべし。げにアッラーは全能にまします。

وَلِكُلٍّ وِجْهَةٌ هُوَ مُوَلِّيهَا فَاسْتَبِقُوا الْخَيْرَاتِ ۚ أَيْنَ مَا تَكُونُوا يَأْتِ بِكُمْ اللَّهُ جَمِيعًا إِنَّ اللَّهَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿١٤٩﴾

149

150. 汝いずかたより出て来るとも、汝の顔を聖殿に向けよ。こは主の降せし真理なり。アッラーはお前たちの所業を看過せず。(注111)

وَمِنْ حَيْثُ خَرَجْتَ فَوَلِّ وَجْهَكَ شَطْرَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ وَإِنَّهُ لَلْحَقُّ مِنْ رَبِّكَ وَمَا اللَّهُ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿١٥٠﴾

151. 汝いずかたより出て来るとも、汝の顔を聖殿に向けよ。(注112) またお前たち何処に在ろうとも、顔をそこに向けよ。さすれば人々

وَمِنْ حَيْثُ خَرَجْتَ فَوَلِّ وَجْهَكَ شَطْرَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ وَحَيْثُ مَا كُنْتُمْ فَوَلُّوا وُجُوهَكُمْ شَطْرَهُ

注110 この節は、短い言葉の中に成功する人生の要素を含んでいる。誰でも最初に明確なゴールを自分のために定めるべきである。それから、細心の注意を払ってそのために献心し、全神経をそれを保持するために緊張させ、健全な競争の精神で他の穆斯林と争い、彼らより勝とうと努めるばかりでなく、自分の仲間がつまづいた時、立ち上がりせレースを続けさせるように助けるべきである。ここで目標という語のもうひとつの意味は「彼が支配するようにさせているもの」即ち、人が最初に目的を立て、それからそれを人生における抑制力とすることである。

注111 この文はメッカはいずれ穆斯林の手に陥るという意味である。穆斯林によるメッカの征服はクルアーンの17章81節、28章86節にも預言されている。申命記33章2節に含まれている預言は、聖なる預言者が1万人の穆斯林の頭としてメッカに入ったとき成就された。

はお前たちに反対する論拠を有すまい、(注113) 不義な徒輩は別として―彼等を恐れず、わしを恐れよ―そはお前たちの上にわしの愛顧を全うせんがためなり。而してお前たちを正しく導かんがためなり。(注114)

152. すなわちわれらは、お前たちの中から一人の使徒を遣わし、お前たちに我が神兆を誦誦し、お前たちを浄め、お前たちに經典と聖知とを教え、お前たちが知らざりしことを教えしむ。

153. 故にわしを忘れるな、さすればわしもお前たちを忘れまい。わしに感謝せよ。わしの恩を忘れまいぞ。(注115)

第十九項

154. 汝等使徒たちよ、忍耐と礼拝によって佑助を求めよ。げにアッラーは忍耐強き人々と偲にあり。(注116)

يَمَّا يَكُونُ لِلنَّاسِ عَلَيْكُمْ حُجَّةٌ إِلَّا الَّذِينَ ظَلَمُوا مِنْهُمْ فَلَا تَخْشَوْهُمْ وَاخْشَوْنِي وَلَا تَمْنَعِيكُمْ عَنْكُمْ وَاعْلَمُوا تَهْتَدُونَ ﴿١٥٤﴾

كَمَا أَرْسَلْنَا فِيكُمْ رَسُولًا مِّنكُمْ يَتْلُو عَلَيْكُمْ آيَاتِنَا وَيُزَكِّيكُمْ وَيُعَلِّمُكُمُ الْكِتَابَ وَالْحِكْمَةَ وَيُعَلِّمُكُم مَّا لَمْ تَكُونُوا تَعْلَمُونَ ﴿١٥٥﴾

فَاذْكُرُونِي أَذْكُرْكُمْ وَاشْكُرُوا لِي وَلَا تَكْفُرُونِ ﴿١٥٦﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اسْتَعِينُوا بِالصَّبْرِ وَالصَّلَاةِ إِنَّ اللَّهَ مَعَ الصَّابِرِينَ ﴿١٥٧﴾

注112 ムスリムは征服したメッカの至高の目的を決して見失わないように言いつけられた。

注113 「人々は汝に対して異論を持たないだろう」という文は、ムスリムがメッカを征服しそこなったら、イスラムの敵から聖なる預言者はアブラハムの祈りを成就できなかったという反対意見が当然起きただろうということを意味している(2章130節)そして、それ故に、彼は約束された預言者と主張することは出来なかった。しかも、ムスリムが祈りの時に顔を向けるように命ぜられた寺院は、異教徒のメッカ人に支配させていて、偶像で一杯であった。偶像がカーバに残っていたため、ムスリムはそれらを礼拝することを非難された。しかし、唯一の神を礼拝するために捧げられた聖なる家から偶像をすっかり無くしたため異議もなくなったのであった。キブラとしてエルサレムの寺院をカーバに取りかえるという命令はメッカの征服に関する命令によって当然に遂げられた。

注114 メッカを征服する事で、神のムスリムへの恩恵は完全になるだろう、その事が、すべてのアラブ人の服従と何千人もの人がイスラムの信仰に入信する意味になるのだから。結果は十分に上記の預言を成就している。なぜなら、メッカの征服のすぐ後に何千人ものアラブ人の改宗があったからである。メッカの征服に続いて、アラブ人がイスラムの教えに殺到したのは、アラブ人はどんな聖典にも従わなかったが、メッカはにせの預言者の弟子には征服されないというアブラハムの預言や、メッカ征服を試みる者は破滅するだろうという預言は知っていたからである。彼らはすばらしい預言の成就を、アビシニア人の侵略者、アブラハムや強力な軍隊の奇跡的な破滅のうちに見た。

注115 人間の側からの神を「忘れない」とは、愛と献心を持って神を想い、神の命令を遂行する事、神の恩恵を心に留める事、神を賛美し祈りを捧げることである。神の側からの人間を「忘れない」とは、神が人間を近くに引き寄せる事、恩恵を人に与え、人間が幸福になるように物を与える事である。

注116 この節は、成功の秘訣を述べている。ムスリムは、辛抱強く努力を続けなければならない。目的を達成するための努力をおこたらず、決して落胆せず、同時に有害なものを遠ざけ、善いものにのみ、従っていかなければならない。神だけがすべての善の源であるからである。「忍耐」(サブル)という語は、「礼拝」(サラート)という語を進めたものである。それは時々軽べつされ、無視される神の法を遵守する事の重要性を強調するためである。祈りは、神によって定められた掟に従う時にのみ、神にききとけられる。

155. またアッラーの道のために殺されたる者を、彼等は死せり、と云うなかれ。否、彼等は生きている。ただお前たちはそれを理解し得ざるなり。
156. われらはお前たちを、恐怖や飢餓で、また財産や生命並びに農作物の収穫の損失によって試めさん。されど耐え忍ぶ者には、朗報を伝えよ。
157. 災難に遭いて、「げに我等はアッラーの所有なり。而して我等はいずれアッラーの御許へ帰り行く者なり」と云う者。(注117)
158. かくの如き者の上にこそ主の祝福と慈悲が降る。彼等こそは正しく導かれていた者なり。
159. サファアとマルワは(注118)アッラーの聖跡のうちなり。故に聖殿に巡礼する者や、聖地詣りをする人々が両丘を周遊するも罪なし。自ら進んで善行をなさんとする者には、げにアッラーは之を認め、知悉者なり。
160. われらはさまざまなる神兆や嚮導を降し、之を經典の中で人々に明白ならしめたにもかかわらず、之を包み隠す者ども、(注119)彼等はアッラーの呪いに遭い、呪詛者の呪いも受けるべし。

وَلَا تَقُولُوا لِمَنْ يُقْتَلُ فِي سَبِيلِ اللَّهِ أَمْوَاتٌ بَلْ أَحْيَاءٌ وَلَكِنْ لَا تَعْلَمُونَ ﴿١٥٥﴾

وَلَنَبْلُوَنَّكُمْ بِشَيْءٍ مِنَ الْخَوْفِ وَالْجُوعِ وَنَقْصٍ مِنَ الْأَمْوَالِ وَالْأَنْفُسِ وَالثَّمَرِ وَبَشِّرِ الصَّابِرِينَ ﴿١٥٦﴾

الَّذِينَ إِذَا أَصَابَهُمْ مُصِيبَةٌ قَالُوا إِنَّا لِلَّهِ وَإِنَّا إِلَيْهِ رَاجِعُونَ ﴿١٥٧﴾

أُولَئِكَ عَلَيْهِمْ صَلَوَاتٌ مِنْ رَبِّهِمْ وَرَحْمَةٌ وَأُولَئِكَ هُمُ الْمُهْتَدُونَ ﴿١٥٨﴾

إِنَّ الصَّفَا وَالْمَرْوَةَ مِنْ شَعَائِرِ اللَّهِ فَمَنْ حَجَّ الْبَيْتَ أَوِ اعْتَمَرَ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْهِ أَنْ يَطَّوَّفَ بِهِمَا وَمَنْ تَطَوَّعَ خَيْرًا فَإِنَّ اللَّهَ شَاكِرٌ عَلِيمٌ ﴿١٥٩﴾

إِنَّ الَّذِينَ يَكْفُرُونَ مَا أُنْزِلَنَا مِنَ الْبَيِّنَاتِ وَالَّذِينَ مِنْ بَعْدِ مَا بَيَّنَّاهُ لِلنَّاسِ فِي الْكِتَابِ أُولَئِكَ يَلْعَنُهُمُ اللَّهُ وَيَلْعَنُهُمُ اللَّعْنُونَ ﴿١٦٠﴾

注117 神は我々の持ち物すべての、我々自身をも含めた主である。神の無限の知恵をもって、神が我々からすべてを取り上げる事が正しいと考えられれば、我々にはそのことに不平やためらいを示す根拠はない。それ故、我々にふりかかるどの不幸にも我々は、落胆しないで、人生においてもっといい結果を得るために、より多くの努力をするべきである。このように、この節にふくまれる信条は、単に口先で決まり文句を唱える事ではなく、賢い助言と適時の警告である。

注118 「サファア」と「マルワ」はメッカにあるカーバの近くにある二つの丘の名前である。サファアの方がカーバに近い。この二つの丘はハガルの偉大な忍耐と神への特別な忠誠心を記念して、又、一方では神の彼女と息子イシュマエルに対しての特別な愛情を記念する丘となっている。これらの丘をおとずれると、巡礼者は神の愛、神への忠誠心、神の力に深く心打たれる。

注119 この文は、聖なる預言者に関して自分たちの聖書に出てくる預言を隠したユダヤ教徒に言われている。

161. 但し、悔悟してその身を修め、真理を明言する者は別なり。わしは彼等を許さん。わしはたびたび許す者、慈悲深い者なり。

162. 不信心者で、不信心者のまま死ぬる者、彼等の上にはアッラーと天使と万民の呪いがかかるべし。

163. 彼等は呪いの中に取り残されん。刑罰は軽減されず、また猶予も与えられざるべし。

164. お前たちの神は唯一なる神なり。彼の外に神なく、彼は仁慈者、慈悲者なり。(注 120)

第二十項

165. 天地の創造、昼夜の交替、人々に利益をもたらす荷を運びて海原を渡る船、またアッラーが空から水を降し死せる大地を生き返らせ、そこにあらゆる種類の動物をまき散らすその雨、風向きの変化、天地の間に奉仕する雲、これ等は皆思慮ある人々への神兆なり。(注 121)

166. しかるに人々の中には、アッラー以外に崇拜の対象を持ち、アッラーを愛する如く之を愛する者どもあり。されど信者のアッラーに対する愛は、彼等よりはるかに強し。

إِلَّا الَّذِينَ تَابُوا وَأَصْلَحُوا وَبَيَّنُّوا فَأُولَٰئِكَ أَتُوبُ عَلَيْهِمْ وَأَنَا التَّوَّابُ الرَّحِيمُ ﴿٢٠﴾

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا وَمَاتُوا وَهُمْ كُفَّارًا أُولَٰئِكَ عَلَيْهِمُ لَعْنَةُ اللَّهِ وَالْمَلَائِكَةِ وَالنَّاسِ أَجْمَعِينَ ﴿٢١﴾

خُلِدُوا فِيهَا فَلَا يُخَفَّفُ عَنْهُمْ الْعَذَابُ وَلَا هُمْ يُنظَرُونَ ﴿٢٢﴾

وَالْهَكَمُ اللَّهُ وَاحِدٌ ۖ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ الرَّحْمَنُ الرَّحِيمُ ﴿٢٣﴾

إِنَّ فِي خَلْقِ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَاخْتِلَافِ اللَّيْلِ وَ النَّهَارِ وَالْمُلْكِ الَّتِي تَجْرِي فِي الْبَحْرِ بِمَا يَنْفَعُ النَّاسَ وَمَا أَنْزَلَ اللَّهُ مِنَ السَّمَاءِ مِنْ مَّاءٍ فَأَخْبَا بِهِ الْأَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا وَبَثَّ فِيهَا مِنْ كُلِّ دَابَّةٍ وَتَصْرِيفِ الرِّيْحِ وَالسَّحَابِ الْمُسَخَّرِ بَيْنَ السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يَعْقِلُونَ ﴿٢٤﴾

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَتَّخِذُ مِنْ دُونِ اللَّهِ أَنْدَادًا يُحِبُّونَهُمْ كَحُبِّ اللَّهِ وَالَّذِينَ آمَنُوا أَشَدُّ حُبًّا

注 120 すべての罪は信仰の弱さから出るので、この節は神の唯一性に言及している。もし人々が神が唯一であることを固く信じて、にせの神々を作り出したりしなければ、決して正しい道をふみはずす事はないだろうと表明している。

注 121 クルアーンは宇宙を全体としてその主題を証明するあかしとしている。個々にとらえられた場合には、神の存在を結論づけるあかしとはならない。地球のはじまりは偶然に原子が集合したと言えるかもしれない。太陽の起源も月の起源もその他のものの起源も同様の理由かもしれない。しかし、一つの統合体としての宇宙、そこに広がる深い整然として秩序を考える時、この宇宙が偶然に存在しはじめたと結論づけることのできる人はいない。本当に、宇宙にみなぎる完全な調和と全秩序は、全治全能の唯一の賢明な存在によって創造され、統制されている事を力強く指摘している。しかも、自然現象の研究を特別に強調することで、不信の徒の注意は又、聖なる預言者に反した計画に成功する可能性がないという事実が引き出される。全宇宙は神によって制御され、神のお心に添うよう、又、神の理想を実現するよう働いている。

(注 122) 而してこれら罪人がやがて天罰を
目の当たりに見る時、思い知るべし、すべ
ての力がアッラーに属し、アッラーの罪が
いかに激烈仮借なきものかを。

167. その時到来ば、追隨者を有せる者は、その
追隨者との関係を否認し、彼等は天罰を目
撃し、彼等を結べる絆は寸断せらるべし。

(注 123)

168. 彼等追隨者どもは云わん、「もし我等が今一
度戻れるなら、彼等が我等との関係を否認
した如く、我等も彼等との関係を否認せん」
と。かくの如く、アッラーは彼等にそのな
せることを明示し給う。されば彼等は、業火
より逃れ得ざるべし。

第二十一項

169. 汝等人々よ、大地にある合法にして佳き物
を食せよ。(注 124) 悪魔^{サタン あしあど}の足跡に従うなか
れ、彼はお前たちに公然と仇なす故に。
170. 悪魔^{サタン}はただ、悪事と醜行をお前たちに勧め、
お前たちがアッラーについて知らざることを
を云わしめる。
171. 彼等に向って、「アッラーが^{くだ}降せしものに従
え」と云うと、彼等は云う、「否、我等は父

يٰلَهُ وَلَوْ يَرَى الَّذِينَ ظَلَمُوا إِذْ يَرُونَ الْعَذَابَ لَا
أَنَّهُ الْقُوَّةَ لِلَّهِ جَمِيعًا ۖ وَأَنَّ اللَّهَ شَدِيدُ الْعَذَابِ ۝

إِذْ تَبَرَأَ الَّذِينَ اتَّبَعُوا مِنَ الَّذِينَ اتَّبَعُوا وَأَوَّلُوا الْعَذَابَ
وَقَطَّعَتْ بِهِمُ الْأَسْبَابَ ۝

وَقَالَ الَّذِينَ اتَّبَعُوا لَوْ أَنَّا لَكَا كَرَّةً فَتَبَرَأْنَا مِنْهُمْ
كَمَا تَبَرَّءُوا مِنَّا كَذَلِكَ يُرِيهِمُ اللَّهُ أَعْمَالَهُمْ حَسَرَاتٍ
فِيهِ عَلَيْهِمْ وَمَا هُمْ بِخَارِجِينَ مِنَ النَّارِ ۝

يَا أَيُّهَا النَّاسُ كُلُوا مِن مَّا فِي الْأَرْضِ حَلَالًا طَيِّبًا وَلَا
تَتَّبِعُوا خُطُوَاتِ الشَّيْطَانِ إِنَّهُ لَكُمْ عَدُوٌّ مُّبِينٌ ۝
إِنَّمَا يَأْمُرُكُمْ بِالسُّوءِ وَالْفَحْشَاءِ وَإِن تَقُولُوا عَلَى
اللَّهِ مَا لَا تَعْلَمُونَ ۝

وَإِذَا قِيلَ لَهُمُ اسْمِعُوا مَّا أَنزَلَ اللَّهُ قَالُوا بَلْ

注 122 神の愛はすべての宗教的教えの真髄であるが、イスラムほど神の愛を強調してきた宗教は他にない。聖
なる預言者は非常に神に没頭していたので、異教徒のアラブ人から神に恋しているといわれた。クルアーンで、
神の愛や恩恵それに至高な神に対する人間の魂の抗しがたい愛やあこがれをうえつけるような神の恩恵が、く
り返し述べられる最も大切な主題である。

注 123 この節では、指導者に盲目的に従い、道を踏みはずし、神の伝道師をしりぞける人々にきびしい警告を
与えている。

注 124 善行は真の信仰を作っている。この節から、約束された預言者の仕事、即ち、律法とその根底にある知
恵を教える事、に関するアブラハムの祈りの第二部の議論に入る。祈り、断食、巡礼、ザカートに関する儀式
が与えられ、又、社会的な事柄に関係する法律も与えられた。食物は人間の性格を形成する上で非常に重要な
ので、食物に関する規則が最初に述べられている。イスラム教では、すべての食物は、(1)ハラール（法律で許
可されているもの）かつ(2)タイヤブ（おいしく、純粋で、栄養があって、健康によいもの）であるべきだとさ
れている。(1)で認められていても場合によって、その人の健康にふさわしくないものなどは、(2)により禁じら
れる。

祖のなせる慣例に従う」と。なんと！ 彼等の先祖は全く無知蒙昧にして、導かれざりしに非ずか？ (注 125)

172. 不信心者どもを譬うれば、喚声と叫声の外に何も聴き得ざる者に向って叫ぶ者の如し。彼等は聾で、啞で、盲なり。されば彼等は悟らず。

173. 汝等信徒たちよ、われらがお前たちに賜える佳き物を食い、(注 126) 而してアッラーに感謝を捧げよ、もしお前たちがアッラーを崇拜するなら。

174. アッラーがお前たちに禁ぜし食物は、死肉、血、豚肉、(注 127) アッラー以外の名が唱えられたるもののみなり。されど必要にせまれ、故意に違反せず、限度を越えざる場合は罪に非ず。(注 128) げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

نَتَّبِعْ مَا آفَيْنَا عَلَيْهِ آبَاءَنَا أَوْ لَوْ كَانَ آبَاؤُهُمْ
لَا يَعْقِلُونَ شَيْئًا وَلَا يَهْتَدُونَ ﴿١٧٢﴾

وَمَثَلُ الَّذِينَ كَفَرُوا كَمَثَلِ الَّذِي يَنْعِقُ بِمَا لَا يَسْمَعُ
إِلَّا دُعَاءً وَنِدَاءً صُمُّوا بِكُمْ عَنْهُمْ لَا
يَعْقِلُونَ ﴿١٧٣﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا كُلُوا مِن طَيِّبَاتِ مَا سَرَفْنَكُمْ
وَأَشْكُرُوا لِلَّهِ إِن كُنتُمْ إِيَّاهُ تَعْبُدُونَ ﴿١٧٤﴾

إِنَّمَا حَرَّمَ عَلَيْكُمُ الْمَيْتَةَ وَالدَّمَ وَلَحْمَ الْخِنْزِيرِ
وَمَا أُهِلَّ بِهِ لِغَيْرِ اللَّهِ فَمَنِ اضْطُرَّ غَيْرَ بَاغٍ وَ
لَا عَادٍ فَلَا إِثْمَ عَلَيْهِ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿١٧٥﴾

注 125 永遠の生命にとても深い関係のある宗教に関して、人が年長者に盲目的に従うのは奇妙ではある。この世での生活の利益を追うことについては、重大な事柄とみなして、他人に盲目的に従わずとも、自分で道を選ぶのに、本当はもっと大切に本質的な宗教について、自分で道を選ばず、年長者に盲目的に従うというのは残念なことである。

注 126 「佳き物を食い」というのは注 124にあるように、「法律で許され」かつ「善いもので、栄養のあるものを食せよ」ということである。ムスリムは、どのような形であれ、たとえ法律で許可されていても、身体的、精神的、霊的な健康を害するものを食べる事は許されていない事を示している。

注 127 この不潔な動物のまさにこの名前は、その肉を食する事を禁ずる事をほのめかしている。この語はアラビア語でヒンズとアラの結合である。最初の部分は「大変不潔な」の意味であり、次の部分は「私は見る」の意味である。即ち、「私はそれが大変不潔である事が分かる」の意味になる。ヒンディー語では、この動物はスーアルという名で知られているが、これはアラビア語のヒンズィール即ち、「私はそれが大変不潔である事が分かる」と全く同じ意味である。ヒンディー語では、この動物はバッド（悪いもの）として知られている、即ち、もとのアラビア語の翻訳と思われる「悪い」とか「不潔な」の意味である。

注 128 この節で非合法的であると宣言されているもののうちで、死んだ動物の血や肉を食べるという事は明らかに有害であって、多くの権威者や医学者によってそのように認識されてきた。ブタ肉は、人間の肉体的な健康にも有害であると証明された。ブタは汚物を食べ、不潔な場所に住む事を喜ぶ。ブタは下品な習慣を持ち、性倒錯という邪悪な特徴を持っている。回虫、豚病、瘰、施毛虫が、ブタ肉を食べる民族により多く発生している事は知られている。ブタ肉を食べると施毛虫病の原因にもなる。

175. アッラーが降せし經典を隠し、之を安値で売り飛ばす者ども、彼等は腹中を燃え盛る炎で満たす。(注129)復活の日、アッラーは彼等に話しかけず、また浄めざるべし。而して酷罰が彼等にあり。

إِنَّ الَّذِينَ يَكْتُمُونَ مَا أَنْزَلَ اللَّهُ مِنَ الْكِتَابِ وَيُسْتَرُونَ بِهِ تَسَاءُلُونَ أُولَئِكَ مَا يَأْكُلُونَ فِي بُطُونِهِمْ إِلَّا النَّارَ وَلَا يُكَلِّمُهُمُ اللَّهُ يَوْمَ الْقِيَمَةِ وَلَا يُزَكِّيهِمْ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿١٧٥﴾

176. 嚮導と引き替えに迷誤を取り、赦免の代りに懲罰を選びし者は、彼等なり。猛火の中における彼等の辛抱は、如何に甚だしいことか！

أُولَئِكَ الَّذِينَ اشْتَرُوا الضَّلَالَةَ بِالْهَدَىٰ وَالْعَذَابُ أَكْبَرُ مِنْ غَفِرَةٍ فَمَا أَصْبَرَهُمْ عَلَى النَّارِ ﴿١٧٦﴾

177. さればこそアッラーは真理を以て經典を降し給えり。この經典について異論を唱うる者どもは、遙かに遠く離れ去りたる者なり。

ذَلِكَ بِأَنَّ اللَّهَ نَزَلَ الْكِتَابَ بِالْحَقِّ وَإِنَّ الَّذِينَ اخْتَلَفُوا فِي الْكِتَابِ لَفِي شِقَاقٍ بَعِيدٍ ﴿١٧٧﴾

第二十二項

178. 正義とは、お前たちの顔を東に向け、また西に向けたりすることに非ず。真の正義とは、アッラーと末日と諸天使と經典と預言者たちを信じ、アッラーを愛するが故に自分の金を、親族、孤児、貧者、旅路にある者、物乞い、並びに捕虜を購うために費し、礼拝を遵守し、喜捨を惜しまぬ者を云い、また約束を結ばざるを必ず履行し、困窮、艱難に耐え忍ぶ者にして、戦いの時は毅然たる者を云う。かくの如き人々こそ誠実な者、神を畏れる者なり。(注130)

لَيْسَ الْبِرَّ أَنْ تُوَلُّوا وُجُوهَكُمْ قِبَلَ الْمَشْرِقِ وَالْمَغْرِبِ وَلَكِنَّ الْبِرَّ مَنْ آمَنَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ وَآلِ الْمَلَائِكَةِ وَالْكِتَابِ وَالنَّبِيِّينَ وَآتَى الْمَالَ عَلَى حُبِّهِ ذَوِي الْقُرْبَىٰ وَالْيَتَامَىٰ وَالسَّكِينِ وَابْنَ السَّبِيلِ وَالسَّائِلِينَ وَفِي الرِّقَابِ وَأَقَامَ الصَّلَاةَ وَآتَى الزَّكَاةَ وَالْبُوفُونَ بِعَهْدِهِمْ إِذَا عَاهَدُوا وَالصَّابِرِينَ فِي الْبَأْسَاءِ وَالضَّرَاءِ وَجَيْنَ الْبَأْسِ أُولَئِكَ الَّذِينَ صَدَقُوا وَأُولَئِكَ هُمُ الْمُتَّقُونَ ﴿١٧٨﴾

注129 この節の意味は、火は渴きを満足させるところが大きくなるのと同じように、この世の事は心の平和と満足を与えることなく、その逆のものをもたらす、という事である。

注130 この節にはイスラムの教えの要点が述べられている。まず、基本的なイスラムの信念と教理から始まっている。それはすべての行動の源となるものであり、人間のもつ本来の善をよりどころとした正義である。すなわち、神を信じること、最後の審判を信じること、天使、經典、聖なる預言者を信じることである。そして次に人間の行為に関するとても大切な事柄について述べている。

179. 汝等信徒たちよ、殺人に対する報復は、自由民には自由民、奴隷には奴隷、女子には女子と公正な報復を規定す。(注 131) 但し加害者が被害者の兄弟によって赦免される場合は、慣例によって之に贖血金を課し、加害者に懇ろに之を支拂わしむべし。これはお前たちの主よりの減刑にして、且つ慈悲なり。されば今後この掟に違反する者は、酷罰あるべし。

180. 思慮ある人々よ、報復の掟にはお前たちのための救いあり、お前たちの安全を保障するための。(注 132)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا كُتِبَ عَلَيْكُمُ الْقِصَاصُ فِي الْقَتْلِ
الْحَرْبِ وَالْحَرْبِ وَالْعَبْدِ بِالْعَبْدِ وَالْأَنْثَى بِالْأُنْثَى مِمَّنْ
عُفِيَ لَهُ مِنْ أَخِيهِ شَيْءٌ فَأَتْبَاعُ بِالْمَعْرُوفِ وَأَدَاؤُهُ
إِلَيْهِ بِإِحْسَانٍ ذَلِكَ تَخْفِيفٌ مِّنْ رَبِّكُمْ وَرَحْمَةٌ
مِّمَّنْ أَعْتَدَىٰ بَعْدَ ذَلِكَ فَلَهُ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿١٧٩﴾
وَكُفِّرْ فِي الْقِصَاصِ حَيَوةً يَّأُولَى الْأَلْبَابِ لَعَلَّكُمْ
تَتَّقُونَ ﴿١٨٠﴾

注 131 この節は一般市民にとって大切な法の根本精神を述べている。すなわち、平等で公平な裁きの必要性である。罪を償い、誠意を見せて被害者の親類が許さない限り、犯罪者は相応に罰せられる。ここでは、殺人者は相当に報復される必要があると言っている。犯罪者を法によって罰しないということは神の命に背くことである。しかしながら、犯罪者を罰するのは殺された人の後継者でなく、法と秩序を責任持って守っている権威者である。しかしながら、また許しを与えることもできる。よって権威者は法のもとに法に従って裁かなければならない。だから自分の判断で勝手に許す権利はない。また被害者の後継ぎは法を司ることはできない。まして直接罰を与えることはできない。処罰は誰にも平等に課せられるとこの節のべられている。この言葉は普遍的である。地位、身分、宗教のいかにかわからず、殺人の罪を犯した人はすべて同様に処罰される。この点に関しては聖なる預言者の言葉に明言されている(マジヤ)。

非戦闘の一般市民で本信徒である者を回教徒が意図的に殺した場合、死刑となるという見解が預言者の仲間の中で一致している。聖なる預言者も非イスラム教徒で非戦闘の者を意図的に殺したイスラム教徒は死刑であると述べている。自由民には自由民、奴隷には奴隷、婦人には婦人という言葉は自由民は奴隷を殺しても死刑にはならないとか、婦人は異性を殺しても死刑にならないと言っているのではない。社会的地位や性のいかにかわからずこの法は適用される。「自由民には自由民…」という言葉は独特に解釈してアラブの特有の慣習ができた。それは性差や社会的地位により殺人者の処罰を決める方法である。しかし、その独特の慣習は今は廃止されている。この節の戒律には皆に嫌がられている習慣を廃止しようとしている姿勢がある。実際、前にも述べた報復についての法は「殺害には同等の報復のみをすることが規定されている。」という文で制限されている。この文は必要十分な意味をもち、主旨を完全に言い尽くしている。それに続く「自由民には自由民、奴隷には奴隷、婦人には婦人」法の重要要素ではない。ただ上記の三例を掲げてこのようなアラブの慣習は拒否すべきであると述べており、又、法をどのように施行すべきかを述べているだけである。聖なる預言者は「自分の奴隷を殺した者は誰でも死が与えられる。」と言ったと伝えられている。(マジヤ) 他のところでまた「イスラム教徒の命はすべて報復の法のもとに平等である。」と述べている。(ナサイ)

注 132 イスラムの報復法のおかげで、殺人が押さえられ、人間の生命への安全が守られるのに多大な効果がある。人間の生命の尊厳を全く無視してしまう様な人間は、人間社会の一員として生きる全ての権利をなく奪われ、赦免や容赦をうけられるのは、赦免などによって事態が好転し、両者共に良い結果がもたらされると考えられる状況のみである。この様にイスラムは一方では犯罪を抑止するのに妥当な手段を講じ、又一方では慈悲と救済の高貴な特質を示すのにやぶさかではないのである。努力に反し、ほとんどの国に於いて、形式はそれぞれ異なっても死刑が課されているという事実がイスラムの規定の賢明さを充分に証明するものである。極刑廃止の熱心な推進者でさえもそれにかわる良い措置をみつけ出せないでいる。死刑にとっかわり終身刑を課するのは「酷」であり、理想的な代行刑とは言い難い事を認めざるを得ないのである。(Roy Caluvert 著 20 世紀に於ける極刑、G. P. Putnum、ロンドン、1930)

181. お前たちに規定する。お前たちの誰かが死に臨んで、もし財産を遺すような場合は、両親及び親族に公明正大な遺言をすること。こは神を畏れる者の義務なり。(注 133)

كُتِبَ عَلَيْكُمْ إِذَا حَضَرَ أَحَدَكُمُ الْمَوْتُ إِنْ تَرَكَ خَيْرًا الْوَصِيَّةَ لِلْأَقْرَبِينَ وَالْأَقْرَبِينَ بِالْمَعْرُوفِ حَقًّا عَلَى الْمُتَّقِينَ ﴿١٨١﴾

182. 遺言を聞きたる後、之を変更すれば、罪は変更する者の上にあり。げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。(注 134)

فَمَنْ بَدَّلَهُ بَعْدَ مَا سَمِعَهُ فَأَنَّمَا أَمْرُهُ إِلَى اللَّهِ يُبَدِّلُ وَنَهْكَهُ إِنَّ اللَّهَ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿١٨٢﴾

183. 但し遺言者側のえこひいきや間違いを懸念して、当時者たちの間に入って之を調停することは、罪に非ず。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。(注 135)

فَمَنْ خَافَ مِنْ مَوْصٍ جَنَفًا أَوْ إِثْمًا فَأَصْلَحَ بَيْنَهُمْ فَلَا إِثْمَ عَلَيْهِ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿١٨٣﴾

第二十三項

184. 汝等信徒たちよ、先人に規定せし如く、断食をお前たちに規定す。こはお前たちを義しい人たらしめんがためなり。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا كُتِبَ عَلَيْكُمُ الصِّيَامُ كَمَا كُتِبَ عَلَى الَّذِينَ مِنْ قَبْلِكُمْ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ ﴿١٨٤﴾

注 133 4 章 12 節、13 節で死者の財産を相続する場合の全ての人の取り分が決められている。これらの節は註釈者達の何人かには誤解されて当該の節を取り消すものと考えられているが、実際にはこの節で、遺言を残す者に対し法律的には相続資格を有してはいないが、遺産を認められる対象となる個人への、或いは慈善の目的の、或いは、戦時の、それぞれの遺産の取り扱いについての大事な追加条項となっているのである。ここでは 4 章 12 節と 13 節で扱っている、法定相続人の受けつぐ遺産について何ら規定するものではなく、そのため 4 章 12 節、13 節によってこの節で述べられる規定が取り消される事など論外なのである。各々が各領分を取りしきるのである。しかしこの様にして譲られる遺産は、サード・ビン・アビー・ワカースに関して聖なる預言者が言った様に、相続されるべき遺産の 1/3 を越えてはならない(ブハリ・ジャナーイズ著)。これが遺言者の自由裁量となる限度で、それも遺言者が巨額の富を残した場合のみにあてはまるのである。死にゆくイスラム教徒がそれに従って遺言でき、一般的な理解としては 4 : 12 と 13 の後に、啓示された 5 章 107 節でこの節が 4 : 12-13 がある為に取り消されるという事はないという点が詳しく支持されている。実際、廃止論には何の根拠もないのである。

注 134 ここでは、前節には、従わねばならず、又違反すると罪となる幾つかの指示が包括されている。それは財産とは相続の法にのっとって管轄されなければならないという指示であり、遺言者が、残した指示を破るものは、違反の罪となるのである。

注 135 子孫、配偶者、両親は、遺言がなくとも遺産を受けとる権利が保証されているため、特にこれらの人々について記述された遺言は必要ではない。遺言が必要となるのは、それ以外の人に対し遺産を与えたいと遺言者が望む場合である。しかしこの限度額は遺産の 1/3 までとされている。その配分に関する遺言状が法的条件を満たしていても、ある条項では不公平となる場合もある。例えば、死者の相続人が非常に多いにもかかわらず、死者が遺言で遺産の最大限の 1/3 を慈善行為や、その他の法にかなった目的の為、寄付したりしてしまうと、相続人達は困った事となる。或いは、その 1/3 について遺言者が、正当な請求を無視した形で、不公平な配分をした場合もそうである。そういう場合には、相続人と遺言によって遺産を相続する人との間で公正な調整を行なうことが許されるが、これはむしろ賞賛されるべき行為である。

185. 定め^の断食には、一定の日数あり。但しお前たちのうち病める者、また旅路にある者は、同じ日数を別の日に断食せよ。また断食可能でありながら、それが至難なる者は、貧者への施しによって償いとする。自発的に服従の気持ちで善行をなすは、己れのために最も良し。断食はお前たちのためなり、もしお前たちわかりさえすれば。(注136)
186. ラマダーン月こそは、(注137) 人類の嚮導として、その嚮導の明証として、正邪善悪の識別としてクルアーンの(注138) 降されたる月なり。(注139) 故にお前たち、この月に家に在る者は、断食せよ。但し病める者、旅路にあるものは別の日に同じ日数を断食せよ。(注140) アッラーはお前たちに便宜を与え、難儀を求めず。こはお前たちがその日数を全うし、アッラーがお前たちに賜える嚮導に対してアッラーを讃美し、且つお前たちをして感謝せしめんがためなり。

إِيَّامًا مَّعْدُودَاتٍ فَمَنْ كَانَ مِنْكُمْ مَّرِيضًا أَوْ عَلَى سَفَرٍ فَعِدَّةٌ مِنْ أَيَّامٍ أُخَرَ وَعَلَى الَّذِينَ يُطِيقُونَهُ فِدْيَةٌ طَعَامُ مِسْكِينٍ فَمَنْ تَطَوَّعَ خَيْرًا فَهُوَ خَيْرٌ لَهُ وَأَنْ تَصُومُوا خَيْرٌ لَكُمْ إِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿١٨٥﴾

شَهْرَ رَمَضَانَ الَّذِي أُنْزِلَ فِيهِ الْقُرْآنُ هُدًى لِّلنَّاسِ وَبَيِّنَاتٍ مِّنَ الْهُدَى وَالْفُرْقَانِ فَمَنْ شَهِدَ مِنْكُمُ الشَّهْرَ فَلْيَصُمْهُ وَمَنْ كَانَ مَرِيضًا أَوْ عَلَى سَفَرٍ فَعِدَّةٌ مِنْ أَيَّامٍ أُخَرَ يُرِيدُ اللَّهُ بِكُمُ الْيُسْرَ وَلَا يُرِيدُ بِكُمُ الْعُسْرَ وَلِتُكْمِلُوا الْعِدَّةَ وَلِتُكَبِّرُوا اللَّهَ عَلَى مَا هَدَاكُمْ وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿١٨٦﴾

注136 宗教的儀式としての断食は、詳細や形態に差異はあっても、全ての宗教に存在している“文化水準の高低にかかわらず、多大な数の宗教に於いて、断食がみうけられる。宗教で要求されていなくても、自分の体の要求に応じて或る範囲まで個人によっても遂行される”(ブリタニカ百科辞典より)肉体的、或いは世俗の関係事から、或る程度まで、厳しく身を律する事は精神の至高には必須であり心や求道者の共通の体験である。しかしイスラムでは、この断食道に新しい方針と精神的意味を導入している。それによると断食とは完全なる犠牲の象徴である。断食をする者は、人の生命を支える主たるものでそれなしでは生きてゆく事のできない飲み物と食べ物とを口にしないだけでなく、自分達の子孫をはらむことができる妻のもとにゆく事も断つのである。この様に断食する者は、自分の神であり創造者であらせられる存在に対し、自分が必要とする全てを犠牲にする用意のある事を、実際に明白にするのである。

注137 「ラマダーン」とは大陰暦の9月である。これは、断食をする人の内臓が乾きの為、大変熱くなる為ラマダ・アサイム(熱くなる)という、そのラマダを語源としている。9月がラマダと呼ばれた理由は、(1)この月の断食が乾きの為、熱と燃えるような感覚を生みだすから、(2)この月の礼拝が人の中の罪の痕跡を焼きつくすから、(3)この月の人の獣身が人の心に創造者と自分の身のまわりの仲間達への必要とされる愛の温かさをうみだすから、と言われている。

注138 クルアーンとは、(1)読まれるべき本、クルアーンとは世界で最も広範に渡り読まれている本である(ブリタニカ百科辞典)(2)世界へひろめられ伝えられるべき本或いはお告げ。クルアーンこそその神よりのお告げに何の制限もない唯一の經典である。その他の經典は、特定の時代の特定の人々へのみ啓示されたものであが、クルアーンは、いつの時代のどんな人にもあてられている。(34:29)(3)全ての真実を包括した本。真にクルアーンこそ、クルアーン以前の經典に包含された、全ての永遠の真実を包含する知識の宝庫のみならず(98:

187. わしの僕たちが、わしについて汝に問う時は、答えよ、「わしは常に近くにあり。(注141) わしに祈らば、わしはその懇願に応えん。故にわしの呼びかけに耳を傾け、わしを信ぜよ。(注142) さすれば彼等は正しい道を歩まん。

188. お前たちが断食の夜、妻のそばに行くことは許される。妻はお前たちの着物であり、(注143) お前たちは妻の着物なり。アッラーはお前たちが無理しているのを斟酌し、憐れみに転ぜられ、軽減を与えたり。さればお前たち、妻のそばに行きて、アッラーがお前たちに定めたことを求めよ。飲むもよし、食べるもよし、黒糸と白糸の見分けがつく黎明に至るまで。その後は日暮れまで断食せよ。(注144) 礼拝堂で勤行中は妻のそばに通うなかれ。(注145) こはアッラーの立てたる掟なれば、彼女たちに近づくなかれ。アッラーはかくの如くその戒律

وَإِذَا سَأَلَكَ عِبَادِي عَنِّي فَإِنِّي قَرِيبٌ أُجِيبُ دَعْوَةَ الدَّاعِ إِذَا دَعَانِ فَلْيَسْتَجِيبُوا لِي وَلْيُؤْمِنُوا بِلِقَائِهِمْ يَوْمَ يُرْسَدُونَ ﴿١٨٨﴾

أَحِلَّ لَكُمْ لَيْلَةَ الصِّيَامِ الرَّفَثُ إِلَى نِسَائِكُمْ هُنَّ لِبَاسٌ لَكُمْ وَأَنْتُمْ لِبَاسٌ لَهُنَّ عَلِمَ اللَّهُ أَنَّكُمْ كُنْتُمْ تَخْتَلُونَهُنَّ أَنْفُسَكُمْ فَتَابَ عَلَيْكُمْ وَعَفَا عَنْكُمْ فَالْآنَ بَاشِرُوهُنَّ وَابْتَغُوا مَا كَتَبَ اللَّهُ لَكُمْ وَكُلُوا وَاشْرَبُوا حَتَّى يَتَبَيَّنَ لَكُمُ الْخَيْطُ الْأَبْيَضُ مِنَ الْخَيْطِ الْأَسْوَدِ مِنَ الْفَجْرِ ثُمَّ أَتُوا الصِّيَامَ إِلَى الْيَلِّ وَلَا تَبَاشَرُوهُنَّ وَأَنْتُمْ يُقِفُونَ فِي الْمَسْجِدِ

4) 人がいかなる時、いかなる状況でも頼る事のできる真実から成っているのである。という三点の集大成であるといえる。(18:50)

注139 聖なる預言者が最初に神のお告げを受けたのがラマダーンの24日である。そして全てのお告げは、毎年この月に、大天使ガブリエルによって聖なる預言者に復唱された。これは聖なる預言者の死んだ年まで続き、亡くなった年のこの月に、大天使ガブリエルにより、全クルアーンが預言者に対し復唱されたのである(ブハリ)。この様に、クルアーンの全てがラマダーンの月に啓示されたと言えるのである。

注140 この文章は不必要な反復ではない。というのも、この文章は前節に於いて、断食の戒律への基盤をなしていたのが、この節では、実際の戒律となっているからである。しかしクルアーンでは賢明にも“病氣”と“旅行”の二つを特に定義せずそれら用語の人々の一般的使用法と、おかれた状況次第の解釈に委ねている。

注141 信仰心厚き者がラマダーンの月の御恵みと断食の御恵みに気づけば、それから、できるだけ多くの精神的恩恵を得ようと熱心になるのは当たり前の事である。この節は、信者のこの魂の渴望への答えなのである。

注142 私を信じる(「わしを信ぜよ」の部分)は、神の存在を信じるという意味ではない。何故なら、すぐ前の文の“彼らは私の言う事に目を傾ける”(「わしの呼びかけに耳を傾け」の部分)という文そのものが、神の存在を信じる事を前提にしなければ意味がないからである。神の存在を信ぜずして傾聴し、神の戒律に従う事などできない事を意味しているからである。

注143 ここでは何と簡明な言葉で、女性の権利と地位、結婚と婚姻関係の目的と意義が表されている事であろう。この節が言おうとしている結婚の本当の目的とは、夫と妻の二人の為の快適さ、保護、そして装飾であり、これこそ着物の使われ方なのである。(7:27と16:8)結婚とは、当然の事ながら性的欲望のはけ口だけでなく、夫と妻の両方が、邪悪や醜聞から互いを守りあうものなのである。

を人々に明示し給う、彼等をして悪よりその身を護らしめんがために。

تِلْكَ حُدُودُ اللَّهِ فَلَا تَقْرُبُوهَا كَذَلِكَ يُبَيِّنُ اللَّهُ
آيَاتِهِ لِلنَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَتَّقُونَ ﴿١٤٤﴾

189. お前たち、無益なことに(注146)互にその財産を(注147)浪費するなかれ。また裁判官に賄賂をつかって、他人の財産の一部を、承知のうえで不法にむさぼり食うなかれ。

وَلَا تَأْكُلُوا أَمْوَالَكُمْ بَيْنَكُمْ بِالْبَاطِلِ وَتُدْلُوا بِهَا
إِلَى الْحَكَّامِ لِتَأْكُلُوا فَرِيقًا مِّنْ أَمْوَالِ النَّاسِ بِالْإِثْمِ
وَأَنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿١٤٥﴾

第二十四項

190. 彼等は新月について汝に問わん。云え、「そは人間の便宜のために、また巡礼のために定めたる時の基準なり」と。(注148) またお前たち、裏口から家に入ることは(注149)正しからず。真の正義者とは神を畏れる者なり。さればお前たち、正面から家に入るべし。而してアッラーを畏れよ、されば成功せん。

يَسْأَلُونَكَ عَنِ الْإِهْلَةِ قُلْ هِيَ مَوَاقِيتُ لِلنَّاسِ
وَالْحَجِّ وَلَيْسَ الْبِرُّ بِأَنْ تَأْتُوا الْبُيُوتَ مِنْ ظُهُورِهَا
وَلَكِنَّ الْبِرَّ مَنْ اتَّقَىٰ وَآتُوا الْبُيُوتَ مِنْ أَبْوَابِهَا
وَاتَّقُوا اللَّهَ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿١٤٦﴾

注144 夜と昼が極端に長くなるような地区では(例えば極地)、夜と昼は12時間の単位で考えられる(ムスリム)。

注145 いわば断食の精神を完全にするといえるエティカフでは、妻との交わりや前戯は、夜であっても禁止される。

注146 断食に関した戒律では、信心と公明正大さを獲得するという観点から、定められた期間中は飲食がまんする事を命じている。この時期程、掟にかなぬ食事(即ち、掟にかなぬ富の獲得の事)は何にもまして突直にさけねばならないという事を人々に思いおこさせる時は他にないのである。また、この節ではその他に、賄賂の受け渡しを強く非難している。

注147 自治体、或いは国家的団結を強調する為にクルアーンでは、しばしば、他のイスラム教徒の財産を“あなた達の財産”と表現する。ここでも、そういう意味で語られている。

注148 イスラムでは、大陰暦と太陽暦を併用している。日中の5回の祈りや、ラマダーンの日の毎日の断食の初めと終わりを決めるのは日の出の入りに従う。また断食の月の選択や巡礼時の指定といった場合には大陰暦が使用される。イスラムは、両方の暦を使用するが、どちらかといえば太陽暦を多用する。

注149 ここでは、礼拝の色々な様式を指示する本当の目的はそれらの行為が本質的に有用だからであるという重要な原則が指摘されている。礼拝することと時間のうち最優先されるべきは礼拝であり、時間は二次的なものである。しかし玄関からではなく“裏口から”家に入るといった類の問題を提出する者は時間を第一義、礼拝をただの付随的なものにしたいのである。これではまるで荷車を馬の前に置くようなものである。またここでの言及は、異教徒のアラブ人の習慣をさす様にも思われる。一たんメッカへの巡礼に出た者が、何らかの理由で帰宅せねばならぬ時には、彼らは、壁にはしごをかけ裏口から家に入る習慣を持っていたのである。この節では、このような因習を、敬けんとは精神的な概念であるからして、そんな事をしても敬けんである事にはならないと指摘して非難している。そして又、人の目的を達成するには適切な手段を講じる様、示唆している。(フハリ、タフシール書)

191. お前たちに対して戦いを挑む者あらば、アッラーの道のために戦え。されど正義を逸脱するなかれ。げにアッラーは不義者を愛さず。(注150)
192. かかる挑戦者に出遭わば、どこでもかまわず之を殺せ。(注151) 而してお前たちが追放されたとところから、(注152) 彼等を追い出せ。迫害は殺害よりも悪し。但し、相手が聖殿の中まで戦いを仕掛けてこないかぎり、聖殿の内部や近くで戦うなかれ。されど相手がもし戦いを挑まば、之と戦え。それは不信心者どもへの応報なり。
193. されど、彼等が戦を止めなば、アッラーは寛大にして、情け深くまします。
194. 迫害がなくなり、宗教がアッラーのために自由に信仰できるようになるまで、戦え。されど彼等が戦いをやめた際は、(注153) 不義者に対しての外は敵意を(注154) 抱くことは許されざることを忘れるな。

وَقَاتِلُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ الَّذِينَ يُقَاتِلُونَكُمْ وَلَا تَعْتَدُوا إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ الْمُعْتَدِينَ ﴿١٩١﴾

وَأَقْتُلُوهُمْ حَيْثُ تَقْبَلُوهُمْ وَارْجُؤْهُمْ مِنْ حَيْثُ أَرْجَوْكُمْ وَالْفِتْنَةُ أَشَدُّ مِنَ الْقَتْلِ وَلَا تَقَاتِلُوهُمْ عِنْدَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ حَتَّى يَقْتُلُوكُمْ فِيهِ فَإِنْ قَتَلُوكُمْ فَأَقْتُلُوهُمْ كَذَلِكَ جَاءَ الْكُفْرِينَ ﴿١٩٢﴾

فَإِنْ انْتَهَوْا فَإِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿١٩٣﴾

وَقَاتِلُوهُمْ حَتَّى لَا تَكُونَ فِتْنَةٌ وَيَكُونَ الدِّينُ لِلَّهِ فَإِنْ انْتَهَوْا فَلَا عُدْوَانَ إِلَّا عَلَى الظَّالِمِينَ ﴿١٩٤﴾

注150 これはイスラム教徒に戦いの許可が与えられている初期の時代の節の一つであり、この関連で、一番最初に啓示された節は22:40である。この節には宗教戦争をつかさどる条件の要旨が示されている。即ち、(1) そういった戦いは、アッラーの神の道の障害を取り除く目的の爲である事、即ち、宗教的信念と行為の自由の確立の爲である事、(2) 相手方が先にイスラムに対して攻撃をしかけた場合のみ行なわれる事、(3) イスラムは敵が戦いを止めたらすぐに武器を置く事、の三つである。

注151 この節は実際に戦いが、勃発した時の事についてであり、明らかに、イスラム軍は、先に攻撃をしかけてきた不信者達に対してのみ戦うよう指示されている。

注152 この語句は、メッカこそ、イスラムの中心で最も聖なる場所であり、イスラム教徒以外が、そこにとどまっていたはいけない事を意味している。

注153 ここでもイスラムが戦うのは相手が仕掛けてきた時の自衛の場合のみで、完全な宗教の自由を確立するまで戦いが許される事が示されている。もし、全ての不信者がイスラムを受け入れるまで戦いを続けよという事が神の律法であったなら聖なる預言者が不信者達との幾つもの平和条約を結ぶことなどできなかったはずである。ジハード(聖戦)についての詳細は22章39節-42節を参照の事。

注154 「敵意」(ウドゥワーン)とは、(1) 敵意(2) 悪しき行為、(3) 悪しき行為への懲罰、そして(4) 相手に対する正当化或いは、弁解の形をとった相手への接近を意味している。これら四つの節(191-194節)が、以下に述べる戦いについての取り決めの基本原理となっている。(1) 戦いは神の爲のみで、いかなる利己的動機、力や富の増強、或いは、国家やその他の利益の発展の爲であってはならない(2) イスラム軍は先に攻撃をしかけられた場合にのみ戦争に突入できる。(3) 敵が攻撃を仕掛けた後も、限度内で交戦し、当面の目標以外は戦線を拡大せぬ事(4) 正規軍のみを攻撃し、戦っていない者を攻撃したり苦痛を与えたりせぬ事。(5) 戦争中でも、人々の宗

195. 聖月には聖月に(注155)報復すべし。またすべての聖事のために報復の掟あり。されば何人^{なんびと}にせよ、お前たちに罪を犯す者あらば、相手がお前たちになしたる如く、その者を懲らしめよ。アッラーを畏れよ。而してアッラーは、アッラーを畏れ敬う人々と偕にあることを知れ。

196. アッラーの道のために費やせ。(注156)されど自らの手で、自分自身を破滅に投げ込むなかれ。善行をせよ。アッラーは善行をなすものを愛し給う。

197. アッラーのために大巡礼、(注157)小巡礼を全うせよ。(注158)されど、もしお前たちがそれをなすことを妨害されなば、何んでもよい、手に入り易いものを捧げよ。而して、その供物が生贄を捧げる場所に達するまで、頭を剃ることなかれ。お前たちのうち病める者、または頭に病いある者は、その償いとして、断食、または施し、または生贄を捧げよ。されどお前たちが安全なる状態にあり、大巡礼と一緒に小巡礼もしておき

الشَّهْرُ الْحَرَامُ بِالشَّهْرِ الْحَرَامِ وَأَحْرَمْتُ قِصَاصُ
فَنِ اعْتَدِي عَلَيْكُمْ فَأَعْتَدُوا عَلَيْهِ يٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ
عَلَيْكُمْ وَاتَّقُوا اللَّهَ وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ مَعَ الْمُتَّقِينَ ﴿١٩٥﴾

وَأَنْفِقُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَلَا تُلْقُوا بِأَيْدِيكُمْ إِلَى التَّهْلُكَةِ
وَاحْسِبُوا أَنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُحْسِنِينَ ﴿١٩٦﴾

وَاتَّبِعُوا الْحَجَّ وَالْعُمْرَةَ لِلَّهِ فَإِنْ أُحْصِرْتُمْ فَمَا اسْتَيْسَرَ
مِنَ الْهَدْيِ وَلَا تَحْلِقُوا رُءُوسَكُمْ حَتَّىٰ يَبْلُغَ الْهَدْيُ
مَحَلَّهُ ۚ فَمَنْ كَانَ مِنْكُمْ مَّرِيضًا أَوْ بِهِ أَذًى مِنْ رَأْسِهِ
فَعِدْيَةٌ مِنْ صِيَامٍ أَوْ صَدَقَةٌ أَوْ كَسَاءٌ فَإِذَا أَمِنْتُمْ
فَمَنْ تَمَتَّعَ بِالْعُمْرَةِ إِلَى الْحَجِّ فَمَا اسْتَيْسَرَ مِنَ

教上の慣例や儀式を妨げないこと。(6)信仰の地、或いはそこに、いかなる害を与える事も許されない。その為、その地の近隣で戦いをする事も許されない。(7)もし敵が、礼拝の場所を攻撃の中心とする場合は、その時に限り、イスラム軍は礼拝地内又はその近くから攻撃をしてもよい。(8)宗教上の自由が妨害されている間のみ、戦闘を続ける事ができる。(8:40; 9:4-6; 20:40, 41) その他を参照の事

注155 「聖月」とはズル・カーダ、ズル・ヒジジャー、ムハッラーム及びラジャブである。これらの月には戦闘行為は禁じられている。この戒律は、カーバの神殿と聖なる月の聖徳を守る為のものである。

注156 戦争に勝つ為には、金銭を必要とする。出費をためらうと国家の破滅につながる為、信者はアッラーの大義の為に惜しまず金銭的協力をする事が望ましい。

注157 この節から巡礼(ハジ)の内容の叙述となる。ジハード(聖戦)とハジ(巡礼)は互いに関係があり、両者共、アッラーの神の道の大義の為に、真実の熱心な信者ならくぐらなければならない犠牲(献身)の一形態であるといえる。2:178 から説明の続いているアッラーの大義の内、巡礼が人の精神的発展の最終段階であり、これまでに、祈り、断食、ジハードは既に説明されているところである。

注158 「ウムラー」(小巡礼)とは上記の方法でエヘラームに入る事で、これはカーバの神殿のまわりを7回まわり、サファとマルワの間を駆け、いけにえを捧げる事であるが、これは強制の義務ではない。小巡礼は一年の内、いつ行なってもよいが、ハジ(大巡礼)はズル・ヒジジャーの月のみに行なわれる。

たいと思うなら、(注 159) なんでもよいから容易に手に入るものを供えよ。されど、何も捧げるものが見つからない場合は、巡礼中に三日間、家に帰ってから七日間、合せて十日間断食せよ。(注 160) こは聖殿近くにその家族が住まざる者の場合に限る。(注 161) アッラーを畏れよ。アッラーの懲罰は苛酷なことを銘記せよ。

第二十五項

198. 巡礼月は周知の事実なり。されば誰であれ、これ等の月に巡礼をなさんとした者は、巡礼中にみだらな言葉を吐いたり、罪を犯したり、喧嘩口論などするなかれ、忘れまいぞ。お前たちが善行をなせば、アッラーはそれを知る。されば旅のための必要な食糧を準備せよ。最上の食糧は正義なり。思慮ある人々よ、わしのみを畏れ敬え。
199. お前たちが主の恵みを求むるは罪に非ず。(注 162) されどお前たち、アラファートから (注 163) 降り来て、聖跡マシュアル・ア

الْهَدْيِ فَمَنْ لَمْ يَجِدْ فَيْصِيَامَ ثَلَاثَةَ أَيَّامٍ فِي الْحَجِّ وَ سَبْعَةَ إِذَا رَجَعْتُمْ تِلْكَ عَشْرَةٌ كَامِلَةٌ ذَلِكَ لِمَنْ لَمْ يَكُنْ أَهْلُهُ حَاضِرَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ وَ اتَّقُوا اللَّهَ وَأَعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ شَدِيدُ الْعِقَابِ ﴿٢٥﴾

الْحَجِّ أَشْهُرٌ مَعْلُومَةٌ فَمَنْ فَرَضَ فِيهِنَّ الْحَجَّ فَلَا رَفَثَ وَلَا فُسُوقَ وَلَا جِدَالَ فِي الْحَجِّ وَمَا تَفْعَلُوا مِنْ خَيْرٍ يَعْلَمْهُ اللَّهُ وَ تَزُودُوا فَإِنَّ خَيْرَ الرِّزْقِ التَّقْوَى وَ اتَّقُوا يَا أُولِي الْأَلْبَابِ ﴿٢٥﴾

لَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ أَنْ تَبْتَغُوا فَضْلًا مِنْ رَبِّكُمْ فَإِذَا أَقَضْتُمْ مِنْ عَرَفَاتٍ فَأَذْكُرُوا اللَّهَ عِنْدَ الْمَشْعَرِ

注 159 ウムラーとハジは二つの方法でつなぐ事ができる。(1)ウムラーを行なう予定の巡礼者は、一人でエヘラームの状態に入り、儀式を取り行い終了させる。そしてズル・ヒジジャーの8 Hめに、もう一度エヘラームの段階に入りハジで指定されている儀式を行う。このウムラーとハジのつなげ方をタマツトと呼び、文字通りに解釈すれば“物事を利用する”の意味となる。(2)巡礼時にウムラーとハジを同時に行う事である。この場合、巡礼者はそのつもりでエヘラームの状態に入り、巡礼が終わるまでその状態を続ける。これはキラーンと呼ばれ、文字通りでは“二つの物事を組み合わせる”の意味である。タマツトとキラーンでは、供え物をしなければならない。

注 160 ‘巡礼中に三日の断食’という文中で言われている断食は別個のもので、同節上記の断食とは同一ではない。最初に述べられる断食は、頭をそる事ができない者の為であり、ここで述べられる断食はタマツトの際に供え物を出せない者の為である。ここでいわれる三日間とはズル・ヒジジャーの11、12、13 Hである事が望ましく残りの7 H間の断食は帰宅してから遂行すればよい。

注 161 ハジとウムラーを一緒に行なう事はメッカの居住者のみでなく外部の者にも許されているの意味であるが、なかには、聖なるモスクをハラム全体、即ちメッカの内とまわりの聖なる領域と拡大解釈する者もいる。

注 162 巡礼の目的はできるだけ多くの教徒の参加である為、クルアーンは巡礼達に商売を行う事を許している。現金を持って旅にでられない者は商品を持ってきて商売し、もうけたお金を旅の費用にあてる事ができる。

注 163 アラファートとは、巡礼達がズル・ヒジジャーの9日めの後半、休息する平地であり、メッカから約14 kmの所にある。ヴァクーフとしていられているこの休息は、巡礼の重要な儀式の一つである。アラファートとは、聖なる場所又は知識の察知手段という意味の合成語である。

ルハラームでアッラーを念ぜよ。(注164) かつて迷えるお前たちを、アッラーが導きたることを思いながら。

200. かくして、人々が急ぎ進むところから、お前たちも急ぎ進み、アッラーに赦しを請え。げにアッラーは寛大にして、情け深くまします。(注165)
201. お前たち定め^のの儀礼を終えなば、自分たちの父祖を賞讃せし如く、いやもつと心をこめて、アッラーを賞讃せよ。人々のうちには云う者あり、「主よ、我等にこの世でもろもろの佳き物を与え給え」と。かかる者は、来世ではなんの分け前も得ざるべし。
202. また彼等のうちに云う者あり、「主よ、我等にこの世で幸い^{しか}を与え給え、来世においてもまた然り。而して我等を、業火^のの責苦から護り給え」と。(注166)
203. これ等の人々は、自分で稼いだものに相当する分け前を得るべし。アッラーは清算に迅速なり。
204. 定められたる日数の間(注167) アッラーを念ぜよ。但し二日間^にに短縮しても、その者

الْحَامِ وَالْأَذْرُوهَ كَمَا هَدَيْتُمْ وَإِنْ كُنْتُمْ مِنْ قَبْلِهِ لَسَنِ الضَّالِّينَ ﴿١٩﴾

ثُمَّ أَيْضًا مِنْ حَيْثُ أَفَاضَ النَّاسُ وَاسْتَغْفَرُوا اللَّهَ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٢٠﴾

وَإِذَا قَضَيْتُمْ مِنْاسِكُمْ فَادْكُرُوا اللَّهَ كَذِكْرِكُمْ آبَاءَكُمْ أَوْ أَشَدَّ ذِكْرًا فَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَقُولُ رَبَّنَا آتِنَا فِي الدُّنْيَا وَمَا لَهُ فِي الْآخِرَةِ مِنْ خَلْقٍ ﴿٢١﴾

وَمِنْهُمْ مَنْ يَقُولُ رَبَّنَا آتِنَا فِي الدُّنْيَا حَسَنَةً وَفِي الْآخِرَةِ حَسَنَةً وَقِنَا عَذَابَ النَّارِ ﴿٢٢﴾

أُولَئِكَ لَهُمْ نَصِيبٌ مِمَّا كَسَبُوا وَاللَّهُ سَرِيعُ الْحِسَابِ ﴿٢٣﴾

وَادْكُرُوا اللَّهَ فِي أَيَّامٍ مَعْدُودَةٍ فَمَنْ تَعَجَّلَ فِي

注164 マシュアル・アルハラームとは、メッカとアラファートの間のムズダリファにある小さな丘である。ここで聖なる預言者は夕べと夜の祈りをし、日の出まで祈り続けた。メッカから約9 km離れたここは、巡礼時のめい想と祈りにあてられる拝所である。

注165 イスラムが到来する以前のクライシュ部族とフムスとして知られるバヌー・キナーナはアラファートへは、他の巡礼についていかず、マシュアル・アルハラームの近くに留まり、他の巡礼がアラファートから戻るのを待って合流した。当節と前節ではマシュアル・アルハラームの近くに留まらず、他の巡礼同様、アラファートまで行くべきであると述べている。そして、アラファートからマシュアル・アルハラームまで戻った巡礼達は、供え物をささげるミナーまで行き、エヘラームの状態が終わるのである。

注166 ここではその努力や向上心が現世のみに限られてはいない現世と来世、両方に於ける善を求道する種類の人々について述べている。ハサナとは成功も意味しており、聖なる預言者も何度も使った、非常に総括的な祈りである。(ムスリム)

注167 これらの日は、可能な限り、巡礼がミナーに滞在し、神を讃美しながら時間をすごすべきとされているズル・ヒッジャーの11、12、13日をさす。それらの日は、輝きと美の日々という意味のアヤム・ウッシャリークと呼ばれている。

は罪なく、また長く留まるも罪なし。こは神を畏れる者のためなり。さればアッラーを畏れよ。(注168) 而していづれ必ずアッラーの御許へ召集せらるべきことを(注169) 銘記せよ。

205. また人々の中には、現世に関することを語りて、汝を感心させ、アッラーを呼びて己れの胸中にあるものの証人たらしめんとする者あり。されど彼こそは最も口論好きな者なり。(注170)
206. かかる者が一たび権力を握ると、四方に奔走して騒乱を策し、穀物や人類を蹂躪す。アッラーは騒乱を憎み給う。
207. かかる者に「アッラーを畏れよ」と云えば、却って驕慢が刺激され、更に罪に走る。(注171) されば彼には、地獄こそがその応報なるべし。そは悲惨なる臥床なり。(注172)
208. また人々のうちにはアッラーの喜びを願うあまり、我と我が身を賣る者あり。アッラーはその僕をあわれみ給う。(注173)

يُؤْمِنِينَ فَلَا تَحْزَنُوا عَلَيْهِ وَمَنْ تَأَخَّرَ فَلَا أَلَمَ عَلَيْهِ
لَئِنْ أَتَىٰ وَالْقَوْمَ اللَّهُ وَعِلْمُوا أَنَّكُمْ إِلَيْهِ تَخْتَمُونَ ﴿٢٠٥﴾

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يُعْجِبُ قَوْلُهُ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا
وَيُشْهِدُ اللَّهَ عَلَىٰ مَا فِي قَلْبِهِ وَهُوَ الَّذِي الْخَصَمُ ﴿٢٠٦﴾

وَإِذَا تَوَلَّىٰ سَلَٰى فِي الْأَرْضِ لِيُفْسِدَ فِيهَا وَيُهْلِكَ
الْحَرْثَ وَالنَّسْلَ وَاللَّهُ لَا يُحِبُّ الْفُسَادَ ﴿٢٠٧﴾

وَإِذَا قِيلَ لَهُ اتَّقِ اللَّهَ أَخَذَتْهُ الْعِزَّةُ بِالْإِثْمِ فَحَسْبُهُ
جَهَنَّمُ وَكَيْسَ الْبِهَادِ ﴿٢٠٨﴾

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَشْرِي نَفْسَهُ ابْتِغَاءَ مَرْضَاتِ اللَّهِ
وَاللَّهُ رَءُوفٌ بِالْعِبَادِ ﴿٢٠٩﴾

注168 巡礼の根本となる目的は、クルアーンで2:198 に於いてナジについての戒律が説き始められる言葉であるタクワー（公明正大さ）の達成である。ここではただ外的に特定の儀式や典礼をとり行うだけで公正さの精神が伴わないものは無意味であり、タクワーこそ人の行動の全ての根底をなすものである事が強調されている。

注169 何千もの巡礼がそのまわりを巡回し、そうできる時はいつもその方角を向いて祈りを捧げるガーンバの神殿はイスラム教徒の心に、神の唯一性と、その尊厳を思い起こさせるのである。

注170 世の中にはその雄弁さと、にせの隣人愛とて聞き手をだましおおす者もいる。彼らは本当の人間の発展には不可欠である犠牲の精神を何ら証明する事なく、自分自身の利益のみを追求し、細かい権利に関し他人と猛烈に争うのである。

注171 彼らの努力は、他の人々の利益を傷つけ自分の利益をふやす事に全てむけられているのである。

注172 尊厳と威信を間違えて理解する事が、そういった人の主たるつまづきのもとであり、彼の虚しさが更に罪を重ねさせ、あらゆる面で正しい道から外れるのである。こういう者は地獄に落ちてゆくのである。

注173 これは前節に述べられた人と対比的に、まるで自分達の魂を、アッラーの喜びを求道する事に与えてしまったかのように、その事のみに没頭する種類の人もある事を述べている。

209. 汝等信徒たちよ、完全服従せよ。^レ而してサタンの足跡を追うなかれ。サタンこそはお前たちの公敵なり。
210. 明証が降りたる後に、うっかり誤るが如きことあらば、アッラーは強大にして、賢哲にましますことを知れ。
211. 彼等は、アッラーが雲の天蓋の下、天使たちを引き連れ、(注 174) 彼等のところへ降臨するとでも思うのか?(注 175) 事はすでに決せられたり。すべてはアッラーに帰属す。

第二十六項

212. イスラエルの子孫^{こども}に問え、われらが如何に多くの明証を彼等に授けたるかを。されど、アッラーの恩寵が降りたる後、これを改変する者あらば、アッラーは之を厳しく罰す。(注 176)
213. この世は、不信心者どもには魅惑的に映るため、彼等は信徒たちを嘲弄す。されど神を畏れる人々は、復活の日には不信心者どもより上位を占めん。アッラーはその嘉し給う人々には、計算を度外視して恩寵を授け給う。
214. 人類はかつて一体なりき。(注 177) しかるにその後互に意見を異にしたれば、アッラー

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا ادْخُلُوا فِي السِّلْمِ كَآفَّةً ۖ وَلَا تَتَّبِعُوا خُطُوَاتِ الشَّيْطَانِ إِنَّهُ لَكُمُ عَدُوٌّ مُبِينٌ ﴿٢٠٩﴾
فَإِنْ زَلَلْتُمْ مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَكُمْ الْبَيِّنَاتُ فَاغْلُظْوا
إِنَّ اللَّهَ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٢١٠﴾

هَلْ يَنْظُرُونَ إِلَّا أَنْ يَأْتِيَهُمُ اللَّهُ فِي ظُلَلٍ مِنَ
الْغَمَامِ وَالسَّيْلِكَةِ وَقُضِيَ الْأَمْرُ وَإِلَى اللَّهِ تُرْجَعُ
الْأُمُورُ ﴿٢١١﴾

سَلِّ بَنِي إِسْرَءِيلَ كَمَا آتَيْنَهُمْ مِنْ آيَةٍ بَيِّنَةٍ
وَمَنْ يُبَدِّلْ نِعْمَةَ اللَّهِ مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَتْهُ فَإِنَّ
اللَّهَ شَدِيدُ الْعِقَابِ ﴿٢١٢﴾

رَبِّ الَّذِينَ كَفَرُوا الْحَيَاةَ الدُّنْيَا وَيَسْخَرُونَ مِنَ
الَّذِينَ آمَنُوا وَالَّذِينَ اتَّقَوْا فَوْقَهُمْ يَوْمَ الْقِيَمَةِ
وَاللَّهُ يَرْزُقُ مَنْ يَشَاءُ بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿٢١٣﴾

كَانَ النَّاسُ أُمَّةً وَاحِدَةً فَبَعَثَ اللَّهُ النَّبِيِّينَ

注 174 これはバドルの戦いの時の事で、この時には 25 章 26 節で約束されたように、信者を助ける為に雨と雲を降らせ(ブハリ)、信者の心には勇気を、不信心者には恐怖を与えるべく天使をつかわされた(8:13)。不信心者の中にもその口、実際に天使を見た者がいたと言われている。

注 175 「降臨」という語句は 16:27、59:3 にあるように、神の懲罰という意味で使われることもある。

注 176 これは神が厳しい懲罰を下されるという事を必ずしも意味している訳ではなく、神の懲罰は厳しく感じられるという意味である。

注 177 預言者の到来する以前は、彼ら全員が不信心者であるという意味で、全ての人間は一つの民族であった。しかし一たん預言者が現れると、互いに違いはあっても、不信心者達は一つに団結して預言者に対抗した。「人類はかつて一体なりき」という表現は、国家的一致団結という意味では、クルアーン中 10:20; 21:93 と 23:53 に又当註の施こされた節で使われているように、考えが同一なという意味では、当節 2:214 の他に 5:49; 16:94; 42:9; 43:34 にみられる。

は預言者たちを挙げて、朗報と警告の伝達となし、その争いを判断すべき真理の經典を彼等と共に降したり。しかるに今、經典を賜わりたる者のみが、經典に関して異った見解を抱き、明証が降りたる後だというに、互に嫉妬して相争うに至れり。(注 178) されどアッラーは、思召しを以て、不信心者どもが異論を唱えたる真理へと、信徒たちを導きたり。かくの如くアッラーは、その嘉し給う者は誰であれ、正しい道に導き給う。

215. お前たち、お前たち以前に世を^さ逝りし人々が味いたる状態を体験することなく、樂園に入り得ると思うか？ 困苦艱難が彼等に降りかかり、不安に恐れおののく余り、使徒並びにその信奉者たちは、「アッラーの^{たすけ}佑助はいつの日か？」と嘆いたり。アッラーの^{たすけ}佑助は近づけり。(注 179)
216. 彼等は何に費すべきかと、汝に問わん。云え、「善いことは皆、両親、親類縁者、孤児、貧者、並びに旅行者のためにお前たちの豊かな富を費すべし。お前たちがなす善行は、すべてアッラー^{みな}之を知り給う」と。(注 180)
217. 戦うことをお前たちに定める、そはいやであろが。されどお前たちが好まざることが^{あだ}案外身のためとなり、また好むことが却って害となることもあり。お前たちは知

هُبِّشْرِينَ وَمُنْذِرِينَ ۖ وَأَنْزَلَ مَعَهُمُ الْكِتَابَ بِالْحَقِّ لِيَحْكُمَ بَيْنَ النَّاسِ فِيهَا اخْتَلَفُوا فِيهِ ۚ وَمَا اخْتَلَفَ فِيهِ إِلَّا الَّذِينَ أُوتُوهُ مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَتْهُمْ الْبَيِّنَاتُ بَغْيًا بَيْنَهُمْ ۚ فَهَدَى اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا لِمَا اخْتَلَفُوا فِيهِ مِنَ الْحَقِّ بِإِذْنِهِ ۚ وَاللَّهُ يَهْدِي مَنْ يَشَاءُ إِلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿١٧٩﴾

أَمْ حَسِبْتُمْ أَنْ تُدْخَلُوا الْجَنَّةَ وَلَمَّا يَأْتِكُمْ مَثَلُ الَّذِينَ خَلَوْا مِنْ قَبْلِكُمْ مَسْتَهْمُؤُنَاصًا ۚ وَالضَّرَاءُ وَرُزِلُوا حَتَّى يَقُولَ الرَّسُولُ وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ مَعِيَ نَصْرُ اللَّهِ إِلَّا أَنْ نَصُرَ اللَّهُ قَرِيبًا ﴿١٨٠﴾

يَسْأَلُونَكَ مَاذَا يُنْفِقُونَ ۚ قُلْ مَا أَنْفَقْتُ مِنْ خَيْرٍ فَلِلَّهِ الدِّينُ وَالْآقَرِبِينَ ۚ وَالْيَتَامَىٰ وَالسَّكِينِ وَابْنِ السَّبِيلِ ۚ وَمَا تَنْفَعُكُمْ خَيْرٌ مِنْ خَيْرِ فَإِنَّ اللَّهَ بِهِ عَلِيمٌ ﴿١٨١﴾

كُتِبَ عَلَيْكُمُ الْقِتَالُ وَهُوَ كُرْهُ لَكُمْ وَعَسَىٰ أَنْ تَكْرَهُوا شَيْئًا وَهُوَ خَيْرٌ لَكُمْ وَعَسَىٰ أَنْ تُحِبُّوا

注 178 神は、聖なる預言者と最後の經典をつかわされ、彼の旗印のもとに全ての民が集結するようにとの全世界的伝道を伝えられたのである。この様に、輪回の輪が完結し、団結で始まった世界は団結に帰するべく設定されているのである。

注 179 イスラムのおつげを受け入れるのは、生易しいものではなく、教徒達は、厳しい試練や苦難を通過した後にはやっとならぬ崇高な理想を達成するのである。

注 180 この節は費やされるものは正直に獲得されるべきであるとの意味を持ち、即ち、お金を使う場合は相手が受けとり易いようであらなくてはならず、その人の必要を充たし、使った目的が称賛に値するものであり、それだけの価値があるものでなくてはならない。

らねども、アッラーはすべてを知るなり。
(注 181)

第二十七項

218. 彼等は聖月の期間における戦争について、
汝に問わん。(注 182) 云え、「その期間に戦
うことは、大いなる罪なり。されど人々を
アッラーの道より阻み、アッラーに忘恩的
であり、人の聖殿に詣でるを妨げ、会衆を
聖殿より追い払うことの方が、アッラーの
目からすれば、より重き罪なり。而して迫
害は、殺害よりも悪し」と。彼等は、もし
出来るなら、お前たちをしてその信仰に背
かしむるまで戦いを止めざるべし。お前た
ちのうち信仰に背き、不信心者として死ぬ
者あらば、その者たちのなせることは、現
世においても来世においても空無に帰すべ
し。彼等は業火の住人なり。而してそこに
永劫に住まん。
219. 信ずる者、並びに迫害をさけて移住し、アッ
ラーの道のために奮闘努力する者、これ等
の者はアッラーの恩恵に浴さん。アッラー
は寛大にして、慈悲深くまします。
220. 彼等は汝に、酒と(注 183) 賭博に(注 184)
について問わん。云え、「両者とも大罪なり。

شَيْئًا وَهُوَ سَرُّكُمْ وَاللَّهُ يَعْلَمُ وَأَنْتُمْ لَا تَعْلَمُونَ ﴿٢١٨﴾

يَسْأَلُونَكَ عَنِ الشَّهْرِ الْحَرَامِ قِتَالٍ فِيهِ قُلْ قِتَالٌ
فِيهِ كَبِيرٌ وَصَدٌّ عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ وَكُفْرٌ بِهِ وَ
الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ وَإِخْرَاجُ أَهْلِهِ مِنْهُ أَكْبَرُ عِنْدَ
اللَّهِ وَالْفِتْنَةُ أَكْبَرُ مِنَ الْقَتْلِ وَلَا يَزَالُونَ
يُقَاتِلُونَكُمْ حَتَّى يَرُدُّوكُمْ عَنْ دِينِكُمْ إِنِ اسْتَطَاعُوا
وَمَنْ يَرْتَدِدْ مِنْكُمْ عَنْ دِينِهِ فَيَمُتْ وَهُوَ كَافِرٌ
قُلْ أُولَئِكَ حَبِطَتْ أَعْمَالُهُمْ فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ وَأُولَئِكَ
أَصْحَابُ النَّارِ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٢١٩﴾

إِنَّ الدِّينَ أَمْنٌ وَالَّذِينَ هَاجَرُوا وَجْهَهُدْوَإِي
سَبِيلِ اللَّهِ أُولَئِكَ يَرْجُونَ رَحْمَتَ اللَّهِ وَاللَّهُ
عَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٢٢٠﴾

يَسْأَلُونَكَ عَنِ الْخَمْرِ وَالْمَيْمِرِ قُلْ فِيهِمَا إِثْمٌ

注 181 イスラム教徒は、おそれからではなく、人の血を流す事を好まないという理由から戦争を嫌った。また彼らは戦争の状態よりも、平和的雰囲気にある方がイスラムをひろめ普及させるのには、より伝達しやすいとも考えたのである。

注 182 もし不信者達が聖なる月の神聖さを犯した場合には、ためらわず聖なる月でも彼らを罰せよと命ぜられている。そうする事以外に聖なるものの神聖さは守れないからである(2:195)。註釈者が一般的に述べるところでは、或る時聖なる預言者はアブドゥラ・ビン・ジェーンにメッカへ向かっているクライシュ族の一行に関する情報を持ってくるように命じた。アブドゥラと彼の仲間がナクラという地点で小隊と出会い、そこで一人を殺し二人を捕虜にした。これが起こったH時は定かではないが、或る者はこれを聖なる月であったとみなし、又ある者はそうではないといった。しかしその報せがメッカに届いた時、クライシュ族はその疑いが(聖なる月に武器をとった事)を利用して、イスラム教徒に抵抗し、聖なる月を汚したのである。この註のある節はその時、啓示されたものである。

注 183 ハマルというのは、あるものに覆いをかけた或いはあるものを隠したとの意味である。酒は、知性や感覚を覆いまどわし、影響を与える為、或いは、頭脳を興奮させ、自制心を失なわせる為、ハマルと呼ばれて

人間を益することもあるが、その害は利益を上廻る」と。(注185) また彼等は汝に、何を費すべきかと問わん。云え、「余分のもの」を(注186)」と。かくの如く、アッラーはお前たちを熟慮せしめんがために、さまざまな戒律を明示し給う。

221. 現世並びに来世について。また彼等は、孤児について(注187) 汝に問わん。云え、「彼等の幸福を増進することは善い行為なり。而してお前たちが彼等と親しく混り合えば、彼等はお前たちの兄弟なり。アッラー

كَيْفَ وَمَنَافِعَ لِلْقَاسِ وَأَنَّهُمَا أَكْبَرُ مِنْ نَفْسِهِمَا
يَسْأَلُونَكَ مَاذَا يُنفِقُونَ قُلِ الْعَفْوَ كَذَلِكَ يُبَيِّنُ اللَّهُ
لَكُمْ الْآيَاتِ لَعَلَّكُمْ تَتَفَكَّرُونَ ﴿٢٢١﴾

فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ وَيَسْأَلُونَكَ عَنِ الْيَتَامَى قُلِ إِطْعَمُوهُمْ فَإِنَّهُمْ يَتَامَى
لَهُمْ خَيْرٌ وَإِنْ تُخَالِطُوهُمْ فَإِنَّهُمْ يَتَامَى وَاللَّهُ يَعْلَمُ

いるのである。この酒とは特にぶどうから作るワインの事であるが、全ての酔酲物があてはまる。“アルコール中毒は病気の原因の重要な因子であり、アル中患者は病人の中でも悪い患者である。伝染病の死亡率が高く、疲労への抵抗力も低く、生命を縮めている様なものである。イギリスの保険会社では飲酒者と非飲酒者の推定寿命は約2倍違うとの統計を出している。飲酒と犯罪の関係もよく知られるところである。又、統計によれば、悪性因子の25～85％は飲酒者である。アル中の及ぶべき結果として、一てんかん、精神異常、精神薄弱や、肉体、精神、倫理面での色々な形での退廃が、アル中患者の子孫には、頭ぬけて極端になっているのである。(Jew, E n c.) “アルコール消費効果はそのまま神経組織に影響を与え、酩酊状態の度が進むと、判断と自制的知的プロセスが停止してしまう。(ブリタニカ)”度をすぎた飲酒と、道徳律や法律の違反との間には密接な関係があるという事は世界中で認めるところである。これは高度な知的及び論理的な能力の無力化の直接の結果であり、下劣な傾向へ流れてゆく事となるのである。(宗教倫理百科辞典)

注184 賭の忌むべき傾向は今まで問題にされた事がなかったが、一生涯懸命に収入を得ようとしぬ賭事は本質的に反社会的行為であり、同情心をしばませ、利己主義をはびこらせ、人格の劣化を招くものである。賭は本質的に野蛮であり、その動機は巧妙に隠されていても貧欲さに他ならない。賭は代価を支払わずに財産を手にする事であるから、平等の法則に反するし、丁度、決とうが相互の同意による殺人である様に、賭は一種の窃盗行為ともいえる。貧欲が、無気力につながり、運を頼むものであるから、その行為をなす者は、道徳秩序や人生の安定性を失ってしまう。賭はもうける事のみに注意を集中させる事であるから、人生のより価値ある目的への注意をむける事をしなくなってしまうのである。

注185 物事を全面的には非難せず、少しでもよい所があれば、素直に認めるというのがイスラムの特徴である。イスラムが、特定のものを禁止するのは、それらが全く善くないという事からではなく、それらの邪悪な面が善い面を圧倒してしまうからである。世の中には全くその全てが悪であるというものは何もないのである。その多大な害の為に飲酒と賭事を禁じてはいても、それらのもつ利点を全然理解しない訳ではないのである。

注186 普通一般の信者は自分達が必要とする分を充たした後で残った分を費やすよう命じられている。そして暮らしの楽な信者達は、自分達の財産のうち、可能な限りを費やすよう望まれている。しかしこの語句を全ての信者全体にあてはめるのであれば、戦時には、自分達の最低必要限分だけを残し大義の為、費やすべきである事を意味するところとなる。

注187 孤児の養育は大変微妙な問題であり、且つ重要な社会的義務である。孤児は肉体的、精神的、道徳的な福祉が最も得やすい様に家族の一員として育成されねばならない。「彼らはあなた達の兄弟(同胞)である」という言葉にその勧めがこめられている。

は孤児の幸福増進を求める者と、悪いことをする者とを識別す。もしアッラー欲しなば、お前たちを困難に陥らしむべし。げにアッラーは強大にして、賢哲にまします」と。

222. 偶像崇拜者の女性とは、彼女が信徒となるまで結婚するなかれ。(注188) たとい彼女がお前たちをいかほど愛慕するとも、偶像崇拜の女性よりは女奴隷の信徒の方がはるかに良し。また、信徒の女性を彼等偶像崇拜者に、相手が信徒になるまで嫁がせるなかれ。たとい彼が彼女をいかほど愛慕するとも、偶像崇拜の男性よりも男奴隷の信徒の方がはるかに良し。これ等の者はお前たちを業火に誘う。されどアッラーは、お前たちを樂園に誘い、思召しを以て赦免し給う。アッラーは人々を反省せしめんがために、その神兆を明示し給う。

第二十八項

223. 彼等は月経について汝に問わん。云え、「それは不浄なり。されば月経中は、女を避け、浄まるまで(注189) 近づくなかれ。清き身に戻りたれば、アッラーが命じたる如く(注190) 彼女たちのそばに行け。アッラーは悔い改める者並びに清潔ならんとする者を愛し給う」と。

الْمُفْسِدَ مِنَ الصَّالِحِ وَلَا شَاءَ اللَّهُ لَأَعْتَبُكُمْ إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿٢٢٢﴾

وَلَا تَنْكِحُوا الشَّرِكَاتِ حَتَّى يُؤْمِنَ وَلَا مَلَءُؤُمَةً
خَيْرٌ مِّنْ مُّشْرِكَةٍ وَلَا أَجْمَعَتُمْ وَلَا تَنْكِحُوا الشَّرِكَاتِ
حَتَّى يُؤْمِنُوا وَلَكِنَّ الْمُؤْمِنِينَ خَيْرٌ مِّنْ مُّشْرِكٍ وَكُ
أَجْمَعُكُمْ أُولَئِكَ يَدْعُونَ إِلَى التَّارِكِ وَاللَّهُ يَدْعُو
إِلَى الْجَنَّةِ وَالْمَغْفِرَةِ بِآذَانِهِ وَيُبَيِّنُ آيَاتِهِ لِلنَّاسِ
لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُونَ ﴿٢٢٣﴾

وَيَسْأَلُونَكَ عَنِ الْمَحِيضِ قُلْ هُوَ أَذًى لَا فَاعِلٌ لِّمَا
النِّسَاءُ فِي الْمَحِيضِ وَلَا تَقْرَبُوهُنَّ حَتَّى يَطْهُرْنَ
فَإِذَا طَهَّرْنَ فَأْتُوهُنَّ مِنْ حَيْثُ أَمَرَكُمُ اللَّهُ إِنَّ
اللَّهَ يُحِبُّ التَّوَّابِينَ وَيُحِبُّ الْمُتَطَهِّرِينَ ﴿٢٢٤﴾

注188 「偶像崇拜者の女性」との結婚問題は、戦争と深くかかわりがある。何故なら、戦争の間長く家を離れている信者達は、こういった女性達との結婚に陥りがちだからである。この件は、多神教徒の男子と信者の女子の結婚同様、クルアーンでは固く禁じられている。これは倫理的、社会的面からだけでなく宗教上の問題にも根ざしている。多神教徒の夫は、妻に対してだけでなく、二人の間に生まれた子供にも極端に有害な影響を与えざるを得ず、又多神教徒の妻は、必ず子孫の育成をめちやくちやにしてしまうのである。更に、多神教徒の妻や夫が、信者を配偶者とすれば、両者の考え、信仰、人生の見方に大きなひらきがありすぎる為、不調和や不一致が生じ、ひいては、家庭内に平和がなくなってしまうのである。イスラムでは奴隷制は何の劣等の不名誉を帯びるものではなく、自由民のイスラム教徒の男子にとっては、多神教徒の女子よりイスラム教徒の女奴隷の方があらゆる面で、よい配偶者となり、その逆もまたそうなのである。イスラム社会に於いては、奴隷達の信仰と公明正大さは多大の尊敬をうけており、聖なる預言者の非常に尊敬された仲間(同胞)のベラール、サルマーン、そしてサーリムは全て解放された奴隷達であった。

注189 信者と多神教徒の結婚の法を簡単にまとめた後で、婚姻関係や夫婦間の義務についての言及が必要となった。

224. お前たちの妻は、お前たちの耕地なり。されば意のままに己が畑におもむけ。(注191) 而して己れ自身のためになるように、何か善いことをしておくべし。アッラーを畏れ、やがてアッラーに会うべきことを知れ。
225. お前たちが善行をなし、正しく振舞い、人々の間に入って仲良くさせること、これ等を妨げるような誓いの対象に(注192) アッラーを使うなかれ。
226. アッラーはお前たちの空しき宣誓を咎めず。(注193) されどアッラーは、お前たちの心に宿すことを咎む。アッラーは寛大にして、寛容にまします。
227. 妻と同衾せざることを誓う者は、四カ月間待つべし。されどその間に、もし誓いを繰さば、アッラーは寛大にして、情け深くまします。(注194)

نِسَاؤُكُمْ حَرْثُكُمْ فَأَتُوا حَرْثَكُمْ أَنَّى شِئْتُمْ وَ
قَدْ مَوَا لَا نَفْسَكُمْ وَأَتُوا اللَّهَ وَأَعْلَمُوا أَنَّكُمْ مَلْفُؤَةٌ
وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٢٢٤﴾

وَلَا تَجْعَلُوا اللَّهَ عُرْضَةً لِأَيْمَانِكُمْ أَن تَبَرُّوا وَتَتَّقُوا
وَلْتَكُونُوا بَيْنَ النَّاسِ وَاللَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٢٢٥﴾
لَا يُؤَاخِذُكُمُ اللَّهُ بِالْفُتُورِ إِيْمَانَكُمْ وَلَكِنْ يَأْخُذُكُمْ
بِمَا كَسَبَتْ قُلُوبُكُمْ وَاللَّهُ غَفُورٌ حَلِيمٌ ﴿٢٢٦﴾

لِلَّذِينَ يُؤْلُونَ مِنْ نِسَائِهِمْ تَرِيصَ أَرْبَعَةِ أَشْهُهِ
فَإِنْ فَأَوْ فَإِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٢٢٧﴾

注190 「アッラーが命じたる如く」という文に示唆される命とは、妻との交接は生殖に通ずる行為としてとらえるとの意味である。(2:188 も参照)

注191 この節はクルアーンの純粋で威厳のある表現の雄弁な実証である。最も微妙な話題が、一番上品で思慮深く取り扱われ、結婚の哲学と婚姻関係全体が、“汝の妻はお前にとって畑の様なもの”という簡明な一文で述べつくされている。女性とは実際、子孫という種のまかれる畑の様であり、賢明な夫は最もよい土を選び、最上の畑を用意し、最も良い種を大事にしておき、種まきに最もよい時と方法を選ぶのである。信者がそうすれば、子供という形で収穫が得られるが、それは信者のみならず、民族の全将来にもかかっているのである。婦人を畑に例える事は、優性学と性の倫理性に浴びるほどの光りをあてる事となるのである。

注192 ここでの「対象」とは物失いの種或いは障害との意味を表し、人が全ての善行の溢れるばかりの源であるアッラーの名を、善行を行なわないようにする為使うという事は、まことに、渾神の行為である。異端や目的もない誓いの対象や笑い物としてアッラーの名を口にする事はアッラーの神聖さの冒瀆にはかならない。当節と次節は、人の妻から身を遠ざけておく誓いについて述べられている2:227への導入部の役割を果たしている。

注193 誓いをたてるとは日険な事であるのに、なかには、何も意味する事なく、(不敬の意味で)神の名を口にするくせの者がいる。無意味に、或いは怒りの為、とっさに口にでたとか、口ぐせになっている誓いは、何の罪ほろぼしにもならない。

注194 誓いに関した内容をはさんで、二つの導入の節の後で、クルアーンは婚姻関係の問題に立ち戻っている。ここでは、実際には離婚をしないで、妻と縁を切ろうと思っている男達について述べている。この離婚の問題にすすむ前に、クルアーンは、実際の別離ではないが、一時的且つ部分的な別離である月経(2:223)について述べているのはまことに興味深いところである。そして当節では、本当の、ただし漠然とした離別が

228. されど彼等が離婚を決意しなば、げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

(注 195)

229. 離縁されたる女性は、用心のために、三たび月経を待つべし。而して彼女たちがもしアッラーと末日を信ずるなば、アッラーが彼女たちの胎内に創造せるものを隠すは、違法なり。而してこの期間中に、夫の側から妻と和解を望み、(注 196) 妻を復帰せしむるならば、その夫は最も正し。公平にみて、女性は男性と同等の権利を有すといえども、男性は女性より一つ上に位す。(注 197) アッラーは偉大にして、賢哲にまします。

وَإِنْ عَزَمُوا الطَّلَاقَ فَإِنَّ اللَّهَ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٢٢٨﴾

وَالْمُطَلَّقَاتُ يَرْجِعْنَ بِأَنْفُسِهِنَّ ثَلَاثَ قُرُوءٍ
لَا يَحِلُّ لَهُنَّ أَنْ يَكُنَّ مَا خَلَقَ اللَّهُ فِي أَرْحَامِهِنَّ
إِنْ كُنَّ يُؤْمِنُ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ وَبَوَّاهُنَّ أَحَقُّ
بِرَوْحِهِمْ فِي ذَلِكَ إِنْ أَرَادُوا إِصْلَاحًا وَلَهُنَّ مِثْلُ
الَّذِي عَلَيْهِنَ بِالْمَعْرُوفِ وَلِلرِّجَالِ عَلَيْهِنَّ دَرَجَةٌ
وَاللَّهُ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٢٢٩﴾

PA
E
17

語られ、そしてこれに続く節で、実際のしかし取り消し可能な離婚が、そして 2:231 では最終的に取り消す事のできない離婚が語られているのである。これはイスラムが必要悪とみなす離婚で、その手続き中に出きる限り多くの負担を課すべく考えられた本当に素晴らしい秩序と命令である。イスラムでは、妻に近よらないと誓う者に 4 ヶ月の期間を許している。この間に、彼は妻と仲直りして婚姻関係を修復するか、両者の間で別れる事にするか、にしなければならない。イスラムではいかなる場合も、女性をまるで停止状態にしておくような漠然とした離別は許されない。イーラとは離別の誓いの事で、この誓いによって夫から無視されている女性は、そのまゝの状態にいる事となる。その間彼女他男性と結婚する事もできないし、自分の夫ととも婚姻関係を持つ事はできないので、最長 4 ヶ月までとされている。

注 195 この節からイスラムの離婚に関する法の説明が始まる。この法律によれば法的必要性が生じた場合には夫側に妻を離婚する権限がある。しかし、この権利が行使される事はめったになく、ほんの例外的場合のみである。

注 196 離婚とは神の目に映る全ての法的事項の内、最も忌むべきものであるという事実から、離婚に関しては、多くの審査と制限が付帯されている。先ず(1)夫が妻を離婚できるのは妻の月経が終わり、自由に夫婦関係のもてる期間でありながら、夫が何ら性的行為をしていない場合、(2)離婚が宣せられてから、妻は、約 3 ヶ月に該当する三回の月経を待たなければならない。これはイッダ（待機期間）と呼ばれる。これだけの時間を夫に与え自分のした行動を考えさせ、もしどこかに妻への潜在的愛情がくすぶっているのなら、もう一度それに気づかせる為の期間である。(3)離婚された女性がもし妊娠している場合は、この事実を夫に隠してはならない。何故なら子供の先の誕生は両者の仲直りの一助となるからである。(4)完全な取り消し不能な離別には三回までの離婚がある。第 2 及び第 1 の離婚の宣言の後でも待機期間がきれてしまうより前なら、夫がそうしたいと思つたら、妻を元に戻す特権を持つ。たとえ待機期間が終わってしまっている場合、結婚のきずなを結び直す事で第 1 回および第 2 回の離婚であれば、再び一緒になる事ができる。

注 197 個人的権利に関しては、夫と妻の権利は同格であるが、4:35 でも指摘される通り、男の方が肉体的優越と家計を支える経済的責任から監督者の權威をもつ。

第二十九項

230. 離婚の宣言は二回まで許す。その後は、ふさわしい待遇を以て之を留むるか、或いは懇ろにして之を出せ。(注198) 夫婦両者がアッラーによって定められたる掟を守り得ざることを恐れるに非ずば、お前たちは妻に与えたるものを取り戻すことは違法なり。(注199) されどもしお前たちが、彼等はアッラーによって定められたる掟を守り得じと恐るる場合は、彼女がその自由を得るために与うることは、兩人とも罪なし。これはアッラーの定めたる掟なれば、違犯するなかれ。(注200) アッラーの定めたる掟に違犯する者は、罪人なり。

231. 三回目の離婚宣言によって正式に別れたる後は、彼女が他の夫と結婚するまでは之を

الطَّلَاقَ مَرَّتَيْنِ فَمَا سَكَتَ يُعْرَوْنِي أَوْ تَسْبِيحُ بِإِحْسَانٍ
وَلَا يَحِلُّ لَكُمْ أَنْ تَأْخُذُوا بِمَا آتَيْنَهُنَّ شَيْئًا إِلَّا
أَنْ يَخَافَا إِلَّا يَقِيمَا حَدُّوَ اللَّهِ فَإِنْ خِفْتُمْ إِلَّا قِيَمًا
حُدُّوَ اللَّهِ لَا فَلَاحِجَاحَ عَلَيْهِمَا فِيمَا افْتَدَتْ بِهِنَّ
حُدُّوَ اللَّهِ وَلَا تَعْتَدُوا هُنَّ وَمَنْ يَتَعَدَّ حُدُّوَ اللَّهِ
فَأُولَئِكَ هُمُ الظَّالِمُونَ ﴿٢٣١﴾

فَإِنْ طَلَّقَهَا فَلَا تَحِلُّ لَهُ مِنْ بَعْدِ ذَلِكَ تَنْكِحُ زَوْجًا

注198 ここで離婚についての5番めの審査がある。妻を離別したい男は、離婚を三度、別個の機会に宣言しなければならない。第2、第3の離婚宣言を一度めの離婚宣言と同時にすませてしまう事はできない。例え、一度めにくりかえし三度述べても意味はない。「離婚の宣言は二回まで許す」というのは聖なる預言者は、その回数がどれだけであれ、こういった集合された宣言を、ただ一回の離婚として取り扱った。ナサイによれば、或る日、一人の男が三つの離婚の宣言を一時に同時に行い「神の経典を私がまだここにいる間に、無効にできないものだろうか？」と言ったという事を聞き聖なる預言者は非常に立腹したという事である。最初の二つの離婚宣言をしても、妻の同意のあるなしにかかわらず、イッダー待機期間中であれば妻を元の状態に戻す事ができる。たとえその期間が終わっていても、彼女の同意があれば再婚する事ができる。しかし三度めの離婚の後では、夫のこの権利を喪失し、夫婦は最終的に離別するところとなる。聖なる預言者の同胞が一度、「クルアーンでは二度の離婚の事だけを語っていますが、三度めはどうなっているのですか？」と預言者に尋ねたら、彼は、「好意を持って自由にしてやれ」即ち二度の離婚の後でも、彼女が同意するのなら夫は妻を留めておき再婚できる事を意味する言葉が返ってきたのである。しかし夫が、どうしても離婚したいと望む場合は、彼は三度めの離婚宣言の後、「彼女を自由に」しなければならない。以上のような、男性の側から望まれる離婚はタラークとよばれる。

注199 夫が妻を離婚する場合、夫は妻に与えた婚資をとりあげる事はできない。婚資を与えていない場合は、離婚が法的に正式のものとなる前に支払わなくてはならない。又、夫は、贈り物という形で彼女に与えたものはどんなものであっても取り戻す事は許されない。

注200 しかし、妻の方が離別を望むホッラ(離婚)であれば彼女は「汝らがおそれるなら」という言葉中、汝らが複数形をとっているという事からわかるように調停又は裁判の手続きをふまなければならない。この場合は両者が同意するか、裁判官が決めるかにより全額であれ一部であれ、妻は夫からもらったものと婚資を手離さなければならない。ケースの妻ジャミラの場合が、女性によるホッラの権利の行使の良い例である。彼女は二人の性格があわぬ為うまくいかず彼をきらいになったという事を理由に夫であるケースとの離別を要求した。彼女は、聖なる預言者より離婚の許可を与えられたが、夫からもらった果樹園を夫に帰さなければならなかった。(ブハリ)

復縁させることは違法なり。もし第二の夫が彼女を離婚する場合は、兩人がアッラーの定めたる掟を守り得る自信があれば、お互いまたもとに戻るとも罪なし。こはアッラーの定めたる掟なり。アッラーは之を知識ある人々に明示し給う。(注 201)

232. お前たちその妻を離縁し、定められたる期間が満了しなば、善意を以て之を留むるか、又は懇ろにして之を出せ。彼女たちを不当に引き留めて、お前たち罪を犯すなかれ。そのようなことをする者は、必ず己れ自信を害う。アッラーの戒律を馬鹿にするなかれ。而してアッラーがお前たちに与えたる恩寵と、諭し戒めんがために降したる經典と知恵とを念え。アッラーを畏れ、且つアッラーが万事を知悉し給うことを銘記せよ。(注 202)

第三十項

233. お前たち妻を離縁し、その定められたる期間が満了しなば、互に合意の上にて合法に彼女が望む者と結婚することを妨げるなかれ。こはお前たちのうち、アッラーを信じ、末口を信ずる者への訓戒なり。こはお前たちのために最も清浄なり。お前たちは知らねども、アッラーは之を知り給う。(注 203)

عِيَّةُ فَإِنْ طَلَقَهَا فَلَا جُنَاحَ عَلَيْهِمَا أَنْ يَتَرَاجَعَا
إِنْ طَلَّأَا أَنْ يُقِيمَا حُدُودَ اللَّهِ وَلِلَّهِ حُدُودُ اللَّهِ
يُؤَيِّتُهَا لِقَوْمٍ يَعْلَمُونَ ﴿٢٣٢﴾

وَإِذَا طَلَقْتُمُ النِّسَاءَ فَلْيُفْلِحْنَ أَجَلَهُنَّ فَأَمْسِكُوهُنَّ
بِعَرُوفٍ أَوْ سَرِّحُوهُنَّ بِعَرُوفٍ وَلَا تَسْكُوهُنَّ
ضِرَارًا لِنَفْسٍ وَمَنْ يَفْعَلْ ذَلِكَ فَقَدْ ظَلَمَ نَفْسَهُ
وَلَا تَحْجِدُوا آيَاتِ اللَّهِ هُذُورًا وَادْكُرُوا نِعْمَتَ اللَّهِ عَلَيْكُمْ
وَمَا أَنْزَلَ عَلَيْكُمْ مِنَ الْكِتَابِ وَالْحِكْمَةِ يُعْظِمُكُمْ
بِهِ وَالْقُوا اللَّهَ وَعَلِمُوا أَنَّ اللَّهَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿٢٣٣﴾

وَإِذَا طَلَقْتُمُ النِّسَاءَ فَلْيُفْلِحْنَ أَجَلَهُنَّ فَلَا تَعْضُلُوهُنَّ
أَنْ يَنْكِحْنَ أَزْوَاجَهُنَّ إِذَا تَرَاضَوْا بَيْنَهُمْ بِالْعَرُوفِ
ذَلِكَ يُعْظِيهِ مَنْ كَانَ مِنْكُمْ يُؤْمِنُ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ
الْآخِرِ ذَلِكَمْ آذَنُ لَكُمْ وَأَطْهَرُ وَاللَّهُ يَعْلَمُ وَأَنْتُمْ
لَا تَعْلَمُونَ ﴿٢٣٣﴾

注 201 この節では、第3の最終的離婚について述べており、この場合夫は、離婚した妻が、他の男と結婚し婚姻関係を確立し、彼女が自由に結婚できる様にならない限り、離婚した妻と再び結ばれる権利を全て失う。この項目を法律の中に組みこむ事で、イスラムは一方では粗末に取り扱う事は許されない結婚の神聖さを高め、もう一方では、非常に間接的ではあるが、一度は夫と妻として暮らした二人が、もしそう望めば再婚できる機会を許可しているのである。

注 202 文脈から明らかなように、ここで述べられている離婚は、取り消す事のできる離婚である。この離婚宣言の後で夫に残された選択は妻をとどめおいてその人とまた夫婦として暮らすか正当に離別するか二つだけである。彼には妻を虐待したり、不安定な状態にしておく事は許されないのである。

注 203 この節での‘夫’は、以前の或いはこれからの夫のいづれをも指す。前夫の場合は、“妻を離婚する場合”という文は第1又は第2の離婚をさし、これから結婚する夫であれば、第3の、最終的離婚を意味する。離婚した女性の後見人は、彼女が前夫と再婚する事を、そして、前夫は彼女が新しい夫と結婚する事を止める事はできない。

234. 生母はその子供に満二年間授乳すべし。こは授乳を全うせんと望む者のためなり。その場合父親は、慣例に従って、哺乳者の衣食を負担する義務を有す。何人もその能力以上の負担は課せられることなし。生母はその子ゆえに、(注 204) 父親もまたその子ゆえに (注 205) 不当に強制せらるることなし。また相続人の場合も同様な義務を有す。(注 206) 双方が相談の上、合意にもとづいて (注 207) 離乳を決定するならば、両者には罪なし。またもし子供のために乳母をつけるなら、その乳母に約束せるものを公正に支給せば、お前たちには罪なし。アッラーを畏れ、アッラーがお前たちの行為を照覽し給うことを知れ。

235. お前たちのうち、その妻を残して死する者あらば、その妻は自分の計らいで、四カ月と十日間待つべし。而してその期間満了の後は、(注 208) 彼女たちが相應に身を処することに対して、(注 209) お前たちには何の罪もなし。アッラーはお前たちの所業を承知し給う。

وَالْوَالِدَتُ يُرْضَعْنَ أَوْلَادَهُنَّ حَوْلَيْنِ كَامِلَيْنِ
إِمَنْ أَرَادَ أَنْ يُتِمَّ الرَّضَاعَةَ وَعَلَى الْمَوْلُودِ لَهُ
رِزْقُهُنَّ وَكِسْوَتُهُنَّ بِالْمَعْرُوفِ لَا تُكَلَّفُ نَفْسٌ
إِلَّا وُسْعَهَا لَا نَضَارُ وَالِدَةً بِوَلَدِهَا وَلَا مَوْلُودٌ
لَهُ بِوَلَدِهَا وَعَلَى الْوَارِثِ مِثْلُ ذَلِكَ إِنْ أَمَرَ
فَصَالًا عَنْ تَرَاضٍ مِنْهُمَا وَتَشَاوُرٍ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْهِمَا
وَإِنْ أَرَدْتُمُ أَنْ تَرْضِعُوا أَوْلَادَكُمْ فَلَا جُنَاحَ
عَلَيْكُمْ إِذَا سَلَّمْتُمْ مَا اتَّيَمُّ بِالْمَعْرُوفِ وَاتَّقُوا
اللَّهَ وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ بِنَاتِقُلُونِ بَصِيرٌ ﴿٢٣٤﴾

وَالَّذِينَ يَتَوَفَّوْنَ مِنْكُمْ وَيَذَرُونَ أَزْوَاجًا يَتَرَبَّصْنَ
بِأَنْفُسِهِنَّ أَرْبَعَةَ أَشْهُرٍ وَعَشْرًا إِذَا بَلَغْنَ أَجَلَهُنَّ
فَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ فِيمَا فَعَلْنَ فِي أَنْفُسِهِنَّ بِالْمَعْرُوفِ
وَاللَّهُ بِنَاتِقُلُونِ خَبِيرٌ ﴿٢٣٥﴾

注 204 この文は、(1)母親は我が子の為に父親を苦しめてはならない、(2)母親は我が子の為に苦しめられてはならない。という意味を表し両方共ここでは適用できる。

注 205 ここでは父親の子供に対する本来の所有権と、子供の保全に対する当然の責任を指摘している。

注 206 死んだ人の財産を相続する者は、故人の残した遺児達を養育する義務がある。

注 207 子供の離乳には最大二年が必要とされるが父親と母親の双方が同意するのであれば二年をまたずして離乳を打ち切る事ができる。これは又、母親の同意なくして二年がすぎるより以前に赤ん坊を離乳させてはいけない事をも意味している。

注 208 寡婦の場合のイッダ(待機期間)は4ヶ月と10日でこれは、四回の月経期間を合わせたものである。イスラムでは、彼女の亡くなった夫への感情への尊敬のしるしとしてふつうの離別期間である3ヶ月よりも期間を長くし、結婚生活のきづなの尊敬と神聖さに対する敬意を払っているのである。

注 209 「彼女達が相應に身を処する」とは、明らかに再婚の意味である。クルアーンは他の箇所でも、「未亡人達の為に結婚を用意してやれ」(24:33)との記載がある。

236. またお前たちがこれ等の女に、結婚の申し出をはのめかしたり、胸の中にその思いを秘めることは、お前たちに罪なし。アッラーはお前たちが、彼女たちになさんとする³ことを知り給う。されど公明正大なる言葉を云う以外は、彼女たちと秘密に約束するなかれ。また定められたる期間が満了するまでは、結婚の結び目を固める決意をするなかれ。アッラーはお前たちが心に宿すものを知悉⁴し給うことを心得よ。さればそのことに用心せよ。アッラーは寛大にして、寛容にまします。(注 210)

第三十一項

237. お前たち女に触れず、婚資も決めざるうちに離婚するは、(注 211) 罪なし。されど富者はその資力に応じて、貧者もその資力に応じて彼女たちに贈与せよ、妥当な贈与を。これ高潔な人に課せられる義務なり。

238. もしお前たち女の体に触れざるも、すでに婚資を決めたる後に之を離婚する場合は、決めた額の半分を(注 212) 支払うべし。但し先方が辞退するか、結婚の絆を握る者が(注 213) 辞退する場合は別なり。いずれにせよ、辞退する方が、公正により近し。ま

وَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ فِيمَا عَرَّضْتُمْ بِهِ مِنْ خِطْبَةِ النِّسَاءِ
أَوْ الْكِنْتُمْ فِي أَنْفُسِكُمْ عَلِمَ اللَّهُ أَنَّكُمْ سَتَذْكُرُونَهُنَّ
وَلَكِنْ لَا تَوَاعِدُوهُنَّ سِرًّا إِلَّا أَنْ تَقُولُوا قَوْلًا
مَعْرُوفًا وَلَا تَعْزِمُوا عَقْدَةَ النِّكَاحِ حَتَّى يَبْلُغَ
الْكِتَابُ أَجَلَهُ وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا فِي أَنْفُسِكُمْ
فَاحْذَرُوهُ وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ غَفُورٌ حَلِيمٌ ﴿٣٦﴾

لَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ إِنْ طَلَقْتُمُ النِّسَاءَ مَا لَمْ تَمْسُوهُنَّ
أَوْ تَفْرِضُوا لَهُنَّ فَرِيضَةً ۖ وَمَتَّعُوهُنَّ عَلَى الْبُيُوعِ
قُدْرَهُ وَعَلَى الْمَقْتَرِ قُدْرَةً مَتَاعًا بِالْمَعْرُوفِ حَقًّا
عَلَى الْمُحْسِنِينَ ﴿٣٧﴾

وَإِنْ طَلَقْتُمُوهُنَّ مِنْ قَبْلِ أَنْ تَمْسُوهُنَّ وَقَدْ
فَرَضْتُمْ لَهُنَّ فَرِيضَةً فَرِصُفًا مَا فَرَضْتُمْ إِلَّا أَنْ
يَعْفُوَ أَوْ يَعْفُوا الَّذِي بِيَدِهِ عَقْدَةُ النِّكَاحِ وَ

注 210 上期の待機期間に、公に未亡人に対し結婚の申し込みをする事はできない。ただ、それとなくわからせる様にする事はできるが、決して公に、正式な、或いは、秘密の内にであってでも、結婚に関する申しこみをしてはならない。未亡人も当期間中にこういった申し込みに承諾を与えてはならない。未亡人は、亡くなった配偶者の思い出に敬意を払い、その間に妊娠していないかどうかを明らかにする為、4ヶ月と10日待つのである。妊娠している未亡人は、子供を産むまでは結婚する事が許されないのである。

注 211 これは例外といえる。しかし結婚の約束が完了した後に、結婚の完遂と継続が、難しい或いは望ましくないとわかったりする事は、まあある事である。次節と現節に、そういう場合の取り決めが述べられている。

注 212 婚資が決められてからの離婚の場合には夫が妻にふれていないのなら決めた婚資の1/2を夫は妻に支払わねばならない。

注 213 「結婚の絆を握る者」は、結婚前には女性の後見人であり結婚後の契約取り扱い人は夫となる。

た互に恩情をかけ合うことを(注214)忘れるなかれ。げにアッラーはお前たちの所業を照覽し給う。

239. 厳密に各礼拝を守れ。(注215) とりわけまん中の礼拝を。(注216)恭敬を満してアッラーの御前に立て。

240. 危険の恐れある場合は、徒歩または騎乗のまま礼拝せよ。(注217) されど安全な場合は、お前たちが知らざりしことをアッラーが教えたる如く、アッラーを念ぜよ。

241. お前たちのうち妻を残して死する者は、彼女たちが追出されずに一年間扶養を(注218)受けられるように遺言すべし。されど彼女たちが自ら家を出る場合は、彼女たちが自ら合法に行動することに対して、お前たちに罪なし。アッラーは偉大にして、賢哲にまします。

أَنْ تَعْمُوا أَقْرَبَ لِلتَّقْوَى وَلَا تَنسُوا الْفَضْلَ بَيْنَكُمْ إِنَّ اللَّهَ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿٢٣٩﴾

حِفْظُوا عَلَى الصَّلَوَاتِ وَالصَّلَاةِ الْوُسْطَى وَقُومُوا لِلَّهِ قَانِتِينَ ﴿٢٤٠﴾

فَإِنْ خِفْتُمْ فَرِجَالًا أَوْ رُكْبَانًا فَإِذَا أَمْتُمْ فَاذْكُرُوا اللَّهَ كَمَا عَلَّمَكُمْ مَا لَمْ تَكُونُوا تَعْلَمُونَ ﴿٢٤١﴾

وَالَّذِينَ يَتَوَفَّوْنَ مِنْكُمْ وَيَذَرُونَ أَزْوَاجًا وَصِيَّةً لَا زَوَاجَهُمْ مَتَاعًا إِلَى الْحَوْلِ غَيْرِ إِخْرَاجٍ ۖ فَإِنْ خَرَجْنَ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ فِي مَا فَعَلْنَ فِي أَنْفُسِهِنَّ مِنْ مَّعْرُوفٍ ۗ وَاللَّهُ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٢٤٢﴾

注214 「恩情をかけ合う」とは妻(或いは彼女の後見人)は、彼女の取り分の全て或いは一部を免除してやるか、夫が自分の支払うべき額よりも多く支払う事を意味している。しかし当然ながら、夫の方が寛容さを示す方が望ましい。

注215 結婚後、人は祈りをいくらかは怠りがちになる。それ以外にも、家庭生活は男女共に世話する事が倍になる為、結婚した人々を、もっと祈りを定期的に時間正しく行う様させる必要が生じてくるのである。

注216 「アスルの祈り」(まん中の礼拝)が聖なる預言者の言葉の内に支持されているという見解である。この祈りは人が前からとりかかっている仕事に没頭する最も忙しい時間の祈りとなるが、ある意味では、祈りは全て、真中の礼拝である。

注217 定められた一日の五回の礼拝を守る事は、最も重要な戒律である。イスラム教徒が正常な神経を持ち意識のある限り、礼拝を欠かしてはならない。教徒が非常な恐怖下にあっても、礼拝を怠ってはならない。馬上にあっても徒歩であっても、走っていようと、坐っていようと横たわっていようと、どういう状態にあっても礼拝すべきである。

注218 未亡人が独りでいなければならない2:235で示される4ヶ月と10日の間は、故人の相続人から、自分の権利として、住居と生活面での保障を要求できる。ここで言われている一年間とは、2:235での権利に加えて、未亡人に与えられる好意にすぎないのである。この間に与えられるものは相続での彼女の取り分でもなければ、強制的命令でもないのである。

242. 離別せられたる女も公正に扶養されるべきなり。(注 219) これ神を畏れる者の義務なり。

243. かくの如くアッラーは、お前たちがわかるように戒律を説き明し給う。

第三十二項

244. 汝は数千の人々が(注 220) 死を怖れて、(注 221) 家から出て行きたる事実を(注 222) 知らざるか? アッラーは彼等に「死せよ」と云い、(注 223) 後に之を甦らせり。げにアッラーは人間に対し慈悲深き御方なれど、世人の多くは感謝せず。

245. アッラーの道のために戦え。(注 224) アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給うことを知れ。

246. アッラーに善き貸付けをする者は誰か?(注 225) アッラーはその者のために之を倍加す

وَلَا تُطْلَقُ مَتَاعٌ بِالْمَعْرُوفِ حَقًّا عَلَى الْمُتَّقِينَ ﴿٣٧﴾

كَذَلِكَ يبينُ اللهُ لَكُمْ آيَاتِهِ لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُونَ ﴿٣٨﴾

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ خَرَجُوا مِنْ دِيَارِهِمْ وَهُمْ أُلُوفٌ
حَدَرُ الْبُوتِ فَقَالَ لَهُمُ اللهُ مُوتُوا ثُمَّ أَحْيَاهُمْ
إِنَّ اللَّهَ لَذُو فَضْلٍ عَلَى النَّاسِ وَلَكِنَّ أَكْثَرَ
النَّاسِ لَا يَشْكُرُونَ ﴿٣٩﴾

وَقَاتِلُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَعَلِمُوا أَنَّ اللَّهَ سَمِيعٌ
عَلِيمٌ ﴿٤٠﴾

مَنْ ذَا الَّذِي يُقْرِضُ اللَّهَ قَرْضًا حَسَنًا فَيُضَاعِفَهُ

注 219 前節では未亡人に追加的好意が与えられていたが、当節では、離婚した女性に追加的好意を与えている。この命令は離婚女性の場合には、離婚後に必然的に生じる困難な時期に、人は離婚女性に対し不当に残酷となりがちなる為、特に不可欠のものである。

注 220 聖書ではエジプトを逃れたイスラエル人の数を 60 万人としている。近年の研究ではクルアーンの説をとり、約数千人と推定している (アーネスト・レナン著、イスラエル人民の歴史、P 145、及びジョンキョト著、パレスチナとユダヤ人の歴史 P 174)。2:61 も参照する事。

注 221 イスラエル人はそれ以上エジプトに居ると自分達が根だやしにされる事を恐れてエジプトを脱出したのである。パロ族はあらゆる手段を講じ、ユダヤ民族を根絶しようとしたのである。

注 222 パロ族に迫害され、イスラエル人はエジプトを逃れ、アジアへ渡り、モーゼが約束された土地に入ろうとした時、彼らはそこに住んでいる人々を恐れ、前進する事を拒んだ。

注 223 これは、モーゼと共にカナン地に入る事を拒んだイスラエル人がシナイ山の荒野で流浪した事であり、彼らは死して荒野に埋められ、新しい生命の息吹きにふれた、新しい世代の者達がジョシアに導かれ約束された土地に入ったのである。クルアーンの他の箇所にも“そして汝が死した後、汝を復活させる”という表現がある。

注 224 これはイスラム教徒にあてられたものである。死を恐れて、血を流す事をせず、自分達の国家の存亡、名誉を守る為に自分達の持つもの全てを犠牲にする心構えのない者は、生きる資格がない、とここでは主張されている。これこそ、クルアーンが教え説く国家発展の秘訣なのである。

注 225 クルアーンでは、アッラーの大義の為に大金を使う事は、神に金を貸すようなものであると言っている。これは、公明正大な理由で費やされた金銭は、無駄使いとはみなされない事を意味している。

べし。アッラーはその掌^{てのひら}を閉ぢ、また之^{これ}を開く^{しか}。而してお前たちは、いずれアッラーの許^{もと}へ帰らしめらる。

247. 汝、モーゼの後のイスラエルの子孫^{こどもら}の族長たちについて、何も聞かざりしか？ その時彼等は預言者に向つて、云えり、「我等のために王を任命せよ。されば我等はアッラーの道のために戦わん」と。預言者は云えり、「いざ戦うことを命ぜられると、お前たち戦いを欲せざるが如きことなきか？」と。彼等は云えり、「いづくぞ我等はアッラーのために戦わざらんや？ すでに家を逐^{こどら}われ、子女とも離されたる身なれば」と。されどいざ戦いを命ぜられると、彼等のうち少数を除いて、皆背き去れり。アッラーはその違反者どもを熟知し給う。(注 226)

248. 預言者は彼等に云えり、「アッラーは、タールートを(注 227) お前たちの王として任命せり」と。すると彼等は云えり、「彼がどうして我等を統治することが出来得ようか？ 彼よりも我等の方が統治者たるにふさわしく、それに彼は裕福にあらざるなり」と。そこで預言者は云えり、「アッラーはお前たちの上に彼を選び、その知識と肉体^{ろくこ}を豊かに増さしめたり」と。アッラーは御心にかなえば誰なりと、統治権を与え給う。アッラーは慈悲深く、すべてを知り給う。

لَهُ أَصْحَافًا كَثِيرَةٌ ۖ وَاللَّهُ يَفْصِلُ وَيُخْصِصُ ۚ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٢٤٧﴾

أَلَمْ تَرَ إِلَى الْمَلِكِ مِنْ بَنِي إِسْرَءِيلَ مِنْ بَنِي مُوسَى إِذْ قَالُوا لِنَبِيِّهِمْ ائْتِنَا مَلِكًا تُقَاتِلُ فِي سَبِيلِ اللَّهِ قَالَ هَلْ عَسَيْتُمْ إِنْ كُتِبَ عَلَيْكُمُ الْقِتَالُ أَلَّا تُقَاتِلُوا قَالُوا وَمَالَنَا أَلَّا نُقَاتِلَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَقَدْ أُخْرِجْنَا مِنْ دِيَارِنَا وَأَبْنَائِنَا فَلَمَّا كُتِبَ عَلَيْهِمُ الْقِتَالُ تَوَلَّوْا إِلَّا قَلِيلًا مِنْهُمْ ۚ وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِالظَّالِمِينَ ﴿٢٤٨﴾

وَقَالَ لَهُمْ نَبِيُّهُمْ إِنَّ اللَّهَ قَدْ بَعَثَ لَكُمْ طَالُوتَ مَلِكًا قَالُوا أَنَّى يَكُونُ لَهُ الْمُلْكُ عَلَيْنَا وَنَحْنُ أَحَقُّ بِالْمُلْكِ مِنْهُ وَلَمْ يُؤْتَ سَعَةً مِنَ الْمَالِ قَالَ إِنَّ اللَّهَ اصْطَفَاهُ عَلَيْكُمْ وَزَادَهُ بَسْطَةً فِي الْعِلْمِ وَالْجِسْمِ ۖ وَاللَّهُ يُؤْتِي مُلْكَهُ مَن يَشَاءُ ۗ وَاللَّهُ وَاسِعٌ عَلِيمٌ ﴿٢٤٩﴾

注 226 このて述べられている出来事は、モーゼの時代に比べれば改善されたイスラエル人の状況である。クルアーンの 5 : 25 では、モーゼが自分の信奉者達にアッラーの大義の為に戦う様、説き動めた所、彼らは「モーゼ、お前はお前の主と二人で行って戦え。我々はここに坐していよう。」と言ったが、現節ではこれに反し、「どうして我々が神の道の為に戦わないでいられよう。我々は既に家と子供達を後にしてかりだされてきたのだから」と言ったと伝えられている。しかしこの改善も口だけで実際はさ程変わっておらず、戦かわなければならなくなった時、彼らは軟弱になり戦う事を拒んだのである。この様に、この出来事は、イスラム教徒にとって、同じてつをふまぬ様に警告しているのである。

注 227 「タールート」は、ダビデより 200 年程前に生存したイスラエル人の王に与えられた名である。詳しくは英版参照。

249. 而して預言者は彼等に云えり、「統治者たるべき瑞兆として、お前たちにもたらされる櫃の(注228)中に、主よりの平安と、モーゼとアロン一家の遺物が(注229)納められ、それを天使たちが担い来るべし。もしお前たち真の信者ならば、げにそこにお前たちへの瑞兆あるなり」と。

第三十三項

250. タールウトが軍を率いて出陣するに臨み、云えり、「げにアッラーは川によってお前たちを試めさんとす。されば、川の水を飲む者は味方に非ず。飲まざるものは味方なり。但し手で一掬の水を(注230)飲む者はその限りに非ず」と。されど少数の者を除いて、彼等はその水を飲み。而して彼及び彼と信仰をともしする人々が川を渡りおえる

وَقَالَ لَهُمْ نَبِيُّهُمْ إِنَّ آيَةَ مُلْكِهِ أَنْ يَأْتِيَكُمُ
التَّابُوتُ فِيهِ سَكِينَةٌ مِّنْ رَبِّكُمْ وَبَقِيَّةٌ مِّمَّا
تَرَكَ آلُ مُوسَىٰ وَآلُ هَارُونَ تَحْمِلُهَا الْمَلَائِكَةُ إِنْ
فِي ذَلِكَ لَآيَةٌ لِّكُم إِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِينَ ﴿٢٤٩﴾

فَلَمَّا فَصَلَ طَالُوتُ بِالْجُنُودِ قَالَ إِنَّ اللَّهَ بِتَلْيِكُمْ
يَمْهَرٌ فَمَنْ شَرِبَ مِنْهُ فَلَيْسَ مِنِّي وَمَنْ لَّمْ
يَطْعَمْهُ فَإِنَّهُ مِنِّي إِلَّا مَنِ اعْتَرَفَ غُرْفَةً بِيَدِهِ
فَتَشَرَّبْنَا مِنْهُ إِلَّا قَلِيلًا مِنْهُمْ فَلَمَّا جَاوَزَهُ هُوَ

注228 「櫃」(ターブート)とは(1)物入れ又は箱(2)中に心臓等の入っている、胸部、胸或いはわき腹(3)知識、知恵そして平和をとどめおく心。

ターブートの解釈は人によってまちまちであるが聖書では物入れ或いは箱であるとしているがクルアーンはここでは完全に「胸」或いは「心臓=心」の意味で使っている。'神からの平安の臨在する'という文中のターブートの説明は、物入れという解釈だけでは通じない。平和や平安を他の人々に与えるどころか、聖書で語られる箱は、敵に持ちさられてしまったのであるから、イスラエル人を戦いで守るどころか、自分自身さえ守る事ができなかったのである。自ら箱をもって従軍していたサウルは、立ち直れない程の敗北を喫し、あまりにもその度合いが、ひどかった為敵もあわれんだ程で、彼は恥ずべき死を遂げたのである。だとすれば、そんな箱などイスラエル人にとって何の平安の源とはならないのである。神が彼らに与え給うたのは、勇気と忍耐力に満ちた「心」であった。その為、そこで行われている平安が彼らのもとに下った時、イスラエル人は敵を打ち破り、相手に多大な敗北を蒙らせたのであった。

注229 神がイスラエル人に下し給うた御恵みがもう一つ、ここに「遺物」という言葉で示されている。神は、彼らの祖先の特長であった崇高な性質で、モーゼやアロンの子孫達を染めあげられたのである。モーゼやアロンの子孫達に残された遺物は何ら物質的な物ではなく、祖先からの遺産として彼らの与えられたすぐれた道徳的資質なのである。

注230 一すくいの水だけは例外にするという事には二つの目的があったのである。先ず(1)行軍中の兵士の中からにひからびたのを湿らせて、最低必要限の肉体的負担から解放する事、但し同時に、ガブガブ飲まないようにしたという事は、彼らの士気を喪失させ敵の事をおろそかにしてしまう事を防ぐためであった。(2)試練をより厳しいものとする為であり、多くの場合、人にとって何もしない事より極端に限られた範囲内でのがまんの方がずっと苦しいからである。上師記7:5-6を参照の事。又「川」という語には「多くの」という意味もある。この意味とすれば、この節は、彼らは川(多くの水)によって試された、即ち、その誘惑に屈する者達は神の仕事を実行する資格は最早なく、忍耐強くこらえて、それを使った者は功を為すであろうとの意味になる。

や、云えり、「我等は今日、ジャールートと
(注 231) その軍に立ち向う力なし」と。されどいつの日かアッラーに見えんことを確認する人々は、云えり、「アッラーの指揮のもとに、如何に幾度も寡兵をもつて大軍を打ち破りたることか！ アッラーは不撓不屈なる者と偕にまします」と。

251. 而してジャールートとその軍勢に (注 232) 遭遇すべく前進を始めたとき、彼等は祈りて、云えり、「我等の主よ、我等に不撓不屈の精神を注ぎ込み給え。我等の足を毅然と立たしめ、不信心者に対し我等を助け給え」と。

252. かくて彼等はアッラーの指揮のもとに、敵を敗走せしめたり。(注 233) ダビデはジャールートを殺し、アッラーはダビデに統治権と知恵とを授け、ダビデに自分が何を喜ぶかを教えたり。もしアッラーが人間に、互に牽制羈絆し合うべくし向けざりせば、この地上は混乱に満たされたり。(注 234) されどアッラーはすべての人々への慈悲の主なり。

253. これ等はアッラーの神兆なり。われらは真理を以て之を汝に読誦す。げに汝は使徒の一人なり。

وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ قَالُوا لَا طَاقَةَ لَنَا الْيَوْمَ بِجَالُوتَ وَجُنُودِهِ قَالَ الَّذِينَ يَظُنُّونَ أَنَّهُم مُّلِقُوا اللَّهَ كَرَمَ مِنْ فِتْنَةٍ قَلِيلَةٍ عَظِبْتَ فِتْنَةً كَثِيرَةً يَا أَدِينَ اللَّهُ وَاللَّهُ مَعَ الصَّابِرِينَ ﴿٢٥١﴾

وَلَمَّا بَرَزُوا لِجَالُوتَ وَجُنُودِهِ قَالُوا رَبَّنَا أَخْرِجْ عَلَيْنَا صَبْرًا وَثَبَّتْ أَدَامَنَا وَانصُرْنَا عَلَى الْقَوْمِ الْكَافِرِينَ ﴿٢٥٢﴾

فَهَرَمُوهُمْ يَا أَدِينَ اللَّهُ وَقَتْلَ دَاوُدَ جَالُوتَ وَ أَنَّهُ اللَّهُ الْمَلِكُ وَالْحَكِيمَةُ وَعَلَيْهِ مِنَّا نِسَاءٌ وَلَوْلَا دَفَعُ اللَّهُ النَّاسَ بَعْضُهُمْ بِبَعْضٍ لَفَسَدَتِ الْأَرْضُ وَلَكِنَّ اللَّهَ ذُو فَضْلٍ عَلَى الْعَالَمِينَ ﴿٢٥٣﴾

تِلْكَ آيَاتُ اللَّهِ تَنَزَّلُهَا عَلَيْكَ بِالْحَقِّ وَرَأَيْكَ لِمَنِ الرُّسُلِينَ ﴿٢٥٤﴾

注 231 「ジャールート」とは、歯止めなく人に攻撃を仕掛け、他を攻めさいなむ者を意味する呼び方である。

注 232 この節で話されている「ジャールート」は一人の人間ではなく人々を指し「軍勢」とはこれらの人々の助力者や仲間を指している。聖書では、ミディアン人と呼び、彼らは数年にわたりイスラエル人に攻撃をかけ、彼らの土地を崩壊させた(士師記 6 : 1-6) アマリフ人及び全ての東部の部族がミディアン人の侵入を助け(士師記 6 : 3) この節で述べられている「軍勢」を形成したのである。

注 233 タールート即ちギデオンは、ジャールート及びミディアン人に打ち勝つ事が出来たが、彼らの圧倒的勝利であるジャールートに殺りくは、約 200 年後のダビデの時代に成就されたものである。聖書ではダビデに倒されたのはゴリアテ(サムエル記上 17 : 4)となっているが、これはジャールートと同類である。クルアーンの手えている別名は多分、ダビデの時代の指揮者の名に由来していると思われる。

注 234 この簡潔な表現にこめられたこれらの言葉が全ての真実と正義の戦いの全哲学を述べつくしている。真実と正義の戦いは、混乱を生じさせたり平和を乱したり、弱小国家の自由を奪う為ではなく、混乱を正し平和と再興する為のみに戦われるべきなのである。

254. われらはこれら使徒たちの或る者をば、他より上位に置きたり。アッラーは彼等のうちの或る者に、御言葉をかけ給えり。また或る者には、高い位階を授けたり。(注 235) またわれらは、マリアの子イエスにさまざまなる明証を与え、聖霊によって彼を強くせり。もしアッラー欲したりせば、後の世の人々は明証が降りたる後、互に相い争うことなかりしなり。しかるに彼等は意見を異にせり。或る者は信じ、或る者は信ぜざりき。もしアッラー欲したりせば、彼等は相い争うことなかりしなり。されどアッラーは己れの欲することをなし給う。

第三十四項

255. 汝ら信徒たちよ、取引も、(注 236) 友情も、(注 237) 執り成しもない (注 238) その日が来る前に、われらがお前たちに賜えしものを費やせ。自分自身に不正をなすことは、不信心者なり。
256. アッラー、彼の外に神なし。永生者、自存者なり。まどろみも眠りも彼を捕えず。天にあるもの地にあるもの、すべて彼の所有なり。彼の許しなしに、彼に執り成しをなし得る者は誰ぞ？ 彼は、人々の前にあることを知り、また人々の後ろにあることを知り給う。彼が欲すに非ずば、人々は彼の知恵をいささかも知るることなし。彼の玉座は天地に広がり、之を護持して重荷となることなし。彼こそは至高にして、至大なる御方にまします。

تِلْكَ الرُّسُلُ فَضَّلْنَا بَعْضَهُمْ عَلَى بَعْضٍ مِنْهُمْ مَنْ كَلَّمَ اللَّهُ وَرَفَعَ بَعْضُهُمْ دَرَجَاتٍ ۗ وَآتَيْنَا عِيسَى ابْنَ مَرْيَمَ الْبَيِّنَاتِ وَأَيَّدْنَاهُ بِرُوحِ الْقُدُسِ ۖ وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا اقْتَتَلَ الَّذِينَ مِنْ بَعْدِهِمْ مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَتْهُمْ الْبَيِّنَاتُ وَلَكِنْ اخْتَلَفُوا فَيَنْتَهِمُ مِنْهُمْ مَنْ وَهُمْ مَنْ كَفَرَ ۗ وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا اقْتَتَلُوا وَلَكِنَّ اللَّهَ يَفْعَلُ مَا يُرِيدُ ﴿٢٥٦﴾

يَأْتِيهَا الَّذِينَ آمَنُوا أَنْفَعُوا مِمَّا رَزَقْنَكُمْ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَأْتِيَ يَوْمٌ لَا يَبْعُ فِيهِ وَلَا خُلَّةٌ وَلَا شَفَاعَةٌ ۚ وَالْكَافِرُونَ هُمُ الظَّالِمُونَ ﴿٢٥٥﴾
اللَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ الْحَيُّ الْقَيُّومُ لَا تَأْخُذُهُ سِنَةٌ وَلَا نَوْمٌ ۚ لَهُ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ مَنْ ذَا الَّذِي يَشْفَعُ عِنْدَهُ إِلَّا بِإِذْنِهِ يُعَلِّمُ مَا بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ وَلَا يُحِيطُونَ بِشَيْءٍ مِنْ عِلْمِهِ إِلَّا بِمَا شَاءَ ۚ وَسِعَ كُرْسِيُّهُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ وَلَا يَئُودُهُ حِفْظُهُمَا ۚ وَهُوَ الْعَلِيُّ الْعَظِيمُ ﴿٢٥٦﴾

注 235 この表現は、アッラーが語りかけない預言者達がいるとか、精神的に卓越していない預言者がいるという意味ではない。ただ、預言者には二種類あるという事を述べているだけである、即ち、(1)新しい律法をもたらす預言者、彼らはムカラム（律法を得た預言者）と呼ばれる。そして(2)預言者の地位が、彼らの精神の高さに由来する者、彼らはガイル・ムカラムな預言者（(1)以外の預言者）である。聖なる預言者はアダムをムカラムな預言者とみなすと言ったと伝えられている。

注 236 復活の日は、取引などなく、人の行いの善悪と神の御慈悲次第なのである。

注 237 その日には、新しい友情のきずなを生み出す機会などないのである。

注 238 2章49節を参照の事。

257. 宗教は強制するものに非ず。正道はすでに迷誤より区別されたり。(注 239) されば邪神をしりぞけてアッラーを信ずる者は、決して壊れざる把手を掴みたる者なり。アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

لَا إِكْرَاهَ فِي الدِّينِ قَدْ تَبَيَّنَ الرُّشْدُ مِنَ الْغَيِّ
فَمَنْ يَكْفُرْ بِالطَّاغُوتِ وَيُؤْمِنْ بِاللَّهِ فَقَدْ
اسْتَمْسَكَ بِالْعُرْوَةِ الْوُثْقَىٰ لَا انْفِصَامَ لَهَا
وَاللَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٢٥٧﴾

258. アッラーは信徒たちの守護者なり。人々を暗闇より連れ出し、光明へ導き給う。不信心者どもは、その守護者は邪神で、彼等を光明より暗闇へ導く。彼等は業火の住人なり。永劫に彼等その中に住まん。

اللَّهُ وَلِيُّ الَّذِينَ آمَنُوا يُخْرِجُهُم مِّنَ الظُّلُمَاتِ إِلَى
النُّورِ وَالَّذِينَ كَفَرُوا أَوْلِيَهُمُ الطَّاغُوتُ
يُخْرِجُونَهُم مِّنَ النُّورِ إِلَى الظُّلُمَاتِ أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ
النَّارِ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٢٥٨﴾

第三十五項

259. アッラーが王権を授けたるが故に、アブラハムに対してその主について論争せるあの男のこと、汝聞かざりしか？ その時アブラハムは云えり、「我が主は、生を与え、死に至らしめる御方なり」と。彼は云えり、「我もまた生を与え、死に至らしむる」と。そこでアブラハムは云えり、「よろしい、アッラーは太陽を東から昇らしむ。汝、西から之を昇らしめよ」と。かくて不信心者はあきれてものも云えざりき。(注 240) アッラーは不義なる者どもを導き給わす。

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِي حَاجَّ إِبْرَاهِيمَ فِي رَبِّهِ أَنْ آتَاهُ
اللَّهُ الْمُلْكَ إِذْ قَالَ إِبْرَاهِيمُ رَبِّيَ الَّذِي يُحْيِي وَيُمِيتُ
قَالَ أَنَا أَحْيَا وَمُمِيتُ قَالَ إِبْرَاهِيمُ فَإِنَّ اللَّهَ يَأْتِي
بِالسَّمْسِ مِنَ الشَّرْقِ فَأْتِ بِهَا مِنَ الْمَغْرِبِ
فَبُهِتَ الَّذِي كَفَرَ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ﴿٢٥٩﴾

注 239 宗教の為に特別な犠牲を払い、イスラムの敵に対して戦うという命令は、アッラーはイスラム教徒に、自分達の宗教を布教する為に武力を行使する事を望んでいらっしやるという誤解を生じ易いが、この節でその誤解が取り除かれ、イスラム教徒に、もっとも強調された言葉で、非イスラム教徒を教徒化する際に絶対武力を行使してはならないと告げ、又何故行使してはならないかという理由も併せて述べている。「正道はすでに迷誤より区別」されているので、強制する必要はない。

注 240 アブラハムは偉大な偶像破壊者であった。彼の時代の人々はマドルク（朝の神、春の太陽）を主たる神とし、太陽や星を礼拝した（聖書百科辞典と宗教倫理百科、P. 296）。彼らは、全ての生命が、太陽に依存していると信じた。アブラハムはある無神論者に非常に賢明に、もし彼が自分で言うように生と死をコントロールしているのであれば、全ての生命の依存している太陽の動きを逆にしてみなさいと頼んだ。彼は何も答えられなかった。彼はアブラハムの課題を成し上げられないとは言えなかった。もしその課題を受け入れれば自分が生と死の管理者である事をぶちこすし、もしできるといえば、太陽を礼拝していた人々の目には、大変な冒瀆とうつってしまうからである。こうして彼は完全に混乱し、何と云ってよいのか途方にくれたのである。

260. また廢墟に歸したる都を通りかかり、(注 241)「アッラーはいつこの死せる都を甦らしむるか?」と云える男ありき。そこでアッラーはその男を百年の間死なせしめ、(注 242)再び甦らせて、云えり、「汝はどれ程留まりたるか?」と。彼は答えて、云えり、「一日か、否、數刻なり」と。(注 243) アッラーは云えり、「^{しか}ならず、汝はその状態で百年滯留せるなり。(注 244) それ、汝の食物と飲物とを見よ。そは未だ腐らず。されど汝の驢馬^はを見よ。(注 245) われらが之^ををなせるは、汝をして人々への徴たらしめんがためなり。

أَوْ كَالَّذِي مَرَّ عَلَى قَرْيَةٍ وَهِيَ خَاوِيَةٌ عَلَى عُرُوشِهَا قَالَ أَنَّى يُغْنِي هَذِهِ اللَّهُ بَعْدَ مَوْتِهَا
فَأَمَّا تِلْكَ الْمَائَةُ عَامٍ ثُمَّ بَعَثَهُ قَالَ كَمْ لَبِثْتَ
قَالَ لَبِثْتُ يَوْمًا أَوْ بَعْضَ يَوْمٍ قَالَ بَلْ لَبِثْتَ
مِائَةَ عَامٍ فَانْظُرْ إِلَى طَعَامِكَ وَشَرَابِكَ لَمْ يَتَسَنَّهْ
وَانْظُرْ إِلَى حِمَارِكَ وَلِنَجْعَلَكَ آيَةً لِّلنَّاسِ وَانْظُرْ إِلَى

注 241 ここで「廢墟に歸したる都」と言われているのは、紀元前 599 年にバビロン^の王ネブカドネザルに破壊されたエルサレムの事である。預言者エゼキエルはバビロンの捕虜となったユダヤ人の一人であったが、街の側を通らされ、荒廢したエルサレムの廢墟と化した光景を目撃させられたのである。

注 242 エゼキエルはこの街の崩壊の様子に心を痛め神に悲哀に満ち溢れた言葉で、エルサレムの復興を祈った。彼の祈りが届き、祈りをささげたエルサレムの復興が 100 年後に成るといふ夢をみたのである。これは別にエゼキエルが 100 年間死していた事を意味するものではない。クルアーンでは時々、夢の中でみられたものであるという事を言わずに、夢での光景が実際に起こったという表現をする事がある。(12:5) エゼキエルもその意義を悟ったという夢はイスラエルの子等が捕虜の状態にあって約 100 年間、民族としての完全な屈辱を経た後新しい生命を受けとり聖なる街に戻ってくるという事を意味していた。そしてエゼキエルの夢は実現したのである。エルサレムは紀元前 599 年にネブカドネザルが占領し(列上 24:10)、エゼキエルの夢は紀元前 586 年頃のはずである。そしてエルサレムは崩壊後、約一世紀後に再建された。エルサレム建設は、ペルシャとメディアの上であったサイラスの許可と助力により紀元前 537 年に始められ、紀元前 515 年に完成をみたが、イスラエル人がエルサレムに戻り落着くまでに更に 15 年が必要とされた為、結果として崩壊から再建まで実際には 100 年を要したのである。神が 100 年の間エゼキエルを死者としておき 100 年後によりみがえらしたとするのは他愛もない事が、これは個人の生死ではなく、民族全体を表す街の生死に関して祈ったエゼキエルの祈りへの答とならないからである。

注 243 この言葉は時間の確認の為で(18:20 と 23:114)、クルアーンでの用法に従えば、エゼキエルはどれだけの間、自分がその状態にあったかはわからない事を意味している。ここでの「H」は 24 時間で表される一日の意味ではなく、絶対的な時間なのである(1:4 参照の事)。「一日か、否、數刻なり」という文はエゼキエルの眠っていた時間か、夢をみていた時間をも指している。エゼキエルは明らかに夢の続いた時間を聞かれたと思ったのである。

注 244 しかしお前は 100 年の間この状態にあったのだというのは、ある意味ではエゼキエルが、その状態に 100 年とどまっていたという意味にもなる。(彼は自分が 100 年死していた事を夢にみたのであるから) また彼が「H」がそこら待ったという叙述は實際夢をみている時間はふつう非常に短いものであるからそれも正しいと言える。

注 245 この事実をエゼキエルにわからせる為、神は彼の関心を彼の食事と飲み物とろばに向けたのである。飲み物や食べ物^が腐らず、ろばが生きているという事は、彼が眠っていたのが一日程度であった事を示している。「汝のろばをみよ」という文は、捕虜でいた時野原でエゼキエルがろばを横にして寝ていた時に、夢をみた事を示している。当時イスラエル人は、農夫として畑で働かされていたのである。

あの白骨を見よ、われらが如何にその骨を合せ、肉の衣を着せるかを」と。而してそれが彼に明示されると、彼は云えり、「我はアッラーが全能にましますことを知る」と。

(注 246)

261. アブラハムが、「主よ、如何にして死者に生命を与うるかを我に見せ給え」と云える時のことを思い起せ。アッラーは云えり、「汝は未だ信ぜざるか?」と。アブラハムは云えり、「我は信ず。ただ我が心を安心させんがためなり」と。(注 247) アッラーは云えり、「ならば四羽の鳥を取れ。之を汝に馴れさせてから、丘の上にその一部ずつを(注 248)置き、而して之を呼べ。彼等は汝のところへ急ぎ飛び来るべし。

かくてアッラーの偉力とその賢哲さを知れ」と。

第三十六項

262. アッラーの道のために己が財を費やす者を譬うれば、一粒の穀物に七つの穂がつき、その各々の穂に百の穀粒がつくが如し。アッラーは思召す者には、倍加して与え

الْعِظَامُ كَيْفَ نُنْشِئُهَا ثُمَّ نَكْسُوها لَحْمًا فَلَمَّا بَيَّنَّ
لَهُ قَالَ اعْلَمَنَّ اللَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٢٦١﴾

وَإِذْ قَالَ إِبْرَاهِيمُ رَبِّ ارْنِي كَيْفَ تُحْيِي الْمَوْتَى قَالَ
أَوْمَرْتُ مُوسَىٰ قَالَ بَلَىٰ وَلَكِنَّ لَيْطِينَ فُلَيْيُ قَالَ
فَخَذَ أَرْبَعَةً مِنَ الطَّيْرِ فَصَرَّهِنَّ إِلَىٰكَ ثُمَّ جَعَلَ
عَلَىٰ كُلِّ جَبَلٍ مِّنْهُنَّ جُزْءًا ثُمَّ ادْعُهُنَّ يَأْتِينَكَ
سَعْيًا وَاعْلَمَنَّ اللَّهُ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٢٦٢﴾

مَثَلُ الَّذِينَ يُنْفِقُونَ أَمْوَالَهُمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ كَمَثَلِ
حَبَّةٍ أَنْبَتَتْ سَبْعَ سَنَابِلٍ فِي كُلِّ سَنَابِلَةٍ مِائَةٌ

注 246 エゼキエルはその身に全ユダヤ民族を代表している。彼の象徴的な 100 年間の死は、個人のことでなく、民族全体の捕虜としての 100 年間の屈辱と悲しみを象徴していたのである。これがエゼキエルが神のみしるしとなったという意味である。37 章のエゼキエルも参照する事。

注 247 イーマーン(信仰)とイトウミナーン(「安心」)との違いは、イーマーンの状態では、人は単に神が事を成しうる事を信じるだけであるが、イトウミオームの状態では、彼の場合にも事が為るという確信を受け取るということである。アブラハムは確かに神が死者を生きかえらす事ができる事を信じていたが、彼が望んだのは、神が自分の子孫の場合にもそうなさって下さるかを知らうる事だったのである。

注 248 これは、物事の一部分又は区分を意味している。アラビア語では、ジュズという。この様に、もし物事が一つの集団をなしていれば、「一部」或いは「区分」という語は、その各構成員をさす事となる。これはアブラハムの夢である。鳥四羽をつかまえるという事で、彼の子孫が四回の興亡をみる事が暗に示されている。これは、イスラエル人に二回、そしてイシュマエルを通してアブラハムの子孫となったイスラムの聖なる預言者の信率者(あるいは後継者)に二回、繰り返されたのである。イサクを通じたアブラハムの末いであるユダヤ人の国力は、最初は、ネブカドネザルに、次にはタイタス(17:5-8ブリタニカ百科辞典、ユダヤ人の項)によって二回、かい減させられた。そして二回とも神は、彼らの没落の後、再興された。二回めの没落後の再興は、キリスト教を受け入れたローマの皇帝コンスタンチヌスによって為しとげられたのである。イスラムの国力も同様に、先ず、タルターンの遊牧民の手にバグダッドが落ちた時、はげしいゆさぶりを受けたが、間もなくその打撃から回復した。勝利者は宗教をのりこえ、バグダッドの略害者であったハラクの係は、イスラム教徒に改宗したのである。第2の段落はその後精神的且つ政治的にイスラムの衰退のみられた時期にやってきたのであり、第2の復興は約束された救世主によりもたらされたのである。

給う。アッラーは寛容にして、すべてに通曉し給う。(注249)

263. アッラーの道のために己が財を費やし、その施しに嘲りや侮辱を伴わしめざる者は、主の御許に報奨あり。彼等には怖れも悲嘆も起らざるべし。(注250)
264. 親切な言葉や寛大さの方が、侮辱を伴う喜捨に優る。アッラーは自足者にして、寛容者にまします。(注251)

265. 汝等信徒たちよ、嘲りと侮辱とによってお前たちの施しを空無に帰せしむるなかれ。(注252) 人々に見せびらかすために自分の財を費せど、アッラーも末日も信ぜざる者どもがするが如く。かかる者は、泥をかぶりたる平らな岩に似て、大雨その上に降りそそがば、忽ち裸となりて、元の平らな堅い岩に戻る。彼等は己が稼ぎからいささかも利益を得ざるべし。アッラーは信仰せざる徒輩を導き給わず。

حَبَّوْا لِلَّهِ يُضْعِفِ لِسَنَ يَشَاءُ وَاللَّهُ وَاسِعٌ عَلِيمٌ ﴿٢٦٣﴾
 الَّذِينَ يُنْفِقُونَ أَمْوَالَهُمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ ثُمَّ لَا
 يُتَّبِعُونَ مَا أَنْفَقُوا مَنًّا وَلَا أَذًى لَهُمْ أَجْرُهُمْ
 عِنْدَ رَبِّهِمْ وَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿٢٦٤﴾
 قَوْلٌ مَعْرُوفٌ وَمَغْفِرَةٌ خَيْرٌ مِنْ صَدَقَةٍ يَتْبَعُهَا
 أَذًى وَاللَّهُ غَنِيٌّ حَلِيمٌ ﴿٢٦٥﴾
 يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَبْطُلُوا صَدَقَتَكُمْ بِالْمَنِّ
 وَالْأَذَى كَالَّذِي يُنْفِقُ مَالَهُ رِثَاءَ النَّاسِ وَلَا
 يُؤْمِنُ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ فَمَثَلُهُ كَمَثَلِ صَفْوَانٍ
 عَلَيْهِ تُرَابٌ فَأَصَابَهُ وَابِلٌ فَتَرَكَهُ صَلْدًا لَا
 يَقْدِرُونَ عَلَى شَيْءٍ مِمَّا كَسَبُوا وَاللَّهُ لَا يَهْدِي
 الْقَوْمَ الْكَافِرِينَ ﴿٢٦٦﴾

注249 前節では、ある国家が死し、そしてその国家が再興するに値する民族であれば、神が新しい生命を与えて下さるのは神の法である事が指摘され、その例としてイスラエルが挙げられている。そして更にアブラハムの末えいはイスラエル人とイシュマエル人に各々二回づつ計四回の興亡をみるとも述べられている。イスラム教徒を約束された再興にむけて準備させる為、神は、国家発展の手段に立ち返り、信仰薄き者達に心おきなく、神の大義の為に資力を費やすように切に勧告なさっているのである。

注250 全ての善行は悪用される事があり、アッラーの大義の為に財産を使う事の悪用は、それにマン(善行を自まげに話す・思をきせる)とアザー(迷惑を及ぼす)をする事である。アッラーの大義の為に財産を使ったり真実の為奉仕をした者は、その事を必要もないのに言いふらす事は禁じられている。そうする事は思きせがましくなってしまうからである。同様に、彼らは自分達の貢献に対し見返りを要求してはならない。

注251 助けを求める者達には、親切な言葉と寛容さの方が迷惑を併なう喜捨に勝る、或いは、助けを求めてきた者に恥をかいたと感じさせない為に、彼らの貧窮を黙っていてやり、他人にその事がもれぬ様にすべきである。というのがマグフラトの意味する所である。

注252 他の箇所でもイスラム教徒は包み隠さず財産を使うよう命ぜられている(2:275)。その意図する目的は、他のイスラム教徒もその例にならう様にという事である。しかし信仰を持たぬ者は、公の評価を勝ちとる為のみに公然と金を使うのである。そういう者は神の報酬を受け取る資格を全て失うのである。

266. アッラーを喜ばさんとして、且つ己が精神を強めんとして（注253）財を費やす人は、丘の上の果樹園に（注254）似たり。大雨降らば、果実の収穫は二倍となる。よしまた降らずとも、お湿り程度でこと足りる。アッラーはお前たちの所業を照覧し給う。

267. お前たちのうち、^{なつみやし}棗椰子や葡萄の果樹園を持ち、小川その下を流れ、あらゆる種類の果物が採れ—ところがすでに年老い、されど跡継ぎたちは未だ幼弱—おりしも旋風猛火を伴いて果樹園を襲い、悉く焼き払う。そんな目に誰が遭いたいと望むか？（注255）かくの如くアッラーは、お前ちを反省せしめんがために、さまざまなる神兆を説き明し給う。

第三十七項

268. 汝等信徒たちよ、お前たちが稼ぎたる佳物と、われらがお前たちのために大地よる産したものとを施しに費やせ。自分でも目をつぶらずには受け得ざる如き悪しきものを選びて施すなかれ。（注256）アッラーは自足者にして、讃美せられるべき御方なるを知れ。

وَمَثَلُ الَّذِينَ يُنْفِقُونَ أَمْوَالَهُمْ ابْتِغَاءَ مَرْضَاتِ اللَّهِ وَتَثْبِيْتًا مِّنْ أَنْفُسِهِمْ كَشَلِّ جَنَّةٍ بِرَبْوَةٍ أَصَابَهَا وَابِلٌ فَآتَتْ أُكُلَهَا ضِعْفَيْنِ فَإِن لَّمْ يُصِبْهَا وَابِلٌ فَطَلَّ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿٢٦٦﴾

أَيُّوْدُ أَحَدُكُمْ أَن تَكُونَ لَهُ جَنَّةٌ مِّنْ نَّجِيلٍ وَأَنْهَابٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ لَهُ فِيهَا مِنْ كُلِ الثَّمَرَاتِ وَأَصَابَهُ الْكِبَرُ وَلَهُ ذُرِّيَّةٌ ضِعْفًا لَهُ فَاصَابَهَا عَصَاؤٌ فِيهِ نَارٌ فَاحْتَرَقَتْ كَذَلِكَ يُبَيِّنُ اللَّهُ لَكُمْ الْآيَاتِ لَعَلَّكُمْ تَتَفَكَّرُونَ ﴿٢٦٧﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا أَنْفِقُوا مِمَّا رَزَقْنَاكُمْ مِمَّا كَسَبْتُمْ وَمِمَّا أَخْرَجْنَا لَكُمْ مِنَ الْأَرْضِ وَلَا تَيَسَّبُوا فِيهِ بِمِثْلِ تَنْفِقُونَ وَلَسْتُمْ بِأَحْذِيذِهِ إِلَّا أَنْ تُخْضَعُوا فِيهِ وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ غَفِيْرٌ حَمِيْدٌ ﴿٢٦٨﴾

注253 アッラーの大義の為に富を使う事は、自分が一生懸命稼いだ富を使う事で、自ら、己をして信仰を固く確固たるものとする重荷を自分に負わせるという事から、人の魂を強くするのである。

注254 神の大義の為に包み隠さず財産を費やす信者の心は、天が雨の恵みを降り注ぐ高台の土地の様なものである。天の雨は場合によっては低い土地には危険であるが、高台には多かろうが少なかろうがいづれの場合にも恵みとなるのである。

注255 この比喩によって、信者達は、自分達の財産をみせびらかしに使ったり、迷惑を及ぼすような喜捨をすれば、自分の費やした全てが無駄となってしまうと警告されている。

注256 この節では信者は神の大義の為に善きものとして純粋なものを費やす事が必要であると説かれている。何故なら合法的に手に入れた財産の中にも悪しきものが混ざっているからである。貧者に古くなった使用済みの物が渡される事はあっても、使い古しのものだけをその目的の為にさし出す事は許されないのである。

269. 悪魔は貧乏を以てお前たちを脅し、お前たちに恥じ知らずな行動を勧む。(注 257) しかるにアッラーは、寛容と恵み深さをお前たちに約束し給う。アッラーは寛容にして、すべてを知り給う。
270. 彼は思し召す者に知恵を授け給う。知恵を賜わりたる者は、豊かなる幸福を賜わりたる者なり。(注 258) されど思慮ある人以外は、何人も之に気づかざるなり。
271. お前たちが何を費やし、また如何なる誓いをたてるか、アッラーはすべて之を知る。(注 259) 而して不義なす徒輩には、助け手なかるべし。
272. お前たち、施しを公然とするも良いが、ひそかに之を貧者に与うるならば、その方が自分のために更に良し。(注 260) アッラーはお前たちが犯せし悪業のいくつかを容赦せん。アッラーはお前たちの所業を知り給う。
273. 彼等を正しい道に従わせることは、汝の責に非ず。アッラーは思し召す者は誰であれ、導き給う。お前たちが施す良きものは、つまりは自分のためになる、アッラーを喜ば

الشَّيْطَانُ يَعِدُكُمُ الْفَقْرَ وَيَأْمُرُكُمْ بِالْفَحْشَاءِ وَاللَّهُ يَعِدُكُم مَّغْفِرَةً مِنْهُ وَفَضْلًا وَاللَّهُ وَاسِعٌ عَلِيمٌ ﴿٢٦٩﴾

يُؤْتِي الْحِكْمَةَ مَنْ يَشَاءُ وَمَنْ يُؤْتَ الْحِكْمَةَ فَقَدْ أُوتِيَ خَيْرًا كَثِيرًا وَمَا يَذْكُرُونَ إِلَّا أُولَ الْأَلْبَابِ ﴿٢٧٠﴾

وَمَا أَنْفَقْتُمْ مِنْ نَفَقَةٍ أَوْ نَذَرْتُمْ مِنْ نَذْرٍ فَإِنَّ اللَّهَ يَعْلَمُهَا وَاللَّهُ لَظَلِيمٌ ﴿٢٧١﴾

إِنْ تَبْدُوا الصَّدَقَاتِ فَنِعِمَّا هِيَ وَإِنْ تُخْفُوهَا وَتُؤْتُوهَا الْفُقَرَاءَ فَهِيَ خَيْرٌ لَكُمْ وَيَكْفُرْ عَنْكُمْ مِنْ سَيِّئَاتِكُمْ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرٌ ﴿٢٧٢﴾

لَيْسَ عَلَيْكَ هُدَاهُمْ وَلَكِنَّ اللَّهَ يَهْدِي مَنْ يَشَاءُ وَمَا تُنْفِقُوا مِنْ خَيْرٍ فَلَا نَفْسِكُمْ وَمَا تَنْفِقُونَ إِلَّا

注 257 神の大義の為、とめどなく財産を費やしていると人は貧乏になってしまうというサタンが人々に疑いの念を起こさせるのをこの節では取り去っている。又逆に、もし富める人々が、善なる理由・目的の為に自由に財産を費やさなければ、国家の貧窮が生じてしまう。即ち、共同社会の中でより恵まれない人々の経済的必要が満たされない場合には、彼らは生計をたてる為に、不正で不道德な手段に走ってしまいがちとなる為、国は経済的に困窮し且つ道徳的に退廃するのである。

注 258 富を慈善に使う事は、国家発展と繁栄の秘訣であり、知恵に基づくということをこの節では意味している。

注 259 聖なる預言者は、義務付けられていない善を必ず行うという誓いをたてる事を認めなかった。もしそれでも人が義務付けられない善い事を行うという誓願をたてるのなら、その誓いを実行する義務を負う事となる。

注 260 イスラムは最も賢明に、公けと秘密裏の二種類の施しの方法を勧めている。施こしをあからさまに行う事は、善い例を設定する為、他の人が見習うという事も生じる。場合によってはこっそりと施こす方が、施こしを受けた兄弟達の貧窮を他人の目にふれさせない、そして施こしを鼻にかける事がほとんどないという事から、いっそうよいといえる。

すことのみを願って(注261)なしたれば。
お前たちが施しに費やせるものは、存分に
返済せられ、不当に遇せられることなかる
べし。

274. これらの施し者は、アッラーの道のために
困窮し、(注262)そのために国内を行き来で
き得ざる者に与えらる。彼等は慎み深く、
人に物乞わざるが故に無知なる者は彼等が
裕福なりと思う。汝彼等のその特徴を觀て、
彼等を識るべし、彼等はうるさく物乞わざ
るが故に。(注263)何であれお前たちが施し
に費やすものは、アッラー之を正確に知り
給う。(注264)

第三十八項

275. 夜となく昼となく、ひそかにまた公然と己
が財を施す者は、主より報奨を受く。彼等
には恐怖も悲嘆も起らざるべし。

276. 利息をむさばり食う徒輩は、(注265)悪魔の
狂気に襲われたる者がする如き立ち上り方
しかでき得ず。(注266)そは彼等が、「商売

اٰتِیْنَا وَجْهَ اللّٰهِ وَمَا تُنْفِقُوْا مِنْ خَيْرٍ نُّؤْتِیْکُمْ
وَاَنْتُمْ لَا تَظْلُمُوْنَ ﴿۲۷۴﴾

لِلْفُقَرَاءِ الَّذِیْنَ اَحْصَوْا فِیْ سَبِیْلِ اللّٰهِ لَا یَسْتَطِیْعُوْنَ
صَرْبًا فِی الْاَرْضِ یَحْسَبُهُمْ الْجَاهِلُ اَغْنِیَاءَ مِنَ
التَّعَفُّفِ تَعْرِفُهُمْ بِسَمِیْعِهِمْ لَا یَسْأَلُوْنَ النَّاسَ
عَنْ اِحْصَائِهِمْ وَمَا تُنْفِقُوْا مِنْ خَيْرٍ فَاِنَّ اللّٰهَ بِهٖ عَلِیْمٌ ﴿۲۷۵﴾

الَّذِیْنَ یُنْفِقُوْنَ اَمْوَالَهُمْ بِالْیَسْرِ وَالنَّهَارِ سِرًّا
وَعَلَانِیَةً فَلَهُمْ اَجْرُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ وَلَا خَوْفٌ عَلَیْهِمْ
وَلَا هُمْ یَحْزَنُوْنَ ﴿۲۷۶﴾

الَّذِیْنَ یَاْكُوْنُ الرِّبَا لَا یَقُوْمُوْنَ اِلَّا کَمَا یَقُوْمُ الَّذِیْ
یَخْبُطُهُ الشَّیْطٰنُ مِنَ الْمَسِّ ذٰلِكَ بِاَنَّهُمْ قَالُوْا اِنَّمَا

注261 モハammad預言者の弟子達は命令されたわけではないが自発的にアッラーの喜びのために自分の財産を善行のために費やそうとした。

注262 状況は時にして、人を孤立させてしまう場合がある。こういう人々がより恵まれた人々からの助力に、特に値するのである。この範ちゅうに属する人々には二種類あり、一つは(1)神の使者と共に精神的恩恵を得るために励んでいる人々、又もう一つは(2)厳しい環境からぬけだせない為、日常の必要にも事欠く者達、である。

注263 ここでは、物乞いをしない自尊心のある人々とその「慎み深さ」を賞讃し、それに対しつく物乞いをする下品さを説いている。望なる預言者は、物乞いを罪ありと咎めた。

注264 慈善に、義務的なザカートと余功・(サダカ)の二種類がある。ザカートは、或る一定額の金銭又は財産を持っている全てのイスラム教徒から国家が徴収し、国家が、貧者、困窮者、孤児、未亡人そして徒歩旅行者等の為に使うものであり、その喜捨がどこから来たのか知らない受取手は、何ら特定の個人には恩義をうけない。ザカートとは国家の福祉なのである。サダカとは自発的であり、貧窮者を助けたいという願いから個人が与えるものである。サダカは、恵まれた裕福な人々には貧しい兄弟への同情心を、そして又貧しい人々の間には援助者への感謝を生じさせるものなのである。

注265 文字通りでは、余剰又は追加を表すリバーは本来の合計額以上の追加額との意味である。リバーとは高利貸しと利息の両方の意味を持ち、ハディースに依れば、利子が前もって決められている全ての貸付けがこの定義にあてはまる。リバーの実際に意味する所は厳密に言えば通常考えられている、「利息」と全く同一ではない

もまた利息を取るが如し」と云うが故なり。
 アッラーは商売は許したれど、利息を取ることは禁じたり。されど、主より訓戒が降り、止める者は、過去のことは許さる。されど逆戻りせば、彼等は業火の住人となり、永劫にその中に住まん。

الْبَيْعُ مِثْلُ الرِّبَا وَأَحَلَّ اللَّهُ الْبَيْعَ وَحَرَّمَ الرِّبَا
 فَمَنْ جَاءَهُ مَوْعِظَةٌ مِنْ رَبِّهِ فَانْتَهَى فَلَهُ مَا سَلَفَ
 وَأَمْرُهُ إِلَى اللَّهِ وَمَنْ عَادَ فَأُولَئِكَ أَصْحَابُ النَّارِ
 هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٢٧٦﴾

277. アッラーは利息を廃止し、施しには利を生ましめん。(注 267) アッラーは誰であれ、不信心者や罪深い者を愛し給わず。

يَمْحَقُ اللَّهُ الرِّبَا وَيُزِيلُ الصَّدَقَاتِ وَاللَّهُ لَا يُحِبُّ
 كُلَّ كَفَّارٍ أَثِيمٍ ﴿٢٧٧﴾

278. されど信じて善行をなし、礼拝を遵守し、定め喜び捨を払う者は、必ず主より報奨を受けん。彼等には、恐怖も悲嘆も起こらざるべし。

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَأَقَامُوا الصَّلَاةَ
 وَآتَوُا الزَّكَاةَ لَهُمْ أَجْرُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ وَلَا خَوْفٌ
 عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿٢٧٨﴾

279. 汝ら信徒たちよ、アッラーを畏れ、残れる利息を放棄せよ、もしお前たち信者ならば。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللَّهَ وَذَرُوا مَا بَقِيَ مِنَ
 الرِّبَا إِن كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿٢٧٩﴾

いが、それ以上にうまく言い表せる言葉がない為、“利息”を持ってあてているのである。実際、人が貸した(金額)より多くをうけとったり、借りた(金額)より多くを支払うということは、取引きが、個人、銀行、社会、郵便局、その他どんな組織であれ、“利息”なのである。“利息”とは金銭に限られておらず、どのような物品であれ、同意を得た余剰分と共に返却されるという条件で貸付けとして与えられる全ての物品にあてはめられるのである。

注 266 ここでは、金貸しは、丁度頭の狂った者が自分の行動の結果を考慮しないのと同様に、彼らが無慈悲にも個人や社会、大きな意味では世界全体に与える、道徳上の又経済上の迷惑に気づいていないという事を意味している。リバーは、彼がもうける事にとりつかれている事が、彼をしてあらゆる善なる大義に対し無分別となっているという意味に於いて、金を貸す者に、いささかの狂気をもたらすのである。イスラムでは、少数の集団のみに富を集中させ、その為、逆に、公正な分配に悪影響を与えるとの理由で、リバーは禁じられている。リバーは金貸しをより怠慢にし、彼の中にある他人を助けるという心をつぶし、同情的行動の泉をしめて枯らしてしまう。彼らは他人の必需や負担を利用し利潤を得ているのである。リバーは金貸しに他の人々の欠乏につけこませ、借金をする者達には、返すあてのあるなしにかかわらず借金をさせ、不注意にせいて事を為すという傾向をうみださせ、結果的には自分自身と借り手の両方に取り返しのつかない道徳的傷を負わせてしまうのである。リバーは又戦争に通じる。戦争が長びくとどうしても貸付金に頼る所となり、それに併なう利息が最終的には、勝利者、敗者共に経済的破たんをきたす所となるのである。手軽な借金のシステムが、直接の課税に頼る事なく、戦争の資金を得る事が、できるため、政府に破壊的な争いの実行を可能にしているのである。イスラムは全ての種類の利息を禁じてしまった。近代業務は利息と密接に関係している為、利息を全面的に禁止するのは、ほとんど不可能であるが、環境や状況そしてシステムの変化が、もたらされれば、利息なしの事業は、イスラムが主権を持っていた日々がそうであった様に、必ずや実現できるのである。

注 267 これは利息に基づく経済は、最終的には、消失する、又は、破壊されるであろうという預言の様に思われる。

280. お前たちそれを放棄せずば、アッラー並びにその使徒より戦いを布告せらるべし。されど悔い改めなば、お前たちは元金を回収し得る。かくの如く、悪いことをなさざれば、お前たちも悪いことをされざるなり。
281. もし債務者が困窮する場合は、余裕が出来るまで猶予せよ。(注 268) 喜捨として借金を棒引きにすることは、お前たちのために更に良し、もしお前たちそれがわからば。
282. お前たち、アッラーの許に帰されるその日を恐れよ。その日各人は、自分が稼いだるものを清算され、不当に遇せられることなるべし。

第三十九項

283. 汝ら信徒たちよ、期限を定めて借りの場合は、それを記録にとどめよ。記録者にお前たちの前で公正に記録させよ。記録者はアッラーが教えたる如く記録し、記録を拒むなかれ。されば記録者に書きしめよ。負債者に口述させて之を記録させよ。負債者はアッラーを畏れ、いささかなりともそれより少くするなかれ。(注 289) もし負債者が、低能または虚弱、或いは自ら口述し得ざる場合は、その後見人に公正に口述して貰うべし。お前たちの内から二人の証人を呼べ。もし二名の男子なき場合は、証人として頼みに足る一名の男子と、二名の女子を選べ。さすれば二名の女子のうちいずれかが記憶を誤るとも、他が之を正すべし。証人は如何なる場合でも喚問を拒むべからず。金額の多少にかかわらず、その返済期

وَإِنْ لَّمْ تَفْعَلُوا فَأْذَنُوا بِحَرْبٍ مِنَ اللَّهِ وَرَسُولِهِ
وَإِنْ تُبْتِغُوا فَكْمًا فَكُمُ رُءُوسُ أَمْوَالِكُمْ لَا تَظْلِمُونَ
وَلَا تُظْلَمُونَ ﴿٢٨٠﴾

وَإِنْ كَانَ ذُو عُسْرَةٍ فَنَظِرَةٌ إِلَىٰ مَيْسَرَةٍ وَأَنْ
تَصَدَّقُوا خَيْرٌ لَّكُمْ إِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٢٨١﴾

وَاتَّقُوا يَوْمًا تُرْجَعُونَ فِيهِ إِلَى اللَّهِ فَتُؤْتَىٰ كُلُّ
نَفْسٍ بِمَا كَسَبَتْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ﴿٢٨٢﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا تَدَايَيْتُمْ بِدَيْنٍ إِلَىٰ أَجَلٍ
مُّسَمًّى فَاذْكُرُوا وَلْيَكْتُب بَيْنَكُمْ كَاتِبٌ بِالْعَدْلِ وَ
لَا يَأْبَ كَاتِبٌ أَنْ يَكْتُبَ كَمَا عَلَّمَهُ اللَّهُ فَلْيَكْتُبْ
وَلْيَمْلِكِ الَّذِي عَلَيْهِ الْحَقُّ وَلْيَتَّقِ اللَّهَ رَبَّهُ وَلَا
يَبْخَسْ مِنْهُ شَيْئًا فَإِنْ كَانَ الَّذِي عَلَيْهِ الْحَقُّ سَفِيهًا
أَوْ ضَعِيفًا أَوْ لَا يَسْطِيعُ أَنْ يُمِلَّ هُوَ فَلْيَمْلِكْ
وَلْيَكُ بِالْعَدْلِ وَاسْتَشْهِدُوا شَهِيدَيْنِ مِنْ رِجَالِكُمْ
فَإِنْ لَمْ يَكُونَا رَجُلَيْنِ فَرَجُلٌ وَامْرَأَتَانِ مِمَّنْ تَرْضَوْنَ
مِنَ الشَّهَادَةِ أَنْ تَصِلَ أَحَدُهُمَا فَتَدْرُكَا وَاحِدُهُمَا
الْأُخْرَىٰ وَلَا يَأْبَ الشَّهَادَةُ إِذَا مَا دُعُوا وَلَا تَسْأَلُوا

注 268 イスラムは貸付けを勧めるがこれは善を行う慈悲の貸付けであり利息はとらない。もし借手が返済時に困窮な状態にあれば、より楽な条件となるまで、返済を延期してもらう事ができる。

注 269 (1)責任が生じるのは借手であり、公正に考えれば、責任を規定する言葉は借手が選択すべきであるし、(2)口述文書は借手ではなく貸手が保管するものであるから、貸手ではなく借手の方が口述しなければならないのである。故に借手は、自分が口述したという事実を以て金額の正確さと返済条件の証明とする為、口述する様、頼まれるのであって、借手にはそれを否定する理由、根拠はないのである。

限を認めることを厭うなかれ。そうすることがアッラーの目にはより正しく、また確かな証拠となり、疑惑をさけるためにも最適なり。されば記録を怠るべからず。但し、商品がその場にあり、手から手へやり取りする場合はその限りに非ず。その場合は記録せずともお前たちに罪なし。(注 270) お前たち、取引をする際は、証人を立てよ。(注 271) 而して記録者並びに証人を害することなかれ。もしそれをなさば、お前たちの側に反則あり。アッラーを畏れよ。アッラーはお前たちにかく教え給う。アッラーはすべてに通曉し給う。

284. もし旅路にありて、記録者を求め得ざる場合は、担保品を手に入れておけ。(注 272) またお前たちの間で、誰かに何かを預ける場合は、委任されたる者はその委託物を元通り引き渡すべし。その者をして主なるアッラーを恐れしめよ。証拠を隠すことなかれ。証拠を隠す者は、その心が罪深い者なり。アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

第四十項

285. 天に在るもの、地に在るもの、すべてはアッラーに属す。お前たちが胸中に抱くものをさらけ出そうと、また隠そうとも、アッラーはこれに対して清算を行うべし。誰を赦し、誰を罰するかは御心のままなり。(注 273) アッラーは全能にまします。

أَنْ تَكْتُبُوهُ صَغِيرًا أَوْ كَبِيرًا إِلَىٰ آجَلِهِ ذَلِكُمْ أَقْسَطُ عِنْدَ اللَّهِ وَأَقْوَمُ لِلشَّهَادَةِ وَأَدْنَىٰ أَلَّا تَرْتَابُوا إِلَّا أَنْ تَكُونَ تِجَارَةً حَاضِرَةً تُدِيرُونَهَا بَيْنَكُمْ فَلَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ أَلَّا تَكْتُبُوهَا وَأَشْهِدُوا إِذَا تَبَايَعْتُمْ وَلَا يُضَارَّ كَاتِبٌ وَلَا شَهِيدٌ هُوَ وَإِنْ تَفَعَّلُوا فَإِنَّهُ سَوْفَ يَكُمُ وَالْفَقُوهُ اللَّهُ وَيَعْلَمُ اللَّهُ وَاللَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿٢٧٠﴾

وَأِنْ كُنْتُمْ عَلَىٰ سَفَرٍ وَلَمْ تَجِدُوا كَاتِبًا فَرِهْنِ مَقْبُوضَةً فَإِنْ آمِنَ بَعْضُكُمْ بِبَعْضٍ فَلْيُؤَدِّ الَّذِي أُؤْتِيَ أَمَانَتَهُ وَلْيَتَّقِ اللَّهَ رَبَّهُ وَلَا تَكُونُوا لِلشَّهَادَةِ وَمَنْ يَكْتُمْهَا فَإِنَّهُ أِثْمٌ قَلْبُهُ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ عَلِيمٌ ﴿٢٧١﴾

لِلَّهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ وَإِنْ تُبْدُوا مَا فِيْ اَنْفُسِكُمْ اَوْ تَخْفَوْهُ يَحْصِبْكُمْ بِهِ اللّٰهُ فَيَغْفِرْ لِمَنْ يَشَآءُ وَيُعَذِّبْ مَنْ يَشَآءُ وَاللّٰهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٢٨٥﴾

注 270 略に言わんとしている事はこういった場合でも、証人が記録を残した方がよりよいという事である。

注 271 これは大きな取引の場合をさす。

注 272 貸付けは担保を取つての前貸しの場合もある。これは一方が金銭を貸付けてもらうかわりに担保を入れるという形態である。担保によって貸付けを確認する事で、貸付けが、同一の配慮をもって、又担保にあてられた財産が請求次第で正直に返却される事が示されているのである。

注 273 “神のみ心のままに”という表現は、むしろ、自然法の存在を示すものであるが、アッラーの場合には、神の法を代表するのは神のみ心（意志）である為に、クルアーンでは以下の事を指摘する為にこの表現を用いているのである。即ち、(1)神は森羅万象に於る最終的権威である。(2)神の意志（み心）こそ法である (3)神は完全な美徳を有されるから、神の意志は、公正且つ慈愛にみちた方法で、明白に示される。(17:111)

286. この使徒は、主が啓示されたるものを信ず。信徒たちもまた然り。彼等は皆、アッラー、諸天使、諸經典、並びに使徒たちを信じて、
(注 274) 「我等は使徒たちの間に差別を設けることなし」と云う。而して彼等は云う、
「我等は拝聴し、我等は従う。なにとぞ我等に赦しを垂れ給え。主よ、我等は汝の許へ帰るなり」と。

287. アッラーは何人にもその能力以上の荷を負わせることなし。(注 275) 人はその稼ぎしもので報奨を受け、その招きし故に罰を受く。
(注 276) 主よ、我等もし忘れ、また過ちを犯すとも、罰すなかれ。(注 277) 主よ、我等以前の人々に負わたる如き重荷を、我等に背負わしむるなかれ。主よ、我等の力では担うに耐えざる重荷を我等に負わしむるなかれ。(注 278) 我等の罪障を消滅され、我等を赦し、憐憫を垂れ給え。汝は我等の愛護者なり。されば不信心者どもに対して、我等を助け給え。

أَمَّنَ الرَّسُولُ بِمَا أُنْزِلَ إِلَيْهِ مِنْ رَبِّهِ وَالْمُؤْمِنُونَ
كُلٌّ آمَنَ بِاللَّهِ وَمَلَكَاتِهِ وَكُتُبِهِ وَرُسُلِهِ لَا تَفْرِقُ
بَيْنَ أَحَدٍ مِنْ رُسُلِهِ وَقَالُوا سَمِعْنَا وَأَطَعْنَا غُفْرَانَكَ
رَبَّنَا وَإِلَيْكَ الْمَصِيرُ ﴿٢٨٦﴾

لَا يُكَلِّفُ اللَّهُ نَفْسًا إِلَّا وُسْعَهَا لَهَا مَا كَسَبَتْ وَعَلَيْهَا
مَا اكْتَسَبَتْ رَبَّنَا لَا تُؤَاخِذْنَا إِنْ نَسِينَا أَوْ أَخْطَأْنَا
رَبَّنَا وَلَا تَحْمِلْ عَلَيْنَا إَصْرًا كَمَا حَمَلْتَهُ عَلَى الَّذِينَ
مِنْ قَبْلِنَا رَبَّنَا وَلَا تَحْمِلْنَا مَا لَا طَاقَةَ لَنَا بِهِ
وَاعْفُ عَنَّا وَاعْفُ لَنَا وَارْحَمْنَا أَنْتَ مَوْلَانَا
سُ ۖ فَانصُرْنَا عَلَى الْقَوْمِ الْكَافِرِينَ ﴿٢٨٧﴾

注 274 善き行いは、確かに精神の純化を達成する主要な手段ではあるが、その源は心の純粹さにあり、心の純粹さは、正しい信仰を持つ事によってしか得られないのである。故に、この節ではクルアーンが今までに教えてきた、根本的な信仰の詳細を述べているのである。即ち、神と天使、經典と使者達、それらの自然の秩序への確信である。

注 275 この文は、あがないの教養への強力な反発となっている。ここでは(1) 神の律法は常に人間の力と本人の自然の限界を正しく把握して与えられる、そして(2) 現世での道徳的純化とは必ずしも全ての欠陥や短所から完全に解放される事を意味する訳ではない、という二つの重要な原則が具体化されている。人がそうすべく期待されている事とは、心から善を求める努力をし、全力を挙げて罪を犯さぬ様努める事で、そのあとは慈悲深き神がお赦しになるのである。故に、あがないなどは必要ないのである。

注 276 善行は、さりげなく何ら意識せずに為されたのであっても報われ、悪行は、意識して、わざと行つた場合のみに、罰せられるのである。

注 277 普通の状況にあつては、「忘れ」たり、「過ち」をおかししたりすることは、懲罰の対象となりうる意図や動機を持たないため、罰せられないのであるが、ここでは、もし適切な注意が払われていればさける事の出来る忘却や、過ちを表している。

注 278 “私達より先にあつた人々に負わたるような重荷を私達に負わせないで下さい”という表現は、自分達に負わたる負担が、自分達以前の人々に課せられた負担より軽くあるべきだという事を意味している訳ではなく、神よ貴方との契約を私達が破らない様お守り下さい。そして、私達以前の者達が、従順でなかったために生じさせた重い責任が、私達が生じさせる事のない様に我らを救い給えという事を意味しているのである。これはイスラムの保護と維持の為、そして、神がイスラム教徒に立腹なさらない様、自分達を守る為の集約的な祈り(礼拝)なのである。

سُورَةُ آلِ عِمْرَانَ مَدَنِيَّةٌ

アール・イムラーン

(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. アリフ・ラーム・ミーム。(注1)
3. アッラー、彼の外に神なく、そは永遠に生き、自存者なり。(注2)
4. 彼は汝に真理の經典を降し、それ以前に降したるものの不足を満たしたり。彼は先に、人類の嚮導として、律法と福音と(注4)を降したり。而していままた闡明を(注5)降したり。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

الْقَمْرِ

اللَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ الْحَيُّ الْقَيُّومُ

نَزَّلَ عَلَيْكَ الْكِتَابَ بِالْحَقِّ مُصَدِّقًا لِمَا بَيْنَ يَدَيْهِ
وَأَنزَلَ التَّوْرَةَ وَالْإِنْجِيلَ

注1 われはアッラー、全知者なり

注2 この節は、イエスの神性という誤った教義を、強く論破するものである。この教義の誤りを指摘する事がこの章の主題であるが、その為この教義を根底から断ち切る神の諸々の美徳が、第3章の冒頭部分で述べられているのである。即ち、唯一の生ける永遠の存在という美徳はその所有者である神が、提携者や助力者を必要としない存在である事を証明する一方、生と死の法の範ちゆうの存在であり、それ故永遠に生きる存在でもないイエスは神ではない事を証明しているのである。これらの神の美徳は、上記の教義の当然の帰結である贖罪の教理の中身の無い事をも証明している。キリスト教徒の主張に依れば、イエスは、人類の罪をあがなう為、死んだという事であるがそれならば、尚更、イエスは神ではない。何故ならば、神は、永遠の生命であり、一時的であろうと永遠であろうと、死に給う事はないからである。イエスの死は、彼の肉体的存在から、神・イエスが分離しただけであるというのは無益である。キリスト教の信仰に従えば、神・イエスとイエスの肉体との間の関係は、イエスが十字架上で死ななかったとしても、本質に於て一時的なものであったので、いつかは分離する定めであった。であるからして、この関係をただ断ちきるという事は何ら意味のある目的を果さない。彼の罪深き信奉者への、あがないをもたらすのは何か他の死でなくてはならない。そして、その死は、キリスト教徒達自身によれば、イエスが十字架にかけられた後、天国或いは地獄(使徒行傳2:31)へ下った時、訪れたのである。この様に、神のみの特権である、“死する事がない”という事がありえなかったイエスは、文字通り、そして比喩の意味からも、死を免れえなかったのである。同時に、唯一無比の永遠の存在という美徳は、キリスト教教理の誤謬を証明している。自存し永遠であられる神は、他の存在の助けをかりずに自存するのみならず、他の全ての存在を支えるものである。しかしイエスは、これらの美徳を有せず、他の死すべき者と同様に、女性から生まれ、食物と水とで生活し、苦痛や痛みを感じ、彼の苦悩をやわらげる為、祈ってくれと他人に頼み、そして最後には、キリスト教徒が言う様に、十字架の上で死んだのである。新約聖書には、これら全ての事実を証明するに足る、数多くの記述がみられる。しかし、神が唯一自存の永遠の存在であるという事は、これら全ての肉体的弱さを超越したものなのである。

注3 律法(トーラ)とはモーゼの五書、即ち、創生記、出エジプト記、レビ記、民数紀略と、申命記を指し、トーラは又、場合によって十戒を指す場合もある。

5. アッラーの神兆^{しるし}を否定する者は、必ず厳しい罰を受けん。アッラーは強大にして、応報の主なり。

مَنْ قَبْلَ هُدَىٰ لِّلنَّاسِ وَأَنْزَلَ الْفُرْقَانَ ۖ
إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا بِآيَاتِ اللَّهِ لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيدٌ
وَاللَّهُ عَزِيزٌ ذُو انتِقَامٍ ⑤

6. げに天地^{あかつち}における一切は、一つとしてアッラーに隠し得るものなし。

إِنَّ اللَّهَ لَا يَخْفَىٰ عَلَيْهِ شَيْءٌ فِي الْأَرْضِ وَلَا فِي
السَّمَاءِ ⑥

7. 彼こそは御心のままに、お前たちを胎内に形造りたる御方なり。(注6)彼以外に神なく、雄大にして賢哲にまします。

هُوَ الَّذِي يُصَوِّرُكُمْ فِي الْأَرْحَامِ كَيْفَ يَشَاءُ ۚ لِلَّهِ
إِلَّا هُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ⑦

8. 彼こそは汝に經典を降^{くだ}したる御方なり。その經典の中には断固として決定的な節がある——これらは經典の根幹なり——他の節には解釈を異にすることが可能なるものもある。(注7)心邪悪なる者は、それから異なった解決を下し、仲たがいを謀り、また

هُوَ الَّذِي أَنْزَلَ عَلَيْكَ الْكِتَابَ مِنْهُ آيَاتٌ مُحْكَمَاتٌ
هُنَّ أُمُّ الْكِتَابِ وَأُخَرُ مُتَشَبِهَاتٌ فَأَمَّا الَّذِينَ فِي
قُلُوبِهِمْ زَيْغٌ فَيَتَّبِعُونَ مَا تَشَابَهَ مِنْهُ ابْتِغَاءَ

注4 福音書が良い報せの書と呼ばれる訳は、イエスの教えを受け入れた人達のための吉報を記述してあるという事だけでなく、イエスが、神自身の到来であると表現した、最も偉大な預言者の到来についての預言が記述されているからである。(マタイ 21:40) また、福音書とは、イエスのはりつけ後、ずっと後になって、イエスの教えの信奉者達のしたためた現在言われるところの、イエスの生涯とその教えを書き記したにすぎない四つの福音書ではなく、イエスの受けた実際の啓示の事を指している。

注5 「闡明」とは、クルアーン、或いは、聖なる預言者が、その真実をうちたてる為に賜った、天からの啓示を指す。

注6 子供の成長は母親の胎内で促される為、その生まれ出てし者は、母親の肉体的且つ道徳的条件に左右される。それ故、その肉体が他の人間同様に、母の胎内で育成されたイエスは、女性に固有の眼界や劣性に影響されざるを得なかった。この事が、ナジラーンのキリスト教徒との論争で、聖なる預言者が、イエスのいわゆる神性が、誤りである事を証明する為に、イエスの誕生について言い及んだ理由なのである。聖なる預言者は、かくの如く話したと伝えられている。即ち、「イエスをはらんだのは女性だという事を知っていますか。そして、彼女が、普通の女性が子供を産むようにイエスを産んだという事も？」と。

注7 問題となる争点を証明する為には、經典の瞭然とした部分を考慮すべきであり、それらがある曖昧な文の構成に反すると考えられる場合は、曖昧な箇所を瞭然と語られている箇所と調和する様に解釈すべきであるとの鉄則をこの節は述べている。この節に依ると、クルアーンには二種類の表記があり、あるものは、モフカン（意味が瞭然としている）で、又あるものはムタシャーベ（色々な解釈が可能、即ち意味が曖昧である）である。39:24ではクルアーン全体がムタシャーベであるとされ、11:2でのクルアーンの諸節はモフカンとされている。ムタシャーベを正しく解釈するには、モフカンに矛盾しない解釈を採択すべきであろう。

間違った解釈を求めんとす。アッラー以外、何人もその正しい解釈を知る者なし。知識の堅固なる者は云う、「我等はこれ信ず、すべては我等の主より出でたるものなれば」と。されど理解を授けられたる者の外は、何人も之を注意せず。

9. 「主よ、ひとたび我等を導きたるからには、我等の心を邪惡に迷わしむるなかれ。汝の慈悲を我等に授け給え。げに汝は素晴らしき授与者なり。(注8)
10. 主よ、げに汝こそ疑う余地なき日にすべての人を召集する御方なり。アッラーは決してその約束を破らず」

第二項

11. あの不信心者ども、(注9)彼等の財産も子女もアッラーに対して何んの役にも立たざるべし。業火の薪は彼等なり。
12. 彼等は、ファラオの民やそれ以前の民の場合と同じなり。彼等はわれらの神兆を拒否したり。さればアッラーは、彼等をその罪故に罰したり。アッラーの懲罰は苛酷なり。
13. あの不信心者どもに云え、「お前たちは打ち負かされたあげく、地獄に集められるべし。それは悪しき安息所なり」と。
14. 両軍相会せる時、確かにお前たちへ神兆ありき。(注10)すなわち、一方はアッラーの

الْفِتْنَةِ وَابْتِغَاءَ تَأْوِيلِهِ وَمَا يَعْلَمُ تَأْوِيلَهُ إِلَّا اللَّهُ وَالرَّاسِخُونَ فِي الْعِلْمِ يَقُولُونَ آمَنَّا بِهِ كُلٌّ مِّنْ عِندِ رَبِّنَا وَمَا يَذَّكَّرُ إِلَّا أُولُو الْأَلْبَابِ ⑧

رَبَّنَا لَا تُزِغْ قُلُوبَنَا بَعْدَ إِذْ هَدَيْتَنَا وَهَبْ لَنَا مِنْ لَدُنْكَ رَحْمَةً إِنَّكَ أَنْتَ الْوَهَّابُ ⑨

رَبَّنَا إِنَّكَ جَامِعُ النَّاسِ لِيَوْمٍ لَا رَيْبَ فِيهِ إِنَّ اللَّهَ لَا يُخْلِفُ الْوَعْدَ ⑩

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا لَنُغْنِيَنَّ عَنْهُمْ أَمْوَالَهُمْ وَلَا أَوْلَادَهُمْ مِّنَ اللَّهِ شَيْئًا وَأُولَئِكَ هُمُ وَقُودُ النَّارِ ⑪

كَذَّابٍ أَلْفِرْعَوْنَ وَالَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا فَآخَذَهُمُ اللَّهُ بِذُنُوبِهِمْ وَاللَّهُ شَدِيدُ الْعِقَابِ ⑫

قُلْ لِلَّذِينَ كَفَرُوا سَعْيُهُمْ وَهُمْ يَخْشَوْنَ إِلَىٰ جَهَنَّمَ وَبُئْسَ الْيَهَادُ ⑬

قَدْ كَانَ لَكُمْ آيَةٌ فِي فِتْنَتِ الَّذِينَ اتَّخَذْتُمُ الْأَعْرَابَ ⑭

注8 クルアーンの正しい知識は、心が純粋な者のみに与えられる。(56：80)

注9 これら全ての節は特にキリスト教徒について述べられている為、この場合の「不信心者」という言葉は、キリスト教徒を指していると思われる。

注10 ここで述べられているのは、装備・軍備とも万全であった1000人のメッカ軍に対し、武器も何もろくに持っていなかった、たった313名のイスラム教徒が、見事なまでの勝利をおさめた、バドルの戦いである。このバドルの戦いでは二つの預言が成就された。その一つはクルアーンの初期の啓示にあるもので、(54：45-49) もう一つは、聖書に示されていた預言である。(イザヤ21：13-17) 聖書の預言に従えば、聖なる預言者のメッカからの(夜間)飛行の約一年の後に、メッカ人達の祖先がバドルで敗れ、かれらの栄光が没落するとの事であった。異教徒達の敗北は、イスラム教徒の勝利同様に、予想だにされなかったが、それは完璧なまでの勝利と敗北であった。実に、バドルの戦いとは、歴史上の、偉大な戦闘の一つに数えられているのである。そして、この戦いこそアラビアの運命を決定し、真に堅固な礎の下にイスラムを定着させたものなのである。

道のために戦い、相手側は不信心者どもなりしかが、彼等はその眼で敵の己れに倍するを見たり。(注11)アッラーは御心にかなえば誰でも、その加護を以て之を強くす。げにその中にあるものは、眼を有する人々への教訓なり。

15. さまざまなる欲望は人間の眼には美しく見えるものなり。すなわち、女性、子女、金銀の蓄積、血統の正しい焼印されたる馬、家畜、並びに作物など。これらは現世の楽しみにすぎず。されど素晴らしき住処は、アッラーの許にあり。(注12)

16. 云え、「我はお前たちにそれに優るものを教えん」と。神を畏れる者のためには、主の御許に河川流れる楽園あり。彼等はそこに永遠に住み、純潔な配偶者とアッラーの御満悦とを賜わらん。アッラーは己れの僕たちを照覧し給う。

17. 「主よ、我等は信ず。されば我等の罪を赦し、業火の罰から救い給え」と云う人々は、

18. 忍耐者、誠実者、謙虚者、並びに神の道のために喜捨を惜しまず、黎明に赦しを希う者なり。

19. アッラーは、己れの外に神なきことを証言す。諸天使並びに正義を護持する(注13)

سَبِيلَ اللَّهِ وَأُخْرَى كَافِرَةٌ يَرَوْنَهُمْ فَمِنْهُمْ رَأَى
الْعَيْنُ وَاللَّهُ يُؤَيِّدُ بَصَرَهُ مَنْ يَشَأْ إِنَّ فِي ذَلِكَ
لَعِبْرَةً لِّأُولِي الْأَبْصَارِ ⑪

لُزِينَ لِلنَّاسِ حُبُّ الشَّهَوَاتِ مِنَ النِّسَاءِ وَالْبَنِينَ
وَالْقَنَاطِيرِ الْمُقَنْطَرَةِ مِنَ الذَّهَبِ وَالْفِصَّةِ وَالْخَيْلِ
السُّوْمَةِ وَالْأَنْعَامِ وَالْخَرْبِ ذَلِكَ مَتَاعُ الْحَيَاةِ
الدُّنْيَا وَاللَّهُ عِنْدَهُ حُسْنُ الْمَبَازِ ⑫

قُلْ أَوْفَيْتُكُمْ بِحَيْثُ مِنْ ذَلِكَ لِلَّذِينَ اتَّقَوْا عِنْدَ
رَبِّهِمْ جَنَّاتٌ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا
وَأَزْوَاجٌ مُطَهَّرَةٌ وَرِضْوَانٌ مِنَ اللَّهِ وَاللَّهُ بَصِيرٌ
بِالْعِبَادِ ⑬

الَّذِينَ يَقُولُونَ رَبَّنَا إِنَّا أَمَّا فَاغْفِرْ لَنَا ذُنُوبَنَا
عَذَابَ النَّارِ ⑭

الصَّابِرِينَ وَالصَّادِقِينَ وَالْقَانِتِينَ وَالْمُنْفِقِينَ
وَالْمُسْتَغْفِرِينَ بِالْأَسْحَارِ ⑮

شَهِدَ اللَّهُ أَنَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ وَالْمَلَائِكَةُ وَأُولُو الْعِلْمِ

注11 ここでは、イスラム教徒達の目にはメッカ軍が、その実際の戦力の半分にみえた。即ち、実際には自分達の三倍にあたっていたのが、二倍にしか見えなかった事が記されている。これは、何ら軍隊といった装備ももたぬ微小なイスラム教徒達が、敵の強大な力をみて、意気が下らぬ様にとの神の意図に合致するところである。(8:45) その時の状況はどうであつたかという、メッカ軍の1/3は小高い丘の向う側におり、自分達の人数の約2倍にあたる600であるメッカ軍の2/3しかイスラム軍は見えていなかったというのが実際なのである。

注12 イスラムは、現世で良きとされる物を求めたり使用したりする事を何ら禁ずるものではない。但し、そのみに没頭したり、そういった事を人生の目的にする者達は、当然、責められるべきなのである。

注13 この言葉は、正義に見合った、正義に基づいている、とも解釈できる。

知識を授けられたる人々もまた然り。彼の外に神なし。(注14) そは偉力者、賢哲なり。

20. アッラーの見たところでは、真正の宗教はイスラームなり。(注15) しかるに經典を授かりし人々が、知識が降りたる後仲たがいせるは、互に相妬むが故なり。アッラーの神兆を否定する者あらば、アッラーの清算は迅速なり。

21. もし彼等が汝と相争わば、云え、「我はアッラーに服従す。我に従う者たちもまた然り」と。而して經典を授けられたる人々(注16)並びに無知なる人々に問え、(注17)「お前たちも服従したるか？」と。もし彼等が服従せば、彼等は必ず導かれん。(注18)されど、たとい彼等が背を向けるとも、汝の義務はただ神託の伝達なり。アッラーは己れの僕たちを照覧し給う。

قَائِلًا بِالْقِسْطِ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ⑭

إِنَّ الدِّينَ عِنْدَ اللَّهِ الْإِسْلَامُ وَمَا اخْتَلَفَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ إِلَّا مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَهُمُ الْعِلْمُ بَقِيًا يَنْهَهُمْ وَمَنْ يَكْفُرْ بِآيَاتِ اللَّهِ فَإِنَّ اللَّهَ سَرِيعٌ

الْجَسَابِ ⑮

وَإِنْ حَاجُّوكَ فَقُلْ أَسْلَمْتُ وَجْهِيَ لِلَّهِ وَمَنِ اتَّبَعُوا وَقُلْ لِلَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ وَالْأُمِّيِّينَ أَسْلَمْتُمْ فَإِنْ أَسْلَمُوا فَقَدِ اهْتَدَوْا وَإِنْ تَوَلَّوْا فَإِنَّمَا عَلَيْكَ الْبَلْغُ

وَاللَّهُ بِصِيرٍ بِالْعِبَادِ ⑯

注14 自然と全ての真実の信仰(宗教)の基本原理に於る、唯一の中心的、議論の余地のない事實は、神の唯一性である。全ての創造と、その創造全般に行き渡っている完全なる秩序がこの基本的事実の、まぎれもない証拠である。預言者達に真実の伝言を与える天使達、その伝言を世界にひろめる神の使者達、そして神の使者達よりの真実の知識を受けとり、自分達のものとする良き人々、それら全てが、神の証明に対し、自分達の証拠を付け加えている。同様に、全てのものが一致して、アッラーといっしょに他の神々を信じるという間違いを、そしてそれが、複数の形態であれ、三位、或いは二位一体であろうと虚偽である事を立証している。

注15 全ての宗教は、神の寛大さと、神の意志への恭順を信ずる事を説き、そうすべく勧めるが、その中で神の意志への恭順が完全な帰依という形をとっているのはイスラムだけである。完全なる帰依とは、神の美徳への完全な顕示を必要とし、この様な顕示を含むのはイスラムのみである。それ故、あらゆる宗教(信仰)の内、イスラムのみが、信仰(宗教)という言葉の実際の意味に於て、神自身の宗教と呼ばれるに足るものである。全ての真実の宗教は、その原型と文字通りの、ムスリム(イスラム信仰者)という意味に於て、多かれ、少なかれイスラム(絶対の帰依)なのである。しかし信仰(宗教)が、あらゆる局面に於ける完全さを有しなければ、アル・イスラームの名は与えられるに到らない。そしてアル・イスラームこそクルアーンで最終的に完全化された律法の為への準備なのである。この節は更に2:63の説明ともなっている。

注16 經典を与えられた民と經典を持たぬ民とで人間の世界は成り立っている。

注17 2章77節及び7章158節を参照の事。

注18 經典を持つ民と經典を持たぬ民がもし自分達を神の御前になげだすなら、彼らは必ずや聖なる預言者を受け入れ正しく導かれる事となる。何故なら經典を持つ民にはその經典中に聖なる預言者に関する預言が、明確に示されているし、經典を持たぬ民は自然や人間の良心そして常識により導びかれる。

第三項

22. アッラーの神兆^{しるし}を否定し、不正に諸預言者を殺し、正義を勧める人々を殺す者には、必ず痛罰あらんことを告知せよ。(注 19)

إِنَّ الَّذِينَ يَكْفُرُونَ بِآيَاتِ اللَّهِ وَيَقْتُلُونَ النَّبِيِّينَ
يُخَوِّدُونَ ۖ وَيَقْتُلُونَ الَّذِينَ يَأْمُرُونَ بِالْقِسْطِ مِنَ
النَّاسِ لَا بُدَّ لَهُمْ مِنْ عَذَابٍ أَلِيمٍ ⑲

23. 彼等はその所業が、現世においても来世においても、無に帰すべき者なり。彼等は如何なる援助者も得ざるべし。(注 20)

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ حَبِطَتْ أَعْمَالُهُمْ فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ
وَمَا لَهُمْ مِنْ نَاصِرِينَ ⑳

24. 汝は、經典の一部を(注 21)授けられたる人々を見ざるか？ 彼等の異同^{いどう}を質^{たづ}すべく、アッラーの經典が示された時、彼等の一部はこれを嫌って背き去れり。

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ أُوتُوا نَصِيبًا مِنَ الْكِتَابِ يَدَّعَوْنَ
إِلَى كِتَابِ اللَّهِ لِيَحْكُمَ بَيْنَهُمْ ثُمَّ يَتَوَلَّى فُرْقَانُ مِنْهُمْ
وَهُمْ مُّعْرِضُونَ ㉑

25. こは彼等が、「業火に触れるは限られたる日数にすぎず」と云うがためなり。彼等はその宗教に関して自分が日頃捏造^{ねつぞう}せるものに、欺かれるなり。(注 22)

ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَالُوا لَنْ تَمْسَنَا النَّارُ إِلَّا أَيَّامًا مَعْدُودَةً
وَعَرَّضْنَاهُمْ فِي دِينِهِمْ مَا كَانُوا يَفْرُقُونَ ㉒

26. いざわれらが、疑う余地なきその日、彼等を召集すると、彼等は果して如何にせん？ その時各人は、稼^はぎしものを存分に支払われ、決して不当に遇せられることなかるべし。(注 23)

فَكَيْفَ إِذَا جُمِعْتَهُمْ لِيَوْمٍ لَا رَيْبَ فِيهِ وَوُفِّيَتْ
كُلُّ نَفْسٍ مَا كَسَبَتْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ㉓

注 19 神の預言者は皆、どの様な状況にさらされようとも、自分の使命を全うした。預言者達を殺そうとする企てや、迫害がどれだけあろうとも、彼らの信仰を止めさせたり、その発展を途切れさせる事はできなかった。宗教(信仰)の歴史とはこの事実への紛れもない証拠を提供しているのである。

注 20 不信者達は来世における報いを信じておらず、自分達の行動が、復活の日に全く役に立たないという事の証拠として、現世に於て、イスラムを打ち破るという彼らの努力も無駄であり、それこそ来世に於ても、自分達の行動は何の益ともならない事の証拠となると告げられている。

注 21 (1)經典の一部を形成する、聖なる預言者に関する、聖書中の預言、(2)聖書の純粋な部分、(しかし、改ざんされずに原文のままで残ったのは極く一部であり、その部分のみが真実の聖書といえる。)或いは、(3)卓越した經典であるクルアーンと比較すれば、聖書は經典の一部にすぎない、の意味。

注 22 ユダヤ人とキリスト教徒達は来世の懲罰を自分達は受けないと自ら信じさせようとしている。ユダヤ人は自分達が選ばれた民であると思う事で、又、キリスト教徒は、自分達が言う所の神の息子であるイエスが、十字架の上のあがないの死により自分達の罪を一身に背負った為と自分達をあざむいているのである。

注 23 この節では、人間の善行ではなく、どんな人であれ人間の血が、救済をもたらすという教義の矛盾を強く、きゅう弾している。

27. 唱えよ、「アッラー、統治権の主よ、汝は御心のままに誰にでも統治権を与え、また御心のままに之を取り上げ給う。御心のままに誰でも貴め、御心のままに誰でも卑しめ給う。善福はすべて汝の掌中にあり。げに汝は全能にまします。(注24)

قُلِ اللَّهُمَّ مَلِكُ الْمَلِكِ تُؤْتِي الْمُلْكَ مَنْ تَشَاءُ وَتَنْزِعُ الْمُلْكَ مِمَّنْ تَشَاءُ وَتُعِزُّ مَنْ تَشَاءُ وَتُذِلُّ مَنْ تَشَاءُ يُبِيدُكَ الْخَيْرُ إِنَّكَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٢٤﴾

28. 汝は夜を昼の中に入らせ、昼を夜の中に入らせ給う。(注25) また死より生を生み、生より死を生み給う。汝は御心のまま誰にでも際限なく与え給う」と。(注26)

تُولِجُ اللَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَتُولِجُ النَّهَارَ فِي اللَّيْلِ وَتُخْرِجُ الْحَيَّ مِنَ الْمَيِّتِ وَتُخْرِجُ الْمَيِّتَ مِنَ الْحَيِّ وَتَرْزُقُ مَنْ تَشَاءُ بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿٢٥﴾

29. 信徒たちに、信徒たちを差し置いて不信心者どもを友たらしめるなかれ。(注27) そのようなことをなす者は、アッラーとは何んの関係もなし。但し、お前たちが不信心者どもの危害を怖れる場合は別なり。(注28) アッラーはお前たちにその懲罰を警告し給う。行きつく先はアッラーなり。

لَا يَتَّخِذُ الْمُؤْمِنُونَ الْكَافِرِينَ أَوْلِيَاءَ مِنْ دُونِ الْمُؤْمِنِينَ وَمَنْ يَفْعَلْ ذَلِكَ فَلَيْسَ مِنَ اللَّهِ فِي شَيْءٍ إِلَّا أَنْ تَتَّقُوا مِنْهُمْ تُقَاةً وَيُحَذِّرُكُمْ اللَّهُ نَفْسَهُ ۗ وَ إِلَى اللَّهِ الْمَصِيرُ ﴿٢٦﴾

30. 云え、「お前たち胸中に隠すとも、また顕すとも、アッラーはそれを知り給う。また彼は、天に在るもの地に在るもの、その一切を知り給う。アッラーは全能にまします」と。

قُلْ إِنْ تُخْفُوا مَا فِي صُدُورِكُمْ أَوْ تُبْدُوهُ يُعْلَمِ اللَّهُ ۗ وَيَعْلَمُ مَا فِي السَّمُوتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ ۗ وَاللَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٢٧﴾

注24 当節の説明の為に、次節を参照の事。

注25 “日(昼)”とはここでは人々の繁栄と権力を指し、“夜”とは衰退と墮落を指す。

注26 当章及び前章では、国家が、全ての力と栄光の源である神の意志にそぐうか、反するか次第で、発展或いは没落してしまう、不変の神聖なる戒律の存在を指摘している。

注27 前章で約束された様に、イスラムの、政治的権力の達成と共に、ムスリム(イスラム教徒)国家間に政治同盟を形成する事が必要となった。当注の施こされている文では、どういった形であれ、その他のイスラム教徒国家の利益を害したり相反したりする為、イスラム国家は非イスラム国家と、同盟、又は条約を結ぶべきではないとの指導原則が掲げられている。イスラムの利益は、その他全ての利益よりも優先される。

注28 イスラム教徒は、不信者達の、ワナや陰謀に対し身を護るようにとの注意を喚起されている。敵の権力や軍備力ではなく、イスラム教徒が常に念頭に置き、用心すべき敵の巧妙なワナに関して言及している。

31. 用心せよ、すべての魂が現世でなせる己が善事と悪事に対決させられるその日を。魂は、己れとその悪事との間に、万里の隔たりがあらんことを望む。アッラーはお前たちに懲罰を警告し給う。されどアッラーは、己れの僕たちには極めて憐れみ深くまします。

第四項

32. 云え、「お前たちアッラーを愛しなば、我に従え。(注 29) さすればアッラーはお前たちを愛で、その過失を赦さん。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします」と。
33. 云え、「アッラー並びに使徒に従え」と。されどもし彼等背き去らば、アッラーは不信心者どもを愛さざることを忘れるな。
34. アッラーは、アダムとノア並びにアブラハム一家とイムラーン一家を (注 30) すべての民の上に選びたり。
35. 彼等は互に他の子孫なり。アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。
36. イムラーンの妻が、(注 31) 「主よ、我が胎内に宿れるものを、汝への奉仕のために妾は厭げんことを誓う。願わくは之を受けよ。すべてを聴き、すべてを知り給うは、げに汝のみなり」と云える時のことを思い起せ。

يَوْمَ يَجِدُ كُلُّ نَفْسٍ مَّا عَمِلَتْ مِنْ خَيْرٍ مُخَصَّرًا ۚ
وَمَا عَمِلَتْ مِنْ سُوءٍ تَوَدُّ لَوْ أَنَّ بَيْنَهَا وَبَيْنَهُ
أَمَدًا أَبْعَدًا وَيَحْذَرُ لِمَّا نَفْسُهَا وَاللَّهُ رَؤُوفٌ
بِالْعِبَادِ ﴿٣١﴾

قُلْ إِنْ كُنْتُمْ تُحِبُّونَ اللَّهَ فَاتَّبِعُونِي يُحْبِبْكُمُ
اللَّهُ وَيَغْفِرْ لَكُمْ ذُنُوبَكُمْ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٣٢﴾
قُلْ أَطِيعُوا اللَّهَ وَالرَّسُولَ فَإِنْ تَوَلَّوْا فَإِنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي
الْكَافِرِينَ ﴿٣٣﴾

إِنَّ اللَّهَ اصْطَفَىٰ آدَمَ وَنُوحًا وَآلَ إِبْرَاهِيمَ وَآلَ
عِمْرَانَ عَلَى الْعَالَمِينَ ﴿٣٤﴾

ذَرِّيَّةً بَعْضُهَا مِنْ بَعْضٍ وَاللَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٣٥﴾
إِذْ قَالَتِ امْرَأَتُ عِمْرَانَ رَبِّ إِنِّي نَذَرْتُ لَكَ مَا
فِي بَطْنِي مُحَرَّرًا فَتَقَبَّلْ مِنِّي ۖ إِنَّكَ أَنْتَ السَّمِيعُ
الْعَلِيمُ ﴿٣٦﴾

注 29 この節では、神の愛を手にするには、聖なる預言者に従う他ないという事を強調している。又ここでは 2 : 63 より生ずる可能性のある、神の存在と来世の存在を信じさえすれば、復活するに足るという誤解が取り除かれている。

注 30 詳しくは、英版参照のこと。

注 31 ムハラタとは、解放されたとの意味であり全ての世俗の事柄から離れ、その両親により教会への奉仕の為、捧げられた子供の事を意味している。そして、これら教会にささげられた子供らは、未婚でいる事がイスラエル人の間の慣習であった。(マリアの福音、5 : 6 & Bayan : 36 項) この節では、マリアの母であるハンナという婦人(聖書辞典)がイムラート・イムラーン(イムラーンの女性の意)として語られており、マリア自身は、アーロンの姉(妹)とされている。イムラーンとアーロンは、各自、モーゼの父、そして兄にいたり、モーゼには又、ミリアムという名の姉(妹)がいた。

37. 而して分娩するに及び、彼女は云えり、「主よ、妾は女兒を産めり(注32)―アッラーは彼女が産めるものをよく承知す、彼女が望みたるものは女兒に非ず男児たることを―妾はこの子をマリアと名づけたり。(注33)妾はこの子と、この子の子孫を汝の御加護にゆだねます故、なにとぞ石にて撃たれし悪魔から守り給え」と。(注34)

فَلَمَّا وَضَعَتْهَا قَالَتْ رَبِّ إِنِّي وَضَعْتُهَا أُنْثَىٰ وَالأُنْثَىٰ كَرَاهٍ
وَرَبِّيَ عَلِيمٌ بِمَا وَضَعْتُ وَلَيْسَ الذَّكَرُ كَالْأُنْثَىٰ وَإِنِّي
سَمَّيْتُهَا مَرْيَمَ وَإِنِّي أُعِيذُهَا بِكَ وَذُرِّيَّتَهَا
مِنَ الشَّيْطَانِ الرَّجِيمِ ﴿٣٧﴾

38. そこで主は恵み深くその子を御嘉納あそばされ、すこやかに育て給い、ザカリヤをして(注35)その子の保護者たらしめり。ザカリヤはその子の部屋を訪れるたびに、彼女のそばに食物があるのを見たり。彼は訊ねたり、「マリアよ、汝はいずこよりこれを得たるか?」と。彼女は答えて、云えり、「こはアッラーより頂戴す」と。(注36)アッラーは御心のまま誰にでも限りなく賜う。

فَتَقَبَّلَهَا رَبُّهَا بِقَبُولٍ حَسَنٍ وَأَنْبَتَهَا نَبَاتًا حَسَنًا
وَوَكَّلَهَا زَكَرِيَّا كُلَّمَا دَخَلَ عَلَيْهَا زَكَرِيَّا الْحِجَابَ
وَجَدَ عِنْدَهَا رِزْقًا قَالَ يَمْرِئُ إِنِّي لَأَكُونُ لَكَ هَذَا
قَالَ هُوَ مِنْ عِنْدِ اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ يَرْزُقُ مَنْ يَشَاءُ
بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿٣٨﴾

注32 マリアの母は、彼女が神への奉仕にささげるつもりの子息に恵まれます様にとの期待の内に誓いをたてた。しかし男子のかわりに女兒が生まれた為、彼女は困惑したのである。

注33 マリア(ミリアム)がイエスの母であった。彼女は多分、モーゼとアーロンの妹(姉)のマリアムにちなんで名付けられたと思われる。(後になってミリアムと発音された。)

注34 これらの言葉の解釈はかなり難しいものである。もしマリアの母が自分の子供を、神への奉仕にささげるつもりであったのなら、彼女は、その子供は、終生、未婚である事を、知っているべきだし知っていたに違いない。そうなれば、その子の子孫に祈りをささげる意味が一体どこにあるのであろう。最も納得のゆく説明は、神が、幻の中でハンナに、彼女の娘は、婦人の域に達すれば、子供を持つとお告げになり、その為マリアとその子供とに神の御加護を賜るべく彼女が祈ったのである。しかし、この祈りにもかかわらず、彼女は、最初に自分が意図した通り、マリアの将来を神に委ね、彼女をささげたのである。(3:36; マリアの誕生の福音)これは、真に例外的な事であったに違いない。何故なら、神への奉仕に献げられる資格は通常は男子のみだからである。マリアの母が幻を見、彼女の娘が、男子をもうける事を知ったという推察は、幾らか違った形ではあってもマリアの福音(3:5)中に示されている。それ故、マリアの母が、マリアとその子がサタンの誘惑から身を守るようにと祈った事に何ら奇異なところはないのである。信心深い親なら誰でも、子供に対しこういった望みを持ち、将来、汚れない良き人生をおくるよう祈るものなのである。又もう一つ留意すべきは、イスラムは、全ての神の預言者はサタンの誘惑から守られると宣言しているのに対し、聖書では、この加護をイエスに帰してはいないのである。(マルコ、1:12, 13)

注35 ザカリヤはクルアーンでは預言者とされている、イスラエル人の聖人の名前であるが、聖書では、単に聖職者(司祭)であったとしか述べられていない。(ルカ、1:5)聖書で預言者とされている人物はゼガリ

39. そこでザカリヤは主に祈りて、云えり、「主よ、願わくは我に汝の御許より汚れなき子を賜え。げに汝は祈りをよくお聞きとどけくださる御方にまします」と。(注37)
40. 而してザカリヤがなほ部屋にありて、立ちて祈りつつありし時、天使たちが彼に呼びかけて、云えり、「アッラーは汝にヨハネの(注38) 朗報を賜う。ヨハネはアッラーからの御言葉が真理なることを証明せん。ヨハネは高貴なる者、純潔なる者、義しき人々の中から選ばれたる預言者たるべし」と。
(注39)
41. ザカリヤは云えり、「主よ、我すでに老い、妻は石女なれば、如何にして子を得られようか?」と。(注40) 主は答えて、云えり、「それをなすのがアッラーなり。アッラーは欲することをなし給う」と。

هٰذَا لَكَ دُعَاؤُكَ رَبَّكَ قَالَ رَبِّ هَبْ لِي مِنْ لَدُنْكَ ذُرِّيَّةً طَيِّبَةً إِنَّكَ سَمِيعُ الدُّعَاءِ ﴿٣٩﴾

فَنَادَتْهُ الْمَلَكَةُ وَهُوَ قَائِمٌ يُصَلِّي فِي الْغُرَابِ إِنَّ اللَّهَ يُبَشِّرُكَ بِغُلَامٍ طَيِّبٍ فَكَرِهْتَ مِنَ اللَّهِ وَسَيِّدًا وَحَصُورًا وَنَبِيًّا مِنَ الصَّالِحِينَ ﴿٤٠﴾

قَالَ رَبِّ أَلَيْسَ لِي عِلْمٌ وَقَدْ بَلَغَتِ الْكِبَرَ وَأَمْرًا نِيَّيْتُ قَالَ كَذَلِكَ اللَّهُ يَفْعَلُ مَا يَشَاءُ ﴿٤١﴾

ヤ(上記のザカリヤとはつづりが違う)であり、これについては、クルアーンでは全く触れられていない。クルアーン中のザカリヤは、イエスの徒弟であるヨハネの父であった。

注36 贈り物はその場所を訪れた礼拝者が明らかに持ってきたものであったが、マリアが、アッラーよりの贈り物であると答える事は尋常な事である。何故なら、人に与えられる全ての善きものは、最終的な贈り手である神より来るからである。実際、マリアのような信心深い育てられ方をした少女から、それ以外の答がでるほうが驚くべきなのである。

注37 その子供の信心深い受け答えは、いたくザカリヤの心をうち、彼の心の奥深くに、彼自身の、似たような信心深い子供を持ちたいという自然で潜在的な欲求を目覚めさせたのである。彼は神にマリアのような子を授かる様祈った。その祈りは、クルアーンの様々な箇所、それぞれ違った言葉で述べられている事からも、長い期間に渡り、何度か繰返されたものと思われる。(3:39; 19:4-7; 21:90)

注38 ヨハネ(あるいはヤヒヤ)とは、聖書の預言を成就する為、イエスより前に、イエスの先駆者として現われた、預言者の名前である。ヨハネという名は、神御自身より、与えられたものである。(マラキ3:1、4:5)

注39 ヨハネはマラキの“見よ、私は、神の偉大にして多難な日の前に、預言者である、エリヤをつかわす。”という預言の成就として現われた。(マラキ4:5)

注40 ザカリヤの疑問は、神の約束に対する、純粋な驚きからの自然な表現であり、その問いかけには、自分が永らえて、自分の息子が生まれ、立派な青年に成長するのを見られる様にとの祈りもこめられていた。

42. そこでザカリヤは云えり、「主よ、我に証拠を示し給え」と。(注41)主は答えて、云えり、「その証拠は、汝は三日の間、他人と手まねを以てする以外は話すこと^{ふた}能わす。(注42)主の御名をひたすら唱え、朝な夕な主を讃美し奉れ」と。

第五項

43. 天使たちが(注43)かく云える時を思え。「マリアよ、アッラーは汝を選び、汝を浄め、而してすべての女性の上に汝を選びたり。(注44)
44. マリアよ、主に従順であれ。神を敬いてひれ伏せよ。神を崇めまつる者と共に神のみを崇拝せよ」
45. こは、われらが汝に啓示する不可見なる物事の情報なり。汝は矢を投げて、誰がマリアを養育すべきかを決めたる時、彼等と共に居合せず、また彼等が互に相争いし時も居合せざりき。(注45)

قَالَ رَبِّ اجْعَلْ لِّي آيَةً قَالَ أَيْتُكَ إِلَّا تَكْلُمُ النَّاسَ
ثَلَاثَةَ أَيَّامٍ إِلَّا رَمْرَماً وَأَذْكُرْ رَبَّكَ كَثِيراً وَسَبِّحْ بِحَمْدِ
رَبِّكَ بِالْغَيْبِ ۚ وَابْتَغِ الْوَعْدَ بِحَسَنَاتٍ ۚ

وَإِذْ قَالَتِ الْمَلَكَةُ يَمْرُؤُا إِنَّ اللَّهَ اصْطَفَاكِ وَ
طَهَّرَكِ وَاصْطَفَاكِ عَلَى نِسَاءِ الْعَالَمِينَ ۝٤٣

يَمْرُؤُا أَفَنَتِي لِرَبِّكِ وَاسْجُدِي وَارْكَعِي مَعَ
الرَّكَعِينَ ۝٤٤

ذَلِكَ مِنْ أَنْبَاءِ الْغَيْبِ نُوحِيهِ إِلَيْكَ وَمَا كُنْتَ
لَدَيْهِمْ إِذْ يَقُولُونَ أَفَلَا مَهْمُ أَيُّهُمْ يَكْفُلُ مَرْيَمَ
وَمَا كُنْتَ لَدَيْهِمْ إِذْ يَخْتَصِمُونَ ۝٤٥

注41 ザカリヤは三日間、口を開かないでいれば、約束が成就すると言われたのであり、福音書が述べる様に、神の御言葉信じなかった罪としておしにされたのではない。(ルカ、1：20-22)

注42 沈黙を守るという戒律は、ザカリヤに、めい想と祈りに自分の時間をさくのに良い機会を与える為であった。即ち神の御慈悲と御慈愛を受けるには、最も適切な機会である。又しゃべらずにいるという事は、或る場合には、人間の失われた生命力と体力を回復するのに役立つとも考えられている。この慣行は当時のユダヤ人の間で流行っていたものと思われる。

注43 クルアーンの慣用的表現に於て、天使に複数形を使うという事は、神はマリアの息子を通し生命の色々な局面に影響を与える意図がおりになった為、神がそれぞれ係りのある場所に全ての異なった天使達を出向かせ、伝言を伝える役割を果たさせ、神の望まれた変革を成しとげるべく召集をかけ、命令された事を意味しているのである。

注44 この節では“選ばれた”という言葉が二回使われている。最初は、マリアについてで、他の誰への言及もない為、これは彼女の抜きん出た絶対的地位を意味している。然るに二回めに使われる時は、マリアの時代の他の女性達と比較した形で、彼女の高い地位を示す為、使われている。クルアーンでの語の使い方に従えば、「すべての女性の上に」という表現は、全ての時代、そして全ての年代の女性に於てはめられるものではなく、マリアの生きた特定の時代の女性のみに使われているものである。

注45 クルアーン中でマリアに関して明らかにされている事実の多くは、それ以前の聖なる書には載っていない。故に、ここではそれらの事は、見えない事として語られている。以下に続く節で述べられている様に、マリアは寺院で神に身を献げた生活を返っている期間に、妊娠したのである。当然ながら神父達は、青天のへ

46. その時、天使たちがかく云えることを思い起せ。「マリアよ、アッラーはじきじきの御言葉で（注46）汝に朗報を授け給う。彼の名はメシア、（注47）マリアの子イエスなり。（注48）彼は、現世並びに来世において高い榮譽を得、神のそば近く寄れる者の（注49）一人たるべし。

47. 彼は揺籠^{ゆりかご}の中においても、（注50）また壮年になってからも人々に語りかけ、必ず義しき人たらん」

إِذْ قَالَتِ الْمَلَكَةُ يٰرَبِّمُنِّى إِنَّ اللَّهَ يُبَشِّرُكِ بِكَلِمَةٍ مِّنْهُ ۖ اسْمُهُ النَّسِيُّحُ عِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ وَجِيعًا فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ وَمِنَ الْمُقَرَّبِينَ ﴿٤٦﴾

وَيُكَلِّمُ النَّاسَ فِي الْمَهْدِ وَكَهْلًا وَمِنَ الصَّالِحِينَ ﴿٤٧﴾

きれきともいえる事実を知るに到り、スキャンダルをおそれて、協議した結果、マリアの処分を決定する人間を決め、結婚という形で落着かせる事となった。福音書で述べられている様に、一人のヨゼフという大工が、彼女の夫として適当であるとされ、この奇妙な状況を受け入れてくれる様にと説得された。これら全ては当然の事ながら秘密裡に行なわれた為、クルアーンで人々に知らしめた事は、見えない事であったのである。

注46 この「御言語」とは命令、律法を意味する語である。4:172でみられる様に「霊」という語と一緒に使用する事で、イエスの神の息子であるという神性を、破壊、否定する為に使われた事は疑いもない。その中でイエスは、その言葉が、真実の大義にとって有用であった為、カリマ・トゥラーと呼ばれている。武勇によって真実の大義を助くる者は神の剣、又は神の獅子と呼ばれる様に、イエスも、彼の生誕が、父親の介在なしに、神の直接の「命令」でもたらされた為、カリマ・トゥラーと呼ばれたのである。イエスがクルアーン中でカリマー（言葉）と呼ばれるのなら、聖なる預言者は、ズィクル、即ち、本、或いは良き話しと呼ばれる。（65:11、12）そしてこれは明らかに多くのカリマー（言葉）で成りたっているものである。実際に、もしカリマ・トゥラーを「神の言葉」という意味に理解すれば、我々が最大限に言える事は、神は丁度他の預言者達を通して現わされたようにイエスを通して、御自身を表現なさったのである。言葉は思考を表わす手段にすぎず、言葉が我々の存在の一部を形成したり具体化したりする事はないのである。

注47 観光者という意を持つアル・マシーとはヘブライ語の塗油された者という意味のメシアにあたるアラビア語である（聖書百科、PelとEth、宗教倫理百科）。イエスは長く多くの旅をする運命にあった為、こう名づけられたのである。しかし福音書の叙述に従えば、イエスの奉仕は、三年足らずの上に、彼は、幾つかのパレスチナ或いはシリアの町々しか尋ねておらず、メシアの称号にはそぐわなくなる。しかし近年の歴史上の調査では、はりつけの衝撃と傷がいた後、イエスは東洋までの遠くと広きにわたり旅をし、最後にはカシミールに辿り着き、その地域に住んでいた、イスラエルの落ちのびた支族への伝言を伝えたという事実が判明している。小高い丘の空地にイエスは家を与えられたと述べられている23章51節も併せて参照する事。上記のメシアとは「塗油されし者」との意味も併せもつ。イエスの生誕が常軌をいっしており嫡出であるとみなされがちな為、この人々の抱きうる非難を取り除く為、全ての神の預言者達は正に塗油されている者達の為、イエスは神御自身の塗油により「塗油された」と言われているのである。

注48 イーサとはヘブライ語のヤスーの変形と思われる。イエスとはジョシュアとイエシュアのギリシア語にあたる。（聖書百科）

注49 この表現からも、イエスは神の公正なる召使以上の存在ではなかった事がわかる。クルアーン中では、全ての、人並み秀れた公正な人々は、神のお側近くにある人と語られている。（56:11、12）

注50 マハド（「ゆりかご」）のもともとの意味は、人が熟年となった時に為さねばならぬ仕事への準備期間にあるという事である。カハラとマハドの二つの期間が一緒に述べられているという事実は、この二つの期間は続いているという事を表わす。カハラ（壮年）の前の全ての期間はマハドなのである。

48. マリアは云えり、「主よ、誰も男が妾に触れざるに、妾は如何にして子を産まん？」と。

(注 51) 主は云えり、「それをなすのがアッラーなり。アッラーは欲するものを創り給う。彼一事を決しなば、ただ『在れ！』と云うだけで、そは存すなり。

49. 而して主は、その子に、經典と知恵と律法と福音とを教え、

50. イスラエルの子孫への使徒として、(注 52) かくなる神託を持たせて派遣せん。『我は主の奇跡をたずさえてお前たちに來たれり。すなわち、粘土を(注 53) もって鳥の形を造り、(注 54) それに息を吹き込めば、アッラーのお許しにより空に舞い上る鳥となら

قَالَتْ رَبِّ اِنِّي يَكُونُ لِي وَلَدٌ وَلَمْ يَمْسَسْنِي بَشَرٌ
قَالَ كَذَلِكَ اللهُ يَخْلُقُ مَا يَشَاءُ اِذَا قَضٰى اَمْرًا وَاَمَّا
يَقُولُ لَهُ كُنْ فَيَكُونُ ﴿٥١﴾

وَيُعَلِّمُهُ الْكِتٰبَ وَالْحِكْمَةَ وَالتَّوْرٰتِ وَالْاِنْجِيلَ ﴿٥٢﴾

وَرُسُلًا اِلَىٰ بَنِي إِسْرَآءِيلَ اِنِّي قَدْ جِئْتُكُمْ بِآيَةٍ
مِّن رَّبِّكُمْ اِنِّي اَخْلَقْتُ لَكُمْ مِنَ الطِّينِ كَيْفَ تَخٰتِرُ
فَانْفُخْ فِيْهِ فَيَكُوْنُ طَيْرًا بِاِذْنِ اللّٰهِ وَ اُبْرِئُ

注 51 いかに幸せな報せであつたとしても、普通の状況では、未婚であり、一生結婚しないものと決められていたマリアにとって、男の子の母になるという事は、非常に困惑にみちた事であつたに違いない。この節は、マリアの当然ながらの混乱を映し出している。又、マリアの、男の人は誰も私にふれていない、という言葉からもわかる様に、イエスには父親がいなかった。寺院の奉仕に献げられたマリアは、独身の誓いをたてていたことから、結婚する事はできなかった。もし彼女が、正当な手順で結婚し子供をもうける事となつていれば、夢で天使に子供の誕生を告げられても驚く事はなかった。普通の女の子なら息子ができると夢で告げられても、普通に結婚すれば子供はできるものとして驚く事などはない。マリアの福音書では、独身の誓いをたてた事が言及されている。マリアの福音書の第 5 章に、寺院に居住する全ての処女達で 14 才の年令に達した者達は、高僧が、自分の家に帰宅する様にとの一般命令を出した際、神の処女であるマリア以外は全員従つたが、マリアだけは、自分自身と自分の両親がマリアを神に委ねたのであるから、そして自分も神に処女でいる事を誓つたのでその命には従えないと答えた。又その処女の誓いは、マリアが絶対に守り通すと決心した誓いであつた。(マリアの福音書、5: 4、5、6) 結果的にヨゼフと結婚した事は、マリア自身の願いと誓いに反する事であつたが、子供がいるとわかつた為、そういった状況から余儀なく為されたものである。聖職者達はスキャンダルをさける為に結婚の手配をしなければならなかつたのである。又、福音書からは何故、ヨゼフに白羽の矢がたつたかは明らかではなく、彼は当然の事ながら結婚した時にはマリアの懐妊を知らされていなかった。(マタイ聖福音書 1: 18、19) 多分、誓いを破る事が正当化できる、もっともらしい理由をつけたのであろう。イエスの誕生についての詳細は、19 章 19 節-27 節を参照する事。

注 52 「イスラエルの子らへの使徒」という言葉は、イエスの使命がイスラエルの民(国)に限定されていた事を示している。彼は全世界に向けられた使者ではなかつたのである。(マタイ聖福音書 10: 5-6; 15: 24; 19: 28、使徒行伝 3: 25、26; 13: 46、ルカ聖福音書 19: 10; 22: 28-30)

注 53 「粘土」とは、比喩的に色々な形のとれる粘土の様に、あらゆる善い形に造られるのに適した従順な本性を有している人との意味を表わす。

注 54 暗喩として、丁度アサド(文字通りの意味は獅子)が勇者に、又ダーバが地をほう、うじ虫の様に取るに足らない人間を表わす様に、この語は、精神的な高みに飛翔する、精神的に高貴な人を指す。(34: 15)

ん。また我は盲人や（注55）癩病人を癒やし、（注56）アッラーのお許しにより死者を生き返らさん。（注57）また我は、お前たちが何を食し、何を家に蓄えるべきかを告げん。（注58）お前たち信徒ならば、げにその中にお前たちへの神兆あり。

الْأَكْمَةَ وَالْأَبْرَصَ وَأَنِّي أَنُوفِي بِإِذْنِ اللَّهِ وَ
أُنْشِئُكُمْ مِمَّا تَأْكُلُونَ وَمَا تَدَّجِرُونَ فِي بُيُوتِكُمْ
إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَةً لِّكُمْ إِن كُنتُمْ مُّؤْمِنِينَ ﴿٥٨﴾

51. また我は、以前に降されたる（注59）律法を確証し、お前たちに禁じられているもの

وَمُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيَّ مِنَ التَّوْرَةِ وَلِإِخْلَافِ

注55 ここでの「盲人」とは、夜、目のみえない者、生まれつきの盲人、後になって目のみえなくなった者、そして理解したり考えたりする力を奪われた者を意味する。

注56 「我は癒やす」とは、'私は、その人がその人を患らわしていた病氣或いは欠陥から生じる社会的束縛から解放された事を宣言する'の意味である。

注57 イエスが鳥を創造したという一般にあまりに知られていない奇跡についての記載は聖書にはみられない。鳥の創造などという、今までどの預言者も為しえなかった事を、もし本当にイエスがしたのであれば、それを記載しないという理由はどこにもなく、その奇跡を述べる事は、イエスを他のいかなる預言者よりも卓越した地位におき、後の彼の信奉者達が、彼に奉った例の神性を主張する良い根拠となるはずである。めくらとライ病の人々をなおしたという事について、聖書から判るのは、ある種の病氣を患う人々は（例、ライ病）イスラエル人の間では不潔であると考えられ、他の人間との社会的接触を禁じられていたという事である。'私は彼らはいえた者である事を宣言する'という表現は、上記の様な悪疾に悩む人々が、彼らのおかれていた法律上の或いは社会的に不利、不都合さをイエスに取り除いてもらった事を意味する。或いはイエスは常にこういった疾病患者を、直していたと考えられる。神の預言者達は精神的な医者であり、心がやみとなった者の目をひらき、精神的に聞く耳を持たぬ者に説き、心が死んでしまった者達に命をふきこむのである（マタイ聖福音書13：15）。この場合にはマクマ（盲人）とは、信仰の灯はもっていても、決心が弱く、試練をもちこたえられない者を意味している。そういう人は、日中は物がみえ、即ち、何の試練もなく信仰の太陽が、かげりなく照らしている間はの意味であるが、しかし一旦、試練があつたり犠牲をはらわねばならない夜になると、精神的な目標を失いぼう然と立ちつくすのである（2：21を参照）。アブラス（ライ病）という語も同様に、精神的意味に於て、健康な皮ふのところどころに病氣の皮ふが点在する信仰の不完全な者を意味する所となる。'死者をよみがえらせる'という文は、イエスが本当に死人を生き返らせた事を意味している訳ではない。実際に死んだ者がこの世に生き返る事などないし、そういう信仰はクルアーンの全ての教えに真向から反対するものである。（2：29；23：100、101；21：96；39：59、60；40：12；45：27）自分達の信奉者の生命（人生）に、神の使者達がもたらす、目をみはる様な、道徳的変革は、精神的言葉の用語法からすると、'死する者に息吹をあたえる'と名付けられるべきもののなのである。

注58 この全文は、イエスがその弟子達に、何を食べるべきか、即ち、肉体の欲求にみあうには、何を身体にたくわえるべきか、そして天に心の宝として、何を貯えるべきか、語った事を意味している。言い換えれば、自分達の手にする所得は正直に法律になつて獲得し、自分達の貯えは神の御心になつて使い、明日の事は神に委ね、何も考えない様にする様にと、イエスは教えたのである。（マタイ聖福音書6：25、26）

注59 イエスはトーラに述べられている、イエス以前の預言者達の預言の成就として到来したのであったが、モーゼの後継者という意味からみれば、何の戒律も示さなかった。彼自身、自分の権能の限界を承知していたのである。（マタイ聖福音書5：17、18）

のうちいくつかを許可すべく来たり。(注 60) 我はお前たちに主よりの奇跡を携えて来たり。さればお前たち、アッラーを畏れかしこみ、我に従え。

لَكُمْ بَعْضَ الَّذِي حَرَّمَ عَلَيْكُمْ وَجِئْتُكُمْ بِآيَةٍ
مِّن رَّبِّكُمْ فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُوا ⑥٠

52. げにアッラーは我が主なり。またお前たちの主なり。されば彼を崇め奉れ。これぞ正しい道なり』

إِنَّ اللَّهَ رَبِّي وَرَبُّكُمْ فَأَعْبُدُوهُ هَذَا صِرَاطٌ
مُّسْتَقِيمٌ ⑥١

53. イエスは彼等の信ぜざるを知りて、云えり、「アッラーの道において、誰が我が援助者たらん？」と。弟子たちは答えて、云えり、「我等はアッラーの援助者なり。我等はアッラーを信ず。なにとぞ我等が忠順なることを証言されよ。

فَلَمَّا أَحَسَّ عِيسَى مِنْهُمُ الْكُفْرَ قَالَ مَنْ أَنْصَارِي
إِلَى اللَّهِ قَالَ الْحَوَارِيُّونَ نَحْنُ أَنْصَارُ اللَّهِ أَمَنَّا
بِاللَّهِ وَاشْهَدْ بِأَنَّا مُسْلِمُونَ ⑥٢

54. 主よ、我等は汝が降し賜わりたるものを信じ、この使徒に従う。さればなにとぞ我等を証言者たちの列に書き加え給え」と。

رَبَّنَا آمَنَّا بِمَا أَنْزَلْتَ وَاتَّبَعْنَا الرَّسُولَ فَاكْتُبْنَا
مَعَ الشَّاهِدِينَ ⑥٣

55. イエスに仇なす彼等は策謀せり。(注 61) アッラーも策謀せり。アッラーこそは最良の策謀者なり。

وَمَكْرُوا وَمَكَرَ اللَّهُ وَاللَّهُ خَيْرُ الْمَكْرِينَ ⑥٤

第六項

56. アッラーがかく云える時を思え。「イエスよ、わしは汝を死に至らしめ(注 62)、わしが許に挙げ、不信心者の罪から汝を清めん。

إِذْ قَالَ اللَّهُ لِعِيسَى إِنِّي مُتَوَفِّيكَ وَرَافِعُكَ إِلَيَّ
وَمُطَهِّرُكَ مِنَ الَّذِينَ كَفَرُوا وَجَاعِلُ الَّذِينَ

注 60 この表現はモーゼの律法を何ら変更したり改訂したりする事を意味しているものではなく、ユダヤ人達自身が、それが原因で違法となってしまうような事柄を指しているだけである(4:161; 43:64)。これら二つの節では、ユダヤ人達の中でも、合法性やある種の事項に関しては意見が分かれていた事と、ユダヤ人は不正や違反をする事で、神の祝福を失ってしまった事がわかる。このように、イエスはユダヤ人達が、どんな事柄が原因で正しい道を踏み外してしまったのかを決める裁き手として到来し、彼に従いさえすれば、取り上げられてしまった神の恵みを取り戻す事ができる事を告げに来たのである。

注 61 ユダヤ人達はイエスが十字架上で、呪われた死を迎える様な計画をもくろんでいたが、(申命記 21:24) 神の御計画はイエスをその死から救う事であった。イエスは十字架上で死なず、生きたまま降ろされ、はりつけの場所から速く離れたカシミールで天寿を全うしたから、ユダヤ人の計画は破れ、神の御計画通りとなったのである。

注 62 高名なアラブの言語学者であるザマクシャリは、「モタワフィーカ(ここでは「死に至らしめ」)とは、我、汝を人の手にかかる死より守り、汝に定められた寿命を約束し、人の手にかかるのではなく天寿を全うさせるものである。」との解釈を下している。実際、アラビア語の辞書編集者達は、おしなべて、タワッフアとい

また汝に従いし人々を復活の日まで、不信心者の上に置くべし。然る後お前たちはわしの許に帰り(注63)、わしはお前たちが争いたることについて裁決を下すべし。

اَسْبَعُوكَ فَوْقَ الَّذِينَ كَفَرُوا إِلَى يَوْمِ الْقِيَامَةِ ثُمَّ إِلَىٰ مَرْجِعِكُمْ فَأَحْكُم بَيْنَكُمْ فِي مَا كُنْتُمْ فِيهِ تَخْتَلِفُونَ ﴿٥٧﴾

57. 不信心者どもをわしは、この世でもまた次の世でも、厳しい刑で処罰せん。而して彼等は如何なる助け手も得ざるべし。

فَأَمَّا الَّذِينَ كَفَرُوا فَأَعِدُّ لَهُمْ عَذَابًا شَدِيدًا فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ وَمَا لَهُمْ مِنْ نَاصِرِينَ ﴿٥٨﴾

58. されど信じて善行を積む者には、アッラーは存分な報奨を賜わん。アッラーは不義な者どもを好まず」

وَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ فَيُوَفِّيهِمْ أُجُورَهُمْ وَاللَّهُ لَا يَجِبُ الظَّالِمِينَ ﴿٥٩﴾

59. 以上が、われらが汝に物語る神兆にして、且つ知恵に満ちた警告なり。

ذَٰلِكَ نَتْلُوهُ عَلَيْكَ مِنَ الْآيَاتِ وَالذِّكْرِ الْحَكِيمِ ﴿٦٠﴾

60. げにイエスは、アッラーから見れば、アダムと似たり。(注64)アッラーはアダムを泥土で創り、(注65)之に「在れ」といいたれば、アダムは存しけり。

إِنَّ مَثَلَ عِيسَىٰ عِنْدَ اللَّهِ كَمَثَلِ آدَمَ خَلَقَهُ مِنْ تُرَابٍ ثُمَّ قَالَ لَهُ كُنْ فَيَكُونُ ﴿٦١﴾

う語が前述の様な形態で使われた場合には、それ以外の解釈はなく、いかなるアラビア語の文字にも他の意味で使われた例は一つもないという点で、意見が一致している。この言葉は、クルアーン中で、25ヶ所の、異なった箇所が使われ、23の箇所、こぞって、死する時に魂を取りさるとの意味となっている。ただ二箇所、眠りにつく時魂を取り去るとの意味で使われているが、その場合には、夜又は眠りという語が付け加えられている。(6:61; 39:43) イエスが死したという事実を否定すべくもない。そして聖なる預言者は、次の様に言ったと伝えられている。“もし、モーゼとイエスが、今、生存しているのであれば、私に従わざるをえなかったであろう。”と(カシール)。聖なる預言者は、イエスの年令を10才であると確信している(ウンマル)。又、クルアーンでは、30にも及ぶ節で、イエスの肉体が昇天し、天上で生きているという不条理な信仰は、完全に粉碎している。

注63 ラーフィオカ・エレイヤ(ここでは「わしのもとへ帰る」)はクルアーン中ではその人の地位をあげ、重んじるという意で使われている。(24:37及び35:11) イエスが召され云々と述べられているのは、イエスが、十字架上で呪われて死んだというユダヤ人の間違った主張に応じての返答である。

注64 アダムとは、もともと、一般的にアダムの息子達である人間を代表するものである。イエスはこの様に、ちりから創られた、その他の死すべき者と同じであると宣せられ、彼についての神性は存在しないものとなった。しかし、「アダム」という言葉が、人間の祖先を表わすとすれば、この節は、父親なくして誕生したという意味での、イエスとアダムの相似性を指摘していると考えられる。この場合、イエスには母があったが、そこまで完璧に考える必要はなく、その事実が二人の類似性に影響を及ぼすものではない。

注65 他の箇所では、人は粘土から創られたと述べられている。‘ちり’と‘粘土’を使う際の違いは、‘ちり’という語を使うと、天啓という概念(天の水)が暗示されないが、‘粘土’という言葉からは表明できるという点にある。

61. こは汝の主よりの真理なり、されば汝、疑う徒輩の仲間となるなかれ。

الْحَقُّ مِنْ رَبِّكَ فَلَا تَكُنْ مِنَ الْمُنْذِرِينَ ①

62. 知識が汝に降^{くだ}されたる後、まだ汝にイエスに関する^{かん}ことで論駁^{ろんばく}する者あらば、云え、「我等の息子たちとお前たちの息子たち、我等の妻たちとお前たちの妻たち、我等の集団とお前たちの集団を召集し、熱烈に祈禱^{きとう}し、アッラーの呪い^{のろい}が嘘つきどもの上に降らんことを求めようではないか」と。

فَمَنْ حَاجَّكَ فِيهِ مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَكَ مِنَ الْعِلْمِ
فَقُلْ تَعَالَوْا نَدْعُ أَبْنَاءَنَا وَابْنَاءَكُمْ وَنِسَاءَنَا وَنِسَاءَكُمْ
وَأَنْفُسَنَا وَأَنْفُسَكُمْ ثُمَّ نَبْتَهِلْ فَنَجْعَلْ
لِنَفْسٍ اللَّهُ عَلَى الْكَافِرِينَ ②

(注 66)

63. こは間違いなく真実の話なり。アッラーの外に神なし。げにアッラーこそは偉大にして、賢哲にまします。

إِنَّ هَذَا لَهُوَ الْقَصَصُ الْحَقُّ وَمَا مِنْ إِلَهٍ إِلَّا اللَّهُ
وَإِنَّ اللَّهَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ③

64. されどもし彼等背を向けなば、忘れまいぞ、アッラーは離間者を熟知し給う。

فَإِنْ تَوَلَّوْا فَإِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ بِالْمُنْفِسِينَ ④

第七項

65. 云え、「経典の民よ、我等とお前たちの間にある共通の言葉のところへ来れ。すなわち、我等はアッラー以外何ものも崇拝せず、アッラーに何ものも配せず、また我等の何人^{なんびと}といえども、アッラー以外のものを主と崇めまつることなし」と。されどもし彼等背を向けなば、云え、「我等が神に帰依したることを証言せよ」と。(注 67)

قُلْ يَاهْلَ الْكِتَابِ تَعَالَوْا إِلَى كَلِمَةٍ سَوَاءٍ بَيْنَنَا وَبَيْنَكُمْ
أَلَّا نَعْبُدَ إِلَّا اللَّهَ وَلَا نُشْرِكَ بِهِ شَيْئًا وَلَا يَتَّخِذَ بَعْضُنَا
بَعْضًا أَرْبَابًا مِنْ دُونِ اللَّهِ فَإِنْ تَوَلَّوْا فَقُولُوا اشْهَدُوا
بِأَنَّا مُسْلِمُونَ ⑤

注 66 この章で論じられているキリスト教の教義に関する検討は、この節が最後となる。ここで言及されているのは、60 名から成りアル・アーキブとして知られている、主任のアブドゥアル・マシーが統轄するナジラーンからやってきたキリスト教徒代表団の事である。彼らはモスクで聖なる預言者と会い、いわゆるイエスの神性について、しばらくの間、討論が続けられた。問題点が十分に論ぜられ、而る後にも代表団はその間違った教義を主張してゆずらぬ為、現節に述べられている神の命に従い、聖なる預言者は最後の手段として、ムバハラとして知られている、一種の、祈りの戦いに代表団を誘う事とした。ムバハラとは、間違った信仰を持っている者の上に神の呪いを呼ばせる祈りである。しかしキリスト教徒達は自分達の土台となるべきものに自信がもてなかったため、この挑戦を受けず、はからずも、間接的に自分達の教義の間違いを認めるところとなった。その時の事であるが、聖なる預言者は、キリスト教徒達独自の方法で、モスクで祈りをささげる事を許可した。彼らは東を向いて礼拝した。これは全ての宗教の歴史に於て比類のない、まことに寛容に満ちた宗教的行為であった。

注 67 この節は、一方にイスラム、もう一方に、キリスト教とユダヤ教をおし頂いての、両者間の妥協の根拠を提供しているものであると一部では間違っているとらえられている。ここでは、もしこれらの宗教も、神の唯一性の教義を教え、説きひろめるのであれば、比較的、重要性のないと考えられるイスラムの教えの部分は、

66. 經典の民よ、お前たち何故にアブラハムのことで論争するのか、律法と福音とは彼以後に啓示されたるに非ざるか？ お前たち、それが解らざるか？

يَا أَهْلَ الْكِتَابِ لِمَ تَحْجُونَ فِي إِبْرَاهِيمَ وَمَا أُنْزِلَتْ
الْقُرْآنُ وَالْإِنْجِيلُ إِلَّا مِنْ بَعْدِهِ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ﴿٦٦﴾

67. 兄よ！ お前たちは知識を有せる事柄について論争してきた者どもなるぞ。それがいま何故、皆目知識を有せざる事柄について論争するか？ アッラーは御存知なれど、知らぬはお前たちなり。(注 68)

هَاتُمْتُمْ هَؤُلَاءِ حَاجَجُمْ فِيمَا لَكُمْ بِهِ عِلْمٌ فَلِمَ
تُحَاجُّونَ فِيمَا لَيْسَ لَكُمْ بِهِ عِلْمٌ وَاللَّهُ يَعْلَمُ وَ
أَنْتُمْ لَا تَعْقِلُونَ ﴿٦٧﴾

68. アブラハムはユダヤ教徒に非ず、またキリスト教徒にも非ざりき。彼は常に神におすがりして、従順にして、多神教徒に非ざりき。

مَا كَانَ إِبْرَاهِيمَ يَهُودِيًّا وَلَا نَصْرَانِيًّا وَلَكِنْ كَانَ
حَنِيفًا مُسْلِمًا وَمَا كَانَ مِنَ الْمُشْرِكِينَ ﴿٦٨﴾

69. げにアブラハムに最も近い人々とは、彼の追従者たち並びにこの預言者とその信徒たちなり。而してアッラーは、信徒たちの愛護者にまします。

إِنَّ أَوَّلَى الْثَّائِسِ بِإِبْرَاهِيمَ لِلَّذِينَ اتَّبَعُوهُ وَهَذَا
السَّبِيلُ وَالَّذِينَ آمَنُوا وَاللَّهُ وَلِيُّ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٦٩﴾

うちずておいてもいいのではないかという事が、論じられているのである。信仰という事柄に於て、すぐこの前の節ではその間違った信念の為、非難をうけ、その間違った信仰への呪いが落ちるのを見きわめる為の祈りの戦いの挑戦を強制的に受けた人々に対し、妥協を認めるという考えが、勧められているなどとは考えられない事である。聖なる預言者は、ヘラクリウス王に伝道の信書を書いていった際に、この節そのものを使って、ヘラクリウス王に強くイスラムを受け入れるよう勧め、もしそうしなければ、神の懲罰があると警告したのである(ブハリ)。この事は、単なる預言者によれば、ただ単に神の唯一性を信じるというだけでは、ヘラクリウス王を神の懲罰から救う事はできないという事を明らかに示している。実際、この節を理解すれば、ユダヤ人やキリスト教徒が、イスラムの真実に関して正しい結論に到達する事のできる、簡単に単純な方法に気がつくはずなのである。キリスト教徒は、神の唯一性を信じると明言しながら、イエスの神性を固く信じており、ユダヤ人はユダヤ人で、厳密な一神教信奉者であるにもかかわらず、聖職者や神学者に盲目的に忠誠を誓い、彼らを実質上、神と同格の位置においてしまっている。この節では、両者に、神の寛大さを信仰した信仰の原点に戻り、イスラム(絶対の帰依)を受け入れる障害となっている間違った神格を礼拝する事をやめるようにと勧告しているのである。この様に、これらの信仰といたずらに妥協する代りに、ここでは、それらの信仰の信奉者達に神の寛大さの教理に注目する事により、絶対の帰依であるイスラムを受け入れるよう、すすめているのである。そして神の寛大さの教義とは、少なくともその外郭に於て、全てに共通する基本原理(教理)であり、更に歩みよる為の基本的接点となるものである。又、ここで、ブハリや、その他のイスラム教徒の伝統支持者が発表している、聖なる預言者が、ヘラクリウス王や、その他の何名かの、エジプト王のマコーキスも含めた支配者達へ送った、この節の言葉に含まれた、イスラムに誘う内容の手紙が最近発見され、ブハリが、引用したのと全く同じ言葉が述べられている事が判った事を併せて特記しておくべきであろう。この事実からも、その件に関しての、又、その他の認められているハディースの業績についても、ブハリの確実性が証明されるのである。

注 68 述べられている内容は、前述の節のアブラハムに関するユダヤ人とキリスト教徒の主張或いは、クルアーンでの教えのいずれかを指す。

70. 經典の民の或る一派は、お前たちを邪道に誘惑せんとす。されど彼等は、己れ自身を惑わすのみ。しかも彼等はそれを悟らず。

(注 69)

وَدَّتْ طَائِفَةٌ مِّنْ أَهْلِ الْكِتَابِ لَوْ يُضِلُّوكُمْ وَمَا يُضِلُّونَ إِلَّا أَنْفُسَهُمْ وَمَا يَشْعُرُونَ ﴿٦٩﴾

71. 經典の民よ、お前たちはその証人でありながら、何故アッラーの神兆を否認するのか? (注 70)

يَا أَهْلَ الْكِتَابِ لِمَ تَكْفُرُونَ بِآيَاتِ اللَّهِ وَأَنْتُمْ تَشْهَدُونَ ﴿٧٠﴾

72. 經典の民よ、お前たち何故真理と虚偽とを混同し、知りつつ真理を隠蔽するのか? (注 71)

يَا أَهْلَ الْكِتَابِ لِمَ تَلْبِسُونَ الْحَقَّ بِالْبَاطِلِ وَتَكْفُرُونَ بِالْحَقِّ وَأَنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٧١﴾

第八項

73. 經典の民の或る一派は云う、「黎明に信者に啓示されたものを信じ、夕べに之を信ぜず。然らば恐らく、彼等踵を返さん。(注 72)

وَقَالَتْ طَائِفَةٌ مِّنْ أَهْلِ الْكِتَابِ آمَنُوا بِالَّذِي أُنْزِلَ عَلَى الَّذِينَ آمَنُوا وَجَهِ النَّهَارِ وَكُفُّوا آخِرَهُ نَعْمَكُمْ يُبِغِضُونَ ﴿٧٢﴾

74. 而してお前たちの宗教を奉ずる者の外は何人をも信ずるなかれ」と。云え、「真の嚮導はアッラーの嚮導なり。お前たちに賜わりたるものと同じ如きものが、他にも賜わるべし」と、「或いはその人々が主の

وَلَا تُؤْمِنُوا إِلَّا لِمَن تَبِعَ دِينَكُمْ قُلْ إِنَّ الْهُدَىٰ هُدَىٰ اللَّهِ أَن يَأْتِيَنَّ أَحَدٌ مِّثْلَ مَا أُوتِيتُمْ أَوْ

注 69 イスラムの信仰の簡明さ、率直さと完成度が、經典を持つ人々の心に抵抗しがたい程、イスラムに傾く心を湧き立たせるのであるが、彼らの道徳の高みに対し、嫉妬心を持ち、妙な心理が働き、評価していても従えずに逆に、イスラム教徒が自分達の方に傾き、自分達の様にルーズになる事を望み始めるのである。

注 70 神の啓示を認めぬという事は、誰がそうしても極悪非道な事であるが、天啓を己のあたりにしながら認めぬ者は、尚さら極悪である。

注 71 經典の民は自分達の聖書中に聖なる預言者の事が啓示されている事から、簡単にモハムマド(彼に神の御恵みと平安あれ)が、約束された救世主である事が判るのに、敵意と嫉妬心から、彼を認めようとせず、純粋な紛れもない真実を受け入れずに虚偽と真実をごちゃまぜにし続けるのである。

注 72 ユダヤ人は異教徒のアラブ人からは宗教的知識故に高く評価されていた。ユダヤ人達はこの事を不当に利用し、イスラム教徒達を信仰から遠ざける方法を考えていた。即ち、外面的にはイスラムを許容し、日の始めには信じ、日の終りには背信の態度をとる事で、無知文盲のアラブ人に、あれ程教養深い人達が、こんなにも早くイスラムの宗教から離れるという事は、イスラムには何か重大な欠陥があるに違いないと思わせようとしてである。しかし、これらの愚かな人々は、聖なる預言者を取り巻く同胞者の何ものにも打ち砕かれな信仰のきずなを完全に間違って評価してしまったのである。

御前^{みまへ}で、お前たちと論争するやも知れず」
と。(注 73)云え、「すべての賜物はアッラー
の掌中^{てのちゅう}にあり。アッラーは之を御心^{みこころ}のまま
に誰にでも与え給う。アッラーは慈悲深く、
すべてに通曉し給う。(注 74)

75. アッラーはその慈悲を垂れるために、御心
のままに誰れをも選ぶ。アッラーは素晴らしい
施恩の主なり」と。

76. 經典の民の中には、たとい汝が財宝をも託
するとも、之を汝に返還する者あり。かと思
えば、わずかにディナール^{これ}を預けても、
催促せずば、之を汝に返さざる者あり。そ
は彼等が、「我等は無知なる者に対して、(注
75) 何をしてもしめられる筋なし」と考え
るが故なり。彼等は知りつつアッラーに対
して虚偽を述べるなり。

77. 否、己れの約束を履行し、アッラーを畏れ
る者——げにアッラーは神を畏れる者を愛
し給う。

78. アッラーとの契約や己れへの誓いを売っ
て、わずかな利益^{あがな}を購う者、彼等は来世に

يُجَازِئُكُمْ عِنْدَ رَبِّكُمْ قُلْ إِنَّ الْفَضْلَ بِيَدِ اللَّهِ
يُؤْتِيهِ مَنْ يَشَاءُ وَاللَّهُ وَاسِعٌ عَلِيمٌ ﴿٧٣﴾

يَخْتَصُ بِرَحْمَتِهِ مَنْ يَشَاءُ وَاللَّهُ ذُو الْفَضْلِ
الْعَظِيمِ ﴿٧٥﴾

وَمِنْ أَهْلِ الْكِتَابِ مَنْ إِنْ تَأْمَنَهُ بِقِطَاعٍ يُودِعُ
إِلَيْكَ وَمِنْهُمْ مَنْ إِنْ تَأْمَنَهُ بِدِينَارٍ لَا يُؤَدِّيهِ
إِلَيْكَ إِلَّا مَا دُمْتُ عَلَيْهِ فَاكْبَهُ ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ قَالُوا
لَيْسَ عَلَيْنَا فِي الْأُمْنِ سَبِيلٌ وَيَقُولُونَ عَلَى اللَّهِ
الْكَذِبُ وَهُمْ يَعْلَمُونَ ﴿٧٦﴾

بَلَىٰ مَنْ أَوْفَىٰ بِعَهْدِهِ وَاتَّقَىٰ فَإِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ
الْمُتَّقِينَ ﴿٧٧﴾

إِنَّ الدِّينَ يَشْتَرُونَ بِعَهْدِ اللَّهِ وَأَيْمَانِهِمْ ثَمَنًا

注 73 もし我々がこういう見解を持つのが間違っているのなら、彼らこそ、この誤解を、何らかの神につい
ての議論で論破すべきなのである。

注 74 (1)そして、お前達の宗教に従う者以外は誰をも信じるな」という文は前節の結びの文からの続きであ
る。そしてその後、導きとは神のお導きである。お前達が授かったと同様のものを他の誰かが授かって」とい
う言葉で始まる文がそう入され、然る後に、ユダヤ人の「その人が主の御もとでお前達と言ひ争うかもしれない」
との文が続き、最後に「全て広にして云々」という神の戒律(律法)で文がしめくられるのである。こういう形
式はクルアーン独得のもので、心理的な効果を生み出す為の工夫である。(2)他の解釈では、「真に導きとは神の
お導きである」と、この場合訳される言葉のみを、そう人句と考え、以下の「お前達が授かったのと同様の……神
のみもとで言ひ争う」のくだりをユダヤ人の発言ととらえる解釈もある。

(3)第3の解釈では、「お前達の宗教に従う者以外は誰をも信じるな」のみを、ユダヤ人の発言と考え、それに続く
発言は全て神の御言葉と考えている。

注 75 聖なる預言者の時代には、ユダヤ人の間では、ユダヤ人以外のアラブ人から、財産や所有物を奪って
も、アラブ人は間違った宗教の信者なので、何の罪にもならないという考えが信じられていた。多分、それは
利子^{リビ}のやりとりに関し、ユダヤ人とユダヤ人以外では、不快な程の区別をするユダヤの高利貸の法にその端を
発していると思われる。(出エジプト記 22: 25、レビ記 25: 36、申命記 23: 20)

おいて一分も得ざるべし。アッラーは彼等に物云わず、復活の日に彼等を顧みることせず、また浄めざるべし。(注76)而して彼等には必ず厳しい罰あるべし。

قَلِيلًا أُولَٰئِكَ لَا خَلَاقَ لَهُمْ فِي الْآخِرَةِ وَلَا يُكْرَمُونَ
اللَّهُ وَلَا يَنْظُرُ إِلَيْهِمْ يَوْمَ الْقِيَمَةِ وَلَا يُزَكِّيهِمْ
وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ⑧

79. 彼等の中には、^{どくしやう}經典を讀誦しているうちに、己れの舌にて經典を歪め、お前たちに經典の中ないものを經典にあるが如く思い込ませんとする一派あり。(注77)彼等はアッラーより降されたるものに非ざるものを、「アッラーより^さ降し賜わりたるものなり」と云う。彼等は承知の上でアッラーに對し奉り嘘を云うなり。

وَأَنَّ مِنْهُمْ لَفَرِيقًا يَلُونِ السِّتْرَ يَكْتُمُونَ
لِتَحْسَبُوهُ مِنَ الْكِتَابِ وَمَا هُوَ مِنَ الذِّبِّ وَيَقُولُونَ
هُوَ مِنْ عِنْدِ اللَّهِ وَمَا هُوَ مِنْ عِنْدِ اللَّهِ وَيَقُولُونَ
عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ وَهُمْ يَعْلَمُونَ ⑨

80. アッラーより經典と、統治權と、預言者の資質とを与えられたる者が、後になって人々に向い、「アッラーではなく、我が僕たれ」と云うが如きは、人間としてあるまじきことなり。むしろ彼は、「主に全く忠実なるべし、お前たちは經典を教え、自らもそれを学ぶが故に」と云うべきなり。(注78)

مَا كَانَ لِبَشَرٍ أَنْ يُؤْتِيَهُ اللَّهُ الْكِتَابَ وَالْحُكْمَ وَ
التَّبَوُّةَ ثُمَّ يَقُولَ لِلنَّاسِ كُونُوا عِبَادًا لِي مِنْ دُونِ
اللَّهِ وَلَكِنْ كُونُوا رَبَّيْنَ بِمَا أَنْتُمْ قَاعِلُونَ الْكِتَابِ
وَبِمَا أَنْتُمْ تُدْرِسُونَ ⑩

81. 彼はまた、諸天使並びに諸預言者を主と崇めよと勧める者に非ず。彼は、お前たちが神に帰依したる後、如何にしてお前たちに再び不信心を勧め得べきか？

وَلَا يَأْمُرُكُمْ أَنْ تُخِذُوا السِّلَاحَ وَالَّذِينَ أَرْبَابَاءُ
أَيَّامُكُمْ بِالْكَفْرِ بَعْدَ إِذْ أَنْتُمْ قَسِرْتُمْ ⑪

注76 神は彼らに親切な言葉もかけられず、彼らの事を慈悲と憐憫の情をもって見まもる事も、彼らを純粹であると御判断なさる事もない。

注77 これは、聖なる預言者の時代にあるユダヤ人達の間で行なわれていた邪悪な行為への隠喩である。彼らはヘブライ語で、聞き手に朗唱されているのは、あたかもトーラであると思わせてしまう様な方法で、文章を朗詠したのである。この節で三回使われている“經典”とは一番最初に使われた部分では“ヘブライ語の文”をそして後二つは、“トーラ”を指している。朗詠された文は、ユダヤ人がそうみせかけた為、“經典”とされている。

注78 「經典を教え、自らも学んで」という文は、神聖且つ高潔な知識を有する者達はおしなべてその知識を人に分け与え、人々を無知なまま暗中摸索させておかないようにするのが義務である事を表わしている。

第九項

82. アッラーが預言者を介して人々と契約を
(注 79) 結び、かく云えることを思い起せ。
「わしはお前たちに經典と知恵を授く。^し而して後に、お前たちの持てる經典を完成すべく一人の使徒がお前たちのところへ来る。(注 80) お前たち彼を信じ、彼を助けよ」
而して更に云えり、「お前たちこれを承諾するか、この件に関してお前たちに課する責任を受諾するか？」と。彼等は答えて、云えり、「我等は受諾す」と。アッラーは云えり、「ならば証人たれ、わしもまたお前たちと共に証人たらん」と。(注 81)

83. さればこの後背を向ける者は、げに彼等は罪人なり。

84. 天に在るもの地に在るもの一切が、好むと好まざるにかかわらず、ことごとくアッラーに服従し、やがて御許へ還るといふに、
彼等はアッラー以外の宗教を求めんとするか？ (注 82)

وَإِذْ أَخَذَ اللَّهُ مِيثَاقَ النَّبِيِّينَ لَمَا آتَيْنَاكُمْ مِنْ كِتَابٍ وَحِكْمَةٍ ثُمَّ جَاءَكُمْ رَسُولٌ مُصَدِّقٌ لِمَا مَعَكُمْ لَتَتُؤْمِنُنَّ بِهِ وَلَتَنْصُرُنَّهُ قَالَ أَأَقْرَرْتُمْ وَأَخَذْتُمْ عَلَىٰ ذَٰلِكُمْ إِصْرِي قَالُوا أَقْرَرْنَا قَالَ فَاشْهَدُوا وَأَنَا مَعَكُمْ مِنَ الشَّاهِدِينَ ﴿٨٢﴾

فَمَنْ تَوَلَّىٰ بَعْدَ ذَٰلِكَ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الْفَاسِقُونَ ﴿٨٣﴾

أَفَغَيْرَ دِينِ اللَّهِ يَبْتَغُونَ وَلَهُ أَسْلَمَ مَنْ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ طَوْعًا وَكَرْهًا وَإِلَيْهِ يُرْجَعُونَ ﴿٨٤﴾

注 79 ミサーク・アル・ナビジーンという表現は、預言者が神と結んだ契約、或いは、神のその預言者を通して人々と結んだ契約を意味している。ここでは後者の意味で使われている。この訳は更に後に続く、「その後に、お前達の持っているものを確認する一人の使徒が現われるであろう」という文章によっても支持される。何故ならば、神の使者が到来するのは預言者達へではなく人々のもだからである。

注 80 ここではムサデイク（確認する）という語は、真実の要求者が偽の者と区別される規準を示す為、使われている。ここでは、この語は「完成する」と翻訳されている。

注 81 この節も、一般的には他の預言者達に、そして特に聖なる預言者にあてはまると考えられる。そしてその両方共正しく、この節は一般的な法則を述べているのであり、預言者の到来とは、彼以前の預言者の特定の預言の成就であり、その預言に於て預言者は、信奉者達に次の預言者が出現する時、彼を受け入れる様にと命ずるのである。もし預言者が丁度イエスその他のイスラエルの預言者達の場合のように、一民族のみに下された經典の書中の預言の成就として出現するならば、その民族のみが、預言者を受け入れ、彼を助けなければならない。しかし聖なる預言者の場合の様に、全ての宗教の經典の書中にその到来が予知されていると、全ての民族が彼を受け入れる事となるのである。聖なる預言者はイスラエルの預言者達のみの預言の成就として到来した訳ではなく、(イザヤ 21:13-15、中命記 18:18、33:2、ヨハネ聖福音書 14:25、26; 16:7-13)、アーリア人の預言者や、仏教徒やゾロアスター教の賢者達も、聖なる預言者の到来を預言していたのである。(ジャフラン・ダサーティール P. 188)

注 82 肉体の世界では人は自然の法則に従わねばならず、人は経験からそうする事が自分に役立つ事を知っている。人間にある程度の自由が許されている精神的事柄に於ても、人がアッラーの戒律と命令に従う事が妥当であり、そうする事で人は神にめでられ恩恵を受ける事となるのである。

85. 云え、「我等はアッラー並びに我等に啓示されたるものを信じ、またアブラハム、イスマイル、イサク、ヤコブ及び諸支族に啓示されたるものを信じ、モーゼとイエスと他の預言者たちに主より降し賜わりたるものを信ず。(注83)我等はこれ等の人々の間に如何なる差別も設けず、(注84)ただ主のみに帰依す」と。

86. イスラーム以外の宗教を求める者は、受入れられざるべし。而して来世では、かかる者は失敗者の仲間たるべし。

87. 一旦信仰を受入れ、しかも使徒の真実なるを証言し、明証が来れる後、再び不信心に戻る徒輩を、アッラーがどうして導き給うや？(注85)アッラーは不義なす者を導き給わず。

88. かかる者どもの受くべき応報は、一斉に彼等に注がれるアッラー並びに諸天使と万民の呪詛なるべし。

89. 彼等は永遠にその中に宿り、罪は軽減せられず、猶予もされざるべし。

90. 但し、悔い改め身を修める者は別なり。げにアッラーは寛大にして、情け深くまします。(注86)

قُلْ أَمَّا بِاللّٰهِ وَمَا أُنزِلَ عَلَيْنَا وَمَا أُنزِلَ عَلَىٰ آبَائِهِمْ
وَأَسْبَاطِهِمْ وَإِسْحَاقَ وَيَعْقُوبَ وَالْأَسْبَاطَ وَمَا
أَوْفَىٰ مُوسَىٰ وَعِيسَىٰ وَالنَّبِيِّينَ مِنْ رَبِّهِمْ لَا أَنْفِرُنَّ
بَيْنَ أَحَدٍ مِنْهُمْ وَنَحْنُ لَهُ مُسْلِمُونَ ﴿٨٥﴾

وَمَنْ يَبْتَغِ غَيْرَ الْإِسْلَامِ دِينًا فَلَنْ يُقْبَلَ مِنْهُ
وَهُوَ فِي الْآخِرَةِ مِنَ الْخَاسِرِينَ ﴿٨٦﴾

كَيْفَ يَهْدِي اللَّهُ قَوْمًا كَفَرُوا بَعْدَ إِيمَانِهِمْ وَ
شَهِدُوا أَنَّ الرَّسُولَ حَقٌّ وَجَاءَهُمُ الْبَيِّنَاتُ وَاللَّهُ
لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ﴿٨٧﴾

أُولَٰئِكَ جَزَاؤُهُمْ أَنَّ عَلَيْهِمْ لَعْنَةَ اللَّهِ وَالْمَلَائِكَةِ
وَالنَّاسِ أَجْمَعِينَ ﴿٨٨﴾

خَالِدِينَ فِيهَا لَا يُخَفَّفُ عَنْهُمْ الْعَذَابُ وَ
لَهُمْ يُنْظَرُونَ ﴿٨٩﴾

إِلَّا الَّذِينَ تَابُوا مِنْ بَعْدِ ذَلِكَ وَأَصْلَحُوا فَإِنَّ
اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٩٠﴾

注83 ‘お前達の宗教に従う者以外、誰をも信じるな’(3:74)という文が示す様に、ユダヤ人は、イスラエル人以外の預言者を決して正しいと信じる事はなかった。

注84 ここでは、色々な預言者の間の地位や格の違いはない事を意味している訳ではないが、この見解は2:251に反している。実際に言わんとしている事は、預言者達の間には、神よりの使者として何ら区別されるものなどないという事である。

注85 確かに、最初は預言者の真実を信じ、彼への信仰を人前で宣言し天啓の証人となりつつも、その後、人を恐れたり世間の思惑を気にして預言者に背く者達は正しい道へ再び導かれるに値するものを全て失う事となる。又この節は、以前の預言者達を信じていたが聖なる預言者に背いた者達を指しているとも考えられる。

注86 ただ過去のあやまちを悔いて、悲しむだけでは神の許しを得られない。その為に必要とされるのは、邪悪な方法を慣しむという正直な約束と他の人々をも改革するという強い決心なのである。

91. 一旦信仰を受入れたる後、再び不信心に戻り、その不信心さを増すのであれば、たとえ悔悟しようとも、受け容れられざるべし。彼等は邪道に陥りたる者どもなり。(注 87)

92. 信仰を拒み、不信心者として死する者は、たとえ大地を埋めつくす程の黄金の身代金を以てしても、受納されざるべし。彼等には必ず酷罰あるべし。彼等には如何なる助け手もなかるべし。

第十項

93. お前たち、己れが愛するものを喜捨するに非ずば、正義を全うするを得ず。お前たちが喜捨するものは、アッラー之を熟知し給う。(注 88)

94. 律法が降された以前には、イスラエルが自ら禁じたるもの以外は、(注 89)すべての食物はイスラエルの(注 90)子孫に許されたりしなり。云え、「お前たちの言葉が真実ならば、律法を持ち来りて、それを読め」と。

95. さればこの後、アッラーに対して虚偽を捏造する者は、不義なす徒輩なり。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا بَعْدَ إِيمَانِهِمْ ثُمَّ انْزَادُوا كُفْرًا
لَنْ نَقْبَلَ تَوْبَتَهُمْ وَأُولَئِكَ هُمُ الظَّالِمُونَ ﴿٩١﴾

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا وَآمَنُوا وَهُمْ كَفَارٌ فَلَنْ نَقْبَلَ
مِنْ أَحَدِهِمْ قَدْلًا الْأَرْضِ ذَهَبًا وَلَوْ اقْتَدَى بِهِ
أُولَئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ وَمَالَهُمْ مِنْ نُصِيرِينَ ﴿٩٢﴾

لَنْ تَنَالُوا الْبِرَّ حَتَّى تُنْفِقُوا مِمَّا تُحِبُّونَ وَمَا
تُنْفِقُوا مِنْ شَيْءٍ فَإِنَّ اللَّهَ بِهِ عَلِيمٌ ﴿٩٣﴾

كُلُّ الطَّعَامِ كَانَ حَلَالًا لِبَنِي إِسْرَءِيلَ إِلَّا مَا حَرَّمَ
إِسْرَءِيلُ عَلَى نَفْسِهِ مِنْ قَبْلِ أَنْ تُنَزَّلَ التَّوْرَةُ
قُلْ فَأَنُوتُوا بِالتَّوْرَةِ فَإِنِّي نَزَّلْتُهَا وَإِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٩٤﴾

فَمَنْ افْتَرَى عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ مِنْ بَعْدِ ذَلِكَ فَأُولَئِكَ
هُمُ الظَّالِمُونَ ﴿٩٥﴾

注 87 背信者の悔後について、3:90にあるように悔後はどういった段階でも受け入れられるということに対し、この節で述べられていることが反しているからといって、いかなる場合にも受け入れられないという事を意味している訳ではない。ここで言及されている人々とは、悔後を公言しておきながら、自分達の生活に、実際の実質的变化を期す事で悔い改めを実行しただけでなく、不信仰の度合を増しさえする者達である。

注 88 全ての公正さの凝縮で、善の最も高い形である真実の信仰を得る為には、人は自分が大事にしている全てを投げうつ覚悟がなくてはならない。公明正大さの極みは、神の為に資財を使うという事によってのみ達成されるのである。高い道德(ビル)は、真の犠牲の精神を吸収する事なしに達成する事などできはしないのである。

注 89 ユダヤ人に禁じられている食物の幾つかはイスラムでは許されている。その内の一つは創世記 32:32に述べられている。ヤコブは座骨神経痛を病んでおり、治療の目的で彼はらくだの肉を食べることを自ら禁じた。これは、彼の個人的な事であったのだが、ユダヤ人は豚の肉を食べる事を禁忌とした。

注 90 イスラエルという名は、夢の中でヤコブに与えられた。(創世記 32:28)

96. 云え、「アッラーは真実を語りたり。されば常に神に従順なりしアブラハムの宗教に従え。アブラハムは多神教徒に非ざりき」と。
(注 91)

قُلْ صَدَقَ اللَّهُ فَاتَّبِعُوا مِلَّةَ إِبْرَاهِيمَ حَنِيفًا وَمَا كَانَ مِنَ الْمُشْرِكِينَ ﴿٩٦﴾

97. 人類のために最初に建立したる聖殿は、バッカ※にあり。そは祝福されたる家にして、万民への嚮導なり。
※メッカの谷。

إِنَّ أَوَّلَ بَيْتٍ وُضِعَ لِلنَّاسِ لَلَّذِي بِبَكَّةَ مُبَارَكًا وَهُدًى لِلْعَالَمِينَ ﴿٩٧﴾

98. その内部には幾多の明白な奇跡あり。たとえば、アブラハムの御立処など。一たびその中に入れば、何人も平安を得るなり。また聖殿へ（注 92）巡礼することは、そこへ行き得るすべての人々に課せられたるアッラーへの義務なり。信ぜざる者をして、げにアッラーが一切から超越して自足し給う御方なることを覚えせしめよ。

فِيهِ آيَاتٌ بَيِّنَاتٌ مِّمَّا فَرَغَ إِبْرَاهِيمَ وَمَنْ دَخَلَهُ كَانَ آمِنًا وَلِلَّهِ عَلَى النَّاسِ حُجُّ الْبَيْتِ مَنِ اسْتَطَاعَ إِلَيْهِ سَبِيلًا وَمَنْ كَفَرَ فَإِنَّ اللَّهَ غَنِيٌّ عَنِ الْعَالَمِينَ ﴿٩٨﴾

99. 云え、「經典の民よ、汝等何故にアッラーの神兆を否認するのか、アッラーはお前たちの所業を照覽するに非ずや？」と。

قُلْ يَٰ أَهْلَ الْكِتَابِ لِمَ تَكْفُرُونَ بِآيَاتِ اللَّهِ ۖ وَاللَّهُ شَهِيدٌ عَلَىٰ مَا تَعْمَلُونَ ﴿٩٩﴾

100. 云え、「經典の民よ、汝等何故にアッラーの道より信徒たちを阻み、アッラーの道を曲んと欲するか、（注 93）お前たちその証人でありながら？ アッラーはお前たちの所業を看過せず」と。

قُلْ يَٰ أَهْلَ الْكِتَابِ لِمَ تَصُدُّونَ عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ مَنْ آمَنَ تَبِغُونَهَا عِوَجًا وَأَنْتُمْ شُهَدَاءُ ۚ وَمَا اللَّهُ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿١٠٠﴾

注 91 アブラハムが常に神に従順であったと言う事で、彼が、イスラエル人がした様に、自分自身の意志での特定の食物を食べる事を禁止する様な事はしなかった事を示唆している。要するに、この件については、イスラムはイスラエル人と異なり、神の預言者達の方法や実例、特にアブラハムの例に、逆らう事をしないという事を言わんとしているのである。

注 92 カーバに好意的な歴史的証拠に言及した後にクルアーンは、何故カーバが、いつの場合にも、キブラ、すなわち、神の宗教の中心とされるに値するかを示す三つの理由を提示している。(1)偉大な長（おさ）であるアブラハムがここで祈りをささげたり、(2)カーバは平和と安心を与え、(3)色々な国の人々や、異なった民族が巡礼におもむく中心として未来永劫もとどまらであろうから。

注 93 “お前達はイスラムに不正が生じるのを期待する。” 或いは、“お前達はイスラムの教義を邪道に陥いれたがっている。” を意味している。

101. 汝等信徒たちよ、お前たちもし經典を授かりたる或る集団に従わば、彼等は信徒となりたるお前たちを、再び不信者たらしむべし。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِنْ تَطِيعُوا فَرِيقًا مِنَ الَّذِينَ
أَوْثُوا الْكِتَابَ يَرُدُّوكُمْ بَعْدَ إِيمَانِكُمْ كُفْرِينَ ⑩

102. アッラーの神兆^{しし}がお前たちに読誦せられ、且つお前たちの中に使徒が居るというのに、お前たち如何にして信仰を棄て得るか？ アッラーに堅く縋る者は、(注94)必ず正しい道に導かる。

وَكَيْفَ تَكْفُرُونَ وَأَنْتُمْ تُتْلَىٰ عَلَيْكُمْ آيَاتُ اللَّهِ وَ
فِيكُمْ رَسُولُهُ ۚ وَمَنْ يَعْتَصِمْ بِاللَّهِ فَقَدْ هُدِيَ
إِلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ⑪

第十一項

103. 汝等信徒たちよ、相応しき畏敬の念を以てアッラーを畏れ敬え。帰依者にならずして、死ぬなかれ。(注95)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللَّهَ حَتَّى تَقْتَرُوا وَلَا
تَمُوتُوا إِلَّا وَأَنْتُمْ مُسْلِمُونَ ⑫

104. 皆アッラーの綱に堅く縋り、分裂するなかれ。お前たちが互に仇敵なりし時、お前たちに賜えるアッラーの恩寵を思い起せ。アッラーはお前たちの心を愛情で結ぶ。(注96) お前たちはその恩恵によって兄弟となれるなり。またお前たちが業火^{ごうか}の坑^{あな}の縁に(注97)ありしを、アッラーがそこより救いたり。お前たちを導かんがために、アッラーはかくの如くその掟を明示し給う。

وَاعْتَصِمُوا بِحَبْلِ اللَّهِ جَمِيعًا وَلَا تَفَرَّقُوا ۚ
وَأَذْكُرُوا نِعْمَتَ اللَّهِ عَلَيْكُمْ إِذْ كُنْتُمْ أَعْدَاءً
فَأَلَّفَ بَيْنَ قُلُوبِكُمْ فَأَصْبَحْتُمْ بِيَعْمَةٍ إِخْوَانًا
وَكُنْتُمْ عَلَىٰ شَفَا حُفْرَةٍ مِنَ النَّارِ فَأَنْقَذَكُمْ
مِنْهَا ۚ كَذَلِكَ يُبَيِّنُ اللَّهُ لَكُمْ آيَاتِهِ لَعَلَّكُمْ
تَهْتَدُونَ ⑬

105. またお前たちの中に、善行に誘い、公正を勧め、邪惡を禁ずる集団をあらしめよ。

وَلَنُكِّنْ مِنْكُمْ أُمَّةً يَدْعُونَ إِلَى الْخَيْرِ وَيَأْمُرُونَ
بِالْمَعْرُوفِ وَيَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ ۚ أُولَٰئِكَ هُمُ

注94 (1)神の戒律に従って行動する事で自分自身を罪を犯さぬ様保つ者。(2)アッラーとの関係を確立し、かたくアッラーに忠実なる者。

注95 死がいつ訪れるかわからないので、人は、いつも持続的にその状態になれば、神に身を委ねた状態で死ぬとは限らない。故に、この表現は人は常に神に従順でなければならない事を教えている。

注96 聖なる預言者が出現する以前のアラブの分裂は他に類をみないほどひどかった。又、一方、彼らの偉大な師の模範と高深な教えにより、結束した、アラブ人の同胞愛のきずなの強さは他に匹敵するものが人間の歴史にない程固かった。

注97 “業火の穴のふち”とは、アラブ人達がいつもしていた、人間の命を多大に失なわせた、破壊的な戦いの事を意味している。

かかる人々は繁栄すべし。(注 98)

السُّفُحُونَ ﴿٩٨﴾

106. 明証来れる後、分裂して互いに論争するが如き者どもとなるなかれ。彼等には重刑あるべし。(注 99)

وَلَا تَكُونُوا كَالَّذِينَ تَفَرَّقُوا وَاخْتَلَفُوا مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَهُمُ الْبَيِّنَاتُ وَأُولَٰئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿٩٩﴾

107. その日、或る者の顔は白く、また或る者はその顔黒くならん。(注 100) その顔黒くなる者は云われん。「お前たち一旦信じておきながら、信仰を翻したな？ されば、不信心故の懲罰を味ええ」と。

يَوْمَ تَبْيَضُّ وُجُوهٌ وَتَسْوَدُّ وُجُوهٌ فَأَمَّا الَّذِينَ اسْوَدَّتْ وُجُوهُهُمْ أَكْفَرْتُمْ بَعْدَ إِيمَانِكُمْ فَذُوقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْفُرُونَ ﴿١٠٠﴾

108. その顔白くなる者は、アッラーの御恵に浴し、永久にその中に住まん。

وَأَمَّا الَّذِينَ أَبْيَضَتْ وُجُوهُهُمْ فَيُنَادُّهُمْ رَحْمَةُ اللَّهِ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿١٠١﴾

109. こは真理を(注 101)包含するアッラーの神兆なり。われら之を汝に読誦す。アッラーは人間に如何なる不正をも望まず。

يَذْكُرُ آيَاتِ اللَّهِ تَتْلُوهَا عَلَيْكَ وَإِنِّي وَمَا اللَّهُ يُرِيدُ ظُلْمًا لِلْعَالَمِينَ ﴿١٠٢﴾

110. 天に在るもの、地に在るもの、ことごとくアッラーの所有なり。而してすべての事柄は、裁決のため必ずアッラーに帰る。

وَلِلَّهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ وَإِلَى اللَّهِ تُجْعَلُ الْأُمُورُ ﴿١٠٣﴾

注 98 聖なる預言者は、「もしお前達の内の誰かが邪悪な事物をみつけたら、手でそれを払いのけよ。もし手ではらいのけられねば、舌(言葉)を使って、それを禁止せよ。腕ずくでも、言葉を介してでも、止めさせられないとしたら、少なくとも心の中でそれを憎ませよ。しかし、それは最も弱い形の信仰である。」と語ったと伝えられている。(ムスリム)

注 99 ここでは、イスラム教徒に不一致と不調和の危険をもたらそうとした際の經典の民の混乱と意見の不和について述べている。

注 100 クルアーンでは「白さ」と「黒さ」を、それぞれ「幸せ」と「悲しみ」を象徴するものとして用いている。(3: 107, 108; 75: 23-25; 80: 39-41) 人が賞讃されるべき行為を為す時、アラブ人は彼の事を、「その人の顔はまっ白になる」といった表現をし、逆の場合には、「彼の顔はまっ黒になった」と表現するのである。

注 101 「真理」は先ず、神のこれらの啓示又は御言葉は真実に充ち溢れている。第 2 に、それらは権利として到来した一即ち、お前たちはそれらを受けとる権利を持っていた。そして最後に、これは、それらを明白にするには絶好の時である、との意味を表わしている。

第十二項

111. お前たちは、人間のために集められたる最良の人々なり。(注 102)お前たちは善事を勧め、邪悪を禁じ、アッラーを信じ奉る。もし經典の民も信じたりせば、そは彼等のためによりきたるものを。彼等の中には信者もいるが、大方は不信心者なり。
112. 彼等はお前たちに、わずかばかりの損害しか加え得ざるなり。たとい彼等がお前たちに戦いを挑むとも、彼等は必ず敗走すべし。而して彼等は援助されざるべし。
113. 彼等は、アッラーまたは人間との契約によって保護されざる限り、何處へ行こうとも、必ず屈辱を被るべし。彼等はアッラーの憤怒を招き、不幸に襲われる。(注 103)そは彼等が神兆を拒否し、預言者たちを不当に殺せるが故なり。そは彼等が常に反抗し、掟にそむく違犯をなしたるが故なり。
114. 彼等とて皆同じに非ず。經典の民の中には義しい一団あり。彼等は夜中にアッラーの御言葉を読誦し、アッラーの御前に叩頭す。
115. 彼等はアッラーと最後の日を信じ、正義を勧め、邪悪を禁じ、互いに善行を競う。これ等は正義者なり。

كُنْتُمْ خَيْرَ أُمَّةٍ أُخْرِجَتْ لِلنَّاسِ تَأْمُرُونَ بِالْمَعْرُوفِ
وَتَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ وَتُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَلَوْ آمَنَ
أَهْلُ الْكِتَابِ لَكَانَ خَيْرًا لَهُمْ مِنْهُمْ الْمُؤْمِنُونَ وَ
أَلْشُّرَهُمُ الْفَاسِقُونَ ﴿١١١﴾

لَنْ يَضُرَّكُمْ إِلَّا أَذًى وَإِنْ يُقَاتِلْكُمْ يَوْلُوكُمْ
الْأَدْبَارَ ثُمَّ لَا يَصُرُونَ ﴿١١٢﴾

ضَرَبَتْ عَلَيْهِمُ الذَّلِيلَةَ إِنْ مَا تَقْفُوا إِلَّا وَجِبِلٌ مِنَ اللَّهِ
وَجِبِلٌ مِنَ النَّاسِ وَبَاءَ وَغَضِبَ مِنَ اللَّهِ وَضُرِبَتْ
عَلَيْهِمُ الْمَسْكَنَةُ ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ كَانُوا يَكْفُرُونَ بِآيَاتِ اللَّهِ وَيَقْتُلُونَ
الرُّسُلَ يَغِيرُونَ ذَلِكَ بِنَاعِصُوا وَكَانُوا يَعْتَدُونَ ﴿١١٣﴾

لَيْسُوا سَوَاءً مِنْ أَهْلِ الْكِتَابِ أُمَّةٌ قَائِمَةٌ يَتْلُونَ
آيَاتِ اللَّهِ أَنْاءَ اللَّيْلِ وَهُمْ يَسْجُدُونَ ﴿١١٤﴾

يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ وَيَأْمُرُونَ بِالْمَعْرُوفِ
وَيَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ وَيُسَارِعُونَ فِي الْخَيْرَاتِ
وَأُولَئِكَ مِنَ الصَّالِحِينَ ﴿١١٥﴾

注 102 この節ではイスラム教徒が最も良き人々であると主張されているのみでなく、その理由も、述べられている。(1)彼らは全人類の善き者として取りあげられた。そして、(2)善を行使し、悪を禁じ、そして唯一無比の神の存在を信じる事が彼らの義務なのである。イスラム教徒の栄光は、これら二つの条件次第で左右されるのである。

注 103 ここにはユダヤ人に関する重要且つ速大な預言が包括されている。その預言とは、彼らは永遠に恥づかしめられる運命にあり、他の民族に隷従して生きてゆく事となるというものである。聖なる預言者の時代から現在に到るまで、ユダヤ人の歴史は、この恐しい預言の真実を雄弁に物語っている。全ての時代にわたり全ての国に於て、そしてそれは啓蒙と許容の現代に於てすら例外ではなく、ユダヤ人はひどい迫害の犠牲者であり、あらゆる種類の不名誉と、はづかしめにあつてきた。イスラエル国家の建設は、ユダヤ民族の人生の一時的局面にすぎないのである。

116. 何事にせよ善をなさば、その報奨を拒まれることなかるべし。(注104)アッラーは神を畏れる者をよく知り給う。

وَمَا يَفْعَلُوا مِنْ خَيْرٍ فَلَنْ يُكْفَرُوهُ وَاللَّهُ عَلِيمٌ
بِالْمُتَّقِينَ ﴿١١٦﴾

117. されど不信心者どもは、その財産も子女もアッラーに対して役立たざるべし。彼等は業火の住人なり。彼等はその中に永久に住まん。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا لَنْ تُغْنِيَ عَنْهُمْ أَمْوَالُهُمْ وَلَا
أَوْلَادُهُمْ مِنَ اللَّهِ شَيْئًا وَأُولَٰئِكَ أَصْحَابُ النَّارِ
هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿١١٧﴾

118. 彼等が現世で費やせることを譬うれば、厳しい寒さが吹きよせて、己れ自身に害なせる人々の収穫を潰滅せしむるが如し。(注105)アッラーが彼等を害したに非ず、彼等自ら己れを害するなり。

مَثَلُ مَا يُنْفِقُونَ فِي هَذِهِ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا كَمَثَلِ
رِيحٍ فِيهَا صِرٌّ أَصَابَتْ حَرْثَ قَوْمٍ ظَلَمُوا أَنْفُسَهُمْ
فَأَهْلَكَتْهُ وَمَا ظَلَمَهُمُ اللَّهُ وَلَكِنْ أَنْفُسُهُمْ
يَظْلِمُونَ ﴿١١٨﴾

119. 汝等信徒たちよ、お前たちの仲間以外の者と親交を結ぶなかれ。彼等はお前たちを破滅させるために苦勞をいとわざるべし。彼等はお前たちが災難に遭うことを喜ぶ。
(注106)憎悪はすでにその唇より出たり。されど彼等の胸中に蔵せるものは更にはなはだし。われらはすでに数々の神兆をお前たちに明らかにせり、もしお前たち理解するなら。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَتَّخِذُوا بِطَانَةً مِنْ دُونِكُمْ
لَا يَأْلُوا نَفْسَكُمْ خُبْرًا وَلَا دُولًا مَا عُنْتُمْ قَدْ بَدَتِ
الْبَعْضَاءُ مِنْ أَفْوَاهِهِمْ وَمَا تُخْفِي صُدُورُهُمْ
أَكْبَرُ قَدْ بَيَّنَّا لَكُمُ الْآيَاتِ إِنْ كُنْتُمْ
تَعْقِلُونَ ﴿١١٩﴾

注104 イスラムは国家或いは部族レベルの宗教ではない。イスラムに加わる者は、その所属社会や信条が何であれ、当然の事ながら公明正大にふるまえば、信仰のその他の信奉者同様、同じ報酬を受取るのである。国籍がどうこうであるといった理由の偏見にみちた不当な扱いなどうけないのである。ユダヤ人も、又他のいかなる人も、一旦イスラムに帰依すれば、アラブ人のイスラム教徒と同等なのである。

注105 この節の根底をなす考えとは、イスラムに敵対する不信者の努力は自分達にはねかえるという事である。不信者がイスラムを傷つけようとして為す事全ては結果として自分達を傷つける事となるのである。

注106 彼らが待ち望んでいるのはお前達が不運や災難にみまわれること、滅びること或いは、弱くなって崩壊すること、或いは、公明正大な道を踏み外すこと、罪深き生活をおくるようになることなのである。

120. 見よ、お前たちは彼等を愛すれど、彼等はお前たちを愛せず。お前たちは經典を信じ、その全部を信ず。然るに彼等は、お前たちに会えば云う、(注 107)「我等は信ず」と。されど自分たちだけになれば、憤怒の余りその指先を噛む。云え、「憤死せよ。(注 108)げにアッラーはお前たちが胸中に隠すものを熟知し給う」と。

121. お前たちに好いことが起らば彼等は悲しみ、悪いことが降りかからば、そこで彼等は喜ぶ。されどお前たちが信念堅固にして、正義ならば、彼等の奸策は決してお前たちを害すること能わず。げにアッラーは彼等がなすことのすべてを取り囲み給う。(注 109)

第十三項

122. 汝早朝に家を出て、信徒たちを戦闘配置につかせし時のことを(注 110)思い起せ。アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。
123. またお前たちの二軍が、(注 111)臆病かぜに吹かれて勇気を失いかけしあの時、アッラーは彼等の守護者なりき。されば信徒たちよ、アッラーを頼みとすべきなり。

هَآأَنْتُمْ أَوْلَاءُ تُحِبُّونَهُمْ وَلَا يُحِبُّونَكُمْ وَتُؤْمِنُونَ
بِالْكِتَابِ كُلِّهِ وَإِذَا لَقُوكُمْ قَالُوا آمَنَّا وَإِذَا خَلَا
عَضُّوا عَلَيْكُمُ الْأَنَامِلَ مِنَ الْغَيْظِ قُلْ مُؤْمِنُوا
بِعِظْمِكُمْ إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿١٢٠﴾

إِنْ تَسْأَلُهُمْ حَسَنَةً سَأَهُمُ وَإِنْ تُصِيبْكُمْ
سَيِّئَةٌ يَفْرَحُوا بِهَا وَإِنْ تُصِيبُوا وَتَتَّقُوا لَا
يَضُرَّكُمْ كَيْدُهُمْ شَيْئًا إِنَّ اللَّهَ بِمَا يَعْمَلُونَ
مُحِيطٌ ﴿١٢١﴾

وَإِذْ عَدَوْتَ مِنْ أَهْلِكَ تُبَوِّئُ الْمُؤْمِنِينَ مَقَاعِدَ
لِلْقِتَالِ وَاللَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿١٢٢﴾
إِذْ هَمَّتْ طَائِفَتَيْنِ مِنْكُمْ أَنْ تَفْشَلَا وَاللَّهُ وَلِيَهُمَا
وَعَلَى اللَّهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُونَ ﴿١٢٣﴾

注 107 文脈からすると、「お前たちに会えば云う」の文の後に、理解のために“彼らは一切經典を信じていないが”或いはそれに類似した語句を補なうとよい。

注 108 「憤死せよ」とは、イスラムに敵意を抱き、イスラムをつぶそうとしているユダヤ人に向けられたものである。

注 109 神が彼らの行為を無にして彼らを破滅させて下さるから、イスラム教徒は彼らを恐れるべきではない。全てのイスラムの敵である者達のたくらみは神の前に明らかであり、神が彼らの計画を実現できなくして下さるのである。

注 110 ここで述べられているのはウハドの戦いである。バドルでの敗北の屈辱をはらさんとしてヒジラの三年めに、メッカのクライシュは、3000名の精鋭から成る武装軍をひきつけ、メディナへのりこんできたのである。望まないままに、聖なる預言者は、後になって逃亡してしまうアブドゥラ・ビン・ウバイの300人の信奉者を含めた1000名の戦力で、敵と交戦する為、メディナを後にしたのである。戦闘は、ウハドで行なわれた。

注 111 二つの隊とは、それぞれハズラジュとアウスに所属するバヌー・サリーマとバヌー・ハリーサの二つの部族であった。(フハリ、マガジ書)ここでは、彼らが実際には、ひるんだのではなく、アブドゥラの300人の逃亡を目のあたりにし、小隊であったイスラム軍が更にかい滅状態となった為、イスラム軍を見すてようと思いが心をかすめたのが、実際にはみすてたりはしなかった事を示している。

124. アッラーはバドルにおいて、(注112)お前たちが劣勢でありし時、お前たちを助けたり。さればアッラーをお前たちの守護者として畏れ敬え。さすればお前たち、感謝の気持も湧いてこよう。

وَلَقَدْ نَصَرَكُمُ اللَّهُ بِبَدْرٍ وَأَنْتُمْ أَذِلَّةٌ ۖ فَاتَّقُوا اللَّهَ لَعَلَّكُمْ تُشْكُرُونَ ﴿١٢٤﴾

125. その時、汝は信徒たちに云えり、「主が天より三千の天使を降し、汝等を助け給う。(注113)お前たちそれでも足らざるか？」と。

إِذْ يَقُولُ الْمُؤْمِنِينَ أَلَنْ يَكْفِيَكَ أَنْ يُبَدِّلَ لَكَ رَبُّكَ مِثْلَهُ ثَلَاثَةِ أَلْفٍ مِنَ الْمَلَائِكَةِ مُزِيلِينَ ﴿١٢٥﴾

126. 然り、お前たちが信念堅固にして、正義ならば、敵が急襲するとも主が五千の天使をもって(注114)猛攻し、(注115)お前たちを助くべし。

بَلَىٰ إِنْ تَصْبِرُوا وَتَتَّقُوا وَيَأْتُوكُم مِّنْ فَوْرِهِمْ هَذَا يُبَدِّلْ لَكُمْ رَبُّكُم مِّنْ مَّحْسَنَةِ الْإِلَهِ مِنَ الْمَلَائِكَةِ مِثْلَ ثَلَاثَةِ أَلْفٍ ۖ وَمُسَوِّمِينَ ﴿١٢٦﴾

127. アッラーはただ之^{これ}によってお前たちの心を安心させんがため、朗報として之^{これ}をお前たちに伝えたるのみ。(注116)助けはただ、偉大にして賢哲にましますアッラーより至る。

وَمَا جَعَلَهُ اللَّهُ إِلَّا بُشْرَىٰ لَكُمْ وَلِتَطْمَئِنَّ قُلُوبُكُم بِهِ ۚ وَمَا النَّصْرُ إِلَّا مِنْ عِنْدِ اللَّهِ الْعَزِيزِ الْحَكِيمِ ﴿١٢٧﴾

注112 バドルとはメッカとメディナの間にある道沿いの地名である。その地名は、バドルという男が持つていた泉に由来している。ここで述べられているバドルの戦いは、この地の近くで闘われた。

注113 バドルの戦いのことであるとまちがって解釈されているが、前節で、たまたま、確固たるイスラム教徒が危険に陥った時、神がいかに助けられたかを示す為に述べられたバドルの戦いをさしているものではない。8:10によれば、バドルの戦い時につかわされた天使の数は、敵の1000名に対し、同数の1000名であった。ウハドの戦いの時の敵の数は3000名であった為、この時つかわされた天使の数は3000である。この約束の成就については3:153にその説明がある。

注114 もし不信者達が、イスラム軍が軍勢をたて直す間もなく、火急に攻めてきたら、神はイスラムに5000の天使を送りこんで下さるとの意味である。前述の3000に比し5000と天使の数が増えているのは、ウハドではイスラム軍は手厳しく攻められ、多大な被害をこうむり弱体化していたからである。メッカの近くまで来た時、クライシュは戻ってもう一度イスラム軍を攻撃する事にした。戦いの一日後に、聖なる預言者が、この事を知るに至った時、直ちに行軍せよとの命を出し、ウハドの戦いで彼と共に戦った者だけに続く様にと指揮した。そしてイスラム軍はメディナから8マイル離れたハムラ・アル・アサドまで出向いたのである。この果敢な聖なる預言者とその信奉者の予期せぬ出現に、威圧されたメッカ軍は、大急ぎでメッカに退却したのである。これは天使達が彼らの心に投げかけた恐怖のせいであった。そうでなければ、前日の戦いで数も減り、傷つき、消耗しきっているイスラム軍を前に退却する訳がないからである。

注115 彼は突然、果敢に彼らを襲い、彼らが破壊する様な働きをしたと言っているのである。

注116 天使達はイスラム軍の心をくじけないようにする一方で、敵の心に威嚇と恐怖を送りこんだ。もし神がそう召されたら、天使がたった一人であっても、ウハドでのイスラム軍を助けるに充分であったが、神は5000の天使を送る事を約束されたのである。この事は、その時、多大な自然の力がイスラム軍に好都合に働いた事

128. こはアッラーが、不信心者どもの一部を切りくずし、或いは失墜させて失望して退去せしめんがためなり。(注 117)

لَيَقْطَعَنَّ طَرَفًا مِّنَ الَّذِينَ كَفَرُوا أَوْ يَكْبِتُنَّهُمْ فَيَنْقَلِبُوا خَائِبِينَ ﴿١٢٨﴾

129. アッラーが彼等を容赦しようと、はたまた不義なす徒輩故に罰しようと、汝はいささかも関与せず。

لَيْسَ لَكَ مِنَ الْأَمْرِ شَيْءٌ أَوْ يَتُوبَ عَلَيْهِمْ أَوْ يُعَذِّبَهُمْ فَإِنَّهُمْ ظَالِمُونَ ﴿١٢٩﴾

130. 天に在るもの、地に在るものすべてはアッラーの所有なり。アッラーは御心のまま誰でも赦し、御心のまま誰でも罰し給う。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَلِلَّهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ يَغْفِرُ لِمَن يَشَاءُ وَيُعَذِّبُ مَن يَشَاءُ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿١٣٠﴾

第十四項

131. 汝等信徒たちよ、倍をまた倍にする利息を食ななかれ。お前たち栄えんがためにはアッラーを畏れよ。(注 118)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَأْكُلُوا الرِّبَا أَضْعَافًا مُّضَاعَةً وَاتَّقُوا اللَّهَ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿١٣١﴾

132. 而して不信心者どもに準備されたる業火を怖れよ。(注 119)

وَاتَّقُوا النَّارَ الَّتِي أُعِدَّتْ لِلْكَافِرِينَ ﴿١٣٢﴾

133. お情けを戴くために、アッラーと使徒に従え。

وَاطِيعُوا اللَّهَ وَالرَّسُولَ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ﴿١٣٣﴾

134. 主の宥恕を得るため、而して天地の如く広大なる樂園に入るために急げ。そは神を畏れる者のために——(注 120)

وَسَارِعُوا إِلَى مَغْفِرَةٍ مِّن رَّبِّكُمْ وَجَنَّةٍ عَرْضُهَا السَّمٰوٰتُ وَالْأَرْضُ أُعِدَّتْ لِلْمُتَّقِينَ ﴿١٣٤﴾

をはめかしている。更には信者の中にも不信心者の中にも、バドルの戦い時に、実際に天使達の姿をみたものがいたと伝えられている。8:10も併せ読む事。

注 117 聖なる預言者は、メッカ人達のメディナへの急襲を予定している事を知るや、メディナに向って、行軍したのである。メッカ軍は、みっともなく恥しげもなく逃げだしたのである。

注 118 キリスト教国家に於て、今では法律的に認められている、利息を課するという事は、モーゼは禁じていた。(出エジプト記 22:25、レビ記 25:36、37; 申命記 23:19、20) ここでは、妥当な利息なら許されるが、暴利をむさぼるのはよくないと言っているのではなく、妥当であろうと極端であろうと、利息を課するという事自体が禁じられているのである。そして「幾倍にもなる」という意味に解釈される語句が、実際に聖なる預言者の時代に、流行っていた慣習を指摘する。2:276-281 参照。

注 119 2:276でも、戦火の警告を後に述べて、利息の禁止が説かれている。一般的な意味の他に、ここで“不信心者”とされるのは、利息に関する戒律を守らぬ者である。

注 120 この節は、商売や売買が利息なしでは動かせないと現在の状況から信じこまされている者達への答を為している。そしてイスラム教徒はイスラムの教えに従いさえすれば全ての利益を受けられるであろうとここでは述べられている。又、樂園とは天上と地上の両方にあると書かれているのは、信者であれば、現世と来世に樂園を持つ事を意味している。聖なる預言者の有名な言葉が樂園と地獄について興味ある光明をなげかけてい

135. 幸運なときも不運なときも喜捨を行い、怒りを抑え、他人に寛容な人々のために準備される。(注121)アッラーは善事を行う人々を愛し給う。

الَّذِينَ يَنْفِقُونَ فِي السَّرَّاءِ وَالضَّرَّاءِ وَالْكُلُوبِ
الْغَيْظِ وَالْعَافِينَ عَنِ النَّاسِ وَاللَّهُ يُحِبُّ الْمُحْسِنِينَ ﴿١٣٥﴾

136. 而して卑屈な行為や、過失を犯せる時、アッラーを想い、罪の容赦を請う人々アッラー以外誰が罪を赦したり出来ようぞ？一またして来たことを悪いと知りつつやり続けられない人々。(注122)

وَالَّذِينَ إِذَا فَعَلُوا كَآثَةً أَوْ ظَلَمُوا أَنْفُسَهُمْ ذَكَرُوا اللَّهَ فَاسْتَغْفَرُوا
لِذُنُوبِهِمْ وَمَنْ يَغْفِرُ الذُّنُوبَ إِلَّا اللَّهُ تَعَالَى وَلَمْ
يُصِرُّوا عَلَى مَا فَعَلُوا وَهُمْ يَعْلَمُونَ ﴿١٣٦﴾

137. これ等の者への報奨は、主よりの赦しと河川流れる楽園なり。(注123)そこに彼等は永久に住まん。善行者の報奨はなんと素晴らしいかな！

أُولَئِكَ جَزَاءُ هُمْ مَغْفِرَةٌ مِنْ رَبِّهِمْ وَجَنَّاتُ جَنَى
مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا وَنِعْمَ أَجْرُ
الْعَامِلِينَ ﴿١٣٧﴾

138. お前たちの以前に幾多の処罰の例あり。地上を旅して、預言者たちを嘔つきとして遇せる者どもの末路が如何なるものなりしかを見よ。

قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِكُمْ سُنَنٌ فَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ
فَانظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُكَذِّبِينَ ﴿١٣٨﴾

139. こは人々への宣言なり。また神を畏れる者への嚮導並びに訓戒なり。

هَذَا بَيَانٌ لِلنَّاسِ وَهُدًى وَمَوْعِظَةٌ لِلْمُتَّقِينَ ﴿١٣٩﴾

140. 弱気になるなかれ、悲観するなかれ。お前たち真の信者ならば、必ず勝利を得ん。(注124)

وَلَا تَهِنُوا وَلَا تَحْزَنُوا وَأَنْتُمُ الْأَعْلَوْنَ إِنْ كُنْتُمْ
مُؤْمِنِينَ ﴿١٤٠﴾

る。即ち、楽園が天上と地上にあるというのなら、一体地獄はどこにあるのか？という問いに対し、聖なる預言者は、答えて“それでは昼がやってくれば、夜はどこに行くというのか？”と語った。そして更に、楽園の報酬は天と地の間の空間程に偉大なものであると語ったとも伝えられている。この事は、楽園とは心の状態であり、決して物理的場所をさす訳ではない事を示している。

注121 人は他人が自分にしかけたいやがらせや罪を完全に忘れる、或いは、心に全く何のあともなくとり払ってしまうということは、最高の“許し”“寛容さ”なのである。それは、罪の抹消だけでなく、その痕跡すらあとかたもなく消し去り、忘れる事を意味している。

注122 善人が偶然、道徳的に墮落しても、自分の行動を正当化したりせず、率直に罪を告白し改めるようにすればよい。

注123 罪を犯した後に、心からその行為を悔いて人が神に本当に帰依した場合は、彼は神に許されるだけでなく、神が彼をより高い精神の極みにお導き下さり、天国を約束して下さる。

注124 ここでは、一国家或いは一個人がいかに、強くなり強さを維持するかという重要な原則が具体化されている。そして“ゆるめるなかれ”とは、将来の危険に関してであり、“なげくなかれ”とは、過去の誤りや不運

141. お前たち負傷を受けたれど、敵側もすでに同程度の損傷を(注125)受けたり。われらが人間のためにこのように幸運の日と不運の日を与うるは、(注126)彼等に注意をうながすためであり、これによってアッラーが真の信者を識別し、(注127)お前たちの内より真理の証人を(注128)作り給うためなり。アッラーは不義者を愛し給わず。
142. そはまたアッラーが信徒たちを浄め、不信心者を絶滅せんがためなり。(注129)
143. お前たち、アッラーの道のために誰が勇敢に戦い、誰が耐え忍びたるかをアッラーが区別せぬうちに、樂園に入れるとでも思っているのか？(注130)
144. お前たちは死に直面する前は死を望みたり。(注131)されど、いざ面と向えば、お前たちの或る者は死から逃れんとす。

إِنْ يَنْسَئْكُمْ قَرْحٌ فَقَدْ مَثَّ الْقَوْمَ قَرْحٌ فِئْلُهُ
وَتِلْكَ الْأَيَّامُ نُدَّأُولُهَا بَيْنَ النَّاسِ وَلِيَعْلَمَ اللَّهُ
الَّذِينَ آمَنُوا وَيَتَّخِذَ مِنْكُمْ شُهَدَاءُ وَاللَّهُ لَا يُحِبُّ
الظَّالِمِينَ ﴿١٤١﴾

وَلِيُخَيِّصَ اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا وَيَبْحَثَ الْكَافِرِينَ ﴿١٤٢﴾
أَمَرَحَبِيبْتُمْ أَنْ تَدْخُلُوا الْجَنَّةَ وَلَمَّا يَعْلَمِ اللَّهُ الَّذِينَ
جَاهَدُوا مِنْكُمْ وَيَعْلَمَ الضَّيِّقِينَ ﴿١٤٣﴾

وَلَقَدْ كُنْتُمْ تَمَنَّوْنَ الْمَوْتَ مِنْ قَبْلِ أَنْ تَلْقَوْهُ
فَقَدْ رَأَيْتُمُوهُ وَأَنْتُمْ تَنْظُرُونَ ﴿١٤٤﴾

についてである。国家の衰退はひとえに、その責任の正しい認識の気をぬいてしまうか否かと、過去に思いをめぐらすか否かにかかっており、その二つを怠った国家は衰退するのである。この節ではこれら二つの危険に對する警告がなされている。

注125 他の箇所(3:166)も参照。

注126 “繁榮の日々”と“不遇の日々”

注127 全知全能であられる神は、何ら自分の知識に付け加えるものなど必要ではない為、ここで意味されているのは、二者間の識別についてのみである。知識(イルム)には二種類あり、一つは、存在が分かる前から認識する知識であり、もう一つは、実際に存在する様になってから認識する知識である。ここでは、後者の知識の事を指す。

注128 信心深い者達は、不遇の時に自分達が築いた高潔な模範と、確固たる信念により、イスラムの真実の証人となるのである。

注129 ウハドの戦いは幾らかの不信者達にイスラムこそ神の真実の宗教であるとの認識を与えた。

注130 人の勇気を試すのは試練であり苦悩である。そしてそれらなくしては精神の発達や純化はありえないのである。

注131 ここでの“死”は戦いの意味である。何故なら戦争の結果が死であるから。戦いとは、装備や人員数に於て敵軍と比し極端に弱体であったイスラム軍にとって、死を意味していた。ウハドの戦いの時に、聖なる預言者はメディナ市中で敵と対戦する事を提案したが、彼の同胞の内、特にバドルの戦いに参加できなかった者は、“我々はこの日を待っていたのです。うって出て敵と戦わせて下さい、そうでなければ、連中は我々を卑怯者というでしょう、”と訴えたのである。“汝はこの死をずっと待ち望んでいた”との表現はこのイスラム教徒の願いをさしているのである。

第十五項

145. ムハンマドは一使徒に過ぎず。使徒たちは皆彼に先だつて逝けり。もし彼死すか、或いは殺害されなば、お前たち踵を返さんとするか？（注132）誰が踵を返そうとも、アッラーをいささかも害することなし。アッラーは必ず感謝する者を報奨し給う。

وَمَا مُحَمَّدٌ إِلَّا رَسُولٌ قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِهِ الرُّسُلُ
أَفَإِنْ مَاتَ أَوْ قُتِلَ انْقَلَبْتُمْ عَلَى أَعْقَابِكُمْ وَمَنْ
يَنْقَلِبْ عَلَى عَقْبَيْهِ فَلَنْ يَضُرَّ اللَّهَ شَيْئًا وَسَيَجْزِي
اللَّهُ الشَّاكِرِينَ ﴿١٤٥﴾

146. 何人もアッラーの許しなしに死ぬることかなわす——その時期は予め定められてあり。而してこの世の報奨を欲する者には、われらは之を与え、来世の報奨を欲する者には、われらは之を与う。われらは必ず感謝する者を報奨し給う。

وَمَا كَانَ لِنَفْسٍ أَنْ تَمُوتَ إِلَّا بِإِذْنِ اللَّهِ كَثِيرًا
مُؤْجَلًا وَمَنْ يُرِدْ ثَوَابَ الدُّنْيَا نُؤْتِهِ مِنْهَا
وَمَنْ يُرِدْ ثَوَابَ الْآخِرَةِ نُؤْتِهِ مِنْهَا وَسَيَجْزِي
اللَّهُ الشَّاكِرِينَ ﴿١٤٦﴾

147. 如何に多くの預言者が付き随う信徒たちと共に戦いたることか。彼等はアッラーの道において遭遇せることのために阻喪せず、弱気にならず、敵を前にして屈せざりき。アッラーは断固として信念を貫き通す者を愛し給う。

وَكَايْنٍ مِّنْ نَّبِيِّ قُتِلَ مَعَهُ رَيْثُيُونَ كَثِيرٌ فَمَا
وَهْنُوا لِمَا آصَابَهُمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَمَا ضَعُفُوا
وَمَا اسْتَكْنَفُوا وَاللَّهُ يُحِبُّ الصَّابِرِينَ ﴿١٤٧﴾

注132 ウハドの戦いの最中に聖なる預言者が殺されたという噂が流れた。ここでは、その事にふれ、たとえその報告が真実であつたとしても、その事で、信仰強き者の心がゆれ動かされてしまう事はなかったであろうという事を言わんとしている。モハammadは、ただの預言者にすぎない。彼以前に存在した預言者達も死した様に彼も又死すべきものである。しかしイスラムの神は不滅である。聖なる預言者が死んだ時、以下の様であつたとの記録がある。オマルはメディナのモスクで、抜いた剣を手にしてこういった。“神の預言者が死したという者は誰であれ、私が生かしておかない。彼は死んだのではなく、あのモーゼでさえ神の御許にいった様に、神に召されたのである。（天に昇つたのである）そして、次には偽善者達を問しに戻ってくるのである。”その場に居あわせたマブー・バクルは、毅然としてオマルに坐る様にいい、モスクに集結していた教徒達に、当節を朗唱し、預言者の死を伝えたのである。当然ながら彼らは大きな悲しみに包まれた。この節では偶然、聖なる預言者以前の預言者達も死んでいる事にふれているが、もし生存している者が一人でもいれば、聖なる預言者の死を証明する為に、この節が引用される事はなかった。

実際、イスラムとは、いかにその個人が偉大であろうと、その生命の火を、一人の人間の存在に頼っている訳ではない。神こそイスラムの啓示者であり保護者且つ守護者なのである。しかしこの節を読み、聖なる預言者が暗殺という形で戦いで死んだと誤解してはならない。彼は自分の生命を神から保護されていたのである。

（5：68）当然ながら敵はこの誤報に狂喜したが、むしろこれはイスラム教徒にとって形を変えた恵みとなつた。後になって聖なる預言者が実際に死した時の、まるで胸がはりさけてしまう様な思いへの心の準備となつたからである。この経験がなかったら、彼らは耐えられなかったはずである。

148. 彼等はただかく云えり、「主よ、我等の罪を赦し給え。我等の行き過ぎた行為を赦し給え。願わくは我等の足許を堅固ならしめ、不信心者どもに対して我等を助け給え」と。

وَمَا كَانَ قَوْلُهُمْ إِلَّا أَنْ قَالُوا رَبَّنَا اغْفِرْ لَنَا ذُنُوبَنَا
وَأَسْرِافَنَا فِي أَمْرِنَا وَثَبِّتْ أَقْدَامَنَا وَانصُرْنَا عَلَى
الْقَوْمِ الْكَافِرِينَ ﴿١٤٨﴾

149. さればアッラーは彼等に、現世の報奨と、来世の素晴らしい報奨とを与えたり。(注 133) アッラーは善事を行う者を愛し給う。

فَأَنشَأَهُمُ اللَّهُ ثَوَابَ الدُّنْيَا وَحَسُنَ ثَوَابُ الْآخِرَةِ
وَاللَّهُ يُحِبُّ الْمُحْسِنِينَ ﴿١٤٩﴾

第十六項

150. 汝等信徒たちよ、お前たちもし不信心者どもに従わば、(注 134) 彼等はお前たちの踵を返さしめ、よってお前たちは失敗者とならん。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِنْ نُضِيعُوا الَّذِينَ كَفَرُوا
يَرُدُّوكُمْ عَلَى أَعْقَابِكُمْ فَتَنْقَلِبُوا خِيسِرِينَ ﴿١٥٠﴾

151. 否、アッラーこそはお前たちの守護者なり、最上の佑助者なり。

بَلَى اللَّهُ مَوْلَاكُمْ وَهُوَ خَيْرُ النَّاصِرِينَ ﴿١٥١﴾

152. われらは信ぜざる者どもの心に恐怖を投ぜん。(注 135) そは彼等が、アッラーが如何なる権威も降さざる者を、アッラーと同位に置くが故なり。彼等の住居は業火なり。不義なす者の住居こそ悲惨なり。

سَنُلْقِي فِي قُلُوبِ الَّذِينَ كَفَرُوا الرُّعْبَ نَحْنُ أَعْلَمُ
بِاللَّهِ مَا لَهُ يَنْزِلُ بِهِ سُلْطَانٌ وَمَا لَهُمُ الْخَاثِرُ
وَلَيْسَ مَشْوَى الظَّالِمِينَ ﴿١٥٢﴾

153. お前たちがアッラーのお許しを得て彼等を殺し、滅ぼせる時、アッラーはお前たちとの約束を果したり。アッラーがお前たちに、お前たちの望みしものを見せた後、お前たちは勇気を喪失して、(注 136) 仲間

وَلَقَدْ صَدَقَكُمُ اللَّهُ وَعْدَهُ إِذْ تَحْسَبُوهُمْ بِأَذْنِهِ
كُفْرًا إِذْ أَفْسَلْتُمْ وَتَنَازَعْتُمْ فِي الْأَمْرِ وَعَصَيْتُمْ مِمَّنْ

注 133 来世での報酬には色々な段階があり、上に述べられた様な信者なら一番良い報せを受ける。“卓越”したと解釈されるフスナーという言葉は必ずしも無上の段階を指すわけではなく強意の意味で使われる場合もある。

注 134 イスラム教徒が非イスラム教徒と交易を行なってはならないと命じられている訳ではない。ただ、イスラムにはつきり敵対している不信者には従わぬ様にと警告されているのである。

注 135 偶像崇拜が生じる原因は迷信と恐怖にある。恐怖と迷信にとらわれる者は勇者となりえないのである。

注 136 ここではウハドでイスラム軍の後陣に位置していた弓矢部隊の事を、実際の戦いへの参加や戦利品の略奪を抑えきれず、自分達の役割を果たさず臆病で卑怯な事をしたと糾弾している。真の勇氣と勇敢さが存在するのはまさに心の中なのである。

どうして命令について相争い、(注137)遂には背きたり。(注138)お前たちの中には現世のみを欲求せし者も(注139)あれば、また来世を望みし者もありき。そこでアッラーはお前たちを試さんがために、お前たちを彼等から敗走せしめたり。而してアッラーはお前たちを赦したり。なんとなれば、アッラーは信徒に対して慈悲深き御方にまします故に。

بِهِمَا مَا أُرِيدُ مِنْكُمْ مَنْ يُرِيدُ الدُّنْيَا
وَمِنْكُمْ مَنْ يُرِيدُ الْآخِرَةَ ثُمَّ صَرَفَكُمْ عَنْهُمْ
لِيَبْتَلِيَكُمْ وَلَقَدْ عَفَا عَنْكُمْ وَاللَّهُ ذُو فَضْلٍ
عَلَى الْمُؤْمِنِينَ ﴿١٣٨﴾

154. お前たちが逃げ去りつつありし時、使徒はお前たちの背後からお前たちを呼びたり。されど誰も振り向かざりき。(注140)そこでアッラーは、苦難の上の苦難でお前たちに報いたり。(注141)そはお前たちをしてその失えるものを悲しまず、また身に降

إِذْ تُصْعِدُونَ وَلَا تَلَوْنِ عَلَى أَحَدٍ وَالرَّسُولُ
يَدْعُوكُمْ فِي أُخْرَاكُمْ فَأَتَابَكُمْ عُنَىٰ بُعِثَ لَكُمْ

注137 ‘命令’とは、聖なる預言者が丘の上の弓矢部隊に、彼の許可なしに持場を離れるなどと言った命令、或いは、その趣旨と意味かのいづれかを指す。即ち、聖なる預言者が戦いの終わった後も、そこにとどまる様にと考えていたか否かについては、ある者は、彼が誰かにそのつもりであったといい、又ある者は誓ってそうではなかったといったのである。

注138 丘に駐屯したイスラム軍は、自分達の指揮者であるアラドゥラ・ビン・ジュベールが聖なる預言者に従って「勝利が目前にあっても、持ち場を離れるな」と命令し、指揮しようとした。しかし、多くの部下はそれに従わず、離れてしまった。彼らが自分達自身を制する事を出来なかった事がイスラム軍に甚大な被害をこうむらせたのである。

注139 これは、持ち場を離れた弓矢部隊の事を指している。アラビア語の文では、部隊の内の何名かは現世を望み、一即ち、戦いに加わり、戦利品をかき集めるの意、一他の何名かは(アブドゥラ・ビン・ジュベールと持ち場を離れなかった彼の仲間たち)、来世を望んだ。一即ち、聖なる預言者の命令に背いた場合の最終的な結果を考えた—との意味も示されている。或る者は目先の事だけを考え、他の者は先の事を讀んだのである。

注140 これは、ウハドの戦いで、前方と後方からはさまれたイスラム軍の隊列が砕け、多くの者達が、それぞれ違った方向に逃げだしてしまった事を指している。最初に後方から敵が出るとの報せに、後ろ向きになって攻撃の姿勢をとり待機していたイスラム軍に、向かってきたのは大軍団のイスラム軍で、彼らを敵であると誤認した待機軍は同士うちを始めたのであった。ひどい混乱と狂乱の為、聖なる預言者の声に注意を払う者もいなかった程であった。

注141 聖なる預言者は弓矢部隊に丘陵地への駐屯を命じたが、戦いが勝利に終わったと早合点した彼らは守るべき位置を放棄してしまった為、手の内にあったイスラム軍の勝利は、ほとんど敗北の観を呈してしまったのである。これが第一の悲嘆である。次の悲しみとは、不確定ながら聖なる預言者の死が伝わった時の彼らの気持ちであった。神は、聖なる預言者の死の報せを、敗北の悲しみの後に意図的にもたらされた。そうする事で、聖なる預言者が死んでいなかった喜びで最初の悲しみがいやされるからである。

りかかれることを悲しまざらしめんがためなり。(注142)アッラーはお前たちの所業を知悉し給う。

155. 而して苦難の後に、アッラーはお前たちに平安を降し給えりーお前たちの一部の者は睡気に(注143)襲われたりー他の或る者(注144)は自分自身が心配になって、無知愚昧の考えを以てアッラーについて間違った憶測をめぐらせり。彼等は云えり、「我等に如何なる関係があるのか?」と。云え、「事はすべてアッラーの所有なり」と。彼等は汝に明らかにせざるものを胸中に隠す。彼等は云う、「もし我等がこの事に関係がありしなば、我等はここで殺されざりしなるべし」と。こはアッラーが、お前たちが胸中に蔵するものを試み、お前たちの胸中に抱けるものを一掃せんがためなり。アッラーは胸中に抱けるものを熟知し給う。(注145)

156. 両方の軍勢が相会せるあの日、(注146)お前たちの中には敵に後を見せた者あ

تَحَرَّوْا عَلَى مَا قَاتَلْتُمْ وَلَا مَا صَابَكُمْ وَاللَّهُ جَبَّارٌ
بِمَا تَعْمَلُونَ ﴿١٥٥﴾

ثُمَّ أُنْزِلَ عَلَيْكُمْ مِنْ بَعْدِ الْغَمِّ أَمْنٌ نَكَاسٌ يُفْتِنُ
كَأَيْفَةً مِنْكُمْ وَطَائِفَةٌ قَدْ أَهَمَّتْهُمْ أَنْفُسُهُمْ
يَظُنُّونَ بِاللَّهِ غَيْرَ الْحَقِّ ظَنَّ الْجَاهِلِيَّةِ يَقُولُونَ
هَلْ لَنَا مِنَ الْأَمْرِ مِنْ شَيْءٍ قُلْ إِنَّ الْأَمْرَ كُلَّهُ لِلَّهِ
يُخْفُونَ فِي أَنْفُسِهِمْ مَا لَا يُبْدُونَ لَكَ يَقُولُونَ لَوْ
كَانَ لَنَا مِنَ الْأَمْرِ شَيْءٌ مَا قُتِلْنَا هَهُنَا قُلْ لَوْ
كُنْتُمْ فِي بَيُوتِكُمْ لَبَرَزَ الَّذِينَ كُتِبَ عَلَيْهِمُ الْقَتْلُ
إِلَى مَضَاجِعِهِمْ وَلِيَبَيِّنَ اللَّهُ لَكُمْ فِي صُدُورِكُمْ
وَلِيُخَصِّصَ مَا فِي قُلُوبِكُمْ وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِذَاتِ
الصُّدُورِ ﴿١٥٦﴾

إِنَّ الَّذِينَ تَوَلَّوْا مِنْكُمْ يَوْمَ الْيَمِّنِ اتَّبَعُوا الْبَغْيَ

注142 「失えるもの」とはイスラム軍が目前にしていた勝利を、そして、「降りかかること」とは、逆に自分達がこうむった敗北と、イスラム軍の失なわれた戦士達の事を指している。

注143 ウハドの戦いでこの事であるが、アブー・タルハは、ウハドの戦いの日に私は顔をあげ、まわりをみわたすと、眠気におそわれ、うとうとしている者ばかりであった。まどろみは心の平安のしるしである。クルアーンはこの事を神の恵みと、とられている。この事件は、戦いがほとんど終結に近づき、イスラム軍が近くの丘陵地に戻った時の事である。

注144 これはメディナの後方にいた偽善者達の事を指している。彼らの関心はイスラムの名誉や聖なる預言者とイスラム軍の安全よりも、自分達の安全にあった。クルアーンの常とう句として、自分自身を殺すという表現は自分の仲間或いは同胞を殺すという意味ともなる。(2:55, 86)

注145 この節は信者達の確固とした献信を指摘している。確固たる信仰を持つ者にとっては、たとえそれが考えられたように死すべき場所であっても、喜んで死地に赴いた事を思いださせる事となるのである。これら全ては、神が、信仰厚き者を純化する為になされた事なのである。

注146 これもウハドの戦いの事である。

り。そは彼等の犯せし罪のために(注147)サタンが彼等をつまづかしめたる(注148)故なり。されどアッラーはすでに彼等を赦し給えり。げにアッラーは有恕者、寛容者にまします。

第十七項

157. 汝等信徒たちよ、自分たちの兄弟が遠くへ旅し、(注149)或いは戦場に赴きてたおれし時、「もし彼等が我等と共に家に在りしなば、死ぬことも、殺されることもなかりしものを」と云う不信心者どもの真似をするなかれ。こはアッラーが彼等の心に悲嘆を惹き起すべく(注150)計り給えしことなり。生を与え死を賜うはアッラーにして、アッラーはお前たちの所業をみそなはし給う。

158. たといお前たちがアッラーの道のために殺され、或いは死すとも、(注151)アッラーの有恕と慈悲とは彼等が蓄積せる財宝よりはるかに優るべし。(注152)

159. 而してたといお前たち死し、或いは殺されとも、お前たちは必ずアッラーの御傍に召集せらる。(注153)

اسْتَزَلَّهُمُ الشَّيْطَانُ بَعْضَ مَا كَسَبُوا وَلَقَدْ عَفَا
اللَّهُ عَنْهُمْ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ حَلِيمٌ ﴿١٥٧﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَتْلُوا كَلِمَاتٍ تُكْفِرُوا وَقَالُوا
لِإِخْوَانِهِمْ إِذَا صَرُّوا فِي الْأَرْضِ أَوْ كَانُوا غُرًّا لَوْ
كَانُوا عِنْدَنَا مَا مَاتُوا وَمَا قُتِلُوا لِيَجْعَلَ اللَّهُ ذَلِكَ
حَسْرَةً فِي قُلُوبِهِمْ وَاللَّهُ يُخَيِّ وَيُيَيِّتُ وَاللَّهُ بِمَا
تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿١٥٨﴾

وَلَيْنَ فُتِلْتُمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ أَوْ مِتُّمْ لَمَغْفِرَةً مِّنَ
اللَّهِ وَرَحْمَةً خَيْرٌ مِّمَّا يَجْمَعُونَ ﴿١٥٩﴾

وَلَيْنَ مِّمُّم أَوْ قُتِلْتُمْ لَإِلَى اللَّهِ تَحْشُرُونَ ﴿١٦٠﴾

注147 聖なる預言者の命令を誤解して持ち場をはなれてしまったが、それを除けば忠実であった者のこと。

注148 この節での“つまづく”は、丘の駐屯地を無断で離れてしまった弓矢部隊と戦場をみすてて逃げ帰った教徒達をさす。

注149 神の大義で遠国へ旅をするのである。

注150 不信者の目的はイスラム軍を戦わせないようにする為、威嚇する事であったが、そんな警告に聴す事のないイスラム軍は、不信者達相手に戦う決意をより強くしたのである。自分達の意図とはうらはらに逆の効果を与えてしまった為、不信者達は途方にくれたのである。

注151 真実の大義の為に戦い命をおとす者は、死んだとみなされない。彼は全ての生命の統率者で居られる神に命をささげたからである。

彼は肉体的には滅びても、精神的に永遠に生きるのである。(2:155)

注152 偽善者は自分が残していかなければならぬ、富や繁栄の為、死を恐れるが、アッラーの大義に死する真の信仰を持つ者は、偽善者の卑しい貯えや、或いは教徒達自身の富或いはその他の世俗的な形で貯えたものなどは比べものにならないものを手にするのである。

注153 「お前たち」という代名詞は偽善者と信者、両方に向けられている。条件は違っても両者共、報酬と懲罰の為に神のもとに集結させられるからである。

160. 汝が彼等に対して優しいのは、アッラーの慈悲による。(注154)もし汝が手荒く冷酷なりしならば、彼等は必ず汝の周囲から離散したるべし。されば彼等を赦し、彼等のために赦しを請え。而して諸事に関して彼等と相談し、(注155)一旦決すれば、アッラーを信頼せよ。げにアッラーは、アッラーを信頼する人々を愛し給う。

فَبِمَا رَحْمَةٍ مِنَ اللَّهِ لِنْتَ لَهُمْ وَلَوْ كُنْتَ فَظًا غَلِظَ الْقَلْبُ لَا نَقُصُّوا مِنْ حَوْلِكَ فَاعْفُ عَنْهُمْ وَاسْتَغْفِرْ لَهُمْ وَشَاوِرْهُمْ فِي الْأَمْرِ فَإِذَا عَزَمْتَ فَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُتَوَكِّلِينَ ﴿١٥٤﴾

161. もしアッラーがお前たちを助けなば、何人もお前たちに打ち勝つことを得ず。されどアッラーもしお前たちを見捨てなば、アッラー以外に誰がお前たちを助くるか？されば信徒たちをして、ただアッラーに頼らしめよ。

إِنْ يَنْصُرْكُمُ اللَّهُ فَلَا غَالِبَ لَكُمْ وَإِنْ يَخْذُكُمُ فَئِنَّ ذَا الَّذِي يَنْصُرْكُم مِّنْ بَعْدِهِ وَعَلَى اللَّهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُونَ ﴿١٥٥﴾

162. 預言者たる者不正を働く筈なし。誰であれ不正を働く者は、復活の日に、自分と一緒に不正をもたらずべし。その日各人は、自分が稼ぎしものを存分に支払われ、決して不当に遇せられることなかるべし。(注156)

وَمَا كَانَ لِنَبِيِّ أَنْ يَعْلُلَ وَمَنْ يَعْلُلْ يَأْتِ بِهَا عَلَى يَوْمِ الْقِيَامَةِ ثُمَّ نُوْثِي كُلِّ نَفْسٍ مَا كَسَبَتْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ﴿١٥٦﴾

注154 ここでの言葉は、その明白で人の口にされる特質が、全てのものにあまねく慈悲深くあられた聖なる預言者の美しい性格にあてられている。彼こそ、溢れるばかりの人間的な親身さを有しており、その相手の立場を思うやさしい気持ちは、仲間だけでなく、折あらば、彼を刺そうとつけねらっていた敵の上にもそそがれていたのである。記録によると、ウハドの戦いで、彼をみすてて逃げ帰った偽善者達の処分をしなかっただけでなく、围勢の相談も、もちかけた程であった。

注155 イスラム独得のものは多々あるが、その一つは、ムシャールラ（協議）制度であり、これはイスラムの根本原理に組み入れられている。イスラム国家の元首は、大事な国事についてはイスラム教徒に計る事が義務づけられているのである。聖なる預言者は、バドル、ウハド、そして堀の戦いの前や、彼の高貴なる妻であるアイシャにあらぬ疑いがかけられた時でさえもそうした様に、全ての重要な事項に関しては、信奉者達に意見を求めたのであった。アブー・フライラは、“聖なる預言者は重要な件を他の人々と協議する時には、最も気をつかっていた。”と言う。聖なる預言者の第二代の後継者であったオマルは、“協議なくしてはフィラファトはありえない。”と語ったと伝えられている。イスラム国家の首長、或いはカリファアは、最終決定権は自分にあっても、教徒の代表者の意見に耳を傾けなければならない。そして、イスラムのシュエラ、又はムシャールラとは西洋でいう所の議会を表わしている訳ではない。イスラム国家元首は、自分に具申された意見を、はねつける、或る種の特権をもってはいるが、この自由裁断を軽々しく使うべきではなく、大多数の意見を尊重しなくてはならない。

注156 聖なる預言者に軍の後方を守る為に、丘陵への駐屯を命ぜられていた弓矢部隊は(全員ではないが)メッカ軍が全員攻戦しているのを見て持ち場を離れた。駐屯地を離れた時点で彼らは聖なる預言者の命令の意志に反しているとは思っていなかったが、結果としてはその場合、離れるべきではなかったのである。また、アラブの習慣では、戦いのさ中に、自分が手をつけた物は取り分となる為、そのままその場所に居つづければ戦利品を手にする事ができぬと考えたのである。

163. アッラーの御意に従う者が、アッラーの怒りを招き地獄を住居する者と同じであつてなるものか。そは悲惨なる帰処なり！(注157)

أَفَمَن آتَىٰ رِضْوَانًا مِّنَ اللَّهِ كَمَن بَاءَ بِسَخَطٍ مِّنَ اللَّهِ وَمَا يُدْرِيهِ جَهَنَّمُ وَبِئْسَ الْمَصِيرُ ﴿١٦٣﴾

164. アッラーの見るところでは、彼等には種々の段階あり。アッラーは彼等の所業をみそなはし給う。

هُمْ دَرَجَاتٌ عِنْدَ اللَّهِ وَاللَّهُ بَصِيرٌ بِمَا يَعْمَلُونَ ﴿١٦٤﴾

165. げにアッラーは彼等の中より一人の使徒を立てて信徒たちに恩恵を施し、その使徒をして彼等に神兆を誦みきかせしめ、彼等を浄め、以前明らかに迷誤の中にありし彼等に經典と知恵とを教えしめたり。(注158)

لَقَدْ مَنَّ اللَّهُ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ إِذْ بَعَثَ فِيهِمْ رَسُولًا مِّنْ أَنفُسِهِمْ يَتْلُوا عَلَيْهِمْ آيَاتِهِ وَيُزَكِّيهِمْ وَيُعَلِّمُهُمُ الْكِتَابَ وَالْحِكْمَةَ وَإِن كَانُوا مِن قَبْلُ لَٰكِنَ يٰٓأَيُّ صَلٰى قٰبِلِينَ ﴿١٦٥﴾

166. なんと！ お前たちに災難が降りかかると一この前は二倍もの損害を(注159)加えたるにもかかわらず一お前たちは云う、「こはどうしたわけか？」と。云え、「そはお前たち自身より出でしことなり」と。(注160)げにアッラーは萬事を支配し給う。

أَوَلَمْ نَكُنْ أَصَابَكُمْ مُصِيبَةً قَدْ أَصَبْتُمْ فَنُتِلْهَا قُلْتُمْ أَنَّىٰ هَٰذَا قُلْ هُوَ مِنْ عِندِ أَنفُسِكُمْ إِنَّ اللَّهَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿١٦٦﴾

167. 兩軍が合戦せるあの日に お前たちに起りたることは、アッラーの思し召しなり。そはアッラーがこの事によって真の信者を識り、

وَمَا أَصَابَكُمْ يَوْمَ الْتَقَى الْجَمْعَانِ فَيُذِنُ اللَّهُ وَلِيَعْلَمَ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١٦٧﴾

注157 イスラム軍を一揆に弱体化せしめたウハドでの偽善者達の裏切りに、不屈の闘志をかきたてられた聖なる預言者は、イスラムの敵と戦う為、前線に進みだ。これに反し偽善者達は、自分達の裏切りにより神の怒りをかかったのである。

注158 この言葉はイスラム教徒の心に、彼らと似ており、彼らの内の一人であつた聖なる預言者の例に習いたいという望みを目覚めさせるべく意図されている。

注159 これはメッカ軍の死者70名及び捕虜70名であつたバドルの戦いの事を言っている。ウハドの戦いではイスラム軍に70名の死者が出たが、捕虜は一人もでなかつた。故に、イスラムは既にメッカ軍に倍の打撃を与えていた事となるのである。

注160 人間の実際の行動は、その原因の善悪の両因を本人が持っているのであるが、その行動の結果をもたらず、最終的な裁き手は神である。その結果の良否は、共に神より生ずるのである。(4:79) この意味で、人の行動の結果の善悪は神に帰するものとなるのである。

168. また偽善者どもを識らんがためなり。(注161)「汝等アッラーの道のために戦え、敵を撃退せよ」と彼等云われし時、彼等は云えり、「もし我等戦の仕方を知るならば、お前たちに従うものを」と。(注162)彼等はあの日、どちらかといえば不信心者に近かりき。彼等は心にもないことをその唇で云えり。されどアッラーは、彼等が隠せることを熟知し給う。

169. 自分自身は後方に居残りながら、自分の仲間について述べる者あり、(注163)「もし彼等が我等に従いたりせば、殺されざりしものを」などと。云え、「もしお前たちの言葉が真実ならば、まず自分自身より死を防げ」と。

170. アッラーの道のために殺されたる者たちを、死せる者と考えるなかれ。然らず、彼等は主より贈り物を賜わり、主の傍近くて生存す。

171. 彼等はアッラーが授けたるその賜物に飲び、彼等の後から、未だ一緒にはならざりしが、従い来る人々のためにも歓喜に満されている。なんととなれば、彼等の身には恐れも悲哀もなかるべし。(注164)

وَلْيَعْلَمَ الَّذِينَ نَافَقُوا هَلْ وَقِيلَ لَهُمْ تَعَالَوْا قَاتِلُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ أَوْ ادْفَعُوا قَالُوا لَوْ نَعْلَمُ جَنَاحَ لَدَا تَبِعْنَاكُمْ هُمْ لِلْكَفَرِ يَوْمَئِذٍ اقْرَبُ مِنْهُمْ لِلْإِيمَانِ يَقُولُونَ بِأَفْوَاهِهِمْ مَا لَيْسَ فِي قُلُوبِهِمْ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا يَكْتُمُونَ ﴿١٦٨﴾

الَّذِينَ قَالُوا إِخْوَانُهُمْ وَقَعَدُوا لَوْ أَطَاعُونَا مَا قُتِلُوا قُلْ فَادْرءُوا عَنْ أَنْفُسِكُمُ الْمَوْتَ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿١٦٩﴾

وَلَا تَحْسَبَنَّ الَّذِينَ قُتِلُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ أَمْوَاتًا بَلْ أَحْيَاءُ عِنْدَ رَبِّهِمْ يُرْزَقُونَ ﴿١٧٠﴾

فَرِحَ بِنِهَا أَنَّهُمْ اللَّهُ مِنْ فَضْلِهِ وَتَبْتَغُونَ بِالَّذِينَ لَمْ يَلْحَقُوا بِهِمْ مِنْ خَلْفِهِمْ أَلَّا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿١٧١﴾

注161 真の信仰を持つ者と偽善者を識別する為に試練や困難が下される為、ウハドでイスラム軍が困難に出会った事は、形を変えた御恵みであった事がわかる。ウハドの戦いの行動で混然としていた、信者達の真偽が識別されたのである。

注162 この節で暗に言及されているのは、ウハドの戦いでイスラム軍をみすてて、メディナに帰ったアブドゥラ・ビン・オバイ率いるところの300名の偽善者達のことである。

注163 ‘仲間の事を語る’とは‘仲間の事について話した’、即ちイスラム軍の事に関し、自分達の間で、話をしたの意味である。

注164 壮烈な死で殉教した者達は、まだ現世に生きてはいて後に彼らのもにくる仲間が敵に勝利をおさめる事で、喜ぶであろう。即ち、死後、バールが取り除かれ、殉教者達には、イスラム軍に予定されている勝利の事が知られるという意味である。彼らは仲間についてのよい報せを受けるとは、神の天使達がイスラム軍の後の成功や勝利を彼らにいつも教えてくれるとの意味である。

172. 彼等はアッラーの恩恵とその恵み深さに喜び、アッラーが信徒たちへの報奨を無効にせざることを喜ぶ。

第十八項

173. 損害を被りたる後、アッラーと使徒の呼びかけに応えし人たち——中でもその人たちのうち善事を行い、公正に振る舞う人々は、必ず立派な報奨を授けられるべし。

174. 人々は彼等に向って云えり、「お前たちに敵対すべく大軍が集結せり。されば彼等敵を恐れよ」と。(注165)されどこの事、却って彼等の信仰心を強めたり。彼等は云えり、「アッラーいませば、我等は満足なり。彼こそは素晴らしき守護者なり」と。

175. かくて彼等はアッラーの恩恵と恵み深さに浴し、如何なる災難に遭うことなく帰り来り、(注166)アッラーが嘉し給うところに従えり。げにアッラーは恵み深い主なり。

176. 悪魔が脅かし得る者は、ただ己が仲間のみ。(注167)されば、お前たち信徒ならば、彼等悪魔を恐れず、わしを畏れよ。

177. 不信心に急ぐ徒輩を、汝悲しむことなかれ。彼等はいささかもアッラーを害すること能わず。(注168)アッラーは来世において、如何なる幸せも彼等に割り当てることを望まず。彼等は必ず厳罰を受くべし。

178. 信仰を売って不信を買う者は、アッラーをいささかも害することを能わず。彼等は必ず酷罰を受くべし。

يَسْتَبْشِرُونَ بِنِعْمَةِ اللَّهِ وَفَضْلٍ وَأَنَّ اللَّهَ لَا يُضِيعُ
أَجْرَ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١٧٢﴾

الَّذِينَ اسْتَجَابُوا لِلَّهِ وَالرَّسُولِ مِنْ بَعْدِ مَا أَصَابَهُمُ
الْقَرْحُ ۚ لِلَّذِينَ أَحْسَنُوا مِنْهُمْ وَاتَّقُوا أَجْرٌ عَظِيمٌ ﴿١٧٣﴾

الَّذِينَ قَالَ لَهُمُ النَّاسُ إِنَّ النَّاسَ قَدْ جَمَعُوا لَكُمْ
فَاخْشَوْهُمْ فَزَادَهُمْ إِيمَانًا ۖ وَقَالُوا حَسْبُنَا اللَّهُ
وَنِعْمَ الْوَكِيلُ ﴿١٧٤﴾

فَأَنقَلَبُوا بِنِعْمَةِ اللَّهِ وَفَضْلٍ لَمْ يَمَسَّ لَهُمْ سُوءٌ
وَاتَّبَعُوا رِضْوَانَ اللَّهِ وَاللَّهُ ذُو فَضْلٍ عَظِيمٍ ﴿١٧٥﴾

إِنَّمَا ذَلِكُمُ الشَّيْطَانُ يُخَوِّفُ أَوْلِيَائِهِ ۖ فَلَا تَخَافُوهُمْ
وَخَافُوا إِن كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿١٧٦﴾

وَلَا يَحْزَنُكَ الَّذِينَ يُسَارِعُونَ فِي الْكُفْرِ ۚ إِنَّهُمْ لَنْ
يُضُرُّوا اللَّهَ شَيْئًا ۚ يُرِيدُ اللَّهُ أَلَّا يَجْعَلَ لَهُمْ حِطًّا فِي
الْآخِرَةِ ۚ وَلَهُمْ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿١٧٧﴾

إِنَّ الَّذِينَ اشْتَرُوا الْكُفْرَ بِالْإِيمَانِ لَنْ يَضُرُّوا اللَّهَ
شَيْئًا ۚ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿١٧٨﴾

注165 ヌーアイム・ビン・マスードがひろめた間違った噂の事をさす。

注166 イスラム教徒達はバドル・アル・スグラで開催されていた年毎にたつ市で、多大な利益を手にして帰国した。

注167 この語句は、(1)サタンはサタンの友である不信者達の事を、信者達に恐れさせようとした。(2)しかしサタンは自分の計画で恐怖を抱かす事ができたのは不信者のみであった。—という事を意味している。

注168 イスラム或いは聖なる預言者とその信奉者を迫害しようとする者は、実際には神を冒とくしているのである。何故なら聖なる預言者の大義は、神御自身の大義だからである。

179. 不信心者どもに、われらが彼等に与える執行猶予は、彼等に幸いしていると思わしめるなかれ。われらが彼等に猶予を与えるは、ただ彼等に罪を重ねせしめんがためなり。彼等は必ず屈辱的な懲罰を受くべし。

وَلَا يَحْسَبَنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا أَنَّمَا نُثَبِّتُ لَهُمْ قَوْلَهُ لِنَنْصِبُهُ
إِنَّمَا نُثَبِّتُ لَهُمْ قَوْلَهُ لِيُرَآهُ الشَّكَّ وَهُمْ عَدَابُ
مُهِينٌ ﴿١٧٩﴾

180. アッラーは善人と悪人を区別する時まで、信徒たちを今或る状態に捨て置き給わず。(注169)また不可見なことをお前たちに啓示し給わず。されどアッラーは欲する者を使徒に選び給う。(注170)さればアッラー並びに使徒を信ぜよ。お前たち、信じて公正であれば、必ず立派な報奨を受くべし。

مَا كَانَ اللَّهُ لِيُذِلَّ الْمُؤْمِنِينَ عَلَى مَا أَنْتُمْ عَلَيْهِ
حُفَّةٌ يَبْزُرُ الْغَيْبِ مِنَ الْغَيْبِ وَمَا كَانَ اللَّهُ لِيُظْلِمَكُمْ
عَلَى الْغَيْبِ وَلَكِنَّ اللَّهَ يَجْتَبِي مِنْ رُسُلِهِ مَنْ يَشَاءُ
فَأْمِنُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ وَإِنْ تُؤْمِنُوا وَتَتَّقُوا فَلَكُمْ أَجْرٌ
عَظِيمٌ ﴿١٨٠﴾

181. アッラーが授けたる賜物を喜捨するにあたり、物惜しみする物に、そうした方が得だと思わしむるなかれ。然らず、そは彼等のために不利益なり。復活の日に 彼等の首のまわりに 物惜しみせしものを首飾りの如く付けられるべし。天地の遺産は(注171)アッラーの所有なり。さればアッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

وَلَا يَحْسَبَنَّ الَّذِينَ يَبْخُلُونَ بِمَا أَنَّهُمْ اللَّهُ مِنْ فَضْلِهِ
هُوَ خَيْرٌ لَهُمْ بَلْ هُوَ شَرٌّ لَهُمْ سَيُطَوَّقُونَ مَا يَخْلُقُوهُ
يَوْمَ الْقِيَمَةِ وَاللَّهُ مِيرَاثُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَاللَّهُ بِمَا
تَعْمَلُونَ خَبِيرٌ ﴿١٨١﴾

第十九章

182. げにアッラーはかくの如く発言する徒輩の言葉を聞けり。「アッラーは貧しく、我等は富めり」われらは彼等が云えること(注172)並びに彼等の企てが預言者たちの不当な殺害なることを記録し、且つ云わん、「汝等火炙りの刑を味わえ」と。

لَقَدْ سَمِعَ اللَّهُ قَوْلَ الَّذِينَ قَالُوا إِنَّ اللَّهَ فَقِيرٌ وَ
نَحْنُ أَغْنِيَاءُ سَنَكْتُبُ مَا قَالُوا وَقَتْلَهُمُ الْأَنْبِيَاءَ
بِفِرْحَةٍ وَنَقُولُ ذُوقُوا عَذَابَ الْحَرِيقِ ﴿١٨٢﴾

注169 ここでは、イスラム教徒がぐぐってきた試練や困難が今すぐには終わらぬ事を意味している。試練は、真の信者と偽善者や信仰低き者とが完全に識別されるまで続くのである。

注170 これは、使者の内、ある者は選ばれ、ある者は選ばれないという事を意味しているのではなく、神が、神の使者と定められた者の内から、その特定の時代に最も適したと思われる使者を、お決めになるという意味なのである。

注171 「遺産」と訳されているミラースは、ここでは所有権の意味を持つ。これは又、人に割りあてられた分との意味でもある。「楽園をつぐ者達」と述べられている23:12を参照してみる事。楽園は誰でもつぐ訳ではなく、神からの割り当てとして受け取るものなのである。

183. こはお前たちの手が先に己れ自身の前に送りたることのため、またアッラーは決してその僕たちを不当に遇せざるためなり。

ذَلِكَ بِمَا قَدَّمَتْ أَيْدِيكُمْ وَأَنَّ اللَّهَ لَيْسَ بِظَلَّامٍ
لِّلْعَبِيدِ ﴿١٨٣﴾

184. 彼等は云えり、「アッラーは我等に、火炎で食い尽される供物をもたらず物に非ずば、如何なる使徒も信ずるなかれと訓めたり」と。(注173)云え、「すでにお前たちのところへ、我より以前に、使徒たちが明証を携えて、お前たちが求めるところのものを持って来たり。お前たちの言葉が真実ならば、その時、何故使徒たちを殺害したるか?」と。

الَّذِينَ قَالُوا إِنَّ اللَّهَ عٰهَدَ إِلَيْنَا لَآ نُؤْمِنَ رُسُلِهِ
مَعَهُ يَأْتِينَا بَقَرَاتٍ نَّأْكُلُهَا النَّارُ قُلْ قَدْ جَاءَكُمْ
رُسُلٌ مِّن قَبْلِي بِالْبَيِّنَاتِ وَبِالذِّكْرِ فَلَمَّا قَلَّمُواهُمْ
إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿١٨٤﴾

185. もし彼等が汝を嘘つき呼ばわりせるとも、汝以前の使徒たちも嘘つき呼ばわりされている、種々なる明証と詩編と光り輝く經典を携えて来たあの使徒たちも。(注174)

فَإِنْ كَذَّبُوكَ فَقَدْ كَذَّبَ رُسُلٌ مِّن قَبْلِكَ جَاءُوا
بِالْبَيِّنَاتِ وَالزَّبُرِ وَالْكِتَابِ الْمُنِيرِ ﴿١٨٥﴾

186. 人は皆必ず死を(注175)味わうべし。而して復活の日においてのみ存分に報いらるべし。業火から遠ざけられ、樂園に入らしめられる者は、げに本願成就せる者なり。現世の生活は、ただ空しき享樂に過ぎず。

كُلُّ نَفْسٍ ذَآئِقَةُ الْمَوْتِ وَإِنَّمَا تُوَفَّقُونَ أُجُورَكُمْ
يَوْمَ الْقِيَمَةِ فَمَن رُّجِحَ عَنِ النَّارِ وَأُدْخِلَ الْجَنَّةَ
فَقَدْ فَازَ وَمَا الْجَنَّةُ الدُّنْيَا ۚ الْأَمْتَاعُ الْغُرُورِ ﴿١٨٦﴾

注172 ユダヤ人が、アッラーの大義の為、富を提供するよう要請された時(3:181)、イスラム教徒達をあざけて「アッラーは貧乏で我々は金持ちというのか?」と言った。この言葉は、新しい運動に参加しても、支払わねばならない金銭的負担が増すに従い、その事を快よく思わないこの様なけちな人々の心の中をも表わしているのである。

注173 この節は「火炎で食い尽される供物」についての戒律を守るとは、詐欺師にだってできる事であるから、預言者の真実を試す資格とはならないということを、ユダヤ人に示している。ユダヤ人はそういう供物に関する戒律を守ることが預言者の証と考えていたので、その誤りを指摘したのである。要求者の真実を示し確立するのは「明快なしるし(「明証」)」のみなのである。しかし、たとえ焼きつくす供物することを遵守するのが、真の預言者の資格であったとしても、ユダヤ人に反論を述べる権利などないのである。それに関するの糾弾が、「何故、お前達は決然とこの戒律を守った預言者達を受け入れなかったのだ?」という言葉によって、ユダヤ人に向けられている。

注174 自分達にもそれぞれの警告と智慧の溢れる言葉の書かれている啓示(黙示)録があるにもかかわらず、イスラエルの預言者達が全員、従ったトーラの事。

注175 死とは自然の中で最も確実である現象なのに、人々の死に対して、全く無視するか非常に冷淡な態度をとっている、ここでは俗世間の生活を、表面は甘く魅力的にみえても、一旦人がその喜びと利益を求める事に執着しだすと、にがく人をあざむくものである為、幻影であり虚無であると言っている。

187. お前たちは必ずその財産や人格において試みられるべし。(注176)またお前たちは、以前に經典を授けられたる人々や、多神教徒からさまざまなるよからぬことを聞かん。されどお前たちが毅然として公正に振る舞わば、それこそ本当に崇高な決意なり。

لَتَبْلُوَنَّ فِي أَمْوَالِكُمْ وَأَنْفُسِكُمْ وَلَتَسْمَعَنَّ مِنَ الَّذِينَ
أُوتُوا الْكِتَابَ مِنْ قَبْلِكُمْ وَمِنَ الَّذِينَ أَشْرَكُوا أَذًى
كَثِيراً وَإِنْ تَصْبِرُوا وَتَتَّقُوا فَإِنَّ ذَلِكَ مِنْ عَزْمِ
الْأُمُورِ ⑮

188. アッラーがかつて、經典を授けられたる人々と契約を結び、(注177)「お前たちこれ
を人々に説明し、隠すなかれ」と云える時
のことを思い起せ。しかるに彼等は之を背
後に投げ捨て、しかもわずかな代価で之を
売れり。彼等が買えるものは災いなるかな。

وَإِذْ أَخَذَ اللَّهُ مِيثَاقَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ لَتُبَيِّنُنَّهُ
لِلْعَالَمِ وَلَا تَكْتُمُونَهُ فَنَبَذُوهُ وَرَاءَ ظُهُورِهِمْ
وَاشْتَرَوْا بِهِ ثَمَناً قَلِيلاً فَبُئْسَ مَا يَشْتَرُونَ ⑯

189. 己れのなせることを喜び、またなさざる
ことで賞讃されることを好む徒輩—かかる
者どもが懲罰を逃れられ得ると思うなか
れ。彼等は苛酷な懲らしめを受けん。

لَا تَحْسَبَنَّ الَّذِينَ يَفْرَحُونَ بِمَا آتَوْا وَيُجِبُونَ أَنَّ
يُحْمَدُوا بِمَا لَمْ يَفْعَلُوا فَلَا تَحْسِبَنَّهُمْ بِمَقَارِفٍ مِنَ
الْعَذَابِ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ⑰

190. 天地の大権はアッラーの所有にして、
アッラーは万物の上に権能を握り給う。

وَلِلَّهِ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَاللَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ
قَدِيرٌ ⑱

第二十項

191. 天地の創造、昼夜の交替、その中に在る
ものは思慮ある人々へのさまざまなる神兆
なり。(注178)

إِنَّ فِي خَلْقِ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَاخْتِلَافِ اللَّيْلِ
وَالنَّهَارِ لَآيَاتٍ لِأُولِي الْأَلْبَابِ ⑲

192. 立つても、坐つても、横になつても、絶
えずアッラーを念じ、天地の創造について

الَّذِينَ يَذْكُرُونَ اللَّهَ قِيَمًا وَقُعُودًا وَعَلَىٰ جُوهِهِمْ

注176 試練と試行には四重の目的がある。(1)それらにより、心からの確固たる信仰を持つ熱心な信者と、ためらったり信仰が薄かったりする者とが識別される。(2)信仰に熱心な者にとっては精神的発展の手段となる。(3)試練をかいぐぐる者は、その際に自分自身の信仰の強さ或いは弱さを知り、それにより自らの行為を正す事が可能になる。(4)試練はそれに値する者にとっては、報酬への資格を確立してくれるものとなる。

注177 ここで述べられているのは、何ら特定の契約の事ではなく、全ての預言者の信奉者が負う、自分達は神の伝言を説きひろめ、それにかなう様生きるという一般的な契約の事である。

注178 天地創造と昼夜の入れかわりに潜在する教訓は、人に精神的な面と世俗的な面との発展を目標に創造されたのであり、もし公明正人に行動すれば、暗やみと苦しみの期間の後に、陽光と幸せがやってくるという事である。

思案する者は云う、「主よ、汝はこれを徒に創造せるに非ず。否、汝至聖者よ、我等を業火の刑より救い給え。(注 179)

193. 主よ、汝が業火の中に入らしめんとする者は、汝必ず之を辱しめ給う。而して不義なす者には如何なる救助者もなかるべし。

194. 主よ、我等は、『汝等の主を信ぜよ』と我等を信仰に招くその呼び掛けを聴いて信者となれり。されば主よ、我等の罪を赦し、犯せし数々の悪事を免除し、而して我等を正義者と共に死なしめ給え。

195. 主よ、汝の使徒たちを通して我等に約束せるものを与え給え。而して復活の日において、我等を辱しめるなかれ。げに汝は約束を破らず」と。

196. そこで主は、彼等の祈りに応えて、云えり、「わしはお前たちのうち、男女を問わず、働き者のその働きを空しくせざるべし。お前たちはお互い同士、男も女も隔てなし。(注 180) 彼等家郷を追われ移住したる者、わしのために迫害をうけ、奮戦し斃れたる人々、わしは彼等よりその罪を消滅して、河川流れる楽園に入らしめん。これぞアッラーよりの報奨なり。げに最も素晴らしき報奨は、アッラーの許にあり」と。

وَيَتَفَكَّرُونَ فِي خَلْقِ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ رَبَّنَا مَا خَلَقْتَ هَذَا بَاطِلًا سُبْحَانَكَ فَقِنَا عَذَابَ النَّارِ ﴿١٩٣﴾

رَبَّنَا إِنَّكَ مَنْ تَدْخُلِ النَّارَ فَقَدْ أَخْرَجْتَهُ وَمَا لِلظَّالِمِينَ مِنْ أَنْصَارٍ ﴿١٩٤﴾

رَبَّنَا إِنَّا سِيعْنَا مُتَنَادِيًا يُنَادِي لِلْإِيمَانِ أَنْ آمِنُوا بِرَبِّكُمْ فَآمَنَّا رَبَّنَا فَاغْفِرْ لَنَا ذُنُوبَنَا وَكَفِّرْ عَنَّا سَيِّئَاتِنَا وَتَوَقَّنَا مِنَ الْأَبْرَارِ ﴿١٩٥﴾

رَبَّنَا وَآتِنَا مَا وَعَدْتَنَا عَلَى رُسُلِكَ وَلَا تُخْزِنَا يَوْمَ الْقِيَامَةِ إِنَّكَ لَا تُخْلِفُ الْوَعْدَ ﴿١٩٦﴾

فَأَسْمَأَبَ لَهُمْ رَبَّهُمْ أَنِّي لَا أُضِيعُ عَمَلَ عَامِلٍ مِّنْكُمْ مِّمَّنْ ذَكَرُوا أَنِّي بَعْضُكُمْ مِنْ بَعْضٍ فَالَّذِينَ هَاجَرُوا وَأُخْرِجُوا مِنْ ديارِهِمْ وَأُودُوا فِي سَبِيلِي وَقُتِلُوا أَوْ قُبِلُوا لَا أَكْفِرُنَّ عَنْهُمْ سَيِّئَاتِهِمْ وَلَا دَخَلَتْهُمْ جَهَنَّمُ تَجَرَّتْ مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ ثَوَابًا مِّنْ عِنْدِ اللَّهِ وَاللَّهُ عِنْدَهُ حُسْنُ الثَّوَابِ ﴿١٩٧﴾

注 179 前節で暗喩の施されている偉大なる秩序は当然ながらはっきりとした目的なしに存在する事はないのである。全宇宙が人間の為に創造されているのだから、その人間自身の創造には偉大な目的がなくてはならないのである。人が宇宙創造の物理的現象中に存在する精神上の暗示や、宇宙にあまねくゆきわたっている完全なる秩序に思いをめぐらす時、人は神の偉大な、えい智に深く印象づけられ、己れの最も奥深い底から、「主よ、あなたはいたずらにこの宇宙をおつくりになったのではありません」との叫びがわきおこるのである。

注 180 当章ではキリスト教の教理や理想、そしてその生活様式を語っており、キリスト教教会はそうではないと主張しているにもかかわらず、キリスト教では女性の地位が男性の地位に比し完全に下位である為、教会内部の女性の地位の内容もそれに準ずる結果となっている。「お前たちはお互い同士」という言葉は、男女両方の地位の内容を強調する為のものである。

197. 汝、不信心者どもが我がもの顔に地上を闊歩する様を見て、これに欺かれるなかれ。
(注 181)

لَا يَغُرُّكَ تَقَلُّبُ الَّذِينَ كَفَرُوا فِي الْبِلَادِ ﴿١٩٧﴾

198. それはしばしの優越に過ぎず。いずれ地獄が彼等の住居とならん。そはおぞましき臥所なり。(注 182)

مَتَاعٌ قَلِيلٌ ثُمَّ مَأْوَاهُمْ جَهَنَّمُ وَبِئْسَ الْمِهَادُ ﴿١٩٨﴾

199. されど主を畏れ敬う者には、河川流れる楽園あり。彼等その中に永久に住まん―こはアッラーよりの歓待なり。正義者のためにアッラーの許にあるものは、最も素晴らしきものなり。

لَكِنَّ الَّذِينَ اتَّقَوْا رَبَّهُمْ لَهُمْ جَنَّاتٌ تَجْرَى مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا نَزِلًا مِنْ عِنْدِ اللَّهِ وَمَا عِنْدَ اللَّهِ خَيْرٌ لِلْأَبْرَارِ ﴿١٩٩﴾

200. また經典の民の中にも、アッラーを信じ、お前たちに降されたるものと並びに自分たちに降されたるものを信じ、アッラーの御前で自らへりくだる者あり。彼等はアッラーの神兆をわずかな代価で売り渡さず。これ等の人々は必ず主の御許で報奨を受けん。げにアッラーの清算は敏速なり。(注 183)

وَأَنَّ مِنْ أَهْلِ الْكِتَابِ لَنْ يُوْفُوا بِآلِهِمْ وَمَا أُنْزِلَ إِلَيْكُمْ وَمَا أُنْزِلَ إِلَيْهِمْ خُشِعِينَ لِلَّهِ لَا يَشْعُرُونَ بِأَلَيْتِ اللَّهِ تُبْسًا قَلِيلًا أُولَئِكَ لَهُمْ أَجْرُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ إِنَّ اللَّهَ سَرِيعُ الْحِسَابِ ﴿٢٠٠﴾

201. 汝等信徒たちよ、忍耐強くあれ。忍耐を互いに競い合せ。敵を用心せよ。幸いなるためにアッラーを畏れ敬え。(注 184)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اصْبِرُوا وَاصْبِرُوا وَاصْبِرُوا وَاصْبِرُوا وَاتَّقُوا اللَّهَ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿٢٠١﴾

注 181 聖なる預言者の時代にあてはまるだけでなく、この節は、現在の、目がくらむ程の生活のあらゆる面に於るキリスト教国家の物質的繁栄にもあてはまる。そしてイスラム教徒には、一時のうつろう発展のまばゆさに、だまされたり、心が弱くなったりせぬ様、警告が為されている。

注 182 キリスト教国家の繁栄は一時的なものにすぎず、この節では、実際もう始まりかけており、更に彼らに与えられるであろう、恐しい懲罰がほのめかされている。

注 183 不信者に対して、「神の清算は敏速なり」という表現が使われる場合は、神は判断を下し懲罰を与えるのが早いとの意味であり、信者に対して使われる場合は、決着をつけ、報酬を与えられるのが早いとの意味である。

注 184 この節で述べられている成功に必要な五項目は以下の通りである。

- (1) 忍耐力と心のゆるぎなさを鍛練する、
- (2) 敵よりも、より忍耐強く確固たる信念を持つ、
- (3) 自分の所属する社会と宗教に、たゆみなく勤勉に奉仕する、
- (4) 辺境地に、攻撃と防御の両方に備えるため、常時用心深く見張りを置いておく事、
- (5) 公明正大な生活を送る事、「用心」とは、また人間の心の事を意味しており、信仰を持つ者は、常に、心の内なる敵と外なる敵の両方といつでも戦える状態にいなければならない、ということである。

سُورَةُ النِّسَاءِ مَكِّيَّةٌ

アル・ニサー
(メディナ啓示)

- 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
- 汝等人人よ、お前たちの主を畏れ敬え。主は一人の人間から（注1）お前たちを創造し、その一部より（注2）配偶者を創造し、その彼等兩名より多くの男女を殖やした。お前たちその御名によって互に頼みごとを請い求めるアッラーを畏れ敬え。とりわけ血族関係の絆を重んずる（注3）アッラーを畏れ敬え。げにアッラーは常にお前たちを監視し給う。
- 孤児に（注4）その財産を与えよ。お前たちの悪いものを以て、彼等の良いものと換えるなかれ。彼等の財産をお前たちのに合せてむさぼり食うなかれ。そは大罪なり。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

يَا أَيُّهَا النَّاسُ اتَّقُوا رَبَّكُمُ الَّذِي خَلَقَكُمْ مِنْ نَفْسٍ وَاحِدَةٍ وَخَلَقَ مِنْهَا زَوْجَهَا وَبَثَّ مِنْهُمَا رِجَالًا كَثِيرًا وَنِسَاءً وَاتَّقُوا اللَّهَ الَّذِي تَسَاءَلُونَ بِهِ وَالْأَرْحَامَ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلَيْكُمْ رَقِيبًا

وَأْتُوا الْيَتَامَىٰ أَمْوَالَهُمْ وَلَا تَتَّبِعُوا الْحَيِّثُ بِالطَّبِيبِ وَلَا تَأْكُلُوا أَمْوَالَهُمْ إِلَىٰ أَمْوَالِكُمْ إِنَّهُ كَانَ حُوبًا

كَبِيرًا

注1 「一人の人間」（又は一つの魂）の意味するものは、(1)アダム (2)男と女を一体とみなした意。これは、二者が共に一つの業を行う時、二体は一体として語られるからである。(3)男と女を別物とみなした意。個々の人間はすべて。一人の人間である男の種から創られ、又同様に一人の人間である女から生まれるという意味において、人間は「一人の人間」から創られた、と言えるからである。

注2 この言葉は、女が男の肉体から造られたと言っているのではなく、女も男と同じ種に属するものであり、良きにつけ悪しきにつけ同じ傾向を持っていると言っているのである。イブが、アダムの肋骨から造られたという考えは、聖なる預言者の言葉から出てきたようである。聖なる預言者の言葉とは「女達は肋骨から造られた。それ故、確かに肋骨の最も曲がっている部分が最高の部分なのである。もし、そこを自分で真つ直ぐに伸ばそうとすれば、折れてしまうだろう。」というものである。(プハリ、ニカー書) この聖なるなる預言者の言葉は、比喩的に用いられている。なぜなら、ここではイブの名をあげることなく、すべて女というものについて述べられているからである。そしてすべての女が肋骨から造られたわけではないことは明白だからである。

注3 この節は「神への畏敬」と「親族の絆の尊重」を並列に置いている。こうして、親族を大事にすることの重要性を強調しているのである。親族との関係は、クルアーンも大いに強調しているところである。聖なる預言者は、結婚式の説教には、相手に対する義務を双方に思い起こさせるために、この節を引用するのであった。

注4 前節で、神の二つの恩恵、即ち一つの魂から多くの男と女を生み殖やしたこと、親族の絆を強くすることにより滅びしないよう保護してくれることの二つを語った後に、クルアーンは更に孤児の権利と利益を保護することにより、子孫を守る必要性を強調している。

4. もしお前たち孤児を公正に扱い得ざる恐れある場合、良しと思う女を娶るがよい、(注5) 二人なり、三人なり、四人なり。されど、もし公平に扱い得ざるを恐れなば、ただ一人の女か、或いはお前たちの右手が所有するものを娶れ。(注6) こは不公平を避けるための一番の近道なり。

وَأَنْ خِفْتُمْ أَلَّا تَقْسِطُوا فِي الْمِيثَاقِ فَانْكِحُوا مَا كَتَبَ
لَكُمْ مِنَ النِّسَاءِ مَتْنٌ وَتِلْكَ وَرِثَةٌ فَإِنْ خِفْتُمْ
أَلَّا تَعْدِلُوا فَوَاحِدَةً أَوْ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُكُمْ ذَٰلِكَ
أَدْنَىٰ أَلَّا تَعُولُوا ۝

注5 この節は、ある特定の状況のもとで、一夫多妻を許している点で重要である。イスラム教は、一人の男が妻を一度に四人まで持つことを許している。(そうするよう指示したり、奨励しているのでは決してない。) これは、孤児に関して許されているのであるから、社会の中で無視されている階層をどうするかという問題にまずその源があると理解すべきである。状況によっては、特に女捕房や、他の普通の女性と結婚することによってのみ、孤児の利益が守られる場合もあるのだ。この節では、一夫多妻を孤児の問題との関連で語っているが、これが、社会的、道徳的な悪に對し必要な処方となりうる場合も起こってくるであろう。もし、結婚そのものの目的のみを考えても、こうした事が許されるのは正当であるばかりでなく、時には望ましいことであり、必要でさえあると思われる。それどころか、こうした場合、一夫多妻を拒否してしまうと、個人や社会の最良の利益に本当に反することになるかもしれない。クルアーンによれば、結婚の目的は四つあるという。即ち、(1) 肉体的、道徳的、精神的被害の防御(2:188; 4:25) (2) 心の平和と愛する相手がいるということの大切さ、(30:22) (3) 子供を生むこと、そして(4) 親族の輪を広げること、(4:2) である。さて、妻が一人の場合、上に述べた結婚の四つの目的のうち、一つあるいは四つ共果たされないことも時々ある。たとえば、妻が不治の病や伝染病にかかった場合、もし妻が一人であれば、結婚の目的は確かに打ち砕かれてしまう。実際、その男には、もう一つ合法的な結婚をするか、欲情に負け不道徳な生活を送る以外、残された道はないのである。そして、病を患う妻は、良き伴侶ではあり得ない。なぜなら、彼女がいかに心に残り同情するに値しようとも、彼女と一緒に生活は、夫に、あらゆる点において心の平和を与えることはできないからである。同様に、もし妻が産まず女であった場合には、自分の後を継ぎ、自分の名を受け継いでいく子孫を欲する夫の自然で全く正当な願望は、一夫多妻制なくしてはかなえられないのである。イスラム教が、複数の婚姻関係を許しているのは、こうした事情に対処するためのものである。しかし、上のどの場合でも、もし夫が最初の妻と離婚するとすれば、それは彼の恥じであり不名誉となるのである。実際のところ、一夫多妻制の目的は、ある程度、一夫一妻制の目的と同じである。一夫一妻の結婚の目的のうちの一つ、あるいはすべてが満たされない時にのみ初めて一夫多妻が必要となるのである。しかし、時には、男が一人の妻を本当に愛し、それで結婚の目的が十分満たされている場合でも、もう一人あるいはそれ以上の妻を持つことが必要となるような理由が他にあらわれるのだ。その理由とは、(1) 父のない孤児の庇護、(2) まだ年若くして未亡人になってしまった女に再婚の道を開くこと、(3) 家族、社会の中で少なくなってしまう男を捕うこと、である。ここに述べられている節から、一夫多妻制は、特に、何の保護もなく残された父のない子を庇護するために必要とされていることが明白である。こうした父のない子の母は、ある男の庇護のもとにいるのであれば、彼と結婚するのがよい。そうすれば、彼は、その子や母と直接に結びつき、もっと密接な親戚関係となって、結婚していない時よりも、もっと彼らの幸福に心を砕くようになるであろう、とこの節は示唆している。未亡人を再婚させること(24:33) は、一夫多妻制が果たすもう一つの目的である。イスラム教徒は、聖なる預言者の時代には、戦いに明けくれている。多くの人が戦争で倒れ、後に、面倒を見てくれる近い親族もいない未亡人と父のない子が残された。戦争の必然の結果であるが、男より女の数が多く、また、面倒をみる人もない父のない子が非常に多くなったことから、イスラム社会を道徳的腐敗から守るため、一夫多妻制を奨励することが必要となったのである。一夫多妻制は、若い未亡人を再婚させるという付随的な理由の外に、戦争勃発後、種々の面の衰弱と共に国内の男の数が激減し、国の存亡が危ぶまれるほどになるという深刻な状況に対処するための策でもあった。民族衰微の大きな原因となる出生率の低下が生じた場合は、一夫多妻制を取り入れることによって、効果的に出生率の低下をくい止めることができるのである。一夫多妻制は、誤解されているような性的欲情のはけ口ではない。男にも女に

も同様に犠牲を要求しているのである。男も女も、個人的また当座の感情より、もっと広い社会的あるいは国家的利益を優先させるよう要求されているのである。

注6 「お前達の右手が所有するもの」という表現は、一般的には、イスラム教滅亡を謀る戦いに参加して、イスラム教徒に捕えられ、結局、自ら自分の自由を失ってしまった女捕虜、身代金も支払われない女の戦争捕虜の意である。この言葉は、クルアーンの中では「イバードやイマー」(男の召し使いと女の召し使い)という言葉よりよく用いられ、ミルク・ヤミーン(右手が所有するもの)という言葉は男女両方を意味する。この言葉は、奴隷や召し使いの意も含んだ言葉であり、ある特定の場合、この言葉が何を意味しているかは、文脈からのみ判断できるのである。「彼らの右手が持っている」という表現が、何を意味しているのか、また、これが適用される人の権利や資格については、多くの誤解が広まっている。イスラム教は、明確な言葉で奴隷制を非難している。それによれば、人間から自由を奪うことは、その人間がイスラム教やイスラム教国を滅亡させようとする戦いに加わって、自ら自分の自由を失うことになるのでなければ、それは、道徳的罪なのである。奴隷の売買もまた重大な罪である。クルアーンは、奴隷制を速やかに完全廃止するために、次のような非常に厳しい規制を定めている。(1)正規の戦闘の後にのみ、敵を捕虜にしうる。(2)捕虜は戦争が終結した後は解放しなければならない。しかし、(3)友好の証として、あるいは捕虜の交換により自由の身にすべきである。(47:5)しかし、これらのどちらの方法でも解放されなかった不運な人々と、あるいはイスラム教徒の主人のもとに留まることを望んだものは、その主人とムカータバと呼ばれる契約を結ぶことにより、自由を獲得することができる。(24:34) さて、もしある女が、上に言うような戦争中に捕虜となり、自由を奪われてミルク・ヤミーンとなったとする。そして、捕虜の交換で解放されることもならず、政府の事情も、友好のあかしとして彼女を即、解放することを許さず、彼女の同朋も政府も彼女のために身代金を払ってはくれず、彼女もムカータバを結んで、自分の自由を手に入れようと考えないとする。そうして、彼女を捕虜としている者が、道徳的理由から、秩序を守るため彼女の事前の承諾なしで、彼女と結婚するということになるのであれば、この成り行きは、どうして好ましくないものと言えるだろうか。戦争で捕虜となった女や、奴隷の女と、結婚はしないまま性関係を持つことについては、この節でもクルアーンの他のどの節でも認めてはいない。クルアーンは、戦争捕虜の女を、正式に婚姻関係を結んでいない状態で妻のように扱うことを許していないばかりでなく、こうした戦争捕虜とも自由な女と同様、妻のような関係を持つためには、結婚しなければならないと明確に述べている。二者の唯一の違いは、社会的地位がその時点では異なっているということである。つまり、戦争捕虜の女の、結婚に対する事前の承諾は、自由な女の場合のようにには必要がないとされたのである。彼女達は、反イスラムの戦争に加わったことにより、こうした権利は失ってしまっているのである。女捕虜について「右手が所有」しているというのはイスラム教が内縁関係を認めているという見解とは全く異なっているとクルアーンは述べている。この節以外にも少なくとも四つの節において、明瞭明白な言葉で、戦争捕虜の女は結婚するべきであると指示されている。(2:222; 4:4; 4:26; 24:33) 聖なる預言者もこの点について非常に明確に述べている。「奴隷の少女を所有している者、彼女に適切な教育を与え、うまく育てあげ、それから彼女に自由を与えて結婚する者、その者は二重に報われる。」(ブハリ・アルイム書) この聖なる預言者の言葉は、「もしイスラム教徒が奴隷の少女を妻にしたいと思うなら、彼はまず彼女を自由の身にし、それから結婚すべきである。」と言っているのである。聖なる預言者自身の行動も、この教えにすっかり一致している。聖なる預言者の妻のうちジュベリヤとサフィヤの二人は戦争捕虜として彼のもとへやって来た。彼らは、聖なる預言者のミルク・ヤミームであった。しかし、彼はイスラム教の法に従って、彼女らと結婚したのである。彼はまた、エジプト王から彼のところに送られてきたマリーヤとも結婚している。そして、彼女も、預言者の他の妻たちと同様に、自由な妻の立場を満喫したのである。彼女はヴェールの着用を守り「信者達の母」の一人とされた。クルアーンは結婚に叔父、叔母の娘たちに適用されるのと同様に、「汝らの右手が所有する者」にも適用されることを明らかにしている。両者共、結婚した後、妻として遇せられるべきである。先にあげた三人の場合共、結婚することによって聖なる預言者に対し正式のものとなったのである(33:51)。更に「そして『汝の右手が所有する者』以外は、既婚の女は、汝に許されてはいない」(4:25)という句は、前節と共に、男がどういう女と結婚すると違法となるかについて語っており、既婚の女は、こうした例の一つだというのである。しかし、例外が一つ設けてある。それは、既婚であっても、宗教戦争で捕虜となり、その後イスラム教徒の中に残ることを

5. 而して女たちには婚資を快く与えよ。されど、もし彼女たち自らその一部を返すならば、喜んで有難く頂戴せよ。

وَآتُوا النِّسَاءَ صَدُقَتِهِنَّ نِحْلَةً فَإِنْ طِبَّنَ لَكُمْ عَنْ شَيْءٍ مِنْهُ نَفْسًا فَكُلُوهُ هَنِيئًا مَرِيئًا ⑤

6. アッラーが扶養のためにお前たちに託したる財産を、(注7) 愚か者に与えるなかれ。その財産で彼等に衣食を給し、且つ優しい言葉で彼等に語れ。

وَلَا تُؤْتُوا السُّفَهَاءَ أَمْوَالَكُمُ الَّتِي جَعَلَ اللَّهُ لَكُمْ قِيَمًا وَارْزُقُوهُمْ فِيهَا وَاكْسُوهُمْ وَقُولُوا لَهُمْ قَوْلًا مَعْرُوفًا ⑥

7. 婚期に達するまで孤児を試みよ。もし健全な判断を(注8) 彼等に認めなば、その財産を彼等に渡すべし。孤児が成長せざるうちに、急いで之を浪費するなかれ。(注9) 後見人が富者ならば之に手を触れさせず、貧しき者なれば公正を以て之を利用せし

وَابْتَأُوا الْيَتَامَى حَتَّىٰ إِذَا بَلَغُوا النِّكَاحَ فَإِنْ آنَسْتُمْ مِنْهُمْ رُشْدًا فَادْفَعُوا إِلَيْهِمْ أَمْوَالَهُمْ وَلَا تَأْكُلُوهَا إِسْرَافًا وَبِدَارًا أَنْ يَكْبَرُوا وَمَنْ كَانَ عَدِيًّا فَلْيَسْتَعِظْ

選んだ女は、その主人と結婚できるというのである。彼女達が、前夫のもとに戻らないと決心したことは、前の結婚は無効となったとみなされたのである。ついでながら、結婚が禁止されている間柄の自由な女の親族と同じように、(こうした) 召し使い女の親族とは、結婚することが許されていない。たとえば、奴隷であった妻の母や姉妹、娘などは結婚できない。さらに、その当時の状況を考慮して、クルアーンでは、女の二つの階級の社会的地位をそれぞれ区別しなければならなかった。その区別はザウジュ(結婚した自由な女)とミルク・ヤミーーン(もと捕虜であったが結婚した女)の二つの言葉で表現された。前者は夫婦が平等であり、後者は妻がいくらか劣った地位にあることを示唆している。しかし、それは一時的な面であった。クルアーンも聖なる預言者も、捕虜の女に、丁度聖なる預言者が実行したように、まず完全な自由と十分な地位を与え、しかる後に結婚すべきであると強く勧告している。また、イスラム教は通常の戦いで女を捕虜とすることを許してはいない。そして、捕虜との結婚が、彼女の事前の承諾なしで許されるのは次のような時のみである。聖なる預言者の頃、敵国がイスラム教を滅亡させようと、また剣の力でイスラム教徒にその信仰を捨てさせようと、反イスラムの宗教戦争をしかけ、イスラムの男や女を捕虜にして連れ去り、奴隷として扱ったことがあり、その時は、イスラム側も一時的に報復をゆるされた。しかしイスラム教のこうした指示は、単なる報復であり、本来、一時的なものである。それにはまた、捕虜となった女の身もちを守るという補足的な目的もあった。こうした状況は、現在は、もはや存在しない。現在は、宗教戦争はなくなっている。従って、戦争捕虜が奴隷や召使として扱われるということもないのである。

注7 この節においては、孤児の保護者は彼らの財産を使うに当たっては、注意深く自分自身の財産のように大切に扱わねばならないと示唆している。「お前たちに託したる財産」という言葉は、「彼らの管理下にある孤児の財産」という意でもある。また、この節においては、その財産が孤児のものであろうが、孤児の保護者のものであろうが、財産すべての意で使われているという解釈も可能である。

注8 孤児が、相應の年令となり、知的に十分成長して自分の財産を管理し、運用できるようになるまでは、いかなる場合も、彼らの財産が彼らに任されることはない。

注9 この節は、保護者たちに、孤児が財産を管理できるようになるまでに、孤児たちの財産を、軽はずみに浪費してしまわないよう警告している。しかし、もし保護者が貧しければ、適当額を賃金としてもらうことは許されている。その額は彼の仕事の量に比例する。

めよ。^し而して彼等の財産を返還する時は、必ず証人を立てよ。(注10)アッラーは清算者たるに十分なり。

8. 男子は、両親及び近親の遺産の一部を得る。女子もまた、両親及び近親の遺産の一部を得る。遺産の多少を問わず一定められたる分与を得るなり。(注11)

9. 遺産の分配に際して、遠い親戚や孤児並びに貧者がその場にある場合は、その中から何がしかを彼等に与え、且つ優しい言葉で彼等に語れ。(注12)

10. もし彼等が自分の後にひ弱な子女を遺し、そのために気懸りであるならば、彼等をしてアッラーを畏れ敬い、正しい言葉を語らせしめよ。(注13)

11. 不当に孤児の財産を貪り食う徒輩は、自分の腹の中に火を吞み込むが如し。やがて彼等は燃え盛る火に焼かれるべし。

第二項

12. アッラーはお前たちの子女に関して、お前たちにかく命じたり。男子は女子二人分に相当する分与を受く。もし女子のみで、二人以上の場合は、故人の遺産の三分の二を受く。女子が一人なら、その半分を受く。また彼の両親は、(注14)彼に遺児ある場合

وَمَنْ كَانَ فَقِيرًا فَلْيَأْكُلْ بِالْمَعْرُوفِ فَإِذَا دَفَعْتُمْ إِلَيْهِمْ أَمْوَالَهُمْ فَأَشْهَدُوا عَلَيْهِمْ وَكَفَى بِاللَّهِ حَبِيرًا ⑩

الَّتِي لَهَا نَصِيبٌ مِمَّا تَرَكَ الْوَالِدَانِ وَالْأَقْرَبُونَ وَلِلنِّسَاءِ نَصِيبٌ مِمَّا تَرَكَ الْوَالِدَانِ وَالْأَقْرَبُونَ مِمَّا قَلَّ مِنْهُ لَوْ أَنَّ نَصِيبًا مَفْرُوضًا ⑪

وَإِذَا حَضَرَ الْقِسْمَةَ أُولُو الْقُرْبَىٰ وَالْيَتَامَىٰ وَالْمَسْكِينُ فَأَذْخَرُوا لَهُمْ مِنْهُ قَوْلًا مَّعْرُوفًا ⑫

وَلْيَخْشَ الَّذِينَ لَوْ تَرَكَوا مِنْ خَلْفِهِمْ ذُرِّيَّةً ضِعْفًا خَافُوا عَلَيْهِمْ فَلْيَتَّقُوا اللَّهَ وَلْيَقُولُوا قَوْلًا سَدِيدًا ⑬

إِنَّ الَّذِينَ يَأْكُلُونَ أَمْوَالَ الْيَتَامَىٰ ظُلْمًا إِنَّمَا يَأْكُلُونَ فِي بُطُونِهِمْ نَارًا وَسَيَصْلُونَ سَعِيرًا ⑭

يُوصِيكُمُ اللَّهُ فِي أَوْلَادِكُمْ لِلَّذِ كَرِهْتُ لَكُمْ حِصَّةً لِلنِّسَاءِ فَإِنْ كَانَ نِسَاءً فَوْقَ اثْنَتَيْنِ فَلَهُنَّ ثُلُثُ مَا تَرَكَ ⑮ وَإِنْ كَانَتْ وَاحِدَةً فَلَهَا النِّصْفُ وَلِأَبَوَيْهِ لِكُلِّ

注10 財産は、信頼できる証人の立ち会いのもとで、孤児が大きくなったとき、彼に渡されるべきである。

注11 この節は、相続についてのイスラム教の法の基本となっている。これは、男女の社会的平等の一般原則を示しているのである。両者共、各々にふさわしい財産の分配を受ける資格を有しているのである。詳細な規則は次の節で述べられている。

注12 他の親戚、孤児、貧しい人々という言葉は、ここでは、故人の合法的な相続人ではなく、故人の財産分与を受ける資格のない遠い親戚、孤児、貧乏人のことをいっている。この節では、彼らに合法的な相続権を与えてはいないが、財産分与の遺言書を作る時に、財産の一部をこうした人々のためにとっておくようイスラム教徒達に強く説いているのである。

注13 この節は、孤児たちのための、説得力ある非常に強力な呼びかけとなっている。

注14 父と母の両方

は、それぞれ遺産の六分の一ずつを受く。
されど遺児なく両親がその相続者である場合は、母親は三分の一を受く。もし彼に兄弟姉妹がある場合は、母親は、彼が遺言して遺贈したであらう分と負債を支払いたる後、六分の一を受く。父母と子女、お前たちは彼等のどちらが自分にとって、より有益かを知らざるなり。この分配の決りは、アッラーより出ず。げにアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。(注15)

13. もし妻に子がない場合は、お前たちは妻の遺せるものの半分を受く。されどもし子がある場合は、彼女が遺言して遺贈したであらう分と負債を支払いたる後、彼女が遺せるものの四分の一を受く。もしお前たちに子がない場合は、妻はお前たちが遺したものの四分の一を受く。されど、もしお前たちに子がある場合は、妻は、お前たちが遺言して遺贈したであらう分と負債を支払いたる後、お前たちが遺せるものの八分の一を受く。もし男でも女でもその遺産が分配される場合、彼また彼女に両親も子もなく、
(注16) 一人の兄か弟、または一人の姉か

وَاحِدٍ مِنْهُمَا الشُّدُسُ مِمَّا تَرَكَ إِنْ كَانَ لَهُ وَلَدٌ وَلَكِنْ لَمْ يَكُنْ لَهُ وَلَدٌ وَوَرِثَتْهُ أَبَوَاهُ فَلِلَّاهِ الثُّلُثُ
فَإِنْ كَانَ لَهُ إِخْوَةٌ فَلِلَّاهِ الشُّدُسُ مِنْ بَعْدِ وَصِيَّتِهِ
يُوصِي بِهَا أَوْ دَيْنٌ آبَاؤُكُمْ وَأَبْنَاؤُكُمْ لَا تَدْرُونَ
أَيُّهُمْ أَقْرَبُ لَكُمْ نَعْتَأْ قَرِيبَةً مِنَ اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ كَانَ
عَلِيمًا حَكِيمًا ⑮

وَلَكُمْ نِصْفُ مَا تَرَكَ أزْوَاجُكُمْ إِنْ لَمْ يَكُنْ لَهُنَّ
وَلَدٌ فَإِنْ كَانَ لَهُنَّ وَلَدٌ فَلِكُمُ الزَّوْجُ مِمَّا شَرَكْنَ
مِنْ بَعْدِ وَصِيَّتِهِ يُوصِي بِهَا أَوْ دَيْنٌ وَلَكِنَّ الزَّوْجَ
مِمَّا تَرَكَتُمْ إِنْ لَمْ يَكُنْ لَكُمْ وَلَدٌ فَإِنْ كَانَ لَكُمْ وَلَدٌ
فَلَهُنَّ الشُّنُ مِمَّا تَرَكَتُمْ مِنْ بَعْدِ وَصِيَّتِهِ تُوَصَّوْنَ
بِهَا أَوْ دَيْنٌ وَإِنْ كَانَ رَجُلٌ يُورَثُ كَلَّةً أَوْ امْرَأَةً
وَلَهُ أَخٌ أَوْ أُخْتُ فَلِكُلِّ وَاحِدٍ مِنْهُمَا الشُّدُسُ فَإِنْ

注15 この節では、性別や生まれた順に関係なく、すべての近親者に対する死者の財産の適切な分配を規定している。子供達、両親、夫、妻が、生存していれば、どんな場合にも相応の分配を受ける主要な相続者であり、その他の親族は、特別な場合のみその資格を有するのである。男は家族を支える責任を持つ故に、男の相続分は女の二倍である。この節では、まず、息子と娘の相続の割合を定めている。息子は娘の二分を相続するのである。息子と娘、両方いる時には、この規定が有効となる。しかし、娘たちだけで息子がいない場合、娘が二人以上であれば、遺産の2/3を彼女たちに、もし娘が一人であれば、1/2を割り当てている。この節では、両親の相続分については三つの場合を述べている。(1)ある人が、一人あるいは複数の子供を残して死んだ場合、その人の両親は各々1/6の分配を受ける。(2)もし亡くなった人に子供がなく、両親のみが相続人の場合(死者に妻あるいは夫がいない場合)には、母親が財産の1/3を相続し、あとの2/3は父親のものとなる。(3)第三の場合は第二の例の例外である。死した人に子がなく両親のみが相続者であるが、その死者に兄弟姉妹がいる場合である。この時、彼の兄弟たちが、彼から相続することはないが、両親への分配に影響を与えることになる。というのは、この場合、母親は1/6を相続し(第2の場合に1/3であったのと異なる)あとの5/6は父親のものとなる。この場合に、父親が相続する割合が多いのは、父親が死者の兄弟姉妹も扶養しなければならないからである。相続については次の節でも述べられている。

注16 カラーア(両親も子もない人)は(1)男であれ女であれ、死した後、親も子もどちらもいない人、(2)父と息子がいない人のことである。イブン・アッパスによれば、カラーアは、その人の父は生きていてもいない

妹がある場合は、各自遺産の六分の一を受く。されどそれ以上の人数にならば、遺言して遺贈したであろう分と負債を支払いたる後、彼等は均等に三分の一の分配を受く。みなこれは何人にも損害を与えざるべし。こはアッラーより出でたる命令なり。アッラーは賢哲にして、寛容者にまします。

كَانُوا الشَّرْمَنَ ذَلِكَ فَهُمْ شُرَكَاءُ فِي الثَّلَاثِ مِنْ
بَعْدَ وَصِيَّةٍ يُوصَىٰ بِهَا أَوْ دَيْنٍ غَيْرَ مُضَاعَفَةٍ وَصِيَّةُ
مِنَ اللَّهِ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَلِيمٌ ﴿١٥﴾

14. これ等はアッラーによりて立てられたる定律なり。誰であれアッラーとその使徒に従う者は、アッラーが河川流れる楽園へ入らしめん。その中に永久に彼等は住まん。そは大成功なり。

تِلْكَ حُدُودُ اللَّهِ وَمَنْ يُطِيعِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ يَدْخُلْهُ
جَنَّاتٌ تَجْرَىٰ مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا
ذَلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿١٥﴾

15. されど誰であれアッラーとその使徒に背き、その定律を破る者は、業火に投ぜられ、永劫にその中に住み、屈辱的な懲罰を受けん。

وَمَنْ يُخْلِصِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ وَيَعْتَزْ حُدُودَ اللَّهِ يَدْخُلْهُ
نَارًا خَالِدًا فِيهَا وَلَهُ عَذَابٌ مُهِينٌ ﴿١٥﴾

第三項

16. お前たちの妻がけしからぬ行いを(注17)したる場合は、四名の証人を喚べ。もし彼等立証しなば、彼女が死に至るまで、またはアッラーが何か別の道を講ずるまで彼女を家に軟禁せよ。

وَالَّذِي يَأْتِيَنَّهَا فَحَاشَةٌ مِنْ نِسَائِكُمْ فَاسْتَشْهِدُوا
عَلَيْهِنَّ أَرْبَعَةً فَمِنْكُمْ فَإِنْ شَهِدُوا فَاْمْسِكُوهُنَّ
فِي الْبُيُوتِ حَتَّىٰ يَتَوَفَّيَهُنَّ الْمَوْتُ أَوْ يَجْعَلَ اللَّهُ
لَهُنَّ سَبِيلًا ﴿١٦﴾

としても、息子がいない人であるという。この解釈は、この言葉の三つの意味と考えてよいだろう。カララの兄弟姉妹は三つの項目に分かれる。第一は、本当の兄弟姉妹、即ち、両親が同じ者(こうした兄弟姉妹は専門的にはアヤーニーと呼ばれる)第二は、父方だけの兄弟姉妹である。(専門的にはアラーティーと呼ばれる)、第三に母方だけの兄弟姉妹で、父親が死者の父とは異なる場合である。(専門的にはアハヤーフィーと呼ばれる)。この節の規定が関係するのは、この最後の項である。前の二つの項の兄弟姉妹に関する規定は、当章の最後の節の中に示されている。この第三の項の兄弟姉妹への配分は、第一、第二の項の兄弟たちへの配分より少ない。その理由は、第三の兄弟たちは母方みの関係であり、他の二つの項の兄弟たちは、死者と同じ父の子供達だからである。カララとして死んだ人の財産は、兄弟と姉妹とは同じ配分である。通例の二対一の割合は、この場合適用されない。

注17 クルアーンの中で(7:29; 33:31; 65:2)用いられているような密通とか不義の意ではない。この言葉は社会関係を侵害し、平和を乱すものとなるような明らかに誤った行為すべてを指している。次の節でも、同様の罪がはっきりと罰が規定されないまま語られているが、この次の節中の男達と同様に、この節中の女達は、不義や密通とまではいえないが不正な、不道德な罪を犯した女達である。これもやはり、アブ・ムスリムとムジャールヒドの見解である。こうした女達は、改心するか、結婚するまでは、他の女達と一緒にしてはならない。結婚は、アッラーによって彼女たちに開かれている道なのである。ここに言う罪は重大であるので、訴えられた女に対し不当とならないよう、目撃者が四人必要とされている。

17. またお前たちのうち男同士が同じ罪を犯さば、両名とも処罰せよ。(注18)されど改悛して行状を改めるならば、かまわずにそのままにしておけ。げにアッラーはよく教し、情け深くまします。

وَالَّذِينَ يَأْتِيْنَهَا مِنْكُمْ قُلُوْبُهُمْ وَأَنَّ ثَابًا وَأَصْلَمَا
فَاعْرِضْ عَنْهُمَا إِنَّ اللَّهَ كَانَ تَوَّابًا رَحِيْمًا ⑮

18. アッラーが悔悟を赦すは、知らずに(注19)悪事を行うも、直ちに改悛する者のみなり。アッラーはこれ等の者には憐れみをかけ給う。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

إِنَّمَا التَّوْبَةُ عَلَى اللَّهِ لِلَّذِينَ يَعْلَمُونَ السُّوءَ بِجَهَالَةٍ
ثُمَّ يَتُوبُونَ مِنْ قَرِيْبٍ فَأُولَئِكَ يَتُوبُ اللَّهُ عَلَيْهِمْ
وَكَانَ اللَّهُ عَلِيْمًا حَكِيْمًا ⑯

19. 悪事をし続けた挙句、死に臨んで、「我今後悔す」と云う者、また不信心者として死ぬ者はその悔悟を赦されざるなり。われらはかかる徒輩に痛罰を用意せり。

وَلَيْسَ التَّوْبَةُ لِلَّذِينَ يَعْلَمُونَ السَّيِّئَاتِ حَتَّى إِذَا
حَصَصَ أَحَدُهُمُ الْمَوْتَ قَالَ إِنِّي تُبْتُ اللَّهَ وَلَا
الَّذِينَ يَمُوتُونَ وَهُمْ كُفَّارٌ أُولَئِكَ أَعْتَدْنَا
لَهُمْ عَذَابًا أَلِيْمًا ⑰

20. 汝等信徒たちよ、本人の意志を無視して女を相続するは、合法に非ず。(注20)またお前たちが彼女たちに与えたるものの一部を取り戻すべく、彼女たちを不当に拘禁する

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا يَحِلُّ لَكُمْ أَنْ تَرِثُوا النِّسَاءَ كَرِهًا
وَلَا تَعْضُلُوهُنَّ لِيَنْتَحِبُوا بِبَعْضِ مَا آتَيْنَهُنَّ

注18 ここは、「両名」としてあるが必ずしも二人の男のこととは限らない。また、ここでいう罰がどのような形式をとるべきかは、関係当局の判断にまかされているのである。この節も前節も、法律で罰が規定されていない罪について語っている。事件は当局の判断にまかされ、その時の状況に応じて決定されるのである。更にこの節は、極悪非道の罪またはそれに近いような罪を犯した二人の男についても語っているようである。

注19 「知らずに」という言葉は、罪人が悪とは知らずに悪をなしたという意味ではない。実際、人のなす悪行というもののはすべて悪と知らず行った行為であり、正しく適切な知識が不足しているために生じたことなのである。「本当に無知と同義となるような知識というものがある。即ち、知ることがかえって人間に害になる知識がある。」とモハムマドは言ったとされている。従って「知らずに」という言葉がつけ加えられているのは、罪の本質、原理を示し、罪を犯さぬため、有益な知識を身につけるよう、人々に強く勧告するためである。

注20 死者の親族は、未亡人の財産を握っておこうとして、彼女が新しい結婚をすることを妨げてはならないのである。しかし、もし彼女が明らかに好ましくない人物と結婚しようとしているのであれば、親族達は彼女の結婚を妨げることができる。この節の言葉が夫に向かって言われているとすれば、次のように解釈できるであろう。即ち、もし妻が夫と共に生活するのを欲せず、夫との離別を求めているのであれば、それは「女性からの離婚」の手続きを経れば可能であり、夫は妻の金銭目当てでこれを妨げてはならないということである。しかし、もし妻が明らかに邪悪な行為を為そうとしているのであれば、夫はその離婚を妨げることができるのである。

なかれ、但し彼女に確たる罪有る場合は別なり。彼女たちと優しく交われ。(注21)お前たちもし彼女たちを嫌わば、アッラーが沢山の幸福をその中に置き給うたものを、お前たちが嫌うことになるやも知らず。

إِلَّا أَنْ يَأْتِيَنَّ بِفَاحِشَةٍ مُّبِينَةٍ وَعَسَىٰ مِنْ الْمَعْرُوفِ
فَإِنْ كَرِهْتُمُوهُنَّ فَعَسَىٰ أَنْ تَكُونُوا شِغَاءً وَمَا يَجْعَلُ اللَّهُ
فِيهِ خَيْرًا كَثِيرًا ﴿٢١﴾

21. お前たち妻を換えんとする場合、たとい彼女に巨額の宝を与えたりとも、その中から何も取り戻すなかれ。(注22)お前たちは云いがかりをつけ、明白な罪を犯し、それを取り戻さんと欲するか？

وَأِنْ أَرَدْتُمْ اسْتِبْدَالَ زَوْجٍ مِّمَّا كَانَ زَوْجًا وَلَا
أَنْتُمْ أَحَدُهُنَّ فَطَّارًا فَلَا تَأْخُذُوا مِنْهُ شَيْئًا
اتَّخِذُوهُنَّ بِهَتَّانَا وَارْتِمَاءٍ مُبِينًا ﴿٢٢﴾

22. どうして取り戻したり出来ようか、共に暮らせし仲なれば。しかも彼女は堅い誓約をお前たちから受けた身ぞ。

وَكَيفَ تَأْخُذُونَهُ وَقَدْ أَفْضَ بَعْضُكُمْ إِلَىٰ بَعْضٍ
وَأَخَذَنَ مِنْكُمْ مِيثَاقًا غَلِيظًا ﴿٢٣﴾

23. お前たち、父が娶りたる女を娶るなかれ、すでに起きたることは除外す。(注23)そは不潔で、憎むべき罪惡なり。

وَلَا تَنْكِحُوا مَا نَكَحَ آبَاؤُكُمْ مِنَ النِّسَاءِ إِلَّا مَا قَدْ
سَلَفَ إِنَّهُ كَانَ فَاحِشَةً وَمَقْتًا وَسَاءَ سَبِيلًا ﴿٢٤﴾

第四項

24. お前たちが娶つてならぬ相手は、自分の母親と(注24)自分の娘、姉妹、父方の伯叔母、母方の伯叔母、兄弟の娘、姉妹の娘、乳母(注25)、乳姉妹、妻の母親、お前たち

حُرِّمَتْ عَلَيْكُمْ أُمَّهَاتُكُمْ وَبنَاتُكُمْ وَأَخُوتُكُمْ وَعَمَّاتُكُمْ
وَخَالَاتُكُمْ وَبنَاتُ الْأَخِ وَبنَاتُ الْأُخْتِ وَأُمَّهَاتُكُمْ

注21 「最も善き者は、妻を最も大切にする者である。」と聖なる預言者が言ったとされている(ブハリ)。アーシャルフナという表現は、相互依存を示している。夫も妻も共に仲良く、お互い相手の愛に報いるよう命じている。

注22 もし、何か特別の理由により、ある人が一人の妻と離婚し、別の女と結婚したいと思っても、彼は今までに前の妻に与えたものを、たとえどんなにその額が大きかろうと、とり戻すことは許されない。

注23 この言葉は、この節が明らかにされる以前に、養母を妻としてしまった場合または姉妹二人が同時にある一人の男性と結婚していた場合、それをそのままにしておいてよいということではない。ここで言うのは、こうした男たちが悔い改め、行いを正すならば、過去に犯したどんな違法な行為に対しても罰せられることはないということである。過去の罪は許されるが、法に反して結婚した女は、ただちに離婚しなければならない。

注24 養母の親族も、実母の血縁で結婚が禁止されている関係の者たちと同様、結婚が制限されている。養母の姉妹や養母の娘との結婚は違法なのである。

注25 どの程度の乳を与えた者が、乳母として、この例にあてはまるのかは、神学者の意見の分かれるところである。

の妻が産みたる被後見人の連れ娘—されど未だ妻と肉体関係を持たざるならば、罪なし—並びに自分の息子の妻なり。また同時に二人の姉妹を娶るべからず、但しすでに起きたることは除外す。(注26) げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

الَّتِي ارْضَعْتُمْ وَاَخَوَاتُكُمْ مِنَ الرِّضَاعَةِ وَأَمْهَاتُ نِسَائِكُمْ وَرَبَائِبُكُمْ الَّتِي فِي حُجُورِكُمْ مِنْ نِسَائِكُمُ الَّتِي دَخَلْتُمْ بِهِنَّ فَإِنْ لَمْ تَكُونُوا دَخَلْتُمُ بِهِنَّ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ وَحَلَائِلُ أَبْنَائِكُمُ الَّذِينَ مِنْ أَصْلَابِكُمْ وَإِنْ تَجَمَعُوا بَيْنَ الْأُخْتَيْنِ إِلَّا مَا قَدْ سَلَفَ إِنَّ اللَّهَ كَانَ غَفُورًا رَحِيمًا ﴿٢٦﴾

25. またお前たちが娶ってならぬ相手は、既婚の婦人なり、但しお前たちの右手が所有するものは除く。(注27) こはアッラーがお前たちに命じたることなり。これ以外ならば、お前たちはその財力によって、私通などではなく、正式に結婚して妻を求めることは許される。而して彼女たちから得た利益に対して、定められた婚資を与えよ。また婚資が決まった後、相互の合意によるならば、なにをしても差し支えなし。げにアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَالْمُحْصَنَاتُ مِنَ النِّسَاءِ إِلَّا مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُكُمْ كَتَبَ اللَّهُ عَلَيْكُمْ وَإِجْلُكُمْ مَا وَرَاءَ ذَلِكَ أَنْ تَبْتَغُوا بِأَمْوَالِكُمْ مُحْصِنِينَ غَيْرَ مُسْفِحِينَ فَمَا اسْتَسْتَعْمَرُوا بِهِ مِنْهُنَّ فَأُولَهُنَّ أَجُورُهُنَّ فَرِيضَةً وَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ فِيهَا تَرَضَيْتُمْ بِهِ مِنْ بَعْدِ الْفَرِيضَةِ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿٢٧﴾

26. お前たちのうち、信徒の自由女子を娶る資力なき者には、お前たちの右手が所有する者、すなわち信徒である女中を娶らしめよ。アッラーはお前たちの信仰を熟知し給う。お前たちは皆一体なり。されば彼女たちの主人の承諾を得て結婚し、彼女たちが貞節で姦淫を犯さず、また密夫と通ずることなくば、公明正大に婚資を与うべし。されどもし結婚後、不貞をはたらきたる場合は、自由婦人に規定された刑罰の半ばを科すべ

وَمَنْ لَمْ يَسْتَطِعْ مِنْكُمْ طَوْلًا أَنْ يَنْكِحَ الْمُحْصَنَاتِ الْمُؤْمِنَاتِ فَمِنْ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُكُمْ مِنْ فَتَيَاتِكُمُ الْمُؤْمِنَاتِ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِإِيمَانِكُمْ بَعْضُكُمْ مِنْ بَعْضٍ فَانْكِحُوهُنَّ بِإِذْنِ أَهْلِهِنَّ وَأُولَهُنَّ أَجُورُهُنَّ بِالْمَعْرُوفِ مُحْصَنَاتٍ غَيْرَ مُسْفِحَاتٍ وَلَا مُتَّخِذَاتِ أَخْدَانٍ فَإِذَا أُحْصِنَ فَإِنَّ أَتَيْنَ

注26 注23 参照

注27 既に結婚している女は、別の男と結婚することは出来ないが、ここで一つの例外を認めている。その例外とは、非イスラム教国がイスラム教国に対してしかけた戦争で捕虜となった女の場合である。こうした既婚の女は、もしイスラム教に改宗し、それ故、教徒でない夫のもとに帰れなくなったのであれば、イスラム教徒と結婚してもよいのである。「汝の右手に持つもの」についての更に詳しい説明は当章注6を見よ。

し。こはお前たちのうち罪を犯す恐れのある者のために定むるなり。自分自身を抑制することが、自分のためには一層よし。アッラーは寛大にして、慈悲深くします。

第五項

27. アッラーはお前たちのために、いろいろと説き明かし、お前たちを先人の道に導かんことを望む。而してお前たちに慈顔を向けんことを望む。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。
28. アッラーはお前たちに慈顔を向けんことを望む。されど己れの下劣な欲望に従う者は、お前たちが大いに道を踏みはずさんことを望む。
29. アッラーはお前たちの荷を軽からしめんと望む、人間は弱きものに創られたるが故に。
30. 汝等信徒たちよ、相互の同意による商売で得るものに非ずば、自分たちの間で不正にむさばり食うなかれ。また己が民を殺すなかれ。げにアッラーはお前たちに慈悲深くします。
31. 何人であれ悪意を以て不当に之をなせば、われらはその者を業火の中に投込まん。それはアッラーにとりていと易きことなり。
32. お前たち禁ぜられたる大罪を避けるなば、(注 28) われらはお前たちの些細な諸悪を抹消し、栄誉の場所に入場せしめん。
33. アッラーがお前たちの誰かを、他の者より優りて創れるとも、それを羨むなかれ。男は自分の稼ぎの中から分け前を得、女もま

يَفَاحِشَةٍ فَعَلَيْهِنَّ نِصْفُ مَا عَلَى الذَّكَاتِ مِنَ الْعَذَابِ ذَلِكَ لِمَنْ خَشِيَ الْعَنَتَ مِنْكُمْ وَأَنْ تَصْبِرُوا خَيْرٌ لَكُمْ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٢٧﴾

يُرِيدُ اللَّهُ لِيُذَيِّبَ لَكُمْ وَيَهْدِيَكُمْ سُنَنَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِكُمْ وَيَتُوبَ عَلَيْكُمْ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿٢٨﴾

وَاللَّهُ يُرِيدُ أَنْ يَتُوبَ عَلَيْكُمْ وَيُرِيدُ الَّذِينَ يَتَّبِعُونَ الشَّهَوَاتِ أَنْ تَبِيلُوا مِيلًا عَظِيمًا ﴿٢٩﴾

يُرِيدُ اللَّهُ أَنْ يُخَفِّفَ عَنْكُمْ وِجْرَتَ الْإِنْسَانِ ضِعْفًا ﴿٣٠﴾
يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَأْكُلُوا أَمْوَالَكُمْ بَيْنَكُمْ بِالْبَاطِلِ إِلَّا أَنْ تَكُونَ تِجَارَةً عَنْ رَاضٍ مِنْكُمْ وَلَا تَقْتُلُوا أَنْفُسَكُمْ إِنَّ اللَّهَ كَانَ بِكُمْ رَحِيمًا ﴿٣١﴾

وَمَنْ يَفْعَلْ ذَلِكَ عُدْوَانًا وَظُلْمًا فَسَوْفَ نُصَلِّيهِ قَارًا وَكَانَ ذَلِكَ عَلَى اللَّهِ يَسِيرًا ﴿٣٢﴾

إِنْ تَجَنَّبُوا كِبَائِرَ مَا تُهَوَّنُ عَنْهُ نَكْفِرْ عَنْكُمْ سَيِّئَاتِكُمْ وَنُدْخِلَكُمْ مُدَّحَلًا كَرِيمًا ﴿٣٣﴾

وَلَا تَتَّبِعُوا مَا فَضَّلَ اللَّهُ بِهِ بَعْضَكُمْ عَلَى بَعْضٍ لِلرِّجَالِ نَصِيبٌ مِمَّا اكْتَسَبُوا وَلِلنِّسَاءِ نَصِيبٌ مِمَّا

注 28 クルアーンでは、罪の大きさの度合いによる分類はしていない。この言葉は相対的に用いているのである。神が禁じていることをなせば、何事であれ罪である。こうしたことを、やめられない、やめるのは大変だと思っても、きっぱりやめるとすれば、その人は他の罪からも許されるであろうと、この節は言っているであろう。ある学者たちは、大罪という語を、罪を犯す最後の段階の意と解釈している。もし最後の行動を行うのをやめれば、それ以前の行動は許されるであろう。

た自分の稼ぎの中から分け前を得ん。(注29) さればアッラーにその恵みを請え。げにアッラーは萬事の知識をもち給う。

34. われらはすべての人々に対して、父母及び親戚が遺すものの相続者を定めたり。また同様に お前たちの誓約を批准せる人々にも。故に彼等にもその分け前を与えよ。げにアッラーは一切を照覧し給う。

第六項

35. 男は女の保護者なり。(注30) そはアッラーがあるものを他より優れるものとし、また男は女のために己が財を費やすが故なり。されば貞淑な女は従順にして、アッラーの加護のもとに夫の秘密を守る。不従順の恐れある女は訓戒し、または臥所に独り置き去りにし、(注31) 懲らしめよ。かくてお前たちに従うようになれば、それ以上の手段を講ずるなかれ。(注32) げにアッラーはいと高く、偉大にまします。
36. もし、お前たち夫婦間の破局を恐れなば、(注33) 男の親族から調停人を一人と、女の親

اَلتَّسْبِيْنُ ۚ وَ سَلُّوْا اللّٰهَ مِنْ فَضْلِهٖ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ
بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمًا ﴿٣٤﴾

و لِكُلِّ جُلَّةٍ مَّا لِيَ مِمَّا تَرَكَ الْوَالِدِيْنَ وَالْاَقْرَبُوْنَ
وَالَّذِيْنَ عَقَدْتُمْ اَيْمَانَكُمْ فَاتُوْهُمْ بِمَا نَبِئْتُمْ اِنَّ
اللّٰهَ كَانَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ شَهِيدًا ﴿٣٥﴾

الرِّجَالُ قَوْمُوْنَ عَلَى النِّسَاءِ بِمَا فَضَّلَ اللّٰهُ بَعْضُهُمْ
عَلٰى بَعْضٍ ۚ وَ بِمَا اَنْفَقُوْا مِنْ اَمْوَالِهِمْ ۚ فَلَا ضِلٰلَۃَ
فِيْهِمْ حَيْثُ ظَنَّتْ لِّلْغَيْبِ بِمَا حَفِظَ اللّٰهُ ۚ وَ الْاَتَىٰ تَخَافُوْنَ
لُئْلَازَهُنَّ فَوِطُّوْهُنَّ وَ اِهْجُرُوْهُنَّ فِى الْمَضَاجِعِ
وَ اْضْرِبُوْهُنَّ ۚ فَاِنْ اطَعَكُمْ فَلَا تَبْغَوْا عَلَيْهِنَّ
سَبِيْلًا ۚ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ عَلِيْمًا كَبِيْرًا ﴿٣٦﴾

وَ اِنْ خِفْتُمْ شِقَاقَ بَيْنِهِمَا فَابْتَغُوا حَكْمًا ۚ وَ مِنْ

注29 この節では、男女は仕事と報酬に関しては平等であることを明確にしている。

注30 アラビア語本文にあるヤッヴァームは、女性にとって支えとなる人という意である。この節では何故男が家長となるのか、二つの理由をあげている。(1)男が精神的、肉体的に優っていること、そして(2)男が生活の糧をかせぎ、家族を扶養する者であることの二点である。従って、当然家族の生活の費用をかせぎ、扶養する男が、家族のことについては自由に管理する立場にあるのである。

注31 この句の意は(1)夫婦関係を慎む(2)床を別々に離す(3)話しかけない、である。こうした方法は、いつまでも続けられるわけではない。なぜなら、宙に浮かぶものの如く、妻を放っておくことはできないからである(4:130)。夫婦関係を持たない、つまり実質的な別居の限度は4ヵ月であるとクルアーンは言う(2:227)。もし、事態が非常に深刻だと思えば、夫は4:16に書かれている条件を守らなければならないであろう。

注32 イスラム教徒たる夫は、妻を殴打せざるを得ないことがあるとしても、妻の体に殴打の跡が残るほどに打ってはならない(ティルマディとムスマリ)。そして、妻を殴打するような夫は、最良の男とは言えないという聖なる預言者の言葉がある。

注33 ここで「お前たち」とはイスラム教国、あるいは社会全体を統合的に指すか、あるいは一般的に人々を指す。

族から調停人を一人任命せよ。(注34)もし彼等調停人が和解を望まば、アッラーは彼等を和解せしむべし。げにアッラーはすべてを知り、すべてに通曉^{つうがう}し給う。

37. アッラーを崇敬^{しやうけい}せよ。何者もアッラーと併せ祀るなかれ。而して父母に優しくせよ。親戚や孤児や貧しい人にも、血族の隣人や近くに住む他人にも、またお前たちのそばにいる仲間や旅行者にも、(注35)更にお前たちの右手が所有する者にも(注36)また然り。げにアッラーは傲慢不遜なる者を愛し給わず。

38. 自ら吝嗇^{きんさく}で他人にも吝嗇^{きんさく}を勧め、アッラーが与えたるものを隠蔽^{いんぺい}する者、われらはかくの如き不信心者どもには屈辱^{くつじやく}的な刑罰を用意せり。

39. また他人に見せびらかすためにその財を費やし、アッラーも最後の日も信ぜざる者どももまた然り。誰であれ悪魔を仲間^{さかん}に持つ者には、悪いやつを仲間にしたものよと思われしめよ。

40. アッラーと最後の日を信じ、アッラーが賜えるものの中らなにかしかを費やしたとしても、彼等には如何程の負担となりたるか？ アッラーは彼等を熟知し給う。

41. げにアッラーは一微塵^{いびじん}の重さだにも何人をも不当に遇せず。もし一善あらば、アッラーは之を倍加し、大なる報奨^{ほうしやう}を御許より与え給う。

أَهْلِهِ وَحِمْلًا مِنْ أَهْلِهَا ۚ إِنَّ يُرِيدَ إِصْلَاحًا يُوَفِّقُ
اللَّهُ بَيْنَهُمَا ۚ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلِيمًا خَبِيرًا ﴿٣٧﴾

وَاعْبُدُوا اللَّهَ وَلَا تُشْرِكُوا بِهِ شَيْئًا ۚ وَالْأُولَ الَّذِينَ
إِحْسَانًا ۚ وَبِذِي الْقُرْبَىٰ وَالْيَتَامَىٰ وَالسَّكِينِ وَالْجَارِ
فِي الْقُرْبَىٰ وَالْجَارِ الْجُنُبِ وَالصَّاحِبِ بِالْجَنُبِ
وَابْنِ السَّبِيلِ وَمَا مَلَكَتْ أَيْمَانُكُمْ ۚ إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ
مَنْ كَانَ مُخْتَالًا فَخُورًا ﴿٣٨﴾

الَّذِينَ يَبْخُلُونَ وَيَأْمُرُونَ النَّاسَ بِالْبَخْلِ وَيَكْنُزُونَ
مَا آتَاهُمُ اللَّهُ مِنْ فَضْلِهِ ۚ وَأَعْتَدْنَا لِلْكَافِرِينَ عَذَابًا
مُهِينًا ﴿٣٩﴾

وَالَّذِينَ يُنْفِقُونَ أَمْوَالَهُمْ رِئَاءَ النَّاسِ وَلَا يُؤْمِنُونَ
بِاللَّهِ وَلَا بِالْيَوْمِ الْآخِرِ ۚ وَمَنْ يَكُنِ الشَّيْطَانُ لَهُ قَرِينًا
فَسَاءَ قَرِينًا ﴿٤٠﴾

وَمَا ذَا عَلَيْهِمْ لَوْ آمَنُوا بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ ۚ وَانْفَقُوا
وَمَا رَزَقَهُمُ اللَّهُ ۚ وَكَانَ اللَّهُ بِهِمْ عَلِيمًا ﴿٤١﴾

إِنَّ اللَّهَ لَا يَظْلِمُ مِثْقَالَ ذَرَّةٍ ۚ وَإِنْ تَكَ حَسَنَةً
يُضْعِفْهَا وَيُؤْتِ مِنْ لَدُنْهُ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿٤٢﴾

注34 調停者は、相争っている両者の親族から選ばれるべきである。なぜなら、調停者たちは、争いの本当の理由を知っているべきであるし、又双方共、親族に彼らの食い違いを訴えるほうが楽である故である。

注35 前節で、妻に優しくせよと述べた後、この節でクルアーンは、その優しさを最も身近な両親から、最も遠い見ず知らずの他人まで、人間全体に広げていこうイスラム教徒たちに命じている。

注36 当章注6参照

42. われら各族より一人の証人を召喚し、また汝を彼等に対する証人たらしむるならば、はたして彼等いかがせん。

كَكَيْفَ إِذَا جِئْنَا مِنْ كُلِّ أُمَّةٍ بِشَهِيدٍ وَجِئْنَا بِكَ عَلَى هَؤُلَاءِ شَهِيدًا ﴿٣٧﴾

43. その日至らば、信ぜずして使徒に背きたる者どもは、大地が彼等とともに平にならんことを望まん。されど彼等は何一つアッラーに隠すことを得ず。

يَوْمَئِذٍ يُوَدِّدُ الَّذِينَ كَفَرُوا وَأَعَصُوا الرَّسُولَ لَوْ تُسَوَّى بِهِمُ الْأَرْضُ وَلَا يَكْتُمُونَ اللَّهَ حَدِيثًا ﴿٣٨﴾

第七項

44. 汝等信徒たちよ、お前たち酔っている時は、自分が何を云っているのか解るまで礼拝に近づくなかれ、また汚れている時も身を洗い浄めるまでは。(注 37) 但し旅行中は別なり。(注 38) また病んでいたり、旅路にあるとか、^{かたが} 厠から出て来たとか、女に触れたる場合(注 39) 水が見つからざれば、土を使って顔と手をこすれ。げにアッラーは寛大にして、寛容にまします。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَقْرَبُوا الصَّلَاةَ وَأَنْتُمْ سُكَارَى حَتَّى تَعْلَمُوا مَا تَقُولُونَ وَلَا جُنْبًا إِلَّا عَابِرِي سَبِيلٍ حَتَّى تَغْتَسِلُوا وَإِنْ كُنْتُمْ مَرْضَى أَوْ عَلَى سَفَرٍ أَوْ جَاءَ أَحَدٌ مِنْكُمْ مِنَ الْغَائِطِ أَوْ لَبَسْتُمْ لِبَاسًا فَلَاحِظًا مَاءً فَتَيَسَّمُوا صَعِيدًا طَيِّبًا فَامْسَحُوا بِوُجُوْهِكُمْ وَأَيْدِيكُمْ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَفُوًّا غَفُورًا ﴿٣٩﴾

45. 汝は經典の一部を賜わりたる者どもを見ざるか? 彼等は迷誤を購い、お前たちを道に迷わしめんと欲す。

الَّذِينَ آمَنُوا وَلَمْ يَلْبِسُوا إِيمَانَهُمْ بِشِرْكٍ يُشْكِرُونَ الصَّلَاةَ وَيَرْيَدُونَ أَنْ تَصَلُّوا السَّبِيلَ ﴿٤٠﴾

注 37 「汚れている時にも行つてはならない」という表現は次のような意味である。人は完全に正気でなければ礼拝できないのと同様に、もし汚れているのならば、沐浴によって全身を潔めた後でなければ礼拝できない。性交は体内に汚れを生じさせる。沐浴によってこの汚れを潔めて、礼拝に不可欠な条件として、汚れなく明るい、生き生きした身としなければならない。

注 38 「旅をしている時を除いて」という句は次のような意味である。即ち、通常は汚れた状態にある者は、きちんと沐浴するまでは礼拝できないが、沐浴は強制されてはいない。この場合、この節の最後で指示されているように、こすりつける動作により汚れをとることが認められる。

注 39 四つの分類は、即ち、病人、旅行者、便所から出てきた者、そして妻のもとへ行ってきた者である。この内、後の二つがけがれているので、場合に應じ沐浴するか洗うことが必要である。そして、もし水が見つからなければ、44 節の最後に示された動作を行うことができる。前の二者に関しては、水についての条件は不要である。たとえば水がなくてもよいのである。それ故、「けがれている時」という言葉が「もし病気があったり、旅行中の場合」という言葉の後につけ加えられているのである。水の代わりは土とされた。というのは、水が人に自分の起源を思いおこさせ (77: 21) そうして人間に造り出すもう一つのささやかな物質を思い起こさせるからである (30: 21)。

46. されどアッラーはお前たちの敵をよく知り給う。アッラーは愛護者たるに足り、佑助者たるに足る。
47. ユダヤ教徒の中には經典の字句の位置を変える徒輩^{やから}あり。彼等は、「我等は聞く、されど従わず」また、「聞かされざることを聞け」と云い、その舌を歪めて、「ラーイナー」と云い、信仰を中傷す。されど彼等がもし、「我等は聞き、且つ従う」とか、「汝聞け」また、「ウンズルナー」と云わば、彼等のために一層よく、更に正し。されどアッラーは、彼等をその不信心故に呪詛せり。されば彼等は、少数の者を除いて、不信心者なり。
48. 汝等經典の民よ、われらがお前たちの指導者の或る者どもを滅ぼし、お前たちをうしろに振じまわす前に、またわれらがサバト^{じゆそ}の民を呪詛せる如くお前たちを呪詛する前に、われらが^{くだ}お前たちの手許にあるものを完成すべく降し賜わりたるもの（注 40）を信ぜよ。アッラーの命令は必ず行わる。
49. げにアッラーは何者も己れに併せ祀ることを許し給わず。（注 41）されどこの事を除けば、アッラーは御心のままに誰をも赦し給う。アッラーに他神^{あだしがみ}を併せ祀る者は、大罪を犯す者なり。
50. 汝は自ら清浄であると思う徒輩^{やから}を見ざるか？ 否、御心のままに誰でも浄められるは、アッラーなり。彼等はいささかも不当に遇せられることなかるべし。

وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِأَعْدَائِكُمْ وَكَفَى بِاللَّهِ وَلِيًّا. وَكَفَى
بِاللَّهِ نَصِيرًا ﴿٤٦﴾

مِنَ الَّذِينَ هَادُوا يُحَرِّفُونَ الْكَلِمَ عَنْ مَوَاضِعِهِ
وَيَقُولُونَ سَبْعًا وَعَصِيْنَا وَاسْعَ عَيْرَ مَسْجِدٍ وَ
رَاعِنَا يَا أَيُّهَا الَّذِينَ فِي الدِّينِ الَّذِينَ هُمْ
قَالُوا اسْمِعْنَا وَاطْعْنَا وَاسْعَ وَانْظُرْنَا لَكَانَ خَيْرًا
لَّهُمْ وَأَقْوَمًا وَلَٰكِن لَّعَنَهُمُ اللَّهُ بِكُفْرِهِمْ فَلَا
يُؤْمِنُونَ إِلَّا قَلِيلًا ﴿٥٩﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا أَوْفُوا الْكَيْبَ إِمْنَا بِمَا نَزَّلْنَا مُصَدِّقًا
لِّمَا مَعَكُمْ مِّن قَبْلُ إِنَّ نَظِيرَ وَجْهَيْهَا نُنْزِلُهَا عَلَى
أَذْيَارِهَا أَوْ تَلْعَمُهَا كَمَا لَعَنَّاهُ أَصْحَابَ السَّبْتِ وَكَانَ
أَمْرُ اللَّهِ مَفْعُولًا ﴿٣٩﴾

إِنَّ اللَّهَ لَا يَغْفِرُ أَنْ يُشْرَكَ بِهِ وَيَغْفِرُ مَا دُونَ
ذَلِكَ لِمَنْ يَشَاءُ وَمَنْ يُشْرِكْ بِاللَّهِ فَقَدْ افْتَرَى
إِثْمًا عَظِيمًا ﴿٢٩﴾

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ يَزْكُونَ أَنْفُسَهُمْ بِاللَّهِ يَزْكِي
مَنْ نَشَاءُ وَلَا يَظْلُمُونَ فِتْنَةً ۝

注 40 この言葉は次のことを意味している。(1)二つの罰のどちらかが、ユダヤ人に下されるであろう。(2)ユダヤ人のある者には一方の罰が、他の者にはもう一方の罰が降りかかるであろう。

注 41 神以外に他のものを信じ、要することは反逆に値する。この節は死後のことのみ述べている。つまり、逃げた偽りの神を信じたまま死んだ者は、決して許されることがないというのである。

51. 見よ、如何に彼等がアッラーに対し虚偽を捏造するかを。(注 42) この一事だけでも、十分に明白な罪なり。

第八項

52. 汝は經典の一部を賜わりたる者どもを見ざるか？ 彼等は邪神を信仰し、罪を犯す者に従い、「この人々の方が、信徒たちよりより正しく導かれているなり」などと不信心者どもを指して云う。(注 43)

53. 彼等こそはアッラーが呪詛せる者なり。アッラーが呪詛する者には如何なる佑助者もなかるべし。

54. 彼等は天国に入れ得るとでも思うか？ もし然りとて、彼等は他人に棗椰子の核一つだに与えざるべし。

55. それとも彼等は、アッラーが恩寵を垂れたるが故にその民を妬むか？ われらはすでにアブラハムの子孫に經典と知恵を与え、且つ偉大なる王国を与えたり。

56. しかるに彼等の或る者は彼を信じ、また或る者は彼より背き去れり。されど地獄の燃え盛る炎は、彼等を懲らしめるに十分なり。

57. われらの神兆を信ぜざる者は、われら必ず之を業火に投ぜん。彼等の皮膚が(注 44) 焼けおちるごとに、われらは之を新らしき

أَنْظُرْ كَيْفَ يَفْتَرُونَ عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ وَكَفَى بِهِ
إِنَّمَا مُبِينًا ﴿٤٦﴾

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ أُوتُوا نَصِيبًا مِنَ الْكِتَابِ يُؤْمِنُونَ
بِالْحَبِيبِ وَالظَّالِمُوتِ وَيَقُولُونَ لِلَّذِينَ كَفَرُوا هَؤُلَاءِ
أَهْدَى مِنَ الَّذِينَ آمَنُوا سَبِيلًا ﴿٤٧﴾

أُولَئِكَ الَّذِينَ لَعَنَهُمُ اللَّهُ وَمَنْ يَلْعَنِ اللَّهُ فَكُنْ
تَجِدْ لَهُ نَصِيرًا ﴿٤٨﴾

أَمْ لَهُمْ نَصِيبٌ مِنَ الْمَلَكِ فَإِذَا لَا يُؤْتُونَ النَّاسَ
نَقِيرًا ﴿٤٩﴾

أَمْ يَحْسُدُونَ النَّاسَ عَلَى مَا آتَاهُمُ اللَّهُ مِنْ فَضْلِهِ
فَقَدْ آتَيْنَا آلَ إِبْرَاهِيمَ الْكِتَابَ وَالْحِكْمَةَ وَآتَيْنَهُمْ
مُلْكًا عَظِيمًا ﴿٥٠﴾

فَمِنْهُمْ مَنْ آمَنَ بِهِ وَمِنْهُمْ مَنْ صَدَّ عَنْهُ وَ
كَفَى بِجَهَنَّمَ سَعِيرًا ﴿٥١﴾

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا بِآيَاتِنَا سَوْفَ نُصْلِيهِمْ نَارًا كُلَّمَا
نَضِجَتْ جُلُودُهُمْ بَدَّلْنَاهُمْ جُلُودًا غَيْرَهَا لِيَذُوقُوا

注 42 預言者を誰も必要としないので、神はもはや預言者をお遣しにはならないうなどと言うのは、ユダヤ人が言っている虚偽である。民衆が墮落した時に、預言者は必ず現われた。そして、現実には預言者はイスラム教の聖なる預言者に具現されたのである。

注 43 イスラム教徒達は、聖書に記されているすべての預言者も、モーゼに与えられた法の聖なる原理も信じていた。しかし、これらに対するユダヤ人の憎悪は非常に激しく、ユダヤ人たちは、聖書も預言者も認めないアラビアの偶像崇拜者のほうが、イスラム教徒よりましだと断言していたのである。

注 44 今日、肉より皮膚のほうが多くの神経が集まっているので、痛みに対して敏感であることが医学的に立証されている。クルアーンはこの大事実を 1400 年も前に明らかにしていた。クルアーンは、地獄の受刑者は焼かれた後皮膚が再生し、また焼かれることにより痛みが続くと述べているのである。

皮膚に取り替え、彼等をしてその罰をいつまでも味わしめん。げにアッラーは偉大にして、賢哲にまします。

﴿الْعَذَابُ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَزِيزًا حَكِيمًا﴾

58. されど信徒にして善行を積む者は、われら彼等を河川流れる楽園に入らしめ、永久にその中に住ましめん。彼等はそこにて汚れなき配偶者を娶らん。而してわれらは、彼等を気持ちよい樹蔭に導かん。

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ سَنُدْخِلُهُمْ جَنَّاتٍ تَجْرَى مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا لَهُمْ فِيهَا أَزْوَاجٌ مُطَهَّرَةٌ وَدُخِلُوهُمْ ظِلًّا ظِلِيلًا ﴿٥٨﴾

59. アッラーはお前たちに、委託物は元の所有者に返還すべきことを命じ給う。(注45)また人を裁く時は、公正を旨とするよう命じ給う。(注46)アッラーがお前たちに訓戒することは、なんと素晴らしきことかな！アッラーはすべてを聴き、すべてをみそなはし給う。

إِنَّ اللَّهَ يَأْمُرُكُمْ أَنْ تُؤَدُّوا الْأَمَانَاتِ إِلَى أَهْلِهَا وَإِذَا حَكَمْتُمْ بَيْنَ النَّاسِ أَنْ تَحْكُمُوا بِالْعَدْلِ إِنَّ اللَّهَ نِعِمَّا يَعِظُكُمْ بِهِ إِنَّ اللَّهَ كَانَ سَمِيعًا بَصِيرًا ﴿٥٩﴾

60. 汝等信徒たちよ、アッラーと使徒並びにお前たちの中の権限を委ねられたる者に従え。(注47)もし何事においてか互に意見を異にする場合、お前たちアッラーと最後の日を信ずるならば、それをアッラーと使徒に委ねよ。それが最善かつもっとも褒めるに価する結果に至る。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اطِيعُوا اللَّهَ وَاطِيعُوا الرَّسُولَ وَأُولِي الْأَمْرِ مِنْكُمْ فَإِنْ تَنَازَعْتُمْ فِي شَيْءٍ فَرُدُّوهُ إِلَى اللَّهِ وَالرَّسُولِ إِنْ كُنْتُمْ تُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ ذَلِكَ خَيْرٌ وَأَحْسَنُ تَأْوِيلًا ﴿٦٠﴾

第九項

61. 汝は、汝に啓示されたるもの並びに汝以前に啓示されたるものを信じているふりをし

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ يَزْعُمُونَ أَنَّهُمْ آمَنُوا بِمَا أُنْزِلَ

注45 支配する権威、権力は民衆の「委託」によるものであるとここで記されている。そして、その権威、権力は民衆のものであり、誰か個人または王家の生得のものではないと明言しているのである。クルアーンは、王制や世襲制を認めず、代表制の政治形態を定めている。長は選挙によって選ばれるべきであり、長を選ぶ時には、民衆はその役職に最もふさわしい人に投票するよう命じられている。

注46 イスラム教国の首長と、行政の仕事を委ねられている者たちは、各々の権限を公正に適切に使うよう命じられている。

注47 「アッラーと使徒並びに」という言葉で表現されている命令は、支配者と被支配者との間の意見の相違、あるいは被支配者の間の食い違いのいずれかに係っているだろう。前者において重要なのは、もし支配者と被支配者との間に不一致の生ずる問題があれば、それはクルアーンの教えに照らして決定されるべきであり、もしそれができなければ、スンナとハディースに照らして決めなければならないということである。しかしながら、もしクルアーンもスンナもハディースもその問題について何も述べていなければ、それは、イスラム教徒の諸事を監督する権限を任された者に委ねられるべきである。この節は特に国家的な問題について述べているようであるが、この点における基本的な掟は、神と神の使者への服従が、あらゆる権威に対する服従に優先するということである。しかし、(一般の)人々の間に意見の相違が生じている社会的な問題に關しての意見の食い違いや紛争の場合は、イスラム教徒はイスラム教の戒律に従うべきであり、他の法律に従ってはならない。

ている者どもを見ざるか？ 彼等は邪神に従うなかれと命ぜられていたにもかかわらず、審判を邪神に求めんとす。悪魔は彼等を遙か遠く邪道に導かんと欲す。

إِلَيْكَ وَمَا أُنْزِلَ مِنْ قَبْلِكَ يُرِيدُونَ أَنْ يَتَحَكَّمُوا
إِلَى الطَّاغُوتِ وَقَدْ أُمِرُوا أَنْ يَكْفُرُوا بِهِ وَيُرِيدُ
الشَّيْطَانُ أَنْ يُضِلَّهُمْ ضَلَالًا بَعِيدًا ﴿٦١﴾

62. 人あり、彼等に向つて、「汝等アッラーが降し給えるもの、並びに使徒の許へ来たれ」と云えば、汝は偽善者どもが嫌惡の情を表わして汝から顔をそむけるのを見ん。
63. 彼等は己が手で前に送れるもののために災難に遭わば、一体如何がせん？ 彼等は汝に来たり、アッラーに誓つて云う、「我等はただ好意を示し、和解を図らんとせるのみ」と。
64. アッラーは彼等の胸中の秘密をよく知り給う。されば彼等を遠ざけ、彼等を訓戒し、彼等自身に関わる効果的な言葉を以て彼等に告げよ。
65. われらが使徒を遣わせるは、アッラーの許しのもとに人々をしてアッラーに従わせしめんがためなり。もし彼等が過ちを犯し、汝のところに来てアッラーの赦しを請い、使徒も彼等のために赦しを請わば、彼等はアッラーがたびたび憐れみに転ぜられ、慈悲深くましますことを知らん。
66. 否、主に誓つて云う、彼等間の争いに汝を審判者として立て、汝が下せる判決に如何なる異議も唱えず絶対服従するまでは、彼等は信徒に非ず。
67. もしわれらが彼等に「神のために生活を犠牲にせよ」とか「家を棄てよ」と命じても、彼等の中の僅かな者しかこれに従わせるべし。もし彼等が勧告通りに行わば、そは彼等のためにはなほだよく、信仰を強力ならしめる助けとなりたるものを。

وَإِذَا قِيلَ لَهُمْ تَعَالَوْا إِلَى مَا أَنْزَلَ اللَّهُ وَإِلَى الرَّسُولِ رَأَيْتُ الْمُنَافِقِينَ يَصُدُّونَ عَنْكَ صُدُودًا ﴿٦٢﴾

فَكَيْفَ إِذَا أَصَابَهُمْ مُصِيبَةٌ بِمَا قَدَّمَتْ أَيْدِيهِمْ
ثُمَّ جَاءُوكَ يَحْلِفُونَ بِاللَّهِ إِنْ أَرَدْنَا إِلَّا الْحُسْنَى
وَتَوْفِيقًا ﴿٦٣﴾

أُولَئِكَ الَّذِينَ يَعْلَمُ اللَّهُ مَا فِي قُلُوبِهِمْ فَأَعْرِضْ عَنْهُمْ وَعِظْهُمْ وَقُلْ لَهُمْ فِي أَنْفُسِهِمْ قَوْلًا بَلِيغًا ﴿٦٤﴾

وَمَا أَرْسَلْنَا مِنْ رُسُولٍ إِلَّا لِيُطَاعَ بِإِذْنِ اللَّهِ وَلَوْ
أَنَّهُمْ إِذْ ظَلَمُوا أَنْفُسَهُمْ جَاءُوكَ فَاسْتَغْفَرُوا اللَّهَ
وَأَسْتَغْفَرَ لَهُمُ الرَّسُولُ لَوَجَدُوا اللَّهَ وَابًّا رَحِيمًا ﴿٦٥﴾

فَلَا وَرَبِّكَ لَا يُؤْمِنُونَ حَتَّى يُحَكِّمُوكَ فِي شَيْءٍ
بَيْنَهُمْ ثُمَّ لَا يَجِدُوا فِي أَنْفُسِهِمْ حَرَجًا مِمَّا قَضَيْتَ
وَيَسْلُمُوا أَسْلِيمًا ﴿٦٦﴾

وَلَوْ أَنَّا كَتَبْنَا عَلَيْهِمْ أَنْ اقْتُلُوا أَنْفُسَكُمْ أَوْ أُخْرِجُوا
مِنْ دِيَارِكُمْ مَا فَعَلُوهُ إِلَّا قَلِيلٌ مِنْهُمْ وَلَوْ أَنَّهُمْ
فَعَلُوا مَا يُوعَظُونَ بِهِ لَكَانَ خَيْرًا لَهُمْ وَأَشَدَّ
تَنْبِيْهًا ﴿٦٧﴾

68. 然らばわれらは必ず大なる報奨を彼等と与え、

وَإِذَا لَا تَنْبَهُهُمْ مِّنْ لَّدُنَّا أَجْرًا عَظِيمًا ﴿١٨﴾

69. 正しき道に導かん。

وَلَهْدِيهِمْ سِرَاطًا مُّسْتَقِيمًا ﴿١٩﴾

70. 誰であれアッラーとその使徒に従う者は、アッラーの祝福を受けし人々、すなわち預言者たち、誠実者たち、殉教者たち、並びに正義者たちの仲間に加わらん。彼等は素晴らしい仲間なり。(注 48)

وَمَنْ يُطِيعِ اللَّهَ وَالرَّسُولَ فَأُولَٰئِكَ مَعَ الَّذِينَ أَنْعَمَ اللَّهُ عَلَيْهِمْ مِنَ النَّبِيِّينَ وَالصِّدِّيقِينَ وَالشُّهَدَاءِ وَالصَّالِحِينَ وَحَسُنَ أُولَٰئِكَ رَفِيقًا ﴿٢٠﴾

71. これこそはアッラーよりの恩恵なり。アッラーはすべてを知る者として万全なり。

هُذَا ذِكْرُ الْفَضْلِ مِنَ اللَّهِ وَكَفَى بِاللَّهِ عَلِيمًا ﴿٢١﴾

第十項

72. 汝等信徒たちよ、安全のために用心せよ。
(注 49) 隊をいくつかに分けて進むか、全軍一団となって前進せよ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا خُذُوا حِذْرَكُمْ فَانْفِرُوا ثُبَاتٍ أَوْ وَفِرُوا جَمِيعًا ﴿٢٢﴾

73. お前たちの中には後に残る者あり。もしお前たちに災難がふりかかると、その者は云う、「我彼等と偕ならざりしは、げにアッラーの慈悲のたまものなり」と。

وَأَن مِّنْكُمْ لَمَنْ يُبْطِنُ ۖ إِن صَابَكُمْ مُّوَيْبَةٌ ۖ قَالَ قَدْ أَنْعَمَ اللَّهُ عَلَيَّ إِذْ لَمْ أَكُنْ مَعَهُمْ شَمِيمًا ﴿٢٣﴾

74. されどもしお前たちに何か幸いがアッラーより来りなば、お前たちと彼の間に何んの交誼も無かりしものの如く、「我もし彼等と偕なりせば、大成功をなし得たものを」などとは云うなり。

وَلَكِن صَابَكُمْ فَضْلٌ مِّنَ اللَّهِ يَفْقَرُونَ ۖ كَانَ لَكُمْ تَكُنْ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُ مَوَدَّةٌ يَّلِينَتِي كُنْتُ مَعَهُمْ فَأَفُوزَ فَوْزًا عَظِيمًا ﴿٢٤﴾

注 48 この節には、イスラム教徒が進みうる、精神的発展のあらゆる道が示されているので重要である。四つのどの精神的段階—預言者、誠実者、殉教者、正義者—にも、今は、聖なる預言者に従っていくことによつてのみ到達しうるのである。こうしたことは、聖なる預言者のみの特権であり、他の預言者は誰も、こうした特権を聖なる預言者と分かつことはない。この考え方は、この節によって更に裏づけられている。この節は、預言者全般について語っている。そして、57:20 では「アッラーとアッラーの使者を信ずる者、それは誠実者と殉教者である。」と言っている。これら二つの節を合わせ読んでみると、次のようになる。即ち、聖なる預言者以外の預言者に従う者は、誠実者と殉教者と正義者の地位までで、それ以上の地位を得ることはできないのに対し、聖なる預言者に従う者は、預言者の地位にも上ることができるというのである。バハルル・ムヒート(vol. iii P287)は、アル・ラーギブの次の言葉を引用している。「この節において、神は信者たちを四つの段階に分けている。そしてそれぞれに上下のある4つの段階を定めている。また、神は真の信者は、これらの段階のどれよりも低い所に止まっていなくてはならないと強く説いている。」そして、さらに付け加えて言う。「預言者の地位にも普通のものとは特別なものと二種類ある。特別な預言者は法を作り出す預言者であり、今は誰もなることはできない。しかし、普通の預言者には、いつでもなることができる。」

注 49 この語は、防衛のために必要なあらゆる警戒、準備にも広げて解釈でき、また防衛のための武器の増強の意も包含していると思われる。

75. されば来世を願って現世を犠牲にする者に、アッラーの道のために戦わしめよ。アッラーの道のために戦う者は、戦死者であれ勝利者であれ、われらは必ず大なる報奨を与えん。

فَلْيُقَاتِلْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ الَّذِينَ يَشْرُونَ الْحَيَاةَ الدُّنْيَا بِالْآخِرَةِ وَمَنْ يُقَاتِلْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ فَيُقْتَلْ أَوْ يَغْلِبْ فَسَوْفَ نُؤْتِيهِ أَجْرًا عَظِيمًا ٥٤

76. お前たち、何故にアッラーの道のために、また弱い者―男や女や子供たちのために戦わざるか？(注50) 彼等は云う、「主よ、この迫害の町から我等を連れ出し給え。而して我等のために汝の許より味方を遣わし給え。佑助者を遣わし給え」と。(注51)

وَمَا لَكُمْ لَا تُقَاتِلُونَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَالْمُسْتَضْعَفِينَ مِنَ الرِّجَالِ وَالنِّسَاءِ وَالْوِلْدَانِ الَّذِينَ يَقُولُونَ رَبَّنَا أَخْرِجْنَا مِنْ هَذِهِ الْقَرْيَةِ الظَّالِمِ أَهْلُهَا وَاجْعَلْ لَنَا مِنْ لَدُنْكَ وَلِيًّا وَاجْعَلْ لَنَا مِنْ لَدُنْكَ نَصِيرًا ٥٥

77. 信ずる者はアッラーの道のために戦い、信ぜざる者は邪神のために戦う。されば汝等悪魔の仲間に対して戦いを挑め。げに悪魔の策略は弱し。

الَّذِينَ آمَنُوا يُقَاتِلُونَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَالَّذِينَ كَفَرُوا يُقَاتِلُونَ فِي سَبِيلِ الظَّالِمِينَ فَتَقَاتِلُوا أَوْلِيَاءَ الشَّيْطَانِ إِنَّ كَيْدَ الشَّيْطَانِ كَانَ ضَعِيفًا ٥٦

第十一項

78. 汝、「手を制止めよ。礼拝を遵守し喜捨を納めよ」と告げられたる人々を見ざるか？しかるに戦闘が命ぜられると、見よ、彼等の一部はアッラーを恐れるが如く人々を恐れ、いやそれ以上大なる恐怖を以って、「主よ、何故に汝は我等に戦いを命じ給うか？しばしの猶予も我等に与えざるおつもりか？」と云う。云え、「現世の歡樂は無きに等しい。神を畏れる者にとりては、来世こそがより勝るなり。而してお前たちはいささかも不当に遇せられることなかるべし」と。

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ قِيلَ لَهُمْ كُفُّوا أَيْدِيَكُمْ وَأَقِيمُوا الصَّلَاةَ وَآتُوا الزَّكَاةَ فَلَمَّا كُتِبَ عَلَيْهِمُ الْقِتَالُ إِذَا فَرِيقٌ مِنْهُمْ يَخْشَوْنَ النَّاسَ كَخَشْيَةِ اللَّهِ أَوْ أَشَدَّ خَشْيَةً وَقَالُوا رَبَّنَا لِمَ كَتَبْتَ عَلَيْنَا الْقِتَالَ لَوْلَا أَخَّرْتَنَا إِلَى أَجَلٍ قَرِيبٍ قُلْ مَتَاعُ الدُّنْيَا قَلِيلٌ وَالْآخِرَةُ خَيْرٌ لِمَنِ اتَّقَى وَلَا يُظْلَمُونَ فَتِيلًا ٥٧

注50 この言葉も、‘汝が戦わないのは一体どうしたのか’の意である。

注51 この節は、イスラム教徒のほうから敵対行為を始めたことはないという明確な証拠である。イスラム教徒は、自分達の宗教を守り、より弱者で宗教を同じくする者を援助するための自己防衛戦しか戦ったことはない。

79. お前たち何処に在ろうとも、たとい堅固な
 高樓のうちにこもうとも、死は必ず追いつくべし。(注52) もし彼等に何かよいことが起らば、彼等は云う、「こはアッラーより賜わる」と。またもし悪しきことが身に降りかからば、彼等は云う、「こは汝の所為なり」と。云え、「すべてはアッラーが賜わるものなり」と。(注53) 彼等が何も理解し得ぬとは一体どうしたことぞ？

80. 汝に起こるすべての幸運はアッラーが下賜するものなり。(注54) しかるに汝に降りかかる災難は、汝自身が因をなす。われらは汝を使徒として人類に遣わしたり。而してアッラーは証人たるに足る。

81. 誰であれ使徒に従う者は、紛れもなくアッラーに従う者なり。されど背き去る者あらば、われらはその者どもの番人として汝を遣わしたに非ず。

82. 彼等は云う、「服従こそ我等の根本理念なり」と。しかるに彼等汝の面前より去れば、その或る者は汝が云えることに對して夜もすがら策謀をめぐらす。(注55) アッラーは闇に紛れた彼等の陰謀をすべて記録し給う。されば彼等から遠離して、ただアッラーを頼れ。事の成敗を決める者として、アッラーは万全なり。

أَيْنَ مَا تَكُونُوا يَدْرِكَكُمُ الْمَوْتُ وَلَوْ كُنْتُمْ فِي بُرُوجٍ مُّشِيدَةٍ وَإِنْ تُصِبْهُمْ حَسَنَةٌ يَقُولُوا هَذِهِ مِنْ عِنْدِ اللَّهِ وَإِنْ تُصِبْهُمْ سَيِّئَةٌ يَقُولُوا هَذِهِ مِنْ عِنْدِكَ قُلْ كُلٌّ مِنْ عِنْدِ اللَّهِ فَمَالِ هَؤُلَاءِ الْقَوْمِ لَا يَكَادُونَ يَفْقَهُونَ حَدِيثًا ٧٩

مَا أَصَابَكَ مِنْ حَسَنَةٍ فَمِنَ اللَّهِ وَمَا أَصَابَكَ مِنْ سَيِّئَةٍ فَمِنَ نَفْسِكَ وَأَرْسَلْنَاكَ لِلنَّاسِ رَسُولًا وَكَفَى بِاللَّهِ شَهِيدًا ٨٠

مَنْ يُطِيعِ الرَّسُولَ فَقَدْ أَطَاعَ اللَّهَ وَمَنْ تَوَلَّى فَمَا أَرْسَلْنَاكَ عَلَيْهِمْ حَفِيظًا ٨١

وَيَقُولُونَ طَاعَةٌ فَإِذَا بَرَزُوا مِنْ عِنْدِكَ بَيَّتَ طَائِفَةٌ مِنْهُمْ غَيْرَ الَّذِي تَقُولُ وَاللَّهُ يَكْتُبُ مَا يُبَيِّتُونَ فَأَعْرِضْ عَنْهُمْ وَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ وَكَفَى بِاللَّهِ وَكِيلًا ٨٢

注52 一般的な自然の法則について述べているか、あるいは、偽善者たちが死をまぬがれることができると考え、自然の聖なる掟にそむいたとして、彼らに対し特に発せられたと考えるかどちらかである。

注53 「すべてはアッラーが賜わるものなり」という表現は、神は宇宙における最終統制力であり、良いことも悪いことも、人間に降りかかることすべて、一般的な自然の法則かあるいは何か神の特別な命令に起因するという意味において真実である。

注54 神は人間に生まれながらの力と才能を授けた。人間はその力や才能を正しく用いれば人生において成功し、逆に誤って用いれば困難に巻き込まれるのである。つまり、すべての善は神に、すべての悪は人間に起因していると、ここでは言っているのである。

注55 ここで言及しているのは、夜であれ昼であれ、密謀のことである。通例、密謀をたくらむのは夜であるので、姿を隠してくれる覆^{とばり}であり、人目につかない「夜」という語がここで用いられているのである。

83. 彼等はクルアーンについて深く思わざるか？ もしクルアーンがアッラー以外より出てたるものならば、必ずその中には幾多の矛盾が（注56）見つかる筈なり。

أَفَلَا يَنْدَبُرُونَ الْقُرْآنَ وَلَوْ كَانَ مِنْ عِنْدِ غَيْرِ اللَّهِ لَوَجَدُوا فِيهِ اخْتِلَافًا كَثِيرًا ﴿٥٦﴾

84. 安全なことにせよ心配ごとにせよ、（注57）何等かの通報が彼等に来ると、彼等はそれを吹聴す。されど彼等もしそれを使徒または彼等のうちなる権威者に任せなば、通報より真相を引き出し得る人々が、必ずそれを理解せり。アッラーの恩恵と慈悲なかりせば、お前たちはただ少数を除いて、みな悪魔に従いしなり。

وَإِذَا جَاءَهُمْ أَمْرٌ مِنَ الْأَمْنِ أَوِ الْخَوْفِ أَذَاعُوا بِهِ وَلَوْ رَدُّوهُ إِلَى الرَّسُولِ وَإِلَى أُولِي الْأَمْرِ مِنْهُمْ لَعَلِمَهُ الَّذِينَ يَسْتَنْبِطُونَهُ مِنْهُمْ وَلَوْ لَا فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهُ لَا تَبَعْتُمُ الشَّيْطَانَ الْإِقْلِيلَ ﴿٥٧﴾

85. さればアッラーの道のために戦え——汝は己れ自身にのみ責めを負う者なり——されば信徒たちを、戦いに鼓舞激励させよ。（注58）恐らくアッラーが不信心者どもの力を制圧せん。アッラーは力において強大、罰を科するに猛烈なり。

فَقَاتِلْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ لَا تُكَلَّفُ إِلَّا نَفْسَكَ وَحَرِّضِ الْمُؤْمِنِينَ عَسَى اللَّهُ أَنْ يَكْفِ بِأَسِ الَّذِينَ كَفَرُوا وَاللَّهُ أَشَدُّ بَأْسًا وَأَشَدُّ تَنْكِيلًا ﴿٥٨﴾

86. 公正な執り成しをする者はそれに応じた報奨を得、悪意の執り成しをする者はそれに応じた報いを受けん。（注59）アッラーは萬事を支配し給う。

مَنْ يَشْفَعْ شَفَاعَةً حَسَنَةً يَكُنْ لَهُ نَصِيبٌ مِنْهَا وَمَنْ يَشْفَعْ شَفَاعَةً سَيِّئَةً يَكُنْ لَهُ كِفْلٌ مِنْهَا وَكَانَ اللَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ مُقِينًا ﴿٥٩﴾

注56 クルアーンの中の一節と、その中の教訓との「矛盾」あるいは預言者として語られているクルアーンの中の言葉と、その結果、成果の不一致は、ないことを示している。もし神からの啓示でなければ多くの矛盾があっただろう。

注57 不安情報の方が平和についての情報より後に与えられているのは、クルアーンがここでは戦いについて述べているからである。戦いの最中には、応々にして良い結果となりそうな事柄を発表するのは、不安な事柄を公表するより危険なことなのである。平時においても、ここに示されている指示は、社会の安寧や規則に直接の影響を及ぼすので、重要である。「権威ある人々」という言葉は聖なる預言者が彼の後継者あるいは彼らに指名された指導者たちのことである。

注58 この節で言わんとしているのは、聖なる預言者も含めてイスラム教徒は皆一人一人神に対して責任を負うということである。しかし、聖なる預言者のなすべき仕事は二つある。(1)自分自身戦うこと、及び(2)止むを得ない場合に、信者達に戦うよう促すことである。

注59 この節は、他人のために為す嘆願や推薦という行為を軽く考えてはならないと述べている。他人のために嘆願する者は、そうした自分の行為に責任をとらなければならないからである。もしその嘆願、推薦が正しく公正であれば、彼は十分に報われるであろう。逆にそれらが正当でなければ、そこから生じる悪い結果に対し責任をとらなければならないであろう。

87. お前たち挨拶されたなら、更に良き挨拶するか、少なくとも同じ程度の挨拶を返せ。
(注 60) げにアッラーは一切を清算し給う。

88. アッラーの外に崇敬に価する者なし。アッラーは復活の日に必ずお前たちを召集すべし。そは疑う余地なし。誰がアッラーの御言葉に勝る真実を語るか？

第十二項

89. 一体どうしたというのか、お前たち偽善者のことで二派に分れるとは？ アッラーは彼等が稼ぎしものの故に彼等を打ち倒せり。汝等はアッラーが迷わしめたる者を導かんとするか？ 汝といえど、アッラーが迷わす者に道を示すこと、そは能わざるべし。

90. 彼等は自分が信ぜざる如く、お前たちにも信ぜざらんことを望み、お前たちが同類の者ならんことを望む。されば彼等がアッラーの道のために家郷を後にするまでは、彼等の誰をも友とするなかれ。されど彼等が背を向けなば、何処なりとも彼等を捕え、之を殺せ。彼等のうちより友または援助者を選ばなかれ。

91. 但し彼等がお前たちと協定を結んでいる部族と関係がある人々、またはお前たちや己れの民と戦うのを避けるためにお前たちに投降せる者は除く。もしアッラーがその気になり給えば、アッラーは彼等にお前たちを制する力を与え、彼等は必ずお前たちと戦いしなり。されば彼等もし退きて戦わず、和平を提議する場合は、アッラーはお前たちに彼等を攻撃することを許さず。

92. お前たちは、お前たちや、己れの民と平和にありたいと望んでいる他の徒輩を見出さ

وَاِذَا جِئْتُمْ بِخَبَرٍ فَحَيُّوا بِاَحْسَنِّ مِمَّا اُورِدُوهَا
ۙ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ حَسِيْبًا ۝

اللّٰهُ لَا اِلٰهَ اِلَّا هُوَ يَجْجَعُكُمْ اِلٰى يَوْمِ الْقِيٰمَةِ لَا رَيْبَ فِيْهِ وَمَنْ اٰصَدُكُمُ مِنَ اللّٰهِ حَدِيْثًا ۝

فَمَا لَكُمْ فِي النُّفُقَيْنِ فَتَيْنِ ۚ وَاللّٰهُ اَرْكَسَهُمْ
بِمَا كَسَبُوْا اَتْرِيْدُوْنَ اَنْ تَهْدُوْا مَنْ اَضَلَّ اللّٰهُ
وَمَنْ يُّضِلِّ اللّٰهُ فَلَنْ يَّجِدَ لَهُ سَبِيْلًا ۝

وَدُّوا اَنْ تَكْفُرُوْا كَمَا كَفَرُوْا فَتَكُوْنُوْنَ سَوَآءً فَلَا تَحْتَسِبُوْا اَنْتُمْ اَوْلِيَّآءَ حَتّٰى يُّهَاجَرُوْا فِي سَبِيْلِ اللّٰهِ
فَاِنْ تَوَلَّوْا اُخَذُوْهُمْ وَاُفْتَلُوْهُمُ حَيْثُ وُجِدُوْهُمْ
وَلَا تَتَّخِذُوْا مِنْهُمْ وِلِيًّا وَلَا نَصِيْرًا ۝

اِلَّا الَّذِيْنَ يَصِلُوْنَ اِلَى قَوْمٍ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُمْ مِّثَاقٌ
اَوْ جَاءُوكُمْ حَصِرَتْ صُدُوْرُهُمْ اَنْ يُقَاتِلُوْكُمْ اَوْ
يُقَاتِلُوْا قَوْمَهُمْ وَلَوْ شَاءَ اللّٰهُ لَسَلَطَهُمْ عَلَيْهِمْ
فَلَقَتَاكُمْ فَلَاِنْ اَعْتَرَضَكُمْ فَلَمْ يُقَاتِلُوْكُمْ وَاللّٰهُ
اِنَّكُمْ السَّلَامُ فَاَجْعَلِ اللّٰهُ لَكُمْ عَلَيْهِمْ سَبِيْلًا ۝

سَيَحْدُوْنَ اٰخَرِيْنَ يَّرِيْدُوْنَ اَنْ يَّامْتُوْكُمْ وَيَاْمَنُوْا

注 60 この節は社会的義務を示している。

ん。されど彼等は騒動が再発すれば、たちまち之に顛倒す。されば、彼等もし退かず、和平も提議せず、戦いの手も制止すば、何処なりとも彼等を捕らえ、之を殺せ。そのような者どもに対しては、われらはお前たちに明白なる権能を与う。

第十三項

93. 過失によるに非ずば、信者が信者を殺すのはふさわしからず。(注61) 過って一人の信者を殺したものは、一人の奴隸信者を解放し、且つ被害者の相続人に血の賠償金を支払うべし、但し相手方がそれを喜捨として免除する場合は別なり。されどもし殺された者がお前たちと敵対する民で、しかも信者ならば(注62)、その科料は一人の奴隸信者を解放するだけでよし。またもし被害者がお前たちと協定を結べる部族であれば、その科料は血の賠償金を相手の相続人に支払った上、一人の奴隸信者を解放すべし。されどその資力なき者は二カ月間連続して断食せよ——こはアッラーよりの慈悲なり。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

94. 誰であれ、故意に信徒を殺害する者は、その応報は地獄なり。彼はその中に永久に住まん。アッラーは彼に激怒し、彼を呪い、彼に恐ろしい罰を準備せん。

95. 汝等信徒たちよ、お前たちアッラーの道のために出で立つ時は、正しい調査をせよ。而して平和を求めてお前たちに挨拶する者

قَوْمُهُمْ كَمَا رَدُّوا إِلَى الْفِتْنَةِ أُرْسُوا فِيهَا فَإِنْ لَمْ
يَعْتَرِزُواكُمْ وَيَلْقُوا إِلَيْكُمْ السَّلَامَ وَيَكْفُوا أَيْدِيَهُمْ
فَاغْدُوهُمْ وَاغْتُلُوهُمْ حَيْثُ تَقْتُلُوهُمْ وَأُولَئِكَ
جَعَلْنَا لَكُمْ عَلَيْهِمْ سُلْطَانًا مُبِينًا ﴿٩٣﴾

وَمَا كَانَ لِمُؤْمِنٍ أَنْ يَقْتُلَ مُؤْمِنًا إِلَّا خَطَاً وَمَنْ
قَتَلَ مُؤْمِنًا خَطَاً فَتَحْرِيرُ رَقَبَةٍ مُؤْمِنَةٍ وَرِيبٌ
مُسْلِمَتُهُ إِلَى أَهْلِهَا إِلَّا أَنْ يَصَدَّقُوا فَإِنْ كَانَ مِنْ
قَوْمٍ عَدِيٍّ لَكُمْ وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَتَحْرِيرُ رَقَبَةٍ مُؤْمِنَةٍ
وَأِنْ كَانَ مِنْ قَوْمٍ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُمْ مِيثَاقٌ فِدْيَةٌ
مُسْلِمَتُهُ إِلَى أَهْلِهَا وَتَحْرِيرُ رَقَبَةٍ مُؤْمِنَةٍ فَمَنْ
لَمْ يَجِدْ فَصِيَامُ شَهْرَيْنِ مُتَابِعَيْنِ تَوْبَةً مِّنَ
اللَّهِ وَكَانَ اللَّهُ عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿٩٤﴾

وَمَنْ يَقْتُلْ مُؤْمِنًا مُّتَعِدًّا فَجَزَاؤُهُ جَهَنَّمُ خَالِدًا
فِيهَا وَغَضِبَ اللَّهُ عَلَيْهِ وَلَعْنَهُ وَأَعَدَّ لَهُ عَذَابًا
عَظِيمًا ﴿٩٥﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا ضَرَبْتُمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ فَتَبَيَّنُوا

注61 実際の戦闘においては、イスラム教徒が、同じイスラム教徒に誤って殺されることもあり得る。それ故、この節ではこうした万一の実態に備え常に自分を守るよう警告を発している。

注62 殺された人がイスラム教徒であっても、たまたま敵側であった場合には、殺した人は信徒である。奴隸を一人解放すればよく、血の代償金は取り立てられない。なぜなら、敵に金銭を支払えば、反イスラム勢力の軍勢力を強化することになるからである。「(そして) もし殺された人が女と協定を結んだ間柄であるなら」という表現中には、「彼が信徒であれば」という言葉は繰り返されていないが、これは、イスラム国家に住んでいるイスラム教徒ではない者、あるいはイスラム教徒と協定を結んでいる国の中の信徒でない者についても、この法律がイスラム教徒に対してと同じであることを示しているのである。

に向って、「汝は信徒に非ず」(注63)と云うなかれ。お前たちは現世の品々を求めるが、アッラーの許には莫大なる戦利品あり。お前たちも以前は不信心者なりしが、アッラーは特別なる恩恵をお前たちに垂れ給えり。されば正しい調査をせよ。(注64)げにアッラーはお前たちの所業を^{しと}知悉^{ちしつ}し給う。

96. 不具者は別として、家に居残る信徒と、アッラーの道のために財産も生命も捧げて戦う者とは同じからず。(注65)アッラーは財産も生命も捧げて戦う者に、家に居残る者より高い位階を授けたり。アッラーはどちらの信徒にも良き報奨を約束せり。されど家に居残る者よりも、戦う者に高い位階を授け、大なる報奨、

97. すなわち^{しやめん}はるかにすぐれた位階と赦免と恵みとを授け給えり。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

第十四項

98. 己れの魂に^{あた}害^{なだ}なしているうちに天使らに召されし者、彼等に天使は^{あた}質^{なだ}さん、「お前たちの境涯^{きやうがい}や如何に？」と。彼等は答えん、「我等は地上で弱い者なりき」と。すると天使

وَلَا تَقُولُوا لِمَنْ أَلْفَ إِلَيْكُمْ السَّلَامَ لَسْتَ مُؤْمِنًا
تَبْتَغُونَ عَرَضَ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا فَعُودَ اللَّهُ مَعَانِمْ
كَثِيرَةً كَذَلِكَ كُنْتُمْ مِنْ قَبْلُ فَمَنْ اللَّهُ عَلَيْكُمْ
فَتَبَيَّنُوا إِنَّ اللَّهَ كَانَ بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرًا ﴿٩٥﴾

لَا يَسْتَوِي الْقَاعِدُونَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ غَيْرُ أُولِي الْقَرْبَى
وَالْمُجَاهِدُونَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ بِأَمْوَالِهِمْ وَأَنْفُسِهِمْ
فَضَّلَ اللَّهُ الْمُجَاهِدِينَ بِأَمْوَالِهِمْ وَأَنْفُسِهِمْ عَلَى
الْقَاعِدِينَ دَرَجَةً ۚ وَلَا وَعَدَ اللَّهُ الْخَائِسَ ۚ وَفَضَّلَ
اللَّهُ الْمُجَاهِدِينَ عَلَى الْقَاعِدِينَ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿٩٦﴾

دَرَجَاتٍ مِّنْهُ وَمَغْفِرَةً وَرَحْمَةً ۚ وَكَانَ اللَّهُ غَفُورًا
رَّحِيمًا ﴿٩٧﴾

إِنَّ الَّذِينَ تَوَفَّيْتُمُ الْمَلَائِكَةَ ظَالِمًا لِّأَنْفُسِهِمْ قَالُوا
فِيمَ كُنْتُمْ قَالُوا كُنَّا مُسْتَضْعَفِينَ فِي الْأَرْضِ قَالُوا

注63 ある国民が和平を提案してきたり、友好的態度を示す時には、イスラム教徒は、その態度に敬意を払い、敵意を抱くことを慎まなければならない。更に、メジナのイスラム教社会は敵対する部族に囲まれていたので、そこでは、イスラム教の挨拶をする人は、調べてみて信徒ではないとわかった時以外には、イスラム教徒とみなすよう指示されていた。

注64 つまり、もし正当な調査もせず、こうした人を信徒ではないと考えるなら、これは汝が相手を殺害したい、そして相手の所有物を手に入れたいと思っていることになるであろう。

注65 この節では、信者の二つの種類について述べている。(1)真面目にイスラム教を信じ、教義に従って生きようとするが、信仰を外からの攻撃から守り広めていく努力にまでは加わらない人々、つまり受動的な信者であり、この節では「家に居残る信徒」と呼ばれている。(2)イスラム教の教義に則って生きるのは勿論、その普及活動に精力的に参加する人々である。この人々は積極的な信者であり、ムジャヒドと呼ばれている。しかしながら、もう一つの種類の信者がいる。実際の非信徒との戦いには加わりはしないが、戦いに参加した者と同じ報酬を受ける者達である。彼らは心底はムジャヒドたるイスラム教徒と同じなのである。ムジャヒドは神のための戦いにどこへでも出ていくが、彼らは特別な事情のため、病気や貧困などのために、本人自らは遠征に参加できないのである。

らは云わん、「アッラーの大地は何処なりとも移り住める程広大ではなかりしか?」と。

(注 66) これ等の者どもの住居は地獄なり。そは悲惨なる行く先なり。

99. 但しかかる弱者のうち、避難の途を見出せず、またどうすべきかその手段を構ずる能力もない男や女や子供は除外す。(注 67)

100. これ等の人々には、アッラーは恐らくその罪を宥恕せん。なんとすれば、アッラーは赦免者にして、寛大にまします故に。

101. 誰であれアッラーの道のために家郷を棄てる者は、この地上のいたるところに避難場所と豊かさがあることを知るべし。また誰であれ家を後にして、アッラーの道並びに使徒のために移住し、(注 68)而して死に襲われたる者、その者の報奨はアッラーの責任なり。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

第十五項

102. 旅行中にもし不信心者どもから危害を加えられる恐れのある場合は、礼拝を短縮するとも(注 69)お前たちに罪なし。げに不信心者どもはお前たちの公然の敵なり。

أَلَمْ تَكُنْ أَرْضَ اللَّهِ وَاسِعَةً فَتُهَاجِرُوا فِيهَا فَأُولَٰئِكَ مَأْوَاهُمْ جَهَنَّمُ وَسَاءَتْ مَصِيرًا ﴿٦٦﴾

إِلَّا السُّتُصْفَيْنَ مِنَ الرِّجَالِ وَالنِّسَاءِ وَالْوِلْدَانِ لَا يَسْتَطِيعُونَ حِيلَةً وَلَا يَهْتَدُونَ سَبِيلًا ﴿٦٩﴾

فَأُولَٰئِكَ عَسَى اللَّهُ أَنْ يَعْفُو عَنْهُمْ وَكَانَ اللَّهُ عَفُوًّا غَفُورًا ﴿٧٠﴾

وَمَنْ يُهَاجِرْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ يَجِدْ فِي الْأَرْضِ مُرْعًا كَثِيرًا وَسَعَةً وَمَنْ يَخْرُجْ مِنْ بَيْتِهِ مُهَاجِرًا إِلَى اللَّهِ وَرَسُولِهِ ثُمَّ يُدْرِكْهُ الْمَوْتُ فَقَدْ وَقَعَ أَجْرُهُ عَلَى اللَّهِ وَكَانَ اللَّهُ غَفُورًا رَحِيمًا ﴿٧١﴾

وَإِذَا ضَرَبْتُمْ فِي الْأَرْضِ فَلَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ أَنْ تَقْصُرُوا مِنَ الصَّلَاةِ إِنْ خِفْتُمْ أَنْ يَفْتِنَكُمُ الَّذِينَ كَفَرُوا إِنَّ الْكَافِرِينَ كَانُوا لَكُمْ عَدُوًّا مُبِينًا ﴿٧٢﴾

注 66 イスラム教は弱い受動的な信仰では十分とは言えない。もし信者の周囲の環境が、信仰に適していないのであれば、信仰により適した場所に移住すべきである。もし移住しなければ、その信者の信仰は真剣なものとはみなされないであろう。

注 67 移住できない信者は、前節の種類分けからは除外される。

注 68 イスラム教は、信仰に対し敵意に満ちた環境から移住できるにもかかわらず、移住せず、そこに留まろうとすることに対しては、信者がどのような言い訳をしようと、それを受け入れない。

注 69 危険時の祈りについては、クルアーンは三つの別々の節で扱っている。即ち、(1)2:240では、非常に危険で正式に祈ることが不可能な時の祈りについて述べている。(2)この節では、通常の危険の時に個人個人が行う祈りを扱っている。(3)次の節では、危険な時、集団で行う祈りについて述べている。個々に行う祈りに関してこの節で言う「祈りの短縮」とはラカート(礼拝の単位)の数を減らすという意味ではない。ラカートは初めから、家より遠く離れている時には二回と定められている。敵襲の危険がある時には、定められた祈りを急いで行うという意味である。(家から遠く離れている場合ラカートは二回と定まっているので)危険が迫っている時には、この二回のラカートさえも一人一人大急ぎですませてよいのである。

103. 汝彼等と共にあり、彼等のために礼拝を先導せんとする際は、彼等の一部の者に武器をとらせて汝と共に立たしめよ。而して彼等が跪拝叩頭を終らば、彼等をしてお前たちの背後に退かしめ、まだ礼拝を済ませざる一団を前に進ませて汝と共に礼拝せしめよ。(注70) その際は彼等をして警戒せしめ、且つ武器をとらしめよ。不信心者どもはお前たちが武器や荷物をおろそかにすることを望み、一挙にお前たちを襲うことを望む。もし降雨に邪魔され、或いは病めるならば、武器を下に置くとも、お前たちに罪なし。されど常に警戒を怠るべからず。(注71) げにアッラーは不信心者どもに恥ずべき懲罰を準備せり。

وَإِذَا كُنْتَ فِيهِمْ فَأَقْبْتَ لَهُمُ الصَّلَاةَ فَلْتُمْ طَائِفَةٌ مِنْهُمْ مَعَكَ وَلْيَأْخُذُوا أَسْلِحَهُمْ تَفْأِذَا سَجَدُوا فَعَلَوْنَ مِنْ دَرَائِكُمْ وَلَتَأْتِ طَائِفَةٌ أُخْرَى لَمْ يُصَلُّوا فَلْيُصَلُّوا مَعَكَ وَلْيَأْخُذُوا حِذْرَهُمْ وَأَسْلِحَهُمْ وَالدِّينَ كَفَرُوا لَوْ تَغْفُلُونَ عَنْ أَسْلِحَتِكُمْ وَأَمْتِنَتُمْ فَيَمِيلُونَ عَلَيْكُمْ مَيْلَةً وَاحِدَةً وَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ إِنْ كَانَ بِكُمْ إِذَى مِنْ قَطْرٍ أَوْ كُنْتُمْ فَرَجًا أَنْ تَضَعُوا أَسْلِحَتَكُمْ وَخُذُوا حِذْرَكُمْ إِنَّ اللَّهَ أَعَدَّ لِلْكَافِرِينَ عَذَابًا مُهِينًا ﴿٧٣﴾

104. 礼拝が終らば、アッラーを唱念せよ、立ちながら、坐りながら、横になりながら。また安全な時は、規定された形式で礼拝を遵守せよ。礼拝は、定められた時刻に捧げることを信徒に命ぜられる。(注72)

فَإِذَا قُضِيَتِ الصَّلَاةُ فَادْكُرُوا اللَّهَ قِيَامًا وَقُعُودًا وَعَلَى جُنُوبِكُمْ فَإِذَا اطْمَأْنَنْتُمْ فَأَقِيمُوا الصَّلَاةَ ۚ إِنَّ الصَّلَاةَ كَانَتْ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ كِتَابًا مَوْقُوتًا ﴿٧٤﴾

105. お前たち敵に対する追求の手をゆるめるなかれ。お前たちが苦しむ時、彼等もまた苦しむなり。されどお前たちには、彼等が望み得ざるアッラーよりの希望あり。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَلَا تَهِنُوا فِي ابْتِغَاءِ الْقَوْمِ إِنْ تَكُونُوا تَأْلَمُونَ فَأَلْهِمَهُمْ يَأْلَمُونَ كَمَا تَأْلَمُونَ وَتَرْجُونَ مِنَ اللَّهِ مَا لَا يَرْجُونَ وَكَانَ اللَّهُ عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿٧٥﴾

第十六章

106. われらが真理を包含する經典を汝に降したるは、アッラーが汝に教えたるもののとって、汝が人々の間を審判くためな

إِنَّا أَنْزَلْنَا إِلَيْكَ الْكِتَابَ بِالْحَقِّ لِتَحْكُمَ بَيْنَ النَّاسِ

注70 前節が、危険時の個人個人の祈りについて述べているのに対し、この節では、信仰篤い人々の集団が、一緒に祈る時の仕方が詳細に示されており、種々の場合に応じた11もの形式の祈りがハディースの中で説明されている。

注71 この節は、武器と警戒の違いを示している。前者は比較的安全な時には片付けられるであろうが、後者はいつも怠ってはならないのである。4:72も参照せよ。

注72 戦闘の最中は2つのラカートを急いで済ませるか、1つのラカートだけを行うかどちらかであるため、この節では、イスラム教徒達は足りない分を補うため、やるべき事が終わった後には神を思い出し、略式でも神に祈らなければならないと定めている。これは、祈りを短くしたことの埋め合わせをするためである。

り。されば汝背信者のための弁護人となるなかれ。(注73)

107. アッラーの赦免^{しごめん}を請い奉れ。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。
108. 自らを欺く者どものために弁護するなかれ。げにアッラーは裏切者や罪深い者を愛し給わず。
109. 彼等は人の日はごまかせても、アッラーから身を隠すこと^{あた}能わず。彼等が夜陰に乗じてアッラーの賛成せざることを企む時、アッラーは彼等と偕に在り。アッラーは彼等の所業を取り囲み給う。
110. 見よ、お前たちは、現世において彼等を弁護する者なり。しかれども復活の日に、誰がアッラーを相手に彼等を弁護できようぞ、また誰が^た彼等の庇護者となり得ようぞ。

111. されど、悪事を行い、己が魂^{あたま}に害なしても、アッラーに赦免^{しごめん}を請わば、アッラーが寛大にして慈悲深くましますことがわかるべし。
112. 誰でもあれ罪を犯す者は、ただ己れ自身に罪を犯すに過ぎず。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。
113. 誰でもあれ過ちや罪を犯して之を潔白な人のせいにする者は、讒誣^{ざんご}と明白な罪をその身に負う者なり。

第十七項

114. もし汝にアッラーの恩恵と慈悲がなかりせば、彼等の一派は汝を迷わしめんと企みたり。されど彼等はただ自ら^{あなた}を迷わしめるのみにして、いささかも汝を害^{あた}うこと能わず。アッラーは汝に經典と知恵とを降し給

بِمَا أَرْكَبَ اللَّهُ وَلَا تَكُنْ لِلْخَائِبِينَ حَصِيماً ⑩

وَأَسْتَغْفِرُ اللَّهَ إِنَّ اللَّهَ كَانَ غَفُوراً رَحِيماً ⑪

وَلَا تُجَادِلْ عَنِ الَّذِينَ يَخْتَلُونَ أَنفُسَهُمْ إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ مَنْ كَانَ خَوَّاناً أَثِيماً ⑫

يَسْتَخْفُونَ مِنَ النَّاسِ وَلَا يَسْتَخْفُونَ مِنَ اللَّهِ وَهُمْ مَعَهُمْ إِذْ يُبَيِّنُونَ مَا لَا يَرْفَعُ مِنَ الْقَوْلِ وَكَانَ اللَّهُ بِمَا يَعْمَلُونَ مُحِيطاً ⑬

هَآأَنْتُمْ هَؤُلَاءِ جَدَلْتُمْ عَنْهُمْ فِي الْحَيَوةِ الدُّنْيَا فَمَنْ يُجَادِلُ اللَّهَ عَنْهُمْ يَوْمَ الْقِيَمَةِ أَمْ مَنْ يَكُونُ عَلَيْهِمْ وَكِيلاً ⑭

وَمَنْ يَعْمَلْ سُوءاً أَوْ يَظْلِمْ نَفْسَهُ ثُمَّ يَسْتَغْفِرِ اللَّهَ يَجِدِ اللَّهَ غَفُوراً رَحِيماً ⑮

وَمَنْ يَكْسِبْ إِثْماً فَإِنَّمَا يَكْسِبُهُ عَلَى نَفْسِهِ وَكَانَ اللَّهُ عَلِيماً حَكِيماً ⑯

وَمَنْ يَكْسِبْ خَطِيئَةً أَوْ إِثْماً ثُمَّ يَزِمْ بِهِ يَرِيضاً ⑰
فَقَدْ احْتَسَلَ بُهْتَاناً وَإِثْماً مُبِيناً ⑱

وَلَوْ لَا فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكَ وَرَحْمَتُهُ لَهتَ طَافِقَةً مِنْهُمْ أَنْ يُضِلُّوكَ وَمَا يُضِلُّونَ إِلَّا أَنفُسَهُمْ وَمَا يَضُرُّونَكَ مِنْ شَيْءٍ وَأَنزَلَ اللَّهُ عَلَيْكَ الْكِتَابَ وَ

注73 この言葉は、すべてのイスラム教徒に宛てたものである。

い、汝が知らざりしことを教えたり。汝に垂れ給うアッラーの恩恵こそ大なるかな。

(注 74)

115. 喜捨や善行を勧め、或いは人々を仲裁する相談を(注 75) 除いて、彼等の多くの相談は無益なり。誰であれアッラーを悦ばさんとして之をなす者あらば、われらはその者に大なる報奨を与えん。

116. されど嚮導が明示されたる後、使徒に背き、信徒の道に非ざる道を辿る者は、われらその者をして、己が追い求めんとする道を続行せしめ、果ては地獄に投げ込まん。そは悲惨なる行き着く先よ。

第十八項

117. アッラーは御自分に如何なる者も併せ祀ることを許し給わず。されどその他のことは、誰であれ御心にかねえば、之を許し給う。されどアッラーに他神を併せ祀る者は、はるかに遠く正道を踏みはずせし者なり。

118. 彼等はアッラーをさしおいて、ただ偶像を祈るのみ、背逆の悪魔を祈るのみ、

119. そはアッラーが呪詛せる者なり。悪魔は云う、「我必ず汝の僕らより割り当てられし者どもを連れ去らん。

120. 我必ず彼等を迷わせ、空しい欲望にふけらせ、彼等を煽って家畜の耳を切らせてアッラーの創造物を変えさせん」と。アッ

الْحِكْمَةِ وَعَلَيْكَ مَا لَمْ تَكُنْ تَعْلَمُ وَكَانَ فَضْلُ اللَّهِ
عَلَيْكَ عَظِيمًا ﴿١١٥﴾

لَا خَيْرَ فِي كَثِيرٍ مِنْ نَجْوَاهُمْ إِلَّا مَنْ أَمَرَ بِصَدَقَةٍ
أَوْ مَعْرُوفٍ أَوْ إِصْلَاحٍ بَيْنَ النَّاسِ وَمَنْ يَفْعَلْ
ذَلِكَ ابْتِغَاءَ مَرْضَاتِ اللَّهِ فَسَوْفَ نُؤْتِيهِ أَجْرًا
عَظِيمًا ﴿١١٥﴾

وَمَنْ يُشَاقِقِ الرَّسُولَ مِنْ بَعْدِ مَا تَبَيَّنَ لَهُ الْهُدَى
وَيَتَّبِعْ غَيْرَ سَبِيلِ الْمُؤْمِنِينَ نُوَلِّهِ مَا تَوَلَّى وَنُصْلِهِ
جَهَنَّمَ وَسَاءَتْ مَصِيرًا ﴿١١٦﴾

إِنَّ اللَّهَ لَا يَعْفِرُ أَنْ يُشْرَكَ بِهِ وَيَعْفِرُ مَا دُونَ
ذَلِكَ لِمَنْ يَشَاءُ وَمَنْ يُشْرِكْ بِاللَّهِ فَقَدْ ضَلَّ
ضَلَالًا بَعِيدًا ﴿١١٧﴾

إِنْ يَدْعُونَ مِنْ دُونِهِ إِلَّا إِنْسَانًا أَوْ يَدْعُونَ
الشَّيَاطِينَ ﴿١١٨﴾
لَعْنَةُ اللَّهِ وَقَالَ لَا تَخِذْنَ مِنْ عَبَادِكَ تَعْبِيًا
مَقْرُوضًا ﴿١١٩﴾

وَالْأَضْلَاهُمْ وَلَا مَنِيْنَهُمْ وَلَا مَنِيْنَهُمْ فَلْيُبَيِّنْ
أَذَانَ الْأَنْعَامِ وَلَا مَنِيْنَهُمْ فَلْيَغْيِرْنَ خَلْقَ اللَّهِ

注 74 偽善者達は様々な手段を用いて、モハムマドを落とし入れようとした。彼らは、非常に重大な事柄について、聖なる預言者が誤った決定を下すように策をめぐらしていた。しかし、彼らの計画はいつも失敗に終わっている。なぜなら、聖なる預言者はイスラム教の将来に影響を及ぼすような問題に関しては、神によって常に正しい方向へと導かれていたからである。

注 75 二人以上の人で交わされた秘密の話、または他の人に秘密を洩らすこと、または秘密の相談をすることの意である。この言葉は、秘密の相談に限って用いられるのではなく、秘密であろうがなかろうが、重要事項を討議するために、特別に人々を召集するあらゆる会議に適用されるのである。

ラーをさしおいて悪魔^{サタン}を友とする者は、必ず明白なる損失を被るべし。

121. 悪魔^{サタン}は彼等にいろいろと約束をなし、空しい欲望を生ぜしむ。されど悪魔はただ彼等を欺^{とこしえ}かんがために約束するのみ。

122. これ等の者どもの住居は地獄なり。しかも彼等はそこより逃れる術^{すべ}を知らず。

123. されど信じて善行を積む人々には、われら之を河川流れる楽園に入るを許し、その中に永久に住ましめん。こはアッラーの確約なり。アッラーの御言葉より勝りて真実ものに云える者は誰か？

124. そはお前たちの希望に副^{たづな}ってならず、また經典の民の希望に副^{たづな}ってならず。誰であれ悪事をなさば、その報いを受くべし。而してアッラーの外には味方も佑助者もなきことを悟るべし。

125. されど善行を積む者は、男女にかかわらず、(注76)しかも信徒であれば、みな楽園に入り、棗椰子^{なつめやし}の種のへこみ程も不当に遇せられざるべし。

126. アッラーに全く服従^{タバ}帰依し、善事にいそしみ、アブラハムの正しい宗教に従う者より勝れる信仰をもつ者は誰か？ アッラーはアブラハムを特別の友とせり。(注77)

وَمَنْ يَتَّبِعِ الشَّيْطَانَ وَلْيَا مِنْ دُونِ اللَّهِ فَقَدْ خَسِرَ خُسْرَانًا مُبِينًا ﴿١٢١﴾

يَعِدُّهُمْ وَيُؤَيِّدُهُمْ وَمَا يَعِدُهُمُ الشَّيْطَانُ إِلَّا عُرْوًا ﴿١٢٢﴾

أُولَئِكَ مَأْوَاهُمْ جَهَنَّمُ ۖ وَلَا يَجِدُونَ عَنْهَا مَخْرِجًا ﴿١٢٣﴾

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ سَنُدْخِلُهُمْ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا وَعَدَ اللَّهُ حَقًّا وَمَنْ أَصْدَقُ مِنَ اللَّهِ قِيلًا ﴿١٢٤﴾

لَيْسَ بِأَمَانَتِكُمْ وَلَا أَمَانِي أَهْلِ الْكِتَابِ مَنْ يَعْمَلْ سُوءًا يُجْزِ بِهِ ۖ وَلَا يَجِدْ لَهُ مِنْ دُونِ اللَّهِ وَلِيًّا وَلَا نَصِيرًا ﴿١٢٥﴾

وَمَنْ يَعْمَلْ مِنَ الصَّالِحَاتِ مِنْ ذَكَرٍ أُولَئِكَ وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَأُولَئِكَ يَدْخُلُونَ الْجَنَّةَ وَلَا يُظْلَمُونَ نَقِيرًا ﴿١٢٦﴾

وَمَنْ أَحْسَنُ دِينًا مِمَّنْ أَسْلَمَ وَجْهَهُ لِلَّهِ وَهُوَ مُحْسِنٌ وَاتَّبَعَ مِلَّةَ إِبْرَاهِيمَ حَنِيفًا وَاتَّخَذَ اللَّهُ إِبْرَاهِيمَ خَلِيلًا ﴿١٢٧﴾

注 76 この節では、仕事と報酬に関する限り、男も女も同等の立場に立っている。どちらも良い仕事をすれば、平等に十分な報酬を受けられるということが示されている。

注 77 この節は、イスラム教の真髄を示している。その真髄とは、神の意志への完全な服従、自分のすべての能力、力を神への奉仕に捧げることであり、またアブラハムをイスラム教徒が模倣すべき、また後に従うべき真の模範としていつも心に止めておくことである。

127. 天に在るもの地に在るもの、挙げてアッラーの^{しん}有なり。アッラーはすべてを取り囲み給う。

第十九項

128. 彼等は女のことで汝に見解を求む。云え、「アッラーはお前たちに、彼女たち^{しな}に關して判定を(注78)与え給う。而してお前たちが規定されたものを与えず、しかも娶らんと望んでいる孤児の女に關することや、また無力な兒童^{しょうじゆう}らに關することなどを經典の中でも誦述されているなり。(注79) またアッラーは孤児を公正に扱うべきことをお前たちに命じ給う。お前たちが行う善事は、アッラーは常に之を認知す」と。

129. もし女がその夫より虐待され、また嫌われる恐れがある場合でも、夫婦の間に和解なれば罪なし。(注80) 和解こそ最善なり。人間はともすれば強欲になりがちなれど、(注81) もしお前たち善事を行い公正であれば、アッラーは必ずお前たちのなせることに気づくなり。

130. お前たち如何に努むるとも、妻たちを完全に平等に遇し得ず。さればとて、他の妻たちを由につるすが如く放置し、ただ一人を偏愛するなかれ。(注82) お前たちが行状

وَلِلَّهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ وَكَانَ اللَّهُ
يَكْلُ كُلِّ شَيْءٍ مُّحِيطًا ۝١٩

وَيَسْتَفْتُونَكَ فِي النِّسَاءِ قُلِ اللَّهُ يَفْتِيكُمْ فِيهِنَّ
وَمَا يُنَالُ عَلَيْكُمْ فِي الْكِتَابِ فِي يَتْسَى النِّسَاءُ الَّتِي لَا
تُؤْتُونَهُنَّ مَا كُتِبَ لَهُنَّ وَتَرْعَبُونَ أَنْ تَنْكِحُوهُنَّ
وَالْمُسْتَضْعِفِينَ مِنَ الْوِلْدَانِ وَأَنْ تَقُومُوا لِلنِّسَاءِ
بِالْقِسْطِ وَمَا تَفْعَلُوا مِنْ خَيْرٍ فَإِنَّ اللَّهَ كَانَ بِهِ
عَلِيمًا ۝٢٠

وَإِنْ امْرَأَةٌ خَافَتْ مِنْ بَعْلِهَا نُشُوزًا أَوْ إِعْرَاضًا
فَلَا جُنَاحَ عَلَيْهِمَا أَنْ يُصْلِحَا بَيْنَهُمَا صُلْحًا وَالصُّلْحُ
خَيْرٌ وَأُحْضِرَتِ الْأَنْفُسُ الشُّحَّ وَإِنْ تُحْسِنُوا
وَتَتَّقُوا فَإِنَّ اللَّهَ كَانَ بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرًا ۝٢١

وَلَنْ تَسْتَطِيعُوا أَنْ تَعْدِلُوا بَيْنَ النِّسَاءِ وَلَوْ حَرَصْتُمْ
فَلَا تَبْلُغُوا كُلَّ النِّبْلِ فَنَدَرُوهَا كَالْمُعَلَّقَةِ وَإِنْ

注78 この「判定」については次の三つの節で触れられている。

注79 「經典の中でも誦述されている」という言葉は、この章の第四節を暗に示している。自分の権利を十分に守れない孤児の少女と結婚することは、イスラム教徒には禁止されている。二代目カリフであるオマルは、裕福で美しい孤児の少女の保護者がその少女と結婚することを許そうとせず、彼女達のために他のもつとよい夫を見つけるよう強く要求していた。女に關するいくつかの教えは、これまでのクルアーンの中に示されているし、この後にもまだ述べられている。

注80 ‘彼らがお互いに和解し合うのは決して罪とはならない。’というこの箇所は、勧告と叱責両方の意味を持つクルアーン特有の表現である。これは次のように解釈するとよいだろう。相争っている人々は、もしお互いに和解すれば、罪を犯すことになると思っているのだろうか。和解は罪ではない。逆に好ましいことである。

注81 夫婦間に応々にして不和を引き起こす真の原因となるもの、それは夫のけちと妻の貧欲である。

注82 男が妻たちとの間に、あらゆる点で完全な調和を保っていくことは、人間の能力では不可能である。例えば、愛は人間が統御できない心に関わることであるため、夫は妻全員に平等な愛を求められても、それは

を改め、公正に振舞うならば、アッラーは寛大にして慈悲深くまします。

131. またたとい夫婦が別れるとも、アッラーはその心の豊かさを以て二人を世話すべし。(注 83)アッラーは恵み深く、賢哲にまします。

132. 天に在るもの地に在るもの、挙げてアッラーの有なり。われらはお前たちの以前に經典を授けし者、並びにお前たちにも、アッラーを畏れよと確かに命じたり。さればたといお前たちが信ぜずとも、天地間の一切はアッラーの有なり。アッラーは自足者、讚美すべき御方なり。

133. 天に在るもの地に在るもの、挙げてアッラーの有なり。而してアッラーは守護者として万全なり。

134. 人々よ、もしアッラー欲しなば、彼はお前たちを滅ぼし、代りに他の人々を創造す。アッラーは之をなす権能を持ち給う。

135. 現世の報奨を望む者には、アッラーの御許に現世と来世の報奨があることを知らしめよ。アッラーはすべてを聴き、すべてをみそなはし給う。

第二十項

136. 汝等信徒たちよ、証人としてアッラーの前に立つ時は、たといお前たち自身、または両親、または親族に逆らっても、(注 84)必ず公正を遵守せよ。富者であろうが貧者

تَصْلِحُوا وَتَتَّقُوا فَإِنَّ اللَّهَ كَانَ غَفُورًا رَحِيمًا ﴿٣١﴾

وَأِنَّ يَتُفَرَّقَا يَغِيظَ اللَّهُ كُلًّا مِّنْ سَعَتِهِ وَكَانَ اللَّهُ وَاسِعًا حَكِيمًا ﴿٣٢﴾

وَلِلَّهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ وَلَقَدْ وَصَّيْنَا الَّذِيْنَ اٰتَوْنَا الْكِتٰبَ مِنْ قَبْلِكُمْ وَاِذَا كُمْ اِنَّ اَنْتَٰوَاللَّهَ وَاِنْ تَكْفُرُوْا فَاِنَّ لِلَّهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ وَكَانَ اللَّهُ غَنِيًّا حَبِيْدًا ﴿٣٣﴾

وَلِلَّهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ وَكَفَى بِاللَّهِ وَكِيلًا ﴿٣٤﴾

اِنْ يَشَآءْ يَذْهَبْكُمْ اَيْهَا النَّاسُ وَيَاْتِ بِاٰخَرِيْنَ وَكَانَ اللَّهُ عَلَىٰ ذٰلِكَ قَدِيْرًا ﴿٣٥﴾

مَنْ كَانَ يُرِيْدْ ثَوَابَ الدُّنْيَا فَعِنْدَ اللَّهِ ثَوَابُ الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ وَكَانَ اللَّهُ سَمِيْعًا بَصِيْرًا ﴿٣٦﴾

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا كُوْنُوْا قَوٰمِيْنَ بِالْقِسْطِ شُهَدَآءُ لِلّٰهِ وَلَوْ عَلَىٰۤ اَنْفُسِكُمْ اَوْ اِلٰوَالِدِيْنَ وَالْاَقْرَبِيْنَ ؕ اِنْ

不可能なことである。しかし、他の点で確かに公平に対処できるし、またそうしなければならぬ。つまり、妻たちに対し公平にできるのは、夫が自分で統制できる行為においてのみである。聖なる預言者はこの節に対し、このような解釈を下しているのである。

注 83 夫と妻が仲良くやっていこうと最大限の努力をしても、一緒にやっていけなくなり、離婚となれば、その時は神は双方によりふさわしい相手を見つけることを約束している。しかしイスラム教では、離婚は神の目から見れば、許されるすべての行為の中で最も憎むべきことである。

注 84 「汝自身に反して」という表現は「汝の家族や親類縁者に反して」という意味にもなるだろう。後に「両親と親類」という言葉がつけ加えられているのは、このことを強調するためである。

であろうが、アッラーはお前たちより以上に彼等両者を氣にかけ給う。されば公正に振舞うべく我欲に追随するなかれ。また、もし真実を隠し、証言を忌避するならば、アッラーはお前たちの所業を知悉し給うこと忘れまいぞ。

137. 汝等信徒たちよ、アッラーとその使徒並びに使徒に降せる經典と、以前に降せる經典を信ぜよ。(注 85) 誰であれアッラー、諸天使、諸經典、使徒たち、並びに最後の日を信ぜざる者は、正しき道よりはるか遠くへ踏み迷いたる者なり。

138. 一たび信じて背信し、再び信じてまたも背信し、しかもその背信の度合を強めるような者は、(注 86) アッラーはかかる徒輩を決して許さず、また導きもせず。

139. 偽善者どもに伝えてやれ、彼等には悲惨な懲罰があることを。

140. 信徒をさしおいて、不信心者を友とする者あり。彼等は自分たちの手にて榮譽を求むるか？ すべての榮譽はアッラーの所有なり。

141. アッラーはすでに經典の中で、(注 87) アッラーの神兆が否定され、また嘲笑せらるるを聞かば、彼等が話題を変えざるかぎり、お前たち彼等と同席するなかれ、と啓示せり。然らずんば、お前たちも彼等と

يَكُنْ عَرِيًّا أَوْ فَقِيرًا فَاللَّهُ أُولَىٰ بِهِمَا ۖ فَلَا تُتَّبِعُوا
الهُوَىٰ أَنْ تَعْدِلُوا ۚ وَإِنْ تَلَوْا أَوْ تَعْرِضُوا فَإِنَّ اللَّهَ
كَانَ بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرًا ﴿١٣٧﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا آمِنُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ وَالْكِتَابِ الَّذِي
نَزَلَ عَلَىٰ رَسُولِهِ وَالْكِتَابِ الَّذِي أَنْزَلَ مِنْ قَبْلُ وَمَنْ
يُكْفِرْ بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ وَكِتَابِهِ وَرُسُلِهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ فَقَدْ
ضَلَّ ضَلَالًا بَعِيدًا ﴿١٣٨﴾

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا ثُمَّ كَفَرُوا ثُمَّ آمَنُوا ثُمَّ كَفَرُوا ثُمَّ أَزْدَدُوا كُفْرًا
ثُمَّ يَكُنِ اللَّهُ يَجْعَلُ كَمْ وَلَا يَهْدِي لَهُمْ سَبِيلًا ﴿١٣٩﴾

بَشِّرِ الْمُنَافِقِينَ بِأَنَّ لَهُمْ عَذَابًا أَلِيمًا ﴿١٤٠﴾

الَّذِينَ يَتَّخِذُونَ الْكَافِرِينَ أَوْلِيَاءَ مِنْ دُونِ
الْمُؤْمِنِينَ يُبْتَغَوْنَ عَنْهُمْ الْعُرَةُ فَإِنَّ الْعُرَةَ
لِلَّهِ جَمِيعًا ﴿١٤١﴾

وَقَدْ نَزَّلَ عَلَيْكُمْ فِي الْكِتَابِ أَنْ إِذَا سَأَلْتُمْ آيَةً
اللَّهُ يُكْفِرُ بِهَا وَيُسْتَهْزَأُ بِهَا فَلَا تَتَعَدُّوْا مَعَهُمْ
حَتَّىٰ يَخُوضُوا فِي حَدِيثٍ غَيْرِهِ ۚ إِنَّكُمْ إِذَا مَثَلْتُمْ

注 85 汝、信徒と称する者、行いと行動によって、汝の信仰が真実で強固なものであることを示せ。

注 86 この表現のついでに、イスラム教では背教は死をもって罰せられるという主張が根拠のないものであり、誤りであることを明らかにしている。死んでしまうなら、背信したり信じたりをくりかえす者など存在し得ないからである。

注 87 「すでに經典の中で汝に姿を示されている」という言葉は、6：69 から引用されている。6：69 は、今語られているこの節より以前に、メッカで啓示されたのであるが、現在のクルアーンの中では、この節より後に置かれている。つまり、現在のクルアーンの順序は、初めに書かれた順序のままではないのである。

類なり。げにアッラーは偽善者と不信心者どもをやがて皆地獄に集めん。(注 88)

إِنَّ اللَّهَ جَامِعُ الْمُنَافِقِينَ وَالْكَافِرِينَ فِي جَهَنَّمَ جَمِيعًا ﴿٧٩﴾

142. 彼等はお前たちの敗戦を期待せる者どもなり。もしお前たちがアッラーの加護により勝利を得なば、彼等は云う、「我等はお前たちに協力せるに非ずや?」と。されどもし不信心者の方が有利な場合は、彼等は不信心者どもに向って云う、「我等はお前たちを優勢になさざりしか? 信徒に対してお前たちを守れるに非ずや?」と。アッラーは復活の日に、お前たちの間を審判すべし。アッラーは不信心者どもに信徒を打ち負かす方法を授けざるべし。

يَا الَّذِينَ يَذْكُرُونَ بَكُمْ فَإِنْ كَانَ لَكُمْ فَتْحٌ مِنَ اللَّهِ قَالُوا أَلَمْ نَكُنْ مَعَكُمْ وَإِنْ كَانَ لِلْكَافِرِينَ نَصِيبٌ قَالُوا أَلَمْ نَسْتَحِذْ عَلَيْكُمْ وَنَنْعَمْ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ فَاللَّهُ يَحْكُمُ بَيْنَكُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ وَلَنْ يَجْعَلَ اللَّهُ لِلْكَافِرِينَ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ سَبِيلًا ﴿٨٠﴾

第二十一項

143. 偽善者どもはアッラーを欺かんとするが、アッラーは彼等の欺瞞を懲らしめん。

(注 89) 彼等礼拝に立つ時は、さも大儀そうに立ち、人に見せるだけのこと、しかも殆どアッラーを念ずることなし。

إِنَّ الْمُنَافِقِينَ يُخَادِعُونَ اللَّهَ وَهُوَ خَادِعُهُمْ وَإِذَا قَامُوا إِلَى الصَّلَاةِ قَامُوا كُسَالَى يُرَاءُونَ النَّاسَ وَلَا يَذْكُرُونَ اللَّهَ إِلَّا قَلِيلًا ﴿٨١﴾

144. こちらでもなければあちらでもなく、(注 90) 何処にも属さざる者ども、アッラーが迷わしむる者には、汝たりとも救う術なし。

مَذْهَبَيْنَ بَيْنَ ذَلِكَ لَا إِلَى هَؤُلَاءِ وَلَا إِلَى هَؤُلَاءِ وَمَنْ يُضْلِلِ اللَّهُ فَلَنْ يَجِدَ لَهُ سَبِيلًا ﴿٨٢﴾

145. 汝等信徒たちよ、信徒たちをさしおいて、不信心者どもを友とするなかれ。お前たち、自らを糾弾する明白な証拠をアッラーに差し出すつもりか?

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَتَّخِذُوا الْكَافِرِينَ أَوْلِيَاءَ مِنْ دُونِ الْمُؤْمِنِينَ أُرِيدُ أَنْ تَجْعَلُوا لِلَّهِ عَلَيْكُمْ سُلْطَانًا مُبِينًا ﴿٨٣﴾

注 88 この節に示された命令の底流には、三つの基本的な考え方がある。(1)宗教的事柄の重大性、重要性を強調している。(2)規律を乱そうとする非信徒の集団の影響から信徒たちを守ること、及び(3)イスラム教徒の心の内に宗教に対する敬虔な気持ちを生まれさせ育てることである。

注 89 神の代理が預言者であるので、実際に偽善者達が欺こうとしたのは聖なる預言者であって神ではない。聖なる預言者を陥れようと企てられた多くの陰謀は、神の意図を実現させないために計画された陰謀であった。それ故、彼らの人を欺く行為に対しては、神自身が彼らの罰を下すであろう。

注 90 この表現は、「信仰と不信仰の間」又は「信徒と非信徒の間」の意である。

146. 偽善者どもは必ず業火の一番深みに墜ちるべし。而して彼等には如何なる佑助者もなかるべし。(注 91)

147. 但し、悔悟して改心し、アッラーにしっかりとお頼りして、アッラーに対し奉り心から服従する者は除く。これ等の者は信徒の仲間なり。アッラーはやがて信徒たちに大なる報奨を授与すべし。

148. お前たちもし感謝の気持ちで信仰しなば、アッラーとていかでお前たちを罰せんや。アッラーは感恩者にして、すべてを知り給う。(注 92)

149. アッラーは公然と汚い言葉で喋ることを好まず。但し、不当に遇せられた者の場合は別なり。(注 93)げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

150. お前たちが善行を公然としようが、隠れてしようが、また受けたる害を赦そうが、アッラーは確かに罪業を寛恕し、全能者にまします。

151. アッラーと使徒たちを信ぜず、アッラーと使徒たちの仲を裂かんとして、「我等には信じられるものもあれば、信じられざるものもあり」と云い、どちらつかずの道を追う者ども、(注 94)

إِنَّ السُّفْهَانَ فِي الذِّكْرِ الْأَسْفَلِ مِنَ النَّارِ وَلَنْ تَجِدَ لَهُمْ نَصِيرًا ﴿٩١﴾

إِلَّا الَّذِينَ تَابُوا وَأَصْلَحُوا وَاعْتَصَمُوا بِاللَّهِ وَأَخْلَصُوا دِينَهُمْ لِلَّهِ فَأُولَٰئِكَ مَعَ الْمُؤْمِنِينَ وَسَوْفَ يُؤْتِي اللَّهُ الْمُؤْمِنِينَ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿٩٢﴾

مَا يَفْعَلُ اللَّهُ بِعَدَابِكُمْ إِنْ شَكَرْتُمْ وَامْنَعْتُمْ وَكَانَ اللَّهُ شَاكِرًا عَلِيمًا ﴿٩٣﴾

لَا يُحِبُّ اللَّهُ الْجَهْرَ بِالسُّوءِ مِنَ الْقَوْلِ إِلَّا مَن ظَلَمَ وَكَانَ اللَّهُ سَمِيعًا عَلِيمًا ﴿٩٤﴾

إِنْ تَبَدُّوا خَيْرًا أَوْ نَخَفُوا أَوْ تَعَفَّوْا عَنْ سُوءٍ فَإِنَّ اللَّهَ كَانَ عَفُوًّا قَدِيرًا ﴿٩٥﴾

إِنَّ الَّذِينَ يَكْفُرُونَ بِاللَّهِ وَرُسُلِهِ وَيُرِيدُونَ أَنْ يُفَرِّقُوا بَيْنَ اللَّهِ وَرُسُلِهِ وَيَقُولُونَ نُؤْمِنُ بِبَعْضٍ وَنَكْفُرُ بِبَعْضٍ وَيُرِيدُونَ أَنْ يَتَّخِذُوا بَيْنَ ذَلِكَ سَبِيلًا ﴿٩٦﴾

注 91 剣をもってイスラム教を広めるようクルアーンが要求しているという偽善者達からの非難に対して、クルアーンは明確に反論し、偽善者達を強く告発している。もし人が、その人の意志に反してイスラム教を信奉しなくてはならないとしたら、その人は決して真の信徒とはならないであろう。

注 92 神の側のシュクル(恩恵)は、人を許すこと、あるいは人を賞賛すること、あるいは人を十分に善意をもって好意的に評価することであり、そうして必ず彼をねぎらい彼に報いることである。

注 93 イスラム教は、教徒達が公然と人の悪口を言うことを許さない。しかし、ひどい目に合わされた者は、実際のその時に大声で叫ぶのはかまわない。そうすれば、他の人々が彼を助けに来るであろう。彼はまた、法廷に訴えて不正を正そうとしてもよい。しかし、誰かれ構わず不平を述べたてるとはしてはならない。

注 94 この節は、彼らは神を受け入れるが、神の預言者達を拒絶しているという意味か、あるいは一部の預言者を信じても他の預言者は信じない、あるいは預言者の主張は拒絶するという意味のいずれかである。中間の道はどんなものも許されないのである。

152. これらの徒輩は紛れもなき不信心者なり。さればわれらは、彼等のために恥ずべき懲罰を用意せり。

153. されどアッラーとすべての使徒たちを信じ、使徒たちの間に何の差別をもつけざる人々には、アッラーはやがて報奨を与うべし。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

第二十二項

154. 経典の民は汝に、天から経典を降してみせよと要求す。彼等はずかつて、モーゼにそれ以上の大なるものを要求せり。彼等は云えり、「我等にアッラーを目のあたり見せよ」と。するとその時、その罪故に、壊滅的な懲罰が彼等を襲いたり。されどその後も彼等は、数々の明白な神兆を戴いておきながら、崇拜の対象に犢を選びたり。されどわれらはそれを赦したり。而してわれらは モーゼに明白な権能を与えたり。(注 95)

155. われらは彼等と契約するに当り、彼等の上に山を起し、彼等に云えり、「うやうやしく礼をしてこの門に入れ」と。また、「安息日の掟に違反するなかれ」と。かくてわれらは彼等より堅い契約を取れり。(注 96)

156. しかしに彼等はその契約を破り、アッラーの神兆を拒否し、不当にも預言者たちを殺害せんと謀り、且つ云えり、「我等の心は蔽われているなり」と。然らず、彼等が信ぜざるが故にアッラーが彼等の心を封じたり。されば彼等は、僅かの者を除いて、不信心者なり。(注 97)

أُولَٰئِكَ هُمُ الْكَافِرُونَ حَقًّا ۖ وَأَعْتَدْنَا لِلْكَافِرِينَ عَذَابًا مُّهِينًا ﴿٩٥﴾

وَالَّذِينَ آمَنُوا بِاللَّهِ وَرُسُلِهِ وَلَمْ يَفْرُقُوا بَيْنَ أَحَدٍ مِنْهُمْ أُولَٰئِكَ سَوْفَ يُؤْتِيهِمْ أَجْرُهُمْ وَكَانَ اللَّهُ غَفُورًا رَحِيمًا ﴿٩٦﴾

يَسْأَلُ أَهْلَ الْكِتَابِ أَنْ تُنَزَّلَ عَلَيْهِمْ كِتَابًا مِّنَ السَّمَاءِ فَقَدْ سَأَلُوا مُوسَىٰ أَكْبَرَ مِنْ ذَلِكَ فَقَالُوا أَرِنَا اللَّهَ جَهْرَةً فَأَخَذَتْهُمُ الصَّعِقَةُ بِظُلْمِهِمْ ثُمَّ اتَّخَذُوا الْعِجْلَ مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَتْهُمْ الْبَيِّنَاتُ فَعَفَوْنَا عَنْ ذَلِكَ وَأَتَيْنَا مُوسَىٰ سُلْطٰنًا مُّبِينًا ﴿٩٧﴾

وَرَفَعْنَا فَوْقَهُمُ الطُّورَ بِبَيِّنَاتِهِمْ وَقُلْنَا لَهُمْ ادْخُلُوا الْبَابَ سُجَّدًا وَقُلْنَا لَهُمْ لَا تَعْدُوا فِي السَّبْتِ وَأَخَذْنَا مِنْهُمْ مِّيثَاقًا عَلِيمًا ﴿٩٨﴾

فَبِمَا نَقْضِهِمْ مِّيثَاقَهُمْ وَكُفْرِهِمْ بِآيَاتِ اللَّهِ وَقَتْلِهِمُ الْأَنْبِيَاءَ بَغْيًا حَتَّىٰ وَقَوْلِهِمْ قُلُوبُنَا غُلُقٌ بَلْ طَبَعَ اللَّهُ عَلَيْهَا بِكُفْرِهِمْ فَلَا يُؤْمِنُونَ إِلَّا قَلِيلًا ﴿٩٩﴾

注 95 2 : 58 も参照せよ。

注 96 4 : 48 も参照せよ。

注 97 2 : 8 も参照せよ。

157. 而して彼等信ぜざるが故にマリアに対する重大な讒言を告げて、(注98)

وَكَيْفَ هُمْ وَقَوْلِهِمْ عَلَى مَرْيَمَ بُهْتَانًا عَظِيمًا

158. 「我等はアッラーの使徒にして救世主なるマリアの子イエスを殺したり」と云う。されど事實は、彼等はイエスを殺せるに非ず、また十字架に釘付けて殺せるに非ず、ただ彼等の目にはそのように映じたり。げにイエスについて意見を異にするものは、皆之を疑問とす。彼等は之に関する明確な知識なく、ただ憶測をめぐらすのみ。彼等は決してイエスを殺しはせじ。(注99)

وَقَوْلِهِمْ إِنَّا قَتَلْنَا النَّسِيعَ عِيسَى ابْنَ مَرْيَمَ رَسُولَ اللَّهِ وَمَا قَتَلُوهُ وَمَا صَلَبُوهُ وَلَكِنْ شُبِّهَ لَهُمْ وَإِنَّ الَّذِينَ اخْتَلَفُوا فِيهِ لَفِي شَكٍّ مِنْهُ مَا لَهُمْ بِهِ مِنْ عِلْمٍ إِلَّا اتِّبَاعَ الظَّنِّ وَمَا قَتَلُوهُ يَقِينًا

注98 ユダヤ人達は、聖母マリアを密通したとして非難したのである。(Panther書「Jewish Life of Jesus」) ユダヤ人がマリアを誹謗したのは、父なしの子イエスを生んだことを明確な証拠としている。なぜなら、もしイエスに父がいるとすれば、ユダヤ人がマリアを誹謗したのは何に對してであったのかということになる。単にイエスを生んだからと彼女をあざけても、これは決して中傷とはなり得ない。クルアーンは他の所で、イエスの母は高徳な女性であったと述べ、この非難は誤りであると明言している。

注99 マー・カタルーフ・ヤキーナン(彼らは決してイエスを殺していない。)という言葉は次のことを意味している。(1)彼らはイエスを確かに殺したのではない。(2)彼らはそのことを(イエスは死んだという推測)を確信とまではしていなかった。即ち、自分達がイエスを殺したことに疑いの余地など皆無だ、と言える程、十字架上のイエスの死を確信しているわけではなかった。即ち自分達がイエスを殺したというのは推測の域を出ておらず十字架上のイエスの死が全く確実だとはいえない。イエスが十字架上で死んだのではなく、天啓を全うしたのだという事実は、クルアーンが明らかにしている。福音書に書かれている通りの次にあげる事実がクルアーンのこの解釈をしっかりと根拠づけている。1. イエスは神の預言者であるので、十字架の上で死んだはずがない。なぜなら、聖書によれば、「十字架に懸けられる者は、神にとってはいまわしいものである」(申命記21:23)からだ。2. イエスは非常な苦しみの中で「私をこの(十字架の上の死の)苦しみからお救い下さい。」と神に祈ったのだ。 (マルコ14:36; マタイ26:29; ルカ22:42)そして、彼の祈りはききとどけられたのである(ヘブル5:7)。3. イエスは、生きたままクジラの腹に飲み込まれ、生きて戻ったヨナのように(マタイ12:40)、彼もまた墓に入って三日の後に生きて戻るであろうと預言していた。4. 彼はまた、自分がイエラエルの失われた十の部族を捜しに行くだろうと預言していた(ヨハネ10:16)。イエスの時代には、ユダヤ人さえも、イスラエルの失われた十の部族は、各々異なった場所に散っていると信じていたのである。(ヨハネ7:34、35)5. イエスが十字架に懸けられたのは、僅か三時間ほどであった(ヨハネ19:14)。そして、普通の人間であれば、そのように短時間で死ぬはずはない。6. 彼は十字架から降ろされてすぐに脇腹を突かれた。すると血と水が吹き出したが、これは生ある確かの証であった。(ヨハネ19:34) 7. ユダヤ人自身もイエスの死を確信していたわけではなかった。なぜなら、ユダヤ人達は「彼の弟子達が夜中に彼を盗み出し、そして人々に向かって『彼は死から甦った』と言ったりすることがないように」彼の墓に衛兵を一人配置するようピラトに頼んだのである。(マタイ27:64) 8. どの福音書にも、十字架から降ろされた時、あるいは墓に安置された時に、イエスは死んでいたことをその目で確かに見たという話は一つも書かれていない。更に、弟子達は一人も、はりつけの現場にはいなかったのである。皆、イエスがカルバリに連れていかれた時に、何処かへ行ってしまっていた。この場合の真相は次のようであつたらしい。恐らく「その罪のない男に何の罰も与えないように。」という妻の強い願いのために、ピラトはイエスが無実であると信じ、そして、イエス自身

159. 否、アッラーはイエスを己れの傍に召し寄せたり。(注 100)アッラーは強大にして、賢哲にまします。

بَلْ رَفَعَهُ اللَّهُ إِلَيْنَا وَكَانَ اللَّهُ عَزِيزًا حَكِيمًا

160. 経典の民の中にはただの一人だに、死ぬ前に、(注 101)そのことを信ぜざる者なかるべし。復活の日には、イエスは彼等に反対する証人たるべし。

وَإِنْ مِنْ أَهْلِ الْكِتَابِ إِلَّا لَيُؤْمِنَنَّ بِهِ قَبْلَ مَوْتِهِ
وَيَوْمَ الْقِيَامَةِ يَكُونُ عَلَيْهِمْ شَهِيدًا

預言者となる以前に所属していたエシニ協会の人望篤い会員であるアリメティアのヨゼフと協力して、イエスの命を助けようとしたのである。イエスの裁判は金曜日に行なわれた。次の日がサバト(安息日)であるため、受刑者は日没には必ず十字架から降ろされることがわかっていたからであり、ピラトは意図的に裁判を遅らせたのである。とうとうイエスに有罪の宣告を下さねばならなくなった時、ピラトは日没のわずかに三時間前に判決を下したのである。こうすれば、普通の健康な人であれば、その程度の短い時間、十字架にかけられても死ぬことはないとは彼は確信していたのである。ピラトは更に、痛みに対して少しは鈍感になるように、没薬に混ぜてワインと酢をイエスに飲ませるよう気を配った。三時間後、気を失った状態で(多分、与えられた酢の作用で)十字架から降ろされると、ピラトはアリメティアのヨゼフの願いをすぐさま聞き入れ、彼にイエスの体を引き渡したのである。イエスと共に、十字架にかけられた二人の犯罪者と異なり、イエスの骨は折られてはなく、ヨゼフは彼を岩の横を穿ち作った広い部屋に寝かせた。医学的な検死も、最後に一緒にいた者の証言による死因審問もなかった。(H. スペンサー・ルイス著「Mystical Life of Jesus」) 9. ある膏薬、有名なマルハム・イサ(イエスの膏薬)が用意され、イエスの傷に塗られた。アリメティアのヨゼフと、やはりエシニ協会の仲間、学識高く人望ある会員であるニコデムスの二人がイエスの介抱をし、世話をした。10. 傷が十分に癒えてから、イエスは墓を出て、数人の弟子達と会い、食事を共にした後、エルサレムからガリリーまで、ずっと歩いて行ったのである(ルカ 24:50)。11. 1873年にアメリカで第一版が出された「The Crucifixion by an Eye Witness (目撃した十字架)」という本は、イエスがはりつけになった七年後、エルサレムの一人のエシンの仲間アレキサンドリアの同じ仲間宛てに書いた古代ラテン語の手紙の写しを英語に翻訳したものであるが、これは、イエスが十字架から降ろされた時には生きていたという考えに、強力な根拠を与えている。この本には、はりつけの原因となった事々、カリバリの光景、それにその後の事が詳細に書かれている。

イエスがはりつけて死んだかどうか ユダヤ人の間にも二つの異なった意見がある。ある者達は、イエスは殺された後十字架に懸けられたと言い、他の者達はイエスは十字架に懸けられて死んだと言う。使徒行伝 5:30 には、前者の考えが示されており、「汝らはそれを殺し木にはりつけにした。」と書かれている。クルアーンはこのどちらの意見もとらず、次の様に言う。「彼らはイエスを殺害してはいないし、十字架の上で死に至しめたのではない。」クルアーンは初めに、イエスがいかなる形でも殺されたのではないとし、次に十字架にはりつけにするという特別な殺害の方法を否定しているのである。クルアーンは、イエスが十字架に懸けられたという事を否定してはいないが十字架の上で死んだということは否定しているのである。

注 100 ユダヤ人たちは、イエスを十字架に懸けて殺した、そうして神の預言者だというイエスの主張が嘘であることを証明したのだと意気盛んに主張した。前節と同じくこの節においても、こうした非難に対し強く反論して、イエスにきせられた汚名を晴らし、そしてイエスの靈魂は(天に)昇り、イエスは神の前で祝福されたと述べている。ここでは、イエスの肉体が昇天したかどうかには、全く触れてなく、ただ神はイエスを神の近くまで昇らせたと述べているのみである。これは明らかに靈魂が天に昇る意である。なぜなら物理的なものは神のもとへはいかないからである。

注 101 「彼が死ぬ前」という表現中の「彼」というのは、イエスの死以前の経典の民のこと皆を指しているのである。ユダヤ人達は、イエスが真の預言者ではないことを証明したいがために、自分達がイエスを十字架に懸けて殺したと信じているのである。キリスト教徒達が、イエスは十字架上で死んだと信じているのは、彼らが贖罪の思想を持っているからである。

161. ユダヤ教徒の罪故に、また彼等がアッラーの道にいそしむ多くの人々を妨害せし理由で、われらは以前に彼等に許可せしいくつかの佳き食物を禁止せり。(注102)

162. そはまた彼等が禁を犯して利息を取り、(注103)人々の財産を不正に貪り食らうためなり。さればわれらは、彼等の中の不信心者どもに、痛罰を用意せり。

163. されど、彼等の中で知識堅固なる者、(注104)つまり信仰する人々で、汝に降されたるもの並びに汝以前に降されたるもの信じ、特に礼拝を遵守し、喜捨をよくし、アッラーと最後の日を信ずる者、これ等の人々にはわれらは必ず大なる報奨を与えん。

第二十三項

164. げにわれらはノアとその後の預言者たちに啓示せる如く、汝に啓示せり。すなわちわれらは、アブラハム、イスマエル、イサク、ヤコブと其の支族、イエス、ヨブ、ヨナ、アロン、並びにソロモンに啓示し、ダビデに詩篇を与えたり。

فُظِّلَ مِنَ الَّذِينَ هَادُوا وَحَرَمْنَا عَلَيْهِمْ طَيْبَاتٍ أُجِلَّتْ لَهُمْ وَبِصَدِّهِمْ عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ كَثِيرًا ﴿١٦١﴾

وَآخَذَ هُمُ الْإِبِلَاءَ وَقَدْ نَهَوْنَا عَنْهُمُ أَمْوَالَ النَّاسِ بِالْبَاطِلِ وَاعْتَدْنَا لِلْكَافِرِينَ مِنْهُمْ عَذَابًا أَلِيمًا ﴿١٦٢﴾

لَكِنَّ الَّذِينَ تَزَيَّجُوا فِي الْعِلْمِ مِنْهُمْ وَالْمُؤْمِنُونَ يُؤْمِنُونَ بِمَا أُنْزِلَ إِلَيْكَ وَمَا أُنْزِلَ مِنْ قَبْلِكَ وَالْمُقِيمِينَ الصَّلَاةَ وَالْمُؤْتُونَ الزَّكَاةَ وَالْمُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ أُولَئِكَ سَنُؤْتِيهِمْ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿١٦٣﴾

إِنَّا أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ كَمَا أَوْحَيْنَا إِلَى نُوحٍ وَالنَّبِيِّينَ مِنْ بَعْدِهِ ۚ وَأَوْحَيْنَا إِلَى إِبْرَاهِيمَ وَإِسْمَاعِيلَ وَإِسْحَاقَ وَيَعْقُوبَ وَالْأَسْبَاطَ وَعِيسَى وَأَيُّوبَ وَيُوسُفَ وَهَارُونَ وَسُلَيْمَانَ وَآتَيْنَا دَاوُدَ نَزِيدًا ﴿١٦٤﴾

注102 この節は、ユダヤ人に対し以前は許されていたが後に禁止された何か重要なことについて言っているのではない。なぜならモーゼ以後ユダヤ人の中には、律法が彼らに対して認めていたことを新たに禁ずるような法を発する預言者は一人も出現してはいなかったからである。この節は、ユダヤ人達が失った精神的な神の恩恵について述べているのである。イエスが「我、汝らに禁じられし事々を認めんがために来たり、」(3:15)即ち、過ちを犯したために汝らに失われていた神の祝福を再び汝らに与えるために自分が来たのだと語っているのも、ユダヤ人が失っていた精神的な神の恩恵についてだったのである。

注103 ユダヤ人は、他のユダヤ人に対して、利息を取って金を貸すことを禁じられていたが、ユダヤ人ではない者からは、利息を取ることを許されていたのである。(出エジプト記22:25; レビ記25:36、37、申命記23:19、20)しかし彼らはこの法を破り、ユダヤ人からも利息を取るようになった(ネヘミヤ記5:7)。後に彼らはこうした悪行は二度としないとネヘミヤに約束した(ネヘミヤ記5:12)。しかし彼らは再び約束を破ったのである。結果、エザキエルの預言通り(エザキエル書8:13)彼らは、一つの国家の民としては滅亡し、地上あちこちに散らばって、敵の手で迫害されることになったのである。

注104 これはイスラム教徒となったユダヤ人の中の学識ある人々のことである。「信徒達」という語がわざわざつけ加えられているのは、ここではイスラム教徒となったこのようなユダヤ人のみを指していることを明確にするためである。

165. その他、すでに汝に告げたる使徒たちもあれば、未だ汝に告げざる使徒たちもあり。特にモーゼには、アッラーは長々と物云えり。
166. 朗報と警告の運び手である使徒の派遣は、使徒が来たからには誰もアッラーに対して如何なる抗弁もなし得ざるようにするためなり。アッラーは強大にして、賢哲にまします。
167. アッラーは汝に降せるものについて、自ら証人となる。その啓示は御自らの知識において降せるものにして、天使たちもその証人なり。而してアッラーは立証者として万全なり。
168. 信仰を拒み、アッラーの道へ進まんとする人々を妨げる徒輩は、正道からはるか遠くへ踏みはずした者なり。
169. げに信ぜずして不義を行う者どもは、アッラーは断じて赦さず、また如何なる道も教えざるべし、
170. 地獄への道以外は。そこに彼等は未長く住まん。そはアッラーにはいと易きことなり。
171. 人々よ、使徒が主の御許より真理を携えて来たり。されば信ぜよ。信ずることはお前たちのためになるなり。また、お前たちとい信ぜずとも、天に在るもの地に在るものすべてはアッラーの所有なり。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。
172. 經典の民よ、お前たち己れの宗教において矩を越えるなかれ。また真実以外はアッラーについて語るなかれ。救世主、すなわちマリアの子イエスは、アッラーの使徒にすぎず、アッラーがマリアに降せる御言葉

وَرُسُلًا قَدْ قَصَصْنَاهُمْ عَلَيْكَ مِنْ قَبْلُ وَرُسُلًا
لَمْ نَقْصُصْهُمْ عَلَيْكَ وَكَلَّمَ اللَّهُ مُوسَى تَكْلِيمًا ﴿١٦٥﴾

رُسُلًا مُبَشِّرِينَ وَمُنذِرِينَ لِئَلَّا يَكُونَ لِلنَّاسِ
عَلَى اللَّهِ حُجَّةٌ بَعْدَ الرُّسُلِ وَكَانَ اللَّهُ عَزِيزًا
حَكِيمًا ﴿١٦٦﴾

لَكِنَّ اللَّهَ يَشْهَدُ بِمَا أَنْزَلَ إِلَيْكَ أَنْزَلَهُ بِعِلْمِهِ
وَالْمَلَائِكَةُ يَشْهَدُونَ وَكَفَى بِاللَّهِ شَهِيدًا ﴿١٦٧﴾

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا وَصَدُّوا عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ قَدْ ضَلُّوا
ضَلَالًا بَعِيدًا ﴿١٦٨﴾

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا وَظَلَمُوا لَمْ يَكُنِ اللَّهُ لِيُغْفِرْ لَهُمْ
وَلَا لِيَهْدِيَهُمْ طَرِيقًا ﴿١٦٩﴾

إِلَّا طَرِيقَ جَهَنَّمَ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا وَكَانَ ذَلِكَ
عَلَى اللَّهِ يَسِيرًا ﴿١٧٠﴾

يَا أَيُّهَا النَّاسُ قَدْ جَاءَكُمْ الرَّسُولُ بِالْحَقِّ مِنْ
رَبِّكُمْ فَأَمِنُوا خَيْرًا لَكُمْ وَإِنْ تَكْفُرُوا فَإِنَّ لِلَّهِ مَا
فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَكَانَ اللَّهُ عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿١٧١﴾

يَا أَهْلَ الْكِتَابِ لَا تَغْلُوا فِي دِينِكُمْ وَلَا تَقُولُوا عَلَى
اللَّهِ إِلَّا الْحَقَّ إِنَّا النُّسَخُ عَيْنِ ابْنِ مَرْيَمَ
رَسُولُ اللَّهِ وَكَلَّمَتْهُ أَلْقَاهَا إِلَى مَرْيَمَ وَرُوحُ قَوْلِهِ

の(注105)履行であり、アッラーより出でたる霊なり。さればアッラーとその使徒を信じ、「三位」と云うなかれ。止めるのだ、そのほうがお前たちのためになるべし。げにアッラーは唯一の神なり。聖なるかな、いづくんぞ子あるべけんや。アッラーに天地の一切は帰属す。さればアッラーは守護者として万全なり。

第二十四項

173. 救世主はアッラーの僕たることを恥じず、神の側近く伺候する天使たちもまた然り。アッラーを崇拜することを潔しとせず、高慢な徒輩は、アッラー之を己が許に召し寄せん。
174. されど信じて善行を積む人々には、アッラーは十分な報奨を与え、その上沢山な恩恵を与えん。されど崇拜することを潔しとせず、高慢な徒輩は、アッラー痛罰を以て之を懲らしめん。而して彼等は、アッラーを捨て如何なる味方も救助者もなきことを悟らん。
175. 汝等人々よ、明証すでに主よりお前たちに来たり。われらはお前たちに明らかなる光明を降したり。
176. さればアッラーを信じて之を護持する人々に、アッラーは慈悲と恩恵とを垂れ給い、直き道によって彼等を己が許へ導かん。
177. 彼等は汝に裁断を請う。云え、「アッラーはお前たちに、直承相続者を遣さず死亡せる者に関する裁断を下す。人もし死して子なく、唯一人の姉妹がある場合は、故人の遺産の半分が彼女のものたるべし。反対に、

فَأْمِنُوا بِاللّٰهِ وَرُسُلِهِۦٓ وَلَا تَقُولُوا ثَلَاثَةً ۚ إِنَّهُمْ
خَبِيرٌ كُفَرٌ ۚ إِنَّمَا إِلَهُ الْإِلَٰهِ وَاحِدٌ سُبْحٰنَهُ أَنْ يَكُوْنَ
لَهُ وَلَدٌ ۚ لَهُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ وَكَفَىٰ
بِاللّٰهِ وَكِيلًا ۝١٧٣

لَنْ يَسْتَنْفِكَ الْمَسِيحُ أَنْ يَكُوْنَ عَبْدًا لِلّٰهِ وَلَا
الْمَلَائِكَةُ الْمُقَرَّبُونَ وَمَنْ يَسْتَنْفِكَ عَنْ عِبَادَتِهِۦ وَ
يَسْتَكْبِرْ فَيَسْخَرْهُمْ إِلَٰهٌ جَبِيحًا ۝١٧٤

فَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّٰلِحٰتِ فَيُوَفِّيهِمْ أُجْرَهُمْ
وَيَزِيدُهُمْ مِنْ فَضْلِهِۦ وَأَمَّا الَّذِينَ اسْتَنكَفَوْا وَ
اسْتَكْبَرُوا فَيُعَذِّبُهُمْ عَذَابًا أَلِيمًا ۖ وَلَا يَجِدُونَ
لَهُمْ مِنْ دُونِ اللّٰهِ وَلِيًّا وَلَا نَصِيرًا ۝١٧٥

يَأْتِيهَا النَّاسُ قَدْ جَاءَكُم بُرْهَانٌ مِّنْ رَبِّكُمْ وَ
أَنزَلْنَا إِلَيْكُمْ نُورًا مُّبِينًا ۝١٧٦

فَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا بِاللّٰهِ وَاعْتَصَمُوا بِهِۦ فَسَيُدْخِلُهُمْ
فِي رَحْمَةٍ مِّنْهُ وَفَضْلٍ ۖ وَيَهْدِيهِمُ إِلَٰهٌ صَرِيحًا
مُّسْتَقِيمًا ۝١٧٧

يَسْتَفْتُونَكَ قُلِ اللّٰهُ يُفْتِيكُمْ فِي الْكَلَالَةِ ۚ إِنِ امْرُؤٌ
هَلَكَ لَيْسَ لَهُ وَلَدٌ وَلَهُ أُخْتٌ فَلَهَا نِصْفُ مَا تَرَكَ
وَهُوَ يَرِثُهَا إِن لَّمْ يَكُن لَّهَا وَلَدٌ ۚ وَإِن كَانَتَا ائْتِنَتَيْنِ

注 105 3:46 節を参照せよ。

妻に子なく死せる場合は、夫が妻の相続者たるべし。されど二人の姉妹がある場合は、彼の遺産の三分の二が彼女たちのものたるべし。もし多数の相続者がある場合、つまり兄弟姉妹の両方——その場合は、男子一人の取り分は女子二人の取り分となる。アッラーはお前たちが誤らぬよう、之を明示し給う。アッラーは一切を熟知し給う。(注106)

فَلَهُمَا الثَّلَاثُ مِمَّا تَرَكَ وَإِنْ كَانُوا إِخْوَةً رِجَالًا وَنِسَاءً فَلِلَّذَكَرِ مِثْلُ حَظِّ الْأُنثَيَيْنِ يُبَيِّنُ اللَّهُ لَكُمْ أَنْ تَضِلُّوا وَاللَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿١٠٦﴾

注106 4:13で言及していたのは、カラーラの内で死の時に親も子もなく、しかも母方の兄弟姉妹しかいない者についてであった。この節では、父方母方、双方に兄弟姉妹がいるカラーラあるいは父方のみの兄弟姉妹がいるカラーラについて述べている。4:13とこの節を比べてみると、前者の兄弟姉妹たちの遺産配分は、後者の兄弟姉妹たちの遺産配分よりも少ないことが明らかであり、その理由も明白である。相続法の中のこの部分は、4:12、13で扱われている法とは意図的に分けて扱われているのである。クルアーンは、ユダヤ人がイエスに対して行った非難について暫く語った後、再びこの章の終わりで、再度、カラーラの問題に戻っている。そうして（カラーラに関する法を完成させるのと共に）イエスに精神的相続人がいないことに注目させようとしているのである。ある意味ではイエスもまたカラーラだった。イエスは、父なくして生まれ、さらに彼は精神的後継者を残していない。イブン・アッバスはカラーラを子を残さぬ者と規定しているが、イエスは後に精神的後継者を残さなかった故に、精神的カラーラだったのである。

سُورَةُ الْمَائِدَةِ مَدَنِيَّةٌ

アル・マーエダ

(メデイナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 汝等信徒たちよ、お前たちの契約を履行せよ。お前たちに告げられるもの以外の(注1)四つ足の家畜は食することを許さる。但し聖地巡礼中は狩猟することを禁ず。アッラーは御心のままに掟を定め給う。
3. 汝等信徒たちよ、アッラーの聖なる儀礼を(注2)汚すなかれ。また神聖月や(注3)犠牲の捧げ物、それにかける首輪を汚すなかれ。また主の恩恵と喜びを求めて聖殿に詣でる人々を妨げるなかれ。されど聖域を去り、巡礼着を脱いだならば、狩猟するも可なり。(注4)また、かつてお前たちを聖殿より阻める者を恨みて、敵意を彼等に抱くなかれ。むしろ相助けて正義を行い、神を敬え。罪と悪事のために相助けることなかれ。(注5)アッラーを畏れよ。げにアッラーの懲罰は苛酷なり。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا أَوْفُوا بِالْعُقُودِ أُحِلَّتْ لَكُمْ
بِهَيْمَةِ الْأَنْعَامِ إِلَّا مَا يُطَى عَلَيْكُمْ غَيْرَ مُحِلِّي الصَّيْدِ
وَأَنْتُمْ حَرَمٌ إِنْ اللَّهُ بِحُكْمٍ مَا يَرِيدُ ①

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَحِلُّوا شَعَائِرَ اللَّهِ وَلَا الشَّهَرِ
الْحَرَامِ وَلَا الْهَدْيَ وَلَا الْقَلَائِدَ وَلَا آثِينَ الْبَيْتِ
الْحَرَامِ يَبْتَغُونَ فَضْلًا مِنْ رَبِّهِمْ وَرِضْوَانًا وَإِذَا
حَلَلْتُمْ فَاصْطَادُوا وَلَا يَجْرِمُكُمْ شَاكُ تَوَرُّمٍ أَنْ
صَدَّقْتُمْ عَنِ السَّجْدِ الْحَرَامِ أَنْ تَعْتَدُوا وَتَعَاوَفُوا
عَلَى الْبِرِّ وَالتَّقْوَى وَلَا تَعَاوَنُوا عَلَى الْإِثْمِ وَالْعُدْوَانِ
وَاتَّقُوا اللَّهَ إِنَّ اللَّهَ شَدِيدُ الْعِقَابِ ③

注1 ‘汝らに告知された物以外’との表現は、以下の節で述べられている動物を指している。しかしこれらには、自然死した動物の肉、血、豚の肉はあてはまらない。豚は家畜とはみなされないし、ここで例外とされるのは家畜についてであって、全ての動物を対象としている訳ではないからである。又、この件に関しては既に2：174で取り上げられているからでもある。

注2 神の認識と神についての知識に通じるあらゆる物を指す。

注3 聖なる月を冒瀆しない様慎むという事は、その月間に為される所業に、正当な配慮をする事も意味している。

注4 巡礼者が、巡礼の旅を終え、巡礼の衣服を最終的に脱いでしまい聖なる領域の外へ足を踏み出せば、狩りをする事が許されるという事。

注5 何とこの個人的且つ全世界的行動の教義は気高いものであろう。もしこの教義通りに人が行為を為したなら、世の中の遺恨や憎しみ、互いのいがみ合いなど消滅してしまうであろうに。

4. お前たちに禁じられたものは、死骸の肉、血、豚肉、アッラー以外の名を唱えられたるもの、絞殺されたるもの、打ち殺されたるもの、墜死せるもの、角で突き殺されたるもの、野獣が食い残したるもの、但しお前たちが正式に殺したものは除く、偶像の供物台に捧げられたるものなり。而してまた籤矢をもって分配せるものも禁ぜらる。こは不敬なる行いなり。今では不信心者どもはお前たちの宗教を打破することを断念せり。されば彼等を怖れず、わしを怖れよ。今日わしはお前たちの宗教を完成し、お前たちの上にわが恩恵を満たし、お前たちの宗教としてイスラームを選びたり。されど罪を犯す意志なくも、ひもじさ故に餘儀なくなせる者には、げにアッラーは寛大にて、慈悲深くします。
5. 彼等は汝に、何が自分たちに許されているかを問う。云え、「すべて佳き物は（注6）お前たちに許さる。またアッラーがお前たちに教えし如く訓練せる鳥獣が捕えし獲物は、（注7）食べてよし。その際、アッラーの御名を唱えよ。而してアッラーを畏れよ。げにアッラーは清算するに迅速なり」と。
6. 今日すべての佳き物は（注8）お前たちに許さる。また經典の民の人々の食物はお前たちに許され、お前たちの食物は彼等に許

حُرِّمَتْ عَلَيْكُمُ الْمَيْتَةُ وَالْدَّمُ وَلَحْمُ الْخِنْزِيرِ
مَا أَهْلَ لَيْعٍ لِلَّهِ بِهِ وَالْمَنْحَرِقَةُ وَالْمُوتَرَةُ وَالتَّيْرُ
وَالطَّيْحَةُ وَمَا أَكَلَ السَّبُعُ إِلَّا مَا ذَكَّيْتُمْ وَمَا ذَرَجَ
عَلَى الصَّيْبِ وَأَنْ تَسْتَقْسِمُوا بِالْأَلْأَمْرِ ذِكْرًا فَتُقَاتِلُوا
الْيَوْمَ بِبَنِي الدِّينِ كَفَرُوا مِنْ دِينِكُمْ فَلَا تَحْشَوْهُمْ
وَاحْشَوْنِ الْيَوْمَ أَكْمَلْتُ لَكُمْ دِينَكُمْ وَأَمْتَمْتُ عَلَيْكُمْ
نِعْمَتِي وَرَضِيتُ لَكُمُ الْإِسْلَامَ دِينًا فَمَنِ اضْطُرَّ فِي
مَخْصَصَةٍ غَيْرِ مُتَجَانِفٍ لِإِثْمٍ فَإِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ⑤

يَسْأَلُونَكَ مَاذَا أَحَلَّ لَهُمْ قُلْ أَحَلَّ لَكُمْ الطَّيِّبَاتُ
وَمَا عَلَّمْتُمْ مِنَ الْجَوَارِحِ مُكَلِّبِينَ تُعَلِّمُونَهُنَّ مِمَّا
عَلَّمَكُمُ اللَّهُ فَمَا كَلَّمُوا مِمَّا أَمْسَكَ عَلَيْكُمْ وَادْكُرُوا اسْمَ
اللَّهِ عَلَيْهِ وَأَقْبُوا اللَّهَ إِنَّ اللَّهَ سَرِيعُ الْحِسَابِ ⑥
الْيَوْمَ أَحَلَّ لَكُمْ الطَّيِّبَاتُ وَطَعَامُ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ
حَلَّ لَكُمْ وَطَعَامُكُمْ حَلَّ لَهُمْ وَالْمُحْصَنَاتُ مِنَ

注6 禁事は前節で述べられており、残りの事はここで、もしそれらがタイヤブ（善であり純粋である）であり、人の健康も倫理に有害でなければ合法であり、自分自身の環境や健康条件を考え合わせて、何が本人にとって善しとされる、或いは善くないとされるかを決定する事は各個人に委ねられるとされている。聖なる預言者は当然の事ながら、肉食獣とつめを持つ鳥獣類は、戒律にかなった食物の範ちゅうには入っていない。

注7 訓練された肉食鳥獣の捕らえた獲物は、人が訓練した代行者が殺したのであるから、適切に律法にかなって殺されたのであるとみなされる。しかし、その獲物に対してそれを食する事が律法にかなったものとする為、神の名を唱える事が必要である。

注8 これは、トラの戒律に従って屠殺された動物の肉は、トラの戒律下で許される全ての食物はイスラムの戒律で、許容されるので、イスラム教徒にとって食してよいものとなるという意味である。しかし、用心の為そういった食物にはアッラーの名を口に出して祈願するとよい。イブン・アッパスによると、ここでの食物とは、“口にしてもよい食べ物”（ザビーハー）或いは、正しい手続きで屠殺された動物の肉を指すとの事である。

さる。また信徒で貞節な女、並びにお前たちの前に經典を(注9)賜われる貞節な女、婚資を与え正当な手続きを踏んで結婚を約定せし女、私通するに非ず秘密の愛人とするに非ずばお前たちに許さる。信仰を拒否する徒輩は、その行為は無に帰し、来世では失敗者の類とならん。

第二項

7. 汝等信徒たちよ、礼拝に起つときは顔を洗い、両手を肘まで洗い、濡れた手で髪を撫でつけ、両足を(注10)踝まで洗え。また体が汚れているときは沐浴して身を淨めよ。また病むか、旅路にありて汚れたる状態、または便所から出て来た場合、もしくは女に触れたとき、水なき場合は、きれいな土を以て之の代りとなし、顔や手を(注11)拭うべし。アッラーはお前たちに難しきを望み給わず。ただお前たちを淨め、お前たちが感謝の念を抱くよう己が恩恵をお前たちに満さんことを欲し給う。

8. お前たちに垂れたるアッラーの恩恵を念い、アッラーがお前たちと結べる契約を念え。その時、お前たちは云えり、「我等は聴き且つ従わん」と。而してアッラーを畏れよ。げにアッラーは人が胸中に懐くものを熟知し給う。

9. 汝等信徒たちよ、正義に基づいて立証し、アッラーのために堅忍不拔たれ。人々への敵意をかりたてて正義に悖る行いをするなかれ。常に公正であれ。かくするは真の篤

الْمُؤْمِنَاتِ وَالْمُحْصَنَاتُ مِنَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ مِنْ قَبْلِكُمْ إِذَا آتَيْتُوهُنَّ آجُورَهُنَّ مُحْصِينَ غَيْرَ مُسْفَحِينَ وَلَا مُتَّخِذِي أَخْدَانٍ وَمَنْ يَكْفُرْ بِالْإِيمَانِ فَقَدْ حَبِطَ عَمَلُهُ وَهُوَ فِي الْآخِرَةِ مِنَ

الْخَاسِرِينَ ④

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا قُمْتُمْ إِلَى الصَّلَاةِ فَاغْسِلُوا وُجُوهَكُمْ وَأَيْدِيَكُمْ إِلَى الْمَرَافِقِ وَامْسَحُوا بِرُءُوسِكُمْ وَأَرْجُلَكُمْ إِلَى الْكَعْبَيْنِ وَإِنْ كُنْتُمْ جُنُبًا فَاطَّهَرُوا وَإِنْ كُنْتُمْ مَرْضَى أَوْ عَلَى سَفَرٍ أَوْ جَاءَ أَحَدٌ مِنْكُمْ مِنَ الْغَائِطِ أَوْ لَسْتُمْ أَنْسَاءَ فَلَمْ تَجِدُوا مَاءً فَتَيَمَّمُوا صَعِيدًا طَيِّبًا فَامْسَحُوا بِوُجُوْهِكُمْ وَأَيْدِيكُمْ مِنْهُ مَا يُرِيدُ اللَّهُ لِيَجْعَلَ عَلَيْكُمْ مِنْ حَرَجٍ وَلَكِنْ يُرِيدُ لِيُطَهِّرَكُمْ وَلِيُتِمَّ نِعْمَتَهُ عَلَيْكُمْ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ⑤

وَاذْكُرُوا نِعْمَةَ اللَّهِ عَلَيْكُمْ وَمِيثَاقَهُ الَّذِي وَاثَقَكُمْ بِهِ إِذْ قُلْتُمْ سَمِعْنَا وَأَطَعْنَا وَاتَّقُوا اللَّهَ إِنَّ اللَّهَ عَالِمُ بَيِّنَاتٍ الصُّدُورِ ⑥

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا كُونُوا قَوَّامِينَ لِلَّهِ شُهَدَاءَ بِالْقِسْطِ وَلَا يَحِبُّ مِنْكُمْ شَنَّانٌ قَوْمٌ عَلَى الْآلَتَعْدِلُوا أَعْدِلُوا

注9 イスラムではイスラム教徒の男性が經典を与えられた民族のイスラム教徒ではない女性と結婚する事を許しているが、やはり通常は、イスラム教徒の女性と結婚する事が望ましい。

注10 ここでは頭の次に足という言葉が表されている。これは頭の様に足もふかれるからという理由ではなく、沐浴の最後の順序が足だからである。

注11 4章44節を参照の事。

信なり。アッラーを畏れよ。げにアッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

تَعْمَلُونَ ⑨

10. アッラーは信じて善行を積む人々を宥^{ゆる}し、大いなる報奨を与えんことを約束せり。

وَعَدَ اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَهُمْ مَغْفِرَةٌ وَأَجْرٌ عَظِيمٌ ⑩

11. されど信ぜず、われらの神兆^{しるし}を拒否する者ども、彼等は地獄の輩なり。

وَالَّذِينَ كَفَرُوا وَكَذَّبُوا بِآيَاتِنَا أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ الْحَرِّ ⑪

12. 汝等信徒たちよ、お前たちに垂れたるアッラーの恩恵を思い起せ。人々がお前たちに向って手を伸さんとせし時、アッラーはすかさずその手を抑止せり。アッラーを畏れよ。信徒たるもの皆アッラーにこそ信頼を寄せるべきなり。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اذْكُرُوا نِعْمَتَ اللَّهِ عَلَيْكُمْ إِذْ هُمْ قَوْمٌ أَنْ يَبْسُطُوا إِلَيْكُمْ أَيْدِيَهُمْ فَكَفَّ أَيْدِيَهُمْ عَنْكُمْ وَاتَّقُوا اللَّهَ وَعَلَى اللَّهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُونَ ⑫

第三項

13. 昔、アッラーはイスラエルの子孫と契約を結びたり。その時われらは、彼等のうちより十二人の首長を（注12）興したり。而してアッラーは云えり、「げにわしはお前たちと偕に在り。お前たちが礼拝を遵守し、定め^{きまり}の喜捨をなし、わが預言者たちを信じ、之を助け、アッラーに立派な貸付をなさば、わしは必ずお前たちの罪業を消滅し、お前たちを河川流れる楽園に導き入れん。されどお前たちの何人^{なんびと}にせよ、この後信ぜざる者は、正しい道より迷い出る者なり」と。

وَلَقَدْ أَخَذَ اللَّهُ مِيثَاقَ بَنِي إِسْرَءِيلَ وَبَشَرْنَا مِنْهُمُ اثْنَيْ عَشَرَ نَقِيبًا وَقَالَ اللَّهُ إِنِّي مَعَكُمْ لَئِنْ أَتَيْتُمُ الصَّلَاةَ وَآتَيْتُمُ الزَّكَاةَ وَآمَنْتُمْ بِرُسُلِي وَعَزَّرْتُمُوهُ وَأَقْرَضْتُمُ اللَّهَ قَرْضًا حَسَنًا لَأُكَفِّرَنَّ عَنْكُمْ سَيِّئَاتِكُمْ وَلَأُدْخِلَنَّكُمْ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ فَمَنْ كَفَرَ بَعْدَ ذَلِكَ مِنْكُمْ فَقَدْ ضَلَّ سَوَاءَ السَّبِيلِ ⑬

14. されど彼等その契約を破れるが故に、われらは彼等を呪い、且つその心を頑迷ならしめたり。彼等は經典中の字句を正しい場所から移し曲げて解釈し、与えられた訓戒の一部を忘却せり。汝は彼等が、僅かな者を除けば、常に裏切りをこととするを見ん。されど彼等を赦^{ゆる}して、之を看過^{かんか}せよ。げにアッラーは善行を積む者を愛し給う。

فَمِمَّا نَقُصُّهُمْ مِيثَاقَهُمْ لَعْنَتُهُمْ وَجَعَلْنَا قُلُوبَهُمْ قَاسِيَةً يُحَرِّفُونَ الْكَلِمَ عَنْ مَوَاضِعِهِ وَنَسُوا حَظًّا مِمَّا ذُكِّرُوا بِهِ وَلَا تَزَالُ تَطَّلِعُ عَلَى خَافِيَةٍ مِنْهُمْ إِلَّا قَلِيلًا مِنْهُمْ فَاعْفُ عَنْهُمْ وَاصْفَحْ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُحْسِنِينَ ⑭

注12 ‘12人の首長’とは、モーゼの死後、現れたイスラエルの12人の預言者を指す、専門学者によれば、これらの人々はモーゼの任命した12人の‘皇子達’と呼ばれていたとの事である。

15. またわれらは、「我等はキリスト教徒なり」と云う者どもとも契約を結べり。(注13)されど彼等もまた与えられたる訓戒の一部を忘却せり。さればわれらは、復活の日まで、彼等の間に敵意と憎悪とをかき立てたり。やがてアッラーは彼等に向って、そのなせることを告げ知らせめん。

16. 經典の民よ、われらの使徒は、お前たちが經典の中で隠してきた幾多のことを解明するために、また幾多のことを黙過(もくわ)するためにお前たちのところへ来れり。アッラーよりの光明と(注14)明白なる經典が今お前たちに降りたり。

17. これによってアッラーは、御心(みこころ)にかなう者を平安の道に導き、思し召し(いさな)によって彼等を暗闇から引き出して光明へと誘い、正しい道に導き給う。

18. 「アッラーは何人(なんびと)にも非ず、マリアの子救世主(すくせしゅ)なり」と云う者どもは、まぎれもなく不信の徒輩なり。云え、「もしアッラーが、マリアの子メシア、その母並びに地上のすべての人々を滅ぼさんとすれば、誰がアッラーを抑止し得ようぞ?」と。(注15)天も地も、またその間に在るもの、挙げてアッラーの統べ給うところなり。アッラーは御心(みこころ)のままに創造し、万能にまします。

19. ユダヤ教徒やキリスト教徒は云う、「我等はアッラーの子なり、寵児なり」と。云え、「しからば何故にアッラーはお前たちの罪を罰するか? 然らず、お前たちはアッラーが創造せる人間にすぎず」と。アッラーは

وَمِنَ الَّذِينَ قَالُوا إِنَّا نَصْرِي أَخَذْنَا مِيثَاقَهُمْ فَنَسُوا حَظًّا مِمَّا ذُكِّرُوا بِهِ فَأَغْرَيْنَا بَيْنَهُمُ الْعَدَاةَ وَالْبَغْضَاءَ إِلَى يَوْمِ الْقِيَامَةِ وَسَوْفَ يَنْبَغُهُمُ اللَّهُ بِمَا كَانُوا يَصْنَعُونَ ⑮

يَا هَلْ الْكِتَابُ قَدْ جَاءَكُمْ رَسُولُنَا يُبَيِّنُ لَكُمْ كَثِيرًا مِمَّا كُنْتُمْ تُخْفُونَ مِنَ الْكِتَابِ وَيَعْفُو عَنْ كَثِيرٍ قَدْ جَاءَكُمْ مِنَ اللَّهِ نُورٌ وَكِتَابٌ مُبِينٌ ⑯

يَهْدِي بِهِ اللَّهُ مَنِ اتَّبَعَ رِضْوَانَهُ سُبُلَ السَّلَامِ وَيُخْرِجُهُم مِّنَ الظُّلُمَاتِ إِلَى النُّورِ بِإِذْنِهِ وَيَهْدِيهِمْ إِلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ⑰

لَقَدْ كَفَرَ الَّذِينَ قَالُوا إِنَّ اللَّهَ هُوَ الْمَسِيحُ ابْنُ مَرْيَمَ قُلْ فَمَنْ يَمْلِكُ مِنَ اللَّهِ شَيْئًا إِنْ أَرَادَ أَنْ يُهْلِكَ الْمَسِيحُ ابْنُ مَرْيَمَ وَأُمُّهُ وَمَنْ فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا وَلِلَّهِ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا يُخْلِقُ مَا يَشَاءُ وَاللَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ⑱

وَقَالَتِ الْيَهُودُ وَالنَّصَارَى نَحْنُ أَبْنَاءُ اللَّهِ وَأَحِبَّاؤُهُ قُلْ فَلِمَ يُعَذِّبُكُمْ بِذُنُوبِكُمْ بَلْ أَنْتُمْ بَشَرٌ مِّثْلُ

注13 これは、聖なる預言者の到来に関するイエスの預言についての様に思われるが(ヨハネ、16:12-13) この預言はイエスの後継者達が故意に無視したり、何とかなった意味にとらうと無駄な努力をした預言である。

注14 聖なる預言者を指す(33:46、47)

注15 ここで計らずも非常に強い語調が使われているのは、イエスが神の息子である等という途方もない教義に焦点をあて、とがめる為である。同様に、19:89-92でも強くとがめる語調が使われている。

御心のままに赦し、御心のままに罰し給う。
天も地も、またその間に在るものは、挙げて
アッラーの統べ給うところ、而してすべて
はその御許へ帰り行く。

20. 經典の民よ、使徒たちの派遣が中断された
る後、われらの使徒がお前たちのところへ
遣わされたるは、お前たちに物事を解明し、
「朗報の伝達者も警告者も来らず」とお前
たちに云わしめざらんがためなり。されば
今、こうして朗報の伝達者であり警告者が
お前たちのところへ来れるなり。アッラー
は万能にまします。

第四項

21. モーゼが己が民に向ってかく云える時のこ
とを思い起せ。「我が民草よ、お前たちに垂
れ賜えるアッラーの恩恵を思い起せ。彼は
お前たちの中から預言者たちを興し、お前
たちを王者たらしめ、他の如何なる民にも
与えざりしものをお前たちに与えたり。
22. 我が民草よ、アッラーがお前たちに定めた
る聖地に入れ。引き返すなかれ。引き返さ
ば、失敗者とならん」
23. 彼等は云えり、「モーゼよ、そこには狂暴且
つ強力な民あり。彼等が出て行かざる限り、
我等はそこに入るを得ず。されど彼等もし
出て行かば、我等はそこに入るべし」と。
24. 主を畏れ、その恩恵に浴せる二人の男あり
て、云えり、「門から入り、彼等に向って進
撃せよ。一たび入らば、お前たちは必ず勝
利を得ん。お前たち信徒ならば、アッラー
を信頼せよ」と。
25. されど彼等は云えり、「モーゼよ、我等は彼
等がそこに居る限り、決して入るを得ず。
されば汝と汝の主が行きて戦え。我等はこ
こにて坐せん」と。

خَلْقًا يُغْفِرُ لِمَن يَشَاءُ وَيُعَذِّبُ مَن يَشَاءُ وَلِلَّهِ مُلْكُ
السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا أُوْا إِلَيْهِ الْمَصِيرُ ①⑤

يَا أَهْلَ الْكِتَابِ قَدْ جَاءَكُمْ رَسُولُنَا يُبَيِّنُ لَكُمْ عَلَى
فَتْرَةٍ مِّنَ الرُّسُلِ أَنْ تَقُولُوا مَا جَاءَنَا مِن بَشِيرٍ وَ
لَا نَذِيرٍ فَقَدْ جَاءَكُمْ بَشِيرٌ وَنَذِيرٌ وَاللَّهُ عَلَى
كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ①⑥

وَإِذْ قَالَ مُوسَى لِقَوْمِهِ يُقَوْمُ أَذْكُرُوا نِعْمَةَ اللَّهِ
عَلَيْكُمْ إِذْ جَعَلَ فِيكُمْ أَنْبِيَاءَ وَجَعَلَكُمْ مُلُوكًا
وَاشْكُرُوا مَا لَمْ يُؤْتِ أَحَدًا مِّنَ الْعَالَمِينَ ①⑦

يُقَوْمُ ادْخُلُوا الْأَرْضَ الْمُقَدَّسَةَ الَّتِي كَتَبَ اللَّهُ لَكُمْ
وَلَا تَرْتَدُّوا عَلَى أَدْبَارِكُمْ فَتَنْقَلِبُوا خِصِرِينَ ①⑧

قَالُوا يَمُوسَى إِنَّ فِيهَا قَوْمًا جَبَّارِينَ ①⑨ وَإِنَّا لَن
نَدْخُلُهَا حَتَّىٰ يَخْرُجُوا مِنْهَا فَإِن يَخْرُجُوا مِنْهَا
فَإِنَّا دَاخِلُونَ ②①

قَالَ رَجُلٌ مِّنَ الَّذِينَ يَخَافُونَ أَعْمَ اللَّهُ عَلَيْهِمَا
ادْخُلُوا عَلَيْهِمُ الْبَابَ فَإِذَا دَخَلْتُمُوهُ فَانكُمُ عَلَيْهِمْ
وَعَلَى اللَّهِ فَتَوَكَّلُوا إِن كُنْتُمْ مُّؤْمِنِينَ ②②

قَالُوا يَٰيُوسَى إِنَّا لَن نَدْخُلُهَا أَبَدًا قَادِمُوا فِيهَا
فَاذْهَبْ أَنتَ وَرَبُّكَ فَقَاتِلَا إِنَّا هَاهُنَا قَاعِدُونَ ②③

26. モーゼは云えり、「主よ、我は我が身と我が兄の外は何人も支配し得ず。されば主よ、我等と逆心の民との間を分け給え」と。

27. 神は云えり、「しからば今後四十年間、彼等に対してこの地を禁断となす。その間彼等は狂気の如く取り乱して地上を彷徨せん。逆心の民に心煩わすなかれ」と。

第五項

28. アダムの二人の息子の（注16）話を正確に彼等に語れ。彼等互に供物を捧げし時、一人は受納されしが、他は納れられざりき。そこで後者は云えり、「我必ずお前を殺さん」と。前者は答えて云えり、「アッラーは義しい人からの供物のみを受納す。

29. たとい汝が我を殺さんとして手を伸すとも、我は汝を殺さんとして手を伸ばすつもりなし。我は森羅万象の主アッラーを畏る。

30. 我は汝が、己が罪同様、我に犯せる罪をも背負いて、業火の住人に加わらんことを望む。そは悪事を行う者の応報なり」と。

31. されど彼の心はその弟を殺すべく誘いたれば、彼は遂に弟を殺し、而して失敗者の一人となれり。

32. その時、アッラーは一羽の鴉^{からす}を遣わし、（注17）地面に穴を掘らし、如何に弟の死骸を隠すかを彼に教えたり。彼は嘆いて云えり、「情けなや、我弟の死骸を隠すのに、この鴉^{からす}ほどのことさえもし得ざるとは！」と。かくて彼は後悔せり。

قَالَ رَبِّ إِنِّي لَا أَمْلِكُ إِلَّا نَفْسِي وَإِنِّي فَاقُوقُ بَيْنَنَا
وَبَيْنَ الْقَوْمِ الْفَاسِقِينَ ﴿٢٦﴾

قَالَ فَإِنَّهَا مُحَرَّمَةٌ عَلَيْهِمْ أَرْبَعِينَ سَنَةً يَتِيَهُونَ
فِي الْأَرْضِ فَلَا تَأْسَ عَلَى الْقَوْمِ الْفَاسِقِينَ ﴿٢٧﴾

وَأَنْتَ عَلَيْهِمْ نَبَأُ ابْنَيْ آدَمَ بِالْحَقِّ إِذْ قَرَّبَا قُرْبَانًا
فَتَقَبَّلَ مِنْ أَحَدِهِمَا وَلَمْ يُتَقَبَّلْ مِنَ الْآخَرِ قَالَ
لَا أُقْبَلُكَ قَالَ إِنَّمَا يَقْبَلُ اللَّهُ مِنَ الْمُتَّقِينَ ﴿٢٨﴾

لَئِنْ بَسَطْتَ إِلَى يَدِكَ لِتَقْتُلَنِي مَا أَنَا بِبَاسِطٍ يَدِي
إِلَيْكَ لِأَقْتُلَكَ إِنِّي أَخَافُ اللَّهَ رَبَّ الْعَالَمِينَ ﴿٢٩﴾

إِنِّي أُرِيدُ أَنْ تَبْوَأَ بِإِثْمِي وَإِثْمُكَ فَتَكُونُ مِنْ
أَصْحَابِ النَّارِ وَذَلِكَ جَزَاُ الظَّالِمِينَ ﴿٣٠﴾

فَطَوَّعَتْ لَهُ نَفْسُهُ قَتْلَ أَخِيهِ فَقَتَلَهُ فَأَصْبَحَ
مِنَ الْخَاسِرِينَ ﴿٣١﴾

فَبَعَثَ اللَّهُ غُرَابًا يَبْحِثُ فِي الْأَرْضِ لِيُرِيَهُ كَيْفَ
يُؤَارِي سَوْءَةَ أَخِيهِ قَالَ يُؤِيلَنِي أَجَزْتُ أَنْ أَكُونَ
مِثْلَ هَذَا الْغُرَابِ فَأُوَارِي سَوْءَةَ أَخِي فَأَصْبَحَ
مِنَ التَّائِبِينَ ﴿٣٢﴾

注16 ‘アダムの二人の息子’とは比喩的に誰であれ人類から選ばれた、二人の個人を指している。又そのたとえ話は、預言者の地位が自分達から聖なる預言者を通してイシュマエル人に移ってしまった為、イスラエル人達がイシュマエルの末えいに対してとった敵意にみちた態度をも表現している。

注17 大がらすの事件が実際にあった事なのか或いはただの例え話にすぎないのかについては評釈者の意見の分かれるところであるが、鳥類の仕草やくせを観察すると、多くの役にたつ発見をする事ができる。創世記4：1-15を参照の事。

33. このために、われらはイスラエルの子孫に掟を定め、人殺しの罪ある者が国中に騒乱を起せる^{かど}廉による処刑に非ざる限り、一人を殺すは万民を殺すが如く、また一人を生かすは万民を生かすが如しと規定せり。而してわれらの使徒たちは明証を携えて彼等のところへ至りしが、なお彼等の多くはその後も地上で非道を行う。

34. アッラーや使徒に向って戦いを挑み、地上を騒乱せんと努むる者の応報は、殺されるか、磔にされるか、手と足を互い違いに切断されるか、又は国外に追放されるかそれ以外になし。(注18)こは彼等が現世で受ける辱め、来世においては重刑を受けん。

35. 但し、お前たちが彼等を制圧せる以前に悔い改めし者は除く。(注19)されば、アッラーが寛大にして慈悲深くましますことを知れ。

第六項

36. 汝等信徒たちよ、アッラーを畏れ敬い、アッラーに近づかんことを求め、アッラーの道のために奮闘せよ。然らばお前たち成功すべし。

مَنْ أَجَلَ ذَلِكَ كَتَبْنَا عَلَى بَنِي إِسْرَائِيلَ أَنَّهُ مَنْ قَتَلَ نَفْسًا بِغَيْرِ نَفْسٍ أَوْ فَسَادٍ فِي الْأَرْضِ فَكَأَنَّمَا قَتَلَ النَّاسَ جَمِيعًا وَمَنْ أَحْيَاهَا فَكَأَنَّمَا أَحْيَا النَّاسَ جَمِيعًا وَلَقَدْ جَاءَتْهُمْ رُسُلُنَا بِالْبَيِّنَاتِ ثُمَّ إِنْ كَثُرُوا مِنْهُمْ بَعْدَ ذَلِكَ فِي الْأَرْضِ لَنَسِفُنَّ ۝

إِنَّمَا جَزَاءُ الَّذِينَ يُحَارِبُونَ اللَّهَ وَرَسُولَهُ وَيَسْعَوْنَ فِي الْأَرْضِ فَسَادًا أَنْ يُقَتَّلُوا أَوْ يُصَلَّبُوا أَوْ تُقَطَّعَ أَيْدِيهِمْ وَأَرْجُلُهُمْ مِنْ خِلَافٍ أَوْ يُنْفَوْا مِنَ الْأَرْضِ ذَلِكَ لَهُمْ خِزْيٌ فِي النَّارِ وَلَهُمْ فِي الْآخِرَةِ عَذَابٌ عَظِيمٌ ۝

إِلَّا الَّذِينَ تَابُوا مِنْ قَبْلِ أَنْ تَقْرَأَ عَلَيْهِمُ الْقَوْلَ ۖ فَاغْلُظْ ۚ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ۝

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللَّهَ وَابْتَغُوا الْبِرَّ الْوَسِيلَةَ وَجَاهِدُوا فِي سَبِيلِهِ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ۝

注18 イスラムはイスラム教国或いはイスラム社会が圧倒多数でイスラムの利益にとって危険とされる邪悪な存在を根絶せよと要求する場合に、極端な手段であっても、積極的に戦うものである。イスラムと感情的な空想の情緒的断面に惑わされる事なく、理性と健全な判断の命に従い、公の攻撃に対する罰則も用意する。ここで準備される罰の形態には四種類あり、特殊な場合には、課される罰は、周囲の状況次第ともなる。又罰を課するのは個人ではなく統治政府の責任であり、‘土地払い’という語は、イマーム・アブー・ハニーファに依ると禁固を表す。

注19 この節及び前節で述べられているのは、‘アッラー及びアッラーの使者に對し戦いを挑む者という表現からも明らかな様に、ただの盗ごくやかつぱらいではなく、イスラム教国に戦いをしかけてくる反乱者や極悪非道な者達への罰についてである。また当節で、罪を犯した者達は悔い改めれば大赦を約束されているという事実からも、その推論は正しいと考えられる。しかし強盗、かつぱらい、窃盗者の様に、明らかに個人や社会に對して極悪非道な罪を犯した者達は、普通の状況では、どれだけ悔い改めても、教国からは許されず、律法

37. たとい不信心者が、地上にあるすべてのもの並びに之に倍するものを以て、復活の懲罰を贖わんとするも、そは受納されざるべし。彼等にはただ痛罰あるのみ。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا لَوْ أَنَّهُمْ مَا فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا
وَمِثْلَهُ مَعَهُ لَيَفْقَتُنَّ إِلَيْهِ مِنْ عَذَابِ يَوْمِ الْقِيَمَةِ
مَا تُقْبَلُ مِنْهُمْ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٣٧﴾

38. 彼等は業火より脱出せんと欲すれど、そこより出づる能わず。永劫の罪のみ続かん。

يُرِيدُونَ أَن يُخْرَجُوا مِنَ النَّارِ وَمَا هُمْ بِخَارِجِينَ
مِنْهَا وَلَهُمْ عَذَابٌ مُّقِيمٌ ﴿٣٨﴾

39. 盗みをしたる者は、男女を問わず、その手を斬り落せ。(注20)そは己が所業の報いにして、アッラーの見せしめなり。アッラーは強大にして、賢哲にまします。

وَالسَّارِقُ وَالسَّارِقَةُ فَاقْطَعُوا أَيْدِيَهُمَا جَزَاءً بِمَا
كَسَبَا نَكَالًا مِنَ اللَّهِ وَاللَّهُ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٣٩﴾

40. されど、悪事を行えるも、後に悔悟し改心する者には、アッラーは容赦に転ぜられん。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

فَمَنْ تَابَ مِنْ بَعْدِ ظُلْمِهِ وَأَصْلَحَ فَإِنَّ اللَّهَ يَتُوبُ
عَلَيْهِ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٤٠﴾

41. 汝は天地の大権がアッラーの所有なることを知らざるか? (注21)アッラーは御心

أَلَمْ تَعْلَمْ أَنَّ اللَّهَ لَهُ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ يَعِيبُ

で定められた悪業に対する罰則をうけねばならないのである。彼等が悔後すれば、神は無論、赦されるが、教国の力は限られており、そこまでの権限は有していない。しかしながら政治犯は、反省しそれ以上の反乱行為や、国家へたてつく事をしなければ赦される。

注20 この節で、'盗みをする女'という表現より前に'盗みをする男'が置かれているのは、女性より男性の方が盗みを犯しやすいからであり、24:3で、姦淫を犯す女という言葉が姦淫する男より前に置かれているのは、姦淫の罪が男より女の場合の方が立証しやすいからである。この各節の配列、又その言葉の配列の妙からもクルアーンの知的水準の高さがわかるのである。私通に関して男子に課せられる罰は厳しすぎる様にも思われるが、人間の今までの経験から、罰を厳しくして、もしその様な罪を犯せばどの様な日に会うか示せば、人をしてその様な行動を慎みさせる効果があるのである。一人の人間を厳しく罰する事で、それをみせしめとし、同様の罪を犯すかもしれない多くの男達を救う方が賢明なのである。身体全体をそこなってしまう事なく、腐りきった四肢を切断できるのは名医といえる。イスラムが、精神的に貧しかった時代に、定められた罰則が人の行動を規制するものとなる為、実際に遂行され、盗ぞく達の手を切断するという極めてまれな事が行なわれた。今日に於いても、クルアーンで定められる盗みへの罰が効力を持っている為、アラビアでは窃盗は極めてまれである。また、この節で使われているアラビア語の二つの語の意味は、"彼らから盗む力を取り去る、或いは、彼らが盗む事をしなくなると考えられる実際的な手段をとる"という事を表している。この節を文字通りの罰と考えられる。しかしこういった最大級の罰が与えられるのは極端な場合のみであり、それ以外は盗人から盗む力を失くす或いは盗まなくさせる実際的方法が考えられ、より軽い罰則が与えられる。当然の事ながら罰を与える場合には、あらゆる面からかんがみた状況判断が下される。神学者達の間で意見の相異があるという事は、とりも直さず、罰則の形態や轻重に関しては、それを下す裁判官の判断に委ねられるという事を意味している。

注21 これらに類似した表現は、宇宙の神の統治が任意であり、何ら法的システムに基づいていないという事を意味している訳ではない。これらの表現は全て、神こそ宇宙に於ける最終的な権威であり、神の言葉が法であり、神の律令に対しての訴えや償いなど存在しないという事を指摘する為、用いられているのである。

のままに聞き、御心のままに赦し給う。アッラーは全能にまします。

42. 使徒よ、競いて不信心に奔る者どもに心を痛めるなかれ。彼等は口では、「我等は信ず」と云うが、心では信ぜざるなり。またユダヤ教徒の中には好んで虚言に耳を傾け、(注22) 汝のところへ寄りつかざる者どもの言葉に耳を傾ける者あり。彼等は勝手に經典の字句を歪曲して云う、「もしこれがお前たちに与えられたるものならば、すなわち受けよ。されど与えられたるものに非ずば、すなわち避けよ」と。アッラーが試さんとする者あらば、汝としてアッラーに抗してその者のために何事をもし得ざるべし。これ等の者どもは、アッラーがその心を浄むるを欲せざる者なり。彼等は現世で恥辱を受け、来世では厳しい懲罰を受けん。

43. 彼等は好んで虚偽に耳を傾け、禁ぜられたるものをむさぼり食らう。もし彼等が裁定を求めて汝のところへ来なば、裁いてやるか彼等から顔を転じて脇を向け。たとい汝が彼等から顔をそむけるとも、彼等は汝を害する能わず。また裁くなら、公正に裁くべし。げにアッラーは公正なる者を愛し給う。

44. されどアッラーの判決を載せたる律法をすでに持つ彼等が、如何にして汝を裁判者となすべきや？ しかるに彼等は律法を無視して背き去る。げに彼等は信徒に非ず。

第七項

45. げにわれらは、嚮導と光明とを内含する律法を降したり。われらに帰依せる預言者たちは、(注23) 之に拠って、聖職者たちや

مَنْ يَشَاءُ وَيَغْفِرْ لِمَنْ يَشَاءُ وَاللَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٢٣﴾

يَا أَيُّهَا الرُّسُلُ لَا يَحْزَنْكَ الَّذِينَ يُسَارِعُونَ فِي الْكُفْرِ مِنَ الَّذِينَ قَالُوا آمَنَّا بِأَفْوَاهِهِمْ وَلَمْ تُؤْمِنْ قُلُوبُهُمْ وَمِنَ الَّذِينَ هَادُوا وَهُمْ سَمْعُونَ لِلْكَذِبِ سَمْعُونَ لِقَوْمٍ آخِرِينَ لَمْ يَأْتُوكَ يَحْفَظُونَ الْكَلِمَ مِنْ بَعْدِ مَوَاضِعِهِ يَقُولُونَ إِنْ أُوتِيتُمْ هَذَا فَخُذُوهُ وَإِنْ لَمْ تُؤْتَوْهُ فَاحْذَرُوا وَمَنْ يُرِدِ اللَّهُ فِتْنَتَهُ فَلَنْ تَمْلِكَ لَهُ مِنَ اللَّهِ شَيْئًا أُولَئِكَ الَّذِينَ لَمْ يُرِدِ اللَّهُ أَنْ يُطَهِّرْ قُلُوبَهُمْ لَهُمْ فِي الدُّنْيَا خِزْيٌ وَلَهُمْ فِي الْآخِرَةِ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿٢٤﴾

سَمْعُونَ لِلْكَذِبِ أَكَلُونَ لِلسُّحْتِ فَإِنْ جَاءُوكَ فَاحْكُم بَيْنَهُمْ أَوْ أَعْرِضْ عَنْهُمْ وَإِنْ تُعْرِضْ عَنْهُمْ فَلَنْ يَضُرُّوكَ شَيْئًا وَإِنْ حَكَمْتَ فَاحْكُم بَيْنَهُم بِالْقِسْطِ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْقَاسِطِينَ ﴿٢٥﴾

وَكَيفَ يُحْكُمُوكَ وَعِنْدَهُمُ التَّوْرَةُ فِيهَا حُكْمُ اللَّهِ ثُمَّ يَقُولُونَ مِنْ بَعْدِ ذَلِكَ وَمَا أُولَئِكَ بِالْمُؤْمِنِينَ ﴿٢٦﴾

إِنَّا أَنْزَلْنَا التَّوْرَةَ فِيهَا هُدًى وَنُورٌ يُحْكُمُ بِهَا النَّبِيُّونَ الَّذِينَ أَسْلَمُوا لِلَّذِينَ هَادُوا وَالرَّبَّانِيُّونَ

注22 この表現は(1)彼らは嘘をつく為に耳を傾ける、(2)彼らは他の者達が聖なる預言者に関していう嘘を真実として受け入れるの意味を持つ。

注23 3章80節参照

律法学者がなせる如くユダヤ教徒を裁きたり。なんとなれば、彼等はアッラーの經典の護持を託され、その守護者なりせば。故に人々を恐れるなかれ、ただわしのみを恐れよ。而してわずかな代価で神兆を売るなかれ。アッラーが降し給えるものに拠らずして(注24)裁判する者ども、これ等の者は皆不信心者なり。

46. われらは律法の中で、かく規定せり。生命には生命を、目には目を、鼻には鼻を、耳には耳を、齒には齒を、その外受けた傷害に同じような報復を。されど報復の権利を放棄する者は、(注25)己が罪の償いとなるべし。アッラーが降し給えるものに拠らずして裁く者、これ等は皆不義な徒輩なり。

47. われらは彼等の跡を踏ませてマリアの子イエスを遣わし、それ以前に律法の中に啓示せるものを実証せり。またわれらは、嚮導と光明とを内含する福音書をイエスに授けたり。そは以前に律法の中に啓示せるものの実証であり、神を畏れる者へ嚮導であり且つ警告なり。

48. されば福音の民をして、アッラーがその中に啓示せるものに拠りて裁き事をなさしめよ。何人であれアッラーが啓示せるものに拠らずして裁き事をなす者は、邪惡の徒輩なり。

49. われらが汝に真理から成る經典を啓示せるは、それ以前に啓示せる經典を実証し、そ

وَ الْأَحْبَارَ بِمَا اسْتَحْفَظُوا مِنْ كِتَابِ اللَّهِ وَ كَانُوا عَلَيْهِ شُهَدَاءَ فَلَا تَخْشَوُا النَّاسَ وَ اخْشَوْا اللَّهَ لَا تَشْتَرُوا بِإِيَّتِي ثَمَنًا قَلِيلًا وَمَنْ لَمْ يَحْكَمْ بِمَا أَنزَلَ اللَّهُ فَأُولَئِكَ هُمُ الْكَافِرُونَ ﴿٤٦﴾

وَ كَتَبْنَا عَلَيْهِمْ فِيهَا أَنَّ النَّفْسَ بِالنَّفْسِ وَ الْعَيْنَ بِالْعَيْنِ وَ الْأَنْفَ بِالْأَنْفِ وَ الْأُذُنَ بِالْأُذُنِ وَ السِّنَّ بِالسِّنِّ وَ الْجُرُوحَ قِصَاصٌ فَمَنْ تَصَدَّقَ بِهِ فَهُوَ كَفَّارَةٌ لَهُ وَمَنْ لَمْ يَحْكَمْ بِمَا أَنزَلَ اللَّهُ فَأُولَئِكَ هُمُ الظَّالِمُونَ ﴿٤٧﴾

وَ قَفَّيْنَا عَلَى آثَارِهِم بِعِيسَى ابْنِ مَرْيَمَ مُصَدِّقًا لِمَا بَيْنَ يَدَيْهِ مِنَ التَّوْرَةِ وَ آتَيْنَاهُ الْإِنْجِيلَ فِيهِ هُدًى وَ نُورٌ وَ مُصَدِّقًا لِمَا بَيْنَ يَدَيْهِ مِنَ التَّوْرَةِ وَ هُدًى وَ مَوْعِظَةً لِّلْمُتَّقِينَ ﴿٤٨﴾

وَ يُحْكَمْ أَهْلَ الْإِنْجِيلِ بِمَا أَنزَلَ اللَّهُ فِيهِ وَمَنْ لَمْ يَحْكَمْ بِمَا أَنزَلَ اللَّهُ فَأُولَئِكَ هُمُ الْفَاسِقُونَ ﴿٤٩﴾

وَ أَنزَلْنَا إِلَيْكَ الْكِتَابَ بِالْحَقِّ مُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيْهِ

注24 この節に於いて、クルアーンは前節で述べられたユダヤ人に対する非難を再び持ち出している。即ちモーゼ以後の神の預言者ですら、トラーに従って裁くよう命ぜられているのに、誰か一体、トラーに依らず、裁く事が出来るというのであろうかとの意味である。

注25 出エジプト記21:23-25、及びレビ記24:19-21を参照の事。また“これを自ら棄権する者達”という言葉が、キリスト教徒が多分に自慢する許しについての教えが、福音書にしか述べられてはいないというのは事実でないという立証となる。またモーゼの教えは、イエスの許しと無抵抗に主眼を置く教えに対し報復に主眼をおいてはいるものの、赦しは、モーゼの教えの一部を形成している。

の守護者たらしめんがためなり。(注26)さればアッラーが啓示せるものに拠りて彼等の間を裁くべし。彼等の邪悪な性癖に従い、汝に賜われる真理に背くなかれ。われらはお前たちのそれぞれに、明白なる宗教上の掟と俗事における明路とを定めたり。もしアッラーが欲したりせば、お前たちを一つの集団になし得たり。されどアッラーはお前たちを、お前たちに授け賜えるもので試めさんとす。されば互に善行を競うべし。いずれお前たちは皆アッラーの許へ帰り行かん。その時アッラーは、お前たちが争えることを教えん。

50. さればアッラーが啓示せるものに拠りて、彼等の間を裁くべし。彼等の邪悪な性癖に従うなかれ。アッラーが汝に啓示せるもので汝を惑わさんとする彼等に用心せよ。されど彼等が背き去らば、そはアッラーが彼等の犯せしさまざまな罪故に、彼等を一撃せんとすることを知れ。げに多くの人間は不従順なり。

51. 彼等は無明時代の(注27)裁判を求むるか？されど信仰篤き人々にとりて、アッラーに勝る裁判官があり得るか？

第八項

52. 汝等信徒たちよ、ユダヤ教徒やキリスト教徒を友とするなかれ。(注28)彼等は互に友人なり。(注29)お前たちの中で彼等と仲良

مِنَ الْكِتَابِ وَمُهَيْمِنًا عَلَيْهِ فَاحْكُم بَيْنَهُم بِمَا أَنزَلَ اللَّهُ وَلَا تَتَّبِعْ أَهْوَاءَهُمْ عَمَّا جَاءَكَ مِنَ الْحَقِّ لِكُلِّ جَعَلْنَا مِنْكُمْ شِرْعَةً وَمِنْهَاجًا وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ لَجَعَلَكُمْ أُمَّةً وَاحِدَةً وَلَٰكِن لِّيَبْلُوَكُمْ فِي مَا آتَاكُمْ فَاسْتَبِقُوا الْخَيْرَاتِ إِلَى اللَّهِ مَرْجِعُكُمْ جَمِيعًا فَيُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ فِيهِ تَخْتَلِفُونَ ﴿٥٠﴾

وَأِنْ أَحْكَمْتُمْ بَيْنَهُمْ بِمَا أَنزَلَ اللَّهُ وَلَا تَتَّبِعْ أَهْوَاءَهُمْ وَاحِدٌ لَهُمْ أَنْ يَقْتُلُوا عَنْ بَعْضٍ مَا أَنزَلَ اللَّهُ إِلَيْكَ فَإِنْ تَوَلَّوْا فَاعْلَمُوا أَنَّمَا يُرِيدُ اللَّهُ أَنْ يُصِيبَهُمْ بِبَعْضِ ذُنُوبِهِمْ وَإِنْ كَثِيرًا مِّنَ النَّاسِ لَفَاسِقُونَ ﴿٥١﴾

أَفَحَكَمَ الْجَاهِلِيَّةُ يَبْعُونَ وَمَنْ أَحْسَنُ مِنَ اللَّهِ فِي حُكْمٍ يَقُومُ يُوقِنُونَ ﴿٥٢﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَتَّخِذُوا الْيَهُودَ وَالنَّصَارَى أَوْلِيَاءَ بَعْضُهُمْ أَوْلِيَاءُ بَعْضٍ وَمَنْ يَتَوَلَّهُمْ فَمِنْكُمْ فَاتَّخِذُوا

注26 ここではクルアーンとは、それに先立つ經典を保護するものとして語られている。又それは、クルアーンは不滅であるものとして語られている。そして永遠の価値を有するもの全てを包括する。永遠ではなく人類の必然にかなわぬものは全く含まれていないという意味に於いて、そして、不正な変更がなされず、神の御加護があるという意味に於いて、コーランは今までに存在した經典を保護する存在と呼ばれるのである。

注27 無明時代—即ち神の啓示の下っていないイスラム以前の事

注28 この節はユダヤ人やキリスト教徒、そして信仰を持たぬ者達への公正な、或いは慈悲深い扱いを禁じたり抑制したりする為に述べられているのではない。ここで取りあげているのは、イスラムと戦闘状態にある、そしていつもイスラムに対し、わなを仕掛けてくるユダヤ人や或いはキリスト教徒についてである。

注29 ユダヤ人とキリスト教徒は、お互いの相異を忘れ、イスラムに敵対する時には、従党を組む。聖なる預言者が“全ての不信仰は、一つの共同体を形成する”と言った事は真に真実である。即ち信仰を持たぬ者は全て、たとえ互いに敵意を抱いていても、イスラム教徒に対抗する時には、仲間として行動するのである。

くする者あらば、その者は同類なり。アッラーは不義の徒輩を導かず。

53. 汝は、心に病^{やまい}ある者が彼等のところへ走り行きて、「我等は災難に遭^あいはせぬかと恐る」と云うを見ん。ことによると、アッラーは御自ら勝利か、(注30)さもなれば何か結果をもたらさん。その時彼等は、胸中に秘めたることについて後悔すべし。

54. 而^{しか}して信ずる者は云わん、「これ等の者は、お前たちに協力するとアッラーにかけて厳かに誓^{ちか}いたる徒輩^{やから}なるか?」と。彼等の所業は無に帰し、失敗者となれり。

55. 汝等信徒たちよ、お前たちのうちもしその教えに背く者あらば、アッラーはその者の代りに、アッラーを愛し、アッラーに愛される民を興^{おこ}すべし。(注31)彼等は、信徒には謙虚で心優しく、不信心者には意志堅固なり。彼等はアッラーの道のために奮闘努力し、非難者の非難を恐れざるべし。こはアッラーの恩恵なり。アッラーはそれを御心^{みこころ}にかなう者に与え給う。アッラーは恵み深く、すべてを知り給う。

56. お前たちの友とは、アッラーとその使徒、並びに礼拝を遵守し、定め^{きまり}の喜捨を納め、ただ神のみを崇拝する信徒たちなり。

57. アッラーとその使徒、並びに信徒を友とする者、こういうアッラーの一党こそ勝利を保証されん。

مِنْهُمْ إِنْ أَلَّهِ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ٥٧

فَرَى الَّذِينَ فِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ يُسَارِعُونَ فِيهِمْ يَقُولُونَ نَخْشَى أَنْ تُصِيبَنَا دَائِرَةٌ فَعَسَى اللَّهُ أَنْ يَأْتِيَ بِالْفَتْحِ أَوْ أَمْرٍ مِنْ عِنْدِهِ فَيُصْبِحُوا عَلَى مَا أَسَرُّوا فِي أَنْفُسِهِمْ نَادِمِينَ ٥٨

وَيَقُولُ الَّذِينَ آمَنُوا أَهَؤُلَاءِ الَّذِينَ اقْتُمُوا بِاللَّهِ هَدَىٰ آيَاتِهِمْ إِنَّهُمْ لَكُمْ حِطٌّ بِأَعْمَالِهِمْ فَاصْبِرُوا

لِلْخَيْرِينَ ٥٩

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا مَنْ يَرْتَدَّ مِنْكُمْ عَنْ دِينِهِ فَسَوْفَ يَأْتِيَ اللَّهُ بِقَوْمٍ يُحِبُّهُمْ وَيُحِبُّونَهُ أَذِلَّةٌ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ أَعِزَّةٌ عَلَى الْكَافِرِينَ يُجَاهِدُونَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَلَا يَخَافُونَ لَوْمَةَ لَائِمٍ ذَلِكَ فَضْلُ اللَّهِ يُؤْتِيهِ مَنْ يَشَاءُ وَاللَّهُ وَاسِعٌ عَلِيمٌ ٦٠

إِنَّمَا وَلِيُّكُمُ اللَّهُ وَرَسُولُهُ وَالَّذِينَ آمَنُوا الَّذِينَ يُعْمِلُونَ الصَّلَاةَ وَيُؤْتُونَ الزَّكَاةَ وَهُمْ رَاكِعُونَ ٦١

وَمَنْ يَتَوَلَّ اللَّهَ وَرَسُولَهُ وَالَّذِينَ آمَنُوا فَإِنَّ حِزْبَ

اللَّهُ هُمُ الْغَالِبُونَ ٦٢

注30 ここで述べられている‘勝利’とは、メッカの陥落のこと、又は一般的な勝利のどちらにも理解できる。勝利の後に来る‘出来事’とは、明らかに勝利以上の何かを指す。それはアラビア半島全体及びアラビア半島にある組織がイスラムに入信することを指す様に考えられる。

注31 ある宗教(信仰)の信者数が、何ら回復の見込みの立たないまま、著実に、持続的に減少する場合に、その宗教は、絶えたと考えねばならない。

第九項

58. 汝等信徒たちよ、お前たちより以前に經典を授けられながら、お前たちの宗教を嘲弄笑罵する徒輩や不信心者どもを友とするなかれ。(注 32) お前たち信徒ならば、アッラーを畏れよ。

59. お前たちが礼拝に人を喚ぶ時、彼等はそれを嘲弄笑罵す。そは彼等が思慮なき民なるが故なり。

60. 云え、「經典の民よ、お前たちが我等を非難するは、我等がアッラーを信じ、我等に降されたるものと、それ以前に降されたるものとを信ずるが故なるか？それとも、お前たちの大部分の者が神に対し奉り不従順なるが故なるか？」と。

61. 云え、「お前たちにこれより更に悪いアッラーの報奨を教えようか？彼等はアッラーに呪われ、その怒りを被り、猿や豚にされたる者、(注 33)並びに邪神を崇拜する徒輩なり。これ等の者どもは最悪な境遇にあり、正しい道よりはるか遠くへ迷い出た者どもなり」と。

62. 彼等はお前たちのところへ来れば、「我等は信ず」と云う。(注 34)されど彼等は無信仰を抱いて入りたれば、去るときも無信仰のままなり。アッラーは彼等が隠すものを熟知し給う。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَتَّخِذُوا الَّذِينَ اتَّخَذُوا دِينَكُمْ هُزُؤًا وَلَعِبًا مِّنَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ مِن قَبْلِكُمْ وَالْكَافِرَ أُولِيَاءَ وَاتَّقُوا اللَّهَ إِنَّ كُنتُم مَّوْمِنِينَ ﴿٥٨﴾

وَإِذَا نَادَيْتُم إِلَى الصَّلَاةِ اتَّخَذُوا هُزُؤًا وَلَعِبًا ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَا يَعْقِلُونَ ﴿٥٩﴾

قُلْ يَاهَلَّ الْكِتَابِ هَلْ سَمِعْتُمْ مِمَّا إِنَّا أَنبَأُ بِاللَّهِ وَمَا أُنزِلَ إِلَيْهَا وَمَا أُنزِلَ مِن قَبْلُ وَإِنَّا أَكْثَرُكُمْ فُسْقُونَ ﴿٦٠﴾

قُلْ هَلْ أُنَبِّئُكُمْ بِشَيْءٍ مِّنْ ذَلِكَ مُتَوَبِّعٌ عِنْدَ اللَّهِ مِنْ لَّدُنْهُ اللَّهُ وَعَصِيبٌ عَلَيْهِ وَجَعَلْ مِنْهُمْ الْفِرْدَوْسَ وَالْخَنَازِيرَ وَعِمَدُ الطَّاغُوتِ أُولَئِكَ شَرٌّ مَّكَانًا وَأَضَلُّ عَنْ سَوَاءِ السَّبِيلِ ﴿٦١﴾

وَإِذَا جَاءُوكُم قَالُوا آمَنَّا وَقَدْ دَخَلُوا بِالْكَفْرِ وَهُمْ قَدْ خَرَجُوا بِهِ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا كَانُوا يَكْتُمُونَ ﴿٦٢﴾

注 32 5:52 では、信仰を持たぬ者の、イスラム教徒に対する敵意にみちた好戦的な態度の故に、彼等と交友関係を、結ぶ事が禁じられている。ここでは、その戒律に関する理由が述べられているが、これは、イスラム教徒が彼らと友好的な取り引きをしたり、善を施したり親切な応対をする事を禁じるものではない。

注 33 ここでは‘猿’や‘豚’は比喩的な意味で使われている。特定の動物には、一定の特徴があり、その特徴は、それを有する特定の動物を明示しない限り、充分に説明できるものではない。猿は物真似を得意とし、豚は、不潔さ、恥知らずな行為、そしてその愚かさの特徴がある。‘邪神を拝む者’という表現では、‘猿’や‘豚’という言葉が、比喩的に用いられている。2章 66 節参照の事。

注 34 ユダヤ人は偽善的に、我は信ず、という語句をつぶやくだけで、単に信者のふりをし、実際には、その本当の意義を理解したり気づいたりしていないのである。次節も参照の事。

63. 汝は、彼等の多くが争つて罪惡と背逆^{はし}に奔り、禁ぜられたるものを食するを見ん。げに彼等の行為は邪惡なり。

وَرَى كَثِيرًا مِنْهُمْ يَسِيرُونَ فِي الْإِثْمِ وَالْعُدْوَانِ وَكُلُّهُمْ السَّعْتِ لَيْسَ مَا كَانُوا يَسْكُونُونَ ﴿٦٣﴾

64. 何故に聖職者たちや律法学者は、彼等が虚偽を口に、禁ぜられたるものを食するを禁ぜざるか？げに彼等のなせることは邪魔なり。

لَا يَنْهَاهُمُ الرِّبَا عَنْ أَجْبَارِ عَنْ قَوْلِهِمُ الْإِثْمُ وَكُلُّهُمْ السَّعْتِ لَيْسَ مَا كَانُوا يَصْنَعُونَ ﴿٦٤﴾

65. 「アッラーの手は縛られているなり」とユダヤ教徒は云う。彼等の手こそ縛られ、而してその云えることのために彼等こそ呪われるべし。然らず、アッラーの両手は大きく開かれてあるなり。(注35)アッラーは御心のまゝに施し給う。主が汝に降し賜わりたるものは、彼等の多くに反抗と不信心とを増大せしむべし。而してわれらが彼等の間に投ぜし敵意と憎惡とは、復活の日まで続くべし。彼等が如何に戦に火をつけんとしても、(注36)その度にアッラーはそれを消し止めん。彼等は地上に騒乱を惹き起さんと努む。されどアッラーは騒乱者を好まず。

وَقَالَتِ الْيَهُودُ يَدُ اللَّهِ مَغْلُولَةٌ غُلَّتْ أَيْدِيهِمْ وَلَعْنُوا إِبْرَاهِيمَ مَا قَالَ ابْلْ يَدَهُ مَبْسُوطَةً يَنْفِقُ كَيْفَ يَسَاءُ وَلَيَزِيدَنَّ كَثِيرًا مِنْهُمْ مَا أُنْزِلَ إِلَيْكَ مِنْ رَبِّكَ طُغْيَانًا وَكُفْرًا وَالْقَيْنَا بَيْنَهُمُ الْعَدَاوَةَ وَالْبَغْضَاءَ إِلَى يَوْمِ الْقِيَامَةِ كُلَّمَا أَوْقَدُوا نَارًا لِلْحَرْبِ أَطْفَأَهَا اللَّهُ وَيَسْعَوْنَ فِي الْأَرْضِ فَسَادًا وَاللَّهُ لَا يُحِبُّ الْمُفْسِدِينَ ﴿٦٥﴾

66. されど經典の民が本当に信仰し、義しい者ならば、われらは彼等の罪障を消滅し、必ずや至福の樂園へ入らしめん。

وَلَوْ أَنَّ أَهْلَ الْكِتَابِ آمَنُوا وَاتَّقَوْا لَكُنَّا نَاعْتَمِدُهُمْ سَيِّئِهِمْ وَلَاَدْخُلْنَاهُمْ جَنَّاتِ النَّعِيمِ ﴿٦٦﴾

67. もし彼等が、律法と福音並びに主が降し賜わりたるものを遵守するならば、頭上からも、脚下からも必ず美味しいものを賜わらん。(注37) 彼等のうちにも節度をわきまえたる者あり。されどその多くの者のなせることは、邪惡なり。

وَلَوْ أَنَّهُمْ أَقَامُوا التَّوْرَةَ وَالْإِنْجِيلَ وَمَا أُنْزِلَ إِلَيْهِمْ مِنْ رَبِّهِمْ لَأَكَلُوا مِنْ فَوْقِهِمْ وَمِنْ تَحْتِ أَرْجُلِهِمْ مِنْهُمْ أُمَّةٌ مُقْتَصِدَةٌ وَكَثِيرٌ مِنْهُمْ سَاءٌ مَا يَعْمَلُونَ ﴿٦٧﴾

注35 手は祝福と仁愛を与える手段として、又、犯罪者を捕らえ、罰する為の力と権力の象徴として使われる。神の両手は大きくひろげられており、片手は信じる者に多くの物を与える為、又、もう一方の手は、ユダヤ人のこゝろ慢さを罰する為、さし出されているのである。

注36 ここでは、ユダヤ人達の、イスラムに対しての彼ら自身の憎しみに満ちた活動のみでなく、アラビアの多神教徒(偶像崇拜者)達がイスラム教徒に対し、戦いをしかける様、画策するユダヤ人の企てについて言及している。

注37 (1)彼らは世俗的な富の他に神の啓示や聖体拝受といった、天の祝福をも受けるのであろう。(2)彼らは天からの時を得た慈雨を受けるだけでなく、地上でも、たくさんの収穫を得る。(3)神は、大からも地からも、彼らの進歩の為の手段を与えられるのである。

第十項

68. 使徒よ、主より啓示されたるものを人々に伝達せよ。汝それをなさずば、汝は主の使命を果たさざることなり。アッラーは人々から汝を護るべし。げにアッラーは信ぜざる民を導かず。

69. 云え、「經典の民よ、(注 38) 律法と福音、並びに主がお前たちに降し賜えるものを遵守せぬ限り、お前たちは立つべき拠り所なし」と。されど主より汝に降し賜わりたるものは、彼等の多くに反抗と不信心とを増大せしむべし。されど不信心者どものことで心を痛めるなかれ。

70. げに信ずる人々、ユダヤ教徒、サービ教徒、(注 39) 並びにキリスト教徒とを問わず、誰であれアッラーと最後の日を信じ、善行をなす者には、恐怖も憂えもなかるべし。

71. げにわれらは、かつてイスラエルの子孫と契約を結び、彼等のところへ幾多の使徒を(注 40) 遣わせり。しかるに使徒が彼等の欲せざるものをもたらす度に、彼等は或いは之を嘯つき呼ばわりし、或いは之を殺したり。

72. 彼等は罰せられざるものと思いたれば、盲となり聾となれり。されどアッラーは彼等を容赦し給えり。彼等の多くは再び盲となり聾となれり。アッラーは彼等の所業を照覧し給う。

يَا أَيُّهَا الرُّسُلُ بَلِّغْ مَا أُنْزِلَ إِلَيْكَ مِنْ رَبِّكَ وَإِنْ لَمْ تَفْعَلْ فَمَا بَلَغْتَ رِسَالَتَهُ وَاللَّهُ يَعْصِمُكَ مِنَ النَّاسِ إِنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْكَافِرِينَ ٦٨

قُلْ يَا أَهْلَ الْكِتَابِ لَسْتُمْ عَلَى شَيْءٍ حَتَّى تُقِيمُوا التَّوْرَةَ وَالْإِنْجِيلَ وَمَا أُنْزِلَ إِلَيْكُمْ مِنْ رَبِّكُمْ وَلَيْزِيدَنَّ كَثِيرًا مِنْهُمْ مَا أُنْزِلَ إِلَيْكَ مِنْ رَبِّكَ طُغْيَانًا وَكُفْرًا فَلَا تَأْسَ عَلَى الْقَوْمِ الْكَافِرِينَ ٦٩

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَالَّذِينَ هَادُوا وَالصَّابِقِينَ مَنْ آمَنَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ وَعَمِلُوا صَالِحًا فَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ٧٠

لَقَدْ أَخَذْنَا مِيثَاقَ بَنِي إِسْرَءِيلَ وَارْسَلْنَا إِلَيْهِمْ رَسُولًا قُلْنَا جَاءَهُمْ رَسُولٌ بِمَا لَا تَهْوَى أَنْفُسُهُمْ فَرِيقًا كَذَّبُوا وَفَرِيقًا يَقْتُلُونَ ٧١

وَحَسِبُوا إِلَّا لَكُنْ وَفَنَنَّا فَعَمُوا وَصَبَّوْا ثُمَّ تَابَ اللَّهُ عَلَيْهِمْ ثُمَّ عَمُوا وَصَبَّوْا كَثِيرًا مِنْهُمْ وَاللَّهُ بِصِيرٍ بِمَا يُعْمَلُونَ ٧٢

注 38 2:114で、ユダヤ人とキリスト教徒は互いに、お互いに関して何ら独立していないと言っている事について非難されているが、この節ではクルアーン自身が經典を持つ人々について、全く同一の表現をしている。しかしこの同一表現には、明らかな相異がある。何故なら2:114に述べられた内容は言質を与えられていないが、当節での表現は、汝がトラーを遵守しなければという節によって言質を与えられているからである。

注 39 2:63を参照の事。

注 40 この章と5:13を比較してみると、5:13で「指導者達(リーダーズ)」とされているのは、この章の使徒にあたると考えられる。

73. 「アッラーはマリアの子、救世主なり」と云う者ども、彼等はまさしく不信心者なり。救世主自身云えり、「イスラエルの子孫よ、我が主でありお前たちの主なるアッラーを崇め奉れ」と。(注41)何人にせよアッラーに他神を配する者あらば、アッラーはその者に樂園に入るを許さず。その者の行き先は業火なるべし。不義な徒輩には如何なる救助者もなかるべし。

74. 「アッラーとは三位の一つなり」と云う者ども、(注42)彼等はまさしく不信心者なり。唯一の神の外に神なし。もし彼等がその言葉止めずば、彼等のうち信ぜざる者は厳しい罰を必ず受けん。

75. 彼等はアッラーに顔を向け、その容赦をなげに請わざるか、アッラーは寛大にして慈悲深くましますのに？(注43)

76. マリアの子救世主は一人の使徒に過ぎず。彼以前にも幾多の使徒ありて逝けり。彼の母は誠実なる女なりき。母子とも常に食事を攝れり。(注44)われらは彼等のためにさまざまなる神兆を明示するも、見よ彼等は背き去るなり。

77. 云え、「お前たちはアッラーの外に、お前たちに毫も役立たざるものを拝む気か？」と。すべてを聴き、すべてを知り給う御方、それはアッラーなり。(注45)

لَقَدْ كَفَرَ الَّذِينَ قَالُوا إِنَّ اللَّهَ هُوَ الْمَسِيحُ ابْنُ مَرْيَمَ
وَقَالَ الْمَسِيحُ يَبْنَىٰ إِسْرَءِيلَ اعْبُدُوا اللَّهَ رَبِّي
وَرَبَّكُمْ إِنَّهُ مَنْ يُشْرِكْ بِاللَّهِ فَقَدْ حَرَّمَ اللَّهُ عَلَيْهِ
الْجَنَّةَ وَمَأْوَاهُ النَّارُ وَمَا لِلظَّالِمِينَ مِنْ أَنْصَارٍ ٥٣

لَقَدْ كَفَرَ الَّذِينَ قَالُوا إِنَّ اللَّهَ ثَلَاثُ ثُلَاثٍ وَمِمَّا يَنْفَرُ
إِلَهُ إِلَّا إِلَهُ وَاحِدٌ وَإِنْ لَمْ يَبْنَهُوا عَمَّا يَقُولُونَ
لَيَسَنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ٥٤

أَفَلَا يَتُوبُونَ إِلَى اللَّهِ وَيَسْتَغْفِرُونَ لَهُ وَاللَّهُ غَفُورٌ
رَحِيمٌ ٥٥

مَا الْمَسِيحُ ابْنُ مَرْيَمَ إِلَّا رَسُولٌ قَدْ خَلَتْ مِنْ
قَبْلِهِ الرُّسُلُ وَأُمُّهُ صِدِّيقَةٌ كَانَا يَأْكُلَنِ الطَّعَامَ
انْظُرْ كَيْفَ بَيَّنَّ لَهُمُ الْآيَاتِ ثُمَّ أَنْظَرُوا أَنْ يُوَفَّقُوا ٥٦

قُلْ اتَّبِعُونِ مَنْ دُونِ اللَّهِ مَا لَا يَمْلِكُ لَكُمْ ضَرًّا
وَلَا نَفْعًا وَاللَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ٥٧

注41 イエスが、神のみを礼拝せよと教えたという事は、現在ではゆがめられた形となつてはいても、福音書からは明らかである(マタイ4:10; ルカ4:8)。

注42 この節では三位一体の教理、即ち聖父と聖子と聖霊が全ての面で共存し同等の存在であり、三つが合わさって一つの神を形成するが各々独立しているという、あの神秘的で難解な教義について語られている。この三位一体の教義に、はっきりとした形を与えたのは、ニケア公会議と特にアテネ人信条であった。

注43 人間の救済の爲には、何ら身代わりとなる犠牲は必要ではない。

注44 この節では、色々言われているイエスの神性について数々の論議が進められている。即ち(1)イエスはあらゆる面に於いて、他の神の使い達に劣っている。(2)彼は女性から生まれた、(3)他の人間同様、彼は飢えと渇きの自然の掟に従わざるを得ず、それに続いて起こる現象を呈するのを免かれえなかった。

78. 云え、「經典の民よ、不正にお前たちの教えの矩を越えるなかれ。また、以前に道を踏み迷いて多くの人々を迷わせ、自らも正道を踏みはずせる者どもの悪癖に従うなかれ」と。

第十一項

79. イスラエルの子孫のうちで信ぜざる徒輩は、ダビデやマリアの子イエスの舌にて呪われたり。そは彼等が従わず、常に掟を破れるが故なり。

80. 彼等は犯せし不正を互に抑止しざりき。彼等のなせることは大悪なり。(注46)

81. 汝は、彼等の多くの者が不信心者を友とするを見ん。彼等が己れのために先に送るものは災いなり。アッラーは彼等に立腹す。彼等は永劫の罪の中にとどまらん。

82. 彼等もしアッラーを信じ、預言者とその啓示されたるものを信じなば、友としてかかる者どもを選びはせざりき。されど彼等の多くは罪人なり。

83. 汝は、人々の中で最も激しく信徒を敵視する者が、ユダヤ教徒と多神教徒なるを知るべし。また汝は、「我等はキリスト教徒なり」と云う者が、信徒と友情最も親近なるを知るべし。そは彼等の中には多くの学者や修道士がいて、傲慢な心を持たざるが故なり。

84. 彼等はこの使徒に啓示されたるものを聞くと、真理を認め、その目に涙を満たす。(注

قُلْ يَا أَهْلَ الْكِتَابِ لَا تَغْلُوا فِي دِينِكُمْ غَيْرَ الْحَقِّ وَلَا تَتَّبِعُوا أَهْوَاءَ قَوْمٍ قَدْ ضَلُّوا مِنْ قَبْلُ وَأَضَلُّوا كَثِيرًا وَضَلُّوا عَنْ سَوَاءِ السَّبِيلِ ⑤

لِحَنِ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ بَنِي إِسْرَائِيلَ عَلَى لِسَانِ دَاوُدَ وَعِيسَى ابْنِ مَرْيَمَ ذَلِكَ بِمَا عَصَوْا وَكَانُوا يَعْتَدُونَ ⑥

كَانُوا لَا يَتَنَاهَوْنَ عَنْ مُنْكَرٍ فَعَلُوهُ لَبِئْسَ مَا كَانُوا يَفْعَلُونَ ⑦

تَرَى كَثِيرًا مِنْهُمْ يَتَوَلَّوْنَ الَّذِينَ كَفَرُوا لَبِئْسَ مَا قَدَّمَتْ لَهُمْ أَنْفُسُهُمْ أَنْ سَخِطَ اللَّهُ عَلَيْهِمْ وَفِي الْعَذَابِ هُمْ خُلِدُونَ ⑧

وَلَوْ كَانُوا يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ وَلَمْ آتِزِلْ إِلَيْهِ مَا اتَّخَذُوا لَهُمْ أَوْلِيَاءَ وَلَكِنْ كَثِيرًا مِنْهُمْ فَسِقُونَ ⑨

لَتَجِدَنَّ أَشَدَّ النَّاسِ عَدَاوَةً لِلَّذِينَ آمَنُوا الْيَهُودَ وَالَّذِينَ أَشْرَكُوا وَلَتَجِدَنَّ أَقْرَبَهُمْ قَوْمَدَةً لِلَّذِينَ آمَنُوا الَّذِينَ قَالُوا إِنَّا نَصْرُهُ ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ قَتَلُوا رُسُلَهُمْ وَأَنَّهُمْ لَا يَتَذَكَّرُونَ ⑩

وَإِذَا سَمِعُوا مَا أُنْزِلَ إِلَى الرَّسُولِ تَرَى أَعْيُنُهُمْ

注45 イエスは誰に対しても何の善悪をなす力を持たなかった。彼は祈りを聞く事もできず、人間の必要を詳しく知る事ができぬ為、彼らの心を満たしてやる事ができなかった。これらが可能であるという特権こそ、神性を持つ全ての存在の特権なのである。

注46 神の怒りを最も強く蒙ったユダヤ人の罪の一つは、ユダヤ人の間で、ひんばんに行なわれていた悪習を互いに禁じようとしなかった事である。

47) 彼等は云う、「主よ、我等は信じ奉る。されば我等を証人のうちに書き添え給え。

تَقِضْ مِنَ الدِّمَعِ مِمَّا عَرَفُوا مِنَ الْحَقِّ يَقُولُونَ
رَبَّنَا آمَنَّا فَاكْتُبْنَا مَعَ الشَّاهِدِينَ ﴿٤٧﴾

85. どうして我等はアッラーと、我等に^{しめ}賜わりたる真理を信ぜずにいられようか？而してまた主が我等を^{しめ}義しい人々の中に入れ給わんことを希求せずにはいられようか？」と。

وَمَا لَنَا لَا نُؤْمِنُ بِاللَّهِ وَمَا جَاءَنَا مِنَ الْحَقِّ وَ
نَطْعُ أَنْ يَدْخِلَنَا رَبَّنَا مَعَ الْقَوْمِ الصَّالِحِينَ ﴿٤٨﴾

86. さればアッラーは彼等の祈りに応え、河川流れる樂園をもって賞し給えり。彼等は永久にそのなかに住まん。そは善事を行う者への報奨なり。

فَاثَابَهُمُ اللَّهُ بِمَا قَالُوا جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ
خَالِدِينَ فِيهَا وَذَلِكَ جَزَاءُ الْمُحْسِنِينَ ﴿٤٩﴾

87. されど信ぜざる者どもやわれらの^{しめ}神兆を拒否せる者ども、彼等はみな地獄の住人なり。

وَالَّذِينَ كَفَرُوا وَكَذَّبُوا بِآيَاتِنَا أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ الْجَهَنَّمَ ﴿٥٠﴾

第十二項

88. 汝等信徒たちよ、アッラーがお前たちに許せる佳い食物を禁制とするなかれ。また掟に違犯するなかれ。アッラーは違犯者を好まず。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَحْرِمُوا طَيِّبَاتِ مَا أَحَلَّ اللَّهُ لَكُمْ
وَلَا تَعْتَدُوا إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ الْمُعْتَدِينَ ﴿٥١﴾

89. アッラーがお前たちに許しを与えたる佳いものを食せよ。而してお前たちが信ずるアッラーを畏れよ。

وَكُلُوا مِمَّا رَزَقَكُمْ اللَّهُ حَلَالًا طَيِّبًا وَانْقُوا اللَّهَ الَّذِي
أَنْتُمْ بِهِ مُؤْمِنُونَ ﴿٥٢﴾

90. アッラーはお前たちの誓約における空しい言葉に対して、(注48)お前たちを咎めざるべし。されど本式に誓約しながらそれを破らば、お前たちを咎めるべし。かかる場合の罪の^{あがな}贖いは、お前たちが家族を養う普段の食物を十人の貧者に供するか、彼等に衣服を支給するか、或いは一人の奴隷を解放することなり。されど、その資力なき場合

لَا يُؤْخَذُ لَكُمْ بِالْعُيُوفِ إِيَّايَكُمْ وَلَكِنْ يُوْخَذُ لَكُمْ
بِمَا عَقَدْتُمُ الْإِيمَانَ فُكِّفَارَتَهُ إِطْعَامُ عَشْرَةِ مَسْكِينٍ
مِنْ أَوْسَطِ مَا تُطْعَمُونَ أَهْلِيكُمْ أَوْ كَسْوَتُهُمْ أَوْ تَحْرِيرُ
رَقَبَةٍ فَمَنْ لَمْ يَجِدْ فَصِيَامُ ثَلَاثَةِ أَيَّامٍ ذَلِكَ كَفَّارَةُ

注47 この節は特にナジャシにもあてはまるといえる。聖なる預言者の従兄でありアビシニアのイスラム教徒の亡命者達の代表であったジャファルが19章(マリム)の最初の節をナジャシに読みかけた時、彼は人の目に明らかな程、感動をうけ、彼はおほを伝って涙がこぼれ落ち、情感にみちあふれた声で、それこそ全く彼自身がイエスについて信じていたとおりの事であり、それ以上には小枝一本分さえも考えなかったと述べたのである。

注48 イスラムの律法に反する誓いは、ただの無益な言葉にすぎない。

は、三日間断食せよ。こは誓約を破りしとき^{あがな}の贖いなり。己が誓約を守れ。かくの如くアッラーがお前たちにその神兆^{しるし}を説き明すは、お前たちに感謝の念を抱かしめんがためなり。

91. 汝等信徒たちよ、酒、賭博、偶像、^{うらないや}占^{サタン} 欠は忌むべき悪魔の仕業なり。お前たち栄えんとするならこれ等に近寄るなかれ。

92. 悪魔^{サタン}の望みはただ、酒と賭博によって(注49) お前たちの間に敵意と憎悪とを煽り立て、アッラーを忘れさせ、礼拝を捧げるを妨げるところにあり。それでもお前たち、これ等を断ち得ざるか?

93. アッラーに従い、使徒に従い、^し而して用心せよ。たといお前たちが背き去ろうとも、わが使徒の責務はただ明白な神託を伝えるにあることを知れ。

94. 信じて善事を行う者は、神を畏れ、信じて義^{なま}しいことを行い、その上にも神を畏れて信心を深め、またその上にも神を畏れて善事を行うかぎり、(注50) その食することについて罪なかるべし。アッラーは善事を行う者を愛し給う。

إِيْمَانِكُمْ إِذَا حَلَفْتُمْ وَاحْفَظُوا إِيْمَانَكُمْ كَذَلِكَ يُبَيِّنُ اللَّهُ لَكُمْ آيَاتِهِ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿٩١﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِنَّمَا الْخَمْرُ وَالْخَيْرُ وَالْبَيْسُ وَالْإِنْتَابُ وَالْأَزْلَامُ رَجَسٌ مِنْ عَمَلِ الشَّيْطَانِ فَاجْتَنِبُوهُ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿٩٢﴾

إِنَّمَا يُرِيدُ الشَّيْطَانُ أَنْ يُوقِعَ بَيْنَكُمْ الْعَدَاوَةَ وَالْبَغْضَاءَ فِي الْخَمْرِ وَالْبَيْسِ وَيَصُدَّكُمْ عَنْ ذِكْرِ اللَّهِ وَعَنِ الصَّلَاةِ فَهَلْ أَنْتُمْ مُنْتَهُونَ ﴿٩٣﴾

وَاطِيعُوا اللَّهَ وَاطِيعُوا الرَّسُولَ وَاحْذَرُوا فَإِنْ تَوَلَّيْتُمْ فَأَعْلَوْنَا أُنْكَا عَلَى رَسُولِنَا الْبَلْعُ الْبَيِّنُ ﴿٩٤﴾

لَيْسَ عَلَى الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ جُنَاحٌ فِيمَا طَعُمُوا إِذَا مَا اتَّقَوْا وَآمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ ثُمَّ اتَّقَوْا وَآمَنُوا ثُمَّ اتَّقَوْا وَأَحْسَنُوا وَاللَّهُ يُحِبُّ الْمُحْسِنِينَ ﴿٩٥﴾

12
ع
4

注 49 前節で述べた四つの事項は全て、何らかの意味で嫌忌であると記した後に、特にその内の二つである、酒と賭に限定して、何故嫌忌であるのかという理由を付記している。“敵意と憎しみ、そして、神を念じ、礼拝を守る妨げ”との言葉が意味する様に、嫌忌たるべき理由は、政治的、社会的、精神的、且つ社会宗教的見地に基づいているのである。

注 50 この節からは以下の二つの重要な教理がひきだされる。(1)この世の中のもので、人間の利益となり利用に供する為作られたものは、一般的に全て純粋で清浄であり、禁じられているものは例外にすぎない。(2)清浄で純粋な食物は、人の道徳的発展に良い影響を及ぼし、不潔で不純な食物はその反対の効果がある。そしてまたこの節では、精神的発達三段階が設定されている。第一段階では信者は神を畏怖し、信じ、そして善行を行う。第二段階では、神を畏怖し信ずるものの、この段階での信者の信仰はあまりにも強い為、善行を行う事がまるで自分達の信仰の一部となってくる。そして第三の段階では、信者は神を畏怖し、まるで実際に神の姿を目のあたりにしているかの如く、友たる人に善を行うのである。

第十三項

95. 汝等信徒たちよ、アッラーは誰が密かにアッラーを畏れ敬うかを知らんがために、お前たちの手や槍にて捕えし獲物によって、お前たちを試すべし。(注51) されば何人なんひとにせよ、この後掟に違反する者は、厳しい罰を受くべし。

96. 汝等信徒たちよ、巡礼中は獲物を殺すなかれ。誰であれ故意に獲物を殺せる者は、その償いとして、お前たちのうち公正なる二名の者の判定に基きき、その殺せるものと等しい価の四足獣を聖殿カアバに捧げ物として届けよ。または罪滅ばしとして貧者に給食を施すか、それに相当する日数を断食せよ、己れがなせる報いを味わうために。アッラーは過ぎたることは赦し給うが、再びそれを繰返さば、その違反を罰すべし。アッラーは偉大にして、応報の主なり。

97. 魚獲物を(注52) 食することは、お前たちや旅人の食料として許されている。されど巡礼中の陸上の狩猟は禁ぜらる。アッラーを畏れよ、いずれお前たちはアッラーの許へ召し寄せられん。

98. アッラーは万民の擁護と向上のために、神聖おかしで冒しがたい聖殿カアバを作り、また神聖月と供物とその犠牲にかける頸輪とを定めたり。これはお前たちに、アッラーが天地間の一切のことを知り、万に通曉し給うことを教えんがためなり。

99. アッラーは罰するに厳しくも、また寛大で慈悲深くましますことを知れ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لِيَبْلُوَكُمُ اللَّهُ شَيْئًا مِنَ الصَّيْدِ تَنَالُهُ أَيْدِيكُمْ وَرِمَاحُكُمْ لِيَعْلَمَ اللَّهُ مَنْ يَخَافُهُ بِالْغَيْبِ فَمَنْ اعْتَدَىٰ بَعْدَ ذَلِكَ فَلَهُ عَذَابٌ أَلِيمٌ ⑤

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَقْتُلُوا الصَّيْدَ وَأَنْتُمْ حُرُمٌ وَمَنْ قَتَلَهُ مِنْكُمْ مُتَعَمِّدًا فَجَزَاءٌ مِّثْلُ مَا قَتَلَ مِنَ النَّعَمِ يَحْكُمُ بِهِ ذَوَا عَدْلٍ مِنْكُمْ هَدْيًا بَالِغَ الْكَعْبَةِ أَوْ كَفَّارَةٌ طَعَامُ مَسْكِينٍ أَوْ عَدْلٌ ذَلِكَ صِيَامًا لِيَذُوقَ وَبَالَ أَمْرِ عَفَا اللَّهُ عَنْكَ لَكَفٌّ وَمَنْ عَادَ فَأَغْلِبْنَاهُ اللَّهُ مِنْهُ وَاللَّهُ عَزِيزٌ ذُو انْتِقَامٍ ⑥

أَحِلَّ لَكُمْ صَيْدُ الْبَحْرِ وَطَعَامُهُ مَتَاعًا لَكُمْ وَلِلنَّسَاءِ وَحُزْمٌ عَلَيْكُمْ صَيْدُ الْبَرِّ مَا دُمْتُمْ حُرُمًا وَاتَّقُوا اللَّهَ الَّذِي إِلَيْهِ تُحْشَرُونَ ⑦

جَعَلَ اللَّهُ الْكَعْبَةَ الْبَيْتَ الْحَرَامَ قِيَمًا لِلنَّاسِ وَالشَّهْرَ الْحَرَامَ وَالْهَدْيَ وَالْقَلَائِدَ ذَلِكَ لِيَعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ وَأَنَّ اللَّهَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ⑧

اعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ شَدِيدُ الْعِقَابِ وَأَنَّ اللَّهَ عَفُوفٌ رَحِيمٌ ⑨

注 51 狩猟は通常は、人が一人であり、神の戒律を破るのを見る者が誰もいない密林地帯で行われる為、この節では、神への畏怖を示す為、その例に似つかわしい狩猟について述べられている。又この節は、次節で述べられる戒律への導入ともなっている。

注 52 ここでの獲物は海だけでなく川(小川)の流れ、湖、池等にいるものを含む。7:139を参照の事。

100. 使徒の務めはただ神託を伝えることにあり。アッラーはお前たちが外に表わすものも、内に隠すものも知り給う。

مَا عَلَى الرَّسُولِ إِلَّا الْبَلَاغُ وَاللَّهُ يَعْلَمُ مَا تُبْدُونَ
وَمَا تَكْتُمُونَ ﴿١٠٠﴾

101. 云え、「たとい悪の多さが汝を驚かそうとも、悪と善とは同じに非ず」と。思慮ある人々よ、アッラーに対し奉り己が務めを忘れまいぞ。さすればお前たち成功すべし。

قُلْ لَا يَسْتَوِي الْخَبِيثُ وَالطَّيِّبُ وَلَوْ أَعْجَبَكَ كَثْرَةُ
الْخَبِيثِ فَاتَّقُوا اللَّهَ يَا أُولِي الْأَلْبَابِ لَعَلَّكُمْ
تُفْلِحُونَ ﴿١٠١﴾

第十四章

102. 汝等信徒たちよ、もし知らされなば却って苦悩するが如きことについて訊ねるなかれ。(注53)されどクルアーンが降されつつあるとき、それを問わば、そはお前たちに知らさるべし。アッラーはこの事を蔽し給う。なんとすれば、アッラーは寛大にして我慢強くまします故に。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَسْأَلُوا عَن أَسْيَافٍ إِن تَبَدَّلَ لَكُمْ
سُؤْلُهُمْ وَإِن تَسْأَلُوا عَنْهَا حِينَ يُنَزَّلُ الْقُرْآنُ
تَبَدَّلَ لَكُمْ عَمَّا اللَّهُ عَنْهَا وَاللَّهُ غَفُورٌ حَلِيمٌ ﴿١٠٢﴾

103. お前たち以前の民もこの事に関して訊ねたり。されどそれが因で、彼等は不信心者となれり。(注54)

قَدْ سَأَلَهَا قَوْمٌ مِّن قَبْلِكُمْ ثُمَّ أَصْبَحُوا بِهَا
كُفْرِينَ ﴿١٠٣﴾

104. アッラーは、バヒーラ、サーイバ、ワシーラ並びにハーミなどを定めたることなし。されど不信心者どもが、アッラーについて偽りを捏造す。彼等の多くは理解し得ない者どもなり。

مَا جَعَلَ اللَّهُ مِنْ بَحِيرَةٍ وَلَا سَائِبَةٍ وَلَا وَصِيلَةٍ
وَلَا حَامٍ وَكَفَرَ الَّذِينَ كَفَرُوا يَقْتُرُونَ عَلَى اللَّهِ
الْكَذِبَ وَآكَرَهُمْ لَا يَعْقِلُونَ ﴿١٠٤﴾

105. 彼等に向って、「アッラーが啓示せるもの並びに使徒の許へ来れ」と云うと、彼等は云う、「我等は父祖が見いだせる信仰で充分なり」と。なんとたことぞ！彼等の父祖は

وَإِذَا قِيلَ لَهُمْ تَعَالَوْا إِلَى مَا أَنزَلَ اللَّهُ وَإِلَى
الرَّسُولِ قَالُوا حَسْبُنَا مَا وَجَدْنَا عَلَيْهِ آبَاءَنَا أَوَلَوْ

注53 イスラムのシャリヤ（戒律）の基礎は三つから成っている。(1)クルアーンで具現化された戒律(2)なる預言者の実践或いはスンナ、そして(3)聖なる預言者の本当に言った言葉の中の命令や教訓。

これらのイスラムの戒律の三つの源が、人間の全ての根本的問題を処理するが、よりささいな細部に渡る問題は、神より与えられた自分自身の知力と能力の助けをかりて上記の三つの輝く導きの光明の中で解決すべく、本人の自由意志に委ねられているのである。この節で言及されているのは、ささいな詳細に関する事柄に他ならない。

注54 取るに足らぬ事を必要もないのに根掘り葉掘り問いたり、それらに不用な法的制裁を求めるのは、大体に於いて質問者自身の損害となる。そうする事は、本人の自由意志を限定し、判断に足かせをはめ、不必要で厄介な法的処置に束縛してしまう。イスラエル人達はモーゼに、とるに足らぬ不必要な質問をした為、その結果、不用に枝葉末節に厳しくしてしまい、基本である神の十戒すらも守れなくなり、それを破る結果を招いてしまった(2:109)。

知識を持たず、また正しく導かれざりしに非ずや？

106. 汝等信徒たちよ、己れ自身に注意せよ。
迷妄^{かいしやう}の徒は、お前たちが正しく導かれなば、
お前たちを害する能わす。(注55)お前たち
はいずれ皆アッラーに帰着す。その時アッ
ラーは、お前たちにそのなせることを告げ
知らせん。

107. 汝等信徒たちよ、お前たちの誰かが臨終
に際し遺言状を作るときは、お前たちの中
から公正なる二人を証人に立てよ。また旅
先で不幸にも死にみまわれたる場合は、お
前たち以外の他の部族から二名の証人を立
てよ。礼拝の後彼等兩名を引き止め、証言
することを頼め。もし疑いあらば、アッラー
にかけてかく誓わしめよ、「我等はたとひ近
親のためなりとも、如何なる価にても証言
を売らず。またアッラーの証言を隠蔽^{つみびと}せず。
万一そのような場合は、我等は罪人たるべ
し」と。

108. されど、二人の証人が偽証の罪を犯せる
こと判明せる場合は、先の二人の証言に反
対せる者の中から、最も真実の証言をする
にふさわしい者を二名選び、之に代えよ。
(注56)而して後者の両証人に、かく誓わ
せしめよ、「我等の証言は前の二人の証言よ
り確かなることを誓う。また我等は如何なる
不正もなしたることなし。これについてい
つわりあらば、我等は確かに不義者なり」
と。

注55 真実を他の人々に説く事だけが我々に課せられた義務である。もし彼らが真実を受け入れればそれでよいし、我々の最善の努力にもかかわらず、彼らが、よこしまな方向から離れようとしないうちに、彼らが真実を拒絶しても、何ら我々に害は及ぼさない。いかなる場合にも、他の人々を我々の考え方に向かせようとして、その教義に妥協を与えてはならない。それは他人の魂を救う為に、自分達自身の魂を亡ぼしてしまう事となるからである。

注56 アウラヤーンという語は最初の二人の証人の事を表し、これら二人の証人は、故人の死に立ち会い、彼らの立ち会っている時に遺言が作成され、財産を相続人に渡してくれるようにと委託されたのであるから、真実の証言をするのによりよい立場にあるといえる。‘他’の二人の証人達は、故人の相続人の内から選ばれるべきである。

كَانَ آبَاؤُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ شَيْئًا وَلَا يَهْتَدُونَ ﴿٥٥﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا عَلَيْكُمْ أَنْفُسَكُمْ لَا تَضُرُّكُمْ مَنْ
صَلَّ إِذَا اهْتَدَيْتُمْ إِلَى اللَّهِ مَرْجِعُكُمْ جَمِيعًا
فِي نِعْمَتِكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٥٦﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا شَهَادَةُ بَيْنَكُمْ إِذَا حَضَرَ أَحَدُكُمْ
الْمَوْتُ حِينَ الْوَصِيَّةِ اثْنَيْنِ ذَوَا عَدْلٍ مِنْكُمْ أَوْ
آخَرَيْنِ مِنْ غَيْرِكُمْ إِنْ أَنْتُمْ صَرَبْتُمْ فِي الْأَرْضِ
فَأَصَابَتْكُمْ مُصِيبَةُ الْمَوْتِ تَحْسَبُوهُمَا مِنْ بَعْدِ
الضَّلَوتِ يَقْسِمِنَ بِاللَّهِ إِنْ اذْتَبَعْتُمْ لَا نَشْتَرِي بِهِ
ثَمَنًا وَلَوْ كَانَ ذَا قُرْبَىٰ وَلَا تَكُنْتُمْ شُهَدَاءَ اللَّهِ
إِنَّمَا إِذَا لَيْسَ الْأُثْمَيْنِ ﴿٥٧﴾

فَإِنْ عُسِرَ عَلَىٰ أَثْمَهُمَا اسْتَحْقَقَ اثْنًا فَأَخْرَجْنِ يَقُومِنِ
مَقَامَهُمَا مِنَ الَّذِينَ اسْتَحَقَّ عَلَيْهِمُ الْأَوَّلِينَ فَيَقْسِمِنِ
بِاللَّهِ لَشَهَادَتُنَا أَحَقُّ مِنْ شَهَادَتَيْهِمَا وَمَا اعْتَدَيْنَا
إِنَّمَا إِذَا لَيْسَ الظَّالِمِينَ ﴿٥٨﴾

109. 事実に³⁵則して証言させるには、かくするのが最良なり。さもなくば彼等の立証が後に別の証言によって斥けられる恐れあり。アッラーを畏れ、耳を傾けよ。アッラーは不従順な徒輩を導かず。

第十五項

110. アッラーが使徒たちを召喚する日、アッラーは彼等に云う、「お前たち如何なる返答を得たか?」と。使徒たちは答えて、(注 57) 云わん、「我等は何もわからず。隠れて見えざるものを知る者は、ただ汝独りなり」と。

111. アッラーがかく云わんその日を思え。「マリアの子イエスよ、汝と汝の母に垂れたるわしの恩寵を思い起せ。わしは聖霊によって汝を強めたれば、汝は揺籃の中でも、また成人せし後も人々に語りたり。(注 58) わしは汝に、經典と知恵と律法と福音とを教えたり。汝はまたわしの許しによりて泥で鳥の形を作り、之に息を吹き込むと、そはわしの許しによりて天かける生き物となれり。また汝はわしの許しによりて (注 59) 盲人と癩者を癒し、死者を甦らしめたり。さらにわしは、汝が明らかな神兆を携えてイスラエルの子孫を訪ねし時、汝を殺害せんとせし彼等を抑止せり。(注 60) 彼等のうちの不信心者どもは云えり、『こは明らかに妖術なり』」

ذَلِكَ أَدْنَىٰ أَنْ يَأْتُوا بِالشَّهَادَةِ عَلَىٰ وَجْهِهَا أَوْ يَحْكُمُوا
أَنْ تَرَدَّ أَيْمَانُ بَعْدَ آيَانِهِمْ وَاتَّقُوا اللَّهَ وَاسْمَعُوا
وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْفَاسِقِينَ ③٤

يَوْمَ يَجْمَعُ اللَّهُ الرُّسُلَ فَيَقُولُ مَاذَا أُجِبْتُمْ قَالُوا
لَا عِلْمَ لَنَا إِنَّكَ أَنْتَ عَلَّامُ الْغُيُوبِ ③٥

إِذْ قَالَ اللَّهُ يُعِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ اذْكُرْ نِعْمَتِي عَلَيْكَ
وَاعْلَىٰ وَالذِّكْرُ إِذْ أَيْدَتْكَ يَرْوَجُ الْفُلْدُ تَشْكُرُ
النَّاسَ فِي الْبَهْدِ وَكَلَّمَكَ الْكِتَابُ وَ
الْحِكْمَةُ وَالْتَوْرَةُ وَالْإِنْجِيلُ وَإِذْ تَخْلُقُ مِنَ الطِّينِ
كَهَيْئَةِ الطَّيْرِ بِإِذْنِي فَتَنفُخُ فِيهَا فَتَكُونُ طَيْرًا بِإِذْنِي
وَتُبْرِئُ الْأَكْمَهَ وَالْأَبْرَصَ بِإِذْنِي وَإِذْ تُخْرِجُ الْمَوْتَى
بِإِذْنِي وَإِذْ كَفَفْتُ بَنِي إِسْرَءِيلَ عَنْكَ إِذْ جِئْتَهُمْ
بِالْبَيِّنَاتِ فَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْهُمْ إِنْ هَذَا إِلَّا
سِحْرٌ مُبِينٌ ③⑥

注 57 預言者の答えによると、神の質問の目的は、彼らから情報をはき出したり、神自身御存知の知識を補足したりすることではなく、4:42 からも明快なように、彼らが信仰をもたぬ者に対し証言を与えることである事を意味している。

注 58 ゆりかごの中から語りかけるとは、幼児期に、賢明で信心深い言葉を語る事を意味している。イエスのこういった語りかけは、本人自身が賢明で信心深く、且つ、イエスを賢く信心厚い子供に育てた母に多大に食うところである。成人になってから善き言葉を語ることは、マリアが信心深い婦人であった事を示すだけではない。イエス自身も公正な人物であった為、彼自身成長し、最早母親の直接の影響を受けない成人になっても、母の教育の結果である信心深く賢明な言葉を語りかけたのである。3 章 46 節も参照の事。

注 59 3:50 を参照の事

注 60 これは、ユダヤ人達がイエスを十字架の上で殺そうとした企てをさす。しかし神はイエスを十字架から降ろされ助けられた。

112. その時わしは、イエスの弟子たちを激励せり、「わしと使徒とを信ぜよ」と。彼等は云えり、「我等は信ず。されば汝、我等の帰依せることの証人たれ」と。

وَلَاذُ أُوحِثُ إِلَى الْخَوَارِجِ أَنْ أُتَوُوا فِي وَبَرَسُو
فَالْوَأَمْنَا وَاشْهَدُ بِأَنَّا مُسْلِمُونَ ⑩

113. その弟子たちがかく云える時のことを思え。「マリアの子イエスよ、主は天から(注61)御馳走を並べた食卓を(注62)降し賜えることが可能なりや？」イエスは答えり、「お前たち信徒ならば、アッラーを畏れ敬え」と。

إِذْ قَالَ الْخَوَارِجُونَ لِيَعِيسَى ابْنِ مَرْيَمَ هَلْ يَسْتَطِيعُ
رُبُّكَ أَنْ يَنْزِلَ عَلَيْنَا مَائِدَةً مِنَ السَّمَاءِ قَالَ اتَّقُوا
اللَّهَ إِنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ⑪

114. 彼等は云えり、「我等はその食卓にて食い、我等の心を安じ、汝が我等に語りたることの真実なるを知り、その証人たらんことを願う」と。

فَالْوَأَمْنَا أَنْ نَأْكُلَ مِنْهَا وَنَطْمِئِنَّ قُلُوبُنَا وَنَعْلَمَ
لَهُ أَنْ قَدْ صَدَقْتَنَا وَنَكُونُ عَلَيْهَا مِنَ الشَّاهِدِينَ ⑫

115. マリアの子イエスは云えり、「アッラーよ、我等の主よ、天上から我等に御馳走を並べた食卓を降し、我等のために、我等の最初の者並びに最後の者の饗宴たらしめ、(注63)且つ汝よりの神兆(しんしう)たらしめよ。我等に食物を与え給え。汝こそは最上の養い主なり」と。

قَالَ عِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ اللَّهُمَّ رَبَّنَا أَنْزِلْ عَلَيْنَا مَائِدَةً
مِنَ السَّمَاءِ تَكُونُ لَنَا عِيدًا لِأَوَّلِنَا وَآخِرِنَا وَآيَةً
مِنْكَ وَارْزُقْنَا وَأَنْتَ خَيْرُ الرَّازِقِينَ ⑬

116. アッラーは云えり、「げにわしはそれをお前(なんび)たちに降さん。なれど、お前(なんび)たちのうち何人(なんび)にせよ後になって不信心者となる者あらば、わしはその者に必ず、他の何人(なんび)にも加えざる罰を(注64)以て、之を懲らしめん」と。

قَالَ اللَّهُ إِنِّي مَرْسِلُهَا عَلَيْكُمْ فَمَنْ يَكْفُرْ بَعْدُ مِنْكُمْ
فَإِنِّي أُعَذِّبُهُ عَذَابًا لَا أُعَذِّبُهُ أَحَدًا مِنَ الْعَالَمِينَ ⑭

注61 ‘天からの’という言葉は、多くの手間なく確実に永久的にの意味を表している。

注62 イエスの弟子が頼んだのは、一食の糧ではなく、何の努力や困難もなく得られる永久的な生計の意味であった。

注63 イード(饗宴)という言葉が文字通り‘めぐりくる日’を表すように、キリスト教徒には、繁栄且つ発展する二つの期間(または時期)が、約束されていた。キリスト教徒は、コンスタンチヌス大帝の最初期の時代には、豊富な、この世の財産が、又それから後では18世紀及び19世紀に物質的繁栄と、政治的権勢が、他の人々の時代の歴史には匹敵するものがない程、約束されていたのである。

注64 ここで言及されている罰とは19:91で述べられている罰と全く同一のものを指す、今までの二回の大戦がこの預言の成就であり西側諸国の国民によってどんな恐ろしい罰が用意されているかは、神のみぞ知る所なのである。

第十六項

117. アッラーがかく云わん時を思え。「マリアの子イエスよ、汝は人々に、『我と我が母をアッラーの外に二柱の神として崇めよ』と告げたるか？」(注 65) イエスは答えん、「汝至聖者よ、我何すれぞ云うべからざることを云わんや。(注 66) 我もしそれを云いたりせば、汝はすでにそれを知るなり。汝は我が心に在るものを知れども、我は汝の心に在るものを知らず。隠れたことを知る者は、独り汝のみなり。

118. 我は、汝が我に命じたることのみを彼等に告げり。すなわち、『我が主にして、お前たちの主なるアッラーを崇敬せよ』と。(注 67) 我生きて彼等の間にありしときは、(注 68) 我は彼等の証人なりしが、汝が我を召し寄せたる後は、(注 69) 汝こそが彼等の監

وَلَا قَالَ اللَّهُ يُعِيسَ ابْنُ مَرْيَمَ ءَأَنْتَ قُلْتَ لِلنَّاسِ
اتَّخِذُونِي وَأَرْبِيَ إِلَهَيْنِ مِنْ دُونِ اللَّهِ قَالَ سُبْحَانَكَ
مَا يَكُونُ لِي أَنْ أَقُولَ مَا لَيْسَ لِي بِحَقِّئِنْ كُنْتُ
قُلْتُهٖ فَقَدْ عَلِمْتَهُ تَعْلَمُ مَا فِي نَفْسِي وَلَا أَعْلَمُ
مَا فِي نَفْسِكَ إِنَّكَ أَنْتَ عَلَّامُ الْغُيُوبِ ⑥

مَا قُلْتُ لَهُمْ إِلَّا مَا أَمَرْتَنِي بِهِ أَنْ أَعْبُدُوا اللَّهَ رَبِّي
وَرَبَّكُمْ وَكُنْتُ عَلَيْهِمْ شَهِيدًا مَا دُمْتُ فِيهِمْ فَلَمَّا
تَوَفَّيْتَنِي كُنْتُ أَنْتَ الرَّقِيبَ عَلَيْهِمْ وَأَنْتَ عَلَى كُلِّ

注 65 この節は聖なる力をマリアより端するキリスト教会の風習について述べている。マリアの助けは連禱中に祈り求められており、ローマ教会の公教要理中にも、彼女が神の母であるという主張が説かれている。教会の神父達は過去に於いて、彼女を聖なるものとみなし、やっと数年前に、教皇パイウス 12 世が、教会の教義中に、マリアの肉体的昇天を組みこんだのである。これら全ては彼女を聖なる地位へ押し上げる事となり、これこそ、新教徒達が迷信的な聖母マリア崇拜であると糾弾するところなのである。

注 66 当書で、「私はできません」と翻訳されている箇所のアラビア語表現のその他の解釈の仕方は、「私にはふさわしくない」或いは、「私には、不可能であった」或いは「私にはそうする権利がない」等となる。よって、ここでの「云うべからざる」は、私が言うにふさわしくないという意になる。

注 67 イエスは唯一の神を礼拝せよと教えた (マタイ 4 : 10、ルカ 4 : 8)。

注 68 イエスが生きている間は、彼は大変注意深く自分の弟子達を見守り、正しい道から外れぬ様気をつけていた。しかし彼はその死後、彼らがどうなっていたか見当もつかない。今や、彼の後継者達は道を踏み外してしまった為、この節の指摘する様に、イエスの死後、彼は神として礼拝されるところとなってしまった。同様に、この節でイエスが、自分の後継者が自分と自分の母親とを二人の神として取り扱っている無知さを表明している事実は、彼がこの世には戻ってこない事を証明している。何故なら、もし彼がこの世に復活し、自分の弟子達が腐敗し、彼を神として崇拝している事を自分自身の目で知ったなら、神の前でこのようなことを言うはずはない。弟子達による三位一体をもし抗弁しようとすれば、この言葉は嘘になってしまう。故にこの節ははっきりと、イエスが死に、彼は復活しない事を述べているのである。更に、聖なる預言者の有名な言によれば、聖なる預言者はここでイエスの口にしたのと同様の言葉を復活の口口にし、その時、イエスの弟子の何人かが地獄へ導かれるのを見るのである。この事は又、イエスも聖なる預言者同様に死んでいるという事実を確認しているのである。

注 69 3 : 56 を参照の事。

視者なり。汝こそ一切の証人なり。

شَيْءٌ شَهِيدٌ ١١٨

119. 汝たとい彼等を罰さんとも、彼等は汝の僕なれば。またもし彼等を赦すなば、そは偉大にして賢哲なる汝なればこそ」と。

إِنْ تُعَذِّبُهُمْ فَإِنَّهُمْ عَبْدُكَ وَإِنْ تُغْفِرَ لَهُمْ فَإِنَّكَ

أَنْتَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ١١٩

120. アッラーは云わん、「こは誠実なる人間が、その正直さ故に利益を得る日なり。彼等には河川流れる楽園ありて、そこに永久に住まん。アッラーは彼等に満足し、彼等もまたアッラーに満悦し奉る。これこそ大成功なり」と。

قَالَ اللَّهُ هَذَا يَوْمُ يَنْفَعُ الصَّادِقِينَ صِدْقُهُمْ لَهُمْ جَنَّاتٌ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا رَضِيَ اللَّهُ عَنْهُمْ وَرَضُوا عَنْهُ ذَلِكَ

الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ١٢٠

121. 天地の主権とその中に存する一切のものは、アッラーに帰属す。アッラーは万物を支配し給う。(注 70)

لِلَّهِ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا فِيهِنَّ وَهُوَ عَلَى

كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ١٢١

注 70 この節は、キリスト教徒の間違いを効果的に指摘している当章における結論を適切に述べている。キリスト教徒の栄光は続かず、神は最終的には、神の王国をより王国にふさわしい者達に移すという宣言がなされている。

سُورَةُ الْأَنْعَامِ مَكِّيَّةٌ

(٦)

家畜 アル・アンアーム

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

2. 天地を創造し、暗闇と光明を生み出せるアッラーを讃え奉る。しかるに不信心者どもは、その主に対等する者を設けたり。

3. 彼こそは土塊よりお前たちを創り給ひ、しかる後に期限を定め給えり。その外にも、彼(注1)の許には、定め給える期限(注2)あり。しかるにお前たちは、まだ疑う。

4. 彼こそは天地(注3)における神、アッラーなり。彼はお前たちの秘めごと、顯すことも知り給う。またお前たちが稼ぐものも知り給う。

5. 主の神兆(注4)が来る度に、彼等はそれより顔をそむける。

6. 以前、彼等に真理がもたらされたる時、彼等はそれを拒否せり。されどほどなく、彼等が嘲笑せる知らせが彼等の身に起らん。

7. われらはこれまでに幾多の世代を滅ぼせり。彼等は之を見ざるか? われらが彼等のために地上に創りたるものは、お前たちに創りたる如きものに非ず。(注5)われらは

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

الْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ وَجَعَلَ
الظُّلُمَاتِ وَالنُّورَ ثُمَّ الَّذِينَ كَفَرُوا بِرَبِّهِمْ يَعْدِلُونَ ①

هُوَ الَّذِي خَلَقَكُمْ مِنْ طِينٍ ثُمَّ قَضَىٰ أَجَلَكُمْ وَأَجَلٌ
مُّسَمًّى عِنْدَهُ ثُمَّ أَنْتُمْ تَمْتَرُونَ ②

وَهُوَ اللَّهُ فِي السَّمَوَاتِ وَفِي الْأَرْضِ يَعْلَمُ سِرَّكُمْ
وَجَهْوَكُمْ وَيَعْلَمُ مَا تَكْسِبُونَ ③

وَمَا تَأْتِيهِمْ مِنْ آيَةٍ مِنْ آيَاتِ رَبِّهِمْ إِلَّا كَانُوا عَنْهَا
مُعْرِضِينَ ④

فَقَدْ كَذَّبُوا بِالْحَقِّ لَمَّا جَاءَهُمْ فَصَفُوفٌ يَأْتِيهِمْ
أَنْبَاءُ مَا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِءُونَ ⑤

أَلَمْ يَرَوْا كَمْ أَهْلَكْنَا مِنْ قَبْلِهِمْ مِنْ قَوْمٍ مَكَانَهُمْ
فِي الْأَرْضِ مَا لَمْ نُنْشِئْ لَهُمْ فِي السَّمَاءِ عَلَامًا

注1 人類の創造とその死(大が定めた期限)の両方が、神のあわれみの行為として述べられている。

注2 最初の「期限」は個人の寿命を意味し、もう一方の「期限」は宇宙の生命を意味する。

注3 この節は神の人格が天と地に広まっていく事を意味するのではない。それは、神の英知が、宇宙全体を包含する事を意味する。

注4 神の知恵と力の重要な証拠は、神が神の使いに明かす預言と、圧倒的に不利な条件の中での使者達へ与える、支えと援助である。

注5 これは、世界が衰退していると言っているのではない。全体として見れば、発展しているに違いないが、過去に文明の頂点に達したいくつかの古代国家は芸術と科学の一定の分野に於いてあまりにも進歩してい

彼等の上に雲を送り、充分なる雨を降らせたり。またその足許にはいくつもの河川を流れしめたり。されど彼等の罪故に、われらは彼等を滅ぼし、代りに別の世代を興したり。

قَدْ رَأَوْا جَعَلْنَا الْأَنْهَارَ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهِمْ فَأَهْلَكْنَاهُمْ بِذُنُوبِهِمْ وَأَنْشَأْنَا مِنْ بَعْدِهِمْ قَوْمًا آخَرِينَ ①

8. たといわれらが羊皮紙の上にしたためしものを汝に降し、彼等それに自分の手を触れるとも、(注6)不信心者どもはかく云わん、「こは明らかに妖術以外の何ものにも非ず」と。

وَلَوْ نَزَّلْنَاهُ عَلَيْكَ كِتَابًا فِي قِرْطَاسٍ فَلَسَوْهُ بِآيَاتٍ لَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا إِنَّ هَذَا إِلَّا سِحْرٌ مُبِينٌ ②

9. また彼等は云う、「何故彼の許へ天使(注7)が派遣されざるか?」と。されどもしわれらが天使を降せりとすれば、事はすでに決定せられ、彼等は猶予せられざりしなるべし。

وَقَالُوا لَوْلَا أُنْزِلَ عَلَيْهِ مَلَكٌ وَلَوْ أَنْزَلْنَا مَلَكَ لَقُضِيَ الْأَمْرُ ثُمَّ لَا يُنْظَرُونَ ③

10. また、もしわれらが天使を使徒に任命したとしても、われらは天使に人間の形をとらしめたとせば、今彼等が迷う問題を、その時も迷はしめたるなり(注8)。

وَلَوْ جَعَلْنَاهُ مَلَكَ لَجَعَلْنَاهُ رَجُلًا وَلَلَبَسْنَا عَلَيْهِمْ مَا يَلْبَسُونَ ④

11. 汝以前にも、実に多くの使徒たちが嘲笑せられたり。されどそれ等嘲笑者は、その嘲笑せるものに包囲されたり。

وَلَقَدْ اسْتَهْزَى بِرُسُلٍ مِنْ قَبْلِكَ فَحَاقَ بِالَّذِينَ سَخِرُوا مِنْهُمْ مَا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِءُونَ ⑤

第二項

12. 云え、「地上を歩き廻り、預言者たちを嘘つき呼ばわりせる者どもの末路を見よ」と。

قُلْ سِيرُوا فِي الْأَرْضِ ثُمَّ انظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُكَذِّبِينَ ⑥

13. 云え、「天に在るもの、地に在るもの、すべては誰の所有なるか?」と。云え、「アッラーの所有なり」と。彼は慈悲を自らの務めと

قُلْ لِمَنْ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ قُلْ لِلَّهِ كُتِبَ عَلَى نَفْسِهِ الرَّحْمَةُ لِيَجْْعَلَ لَكُمْ إِلَى يَوْمِ الْقِيَمَةِ لَارِيبَ

たので、その分野では、あとに続く世代で匹敵するものがなかったのである。例えば、科学の領域において驚異をもたらしたにもかかわらず、現代は今だに古代エジプト文明のなした業のいくつかを驚嘆の思いでみつめている。

注6 彼らはそれが俗界のものでなく、天のものである事を確かめた。

注7 「天使の到来」は天の罰の切迫した接近を示す。

注8 この節は、天使が案内をするために来るべきであったという不信仰者の要求の愚かさをさらけだしている。

なす。(注9)彼はお前たちを必ず復活の日に喚び集めん。そは疑惑の余地なし。されど己が魂を破滅せる者どもは信じざるべし。

14. およそ何であれ、夜の中に住むもの、昼の中に住むもの、すべてはアッラーの所有なり。彼はすべてを聴き、すべてを知り給う。
15. 云え、「天地の創始者であるアッラーの外に、我誰を守護者に求めんや？彼は一切を養ひはすれど、自らは養われるを要せず」と。云え、「我は帰依者の魁たれと命ぜられたり」と。されば汝、アッラーに他神を併せ祀る者どもの仲間となるなかれ。
16. 云え、「我もし主に背かば、我は莊嚴な日のその懲罰を恐る」と。(注10)
17. その日懲罰を免れる者は、神がまさしく慈悲を垂れたまいし者なり。そは明らかなる成功なり。
18. もしアッラーが災いを持って汝に触れなば、アッラーを措いて何人もそれを取り除くこと能わずまたもし幸運を持って汝に触れなば、そはその支配力が万物に及ぶが故なり。
19. 彼はその僕らの上にまします至高の權威(注11)なり。彼は賢哲にして、一切に通曉し給う。
20. 云え、「証言(注12)において最も重要なこととは何んぞや？」と。云え、「アッラーは、

فِيهِ الدِّينُ خَيْرٌ وَالْفَسْهُمُ فَهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿١٣﴾

وَلَهُ مَا سَكَنَ فِي الْبَيْلِ وَالنَّهَارُ وَهُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿١٤﴾

قُلْ أَعِزَّ اللَّهُ اتَّخَذَ وَلِيًّا فَأُطِرَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَهُوَ يُطْعِمُ وَلَا يُطْعَمُ قُلْ إِنِّي أُورِثُ أَنْ أَكُونَ أَوَّلَ مَنْ أَسْلَمَ وَلَا تَكُونَنَّ مِنَ الْمُشْرِكِينَ ﴿١٥﴾

قُلْ إِنِّي أَخَافُ إِنْ عَصَيْتُ رَبِّي عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ﴿١٦﴾ مَنْ يَصْرِفْ عَنْهُ يَوْمَئِذٍ فَقَدْ رَجِمَهُ وَذَلِكَ الْفَوْزُ الْبَينُ ﴿١٧﴾

وَأِنْ يَتَسَنَّسَكَ اللَّهُ بِضَرْفٍ فَلَا كَاشِفَ لَهُ إِسْهُوٌ وَإِنْ يَتَسَنَّسَكَ يَخْرِقْهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿١٨﴾ وَهُوَ الْقَاهِرُ فَوْقَ عِبَادِهِ وَهُوَ الْحَكِيمُ الْغَيُّورُ ﴿١٩﴾

قُلْ أَيُّ شَيْءٍ أَكْبَرُ شَهَادَةً قُلِ اللَّهُ شَهِيدٌ بَيْنِي

注9 天と地の全てのものがアッラーの神の所有するものなので、信仰に反するものでさえも神のものである。自分の手でつくりあげた物を破壊したいと思う人は誰もいないし、ましてや神がそうなるわけがない。「彼」は慈悲深く、不信仰者達が後悔し、あわれみをかけられるように、彼らに猶予を授けられるのである。

注10 この節は、人間に神に対し不従順にならないよう身を守る事について強く勧告しているのであって聖なる預言者が神にそむくことがあると言っているわけではない。

注11 神の至高の權威という美德は、物体と魂は、神と共存し、従って神によって創られたものではないという理論に反駁する。もし神によって創りだされたものでないならば、神はそれらを征服、又は支配する権利も力もなかったはずである。

注12 神は証言を3つの違った方法で有しておられる。—クルアーンによる啓示、これが第一の証言である。第二、第三の証言は、次に続く節で述べられている。

我とお前たちの間の証人なり。而してクルアーンが我に啓示されたるは、我をして之によって、お前たち並びに及ぶ限りの人々を戒めしめんがためなり。何んとな！お前たち本当にアッラーの外に神ありと証言するか？」と。云え、「我は証言せず」と。云え、「彼は独一なる神なり。お前たちが彼と共に併せ祀る他神と、我は関わりなし」と。

وَبَيْنَكُمْ وَأُوحِيَ إِلَىٰ هَذَا الْقُرْآنِ لِتُنذِرَكُمْ بِهِ
وَمَنْ يَلْعَلْ أُنِيسُكُمْ لِتُشْهَدُونَ أَنَّهُ مَعَ اللَّهِ إِلَهًا
أُخْرَىٰ قُلْ لَا أَشْهَدُ قُلْ إِنَّمَا هُوَ إِلَهُ وَاحِدٌ وَ
إِنِّي بَرِيءٌ مِّمَّا تُشْرِكُونَ ﴿٦﴾

21. われらが経典を授けし人々は、己が息子を識る如く彼を認む。(注13)されど己が魂を破滅せる者どもは、信じざるべし。

第三項

22. アッラーについて虚偽を捏造し、その神兆を虚妄とみなす者にも勝る不義者は誰か？げに不義者は栄えざるべし。(注14)

الَّذِينَ آتَيْنَهُمُ الْكِتَابَ يَعْرِفُونَهُ كَمَا يَعْرِفُونَ
أَبْنَاءَهُمُ الَّذِينَ خَسِرُوا أَنْفُسَهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿٧﴾
وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنْ افْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا أَوْ كَذَّبَ
بِآيَاتِهِ إِنَّهُ لَا يُفْلِحُ الظَّالِمُونَ ﴿٨﴾

23. われらが彼等を皆召喚する日、われらは神に他神を祀りし徒輩に問わん、「お前たちが主張せる僚神は今何処に在りや？」と。

وَيَوْمَ نَحْشُرُهُمْ جِجِيًّا ثُمَّ نَقُولُ لِلَّذِينَ أَشْرَكُوا
أَيْنَ شُرَكَاؤُكُمُ الَّذِينَ كُنْتُمْ تَزْعُمُونَ ﴿٩﴾

24. その時彼等は、「我等の主アッラーにかけて誓う、我等は偶像崇拜者に非ざりき」と云う以外、如何なる云い訳もなかるべし。(注15)

ثُمَّ لَمْ تَكُنْ فِتْنَتُهُمْ إِلَّا أَنْ قَالُوا وَاللَّهِ رَبَّنَا مَا
كُنَّا مُشْرِكِينَ ﴿١٠﴾

25. 見よ、彼等が如何に自分を欺くかを。また彼等の捏造せるものが彼等を見捨てたるかを。

أَنْظُرْ كَيْفَ كَذَبُوا عَلَىٰ أَنْفُسِهِمْ وَصَلَّ عَنْهُمْ مَا كَانُوا
يَفْتَرُونَ ﴿١١﴾

26. 彼等の中には、汝に耳傾ける者あり。されどわれらは、彼等の心を覆いて理解し得ざるようにし、またその耳も聾となせり。さ

وَمِنْهُمْ مَنْ يَسْتَمِعُ إِلَيْكَ وَجَعَلْنَا عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ
كَفَّةً أَنْ يَفْقَهُوهُ وَفِي آذَانِهِمْ وَقْرًا وَأَنْ يَرَوْا

注13 預言者(又は、信仰(教義))に関する事はすべて)は最初は認められない。彼は、父親が息子を認めるがごとく認められるのみであり、全くの確実性というよりどちらかといえば、可能性としてである。信仰は、いつも目に見えない所から始められるべきである。

注14 3つ目の教えは、人間の道理に基づいたものである。正気な人間なら誰もが、もし人が神に誓って話すと言いながら、神に対してうそをつく様な事をすれば、自分が完全な失敗と破滅のもとで人生を終わるであろう事を認めるであろう。一方、神の使いに反対するものは、決して繁栄を許される事なく、彼らの新しい信仰の発展をはばんだり阻止しようとする努力は完全な失敗に終わるであろう。

注15 この異教徒側の否定は、本当は、自分達の無力さの、告白であり、又神の慈悲へ祈願の形でもある。

れば彼等たとい神兆を目の当たりに見ても、それを信ぜざるべし。彼等が汝のところへ来るのは、議論するためなり。かかる不信心者どもは云う、「こは往古の物語にすぎず」と。

27. 彼等は、他人がそれを信ずることを禁じ、自らもそれより遠ざかる。彼等は誰も滅ぼさず、ただ自らを滅ぼすのみ。なれどそれに気付かず。
28. 汝もし彼等が業火の前に立たされる時を見るなら、彼等は云わん、「我等を今一度世に戻しなば、我等は主の神兆を虚偽とみなさざるべし。而して我等は、信徒の一人とならん」と。
29. 否、彼等が日頃隠せるものが、ついに彼等の前に明らかにせられたり。たとい彼等を世に戻したとしても、彼等は必ず再び禁ぜられたることを繰り返さん。げに彼等は嘘つきなり。
30. 彼等は云う、「在るものはただ現世のみ。我等甦る筈なし」と。
31. 汝もし彼等が主の御前に立たされる時を見るなら！主は云わん、「この二度目の命は、真実に非ざるか？」と。彼等は云わん、「然り、主にかけて」と。主は云わん、「しからば信仰を拒みし報いとして、罰を味わえ」と。

第四項

32. アッラーとの対面を否認せる者どもは、確かに失敗者なり。その時が突然至れば、彼等は云わん、「痛恨なるかな、この時を無視せることは！」と。而して彼等は、その背に重荷を背負うべし。(注16)げに彼等の背負う荷物は災いなり。

كُلَّ آيَةٍ لَا يُؤْمِنُوا بِهَا حَتَّىٰ إِذَا جَاءُوكَ يُجَادِلُونَكَ
يَقُولُ الَّذِينَ كَفَرُوا إِنَّ هَٰذَا إِلَّا آسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ﴿١٦﴾

وَهُمْ يَنْهَوْنَ عَنْهُ وَيَنْنَوْنَ عَنْهُ وَإِنْ يُهْلِكُونَ
إِلَّا أَنفُسَهُمْ وَمَا يَشْعُرُونَ ﴿١٧﴾

وَلَوْ تَرَىٰ إِذْ وَقَفُوا عَلَى النَّارِ فَقَالُوا يَلَيْتُنَا نُرَدُّو
لَا نَكْذِبَ رَبَّنَا وَلَوْ كُنَّا مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١٨﴾

بَلْ بَدَأ لَهُمْ مَا كَانُوا يُخْفُونَ مِنْ قَبْلُ وَلَوْ رَدُّوْا
لَعَادُوا إِنَّمَا لَهُمْ آعَنَةٌ وَأَنَّهُمْ لَكَذِبُونَ ﴿١٩﴾

وَقَالُوا إِن هِيَ إِلَّا حَيَاتُنَا الدُّنْيَا وَمَا نَحْنُ بِمَبْعُوثِينَ ﴿٢٠﴾

وَلَوْ تَرَىٰ إِذْ وَقَفُوا عَلَىٰ رَبِّهِمْ قَالَ إِلَيْكَ هَٰذَا بِحَقِّ
قَالُوا بَلَىٰ وَرَبَّنَا قَالِ فَذُوقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنْتُمْ
تَكْفُرُونَ ﴿٢١﴾

قَدْ خَسِرَ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِ اللَّهِ حَتَّىٰ إِذَا جَاءَتْهُمْ
السَّاعَةُ بَغْتَةً قَالُوا يَحْسِرُنَا عَلَىٰ مَا فَزَعْنَا فِيهَا لَا
وَهُمْ يَحْسِرُونَ أَوَلَمْ يَأْتِهِمْ عَلَىٰ ظُهُورِهِمْ إِلَّا سَاءُ مَا
يُرَدُّونَ ﴿٢٢﴾

注16 この節は、彼らの背負う重荷がことのほか重いことを意味している。

33. 現世の世話はただ遊戲か氣晴らしにすぎず。
 義しい人々には、来世の住居こそが勝れる
 ものなり。お前たちまだ解らざるか？

وَمَا الْحَيَوةُ الدُّنْيَا إِلَّا لَعِبٌ وَلَهُوَ وَلَدَارُ الْآخِرَةِ
 خَيْرٌ لِلَّذِينَ يَتَّقُونَ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ﴿٣٣﴾

34. われらは彼等の言葉が汝を悲しませること
 をよく承知す。彼等が嘘つきと誘うは汝に
 非ず。悪人どもが拒否するは、アッラーの
 神兆そのものなり。(注 17)

قَدْ نَعْلَمُ إِنَّهُ لَيَحْزَنُكَ الَّذِي يَقُولُونَ فَإِنَّهُمْ لَا
 يَكَذِبُونَكَ وَلَكِنَّ الظَّالِمِينَ بِآيَاتِ اللَّهِ يَجْحَدُونَ ﴿٣٤﴾

35. 汝(注 18) 以前にも、多くの使徒たちが拒
 否されたり。されど拒否や迫害にもかかわ
 らず、われらの救いが至るまで、使徒たち
 は耐え忍べり。アッラー(注 19) の言葉は、
 何人も之を変えることが能わず。而して過去
 の使徒たちの消息はすでに汝に伝えられた
 り。

وَلَقَدْ كَذَّبَتْ رُسُلٌ مِنْ قَبْلِكَ فَصَبَرُوا عَلَى مَا كَانُوا
 يَأْذَوْنَ حَتَّى أَتَاهُمْ نَصْرُنَا وَلَا مُبَدِّلَ لِكَلِمَاتِ اللَّهِ
 وَلَقَدْ جَاءَكَ مِنْ نَبِيِّ الْمُرْسَلِينَ ﴿٣٥﴾

36. もし彼等の離反が汝を悲しましむるなら
 ば、汝地中に抜け道を穿つか、天に梯をか
 けて神兆を彼等にもたらすべし、汝それが
 でき得るなら。アッラーもし欲したりせば、
 彼等を集めて之を導き給えり。されば汝、
 無知蒙昧の徒となるなかれ。

وَإِنْ كَانَ كِبَرَ عَلَيْكَ إِعْرَاضُهُمْ فَإِنْ اسْتَطَعْتَ أَنْ
 تَبْنِي نَقْفًا فِي الْأَرْضِ أَوْ سُلَّمًا فِي السَّمَاءِ فَتَأْتِيَهُمْ
 بَأْيَتُهُ وَكَوْشَاءَ اللَّهُ لَجَمْعُهُمْ عَلَى الْهُدَى فَلَا
 تَكُونَنَّ مِنَ الْجَاهِلِينَ ﴿٣٦﴾

37. 耳傾ける者のみ喚びかけに能く応ず。アッ
 ラーは能く死者を甦らしめん。しかる後に
 彼等はアッラーの許に帰らしめらる。(注
 20)

إِنَّمَا يَسْتَجِيبُ الَّذِينَ يَسْعَوْنَ وَالْبَوَاقِي يَتَّبِعُهُمُ
 اللَّهُ ثُمَّ إِلَيْهِ يُرْجَعُونَ ﴿٣٧﴾

注 17 聖なる預言者は、(心の)優しさにあふれていた。彼は自分に関して不信仰者達が言った事には心を乱さなかった。彼は、不信仰者達が自分をうそつきとして責めたからではなく、アッラーのお告げを退ける事により、彼らが自分自身への神の慈悲の入口を閉ざしてしまった事に深い悲しみを抱えた。

注 18 神は、安楽と慰めのこれらの言葉でもって、聖なる預言者に愛情をこめて話しかける。預言者は彼より以前の預言者達もやはり拒絶され、あざけられ笑いのものにされた事を知らされている。

注 19 神の救いは神の預言者達の上にもたらされ、その敵対する者達は、災難にあうという神のおきては不変のものである。

注 20 この節は、2 種類の人間の事を述べている。それは、(1)心底は善く、真実を聞く耳をもち、ちゆうちよなく受け入れる者達、そして(2)死んでいるようにみえるが、精神的な再生にふさわしい者達である。神は奇跡によって彼らの再生を早め、彼らはさらにイスラム教に耳を傾け、奉ずる事となるのである。

38. また彼等は云う、「何故に主より彼の許に神兆が降されざるか?」と。云え、「げにアッラーは神兆を降す力あり。されど彼等の多くは、解らざるなり」と。

وَقَالُوا لَوْلَا نَزَلَ عَلَيْهِ آيَةٌ مِنْ رَبِّهِ قُلْ إِنْ اللَّهُ قَادِرٌ عَلَى أَنْ يُنْزِلَ آيَةً وَلَكِنْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٣٨﴾

39. 地上を這う動物も、双翼で飛翔する鳥も、みなお前たちのように集団をなす。われらは經典の中で、一つとして遺漏せしものはなし。されば彼等もまた、いずれその主の許に召し寄せられん。(注 21)

وَمَا مِنْ دَابَّةٍ فِي الْأَرْضِ وَلَا طَيْرٍ يَطِيرُ بِجَنَاحِهِ إِلَّا أَمْرٌ أَمْثَلُكُمْ مَا فَزَعْنَا فِي الْكِتَابِ مِنْ شَيْءٍ ثُمَّ إِلَى رَبِّهِمْ يُحْشَرُونَ ﴿٣٩﴾

40. われらの神兆を拒否せる者どもは、暗闇の中にいる盲であり、聾なり。アッラーは己れの欲する者を迷わしめ、また欲する者を正しい道の上に置き給う。

وَالَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا صُمُّ وَبُكْمٌ فِي الظُّلُمَاتِ مَنْ يَشَأِ اللَّهُ يُضِلَّهُ وَمَنْ يَشَأِ يُصْلِحْهُ عَلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿٤٠﴾

41. 云え、「我に答えよ。もしアッラーの懲罰がお前たちに降りかかるとか、復活の日(注 22)が到来したら、もしお前たちの言葉がまことなら、お前たちはアッラー以外の者を喚びて祈るか?

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ أَتَاكُمْ عَذَابُ اللَّهِ أَوْ أَتَتْكُمُ السَّاعَةُ أَغَيْرَ اللَّهِ تَدْعُونَ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٤١﴾

42. 然らず、お前たちは必ずアッラーを喚びて祈らん。而してアッラーもし欲しなば、お前たちの祈りに応えてその災厄を除き給うが故に、お前たちはアッラーに併せ祀りし神々を忘れ去らん」と。(注 23)

بَلْ إِيَّاهُ تَدْعُونَ فَيَكْشِفُ مَا تَدْعُونَ إِلَيْهِ إِنْ شَاءَ وَتَنْسَوْنَ مَا تُشْرِكُونَ ﴿٤٢﴾

注 21 この節は、鳥や昆虫、例えば蟻でさえも、大気中の変化から嵐がさし迫っている事を理解し、犬などの動物は飼い主の命令を理解するのに、愚かな不信仰者達は、災いの前兆も見えず、聖なる預言者を拒絶する事により、神の怒りを招いている事に気付かないという事を指摘している。彼らは、彼らの行動の全てが記録され、それに対する償いをしなければならぬと警告されている。

この節は、さらに2種類の人間を示唆しているようである。それは(1)野獣を好む者は完全に世俗に心が傾けられ、彼らの人生の全てが肉体的欲望を満たす事に眼られている、(2)鳥を好む者は、神聖な域へと高く舞いあがる—非常に崇高な者達は、クルアーン(3章50節)では鳥にたとえられている。

注 22 アッサーア「復活の日」は、イスラム教の決定的な勝利の時、又はメッカの陥落をさす。

注 23 「神々を忘れ去らん」という言葉は、メッカの陥落の日に、文字通り履行された。その日、メッカの人々は、アブ・スフヤーンと彼の妻ヒンダを始めとした他の人々が聖なる預言者の目前で、素直に認めた様に彼らの神々への信仰をすてた。ついに、アラビアから偶像崇拜は完全に消えたのである。

第五項

43. げにわれらは汝以前の諸々の民に多くの使徒を遣わせり。而して彼等を謙虚ならしめんがために、われらは彼等を貧困と災難で苦しめたり。(注24)
44. しかるにわれらの懲罰が降りしとき、何故彼等は謙虚にならざりしか? されど、彼の心は却って頑なとなり、悪魔は彼等にそのなせることを正しいものと思わしめたり。
45. かくて彼等がその与えられたる訓戒を忘れ去りし時、われらは万物の門を彼等に開き、授けられたるものに彼等が狂喜している時に、われらは突然彼等を襲いたり。見よ、彼等の絶望に落ち入りたる様を。
46. かくして不義なす民は根絶やしにせられたり。万物の主アッラーに讃えあれ。
47. 云え、「お前たち我に答えよ。もしアッラーがお前たちの耳目を奪い、その心を封じなば、それをお前たちに返還し得るは、アッラーに非ずして如何なる神ぞや?」と。見よ、われらがさまざまなる方法で神兆を説明することを。されど彼等は背き去る。
48. 云え、「お前たち我に答えよ。もしアッラーの懲罰がお前たちに突然、又は公然と下らば、不義なる民以外に、誰が滅ばされんや?」と。
49. われらは朗報と警告の使者以外は使徒を派遣せず。されば、信じて身を修める者には、怖れもなく、また悲しみもなからん。
50. されどわれらの神兆を拒否する者は、その不服従故に、懲罰が下らん。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا إِلَىٰ أُمَمٍ مِّن قَبْلِكَ فَآخَذْنَاهُم بِالْبَأْسِ
وَالضَّرَّاءِ لَعَلَّهُمْ يَتَضَرَّعُونَ ﴿٤٣﴾

فَلَوْلَا إِذْ جَاءَهُمْ بَأْسُنَا تَضَرَّعُوا وَلَكِن قَسَتْ قُلُوبُهُمْ
وَزَيَّنَّ لَهُمُ الشَّيْطَانُ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٤٤﴾

فَلَمَّا نَسُوا مَا ذُكِّرُوا بِهِ فَتَحْنَا عَلَيْهِمُ أَبْوَابَ كُلِّ
شَيْءٍ خَلَّ إِذَا فَرِحُوا بِمَا أُوتُوا أَخَذْنَاهُمْ بَغْتَةً
فَإِذَا هُمْ مُبْلِسُونَ ﴿٤٥﴾

فَقَطَّعَ دَائِرَ الْقَوْمِ الَّذِينَ ظَلَمُوا وَالْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ
الْعَالَمِينَ ﴿٤٦﴾

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ أَخَذَ اللَّهُ سَمْعَكُمْ وَبَصَارَكُمْ وَخَمَمَ
عَلَىٰ قُلُوبِكُمْ مَنْ إِلَهٌ غَيْرُ اللَّهِ يَأْتِيكُمْ بِهِ أَنْظَرُوا
كَيْفَ نُصَرِّفُ الْآيَاتِ ثُمَّ هُمْ يَصْذَقُونَ ﴿٤٧﴾

قُلْ أَرَأَيْتَكُمْ إِنْ أَتَاكُمْ عَذَابُ اللَّهِ بَغْتَةً أَوْ
جَهْرَةً هَلْ يُهْلِكُ إِلَّا الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ﴿٤٨﴾

وَمَا نُرْسِلُ الْمُرْسَلِينَ إِلَّا مُبَشِّرِينَ وَمُنذِرِينَ
فَمَنْ آمَنَ وَأَصْلَحَ فَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ
يَحْزَنُونَ ﴿٤٩﴾

وَالَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا يَشْهَمُ الْعَذَابُ بِمَا كَانُوا
يَفْسُقُونَ ﴿٥٠﴾

注24 前述の節は、一般に天罰を意味しており、この節では、その多様な形式が述べられている。

51. 云え、「我はお前たちに向って、アッラーの宝を所有すとは云わず。また、我不可視なるものを知るとも、我は天使なりとも云わず。我はただ我に啓示されたるものに従うのみ」と。云え、「盲人と目あきが同等なりや？それでもお前たちまだ反省せざるか？」と。

第六項

52. 主の許に招集せられることを怖れる人々に警告せよ、彼等には主を措いて外に、友もなければ執り成すものもなしと。さすれば彼等も、義しい人になるやも知れぬ。
53. 主の愛顧を求めて、朝な夕な主を喚びて祈る者を追い払うなかれ。汝は彼等のことには全く責任なし、彼等もまた汝のことには責任なし。されば汝、もし彼等を追い払わば、汝は不義者の仲間とならん。
54. かくしてわれらは、彼等の或る者をもって、他を試みたり。そは彼等をして、「アッラーが恩恵を垂れるは、我等のうちのこれ等の者なるか？」と云わしめんがためなり。感謝する者を最もよく知る者は、アッラーに非ざるか？（注25）
55. われらの神兆を信ずる者が汝のところへ来なば、云え、「お前たちの上に平安あれ。お前たちの主は慈悲を自らの務めとなせり。さればお前たちのうち知らずに罪を犯す者は、しかもその後改悛して行状を改めなば、主は寛大にして慈悲深くします」と。
56. かくの如く、われらはさまざまなる神兆を説き明す。そはお前たちに教しを請い易くするためであり、また罪人たちの道を明白ならしむるためなり。

قُلْ لَا أَقُولُ لَكُمْ عِنْدِي خَزَائِنُ اللَّهِ وَلَا أَعْلَمُ الْغَيْبَ وَلَا أَقُولُ لَكُمْ إِنِّي مَلَكٌ إِن أَتَّبِعُ إِلَّا مَا يُوْحَىٰ إِلَيَّ قُلْ هَلْ يَسْتَوِي الْأَعْمَىٰ وَالْبَصِيرُ أَفَلَا تَتَفَكَّرُونَ ﴿٥١﴾

وَأَنْذِرْ بِهِ الَّذِينَ يَخَافُونَ أَنْ يُنْشِئُوا إِلَىٰ رَبِّهِمْ لَيْسَ لَهُمْ مِنْ دُونِهِ وَلِيٌّ وَلَا شَفِيعٌ لَعَلَّهُمْ يَتَّقُونَ ﴿٥٢﴾

وَلَا تَطْرُدِ الَّذِينَ يَدْعُونَ رَبَّهُمْ بِالْغَدَاةِ وَالْعَشِيِّ يُرِيدُونَ وَجْهَهُ مَا عَلَيْكَ مِنْ حِسَابِهِمْ مِنْ شَيْءٍ وَمَا مِنْ حِسَابِكَ عَلَيْهِمْ مِنْ شَيْءٍ فَتَطْرُدَهُمْ كُنُونَ مِنَ الظَّالِمِينَ ﴿٥٣﴾

وَكَذَٰلِكَ فَتَنَّا بَعْضَهُم بِبَعْضٍ لِيَقُولُوا أَهَؤُلَاءِ مَنَّ اللَّهُ عَلَيْهِمْ مِنْ بَيْنِنَا أَلَيْسَ اللَّهُ بِأَعْلَمَ بِالشَّاكِرِينَ ﴿٥٤﴾

وَإِذَا جَاءَكَ الَّذِينَ يُؤْمِنُونَ بِآيَاتِنَا فَقُلْ سَلَامٌ عَلَيْكُمْ كَتَبَ رَبُّكُمْ عَلَىٰ نَفْسِهِ الرَّحْمَةَ أَنَّهُ مَنْ عَمِلَ مِنْكُمْ سُوءًا بِجَهَالَةٍ ثُمَّ تَابَ مِنْ بَعْدِهِ وَأَصْلَحَ فَأَنَّهُ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٥٥﴾

وَكَذَٰلِكَ نَفْصَلُ الْآيَاتِ وَلِتَسُبِّحَ سُبْحَانَ اللَّهِ بَرِّينَ ﴿٥٦﴾

注25 一般的に、信仰者達の社会における貧しい人々の存在は、金持ちが新しいお告げを受け入れる際の障害であることを示す。

第七項

57. 云え、「我はお前たちがアッラー以外に祈るものを崇めることを、禁ぜられているなり」と。云え、「我はお前たちの墮落した欲望に従わざるべし。もし従わば、我は邪道に陥りて、正しく導かれた者の仲間にならざるべし」と。

58. 云え、「我は主の明証の上に立つ。しかるにお前たちは、それを拒否す。お前たちが催促することは、我が権限の外のことなり。その決定は唯だアッラー次第なり。彼は真理を説き給い、最も優れたる判断者なり」と。

59. 云え、「お前たちが催促することが我が掌中にありとすれば、事は我とお前たちの間で決定せられん。されどアッラーは最もよく不義者を知り給う」と。

60. げにアッラーの許には不可視なるものの鍵あり。アッラーの外は何人も之を知らず、アッラーは陸上のもの、また海上のもの、その一切を知り給う。木の葉一枚落つるとも、アッラーは之を知り給う。また地中深い暗闇に横たわる一粒の穀物も、青きもの、枯れたるもの、一つとして明白な經典に記載せられざるはなし。

61. 夜お前たちの魂を召し寄せる者は、アッラーなり。彼はお前たちが昼間行くこと(注26)を知り給う。而して彼は、再びお前たちを昼の中に目覚めさせ、定めの間(注27)を全うさせ給う。而してお前たちの帰するところは彼の許なり。その時彼はお前たちに、お前たちの現世での所業を語り聞かせん。

قُلْ إِنِّي نُهِيتُ أَنْ أَعْبُدَ الَّذِينَ تَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ قُلْ لَا آتِيْعُ أَهْوَاءَكُمْ قَدْ ضَلَلْتُ إِذَا وَمَا أَنَا مِنَ الْمُهْتَدِينَ ﴿٥٧﴾

قُلْ إِنِّي عَلَىٰ بَيِّنَةٍ مِنْ رَبِّي وَكَذَّبْتُمْ بِهِ مَا عِنْدِي مَا تَسْتَعْجِلُونَ بِهِ إِنْ الْحُكْمُ إِلَّا لِلَّهِ يَقْضِي الْحَقَّ وَهُوَ خَيْرُ الْفَصِلِينَ ﴿٥٨﴾

قُلْ لَوْ أَنَّ عِنْدِي مَا تَسْتَعْجِلُونَ بِهِ لَقَضَيْتُ الْأَمْرَ بَيْنِي وَبَيْنَكُمْ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِالظَّالِمِينَ ﴿٥٩﴾

وَعِنْدَهُ مَفَاتِيحُ الْغَيْبِ لَا يَعْلَمُهَا إِلَّا هُوَ يُعْلِمُ مَا فِي الْبَرِّ وَالْبَحْرِ وَمَا تَسْقُطُ مِنْ وَرَقَةٍ إِلَّا يَعْلَمُهَا وَلَا حَبَّةٌ فِي ظُلُمَاتِ الْأَرْضِ وَلَا رَطْبٌ وَلَا يَأْسٌ إِلَّا فِي كِتَابٍ مُبِينٍ ﴿٦٠﴾

وَهُوَ الَّذِي يَتَوَفَّاكُم بِاللَّيْلِ وَيَعْلَمُ مَا جَرَحْتُم بِالنَّهَارِ ثُمَّ يَبْعَثُكُمْ فِيهِ لِيُقْضَىٰ أَجَلٌ مُسَمًّى ثُمَّ إِلَىٰ إِلَهِكُمْ مُرْجِعُكُمْ ثُمَّ يُنَبِّئُكُم بِمَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٦١﴾

注 26 神のみが、人間の夜の状態と日中の行動を知っており、いつ何時でも神の支配下に収められる、従って、敬虔な者と邪悪な者の本質を知っているのも神のみであり、その結果として神のみが罰を下すことのできる立場にあるわけである。

注 27 ここで言われている「期間」は、人間が生まれながらにして賦与されている才能や力によって決定されており、その使われ方が正しいか否かに従って、延ばされたり短縮されたりする。

ここでは、神の永遠の知識への言及はない。

第八項

62. アッラーはその僕らの上に至高に君臨す。
死がお前たちのうちの誰かに訪れ、われらの使者がその魂を手ぬかりなく迎え入れるまで、アッラーはお前たちの上に監視者を遣わす。

63. しかる後に、彼等は真の主たるアッラーの許に帰らしめらる。げに判決は彼のものなり。彼は最も迅速な清算者なり。

64. 云え、「陸や海の災難からお前たちを救う者は誰か？ かかる時お前たちは、心密かに謙って、アッラーに祈って、『もし我等をこの事より救わば、我等は必ず感謝する者たらん』などと云うのではないか？」と。

65. 云え、「アッラーはお前たちを之より救い、また一切の災難から救い給う。しかるにお前たちは、アッラーに他神を併せ祀るとは」と。

66. 云え、「アッラーはお前たちに、頭上からも、脚下からも懲罰を科す力あり。またお前たちを多くの派閥に分裂混乱せしめ、お互に暴虐を味わせしめる力を有す」と。見よ、彼等を諭さんがために、われらは如何にさまざまな方法で神兆を説き明かすかを！

67. しかるに汝の民は、真実なるものを否認せり。云え、「我はお前たちの守護者に非ず」と。

68. そもそもそれぞれのお告げには、一定の時期あり。やがてお前たちにもわかる時が来よう。(注28)

69. 汝、われらの神兆について空しく談論する者を見なば、彼等が話題を転ずるまで彼等から遠ざかれ。たとい悪魔が汝を忘却せし

وَهُوَ الْقَاهِرُ فَوْقَ عِبَادِهِ وَيُرْسِلْ عَلَيْكُمْ حَفَظَةً
نَحْنُ إِذَا جَاءَ أَحَدَكُمْ الْمَوْتُ تَوَفَّتْهُ رُسُلُنَا وَهُمْ
لَا يُفَرِّطُونَ ﴿٦٢﴾

ثُمَّ رُدُّوْا إِلَى اللَّهِ مَوْلَهُمْ الْحَقُّ ۚ لَا إِلَهَ إِلَّا لَهُ الْحُكْمُ وَهُوَ
أَسْرَعُ الْحَاسِبِينَ ﴿٦٣﴾

قُلْ مَنْ يُنِيبُكُمْ مِّنْ ظُلُمَاتِ اللَّيْلِ وَالْبَحْرِ تَدْعُوْهُ
تَضَرُّعًا وَخُفْيَةً ۚ لَّيْنًا أَنَجِّنَا مِنْ هَذِهِ لَنَكُوْنُ
مِنَ الشَّاكِرِينَ ﴿٦٤﴾

قُلِ اللَّهُ يُنِيبُكُمْ مِّنْهَا وَمِنْ كُلِّ كُفٍّ ثُمَّ أُنْتُمْ
تُشْرِكُوْنَ ﴿٦٥﴾

قُلْ هُوَ الْقَادِرُ عَلَىٰ أَن يَبْعَثَ عَلَيْكُمْ عَذَابًا مِّنْ
فَوْقِكُمْ أَوْ مِنْ تَحْتِ أَرْجُلِكُمْ أَوْ يَلْبِسَكُمْ شِيْعًا
وَيُزَيِّنَ بَعْضَكُمْ بِأَسْ بَعْضٍ ۚ أَنظُرْ كَيْفَ نُصَرِّفُ
الْآيَاتِ لَعَلَّهُمْ يَفْقَهُوْنَ ﴿٦٦﴾

وَكَذَّبَ بِهِ قَوْمُكَ وَهُوَ الْحَقُّ ۚ قُلْ أَسْتُ عَلَيْكُمْ
بِوَكِيلٍ ﴿٦٧﴾

لِكُلِّ نَبِيٍّ مُّسْتَقَرٌّ وَسَوْفَ تَعْلَمُوْنَ ﴿٦٨﴾

وَإِذَا رَأَيْتَ الَّذِينَ يَخُوضُونَ فِي آيَاتِنَا فَأَعْرِضْ
عَنْهُمْ حَتَّىٰ يَخُوضُوا فِي حَدِيثٍ غَيْرِهِ ۚ وَإِمَّا

注 28 この節は、神がその全然誤りのない知識をもって、全ての預言の成就の時を定めた事を意味している。従って、真理の拒絶する者達に約束された間も時が来れば実現するのである。

むることあるとも、それに気付いたなら、
不義なる徒輩カハラと同坐するなかれ。

يُنْسِيَنَّكَ الشَّيْطَانُ فَلَا تَقْعُدَ بَعْدَ الذِّكْرِ مَعَ
الْقَوْمِ الظَّالِمِينَ ﴿١٩﴾

70. 義しい人々は彼等に対して如何なる責任も
有せず。されど彼等に忠告すべし。さすれば
彼等も神を畏れ敬うようになるやも知れ
ぬ。

وَمَا عَلَى الَّذِينَ يَتَّقُونَ مِنْ جَسَادِهِمْ مِنْ شَيْءٍ
وَلَكِنْ ذَكَّرُوا لَهُمْ يَتَّقُونَ ﴿٢٠﴾

71. 宗教を娯楽に気晴しと考へ、この世の生活
に欺かれている者どもは、うち捨てておけ。
人は己が稼ぎのために地獄に送られるとい
うことを、これによって人々に訓戒せよ。
アッラーの外には、助ける者も執り成す者
もなかるべし。たとひ如何なる賠償を以て
しても、受納せられざるべし。彼等は己れ
の行状のために、破滅へと引き渡されたる
者どもなり。彼等は信ぜざるが故に、熱湯
を飲まされ、苛酷な懲罰を受けん。

وَذَرِ الَّذِينَ اتَّخَذُوا دِينَهُمْ لُغِيًّا ذَلَّهُمُ
الْحَيَاةُ الدُّنْيَا وَذَكَّرِيَهُ أَنْ يُبْسَلَ نَفْسٌ بِمَا كَسَبَتْ
لَيْسَ لَهَا مِنْ دُونِ اللَّهِ وَلِيٌّ وَلَا شَفِيعٌ وَإِنْ
تَعْدِلْ كُلُّ عَدْلٍ لَا يُؤْخَذُ مِنْهَا أُولَئِكَ الَّذِينَ
أُبْسِلُوا بِمَا كَسَبُوا لَهُمْ شَرَابٌ مِنْ حَيْمٍ وَعَلَى
الْأَعْيُنِ مَاءٌ كَانُوا يَكْفُرُونَ ﴿٢١﴾

第九項

72. 云え、「我等はアッラー以外に、毒にも薬に
もならざるものを祈れようか。また、一た
びアッラーに導かれておりながら、悪魔の
誘惑にまどわされて、地上で当てどなく途
方にくれる者の如く、後で踵を返せようか。
彼には、『我等の許へ来れ』と正しい道に招
いてくれる仲間がいるというのに」と。云
え、「アッラーの嚮導こそ真の嚮導なり。
我等は万物の主に従従せよと命ぜられた
り。(注29)

قُلْ أَسْأَلُكُمْ مِنَ اللَّهِ مَا لَا يَنْفَعُنَا أَوْ لَا يَضُرُّنَا
وَنُزِّدُ عَلَىٰ أَعْقَابِنَا بَعْدَ إِذْ هَدَيْنَا اللَّهُ كَالَّذِي
اسْتَهْوَتْهُ الشَّيَاطِينُ فِي الْأَرْضِ حَيْرَانًا لَّا أَصْحَابُ
يَدْعُونَهُ إِلَى الْهُدَىٰ ائْتِنَا قُلْ إِنْ هَدَىٰ اللَّهُ
هُوَ الْهُدَىٰ وَأَمْرًا لِلْإِسْلَامِ لِلرَّبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٢٢﴾

73. また我等は、『礼拝を遵守し、主を畏れ敬え』
と命ぜられたり。而してお前たちは、必ず
主の御許へ召し寄せられん」と。

وَأَنْ أَتَمُّوا الصَّلَاةَ وَآتَوْهُ وَهُوَ الَّذِي إِلَيْهِ
نُحْشَرُونَ ﴿٢٣﴾

74. 真理を以て天地を創造せる者は彼なり。そ
の日、彼「在れ」と宣えば、そは在るべし。
その御言葉は真理なり。喇叭ラッパが吹き鳴らさ

وَهُوَ الَّذِي خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ بِالْحَقِّ وَيَوْمَ
ذَٰلِكَ يَقُولُ كُنْ فَيَكُونُ هُوَ قَوْلُ الْحَقِّ وَلَهُ الْمُلْكُ يَوْمَ
ذَٰلِكَ

注29 この節は、偶像崇拜者の場合を、進むべき決まった方向のない迷える人にたとえている。しかし真の
信仰者は、人生の定まった目的と目標をもっている。彼はいつも根深い信念のもとに唯一の神に祈りを捧げ、
偶像崇拜者の様に取り乱してさまよい歩く事はない。

れるその日、主権は彼の所有なり。彼は見えざるものも見えるものも、ひとしく知り給う。彼は賢哲にして一切を知悉し給う。

(注 30)

75. アブラハムが父アザル (注 31) に「汝は偶像を神と見なすか？我思うに、父上もその御一党も、明らかに迷誤の中にあり」と云える時のことを思え。

76. そこでわれらは、アブラハムを信心堅固なる者たらしめんがために、天地の王国を示したり。(注 32)

77. 夜の帳が彼を覆える時、彼は一つの星を見たり。彼は云えり、「こは我が主なり」と。しかるに、星が沈むに臨み、「我は没するものを好まず」と云えり。

78. 次いで彼は、煌々と輝く月の昇るのを見て、云えり、「こは我が主なり」されど月が没するや、彼は云えり、「もし主が我を導かずば、我は必ず迷える者どもの仲間とならん」と。

79. 次いで彼は日映い日の出を見て、云えり、「こは我が主なり。こは偉大なり」と。されどこれまた没するに及び、彼は云えり、「我が民よ、我はお前たちが神と併せ祀る偶像を避ける。(注 33)

يُنْفَخُ فِي الصُّورِ عِلْمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةُ وَهُوَ
الْحَكِيمُ الْخَبِيرُ ④②

وَإِذْ قَالَ إِبْرَاهِيمُ لِأَبِيهِ إِذْ رَأَى أَنَّهُ اتَّخَذَ أَصْنَامًا اللَّهُ
إِنِّي أَرَىكَ وَقَوْمَكَ فِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ④③

وَكَذَلِكَ نُرِي إِبْرَاهِيمَ مَلَكُوتَ السَّمَوَاتِ
وَالْأَرْضِ وَلِيَكُونَ مِنَ الْمُوقِنِينَ ④④

فَلَمَّا جَنَّ عَلَيْهِ اللَّيْلُ رَأَى كَوْكَبًا قَالَ هَذَا رَبِّي
فَلَمَّا أَفَلَ قَالَ لَا أُحِبُّ الْآفِلِينَ ④⑤

فَلَمَّا رَأَى الْقَمَرَ بَازِعًا قَالَ هَذَا رَبِّي فَلَمَّا أَفَلَ
قَالَ لَنْ لَمْ يَهْدِنِي رَبِّي لَأَكُونَنَّ مِنَ الْقَوْمِ
الضَّالِّينَ ④⑥

فَلَمَّا رَأَى الشَّمْسَ بَازِعَةً قَالَ هَذَا رَبِّي هَذَا الْكَبَرُ
فَلَمَّا أَفَلَتْ قَالَ يُقَوْمُ إِنِّي بَرِيءٌ مِمَّا تُشْرِكُونَ ④⑦

注 30 神の預言者は實際、神の声を通す喇叭であり、又その音は、神の教えの幅広い普及と彼の人々の人生の中に彼によってもたらされるべき大なる革命の集徴である。

この節は、聖なる預言者の教えが世界に幅広く発表され受け入れられ、そしてイスラム教が勝利を得、支配をする時、それから神の(王)国はこの世にはっきり示される様に確立し、そしてその日、偶像は粉々に破壊される事となるのである。

注 31 旧約聖書には、アブラハムの父の名は、テラとして与えられており(創世記 11 章 26 節)新約聖書では(ルカ 3 章 34 節)、サラとなっている。タルムードは、ルカと一致している。従ってキリスト教の著述家達は、クルアーンでアブラハムの父をアザル名で呼ぶ事に関して異議を唱える道理はないはずである。

注 32 この節は、神がアブラハムに、天地万物で働く自然のおきてと、全てにゆきわたっている神の力と支配への知識と洞察力を授けた事を述べている。

注 33 77 節から 79 節までは、アブラハムがその偶像崇拜者達に呈示した。彼らの太陽、月、そして星の数々は、そのまま彼らが崇拜する神(の数)である(Jew Enc.)という彼らの信心のバカバカしさを論じている。

しかしこれらの節から、アブラハム自身が暗中模索し自分の神が誰であるかを知らず、そして夜の星、月、

80. 我は天地を創造せる主の方に我が顔を向け奉る。我は常に神に耳を傾け奉る。我は多神教徒の類いに非ず」と。

إِنِّي وَجَّهْتُ وَجْهِيَ لِلَّذِي فَطَرَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ حَنِيفًا وَمَا أَنَا مِنَ الْمُشْرِكِينَ ﴿٨٠﴾

81. されど彼の民は、彼に異存を唱えたり。そこで彼は、「お前たち、我を正しく導きたるアッラーについて、我と議論するつもりか？主が何事を欲すに非ずば、我はお前たちが主と併せ祀るものを怖れず。主はその知識の中に、すべてを包含し給う。お前たちまだ悟らざるか？

وَحَاجَّتُهُ قَوْمُهُ قَالُوا اتَّخَذُونِي فِي اللَّهِ وَكَذَّبْ هَذِينَ وَلَا أَخَافُ مَا تُشْرِكُونَ بِهِ إِلَّا أَن يَشَاءَ رَبِّي شَيْئًا وَسِعَ رَبِّي كُلَّ شَيْءٍ عِلْمًا أَفَلَا تَتَذَكَّرُونَ ﴿٨١﴾

82. 我あんぞお前たちが神と併せ祀るものを怖れんや。お前たちはアッラーより如何なる権限も授けられざるに、怖れ気もなく、アッラーに偶像を併せ祀る」と云えり。さて、両者のどちらがより安泰なり得べきか、お前たちにもわかる筈なり。

وَكَيْفَ أَخَافُ مَا أَشْرَكْتُمْ وَلَا تَخَافُونَ أَنَّكُمْ أَشْرَكْتُم بِاللَّهِ مَا لَمْ يُنَزَّلْ بِهِ عَلَيْكُمْ سُلْطَانًا فَأَنَّى الْفَارِيقِينَ أَتَقُولُونَ بِالْأَمْنِ إِن كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٨٢﴾

83. 信徒であり、その信仰を不義と混同せざる者、彼等こそは平安であり、正しく導かれる者なり。

الَّذِينَ آمَنُوا وَلَمْ يَلْبِسُوا إِيمَانَهُمْ بِظُلْمٍ أُولَٰئِكَ لَهُمُ الْأَمْنُ وَهُمْ مُهْتَدُونَ ﴿٨٣﴾

第十項

84. これが、アブラハムに与えてその民に抗せしめたるわれらの論旨なり。われらは嘉す

وَتِلْكَ حُجَّتُنَا آتَيْنَاهَا إِبْرَاهِيمَ عَلَى قَوْمِهِ طَرَفُ

そして太陽を次から次へと神にして迎え、そしてそれぞれが各々の見方に向かった時、彼らの神威への信心をあきらめ、天地の創造者である唯一の神に向きなかつた、と推定するのは間違ひである。

事実、この一節は、アブラハムがこういう天体を神とみなしたどころか、彼の人々に彼らの信心の空しさを一步一步証明しようと努めたことを示すため、色々な面から論じられているのである。75-76 節は、アブラハムが唯一の神の断固たる信者であった事を表している。彼は、従って、暗中模索していたり、一つの神から又違う神へとさまよつたとみなされる事などあり得ない。

「これが私の神であろうか」という言葉は、星を崇拝する人に対する反論である。彼は、彼の人々の星が彼らの神であるという信仰をあばくためにこれらの言葉を述べたのである。その上に彼は、星が沈んでしまうものである事をもう知っていた。従って彼の「私は沈んでしまわないものが好きである」という言葉に含まれた議論は既に彼の中には存在していたにちがいない。実際には、彼は自分の議論を最も効果的な形で使いたかつた。

従って、彼は最初に星が自分の神であると仮定して、そしてそれが消えた時、「私は沈んでしまわない物を好む。」と急いで宣言した。

月と太陽の沈む事に関しても同様であつた。太陽の場合は、彼は彼の人々の愚かさをあざけるために、「より偉大な」又は「最も偉大な」という言葉を皮肉に使つた。これは、彼がとり入れた議論のひとくぐりによって、アブラハムが徐々に神へ彼の人々を引くつもりであつた事を示す。

80-82 節に、ざつと日を通すだけで、アブラハムが神に断固たる信仰のみを持っていただけでなく、神の特質に関する深い知識も持っていた事は、非常に明白である。

る者は誰であれ位階を高む。げに汝の主は賢哲にして、すべてを知り給う。(注34)

85. またわれらは、彼にイサクとヤコブを与え、それぞれ正しく導きたり。またこれより前に、われらはノアを導きたり。アブラハムの子孫では、ダビデ、ソロモン、ヨブ、ヨセフ、モーゼ、アロンを導きたり。われらはかくの如く善行に励む人々を報奨す。(注35)

86. またわれらは、ザカリヤ、ヨハネ、イエス、並びにイリアスを導きたり。皆それぞれ高潔な者なりき。

87. またわれらは、イスマイル、エリヤ、ヨナ、並びにロトを導き、その各々を世に秀でた者となせり。

88. またわれらは、彼等の父祖、子孫、兄弟の中から、或る者たちを選びて正しい道へと導きたり。

89. こはアッラーの嚮導なり。アッラーは己が僕らの中から、嘉する者を導き給う。されど彼等もしアッラー以外のものを崇拜しなば、彼等の所業はすべて無益なものに帰すべし。

دَرَجَاتٍ مِّنْ نَّشَأٍ إِنَّ رَبَّكَ حَكِيمٌ عَلِيمٌ ﴿٣٤﴾

وَوَهَبْنَا لَهُ إِسْحَاقَ وَيَعْقُوبَ كُلًّا هَدَيْنَا وَنُوحًا هَدَيْنَا مِنْ قَبْلُ وَمِنْ ذُرِّيَّتِهِ دَاوُدَ وَسُلَيْمَانَ وَيُوسُفَ وَمُوسَى وَهَارُونَ وَكَذَلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ﴿٣٥﴾

وَذَكَرْنَا وَيْحَىٰ وَعِيسَىٰ وَإِلْيَاسَ كُلٌّ مِّنَ الصَّالِحِينَ ﴿٣٦﴾

وَإِسْمَاعِيلَ وَإِلْيَاسَ وَيُوسُفَ وَلُوطًا وَكُلًّا فَضَّلْنَا عَلَى الْعَالَمِينَ ﴿٣٧﴾

وَمِنَ آبَائِهِمْ ذُرِّيَّتِهِمْ وَإِخْوَانِهِمْ وَاجْتَبَيْنَاهُمْ وَهَدَيْنَاهُمْ إِلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿٣٨﴾

ذَلِكَ هُدَى اللَّهِ يَهْدِي بِهِ مَن يَشَاءُ مِنْ عِبَادِهِ وَلَوْ أَشْرَكُوا لَحِطَّ عَنْهُمْ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٣٩﴾

注34 この節は、アブラハムが彼の主として次から次へと天体を選び、徐々に神への信仰を持ち始めたのか、それともこういった天体を神々として崇拜することによって彼の人々の誤りを証明しようと努めることに用いた、巧みで漸進的な論証で、あるかの問題を明白に解決する。

この節はアブラハムが最初から唯一の神への明らかな、確固とした信念を、もっていた事を表し、そして太陽や月等に関して彼が言った事は、神が彼に教えた論証の一部であった。

注35 アッユーブもしくはヨブはヨブ記の主要人物である。彼は聖書の中でウジ地に住んでいると述べられている。

専門学者の中には、これはイドウミア又はアラビア地方であるという者達がいる。又他には、メソポタミアを彼の出生地として定めている者達もいる。

ウジはどうかやどこかアラビアの北にあったようである。イスラエル人のエジプトからの脱出以前にヨブはその地に住んでいたと言われている。

彼は、従って、モーゼよりも前に生まれており、又一部ではモーゼより約20年前にも預言者としての使命を受けた、モーゼの同国人であると言われている。

90. われらが經典と統治權と預言の資格を授けし人々は、これ等の者なり。されど彼等がもしその恩顧に背かば、われらは忘恩に非ざる人々に之を委ぬべし。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ آتَيْنَاهُمُ الْكِتَابَ وَالْحُكْمَ وَالنُّبُوَّةَ
فَإِنْ يَكْفُرْ بِهَا هَٰؤُلَاءِ فَقَدْ وَكَلْنَا بِهَا قَوْمًا لَّيْسُوا
بِهَا بِكَافِرِينَ ﴿٩٠﴾

91. これ等の者はアッラーに導かれたる者なれば、汝は彼等の嚮導に従え。云え、「我はこのために如何なる報酬もお前たちに求めず。こはただ全人類への訓戒なり」と。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ هَدَى اللَّهُ فَبِهِدِّمُمْ أَفْتَدِيهِ قُلْ لَا
أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ أَجْرًا إِنْ هُوَ إِلَّا ذِكْرٌ لِلْعَالَمِينَ ﴿٩١﴾

第十一項

92. 「アッラーは如何なる人間にも何一つ啓示せず」(注36)と云う者どもがいるが、彼等はアッラーの力を正しく測れる者に非ず。云え、「光明と嚮導として、モーゼが人々のためにもたらせる經典は、誰が啓示したるや—お前たちはそれを紙に書き、そのいくらかを見せて、大部分は隠蔽するも、お前たちもお前たちの祖先も知らざりしことをそれによって教えられたるに非ずや?」と。云え、「アッラーなり」と。その後は彼等を放置して、空論にふけらしめよ。(注37)

وَمَا قَدَرُوا اللَّهَ حَقَّ قَدْرِهِ إِذْ قَالُوا مَا أَنزَلَ اللَّهُ
عَلَيْ بَشَرٍ مِّن شَيْءٍ قُلْ مَن أَنزَلَ الْكِتَابَ الَّذِي جَاءَ
بِهِ مُوسَى نُورًا وَهُدًى لِّلنَّاسِ يَجْعَلُونَهُ قُرْآنًا
يُمَدِّدُونَهَا وَيُحْفَوْنَ كَثِيرًا وَعَلَّمْنَاهُمَا لَمْ نَعْلَمَوْا
أَنْتُمْ وَلَا آبَاؤُكُمْ قُلِ اللَّهُ ثُمَّ ذَرْهُمْ فِي خَوْضِهِمْ
يَلْعَبُونَ ﴿٩٢﴾

93. こはわれらが啓示せる祝福せられたる經典にして、以前に降されたるものを満たし、また汝をして諸邑の母並びにその周囲の人々に警告せしめんがために降されたるものなり。されば来世を信ずる人々は之を信じ、厳しく礼拝を遵守す。

وَهَٰذَا كِتَابٌ أَنزَلْنَاهُ مُبْرَكٌ مُّصَدِّقٌ لِّ الَّذِي بَيْنَ
يَدَيْهِ وَلِتُنذِرَ أُمَّ الْقُرَىٰ وَمَنْ حَوْلَهَا وَالَّذِينَ
يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ يُؤْمِنُونَ بِهِ وَهُمْ عَلَىٰ صَلَاتِهِمْ
يُقِيمُونَ ﴿٩٣﴾

彼はイスラエル人ではなく、ヤコブの兄のエサウの系統を引いていた。彼は、非常に変化に富んだ生涯を送り、神に多様な方法で「ためされた」。しかし彼は最も信義に厚く公正である事を立証し、非常な迷境においても忍耐強くしっかりとしていた為、彼は忍耐の Handbook として、今なお人類の記憶にとどめられている (Jewish Enc. 及び Enc. of Islam)。

注36 この言葉は「もしクルアーンが神によって啓示されたのでないならば、一体誰がそのなかに、あなたやそしてあなたの祖先のどちらにも知られていないそのような賢明で広い教え—その教えを生ずる事はあなたの力をはるかに越えているか—を具体的に表現したというのか。神のみがその様な教えを下すことができるのである。」という事を意味している。

注37 ユダヤ人達は、モーゼの五書のある箇所を明らかにし、聖なる預言者の出現に関する預言とおつげを含む他の箇所を隠しておいた事をここで非難されている。

94. アッラーについて虚偽を捏造し、また啓示を受けずして「我は啓示を受けたり」などと云う者、また「我はアッラーが降せるものと類似なものを降して見せん」などと云う者、これ以上の性悪な不義者であろうか？あの不義者どもが死の苦痛にもたえる最中、天使たちが手をさし伸べて「お前たちの魂を渡せ。アッラーについて虚偽を述べたて、尊大にもその神兆から顔をそむけたる報いとして、今お前たちは屈辱的な懲罰に処せらるべし」と云う有様を、汝が見るを得なば。

95. 今お前たちは、われらがお前たちに授けしものはすべて背後に残し、最初われらが創れる如く、一人ずつわれらの前に来たる。われらは、お前たちが神の仲間なりと主張せる仲介者どもがお前たちと一緒にるを見ず。今お前たちの間の絆は断たれ、お前たちが主張せるものがお前たちを見捨てたり。

第十二項

96. 穀粒や棗椰子の種に芽ばえさせる者は、アッラーなり。彼は死より生をもたらし、また生けるものに死を与える者なり。これがアッラーなり。しかるにお前たち、何故に背き去るのか？（注38）
97. 彼は曙を出現させ、休息のために夜を設け、（注39）また時を計るために太陽と月とを設けたり。こは偉大にして賢哲なる彼の処置なり。（注40）

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرَى عَلَى اللَّهِ كَذِبًا أَوْ قَالَ أُوحِيَ إِلَيَّ وَلَمْ يُوحَ إِلَيْهِ شَيْءٌ وَمَنْ قَالَ سَأُنْزِلُ مِثْلَ مَا أَنْزَلَ اللَّهُ وَلَوْ تَرَى إِذِ الظَّالِمُونَ فِي غَمَرَاتِ الْمَوْتِ وَالْمَلَائِكَةُ بَاسِطُوا أَيْدِيهِمْ أَخْرِجُوا أَنْفُسَكُمُ الْيَوْمَ تُجْزَوْنَ عَذَابَ الْهُونِ بِمَا كُنْتُمْ تَقُولُونَ عَلَى اللَّهِ غَيْرَ الْحَقِّ وَكُنْتُمْ عَنْ آيَاتِهِ تَسْكِبُونَ ﴿٩٤﴾

وَلَقَدْ جِئْتُمُونَا فِرَادَى كَمَا خَلَقْنَاكُمْ أَوَّلَ مَرَّةٍ وَتَرَكْتُمْ مَا خَوَّلْنَاكُمْ وَرَاءَ ظُهُورِكُمْ وَمَا نَرَى مَعَكُمْ شُفَعَاءَكُمُ الَّذِينَ زَعَمْتُمْ أَنَّهُمْ فِيكُمْ شُرَكَاءَ ۚ لَقَدْ تَقَطَّعَ بَيْنَكُمْ وَوَصَّلَ عَنْكُمْ مَا كُنْتُمْ تَزْعُمُونَ ﴿٩٥﴾

إِنَّ اللَّهَ فَالِقُ الْحَبِّ وَالنَّوَى يُخْرِجُ الْحَيَّ مِنَ الْمَيِّتِ وَمُخْرِجُ الْمَيِّتِ مِنَ الْحَيِّ ذَلِكُمُ اللَّهُ فَالِقُ تُوَفِّكُونَ ﴿٩٦﴾

فَالِقُ الْإِصْبَاحِ وَجَعَلَ اللَّيْلَ سَكَنًا وَالشَّمْسَ وَالْقَمَرَ حُسْبَانًا ۚ ذَلِكُمْ تَقْدِيرُ الْعَزِيزِ الْعَلِيمِ ﴿٩٧﴾

注38 草木が芽を出す、もとなるその種にここでは注意がむけられている。種自体は、ほんのとり足らないものであるのに、成長し、大木になるのである事に注意がむけられている

同様に、種の様に人間は、神の啓示を受け入れる者、そして神の大きな特質を反映するものとして成長する事が可能なのである。

注39 ちょうど、人が口中働いて疲れて夜眠り元気を回復するのと同様に、聖なる預言者がその姿を現した人々は、長い休息の夜をおくっていたが、彼らの機能はまた活気をとれどし、精神的エネルギーに満ちあふれる所となり、預言者の導きのもとに精神的発展の頂上を極めていく（登っていく）のに著しくふさわしい状態になったのである。

注40 ちょうど自然界で、時間の計測と光の源として太陽と月が欠くことのできないものである様に、精神の世界では、神の預言者は絶対必要なものである。

98. また彼は、お前たちのために星辰^{せいしん}を設け、
陸でも海でも暗闇の中を行くときの道しる
べとなせり。われらは思慮ある人々に神兆^{しんし}
を詳述せり。(注41)

وَهُوَ الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ النُّجُومَ لِتَهْتَدُوا بِهَا فِي
طُلُوعِ الْبَرِّ وَالْبَحْرِ قَدْ فَضَّلْنَا الْآيَاتِ لِقَوْمٍ
يَفْقَهُونَ ٩٨

99. また彼は、一人の人間よりお前たちを作り
出し、住居と宿るところを与えたり。われ
らは理解し得る人々に神兆^{しんし}を詳述せり。(注
42)

وَهُوَ الَّذِي أَنشَأَ لَكُم مِّنْ نَّفْسٍ وَاحِدَةٍ مِّنْ نَّفْسِهِ
وَمُتَوَدِّعٌ قَدْ فَضَّلْنَا الْآيَاتِ لِقَوْمٍ يَفْقَهُونَ ٩٩

100. 雨を雲より降らせるのもまた彼なり。わ
れらはその水でよろずの草木に芽をふか
せ、次いでその芽から青葉を出させ、而し
て鈴なりの穀粒を実らしむ。また椰子^{なつのやし}の
茎衣^{はかま}から枝もたわわに房なす椰子の実を垂
らしむ。またわれらは、葡萄園^{ぶどうえん}とともに、
橄欖^{かんらん}、柰^{ざくろ}など—似たものもあれば、似ざ
るものもあり、を育成す。その果物に実が
なり、それが熟するを見よ。げにこの中に
は、信ずる人々へのさまざまなる神兆^{しんし}あり。
(注43)

وَهُوَ الَّذِي أَنزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَأَخْرَجْنَا بِهِ
نَبَاتَ كُلِّ شَيْءٍ فَأَخْرَجْنَا مِنْهُ خَضِرًا نُّخْرِجُ مِنْهُ
حَبًّا مُّتَرَاكِبًا وَمِنَ النَّخْلِ مِن طَلْعِهَا قَوَاقِدٌ دَانِيَةٌ
وَجَعَلْنَا مِنَ الْأَعْنَابِ زَيْتُونَ وَالزَّيْتُونَ مُسْتَشْبِهًا
وَغَيْرَ مُتَشَابِهٍ انظُرُوا إِلَى ثَمَرِهِ إِذَا أَثْمَرَ وَيَنْعِهِ
إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِّقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ١٠٠

注41 夜の闇の中で旅行者を導く星の様に、神と神学者達は、精神的な闇の中を手探りしながら、過ちをおかしている人々に導きを与える。

注42 この節は、神が「1つの魂」から人間を増やした時に、意図なしに行ったはずはない事を示している。神が人類を創り、増やした大いなる目的は、神は彼らにこの世の住人となる期間だけでなく、さらに正しい人は、自らの主に対面できる死の向こうにある永遠の命を約束された—それは、神の使いの導きのもとのみ昇っている、実に高尚な目標なのである。

注43 啓示はここでは、雨水にたとえられており、この節は、啓示は実際に天恵であるならば、何故、預言者が出現すると必ず不和や争いが起るのかという疑問に答えている。ちょうど雨降りのあとに大地の内に隠れて眠っている種に応じて、善きも悪きあらゆる種類の草木がはえるのと、同様に、預言者の出現により、それまで混ざりあった状態であった人間は、善と悪に分けられる。「似たものもあれば、似ざるものもあり」という言葉はしかるに、似かよっている果物もあれば全く異なる果物もある事を意味している。

これは、種類を異にして、ある点では似かよっており、又他の点では似ていない果物と、同種のもので、主たる点では似通っているが、大して重要でない細部においては、どちらかの方が甘みが強かったりどちらかの方が色や大きさに多様性があったりという風に似ていないという果物のどちらの場合においても適用され得る。預言者を受け入れ神の導きに従うような人々の場合はこれと同様である。しかるにある点ではお互いに非常に類似点を持ち、又他の点では異なり、あるものは他よりも道德的に、かつ精神的により進歩している。又同じ様に、あるものは精神的成長の1つの段階においてより進歩しており、他のものは違う所でより進歩している。彼らは、精神的完成の違った段階に到達し、それぞれの生まれながらの能力や性質により、異なった特性を作り出す。「その熟すこと」という言葉は、果物が成熟することの類似に当てはまる。ちょうどまだ熟していない見本で果物の評価をするのが不公平であるのと同様に、信仰者の中にはまだ精神的発達過程である完成の域に到達していないから天啓の結果の欠点を捜すのは不公平である。

101. 彼等は妖壺を、アッラーが創りたるにもかかわらず、アッラーの同位者と見なす。そればかりか、知識もなしに、妄りにアッラーに息子たちや娘たちがありとなす。聖なるかなアッラー、彼は彼等が彼に在りとするものの上に超在す！(注44)

第十三項

102. 天地の創始者よ、彼は一切を創造し、あらゆることを知り給い、配偶者も持たずして、安んぞ子を持ち得んや(注45)?

103. それがお前たちの主アッラーなり。彼の外に神なし。万物の創造者なり。されば彼を崇拜せよ。彼は一切を監視す。

104. 衆目は彼を見ず、されど彼は衆目を見る。彼は靈妙にして、一切を知悉し給う。(注46)

105. げに証拠が、すでに主よりお前たちに降り。されば、眼をあけて見る者は(注47)己がために幸いし、眼を閉ざす者(注48)は己れを損なう。而して我はお前たちの監視者に非ず。(注49)

وَجَعَلُوا لِلَّهِ شُرَكَاءَ الْجِنَّ وَخَلَقَهُمْ وَخَرَقُوا لَهُ بَنِينَ وَبَنَاتٍ بِغَيْرِ عِلْمٍ سُبْحَنَهُ وَتَعَالَى عَمَّا يُصِفُونَ ﴿١٣﴾

بَدِيعُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ أَنَّى يَكُونُ لَهُ وَلَدٌ وَلَمْ تَكُنْ لَهُ صَاحِبَةٌ وَخَلَقَ كُلَّ شَيْءٍ وَهُوَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿١٤﴾

ذِكْرُ اللَّهِ رَبِّكُمْ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ خَالِقُ كُلِّ شَيْءٍ فَاعْبُدُوهُ وَهُوَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ وَكِيلٌ ﴿١٥﴾

لَا تُدْرِكُهُ الْأَبْصَارُ وَهُوَ يُدْرِكُ الْأَبْصَارَ وَهُوَ اللَّطِيفُ الْخَبِيرُ ﴿١٦﴾

فَدَجَّاءُكُمْ بَصَائِرُ مِنْ رَبِّكُمْ فَمَنْ أَبْصَرَ فَلِنَفْسِهِ وَمَنْ عَمِيَ فَعَلَيْهَا وَمَا أَنَا عَلَيْكُمْ بِخَفِيظٍ ﴿١٧﴾

注44 ジンは、一般の人達から隠れた、又は離れたままでいるそんな存在である。この節は、人間が、神の啓示を拒絶し自らの判断と理屈に従ったり、ジンと天使達を神の協同者と関連づけて考えたり神が息子や娘をものと考えたりするのはあやまりであることを示している。

注45 人は妻をもつことにより息子を、持つ事ができる。神には妻がないので、むすこはもてない。さらに、神は全ての創造者であり、完全な知恵を持つので援助したり跡を継いだりするのための息子が必要としない。

注46 この節は、神の啓示の援助なく、人間の思慮のみでは、神を理解する事はできない事を表しており、神は肉眼では見られないが、彼の預言者達を通して、又は彼の美德の働きを通して、自らの姿を人間の前に明らかにされる。神はさらに心の眼で知覚する事ができる。

注47 道理をうまく利用する事。

注48 真理に目をつむるため盲目も同然である。

注49 神の預言者の義務は、神が彼に明らかにする事を伝達する事に限られている。人々にそれを受け入れる様強要する事は彼の関与すべきことではない。

付随的に、この節はイスラム教は、その教えの普及のための「力」の使用を奨励又は黙認するという問責への反駁となっている。

106. かくの如く、われらが多くの神兆^{しるし}をさまざまなる方法で説明するは、彼等に「汝は深く学べり」と云わしめさせ、また知識ある人々に神兆^{しるし}を明瞭ならしめんがためなり。

107. 主より汝に啓示されたるものに従え。彼の外に神なし。偶像崇拜者を避けよ。

وَكَذَلِكَ نَصْرِفُ الْأَيَاتِ وَلِيَقُولُوا دَرَسْتَ وَلِنُبَيِّنَهُ لِقَوْمٍ يَعْلَمُونَ ﴿١٠٦﴾

إِتَّبِعْ مَا أَوْحَىٰ إِلَيْكَ مِنْ رَبِّكَ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ وَأَعْرِضْ عَنِ الشُّرَكِيِّنَ ﴿١٠٧﴾

108. もしアッラーが欲したりせば、彼等とてアッラーに他^{あだしがみ}神を配したりはせじ。(注50)ともあれ、われらは汝を彼等の監視者に任命せるに非ざれば、汝も彼等に対して責めを負うことなし。(注51)

وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا أَشْرَكُوا وَمَا جَعَلْنَاكَ عَلَيْهِمْ حَفِيظًا وَمَا أَنتَ عَلَيْهِمْ بِوَكِيلٍ ﴿١٠٨﴾

109. 彼等がアッラー以外に崇拜するもの^{ののし}を罵るなかれ。(注52)彼等は無知ゆえに、恨みから、アッラー^{ののし}を罵るやも知れぬ。かくの如くして、われらはどの民族にも己^{しか}が行為を公正なものとと思わしめたり。而して彼等の帰所はその主の許なり。その時主は、彼等に向ってそのなせることを告げ知らせん。(注53)

وَلَا تَسُبُّوا الَّذِينَ يَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ فَيَسُبُّوا اللَّهَ عَدْوًا بِغَيْرِ عِلْمٍ كَذَلِكَ زَيْنًا لِكُلِّ أُمَّةٍ عَمَلُهُمْ ثُمَّ إِلَىٰ رَبِّهِمْ مَرْجِعُهُمْ فَيُنَبِّئُهُمْ بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٠٩﴾

110 彼等はいとも厳かにアッラーにかけて誓い、もし我等に神兆^{しるし}が降るなら、之を必ず信ずと云えり。云え、「神兆^{しるし}はすべてアッラーの掌中にあり。されど、神兆^{しるし}が降ると

وَأَقْسَمُوا بِاللَّهِ جَهْدَ أَيْمَانِهِمْ لَنِ جَاءَهُمْ نَبَأٌ وَإِنَّ إِلَهُنَّ الْأَلِيتُ عِنْدَ اللَّهِ وَمَا يُشْعُرُونَ ﴿١١٠﴾

注50 神は、その無限の知恵の内に、人間を自由な行為者とされた。もし神が少しでも人々を強要しようとしたならば、彼は確かに真理に従う様強要していただろう。しかし、人間自身のために神は強制する事に満足を見えられなかったのである。

注51 クルアーンの中で聖なる預言者の呼び名として使われている“守護者”“番人”又は、“色々な事柄の処置者”という言葉は、彼が他の人々の行動に責任は持たないという事を意味するために使われている。

注52 この節では、偶像崇拜者達の感情でさえも尊重する事を説き聞かせるだけでなく、さらに、異なった国や社会の間に親睦を作り出す事への希望も示されている。

注53 これは、ある特定の動作をする事に固執する時、人はそれに好意を抱く様になり、その動作は自分の見解では良く見える様になるというような人間の本質（そして、この神のおきてに人間の全般にわたる進歩の秘密が隠されている）を神がつくり出された事を意味するのみである。この一般的な神のおきてに従って、偶像崇拜者達は自分達には良く、価値のあるものに思われる、偶像を崇拜するという行為を好むようになるのである。

も彼等は之^{これ}を信じざるべきことを、如何にお前たちにわからしめようぞ?」と。(注54)

111. われらは、彼等が最初に之^{これ}を信ぜざりし時の如く、彼等の心と目を混乱せしめ、罪を犯すままにして迷誤の中に彼等をさまよわせしむべし。(注55)

第十四項

112. たといわれらが彼等に諸天使を遣わし、死者が彼等に語りかけ、また万物を彼等の面前に集むるとも、アッラーが欲せざれば、彼等は決して信ぜざるべし。されど彼等の多くは無知なり。(注56)

113. われらはどの預言者にも或る敵^{ほり}を設けたり。すなわち人間や妖霊の中の邪悪なる者どもなり。彼等は互に欺き合うために華美な談論を交わす—もし主が欲したりせば、彼等もそれをせざりしものを。されば虚言をもてあそぶままに、彼等を捨て置き(注57)

أَنهَآ إِذَا جَاءَتْ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿١١﴾

وَنُقَلِّبُ أَفْئِدَتَهُمْ وَأَبْصَارَهُمْ كَمَا لَمْ يُؤْمِنُوا بِهِ أَوَّلَ مَرَّةٍ وَنَذَرُهُمْ فِي طُغْيَانِهِمْ يَعْمَهُونَ ﴿١٢﴾

13
ع
19
ج
20

وَلَوْ أَنَّا نَزَّلْنَاهُ إِلَيْهِمُ الْمَلَكَةَ وَكَلَّمَهُمُ الْمَوْتَى وَحَشَرْنَا عَلَيْهِمْ كُلَّ شَيْءٍ قُبُلًا مَا كَانُوا إِلَّا أَعْيُنًا عَلَى اللَّهِ وَبَشَارَةً لَّعَنَهُ لَكِنَّ أَكْثَرَهُمْ يَجْهَلُونَ ﴿١٣﴾

وَكَذَلِكَ جَعَلْنَا لِكُلِّ نَبِيٍّ عَدُوًّا وَاشَّيْطَانُ الْإِنْسِ وَالْجِنِّ يُوحِي بَعْضُهُمْ إِلَى بَعْضٍ زُخْرُفَ الْقَوْلِ غُرُورًا وَلَوْ شَاءَ رَبُّكَ مَا فَعَلُوهُ نَذَرُهُمْ وَمَا يَفْقَهُونَ ﴿١٤﴾

注54 聖句で与えられている内容以外に、節の後半部は、以下の様に表現する事ができる。それは、おつげはアッラーとともにある、そしてさらに彼らは信じないだろうが、いつそのおつげが来るか知らしめるそのものもアッラーと共にある。

注55 神が忘れずに心に留めておられる過去の不信仰者達の行為は、彼らが偶像崇拜的な礼拝をあきらめない限り、たとえおつげがあつてからでも真理を受け入れる邪魔となるであろうの意。

注56 天使の役目の一つは、人間によい考えを提案し、真理へ導くことである(4章32、33節)。時には、彼らはこれらの役目を夢や幻を通して果たす。もう死んでいる正しい人々は、預言者の言い分を立証するために人々の夢の中に現われる。死んだ者が人と話すにはもう一つの方法がある。精神的に死んでしまっている人が彼らの預言者の教えにより、新しい精神的生活に促されると、彼らの精神的復活は、言わば、不信仰者達に呼びかけ、その主張の真理を立証する事となる。

ここでの言葉は、地震、疫病、飢饉、戦争そして他の災いの形で、預言者の真理に対する証拠となっている。自然界の種々の事柄の考証なのである。このように自然そのものが、不信仰者に対し怒りをもっている様に見える。まさにその自然力は彼らに対し反旗を翻しているのである。

注57 「人間やジン」という言葉は、クルアーンの多くの節に登場するが、これは神の創造物の2つの異なった種族ではなく、人間の内の2つの部類を示す；「人間」は大衆又は一般の人々を示し「ジン」は、しばしば一般の人々から遠ざかったままでおり、混ざろうとせず、公衆の熟視から隠れたままでいるも同然の尊大な人々を表わす。

114. そは来世を信ぜざる者の心をそれに傾かしめ、それで喜ばしめ、今稼いでいるものをいつまでも稼がせるためなり。(注 58)

وَلِتَصْغَرُ إِلَيْهِ أَفْئِدَةُ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ وَلِيَرْضَوْهُ وَلِيَقْتَرِفُوا مَا هُمْ مُقْتَرِفُونَ ﴿٥٨﴾

115. 我豈アッラー以外に審判を求むべけんや。明白に説かれたる經典をお前たちに降したるはアッラーなり。われらが經典を与えたる者は、それが真理を以て主より降されたることを知る。されば汝、疑う徒輩の仲間となるなかれ。(注 59)

أَفَغَيْرَ اللَّهِ أَبْتَغِي حَكْمًا وَهُوَ الَّذِي أَنْزَلَ إِلَيْكُمُ الْكِتَابَ مُفَصَّلًا وَالَّذِينَ آتَيْنَهُمُ الْكِتَابَ يَعْلَمُونَ أَنَّهُ مُنْزَلٌ مِنْ رَبِّكَ بِالْحَقِّ فَلَا تَكُونَنَّ مِنَ الْمُمْتَرِينَ ﴿٥٩﴾

116. 主の御言葉は、真実と公正とにおいて缺くところなし。(注 60) 何人もその御言葉を変えるを得ず。彼はすべてを聴き、すべてを知り給う。(注 61)

وَتَمَّتْ كَلِمَتُ رَبِّكَ صِدْقًا وَعَدْلًا لَا مُبَدِّلَ لِكَلِمَاتِهِ وَهُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿٦٠﴾

117. 汝もし地上の多数の者に従わば、彼等は汝をアッラーの道から迷わしめん。彼等はただ臆測にまかせて、虚言をこととするにすぎず。

وَأِنْ تَطِعْ أَكْثَرَ مَنْ فِي الْأَرْضِ يُضِلُّوكَ عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ إِنْ يَتَّبِعُونَ إِلَّا الظَّنَّ وَإِنْ هُمْ إِلَّا يَخْرُصُونَ ﴿٦١﴾

118. げに汝の主は、彼の道から迷い去る者を一番よく知り、また正しく導かれている者を一番よく知り給う。(注 62)

إِنَّ رَبَّكَ هُوَ أَعْلَمُ مَنْ يَضِلُّ عَنْ سَبِيلِهِ وَهُوَ أَعْلَمُ بِالْمُهْتَدِينَ ﴿٦٢﴾

注 58 彼らは自分達の邪悪な道を持続するという事である。この言葉はさらに、彼らが自分達が、得たものの結果を経験する事も意味する。

注 59 「經典」とは、クルアーンの事をも意味している。なぜならば、前の神の聖典（聖書など）のみでなく、クルアーンそのものも聖なる預言者の真理に対する証明となっているからである。クルアーンは、近來の見解と信仰に反するにもかかわらず、クルアーンにこういう教えが詳細に物語られ、説明される対象となる公正な心をもつ人々は、その教えの正当性を認めざるを得ないような内容を包括しているのである。

注 60 メッカが陥落した時、聖なる預言者が、その頃偶像であふれていたカーバに入り、偶像をあとからあとから杖でなぐり、まさしくこの預言の「王の御言葉と真実と公正とにおいて缺くところなし」という言葉を唱えた。このように、メッカの陥落によって神の言葉は実際に満たされたという事実がここでは暗に意味されている。

注 61 神の預言、又は神の律法が神の預言者達の利益の為に働く方法或いは手段。

注 62 信仰に關しては、何が正しいか誤っているかの審判として受け入れられるのは、多数派と、少数派のどちらでもない。神のみが「絶対的に確実な審判」である。神は天のおつげを見せ、真理の道を追い求める集団を助けることによって己れの審判を下す。

119. お前たちアッラーの神兆^{しるし}を信じなば、アッラーの御名^{御名}がその上に唱えられたるものを食せよ。(注 63)

120. お前たち何故にアッラーの御名^{御名}がその上に唱えられたるものを食わざるか—強いられたる場合を除いて、アッラーはお前たちに食うべからざるものをすでに明示せるに非ずや? げに多くの人々が知識の不足に因する邪欲から他人を誤り導く。確かに、汝の主は、違犯者を一番よく知り給う。

121. 公然の罪も、内密の罪も之を避けよ。げに罪を積む者は、必ずその犯せる行為に對して応報を受けん。

122. アッラーの御名^{御名}をその上に唱えざるものを食うなかれ。そは歴然たる違犯なり。げに悪魔たちは仲間をそそのかして、お前たちと論争せしめんとす。お前たちもし彼等に従わば、お前たちは多神教徒となるべし(注 64)。

第十五項

123. 死せる者にわれら生を与え、^光而して光明を与えて人々の間を歩かしめたる者と、暗闇の中に在りてそこより出で得ざる者と、同じなりや? かくの如く不信心者どもは、己が行為を正しいものと思わしめられたり。(注 65)

فَكُلُوا مِنَّمَا ذَكَرَ اسْمُ اللَّهِ عَلَيْهِ إِنَّ كُنْتُمْ بِآيَاتِهِ
مُؤْمِنِينَ ﴿١١٩﴾

وَمَا لَكُمْ أَلَّا تَأْكُلُوا مِمَّا ذَكَرَ اسْمُ اللَّهِ عَلَيْهِ وَ
قَدْ فَصَّلَ لَكُمْ مَا حَرَّمَ عَلَيْكُمْ إِلَّا مَا اضْطُرِرْتُمْ
إِلَيْهِ وَإِنْ كَثِيرًا يَافُضُّونَ بِهَا هَوَاهُمْ بِغَيْرِ عِلْمٍ
إِنَّ رَبَّكَ هُوَ أَعْلَمُ بِالْمُعْتَدِينَ ﴿١٢٠﴾

وَذَرُوا ظَاهِرَ الْإِشْمِ وَبَاطِنَهُ إِنَّ الَّذِينَ يَكْسِبُونَ
الْإِثْمَ سَيُجْزَوْنَ بِمَا كَانُوا يَقْتَرِفُونَ ﴿١٢١﴾

وَلَا تَأْكُلُوا مِمَّا لَمْ يَذْكُرْ اسْمُ اللَّهِ عَلَيْهِ وَإِنَّهُ
لَفِسْءٌ وَإِنَّ الشَّيْطَانَ لِيُؤْخَذَ إِلَىٰ أَوْلِيَائِهِمْ
لِيُجَادَّ لَكُمْ وَإِنْ أَطَعْتُمُوهُمْ إِنَّكُمْ لَمُشْرِكُونَ ﴿١٢٢﴾

أَوْ مَنْ كَانَ مِيتًا فَأَحْيَيْنَاهُ وَجَعَلْنَا لَهُ نُورًا
يَمْشِي بِهِ فِي النَّارِ كَمَنْ مَثَلُهُ فِي الظُّلُمَاتِ لَيْسَ
بِمَخْرُجٍ مِنْهَا كَذَلِكَ نُزِّنُ لِلْكَافِرِينَ مَا كَانُوا
يَعْمَلُونَ ﴿١٢٣﴾

注 63 2章 173節と23章 52節において、よい純粋な食物を食すことは、人間の動作と直接に関係を持つことを示す。従って信仰者達は、ここに自分達の信仰を強め、自分達の不純な心を洗い清めるため、純粋で体によい食べ物を食べるようにと、ここに申しつけられている。

注 64 この節は、何故自然に死んだ動物や神の名においての祈りをもって正当に殺された動物でないものを食する事が禁止されているかを説明している。神の名を唱えるのは、動物の殺害によってうみだされがちな無慈悲の影響を取り消し、人間の心に神聖化される効果をうみだす為である。

注 65 前述の節では、人間の手によって作られたおきては、いつも欠陥がある事が指摘されていた。今、この節では、人間の手で作られた教えは、神の教えに對抗できない事が述べられている。人間の思考力のみを助けとして法を考案する者とは、決して出てこれない暗闇の中で手探りで何かを捜し求めている者のようである。

124. またわれらは、それぞれの^{あち}邑の有力者たちを罪人となし、暗闇のような中でむなく策謀せしむ。されど彼等は自ら識らずして、ただ己れに対して策謀するのみ。

وَكَذَلِكَ جَعَلْنَا فِي كُلِّ قَرْيَةٍ آلِدِرْجُومِيهَا لِمَكْرُوا
فِيهَا وَمَا يَنْكُرُونَ إِلَّا بِأَنْفُسِهِمْ وَمَا يَشْعُرُونَ ﴿١٢٤﴾

125. 奇跡が起ると、彼等は云う、「アッラーの使徒たちに賜わりたるものと同じものを我等に賜わるまでは、我等は信ずる気持なし」と。アッラーは誰がその使徒たちにふさわしいかを一番よく知り給う。罪を犯せし者どもは、その策謀せることのために、いずれアッラーの御前で屈辱と厳しい懲罰を受くべし。(注 66)

وَاِذَا جَاءَتْهُمْ آيَةٌ قَالُوا لَنْ نُّؤْمِنَ حَتَّى نُؤْتَىٰ
مِثْلَ مَا أُوتِيَ رُسُلُ اللَّهِ ۗ اللَّهُ أَعْلَمُ حَيْثُ يَجْعَلُ
رِسَالَتَهُ ۗ سَيُصِيبُ الَّذِينَ أَجْرَمُوا صَغَارٌ عِنْدَ
اللَّهِ وَعَذَابٌ شَدِيدٌ بِمَا كَانُوا يَنْكُرُونَ ﴿١٢٥﴾

126. アッラーもし人を導かんとすれば、彼はイスラームのために、その人の胸を拡げ給う。されど迷わしめんとすれば、恰も天に昇れんとする者の如く、その胸を締めせばめ給う。かくの如く、アッラーは信ぜざる者どもの上に罰を課し給う。(注 67)

مَنْ يُرِدِ اللَّهُ أَنْ يَهْدِيَهُ يَشْرَحْ صَدْرَهُ لِلْإِسْلَامِ
وَمَنْ يُرِدْ أَنْ يُضِلَّهُ يَجْعَلْ صَدْرَهُ ضَيِّقًا حَرَجًا
كَاثِمًا يَغْضُغُ فِي السَّمَاءِ ۖ كَذَلِكَ يَجْعَلُ اللَّهُ الْغِيْضَ
عَلَى الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿١٢٦﴾

127. これぞ汝の主の道、御許に真直に導く道なり。われらはこうして、反省する人々のためにさまざまなる神兆を詳細に説明せり。

وَهَذَا صِرَاطُ رَبِّكَ مُسْتَقِيمًا ۚ قَدْ فَضَّلْنَا الْآلِيَّةَ
لِقَوْمٍ يَذَّكَّرُونَ ﴿١٢٧﴾

128. 主の御許に、彼等のための平安な住居あり。而して主は彼等の愛護者なり、彼等のなせる報い故に。

لَهُمْ دَارُ السَّلَامِ عِنْدَ رَبِّهِمْ وَهُوَ وَلِيُّهُمْ بِمَا
كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٢٨﴾

129. 彼等を皆一斉に招集する日、主は云わん、「妖霊の徒輩よ、お前たちは多くの人間を食いものにせり」と。(注 68) 人間の中の

وَيَوْمَ يَحْشُرُهُمْ جَبِيْعًا يَنْخَسِرُ الْجِنَّ قَدِ
اسْتَكْثَرْتُمْ مِنَ الْإِنْسِ وَقَالَ أَوْلِيُوهُمْ مِّنْ

注 66 アッラーの神は、彼の使いとして誰がふさわしく、又誰がふさわしくないか一番よく知っておられる。

注 67 神が迷わそうと欲した者は神のおきてを重荷とみなし、それを実行するのに肉体的な困難と精神的な苦悩を感じる。彼の胸中は、いわば急勾配の丘を登っている人のように切迫していくのである。

注 68 そのアラビア語の言葉のもつ可能性は以下の様である。(1)汝は一般の大衆の中から多くの者達を味方に引き入れ、そばに呼び、汝に従わせるようにした。(2)汝は彼らを食い物にした。(3)汝は大衆に大いなる重要性があるとみなした、すなわち、大衆が汝に従わなくなるのではという恐れから真理を受け入れなかった。

ちょうど弱者が、大いなる者への恐れから真理を受け入れないように、同様に、大いなる者も時にはその信奉者達を恐れ、彼らが彼を置き去りにするのでは、という恐れのために真理を受け入れなかったりするのである。

妖霊の友は云わん、「主よ、我等は相互に利用し合えり。されど今、汝が我等のために定めたる期限が到来せり」と。主は云わん、「業火がお前たちの永劫の住居なり。但し、アッラーが欲すれば、その限りに非ず」と。げに汝の主は賢哲にして、すべてを知り給う。

130. かくの如く、我等は不義者どもを互に親しくせしむ、そのなせる悪事のために。(注 69)

第十六項

131. 「妖霊と人間の徒輩よ、お前たちのところには、お前たちの中より出でし使徒たちが来て、われらの神兆をお前たちに物語り、この日の会見について警告せざりしか？」すると、彼等は云わん、「我等は自らに逆つて証言す」と。要するに現世の生活が彼等を欺けり。彼等は已れに背いて、不信心者なりしことを自ら立証す。

132. 諸使徒が遣わされるのは、主が警告もなしに妄りに諸市府を滅ぼすことなきがためなり。(注 70)

133. 人はすべて、その行為に応じて段階あり。主は彼等のなせることを等閑にせず。

134. 主は自立自足し、慈悲に満ちあふれ給う。彼もし欲しなば、お前たちを追い払い、欲するものをお前たちの継承者たらしむ、恰も別の民の子孫よりお前たちを出現せしめたる如く。

إِلَٰهِسَ رَبَّنَا اسْتَمَعَ بَعْضُنَا بَعْضًا وَبَلَّغْنَا
أَجَلَنَا الَّذِي أَجَلْتَنَا قَالَ النَّارُ مَثْوَاكُمْ
خَالِدِينَ فِيهَا إِلَّا مَا شَاءَ اللَّهُ إِنَّ رَبَّكَ حَكِيمٌ
عَلِيمٌ ﴿١٢٩﴾

وَكَذَٰلِكَ نُؤَيِّنُ بَعْضَ الظَّالِمِينَ بَعْضًا بِمَا كَانُوا
يَكْسِبُونَ ﴿١٣٠﴾

يُعْصِمَ النَّجَىٰ وَالْإِنْسَ أَلَمْ يَأْتِكُمْ رُسُلٌ مِنْكُمْ
يَقْضُونَ عَلَيْكُمْ آيَاتِي وَيُنذِرُونَكُمْ لِقَاءَ يَوْمِكُمْ
هَٰذَا قَالُوا شَهِدْنَا عَلَىٰ أَنْفُسِنَا وَعَازَتْهُمْ الْحَيَاةُ
الدُّنْيَا وَشَهِدُوا عَلَىٰ أَنْفُسِهِمْ أَنَّهُمْ كَانُوا الْكَافِرِينَ ﴿١٣١﴾

ذَٰلِكَ أَنْ لَمْ يَكُنْ رَبُّكَ مُهْلِكَ الْقُرَىٰ بِظُلْمٍ
وَأَهْلُهَا غَافِلُونَ ﴿١٣٢﴾

وَلِكُلِّ دَرَجَةٍ مِمَّا عَمِلُوا وَمَا رَبُّكَ بِغَافِلٍ عَمَّا
يَعْمَلُونَ ﴿١٣٣﴾

وَرَبُّكَ الْغَنِيُّ ذُو الرَّحْمَةِ إِنْ يَشَاءُ يُدْهِبْكُمْ
وَيَسْتَخْلِفْ مِنْ بَعْدِكُمْ مَا يَشَاءُ كَمَا أَنشَأَكُمُ
مِنْ ذُرِّيَةِ قَوْمٍ آخَرِينَ ﴿١٣٤﴾

注 69 この言葉は、そしてこのように邪悪な者のいくらかを他の邪悪なもの達の上におくとの意味を併せもつ。

注 70 神は警告者をたててさし迫った災いに対し、まず最初に人々に警告しない限りは、決して一般的な災難を下されない。災難はここでは、地震、悲惨な戦争、伝染病、等の全ての人を襲う一般的な災害を意味する。

135. お前たちに約束されることは、必ず実現す。されどお前たちは、それを阻止し得ず。

إِنَّ مَا وَعَدُونَنَا لَآتٍ وَمَا أَنْتُمْ بِمُعْجِزِينَ ﴿٦٩﴾

136. 云え、「人々よ、お前たちの仕方で行え。我もまた我が務めを行う。やがてお前たちは、終の報奨の住居が誰れのものとなるかを知らん」と。げに不義な徒輩は決して栄えず。(注 71)

قُلْ يَقَوْمِ اعْمَلُوا عَلَىٰ مَكَانَتِكُمْ إِنِّي عَايِلٌ فَسَوْفَ تَعْلَمُونَ مَنْ تَكُونُ لَهُ عَاقِبَةُ الدَّارِ إِنَّهُ لَا يُفْلِحُ الظَّالِمُونَ ﴿٧٠﴾

137. 彼等はアッラーが創れる穀物や家畜の一部を割いて、「これをアッラーに」と自分勝手にきめこみ、「^{しか}而してこれは我等の偶像神に」などと云う。彼等の偶像神に供えたるものはアッラーに達せず、アッラーに供えたるものは彼等の偶像神に達す。彼等の判断は悪し。(注 72)

وَجَعَلُوا لِلَّهِ مِنَّا ذُرًّا مِّنَ الْحَرْثِ وَالْإِنْعَامِ نَصِيبًا فَقَالُوا هَذَا لِلَّهِ بِزَعْمِهِمْ وَهَذَا لِشُرَكَائِنَا فَمَا كَانَ لِشُرَكَائِهِمْ فَلَا يَصِلُ إِلَى اللَّهِ وَمَا كَانَ لِلَّهِ فَهُوَ يَصِلُ إِلَى شُرَكَائِهِمْ سَاءَ مَا يَحْكُمُونَ ﴿٧١﴾

138. 同様にまた彼等の神々(注 73)は、多くの多神教徒に自分たちの子女を殺すを善しと思わしめたり。こは神々が彼等を滅ぼし、その宗教を混乱させんがためなり。されど、もしアッラー欲したりせば、彼等もこれをせざりしなり。されば彼等を、その捏造せるものとともに捨て置け。(注 74)

وَكَذَٰلِكَ زَيَّنَّا لَكِثْرٍ مِّنَ الْمُشْرِكِينَ قَتْلَ أَوْلَادِهِمْ شُرَكَائِهِمْ لِيُرْذَوْهُمْ وَلِيَنْسُوا عَلَيْهِمْ دِيْنَهُمْ وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا فَعَلُوهُ قَدْ رُفِعَ لَهُمْ وَمَا يَفْقَهُونَ ﴿٧٢﴾

139. 彼等はまた、「これこれの家畜^{なんびと}と穀物は禁ぜられている。(注 75)何人も彼等の許しな

وَقَالُوا هَذِهِ إِنْعَامٌ فَحَرِّثْ حَرْثًا لَا يُطْعِمُهَا إِلَّا

注 71 この言葉はさらに、(1)汝の方法に基づいて行動せよ (2)どんなことでもやるならやってみよという意味をもつ。この節は偶像崇拜的なメッカの人々にどうでも勝手にして、イスラム教を絶滅させ、当時の小さなイスラム社会を破壊するために自分達の力と方策の最大限を尽くす努力をする様挑戦をしているが、彼らのふらちな計画と努力は全く失敗に終わるのである。

注 72 これはアラブ人の偶像崇拜的な習慣に関連している。彼らは、自分達の土地の産物を「神」と彼らの神々の間で分ける。もし彼らの神々のためにとっておかれる分量が他の目的に使われたならば、「神」のためにとっておいた分は、彼らの神々の名において慈悲(慈善)心として手放されるが、もし「神」のためにとっておいたものが他の目的に使われた時は、神々のためにとっておいた分量が、神に譲られることはなかったのである。

注 73 ここでいう「彼らの神々」とは預言者や占星家等の聖職者を意味する。

注 74 ここでは、自然の災害を防ぐために、女の子を殺害したり生きたまま埋めたり、彼らの神々の供物台に、いけにえとして捧げたりという、特定のアラブの部族が行う最も残虐な慣例について言及している。又は何人か特定の子供の数がいれば一人を神のいけにえとして捧げるという彼らの迷信的な祈願を表わしているともいえる。

注 75 「禁じられた穀物」というのは、偶像に捧げられた、収穫を得る為の畑という意味である。これらの穀物を使えるのは、彼らの世話をする聖職者のみである。

しに食すべからず」と自分勝手にきめこんで云う。而してその背が禁じられたる家畜(注76)や、アッラーの御名をその上に唱えざる家畜(注77)を作る。これすべてアッラーに対して虚偽の捏造なり。そのうちアッラーは、彼等の捏造せることに返報すべし。

140. 彼等はまた、「これこれの家畜の胎内にあるものは、もっぱら男子だけに限られ、妻女には禁ぜらる。但し死産の場合はみんな一緒に相伴することを得」などと云う。アッラーはそのうち、彼等の独断に対して応報すべし。げにアッラーは賢哲にして、すべてを知り給う。(注78)

141. 無知ゆえに、愚かにも自分の子女を殺す者、またアッラーに対して嘘をつき、アッラーが彼等に与えたものを禁ずる者は、本当に失敗者なり。彼等は紛れもなく迷誤に陥りし者にして、正しく導かれることなし。

第十七項

142. 棚を備えた果樹園、棚のない果樹園、^{なつめやし} 棗椰子、さまざまなる作物を産する畑、^{かんらん} 橄欖、^{きくろ} 柘榴、その他似たるもの、似ざるものの、これらすべてを生じしめたるは、アッラーなり。実を結ばば、食べよ。されど收穫の日には税を納め、浪費するなかれ。げにアッラーは浪費する者を好まず。(注79)

مَنْ نَشَاءُ بِرَعِيهِمْ وَالْأَنْعَامَ حَرَمَتْ طَهُورُهَا وَالْأَنْعَامَ لَا يَذْكُرُونَ اسْمَ اللَّهِ عَلَيْهَا افْتِرَاءً عَلَيْهِمْ سَيِّئُهُمْ بِمَا كَانُوا يَفْتَرُونَ ﴿١٤٠﴾

وَقَالُوا مَا فِي بُطُونِ هَذِهِ الْأَنْعَامِ خَالِصَةٌ لِّذُنُورِنَا وَمُحَرَّمٌ عَلَى أَزْوَاجِنَا وَإِنْ يَكُنْ مَيْتَةً فَهُمْ فِيهِ شُرَكَاءُ سَيِّئُهُمْ وَصَفُهُمْ إِنَّهُ خَلِيفَةُ عَلَيْهِمْ ﴿١٤١﴾

قَدْ خَسِرَ الَّذِينَ قَتَلُوا أَوْلَادَهُمْ سَفَهًا بِغَيْرِ عِلْمٍ وَحَرَّمُوا مَا رَزَقَهُمُ اللَّهُ افْتِرَاءً عَلَى اللَّهِ قَدْ ضَلُّوا سَبِيلًا وَمَا كَانُوا مُهْتَدِينَ ﴿١٤٢﴾

وَهُوَ الَّذِي أَنشَأَ جَنَّاتٍ مَعْرُوشَاتٍ وَغَيْرَ مَعْرُوشَاتٍ وَالنَّخْلَ وَالزَّرْعَ مُغْتَلِفًا أَكُلُهُ وَالزَّيْتُونَ وَالرِّمَّانَ مُتَنَابِهًا وَغَيْرَ مُتَنَابِهٍ كُلُوا مِنْ ثَمَرِهِ إِذَا أَثْمَرَ وَآتُوا حَقَّهُ يَوْمَ حَصَادِهِ وَلَا تُسْرِفُوا إِنَّهُ لَا يُحِبُّ الْمُسْرِفِينَ ﴿١٤٣﴾

注76 5章104節で述べられている牛の事である。それらは、乗り物としても、荷物運搬用としても使われなかった。

注77 メッカの偶像崇拜者達の「彼らの神々」に奉納された牛の事をさす。殺害の時に、神の名を述べたことに関してはここでは何も言及されていない。

注78 アラブ人のもう一つの馬鹿げた慣習を指す。

注79 前述の節では、偶像崇拜者のアラブ人が自分達のために考案した、偶像崇拜的な慣習、馬鹿げた慣例やおきてが言及されており、この節になってから、神の律法が示されている。

143. アッラーは家畜を、或るものは荷を負うべく、また或るものは食用にと創りたり。

アッラーがお前たちに賜えるものを食し、悪魔の足跡に追隨するなかれ。げに悪魔はお前たちの公然の敵なり。(注 80)

وَمِنَ الْأَنْعَامِ حَمُولَةً وَفَرْشًا كُلُوا مِمَّا رَزَقَكُمُ اللَّهُ وَلَا تَتَّبِعُوا خُطُوَاتِ الشَّيْطَانِ إِنَّهُ لَكُمْ عَدُوٌّ مُبِينٌ ﴿٨٠﴾

144. アッラーは八隻を創りたり。すなわち羊が二対、山羊が二対—云え、「アッラーが禁じたるは、牡二匹なのか、それとも牝二匹なのか、はたまた胎内にある牝二匹なのか？ お前たちの云うことが真実ならば、確実に我に告げよ」と。

لَتَنْبِيْهُ أَرْوَاحٌ مِّنَ الصَّانِ اثْنَيْنِ وَمِنَ النَّعْرِ اثْنَيْنِ قُلْ أَلَمْ يَكُنْ حَرَمٌ أَمَّا الْأُنثَيَيْنِ أَمَّا اشْتَمَلَتْ عَلَيْهِ أَرْحَامُ الْأُنثَيَيْنِ نَبِيُّنِي يَعْلَمُ إِنَّ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٨١﴾

145. 駱駝が二頭、牡牛が二頭。云え、「アッラーが禁じたるは、牡二頭なのか、牝二頭なのか、はたまた胎内にある牝二頭なのか？ アッラーが之を命じたる時、お前たちはその場に在りしか？」と。アッラーに対して嘘をつき、知識もなしに人々を迷わす者より不義なる奴輩はあろうか？ アッラーは不義なる奴輩を導かず。(注 81)

وَمِنَ الْإِبِلِ اثْنَيْنِ وَمِنَ الْبَقَرِ اثْنَيْنِ قُلْ أَلَمْ يَكُنْ حَرَمٌ أَمَّا الْأُنثَيَيْنِ أَمَّا اشْتَمَلَتْ عَلَيْهِ أَرْحَامُ الْأُنثَيَيْنِ أَمْ كُنْتُمْ شُهَدَاءَ إِذْ وَضَعَكُمُ اللَّهُ فِيهِمَا فَمَنْ أَكْظَمُ مِمَّنْ افْتَرَى عَلَى اللَّهِ كَذِبًا لِّيُضِلَّ النَّاسَ يَغْيِرُ عَلَيْهِمُ إِنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ﴿٨٢﴾

146. 云え、「我に啓示されたるものの中で、食べたいのに食べることを禁じられたものを我は知らず、死肉、流れ出る血、豚の肉—これは不浄なるが故に—それにアッラー以外の名が唱えられる故に汚れたるものを除き。されど、違犯の意志なく、また規則にそむくに非ず、必要に迫られやむを得ざりし場合は、汝の主は寛大にして、情け深くまします」と。(注 82)

قُلْ لَا أَحَدٌ فِي مَا أَوْحَى إِلَيَّ مُحَرَّمًا عَلَى طَائِفٍ مِّنْهُمْ إِلَّا أَنْ يَكُونَ مِيتَةً أَوْ دَمًا مَّسْفُوحًا أَوْ لَحْمَ خِنْزِيرٍ فَإِنَّهُ رِجْسٌ أَوْ فِسْقًا أُهِلَّ لِغَيْرِ اللَّهِ بِهِ فَمَنْ اضْطُرَّ غَيْرَ بَاغٍ وَلَا عَادٍ فَإِنَّ رَبَّكَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٨٣﴾

注 80 その第一の意味以外に、この節は、さらに、おきてにかなったものを食することは、悪魔の攻撃から自らを守る手段であることを示唆している。

注 81 偶像崇拜者達は、もし神が牛とらくだを食べる事を禁じたと主張するなら、神がそれを伝えたという時に居あわせたのか、と尋ねられる。彼らは、牛とらくだは本当に禁止されていたことを示す神の權威を提出する事を要求されており、それは何故ならば、牛やらくだの肉を食べることは、いくらかの、聖書重視の人々—牛はヒンズー教徒達が、らくだは一部のユダヤ人達—にとっては禁止されている事とみなされているからである。

注 82 この節は、許される食物と禁止されている食物に関して、偶像崇拜者のアラブ人達によって作られた法は、何の知識も理由も基盤もなく、随意的である；それにひきかえ、イスラム教徒によって規定された食物

147. されどユダヤ教徒には、われらは爪牙そうがを持つすべての動物を禁じたり。またわれらは、背中や腸や骨に付きたるものを除いて、(注83)牛や羊や山羊あひらの胎を禁じたり。こは彼等の違犯に対する応報じくいなり。(注84)げにわれらは真実を語る。

وَعَلَى الَّذِينَ هَادُوا حَرَمًا كُلُّ ذِي ظُفْرٍ وَمِنَ الْبَقَرِ وَالْغَنَمِ حَرَمًا عَلَيْهِمْ شُحُومُهَا إِلَّا مَا حَمَلَتْ ظُهُورُهُمَا أَوِ الْحَوَايَا أَوْ مَا اخْتَلَطَ بِعِظَمٍ ذَلِكَ جَزَيْنَهُمْ بِبَعْثِهِمْ وَإِنَّا لَصَدِيقُونَ ﴿٨٣﴾

148. 彼等もし汝を嘘つきと責めなば、云え、「主は一切を抱擁する慈悲を持ち給う。されど罪深い民は、主の激怒を押し戻すことし得ざるべし」と。

فَإِنْ كَذَّبُوكَ فَقُلْ رَبِّكُمْ ذُو رَحْمَةٍ وَاسِعَةٍ وَلَا يُرَدُّ بَأْسُهُ عَنِ الْقَوْمِ الْمُجْرِمِينَ ﴿٨٤﴾

149. アッラーに他神あだしがみを配する彼等は云わん、「アッラーもし欲したりせば、我等も我等の父祖も、アッラーに他神あだしがみを配することはせず、また何も禁忌を作らざりしならん」と。同様に、彼等以前の者も、われらの激怒を味ううまでは、神の使徒たちを嘘つきよばわりせり。云え、「お前たち確たる知識を有するか? 有るならそれをわれらに示せ。お前たちはただ憶測に従い、虚言を事とするにすぎず」と。

سَيَقُولُ الَّذِينَ أَشْرَكُوا لَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا أَشْرَكْنَا وَلَا آبَاؤُنَا وَلَا حَرَمْنَا مِنْ شَيْءٍ كَذَلِكَ كَذَبَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ كَتَّبُوا بِأَسْنَانٍ قُلْ هَلْ عِنْدَكُمْ مِنْ عِلْمٍ فَتُخْرِجُوهُ لَنَا إِنْ تَتَّبِعُونَ إِلَّا الظَّنَّ وَإِنْ أَنْتُمْ إِلَّا تَخْرُصُونَ ﴿٨٥﴾

150. 云え、「最後の論拠はアッラーのものなり。アッラーもし欲したりせば、アッラーはお前たちを皆導きたりしならん」と。(注85)

قُلْ فَلِلَّهِ الْحُجَّةُ الْبَالِغَةُ فَلَوْ شَاءَ لَهَدَاكُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٨٥﴾

の規律は知恵と理由に基づいている、という事を意味している。根本的に、イスラム教(徒)は4つのものを禁止している—3つはそれらが不浄で不潔であることから、そして1つはそれが神聖を汚し信心深くないということからである。最初に述べた3つのものは、腐肉、動物が殺害された時、又は傷を負った時に流れ出る血、そして豚肉である。

この節で述べられている様に、これら全ては不浄で不潔すなわち、それらは人間の肉体と精神の両方の健康にとって有害である。ここで注意すべき事は、不浄という言葉は、最初に述べられた3つの禁止されている物とともに読みとる必要がある。4つ目の禁止されているものは、アッラー以外のものの名をとなえて加工された食べ物である。それは神聖を汚す、すなわち、神に対する不従順、反抗のものである。そういう食物を食す事は、人間の精神面の健康を害し、彼の神に対する愛を自ら失うこととなっていく。

注83 レビ記7章23節参照。タルムードの中では、あばらについている脂肪に関しては、例外とされている。

注84 これらのものは、ユダヤ人の人達の罪に対する罰として禁止された。

注85 もし神が彼の人々に「神の意」に従う様強制するならば、神は確実に、誤った事ではなく、正しいことを強制するはずである。しかし神の無限の知恵の中で、神は人間を自由な取次人とした。神は人間に、何が正しく、何が誤っているかを説明し、そしてどちらでも、選びたい道に進める様、選択を自由にまかせた。

151. 云え、「アッラーがこれを禁じたり、と立証する証人を出せ」と。たとい彼等証言するとも、汝は彼等とともに証言するなかれ。またわれらの神兆を虚偽なりとする者ども並びに来世を信ぜず、主に同位者を配する者どもの邪悪な性向に追隨するなかれ。

第十九項

152. 云え、「来れ、我は主が禁じたることをお前たちに復誦せん。同位者として如何なるものも主に配するなかれ。両親に親切を尽くせ。貧困を恐れて子女を殺すなかれ—お前たちも子女もわれらが養ってやるほどに一外に現われたることでも、心の内に隠されたることでも、不潔な行為に近づくなかれ。また正義のため以外は、アッラーが禁じたる殺害をするなかれ。こはアッラーがお前たちを理解せしめんととして、お前たちに命じたるものなり。(注 86)

153. また孤児の財産は最善の管理のため以外は、彼が成年に達するまで、近寄るべからず、また、初目は十分にし、目方は公正にせよ。(注 87) われらは何人にもその能力以上のものは課せず。意見を述べる時は、たとい近親に關係せることでも公平を守れ。またアッラーとの契約を全うせよ。こはアッラーがお前たちを注意させるためにお前たちに命じたるものなり」と。(注 88)

قُلْ هَلْ شَهِدَ آءُكُمُ الَّذِينَ يَشْهَدُونَ أَنَّ اللَّهَ حَرَّمَ هَذَا فَإِنْ شَهِدُوا فَلَا تَشْهَدْ مَعَهُمْ وَلَا تَتَّبِعْ أَهْوَاءَ الَّذِينَ كَذَبُوا بِآيَاتِنَا وَالَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ وَهُمْ يَرْبِهِمْ يَعْدِلُونَ ﴿١٥١﴾

قُلْ تَعَالَوْا أَتْلُ مَا حَرَّمَ رَبِّي عَلَيْكُمْ أَلَّا تُشْرِكُوا بِهِ شَيْئًا وَبِالْوَالِدَيْنِ إِحْسَانًا وَلَا تَقْتُلُوا أَوْلَادَكُمْ مِنْ إِمَّاكُنَّ نَحْنُ نَرْزُقُكُمْ وَإِيَّاهُمْ وَلَا تَقْرُبُوا الْفَوَاحِشَ مَا ظَهَرَ مِنْهَا وَمَا بَكْنٌ وَلَا تَقْتُلُوا النَّفْسَ الَّتِي حَرَّمَ اللَّهُ إِلَّا بِالْحَقِّ ذَلِكُمْ وَصَّيْتُكُمْ بِهَ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ ﴿١٥٢﴾

وَلَا تَقْرَبُوا مَالَ الْيَتِيمِ إِلَّا بِالَّتِي هِيَ أَحْسَنُ حَتَّى يَبْلُغَ أَشُدَّهُ وَأَوْفُوا بِالْعَيْلِ وَالْزَّيْنَانَ بِالْقِسْطِ لَا تَكْرِفُ نَفْسًا إِلَّا وُسْعَهَا وَإِذَا قُلْتُمْ فَاعْدُوا وَكُتِبَ عَلَيْكُمُ الْقُرْآنُ أَنْ تُؤْتُوا أَوْفُوا ذَلِكُمْ وَصَّيْتُكُمْ بِهَ لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُونَ ﴿١٥٣﴾

注 86 「禁止」という言葉にあとに続く訓令は、神が実行する様命令している事である。一方では、「禁止」という言葉を使うことによって、また一方で、明確に定めた戒律をすぐ後に続ける事により、この節は、それ自体に直接的な命令と、その逆の両方が組み合わされている。この節は、更に違った風に、解釈することも可能である。最初の文は、「主が禁じたること」という語句で終わり、次の文章が、この場合「それはあなたに申しつけられている」という意味をもつ言葉で始まっていると、とらえられるべきである。そうすると、この節は以下の様に読みとられる。「さあ、あなたの方の主が禁止したものを私が語ろう。神のパートナーとして、関連づけるものは、何でもいというわけではない事が申しつけられており……」

注 87 生命の保護についての訓令の次に、財産を守るための戒律について述べられている。

注 88 言葉を守るための訓令のあとに、心を守るための訓令があり、それは、「アッラーとの契約を全うせよ」という語句の中に含蓄されている。なぜならば、以前の訓令が人間との契約に關係していたのに反し、ここでの訓令は、神との契約に關係しているからである。

154. また、云え、「これこそわが直き道なり。されば之に従え。お前たちをアッラーの道から離れしむる如き他の道に従うなかれ。こはアッラーがお前たちをして悪に対して身を守らしめんがために、お前たちに命じたるものなり」と。

155. 更にわれらがモーゼに經典を与えたるは一善行をなせる者に対する恩恵の完遂であり、一切の解明であり、嚮導にして慈悲なり―彼等は恐らく主との対面を信ぜん。

第二十項

156. こはわれらが降せる有難い經典なり。されば之に従い、罪から身を守れ。さすればお前たち慈悲に浴せん。

157. お前たちに、「經典は我等以前にただ二つの宗派にのみ降されたり。されど我等は彼等の讀めるものを知らざりき」と、云わしめざるために。(注 89)

158. またお前たちに、「もし我等に經典が降されていなば、我等は必ず彼等より善く導かれたるなり」と、云わしめざるために。今主よりの明証が、すなわち嚮導と慈悲がお前たちのところへ来れり。さればアッラーの神兆を拒否し、それより背き去る者、これ以上の不義なる者は誰か？われらは、われらの神兆を忌避する者どもには、その忌避せることのために、恐ろしい懲罰を以て報ゆべし。

159. 彼等はただ、諸天使が彼等のところへ現われるを待ち、(注 90)主が来臨する(注 91)

وَإِنَّ هَذَا صِرَاطٌ مُسْتَقِيمٌ فَاتَّبِعُوهُ وَلَا تَتَّبِعُوا السَّبِيلَ فَتَفْزَقَ بِكُمْ عَنْ سَبِيلِهِ ذِكْرُكُمْ وَضَعَهُ لَكُمْ لَعَلَّكُمْ تُتَّقُونَ ﴿٩٠﴾

ثُمَّ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ تَمَامًا عَلَى الَّذِي أَحْسَنَ وَتَفْصِيلًا لِكُلِّ شَيْءٍ وَهُدًى وَرَحْمَةً لَّعَلَّهُمْ بِلِقَاءِ رَبِّهِمْ يُؤْمِنُونَ ﴿٩١﴾

وَهَذَا كِتَابٌ أَنْزَلْنَاهُ مَبْرُوكٌ فَاتَّبِعُوهُ وَاتَّقُوا لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ﴿٩٢﴾

أَنْ تَقُولُوا إِنَّمَا أُنْزِلَ الْكِتَابُ عَلَى طَائِفَتَيْنِ مِنْ قَبْلِنَا وَإِنْ كُنَّا عَنْ دِرَاسَتِهِمْ لَغَافِلِينَ ﴿٩٣﴾

أَوْ تَقُولُوا لَوْ أَنَّا أُنْزِلَ عَلَيْنَا الْكِتَابُ لَكُنَّا أَهْدَى مِنْهُمْ فَقَدْ جَاءَكُمْ بَيِّنَةٌ مِنْ رَبِّكُمْ وَهُدًى وَرَحْمَةٌ فَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنْ كَذَبَ بِآيَاتِ اللَّهِ وَصَدَّقَ عَنْهَا سَخِرَ مِنَ الَّذِينَ يَصِدُّونَ عَنْ آيَاتِنَا سُوءَ الْعَذَابِ بِمَا كَانُوا يَصِدُّونَ ﴿٩٤﴾

هَلْ يَنْظُرُونَ إِلَّا أَنْ تَأْتِيَهُمُ الْمَلَائِكَةُ أَوْ يَأْتِيَ رَبُّكَ أَوْ يَأْتِيَ بَعْضُ آيَاتِ رَبِّكَ يَوْمَ يَأْتِي بَعْضُ

注 89 この節で述べられている「二つの宗派」は、モーゼの5書が与えられ、アラビアの北の地域から、その宗教が起ったユダヤ人と（ゾロアスター教の經典である）ゼンドアベスタが与えられ、アラビアの東側に住んでいたゾロアスター教徒のことだとも言えるし、又は、アラビアに住んでいて、アラブ人が出会った、二派の人々である、ユダヤ人とキリスト教徒の事をさしているのかもしれない。

注 90 ここでは、「天使が現われる」は、戦争を使った、人間への罰を意味する。何故ならば、イスラム教徒とその敵との間で行われた戦いに関連して、天使の到来が、述べられているからである（3章 125節、126節、8章 10節）。

を待ち、また主の何か特別な奇蹟が起るを待つのみ。而して、主の何かの奇蹟が起る(注92)日には、それまで信じもせず、信仰によって善行を積まざる者が信じても、益するところなし。云え、「待て汝等、われらもまた待つ」と。

إِنَّ رَبَّكَ لَا يَنْفَعُ نَفْسًا إِيْمَانُهَا لَمْ تَكُنْ أَمَنَتْ
مِنْ قَبْلُ أَوْ كَسَبَتْ فِي إِيمَانِهَا خَيْرًا قُلِ انْتَظِرُوا
إِنَّا مُنْتَظِرُونَ ﴿٩٤﴾

160. 己が宗教を分裂させて、(注93)宗派となせる者どもに対して、汝はいささかも関わりなし。げに彼等のことはアッラーのもとにあり。やがてアッラーは彼等に、そのなせることを告げ知らすべし。

إِنَّ الَّذِينَ فَزَعُوا مِنْهُمْ وَكَانُوا شِيعًا أَنتَ مِنْهُمْ
فِي شَيْءٍ إِنَّمَا أَمْرُهُمْ إِلَى اللَّهِ ثُمَّ يُنَبِّئُهُمْ بِمَا كَانُوا
يَفْعَلُونَ ﴿٩٥﴾

161. 一善を行う者は、之に十倍する報奨を受くべし。されど一悪を行えば、それに等しき応報を受けるのみ。彼等は不当に遇せられることなるべし。(注94)

مَنْ جَاءَ بِالْحَسَنَةِ فَلَهُ عَشْرُ أَمْثَالِهَا وَمَنْ جَاءَ
بِالسَّيِّئَةِ فَلَا يُجْزَى إِلَّا مِثْلُهَا وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ﴿٩٦﴾

162. 云え、「主は我を直き道に導き給えり一正しい宗教、高潔なアブラハムの宗教に。アブラハムは、アッラーに他神を併せ祀る徒輩に非ざりき」と。

قُلْ إِنِّي هَدَيْتَنِي رَبِّيَ إِلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ دِينًا
قَبْلًا قَوْلَهُ إِبْرَاهِيمَ حَنِيفًا وَمَا كَانَ مِنَ الْمُشْرِكِينَ ﴿٩٧﴾

163. 云え、「我が礼拝、我が献身、我が生も死も、挙げて万物の主なるアッラーのためなり。(注95)

قُلْ إِن مَلَائِكَتِي وَسْئَلُنِي وَحْيًا أَوْ مِمَّا تَرَى إِلَهُ رَبِّ
الْعَالَمِينَ ﴿٩٨﴾

164. 主には如何なる同位者もなし。而して我はかく命ぜられたり、我は服従帰依する人々の魁なり」と。

لَا شَرِيكَ لَهُ وَبَدِّلْ لَكَ أَمْرًا أَنَا أَوَّلُ الْمُسْلِمِينَ ﴿٩٩﴾

注91 「主が来臨する」という表現は、真実の敵の完全な破滅を意味する。

注92 「奇蹟が起こる」とは、飢饉、疫病、災害の様な、この世の間を意味する。

注93 「己が宗教を分裂させる」という語句は、人が自分の気まぐれや空想に従うようになると、違いというものが人間同士に生じ、考え方の合意が消失することを示している。

注94 よい行為は、10倍にも、又それ以上にも増えていく、よい種のようなのであるが(2章262節、4章4節、10章27・28節及びデイルマディの断食書)、それに反して悪は、悪い種のように1つのままである。

注95 祈り、犠牲、生と死は人間の行動の全ての分野にかかわり、そして聖なる預言者は、彼の人生の全ての局面は、神に捧げられていと宣言する様に命じられていた。彼の祈りの全ては、神に捧げられ、彼の犠牲

165. 云え、「我^{なんびと}豈万物の主にましますアッラーの外に主を求むべけんや?」と。何人も己れ自身に稼^{しか}ぐのみ。他人の荷物まで背負うことなし。而してお前たちは、やがて主に召されるべし。その時主は、お前たちが意見を異にせる問題について、お前たちに告げ知らすべし。(注 96)

قُلْ أَغَيَّرَ اللَّهُ ابْنِي رَبًّا وَهُوَ رَبُّ كُلِّ شَيْءٍ وَلَا تَكْسِبُ
كُلُّ نَفْسٍ إِلَّا عَلَيْهَا وَلَا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِزْرَ أُخْرَىٰ
ثُمَّ إِلَىٰ رَبِّكُم مَّرْجِعُكُمْ فَيُنَبِّئُكُم بِمَا كُنتُمْ فِيهِ
تَخْتَلِفُونَ ﴿٩٦﴾

166. お前たちをして地上に於ける代理者となし、お前たちの或る者の位階を他の者よりも高からしめたるは、アッラーなり。そは彼がお前たちに与えたるものによって、お前たちを試みんがためなり。げに主は懲罰に迅速なれど、また寛大にして、情け深くまします。(注 97)

وَهُوَ الَّذِي جَعَلَكُمْ خَلَائِفَ الْأَرْضِ وَرَفَعَ بَعْضَكُمْ
فَوْقَ بَعْضٍ دَرَجَاتٍ لِّيَبْلُوَكُمْ فِي مَا آتَاكُمْ إِنَّ رَبَّكَ
بِشَيْءٍ سَرِيعٍ الْعَقَابِ ﴿٩٧﴾

も全て、神のためのものであり、彼の人生の全ては神への奉仕であり、そして、宗教的原因から、彼が死を求める事になろうとも、それもやはり神の喜びを得んがための行為という事に他ならない。

注 96 この節は、17 章 16 節、53 章 40、41 節と同様、キリストの贖罪の教義への激しい否認を含み、誰もが、自らの十字架を背負い、己れの行動に責任をもたなければならないという事実^①に断固として注目させている。

注 97 この節は、イスラム教徒に対する、勧告と警告の両方から同時に構成されている。彼らは、力と権威を授けられ、国事を統制する義務を、今まさにゆだねられると告げられている。彼らは、創造主に対し、自分達の義務遂行の結果を明らかにしなければならないので、責任を公正と正義によって果たさなければならない。



アル・アラーフ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. アリフ・ラーム・ミーム・ザード。(注1)

النَّص ②

3. こは汝に啓示されたる經典なり、汝が之によって警告を与え、また信徒たちへの訓戒たらしめんがために—さればこれがために汝の胸を狭めるなかれ。(注2)

كُتِبَ أَنْزَلَ إِلَيْكَ فَلَا يَكُنْ فِي صَدْرِكَ حَرَجٌ مِنْهُ
لِتُنْذِرَ بِهِ وَذِكْرَى لِلْمُؤْمِنِينَ ③

4. 主よりお前たちに降されたるものに従い、主以外の守護者に追隨するなかれ。お前たちはめったに訓戒に従わず。

اتَّبِعُوا مَا أُنْزِلَ إِلَيْكُمْ مِنْ رَبِّكُمْ وَلَا تَتَّبِعُوا مِنْ دُونِهِ
أَوْلِيَاءَ قَلِيلًا مَّا تَذَكَّرُونَ ④

5. われらは如何に多くの邑を滅ぼせることか！われらの懲罰は夜間に、また彼等が昼寝の最中に降りり。(注3)

وَكَمْ مِنْ قَرْيَةٍ أَهْلَكْنَاهَا بَاسْنَاءِ بَاسٍ فَأُتُوا مِنْ قَائِلُونَ ⑤

6. 而してわれらの懲罰が彼等に降れる時、彼等はただ、「げに我等は不義者なりき！」と叫喚するのみなりき。(注4)

فَمَا كَانَ دَعْوَاهُمْ إِذْ جَاءَهُمْ بَاسُنَا إِلَّا أَنْ قَالُوا إِنَّا
كُنَّا ظَالِمِينَ ⑥

7. われらは、必ず使徒を遣わされたる人々を尋問し、また使徒たちも必ず尋問すべし。(注5)

فَلَنَسْأَلَنَّ الَّذِينَ أُرْسِلَ إِلَيْهِمْ وَلَنَسْأَلَنَّ الْمُرْسَلِينَ ⑦

注1 我は全知全能にて、真理なり。

注2 この節は、特にモハammadのみでなくすべての信徒に向けて話されている。

注3 特に夜間（明け方）と真昼が、たいてい神の罰が下る時間であるところでは述べている。この時間は人々が人抵眠っているか、ぼんやりしている時間である。

注4 罰が下された時、確固とした無神論者さえも、時として神の助けを求めて叫び声をあげるが、それは、こうした恐ろしい時には自分自身の無力さばかりでなく、より高い存在の強力な力を実感するからである。

注5 すべての人々は、どんな形であれ神に対して責任を負うという原則をこの節では、述べている。人々はすべて、神の使者をどのように受け入れたかを問われるであろう。又、使者達は神の言葉をいかに伝道し、それに対する民衆の反応がどうであったかを問われるであろう。

8. 而して、われらは彼等に、その所業を確実な知識にもとづいて話さん。なんとすれば、われらは決して不在なることなし。

9. その日の秤は正確なり。秤重き者は、(注6) 必ず成功すべし。

10. されど秤^{はかり}軽き者は、われらの神^{しちし}兆を軽^{しちし}ろんじたがために、その身を減^{はかり}ばせる者なるべし。

11. われらはお前たちを地上に安住させ、而して生計の手段を与えたり。しかるにお前たちは殆んど感謝せず。

第二項

12. われらはお前たちを創造し、しかる後にお前たちに形を与えたり。(注7) 而してわれらは天使たちに向って「アダムに服従せよ」(注8) と命じたところ、イブリースを除いて、(注9) 彼等はすべて服従せり。イブリースだけが服従者のうちに加わらざりき。

13. 神は云えり、「わしが命じたるに、汝何故に服従せざるか?」と。すると、イブリースは云えり、「我はアダムに勝る。汝は我を火で創りたるが、アダムは粘土で(注10) 創られたり」と。(注11)

فَلَنَقْصُصَ عَلَيْهِمْ عِلْمَهُمْ وَمَا كُنَّا عَائِينَ ①

وَالْوَزْنَ يَوْمَئِذٍ بِالْحَقِّ ۖ فَمَنْ ثَقَلَتْ مَوَازِينُهُ فَأُولَٰئِكَ

هُمْ الْمَفْجُون ②

وَمَنْ خَفَّتْ مَوَازِينُهُ فَأُولَٰئِكَ الَّذِينَ خَسِرُوا أَنْفُسَهُمْ

بِمَا كَانُوا يَأْتِيَانَا يِظْلُمُونَ ③

وَلَقَدْ مَكَّنَّاكُمْ فِي الْأَرْضِ وَجَعَلْنَا لَكُمْ فِيهَا مَعَايِشَ ۚ

فَلْيَاذْكُرُوا مَا تَشْكُرُونَ ④

وَلَقَدْ خَلَقْنَاكُمْ ثُمَّ صَوَّرْنَاكُمْ ثُمَّ قُلْنَا لِلْمَلَائِكَةِ اسْجُدُوا

لِآدَمَ فَسَجَدُوا إِلَّا إِبْلِيسَ ۖ لَمْ يَكُنْ مِنَ السَّاجِدِينَ ⑤

قَالَ مَا مَنَعَكَ إِلَّا تَسْجُدَ إِذْ أَمَرْتُكَ ۖ قَالَ أَنَا خَيْرٌ مِنْهُ

خَلَقْتَنِي مِنْ نَارٍ وَخَلَقْتَهُ مِنْ طِينٍ ⑥

注6 この言葉は比喩的に用いられている。物質は、金属や木で作られた秤りでその重さを計るが、物質でないものの重さを計るということは、その本来の価値、真価、重要性を明確にすることである。

注7 人間は、粘土をいろいろの形にできるように、自分の精神的存在を様々に形成することができるのである。

注8 アダムに服せよという命令は、天使に向かって発せられたのであるが、天使は神の命令の神聖なる具現者であるが故に、この命令はすべての創造物に適用されるものであった。

注9 イブリースは天使ではなかった(18:51)。ガブリエルが天使長であるのに対し、イブリースは悪霊の長である。ここに述べられていることは、人間の最初の祖先である最初のアダムとは何のかかわり合いもない。ここにかかわっているのは、後のアダム(この大地に6000年前に住み、ノアやアブラハムや彼らの子孫の直接の祖先)のみである。

注10 「粘土」という語についての説明は、3章50節を参照。

注11 この節は、神とイブリースの間の会話として表現されているが、実際にこうしたやり取りがあったというわけではなく、状況を言葉で表現したということである。イブリースがアダムに服さなかった結果がこの状況なのである。2章31節も参照せよ。

14. 神は云えり、「ならばここより落ちて行け。ここは汝如き傲慢な者の居るべきところに非ず。出て行け。げに汝は見下げはてたる輩なり」と。

قَالَ فَاهْبِطْ مِنْهَا مَا يَكُونُ لَكَ أَنْ تَتَكَبَّرَ فِيهَا فَاخْرُجْ
إِنَّكَ مِنَ الصَّغِيرِينَ ﴿١٤﴾

15. イブリースは云えり、「彼等人間が廻らしめらるその日まで、(注12)なにとぞ我に猶予を授けたまえ」と。

قَالَ أَنْظِرْنِي إِلَى يَوْمِ يُبْعَثُونَ ﴿١٥﴾

16. 神は云えり、「汝は猶予される者のうちに加えられん」と。

قَالَ إِنَّكَ مِنَ الْمُنظَرِينَ ﴿١٦﴾

17. イブリースは云えり、「汝が我に身を誤らせたので、我は汝の直き道にて彼等人間を待たん。

قَالَ فِيمَا آغَايَيْتَنِي لَا أَفْعَدَنَّ لَهُمْ سِرَاطَكَ
الْمُسْتَقِيمَ ﴿١٧﴾

18. 而して我は、前後左右から(注13)彼等を襲わん。されば汝は、彼等の多くが忘恩の徒なるを知るべし」と。

ثُمَّ لَا يَذُنُّهُمْ مِنْ بَيْنِ أَيْدِيهِمْ وَمِنْ خَلْفِهِمْ
وَعَنْ أَيْمَانِهِمْ وَعَنْ شَمَائِلِهِمْ وَلَا تَجِدُ أَكْثَرَهُمْ
شَاكِرِينَ ﴿١٨﴾

19. 神は云えり、「^{さげす}蔑まれ、^さ逐い立てられてここより去れ。もし彼等のうち汝に追隨する者あらば、わしはお前たち一同で地獄を満さん。

قَالَ اخْرُجْ مِنْهَا مَذْذُومًا مَدْحُورًا لَنْ تَجْعَلَ
مِنْهُمْ لَامِلًا لَنْ جَهَنَّمَ مِنْكُمْ أَجْمَعِينَ ﴿١٩﴾

20. アダムよ、汝と汝の妻は庭園に(注14)住み、好きなところで食うがよい。(注15)なれど不義者の類にならざらんがために、この樹には(注16)近寄るなかれ」と。

وَيَا آدَمُ اسْكُنْ أَنْتَ وَزَوْجُكَ الْجَنَّةَ فَكُلَا مِنْ حَيْثُ
شِئْتُمَا وَلَا تَقْرَبَا هَذِهِ الشَّجَرَةَ فَتَكُونَا مِنَ
الظَّالِمِينَ ﴿٢٠﴾

注12 この節にいう復活とは来世に約束された万人の大復活のことではない。人間の靈魂の復活あるいは人間の精神的意識が最も高められた状態のことを言っているのである。精神的復活がない限り、イブリースが人に道を誤らせることもあるであろう。しかし、人間が一旦バカー（再生）と呼ばれる精神の高い段階に到達すれば、もはやイブリースはその人間に対し何の害を為すこともできないのである（17:66）。

注13 サタンが張りめぐらしている誘惑の網に注意せよ。

注14 2:36を参照

注15 これは、肉体的、精神的に有害であるとして禁じられること以外はすべて合法であることを示している。

注16 「禁断の木」とは、アダムとその妻に、ある特定の事柄を禁じている戒律のことも意味しているようである。クルアーンの中では、「良い言葉」は「良い木」と関連しており（14:25）、邪悪な言葉は「悪い木」と関連づけられている（14:27）。

21. しかるに悪魔が彼等に囁いて、彼等に見えざりし恥部を彼等に知らせめ、而して云えり、「主がお前たちにこの樹を禁じたるは、お前たちを天使または不老不死者たらしめざらんがためなり」と。(注17)

فَوَسَّوَسَ لَهُمَا الشَّيْطَانُ لِيُبْدِيَ لَهُمَا مَا وُورِيَ عَنْهُمَا مِنْ سَوَاتِهِمَا وَقَالَ مَا نَهَاكُمَا رَبُّكُمَا عَنْ هَذِهِ الشَّجَرَةِ إِلَّا أَنْ تَكُونَا مَلَكَائِينَ أَوْ تَكُونَا مِنَ

الْخَالِدِينَ ﴿٢١﴾

22. 而して悪魔は二人に誓って云えり、「げに我はお前たちの真実の助言者なり」と。

وَفَاسَّهَمَا إِلَىٰ كُنُفَيْكُمَا لِمَنِ التَّصْحِيفُ ﴿٢٢﴾

23. こうして悪魔は二人を欺きて墮落せしめたり。彼等その樹の実を味わうや、たちまち恥ずかしさを自覚し、庭園の木葉で己が身を覆いたり。(注18)すると、主は二人に呼びかけて、云えり、「わしはお前たちにその樹を禁ぜざりしか、また悪魔はお前たちの公然の敵なりと云わざりしか?」と。

فَدَلُّهُمَا بِغُرُورٍ فَلَمَّا ذَاقَا الشَّجَرَةَ بَدَتْ لَهُمَا سَوَاتُهُمَا وَطَفِقَا يَخْصِفْنَ عَلَيْهَا مِنْ وَرَثَةِ الْجَنَّةِ وَنَادَاهُمَا رَبُّهُمَا أَلَمْ أَنْهَكُمَا عَنْ تِلْكَ الشَّجَرَةِ وَأَقُلْتُ لَكُمَا إِنَّ الشَّيْطَانَ لَكُمَا عَدُوٌّ

مُبِينٌ ﴿٢٣﴾

24. 彼等は云えり、「主よ、我等は誤れり。汝我等を許さず、慈悲を垂れざれば、我等は必ず失敗者とならん」と。(注19)

قَالَا رَبَّنَا ظَلَمْنَا أَنْفُسَنَا وَإِنْ لَمْ تَغْفِرْ لَنَا وَ

تَرْحَمَنَا لَنَكُونَنَّ مِنَ الْخَاسِرِينَ ﴿٢٤﴾

注17 邪悪な考えが最後に人を破滅に迫りやる時、同時に、その人自身、自分の弱点をはっきりと自覚するのである。アダムが住むことになった場所は、クルアーンの中では比喩的に「庭園」と表現されている。そして、次に続く文においても比喩が続いて用いられ、アダムはある特定の「木」に近づくことを禁止されていること書かれているが、この「木」とは、文字通りの物としての木ではなく、アダムが近づいてはならないある特定の一族、部族のことであった。アダムが近づいてはならないとされたのは、この一族が彼の敵であり、彼に危害を加えようとも何の痛みも感じない人々であったからである。

注18 サタンのため、アダムの共同体に亀裂が入り、中の弱い人々が共同体の絆から離れていった時に、アダムが「庭園」の木葉すなわち共同体の若者達を集め、彼らの協力を得て、彼に従う人々を再統一、再編成しはじめたということをしめしているのである。若者は旧思想や偏見にほとんどとられないので、神の預言者達に従い彼らを助けるのは、一般に若者たちである(10:84)。アダムに従うことを拒否した者としてクルアーンに描かれているのはイブリースと呼ばれ、彼をそそのかす者がサタンと呼ばれている。この区別は、この節のみでなく、クルアーン全体を通して、関連する節すべてにおいて、明確である。すなわちサタンとイブリースは別人なのである。アダムをそそのかし、間違いを犯させたシャイターンは、目に見えぬ悪魔ではなく、血も肉もある邪悪な人間であって、人々の中にいる悪魔であり、サタンの具現であり、イブリースの代理人であった。そして、アダムが近づいてはならないとされた一族の一人なのであった。モハammadは、彼の名前はハリス(人名)であると言ったとされているが、このことは、彼が人間であって悪魔ではないことを示すもう一つの証拠である。

注19 間もなくアダムは自分の誤ちに気づき、後悔しつつ、急いで神のもとへ戻った。そもそもアダムの誤ちとは、この人間悪魔を、神がかかわり合わないよう警告したにもかかわらず、支援者と間違えたことにあったのである。

25. 主は云えり、「出て行け、お前たちは互に敵とならん。地上にはお前たちの仮の宿と、ひと時の楽しみあり」と。(注 20)

قَالَ اهْبِطُوا بَعْضُكُمْ لِبَعْضٍ عَدُوٌّ وَلَكُمْ فِي الْأَرْضِ مُسْتَقَرٌّ وَمَتَاعٌ إِلَىٰ حِينٍ ⑮

26. 而して主はまた云えり、「そこでお前たちは生き、そこで死に、而してそこより甦らしめらるべし」と。(注 21)

قَالَ فِيهَا تَحْيَوْنَ وَفِيهَا تَمُوتُونَ وَمِنْهَا تُخْرَجُونَ ⑯

第三項

27. アダムの子らよ、げにわれらはお前たちに、恥部を覆い、また飾のための衣服を授けたり。されど、正義の衣裳こそが最高なり。(注 22) こは彼等に忘れさせざるための、アラフの神兆の一つなり。

يَبْنَىٰ أَدَمَ قَدْ أَنْزَلْنَا عَلَيْكُمْ لِبَاسًا يُؤَارِي سَوَاتِرَكُمْ وَرِيشًا وَلِبَاسُ التَّقْوَىٰ ذَٰلِكَ خَيْرٌ ذَٰلِكَ مِنْ آيَاتِ اللَّهِ لَعَلَّهُمْ يَذَّكَّرُونَ ⑰

28. アダムの子らよ、悪魔がかつて、お前たちの先祖にその恥部を知らしめんがために、その衣を剥ぎ奪って彼等を庭園より放逐せしめたように、悪魔にたぶらかされるなかれ。事実、悪魔とその一族は、お前たちには見えざるところからお前たちを見る。げにわれらは、悪魔をして信ぜざる者どもの友となせり。(注 23)

يَبْنَىٰ أَدَمَ لَا يَفْتِنَنَّكُمُ الشَّيْطَانُ كَمَا أَخْرَجَ أَبَوَيْكُم مِّنَ الْجَنَّةِ يَنْزِعُ عَنْهُمَا لِبَاسَهُمَا لِيُرِيَهُمَا سَوَاتِرَهُمَا إِنَّهُ يَرَكَمُ هُوَ وَقَبِيلُهُ مِنْ حَيْثُ لَا تَرَوْنَهُمْ إِنَّا جَعَلْنَا الشَّيْطَانَ أَوْلِيَاءَ لِلَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ ⑱

注 20 この節では、アダムが自分の生地から他の地へ移住するよう命令されたことを明らかにしている。そうだったのは、彼の共同体の中に様々に異なった人達の間に、急に敵意と憎しみが生まれできたからであつた。この事實は、アダムが出て行くよう命令された「庭園」が楽園ではなかったことのもう一つの証拠となつている。アダムは、彼の生地メソポタミアから出て、近隣の地に移つたようである。この移住は、多分一時的なことであり、ずっと後に彼は自分の故郷に戻つたであらう。事実、「時への備え」という言葉は、移住が一時的なものであることを、僅かにほのめかしている。アダムは、この節で、これから先、注意深くしているよう警告を受けているのである。それも、今や彼は永遠に自分の生地到此に住むべきであるからなのである。

注 21 一般的な意に解釈すれば、この節は、人間は誰も物としての肉体を持ったまま楽園に昇ることはできないと示唆しているのである。人は地上で生き、地上で死ななければならないのである。

注 22 アダムが「庭園」において自己の「裸身」に纏つたのは、敬虔なる信仰という衣服であつた。

注 23 シャイターンと呼ばれる悪霊とその仲間達は、普通は目には見えない。彼らは、密かに力をふるい、人間の隠れた弱点を捜し出しては、人間がその邪悪な心をますます強くするよう仕向けるのである。神はただ人間の試練として、サタンをお創りになつたのであり、サタンは、人間が辿っていく精神の旅路の途中にある障害物としての役割を果たすのである。障害物とは、妨害するためのものではない。人生という競技の中で、競争者達がもっと用心深くなり、それまで以上に努力をするようになるためのものなのである。障害物に躓き人生に負けた、不注意者、怠惰な者は、自分自身を責めるべきであつて、彼らの気概を試すため、彼らを試練に向かわせた人あるいは人々を責めるべきではない。

29. 彼等はみだらな行為をする度に、云う、「我等は、父祖たちがそれを行うを見たり。アッラーが之を我等に命じたり」と。云え、「アッラーは決してみだらな行為を命ぜず。お前たち、アッラーについて己れの知らざることを云うか?」と。

وَإِذَا قُلُوا فَاِحْسَةً قَالُوا وَجَدْنَا عَلَيْهَا آبَاءَنَا
وَاللَّهُ أَمَرَنَا بِهَا قُلْ إِنَّ اللَّهَ لَا يَأْمُرُ بِالْفَحْشَاءِ
اتَّقُوا اللَّهَ عَلَى اللَّهِ مَا لَا تَعْلَمُونَ ﴿٢٩﴾

30. 云え、「主は正義を命じ給えり。されば礼拝の場所では、(注24)常にその顔を主に正しく向けて祈り、誠を尽して信ぜよ。主がお前たちに生をもたらしたる如く、お前たちはいずれ主の許へ帰り行く」と。(注25)

قُلْ أَمَرَ رَبِّي بِالْقِسْطِ وَأَقِيمُوا وُجُوهَكُمْ عِندَ كُلِّ
مَسْجِدٍ وَادْعُوهُ مُخْلِصِينَ لَهُ الدِّينَ هُ كَمَا بَدَأَكُمْ
تَعُودُونَ ﴿٣٠﴾

31. 主は或る者は導き、また迷誤する者はうち捨てたり。彼等はアッラーをさしおいて悪魔どもを仲間となし、しかも自らは正しく導かれていると思う。

فَرِيقًا هَدَىٰ وَفَرِيقًا حَقَّ عَلَيْهِمُ الضَّلَالَةُ إِنَّهُمْ
اتَّخَذُوا الشَّيَاطِينَ أَوْلِيَاءَ مِنْ دُونِ اللَّهِ وَيَحْسَبُونَ
أَنَّهُم مُّهْتَدُونَ ﴿٣١﴾

32. アダムの子らよ、礼拝所に於ける礼拝時には、服装に気をつけよ。(注26)飲むもよし、食べるもよし、なれど度を過ごすなかれ。げに主は度を過ごす者を好まず。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا رَأَيْتُمْ أَنَّ كُلَّ مَسْجِدٍ وَكُلَّ
مَاءٍ وَاشْرَبُوا وَلَا تُسْرِفُوا إِنَّهُ لَا يُحِبُّ الْمُسْرِفِينَ ﴿٣٢﴾

第四項

33. 云え、「アッラーがその僕のために作りたる装身具や、その賜える清潔な食物を禁じたるは誰か?」と。云え、「これらのものは、復活の日において、現世にて信徒なりし人々にのみ限らる」と。(注27)かくの如く、われらは知識ある人々にさまざまな神兆を説明す。

قُلْ مَنْ حَزَمَ زِينَةَ اللَّهِ الَّتِي أَخْرَجَ لِعِبَادِهِ وَالطَّيِّبَاتِ
مِنَ الزَّيْتِ قُلْ هِيَ لِلَّذِينَ آمَنُوا فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا
خَالِصَةٌ يَوْمَ الْقِسْمَةِ كَذَلِكَ نُفَصِّلُ الْآيَاتِ لِقَوْمٍ
يَعْلَمُونَ ﴿٣٣﴾

注24 祈りの時間が近づき、寺院に出かける時には、イスラム教徒達は、世俗のことを忘れて、神に注意を集中しなければならない。すべての祈りの前に行う沐浴は、信徒の心を神に向けさせ、祈りを行うにふさわしい状態にさせることを目的としているのである。

注25 「主がお前たちに生をもたらしたる如く、お前たちはいずれ主の許へ帰り行く」という言葉は、「度我々の肉体が母の子宮の中で次第に成長するように、我々の魂も、死後、同様な成長過程を辿るであろうと言っているのである。

注26 美しく装うことは身体的にも精神的にも必要なことである。身体的な観点では、信徒達は祈りの場へ行く時には、できるだけ清潔できちんとした服装をすることとされているのである。

注27 神が用意なさった素晴らしい汚れなき物は、実際の生活においては不信徒とも分かちるのであるが、本来は信徒たちのためのものである。将来には、不信徒を除き、信徒たちのみ恩恵を与えられるであろう。

34. 云え、「主が禁じたることは、みだらな行為、そは外に現われたるものでも内に秘めたるものでも、また罪と邪悪な違犯、アッラーが何の権能も授けざるものをお前たちがアッラーに配し祀ること、並びにアッラーについて己れの知らざることを云うことなり」と。

35. いずれの民にも一定の期限あり。その期限至れば、一瞬なりとも遅速する能わず。(注28)

36. アダムの子らよ、(注29)もしお前たちの中より選ばれし使徒がお前たちのところに来て、わが神兆をお前たちに物語る場合、それで神を畏れ、善事を行う者には、恐れも悲哀もなかるべし。

37. されどわれらの神兆を拒否し、尊大にも之より顔をそむける者ども、彼等は業火の住人となり、その中に永劫に住まん。

38. アッラーに対して偽りを捏造し、その神兆を虚偽なりとする者以上に不義なる者は誰か？かかる徒輩は定められた通りの運命を持つべし。(注30)やがてわれらの使者たちが彼等を訪れてその命を召す時、使者たちは云わん、「アッラーの外に、日頃お前たちが祈れる者は、今何処にありや？」と。彼等は答えん、「我等は彼等を見出せず」と。かくて彼等は自ら不信心者たりしことを立証すべし。

قُلْ إِنَّمَا حَرَّمَ رَبِّي الْفَوَاحِشَ مَا ظَهَرَ مِنْهَا وَمَا بَطَنَ
وَالْإِثْمَ وَالْبَغْيَ يُبَيِّرُ النَّحْيَ وَأَنْ تُشْرِكُوا بِاللَّهِ مَا لَمْ
يُنْزَلْ بِهِ سُلْطَانًا وَأَنْ تَقُولُوا عَلَى اللَّهِ مَا لَا تَعْلَمُونَ ﴿٣٤﴾

وَلِكُلِّ أُمَّةٍ أَجَلٌ فَإِذَا جَاءَ أَجْلُهُمْ لَا يَسْتَأْخِرُونَ
سَاعَةً وَلَا يَسْتَقْدِمُونَ ﴿٣٥﴾

يَا بَنِي آدَمَ إِنَّا يَبَايِعُكُمْ رَسُولٌ مِّنْكُمْ يُقْضُونَ عَلَيْكُمْ
أَيْتِي فَمَنْ أَتَى وَأَصْلَحَ فَلَا خَوْفَ عَلَيْهِمْ وَلَا
هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿٣٦﴾

وَالَّذِينَ كَذَبُوا بَايَعَتَنَا وَاسْتَكْبَرُوا عَنْهَا أُولَٰئِكَ
أَحْصَى النَّارُ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٣٧﴾

فَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنْ افْتَرَى عَلَى اللَّهِ كَذِبًا أَوْ كَذَّبَ
بَايَعَتِهِ أُولَٰئِكَ يَنَالُهُمْ نَصِيبُهُمْ مِنَ الْكِتَابِ حَتَّى
إِذَا جَاءَهُمْ رَسُولُنَا يُتَوَفَّوْنَهُمْ قَالُوا إِنَّا كُنْتُمْ
تَدْعُونَنَا مِنْ دُونِ اللَّهِ قَالُوا ضَلُّوا عَنَّا وَشَهِدُوا
عَلَىٰ أَنْفُسِهِمْ أَنَّهُمْ كَانُوا كَافِرِينَ ﴿٣٨﴾

注28 ある民族に罰が下ると定められた時がせまってくると、もうそれを回避することも、遅らせることも、別の時期に延期することも不可能である。

注29 この点については、特別な注を加えるに値する。即ち、既出のいくつかの節と同様、「アダムの子供達よ」という言葉は、モハammadの時代の人々に向かって、またまたこれから生まれてくる世代の人々に向かって呼びかけているのである。遠い過去の人々や、アダムのすぐ次の世代に向かって呼びかけているのではない。

注30 この言葉は、神の使者を拒絶する者たちは、彼らは敗北し、挫折するという預言が実現するのを、自らの目でしかと見るであろう。また、神の使者に逆らった罪で、彼らに下される罰を噛みしめることになるであろうと述べているのである。

39. 主は云わん、「汝等、お前たち以前に逝きたるさまざまなる民族、妖霊と人間の集団に混って業火に入れ」と。一つの集団が入るたびに、必ず姉妹集団を呪い、逐次そこに入り終るや、最後の集団は最初の集団について云わん、(注 31)「主よ、我等を迷わしめたるは、この者どもなり。されば彼等に業火の罪を二倍与えよ」と。主は云わん、「誰れにも皆二倍の刑罰を(注 32)与えん。されどお前たち、之を知らざるのみ」と。

40. 最初の者どもは最後の者どもに向って、云わん、「お前たちは我等に勝るところなし。さればお前たちがなせることに対する懲罰を味わえ」と。

第五項

41. われらの神兆を拒否し、尊大にも之より顔をそむける者ども、彼等には天門断じて開かれず。また駱駝が針の孔を通らぬ限り、彼等は樂園に入るを得ざるべし。かくの如く、われらは悪人どもに報ゆ。
42. 彼等の寢床は地獄なり。上もまた同じ地獄で、彼等を覆う。われらはかくの如く不義者に報ゆ。
43. されど信じて、善行を積む人々は一われらは何人にも、能力以上のものを課せず、(注 33)一樂園の住人であり、そこに永久に住まん。
44. われらは如何なる怨恨も彼等の胸中より取り除くべし。彼等の足許には河川流れるべし。彼等は云わん、「我等をここに導きしアッラーに讃えあれ。もしアッラー我等を

قَالَ ادْخُلُوا فِي أُمَمٍ قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِكُمْ مِنَ الْجِنِّ وَالْإِنْسِ فِي النَّارِ كُلَّمَا دَخَلَتْ أُمَّةٌ لَعَنَتْ أُخْتَهَا حَتَّى إِذَا اتَّارُوا فِيهَا جَمِيعًا قَالَتْ أُخُولُهُمْ لَا وَلَهُمْ رَبِّنَا هَؤُلَاءِ أَضَلُّونَا فَاتِهِمْ عَذَابًا ضِعْفًا مِنَ النَّارِ قَالَ لِكُلِّ ضِعْفٌ وَلَكِنْ لَا تَعْلَمُونَ ﴿٣٩﴾

وَقَالَتْ أُوْلَاهُمْ لِأُولِهِمْ مَا كَانَ لَكُمْ عَلَيْنَا مِنْ فَضْلٍ فذُقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْسِبُونَ ﴿٤٠﴾

إِنَّ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا وَاسْتَكْبَرُوا عَنْهَا لَا تُفْعَلُ لَهُمْ أَبْوَابُ السَّمَاءِ وَلَا يَدْخُلُونَ الْجَنَّةَ حَتَّى يَلِجَ الْجَمَلُ فِي سَمِّ الْخِيَاطِ وَكَذَلِكَ نَجْزِي الْمُجْرِمِينَ ﴿٤١﴾ لَهُمْ مِنْ جَهَنَّمَ مِهَادٌ وَمِنْ فَوْقِهِمْ غَوَاشٍ وَكَذَلِكَ نَجْزِي الظَّالِمِينَ ﴿٤٢﴾

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَا نُكَلِّفُ نَفْسًا إِلَّا وُسْعَهَا أُولَئِكَ أَصْحَابُ الْجَنَّةِ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٤٣﴾

وَنُزِعْنَا مَائِي صُدُورِهِمْ مِنْ غَيْرِ تَجَرُّ مِنْ تَحْتِهِمْ الْأَنْهَارُ وَقَالُوا الْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي هَدَانَا لِهَذَا وَمَا

注 31 指導者達 (最初の集団) と彼らに従う者達 (最後の集団)。

注 32 苦痛と苦悩は、それが続いている間は激しく感じられるであろう、神の苦悩は堪え難いものであるだろう。

注 33 挿入句の「何人も能力以上のものを課せず」という句は、「罪は人間の本性に根ざしており、人間はそこから逃げ出すことはできない」というキリスト教の教義と反している箇所である。

導かざりせば、我等は正しい道を得る^{おた}能わじ。げに主の使徒たちは真理をもたらしたり」と。而^{しか}して彼等はかく告げらるべし、「こはお前たちの行い故に、報奨として授けられたる樂園なり」と。

45. 樂園の住人たちは地獄の住人たちに向って云わん、「我等は主の約束が真実なるを見た^みり。お前たちも主の約束が真実なるを見た^みるか?」と。彼等は答えん、「然り」と。その時、一人の布告者が^み両者の間にありて、云わん、「アッラーの呪い、不義者の上に降る—

46. 彼等はアッラーの道から人々を背かしめ、之を歪めんとしたばかりか、(注 34) 来世も信ぜざる者どもなり」と。

47. 両者の間に隔壁あり。而^{しか}してその高壁の上に人々ありて、記号によってすべての者を識別す。彼等は樂園へ行く人々に声をかけて、云わん、「あなたがたに平安あれ」と。彼等は未だ^{いまだ}樂園に入らねど、そこに入るを希望せん。

48. 次に彼等の目は業火の徒輩^{こゝろ}に転じて云わん、「主よ、我等を不義なる徒輩^{よから}と一緒にするなかれ」と。

第六項

49. 高壁に居る人々は記号によって人を識別し、(注 35) その者たちに呼びかけて云わん、「お前たちの多くの富も、傲慢さも、ともに自らを益せざるに非ずや?

كُنَّا لِنَهْتَدِيَ لَوْلَا اَنْ هَدٰنَا اللّٰهُ لَقَدْ جَاۤءَتْ
رُسُلٌ رَّبِّنَا بِالْحَقِّ وَنُودُوۡا اَنْ تَكْفُرَ الْجَنَّةُ اُورِثْتُمُوهَا
بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوۡنَ ﴿٣٤﴾

وَنَادٰۤى اَصْحٰبُ الْجَنَّةِ اَصْحٰبَ النَّارِ اَنْ قَدْ وَجَدْنَا
مَا وَعَدْنَا رَبِّنَا حَقًّا فَبُهِلْ وَجَدْتُمْ مَا وَعَدَ رَبُّكُمْ
حَقًّا قَالُوۡا لَئِمَّا فَتَمَحُّوۡا فَاَذَنُ مُؤَذِّنٍ بَيْنَهُمۡ اَنْ لَّعَنَ اللّٰهُ
عَلٰى الظّٰلِمِيۡنَ ﴿٣٥﴾

اَلَّذِيۡنَ يَصُدُّوۡنَ عَنِ سَبِيۡلِ اللّٰهِ وَيَبْغُوۡنَهَا عِوَجًا
وَهُمۡ بِالْاٰخِرَةِ كٰفِرُوۡنَ ﴿٣٦﴾

وَبَيْنَهُمَا حِجَابٌ وَعَلَى الْاَعْرَافِ رِجَالٌ يَعْرِفُوۡنَ كُلًّا
بِسِيۡمَتِهِمْۢ وَنَادٰۤوۡا اَصْحٰبَ الْجَنَّةِ اَنْ سَلِّمُوۡا عَلَيْهِمۡ
لَمْ يَدْخُلُوۡهَا وَهُمْ يَصۡعُقُوۡنَ ﴿٣٧﴾

وَاِذَا صُرِفَتْ اَبۡصَارُهُمْ تَلۡفَافًا اَصْحٰبُ النَّارِ قَالُوۡا رَبَّنَا
لَا تَجۡعَلۡنَا مَعَ الْقَوۡمِ الظّٰلِمِيۡنَ ﴿٣٨﴾

وَنَادٰۤى اَصْحٰبُ الْاَعْرَافِ رِجَالًا يَعْرِفُوۡنَهُمۡ بِسِيۡمَتِهِمۡ
قَالُوۡا مَا لَئِمَّا عَنْكُمْ جِئْتُمْ وَمَا كُنْتُمْ تَسۡتَكۡبِرُوۡنَ ﴿٣٩﴾

注 34 この表現は、悪を行なう者達は、真の宗教など堕落させたいと願っているという意味である。彼らは、彼ら自身邪悪なだけでなく、他人をも彼らの如くに変えてしまおうとし、更に宗教の教義をゆがめ、勝手に変えようとさえているのである。

注 35 段上にいる人即ち預言者達は、人々の中のある特定の者達に呼びかけるであろう。預言者達は彼らの為に派遣されたのであり、預言者達はこうした人々を彼らの特別な特徴によって見分け、彼らに向かって、預言者達に敵対すれば、悲しむべき結末になることを、今こそ理解する必要があると告げるであろう。

50. お前たちが、アッラーは恩恵を施さずと誓えるは、これ等の人々なるか？」と。神は彼等に向って云わん、「楽園に入れ。お前たちは恐れも悲哀もなかるべし」と。
51. 業火^{こうか}の住人たちは楽園の住人たちに呼びかけて、云わん、「アッラーがお前たちに与えたもの、水なりなんなり我等に注げ」と。彼等は答えて云わん、「アッラーは不信心者どもにその両方を禁じたり—
52. 宗教を気晴しか娯楽と考え、現世の生活に欺かれたる者どもには」と。されば、彼等がこの日の対面を忘れ、われらの神兆^{しんし}を認めざりし如く、今日われらも彼等を忘れ去らん。
53. げにわれらは彼等に經典をもたらし、知識に基いてそれを記述せり。こは信ずる人々への嚮導^{きようどう}にして、かつ慈悲なり。
54. 今彼等は、ただ警告の結果、それ以外何を待つか？ その結果が到来する日、以前に之を忘れていた人々は「主の使徒たちは確かに真実をもたせり。我等のために執り成してくれる仲裁者はいざるか？それとも我等を再び現世に返してくれるなら、これまでして来たことと違つた行為をなすべきものを」と云わん。げに彼等は自らを滅ぼせり。而してその捏造^{ねつぞう}せるものは、彼等を見捨てたり。

第七項

55. げにお前たちの主はアッラーにして、六日の間に（注36）天と地を創り、しかる後に

أَهْوَأَ الَّذِينَ أَفْسَنُوا لِيَأْتِيَهُمُ اللَّهُ بِرَحْمَةٍ
أُدْخِلُوا الْجَنَّةَ لَأَخَافَ عَلَيْكُمْ وَلَا أَنْتُمْ تَحْزَنُونَ ﴿٥٠﴾

وَأَذَى أَصْحَابِ النَّارِ أَصْحَابِ الْجَنَّةِ أَنْ يَفْضُوا عَلَيْنَا
مِنَ الْمَاءِ أَوْ مِمَّا رَزَقْنَاهُ اللَّهُ قَالُوا إِنَّ اللَّهَ خَدَمَهُمْ
عَلَى الْكُفْرِ ﴿٥١﴾

الَّذِينَ اتَّخَذُوا دِينَهُمْ لَهْوًا وَلَعِبًا وَغَرَّتْهُمُ الْحَيَاةُ
الدُّنْيَا فَالْيَوْمَ نَنسِفُهُمْ كَمَا نَسَوُا لِقَاءَ يَوْمِهِمْ هَذَا
وَمَا كَانُوا بِآيَاتِنَا يَجْحَدُونَ ﴿٥٢﴾

وَلَقَدْ جِئْتَهُم بِكِتَابٍ فَصَّلْنَاهُ عَلَى أَعْيُنِهِمْ هَذَا
رَحْمَةً لِقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ﴿٥٣﴾

هَلْ يَنْظُرُونَ إِلَّا تَأْوِيلَهُ يَوْمَ يَأْتِي تَأْوِيلَهُ يَقُولُ
الَّذِينَ نَسُوا مِنْ قَبْلُ قَدْ جَاءَتْهُمْ رُسُلُنَا بِالْحَقِّ
فَهَلْ لَنَا مِنْ شَفْعَاءَ فَيسْتَفْعُوا لَنَا أَوْ نَزِدْهُمْ مِمْ
غِيرَ الَّذِي نُنْزِلُ لَعَلَّ قَدْ خَسِرُوا أَنْفُسَهُمْ وَصَلَّ
عَنْهُمْ مَا كَانُوا يَفْتَرُونَ ﴿٥٤﴾

إِنَّ رَبَّكُمُ اللَّهُ الَّذِي خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ فِي
سِتَّةِ أَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوَى عَلَى الْعَرْشِ يُغْشَى الْيَلَمُ الْبَهْرُ

注36 この期間の長さを推測したり、決定することは不可能である。「一千年」かもしれないし（20：48）、
「五万年」かもしれない（70：5）。神は、神の時代のすべてを我々に明らかになさっているわけではない。神
のある時代は、一千年以上であり、また別の時代は五万年、何億年と続くかもしれない。科学が、天や地が現在の
の形態にまで発展してくるのに何百万年もかかっていることを明らかにしている。イスラム教の高名な学者イ
ブン・アラビーの見解と同じ結論を引き出している。このとおり、我々は、天地の創造が完成していく「六日
間」の長さを明確にすることはできないのである。神は、それぞれの期間に、それぞれの变化をもたせられる。
変化のあるものは、一千年、あるものは五万年、またあるものはもっと長い歳月を必要とするであろう。我々

玉座に登れり。(注37)彼は夜を以て昼を覆わしめたれば、夜はすみやかに昼を追跡す。更に彼は、日月星辰すべてを創り、これらすべてを己が命に服させ給う。げに創造と支配は彼の所有なり。讃えあれ、万物の主アッラー。

56. 心を虚しくして、密かに主に祈れ。げに主は罪人を好まず。

57. 秩序が(注38)定まりたる後、地上に騒乱を起すなかれ。畏敬し、希望を抱いて主に祈れ。げにアッラーの慈悲は善行をなす者の近くにあり。

58. その慈悲に先立ち、朗報として風を送り出す御方は、彼なり。風が重い雲を運べば、われらは之を不毛の地に送り、それより水を降らせ、さまざまなる果実を生ぜしむ。同様に、われらは死者を甦らしむるなり。
(注39) お前たち恐らく教訓を受けん。

59. 沃土は主の許しによりて草木繁茂すれど、悪土は貧弱なもので外育たず。同様に、わ

بَطْلُهُ خَيْشًا وَالشَّسَّ وَالْقَمَرَ وَالْجُومَ مَصْعَرَاتٍ
يَا صِرْطُ الْآلَةِ الْخَلْقِ وَالْأَمْرِ كَتَبَكَ اللَّهُ رَبُّ
الْعَالَمِينَ ﴿٥٥﴾

ادْعُوا رَبَّكُمْ تَضَرُّعًا وَخُفْيَةً إِنَّهُ لَا يُحِبُّ
الْمُعْتَدِينَ ﴿٥٦﴾

وَلَا تُفْسِدُوا فِي الْأَرْضِ بَعْدَ إِصْلَاحِهَا وَادْعُوهُ
خَوْفًا وَطَمَعًا إِنَّ رَحْمَتَ اللَّهِ قَرِيبٌ مِنَ الْحَسِينِ ﴿٥٧﴾

وَهُوَ الَّذِي يُرْسِلُ الرِّيحَ بُشْرًا لِيَدْفِي رَحْمَتَهُ
حَتَّىٰ إِذَا أَكَلَتْ الْأَرْضُ نَقَالًا سَقْنَهُ لِبَلَدٍ يَدَّتْ فَأَنْزَلْنَا
بِهِ الْمَاءَ فَأَخْرَجْنَا بِهِ مِنْ كُلِّ الثَّمَرَاتِ كَذَلِكَ نُخْرِجُ
الْمَوْتَى لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُونَ ﴿٥٨﴾

وَالْبَلَدُ الطَّيِّبُ يَخْرُجُ نَبَاتُهُ بِإِذْنِ رَبِّهِ وَالَّذِي

のわかることは、天地の創造は、完全な完結した形態になるためには、長い六つの期間が必要であるということのみである。

注37 「神は玉座に登れり」という言葉は、物質的な宇宙の創造の後、神の卓越した属性とそれに類する特性が発揮されて、世界のすべての事々が、一連の自然法によって統率されるようになったということ意味する。

注38 この表現は次のような意である。クルアーンが明らかにされる以前は、不信徒達は、正義にそむく生活をしていても、それに対して何らかの言い訳をしてきた。しかし、完全な導きの書が著されたからには、彼らは、もはや悪を為し続け、罪惡と不正に屈し、罰も受けることなく正義に反する生活を続けていくことは許されないというべきである。イスラー(秩序)という語は、クルアーンが著され、モハammadが出現したのと共に行われるようになった、良き規則正しい生活を表している。

注39 単なる雨水でも、死の土地に新しい生命を与え、野菜、果物や穀物をその地から生まれさせる。それと同様に、天の啓示の水が精神的な命のなかった人間に新しい命を吹き込むのだと、この節は語っているのである。この節は、クルアーンという形となって降ってきた天の水のおかげで、荒涼として乾燥した不毛の地アラブが、やがて果物のたわわになった木々や、香り高い花をつけた草々で満ちるであろうと約束しているのである。当然、これまで人間のかす、屑と言われてきたアラブの人々が、これ以後突然、教師として指導者として浮かび上がってきたのである。

れらは感謝の念を抱く人々にいろいろと形を変えてさまざまな神兆を詳しく説明す。

第八項

60. われらはノアをその民に遣わせり。その時、ノアは云えり、「人々よ、アッラーを崇拜せよ。彼の外に神なし。げに我はお前たちのために大変な日の懲罰を恐る」と。

61. 部族の長老たちは云えり、「我等は、汝こそ迷誤の中にありと思う」と。

62. ノアは云えり、「人々よ、我は迷える者に非ず。我は万物の主よりの使徒なり。(注40)

63. 我は主の神託をお前たちに伝え、善き助言を与える者なり。而して我は、お前たちが知らざることをアッラーより知らされているなり。

64. お前たちは、お前たちの中の一人を通して主の訓戒がお前たちに来たることを驚くか？彼がお前たちに警告し、お前たちをして正義ならしめ、慈悲に浴せしめんとするのを」と。

65. しかるに彼等は、ノアを嘘つき呼ばわりせり。さればわれらは、ノア並びにノアと箱舟をともにする人々を救い、われらの神兆を拒否せる者どもを溺死せしめたり。げに彼等は盲目の民なりき。

第九項

66. われらはまた、アードの民に(注41)その兄弟フードを遣わせり。その時、フードは

حَبْتٌ لَا يَخْرُجُ إِلَّا لَكَذِّكَ نَصْرَفُ الْآيَاتِ
يَقَوْمُ يَشْكُرُونَ ⑥

لَقَدْ أَرْسَلْنَا نُوحًا إِلَى قَوْمِهِ فَقَالَ يٰقَوْمِ اعْبُدُوا
اللَّهَ مَا لَكُمْ مِنْ إِلَهٍ غَيْرُهُ إِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ
عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ⑦

قَالَ السَّلَامُ مِنْ قَوْمِهِ إِنَّا لَنُرِيكَ فِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ⑧
قَالَ يَقَوْمُ لَيْسَ بِي ضَلَالَةٌ وَلَكِنِّي رَسُولٌ مِنْ رَبِّ
الْعَالَمِينَ ⑨

أُبَلِّغُكُمْ رِسَالَاتِ رَبِّي وَأَنْصَحُ لَكُمْ وَأَعْلَمُ مِنَ اللَّهِ
مَا لَا تَعْلَمُونَ ⑩

أَوْعَجِبْتُمْ أَنْ جَاءَكُمْ ذِكْرٌ مِنْ رَبِّكُمْ عَلَى رَجُلٍ مِمَّنْكُمْ
لِيُنذِرَكُمْ وَلِتَتَّقُوا وَلَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ⑪

فَكَذَّبُوهُ فَأَخْبَيْنَاهُ وَالَّذِينَ مَعَهُ فِي الْفُلِكِ وَاعْرَقْنَاهُ
الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمًا عَائِينَ ⑫

وَالِإِلَى عَادٍ أَخَاهُمْ هُودًا قَالَ يَقَوْمِ اعْبُدُوا اللَّهَ

注40 ノアは、彼が誤りを犯しているという非難に対し反論している。実際には、彼は、ある場所にこれから行こうとする者は、そこへ通じる道を知らないか、あるいは、そこへの道を以前に通ったことがないために、道に迷ったとされるかもしれないが、ある場所から戻ってこようという者が、どうして道を知らないことがあるのか、どうして道に迷うことがあるのだろうかと言っている。ノアは、自分が間違えをするはずがないという。なぜなら、彼は神のもとからやって来たのであり、それ故、彼が神のもとへ通じる道からはずれず迷うことはあり得ないというのである。

注41 アードとは、アラビアにはるか昔に住んでいた部族の名称である。ある時期、彼らは広義のアラビアの最も肥沃な地域、特にイエメンやシリア、メソポタミアを支配しており、アラビア全土を支配した最初の民

(注 42)云えり、「人々よ、アッラーを崇拜せよ。彼の外に神なし。お前たち神を畏れざる気か？」と。

مَا لَكُمْ مِنَ اللَّهِ غَبَرَةٌ أَفَلَا تَتَّقُونَ ﴿٦٧﴾

67. この民のうち信ぜざる長老どもは云えり、「我等は、汝が確かに愚妄の中にあるを見る。我等は汝を嗤つきの一人と見なす」と。

قَالَ الْمَلَأُ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ قَوْمِهِ إِنَّا لَنَرُكَ فِي سَفَاهَةٍ وَإِنَّا لَنَظُنُّكَ مِنَ الْكَذِبِينَ ﴿٦٨﴾

68. フードは答えり、「人々よ、我は愚か者に非ず。万物の主の使徒なり。

قَالَ يَقُومُ لَيْسَ بِي سَفَاهَةٌ وَلَكِنِّي رَسُولٌ مِنْ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٦٩﴾

69. 我はお前たちに主の神託を伝える者にして、お前たちの正直かつ誠実な相談相手なり。

أُبَلِّغُكُمْ رِسَالَتِ رَبِّي وَأَنَا لَكُمْ نَاصِحٌ أَمِينٌ ﴿٧٠﴾

70. お前たちは、お前たちの中の一人を通して主の訓戒がお前たちに來たることを驚くか？主はお前たちにノアの民の後を継がせ、而してお前たちの体格を強大ならしめたることを思い起せ。而して繁栄を願わば、アッラーの恩恵を忘れまいぞ」と。

أَوْعَيْبُهُمْ أَنْ جَاءَهُمْ ذِكْرٌ مِنْ رَبِّكُمْ عَلَى سَرَجٍ مِّنْكُمْ لِيُنذِرَكُمْ وَأَذْكُرُوا إِذْ جَعَلَكُمْ خُلَفَاءَ مِنْ بَعْدِ قَوْمِ نُوحٍ وَزَادَكُمْ فِي الْغَلَقِ بَضْطَةً فَأَذْكُرُوا آلَاءَ اللَّهِ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿٧١﴾

71. 彼等は云えり、「汝は我等にアッラーのみを崇拜し、我等の父祖が崇拜せるものをやめさせんがために我等に來たるか？もし汝の言葉が本当なら、我等を脅迫する事実を今ここにもたらせ」と。

قَالُوا أَجِئْنَا لَتَعْبُدَ اللَّهَ وَحْدَهُ وَنَذَرَ مَا كَانَ يَعْبُدُ آبَاؤُنَا فَأَمِّتْنَا بِمَا نَعِدُ نَا إِنْ كُنْتَ مِنَ الصَّادِقِينَ ﴿٧٢﴾

72. フードは答えり、「主よりの懲罰と憤怒はすでにお前たちにふりかかりたり。お前たちは、お前たちが命名せる名前について我と論争するつもりか—お前やお前たちの父祖たちが命名せる—アッラーはそれ等に如何なる権能も与えず。されば待て、我もまたお前たちと共に待つほどに」と。

قَالَ قَدْ وَقَعَ عَلَيْكُمْ مِنْ رَبِّكُمْ رِجْسٌ وَغَضَبٌ أَتُجَادِلُونَنِي فِي أَسْمَاءٍ سَيَّسْتُمُوهَا أَنْتُمْ وَآبَاؤُكُمْ مِمَّا نَزَّلَ اللَّهُ بِهَا مِنْ سُلْطَانٍ فَانْظُرُوا إِنِّي مُعَذِّبُ النَّظِيرِينَ ﴿٧٣﴾

73. かくてわれらは慈悲を垂れ、彼並びに彼と共にありし者を救いたれど、われらの神兆

فَأَنجَيْنَاهُ وَالَّذِينَ مَعَهُ بِرَحْمَةٍ مِنَّا وَقَطَعْنَا دَائِرَ

族であった。そして、一番めのアードとして知られている。11章51節も参照せよ。

注 42 フードはノアから数えて七代目の世代の人であった。

を拒否し、信ぜざりし者どもは最後の一人まで生命を奪い去りたり。

第十項

74. われらはまた、サムードの民にその兄弟サーリフを遣わせり。その時、サーリフは云えり、「人々よ、アッラーを崇拜せよ。彼の外に神なし。今主より明証^{あかし}がお前たちに来たり—こはアッラーの牝駱駝^{めすらくだ}にして、お前たちへの神兆^{しるし}なり。されば之をアッラーの大地に食むがままに放牧^{はかみ}せよ。而して痛罰にあわぬよう、之を害するなかれ。

75. アッラーがお前たちにアードの民のあとを継がせ、その地に安住せしめた時のことを思い起せ。お前たちは平野に館を建て、また山を刻^きんで家々となせり。さればアッラーの恩恵を思い出して、地上に騒乱を引き起す不法をするなかれ」と。

76. この民の中の傲慢な長老たちは、弱者と見なされている人々、すなわち信徒たちに向つて、云えり、「お前たちはサーリフが確かに主より遣わされたる者なることを知るか?」と。彼等は答えり、「我等はサーリフが遣わされたる使命を信ず」と。

77. 傲慢なる者どもは云えり、「我等はお前たちが信ずるものを信ぜず」と。

78. 而して彼等は雌駱駝^{めすらくだ}の腦^{ひかみ}を切り、主の命に背きて、云えり、「サーリフよ、もし汝が本当に使徒の一人ならば、我等を脅迫する事実を今ここで起して見せよ」と。

79. すると、にわかに地震が彼等を襲いたれば、彼等はことごとく自らの家の中で斃^たれ伏したり。

80. そこでサーリフは彼等に背を向け、而して云えり、「人々よ、我は主のお告げをお前たちに伝え、真心をもって忠告せり。しかる

الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا وَمَا كَانُوا مُؤْمِنِينَ ﴿٧٤﴾

وَالِى شُودَ أَخَاهُمْ ضِلْحًا قَالَ يَقَوْمِ اعْبُدُوا اللَّهَ مَا لَكُمْ مِنْ إِلَهٍ غَيْرُهُ قَدْ جَاءَكُمْ بَيِّنَةٌ مِنْ رَبِّكُمْ هَذِهِ نَاقَةُ اللَّهِ لَكُمْ آيَةٌ فَذَرُوهَا تَأْكُلْ فِي أَرْضِ اللَّهِ وَلَا تَمْسُوهَا بِسَوْءٍ فَيَأْخُذَكُمْ عَذَابُ إِلِيمٍ ﴿٧٥﴾

وَاذْكُرُوا إِذْ جَعَلَكُمْ خُلَفَاءَ مِنْ بَعْدِ عَادٍ وَبَوَّأَكُمْ فِي الْأَرْضِ تَتَّخِذُونَ مِنْ سَهْلِهَا قُصُورًا وَتَنْحِتُونَ الْجِبَالَ بُيُوتًا فَاذْكُرُوا الْآلَاءَ اللَّهِ وَلَا تَعْسُوا فِي الْأَرْضِ مُفْسِدِينَ ﴿٧٦﴾

قَالَ الْمَلَأَ الَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا مِنْ قَوْمِهِ لِلَّذِينَ اسْتَضَعُوا إِلَهُنَّ أَمْنَ مِنْهُمْ أَتَعْلَمُونَ أَنَّ ضِلْحًا مُرْسَلٌ مِنْ رَبِّهِ قَالُوا إِنَّا بِمَا أُرْسِلَ بِهِ مُؤْمِنُونَ ﴿٧٧﴾

قَالَ الَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا إِنَّا بِالَّذِي آمَنُم بِهِ كَافِرُونَ ﴿٧٨﴾ فَحَقَّرُوا النَّاقَةَ وَتَوَاعَنَ أَمْرَ رَبِّهِمْ وَقَالُوا يَصْلِحُ إِبْنَتَنَا إِنَّمَا تَعِدُّنَا أَنْ كُنْتُمْ مِنَ الْمُرْسَلِينَ ﴿٧٩﴾

فَأَخَذَتْهُمُ الرَّجْفَةُ فَأَصْبَحُوا فِي دَارِهِمْ جُثَمِينَ ﴿٨٠﴾

فَتَوَلَّى عَنْهُمْ وَقَالَ يَقَوْمِ لَقَدْ أَبْلَغْتُكُمْ رَسُولًا

にお前たちは、誠実な忠告者を好まず」と。
(注 43)

رَبِّي وَصَحَّتْ لَكُمْ وَلَكِنْ لَا تُحِبُّونَ النَّصِيحِينَ ④③

81. われらはまたロトを(注 44) 遣わせり。その時、ロトはその民に向って云えり、「お前たちは、何人も未だかつて行わざりし(注 45) 忌まわしい行為を犯すのか？」

وَلَوْطًا إِذْ قَالَ لِقَوْمِهِ إِنَّا نَتَوَنَّى الْفَاحِشَةَ مَا سَبَقَكُمْ

بِهَا مِنْ أَحَدٍ مِنَ الْعَالَمِينَ ④①

82. お前たち、女の代りに男に欲情をもよおして近づくとは。お前たちはなんという放埒な民なのだ」と。

إِنَّكُمْ لَتَتَوَنَّى الرِّجَالَ شَهْوَةً مِّنْ دُونِ النِّسَاءِ

بَلْ أَنْتُمْ قَوْمٌ مُّسْرِفُونَ ④②

83. その民はただかく答えたり、「彼等をお前たちの邑から追い出せ。彼等は清純を装う者なり」と。(注 46)

وَمَا كَانَ جَوَابَ قَوْمِهِ إِلَّا أَنْ قَالُوا أَخْرِجُوهُمْ

مِّنْ قَرْيَتِكَ إِنَّهُمْ أَنْأَسُ يَنْظَهُوْنَ ④④

84. かくてわれらは、ロトの妻を除いて、ロトとその家族を救いたり。彼女はあとにとどまりたる者の類なりき。

فَأَنْجَيْنَاهُ وَأَهْلَهُ إِلَّا امْرَأَتَهُ ۖ كَانَتْ مِنَ الْغَابِرِينَ ④⑤

85. 前してわれらは彼等の上に雨を降らせたり。(注 47) 見よ。罪人どもの末路が如何なるものなりしかを！(注 48)

وَأَمْطَرْنَا عَلَيْهِمْ مَطَرًا فَأَنْظَرِكَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ

الْمُجْرِمِينَ ④⑥

第十一項

86. われらはまた、マドヤンの民に(注 49) その兄弟シュアイブを遣わせり。(注 50) そ

وَالِإِلَى مَدْيَنَ أَخَاهُمْ شُعَيْبًا قَالَ يَقَوْمُ اعْبُدُوا اللَّهَ

注 43 サーリフ(サーレ)は悲しみに打ちひしがれた町を、そのままにしてたち去った。彼はこれ以上その恐ろしい光景を見るに耐えなかったのであり、丁度バドルにおけるモハッマドのように、悲しみと悲嘆に満ちた心で、この節にあるような哀しい言葉を口にしたのである。

注 44 ロトはアブラハムの甥であり、同世代であった。

注 45 この言葉は、その忌まわしい事が、今までになかった新たな悪であるということ、あるいは、その程度が以前と比べべくもない程重大であったということを言っている。

注 46 ロトに敵対する人々は、彼に従う人々を特別に高潔を気どり、それを誇示していると輕蔑した。

注 47 大地震の時には、岩や瓦礫が噴き出し、高く上ってまた大地に落ちてくることがよくある。ポンペイで起こり、1965年にはカングラ(インド)で起こった。

注 48 ある人々によれば、死海の周囲の地は街が廢墟となっているという。しかし、クルアーンはここをメディナからシリアへの道に定めているようである(15:80)。

注 49 マドヤンはケトゥラとアブラハムの間に生まれた息子であった(創世記 25:1、2)。

注 50 シュアイブはモーゼ以前の非イスラム人の預言者の名であった。聖書に彼の名は見当たらないが、一般に彼はモーゼの義父として、尊敬されている。

の時、シュアイブは云えり、「人々よ、アッラーを崇拜せよ。彼の外に神なし。主より明証がお前たちに来たり。されば量目や目方をたつぷりと与え、人の財産を減らすなかれ。また秩序が定りたる後、地上に騒乱をひき起すなかれ。お前たち信徒ならば、こうするのが身のためなぞ。

87. また路頭に坐して脅迫し、アッラーを信ずる人々をアッラーの道より背かしむるなかれ。またそれを歪曲せんとするなかれ。お前たちはかつて少数なりしが、アッラーがお前たちを増加せしめたることを思い起せ。見よ、騒乱を引き起したる者どもの末路が如何なるものなりしかを！

88. もしお前たちのうち、我が遣わされたる使命を信ずる一団と、之を信ぜざる一団とあらば、アッラーが我等の間を審判するまで暫く辛抱して待て。アッラーこそ最上の審判者にまします」と。

89. その民の中の傲慢なる長老たちは云えり、「シュアイブよ、我等は汝並びに汝と共にある信者たちをこの邑より追放せん。それがいやなら、我等の宗教に戻れ」と。シュアイブは云えり、「我等不本意でもか？

90. アッラーがそより我等をお救いくだされたというに、今またお前たちの宗教に戻らば、我等はアッラーに対し奉り偽る者とならん。我等の主アッラーの御意志に非ざれば、そこに戻らざることが我等の義務なり。主はその知識の中に一切を包含す。我等はアッラーを信頼し奉る。されば主よ、真理をもって我等とこの人々の間を裁き給え。汝こそ最上の判決者にまします」と。

91. その民の中の信ぜざる長老たちは云えり、「お前たちもしシュアイブに従わば、必ず失敗者とならん」と。

مَا لَكُمْ مِنَ اللَّهِ عِوَاءَ قَدْ جَاءَكُمْ بَيِّنَةٌ مِنْ رَبِّكُمْ فَأَوْفُوا الْكَيْلَ وَالْيِزَانَ وَلَا تَبْخُسُوا النَّاسَ أَمْثَلُمْ وَلَا تُنْفِسُوا فِي الْأَرْضِ بَعْدَ إِصْلَاحِهَا ذَلِكُمْ خَيْرٌ لَكُمْ إِنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ٨٧

وَلَا تَقْعُدُوا بِكُلِّ صِرَاطٍ تُوعِدُونَ وَتَصُدُّونَ عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ مَنْ آمَنَ بِهِ وَتَبْغُونَهَا عِوَجًا ۚ وَادْكُرُوا إِذْ كُنْتُمْ قَلِيلًا فَكَثَرَكُمْ وَانظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُفْسِدِينَ ٨٨

وَإِنْ كَانَ طَائِفَةٌ مِنْكُمْ آمَنُوا بِالَّذِي أُرْسِلْتُ بِهِ وَطَائِفَةٌ لَمْ يُؤْمِنُوا فَاصْبِرُوا حَتَّى يَحْكُمَ اللَّهُ بَيْنَنَا وَهُوَ خَيْرُ الْحَاكِمِينَ ٨٩

يَا أَيُّهَا الْمَلَأَ الَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا مِنْ قَوْمِهِ لِلَّذِينَ جِئْتَهُمْ بِبَيِّنَاتٍ مِنْ رَبِّهِمْ أَنْ لَا يَأْمُرُوا بِالْعَدْلِ وَالْإِيمَانِ أَنْ يَكُونَ لَنَا أَنْ نَعُودَ فِيهَا إِلَّا أَنْ يَشَاءَ اللَّهُ رَبُّنَا وَسِعَ رَبُّنَا كُلَّ شَيْءٍ عِلْمًا عَلَى اللَّهِ تَوَكَّلْنَا رَبَّنَا افْتَحْ بَيْنَنَا وَبَيْنَ قَوْمِنَا بِالْحَقِّ وَأَنْتَ خَيْرُ الْفَاتِحِينَ ٩٠

قَدْ أَفْرَيْنَا عَلَى اللَّهِ كَذِبًا إِنْ عُدْنَا فِي مِلَّتِكُمْ بَعْدَ إِدْجَائِنَا اللَّهُ مِنْهَا وَمَا يَكُونُ لَنَا أَنْ نَعُودَ فِيهَا إِلَّا أَنْ يَشَاءَ اللَّهُ رَبُّنَا وَسِعَ رَبُّنَا كُلَّ شَيْءٍ عِلْمًا عَلَى اللَّهِ تَوَكَّلْنَا رَبَّنَا افْتَحْ بَيْنَنَا وَبَيْنَ قَوْمِنَا بِالْحَقِّ وَأَنْتَ خَيْرُ الْفَاتِحِينَ ٩١

وَقَالَ الْمَلَأَ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ قَوْمِهِ لِبَنِي إِسْرَءِيلَ سَعْيَا لَكُمْ إِذَا لُحِصْرُونَ ٩٢

92. すると、にわか地震が彼等を襲いたれば、
彼等はことごとく自らの家の中で斃れ伏し
たり。
93. シュアイブを嘘つき呼ばわりせる人々は、
恰もそこに未だかつて住めることなかりし
如くなれるなり。シュアイブを嘘つき呼ば
わりせる人々―彼等こそ失敗者なりけり。
94. そこで、シュアイブは彼等に背を向け、而
して云えり、「人々よ、我は主のお告げを確
かにお前たちに伝え、真心をもって忠告せ
り。されば、信ぜざる人々のためにどうし
て我が心を痛めようか」と。

第十二項

95. われらは如何なる邑にも、そこに住む人々
に災難と苦しみをふりかけず預言者を遣
わさざりき。そは彼等を謙虚ならしめんが
ためなり。
96. しかる後、われら彼等の不幸を転じて幸福
を与うれば、彼等は裕福になりて、云えり、
「我等の父祖もまた苦楽を合せ嘗めたり」
と。さればわれらは彼等が悟らざるうちに
突然懲罰を加えたり。
97. もしこれ等の邑々の住民が信じて義しくあ
りたりせば、われらは彼等に天地の祝福を
開きしなり。されど彼等信ぜざるが故に、
われらは彼等が日頃稼ぎしことに対して懲
罰を加えたり。
98. これ等の邑々の住民は、彼等が夜眠れる間
に降るわれらの懲罰に対して果して平気で
いられるのか？
99. これ等の邑々の人々は、昼日中遊び戯れる
最中に降るわれらの懲罰に対して果して平
気でいられるのか？
100. 彼等はアッラーの計略に対して果して平
気でいられるのか？滅ぶべきものどもの外
は、何人もアッラーの計略に対して心配せ
ざる者はなし。

فَأَخَذَتْهُمُ الرَّجْفَةُ فَأَصْبَحُوا فِي دَارِهِمْ جِثِيمِينَ ﴿١٢﴾

الَّذِينَ كَذَبُوا شُعَيْبًا كَأَن لَّمْ يَغْنَوْا فِيهَا الَّذِينَ كَذَبُوا
شُعَيْبًا كَانُوا هُمُ الْخَاسِرِينَ ﴿١٣﴾

فَتَوَلَّى عَنْهُمْ وَقَالَ يَاقَوْمُ لَقَدْ أَبْلَغْتُكُمْ رَسُولِي
وَنَصَحْتُ لَكُمْ فَكَيْفَ آتَيْتُمْنِي عَلَى قَوْمٍ كَافِرِينَ ﴿١٤﴾

وَمَا أَرْسَلْنَا فِي قَرْيَةٍ مِّن نَّبِيٍّ إِلَّا أَخَذْنَا أَهْلَهَا
بِالْبَأْسَاءِ وَالضَّرَاءِ لَعَلَّهُمْ يَضُرَّعُونَ ﴿١٥﴾

ثُمَّ بَدَّلْنَا مَكَانَ السَّيِّئَةِ الْحَسَنَةَ حَتَّى عَفَوْا وَقَالُوا
قَدْ مَنَّ اللَّهُ عَلَيْنَا إِنَّهُنَّ الْأَرْضُ فَأَخَذْنَاهُمْ بَغْتَةً
وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ﴿١٦﴾

وَكُذِّبَتْ أَهْلُ الْقُرَىٰ أَمَنُوا وَاتَّقَوْا فَفَتَحْنَا عَلَيْهِم
بَرَكَاتٍ مِّنَ السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ وَلَكِن كَذَبُوا فَأَخَذْنَاهُمْ
بِمَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ﴿١٧﴾

أَفَأَمِنَ أَهْلُ الْقُرَىٰ أَن يَأْتِيَهُمْ بَأْسُنَا بَيِّنًا وَهُمْ يَقَابِلُونَ ﴿١٨﴾

أَوَأَمِنَ أَهْلُ الْقُرَىٰ أَن يَأْتِيَهُمْ بَأْسُنَا هُجُوعًا وَهُمْ يَلْعَبُونَ ﴿١٩﴾

أَفَأَمِنُوا مَكْرَ اللَّهِ فَلَا يَأْمَنُ مَكْرَ اللَّهِ إِلَّا الْقَوْمُ
الْخَاسِرُونَ ﴿٢٠﴾

第十三項

101. 以前の住民の後を承けてその地を継げる者には、こは嚮導を与えざるか？すなわち、もしわれらが欲しなば、彼等の罪故にわれらは彼等を滅ぼすことも、また彼等の心を封印して聞えなくすることも可能なれば。

102. われらはこれ等の邑々について、いくつかの消息を汝に語れり。使徒たちは確かに明証を携えて彼等のところへ来れり。しかるに彼等は、以前信ぜざるものを信ずることを欲せざりき。アッラーはかくの如く不信心者の心を封じ給う。

103. 彼等の大半は契約を守らず。げに彼等の大半は邪悪な者どもなり。

104. そこでわれらは、彼等の後に、モーゼにわれらの奇蹟を持たせてファラオ並びにその長老たちのところへ遣わしたり。しかるに彼等は不当にも之を拒否せり。されば見よ、騒乱をひき起せる者どもの末路が如何なるものなりしかを！

105. モーゼは云えり、「ファラオよ、げに我は万物の主より遣わされたる者なり。

106. 我はアッラーについて、真実の外は何事も語るを許されざる身なり。我は主より明証を携えてお前たちに来れり。されば我と共に、イスラエルの子らを放免せよ」と。

107. ファラオは云えり、「もし汝が証拠を携えて来たりなば、而して汝の言葉が事実ならば、その証拠を見せよ」と。

108. さればモーゼ、その杖を投げたり。見よ、それは忽ち一條の蛇となれり。(注 51)

أَوَلَمْ يَهْدِ لِلَّذِينَ يَرِثُونَ الْأَرْضَ مِنْ بَعْدِ أَهْلِهَا
أَنْ لَوْ نَشَاءُ أَصْبَنَهُمْ بِدُنُوبِهِمْ وَنَطْبَعُ عَلَى قُلُوبِهِمْ
فَهُمْ لَا يَسْمَعُونَ ﴿١٠١﴾

تِلْكَ الْأَمْثَلُ نَقَضُ عَلَيْكَ مِنْ بَنَائِبِهَا وَلَقَدْ
جَاءَتْهُمْ رُسُلُهُم بِالْبَيِّنَاتِ فَمَا كَانُوا لِيُؤْمِنُوا بِهَا
كَذَّبُوا مِنْ قَبْلُ كَذَلِكَ يَطْبَعُ اللَّهُ عَلَى قُلُوبِ
الْكَافِرِينَ ﴿١٠٢﴾

وَمَا وَجَدْنَا لِأَكْثَرِهِمْ مِنْ عَهْدٍ وَإِنْ وَجَدْنَا
أَكْثَرَهُمْ لَفَاسِقِينَ ﴿١٠٣﴾

ثُمَّ بَعَثْنَا مِنْ بَعْدِهِمُ مُوسَى بِلَدْنَاهُ إِلَى فِرْعَوْنَ
وَمَلَائِكِهِ فَظَلَمُوا بِهَا فَأَنْظِرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ
الْمُفْسِدِينَ ﴿١٠٤﴾

وَقَالَ مُوسَى يُفْرِعَوْنَ إِيَّايَ رَسُولُ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١٠٥﴾

حَقِيقٌ عَلَى أَنْ لَا أَقُولَ عَلَى اللَّهِ إِلَّا الْحَقُّ قَدْ جُنِئْتُكُمْ
بِبَيِّنَةٍ مِنْ رَبِّكُمْ فَارْسِلْ مَعِيَ بَنِي إِسْرَائِيلَ ﴿١٠٦﴾

قَالَ إِنْ كُنْتَ جِئْتَ بِآيَةٍ فَأْتِ بِهَا إِنْ كُنْتَ مِنَ
الصَّادِقِينَ ﴿١٠٧﴾

فَأَلْقَى عَصَاهُ فَإِذَا هِيَ ثُعْبَانٌ مُبِينٌ ﴿١٠٨﴾

注 51 神の預言者達が示した奇跡は、奇術師の手先の芸当とは違うものである。それらは、大いなる宗教的、精神的目的にかなうものであり、それを目撃した人々の心に、信仰への確信、神への敬虔な感情と怖れを生じ

109. また彼その手を前に伸せば、見よ、その手は誰れの目にも真白に映れり。(注 52)

وَنَزَعَ يَدَهُ فَإِذَا هِيَ بَيْضَاءُ لِلنُّظَرِ ١٩

第十四項

110. ファラオの民の長老たちは云えり、「この者は確かに技量優れた魔術師なり。

قَالَ الْمَلَأُ مِنْ قَوْمِ فِرْعَوْنَ إِنَّ هَذَا لَسِيرٌ عَلِيمٌ ٢٠

111. 此奴はお前たちをこの国より追い出さんとする者なり。さてそこで、お前たちの意見や如何に？」と。(注 53)

يُرِيدُ أَنْ يُخْرِجَكُمْ مِنْ أَرْضِكُمْ فَمَاذَا تَأْمُرُونَ ٢١

るものである。もし実際に小杖がへびに変わったとしたら、その動作の全てが預言者の奇跡というより、手品師の芸当のように見えたであろう。この奇跡について、聖書に何と書いてあるかにかかわらず、クルアーンは小杖が実際に生きているへびに変わったという見解への支持を与えるには到っていない。そんな事は、現実には起こらなかったようである。小杖がただ単にすばやく動いているへびのようにみえたのである。奇跡は、神が、小杖がへびの形にみえる様に見物人の視覚に、何か特別な支配を施したか、小杖そのものをへびに見るように変えられたかどちらかの、幻であり、この幻を、モーゼに加えて、パロとその臣廷達も一緒に見たのである。小杖は小杖のままであったのだが、ただモーゼや他の者達にはへびにみえたのであった。幻影の内に、人が邪魔物である肉体の域を越え、一時的に精神的な範囲に移動される時、人はその認知以外で又肉体の一部である目では見えないものが見えることは、普通の霊的な現象である。同様な神霊的現象は、聖なる預言者の時代に、月がまるでバラバラに割れたかの様に、聖なる預言者のみでなく、その信者達と、その敵対する者達にも目撃された時にもみられた(ブハリ・タフシール書)。

聖なる預言者が幻の中でしばしば見たというガブリエルは、ある時、預言者と共に座っていたその仲間達によっても目撃された、と言い伝えられている(ブハリ・イマーヌ書)。同様に、パドルの戦いに於て、天使達が、不信仰者にでさえも目撃された。同じような実例は、著名なイスラムの軍司令官であるサーリヤの率いるイスラムの陸軍が、イラクで敵と戦っていた時にも起こっている。二代カリフであるオマルがメディナで金曜日の説教をしている最中に、イスラムの陸軍が絶対多数の敵に圧倒され悲惨な敗北がさし迫っているのを幻の中に見た。そこで突然、彼は説教を途中でやめ説教壇から「サーリヤよ、山へ逃げろ、山へ逃げろ。」と叫んだ。何百マイルも離れた所で、また耳が聞こえなくなる程の戦争のごう音のまっ只中で、サーリヤはオマルの声を聞き、その指示に従い、イスラムの陸軍は確実な敗北から救われたのである。

モーゼの奇跡は、大いなる重要性を持っている。それは、こんな風に解釈する事ができる。神はモーゼに、その時彼にはへびのように見えた小杖を投げ捨てる様言ったり、そして、神の命ずるままに拾いあげると、それはただの木であった。ここで、幻と夢の言葉を借りて言えば、へびは敵を象徴し、小杖は公衆を表象している。従って、この幻を手段として、神はモーゼに、もし神がモーゼの人々を彼から退けさせたら、人々はまぎれもないへび(のような陰険な人々)になるだろう事を知らせようとした。しかし、もし人々を彼のいつくしみ深い世話の下に置いておくならば、彼らは公正な、信心深い人々からなる強力堅固な社会へと成長していくだろうと悟らせたのである。

注 52 神はモーゼにこう言った「汝の手をその胸に突きさしてみよ。それは、病幣もなく、まっ白なまま現われて来るであろう」(28:33)。これは象徴的な言葉で、モーゼにもし彼が信仰者達をいつくしみ深い世話のもとで近くに置けば、人々は知性にあふれた者達になるだけでなく、他の者達へその明知を伝えることになるが、そうでなければ、ただ陰険であるだけでなく道徳的にも病むであろう、というはっきりとした暗示となっていた。従って奇跡は、魔術師による演技ではなく、深い精神的意味に満ちたお告げだったのである。

注 53 これらの言葉は、モーゼに対するエジプト人達の気持を徐々に組立てる意図をもっていたのだが、モーゼは彼らを追い出す事など望んでいなかった。彼の使命は、自分の人々をエジプトから脱出させることに限られていたのである。

112. 彼等は云えり、「しばし彼とその兄弟を待たせ、その間に召喚者を国中に走らせ、

قَالُوا أَرْجِهْ وَأَخَاهُ وَأَرْسِلْ فِي الْمَدَائِنِ خَبِيرِينَ ﴿١١٢﴾

113. それぞれの技量に秀でたる魔術師を汝の前に連行させるがよろしかろう」と。

يَأْتُوكَ بِكُلِّ سِحْرٍ عَلَيْهِمْ ﴿١١٣﴾

114. かくて魔術師たちはファラオの前に参上し、「我等首尾よく勝ちたる時は、もちろん褒美をいただけましような」と云えり。

وَجَاءَ السَّحَرَةُ فِرْعَوْنَ قَالُوا إِنَّ لَنَا لَأَجْرًا إِن

كُنَّا نَحْنُ الْغَالِبِينَ ﴿١١٤﴾

115. ファラオは云えり、「さよう。その上、お前たちを余がそば近く取り立てん」と。

قَالَ نَعَمْ وَإِنَّكُمْ لِمِنَ الْمُتَقَرَّبِينَ ﴿١١٥﴾

116. そこで彼等は、「モーゼよ、汝が先に投げけるか、それとも我等が先に投げようか」と云えり。(注 54)

قَالُوا يَمُوسَى إِمَّا أَنْ تُلْقِيَ وَإِمَّا أَنْ نَكُونَ نَحْنُ

الْمُلْقِينَ ﴿١١٦﴾

117. モーゼは答えり、「汝等投げよ」と。(注 55) 彼等投げるに当り、先づ人々の目に魔法をかけ、畏怖の念にうたせておいてから、驚嘆する魔術を披露せり。

قَالَ الْقَوَاهِ كُلُّهَا فَقَوَّاهُ سَحَرُوا أَعْيُنَ النَّاسِ

وَاسْتَرْهَبُوهُمْ وَجَاءُوا بِسِحْرٍ عَظِيمٍ ﴿١١٧﴾

118. われらはモーゼをかく激励せり、「汝の杖を投げよ」と。すると見よ、その杖は彼等が幻出せしめたるものを忽ち呑み込みたり。(注 56)

وَأَوْحَيْنَا إِلَى مُوسَى أَنْ أَلْقِ عَصَاكَ فَإِذَا هِيَ

تَلْقَفُ مَا يَأْفِكُونَ ﴿١١٨﴾

119. かくて真理は確立され、彼等のなせることの空しさが証明せられたり。

فَوَقَعَ الْحَقُّ وَبَطَلَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١١٩﴾

120. かくの如く彼等はそこで打ち負かされ、面目を失って退きさがりたり。(注 57)

فَعْلَبُوا هَٰذَاكَ وَانْقَلَبُوا صُغِيرِينَ ﴿١٢٠﴾

注 54 その場面の緊張感に注目せよ。関係者達両方共が、決定的な試練に取り組む心構えを持ちながらお互いに向いあって勢ぞろいしているのである。

注 55 神の預言者達は決して最初に攻撃をしない。彼らは、防御をし、神の救いを求めるのを好むので、相手側の攻撃を待つ。

注 56 それは、小杖からできた「へび」ではなく、手品師達の魔術をといいたのは、小杖そのものであった。大いなる預言者の精神力に支配され、神の命令により投げ捨てられたモーゼの小杖は、見物者達の前でまやかしをあらわし、そして彼らの魔術によって人々に本当のへびだと思込ませていたものを、粉々にこわした。「彼らが幻出せしめたるものを忽ち呑み込みたり。」という語句は、手品師達によってつくられた惑わしを小杖がすぐにはあらわした事を示し「呑み込む」は「つくり出された影響もしくは印象を破壊した」ことを示す。

注 57 この節は、パロ族の一同を指し、魔術師達のことを言っているのではなさそうである。後者は、次の節で語られる。「面目を失う」は、ほんの少し前に戦いの場面に、誇り高く、横柄な態度で現れ、成功に自信を持っていた彼ら（パロとその一同）は、今では遠慮がちで控えめで元気がないとの事である。

121. 魔術師たちはひれ伏して (注 58) 叩頭せり。

وَأَنقَى السَّحَرَةُ سَجْدِينَ ﴿١٢١﴾

122. 而して彼等は云えり、「我等は万物の主を信ず、

قَالُوا أَمَّا رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١٢٢﴾

123. モーゼとアロンの主を」と。

رَبِّ مُوسَى وَهَارُونَ ﴿١٢٣﴾

124. ファラオを云えり、「お前たち余の許しなしに彼を信じたるか。これはまさしく、住民を (注 59) 邑から追い出さんとして、お前たちが企らみたる陰謀なり。余はいまに、お前たちを思い知らしてやるほどに。

قَالَ فِرْعَوْنُ أَمْسَنُكُمْ بِهِ قَبْلَ أَنْ أَذَنَ لَكُمْ إِنَّ هَذَا لَمَكْرٌ مَّفَكَّرْتُمُوهُ فِي السَّيِّئَةِ لَتُخْرِجُوا مِنْهَا أَهْلَهَا فَسَوْفَ تَعْلَمُونَ ﴿١٢٤﴾

125. 必ずやお前たちの手足を交互に切り落とし、しかる後に一纏めにして磔に (注 60) 処せん」と。

لَا قِطْعَنَ أَيْدِيكُمْ وَأَرْجُلَكُمْ مِنْ خِلافٍ ثُمَّ لَأَمْشِيَنَّكُمْ أَجْمَعِينَ ﴿١٢٥﴾

126. 彼等は答えり、「我等は我が主の許へ歸るべし。

قَالُوا إِنَّا إِلَى رَبِّنَا مُنْقَلِبُونَ ﴿١٢٦﴾

127. 陛下は、我等が我等に降^{くだ}されたる主の神兆^{しるし}を信じたという理由で、報復せんとするか。主よ、確固不拔な信念を我等に注ぎ給え。我等をば汝に身を任せて、死なせ給え」と。

وَمَا تَنْفَعُ مِنَّا إِلَّا أَنْ أَمَّا يَا إِلَهَ رَبِّنَا لَمَّا جَاءَتْ نِسَاءُ رَبِّنَا أَفَرِغْ عَلَيْنَا صَبْرًا وَتَوَفَّنَا مُسْلِمِينَ ﴿١٢٧﴾

第十五項

128. ファラオの民の長老たちは云えり、(注 61) 「陛下はモーゼとその一党を放置しておくおつもりか？ 彼等は国中に騒乱をまき

وَقَالَ الْمَلَأُ مِنْ قَوْمِ فِرْعَوْنَ اتَّخَذَ مُوسَى وَقَوْمَهُ يُفْسِدُوا فِي الْأَرْضِ وَيَذَرُكَ وَالْهَيْكَلُ قَالَ

注 58 魔術師達の敗北はあまりにも完全なものであったので、何か隠された力が足元をすくったようであった。そして彼らは神の御前にて祈りと謙遜の態度で、地面にひれ伏す事を余儀なくさせられた。

注 59 ここでいう「住民」という語句は、パロ自身の人民を指すが、彼らは、エジプトの本当の住人ではなく、農夫達から国を無理にとりあげた者達であった。

注 60 はりつけは、苦痛な死を意味していたにもかかわらず、刑罰によりみせしめの効果を加え、死をより苦痛なものとするために、手足を切り落とす罰がそれに加えられた。付随的に、この節は、モーゼの時代の昔からでさえも、はりつけによる死刑は、行われていた事を示している。

注 61 重臣達自身が、モーゼとその兄に、猶予を与える様、パロに助言したのであるが (17 : 112) しかし今、その同じ重臣達が、自分達の助言に従ってモーゼとアロンに与えた時間に対しパロを非難している。このようにして、不名誉と屈辱を敬虔する者は、道徳的品位を落としていくのである。

起し、あまつさえ汝とその神々をないがしろにするなり」と。(注62) ファラオは答え、「我等は彼等の息子たちをことごとく殺し、婦女のみを生かしておこう。我等は彼等を支配す」と。

129. モーゼはその民に云えり、「アッラーに助けを求め、辛抱せよ。げに大地はアッラーの所有なり。アッラーはその僕らの中で嘉する者に遺産として之を授く。善果は神を畏敬する者に帰する」と。

130. 彼等は云えり、「我等は、汝が我等のところへ来る前も、その後ですら、常に迫害を受く」と。モーゼは云えり、「主はお前たちの敵を滅ばし、お前たちにこの地を(注63)統治せしめんがために、主はお前たちが如何に行動するかを御覧になるかも知れぬ」と。

第十六項

131. われらはファラオの民を、うち続く旱魃^{かんぼう}と果実類の缺乏を以て懲らしめ、彼等を反省せしめんとせり。

132. しかるに彼等は、幸運至れば、「こは我等のものなり」と云えり。されど災いが降りかかれば、彼等はその凶運をモーゼ並びに彼と偕にある者たちのせいになせり。然らず、彼等の凶運はアッラーの定め給えるものなり。されど彼等の多くは之を知らず。

133. 彼等は云えり、「汝が如何なる奇蹟を示して我等を魅了せしめんとするも、我等は断じて汝を信ずるものに非ず」と。

سَنَقُولُ إِنَّمَا هُمْ وَنَسْتَحْيِي سَاءَ هُمْ وَإِنَّا فَوْقَهُمْ قَاهِرُونَ ﴿١٢٩﴾

قَالَ مُوسَى لِقَوْمِهِ اسْتَعِينُوا بِاللَّهِ وَاصْبِرُوا إِنَّ الْأَرْضَ لِلَّهِ يُورِثُهَا مَنْ يَشَاءُ مِنْ عِبَادِهِ وَالْعَاقِبَةُ لِلْمُتَّقِينَ ﴿١٣٠﴾

قَالُوا أَوَدِينَا مِنْ قَبْلِ أَنْ تَأْتِيَنَا وَمِنْ بَعْدِ مَا جِئْتَنَا قَالَ عَلَىٰ رَبِّكُمْ أَنْ يَهْلِكَ عَدُوُّكُمْ وَسَيَحْضُرْ لَكُمْ فِي الْأَرْضِ فَيَنْظُرَ كَيْفَ تَعْمَلُونَ ﴿١٣١﴾

وَلَقَدْ أَخَذْنَا آلَ فِرْعَوْنَ بِالسِّنِينَ وَنَقْصٍ مِنَ الثَّمَرَاتِ لَعَلَّهُمْ يَذْكُرُونَ ﴿١٣٢﴾

فَإِذَا جَاءَتْهُمْ الْحَسَنَةُ قَالُوا لَنَا هَذِهِ وَإِنْ يَصْحَبُهَا سَيِّئَةٌ نَنْظُرُهَا بِسُوءٍ وَمِنْ مَعْلَكِ إِلَّا أَنَّا ظَاهِرُونَ عِنْدَ اللَّهِ وَلَكِنْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿١٣٣﴾

وَقَالُوا مَهْمَا تَأْتِنَا بِهِ مِنْ آيَةٍ لَتَتَحَرَّكُنَا بِهَا فَأَمَّا نَحْنُ لَكَ بِمُؤْمِنِينَ ﴿١٣٤﴾

注62 パロ自身、彼の人民によって神として崇拝されていた(28:39)。そして、彼は、代わって、他の神々を崇拝した。このゆえに、重臣達は、パロとその神々の崇拝を非難したことに對し、モーゼとアロンを責めたのである。

注63 この節はパロの絶滅の後、イスラエル人がエジプトを継承させられるべきだという事を必ずしも意味しない。これは、単に、パロの力は、断たれるべきものであった、そして他の者達が彼の王国を所有することになっていることを意味する。パロの絶滅とその王国の崩壊の後、イスラエル人を支持する王朝がその地を占有したことを我々は知っている。この節で述べられている「この地」はエジプトではなく、イスラエル人に約束され、その約束に従って彼らが受け継いだ聖なる国のことをさしている。

134. そこでわれらは彼等に、嵐、蝗、虱、蛙、血など一明証を降したり。(注64)されど彼等依然として傲慢にして、罪深い民なりき。

فَإَرْسَلْنَا عَلَيْهِمُ الطُّوفَانَ وَالْجَرَادَ وَالْقُمَّلَ
وَالضَّفَادِعَ وَالْذَّمَارَ أَيُّ مُفْضَلٍ فَاسْتَكْبَرُوا
وَكَانُوا قَوْمًا مُّجْرِمِينَ ١٣٤

135. しかるに懲罰が降ると、彼等は云えり、「モーゼよ、我等のために汝の主に懇願してくれぬか、主が汝に約束せることに従つて。汝もしこの懲罰を除かば、我等は必ず汝を信じ、イスラエルの子らを汝と共に放免すべし」と。

وَلَمَّا وَقَعَ عَلَيْهِمُ الرِّجْزُ قَالُوا يُوسَى ادْعُ لَنَا رَبَّكَ
بِمَا عَاهَدْتَ عِنْدَكَ لَنَ لَا يَكْشِفَ عَنَّا الرِّجْزَ لَنُؤْمِنَ
لَكَ وَلَنُرْسِلَنَّ مَعَكَ بَنِي إِسْرَءِيلَ ١٣٥

136. かくてわれらが、或る期間、懲罰を彼等より除いてやると、見よ、彼等はその約束を破りたり。

فَلَمَّا كَشَفْنَا عَنْهُمْ الرِّجْزَ إِلَى أَجَلٍ هُمْ بِلَعْوِهِ
إِذَا هُمْ يَنْكُحُونَ ١٣٦

137. さればわれらは彼等に報復し、ことごとく之を海中に溺れせしめたり。そは彼等がわれらの神兆を嘘よばわりし、これを軽視せるがためなり。

فَأَنفَقْنَا مِنْهُمْ غَوَّارًا فِي الْيَمِّ بِأَنَّهُمْ كَذَّبُوا
بِآيَاتِنَا وَكَانُوا عَنْهَا غَافِلِينَ ١٣٧

138. 而してわれらは、弱者視せられたる人々に、われらが祝福せる土地の(注65)東も西も(注66)継がしめたり。イスラエルの子らの忍耐故に、汝の主の有難い言葉は彼等の上に完うせられたり。われらはファラオとその民が築けるもの並びに建てたるもの、そのことごとくを破壊せり。

وَأَوْرَثْنَا الْقَوْمَ الَّذِينَ كَانُوا يُسْتَضْعَفُونَ مَشَارِقَ
الْأَرْضِ وَمَغَارِبَهَا الَّتِي بَرَكْنَا فِيهَا ۖ وَتَمَّتْ
كَلِمَتُ رَبِّكَ الْحُسْنَىٰ عَلَىٰ بَنِي إِسْرَءِيلَ ۖ لَا يَمَاصُورُ
وَدَمَّرْنَا مَا كَانَ يَصْنَعُ فِرْعَوْنُ وَقَوْمُهُ وَمَا كَانُوا
يَعْرِشُونَ ١٣٨

139. かくてわれらはイスラエルの子らをして海を渡らしめると、彼等は多くの偶像を熱心に奉ずる人々に出会いたり。彼等は云えり、「モーゼよ、彼等には多くの神々あり、我等にも一柱の神を作れ」と。モーゼは云えり、「げにお前たちは愚かなる徒輩なり。

وَجَاوَزْنَا بِبَنِي إِسْرَءِيلَ الْبَحْرَ فَأَتَوْا عَلَىٰ قَوْمٍ
يَعْبُدُونَ عَلَىٰ أَصْنَامٍ لَهُمْ قَالُوا يُوسَى اجْعَلْ
لَنَا إِلَهًا كَمَا لَهُمْ آلِهَةٌ ۚ قَالَ إِنَّكُمْ قَوْمٌ تَبْجُلُونَ ١٣٩

注64 聖書では、小林と白い手のおつげ以外に10のお告げが述べられている(出エジプト記7-11章)。聖書の記述は、お告げを相当誇張してしまったようである。

注65 アブラハムとヤコブの子孫達に約束された聖なる地(5:22)。イスラエル人が成功し、繁栄し、大いなる国家に成長することになっている土地だったので清められた。

注66 「土地の東も西も」という語句は、アラビア語の慣用句によると、国全体を意味する。

140. これ等の人々が携わるものはことごとく破壊され、彼等のなすことは必ず無に帰すべし」と。

141. モーゼは更に云えり、「我にアッラーの外に神を探せとな、お前たちを選びてすべての民族の上に置き給えし御方の外に？」と。

142. われらがお前たちをファラオの民から救える時のことを思い起せ。彼等はお前たちを厳しい責苦で苦しめたり。お前たちの息子たちは殺され、女たちは辱められたり。その中にお前たちの主よりの重大な試練ありき。

第十七項

143. われらはモーゼに三十夜を命じたりしが、更に十夜を追加せり。(注 67) 従つて主の命じたる期間は四十夜をもって完了せり。そこでモーゼはその兄アロンに向つて云えり、「我が留守中に、(注 68) 我に代りて我が民を治め、彼等をうまく統御し、悪をなす者どもの道に従うなかれ」と。

144. モーゼがわれらの命じたる時に來たので、主はモーゼに向つて云うと、モーゼは云えり、「主よ、お姿を現わし、我に汝を仰ぎ見させたまえ」と。主は答えて云えり、「汝はわれを見るべからず。なれどあの山を見よ。もしあの山がその場に残るなら、すなわち汝はわれを見ん」と。されど、主が山の上に御自身を顕わすや、主は忽ち山を粉々に粉碎せり。(注 69) ためにモーゼは氣を失つて倒れたり。やがて正氣に戻ると、モーゼは云えり、「聖なるかな。我は改悛して汝に帰依し、信者の魁きぎがけとならん」と。

إِنَّ هَؤُلَاءِ مُتَّبَرِّكٌ مَا هُمْ فِيهِ وَبِطُلَّ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٤٠﴾

قَالَ أَعْبُدُوا اللَّهَ ابْنِعْكُمْ إِلَهًُا وَهُوَ فَضْلُكُمْ عَلَى الْعَالَمِينَ ﴿١٤١﴾

وَأِذْ أَنْجَيْنَاكَ مِنْ آلِ فِرْعَوْنَ يَسُومُونَكَ سُوءَ الْعَذَابِ يَقْتُلُونَ أَبْنَاءَكَ وَيَسْتَجِیُونَ نِسَاءَكَ ﴿١٤٢﴾ وَفِي ذَلِكَ لَكُمْ بَلَاءٌ مِنْ رَبِّكُمْ عَظِيمٌ ﴿١٤٣﴾

وَوَعَدْنَا مُوسَى ثَلَاثِينَ لَيْلَةً وَأَتَمَّمْنَاهَا بِعَشْرِ فِتْنَةٍ مِيقَاتٍ رَبِّهِ أَرْبَعِينَ لَيْلَةً وَقَالَ مُوسَى لِأَخِيهِ هَارُونَ اخْلُفْنِي فِي قَوْمِي وَأَصْلِحْ وَلَا تَتَّبِعْ سَبِيلَ الْمُفْسِدِينَ ﴿١٤٤﴾

وَلَمَّا جَاءَ مُوسَى لِمِيقَاتِنَا وَكَلَّمَهُ رَبُّهُ قَالَ رَبِّ أَرِنِي أَنْظُرْ إِلَيْكَ قَالَ لَنْ نَرِيكَ وَلَكِنْ نُنْظِرُ إِلَى الْجَبَلِ فَإِنْ اسْتَقَرَّ مَكَانَهُ فَسَوْفَ نَرِيكَ فَلَمَّا بَدَّلْنَاهُ إِلَى جَبَلٍ آخَرَ دَكَ وَخَرَّ مُوسَى صَعِقًا فَلَمَّا أَفَاقَ قَالَ سُبْحَنَكَ تُبْتُ إِلَيْكَ وَأَنَا أَوَّلُ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١٤٥﴾

注 67 神のモーゼとの親交は約束された三十夜に完成された。十夜の期間の延長は約束の一部ではないが、特別の好意であった。

注 68 この語句はアロンの地位がモーゼのそれより下（従属したもの）だった事を示す。モーゼはイスラエル人達を「私の民」と呼び、アロンに彼の代わりに行動してくれる様に指示した、すなわち、彼が不在の間に彼の代わりに役目を勤めるということである。

注 69 山は実際に粉々に破壊されたわけではない。この語句は地震のものすごい激烈な様子を比喩的に表すために使われた。

145. アッラーは云えり、「モーゼよ、われは汝を、わが神託とわが言葉によって人々の上に選びたり。さればわが賜えるものを護持し、感謝する者となれ」と。(注70)

قَالَ يُوسُفَىٰ إِنِّي اصْطَفَيْتُكَ عَلَى النَّاسِ بِرِسَالَتِي
وَكَلَّمْنِي تَحْتِ الْكَلْبِ مَا آتَيْتُكَ وَكُن مِّنَ الشَّاكِرِينَ ﴿٧٠﴾

146. われらは石の平板の上にあらゆることについて—あらゆることについての訓戒と解釈とを記せり。「されば、これをしっかりと護持し、また汝の民にこの中に記されている如く、最善の道に従うよう命ぜよ。(注71) われらはその中、お前たちに罪人どもの住居を見せん」

وَكُتِبْنَا لَهُ فِي الْأَلْوَابِ مِنْ كُلِّ شَيْءٍ مَّوعِظَةٌ وَنُفِيسٌ
لِّكُلِّ شَيْءٍ فَخُذْهَا بِقُوَّةٍ وَأْمُرْ قَوْمَكَ يَأْخُذُوا بِأَحْسَنِهَا
سَأُوْرِيكُمْ دَارَ الْفَاسِقِينَ ﴿٧١﴾

147. この地上に妄りに傲慢にふるまう者ども、わしは彼等をわが神兆より遠ざけん。されば彼等は、たといさまざまなる神兆を見るも之を信ぜず、また正道を目のあたりにしても之を己れの道とはせず。されど邪曲の道を見なば、これぞ己が道なりと思うべし。こは彼等がわれらの神兆を偽りと見なし、之を軽視せるが故なり。

سَأَصْرِفُ عَنِ الَّذِينَ يَتَكَبَّرُونَ فِي الْأَرْضِ
بَغْيَ الْحَقِّ وَإِن يَرَوْا كُلَّ آيَةٍ لَا يُؤْمِنُوا بِهَا وَإِن
يُرَوْا سَبِيلَ الرَّشَدِ لَا يُخْذُوا سَبِيلًا وَإِن يَرَوْا
سَبِيلَ الْغَىِّ يَخْذُوا سَبِيلًا ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ كَذَّبُوا
بِآيَاتِنَا وَكَانُوا عَنْهَا غَافِلِينَ ﴿٧٢﴾

148. われらの神兆並びに来世での対面を信ぜざる者ども—彼等の所業は無に帰さん。彼等はただそのなせることに対して応報せらるるのみに非ざるか？

وَالَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا وَلِقَاءِ الْآخِرَةِ حَبِطَتْ أَعْمَالُهُمْ
إِذْ هَلْ يُجْزَوْنَ إِلَّا مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٧٣﴾

第十八項

149. モーゼの民は、モーゼの留守中、自分たちの装身具にて一命なき吼える犢を作りたり。彼等その犢が彼等に物云わず、(注72)

وَإِذْ أَخَذَ قَوْمُ مُوسَىٰ مِن بَعْدِهِ مِنْ خُلِيِّهِمْ عِجْلًا
جَسَدًا لَهُ خُوَارٌ أَلَمْ يَرَوْا أَنَّهُ لَا يُكَلِّمُهُمْ وَلَا

注70 この節は、神が、モーゼはイシュマエル家の大預言者が達成する様に運命づけられている高い精神的段階には達する事はできない、という事を気付かせたあとに、モーゼを慰める方法として彼にむけて話しかけられたものの様である。彼は「あの預言者」のために指定された高い尊厳を切望せず、神が既に彼に授けた段階に満足し続け、感謝する様求められた。

注71 モーゼはここでは、彼の人々に、徳のより高い形を実行する様努力し、単に信仰の弱者向けの指令の上で行動する事で満足し続けない様に熱心に説く様求められている。

注72 神は、彼のしもべ達に話しかけなければ、生きた神とは証明されない。神がその選ばれたしもべ達に過去に話をしているのに、今話をやめるべきだったのにと論じるのは、おかしい。神のいかなる特質も機能をやめるべきだったと仮定される事はできない。神の啓示の贈り物は過去に獲得できた様に、今でも得る事ができる。啓示は必ずしも新しいおきてを含んでいるとは限らない。それは、さらに精神的な生活に新鮮味を与え、人々をその神に近づかせる意味をもった。

また如何なる道にも彼等を導かざるを知らざりしか？ 彼等はそれを拝みたれば、すなわち罪人なりき。

150. されど彼等後悔して、その迷えることを悟りて、云えり、「主が我等に慈悲を垂れ給わず、また我等を赦さざれば、我等は必ず失敗者の類とならん」と。

151. モーゼその民に帰るや、憤りかつ悲しみて云えり、「お前たちは、我が留守中になんたる邪悪をなしたるか。お前たちは主の命を待たずに、自ら主の断罪を早めんとせざるか？」と。而して彼は石の平板を下に置き、兄の頭をかかえて己れに引き寄せたり。(注73) アロンは云えり、「我が母の子よ、人々は我をあなどり、今にも殺さんとせり。されば我を罰して敵を喜ばしむるなかれ。また我を不義なる徒輩の民の中に加えるなかれ」と。(注74)

152. モーゼは云えり、「主よ、我と兄とを赦し、汝の慈悲に浴せしめ給え。汝は慈悲を与える者の中でも最も慈悲深き御方なり」と。

第十九項

153. 憤を拝せる者どもは(注75) 主の激怒に触れ、またこの世の生活においても屈辱に遭うべし。われらは嘘いつわりを捏造する者にかくの如く報ゆ。

154. されど、悪事をなせども後に改悟して信仰に入る者には、げに主はその後は寛大にして慈悲深くします。

يَهْدِيهِمْ سَبِيلًا اتَّخَذُوهُ وَكَانُوا ظَالِمِينَ ﴿١٤٩﴾

وَلَمَّا سَقَطَ فِي أَيْدِيهِمْ وَرَأَوْا أَنَّهُمْ قَدْ ضَلُّوا قَالُوا لَئِنْ لَمْ يَرْحَمْنَا رَبُّنَا وَيَغْفِرْ لَنَا لَكُنَّا مِنَ الْخَاسِرِينَ ﴿١٥٠﴾

وَلَمَّا رَجَعَ مُوسَى إِلَى قَوْمِهِ غَضَبًا اسْفَقًا قَالَ بَشَرًا خَلَقْتُمُونِي مِنْ بَعْدِي أَعْلَيْتُمْ أَمْرًا سَرِيكُمُ وَالْقَى الْأَلْوَابَ وَأَخَذَ بِرَأْسِ أَخِيهِ يَجُرُّهُ إِلَيْهِ قَالَ ابْنَ أُمِّرٍ إِنَّ الْقَوْمَ اسْتَضَعُّفُونِي وَكَادُوا يَقْتُلُونِي فَلَا تُشْفِتْ بِي الْأَعْدَاءَ وَلَا تَجْعَلْنِي مَعَ الْقَوْمِ الظَّالِمِينَ ﴿١٥١﴾

قَالَ رَبِّ اغْفِرْ لِي وَلِإِخِي وَأَدْخِلْنَا فِي رَحْمَتِكَ ۖ وَأَنْتَ أَرْحَمُ الرَّاحِمِينَ ﴿١٥٢﴾

إِنَّ الَّذِينَ اتَّخَذُوا الْوَعَالَ سَبِيلًا لَهُمْ عَذَابٌ مِنْ دُونِ ذَلِكَ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَكَذَلِكَ نَجْزِي الْمُفْتِرِينَ ﴿١٥٣﴾

وَالَّذِينَ عَمِلُوا الصَّالَاتِ ثُمَّ تَابُوا مِنْ بَعْدِهَا وَآمَنُوا إِنَّ رَبَّكَ مِنْ بَعْدِهَا لَغَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿١٥٤﴾

注73 モーゼは、アロンが聖書の中で(出エジプト32:2-4) そうしたと描かれている様に仔牛崇拜を支持もしくは援助したからという理由からではなく、彼が人々が仔牛を崇拜する事を、ちゃんと止めさせなかつたという事に対して、腹を立て、アロンの頭をつかまえたのである。モーゼの怒りは、アロンのおかしなかなる宗教的、または規則的違反に対してではなく、彼が不在の時に物事を正しく維持できなかった自分の失敗に対して当然のものであった。その怒りは怒るにたる正当な理由があるとみなされた。なぜならば非常な神聖冒瀆罪がおかされ、モーゼの人生の全ての業績が危うくさせられたからである。

注74 アロンは、モーゼの優しさと兄弟愛の感情に訴えた。

注75 仔牛崇拜に共謀したとしてアロンを非難している聖書の記述は、実に誤った印象を与えるものである(Enc. Bib 1巻:2)。

155. さて、モーゼの憤怒静まるや、彼は落ちたる石の平板を拾いたり。その上には、主を畏れる者への嚮導ようどうと慈悲しただとが認められてありき。

156. 而してモーゼは、われらとの会見の約束のために、その民の中より七十人を選びたり。しかるにその時、地震彼等を襲いしかば、(注76) モーゼは云えり、「主よ、汝もし欲したりせば、汝は彼等をすでに滅ぼし、我もまた滅ぼし得た筈。いま汝は、我等のうちの愚か者がなせることのために我等を滅ぼさんとするか？ただこれ汝の試練なり。汝は之これによって己れの欲する者を迷わせ、また欲する者を導き給う。汝は我等の守護者なり。されば我等を赦して慈悲を垂れ給え、汝は最上の有恕者ゆうじよしやなれば。

157. この世においても、また次の世においても、我等に幸福を授け給え。我等は悔い改めて汝に帰依す」と。アッラーは答えり、「われは欲する者にわが懲罰を加う。されどわが慈悲は一切を包容す。さればわれは、正義に振舞い、喜捨をなし、われらの神兆を信ずる人々にはその慈悲を授けん—

158. すなわち文盲ウンミーの(注77) 預言者に追従する者たちには。この者については、彼等

وَلَمَّا سَكَتَ عَنْ مُوسَى الْغَضَبُ أَخَذَ الْأَلْوَاحَ وَفِي نُحُومِهَا هُدًى وَرَحْمَةٌ لِلَّذِينَ هُمْ لِأَنَّهُمْ يُرْهَبُونَ ﴿١٥٥﴾

وَاخْتَارَ مُوسَى قَوْمَهُ سَبْعِينَ رَجُلًا رِيقَاتٍ فَلَمَّا أَخَذَتْهُمُ الرَّجْفَةُ قَالَ رَبِّ لَوْ شِئْتَ أَهْلَكْتَهُم مِّن قَبْلُ وَإِيَّايَ أَتُهْلِكُنَا بِمَا فَعَلَ السُّفَهَاءُ مِنَّا إِنْ هِيَ إِلَّا فِتْنَتُكَ تُضِلُّ بِهَا مَن تَشَاءُ وَتَهْدِي مَن تَشَاءُ أَنْتَ اللَّهُ الْغَفِيرُ ﴿١٥٦﴾

وَأَكْتُبَ لَنَا فِي هَذِهِ الدُّنْيَا حَسَنَةً وَفِي الْآخِرَةِ إِنَّا هُنَا أِلَيْكَ قَالَ عَذَابِي أُصِيبُ بِهِ مَن أَشَاءُ وَرَحْمَتِي وَسِعَتْ كُلَّ شَيْءٍ فَسَأَلْنَاهَا الَّذِينَ يَتَّقُونَ وَيُؤْتُونَ الزَّكَاةَ وَالَّذِينَ هُمْ بِآيَاتِنَا يُؤْمِنُونَ ﴿١٥٧﴾
الَّذِينَ يَتَّبِعُونَ الرَّسُولَ النَّبِيَّ الْأُمِّيَّ الَّذِي يَجِدُونَهُ

注 76 地震は自然な現象であったが、モーゼはそれが彼の人々の犯した罪に対する神の罰ではないかとおそれた。

注 77 ウンミーは、母親に所属、又は付属する、すなわち母の胸の中の子供の様に純粋無垢であること；特にアラブ人のように天啓聖典のないもの；読み書きのできないもの；町々の母として知られているメッカに属しているもの、を意味する。もしウンミーという言葉が「文盲」としてとらえられるならば、この節は、聖なる預言者が、いかなる教育も受けず、学問もなかったにもかかわらず、それなのに神は、彼に、学問や啓蒙に最も進歩的とされている人々にさえも光と案内を分け与える知恵をお与えになったことを意味している。

もし聖なる預言者が文盲で読み書きができなかったとしたら、彼が現実にもそうであったような、すぐれた商売人ではあり得なかったであろうという反対意見は、聖なる預言者の時代の、善良な成功をおさめたアラビア人の商売人に対する誤った概念から生まれたものである。ウェリー（人名）は、アジアには、20世紀の現代にさえも、初等教育でさえ受けていない、非常に成功をおさめた商売人がいる事を知っていたならば、そんな異議はとなえなかったであろう。聖なる預言者の時代、メッカでは、教育はあまり好まれなかった。読み書きができる人は非常に少なかったが、多くの人々が非常に成功し、繁栄した商売を経営していた。教育は、その頃ア

が所持せる律法並びに福音（注78）の中に記されたるなり。彼は正義を彼等に命じ、邪惡を禁じ、またすべての清潔なものを許し、不浄なるものを禁じ、かつ彼等からその背負いし重荷や束縛を取り除く。されば彼を信じ、彼を尊敬し、彼を支持し、彼を援助し、彼と共に降されたる光明に従う人々—これ等の者は必ず成功すべし」と。

第二十項

159. 云え、「人々よ、げに我は天地の主權を掌握するアッラーよりお前たちに遣わされたる使徒なり。（注79）アッラーの外に神なし。アッラーは生を与え、死を賜う。さればアッラー並びにその使徒、すなわちアッラー並びにその御言葉（^{ミことば}）を信ずる文盲（^{ウンミ}）の預言者を信ぜよ。而して彼に追従せよ。しからばお前たち正しく導かれん」と。

مَكُونًا عِنْدَهُمْ فِي التَّوْرَةِ وَالْإِنْجِيلِ يَأْمُرُهُمْ
بِالْمَعْرُوفِ وَيَنْهَاهُمْ عَنِ الْمُنْكَرِ وَيُجِلُّ لِمَنْ خَاطَبَتْ
وَيُحَرِّمُ عَلَيْهِمُ الْخَبِيثَ وَيَضَعُ عَنْهُمْ إِصْرَهُمْ
وَالْأَغْلَالَ الَّتِي كَانَتْ عَلَيْهِمْ فَاَلَّذِينَ آمَنُوا بِهِ وَ
عَزَّوْهُ وَنَصَرُوهُ وَاتَّبَعُوا النُّورَ الَّذِي أُنْزِلَ مَعَهُ
بِأَوَّلِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ﴿٥٩﴾

قُلْ يَا أَيُّهَا النَّاسُ إِنِّي رَسُولُ اللَّهِ إِلَيْكُمْ جَمِيعًا الَّذِي
لَهُ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ يُحْيِي وَ
يُمِيتُ فَأَمِنُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ الْيَحْيَى الَّذِي
يُؤْمِنُ بِاللَّهِ وَكَلِمَتِهِ وَاتَّبِعُوهُ لَعَلَّكُمْ تَهْتَدُونَ ﴿٥٩﴾

ラビアでは必須条件とはみなされていなかったのである。さらに、聖なる預言者が読み書きできなかったという考えが、彼の何度もうくりかえされた「文盲の預言者」という主張に対する誤解に源を発するものであるといういくらかのキリスト教徒達の主張は、異様であり、又、根本的にまちがっている。彼（預言者）と何年も寝食を共にし、毎日彼が読んだり書いたりしている姿を見た者達が彼が文盲であるかそうでないか確認する事ができず、単に彼の自分は文盲だというくり返された主張によりこの確信に誤って導かれたことは驚くべきことである。彼の（聖なる預言者の）筆記者の利用は、最も学問のある者達の間でも、筆記者の利用はその時代には普通であったことから、彼の書く技術への知識に否定的に作用するものではないという論争は、アラブとイスラエルの歴史に対するウェリーの無知さをうっかり示す結果となっている。事實は、聖なる預言者の時代には、アラブ人の間には、今その言葉が理解されている様な意味でのウラマー、すなわち宗教学者は存在せず、また筆記者や書記をもつ事にも慣れ親しんでいないという事である。アラブ人によって筆記者が使われていたという事実の記録は全く残っていない。聖なる預言者が、啓示が彼のもとへ与えられる以前は、書くことも読むこともできなかったという学者達による完璧な意見の合意が為されている。クルアーンは、少なくとも神から啓示をうける以前の聖なる預言者は、読み書きはできなかったという点では、かなりははっきりとしている。（29；49）。しかしながら、彼は、晩年には、少しは判読できるようになっていたのである。

注78 聖なる預言者に関する聖書の預言のいくつかについてはマタイ23；39、ヨハネ14；16、26；16；7—14申命記18；18と33；22；イザヤ書21；13—17と20；62、雅歌1；5—6；そしてハバクク書3—7を参照する事

注79 イスラム教の預言者以前に現れた神の預言者達の全ては、彼らがさし向けられた人々、そして彼らが出現した特定の時代にあうように教えが定められていた彼らが特定の国の預言者であったのに反して、聖なる等は人類全体に向けて、時の終わりまでのために出現したのである。彼の到来は、人類の歴史にとってすばらしい独特な出来事であった。それは全ての異なった国家と社会を1つの友愛団体に結合させる様働いた—それは、（肌の）色、風土、信念の違いが完全に束縛される人類の兄弟愛なのである。

160. モーゼの民の中にも、真理をもって他人を導き、また自らもそれによって正義を行う集団あり。(注80)

161. われらは彼等を、十二の支族、すなわち異なる集団に分ちたり。モーゼの民が渴を訴えたる時、われらはモーゼに、「汝の杖でその岩を打て」と(注81)黙示して教えたり。すると、忽ちそより十二の泉が噴出し、各支族は己が飲む場所を知れり。またわれらは、鵝を降して、「われらがお前たちに用意せる清潔なものを食べよ」と告げたり。彼等は如何なる害もわれらに加えざりき。彼等はただ己れを害したるのみ。(注82)

162. 彼等がかく云われた時のことを思い起せ。「この邑に住み、随処で好む物を食へ、ただ、『赦し給え』と唱え、頭を低うして門を入れ。われらはお前たちの罪を赦し、また善事を行う者に益々報奨を加増せん」

163. しかるに彼等のうちの罪人どもは、自分たちに説かれたるものを他の言葉に変えたり。さればわれらは、彼等の罪に対して天誅を降したり。

第二十一項

164. かつて海浜にありしあの邑について彼等に訊ねよ。彼等が安息日を汚せし時のことを。安息日には水面に姿を見せていた魚たちが、彼等が安息日を守らざりし時、魚たちはその姿を見せざりき。われらはかくの

وَمِنْ قَوْمٍ مُّؤْمِنِينَ آمَنُوا بِالْحَقِّ وَبِهِ يَعْدِلُونَ ﴿٨٠﴾

وَقَطَّعْنَاهُمْ اثْنَتَيْ عَشْرَةَ أَسْبَاطًا أُمَمًا وَأَوْحَيْنَا إِلَىٰ مُوسَىٰ إِذِ اسْتَسْقَاهُ قَوْمُهُ أَنْ اصْرِبْ بِصَوَّاكُمُ الْحَجَرِ فَإِذَا ثَبَجَتْ مِنْهُ اثْنَتَا عَشْرَةَ عَيْنًا قَدْ عَلِمَ كُلُّ أُنَاسٍ مَّشْرِبَهُمْ وَظَلَّلْنَا عَلَيْهِمُ الْغَمَامَ وَأَنزَلْنَا عَلَيْهِمُ السَّنَّ وَالسَّلْوَىٰ كُلُوا مِنْ طَيِّبَاتِ مَا رَزَقْنَاكُمْ وَمَا ظَلَمُونَا وَلَكِنْ كَانُوا أَنفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ ﴿٨١﴾

وَأَذَيْنَا لَهُمْ أَسْكُنُوا هَذِهِ الْقَرْيَةَ وَكُلُوا مِنْهَا حَيْثُ شِئْتُمْ وَقُولُوا حِطَّةٌ وَادْخُلُوا الْبَابَ سُجَّدًا نَّغْفِرْ لَكُمْ خَطِيئَتَكُمْ سِرًّا يُدِ الْمُحْسِنِينَ ﴿٨٢﴾

فَبَدَّلَ الَّذِينَ ظَلَمُوا مِنْهُمْ قَوْلًا غَيْرَ الَّذِي قِيلَ لَهُمْ فَأَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ رِجْزًا مِنْ السَّمَاءِ وَمَا كَانُوا يَنْظُرُونَ ﴿٨٣﴾

وَسَأَلْنَاهُمْ عَنِ الْقَرْيَةِ الَّتِي كَانَتْ حَاصِرَةَ الْبَحْرِ إِذْ يَعْدُونَ فِي السَّبْتِ إِذْ تَأْتِيهِمْ حِيتَانُهُمْ يَوْمَ سَبْتِهِمْ شُرَاعًا وَيَوْمَ لَا يَسْبِتُونَ لَا تَأْتِيهِمْ كُذَّالِكُ

注80 モーゼの信者の全員が墮落していた訳ではない。彼らのうちのいくらかは、彼ら自身が善良であっただけでなく、さらに他の者達をも真理に導き、公正に行動したのである。クルアーンは決して人々を一律に非難し、無差別にとがめる事はなかったのである。

注81 2:61を参照の事。

注82 彼らは、自分達自身を中傷したにすぎず、真理の起こりを傷つける事はできなかった。

如く、彼等が違犯するために彼等を苦しめたり。(注83)

ثُمَّ نَبْلُؤُهُمْ مِمَّا كَانُوا يَفْسُقُونَ ﴿٨٣﴾

165. 彼等の中の一団が他の一団に、「何故お前たちはアッラーが之を滅ぼさんとし、また厳罰を以て懲らしめんとする者どもを訓戒するか?」と云える時、彼等は云えり、「我等がそうするのは、主の御前で弁明せんがためなり。また彼等をして義しい人たらしめんがためなり」と。

وَإِذْ قَالَتْ أُمَّةٌ مِنْهُمْ لِمَ تَعِظُونَ قَوْمًا لَإِلَهِهِمْ مُهْلِكُهُمْ أَوْ مُعَذِّبُهُمْ عَذَابًا شَدِيدًا قَالُوا مَعَذَرَةٌ إِلَى رَبِّكُمْ وَلَعَلَّهُمْ يَتَّقُونَ ﴿٨٤﴾

166. 彼等が訓戒されていたものをすべて忘れたる時、われらは悪を禁じたる者たちを救い、罪人どもはその違犯ゆえに厳罰を以て罰したり。

فَلَمَّا نَسُوا مَا ذُكِّرُوا بِهِ أَنْجَيْنَا الَّذِينَ يَنْهَوْنَ عَنِ السُّوءِ وَأَخَذْنَا الَّذِينَ ظَلَمُوا بِعَذَابٍ بَئِيسٍ بِمَا كَانُوا يَفْسُقُونَ ﴿٨٥﴾

167. 彼等が禁じられたることに對して生意氣にも背きし時、われらは彼等に云えり、「汝等卑賤なる猩に(注84)なれ!」と。

فَلَمَّا عَتَا عَنْ مَا نُهُوا عَنْهُ قُلْنَا لَهُمْ كُونُوا قِرَدَةً خَاسِئِينَ ﴿٨٦﴾

168. 主が、復活の日まで、酷い責苦によって彼等を苦しめる者を彼等に遣わさんと、宣言せる時のことを思い起せ。(注85) げに主は応報に速かなり。(注86) また寛大にして慈悲深くもします。

وَإِذْ تَأَذَّنَ رَبُّكَ لِيَبْعَثَ عَلَيْهِمْ إِلَى يَوْمِ الْقِيَامَةِ مَنْ يُسَوِّمُهُمْ سُوءَ الْعَذَابِ إِنَّ رَبَّكَ لَسَرِيعُ الْعِقَابِ ۖ وَإِنَّهُ لَغَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٨٧﴾

169. われらは地上で彼等を幾多の支族に分割せり。或る者は正しく、また或る者はそうではない。されば、われらは彼等をたち戻らせんがために、幸いと災いとを以て彼等を試みたり。

وَقَطَعْنَاهُمْ فِي الْأَرْضِ أُمَمًا مِنْهُمْ الصَّالِحِينَ وَمِنْهُمْ دُونُ ذَلِكَ وَبَلَوْنَاهُمْ بِالْحَسَنَاتِ وَالسَّيِّئَاتِ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ﴿٨٨﴾

注83 安息日には魚はとられなかったので、魚は、本能的に安全な時を知ようになり、従ってこの本能的な安全の気持が、安息日に彼らを水面に現れさせ、大群をなして、岸辺に近寄せたのである。この事実、ユダヤ人にとってあまりにも強い誘惑であり、安息日に捕獲する手はずを整え、神聖を汚してしまったのである。

注84 2:66 参照

注85 先の節で「卑賤なる猩」と言われた人々が、実際に猩に变身させられたわけではなく人間として存在し続けたのであるが、みじめに生存し、他の者達に軽べつされた事を示している。

注86 クルアーンのいくつかの節から、神が罪人をさばくのに時間をかけることが明らかとなっている。神は何度も何度も猶予を授ける。この語句が意味するのはついに罰が人々に下されると命ぜられた時には、それは即座に米て、それが来るのを退ける事は何をもってしてもできない事を意味している。

170. その後、邪悪な子孫が彼等の後を継いで
 經典を継承せり。彼等はこの下劣な世界の
 儂い利得を取り、「こは我等に許さるべし」
 と云う。再び同じような利得が彼等に至ら
 ば、彼等はそれ等を取るべし。アッラーに
 ついては真実以外なにも口にせざること
 と、經典にかけて彼等からとりし契約に非
 らざるか？彼等はそこに記されたることを
 読み、かつ学びし筈。されば義しい人々の
 来世の住居の方がえってよし。お前たち
 これでも解らざるか？

فَخَلَفَ مِنْ بَعْدِهِمْ خَلْفٌ وَرِثُوا الْكِتَابَ يَأْخُذُونَ
 عَرَصَ هَذَا الْأَدْنَى وَيَقُولُونَ سَيُغْفَرُ لَنَا وَإِنْ
 يَأْتِيهِمْ عَرَصٌ مِثْلَهُ يَأْخُذُوهُ الْمَرِيضُونَ عَلَيْهِمْ يَسْأَلُونَ
 الْكِتَابَ أَنْ لَا يَقُولُوا عَلَى اللَّهِ إِلَّا الْحَقَّ وَدَرَسُوا مَا
 فِيهِ وَالذَّارُ الْآخِرَةُ خَيْرٌ لِّذَيْنِ يَنْتَفَعُونَ أَفَلَا
 تَعْقِلُونَ ﴿١٧٠﴾

171. 而して經典に沿うた己が生活を堅持し、
 礼拝を遵守する人々、そのような義しい
 人々への報奨はわれらは空くせず。

وَالَّذِينَ يُسَبِّحُونَ بِالْكِتَابِ وَاقَامُوا الصَّلَاةَ إِنَّا
 لَا نُنْصِفُ أَجْرَ الْمُصْلِحِينَ ﴿١٧١﴾

172. われらがあの山を天蓋の如く（注87）
 彼等の頭上で揺り動かすや、彼等はそれが
 己れの頭上に落下せんと思いたり。時にわ
 れらは云う、「われらがお前たちに授けたる
 ものを堅持し、救われんためにその中に記
 されたることを銘記せよ」と。

وَإِذْ نَفَقْنَا الْجَبَلَ فَوْقَهُمْ كَأَنَّهُ ظِلَّةٌ وَظَنُّوا أَنَّهُ
 وَاقِعٌ بِهِمْ خُذُوا مَا آتَيْنَاكُمْ بِقُوَّةٍ وَاذْكُرُوا مَا
 فِيهِ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ ﴿١٧٢﴾

第二十二項

173. 汝の主がアダムの子ら一すなわち彼等の
 腰部から一子孫を取り出し、彼等に己れ自
 身の証人たらしめたる時、かく云えり、「わ
 れらはお前たちの主に非ざるか？」と。彼
 等は云う、「然り、我等は之を証言す」と。
 こは復活の日にあたり、お前たちに「我等
 はこの事を閑却せり」と云わざらしめんが
 ためなり。

وَإِذْ أَخَذَ رَبُّكَ مِنْ بَنِي آدَمَ مِنْ ظُهُورِهِمْ ذُرِّيَّتَهُمْ
 وَأَشْهَدَهُمْ عَلَى أَنْفُسِهِمْ أَلَسْتُ بِرَبِّكُمْ قَالُوا بَلَى
 شَهِدْنَا أَنْ تَقُولُوا يَوْمَ الْقِيَامَةِ إِنَّا كُنَّا عَنْ
 هَذَا غَافِلِينَ ﴿١٧٣﴾

174. また、「かつてアッラーに神々を配したる
 は我等が父祖にして、我等はただ彼等以降
 の子孫にすぎず。汝は偽りを云う者がなせ
 ることのために我等を滅ぼさんとする
 か？」とお前たちに云わざらしめんがため
 なり。

أَوْ تَقُولُوا إِنَّمَا أَشْرَكَ آبَاؤُنَا مِنْ قَبْلُ وَكُنَّا ذُرِّيَّةً
 مِنْ بَعْدِهِمْ أَنْتُمْ لَكُمْ بِمَا فَعَلَ الْبُاطِلُونَ ﴿١٧٤﴾

注87 イスラエルの指導者達は、山のふもとに集められた（出エジプト19:17）。山は彼らにとっては、いつ何時落ちるかもしれない天蓋のように高くそびえている様に思われた。

175. われらがかくの如く神兆^{しるし}を明示するは、
彼等をさとし、正道にたち戻せんがため
なり。
176. また、われらが神兆^{しるし}を与^{たま}へたるも、それ
を脱ぎ棄てたるが故に、悪魔が彼に憑き、
邪道に陥^{おと}ちたる者の物語を彼等に告げよ。
177. われらもし欲したりせば、その神兆^{しるし}に
よって彼を向上せしめ得たり。されど彼は
地上に（注 88）執着し、己れの欲望に従え
り。譬うれば渴したる犬の如し。追い払え
ども舌をたらし、放置するも舌をたらす。
われらの神兆^{しるし}を信ぜざる者どもはかくの如
し。されば、彼等に反省させるために、こ
の物語を彼等に語れ。
178. 悪いのは、われらの神兆^{しるし}を虚偽と見なす
者なり。されど彼等が損^こなうもの、そは己れ
自身なり。
179. アッラーが導き給う者は正しき道の上に
あり。アッラーが迷わしむる者は失敗者と
ならん。
180. げにわれらは地獄に入るべき多くの妖靈^{じゆう}
と人間とを創りたり。（注 89）彼等は心あ
れどそれもて悟らず、眼あれどそれもて見
ず、耳あれどそれもて聴かざるなり。彼等
は恰も家畜の如し。否、家畜よりもさらに
迷う。彼等は全く無思慮なり。
181. 極めて美しき名称はすべてアッラーのも
のなり。（注 90）されば之を以て彼を呼び

وَكَذَلِكَ نَفْصِلُ الْآيَاتِ وَلَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ﴿١٧٥﴾

وَأَنزَلْنَا عَلَيْهِمُ نَبِيًّا الَّذِي آتَيْنَاهُ آيَاتِنَا فَاسْلَخَ مِنْهَا
فَاتَّبَعَهُ الشَّيْطَانُ فَكَانَ مِنَ الْغَاوِينَ ﴿١٧٦﴾

وَلَوْ شِئْنَا لَرَفَعْنَاهُ بِهَا وَلَكِنَّهُ أَخْلَدَ إِلَى الْأَرْضِ
وَاتَّبَعَ هَوَاهُ فَمَثَلُهُ كَمَثَلِ الْكَلْبِ إِنْ تَحِيلَ عَلَيْهِ
يَلْهَثَ أَوْ تَتْرَكْهُ يَلْهَثَ ذَلِكَ مَثَلُ الْقَوْمِ الَّذِينَ
كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا فَاقْصُصِ الْقَصَصَ لَعَلَّهُمْ يَتَفَكَّرُونَ ﴿١٧٧﴾

سَاءَ مَثَلُ الْقَوْمِ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا وَالنَّفْسُ مَا كَانُوا
يَظُنُّونَ ﴿١٧٨﴾

مَنْ يَهْدِ اللَّهُ فَهُوَ الْمُهْتَدِى وَمَنْ يُضِلْ فَلَا وَلِيَّكَ
هُمُ الْخَاسِرُونَ ﴿١٧٩﴾

وَلَقَدْ ذَرَأْنَا لِجَهَنَّمَ كَثِيرًا مِنَ الْجِنَّ وَالْإِنْسِ
لَهُمْ قُلُوبٌ لَا يَفْقَهُونَ بِهَا وَلَهُمْ أَعْيُنٌ لَا يُبْصِرُونَ
بِهَا وَلَهُمْ أُذُنٌ لَا يَسْمَعُونَ بِهَا أُولَئِكَ كَالْأَنْعَامِ
بَلْ هُمْ أَضَلُّ أُولَئِكَ هُمُ الْغَافِلُونَ ﴿١٨٠﴾

وَلِلَّهِ الْأَسْمَاءُ الْحُسْنَى فَادْعُوهُ بِهَا وَذَمُّوا الَّذِينَ

注 88 物質的な物、特に金銭への執着。

注 89 この節は、従って、人間の創造の目的とは何ら関係がなく、ただ、多くの人やジン（後者の語は、特別な階級の人、すなわち指導者又は重臣或いは著名な人をも意味する）の生命の痛ましい終わりを語るだけである。彼らがその口々を罪と邪悪の中で過ごす様子から、彼らは、地獄のために創り出されたのではないかと思われる。

注 90 神の正式な名はアッラーである；他の呼び名の全ては、厳密に言えば、彼の美德である。祈りの間、人は、そういう神の美德を、その祈りの目的に直接関連があるとして念ずるべきである。

奉れ。その名称について正しい方法より逸脱する者は捨て置き。彼等は己れがなせることに對して報いらるべし。(注91)

يُحَدِّثُونَ فِي آسَابِهِ سُبُحُونَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٩١﴾

182. また、われらが創れる者の中には、真理を以て人を導き、それに基づき正義を行う一団あり。

وَمِمَّنْ خَلَقْنَا أُمَّةٌ يَهْدُونَ بِالْحَقِّ وَبِهِ يَعْدِلُونَ ﴿٩٢﴾

第二十三項

183. されどわれらの神兆を拒否する者どもは、われらは彼等の知らざる方法で少しづつ彼等を破滅に引き込まん。

وَالَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا سَنَسْتَدْرِجُهُم مِّنْ حَيْثُ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٩٣﴾

184. われは彼等に猶予を与うるも、わが計略は必ずや効を奏せん。

وَأُمْلِي لَهُمْ إِنَّ كَيْدِي مَتِينٌ ﴿٩٤﴾

185. 彼等は、彼等の仲間が精神異状者に非ず、と考えざりしか？彼は明白なる警告者に他ならぬ。(注92)

أَوَلَمْ يَتَفَكَّرُوا مَا بِصَاحِبِهِمْ مِّنْ جِنَّةٍ إِنْ هُوَ إِلَّا نَذِيرٌ مُّبِينٌ ﴿٩٥﴾

186. 彼等は天地の王国に(注93)目を向け、アッラーが創りたる万物を観察せざるか？また己れの期限が真近に近づくを知らざるか？ならばこの後、如何なるものを信ぜんとするか？(注94)

أَوَلَمْ يَنْظُرُوا فِي مَلَكُوتِ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا خَلَقَ اللَّهُ مِنْ شَيْءٍ وَأَنْ عَسَى أَنْ يَكُونَ قَدِ اقْتَرَبَ أَجَلُهُمْ فَبِأَيِّ حَدِيثٍ بَعْدَهُ يُؤْمِنُونَ ﴿٩٦﴾

187. アッラーが一たび迷わしむれば、何人といえどもそこに導きはなし。アッラーは彼等をして罪を犯すにまかせ、気ままに徘徊せしむ。

مَنْ يُضِلِلِ اللَّهُ فَلَا هَادِيَ لَهُ وَيَذَرُهُمْ فِي طُغْيَانِهِمْ يَعْمَهُونَ ﴿٩٧﴾

注91 神の美德に関して、正しい道からそれるという事は、神はクルアーンまたはハディースに述べられている最も素晴らしい美德の全ての所有主なので、彼の威厳、尊厳、そして全能の慈悲と矛盾する様な、他の美德を神のために考え出す必要はない事を意味している。

注92 彼らは、聖なる預言者は彼らの仲間であると告げられており、預言者は、彼らの中で生活し、行動し、そして彼らはもう何年も彼の事を知っており、従って彼のどこをとっても狂気のさたではない事は、彼らには簡単に理解出来、事実心の中では確信しているのである。

注93 メッカの人々は、新しい時代の到来を告げる、自分達の周囲で起きている大きな、多様な変化が見えないのであろうか。全ての徴候が、偶像崇拜が国から消滅し、イスラム教にとって代わられるという事実を示しているのに。又「王国」という言葉は、神が天国と地獄の上に及ぼす支配を意味している。

注94 不信仰者達が、完璧で完成された戒律であるクルアーンを、拒絶し続けているとすると、一体彼らが信じる物は、他に何があるのだろうか、

188. 彼等が汝に「いつ起らんや?」とその時について問わば、云え、「それを知り給うは、独り我が主のみ。主を措いて何人もそれを明示する能わす。そは天と地を苦しめるなり。(注95) そは突如襲いかからん」と。彼等は汝に恰も汝がそれを熟知せるかの如く問う。云え、「それを知り給うは、独りアッラーのみ。されど大多数の者は之を知らず」と。

189. 云え、「アッラーが欲すに非ずば、我は己れの利害すら左右する能力なし。我もし不可見のものの知識を有したりせば、大なる幸せを得て、災いに遭うこともなかりしものを。我はただ一介の警告者にして、信徒たちへ朗報を伝達する者にすぎず」と。

第二十四項

190. アッラーこそは単一の人間からお前たちを創造せり。またアッラーは、男が女に安らぎを見いだすべく、(注96) 男の肋骨より妻を創り給えり。彼が彼女を知るや、彼女は軽き荷を負いてその荷と共に往来せり。されど次第に重くなりたれば、彼等兩名その主アッラーに祈りて、云う、「もし我等に良い子を授けなば、我等は必ず感謝を捧げん」と。

191. 主が彼等に良い子を授けると、彼等は主が自分たちに授けたことを顧慮して、主に他神を配したり。しかれどもアッラーは、彼等が配せる者の上にいと高くいまし給う。

192. 彼等自身が造られたるものにして、己れは何も創り得ない偶像をアッラーに配するとは何んたることか?

يَسْأَلُونَكَ عَنِ السَّاعَةِ أَيَّانَ مُرْسَاهَا قُلْ إِنَّمَا عِلْمُهَا
عِنْدَ رَبِّي لَا يُجِيبُهَا رُوحِي وَلَا هُوهٗ تُقَلَّتْ فِي
السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ لَا تَأْتِيكُمْ إِلَّا بَغْتَةً يَسْأَلُونَكَ
كَأَنكَ حَفِيفٌ عَنْهَا قُلْ إِنَّمَا عِلْمُهَا عِنْدَ اللَّهِ وَلَكِنْ
أُنْكَرُ الْكَافِرَ لَا يَعْلَمُونَ ﴿١٨٨﴾

قُلْ لَا إِلَهَ إِلَّا أَنَا فَاعْبُدْنِي وَأَقِمِ الصَّلَاةَ لِذِكْرِي
وَلَوْ كُنْتَ أَعْلَمُ الْغَيْبِ لَا سَكَرْتُ مِنَ الْخَمْرِ
وَمَا مَسَّنِيَ السُّوْءُ إِن أَنَا إِلَّا نَذِيرٌ لِّقَوْمٍ
يُؤْمِنُونَ ﴿١٨٩﴾

هُوَ الَّذِي خَلَقَكُمْ مِنْ نَفْسٍ وَاحِدَةٍ وَجَعَلَ مِنْهَا
زَوْجَهَا لِيَسْكُنَ إِلَيْهَا فَلَمَّا تَغَشَّاهَا حَمَلٌ
خَفِيًّا فَهَرَّتْ بِهِ فَلَمَّا أَثْقَلَتْ دَعَوَا اللَّهَ رَبَّهُمَا
لَئِنْ آتَيْتَنَا صَالِحًا لَنُكَفِّرَنَّ مِنَ الشُّكْرِينَ ﴿١٩٠﴾

فَلَمَّا آتَاهُمَا صَالِحًا جَعَلَا لَهُ شُرَكَاءَ فِيمَا آتَاهُمَا
فَعَلَى اللَّهِ عَيْنَا يُشْرِكُونَ ﴿١٩١﴾

أَيُّشْرِكُونَ مَا لَا يَخْلُقُ شَيْئًا وَهُمْ يُخْلَقُونَ ﴿١٩٢﴾

注95 人間にとって罰を受ける事が苦痛であるのと同様、神にとって、罰の裁定は苦痛であり、それが、「そは天と地を苦しめるなり」という語句の意味するところである；すなわち「天」は神と大使達を表わし、「地」は人間を表すのである。

注96 結婚の本来の目的の一つは、男女がお互いにとっての、安楽と慰めのよりどころとなる事である。人間は、本質的に社会生活を営むものであり、親しい伴侶への自然な切望が結婚というものによって満たされるのである。

193. それ等神々は彼等を助け得ず、己れ自身さえも助くる能わず。

وَلَا يَسْتَطِيعُونَ لَهُمْ نَصْرٌ وَلَا أَنْفُسُهُمْ يَنْصُرُونَ ﴿١٩٣﴾

194. たといお前たち彼等を正道に招くとも、彼等はお前たちに従わざるべし。彼等を招くも、沈黙を守るも、しよせんお前たちにとりては同じことなり。

وَأِنْ تَدْعُهُمْ إِلَى الْهُدَىٰ لَا يَتَّبِعُوكُمْ سَوَاءٌ عَلَيْكُمْ أَدَعَوْتُهُمْ أَمْ أَنْتُمْ صَامِتُونَ ﴿١٩٤﴾

195. げにアッラーの外にお前たちが祈るそれ等神々は、お前たちと同じく主の僕にすぎず。もしお前たちの言葉が真実ならば、それ等神々を呼びてお前たちの祈りに応えさせよ。(注 97)

إِنَّ الَّذِينَ تَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ عِبَادٌ أَمْثَلُكُمْ فَادْعُوهُمْ فَلْيَسْتَجِيبُوا لَكُمْ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿١٩٥﴾

196. それ等神々には歩む足ありや、握る手ありや、見る眼ありや、聴く耳ありや? 云え、「お前たちがアッラーに配するものと呼びて、汝等みな我に謀らみをしかけよ、遠慮することなかれ。(注 98)

أَلَهُمْ أَرْجُلٌ يَمْشُونَ بِهَا? أَمْ لَهُمْ أَيْدٍ يُمْسِكُونَ بِهَا? أَمْ لَهُمْ آيُنٌ يُبْصِرُونَ بِهَا? أَمْ لَهُمْ آذَانٌ يَسْمَعُونَ بِهَا? قُلْ ادْعُوا شُرَكَاءَكُمْ كَيْدُونَ فَلَا تَنْظُرُونَ ﴿١٩٦﴾

197. げに我が守護者は經典を降し賜わりたるアッラーなり。彼は正義を行う者を守護し給う。

إِنَّ وَلِيَ اللَّهِ الَّذِي نَزَلَ الْكِتَابُ وَهُوَ يَتَوَكَّلُ الصَّالِحِينَ ﴿١٩٧﴾

198. お前たちが祈るものは、お前たちを助くる能力なく、己れ自身すら助くる能わず」と。

وَالَّذِينَ تَدْعُونَ مِنْ دُونِهِ لَا يَسْتَطِيعُونَ نَصْرَكُمْ وَلَا أَنْفُسُهُمْ يَنْصُرُونَ ﴿١٩٨﴾

199. たといお前たちが彼等を正道に招くとも、彼等は聴かざるべし。汝は彼等が汝の方を見るを知るが、彼等は見ざるなり。

وَأِنْ تَدْعُهُمْ إِلَى الْهُدَىٰ لَا يَسْعَوْا وَتَرَاهُمْ يَنْظُرُونَ إِلَيْكَ وَهُمْ لَا يُبْصِرُونَ ﴿١٩٩﴾

200. 預言者よ、常に寛容を旨とし、親切をすすめ、無知なる者から遠ざかれ。

خُذِ الْعَفْوَ وَأْمُرْ بِالْعُرْفِ وَأَعْرِضْ عَنِ الْجَاهِلِينَ ﴿٢٠٠﴾

注 97 この節は、偶像はそうする力をもっていないので、彼らが求める、アッラー以外の生物又は無生物は、決して彼らの祈りに答えられないという趣意であり、偶像崇拜者達に対する公然の挑戦となっている。ところが、生き給う神は、彼の熱愛者の祈りにお答えになるのである。

注 98 これとこの次の節では、前節で、不信仰者達に掲げられた挑戦が拡大されている。彼らはイスラム教との戦闘において、彼らの神に助けを要求し、自分達の全ての方策を駆使し、攻撃のために全ての武力を召集し、打ちこわすためにあらゆる手段を講じ、聖なる預言者を攻撃するための時間を無駄にせず、こうした試みにより、どういう危害を及ぼすことができたかをあえて見たがっている。神は、彼の預言者を助け、その根源の繁栄と成功を約束された(5:68 58:22)。

201. もし悪魔^{サタン}の誘惑に襲われたる場合は、アッラーに加護^{あまもり}を求めよ。げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。
وَأَمَّا يَنْزَغَنَّكَ مِنَ الشَّيْطَانِ نَزْعٌ فَاسْتَعِذْ بِاللَّهِ إِنَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٢٠١﴾
202. 義しい人々は悪魔^{サタン}の誘惑に襲われたる時、アッラーを念う。(注99)すると見よ、物事は正しく見え来るなり。
إِنَّ الَّذِينَ اتَّقَوْا إِذَا مَسَّهُمْ طَافٌ مِنَ الشَّيْطَانِ تَذَكَّرُوا فَإِذَا هُمْ مُبْصِرُونَ ﴿٢٠٢﴾
203. 兄弟でも無信心者は彼等を迷誤の中に引き込み、手をゆるめることなし。
وَإِخْوَانُهُمْ يَمُدُّوهُمْ فِي النَّفْيِ ثُمَّ لَا يَقْصِرُونَ ﴿٢٠٣﴾
204. 汝が彼等に新たな神兆^{しるし}をもたらさざれば、彼等は「何故汝は自らそれを作らざるか?」と問う。云え、「我はただ我が主より啓示されることに従うのみ。これ等はお前たちの主よりの明証にして、信ずる者たちへの嚮導^{きようどう}並びに慈悲なり」と。
وَإِذَا لَمْ تَأْتِهِمْ بَآيَةٌ قَالُوا لَوْلَا اجْتَبَيْتُمَا قُلُوبَنَا سَتِيعٌ مَا يُوحَىٰ إِلَىٰ مِنْ رَبِّي هَذَا بَصَائِرُ مِنْ رَبِّكُمْ وَهُدًى وَرَحْمَةٌ لِّقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ﴿٢٠٤﴾
205. さればクルアーンが読誦せらるる時は、之に耳を傾け、静肅にせよ、さすればお前たち慈悲に浴さん。(注100)
وَإِذَا قُرِئَ الْقُرْآنُ فَاسْتَمِعُوا لَهُ وَأَنْصِتُوا لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ﴿٢٠٥﴾
206. 朝な夕な、心を虚しくして畏れかしこみ、^{しき}声を低くして汝の主を汝の心に念ぜよ。而して懈怠者の類となるなかれ。
وَاذْكُرْ رَبَّكَ فِي نَفْسِكَ تَضَرَّعًا وَخَيْفَةً وَدُونَ الْجَهْرِ مِنَ الْقَوْلِ بِالْغُدُوِّ وَالْآصَالِ وَلَا تَكُن مِّنَ الْغَافِلِينَ ﴿٢٠٦﴾
207. げに主の側近くある者は、慢心して崇敬を怠る者に非ず。彼等は主を讃美し、その御前に平伏叩頭す。
إِنَّ الَّذِينَ عِنْدَ رَبِّكَ لَا يَسْتَكْبِرُونَ عَنْ عِبَادَتِهِ وَيُسَبِّحُونَهُ وَلَهُ يَسْجُدُونَ ﴿٢٠٧﴾

注99 これらの語句は、公正な人々が、サタンによって怒りに煽動される時、又は悪人達によって、彼らに対し、何らかの災いが引き起こされる時、彼らは、アッラーを思い出す事を意味している。

注100 新しいお告げへの要求に対する返答として、不信仰者達は、ここに、あり余るほどのおつげや証しを含んでいる事から、クルアーンに注意して耳を傾ける様にと言われた。

سُورَةُ الْأَنْفَالِ مَدَنِيَّةٌ (A) ۞

(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 彼等戦利品（注1）について汝に問う。云え、「戦利品はアッラーと使徒に属す。さればアッラーを畏れかしこみ、お互いの関係を正しくし、アッラーと使徒に従え、もしお前たち信者ならば」と。

يَسْأَلُونَكَ عَنِ الْأَنْفَالِ قُلِ الْأَنْفَالُ لِلَّهِ وَالرَّسُولِ
فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَصْلِحُوا ذَاتَ بَيْنِكُمْ وَأَطِيعُوا اللَّهَ وَرَسُولَهُ إِنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ②

3. 真の信者とは、アッラーの御名が言及されただけでその心が震え戦き、その神兆が読誦されるや、その信心を益々深め、主を信頼し、

إِنَّمَا الْمُؤْمِنُونَ الَّذِينَ إِذَا ذُكِرَ اللَّهُ وَجِلَتْ قُلُوبُهُمْ
وَإِذَا تُلِيَتْ عَلَيْهِمْ آيَاتُهُ زَادَتْهُمْ إِيمَانًا وَاعْلَوْ
رَبِّهِمْ يَتَوَكَّلُونَ ③

4. 礼拝を遵守し、われらが授けしものから惜みなく施す者をいうなり。

الَّذِينَ يُقِيمُونَ الصَّلَاةَ وَمِمَّا رَزَقْنَاهُمْ يُنْفِقُونَ ④

5. これ等は真の信者なり。彼等は主の御許にて高い位階を得、また容赦と高貴な給養を賜わらん。

أُولَٰئِكَ هُمُ الْمُؤْمِنُونَ حَقًّا لَهُمْ دَرَجَاتٌ عِنْدَ رَبِّهِمْ
وَمَغْفِرَةٌ وَرِزْقٌ كَرِيمٌ ⑤

6. 主が正義のために汝を家郷より出でしめる時、一部の信者が之に反対したれば、主は汝を助けて敵にあたらせたり。（注2）

كَمَا أَخْرَجَكَ رَبُّكَ مِنْ بَيْتِكَ بِالْحَقِّ وَإِنَّ فَرِيقًا
مِنَ الْمُؤْمِنِينَ لَكَاذِبُونَ ⑥

注1 アンファールとは、神の贈り物として、労なくしてイスラム教徒が手に入れた戦利品である。この節は、戦利品の分配について述べているのではない。それについては、8:42を参照する事。ここでは、バドルの勝利の後にイスラム教徒は戦利品を手に入れたことのみ語っている。

注2 イスラム教徒達は、メジナから行軍してきた時、自分達が十分に武装したメッカ軍と戦うことには思ってもいなかった。彼らは戦う準備もろくにしていなかったのである。途中、メッカ軍と戦わなければならないとわかった時、彼らは聖なる預言者に心配そうに尋ねた。何故、自分達に本当の状況を教えてくれなかったのか、知っていれば、敵を迎え打つ準備も十分に整えてきたはずだと。彼らは自分たちのことを心配したのではなく聖なる預言者の身を心配したのだ。覚悟もできていないまま預言者を危険にさらしたくなかったのである。（主は）「汝らを進ませた」と言わず、「汝を進ませた」と言うこの節から、神は預言者を防備無しにはしておかないことが明らかである。イスラム教徒達は、戦いを恐れてはいなかったが、好みはしなかった。それは、彼らは流血を嫌うし、また、聖なる預言者が危険にさらされることになるからだだった。

7. 彼等は恰も死を目の当りにしながらそれに追い立てられているかの如く、真理が明白になった後も、なお汝と真理について論争す。
8. またアッラーが、二隊（注3）のうちいずれか一隊はお前たちの所有たるべしと約束せし時、お前たちは武装せざる一隊（注4）を己れの所有と望みしあの時を念え。だがアッラーはその言葉の真実を立証し、不信心者の根を絶やさんと欲したり。
9. これは罪人がたとえそれを嫌うとも、彼は真実を立証し、虚偽は無なりと悟らしめんと欲したるが故なり。
10. お前たちが主に援助を嘆願せし時、彼はお前たちに応えて、云えり、「われは次々（注5）に一千（注6）の天使を繰り出してお前たちを助けん」と。
11. アッラーが朗報をなせるは、ひたすらお前たちの心をそれで安んじさせんがためなり。（注7）援助はひとりアッラーのみより来る。げに、アッラーは偉大にして、賢哲にまします。

第二項

12. その時、アッラーは安心のしるしとしてお前たちを仮眠（注8）に陥らしめ、また天

يُجَادِلُونَكَ فِي الْحَقِّ بَعْدَ مَا بَيَّنَّ كَأَنَّهُمْ يَسْأَلُونَ
إِلَى الْمَوْتِ وَهُمْ يَنْظُرُونَ ⑤

وَإِذْ يَعِدُكُمُ اللَّهُ إِحْدَى الطَّائِفَتَيْنِ أَنَّهَا لَكُمْ وَ
تَوَدُّونَ أَنَّ غَيْرَ ذَاتِ الشَّوْكَةِ تَكُونُ لَكُمْ وَيُرِيدُ
اللَّهُ أَنْ يُبَيِّنَ الْحَقَّ بِكَلِمَاتِهِ وَيَقْطَعَ دَابِرَ الْكَافِرِينَ ⑥

لِيُخَيِّطَ الْحَقَّ وَيُجِلَّ الْبَاطِلَ وَلَوْ كَرِهَ الْمُجْرِمُونَ ⑦

إِذْ تَسْتَغِيثُونَ رَبَّكُمْ فَاسْتَجَابَ لَكُمْ أَنِّي مُمِدُّكُمْ
بِآلِفٍ مِنَ الْمَلَائِكَةِ مُرْدِفِينَ ⑧

وَمَا جَعَلَهُ اللَّهُ إِلَّا بُشْرَىٰ وَلِتَطْمَئِنَّ بِهِ قُلُوبُكُمْ
۝ وَمَا النَّصْرُ إِلَّا مِنْ عِنْدِ اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ⑨

إِذْ يُخَيِّطُكُمُ النَّعَاسَ أَمَنَةً مِنْهُ وَيُنَزِّلُ عَلَيْكُمْ مِنَ

注3 二隊とは、(1)初めからイスラム教徒と戦うつもりで来ている装備十分なメッカ軍。(2)北からメッカへ戻っていく途中の軽武装のメッカの隊商、を指している。

注4 イスラム教徒達は、当然のことながら、軽武装の隊商と出合うほうがよかった。しかし、神は、彼らをしっかり武装したメッカ軍と出合わせたのである。このようにした神の目的は、神の命令によって真実を確立し、信仰しない者の根をたち切ることであった（3章14節と8章42節～45節参照）。

注5 次々と並んでいるの意。

注6 6章159節参照。

注7 3章127節参照。

注8 ここでは、パドルの戦いについて述べている。

より水を注ぎかけこれによってお前たちを
 浄め、悪魔（注9）の汚れを祓い、お前た
 ちの心を引き締め、またこれによってお前
 たちの脚を堅めんとせり。（注10）

السَّمَاءِ مَاءً يُطَهِّرُكُمْ بِهِ وَيُذْهِبُ عَنْكُمْ رِجْسَ الشَّيْطَانِ
 وَيُثَبِّتُ عَلَى قُلُوبِكُمْ وَيُنْثِتُ بِهِ الْأَقْدَامَ ⑫

13. その時汝の主は諸天子に啓示して、云い給
 えり、「われはお前たちと偕にあり。されば
 信ずる者たちを確固不動たらしめよ。われ
 は信ぜざる者の心に恐怖を投ぜん。その時
 彼等の首（注11）を刎ね、すべての指先を
 打ち落せ」と。

إِذْ يُوحِي رَبُّكَ إِلَى الْمَلَكَةِ أَنِّي مَعَكُمْ فَثَبَّتُوا الَّذِينَ
 آمَنُوا سَأَلْتُ فِي قُلُوبِ الَّذِينَ كَفَرُوا الرُّعْبَ فَأَصْرَبُوا
 فَوْقَ الْأَعْنَاقِ وَاصْرَبُوا مِنْهُمْ كُلَّ بَنَانٍ ⑬

14. これは彼等がアッラー並びにその使徒に抗
 せるが故なり。誰であれアッラー並びにそ
 の使徒に抗する者には、まことにアッラー
 は応報に厳しくまします。

ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ شَاقُّوا اللَّهَ وَرَسُولَهُ وَمَنْ يُشَاقِقِ
 اللَّهَ وَرَسُولَهُ فَإِنَّ اللَّهَ شَدِيدُ الْعِقَابِ ⑭

15. お前たちの懲罰はこれなり、されば之を味わ
 いて、不信心者のために業火の刑罰あるを
 知れ。

ذَلِكُمْ فَذَوْقُوهُ وَإِنَّ لِلْكَافِرِينَ عَذَابَ النَّارِ ⑮

16. おお、汝等信ずる者よ！ 汝等不信心者ど
 もの進軍して来るに会うとも、彼等にお
 前たちの背を向けるなかれ。（注12）

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا لَقِيتُمُ الَّذِينَ كَفَرُوا زَحَفًا
 فَلَا تُولُوهُمْ الْأَدْبَارَ ⑯

17. 誰であれ作戦上か、他の隊に合流（注13）
 するため以外、その日の敵に背を向ける者
 は、アッラーの激怒を蒙り、その住居は
 地獄なるべし。そは悪しき行先なり。

وَمَنْ يُولِهِمْ يُؤَمِّدِمْ دُبْرَهُ إِلَّا مُتَحَرِّفًا لِقِتَالٍ أَوْ
 مُتَحَيِّرًا إِلَى فِتْنَةٍ فَقَدْ بَاءَ بِغَضَبٍ مِنَ اللَّهِ وَمَأْوَاهُ
 جَهَنَّمُ وَبِئْسَ الْمَصِيرُ ⑰

注9 敵が水源を占拠してしまったのである。イスラム教徒達は、当然、水不足で非常に困るだろうと心配したのである。また、サタンというのは、悪魔の友達や仲間のことも意味している。

注10 イスラム教徒は砂地で、メッカ軍は固い土の上で野営した。折よく雨が降り、砂地は固まり、固い土のところは滑りやすくなった。

注11 頭のすぐ下の首の上部、ここは最も弱いところとされている。

注12 イスラム教徒は、最後の最後まで戦わなければならない。勝利が死かである。彼らに第三の道はない。

注13 この節は、イスラム教徒が退却してもよい場合を規定し、説明している。すなわち、(a)敵を欺く作戦として、あるいは、よりよい戦術位置に移動する時。(b)隊が主力軍か別の部隊に合流するため退却する時。

18. お前たちが彼等を殺したに非ず、アッラーが彼等を殺せり。また汝が投げたる時、それを投げたるは汝に非ずしてアッラーなり。(注14) そは不信心者どもを打ち倒さんがため並びに彼御自身より恩恵を信者に賜わらんがためなり。げに、アッラーはすべてを聴き、すべてを深知し給う。

كُلَّمَا تَقَاتَلُواهُمْ وَلَكِنَّ اللَّهَ قَتَلَهُمْ وَمَا رَمَيْتَ إِذْ رَمَيْتَ وَلَكِنَّ اللَّهَ رَفَعَى وَلِيْلَى الْمُؤْمِنِينَ مِنْهُ بَلََاءٌ حَسَنًا إِنَّ اللَّهَ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ⑭

19. 生じたる事はかくの如し。されば、アッラーは不信心者どもの奸策を無に帰せしめん御方なるを知れ。

ذَلِكُمْ وَأَنَّ اللَّهَ مُوهِنُ كَيْدِ الْكَافِرِينَ ⑮

20. 不信心者よ、もしお前たち審判を望むなら、すでに裁決(注15)は降されたり。もしお前たち敵対を止めるなら、そはお前たちのために益とならん。だがもし敵対行為に戻るなら、われらもまた還るべし。お前たちの軍勢が如何に多くとも、役立つことなかるべし。アッラーが信者と偕にあることを知れ。

إِنْ تَسْتَفْتِحُوا فَقَدْ جَاءَكُمُ الْفَتْحُ وَإِنْ تَنْتَهُوا فَهُوَ خَيْرٌ لَكُمْ وَإِنْ تُعَادُوا نُعَادْ وَلَنْ تَغْنَى عَنْكُمْ فَنُكَلِّمُ شَيْئًا وَلَوْ كَثُرَتْ وَأَنَّ اللَّهَ مَعَ الْمُؤْمِنِينَ ⑯

第三項

21. 汝等信ずる者よ、アッラー並びにその使徒に従え。彼の命を聴き、同時に背くなかれ。
22. また、聴きもせて、「我等は聴く」と云う如き徒輩になるなかれ。
23. アッラーの見解における最悪の人非人とは、ものごとの道理を解せざる顰者並びに啞者なり。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا أَطِيعُوا اللَّهَ وَرَسُولَهُ وَلَا تَوَلَّوْا عَنْهُ وَأَنْتُمْ تَسْعَوْنَ ⑰

وَلَا تَكُونُوا كَالَّذِينَ قَالُوا سَمِعْنَا وَهُمْ لَا يَسْمَعُونَ ⑱

إِنَّ شَرَّ الدَّوَابِّ عِنْدَ اللَّهِ الصُّمُّ الْبُكْمُ الَّذِينَ لَا يَعْقِلُونَ ⑲

注14 バドルの戦いに勝ったのは、イスラム教徒達が巧みに戦い、勇豪だったからではない。彼らはあまりに少数であり、あまりに弱く、装備は粗末すぎたので、数の上でははるかに優勢で装備もずっと整い、また、はるかによく訓練されている軍隊と戦って勝てるとは考えられなかった。聖なる預言者がひとつかみの小石や砂を投げた行為は、モーゼが杖で海の水を打ったのと全く似ている。モーゼの行為を合図に、風が吹き、潮が満ちてきて、ファラトとその大軍は海の藻ぐずとなったのである。同様に、聖なる預言者が小石をひとつかみ投げたのは、強風が吹く合図であった。その強風のためにアブ・ジャハル(聖なる預言者は彼を、自分に従う人々のファラオだとみなしていた。)とその大軍は砂漠で壊滅したのである。どちらの場合も、神の特別な意図の下で、二人の預言者の行為と同時に、自然の威力が発揮されたのだった。

注15 信仰しない者達は、聖なる預言者に、神の審判として勝利を要求した。彼らは、神の審判は彼らが望む通りになると聞かされているのである。

24. アッラーもし彼等に何か善きことあるを認めれば、必ず彼等を聞かしめたるなり。
(注16) されど、今仮に聴えるようになさば、彼等これを嫌って背き去らん。

وَلَوْ عَلِمَ اللَّهُ فِيهِمْ خَيْرًا لَأَسْمَعَهُمْ وَلَوْ أَسْمَعَهُمْ
لَتَوَلَّوْا وَهُمْ مُعْرِضُونَ ﴿٢٤﴾

25. 汝等信ずる者よ、アッラー並びにその使徒がお前たちに生命を与える(注17)ために呼び給う時は、応えよ。アッラーは人とその心との間に入り給い、(注18) またお前たちはやがて彼の御許に召し寄せられるを知れ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اسْتَجِيبُوا لِلَّهِ وَلِلرَّسُولِ إِذَا دَعَاكُمْ لِمَا يُحْيِيكُمْ وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ يَحُولُ بَيْنَ الْمَرْءِ وَقَلْبِهِ وَأَنَّهُ إِلَيْهِ تُحْشَرُونَ ﴿٢٥﴾

26. 災難に対して油断するな、そはお前の中の不義を為せる者(注19)のみ襲うに非ず。
而して、アッラーは懲罰するに厳しくましますと知れ。

وَاتَّقُوا فِتْنَةً لَا تُصِيبُنَ الَّذِينَ ظَلَمُوا مِنْكُمْ خَاصَّةً ۖ وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ شَدِيدُ الْعِقَابِ ﴿٢٦﴾

27. お前たち地上においてその数少く、劣勢と見なされ、人々が強奪に来はしないかと恐れおののいていた頃のことを憶い起せ。あの時彼は、お前たちを助けてかくまい、且つ強くし、更に種々なる佳き物を賜いたり。お前たち恐らく感謝せん。(注20)

وَاذْكُرُوا إِذْ أَنْتُمْ قَلِيلٌ مُسْتَضْعَفُونَ فِي الْأَرْضِ تَخَافُونَ أَنْ يَتَخَفَتَكُمْ النَّاسُ فَأَوْلَكُمْ وَأَيْدِيكُمْ بِضَرْهِهِ وَزَفَّكُمْ مِنَ الظَّيْبِ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿٢٧﴾

28. 汝等信ずる者よ、アッラー並びに使徒を裏切るなかれ。また自分達への信頼を知りつ

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَخُونُوا اللَّهَ وَالرَّسُولَ وَخَوْنُوا

注16 「必ず彼等を聞かしめたるなり。」という言葉は、次のような意味である。もし、神が今の状態のままで彼らに真理を受け入れるよう強いても、彼らの心の底は変わらず、決して真のイスラム教徒にはならないだろう。

注17 神の預言者が死者への命を与えるという表現は、比喩的、精神的な意味でとらえるべきである。

注18 「アッラーは、人とその心との間に入り給う」という言葉は、人(または人の自我)は自分の心を統制することはできない、心を自分の思うままにすることはできないという意味である。この言葉は、さらに、人はすぐに神の声に耳を傾け、すぐにそれに応じなければならない、とも言おうとしている。なぜなら、もし人がすぐにそうしなければ、予期しなかった事柄が人の心をかたくなにし、錆つかせてしまうかもしれない。そうなれば、人は神の声に耳をかたむけなくなってしまうかもしれないからである。

注19 自分自身を正しく律するだけでは十分ではない。我々は、周囲も変えていかなければ安全ではない。燃えさかる炎に囲まれた家は、いつ何時、その炎に燃え尽きされてしまうかもしれないのである。

注20 ここでは、イスラム教徒たちに、彼らが国の中で弱い立場にあって、強い敵意ある人々に囲まれていた時、神が助けてくれたように、彼らは、権力を持った時には、弱者を守るよう努力しなければならないと言っている。この節は、イスラム教徒が、すぐに政治的権力を得るであろうという預言を暗示している。

つ、裏切るなかれ。(注 21)

29. 富と子女達は一つの^{たか}験にすぎぬことを知れ、またアッラーの御許にこそ偉大な報奨あるを知れ。

30. 汝等信ずる者よ、お前たちもしアッラーを恐れ敬わば、彼はお前たちに救援を授け、お前たちの諸悪を消滅し、容赦せん。アッラーは偉大なる恩恵の主にまします。

31. 不信者どもが汝に対して^{かんさく}奸策をめぐらし、汝を監禁し、或いは殺さんとし、或いは放逐せんとせし時のことを憶い起せ。彼等^{かんさく}畫策したれども、アッラーもまた^{かんさく}畫策せり。(注 22) アッラーは一番の策略家にまします。

32. われらの^{しるし}神兆が彼等に誦誦されるや、彼等は云う、「我等はすでに聞けり。もし我等欲しなば、これと同じことを云い得べし。(注 23) これはただ古人の物語にすぎず」と。

33. 彼等が、「アッラーよ、もしこれが汝よりの真理ならば、我等の上に天より石を降らせ給え、或いは我等の上に^{くわい}苛酷な懲罰を蒙ら

أَمْنَتَكُمْ وَأَنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٢٩﴾

وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ وَآدَارَتَهُ فَتَنُهُ ۚ وَ أَنَّ

اللَّهُ عِنْدَهُ أَجْرٌ عَظِيمٌ ﴿٣٠﴾

يَأْتِيهَا الَّذِينَ آمَنُوا ۚ إِنَّ تَتَّقُوا اللَّهَ يَجْعَلْ لَكُمْ

فُرْقَانًا ۚ وَيَكْفُرْ عَنْكُمْ سَيِّئَاتِكُمْ وَيَغْفِرْ لَكُمْ ۚ وَاللَّهُ

ذُو الْفَضْلِ الْعَظِيمِ ﴿٣١﴾

وَإِذْ يَبْكُرُكَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِيُثْبِتُوكَ أَوْ يَقْتُلُوكَ أَوْ

يُخْرِجُوكَ وَيَبْكُرُونَ وَيَكْفُرُ اللَّهُ ۚ وَاللَّهُ خَبِيرٌ

الْمَكِينِ ﴿٣٢﴾

وَإِذَا تَنَلَّى عَلَيْهِمْ أَيْبُنَا قَالُوا قَدْ سَمِعْنَا لَوْ نَشَاءُ

لَقُلْنَا مِثْلَ هَٰذَا ۚ إِنَّ هَٰذَا إِلَّا أَسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ﴿٣٣﴾

وَإِذْ قَالُوا اللَّهُمَّ إِنَّ هَٰذَا هُوَ الْوَحْيُ مِنْ عِنْدِكَ

فَأَمْطَرْنَا عَلَيْهِمْ حِجَابًا مِّنَ السَّمَاءِ ۚ وَأَوْتَيْنَا بَعْدَآبٍ

注 21 この節は、人間の二つの忠誠について述べている。一つは、我々の創造者であるが故に絶対に絶対に永遠なる神（そして神の使者も）に対する忠誠であり、もう一つは、仲間への義務から生じる、仲間に対する忠誠である。

注 22 この節で述べられているのは、メッカのダールン・ナドワ（自治会館）で行われた秘密会議のことである。町の長老たちは、この新しい信仰が広まるのを妨げようとする自分達の努力がすべて失敗し、また、メッカから移ることのできるイスラム教徒はほとんど皆、メジナへ移り、危害を逃れたのを知って、イスラム教を根絶しようとする最後の計画をねろうとダールン・ナドワに集まったのである。さんざん討議した後に、彼らはある計画を考えついた。それはクライシュのいろいろな部族から、たくさんの若者を集め、共同して聖なる預言者を襲撃させ、殺させるというものだった。聖なる預言者は、真夜中、見張りが眠りこんでいる間に、密かに家を出、常に誠実な仲間であるアブ・バクルと共に、ソールの洞くつに避難した。そして、無事メジナに行きついたのである。

注 23 信仰しない者達は、クルアーンのような話など、自分達も作れると豪語していたが、これはただのからいばりである。実際に、彼らは何も作りはしなかったし、今だに、短い一章すらできてはいない。

せ給え」と云える時を憶い起せ。(注24)

34. されどアッラーは汝が彼等の中にいる間は彼等を罰せず、(注25) また彼等が赦罪を乞う間は彼等を処罰せざりき。

35. 彼等聖礼拝所の真の守護者に非らざるに、そこに人の詣づるを妨害するに及んでは、もはやアッラーとて彼等を罰せざる理由何なし。真の守護者は正義の人のみなり、しかるに彼等の多くは之を知らず。

36. 聖殿における彼等の礼拝は、ただ口笛を吹き手を拍ちならすにすぎず。されば、懲罰を味わえ、信ぜざりしが故に。

37. まこと、不信心者どもは人をアッラーの道より阻まんとして己が富を費やす。これからも費やし続けん。されど、やがてそれが後悔の種とならん、(注26) 打ち負かされん時至るらん。不信心者どもは地獄に集められん。

38. それはアッラーが悪人を善人より分ち、一人を他の上に置いて順次彼等を一緒に積み重ね、しかる後に之を地獄に投げ込み給う。彼等は紛れもない失敗者なり。

第五項

39. 不信心者どもに云え、「もし止めるならば、過去のことは赦されん。されど、もしそこに還るならば、往古の人々が遭いたる先例あり」と。

الْيَوْمِ ٢٢

وَمَا كَانَ اللَّهُ لِيُعَذِّبَهُمْ وَأَنْتَ فِيهِمْ وَمَا كَانَ

اللَّهُ مُعَذِّبَهُمْ وَهُمْ يَسْتَغْفِرُونَ ٢٣

وَمَا لَهُمْ أَلَّا يُعَذِّبَهُمُ اللَّهُ وَهُمْ يَصُدُّونَ عَنِ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ وَمَا كَانُوا أَوْلِيَاءَهُ إِنْ أَوْلِيَائُهُ

إِلَّا الْمُتَّقُونَ وَلَكِنْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ٢٤

وَمَا كَانَ صَلَاتُهُمْ عِنْدَ الْبَيْتِ إِلَّا مُكَاءٌ وَتَصْدِيدٌ

فَذُوقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْفُرُونَ ٢٥

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا يُنْفِقُونَ أَمْوَالَهُمْ لِيَصُدَّوْا عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ فَسَيَنْفِقُونَهَا ثُمَّ تَكُونُ عَلَيْهِمْ حَسَمَةً

ثُمَّ يَغْلِبُونَ ٢٦ وَالَّذِينَ كَفَرُوا إِلَىٰ جَهَنَّمَ يُخْشَرُونَ ٢٧

لِيُمِيزَ اللَّهُ الْخَبِيثَ مِنَ الطَّيِّبِ وَيَجْعَلَ الْخَبِيثَ بَعْضَهُ عَلَىٰ بَعْضٍ فَيَرْكُمَهُ جَمِيعًا فَيَجْعَلُهُ فِي جَهَنَّمَ

أُولَٰئِكَ هُمُ الْخٰسِرُونَ ٢٨

قُلْ لِلَّذِينَ كَفَرُوا إِنْ يَنْتَهُوا يُغْفَرْ لَهُمْ مَا قَدْ

سَلَفَ وَإِنْ يُعْوَدُوا فَقَدْ مَضَتْ سُنَّتُ الْأَوَّلِينَ ٢٩

注24・バドルの戦場でのアブ・ジャハルの祈りは、ほとんどの言葉の通りであった。そして、この祈りは、そのとおり実現したのである。アブ・ジャハルは、多くのクライシスの指導者と共に死に、彼らの屍は穴に投げ込まれた。

注25 メッカの人々は、聖なる預言者がメッカを去った後に、罰を受けたのである。神の使者は、天罰に対する橋になってくれたのである。

注26 この言葉が預言しているのは、信仰しない者達はイスラム教との戦いに多くの富を費やしているが、後にそれを非常に後悔し、悲嘆にくれるだろうということである。イスラム教を滅ぼそうとする彼らの努力は、結局、無に帰するであろうし、彼らの息子達は、イスラム教を受け入れ、イスラム教を更に広めるために、富を費やすことになるのである。

40. 迫害がなくなり、宗教が皆^{ことごと}悉くアッラーのものとなるまで彼等と戦え。(注27) されど、彼等もし敵対を止めるならば、まことにアッラーは彼等の行動を監視し給う。
41. もし彼等背くならば、(注28) その時アッラーはお前たちの守護者にましますことを知れ。なんと素晴らしい守護者なり、擁護者なり！
42. もしお前たちアッラーを信じ、また判別の日(注29)——すなわち両軍相会せる日、われらが僕に降せしものを信じるならば、お前たちが戦利品として獲たるものは何物にせよ、その五分の一は、アッラー並びにその使徒、親戚、孤児、貧者、及び旅行者(注30)のものであることを知れ。げにアッラーは全能にまします。
43. お前たちが谷の手前岸に陣取り、彼等は向う岸にあり、その下を隊商が在りたりし時のこと。たとえお前たち互に合戦を約したりとも、必ずその約束を違えたであろう。(注31) されど、戦闘は行われたり。そはアッラーが定めたことを成し遂げんがた

وَقَاتِلُوهُمْ حَتَّى لَا تَكُونَ فِتْنَةٌ وَيَكُونَ الدِّينُ كُلُّهُ لِلَّهِ فَإِنِ انْتَهَوْا فَإِنَّ اللَّهَ بِمَا يَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿٤٠﴾
وَإِن تَوَلَّوْا فَأَعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ مَوْلَكُمْ نِعْمَ الْمَوْلَى وَنِعْمَ النَّصِيرُ ﴿٤١﴾

وَأَعْلَمُوا أَنَّا غَنِمْتُمْ مِنْ شَيْءٍ فَإِنَّ لِلَّهِ خُمُسَهُ وَلِلرَّسُولِ وَلِذِي الْقُرْبَىٰ وَالْيَتَامَىٰ وَالْمَسْكِينِ وَابْنِ السَّبِيلِ إِن كُنْتُمْ أَمْتُمْ بِاللَّهِ وَمَا أُنزِلْنَا عَلَيْهِ عَبْدُنَا يَوْمَ الْفُرْقَانِ يَوْمَ التَّنَجُّتِ فَالْجَمْعُ وَاللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٤٢﴾

إِذْ أَسْتَمِرُّ بِالْعُدُوِّ الدِّينِيَّةِ وَهُمْ بِالْعُدُوِّ الْقُصْوَىٰ وَالرَّكْبِ أَسْفَلَ مِنْكُمْ وَلَا تَوَاعَدْتُمْ لِاخْتِلَافْتُمْ فِي الْأَيْعَالِ وَلَكِنْ لِّيَقْضَىٰ اللَّهُ أَمْرًا كَانَ مَفْعُولًا لِّبِهَائِهِ

注27 イスラム教徒達は、宗教上の迫害がなくなり、人々が自分の選んだ宗教を自由に信仰できるようになるまで、戦わなければならないと定められていた。勿論、イスラム教は、良心の自由の最大の支持者である(2章194節参照)。

注28 この言葉は、「もし、彼らが和平の提案を受け入れず、再び敵対するのであれば」という意味である。

注29 バドルの日のこと。

注30 この節は、戦利品の分配について述べている(8章2節も参照の事)。戦利品の五分の一はイマームがカリファにゆだね、彼の判断に従って、ここにあげた五者の間で分配されるべきものである。聖なる預言者に分配されたものは、貧しいイスラム教徒たちのために費やされた。預言者自身は、全く簡素な生活をしていたからである。イマーム・マリクによれば、分配は必ずしも平等に行なわれる必要はない。イマームの裁量にまかされ、イマームは、その時の状況や必要性に応じて分配するのである。こうしたことも、聖なる預言者と、正しく彼を踏襲する四人の後継者の仕事であった。残りの五分の四は、兵士たちに分配された。兵士たちは、給料もなく、なたいの場合、戦争に行く費用さえ自分達で賄わなければならなかったのだ。当時、正規軍も国家財政というものもない時であったから、これは、その当時の状況に見合うよう考えられた、緊急の分配方法であった。「親戚」とは、ザカート(喜捨)から何の利益も得ることができなかったハシムと、アブドウル・ムッターリブの子孫すべてのことである。

注31 この節は、バドルにおける三つの軍勢の位置関係をはっきり描き出している。イスラム教徒達はメジナに近い側に、メッカ軍はメジナから離れた側に、そしてシリアから来たメッカの隊商は、海の方へ向ってい

め、(注 32) また死ぬ者にアッラーの明証を見させて死なせ、生き残る者にアッラーの明証を見させて生き残らしめんがためなり。まことにアッラーはすべてを聴き、すべてを深く知り給う。

مَنْ هَاكَ عَنْ بَيِّنَةٍ وَحَيٍّ مَنْ حَى عَنْ بَيِّنَةٍ وَإِنَّ
اللَّهَ لَسَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٣٢﴾

44. アッラーは汝の夢の中で、敵を寡少に見せしめたり。(注 33) もし彼が敵の人数を大勢いるように見せしめなば、お前たちは必ず気後れし、その事について論じ争ったに違いない。されど、アッラーはお前たちを救い給えり。彼は確かに、人が胸奥に秘めたるものを深知し給う。

وَإِذْ يُرِيكُمُ اللَّهُ فِي مَنَامِكَ قَلِيلًا وَلَوْ أَرَاكُمْ
كَثِيرًا لَّفَاشَلْتُمْ وَلَتَنَازَعْتُمْ فِي الْأَمْرِ وَلَكِنَّ اللَّهَ
سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٣٣﴾

45. 両軍が遭遇せし時を念え。彼はお前たちの眼に、彼等を少数と映ぜしめ、彼等の眼にはお前たちを少数と映ぜしめたるは、(注 34) アッラーがその定めたることを成し遂げんとせんがためなりき。万事最後の決定はアッラーに帰着す。

وَإِذْ يُرِيكُمُ اللَّهُ إِذَا الْتَقَيْتُمْ فِي آَعَيْنِكُمْ قَلِيلًا وَ
يُقَلِّلُكُمْ فِي آَعَيْنِهِمْ لِيَقْضَى اللَّهُ أَمْرًا كَانَ مَفْعُولًا
بِهِ وَاللَّهُ تَرْجِعُ الْأُمُورُ ﴿٣٤﴾

第六項

46. 汝等信ずる者よ、合戦に際しては毅然として、アッラーを幾度も唱念せよ、さすれば幸あらん。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا لَقَيْتُمْ فَعَةً فَاقْتَبِرُوا وَادْعُوا
اللَّهَ كَثِيرًا لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿٣٥﴾

47. 而して、アッラーと使徒に従い、意気消沈して力を喪失することのないように互に喧嘩口論などするなかれ。堅忍不拔たれ。アッラーは堅忍不拔なる者と偕にあり。

وَاطِيعُوا اللَّهَ وَرَسُولَهُ وَلَا تَنَازَعُوا فَعَفُوا قَفْسُوا وَتَدْعُوا
اللَّهَ مَعَ الصَّابِرِينَ ﴿٣٦﴾

たのである。この節では、次のようにも述べている。もし、イスラム教徒達が、自分で衝突の時を決められるのなら、彼らはきっと、最初の衝突の口を、もっと先に延ばしたかったであろう。その時、彼らは自分達の力は、はるかに強力で、装備もはるかに整った敵と戦うには不十分だと感じていたのである。しかし、神は、神の奇跡を強く示すが目的であったから、彼らを敵に出合わせたのである。

注 32 神は、メッカ軍の敗北を宣告していたのである。

注 33 聖なる預言者がバドルへ行く途中見た幻の中では、メッカ軍の人数は、実際の数よりも少なく見えたのである。これは、メッカ軍は、数や装備で優っていても、必ず敗北するという意味であった。

注 34 前節が、聖なる預言者の見た幻の中の敵の様子を述べているのに対し、この節では戦場における敵の実際の陣容について述べている。敵は、兵の三分の一を土手の後に隠れさせていた。従って、両軍が相対する時、イスラム教徒は、実際の三分の二の人数の敵と対することになる。これは、当然彼らを勇気づけた。敵側としては、このようにしたのは、イスラム教徒達が恐れをなして戦場から逃げ出し、戦争にならなくなる事態を避けるためであった。こうした両軍の考えは、それぞれに軍の戦意をもち上げていた。結果は、神が宣告した通り、すなわち、メッカ軍の屈辱的なさんざんな敗北となったのである。

48. 昂然として己が家より現われ出で、人をアッラーの道から背き去らしめる徒輩の如くなるなかれ。アッラーは彼等の行動のすべてを取り囲み給う。

وَلَا تَكُونُوا كَالَّذِينَ خَرَجُوا مِنْ دِيَارِهِمْ بَطَرًا وَرِئَاءَ النَّاسِ وَيَصُدُّونَ عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ وَاللَّهُ بِمَا يَعْمَلُونَ حَكِيمٌ ﴿٥٨﴾

49. 悪魔（注35）が己が行為を正しいと彼等に思わしめていた時、云えり、「今日、何人もお前たちに打ち勝るを得ず。我はお前たちの擁護者なり」と。しかるに、両軍相對峙するや、彼は踵を回して、云えり、「我はお前たちとは関りなし。我はお前たちの見えざるものを見る。我はアッラーを恐る。（注36）アッラーは罰するに厳しくまします」と。

وَإِذْ زَعَمَ لَهُمُ الشَّيْطَانُ أَعْمَالَهُمْ وَقَالَ لَا غَالِبَ لَكُمْ الْيَوْمَ مِنَ النَّاسِ وَإِنِّي جَارٌ لَكُمْ فَلَمَّا تَرَ اتَّ الْفِتْنَتَيْنِ لَغَصَ عَلَى عَقِبَيْهِ وَقَالَ إِنِّي بَرِيءٌ مِنْكُمْ إِنِّي أَزَى مَا لَا تَرَوْنَ إِنِّي أَخَافُ اللَّهَ وَاللَّهُ شَدِيدُ الْعِقَابِ ﴿٥٩﴾

第七項

50. 偽善者並びに心に病のある者が「彼等の宗教はこれ等の人々を惑わしたり」と云えし時を念え。誰であれアッラーに信頼をよせる者は……然り、まことにアッラーは偉大にして、賢哲にまします。

إِذْ يَقُولُ الْمُنَافِقُونَ وَالَّذِينَ فِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ غَرَّ هَؤُلَاءِ دِينُهُمْ وَمَنْ يَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ فَإِنَّ اللَّهَ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٦٠﴾

51. 汝もし見得るならば、諸天使が不信心者どもの生命を持ち去る時、彼等の顔や背を打ちて云う、「汝等火焔の刑を味わえ！」

وَلَوْ تَرَى إِذْ يَتَوَفَّى الَّذِينَ كَفَرُوا الْمَلَائِكَةُ يَضْرِبُونَ وُجُوهَهُمْ وَأَدْبَارَهُمْ وَذُوقُوا عَذَابَ الْحَرِيقِ ﴿٦١﴾

52. この責苦はお前たちの手が自分の前に送りしもののためなり。またアッラーはその僕等に些かも不正不義にましまさぬことを知れ」と。

ذَٰلِكَ بِمَا قَدَّمْتِ أَيْدِيكُمْ وَأَنَّ اللَّهَ لَيْسَ بِظَلَّامٍ لِلْعَبِيدِ ﴿٦٢﴾

注 35 この節で語られている人は、メッカの人々の反イスラム感情をかきたてたスラカ・ビン・マリク・ビン・ジュシャムなどと言われている。しかし、彼は後に、イスラム教徒になっている。メッカ軍がまだメッカに滞留している時に、何人かのクライシュ部族の指導者の心配は、バヌー・カナーナの一派でクライシュ部族に敵意を持つバヌー・バクルが、メッカ軍がいなくなった時に、メッカを急襲するかもしれないし、メッカ軍を後から攻撃するかもしれないということだった。バヌー・カナーナの長、スラカがバヌー・カナーナの部族はメッカの人々に何の危害も加えることはない保証したので、彼らの心配はおさまった。

注 36 スラカは、イスラム教徒達が漸固とした決意を固めているのを見て、恐ろしくなったのである。彼らを見て、彼らには勝利か死か、どちらか一つなのだと言ったのである。丁度同じ様に、ウットバとウメールはバドルの戦いの日に感じ、メッカの人々に、イスラム教徒は皆、死へ向って行く様に見えたと言っている（Tabari）。

53. 彼等の場合は、ファラオの民並びにその以前のものどもと同じなり。彼等はアッラーの神兆を信ぜざりき。さればアッラーはその罪故に彼等を懲らしめたり。まことに、アッラーは強力にして、罰するに厳しくまします哉。

كَذٰبِ اِلٰ فِرْعَوْنَ وَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ كَفَرُوْا
بَاٰيٰتِ اللّٰهِ فَاَخَذَهُمُ اللّٰهُ بِذُنُوْبِهِمْ اِنَّ اللّٰهَ
قَوِيٌّ شَدِيْدُ الْعِقَابِ ﴿٥٣﴾

54. こはアッラーが一度或る民に恩寵を授くれば、その民が先に自らの心裡を変えざる限り（注 37） 変えざるがためなり、而して、アッラーはすべてを聴き、すべてを深知するを知れ。

ذٰلِكَ بِاَنَّ اللّٰهَ لَمْ يَكْ مُغَيِّرًا نِّعْمَةً اَنْعَمَ عَلَيْهَا وَهُوَ
خَفِيٌّ غَيْرُوْا مَا بِاَنْفُسِهِمْ وَاَنَّ اللّٰهَ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ﴿٥٤﴾

55. 彼等の場合はファラオの民並びにその以前のものどもと同じなり。彼等ははその主の神兆を拒否せり。されば、われらはその罪故に彼等を滅ぼせり。われらはファラオの民を溺れしめたり、なんとなれば彼等悉く不義なす徒輩なりしが故に。

كَذٰبِ اِلٰ فِرْعَوْنَ وَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ كَذَّبُوْا
رَبَّيْهُمْ فَاَهْلَكَهُمْ بِذُنُوْبِهِمْ وَاَعْرَفْنَا اِلٰ
فِرْعَوْنَ وَ كُلَّ كَاٰنٍ ظٰلِمِيْنَ ﴿٥٥﴾

56. アッラーの立場から見た最低の人非人とは、忘恩の徒輩なり。されば彼等は信ぜざるべし。

اِنَّ شَرَّ الدّٰوَابِّ عِنْدَ اللّٰهِ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا فَهُمْ لَا
يُؤْمِنُوْنَ ﴿٥٦﴾

57. これ等の者と汝は盟約を結びしも、彼等ははその都度之を破約し、（注 38） 神を畏れぬ者どもなり。

الَّذِيْنَ عٰهَدْتَ مِنْهُمْ ثُمَّ يَنْقُصُوْنَ عٰهْدَهُمْ
فِيْ كُلِّ مَرَّةٍ وَهُمْ لَا يَنْقُوْنَ ﴿٥٧﴾

58. されば、戦場にて彼等を打ち破りし時は、背後に従う者どもを逐い散らせ。（注 39） されば、彼等も反省するやも知らず。

فَاَمَّا تَتَقَفُّهُمْ فِى الْحَرْبِ فَسَرَدَبِهِمْ مِّنْ خَلْفِهِمْ
لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُوْنَ ﴿٥٨﴾

59. また、或る民が汝を裏切る恐れある場合は、お前の方から公平に（注 40） 盟約を彼等

وَاَمَّا تَخَافَنَّ مِنْ قَوْمٍ خِيٰاَنَةً فَانْبِذْ اِلَيْهِمْ عَلٰى

注 37 この節は、神は、先に人々が悪い方に変っていかない限り、神が民族に与えた恩恵を取り上げないという、一般的な神の掟を述べている。

注 38 彼らは、再三約束を破り、敵意に行なわれた合意も踏みにじる。

注 39 信徒は、はっきりした理由がない限り、決して武器をとってはならないと定められている。しかし、いったん武器を取れば、敵に恐怖心を抱かせるほどに、勇敢に戦い、相手に致命的な打撃を与えなければならないのである。気力に欠け、優柔不断な戦いは決して巧みな戦術ではない。戦うとなれば、敏速で徹底的でなければならないのである。

注 40 もし、ある民族が、イスラム教徒と交した盟約を破れば、イスラム教徒は、盟約は破棄するとはっきり相手に布告し、もし攻撃されれば、全力で反撃するであろう。しかし、いかなる場合も、この事前の布告な

に投げ返せ。げに、アッラーは背信者を愛し給わぬ。

﴿سَوَاءٌ إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ الْخَائِبِينَ﴾

第八項

60. 信ぜざる者をして、わしに勝ると思わしむるなかれ。彼等は神の目的を挫折する能わす。

وَلَا يَحْسَبَنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا سَبَقُوا إِنَّهُمْ لَا يُعْجِزُونَ ﴿٦٠﴾

61. 可能な限りの軍勢とつないだ馬を彼等に対して備えよ、それによってアッラー並びにお前たちの敵、それからお前たちは知らぬが、アッラーが知る敵に恐怖を与えよ。(注41) お前たちがアッラーの道に費すものは、必ず存分に返済されん。決して不当に遇せらるることなし。

وَأَعِدُوا لَهُمْ مَا اسْتَطَعْتُمْ مِنْ قُوَّةٍ وَمِنْ رِبَاطِ الْخَيْلِ تُرْهِبُونَ بِهِ عَدُوَّ اللَّهِ وَعَدُوَّكُمْ وَآخَرِينَ مِنْ دُونِهِمْ لَا تَعْلَمُوهُمْ اللَّهُ يَعْلَمُهُمْ وَمَا تُنْفِقُوا مِنْ شَيْءٍ فِي سَبِيلِ اللَّهِ يُوَفَّ إِلَيْكُمْ وَأَنْتُمْ لَا تَظْلَمُونَ ﴿٦١﴾

62. もし彼等和平に傾かば、汝もまたそれに傾け、(注42) 而してアッラーを信頼せよ。彼こそはすべてを聴き、すべてを深く知り給う御方にまします。

وَإِنْ جَحَحُوا لِّلْسَلَامِ فَاْجَحَّحْ لَهَا وَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿٦٢﴾

63. たとえ彼等が汝を欺かんとするも、アッラーいます限り汝は万全なり。彼こそはその助けにより、且つ多くの信者によって汝の地歩を固めたりし御方なるぞ。

وَإِنْ يُرِيدُوا أَنْ يَخْدَعُوكَ فَإِنْ حَسِبَكَ اللَّهُ هُوَ الَّذِي آتَاكَ نَصْرَهُ وَبِالْمُؤْمِنِينَ ﴿٦٣﴾

しに奇襲することは許されない。「公平に」とは平等な立場で、つまり、両軍共知った上で、各々盟約の義務を負うことはないという意味である。

注41 この節では、イスラム教徒に、戦争を回避する最善の方法は十分な準備をしておくことだということが述べられている。国内に十分な軍隊を持つだけでなく、国境にも十分な軍隊を配置すべきである。そして、知恵と誠実と気力を持って自らを律すれば、戦場から遠く離れた敵も、イスラム教徒と戦うことをあきらめるであろう。また、戦う時には、金銭を惜しみなく使うことも大切だと述べられている。更に、信徒たちへの警告と預言も含んでいるようである。その預言とは、異教徒のアラブ人だけが彼らの敵なのではなく、近い将来、彼らを攻撃してくる民族が、他にいるというのである。これは、ビザンチン帝国とペルシャ帝国のことを指し、聖なる預言者の死後間もなく、イスラム教徒はこの国々と戦わなければならないであろうというものである。

注42 この節は、和平条約を結ぶに当たっての、重要な原則を具体的に述べているだけでなく、イスラム教の戦争の性格についても興味深い指摘をしている。イスラム教徒は、イスラム教を受け入れさせるために戦争に訴えたのではなく、平和を確立し、維持するために戦争をしたというのである。たとえ相手が仕掛けてきた戦争でも、相手が平和を求めてくれば、イスラム教徒は、これを担んではならないと定めていた。たとえそれが、彼らを欺き、時をかせぐための和平であつてもである。このことは、イスラムが、国家間の平和を確立するために、どれほどのことをするかを示している。

64. また彼は、信者の心を一つに結集し給うた御方なり。たとえ汝が地上に在るすべてのものを費やすとも、信者等の心を一つになす能わず、しかるに、アッラーは彼等を一つに結集せり。げに、彼は偉大にして、賢哲にまします。

第九項

65. 預言者よ、汝はアッラーと汝に従う信者あれば十分なり。

66. 預言者よ、戦いに際しては信者たちを激励せよ。お前たちのうち二十人（注43）の堅忍不拔の者あらば、能く二百の敵を打ち破らん。もしお前たちの一百あらば、一千の不信者どもを打ち破らん。なんとすれば、彼等は事のなんたるかを解せざる人々故。（注44）

67. いまアッラーはお前たちに弱気あるを知り。お前たちの負担を軽減せり。されば、お前たちのうち一百の堅忍不拔の者あらば、能く二百の敵を打ち破らん。またもし一千あらば、アッラーの支配力の許に二千（注45）を打ち破らん。アッラーは堅忍不拔の人々と偕にまします。

68. 正規の戦いで打ち負かした敵に非ざれば、捕虜とするは預言者には相応しからず。（注46）お前たちは現世の幸せを望めど

وَأَلَفَ بَيْنَ قُلُوبِهِمْ لَوْ أَنْفَقْتَ مَا فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا
مَا أَلَفْتَ بَيْنَ قُلُوبِهِمْ وَلَكِنَّ اللَّهَ أَلَفَ بَيْنَهُمْ إِنَّهُ
عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٦٤﴾

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ حَسْبُكَ اللَّهُ وَمَنِ اتَّبَعَكَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٦٥﴾

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ حَرِّضِ الْمُؤْمِنِينَ عَلَى الْقِتَالِ إِنْ يَكُنْ
مِنْكُمْ عَشْرُونَ صَابِرُونَ يَغْلِبُوا مِائَتَيْنِ وَإِنْ
يَكُنْ مِنْكُمْ مِائَةٌ يَغْلِبُوا أَلْفًا مِنَ الَّذِينَ كَفَرُوا
بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَا يَفْقَهُونَ ﴿٦٦﴾

إِنَّ اللَّهَ خَفَّفَ اللَّهُ عَنْكُمْ وَعَلِمَ أَنَّ فِيكُمْ ضَعْفًا فَإِنْ
يَكُنْ مِنْكُمْ مِائَةٌ صَابِرَةٌ يَغْلِبُوا مِائَتَيْنِ وَإِنْ يَكُنْ مِنْكُمْ
أَلْفٌ يَغْلِبُوا أَلْفَيْنِ بِإِذْنِ اللَّهِ وَاللَّهُ مَعَ الصَّابِرِينَ ﴿٦٧﴾

مَا كَانَ لِنَبِيِّ أَنْ يُكُونَ لَهُ أَسْرَى خَلًّا يُدْخِلُ فِي
الْأَرْضِ تُرِيدُونَ عَرَصَ الدُّنْيَا وَاللَّهُ يُبْدِي الْآخِرَةَ

注43 この節は、一戦闘部隊の最小限の人数を20人とやっているようである。

注44 なぜなら、彼らは雇い兵であり、自分達の戦いの目的が正当かどうか理解してはいないし、それに興味も持っていないからである。それとも、彼らは、自ら追求し、身を献げるような、より高尚な理想など持ち合わせていないと言っているのかもしれない。

注45 この節を、前節を破棄するものと理解すべきではない。二つの節は各々、イスラム教徒社会の二つの異った状況の時のことを述べているのである。初めのうち、彼らは、弱少で、装備も不十分であり、戦う技術も十分身につけていなかった。しかし、時が経つにつれて、全般的な状況、戦争経験、兵力は大いに向上し、彼らは十倍の敵も打ち負かすことができるようになったのである。バドル、オハド、塙の戦いと、両軍の兵力の差はますます広がっていった。しかし、イスラム教徒は自分達の勢力を見事に守り、とうとうヤルムークの戦いで、たった六万のイスラム教徒が百万以上の敵を破ったのである。

注46 この節では、戦いが正規戦で、そして敵を完全に制圧した場合以外には、敵を捕虜にしてはならないという原則を定めている。これは、奴隷制度を廃止する原則である。イスラム教を滅ぼすために戦争に参加し、そして負けたもののみが、捕虜となるというのである（47章5節参照）。

も、アッラーはお前たちに来世を望む。アッラーは偉大にして、賢哲にまします。

وَاللَّهُ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٧٥﴾

69. すでに発令されしアッラーの掟なかりせば、(注 47) お前たちはその取りしもの故に大なる災難に襲われた筈。(注 48)

لَوْلَا كِتَابٌ مِّنَ اللَّهِ سَبَقَ لَنَسَكُنَّ فِيهَا مَا أَخَذْتُمْ
عَدَابٌ عَظِيمٌ ﴿٧٦﴾

70. お前たちは戦利品の中より合法にして清潔なるものを食し、アッラーを畏れ敬え。げに、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

فَكُلُوا مِمَّا غَنِمْتُمْ حَلَالًا طَيِّبًا ۚ وَاتَّقُوا اللَّهَ ۚ إِنَّ اللَّهَ
غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٧٧﴾

第十項

71. 預言者よ、お前の手中にある捕虜に云え、「もしアッラーお前たちの心中に何んらかの良きものの在るを知らば、お前たちが奪われしものより優るものをお前たちに与え、(注 49) 且つ宥赦せん。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします」と。

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ قُلْ لِّمَن فِي أَيْدِيكُمْ مِنَ الْأَسْرَى
إِن يَعْلَمِ اللَّهُ فِي قُلُوبِكُمْ خَيْرًا يُؤْتِكُمْ خَيْرًا مِّمَّا أُخِذَ
مِّنْكُمْ وَيَغْفِرَ لَكُمْ ۚ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٧٨﴾

72. されど彼等もし汝を裏切らんと思図するならば、彼等はすでにアッラーを裏切りし者なれば、アッラーは汝に彼等を制する力を与えたり。アッラーはすべてを聴き、賢哲にまします。

وَإِن يُرِيدُوا خِيَانَتَكَ فَقَدْ خَانُوا اللَّهَ مِن قَبْلُ
فَأَمْكَنَ مِنْهُمْ ۚ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿٧٩﴾

73. 信仰を受け容れ、家郷を棄て、財産も生命をもなげうってアッラーのために奮闘努力せる者、並びに彼等に住居と援助を与えし人々——これ等は互に仲間なり。されど、信仰を受け容れど、家郷を出でざる人々を、彼等が家郷を出でざる限り、お前たちは彼等を保護する責務なし。されど、彼等が宗教上の問題でお前たちに援助を請わば、彼

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَهَاجَرُوا وَجَاهَدُوا بِأَمْوَالِهِمْ
أَنفُسِهِمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَالَّذِينَ أَوْوُوا وَتَصَرَّوْا
أُولَٰئِكَ بَعْضُهُمْ أَوْلِيَاءُ بَعْضٍ ۚ وَالَّذِينَ آمَنُوا
لَمْ يَهَاجَرُوا مَا لَكُمْ مِّنْ وَلَا يَتَّبِعُهُمْ مِّنْ شَيْءٍ ۚ
يُهَاجَرُوا وَإِنِ اسْتَنْصَرُوكُمْ فِي الدِّينِ فَعَلَيْكُمْ

注 47 この言葉は、援助についての神の約束を指している。

注 48 身代金をとって、捕虜を釈放することは、既に、よく行われていたことであった。ここで強調していることは、正規戦以外では、相手を捕虜にしてはいけないということである。

注 49 預言者の叔父アバースが、バドルで敵の捕虜となった。その後、彼はイスラム教に改宗し、聖なる預言者のもとにやって来た。そして、神は捕虜には身代金以上のものを与えるとこの節に約束されている様に、自分の場合も、この約束を実行して欲しいと叔父アバースは頼んだ。聖なる預言者は、彼の要求をきき入れたのである (Jarir, X, 31)。

等を助くるはお前たちの義務なり。但しお前たちと協定のある民に敵対する場合は除く。(注50) アッラーはお前たちの所業を憐れし給う。

التَّصَرُّاتِ عَلَى قَوْمٍ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُمْ مِيثَاقٌ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿٥٠﴾

74. 信ぜざる者ども——彼等も互に仲間なり。もしお前たち命ぜられたることを為さざれば、地上に災害と大混乱が到来せん。(注51)

وَالَّذِينَ كَفَرُوا بَعْضُهُمْ أَوْلِيَاءُ بَعْضٍ إِلَّا تَفْعَلُوا لَكُنْ فِتْنَةً فِي الْأَرْضِ وَفَسَادٌ كَبِيرٌ ﴿٥١﴾

75. 信仰を受け容れ、家郷を棄て、アッラーのために奮闘努力する者、並びに彼等に住居と援助を与えし人々——これ等の人々こそ真の信者なり。容赦と給養は彼等のためにこそあり。

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَهَاجَرُوا وَجْهَهُدْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَالَّذِينَ آمَنُوا وَنَصَرُوا أُولَئِكَ هُمُ الْمُؤْمِنُونَ حَقًّا لَهُمْ مَغْفِرَةٌ وَرِزْقٌ كَرِيمٌ ﴿٥٢﴾

76. 後れて信仰を受け容れ、家郷を棄て、アッラーのためにお前たちと一緒に奮闘努力せし者——これ等はお前たちの仲間なり。なれど、アッラーの經典によれば、血縁者は彼等よりも更に相い近し。(注52) げにアッラーは万事を深知し給う。

وَالَّذِينَ آمَنُوا مِنْ بَعْدِ وَهَاجَرُوا وَجْهَهُدْ مَعَكُمْ فَأُولَئِكَ مِنْكُمْ وَأُولُوا الْأَرْحَامِ بَعْضُهُمْ أَوْلَى بِبَعْضٍ فِي كِتَابِ اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿٥٣﴾

注50 この節は、同国内、同じ政府の下に住むイスラム教徒達は、移民であろうが、もともと市民であろうが、おおい必要な時には助け合わなければならないと定めている。しかし、イスラム教国に移住しない教徒達は、世俗的なことではイスラム教の国から、援助を求めることはできない。もし宗教上の理由で迫害されれば、その時は、イスラム教国の人々は、彼らを助けなければならない。しかしながら、もし、彼らが非イスラム教国でも、イスラムと和平条約を結んでいる国に住んでいるのであれば、たとえ宗教上の問題でも、援助はできない。この場合のイスラム教徒がとれる唯一の方法は、非イスラム教国から移民してくることである。

注51 イスラム教徒がもし、この原則を守らなければ、国内には、圧制と暴虐と混乱が起きるであろう。

注52 73節で、すべてのイスラム教徒はお互いに兄弟であるとはっきり述べているということと、聖なる預言者がメジナで、亡命者と救援者達の間に兄弟の関係を結ばせたということから、財産までが相続されると誤解されたかもしれない。ここでは、血縁関係のみが相続の資格があり、他の教徒達は信仰上のみの兄弟であると明言しているのである。

سُورَةُ التَّوْبَةِ مَدَنِيَّةٌ

(٩)

(メディナ啓示)

1. これはアッラー並びにその使徒より、お前たちが協約を結びし多神教徒に対する義務の免除の宣言なり。(注1)

بَرَاءَةٌ مِنَ اللَّهِ وَرَسُولِهِ إِلَى الَّذِينَ عَاهَدْتُمْ مِنَ الْمُشْرِكِينَ ①

2. されば、四ヵ月間は自由に地上を往来せよ。お前たちはアッラーの計画を挫折し得ず、(注2) またアッラーが不信心者に屈辱を与える者なることを知れ。

فَيُنْزِلُوا فِي الْأَرْضِ أَرْبَعَةَ أَشْهُرٍ وَعِلْمُوا أَنَّكُمْ عَلَىٰ مَعْجِزَةٍ مِنَ اللَّهِ وَأَنَّ اللَّهَ مُجْزِي الْكَافِرِينَ ②

3. アッラー並びにその使徒より大巡礼の日に人々に発せられる布告は次の如し、(注3) 「アッラーは多神教徒とは何んの関係もなし。その使徒もまた同じなり。されば、もしお前たち改悛するなら、そはお前たちのために幸いならん。なれど、もし背き去らば、アッラーの計画を挫折し得ざることを知れ」而して、信ぜざる者どもに痛罰を通告せよ。

وَأَذَانٌ مِنَ اللَّهِ وَرَسُولِهِ إِلَى النَّاسِ يَوْمَ الْحَجِّ الْأَكْبَرِ أَنَّ اللَّهَ بَرِيءٌ مِنَ الْمُشْرِكِينَ وَرَسُولُهُ فَإِنْ تُبْتَلُمْ فَهُوَ خَيْرٌ لَّكُمْ وَإِنْ تَوَلَّيْتُمْ فَاعْلَمُوا أَنَّكُمْ عَلَىٰ مَعْجِزَةٍ مِنَ اللَّهِ وَلِيَّ الشَّيْءِ الَّذِينَ كَفَرُوا بِعَدَابِ اللَّهِ ③

4. 但しお前たちが協定を結びし多信教徒でその後破約せず、またお前たちに敵対する何人をも援助せざりし人々は除く。(注4)

إِلَّا الَّذِينَ عَاهَدْتُمْ مِنَ الْمُشْرِكِينَ ثُمَّ لَمْ يَنْقُصُوكُمْ شَيْئًا وَلَمْ يُظَاهِرُوا عَيْلَكُمْ أَحَدًا فَأَتُوا إِلَيْنَا هَرَمًا

注1 この節では、イスラムと聖なる預言者の正当性がメッカの陥落によって完全に証明されたと言われている。預言者は賞金付きのお尋ね者となつてさびしくメッカを追放されたが、彼は再び栄光と勝利を得て帰つて来ると宣言されていた(28章86節参照)。ここにメッカの陥落、そしてアラビアにおけるイスラム戒律の樹立という二つの預言が成就された。このようにメッカは預言者のものであるという預言を果たすため、またメッカの人々の同様の願いを成就するためにもこの聖なる預言は完全に正しいと立証された。

注2 メッカ陥落とフナインの戦いにおけるハワズインの敗北を通してイスラムの戒律と権威が確立された。武器を捨てて回教徒たちと和平を結んだ地方もあり、和平は完全に守られた。しかし、平和が続き、法と秩序が守られていることが確かであるのに、正式な和平への提示もしなければ、武器も捨てず、またイスラム教徒といかなる和平も結ばない地方もあり、こういう人々はイスラム教徒に敵意を示した。結果的には彼らは滅びていったが、敗北を認めもしなければ、回教徒と共に平和に暮らそうともしなかった。四ヶ月の停戦期間を与え、その間は軍事行動はとらなかったで、彼らはもうこれ以上の抵抗は無意味と思っていたので、行こうと思えば国中どこへも行くことができた。彼等は、その時降服することもできれば和平を結ぶこともできたのである。この節はこういう人々について述べられている。

注3 イスラム教徒の指導のもとに最初に行われた異教徒の移動であつたので、大巡礼と呼ばれた。

注4 これらの部族はバヌー・クザー、バヌー・ムドリユジュ、バヌー・バクル、バヌー・ダムラー、バヌー・

されば、期限が満了するまで彼等との協定を全うせよ。アッラーは公正なる者を愛し給う。

5. 禁止の月過ぎなば、(注5) 何処なりと多神教徒(注6)は見つけ次第これを殺し、捕虜となし、包圍し、いたるところに伏兵を置いて待たせよ。なれど、もし彼等が改悛し、礼拝を遵守し、喜捨を払うなら、その時は釈放せよ。(注7) げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。
6. もし誰が多神教徒が汝に保護を請わば、之を保護してアッラーの言葉を聞かしめ、しかるに後に彼を安全な場所に送り届けよ。(注8) そは彼等が無知の民なるが故なり。

عَهْدُهُمْ إِلَىٰ مَدِّ يَدِهِمْ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُتَّقِينَ ﴿٥﴾

فَإِذَا انسَلَخَ الْأَشْهُرُ الْحُرُمُ فَاقْتُلُوا الْمُشْرِكِينَ حَيْثُ وَجَدْتُمُوهُمْ وَخُذُواهُمْ وَأَحْصُوا قُوَّةَكُمْ وَأَقْعُدُوا لَهُمْ كُلَّ مَرْصَدٍ فَإِنْ تَابُوا وَأَقَامُوا الصَّلَاةَ وَآتَوُا الزَّكَاةَ فَخَلُّوا سَبِيلَهُمْ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٥﴾

وَإِنْ أَحَدٌ مِنَ الْمُشْرِكِينَ اسْتَجَارَكَ فَأَجِرْهُ حَتَّى يَسْمَعَ كَلِمَ اللَّهِ ثُمَّ ابْلِغْهُ مَا مَنَعَهُ ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٦﴾

スレームの一族である。この節はイスラムが愛をもって和平や合意をしたので、計らずもイスラムの神聖さを表わしている。

注5 「禁止の月」というのはズル・ガーダ、ズル・ヒジジャー、モハッラム、ラジャブの四ヶ月間を指している。最初の三ヶ月は大巡礼の期間であって、最後の一月月にアラブ人は一般的に小巡礼またはウムラーを行なう(2章195節、2章218節参照)。アシホルル・ホロムという語は「聖なる月」をあらわすのではなく、上記の9章2節の戦闘行為の「禁止の期間」の四ヶ月間を意味している。この期間には、異教徒は国中を安全に旅することを許されたので、イスラムが勝利を納めているかどうか、神の言葉が成就されているかどうかを自分の目で確かめることができた。

この期間中は敵意をもたないことになっているが、この期間が終ると、公然とイスラムに敵対するものと戦争にすることもできた。それは彼らが敵意を示し、繰り返し誓いを破ったからである。この誓いの最後の条件に対する判断が9章8節～13節に記されている。不誠実やうらぎりの罪のない異教徒は保護されていた(9章4節7節参照)。

注6 イスラム教徒と戦っているがまだ和平が結ばれていない多神教徒のこと。

注7 イスラム教徒に與うべき損失を与えたこれらイスラムの敵であっても悔い改め、自らの意志でイスラムを受け入れたならば許されるべきである。実は、異教徒の中には心の底からイスラムが真理であることを確信している人がたくさんいたが、自尊心や迫害されはしまいかという恐れや思惑から、信仰告白を控えていた。この節ではたとえ戦争中であろうとも、イスラムの信仰を告白する人がいれば、その告白は決して偽善や言い逃れとは考えないという事を保障している。

注8 異教徒との戦争はイスラムの信仰を強いるためのものではなかった。戦争中でも異教徒がイスラムの真理を確かめたいと思えば、キャンプや本部へ入ることが許されている。そこでイスラムの真理を説かれ、彼らはイスラムの教えに触れる事ができた。しかし、もし新たに信仰する気にならない場合でも、もとの安全な場所に戻された。このようなすばらしい教えがあるのに、雅量の狭さから真理を逆手にとったり黙殺したりしてイスラムを非難する事は不正の極みであり、すなわちそれは異教徒の反イスラムの宣伝運動なのである。

第二項

7. お前たちが聖殿において締結せし者を除いて、これ等多神教徒がアッラー並びにその使徒と協定を結ぶようか？ されば、彼等がお前たちに誠実である限り、お前たちも誠実であれ。(注9) げにアッラーは公正なる者を愛し給う。
8. どうして彼等と協定など結ぶようか(注10)？ 彼等もしお前たちより優位に立たば、如何なる血縁も誓約も顧みざるべし。彼等は口先ではお前たちを喜ばせども、その実心では拒絶する。彼等の多くは二心のある徒輩なり。
9. 彼等はわずかな代価でアッラーの神兆を売り、人々をアッラーの道から背かしむ。彼等の行為は邪悪なる哉。
10. 彼等は血縁も契約も、信者の場合には顧みず。(注11) 彼等こそは罪人なり。
11. されど、もし彼等悔悟し、礼拝を遵守し、喜捨を払うなら、彼等とてお前たちの信仰における兄弟なり。われらは事理を解する人々に神兆を明示す。
12. されど、誓約の後その誓いを破り、お前たちの宗教を誹謗するが如きことあらば、そ

كَيْفَ يَكُونُ لِلْمُشْرِكِينَ عَهْدٌ عِنْدَ اللَّهِ وَعِنْدَ رَسُولِهِ
إِلَّا الَّذِينَ عَاهَدْتُمْ عِنْدَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ فَمَا
اسْتَقَامُوا لَكُمْ فَاسْتَقْبِلُوا لَهُمْ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ
الْمُتَّقِينَ ④

كَيْفَ وَإِنْ يَظْهَرُوا عَلَيْكُمْ لَا يَرْقُبُوا فِيكُمْ إِلَّا
وَلَا ذِمَّةً يُرْضُونَكُمْ بِأَفْوَهِهِمْ وَتَأْبَى قُلُوبُهُمْ
وَالَّذِينَ هُمْ يُفْسِقُونَ ⑤

اشْتَرَوْا بِآيَاتِ اللَّهِ ثَمَنًا قَلِيلًا فَصَدُّوا عَنْ سَبِيلِهِ
إِنَّهُمْ سَاءَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ⑥

لَا يَرْقُبُونَ فِي مُؤْمِنٍ إِلَّا وَلَا ذِمَّةً وَأُولَئِكَ هُمُ
الْمُعْتَدُونَ ⑦

فَإِنْ تَابُوا وَأَقَامُوا الصَّلَاةَ وَآتَوُا الزَّكَاةَ وَفَاحَوا نَكُمْ
فِي الدِّينِ وَفَضَّلُ الْآيَاتِ لِقَوْمٍ يَعْلَمُونَ ⑧

وَإِنْ تَنَكَّبُوا بِنَاهُمْ مِنْ بَعْدِ عَهْدِهِمْ وَطَعَنُوا

注9 この節では大事な和平を繰返し破棄したり、イスラム教徒を裏切って攻撃したりする非イスラム教徒に対してだけ戦うことが許されていると述べている。更に、和平を結んでいる人々に対して、イスラム教徒は、彼らが和平をきちんと誠実に守っているかどうかを見守らなければいけないと述べている。9章4節にも同様のことが書かれている。クルアーンには、繰返し和平に誠実であれと熱心に説かれている。

注10 イスラムに対して一度ならず敵対した不信心者や、和平を締結することに一際関心を示さない不誠実な裏切り者に対してにのみ、戦争を行うことを命じる、とこの節に詳しく記されている。

注11 8、9、10節ではなぜイスラム教徒がこういう偶像崇拜者に対して戦争を行うことを命じられるかという理由が記されている(9章5節参照)。その理由は、(1)彼らは不誠実な裏切り者であり、彼らはイスラム教徒と友人であると公言しながら、すぐ中傷する機会をねらい、約束を破り、イスラム教徒の信頼を裏切ってきた。(2)彼らは親族関係の絆さえ無視し、親族の者がイスラムを信じただけで殺してしまった(9章8節参照)。(3)彼らが戦争をする目的はイスラムを信仰させないようにするためであった(9章9節参照)。(4)彼らが最初にイスラム教徒を攻撃したのである(9章13節参照)。

の時^{りようしゅう}は不信心者の領袖^{りようしゅう}と戦え（注12）——げに、彼等は自らの誓いを尊重せず——さすれば彼等の方から止めるやも知らず。

فِي دِينِكُمْ فَقَاتِلُوا إِنِّي لَا إِلَهَ إِلَّا أَنَا ۚ إِنَّهُمْ لَا يَأْمَنُونَ
لَهُمْ لَعَلَهُمْ يَنْتَهُونَ ﴿١٢﴾

13. お前たち、己れの誓約を破り、使徒を放逐せんと企て、（注13）最初にお前たちを攻撃せし者ども（注14）と戦わざる気か？ お前たち彼等を恐るるか？ 否、お前たち信者ならば、恐るるに最も相応しい御方はアッラーなるぞ。

إِلَّا تُقَاتِلُونَ قَوْمًا نَكَثُوا أَيْمَانَهُمْ وَهَمُّوا بِإِخْرَاجِ
الرَّسُولِ وَهُمْ بَدَّوْكُمْ أَوَّلَ مَرَّةٍ أَتَخْشَوْنَ اللَّهَ
أَحَقَّ أَنْ تَخْشَوْهُ إِن كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿١٣﴾

14. 彼等と戦え。じからばアッラーはお前たちの手で彼等を懲らしめ、彼等を辱しめ、お前たちを助けて彼等に勝たしめ、信ずる人々の心を和らげ、

فَاتِلُوهُمْ يُعَذِّبُهُمُ اللَّهُ بِأَيْدِيكُمْ وَيُخْرِجُهُمْ
عَلَيْهِمْ وَيُشْفِ صُدُورَ قَوْمٍ مُّؤْمِنِينَ ﴿١٤﴾

15. 且つ心中の憤りを運び去らん。アッラーは御心^{みこころ}にかなう者は恵みを垂れ給う。アッラーはすべてを深知し、賢哲にまします。

وَيَذْهَبُ غَيِّظَ قُلُوبِهِمْ وَيَتُوبُ اللَّهُ عَلَى مَنْ يَشَاءُ
وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿١٥﴾

16. お前たちのうちアッラーのために奮闘努力する者、並びにアッラーとその使徒と信者の外は何者も親しい友とせざる者を、（注15）アッラーが知らざるままに放置するとも思うのか？ アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

أَمْ حَسِبْتُمْ أَنْ تُتْرَكُوا وَلَمَّا يَعْلَمِ اللَّهُ الَّذِينَ جَاهَدُوا
مِنْكُمْ وَلَمْ يَتَّخِذُوا مِنْ دُونِ اللَّهِ وَلَا رَسُولِهِ
عَلَى شَيْءٍ لَا يُؤْمِنُونَ وَلِإِنَّ اللَّهَ لَخَبِيرٌ بِمَا تَعْمَلُونَ ﴿١٦﴾

第三項

17. アッラーの聖殿を保守管理するは、自ら不信を立証する多神教徒に非ず。（注16）彼

مَا كَانَ لِلشُّرَكِيَّةِ أَنْ يَعْبُرُوا مَسْجِدَ اللَّهِ شَاهِدِينَ

注12 ‘不信仰の指導者達’という言葉はここでは少数の個人の指導者を指すのではなく、戦うことを命じたすべての人々を指している。彼らは最初にイスラム教徒と衝突したので、他の者達に勇気を与える結果となった為、‘指導者’と呼ばれるようになった。また、彼らのイスラムに対する敵意は根強く、執念深いものであったのでまるで、悪魔そのものであったといえる。

注13 聖なる預言者がタブークへ遠征したとき、メジナ周辺の部族はアラビアのさまざまな部族を煽動して彼を滅ぼそうとたくらんだ。

注14 これらの言葉は、メッカ人の異教徒を指すのではない。これはメジナおよびその周辺に住む異教徒を指している。同時の状況を考察するとイスラムは被害者であってこそあれ、加害者であるというのは見当違いもはなはだしい。

注15 イスラム教徒の歩むべき道はまだ続き、もっと憂うべき危機に直面するだろうとこの節で暗示されている。

注16 この節は偶像崇拜者の巡礼に関するものであり、下記の9章28節にある告知の序文にあたっている。

等の所業は虚しく、業火のうちに永久に住まん。

18. アッラーを信じ、末日を信じ、礼拝を遵守し、喜捨を払い、アッラー以外には何人も恐れぬ者、(注17) そういう者のみがアッラーの聖殿を管理すべし。彼等は正しく導かれん。

19. お前たちは、巡礼者に水を与え、聖殿を管理する者を、アッラーと末日を信じ、アッラーの道のために奮闘努力する者と同じなると考えるか？ アッラーの見地からすれば、彼等は到底比較にならず。(注18) アッラーは不正なる人々を導き給わぬ。

20. 信仰を受け容れ、神のために家郷を棄て、財産と生命をアッラーのために献げて奮闘努力する者は、アッラーの見地において最上位たるべし。彼等こそは勝利を得ん。

21. 主は彼等に慈悲と喜悅の朗報を賜い、また永遠の至福に満ちたる樂園も彼等のものなるべし。

22. 彼等は永遠にそこに住まん。げに、アッラーの御許には大なる報奨あり。

عَلَىٰ أَنْفُسِهِمْ بِالْكَفْرِ أُولَٰئِكَ حَبِطَتْ أَعْمَالُهُمْ
فِي النَّارِ هُمْ خَالِدُونَ ﴿١٨﴾

إِنَّمَا يَعْمُرُ مَسْجِدَ اللَّهِ مَنْ آمَنَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ
وَأَقَامَ الصَّلَاةَ وَآتَى الزَّكَاةَ وَلَمْ يَحْشَ إِلَّا لِلَّهِ فَعَسَىٰ
أُولَٰئِكَ أَنْ يَكُونُوا مِنَ الْمُهْتَدِينَ ﴿١٩﴾

أَجَعَلْتُمْ سِقَايَةَ الْحَاجِّ وَعِمَارَةَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ
كَمَنْ آمَنَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ وَجَاهَدَ فِي سَبِيلِ
اللَّهِ لَا يَسْتَوُونَ عِنْدَ اللَّهِ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ
الظَّالِمِينَ ﴿٢٠﴾

الَّذِينَ آمَنُوا وَهَاجَرُوا وَجَاهَدُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ
بَأَمْوَالِهِمْ وَأَنْفُسِهِمْ أَكْثَرُ دَرَجَةً عِنْدَ اللَّهِ
وَأُولَٰئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ﴿٢١﴾

يُبَشِّرُهُمْ رَبُّهُمْ بِرَحْمَةٍ مِنْهُ وَرِضْوَانٍ وَجَنَّاتٍ لَهُمْ
فِيهَا نَعِيمٌ مُّقِيمٌ ﴿٢٢﴾

خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا إِنَّ اللَّهَ عِنْدَهُ أَجْرٌ عَظِيمٌ ﴿٢٣﴾

これ以後アリーがヘジュラ歴9年の大巡礼の時に告知したように、偶像崇拜者は誰もカーバに近づくことが許されなかった。その禁止の理由がこの節に述べられている。カーバは唯一の神を礼拝するために献堂された寺院であり、偶像崇拜者達は唯一の神の敵であることを宣言し、神を非難していると自ら告白しているのであるから、彼等はまるで関係がないのである。

注17 聖なるモスクまたはカーバは世界中のモスクを代表するイスラムの中心的モスクである為、アッラーのモスクという語句は19節の聖なるモスクを指している。

注18 カーバを外面的に形の上から礼拝することは、それ自体価値あることである。しかし真のイスラム教徒のみが行い得る精神な礼拝と比べるべきもない事である。イスラムは儀式の形式よりもそのもととなる精神なものを重んじるのである。そして信徒の生活はカーバよりもっと神聖である、と聖なる預言者は述べたと記されている (MAJAH)。

23. 汝等信ずる者よ、もしお前たちの父や兄弟が信仰よりも不信を選ばば、友とするなかれ。(注19) お前たちのうち彼等を友とする者あらば、それこそ不義の徒輩なるぞ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَتَّخِذُوا آبَاءَكُمْ وَإِخْوَانَكُمْ
أَوْلِيَاءَ إِنِ اسْتَحَبُّوا الْكُفْرَ عَلَى الْإِيمَانِ وَمَنْ يَتَوَلَّ
مِنْكُمْ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الظَّالِمُونَ ﴿٢٣﴾

24. 云え、「もしお前たちの親、子供、兄弟、妻、親戚、それからお前たちが手に入れた財産や不況を恐れる商売、意になつた住居などが、アッラーとその使徒並びにアッラーの道のために(注20)奮闘努力するよりお前たちにとって大事ならば、よろしい、アッラーの裁断が降るまで待つがよい。アッラーは不従順な人は導き給わぬ」と。

قُلْ إِن كَانَ آبَاؤُكُمْ وَأَبْنَاؤُكُمْ وَإِخْوَانُكُمْ وَأَزْوَاجُكُمْ
وَعَشِيرَتُكُمْ وَأَمْوَالٌ اقْتَرَفْتُمُوهَا وَتِجَارَةٌ تَخْشَوْنَ
كَسَادَهَا وَمَسَاكِينُ تَرْضَوْنَهَا أَحَبَّ إِلَيْكُمْ مِنَ اللَّهِ
وَرَسُولِهِ وَجِهَادٍ فِي سَبِيلِهِ فَتَرْتَصِدُوا حَتَّى يَأْتِيَ
اللَّهُ بِأَمْرٍ ۖ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْفَاسِقِينَ ﴿٢٤﴾

第四項

25. アッラーはこれまでに幾多の戦場でお前たちを援助せり、フナインの合戦のときも然り。あの時お前たちは多勢をたのんで得意になりたれど、それはお前たちになんの役にも立たず、却って広大な大地がお前たち全体のせいで狭くなり、遂にお前たちは退却せり。

لَقَدْ نَصَرَكُمُ اللَّهُ فِي مَوَاطِنَ كَثِيرَةٍ وَيَوْمَ حُنَيْنٍ
إِذْ أَعْجَبَتْكُمْ كَثْرَتُكُمْ فَلَمْ تُغْنِ عَنْكُمْ شَيْئًا وَ
ضَاقَتْ عَلَيْكُمْ الْأَرْضُ بِمَا رَحُبَتْ ثُمَّ وَلَّيْتُمْ
مُقْدِرِينَ ﴿٢٥﴾

26. そこでアッラーは、彼の使徒と信者等の上に沈着さを降し、またお前たちに見えざりし軍勢を遣わして不信心者どもを懲らしめたり。これこそは不信心者どもの応報なり。

ثُمَّ أَنْزَلَ اللَّهُ سَكِينَتَهُ عَلَى رَسُولِهِ وَعَلَى الْمُؤْمِنِينَ
وَأَنْزَلَ جُنُودًا لَمْ تَرَوْهَا وَعَذَّبَ الَّذِينَ كَفَرُوا
وَذَٰلِكَ جَزَاءُ الْكَافِرِينَ ﴿٢٦﴾

27. この後アッラーは意にかなう者には憐れみに転ぜられ給う。アッラーは寛大にして、慈悲深くします。

ثُمَّ يَتُوبُ اللَّهُ مَنْ بَعْدَ ذَٰلِكَ عَلَىٰ مَنْ يَشَاءُ وَاللَّهُ
غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٢٧﴾

28. 汝等信ずる者よ、多神教徒は真に不浄なり。故に本年以降彼等が聖殿に近づくことを禁

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِنَّا الشُّرُكُونَ كَجَسٍّ لَا يُفْعَلُ

注19 この節は、イスラムに正面から敵対し激しく戦い、イスラムを皆殺しにしようとする未信徒たちについて書かれている。

注20 親類や友人との愛の絆やその他世間体、財産、商売、富などはより貴い絆、より高潔な理由のために犠牲にすべきと判断したときには、そうされてしかるべきである。

ず。お前たち困窮が心配なら、(注21) アッラーの意にかなえば、その賜物によってお前たちを富ます。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

الْمَسْجِدَ الْحَرَامَ بَعْدَ عَامِهِمْ هَذَا وَإِنْ خِفْتُمْ
عَيْلَةً فَسَوْفَ يُغْنِيَكُمْ اللَّهُ مِنْ فَضْلِهِ إِنْ شَاءَ
إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿٣٨﴾

29. 經典の民でありながら、アッラーも末日も信ぜず、アッラーとその使徒が禁じたるものを守らず、^{おまつき}剩え真理の宗教を奉ぜざる者に対して、彼等が屈服して、自ら進んで貢税を差し出すまで戦え。(注22)

قَاتِلُوا الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَلَا بِالْيَوْمِ الْآخِرِ
وَلَا يُحَرِّمُونَ مَا حَرَّمَ اللَّهُ وَرَسُولُهُ وَلَا يَدِينُونَ
دِينَ الْحَقِّ مِنَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ حَتَّى يُعْطُوا الْجِزْيَةَ
عَنْ يَدٍ وَهُمْ ضَعُفُونَ ﴿٣٩﴾

第五項

30. ユダヤ教徒はエズラを(注23) アッラーの子なりと云い、キリスト教徒はメシアをアッラーの子なりと云う。これ彼等の口より出る言葉なり。彼等はそれ以前の不信心者どもの言葉を真似るに過ぎず。彼等にアッラーの呪いあれ！ なんと迷誤せるものどもよ！

وَقَالَتِ الْيَهُودُ عُزَيْرٌ إِنَّ اللَّهَ وَقَالَتِ النَّصَارَى الْمَسِيحُ
ابْنُ اللَّهِ ذَلِكَ قَوْلُهُمْ بِأَفْوَاهِهِمْ يُضَاهَوْنَ قَوْلَ
الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ قَبْلُ قَتَلَهُمُ اللَّهُ أَنْ يَكُونُوا

31. 彼等はアッラーの他に、法学者や修道士を己れの主となせり。またマリアの子メシアも然り。彼等はただ唯一なる神を崇拜することのみを命ぜられたり。彼の外に神なし。

لَا تَتَّخِذُوا أَحْبَابَهُمْ رُبُّهُمْ أَرَبَابًا مِنْ دُونِ
اللَّهِ وَالْمَسِيحُ ابْنُ مَرْيَمَ وَمَا أُمُورُهُ إِلَّا لِيُعْبَدُوا

注21 メッカは商業の一大中心地であったので、巡礼の季節になると大変賑わった。だからメッカ人はとても経済的に潤っており、この禁令は経済的豊かさがかえって悪影響を及ぼすのではないかと懸念して出されたようである。

注22 この節はアラビアに住んでいる契約した人々に関するもので、彼たちは、偶像崇拜者のようにあからさまにイスラムに敵対し、イスラムを滅ぼそうと企て、策略をめぐらしてきた。そのため、イスラム教徒は彼らが忠実に和やかな僕とならないかぎり、戦わざるを得なかったのである。ジズヤとはこれら非イスラム教徒が払う税金のことであり、彼らは税金を払う事で自由に安全にイスラム教国の臣民として生活できるのである。非イスラム教徒に課せられた税ジズヤよりもっと重い税ザカートが、イスラム教徒に課せられていたことは特記すべきことである。その上、非イスラム教徒には免除されていた徴兵の義務もイスラム教徒には課せられていた。このように非イスラム教徒のほうが、安い税金を払い、徴兵義務もなく、この意味では楽な暮らしをしていたのである。「屈服」という語は彼らが政治的には下位の立場にあることを表わしており、その他はイスラム教徒と同等の社会的権利を有していたのである。アラビアの偶像崇拜者やその近隣に住むユダヤ人、キリスト教徒はイスラムの宿敵であった。

注23 ウザイルまたはエズラは紀元前五世紀の人で、彼はセライヤという高僧の子孫で僧侶階級に属し、僧エズラとして知られていた。

彼に^{あだがみ}他神を配するとはなんと畏れ多いことか！

32. 彼等はその口によってアッラーの光を消さんと欲す。されど不信心者どもが^{これ}之を嫌うとも、アッラーはその光を完璧ならしめるのみ。

33. 彼こそは^{きようどう}嚮導と^{まこと}真理の宗教とをもたせて使徒を遣わし給いし御方なり。たとい多信教徒が嫌うとも、彼は^{これ}之を以て^{よろす}万の宗教より^{すぐ}優れるものとなす。

34. 汝等信ずる者よ、げに、聖職者や、修道士の多くは、偽って人々の財産を貪り、アッラーの道より人々を背かしむ。また金銀を^{ため}貯め込み、^{これ}之をアッラーの道のために使おうとせぬ徒輩——彼等に^{やから}痛刑あるを知らせよ。

35. その日、地獄の火の中で財宝は^{しやくおつ}灼熱せられ、それが彼等の額や脇腹や背中に焼印を押し、(注24)「これはお前たちが己れのために貯めたるものなり。さらば己れの貯めたるものを味われ」と云われん。

36. アッラーの布告によれば、アッラーが^{あめつち}天地を創造せし以来、月の数は十二なり。(注25) そのうち四ヵ月が神聖月なり。それが正しい^{おし}信経なり。さればこの期間中はお前たち互に害し合うなかれ。だが多神教徒が皆一緒になってお前たちと戦う如く、お前たちも皆一緒になって彼等と戦え。而して、アッラーは主を畏れ敬う者と^{とも}偕にあることを知れ。

إِلَٰهَا وَاحِدٌ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ سُبْحَنَهُ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿٣١﴾

يُرِيدُونَ أَن يُطْفِئُوا نُورَ اللَّهِ بِأَفْوَاهِهِمْ وَيَأْبَى اللَّهُ إِلَّا أَن يُتِمَّ نُورَهُ وَلَوْ كَرِهَ الْكَافِرُونَ ﴿٣٢﴾

هُوَ الَّذِي أَرْسَلَ رَسُولَهُ بِالْهُدَى وَدِينِ الْحَقِّ لِيُظَاهِرَهُ عَلَى الدِّينِ كُلِّهِ وَلَوْ كَرِهَ الْمُشْرِكُونَ ﴿٣٣﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِن كَثِيرًا مِنَ الْغَابِرِ وَالرُّهْبَانِ لَيَكُونُوا أَمْوَالِ النَّاسِ بِالْبَاطِلِ وَيَصُدُّونَ عَن سَبِيلِ اللَّهِ وَالَّذِينَ يَكْنِزُونَ الذَّهَبَ وَالْفِضَّةَ وَلَا يَنْفِقُونَهَا فِي سَبِيلِ اللَّهِ فَبَشِّرْهُمْ بِعَذَابٍ أَلِيمٍ ﴿٣٤﴾

يَوْمَ يُحْمَى عَلَيْهَا فِي نَارِ جَهَنَّمَ فَيُكَلِّمُهَا بِهَا جِبَاهُهُمْ وَجُنُوبُهُمْ وَظُهُورُهُمْ هَذَا مَا كُنْتُمْ لَا تَفْقَهُونَ ﴿٣٥﴾

إِنَّ عِدَّةَ الشُّهُورِ عِنْدَ اللَّهِ اثْنَا عَشَرَ شَهْرًا فِي كِتَابِ اللَّهِ يَوْمَ خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ مِنْهَا أَرْبَعَةٌ حُرُمٌ ذَلِكَ الدِّينُ الْقَيِّمُ فَلَا تَظْلِمُوا فِيهِنَّ أَنْفُسَكُمْ وَقَاتِلُوا الْمُشْرِكِينَ كَافَّةً كَمَا يُقَاتِلُونَكُمْ كَافَّةً وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ مَعَ الْمُتَّقِينَ ﴿٣٦﴾

注24 これは比喩的な表現である。ひとりの金持ちが強欲と高慢から貧しい人々を助けようとしなかった時、彼の額は曇り、そして目をそむけ、ついには輕蔑の色をあらわし、助けを求める男に背を向けて行ってしまった。額、両脇、背がその場の状況や心の動きを印象的に物語っている。

注25 太陰暦でも太陽暦でも十二ヶ月である。

37. 神聖月の延期はただ不信を増すだけなり。
(注 26) 信ぜざる人々はこれによって邪道に導かれる。彼等或る年はこれを犯し、次の年にはこれを守り、アッラーが神聖と定め給うた月数に符合させ、かくしてアッラーが禁じ給うたことを合法となす。彼等その己が悪行を自らは正しいと思う。されどアッラーは信ぜざるものどもを導き給わぬ。

第六項

38. 汝等信ずる者よ、アッラーの道のために出陣せよと云われると、地べたに重く身を洗めるとは、一体如何なることぞ？（注27）お前たち来世よりも現世に満足するか？されど、来世に較ぶれば現世の享樂は無きに等しい。
39. もしお前たちが出陣せぬのなら、アッラーは痛刑をもってお前たちを懲らしめ、お前たちの代りに他の民を選ばん。されどお前たちアッラーを害する能わず。アッラーは万事に全能なり。
40. たといお前たち彼を助けずとも、彼が不信心者どもにたった一人の同僚とともに追い詰められし時、アッラー彼を助けしことを知れ。その時彼等は二人で洞窟にひそみ、彼は同僚に向つて云えり、「悲しむなかれ、アッラーは我等と偕にあり」と。すると、アッラーは彼に安心を降し賜い、お前たちには見えざる軍勢を以て彼を強加し、信ぜざるものどもの言葉を卑しめ、而してアッラーの言葉こそのみ至高となす。アッラーは偉大にして、賢哲にまします。（注28）

إِنَّمَا النَّسِيءُ زِيَادَةٌ فِي الْكُفْرِ يُضَلُّ بِهِ الَّذِينَ كَفَرُوا
يُجَاهِلُونَ مَا فِي حُرْمَتِهِ عَمَّا زَيَّنُوا يَوْمَئِذٍ لَّهُمْ
سُوءُ حُرْمٍ أَلَّا يَقُولُوا مَا حَرَّمَ اللَّهُ زَيْنَ لَهُمْ سُوءُ
عَمَلِهِمْ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْكَافِرِينَ ﴿٢٥﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا مَا لَكُمْ إِذَا قِيلَ لَكُمْ أَنْفَرُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ أَنْ أَقْلَمْتُمْ إِلَى الْأَرْضِ أَرْضَيْتُمْ بِالْحَيَاةِ الدُّنْيَا مِنَ الْآخِرَةِ فَمَا مَتَاعُ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا فِي الْآخِرَةِ إِلَّا قَلِيلٌ ﴿٢٨﴾

إِلَّا تَنْفَرُوا يُعَذِّبْكُمْ عَذَابًا أَلِيمًا وَيَسْتَبْدِلْ قَوْمًا غَيْرَكُمْ وَلَا تَضُرُّوهُ شَيْئًا وَاللَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٣٩﴾

[illegible]

注 26 この節ではアラブの長年の習慣に言及しており、ズル・カータ、ズル・ヒッジヤー・ムハラムの聖なる三ヶ月間は肉食を断つには長過ぎる為で時々普通の月と入れ替えることがあった。

注 27 これはタブークへの遠征の事についてであり、この町はメジナとダマスカスのちょうど中間にある。ローマ人として一般に知られている東ローマ帝国のギリシャ人達がシリア国境に集まっているという報せが届き勇猛な軍隊、その数およそ三万、ヒジラ九年に聖なる預言者はメジナを後にした。大きな苦難の末、イスラム教徒の軍隊は長くつらい行進を続けた為、後にこの遠征は苦難の行軍と言われた。

41. 或いは軽く或いは重く備えて出陣せよ。お前たちの財産や生命をアッラーのために献げて奮闘努力せよ。もしお前たち之を解さば、お前たちのためにはそれが最善なり。

إِنْفِرُوا خِفَافًا وَثِقَالًا وَجَاهِدُوا بِأَمْوَالِكُمْ وَأَنفُسِكُمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ ذَلِكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ إِن كُنتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٤١﴾

42. 利益眼前にあり、しかも旅程短かければ、彼等もまた汝に従えり。されど苦しい旅は彼等には余りにも遠しと映ず。しかも彼等はアッラーにかけて誓って云う、「出来得たならば、我等も諸君とともに出陣せしものを」と。彼等は自らを減ぼす者なり。アッラーは彼等が嘘つきなるを知る。

لَوْ كَانَ عَرَصًا قَرِيبًا وَسَفَرًا قَاصِدًا لَّاتَّبَعُوكَ وَلَكِنْ بَعَدَتْ عَلَيْهِمُ الشُّقَّةُ وَسَيَحْلِفُونَ بِاللَّهِ لَوِ اسْتَطَعْنَا لَخَرَجْنَا مَعَكُمْ يُهْلِكُونَ أَنفُسَهُمْ وَاللَّهُ يَعْلَمُ إِنَّهُمْ لَكَاذِبُونَ ﴿٤٢﴾

第七項

43. アッラーは汝の心配事を取り除き給う。何故に汝は、真実を告げるは誰で、嘘をつくは誰かを知る前に彼等に背後に留まることを許したるか？

عَفَا اللَّهُ عَنْكَ لِمَ أَذِنْتَ لَهُمْ حَتَّى يَتَّبِعَنَكَ الَّذِينَ صَدَقُوا وَتَعْلَمَ الْكَذِبِينَ ﴿٤٣﴾

44. アッラーと末日を信ずる者は、財産と生命を献げて奮戦することを免除されんとして汝に許しを請いはせぬ。アッラーは主に対する義務を果たす者を深知し給う。

لَا يَسْتَأْذِنُكَ الَّذِينَ يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ أَن يُجَاهِدُوا بِأَمْوَالِهِمْ وَأَنفُسِهِمْ وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِالْمُتَّقِينَ ﴿٤٤﴾

45. アッラーと末日を信ぜざる者のみ汝に免除の許しを請わん。彼等の心は疑惑に充ち、疑惑の中に揺れ動く。

إِنَّمَا يَسْتَأْذِنُكَ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ وَارْتَابَتْ قُلُوبُهُمْ فَهُمْ فِي رَيْبٍ مِّمَّا يَزِيدُونَ ﴿٤٥﴾

46. もし彼等真に出陣する気持ありたれば、そのための準備をなせし筈。されどアッラーは彼等の出陣に反対せり。故に彼は、彼等を背後に留め置き、「汝等居残り者と一緒に家に居残り」と仰せられたり。

وَلَوْ أَرَادُوا الْخُرُوجَ لَأَعَدُّوا لَهُ عُدَّةً وَلَكِنْ كَرِهَ اللَّهُ انشِعَاثَهُمْ فَثَبَّطَهُمْ وَقِيلَ اقْعُدُوا مَعَ الْقَاعِدِينَ ﴿٤٦﴾

注 28 この節では聖なる預言者はアブー・バクルを伴ってメッカからメジナへ移動したことを述べている。その時聖なる預言者はソールという洞窟に身を寄せたのであるが、この節ではアブー・バクルの極めて靈的に高い状態を強調しており、彼は神と共におり、神と恐れを分かちあう者達“二人の内の一人”と説明されている。記録に依れば、洞窟の中でアブー・バクルが急に泣き出し、聖なる預言者がなぜ泣くのかと聞くと、アブー・バクルは「私は自分の命が惜しくて泣いているわけではありません。ああ、神の預言者であられるお方よ、私が死んでもそれは単に私個人の問題です。でももしあなたがお亡くなりになったら……それはイスラムそして、すべてのイスラム社会滅亡を意味します。」と言ったと伝えられている。

47. もし彼等お前たちとともに出陣せば、いたずらに難儀を増すばかり。お前たちの間をあちこち走り廻って騒動を惹き起こそうと謀らん。さすればお前たちの中には彼等に耳を傾ける者も出てこよう。されどアッラーは不義な徒輩を深知し給う。

لَوْ خَرَجُوا فِيكُمْ مَا زَادُوكُمُ إِلَّا خَبَالًا وَلَا أُضْعَفُوا
جِلْدَكُمْ يَبْغُونَكُمُ الْفِتْنَةَ وَفِيكُمْ سَمْعُونُ لَهُمْ
وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِالظَّالِمِينَ ⑤

48. 彼等は以前にも騒動を起し、汝を陥れんと企みしが、真理が到来してアッラーの御意志が打ち勝れたりき、もつとも彼等それを好まざりしが。

لَقَدْ ابْتِغُوا الْفِتْنَةَ مِنْ قَبْلُ وَقَلَبُوا الْاُمُورَ
حَتَّى جَاءَ الْحَقُّ وَظَهَرَ اَمْرُ اللَّهِ وَهُمْ كَرِهُونَ ⑥

49. 彼等の中には「背後に留まることを許せ、我を試練に遭わしむるな」と云う者あり。彼等はすでに試練に陥にけり。地獄は不信心者を包围せん。

وَمِنْهُمْ مَنْ يَقُولُ ائْذَنْ لِي وَلَا تَفْتِنِي اَلَا فِي
الْفِتْنَةِ سَقَطُوا وَاِنْ جَهَنَّمَ لَحِيطَةٌ بِالْكَافِرِينَ ⑦

50. もし汝福を得ればそれは彼等を悩まし、災難降りかかれば、「我等は以前より警戒せり」と彼等は云う。彼等歓喜して背き去る。

اِنْ تُصِيبَكَ حَسَنَةٌ فُسُوهُمْ وَاِنْ تُصِيبَكَ مُصِيبَةٌ
يَقُولُوا قَدْ اَخَذْنَا اَعْرَافًا مِنْ قَبْلُ وَيَتَوَلَّوْا وَهُمْ
فَوَحُونَ ⑧

51. 云え、「アッラーが我等に定めたることの外は、何事も我等に降りかかることなかるべし。アッラーは我等の守護者なり。されば信者たるものその信頼をアッラーに寄せるべきなり」と。

قُلْ لَنْ يُصِيبَنَا اِلَّا مَا كَتَبَ اللَّهُ لَنَا هُوَ مَوْلَانَا
وَعَلَى اللَّهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُونَ ⑨

52. 云え、「お前たちは我等に、二つの光栄の一つ以外に何事も期待する能わず。我等は、アッラー御自ら又は我等の手を通じてお前たちを懲らしめんことを期待す。されば待て、我等もまたお前たちとともに待たん」と。

قُلْ هَلْ تَرْتَبِصُونَ بِنَا اِلَّا اَحَدَى الْحُسْنَيْنِ
وَنَحْنُ نَرْتَبِصُ بِكُمْ اَنْ يُصِيبَكُمْ اللَّهُ بِعَذَابٍ
مِنْ عِنْدِهِ اَوْ يَأْخُذَ بِنَا فَنَرْتَبِصُوا اِنَّا مَعَكُمْ
مُتَرَبِّصُونَ ⑩

53. 云え、「たとい進んで寄付しようが、出ししぶろうが、お前たちからのものは御嘉納せられざるべし。お前たちは実に不従順な人間なり」と。

قُلْ اَنْفِقُوا طَوْعًا اَوْ كَرْهًا لَنْ يُتَقَبَلَ مِنْكُمْ اِنْ كُمْ
كُنْتُمْ قَوْمًا فَاسِقِينَ ⑪

54. 彼等の寄付が御嘉納されざるは、偏に彼等

وَمَا مِنْهُمْ اَنْ تُقْبَلَ مِنْهُمْ نَفَقَتُهُمْ اِلَّا اَنْهُمْ

がアッラー並びにその使徒を信ぜざるが故なり。また、彼等は礼拝を怠り、しぶしぶ寄付するが故なり。

55. されば彼等の富や子女^{こども}を羨望するなかれ。アッラーはそれによって現世で彼等を罰し、また不信心者として死なしめんと意図するのみ。

56. 彼等アッラーの御名にかけてお前たちの味方なりと誓いしも、味方に非ず、ただ臆病者なり。

57. もし彼等避難所や洞窟、または潜り込むべき穴ですらあるを知れば、そこへ向って一目散に逃げ去らん。

58. 彼等の中には喜捨のことに關して汝を非難する者あり。それを与えられたる者は喜び、与えられざる者は、兄よ、彼等は憤る。

59. 彼等もしアッラー並びにその使徒が与えしものに満足して、「我等はアッラーさえましますれば十分なり。アッラーはその恵みを我等に垂れん、同様に使徒もまた。我等はアッラーに嘆願し奉る」と云いたれば、彼等のためにはよかりしものを。

第八項

60. 喜捨の用途は、(注29) 貧者に困窮者、喜捨の業務に携わる人、心を和らげる人々、奴隷の身の代金、負債者の救済、アッラーの道、並びに旅人のためにあり——これアッラーの掟なり。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

كُفِّرُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ وَلَا يَأْتُونَ الصَّلَاةَ إِلَّا وَهُمْ كُسَالَى وَلَا يُنْفِقُونَ إِلَّا وَهُمْ كِرْهُونَ ﴿٥٥﴾

فَلَا تُعْجِبْكَ أَمْوَالُهُمْ وَلَا أَوْلَادُهُمْ إِنَّمَا يُرِيدُ اللَّهُ لِيُعَذِّبَهُمْ بِهَا فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَتَرْهَقَ أَنْفُسُهُمْ وَهُمْ كَافِرُونَ ﴿٥٦﴾

وَيَخْلِفُونَ بِاللَّهِ إِنَّهُمْ لَمِنْكُمْ وَمَا هُمْ مِنْكُمْ وَلَكِنَّهُمْ قَوْمٌ يَفْهَمُونَ ﴿٥٧﴾

لَوْ يَجِدُونَ مَلْجَأً أَوْ مَغْرِبًا أَوْ مَدْخَلًا لَوَلَّوْا إِلَيْهِ وَهُمْ يَجْحَدُونَ ﴿٥٨﴾

وَمِنْهُمْ مَنْ يَلْمِزُكَ فِي الصَّدَقَاتِ فَإِنْ أُعْطُوا مِنْهَا رَضُوا وَإِنْ لَمْ يُعْطَوْا مِنْهَا إِذَا هُمْ يَسْتَفْخِمُونَ ﴿٥٩﴾

وَلَوْ أَنَّهُمْ رَضُوا مَا أَتَاهُمْ اللَّهُ وَرَسُولُهُ وَقَالُوا حَسْبُنَا اللَّهُ سَيُؤْتِينَا اللَّهُ مِنْ فَضْلِهِ وَرَسُولُهُ إِنَّا إِلَى اللَّهِ رَاغِبُونَ ﴿٦٠﴾

إِنَّمَا الصَّدَقَاتُ لِلْفُقَرَاءِ وَالْمَسْكِينِ وَالْعَمِلِينَ عَلَيْهَا وَالْمَوْلَاةِ قُلُوبُهُمْ وَفِي الرِّقَابِ وَالْغُرِينِ وَفِي سَبِيلِ اللَّهِ وَابْنِ السَّبِيلِ فَرِيضَةٌ مِّنَ اللَّهِ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿٦١﴾

注29 この節ではザカートが施される人と物について規定している。(1)フカラー(貧しさや病で打ちひしがれた人々の意)。(2)マサーキーン(働く能力があるのにその法を知らない人々の意)。(3)ザカートを集めたり、教えたり、その他これに類する仕事をする人々。(4)新しく改宗した、お金に困っている人々。(5)奴隷、捕虜、その他自由になるために保証金を要求された人々。(6)借金を払えなくなった人々や事業に失敗した人々。(7)立派な理由がある場合。(8)旅の途中でお金がなくなった人、知識を求めて旅をしている人、社会的関係を広げるために旅している人。

61. 彼等の中には預言者を怒らせんとて「彼は耳に過ぎず」と云う者あり。云え「お前たちのためになる良いことを聴く耳なり。(注30) 彼はアッラーを信じ、信者の信義を信じ、且つ信者への恩寵を信ずる者なり」と。アッラーの使徒を怒らせる者はいずれ痛罰を受けん。

وَمِنْهُمْ الَّذِينَ يُؤْذُونَ النَّبِيَّ وَيَقُولُونَ هُوَ ذُنُّ قَبْلَ أَنْ خَيْرَ لَكُمْ يُؤْمِنُ بِاللَّهِ وَيُؤْمِنَ لِلْمُؤْمِنِينَ وَرَحْمَةً لِلَّذِينَ آمَنُوا وَنُكْمٌ وَالَّذِينَ يُؤْذُونَ رَسُولَ اللَّهِ لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ①

62. 彼等はお前たちを喜ばしめんとしてアッラーの御名にかけて宣誓す。されど、もし彼等信者ならば、アッラー並びにその使徒を喜ばしむることこそ正しけれ。

يُحِبُّونَ بِاللَّهِ لَكُمْ لِيَرْضَوْكُمْ وَاللَّهُ وَرَسُولُهُ أَحَبُّ أَنْ يُرْضَوْهُ إِنْ كَانُوا مُؤْمِنِينَ ②

63. 誰であれアッラー並びにその使徒に反抗する者は、そこに永遠に留め置かる地獄の業火あるを、彼等知らざるか？ そは大いなる屈辱なり。

أَلَمْ يَعْلَمُوا أَنَّهُ مَنْ يُحَادِدِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ فَأَنَّ لَهُ نَارَ جَهَنَّمَ خَالِدًا فِيهَا ذَلِكَ الْخِزْيُ الْعَظِيمُ ③

64. 偽信者は胸中に秘めるものをあばき出される一章が啓示されはしないかと恐る。(注31) 云え、「汝等嘲笑せよ！ アッラーはお前たちが恐るものを明るみに出さん」と。

يَحْذَرُ الْبَاقُونَ أَنْ تَنْزَلَ عَلَيْهِمْ سُورَةٌ تُنَبِّئُهُمْ بِمَا فِي قُلُوبِهِمْ قُلِ اسْتَهِزُّوا ۚ إِنَّ اللَّهَ مُخْرِجٌ مَا تَحْذَرُونَ ④

65. 汝もし彼等に問わば、彼等必ず云わん、「我等はただ無駄話をしてふざけているのみ」と。云え、「お前たちが嘲笑せるは、アッラーやその神兆、並びに使徒に非らざるか？」

وَلَكِنْ سَأَلْتَهُمْ لَيَقُولُنَّ إِنَّمَا كُنَّا نَخُوضُ وَنَلْعَبُ قُلْ أَبَا اللَّهِ وَآيَاتِهِ وَرَسُولِهِ كُنْتُمْ تَسْتَهْزِئُونَ ⑤

66. 云い訳はするな。お前たちは一度信じた後また不信心者に戻れり。たといわれらがお前たちの一部は赦せども、他の一部は懲らしめん。なんととなれば彼等の犯せし罪故に」と。

لَا تَعْتَذِرُوا قَدْ كَفَرْتُمْ بَعْدَ إِيمَانِكُمْ إِنْ نَعْفَ عَنْ طَائِفَةٍ مِنْكُمْ نُعَذِّبْ طَائِفَةً بِأَنَّهُمْ كَانُوا مُجْرِمِينَ ⑥

第九項

67. 偽信者どもは、男も女も皆同じようなもの。彼等は悪を勧め、善を妨げ、アッラーの道

أَلْبَسُوا ۚ وَالْبَاقُونَ وَالسَّافِقَاتُ بَعْضُهُمْ مِنْ بَعْضٍ يَأْمُرُونَ

注30 オズン（意味は「耳」）は他人から聞いたことを何でも信じる人の意味であり、聖なる預言者を中傷する人々が、預言者を軽蔑し、見くびって話すのを聞きその話が正しいとすぐ信じ、単に聞くだけの道具と化している人の事を指している。

注31 実際には偽善者は、聖なる預言者を神の啓示を受けた者と信じていなかったで、そのような恐れはもたなかった。この節では偽善者の冗談や嘲笑の皮肉な面を示している。

のために費すことにその手を閉づ。彼等アッラーを忘れたるが故にアッラーもまた彼等を見捨てり。(注32) げに偽信者は罪人なり。

68. アッラーは偽信者の男女並びに不信者に業火を約束し、彼等をそこに永遠に留めん。業火は彼等には十分なり。その上アッラーは彼等を呪詛せり。彼等は永劫の刑罰を受けん、

69. お前たち以前の民の如く。彼等は力においてお前たちに優り、財産と子女においてもより豊かなりき。彼等は己が定命をしばしの間楽しみ、お前たちもまたお前たち以前のこれ等の民が楽しんだ如く己が定命を楽しめり。またお前たちは彼等が無駄話に耽溺した如く無駄話にうつづを抜かせり。彼等の所業は現世においても来世においても無益に帰さん。彼等こそは失敗者なり。

70. 彼等以前の人々——ノアの民、アード、サムード、アブラハムの民、ミディアンに住民、並びに滅亡せる幾多の民の消息が彼等に達せざりしか?(注33) 彼等の許にはそれぞれの使徒たちが明証を携えて至れり。さればアッラー彼等を虐待するに非ず、彼等自ら己れを虐待せり。

71. 男女の信者はお互い同士助けとなる仲間なり。彼等は善を勧め、悪を禁じ、礼拝を遵守し、喜捨を払い且つアッラー並びにその使徒に従う。アッラーは斯かる人々に慈悲を垂れ給わん。げにアッラーは偉大にして、賢哲にまします。

بِالنُّكْرِ وَيَهْوُونَ عَنِ الْمَعْرُوفِ وَيَقْبِضُونَ أَيْدِيَهُمْ
سُوءَ اللَّهِ فَسَيَسْأَلُهُمْ إِنَّ الْمُنْفِقِينَ هُمُ الْفٰسِقُونَ ﴿٣٥﴾

وَعَدَ اللَّهُ الْمُنْفِقِينَ وَالْمُنْفِقَاتِ وَالْكٰفِرَاتِ نَارَ جَهَنَّمَ
خٰلِدِينَ فِيهَا هِيَ حَسْبُهُمْ وَلَعْنُهُمُ اللَّهُ وَلَهُمْ
عَذَابٌ مُّقِيمٌ ﴿٣٦﴾

كَالَّذِينَ مِنْ قَبْلِكُمْ كَانُوا اَشَدَّ مِنْكُمْ قُوَّةً وَآلًا
اَمْوَالًا وَاَوْلَادًا فَاسْتَسَعَوْا بِخِلَافِهِمْ فَاَسْتَمْتَعْتُمْ
بِخِلَافِكُمْ كَمَا اسْتَمْتَعَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِكُمْ بِخِلَافِهِمْ
وَخُضِعْتُمْ كَالَّذِيْنَ خَاضُوا اُولٰٓئِكَ حَبِطَتْ اَعْمَالُهُمْ
فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ وَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْخٰسِرُونَ ﴿٣٧﴾

اَلَمْ يَأْتِهِمْ نَبَا الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ قَوْمُ نُوحٍ وَعَادٍ
وَاٰمُودَ وَاَقْوَمُ اِبْرٰهِيْمَ وَاَصْحٰبَ مَدْيَنَ وَالنُّوٓفَكٰثِ
اَتَنَّهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنٰتِ فَمَا كَانَ اللّٰهُ لِيَظْلِمَهُمْ
وَلٰكِنْ كَانُوْا اَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُوْنَ ﴿٣٨﴾

وَالَّذِيْنَ يُؤْمِنُونَ وَالَّذِيْنَ يَتَّبِعُوْنَ اُولٰٓئِكَ بَعْضُهُمْ
اَوْلٰٓئُ الْاٰخِرَةِ مِنَ الْاٰوَّلَةِ اَلَمْ تَرَ اَنَّ اللّٰهَ
يَاْمُرُ بِالْمَعْرُوفِ وَيَنْهٰى عَنِ الْمُنْكَرِ
يُقِيمُونَ الصَّلٰوةَ وَيُؤْتُونَ الزَّكٰوةَ وَيُطِيعُونَ اللّٰهَ
وَرَسُوْلَهُ اُولٰٓئِكَ سَيَرْحَمُهُمُ اللّٰهُ اِنَّ اللّٰهَ عَزِيْزٌ
حَكِيْمٌ ﴿٣٩﴾

注32 ニスヤーンの一般的な意味は「忘れること」であるが、実際には人や物に関して考えることを止めたり、記憶していなかったり、怠慢だったり、物事の処理がのろいことを意味する。神に關して用いられるときは、この言葉は人間に罰を与えて神との關係を絶ったり、神が愛と思いやりの心で人間のことを考えるのを止める意味となる。

注33 ソドムとゴモラ(創世記19:24、25)の事。

72. アッラーは男女の信者に、永遠に住むべき河川流る楽園と、また永遠の園の中に楽しい住居とを約束せり。されど一番素晴らしいものは、アッラーの御満悦。そは至上の成就なり。

وَعَدَ اللَّهُ الْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا وَمَسْكِنٍ كَرِيمٍ فِي جَنَّاتٍ عَدْنٍ وَرِضْوَانٍ مِنَ اللَّهِ أَكْبَرُ ذَلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿٧٢﴾

第十項

73. 預言者よ、不信心者どもや偽信者と戦え。(注34) 彼等に対して厳しくあれ。彼等の住居は地獄にして、行きつく先の大凶なるかな。

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ جَاهِدِ الْكُفَّارَ وَالْمُنَافِقِينَ وَاغْلُظْ عَلَيْهِمْ وَمَا لَهُمْ جَهَنَّمَ وَبِئْسَ الْمَصِيرُ ﴿٧٣﴾

74. 彼等はアッラーの御名にかけて何も悪いことは云わずと誓いしも、事實は確かに罰当たりな言葉を吐き、一旦イスラームに帰依した後また不信心者となれり。また彼等は達成し得ざることを企む。彼等が信者に恨みを抱くのは、ただアッラー並びにその使徒がその恵みによって信者たちを富ましめたがためなり。(注35) されど彼等もし改悛するならば、それは彼等のために大いに結構なこと。されど彼等もし背き去らば、アッラーは彼等を現世においても来世においても痛刑をもって懲らしめん。地上において彼等は如何なる友も救い手もなかるべし。

يَحْلِفُونَ بِاللَّهِ مَا قَالُوا وَلَقَدْ قَالُوا كَلِمَةَ الْكُفْرِ وَكَفَرُوا بَعْدَ إِسْلَامِهِمْ وَهُمْ زَوَّارٌ لِمَا بَيَّانُوا وَمَا تَغْمُرُ إِلَّا أَنْ اغْنَاهُمُ اللَّهُ وَرَسُولُهُ مِنْ فَضْلِهِ فَإِنْ يَتُوبُوا يَكْ خَيْرًا لَهُمْ وَإِنْ يَتَوَلَّوْا يَكُ اللَّهُ عَذَابًا أَلِيمًا فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ وَمَا لَهُمْ فِي الْأَرْضِ مِنْ وَلِيٍّ وَلَا نَصِيرٍ ﴿٧٤﴾

75. 彼等の中にはアッラーと契約を結びし者ありて、云えり、「もしアッラーがその恵みを我等に垂れ給わば、我等は必ず施しを行い、義人とならん」と。

وَمِنْهُمْ مَنُ عَاهَدَ اللَّهُ لَنْ يَتَنَبَّأَ بِفَضْلِهِ لَئِنْ وَكُنْتُمْ مِنَ الصَّالِحِينَ ﴿٧٥﴾

76. ところがアッラーが彼等に恵みを垂るや、賜われるものを惜み、嫌って背き去る。

فَلَمَّا آتَاهُمُ مِنْ فَضْلِهِ جَحَلُوا لَهُ وَتَوَلَّوْا لَهُمْ قُرْعُونَ ﴿٧٦﴾

注34 預言者はどのように偽善者相手に戦うのかの記載はないが、少なくとも武器を取って戦うことはどこにも誓っていない。事実預言者は偽善者に戦いをしかけるようなことはなかったのである。

注35 聖なる預言者がメディナに来てから町は賑わい、商売は繁盛し、市民は豊かになったのである。

77. そこでアッラーは、彼等がアッラーと会う日まで彼等の心の中に偽善を抱かしめたり。なんとすれば、彼等がアッラーとの約束を破り、嘘をついた報いなるが故に。

فَأَعْقَبَهُمْ نِفَاقًا فِي فُلُوهِمْ إِلَى يَوْمٍ يَلْقَوْنَ رَبَّهُمْ أَخْلَفُوا اللَّهَ مَا وَعَدُوهُ وَبَا كَانُوا يَكْذِبُونَ ﴿٤٤﴾

78. 彼等は、アッラーが彼等の秘密も密談も、いな、見る^{みた}能わざるものまでよく御存知なることを知らざるか？

أَلَمْ يَعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ سِرَّهُمْ وَنَجْوَاهُمْ وَأَنَّ اللَّهَ عَلَّامُ الْغُيُوبِ ﴿٤٥﴾

79. 進んで喜捨を行う信者並びに己れの勞力で得たもの以外に喜捨するものを持たざる信者を非難し、(注36) 嘲笑する者どもあり。アッラーはその嘲笑を彼等に返報せん。彼等には痛刑あるべし。

الَّذِينَ يَمْلِكُونَ الْغُلُوبِ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ فِي الصَّدَقَاتِ وَالَّذِينَ لَا يَجِدُونَ إِلَّا جَهْدَهُمْ يُسْخَرُونَ مِنْهُمْ يَخِرُّ اللَّهُ مِنْهُمْ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٤٦﴾

80. 汝、彼等のために赦しを請おうが請うまいが、たとい七十度^{たたび}彼等のために赦しを請うとも、(注37) アッラーは決して彼等を赦さざるべし。これ彼等がアッラーとその使徒を信ぜざりしが故なり。アッラーは不実な人間を導き給わぬ。

إِسْتَغْفِرْ لَهُمْ أَوْ لَا تَسْتَغْفِرْ لَهُمْ إِنْ تَسْتَغْفِرْ لَهُمْ سَبْعِينَ مَرَّةً فَلَنْ يَغْفِرَ اللَّهُ لَهُمْ ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ كَفَرُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْفَاسِقِينَ ﴿٤٧﴾

第十一項

81. 残留組の人々は、アッラーの使徒が出陣したる後、家に坐せるを喜びて、己が財産と生命をアッラーの道のために献げて戦うことを嫌いたり。彼等は云えり、「炎暑の時に出陣するな」と。云え、「地獄の火は更に強烈なるぞ」と。彼等これしきのことが理解し得ざるか！

فَرِحَ الْخَلْفُونَ بِمَقْعَدِهِمْ خَلْفَ رَسُولِ اللَّهِ وَكَرِهُوا أَنْ يَجَاهِدُوا بِأَمْوَالِهِمْ وَأَنْفُسِهِمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَقَالُوا لَا تَنْفِرُوا فِي الْحَرِّ قُلْ نَارُ جَهَنَّمَ أَشَدُّ حَرًّا لَوْ كَانُوا يَفْقَهُونَ ﴿٤٨﴾

82. 彼等は暫くの間笑い、しかる後沢山泣くがよい。(注38) これ彼等が稼ぎしものに対する応報なり。

فَلْيَصْحَقُوا فَلَيْلًا وَلَيُنَبِّئَنَّ أَكْثَرُاهُ جَزَاءَ مَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ﴿٤٩﴾

注36 貧しいイスラム教徒アブー・アキールは、一口の稼ぎすべてを神に捧げたが、その額が、少なかったので偽善者にあざけりを受けた。

注37 「七十」という数には特別な意味はないが、減びることが運命づけられているような偽善者は、何度預言者に許しを請うても決して許されないことを強調する為に使われている。

注38 この節では命令的な意味がないことは明らかである。ただ偽善者は遠からず、泣かなければならないHが来ると預言しているだけである。

83. アッラーが汝を彼等の一味のところへ凱旋させると、彼等は汝に出陣の許可を願い出ん、されば云え、「お前たちは決して我と共に出陣すること叶わず、また決して我と共に敵と戦うこと叶わず。最初にお前たちは居残りを選びたれば、今回も残留組と共に坐せ」と。

84. また彼等のうち誰かが死すとも、汝決して祈るなかれ、また墓に詣でるなかれ。彼等はアッラー並びにその使徒を信ぜず不従順のうちに歿したるが故に。

85. 汝、彼等の財産や子女に好奇心をそそるなかれ。アッラーはただこれによって現世で彼等を罰し、彼等が不信心者でいる間にその魂を離れ去らしめんと意図するのみ。

86. 「アッラーを信じ、アッラーの道のために使徒と一緒に奮戦せよ」との一章が啓示されるや、彼等のうちの富裕なる者は汝に許可を願い出て、云う、「我等に家に坐せる者と共に居られることを許せ」と。(注39)

87. 彼等は女どもと共に留まることを好む。彼等の心は封ぜられたり。(注40) されば彼等理解し難し。

88. されど、使徒並びに彼と共に信ずる者は、アッラーの道のために己が財産と生命を献げて奮戦す。これ等の者はさまざまなる幸福を得ん。これ等の者は成就者たらん。

89. アッラーは彼等に河川流る楽園を用意せり。彼等彼処に永遠に住まん。そは至高の幸福なり。

فَإِنْ رَجَعَكَ اللَّهُ إِلَى طَائِفَةٍ مِنْهُمْ فَاسْتَأْذَنُواكَ
لِخُرُوجٍ فَقُلْ لَنْ تَخْرُجُوا مَعِيَ أَبَدًا وَلَنْ تُقَاتِلُوا
مَعِيَ عَدَاوَاهُ إِنَّكُمْ رَضِيتُمْ بِالْفَقْدِ أَوَّلَ مَرَّةٍ
فَاتَّعَدُوا مَعَ الْخَالِفِينَ ﴿٣٩﴾

وَلَا تَصِلْ عَلَى أَحَدٍ مِنْهُمْ مَاتَ أَبَدًا وَلَا تَقُمْ
عَلَى قَبْرِهِ إِنَّهُمْ كَفَرُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ وَمَا تَوَاوَا
هُمْ فُيُقُونَ ﴿٤٠﴾

وَلَا تُعْجِبْكَ أَمْوَالُهُمْ وَأَوْلَادُهُمْ إِنَّا يَرِيذُ
اللَّهُ أَنْ يُعَذِّبَهُمْ بِهَا فِي الدُّنْيَا وَنَزَعَنْ أَنْفُسَهُمْ
وَهُمْ كَافِرُونَ ﴿٤١﴾

وَإِذَا أَنْزَلْتَ سُورَةَ أَنْ أَمِنُوا بِاللَّهِ وَجَاهِدُوا مَعَ
رَسُولِهِ اسْتَأْذَنَكَ أُولُو الطَّوْلِ مِنْهُمْ وَقَالُوا ذَرْنَا
مَكَّنْ مَعَ الْقُعْدِبِينَ ﴿٤٢﴾

رَضُوا بِأَنْ يَكُونُوا مَعَ الْخَوَالِفِ وَطُبِعَ عَلَى قُلُوبِهِمْ
فَهُمْ لَا يَفْقَهُونَ ﴿٤٣﴾

لَكِنَّ الرِّسُولَ وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ جَاهَدُوا بِأَمْوَالِهِمْ
وَأَنْفُسِهِمْ وَأُولَئِكَ لَهُمُ الْخَيْرَاتُ وَأُولَئِكَ هُمُ
الْمُقْلِحُونَ ﴿٤٤﴾

أَعَدَّ اللَّهُ لَهُمْ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ
خَالِدِينَ فِيهَا ذَلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿٤٥﴾

注39 この言葉が必ずしも実際に偽善者によって話されたとする必要はなく、ただ色々な言い訳をして預言者のもとへなかなか来ない様子を表わす為に使われただけである。

注40 2章8節を参照の事。

第十二項

90. 沙漠の民の中にも種々なる弁解をして、(注41) 免除を願い出て来たる者あり。彼等はアッラー並びにその使徒に嘘をつき家に居残りたり。不信心者のあの者どもにやがて痛刑が降されん。
91. 弱き者、病める者、並びに費すものを持たざる者は、彼等がアッラー並びにその使徒に誠実でありなば、罪はなし。善事を行う者に非難の理由なし。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。
92. また汝のところへ来て、汝に乘るものを求めたる者に、汝が「我はお前たちに乗せてやるものを都合出来ず」と云うと、彼等は目から涙をこぼして、自分たちが貢献し得ざることを悲しみて去り行く。これ等の者もまた罪なし。(注42)
93. 責められるべきは、裕福にもかかわらず免除を願い出てくる者どものみ。彼等は女どもと共に残るを喜ぶ。アッラーは彼等の心を封じたれば、彼等はものの道理を知らず。
94. お前たちが彼等のところへ帰還するや、彼等はさまざまな弁解をお前たちになさん。云え、「弁解は止めよ。彼等は断じてお前たちを信ぜず。アッラーはすでにお前たちの実態を彼等に教えたり。アッラーはお前たちの行状を監視せん。使徒もまた然り。然る後にお前たちは見えざるものと見えるものを知る御方の許に召し寄せられ、そこでお前たちは己が為せしことをすべて告げられん」と。(注43)

وَجَاءَ الْمُعَذِّرُونَ مِنَ الْأَعْرَابِ لِيُؤْذَنَ لَهُمْ
وَقَعَدَ الَّذِينَ كَذَبُوا اللَّهَ وَرَسُولَهُ سَيُصِيبُ الَّذِينَ
كَفَرُوا مِنْهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ٩٠

لَيْسَ عَلَى الضَّعَفَاءِ وَلَا عَلَى الْمَرْضَى وَلَا عَلَى
الَّذِينَ لَا يَجِدُونَ مَا يَنْفِقُونَ حَرَجٌ إِذَا انْفَقُوا
لِنَفْسِهِمْ وَمَا عَلَى الْمُحْسِنِينَ مِنْ سَبِيلٍ وَاللَّهُ
عَفُورٌ رَحِيمٌ ٩١

وَلَا عَلَى الَّذِينَ إِذَا مَا أَتَوْكَ لِتَحْمِلَهُمْ قُلْتَ لَا
أَجِدُ مَا أَحْمِلُكُمْ عَلَيْهِ تَوَلَّوْا وَعَيْنُهُمْ يُفْصِنُ مِنَ
الدِّمَاعِ حَزَنًا أَلَّا يَجِدُوا مَا يَنْفِقُونَ ٩٢

إِنَّمَا السَّبِيلُ عَلَى الَّذِينَ يَسْتَأْذِنُونَكَ وَهُمْ
أَغْنِيَاءُ رَضَوْا بِأَنْ يَكُونُوا مَعَ الْخَوَالِفِ وَطَبَعَ
اللَّهُ عَلَى قُلُوبِهِمْ فَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ٩٣

يَعْتَذِرُونَ إِلَيْكُمْ إِذَا رَجَعْتُمْ إِلَيْهِمْ قُلْ
لَا تَعْتَذِرُوا لَنْ تُؤْمِنُ كَلَّمَ قَدْ نَبَأْنَا اللَّهُ مِنْ
أَخْبَارِكُمْ وَسَيَرَى اللَّهُ عَمَلَكُمْ وَرَسُولُهُ ثُمَّ تُرَدُّونَ
إِلَى عِلْمِ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ فَيُنْصِتُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ
تَعْمَلُونَ ٩٤

注41 要するに、この言葉は義務を怠り、実際そうする事が出来なかった理由もないのに、言い訳をする人を指している。

注42 この節に書かれていることは誰にでもあてはまることであるが、ここでは特に貧しい七人のイスラム教徒について述べられている。彼らはとてもジハートへ行きたがっていたのであるが望みを達成する手段も資力もなかったのである。

注43 この節は聖なる預言者がタブークへの遠征へ行ってまだメディナに戻っていない時啓示された。

95. お前たちが彼等のところへ帰還するや、彼等は、お前たちが彼等を見捨てることをアッラーにかけて誓言せん。されば彼等を見捨てるや。げに、彼等は不浄なり、彼等の居住は地獄なり——これ彼等が稼ぎしものに対するふさわしき報いなり。(注44)

96. 彼等はお前たちを喜ばせようと誓言せん。されどたといお前たちが彼等に満足しようと、アッラーは邪悪な民は喜ばず。

97. 砂漠の民の不信と偽善たるや更に甚だし、アッラーが使徒に啓示せし掟を知ろうと欲せず。されどアッラーはすべてを聴き、賢哲にまします。

98. また砂漠の民の中にはアッラーの道のために費すことを、罰金とでも考え、お前たちに災難が降りかからんことを期待する者あり。されど不幸は彼等の上にこそ降りかからん。アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

99. されど砂漠の民の中にもアッラーと末日を信じ、(注45) 自分の差し出すものによってアッラーに近づき、且つ預言者の祝福にあずかれる手段と考えている者あり。然り！ そは確かに彼等にとりて神に近づき、手段なり。アッラーはやがて彼等をその恩寵に浴せしめん。げに、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

第十三項

100. 信者の一番先に位を占むる者は、最初の遷移者並びに援助者、及び彼等に従って善い振舞をした者なり。アッラーは彼等を喜び、彼等もまたアッラーを喜ぶ。(注46)

سَيَجْلِقُونَ بِاللّٰهِ لَكُمْ اِذَا اُنْقَلَبْتُمْ اِلَيْهِمْ لَتَرُوْهُنَّ عَنْهُمْ فَاَعْرَضُوْا عَنْهُمْ اِنَّهُمْ رِجْسٌ وَمَا وَدَّوْهُمْ جَهَنَّمُ جَزَاءً بِمَا كَانُوْا يَكْسِبُوْنَ ﴿٩٥﴾

يَجْلِقُونَ لَكُمْ لَتَرُوْهُنَّ عَنْهُمْ فَاِنْ تَرَٰوْهُنَّ عَنْهُمْ فَاِنَّ اللّٰهَ لَا يَرْضٰى عَنِ الْقَوْمِ الْفٰسِقِيْنَ ﴿٩٦﴾

اَلْاَعْرَابُ اَشَدُّ لُغْوًَا وَنِفَاقًا وَّاجَدَرًا لَا يَعْلَمُوْا حُدُوْدَ مَا اَنْزَلَ اللّٰهُ عَلٰى رَسُوْلِهِ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿٩٧﴾

وَمِنَ الْاَعْرَابِ مَنْ يَّتَّخِذُ مَا بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُمْ مَّعْرَافًا وَيَكْبُرُ بِكُمُ الدَّٰلِ وَيَكْبُرُ عَلَيْهِمْ دَاخِرَةُ السَّوْءِ وَاللّٰهُ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ﴿٩٨﴾

وَمِنَ الْاَعْرَابِ مَنْ يُؤْمِنُ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ وَيَتَّخِذُ مَا يَنْفِقُ قُرْبًاۤىۤ عِنْدَ اللّٰهِ وَصَلَوٰتِ الرُّسُلِ اَلَا اِنَّهَا قُرْبٰىۤ لَّهُمْ سَيُدْخِلُهُمُ اللّٰهُ فِي رَحْمَتِهٖ ؕ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٩٩﴾

وَالسَّابِقُونَ السَّابِقُونَ مِنَ الدُّهْرَيْنِ وَالْاٰخِرِ وَالَّذِيْنَ اتَّبَعُوْهُمْ بِاِحْسَانٍ رَّضِيَ اللّٰهُ عَنْهُمْ

注44 これら「信仰に遅れをとる者」は異った概念に属するので、彼らは別に扱われる。

注45 クルアーンは決して無差別にすべての人々を非難しはしない。この節では砂漠に住むアラブ人はすべて悪人であるという誤解をとり除こうとしている。

注46 この節では聖なる預言者の最初の3代の後継者や彼の主だった仲間を非難しているシーア派について触れている。彼等に対しては、強行な論駁がなされている。このシーア派というのはイスラム教の二大分派

アッラーは彼等のために河川流るる楽園を用意せり。彼等は永遠にそこに住まん。これぞ至高の幸福なり。

وَرِضْوَانُهُ وَأَعَدَّ لَهُمْ جَنَّاتٍ تَجْرِي تَحْتِهَا
الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا ذَلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ⑩

101. お前たちのまわりの砂漠の民の中にも偽信者あり、(注47) またメディナの住民の中にも然り。彼等は偽善に固執す。汝等それを知るまいが、われらはそれを知る。われらは彼等を再度懲らしめ、然る後に重刑に処せん。(注48)

وَمِنَ حَوْلِكُم مِّنَ الْأَعْرَابِ مُنْفِقُونَ ثُوْمِنَ
أَهْلِ الْمَدِينَةِ مَرَدُّوا عَلَى النَّيْقِ لَا تَعْلَمُهُمْ
نَحْنُ نَعْلَمُهُمْ سَعَدَ لَهُمْ مَزَاجُهُمْ ثُمَّ يَمُرُّونَ إِلَى
عَذَابٍ عَظِيمٍ ⑪

102. またその他に、自らの罪を認めたるものあり。彼等の所業は善悪相混じりたり。(注49) かかる人々には恐らくアッラーは憐れみの顔を向け給う。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَأُخْرُونَ اعْتَرَفُوا بِذُنُوبِهِمْ خُطُوا عَلَيَّا صَاحِبًا
وَأُخْرُسِيئًا عَسَىٰ اللَّهُ أَن يَتُوبَ عَلَيْهِمْ إِنَّ اللَّهَ
غَفُورٌ رَّحِيمٌ ⑫

103. 彼等の財産から喜捨をさせ、之によって彼等を清め且つ浄化せよ。また彼等のために祈れ。汝の祈禱は彼等のために安らぎの源泉なり。アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

خُذْ مِنْ أَمْوَالِهِمْ صَدَقَةً تُطَهِّرُهُمْ وَتُزَكِّيهِمْ
بِهَا وَصَلِّ عَلَيْهِمْ إِنَّ صَلَاتَكَ سَكَنٌ لَهُمْ وَاللَّهُ
سَمِيعٌ عَلِيمٌ ⑬

104. 彼等は、アッラーがその僕の改悛を容認し、その喜捨を受納し、また幾度も憐れみに立ち戻り、慈悲深くましますことを、知らざるか？

أَلَمْ يَعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ هُوَ يَقْبَلُ التَّوْبَةَ عَنْ عِبَادِهِ
وَأَنَّهُ يُؤَخِّرُ الْقَبُولَ وَاللَّهُ هُوَ التَّوَّابُ الرَّحِيمُ ⑭

105. 云え、「働き続けよ。アッラーは必ずお前たちの所業を監視せん、使徒並びに信者も

وَقُلْ أَعْمَلُوا بِسَيْرَةِ اللَّهِ عَمَلَكُمْ وَرَسُولُهُ وَالْمُؤْمِنُونَ

の一派で、モハammadの婿のアリを正統の後継者として初三代のカリフを教主と認めず、スンナを正統と認めない一派のこと。

注47 聖なる預言者の死後彼らの種族の中の偽善者が結集して、メジナを襲った。メジナの近くの砂漠に住む五つの種族—ジュヘナ、ムゼナ、アシジャ、アスラム、ゲフェルについて特に言及している (Khalidūn, i i 66)。

注48 「二回」は罰の方式を意味しているのではなく、(9 ; 16 に説明された様にその) 期間を意味している。偽善者は一年に二回の罰が課せられるなら一年の、又、一年に一回の罰が課せられるならば二年という様に、一年から二年の期間に渡って罰せられることを意味している。

注49 クバーのモスクのことで、ここは聖なる預言者がメッカからメディナに行くときに立ち寄った所で、そこに建てられたモスクである。

また然り。やがてお前たちは見えざるものと見えるものとを知悉し給う御方の許に召し寄せられ、しかる後にお前たちが為せることを告げられん」と。

106. この他に、アッラーの裁定が延期された者あり。彼等は罰せられるのか、はたまた慈悲の顔を向けてもらえるものやら。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

107. 偽善者どもの中には、イスラームの妨害と不信心を助けるために、また信者の仲を離反させるために、並びに以前アッラーとその使徒に戦った人の待伏の場所たらしめんがために礼拝堂を建立したる人々あり。而して彼等は必ず誓って云う、「我等はただ善事を行うのみ」と。されどアッラーは断固としてその虚偽なることを立証す。

108. 断じてそのような場所で礼拝するなかれ。最初の日より敬虔に基づいて建立されたる礼拝堂こそ、その中で汝が礼拝するにどれほどふさわしいことか。あすこには、身を清めることを好む人々あり。アッラーは自らを清める者を愛し給う。

109. アッラーを畏れ、且つ喜ばしむるために建物の礎を定めた者と、水に侵蝕されて崩れ落ちる断崖の縁に建物の礎を定め、建物ともども地獄の火中に転落した者と、果していずれが勝れるか？ アッラーは不義なす徒輩を導き給わず。

110. 彼等の作れる建物は、その心千々に引き裂かれない限り、いつまでも心の不安の種とならん。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

第十四項

111. まことに、アッラーは樂園と引換えに、信者たちの生命と財産を購えり。彼等はアッラーの道のために戦い、殺し殺される

وَسْتُرَدُّونَ إِلَىٰ عِلْمِ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ فَيُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٩﴾

وَأَخْرُوجُونَ مَرْجُونَ لِأَمْرِ اللَّهِ إِمَّا يُعَذِّبُهُمْ وَإِمَّا يَتُوبَ عَلَيْهِمْ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿١٠﴾

وَالَّذِينَ اتَّخَذُوا مَسْجِدًا ضِرًّا وَكُفْرًا وَتَفْرِيقًا بَيْنَ الْمُؤْمِنِينَ وَأَرْصَادًا لِّمَنْ حَارَبَ اللَّهَ وَرَسُولَهُ مِنْ قَبْلُ وَيَحْلِفُونَ إِنْ أُرْدْنَا إِلَى الْأَحْصَىٰ وَاللَّهُ يَتَّبِعُ إِنَّهُمْ لَكَذِبُونَ ﴿١١﴾

لَا تَقُمْ فِيهِ أَبَدًا لِّلْمَسْجِدِ أُسُسٌ عَلَىٰ تَقْوَىٰ مِنْ أَوَّلِ يَوْمٍ أَحَقُّ أَنْ تَقُومَ فِيهِ فِيهِ رِجَالٌ يُحْجُونَ أَنْ يَضَعُوا وَا اللَّهُ يُحِبُّ الْمُطَهِّرِينَ ﴿١٢﴾

أَفَمَنْ أُسِّسَ بُيَاتُهُ عَلَىٰ تَقْوَىٰ مِنَ اللَّهِ وَرِضْوَانٍ خَيْرٌ أَمْ مَنْ أُسِّسَ بُيَاتُهُ عَلَىٰ شِقَاجِرٍ هَٰ رِ قَالَتْ هَارِبُهُ فِي نَارِ جَهَنَّمَ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ﴿١٣﴾

لَا يَزَالُ بُنْيَانُهُمُ الَّذِي بَنَوْا رِيبَهُ فِي قُلُوبِهِمْ إِلَّا أَنْ تَقَطَّعَ قُلُوبُهُمْ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿١٤﴾

إِنَّ اللَّهَ اشْتَرَىٰ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ أَنْفُسَهُمْ وَأَمْوَالَهُمْ بِأَنْ لَهُمُ الْجَنَّةُ يُقَاتِلُونَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ لِيُقَاتَلُوا

——これはアッラーが^{トール}律法、福音、(注50)並びにクルアーンにおいて己れ自身に義務としてかかる約束なり。誰がアッラーより約束に忠実なるものがあるか？ さればお前たちアッラーと結びし契約を喜べ。これぞ至高の幸福^{じようじゆ}成就なり。

112. 彼等は、悔い改める者、アッラーを崇敬する者、讃美する者、断食する者、神前に跪く者、ひれ伏して祈る者、善を勧め悪を許さぬ者、アッラーの制限を守る者などなり。これ等の信者に朗報を伝えよ。

113. 多神教徒のために、たとい血縁の者たりとも、地獄に陥ちることが明白となる後は、神の赦しを請うようなことは、預言者並びに信者の為すべきことに非ず。

114. アブラハムが自分の父のために赦しを請えるは、父となせし約束のためなり。(注51) されど、父がアッラーの敵なることが明白なるに及び、彼は父と絶縁せり。げに、アブラハムは心優しく、寛容なりき。

115. アッラーは、彼等が守るべきことを明示せぬ限り、一度導いた人々を迷わしむることなし。げにアッラーは萬事を深知し給う。

116. げに、天地の主権はアッラーに属す。生を与え、死を賜う御方。お前たち、アッラーの他には味方もなければ、救助者もなし。

117. アッラーは預言者並びに苦難な時代に彼に従った遷移者と援助者に慈悲の顔を向け給えり、一部の者の心はほとんど本分を踏みはずしかけていたが。それでもなお慈悲

وَيَقْتُلُونَ وَعدَا عَلَيْهِ حَقًّا فِي التَّوْرَةِ وَالْإِنْجِيلِ
وَالْقُرْآنِ وَمَنْ أَوْفَى بِعهْدِهِ مِنَ اللَّهِ فَاسْتَبْشِرُوا
بِيعْكُمْ الَّذِي بَاعْتُمْ بِهِ وَذَلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿٥٠﴾

التَّائِبُونَ الْعِدُونَ الْحُدُونَ السَّائِحُونَ الرَّاغِبُونَ
الشَّجِدُونَ الْأَمْرُونَ بِالْمَعْرُوفِ وَالنَّاهُونَ عَنِ
الْمُنْكَرِ وَالْحَافِظُونَ لِحُدُودِ اللَّهِ وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٥١﴾

مَا كَانَ لِلنَّبِيِّ وَالَّذِينَ آمَنُوا أَنْ يَسْتَغْفِرُوا لِلْمُشْرِكِينَ
وَلَوْ كَانُوا أُولَىٰ قُرْبَىٰ مِنْ بَعْدِ مَا تَبَيَّنَ لَهُمْ أَنَّهُمْ
أَصْحَابُ الْجَحِيمِ ﴿٥٢﴾

وَمَا كَانَ اسْتِغْفَارُ إِبْرَاهِيمَ لِأَبِيهِ إِلَّا عَنْ مَوْعِدَةٍ
وَعَدَهَا آيَةٌ فَلَمَّا تَبَيَّنَ لَهُ أَنَّهُ عَدُوٌّ لِلَّهِ تَبَرَأَ مِنْهُ
إِنَّ إِبْرَاهِيمَ لَأَوَّاهٌ حَلِيمٌ ﴿٥٣﴾

وَمَا كَانَ اللَّهُ لِيُضِلَّ قَوْمًا بَعْدَ إِذْ هَدَاهُمْ
حَتَّىٰ يَبَيِّنَ لَهُمْ مَا يَتَّقُونَ إِنَّ اللَّهَ لَبَلَّغُ شَيْءٍ عَليمٌ ﴿٥٤﴾

إِنَّ اللَّهَ لَهُ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ يُحْيِي
وَيُمِيتُ وَمَا لَكُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ مِنْ
وَلِيٍّ وَلَا نَصِيرٍ ﴿٥٥﴾

لَقَدْ تَابَ اللَّهُ عَلَى النَّبِيِّ وَالْمُهَاجِرِينَ وَالْأَنْصَارِ
الَّذِينَ اتَّبَعُوهُ فِي سَاعَةِ الْعُسْرَةِ مِنْ بَعْدِ مَا

注50 律法(申命記6:3-5)と福音書(マタイ19:21, 27-29)。

注51 19章48節を参照の事。

の顔を向け給えり。げにアッラーは、彼等には同情的で慈悲深くまします。

118. 後に居残りし三人の者にも(注52) アッラーはまた慈悲の顔を向けたり。広大な大地が彼等には狭きものとなり、彼等の魂もまた之これによって苦しめられ、遂にアッラーに救いを求める以外に、アッラーから遁のがれるすべなきを悟れり。するとアッラーは慈悲の顔を彼等に向け、彼等がアッラーに頼れるように取りはからい給う。げにアッラーは、幾たびとなく赦し給い、慈悲深くまします。

第十五項

119. 汝等信ずる者よ、アッラーを畏れ、真を説く人と行を偕いっしょにせよ。
120. メディナの住民やその周辺の砂漠の民が、アッラーの使徒の後に居残って、彼の生命より己れ等の命を重ずるのは正しからず。なんとなれば、彼等はアッラーの道において、渴きにも疲れにも餓えにも遭あわず、不信心者どもを立腹しょうせきさせる証跡も踏まず、また敵になんの損害も生ぜせしめず、にもかかわらず彼等のために善行が記録いんふされている所以なり。アッラーは善行者への報奨を湮滅いんめつせず。
121. 彼等は多かれ少なかれ如何なる金額も費さず、また一つの谷も越さずとも、アッラーは彼等が為せる行為に対して最善の報奨を与えんと記録せられたり。

كَادَ يَزِيغُ قُلُوبَ فَرِيقٍ مِّنْهُمْ ثُمَّ تَابَ عَلَيْهِمْ إِنَّهُ بِهِمْ رُءُوفٌ رَّحِيمٌ ﴿١١٩﴾

وَعَلَى الشَّاتِرِ الَّذِينَ خَلَقُوا حَتَّىٰ إِذَا صَافَتْ عَلَيْهِمُ الْأَرْضُ بِمَا رَحُبَتْ وَصَافَتْ عَلَيْهِمْ أَنفُسُهُمْ وَظَنُّوا أَنَّهُ لَا مَلْجَأَ مِنَ اللَّهِ إِلَّا إِلَيْهِ ثُمَّ تَابَ عَلَيْهِمْ لِيَتُوبُوا إِنَّ اللَّهَ هُوَ التَّوَّابُ الرَّحِيمُ ﴿١٢٠﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللَّهَ وَكُونُوا مَعَ الصَّادِقِينَ ﴿١١٩﴾

مَا كَانَ لِأَهْلِ الْمَدِينَةِ وَمَنْ حَوْلَهُمْ مِنَ الْأَعْرَابِ أَنْ يَتَخَلَّفُوا عَنْ رَسُولِ اللَّهِ وَلَا يَرْغَبُوا بِأَنفُسِهِمْ عَنْ نَفْسِهِ ذَلِكَ إِنَّهُمْ لَا يُصِيبُهُمْ ظَمَأٌ وَلَا نَصَبٌ وَلَا مَخْصَصَةٌ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَلَا يَطَؤُونَ مَوْطِئًا يَغِيظُ الْكُفَّارَ وَلَا يَنَالُونَ مِنْ عَدُوٍّ نَيْلًا إِلَّا كُتِبَ لَهُمْ بِهِ عَمَلٌ صَالِحٌ إِنَّ اللَّهَ لَا يُضِيعُ أَجْرَ الْمُحْسِنِينَ ﴿١٢٠﴾

وَلَا يَنْفَقُونَ نَفَقَةً صَغِيرَةً وَلَا كَبِيرَةً وَلَا يَقْطَعُونَ وَادِيًا إِلَّا كُتِبَ لَهُمْ لِحَجَّتِهِمْ إِنَّ اللَّهَ أَحْسَنُ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٢١﴾

注52 カービン・マーリク、ヒラール・ビン・オマイヤ、ムラーラ・ビン・ラビーヤ(9:106)の三人のことである。彼らは熱心なイスラム教徒であったが、タブークの行軍に参加しそびれた為、聖なる預言者がメディナに戻った時、三人共徹底的な社会追放をうけた。その為彼らは妻と別居しなければならず、このような禁治産者としての状態が五十日間も続いた。その間彼らは深く悔い改めたので許しを与えられたが、彼らは迷うことなく自らの罪を告白し、言い訳がましいことは言わず率直で正直な信徒であった為、民の罰を心の底から深く受け入れた。大地はこんなにも広大なのに、その時の彼らにとっては、この世は息のつまるほど狭く感じられたほど、彼らは心痛のためやつれ果てたのである(ブハリ・マザーズィ書)。

122. 信者全員は一斉に出陣すべきに非ず。各団の一部を出陣から外し、その者たちに宗教上の知識(注53)に習熟せしめ、みなが帰還したる時彼等に訓戒を与え、悪から身を守れるようにしてやるべきではないか?

第十六項

123. 汝等信ずる者よ、お前たちの傍近くにいる不信心者どもと戦え。(注54) 彼等にお前たちが手強い相手であることを悟らしめよ。アッラーは義しい者と併にあることを知れ。

124. 啓示が降る度に、彼等の中には「この章によって信心を深めるのか?」と云う者あり。およそ信仰する者は之によって信心を深め、且つ喜ぶ。

125. されど心に病ある者は、穢れの上にさらに穢れが加わり、遂に不信心者のまま歿す。

126. 彼等は毎年一度や二度試みられていることを悟らざるか? されど彼等は改悔することなく、また留意することなし。

127. 啓示が降る度に彼等は互に顧みて、云う、「誰かに見られてはいまいか?」と。然る後に彼等は背き去る。アッラーが彼等の心を背かしめたるは、彼等が理解せざる徒輩なるが故なり。

وَمَا كَانَ الْمُؤْمِنُونَ لِيَنفِرُوا كَآفَّةً ۚ فَلَوْلَا نَفَرَ مِن
كُلِّ فِرْقَةٍ مِّنْهُمْ خَاصَّةٌ لِّيَتَفَقَّهُوا فِي الدِّينِ
وَلِيُنذِرُوا قَوْمَهُمْ إِذَا رَجَعُوا إِلَيْهِمْ لَعَلَّهُمْ
يَحْذَرُونَ ﴿١٦﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا قَاتِلُوا الَّذِينَ يَلُونَكُمْ مِنَ الْكُفَّارِ
وَلْيَعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ مَعَ الْمُتَّقِينَ ﴿١٧﴾

وَإِذَا مَا أُنزِلَتْ سُورَةٌ مِّنْهُمْ مَّن يَقُولُ إِنَّكَ بَآدِئَتُهُ
هَذِهِ آيَاتُنَا فَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا فَيَزَادُ تَهُمُ إِيْمَانًا
وَهُمْ يَسْتَبْشِرُونَ ﴿١٨﴾

وَأَمَّا الَّذِينَ فِي قُلُوبِهِمْ مَّرَضٌ فَيَزَادُ تَهُمُ رِجْسًا
إِلَىٰ رِجْسِهِمْ وَمَاتُوا وَهُمْ كَافِرُونَ ﴿١٩﴾

أَوَلَا يَرَوْنَ أَنَّهُمْ يُفْتَنُونَ فِي كُلِّ عَامٍ مَّرَّةً أَوْ
مَرَّتَيْنِ ثُمَّ لَا يَتُوبُونَ وَلَا هُمْ يَذْكُرُونَ ﴿٢٠﴾

وَإِذَا مَا أُنزِلَتْ سُورَةٌ نَّظَرَ بَعْضُهُمْ إِلَىٰ بَعْضٍ هَلْ
يَرَاكُمْ مِنْ أَحَدٍ ثُمَّ انصَرَفُوا صَرَفَ اللَّهُ قُلُوبَهُمْ
بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَا يَفْقَهُونَ ﴿٢١﴾

注53 善い信仰や善行ができないのは真の知識が欠如している事が原因であり、この節ではこういった弱さを取り除く方法について述べている。砂漠に住むアラビア人はイスラムの教義には全く無知であった為(9:97)、彼らを指導する際の実践的な方法をここでは論じている。

注54 イスラム教徒の中にあり、共に暮らしていた偽善者達の事についての言及である。イスラム教徒は、彼ら個人に対してではなく、偽善者という階級に対し戦うよう命ぜられ、聖なる預言者に彼らの悪習や、偽善的な行為を訴え出る事で、彼らに対抗する事が課せられていた。

128. いまお前たちの中から一人の使徒がお前たちのところへ遣わされたり。彼はお前たちが災難に遭えば心を痛め、熱心にお前たちの幸福を願い、信者に対して情け深く、慈悲深い。

لَقَدْ جَاءَكُمْ رَسُولٌ مِّنْ أَنفُسِكُمْ عَزِيزٌ عَلَيْهِ مَا
عَنِتُّمْ حَرِيصٌ عَلَيْكُمْ بِالْمُؤْمِنِينَ رَءُوفٌ
رَّحِيمٌ ﴿١٢٨﴾

129. されどもし彼等背き去らば、云え、「我はアッラーいませば充分なり。彼の他に神なし。彼こそは我が頼り、偉大なる玉座の主なり」と。

فَإِنْ تَوَلَّوْا فَقُلْ حَسْبِيَ اللَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ
عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ وَهُوَ رَبُّ الْعَرْشِ الْعَظِيمِ ﴿١٢٩﴾

سُورَةُ يُونُسَ مَكِّيَّةٌ

ヨナ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵^{あまね}遍くアッラーの御名^なにおいて。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. アリフ・ラム・ラー。(注1) これこそは知恵に満ちた經典の諸節なり。(注2)

الَّذِيكَ آتَى الْكِتَابَ الْحَكِيمَ

3. われらが彼等のうちの一人に啓示して、「人類に警告せよ。また信ずる者には、彼等が主のお傍で名誉ある地位を得べしとの朗報を伝えよ」と云えることが、人々には不思議なこととなるか? 不信心者どもは云う、「これは明らかに魔術なり」と。(注3)

أَكَانَ لِلنَّاسِ حُجُبًا أَنْ أَوْحَيْنَا إِلَى رَجُلٍ مِنْهُمْ أَنْ أَنْذِرِ النَّاسَ وَبَشِّرِ الَّذِينَ آمَنُوا أَنَّ لَهُمْ قَدَمَ صِدْقٍ عِنْدَ رَبِّهِمْ قَالَ الْكَافِرُونَ إِنَّ هَذَا لَسِحْرٌ مُبِينٌ

4. げに、お前たちの主は六日のうちに(注4)天地を創造り給い、然る後に玉座に登り給えしアッラーなり。彼は一切を統治し給う。(注5)彼の許しを得た後でなければ何者も仲裁者たるを得ず。これがアッラー、お前たちの主なり。されば彼を崇拜せよ。お前たちまだ日がさめざるか?

إِنَّ رَبَّكُمُ اللَّهُ الَّذِي خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ فِي سِتَّةِ أَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوَى عَلَى الْعَرْشِ يُدَبِّرُ الْأُمُورَ مَنْ شَفِيعٌ إِلَّا مِنْ بَعْدِ إِذْنِهِ ذَلِكَُمُ اللَّهُ سَرُّكُمْ فَأَعْبُدُوهُ أَفَلَا تَذَكَّرُونَ

注1 「アリフ・ラム・ラー」2章2節を参照

注2 「知恵に満ちた」という言葉はクルアーンの三つの顕著な特質を表わしている。即ちクルアーンは、(a)あらゆる精神的知識の土台を包含し、全ての真実を教え込んでいる故に、知恵に満ちているのである。(b)次に、その教えはあらゆる場合や、あらゆる環境に適合するように表わされている。(c)そしてそれは、全ての宗教上の違いに正しい判断を下してくれるのである。

注3 この節は次の様な重要な事実を明らかにする。即ち、道徳的に墮落し、自分を大切にしたり自信を持つというあらゆる感覚を失くしてしまっている人達、つまりここでは不信仰者達のことであるが、あまりにも墮落している為に、彼らの中から誰かが現れて、彼らが落ち込んでしまっている墮落の泥沼の中から彼らを助けることが出来るなどとは想像も出来なかった。ただ、外部から現れた誰かにしか彼らの境遇を改善することは出来ないと思っていた。

注4 7章55節参照。

注5 「彼は一切を統治し給う」という言葉は、宇宙の働きと、神が神の命令を果たし神の意志を明示するのに使う手段とを表わしているのである。

5. お前たち皆ともにアッラーのお傍に帰るなり。アッラーのお約束は違^{ちが}うことなし。げに彼は創造の源を起し、然る後に之を復起させ給う、これ信じて善事を行える者を公平に賞せんがためなり。然れども、不信心者どもに対しては煮えたぎる熱湯と痛刑あるべし、なんとなれば彼等信ぜざるが故に。(注6)

6. 彼こそは太陽を燦爛たる輝きたらしめ、月を反射の明鏡たらしめ、年数と時刻の計算をお前たちにわからしむるために(注7)その整然たる軌道を定めたる御方なり。アッラーが之を創造せるはただ真理のために他ならず。彼は理解する人々のためにさまざまなる神兆を詳述し給う。

7. まこと、夜と昼の交替の中に、またアッラーが天地の間に創造れるすべてのもののうちに、神を畏れる人々へのさまざまな神兆あり。(注8)

إِلَيْهِ مَرْجِعُكُمْ جَمِيعًا وَعَدَ اللَّهُ حَقًّا إِنَّهُ يَبْدَأُ الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ لِيَجْزِيَ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ بِالْقِسْطِ وَالَّذِينَ كَفَرُوا لَهُمْ شَرَابٌ مِنْ حَمِيمٍ وَعَذَابٌ أَلِيمٌ بِمَا كَانُوا يَكْفُرُونَ ⑤

هُوَ الَّذِي جَعَلَ الشَّمْسُ ضِيَاءً وَالْقَمَرَ نُورًا وَقَدَرَهُ مَنَازِلَ لِتَعْلَمُوا عَدَدَ السِّنِينَ وَالْحِسَابَ مَا خَلَقَ اللَّهُ ذَلِكَ إِلَّا بِالْحَقِّ يُفَصِّلُ الْآيَاتِ لِقَوْمٍ يَعْلَمُونَ ⑥

إِنَّ فِي اخْتِلَافِ اللَّيْلِ وَالنَّهَارِ وَمَا خَلَقَ اللَّهُ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ لآيَاتٍ لِقَوْمٍ يُتَّقُونَ ⑦

注6 現世での行動に審判が下され、報いられ、新しい人生が与えられるのは死後だけではないといえる。現世も又、一つの世代というのは次の世代へと引き継がれていく為、前世代の人々の良い行いというものは無駄にはならないし、次世代の人々にとり有益となりうる。また、サリハートは、正しく高潔な所業を意味する他に、特殊な場合と環境で緊急事態の為になされた所業をも意味している。

注7 この節は、非常に賢明な自然の法則を指摘している。我々は一つの天体が横切った宇宙の大きさを知るのに、他の天体との位置の変化の関係によって判断出来る。神は、我々が歳月の計算をすることができるようにあらかじめ太陽と月の運行を定められたのである。云いかえれば神はこれらの天体に動きを与え、その運行を定められたので、その動きを観察することによって我々は一定の歳月が流れ、元の位置から動き続けたことを知ることができるのである。あらゆる計算とあらゆる暦は、太陽と月の動きにたよっている。月は地球の回りを回るので、我々は月という尺度を知ることができる。地球は地軸上を回転しながら太陽の回りを回っているので、我々は日と年を計ることが出来るのである。

注8 この節の中の「神を畏れる人々」という言葉は、前節の「理解する人々」という表現のかわりに用いられている。なぜなら昼夜の交替という自然現象は、無知な人でさえ知っていたが、神への畏敬のみが敬けんな研究から、真の精神的恩恵を生み出すからである。また、先の節で言及した月と太陽のさまざまな運行の定めというのは、一個人やあらゆる人が感知し理解できるほど容易なことではなかった。それ故、知識を授かった人々のみが、それによって恩恵をこうむることができた。その上、昼夜が交替する現象は、民族の興亡に似通っている。栄華繁栄の昼の後には衰退と墮落の夜が来る。永遠の栄華を満喫した民は一つもなかったし、衰退と墮落の暗闇の中で永遠にもがき手探りし続けた民もなかった。ある民は、繁栄の昼を長く、衰退の夜を短くすることが出来よう。それに夜が来るを遅らせるのも、彼らの力のうちにある。

8. われらとの会見を待ち望まず、現世の生活に満足し、之に安んずる者、並びにわれらの神兆を軽視する者(注9)——

9. 彼等の住居は業火なり、己が稼ぎし報い故に。

10. されど信じて善行に勤しむ者は——彼等の信仰の故をもって主が之を正しく導かん。至福の園において、河川彼等の脚下を流るべし。

11. 彼等には、「おお、アッラーに栄えあれ!」と祈り、互に「平安あれ」と挨拶を交わす。而して祈禱の結びは、「万物の主たるアッラーに讃美あれ」となるべし。(注10)

第二項

12. もしアッラーが、人々が富の獲得に狂奔する如く彼等の上に災厄を急ぎ早めなば、彼等の命数はすでに終らされたるべし。されどわれらは、われらとの会見を待ち望まぬ者どもを放置し、その迷路の中に狂気のように徘徊せしむ。(注11)

إِنَّ الَّذِينَ لَا يَرْجُونَ لِقَاءَنَا وَرَضُوا بِالْحَيَاةِ الدُّنْيَا
وَاطْمَأْنَوْا بِهَا وَالَّذِينَ هُمْ عَنْ آيَاتِنَا غَفُلُونَ ⑨

أُولَٰئِكَ مَا لَهُمْ النَّارُ بِمَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ⑩

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ يَهْدِيهِمْ رَبُّهُمْ
بِأَيِّمَا نَهْمُ تَجْرَى مِنْ تَحْتِهِمُ الْأَنْهَارُ فِي جَنَّاتِ
النَّعِيمِ ⑪

دَعْوُهُمْ فِيهَا سُبْحَانَكَ اللَّهُمَّ وَتَحِيَّاتُهُمْ فِيهَا سَلَامٌ
وَآخِرُ دَعْوَاهُمْ أَنِ الْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ⑫

وَلَوْ يَعْلَمُ اللَّهُ لِلنَّاسِ الشَّرَّ اسْتِجَابَ لَهُمْ بِالْخَيْرِ
لَقَظِضَ إِلَيْهِمْ أَجْلَهُمْ فَندَرُ الَّذِينَ لَا يَرْجُونَ لِقَاءَنَا
فِي طُغْيَانِهِمْ يَعْمَهُونَ ⑬

注9 人間性の研究は次のような重要な事実を明らかにする。即ち、全ての人間の進歩は、希望と、畏敬という本能に密接に結びついているということである。我々の最高の努力は、この二つの本能のどちらかに鼓吹されている。ある人々の労働と汗は、利益と権力増大という希望の為であり、他の人々の作業は恐れのためである。この節では、これらの二つの階級の人々に「ラジャー」という言葉で訴えている。「ラジャー」とは、「望む者、恐れる者」の意味である (Lane)。

注10 神を崇拜することは、自発的であり本能によるものであるといえる。なぜなら、天上では物事の真実が人間を導くものとなり、人々はあらゆる神の所業は深い叡知に基づいていたことを理解する事となる。このことを理解すると、彼らは本能的自発的に、「アッラーに栄光あれ」と唱えるようになるのである。この節はまた、信ずる者達の行きつく先は、いつも幸福であることを示している。彼らは神の栄光を唱えることで、彼らの喜びを表現するのである。

注11 不信仰者達の行為は、禍が彼らにふりかかってくるのを求めているようなものである。しかし神はゆっくり罰せられる。もし神が不信仰者達の行為が受けるに値する程急いで彼らを罰していたなら、彼らはとうの昔に滅びてしまっていたことであろう。もし、「ハイール」という単語を、聖句の中にあるように「善」の意味にとるなら、この節は次の様な意味になると思われる。もし神が不信仰者達を、彼らの悪い行いのゆえに罰するのを、神が善を授けると同じ程の早さでなされるなら、不信仰者達は、とつに滅亡してしまっていたであろうに。

13. 人は災難に遭えば、或いは側臥し、或いは端坐し、或いは起立してわれらに祈る。されどわれらがその災難を彼より取り除くや、恰も災難に際してわれらに祈らざりしが如く、また己れの道を行く。このように則を越えたる者は己れの所業を正しいと思われしめらる。
14. 昔われらは、お前たちより前に幾多の世代を滅ぼしたり。使徒たちが明証を携えて彼等のところへ行けども、彼等^{これ}之を信ぜざりしが故なり。このようにわれらは罪人に報ゆ。(注12)
15. 然る後にわれらはお前たちをして彼等の後に地上を継がしめたり、これお前たちが如何に為すかを見んがためなり。
16. われらの明証が彼等に読誦されるや、われらと会見を待ち望まぬ者どもは、云う、「これと違ったクルアーンを持ち来れ、さもなくばこれを改竄せよ」と。云え、「我は自分勝手に改竄するを得ず。我はただ己れに啓示されたものに従うのみ。もし我主に背かば、莊嚴な日の刑罰を我は恐るる」と。(注13)
17. 云え、「もしアッラー欲したりせば、我はお前たちに之を誦せず、またアッラーは之をお前たちに教えざりしなり。この啓示が降

وَإِذَا مَسَّ الْإِنْسَانَ الضُّرُّ دَعَانَا لِجَنَّةٍ أَوْ قَاعٍ
أَوْ قَائِمَاءَ فَلَمَّا كَشَفْنَا عَنْهُ صُورَهُ مَرَّكَانَ لَمْ يَدْعُنَا
إِلَى صُورِ مَسَّهُ كَذَلِكَ زُيِّنَ لِلْمُسْرِفِينَ مَا كَانُوا
يَعْمَلُونَ ⑬

وَلَقَدْ أَهَلَكْنَا الْقُرُونُ مِنْ قَبْلِكُمْ لَمَّا ظَلَمُوا
وَجَاءَهُمْ رَسُولُهُمْ بِالْبَيِّنَاتِ وَمَا كَانُوا لِيُؤْمِنُوا
كَذَلِكَ نَجْزِي الْقَوْمَ الْمُجْرِمِينَ ⑭

ثُمَّ جَعَلْنَاكَ خَلِيفَ فِي الْأَرْضِ مِنْ بَعْدِهِمْ لِنَنْظُرَ
كَيْفَ تَعْمَلُونَ ⑮

وَإِذَا تَطَلَّ عَلَيْهِمْ آيَاتُنَا بَيِّنَاتٍ قَالَ الَّذِينَ لَا يَرْجُونَ
لِقَاءَنَا أَنْتَ بَقْرَانٌ غَيْرُ هَذَا أَوْ بَدَّلَهُ قُلْ مَا يَكُونُ
لِي أَنْ أَبْدِلَهُ مِنْ تِلْكَ آيٍ أَنْفُسِي إِنْ أَتَّبِعُ إِلَّا مَا يُوحَى
إِلَيَّ إِنِّي أَخَافُ إِنْ عَصَيْتُ رَبِّي عَذَابٌ يَوْمٍ عَظِيمٍ ⑯

قُلْ تَوَسَّاءُ اللَّهُ مَا تَكَلَّمْتُمْ عَلَيْكُمْ وَلَا أَدْرِكُهُ بِهِ ⑰

注12 懲罰は二種類ある。(1)自然の法則に違反する結果である懲罰と、(2)「シャリヤ」の掟が侮辱される時に生ずる懲罰とである。後者の懲罰は、人々が邪(よこしま)な生活を送っている時、又は、彼らの中から預言者が現れるのに人々は彼を拒み、彼の前にあらゆる種類の妨害をなす時、一民族の上にふりかかる。この種の懲罰は、ある種の特徴によって解り、他の懲罰の方は、たとえば、民族の興亡の様なものであるが、これらは自然の通常の法則に対する違反行為の結果として生ずるのである。

注13 「莊嚴な日の刑罰」は、一国家の災禍を暗示している。

注14 この節は、預言者の地位を主張する者の真实性を調べる為の確実な基準を具体的に表わしている。当然のことながら、ある行為の中で、習慣や気質を通して確信を得た人間が、善か悪かどちらかに大きく変化するには、非常に長い時間がかかる。それではイスラムの預言者は啓示を受ける前、全く公正な人間であったのに、いかにして突然べて人師に変わることができたのであろうか。そんな事はないのである。

る以前に我はお前たちと偕に過ごしたり。
お前たちまだ理解せざるか？」と。(注
14)

18. アッラーに反対して虚偽を作り出し、或いはその神兆を虚偽なりとする者より倍する
不義なる者があるか？ げに罪人は決して
栄えざるべし。(注 15)

19. 彼等はアッラーの代りに、害にも益にもな
らざるものを拝み、而して云う、「これ等の
神々はアッラーに対する我等の弁護者なり
と。云え、「お前たちは天地に在るアッ
ラーの知らざる何者かをアッラーに告げん
とするか？」と。聖なるかな、アッラーは
彼等がアッラーと併せ祀る神々の上に高く
いまし給う。(注 16)

20. 人類は初め一つの生活共同体なりしが、
(注 17) その後自らの間で互に意見を異に
せり。もし以前に汝の主より降されたる言
葉なかりせば、彼等の争論はすでに判決さ
れていたであらう。(注 18)

21. 彼等は云う、「何故に主より神兆が彼に降さ
れざるか？」と。云え、「不可視なものはた

قَدْ لَبِثْتُ فِيكُمْ عَمْرًا مِّن قَبْلِهِ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ⑮

مَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرَى عَلَى اللَّهِ كَذِبًا أَوْ كَذَّبَ بِآيَاتِهِ
إِنَّهُ لَا يَفْلَحُ السَّجِرُمُونَ ⑯

وَيَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ مَا لَا يَضُرُّهُمْ وَلَا يَنْفَعُهُمْ
وَيَقُولُونَ هَؤُلَاءِ شُفَعَاؤُنَا عِنْدَ اللَّهِ قُلْ أَتُتَّبَعُونَ
اللَّهُ إِنَّمَا لَا يَعْلَمُ فِي السَّمَوَاتِ وَلَا فِي الْأَرْضِ سُبْحَنَهُ
وَنُفَعَالَى عَمَّا يُشْرِكُونَ ⑰

وَمَا كَانَ النَّاسُ إِلَّا أُمَّةً وَاحِدَةً فَاخْتَلَفُوا وَلَوْلَا
كَلِمَةٌ سَبَقَتْ مِن رَّبِّكَ لَفَقَضَى إِلَيْهِمْ فِيمَا فِيهِ
يَخْتَلِفُونَ ⑱

وَيَقُولُونَ لَوْلَا أُنزِلَ عَلَيْهِ آيَةٌ مِّن رَّبِّهِ فَقُلْ إِنَّمَا

注 15 この節は、二つの永遠の真実を照らし出している。(a)神について嘘を作り上げたり、神の使者達を排斥したり反対したりする者達は、神の懲罰から決して逃れることは出来ない。(b)べてん師や偽りの預言者達は、彼らの伝道に成功することは出来ない。

注 16 偶像崇拜の真の原因は、彼らの創り出した偶像の目的を間違えて理解してしまった所にある。偶像崇拜者は、人間と神の美德又、彼自身の生まれながらにして神から授かった偉大な収容力と素質と間違った概念を持っている。彼は、仲介物の助けなしでは神への道がない。とか、神は、すでに神に近づいた者の仲介を通してでなければ人間の所に降りたもうことではない、という愚かな信念をいだいているのである。イスラム教はこれらの観念に両方とも極度に反対するものである。

注 17 彼らはよこしまな考えで、神の預言者達に反対して一致団結したのであった(2章 214節参照)。

注 18 この言葉は、次の意味のうちの一つあるいは全てを示す可能性がある。即ち、(a)神は、正しい道を見つける能力を人に与え、啓示された指導を通してそこへの方向を示されたが、彼らはその道を捨て、誤った方向に落ちてしまった。(b)人は、神の使者達を通して正しい道をいつも示されているのだが、人間達の中で、意見を異にし続けているのである。(c)神よりの使者達に反対して、不信仰者達はいつも同じ道をたどり、こうして一つの共同体を形成するのである。古来ずっと、彼らは神よりの使者達に反対し、意見を異にしていたのである。(2章 214節参照)

だアッラーにのみ属す。されば待て、我もお前たちとともに待つ者なり」と。(注19)

第三項

22. 災難に遭いたる後にわれらが人々に慈悲を味わしむると、彼等は却つてわれらの神兆に対してよからぬ企みをなす。(注20) 云え、「アッラーの方が策謀においてはより迅速なり」と。げにわれらの使徒たちはお前たちの企みをすべて記録す。
23. 彼こそはお前たちを陸に海に旅せしむお方なり。お前たち船に乗るや、和風彼等を運び、彼等之を喜ぶ。然れども暴風忽ち船を襲い、波浪四方より迫り来たればもはやこれまでと思い、彼等は自らの宗教を浄化してアッラーに祈って云う、「汝もし我等を之より救わば、我等必ず感謝を捧げる者たらん」と。(注21)
24. 然れども彼等救い出されるや、見よ、彼等は地上において不法にも不行跡を行う。汝等よく聞け、お前たちの不行跡は現世の享樂を求めて己れ自身を害するに過ぎず。然る後にお前たちはわれらが許に帰る。その時われらはお前たちに、お前たちの為せしことを語り聞かせん。

الْغَيْبِ لِلَّهِ فَاتَّطَرَّعُوا إِلَيَّ مَعَكُمْ مِنَ النَّاتِقِينَ ﴿٢٠﴾

وَإِذَا أَدَقْنَا النَّاسَ رَحْمَةً مِنْ بَعْدِ ضَرَّاءَ مَسَّتْهُمْ
إِذَا لَهُمْ مَكْرٌ فِي آيَاتِنَا قُلِ اللَّهُ أَسْرَعُ مَكْرًا إِنَّ
رُسُلَنَا يَكْتُبُونَ مَا نَكْذِبُونَ ﴿٢١﴾

هُوَ الَّذِي يُسَيِّرُكُمْ فِي الْبَرِّ وَالْبَحْرِ إِنْ أَنْتُمْ
فِي الْفَلَكَ وَجَرَيْنَ بِهِمْ بِرِيحٍ كَثِيرَةٍ وَفَرَحُوا بِهَا
جَاءَتْهَا رِيحٌ عَاصِفٌ وَجَاءَهُمُ الْمَوْجُ مِنْ كُلِّ
مَكَانٍ وَظَنُّوا أَنَّهُمْ أُحِيطَ بِهِمْ دَعَوُا اللَّهَ مُخْلِصِينَ
لَهُ الدِّينَ هَ لَئِنْ أَنْجَيْنَا مِنْ هَذِهِ لَنُكَوِّنَنَّ مِنَ
الشَّاكِرِينَ ﴿٢٢﴾

فَلَمَّا أَنْجَيْنَاهُمْ إِذَا هُمْ يَبْعُونَ فِي الْأَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ
يَا أَيُّهَا النَّاسُ إِنَّمَا بُغِيْتُكُمْ عَلَى أَنْفُسِكُمْ مَتَاعَ الْحَيَاةِ
الدُّنْيَا ثُمَّ إِلَيْنَا مَرْجِعُكُمْ فَنُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ
تَعْمَلُونَ ﴿٢٣﴾

注19 この節は、不信仰者達が、早く懲罰が来ないのかと要求するのに対しての効果ある回答を含んでいる。モハammad預言者は、彼らに次のように云うようにお告げを受けた。恐るべき懲罰の到来が遅れていることに苛立つべきは、彼らではなく、モハammad預言者自身である。というのは、この遅れによってあざけりにさらされているのはモハammad預言者であって、モハammad預言者が神の命令を辛抱強く待っているのに、彼らが待てないというのは、いかなることかと。

注20 慈悲は神からもたらされるが、不遇は己れの邪悪な行為の結果である。

注21 心地良い風が時に激しい強風となって、広範囲の破壊を招くように、不信仰者達に許されている一時の休息は、彼らの破壊への前奏曲となるかもしれない。この明白な真実を不信仰者達に痛感させる為に、航海の安楽と危険に彼らの注意を引くのである。

25. げに^{うつしよ}現世の生活は、譬^{たと}うれば、われらが天上より降す雨の如し。人や家畜が食する地上の産物は雨とよく混り、大地がその装飾を身にまとい美しく装いをこらすや、そこに住む人間は大地を支配せりと思う。^{しか}然れどもわれらの命令が昼夜の別なく一たび下れば、昨日までのものはなきが如く刈り入れの跡と変ぜせしむ。われらはかくの如く反省する人々のためにもろもろの神兆を説きあかす。(注22)
26. アッラーは平安の住居に召し給い、お気に召すものを正しき道に導き給う。
27. 善行を為せる者には、こよなき報奨^{おほて}と、これに加うるに祝福あるべし。彼等の面には暗さも屈辱の蔭もなし。彼等こそは樂園の住人、その中に永遠に住まん。
28. ^{しか}然るに悪事を為せる者には、その悪事に見合う応報ありて屈辱に覆われるべし。何人もアッラーの怒りから彼等を守らざるべし。されば彼等の面はさながら夜の暗闇に覆われたる如くなるべし。彼等こそは業火の住人、その中に永遠に留まらん。(注23)
29. われらが彼等を皆ともに集めんその日を忘れまいぞ、われらはそこで神に他神^{あがしがみ}を配したる徒輩に云わん、「己が場所に控えおれ、お前たち並びに他神^{あがしがみ}たちは」と。然る後にわれらは両者の間を隔つべし。すると他神^{あがしがみ}たちは云わん、「お前たちが崇拜せしは我等に非らざりしか？」

إِنَّمَا مَثَلُ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا كَمَاءٍ أُنْزِلَتْهُ مِنَ السَّمَاءِ فَأَخْتَلَجُ بِهِ نَبَاتَ الْأَرْضِ مِمَّا يَأْكُلُ النَّاسُ وَالْأَنْعَامُ حَتَّى إِذَا أَخَذَتِ الْأَرْضُ زُخْرُفَهَا وَازَّيَّنَتْ وَظَنَّ أَهْلُهَا أَنَّهُمْ قَدِرُونَ عَلَيْهَا أَتَاهَا أَمْرُنَا لَيْلًا أَوْ نَهَارًا فَجَعَلْنَاهَا حَصِيدًا كَأَن لَّمْ تَكُنْ بِالْأَمْسِ كَذَلِكَ نُفَصِّلُ الْآيَاتِ لِقَوْمٍ يَتَفَكَّرُونَ ﴿٢٥﴾
وَاللَّهُ يَدْعُو إِلَى دَارِ السَّلَامِ وَيَهْدِي مَنْ يَشَاءُ إِلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿٢٦﴾

لِلَّذِينَ أَحْسَنُوا الْخُسْنَ وَزِيَادَةً ۖ وَلَا يَرَهُنَّ وَجُوهُهُمْ قُتُورٌ وَلَا ذُلٌّ ۚ أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ الْجَنَّةِ ۖ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٢٧﴾
وَالَّذِينَ كَسَبُوا السَّيِّئَاتِ جَزَاءُ سَيِّئَةٍ بِمِثْلِهَا ۖ وَتَرْهَقُهُمْ ذِلَّةٌ ۚ مَا لَهُمْ مِنَ اللَّهِ مِنْ عَاصِمٍ ۚ كَانَتْ أَعْيُنُهُمْ فِي غُمَّةٍ وَقَطَاعٌ مِّنَ الْأَيْلِ مُظْلِمًا ۚ أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ النَّارِ ۖ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٢٨﴾

وَيَوْمَ نَحْشُرُهُمْ جِجَعًا ثُمَّ نَقُولُ لِلَّذِينَ أَشْرَكُوا مَكَانَكُمْ أَنْتُمْ وَشُرَكَاؤُكُمْ فَزَيَّلْنَا بَيْنَهُمْ وَقَالَ شُرَكَاؤُهُمْ مَا كُنْتُمْ إِلَّا نَا عِبْدُونَ ﴿٢٩﴾

注22 たとえ話の中の教訓では、民族がおごり、空となり、命を軽々しく取るようになると、彼らの衰退は始まり、ちゆう落してゆくのである。

注23 この節はいくつかの重要な真実を表わしている。(a)善の報いはいろいろある(前の節参照)が、悪の報いは、悪と似通ったものだけである。(b)神の掟を破る者達は、高い理想と高潔な野心に鼓吹されることがなくなり、あらゆる指導力を失くし、決して指導者になることを望まず、単に他人の模倣者となるのである。(c)

30. 我等とお前たちの関係はアッラーの御証言で充分なり。我等はお前たちの崇拜を毫も気づかざりき」と。

فَكْفَى بِاللَّهِ شَهِيدًا بَيْنَنَا وَبَيْنَكُمْ إِن كُنَّا عَنْ عِبَادَتِكُمْ لَغْفِيلِينَ ﴿٣٠﴾

31. そこにて各人は先に経験せし行為の何んたるかを悟らん。而して彼等の真正の主たるアッラーの許に引戻され、彼等が捏造せるすべては消滅せん。(注24)

هَذَا لَكَ تَبْلَاؤُ كُلِّ نَفْسٍ مَّا أَسْلَفَتْ وَرُدُّوْا إِلَى اللَّهِ مَوْلَاهُمُ الْحَقُّ وَضَلَّ عَنْهُمْ مَا كَانُوا يَفْتَرُونَ ﴿٣١﴾

第四項

32. 云え、「お前たちのために天地より食物を供給するは誰ぞ？ また、誰が耳や目に権能を授け給うたるや？ 死から生を興し、生に死をもたらす者は誰ぞ？ 万物を摂理するは誰ぞ？ 彼等は云わん、「アッラーなり」と。然らば云え、「お前たちアッラーの保護を請わざる気か？」と。

قُلْ مَنْ يَرْزُقُكُمْ مِنَ السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ أَمَّن يَمْلِكُ السَّمْعَ وَالْأَبْصَارَ وَمَنْ يُخْرِجُ الْحَيَّ مِنَ الْمَيِّتِ وَيُخْرِجُ الْمَيِّتَ مِنَ الْحَيِّ وَمَنْ يَدْبُرُ الْأُمُورَ فَسَيَقُولُونَ اللَّهُ فَقُلْ أَفَلَا تَتَّقُونَ ﴿٣٢﴾

33. このような御方こそお前たちの真正の主アッラーなり。真理を捨てたる後に残るものは迷誤に非ずして何ぞ？ 然るにお前たちは何故に真理から顔を背けるのか？

فَذَلِكُمْ اللَّهُ رَبُّكُمُ الْحَقُّ فَمَاذَا بَعَدَ الْحَقِّ إِلَّا الضَّلَالُ فَأَنَّى تُصَوِّفُونَ ﴿٣٣﴾

34. かくして、反逆の徒輩は信ぜざるべしと云える主の言葉は真実となれり。

كَذَلِكَ حَقَّتْ كَلِمَتُ رَبِّكَ عَلَى الَّذِينَ فَسَقُوا أَنَّهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿٣٤﴾

35. 云え、「お前たちの偶像神の中で、誰が創造を起し、然る後に之を繁殖させ得るか？」と。云え、「創造を起し、然る後に之を繁殖させ得るは、ただアッラーのみ。然るにお前たち何故に背き去るのか？」と。(注25)

قُلْ هَلْ مِنْ شُرَكَائِكُمْ مَنْ يَبْدُو الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ قُلِ اللَّهُ يَبْدُو الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ فَأَنَّى تُؤْفَكُونَ ﴿٣٥﴾

この様に墮落し、神の怒りを招いてしまうと、彼らは神の救いを失くしてしまう。(d)悪事を行う者達の不正行為と罪は、長く隠しておくことはできないし、遅かれ早かれあばかれるのである。

注24 この世で、完全に物の真実を理解し、悟ることは人には与えられていない。あらゆる物からおおいが完全に取り除かれ、その物の真の姿が明らかにされるのは、次の世においてのみである。

注25 創造主の真の試練は、神がすでに作りたもうた物を、再び作ることができる能力である。さもなくば批判は重大な反対となり、どんなべてん師にもすることができてしまう。この神性の試練を規定した後で、この節は偶像崇拜者達に尋ねる。彼らが神と呼んでいる者達の中で、誰がこの創造と、この世の初めから働き続けている再生のシステムの創り主であるのかと。

36. 云え、「お前たちの偶像神の中で、誰が真理に導くか？」と。云え、「真理に導く者はアッラーなり。然らば真理に導き給う御方の方が追従うに値するの、それとも己れ自身が導かれずば道を知らざる者に追従うべきなのか？ どうしたのか？ 汝等如何に判断するや？」と。

37. 彼等の多くはただ憶測に従うのみ。真理の前には憶測は断じて何んの役にも立たず。げにアッラーは彼等の所業を知悉し給う。(注 26)

38. このクルアーンはアッラー以外の者によって案出されたものに非ず。それどころか、それ以前に在りし啓示の不足を満たし、完全なる法の闡明なり。そは疑う余地なきものぞ。万物の主より下し賜われるものなり。

39. 彼等が「彼之を捏造したるか？」と云うならば、云え、「然らばこれに類する一章を作り、アッラー以外にお前たちが見いだし得る者に助けを求めよ、もしお前たちの言葉が真実ならば」と。(注 27)

40. いや彼等は、自分たちが理解し得ざりしもの、並びに未だその深い意味を示されざる故をもって拒否けたり。だが見よ不義者の末路が如何なるものなりしかを！

41. 彼等の中の或る者は之を信じ、また他の者は之を信ぜず、されど主は害悪をなせる者を熟知し給う。

第五項

42. もし彼等が汝を嘘つきよばわりするならば、云え、「我が所業は我がため、お前たち

قُلْ هَلْ مِنْ شُرَكَائِكُمْ مَنْ يَهْدِي إِلَى الْحَقِّ قُلْ
اللَّهُ يَهْدِي لِلْحَقِّ أَفَمَنْ يَهْدِي إِلَى الْحَقِّ أَحَقُّ
أَنْ يُتَّبَعَ أَمْ لَا يَهْدِي إِلَّا أَنْ يَهْدِيَ مَا لَكُمْ
كَيْفَ تَحْكُمُونَ ﴿٣٦﴾

وَمَا يَتَّبِعُ أَكْثَرُهُمْ إِلَّا ظَنًّا إِنَّ الظَّنَّ لَا يُغْنِي
وَمَنِ الْحَقُّ شَيْئًا إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ بِمَا يَفْعَلُونَ ﴿٣٧﴾

وَمَا كَانَ هَذَا الْقُرْآنُ أَنْ يُفْتَرَى مِنْ دُونِ اللَّهِ
وَلَكِنْ تَصْدِيقُ الَّذِي بَيْنَ يَدَيْهِ وَتَفْصِيلُ الْكِتَابِ
لَا رَيْبَ فِيهِ مِنْ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٣٨﴾

أَمْ يَقُولُونَ افْتَرَاهُ قُلْ فَأْتُوا بِسُورَةٍ مِثْلِهِ وَادْعُوا
مَنْ اسْتَطَعْتُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٣٩﴾

بَلْ كَذَّبُوا بِمَا لَمْ يُحِيطُوا بِعِلْمِهِ وَلَمَّا يَأْتِهِمْ تَأْوِيلُهُ
كَذَلِكَ كَذَّبَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ
عَاقِبَةُ الظَّالِمِينَ ﴿٤٠﴾

وَمِنْهُمْ مَنْ يُؤْمِنُ بِهِ وَمِنْهُمْ مَنْ لَا يُؤْمِنُ بِهِ
وَرَبُّكَ أَعْلَمُ بِالْمُفْسِدِينَ ﴿٤١﴾

وَإِنْ كَذَّبُوكَ فَقُلْ لِي عَمَلِي وَلَكُمْ عَمَلُكُمْ أَنْتُمْ

注 26 アッラー以外の神々を信じる者達が持つ信念と見解は、単に空想と推測から生じたものである。彼らがいわゆる神とよんでいる者達は、彼らに何ら指針を明示したことがなかったからである。

注 27 この節は、不信仰者達に挑戦している。クルアーンが持っているような優秀さを備えた本が、もし人が捏造できるような物であるならば、なぜ彼らは自分達で同様のものを作成しないのか。この挑戦はあらゆる時代にある (44 も参照)。

の所業はお前たちのため。お前たちは我が
所業しかわりに関係なく、我はお前たちの所業に
関係なし」と。

43. 彼等の中には汝に耳を傾ける者あり。然れ
ども理解し得ぬ聾者ろうしやをして聴かしめんとす
るか？
44. また、彼等の中には汝に目を向ける者あり。
然れどもよしや彼等見えずとも、その盲を助
け導かんとするか？
45. げにアッラーは決して人を害さず、害する
は、人己れ自らなり。
46. アッラーが彼等を召し寄せ給う口、彼等は
ただ白昼の一刻を墓穴の中で待ちたるかの
如く思わん。彼等は互に相い認めん。アッ
ラーとの会見を否定し、嚮導きようどうに従わざりし
者は確かに失敗者なり。(注28)
47. われらが彼等に威嚇せることの幾つかの履
行を汝の生涯のうちに見せようとも、また
見せる前に汝をわれらが許に召し寄せよう
が、どのみち彼等はわれらがところへ帰る
なり。されば汝、来世においても予言の履
行を知るべし。アッラーは彼等が為せるす
べてについて立証す。(注29)
48. どの民族にも一人の使徒あり。されば使徒
が現れ出れば彼等は公正に裁かれ、不当に
遇せられることなし。(注30)

بَرِيُونَ وَمِمَّا عَمِلُوا أَنَا بَرِيٌّ مِمَّا تَعْمَلُونَ ﴿٣٧﴾

وَمِنْهُمْ مَنْ يَسْتَمِعُونَ إِلَيْكَ أَفَأَنْتَ تَسْمِعُ الصُّمَّ
وَلَوْ كَانُوا لَا يَفْقَهُونَ ﴿٣٨﴾

وَمِنْهُمْ مَنْ يَنْظُرُ إِلَيْكَ أَفَأَنْتَ تَهْدِي الْعُمْيَ
وَلَوْ كَانُوا لَا يَبْصُرُونَ ﴿٣٩﴾

إِنَّ اللَّهَ لَا يَظْلِمُ النَّاسَ شَيْئًا وَلَكِنَّ النَّاسَ
أَنفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ ﴿٤٠﴾

وَيَوْمَ يَحْشُرُهُمْ كَأَن لَّمْ يَلْبَثُوا إِلَّا سَاعَةً مِّنَ
النَّهَارِ يَتَعَارَفُونَ بَيْنَهُمْ قَدْ خَسِرَ الَّذِينَ كَذَبُواْ
بِلِقَاءِ اللَّهِ وَمَا كَانُوا مُهْتَدِينَ ﴿٤١﴾

وَأَمَّا نُرِيَنَّكَ بَعْضَ الَّذِي نَعِدُهُمْ أَوْ نَتَوَقَّعَنَّكَ فَالِئِنَّ
مَرْجِعَهُمْ لَمَّا اللَّهُ شَهِيدٌ عَلَىٰ مَا يَفْعَلُونَ ﴿٤٢﴾

وَلِكُلِّ أُمَّةٍ رَّسُولٌ فَإِذَا جَاءَ رَسُولُهُمْ قُضِيَ بَيْنَهُمْ
بِالْقِسْطِ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ﴿٤٣﴾

注28 不信仰者達のことは、クルアーンの中で、ただ昼間の一時間だけこの世界にいたと何回も述べられてきた。それらの節の中では全て、その事は文字通りこの世に実際にいた時間のことではなく、暗黙のうちに定められている世俗的な用事や、怠けた仕事に費やした時間のことである。彼らは仕事を怠けて人生を無駄に使ったので、たとえ彼らが実際は何年も生きたとしても、彼らはこの世にたった一日しか生きていなかったといわれるのは正当であろう。

注29 この節は、重要な原則を定めている。迫り来る懲罰についてのおどしと警告から成っている預言は、取り消されることがある。一方、一般的な特性を持った約束を含んでいる預言で、特定の預言者に依頼するのではなく、全ての預言者達に依頼する一般的掟を具体化している預言は、取り消されたり無効になったりしない。この節は、更に、全ての預言者が実現されるまでに時間制限が必要のないことを示唆するのである。

注30 この節は律法を定める預言者に関係していると考えられる。なぜなら、全ての宗教上の律法は、律法を制定する預言者が礎を築いているからである。

49. 彼等は云う、「お前たちの言葉が真実ならば、この威嚇は何時履行されんや？」と。

50. 云え、「アッラー欲せざれば、我は己れの利害を掌握する力を有せず。(注31) それぞれの民に定められた期限あり。その期限至れば、彼等瞬時たりとも遅らすこと能わず、また早めることも能わず」と。

51. 云え、「我に教えよ、もし彼の懲罰が或いは夜に、或いは昼に急襲されたるとき、罪人はそれから如何にして逃げ出さん？(注32)

52. それがあなたたちに降りかかるに及んで初めてお前たちは之を信ぜんとするか？ 何事ぞ、今になって信ずるとは！ お前たちは以前、その到来の速かならんことを要求したではないか？」と。

53. その時不正を為したる者どもは、「永劫の刑罰を味わえ。お前たちは自ら稼ぎしものに対してのみ返報されるに非ずや」と云われん。

54. 彼等は汝に問わん、「そは真実なるか？」と。云え、「然り、主にかけて！ これは真実なり。お前たちはそれから逃ぐる能わず」と。(注33)

第六項

55. もし不義不正を行う者が地上の一切のものを所有したなら、必ずそれを以て罪を贖わんとせん。また刑罰を目のあたりにすれば、良心の苛責を表明せん。なれど審判は公正に下され、彼等は決して不当に遇せられることなかるべし。

وَيَقُولُونَ مَتَى هَذَا الْوَعْدُ إِن كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٤٩﴾

قُلْ لَا أَمْلِكُ لِنَفْسِي ضَرًّا وَلَا نَفْعًا إِلَّا مَا شَاءَ اللَّهُ لِكُلِّ أُمَّةٍ أَجَلٌ إِذَا جَاءَ أَجْلُهُمْ فَلَا يَسْتَأْخِرُونَ سَاعَةً وَلَا يَسْتَقْدِمُونَ ﴿٥٠﴾

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ أَتَاكُمْ عَذَابٌ بَيِّنًا أَوْ نَهَارًا مَاذَا يَسْتَغْجِلُونَ مِنْهُ الْمُجْرِمُونَ ﴿٥١﴾

أَتُحْسِنُونَ إِذَا مَا وَفَّعَ أَمْنُكُمْ بِهِ النَّاسَ وَقَدْ كُنْتُمْ بِهِ تَسْتَعْجِلُونَ ﴿٥٢﴾

ثُمَّ قِيلَ لِلَّذِينَ ظَلَمُوا ذُوقُوا عَذَابَ الْخُلْدِ هَلْ تُجْزَوْنَ إِلَّا بِمَا كُنْتُمْ تَكْسِبُونَ ﴿٥٣﴾

وَيَسْتَفْتِيكَ أَحَقُّ هُوَ قُلْ إِي وَرَبِّي إِنَّهُ لَحَقٌّ ﴿٥٤﴾ وَمَا أَنْتُمْ بِمُعْجِزِينَ ﴿٥٥﴾

وَلَوْ أَنَّ لِكُلِّ نَفْسٍ ظَلَمَتْ مَا فِي الْأَرْضِ لَا فِدَتْ بِهَا وَأَسْرَوْا التَّدَامَةَ لَئِن رَأَوِ الْعَذَابَ لَفُضِّعَتْ بَيْنَهُمْ بِالْقِسْطِ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ﴿٥٥﴾

注31 この節は、不信仰者達の(前の節で述べた)懲罰についての要求に対する回答を表わしている。モハマドは、彼らに次の様に質問する様命じられる。彼が、彼自身に善をなしたり、彼から邪悪をそらしたりする力を一切持たない時に、どのようにして彼らの懲罰の要求を満たすことが出来るのかと。

注32 この節は、不信仰者達に対する非難になっている。彼らは、懲罰がいつ来るのかとか、どんな形かなど、無駄な議論にふけるべきではなく、彼らの人生に健全な変化を与えることによって、その懲罰から逃れる様努力すべきである。

注33 あなた達は、それから逃れることは出来ない。との意味。

56. 汝等知れ、およそ天地の間に存在するものはアッラーの所有なり。アッラーの約束は眞実なることを知れ！ 然るに大多数の者は之を知らず。

57. 生を与え死を賜う者は彼にして、お前たち皆いずれは彼の許に連れ戻されん。

58. おお人々よ！ 主よりお前たちに訓戒が降り、また心中の病いを癒す良薬と、信者への嚮導と慈悲とが。

59. 云え、「偏にアッラーの恩恵とその慈悲によりて。そこに、それによって、彼等を喜ばしめよ。それは彼等が秘蔵したものより優る」と。

60. 云え、「アッラーがお前たちに下し賜えたる食物のうち、お前たちは或るものを禁じ、或るものを合法となせり、このことをお前たち考えたことがあるのか？」と。云え、「アッラーがお前たちにそれを許し給うや、それともアッラーに対して虚偽を唱える気か？」と。（注34）

61. アッラーに対して虚偽を唱える者どもは復活の日を如何に恩案するや？ アッラーは人間に対して慈悲深くします、然るに彼等の大多数は感謝せず。

第七項

62. 汝が何かに携わり、クルアーンのいづかを誦し、またお前たちがどんな仕事をしよう、とお前たちがそれに夢中になっていることをわれらは監察す。また地に在り、天に在るものは、たとひ微塵の重さでも汝の主の日より逃れること能わず。それよりも

الْأَنَّا إِنَّا لِلَّهِ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ الْإِنَّا وَعَدَ اللَّهُ حَقًّا وَلَكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٥٧﴾

هُوَ يُحْيِي وَيُمِيتُ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٥٨﴾

يَا أَيُّهَا النَّاسُ قَدْ جَاءَكُمْ مَوْعِظَةٌ مِنْ رَبِّكُمْ وَشِفَاءٌ لِمَا فِي الصُّدُورِ وَهُدًى وَرَحْمَةٌ لِلْمُؤْمِنِينَ ﴿٥٩﴾

قُلْ بِفَضْلِ اللَّهِ وَبِرَحْمَتِهِ فَبِذَلِكَ فَلْيَفْرَحُوا هُوَ خَيْرٌ مِمَّا يَجْمَعُونَ ﴿٦٠﴾

قُلْ أَرَأَيْتُمْ مَا أَنْزَلَ اللَّهُ لَكُمْ مِنْ رِزْقٍ فَجَعَلْتُمْ مِنْهُ حَرَامًا وَحَلَالًا قُلْ اللَّهُ آذِنَ لَكُمْ أَمْ عَلَى اللَّهِ تَفْتَرُونَ ﴿٦١﴾

وَمَا ظَنُّ الَّذِينَ يَفْتَرُونَ عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ يَوْمَ الْقِيَامَةِ إِنَّ اللَّهَ لَذُو فَضْلٍ عَلَى النَّاسِ وَلَكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَشْكُرُونَ ﴿٦٢﴾

وَمَا تَكُونُ فِي شَأْنٍ وَمَا تَتْلُوا مِنْهُ مِنْ قُرْآنٍ وَلَا تَعْمَلُونَ مِنْ عَمَلٍ إِلَّا كُنَّا عَلَيْكُمْ شُهُودًا إِذْ تُفِيضُونَ فِيهِ وَمَا يَعْزُبُ عَنْ رَبِّكَ مِنْ مِثْقَالِ ذَرَّةٍ فِي الْأَرْضِ

注34 飲食は人間が第一に必要なとする物であり、この点で人を導くことは宗教の最初の義務である。しかしながら、ある物は律法にかなひ、他の物は律法にかなわないと宣言するのには、医学的、道徳的、宗教的な根拠が当然である。イスラム教はこの点必要な教訓を規定しているのである。

小なるものも、或いは大なるものも逃れられず、悉く載せて明典の中にあり。(注 35)

63. 見よ、アッラーが愛護する者は、恐怖もなければ悲哀もなからん——(注 36)

64. 信仰する者並びに正義を守る者は——

65. 彼等には、現世においても来世においても朗報あり。アッラーのお言葉には変更なし。そは大成功ぞかし。

66. 彼等の言葉に汝心を痛めることなかれ。権能栄誉は悉くアッラー所有なり。彼はすべてを聴き、すべてを知り給う。(注 37)

67. 見よ、天に在るもの地に在るもの皆アッラーの所有なり。アッラー以外に他の神々を祈る者は、実に併せ祀りし神々に従うに非ず。彼等はただ憶測に従うに過ぎず、推測するのみ。

68. 彼こそはお前たちの休息のために夜を設け、また仕事に従事するための光り輝く昼を設け給うた御方なり。此の中には神託に耳を傾ける人々へのさまざまなる神兆あり。(注 38)

وَلَا فِي السَّمَاءِ وَلَا أَصْغَرَ مِنْ ذَلِكَ وَلَا الْكَبَرِ إِلَّا فِي كِتَابٍ مُبِينٍ ١١

إِلَّا إِنْ أَوْلِيَاءَ اللَّهِ لَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ١٢

الَّذِينَ آمَنُوا وَكَانُوا يَتَّقُونَ ١٣

لَهُمُ الْبُشْرَىٰ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَفِي الْآخِرَةِ لَا تَبْدِيلَ لِكَلِمَاتِ اللَّهِ ذَلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ١٤

وَلَا يَحْزَنكَ قَوْلُهُمْ إِنَّ الْعِزَّةَ لِلَّهِ جَمِيعًا هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ١٥

إِلَّا إِنْ لِلَّهِ مَنْ فِي السَّمَوَاتِ وَمَنْ فِي الْأَرْضِ وَمَا يَتَّبِعُ الَّذِينَ يَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ شُرَكَاءَ إِنْ يَتَّبِعُونَ إِلَّا الظَّنَّ وَإِنْ هُمْ إِلَّا يَخْرُصُونَ ١٦

هُوَ الَّذِي جَعَلَ لَكُمْ آيَاتٍ لَتَسْكُنُوا فِيهِ وَالنَّهَارُ مُبْصِرٌ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يَعْلَمُونَ ١٧

注 35 ある物は、小さいがゆえに隠れたままになっている一方、大きい為に、一部分が隠れているような物もある。神の視力は、非常に鋭く見抜く為に、どんな物も、いかに小さくとも、神から隠れていることは出来ないし、神の視力は非常に理解力がある為に、大きい物であっても、その物の一部分たりとも神の視野から逃れることは出来ないのである。

注 36 「恐れ」は人の未来の行動に、「悲しみ」は人の過去の行動に関連しているのである。

注 37 6 節では神の友は決して悲しまないと云われたが、ここではモハammadは悲しまないよう命ぜられている。事実、モハammadの悲しみは、自分の為ではなく、他の人の為であった。彼は悲しみの声をあげたのも涙を流したのも人類の為であった(18 章 7 節参照)。

注 38 夜は、人の疲れきった身体が回復するのに必要な時間であり、次の日の仕事に備えるためのものであるのと同様に、民族の生活の中で、不景気で停滞している期間というのは、彼らの休息と回復の為の時間となり、人々は気持ちを新たに、新たな活力を吹き込むことによって未来の仕事の準備を整えるのである。

69. 彼等は云う、「アッラーは子を生み給うた」と。彼に讃えあれ！ 彼は自ら満ち足り給う。天に在るもの地に在るもの悉くアッラーに属す。お前たちはこの件に関してなんの権威も有せず。お前たち知らざるくせに、アッラーについて語る気か？（注39）

70. 云え、「アッラーについて虚偽を案出する者どもは、断じて幸いなるべし」と。

71. 彼等は此の世で末の間の享樂に浴さん。なれどその後われらが許に帰る。その時われらは彼等に厳刑酷罰を味わしめん、信ぜざりしが故に。

第八項

72. 彼等にノアの物語を誦んで聞かせよ。すなわち彼がその民に向って云えり、「おお我が民よ、もしもわしが神とともにいることが気にさわるなら、またアッラーの神兆に基づいてお前たちに義務を喚起することが気にさわるなら——わしはアッラーに一切を任せる——さればお前たちその併せ祀る神々とともにその陰謀を奮い起こせ。お前たちの行動を躊躇するなかれ。わしに対してお前たちの陰謀を断行し、猶予を与えるなかれ。（注40）

73. たといお前たちが背を向けるとも、わしはお前たちから報酬を請う者に非ず。我が報酬はアッラーの許にあり。而して我はアッ

قَالُوا اتَّخَذَ اللَّهُ وَلَدًا سُبْحَنَهُ هُوَ الْعَزِيزُ لَهُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ إِنْ عِنْدَكُمْ مِنْ سُلْطٰنٍ بِهٰذَا أْتَقُولُونَ عَلَى اللَّهِ مَا لَا تَعْلَمُونَ ﴿٣٩﴾

قُلْ إِنْ الَّذِينَ يَقْتُرُونَ عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ لَا يَقْلِحُونَ ﴿٤٠﴾

مَتَاعٌ فِي الدُّنْيَا ثُمَّ إِلَيْنَا مَرْجِعُهُمْ ثُمَّ نَذِيقُهُمُ الْعَذَابَ الشَّدِيدَ بِمَا كَانُوا يَكْفُرُونَ ﴿٤١﴾

وَأَنذِرْ عَلَيْهِمْ بَأْسَ نُوحٍ إِذْ قَالَ لِقَوْمِهِ يٰعَوْمِرَ إِنْ كَانَ كِبَرٌ عَلَيْكُمْ مَّقَامِي وَتَذَكِيرِي بِآيَاتِ اللَّهِ فَعَلَى اللَّهِ تَوَكَّلْتُ فَأَجِيعُوا أَمْرَكُمْ وَشُرَكَاءُكُمْ ثُمَّ لَا يَكُنْ أَمْرَكُمْ عَلَيْكُمْ عِمَّةً ثُمَّ اقْضُوا إِلَيَّ وَلَا تُنْظِرُونِ ﴿٤٢﴾

فَإِنْ تَوَلَّيْتُمْ فَمَا سَأَلْتُكُمْ مِنْ أَجْرٍ إِنْ أَجِرِيَ إِلَّا

注39 (a)神は、衰えと死という法則を免れている。それ故、神の仕事を引き継ぐべき息子を必要としないのである。(b)神は、自ら満ち足りたお方である故に、神が宇宙の事柄をなす時の助けとなる息子を必要としないのである。(c)“アッラーは子を生み給うた”という教義は、いかなる確証にももたづいていないし、怠かな哲學的推量や臆測をはるかに越えるものでもない。

注40 あとの節で述べられるノアとモーゼとヨナの三預言者達の記述を注意深く精読すると、彼らの人生の話はモハammadの人生に集約されていることがわかる。モハammadはメッカでノアの、またメディナでモーゼの、そして再び戻ったメッカではヨナの役を勤めたのである。このことは、クルアーンで述べられている預言者達の記述が単なる物語ではなく、モハammadの人生に起こる予定であった重大な出来事についての偉大な預言となっていることを十分に表わしている。

ラーに身を任せる者たるべきことを命ぜられたり」と。(注41)

74. 然るに彼等は彼を拒みし故に、われらは彼と、彼と偕にある人々を箱舟に救いたり。われらは彼等をわれらが寵愛の相続者たらしめ、われらの神兆を否認した者どもは皆溺れしめたり。されば見よ、警告されたる者の末路が如何に惨たるかを！

75. 斯くて彼の後に、われらはそれぞれの民に使徒たちを遣わし、彼等に明証を齎せり。然れども彼等は以前にそれを拒否したが故に、それを信じようと欲せざりき。かくの如くわれらは罪人の心を堅く閉ざす。(注42)

76. 斯くてわれらは彼等の後に、モーゼ並びにアロンにわれらの神兆を託してファラオ並びにその長老たちのところへ遣わしたり。然れども彼等尊大に振舞いたり。彼等は罪深い民なりき。

77. われらより真理が彼等に至るや、彼等は云う、「こは明白なる魔術なり」と。(注43)

78. モーゼは云えり、「真理がお前たちに至るや、かくの如き言葉を云うか？ 魔術とな？ 魔術師は栄えざるべし」と。

عَلَى اللَّهِ وَأُمِرْتُ أَنْ أَلُونَ مِنَ الْمُسْلِمِينَ ﴿٤٣﴾

فَكَذَّبُوهُ فَذُجِبَتْهُ وَمَنْ مَعَهُ فِي الْفَلَاحِ وَجَعَلْنَاهُمْ خَلِيفَ وَأَغْرَقْنَا الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُتَكَبِّرِينَ ﴿٤٤﴾

ثُمَّ بَعَثْنَا مِنْ بَعْدِهِ رَسُولًا إِلَى قَوْمِهِمْ فَجَاءَهُمْ بِالْبَيِّنَاتِ مِمَّا كَانُوا يُؤْمِنُونَ بِمَا كَذَّبُوا بِهِ مِنْ قَبْلُ ۚ كَذَلِكَ نَطْغِي عَلَى قُلُوبِ الْمُتَكَبِّرِينَ ﴿٤٥﴾

ثُمَّ بَعَثْنَا مِنْ بَعْدِهِم مُوسَى وَهَارُونَ إِلَى فِرْعَوْنَ وَمَلَئِهِ بِآيَاتِنَا فَاسْتَكْبَرُوا وَكَانُوا قَوْمًا مُجْرِمِينَ ﴿٤٦﴾

فَلَمَّا جَاءَهُمُ الْحَقُّ مِنْ عِنْدِنَا قَالُوا إِنَّ هَذَا سِحْرٌ مُبِينٌ ﴿٤٧﴾

قَالَ مُوسَى اتَّقُوا اللَّهَ الَّذِي تَسَاءَلُونَ لِلْحَقِّ لَمَّا جَاءَكُمْ ۚ إِنَّكُمْ لَشُعْرُهَذَا وَلَا يُفْلِحُ الشَّارِكُونَ ﴿٤٨﴾

注41 神の預言者達に対して、いつも出される意義は、彼らは、自分達の指導権の下に新しい政治制度を確立しようと、すでに存在している政治制度に対する反逆の基準を引き上げ、彼らの同胞を支配しようともくろむというものである。この根拠のないとがめは、この節の中で反ばくされている。神の預言者達は決して自己の権力増大を求めはしない。それどころか、苦しみと奉仕の道を選ぶのである。

注42 神は、独断的に不信仰者達の心を封印したりはなさらない。がんこで不正に神の言葉に耳を傾けることを拒んで、真実を見て受け入れる能力を捨て去るのは不信仰者達自身である。彼らは自分自身で邪惡の運命を作り上げているのである。

注43 明白なる魔術(シイフルとムビーン)という二つの簡単な単語の中には、神の預言者達の敵が、彼らを敗北させ、くじかせるのに使う、殆んど全ての策略と陰謀が隠されている。真実の敵達は、宗教心の篤い人々に新しい教えはその土地の宗教を腐敗させるような魔術やごまかし以外の何ものでもないと言う。一方心の底では国の物質的利益を求めると告白する愛国者達には、新しい教えを受け入れると、国の中の異なる共同体の間で紛争や不協和が生じ、国の団結に致命的な打撃を与えると云うので、彼らは恐れて新しい教えから逃げ去るのである。

79. 彼等は云えり、「汝が来たるは、我等の父祖の奉ぜし信仰から我等を背かしめんがためなるか、而してお前たち兄弟はこの国を支配せんと欲するか？されど我等はお前たち兩名を信じはせぬ」と。

قَالُوا اٰجْتَنَّا لِتَلْفِتَنَا عَمَّا وَجَدْنَا عَلَيْهِ اٰبَاءَنَا وَتَكُوْنُ لَكُمُ الْكِبْرِيَاءُ فِي الْاَرْضِ وَمَا خُنُّكُمْ اَبُوْمِنِيْنَ ⑨

80. ファラオは云えり、「魔術の達人たちを皆我が前に連れ来れ」と。

وَقَالَ فِرْعَوْنُ اسْتَوْفِيْ بِكُلِّ سِحْرٍ عَلَيْهِمْ ⑩

81. 魔術師たちが来るや、モーゼは彼等に向って云えり、「汝等投げたいものを投げよ」と。

فَلَمَّا جَاءَ السَّحَرَةُ قَالَ لَهُمْ مُّوْسٰى اَلْقُوا مَا اَنْتُمْ مُّلقُوْنَ ⑪

82. 彼等投げるや、モーゼは云えり、「お前たちが齋せるものは、単なる魔法に過ぎず。アッラーはそれを無力にせん。アッラーは悪事をなせる者の仕業を許さず。

فَلَمَّا اَلْقَوْا قَالَ مُّوْسٰى مَا جِئْتُمْ بِهٖ السِّحْرَانَ ۙ اَللّٰهُ سَيَبْطِلُهُ ۙ اِنَّ اللّٰهَ لَا يُصْلِحُ عَمَلَ الْمُفْسِدِيْنَ ⑫

83. たとい悪人どもがそれを嫌うとも、アッラーは自らの言葉によって真理を確認す」と。(注 44)

ۙ وَيُحْيِ اللّٰهُ الْحَيَّ بِحِكْمَتِهٖ وَلَوْ كَرِهَ الْمُجْرِمُوْنَ ⑬

第九項

84. されど、モーゼの民の中の少数の若者たちを除いて、モーゼに従う者はなかりき、ファラオ並びに長老たちの迫害を恐るるが故に。げにファラオは地上における暴君にして、罪人なりき。

فَمَا اَمَنَ لِمُوسٰى اِلَّا ذُرِّيَّةٌ مِّنْ قَوْمِهٖ عَلَى خَوْفٍ مِّنْ فِرْعَوْنَ وَكَآبٍ بِهِمْ اَنْ يَّقْتُلَهُمْ ۚ وَاَنْ فِرْعَوْنَ لَعَالٍ فِي الْاَرْضِ وَاِنَّهٗ لَئِنْ السُّرُفِيْنَ ⑭

85. モーゼは云えり、「我が民よ、もしお前たちアッラーを信ずるならば、而して神の御旨に服従するならば、お前たちの信頼をアッラーに置き奉れ」と。

وَقَالَ مُّوْسٰى يَقُوْمُ اِنْ كُنْتُمْ اٰمِنُمْ بِاللّٰهِ فَعَلَيْهٖ تَوَكَّلُوْا اِنْ كُنْتُمْ مُّسْلِمِيْنَ ⑮

86. 彼等は云えり、「我等は信頼をアッラーに置き奉る。我等の主よ、我等をして不義なす民の災難に遭わしむるなかれ。

فَقَالُوا عَلَى اللّٰهِ تَوَكَّلْنَا رَبَّنَا لَا تَجْعَلْنَا فِتْنَةً لِّلْقَوْمِ الظَّالِمِيْنَ ⑯

87. お慈悲もて、我等をかの不信心の民の暴虐より救い出し給え」と。

وَنَجِّنَا بِرَحْمَتِكَ مِنَ الْقَوْمِ الْكَافِرِيْنَ ⑰

注 44 正義は、その普及の為に正しくない手段による支援を必要としない。「終りは手段を正当化す」という言葉は、神の預言者達と彼らの真の後継者達の説法ではなかった。 真実は、それ自体が持つ強さによって広まり、勝利を収めるのであって、虚偽によるのではない。

88. そこでわれらはモーゼとその兄弟に啓示して、云えり、「汝等兩名、お前たちが率いる民のため、邑中に住まいを定め、(注45)どの家も同じ方向に面して建て、礼拝を遵守せよ。それから信者たちに朗報を与えよ」と。(注46)

89. すると、モーゼは云えり、「我等の主よ、汝はファラオとその長老たちに現世の栄華と富財とを賜えり。主よ、それ故に彼等は人々を汝の道から迷わしむ。主よ、彼等の富財を消滅し、その心を頑固になし給え——痛刑を目の当りにせぬ限り信ずる気になぬように」と。

90. 彼は云えり、「お前たちの祈禱は聴き容れらる。されば汝等兩名堅忍不拔たれ、無知なる者どもの道に従うなかれ」と。

91. かくしてわれらはイスラエルの子らをして海を渡らしめたり。ファラオとその軍勢はここぞとばかり果敢に追跡せしが、溺死その身に襲いかかるに及んで、ファラオは云えり、「イスラエルの子らが信ずるお方の外に神無きを信ず。我は彼に服従する人々の一人なり」と。(注47)

92. 何事ぞ、今となって！ 以前汝は服従せず、作悪者の一人なりしに非ずや。

وَأَوْحَيْنَا إِلَىٰ مُوسَىٰ وَأَخِيهِ أَنْ تَبَوَّأُوا لِقَوْمِكُمْ
بِمِصْرَ بُيُوتًا وَأَجْعَلُوا بُيُوتَكُمْ قِبْلَةً وَأَقِيمُوا الصَّلَاةَ
وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٩٨﴾

وَقَالَ مُوسَىٰ رَبَّنَا إِنَّكَ آتَيْتَ فِرْعَوْنَ وَمَلَآئِكَ
زِينَةً وَآمَوَّا إِلَى الْحَيَاةِ الدَّيْنِ رَبَّنَا لِيُضِلُّوْا
عَنْ سَبِيلِكَ رَبَّنَا اطْمِسْ عَلَىٰ أَمْوَالِهِمْ وَاشْدُدْ
عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ فَلَا يُؤْمِنُوا حَتَّىٰ يَرَوْا الْعَذَابَ الْاَلِيمَ ﴿٩٩﴾

قَالَ قَدْ أُجِيبَتْ دَعْوَتُكُمْ فَأَسْتَفِيمَا وَلَا تَتَّبِعْنَ
سَبِيلَ الَّذِينَ لَا يَعْلَمُونَ ﴿١٠٠﴾

وَجَوْرْنَا بِبَنِي إِسْرَءِيلَ الْبَحْرَ فَاتَّبَعَهُمْ فِرْعَوْنُ
وَجُودُهُ بَغْيًا وَعَدَاؤًا حَتَّىٰ إِذَا أَدْرَكَهُ الْعَرَقُ قَالَ
أَمَنْتُ أَنَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا الَّذِي آمَنْتُ بِهِ بَنُو إِسْرَءِيلَ
وَأَنَا مِنَ الْمُسْلِمِينَ ﴿١٠١﴾

النَّ وَ قَدْ عَصَيْتَ قَبْلَ وَ كُنْتَ مِنَ الْمَفْسِدِينَ ﴿١٠٢﴾

注45 町に住めという命令は、イスラエル人がその前に荒野に住んでいたゆえ出されたということではない。この節は、ただ、文明化した共同生活の必要性和有益性を強調しているにすぎない。弱い少数派社会の人々は、大都會では集団生活をするという一般的な傾向があるのである。

注46 「どの家も同じ方向に面して建てる」という言葉は次のことを意味する。(1)イスラエル人は、必要な時にお互いに助け合えるように非常に近くに一緒に住むよう命じられた。というのは、この目的は人々が家を近くか又はお互い向かい合って建てる時にのみ達成されるからである。(2)彼らは全員家を一方に向けて建てなければならない。そのことは、比喩的に、彼らが共通の目的又は理想を持たねばならないことを意味している。(3)全ての家は同じように建っていなければならない。そこでは富者と貧者との間に真の同胞愛が得られるので皆が一つの集団として協力するということが暗示されている。なぜなら、一社会のある者は宮殿の様な住宅に住み、ある者はひどいあばら家に住むというようなところには、真の同胞愛は存在することができないからである。

注47 これらの言葉は、誇り高いファラオの失墮の深さを物語っている。

93. されど今日われらは汝をその肉体と共に救わん。そは汝をして汝の後に来る人々への神兆たらしめんがためなり。されどまことに多くの人々がわれらの神兆を軽視す。

(注 48)

第十項

94. われらはイスラエルの子らに立派な住まいを当てがい、いろいろと佳物を与えたり。而して知恵づくまでは彼等互に相い争うことなかりき。げに主は、復活の日において、彼等が争いし事柄に関して彼等を審判せん。

95. もし汝われらの降せしものに疑いあらば、汝以前に經典を読める人々に尋ねよ。真理が主より汝に来たれり、されば断じて疑う者の一人となるなかれ。(注 49)

96. またアッラーの神兆を拒否するなかれ。さもなくば、汝失敗者の一人とならん。

97. げに主の罰が決定された者は、信ぜざるべし、

98. たとい諸々の神兆が彼等に至るとも、痛刑を目のあたり見ぬ限りは。

فَالْيَوْمَ نُنَجِّيكَ بِبَدَنِكَ لِتَكُونَ لِمَنْ خَلْفَكَ آيَةً
وَإِنَّ كَثِيرًا مِنَ النَّاسِ عَنْ آيَاتِنَا لَغَفُلُونَ ﴿٩٣﴾

وَلَقَدْ بَوَّأْنَا بَنِي إِسْرَءِيلَ مَبَازِئِدِي وَوَرَقْنَهُمْ
مِّنَ الْجِبِّ فَمَا اخْتَلَفُوا حَتَّىٰ جَاءَهُمُ الْعِلْمُ إِنَّ
رَبَّكَ يَقْضِي بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيَمَةِ فِيمَا كَانُوا فِيهِ
يَخْتَلِفُونَ ﴿٩٤﴾

فَإِنْ كُنْتَ فِي شَكٍّ مِّمَّا أَنْزَلْنَا إِلَيْكَ فَسْأَلِ الَّذِينَ
يَقْرَءُونَ الْكِتَابَ مِنْ قَبْلِكَ لَقَدْ جَاءَكَ الْحَقُّ مِنْ
رَبِّكَ فَلَا تَكُونَنَّ مِنَ الْمُسْتَرِينَ ﴿٩٥﴾

وَلَا تَكُونَنَّ مِنَ الَّذِينَ كَذَبُوا بِآيَاتِ اللَّهِ فَتَكُونُوا
مِنَ الْخَاسِرِينَ ﴿٩٦﴾

إِنَّ الَّذِينَ حَقَّتْ عَلَيْهِمْ كَلِمَةُ رَبِّكَ لَا يُؤْمِنُونَ
وَلَوْ جَاءَتْهُمْ كُلُّ آيَةٍ حَتَّىٰ يَرَوْا الْعَذَابَ الْأَلِيمَ ﴿٩٧﴾

注 48 あらゆる聖典と歴史の本の中でクルアーンだけがこの事実を述べているのは注目すべきことである。聖書はこのことについてふれていないし、どんな歴史書もそうである。しかし、神の言葉は何というすばらしい手法で真実を証明されたことか。3000 年以上の経過の後に、ファラオの遺体は発見され、現在カイロの博物館に保存されている。ミイラは、ファラオが怒りと愚かさをうかがわせる顔つきをした、やせた背の低い男であったことを示している。モーゼはラメス 2 世 (Rameses II) の時代に生まれ、彼に育てられた (出エジプト記 2 の 2~10)。しかし、モーゼが預言者としての使命を託されたのは、ラメス 2 世の息子のメネプタ (Menephtah) の治世の時であった (Jew. Enc. 9 巻 P 500 と、Enc. Bib. 「パロ」と「エジプト」の箇所)。

注 49 この演説は、モハammad に対してではなく、クルアーンのあらゆる読者に対してのものである。その事については、「汝われらが降せし」という言葉もまた、この話がモハammad にされていないことを示している。というのは、クルアーンの数箇所、それは全ての民に示されたと言われているからである (2 の 137、21 の 11)。まさに次の節が、この見方を支持している。何故ならば、マホメットはどうあっても「アラーのみしるしを疑う」人々のうちの一人ではあり得ないからである。

99. ヨナの民を除いて、信仰に入り、その信仰のおかげを被^{こう}むりたる邑^{まち} (注50) なかりしは何故ぞ? ヨナの民が信仰に入りたる時、われらは彼等からこの世における恥辱の罰を除き、しばしの給養を与えたり。(注51)

100. もし主が欲したりせば、地上のすべての人々は皆ともに信者とならん。汝は人々に強要して信者たらしめんとするか? (注52)

101. 何人^{なんびと}もアッラーの許可^{いかり}なくして信仰に入る能^{あた}わず。而^{しか}して理解せざる者どもには天罰を加え給う。(注53)

102. 云え、「天地^{あめつち}に生ずるものをよく考えてみよ」と。然れども、神兆^{しるし}も警告も信ぜざる人々には役立たず。(注54)

103. 彼等は、彼等以前に逝^いける者^{こうむ}が被^{こう}つた懲罰の日々以外に、何を期待し得るか? 云え、「待て。わしもお前たちとともに待つ者なり」と。

104. その時われらは使徒たち並びに信者たちを救うべし。かくの如く信者を救うはわれらが義務なり。

فَلَوْلَا كَانَتْ قَرْيَةٌ أَمِنَتْ فَفَنَعَهَا إِنِّي سَأَلْتُهَا لَأَلْقِيَهُمْ
يُوسُفُ لَمَّا أَمْنُوا أَشْفَقْنَا عَنْهُمْ عَذَابَ الْخِزْيِ فِي
الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَمَتَّعْنَاهُمْ إِلَىٰ حِينٍ ﴿٩٩﴾

وَلَوْ شَاءَ رَبُّكَ لَأَمَنَّ مِنَ فِي الْأَرْضِ كُلَّ جَمِيعًا
أَفَأَنْتَ تُكْرِهُ النَّاسَ حَتَّىٰ يَكُونُوا مُؤْمِنِينَ ﴿١٠٠﴾

وَمَا كَانَ لِنَفْسٍ أَنْ تُوَظِّنَ إِلَّا بِإِذْنِ اللَّهِ وَيَجْعَلُ
لِلْجَنَسِ عَلَى الدِّينِ لَا يَعْقِلُونَ ﴿١٠١﴾

قُلْ أَنْظَرُوا مَاذَا فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا تُغْنِي
الْأَيْتُ وَالنُّذُرُ عَنْ قَوْمٍ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿١٠٢﴾

فَهَلْ يَنْتَظِرُونَ إِلَّا مِثْلَ أَيَّامِ الَّذِينَ خَلَوْا مِنْ
قَبْلِهِمْ قُلْ فَانْتَظِرُوا إِنِّي مَعَكُمْ مِنَ الْمُنْتَظِرِينَ ﴿١٠٣﴾

ثُمَّ نُنَجِّي رُسُلَنَا وَالَّذِينَ آمَنُوا كَذَلِكَ حَقًّا عَلَيْنَا
نُنَجِّي الْمُؤْمِنِينَ ﴿١٠٤﴾

注50 町に住む人々の事。

注51 ヨナについては、クルアーンの6箇所て述べられており、(4章164節、6章87節、21章88節、37章140節、68章49節)聖書の中では、彼は「イスラエルの預言者」と述べられている(2列王紀、14章25節)。彼はニネベに行きそこでニネベの人々にのろいをかけるよう命じられた。そこで、クルアーンによると、彼は自分の民の所につかわされたとなっている。彼はイスラエル人でもなければ、ニネベにつかわされたのでもなく、ただ彼自身の民の区域に行っただけであった。聖書研究者達自らもヨナのことをイスラエル人とは認めないのである。

注52 この節により、イスラム教はその布教の為に武力の行使を許したり支持したりしないということが、いささかの疑いもなく明らかとなっている(2章257節も参照。)

注53 単に口先で、ある教義を述べるだけで、真の信仰を得ることは不可能である。

注54 「天地に生ずるものをよく考えてみよ」という言葉は次のような意味である。モハムマドの主張を成功と繁栄に導くよう運命づけている数々の要因は、天と地の両方ですでに明らかである。それで、その主張はそれ自体の美しい教訓の力で繁栄していくので、その主張を助けるのにどんな強制も必要としないのである。

第十一項

105. 云え、「汝等人々々、たといお前たちが我が宗教に疑いを抱くとも、我はお前たちがアッラー以外に拝するものを拝まず。我はお前たちに死を賜うアッラーのみを拝す。げに我は信者たるべきことを命ぜられたり。

106. また我は神の言いつけをお前たちに伝達することも命ぜられたり、『常に神に心を向ける者として宗教に専念し、アッラーにあだしがみ他神を併せ祀る者どもの一人となるなかれ。

107. アッラーの外に、汝を益することも損なうこともなし得ざる者に、祈るなかれ。もし汝之を為さば、汝は必ず不義者の一人とならん』と。

108. もしアッラーがわざわ禍いによつて汝を苦しめなば、彼以外に何人たりとも之を除くことこれ能わず。またもし幸いを授けようと思えば、何人もしその恩寵を阻むこと能わず。彼は僕等の中から御心にかなう者にそれを施し給う。彼は寛大にして、慈悲深くします。

109. 云え、「汝等人々々、今、主より真理がお前たちに来れり。その嚮導に従う者はただ己れの利益のために導かれ、誤る者はただ己れを損なうために誤る。我はお前たちの付き添い人に非ず」と。

110. 汝に啓示されたるものに従い、アッラーが審判するまで耐え忍べ。彼は最も優れた審判者なり。

قُلْ يٰٓاَيُّهَا النَّاسُ اِنْ كُنْتُمْ فِي شَكٍّ مِنْ رَبِّيْ
فَلَا اَعْبُدُ الَّذِيْنَ تَعْبُدُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَ لٰكِنْ
اَعْبُدُ اللّٰهَ الَّذِيْ يَتَوَفَّاكُمْ ۚ وَاُمِرْتُ اَنْ اَكُوْنَ
مِّنَ الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿١٠٥﴾

وَاَنْ اَقِمَّ وَجْهَكَ لِلدِّيْنِ حَنِيفًا ۚ وَلَا تَكُوْنَنَّ مِنَ
الْمُشْرِكِيْنَ ﴿١٠٦﴾

وَلَا تَدْعُ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ مَا لَا يَنْفَعُكَ وَلَا يَضُرُّكَ
فَاِنْ فَعَلْتَ فَاِنَّكَ اِذَا مِنَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿١٠٧﴾

وَاِنْ يَتَسَوَّكَ اللّٰهُ بِضُرٍّ فَلَا كَاشِفَ لَهٗ اِلَّا هُوَ ۚ وَ
اِنْ يُّرِدْكَ بِخَيْرٍ فَلَا رَادَّ لِفَضْلِهٖ يُصِيبُ بِهٖ مَنْ
يُّشَآءُ مِنْ عِبَادِهٖ ۚ وَهُوَ الْغَفُوْرُ الرَّحِيْمُ ﴿١٠٨﴾

قُلْ يٰٓاَيُّهَا النَّاسُ قَدْ جَاءَكُمُ الْحَقُّ مِنْ رَبِّكُمْ ۚ فَمَنْ
اهْتَدٰى فَاِنَّمَا يَهْتَدِيْ لِنَفْسِهٖ ۚ وَمَنْ ضَلَّ فَاِنَّمَا
يَضِلُّ عَلٰیهَا ۚ وَمَا اَنَا عَلَيْكُمْ بِوَكِيْلٍ ﴿١٠٩﴾

وَاطِيعَ مَا يُوْحٰى اِلَيْكَ ۚ وَاصْبِرْ حَتّٰى يَخْرُجَ اللّٰهُ وَهُوَ
خَيْرُ الْخٰكِمِيْنَ ﴿١١٠﴾

سُورَةُ هُودٍ مَكِّيَّةٌ

フード

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. アリフ・ラーム・ラー。(注1) こはその諸節が確定せられ、欠陥がなく、細部にわたって説明されたる經典なり。(注2)
3. そはお前たちに、アッラー以外に何者をも崇拜すべからずと教え給う。我は警告者並びに朗報伝達者としてアッラーより遣わされたる者なり。
4. お前たち主の赦しを求めて、懺悔せよ。さすれば定めの時至るまで、主はお前たちに沢山の給養を与えん。また功績のある者には恩恵を授けん。されど、もしお前たち背き去らば、我はお前たちのためにあの恐ろしい口の懲罰を恐る。(注3)
5. お前たちが帰り着くところはアッラーなり。而して彼は萬事において全能なり。
6. 今彼等は彼に見られまいとして、その胸を折りたたむ。彼等その衣で体をすっかり包み隠さんとしても、彼は彼等が何を隠し、また何を顯すかを知り給う。げに彼は、彼等の胸奥に抱くものを深知し給う。(注4)

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

الْقَافُ كَيْتُ أَهْكَيْتُ آيَةُ ثُمَّ فَصَّلْتُ مِنْ لَدُنْ

حَكِيمٍ خَبِيرٍ

إِلَّا تَعْبُدُوا إِلَّا اللَّهَ إِنِّي لَكُمْ مِنْهُ نَذِيرٌ وَبَشِيرٌ

وَأَنْ اسْتَغْفِرُوا رَبَّكُمْ ثُمَّ تُوبُوا إِلَيْهِ يَتَّبِعْكُمْ

مَتَاعًا حَسَنًا إِلَى أَجَلٍ مُسَمًّى وَيُؤْتِ كُلَّ ذِي فَضْلٍ

فَضْلَهُ وَإِنْ تَوَلَّوْا فَإِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ

يَوْمٍ كَبِيرٍ

إِلَى اللَّهِ مَرْجِعُكُمْ وَهُوَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ

إِلَّا أَنَّهُمْ يَتَشَوَّنُ صُدُورُهُمْ لَيَسْتَخْفُوا مِنْهُ إِلَّا

حِينَ يَنْتَشِرُونَ شَيْأَهُمْ لَعَلَّكُمْ تَعْلَمُونَ وَمَا

يُعْلِنُونَ إِنَّهُ عَلَيْكُمْ بِذَاتِ الصُّدُورِ

注1 われは一切を見るアッラーなり。

注2 イスラム教の根本となる教えには反論の余地が全くないので、それらに異議を申し立てるのは難しい。しかしイスラム教についてのあらゆる真実を知る為には、根本となる教えと、それらの細目の両方を学ぶ必要がある。それでも、根本のものを細目より優先すべきである。

注3 この節は、人の精神の発達では、給養の段階が、ざんげのあとに来て、それよりも価値が高いことを示している。給養は過去の罪による邪悪な影響に対して神の保護を願い求めたあと、誠実で心から神に帰依する行動のことである。神に近づくのに、これ以上のどんな良い手段を想像することが出来るであろうか。

注4 不信仰者達は、疑惑と反対の念を心に隠し持っており、それらをあらわに出さないし、取り除いたりしない。彼らが真実を受け入れるのを妨げている理由は、彼らが心の内を開き、疑いを晴らすのを彼ら自身で拒んでいる為である。

7. 地上における生きとし生けるもの、みなその食物をアッラーに頼らざるものはなし。

彼はそのしばしの滞在場所も、常住所も知り給う。百事は載せて明快なる經典にあり。(注5)

8. 玉座が水上に在りし頃、六日の間で(注6)天地を創造したるは彼なり。これは彼が、お前たちのうち誰が一番立派な振舞いをするか試さんがためなり。されど汝もし「お前たちは死後に必ず甦らしめられん」と云わば、信ぜざる者どもは必ず云わん、「これは明らかに惑わし以外の何ものにも非ず」と。(注7)

9. またわれらがもし彼等の懲罰を一定時期延ばせば、彼等は必ず云わん、「何がそれを制止するのか?」と。罰彼等の下る日は、それを避ける術もなく、日頃嘲笑してたものに彼等は包囲されん。

第二項

10. もしわれらが人間をしてわれらの慈悲を味わしめ、然る後にこれを彼から取り上げたなら、彼は絶望し、恩を忘る。

وَمَا مِنْ دَابَّةٍ فِي الْأَرْضِ إِلَّا عَلَى اللَّهِ مِنْ رِزْقِهَا
وَيَعْلَمُ مُسْتَقَرَّهَا وَمُسْتَوْدَعَهَا كُلٌّ فِي كِتَابٍ

⑤ مَبِينٌ

وَهُوَ الَّذِي خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ فِي سِتَّةِ
أَيَّامٍ وَكَانَ عَرْشُهُ عَلَى الْمَاءِ لِيَبْلُوَكُمْ أَيُّكُمْ
أَحْسَنُ عَمَلًا وَلَئِنْ قُلْتُمْ إِنَّكُمْ مَعْبُودُونَ مِنْ بَدَلِ
الْمَوْتِ لَيَقُولَنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا إِنْ هَذَا إِلَّا سِحْرٌ

⑥ مَبِينٌ

وَلَئِنْ أَخَّرْنَا عَنْهُمُ الْعَذَابَ إِلَى أُمَّةٍ مَعْدُودَةٍ
لَيَقُولَنَّ مَا يَجِئُهُ إِلَّا يَوْمَ يَأْتِيهِمْ لَيْسَ مَصْرُوفًا

عَنْهُمْ وَحَاقَ بِهِمْ مَا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِءُونَ ⑦

وَلَئِنْ أَدَقْنَا لِلْإِنْسَانِ مَتَارِحَةً ثُمَّ تَرَعْنَاهَا مِنْهُ

إِنَّهُ لَيُنْسُو كُفُورَهُ ⑧

注5 神は、神のあらゆる創造物の為に、食物を用意なされた。地の底深くに住む虫やは虫類の為に、生活の手段を与ええしたのである。人間の理性は、この様に地上や地中の無制限に存在する虫や昆虫達が、どの様に、どこから食物を得るのかを知って当惑する。人間は宇宙の神秘を解明したと考えているが、自分達が食べているいろいろな種類の食物は言うに及ばず、全ての生命体をまだ完全に知りつくした訳ではない。しかし、神はそれら全てのものに対して十分な用意をなされた。この節は、神が創造物の中でも最も卑しい物を自然学上の必要性から供給された様に、道徳的精神的な必要物として同様の供給をするのを確かに怠ることが出来なかったし、それが人間であり、神の創造物の極致であることを示している。この節は、あらゆる生き物の一時的永久的すみかだけではなく、その力が発展することが出来る最大の限界についても述べている。

注6 7章55節参照。

注7 水のことは全ての生命の源としてクルアーンの中で繰返し述べられてきた(21章31節、25章55節、77章21節、86章7節)。「玉座が水上に在りし」という言葉は、偉大なる恩恵の表示は生き物、とりわけ全創造物の中で最高のものである人間を通して見られることを表している。この言葉は又、神の美德は恩恵の表示の為に、クルアーンの数箇所水にたとえられてきた神の啓示のことを意味しているのかもしれない。「おまえたちは死後、必ず甦らしめられん。」という言葉には次のことが示されている。この創造のシステム自体、人は死後生命を持つことを表わしている。というのは、意志と独立心を持った生物がその中で生きなければならないこの広大な宇宙という創造物は、その生物の創造が偉大なる目的にかなう様意図されていることを明らかに

11. だがもし災難にみまわれた後、われらが彼に幸福を味わせてやると、彼は自信をもって云わん、「不幸は我より去れり」と。見よ、彼は大喜びして自慢す、
12. 耐え忍び善い行いをなす者は別として。彼等には赦しと素晴らしい報奨が与えられん。
13. 恐らく汝は、汝に啓示されたるものの一部を放棄したい気持ちになり、そのために己が胸を苦しめられる。そは彼等が「何故に宝物が彼に降されざるか、また何故に天使が彼と共に至らざるか？」と云うがためなり。汝はただ警告者に過ぎず、萬事の監視者はアッラーなり。
14. 彼等は云う、「彼がこれを偽造したのではないか？」と。云え、「もしお前たちの言葉が真実なら、然らばこれに類する章節を十ほど作って示せ。アッラー以外にお前たちが頼れる神にお願いしてみるがいい」と。
15. もし彼等神々がお前たちの挑戦に応えられぬのなら、そはアッラーの御知恵にて啓示されたるものにして、彼の他に神なきことを知れ。さればお前たち服従するや？
16. 誰であれ現世の生活とその栄華を望む者には、彼等の行いに対して、われらは現世において充分に報ゆべし。決して不当に遇せらるることなし。
17. されどこれ等の者どもは、来世において火獄の外に何もなき者なり。彼等が現世でなせることは無となり、すべての振舞いは徒勞に帰さん。
18. 主よりの明白な証拠に基づいて、主の神兆の真理なるを証言する彼に従い、しかも嚮導しやうどうにして慈悲なるモーゼの經典によつ

وَلَكِنْ أَزْمَنَهُ نَعْمَاءٌ بَعْدَ ضَرَاءٍ مَسْتَه يَكْفُوْلُنْ
ذَهَبَ السَّيِّئَاتُ عَنِّي إِنَّهُ لَفَرِحٌ فَخُوْرٌ ①

إِلَّا الَّذِينَ صَبَرُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ أُولَٰئِكَ لَهُمْ
مَغْفِرَةٌ وَأَجْرٌ كَبِيرٌ ②

فَلَعَلَّكَ تَارِكٌ بَعْضَ مَا يُوحَىٰ إِلَيْكَ وَضَائِقٌ بِهِ
صَدْرُكَ أَنْ يَقُولُوا لَوْلَا أُنْزِلَ عَلَيْهِ كُتْرٌ أَوْ جَاءَ
مَعَهُ مَلَكٌ إِنشَاءً أَنْتَ نَذِيرٌ وَاللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ
وَكَيلٌ ③

أَمْ يَقُولُونَ افْتَرَاهُ قُلْ فَأْتُوا بِعَشْرِ سُوْرٍ مِّثْلِهِ
مُفْتَرِيَةٍ أَوْ ادْعُوا مَنِ اسْتَطَعْتُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ إِنْ
كُنْتُمْ صَادِقِينَ ④

فَالَمْ يَسْتَجِيبُوا لَكُمْ فَأَعْلَمُوا أَنشَاءً أَنْزَلَ يَعْلَمُ اللَّهُ
وَأَنْ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ فَهَلْ أَنْتُمْ مُسْلِمُونَ ⑤

مَنْ كَانَ يُرِيدِ الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا وَزَيَّنَّهَا نُوْفٌ
إِلَيْهِمْ أَعْمَالُهُمْ فِيهَا وَهُمْ فِيهَا لَا يُجْسَوْنَ ⑥

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ لَيْسَ لَهُمْ فِي الْآخِرَةِ إِلَّا النَّارُ
وَحَبِطَ مَا صَنَعُوا فِيهَا وَبِطُلٌ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ⑦

أَفَمَنْ كَانَ عَلَىٰ يَبْتَنَةٍ مِنْ رَبِّهِ وَيَتْلُوهُ شَاهِدٌ مِنْهُ
وَمِنْ قَبْلِهِ كُتِبَ مُوسَىٰ إِمَامًا وَرَحْمَةً أُولَٰئِكَ

するのである。しかしこの世界での寿命は短く、試しと試練の一時的存在であるので、この試しと試練の一時のすみかの後、人間は報酬の永続的な永遠のすみかに進まなければならないのである。

て予言されていた者が、どうして詐欺師であべきか？これを信ずる人々は、真の信者なり。而してこれを信ぜず反対する徒輩は、火獄が約束の地とならん。されば、汝これを疑うなかれ。まことにこれは、汝の主よりの真理なり。されど、人々の多くは之を信ぜず。(注8)

19. アッラーに対して虚偽を案出てる者より更に大なる不義者はあろうか？かかる者どもは主の御前に引き立てられ、証人たちに、「これ等の者は主に対して虚偽をなした」と云われん。それ、アッラーの咀詛不義な輩の上に降る。(注9)

20. 彼等はアッラーの道から人々を背かしめ、之を曲げんと謀る。その上、来世を信ぜぬ者どもなり。

21. かかる徒輩は、地上において神の計画を挫折する能わず、またアッラー以外に如何なる愛護者も持つ能わじ。彼等の刑罰は倍加されん。彼等は聴く能わず、また見る能わじ。(注10)

22. 彼等は己が身を減ばせり、而して彼等が案出せる神々は彼等を見捨てるべし。

يُؤْمِنُونَ بِهِ وَمَنْ يَكْفُرْ بِهِ مِنَ الْأَحْزَابِ كَالنَّارِ
مَوْجِدَةٍ فَلَا تَكُ فِي مِرْيَةٍ مِّنْهُ إِنَّهُ الْحَقُّ مِن رَّبِّكَ
وَلَكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿١٩﴾

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا أُولَٰئِكَ
يَعْرَضُونَ عَلَىٰ رَبِّهِمْ وَيَقُولُ الْأَشْهَادُ هَٰؤُلَاءِ
الَّذِينَ كَذَّبُوا عَلَىٰ رَبِّهِمْ آلَا لَعْنَةُ اللَّهِ عَلَى
الظَّالِمِينَ ﴿٢٠﴾

الَّذِينَ يَصُدُّونَ عَنِ سَبِيلِ اللَّهِ وَيَعُوجُّونَهَا
وَهُمْ بِالْآخِرَةِ هُمْ كَافِرُونَ ﴿٢١﴾

أُولَٰئِكَ لَمْ يَكُونُوا مُعْجِزِينَ فِي الْأَرْضِ وَمَا كَانَ
لَهُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ مِنْ أَوْلِيَاءَ يُضْعِفُ لَهُمُ
الْعَذَابُ مَا كَانُوا يَسْتَطِيعُونَ السَّعْيَ وَمَا كَانُوا
يُبْصِرُونَ ﴿٢٢﴾

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ خَسِرُوا أَنفُسَهُمْ وَصَلَّ عَنْهُمْ مَا
كَانُوا يَفْتَرُونَ ﴿٢٣﴾

注8 この節ではモハammadを支持して三つの主張が言葉で示された。(a)「彼は、主から下された明らかなみしるしの上にしっかりと立っている者であり」(b)「彼に従うように主から下された証人が真であることを証明する為に」そして、(c)「モーゼの聖書に彼の出現は予言されていた」と。「主から下された明らかなみしるし」というのは、モハammadが、墮落し退廃した人々の生活に引き起こした偉大な道徳的革命のことであった。そして、彼の真実性を証明する証人達というのは、彼の後継者達の中から現われた神に支持されたる指導者たちのことであった。後継者達は教訓と慣例によって時代を通してイスラム教の真理とクルアーンを確立していった。一段と秀でた証人というのは、約束されたメシアアハマディア運動の創立者であった。次の、「モーゼの経典によって予言されていた」という言葉は、旧約聖書の中に見い出されるモハammadについての数々の予言を示すものである(26章 197節参照)。

注9 この証人達は、神の予言者達のことであるといえる。

注10 不信仰に導いた指導者達は、彼ら自身の罪と、彼らが誤って導いた者達の罪との両方の為に罰せられるであろう。

23. 彼等こそは、疑いもなく、来世において最大の失敗者なり。
24. 然しながら、信じて善行を為し、主の御前で謙虚の者—これ等は楽園の住人にして、その中に永遠に滞在せん。(注11)

25. 両者を譬うれば、盲で聾と、目も見えれば耳も聞える者との違いの如し。両者の状態等しからんや？これでもまだお前たち理解せざるか？(注12)

第三項

26. われらはノアをその民に遣わして、云わしめた、「実に我はお前たちのための、平凡な一介の警告者に過ぎず。
27. お前たちはアッラーの外に何者をも崇拜するなかれ。げに我は、お前たちのために、悲惨な日の刑罰を恐る」と。(注13)
28. その民のうちの信ぜざる長老たちは云えり、「我等は汝を見るに、我等自身と同じ人間にすぎず。また我等が見るに、ただ我等の中で最も卑しい連中が考えなしに汝に従ったにすぎず。また我等は、お前が我等より何も優れているとは思われず。それどころか、お前は嘘つきだと我等は信ず」と。
29. ノアは云えり、「我が民よ、我に告げよ。もし我、主の明証に基づいて、主の御許から慈悲を賜わりても、それがお前たちに解しがたいのなら、之を嫌悪うお前たちに、我等之を強い得べけんや？

لَا جَورَ لَهُمْ فِي الْآخِرَةِ هُمْ الْآخَسِرُونَ ﴿٢٣﴾
 إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَاجْتَبَوْا إِلَىٰ رَبِّهِمْ أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ الْجَنَّةِ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٢٤﴾
 مَثَلُ الْفَرِيقَيْنِ كَالْأَصْمَىٰ وَالْبَصِيرِ وَالسَّمِيعِ هَلْ يَسْتَوِينَ مَثَلًا أَفَلَا تَذَكَّرُونَ ﴿٢٥﴾

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا نُوحًا إِلَىٰ قَوْمِهِ إِنِّي لَكُمْ نَذِيرٌ مُّبِينٌ ﴿٢٦﴾

أَنْ لَا تَعْبُدُوا إِلَّا اللَّهَ إِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمِ الْيَوْمِ ﴿٢٧﴾

فَقَالَ الْمَلَأُ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ قَوْمِهِ مَا تَرَكُ إِلَّا بَشَرًا مِثْلَنَا وَمَا تَرَكُ أَتَّبِعَكَ إِلَّا الَّذِينَ هُمْ أَرَادُوا أَنْ يَبْأَدُوا الرَّأْيَ وَمَا نَرَىٰ لَكُمْ عَلَيْنَا مِنْ فَضْلٍ بَلْ نَظُنُّكُمْ كَاذِبِينَ ﴿٢٨﴾

قَالَ يَقَوْمُ ارْءَايَكُمْ إِنْ كُنْتُ عَلَىٰ بَيِّنَةٍ مِنْ رَبِّي وَأَنْتُمْ رَحِمَةٌ مِنْ عِنْدِهِ فُعْيِيَتْ عَلَيْكُمْ أَنْزَلْنَا مُكُوبَهَا وَأَنْتُمْ لَهَا كَاِرْهُونَ ﴿٢٩﴾

注11 精神的発展でより高い段階に上る為には、正しい信仰と善なる所業に加えて、神への完全な確信と服従、そして神に対する完全な信仰が不可欠である。

注12 ここでは、信仰と不信仰との間が美しい対比で示されている。信仰者は視覚と聴覚を完全に所有する者として表わされ、不信仰者のことは、めくらでつんばの人間にたとえられているのである。

注13 「悲惨な懲罰」と「悲惨な日の懲罰」は異なるものである。後者の表現は、より大きな激烈さを暗示している。ある種の懲罰は非常に悲惨なものである。しかし、何百年も経過したあとでさえ、その日々の記憶が絶えず付きまとい苦痛を与え続ける様な「特定の日々」がある。現実の「懲罰」は、それが降りかかる人々にだけ苦痛を与えるのだが、「悲惨な懲罰の日々」の記憶はそれ以後の人々をさえおびえさせるものである。

30. 我が民よ、我はその報酬として、お前たちに如何なる財貨も求むるに非ず。我が報酬はアッラーからのみなり。而して我はこれ等信ずる者を追い払う気はなし。彼等は必ず主に見えん。されど我は、お前たちが無知なる民だと考える。

31. 我が民よ、我もし彼等信者を遂わば、アッラーの怒りに対して我を助くるは誰ぞ？ お前たちこれでもまだ気がつかぬのか？

32. 我はお前たちに、『我が手にアッラーの宝あり』とか、『不可視なものを知る』とか、また『我は天使なり』とも云わず。また我は、お前たちが蔑視している人々に関して『アッラーが彼等に如何なる幸福も授けざるべし』とも云わず—彼等の胸中に何があるかを一番御存知なのは、アッラーなり。それ等を云いし場合は、我は不義者の列に加わらん』と。

33. 彼等は云えり、「ノアよ、汝は我等と論争せり、しかも、しばしば長きに亘り。もし汝の言葉が真実を語るなら、汝が我等に威嚇することを今ここに齎せ」と。

34. ノアは云えり、「もしアッラー欲しなば、お前たちにそれを齎すは彼のみ、而してお前たちは神の御意志を妨げること能わず。
(注14)

35. もしアッラーがお前たちを滅ぼさんと欲しなば、たとい我お前たちに忠告せんと欲しても、我が忠告はお前たちを益せざるべし。彼はお前たちの主にして、お前たちやがて彼の御許に召し寄せられん」と。(注15)

وَيَقُولُوا لَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مَا لَإِنْ أَجْرِي إِلَّا عَلَى اللَّهِ وَمَا أَنَا بِظَارِدِ الَّذِينَ آمَنُوا إِنَّهُمْ مُلْقُوا رَبِّهِمْ وَلَكِنِّي أَرَأَيْتُمْ قَوْمًا تَجْهَلُونَ ﴿٣٠﴾

وَيَقُولُ مَنْ يَنْصُرُنِي مِنَ اللَّهِ إِنْ هَدَيْتُهُمْ أَتَى تَذَكُّرُونَ ﴿٣١﴾

وَلَا أَقُولُ لَكُمْ عِنْدِي خَزَائِنُ اللَّهِ وَلَا أَعْلَمُ الْغَيْبَ وَلَا أَقُولُ إِنِّي مَلَكٌ وَلَا أَقُولُ لِلَّذِينَ تَزْدَرِي أَعْيُنُكُمْ لَن يُؤْتِيَهُمُ اللَّهُ خَيْرًا اللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا فِي أَنْفُسِهِمْ إِنِّي إِذَا لَسَ الظَّالِمِينَ ﴿٣٢﴾

قَالُوا يُونُسُ قَدْ جَدَلْنَاكَ كَثُرَتْ جَلَلَاتُنَا فَأَيْنَا بِمَا نَعْبُدُ نَأْنِ إِنْ كُنْتَ مِنَ الصَّادِقِينَ ﴿٣٣﴾

قَالَ إِنَّمَا يَأْتِيَكُمْ بِهِ اللَّهُ إِنْ شَاءَ وَمَا أَنْتُمْ بِمُعْجِزِينَ ﴿٣٤﴾

وَلَا يَنْفَعُكُمْ نَصِيحِي إِنْ أَرَدْتُ أَنْ أَنْصَحَ لَكُمْ إِنْ كَانَ اللَّهُ يُرِيدُ أَنْ يُغْوِيَكُمْ هُوَ رَبُّكُمْ وَالْيَاقُوتُ تَرْجِعُونَ ﴿٣٥﴾

注14 この節は、懲罰の予告について次の三つの重要な規則を具体化している。(a)懲罰が現実について起きるかということは、一般には明らかにされない。(b)予告は条件付きであり、神が欲するままに延期されたり取り消されたりし得るものである。(c)懲罰の予告に関して、どんな変更が起きようとも、神の不変の目的は決して変わることはない。なぜなら、不信仰者達には「神の目的をくじかせることが出来ない」からである。

注15 この節は、ノアが、彼の民が彼を信じなかった為に非常に怒り、彼らの滅亡の為に祈った(71章27節、28節)という一般に持たれていた誤った観念を取り去るものである。というのは、この節は、ノアが自発的に

36. 彼等は云うか、「彼が之を創作したるか？」と。云え、「我もし之を創作せりとすれば、罪は我にあり。然れども、我はお前たちが犯す罪には関りなし」と。

第四項

37. ノアにかく啓示されき、「すでに信者となりし者以外は、汝の民の何人も信ぜざるべし。故に彼等が行動について、汝憂うるなかれ。(注16)

38. されば汝、われらが監視のもとに、啓示に従って方舟を造れ。悪行をなせる者どものことでわれに歎願するなかれ。彼等は溺れ死ぬ定めなり」と。

39. かくてノアは方舟を造りぬ。その民の長老たちそばを通り過ぎる毎に、彼を嘲弄せり。彼は云えり、「今お前たち我等を嘲り笑うとも、時至りなば、お前たちが今嘲り笑う如く、我等はお前たちを笑うべし。

40. その時お前たちは、誰が上に恥辱の刑が、永劫の刑が降るかを知るべし」と。

41. 遂にわれらの命令は下り、大地より諸泉ほとばしり出る時、(注17) われらは云えり、「各種類の番、雄と雌、並びに汝の家族をこの舟に乗り込ませよ。但し、すでに宣刑が降された者を除き、信者も乗せよ」と。

أَمْ يَقُولُونَ افْتَرَاهُ قُلْ إِنِ افْتَرَيْتُهُ لَعَلَّيْ أَجْرًا فَيُؤْتُونَهُ مَا يَكُونُ لَهُمْ جَزَاءُ بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٣٦﴾

وَأَوْحَىٰ إِلَىٰ نُوحٍ أَنَّهُ لَنْ يُؤْمِنَ مِنْ قَوْمِكَ إِلَّا مَن قَدْ آمَنَ فَلَا تَبْتَئِسْ بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٣٧﴾

وَأَصْنَعِ الْفُلَكَ بِأَعْيُنِنَا وَوَحْيُنَا وَلَا تَخَظِئْ فِي الَّذِينَ ظَلَمُوا إِنَّهُمْ مُّعَذِّبُونَ ﴿٣٨﴾

وَيَصْنَعِ الْفُلَكَ وَكَلَّمَا مَرْعِيَهُ مَلَأَ مِنْ قَوْمِهِ سَخِرُوا مِنْهُ قَالَ إِنِ اسْخَرُوا مِنِّي فَإِنَّا نَسْخَرُهُمْ مِنْكَ كَمَا تَسْخَرُونَ ﴿٣٩﴾

فَسَوْفَ تَعْلَمُونَ مَن يَأْتِيهِ عَذَابٌ يُخْزِيهِ وَيَحِلُّ عَلَيْهِ عَذَابٌ مُّقِيمٌ ﴿٤٠﴾

حَتَّىٰ إِذَا جَاءَ أَمْرُنَا وَفَارَ التَّنُّورُ قُلْنَا احْمِلْ فِيهَا مِنْ كُلِّ ذَوْجَيْنِ اثْنَيْنِ وَأَهْلَكَ إِلَّا مَن سَبَقَ

民の滅亡を神に祈ったのではなく、神自らが彼にそうさせることを望まれたからであつたことを示すからである。

注16 71章27節、28節に関する祈りは、この節が明示されたあとに、唱えられたものと思われる。この節によると、ノアは彼の民の中から誰も彼を信ずる者が出ないであろうという神の決定を知らされていた。それ故ノアの祈り(71章27節、28節)は、神の意志と定めに対する服従以上の何ものでもなかった。その祈りが意味したことは全て、ノアの民の滅亡についての神の定めを神が実行してもよいということであつた。

注17 ノアの洪水は、ただ単に泉から水が湧き出た為だけではなく、54章12節～13節で明らかな様に、その本当の原因は、にわか大雨が降り出したということであつた。雨は降って激流となり、至る所水びたしとなり、概して大雨の時みられる様に、水も又、地球の深部からわき上がり始めた。そして泉という泉はわき上がり始め、この様にして、水は天からと地からの両方で、全ての土地に洪水をもたらししたのであつた。ノアは、泉が非常に沢山発見された山の多い土地に住んでいたのである。

されど、僅少^{わずか}を除いて、彼と共に信ぜし者はなかりき。(注18)

42. ノアは云えり、「この中に乗り込め。航行も停泊もアッラーの御名においてなせ。我が主は実に寛大にして、慈悲深くまします」と。

43. かくして方舟は彼等を乗せ、山の如き波浪の中へ進め行けり。ノアは離れて立てる我が子に向って呼びかけり、「我が息子よ、我等と偕^{とも}に船に乗れ、不信心者と偕^{とも}にいるなかれ」と。

44. すると息子は答えり、「我は山に逃げて避難せん」と。ノアは云えり、「今日という日は、アッラーが慈悲を垂れる者以外は、何人もアッラーの神慮から無事でいられる者はなし」と。その時、波浪二人の間に寄せ来り、遂に息子は溺死者の一人となれり。(注19)

45. やがて声ありて、云えり、「大地よ、汝の水を吸い込め。大空よ、雨降らすことを止めよ」と。すると洪水は引き、事態は治まり、方舟はジューディー山の上に漂着せり。するとまた声ありて、「滅亡せよ、悪人ども」と云えり。(注20)

عَلَيْهِ الْقَوْلُ وَمَنْ آمَنَ وَمَا آمَنَ مَعَهُ إِلَّا قَلِيلٌ ﴿٣٩﴾

وَقَالَ ارْكَبُوا فِيهَا بِسْمِ اللَّهِ مَجْرِبَهَا وَمُرسِمُهَا
إِنَّ رَبِّي لَغَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٤٠﴾

وَهِيَ تَجْرِي بِهِمْ فِي مَوْجٍ كَالْجِبَالِ تَنَادَى
نُوحٌ ابْنَهُ وَكَانَ فِي مَعْزِلٍ ابْنُيْ ارْكَبْ مَعَنَا
وَلَا تَكُن مَعَ الْكَافِرِينَ ﴿٤١﴾

قَالَ سَاوِيَ إِلَى جِبَلٍ يَتَصَانِي مِنَ الْمَاءِ قَالَ
لَا عَاصِمَ الْيَوْمَ مِنْ أَمْرِ اللَّهِ إِلَّا مَنْ رَحِمَ وَحَالَ
بَيْنَهُمَا الْمَوْجُ فَكَانَ مِنَ الْمُغْرَقِينَ ﴿٤٢﴾

وَقِيلَ يَا أَرْضُ ابْلَعِي مَاءَكِ وَيَسَّاءِ أَقْلِيهِ
وَاغْنِضِي الْمَاءُ وَقْضِيَ الْأَمْرُ وَاسْتَوَتْ عَلَى الْجُودِيِّ
وَقِيلَ بَعْدًا لِلْقَوْمِ الظَّالِمِينَ ﴿٤٣﴾

注18 「各種類の」という言葉は、ここではあらゆる動物たちのことではなく、ノアが必要とした全ての動物のことを意味するのである。確かに、箱舟は世界中にいる全種類の動物のつがいを選ぶのに十分な大きさではなかった。「つがい(各種類2つのみ)」という言葉をつけ加えていることも、又絶対に必要であった数だけの動物が取り上げられたことを示すのである。

注19 この節は、ノアが住んでいた場所が山々に囲まれていたことを示している。普通名詞として使われるジャバル(山)という単語は、一連の山々があったという事実を表わしている。そしてその山のうちの一つに、ノアの息子は避難所を求めたのかもしれない。事実、その場所は高い山々で囲まれた谷であったと思われる。この様な場所は、大雨の時すぐに洪水になってしまうということは驚くべきことではない。

注20 ヤクートウル、ハムウィによると、アル・ジュディ山は、モサル地方のチグリス河の東側にある長い一連の山々である。サッレによれば「アル・ジュディは、南側のアルメニアを、メソポタミアとカード人が住んでいたアッシリアの地方とから分ける山々のうちの一つである。その山は、カード人からカルドウ又は、ガルドウという名をとったのだが、ギリシヤ人がそれを Gordyoei と変えてしまったのである……。ノアの箱舟がこれらの山の上に止まったと断言している言伝は、かなり古代のものであったに違いない。というのは、それはキャルディーン自身の言伝だからである (Berosusapud Joseph.Antiq……)。ノアの箱舟の名残りは、

46. ノアはその主を呼びて、云えり、「我が主よ、息子は我が家族の一員なり。汝の約束は真実であり、汝は審判者の中で最も公明正大なる御方にまします」と。

47. 主は云えり、「ノアよ、彼は汝の家族の一員に非ず。彼は不行跡な人間なり。されば汝が知らざることについて、われに求めを請うなかれ。われは警告す、汝が無知なる者の一人とならぬよう」と。(注21)

48. ノアは云えり、「主よ、汝のお加護によりまして、我、自ら知らざることを汝に請ひ求めざらんことを。汝が我を救し、慈悲を垂れ給わざれば、我は失敗者の列に加わらん」と。(注22)

49. 声ありて、云えり、「ノアよ、われらが賜う平安と共に上陸せよ。汝並びに汝と偕にある人々から生まれる民族に祝福あれ。しばしの間享楽に与る民族もあろうが、然る後に彼等にはわれらの痛刑が降されん」と。(注23)

وَنَادَى نُوحٌ رَبَّهُ فَقَالَ رَبِّ إِنَّ ابْنِي مِنْ أَهْلِي
وَإِنَّ وَعْدَكَ الْحَقُّ وَأَنْتَ أَحْكَمُ الْحَاكِمِينَ ﴿٤٦﴾

قَالَ يُنوحُ إِنَّهُ لَيْسَ مِنْ أَهْلِكَ إِنَّهُ عَمَلٌ غَيْرُ
صَالِحٍ فَلَا تَسْأَلْنِي مَا لَيْسَ لَكَ بِهِ عِلْمٌ إِنِّي
أَعِظُكَ أَنْ تَكُونَ مِنَ الْجَاهِلِينَ ﴿٤٧﴾

قَالَ رَبِّ إِنِّي أَعُوذُ بِكَ أَنْ أَسْأَلَكَ مَا لَيْسَ لِي بِهِ
عِلْمٌ وَإِلَّا تَغْفِرْ لِي وَتَرْحَمْنِي أَكُنْ مِنَ
الْخَاسِرِينَ ﴿٤٨﴾

قِيلَ يُنوحُ اهْبِطْ بِسَلَامٍ مِنَّا وَبَرَكَاتٍ عَلَيْكَ وَ
عَلَى أُمَمٍ مِمَّنْ مَعَكَ وَأُمَمٌ سَنُبْعِعُهُمْ فِي كَمٍّ
مِنَّا عَدَابُ الْيَمِّ ﴿٤٩﴾

又、エビファニアスの時代にここで見られたのであった……そして、ヘラクレス王はタマニーン町からアル・ジュディ山に登って行き、ノアの箱舟の場所を見たといわれている。又、以前には、“ノアの箱舟修道院”と呼ばれた有名な修道院があった。ネストリア人は、これらの山々の上のノアの箱舟が止まったとみなされた場所で、祝祭日を祝ったものであった。しかし、西暦 776 年にその修道院は、いなすまによって破壊されたのであった (サレSele P 179, 180) ……。ジュディ (Djudi) は、ジャズィラ・イブン・オマルの北西約 25 マイル、北緯 37 度 30 分、ブタン地方のそびえ立つ山の一群である……。ジュディの名声はメソポタミアの言伝えをよりどころにしている。この言伝えは、ノアの箱舟が止まった山は、アララット山ではなく、ジュディであることを確認するのである……。古い聖書の注釈書は、現在ジュディと呼ばれている山をそれとみなし、あるいはキリスト教当局によれば、Gordyeneの山がノアの避難所にされたということである (Enc. of Islam, 1 巻 P 1059)。バビロニアの言伝えも又、アルメニアのアル・ジュディ山をその場所とし (Jew. Enc. “Ararat”参照)、旧約聖書は、バビロンがノアの子孫の住んだ場所であることを認めるのである (創世記 11 章 9 節)。

注21 この節によれば、これらの人々だけがノアの家族の一員とみなされ、彼を通じて、神と真実の関係を確立したのであった。

注22 ノアは、彼の息子が彼の家族の中に含まれていないかと言ったことは、罪ではなかった。それは単に人間らしい誤った判断だったのである。しかも彼はごんげをした。そのことは、ごんげをすることが、必ずしも人の罪深きことの証明とはならないことを示すのである。ごんげは又、人間の弱さからくる悪や、誤った判断の結果による悪から自分を守ってくれることもあるのだ。

注23 この節は、ノアの子孫とは切り離して、ノアの箱舟で彼と一緒にいた信仰者達の子孫も、ノアの洪水から救われ、繁栄し、増加したことを示すものである。現在、学者達は、今地上に住んでいる者の殆どがノア

50. これはわれらが汝に啓示する、知られざる消息なり。以前は汝之を知らず、汝も汝の民もまた。されば汝、忍耐せよ。善果は神を畏れ敬う人々のものなり。(注24)

تِلْكَ مِنْ أَنْبَاءِ الْغَيْبِ نُوحِيهَا إِلَيْكَ مَا كُنْتَ
تَعْلَمُهَا أَنْتَ وَلَا قَوْمُكَ مِنْ قَبْلِ هَذَا فَاصْبِرْ
إِنَّ الْعَاقِبَةَ لِلْمُتَّقِينَ ﴿٥٠﴾

第五項

51. われらはアードの民に、その同胞フードを遣わせり。彼は云えり、「我が民よ、唯アッラーを崇拜せよ。お前たちはアッラー以外に神を有せず。彼に配したる他神は、お前たちが作り出したものにすぎず。(注25)

وَالِى عَادٍ أَخَاهُمْ هُودٌ قَالَ يَقَوْمِ اعْبُدُوا اللَّهَ
مَا لَكُمْ مِنَ الْإِلَهِ غَيْرُهُ إِنْ أَنْتُمْ إِلَّا مُفْتَرُونَ ﴿٥١﴾

の子孫であるとの見方に賛成するのである。

ノアの洪水の話は、さまざまな国の言伝えと文学の中に見ることが出来、それらは少しずつ異なっている(Enc. Rel. & Eth.; Enc. Bib & Enc. Brit. "Deluge"参照)。この悲劇の結末は、人類の文明が起り始めた頃、どこかで起こったと推測される。比較的文化と文明が進んだ一民族が、ある国に定住するようになる時は、常にその土地に以前からいた文明の遅れた住民達を抹殺してしまったか、彼らを非常に弱体化させたかのどちらかであったことは、歴史的によく知られた事実である。この様に人類文明の幕明け役であったノアの子孫と彼の仲間達は、他の土地に散らばって行ったのである。というのは、彼らはすでにその土地に住んでいた民族より強力であった為に、その民族を滅ぼしてしまったか、自分達の中に吸収してしまったかであった。この様にして、彼らは征服して全ての国に彼ら自身の伝統と習慣をとり入れていったに違いないのである。そしてその結果、ノアの箱舟についての言伝えも又、他の土地に紹介されていったに違いない。しかし、時の経過と共に、移住者達は、元の土地とのつながりを持たなくなり、その結果、悲劇の結末はどこかの土地での出来事とみなされる様になり、人や場所のその地方での呼び方が、元の名前にとってかわる様になったのであった。ノアの洪水は全人類への天罰ということでもなかったし、いろいろな土地の言伝えが別の洪水のことを指すにとられていた訳でもなかったのである。

注24 いろいろな予言者達についてのクルアーンの説明は、単なる物語として、もくろまれているのではない。それらの話はクルアーンの中に与えられているが、その理由は、それらが、モハammad自身の人生に起こる予定であった似通った出来事についての予言的暗示を含んでいるからである。

注25 いくつかのヨーロッパの批評家達はアード人そのものの存在を否定した。今迄アラビアで発見された碑文の中で、アードがその国のある民族の名前だと述べているものは一つもないと彼らは言う。それで、クルアーンはマホメットの時代に、アラブ人の間に広くいきわたっていた人気のある伝説の中の一つを引用したにすぎなかったのだと主張するのである。この反論は誤解の上に成り立っている。事実、人種の区分には、二通りあることが一般に知られている。一つは人種全体を表わす名前であり、もう一つは、その人種のうちのある特定のグループを表わすものである。アードは単一種族の名ではなく、幾つかの種族の集まりの名であり、それらの中の異なる種族が時を変えて権力をふるったのであった。彼らは、特定の集まりの名を携える碑文を残したのであった。しかし彼らは全て、中心となるアード族に属していた。この名が、古代の地理の本の中にある、という事実もまたアードという名の民族が確かに住んでいたことも示すのである。クルアーンの中で述べられているアード種族は、イラームと呼ばれていた。アードの中のこのイラーム派は、紀元前500年迄続いた強大な王国を築いていた。彼らの言語はアラミ語で、ヘブライ語と同族である。アラム王国は、セム王国の滅亡後築かれ、その境界の中に、メソポタミア、パレスチナ、シリア、カルディアの全てを含んでいた。考古学の調査で、この王国の跡が発見されたのである。

アード種族は、ノアの民のすぐあとに生活していた(7章70節)。彼らは高い場所に記念物を築いた(26章

52. 我が民よ、我は之がために如何なる報酬もお前たちに求めず。我が報酬は、我を創り給うた彼の御許にのみあり。それでもお前たち理解し得るか？

يَقَوْمُ لَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ أَجْرًا إِنْ أَجَرْتُمَنِ إِلَّا عَلَى
الَّذِي فَطَرَنِي أَفَلَا تَعْقِلُونَ ﴿٥٢﴾

53. 我が民よ、お前たちの主に赦しを請い、おすがりすれば、彼はお前たちの上に雲を送り、沛然たる雨を降らし、お前たちの力に更に力を加うべし。されば不信心者となって、彼から顔をそむけることなかれ」と。
(注 26)

وَيَقَوْمِ اسْتَغْفِرُوا رَبَّكُمْ ثُمَّ تُوبُوا إِلَيْهِ يُرْسِلِ
السَّمَاءَ عَلَيْكُمْ فِدْرَارًا وَيَزِدْكُمْ قُوَّةً إِلَى قُوَّتِكُمْ
وَلَا تَتَوَلَّوْا مُجْرِمِينَ ﴿٥٣﴾

54. 彼等は云えり、「フードよ、汝は我等に如何なる確証も齎さざりき。されば彼等は、汝の言葉だけでは、彼等の神々を棄てる気はなし。また汝を信ずる気もなし。

قَالُوا يَهُودُ مَا جِئْتَنَا بِبَيِّنَةٍ وَمَا نَحْنُ بِتَارِكِي
الْهَيْثَانِ عَنْ قَوْلِكَ وَمَا نَحْنُ لَكَ بِمُؤْمِنِينَ ﴿٥٤﴾

55. 我等は唯、我等の神々の或る者が汝に禍をなせり、と云う得るのみ」と。フードは答えて、云えり、「我はアッラーに立証を願う、されば汝等もまた、我は彼以外に、汝等の神々に関りなきことを証言せよ。

إِنْ نَقُولُ إِلَّا اعْتَرَاكَ بَعْضُ آلِهَتِنَا بِسْمٍ قَالَ إِنِّي
أَشْهَدُ اللَّهَ وَأَشْهَدُ أَنِّي بَرِيٌّ مِمَّا تَشْرِكُونَ ﴿٥٥﴾

56. さればお前たちみなで、我に刃向かう計画を工夫せよ。我に猶予を与えるなかれ。

مِنْ دُونِهِ فَبِكَيْدٍ وَفِي جَيْعَانِهِمْ لَا تَنْظُرُونَ ﴿٥٦﴾

57. げに我は、我が主にしてお前たちの主なるアッラーを信頼し奉る。生きとし生ける者、一としてアッラーがその前髪を捕えざるはなし。(注 27) げに主は、彼を頼る人々を救うべく、正道の上に立ち給う。

إِنِّي تَوَكَّلْتُ عَلَى اللَّهِ رَبِّي وَرَبِّكُمْ مَا مِنْ دَابَّةٍ
إِلَّا هُوَ آخِذٌ بِنَاصِيَتِهَا إِنْ رَدَّتْ إِلَى صِرَاطٍ
مُسْتَقِيمٍ ﴿٥٧﴾

129 節)。アラビアには、今も尚、大建造物の遺跡が残っている。これらの民の歴史は今、薄暗がりにおおわれてしまい、只、いくらかの建物の遺跡が見られるだけである (46 章 26 節)。これらの民が住んでいた領域は、アフカーフ (46 章 22 節) と呼ばれている。それは、文字上は、ゆるやかに曲がりくねった Z 字形の砂丘を意味するが、アラビアの二つの場所に与えられた名である。一つは南部で、南アフカーフとして知られており、もう一つは北部で、北アフカーフと呼ばれている。これらの広大な地域はよく肥えた地であるが、砂漠の近くである為に、砂漠の砂が風で積み上げられて、そこに砂丘を作り上げる。アードが砂嵐によって罰せられた時、これらの砂丘が出来上がったのかもしれない。彼らの滅亡は吹きつける激しい風によって引き起こされ、彼らの主要都市を山のような砂と塵の下に埋めつくしていったのであった (69 章 7、8 節)。

注 26 アードの人々の主要な職業は農業であり、彼らの土地には井戸も灌漑用水もなかった為、耕作の為に雨水にたっていたと思われるのである。

注 27 前髪を捕えるというのは、アラブ人の古い習慣に関係している。征服された民族が捕虜として征服者の前に連れて来られた時、征服者は彼の前髪をしっかりと捕えていたか、勝利のしるしに彼らの前髪をそらせたのであった。

58. 然れどもなお、たといお前たち背き去るとも、我はすでに我が使命をお前たちに伝達せり。主はお前たちの代りに、他の民で置き替えん。お前たちは彼を毫も害する能わぬ。げに主は、一切を監視し給う」と。

59. かくてわれらの命令が下るや、われらはフード並びに彼と共に信ぜし人々を救えり。われらは厳刑酷罰から彼等を救助せり。

60. アードとはこのような者なりき。彼等はその主の徴を拒否し、その使徒たちに背き、真理の敵の傲慢な命令に従えり。

61. かくて彼等は、この世において、また復活の日において、呪いの言葉につきまとわれたり。見よ、アードの手合いはその主に対して恩知らずな振舞をなせり。見よ、フードの民アードは遠くへ放逐されたではないか！

第六項

62. またわれらは、サムード族にはその同胞のサーリフを遣わしたり。彼は云えり、「我が民よ、アッラーを崇拝せよ。お前たちは彼以外に神を有せず。彼はお前たちを地より興し、そこにお前たちを住ましめ給うた。されば彼に教しを請い、帰依しまつれ。まこと我が主はいと近くにましまして、祈願に応え給う。

63. 彼等は云えり、「サーリフよ、汝は我等の間で希望の的なりき。汝は我等が父祖が拝みしものを、我等に拝むかと云うか？なれど、汝が勧める教えについて、我等は訝しみ疑う」と。

64. サーリフは云えり、「我が民よ、云ってみよ、もし我主よりの明証の上に立ち、じきじきに特別な慈悲を賜わっていながら、もし我主に背かば、誰が我をアッラーから衛る

فَإِنْ تَوَلَّوْا فَقَدْ أَبْلَغْتُكُمْ مَا أُرْسِلْتُ بِهِ إِلَيْكُمْ
وَبَسْتَلْقِ رَبِّي قَوْمًا غَيْرَكُمْ وَلَا تَضُرُّوهُ شَيْئًا إِنْ
رَبِّي عَلَى كُلِّ شَيْءٍ حَفِظٌ ﴿٥٨﴾

وَلَمَّا جَاءَ أَمْرُنَا نَجَّيْنَا هُودًا وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ
بِرَحْمَتِنَا وَنَجَّيْنَاهُمْ مِنْ عَذَابٍ غَلِيظٍ ﴿٥٩﴾

وَلِئَلَّا عَادٌ تُشْحَذُوا بِآيَاتِ رَبِّهِمْ وَعَصَوْا رُسُلَهُ
وَاتَّبَعُوا أَمْرَ كُلِّ جَبَّارٍ عَالِيَةٍ ﴿٦٠﴾

وَاتَّبِعُوا فِي هَذِهِ الدُّنْيَا لَعْنَةً وَيَوْمَ الْقِيَمَةِ
إِنْ عَادُوا كَفَرُوا رَبَّهُمْ أَلَا بُعْدُ لِعَادٍ قَوْمِ هُودٍ ﴿٦١﴾

وَالِى ثُودَ أَخَاهُمْ صَالِحًا قَالَ يَقَوْمِ اعْبُدُوا اللَّهَ
مَا لَكُمْ مِنْ إِلَهٍ غَيْرُهُ هُوَ أَنشَأَكُمْ مِنَ الْأَرْضِ
وَاسْتَعْمَرَكُمْ فِيهَا فَاسْتَغْفِرُوهُ ثُمَّ تَوْبُوا إِلَيْهِ
إِنَّ رَبِّي قَرِيبٌ مُجِيبٌ ﴿٦٢﴾

قَالُوا يَصْلِحْ قَدْ كُنْتَ فِينَا مَرْجُوًّا قَبْلَ هَذَا أَتَنُحَا
أَنْ نَعْبُدَ مَا يَعْبُدُ آبَاؤُنَا وَإِنَّا لَفِي شَكٍّ مِمَّا
نَدْعُونَ إِلَيْهِ مُرِيبٌ ﴿٦٣﴾

قَالَ يَقَوْمِ أَرَأَيْتُمْ إِنْ كُنْتُ عَلَى بَيِّنَةٍ مِنْ رَبِّي
وَأُتِنِي مِنْهُ رَحْمَةً فَمَنْ يَنْصُرُنِي مِنَ اللَّهِ إِنْ

を得べけんや？さればお前たちは、ただ我が破滅を促さんとするものなり。

65. 我が民よ、これなるはアッラーがお前たちへの徴として賜われる牝駱駝なり。されば彼女をアッラーの大地に放牧し、身近な懲罰を被らぬように之に危害を加えることなかれ」と。

66. 然るに彼等はその駱駝の腹を切れり。そこでサーリフは云えり、「三日の間お前たちは自分の家で楽しむがよい。これは違ふことなき約束なるぞ」と。(注 28)

67. かくてわれらの命令が下るや、われらは特別な慈悲によって、サーリフ並びに彼と共に信ぜし人々を救い、また該の日における恥辱からも救いたり。げに汝の主は、強力にして偉大なる者にまします。

68. 懲罰が不義を行いし者どもに襲いかかるや、彼等は家の中で伏し横たわる、

69. さながら彼等はその中に絶て住まなかつた者の如く。見よ、サムードはその主に対して恩知らずな振舞をなせり。見よ、サムードは遠くへ放逐されたではないか！(注 29)

第七項

70. われらの使徒たち(注 30)は朗報を携えてアブラハムに至れり。彼等が「平安あれ」

عَصِيَّتُهُ فَمَا تَزِيدُونَنِي غَيْرَ تَخْسِيرٍ ⑩

وَيَقَوْمُ هَذِهِ نَاقَةُ اللَّهِ لَكُمْ آيَةٌ فَمَذَرُوهَا تَأْكُلُ فِي أَرْضِ اللَّهِ وَلَا تَسْوَهَا بِسَوْءٍ فَيَأْخُذْكُمْ عَذَابٌ قَرِيبٌ ⑪

فَعَقَرُوهَا فَقَالَ تَمَتَّعُوا فِي دَارِكُمْ ثَلَاثَةَ أَيَّامٍ ذَٰلِكَ وَعَذَابٌ غَيْرُ مَكْدُوبٍ ⑫

فَلَمَّا جَاءَ أَمْرُنَا نَجَّيْنَا طِيعًا وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ بِرَحْمَةٍ مِنَّا وَمِنْ خِزْيِ يَوْمِئِذٍ إِنَّ رَبَّكَ هُوَ الْقَوِيُّ الْعَزِيزُ ⑬

وَآخِذِ الَّذِينَ ظَلَمُوا الصَّيْحَةَ فَأَصْبَحُوا فِي يَوْمِئِذٍ جُثَيِّينَ ⑭

كَانَ لَمْ يَغْتَوِئْهَا إِلَّا رَاتٍ مُّوَدًّا لِّقَوْمِهِمْ ⑮
إِلَّا بُعْدًا لِلشُّوَدَّ ⑯

وَلَقَدْ جَاءَتْ رُسُلُنَا إِبْرَاهِيمَ بِالْبُشْرَىٰ قَالُوا سَلَامٌ

注 28 三日の猶予というのは多分、後悔の為の最後のチャンスとしての意味があったのであろうが、不運な民はそれを利用しなかったのである。

注 29 61 節では、「フードの民」という言葉が、歴史上の理由の為に、アードという単語につけ加えられていた。というのは、実際アードは、二つの種族の名前、1 番目のアード人と 2 番目のアード人とがある。そして「フードの民」という言葉がつけ加えられていたのは、そこで意味しているのが 1 番目のアード人のことであって、2 番目の方ではないことを示す為であった。しかし、タムードは、一種族のみの名前であったので、「予言者サレの民」という言葉は省略されていた。理由は、それをつけ加えても、どんな有益な目的にもかなわなかったであろうからである。

注 30 「使徒達」が誰であったかに関しては、異なった意見がある。ある者は、彼らを人間と考え、ある者は彼らは天使だと考える。前者の見方は、真実と現実により近いと思われる。アブラハムとロトの二人は、そ

と挨拶すると、彼も「平安あれ」と応え、ただちに焼いた^{こやし}積^{あや}を供したり。(注31)

71. 然るに、アブラハムは彼等の手が^{こやし}積^{あや}に触れざるのを見て、彼之を怪しみ、彼等に怖れるを抱きたり。すると彼等は云えり、「怖れるなかれ、我等はロトの民へ遣わされた者なり」と。(注32)

72. その時、彼の妻そばに居合わせれば、彼女もまた恐怖を覚えたり。そこで、われらは彼女にイサクと、イサクの後にヤコブが産まれる朗報を伝えたり。

73. 彼女は云えり、「情けなや、^{かへは}妾はすでにいたく老い、我が夫も老人なるに、我如何にして子を産むべけんや？これはまことに不思議なことなり」と。

74. すると彼等は云えり、「汝はアッラーの御決定を不思議に思うか？アッラーの慈悲と祝福がこの家の人々の上にあれかし。げに彼は、讃美と栄光を受け給うべき御方なり」と。(注33)

قَالَ سَلَامٌ عَلَيْكَ اِنْ جَاءَ بِوَعْدِ حَنِينٍ ⑤

فَلَمَّا رَاَ اَيْدِيَهُمْ لَا تَصِلُ اِلَيْهِ نَكَّرَهُمْ وَاَوْجَسَ مِنْهُمْ خِيفَةً قَالُوا لَا تَحْزَنْ اِنَّا اُرْسِلْنَا اِلَى قَوْمٍ لَّوْطٍ ⑥

وَاَمْرَاتِهِ قَالِيَهُ فَضَحِكْتَ فَبَشَّرْنَاهَا بِاسْحٰقٍ وَ مِنْ وَّرَآءِ اِسْحٰقَ يَعْقُوبُ ⑦

قَالَتْ يٰوَيْلَتِيْ اَلَيْدُ وَاَنَا عَجُوزٌ وَهٰذَا بَعْلِيْ شَيْخًا اِنَّ هٰذَا لَشَيْءٌ عَجِيبٌ ⑧

قَالُوا اَتَعْجَبِينَ مِنْ اَمْرِ اللّٰهِ رَضِيَ اللّٰهُ وَرَحْمَتُهُ عَلَيْكُمْ اَهْلَ الْبَيْتِ اِنَّهُ حَنِيدٌ مُّجِيدٌ ⑨

の土地は初めてであったところから、神がその地方の信心深い人々に命じて、天罰が実際に彼の民に襲いかかる前に、ロトを安全な場所に連れて行くよう命じられた、という可能性がかなりある。ロトの民はすでに懲罰におどされていた(15章65節)。「使徒達」は、ただ彼に約束された恐るべき懲罰の時が来たことを知らせる為にのみ来たのであった。

注31 アブラハムの本当の名前はアブラムであった。イシュマエルの誕生の後、神御自身の命令によって、彼は「民族の父」とか「多くの民族の父」を意味するアブラハムと呼ばれる様になった。彼の子孫の一派イスラエル人はカナンに住み、他の一派はイシュマエルの民で、アラビアに住んでいた。

注32 アブラハムは最初、「使徒達」を普通の旅人と思っていたが、彼らが焼いた子牛を食べるのを控えた時、彼は彼らが特別な使命を帯びているのに気がついたのであった。それを彼は理解することが出来なかったのであった。「彼等に怖れるを抱きたり」という言葉は、アブラハムが見知らぬ旅人を恐れるという意味ではなく、彼らがその食物を口にしなかった時、彼はもてなしの作法に反することを何かしたのではないかと恐れたのであった。客はアブラハムの落ち着かない表情から彼の心の不安な状態を読み取ったと思われる。それで、彼らはすぐにアブラハムに、自分達は気分を害している訳ではなく、食べ物をごちそうにならない理由は、自分達の恐ろしい使命が食べる気をなくさせているのだ、と言って、彼の心配を取り除いたのであった。客はこの返答もまた、彼らが天使ではなかったことを表わしている。もし彼らが天使であったなら、彼らは自分達は人間ではないから食べ物に手をつけることが出来ないのだと言ったことであろう。ロトは、ハランの息子、テラーフの孫であり、パレスチナ人、モアブとアンモーンの祖先であった。彼はアブラハムのおいでであり、カナンでアブラハムに加わったのである。

注33 この節では、「この家の人々」という言葉は、明らかにアブラハムの妻に当てはまるのである。理由は彼女は子供を一人も産んでいなかったからである。事実、予言者 a Prophet に関してクルアーンの中で家

75. アブラハムから恐怖が去り、朗報が彼に伝えられると、彼はロトの人々のためにわれらに対して弁護せり。(注34)

فَلَمَّا ذَهَبَ عَنْ إِبْرَاهِيمَ الرَّوْعُ وَجَاءَتْهُ الْبَشَرُ
يُجَادِلُنَا فِي قَوْمِ لُوطٍ ⑤

76. げにアブラハムは、温厚で心優しく、幾たびとなく改悛せり。

إِنَّ إِبْرَاهِيمَ لَحَلِيمٌ أَوَّاهٌ مُنِيبٌ ⑥

77. 「アブラハムよ、思いとどまれ。主の御決定はすでに下り、避け難き懲罰が彼等の上に来りつつあり」

يَا إِبْرَاهِيمُ اعْرِضْ عَنْ هَذَا إِنَّهُ قَدْ جَاءَ أَمْرُ
رَبِّكَ وَإِنَّهُمْ آتِيهِمْ عَذَابٌ غَيْرُ مَرْدُودٍ ⑦

78. われらの使徒等がロトに至るや、彼は彼等のために心を痛め、彼等のために無力なるを感じ、「こは苦難の日なるかな」と云えり。

وَلَمَّا جَاءَتْ رُسُلُنَا لُوطًا سِئَىٰ بِهِمْ ضَاقَ بِهِمْ
ذَرْعًا وَقَالَ هَذَا يَوْمٌ عَصِيبٌ ⑧

79. 人々はあわてふためいて彼に来たれり。(注35) 彼等はこれ以前にも悪事を重ねたりき。彼は云えり、「我が民よ、ここに我が娘たちあり。彼女等は、お前たちには潔きに過ぎる。さればアッラーを畏れ、我が客人たちの前で我を辱しむるなかれ。お前たちの中には一人も正義の心の者が在らざるか？」と。(注36)

وَجَاءَهُ قَوْمُهُ يُهْرَعُونَ إِلَيْهِ وَمِنْ قَبْلُ كَانُوا
يَعْمَلُونَ السَّيِّئَاتِ قَالَ يَقَوْمِ هَؤُلَاءِ بَنَاتِي هُنَّ
أَطْهَرُ لَكُمْ فَاتَّقُوا اللَّهَ وَلَا تَخْرُونِ فِي ذَيْفِ الْيَمِينِ
مِنْكُمْ رَجُلٌ رَشِيدٌ ⑨

の人々という表現が使われている時、概してそれは、彼の妻又は妻達を指しているのである(28章13節、33章34節)。

注34 創世紀18章21節-33節参照。

注35 ソドムとゴモラの二つの町の住人は、街道で旅人達から金品を略奪したものであった。(Jew. Enc. "Sodom"参照)。当然彼らは常に報復を恐れていた。特にソドムの住人は、実際隣国と戦争状態にあった(創世紀14章)。彼らはよそ者が町に入ることを歓迎しなかったのである。ロトは、神の全ての予言者達のように、自然に旅人の世話をし、もてなしたものであった(15章71節)。彼の民は、いつも不安がって、繰り返して彼にその習慣を捨てよう警告していたので、彼が旅人である「使徒達」を家に招き入れた時、彼らは激怒し、怒った顔つきで彼の家にとんで来た。なぜなら、彼らが何度も抗議しているのを無視して彼がよそ者に宿をやす為、今度こそ彼を罰する良い機会を得たと思ったのであった(15章68節-71節)。

注36 ロトは、彼らの今迄の悪い行いから考えて、何か悪いことをして客の前で彼をはずかしめはしないかと恐れたことを、この節は表わしている。ここではその悪い行いがどんなものかについては特に言及していない。彼らは邪な民であったので、ロトは彼らが彼に何か害を与えるかもしれないことを、当然理解していた。それで彼は彼らに、もし彼らが本当に彼がよそ者と結託して彼らに害をなすかもしれないと恐れるのなら、彼の娘達を拘留し彼女達を罰することによって彼への怒りをぶちまけることができるであろう、と言った。それは彼らを取り上げるのに、より良くより清浄な道であった。なぜなら、その方法なら、彼らは彼の客を侮辱するという恥すべき行動を避けることもしたであろうからである。あるいは、その意味は次の様であるかもしれない。ロトは町の尊ぶべき高齢者として人民自身の妻達のことを我が娘達と呼んだのかもしれない。彼女達はその町の人たちにとって清浄だと言った。

80. 彼等は答え、「汝は、我等が汝の娘たちに対して何も求めることなきことを知り、また我等が何を欲するかを知る」と。(注37)

قَالُوا لَقَدْ عَلِمْتَ مَا لَنَا فِي بَنَاتِكَ مِنْ حَقٍّ وَإِنَّكَ لَتَعْلَمُ مَا نُرِيدُ ①

81. 彼は云えり、「我にお前たちを処理する力あらんことを、或いは、我を擁護してくれる強力な支えを得んことを」と。(注38)

قَالَ لَوْ أَنَّ لِي بِكُمْ قُوَّةً أَوْ آوِي إِلَى رُكْنٍ شَدِيدٍ ②

82. すると使徒たちは云えり、「ロトよ、我等は汝の主の使徒なり。(注39) 彼等は決して汝を害する能わ^{あた}ず。されば夜の間に汝の家族と共に立ち去れ。而^{しか}してお前たち家族の何人をも後を振り向かしめるな、但し汝の妻は除く。彼等の身に降りかかることが、彼女にも起らん。彼等の定め^{なんびと}の刻限は朝なり。朝はすでに近きに非ずや？」と。

قَالُوا يَلُوطُ إِنَّا رُسُلُ رَبِّكَ لَنْ يَصْلَوْا إِلَيْكَ فَأَوْرَثْنَاكَ بِقَطْعٍ مِنَ اللَّيْلِ وَلَا يَلْتَفِتْ مِنْكُمْ أَحَدٌ إِلَّا أَمْرًا تَكُنْ إِنَّهُ مُصِيبُهَا مَا أَصَابَهُمْ رَأْسُ مَوْعِدُهُمُ الصُّبْحُ الْيُسُ الصُّبْحُ يَقْرِبُ ③

83. かくてわれらの命令が下るや、われらはその邑を転覆し、泥石をその上に雨と注ぎ積らせたり、(注40)

فَلَمَّا جَاءَ أَمْرُنَا جَعَلْنَا عَالِيَهَا سَافِلَهَا وَأَمْطَرْنَا عَلَيْهَا حِجَابًا فَرِنْ يَتَجَلَّىٰ مَنصُودٍ ④

84. 汝の主の決定^しを印した泥石を。かかる刑罰は今日の不義者を隔てること遠からざるものなり。

مُسَوِّمَةً عِنْدَ رَبِّكَ وَمَا هِيَ مِنَ الظَّالِمِينَ بَعِيدَةٌ ⑤

第八項

85. それからまたミディアン^{はらみ}の民にわれらはその同胞シュアイブを遣わしたり。彼は云え

وَإِلَىٰ مَدْيَنَ أَخَاهُمْ شُعَيْبًا قَالَ يَوْمِ اعْبُدُوا

注37 ロトが町ですでに結婚している彼の娘達(創世紀19章15節)を人質として提案した時、彼の民は女性を人質としてとることは彼らの習慣に反するので、その提案を受けるのを拒否した(Enc. Brit.)。「我等が汝の娘たちに対して何も求めることなき」という言葉は、彼らが多くの注解者がいっている様な娘達のせいだとする動機を持ってやって来たのではなかったことを示している。というのは、ロトの民の様に道徳的に墮落し、腐敗した民は、肉欲の情熱を満足させることにに関して、権利があるとかないとか、正しいとか正しくないとかいう様な疑問はいだかないものであるからであった。「我等が何を欲するかを知る」という言葉は、「我々の望みは、よそ者を我々に引き渡すことだとお前は知っているはず」ということを意味するのである。

注38 お前達は、私が客を追い払うべきだと主張して、私の上に屈辱がふりかかるのを望んでいるが、私はその屈辱から救われる様神に祈るであろう。

注39 「使徒達」は、ロトに警告を与え、どこへ行くかを導くよう神から命令されていた隣国の高潔な人達であった。

注40 ロトの民は恐ろしい地震によって滅亡したと思われる。激しい地震は、しばしば地球のある部分を上下にひっくり返し、土の破片が空中に吹き飛び、そして落ちるのである。

り、「我が民よ、アッラーを崇拜せよ。お前たちは彼以外に神を有せず。度量衡を不足するなかれ。お前たちは繁栄しているようであるが、我はお前たちのために滅亡の日のその刑罰を恐る。(注 41)

اللَّهُ مَا لَكُمْ مِنْ إِلَهٍ غَيْرُهُ وَلَا تَنْقُصُوا الْمِكْيَالَ
وَالْيُوزَانَ إِنِّي أُرَاكُمْ بِخَيْرٍ وَإِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ
عَذَابَ يَوْمٍ مُحِيطٍ ④⑤

86. 我が民よ、度量衡は公正に十分に計れ、他人のものを詐取するなかれ、不正を行って地上に騒乱を引き起すなかれ。

وَيَقُومُوا أَوْفُوا الْمِكْيَالَ وَالْيُوزَانَ بِالْقِسْطِ وَلَا
تَبْخَسُوا النَّاسَ أَشْيَاءَهُمْ وَلَا تَعْتُوا فِي الْأَرْضِ
مُفْسِدِينَ ④⑥

87. アッラーがお前たちの手許に遺すもののほうがお前たちのためには一層よい、もしお前たち信者ならば。されど我はお前たちの監守者たる身に非ず」と。

بَقِيَتْ لِلَّهِ خَيْرٌ لَكُمْ إِنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ وَمَا أَنَا
عَلَيْكُمْ بِحَفِيفٍ ④⑦

88. 彼等は云えり、「シュアイブよ、汝の教えは、我等が父祖の崇めしものを捨つるべしと命じ、且つ我等の財産を己が意のままにすべからずと命ずるのか？ 汝はほんとに、自分が聡明であり、公正な者だと思い込んでいる者よ」と。

قَالُوا يُشْعِبُ أَصْلُوتَكَ تَأْمُرُكَ أَنْ تَتْرَكَ مَا
يَعْبُدُ آبَاؤُنَا أَوْ أَنْ نَفْعَلَ فِي أَمْوَالِنَا مَا نَشَاءُ
إِنَّكَ لَأَنْتَ الْحَكِيمُ الرَّشِيدُ ④⑧

89. 彼は云えり、「我が民よ、我に告げよ、もし我、主から賜われる明証の上に立ち、且つ主は我に手厚い給養をじきじきに賜われり、お前たち之を主に何と回答せん？ 我はお前たちに禁じたることを、かげで之を行わんと欲せず。我は出来得る限り世の中の物事を正しくせんと願うのみ。アッラーによる以外には、我は何事も成し遂げる力を有さず。我は彼を頼り、而して彼のお傍に帰り行く。(注 42)

قَالَ يَقُومُ أَرَأَيْتُمْ إِنْ كُنْتُ عَلَى بَيْتَةٍ مِّنْ
رَّبِّي وَرَزَقْنِي مِنْهُ رِزْقًا حَسَنًا وَمَا أُرِيدُ أَنْ
أُخَالِفَكُمْ إِلَىٰ مَا أَنهَضْكُمْ عَنْهُ إِنْ أُرِيدُ إِلَّا
الْإِصْلَاحَ مَا اسْتَطَعْتُ وَمَا تَوْفِيقِي إِلَّا بِاللَّهِ
عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ وَإِلَيْهِ أُنِيبُ ④⑨

注 41 マディアンは、アブラハムの三番目の妻ケトラの息子であった。(創世記 25 章 1 節、2 節)。彼の子孫は皆マディアンと呼ばれた。彼らの首都もまたマディアンと呼ばれた。この町はアラビア海岸上、海から 10 キロ入り込んだアクバ湾にあった。マディアンの子孫がヘジャーズの北に住み、彼らがこの町を作り上げたのである。モーゼがファラオから避難する為に逃げたのはここであったし、彼が紅海をわたったあと、イスラエル人と共にいたのはマディアンの近くであった。7 章 86 節も参照。

注 42 シュエーブに反対する者達は、彼は彼らが詐欺を働くのを押さえて、自分の仕事を進めようとしてしていると疑ったのである。

90. 我が民よ、我に反抗して、ノアの民やフードの民、またサーリフの民が遭遇した如き運命に自分自身を導き行かしむるな。特にロトの民はお前たちと隔たること遠からず。(注43)

91. さればお前たちの主に赦しを請い、誠意をもっておすがりせよ。主はまことに慈悲深く、愛に満ちたお方でいらせられる」と。

92. 彼等は云えり、「シュアイブよ、我等、汝の云うことを解せず、我等は汝が我等の中の弱者と見たり。汝の一族のためならざりせば、我等は汝を石にて打たん。汝は我等の中で些かの権威も有せず」と。

93. 彼は云えり、「我が民よ、お前たちはアッラーよりも我が一族を重視するのか? 粗略にもお前たちの背後に彼を投げ捨てり。げに我が主はお前たちの所業を遍くみそなはし給う。

94. 我が民よ、自分が思うがままに振舞え、我も思うがままに行わん。お前たちは程なく思い知るべし、誰が上に恥すべき刑罰が下るか、誰が嘘つきであるかを。されば待て、我もまたお前たちと共に待たん」と。(注44)

95. われらの命令が実施されるに及んで、われらはシュアイブ並びに彼と共に信じたる人々を特別な慈悲によって救いたり。然るに、懲罰は悪人どもを捕えなれば、彼等は皆自分の家の中で仆れ伏す、

وَيَقَوْمٌ لَا يَجْرِمُكُمْ شِقَاقِي أَن يُصِيبَكُمْ مِثْلُ
مَا أَصَابَ قَوْمَ نُوحٍ أَوْ قَوْمَ هُودٍ أَوْ قَوْمَ صَالِحٍ
وَمَا قَوْمَ لُوطٍ فِتْنَتُهُمْ كَبِيرٌ ④

وَاسْتَغْفِرُوا رَبَّكُمْ ثُمَّ تُوبُوا إِلَيَّ إِنَّ رَحِيمِي
وَذُودِي ⑤

قَالُوا لَشُعَيْبٌ مَا نَفَقَهُ كَثِيرًا مِمَّا تَقُولُ وَإِنَّا
لَنَرِيكَ فِينَا ضَعِيفًا وَلَوْلَا رَهْطُكَ لَرَجَّحْنَاكَ وَ
مَا أَنتَ عَلَيْنَا بِعَزِيزٍ ⑥

قَالَ يَقَوْمِ ارْهَطِي أَعَزُّ عَلَيْكُمْ مِنَ اللَّهِ وَاتَّخَذْتُمُوهُ
وَرَءَاءَكُمْ ظَهْرِيَّ إِنَّ رَبِّي بِمَا تَعْمَلُونَ فَخَبِيرٌ ⑦

وَيَقَوْمِ اعْمَلُوا عَلَى مَكَانَتِكُمْ إِنِّي عَامِلٌ سَوْفَ
تَعْلَمُونَ مَنْ يَأْتِيهِ عَذَابٌ يُخْزِيهِ وَمَنْ هُوَ كَارٍ
وَأَنْتُمْ قَبُولَا أَرْبَابِكُمْ ⑧

وَلَمَّا جَاءَ أَمْرُنَا لَنَجِّنَا شُعَيْبًا وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ
بِرَحْمَةٍ مِنَّا وَاتَّخَذَتِ الَّذِينَ ظَلَمُوا الصَّيْفَةَ فَاصْبُؤْا
فِي دِيَارِهِمْ جُثَيْنًا ⑨

注43 この節は次のことを示す。シュエーブはノア、フード、サーレ、ロト、アブラハムの後に現れたのであるが、モーゼの時代よりは前であった。だからモーゼとその民は、まさにシュエーブの民の区域内に住んでいたにもかかわらず、彼はここでモーゼの民についてふれていないからである。

注44 彼らは、彼ら自身の知識と計画に応じて、働き続けねばならず、彼は彼の信仰(Faith)に導かれて働いたことを、この節も表わしているといえよう。その結果は、誰が神の意志に従って働いたか、誰が神の目的に逆らって失敗させようと企てていたかを示したのであった。

96. さながら彼等は絶えてその家に住めること
なかりし如くなりき。滅亡せよミディアン、
かつてサムードが滅びし如く。

第九項

97. われらはまた、数々の神兆と明瞭なる権能
を授けてモーゼを、

98. ファラオとその族長たちのもとに遣わしたり。
然るに、彼等はファラオの命令に従えり。
されどその命令は全く正しいものに非
ざりき。

99. 復活の日には、ファラオは人民を率い、彼
等を火獄の中へ導き行かん、恰も家畜が
水飼場に導かれる如く。行き着ける水飼場
こそ禍なるかな。

100. 彼等は現世で呪詛につきまとわれ、復活
の日に於て、賜わるものは禍なり。(注45)

101. これは、われらが汝に語る、滅亡せし
の消息なり。或るものは今も立っているが、
中にはすでに刈り入れ時の如くなぎ倒され
たるものもあり。

102. われらは彼等を害せざりき、害せしは己
れ自らなり。アッラー以外に彼等が祈りし
神々は、主の命令が実施されるに及んで、
毫も彼等を益することなかりき。いたずら
に彼等の破滅を促したにすぎず。(注46)

103. かくの如きは、主が悪事をなせる
捕える、その掴み方なり。げに、その掴み
方は、痛烈にして苛酷なり。

كَانَ لَمْ يَخُونُوا فِيهَا إِلَّا بَعْدَ الْبَدَنِ كَمَا بَعْدَتْ
ثَمُودُ ٩٦

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مُوسَى بِآيَاتِنَا وَسُلْطَانٍ مُبِينٍ ٩٧

إِلَى فِرْعَوْنَ وَمَلَئِهِ فَأَتَّبَعُوا أَمْرَ فِرْعَوْنَ وَمَا
أَمْرُ فِرْعَوْنَ بِرَشِيدٍ ٩٨

يَقْدُمُ قَوْمَهُ يَوْمَ الْقِيَامَةِ فَأَوْدَدَهُمُ النَّارُ بِنُفْسِ
الْوَرْدِ الْمُرْوَدِ ٩٩

وَأُتْبِعُوا فِي هَذِهِ لَعْنَةً وَيَوْمَ الْقِيَامَةِ بِنُفْسِ
الرُّفُودِ ١٠٠

ذَلِكَ مِنْ أَنْبَاءِ الْفُرَى نَقْصَهُ عَلَيْكَ مِنْهَا قَائِمٌ
وَحَصِيدٌ ١٠١

وَمَا ظَلَمْنَاهُمْ وَلَكِنْ ظَلَمُوا أَنْفُسَهُمْ فَمَا أَغْنَتْ
عَنْهُمْ إِلَهُتُهُمْ الَّتِي يَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ مِنْ
شَيْءٍ لَمَّا جَاءَ أَمْرُ رَبِّكَ وَمَا زَادُهُمْ إِلَّا تَتَابُعًا ١٠٢

وَكَذَلِكَ أَخْذُ رَبِّكَ إِذَا أَخَذَ الْفُرَى وَهِيَ ظَالِمَةٌ
إِنَّ أَخْذَهُ أَلِيمٌ شَدِيدٌ ١٠٣

注 45 この節は、次のことを示す。ファラオは、彼の民から神に逆らう彼らのささえとみなされていたのだが、復活の日、彼は彼らにとって禍のささえであったことを証明することになろう。というのは、彼は彼らを地獄へつき落とすだけでなく、彼自身彼らと共にそこへ入って行くであろうからである。

注 46 神は決して不正に民を罰することはないし、彼らの上に懲罰をもたらすのは、彼ら自身の悪事である、という事実をクルアーンは繰り返して強調するのである。そのことは、運命とか、人は先の解らない宿命のえじきである、という理論を否定するものである。神は公正さとか真の理由もなしに独断的に民族の興亡を作り上げるといふ見解をも否定するのである。そういう訳で、懲罰のことを述べる箇所ではどこでも、懲罰とか報復は人間自身の行いの結果であることを付け加えずにはおけないのである。

104. げにその中には、来世の懲罰を恐れる者への神兆（注47）あり。その日こそ人類すべてが召集せられ、一切衆生にその処分が目撃されん日なり。（注48）

إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَةً لِّمَن خَافَ عَذَابَ الْآخِرَةِ ذَلِكَ يَوْمٌ مَّجْمُوعٌ لَّهُ النَّاسُ وَذَلِكَ يَوْمٌ مَّشْهُودٌ ⑤

105. われらは之を、一定期限だけ延期するにすぎず。（注49）

وَمَا نُؤَخِّرُهُ إِلَّا لِإِحْسَالٍ مَّعْدُودٍ ⑥

106. その日來れば、何人も主の許しなしに発言する能わず。而して或る者は不幸に、また或る者は幸福を得ん。

يَوْمَ يَأْتُ لَا تَكَلَّمُ نَفْسٌ إِلَّا بِإِذْنِهِ فَمِنْهُمْ سُقَىٰ وَسَعِيدٌ ⑦

107. 不幸にならん徒輩は劫火の中に入れられ、そこに嘆き、涙にむせぶばかりなるべし。

فَأَمَّا الَّذِينَ شَقُوا فِي النَّارِ لَهُمْ فِيهَا زَفِيرٌ وَشَهِيقٌ ⑧

108. 主の思し召しかなければ、天地が存続する限りそこに住みとどまらん。げに汝の主は、欲することを成し遂げ給う。（注50）

خُلِدِينَ فِيهَا مَا دَامَتِ السَّمُوتُ وَالْأَرْضُ إِلَّا مَا شَاءَ رَبُّكَ إِنَّ رَبَّكَ فَعَّالٌ لِّمَا يُرِيدُ ⑨

109. 然るに、幸福になるべき者は樂園に入り、主の思し召しかなければ、天地が存続する限りそこに住みとどまらん—つまり絶ゆることなき恩賞を。（注51）

وَأَمَّا الَّذِينَ سَعِدُوا فِي الْجَنَّةِ خُلِدِينَ فِيهَا مَا دَامَتِ السَّمُوتُ وَالْأَرْضُ إِلَّا مَا شَاءَ رَبُّكَ عَطَاءٌ غَيْرُ مَجْدُودٍ ⑩

注47 このでの「神兆」とは、「戒め」を意味する。

注48 人は完全に独立している訳ではない。人は、環境と教育と遺伝に影響されている。それで人の特別な行動を正しく判定する為には、その行動を導き影響を与えるまわりの全ての状況と環境を考慮に入れる必要がある。

注49 猶予できる「時期」とは、すでにわかっている範囲の中で動くのであり、それはその範囲の中で環境によって容易に変わるのである。たとえば、人の寿命にはある眼界がある。つまり、それは、その眼界の中で短くなったり長くなったり出来るのである。しかし廃棄されることが出来ず、取り消しも出来ないこの「時期」とは、全ての民の滅亡に関係するのである。

注50 クルアーンのこの表現は、非常に延長された時期を表わす慣用語句である。クルアーンは、地獄の懲罰が永遠に続くものではないことを啓示するのである。

注51 ヒンズー教によれば、天国も地獄も（即ち、報償と懲罰）期間が限られている。そして懲罰を受けたり、彼の行いの報償を受けた後、人は再びこの世に送り返されるのである。セム族の宗教のうちユダヤ教は、ユダヤ人を地獄の拷問から殆んど解放している一方、ユダヤ人以外には樂園を否定するものである。キリスト教によれば、その数派のものは、天国は最終的には結末を迎える（Tafsir Kabir）という信念を持っているけれど、天国も地獄も永遠である。イスラム教は、この点についてはこれら全ての宗教とは根本的に異なるもの

110. されば彼等が崇拜するものについて思い煩うことなかれ。彼等はただ以前父祖が崇拜した如く、崇拜しているに過ぎず。われらは彼等に、その取り分を減らすことなく支給せん。

第十項

111. 昔、われらはモーゼに經典を与えしが、これに関して異論生じたり。もし汝の主よりすでに発せられたる言葉なかりせば、問題は遠い以前に彼等の間ですでに解決済な筈。然るに、彼等は之について今だに不安なる疑惑を抱く。(注52)

112. 汝の主は彼等の所業に応じて、十分に報い給う。げに彼は、彼等のなせることを知悉し給う。

113. されば、汝並びに汝と共に神に^{まつすく}帰依した者は、命ぜられた通り真直に進み行け。また汝等則を越えるなかれ、信ずる者よ、彼はお前たちのなせることをみそなわし給うが故に。(注53)

فَلَا تَكُ فِي مِرْيَةٍ مِّمَّا يَعْبُدُ هَؤُلَاءُ مَا يَعْْبُدُونَ
إِلَّا كَمَا يَعْْبُدُ آبَاؤُهُمْ مِنْ قَبْلُ وَإِنَّا لَمُوفُونَ
نُصِيبُهُمْ غَيْرَ مَنْقُوصٍ ⑩

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ فَاخْتَلَفَ فِيهِ وَلَوْ لَا
كَلِمَةٌ سَبَقَتْ مِنْ رَبِّكَ لَقُضِيَ بَيْنَهُمْ وَإِنَّهُمْ لَفِي
شَكٍّ مِنْهُ مُرِيبٍ ⑪

وَإِن كَلَّا لَبَلَّا يَؤُودِيَنَّهُمْ رَبُّكَ أَعْمَاهُمْ إِنَّهٗ بِنَا
يَعْمَلُونَ خَبِيرٌ ⑫

فَاسْتَقِمْ كَمَا أُمِرْتَ وَمَنْ تَابَ مَعَكَ وَلَا تَطْغَوْا
إِنَّهٗ بِنَا لَعَالِمُونَ بَصِيرٌ ⑬

である。それによると、天国は永遠永劫である。一方、地獄は一時的であり、期間に限りがある。イマム・アハマド・ビン・ハンバルは、その影響についてアブドゥラ・ビン・アムル・ビン・アル・アースによって報告されているとして、モハammadの言葉を引用する。即ち、「地獄の上にはそのよろい戸がお互いにぶつかり合うであろうHが来て、その中には何も残らないであろう。それは、地獄の仲間達が何世紀もそこで過ごした後、起こるであろう。」(Musnad)。この言伝えによれば、地獄に関して使われているハリディーン(永続的)という単語は、「幾世紀もの間続く」ということを意味しているだけである。アブドゥラ・ビン・ウマルとジャビルは、イマム・ハンバルの意見に賛成している。アブ・サイド・アルフダリも同様のハディース(ブハリ)を引用している。しかしながら、いくらかの著名な宗教権威者達—その中でもイブン・テミヤとイブン・カイエムは次の様に主張する。邪まな不信仰者達は、地獄に永久にとどめられてしかるべき者であるが、地獄そのものが、ある日、神の御慈悲によって消滅するであろうし、地獄がなくなった時には当然地獄の中の住人はいなくなるであろうと(Faith)。クルアーンは、天国については、地獄に関して使った様な表現ではなく、決して終ることのない報償(41章9節、84章26節、95章7節)という言葉を使った。更に101章10節~12節の中では、地獄は母にたとえられ、胎児は子供の体が形作られ、さまざまな器官が完成する迄母親の子宮の中に留まると述べられている。同じ様に、地獄に落とされていくような不運な人々は、彼らの諸器官の機能が完全な発達を遂げて、主の美しい御顔を見ることが出来る様になる迄そこに留まるであろう。

注52 人間の罪はあまりにもひどかったので、もしも、人類は精神的に発達していくよう作られて、その結果、神の御慈悲をうける者になるであろうという前もって定められた命令がなかったなら、人間はとっくの昔に滅亡させられてしまっていたであろう(7章157節、11章120節、51章57節参照)。

注53 モハammadだけは、神の意志に従って、彼自身の人生を形作るよう要求されてはいなかった。彼は彼を信ずる全ての人達も、彼の例にならうのを見なければならなかった。それはこの莊重な二重の責任を理解す

114. 劫火^{ごうか}を免れんとするならば、悪事をする者どもに心を傾けるなかれ。お前たちは、アッラーの外に、愛護者もなく、また助けの者とてなかるべし。(注54)

115. 昼間の両端に、並びに昼に近い夜の時刻に、礼拝を遵守せよ。げに善行は諸悪を驅逐す。これは主を念ずる人々への訓戒なり。

116. 汝、辛抱強くあれ。げにアッラーは義人^{ただしひと}への報奨^{いんめつ}は湮滅するに忍び難し。

117. お前たちの前の世代の者の中には、われらが救いたる僅かな者を除いて、何故に地上における頹廢行為を禁ずる思慮ある者なかりしか? 不義^{ふぎ}を行う者どもは安逸^{かみびと}を追い求めて、罪人となれり。

118. 汝の主は、そこに住む住民が正義^{たみよ}くありさえすれば、その邑^{やま}を妄りに潰滅するものに非ず。

119. また、もし主欲し給わば、彼は全人類を一つの民族となす。されど彼等は常に争いを起す、

120. 主が慈悲を垂れ給うた人々を除いて、それが為^{ため}にこそ主は彼等を創れり。「われは従わぬ妖靈^{じん}並びに庶民どもで地獄を満たさん」との主の言葉は、履行されん。

121. われらが汝に使徒たちの重要な消息を物語るのは、それによって汝の信念を強固た

وَلَا تَرْكَنُوا إِلَى الَّذِينَ ظَلَمُوا فَتَمَسَّكُمُ النَّارُ وَمَا لَكُم مِّنْ دُونِ اللَّهِ مِنْ أَوْلِيَاءٍ ثُمَّ لَا تُنصَرُونَ ﴿١١٤﴾

وَأَقِمِ الصَّلَاةَ طَرَفَيِ النَّهَارِ وَزُلْفًا مِّنَ اللَّيْلِ إِنَّ الْحَسَنَاتِ يُذْهِبْنَ الشَّيْئَاتِ ۚ ذَٰلِكَ ذِكْرُكَ لِلَّذِينَ كَرِهْتَ ﴿١١٥﴾

وَأَصْبِرْ فَإِنَّ اللَّهَ لَا يُضِيعُ أَجْرَ الْمُحْسِنِينَ ﴿١١٦﴾

فَلَوْلَا كَانَ مِنَ الْقُرُونِ مِن قَبْلِكُمْ أُولُوا بَقِيَّةٍ يَنْهَوْنَ عَنِ الْفَسَادِ فِي الْأَرْضِ إِلَّا قَلِيلًا مِّمَّنْ أَنْجَيْنَا مِنْهُمْ ۚ وَاتَّبَعَ الَّذِينَ ظَلَمُوا مَا أُتْرِفُوا فِيهِ وَكَانُوا مُجْرِمِينَ ﴿١١٧﴾

وَمَا كَانَ رَبُّكَ لِيُهْلِكَ الْقُرَىٰ بِظُلْمٍ ۖ وَأَهْلُهَا مُصْلِحُونَ ﴿١١٨﴾

وَلَوْ شَاءَ رَبُّكَ لَجَعَلَ النَّاسَ أُمَّةً وَاحِدَةً ۚ وَلَا يَزَالُونَ مُخْتَلِفِينَ ﴿١١٩﴾

إِلَّا مَن رَّحِمَ رَبُّكَ ۚ وَلِذَٰلِكَ خَلَقَهُمْ وَتَنَبَّأَهُ رَّبُّكَ لِأَمَلَنَّ جَهَنَّمَ مِن نَّارِهَا وَالنَّاسُ أَجْمَعِينَ ﴿١٢٠﴾

وَلَا تَقْصُصْ عَلَيْكَ مِنْ أَنبَاءِ الرُّسُلِ مَا نَبَّأَتْ بِهِ

ることであり、そのことは、彼を早く老いこませた程に、彼の上にも重くのしかかっていたのであった (Baihaqi)。

注54 人はまわりの環境に影響されるので、もし彼のまわりが墮落していれば、その墮落は遅かれ早かれ彼に影響を与えるのは確かである。それで、この節では、信仰者達は、たとえそれが彼らの友人縁者であっても、邪まで正しくない人々との全てのつながりを断ち切るよう命じるのである。

らしめんがためなり。而してこの中に真理並びに信者への訓戒と注意が汝に授けられたり。

فَوَادَكَ وَجَاءَكَ فِي هَذِهِ الْحَقُّ وَمَوْعِظَةٌ وَذِكْرٌ
لِّلْمُؤْمِنِينَ ﴿١٧١﴾

122. 然しながら、信ぜぬ者どもには云え、「お前たち思うがままに振舞え、我等も思うままに行わん。(注55)

وَقُلْ لِلَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ اَعْمَلُوا عَلَيَّ مَا تَكُمُ اَنَا اَعْلَمُ ﴿١٧٢﴾

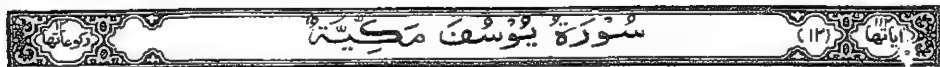
123. 汝等待っておれ、我等も待たん」と。

وَاصْطَبِرُوا اِنَّا مُنْتَظِرُونَ ﴿١٧٣﴾

124. 天地の秘事は悉くアッラーに属し、萬事は彼に帰し奉る。されば彼を崇拜し、汝の信頼をただ彼のみに置き奉れ。主はお前たちの所業を閑却せず。

وَلِلّٰهِ غَيْبُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَالْيَمْرِ وَالْاَمْرِ كُلِّهِ
فَاعْبُدْهُ وَتَوَكَّلْ عَلَيْهِ وَمَا رَبُّكَ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿١٧٤﴾

注 55 この節は次のことを意味する。イスラム教の最終的な勝利と、不信仰者達の敗北と挫折について、この章の中で述べられた偉大な予言は、現在では成就不可能で信じられないことのように見えるが、神において不可能なことは何もなく、これらの予言は、必ず実現するであろう。



ユースフ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. アリフ・ラーム・ラー。(注1) これは明瞭な經典の諸節なり。

الرَّحْمَنُ تِلْكَ آيَاتُ الْكِتَابِ الْمُبِينِ ②

3. われらはお前たちに理解せしめんがために、クルアーンをアラビア語で啓示したり。(注2)

إِنَّا أَنْزَلْنَاهُ قُرْآنًا عَرَبِيًّا لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُونَ ③

4. われらはこのクルアーンを汝に啓示するにあたり、以前汝が閑却にしていた最も美しい物語を語り聞かせようぞ。(注3)

نَحْنُ نَقُصُّ عَلَيْكَ أَحْسَنَ الْقَصَصِ بِمَا أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ هَذَا الْقُرْآنَ ④ وَإِنْ كُنْتَ مِنْ قَبْلِهِ لَمَنِ الْغَافِلِينَ ⑤

5. ヨセフ(注4)がその父にかく云える時を念え。「我が父よ、我は十一の星と太陽と月が、我に拝賀するを夢に見たり」(注5)

إِذْ قَالَ يُوسُفُ لِأَبِيهِ يَا أَبَتِ إِنِّي رَأَيْتُ أَحَدَ عَشَرَ كَوْكَبًا وَالشَّمْسَ وَالْقَمَرَ رَأَيْتُهُمْ لِي سَاجِدِينَ ⑥

注1 2章2節を参照の事。

注2 数えきれない程多量で多様な意味の語源を持ち、言語自体が明快、雄弁、そしてわかりやすいアラビア語は「アラビヤ」と呼ばれ、豊か、全体的、明確という意味を表わしている。アラビア語の豊富な語句は、多岐にわたる思想を充分に表現し、なおかつ、微妙な言外の意味も伝える事が出来、他の言語をよせつけない正確さと豊富さで以ってあらゆる内容の題材を論ずる事が出来る。ヨーロッパの言語学者は、アラビア語は根源が完璧な言語である事を認めざるを得ず、その豊かな何十万もの語源からは、ばう大な何種類もの派生語が生じている。

注3 ヨセフの話が聖なる預言者にかくも詳細に渡って啓示されているのは、その話の内容に預言者自身の生涯に預言的な暗示となる部分が多くあるからである。

注4 ヨセフは、イスラエルとしても知られる預言者ヤコブの12人の息子の一人である。ヨセフはラケルの二人の息子の長男の方である。彼の名前は「加える」即わち、「神は私にもう一人息子をお加えになる」という意味を表わしている(創世記30章24節)。

注5 「我に拝賀するを夢にみたり」聖書では、太陽と月を最初に、それから11個の星の記述が後に続いているが(創世記37章9節)、このヨセフに拝賀する者達の順序が、クルアーンでは逆になっている。これはクルアーンの方が史実に忠実であり、まず最初にヨセフに出会い拝賀したのは彼の兄達(11個の星)それから両親の順序であったからである。この節はヨセフの両親と兄弟達が彼に帰依した事を意味している。

6. 彼は云えり、「かわいい我が息子よ、汝が兄弟にその夢の話を語るなかれ、汝に敵対する謀^{はかりごと}を企たせぬためにも。げに悪魔^{サタン}は人間にとって公然の敵なり。

7. 汝がかかる夢を見たのであれば、主は汝を選び諸事の解釈を教え、汝の二祖—アブラハムとイサクに恩寵^{まつと}を完^{これ}うした如く、之を汝とヤコブ一家（注6）に完^{まつと}うせん。げに汝の主は、すべてを知り、賢哲にまします。

第二項

8. げにヨセフとその兄弟の物語の中には、詮索^{ともがら}好きな徒輩へのいろいろな表徴あり。
9. 時に彼等は云えり、「確かに、数において優る我等よりも、我等の父はヨセフとその弟を我等より寵愛す。父は明らかに誤れり。（注7）
10. ヨセフを殺せ（注8）、或いは、どこか遠い国に追い払え、されば父の顔はもっぱらお前たちに向けられん。然る後に義しい人となるを得べし」と。（注9）
11. するとその中の一人が云えり、「ヨセフを殺すなかれ。やむなくば、彼を深い井戸の底に置き去りにせよ。誰か旅人が彼を拾い去らん」と。

قَالَ يَبْنَى لَا تَقْصُصْ رُؤْيَاكَ عَلَىٰ إِخْوَتِكَ فَيَكِيدُوا لَكَ كَيْدًا إِنَّ الشَّيْطَانَ لِلْإِنْسَانِ عَدُوٌّ مُّبِينٌ ①

وَكَذَلِكَ يَجْتَبِيكَ رَبُّكَ وَيُعَلِّمُكَ مِنْ تَأْوِيلِ الْأَحَادِيثِ وَيُتِمِّرُ نِعْمَتَهُ عَلَيْكَ وَعَلَىٰ آلِ يَعْقُوبَ كَمَا أَتَمَّهَا عَلَىٰ أَبَوَيْكَ مِنْ قَبْلُ إِبْرَاهِيمَ وَإِسْحَاقَ إِنَّ رَبَّكَ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ②

لَقَدْ كَانَ فِي يُوسُفَ وَإِخْوَتِهِ آيَاتٍ لِّأُولِي الْأَبْصَارِ ③

إِذْ قَالُوا لِيُوسُفُ وَأَخُوهُ أَحَبُّ إِلَيْنَا مِمَّا نَحْنُ نَحْنُ عُصْبَةٌ إِنَّ أَبَانَا لَفِي ضَلَالٍ مُّبِينٍ ④

اقْتُلُوا يُوسُفَ وَأَظْهِرُوا أَرْضَ يَئُوسَ لَكُمْ وَجْهَ أَبِيكُمْ وَتَكُونُوا مِنْ بَعْدِهِ قَوْمًا صَالِحِينَ ⑤

قَالَ قَائِلٌ مِنْهُمْ لَا تَقْتُلُوا يُوسُفَ وَالْقَوَاهُ فِي غَيْبَتِ الْجَبِّ يَلْتَقِطُهُ بَعْضُ السَّيَّارَةِ إِنْ كُنْتُمْ فَاعِلِينَ ⑥

注6 聖書では、この名前（ヤコブ）は「取って代わる者」との説明がある（創世記 27 章 36 節）。「ヤコブ」とは「神が後ろにおわします」、或いは「神が報いを与えられる」といった様な意味合いの「ヤコベル」が短縮されて作られた名前だというのが、一般的な批評家達の意見である。ヤコブはイサクとレベッカの息子で、アブラハムの孫にあたり、イスラエル人の祖先とされており、第三の族長として知られている（Enc. Bib. Jew. Enc.）。

注7 自分達の方があらゆる点でずっと優れていると思っているのに、自分達に取ってかわって父親の愛情を勝ち得、常にその関心の的となったヨセフに立腹したヨセフの兄弟達の様に、クライシュの指導者達も、クルアーンはメッカとタイフの町の偉大な著述の中の誰かに啓示されるべきであったと主張した（43 章 32 節）。何故なら、彼等は、聖なる預言者は、預言者という高い地位に選ばれるには値しない存在であるとみなしていたからである。

注8 ヨセフを殺そうと計画したヨセフの兄弟達の様にクライシュの人々も聖なる預言者を殺そうと企てた。（8 章 31 節）

注9 ルベン（創世記 37 章 22 節）参照。

12. 彼等は云えり、「我等の父よ、我等はヨセフの幸いを祈る者だというに、汝は何故にヨセフを我等に信託¹²ざるか？
13. 明日、彼を我等と共に行かしめよ、さすれば彼は自ら楽しみ遊び、我等は必ず彼を護らん」と。
14. ヤコブは云えり、「お前たちが彼を連れ去るのは、我を深く悲しませる。お前たちがうっかりしている間に、狼が彼を取り食いはいしないかと我は恐る」と。（注10）
15. 彼等は云えり、「我等は大勢いるというのに、狼が彼を取り食らうようであれば、我等も紛れもなく身の破滅なり」と。
16. かくて彼等は彼を連れ去り、深い井戸の底に彼を置き去りにすべく衆議一致し、まさにその意地悪い企てをなさんとするや、われらはヨセフに黙示して、云えり、「汝は何時かこの事を彼等に語り告げん、然れども彼等はその時、汝を識らざるべし」と。
17. 日が暮れて、彼等は泣きながらその父のところに帰りたり。
18. 「我等の父よ、我等は互に競走していて、ヨセフを我等の荷物と一緒に残し置きたるところ、狼来りて彼を食らう。我等真実を語るとも、汝は我等を信じざるべし」と彼等は云えり。（注11）
19. 彼等はヨセフの下着に偽りの血をつけて持ち来たり。ヤコブは云えり、「そうではあるまい、お前たちの目にはこれしきことと思えしが、己れ自身に重大な事をなしたるなり。（注12）されど今は、耐え忍ぶこ

قَالُوا يَا أَبَانَا مَا لَكَ لَا تَأْمَنَّا عَلَى يُوسُفَ وَإِنَّا لَهُ لَنَصْحُونَ ﴿١٢﴾

أَرْسَلَهُ مَعَنَا غَدًا يَرْتَع وَيَلْعَب وَإِنَّا لَهُ لَكَافُونَ ﴿١٣﴾

قَالَ إِنِّي لَيَحْزُنُنِي أَنْ تَذْهَبُوا بِهِ وَأَخَافُ أَنْ يَأْكُلَهُ الذِّبُّ وَأَنْتُمْ عَنْهُ غَافُونَ ﴿١٤﴾

قَالُوا لَيْنَ أَكَلَهُ الذِّبُّ وَنَحْنُ عُصْبَةٌ إِنَّا إِذًا لَخَسِرُونَ ﴿١٥﴾

فَلَمَّا ذَهَبُوا بِهِ وَاجْمَعُوا أَنْ يَجْعَلُوهُ فِي غِيَابِ الْجُبِّ وَأَوْحَيْنَا إِلَيْهِ لَتُنَبِّئَنَّهُمْ بِأَمْرِهِمْ هَذَا وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ﴿١٦﴾

وَجَاءَ وَآبَاهُمُ عَشَاءً يَبْكُونَ ﴿١٧﴾

قَالُوا يَا أَبَانَا إِنَّكَ ذَهَبْنَا نَسْتَبِقُ وَتَرَكْنَا يُوسُفَ عِنْدَ مَتَاعِنَا فَأَكَلَهُ الذِّبُّ وَمَا أَنْتَ بِمُؤْمِنٍ لَنَا وَلَوْ كُنَّا صَادِقِينَ ﴿١٨﴾

وَجَاءُوا عَلَى قَيْصِهِ يَدٌ مَرْدُوبٌ قَالَ بَلْ سَوَّلَتْ لَكُمْ أَنْفُسُكُمْ أَمْرًا فَصَبْرٌ جَمِيلٌ وَاللَّهُ السَّمِيعُ

注10 この節の叙述から、ヤコブは、兄弟達がヨセフを殺そうとしているたくらみについて神より既に知らされていた事がわかる。その為あたかも告発するが如くに、彼等が自分達の凶悪な犯罪を酌量してもらう為に、後になって使う事になるのと同じの語句を使ったのである。

注11 この言葉は、兄弟達の心のイライラを表わし、自分達の罪の意識を暴露している。

注12 これらの言葉は、ヤコブが息子達の報告を作り話と考えていた事を示している。

とこそ我がためなり。お前たちが主張することに対して、我は偏にアッラーに助けを求めん」と。

عَلَىٰ مَا تَصِفُونَ ①٩

20. やがて隊商が通りかかり、水汲む者が井戸に遣わされたり。男釣瓶を井戸に下ろすや、叫びたり、「古なるかな！ここに童子あり！」そこで彼等はこの童子を賣りものにして、ひそかに隠したり。(注13) されどアッラーは、彼等のなせることを熟知せり。

وَجَاءَتْ سَيَّارَةٌ فَأَرْسَلُوا وَارِدَهُمْ فَأَدْلَىٰ دَلْوَةً
قَالَ يَبْشَرِي هَذَا عِلْمٌ وَأَسْرُوهُ بِضَاعَةً وَاللَّهُ
عَلِيمٌ بِمَا يَعْمَلُونَ ②٠

21. 彼等はヨセフを、欲しがりざりしかば、僅かな銀貨で彼を売り払えり。

وَسَرَّوهُ بِشْتَنٍ بَخِيسٍ دَرَاهِمَ مَعْدُودَةٍ وَكَانُوا
فِيهِ مِنَ الرَّاهِدِينَ ②١

第三項

22. ヨセフを購いたるは埃及人(注14)にして、男その妻に云えり、「懇に遇せよ。彼が彼等を益することあるやもしれず、また彼を我等の養子とするもよし」と。かくてわれらはヨセフをその国に落ち着かせ、さまざまの事象の解釈を教えたり。アッラーはその決定したるものは必ず完うし給う、されど世人の多くは之を知らず。

وَقَالَ الَّذِي اشْتَرَاهُ مِنْ مِصْرَ لَا مَرَاتٍ أَكْرَمِي
مَثْوَاهُ عَلَيَّ أَنْ يَنْفَعَنَا أَوْ نَتَّخِذَهُ وَلَدًا وَكَذَلِكَ
مَكَّنَّا لِيُوسُفَ فِي الْأَرْضِ وَلِنُعَلِّمَهُ مِنْ تَأْوِيلِ
الْأَحَادِيثِ وَاللَّهُ غَالِبٌ عَلَىٰ أَمْرِهِ وَلَكِنْ أَكْثَرُ
النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ②٢

23. さて、彼が成人に達した時、われらは彼に識見と知識とを授けたり。かくの如くわれらは正しい行いをなす者に報ゆ。

وَلَمَّا بَلَغَ أَشُدَّهُ آتَيْنَاهُ حُكْمًا وَعِلْمًا وَكَذَلِكَ
نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ②٣

24. ヨセフが起居せる家の妻、彼の意志に反して彼を誘惑せんと謀る。彼女は戸を閉じて、云えり、「さあ、来れ」と。ヨセフは云えり、「我はアッラーに保護を求む。彼は我が主なり。(注15) 彼があなたがたに、我を懇に遇さしめたり。げに、悪事をなせる者は決して榮えず」と。

وَرَأَوْتَهُ الَّتِي هُوَ فِي بَيْتِهَا عَنْ نَفْسِهِ وَغَلَّقَتِ
الْأَبْوَابَ وَقَالَتْ هَيْت لَكَ قَالَ مَعَاذَ اللَّهِ إِنَّهُ
رَبِّي أَحْسَنُ مَنَآئِ إِنَّهُ لَا يُفْلِحُ الظَّالِمُونَ ②٤

注13 隊商の面々は、ヨセフをよいもうけの対象と考えていた。

注14 ヨセフを買い取ったエジプト人は、ユダヤの文字では、ポテパルであるとされている(Enc. Bib. 及び創世紀39章1節)。彼は古代エジプトでは高官とされた、近衛兵の隊長であった。

注15 この節では、婦人がヨセフを誘惑しそこない、ヨセフがこの難を逃れた事が述べられている。「彼は我が主なり」とは神の事である。一部訳者が「主人」と解釈しているのは誤りである。ここはヨセフのエジプト人の主人をさしているわけではない。神を表わしているのである。

25. 彼女は彼を誘惑せんと思えども、彼は誘惑に負けじと決意せり。(注16) もし彼主の明証(注17)を見ざりせば、かかる決心を示すこと能わじ。かくの如く、われらは彼より罪惡と醜行とを遠ざけたり。げに彼は、われらの選ばれた僕しもべの一人なりき。(注18)

26. そこで彼等はともに戸口に走り、女は背後よりヨセフの上着を引き裂けり、而して彼等は戸口に於て彼女の夫に遭いたり。彼女は云えり、「汝の妻に惡事をなさんとした者は、投獄するか痛刑の外に、その懲罰如何にせん？」と。

27. ヨセフは云えり、「彼女の方が我が意志に逆らつて我を誘惑せん」と謀る」と。時に家人の中の一曰撃者証言して、云う、「もし彼の上着が前から裂けているならば、彼女の言葉は真実で、嘘つきは彼なり。

28. 然しながら、その上着が後ろから裂けているならば、彼女は嘘つきで、彼の言葉は真実なり」と。

29. そこで、彼女の夫は上着が背後から引き裂かれているのを見て、云えり、「これはお前たち女どもの企ねころもみなり。實にお前たちの企みは恐るべし。(注19)

وَلَقَدْ هَمَّتْ بِهٖ وَهَمَّ بِهَا لَوْلَا اَنْ رَّا بَرَّهَانَ رَبِّهٖ
كَذٰلِكَ لِنُصْرِفَ عَنْهُ السُّوءَ وَالْفَحْشَآءُ اِنَّهٗ مِنْ
عِبَادِنَا الْمُخْلَصِيْنَ ﴿٢٥﴾

وَاسْتَبَقَا الْبَابَ وَقَدَّتْ قَبِيضَةً مِنْ دُبُرِهٖ
وَالْفَيَّا سَيِّدَهَا لَهَا الْبَابُ قَالَتْ مَا جِئْتُ مِنْ اَرَادَ
بِأَهْلِكَ سُوءًا اِلَّا اَنْ يُّنَجِّنَ اَوْ عَذَابُ الْيَوْمِ ﴿٢٦﴾

قَالَ هِيَ رَاوَدْتَنِي عَنْ نَفْسِي وَشَهِدَ شَاهِدٌ مِنْ
أَهْلِهَا اِنْ كَانَ قَبِيضَةً قَدْ مِنْ قُبُلٍ فَصَدَقَتْ
وَهُوَ مِنَ الْكَذٰبِيْنَ ﴿٢٧﴾

وَإِنْ كَانَ قَبِيضَةً قَدْ مِنْ دُبُرٍ فَكَذَّبَتْ وَهُوَ
مِنَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿٢٨﴾

فَلَمَّا رَا قَبِيضَةً قَدْ مِنْ دُبُرٍ قَالَ اِنَّهٗ مِنْ كَيْدِكُنَّ
اِنْ كَيْدُكُمْ عَظِيْمٌ ﴿٢٩﴾

注16 ヨセフの主人の妻は、ヨセフに関してある事—男女の交合—を企てた。同様に、ヨセフも彼女についてある考えを持った。即ち彼女の邪惡な目的に抗する事である。ヨセフが何らやましい心を持たなかった事は前節から明瞭であり、彼はただ、彼女をその邪惡な目的から思い止まらせようとしただけであった。

注17 「主の明証」とは、ヨセフが既に目のあたりに見た井戸に投げこまれた時に受けた啓示である彼の将来を預言した素晴らしい夢をさす。この時の夢では、彼の後々の卓越性や栄光(当章16節)及び、投げこまれた井戸から無事に助けだされる事も指摘されていた。

注18 丁度ヨセフが自分の敬虔さと廉直さの道をふみはず様に誘惑されたのと同様に、聖なる預言者も、メッカの偶像崇拜者達に、神の唯一性について説教するのを止めれば、彼等の王にするとか、莫大な富を与える、或いはアラビアでいちばん美しい女性と結婚させると誘惑された。当然ながら聖なる預言者は、この申し出を退けたが、拒絶の際の「私の右手に太陽を、そして左手に月を置いたとしても、私が唯一なる神についての説教を止める事は有り得ない」との返答は歴史に残る言葉である。

注19 出来る限り妻をかばおうとしたボテバルは、ずるかしこく、よこしまなる全ての女性を糾弾している。

30. ヨセフよ、この危害を見のがしてやれ。しかし、妻よ、汝はその罪の赦しを請え。汝は間違ひなく罪を犯せし者なるぞ」と。

第四項

31. ところで、市井の婦人たちは評せり、「アズィーズ（注20）の妻が従僕の意に反して誘惑せんとす。従僕が奥方を恋に迷わしめたり。（注21）我等は明らかに奥方の過ちなるを知る」と。
32. 奥方は彼女たちの陰口を聞くと、人を遣わして彼女たちを招き、宴を設けてその一人一人にナイフを与えた後、ヨセフを呼んで、云えり、「ここに来て、彼女たちの前に出よ」と。然るに、婦人たちが彼を見るなり、余程高貴な御方に違ひないと思ひ、（注22）驚嘆の余りその手を傷つけて、（注23）云えり、「アッラーに讃美あれ！こは人間に非ず、こは貴き天使に非ずして何ぞ」と。
33. 奥方は云えり、「皆様が妾を非難した、その相手というのがこの者なり。妾は彼の意に反して誘惑せんとせしが、彼は罪より己れを護りたり。されど、今度妾の命ずることに従わずば、妾は彼を投獄し、彼は蔑まれる身とならん」と。
34. そこで、ヨセフは祈りて云えり、「我が主よ、我は彼女たちの誘いに従うよりは牢獄を選ぶ。されど、汝、彼女たちの策略を取り除かずば、我が心彼女たちに傾きて遂に痴人の一人とならん」と。

يُوسُفُ أَعْرِضْ عَنْ هَذَا وَاسْتَغْفِرِي لِذَنبِكِ
إِنَّكَ كُنتِ مِنَ الْخَاطِئِينَ ﴿٣٠﴾

وَقَالَ نِسْوَةٌ فِي الْمَدِينَةِ امْرَأَتُ الْعَزِيزِ تُرَاوِدُ
فَتَاهَا عَنْ نَفْسِهِ قَدْ شَغَفَهَا حُبًّا إِنَّا لَنَرَاهَا
فِي ضَلَالٍ مُّبِينٍ ﴿٣١﴾

فَلَمَّا سَمِعَتْ بِمَكْرِهِنَّ أَرْسَلَتْ إِلَيْهِنَّ وَأَعْتَدَتْ
لَهُنَّ مُتَنَا وَأَتَتْ كُلَّ وَاحِدَةٍ مِّنْهُنَّ سِكِّينًا
وَقَالَتْ أَخْرِجْ عَلَيْهِنَّ فَلَمَّا رَأَيْنَهُ أَكْبَرْنَهُ وَقَطَّعْنَ
أَيْدِيَهُنَّ وَقُلْنَ حَاشَ لِلَّهِ مَا هَذَا بَشَرًا إِنْ هَذَا
إِلَّا مَلَكٌ كَرِيمٌ ﴿٣٢﴾

قَالَتْ فَذَلِكُنَّ الَّذِي لُمْتُنَّنِي فِيهِ وَلَقَدْ رَاودْنَاهُ
عَنْ نَفْسِهِ فَاسْتَعْصَمَ وَلَئِن لَّمْ يَفْعَلْ مَا أَمَرَهُ
لَيَكُونَنَّ مِنَ الصَّغِيرِينَ ﴿٣٣﴾

قَالَ رَبِّ السِّجْنُ أَحَبُّ إِلَيَّ مِمَّا يَدْعُونَنِي إِلَيْهِ
وَأِلَّا تَصْرِفْ عَنِّي كَيْدَهُنَّ أَصْبُ إِلَيْهِنَّ وَأَكُنَّ
مِنَ الْجَاهِلِينَ ﴿٣٤﴾

注20 「アル・アズィーズ」とはボテバルの事を指す。彼は王の警護に当る兵の隊長であつたが、聖なる預言者の時代には、エジプトの長や高位にある者達は「アル・アズィーズ」の称号で呼ばれていた。

注21 「恋に迷わせむ」というアラビア的表現は、彼女のヨセフに対する愛は彼女の心の奥底まで入りこんだ、或いは、彼への愛が彼女をはげしくうった、又は、彼女の心が奪われたという意味合いである。

注22 彼女たちは彼の事を気高い存在と感じたのである。

注23 「手を傷つけた」という表現は、女性達がヨセフを見た時、そのあまりの気高く、美しい容ぼうに心を奪われ、思わず手にしていたナイフで自分達の手を傷つけてしまった程であつた事を意味している。或いは、彼女等の驚きと驚嘆を比喩的に表わしたものと考えられる。「指先をかむ」というアラビア語の表現は、驚きを示す時に使われる。その一部を表わす際、その含まれる全体を表わす言葉が時々使われるので、この場合

35. それゆえ、主は彼の祈願に答え、ヨセフから彼女たちの策略を払いのけたり。げに彼は、すべてを聴き、すべてを深知し給う。

فَاسْتَجَابَ لَهُ رَبُّهُ فَصَرَفَ عَنْهُ كَيْدَهُنَّ إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿٣٥﴾

36. 然るに長老たちは、ヨセフの潔白の証拠を見たにもかかわらず、自分たちの名望を維持せんがために、彼を暫く投獄せしむることにせり。(注24)

ثُمَّ بَدَأَ لَهُمْ مِنْ بَعْدِ مَا رَأَوُا الْآيَاتِ لِيَسْجُنُوهُ حَتَّىٰ جِئَ ۖ ﴿٣٦﴾

第五項

37. その時、二人の若者がヨセフと共に入牢せり。その一人は云えり、「我は夢に葡萄を搾るを見たり」と。すると、もう一人が云えり、「我は夢に、自分の頭の上にパンをのせて運びつつあると、烏米りて之を啄むを見たり。(注25) 我等に教え給え、この夢の解釈を。お見かけしたところ、汝は義しい人なりと思う」と。

وَدَخَلَ مَعَهُ السِّجْنَ فَتَيْنِ ۖ قَالَ أَحَدُهُمَا إِنِّي أَرَانِي أَعْصِرُ خَمْرًا ۖ وَقَالَ الْآخَرُ إِنِّي أَرَانِي أُفِئِدُ فَوْقَ رَأْسِي خُبْرًا تَأْكُلُ الطَّيْرُ مِنْهُ نَبْنَأُ بِتِلْكَ ۖ إِنَّا تَرَىٰكَ مِنَ الْمُحْسِنِينَ ﴿٣٧﴾

38. ヨセフは答えり、「お前たちに支給される食事は無くなるべし、然れども我はそうなる前にその意味を告げ知らせん。これは我が主が我に教えたが故なり。我はアッラーを信ぜず且つ来世を信ぜざる人々の宗教を放棄せり。

قَالَ لَا يَأْتِيكُمَا طَعَامٌ تُورَفَانِي إِلَّا نَبْأُكُمَا بِتِلْكَ ۖ قَبْلَ أَنْ يَأْتِيَكُمَا ذِكْرُكُمَا مِنِّي ۖ عَلِمْتُ رُبِّي إِنِّي تَرَكْتُ مِلَّةَ قَوْمٍ لَا يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَهُمْ بِالْآخِرَةِ هُمْ كَافِرُونَ ﴿٣٨﴾

39. 而して我は、我が父祖、アブラハム、イサク及びヤコブの宗教を奉ず。我等は何者もアッラーと併せ祀ること能わず。これこそ我等のみならず、全人類に賜りたるアッラーの恩恵なり、然るに世人の大半は感謝の念を知らず。

وَاتَّبَعْتُ مِلَّةَ آبَائِي إِبْرَاهِيمَ وَإِسْحَاقَ وَيَعْقُوبَ ۖ مَا كَانَ لَنَا أَنْ نُشْرِكَ بِاللَّهِ مِنْ شَيْءٍ ۚ ذَلِكَ مِنْ فَضْلِ اللَّهِ عَلَيْنَا وَعَلَى النَّاسِ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَشْكُرُونَ ﴿٣٩﴾

も、手が指先の代わりに使われたとも考えられる。タルムードに依れば、お客の女性達にはオレンジが¹出されており、彼女達はヨセフを一目みて心を奪われた為、うっかり手を切ってしまったという解釈になる(Jew. Enc. とタルムード)。

注24 ポテパルの妻の悪い噂がひろまった為、彼女のまわりの者達は、スキャンダルのもみけしには、ヨセフを投獄すれば、世間が彼の方が悪い事をしかけたのだと思い、人々の非難が彼にむけられるであろうと考えた。

注25 召使い頭とパン職人の夢については、創世紀の第40章を参照の事。

40. 我が同囚の兩名よ、異った神々か、それとも唯一全能の主か、いずれが優るや？

يُصَاحِبِي السِّجْنِ أَأَدْبَابُ مُنْفَرِقُونَ خَيْرٌ أَمِ
اللَّهُ الْوَاحِدُ الْقَهَّارُ ﴿٤٠﴾

41. アッラーの外にお前たちが崇拝するものは、お前たちや父祖たちが名づけたる名稱にすぎず、アッラーはそれ等に如何なる権威も降り賜わざるなり。決定は独りアッラー次第なり。彼はお前たちに、彼以外に何者も崇拝するなかれと命じたり。これこそ正しき教えなり、然るに世人の大半は之を知らず。

مَا تَعْبُدُونَ مِنْ دُونِهِ إِلَّا أَسْمَاءُ سَبَّحْتُمُوهَا
أَنْتُمْ وَأَبَاؤُكُمْ مَا أَنْزَلَ اللَّهُ بِهَا مِنْ سُلْطَانٍ إِنْ
الْحُكْمُ إِلَّا لِلَّهِ أَمَرَ أَلَّا تَعْبُدُوا إِلَّا إِيَّاهُ ذَلِكَ
الَّذِينَ الْفَقِيرُ وَلَكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٤١﴾

42. 我が同囚の兩名よ、お前たちの一人については、その主人のために酒を酌ぐ身とならん。他の一人は、磔けにされ、数多の鳥がその頭を啄むべし。お前たちが訊ねし事は、すでに決定をみたるなり」と。

يُصَاحِبِي السِّجْنِ أَمَّا أَحَدُكُمَا فَيَسْقِي رَبَّهُ خَمْرًا
وَأَمَّا الْآخَرُ فَيُصْلَبُ فَتَأْكُلُ الطَّيْرُ مِنْ رَأْسِهِ
فُضِيَ الْأَمْرُ لِلَّذِي فِيهِ تَسْتَفْتِينَ ﴿٤٢﴾

43. 而してヨセフは、兩名の中釈放せらるべしと思つた方に、云えり、「我が主人に我がことを告げよ」と。然るに悪魔が男に之を忘れせしめたれば、ヨセフはなお数年牢屋に繋がれたり。

وَقَالَ لِلَّذِي ظَنَّ أَنَّهُ نَاجٍ مِنْهُمَا اذْكُرْنِي عِنْدَ
رَبِّكَ فَأَنَسَ الشَّيْطَانُ ذِكْرَ رَبِّهِ فَلَبِثَ فِي السِّجْنِ
بِضْعَ سِنِينَ ﴿٤٣﴾

第六項

44. 時に王云えり、「余は夢で、七頭の肥えた牝牛が七頭の瘦せたのに食われ、また七つの青穂と七つの枯れ穂を見たり。汝等長老たちよ、もし夢判断が出来るなら、余の夢の意味を解け」と。

وَقَالَ الْمَلِكُ إِنِّي أَرَى سَبْعَ بَقَرَاتٍ سَوِيَّاتٍ يَأْكُلْنَ
سَبْعَ عِجَافٍ وَسَبْعَ سُنبُلَاتٍ خُضْرٍ وَأُخَرَ يَابِسَاتٍ يَا أَيُّهَا
الْمَلَأُ أَفْتُونِي فِي رُؤْيَايَ إِنْ كُنْتُمْ لِلرُّؤْيَا تَعْبُرُونَ ﴿٤٤﴾

45. 彼等は答えり、「雑夢なり、我等はかかる雑夢を解く術を知らず」と。

قَالُوا أَضْغَاتٌ أَحْلَامٍ وَمَا نَحْنُ بِتَأْوِيلِ الْأَحْلَامِ
بِغَالِيَيْنَ ﴿٤٥﴾

46. ところで、例の兩名の中釈放された男が、その後しばらくして想起し、云えり、「我その解説を御一同に告げ知らせん、故に我を派遣し給え」と。

وَقَالَ الَّذِي نَجَّى مِنْهُمَا وَادَّكَرَ بَعْدَ أُمَّةٍ أَنَا أُنْتِظَمُ
بِتَأْوِيلِهِ فَأَرْسِلُونِ ﴿٤٦﴾

47. 「ヨセフよ、誠実なる人よ、七頭の肥えた牝牛が七頭の瘦せたのに食われ、また七つ

يُوسُفُ أَيُّهَا الصِّدِّيقُ أَفْتِنَا فِي سَبْعِ بَقَرَاتٍ سَوِيَّاتٍ

の青穂と七つの枯れ穂の夢の意味を我等のために解け。我は帰来て人々に之を知らさん」

48. ヨセフは答えり、「お前たち七年間今まで通り種を播き、勤勉に働け。而して自分たちが食べる少量を除いて、刈り入れたるものは穂のまま蓄えよ。

49. すると、その後、七年に亘って苦しいとき来り、お前たちが貯蔵する少量を除いて、豫め災害に備えておきしものまですべてを食い尽くさん。(注26)

50. その後に来る一年は、慈雨を得て、果汁を搾るべし」と。

第七項

51. 王は云えり、「その者を連れて参れ」と。然るに使者がヨセフのところへ来ると、ヨセフは云えり、「帰来て汝の主人に訊ねよ、その手を傷つけし女どもはどうするのかと。我が主は彼女等の詭計をよく知り給う」と。(注27)

52. 王は婦人たちに訊ねり、「お前たちがヨセフの意に反して誘惑せし時、どうであったか?」と。彼女たちは答えり、「彼はアッラーを恐れ、罪に近寄りざりき—私たちは、彼がいささかも悪なきを知りぬ」と。アズイーゾの妻云えり、「これで、事実が明らかになり。彼を誘惑せしは妾なれど、彼はまことに誠実なる者なり」と。(注28)

注26 聖なる預言者の時代に、アラビアは七年にも渡る飢きに襲われ、その大飢きのすさまじきは、人々が腐肉でも口にせざるを得なかった程であったという(ブハリ)。

注27 ヨセフが並々ならぬ人間である事を知った王は、彼を釈放しようとしたが、ヨセフが自分に科された疑いの潔白をはっきり証明する査問が終わらないうちは釈放される事を拒んだ。ヨセフが取調べを望んだ目的は二つあった。一つは、王に後々になって彼を閉じこめた人達の邪悪な目的に惑わされ彼に悪意をもたぬ様、彼の無実をしっかりとらしたかった事。そしてもう一つには彼の愚人であるポテバルにヨセフが恩知らずであったとの印象を持ち続けて欲しくなかったからである。

注28 この節の語句から、女達が手を傷つけたというのは実際に起こった事である事がわかる。さもなければ、ヨセフがその事に言及はしないからである。驚嘆からか会話に没頭したかのいづれかの理由で、何人かの

يَاكُلْهُنَّ سَبْعَ عَجَافٍ وَ سَبْعَ سُنْبُلَاتٍ خُضِرَ وَ أُخِرَ
يُسَبِّحُ لَكَ إِلَى أَرْجَعُ إِلَى النَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَعْلَمُونَ ⑤

قَالَ تَزْرَعُونَ سَبْعَ سِنِينَ دَابًّا فَمَا حَصَدْتُمْ فَذَرُوهُ
فِي سُنْبُلِهِ إِلَّا قَلِيلًا مِمَّا تَأْكُلُونَ ⑥

ثُمَّ يَأْتِي مِنْ بَعْدِ ذَلِكَ سَبْعُ شِدَادٍ يَأْكُلْنَ مَا
قَدَّمْتُمْ لَهُنَّ إِلَّا قَلِيلًا مِمَّا تَحْصِنُونَ ⑦

ثُمَّ يَأْتِي مِنْ بَعْدِ ذَلِكَ عَامٌ فِيهِ يُغَاثُ النَّاسُ
وَفِيهِ يَعْصِرُونَ ⑧

وَقَالَ الْمَلِكُ انْتَوَيْ بِهٖ فَلَمَّا جَاءَهُ الرَّسُولُ قَالَ
ارْجِعْ إِلَى رَبِّكَ فَسْأَلْهُ مَا بَالُ النِّسْوَةِ الَّتِي تَقْطَعْنَ
أَيْدِيَهُنَّ إِنَّ رَبِّي بِكَيْدِهِنَّ عَلِيمٌ ⑨

قَالَ مَا خَطْبُكَ إِذْ رَأَوْنِي تُسْوَفُ عَنْ نَفْسِي ٥
قُلْنَ حَاشَ لِلَّهِ مَا عَلِمْنَا عَلَيْهِ مِنْ سُوءٍ قَالَتِ امْرَأَتُ
الْعَزِيزِ إِنِّي حَصَصْتُ الْحَقَّ أَنَا وَارْوَدْتُهُ عَنْ نَفْسِي
وَإِنَّهٗ لَكِنَّ الضَّالِّينَ ⑩

53. ヨセフは云えり、「これは我が主人に、彼が不在中、我彼を裏切る者に非ず、またアッラーは不貞な女の詭計を助けるものに非らざることを知らしめるためなり。

54. 然れども、人間の心は悪に傾きやすいものであるが故に、主が慈悲を垂れる者を除いて、我は自ら潔白なりとは考えず。げに我が主は寛大にして、慈悲深くまします」と。

55. 王は云えり、「その者を連れて参れ。余はその者を格別に取り立てん」と。王はヨセフと語りて、云えり、「今日より汝は地位と信任を授けられて、我等と偕に居るべし」と。

56. ヨセフは云えり、「我をこの国の倉庫の管理者に任命されよ、我有能なる管理者なるが故に」と。(注29)

57. かくの如く、われらはヨセフにこの国において地位を与え、彼の好むところに何処なりと住むことを得せしめたり。われらはわれらの欲する者に恩恵を垂れ、義しい人の報奨は決して空しくせず。

58. 神を信じ神を畏れる者には、来世の報奨こそ勝りたるはなし。

第八項

59. ヨセフの兄たち来たりて、ヨセフに日通りせり。ヨセフは兄たちを認めたれど、彼等はヨセフを認めざりき。

60. ヨセフは兄たちに食料を供給して、云えり、「お前たちの腹違いの弟を連れて参れ。(注30) お前たち、我充分に柝目を満すを見ずや、我は最善の招客者に非ざるか？

ذَلِكَ لِيَعْلَمَ أَنِّي لَمْ أَخُنْهُ بِالْغَيْبِ وَأَنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي كَيْدَ الْخَائِنِينَ ﴿٥٣﴾

وَمَا أَيْتِي نَفْسِي إِنْ النَّفْسَ لَأَمَّارَةٌ بِالسُّوءِ إِلَّا مَا رَجِمْتُ إِنْ رَّبِّي غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٥٤﴾

وَقَالَ الْمَلِكُ انْتَوَيْ بِهٖ اسْتَخْلَصْهُ لِنَفْسِي فَكَلَّمَهَا قَالَ إِنَّكَ الْيَوْمَ لَدَيْنَا مَكِينٌ أُمِينٌ ﴿٥٥﴾

قَالَ اجْعَلْنِي عَلَى خَزَائِنِ الْأَرْضِ إِنِّي حَفِيظٌ عَلِيمٌ ﴿٥٦﴾

وَكَذٰلِكَ مَكَّنَّا لِيُوسُفَ فِي الْأَرْضِ يَتَّبِعُوهُ مِنْ حَيْثُ شَاءَ مُصِيبٌ بِرَحْمَتِنَا مَنْ شَاءَ وَلَا نُضِيعُ أَجْرَ الْمُحْسِنِينَ ﴿٥٧﴾

وَلِلْآخِرَةِ الْآخِرَةُ خَيْرٌ لِّلَّذِينَ آمَنُوا وَكَانُوا يَتَّقُونَ ﴿٥٨﴾

وَجَاءَ إِخْوَةُ يُوسُفَ فَدَخَلُوا عَلَيْهِ فَعَرَفَهُمْ وَهُمْ لَهُ مُنْكَرُونَ ﴿٥٩﴾

وَلَمَّا جَهَّزَهُمْ بِجَهَّازِهِمْ قَالَ انْتَوَيْ بِأَخِي لَكُمْ مِنْ أَبِيكُمْ أَتَوُونَ أَنِّي آؤِي الْكَيْلَ وَأَنَا خَيْرُ الْمُنْزِلِينَ ﴿٦٠﴾

婦人が気づかずに手を傷つけたのである。或いは、ヨセフに、真実ではない告発を行なった事で、手を傷つければならなかった、即ち、自分達を虚偽の立場に落としこんだという意味とも考えられる。しかし実際には何もおこらなかったのだとすれば、ヨセフが“手を切った事”について言及するはずがないのである。

注29 ヨセフは、財務係となる事を望んだ。彼は王の夢の実現に深くかかわる部署の責任を持つという強い願いから、一途に望んだものと思われる。

注30 ヤコブには12人の息子がいた。ヨセフとベニヤミンは妻ラケルの子で、残りの10人は他の妻達の子供であった。

61. 然しながら、その弟を我が前に連れ参れぬのなら、お前たちはわしから穀物を量ってもらえまい。またわしに近づくこともさせぬ」と。

62. 彼等は答えり、「彼を手放すよう、我等は父を説き伏せん。我等必ず之をなさん」と。

63. ヨセフはその家僕等に命じたり、「彼等の金子をその鞍袋の中に入れておけ、さすれば家に帰りてこれを認め、多分また帰り来たらん」と。

64. 彼等その父の許に帰るや、云えり、「我等の父よ、我等は今後穀物の販売を拒否されたり。されば売って貰うために、弟を我等と偕に遣わされよ。我等は必ず弟を保護せん」と。

65. ヤコブは云えり、「あの子をお前たちには預けられぬ。先にあの子の兄をお前たちに預けた時と同じ結果とならん。されど一番の保護者はアッラーにして、彼こそは慈悲を垂れ給う者の中で最も慈悲深き御方にまします」と。

66. ところで、彼等その荷を解くと、彼等の金子が返還されてあるを見たり。彼等は云えり、「我等の父よ、我等はこの上に何を望むべきや？我等の金子は返還されてここにあり。此の分なら家族の食料も貰え得べし、また弟を護り、更に駱駝一頭分の荷を得て帰るべし。それくらいわけもなく得られるなり」と。(注31)

67. ヤコブは云えり、「お前たちが避け難い障害にとり囲まれた場合に非ざれば、必ず彼を連れ戻るとアッラーの御名にかけて誓わぬかぎり、我は彼をお前たちと偕に行かしめず」と。かくて彼等がヤコブに誓いし時、

فَإِنْ لَّمْ تَأْتِنِي بِهِ فَلَا كَيْلَ لَكُمْ عِنْدِي وَلَا تَقْرُبُونِ ⑪

قَالُوا اسْتَأْذِنُوا عَنْهُ أَبَاهُ وَإِنَّا لَفَاعِلُونَ ⑫
وَقَالَ يَفْتَئِدِيهِ اجْعَلُوا بِضَاعَتَهُمْ فِي رِحَالِهِمْ
لَعَلَّهُمْ يُعْرِقُونَهَا إِذَا انْقَلَبُوا إِلَى أَهْلِهِمْ لَعَلَّهُمْ
يَرْجِعُونَ ⑬

فَلَمَّا رَجَعُوا إِلَى أَبِيهِمْ قَالُوا يَا أَبَانَا مُنِعَ مِنَّا الْكَيْلُ
فَأَرْسِلْ مَعَنَا آخَنَانًا يُكْتَلُ وَإِنَّا لَهُ لَحَافِظُونَ ⑭

قَالَ هَلْ آمَنُكُمْ عَلَيْهِ إِلَّا كَمَا أَمِنْتُكُمْ عَلَى أَخِيهِ
مِنْ قَبْلُ قَالَهُ خَيْرَ حِفْظًا وَهُوَ أَرْحَمُ الرَّاحِمِينَ ⑮

وَلَمَّا فَتَحُوا مَتَاعَهُمْ وَجَدُوا بِضَاعَتَهُمْ رُدَّتْ
إِلَيْهِمْ قَالُوا يَا أَبَانَا مَا نَبْغِي هَذِهِ بِضَاعَتُنَا رُدَّتْ
إِلَيْنَا فَوَيْبُ أَهْلِنَا وَنَحْفَظُ أَخَانَا وَنَزِدُكَ كَيْلَ
بَعِيدٍ ذَلِكَ كَيْلٌ يَسِيرٌ ⑯

قَالَ لَنْ أُرْسِلَهُ مَعَكُمْ حَتَّى تُؤْتُونِ مَوْثِقًا مِنَ
اللَّهِ لَتَأْتُنِي بِهِ إِلَّا أَنْ يُحَاطَ بِكُمْ فَلَمَّا آثَرَهُ مَوْثِقَهُمْ

注31 「らくだ一頭分の荷物」とは必ずしも、らくだの背に載せる荷物を指すのではなく、たとえ、ろばに積んでも、らくだが普通運ぶ分の荷物の量を表わす。

ヤコブは云えり、「アッラーは我等が誓いしことを監視し給う」と。

قَالَ اللَّهُ عَلَى مَا نَقُولُ وَكِيلٌ ١٤

68. 更にヤコブは云えり、「我が息子たちよ、一つの門より入るなかれ、必ず別々の門より入れ。されど我はアッラーに対して無力なり。決定は独りアッラー次第なり。我はアッラーを信頼し奉る。信頼は独りアッラーに置き奉れ」と。

وَقَالَ يَبْنِي لَا تَدْخُلُوا مِنْ بَابٍ وَاحِدٍ وَادْخُلُوا مِنْ أَبْوَابٍ مُتَفَرِّقَةٍ وَمَا أُغْنِي عَنْكُمْ مِنَ اللَّهِ مِنْ شَيْءٍ إِنْ أُلْحِمَكُمُ إِلَّا لِلَّهِ عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ وَعَلَيْهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُتَوَكِّلُونَ ١٥

69. 彼等は父の言葉に従いて入りたれど、アッラーの定めたる何事も回避する能わじ、ただヤコブの気持を満足させたるのみ。われらは彼に教えたれば、彼は博識なれど、世人の大半は之を知らず。(注32)

وَلَمَّا دَخَلُوا مِنْ حَيْثُ أَمَرَهُمْ أَبُوهُمْ مَا كَانَ يُغْنِي عَنْهُمْ مِنَ اللَّهِ مِنْ شَيْءٍ إِلَّا حَاجَةٌ فِي نَفْسِ يَعْقُوبَ قَضَاهُ وَإِنَّهُ لَذُو عِلْمٍ لِمَا عَلَّمْنَاهُ وَلَكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ١٦

第九項

70. 彼等がヨセフを訪ねると、ヨセフはその弟を自分の許に泊らせり。而してヨセフは云えり、「我は汝の兄なり。されど彼等のなしたることに、悲しむなかれ」と。

وَلَمَّا دَخَلُوا عَلَى يُوسُفَ أَوَى إِلَيْهِ أَخَاهُ قَالَ إِنِّي أَنَا أَخُوكَ فَلَا تَبْتَئِسْ بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ١٧

71. ヨセフは彼等に食料を供給したる時、弟の鞍袋の中に器をしのばせたり。出発してもなく、大声で喚びかける者の声あり、「汝等旅行者よ、お前たちは盗賊なり」と。(注33)

فَلَمَّا جَهَّزَهُمْ بِجَهَّازِهِمْ جَعَلَ السِّقَايَةَ فِي رَحْلِ أَخِيهِ ثُمَّ أَذَّنَ مُؤَذِّنٌ أَيُّهَا الْعِزْرُ إِنَّكُمْ لَسِرَّوْنَ ١٨

72. 彼等は振り返って訊ねり、「お前たちが失える物は何ぞ?」と。

قَالُوا وَأَقْبَلُوا عَلَيْهِمْ مَاذَا تَفْقِدُونَ ١٩

注32 ヤコブは、神の啓示で既に知らされるかしてエジプトにいる男がヨセフだと気がついてた。その為、ヨセフが実の弟であるベニヤミンに二人だけで会える様、息子達に別々に町に入る様、頼んだのである。

注33 ヨセフ自身が器を弟の袋に入れる事を最初に命令し、その後で彼を、窃盗の罪で告発したというのは誤った解釈である。彼の威厳から考えて、その様なことをすることはあり得ないのである。実際、弟の袋に入れる様にヨセフが命令したのはセカヤ(水を飲む器)であり、失くなった王の器というのはスワー(計量の器)の事であった。兄弟達の復路の準備の興奮のためと、弟ベニヤミンとの別れが近づいたため、ヨセフはのどの渇きをおぼえ水を持ってくる様に頼んだ。水は王の計量の器に入って運ばれてきた。当時は、計量の器は飲む器としても使われていたのである。喉の渇きをいやした後、ヨセフは、うっかりとその器をベニヤミンの持ち物の中に置いてしまい、誰も気づかずに兄のせいで荷物にまぎれこんでしまったのである。ヨセフはすぐに、いかにしてこの間違いが起こったのか気づいたが、これはベニヤミンを拘束する為の神自身の計兩だと気づき、隊商が出ていってしまうまで、分別をもって何も言わずにおいたのである。

73. 追手の人たちは云えり、「国王の器を失えり。誰であれ、それを届け出る者には、一駱駝分の荷を取らせん、我その保証人たらん」と。

قَالُوا نَفْقِدُ صُوَاعَ الْمَلِكِ وَلِمَنْ جَاءَ بِهِ حِمْلُ بَعِيرٍ وَأَنَا بِهِ زَعِيمٌ ④

74. 彼等は答えり、「アッラーにかけて、あなた方よく御存知のように、我等はこの国で悪事を働くために来たに非ず、我等は盗賊に非ず」と。

قَالُوا تَاللّٰهِ لَقَدْ عَلِمْتُمْ مَا جِئْتُمْ لِنُفْسِدَ فِي الْأَرْضِ وَمَا كُنَّا سَرِقِينَ ⑤

75. すると、追手の人たちは云えり、「ならば、もしお前たちが嘘をついたことが判ったなら、その処罰は如何がせん？」と。

قَالُوا فَمَا جَزَاؤُهُ إِنْ كُنْتُمْ كَاذِبِينَ ⑥

76. 彼等は答えり、「その罰は、器が誰かの鞍袋の中に在りたる場合、その鞍袋の持主をその罰金とす。かくの如く我等は悪事を行う者を罰す」と。(注 34)

قَالُوا جَزَاؤُهُ مَنْ وَجِدَ فِي رِحْلِهِ فهُوَ جَزَاؤُهُ كَذَلِكَ نَجْزِي الظَّالِمِينَ ⑦

77. そこで彼(注 35)は弟の袋の前に、彼等の袋を調べ、然る後器を弟の袋より取り出だせり。(注 36) かくわれらはヨセフのために策したり。(注 37) アッラーの思召しかなかりせば、国王の法律の下で、ヨセフはその弟を取り上げること叶わざるが故なり。われらは欲するままにその者の位階を高む。而して一切の知識ある者の上に、独一なる最高の識者あり。

فَبَدَأَ بِأَوْعِيَّتِهِمْ قَبْلَ وِعَاءِ أَخِيهِ ثُمَّ اسْتَخْرَجَهَا مِنْ وِعَاءِ أَخِيهِ كَذَلِكَ كِدْنَا لِيُوسُفَ مَا كَانَ لِيَأْخُذَ أَخَاهُ فِي دِينِ الْمَلِكِ إِلَّا أَنْ يَشَاءَ اللَّهُ نَرْفَعُ دَرَجَاتٍ مَن شَاءَ وَفَوْقَ كُلِّ ذِي عِلْمٍ عَلِيمٌ ⑧

78. 彼等は云えり、「彼が盗みたるか、以前彼の兄も盗みたることありき」と。(注 38) さ

قَالُوا إِنْ يَسْرِقْ فَقَدْ سَرَقَ أَخٌ لَهُ مِنْ قَبْلُ ⑨

注 34 驚きあわてふためいたヨセフの兄弟達は、袋から器の見つかった者は自分達自身で拘束され身の証をたてるべきだと提案した。その為、自分の弟以外の残りの兄弟は、窃盗の罪をさせられずに、弟だけを残させておく事ができたのである。

注 35 器がなくなると公表した役人。

注 36 これはヨセフがベニヤミンに示した特別の配慮からである。

注 37 全ての事は神の思召しであった。即ちヨセフは、何も手を出さなかったのである。ヨセフは水飲み用に使った王の計量の器を全く気付かずにベニヤミンの荷物に入れてしまい、偶然に兄弟達がベニヤミンをヨセフのところに残す様にする意見を述べた。そのため、ヨセフは満足のゆく幸運を手にしたのである。

注 38 一つの罪はもう一つの罪を呼ぶ。ヨセフの兄弟達は、最初は彼を死に追いやろうとし、今や、恥も知らずに、彼の事を盗っ人呼ばわりしたのである。

れどヨセフはそれを心に秘め、之を彼等に明さざりき。ヨセフはただ云えり、「お前たちは酷い状態になるべし。アッラーはお前たちが申し立てることを最もよく知り給う」と。

79. 彼等は云えり、「候に申し上げる、彼には年老いたる父あり。(注 39) されば彼の代りに我等の中から一人を選び給え、汝を優しいお方とお見うけいたすが故に」と。
80. ヨセフは答えり、「アッラーは、我等の財物を所持せし者以外は、^{なんびと}何人も捕えることを禁じたり。之をなさば、我等不義者とならん」と。

第十項

81. 彼等は弟を諦め、退きて、密議せり。一同の指導者(注 40)は云えり、「汝等はアッラーの御名において厳肅なる誓約を父と交せしこと、並びに以前ヨセフについても自らの取分を怠ったことを忘れたるか？ されば、我が父が我を許すか、或いはアッラーが判決を下すまでは、我はこの地を離れまじ。彼こそは最も優れたる審判者なり。
82. 汝等は父の許に帰りて、告げよ、『我等の父よ、汝の息子は盗みをしたり。我等はただ自分たちが見たことを申し述べるに過ぎず。なれど、見えざることに對しては、監視者たる能わじ。

فَأَسْرَهَا يَوْسُفُ فِي نَفْسِهِ وَكَمْ يَبِيدُهَا لَهُمْ قَالَ
أَنْتُمْ شَرُّ مَكَانٍ إِنَّ اللَّهَ أَعْلَمُ بِمَا تَصِفُونَ ﴿٥٩﴾

قَالُوا يَا أَبَانَا أَلَيْسَ لَكَ أَبَا سُحُبَا كَيْدًا فَخَذَ
أَحَدَنَا مَكَانَهُ إِنَّا نَرَاكَ مِنَ الْحَسِينِينَ ﴿٦٠﴾

قَالَ مَعَاذَ اللَّهِ أَنْ تَأْخُذَ إِلَّا مَنْ وَجَدْنَا مَتَاعَنَا
عِنْدَهُ إِنَّا إِذَا ظَلَمْنَا لَنَا ۖ ﴿٦١﴾

فَلَمَّا اسْتَيْسَسُوا مِنْهُ خَلَصُوا نَجِيًّا قَالَ كَبِيرُهُمْ أَلَمْ
تَعْلَمُوا أَنَّ أَبَاكُمْ قَدْ أَخَذَ عَلَيْكُمْ مَوْثِقًا مِنَ اللَّهِ
وَمِنْ قَبْلُ مَا فَرَّظْتُمْ فِي يُوسُفَ فَلَنْ أَبْرَحَ الْأَرْضَ
حَتَّى يَأْذَنَ لِي أَبِي أَوْ يَحْكُمَ اللَّهُ لِي وَهُوَ خَيْرُ الْحَاكِمِينَ ﴿٦٢﴾

ارْجِعُوا إِلَى آبَائِكُمْ فَقُولُوا يَا أَبَانَا إِنَّ ابْنَكَ سَرَقَ
وَمَا شَهِدْنَا إِلَّا بِمَا عَلَّمْنَا وَمَا كُنَّا لِلْغَيْبِ
حَافِظِينَ ﴿٦٣﴾

注 39 ベニヤミンに盗みの罪を着せただけでなく、彼を見放し、その上、「彼には年老いたる父あり」と言って自分達の弟である事を認め様としなかった。

注 40 聖書によれば、ベニヤミンを置き去りにして父ヤコブの元には帰れないと言ったのは長男のルベンではなく、四番めの兄のユダであった。クルアーンに用いられている「カロール」は「大きい」とか「年上の」という意味を表わし、「年長の」という意味を持つ「アクバル」は使われていない。ヤコブの四番めの息子であるユダは、ヨセフより年上の兄の一人である。又更に、「カビール」は単に「大きい」、「年上」であるだけではなく、「査定、地位、尊厳に於いて偉大である」或いは「統率者」の意味をも併せ持ち、ここではむしろその意味で使われており、又そういう意味であればルベンよりはユダにあてはまる。ユダはヤコブにとってはルベンよりも重要な存在であった(創世紀 43 章 8～10 節)。

83. 我等が在りし邑の人々に訊ね給え、又は我等と偕に帰りたる隊商に訊ね給え。我等の言葉は真実なり」と。

وَسْأَلِ الْقَرْيَةَ الَّتِي كُنَّا فِيهَا وَالْعِيرَ الَّتِي أَقْبَلْنَا فِيهَا وَإِنَّا لَصَدِيقُونَ ﴿٥٣﴾

84. ヤコブは云えり、「そうではあるまい、お前たちは自分たちのためによからぬ事件を潤色したり。なれど、今の我は耐え忍ぶことこそ有益なり。恐らく、アッラーがあの子たちをすべて（注41）我に返し給わん。彼こそはすべてを知り、賢哲にましますが故に」と。

قَالَ بَلْ سَوَّلَتْ لَكُمْ أَنْفُسُكُمْ أَمْرًا فَصَبِّرْ جَبِيلٌ ۚ إِنَّ اللَّهَ أَنَّىٰ تَدِينِي بِهِمْ جَمِيعًا ۚ إِنَّهُ هُوَ الْعَلِيمُ الْحَكِيمُ ﴿٥٤﴾

85. ヤコブは彼等から顔をそむけて、云えり、「ああ、ヨセフを思いて我が心歎き哀しむ!」と。彼の目は悲嘆のために涙で満たされ、胸は煩悶で締めつけられたり。（注42）

وَتَوَلَّى عَنْهُمْ وَقَالَ يَا سَعْدُ عَلَىٰ يُونُسَ ۖ وَأَبِصْتُ عَيْنُهُ مِنَ الْحُزَنِ فَهُوَ كَظِيمٌ ﴿٥٥﴾

86. 彼等は云えり、「アッラーにかけて申し上げる、汝ヨセフについて語るを止めずば、衰弱するか、果ては亡き人の中に入らん」と。（注43）

قَالُوا تَاللَّهِ تَفْتَوْنَا ۖ لَنُكَرِرَ يُونُسَ ۖ لَنَكُونَ حَرْصًا أَوْ تَكُونُ مِنَ الْهَالِكِينَ ﴿٥٦﴾

87. ヤコブは答えり、「我はただ我が煩悶と憂愁をアッラーに訴えるのみ。而して、我は、お前たちが知らざることを、アッラーより聴き知る者なり。（注44）

قَالَ إِنَّمَا أَشْكُوا بَنِيَّ وَحُزْنِي إِلَى اللَّهِ ۖ وَأَعْلَمُ مِنَ اللَّهِ مَا لَا تَعْلَمُونَ ﴿٥٧﴾

88. 我が息子たちよ、行きて、ヨセフ並びにその兄弟を探すのだ。アッラーの慈悲に絶望するなかれ、不信者輩の外は何人もアッラーの慈悲に絶望せず」と。（注45）

يَكْبِتِي أَذْهَبُوا فَتَحَسِّنُوا مِن يُونُسَ ۖ وَأَخِيهِ وَلَا تَأْيِسُوا مِنْ رَوْحِ اللَّهِ ۚ إِنَّهُ لَا يَأْيِسُ مِنْ رَوْحِ اللَّهِ إِلَّا الْقَوْمُ الْكَافِرُونَ ﴿٥٨﴾

注41 ヨセフとベニヤミンとユダのこと。

注42 この節にはヤコブの目には悲しみの涙が溢れ日の前がまっ暗になったという事が述べられている。

注43 「衰弱」とは、肉体及び知性の墮落した、心の多大な不安と病に悩む、虚弱や疲労で死にかけている、或いは、過度の悲しみや愛情でやせ衰え崩壊してしまった人間を意味している。

注44 ヤコブが、神により、ヨセフとベニヤミンそしてユダが生きている事を知らされている事を暗示している。

注45 この節も、ヤコブが、ヨセフとベニヤミンとユダがエジプトで生きている事を確信していた事を示している。

89. 彼等は再びヨセフの前に来て、云えり、「侯よ、我等並びに我が家族は災難に見舞われたれば、我等が持ち来たる金少しなれど、十分な株目^{きぶめ}を我等に与え、慈善として施し^{はたこ}給え。必ずやアッラーは、慈悲深いお方を賞し給う。(注46)

90. ヨセフは云えり、「お前たちが愚昧でありし時、ヨセフ並びにその弟に、何を行いたるかわかっておるのか?」と。(注47)

91. 彼等は云えり、「ややつ、汝ヨセフとな!」ヨセフは云えり、「さよう、我はヨセフ、こは我が弟なり。アッラーは我等に慈悲深くあらせられたり。誰であれ、アッラーを畏れ敬い、且つ耐え忍ぶ者であるならば一アッラーは決して善行者への報奨を空しゅうはせず」と。

92. 彼等は云えり、「アッラーにかけて、げにアッラーは、汝を我等の上に選べるなり。我等は確かに罪人^{つみびと}にてありき」と。

93. ヨセフは云えり、「今日のところはお前たちを非難すまい。(注48) 恐らくアッラーもお前たちを赦し給う。彼は慈悲者の中でも、最も慈悲深い御方にましますが故に。

فَلَمَّا دَخَلُوا عَلَيْهِ قَالُوا يَا أَيُّهَا الْعَزِيزُ مِمَّنَّا وَأَهْلُنَا
الضَّرُّ وَجُنُودًا بِضَاعَةٍ مُزْجَاةٍ فَأَوْفِ لَنَا الْكَيْلَ
وَتَصَدَّقْ عَلَيْنَا إِنَّ اللَّهَ يَجْزِي الْمُتَصَدِّقِينَ ﴿٩٠﴾

قَالَ هَلْ عَلِمْتُمْ مَا فَعَلْتُمْ بِيُوسُفَ وَأَخِيهِ إِذْ
أَنْتُمْ جَاهِلُونَ ﴿٩١﴾

قَالُوا أَعْرَأَكَ أَنْتَ يُوسُفُ قَالَ أَنَا يُوسُفُ وَهَذَا
أَخِي قَدْ مَنَّ اللَّهُ عَلَيْنَا إِنَّهُ مَنْ يَتَّقِ وَيَصْبِرْ
فَإِنَّ اللَّهَ لَا يُضِيعُ أَجْرَ الْمُحْسِنِينَ ﴿٩٢﴾

قَالُوا تَاللَّهِ لَقَدْ أَتَرَكْنَا اللَّهَ عَلَيْنَا وَإِنْ كُنَّا
لَخَاطِئِينَ ﴿٩٣﴾

قَالَ لَا تَنْزِيبَ عَلَيْكُمُ الْيَوْمَ يَغْفِرُ اللَّهُ لَكُمْ وَهُوَ
أَرْحَمُ الرَّاحِمِينَ ﴿٩٤﴾

注46 この場合のヨセフの兄弟達の行動は説明し難い。彼等は、自分達の現在のエジプトへの旅の真の目的であるヨセフとベニヤミンとユダを捜し出すということを見捨て、余りにも道徳的に低次元となってしまい、食物の施しを乞う様になった。

注47 自分の兄弟が身を落としてゆくのを、これ以上見るに耐えなくなったヨセフは、自分がヨセフであることを彼等に言った。しかし話の内容については間接的に持ち出した。

注48 ヨセフは兄弟に疑念を持たせず、即座に自分の赦免は腹藏のない無制限なものであると告げ、彼等の処置についての兄弟の恐怖と憂慮を取り除いてやった。この兄弟を許した心の広さ、寛大さが、聖なる預言者に最も類似している点である。聖なる預言者もヨセフの様に脱出と追放の中にあって、名誉と力を勝ち得、何年もの流刑の後、生まれ故郷に征服者として万人の支持者の統率者として凱旋した時に、メッカは彼の足許にひれ伏し、預言者は彼等にどの様な措置を望むか尋ねた。「ヨセフが自分の兄弟達に取った措置を」と彼等は答えた。聖なる預言者は即座に「それでは今日お前達には何のともがめもない事としよう」と答えた。メッカのクライシムはこの聖なる預言者の死を計る為に、そしてイスラムを根絶する為には、何ものをも辞さなかった以前の血に飢えた敵であった。それにもかかわらずこのクライシムに対して聖なる預言者のとったこの気高い処置は人間の歴史の全記録中に並ぶものがない程、寛大であった。

94. されば我が上着を持ち帰りて、我が父の前に横たえよ。さすれば彼一部始終を了解せん。然る後にお前たち、全家を挙げて我を訪ねよ」と。

第十一項

95. 彼等の隊商が出発した頃、その父は云えり、「お前たち我を老耄せりと思うだろうが、我はヨセフの句いを感じ」と。(注49)
96. 彼等皆云えり、「アッラーにかけて、そはいつもながらの老いの錯誤なり」と。
97. されど、朗報の伝達者来りて、ヨセフの上着をヤコブの前に横たえると、ヤコブは啓発されたり。(注50) そこで、ヤコブは云えり、「我はお前たちに、お前たちが知らざることをアッラーより聴き知っておると云わざりしか?」と。
98. 彼等は云えり、「我等の父よ、我等の罪の赦免を請い給え。我等は紛れもなく罪深い者なりき」と。
99. ヤコブは云えり、「我は、我が主に間違ひなくお前たちの赦しを請わん。げに彼は、寛大にして慈悲深くします」と。
100. かくて彼等一同ヨセフを訪れると、ヨセフは父母(注51)を抱きしめて、云えり、「アッラーもし欲しなば、安じて埃及に入れ」と。

إِذْ هَبُوا بَيِّعُوا هَذَا فَالْقَوَّةَ عَلَى دَجْرٍ إِنِّي يَأْتِ
بَصِيرًا وَأَتُونِي بِأَهْلِكُمْ أَجْبَعِينَ ﴿٩٤﴾

وَلَمَّا فَصَلَتِ الْعِيرُ قَالَ أَبُوهُمْ إِنِّي لَأَجِدُ رِيحَ
يُوسُفَ لَوْ لَا أَن تَقْنَدُونِ ﴿٩٥﴾

قَالُوا تَاللَّهِ إِنَّكَ لَفِي ضَلَالِكَ الْقَدِيمِ ﴿٩٦﴾

فَلَمَّا أَنْ جَاءَ الْبَشِيرُ أَلْقَاهُ عَلَى وَجْهِهِ فَارْتَدَّ
بَصِيرًا قَالَ أَلَمْ أَقُلْ لَكُمْ إِنِّي أَعْلَمُ مِنَ اللَّهِ مَا
لَا تَعْلَمُونَ ﴿٩٧﴾

قَالُوا يَا أَبَانَا اسْتَغْفِرْ لَنَا ذُنُوبَنَا إِنَّا كُنَّا
خَاطِئِينَ ﴿٩٨﴾

قَالَ سَوْفَ أَسْتَغْفِرُ لَكُمْ رَبِّي إِنَّهُ هُوَ الْغَفُورُ
الرَّحِيمُ ﴿٩٩﴾

فَلَمَّا دَخَلُوا عَلَى يُوسُفَ أَوَى إِلَيْهِ أَبُويْهِ وَقَالَ
ادْخُلُوا مِصْرَ إِنْ شَاءَ اللَّهُ آمِينَ ﴿١٠٠﴾

注49 兄弟達の隊商が帰宅する以前に、ヤコブは家内の人々に、「あらゆる状況はそれに反した様相を呈しているにもかかわらず、ヨセフに間もなく会える様に思う」と述べている。この確信を強調する為、ヤコブは、「ヨセフに会う事は不可能だと皆は思っているだろうが、夢でもなければ、年寄りの思い入れでもない。」という語句で表わしている。

注50 ヨセフのシャツがヤコブの目の前に置かれた時、信仰に根ざした啓示に過ぎなかったヨセフが生きているという確信が事実として、把握されたのである。これが、「啓発された」という言葉の意味するところである。クルアーンでは、ヤコブが盲になったという解釈は全然取っていないのである。盲になったという事が、彼の偉大な神の預言者であるという尊厳と一致しないし、その他の数節にも盲になったという見解には反する叙述がみられる。ヤコブに手渡されたシャツは、ヨセフが井戸に投げ込まれた時着ていたシャツと思われる。

注51 ヨセフの実の母親であるラケルは既に死んでおり、この節の「両親」という語の使用法は、養母であっても、その人の実の親としての愛と尊敬に値する事を示している。

101. 而してヨセフは兩親を玉座（注 52）に登らしめれば、彼等一同地に俯伏して神に感謝の意を捧げり。（注 53）ヨセフは云えり、「我が父よ、これは昔、我が見し夢の成就なり。我が主は之を實現せしめたり。悪魔が我と我が兄弟との間に仲たがいを引き起こさせたる時、後で我を牢獄より出し、（注 54）またあなた方を砂漠より連れ来るは、我に賜えるアッラの恩寵なり。げに、我が主は、お氣に召したる者には慈悲深くまします。彼はすべてを知り、賢哲にまします。

102. おお、主よ、汝は我に権能を授け、夢の解釈を教えたり。おお、天地の創造者よ、汝は現世においても来世においても我が守護者なり。願わくば我を、汝の意思に甘心悦服して死なしめよ、而して義しき人々の列に加え給え」と。

103. これは、われらが汝に啓示する秘奥なる消息なり。汝は、ヨセフの兄弟たちが詭計をなさんとせし時、彼等と偕に居らざりき。（注 55）

104. たとい汝が熱望するとも、世人の多くは之を信ぜざるべし。

105. 汝はこのために如何なる報酬も彼等に求めず。そはただ全人類のための訓戒に過ぎず。

وَرَفَعَ أَبَوَيْهِ عَلَى الْعَرْشِ وَخَرُّوا لَهُ سُجَّدًا ۖ وَقَالَ يَا أَبَتِ هَذَا تَأْوِيلُ رُؤْيَايَ مِنْ قَبْلُ ۖ قَدْ جَعَلَهَا رَبِّي حَقًّا ۖ وَقَدْ أَحْسَنَ بِي إِذْ أَخْرَجْتَنِي مِنَ السِّجْنِ وَجَاءَ بِكُمُ مِنَ الْبَدْوِ مِنْ بَعْدِ أَنْ نَزَغَ الشَّيْطَانُ بَيْنِي وَبَيْنَ إِخْوَتِي ۚ إِنَّ رَبِّي لَطِيفٌ لِمَا يَشَاءُ ۚ إِنَّهُ هُوَ الْعَلِيمُ الْحَكِيمُ ﴿٥١﴾

رَبِّ قَدْ آتَيْتَنِي مِنَ الْمُلْكِ وَعَلَّمْتَنِي مِنْ تَأْوِيلِ الْأَحَادِيثِ ۚ فَاطِرَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ أَنْتَ وَلِيِّ فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ تَوَفَّنِي مُسْلِمًا وَأَلْحِقْ بِالصَّالِحِينَ ﴿٥٢﴾

ذَلِكَ مِنْ أَنْبَاءِ الْغَيْبِ نُوحِيهِ إِلَيْكَ ۖ وَمَا كُنْتَ لَدَيْهِمْ إِذْ أَجْمَعُوا أَمْرَهُمْ وَهُمْ يَمْكُرُونَ ﴿٥٣﴾

وَمَا أَكْثَرُ النَّاسِ وَلَوْ حَرَصْتَ بِمُؤْمِنِينَ ﴿٥٤﴾

وَمَا تَسْأَلُهُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ ۗ إِنَّهُ هُوَ الْذِكْرُ الْعَلِيمُ ﴿٥٥﴾

注 52 「玉座」の意味は、ヨセフが兩親を王にひきあわせた（創世記 47 章 2 節、7 節）、或いは王の許可を受け、自分の玉座に坐らせた事を意味している。古代に於いては、王の大臣や代理人は、王と同様に自分の玉座を持っていたのである。

注 53 ヨセフの兄弟と兩親は、ヨセフがこんなにも高い地位につかせて頂けた事を、ひれ伏して神に感謝したのである。ヨセフにひざまづいて拝したのではなく、ヨセフの事で跪拝したのである。

注 54 ヨセフは、神の恩恵については、牢獄から解放してもらった事だけを述べ、井戸から助け出された事には触れなかった。これは兄弟達に自分達の行為を恥じさせたくなかったからである。

注 55 このヨセフの次第は単なる話ではなく、聖なる預言者とイスラムの将来についての力強い預言の核をなしている。

第十二項

106. 天地間には数多の神兆あり、されど彼等は之を見過し、通りすぐ。(注 56)

107. 彼等の多くは、アッラーに他神を併せ祀らずば、アッラーを信ぜず。

108. ならば彼等は、抵抗し難いアッラーの懲罰から、また知らぬ間に突然到来する死期から安全でいられるとも思っているのか？

109. 云え、「これぞ我が道なり。我と我に従う者は、确实なる証拠に基いて、アッラーに呼びかける。アッラーに光栄あれ、我はアッラーに他神を配する者に非ず」と。(注 57)

110. われらが汝以前に使徒として遣わした者は、すべて邑の住民の中から選びてこれに啓示を与えし者ばかり。彼等地上を遍く旅して、彼等以前の人々の末路が如何なるものなりしかを見ざりしか？神を畏れ敬う者にとっては、来世の住居こそ最上なり。お前たちこれでも理解ざるか？

111. 使徒たちが不信心者どもに絶望し、世間から嘘つき呼ばわりされたる時、われらの助けが使徒たちに降り、われらが欲する者を救いたり、されど、悪人どもは、われらの懲罰から免れ得ず。

112. 確かに、これ等の物語の中には理性ある人々への教訓あり。そは作り話に非ず、以前に在りしものの証明であり、萬事の詳細な解説であり、且つまた信仰する徒輩への嚮導にして、慈悲なり。

وَكَايْنٍ مِّنْ آيَةٍ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ يَتَّبِعُونَ عَلَيْهَا
وَهُمْ عَنْهَا مُعْرِضُونَ ﴿٥٦﴾

وَمَا يُؤْمِنُ أَكْثَرُهُمْ بِاللَّهِ إِلَّا وَهُمْ مُشْرِكُونَ ﴿٥٧﴾

أَفَأَمِنُوا أَن تَأْتِيَهُمْ غَاشِيَةٌ مِّنْ عَذَابِ اللَّهِ أَوْ
تَأْتِيَهُمُ السَّاعَةُ بَغْتَةً وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٥٨﴾

قُلْ هَذِهِ سَبِيلِي أَدْعُو إِلَى اللَّهِ عَلَى بَصِيرَةٍ أَنَا وَمَنِ
اتَّبَعَنِي وَسُبْحَانَ اللَّهِ وَمَا أَنَا مِنَ الْمُشْرِكِينَ ﴿٥٩﴾

وَمَا أَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ إِلَّا رِجَالًا نُّوحِي إِلَيْهِمْ مِنْ
أَهْلِ الْقُرَىٰ أَفَلَمْ يَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَيَنْظُرُوا كَيْفَ
كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ وَلَدَارُ الْآخِرَةِ خَيْرٌ
لِّلَّذِينَ اتَّقَوْا أَفَلَا تَعْقِلُونَ ﴿٦٠﴾

حَتَّىٰ إِذَا اسْتَيْسَسَ الرُّسُلُ وَكَفَىٰ النَّاسُ كُفْرًا
جَاءَهُمْ نَصْرُنَا فَنُجِّيَ مَنْ نَّشَاءُ وَلَا يُرَدُّ بَأْسُنَا
عَنِ الْقَوْمِ الْمُجْرِمِينَ ﴿٦١﴾

لَقَدْ كَانَ فِي قَصصِهِمْ عِبْرَةٌ لِأُولِي الْأَلْبَابِ ۚ
كَانَ حَدِيثًا يُنْكَرُ وَلَٰكِنْ تَصْدِيقُ الَّذِي بَيْنَ
يَدَيْهِ وَتَفْصِيلُ كُلِّ شَيْءٍ وَهُدًى وَرَحْمَةً

لِّقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ﴿٦٢﴾

注 56 この節では、信者と不信者の根本的な態度の違いが指摘されている。信ずる者は、心の目を開き、少しでも神よりの手がかりがあれば、つかもうと心の準備がなされているが、不信者達は、明確な究極の神兆が現れている際にも恩恵をうける事を拒否する盲の人間の様にふるまう。

注 57 健やかな理由と確固たる信念を持たない盲目的で思慮のない信仰は、神の目には屈いたとしても何の意味をも持たないのである。

سُورَةُ الرَّعْدِ مَكِّيَّةٌ

(۱۳)

アル・ラアド

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

2. アリフ・ラーム・ミーム・ラー。(注1) これは完全無欠なる經典の諸節なり。汝の主より汝に降し賜わりたるものは真理なり、されど世人の多くは之を信ぜず。

3. お前たちに見得る柱なくして大空を高く挙げたるはアッラーなり。(注2) 然る後、彼は玉座に登れり。(注3) 彼はまた日月をその任務に服せしめ給えば、両者は定め時までその軌道を運行す。彼は萬事を総結す。お前たちに主に見えんことを確信せしめんがため、彼はさまざま神兆を明にし給う。

4. 大地を上げ、山々や河川をそこに配したるは彼なり。而して彼は、一切の果実を雌雄一対となせり。(注4) 彼はまた夜をして昼を覆わせ給う。まことにこの中には、思案する人々へのさまざまなる神兆あり。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

الَّتِي تِلْكَ آيَاتُ الْكِتَابِ وَالَّذِي أُنْزِلَ إِلَيْكَ مِنْ رَبِّكَ الْحَقُّ وَلَكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿١﴾

اللَّهُ الَّذِي رَفَعَ السَّمَوَاتِ بِغَيْرِ عَمَدٍ تَرَوْنَهَا ثُمَّ أَسْتَوَىٰ عَلَى الْعَرْشِ وَسَخَّرَ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ كُلٌّ يَجْرِي لِإِجَالٍ مُّسَمًّى يُدِيرُ الْأَمْرَ يُفَصِّلُ الْآيَاتِ لَعَلَّكُمْ بِلِقَاءِ رَبِّكُمْ تُوقِنُونَ ﴿٣﴾

وَهُوَ الَّذِي مَدَّ الْأَرْضَ وَجَعَلَ فِيهَا رَوَاسِيَ وَأَنْهَارًا وَمِنْ كُلِّ الثَّمَرَاتِ جَعَلَ فِيهَا رُجُومًا مُّشْتَبِهَاتٍ يُنْزِلُ الْبَرَقَ النَّهَارَ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِّقَوْمٍ يَتَفَكَّرُونَ ﴿٥﴾

注1 われは一切を知り一切を見るアッラーなり。10、11、12章はアリフ・ラーム・ラーという句ではじまっているが、順番でいうと13番目当章はアリフ・ラーム・ミーム・ラーという句ではじまっている。このように短縮形で異なっているのは、当章の主題が10、11、12章とは少し違っているという事である。この4語から成る短縮句の意味は、「我はアッラーであり、全知の神、一切を知り一切を見る神である」ということである。

注2 この文の意味は、(1)天は柱がなくても落ちない事が分かる。(2)天は目には見えない柱の上にある、即ち天には支えがあるが、それを見ることができない。この節の意味を文字通りに取れば、天は柱の支えなしで存在しているという意味である。比喩的には、天は、実際には、支えの上にあるのだが、人間の目にはこの支えは見えないというのである。これは、たとえば、今までに科学によって発見された目には見えない重力、磁力、惑星の動きなどや、将来発見されるであろうものごとである。

注3 「玉座」という語はクルアーンでは、精神的、肉体的法則の完成をもたらしことを意味するために使われている。この表現の使い方は、世界の君主のならわしに似ている。

注4 この節では果物のことにだけ触れているけれども、クルアーンの他の箇所では、神がすべてのものに一対一雄と雌を作られたと述べている(36章37節、51章50節)。これは実に、すべての宗教的聖典の中でクルアーンが最初に言い出したことである。科学者は、無機物の中にすら「対」を発見しようと始めた。この節ではすべてのものは対になっているという法則が人間の知性にも応用できることに注意を向けている。天の光が知性を照らさなければ、人は神の啓示を人間の理性の結合から生まれる真の知識を得ることはできない。

5. 地上には、相い接して、異った区域あり。葡萄の園、穀物の畑、或いは一つの根より一緒に育った棗椰子の樹もあれば、独り立つものもあり。それ等は皆同じ水を灌がれども、われらが或る果物を特に他よりも慈味ならしめたり。この中には、理性ある人々へのさまざまな神兆あり。(注5)

6. もし汝驚くべきことあらば、彼等の言葉こそ驚くべきことなり、「何んとな！彼等土と化したる後、再び新しい創造の状態にさせられるとな？」と云う。これ等の者はその主を信ぜざる者どもなり。彼等はその頸に枷をかけられ、(注6)火獄の住人となって、永劫に彼処に留まん。

7. 過去において、さまざまなみせしめが起っているにもかかわらず、彼等は汝に福よりも禍いの速やかならんことを求む。げに主は、その悪行にもかかわらず、人間に寛大であり、同時に懲罰にも厳格にまします。

8. 信ぜざる者どもは云う、「何故に主より奇蹟(注7)が彼に降らざりしか？」と。汝はただ警告者にすぎず。それぞれ各民族とも、一人の師導者あり。

第二項

9. アッラーはそれぞれの女性が身ごもることを知り、また懐妊期限の増減を知る。一切のものは、アッラーの御手許で正しく計量される。(注8)

وَفِي الْأَرْضِ قَطْعٌ مُتَجَارِتٌ وَجَنَّتْ مِنْ أَعْنَابٍ وَزَرْعٌ وَنَخِيلٌ صَوَائِدٌ وَغَيْرُ صَوَائِدٍ يُتَقَى بِمَاءٍ وَاحِدٍ تَسْقِيهِمْ بَعْضُهَا عَلَى بَعْضٍ فِي الْاَكْلِ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يَعْقِلُونَ ⑤

وَأَنْ تَعْبَ تَعْبٌ فَجَبَّ قَوْلُهُمْ إِذَا كُنَّا تُرَابًا إِنْ أُنْفِئْ خَلْقٍ جَدِيدُهُ أُولَئِكَ الَّذِينَ كَفَرُوا بِرَبِّهِمْ وَأُولَئِكَ الْأَعْلَى فِي أَعْنَاقِهِمْ وَأُولَئِكَ أَصْحَابُ النَّارِ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ⑥

وَيَسْتَعْجِلُونَكَ بِالسَّيِّئَةِ قَبْلَ الْحَسَنَةِ وَقَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِهِمُ النَّبِيُّاتُ وَإِنَّ رَبَّكَ لَذُو مَغْفِرٍ لِنَّاسٍ عَلَى ظُلُمِهِمْ وَإِنَّ رَبَّكَ لَشَدِيدُ الْعِقَابِ ⑦

وَيَقُولُ الَّذِينَ كَفَرُوا لَوْلَا نُزِّلَ عَلَيْهِ آيَةٌ مِنْ رَبِّهِ إِنَّمَا أَنْتَ مُنْذِرٌ وَلِكُلِّ قَوْمٍ هَادٍ ⑧

اللَّهُ يَعْلَمُ مَا تَحِيلُ كُلُّ أُنْثَى وَمَا يَغِيصُ الْأَرْحَامُ وَمَا تَزْدَادُهُ وَكُلُّ شَيْءٍ عِنْدَهُ بِقَدَرٍ ⑨

注5 この表現の意味は、木々に同じ水をやっても実る果実は味や色が大変に違う、それなら、何故聖なる預言者が同じ町、同じ民族の中に住んでいても、彼が特に天啓という秘薬に養われていて、彼の敵がサタンの保護の下で育てられているなら、彼一人抜きでいていないわけがあり得ようかという意味である。

注6 間違った信仰と悪行という手かせ足かせ。

注7 「奇蹟」というのは、他の意味が示されていない時は、いつでも「こらしめの奇蹟」の意味である。

注8 4節で宇宙のすべての物は対になっていると語られたが、霊的世界でも男のように振るまう人もあれば女のように振るまう人もいる。前者は影響を与え、後者は影響を受ける。この節では聖なる預言者の人格においては、霊的には影響を与える男であっても、だれも彼の刻印を受けなければ、霊的な身分を得る事が出来ない、という事が指摘されている。更に、神は聖なる預言者の時代の人々の生まれつきの才能や素質をよく知っ

10. 彼は見えざる世界も、見える世界も知悉し、
比類ない偉大者、至高者なり。

عَلِمَ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ الْكَبِيرِ التَّعَالَى ⑩

11. お前たちの中で、その言葉をそつと胸にし
まっておく者も、また之をあからさまに吹
聴する者も、アッラーにとりては同じなり。
また闇に身を隠す者も、白昼堂々と闊歩す
る者もまた然り。(注9)

سَوَاءٌ مِنْكُمْ مَنْ أَسَرَ الْقَوْلَ وَمَنْ جَهَرَ بِهِ وَمَنْ هُوَ

مُسْتَكْفٍ بِاللَّيْلِ وَسَارِبٌ بِالنَّهَارِ ⑪

12. 使者の前後には諸天使(注10)が随伴し、
アッラーの命を奉じて彼を護衛す。アッ
ラーは、人々が己れの心中にあるものを変
えぬ限り、決して人々の境遇を変えること
なし。而して、アッラー人々を懲らしめんと
欲さば、何人も之を払いのけること能わ
ず、また人々はアッラー以外に如何なる守
護者も有せず。

لَهُ مَعْجِبَاتٌ مِنْ بَيْنِ يَدَيْهِ وَمَنْ خَلْفَهُ يَحْفَظُونَ
مِنْ أَمْرِ اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ لَا يُغَيِّرُ مَا يَقُومُ حَتَّى يُعَذِّبُوا
مَا بِأَنْفُسِهِمْ وَإِذَا أَرَادَ اللَّهُ بِقَوْمٍ سُوءًا فَلَا مَرَدَّ لَهُ

وَمَا لَهُمْ مِنْ دُونِهِ مِنْ وَالٍ ⑫

13. 彼こそは稲妻を見せて、お前たちに希望と
恐怖を抱かしめ、また重い雨雲を起し給う。
(注11)

هُوَ الَّذِي يُرِيكُمْ الْبَرْقَ خَوْفًا وَطَمَعًا وَيُنْزِلُ السَّحَابَ
الْثِقَالَ ⑬

14. 雷鳴とどろいてその栄光を讃えれば、諸天
使も彼を畏れてまた然り。彼は雷鳴を放ち、
彼等がアッラーについて論争している間
に、之をもってその欲する者を撃ち給う、
而して、罰するに厳しくまします。

وَيُسَبِّحُ الرَّعْدُ بِحَمْدِهِ وَالْمَلَائِكَةُ مِنْ خِيفَتِهِ
وَيُرْسِلُ الصَّوَاعِقَ فَيُصِيبُ بِهَا مَنْ يَشَاءُ وَهُمْ
يُجَاوِلُونَ فِي اللَّهِ وَهُوَ شَدِيدُ الْحَالِ ⑭

15. 正当な祈りとはただ彼にのみ祈ることな
り。(注12) 彼等がアッラー以外に祈る

لَهُ دَعْوَةُ الْحَيِّ وَالَّذِينَ يَدْعُونَ مِنْ دُونِهِ لَا

ておられ、神の影響を受け入れようと悪魔の影響を受け入れようとに関係なく、どちらが栄え、どちらが衰退するかは神にとってはわかりきった事なのである。聖なる預言者を受け入れ、彼の刻印を受ける者は、成長し、力・影響力・数も増し、彼の敵は衰退し減少するのである。

注9 聖なる預言者の敵の、あからさまな、或いは秘密の計画は、神の日には見通されているし、その神が聖なる預言者の助力者であり保護者である為、成功するはずがないのである。

注10 「諸天使」とここで言われているのは、天国に住む天使とも取れるし、命をかけて聖なる預言者を守った献身的な仲間のこととも理解できる。

注11 雷は、恐怖と希望とを想起させる。雷が恐怖を想起させるのは、人がそのために死んだり、胚芽やある種の植物は悪い影響を受けたりするからである。又、雷は希望をもたす。なぜなら、雷は豊かな雨の訪れを告げ、色々な病原菌を破壊して、伝染病をおさえる役割も果たすからである。

注12 この表現は次のように解釈できる。(1)神だけが礼拝に値する。(2)人間に役に立ち利益になるのは、神に祈ることだけである。(3)神の声だけが真実を支持するものである。(4)神の声こそ、何ものにも勝り優先されなければならない。

神々は、何んの^た応えも与えはせず。^た譬うれば、口に水が達せんことを願って、両手を水にさし伸べしが、水は決して達せざるが如し。(注13) 不信心者どもの祈りは、無駄骨折りにすぎず。

16. 凡そ天に在るもの地に在るものは、好むと好まざるにかかわらず、アッラーに服従す、それ等の影が朝な夕な地に這う如く。(注14)

17. 云え、「天地の主は誰ぞ?」と。云え、「アッラーなり」と。云え、「然らばお前たち何故にアッラーの代りに、自分自身ですら益するも害するもなし得ざる者を救い手としたるか?」と。云え、「盲と目あきは同等なりや? また、暗闇と光が同等と見なさるべきや? 或いは、彼等は、アッラーの創造するのと似たようなものを創造した神々を彼に配したれば、両者の創造が彼等には相似たものと思われるか?」と。云え、「アッラーこそ萬物の創造主、独一にして至高者なり」と。

18. 彼、空より雨を降らせ給えば、水はその容量に应じて谷谷を流れ下り、奔流は泡沫を浮べて運び行く。装身具や台所道具を造るために火に溶かされた金属からも、また同様な泡を生ず。アッラーはかくの如く眞實を描写し給う。泡沫は忽ちに消え去れども、

يَسْتَجِيبُونَ لَهُمْ بِشَيْءٍ إِلَّا كَبَاسِطٌ كَفِيهِ إِلَى الْمَاءِ لِيَبْلُغَ فَاهُ وَمَا هُوَ بِبَالِغِهِ وَمَا دَعَا الْكَاذِبِينَ إِلَّا فِي ضَلَالٍ ⑮

وَلِلَّهِ يَسْجُدُ مَنْ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ طَوْعًا وَكَرْهًا وَظِلُّهُمْ بِالْأَشْجَادِ ⑯

قُلْ مَنْ رَبُّ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ قُلِ اللَّهُ قُلْ أَفَاتَّخَذْتُ مِنْ دُونِهِ أَوْلِيَاءَ لَا يَمْلِكُونَ لِأَنْفُسِهِمْ نَفْعًا وَلَا ضَرًّا قُلْ هَلْ يَسْتَوِي الْأَعْمَى وَالْبَصِيرَةُ أَمْ هَلْ تَسْتَوِي الظُّلُمَاتُ وَالنُّورُ أَمْ جَعَلُوا لِلَّهِ شُرَكَاءَ خَلَقُوا كَخَلْقِهِ فَتَشَابَهُ الْخَلْقُ عَلَيْهِمْ قُلِ اللَّهُ خَالِقُ كُلِّ شَيْءٍ وَهُوَ الْوَاحِدُ الْقَهَّارُ ⑰

أَنْزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَسَالَتْ أَوْدِيَةٌ بِقَدَرِهَا فَاحْتَمَلَ السَّيْلُ زَبَدًا رَابِيًا وَمِمَّا يُوقِدُونَ عَلَيْهِ فِي النَّارِ ابْتِغَاءَ حِلْيَةٍ أَوْ مَتَاعٍ زَبَدٌ مِثْلَهُ كَذَلِكَ يَضْرِبُ اللَّهُ الْحَقَّ وَالْبَاطِلَ ⑱ فَأَمَّا الزَّبَدُ

注13 人生で成功する正しい方法は、すべてのものをそれにふさわしい場所に置くことである。即ち、神には神があって然るべき地位を与え、創造物は、そうあるべき位置を与える。これこそ、成功し真に幸福になる方法である。

注14 この節は偉大な眞實を具体的に述べている。即ち、すべての創造物は、いやでも応でも神がつくられた自然法に従う義務がある。舌は味覚を司らねばならないし、耳は聴かざるを得ない。この自然法への服従が強制と呼ばれる。しかし、人はある程度行動の自由が与えられていて、人は自由意志を働かせ自分で判断するが、自由を与えられていると思われる分野での行動においてすら、一定量の義務がある。又、好むと好まざるとにかかわらず、何をするにしても神の法則に従わなければならない。「好むと好まざるとにかかわらず」という語は、喜んで神に服従する信徒と不承不承神の法に従っている不信徒の二種類の人々についてもあてはまる。

人間に役立つものは地上に残る。かくの如くアッラーはさまざまな比喩で説き明かし給う。(注 15)

19. 主のお召に^{おし}応ずる人々には永遠の幸福あり。然しながらそのお召に^{おし}応えぬ者どもは、たとい地上にあるすべてのもの並びに^{これ}之に倍するものを持っていたとて、躊躇うこと^{これ}なく之を投げ出して罪を贖わんとするに至らん。それらの者どもは苛酷な罰を受けん。その住居は地獄なり。なんと悲惨なる死なるかな!

第三項

20. 主より汝に啓示されたるものが真理なることを知る者を、盲と同一視できようか? されど思慮ある人々だけが注意する。
21. そはアッラーとの約束を履行し、誓約を破らざる人々なり。
22. またアッラーが結合されんことを命じ給うた者と結ばれ、主を畏敬し、あの苛酷な罰を恐れる人々。(注 16)
23. また主の愛顧を求めて耐え忍び、礼拝を遵守し、われらが施したもののの中から、公私に亘って喜捨を行い、善を以て悪を撃退する人々。これ等の人々には終の住処の善果あるべし— (注 17)

فَيَذَرُهَا جُفَاءً وَأَمَّا مَا يَنْفَعُ النَّاسَ يَمَكِّتُ
فِي الْأَرْضِ كَذَلِكَ يَضْرِبُ اللَّهُ الْأَمْثَالَ ⑮

لِلَّذِينَ اسْتَجَابُوا لِرَبِّهِمْ الْحُسْنَىٰ وَالَّذِينَ لَمْ يَنْجِبُوا
لَهُ لَوْ أَنَّ لَهُمْ مَا فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا وَمِثْلَهُ مَعَهُ
لَا فِتْنَةٌ وَلَا يَأْتِيهِ أُولَٰئِكَ لَهُمْ سُوءُ الْحِسَابِ وَمَأْوَاهُمْ
الْجَهَنَّمُ وَبِئْسَ الْمِهَادُ ⑯

الفصل
الثالث

أَفَمَنْ يَعْلَمُ أَنَّمَا أُنْزِلَ إِلَيْكَ مِنْ رَبِّكَ الْحَقُّ كَنْ
هُوَ أَعْمَىٰ إِنَّمَا يَتَذَكَّرُ أُولَٰئِكَ الْأَبَابُ ⑰

الَّذِينَ يُؤْفِقُونَ يَعْهَدُ اللَّهُ وَلَا يَنْقُضُونَ الْعَيْثَ ⑱
وَالَّذِينَ يَبِصُلُونَ مَا أَمَرَ اللَّهُ بِهِ أَن يُوصَلَ وَ
يَخْشَوْنَ رَبَّهُمْ وَيَخْلِفُونَ سُوءَ الْحِسَابِ ⑲

وَالَّذِينَ صَبَرُوا ابْتِغَاءَ وَجْهِ رَبِّهِمْ وَأَقَامُوا
الصَّلَاةَ وَآتَوْا مِمَّا رَزَقْنَاهُمْ سِرًّا وَعَلَانِيَةً وَ
يُذَرُّونَ بِالْحَسَنَةِ السَّيِّئَةَ أُولَٰئِكَ لَهُمْ عُقْبَى
الدَّارِ ⑳

注 15 この節には、2つの非常に適切な比喩が使われている。一つは、真理は水にたとえられ、虚偽は泡にたとえられている。虚偽は、はじめ真理をおおい隠すように思われるが、最終的には、ゴミが強力な水流に流されるように、真理によって押し流されてしまう。二番目の比喩では、真実は金又は銀に例えられる。何故なら金や銀は溶かされたとき、不純物を捨て去り、混じりけのない純粋で輝く金属だけを残すからである。

注 16 信心深く神に対する義務を果たす事で、信徒は神の創造物である事に対する義務をまとうとする。この二つの義務を守ることが、信仰の土台となるのである。

注 17 信者は、悪を絶滅するのに最もふさわしい道に従う。信者は罰に立つ目的の役割を果たすなら、罰に頼るし、赦しが望ましい結果をもたらす場合なら、赦しに頼る。簡単に言うならば、信者は環境に応じてどの方法であれ最も適切な方法を使って悪の根源そのものを切り捨てるのである。

24. すなわち永遠の樂園が。彼等は彼処に入る、その父祖、その妻女、その子孫（注18）のうちの正義者もまた然り。而して諸天使は各門より入りて彼等を迎え、（注19）

جَنَّتْ عَدْنٍ يَدْخُلُونَهَا وَمَنْ صَلَحَ مِنْ آبَائِهِمْ
وَأَزْوَاجِهِمْ وَذُرِّيَّتِهِمْ وَالْمَلَائِكَةُ يَدْخُلُونَ عَلَيْهِمْ
مِنْ كُلِّ بَابٍ ﴿١٨﴾

25. 「お前たち耐え忍びたるが故に平安を得たり。見よ、この終の住処の褒賞のなんと素晴らしいことよ！」と云う。

سَلَامٌ عَلَيْكُمْ بِمَا صَبَرْتُمْ فَنِعْمَ عُقْبَى الدَّارِ ﴿١٩﴾

26. しかるに、アッラーに誓約した後、之を破り、アッラーが結合すべく命じ給うた者と絶縁し、地上において悪業を犯す者ども—これ等の者はアッラーの呪いが降り、苛酷な住処に入るべし。

وَالَّذِينَ يَنْقُضُونَ عَهْدَ اللَّهِ مِنْ بَعْدِ مِيثَاقِهِ
وَيَقْطَعُونَ مَا أَمَرَ اللَّهُ بِهِ أَنْ يُوصَلَ وَيُفْسِدُونَ
فِي الْأَرْضِ أُولَئِكَ لَهُمُ اللَّعْنَةُ وَلَهُمْ سُوءُ الدَّارِ ﴿٢٠﴾

27. アッラーはその欲する者に、その給養を或いは豊かに、或いは乏しく授け給う。彼等は現世を喜んでいるが、来るべき生活に比すれば、これただ束の間の享樂にすぎず。

اللَّهُ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَشَاءُ وَيَقْدِرُ وَفَرِحُوا
بِالْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَمَا الْحَيَاةُ الدُّنْيَا فِي الْآخِرَةِ إِلَّا
مَتَاعٌ ﴿٢١﴾

第四項

28. 信ぜざる者どもは云う、「何故に主より奇蹟が彼に降らざりしか？」と。云え、「アッラーはその欲する者を迷わしめ、彼に頼る者をお傍に導き給う。（注20）

وَيَقُولُ الَّذِينَ كَفَرُوا لَوْلَا نُزِّلَ عَلَيْهِ آيَةٌ مِنْ
رَبِّهِ قُلْ إِنَّ اللَّهَ يُضِلُّ مَنْ يَشَاءُ وَيَهْدِي إِلَى
بَابِ الْإِيمَانِ ﴿٢٢﴾

29. 信ずる輩は、アッラーを唱念して心安かなり。然り！心に安らぎを得るには、アッラーを唱念するに如かず。（注21）

الَّذِينَ آمَنُوا وَتَطْمَئِنُّ قُلُوبُهُمْ بِذِكْرِ اللَّهِ أَلَا
بِذِكْرِ اللَّهِ تَطْمَئِنُّ الْقُلُوبُ ﴿٢٣﴾

注18 この節では重要な原理が述べられている。人の行う善行は、意図したものであらうとなかろうと、親戚縁者の助けや協力があるて為される。だから、人の勝ちとするほうびは、親戚縁者すべてが、その報にあずかるべきなのである。

注19 信者の為した善行の種々の範疇は、来るべき世において、天国の数多くの門として表わされる。

注20 神が、神の方に向う者を導き、神から背いて神の導きを拒む者が道を迷っても、そのままにしておかれるというのは、神の不変の法である。

注21 神を探究するのは、人間の魂の心からの願望であって、人生の真の目的である。その目的が達成されると、人は丁度まるで神のひざの上で安らかに眠っている様な心のやすらぎを得るのである。

30. 信仰に入り、善行にいそしむ者は「幸福を手にし、素晴らしい処に帰り行かん」と。

الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ طُوبَى لَهُمْ
وَحَسَنُ مَا بِهِ ⑤

31. かくてわれらは、汝に啓示したことを彼等に誦み聞かせんがために、昔幾多の民族が滅び去ったことのある民の中に汝を遣わせり。然るに彼等は慈悲深い神を信ぜず。云え、「彼は我が主なり。彼の外に神なし。我は彼に頼り、彼に帰る」と。

كَذَلِكَ أَرْسَلْنَا فِي أُمَمٍ قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِهَا أُمَمٌ
لَتَتْلُوَ عَلَيْهِمُ الَّذِي أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ وَهُمْ يَكْفُرُونَ
بِالْحُسْنِ قُلْ هُوَ رَبِّي لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ
وَالَيْهِ مَتَابٌ ⑥

32. もしここにクルアーンがあつて、それによつて山が動かされ、(注22)大地が裂かれ、(注23)死者が物云うとしても、(注24)彼等はそれを信じはすまい。否、物事はすべてアッラーじだいなり。アッラーもし欲したりせば、全人類を必ず導き得た筈、信者たるものこれに気がつかぬか？なれど、信ぜざる者どもには、その所業ゆえに、災難がつきまとい、或いは家の近くに居座つて、(注25)アッラーの約束が実現されるまでは絶えることなからん。アッラーは必ずその約束を守り給う。

وَلَوْ أَنَّ قُرْآنًا سُيِّرَتْ بِهِ الْجِبَالُ أَوْ قُطِعَتْ بِهِ
الْأَرْضُ أَوْ كَلِمَةٌ بِهِ الْيَوْمُ بَلَّ إِلَهُ الْأُمَرَجِينَ
أَفَلَمْ يَأْتِنَسِ الَّذِينَ آمَنُوا أَنْ لَوْ يَشَاءُ اللَّهُ لَهْدَى
النَّاسَ جَمِيعًا وَلَا يَزَالُ الَّذِينَ كَفَرُوا تُصِيبُهُمْ بِئْسَ
صَنُوعًا قَارِعَةً أَوْ تَحُلُ قَرْيَةً مِنْ دَارِهِمْ حَتَّى
يَأْتِيَ وَعْدُ اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ لَا يُخْلِفُ الْبِعَادَ ⑦

第五項

33. 使徒たちは汝以前にも嘲笑されり。しかしわれらは信ぜぬ者どもに猶予を与えたり。然るに今、急に襲う、わが懲罰の如何に恐ろしいことかよ！

وَلَقَدْ اسْتَهْزَيْ بِرُسُلٍ مِنْ قَبْلِكَ فَأَمَلَيْتُ لِلَّذِينَ
كَفَرُوا ثُمَّ أَخَذْتُهُمْ فَكَيفَ كَانَ عِقَابِ ⑧

注22 「それによつて山が動かされる」というのは、クルアーンは人にふりかかるすべての難問をすべて解決する、或いは、クルアーンが古い規則を廃止して人間の直面する種々の問題への新しい解決法を教え込む、という意味を表わしている。

注23 「大地が裂かれ」というのは、クルアーンは地球全地にすみやかに広がるだろうという事であり、文字通りに解釈すれば、土地の一部が敵の領土から切り離され、信徒の所有地になっていく事を意味している。

注24 「死者がもの云うとしても」というのは、クルアーンによつて、霊的に死んでいる人々が、新しい生活にめざめるだけでなく、叡智ある言葉を話し、世界にクルアーンのメッセージを説く様になるということである。

注25 「災難がつきまとい、或いは近くに居座つて」というのは、不信者の上に災害が次から次へと降り続け、不運の波に見舞われ続けることとなり、然る後、彼らの権力の完全な破滅に関する預言が成就して、彼らの都であり主要塞であるメッカが崩壊することを示している。

34. 各人の上に在りて、監視する者は誰か？然るに彼等は、アッラーに比すべき神々を作る。云え、「彼等の名を挙げよ」（注26）と。お前たちはアッラーの知らざることをアッラーに教えんとするか？それとも、ただの空しい名稱なりや？そうではない、不信心者の目には、自分たちの企みが立派なものに映じ、（注27）ために彼等は正しい道から閉め出されているなり。アッラーが邪道に陥し入れた者には、如何なる導きもなかるべし。

35. かかる者どもは現世で罰を受けるが、来世の間は更に酷く、何人もアッラーの怒りに対して彼等を護ってくれはせぬ。

36. 敬虔なる信者に約束されたる楽園をたとうれば、かくの如し。河川その中を流れて、常時果物が実り、（注28）されば樹下に日蔭あり。こは正義者への褒賞なり、されど信ぜざる者どもへの応酬は、業火なり。

37. われらが経典を授けた人々は、汝に啓示されたことを喜ぶ。されど多くの異った集団の中にはその一部を否認する者あり。云え、「我はただアッラーを崇拝せよ、何物も彼に併せ祀るべからず、と命ぜられてるのみ。我は彼に祈り、彼に帰る」と。

أَفَمَنْ هُوَ قَائِمٌ عَلَى كُلِّ نَفْسٍ بِمَا كَسَبَتْ وَجَعَلُوا لِلَّهِ شُرَكَاءَ قُلْ سَوَّاهُمْ أَمْ تُتَّبِعُونَهُمْ بَلَا يَعْلَمُ فِي الْأَرْضِ أَمْرٌ بَاطِلٌ مِنَ الْقَوْلِ بَلْ دَرِينِ لِلَّذِينَ كَفَرُوا مَكْرَهُمْ وَصَدُّوا عَنِ السَّبِيلِ وَمَنْ يَضِلِّ اللَّهُ فَمَا لَهُ مِنْ هَادٍ ﴿٣٧﴾

لَهُمْ عَذَابٌ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَلَعَذَابُ الْآخِرَةِ أَشَقُّ وَمَا لَهُمْ مِنَ اللَّهِ مِنْ وَاكِ ﴿٣٨﴾

مِثْلُ الْجَنَّةِ الَّتِي وَعَدَ الْمُتَّقُونَ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ أُكْلُهَا دَائِمٌ وَظِلُّهَا تِلْكَ عُقْبَى الَّذِينَ اتَّقَوْا وَعُقْبَى الْكَافِرِينَ النَّارُ ﴿٣٩﴾

وَالَّذِينَ آتَيْنَهُمُ الْكِتَابَ يَفْرَحُونَ بِمَا أُنْزِلَ إِلَيْكَ وَمِنَ الْأَحْزَابِ مَنْ يُنْكِرُ بَعْضَهُ قُلْ إِنَّمَا أُمِرْتُ أَنْ أَعْبُدَ اللَّهَ وَلَا أُشْرِكَ بِهِ إِلَيْهِ أَدْعُوا وَإِلَيْهِ مَأْبٍ ﴿٤٠﴾

注26 偶像崇拝者は、彼らの神がどんな儀式を司っていたかを述べるように要求されている。この節で使われる「名を挙げよ」という語は、個人の名前ではなく特性を表わす名前のことである。なぜなら神々の個人的な名のうちのいくつかは、クルアーン自体の中に述べられているからである（71章24節）。「彼等の名を挙げよ」という意味は軽蔑の意味でもあり得る。即ち、不信の徒の神々はあまりにも価値がないので、その名を口にすることで恥しい事となる。

注27 人が利益を得るために、詐欺や欺瞞を働く時、自分の行う詐欺行為がだんだん魅力的に思われてきて、自分が犠牲になるということとはよくあることである。

注28 「常時果物が実り」の意味は天上の果実には秋はなく、腐る季節や休止期もないという事で、天国の恩恵や祝福は絶える事がない事を意味している。「果物」と「日蔭」はそれぞれ内的な祝福と外的な祝福を表わしていて、信徒は天国において、内的にも外的にもすべての種類の祝福を受けるであろうという意味である。

38. 従って、われらはそれを詳細な、判断の基準として啓示したり。されば汝に知識が降った後、彼等の邪悪な欲望に汝もし従うならば、汝をアッラーの怒りから助ける者も防ぐ者もなかるべし。

第六項

39. げにわれらは汝以前にも幾多の使徒を遣わし、妻子を彼等に与えたり。なれど、アッラーの許しなくば、如何なる使徒も奇蹟を現わすことを得ず。各時代ごとに一つの啓示書あり。

40. アッラーはその欲するものを取り消し、(注29) またこれを制定す。すべての戒律の拠り所はアッラーの御許にあり。(注30)

41. われらが彼等に威嚇することの一部を実現して汝に見せようが、または汝を死なしめようと、それは問題にならず。なんとなれば、汝の役目はただ神託の伝達にして、清算はわれらの務めなり。

42. 彼等はわれらがその地を襲って、端からその地を次第に衰えさせつつあるを見ざるか？(注31) アッラーが判定を下せば、何人もその裁定を覆し得ず。而して彼は清算するに迅速なり

43. 彼等以前の者どももいろいろと企みを謀る。されど一切の有効な企みはアッラーに

وَكَذَلِكَ أَنْزَلْنَاهُ حُكْمًا وَعَرَبِيًّا وَلَكِنَّ أَتَّبَعَتْ أَهْوَاءَهُمْ
بَعْدَ مَا جَاءَكَ مِنَ الْعِلْمِ مَا لَكَ مِنَ اللَّهِ مِنْ وَلِيٍّ وَلَا وَاقٍ ﴿٣٨﴾

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا رُسُلًا مِنْ قَبْلِكَ وَجَعَلْنَا لَكُمُ زَوَاجًا
وَذُرِّيَّةً وَمَا كَانَ لِرَسُولٍ أَنْ يَأْتِيَ بِآيَةٍ إِلَّا
بِإِذْنِ اللَّهِ لِكُلِّ أَجَلٍ كِتَابٌ ﴿٣٩﴾

يَحْكُمُ اللَّهُ مَا يَشَاءُ وَيُخَيِّرُ ۖ وَعِنْدَهُ أُمُّ الْكِتَابِ ﴿٤٠﴾

وَأَنْ تَأْمُرَ بِكَ بَعْضُ الَّذِينَ نَعِدُهُمْ أَوْ تَوَفِّيَكَ
فَاتِمَّا عَلَيْكَ الْبَلْعُ وَعَلَيْنَا الْحِسَابُ ﴿٤١﴾

أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّ إِلَى الْاَرْضِ تَنْقِصُهَا مِنْ أَطْرَافِهَا
وَاللَّهُ يَحْكُمُ لَا مُعَقِّبَ لِحُكْمِهِ ۖ وَهُوَ سَرِيعُ الْحِسَابِ ﴿٤٢﴾

وَقَدْ مَكَرَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَلِلَّهِ الْبُكْرُ جَمِيعًا

注29 この節では、神の罰に関する二つの掟を述べている。a) 神が罰を取消されるのは、全体か一部のいずれかである。b) 神は罰を命ぜられたままにしておかれる。

注30 a) 神だけがすべての戒律やその基になっている教智の根源を知っておられる。b) 律法のすべての戒律は神の恩恵に基づいている為、律法の根源は神と共にある。「拠り所」とは源、基礎、起源、あるいは滞在、支持を意味する。

注31 この節は、「端からその地を次第に衰えさせつつあるを見ざるか？」というの以下の様な意味であることを示している。イスラムはアラビア中に広がり、すべての家、すなわち身分の高い人にも低い人にも、金持ちにも貧者にも、奴隷にも主人にも、社会のすべての機関に食い込んでいるということである。

属す。彼は各人が稼^{つひ}ぎしものを知る。而^{しか}して不信心者どもは、終の住居の褒賞^{ごんびと}が何人ものものなるかをほどなく知らん（注 32）。

يَعْلَمُ مَا تَكْسِبُ كُلُّ نَفْسٍ وَسَيَعْلَمُ الْكُفْرُ لِمَن
عُقِبَى الدَّارِ ﴿٣٢﴾

44. 信ぜざる者どもは云う、「汝は使徒に非ず」と。云え、「アッラーは我とお前たちの証人たるに十分なり。而^{しか}して經典の知識を有する者もまた然^{しか}り」と。（注 33）

وَيَقُولُ الَّذِينَ كَفَرُوا لَسْتَ مُرْسَلًا قُلْ كَفَىٰ بِاللَّهِ
شَهِيدًا بَيْنِي وَبَيْنَكُمْ وَمَنْ عِنْدَهُ عِلْمُ الْكِتَابِ ﴿٣٣﴾

注 32 イスラムのすべての敵の意図は、神に知られているので、そのどんな計画も戦略も神の目的—イスラムの究極の勝利—を邪魔することはできない。

注 33 「經典の知識」という語の意味は、天国からの鮮明な、神兆^{しきし}と、聖なる預言者に関しての以前からある經典の預言の事を指す。

سُورَةُ اِبْرٰهِيْمَ مَكِّيَّةٌ

(۱۳)

イブラヒーム

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. アリフ・ラーム・ラー。(注1) これはわれらが汝に啓示した經典なり。汝が、主の命によって、人類を暗黒の中から光明へ、偉大にして、讃美されるべき御方の道に導くために—
3. アッラー、その御方に天地にあるもの一切は属す。されば災いなるかな不信心者ども、恐ろしい刑罰を受けねばならぬ。
4. 彼等は来世よりも現世を愛し、人々をアッラーの道から妨げ、之を歪曲せんと謀る。これ等は甚だしく迷える者なり。
5. われらは未だかつて、その民の言葉(注2)でなさざる如何なる使徒も遣わしたことなくし。それは人々に解るように説明させんがためなり。然る後、アッラーは己れの欲する者を迷わしめ、また己れの欲する者を導き給う。彼は偉大にして、賢哲にまします。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

الرَّحْمٰنُ كَتَبَ اَنْزَلْنٰهُ اِلَيْكَ لِتُخْرِجَ النَّاسَ مِنَ الظُّلُمٰتِ اِلَى النُّوْرِ ۚ بِاِذْنِ رَبِّهِمْ اِلَى صِرَاطٍ الْعَزِيزِ الْحَمِيدِ ①

اللَّهُ الَّذِي لَهُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ وَوَيْلٌ لِّلْكَافِرِيْنَ مِنْ عَذَابٍ شَدِيْدٍ ②

اِلَّذِيْنَ يَسْتَجِبُوْنَ اِلْحٰوْلَةَ الدُّنْيَا عَلٰى الْاٰخِرَةِ وَيَصُدُّوْنَ عَنْ سَبِيْلِ اللَّهِ وَيَعْبُوْهُنَّا عِوَجًا ۚ اُولٰٓئِكَ فِيْ ضَلٰلٍ بَعِيْدٍ ③

وَمَا اَرْسَلْنَا مِنْ رَّسُوْلٍ اِلَّا بِلِسٰنٍ قَوْمٍ لِّيُبَيِّنَ لَهُمْ ۚ فَيُضِلُّ اللَّهُ مَنْ يَّشَآءُ وَيَهْدِيْ مَنْ يَّشَآءُ ۚ وَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيْمُ ④

注1 われは一切を見るアッラーなり。

注2 この節は、聖なる預言者の御告げがアラブ民族のみに宛てられているという事を意味しているのではない。その様な考えは、聖なる預言者がはっきりと自分は全世界に、つかわれた神よりの使者であると宣言しているクルアーン中の他の節でも(7: 159; 34: 29)とがめられており、クルアーンが聖なる預言者の全世界への使命を説くのみならず、預言者自身も人類全てにという意味で“私は黒い人にも赤い人にも、つかわれた(Binan)、そして私は全ての人類の為に選ばれた(Buphan)”と語ったと伝えられている。クルアーンはアラブ民族が最初の受け取り手であった為にアラビア語で啓示され(そして又、アラビア語が、最も明快で雄弁且つ意味の広い言語である為、クルアーンの御告げを伝達するには最も卓越して適切な手段である為)、アラビア語を通して、全世界へ説かれる事になっていたのであり、神よりの御告げがアラブ民族のみにあてられていたという訳ではない。

6. 告われらは、モーゼにさまざまな^{しし}神兆を持たせて遣わした時、「汝の民を暗黒の中から光明へ導き、アッラーの日々を彼等に憶い起させよ」と云えり。げにその中には、耐え忍び恩に感ずる者へのさまざまな^{しし}神兆あり。

7. モーゼがその民にかく云いたる時を念え。「ファラオの民がお前たちに残酷な刑罰を加え、お前たちの男児を殺して女子のみを容赦した時、アッラーがお前たちを救い出したその恩顧を忘れまいぞ。そは主の下し給うた試練なりき」

第二項

8. その時、主は宣言せり、「お前たちもし有難く思うなら、われは必ずお前たちへの恵みを増さん。然れども、お前たちもし恩に感ぜずば、わが懲罰は実に恐ろしいぞ」と。
(注3)

9. 更にモーゼは云えり、「たといお前たちが信ぜずとも、いや地上の尽くの人々が信ぜずとも、神はお前たちに損なわれることなし。げにアッラーは自ら満ち足りて、讃美に値し給う。

10. お前たち以前の人々、ノアやアードやサムドの民、並びに彼等以後の民の消息を伝え聞かざりしか？ 以後の民については、アッラー以外何人も知らず。使徒たちがそれぞれに民に明証を携えて来たれども、

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مُوسَىٰ بِآيَاتِنَا أَنْ أَخْرِجْ قَوْمَكَ مِنَ الظُّلُمَاتِ إِلَى النُّورِ وَذَرِّهُمْ بِآيَاتِ اللَّهِ إِنْ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِّكُلِّ صَبَّارٍ شَكُورٍ ①

وَإِذْ قَالَ مُوسَىٰ لِقَوْمِهِ اذْكُرُوا نِعْمَةَ اللَّهِ عَلَيْكُمْ إِذْ أَنْجَاكُمْ مِنْ آلِ فِرْعَوْنَ يَسُومُونَكُمْ سُوءَ الْعَذَابِ وَيَدْعُونَ أَبْنَاءَكُمْ وَيَسْتَحْيُونَ نِسَاءَكُمْ وَفِي ذَلِكَ لُبْلَاءٌ مِّنْ رَبِّكُمْ عَظِيمٌ ②

وَإِذْ تَأَذَّنَ رَبُّكُمْ لَئِنْ شَكَرْتُمْ لَأَزِيدَنَّكُمْ وَلَئِنْ كَفَرْتُمْ إِنَّ عَذَابِي لَشَدِيدٌ ③

وَقَالَ مُوسَىٰ إِنَّ تَكْفُرًا أَنْتُمْ وَمَنْ فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا لَا فَإِنَّ اللَّهَ لَغَنِيٌّ حَمِيدٌ ④

أَلَمْ يَأْتِكُمْ نَبَأُ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِكُمْ قَوْمِ نُوحٍ وَعَادٍ وَثَمُودَ وَالَّذِينَ مِنْ بَعْدِهِمْ لَا يَعْلَمُهُمْ إِلَّا اللَّهُ جَاءَهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنَاتِ فَرَدُّوا أَيْدِيَهُمْ فِي أَعْيُنِهِمْ

注3 「有難く思う」というのは、三種類あり、それらは、(1)心或いは精神により、受けた恩恵がどんなものであるかを正しく理解する「感謝」。(2)舌(言葉)を使って、恩人を賞賛、推奨する「感謝」そして(3)手足を使い、その功績・価値に従い、受けた恩恵に報いる「感謝」である。また感謝には五つの基本がある。即ち、(a) 自分に何かをしてくれた恩人に対してする返礼を望む気持ち、尊敬の念 (b) 恩人への愛 (c) 受けた恩恵への認識 (d) 受けた恩恵に対し恩人を賞賛する事、及び (e) 彼(恩を与えてくれた人)の望まぬ方法でその恩恵を使わない事、という五つの基本である。これが人間の側からの感謝である。神の側から捉えられた感謝とは、人を許し、受け入れ、或いは安らぎを与え善意と恩恵をもって人を導くと、そして而る後、当然彼に、応じる或いは報いるという事である。人は、人が神より賜った物を正しく使う時のみ、神に感謝することができるのである。

人々はその手を己が口に当て(注4)、云えり、「我等はお前たちが違わされた使命を信ぜず、またお前たちが我等を招く教えについても不安なる疑いを持つ」と。

11. 彼等の使徒たちは云えり、「お前たち天地の創造主(注5)、アッラーに疑心を抱くか？彼がお前たちを召し給うは、お前たちの罪を赦し、定められた期限までお前たちに猶予を与えんがためなり」と。すると、彼等は云えり、「お前たちは我等同様ただの人間にすぎず。お前たちは我等の父祖が崇拜していたものから、我等を背かしめんとす。ならば、明確なる証拠を我等に示せ」と。

12. 使徒たちは云えり、「我等は確かにお前たち同様ただの人間なり、(注6)然れども、アッラーはその僕等の中から嘉し給う者に恩恵を施し給う。アッラーの命に非ざれば、我等はお前たちに証拠を示す立場に非ず。信者たちはただアッラーにのみその信頼を託すべきなり。

13. アッラーが我等に歩むべき道を導き給うたというに、何故に我等は自らの信頼をアッラーに託さざるか？されば、我等は必ずお前たちが我等に加える迫害を耐え忍ばん。されば、頼る者をして、アッラーに頼らしめ給え」と。

وَقَالُوا إِنَّا كَفَرْنَا بِمَا أُرْسِلْتُمْ بِهِ وَإِنَّا لَفِي شَكٍّ مِّمَّا تَدْعُونَنَا إِلَيْهِ مُرِيبٍ ⑤

قَالَتْ رُسُلُهُمْ أِنِى اللّٰهُ شَكَّ فَاطِرُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ يَدْعُوْكُمْ لِيَغْفِرَ لَكُمْ مِّنْ ذُنُوْبِكُمْ وَيُخْرِجَكُمْ اِلَىٰ اَجَلٍ مُّسَمًّى قَالُوْا اِنْ اَنْتُمْ اِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُنَا طَرَيْدُونَ اَنْ تَصُدُّوْنَا عَمَّا كَانَ يَعْبُدُ اٰبَاؤُنَا فَانْتَوْنَا اِىَّ سُلٰطٰنٍ مُّبِيْنٍ ⑥

قَالَتْ لَهُمْ رُسُلُهُمْ اِنْ تَحْنُ اِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُكُمْ وَلٰكِنَّ اللّٰهَ يَمُنُّ عَلَىٰ مَنۢ يَّشَآءُ مِنْ عِبَادِهٖ وَمَا كَانَ لَنَا اَنْ نَّأْتِيَكُمْ سُلٰطٰنٍ اِلَّا بِاِذْنِ اللّٰهِ وَعَلَىٰ اللّٰهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُوْنَ ⑦

وَمَا لَنَا اَلَّا تَتَوَكَّلَ عَلَى اللّٰهِ وَقَدْ هَدٰىنَا سُبُلَنَا وَلَنَصْبِرَنَّ عَلَىٰ مَا اُذِيْتُمُوْنَا وَعَلَى اللّٰهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُتَوَكِّلُوْنَ ⑧

注4 「手を己が口に当て」というのは、信仰なき者達は、預言者達の高らかな主張に、驚きのあまり自分達の手で口をふさぐ、或いは、強い怒りの為預言者の言った事に対し、自分達の手をかむとの意味を表わしている。或いはもう一つの解釈としては、不信者達は、預言者達をだまらせ、その主張を話す事を止めさせる為、預言者達の口に手を置くとの意味にもとれる。

注5 預言者に与えられた御教えは神を源泉としている事を証明する為に天と地の創造が引用されている。神は、天地の創造主で、人を造り賜うたのであるから、神がその被造物である人間に何の導きも与えられないと考えるのは、理にかなっていないのである。それと同等に、神は天地を創造する事によって、人間の進歩と物質的繁栄の為に豊富な準備を為さったのであるから、人の精神的繁栄への準備を怠たられる訳がないのである。

注6 人を導く為に又、人の模範となる為、つかわれる神よりの使者は、人間達自身に似た人でなくてはならない。何故なら、彼等自身に似た人間でなくしては模範とはなりえないからである。

第三項

14. すると、不信心者どもは使徒たちに向って云えり、「お前たちが我等の宗教に戻らずば、我等は必ずお前たちを追放せん」と。そこで主は使徒たちに啓示し給う。「われらは必ず悪人どもを絶滅せん。
15. 而して、その後、必ずお前たちをこの国に住まわしめん。こはわが審判を畏れ、わが警告を恐れる者のためなり」。(注7)
16. 使徒たちが勝利を祈ると、そのお蔭で、真理に対するすべての傲慢な敵の野望は水泡に帰せり。
17. 彼の前には地獄あり、而して彼は煮えたぎる湯を飲まされよう。
18. 彼は煮え湯を口一杯含めども、嘔み下す能わず。而して、死四方より迫るも、(注8)死する能わず。その他にも、苛酷な刑罰あるべし。
19. 己が主を信ぜざる者どもの有様は、(注9)風吹きすさぶ嵐の口の灰燼にさも似たり。彼等は己が稼ぎしものを支配し得ず。こは実に甚だしき迷誤なり。
20. 汝はアッラーが真理に基づいて、天地を創り給いたることを知らざるか? アッラーもし欲しなば、彼はお前たちを取り除き、新たな創造を以て之に代えること可能なり。

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِرُسُلِهِمْ لَنُخْرِجَنَّكُمْ مِنْ
أَرْضِنَا أَوْ لَتَعُوذُنَّ فِي مِلَّتِنَا فَأَوَّيَ إِلَيْهِمْ رَبُّهُمْ
لَنُهْلِكَنَّ الظَّالِمِينَ ⑭

وَلَنُسْكِتَنَّكُمْ الْأَرْضَ مِنْ بَعْدِهِمْ ذَلِكَ لِمَنْ
خَافَ مَقَامِي وَخَافَ وَعِيدِ ⑮

وَأَسْتَفْتَحُوا وَخَابَ كُلُّ جَبَّارٍ عَنِيدٍ ⑯

مِنْ وَرَائِهِ جَهَنَّمُ وَيُسَفُّ مِنْ مَاءٍ صَدِيدٍ ⑰

يَتَجَرَّعُهُ وَلَا يَكْدُ لِيُسْفِغَهُ وَيَأْتِيهِ الْمَوْتُ مِنْ
كُلِّ مَكَانٍ وَمَا هُوَ بِبَيِّنٍ وَمِنْ وَرَائِهِ عَذَابٌ
عَلِيلٌ ⑱

مَثَلُ الَّذِينَ كَفَرُوا بِرَبِّهِمْ أَعْمَالُهُمْ كَرَمَادٍ
إِسْتَدَّتْ بِهِ الرِّيحُ فِي يَوْمٍ عَاصِفٍ لَا يَقْدِرُونَ
مِنْهَا كَسْبًا عَلَى شَيْءٍ ذَلِكَ هُوَ الصَّلَاةُ الْبُعِيدُ ⑲

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ بِالْحَقِّ
إِنْ يَشَأْ يُدْهِبْكُمْ وَيَأْتِ بِخَلْقٍ جَدِيدٍ ⑳

注7 クルアーンでは、最高の存在に対して代名詞を使う場合、単数形と複数形の両方を用いている。神の力と尊厳を表わす場合には複数形が、そして自足性と独立性を表わす場合には単数形が用いられる。又、一部のイスラム教徒の神学者の説によると、天使を通して、結果をもたらす場合には複数が、そしてある特別な神の律令(命令)で事を為す場合には単数形が与えられるとの事である。現行の節では両方使用されている。

注8 「四方から死が迫る」とは、信仰を持たぬ者達の多くの罪や諸悪には、色々な形態での死が待ちうけている。という意味である。

注9 この「有様」とは、神の預言者に背いて為した行為を指す。

21. そは、アッラーにはいと易きことなり。

وَمَا ذَلِكَ عَلَى اللَّهِ يَعْزِيزٌ ﴿٢١﴾

22. 彼等こぞってアッラーの御前にまかり出る時、(注10) 弱者と見なされていた者は傲慢なりし人々に向って云わん、「げに我等はお前たちの追隨者なり。されば、お前たちはアッラーの懲罰に対して何か我等のためになし得るか?」と。彼等は答えん、「アッラーもし我等を導きたりせば、我等必ずお前たちを導きしなり。されど、今となりては、忍耐するもせずとも、我等がためには同じこと、逃れる術はなし」と。(注11)

第四項

23. 而して、事決せられるや、悪魔は云わん、「アッラーは真実の約束をお前たちと結びたれど、わしはお前たちを欺きたり。わしはお前たちの上に如何なる権能も有せず、ただお前たちを誘惑し、お前たちがそれに従いたるなり。されば、わしを責めるなかれ、責めるは已れ自身なるぞ。わしはお前たちを助くる能わず。お前たちもまたわしを助くる能わず。お前たちはわしを神と併せ祀りたりしが、わしはすでにそのことは認めざりき。悪人どもは必ず酷罰に遭わん」と。

24. 然れども、信仰に入り、善行にいそしむ者は、河川流るる樂園に入るを許され、主の命によって、そこに末永く住むべし。そこでのお互いの挨拶は「平安あれ」なり。

25. 汝はアッラーが如何に適当な言葉で譬えを述べられているかを解らざるか? それは恰

وَبَرُّوا لِلَّهِ جَمِيعًا فَقَالَ الضُّعَفَاءُ لِلَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا إِنَّا كُنَّا لَكُمْ تَبَعًا فُهِلْ أَنْتُمْ مُغْنُونَ عَنَّْا مِنْ عَذَابِ اللَّهِ مِنْ شَيْءٍ قَالُوا لَوْ هَدَانَا اللَّهُ لَهْدَيْنَاكُمْ سَوَاءٌ عَلَيْنَا أَجْرَعْنَا أَمْ سَبَّحْنَا مَا لَنَا مِنَ مَحِيصٍ ﴿٢٢﴾

وَقَالَ الشَّيْطَانُ لَنَا قُصِيَ الْأَمْرَاتِ اللَّهُ وَعَدَكُمْ وَعَدَ الْحَقِّ وَوَعَدْتُكُمْ فَأَخْلَفْتُكُمْ وَمَا كَانَ لِي عَلَيْكُمْ مِنْ سُلْطَانٍ إِلَّا أَنْ دَعَوْتُكُمْ فَاسْتَجَبْتُمْ لِي فَلَا تَلُمُونِي وَلَوْلَا أَنْتُمْ لَمْ يَكُنْ مَا أَنَا بِبَصِيرِ حَكَمٍ وَمَا أَنْتُمْ بِبَصِيرِي إِنِّي كَفَرْتُ بِمَا أَشْرَكْتُمُونِ مِنْ قَبْلُ إِنَّ الظَّالِمِينَ لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٢٣﴾

وَأُدْخِلَ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا بِإِذْنِ رَبِّهِمْ فِيهَا سَلَامٌ ﴿٢٤﴾

أَلَمْ تَرَ كَيْفَ ضَرَبَ اللَّهُ مَثَلًا كَلِمَةً طَيِّبَةً كَشَجَرَةٍ

注10 弱さの表われとしての墮落をもたらすのは、人々が実際にとった間違った行動ばかりが原因とはいえない。自分達の弱さが人目にさらされると、業績以上に成功の頼みの綱である評判と威信が致命的な打撃をうけ、敵対する社会での自分達の評価が下がり、はっきりと衰退と退廃を感じさせられるのである。これが「彼等こぞってアッラーの御前にまかり出る時」という節の意味するところである。

注11 「脱れる術はなし」というのは、滅ぶ運命にある者達は、絶望にうちひしがれ、自分達のおかれる低い状態に既に甘んじているのである。

も良樹の如く、根はしっかりとて、枝葉を蒼穹に伸す。(注12)

26. 主の命によって春夏秋冬その実を結ぶ。
アッラーは人々に反省をうながすために比喻を用う。

27. 然れども、悪言は悪樹の如く、根は大地から根こそぎにされ、堅固さを欠く。(注13)

28. アッラーは堅固なる言葉を以て、信仰する者たちの意志を、現世並びに来世においても強固ならしむ。されど、悪人どもは迷わしめる。アッラーは己れの欲することをなし給う。

29. 汝は忘恩を以てアッラーの恩恵に報い、その民を破滅の住居へと陥らしめたる者を見ざりしや—

30. すなわち地獄に？彼等はその中で焼かれるべし。憐れなるかな彼等の住居や。

31. 彼等はアッラーの道から人々を迷わせるために、アッラーに対する同位者等を立てり。
「暫時^{ごうか}楽しめ、したが、お前たちの行先は業火なり」

طَيْبَةً أَصْلَهَا ثَابِتٌ وَفَرْعُهَا فِي السَّمَاءِ ﴿٢٥﴾

تُؤْتِي أَكْلَهَا كُلَّ حِينٍ يَأْذِنُ رَبُّهَا وَيَضْرِبُ اللَّهُ
الْأَمْثَالَ لِلنَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُونَ ﴿٢٦﴾

وَمَثَلُ كَلِمَةٍ خَبِيثَةٍ كَشَجَرَةٍ خَبِيثَةٍ اجْتُثَّتْ
مِنْ فَوْقِ الْأَرْضِ مَا لَهَا مِنْ قَرَارٍ ﴿٢٧﴾

يُثَبِّتُ اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا بِالْقَوْلِ الثَّابِتِ فِي الْحَيَاةِ
الدُّنْيَا وَفِي الْآخِرَةِ وَيُضِلُّ اللَّهُ الظَّالِمِينَ ﴿٢٨﴾
يَفْعَلُ اللَّهُ مَا يَشَاءُ ﴿٢٩﴾

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ بَدَّلُوا نِعْمَتَ اللَّهِ كُفْرًا وَآحَلُّوا
قَوْمَهُمْ دَارَ الْبَوَارِ ﴿٣٠﴾

جَهَنَّمَ يَصْلَوْنَهَا وَبِئْسَ الْقَرَارُ ﴿٣١﴾

وَجَعَلُوا لِلَّهِ أَنْدَادًا لِيُضِلُّوا عَنْ سَبِيلِهِ قُلْ تَمَتَّعُوا
فَإِنَّ مَصِيرَكُمْ إِلَى النَّارِ ﴿٣٢﴾

注12 神の言葉は、かれらの節では以下の4つの基本的性質を有する木になぞらえられている。その木の4つの性質とは (a) それは善である、即ち、絶対に人間の理性や良心、或いは人間の感情や感受性を害する事がない教えである、という意味であり、(b) まるで良好な根の深い、実のたくさんなる木の様に、強く安定した土台を持ち、その源から新鮮な生命と糧を受け取り、強い木の如く、反対やそれを認めない批判の一撃にあっても折れ曲がる事なく、あらゆる嵐に耐えてしっかりと立っている特質である。その木は、唯一の源より生命と糧を得ている為、その原則と教えには、不調和や放棄がないのである。(c) その枝は天にも届き、即ち、それに従って行動すれば、人は精神的卓絶の頂上をも極められる事を意味し、(d) それが生みだす事實は一年を通じ豊富であるという特質で、これは、その恩恵はいつもみられ、いつの時も生みだされ続け、その教えに従って行動する人々は神と交わる事が出来、高潔さと行動の純粋さで、同時代の人々の上に高くそびえる事が出来るという意味である。クルアーンはこれらの特質を隅々まで有しているのである。

注13 善い木とは違って、ねつ造者達の作り出した本は、悪い木の様なものである。その教えは、理知にも自然法にも支えられておらず、批判に耐える事も出来ず、その原則として理想は人間の条件や環境が変わると、ころころ変わってしまうのである。又その教えは、神と真実の関係を持ちえたと主張できる人達を生みだす事ができない。神の源泉から新鮮な生命を得る事の出来ない教えは、衰退と退化を免れる事ができないのである。

32. 信ずるわが僕等に告げよ、取り引きも友情も役立たぬ日が到来する前に、礼拝を遵守し、われらが賜えしものの中から、こっそりと、或いは公然と施しを行え。

قُلْ لِّعِبَادِيَ الَّذِينَ آمَنُوا يُقِيمُوا الصَّلَاةَ وَيُؤْتُوا
مِمَّا رَزَقْنَاهُمْ سِرًّا وَعَلَانِيَةً مِّن قَبْلِ أَن يَأْتِيَ
يَوْمٌ لَا يَبِيعُ فِيهِ وَلَا يَخْلَى ﴿٣٢﴾

33. アッラー、彼こそは天地を創造し、雲から雨を降らせ、之によってお前たちの食物たる果実を成熟せ給うたお方なり。また、船舶に命じ、大洋を渡ってお前たちの用に服せしめ、河川をもお前たちの用に服せしめたり。

اللَّهُ الَّذِي خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ وَأَنْزَلَ مِنَ
السَّمَاءِ مَاءً فَأَخْرَجَ بِهِ مِنَ الثَّمَرَاتِ رِزْقًا لَّكُمْ
وَسَخَّرَ لَكُمُ الْفُلَ لَتَجْرِيَ فِي الْبَحْرِ بِأَمْرِهِ
وَسَخَّرَ لَكُمُ الْأَنْهَارَ ﴿٣٣﴾

34. また彼は、絶えずその役日を果たす日月をお前たちの用に服せしめたり。而して彼は、夜も昼もお前たちの用に服せしめたり。

وَسَخَّرَ لَكُمُ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ دَائِبَيْنِ وَسَخَّرَ
لَكُمُ اللَّيْلَ وَالنَّهَارَ ﴿٣٤﴾

35. 彼は、お前たちが彼に請い願うものは、(注14) すべて与え給う。たといお前たちがアッラーの幾多の恩恵を教え上げようと欲するも、教うる能わじ。げに人間というのは、不義不正にして、恩知らずであることよ。

وَأَشْكُرُ مِنْ كُلِّ مَا سَأَلْتُمُوهُ وَإِن تَعُدُّوا نِعْمَتَ
اللَّهِ لَا تَحْصُوهَا إِنَّ الْإِنْسَانَ لَظَلُومٌ كَفَّارٌ ﴿٣٥﴾

第六項

36. アブラハムがかく云える時を思い起せ。「主よ、願わくばこの邑を安泰ならしめ給え。また、我と我が子孫等を偶像崇拜から遠ざけさせ給え。(注15)

وَإِذْ قَالَ إِبْرَاهِيمُ رَبِّ اجْعَلْ هَذَا الْبَلَدَ آمِنًا
وَاجْنُبْنِي وَبَنِيَّ أَنْ نَعْبُدَ الْأَصْنَامَ ﴿٣٦﴾

37. 主よ、彼等はすでに幾多の人々を迷わしめたり。されど、誰であれ我に従う者は、確かに我が仲間であり、我に従わざる者は一いや、今は云うまい。汝はまことに寛大にして、慈悲深くまします。

رَبِّ إِنَّهُمْ أَضَلَلْنِي كَثِيرًا مِّنَ النَّاسِ فَمَنْ يَّبْعَثْ
فَأَتَهُ مِنِّي وَمَنْ عَصَانِي فَإِنَّكَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٣٧﴾

注14 「お前たちが彼に請い願うもの」というのは、全てかなえられてきた人間の本質的な、要求の事をさす。神は今まで人間が本質的に切望し要求する全てを満足させる為に完全な準備をして下さったのである。

注15 この節でのアブラハムの祈りは、偶像崇拜がメッカやその周辺の国々に、いつか広がり、浸透していくであろう事を知っていた事を示している。何年も前に祈りがさげられた時の、子孫達を偶像崇拜から守り給えという危惧が示されているのである。

38. 我等の主よ、我は、我が子孫等の一部を汝の聖殿の近くの不毛の谷間に住まわせたり
(注16) —主よ—彼等に礼拝を遵守せしめよ。
(注17) されば、人々の心を彼等に向けさせ、また彼等に果実を供給し給え、
(注18) さすれば、彼等恐らく感謝せん。

رَبَّنَا إِنِّي أَسْكَنْتُ مِنْ ذُرِّيَّتِي بِوَادٍ غَيْرِ ذِي زَرْعٍ
عِنْدَ بَيْتِكَ الْحَرَمِ رَبَّنَا لِيُقِيمُوا الصَّلَاةَ فَاجْعَلْ
أَفْئِدَةً مِنَ النَّاسِ تَهْوِي إِلَيْهِمْ وَارْزُقْهُمْ مِنْ
الشَّرْبِ لَعَلَّهُمْ يَشْكُرُونَ ﴿٣٨﴾

39. 我等の主よ、汝は我等が隠すことも、あらわにすることも知り給う。凡そ天にあるもの地にあるもの、何一つとしてアッラーより隠れたるは無し。

رَبَّنَا إِنَّكَ تَعْلَمُ مَا نُخْفِي وَمَا نُعْلِنُ وَمَا يَخْفَى
عَلَى اللَّهِ مِنْ شَيْءٍ فِي الْأَرْضِ وَلَا فِي السَّمَاءِ ﴿٣٩﴾

40. 老齢にもかかわらず、我にイスマエルとイサクを授け給えしアッラーに讚美あれ。げに主は祈願をよくお聴きとどけ下さるお方にまします。

الْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي وَهَبَ لِي عَلَى الْكِبَرِ إِسْمَاعِيلَ
وِإِسْحَاقَ إِنَّ رَبِّي لَسَمِيعُ الدُّعَاءِ ﴿٤٠﴾

41. 主よ、常に我をして礼拝を守らしめよ、我が子孫等にもまた然り。主よ、汝の慈悲を我に垂れ、我が祈りに応え給え。

رَبِّ اجْعَلْنِي مُقِيمَ الصَّلَاةِ وَمِنْ ذُرِّيَّتِي ذُرِّيَّتًا
وَتَقَبَّلْ دُعَاءِ ﴿٤١﴾

42. 主よ、清算を受ける日、我と我が両親並びに信者たちを救し給え」 (注19)

رَبَّنَا اغْفِرْ لِي وَلِوَالِدَيَّ وَلِلْمُؤْمِنِينَ يَوْمَ يَقُومُ
الْحِسَابُ ﴿٤٢﴾

第七項

43. アッラーが悪人どもの所業をうかつに見過すと思うなかれ。彼はただ、彼等が恐怖の余り瞠目する日まで、暫し彼等に猶予を与えているのみ。

وَلَا تَحْسَبَنَّ اللَّهَ غَافِلًا عَمَّا يَعْمَلُ الظَّالِمُونَ إِنَّمَا
يُؤَخِّرُهُمْ لِيَوْمٍ تَشْخَصُ فِيهِ الْأَبْصَارُ ﴿٤٣﴾

注16 ここで述べられているのは、アラビアの荒野での、我が息子イシュマエルと妻ハガルについてのアブラハムの決心である。

注17 このアブラハムの祈りは聖なる預言者に於いて完全に成就された。何故なら預言者以前は、神前に供物を捧げる為メッカを訪れたのはアラブ人達だけであったが、預言者モハَمَّدの出現の後は、全世界からあらゆる人々が訪れる事となったからである。

注18 この祈りは、メッカのまわりに草の葉一枚見られなかった時に捧げられたものであったが、預言が画期的に成就し、メッカでは最も望ましい果実が一年を通じ手に入る様になったのである。

注19 自分達がサタンから守られているにもかかわらず、神の預言者達が神に敵しを乞う祈りをささげるのは、預言者が、神の尊厳と神聖さを、そして自分達の弱さを知っているからである。自分達の自我や私欲が、ぬぐいされ、神と完全に併合できる事を願い神が彼等を神の慈悲と慈愛で覆って下さる様神に謙虚に祈りをささげさせるのは、この弱さの認識に他ならないのである。

44. その日彼等は、恐怖の余り頭を振り立てて走り廻り、眼は転じ眩み、心は空ろなり。
(注 20)

مَهْطِعِينَ مُقْنِعِينَ رُءُوسِهِمْ لَا يَرْتَدُّ إِلَيْهِمْ طَرْفُهُمْ
وَأَفْنَدَتْهُمْ هَوَاءٌ ﴿٢٠﴾

45. 約束の懲罰が降る日のことを人々に警告せよ。時に悪人どもは云わん、「主よ、暫し我等に猶予を与え給え。我等は必ず汝の呼びかけに応え、使徒に従わん」と。「お前たちは以前、自ら誓わざりしか、自分たちには決して没落なしと？」

وَأَنْذِرِ النَّاسَ يَوْمَ يَأْتِيهِمُ الْعَذَابُ فَيَقُولُ
الَّذِينَ ظَلَمُوا رَبَّنَا أَخْرِجْنَا إِلَى أَجَلٍ قَرِيبٍ نَحْجِبْ
دَعْوَتَكَ وَنَتَّبِعِ الرَّسُولَ أَوْ لَمْ نَكُونُوا أَفْسَلْتُمْ
مَنْ قَبْلُ مَا لَكُمْ مِنْ ذُلٍّ ﴿٢١﴾

46. お前たちは、自らを滅ぼせる者どもが住居した跡に住み、而して、われらが如何に彼等を処遇したるかをお前たちに明示せり。また多くの警え話を述べたるなり」

وَسَكَنْتُمْ فِي مَسْكِينَ الَّذِينَ ظَلَمُوا أَنْفُسَهُمْ وَتَبَيَّنَ
لَكُمْ كَيْفَ فَعَلْنَا بِهِمْ وَضَرَبْنَا لَكُمْ الْأَمْثَالَ ﴿٢٢﴾

47. 彼等はすでに企みを謀れり。なれど、その企みはアッラーの手許にあり。(注 21) その企みがたとい山をも動かす如きものであっても。

وَقَدْ مَكَرُوا مَكَرَهُمْ وَعِنْدَ اللَّهِ مَكَرُهُمْ وَإِنْ
كَانَ مَكَرُهُمْ لِتَزُولَ مِنْهُ الْجِبَالُ ﴿٢٣﴾

48. されば、アッラーがその使徒になされた約束を、怠るなどと思うなかれ。げにアッラーは強大にして、応報の主なるぞ。

فَلَا تَحْسَبَنَّ اللَّهَ مُخْلِفَ وَعْدِهِ رُسُلَهُ إِنَّ اللَّهَ
عَزِيزٌ ذُو انْتِقَامٍ ﴿٢٤﴾

49. 大地変じて他の地に変わり、天また変じて他の天に変わるその日、(注 22) 人は皆、唯一至高なるアッラーの御前に出で来らん。

يَوْمَ تَبْدُلُ الْأَرْضَ غَيْرَ الْأَرْضِ وَالسَّمَوَاتِ وَبَرَزُوا
لِلَّهِ الْوَاحِدِ الْقَهَّارِ ﴿٢٥﴾

50. 汝はその日、悪人どもが鎖で一緒に繋がれているのを見るべし。

وَتَرَى الْمُجْرِمِينَ يَوْمَئِذٍ مُقَرَّنِينَ فِي الْأَصْفَادِ ﴿٢٦﴾

51. 彼等の着物は、恰も滌青の如くにして、火は彼等の顔面を包む。

سَرَابِيلُهُمْ مِنْ قَطَرَانٍ وَأَنْفُسُهُمْ فِي سَعِيرٍ ﴿٢٧﴾

注 20 この節と前節には、予想だにしなかった一万の精鋭軍を連れた聖なる預言者のメッカの門への突然の出現に対する、メッカの人々の当惑と驚倒が、まざまざと描写されている。

注 21 神は彼等の邪悪な計画を全て御存知で彼等の計画を徒勞に終らせられるのである。

注 22 メッカの陥落とアラビアに於いてのイスラムの樹立は、謂わば、新しい宇宙が新天地に出現した様なものであった。古い秩序は一掃され、全く以前とは異なった新しい秩序がそれらに取ってかわったのである。

52. これアッラーが各人のなせることに応じて
報い給うところなり。げにアッラーは、清
算するに迅速なり

لِيَجْزِيَ اللَّهُ كُلَّ نَفْسٍ مَا كَسَبَتْ إِنَّ اللَّهَ سَرِيعُ الْحِسَابِ ﴿٥٢﴾

53. こは世人への訓戒なり。之^{これ}によって彼等が
恩恵に浴し、警戒し、彼こそ唯一なる神で
あることを悟り、思慮ある人々に注意せし
めんがために。

هَذَا بَلَاغٌ لِلنَّاسِ وَلِيُنذَرُوا بِهِ وَلِيَعْلَمُوا أَنَّمَا هُوَ
إِلَهُ وَاحِدٌ وَلِيَذَّكَّرَ أُولُوا الْأَلْبَابِ ﴿٥٣﴾

سُورَةُ الْحَجَرِ مَكِّيَّةٌ

(15)

ヒジル

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. アリフ・ラーム・ラー。(注1) これ等は經典の諸節にして、事理を解明するクルアーンの諸節なり。
3. 信ぜざる者どもは幾度も希がわん、我等ムスリムでありたれば、と。(注2)
4. 彼等をして好きなように食べ且つ楽しませておくがよい。また空しい希望を抱いて自ら欺かしめよ。やがて彼等は思い知らん。
(注3)
5. われらは決して、如何なる邑も一定期限(注4)を置かずに、(注5)滅亡せしめたることなし。
6. 如何なる民も己れの運命の期限を早める能わず、また之を延期する能わず。
7. 彼等は云えり、「汝、訓戒を降されたる者よ、げに汝は狂人なり。
8. もし汝の言葉真理とあらば、何故我等に諸天使を連れ来らざるか？」と。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

الرَّتْ تِلْكَ آيَاتُ الْكِتَابِ وَقُرْآنٍ مُبِينٍ ②

رُبَمَا يَوَدُّ الَّذِينَ كَفَرُوا لَوْ كَانُوا مُسْلِمِينَ ③

ذُرَّهُمْ يَأْكُلُوا وَيَسْتَعْوُوا يُلْهِمُ الْأَمْلَ فَسَوْفَ يَعْلَمُونَ ④

وَمَا أَهْلَكْنَا مِنْ قَرْيَةٍ إِلَّا وَلَهَا كِتَابٌ مَعْلُومٌ ⑤

مَا تَسْبِقُ مِنْ أُمَّةٍ أَجَلَهَا وَمَا يَسْتَأْخِرُونَ ⑥

وَقَالُوا يَا أَيُّهَا الَّذِي نُزِّلَ عَلَيْهِ الذِّكْرُ إِنَّكَ لَجُنُونٌ ⑦

لَوْ مَا تَأْتِينَا بِالْمَلَكَةِ إِنْ كُنْتَ مِنَ الصَّادِقِينَ ⑧

注1 われは一切を知るアッラーなり

注2 このような望みは、聖なる預言者の時代に実際に不信者によって表現されたと記録にある。

注3 この節の意味は、節の最後で述べられている不信の徒の望み——イスラム教徒であったならばよかったのに——という望みはかなえられない望みであるという事である。即ち、それは単なる一時的な望みであって彼らの真の欲望は世間的な楽しみと物質の獲得である。

注4 ここで言われている「一定期限」とは、預言者が預言したように敵が破滅すべく定められた時機のことである。

注5 「邑」とは預言者がつかかわされた人々を象徴している。聖なる預言者モハम्मドの「邑」は、クルアーン(6:93)で「母なる邑」と呼ばれてきた。

9. われらは正義の必要のため以外は天使を降しはせぬが、降したる時は、不信心者どもは猶予せられざるべし。(注6)
10. げに訓戒を降せしはわれら自らなり、而して、われらはその守護者とならん。(注7)
11. われらは汝以前にも、古の民のさまざまな集団に幾多の使徒を遣わせり。
12. 然れども、使徒等彼等に至るや、一人として彼等のために嘲笑せられざるはなかりき。
13. かくの如く、われらは罪深い者の心中に、この嘲りの習癖を忍ばせり。
14. 故に彼等は、昔の人々の先例がありたれど、このクルアーンを信ぜず。
15. また、たといわれらが彼等のために天門を開き、自由に登らしめんとするも。(注8)
16. 彼等は必ず云わん、「ただ我等の日が眩惑されたに過ぎず。否な、我等は魔法にかけられたり」と。(注9)

④ مَا نَزَّلَ الْمَلَكَةُ إِلَّا بِالْحَقِّ وَمَا كَانُوا إِذْ أُنْزِلَ

إِنَّا نَحْنُ نَزَّلْنَا الذِّكْرَ وَإِنَّا لَهُ لَحَافُظُونَ ⑤

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ فِي شَيْعِ الْأَوَّلِينَ ⑥

وَمَا يَأْتِيهِمْ مِنْ رَسُولٍ إِلَّا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِئُونَ ⑦

كَذَلِكَ نَسْلُكُهُ فِي قُلُوبِ الْمُجْرِمِينَ ⑧

لَا يُؤْمِنُونَ بِهِ وَقَدْ خَلَتْ سُنَّةُ الْأَوَّلِينَ ⑨

وَلَوْ فَتَحْنَا عَلَيْهِمْ بَابًا مِنَ السَّمَاءِ فَظَلُّوا فِيهِ يَهْبِئُونَ ⑩

لَقَالُوا إِنَّمَا سَكْرَاتُ أَنْبَاءٍ نَابِلٍ لِحَنٍّ قَوْمٌ مُسْجُورُونَ ⑪

注6 ここで不信者は、次のように告げられる。真理、正義、知恵の必要に従って、彼らは神の罰を受ける事になるだろう。天使が彼らの上に降りてきて一刻の猶予もくれないだろう。

注7 この節でなされたクルアーンの保護と保存に関する約束が見事に達成されたので、他に証拠がなかったとしても、この事実だけでこれが神からのものであると証明するに充分である。当章はメッカで啓示された。その時、聖なる預言者とその信奉者の命は深刻な危険にさらされていて、敵は簡単に新しい信仰をつぶす事ができるかのようにみえた。しかし、その時、不信者はその新しい信仰を破壊するよう挑まれた。そして神は、神自らがその保護者であるから、不信者の計画を善しとされない旨、警告された。神からの挑戦は明白で絶対的なものであって、敵が強く、無茶苦茶な事をしかけてきにもかかわらず、クルアーンは改悪されず、書き入れられずに残った。そしてそれ以来いつも完全に安全に守られた。クルアーンのこの特質は、どのような聖なる書とも共有されるものではない。イスラムに対して敵意を持つことで名高い批評家ウィリアム・ミュー脚は次のように述べている。「クルアーンのすべての節がモハammad自身の手によるもので、全く変えられていないとほとんど確信してもよい。……我々が、今、手にしているクルアーンは、完全にモハammad自身が使った成文と同じものであると保証できる。……この純粋なクルアーンと、他の經典を比較することは、共通点を持たない者を比較することである。」(「モハammadの生涯」の序論)。ドイツの偉大な東洋学者であるノルデク教授は次のように書いている。「クルアーンに後世の書き込みがあると証明しようとしたヨーロッパの学者の試みは失敗した(Enc. Brit)。二、三年後、クルアーンの純粋性に誤りを見出す事に完全に失敗したミンガナ博士は、反対に、すべての經典の中でクルアーンだけが、全く書き込みも改変もされていないという主張を容認した。

注8 この節は、もし神が神のあわれみの門を開けて罰を与えないとしたら、不信者は、神の方に向かないで、物質的繁栄や楽しみを得るのに一生懸命になるであろうとの意味である。

第二項

17. われらは天上に星座を設け、仰ぎ見る者のために之を飾り装えり。(注 10)
18. 而してわれらは、石もて追われたるすべての悪魔から之を護りたり。(注 11)
19. 盗み聞きし、之を歪曲する者あらば、(注 12) その者は流星に追いかけられる。
20. また、われらは大地を伸べ広げ、(注 13) そこに揺がざる山々を据え、そこですべてのものを相応な割合のもとに生ぜしめたり。(注 14)
21. われらはそこで、お前たちのために生活の道を与え、お前たちが扶養せざるものにも之を与えたり。

وَلَقَدْ جَعَلْنَا فِي السَّمَاءِ بُرُوجًا وَزَيَّنَّاهَا لِلنَّاظِرِينَ ١٧

وَحَفِظْنَا مِنْ كُلِّ شَيْطَانٍ رَجِيمٍ ١٨

إِلَّا مَنِ اسْتَرَقَ السَّمْعَ فَاتَّبَعَهُ شَهَابٌ مُبِينٌ ١٩

وَالْأَرْضَ مَدَدْنَاهَا وَالْقَيْنَا فِيهَا رَوَاسِيَ وَأَنْبَتْنَا

فِيهَا مِنْ كُلِّ شَيْءٍ مَوْزُونٍ ٢٠

وَجَعَلْنَا لَكُمْ فِيهَا مَعَايِشَ وَمَنْ لَسْتُمْ لَهُ

بِرَازِقِينَ ٢١

注 9 不信の徒は、精神的な事柄からあまりにもかけ離れてしまっているので、たとえ聖なる預言者が経験した靈的体験や、彼が到達した靈的視野が多少なりとも得られたとしても、不信の徒はこれ信ぜず魔法や妖術の犠牲になったと言ったことであろう。

注 10 ここで述べられているのは、夜空の惑星や恒星の美しさだけではない。それらが創造された偉大なる目的が 16:17 や 67:6 と同じ様に以下の節でも述べられており、星の美しさはその偉大な目的の成就にあるのである。

注 11 この節では、物理的世界では、悪意を持ちがちな人がある種の影響力や力を行行使して他人をある程度傷つけることはできても、天の祝福、即ち、星の健全な影響を完全に奪うことはできないと述べている。同様に、靈的世界において「サタン」は預言者や他の信奉者を支配する事ができないのである(当章 43 節)。この節で述べられる「サタン」とは、預言者から離れて神と連結しようとするような不信の徒のことである(14-16 節)。このような人に対して、靈的天界は真に守られていて、天国の門は閉じられている。

注 12 「盗み聞きし」とは、預言者の教えを自分の教えのふりをして提言するようなサギ行為のことである。彼らは、預言者の教えに何ら新しいものはなく、彼ら自身が預言者の持っている知識への入口を知っていると人々を信じさせるようにすることで人を欺くのである。又、当節では、彼らが一文脈から一節をむしり取って、間違った解説をつけて、その意味を曲解することで素朴な民衆を欺こうとしているという意味でもある。また「之を歪曲する者」という言葉から、17 節の「天上」とは靈的秩序を代表しているのであって物理的な天上を指している訳ではない事がはっきりわかる。

注 13 二つの意味がここでは考えられる。即ち、神は地球を非常に大きく創られたので、地球が丸いのに人々はその丸さに不自由を感じない、という事。又、神は肥料で土を肥えさせた、の意味である。天文学の研究から、地球は隕石や隕石のかけらとして地球にふりそそぐ星のかけらから新しい力と肥料を得続けているという事が明らかになっている。

注 14 地球は食物を育てるのに充分な水を必要としている。この目的のために神は水の貯蔵庫としての山を創造されて、雪の形で水を貯え、河の形で地上に水を分配された。

22. われらの手許には、無限の財宝の如く、無いものとなし。而してわれらは、之を一定の分量ずつ授け与う。(注 15)

وَأِنْ مِنْ شَيْءٍ إِلَّا عِنْدَنَا خَزَائِنُهُ وَمَا نُنْزِلُهُ إِلَّا بِقَدَرٍ مَعْلُومٍ ﴿٣٧﴾

23. われらは雨雲を孕んだ風を送り、雲から雨を降らせ、お前たちに之を飲ましむ。お前たちはその水の貯蔵者に非ず。

وَأَرْسَلْنَا الرِّيحَ لَوَاقِحَ فَأَنْزَلْنَا مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَأَسْقَيْنَاكُمُوهُ وَمَا أَنْتُمْ لَهُ بِخَازِنِينَ ﴿٣٨﴾

24. 生を与え、死を生ぜしむるはげにわれらなり。而してわれらは、萬物の唯一なる相続者なり。(注 16)

وَأِنَّا لَنَحْنُ نُحْيِي وَنُمِيتُ وَنَحْنُ الْوَارِثُونَ ﴿٣٩﴾

25. われらはお前たちの中で率先垂範する者を知り、また誰が落後者かをも知る。

وَلَقَدْ عَلِمْنَا الْمُسْتَقْدِمِينَ مِنْكُمْ وَلَقَدْ عَلِمْنَا الْمُسْتَأْخِرِينَ ﴿٤٠﴾

26. 汝の主は、いずれ彼等を一斉に召喚せん。げに彼は賢哲にして、一切を知ろしめし給う。

يَوْمَ إِنَّ رَبَّكَ هُوَ يَحْشُرُهُمْ إِنَّهُ حَكِيمٌ عَلِيمٌ ﴿٤١﴾

第三項

27. われらは、黒泥で形どった乾ける陶土で人間を創れり。(注 17)

وَلَقَدْ خَلَقْنَا الْإِنْسَانَ مِنْ صَلْصَالٍ مِنْ حَمَإٍ مَسْنُونٍ ﴿٤٢﴾

注 15 神はすべてのものを無限に所有されている。しかし神は限りない慈悲の心で、人が真にその物を求める時にだけ特定の物に心を向けさせるようにされた。物質的な宇宙と同様に、クルアーンは靈的宇宙であって、その中に時の要求に従ってあらわれてくる靈的知識の隠された宝庫がある。

注 16 大きな改革がクルアーンの教えを通してもたらされる。古い規律が死に、真の信徒が地を継ぐ事となるのである。

注 17 「乾ける陶土」から人が創造されたという事の意味は、人が言語の資質と恩恵がひそんでいる物質から創造されたという事である。この事は、人は天の声に応答する力を与えられているという事でもある。しかし、乾ける陶土は、異質の何かに打たれた時にだけ音を発するので、この語の意味は人が応答する力は、神の呼びかけを受けることを条件にしている事を示している。この資質が人間をすべての創造物のうちで最も優れた存在にしている。黒泥という語は、人が黒い泥即ち、土と水から創られたという事を意味する。土は身体の源であり、水は魂の源である。他の場所でクルアーンは、土と水を別々に、人が創造された物質として述べている(3:60; 21:31)。「乾ける陶土」という語と「黒泥」という語を連結することで、クルアーンは、他の生物が黒い泥、即ち土と水だけから創られた(それらも未開発の魂を持っているので)のに対し、人は乾いた土、即ち言語の賜物と結合した黒い泥から創られている事を指摘している。人間は又完全な形に「形どられ」ている(95:5)。当節の意味は神が土に息を吹きかけられた時、土がすぐさま生きる物質になったという事ではない。クルアーンが繰り返して述べているのは、宇宙の創造はゆっくりと行われたという事である。この節では、人間の創造の第一段階を述べているだけであり、人間の創造の他の段階は 30:21、35:12、22:6、23:15、

28. したがその前に、燃えさかる炎から妖霊を創れり。(注18)

وَالْجَانَّ خَلَقْنَاهُ مِنْ قَبْلُ مِنْ نَارِ السُّمُومِ ⑲

29. 汝の主が諸天使にかく云える時を思い起せ。「われは黒泥で形どった乾ける陶土で人間を創らんとす。

وَإِذْ قَالَ رَبُّكَ لِلْمَلِكَةِ إِنِّي خَالِقٌ بَشَرًا مِنْ مَصَالٍ
مِنْ حَمِئٍ مَسْنُونٍ ⑳

30. されば、われ之を完成し、わが霊を彼に吹き込みたらん時、汝等地に平伏して彼を拝せよ」

فَإِذَا سَوَّيْتُهُ وَنَفَخْتُ فِيهِ مِنْ رُوحِي فَقَعُوا لَهُ
سُجَّدَينَ ㉑

31. されば諸天使、すなわち一齊に叩頭せり。

فَسَجَدَ الْمَلِكَةُ كُلُّهُمْ أَسْجُودًا ㉒

32. しかるに、イブリースだけはなさざりき。彼は叩頭者の仲間に加わることを拒みたり。(注19)

إِلَّا إِبْلِيسَ أَبَى أَنْ يَكُونَ مَعَ السَّاجِدِينَ ㉓

33. 神は云えり、「イブリースよ、皆と偕に叩頭せぬとは如何なることぞ？」と。(注20)

قَالَ يَا إِبْلِيسُ مَا لَكَ لَا تَكُونَ مَعَ السَّاجِدِينَ ㉔

34. イブリースは答えり、「我は、黒泥で形どった乾ける陶土で創られし人間如きに平伏して拝する気持ちなし」と。

قَالَ لَمْ أَكُنْ لَا سَجِدُ لِشَيْءٍ خَلَقْتَهُ مِنْ مَصَالٍ
مِنْ حَمِئٍ مَسْنُونٍ ㉕

40:68 に述べられている。人間が土から創られたというクルアーンの説明は（この事は、人間創造の長い過程は土から始まったという意味である）、現在でも人の食物が土から直接に、間接に生み出されるという事実からも確証される。この事は土に含まれる物質が人のもとを形成している事を示している。何故なら、このような事が起こらなかったならば、人は土から栄養を取ることがなかったであろうからである。それは、生物を形成しているものだけが栄養を与えることができるからで、その他のものでは消費した分を補給する事はできない。

注18 同じようなクルアーンの表現である、「人はあわただしき（性急さ）から創られている」（21:38）が、実際に人が性急さからできているわけではないことを示しているのと同様に、この節でもジンが炎のような性質を持っているが、実際に炎でできているわけではないことを示している。このように土からの創造、あるいは炎からの創造というのは比喩であって、それぞれに、おとなしくて従順な性質、烈しくて燃えさかる気質を表している。

注19 神がサタンを罰せられた(当章35、36節)のは、天使にだけ命じられた命令を実行しなかったから(当章29、30節)であり、天使に与えられた命令は、自動的に天使の権威に服するすべての被造物に適用されるからである。クルアーンの他の箇所でも、天使たちへの命令がイブリースにも適用される事が明言されている（7:12、13）。

注20 アラビア語の表現では次の意味に取ることもできる。「何を迷っているのか。」「なぜ、従わないのか。」「いったいどうしたというのか。」

35. 神は云えり、「さればここより出で去れ。げに汝は拒否されたり。」
 36. さればわが呪いを、汝は最後の審判の日まで背負わされん」と。
 37. イブリースは云えり、「主よ、ならば我を人々が甦らされる日まで猶予したまえ」と。
 (注 21)
 38. 神は云えり、「汝は猶予を与えられた人々の中に加えられる。」
 39. 定められた時限の、その日まで」と。(注 22)
 40. イブリースは答えり、「主よ、汝は我を迷わせたが故に、我は必ず地上において、正道から踏みはずすことを人間の目に美しく映ぜしめ、悉く彼等を迷わしめん。」
 41. 人々の中から汝が特に選びたる僕等を除いて」と。
 42. 神は云えり、「こはわれに至る正しき道なり。」
 43. 汝は、汝に従うことを選びたる身を誤れる者以外は、わが僕等の上に支配力を有せず」と。(注 23)
 44. げに地獄は、彼等一同への約束の場所なり。
 45. 地獄には七つの門あり。その各々に割り当てられた彼等の一部あり。(注 24)

قَالَ فَخُذْ مِنْهَا فَإِنَّكَ رَجِيمٌ ③٥

وَإِنَّ عَلَيْكَ اللَّعْنَةَ إِلَى يَوْمِ الدِّينِ ③٦

قَالَ رَبِّ فَأَنْظِرْنِي إِلَى يَوْمِ يَبْعُثُونَ ③٧

قَالَ فَإِنَّكَ مِنَ الْمُنْظَرِينَ ③٨

إِلَى يَوْمِ الْوَقْتِ الْمَعْلُومِ ③٩

قَالَ رَبِّ بِمَا أَغْوَيْتَنِي لَأُزَيِّنَنَّ لَهُمْ فِي الْأَرْضِ
وَلَأُغْوِيَنَّهُمْ أَجْمَعِينَ ④٠

إِلَّا عِبَادَكَ مِنْهُمُ الْخَالِصِينَ ④١

قَالَ هَذَا صِرَاطٌ عَلَيَّ مُسْتَقِيمٌ ④٢

إِنَّ عِبَادِي لَيْتَ لَكَ عَلَيْهِمْ سُلْطَانٌ إِلَّا مَنِ
اتَّبَعَكَ مِنَ الْغَاوِينَ ④٣

وَإِنَّ جَهَنَّمَ لَمَوْعِدُهُمْ أَجْمَعِينَ ④٤

لَهَا سَبْعَةُ أَبْوَابٍ لِكُلِّ بَابٍ مِنْهُمْ جُزْءٌ مَقْسُومٌ ④٥

注 21 「人々が甦らされる日まで」という文の意味は、神の安らぎを体得した状態に達した時、人が霊的に生まれかわる事を指す。その時には、人はサタンの誘惑や霊的墮落からまぬがれる。神とサタンの間のこの会話は、ここで示されているように、比喩にすぎない。

注 22 「定められた時限」とは、37 節で説明されているように、預言者とその信奉者が最終的に敵に打ち勝つ日のことであり、虚言とその虚言に従う者がついに打ち潰される時のことである。

注 23 当節では、人の性質は本質的に純粋である事を暗示しているようである。自分自身の性質を汚しサタンに従うことを選んだ者だけが正しい道を見失う。この考えは 91:11 でより深く説明されている。

注 24 アラビア語では、70 と同様 7 という数字は特定の数ではなく、完全さや豊かさを表わすために用いられる事が多い。この節は、地獄の門の数は、罪を犯した者の罪の数や種類に対応するだけであるという意味であ

第四項

46. されど、公正なる人は、花園や泉のあるところに住まん。

إِنَّ الْتَّقِينَ فِي جَنَّاتٍ وَعُيُونٍ ﴿٣٦﴾

47. 「心安らかに、安心してその中に入れ」(注25)

ادْخُلُوهَا بِسَلَامٍ آمِينَ ﴿٣٧﴾

48. われらは彼等の胸中よりすべての怨恨^{おんこん}をとり除かん。さすれば、彼等は兄弟の如くなりて、(注26) 偕^{とも}に相対^{しょうたい}して牀^{しょう}に坐さん。

وَنَزَعْنَا مَا فِي صُدُورِهِمْ مِنْ غِلٍّ إِخْوَانًا عَلَى سُرُرٍ مُتَقَابِلِينَ ﴿٣٨﴾

49. 彼等はそこで如何なる労苦も知らず、またそこを追われることもなかるべし。(注27)

لَا يَسْأَلُهُمْ فِيهَا نَصَبٌ وَمَا هُمْ مِنْهَا بِمُخْرِجِينَ ﴿٣٩﴾

50. 預言者よ、わが僕等^{しもべ}に告げよ、われは実に寛大にして、慈悲深い者なることを。

نَبِيِّ عِبَادِي أَنِّي أَنَا الْغَفُورُ الرَّحِيمُ ﴿٤٠﴾

51. また、わが懲罰は実に痛烈であることも。

وَأَنَّ عَذَابِي هُوَ الْعَذَابُ الْأَلِيمُ ﴿٤١﴾

52. 而^{しか}して、彼等にアブラハムの賓客について語れ。

وَنَبِّهُمْ عَنْ صَيْفِ إِبْرَاهِيمَ ﴿٤٢﴾

53. 客たち彼を訪れて云えり、「平安あれ」と。アブラハムは云えり、「我等は貴方がたを恐る」と。(注28)

إِذْ دَخَلُوا عَلَيْهِ فَقَالُوا سَلَامًا قَالَ إِنَّا مِنْكُمْ وَجِلُونَ ﴿٤٣﴾

54. 彼等は云えり、「恐るるなかれ、我等は汝に賢き男子の嬉しい知らせをもたせり」と。

قَالُوا لَا تَوْجَلْ إِنَّا نُبَشِّرُكَ بِغُلَامٍ عَلِيمٍ ﴿٤٤﴾

る。7 という数は外界に対応する7つの感覚、即ち、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、そして痛みを感じる感覚と気温を感じる感覚のことでもある。それによって人は外界を感受する。

注25 「心安らかに」安全に入れということは、それぞれ人の心の中に食い込む内的心配からの自由、外的苦痛と罰からの自由という事を表わす。

注26 真に天国の生活を楽しんでいると言える人は、その心の中に兄弟に対する敵意や悪意が全くない者だけである。

注27 この節は、天国とは絶えず働き続ける場所である事を意味している。しかし、それにもかかわらず、信徒は激しい仕事につきものの疲れを全く感ぜず、従って疲れの結果生ずる消耗や衰弱もないのである。

注28 使いの者達は差し迫った大惨事の報せをもたした為、悲しみと悲嘆が、はっきりと表情に表われていたのであろう。アブラハムは彼らの困惑した表情から、又、彼らが差し出された食事を口にする事を拒否した事からそれを悟ったのである(11:71)。

55. 彼は云えり、「我^{まわい} 齢すでに老いたるにもか
かわらず、嬉しい知らせを我に与うるか？
何故貴方がたはかかる知らせを我に与うる
か？」と。

56. 彼等は云えり、「我等^{われら} 本^{ほん}当に汝に嬉しい知
らせをもたせり。されば絶望^{ぜつぼう}の者の一人
となるなかれ」と。

57. 彼は云えり、「迷える者に非ずば、誰が主の
慈悲を諦め得ようか？」と。

58. 更に語をついで、「ところで、使者たちよ、
貴方がたの使命とはそも如何なるもの
ぞ？」と訊けば、

59. 「我等は罪深い民のところへ赴く途中なり。

60. 但し、ロトの一家は除く。我等はあの一家
は全員救わんと欲すれど、

61. ロトの妻だけは例外なり。我等は、彼女が
後に居残る者どもの仲間に加わらんことを
定めたり」と彼等は云えり。

第五項

62. 使者たちがロトの家を訪ねるや、

63. ロトは云えり、「貴方がたは見なれぬ人たち
じゃ」と。(注29)

64. 彼等は云えり、「さよう、しかし我等は人々
が疑いを抱くことに関して、天罰の知らせ
を汝に持ち来たるなり。

65. 我等は汝に確実な知らせをもたせり。我
等の言葉は真実なり。

66. されば、夜の明けぬ間に、家族と共に出で
立ち、汝は家族の最後尾に従え。お前たち
のうち誰も後ろを振り向かせず、(注30)
ただ命ぜられた方向に進め」と。

قَالَ ابْشِرْ تَمُوتِي عَلَىٰ أَنْ تَسْمِيَ الْكَرِيمَ بَشَرُونَ ﴿٥٥﴾

قَالُوا بَشَرْنَاكَ بِالْحَقِّ فَلَا تَكُن مِّنَ الْفَاطِينَ ﴿٥٦﴾

قَالَ وَمَنْ يَقْضُ مِنْ رَّحْمَةِ رَبِّي إِلَّا الصَّالُونَ ﴿٥٧﴾

قَالَ فَمَا خَطْبُكُمْ أَيُّهَا الْمُرْسَلُونَ ﴿٥٨﴾

قَالُوا إِنَّا أُرْسِلْنَا إِلَىٰ قَوْمٍ مُّجْرِمِينَ ﴿٥٩﴾

إِلَّا آلَ لُوطٍ إِنَّا لَنَجِّيهِمْ أَجْعِينَ ﴿٦٠﴾

إِلَّا امْرَأَتَهُ قَدْ ذَرَانَا إِنَّهَا لَبِئْسَ الْغَابِرِينَ ﴿٦١﴾

فَلَمَّا جَاءَ آلَ لُوطٍ الْمُرْسَلُونَ ﴿٦٢﴾

قَالَ إِنَّكُمْ قَوْمٌ مَّتَكُورُونَ ﴿٦٣﴾

قَالُوا بَلْ جِنَّتَكَ يَمَا كُنَّا فِيهِ يَسْتَرْوُونَ ﴿٦٤﴾

وَأَتَيْنَكَ بِالْحَقِّ وَإِنَّا لَصِدْقُونَ ﴿٦٥﴾

فَأَنذَرْنَا بِهِكَ لِقَاءَ الْيَوْمِ وَأَنبَغِ أُنذَرْتُمْ وَلَا يَلْتَفِتُونَ ﴿٦٦﴾

مِنْكُمْ أَحَدٌ وَأَمْضُوا حَيْثُ تُؤْمَرُونَ ﴿٦٧﴾

注29 ロトはこの人たちは単なる旅人で、たまたまその場所を訪ねたにすぎないと思った。

注30 「誰も後ろを振り向かせず」という言葉は比喩的に使われていて、後に残された人々に気をとられず、前向きに進んでいくようにという意味である。

67. かくしてわれらは、この民が朝までに根絶されんことを、その決定をロトにはっきりと伝えたり。

وَقَضَيْنَا إِلَيْهِ ذَلِكَ الْأَمْرَ أَنَّ دَابِرَ هَؤُلَاءِ مَقْطُوعٌ مُّصْبِحِينَ ﴿٦٧﴾

68. 都の人々は歓喜して集まり米たれり。(注 31)

وَجَاءَ أَهْلُ الْمَدِينَةِ يَتَبَشَّرُونَ ﴿٦٨﴾

69. ロトは云えり、「これなる方々は我が客人なり。されば我に恥をかかせるなかれ。

قَالَ إِنَّ هَؤُلَاءِ ضَيْفِي فَلَا تَفْضَحُونِ ﴿٦٩﴾

70. アッラーを畏れよ、我を侮辱するなかれ」と。

وَاتَّقُوا اللَّهَ وَلَا تُخْزُونِ ﴿٧٠﴾

71. 彼等は云えり、「我等は汝に如何なる民も接待することを禁じたるに非ざるか?」と。

قَالُوا أَوَلَمْ نَنْهَكَ عَنِ الْعَالَمِينَ ﴿٧١﴾

72. ロトは云えり、「お前たちが是非というなら、ここに十分なる保障、我が娘らあり」と。(注 32)

قَالَ هَؤُلَاءِ بَنَاتِي إِنْ كُنْتُمْ فَعِلِينَ ﴿٧٢﴾

73. 誓って云う、彼等は狂乱して迷誤の中に徘徊す。

لَعَنُوكَ إِنَّهُمْ لَفِي سَكْرَتِهِمْ يَعْبَهُونَ ﴿٧٣﴾

74. かくて、彼等は黎明に天罰に見舞われたり。

فَأَخَذَتْهُمُ الصَّيْحَةُ مُشْرِقِينَ ﴿٧٤﴾

75. われらはあの都を顛覆し、住民の上に焼いた瓦石を雨と降らせたり。

فَجَعَلْنَا عَلَيْهِمَا سَافِلًا وَأَمْطَرْنَا عَلَيْهِمْ حِجَارَةً مِّن سِجِّيلٍ ﴿٧٥﴾

76. げにこの中には、物事に関する人々へのさまざまな神兆あり。

إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِّلْمُتَوَسِّمِينَ ﴿٧٦﴾

77. しかも、この都の跡は、今なおそのまま路傍に横たわれり。(注 33)

وَأَنَّهَا لِسَبِيلٍ مُّقِيمٍ ﴿٧٧﴾

78. げにこの中には、信ずる者への一種の表徴あり。

إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَةً لِّلْمُؤْمِنِينَ ﴿٧٨﴾

注 31 ロトは人々から、見知らぬ人を町に入れるなどと言われていたので、ロトのもとへお客が来たとき、ロトが彼らの警告にもかかわらずお客をもてなしているのを非難してやろうと思って、人々は喜んで集まってきた。

注 32 11 章 79 節参照

注 33 ここで言及されている道、即ち、アラビアとシリアを結ぶ道は今なお使われている。この道は死海に沿って通じていて、地方の人たちにロトの海 (The Sea of Lot) として知られている。

79. 而して、森に住む民もまた不義な徒輩なりき。

وَرَأَى كَانَ أَصْحَابُ الْأَيْكَةِ لَظَالِمِينَ ٧٩

80. されば、われらは彼等を懲らしめたり。これ等の二都市の跡は、今なお天下の公道沿いに在り。(注34)

فَأَتَيْنَاهُمُ الْبَيِّنَاتِ فَكَانُوا عَنْهَا مُعْرِضِينَ ٨٠

第六項

81. ヒジル(注35)の住民も使徒たちを虚妄家として遇せり。

وَلَقَدْ كَذَّبَ أَصْحَابُ الْحِجْرِ الْمُرْسِلِينَ ٨١

82. われらが数々の神兆を降したるも、彼等は之に注意を向けざりき。

وَأَتَيْنَاهُمُ الْبَيِّنَاتِ فَكَانُوا عَنْهَا مُعْرِضِينَ ٨٢

83. 彼等は岩石を穿って家となし、而して油断せり。(注36)

وَكَانُوا يَنْحِتُونَ مِنَ الْجِبَالِ بُيُوتًا آمِنِينَ ٨٣

84. 然るに或る朝、彼等は天罰に見舞われたり。(注37)

فَأَخَذَتْهُمُ الصَّيْحَةُ مُصْبِحِينَ ٨٤

85. 而して、彼等が今まで築けしものは、彼等のためになんの役にも立たざりき。

فَمَا أَغْنَىٰ عَنْهُمْ مَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ٨٥

86. われらは天も地も、その間にある一切のものを真理に基づかざる以外は創造せざりき。げに審判の時刻は近づけり。されば、汝寛大な心をもって容赦せよ。(注38)

وَمَا خَلَقْنَا السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا إِلَّا بَرَاءَةً وَإِنَّ السَّاعَةَ لَآتِيَةٌ فَأَصْفَحْ الصَّفْحَ الْجَمِيلَ ٨٦

注34 ロトの町の場合、街道は「今なおそのまま路傍に横たわれり。」と記されている(当章77節)。これは未来も存在し続けるだろうという預言を意味している。「森の人」(The People of the Wood)の住居の場合、道は「開かれた道」と呼ばれていた。アジアとエジプトを結ぶ古い道は「開かれた」という語は、その道が隊商によって使われなくなった今でもなお存在していることを含蓄している。)最近、隊商には使われなくなった。

注35 ヒジル(石の意)はタブークとメディナの間にあり、ここに住んでいたタムード族に彼らに警告を与える者としてサレーが遣わされた。その町は大きな石造りの町、石の壁と城壁で囲まれていた為、この名前前で呼ばれる様になった。

注36 この節ではタムード族は文明化された強力で裕福な集団であった事を示している。彼らは夏と冬に別々の保養地を持ち、安全で快適な生活を送っていた。夏、高原に保養と転地のために出かけて冬の住居を離れる時でさえも、他の地区の住民から攻撃されるという心配は全くなかった。この節では又、彼らの建築が非常に発達していたことが、示されている。

注37 この節で言及されている大惨事は地震であった事が7:79に明らかにされている。

注38 宇宙の創造とそこに行き渡っている素晴らしい設計と秩序は、人生がこの地上だけのかりそめの短い存在に限定されてはならず、偉大な目的を有しており、人はただほんのしばらくの間食べて飲んで楽しく過ごしそれから永遠に死するのために創造された訳ではないという、紛れもない結論へと導いてゆく。

87. げに汝の主こそ至尊者、全知者なり。

إِنَّ رَبَّكَ هُوَ الْخَلْقُ الْعَلِيمُ ٨٧

88. われらは汝に不断に繰り返して唱えるべき七つの節と、偉大なるクルアーンをすでに授けたり。

وَلَقَدْ آتَيْنَاكَ سَبْعًا مِّنَ الْكِتَابِ وَالْقُرْآنَ الْعَظِيمَ ٨٨

89. 汝、われらが或る類いの者に授けたるかりそめの楽しみに、目を見張り、また彼等のために心を悩ますなかれ。それよりも汝の慈悲の翼を信徒たちに低く垂れよ。(注39)

لَا تُدْخِلْ عَيْنُكَ إِلَى مَا مَتَّعْنَا بِهِ أَزْوَاجًا مِنْهُمْ وَلَا تَحْزَنْ عَلَيْهِمْ وَخَفْصُ جَنَاحِكَ لِلْمُؤْمِنِينَ ٨٩

90. 而して云え、「我は疑う余地なき警告者なり」と。

وَقُلْ إِنِّي أَنَا النَّذِيرُ الْبَيِّنُ ٩٠

91. なんとすれば、われらは汝に逆って幾つもの集団に分れた者どもに罰を科せんと決意せり。(注40)

كَمَا أَرْسَلْنَا عَلَى الْمُتَقَسِّمِينَ ٩١

92. 彼等は、クルアーンには幾多の虚偽ありと言明せり。

الَّذِينَ جَعَلُوا الْقُرْآنَ عِضِينَ ٩٢

93. されば誓って云う、われらは必ず彼等一同を糾明せん、

فَوَرَبِّكَ لَنَسْأَلَنَّهُمْ أَجْمَعِينَ ٩٣

94. 彼等が現世で何をしていたかと。

عَمَّا كَانُوا يَعْمَلُونَ ٩٤

95. されば汝は、伝達を命ぜられたことを宣揚し、多神教徒どもから遠ざかれ。

فَاصْلَعْ بِمَا تُؤْمَرُ وَأَعْرِضْ عَنِ الْمُشْرِكِينَ ٩٥

96. われらは必ず嘲笑する者どもに對し汝を満足させん。

إِنَّا كَفَيْنَاكَ الْمُسْتَهْزِئِينَ ٩٦

97. 彼等はアッラーと偕に他の神々を並べ立てるが、そのうち必ず思いしらされん。

الَّذِينَ يَجْعَلُونَ مَعَ اللَّهِ إِلَهًا آخَرَ فَسَوْفَ يَعْلَمُونَ ٩٧

98. われらは、汝の胸が彼等の云うことのために難儀させられていることを知る。(注41)

وَلَقَدْ نَعْلَمُ أَنَّكَ يَضِيقُ صَدْرُكَ بِمَا يَقُولُونَ ٩٨

注39 この節で真に重要なことは、聖なる預言者が次のように告げられたという事である。

即ち、不信の徒が間もなく罰せられて、彼らが誇っていたすべての富、繁栄、栄光は彼らに縁のないものになるという事実を嘆き悲しむことのないようにと。

注40 メッカの住民は、数組の集団を形成していて聖なる預言者を妨害して邪魔をするための様々な任務を

99. 主の讃美を^{たたえ}称え、主の御前に^{みまえ}平伏者^{ひれふす}の仲間たれ。

فَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ وَكُنْ مِنَ السَّاجِدِينَ ﴿٩٩﴾

100. 而^{しか}して死が汝に到来するまで、主を崇拜し続けよ。(注 42)

وَأَعْبُدْ رَبَّكَ حَتَّى يَأْتِيَكَ الْيَقِينُ ﴿١٠٠﴾

それぞれに負っていた。又、その集団は聖なる預言者を殺すことに決めた時、種々の役割を割り当てられた。「幾つもの集団に分れた者」というのは「お互いに種々の義務を割り当てた人々」の意味でもある。

注 41 聖なる預言者が嘆いたのは、不信者が、彼をあざ笑ったからではなく、彼らがアッラーの神と他の神々とを結びつけたからである。預言者の嘆きは一方では神へのねたましい程の愛であり、又、他方では彼の同胞に対しての心からの心配であった。

注 42 この節では、聖なる預言者の使命の主な目的、即ち、神の調和を確立すること、に関する限り、それは成就されつつあるということを主張している。彼は喜びに満ちて感謝しながら、神を誹めたたえ、神に心からの献身をささげてひれ伏すのである。

سُورَةُ النَّحْلِ مَكِّيَّةٌ

(17)

アンナハル
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. アッラーの仰せられしことは近い将来に必ず起るべし。(注1)されば、之を急ぎ求むるなかれ。聖なるかな、彼こそは人々が彼と併せ祀る神々の上に高くまします。
3. 彼は僕らの中で嘉したる者に、彼が命じた天使らを遣わし、「われの外に神なし。さればただわれのみを、主護者と崇めよ」と人々に警告せよ」と仰せられ給う。
4. 彼は真理に基づいて天 地を創造せり。(注2)彼こそは人々が彼と併せ祀る神々の上に高くまします。
5. 彼は一滴の液体より人間を創造せり。然るに見よ、人間は公然たる反抗者なるかな！(注3)
6. 而して、彼また家畜も創造せり。お前たちが之に依って暖かい着物と便宜を得るのみならず、その肉を食するために。
7. 夕に家畜らを小屋に連れ帰るとき、又朝に牧場へ逐い行くと、家畜らのなんたる美しきよ。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

أَنَّى أَمْرُ اللَّهِ فَلَا تَسْعَاجُوهُ سُبْحَانَهُ وَتَعَالَى عَمَّا يُشْرِكُونَ ①

يُنْزِلُ الْمَلَكَةَ بِالرُّوحِ مِنْ أَمْرِهِ عَلَى مَنْ يَشَاءُ مِنْ عِبَادِهِ أَنْ أَنْذِرُوا أَنَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا أَنَا فَاتَّقُونِ ②

خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ بِالْحَقِّ ۚ تَعَالَى عَمَّا يُشْرِكُونَ ③

خَلَقَ الْإِنْسَانَ مِنْ نُطْفَةٍ فَإِذَا هُوَ خَصِيمٌ مُبِينٌ ④

وَالْأَنْعَامَ خَلَقَهَا لَكُمْ فِيهَا دِفْءٌ وَمَنْفَعٌ وَمِنْهَا تَأْكُلُونَ ⑤

وَلَكُمْ فِيهَا جَمَالٌ حِينَ تُرْجَوْنَ وَحِينَ تُسْرَحُونَ ⑥

注1 この文の意味は、不信者を罰する時期、即ち新しい時代の到来を告げる時期が既に来ているという事である。

注2 「真理に基づいて」という意味は、人間が霊的に改心する時、天と地は協力して望ましい結果を生み出すように、それぞれ決まった役割を持っていると考えてもいいし、又は神が天地を創ったのは人間の関心を神の方に向けるように働かせるためであり、人間に神をおいて完全なものは何もない事を知らせるためであると考えてもいい。

注3 神は明確な法則に従って天地を創造された後に人間を創り、その導き手としての啓示を下された。神はとるに足らないものから人間を創造されたにもかかわらず、人間に最高の資質を与えられたが、人間は神から賜った導きによって行動しないで、神の力や権力を疑い始めた。

8. 剰え、お前たちが苦勞せず^{あまつぎ}に達し得ぬ遠い所にまでお前たちの重荷を運ぶ。げにお前たちの主は憐憫^{れんぴん}にして、慈悲深くまします。

9. また、彼は馬、騾馬^{ろば}、驢馬^{ろば}をお前たちの乗用に、それから飾りとなすためにと創り給えり。(注4) さらに彼は、お前たちがいまだ知らざるものを創造せん。(注5)

10. 正しい道を示すはアッラー次第なり。逸脱する道もあり。然しながら、もしアッラー欲したりせば、お前たちすべてを導き得たりし筈。

第二項

11. 彼こそは雲から水を降らせ給える御方。お前たちはそれを飲み、またお前たちが家畜を育てる叢林^{そうりん}も之によって成育す。

12. この雨によって、彼は穀物^{かんらん}、橄欖^{なつめやし}、棗椰子、葡萄など種々の果実を生ぜしむ。げに、この中に含むものこそ、思慮深い者への神兆なり。(注6)

13. また彼は、夜と晝とをお前たちのために役立たせしめ、太陽も月も群星もまた彼の命令によってお前たちに役立たせしめたり。げにこの中に含むものこそ理解ある者へのさまざまな神兆なり。

14. また彼が地上に創りしさまざまな色合いも、お前たちのために役立たせしむ。(注7)

وَنَحْمِلُ أَنْفَالَكُمْ إِلَىٰ بَلَدٍ لَّمْ تَكُونُوا بِلَٰغِهِ إِلَّا يَشِقُ
الْأَنْفُسُ إِنَّ رَبَّكُمْ لَرَوْفٌ رَّحِيمٌ ④

وَالْحَيْلَ وَالْبَغَالَ وَالْحَبِيرَ لَنَزَكُوها وَرَيْنَةً وَمَخْلُقُ
مَا لَا تَعْلَمُونَ ⑤

وَعَلَى اللَّهِ قَصْدُ السَّبِيلِ وَمِنْهَا جَائِرٌ وَلَوْ شَاءَ
لَهَدَاكُمْ أَجْمَعِينَ ⑥

هُوَ الَّذِي أَنْزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً لَكُمْ مِنْهُ شَرَابٌ
وَمِنْهُ شَجَرٌ فِيهِ تُسِيمُونَ ⑦

يُنْبِتُ لَكُمْ بِهِ الزَّيْتُونَ وَالنَّخْلَ وَالْأَنْجَابَ
وَمِنْ كُلِّ الشَّجَرِ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً لِّقَوْمٍ
يَتَفَكَّرُونَ ⑧

وَسَخَّرَ لَكُمُ اللَّيْلَ وَالنَّهَارَ وَالشَّمْسَ وَالْقَمَرَ
وَالنَّجْمُ مُسَخَّرَاتٌ بِأَمْرِ رَبِّ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ
لِّقَوْمٍ يَعْقِلُونَ ⑨

وَمَا ذَمَرْنَا لَكُمْ فِي الْأَرْضِ مُخْتَلِفًا أَلْوَانَهُ إِنَّ

注4 神は人間に必要な物資を与えられる時、いつでも精神的に必要なものにも心を配っておられる。

注5 この文は、神は人間にまだ知られていない新しい交通機関をもたられさるという意味である。この預言は鉄道、蒸気船、自動車、飛行機という形で実現された。神だけがこれから先に発明される交通手段を知っておられる。

注6 植物を成長させるエネルギーは土の中に隠れているのかも知れないが、土が天から水をもらわなければそのエネルギーは働くことができない。人間も同様にすばらしい素質を受け継いでいても神の啓示の助けなしには向上できない。人間の精神的向上の基礎を知性だけに置くことは、土が水の助けなしに植物を成長させることができると言うのに等しい。

注7 神の創造で最もすばらしい事の1つは、2つの物あるいは人で全く同じものがないという事である。この多様性がなかったならば世界中で数え切れない程の混乱が起きたであろう。1つのものを別のものと区別

げにこの中に含むものは、注意ぶかい人への神兆なり。(注8)

15. 而して、海をお前たちに服従せしめ、お前たちが海から新鮮な魚を獲て食し、また身に付ける装飾を得さしめ給うたは彼なり。汝は見たり、波を蹴立てて進み行く舟の姿を。こはお前たちに、旅行を可ならしめ、且つ主の恩恵を求め、以て感謝を捧げしめんがためなり。(注9)

16. また大地がお前たちとともに揺れ動かざるよう、彼は地上に堅固なる山嶽を据えたり。(注10) 而してお前たちが正しく進めるよう、河川や道路を設けたり。(注11)

17. そのほかにも、道標を設置せり。それらによって、また星辰によって、人々は正しい方角を知る。(注12)

فِي ذَلِكَ لَآيَةٌ لِّقَوْمٍ يَذَّكَّرُونَ ﴿١٤﴾

وَهُوَ الَّذِي سَخَّرَ الْبَحْرَ لَنَا كُلَّوَامِنَهُ لِنَأْكُلَ مِنْهُ
وَنَسْتَخْرِجَ مِنْهُ حِلْيَةً تَلْبَسُوهَا وَتَمْرَ
الْفُكَّ مَوَآخِرَ فِيهِ وَلِتَبْتَغُوا مِنْ فَضْلِهِ وَلَعَلَّكُمْ
تَشْكُرُونَ ﴿١٥﴾

وَأَلْقَى فِي الْأَرْضِ رَوَاسِيَ أَنْ تَمِيدَ بِكُمْ وَأَنْهَارًا
وَسُبُلًا لَعَلَّكُمْ تَهْتَدُونَ ﴿١٦﴾

وَعَلَيْتُمْ وَبِالْجَمِ هُمْ يَهْتَدُونَ ﴿١٧﴾

したり、1人の人を別の人と見分けるのが難しかったことだろう。同様に、人間は気質や体質が多様なので、色んな性質の人に同じようにびったりする教えを工夫することは人間の能力を超えている。自然界に存在する相違点を全部知っている人はだれもいない。神だけがこのさまざまな違いを把握されていて、それ故に、神だけがすべての人を満足させ、すべての人に有益な教えを与えることができる。

注8 思慮深い者(12節)、理解ある者(13節)、注意ぶかい者(14節)という三語はそれぞれの節の終わりに別々に記されていて、その語が使われている節の主題に特に適切であると考えられる。又この3つの節でまとめられていた主題にも応用できると考えられる。どの語をどの場所で使うかはその語の重要さの度合によって決められている。「思慮」という語が最初に使われているのは、それが人間が道徳的に改心する過程で最初に行うことであり、又すべての道徳的性質の中で最初に目覚めるものであるからである。「思慮」深くなれば、「理解力」が増し理性を使うようになる。第二段階で人は道徳的改革を遂げる。その次に来る第三段階では誘惑は完全に克服され道徳的葛藤は消え、「注意ぶかく」自戒し善行を行うことは自分の性質の一部となる。

注9 海は人間の益になるととても重要なものである。それは水の宝庫でありそこから太陽は我々に雨を与える。海は又、旅行や貿易の交通路であり、人間に食物資源を与えている。

注10 地質学では山脈が地震の時に地面を守るのに大いに役立っている事実を立証した。

注11 ここで使われている「道路」という語は人間の手によって人為的に作られた道ではなく大昔から公道として使われてきた自然にできた山道、川道、谷道のことである。

注12 この節は、地球が、谷も山も川もないでこぼこのない平らな表面をしていたならば人がある場所から他の場所へ行く道を見つけることがほとんど不可能であったろうという事を物語っている。地球の表面にある物理的な特徴が道を探すのに役立っている。今日でもこういう目標が空路で非常に役立っている。星も陸や海を旅する人の役に立っている。

18. されば、萬物を創造せし者を、何一つ創造せざる者と同一視できようか？お前たちまだ気がつかぬか？

19. お前たち、たといアッラーの恩恵を数えあげんと欲するとも、数うべからず。然り、アッラーはまことにやさしく、恩恵きわまりなきお方にましますぞ。

20. しかもアッラーは、お前たちが何を隠し、何を表わすかを知り悉し給う。

21. 然るに、彼等がアッラーの他に拝する神々は、何一つ創造せず、却って自ら創られたり。

22. 彼等は死物にして、生命なし。されば、いつ甦らされるのか、その時を知らず。

第三項

23. お前たちの神は独一なる神なり。されど、来世を信ぜざる徒輩は、その心が真理に染まず、全く傲慢な者どもなり。

24. 疑う余地なく、アッラーは彼等が何を隠し、何を表わすかを知り給う。げに彼は、高慢なる者を愛て給わず。

25. 彼等に向って「主が汝等に降し給えるものは何ぞや？」と問わば、彼等は云う、「古人の寓話なり」と。

26. 復活の日至らば、己が荷をすべて背負い、刺え彼等がその無知ゆえに迷わしめたる者の重荷の一部まで負わさるべし。ああ、彼等が担うものこそ悲惨しきかな！

第四項

27. 彼等以前にも悪巧みを策てたる徒輩あり。然れども、アッラー彼等の建物^しを土台から覆^{くつがえ}し、その屋根彼等の頭上に落下し、思いもよらぬところから懲罰を蒙りぬ。(注13)

أَفَن يَخْلُقُ كَمَنْ لَا يَخْلُقُ أَفَلَا تَذَكَّرُونَ ﴿١٨﴾

وَأَن تَعُدُّوا نِعْمَةَ اللَّهِ لَا تُحْصُوهَا إِنَّ اللَّهَ لَغَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿١٩﴾

وَاللَّهُ يَعْلَمُ مَا تُسْرُونَ وَمَا تُنْفُونَ ﴿٢٠﴾

وَالَّذِينَ يَدْعُونَ مِن دُونِ اللَّهِ لَا يَخْلُقُونَ شَيْئًا وَهُمْ يُخْلَقُونَ ﴿٢١﴾

بِعَمَواتٍ غَيْرِ أَحْيَاءٍ وَمَا يَشْعُرُونَ أَيَّانَ يُبْعَثُونَ ﴿٢٢﴾

لَهُمُ اللَّهُ وَاحِدٌ فَالَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ قُلُوبُهُم مُّنْكَرَةٌ وَهُمْ مُسْتَكْبِرُونَ ﴿٢٣﴾

لَا جَرَمَ أَنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا يُسْرُونَ وَمَا يُعْلِنُونَ إِنَّهُ لَا يُحِبُّ الْمُسْتَكْبِرِينَ ﴿٢٤﴾

وَلَوْ أَقْبَلُ لَهُمْ مَادًّا أَنزَلَ رَبُّكُمْ قَالُوا اسْأَلُوا الْأَوَّلِينَ ﴿٢٥﴾

لِيَحْمِلُوا أَوْزَارَهُمْ كَامِلَةً يَوْمَ الْقِيَامَةِ وَهُمْ أَوْزَارُ الَّذِينَ يُضِلُّوهُمْ بِغَيْرِ عِلْمٍ إِلَّا سَاءَ مَا يَزِدُّونَ ﴿٢٦﴾

قَدْ مَكَرَ الَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ فَآتَى اللَّهُ بُيُوتَهُم مِّنَ السَّمَاءِ فَخَرَّ عَلَيْهِمُ السَّقْفُ مِّن فَوْقِهِمْ وَأَتَاهُمُ الْعَذَابُ مِنْ حَيْثُ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٢٧﴾

注13 過去の預言者達に反対する者達にふりかかったのは通常の破壊ではなかった。彼らは根こそぎ破壊され、彼らが建てた建物の土台やその上の壁や屋根は彼らの上に倒れかかった。すなわち対立した者達の指導者も追従者も容赦されなかったのである。

28. さらにまた、復活の日至らば、彼は彼等を辱しめて云わん、「お前たちが預言者に反抗して、われに併せ祀りし神々は果して何処にありや？」と。知識を賦与された人々は云わん、「げに今日こそ、恥辱と災難が不信心者輩の上に下るべし」と。

29. 己れの魂を自らそこなっている間に天使らに召されたる者は、そこで初めて服従を申し出、「我等は如何なる悪事も行わず」と云わん。(注14) 否な、アッラーはお前たちの所業を知悉し給う。

30. されば地獄の門を入り、その中に住め。高慢なる者の住居は禍なるかな。

31. 然れども、主を畏れ奉りし者は斯問われん、「主が啓示されたるものを汝等いかに思うや？」と。彼等は云う、「最上なり」と。善事をなす者はこの現世で報奨あり。しかも来世の住居は更に良し。げに主を畏れ奉る者の住居は素晴らしきかな—

32. そは河川流るる永遠の楽園なり。彼等が欲するものはすべてそこにあり。(注15) かくの如く、アッラーは己れを畏れ奉る者に報い給う。

33. 彼等は汚れなきままに天使らが命を召し上げた者。天使らは、「あなたがたに平安あれかし！あなたがたがなしたることの賞なれば、いざ楽園に入れかし」と云う。

34. これに反して、不信心者どもは天使らが彼等に臨まんとするを待つか、或いは汝の主

تُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ يُخَرِّبُهُمْ وَيَقُولُ ابْنَ سُرَكَايَ
الَّذِينَ كُنْتُمْ تُشَاقِقُونَ فِيهِمْ قَالَ الَّذِينَ أُوتُوا
الْعِلْمَ إِنَّ الْخِزْيَ الْيَوْمَ وَالسُّوءَ عَلَى الْكَافِرِينَ ﴿٢٨﴾

الَّذِينَ تَتَوَفَّيهِمُ الْمَلَائِكَةُ طَائِلِينَ أَنْفُسِهِمْ فَالْقَوْلُ
السَّلَامُ مَا كُنَّا نَعْمَلُ مِنْ سُوءٍ بَلْ إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ
بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٢٩﴾

فَادْخُلُوا أَبْوَابَ جَهَنَّمَ خَالِدِينَ فِيهَا فليس مَثْوًى
الْمُتَكَبِّرِينَ ﴿٣٠﴾

وَقِيلَ لِلَّذِينَ اتَّقَوْا مَاذَا أَنْزَلَ رَبُّكُمْ قَالُوا خَيْرٌ
الَّذِينَ أَحْسَنُوا فِي هَذِهِ الدُّنْيَا حَسَنَةٌ وَلَدُنَا
الْآخِرَةُ خَيْرٌ وَلَنِعْمَ دَارُ الْمُتَّقِينَ ﴿٣١﴾

جَنَّاتٍ مِنْ دُونِهَا يَدْخُلُونَهَا تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ
لَهُمْ فِيهَا مَا يَشَاءُونَ كَذَلِكَ يَجْزِي اللَّهُ
الْمُتَّقِينَ ﴿٣٢﴾

الَّذِينَ تَتَوَفَّيهِمُ الْمَلَائِكَةُ كَسِبِينَ يَقُولُونَ سَلَامٌ
عَلَيْكُمْ ادْخُلُوا الْجَنَّةَ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٣٣﴾

هَلْ يَنْظُرُونَ إِلَّا أَنْ تَأْتِيَهُمُ الْمَلَائِكَةُ أَوْ يَأْتِيَ

注14 不信心者は、自分達のした事は良い意図と純粋な動機に基いており、神の美德に想念を集中させる為、にせの神々を礼拝したにすぎないと抗議する。

注15 正しく、敬けんな意志の望む事は神の意志と一致する。それ故、神の意図するものだけが与えられるように敬けんな者は願うのである。

の命が下るを待つ以外に、何をか期待せん？（注16）斯く振舞いたる者は、彼等以前にも存したり。アッラーは彼等を害したに非ず、害えるは彼等自らなり。

35. かくして、なせる悪事は自らに跳ね返り、（注17）かつて嘲笑せしものに彼等は包圍されたり。

第五項

36. 多神教徒どもは云う、「アッラーもし欲したりせば、我等も、我等の父祖も、彼以外に何物をも崇拝せざりしものを。また我等は主の命令なくして、何物も禁ぜざりき」と。斯く云うは、彼等以前の者も又然り。しかれども、使徒の責務は神託を明瞭に宣達する以外、他事なきに非ずや？

37. われらはそれぞれの民の中から一人の使徒を選び、説かしめたり、「アッラーを崇拝し、邪神を避けよ」と。彼等の或る者をアッラーは導き給い、又他の者を迷うがままに任じたり。されば各地を巡りて、預言者たちを偽る者と遇した徒輩の末路や如何ん、と見るがよい！

38. たとい汝が彼等を導かんと切望しても、知るがよい、アッラーは迷わしめんとした者は断じて導かず。あの者どもは如何なる救け手もなし。

39. 彼等はアッラーの御名にかけて、「アッラーは一たび死したる者を甦らせ給わず」と堅く誓う。否、アッラーは必ず死者を甦らせん—こは彼自らを縛りたる約束なり。されど世人の大半は之を知らず。

أَمْرٌ بِكَ كَذَلِكَ فَعَلَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ وَمَا ظَلَمَهُمُ اللَّهُ وَلَكِنْ كَانُوا أَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ ﴿٣٦﴾

فَأَصَابَهُمْ سَيِّئَاتُ مَا عَمِلُوا وَحَاقَ بِهِمْ مَا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِءُونَ ﴿٣٧﴾

وَقَالَ الَّذِينَ أَشْرَكُوا لَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا عَبَدْنَا مِنْ دُونِهِ مِنْ شَيْءٍ نَحْنُ وَلَا آبَاؤُنَا وَلَا حَرَمْنَا مِنْ دُونِهِ مِنْ شَيْءٍ كَذَلِكَ فَعَلَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَهَلْ عَلَى الرُّسُلِ إِلَّا الْبَلَاغُ الْمُبِينُ ﴿٣٨﴾

وَلَقَدْ بَعَثْنَا فِي كُلِّ أُمَّةٍ رَسُولًا أَنْ اعْبُدُوا اللَّهَ وَاجْتَنِبُوا الطَّاغُوتَ فَمِنْهُمْ مَنْ هَدَى اللَّهُ وَمِنْهُمْ مَنْ حَقَّتْ عَلَيْهِ الضَّلَالَةُ فَبُذِلُوا فِي الْأَرْضِ فَانظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْكَافِرِينَ ﴿٣٩﴾

إِنْ تَحَرَّصَ عَلَى هُدَاهُمْ فَإِنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي مَنْ يُضِلُّ وَمَا لَهُمْ مِنْ لُصْرَةٍ ﴿٤٠﴾

وَأَقْسُوا بِاللَّهِ جَهْدَ إِيْمَانِهِمْ لَا يَبْعَثُ اللَّهُ مَنْ يَمُوتُ بَلَى وَعَدًا عَلَيْهِ حَقًّا وَلَكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٤١﴾

注16 「天使を待つ」は個人の不信仰者の破壊を意味し、「主の命が下るを待つ」は国家の滅亡を意味している。

注17 悪行が罰せられるという事は、外から発生するのではなく、その行為そのものの自然の結果であり、その行為の度合いに応じたものである。

40. 彼等の論争の問題を彼等に明示し、且つ信ぜざる者に自分たちが嘘つきなるを思い知らしめんがために、彼は死者を甦らせん。
(注 18)
41. われら何事かを欲するときは、ただ「在れ」と云うのみ。而して、忽ち存す。(注 19)
- 第六項
42. アッラーの道のため故に迫害を蒙り家郷を逐われたる者は、彼等は知るべくもないが、われらは彼等に現世で必ず佳い住居を与え、来世においても更に大なる報奨を与えん—
43. すなわち彼等は堅忍不拔にして、その主を信ずる者なり。
44. われらは、啓示を授けたる人々を除いて、何者をも汝以前に遣わしたりはせじ。汝之を知らずば、警告の聖典を持てる民に之を問え。
45. われらは明証と經典を授けて使徒らを遣わしたり。われらが汝に警告の聖典を授けたるは、今迄に降されたものを人々に解明せんがため、さすれば彼等も熟慮せん。
46. 悪事をたくらむあの者ども、アッラーの怒りに触れて大地に呑みこまれたり、又は思いがけないことで天罰を蒙ることなどなしと確信するや？
47. 或いは、あちこち動きまわっている際に、神のお考えを避くべき途なきときに、彼等をアッラーは捉え給わじと信ずるや？ (注 20)

لِيُبَيِّنَ لَهُمُ الَّذِي يُخْتَلَفُونَ فِيهِ وَلِيَعْلَمَ الَّذِينَ كَفَرُوا أَنَّهُمْ كَانُوا كَذِبِينَ ﴿٤٠﴾

إِنَّمَا قَوْلُنَا لِشَيْءٍ إِذَا أَرَدْنَاهُ أَنْ نَقُولَ لَهُ كُنْ فَيَكُونُ ﴿٤١﴾

وَالَّذِينَ هَاجَرُوا فِي اللَّهِ مِنْ بَعْدِ مَا ظَلَمُوا لَنُبَوِّئَنَّهُمْ فِي الدُّنْيَا حَسَنَةً ۖ وَلَآجِرُ الْآخِرَةِ أَكْبَرُ لَوْ كَانُوا يَعْلَمُونَ ﴿٤٢﴾

الَّذِينَ صَبَرُوا وَعَلَىٰ رَبِّهِمْ يَتَوَكَّلُونَ ﴿٤٣﴾

وَمَا أَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ إِلَّا رِجَالًا نُوْحِي إِلَيْهِمْ فَسَلُوا أَهْلَ الدِّكْرِ إِنْ كُنْتُمْ لَا تَعْلَمُونَ ﴿٤٤﴾

بِالْبَيِّنَاتِ وَالزُّبُرِ وَأَنْزَلْنَا إِلَيْكَ الذِّكْرَ لِتُبَيِّنَ لِلنَّاسِ مَا نُزِّلَ إِلَيْهِمْ وَلَعَلَّهُمْ يَتَفَكَّرُونَ ﴿٤٥﴾

أَفَأَمِنَ الَّذِينَ مَكَرُوا السَّيِّئَاتِ أَنْ يَخْسِفَ اللَّهُ بِهِمُ الْأَرْضَ أَوْ يَبَاتِيَهُمُ الْعَذَابُ مِنْ حَيْثُ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٤٦﴾

أَوْ يَأْخُذَهُمْ فِي تَقْلِيدِهِمْ فَمَا هُمْ بِمُعْجِزِينَ ﴿٤٧﴾

注 18 復活の日に悟る真理が、あまりにも完璧な為、不信者は復活を否定した事は愚かであったと認める事となる。まことに復活の日の真実の実現は完全無欠なのである。

注 19 「在れ」という語は、神が既に存在しているものに対し、命令を下すという意味ではない。それは単に望みについての表現にすぎず、神が望みを表明すれば直ちにそれは成就される事を意味する。

注 20 不信の徒が、度々の旅行や、その活動が自由で制限されていない事から、彼らの力は無敵で栄光が常に彼らと共にあるのだと、信仰を持つ者が考えてはならない。間もなくこういう活動はその政治力の破滅を招くだろう。

48. はたまた、少しずつ消耗させて破滅に導く罰なしと信ずるや? とにかく、お前たちの主は実におやさしく、慈悲深きお方にまします。(注 21)

49. 彼等は、アッラーが創り給いしすべてのものが、かしこまってアッラーに平伏しながら、右から左にその影を移動するを觀ざりしか?

50. 天に在るもの、地に在るもの、皆悉くアッラーに額づく。諸天使もまた然り。彼等は高慢に非ず。

51. すなわち、彼等は己れらの上に在す主を畏れ、その命ぜられたることを行う。

第七項

52. アッラーは云えり、「二神を拝むなかれ。神は唯だ御一柱。されば、われらのみ畏れ敬え」と。(注 22)

53. 天に在るもの、地に在るもの、すべてはアッラーの所屬にして、彼にこそ永久に服従す。然るに、お前たちアッラー以外に何者を畏るるか?

54. すべての恩恵はアッラーより授かり給う。なれど、お前たち災難に遭えば、彼に救いを求めて嘆願す。

55. 斯て、彼はお前たちからその災難を取り除けると、なんと、お前たちの或る者は主に併せ祀る者を配して、

أَوْ يَأْخُذُهُمْ عَلَى تَخَوُّفٍ فَإِنَّ رَبَّكُمْ لَرَؤُوفٌ رَحِيمٌ ﴿٥٨﴾

أَوَلَمْ يَرَوْا إِلَى مَا خَلَقَ اللَّهُ مِنْ شَيْءٍ يَتَفَتِحُونَ ظِلَّهُ
عَنِ الْيَمِينِ وَالشَّمَائِلِ سُجَّدًا لِلَّهِ وَهُمْ ذُكُورٌ ﴿٥٩﴾

وَلِلَّهِ يَسْجُدُ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ مِنْ
دَابَّةٍ وَالْمَلَائِكَةُ وَهُمْ لَا يَسْتَكْبِرُونَ ﴿٦٠﴾

يَخَافُونَ رَبَّهُمْ مِنْ قُوَّتِهِمْ وَيَفْعَلُونَ مَا
يُؤْمَرُونَ ﴿٦١﴾

وَقَالَ اللَّهُ لَا تَتَّخِذُوا إِلَهَيْنِ اثْنَيْنِ إِنَّمَا هُوَ إِلَهُ
وَاحِدٌ فَإِنِّي فَارِهُبُونَ ﴿٦٢﴾

وَلَهُ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَلَهُ الدِّينُ وَاصِبًا
أَغْفِرَ اللَّهُ تَنَقُّونَ ﴿٦٣﴾

وَمَا يَكُمُ مِنْ دُعَاءِ فِينِ اللَّهِ ثُمَّ إِذَا مَسَّكُمُ الضُّرُّ
فَأَلَيْهِ تَجْرُونَ ﴿٦٤﴾

ثُمَّ إِذَا كُشِفَ الضُّرُّ عَنْكُمْ إِذَا فَرِيقٌ مِنْكُمْ بِرَبِّهِمْ
يُشْرِكُونَ ﴿٦٥﴾

注 21 この節は、不信の徒の力はしだいに弱くなるということで、信仰を持たぬ者は徹底的に打倒される前に、イスラムの力が増大し続けて最終的には勝利を収めるという恐怖にとりつかれる事となるという意味である。

注 22 宇宙のしくみを研究すれば、宇宙に存在するその素晴らしい一貫性が明らかになる。もし神が一人でなかったならば、この秩序は消えてしまったであろうし、その上、もし二人の神がいたら命令を実行するために一人の神はもう一人の神に従わなければならなかったであろう。この場合、二人のうち一人の神は不必要であったろう。もし二人共、同等であったならばそれぞれが影響を及ぼし統制する宇宙を持っていたこととなる。そんな事になれば、お互いの間できつと意見の相違がでたことであろう。しかしその様な仮定は不条理である。それ故に、全宇宙を創造したのは唯一の神でなければならないのである。

56. われらが彼等に垂れたる恩恵を否定す。されば、しばし楽しむがよい。やがてお前たち思い知らん。

57. 彼等は、われらが授けしものの一部を偽りの神々のために用意す。アッラーに誓って云う、お前たちはその捏造したかどにより必ず糾明せらるるべし。

58. そればかりか、彼等はアッラーに娘らありと云う―畏れ多きかな！―ところが、自らは所望するものを欲しがる。(注23)

59. 現に、彼等のだれもが女兒誕生の報せを聞けば、忽ち失意落胆の余りその顔はくもる。

60. 彼はその悪い報せのために人目を避け「恥を忍んで之を育つべきか、それとも土中に埋めるべきか」と思い惑う。(注24) げに、彼等の判断たるや邪悪なり。

61. 来世を信ぜざる徒輩の地位は不幸なり、これに反して、すべての高尚な属性はアッラーに属す。そは雄大にして、賢哲にまします。

第八項

62. もし仮に、アッラーがその悪業故に人を罰さば、彼は地上に一個の生類もとに残すまじ。(注25) 然れども、彼は定められたる

لَيَكْفُرُوا بِمَا آتَيْنَاهُمْ فَتَقْتُلُوهُمْ قَتَلُوا قَتْلَهُمْ ⑤

وَيَجْعَلُونَ لِمَا لَا يَكُونُونَ نَصِيبًا مِمَّا رَزَقْنَاهُمْ

تَاللَّهِ لَلْكَافِرِينَ عَمَّا كُنْتُمْ تَفْتَرُونَ ⑥

وَيَجْعَلُونَ لِلَّهِ الْبَنَاتِ سُبْحَنَهُ وَلَهُمْ مَا يَشْتَهُونَ ⑦

وَإِذَا بُشِّرَ أَحَدُهُمْ بِالْأُنْثَىٰ ظَلَّ وَجْهُهُ مُسْوَدًّا

وَهُوَ كَظِيمٌ ⑧

يَتَوَارَىٰ مِنَ الْقَوْمِ مِنْ سُوءِ مَا بُشِّرَبِهِ أَيُمْسِكُهُ

عَلَىٰ هُونٍ أَمْ يَدُسُّهُ فِي التُّرَابِ أَلَا سَاءَ مَا

يَحْكُمُونَ ⑨

لِلَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ مَثَلُ السَّوْءِ وَلِلَّهِ

الْبَشَرُ الْأَعْلَىٰ وَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ⑩

وَلَوْ يُؤَاخِذُ اللَّهُ النَّاسَ بِظُلْمِهِمْ مَا تَرَكَ عَلَيْهِمَا

مِنْ دَابَّةٍ وَلَكِنْ يُؤَخِّرُهُمْ إِلَىٰ أَجَلٍ مُّسَمًّى فَإِذَا

注23 この節では、信仰を持たぬ者のつまずきのもとは、(息子ではなく)娘の出生が神のせいだとすることにあると言っている訳ではない。しかしながらクルアーンでは息子の出生を神のせいにする事も、強く非難している(19章91、92節)。当節では単に、不信者が娘の出生により面目がつぶれると信じこんでいるので、神のせいにしてしまう彼らの愚かさについて述べられている。

注24 ここで言及されているのはあるアラブの種族で流行していた女兒を生き埋めにする野蛮な習慣についてである。彼らは女性に対して非常に低い認識しか持っておらず、その社会で極端に低い地位しか与えていなかった。クルアーンは女性の名誉を強く支持し、すべての合法的な権利を認めてきた。この点でクルアーンは世界中の聖典の中で独特なものといえる。

注25 神によってすべての罪が一度に罰せられたとしたら、世の終りが来て地上の生物がすべて死に絶えてしまう為、罰の下される時が遅らされているのである。人は罪の結果として滅ぼされ、人の滅亡後は動物や鳥などは生存する為の目的がなくなる。動物等は、人間の役に立ち、人間の利益になるために創られたのだから、人間と共に滅びるのである。

期限まで彼等を猶豫す。而して、その時至らば、彼等之を寸時も延し、又早めること能わず。

63. 然しながら、彼等は己れの好まざるものをアッラーに振り当て、しかも、最上なものは自分たちのためにあるべしと偽りを述べる。疑いもなく、業火は彼等のもの、その中に彼等は見捨てられん。

64. 神かけて云うが、われらは汝以前にも諸々の民に使徒らを遣わせり。然るに、悪魔はそれらの民をして己れの所業を正しいと思わしめたり。されば、今日彼等の庇護者は悪魔なれど、何れ彼等も痛罰を蒙らん。

65. われらが汝に經典を降せるは、汝に、彼等が論争する問題について彼等に、解明せしめんがため、また信ずる者への嚮導並びに慈悲たらしめんが故なり。

66. アッラーは天より水を降し、之によって死せる大地を甦らしむ。げにこの中には耳傾ける者への神兆あり。

第九項

67. また、家畜の場合にも、お前たちへの教えあり。われらは、彼等の腹中にあるもの、すなわち排泄物と血液の中間にある清らかなもの、飲む者をして快さを得さしむる乳をお前たちに与う。

68. また、棗椰子と葡萄の果実、お前たちは之にて酒や体によい食べ物を得る。(注26) この中に含まれるものは、道理をわきまえた者への確かな神兆なり。

69. また、汝の主は蜜蜂に黙示して(注27)「丘や樹間や、又は人が作りし棚に、お前たちの巣を営め。

جَاءَ أَجْلَهُمْ لَا يَسْتَأْخِرُونَ سَاعَةً وَلَا يَسْتَقْدِمُونَ ﴿٦٧﴾

وَيَجْعَلُونَ لِلَّهِ مَا يَكُونُ لَهُمْ وَتَصِفُ السِّتَمَ الْكَذِبَ
أَنَّ لَهُمُ الْحُسْنَىٰ لَاجِرَمَ أَنَّ لَهُمُ النَّارَ وَأَنَّهُمْ مُّفْطَرُونَ ﴿٦٨﴾

ثَا لِّلّٰهِ لَقَدْ اَرْسَلْنَا اِلٰى اُمَمٍ مِّنْ قَبْلِكَ فَوَٰثِنَ لَهُمُ
الشَّيْطٰنُ اَعْمٰلَهُمْ فَهُوَ وَلِيُّهُمْ الْيَوْمَ وَلَهُمْ عَذَابٌ
اَلِيمٌ ﴿٦٩﴾

وَمَا اَرْسَلْنَا عَلَيْكَ الْكِتٰبَ اِلَّا لَتُبَيِّنَ اَلَّذِي اَخْتَلَفُوْا
فِيْهِ وَهُدًى وَرَحْمَةً لِّقَوْمٍ يُؤْمِنُوْنَ ﴿٧٠﴾

وَاللّٰهُ اَنْزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَآءً فَاَخْيَا بِهِ الْاَرْضَ بَعْدَ
مَوْتِهَا اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً لِّقَوْمٍ يَّسْمَعُوْنَ ﴿٧١﴾

وَإِنَّ لَكُمْ فِي الْأَنْعَامِ لَعِبْرَةً لِّتُنْقِذُوا مِمَّا فِيْ طُغْيَانِهِ
مِنْ بَيْنِ قَوْمٍ وَدِمِّ بَيْنَنَا خَالِصًا سَائِغًا لِلشَّٰرِبِيْنَ ﴿٧٢﴾

وَمِنْ ثَمَرَاتِ النَّخِيلِ وَالْأَعْنَابِ تَتَّخِذُونَ مِنْهُ
سَكَرًا وَرِزْقًا حَسَنًا إِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً لِّقَوْمٍ يَعْقِلُوْنَ ﴿٧٣﴾

وَأَوْحَىٰ رَبُّكَ إِلَى النَّحْلِ أَنْ اتَّخِذِي مِنَ الْجِبَالِ بُيُوتًا
وَمِنَ الشَّجَرِ وَمِمَّا يَعْرِشُونَ ﴿٧٤﴾

注26 神によって創造されたものが自然で純粋な形のままであれば、純で健全で活力のもととなる食物になる。しかし人がそれらを自然のまま用いないのであれば、損われてしまう。同じ様に神の教えも完全なままである限り、精神的に非常に有益なものとなるが、その完全さが損われれば全く役に立たなくなる。

注27 ここでの啓示は、神がすべての創造物に生まれつきの本能を与えられたという事を意味している。この節には、全宇宙は、明らかであったり隠されていたりする啓示(直観)によって円滑に首尾よく動いている

70. 而して、あらゆる果実を食し、主によって教えられた分り易い道をとって帰巢せよ」と仰せられ給う。かくて蜜蜂の体内から多様な色彩の薬効ある飲物出づ。この中に含まれるものは、思維する者たちへの確かな神兆なり。

71. アッラーはお前たちを創り、いつかまた死なしむ。而して、お前たちの或る者を、知りたることをことごとく忘れ果てるまで長生させしむ。げにアッラーは、全知全能にまします。

第十項

72. また、アッラーは、お前たちの或る者を富裕ならしめたり。然るに、これらの恩恵を施されたる者、己れの右手が所有す者にその財産を頒ちて、之を等しく配分することをせず。然らば、彼等はアッラーの恩恵を非認せんとするか？

73. また、アッラーは、お前たちの中からお前たちに配偶者を与え、その配偶者からお前たちに子供や孫を授け、且ついろいろと結構なものを供給し給う。(注 28) 然るに、彼等はくだらぬものを信じて、アッラーの恩恵を認めざるか？

74. アッラーをさし措いて彼等が崇める如きものは、天地から如何なる賜物も彼等に与えず、のみならずかかる能力を所有せず。

75. されば、アッラーに類似せるものを造り出すなかれ。げにアッラーは知り給うが、お前たちは知らず。(注 29)

ثُمَّ كُلٍّ مِنْ كُلِّ الثَّمَرَاتِ فَاسْلُكِي سُبُلَ رَبِّكِ ذُلُلًا
يَخْرُجُ مِنْ بَطُونِهَا شَرَابٌ مُخْتَلِفٌ أَلْوَانُهُ فِيهِ شِفَاءٌ
لِلنَّاسِ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَةً لِقَوْمٍ يَتَفَكَّرُونَ ﴿٥٠﴾

وَاللَّهُ خَلَقَكُمْ ثُمَّ يَتَوَفَّاكُمْ وَاللَّهُ مَنَّانٌ
أَزَلَّ الْحَمْرُ عَنْكُمْ لَعَلَّكُمْ تَعْلَمُونَ إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ
قَدِيرٌ ﴿٥١﴾

وَاللَّهُ فَضَّلَ بَعْضَكُمْ عَلَى بَعْضٍ فِي الرِّزْقِ فَمَا
الَّذِينَ فَضَّلُوا بَرَاءُوا رِزْقِهِمْ عَلَى مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُهُمْ
فَهُمْ فِيهِ سَوَاءٌ أَوِ بَعْضُهُمْ أَوْلَىٰ بِرِزْقِهِ مِنْ
آخَرٍ ۚ بَلَىٰ ۖ إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ خَبِيرٌ ﴿٥٢﴾

وَاللَّهُ جَعَلَ لَكُمْ مِنْ أَنْفُسِكُمْ أَزْوَاجًا وَجَعَلَ لَكُمْ
مِنْ أَزْوَاجِكُمْ بَيْنِينَ وَحَفَدَةً وَرَزَقَكُمْ مِنَ الطَّيِّبَاتِ
أَفَبِلَا ظُلْمٍ يَوْمُؤْنَ وَيُنْعَبِتِ اللَّهُ هُمْ يَكْفُرُونَ ﴿٥٣﴾

وَيَعْبُدُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ مَا لَا يَمْلِكُ لَهُمْ رِزْقًا
مِنَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ شَيْئًا وَلَا يَسْتَطِيعُونَ ﴿٥٤﴾
فَلَا تَضْرِبُوا لِلَّهِ الْأَمْثَالَ إِنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ وَأَنْتُمْ لَا
تَعْلَمُونَ ﴿٥٥﴾

というほのめかしが隠されている。言い換えれば、すべての創造物は天賦の本能と生まれつきの素質に従って行動する時にだけそのものが存在する目的にかなっているという事である。蜜蜂が優れた例として選ばれた。なぜならば蜜蜂のすばらしい組織と仕事ぶりは裸眼によっても見ることができるので素人の観察者をも感動させる事ができるからである。

注 28 この節は神の唯一性を、支持する論点として、私有の本能について述べている。

注 29 人間は神の偉大で限らない力について何も知らないのに、神に関する法則を考察するなどというのは、厚かましい限りである。

76. アッラーは、主の持ちものにして自らは如何なる力ももたぬ奴隷と、(注30) われらが許から住き供給物を賜りたる者が、ひそかに、又公然とそれらを施しに使う自由人とを比喻し給う。(注31) この両者果して同等なるか？アッラーに讃美あれ！されど、彼等の大半は之を知らず。

77. また、アッラーは、二人の男の比喻を説く。一人は啞にして、何事もなす能わず、何処に遣っても役に立たず、主人の重荷となるばかり。かかる者が、正義を勧め、直き道を踏む者と同等となり得べきや？

第十一項

78. 天地の奥秘(注32) はアッラーの司り給うところ、而して、約束の時起るはまたたく間に似たり。否、それよりも速やかなり。然り、アッラーは萬事に亘って力を有す。

79. また、アッラーはお前たちに感謝せしめんがために、お前たちを母の胎内から何も解らざるうちに取り出だし、耳と目と心とを与え給えり。(注33)

80. 彼等は天空でアッラーに服う飛鳥を窺うるか？アッラーに非ずして誰が飛鳥を制するぞ。(注34) 確かに、この中に含まれているものは、信仰する人々へのさまざまな神兆なり。

ضَرَبَ اللَّهُ مَثَلًا عَبْدًا مَمْلُوكًا لَا يَقْدِرُ عَلَى شَيْءٍ
وَمَنْ رَزَقْنَاهُ مِنَّا رِزْقًا حَسَنًا فَهُوَ يُنْفِقُ مِنْهُ سِرًّا
وَجَهْرًا ۚ هَلْ يَسْتَوِي الْحَمْدُ لِلَّهِ بَلْ أَكْثَرُهُمْ لَا
يَعْلَمُونَ ﴿٤٠﴾

وَضَرَبَ اللَّهُ مَثَلًا ذَكَّيْنِ أَحَدَهُمَا ابْنُكَ لَا يَقْدِرُ
عَلَى شَيْءٍ وَهُوَ كَلٌّ عَلَى مَوْلَاهُ أَيْنَمَا يُوَجِّههُ لَا يَأْتِ
بِخَيْرٍ ۚ هَلْ يَسْتَوِي هُوَ وَمَنْ يَأْمُرُ بِالْعَدْلِ وَهُوَ
عَلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿٤١﴾

وَاللَّهُ غَيبُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا أَمَرَ السَّاعَةِ
إِلَّا كَمَنْحِ الْبَصَرِ ۚ أَوْ هُوَ أَقْرَبُ إِنَّ اللَّهَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ
قَدِيرٌ ﴿٤٢﴾

وَاللَّهُ أَخْرَجَكُمْ مِنْ بُطُونِ أُمَّهَاتِكُمْ لَا تَعْلَمُونَ شَيْئًا
وَجَعَلَ لَكُمُ السَّمْعَ وَالْأَبْصَارَ وَالْأَفْئِدَةَ ۚ لَعَلَّكُمْ
تَشْكُرُونَ ﴿٤٣﴾

الْمَيْرَ إِلَى الظِّلِّ مُسْحُوتٍ فِي جَوِّ السَّمَاءِ ۚ مَا
يُنْسِكُهُنَّ إِلَّا اللَّهُ ۚ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ﴿٤٤﴾

注30 不信心な者はまるで意志と行動の自由を失って、自分の低い欲望と快楽の奴隷になった者のようである。

注31 ここで参考とされているのは聖なる預言者一神の最高のしもべの事と思われる。(1)彼は(夜に人類のために祈ることにより)人に知られる事なく人類に仕え、又(目に見える奉仕活動によって)堂々と人類の為に尽くした。(2)彼は昼夜絶え間なく人類の為に尽くした。

注32 「天地の奥秘」とは即ち、信じない者の最終的な敗北と当惑、それにイスラムの勝利を意味する。

注33 聞いたり見たり理解したりする能力は、この順序で人が知識を得るのを助けてきた。生まれたばかりの子供はまず、聴力を使う。視力が次に発達し、そして成長の最終段階として理解が発達する。

注34 この節では間もなくメッカの不信の徒にふりかかる罰についてだけ述べている。鳥を近づけないという意味は、信じない者のために用意してある罰を保留しているという事である。アラブの詩には鳥が勝手の後

81. また、アッラーは、お前たちに安息の場所として家を与え、また家畜の皮革によって天幕を与え、旅路にあっても、宿営に際しても、その軽便さをお前たちに分らしめたり。また彼は、家畜からとれる羊毛や毛皮や獣毛で世帯道具や時期に応じた必需品をお前たちに与えたり。

وَاللّٰهُ جَعَلَ لَكُمْ مِنْ بُيُوتِكُمْ سَكَنًا وَجَعَلَ لَكُمْ مِنْ جُلُودِ الْأَنْعَامِ بُيُوتًا تَسْتَخِفُّونَهَا يَوْمَ ظَعْنِكُمْ وَيَوْمَ إِقَامَتِكُمْ وَمِنْ أَصْوَافِهَا وَأَوْبَارِهَا وَأَشْعَارِهَا أَثْنَا ثَلَاثًا وَمَتَاعًا إِلَىٰ حِينٍ ①

82. また、アッラーは、創造せる樹木でお前たちに日陰を作り、山中に避難所を設け、暑熱を防ぐ衣服と戦場でその身を護る甲冑とを与えたり。かくの如く、彼はお前たちを服従帰依させんがために、その恵みを全うす。

وَاللّٰهُ جَعَلَ لَكُمْ مِنْهَا خَلَقَ ظِلًّا وَجَعَلَ لَكُمْ مِنَ الْجِبَالِ أَنْثًا وَجَعَلَ لَكُمْ سَرَابِيلَ تَقِيكُمُ الْحَرَّ وَسَرَابِيلَ تَقِيكُمُ الْبَأْسَ كَذَلِكَ يُبَيِّنُ نِعْمَتَهُ عَلَيْكُمْ لَعَلَّكُمْ تُسْلَوْنَ ②

83. されど、もし彼等背を向けなば、汝はただ神託を伝えよ。

فَإِنْ تَوَلَّوْا فَإِنَّمَا عَلَيْكَ الْبَلْغُ الْمُبِينُ ③

84. 彼等はアッラーの恵みを認めつつも、之を否認す。世人の大半は凝り固まった不信心者輩なり。

يَعْرِفُونَ نِعْمَتَ اللَّهِ ثُمَّ يُنْكِرُونَهَا وَأَكْثَرُهُمُ الْكَافِرُونَ ④

第十二項

85. われらがそれぞれの民より一人の証人を立てるその日を忘れまいぞ。(注35) その日不信心者どもは犯した行為の修正は許されず、また弁解も許されざるべし。

وَيَوْمَ نَبْعَثُ مِنْ كُلِّ أُمَّةٍ شَهِيدًا ثُمَّ لَا يُذَنِّقُ لِلَّذِينَ كَفَرُوا وَلَا هُمْ يُسْتَعْتَبُونَ ⑤

86. 非行を為せる者どもが懲罰を目のあたりに見ん時は、そは彼等のために軽減せられず、また猶予せられざるべし。

وَإِذَا رَأَى الَّذِينَ ظَلَمُوا الْعَذَابَ فَلَا يُخَفَّفُ عَنْهُمْ وَلَا هُمْ يُنْظَرُونَ ⑥

87. アッラーに他神^{あだしがみ}を併せ祀りし彼等が、その他神^{あだしがみ}を見て、云わん、「われらの主よ、彼等

وَإِذَا رَأَى الَّذِينَ أَشْرَكُوا شُرَكَاءَهُمْ قَالُوا أَرَبَّنَا

について行って戦場で倒されたままになっている敵の死体をついばむことが述べられているものが沢山ある。アラブの諺によれば鳥が空中を舞うという事は、部族の敗北と破壊を象徴している(67:20 参照)。この節では、神はイスラム教徒が信仰を持たぬ者に対して戦いを挑む事を差し控えさせたと言明している。しかし、いったん戦う許可が与えられるや否や、不信の徒は、打ち負かされ破壊させられ、信仰を持たぬ者達の死体は空を飛んでいる鳥に食われるところとなるのである。

注35 この節では神よりの使者が世界のすべての民族と国々に送られた事が述べられている。この主張はすべての経典の中でクルアーンにだけ述べられているものである。そしてクルアーンによって約1400年前に明らかにされたこの主張の真理が、今や人類の上を照らし始めたのである。

こそは、我等が日頃主の代りに崇めたる合祭神なり」と。すると、彼等は直ちに反駁せん、「お前たちこそ虚言者なり」と。(注36)

88. その日彼等も初めてアッラーに恭順を申し出でん。而して、彼等が捏造せし神々は彼等を見捨てん。
89. 自ら不信心者にして、人をアッラーの道から背かしめる者には、その害毒故に、懲罰の上に更に懲罰を加えん。
90. われらがそれぞれの民のうちに同族の一人の証人を召し出し、彼等に対する証言をさせる目を、忘れまいぞ。而して、われらは汝をこの徒輩に対する証人たるべしとす。さればこそ、われらは一切を解明する経典を汝に降し、神に甘心順服する者への嚮導と慈悲と朗報たらしめたるなり。

第十三項

91. げにアッラーは、正義と善行並びに親族に対する贈与を命じ給ひ、醜行と邪惡並びに背逆を禁じ給う。かく誠め給うは、お前たちに留意せしめんがためなり。
92. お前たちアッラーと約束したならば、その約束を全うせよ。誓約を確認し、(注37)アッラーを証人としたる後に之を破ることなかれ。アッラーはお前たちの行為を確実に知り給う。
93. せっかく紡いだ糸を解す女の如くなるなかれ。いかに一方の集団が他方より優勢になったからといって、誓約を策略の手段に使うなかれ。(注38)アッラーは之によつ

هُؤُلَاءِ شُرَكَائِنَا الَّذِينَ كُنَّا نَدْعُوا مِنْ دُونِكَ
فَالْقُوا إِلَيْهِمُ الْقَوْلَ إِنَّكُمْ لَكَاذِبُونَ ﴿٣٦﴾

وَالْقُوا إِلَى اللَّهِ يَوْمَئِذٍ السَّلَامَ وَصَلَّ عَنْهُمْ مَا كَانُوا يَفْعُرُونَ ﴿٣٧﴾

الَّذِينَ كَفَرُوا وَصَدُّوا عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ زِدْنَاهُمْ
عَذَابًا فَوْقَ الْعَذَابِ بِمَا كَانُوا يُفْسِدُونَ ﴿٣٨﴾

وَيَوْمَ نَبْعَثُ فِي كُلِّ أُمَّةٍ شَهِيدًا عَلَيْهِمْ مِنْ أَنْفُسِهِمْ
وَجِئْنَا بِكَ شَهِيدًا عَلَى هَؤُلَاءِ وَتَرْنَا عَلَيْكَ الْكَتِبَ
تَبْيِئَاتًا لِكُلِّ شَيْءٍ وَهَدَى وَرَحْمَةً وَبَشِّرِ الْمُسْلِمِينَ ﴿٣٩﴾

إِنَّ اللَّهَ يَأْمُرُ بِالْعَدْلِ وَالْإِحْسَانِ وَإِيتَاءِ ذِي
الْقُرْبَىٰ وَيَنْهَىٰ عَنِ الْفَحْشَاءِ وَالنَّكَرِ وَالْبَغْيِ
يُعْظَمُ لَكُمْ تَذَكُّرُونَ ﴿٤٠﴾

وَأَوْفُوا بِعَهْدِ اللَّهِ إِذَا عَاهَدْتُمْ وَلَا تَفْضَحُوا الْأَيْمَانَ
بَعْدَ تَوْكِيدِهَا وَقَدْ جَعَلْتُمُ اللَّهَ عَلَيْكُمْ كَفِيلًا
إِنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا تَفْعَلُونَ ﴿٤١﴾

وَلَا تَكُونُوا كَالَّذِينَ نَقَضَتْ غَزْلَهُمَا مِنْ بَعْدِ قُوَّةٍ
أَنْكَارًا تَتَخَدَّوْنَ أَيَسَاتُكُمْ دُخَانًا يَسْخَمُونَ

注36 偽りの神とその信奉者との間の論争が、示唆している事は、罪と、真理の否定に基く友情は決して長続きしないという事である。

注37 信徒が神に負っている恩義はアッラーの約束という語で表わされ、仲間に負っている義務は誓約という語で表わされている。

注38 この節と次の節では、どんな事をしてもし守らなければならない誓いの死守について最大級の強調がなされている。

てお前たちを試みんとす。されば復活の日に於て、彼はお前たちが意見を異にする事柄を必ずお前たちに明確にせん。

94. アッラーもし欲したりせば、彼は必ずお前たちを一団となし得た筈。されど、彼はその欲する者を迷わしめ、また、欲する者を導き給う。而して、お前たちはその為せることについて必ずや訊問されん。

95. お前たち、誓約をお互いの間の策略の手段に使うことなかれ。(注39) 然らずば、踏みしめた脚は滑り、人々をアッラーの道から背かしめたることのために、不運を嘗めさせられ、且つ重刑を受けん。

96. アッラーの契約をわづかな代価で売るなかれ。お前たち識見を有するなら、アッラーの許にあるものこそお前たちにとりて最も優れるを知らん。(注40)

97. お前たちの有するものは消滅すれど、アッラーの許にあるものは永存す。而して、堅忍不拔な者には、われらは必ず彼等が為せる最善の行為に対して報奨を与えん。

98. 男でも女でも、(注41) 信者にして義しい行いをする者は、われら必ず清らかな人生を授く。またわれらは、彼等が為せる最善の行為に対して、必ずや報奨を授けん。

99. 汝クルアーンを誦する時は、排斥された悪魔に対してアッラーの加護を求めよ。

أَمَّهُ هِيَ أَرْبَى مِنْ أُمَّتِي إِنْ سَأَلْتُكُمْ اللَّهُ بِهِ وَلَيَبَيِّنَنَّ
لَكُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ مَا كُنْتُمْ فِيهِ تَخْتَلِفُونَ ﴿٩٧﴾

وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ لَجَعَلَكُمْ أُمَّةً وَاحِدَةً وَلَكِنْ يُبَيِّنُ
مَنْ يَشَاءُ وَيَهْدِي مَنْ يَشَاءُ وَلَسُنَّ عَمَّا
كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٩٨﴾

وَلَا تَتَّخِذُوا أَيْمَانَكُمْ دَخَلًا بَيْنَكُمْ فَتَرِلْ قَدَمُ
بَعْدَ ثُبُوتِهَا وَتَذُوقُوا السَّوْءَ بِمَا صَدَقْتُمْ عَنْ
سَبِيلِ اللَّهِ وَلَكُمْ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿٩٩﴾

وَلَا تَشْتَرُوا بِعَهْدِ اللَّهِ ثَمَنًا قَلِيلًا إِنَّمَا عِنْدَ اللَّهِ
هُوَ خَيْرٌ لَكُمْ إِنْ كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿١٠٠﴾

مَا عِنْدَكُمْ يَنْفَدُ وَمَا عِنْدَ اللَّهِ بَاقٍ وَلَنَجْزِيَنَّ
الَّذِينَ صَبَرُوا أَجْرَهُمْ بِأَحْسَنِ مَا كَانُوا
يَعْمَلُونَ ﴿١٠١﴾

مَنْ عَمِلَ صَالِحًا مِنْ ذَكَرٍ أَوْ أُنْثَىٰ وَهُوَ مُؤْمِنٌ
فَلَنَجْزِيَنَّهُ حَيَوةً طَيِّبَةً ۖ وَلَنَجْزِيَنَّهُمْ أَجْرَهُمْ
بِأَحْسَنِ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٠٢﴾

وَإِذَا قَرَأْتَ الْقُرْآنَ فَاسْتَعِذْ بِاللَّهِ مِنَ الشَّيْطَانِ
الرَّجِيمِ ﴿١٠٣﴾

注39 そのような行いは、自分の力を弱める事になる。

注40 人々は力を持つようになると、人体に於いて、色々な誘惑にかられてしまう。故に彼らの敵は人々の中からスパイや情報提供者を雇い、その国家の秘密を知るために多額のワイロを贈る。イスラム教徒達は次のような言葉で、このような誘惑に負けないように警告されている。「アッラーの契約をわずかな代価で売るなかれ。」

注41 この節では男女同権が認められ、神の恩恵は男女に等しく分け与えられる事が約束されている。

100. 悪魔は、信じてその主に頼る者に対して
何んの支配力も持たず。

إِنَّهُ لَيْسَ لَهُ سُلْطَانٌ عَلَى الَّذِينَ آمَنُوا وَعَلَىٰ رَبِّهِمْ
يَتَوَكَّلُونَ ﴿١٠٠﴾

101. 彼の力はただ、彼を味方とする者並びに
アッラーに他神等を併せ祀る徒輩の上にの
み及ぶ。

إِنَّمَا سُلْطَانُهُ عَلَى الَّذِينَ يَتَوَلَّوْنَهُ وَالَّذِينَ هُمْ بِهِ
مُشْرِكُونَ ﴿١٠١﴾

第十四項

102. われらが或る御告を他の御告に代える時
—アッラーこそは最もその啓示するものを
知り給うに—彼等は云う、「汝はただ捏造者
にすぎず」と。然らず、彼等の大半は知識
を有せざるなり。

وَلَا يَدَّبْدُنَا آيَةً مَّكَانَ آيَةِ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا
يُنْزِلُ قَالُوا إِنَّمَا أَنْتَ مُفْتٍ بَلْ أَكْثَرُهُمْ
لَا يَعْلَمُونَ ﴿١٠٢﴾

103. 云え、「主より聖霊が汝に、真理を携えて
降せるは、信者の信念を強固ならしめ、且
つムスリムへの嚮導並びに朗報たらしめ
んがためなり」と。

قُلْ نَزَّلَهُ رُوحُ الْقُدُسِ مِنْ رَبِّكَ بِالْحَقِّ لِيُثَبِّتَ
الَّذِينَ آمَنُوا وَهُدًى وَبُشْرَىٰ لِلْمُسْلِمِينَ ﴿١٠٣﴾

104. われらは彼等が、「彼ムハマンドに教える
は、ただの人間にすぎず」と云うを知る。
然れども、彼等がほのめかす者の言葉は外
国語なり。これに反し、こは平易明瞭なる
アラビア語なり。

وَلَقَدْ نَعْلَمُ أَنَّهُمْ يَقُولُونَ إِنَّمَا يُعَلِّمُهُ بَشَرٌ
لِّسَانُ الَّذِي يُلْحِدُونَ إِلَيْهِ أَعْجَبِي وَهَذَا لِسَانٌ
عَرَبِيٌّ مُبِينٌ ﴿١٠٤﴾

105. アッラーの神兆を信ぜざる徒輩は、アッ
ラー之を導かず、而して彼等は痛ましい罰
を受けん。

إِنَّ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِآيَاتِ اللَّهِ لَا يَهْدِيَهُمُ اللَّهُ
وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿١٠٥﴾

106. アッラーの神兆を信ぜざる徒輩は、虚偽
を捏造してるにすぎず、彼等こそ嘘つきな
り。

إِنَّمَا يَقْتَرِعُ الْكَذِبَ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِآيَاتِ
اللَّهِ وَأُولَٰئِكَ هُمُ الْكَذِبُونَ ﴿١٠٦﴾

107. 誰であれ一旦アッラーを信じた後、再び
翻った者—但し無理じいされてやむなく不
信を表明した者で、(注 42) その心が全く
平安なる者は除くが—自らの胸を不信仰に
向って開ける者は、アッラーの激怒その上
に降る。されば、彼等は苛酷な罰を受けん。

مَنْ كَفَرَ بِاللَّهِ مِنْ بَعْدِ إِيمَانِهِ إِلَّا مَنْ أَكْرَهَ وَ
قَلْبُهُ مُطْمَئِنٌّ بِالْإِيمَانِ وَلَكِنْ مَنْ شَرَحَ بِالْكُفْرِ
صَدْرًا فَعَلَيْهِمْ عَذَابٌ مِنَ اللَّهِ وَهُمْ عَلَيْهِ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿١٠٧﴾

注 42 この節では、心の中ではイスラムの教えに満足しているけれども、厳しい取調べに会って不信仰を表明する言葉を述べてしまった人が神からどのように扱われるかについては述べられていない。この事は、こういう者についての最後の審判は保留されていて、今後の行動によって神がどのように扱われるかを決定するという事が述べられている。

108. こは彼等が来世よりも現世を愛したがため、またアッラーが不信心者どもを導かざるが故なり。

109. これ等はアッラーがその心と耳と目を封じたる徒輩なり。不注意な人間とは彼等のことなり。

110. 彼等は来世に於て必ず失敗者たるべし。

111. されど、汝の主は一迫害を受けて家郷を捨て、それでもなお苦闘善戦し、且つ耐え忍びし者には(注43) —これからは寛大にして、慈悲深くまします。

第十五項

112. 各自が自分自身を弁護す日至れば、誰れもが己れの所業に応じて報いられ、決して不当に遇せられることなかるべし。

113. アッラーは一比喻を説く。平穏無事な或る邑あり。四方から豊かに物質が至りたるが、アッラーの恵みを感謝せざるにより、彼は飢餓と恐怖の長衣を被せ、以て彼等が為せる悪事の報いを味わせり。(注44)

114. 同族から選ばれし使徒が彼等に遣わされたり。されど、彼等はその者を嘔つき呼ばわりしたれば、彼等が不義を行いつつあるとき天罰之に降りたり。

ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ اسْتَحَبُّوا الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا عَلَى الْآخِرَةِ
أَنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْكَافِرِينَ ①٨

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ طَبَعَ اللَّهُ عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ وَسَعَىٰهُمْ
أَبْصَارُهُمْ ۖ أُولَٰئِكَ هُمُ الْغٰفِلُونَ ①٩

لَا جَرَمَ لَهُمْ فِي الْآخِرَةِ ۚ هُمُ الْخٰسِرُونَ ②٠
ثُمَّ إِنَّ رَبَّكَ لِلَّذِينَ هَاجَرُوا مِن بَعْدِ مَا فُتِنُوا
ثُمَّ جَهِدُوا وَصَبَرُوا إِنَّ رَبَّكَ مِن بَعْدِ مَا لَعَنُوا
رَاحِمٌ ②١

يَوْمَ تَأْتِي كُلُّ نَفْسٍ بِجَاسِدِهَا عَنْ نَفْسِهَا وَتُوَفَّى
كُلُّ نَفْسٍ مَّا كَسَبَتْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ②٢
وَضَرَبَ اللَّهُ مَثَلًا قَرْيَةً كَانَتْ آمِنَةً مُّطْمَئِنَّةً
بِأَيِّهَا رِزْقُهَا رَغَدًا أَمِنَ كُلُّ مَكَّانٍ فَكَفَرَتْ
بِأَنعَمَ اللَّهُ فَأَذَاقَهَا اللَّهُ لِبَاسَ الْجُوعِ وَالْخَوْفِ
بِمَا كَانُوا يَصْنَعُونَ ②٣

وَلَقَدْ جَاءَهُمْ رَسُولٌ مِّنْهُمْ فَكَذَّبُوهُ فَأَخَذَهُمُ
الْعَذَابُ وَهُمْ ظَالِمُونَ ②٤

注43 109節、110節では、信仰からはなれ、不信仰を支持し、イスラムの敵に加わる者について、語られているが、この節では審判が保留されている者について述べられている。この場合に下される審判は、次の通りである。もし彼らが家を離れ、神のために闘い、イスラムへの途上でふりかかるすべての苦しみを耐え忍ぶならば、神は、その時になつてはじめて過去の罪を赦される事となろう。又、当節は、メッカに啓示されたもので、この節で述べられているジハード(聖戦)は、剣で戦うことではなく、イスラムの理想を実現するために努めるというだけの意味である。

注44 「邑」—メッカのこと、「飢餓」—恐ろしい飢きが七年の間メッカを襲った(44章11節参照)。「恐怖の長衣」—メッカ市民がイスラム教徒に巻き込まれて敗れた戦争の恐怖の事を意味している。彼らは戦争の恐怖がすっかり彼らをおおっているかのように非常に緊張の中で、生活していた。アラブの諺では、「味わう」という語はしばしば「長衣」として使われ、次の様な良く知られたアラブの詩がある。あなたのために何を料理してあげましょうかと言われたから、長い上衣とシャツを料理して下さいと私が答えた。

115. アッラーがお前たちに賜わりたる合法にして且つ清潔なるものを食し、アッラーを崇拝するなら、アッラーの恵みに感謝せよ。
(注 45)

116. アッラーがお前たちに禁じ給うたものは、死肉と血液と豚の肉、並びにアッラー以外の名を唱えられたるものなり。然しながら、不服従するに非ず、掟にそむくに非ず、やむなく食わされた場合は、アッラーは寛大に赦し給う。

117. お前たち、口から出まかせに虚偽を云うなかれ―「こは合法、そは禁ぜられている」などと。これ等の者はアッラーに対し奉り虚偽を企てる者なり。アッラーに対し奉り虚偽を企てる者は決して栄えず。

118. 此の世はしばしの享樂なれど、やがて彼等は悲惨な罰を受くべし。

119. ユダヤ教徒にも、われらは先に汝に告げたる如く、多くの物を禁じたり。されど、われらは彼等に不当なことをしたに非ず、彼等自ら己れを害えるなり。

120. 汝の主は無知故に悪事を行い、後に改悛して身を修める者には一寛大にして、慈悲深くします。

第十六項

121. げにアブラハムは美徳の模範、アッラーに忠実で、常に信心深く、アッラーに他神を併せ祀る者に非ざりき。

122. 常にその恵みに感謝の念を抱きし故に、アッラーは彼を選びて正しい道に導き給えり。

فَكُلُوا مِمَّا رَزَقَكُمُ اللَّهُ حَلَالًا طَيِّبًا وَاشْكُرُوا
بِعِنتِ اللَّهِ إِنَّ كُنْتُمْ لِرِآيَاهُ تَعْبُدُونَ ﴿١١٥﴾

إِنَّمَا حَرَّمَ عَلَيْكُمُ الْمَيْتَةَ وَالدَّمَ وَلَحْمَ الْخِنْزِيرِ
وَمَا أُهْلٍ لِغَيْرِ اللَّهِ بِهِ فَمَنْ اضْطُرَّ غَيْرَ بَاغٍ وَ
لَا عَادٍ فَإِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿١١٦﴾

وَلَا تَقُولُوا لِمَا تَصِفُ أَلْسِنَتُكُمُ الْكَذِبَ هَذَا
حَلَالٌ وَهَذَا حَرَامٌ تَفْتَرُوا عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ
إِنَّ الَّذِينَ يَفْتَرُونَ عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ لَا يُفْلِحُونَ ﴿١١٧﴾
مَتَاعٌ قَلِيلٌ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿١١٨﴾

وَعَلَى الَّذِينَ هَادُوا حَرَّمْنَا مَا قَصَصْنَا عَلَيْكَ
مِنْ قَبْلُ وَمَا ظَلَمْنَاهُمْ وَلَكِنْ كَانُوا أَنْفُسَهُمْ
يُظْلِمُونَ ﴿١١٩﴾

ثُمَّ إِنَّ رَبَّكَ لِلَّذِينَ عَمِلُوا الشُّوْءَ بِجَهَالَةٍ ثُمَّ
تَابُوا مِنْ بَعْدِ ذَلِكَ وَأَصْلَحُوا إِنَّ رَبَّكَ مِنْ بَعْدِهَا
لَغَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿١٢٠﴾

إِنَّ إِبْرَاهِيمَ كَانَ أُمَّةً قَانِتًا لِلَّهِ حَنِيفًا وَلَمْ يَكُ
مِنَ الْمُشْرِكِينَ ﴿١٢١﴾

شَاكِرًا لِأَنْعُمِهِ اجْتَبَاهُ وَهَدَاهُ إِلَى صِرَاطٍ
مُسْتَقِيمٍ ﴿١٢٢﴾

注 45 2 章 169 節、174 節、5 章 4 節、6 章 119 節、120 節、146 節参照

123. われらは彼に現世に於ける幸福を与え、
米世に於ても義しき人々の仲間に入れん。

وَأَتَيْنَاهُ فِي الدُّنْيَا حَسَنَةً ۖ وَإِنَّا لَهُ فِي الْآخِرَةِ لَكَيْنِ
الضَّالِّينَ ﴿١٢٣﴾

124. 而して今、われらは汝に啓示を降して云
えり、「常にアッラーに心を捧げまつるアブ
ラハムの流儀に従え、彼はアッラーに他神
を併せ祀る者に非ざりき」と。

ثُمَّ أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ أَنِ اتَّبِعْ مِلَّةَ إِبْرَاهِيمَ حَنِيفًا
وَمَا كَانَ مِنَ الْمُشْرِكِينَ ﴿١٢٤﴾

125. 安息日は、(注 46) それについて意見を
異にする者どもに対して定められたものに
すぎず。而して、復活の日には、汝の主は
必ず彼等が論争したことに対して判決を下
すべし。

إِنَّمَا جُعِلَ السَّبْتُ عَلَى الَّذِينَ اخْتَلَفُوا فِيهِ ۚ وَإِنَّ
رَبَّكَ لَيَحْكُمُ بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ فِيمَا كَانُوا فِيهِ
يَخْتَلِفُونَ ﴿١٢٥﴾

126. 知恵と熱心な勧めによって人々を主の道
に招き、最善な方法で人々を説得せよ。主
は、道を踏みはずした者、また正しく導か
れる者を最もよく知り給う。

ادْعُ إِلَى سَبِيلِ رَبِّكَ بِالْحُكْمِ وَالْوَعظِ ۖ الْحَسَنَةُ
وَجَادِلْهُمْ بِالَّتِي هِيَ أَحْسَنُ ۚ إِنَّ رَبَّكَ هُوَ أَعْلَمُ
بِمَنْ صَلَّ عَنْ سَبِيلِهِ وَهُوَ أَعْلَمُ بِالْمُهْتَدِينَ ﴿١٢٦﴾

127. お前たち迫害者を懲しめんと欲するな
ら、蒙った被害と同じ程度に之をなせ。然
しながら、もし堪忍しうるなら、堪忍する
にしくはなし。

وَإِنْ عَاقَبْتُمْ فَعَاقِبُوا بِمِثْلِ مَا عُوقِبْتُمْ بِهِ ۚ
وَلَكِنَّ صَبْرَكُمْ لهُوَ خَيْرٌ لِلصَّادِقِينَ ﴿١٢٧﴾

128. 預言者よ、汝、我慢強くあれ。されど、
汝の忍耐はアッラーの加護にてのみ可能なり。
彼等のことを悲しむなかれ、また彼等
の悪計に心を痛めるるなかれ。

وَاصْبِرْ وَمَا صَبْرُكَ إِلَّا بِاللَّهِ ۚ وَلَا تَحْزَنْ عَلَيْهِمْ
وَلَا تَكُ فِي ضَيْقٍ مِّمَّا يَمْكُرُونَ ﴿١٢٨﴾

129. げにアッラーは、義しい者、善行を積む
者と偕にいまし給う。

إِنَّ اللَّهَ مَعَ الَّذِينَ اتَّقَوْا وَالَّذِينَ هُمْ
مُحْسِنُونَ ﴿١٢٩﴾

注 46 ユダヤ人は、自国の衰退と悲惨は、安息日を冒瀆したからだと信じていた。しかし彼らは今、安息日を守ることでなくイスラムを受け入れることで失われた栄光を取り戻すことができたと教えらるるのである。



イスラエル
(メッカ啓年)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 夜に乗じて、その僕を聖殿から、われらが
辺りを淨めし遙か遠き聖殿に運びたる彼に
栄光あれ。こはわれらの神兆のいくつかを
彼ムハンマッドに見せんがためなり。げに
全てを聴き、全てを見透す者は、彼のみに
まします。(注1)

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

سُبْحَانَ الَّذِي أَسْرَى بِعَبْدِهِ لَيْلًا مِنَ الْمَسْجِدِ
الْحَرَامِ إِلَى الْمَسْجِدِ الْأَقْصَا الَّذِي بَوَّكُنَا حَوْلَهُ
لِتُرِيَهُ مِنْ آيَاتِنَا إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْبَصِيرُ ①

注1 この聖なる預言者の啓示としての幻について語っている節は多くのクルアーン注釈者にはミラージュ(霊的昇天)と解釈されているが当書では、これは聖なる預言者のメッカからエルサレムへの幻の中でイスラ(聖なる夜間飛行)であると解釈している。聖なる預言者のミラージュについては、かなりの行間をさいて53章で語られている。53章で(8-18節)語られている全ての事実は、預言者出現の5年後のラジャブの月に起ったアビシニアへの移動に引き続き直ちに啓示されたのであるが、これは聖なる預言者のミラージュについての伝承中で詳細に渡って述べられている。この節で述べられている聖なる預言者のメッカからエルサレムへの霊的夜間飛行或いはイスラは、ズルカーニに依れば預言者出現の11年後に起った事であり、ミヨールや数人のキリスト教著述家の意見では預言者出現の12年後という事になっている。しかしメルダベト、イブネ・サードの説では、ヒジラに一年先立つラビウル・アウヴァール月の17日に起ったとされている(AI-Khasais, AI-Kubia)。ペーキもイスラはヒジラの一年か半年前に起ったとしている。この様に全ての伝承から解る事は預言者出現の12年後にあたるヒジラの一年か半年前にイスラが起ったという事で、預言者出現の10年後にハディジャが亡くなった後、聖なる預言者が、彼の従姉であるウンム・ハニと暮していたのがヒジラの時である。しかし大勢を占める学術的意見では、ミラージュは第5番めの年に起っているのである。かくの如くこの二つの事件は、6-7年の間隔のあいた全く別個の事件であり、同一のものではないのである。各々の事件は全く別個であると考えなければならない。そして聖なる預言者のミラージュで起ったとされる言い伝えのなかの色々な事柄は、イスラでの事柄とは、全く性質を異にするものなのである。叙述中には、これら二つの事件は、精神的現象であつたにすぎず聖なる預言者が物理的に昇天したり、エルサレムまで旅した訳ではないとも述べられている。「歴史的に強力な事実の他にも、その他の関連状況がこの二つの事件は全く別個の物である事を主張する助けとなる。即ち(a)クルアーンでは聖なる預言者のミラージュ(霊的昇天)については53章で説明があるが、イスラについては何の言及もされていない(エルサレムの夜間飛行)。そして当章では、イスラについては述べられていてもミラージュへの引喩はない。(b)イスラが起った時、聖なる預言者が宿泊先にしていた彼の従姉であるウンム・ハニは、聖なる預言者がエルサレムへ旅した事については語っているが、天へ旅した事については何も語っていない。彼女こそ聖なる預言者が、エルサレムへの夜間飛行を話した、初めての人であり、彼女からの報告をうけて、その事件を書きとめた四名の違った報告者の権威に基づき、少なくとも、数人の伝承話の収集者が、彼女の話を裏づけている。四人の報告者全員が、聖なる預言者がエルサレムに行き、同じ夜にメッカへ帰ってきたという意見を同じくしている。又聖なる預言者が昇天の事をもウンム・ハニに話していたなら、彼女がその事を書きもらすはずがないのである。しかし彼女がそうしていない事から考え合せ、結果的には、問題の夜に、聖なる預言者はエルサレムへの夜間飛行或いはイスラを行なったのみで、その時に昇天のミラージュは起らなかったのである。伝承話を編纂する人達がイスラとミラージュを混同してしまった様に思われる。この混乱はイスラ(夜間飛行)という言葉がイスラとミラージュの両方の意味で使われた事に起因する様である。

3. われらはモーゼに經典を与え、これを以てイスラエルの子らへの嚮導^{ようどう}たらしめて云えり、「汝等、われを措いて他に守護者をつくるなかれ。

وَآتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ وَجَعَلْنَاهُ هُدًى لِّبَنِي إِسْرَءِيلَ أَلَّا يَتَّخِذُوا مِنْ دُونِي وَكِيلًا ⑤

4. ノアと共に方舟^{はこぶね}に乗せたる者の子孫よ」と。げに彼は謝恩の念厚^{しんこう}き僕なりき。

فَرِيقَةً مِّنْ حَمَلْنَا مَع نُوحٍ إِنَّهُ كَانَ عَبْدًا شَكُورًا ⑥

5. また、われらは經典の中でイスラエルの子らに「お前たちは必ず二度地上に於て悪事を犯し、而して非常に横柄な態度に出づ」と言明す。(注2)

وَقَضَيْنَا إِلَىٰ بَنِي إِسْرَءِيلَ فِي الْكِتَابِ لَتُفْسِدُنَّ فِي الْأَرْضِ مَرَّتَيْنِ وَلَتَعْلُنَّ عُلُوقَ كَيْبَرٍ ⑦

6. 二つのうち最初の警告が実現されるや、われらは、われらの僕の中で恐ろしい腕力を備へたる者たちをお前たちに遣わしたり。彼等はお前たちの家の最奥部までも詮索したれば、警告はかくして全うされり。(注3)

فَإِذَا جَاءَ وَعْدُ أُولَاهُمَا بَعَثْنَا عَلَيْكُمْ عِبَادًا لَّنَا أُولِي بَأْسٍ شَدِيدٍ فَجَاسُوا خِلَالَ الدِّيَارِ وَكَانَ وَعْدًا مَّفْعُولًا ⑧

そして、イスラとミラージュの説明中の、幾つかの詳細の類似性が、この混乱を大きくし定着させてしまった。(c)先ず最初に、聖なる預言者がエルサレムへ行き、その後エルサレムから天へ昇ったと言われる言い伝えでは、エルサレムで聖なる預言者は彼以前のアダム、アブラハム、モーゼ、そしてイエス・キリストという預言者達に出会い、そして天でも、再び同一の預言者達にあったのに、聖なる預言者は、彼等だとはわからなかったとも述べられている。しかし聖なる預言者がエルサレムで会った預言者達はどうやって彼以前に天に行ったのであろう。そして何故、同夜の夜間飛行中に、ほんの少し前に出会った彼等に、聖なる預言者が気づかなかったのであろう。そんな事は考えられない事である。むしろ“遠隔のモスク(礼拝堂)”とはエルサレムにある預言者ソロモンの神殿をさす。

注2 モーゼの經典中に述べられているユダヤ人達の二つの約束違反が、この節で言及されている(中命記28章15節、49〜53節、63節、64節、30章15節) イスラエルの民の中から不信者になった人達に、ダビデとイエス・キリストによりのろいが2度与えられ(5章79節) 彼らは2度も罰せられた。

注3 ダビデの死後神より第一の罰が、そしてイエス・キリストの死後第二の罰がユダヤ人達に下された。聖書によれば、ユダヤ人達は、モーゼ以後強大な民族となり、ダビデの時代に強力な王国の土台を築き、ダビデの死後、しばらくの間、その繁栄を保ち続けたとある。その後、衰退の一途をたどり、紀元前733年頃に、サマリアはアッシリア人に占領され、イスラ全土は、ジェズリールの北部に併合されてしまった。紀元前608年にはネコ・ファラオ引きいるエジプト軍がパレスチナを侵攻し、イスラエル人はエジプト人の支配する所となった(Jew. Enc. 卷P 665)。しかし一時の権力の消失と破壊、荒廃といった事が彼等の生活様式を変える事はなかった。ユダヤ人達は以前のままの邪悪な生活態度のままで、預言者エレミアが、彼等の悪しき生活方法を止めないと神の怒りが下されると注意しても、ユダヤ人達は一つもくれない。ジョハークンの在位時、バビロニアのネブカドネザルはパレスチナへの第一次侵攻を行ない、神殿の器を持ち去ったが、街を苛酷に包囲する事はなかった。しかし、ゼデキアの反乱が紀元前87年にネブカドネザルに第2次パレスチナ侵攻を許す所となり、一年半の包囲の後、街は嵐で落ちてしまい、街から逃げだしたゼデキア王はとらわれの身となった。王の息子達は虐殺され、王の目はくりぬかれ、足かせをはめられて、バビロンへと連れ去られた。神殿や王宮、その他の偉大な建築物は焼きうちされ、大司祭や指導者達は殺され、多くの人々が捕虜となって連れられていった(Jew. Enc. 第6巻P 665、第7巻P 122、“Jerusalem”参照)。

7. その後、われらはお前たちに彼等を打ち負かす力を与え、加えて、富と子宝でお前たちを助け、以前よりも遙かに優勢ならしめたり。

8. ところで、もしお前たち善事を行わば、そは己が身のためとならん。また、もし悪事を行わば、そは己れの損とならん。さて、後者の警告その実現の時到来や、われらはお前たちの顔を苦痛で覆うべく敵軍を差し向けり。彼等は最初の時の如く聖殿に踏み入り、分捕った全てのものを破壊せん。(注4)

9. 或いは、主もお前たちの上にあわれみを思し召すやもしらず。されど、お前たち再び以前の状態に逆もどりするなら、われらも必ず返報せん。されば、われらは地獄、不信心者輩の牢獄として設けたり。

10. げにこのクルアーンは人を最も正しい道に導き、また、善行を積み信徒は大いなる報奨を授けらるべしとの朗報を伝う。(注5)

ثُمَّ رَدَدْنَا لَكُمُ الْكَرَّةَ عَلَيْهِمْ وَأَمْدَدْنَاكُمْ بِأَمْوَالٍ
وَبَيْنِينَ وَجَعَلْنَاكُمْ أَكْثَرَ نَفِيرًا ④

إِنْ أَحْسَنْتُمْ أَحْسَنْتُمْ لِأَنفُسِكُمْ وَإِنْ أَسَأْتُمْ فَلَهَا
فَإِذَا جَاءَ وَعْدُ الْآخِرَةِ لِيَسُوءَ وُجُوهَكُمْ وَلِيَدْخُلُوا
الْمَسْجِدَ كَمَا دَخَلُوهُ أَوَّلَ مَرَّةٍ وَلِيُتَبِّرُوا مَا عَلَوْا
تَتَّبِرًا ⑤

عَلَى رَبِّكُمْ أَنْ يَرْحَمَكُمْ وَإِنْ عُدتُمْ عَلَيْنَا
جَهَنَّمَ لِنُكْفِرَنَّ بَنَصِيرًا ⑥

إِنَّ هَذَا الْقُرْآنَ يَهْدِي لِلَّذِي هُوَ أَقْوَمُ وَيُبَشِّرُ
الْمُؤْمِنِينَ الَّذِينَ يَعْمَلُونَ الصَّالِحَاتِ أَنَّ لَهُمْ
أَجْرًا كَبِيرًا ⑦

注4 この節はユダヤ人達の第2の邪宗への帰依による邪悪な生活と、その結果として彼等にもたらされた罰について語っている。彼等はイエス・キリストを迫害し、彼を十字架にはりつけて殺そうとし、又、彼の目的を、はばもうとした。それ故、神はユダヤ人達に罰の苦しみとして、西暦70年に、タイタス率いるところのローマ軍を侵攻させて国を破壊させた。そして比べようのない恐怖の中で、エルサレムは破壊され、ソロモンの神殿は焼きつくされたのである。(Enc. Bib. "Jerusalem"参照) この大きな不幸は、イエス・キリストがカシミールでまだ生存していた時に起こった。この事は、モーゼによって預言されたことである。(申命記32章18節～26節)ここは、第2の罰についての預言が聖書では、第1の罰についての預言の後に述べられている点に注目すべきであろう(申命記28章)。ユダヤ人達が再びエルサレムに戻るといふ預言の後にもこの預言が為されている(申命記30章1～5節)。この事からわかるのはこの預言(申命記32章18～26節)が、クルアーンでは、“お前達は必ずや二度地上に於て悪事を犯すとの言及のある、第2の罰を指している”という事である。この節はイスラム教徒に対しても、ユダヤ人達様に邪悪な生活を止めなければ二度罰せられるであろうとの警告の意味を持っている。最初の罰は西暦1258年に、バグダードが侵攻された時、下された。野蛮な遊牧民であるハラクが、完璧な力を誇り、かつ知識に富む町をうちのめし、180万ものイスラム教徒の首をはねたと言われている。しかしイスラムはこの恐るべきちよう落から輝しく立ち直り、ハラクの孫と多くのモンゴル人そして、タタル人もイスラムを受け入れたのである。第2の罰は、末日に下されるべく大により定められる。

注5 クルアーンが信奉者達の為に設定する究極の目標はクルアーン以前の人々の目標に比し、より高貴で崇高である。そして真の信奉者には、精神的且つ現世の祝福を約束している。故に人々は、その祝福を得んが為に多大な努力をし、だらしく規律のゆるんだ生活に落ちいらぬ様身を守り、あらゆる場合に於て、約束された神の恩恵に値いする者であり得なければならない。

11. また、来世を信ぜざる徒輩に、われらが酷罰を用意していることを警告す。

وَأَنَّ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ أَعْتَدْنَا لَهُمْ عَذَابًا
الْبَاطِلَ ⑪

第二項

12. 人間は幸福のために祈るべきなのに、不幸をも祈る。人間とは軽はずみなり。

وَيَدْعُ الْإِنْسَانُ بِالشَّرِّ دُعَاءَهُ بِالْخَيْرِ وَكَانَ الْإِنْسَانُ
عَجُولًا ⑫

13. われらは夜と昼を二つの徴として設け、次に夜の徴を暗くし、昼の徴を明るくせり。こはお前たちをして主の恵みを求めしめ、また年の計算を知り、計算の方法をわきまえせしめんがためなり。われらはすべてのことを詳細に説き明かせり。(注6)

وَجَعَلْنَا اللَّيْلَ وَالنَّهَارَ آيَاتَيْنِ فَمَحْوًا آيَةَ اللَّيْلِ
وَجَعَلْنَا آيَةَ النَّهَارِ مُبْصِرَةً لِّتَبْتَغُوا فَضْلًا مِّنْ
رَّبِّكُمْ وَلِتَعْلَمُوا عَدَدَ السِّنِينَ وَالْحِسَابَ وَكُلَّ
شَيْءٍ فَصَّلْنَاهُ تَفْصِيلًا ⑬

14. われらはそれぞれの人間の運命をその者の頸に結びたり。而して、復活の日に、われらは彼に大きく開いた帳簿を提示せん。(注7)

وَكُلَّ إِنْسَانٍ أَلْزَمْنَاهُ طَلُوعَهُ فِي عَقْبِهِ وَنُخْرِجُ
لَهُ يَوْمَ الْقِيَامَةِ كِتَابًا يَلْقَاهُ مَشْهُورًا ⑭

15. 「汝の帳簿を読むがよい。今日こそ汝、自分自身に十分なる清算者たれ」

اقْرَأْ كِتَابَكَ كَفَىٰ بِنَفْسِكَ الْيَوْمَ عَلَيْكَ حَسِيبًا ⑮

16. 正道を守る者はただ己れ自身を益するためを守り、迷う者はただ己れ自身が損をするのみ。(注8) また重荷を背負うは、他人の重荷を背負うに非ず。(注9) われらは使徒を派遣せずして、罰することなし。(注10)

مِمَّنْ اهْتَدَىٰ فَإِنَّمَا يَهْتَدِي لِنَفْسِهِ وَمِمَّنْ ضَلَّ
فَأِنَّمَا يَضِلُّ عَلَيْهَا وَلَا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِزْرَ أُخْرَىٰ
وَمَا كُنَّا مُعَذِّبِينَ حَتَّىٰ نَبْعَثَ رَسُولًا ⑯

注6 夜も昼も共に人間に益をもたらす。しかし夜のもたらす益が微妙で隠れているのに対し、昼の益ははっきりと明白である。この節では又、昼と夜の交替する事自然現象が一年の口附を決め、暦を作る助けとなる事が述べられている。この現象が、科学と数学の発達と発展にも寄与したのである。

注7 人間の運命をその頸に結びたりという事は、行動と努力は人が生きている限り永遠についてまわる事を意味し、ターイル(鳥)とは鳥で吉凶を占うアラブの古い習慣を表わしている。人は、一たん為した行為をやり直す事は出来ず、その行動はとてつもない効力を持ち、人の目には見えなくても、行為を為した者の首につけられたままで拭い去る事は出来ないのである。

注8 懲罰は外部から来るものではなく、人自身の中より生まれるものである。実際に天と地獄の懲罰と報酬は、善であろうと悪であろうと、人が現世で為した行為を形態化し、代表するものなのである。この様に現世では人は運命を創り出し来世で、いわば、自分自身の報酬を或いは罰をうける者なのである。

注9 誰もが自分自身の十字架を背負わなければならないし、また誰かが代わって犠牲になってくれても本人には何の利益にもならない。この節は贖罪の原則の根本を取り去るものである。

注10 世界は、かつてない程の厳しさと比べようのない強大さの悪病(ペスト)、飢饉、戦争、地震やその他の災害を次々に経験し、人間の生活は苛酷なものであった。これらの災害や破局が地球をおそう以前に、神が警告者を派遣することになっているのだ。

17. われら或る邑を滅ぼさんと欲するや、まずその邑の反逆する徒輩に命令を下す。然るに、彼等はなおも罪を犯すが故に、之に対して当然の処刑をなし、われらその邑を壊滅す。
18. ノア以後われらは如何に多くの世代を亡ぼしたることか！汝の主は、その僕等の罪業を知悉し、且つ余す所なくみそなわし給う。
19. 誰であれ、束の間の現世を望むものには、われらは気の向くままに、気の向いた者に、現世で享楽を急がす。而る後、われらは彼に地獄を指定す。そこで彼は焼かれ、呪われ、拒否されるべし。
20. されど、信者であり、来世を望み、そのために努力する者—かくの如き者の努力は、神に嘉納せられん。
21. われらはすべての者に—この者にも、またあの者にも—あまねく賜物を頒ち授く。主の授けものには限界なし。(注 11)
22. 見よ、如何にわれらが現世で或る者を他の者より出世させたかを。されど、来世に於ては、之に優る地位と荣誉あり。
23. 汝辱しめられ、見捨てられることなきよう、アッラーに他 神を併せ祀るなかれ。

第三項

24. 汝の主は命じたり、「彼以外に何者をも崇拜するなかれ。また両親に孝養をつくせ。片親、或いは両親とも汝のところで年老いた場合、いやみを云ったり、非難することなく、丁寧な言葉で話すがい。(注 12)

وَاِذَا ارَدَدْنَا اَنَّ تَهْلِكَ قَرْيَةً اَمَرْنَا مُشْرَفِيهَا
فَفَسَقُوا فِيهَا فَحَقَّ عَلَيَّهَا الْقَوْلُ فَمَزْنٰهَا تَارِيًّا ⑮

وَكَمْ اَهْلَكْنَا مِنَ الْقُرُونِ مِنْ بَعْدِ نُوْحٍ وَكَفٰى
بِرَبِّكَ بِذُنُوْبٍ عِبَادِهِ خَبِيرًا بَصِيْرًا ⑯

مَنْ كَانَ يَرْيِدُ الْعَاجِلَةَ جَعَلْنَا لَهُ فِيْهَا مَا تَشَاءُ لِيَنْ
تُرِيْدَ ثُمَّ جَعَلْنَا لَهُ جَهَنَّمَ يَصْلٰهَا مِنْ دُمُوْمَا
مَذْحُوْرًا ⑰

وَمَنْ ارَادَ الْاٰخِرَةَ وَسَعٰى لَهَا سَعِيْهَا وَهُوَ مُؤْمِنٌ
فَاُولٰٓئِكَ كَانَ سَعِيْهُمْ مَشْكُوْرًا ⑱

كُلًّا نُّبَدِّلُ هٰؤُلَاءِ وَهٰؤُلَاءِ مِنْ عَطَاٰ رَبِّكَ وَمَا
كَانَ عَطَاٰ رَبِّكَ مَحْظُوْرًا ⑲

اُنْظُرْ كَيْفَ فَضَّلْنَا بَعْضَهُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ وَلِلْاٰخِرَةِ الْكِبْرُ
دَرَجَتٍ وَّ الْكِبْرُ تَفْضِيْلًا ⑳

لَا تَجْعَلْ مَعَ اللّٰهِ اٰلٰهًا اٰخَرَ فَتَقْعُدَ مِنْ دُمُوْمَا
مَخْذُوْلًا ㉑

وَقَضٰى رَبُّكَ اَلَّا تَعْبُدُوْا اِلٰهًا وَّ اِلٰهَ الْاٰدِيْنَ
اِحْسَانًا اِلَّا مَا يَبَيِّنُ لَكَ عِنْدَكَ الْكِبْرَ اَحَدُهُمَا اَوْ
كُلُّهُمَا فَلَا تَقُلْ لَّهُمَا اٰفٍ وَلَا تَنْهَرْهُمَا وَقُلْ لَّهُمَا
قَوْلًا كَرِيْمًا ㉒

注 11 神の賜物には二種類ある。(1)イスラム教徒、ユダヤ人、ヒンズー教徒、その他を問わず、あらゆる種類の人々の善行と努力が、その程度に応じ身を結ぶ結果としての一般的な賜物、(2)精神的事柄のみに限られ、神の真実の下僕のみにも与えられ、不信者には与えられない事のない特別の慈愛と救い。

注 12 この節より、行動の原則の説明が始まる。人はこの行動の原則を遵守する事で、自分達の組織の保全が出来、衰退と分裂から組織を安全に守る事が出来る。神の単一性を信ずる事が全ての美德が芽生える種とな

25. ^{しか}して、敬愛の情をこめ、柔順の翼を低く垂れ、かく云え、『主よ、彼等に慈悲を垂れ給え、幼い時彼等が我を^{いつく}慈しみ育てた如く』と。(注13)
26. もしお前たち^{ただ}義しからば、主はお前たちの心中を熟知し給う。げに彼は、悔い改めて帰順する者には寛大にまします。
27. それから、親族にはやるべきものはやるべし、また貧者や^{たびびと}旅人にも。但しむやみに浪費するなかれ。
28. 浪費家は^{サタン}悪魔の同胞なり。^{サタン}悪魔は主に対し恩知らずなり。(注14)
29. なれど、主の恵みを汝が求むるが故に、汝がもし彼等から顔をそむけざるを得ない場合でも、少くとも優しい言葉で彼等に語れ。(注15)

وَأَخْفِضْ لَهُمَا جَنَاحَ الذُّلِّ مِنَ الرَّحْمَةِ وَقُلْ رَبِّ ارْحَمْهُمَا كَمَا رَبَّيْنِي صَغِيرًا ⑮

رَبُّكُمْ أَعْلَمُ بِمَا فِي أَنْفُسِكُمْ إِنْ تَكُونُوا صَادِقِينَ فَإِنَّهُ كَانَ لِلْأَوَّابِينَ غَفُورًا ⑯

وَأَبِذْ الْقُرْبَى حَقَّهُ وَالْيَسِيرَ وَالْإِسْكِينَ وَابْنَ السَّبِيلِ وَلَا تُبَذِّرْ تَبْذِيرًا ⑰

إِنَّ الْبُذْرَ رَيْنٌ كَانُوا إِخْوَانَ الشَّيْطَانِ وَكَانَ الشَّيْطَانُ لِرَبِّهِ كَفُورًا ⑱

وَمَا تَعْرِضْنَ عَنْهُمْ أَبْغَاءَ رَحْمَةٍ مِنْ رَبِّكَ تَرْجُوهُمَا فَقُلْ لَهُمْ قَوْلًا مَيْسُورًا ⑲

り、その信心がなければ、全ての罪がはびこる。神の唯一性を信じることは、信仰の中心であり、またシルク（唯一の神以外に他のものを崇拜すること）を非難することも、信仰の中心となっている。なぜならば、唯一性を信じることは全ての善のもとになり、シルクは全ての罪の根であるからである。この原則は、自然の法則と律法の法則両者の基盤と礎となる。また、律法の全ての法則が神の唯一性への信仰を基としているという現実あまりにも明白なので、説明も必要としないが、自然界の法則や全ての科学の発達も、全てこの信念に起因している。何故なら、もし神が複数で存在するのなら、自然の法則も一つではなくなるからである。全ての科学上の発明や発見は、秩序ある一定の変わる事のないシステムが全宇宙を支配するという信念に従っている為、一つの一定で一条乱れぬ自然界の法則が欠除しては、全ての科学的発展が終結してしまうのである。この節の表わす第2の重要な戒律は、人間の道徳行動に関してである。つまり、人間の自分の親に対する義務が道徳的行為の最も重要な部分を形成するものであり、これは何故なら自分の神への関心を一番最初に向けさせてくれるのが両親であり、両親が鏡となって神の美德をうつしてくれるからである。神の美德を具体的に人間の例を出して説明しようとするなら、両親の例が一番ふさわしいであろう。しかし、神に関する態度には、不可能であっても、両親の場合は可能であることがある。たとえば、神の恩恵にお返しをする事は不可能であるから、人は少なくともシルクから遠ざかる事を心がけるべきであると教えられるが、両親の場合は、与えてくれた愛と思いやりに報いることがほとんど可能なのである。

注13 美しい直喩を用いてこの節では、両親への思いやりが教えこまれている。親の愛は報いる事の出来ぬ程深いものである為、この返せぬ分は祈りが補ってくれる。祈りには、年老いた両親は、自分達が子供の時、親にしてもらったのと同じ様に、心を配って愛情豊かに接する様との思いがこめられている。

注14 神から与えられた賜物を正しく使わない人間は神からうとまれる。そして自分の富を浪費し、正しく富を使わねばならないという責任をさけようとする者も同様である。

注15 見た所は慈悲を与えた方が良さそうにみえるともそれを与えると逆効果となる場合もある。例えば、乞食を職業としたり、金をよくない使い道に費やす悪い習慣からぬけられない者達がそうである。そういう人々には金を与えるよりもはげましの言葉をかける方が救いとなるのだ。

30. 汝の手を己れの頸に縛りつけるなかれ。さりとて金く手を差し伸べ放題にするなかれ、非難されたあげく無一文にならぬためにも。(注16)

31. 主は己れの欲する者にその給養を豊かにし、また己れの欲する者に之を制限す。げに彼は己れの僕等を知悉し、すっかり見透し給う。

第四項

32. 貧困を恐れて自分の子女を殺すなかれ。(注17) 子女たちもお前たちも、養うはわれらなり。げに子女を殺すは大罪なり。(注18)

33. また、姦通を斥けよ。そは醜惡なり、罪惡なり。(注19)

34. 而して、正当な理由なしにアッラーが禁じたる者を殺すなかれ。何人にせよ不当に殺害されたる場合は、その相続人にわれらは報復の権利を認めたり。然れども、その報復殺害は規定された限度を越えるなかれ、なんとなれば、法によって擁護されるが故に。

وَلَا تَجْعَلْ يَدَكَ مَغْلُولَةً إِلَىٰ عُنُقِكَ وَلَا تَبْسُطْهَا
كُلَّ الْبَسِطِ فَتَقْعُدَ مَلُومًا مَّحْسُورًا ﴿٣٠﴾

إِنَّ رَبَّكَ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَن يَشَاءُ وَيَقْدِرُ ۚ إِنَّهُ
بِجَ كَانَ يَعْبَادُهُ خَبِيرًا بِصِيرًا ﴿٣١﴾

وَلَا تَقْتُلُوا أَوْلَادَكُمْ خَشْيَةً إِمَّا يَكُنْ لَّكُمْ نَرَضٌ
وَأَيُّكُمْ لَأَن تَقْتُلَهُمْ كَانَ خَطَاً كَبِيرًا ﴿٣٢﴾

وَلَا تَقْرَبُوا الزَّوْجَ إِنَّهُ كَانَ فَاحِشَةً وَسَاءَ سَبِيلًا ﴿٣٣﴾

وَلَا تَقْتُلُوا النَّفْسَ الَّتِي حَرَّمَ اللَّهُ إِلَّا بِالْحَقِّ وَمَن
قَتَلَ مَظْلُومًا فَقَدْ جَعَلْنَا لَوِائِهِ سُلْطَانًا ۚ لَا يَشْرَفُ
فِي الْقَتْلِ إِنَّهُ كَانَ مَنْصُورًا ﴿٣٤﴾

注16 真の必要があつての施しを惜しんだり、無分別に浪費してはならない。富を浪費してしまった結果、本当に寄附が必要となる時に施しができなくなってしまうからだ。

注17 子供に対し適切な教育や食事そして衣類を与えぬしめられた(欲深な)親達は、実質的には子供達に肉体的且つ精神的な死を与えているに等しい。心のこもった教育や、本来あるべき状態になる機会を与えられたら、社会の有用な構成員になり得る一罪もない子供達を“まっ殺してしまう”を、この節では強く非難している。子供を殺す事とは又、近頃世間で奨励されている、不必要で問題の多い、受胎調節の事をも意味している。

注18 ここでは大罪を用い、子供を殺すという事は、人間の本質が不快を感じ、ひるみをおぼえ、人間の感情を持たぬ者だけが出来る事であるという事を主張している。

注19 子供を殺す事を禁じた戒律に続くのは、それと同じ位重い姦淫についての戒告である。姦淫は、色々な形で数えきれぬ程の子供を死なせてしまうという意味に於て、重要な戒律なのである。聖書の“汝、姦淫するなかれ”と違い、クルアーンではもっとはっきりと効果的でわかりやすい表現で“姦通を斥けよ”と言っている。クルアーンでは、姦淫の具体的行為を禁じ、とがめるのみならず、姦淫に通じる道を全て閉じようとしているのである。

35. 孤児が成年に達するまでは、その財産を殖やすのでなければ、之に手を触れるなかれ。而して契約を全うせよ。契約は必ず糾明せらるるべし。(注20)
36. お前たち量る場合は、枘目を十分に与え、また正確い天秤を以て量れ。その方が立派であり、結局は得となる。(注21)
37. 己れの知らざることに従うなかれ。げに耳、目、心一皆これ等は必ず釈明を求めらるるべし。(注22)
38. 横柄に地を歩むなかれ、なんととなれば、汝大地を引き裂く能わず、また山の高さにも達する能わず。(注23)
39. これ等すべては、汝の主から見れば、憎むべき罪惡なり。
40. こは主が汝に啓示せる知恵の一部なり。されば、如何なる他神もアッラーと偕に祀るなかれ、然らずば、呪われ、拒否されて、汝地獄に投げられん。
41. なんと！主は男子をお前たちに授け給い、自らは天使等の中より女子を採れりと云うか？お前たちはまことに罪深いことを云う。

وَلَا تَقْرَبُوا مَالَ الْيَتِيمِ إِلَّا بِالَّتِي هِيَ أَحْسَنُ حَتَّىٰ يَبْلُغَ أَشُدَّهُ وَأَوْفُوا بِالْعَهْدِ إِنَّ الْعَهْدَ كَانَ مَسْئُولًا ⑤

وَأَوْفُوا الْكَيْلَ إِذَا كِلْتُمْ وَزِنُوا بِالْقِسْطَاسِ الْمُسْتَقِيمِ ذَلِكَ خَيْرٌ وَأَحْسَنُ تَأْوِيلًا ⑥

وَلَا تَقْفُ مَا لَيْسَ لَكَ بِهِ عِلْمٌ إِنَّ السَّمْعَ وَالْبَصَرَ وَالْفُؤَادَ كُلُّ أُولَٰئِكَ كَانَ عَنْهُ مَسْئُولًا ⑦

وَلَا تَمْشِ فِي الْأَرْضِ مَرَحًا إِنَّكَ لَن تَخْرِقَ الْأَرْضَ وَلَن تَبْلُغَ الْجِبَالَ طُولًا ⑧

كُلُّ ذَلِكَ كَانَ سَيِّئُهُ عِنْدَ رَبِّكَ مَكْرُوهًا ⑨

ذَلِكَ وَمِمَّا أَوْحَىٰ إِلَيْكَ رَبُّكَ مِنَ الْحِكْمِ وَلَا تَجْعَلْ مَعَ اللَّهِ إِلَهًا آخَرَ فَتُنْفِلِي فِي جَهَنَّمَ مَوْلُودَاتٍ زَوَّارًا ⑩

أَفَأَصْفَكُمْ رَبُّكُمُ بِالْمِثْلِينَ وَاتَّخَذَ مِنَ الْمَلَائِكَةِ إِنَاثًا إِنَّكُمْ لَتَقُولُونَ قَوْلًا عَظِيمًا ⑪

注20 結果的には、殺人者と殺された者との二つの家族に孤児を残してしまう殺人の罪に関する法を、定めた後で、クルアーンでは孤児達の権利について指示を与えている。最も重要な点は、彼等の財産についてであり、ここでは義務という意味を表わす“契約”という言葉が孤児達の財産の世話をするという事は、そうする事で何の恩恵もないが、誠実にそして十分に履行すべき責任であり義務である事を強く訴える為に、使われている。

注21 商売を順調に運び、富を形成する秘訣は、商売上の取引きに於て、公正且つ誠実である事である。

注22 自然の順序でゆけば、“耳”“目”そして“心”による疑いの源をこの節では非難している。人の心に疑いが、生じるのは先ず耳を通してである。意地の悪い告げ口や噂で疑いが生じるのである。その次が目察する事である。人は他人の行動を見て誤解し、その動機や意図を疑ったりする。しかし一番忌むべきは、悪い噂の結果や、勝手な解釈をした他の人の行動が原因ではなく、病んだ自分自身の心が作りあげてしまう疑いの念である。(前述の節で言及されている)神聖にして犯すべからざる人間の生命や財産のみでなく、人間の名誉も、神聖にして犯すべからざるものであり、これを攻撃する事も責任を持って向かわねばならない。

注23 自分の業績を自慢したり、見せびらかしたりする事は、軽薄さを吹聴するのみならず、道徳的にも欠陥を生じさせる。何故なら、そういう態度は、既に自分の達成した業績に満足を感じるのみで、結果的にはその人の道徳的向上の妨げになるだけである。

第五項

42. われらは彼等を諭さんとして、クルアーンの中で真理をいろいろな方法で説明せり。されど、そはただ彼等の嫌悪を増したるにすぎず。(注24)
43. 云え、彼等が云う如く、彼と偕に他^{ともし}神^{あだしがみ}等があつたならば、偶像崇拜者どもは必ず玉座の主に抗する道を捜し求めん。
44. 清浄なるかな、彼は彼等が云うが如きものとは較べものにならぬ遙か高みにおわします。
45. 七つの天も大地も、またその中にあるすべてのもので、彼の栄光を讃えざるはなし。然しながら、お前たちはそれ等の讃美の意味を解せず。げに彼は忍耐強く、寛大にまします。(注25)
46. 汝クルアーンを読誦するとき、われらは汝と、来世を信ぜぬ者との間に見えざる幕を垂らす。
47. 並びにわれらは、彼等にクルアーンを理解させないように、その心に覆いをかけ、耳も聞けなくす。されば、汝がクルアーンの中で主のことのみ語れば、彼等之を嫌ひ背を向けるなり。(注26)
48. われらは彼等が汝に耳傾ける時、彼等がどんなことを聞くのか、また、彼等が内証で協議する時、悪人どもは「お前たちはただ感かれた男に従っているにすぎず」と云うを熟知す。

وَلَقَدْ صَرَّفْنَا فِي هَذَا الْقُرْآنِ لِيَذَّكَّرُوا وَمَا يَزِيدُهُمْ إِلَّا نُفُورًا ﴿٢٤﴾

قُلْ لَوْ كَانَ مَعَهُ آلِهَةٌ كَمَا يَقُولُونَ إِذًا لَابْتَعُوا إِلَىٰ ذِي الْعَرْشِ سَبِيلًا ﴿٢٥﴾

سُبْحَنَهُ وَتَعَالَىٰ عَمَّا يَقُولُونَ عُلُوًّا كَبِيرًا ﴿٢٦﴾

تَسْبِيحٌ لَهُ السَّمَوَاتُ السَّبْعُ وَالْأَرْضُ وَمَنْ فِيهِنَّ وَإِنْ مِنْ شَيْءٍ إِلَّا إِلَّا يَسْبُحُ بِحَمْدِهِ وَلَكِنْ لَا تَفْقَهُونَ تَسْبِيحَهُمْ إِنَّهُ كَانَ حَلِيمًا غَفُورًا ﴿٢٧﴾

وَإِذَا قَرَأْتَ الْقُرْآنَ جَعَلْنَا بَيْنَكَ وَبَيْنَ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ حِجَابًا مَسْتُورًا ﴿٢٨﴾

وَجَعَلْنَا عَلَىٰ قُلُوبِهِمُ أَكِنَّةً أَنْ يَفْقَهُوهُ وَفِي آذَانِهِمْ وَقْرًا وَإِذَا ذُكِّرْتُ بِهِ فِي الْقُرْآنِ وَحْدَهُ وَلَوْ أَنَّا أَذَّبْنَاهُمْ نَفُورًا ﴿٢٩﴾

مَنْ أَعْلَمُ بِمَا يَسْتَمِعُونَ بِهِ إِذْ يَسْتَمِعُونَ إِلَيْكَ وَإِذْ هُمْ مُجَوِّمُونَ إِذْ يَقُولُ الظَّالِمُونَ إِنَّا تَعْبُونَ إِلَّا رَجَا مَسْخُورًا ﴿٣٠﴾

注24 重要な事柄全てを諭じなければならない經典では、時に応じ、主題にかかれる要点に立ち戻る事は、極く当り前で必要でもある。何度も言及するのは、その事柄につき、新しい角度からとらえてみたり、新しい反論を論破したりする為であり、その目的で反復すると正常な神経を有する教養ある人ならそれに対し異議を唱える事はできないのである。

注25 「七つの天と大地もまたその中にあるすべてのものは、神を讃える」という語句は、全宇宙が神の唯一性に関わりを持つという事を、又「神の栄光を讃えざるはなし」の語句は、全ての事物は神の存在の寛大さに、それぞれ各々に係り合っているという事を意味している。

注26 心の覆いとは、悪意やねたみ、まちがった優越感や人種的偏見、社会的地位や収入の喪失に対して心を被う事、或いは、不信者が真実を受け入れるのを拒む為に、強く都合よく信じてきた古い習慣や信仰への心の覆いを指す。

49. 見よ、彼等が如何に数々の譬えを汝に向つて並べ立てるかを。しかし、結局迷えるなり。されば、道を見出すこと^{あなた}能わず。

اَنْظُرْ كَيْفَ هَمُّوْا لَكَ الْاَمْثَالَ فَضَلُّوْا لَا يَسْتَطِيعُوْنَ
سَبِيْلًا ④

50. 彼等は云う、「我等が骨となり、粉々の粒子となり果てた後、また新しく生まれかえるとな?」と。

وَقَالُوْا اِذَا كُنَّا عِظَامًا وَرُفَاتًا ؕ اِنَّا لَكَبُوْعُوْنَ
خَلْقًا جَدِيْدًا ⑤

51. 云え、「汝等石なりとも鉄なりとも、

قُلْ كُنُوْا حِجَارَةً اَوْ حَدِيْدًا ⑥

52. はたまた、お前たちが思う一番堅い如何なる物質になろうとも、お前たちは甦らしめらるべし」と。すると、彼等は問わん、「我等を生き返らすは誰ぞ?」と。云え、「そはお前たちを最初に創り給うた御方なり」と。彼等頭を振りて更に問わん、「それは何時起るや?」と。云え、「恐らく、近からん、(注27)

اَوْ خَلْقًا مِّمَّا يَكْبُرُ فِيْ صُدُوْرِكُمْ فَسَيَقُوْلُوْنَ
مَنْ يُحْيِيْنَا قُلِ الَّذِيْ فَطَرَكُمْ اَوَّلَ مَرَّةٍ
فَسَيُنْخِضُوْنَ اِلَيْكَ رُءُوسُهُمْ وَيَقُوْلُوْنَ مَتٰى
هُوَ قُلْ عَسٰى اَنْ يَكُوْنَ قَرِيْبًا ⑦

53. 彼がお前たちを喚び出し、お前たちがそれに応えて彼を讃美し奉るその日は。而して、お前たちは、墓中にとどまりたるは暫しの間にすぎずと思うらむ」と。

يَّيْمَرُ يَدْعُوْكُمْ فَتَسْتَجِيْبُوْنَ بِحَمْدِهِ وَتَظُنُّوْنَ اِنْ
لَّيْسَ لَكُمْ اِلَّا قَلِيْلًا ⑧

第六項

54. わが僕等に告げよ、常に丁寧^{ワッタン}に語りかけよ。たしかに、悪魔^{シャイطن}というものは人々の間に仲たがいを扇動す。げに悪魔は人間にとって公然の敵なり。

وَقُلْ لِّعِبَادِيْ يَقُوْلُوا الَّذِيْ هِيَ اَحْسَنُ اِنَّ الشَّيْطٰنَ
يَنْزِعُ بَيْنَهُمْ اِنَّ الشَّيْطٰنَ كَانَ لِلْاِنْسَانِ عَدُوًّا
مُّبِيْنًا ⑨

55. お前たちを一番よく御存知なのは、お前たちの主なり。彼もし欲しなば、慈悲をお前たちに垂れ、また欲しなば、お前たちを罰しめしよ。而して、われらはあの者どもの番人たるべく汝を遣わしたに非ず。

رَبُّكُمْ اَعْلَمُ بِكُمْ اِنْ يَشَآءْ يَرْحَمْكُمْ اَوْ اِنْ يَشَآءْ
يُعَذِّبْكُمْ وَمَا اَرْسَلْنَاكَ عَلَيْهِمْ وَكِيْلًا ⑩

注27 この節は二通りに解釈できる。先ず不信者に対し、彼等の心が鉄や石、或いはその他の似た様な物質の如くかたくなになろうとも、神は聖なる預言者を通してもたらそうとなさった、全体的な変革を彼等にも、もたらそうと思っていらっしゃるという解釈。そしてもう一つは、前節で述べられた、復活についての彼等の疑いに対して答えるという形で、彼等が、鉄や石、或いはその他の物質に形を変えても、神の懲罰は免れ得ないと言っているという解釈である。

56. 汝の主は、天地間のすべてのものをよく知り給う。またわれらは預言者の或る者を他よりも賞揚し、ダビデに詩篇を授けたり。

وَرَبُّكَ أَعْلَمُ بِسَنَ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَلَقَدْ
فَضَّلْنَا بَعْضَ النَّبِيِّينَ عَلَى بَعْضٍ وَأَيَّدْنَا دَاوُدَ
ذُبُورًا ⑤

57. 云え、「アッラー以外にお前たちが神々と信じている者に訴えよ。されば、お前たちは、彼等がお前たちの災難を除き、またそれを転ずる力もないことを思い知らん」と。

قُلْ ادْعُوا الَّذِينَ زَعَمْتُمْ مِنْ دُونِهِ فَلَا يَمْلِكُونَ
كُشْفَ الضَّرِّ عَنْكُمْ وَلَا تَحْوِيلًا ⑥

58. 彼等が拝んでいる者どもも自身、主に近づかんことを望む一たといお側近く伺候している者たちですら—アッラーの慈悲を期待し、その懲罰を恐る。げに恐るべきは、汝の主の懲罰なり。(注 28)

أُولَئِكَ الَّذِينَ يَدْعُونَ يَبْتَغُونَ إِلَى رَبِّهِمُ الْوَسِيلَةَ
أَيُّهُمْ أَقْرَبُ وَيَرْجُونَ رَحْمَتَهُ وَيَخَافُونَ عَذَابَهُ
إِنَّ عَذَابَ رَبِّكَ كَانَ هَدُورًا ⑦

59. 如何なる都でも、われらは復活の日の来る前に之を滅ばし、または厳しい懲罰を加えん。此の事は經典の中に銘記せらる。(注 29)

وَأَنَّ مِنْ قَرِيبَةٍ إِلَّا نَحْنُ مُهْلِكُوهَا تَبْلُ يَوْمَ الْقِيَامَةِ
أَوْ مُعَذِّبُوهَا عَذَابًا شَدِيدًا كَانَ ذَلِكَ فِي الْكِتَابِ
مَسْطُورًا ⑧

60. 奇蹟を降すにわれらの妨げとなるものは何もし。ただし、往古の民が之を認めざりき。されど、此の事は妨害とはならず。われらはサムードの民に明白な神兆として牝駱駝を与えたり、しかるに彼等は不当にも之を虐げたり。われらは警告のためにのみ奇蹟を降す。(注 30)

وَمَا مَنَعَنَا أَنْ نُرْسِلَ بِالْآيَاتِ إِلَّا أَنْ كَذَّبَ بِهَا
الْأَوَّلُونَ وَآتَيْنَا ثَمُودَ النَّاقَةَ مُبْصِرَةً فَظَلَمُوا
بِهَا وَمَا نُرْسِلُ بِالْآيَاتِ إِلَّا تَخْوِيفًا ⑨

61. われらがかつて、汝に向つて、「げに、主は人間をとり囲み給う」と云いし時のことを思い起せ。われらが汝に見せたる幻は、クルアーンに記されたあの呪われた樹と同じく、人間を試さんがためなり。われらは

وَأَذَلْنَا لَكَ إِنَّ رَبَّكَ أَحَاطَ بِالنَّاسِ وَمَا جَعَلْنَا
الرُّءْيَا الَّتِي أَرَى لَكَ إِلَّا فَتْنَةً لِّلنَّاسِ وَالشَّجَرَةَ
الْمَلْعُونَةَ فِي الْقُرْآنِ وَنَخَوِفُهُمْ مُنَادٍ يُبْدِيهِمْ

注 28 この節は、或る人々が神として礼拝する天使、預言者そして聖人達について言及している。

注 29 神の預言者達やクルアーンが予言した宇宙的な惨禍と一連の災害の前兆となる懲罰の事についての言及である。

注 30 以下の様にも解釈出来る。即ち、以前の人々が、預言者達の言を嘘だといった事が原因で、これ以上神のしるしを送られないというようなことがあろうか、つまり、それが、天よりのしるしを与えぬ理由にはなりえないという解釈となる。

彼等に継続して警告せんとするも、それは徒に彼等に大罪を増さしめるばかりなり。
(注 31)

إِلَّا طُغْيَانًا كَبِيرًا ۖ

第七項

62. われらが、天使たちに、「アダムに対して平伏せよ」と命じた時のことを思い起せ。イブリースの外は彼等みな平伏せり。イブリースは「汝が泥にて創れしものに対して、我いかで拝伏すべきや？」と云えり。

وَإِذْ قُلْنَا لِلْمَلَائِكَةِ اسْجُدُوا لِآدَمَ فَسَجَدُوا إِلَّا إِبْلِيسَ قَالَ مَا أَسْجُدُ لِمَنْ خَلَقْتُ طِينًا ۝

63. 更に彼は、「汝が我より上の者として礼遇したるは此の者なるか？ 汝もし復活の日まで我を猶予したまえば、我は必ずこの者の子孫を、わずかの者を除き、我が支配下にす」と云えり。(注 32)

قَالَ أَرَأَيْتَكَ هَذَا الَّذِي كَرَّمْتَ عَلَيَّ لَنْ أَخُوْتَنَ إِلَى يَوْمِ الْقِيَامَةِ لَأَحْنَنَنَّكَ دُرِّيَّتَهُ إِلَّا قَلِيلًا ۝

64. アッラーは云えり、「立ち去れ！ 何人にせよ汝に従う者は、必ず地獄を返報しようぞ——返報をたつぷりとな。

قَالَ اذْهَبْ فَمَنْ تَبِعَكَ مِنْهُمْ فَإِنَّ جَهَنَّمَ جَزَاءُكُمْ جَزَاءً مَوْفُورًا ۝

65. 而して、彼等の仲で誰でもいいから汝その声で誘惑し、汝の歩兵や騎兵を以て彼等を攻めたてよ。また、財宝と子女たちを頒ちて、彼等と約束を結べ」と。されど、悪魔の約束は、ただ彼等を欺くのみ。(注 33)

وَاسْتَفْزِرُ مِنْهُمْ ضَوْرًا وَأَجْلِبَ عَلَيْهِمْ بِخِيَلِكُمْ وَرَجَالِكُمْ وَشَأْنُكُمْ فِي الْأَمْوَالِ وَالْأَوْلَادِ وَعَدْلَهُمْ وَمَا يَعْلَمُ الشَّيْطَانُ إِلَّا عُرْوًا ۝

66. されど、わが僕等に対しては、げに汝は彼等の上に如何なる支配力も有せず。彼等の守護は汝の主のみでこと足りる。(注 34)

إِنَّ عِبَادِي لَيْسَ لَكَ عَلَيْهِمْ سُلْطَانٌ وَكَفَى بِرَبِّكَ وَكِيلًا ۝

注 31 これは当章の第二節で述べられた幻の事を言っている。この幻の中で、聖なる預言者は、ユダヤ人達のキブラ（祈りの方向）であるエルサレムの神殿で、他の全ての預言者達を率いて祈る自分自身を見た。この幻は、いつか将来に於て、これらの預言者達の信奉者達もイスラムの輪に加わるであろう事を暗示している。これが「主はすべての人間をとりかこみたまう」の語句の意味する事なのである。そして、イスラムが全体に浸透するのは、59 節に述べられた厄禍が世界的に始まりだした後なのである。

注 32 “復活”という言葉はここでは信者の信仰が完全なものとなりサタンが、その信者に対し何の影響も及ぼせなくなった時に、信者の誰でもが経験する霊的復活を指している。

注 33 この節では、悪魔の仲間達が、人に正しい道をふみはずさせるのに使う三つの方法を説明している。(1)貧しい人間や弱い人間を彼等に対する暴力の恐怖を持続させる事で威嚇する。(2)言葉での暴力への恐怖に負けない者達に対し徒党を組み、更にあくどいやり方で又計画的な攻撃をしかけ、あらゆる方法で、迫害、弾圧を行なう。(3)真実の大義を守る事を止めさえすれば、指導者にしてやると言って、力強く、影響力のある者達を誘惑する。

注 34 人は、精神的に“復活”し、信仰が確かなものとならない限り、サタンの誘惑に影響される。

67. お前たちの主は、お前たちのために海上を船で航行させ、お前たちに彼の恩恵を求めさせんとするお方なり。げに彼はお前たちに慈悲深くまします。

رَبُّكُمُ الَّذِي يُرِيكُمُ الْفَلَكَ فِي الْبَحْرِ لِتَبْتَغُوا مِنْ فَضْلِهِ إِنَّهُ كَانَ بِكُمْ رَحِيمًا ⑤

68. お前たち海で災難に遭うや、口頃お前たちが拝む神々はみな消え、独りアッラーいいますのみ。然るに、彼がお前たちを無事陸に届けてやれば、お前たちは忽ちよそを向く。人間という奴はまことに恩知らずな者なり。(注 35)

وَإِذَا مَسَّكُمُ الضُّرُّ فِي الْبَحْرِ ضَلَّ مَنْ تَدْعُونَ إِلَّا إِلَٰهَهُمْ فَلَمَّا نَجَّيْكُمْ إِلَى الْبَرِّ أَعْرَضْتُمْ وَكَانَ الْإِنْسَانُ كَفُورًا ⑥

69. お前たち、彼が、渚において、お前たちを沈めるとか、物凄い砂嵐を見舞わせることなし、と安心し得るか？ そうなつては、お前たち如何なる守護者も見つかりはせぬぞ。

أَفَأَمِنْتُمْ أَنْ يُخْصِفَ بِكُمْ جَانِبَ الْبَرِّ أَوْ يُرْسِلَ عَلَيْكُمْ حَاصِبًا ثُمَّ لَا تَجِدُوا لَكُمْ وَكِيلًا ⑦

70. それとも、彼が再びお前たちを海に連れ戻し、突風を見舞って、お前たちをその不信仰のために溺れさせることなし、と安心し得るか？ そうなりたる時は、お前たちのために、われらに刃向って助けてやろうという者など見つかりはせぬ。

أَمْ أَمِنْتُمْ أَنْ يُعِيدَ كُمْ فِيهِ تَارَةً أُخْرَى فَيُرْسِلَ عَلَيْكُمْ قَاصِفًا مِنَ الرِّيحِ فَيُغَرِّقَكُم بِمَا كُفَرْتُمْ ثُمَّ لَا تَجِدُوا لَكُمْ عَلَيْنَا بِهِ نَبِيًّا ⑧

71. げにわれらは、アダムの子孫を優遇し、(注 36) 彼等を陸や海に運び、(注 37) いろいろ結構な品々を与え、更に、われらが創りし多くの人々の上に彼等の身分を高めた。 (注 38)

وَلَقَدْ كَرَّمْنَا بَنِي آدَمَ وَحَمَلْنَهُمْ فِي الْبَرِّ وَالْبَحْرِ وَرَزَقْنَهُم مِّنَ الطَّيِّبَاتِ وَفَضَّلْنَاهُمْ عَلَى كَثِيرٍ مِّمَّنْ خَلَقْنَا تَفْضِيلًا ⑨

注 35 苦悩と困窮の中にいる時、飢虚になり神に祈り慎み深い生活を送る様にと誓うのが人間の本性である。

注 36 神はアダムの子等全てに同等にほまれを与えられ特定の民族や種族のみに特権を与えられた訳ではない。更に、発展と繁栄への道は誰にでも平等にひらかれており、海のみでなく陸にも同様に運ばれるのである。

注 37 クルアーン中に海に重点がおかれているのは珍しい。クルアーンがアラブ人達に与えられた經典であり、生涯を通して航海による旅を経験した事のない全てのアラブ人や聖なる預言者が、海路の旅路を強調する事はまず有り得ない事からクルアーンが聖なる預言者が書いたものではない事が解る。聖なる預言者は、海路の航海の多大な利点については知り得なかったのである。

注 38 人間であるという等級は、地上に於ける神の代理者という意味で他の全ての創造物に、まさっているのである。

第八項

72. 或る日、われらはすべての人間をその師導者と共に召集せん、そのことを忘れまいぞ。その日、右手に己れの記録を渡される者は—その記録を熱心に読み、且ついささかも不当に遇せらるることなかるべし。
(注 39)

يَوْمَ نَدْعُوا كُلَّ أُنَاسٍ بِإِمَامِهِمْ فَمَنْ أُوِّيَ كِتَابُهُ
بِمَعْنِيهِ فَأُولَئِكَ يَفْرَهُونَ كِتَابَهُمْ وَلَا يَطْلُبُونَ فِيهِ ③٩

73. 然しながら、此の世に於て盲目なる者は、来世に於いても盲目なるべし。而して、ますます正道から迷い去らん。(注 40)

وَمَنْ كَانَ فِي هَذِهِ أَعْمَى فَهُوَ فِي الْآخِرَةِ أَعْمَى وَأَضَلُّ
سَبِيلًا ④٠

74. 彼等は、われらが汝に啓示したことのために、汝にひどいしうちをし、危く汝に、われらに対抗して啓示したものとは別なものを捏造せしめんとせり。もしそうなりたる場合、彼等は汝を親友として遇したるべし。
(注 41)

وَأَن كَادُوا يَقْتُلُونَا الَّذِي آوَيْنَا إِلَيْكَ
لِنَقْرِضَ عَلَيْهِمَا غَيْرَهُ ④١ وَإِذَا لَاتُخَذُوكَ حِلِيلًا ④٢

75. もしわれらがクルアーンを以て汝を堅固たらしめざりせば、汝はいささか彼等に傾かんとしたるなり。(注 42)

وَلَوْلَا أَن تَبْتَغِيكَ لَفَدَّتْ وَرَكُنَ إِلَيْهِمْ شَيْئًا
قَلِيلًا ④٢

76. その場合は、われらは汝に此の世で重刑を、また死後に於ても重刑を味わさせんとす。もしそうなりたる場合、汝のために、われらに刃向って助けてやろうなどという者は何処にも見つかりはせぬ。

إِذَا لَاتُخَذُوكَ ضِعْفَ الْحَيَاةِ وَضِعْفَ الْمَمَاتِ تُؤْمَلَا
تُجَدُّ لَكَ عَلَيْكَ نَصِيرًا ④٣

注 39 左手は懲罰の、そして右手は祝福の象徴である。そして又、人の身体の右半分は、左に比べ筋力が強い為、或る種の優越性を帯びている。この節で述べられる人の行いの記録とは善い方の祝福された記録を意味する。右手はここでも強さと力を意味しており(69章46節)、右手に信者達が各々の記録を持つとは、力と決意をもつて美德を有する事を表わし、不信者達が左手に記録を持つという事は、必要とされる強さと熱意を持って美德への努力をしなかった事を表わしている。

注 40 現世で心の(精神の)眼を開いて物を見ない者は、来世でも精神的に物を見る目を持たないままである。クルアーンでは神のみ印をよく考えず、それを役立てない者は“盲目”であるとしている。こういう人々は来世でも精神的に“盲目”なのである。

注 41 不信者達は聖なる預言者を彼に啓示された教義が原因で、彼に強制的にそれを変えさせたり、クルアーンで体現されている教義以外を教義としようとしていたりして、聖なる預言者を非常に苦境に落とし入れようとした。これらの不信者の邪悪な計画や、それを実行した事が、彼等の全くの失敗であった事についてこの節では言及しているのである。

注 42 預言者の根本的性質は余りにも純粋であった為、クルアーンが彼に啓示されていなかったとしても、そして、神が彼に関して意図し給うた事を知らなかったとしても、預言者はシルク(唯一の神以外のものを崇拜すること)を行なう事に屈する事はほとんどありえなかったのである。。

77. げに彼等は、汝を国外に放逐せんとし、汝をこの地より正に追い払わんとせり。しかし、その場合は、彼等とて汝が去れる後、長くは留まり得ざりき。(注 43)

وَأَنْ كَادُوا لَيَسْتَفِزُّوكَ مِنَ الْأَرْضِ لِيُخْرِجُوكَ مِنْهَا وَإِذًا لَا يَبْكُونَ خَلْفَكَ إِلَّا قَلِيلًا ٤٣

78. 以上のことは、汝以前にわれらが使徒たちと共に降せしわれらの遣りかたなり。されば汝、われらの遣り方には如何なる変更もなきことを悟るべし。

سُنَّةَ مَنْ قَدْ أَرْسَلْنَا قَبْلَكَ مِنْ رُسُلِنَا وَلَا تَجِدُ لِسُنَّتِنَا تَحْوِيلًا ٤٤

第九項

79. 太陽が傾き、薄暗くなったところから夜の暗闇に至るまで礼拝を行い、而して、黎明にクルアーンを読誦せよ。げに黎明のクルアーン読誦は、とりわけ神に御嘉納あらせられ給う。(注 44)

اقِمِ الصَّلَاةَ لِذِكْرِ الشَّمْسِ إِلَى غَسَقِ اللَّيْلِ وَقُرْآنَ الْفَجْرِ إِنَّ قُرْآنَ الْفَجْرِ كَانَ مَشْهُودًا ٤٥

80. また、汝、汝には規定外(注 45)の勤行としてクルアーンの読誦のために、深夜に起きよ。恐らく主は、汝を栄光ある地位に登らしめん。(注 46)

وَمِنَ اللَّيْلِ فَسَجُدْ لَهُ نُافِلَةً لَكَ يَبْتَغِيكَ رَبُّكَ مَقَامًا مَحْمُودًا ٤٦

81. 云え、「主よ、我に正しい入り方で入らせ、正しい出方で出し給え。而して、我になにぞお手ずからお手助けの力を授け給え」と。(注 47)

وَقُلْ رَبِّ ادْخُلْنِي مَدْخَلَ صِدْقٍ وَأَخْرِجْنِي مَخْرَجَ صِدْقٍ وَاجْعَلْ لِي مِنْ لَدُنْكَ سُلْطَانًا نَصِيرًا ٤٧

注 43 聖なる預言者の敵達は、彼がその信奉者達の間の尊厳を失ってしまう様に、法的追放の汚辱にまみれさせようとした。しかし神自身が、彼にメッカを去る様にと命ぜられた為、メッカの市民権を失う事も含めた汚辱から、聖なる預言者は救われたのである。

注 44 この節では、イスラムの5回の日々の祈りの時間について説明している。‘太陽が傾き’とは午後の祈り、夕方の祈り、そして日没の祈りの三つの意味を持つ、‘夜の暗闇’という表現には日没時の祈りも含まれるが、特に夜の祈りを意味し、‘黎明の’という語句は、朝の祈りの時間を示している。

注 45 本文中に与えられた意味に加えナ・フィアとは特別の恩恵との意味を持ち、祈りは肉体に負担をかけるものではなく、神からの特典と特別の恩恵である事を教えている。

注 46 イスラムの聖なる預言者程、ひどいそりをうけ悪口をいわれた人はおそらく他に類をみないであろうし、彼程、神の賞讃をうけ、多くの神の祝福と恩恵の対象となった人もいないといえる。夜の静けさの中では、タハッジュードの祈りが信ずる者の精神的な意気の高まりに最も似合い、創造主と共にただ一人、神との特別な霊的交わりをかわすのである。

注 47 祈りと嘆願がかなえられ聖なる預言者はこの節で聖なる礼拝堂から遠隔の礼拝堂まで夜の間に、その僕を連れて旅したもうたお方に栄光あれ(17章2節)の語句で為された預言の成就として、メディナへ連れていかれる福音を授けられた。この預言の成就を予期し、彼は今住んでいるメッカからの脱出とメディナへの入場がまぎれもなく祝福されたものである事を祈るよう命ぜられた。

82. 而して、宣言せよ、「真理は降り、虚偽は消滅せり。げに虚偽は消滅する定めなり」と。

وَقُلْ جَاءَ الْحَقُّ وَزَهَقَ الْبَاطِلُ إِنَّ الْبَاطِلَ كَانَ زَهُوقًا ٨٢

83. われらが少しずつ降すクルアーンは、信者にとっては治療であり慈悲なれど、そはただ不義な徒輩の損を増すばかりなり。

وَنُزِّلُ مِنَ الْقُرْآنِ مَا هُوَ شِفَاءٌ وَرَحْمَةٌ لِّلْمُؤْمِنِينَ وَلَا يَزِيدُ الظَّالِمِينَ إِلَّا خَسَارًا ٨٣

84. われら人に恩恵を施すや、彼は顔をそむけて遠ざかり、而して災難に見舞われれば、彼は忽ち絶望す。

وَإِذَا أَنشَأْنَا عَلَى الْإِنْسَانِ أَعْرَاضًا وَنَا بِجَانِبِهِ وَإِذَا مَسَّهُ الشَّرُّ كَانَ يَئُوسًا ٨٤

85. 云え、「人はだれでも己が流儀に従って行動す。されど、主は、一番正しく導かれたる者は誰なるかを熟知し給う」と。

قُلْ كُلٌّ يَجْعَلُ عَلَى شَاكِلَتِهِ فَرِيضَةً فَأَلْهَمَ بَيْنَهُمُ الْهُدَىٰ سَبِيلًا ٨٥

第十項

86. 彼等は汝に、霊について問う。云え、「霊は主の命により創られり。お前たちがこの件に関して授かりし知識は、些少なものとすぎず」と。(注48)

وَيَسْأَلُونَكَ عَنِ الرُّوحِ قُلِ الرُّوحُ مِنْ أَمْرِ رَبِّي وَمَا أُوتِيتُمْ مِنَ الْعِلْمِ إِلَّا قَلِيلًا ٨٦

87. もしわれら欲さば、われらは汝に啓示せしものを取り去ることも可能なり。然る時は汝、汝のためにわれらに刃向う如何なる守護者も見出せまいぞ、(注49)

وَلَيْن شِئْنَا لَنذْهَبْنَ بِاللَّيْلِ أَوْحِينَآ إِلَيْكَ ثُمَّ لَا تَجِدُ لَكَ بِهِ عَلَيْنَا وَكِيلًا ٨٧

88. ただ主が慈悲を垂れる場合を除いて。実に、汝に対する主の恩寵は廣大無辺なり。

إِلَّا رَحْمَةً مِّن رَّبِّكَ إِنَّ فَضْلَهُ كَانَ عَلَيْكَ كَبِيرًا ٨٨

注 48 ユダヤ人達の精神的衰退と退廃の時期には、多くの近代の心靈主義者や見神論者、そしてヒンズー教のヨガ行者の様にオカルトが流行した。聖なる預言者の時代のメディナにいたユダヤ人達の中にもこの種の事をする者達があり、メッカの偶像崇拜者達が聖なる預言者を論駁する為オカルト信奉者達に助力を求めた時、彼等は、聖なる預言者に人間の魂について質問する様、メッカの偶像崇拜者達をそそのかした。クルアーンでは、魂は神の命令によりその力を得るのであり、魔術や心靈儀式で得たとされる神の命令以外の物は、全てまやかしてあるという意見を述べた節でこの問いかけに答えている。人間の魂の本質に関する質問を最初にメッカで聖なる預言者に問いかけたのはクライシュ族でアブトウラ・ビン・マスードによるとメディナでも、同様の質問をユダヤ人達にされたと言うことである。魂はここでは、神の直接の命令によって創られたものと説明されている。クルアーンでは、全ての創造は、以下に述べる二つのカテゴリーに分けられる。(1)先に創造された物質や事柄の助けを全く借りず、直接もたらされた創造 (2)即ち創造されている方法や事柄の助けをかりて、第二次的に生じた創造。前者の種類の創造はアムル(2章 118節参照)のカテゴリーに属し、後者はハルク(創造)(命令)として知られている。人間の魂は第一のカテゴリーに属する。

注 49 この節では地上からクルアーンの教えが消え去る時が来るという預言を暗示している様に思われる。クルアーンの精神や核心が地上より姿を消し、その他の教義の、ユダヤを原型とする、超自然の力を持つ、その時代にはスフィといわれたいわゆる秘法などは、関係者の努力で全部が全部消滅してしまう訳ではないが、どちらにしてもそういった時が来るであろうという聖なる預言者の似通った預言が伝えられている。

89. 云え、「たとい人間と妖霊が力を合わせ、互に助け合って、此のクルアーンに似たものを作らんとしても、彼等は断じて之に類するものを作るを得ず」と。(注50)

قُلْ لَّيِّنَ اجْتَمَعَتِ الْإِنْسُ وَالْجِنَّ عَلَىٰ أَنْ يَأْتُوا بِمِثْلِ هَذَا الْقُرْآنِ لَا يَأْتُونَ بِمِثْلِهِ وَلَوْ كَانَ بَعْضُهُمْ لِبَعْضٍ

ظُهُورًا ﴿٨٩﴾

90. げにわれらは此のクルアーンの中で、一切の比喩をあげ、いろいろな遣りかたで人間に解明したけれど、大多数の人間は不信仰ゆえに一切を拒否せり。(注51)

وَلَقَدْ صَرَّفْنَا لِلنَّاسِ فِي هَذَا الْقُرْآنِ مِنْ كُلِّ مَثَلٍ فَأَلَّىٰ أَكْثَرُ النَّاسِ إِلَّا كُفُورًا ﴿٩٠﴾

91. 而して、彼等は云う、「我等は汝が大地より泉を噴き出させて見せてくれるまでは、絶対に汝を信ぜず」。

وَقَالُوا لَنْ نُؤْمِنَ بِكَ حَتَّىٰ تُفْعِّرَ لَنَا مِنَ الْأَرْضِ يَنْبُوعًا ﴿٩١﴾

92. 或いは、汝が棗椰子園や葡萄園を持ち、その中に幾すじもの豊かに流れる川を生じせしめるまでは。(注52)

أَوْ تَكُونُ لَكَ جَنَّةٌ مِّنْ تَحْيِيلٍ وَعِنَبٌ فَتُفَجِّرَ الْأَنْهَارَ خِلَالَهَا تَفْجِيرًا ﴿٩٢﴾

93. 或いは汝が主張する如く、汝が大空をばらばらにして我等の頭上に落して見せるまでは。それとも、アッラーと天使たちを我等が面前に伴い来るまでは。

أَوْ تَسْقِطَ السَّمَاءَ كَمَا زَعَمْتَ عَلَيْنَا كِسْفًا أَوْ تَأْتِي بِنَا إِلَهِ وَالْمَلِكَةِ قَبِيلًا ﴿٩٣﴾

94. 或いは汝が黄金の家を持つか、昇天して見せるまでは。我等は、我等が読み得るような經典を持って降るに非ざれば、断じて汝の昇天を信ぜず」と。云え、「我が主に讃えあれ！我はただが使者として遣わされた一個の人間にすぎざるに非ずや」と。(注53)

أَوْ يَكُونُ لَكَ بَيْتٌ مِّنْ ذُرْهِفٍ أَوْ تَرْتَفِ فِي السَّمَاءِ وَلَنْ نُؤْمِنَ بِرُقَيْتِكَ حَتَّىٰ تُنْزِلَ عَلَيْنَا كِتَابًا تُقْرَأُ قُلْ سُبْحَانَ رَبِّيَ هَلْ كُنْتُ إِلَّا بَشَرًا رَسُولًا ﴿٩٤﴾

注50 ここでは、その霊能力を得る対象である、やみに隠れた霊を呼び出し、助力を願うというオカルト儀式にふける者達に対する挑戦が為されている。挑戦は聖なるクルアーンの神の起源 (origin) (聖なる源) を否定する全ての人々に対し、為されているのである。

注51 人間の能力には限りがある為、人は、どんなにがんばっても、限られた数の問題しか解決できない。しかしクルアーンは人間の道徳や精神的発展に関するあらゆる事柄を今までに処理してきているのである。

注52 メッカの人々が、自分達の質問や反対に対してクルアーンの答えに戸惑った時、彼等は聖なる預言者に向き直り、'もしクルアーンが全ての知識に精通しているのなら、聖なる預言者は地から泉を湧かせたり、庭園を造り出したり、自分用に金で出来た家を建てるといった奇跡が行えるはずだ。'とつめよった。

注53 不信者達の思慮分別のない要求に対しこれらの要求は神或いは預言者のいずれかについての事であるとの答が出され、第一のカテゴリーの要求は、その性格に於て軽兆浮薄であり、神はそういった法外さの及ばぬ所にましますので論外であり、聖なる預言者に関しての要求については、彼は人間である為能力は限られており、一方神の預言者であるという使命を有する為、相矛盾してしまうという事になる。

第十一項

95. 嚮導^{きやうどう}が彼等に降^{くだ}された時、「アッラーは使者として我等と同じ人間を遣わしたるか？」と彼等が云いしことを除けば、人々に信仰を妨げるものは何ものなかりき。
96. 云え、「もし地上を悠々として歩き廻っているのが天使たちなら、われらは確かに天から天使を使者として遣わせり」と。(注54)
97. 云え、「我とお前たちのことは、アッラーの証言で十分なり。げにアッラーはその僕等^{しもべ}を知り尽くし、よくみそなわし給う」と。
98. アッラーが導く者のみが、正しい道^{ただ}を辿る。されどアッラーが迷わしむる者は、汝はアッラー以外にその者どもには助け手がな^{しか}いことを知るべし。而して、復活^{めくろ}の日に、われらは彼等をうつ伏せにし、盲にし、啞^{おし}にし、聾^{ぶんば}にして召し寄せん。彼等の住居は地獄なり。火勢が衰えるたびに、われらは彼等のために火炎を加うべし。(注55)
99. こは、彼等がわれらの神^{しるし}兆^{めくろ}を拒否し、「何んとな！我等が死んで骨と塵埃^{ちりあくた}に帰したる後、再び新たな被造物として生き返ると云うか？」などと云いしが故の報いなり。(注56)
100. 彼等は、天地^{あめつち}を創造し給うたアッラーが、また彼等の如き者を創る力を有することを知らざりしか？されば、彼は、彼等のために疑うべからざる期限を定めたり。然れど

وَمَا مَنَعَ النَّاسَ أَنْ يُؤْمِنُوا إِذْ جَاءَهُمُ الْهُدَىٰ
إِلَّا أَنْ قَالُوا إِنَّمَا نَشْرَا نَسْلًا ۖ (٩٥)

قُلْ لَوْ كَانَ فِي الْأَرْضِ مَلَائِكَةٌ يُمْشُونَ مُطْبِعِينَ
لَنَلَّزْنَا عَنْهُمْ مِنَ السَّمَاءِ مَلَكًا رَسُولًا ﴿٩٦﴾

قُلْ كَفَىٰ بِاللَّهِ شَهِيدًا بَيْنِي وَبَيْنَكُمْ إِنَّهُ كَانَ
بِعِبَادِهِ خَبِيرًا بَصِيرًا ﴿٩٤﴾

وَمَنْ يَهْدِ اللَّهُ فَهُوَ الْمُهْتَدِ وَمَنْ يُضِلْ فَلَنْ
تَجِدَ لَهُمْ أَوْلِيَاءَ مِنْ دُونِهِ وَنَحْنُ لَهُمْ
الْقِيَمَةُ عَلَىٰ وَجْهِهِمْ عَمِيََا وَبُكَمًا وَصَمًا مَا لَهُمْ
بِحَبَّتِمْ كَلَمًا حَبَّتْ زُرَّتُهُمْ سَعِيرًا ﴿٩٨﴾

ذَلِكَ جَزَاؤُهُمْ بِإِثْمِهِمْ كَفَرُوا بِآيَاتِنَا وَقَالُوا إِذَا
كُنَّا عِظَامًا وَرُفَاتًا إِنَّا لَبَعُوثُونَ خَلَقًا جَدِيدًا ﴿٩٩﴾

أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّ اللَّهَ الَّذِي خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ
قَادِرٌ عَلَى أَنْ يَخْلُقَ مِثْلَهُمْ وَجَعَلَ لَهُمْ أَجَلًا لَا

注 54 この節には以下の二つの意味が考えられる。(a)天使達は天使の様な人間の上に降臨し、彼等に反対する者達には降臨しない。そして反対する者達も生活面で天使の様なになれば、天使が降臨する。(b)同種類の生き者のみが、互いの模範となりうる。故に、人間以外は、他の人間のひな型とはなり得ぬ為、人類に対する神の伝言を帯びる者は人間でしかあり得ない。

注 55 長い間、炎に焼かれて不信者達の意識が薄れると、神は再び彼等の意識を日覚めさせ以前と同じ位、厳しく焼かれる苦痛を感じさせるのである。

注 56　米世を否定した結果が、実際には、信仰と真実の拒否となるのである。そしてこの事が、クルアーンが多大な重点を死後の世界におき、全ての重要な問題点を何度も折にふれ、死後の世界に帰するのである。

も、不義なす徒輩は一切を拒否し、背信を
つものらせるばかりなり。

101. 云え、「たといお前たち、主の無限の財宝
を掌中にしても、お前たちは費すことを恐
れて之を隠さん。人間とは吝嗇なり」と。

第十二項

102. 実はわれらは、モーゼに九つの明証を授
けたり。されば、イスラエルの子孫にこの
事を問え。モーゼが彼等に来るや、ファラ
オは彼に対して云えり、「モーゼよ、我は汝
を憑かれた者とみなす」と。(注57)

103. モーゼは云えり、「これ等の奇蹟を明証と
して降したるは、外でもない、天地の主な
ることは汝もよく知ること。ファラオよ、
思うに、汝は滅びる運命たるべし」と。

104. そこで、ファラオは、彼等を国外に追放
せんとせり。されど、われらは、ファラオ
並びに彼の仲間を悉く溺れしめたり。

105. 而して、その後、われらはイスラエルの
子孫に云えり、「汝等この地に住め。されど、
後世になって、約束の時至れば、われらは
お前たちすべてをさまざまなる民族から連
れ戻さん」と。(注58)

106. われらはこれを真理を以て降したれば、
これは真理によって降れり。而して、われ
らが汝を遣わしたるは、ただ朗報を伝え、
警告を与えるためにすぎず。

رَبِّ فِيهِ فَأَبَى الظَّالِمُونَ إِلَّا كُفُورًا ①

قُلْ لَوْ أَنْتُمْ تَعْلَمُونَ خَزَائِنَ رَحْمَةِ رَبِّي إِذَا أَنفَكْتُمْ
خَشْيَةَ الْإِنْفَاقِ وَكَانَ الْإِنْسَانُ قَتُورًا ②

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى تِسْعَ آيَاتٍ فَتَنَّا بَنِي إِسْرَءِيلَ
إِذْ جَاءَهُمْ فَقَالَ لَهُ فِرْعَوْنُ إِنِّي لَأَظُنُّكَ يُبُوسِي
مَسْجُورًا ③

قَالَ لَقَدْ عَلِمْتَ مَا أَنزَلَ هَؤُلَاءِ إِلَّا رَبُّ السَّمَوَاتِ
وَالْأَرْضِ بِصَآئِرٍ وَإِنِّي لَأَظُنُّكَ يُفْرَعُونَ مُبُورًا ④
فَأَرَادَ أَنْ يَنْتَفِعَهُمْ مِنَ الْأَرْضِ فَأَغْرَقْنَاهُ وَمَنْ
مَعَهُ جَمِيعًا ⑤

وَقُلْنَا مِنْ بَعْدِهِ لِبَنِي إِسْرَءِيلَ اسْكُنُوا الْأَرْضَ
فَإِذَا جَاءَ وَعْدُ الْآخِرَةِ جِئْنَا بِكُمْ لَفِيفًا ⑥

وَبِالْحَقِّ أَنزَلْنَاهُ وَبِالْحَقِّ نَزَلَ وَمَا أَرْسَلْنَاكَ إِلَّا
مُبَشِّرًا وَنَذِيرًا ⑦

注57. クルアーンの他の箇所であれられている、これら九つの神兆とは (a)杖 (7章108節)、(b)白い手 (7章109節)、(c)、(d)ひでり及び果物が手に入らなくなる事 (7章13節)、(e)嵐、(f)いなご、(g)しらみの群れ、(h)かえるの群れ、そして(i)血の懲罰である (7章134節)。

注58. この節では、イスラム教徒にも、ユダヤ人の様に、2回の大災厄が訪れる事が暗示されている。第一の災厄はハラク・カーンの率いるタタル人の手にバグダッドが落ちた時に訪れた。そして第2の神の懲罰は末日に訪れる事がここでは語られている。丁度ユダヤ人達が第一番目の救世主であるイエス・キリストの時に神罰を受けた如く、約束されたメシアの時代の末日に於てイスラム教徒は神罰をうけるのである。そして「末日の約束」の成就を意味するこの第二の神罰で、ユダヤ人達は世界の各地から聖なる地に戻される事になっていた。この預言はバルフォア宣言の下にユダヤ人達がパレスチナにもどり、イスラムと呼ばれる国を建設した事で明白に成就されているのである。「末日の約束」は約束されたメシアの時代に於てはめられるのだ。

107. 而して、われらがクルアーンをばらばらに啓示せるは、汝がそれを人々に折々に読み聞かせるためなり。されば、われらは之を断片的に啓示せり。
108. 云え、「お前たち之を信ずるも、また信ぜざるも、これ以前に知識を授けられた者は、その読誦されるを聞くや、その面を伏して拝す」と。
109. 而して云う、「清浄なるかな主よ。ついに主の約束は果たされたり」と。
110. 彼等はその顔を地に伏して泣きぬ。そは彼等をますます謙虚ならしむ。(注 59)
111. 云え、「アッラーに祈れ、またはラフマーンに祈れ。お前たちが彼に祈る御名は、どちらを唱えても、つまり最高の美称は彼のものなり」と。礼拝は声高くなるなかれ、さりとて低く過ぎててもならぬ。その中頃に道を求めよ。
112. 而して云え、「讃えあれ、アッラー。子を持たざる御方、その王権を共に分つ者としてなく、またその欠陥の故に援助者を必要とすることなき御方」と。その偉大さを賞揚し、彼を讃美し奉れ。

وَقَرَأْنَا لَهُمْ آيَاتِنَا فَتَفَرَّقَ عَلَى النَّاسِ عَلَى مَكَثٍ
وَنَزَّلْنَاهُ تَنْزِيلًا ﴿١٠٧﴾

قُلْ أَمِنُوا بِهِ أَوْ لَا تُؤْمِنُوا إِنَّ الَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ
مِنْ قَبْلِهِ إِذَا يُتْلَى عَلَيْهِمْ يَخِرُّونَ لِلْآذِقَانِ
سُجَّدًا ﴿١٠٨﴾

وَيَقُولُونَ سُبْحَنَ رَبِّنَا إِن كَانَ وَعْدُ رَبِّنَا لَمَفْعُولًا ﴿١٠٩﴾

وَيَخِرُّونَ لِلْآذِقَانِ يَبْكُونَ وَيَرْبُّدُهُمْ خُشُوعًا ﴿١١٠﴾

قُلْ ادْعُوا اللَّهَ أَوْ ادْعُوا الرَّحْمَنَ أَيًّا مَا تَدْعُوا فَلَهُ الْأَسْمَاءُ
الْحُسْنَى وَلَا تَجْهَرُوا بِصَلَاتِكُمْ وَلَا تَخَافُوهَا وَ
ابْتَغِ بَيْنَ ذَلِكَ سَبِيلًا ﴿١١١﴾

وَقُلِ الْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي لَمْ يَتَّخِذْ وَلَدًا وَلَمْ يَكُنْ
لَهُ شَرِيكٌ فِي الْمُلْكِ وَلَمْ يَكُنْ لَهُ وِئَاتٌ مِنَ الدِّنَارِ
وَكِبَرُهُ تَكْبِيرًا ﴿١١٢﴾

注 59 この節では、平伏する時に、神の偉大さをそして自分自身の弱さをはっきり認識する事が人間の精神を謙虚にするというイスラム教徒の心の状態を表わしている。信者は平伏の姿勢でひれ伏すという命が包括されているこれらの節を誦じた後でひれ伏さなければならない。

سُورَةُ الْكَهْفِ مَكِّيَّةٌ

(18)

アル・カハフ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く、アッラーの御名において

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. すべての賞讃はアッラーのもの、彼こそはその僕に經典を降し、いささかもその中に不正を入れざりき。(注1)

الْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي أَنْزَلَ عَلَى عَبْدِهِ الْكِتَابَ وَلَمْ يَجْعَلْ لَهُ عِوَجًا ②

3. 彼は經典を以って監視者となし、それによって御手ずから苛酷な刑罰を加え給うことを警告させ、また善行を積む信徒たちはやがて結構な報奨あるべしとの朗報を伝え給えり、

قَيِّمًا لِيُنْذِرَ بَأْسًا شَدِيدًا لِمَنْ لَدُنْهُ وَيُبَشِّرَ الْمُؤْمِنِينَ الَّذِينَ يَعْمَلُونَ الصَّالِحَاتِ أَنَّ لَهُمْ أَجْرًا حَسَنًا ③

4. 彼等をその中で末永く住まわせんとの。

مَّا كُنْتُمْ فِيهِ أَبَدًا ④

5. また、「アッラーは御子をもち給う」と云う徒輩にも警告し給う。(注2)

وَيُنْذِرَ الَّذِينَ قَالُوا اتَّخَذَ اللَّهُ وَلَدًا ⑤

6. 彼等並びに彼等の父祖たちはこの事について如何なる知識も持たず。彼等の口より出づるこの言葉は実に重大なり。彼等の云うことは虚偽以外の何ものにも非ず。

مَا لَهُمْ بِهِ مِنْ عِلْمٍ وَلَا لِآبَائِهِمْ كَبُرَتْ كَلِمَةً تَخْرُجُ مِنْ أَفْوَاهِهِمْ إِنْ يَقُولُونَ إِلَّا كَذِبًا ⑥

7. 彼等もしこの説教を信ぜずば、恐らく彼は彼等のために心を痛め、己れの身を殺すに至らん。(注3)

فَلَعَلَّكَ بَاخِعٌ نَفْسَكَ عَلَى آثَارِهِمْ إِنْ لَمْ يُؤْمِنُوا بِهِذَا الْحَدِيثِ أَسَفًا ⑦

注1 監視者として、クルアーンは2つの役目を果たす。クルアーンは、以前の聖典に見受けられた誤りを訂正し、消去するという意味において、そういった以前の經典の監視者となる。そしてまた、来るべき世代の人々の精神的教育の責任を担い、人間生活の崇高な目的の実現へと至らしめる道のりに彼らを導くことにより、クルアーンは彼らに対する監視者でもある。

注2 クルアーンは最初、「警告を与えるもの」として、そしてその次には、「喜ばしきたよりを与えるもの」(3節)、そして再び本節に見られるように「警告を与えるもの」として語られている。不信者は、2度警告を受け、その2度にわたる警告の間に、信者は、喜ばしきたよりを与えられてきたのである。イスラム教徒にとっての喜ばしきたよりが間に入る形となつての2重の警告は、3つの預言を暗示していた。(1)聖なる預言者の時代における聖なる預言者の反対者の敗北、破滅 (2)イスラム教徒による驚異的な権力と栄光の獲得 (3)イスラム教徒の栄光ののち、「アッラー(神)は御子をもち給う」と主張するキリスト教国家にふりかからんとする間

注3 本節では、己の人々の精神的幸福に対する聖なる預言者の不安と憂慮が大いに証されている。聖なる預言者は、神のお告げの拒否や反対を深く悲しむあまり、すんでのところまで亡くなってしまうところであった。

8. げにわれらは、地上にあるすべてのものを地の飾りとして設けたり、彼等のうち誰が最も立派な行状を示すかを試さんがために。(注4)

إِنَّا جَعَلْنَا مَا عَلَى الْأَرْضِ زِينَةً لِّهَا لِنَبْلُوهُمْ
أَيُّهُمْ أَحْسَنُ عَمَلًا ④

9. されど、われらは、地上にあるすべてのものを潰滅し、不毛の荒野に帰せしめん。(注5)

وَأِنَّا لَجَاعِلُونَ مَا عَلَيْهَا صَعِيدًا جُرُثًا ⑤

10. 汝は思うや、あの洞窟の人たちとその碑文のことを、われらの神兆の中でも特に不思議なものはなしたと？ (注6)

أَمْ حَسِبْتَ أَنَّ أَصْحَابَ الْكَهْفِ وَالرَّقِيعِ كَانُوا
مِنَ آيَاتِنَا عَجَبًا ⑥

神の使者、そして神の預言者たちは、生まれながらの人情の深さにあふれている。彼らは、人類のために叫び、涙を流し、深く悲しむのである。しかしながら、人間とは恩知らずのもので、彼らが深く同情の気持ちを抱いている、まさにその人々が彼らを処刑し、殺害しようとするのである。

注4 神が創造した数えきれない全てのものの中には、特定の用途がないとか、利益に欠けるといったようなものはただひとつとして存在しない。それら全てが、人間生活の美を高めているのである。イスラム教徒は、常にこれらの簡単な言葉の根底にある偉大なる真実を心に留めおき、自然の偉大なる神秘を探究し、また自然力の限りなき特性を調査するため、その時間と労力を捧げるよう命じられてきたのだ。

注5 本節は、西洋のキリスト教国家が、富、権力、支配を獲得し、偉大なる発見、発明を成し遂げたのち、聖書で述べられているように、神の地上を罪と邪悪で満たしてしまうであろうという預言を暗示している。神の天罰が引き起こされ、旧約、および新約聖書、クルアーン、ハデイスの神の偉大なる預言者の口から出された預言のごとく、広範囲にわたる災難が地上に下り、彼らが成し遂げるであろう全ての進歩、全ての作品、高貴かつ荘厳な建築物、土地の美しさ、全てのはなやかさ、栄光、そして壮大さは完全に破壊されることであろう。

注6 本節では、ほら穴の住人がなんら不可解なものではなかったことが、断言されている。普通の自然法からの逸脱と見做されるものは、彼らに関しては何もなくあったのだ。だが、不思議なことに、多くの風変わりな伝説が、彼らを中心にして作り上げられてきたのだ。ギボンが、自らの“ローマ帝国の墮落と没落”の中で語ったように、記憶すべき物語、“7人の眠れる者たち”が、ほら穴の住人たちを取り巻く神秘の解決への重大な手がかりを提供している。ギボンは次のように語っている。“デキウス皇帝がキリスト教徒を処刑した際、エフェソスの7人の高貴な若者は、隣り山腹の広々とした洞窟に潜伏した。彼らは、暴君により滅びる運命だったのだ。暴君は、洞窟の入り口を巨大な石を積み重ねてしっかりと閉ざすよう命令した。初期のキリスト教徒が、神の唯一性を信じていたため、偶像崇拜者であるローマ皇帝の手による数えきれないほどの処刑を受けねばならなかったということは、今や有名な歴史的事実である。この処刑は、ローマに火をつけたと言われる悪名高きネロ皇帝の時代から早くも、始まったのだ。偉大なる学問および文明の府が燃えた際に、彼はばらばらしてしたのである。この処刑は、約40年間の短い休止期間の後まで断続的に続いたのち、古代ローマの宗教や組織を復活させたいと願ったデモウスの皇帝のもとで新たな怒りと共に再開された。そして、この目的を考慮し、キリスト教徒の系統的絶滅を始めたのだ。しかしながら、全ての反キリスト教徒法案をしのいだのは、西暦303年のディオクレティアヌスの布告であった。これらの布告により、帝国の全地方のキリスト教教会は破壊され、彼らの神聖なる書物は公に燃やされ、教会の所有物は没収され、キリスト教徒は、土地の保護から除外されてしまったのだ。”(ギボン著ローマ帝国, Enc. Brit, Story of Rome)。この残酷で非人間的な処刑からのがれるため、無力な犠牲者たちは、ローマのカタコンベへ逃げ込み、隠れたのだ。このような目的のために、これらのカタコンベは、迷路のような通り道の複雑さ、暗やみの中でも追跡者に発見されないとされる多くの小部屋、いろんな高さにある隠れ場所により、みごとに改造された。カタコンベの墓石上の碑銘から、初期のキリスト教徒は厳格な一神教信者であったことがうかがわれる。イエスは、羊飼ひ、または神の預言者として

11. あの若者たちが洞窟の中に逃れて、云えり。
「主よ、御手ずから我等に慈悲を垂れ、我等の仕事に正しい導きを授け給え」と。

إِذْ أَوَى الْفِتْيَةُ إِلَى الْكَهْفِ فَقَالُوا رَبَّنَا آتِنَا
مِنْ لَدُنْكَ رَحْمَةً وَهَيِّئْ لَنَا مِنْ أَمْرِنَا رَشَدًا ⑪

12. かくてわれらは、洞窟の中で、長年にわたり
彼等の耳を封じたり。(注7)

فَضَرَبْنَا عَلَى أَرْوَاحِهِمْ فِي الْكَهْفِ سِنِينَ عَدَدًا ⑫

13. 然る後、われらと彼等を喚び覚まし、両者の
どちらがよく彼等の滞在期間を計算する
かを知らんとせり。(注8)

ثُمَّ بَعَثْنَاهُمْ لِنَعْلَمَ أَيُّ الْحِزْبَيْنِ أَحْصَى لِنَا
أَلًّا ⑬ لَيْسُوا بِأَعْدَاءَ ⑭

第二項

14. われら真実を以て、彼等の話を汝に語らん。
彼等は主を信ずる若者たちならば、(注9)
われらも彼等の導きを倍加せり。

نَحْنُ نَقُصُّ عَلَيْكَ نَبَأَهُم بِالْحَقِّ إِنَّهُمْ فِتْيَةٌ
آمَنُوا بِرَبِّهِمْ وَزِدْنَاهُمْ هُدًى ⑮

のみ言及されてきたし、彼の母マリアも、信心深い女性として言及されているのみである。また、カタコンベに避難したキリスト教徒は、見知らぬ人の接近をばえ声で知らせてくれる犬を入りに置いていたように思われる。このように、ほら穴の住人の説明は実際初期のキリスト教徒の歴史を表すものであり、彼らが、神の唯一性を信じているがために、いかに多くの処刑を受けなければならなかったかを示すものである。ほら穴の場所と描写は、18節で見られるように第2次的に重要なものなのだ。そしてその場所と描写は、他のどの場所よりも完全に、より細かな詳細、正確さにおいてローマのカタコンベに当てはまるのである。

ほら穴の住人の物語はまた、アリミティヤのヨセフや彼の仲間たちにも当てはまると考えられ得る。アームズベリーのウィリアムによれば、ヨセフは、聖ピリポによりイギリスに派遣され、サマーセットシャーの小さな島を与えられ、そしてそこに、よじれた小枝でイギリスで初めてのキリスト教教会を建設したが、その教会はのちに、グラストンベリーの修道院となったということである。また別の説明によると、ヨセフは西暦63年にイギリスにさまよい込んだということになっている。伝説によれば、グラストンベリーの最初の教会は、聖ピリポにより、ガリアからイギリスへと派遣された12使徒の指導者であるアリミティヤのヨセフが建設した編み枝でつくられた小さな建物であったらしい(Enc. Brit., 第10版、13版“アリミティヤのヨセフ”および“グラストンベリー”参照)。最新の理論もまた、“死海文書”の研究から強力な支持が得られるのだが、その理論では、初期のキリスト教徒が、避難し自らの信念や教訓を書きつけたほら穴の場所を死海付近の谷だとしてい

“ほら穴”と“碑銘”が、キリスト教徒の信仰の2つの最も顕著な側面を表している。すなわち、キリスト教は、拒絶の宗教、世界から身をひそめる宗教として始まり、最後には世の中の事柄に完全に没頭する宗教、著作や碑銘の世界においてはビジネスおよび貿易の宗教となるに至ったということなのだ。

注7 文字どおり、本節は‘我々は、いかなる音であれ、彼らの耳に入り込ませはしなかった’ということの意味する。すなわち、長年にわたり、彼らは外界の出来事からは完全に孤立したままで、外界で何が起っているかなど、知るよしもなかったのだ。

注8 初期のキリスト教徒の間には、派が2つ存在したようであった。(1)しらばくれたり偽り隠したりすることをいやがり、不信仰や偶像崇拜と妥協するすべも知らない人たちは自らの信仰のため、忍耐強く毅然として、迫害を受けた。この人たちは、ほら穴へ逃げ込まねばならなかった。(2)思慮分別も勇気の重要な一部であると考えた人たちは、自らの信仰を隠し、迫害からのがれた。“2派”という言葉はまた、迫害者と迫害された者をも指す。

注9 本節は、多くの異様な話が、聖なる預言者の時代にほら穴の住人に関して流されていたことを示している。しかしながら、彼らは自らの主のために全てを投げうち、自らの信仰ゆえに著実に迫害への途をたどったという高貴なふるまいの持ち主たる若者だったというところが、彼らに関する真実なのである。

15. 而して、われら、彼等の心を堅固ならしめるや、(注10) 彼等^た起ちて、云えり、「我等の主は、天地の主なり。我等断じて彼の外に如何なる神も祈らず。もし祈らば、途方もないことを口にしたことなり。
16. これ等我が民は、アッラー以外に他^{あだしがみ}神を崇拜す。(注11) 何故彼等は、一つの明証だに無きにもかかわらず、崇拜するや? アッラーについて偽りを捏造する者よりも惡逆な者が果たしてあろうか?
17. ところで、お前たち、彼等や彼等がアッラー以外に崇める者から身を退いたなら、洞窟へ避難せよ。(注12) 主はその慈悲をお前たちに広げ、このお前たちの事態を善処せん」と。
18. 汝は、日がその昇る時は洞窟の右方に移動し、その没する時は彼等から左に遠ざかり行くを見たり。彼等は洞中の広場に居たり。(注13) これ、アッラーの神兆^{しんめう}の一つなり。アッラーが導き給う者のみ正しい道を辿れども、迷うにまかせた者には、汝、如何なる助け手もないことを知るべし。

وَرَبَطْنَا عَلَى قُلُوبِهِمْ إِذْ قَامُوا فَقَالُوا رَبُّنَا رَبُّ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ لَنْ نَدْعُو مِنْ دُونِهِ إِلَهًا لَقَدْ قُلْنَا إِذَا شَطَطًا ⑮

هَؤُلَاءِ قَوْمُنَا اتَّخَذُوا مِنْ دُونِهِ إِلَهًا لَوْ لَا يَأْتُونَ عَلَيْهِمْ بِبَيِّنٍ مِّنْ أَظْلَمَ مِنِّينِ أَفَرَأَيْتُمْ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا ⑯

وَأِذَا عَتَلْتُمْ سَبِيلَهُمْ وَمَا يَعْجُدُونَ إِلَّا اللَّهُ فَأَوْآءَ إِلَى الْكَهْفِ يَنْتَشِرُ لَكُمْ رَبُّكُمْ مِنْ رَّحْمَتِهِ وَيَهْدِي لَكُمْ مِّنْ أَمْرِكُمْ مِّزْفَقًا ⑰

وَتَرَى الشَّمْسَ إِذَا طَلَعَتْ تَزْوُورُ عَنْ كَهْفِهِمْ ذَاتَ الْيَمِينِ وَإِذَا غَرَبَتْ تَقْرِضُهُمْ ذَاتَ الشِّمَالِ وَهُمْ فِي وُجُوهِ مِنْهُ ذَلِكَ مِنْ آيَاتِ اللَّهِ مَن يَهْدِ اللَّهُ فَهُوَ الْمُهْتَدِ وَمَن يُضِلِلْ فَلَن تَجِدَ لَهُ وَلِيًّا مُّرْسِدًا ⑱

注10 人々は、彼らに反対し、冷酷にも彼らを迫害したが、ほら穴の住人は、おどされ、自らの宗教を捨てるなどということはありません。神は、彼らの心を強固なものにし、彼らに堅固たる信仰を授けた。

注11 ほら穴の住人は、偶像崇拜をしていたローマ人により迫害されていた。

注12 本節では、一神教の若者たちは、個人個人が離れ離れになっているのではなく、その構成員がしばしば私生活において顔を合すような組織化がされ、統制された宗教社会の一部となっているのだという事実が、明るみに出されている。これらの若者たちが、ほら穴に避難することを話す際に、彼らは特定のほら穴を心に留めていたということを、本節は示している。このほら穴は、ローマの奴隷が己の残酷な主人から逃亡してきた折に、避難場所として常に使用していたものと思われる。“そして、なんじらは彼らから逃れた今や”という語は、彼らがすでに厳しい社会的排斥の犠牲者となり、自らの別個の集団で人々から離れて生活していたということを物語っている。

注13 ほら穴は、北西向きに位置していたと思われる。というのも、太陽が、北向きの場所を右から左へと通過するからである。‘広々とした穴’という語が示すように、ほら穴は、広い領域にわたっていたようであった。現存するローマのカタコンベが、この説を確認している。カタコンベは広い領域を囲うが、870 マイル(約1400 km)にまでも及ぶと推定されてきた(Enc. Brit)。また、カタコンベにはほとんど光は入らなかったように思われる。ほら穴は、隠れ場所としての役割を果たすようにつくられた。聖ジェロームは、4世紀にカタコンベを

第三項

19. 汝、彼等が目覚めていると思うだろうが、
(注14) さにあらず、眠りおる。われらは彼等に、右と左に寝返りを打たせ、(注15) 犬もその入口で前脚を伸ばし臥す。(注16) 人もし彼等を見なば、仰天して彼等から逃げ、必ずや彼等を恐れる心に満されん。
(注17)

20. かくてわれらは、彼等を目覚めさせると、彼等互に相い尋ねたり。中の一人が「お前たちどれほどここにとどまりしか？」と問えり。彼等は答えり、「我等が居たのは一日か、或いは数刻なり」と。他の者は云えり、「どれほど居たのか、最も良く知る者は主なり。ともかく、誰かに、この銀貨を持たせて町に遣り、最も清潔なる食物を(注18) 売る住民を探させて、彼にそこから食糧を運ばせよ。彼に慎重に振舞わさせ、(注19)

وَتَحْسَبُهُمْ آيِقَاطًا وَهُمْ سُقُودٌ وَنَقْبُهُمْ
ذَاتَ الْيَمِينِ وَذَاتَ الشِّمَالِ وَكَلْبُهُمْ بَاسِطٌ
ذِرَاعَيْهِ بِالْوَصِيدِ لَوِ اطَّلَعْتَ عَلَيْهِمْ لَوَلَّيْتَ مِنْهُمْ
فِرَارًا وَلَلَّيْتُ مِنْهُمْ رُعْبًا ①٩

وَكَذَلِكَ بَعَثْنَاهُمْ لِيَتَسَاءَلُوا بَيْنَهُمْ قَالَ قَائِلٌ
مِّنْهُمْ كَمْ لَبِثْتُمْ قَالُوا لَبِثْنَا يَوْمًا أَوْ بَعْضَ يَوْمٍ
قَالُوا رَبُّكُمْ أَعْلَمُ بِمَا لَبِثْتُمْ فَابْعَثُوا أَحَدَكُمْ
بَيْرُقِكُمْ هَذِهِ إِلَى الْمَدِينَةِ فَلْيَنْظُرْ أَيُّهَا أَزْكَى
طَعَامًا فَلْيَأْتِكُمْ بِرِزْقٍ مِنْهُ وَلْيَسَلِّطْ

訪れたがこのように語っている。“まっくらなので、ダビデ預言者の“生けるまま地獄に下らんことを”(詩篇55章15節)という言葉が果たされそうだと。”ほんの時折、薄暗がりの恐怖を和らげるべく、光が入れられるが、それも窓を通してというよりは、穴を通してなのである (Enc. Brit., 第11版よりの引用)。

注14 北方のキリスト教国家は、休止状態にあるが、まもなく何世紀にも及ぶ深い眠りから目覚め、世界じゅうに分散し、世界を支配するようになるであろうと、聖なる預言者の時代に、イスラム教徒たちは警告された。

注15 “我々は彼らをして、右に左に寝返りを打たせる”という語は、彼らが世界を歩き回り、新たな市場を求めてあらゆる方向に分散し、新たな征服を成し遂げることをさしているように思われる。

注16 この語は、西洋のキリスト教国家では犬がこの上なく好まれたということを示すのに加え、マルモラ海の両側でヨーロッパを警戒し、その姿が、犬が前肢を前方に伸ばして、両側を見張っているような様相のビザンチン帝国をさしているともとれる。

注17 この語は、西洋のキリスト教国家が、強大な政治権力を獲得せんとする時代をさしている。クルアーンでは、キリスト教国家がまだ何世紀にも及ぶ深い眠りに陥り、いかに想像力を駆使しようとも、彼らが、その後手にした権力や栄光を予知することは不可能に思われた何百年も昔に、この事実を預言していたのだ。本節では、西洋国家の東方、南方の土地に及ぶ支配的特徴的な像、彼ら特有の生活様式、彼らがそういった地域の人々の間に引き起こした恐怖と畏敬の念、すべてが述べられている。

注18 ほら穴の住人は、自分たちへの迫害の波が和らいだのを見、食料を買い、自分たちに対する状況把握するため、仲間のひとりに古いコインを何枚か持たせて、町に向かわせた。ここでの「食品」は、小麦、大麦、きび、なつめやし等の食料品を意味する。このことは、西洋国家による世界のあらゆる地域への商業的遠征に言及しているのである。

誰にも我等のことは気づかせるな。

(注 20)

وَلَا يُشْعِرَنَّ بِكُمْ أَحَدًا ⑮

21. もし彼等がお前たちを知らば、彼等はお前たちを石撃ちにするか、彼等の宗教に引き戻さんとす。然る時は、お前たち決して栄えざるべし」と。

إِنَّهُمْ إِنْ يَظْهَرُوا عَلَيْكُمْ يَرْجُمُوكُمْ أَوْ يُعَذِّبُوكُمْ فِي مِلَّتِهِمْ وَلَنْ تُفْلِحُوا إِذَا أَبَدًا ⑯

22. かくの如く、われら彼等にこの人たちのことを明らかにせり。そは、之によって、アッラーの約束が真実なることを彼等に知らしめ、且つ該の時について、疑いなきことを知らしめんがためなりき。思い起せ、その時彼等は互に論争して、「彼等の上に一堂を建てん」と云いしことを。主は彼等を最も良く知り給う。この論争に勝利せる人々は云えり、「我等は必ず彼等の上に礼拝堂を建立せん」と。

وَكَذَلِكَ أَشَرْنَا عَلَيْهِمْ لِيَعْلَمُوا أَنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ وَأَنَّ السَّاعَةَ لَا رَيْبَ فِيهَا إِذْ يَتَنَازَعُونَ بَيْنَهُمْ أَمْرَهُمْ فَقَالُوا ابْنُوا عَلَيْهِمْ بُيُوتًا رَبُّهُمْ أَعْلَمُ بِهِمْ قَالَ الَّذِينَ غَلَبُوا عَلَيْهِمْ أَفَرَأَيْتُمْ لَتَنِتَضَدَنَّ عَلَيْهِمْ مَسْجِدًا ⑰

23. 或る者は云う、「彼等は三人なりき、四番目は犬なり」と。また、他の者は当て推量で「彼等は五人なりき、六番目は犬なり」と云う。而して、更に他の者は云う、「彼等は七人なりき、八番目は犬なり」と。云え、「我が主が最も良くその数を知る。僅かな者を除いて、彼等を知る者はなし」と。されば、彼等について、反駁し得ざる論議以外は、議論するなかれ。また、彼等の誰にも、これについて問うなかれ。(注 21)

سَيَقُولُونَ ثَلَاثَةٌ رَأَيْتُمْ كُتُبَهُمْ وَيَقُولُونَ خَمْسَةٌ سَاءَ مِنْهُمْ كُتُبُهُمْ رَجُمًا بِالْغَيْبِ وَيَقُولُونَ سَبْعَةٌ وَرَأَيْنَاهُم كُتُبَهُمْ قُلْ رَبِّي أَعْلَمُ بِعَدَّتِهِمْ مَّا يَعْلَمُهُمْ إِلَّا قَلِيلٌ فَلَا تُمَارَ فِيهِمْ إِلَّا مِرَاءً ظَاهِرًا وَلَا تَسْتَفْتِ فِيهِمْ ⑱ مِنْهُمْ أَحَدًا ⑲

第四項

24. 何事によらず、「我それを明日なさん」と云うなかれ、

وَلَا تَقُولَنَّ لِشَيْءٍ إِنِّي فَاعِلٌ ذَٰلِكَ غَدًا ⑳

注 19 ヨーロッパの商売人は、商業取引において、穏やかさや礼儀正しさを保つ特別なこつを身につけている。この彼らの特質については、ここでの表現を“彼を礼儀正しくさせておけ”と解釈することにより、一言言及されていることがわかる。そして、この表現は‘彼に注意深いふるまいをさせよ’という意味でもある。

注 20 「誰にも我等のことは気づかせるな」という語は東洋において西洋の影響が、静かにそっと浸透していくことを意味している。

注 21 これらの推測は、カタコンベの小部屋の壁の碑銘に基づいているようである。しかし、各々の碑銘は特定の家族、派、集団についてのみの言及があるにすぎない。さまざまな折りに、カタコンベに避難した人々の総数は、知られていない。碑銘から、犬が常に、避難民の一派に同伴したと思われる。

25. もしアッラーの思し召しならば、と附加せずして。汝もしこれを忘れたる時は、主を念じて云え、「主よ、願わくは我をこれよりも正しい道に近づけたまえ」と。

26. さて、彼等が洞窟の中に居たのは、三百年と、更に加えて九年なり。(注 22)

27. 云え、「アッラーは彼等が如何に長く滞在したか最も良く知り給う」と。(注 23) 天地の神秘は、すべて彼に属す。なんと彼はすべてを見透し、且つ聞こしめすことよ！(注 24) 彼等はアッラー以外に如何なる助け手も持たず、また彼は、何人にもその審判を分担させることなし。

28. 汝に啓示されたる主の經典を誦誦せよ。何人もその言葉を変える能わず。また、汝は、彼以外に避難所を見出せざるべし。

29. 朝な夕な、主に祈る人たちにならって、汝も彼の喜びを求め続けよ。現世の榮華を求めて、彼等から目をそらすなかれ。また、われらが、その心にわれらを念ずることを軽視させた者、並びに下劣な欲望を追い求める者に従うなかれ。かかる者は、掟にそむけり。

إِلَّا أَنْ يَشَاءَ اللَّهُ وَادُّرُّ رَبِّكَ إِذَا نَسِيتَ وَقُلْ
عَسَى أَنْ يَهْدِيَنِي رَّبِّي لِأَقْرَبَ مِنْ هَذَا رَشَدًا ﴿٢٥﴾
وَلِكُنَّا فِي كَهْفِهِمْ ثَلَاثَ مِائَةٍ سِنِينَ وَ
ازْدَادُوا تِسْعًا ﴿٢٦﴾

قُلِ اللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا لِكُنَّا لَهُ غَيْبُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ
أَبْصَرُ بِهِ وَأَسْمِعْ مَا لَهُمْ مِنْ دُونِهِ مِنْ وَلِيٍّ
وَلَا يُشْرِكُ فِي حُكْمِهِ أَحَدًا ﴿٢٧﴾

وَآتِلْ مَا أَوْحِيَ إِلَيْكَ مِنْ كِتَابِ رَبِّكَ لَا مُبَدِّلَ
لِكَلِمَاتِهِ وَلَنْ تَجِدَ مِنْ دُونِهِ مُلْتَحَدًا ﴿٢٨﴾

وَاصْبِرْ نَفْسَكَ مَعَ الَّذِينَ يَدْعُونَ رَبَّهُمْ بِالْعَدْوَى
وَالْعِشْيِ يُرِيدُونَ وَجْهَهُ وَلَا تَعْدُ عَيْنَاكَ عَنْهُمْ
تُرِيدُ زِينَةَ الدُّنْيَا وَلَا تُطِيعَ مَنْ
أَغْفَلْنَا قُلُوبَهُ عَنْ ذِكْرِنَا وَاتَّبَعَ هَوَاهُ
وَكَانَ أَمْرُهُ فُرُطًا ﴿٢٩﴾

注 22 初期のキリスト教徒が迫害を受け、しばしば、ほら穴や他の隠れ場所に避難していた期間は、およそ 300 年にも及び、歴史的資料により、この数字は確証されてきた。一般に信じられているように、キリスト教徒の迫害は、西暦 28 年のイエスのはりつけに始まり、約 309 年を経た西暦 337 年に、コンスタンチヌス大帝がキリスト教に改宗したことにより幕を閉じたのであった。(Enc. Brit) コンスタンチヌス大帝が、改宗したのは西暦 337 年ではなく、西暦 309 年であった。はりつけの悲劇を、一般に信じられているよりも 28 年おそくおこったのだ (Chronologh; Archbishop Ushers 著と Daily Bible Illustrations; Dr. Kitto 著)。

注 23 初期のキリスト教徒は、いろんな時代に多くの場所、たとえばローマ、アレクサンドリア等で、迫害されてきた。彼らは、さまざまな時に、さまざまな期間にわたり、ほら穴やカタコンベに避難することを余儀なくされた。カタコンベにおける彼らの滞在が、唯一の不断のエピソードだというわけではなかった。そのような滞在の期間全ての正確な長さは、アッラーのみが知るところである。

注 24 この語はまた次のような意味をもつ。‘神の視界は、よどみなく、神の聴覚は鋭い’つまり、‘神は全てを見、全てを聞くのである’ということなのだ。

30. 云え、「真理は主より来たる。されば、信ずるも、信ぜざるも、その者の意志なり」と。げにわれらは、悪人どもに、燃えさかる天蓋に囲まれるべく火を用意せり。彼等助けを求めて叫ぶれば、どろどろに溶けた鉛が浴びせられ、その顔を焼かん。なんと恐ろしきかなその飲物たるや、なんと不幸なるかな火獄の休み処よ！

31. 信じて善行を積む者には一われらは善行を積む者の報奨は決して忘れはせぬ。

32. それ等の者には永遠の樂園ありて、河川その下を流る。彼等その中に在りて黄金の腕環で飾られ、絹や錦の緑衣をまとい、寝椅子にもたれかからん。なんと素晴らしき報奨なるかな、なんと結構な休み処よ！

第五項

33. 彼等に二人の男の比喩を述べよ。(注 25) われらはその一人に、葡萄園を与え、そのまわりに棗椰子を植えめぐらし、その間に穀物の畑を設けたり。

34. 両園とも豊かな果実を産し、いささかも欠乏することなかりき。而して、われらは両園の間に川も流したり。(注 26)

35. されば、彼は豊かな収穫を獲たり。或る日、彼は自慢して、友に向って云えり、「我は汝

وَقُلِ الْحَقُّ مِنْ رَبِّكُمْ فَمَنْ شَاءَ فَلْيُؤْمَرْ
وَمَنْ شَاءَ فَلْيُكْفَرْ إِنَّا أَعْتَدْنَا لِلظَّالِمِينَ نَارًا
أَحْمَقَ بِهِمْ سُورَافَهُمْ وَأَنْ يَسْتَغِيثُوا يَغَالُظُهُمْ
كَالْهَيْهَلِ يَشْوِي الْوُجُوهُ يَنْسُ الشَّرَابُ وَسَاءَتْ
مُرْتَقَقًا ﴿٣٠﴾

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ إِنَّا لَا نَنْسِيهِمْ
أَجْرَ مَنْ أَحْسَنَ عَمَلًا ﴿٣١﴾

أُولَئِكَ لَهُمْ جَنَّاتُ عَدْنٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهِمْ
الْأَنْهَارُ يُحَلَّوْنَ فِيهَا مِنْ أَسَاوِرَ مِنْ ذَهَبٍ
وَيَلْبَسُونَ ثِيَابًا خُضْرًا مِنْ سُنْدُسٍ وَ
إِسْتَبْرَقٍ مُتَّكِئِينَ فِيهَا عَلَى الْأَرَائِكِ نَبْغُ
الثَّوَابِ وَحَسُنَتْ مُرْتَقَقًا ﴿٣٢﴾

وَاضْرِبْ لَهُم مَثَلًا ذُلَيْنِ جَعَلْنَا لِأَحَدِهِمَا
جَنَّتَيْنِ مِنْ أَعْنَابٍ وَحَفَفْنَاهُمَا بِنَخْلٍ وَجَعَلْنَا
بَيْنَهُمَا زُرْعًا ﴿٣٣﴾

كُلَّتَا الْجَنَّتَيْنِ تَبْتَأُكُلَهُمَا وَلَمْ تَظْلِمْ مِنْهُ شَيْئًا
وَفَجَّرْنَا خِلَالَهُمَا نَهْرًا ﴿٣٤﴾

وَكَانَ لَهُ ثَمَرٌ فَقَالَ لِصَاحِبِهِ وَهُوَ يُحَاوِرُهُ

注 25 本節は、たとえ話の形で、2種類の人々——キリスト教徒とイスラム教徒の状態を語っているが、“2人の男”というのは、これら2種類の間人を表し、“2つの庭”はキリスト教徒国家繁栄の2時代を表している。最初の時代は、イスラム教の出現に先立ち、2度目の時代は、ヨーロッパのキリスト教国家が、大いに進歩を遂げ、19世紀に頂点に達した先例のない権力と名声を獲得し始めた西暦17世紀の幕あけとともに始まったのだ。

注 26 川の流れば、聖なる預言者の時代を表している。聖なる預言者を通して、モーゼやイエスの真の教訓の一部が、保存された。

より裕福にして、眷族も汝より多数なり」と。
(注 27)

36. 彼は邪心を抱いて己が園に入れり。彼は云えり、「我はこの園がいつか荒廃に帰すべしとは思わず。」(注 28)

37. 而して、また、該の時が来るべしとも思わず。たとい主の許に連れ戻されとも、我は必ずこれに優る良い場所を得ん」と。

38. その友、彼に抗して云えり、「汝は、最初土より汝を創り、次いで一滴の精液より、更に完全な人間の形に仕上げ給うた御方を信ぜざるか？

39. なれど、我に関するかぎりでは、アッラーのみが我が主なり。されば、我、主と偕に如何なる者も併せ祀らず。

40. 汝が、己れの葡萄園に入りし時、何故「すべてはアッラーの御意志のまま。権能はただアッラーに存す」と云わざりしか？たとい汝、我を財力と子孫とに於て、汝より劣ると見るとしても。

41. 恐らく主は、我に何時か汝の園に優る何かを授け給わん。(注 29) 而して、汝の園には天から雷を投じ、不毛の荒野に帰せしめん。(注 30)

أَنَا أَكْثَرُ مِنْكَ مَالًا وَأَعَزُّ نَفَرًا ۝

وَدَخَلَ جَنَّتَهُ وَهُوَ ظَالِمٌ لِّنَفْسِهِ قَالَ مَا

أَظُنُّ أَنْ تَبِيدَ هَذِهِ أَبَدًا ۝

وَمَا أَظُنُّ السَّاعَةَ قَائِمَةً وَلَئِنْ رُودْتُ إِلَى

رَبِّي لَأَجِدَنَّ خَيْرًا مِنْهَا مُنْقَلَبًا ۝

قَالَ لَهُ صَاحِبُهُ وَهُوَ يُحَاوِرُهُ أَكَفَرْتَ بِالَّذِي

خَلَقَكَ مِنْ تُرَابٍ ثُمَّ مِنْ نُطْفَةٍ ثُمَّ سَوَّكَ

رَجُلًا ۝

لَكِنَّا هُوَ اللَّهُ رَبِّي وَلَا أُشْرِكُ بِرَبِّي أَحَدًا ۝

وَلَوْلَا إِذْ دَخَلْتَ جَنَّتَكَ قُلْتَ مَا شَاءَ اللَّهُ ۚ

لَا قُوَّةَ إِلَّا بِاللَّهِ إِن تَرَىٰ أَنَا أَقَلُّ مِنْكَ مَالًا

وَوَلَدًا ۝

فَعَسَىٰ رَبِّي أَنْ يُؤْتِيَنِي خَيْرًا مِنْ جَنَّتِكَ وَيُرْسِلَ

عَلَيْهَا حُسْبَانًا مِنَ السَّمَاءِ فَتُصْبِحَ صَعِيدًا

زَلَقًا ۝

注 27 強力で富裕なキリスト教国家は、貧しく力のないイスラム教徒を、貧困、および、物質資源の欠乏のために、軽蔑し、あざけた。

注 28 自らの物質的進歩に誇りを抱き、西洋キリスト教国家は、楽でぜいたくな生活にふけているのである。そして、うぬぼれと横柄から、自分たちの権力、進歩、繁栄が永久に続くのだと誤解している。また、だまされて、安心、自己満足しているため、彼らは罪と邪悪の生活に全く迷い込んでしまうことになるのである。

注 29 本節および 36、40 節では 2 つの庭 (33 節) のうち、1 つはイスラム以前に実際、消滅したため、ひとつの庭のみについて述べられている。キリスト教徒にとって最大の誇りの源となった庭は、イスラム後に栄えた庭——彼らの現在の大きな物質的進歩と権力なのである。

注 30 ‘天から’という語は、いかなる地上の力も、西洋のキリスト教国家の軍事力に實際上、抵抗し戦うことができないことを示している。神自身が、彼らの破滅を引き起こすような状況を生み出すのである。

42. 或いは、園内の水が地面深く浸透し、
(注31) 地下水を見出し得ざるべし」と。
43. 果せるかな、彼の果実は絶滅せり。彼は葡萄園につき込んだものを想い、両手を堅く握って嘆き悲しめり。葡萄園は葡萄棚もろとも倒潰せり。(注32) 而して、彼は云えり、「我もし我が主と偕に、何者をも配せざりしなば！」と。
44. 彼にはアッラーに逆って助けてくれる衆とてなく、また己れ自身も護り得ざりき。

أَوْ يُصْبِحَ مَاوْهَا غَوْرًا فَلَنْ تَسْتَطِيعَ لَهُ طَلَبًا ﴿٣١﴾
وَأُحِيطَ بِشَرِّهِ فَأَصْبَحَ يُقَلِّبُ كَفَّيْهِ عَلَى مَا أَنْفَقَ فِيهَا وَهِيَ خَاوِيَةٌ عَلَى عُرُوشِهَا وَيَقُولُ لِيَلَيْتَنِي لَمْ أَشْرِكْ بِرَبِّي أَحَدًا ﴿٣٢﴾

وَلَمْ تَكُنْ لَهُ فِتْنَةً يَتَصَوَّرُهُ مِنَ دُونِ اللَّهِ وَمَا كَانَ مُنتَصِرًا ﴿٣٣﴾

45. かかる場合に於ける加護は、真実者アッラーからのみ来る。彼は最良の報奨者にして、最善の結果を降し給う。

هَٰذَا لَكَ الْآلَاءُ لِلَّهِ الْحَقِّ هُوَ خَيْرٌ ثَوَابًا وَخَيْرٌ عُقْبًا ﴿٣٤﴾

第六項

46. また、彼等に、現世の生活を譬え話で述べよ。そは、われらが空から降す水の如し。大地の草木はそれを混じて成育するも、やがて風に吹き散らされん枯れ草の破片となる。(注33) げにアッラーは、万事を支配す。

وَاصْرِبْ لَهُم مَّثَلُ الْجَبْقَةِ الدُّنْيَا لَمَّا أَنزَلْنَاهُ مِنَ السَّمَاءِ فَاخْتَلَطَ بِهِ نَبَاتُ الْأَرْضِ فَأَصْبَحَ هَشِيمًا تَذْرُوهُ الرِّيْحُ وَكَانَ اللَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ مُّقْتَدِرًا ﴿٣٥﴾

47. 富や子女はこの世の生活の飾りなり。なれど、永続する善行こそ、アッラーの目には、即座の報奨の故に、また将来の希望が故に遙かに優るなり。

الْمَالُ وَالْبَنُونَ زِينَةُ الدُّنْيَا وَالْبَاقِيَةُ الصَّالِحَاتُ خَيْرٌ عِنْدَ رَبِّكَ ثَوَابًا وَخَيْرٌ أَمَلًا ﴿٣٦﴾

48. われらが群山を動かす日をよく考えよ。汝はさまざまな民族が互に前に進むを見ん。

وَيَوْمَ نُسَيِّرُ الْأَجْبَالَ وَتَرَى الْأَرْضَ بَارِزَةً وَخَشَعَتِ

‘何者も、彼らと戦う力はないであろう’ (ムスリム ダジャール書) と述べたと伝えられ、聖なる預言者が言及したのは、キリスト教の物質的栄光を象徴するゴグとマゴグのこの抵抗不可能な力である。

注31 クルアーンの言葉では、彼らの庭を新鮮で緑に保つと表現されている、彼らの偉大な手腕や知的才能の源は、これまで彼らの物質的進歩を支えてきたが、やがて干上がり、彼らの“園”は完全に荒廃してしまうことになるだろう。とこの節は示している。彼らの精神的な新鮮さの源もまた同様に干上がってしまうだろう。

注32 物質的富裕を維持しようとするキリスト教徒たちの全ての努力は、煙のごとく消え権力や名声は、またたく間に突然、傾くであろう。ついてながら、本節では、園は棚もろとも“倒れる”と示されてあるが現実にはそういうことはないため、これらの節で使われている“園”という語は、文字通りの意味で使われたのではないことを示している。

注33 なんと、適切で力強い、世俗生活のはかなさの表現なのだろうか！

而して、われらは彼等を集め、(注34)ただの一人だに残しはせぬ。

فَلَمْ نَعَاذِرْ مِنْهُمْ أَحَدًا ③

49. 彼等並んで主の御前に拝謁させられん。「いまお前たちは、われらが最初創りし如く、(注35)われらが前に来たれり。なれど、お前たちは、われらがお前たちに対する約束を履行するとは思わざりき」と彼等は云われん。

وَعُضُوا عَلَىٰ رَبِّكَ صَفًّا لَقَدْ جِئْتُونَا كَمَا خَلَقْنَاكُمْ
أَوَّلَ مَرَّةٍ بَلْ زَعَمْتُمْ أَلَّنْ نَجْعَلَ لَكُمْ مَوْعِدًا ④

50. 而して、行状の記録が記された帳簿が彼等の前に提示され、汝は、悪人どもがその中に記されたことについて恐れおののく姿を見ん。而して、彼等は云わん、「ああ、こはなんたる帳簿ぞ！細大洩らさず記録して、余すところなし」と。而して、彼等は、己が為せる所業のすべてを顔前に突きつけられん。されば主は、何人も不公平には処遇せず。

وَوُضِعَ الْكِتَابُ فَتَرَىٰ الْمُجْرِمِينَ مُشْفِقِينَ مِمَّا
فِيهِ وَيَقُولُونَ يَوَيْلَتَنَا مَا لَ هَذَا الْكِتَابِ لَا يُغَادِرُ
صَغِيرَةً وَلَا كَبِيرَةً إِلَّا أَحْصَاهَا وَوَجَدُوا مَا
عَمِلُوا حَاضِرًا وَلَا يَظْلِمُ رَبُّكَ أَحَدًا ⑤

第七項

51. われらが諸天使に向って、「アダムに対して平伏せよ」と云いし時のことを思い起せ。イブリースを除いて、彼等はみな従えり。イブリースは妖霊の仲間にして、主の命令に背きたり。然るに、お前たち、イブリースやその子孫をお前たちの敵だというに、わしの代りに仲間とせんとするか？不義者ども、その交換は災いなるぞ。

وَإِذْ قُلْنَا لِلْمَلَائِكَةِ اسْجُدُوا لِآدَمَ فَسَجَدُوا إِلَّا
إِبْلِيسَ كَانَ مِنَ الْجِنِّ فَفَسَقَ عَنْ أَمْرِ رَبِّهِ
أَفَتَتَّبِعُونَهُ وَذُرِّيَّتَهُ أُولَئِكَ مِنْ دُونِي وَهُمْ
لَكُمْ عَدُوٌّ يُبْسُ لِلظَّالِمِينَ ⑥

52. われは天地の創造並びに彼等自身の創造にも、彼等を参与せしめざりき。(注36)また、われは、人々を迷わせる徒輩の助けは借りはせぬ。

مَا أَشْهَدُ لَهُمْ خَلْقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَلَا خَلَقَ
أَنْفُسَهُمْ وَمَا كُنْتَ مُمْتَثِلَ الْبَاطِلِينَ عُضْدًا ⑦

注34 本節では、聖書の言葉により、「国家が国家に反抗して立ち上がり、王国が王国に反抗して立ち上がり、さまざまな場所で飢饉、疫病、地震が起こるとき（マタイ24章7節）、先の数節で述べられた悪の力、すなわちゴグとマゴグの完全なる破滅に関する預言が、果たされるであろうということが示されている。『彼らを集め』という表現は、彼らがお互いに向きあって、戦闘隊形をとって集まり、あくまで戦うことを意味している。

注35 この言葉は、彼らが全ての権力、権威を奪われ、以前のごとく服従と恥辱の状態に戻ることを余儀なくされてしまうことを意味している。

注36 本節は、そのとき世界の恒久的平和と調和の時代を布告する新たな世界秩序について、一般に語られ、いわゆる政治的、社会的思考の指導者たちは、その確立を求め、主張するが、神が、この至高なる任務の成就を自らの仕事としたため、彼らは、努力を果たせることはできないであろうことを意味している。

53. 「お前たちがわしの同位者と考えし神々を喚べ」と主が云わん、その日を想え。その日、彼等、いくら神々を喚べども、神々は彼等に応えざるべし、われらが両者の間に障壁を置いたがために。(注 37)

54. 罪を犯せし者は業火を見、その中に投ぜられんことを悟るも、そこから逃れ去る術なきことを知るべし。(注 38)

第八項

55. げにわれらは、人間に良かれかしと、このクルアーンの中で、さまざまに、あらゆる譬を引いて詳述せり。(注 39) 然るに、人間とは、なんと議論好きなことよ。

56. 今嚮導彼等に至れり。往古の民が被むりし先例が彼等の身に起るを望むか、それとも、懲罰の急襲に直面するを望むに非ずば、何者も、人々が信仰し、主の有恕を求めることを妨げるを得ず。

57. われらは、朗報伝達者として、また警告者に非ずば、使徒たちを違わさず。然るに、信ぜざる者どもは虚偽を以て論争し、真理をしりぞけんとす。而して彼等は、わが神兆と彼等への警告を嘲笑す。

58. その主の神兆を気づかせられながら、之に背き、また己が手が先に送りしものを忘れるよりも更に悪しき者あるや？げにわれら

وَيَوْمَ يَقُولُ نَادُوا شُرَكَائِيَ الَّذِينَ زَعَمْتُمْ فَدَعَوْهُمْ فَلَمْ يَسْتَجِيبُوا لَهُمْ وَجَعَلْنَا بَيْنَهُم مَّوْبِقًا ﴿٥٣﴾

وَرَأَى الْجَحِيمُونَ النَّارَ فَطَوَّأُا لَهَا أَنَّهُمْ مِثْلُ حَمِإٍ حَمِيءٍ ﴿٥٤﴾

وَلَقَدْ صَرَّفْنَا فِي هَذَا الْقُرْآنِ لِلنَّاسِ مِنْ كُلِّ مَثَلٍ وَكَانَ الْإِنْسَانُ أَكْثَرُ شَيْءٍ جَدَلًا ﴿٥٥﴾

وَمَا مَنَعَ النَّاسَ أَنْ يُؤْمِنُوا إِذْ جَاءَهُمُ الْهُدَىٰ وَيَسْتَغْفِرُوا رَبَّهُمْ إِلَّا أَنْ تَأْتِيَهُمْ سُنَّةُ الْأَوَّلِينَ أَوْ يَأْتِيَهُمُ الْعَذَابُ قُبُلًا ﴿٥٦﴾

وَمَا تُرْسِلُ الرُّسُلَ إِلَّا بُشْرًا وَمُنذِرِينَ وَيُجَادِلُ الَّذِينَ كَفَرُوا بِالْبَاطِلِ لِيُدْحِضُوا بِهِ الْحَقَّ وَانْتَفَخُوا أَبْطِئُوا وَنَادُوا هَؤُلَاءِ ﴿٥٧﴾

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنْ ذُكِّرَ بِآيَاتِ رَبِّهِ فَأَعْرَضَ عَنْهَا وَنَسِيَ مَا قَدَّمَتْ يَدُهُ إِنَّا جَعَلْنَا عَلَى قُلُوبِهِمْ

注 37 本節は、これらの国家が高い関税障壁、鉄のカーテンを張りめぐらせ、お互いに経済ボイコットをなすことを意味している。または、彼らが破壊に至る致命的な戦争にまきこまれることを意味しているともとれる。

注 38 西洋の不信仰国家は、多大な破壊力を誇る戦争の接近に遭遇するであろう。彼らは、あらゆる手段に訴えて、それを避けようとするが、そのための彼らの計画や努力は全て、むだになるであろう。西洋はすでに、世界における西洋の政治的支配、名声を破壊されるところであり、また西洋文明をその基盤までゆるがした2度にわたる最も破壊的な戦争のきびしい試練をくぐり抜けてきたのだ。第3の大虐殺が西洋を、いやおそらくは全世界のどき込んで入る。

注 39 本節は、以下のことを意味する。(1)全ての神の創造物の中で、人間は、理性と知的能力を授けられてきた。しかしながら残念なことに、人間は、その真実を拒否し、他の邪悪な目的を遂行するために使っているのだ。(2)また、人間は、慢性的な不安と疑いの犠牲者であり、めったに満足することがない。そして、常に疑い深いため、最も確信のもてる論議においてさえ、逃げ道を見つけたそうとするという意味だともとれる。

は、彼等の心に覆いをかけたれば、彼等は神兆を理解せず、その耳もつんぼなり。されば、たとい汝が彼等を導きのために呼びかけるとも、彼等は決して之を容認さるべし。(注40)

59. 然るに、汝の主は寛大にして、情け深い御方にまします。彼もし彼等の積みし所業を以て誅せんと欲さば、彼等はたちどころに罰せられるべし。然しながら、彼等には定められた一期ありて、それより逃れ得る避難所を見出さざるべし。

60. これ等の邑々を一われらは彼等が邪悪を犯したがために滅ぼせり。しかし、その滅亡には、豫めその時を定めたり。

第九項

61. モーゼがその従者に向って「わしは二つの海が会おうところに行きつくまで、何年かかろうと旅を止める気はなし」と云いし時を思い起せ。

62. 然るに、彼等二つの海が出会いしところにたどりつくや、携え来たりし彼等の魚のことを忘れたれば、魚は(注41)速やかに海中へと逃げ去りぬ。

63. 而して、彼等更に旅を続け、またモーゼ、従者に云えり。「朝餉を(注42)これへ持て。いやはやこの旅には疲れたり」

أَكْبَهَ أَنْ يَفْقَهُوهُ وَفِي إِذْ أَنبَهُمْ وَقَرَأَ وَإِنْ
تَذَرُهُمْ إِلَى الْهُدَى فَلَنْ يَهْتَدُوا إِذًا أَبَدًا ⑤

وَرَبُّكَ الْغَفُورُ ذُو الرَّحْمَةِ لَوْ يُؤَاخِذُ هُمْ بِمَا
كَسَبُوا لَعَجَلْ لَهُمُ الْعَذَابُ بَلْ لَهُمْ مَوْعِدٌ
لَنْ يَجِدُوا مِنْ دُونِهِ مَوْيِلًا ⑥

وَالْيَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا أَهْلُكُنْهُمْ لَنَا ظَلَمُوا وَجَعَلْنَا
لِغُلَامِكُمْ مَوْعِدًا ⑦

وَإِذْ قَالَ مُوسَى لِقَوْمِهِ لَا أَبْرَحُ حَتَّى أَبْلُغَ
مَجْمَعَ الْبَحْرَيْنِ أَوْ أَمْضِيَ حُقُبًا ⑧

فَلَمَّا بَلَغَا مَجْمَعَ بَيْنَهُمَا نَسِيَا حُوتَهُمَا فَاتَّخَذَ
سَبِيلَهُ فِي الْبَحْرِ سَرَبًا ⑨

فَلَمَّا جَاوَزَا قَالَ لِقَوْمِهِ إِنِّي عَدَاُكُمْ لَقَدْ لَقِيتُ
مِنْ سَفَرِنَا هَذَا نَصَبًا ⑩

注40 不信仰者は、道理を理解し、神から授けられた能力を活用するのをしつこく拒否する。その結果、その能力や才能はさびつき、腐敗し、彼らは罪と邪悪の中で、もがきつづけるのである。

注41 フート(魚)は、幻となって見られると、正しき人々の崇拜の家を示す。この語のこの意味において、「2つの海が会おう場所に彼らが到達すると、彼らは魚のことは忘れてしまった」という表現は、モーゼとイスラムの摂理が会おうとき、すなわち、モーゼの摂理がその機能を停止させ、イスラムの摂理が効力を発生するとき、真の正義がモーゼとイエスの従者たちの間より出て、そのときより、新たな摂理の従者たちの特別な印となるのである。(48章30節)尚、前節(当章61節)の詳しい説明は英版参照のこと。

注42 幻で「朝餉(朝の食事、朝食を頼むこと)」は、疲労を表す。そして本節では、「2つの海のつながり」を過ぎ、長い間、それぞれの旅に出、むなしく約束されたる預言者を待つことにあきあきしたのち(申命記18章18節)モーゼと彼の若き仲間、預言者は既に現れたのだが、自分たちが彼に気づかなかったかもしれないといわんとしている。本節では、モーゼと彼の若き仲間(イエス)は、それぞれユダヤ教とキリスト教を象徴している。

64. 従者は答えり、「汝見ざりしか、我等岩の上にて休めし時、手前は魚のことを忘れたり—この事を汝に告げることを忘れさせたるは、悪魔に非ずして誰ぞ一魚は海へ泳ぎ去れり、不思議なこともあるものなり?」と。
(注 43)

65. モーゼは云えり、「それこそ我等が求めたるものなり」と。かくて、彼等はその足跡をたどり、もと来た道を引き返せり。

66. 而して、彼等は、われらが慈悲を垂れし僕等の (注 44) 一人に会えり。その僕にはわれらじきじきに知識を授けたり。

67. モーゼは彼に向つて云えり、「汝が教えられたる嚮導のいくつかを教えてください、我汝に従うべきや?」と。(注 45)

68. 彼は答えり、「汝は我と共に忍耐するを得ず。

69. 汝、その意味を解せぬ事柄について、どうして辛抱しきれようぞ?」と。

70. モーゼは云えり、「もしアッラー欲しなば、汝、我が耐え忍ぶを見ん。而して、我は汝の如何なる命令にも背くまじ」と。

71. 彼は云えり、「ならば、我に従うとも、我その意味を汝に云うまでは、何事も我に問うなかれ」と。

第十項

72. かくて、彼等ともに出発し、やがて船に乗り込むや、彼その船に孔を穿ちたり。モーゼは云えり、「船に孔を穿ちたるは、乗客を

قَالَ أَرَأَيْتَ إِذْ أَوَيْنَا إِلَى الصَّخْرَةِ فَإِنِّي نَسِيتُ الْحَوْتَ وَمَا أَنْسِيْنُهُ إِلَّا الشَّيْطَانُ أَنْ أَذْكُرَهُ وَاتَّخَذَ سَبِيلَهُ فِي الْبَحْرِ عَجَبًا ﴿٧٢﴾

قَالَ ذَلِكَ مَا كُنَّا نَبْغُ فَأَرْتَدَّاعَىٰ أَنَا وَهَيْمًا تَصَصًّا ﴿٧٣﴾

فَوَجَدَا عَبْدًا مِّنْ عِبَادِنَا آتَيْنَاهُ رَحْمَةً مِّنْ عِنْدِنَا وَعَلَّمْنَاهُ مِمَّا لَدُنَّا عِلْمًا ﴿٧٤﴾

قَالَ لَهُ مُوسَىٰ هَلْ أَتَّبِعُكَ عَلَىٰ أَنْ تُعَلِّمَنِ مِمَّا عُلِّمْتَ رُشْدًا ﴿٧٥﴾

قَالَ إِنَّكَ لَنْ تَسْتَطِيعَ مَعِيَ صَبْرًا ﴿٧٦﴾

وَكَيْفَ تَصْبِرُ عَلَىٰ مَا لَمْ تُحِطْ بِهِ خُبْرًا ﴿٧٧﴾

قَالَ سَتَجِدُنِي إِن شَاءَ اللَّهُ صَابِرًا وَلَا أَعْصِي لَكَ أَمْرًا ﴿٧٨﴾

قَالَ فَإِنِ اتَّبَعْتَنِي فَلَا تَسْأَلْنِي عَنْ شَيْءٍ حَتَّىٰ أُحْدِثَ لَكَ مِنْهُ ذِكْرًا ﴿٧٩﴾

فَانْطَلَقَا حَتَّىٰ إِذَا رَكِبَا فِي السَّفِينَةِ خَرَقَهَا قَالَ

注 43 ここで表していることは、真の信心と神の崇拜は、このような人々のもとを離れるのだということである。

注 44 この“神のしもべ”(アブド)とは誰なのだろうか。神は誰に慈悲を授けたのであろうか。神は誰に知識を与えたのであろうか。モーゼは誰を求めて、神の命令を履行し、あのような長い困難な旅に出たのであろうか。誰が全ての話の中心人物であり、英雄であるのだろうか。聖なる預言者モハammad 以外には考えられないのだ。彼の魂は、モーゼの幻において、肉体を与えられたのである。

注 45 モーゼは、聖なる預言者が成し遂げた最高の精神的知識を与えられなかった。

溺れさせんとする気か？汝はほんとに罪なことをなせるかな！」と。

73. すると、彼は答え、「我は汝に、我と共に忍耐し得る者に非ず、と云わざりしか？」と。(注46)

24 74. モーゼは云えり、「我が失念を責めるなかれ、またしくじらすべく、我をむずかしい目に遇せるなかれ」と。

75. かくて、彼等はともに旅をし、やがて一人の若者に出会うや、彼その若者を殺したり。モーゼは云えり、「汝は、誰も殺さぬ罪なき者を殺したり。汝、なんたる恐ろしいことをなせるや！」と。(注47)

24 76. 彼は云えり、「我は汝に、我と共に汝は忍耐し得る者に非ず、と云わざりしか？」と。

77. モーゼは云えり、「我もし、この後、何事かを汝に問わば、我を伴うなかれ。いまは我が詫びを容れよ」と。

78. かくて、彼等は更に旅を続け、或る邑にたどりつき、その邑人に食物を請いたり。然るに、邑の人々は彼等を客としてもてなすを拒みたり。(注48)ところが、そこに崩れかかりし壁あるを見て、彼之を修理せり。モーゼは云えり、「汝もし欲しなば、之に対する報酬を得たりしものを」と。

79. 彼は云えり、「これで、汝と訣別す。今我は、汝が忍耐し得ざりし事柄の、その理由を告げん。

أَخْرَجَهَا لِتُغْرِقَ أَهْلَهَا لَقَدْ جِئْتَ شَيْئًا إِمْرًا ⑤

قَالَ أَلَمْ أَقُلْ إِنَّكَ لَنْ تَسْتَطِيعَ مَعِيَ صَبْرًا ⑥

قَالَ لَا تَأْخُذْ بِنِإِيَّتِي وَلَا تَرْهَقْنِي مِنْ

أَمْرِي عُسْرًا ⑦

فَأُطْلِقَ أَخَاهُ إِذَا لَقِيَاهُ فَعَتَلَهُ قَالَ أَقْتَلَتْ

نَفْسًا رَكِيَّةً بِغَيْرِ نَفْسٍ لَقَدْ جِئْتَ شَيْئًا

ثُكْرًا ⑧

قَالَ أَلَمْ أَقُلْ لَكَ إِنَّكَ لَنْ تَسْتَطِيعَ مَعِيَ صَبْرًا ⑨

قَالَ إِنْ سَأَلْتِكَ عَنْ شَيْءٍ بَعْدَ هَذَا فَلَا تُصِغْنِي قَدْ

بَلَغْتَ مِنْ لَدُنِّي عَذْرًا ⑩

فَأُطْلِقَ أَخَاهُ إِذَا آتَى أَهْلَ قَرْيَةٍ اسْطَعْمَاهُ أَهْلَهَا

فَأَبَوْا أَنْ يُضَيِّفُوهُمَا فَوَجَدَا فِيهَا جِدَارًا يُرِيدُ

أَنْ يَنْقُصَ فَأَقَامَهُ قَالَ لَوْ شِئْتَ لَتَّخَذْتَ

عَلَيْهِ أَجْرًا ⑪

قَالَ هَذَا فِرَاقُ بَيْنِي وَبَيْنَكَ سَاءَ بَيْتُكَ بِتَأْوِيلِ

مَا لَمْ تَسْتَطِعْ عَلَيْهِ صَبْرًا ⑫

注46 公正なるモーゼの幻における“神のしもべ”(聖なる預言者)は、2者の間には大きな違いが存在したので、それゆえに、彼(モーゼ)は、彼に同伴できない、すなわちモーゼの信者たちは彼(聖なる預言者)を受け入れないであろうと、モーゼに述べたとしてここに表されている。

注47 幻の言葉の中で、若者はとりわけ、無知、強さ、そして、野性的衝動を示す。モーゼの幻における正しき“神のしもべ”によるその青年の殺害は、イスラム教では、その従者に、肉欲、情欲を真に絶つことを要求するのだということを意味した。

注48 本節は、モーゼと聖なる預言者が神のためにユダヤ教徒とキリスト教徒の協力を求めるが、それは、両者に拒まれるということを示している。

80. 先づ船のことだが、あれは海で働く貧しい人々のもの。(注49)それを我輩さんとしたるは、彼等の背後にすべての船を強制徴用せんとす国王あるが故なり。

أَمَّا السَّفِينَةُ فَكَانَتْ لِمَسْكِينٍ يَعْمَلُونَ فِي الْبَحْرِ
فَارَدْتُ أَنْ أَعِيبَهَا وَكَانَ وَرَاءَهُمْ نَلِكٌ يَأْخُذُ
كُلَّ سَفِينَةٍ غَصْبًا ۝۸۰

81. 次に、若者の(注50)場合は、その若者の両親は信者なれど、彼が背逆と不信を以て禍を両親に及ぼさんことを我は恐れたがためなり。

وَأَمَّا الْغُلَامُ فَكَانَ أَبَوَاهُ مُؤْمِنَيْنِ فَخَشِينَا أَنْ
يُزَيِّجَهُمَا طَغْيَانًا وَكُفْرًا ۝۸۱

82. されば、我等は主に、彼よりも清純且つ親孝行な息子を取換へてくだし賜わらんことを希えり。

فَارَدْنَا أَنْ يَبْدِلَهُمَا رَبُّهُمَا خَيْرًا مِنْهُ زَكَوَةً
وَأَقْرَبَ رَحْمًا ۝۸۲

83. さて、あの壁のことだが、あれはもともと邑に住む二人の孤児の(注51)所有なり。その中には二人のための財宝あり。而して、彼等の父は義しい人なりき。されば、彼等が成人したあかつきに、主よりのお恵みとして之を取り出さんことを望みたり。されば、修理をしたるは、我が意向に非ず。(注52)以上が、汝が忍耐し得ざりし事柄の説明なり」と。(注53)

وَأَمَّا الْجِدَارُ فَكَانَ لِغُلَامَيْنِ يَتِيمَيْنِ فِي الْمَدِينَةِ
وَكَانَ بَيْنَهُمَا كَنْزٌ لَهُمَا وَكَانَ أَبُوهُمَا صَالِحًا
فَأَرَادَ رَبُّكَ أَنْ يَبْلُغَا أَشُدَّهُمَا وَيَسْتَخْرِجَا كَنْزَهُمَا
رَحْمَةً مِنْ رَبِّكَ وَمَا فَعَلْتُهُ عَنْ أَمْرِي ذَٰلِكَ
فِي تَاوِيلِ مَا لَمْ تَسْطِعْ عَلَيْهِ صَبْرًا ۝۸۳

注49 “貧しき人々”という語は、ここでは、“イスラム教徒”を表していると思われる。ポートに穴をあけるとは、イスラムでは、イスラム教徒にアッラーのために、ザカート、施しとして自らのお金を使うよう勧められていることを意味した。これは、強さ、真の繁栄というよりはむしろ、経済的弱さのよりどころであるように思われるが、実際は、そうではないのである。イスラムの暴君の最たるものは、ビザンティンおよびイラン帝国であり、アラビアが彼らに貧しく不毛の土地で、わざわざ征服する価値はないと思われていなかったとしたら、それらの帝国がアラビアを吸い上げてしまったであろう。そういうわけで、この地は、聖なる預言者のためにそのままの形で保たれたのだ。

注50 グラーム(若者)は、上記に述べられたように、夢や幻の中では、無知、強さ、野性的衝動を示す。本節での“彼の両親”とは、人間の体と魂である。というのは、全ての道徳的特質が湧き上がる源(両親)は、イスラム教で教えられるように人間は本来、善を好むため、ここでは“信者”として表される人間の体と魂の結合だからなのである。これらの“信者”は“若者”と称される衝動により悪に引き込まれるのだ。イスラム教は、これらの衝動を根絶し、人間、つまり結合した人間の体と魂を、慈善心に富む方向に発達させ、また、人間生活の高い目的を達成させるのである。

注51 孤児は、モーゼとイエスであり、公正なる父はアブラハムである。彼らの宝物は、彼らにより人々に残された真の教訓である。その教訓は、人々の不信心により失われてしまう危険性があつたのではあるが。この宝物の、人々が、クルアーンの教訓の真実の悟りに目覚めるときには、それを受け入れるだろうという目的で、クルアーンの中で守られたのだ。

注52 それは神の命令のもとになされた。

注53 イスラム教の教えは、根本的にモーゼの律法の原理のあるものとは異なる法律や原理に基づいていたため、ユダヤ教徒とイスラム教徒の真実であり本物の協力は不可能であったという事実をモーゼの幻は指摘している。

第十一項

84. 彼等はズル・クアルナインに（注54）ついて汝に問わん。云え、「我は彼の物語のいくつかをお前たちに語り聞かせん」と。

85. われらは彼の^{ちから}権能を地上に確立し、すべてを成し遂げる^{はうと}方途を彼に与えたり。

86. 然る^{しか}後、彼は或る道を進めり、

87. 太陽が没する国に至るまで。彼はそこで、太陽が暗黒の水に沈むを見、また海辺に民の住むを見たり。われらは云えり、「ズル・クアルナインよ、彼等を懲らしめるもよし、また優しくしてやるもよし」と。

88. 彼は云えり、「不義なす者は、先ず我等が必ず^{しかり}罰し、然る後、主の御許に連れ行かれ、恐ろしい懲罰を味わされん」と。

89. 然しながら、信仰心篤く、善行を積む者は、結構な報奨を得べし。また、われらも、彼が容易に行い得ることを命ぜん。（注55）

90. 次いで彼は他の道を進めり、

وَيَسْأَلُونَكَ عَنِ الْقَرْيَيْنِ قُلْ سَأَتْلُو عَلَيْكُمْ
مِنْهُ ذِكْرًا ۝٨٦

إِنَّا مَكِّنَّا لَهُ فِي الْأَرْضِ وَاتَيْنَاهُ مِنْ كُلِّ شَيْءٍ
سَبِيلًا ۝٨٧

فَاتَّبَعَ سَبِيلًا ۝٨٨
حَتَّىٰ إِذَا بَلَغَ مَغْرِبَ الشَّمْسِ وَجَدَهَا تَغْرُبُ فِي
عَيْنِ حَيِثُمْ ۖ وَوَجَدَ عِنْدَهَا قَوْمًا قُلْنَا يٰذَا
الْقَرْيَيْنِ إِنَّمَا أَنْتَ تُعَذِّبُ وَإِنَّمَا أَنْتَ تُخَذِّلُ فِيهِمْ
حُسْنًا ۝٨٩

قَالَ إِنَّمَا مَنِ ظَلَمَ فَسَوْفَ نُعَذِّبُهُ ثُمَّ يُرَدُّ إِلَىٰ
رَبِّهِ فَيُعَذِّبُهُ عَذَابًا نُكْرًا ۝٩٠

وَإِنَّمَا مَنْ آمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا فَلَهُ جَزَاءٌ الْحُسْنَىٰ
وَسَنُقُولُ لَهُ مِنْ أَمْرِنَا يُسْرًا ۝٩١

ثُمَّ اتَّبَعَ سَبِيلًا ۝٩٢

注54 ズル・クルナインはダニエルの有名な夢の雄牛の2本の角を象徴するメド・ペルシア帝国を創立した王だと思われる。“私は、雄牛が西方、北方、そして南方に前進するのを見た。だからどんな動物も雄牛の前には立つことができないであろうし、雄牛の手から解放されるものもなかったのである。しかし、雄牛は、己の意志で行動し、偉大になったのだ”（ダニエル書8章4節、20節、21節）ダニエルの夢のこの部分と完全に調和して、クルアーンはズル・クルナイン（87、91、94節）の3つの旅に言及している。この事実は、ズル・クルナイルがメディアとペルシアの王の記述的な名前だという推論に対する大きな根拠となる。メディアとペルシアの全ての王の中で、クルアーンにおいて与えられた記述が最もよくあてはまるのはサイラスである。クルアーンは、ズル・クルナインの4つの特有の性質に言及した。(1)彼は力強い君主であり、親切で公正な統治者であった（85節、89節）。(2)彼は、神の有徳なしもべであり、神の啓示をうけた（92節、99節）。(3)彼は西方に向かって行進し、いわば、濃い水の海に太陽が沈むのに気がついたところに至るまで、征服を続けた。そしてその後、東方に向かい、広大な領土を征服し鎮圧した（87節、88節）。(4)彼は、野蛮な人たちが住み、ゴグとマゴグが侵略をした中ほどの地域へ行った、そしてその侵略を押さえるために、壁を築いた（94～98節）古代の偉大な統治者、有名な陸軍大尉の中で、サイラス上記の4つの特性を大部分、所有しているのだ。それゆえに彼はクルアーンのズル・クルナインだと見なされる価値が当然あるのである（イザヤ書45章、エズラ書1、2章歴代史略第2巻36章22、23節、Historians' History of the World, “Cyrus” 参照）。

注55 イザヤ書45章1～3節、歴代史略第2巻36章22～23節参照

91. 太陽が昇る国に至るまで。(注56) 彼はそこで、なんの日覆いを持たぬ住民の上に太陽が昇り来るを見たり。

حَتَّىٰ إِذَا بَلَغَ مَطْلِعَ الشَّمْسِ وَجَدَهَا تَطْلُعُ عَلَىٰ قَوْمٍ لَّمْ يَجْعَلْ لَهُم مِّن دُونِهَا سِتْرًا ﴿٩١﴾

92. 事実はかくの如し。げにわれらは、彼が持てるもののすべてを熟知せり。

كَذَٰلِكَ وَقَدْ أَحَطْنَا بِمَا لَدَيْهِ خُبْرًا ﴿٩٢﴾

93. 次いで彼は更に他の道を進めり、(注57)

ثُمَّ اتَّبَعَ سَبِيلًا ﴿٩٣﴾

94. 遂に二峯が聳え立つ山間に(注58) 入り来るまで。見れば麓に住民ありて、彼等は一言も解せざりき。(注59)

حَتَّىٰ إِذَا بَلَغَ بَيْنَ السَّدَّيْنِ وَجَدَ مِنْ دُونِهَا قَوْمًا لَّا يَكَادُونَ يَفْقَهُونَ قَوْلًا ﴿٩٤﴾

95. 彼等は云えり、「ズル・クアルナインよ、ゴグとマゴグが(注60) この地を荒す。我等は汝に税賦を納める故、我等と彼等の間に防壁を築きたまえ?」と。

قَالُوا يَا أَلْفَ تَيْبَ إِنَّ يَأْجُوجَ وَمَأْجُوجَ مُفْسِدُونَ فِي الْأَرْضِ فَهَلْ نَجْعَلُ لَكَ خَرْجًا عَلَىٰ أَنْ تَجْعَلَ بَيْنَنَا وَبَيْنَهُمْ سَدًّا ﴿٩٥﴾

96. 彼は答えり、「主が我に賦与せる能力は、汝等の貢賦より更に勝る。されど、お前たち努めて我に手を貸せ。さすれば我は、お前たちと彼等の間に防壁を築かん。

قَالَ مَا مَكْنِيَ فِيهِ رِجِّي خَيْرٌ فَأَعِينُونِي بِقُوَّةٍ أَجْعَلْ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُمْ رَدْمًا ﴿٩٦﴾

注56 本節は、太陽が激しく照りつける樹木のない不毛地帯であるアフガニスタンやバルチスタンといった東方へのサイラスの遠征に言及している。またシースタンやヘラトの東方まで、そしてメシェドまでつづくドゥズタブの北方まで何百マイルも広がった平野に暮らす人々にもあてはまるのである。

注57 本節は、カスピ海とコーカサス山脈の間の領土、ペリシア北方までのサイラスの3度めの遠征に言及している。

注58 “2つの山”は、2つの障壁を意味する。壁が築かれたデルベントの道は、片側がカスピ海、もう一方の側がコーカサス山脈に接していた。これら2つが、2つの障壁の役目を果たしていた。

注59 こういった地域の人々は、サイラスとは異なる言葉を話した。しかしペルシアのすぐ近隣に住み、ペルシア人やメディア人と、常に接していたため、彼らは、非常に不十分であり、また非常に困難を作ったが、彼らの言葉を理解し、話せるようになったのだ。壁が築かれた地域は、ペルシアに隣接し、のちには、ペルシアの一部となった。しかし今では、ロシア領土に含まれてしまっている。

注60 ヤジュージュとマジュージュ(ゴグとマゴグ)という言葉は共に、彼はペースがはやかった、彼またはそれは燃え立つ火となったという意味の語源アッジャに由来し、最も遠い東方のスキタイ人に関連がある(Enc. Brit. & Jewish Ency. “ゴグ”と“マゴグ”, Historians' History of the world 第2巻582ページ、エザキエル38章2～6節、39章6節)。西洋のキリスト教国家も、燃える火や、煮え湯を大いに利用するし、また、彼らの物質的進歩、偉大な発見や発明は、こういったものの正しく非常に広範囲にわたる使用のおかげであるゆえに、この言葉は西洋のキリスト教国家にもあてはまるのである。または、この言葉は、これらの国家が新たな征服を試みるため常に、せかせかと、いらいらして見張りの体制をくずさぬゆえ、その落ち着かない行動を含蓄しているとも考えられる。

97. 我に沢山の鉄塊を運び来たれよ」と。やがて、両山腹の間の空地が鉄塊で満たされるや、彼は「今だ、鞴にて之を吹け」と命じたり。彼等それを火の如く熱して赤くなるまで吹くと、彼は云えり、「溶かした銅をこれへ持て。我それをこの上に注がんと」。

98. かくして彼等ゴグとマゴグは、之によじ登るも、之を穿つこともし得ざりき。

99. そこで、彼は云えり、「これ我が主の慈悲なるぞ。なれど、主の約束が実現せらるる時、彼は之を微塵に打ち砕かん。主の約束は必ずや間違ひなし」と。

100. その日、われらは、押し寄せる波の如く彼等を相打ち砕かしめん。而して、喇叭が吹き鳴らされ、われらすべての人々を喚び集めん。

101. その日、われらは不信心者どもに地獄を目のあたりに表示せん—

102. その目を蔽われてわが警告に気づかず、聴くことさえも能わざりし者どもに。

第十二項

103. 不信心者どもは、わしをさしおいて、わが僕等を守護者となし得べしとするか？げにわれらは、不信心者どもをもてなすためにと地獄を備えたり。

104. 云え、「その所業故に誰が一番損するかを、われらはお前たちに教えようか？—

105. つまり、自分では善行をしているつもりが、現世の生活を追う余りその努力がすべて徒勞に帰したる者どもなり」と。

106. 彼等は、主の神兆も、主との会見も信ぜざる者どもなり。されば、彼等の努力は無に帰し、復活の日には、われら彼等になんらの重みも与えざるべし。

أُنُوْنِي زُبَرَ الْحَدِيدِ كَحَدِّ إِذَا سَاوَاهُ بَيْنَ الصَّدَفَيْنِ
قَالَ انْفُخُوا كَحَدِّ إِذَا جَعَلَهُ نَارًا قَالَ أُنُوْنِي أُنْرِغْ
عَلَيْهِ قَطْرًا ٩٧

فَمَا اسْطَاعُوا أَنْ يَظْهَرُوهُ وَمَا اسْتَطَاعُوا لَهُ
نَقْبًا ٩٨

قَالَ هَذَا رَحْمَةٌ مِنْ رَبِّي فَإِذَا جَاءَ وَعْدُ رَبِّي
جَعَلَهُ دَكَّاءَ وَكَانَ وَعْدُ رَبِّي حَقًّا ٩٩

وَتَرَكْنَا بَعْضَهُمْ يَوْمَئِذٍ يَمُوجُ فِي بَعْضٍ وَنُفِخَ
فِي الصُّورِ فَجَمَعْنَاهُمْ جُمُعًا ١٠٠

وَعَرَضْنَا جَهَنَّمَ يَوْمَئِذٍ لِلْكَافِرِينَ عَرْضًا ١٠١

الَّذِينَ كَانَتْ أَعْيُنُهُمْ فِي غِطَاءٍ عَنْ ذِكْرِنَا وَكَانُوا
لَا يَسْمَعُونَ سَعَاءًا ١٠٢

أَنْحَسِبَ الَّذِينَ كَفَرُوا أَنْ يَتَّخِذُوا عِبَادِي مِنْ
دُونِي أَوْلِيَاءَ إِنَّا أَعْتَدْنَا جَهَنَّمَ لِلْكَافِرِينَ
نَزْلًا ١٠٣

قُلْ هَلْ نُنَبِّئُكُمْ بِالْأَخْسَرِينَ أَعْمَالًا ١٠٤

الَّذِينَ ضَلَّ سَعْيُهُمْ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَهُمْ
يَحْسَبُونَ أَنَّهُمْ يُحْسِنُونَ صُنْعًا ١٠٥

أُولَئِكَ الَّذِينَ كَفَرُوا بِآيَاتِ رَبِّهِمْ وَلِقَائِهِ
فَحَبِطَتْ أَعْمَالُهُمْ فَلَا تُقِيمُ لَهُمْ يَوْمَ الْقِيَمَةِ
وِزْرًا ١٠٦

107. こは彼等の応報なり—すなわち地獄こそ。信仰を拒み、わが神兆とわが使徒たちを嘲笑したるが故に。

ذَٰلِكَ جَزَاؤُهُمْ بِمَا كَفَرُوا وَاتَّخَذُوا آلِيَّيْهِمْ
رُءُسَىٰ هُمْ ۚ (١٠٧)

108. 信じて善行を積む者は、かならずや至福の園に入居せん。

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ كَانَتْ لَهُمْ
جَنَّاتُ الْفِرْدَوْسِ نُزُلًا ۚ (١٠٨)

109. 彼等その裡に永遠に住み、決して他に移ることを欲せざるべし。

خَالِدِينَ فِيهَا لَا يَبْغُونَ عَنْهَا حِوَلًا ۚ (١٠٩)

110. 云え、「たとい大海が主の御言葉のために墨なりとも、主の御言葉が果てる前に、海水必ず涸れん、たといわれら同じものをもたらし之を補うとも」と。(注 61)

قُلْ لَوْ كَانَ الْبَحْرُ مَدَادًا لَّكَفَيْتُ رَبِّي لِنَفْسِ
الْبَحْرِ قَبْلَ أَنْ تَنْفَدَ ۚ كَلَيْتُ رَبِّي وَلَوْ جِئْتُ
بِشَيْءٍ مَدَدًا ۚ (١١٠)

111. 云え、「我はお前たち同様ただの人間にすぎず。なれど我は、お前たちの神が唯一なる神なることを啓示されたり。されば、その主に会わんことを望む者には、善行を積ましめよ。また、彼をしてその主と共に何者をも拝せしむるなかれ」と。(注 62)

قُلْ إِنَّمَا أَنَا بَشَرٌ مِّثْلُكُمْ يُوحَىٰ إِلَيَّ أَنَّمَا إِلَهُكُمُ اللَّهُ
وَاحِدٌ ۚ فَمَن كَانَ يَرْجُوا لِقَاءَ رَبِّهِ فَلْيَعْمَلْ عَمَلًا
صَالِحًا وَلَا يُشْرِكْ بِعِبَادَةِ رَبِّهِ ۚ أَحَدًا ۚ (١١١)

注 61 西洋のキリスト教国家は、自分たちの偉大な発明や科学的発見を、誇りにし、創造物自体の神秘を見抜くことに成功したという思い違いのもとで、努力をしているように思われる。これは、空虚なおごりにすぎない。神の神秘は、無尽蔵で底知れないため、これらの人間が発見したことや、今後あらゆる努力をして発見するであろうことは、大洋の中の水滴 1 滴にも及ばないのである。

注 62 この章の最初と最後の 10 節の朗唱をすれば、ダッジャールの精神的猛攻撃から守られると聖なる預言者が述べたと伝えられている。このことは、ダッジャールとゴグとマゴグが 1 つのものであり、同一人物——西洋のキリスト教国家の人間であることを示している。ダッジャールが、イスラム教に対する有害な宗教布教を表し、ゴグとマゴグは、彼らの物質的、政治的権力と支配を表すのである。



マリヤム
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. カーフ・ハー・ヤー・アイン・サード。(注1)
3. こは汝の主がその僕ザカリヤに垂れたる慈悲の話なり。
4. ザカリヤ密かにその主を喚びて、
5. 云えり、「主よ、我が体の骨は弱まり、頭は霜の如くきらめき輝く。然れども、我が主よ、我は汝に祈りて未だ祝福されざることはなかりき。
6. されど、我が妻は石女なれば、我が亡き後の縁者たちを心配す。さればなにとぞ我に後継ぎを授け給え。(注2)
7. 我が後を継ぎ、ヤコブの家を継ぐ者を。而してその者を、汝の意に適う者たらしめよ。」と。
8. 神は云えり、「ザカリヤよ、われらは、その名をやフヤーと呼ぶ息子の朗報を汝に伝う。われらはこれまで何人にもこの名を与えざりき」と。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

كَالْبَيْضِ ①

ذِكْرُ رَحْمَتِ رَبِّكَ عَبْدَهُ زَكَرِيَّا ②

إِذْ نَادَى رَبَّهُ نِدَاءً خَفِيًّا ③

قَالَ رَبِّ إِنِّي وَهَنَ الْعَظْمُ مِنِّي وَاشْتَعَلَ الرَّأْسُ

شَيْبًا لَمْ أَكُنْ بِدُعَائِكَ رَبِّ شَقِيًّا ④

وَإِنِّي خِفْتُ الْمَوَالِيَ مِنْ وَرَائِي وَكَانَتِ امْرَأَتِي

عَاقِرًا فَهَبْ لِي مِنْ لَدُنْكَ وَلِيًّا ⑤

يَرِثُنِي وَيَرِثُ مِنْ آلِ يَعْقُوبَ ⑥ وَاجْعَلْهُ رَبِّ

رَضِيًّا ⑦

يُزَكِّرُنَا إِنَّا بُشِّرُكَ بِغُلَامٍ اسْمُهُ يَحْيَى لَمْ نَجْعَلْ

لَهُ مِنْ قَبْلُ سَيِّئًا ⑧

9. ザカリヤは云えり、「我が妻は石女にして、我もまた老齢に達す、いかで子を持てるや?」と。(注3)

قَالَ رَبِّ أَلَى يَكُونُ لِي غُلَامٌ وَكَانَتِ امْرَأَتِي عَاقِرًا

وَقَدْ بَلَغْتُ مِنَ الْكِبَرِ عِتِيًّا ⑨

注1 汝はすべてを満たす真の導き手、すべてを知り給う真の神。

注2 ザカリヤの祈りは、祈りが必要とするすべての要素を兼ね備えていた。神にきき届けられるには、謙虚に心からの熱情をこめて祈らなければならない。サガリヤの祈りはこれらすべての条件を満たしていた。

注3 この節では、ザカリヤが神から息子が授けられるという恩寵に純粋に驚いている様子が示されている。だれであっても、ザカリヤと同様、突然このような知らせを受けたならば自然に驚きを示すはずである。

10. 啓示を伝達せる天使は云えり、「さもありなん。されど、汝の主は云えり、『われは以前、汝が無でありし時に汝を創造せり。されば、いと易きことなり。』」と。

قَالَ كَذَلِكَ قَالَ رَبُّكَ هُوَ عَلَىٰ هَيْنٍ وَقَدْ خَلَقْتُكَ مِن قَبْلُ وَلَمْ تَكُ شَيْئًا ⑩

11. ザカリヤは云えり、「主よ、然らば我にその証拠を示したまえ」と。神は云えり、「その証拠は、汝に三昼夜の間誰とも語らせず」と。(注4)

قَالَ رَبِّ اجْعَلْ لِّي آيَةً قَالَ آيَتُكَ إِلَّا تُكَلِّمَ النَّاسَ ثَلَاثَ لَيَالٍ سَوِيًّا ⑪

12. かくて彼は聖殿よりその民のところへ出て来たり、それとなく身振りで、朝な夕な神を讃え奉ることを彼等に頼みたり。

فَخَرَجَ عَلَىٰ قَوْمِهِ مِنَ الْمِحْرَابِ فَأَوْحَىٰ إِلَيْهِمْ أَن سَبِّحُوا بُكْرَةً وَعَشِيًّا ⑫

13. 神は云えり、「ヤフヤーよ、經典を遵守せよ」と。而して、われらは未だ幼いながらも彼に知恵を授け、

يُيَحْيِي خُذِ الْكِتَابَ بِقُوَّةٍ وَآتَيْنَاهُ الْحُكْمَ صَبِيًّا ⑬

14. またわれら手ずから慈愛と無垢の心を授けたれば、彼は敬虔にして、

وَحَنَانًا مِّن لَّدُنَّا وَزَكَاةً وَكَانَ تَقِيًّا ⑭

15. 父母に孝、傲慢かつ反抗的に非ざりき。

وَبَرًّا بِوَالِدَيْهِ وَلَمْ يَكُن جَبَّارًا عَصِيًّا ⑮

16. 彼の生まれし日に、逝きし日に、また復活らん日に平安彼の上にあれかし。

وَسَلَّمَ عَلَيْهِ يَوْمَ وُلِدَ وَيَوْمَ يَمُوتُ وَيَوْمَ يُبْعَثُ حَيًّا ⑯

第二項

17. また、經典で言及したマリアのことを物語れ。その時彼女は、家人を避けて東の方へ引籠り、

وَإِذْ كُنتِ فِي الْكَتِّبِ مَرْيَمُ إِذْ أَنْتَبَذْتَ مِنْ أَهْلِهَا مَكَانًا شَرْفِيًّا ⑰

18. 彼等の目から己れを蔽ひ隠したる時、われら天使を彼女のもとへ遣わしたれば、天使は完璧き人間の形を以て彼女の前に出現せり。(注5)

فَاتَّخَذَتْ مِنْ دُونِهِمْ حِجَابًا فَأَرْسَلْنَا إِلَيْهَا رُوحَنَا فَتَمَثَّلَ لَهَا بَشَرًا سَوِيًّا ⑱

注4 ザカリヤは、口をきかず、ただ神を想い、賛美することに専心するようという命令を申し渡されたが、これは老いたザカリヤの体力を回復させるために考慮された気高い方策なのである。福音書では、彼がおしになったのは神の言葉を信じなかったゆえに与えられた罰なのだとされているが、正しくない。(ルカ 1: 20-21)

注5 偉大なる息子の誕生という喜ばしいお告げがマリヤに伝えられたのだが、そのお告げは、直接マリヤに聞かされるように音声として語られたのではない。夢か幻影という形をとって伝達されたのである。夢の中に現れた天使は、健康な男子の姿をしており、彼女に息子が生まれるという神からのお告げを伝えたのである。それゆえ、聖霊が彼女の体に入り込むことなどあり得ず、ここで示されているのは単に彼女のゆめの中に大天使が男性の姿で現れたということである。

19. マリアは云えり、「我、汝より離れて慈悲深い神の御許に逃れたり、汝もし神を畏るるなば」と。

20. 彼は答えり、「我はただ汝に、純潔なる男の子を授けんがために来し使者にすぎず」と。

21. マリアは云えり、「男未だ我に触れざれば、しかも、不身持ちでない身が、如何にして子供を持ち得ようぞ？」と。

22. 彼は答えり、「さもありなん。なれど、汝の主は云う、「これわれには容易し。われらがかくするは、その子を以て人間への神兆となし、われらからの慈悲たらしめんがためなり。こは命定されたことなり」』と。

23. かくて彼女はその子を孕み、(注6)その子と共に遠隔のところへ引籠れり。

قَالَتْ اِنِّىْ اَعُوْذُ بِالرَّحْمٰنِ مِنْكَ اِنْ كُنْتَ تَبِيْئًا ①٩

قَالَ اِنَّمَا اَنَا رَسُوْلُ رَبِّكَ لِاَهْبَ لَكَ عَلِيًّا ②٠
رَبِّكَ ②١

قَالَتْ اَنِّىْ يَكُوْنُ لِىْ عَلَمٌ وَلَمْ يَنْسَسْنِىْ بِشَرٍّ وَّ ②٢
لَمْ اَكُ بَغِيًّا ②٣

قَالَ كَذٰلِكَ قَالَ رَبُّكَ هُوَ عَلٰى هٰٓهٖنَ وَلِنَجْعَلَ اٰيَةً ②٤
لِّلنَّاسِ وَرَحْمَةً مِّنَّا وَكَانَ اَمْرًا مَّقْضٰیًا ②٥

فَحَمَلَتْهُ فَانْتَبَدَتْ بِهٖ مَكَانًا قَوِيًّا ②٦

注6 マリアが夫との交わりもなくしてどのようにイエスを身ごもったのか、ということは、現在のところ人間の知性では押し測ることのできない神の神秘であるとみなされている。この謎は、今の我々の知力の及ぶ範囲内での自然法を超越したものなのである。今の我々は知らずともこの先解明できるようになるであろう、などとは言えまい。人間の知識には、所せん限りがあり、神の神秘をすべて解き明かすことなど、とうてい無理なことである。自然の神秘で、人間がまだ解明できないものは山とあるし、多分それらはこれからわからぬまじ謎として残っていくのではないかと思われる。解き明かせない神秘の一つが、父を介さないイエスの誕生についてである。神がおできになることは際限がなく、一方、人間の力には限りがある。彼は「存れ」と一言おっしゃってこの宇宙を創造された方なので、我々には起こり得ないと思われる事もすべてお出来になるのだということとは明らかである。また医学的にも、女性…人の子供をはらむという可能性を完全に排除することができない。生物学的見地から宗教ぬきにして純粋に考察すると、処女生殖（単為生殖——すなわち、男性との関係を持たずして子供をつくるということ）が、何らかの条件下では起こり得ると考えられている。女性の骨盤、下腹部にしばしば見られるある種の種瘍がこのような単為生殖を可能にし得ると見ている医学関係者がいる。この種瘍は男性化細胞種瘍として知られ、男性の精子をつくることができる。もし、女性の体内で、男性化細胞種瘍により生存精子が製造できるとすれば、女性の単為生殖の可能性、さらに言えば処女生殖の可能性は否定できまい。すなわち、女性自身の体内において男性が彼女の体内に通常の方法でもしくは外科的処置により精子を送り込んだと同様の結果を生み出すことが可能であろうということである。最近になってヨーロッパで、ある婦人科グループが、男性との接触なく出産した女性の例を公表した(ランセット)。イエスの誕生は、父を介さなかったという点において全く他に例を見ないものとされてきたが、こうなってくるとそうとも言いきれないようである (Enc. Brit 引用について詳しくは英版参照)。もしこれらのすべての可能性を完全に否定するとイエスは私生児として生まれたなどとんでもない帰結を導きだしてしまうかもしれない。キリスト教、ユダヤ教ともイエスの誕生は、通常、人が生まれるのとは違った特殊性を有するという点で合意しているものの、キリスト教ではそれを超自然として受けとめているのに対しユダヤ教はイエスが私生児なのだと解釈している (Jew Enc.)。実際、戸籍簿にもイエスを私生児として記載している (タルムド)。マリアの夫、ヨセフは、イエスが生まれるまでマリアと夫婦関係を持たなかったと福音書で述べられており、この事実のみがイエスの誕生の特異性を成している (マタイ 1:25)。この「彼女はその子を孕み」という表現には、マリアが男性を介さずにそうなったという特別の概念を含む。

24. 分娩の苦痛の余り、彼女は棗椰子^{なつめやし}の幹に取りすがりたり。彼女は云えり、「おお！我くなる以前に死に、忘れ去られし者なりせば！」と。
25. すると、下から彼女を呼ぶ者ありて、云う、「悲しむなかれ。汝の主は、汝の足もとに一筋の小川を備えたり。
26. 棗椰子^{なつめやし}の幹を自分の方に揺り動かせ。さすれば、熟れた新鮮な実が汝の上に落ちん。
(注7)
27. されば、食い且つ飲み、汝の目を静めよ。而して、汝もし誰かに会わば『我は慈悲なる神に資戒を誓いたり。されば、我どなたとも今日は物云えず』と云え」と。(注8)
28. かくて、彼女は、嬰兒^{どうりご}を抱いて一族のもとに帰り来たり。彼等は云えり、「マリアよ、汝はまことにけしからぬことをなせり。
- فَاجَاءَهَا الْبَخَّاسُ إِلَى جَذْعِ النَّخْلَةِ قَالَتْ
يَلَيْتَنِي مِثْ قَبْلَ هَذَا وَكُنْتُ نَسِيًّا مَنْسِيًّا ①⑤
- فَنَادَاهَا مِنْ تَحْتِهَا أَلَا تَحْزَنِي قَدْ جَعَلَ رَبُّكِ
تَحْتِكَ سَرِيًّا ①⑥
- وَهَدَىٰ إِلَيْكِ الْجَنَّةَ تَلْقُطُ عَلَيْكَ رُطْبًا
جَنِينًا ①⑦
- فَكُلِي وَاشْرَبِي وَقَرِّي عَيْنًا فَإِمَّا تَرَيْنَ مِنَ الْبَشَرِ
أَحَدًا فَخُوفِي إِنِّي زِدْتُ الرَّحْمَنَ صَوْمًا فَلَنْ أَكَلِمَ
الْيَوْمَ إِنْسِيًّا ①⑧
- فَأَنْتِ بِهِ قَوْمَهَا تَحْمِلُهُ قَالُوا يُمَرِّمُ لَقَدْ جِئْتِ
شَيْئًا فَرِيًّا ①⑨

注7 この記述によると、イエスの誕生は、ナツメヤシがユダヤ地方で新たに実る季節のでき事とわかる。ナツメヤシの季節というと、粉れもなく8月から9月である。一般にキリスト教徒に受けとられている見解では、イエスは12月25日生まれとされており、毎年、キリスト教国ではこの日をクリスマスとして熱情的に祝っている。しかし、この12月25日生まれという見解はクルアーンの記述と矛盾するだけでなく、歴史的にも反するし、さらには新約聖書の記述にも合致せず矛盾してしまっている。イエス誕生について、ルカによる福音書では「この地方で（ユダヤ地方）で羊飼いたちが、夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた（ルカ 2：7、8参照）、とある。このルカの記述についてキリスト教の司教であるバーンズ氏も「The Rise of Christianity」という有名な本の79ページでこう述べている。「12月25日Hがイエスの実際の誕生の日であるということは何の根拠もないことである。もし、イエスの誕生にまつわるルカの福音を信じるとするとそこにはベツレヘム近くで羊飼いが野宿していたとある。イエスのお生まれになったベツレヘム周辺で冬というとき夜の気温はたいへん低く、ユダヤ地方の山岳地域では、雪も珍しくない。どうやら西暦300年ごろ、あれこれ議論の末、イエスの誕生日を話し合いの上で決定したようである。バーンス司教の見解について以下に少し引用する。（引用文献については英版参照。）

キリストの生年月日は今だ明白になってはいない。しかし、西暦340年に教会の神父がキリスト誕生を祝う日として、ある一日を選んだ際、彼らは賢くも冬至を選んだといえよう。冬至であれば人々はしっかり頭に入れ、最も大切な祝祭日として心に留めることができるからである。もちろん、人間がつくった暦の形式のずれにより、キリスト誕生の日づけも冬至を2～3日前後するということはある。（Enc. Brit.15版 5巻P 642）……中略……第2に、冬至は、その当時太陽の誕生した日とみなされており、ローマ暦12月25日は多神教徒にとり太陽神誕生の祝日となっていた。キリスト教会はこの一般に広まっていた祝日を踏みにじることができず、その祝日をキリストの誕生の日として精神的意味を与えたのである（Ch. Enc.）。

注8 マリアが無駄な話をしないよう命ぜられたのは、一つには彼女の体力を保持するためにであり、もう一つには彼女が心を集中させて神を想い、神に祈る時間をより多くとれるようにという御はからいなのであった。

29. アロンの姉よ、汝の父は悪人に非ず、母もまた淫らな女に非ざりしに！」と。
يَا خَتَّ هُرُونَ مَا كَانَ أَبُوكَ امْرَأَ سَوْءٍ وَمَا كَانَتْ
أُمُّكَ بَغِيًّا ٢٩
30. すると、マリアは己が子を指させり。彼等は云えり、「我等、揺籃の中なる嬰兒と如何にして語り得るか？」と。
فَأَشَارَتْ إِلَيْهِ قَالُوا كَيْفَ نُكَلِّمُ مَنْ كَانَ فِي
الْهَمْدِ صَبِيًّا ٣٠
31. すると、その子は云えり、「我はアッラーの僕なり。彼經典を我に授け、我を預言者となせり。
قَالَ إِنِّي عَبْدُ اللَّهِ آتَانِيَ الْكِتَابَ وَجَعَلَنِي نَبِيًّا ٣١
32. 而して、彼は、我いずこに居ようと祝福し賜い、我が生ある限り礼拝と慈善を怠らぬよう命じたり。
وَجَعَلَنِي مُبَارَكًا أَيْنَ مَا كُنْتُ وَأَوْصَانِي بِالصَّلَاةِ
وَالزَّكَاةِ مَا دُمْتُ حَيًّا ٣٢
33. また、母に孝養をつくすことを命じたり。而して、我を高慢にして、不幸なる者たらしめざりき。
وَبَرًّا بِوَالِدَتِي وَلَمْ يَجْعَلْنِي جَبَّارًا شَفِيًّا ٣٣
34. 我が生まれし日に我が上に平安ありしが、我が死なん日に、また、再び甦らん日にも我が上に平安あらん」と。
وَالسَّلَامُ عَلَيَّ يَوْمَ وُلِدْتُ وَيَوْمَ أَمُوتُ وَيَوْمَ
أُبْعَثُ حَيًّا ٣٤
35. これがマリアの子（注9）イエスなり。人々が疑心を抱くところの真相とは、これなり。
ذَٰلِكَ عِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ قَوْلَ الْحَقِّ الَّذِي فِيهِ
يَبْتَرُونَ ٣٥
36. アッラーに子があるはずなどは、（注10）アッラーの威厳にふさわしからず。彼に讃えあれ。彼ことを決して「在れ」と云えば、すなわち、存す。
مَا كَانَ لِلَّهِ أَنْ يَتَّخِذَ مِنْ وَلَدٍ سُبْحَانَهُ إِذَا قَضَىٰ
أَمْرًا فَإِنَّمَا يَقُولُ لَهُ كُنْ فَيَكُونُ ٣٦

注9 「イブン・マリヤム」（マリアの息子）という表現はイエスを指し示す名前である。これは、父を介さない誕生である（そのため父の名前を入れられない）ことを暗示するものである。それと同時にクルアーンはこの箇所「マリアの息子」と表現されたもう一つの理由は、他の者との混合を避けることができるという点にある。福音書ではイエスの通称として「人の子（イエス）」（アラビア語で「イブン・アダム」）を用いているが、「人の子」という表現は聖書の中で他の人々を指し示すのにも使われている。「マリアの息子」と言えば誰のことであるか一目瞭然にわかるので紛わしきのないこの表現を用いてクルアーンはここでイエスを「マリアの息子」と称している。

注10 キリスト教の人々は、イエスを神の息子と信じている。その根拠としては、聖書中でイエスが「神の御子」と称されていることにあるのだが、聖書では他の人々に対しても「神の御子」と呼びかけている。イエスのみが「神の御子」として他の人々と区別して呼ばれたわけではないので、これらの人々が神の実際の息子たちでないのと同様、イエスも神の実際の息子ではないのである（ルカ 20:36； エレミヤ 31:9； マタイ 6:9； ヨハネ 8:41； エペソ 4:6）。

37. イエスは云えり、「げにアッラーは我が主なり。而して、お前たちの主なり。されば、彼のみを崇めよ。こは正しき道なり」と。

وَرَأَى اللَّهَ رَبِّي وَرَبَّكُمْ فَأَعْبَدُوهُ هَذَا صِرَاطٌ مُسْتَقِيمٌ ﴿٣٧﴾

38. 然るに、諸宗派はイエスに関して互に論争す。信ぜざる者どもは禍いなるかな、重大な日に臨むが故に。

فَاخْتَلَفَ الْأَحْزَابُ مِنْ بَيْنِهِمْ فَوَيْلٌ لِلَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ مَّشْهَدِ يَوْمٍ عَظِيمٍ ﴿٣٨﴾

39. 彼等がわれらの前にまかり出づる日、彼等はなんとよく聞こえ、よく見えることよ！然るに、現世では、不義者どもは明らかに迷誤の中にあり。

أَسْمِعْ بِهِمْ وَأَبْصُرْ يَوْمَ يَأْتُونَنَا لَكِنِ الظَّالِمُونَ الْيَوْمَ فِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ﴿٣٩﴾

40. 一切が決定されん嘆きのその日について、彼等に警告せよ。なれど、今はのん気にかまえているので、彼等は信ぜず。

وَأَنْذِرْهُمْ يَوْمَ الْحَسْرَةِ إِذْ قُضِيَ الْأَمْرُ وَهُمْ فِي غَفْلَةٍ وَهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿٤٠﴾

41. この大地、並びにその上に在るすべての人々を相続するはわれらなり。されば、彼等は皆われらが許に連れ戻されん。(注11)

إِنَّا نَحْنُ نَرِثُ الْأَرْضَ وَمَنْ عَلَيْهَا وَإِلَيْنَا يُرْجَعُونَ ﴿٤١﴾

第三項

42. 經典の中でアブラハムの物語を話せ。彼は誠実な男であり、預言者なりき。

وَأَذْكُرْ فِي الْكِتَابِ إِبْرَاهِيمَ إِنَّهُ كَانَ صِدِّيقًا نَبِيًّا ﴿٤٢﴾

43. 彼が父に向かって云いし時のことを念え。「我が父よ、何故汝は、聞きもせず見もせず、また少しも役立たぬものを崇拜するか？

إِذْ قَالَ لِأَبِيهِ يَا أَبَتِ لِمَ تَعْبُدُ مَا لَا يَسْمَعُ وَلَا يُبْصِرُ وَلَا يُغْنِي عَنْكَ شَيْئًا ﴿٤٣﴾

44. 我が父よ、汝が授かりしことなき知識が今我に降り。されば、我に従え。我は汝を正しい道に導かん。

يَا أَبَتِ إِنِّي قَدْ جَاءَنِي مِنَ الْعِلْمِ مَا لَمْ يَأْتِكَ فَاتَّبِعْنِي أَهْدِكَ صِرَاطًا سَوِيًّا ﴿٤٤﴾

45. 我が父よ、悪魔を拜むなかれ。げに悪魔は慈悲なる神に逆らう反逆者なり。

يَا أَبَتِ لَا تَعْبُدِ الشَّيْطَانَ إِنَّ الشَّيْطَانَ كَانَ لِلرَّحْمَنِ عَصِيًّا ﴿٤٥﴾

注11 この節は、次の2つの預言を表している。(1)キリスト教の人々が、まず、多くの信者に支えられて世界中で優勢をふるい、世界を支配するであろう。(2)しかし、彼らは真の神を信じなかったが故に、支配権を剥奪され、それは究極的にはイスラムの人々の手に与えられるであろう。

46. 我が父よ、我は慈悲なる神の罰が汝に降り
はすまいか、また汝が悪魔の仲間たらんこ
とを恐る」

47. 父は答えり、「アブラハムよ、汝は我が神々
を拒否するか？もし汝思いとどまらずば、
汝との一切の関係を断ち切らん。暫く我よ
り遠ざかれ」と。

48. アブラハムは云えり、「汝の上に平安あれ。
我は汝のために我が主に赦しを請わん。彼
は我に実に慈悲深くまします。

49. されば、我は、あなたがた並びにあなた方
がアッラー以外に祈る者から離れて去り行
かん。而して、我が主のみに祈らん。我が
主に祈らば、我は失望させられざるべし」
と。

50. かくて彼が、彼等並びに彼等がアッラー以
外に崇拜せる神々から別れたれば、われら
は彼にイサクとヤコブを授け、彼等各々を
預言者たらしめたり。

51. 而して、われらは彼等に恵みを与え、また
まことの名声を授けたり。

第四項

52. 而して、この經典の中で、モーゼの物語を
述べよ。彼は特に選ばれた者で、使者であ
り、預言者なりき。

53. われらは山の右側より彼に呼びかけ、靈的
交渉のために傍近くに彼を招き寄せり。

54. 而して、われらは恩恵によって、彼の兄ア
ロンを預言者として彼に授けたり。

55. また、この經典の中で、イスマエルの物語
を述べよ。彼は実に信義に厚い男で、使徒
であり、預言者なりき。

يَا بَتَّ إِنِّي أَخَافُ أَنْ يُسَكِّنَكَ عَدَابٌ مِنَ الرَّحْمَنِ
فَتَكُونَنَّ لِلشَّيْطَانِ وَلِيًّا ﴿٤٦﴾

قَالَ أَرَأَيْبَ أَنْتَ عَنْ إِلَهِي يَا بُرْهَيْمَ لَئِنْ لَمْ
تَنْتَوِ لَأَرْجِمَنَّكَ وَاهْجُرْنِي مَلِيًّا ﴿٤٧﴾

قَالَ سَلِّمْ عَلَيْكَ سَأَسْتَغْفِرُ لَكَ رَبِّي إِنَّهُ كَانَ بِي
حَفِيًّا ﴿٤٨﴾

وَأَعْتَزِّلُكُمْ وَمَا تَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ وَأَدْعُوا
رَبِّي ۖ عَلَىٰ آلَاكُمْ بِدُعَاءِ رَبِّي شَقِيًّا ﴿٤٩﴾

فَلَمَّا أَعْتَزَلْتَهُمْ وَمَا يَبْذُلُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ
وَهَبْنَا لَهُ إِسْحَاقَ وَيَعْقُوبَ وَكُلًّا جَعَلْنَا
نَبِيًّا ﴿٥٠﴾

وَوَهَبْنَا لَهُمْ مِنْ رَحْمَتِنَا وَجَعَلْنَا لَهُمْ لِسَانَ
صِدْقٍ عَلَيَّا ﴿٥١﴾

وَأَذْكُرُ فِي الْكِتَابِ مُوسَىٰ إِنَّهُ كَانَ مُخْلَصًا وَكَانَ
رَسُولًا نَبِيًّا ﴿٥٢﴾

وَنَادَيْنَاهُ مِنْ جَانِبِ الطُّورِ الْأَيْمَنِ وَقَرَّبْنَاهُ
نَجِيًّا ﴿٥٣﴾

وَوَهَبْنَا لَهُ مِنْ رَحْمَتِنَا أَخَاهُ هَارُونَ نَبِيًّا ﴿٥٤﴾

وَأَذْكُرُ فِي الْكِتَابِ إِسْمَاعِيلَ إِنَّهُ كَانَ صَادِقَ الْوَعْدِ
وَكَانَ رَسُولًا نَبِيًّا ﴿٥٥﴾

56. 彼は常に、その民に礼拝と慈善を命じたりは、主にいたく嘉せられたり。

57. また、この經典の中で、イドリースの物語を述べよ。彼は正直な男で、預言者なりき。

58. されば、われらは彼を、高き地位に登らしめたり。

59. 以上の人々は、アッラーが特に祝福を与えし預言者にして、アダムの後裔にして、われらがノアと共に方舟で運びし者たちの子孫で、アブラハムとイスラエルの子孫なり。彼等は、われらが導き選び出した者ばかりなり。慈悲なる神の徴が彼等に読誦されるや、彼等は神の御前に平伏して叩頭し、感涙にむせぶ。

60. 然るに、彼等の後をついだ子孫たちは、礼拝を怠り、私欲に耽けりたり。されば、彼等はやがて破滅に遭遇せん、

61. 改悔し、信仰に入り、善行を積む者を除いて。それ等の人々は樂園に入り、些かも不当に遇せらるることなかるべし—

62. すなわち慈悲なる神が、目に見えぬものを信じたその僕等に約束せしエデンの園なり。彼の約束は必ずや果たされん。

63. 彼等はそこで一切くだらぬことは聞かず、ただ「平安あれ」と云うを聞く。而して、朝な夕な食物を与えられん。

64. かくの如きが樂園にして、われらは、義しいわれらの僕等に之を継がせしめん。

65. 諸天使は彼等に云わん、「我等は汝の主の命に非ずば、天より降らず。我等以前のもの、我等以後のもの、並びにその間にあるもの、すべてはアッラーの統べ給うところ。而して、汝の主は決して忘却せず」と。

وَكَانَ يَأْمُرُ أَهْلَهُ بِالصَّلَاةِ وَالزَّكَاةِ وَكَانَ عِنْدَ رَبِّهِ مَرْضِيًّا ⑤٦

وَأَذْكُرُ فِي الْكِتَابِ إِدْرِيسَ إِنَّهُ كَانَ صِدِّيقًا نَبِيًّا ⑤٧
وَرَفَعْنَاهُ مَكَانًا عَلِيًّا ⑤٨

أُولَئِكَ الَّذِينَ أَنْعَمَ اللَّهُ عَلَيْهِمْ مِنَ النَّبِيِّينَ مِنْ ذُرِّيَّةِ آدَمَ وَمِمَّنْ حَمَلْنَا مَعَ نُوحٍ وَمِنْ ذُرِّيَّةِ إِبْرَاهِيمَ وَإِسْرَءِيلَ وَمِمَّنْ هَدَيْنَا وَاجْتَبَيْنَا إِذِ اسْتَسْقَاهُمْ آيَةُ الرَّحْمَنِ خَرُّوا سُجَّدًا ذَلِيلِينَ ⑤٩

فَخَلَفَ مِنْ بَدْوِهِمْ خَلْفٌ أَضَاعُوا الصَّلَاةَ وَاتَّبَعُوا الشَّهَوَاتِ فَسُوفَ يَلْقَوْنَ غِيًّا ⑥٠

إِلَّا مَنْ تَابَ وَآمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا نَأْوِلُكَ يَدُ الْخُلُوفِ الْجَنَّةِ وَلَا يَظْلَمُونَ شَيْئًا ⑥١

جَعَلْنَا عَدْنَ الْإِنِّي وَعَدَ الرَّحْمَنِ عِبَادَةً بِالْغَيْبِ إِنَّهُ كَانَ وَعْدُهُ مَأْتِيًّا ⑥٢

لَا يَسْمَعُونَ فِيهَا لَغْوًا إِلَّا سَلَامًا وَلَهُمْ رِزْقُهُمْ فِيهَا بُكْرَةً وَعَشِيًّا ⑥٣

بَلْكَ الْجَنَّةِ الَّتِي نُورِثُ مِنْ عِبَادِنَا مَنْ كَانَ تَقِيًّا ⑥٤

وَمَا نَنْزِلُ إِلَّا بِأَمْرِ رَبِّكَ لَهُ مَا بَيْنَ أَيْدِينَا وَمَا خَلْفَنَا وَمَا بَيْنَ ذَلِكَ وَمَا كَانَ رَبُّكَ نِيًّا ⑥٥

66. 彼は天地と、その間にある一切のものの主なり。されば、彼に仕えて、堅忍不拔な奉公をせよ。汝は彼の外に、比肩し得る者あるを知るや？

رَبُّ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا فَاعْبُدْهُ وَاصْطَبِرْ
عَلٰٓى عِبَادَتِهٖ هَلْ تَعْلَمُ لَهُ سَمِيًّا ٦٦

第五項

67. 人は云う、「なんと！我死したる後、再び甦らせられるとな？」と。
68. 人は、われらが嘗て彼が無でありし時、彼を創造したる事実を、忘れたるか？

وَيَقُوْلُ الْاِنْسَانُ اِذَا مَاتَ لَسَوْىٓ اُخْرَجَ حَيًّا ٦٧
اَوْ لَا يَذْكُرُ الْاِنْسَانُ اَنَّا خَلَقْنٰهُ مِنْ قَبْلُ وَلَمْ يَكُ
شَيْئًا ٦٨

69. ならば、汝の主にかけて云う、「われらは彼等並びに悪魔どもと一緒に、必ず召集せん。然る後、彼等を跪かせ、地獄のまわりを曳き廻さん。

فَوَرَبِّكَ لَنَحْشُرَنَّهُمُ وَالشَّيَاطِيْنَ ثُمَّ لَنَنْحَضَنَّهٖمْ
حَوْلَ جَهَنَّمَ حِثًّا ٦٩

70. 次いで、われらは各宗派の中から、慈悲なる神に反逆すること最も甚だしかりし者を必ずや選び出さん。

ثُمَّ لَنَنْزِعَنَّ مِنْ كُلِّ شِيعَةٍ اِيْهُمْ اَشَدُّ عَلَى الرَّحْمٰنِ
عِتِيًّا ٧٠

71. げにわれらは、誰がそこで焼かれるに最もふさわしいかを熟知す。(注12)

ثُمَّ لَنَحْنُ اَعْلَمُ بِالَّذِيْنَ هُمْ اَوْلٰى بِهَا صِلٰٓئًا ٧١

72. お前たちの一人として、それが起らざるはなし。これ主の決定済みの判決なり。

وَ اِنْ فِىْكُمْ اِلَّا وٰرِدُهَا كَانَ عَلَىٰ رَبِّكَ حَتْمًا
مَّقْضِيًّا ٧٢

73. われらは義しい者を救い、不義者どもは跪かせたま地獄に放置せん。

ثُمَّ لَنُنۢبِىَ الَّذِيْنَ اتَّقَوْا وَنَذَرُ الظَّالِمِيْنَ فِيْهَا
جِثًّا ٧٣

74. 而して、われらの明白なる徴(注13)彼等に読誦されると、不信心者共は信者に向って云う、「両派のいずれが地位に於て優り、また付き合う仲間もより印象的なかを云ってみよ」と。

وَ اِذَا تُتْلٰى عَلَيْهِمْ اٰیٰتُنَا بَيِّنٰتٍ قَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا
لِلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا اِنۡنٰى الْقَرِيْنٰیۡنِ خَيْرٌ مَّقَامًا وَّ اَحْسَنُ
نَدِيًّا ٧٤

注12 「焼かれるにふさわしい」が意味しているのは(1)放っておかれるよりも火の中へ入れられた方がよい人々のこと。(2)他の人々と比較した際、他の人々よりも火の中に入れられる必要がある人々。(3)他の手段を用いるよりは、火を用いて罰せられた方がよい人々。

注13 単に「しるし」というと何かにまつわる証拠であるとか、論拠のある主張のことを意味する。あるものの存在、目的を示し、それを確立することのできる論理、知性あるいは経験に基づいていれば、それは「徴」である。一方、本文中にあるような「明白なる徴」と言うと、これは、単にその存在を示し、証明するというに留まらず、今、直面し、解決しようとしている問題やその状況に応じた適切な主張や論理のことを示す。そ

75. われらは彼等以前に如何に多くの世代を破滅に陥れたことか、富に於ても見かけに於ても彼等に優る徒輩なりし者を！

وَكَمْ أَهْلَكْنَا قَبْلَهُمْ مِنْ قَرْنٍ هُمْ أَحْسَنُ أَتَانَا وَرِيعًا ۝٥

76. 云え、「慈悲なる神は、迷誤の中にいる者に暫しの猶予を与う。彼等が威嚇されたことに会おうまで一天罰か、それとも審判の時至りて—その時彼等は、状態に於いてより悪く、力に於てより弱きものは誰なるかを知らん。

قُلْ مَنْ كَانَ فِي الضَّلَالَةِ فَلْيَمْدُدْ لَهُ الرَّحْمَنُ مَكَلًا خَلَّىٰ إِذَا رَأَا مَا يُوعَدُونَ إِنَّمَا الْعَذَابُ وَإِنَّا السَّاعِدَةُ فَيَسْئَلُونَ مَنْ هُوَ سَرُّ مَكَانًا وَاضْعُفْ جُنْدًا ۝٦

77. 而して、アッラーは、嚮導に従う者にはその指導を増し給う。末永く残る善行は、汝の主の目には、報奨に於て勝り、また終局に於ても勝る。」と。

وَيَزِيدُ اللَّهُ الَّذِينَ اهْتَدَوْا هُدًى وَالْبَيْتُ الطِّيبُ خَيْرٌ عِنْدَ رَبِّكَ ثَوَابًا وَخَيْرٌ مَرَدًّا ۝٧

78. 汝は、われらの神兆を信ぜず、「我は必ず富と子女に恵まれん」と云う者を見たるか？

أَفَرَأَيْتَ الَّذِي كَفَرَ بِآيَاتِنَا وَقَالَ لَأُوتِيَنَّ مَالًا وَوَلَدًا ۝٨

79. 彼は見る能わざるものの知識を得たるか、それとも、慈悲なる神と約束を結べるか？

أَطَّلَعَ الْغَيْبَ أَمِ اتَّخَذَ عِنْدَ الرَّحْمَنِ عَهْدًا ۝٩

80. 断じて然らず！われらは彼の言葉を記録し、而して、その懲罰を延長せん。

كَلَّا سَنَكْتُبُ مَا يَقُولُ وَنَمُدُّ لَهُ مِنَ الْعَذَابِ مَدًّا ۝١٠

81. われら、彼が自慢するものをすべて相続せん。されば、彼は独りわれらの前に出で来らん。

وَنَرِيئُهُ مَا يَقُولُ وَيَأْتِينَا فَرْدًا ۝١١

82. 彼等はアッラー以外にも神々を立て、之を力のよりどころとして拝す。

وَاتَّخَذُوا مِنْ دُونِ اللَّهِ آلِهَةً لِيَكُونُوا لَهُمْ عِزًّا ۝١٢

83. 然らず！その神々は彼等の崇拜を拒み、かえって彼等の敵とならん。

كَلَّا سَيَكْفُرُونَ بِعِبَادِهِمْ وَيَكُونُونَ عَلَيْهِمْ ضِدًّا ۝١٣

第六項

84. われらはあの不信心者どもに違犯行為を扇動せんがために悪魔どもを遣わしたり。汝、之を知らずや？

أَلَمْ تَرَ أَنَّا أَرْسَلْنَا الشَّيَاطِينَ عَلَى الْكَافِرِينَ تَؤْزُرُهُمْ أَمْرًا ۝١٤

85. 故に汝は、彼等に関して性急になるなかれ。われらが詳しく彼等の悪行を記録す。

فَلَا تَعْجَلْ عَلَيْهِمْ إِنَّمَا نَعُدُّ لَهُمْ عَدًّا ۝١٥

86. われらが義しい人々を名誉ある客として慈悲なる神の御前に召集せん、その日を想え。

يَوْمَ نَحْشُرُ السَّافِقِينَ إِلَى الرَّحْمَنِ وَقَدًّا ۝١٦

の徴により私たちは、何が正しいのか、その場に必要な解答を得ることができる。さらにそれはその「明白なる徴」のみが持てる高貴で崇高な目的を有しているという点で普通の徴とは異なる。

87. 而して、罪人をば、渴した駱駝の群の如く、
われら之を地獄に駆りたてん。
وَسَوْفَ الْمَجْرُمِينَ إِلَىٰ جَهَنَّمَ وَرِدًا ٨٧
88. 慈悲なる神と契約を結びたる者の外は、
何人も執り成す力を有せざるべし。
لَا يَبْلُغُونَ الشَّفَاعَةَ إِلَّا مَنِ اتَّخَذَ عِنْدَ الرَّحْمَنِ
عَهْدًا ٨٨
89. 彼等は云う、「慈悲なる神は子を設けたり」と。
وَقَالُوا اتَّخَذَ الرَّحْمَنُ وَلَدًا ٨٩
90. まことにお前たちは恐ろしいことを口にしたりしたものよ！
لَقَدْ جِئْتُمْ شَيْئًا إِدًّا ٩٠
91. ために天は裂け、大地はちりぢりに割れ、
山々も粉々に崩れ落ちん。(注 14)
تَكَادُ السَّمَوَاتُ يَتَفَطَّرَن مِنْهُ وَتَكْشَقُّ الْأَرْضُ وَ
تَخِرُّ الْجِبَالُ هَدًّا ٩١
92. 彼等が慈悲なる神に子ありと云いしがためなり。
أَنْ دَعَا لِلرَّحْمَنِ وَلَدًا ٩٢
93. 子ありなどとは、慈悲なる神の身にはふさわしからず。
وَمَا يَنْبَغِي لِلرَّحْمَنِ أَنْ يَتَّخِذَ وَلَدًا ٩٣
94. 天にあるもの、地にあるもの、一人として
慈悲なる神の許に僕として罷り出でざる者はなし。(注 15)
إِنْ كُلُّ مَنْ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ إِلَّا آتِيَ الرَّحْمَنِ
عَبْدًا ٩٤
95. げに彼はその知恵によって彼等を理解し、
すべて完全に数えたり。
لَقَدْ أَحْصَاهُمْ وَعَدَّهُمْ عَدًّا ٩٥
96. 而して、復活の日には、みなそれぞれ単独
で彼の御前に罷り出でん。
وَكُلُّهُمْ أَمِنْهُ يَوْمَ الْقِيَامَةِ فَرْدًا ٩٦

注 14 イエスが神の実子であるという教義はたいへんに忌むべきものであるので、山も地もごう音を響かせて粉々に砕け散るであろうというのである。神の息子であると信じる教義は、「天」―天の摂理と矛盾する。なぜなら、神が息子をもつというのは神の属性に反するからである。同時にその教義は「大地」に住む人の摂理にもそむくものである。なぜならそれは人間の本性の命ずるところではなく、自然に従えば、人間の知性も論理性も嫌悪感を示し、それを受け入れようとはしないはずである。高貴で崇高な人々、すなわち聖なる預言者や神に選ばれた人々「山」もまた、それを否定している。なぜなら、人が自らの救済のために、誰かを身代わりとしての代償的受難者が必要であるということはおかしいし、道徳的に高い地位に自らをおくことができるかどうかは自らの精神的努力、経験の帰結として決められることなのだから。

注 15 慈悲深き気高き神には御自身の助けとして息子を必要としたり、継承者として息子を必要とすることはあり得ない。なぜなら神は天地創造の神であられ、彼の王国は宇宙すべてに渡り、人間はすべて、その神のしもべであり、イエスも我々同様に神のしもべなのであるから。

97. 信じて善行を積む人々には一慈悲なる神は
慈しみを賜わらん。(注16)

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ سَيَجْعَلُ لَهُمُ الرَّحْمَنُ

وَدًّا ⑨⑩

98. かくの如く、われらがクルアーンを汝の言
葉で容易ならしめたは、汝をして義しい者
に朗報を伝え、論争好きな徒輩には警告を
与えしめんがためなり。

فَأَنشَأْنَا لَهُ بَلَاغًا مِّنْ بَيْنِ يَدَيْنَا لِيُنْذِرَ بِهِ الَّذِينَ

بِهِ قَوْمًا لَّدُنَّا ⑨⑪

99. 彼等より以前に、われらは如何に多くの世
代を打ち滅ばしたることか！汝はいま彼等
のうちのただの一人でも残存するを見る
か、またはその囁きすら聴くか？(注17)

وَكَمْ أَهْلَكْنَا قَبْلَهُم مِّن قَرْنٍ هَلْ تُحِصُّ مِنْهُمْ

شَيْءٌ مِّنْ أَحَدٍ أَوْ تَسْمَعُ لَهُمْ رِكْرًا ⑨⑫

注16 この節は、次の3通りに解釈できる。(1)神は、御自身の愛をキリストの心の中に託されるであろう。(2)神は、キリストを深く愛されるであろう。(3)神は、キリストの心の中に人々への深い愛を与えられるであろう。(4)神は、人々の心の中にキリストへの深い愛を育まれるであろう。

注17 西洋のキリスト教諸国家に対するきびしい警告がこの節で示されている。もし彼らが自分たちの誤った考えを捨てて、真実を受け入れるということを実際にしないのであれば、彼らの上に恐ろしい運命がふりかかることになるという警告である。彼らは今、物質的な力を誇り、物質的なものを握りどころとし、世界的な繁栄、発展をとげたとき誇りにしているが、もしこのまま誤った信仰を持ち、罪深き生活を悔い改めないならば、破滅に至る他、道はないという明白な事実が気がついていないのである。

سُورَةُ طه مَكِّيَّةٌ

ター・ハー
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. ター・ハー。(注1)
3. われらが汝にクルアーンを降したるは、汝を苦しめんがために非ず、
4. 神を畏れる者への訓戒としてなり。
5. そは、大地と崇高なる諸天とを創り給うた御方の啓示なり。
6. 彼は玉座に鎮座し給う慈悲なる神なり。
7. 天にあるもの、地にあるもの、その間にあるもの、並びに湿った底土の下にあるもの、すべては彼が統べ給う。
8. もし汝が声高に物云うとも、また低い声でささやこうと、彼は差異なく聴きたまい、人間の秘めたる思案や、更に隠されたことも知り給う。
9. アッラー、彼の外に神なし。最も美しい称号は彼のものなり。
10. とところで、モーゼの物語は汝の耳に達したりや？
11. 彼、火を見て、家族に云えり、「汝等ここにとどまれ、我は火を認めたり。我、お前たちのために彼処から燃えさしを持ちかえらん。或いは、あの火で正しい道に導かれるかも知らぬ」と。(注2)

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

طهٓ

مَا أَنزَلْنَا عَلَيْكَ الْقُرْآنَ لِتَشْقَىٰ

إِلَّا تَذَكُّرٌ لِّمَن يَخْشَىٰ

تَنزِيلًا مِّمَّنْ خَلَقَ الْأَرْضَ وَالسَّمَوَاتِ الْخَالِيَاتِ

الرَّحْمَنُ عَلَى الْعَرْشِ اسْتَوَىٰ

لَهُ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا وَمَا تَحْتَ الثَّرَىٰ

وَأَن تَجْهَرُ بِالْقَوْلِ فَإِنَّهُ يَعْلَمُ السِّرَ وَأَخْفَىٰ

اللَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ لَهُ الْأَسْمَاءُ الْحُسْنَىٰ

وَهَذَا أَنشَكَ حَدِيثُ مُوسَىٰ

إِذْ رَأَىٰ نَارًا فَقَالَ لِأَهْلِهِ امْكُثُوا إِنِّي آنَسْتُ نَارًا

لَعَلِّي آتِيكُمْ مِنْهَا بِقَبَسٍ أَوْ أَجْدٍ عَلَى النَّارِ

هَذِهِ

注1 我、愛しきしもべよ。完全な人間、理想的な人物よ。

注2 この節には、モーゼの2種類の幻影について書かれている。(1)この様なものが、預言者にしか見えない場合。このような状況では、預言者しか神の出現を見ることはできない。(2)預言者の子弟たちも、神の出現を見ることが出来る場合。ここで、モーゼが言おうとしたのは、彼が見た光景が後者のような出現であるならば、子弟たちに新しいシャリヤが与えられるだろうが、もし前者であるならば、自分自身の精神の向上のための導きと受けるであろう。

12. さて、彼が火の傍に来ると、声ありて、云う、「モーゼよ、

فَلَمَّا أَتَاهَا نُودِيَ يُوْسَىٰ ⑬

13. げにわれは汝の主なり。されば、汝の靴を脱げ。汝は今、トッワーの聖なる谷にあり。
(注3)

إِنِّي أَنَا رَبُّكَ فَاحْلَعْ نَعْلَيْكَ إِنَّكَ بِالْوَادِ الْمُقَدَّسِ طُوًى ⑭

14. われは汝を選びたり。されば、啓示されることに耳を傾けよ。

وَأَنَا اخْتَرْتُكَ فَاسْتَمِعْ لِمَا يُوحَىٰ ⑮

15. げにわれはアッラーなり。われの外に神なし。されば、われに仕え、われを念じて礼拝を遵守せよ。

لَتَنبَىٰ أَنَا اللَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا أَنَا فَاعْبُدْنِي وَأَقِمِ الصَّلَاةَ لِذِكْرِي ⑯

16. げに該の時は近づけり。われ之を隠さんとするは、各人がその努力に応じて返報されんがためなり。

إِنَّ السَّاعَةَ آتِيَةٌ أَكَادُ أُخْفِيهَا لِيُجْزَىٰ كُلُّ نَفْسٍ بِمَا تَسْعَىٰ ⑰

17. されば、之を信ぜず、己れの下劣な欲望に従う者に妨げられ、汝それより背を向けなば、汝滅亡せん。

فَلَا يَصُدُّكَ عَنْهَا مَنْ لَا يُؤْمِنُ بِهَا وَاتَّبَعَ هَوَاهُ فَتَرْدَىٰ ⑱

18. ところで、モーゼよ、汝の右手にあるものは、そは何ぞや？」と。

وَمَا يَلَكَ بِيَمِينِكَ يُوْسَىٰ ⑲

19. モーゼは答えり、「これは杖なり。我これに凭れ、また我が羊のために木の葉を打落し、その他いろいろ利用す」と。

قَالَ هِيَ عَصَايَ أَتَوَكَّأُ عَلَيْهَا وَأَهُشُّ بِهَا عَلَىٰ غَنِيٍّ وَلِيَ فِيهَا مَآرِبُ أُخْرَىٰ ⑳

20. 神は云えり、「モーゼよ、その杖を投げよ」と。

قَالَ أَلْقُهَا يُوْسَىٰ ㉑

21. そこで、モーゼが杖を投げると、見よ、それは蛇に交じたり。(注4)

فَأَلْقَاهَا فَإِذَا هِيَ حَيَّةٌ تَسْعَىٰ ㉒

22. 神は云えり、「それを攫め、怖がるなかれ。われらはそれをもとの形に戻さん。

قَالَ خُذْهَا وَلَا تَحْزَنْ سَنُعِيدُهَا سِيرَتَهَا الْأُولَىٰ ㉓

注3 上述したように、これはモーゼが見た光景である。ここで「くつ」は、妻、子供、友人など世俗の関係を表している。「汝のくつを脱げ」というのは、家族との関係と地域との関係を意味している。従って、神との靈的交感の時モーゼは、妻、子供や他の世俗的關係についてこの考えを払いのけなければいけなかった。この節を文字通り解釈すれば、モーゼは聖なる場所にいるので、くつを脱ぐように命令されたということになるであろう。

注4 杖が実際にへびになったのではなく、単にへびのように見えただけであるので、自然の法則となんら矛盾することは無い。この奇跡は、モーゼを支持する強力な証拠であるばかりでなく、人々が永遠に偶像崇拜や他の邪悪な習慣を信じていたりする訳ではないと、モーゼをなぐさめるものである。モーゼの庇護を受けた瞬間に、人々は善良で神を畏敬する仲間となるのである。7章108節も参照のこと。

23. 今度は汝の手を(注5)腋の下にさし込め。
病気に非ざるにその手は白くならん—つまり
第二の奇蹟なり。

وَاصْمُ يَدَكَ إِلَى جَنَاحِكَ تَخْرُجَ بَيْضَاءَ مِنْ
غَيْرِ سَوَاءٍ آيَةً أُخْرَى ②③

24. かくの如きは、われらが汝に更に大なる
奇蹟しるしのいくつかを示さんがためなり。(注
6)

لِيُرِيكَ مِنْ آيَاتِنَا الْكُبْرَى ②④

25. 汝ファラオのところへ行け。彼はあらゆる
面で掟を破りたり」と。

إِذْهَبْ إِلَى فِرْعَوْنَ إِنَّهُ طَغَى ②⑤

第二項

26. モーゼは云え、「主よ、我が胸を拡げ給え。

قَالَ رَبِّ اشْرَحْ لِي صَدْرِي ②⑥

27. 我が仕事を容易ならしめ給え。

وَيَسِّرْ لِي أَمْرِي ②⑦

28. 我が舌の結び目を解き、

وَاحْلُلْ عُقْدَةً مِنْ لِسَانِي ②⑧

29. 彼等に我が言葉を理解せしめ給え。

يَفْقَهُوا قَوْلِي ②⑨

30. また、我が家族より我に一人の補佐を与え
給え—(注7)

وَاجْعَلْ لِي وَزِيرًا مِنْ أَهْلِي ③①

31. すなわち、我が兄、アロンを。

هُرُونَ أَخِي ③②

32. 彼によって我が力を増大し、

أَسْدُدْ بِيْةَ أَنْزِلْنِي ③③

33. 彼をして我が仕事を分担せしめ給え、

وَأَشْرِكْهُ فِي أَمْرِي ③④

34. 我等大いに汝を讃美し奉り、

كُنْ سُبْحَانَكَ كَثِيرًا ③⑤

35. また大いに汝を念じ奉るほどに。

وَنَذْكُرَكَ كَثِيرًا ③⑥

36. げに汝は、我等を常に見守り給う」と。

إِنَّكَ كُنْتَ بِنَا بَصِيرًا ③⑦

注5 ヤド(手)は、地域・人々も意味するので、この節の表現は、モーゼが人々を庇護しなければいけないという命令を意味している。もしそうすれば、モーゼは精神的な光を放つ高潔な人となり、世界には、道義的邪悪が無くなるであろう。ヤドバイダ(白い牛)は明確で強力な議論も意味する。モーゼは自らを証明する強固な議論を授かっていた。

注6 杖は、モーゼに与えられた神兆しるしのうちでも最も偉大なものの1つである。モーゼが、預言者となった時にも、杖の神兆が現れた(20章19節)。モーゼがファラオ(王)に説教をしに行った時にも、ファラオと魔法使いたちに、杖の奇跡が示された(20章70節〜74節)。イスラエル人たちが、水を欲しがった時、モーゼは、岩を杖でたたく様に命じられた(2章61節)また、モーゼが海を渡ろうとした時、神はモーゼに対し、海を杖でたたく様命じた。

注7 モーゼは、自分に与えられた偉大な仕事を遂行するには、力不足であると考え、援助者に助けを求めた。聖なる預言者には、もっと重大な責任の仕事が任されていたが、決して援助を求めたりはしなかった。彼は、道徳的退廃の深淵から、精神的栄光の頂点へと人々を高めるという責任を、独力で、全く手助けも無しで、完全に遂行した。

37. 神は云えり、「モーゼよ、汝の願いごとを承諾す。

38. われらは以前にも汝に恩恵を施せり。

39. その時、われらは、汝の母に重要な啓示について黙示して、云えり、

40. 「この子を箱舟に入れて、川に投げ込め。然らば後に、川が之を岸に打上げん。而して、わが敵であり、その子の敵でもある者が彼を拾い上げん」と。われは手ずから愛をこめて汝を包みたり。われこれをなせるは、わが目の前にて汝が育てあげられんがためなり。

41. 汝の姉が歩き廻った末、「あなた方をこの子を世話する者のところへ案内すべきか？」と云いたる時。されば、われらは汝を母のところへ戻したり、そは汝の母を安心させ、悲しみを消さんがためなり。また、汝が人を殺した時も、われらは汝を窮地より救えり。この外にも、われらは汝をいろいろな方法で試みたり。汝は数年間マドウヤンの民の中にとどまりたり。その後、汝はわれらの命によってここに来たりぬ、モーゼよ。

42. 「われは、わがために汝を選びたり。

43. 汝、兄と共に、わが奇蹟をたずさえて行け。而して、われを念ずることを怠るなかれ。

44. お前たち兩名ファラオのところへ行け、彼はすべての則を越えて罪を犯したれば。

45. されど、優しい言葉で彼に語れ。さすれば彼気がつき、神を畏れるかも知らぬ」

46. 兩名は答えり、「主よ、彼が我等に対して乱暴せぬか、また暴虐ならんことを恐る」と。

47. 神は云えり、「恐るるなかれ。われはお前たち兩名と偕にあり。われは聞き、見守らん。

قَالَ قَدْ أُوتِيتَ سُؤْلَكَ يُمُوسَى ③

وَلَقَدْ مَتَنَّا عَلَيْكَ مَرَّةً أُخْرَى ④

إِذْ أَوْحَيْنَا إِلَىٰ أُمِّكَ مَا يُوحَى ⑤

أَيْنَ أَقْبَدُ فِيهِ فِي التَّابُوتِ فَأَقْدَفِيهِ فِي الْيَمِّ فَلْيُلْهِهِ
الْيَمُّ بِالسَّاحِلِ يَأْخُذْهُ عَدُوِّي وَعَدُوُّهُ وَ
الْقَيْتُ عَلَيْكَ مَحَبَّةً مِّمِّي ⑥ وَلَيُصْغَعَ عَلَىٰ يَدَيَّ ⑦

إِذْ تَنَسَّيْتُ أَخْنَكَ تَقُولُ هَلْ أَدُلُّكُمْ عَلَىٰ مَنْ يَكْفُلُهُ
فَرَجَعْنَاكَ إِلَىٰ أُمِّكَ كَيْ تَقَرَّ عَيْنُهَا وَلَا تَحْزَنَ ⑧ وَوَضَعْنَا
نَفْسًا فَنَجَّيْنَاكَ مِنَ الْغَمِّ وَفَتَنَّاكَ فُتُونًا ⑨ فَلْيَلِذْ
سِينِي فِي أَهْلِ مَدْيَنَ ⑩ ثُمَّ جِئْتَ عَلَىٰ قَدَرٍ يَمْؤُومِي ⑪

وَاصْطَنَعْتُكَ لِنَفْسِي ⑫

إِذْ هَبَّ أَنْتَ وَأَخُوكَ بِآيَتِي وَلَا تَنِيَا فِي ذِكْرِي ⑬

إِذْ هَبَّا إِلَىٰ فِرْعَوْنَ إِنَّهُ طَغَى ⑭

فَقُولَا لَهُ قَوْلًا لَّيْنًا لَّعَلَّهُ يَتَذَكَّرُ أَوْ يَخْشَى ⑮

قَالَا رَبَّنَا إِنَّا نَخَافُ أَنْ يُفْرِطَ عَلَيْنَا أَوْ أَنْ يَطْغَى ⑯

قَالَ لَا تَخَافَا إِنِّي مَعَكُمَا أَسْعَى ⑰ وَادِّي ⑱
فَأْتِيَهُ فُقُولًا إِنَّا رَسُولَا رَبِّكَ فَأَرْسِلْ مَعَنَا بَنِيَّ

48. されば、汝等兩名彼のところへ行きて、云え、「我等は汝の主の使徒なり。されば、我等と共にイスラエルの子らを去らしめよ。彼等を苦しめることなかれ。今我等は主より奇蹟を汝にもたらせり。この嚮導に従う者に平安あれかし。

49. そは我等に啓示されたり。之を拒否し、背を向ける者に天罰降らんことを」と。

50. ファラオは云えり、「ならば、モーゼよ、お前ら兩名の主とは誰ぞや？」と。

51. モーゼは云えり、「我等の主とは、すべてのものに正しい形を与え、然る後にその本来の目的に導き給うた御方なり」と。

52. ファラオは云えり、「然らば、前代の者の成り行きや如何に？」と。(注8)

53. モーゼは云えり、「それに関する知識は、記録されて主の許にあり。我が主は誤ることなく、また忘ることもなし」と。(注9)

54. 貴方がたのために大地を揺籃となしたるは彼にして、その中に幾多の道を敷き連ねたり。而して、天より雨を降し、それによってわれらはさまざまなる雌雄の植物を生ぜしむ。

55. 汝等之を食ひ、家畜を放牧せよ。げにこの中には、思慮ある者への幾多の神兆あり。

第三項

56. われらは、大地よりお前たちを創り、而して、之に帰らしめ、再びそれよりお前たちを甦らせん。

إِسْرَائِيلَ وَلَا تُعَذِّبُهُمْ قَدْ جِئْنَاكَ بِآيَةٍ مِنْ رَبِّكَ وَالسَّلَامُ عَلَيَّ مِنَ اتَّبِعِ الْهُدَى ④

إِنَّا قَدْ أُوحِيَ إِلَيْنَا أَنَّ الْعَذَابَ عَلَى مَنْ كَذَّبَ وَتَوَلَّى ⑤

قَالَ فَمَنْ رَبُّكُمَا يُوسَى ⑥

قَالَ رَبُّنَا الَّذِي أَعْطَى كُلَّ شَيْءٍ خَلْقَهُ ثُمَّ هَدَى ⑦

قَالَ فَمَا بَالُ الْقُرُونِ الْأُولَى ⑧

قَالَ عَلِمْنَا عِنْدَ رَبِّي فِي كِتَابٍ لَا يَضِلُّ رَبِّي وَلَا يَنْسَى ⑨

الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ الْأَرْضَ مَهْدًا وَرَسَّكَ لَكُمُ فِيهَا سُبُلًا وَأَنْزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَأَخْرَجْنَا بِهِ أَزْوَاجًا مِنْ ثَبَاتٍ شَيْءٍ ⑩

كُلُوا وَارْعَوْا أَنْعَامَكُمْ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِأُولِي النُّهَى ⑪

مِنْهَا خَلَقْنَاكُمْ وَفِيهَا نُعِيدُكُمْ وَمِنْهَا نُخْرِجُكُمْ تَارَةً أُخْرَى ⑫

注8 ファラオの問に対するモーゼの返答に、ファラオは困惑し、自らの質問を退け、モーゼに別の質問をした。すなわち、もう死んでしまった以前の世代について、モーゼの神は知っているかと尋ね、モーゼの導き無しで、以前の世代の人々は、どのようにやっていたのかと明らかにしようとした。すなわち彼らの祖先は、神の導きが無く、神の罰を受けて然るべきであるとモーゼに達回しに言わせることにより、ファラオは、人々がモーゼに対し反感を抱くように、巧妙に仕組んだのであった。

注9 モーゼは、ファラオの責任のかけられた策略に対し、相手へこますような答をしている。彼はファラオに対し、祖先のことは気にかけないと言った。神は彼らのことをすべて知り、彼らに関する詳細は神の記憶

57. われらはファラオにさまざまな神兆を見せたれど、それ等を彼は認めず、信ずることを拒否したり。

وَلَقَدْ آرَيْنَاهُ آيَاتِنَا كُلَّهَا فَكَذَّبَ وَأَبَى ⑤

58. ファラオは云えり、「モーゼよ、汝は妖術を以て我等をこの国土から追い出すべく来たるか？（注10）

قَالَ أَجِئْتُكَ لِتُخْرِجَنِي مِنْ أَرْضِنَا بِسِحْرِكَ يُمُوسَى ⑥

59. ならば我等も、同じ妖術を以て汝に対抗せん。されば、我等と汝と約束を結び、双方に都合のいい場所で、必ず約束に違わざれ、我等も汝も」と。

فَلَمَّا بَيَّنَّنَا لَبِغٍ مِثْلِهِ فَأَجْعَلَ بَيْنَنَا وَبَيْنَكَ مَوْعِدًا إِلَّا نُخْلِفُهُ نَحْنُ وَلَا أَنْتَ مَكَانًا سُوًى ⑦

60. モーゼは云えり、「その約束は祭りの日と定めん。日が空高く昇る頃、（注11）人々を呼び集めよ」と。

قَالَ مَوْعِدُكُمْ يَوْمَ الزَّيْتَةِ وَأَنْ يُحْشَرَ النَّاسُ ضَعْفَى ⑧

61. そこで、ファラオは退きとり、計画を練り、然る後約束の場に現れたり。

فَقَالُوا فِرْعَوْنُ فَجَمَعَ كَيْدَهُ ثُمَّ أَتَى ⑨

62. モーゼは人々に云えり、「禍なるかなお前たち。アッラーに對し奉り偽りを云うなかれ、天罰をうけて滅ぼされぬために。げに彼は、偽る者は必ず滅ぼさん」と。（注12）

قَالَ لَهُمْ مُوسَى وَيْلَكُمْ لَا تَفْتَرُوا عَلَى اللَّهِ كَذِبًا فَيُسْحِتَكُمْ بِعَذَابٍ وَقَدْ خَابَ مَنْ افْتَرَى ⑩

63. そこで、彼等と計略について互いに論議し、またひそかに協議せり。

فَتَنَارَعَوْا أَمْرَهُمْ بَيْنَهُمْ وَأَسْرَأُوا التَّجْوَى ⑪

64. 彼等は云えり、「この兩名は確かに妖術使いにして、その妖術を使ってお前たちをその国土から放逐し、もってお前たちの優れた伝統を滅ぼさんとする者なり。

قَالُوا إِنْ هَذَانِ لَسَاحِرُونَ يُرِيدَانِ أَنْ يُخْرِجَاكَ مِنْ أَرْضِنَا بِسِحْرِهِمَا وَيَذْهَبَا بِطَرِيقَتِكُمُ الْمُثَلَّى ⑫

の中に蓄えられており、復活の日には、神が彼らの状況、環境を考慮に入れ、彼らの行ないに従って、報いるであろう、と答えたのである。

注10 この節は、ファラオの狡猾なたくらみについて言及しているようである。エジプトでは外人であるモーゼは、賢い策略により、エジプト王朝を覆そうとしている、とファラオは人々に述べた。

注11 モーゼと聖なる預言者との間には、面白い類似点がある様だ。十分に準備されたモーゼと魔術師とのコンテストがズハー（午前中）に行なわれたのに対し、聖なる預言者が征服者として、メッカ入りしたのも、アラビアにおける不信仰と多神教の敗退を示すズハーの時であった。

注12 この節には神の啓示の要求者の真偽を試すための確実な基準が定められている。すなわち、神に對してうそをつく者は、つかの間繁栄するかもしれないが、究極的には滅び、みじめな終りをとげるであろう。これは、すべての宗教の歴史のページに大きく書かれている真理である。

65. されば、お前たちの計略^{はかりごと}を申し合せ、勢ぞろいして進み出でよ。げに今日勝利を得た者は必ず栄えん」と。
66. 彼等は云えり、「モーゼよ、汝が先に投げろや。それとも我等が先になそうか」と。
67. モーゼは云えり、「いや、汝等先に投げよ」と。(注13)すると、見よ！彼等の縄や棒は、その魔術によって、モーゼには、さながら走り廻るが如くに見えたり。(注14)
68. されば、モーゼは心中に怖れをいだけり。(注15)
69. われらは云えり、「怖るるなかれ、汝必ず勝を得ん。
70. 汝の右手にあるものを投げよ。さすればそれは、彼等が造れるものを呑み込まん、彼等が造りし物はただの魔術師のごまかしにすぎぬ故。魔術師など、何をもうろうと、決して栄えず」と。
71. かくて、魔術師たちは屈服し、平伏せり。彼等は云えり、「我等はアロンとモーゼの主を信ず」と。
72. ファラオは云えり、「お前たちは余の許可なしに彼を信ずるか？彼はお前たちに魔術を教えた首魁^{しゅがい}だった筈。されば、余はお前たちの両手両足を互い違いに切落し、必ず囊椰子^{なつめやし}の幹にお前たちを磔^{さげ}けにしてくれん。さすればお前たち、いずれの罰^{おび}が酷しく、いつそう永続^{とこし}きするか、思い知らされん」と。

注13 神の預言者たちは、決して自ら攻撃をしかけることはなかった。攻撃されて始めて、防衛した。

注14 モーゼには魔術師の縄と棒は、動き回っているかの様に見えた。悪の力は、はじめ、短い間勝利を得る様にみえるが、すぐに滅びるのだ。

注15 モーゼは、魔術師の縄や棒を恐れたりはしなかった。神の預言者たちは、確固たる岩の上に立っており、何ものをも恐れなかった。唯一モーゼが恐れたのは、人々が魔術師の奇妙な行動に惑わされるのではないかということだけであった。

فَاجْبِعُوا كَيْدَكُمْ ثُمَّ اتُّوَصَفَّا وَقَدْ اَفْلَحَ
الْيَوْمَ مِنَ اسْتَعْصَمَ ⑤

قَالُوا يَمُوسَى اِمَّا اَنْ تُلْقِيَ وَاِمَّا اَنْ تَكُونَ اَوَّلَ
مَنْ اُلْقَى ⑥

قَالَ بَلْ اَلْقُوا فَاِذَا جِبَالُهُمْ وَعَصِيَّهُمْ يُخَيَّلُ
اِلَيْهِمْ مِنْ سِحْرِهِمْ اَنَّهُمْ تَسْعُ ⑦

فَاَوْجَسَ فِي نَفْسِهِ خِيفَةً مُوسَى ⑧

فَلَمَّا لَا تَخَفْ اِنَّكَ اَنْتَ الْاَعْلَى ⑨

وَالْقَى مَا فِي يَمِينِكَ تَلْقَفُ مَا صَنَعُوا اِمَّا صَاعُوا
كَيْدٌ سِحْرٍ وَلَا يُفْلِحُ السَّاحِرُ حَيْثُ اَتَى ⑩

فَالْقَى السَّحَرَةُ سُجَّدًا قَالُوا امَّا بَرَبُّ هَارُونَ
وَمُوسَى ⑪

قَالَ امْنُكُمْ لَهُ قَبْلَ اَنْ اَذِنَ لَكُمْ اِنَّهُ لَكَيْدٌ كَرِيمٌ
الَّذِى عَلَّمَ السِّحْرَ فَلَا قَطْعَانَ اَيْدِيكُمْ وَ
اَرْجُلَكُمْ مِنْ خِلَافٍ وَلَا وَصْلَبَكُمْ فِي جُدُوعِ
التَّحْلِ وَلَتَعْلَمَنَّ اَيْنَا اَشَدُّ عَذَابًا وَابْقَى ⑫

73. 彼等は答えり、「我等は汝より、我等に示されたる明白なる神兆、並びに我等を創造せる彼の方を選ぶべし。されば、汝欲するがままに判決せよ。汝はただ現世の命のみ決定し得るにすぎず。

قَالُوا لَنْ نُؤْثِرَكَ عَلَىٰ مَا جَاءَنَا مِنَ الْبَيِّنَاتِ ۖ
الَّذِي فَطَرْنَا فَاقْضِ مَا أَنْتَ قَاضٍ ۖ إِنَّا تَقْضِيهِ
هَذِهِ الْحَيَاةَ الدُّنْيَا ﴿٧٣﴾

74. げに我等が主を信ずるは、我等が犯せし罪の赦しを請い、また汝が我等に強要した魔術の赦しを請わんがためなり。なんとなれば、アッラーは汝よりもはるかに優りて、最も長続きし給う」と。

إِنَّا آمَنَّا بِرَبِّنَا لِيَغْفِرَ لَنَا خَطِئَنَا وَمَا أَكْرَهْتَنَا
عَلَيْهِ مِنَ السِّحْرِ وَاللَّهِ خَيْرٌ وَأَبْقَىٰ ﴿٧٤﴾

75. 罪人として主の前に出る者には一地獄あり。彼はその中で死にもせず、また生きもせざらん。(注16)

إِنَّكَ مِنْ يَأْتِ رَبَّهُ مُجْرِمًا فَإِنَّ لَهُ جَهَنَّمَ لَا
يَمُوتُ فِيهَا وَلَا يَحْيَىٰ ﴿٧٥﴾

76. されど、善行を積みし信者として彼の前に出る者、かかる者には最上の位階あり—

وَمَنْ يَأْتِهِ مُؤْمِنًا قَدْ عَمِلَ الصَّالِحَاتِ فَأُولَٰئِكَ
لَهُمُ الدَّرَجَاتُ الْعُلَىٰ ﴿٧٦﴾

77. すなわち、下に河川流る永遠の樂園なり。彼等はそこに永久に住みつかん。そはその身を潔く保つ者への報奨なり。

جَنَّاتٌ مِّنْ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ
فِيهَا ۚ وَذَٰلِكَ جَزَاءُ مَنْ تَزَكَّىٰ ﴿٧٧﴾

第四項

78. われらはモーゼに啓示を降し、「夜に乗じてわが僕等^{しもべ}を連れ出し、海中に彼等のために乾いた道を打ち開け。汝追いつかれることを恐れるなかれ、また何も怖がることなかれ」と命ず。

وَلَقَدْ أَوْحَيْنَا إِلَىٰ مُوسَىٰ ۖ أَنْ أَسْرِ بِعِبَادِي فَاصْرَبْ
لَهُمْ طَرِيقًا فِي الْبَحْرِ يَبَسًا لَا تَخَفْ دَرَكَاؤُا وَلَا
تَخْشَىٰ ﴿٧٨﴾

79. ファラオはその軍勢を率いて人々を追跡しが、海水は彼等を完全に呑み沈めたり。

فَاتَّبَعَهُمْ فِرْعَوْنُ وَبُجُودَهُ فَخَشِيَهُمْ مِنَ الْيَمِّ
مَا غَشِيَهُمْ ﴿٧٩﴾

80. ファラオはその民を邪道に導き、之^{これ}を正しく導かざりしが故なり。

وَاصْلَ فِرْعَوْنُ قَوْمَهُ وَمَا هَدَىٰ ﴿٨٠﴾

81. 「イスラエルの子らよ、われらはお前たちをその敵から救い出し、あの山の右側でお

يَبْنِي إِسْرَءِيلَ قَدْ أَنْجَيْنَاكَ مِنْ عَدُوِّكُمْ وَ

注16 死により、人は苦しみから解き放される。そのため、罪人は地獄では死なず、苦しみに苛まされるであろう。また、罪人は地獄で生きることもしない。真実の生とは、神の恩寵により成り立つものであり、彼にはそれが与えられないのだ。あるいは、この節の意味するものは、罪人からはすべての慰め、幸福が奪われており、この様な状況は、死よりもつらい、ということかもしれない。

前たちと約束を結び、^{しか}而して、マンナと鶉^{うずら}をお前たちに降したり。

وَعَدْنَاكُمْ جَانِبَ الطُّورِ الْأَيْمَنِ وَنَزَّلْنَا عَلَيْكُمُ
الْمَنَّاءَ وَالسَّلْوَى ⑧

82. われらが^{佳物}お前たちのために用意したる物を食せよ、なれど、度を過ぐすことなかれ、もしわが激怒がお前たちの上に^{降る}を恐れなば。わが激怒に触れたる者は、必ずや滅び去らん。

كُلُوا مِنْ طَيِّبَاتِ مَا رَزَقْنَاكُمْ وَلَا تَطْغَوْا فِيهِ فَيَحِلَّ
عَلَيْكُمْ غَضَبِي ⑨ وَمَنْ يَحِلَّ عَلَيْهِ غَضَبِي فَقَدْ
هَوَى ⑩

83. されど、悔い改めて信仰に入り、善行を積み、その上、指導に忠実なる者には、げにわれは寛大なり。

وَإِنِّي لَغَفَّارٌ لِمَنْ تَابَ وَآمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا ثُمَّ
اهْتَدَى ⑪

84. ところで、モーゼよ、汝をその民から急ぎ離れさせたるは、何ぞや？」

وَمَا أَجْعَلَكَ عَنْ قَوْمِكَ يَمُوسَى ⑫

85. モーゼは答えり、「みな我が足跡を厳密に追う。而して我、汝主の許に急ぎたるは、ただ汝を喜ばせんがためなり」と。

قَالَ هُمْ أُولَاءِ عَلَى أَثَرِي وَعَجِلْتُ إِلَيْكَ رَبِّ
لِتَرْضَاهُ ⑬

86. 神は云えり、「われら、汝の不在の間に人々を試したるに、サーミリーが(注17)皆を邪道に導きぬ」と。

قَالَ فَإِنَّا نَدِّ مُتَّبِعَاتُ قَوْمِكَ مِنْ بَعْدِكَ وَأَضَلَّهُمُ
السَّامِرِيُّ ⑭

87. されば、モーゼは怒りかつ悲しみつつ己が民のもとに帰りて、云えり、「お前たちの主は有難い約束をお前たちと結ばざりしか？その約束の期限がお前たちは長すぎるとでも云うのか、それとも、天罰が己が身に降りかからんことを望みて、我との約束を破りしか？」と。

فَرَجَعَ مُوسَى إِلَى قَوْمِهِ غَضْبَانَ أَسِفًا ⑮ قَالَ
يَقَوْمُ أَلَمْ يَعِدْكُمْ رَبُّكُمْ وَعَدًّا حَسَّتَاهُ أَفَطَالَ
عَلَيْكُمْ الْعَهْدُ أَمْ أَرَدْتُمْ أَنْ يَحِلَّ عَلَيْكُمْ غَضَبٌ
مِنْ رَبِّكُمْ فَأَخْلَقْتُمْ مَوْعِدِي ⑯

88. 彼等は云えり、「我等は自ら進んで汝との約束を破れるに非ず。なれど、我等は人々の装飾品の重荷を背負わされたので、之を打ち捨てり、あのサーミリー人が投げたる如く」と。

قَالُوا مَا أَخْلَفْنَا مَوْعِدَكَ بِمَلِكِنَا وَلَكِنَّا حَمَلْنَا
أَوْزَارًا مِنْ زِينَةِ الْقَوْمِ فَقَدْ تَوَلَّىٰكَ ذَٰلِكَ الْفَقَى
السَّامِرِيُّ ⑰

注17 サーミリーとは、サーマリヤ(サマリア人)の形容詞である。サマリア人は、イスラエルの子供の種族の一つであり、ユダヤ教の一宗派であるが、彼らとは、慣習が異なっていた。正確に言えば、サマリア人とは、サマリアの住民である。このサマリア人とは、現在、ナブラスに住み、自らをベネー・イエスラエルと呼ぶ小部族のことを指す。彼らの地域としての歴史は紀元前722年にアッシリア人がサマリアを占拠した時に始まる(Jew. Enc.)。

89. かくてサーミリー人は彼等に、牛の形をした、叫える物を造りたり。すると、彼等は云えり、「こはお前たちの神にして、モーゼの神なりしが、彼はそれを忘れたるなり」と。

فَأَخْرَجَ لَهُمْ عِجْلًا جِسدًا لِلَّهِ خَوَارِقًا ۖ وَهَذَا إِلَهُكُمْ
وَاللَّهُ مُوسَى ۖ فَنَسِيَ ۙ

90. 彼等はそれが一言も答えず、また毒にも薬にもならぬものだということが解らざりしか？

أَفَلَا يَرُونَ إِلَّا يَرْجِعُ إِلَيْهِمْ قَوْلًا ۖ وَلَا يَمْلِكُ لَهُمْ
شُرَكَاءُ ۖ وَلَا نَفْعًا ۙ

第五項

91. これ以前に、すでにアロンが人々に云えり、
「我が民よ、お前たちは偶像こうしによって試されたるにすぎず。なれど、げにお前たちの主は慈悲深い神なり。されば、我に従い、我が命に服せ」と。

وَلَقَدْ قَالَ لَهُمْ هَارُونُ مِنْ قَبْلُ يَقُولُ إِنَّمَا
فَتِنْتُكُمْ بِهِ وَإِنَّ رَبَّكُمُ الرَّحْمَنُ فَاتَّبِعُونِي وَأَطِيعُوا
أَمْرِيَ ﴿٩﴾

92. 彼等は答え、「我等はモーゼが我等に還る
までは、決して之を崇拜することを止めず」
と。

فَأُولَٰئِكَ نَبْرِحْ عَلَيْهِمْ عَافِينَ حَتَّىٰ يَرْجِعَ إِلَيْنَا
مُوسَىٰ ٩٢

93. モーゼは尋ねり、「アロンよ、彼等が迷うの
を見たる時、何が汝を妨げたるか、

قَالَ يَهُرُونَ وَمَا مَنَعَكَ إِذْ رَأَيْتَهُمْ ضَلُّوا۟ ۙ

94. 我に従うことから？汝、何故に我が命に背きたるや？」と。

أَلَا تَتَّبِعُنِ أَفْعَصَيْتَ أَمْرِي ﴿٩٣﴾

95. アロンは答え、「我が母の子よ、我が髭や髪を毛を掴むなかれ。我は汝が『イスラエルの子らを分裂せしめ、我が言葉を守らざりき』と云いはすまいかと恐れたるなり」と。

قَالَ يَبْنَومُ لَا تَأْخُذْ بِلِجَنَّتِي وَلَا بِرَأْسِي رَأَيْتُ
خَشِيتُ أَنْ تَقُولَ فَرَّقْتَ بَيْنَ بَنِي إِسْرَءِيلَ
وَلَمْ تَفَرِّقْ بَيْنِي ۖ (٩٥)

96. モーゼは云えり、「然らば、サーミリー人よ、
汝の存念や如何に？」と。

قَالَ فَمَا خَطْبُكَ يَا مِرْيُ ⑨٦

97. 彼は云えり、「我は彼等が**気づかざるもの**を
気づけり。我は使徒が教えしことの**一部を**、
採つたにすぎず。しかし、それすらも打ち
捨てり。かくしたるは、我が心が我に命じ
たるが故なり」と。(注18)

قَالَ بَصُرْتُ بِمَا لَمْ يَبْصُرُوا بِهِ فَقَبَضْتُ قَبْضَةً
مِنْ أَثَرِ الرَّسُولِ فَنَبَيْذُهَا وَكَذَلِكَ سَوَّلَتْ لِي نَفْسِي ﴿٩﴾

注 18 この言葉には、「私たちの理解力は、イスラエル人よりもすぐれている。」という意味もあるかもしれない。サーミリーが言おうとしたのは、盲目的にモーゼの教えを信じたのではなく、モーゼに従い、教えを理解して信じた、ということである。しかし、モーゼがシナイ山に行った時、彼は便宜の仮面を取り去り、今まで受け入れてきた教え（先祖から受け継がれてきた知識）をすべて捨ててしまった。これが、彼の心の中からの行動である。

98. モーゼは云えり、「されば、立ち去れ！この世にある限り、汝は誰にも『我に触るなかれ』と（注19）云わしめられん。而して、いずれは逃れ難き懲罰の約束あり。さあ、汝が崇拜せし神を見よ。我等は必ず之を焚き灰と化し、然る後に之を海中に撒き散らさん。

99. お前たちの神は、独りアッラーにして、それ以外には神なし。彼はその御知識で一切を包含す」と。

100. かくの如く、われらは汝に以前に起りしこと、の消息を語り聞かす。而して、われらは汝にわれらがもとより注意を与えたり。

101. 之に背いたる者は、復活の日に於て、必ず重荷を背負わされ、

102. その下に甘んぜん。復活の日に於ける彼等にとりて、その重荷は禍いなるべし、

103. 喇叭が吹き鳴らされんその日。その日こそ、われらは碧眼の罪ぶかい者どもを（注20）一人のこらず召集せん。

104. 彼等は互いに声をひそめて、ささやかん「お前たちの滞在は、ほんの十日程に（注21）しかすぎざりき」—

105. われらは彼等が云わんとすることを熟知す—すなわち、彼等の中で最も世故にたけた者は云わん、「お前たちは、たった一日しか滞在せなんだ」と。

قَالَ فَاذْهَبْ فَإِنَّ لَكَ فِي الْحَيَاةِ أَنْ تَقُولَ لَا مِسَاسَ وَإِنَّ لَكَ مَوْعِدًا لَنْ تُخْلَفَهُ ۖ وَانْظُرْ إِلَى إِلَهِكَ الَّذِي ظَلْتَ عَلَيْهِ عَاكِفًا لَنُحَرِّقَنَّهُ ثُمَّ لَنَنْسِفَنَّهُ فِي الْيَمِّ نَسْفًا ﴿٩٨﴾

إِنَّمَا إِلَهُكُمُ اللَّهُ الَّذِي لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ وَسِعَ كُلُّ شَيْءٍ عِلْمًا ﴿٩٩﴾

كَذَلِكَ نَقُصُّ عَلَيْكَ مِنْ أَنْبَاءِ مَا قَدْ سَبَقَ ۚ وَقَدْ آتَيْنَاكَ مِنْ لَدُنَّا ذِكْرًا ﴿١٠٠﴾

مَنْ أَعْرَضَ عَنْهُ فَإِنَّهُ يَحْمِلُ يَوْمَ الْقِيَمَةِ وِزْرًا ﴿١٠١﴾

خَالِدِينَ فِيهِ ۚ وَسَاءَ لَهُمْ يَوْمَ الْقِيَمَةِ حِمْلًا ﴿١٠٢﴾

يَوْمَ يُنْفَخُ فِي الصُّورِ وَنَحْشُرُ الْجَبْرِينَ يَوْمَئِذٍ رُزُقًا ﴿١٠٣﴾

يَتَخَفَتُونَ بَيْنَهُمْ إِنْ لَبِثْتُمْ إِلَّا عَشْرًا ﴿١٠٤﴾

نَحْنُ أَعْلَمُ بِمَا يَقُولُونَ إِذْ يَقُولُ أَمْثَلُمْ مُرِيقَهُ ۚ
إِنْ لَبِثْتُمْ إِلَّا يَوْمًا ﴿١٠٥﴾

注19 この“我に触るなかれ”という言葉の意味として、次の3つが考えられる。(1)サーミリーは、イスラエル人を牛鬼信仰へ導いたため、社会から拒絶され、罰せられた。(2)彼は皮膚の伝染病にかかったので、人々は彼との接触を拒んだ。(3)彼は、心気症にかかり、人々を避けた。

注20 この比喩は、青い目を持ち、精神的に盲目で、常にイスラムへの憎みを持っている西洋キリスト教諸国を指している様である。

注21 ここでの「10日間」とは、全部で1000年間を意味している。ヒジラ後、ヨーロッパ諸国が休眠していた10世紀(1000年間)のことを指している。聖なる預言者が紀元7世紀初頭に説教を始めた1000年後の17世紀始めに、ヨーロッパ諸国は冬眠から目ざめ、征服のために世界中へと広がっていった。

第六項

106. 彼等は山について（注22）汝に問わん。
云え、「我が主之を粉々に打ち砕き、塵埃の
如く四散せん。

وَيَسْأَلُونَكَ عَنِ الْجِبَالِ فَقُلْ يَنْسِفُهَا رَبِّي نَسْفًا ①٧

107. 而して、之を平坦なる不毛の荒野となし、

فَيَذَرُهَا قَاعًا صَفْصَفًا ①٨

108. 汝はそこに、何んの窪みも突起するところも見るべし」と。（注23）

لَا تَرَى فِيهَا عِوَجًا وَلَا أَمْتًا ①٩

109. その日彼等は、真直に行く召集者に（注24）従い、それから逸脱し得ざるべし。慈悲深い神の御前ではすべての声は静まり、かそけき足音の外、汝なにも聴かざるべし。

يَوْمَئِذٍ يَتَّبِعُونَ الدَّاعِيَ لَا عِوَجَ لَهُ وَخَشَعَتِ
الْأَصْوَاتُ لِلرَّحْمَنِ فَلَا تَسْمَعُ إِلَّا هَبْسًا ②٠

110. その日、慈悲深い神が許可を与え、誠実なるその言葉が嘉納せられる者の外は、誰の執成も益せざるべし。

يَوْمَئِذٍ لَا تَنْفَعُ الشَّفَاعَةُ إِلَّا مَنْ أَذِنَ لَهُ
الرَّحْمَنُ وَرِضِيَ لَهُ قَوْلًا ②١

111. アッラーは、彼等の前にあるもの後ろにあるもの、（注25）そのすべてを知り給う。されど、彼等ははその知識を以て之を理解し得ざるなり。

يَعْلَمُ مَا بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ وَلَا يُحِيطُونَ بِهِ عِلْمًا ②٢

112. すべての顔は、永生者、自存者の御前で謙らん。而して、邪悪の重荷を背負った者は、必ずや滅ぶらん。

وَعَنَتِ الْوُجُوهُ لِلْبَاقِي الْقَبُورِ وَقَدْ حَاطَ مِنْ كُلِّ
ظَلَمًا ②٣

113. されど、信者にして、善行を積む者は、不当に遇せられる心配もなければ、また損害を受ける心配もなかるべし。

وَمَنْ يَعْمَلْ مِنَ الظَّالِمَاتِ وَهُوَ مُؤْمِنٌ وَلَا يُخَفِّ
ظَلَمًا وَلَا هَضْمًا ②٤

注22 ここでアル・ジバール（山）というのは、強力な西洋キリスト教諸国のことである。この節の預言は、西洋諸国を完膚なきまでに破壊するということである。西洋の衰退はもうすでに始まっている。2つの大戦が、西洋を大いに弱体化させた。18章9節も参照のこと。

注23 これは、偉大で強力な帝国が減び、人間社会の様々な分野における社会的経済的地位が向上するであろう時に、社会主義と民主主義が興隆することを示している。

注24 聖なる預言者のこと。

注25 「後ろにあるもの」という言葉は、すでに成し遂げた偉業を指し、「前にあるもの」とは、将来、成し遂げようとしている偉業を示す。

114. かくの如く、われらはアラビア語でクルアーンを降し、その中でさまざまなる警告を明示せり、こは彼等をして神を畏れせしめ、また神を思い出さしめる原因を生ぜしめんがためなり。

115. 崇高なるかな、アッラー、真の王者なり！汝への啓示が完了せぬ前にクルアーンの誦誦を催促することなかれ。むしろ云え、「主よ、我に知識を（注26）増し給え」と。

116. 昔、われらは、アダムと約束を結びしが、彼は之を忘れたり。されどわれらは、彼に不服従の決心ありとは思わざりき。（注27）

第七項

117. われらが、天使たちに向かってアダムに服従せよ」と云いし時、人々は皆従いたり。なれど、イブリースは服さざりき。彼は拒みたり。

118. そこで、われらは云えり、「アダムよ、この者は、汝並びに汝の妻の敵なり。されば、お前たち兩人、この者に樂園から逐い出されて失敗せぬよう気をつけよ。（注28）

119. 此の園では、汝は飢えず、また裸ならず。

120. 渇きを覚えず、また陽にさらされることもなからん」と。（注29）

وَكَذَلِكَ أَنزَلْنَاهُ قُرْآنًا عَرَبِيًّا وَصَرَّفْنَا فِيهِ مِنَ الْوَعِيدِ لَعَلَّهُمْ يَتَّقُونَ أَوْ يُحْدِثُ لَهُمْ ذِكْرًا ﴿١١٧﴾

قَتَطَ اللَّهُ إِلَيْكَ الْوَعْدَ وَلَا تَعْلَلْ بِالْقُرْآنِ مِنْ بَقِيلٍ أَنْ يُقْفَظَ إِلَيْكَ وَحْيُهُ وَقُلْ رَبِّ زِدْنِي عِلْمًا ﴿١١٨﴾

وَلَقَدْ عَاهَدْنَا إِلَى آدَمَ مِنْ قَبْلِ نَسِيٍّ وَلَمْ يَجِدْ لَهُ عَزْمًا ﴿١١٩﴾

وَإِذْ قُلْنَا لِلْمَلَائِكَةِ اسْجُدُوا لِآدَمَ فَسَجَدُوا إِلَّا إِبْلِيسَ أَبَى ﴿١٢٠﴾

فَقُلْنَا يَا آدَمُ إِنَّ هَذَا عَدُوٌّ لَكَ وَلِزَوْجِكَ فَلَا يُخْرِجَنَّكَ مِنَ الْجَنَّةِ فَتَشْقَى ﴿١٢١﴾

إِنَّكَ لَا آتٍ جُوعَ فِيهَا وَلَا تَعْرَى ﴿١٢٢﴾

وَأَنَّكَ لَا تَظْمَأُ فِيهَا وَلَا تَصْحَى ﴿١٢٣﴾

注26 型なる預言者は、「知識は中国の様な遠い国にある。されど、知識を求めよ。」と言ったと伝えられている。クルアーンの他の箇所でも、知識は「神の偉大なる恩寵」とされている（2章270節、4章114節参照）知識には2種類ある。(1)啓示によって与えられる知識。クルアーンには、完全な顕示として書かれている。(2)人間が、自ら努力して習得するもの。

注27 この節には、アダムの過失は、判断の過ちであったことが示されている。それはうかつに心ならずもしたことであり、意識的、故意にしたことではなかった。過ちを犯すのは、人の常である。

注28 もし、アダムがイブリースの甘言に惑され、彼の忠告を受け入れたならば、ジャンナ、すなわち、今まで享受してきた「樂園」にいるような至福の生、精神的満足を失うであろう、と警告された。

注29 当節と前節は、文明社会の快適さ、安楽さについて言及しているものと思われる。この2つの節が示しているのは、生活に基本的に必要である衣・食・住を供給することが文明的政府の第一の義務であり、社会が文明社会であるといえるのは、国民すべてにこれらの必要性が満たされた時である。飢えて死ぬ人々がいる一方、富をためこむ人々がいる、という様な深刻な経済的不平等が無くならない限り、人類は社会の混乱に苦しみ続け、人間社会の道徳は向上しないであろう。ここでアダムは、すべての住民に、生活の快適さと必需品

121. 然るに、悪魔はアダムに教唆して、云えり、「アダムよ、我は汝に永遠の樹と不滅の王権とを教えようか?」と。(注30)
122. かくて、彼等兩人それを食したれば、自分たちが裸なることに気づき、樂園の木の葉を綴りてその身を蔽い始めたなり。かくて、アダムは主の命に背きたれば、その生涯はみじめなものとなりぬ。
123. その後主は、慈悲ゆえに再び彼を選び、彼を容赦して正道へと導きたり。
124. 神は云えり、「お前たち、偕にここから落ちて行け、相互に敵となりて。而して、もしお前たちにわが嚮導降ることあらば、之に従う者は迷うことなく、また災難に遭わざるべし。
125. されど、わが訓戒に背く者は、その生涯は難儀させられ、また復活の日には、われら之を盲者として甦らさん」と。
126. 彼は云わん、「主よ、汝何故に我を盲者として甦らしめたるか、我以前視力を持ちたるものを?」と。
127. 神は云えり、「われらの神兆が汝に降りし時、汝は之をなおざりにせり。今日は、同様に汝がなおざりにされる日なり」と。
128. われらはこのようにして、規則に違犯し、その主の神兆を信ぜざる者に報ゆ。なれど、来世の懲罰は更に厳しく、更に長し。
129. われらが彼等以前に如何に多くの世代を滅ぼしたるか、今彼等はそれ等の廢墟を往き来しながら、之によって導かれることなきか?げにこの中には、理性を備えた者へのさまざまなる神兆あり。

فَوَسَّوَسَ إِلَيْهِ الشَّيْطَانُ قَالَ يَادُمْ هَلْ أَوْلَكَ عَلَى شَجَرَةِ الْخُلْدِ وَمُلْكٍ لَّا يَبُلُ ①٢١

فَأَكَلَا مِنْهَا فَبَدَّتْ لَهُمَا سَوْآتُهُمَا وَطَفِقَا يَخْصِفْنَ عَلَيْهِمَا مِنْ ذَرَقِ الْجَنَّةِ وَعَصَى آدَمُ رَبَّهُ فَغَوَى ①٢٢

ثُمَّ اجْتَبَاهُ رَبُّهُ فَتَابَ عَلَيْهِ وَهَدَى ①٢٣

قَالَ اهْبِطَا مِنْهَا جَمِيعًا بَعْضُكُمْ لِبَعْضٍ عَدُوٌّ وَأَنَا يَارِيتُكُمْ مِثِّي هُدَىٰ هَٰ فَمَنِ اتَّبَعَ هَٰذَا سَ لَا يَضِلُّ وَلَا يَشْتَقِي ①٢٤

وَمَنْ أَعْرَضَ عَن ذِكْرِي فَإِنَّ لَهُ مَعِيشَةً ضَنْكًا وَنَحْشُرُهُ يَوْمَ الْقِيَامَةِ أَعْمَى ①٢٥

قَالَ رَبِّ لِمَ حَشَرْتَنِي أَعْمَى وَقَدْ كُنْتُ بَصِيرًا ①٢٦

قَالَ كَذَلِكَ أَتَتْكَ آيَاتُنَا فَنَسِيتَهَا وَكَذَلِكَ الْيَوْمَ تُنْسَى ①٢٧

وَكَذَلِكَ نَجْزِي مَنْ أَسْرَفَ وَلَمْ يُؤْمِنْ بِآيَاتِ رَبِّهِ وَلَعَذَابُ الْآخِرَةِ أَشَدُّ وَأَبْقَى ①٢٨

أَفَلَمْ يَهْدِ لَهُمْ كَمْ أَهْلَكْنَا قَبْلَهُمْ مِنَ الْقُرُونِ يَسْتَوْنَ فِي مَسْكِنِهِمْ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ لِّأُولِي ①٢٩

الْبَصَرِ ①٣٠

が十分に与えられている場所に住むであろう、と告げられている。このような状態は、クルアーンの他の部分でも(2章36節)示されている。この節は、また、アダムによって、新しい社会秩序が始まり、人間の社会的発展の時代の先がけとなる王国の基盤を築かれる、ということも示している。

注30 121節~124節までについての説明は2章36節~39節参照。

第八項

130. もしすでに主から発布せられたる言葉
(注 31) なかりせば、而して期限が定めら
れたるに非ざりせば、即罰は避け得ざりし
なり。
131. 彼等が何んといおうとも耐え忍び、日の
出前、日没前に主の栄光を讃えまつれ。ま
た夜間ひとときの一時、一日の二回きわみの極に於ても之
をなせ。さすれば汝本当の幸福を見いだす
やも知れぬ。
132. われらが彼等の或る種の者に、束の間の
楽しみ—すなわち現世の栄華—を与えたこ
とに汝目をみはるなかれ—あれは要する
に、それによって彼等を試さんがためなり。
(注 32)
133. 汝の家族に礼拝を命じ、且つそれを絶え
ず続けさせよ。われらは汝に養われんこと
を求めず、汝を養うはわれらなり。果報は
罪惡に抗して身を護る者にあり。
134. 彼等は云う、「何故彼は主から奇蹟ししを我等
にもたらさざるか？」と。先の諸經典の中
にある明白な証拠が、いま彼等に來たれる
に非ざるか？
135. もしわれらが、使徒の到来以前に天罰に
よつて彼等を滅ぼしたれば、彼等は必ず云
わん、「何故汝は我等に使徒を遣わさざり
き？さすれば、我等は、卑しめられ、辱し
められる前に汝の戒律に従いたりしもの
を」と。
136. 云え、「誰もみな待つ。されば、汝等も待
て。やがてお前たちは、正道を進むは誰か、
また正しい嚮導に従うは誰か、それを知る
べし」と。

وَلَوْلَا كَلِمَةٌ سَبَقَتْ مِنْ رَبِّكَ لَكَانَ لِزِمَامِ آجَلٍ
مُسَمًّى ③①

فَاصْبِرْ عَلَى مَا يَقُولُونَ وَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ قَبْلَ
طُلُوعِ الشَّمْسِ وَقَبْلَ غُرُوبِهَا وَمِنْ أَتَى النَّيْلَ
فَسَبِّحْ وَأَطْرَافَ النَّهَارِ لَعَلَّكَ تَرْضَى ③②

وَلَا تَمُدَّنْ عَيْنُكَ إِلَى مَا مَتَّعْنَاهُ أَزْوَاجًا مِنْهُمْ
زَهْرَةَ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا لِنَفْتِنَهُمْ فِيهِ وَرِزْقُ رَبِّكَ
خَيْرٌ وَأَبْقَى ③③

وَأْمُرْ أَهْلَكَ بِالصَّلَاةِ وَاصْطَبِرْ عَلَيْهَا لَا نَسْأَلُكَ
رِزْقًا نَحْنُ نَرْزُقُكَ وَالْعَاقِبَةُ لِلتَّقْوَى ③④

وَقَالُوا لَوْلَا يَأْتِينَا بِآيَةٍ مِنْ رَبِّهِ أَوَلَمْ تَأْتِهِمْ
بَيِّنَةٌ مَا فِي الصُّحُفِ الْأُولَى ③⑤

وَلَوْ أَنَّا أَهْلَكْنَاهُمْ بِعَذَابٍ مِنْ قَبْلِهِ لَقَالُوا رَبَّنَا
لَوْلَا أَرْسَلْتَ إِلَيْنَا رَسُولًا فَنَتَّبِعَ آيَاتِكَ مِنْ قَبْلِ
أَنْ نَذِلَّ وَنَخْزَى ③⑥

قُلْ كُلُّ مُشْتَرِصٍّ فَتَرَبُّصًا يُسْتَخْلَمُونَ مِنْ أَهْلِ
بَيْتِ الصِّرَاطِ السَّوِيِّ وَمَنِ اهْتَدَى ③⑦

注 31 これは、7章137節の神の言葉について言及している。これから神の慈悲が、他の特性より優るであ
ろう、と神は全智において定めた。

注 32 戦争、そしてひいては人間の悲惨・流血につながる国家間のねたみ・対立は、人間が物質的豊さ・快
適さを食欲に求めたことによる直接的・間接的な結果である。イスラム教信者は、他人の富をうらやんではい
けない。

سُورَةُ الْأَنْبِيَاءِ مَكِّيَّةٌ

アル・アンビヤ
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 自分たちの清算が近づいているにもかかわらず、人々は無頓着に顧みざるなり。
3. 主より降る新たな警告をば、(注1)彼等はいずれも、ばかにして聞き流すばかり。
4. 彼等の心は怠りがちなり。而して、不義を行う者どもは密かに相語りて云う、「この男は、我等同様ただの人間に非ざるか?(注2)お前たちその目を開いていながら、魔術に従うのか?」と。
5. 之に答えて、預言者は云えり、「我が主は、天地の間で語られることはすべて知り給う。彼はすべてを聴き、すべてを深知し給う」と。(注3)

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

اقْتَرَبَ لِلنَّاسِ حِسَابُهُمْ وَهُمْ فِي غَفْلَةٍ
مُعْرِضُونَ

مَا يَأْتِيهِمْ مِنْ ذِكْرٍ مِنْ رَبِّهِمْ مُحَدَّثٍ إِلَّا اسْتَعْتَبُوهُ
وَهُمْ يُعْبَوْنَ

لَا هِيَ قُلُوبُهُمْ وَأَسْرَأُ النَّجْوَى الَّذِينَ ظَلَمُوا
هَلْ هَذَا إِلَّا بَشَرٌ مِثْلُكُمْ أَفَتَأْتُونَ السَّحَرَاءَ
بُعْثُورًا

قُلْ رَبِّي يَعْلَمُ الْقَوْلَ فِي السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ وَهُوَ
السَّمِيعُ الْعَلِيمُ

注1 モハammad預言者がもたらす啓示は、人々に初めて伝えられる新しい文句や新鮮な形で提示されているが、伝達すべき内容、その本質は既存の啓示と変わらぬものである。そのことは、クルアーンの中でモハammad預言者自身が、御自身のことを、新たな啓示をもたらす使者ではないと自述していることからわかる。(46:10)

注2 各々の預言者に対し不信者が反ばくの対象としていつでも言及することは、“お前だって我々と変わらぬ人間であり、我々同様いつかは死ぬ運命にあるではないか”、という点である(14:11、23:25、34:26、155:36、16:64:7)。このことに対しては幾度も答えが与えられている(12:110、14:12、16:44と45、17:96)。ここでは8節で答えが述べられている。それは、不信者たちが一方では預言者のことを普通のひとと何ら変わりはないと言いつつも、その一方で彼が魔術師であると言うことによりモハammad預言者が人並みでない知力を有していることを認めているところにある。聖なる預言者は、聞き手に、不思議な影響を及ぼしたがゆえに不信者たちに魔術師と呼ばれたのである。そしてこの節では、クルアーンの有する力は、すばらしく、人を引きつけるものであるから、偏見のない公平な判断力を持つ人であれば、だれでも、クルアーンを受け入れずにはいられないのだということに言及している。

注3 神は不信者がイスラムにしかけるすべての悪たくみや彼らの秘密を御存知なのである。神は、モハammad預言者や神に選ばれたしもべたちの祈りを聞きとどけられ、不信者たちのすべての悪たくみをくじくのである。

6. 否、彼等は云えり、「そは雑夢にすぎず。否、彼之を捏造せり。否、彼は詩人にすぎず。ならば、昔の預言者たちが遣わされたる時の如く、彼にも我等に奇蹟をもたらしめよ」と。
7. 彼等以前にわれらが滅ぼせし邑の住民は、いずれも信仰せざりき。されば、彼等は信ずべきか？
8. 汝以前にわれらが使徒として遣わしたる者はすべて、われらが啓示を降せしただの人間にすぎず。お前たち之を知らずば、警告を受けた民に之を問え。
9. われらは使徒たちを食物を摂らざる軀に造らず、また彼等は永遠に生くべき身でもなかりき。
10. かくて、われらは約束を全うし、嘉せし者たちを救い、罪人どもを滅ぼせり。
11. 今われらはお前たちに、その品位の糧となる經典を降したり。お前たちそれが解らざるか？（注4）

第二項

12. われらは如何に多く罪深き邑の住民を滅ぼし、その後別に別の民を興したりぞや！
13. 彼等はわれらの懲罰に気づくや、見よ、そこから逃げ出し始めり。
14. そこで、われらは云えり、「逃れるなかれ、お前たちが楽しめし快樂の場、お前たちの住居へ帰れ。お前たちはその行状について糾問せらるべし」と。
15. 彼等は云えり、「悲しいかな、げに我等は不義者なりき」と。

بَلْ قَالُوا أَضْغَاتُ أَحْلَامٍ بَلْ افْتَرَاهُ بَلْ هُوَ شَاعِرٌ
فَلْيَأْتِنَا بآيَةٍ كَمَا أُرْسِلَ الْأَوَّلُونَ ﴿٦﴾

مَا آمَنَتْ قَبْلَهُمْ مِنْ قَرْيَةٍ أَهْلَكْنَاهَا أَتُمْ يَحْيَوْنَ ﴿٧﴾

وَمَا أَرْسَلْنَا قَبْلَكَ إِلَّا رِجَالًا نُوْحِي إِلَيْهِمْ فَسْأَلُوا
أَهْلَ الدِّكْرِ إِنْ كُنْتُمْ لَا تَعْلَمُونَ ﴿٨﴾

وَمَا جَعَلْنَاهُمْ جَسَدًا لَا يَأْكُلُونَ الطَّعَامَ وَمَا
كَانُوا خَالِدِينَ ﴿٩﴾

ثُمَّ صَدَقْنَاهُمُ الْوَعْدَ فَأَنْجَيْنَاهُمْ وَمَنْ نَشَاءُ
وَأَهْلَكْنَا السُّرُوفِينَ ﴿١٠﴾

لَقَدْ أَنْزَلْنَا إِلَيْكُمْ كِتَابًا فِيهِ ذِكْرُكُمْ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ﴿١١﴾

وَكَمْ قَصَمْنَا مِنْ قَرْيَةٍ كَانَتْ ظَالِمَةً وَأَنْشَأْنَا
بَعْدَهَا قَوْمًا آخَرِينَ ﴿١٢﴾

فَلْيَأْتِنَا بِسَنَاءٍ إِذَا هُمْ مِنْهَا يُرْكَضُونَ ﴿١٣﴾

لَا تَرْكُضُوا وَارْجِعُوا إِلَى مَا أُتْرِفْتُمْ فِيهِ وَمَسْكِنِكُمْ
لَعَلَّكُمْ تَسْأَلُونَ ﴿١٤﴾

قَالُوا يُؤْيِيكُنَا إِنَّا كُنَّا ظَالِمِينَ ﴿١٥﴾

注4 この節で意味していることは、クルアーンを拒否するものは深い悲しみの淵に落ち入り、クルアーンに従うものは発展し、繁栄を遂げ、はしご段の一番下から、いと高き所に昇り、物質的、精神的栄光を得るであろうということである。この事実から、クルアーンが作りごとや詩人のたわむれでなく、混乱した夢物語の集成でもなく、まさに真の神、天地の創造主のお言葉の集大成であるとわかる。

16. 而して、彼等の泣き声は、われらがなげ倒せし如く絶滅せしむるまでは止まざりき。

17. われらは天と地、並びにその間にあるすべてのものを、戯れに創造せるに非ず。(注5)

18. もし気晴しを見出さんと欲しなば、われらは之を自らの内に見出さん。われらは断じてそのようなことはせじ。(注6)

19. 否、われら、真理を虚偽に投げつけば、そはその頭を碎き、見よ、消滅す。禍なるかな、お前たちが神のせいにしたことが。

20. 天にあるもの地にあるもの、すべてはアッラーに属す。而して、彼のお傍にある者たちは、彼に仕えて驕らず、また倦みもせぬ。

21. 彼等は夜も昼も彼を讚美し奉り、たゆむことなし。(注7)

22. 彼等は死者を甦らし得る神々を地上で取り得たるや？(注8)

23. もし天地の間にアッラー以外に神々がありとすれば、天地は必ず荒廃せん。(注9)されば、彼等が唱えるものの上にいやさかに栄えます王座の主アッラーを讚美し奉れ。

فَمَا زَالَتْ تِلْكَ دَعْوُهُمْ حَتَّىٰ جَعَلْنَاهُمْ حَصِيدًا خَائِدِينَ ﴿١٦﴾

وَمَا خَلَقْنَا السَّمَاءَ وَالْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا لِعَيْنِينَ ﴿١٧﴾
لَوْ أَرَدْنَا أَنْ نَتَّخِذَ لَهَا آلَاتٍ خَدْنَاهُ مِنْ لَدُنَّا ۖ إِنَّ كُنَّا فَعِيلِينَ ﴿١٨﴾

بَلْ نَقْذِفُ بِالْحَقِّ عَلَى الْبَاطِلِ فَيَدْمَغُهُ فَإِذَا هُوَ زَاهِقٌ ۚ وَلَكُمُ الْوَيْلُ مِمَّا تَصِفُونَ ﴿١٩﴾

وَلَهُ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ وَمَنْ عِنْدَهُ لَا يَسْتَكْبِرُونَ عَنْ عِبَادَتِهِ وَلَا يَسْتَحْسِرُونَ ﴿٢٠﴾
يُسَبِّحُونَ اللَّيْلَ وَالنَّهَارَ لَا يَفْترُونَ ﴿٢١﴾

أَمْ اتَّخَذُوا الرِّهَةَ مِنَ الْأَرْضِ هُمْ يُنشِرُونَ ﴿٢٢﴾
لَوْ كَانَ فِيهِمَا آلِهَةٌ إِلَّا اللَّهُ لَفَسَدَتَا فَسُبْحَانَ اللَّهِ رَبِّ الْعَرْشِ عَمَّا يَصِفُونَ ﴿٢٣﴾

注5 宇宙が単なるなぐさみに創造されたのではなく、その創造には、神の偉大なる知性が秘められているということを考えれば、神が創造物の核として創り給うた人間は、壮大で崇高な目的に仕えるべく創られたことは明らかである。この節では、人間は地球上に神の代理人として遣わされ、人間は神の美德を映し出す鏡として仕えるべく創られているということが示されている。(2:31)

注6 もし、神が何の壮大な目的もなく単なるなぐさみにこの宇宙を創造されたとしたら、それは神の尊厳や栄光に矛盾することである。

注7 この節では、神の真のしもべとはいかなるものかが述べられている。彼らはたゆむことなく神や人類に仕えているのである。

彼らは一旦神の真理を受け入れれば、どんな状況にあらうとそれを捨てることはない。彼らの、真理に仕えようとする熱意は、衰えることがない。神を礼拝することは彼らの喜びの源であり、それにより彼らは不安や悩みから解き放たれ、心の安らぎをおぼえるのである。(13:29) モハammad預言者は「私の日の輝きは祈りの中に存る」と述べたとされている。

注8 使者を甦らせることは、神のみが成し得ることである。イエスにしる他の人にしろ、この神のみがもつ力は持ち得ない。この神の属性に言及することでイエスの神性を論破するのがこの節とその前後を通じての大切な主題となっている。

注9 この節では、多神論者に対する効果的で得心のいく議論がなされている。無神論者であろうともこの全宇宙に行きわたっている完全な秩序を否定することはできない。このすばらしい秩序を見れば、唯一の法に

24. 彼はそのなすことについて問われることなし、問われるは彼等なるべし。
25. 彼等はアッラー以外に神々ありとするか？云え、「ならばその証拠を示せ。こは、我に従う者たち並びに我が以前の者たちへの経典なり」と。否、彼等の多くは真理を知らず、故に彼等は之を忌避す。
26. われらは「われ以外に神なし、されば、われのみを崇拜せよ」と啓示することなく、汝以前に使徒を遣わさざりき。
27. 彼等は云う、「慈悲深い神は子を設け給えり」と。アッラーに讃えあれ。否、彼等はただ名譽ある僕等なり。
28. 彼等はアッラーより先に物云わず、ただアッラーの命を奉じて行ふ。
29. アッラーは、彼等以前にあるもの並びに彼等以後にあるものを知る。彼等は、アッラーが満足の意を表せざる者は執り成さず。彼等はアッラーに畏れて震え戦く。
30. 彼等天使の中に「我は彼とは別の神なり」と云う者あらば、(注10) われらはその者に地獄を以て報いん。われらはかくの如く不義な輩に報ゆ。

لَا يَسْأَلُ عَمَّا يَفْعَلُ وَهُمْ يُسْأَلُونَ ﴿٢٤﴾

أَمِ اتَّخَذُوا مِنْ دُونِهِ آلِهَةً قُلْ هَاتُوا بُرْهَانَكُمْ
هَذَا ذِكْرٌ مَنْ مَعِيَ وَذِكْرٌ مَنْ قَبْلِي بَلْ أَكْثَرُهُمْ
لَا يَعْلَمُونَ الْحَقَّ فَهُمْ مُّعْرِضُونَ ﴿٢٥﴾

وَمَا أَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ مِنْ رَسُولٍ إِلَّا نُوحِي إِلَيْهِ
أَنَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا أَنَا فَاعْبُدُونِ ﴿٢٦﴾

وَقَالُوا اتَّخَذَ الرَّحْمَنُ وَلَدًا سُبْحَانَهُ بَلْ عِبَادٌ
مُكْرَمُونَ ﴿٢٧﴾

لَا يَسْقُضُوهُ بِالْقَوْلِ وَهُمْ بِأَمْرِهِ يَعْمَلُونَ ﴿٢٨﴾

يَعْلَمُ مَا بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ وَلَا يَشْفَعُونَ
إِلَّا لِمَنْ أَرَادَ تَحْفَظَهُ وَهُمْ مِنْ خَشْيَتِهِ مُشْفِقُونَ ﴿٢٩﴾

وَمَنْ يَقُلْ مِنْهُمْ إِنِّي إِلَهٌ مِنْ دُونِهِ فَلْيَنْجِبْهُ
جَهَنَّمُ كَذَلِكَ يَجْزِي الظَّالِمِينَ ﴿٣٠﴾

従ってそれが形成されているという事実は明らかである。そして法が唯一であるということから自然に、宇宙の創造主であり監視者であられる神の唯一性が証明できる。もし神が複数存在するとしたら、当然のことながら宇宙を制御している法も複数存在することになる。

なぜなら一つの神にそれぞれ、宇宙を創るために個々の法が必要とされるからである。それゆえに、もし複数の神が存在するとすれば当然、混乱が生じるのは避けられず、宇宙はぶつかり合って粉々に砕け散ってしまうことであろう。以上のことから、すべての点で同等の3人の神が存在し、共に宇宙を創り、制御しているなどというのは全くばかげたあり得ない話だとわかる。

注10 神性を要求する者が、その誤った要求ゆえ罰せられるのは、来世においてのみであるが、不実にも預言者性を主張する詐称者、いかさま師はまさにこの世で、罰せられるのである。彼らは、死、破滅に遭遇し、彼らの組織は全て、まさにこの世でむだになってしまうのだ(69章45-48節)。このような2種類の詐称者の扱いが違うのは、神性を主張することの愚かさは自明であるという事実ゆえであり、そのようなことを主張する者は、あえてこの世で罰せられるにはおよばないからである。しかしながら、預言者性を不実にも主張する者は、もし無罪放免を認められたとしたならば、罪なき人々をだまして、己の虚偽なる主張を受け入れさせることに成功する可能性もありえる。それゆえに、そのような者はまさにこの世で、最終的に、敗北、敗走、破壊を経験させられ、長生きは許されず、又、その使命が果たされることも許されないのである。

第三項

31. 不信心者輩は、天と地が相い寄りたる一個の団塊なりしをわれらが之を二つに分けたることを、解らざるか？而して、われらは、水よりすべての生物を創造せり。それでも彼等は信ぜざるか？（注11）
32. また、われらは、大地に堅固なる山々を据え、以て大地が揺れ動かざるようにし、その上、彼等が正しく導かれんがためにそこに広い道を造りたり。
33. 更にわれらは、天をもつて、しっかりと支え護る屋根となしぬ。然るに彼等は、その神兆を顧みず。（注12）
34. 彼こそは、昼夜を創り、その軌道に沿って迅速に走る太陽と月とを創り給えし御方なり。（注13）
35. われらは汝以前の何人にも、不死の命を授けたることなし。それでは、汝は死すとも、

أَوَلَمْ يَرِ الَّذِينَ كَفَرُوا أَنَّ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ كَانَتَا رَتْقًا فَفَتَقْنَاهُمَا وَجَعَلْنَا مِنَ الْمَاءِ كُلَّ شَيْءٍ حَيٍّ أَفَلَا يُؤْمِنُونَ ﴿٣١﴾

وَجَعَلْنَا فِي الْأَرْضِ رَوَاسِيَ أَنْ تَمِيدَ بِهِمْ وَجَعَلْنَا فِيهَا فِجَاجًا سُبُلًا لَعَلَّهُمْ يَهْتَدُونَ ﴿٣٢﴾

وَجَعَلْنَا السَّمَاءَ سَقْفًا مَحْفُوظًا وَهُمْ عَنْ آيَاتِهَا مُعْرِضُونَ ﴿٣٣﴾

وَهُوَ الَّذِي خَلَقَ الْإِنسَانَ وَالنَّهَارَ وَاللَّيْلَ وَالشَّمْسَ وَالْقَمَرَ كُلٌّ فِي فَلَكٍ يَسْبَحُونَ ﴿٣٤﴾

وَمَا جَعَلْنَا لِبَشَرٍ مِنْ قَبْلِكَ الْخُلْدَ أَفَإِنْ مِتَّ

注11 本節は、偉大なる科学的真実を指摘している。宇宙の前物質的段階に言及し、全宇宙、特に太陽系が、非結晶質、星雲状集団から発達したということを主張しているように思われる。神は、神自身の手により動かしめた法則に応じ、物質の固まりを分裂させた。そのまばらとなった小片が、太陽系の単位となったのである。（Harold Richards著“The Universe Surveyed”及びFred Hoyle著“The Nature of Universe”）その後、神は水から全ての生命を創造した。物質的宇宙と同様に、精神的宇宙もまた、混乱した考え、愚かな信念といった定形の集団から発達するのだと、本節は含意しているように思われる。神が、神の絶対的に確実な知恵を駆使し、至高なる計画に従事し、物質の固まりを分裂させ、その結果こなごなとなった小片が太陽系の単位となったのと同様の方法で、神は混乱した考えの窮地に浸った世界に新しい精神的秩序をもたらすのである。人類が、道徳的墮落のまっ暗やみに陥り、精神的ふん開きが濃厚かつ圧迫的になると、神は、一面に広がる精神的暗やみを揺さぶる天の使者を遣わして御自身的美徳を表されるために、光を起こすのだ。すると、この混乱し、生命のない道徳的墮落と精神的退廃の固まりから、精神的宇宙が生まれるのである。その精神的宇宙は、中央から広がり始め、最終的には全地球を包含し、その刺激から生命および進むべき方向を受け入れるのだ。

注12 太陽、月、惑星、星を伴う太陽系は、何百万年もの間存在し続けた秩序のとれ、よく統制された組織であり、これら組織体の動きにおいては、なんらの無秩序も、逸脱も経験したこのがないのであった。これらの天の組織体は、地球及びその住民に、非常に有益な影響を与えるのである。屋根が、家の住民に対して、雨、寒さ、暑さからの保護手段であると同様に、天は、地球に対しての保護の役割を果たし、天体は、人類に有益な影響を及ぼすのである。

注13 夜と昼、太陽と月は全て、神によって創造され、それら全てが人間の必要性を満たすのであり、地球上での人間の存在にとっては不可欠なものである。

彼等は永遠にこの世で生きると云うか？
(注 14)

36. 人はみな死を味わされん。われらは禍福の試練を用いて、お前たちを試すなり。而して、お前たち、必ずわが許に連れ戻されん。
37. 不信心者どもが汝を見る時、彼等は汝をただ嗤いものにして、云う、「我等の神々を悪し様に云うは、この者なるか？」と。慈悲深い神の訓戒を拒否する者、そは彼等自身なり。
38. 人間というものはせっかちに出来ている。わが神兆を必ずお前たちに見せてやるから、われをせき立てることなかれ。
39. すると、彼等は云う、「お前の言葉が本当なら、その約束は何時実行されるか？」と。
40. もし不信心者どもが、その顔や背を業火から(注 15) 防ぎ得ず、また救われざらんことを知るならば！
41. 否、そは彼等を不意に襲い、驚きうろたえせしむべし。されば、彼等は之を押し戻すこと能わず、また猶予せらることもなかるべし。(注 16)
42. げに汝以前の使徒たちは嘲弄せられたり。されど、彼等を嘲弄せし者どもは、その嘲弄したもので包囲されり。

فَهُمُ الْخَالِدُونَ ﴿١٤﴾

كُلُّ نَفْسٍ ذَاقَةُ الْمَوْتِ وَنَبَلَّوْكُمْ بِالْأَسْرِ وَالْخَيْرِ وَنَنَّهُ وَالْإِنْتَارُ تَرْجِعُونَ ﴿١٥﴾

وَإِذَا رَأَى الَّذِينَ كَفَرُوا أَنْ يَنْجِدُونَكَ إِلَّا هُزُوءًا أَهَذَا الَّذِي يَذْكُرُ إِلَهُكُمْ وَهُمْ يَذْكُرُ الرَّحْمَنَ هُمْ كَافِرُونَ ﴿١٦﴾

خُلِقَ الْإِنْسَانُ مِنْ عَجَلٍ سَأُولِيكُمْ أَيْتِي فَلَا تَسْتَعْجِلُونَ ﴿١٧﴾

وَيَقُولُونَ مَتَى هَذَا الْوَعْدُ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿١٨﴾

لَوْ يَعْلَمُ الَّذِينَ كَفَرُوا حِينَ لَا يَكُونُونَ عَنْ وُجُوهِهِمُ النَّارَ وَلَا عَنْ ظُهُورِهِمْ وَلَا هُمْ يُصَرُّونَ ﴿١٩﴾

بَلْ تَأْتِيهِمْ بَغْتَةً فَتَبْهَتُهُمْ فَلَا يَسْتَطِيعُونَ رَدَّهَا وَلَا هُمْ يُنْظَرُونَ ﴿٢٠﴾

وَلَقَدْ اسْتَهْزَيْ بِرُسُلٍ مِنْ قَبْلِكَ فَخَافَ بِالْبَاطِلِينَ ﴿٢١﴾

سَجَرُوا مِنْهُمْ مَا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِءُونَ ﴿٢٢﴾

注 14 聖なる預言者以前のさまざまな法律や宗教的組織は全て、精神的腐敗、破滅に至る運命だったのだ。時の果てまで生き延びるのは、聖なる預言者の法律—イスラム教律法のみであった。本節がまた含意していることは、いかなる人間も、腐敗や死から免れないし、聖なる預言者ですらも同様であるということである。永遠・永久とは神自身のみに見られる特性なのだ。

注 15 「業火」とはここでは「戦争の火」を意味する。不信者たちは、火をつけ、自分たち自身がその中で、燃え尽きてしまった。彼らはイスラム教に向かって、剣を抜き、その剣によって、滅びてしまったのだ。「その顔や」というのは、彼らが、自分たちの前で目にするようになる罰を意味する。すなわちそのきざしが、明らかに判然とするだろうということである。「その背を」というのは、その罰が彼らに突然、だしぬけに襲いかかるであろうということを意味している。さらには、その罰は彼ら全て—指導者たち、そして一般の人間—を圧倒することになるであろう。

注 16 本節での言及は、おそらくは、クライシュが完全に不意打ちを食われ、すっかりうろたえてしまった際のメッカの陥落についてのことであろう。

第四項

43. 云え、「昼夜をとわず、慈悲深い神の怒りに対してお前たちを護る者は誰ぞ?」と。然るに彼等は、その主を念ずることを願みず。
44. それとも彼等は、われら以外に、自分を護り得る神々を有するや? それ等の神々は、己れ自身をも護ること能わず、またわれらの攻撃を防ぐこと能わず。
45. 否、われらはこれ等の者並びに、その父祖たちにこの世の享樂を与え、その命を永からしめたり。彼等は、われらがこの地を訪れ、外郭から縮小しつつあるを見ざるか? (注17) 彼等は果して勝利者たり得るや?
46. 云え、「我はただ天啓に従ってお前たちに警告するのみ」と。されど、聾者は、警告されてもその呼びかけの声が聞けず。
47. 然しながら、主の罰の気配すら感じただけで、彼等は必ず悲鳴を上げる。「ああ、情けなや! げに我等は不義者なりき」
48. われらは公正にして正確なる秤を最後の審判の日のために設けん、されば何人も不当に遇せらるることなし。たとい芥子菜の種子の一粒の重さなりとも、われらは之を明らかにせん。われらは清算者として万金なり。
49. われらはモーゼとアロンに、義しい者にとっては識別とも光明とも、また訓戒ともなるものを与えたり。
50. 彼等は密かにその主を恐れ、審判の時を憶いて恐れおののく者たちなり。

قُلْ مَنْ يَكْلُوْكُمْ بِاللَّيْلِ وَالنَّهَارِ مِنَ الرِّحْمٰنِ
بَلْ هُمْ عَنْ ذِكْرِ رَبِّهِمْ مُّعْرِضُوْنَ ﴿٤٣﴾
اَمْ لَهُمْ اِلٰهَةٌ تَنْعُهُمْ مِنْ دُونِنَا لَا يَسْتَطِيعُوْنَ
نَصْرَ اَنْفُسِهِمْ وَلَا هُمْ يَنْصُرُوْنَ ﴿٤٤﴾
بَلْ مَتَّعْنَا هَؤُلَاءِ وَاَبَاءَهُمْ حَتَّى طَالَ عَلَيْهِمُ
الْعُمُرُ اَفَلَا يَرَوْنَ اَنَّا نَأْتِي الْاَرْضَ نَنْقُصُهَا
مِنْ اَطْرَافِهَا اَفَهُمُ الْغَالِبُوْنَ ﴿٤٥﴾
قُلْ اِنَّمَا اُنذِرُكُمْ بِالْوَحْيِ وَلَا يَسْمَعُ الصُّمُّ
الدُّعَاءَ اِذَا مَا يُنْذَرُوْنَ ﴿٤٦﴾
وَلٰكِنْ مَسَّنَّهُمْ نَفْحَةٌ مِّنْ عَذَابِ رَبِّكَ لَيَقُولُنَّ
يُوَيْلَنَا اِنَّا كُنَّا ظٰلِمِيْنَ ﴿٤٧﴾
وَنَضَعُ الْمَوَازِيْنَ الْقِسْطَ لِيَوْمِ الْقِيَمَةِ لَا تَظْلَمُ
نَفْسٌ شَيْئًا وَاِنْ كَانَ مِثْقَالَ حَبَّةٍ مِّنْ خَرْدَلٍ
اَتَيْنَا بِهَا وُكْفًى بِمَا حَسِبْتُمْ ﴿٤٨﴾
وَلَقَدْ اَتَيْنَا مُوسٰى وَهَارُونَ الْفُرْقَانَ وَضِيَّا
وَذِكْرًا لِّلْمُتَّقِيْنَ ﴿٤٩﴾
الَّذِيْنَ يَخْشَوْنَ رَبَّهُمْ بِالْغَيْبِ وَهُمْ مِنَ السَّاعَةِ
مُشْفِقُوْنَ ﴿٥٠﴾

注17 ある国民の国家の繁栄の時代が長くなると、その国民は、自分らの繁栄や進歩が衰えることはないであろうとの誤った認識をするようになり、その結果、横柄になり、心はかたくなになるのである。従って、繁栄時代が長びくことが、没落の原因となるのである。本節では、不信者たちに、進歩や繁栄が無限に続くのだという物欲しげな考え、虚偽の自己満足を特に持たぬよう警告し、神は徐々にではあるが確実に、あらゆる方向からその土地を滅らし、縮小しつつあるのだ、つまり、イスラム教は、あらゆる家、全ての社会的地域や階層に侵入していくのだという事実を目を閉じてしまわないようにと言っているのだ。

51. 而して、このクルアーンは、われらが降したる有難い訓戒なり。然るにお前たち、なお之を拒むか？

第五項

52. その昔、われらはアブラハムを指導せり、彼がその器であるを知りたればこそ。
53. 彼がその父並びにその民に向って、「貴方がたが程夢中になる、これ等の偶像は何者ぞ？」と云えし時、
54. 彼等は答えり、「我等は、先祖たちが彼等を崇拜するを見たり」と。
55. アブラハムは云えり、「貴方がた自身並びに貴方がたの先祖たちも明らかに誤れり」と。
56. 彼等は云えり、「汝は本当に我等に真理をもたらしたるか、それとも冗談を云うのか？」と。
57. アブラハムは答えり、「否、貴方がたの主は天地の主、それを創り給うた御方なり。而して、我は、その証人の一人なり。(注18)
58. アッラーに誓って云う、貴方がたが背を向けて去りし後、我は必ず貴方がたの偶像に対して策を施さん」と。
59. そこで彼は、巨像一体、彼等歸りて尋ねべしと思ひ、之を残し、他の悉く打ち砕きたり。
60. 彼等は云えり、「我等の神々に対して誰が之をなしたるか？げにその者こそ不義者なり」と。
61. 他の者は云えり、「我等は、アブラハムと呼ばれる若者が、神々を悪し様に云うを聞けり」と。

وَهَذَا ذِكْرٌ مُبْرَكٍ أَنْزَلْنَاهُ أَفَأَنْتُمْ لَهُ مُنْكَرُونَ ﴿٥١﴾

وَلَقَدْ آتَيْنَا إِبْرَاهِيمَ رُشْدَهُ مِنْ قَبْلُ وَكُنَّا بِهِ عَلِيمِينَ ﴿٥٢﴾

إِذْ قَالَ لِأَبِيهِ وَقَوْمِهِ مَا هَذِهِ الشَّائِئِلُ الرَّجِيءُ أَنْتُمْ لَهَا عَاِقُونَ ﴿٥٣﴾

قَالُوا وَجَدْنَا آبَاءَنَا لَهَا عَابِدِينَ ﴿٥٤﴾

قَالَ لَقَدْ كُنْتُمْ أَنْتُمْ وَآبَاؤُكُمْ فِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ﴿٥٥﴾

قَالُوا أَجِئْتَنَا بِالْحَقِّ أَمْ أَنْتَ مِنَ اللَّاعِينَ ﴿٥٦﴾

قَالَ بَلْ رَبُّكُمْ رَبُّ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ الَّذِي فَطَرَهُنَّ وَأَنَا عَلَى ذِكْرِكُمْ مِنَ الشَّاهِدِينَ ﴿٥٧﴾

وَتَاللَّهِ لَا كِبَادَ أَصْنَامُكُمْ بَعْدَ أَنْ تُوَلَّوْا مُدْبِرِينَ ﴿٥٨﴾

فَجَعَلَهُمْ جُودًا إِذْ لَا إِلَهَ إِلَّا هُمْ لَعَلَّهُمْ الْغَائِرُونَ ﴿٥٩﴾

قَالُوا مَنْ فَعَلَ هَذَا بِإِلَهِنَا إِنَّهُمْ لِلظَّالِمِينَ ﴿٦٠﴾

قَالُوا سُبْحَانَ فَتَىٰ بَذَلْنَاهُمْ لَهَا إِبْرَاهِيمَ ﴿٦١﴾

注18 本節では、神の使者たちは、神について語る際には、個人的経験から話すのだという至高の真実を指摘している。神の使者たちは、単に、人間の理性が神の存在を信じることを要求するために人間を神のもとに招くのではなく、十分な確信と、確固たる信念をもって、人間を神のもとに招くのである。(12章 109節)

62. 彼等は云えり、「されば彼を公衆の面前に曳き出せ、(注19) 恐らく皆が証人とならん」と。
63. 彼等はアブラハムに向って云えり、「おお、アブラハムよ、我等の神々に之^{これ}を為せるは汝なるか?」と。
64. アブラハムは答えり、「然り、確かに何者かが之^{これ}をなせり。ここに偶像等の頭あり。もし偶像等物云わば、之^{これ}を偶像等に問え」と。(注20)
65. かくて彼等は自ら顧みて、云えり、「誤りしは、げに我等自身なり」と。
66. しかるに、彼等はやがて、邪惡な以前の狀態にたち返りて、云えり、「汝これ等の神々が物云わぬことを確かに知りぬ」と。
67. アブラハムは云えり「ならば貴方がたは、アッラーの代りに、少しも毒にも薬にもならぬ神々を崇め奉るか?」
68. いやはや、情けなや貴方がた、並びにアッラーの代りに貴方がたが崇める神々は。これでも貴方がたまだ理解し得ぬか?」と。
69. 彼等は云えり、「彼を火炙りにし、我等の神々を救え、いやくも何事かをなさんとするなら」と。
70. そこで、われらは云えり、「火よ、冷たくなれ、アブラハムは安泰なれ」と。(注21)

قَالُوا فَأْتُوا بِهِ عَلَىٰ أَعْيُنِ النَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَشْهَدُونَ ﴿٦٢﴾

قَالُوا أَنْتَ فَعَلْتَ هَذَا بِإِلَهِنَا يَا بُرْهِيمُ ﴿٦٣﴾

قَالَ بَلْ فَعَلَهُ كَبِيرُهُمْ هَذَا فَاسْأَلُوهُمْ إِنَّهُمْ يَنْطِقُونَ ﴿٦٤﴾

فَرَجَعُوا إِلَىٰ أَنفُسِهِمْ فَقَالُوا إِنَّكُمْ أَنْتُمُ الظَّالِمُونَ ﴿٦٥﴾

ثُمَّ نَگَسُوا عَلَىٰ رِءُوسِهِمْ لَقَدْ عَلِمْتَ مَا هَؤُلَاءِ يَنْطِقُونَ ﴿٦٦﴾

قَالَ أَتَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ مَا لَا يَنْفَعُكُمْ شَيْئًا وَلَا يَضُرُّكُمْ ﴿٦٧﴾

أُفٍّ لَّكُمْ وَلِمَا تَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ﴿٦٨﴾

قَالُوا حَرِّقُوهُ وَانصُرُوا آلِهَتَكُمْ إِنْ كُنْتُمْ فاعِلِينَ ﴿٦٩﴾

قُلْنَا يَا نَارُ كُونِي بَرْدًا وَسَلَامًا عَلَىٰ إِبْرَاهِيمَ ﴿٧٠﴾

注19 アブラハムが、大衆の前に召喚された理由は、彼が偶像を非難するのを聞いた者が彼に不利な証言をするためか、彼に不利な証拠を耳にし、どんな罰を彼に与えるべきかを決定するためか、又は、彼に課することになっている罰を、彼らが日撃するためかのどれかである。

注20 本文で与えられた意味の他に、このアラビア語の表現は、アブラハムが偶像崇拜者たちと話をする際に、習慣として皮肉的に話されてきたものでもある。この場合、この語の意味は、次のようである。“なぜ私がこれを為してしまうべきだったのであろうか。彼らの支配者がこれを為したかもしれないのに”これによって、事実があまりに明らかであるので、私がこれを為したことを疑う余地もなければならぬの説明も必要ないのだということを意味している、アブラハムは、まず偶像を破壊し、そしてもしも話せるのなら、偶像に誰が、偶像を破壊したのか告げるよう要求せよと信者にいどむことにより、人々を非難し、彼の偶像崇拜の慣習の空虚さをしみじみと訴えたようである。

注21 火がいかにしておさまったかについては、語られていない。折よい雨、または激しいハリケーンによって、消されたのかもしれない。いずれにせよ、神が、アブラハムの解放に至った状況をひき起こしたことに変

71. 彼等はアブラハムに危害を加えんと謀りしが、われらは彼等を最悪の失敗者たらしめたり。

72. 而して、われらはアブラハムとロトを救い、われらが万民のために祝福せし土地へ彼等を導きたり。

73. 而して、われらは彼にイサクを授け、また孫としてヤコブも授け、彼等を皆義しい人となせり。

74. 而して、われらは彼等をして、われらが命を奉じて人々を導く指導者たらしめ、また啓示を降して、善行を積み、礼拝を遵守し、施しを惜しまぬことを彼等に命じたり。されば、彼等は、われらのみを崇拜せり。

75. またロトには、われらは知恵と知識とを与えり。而して、われらは忌まわしい行為にふけるあの邑から、彼を救出せり。げに彼等は邪惡にして、反逆的民なりき。

76. なれど、われらはロトをわれらが慈悲の中に入るを許したり、彼が本当に義しい人間なりしが故に。

第六項

77. 昔、ノアが、声をあげてわれらを喚びし時のことを思い起せ。われらはその祈りを聞きたれば、大災害から彼とその家族とを救出せり。

78. 而して、われらは、われらの神兆を否認せる者どもに対抗し、彼を助けり。げに彼等は邪惡な民なりし故、われらは之を皆溺死せしめたり。

وَأَرَادُوا بِهِ كَيْدًا فَجَعَلْنَاهُمُ الْأَخْسَرِينَ ﴿٧١﴾

وَنَجَّيْنَاهُ وَلُوطًا إِلَى الْأَرْضِ الَّتِي بَارَكْنَا فِيهَا الْعَالَمِينَ ﴿٧٢﴾

وَهَبْنَا لَهُ إِسْحَاقَ وَيَعْقُوبَ نَافِلَةً ۚ وَكَوْنًا جَعَلْنَا صَالِحِينَ ﴿٧٣﴾

وَجَعَلْنَاهُمْ آيَةً يُهَدَّوْنَ بِأَمْرِنَا وَأَوْحَيْنَا إِلَيْهِمْ فِعْلَ الْخَيْرَاتِ وَإِقَامَ الصَّلَاةِ وَإِيتَاءَ الزَّكَاةِ وَكَانُوا لَنَا عِبْدِينَ ﴿٧٤﴾

وَلُوطًا آتَيْنَاهُ حُكْمًا وَعِلْمًا وَنَجَّيْنَاهُ مِنَ الْقَرْيَةِ الَّتِي كَانَتْ تَعْمَلُ الْخَبِيثَ ۖ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمَ سَوْءٍ فَسَقِينَ ﴿٧٥﴾

﴿٧٦﴾ وَأَدْخَلْنَاهُ فِي رَحْمَتِنَا إِنَّهُ مِنَ الصَّالِحِينَ ﴿٧٧﴾

وَنُوحًا إِذْ نَادَى مِنْ قَبْلُ فَاسْتَجَبْنَا لَهُ فَنَجَّيْنَاهُ وَأَهْلَهُ مِنَ الْكَرْبِ الْعَظِيمِ ﴿٧٨﴾

وَنَصْرْنَاهُ مِنَ الْقَوْمِ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا ۚ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمَ سَوْءٍ فَأَعْرِضْنَاهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٧٩﴾

わりはない。天の奇跡には、常に神秘的要因が存在する。アブラハムが火から救い出されたその方法も、本当にすばらしき奇跡であった。アブラハムが火の中に投げ込まれたことは、ユダヤ人のみならず、東方のキリスト教徒にも信じられている。1月25日は、この事件を記念して、シリアカレンダーで特別扱いの日とされている (Hyde, De Rel. Vet Pers., P73)。また、Mdr. Rabbah on Gen. Par. 17, Schalacheleth Hakabala 2, Maimon de Idol. Ch. 1 Jad Hachazakah, Vet 6も参照のこと。

79. また、ダビデとソロモンが、或る者の羊が夜間迷い出て作物を荒したる時、(注22)それぞれ独自の裁きをなしたることを思い起せ。われらはその裁判の証人なりき。

80. われらはソロモンに、その事件に対する正しい知力を与えたり。われらは両名のそれぞれに知恵と知識とを与えたり。特にダビデには、われら山々と鳥たちを従わせしめ、われらの讚美にダビデと偕に協和せしめたり。こはすべてわれらがなせる技なり。

81. また、われらは、お前たちのために鎧を造る術を彼に教えたり、(注23)そは人々にお互いの暴力からその身を防ぎ衛らしめんがためなり。これでもお前たち感謝の念が湧かぬか？

82. また、われらは、烈風を(注24)ソロモンに従わせしめたり。風はソロモンの意のままに、われらが祝福したる国に向いて吹きつけり。われらはすべてのことを知る者なり。

83. また、われらは、彼のために潜水し、かわら他の仕事もなす潜水夫を彼に従わせしめたり。而して、彼等を見張るは、われらなり。

وَدَاوُدَ وَسُلَيْمَنَ إِذْ يَحْكُمَنِ فِي الْحَرْثِ إِذْ
نَفَسَتْ فِيهِ غَنَمُ الْقَوْمِ وَكُنَّا لِحُكْمِهِمْ شَاهِدِينَ ٢٢

فَفَهَّمْنَاهَا سُلَيْمَنَ ۚ وَكُلًّا آتَيْنَاهُمْ حُكْمًا وَعِلْمًا وَرَوَّ
سَخَّرْنَاهُ مَعَ دَاوُدَ الْجَبَالَ يُسَبِّحْنَ وَالطَّيْرُ وَكُنَّا
فَاعِلِينَ ٢٣

وَعَلَّمْنَاهُ صَنْعَةَ لَبُوسٍ لَكُمْ لَتُخَصِمَنَّ مِنْ
بَاسِكُمْ ۚ فَبَلَّغْتُمْ شُكْرَكُمْ ٢٤

وَسُلَيْمَنَ الرِّيحَ عَاصِفَةً تَجْرِي بِأَمْرِ إِلَى
الْأَرْضِ الَّتِي بَرَكْنَا فِيهَا دَاوُدَ وَكُنَّا بِكُلِّ شَيْءٍ
عَالِمِينَ ٢٥

وَمِنَ الشَّيْطَانِ مَنْ يَغْوُصُّونَ لَهُ وَيَعْمَلُونَ
عَمَّا دُونَ ذَلِكَ وَكُنَّا لَهُمْ حَافِظِينَ ٢٦

注22 表現の美しさを増すために、本節および後続の数節において、隠喩的言語が用いられた。「作物」は、ソロモンの国を意味し、「或る者の羊は、ソロモンの国に攻め入った野性的で、略奪によって生きている近隣の部族のことを表す。ここでは、ダビデとソロモンが、そういった野蛮な部族の腐敗を一掃し、打ち砕くために採った政策についての言及がなされている。ダビデは、偉大なる戦士であったため、強硬な政策をとることを支持した。しかしながら、ソロモンは、穏健な政策を追求し、それら部族と友好条約を結ぶことにより、味方にひき入れたと考えた。

注23 本節ではまた、ダビデ軍勢力および彼の戦闘道具、くさりかたびらをつくる技術のすばらしさについて、言及されている。ダビデは、偉大な征服を成し遂げてきた手段により、さまざまなよろいかぶとを發明し、発展させた。彼の代において、イスラエル王国は、その権力の頂点に達した。それは、イスラエルの歴史における黄金時代だった。

注24 ソロモンの船は、ペルシア湾、紅海、地中海を往復し、そして、定期的な貿易が、パレスチナとペルシア湾、およびこれら2海のまわりに位置する国との間で行われていたようだ(列王紀第1巻、10章27～29節)。

“テュロスのヒラムと協力し、彼は、一定の間隔をおいて地中海の港で貿易を行い、金、銀、象牙、さる、くじゃくを持ち込む外洋航行の船団を維持したのだ(列王紀第1巻10章22節、10章27～29節、歴代史略第2巻

84. また、ヨブが、声をあげてその主を喚び、
「我は災難にみまわれたり、汝は慈悲を垂
れ給う者の中で最も慈悲深きお方にしまし
す」と云いし時のことを思い起せ。

وَإِيُّوبَ إِذْ نَادَىٰ رَبَّهُ أَنِّي مَسَّنِيَ الضُّرُّ وَأَنْتَ
أَرْحَمُ الرَّاحِمِينَ ﴿١٧﴾

85. われらは彼の祈りを聞きたれば、身にふり
かかりたる災難を除き、その家族をもとに
戻したのみか、眷族を倍加して之を彼に賜
わりたり。すなわち、こはわれらよりの慈
悲にして、且つ崇拜者たちへの訓戒なり。

فَاسْتَجَبْنَا لَهُ فَكَشَفْنَا مَا بِهِ مِنْ ضُرٍّ وَآتَيْنَاهُ أَهْلَهُ
وَمِثْلَهُمْ مَعَهُمْ رَحْمَةً مِنَّا عِنْدَنَا وَذِكْرًا
لِّلْعَالَمِينَ ﴿١٨﴾

86. イスマエル、イドリス、ズール・キフルた
ち（注 25）を思い起せ。皆堅忍不拔の者な
りき。

وَإِسْمَاعِيلَ وَإِدْرِيسَ وَذَا الْكِفْلِ كُلٌّ مِّنَ
الصَّابِرِينَ ﴿١٩﴾

87. されば、われらは彼等を、われらが慈悲の
中に入るを許したり。げに彼等は義しい者
なりき。

وَأَدْخَلْنَاهُمْ فِي رَحْمَتِنَا إِنَّهُمْ مِّنَ الصَّالِحِينَ ﴿٢٠﴾

88. また、ズル・ヌーンが立腹して出で去りし
時を思い起せ。（注 26）彼は、われらが決
して彼を苦しめまいと考え、暗黒の最中
に在りて、声をあげて云う、「汝の外に神な
し。汝に栄光あれ。げに我は誤れり」と。

وَذَا النُّونِ إِذْ ذَهَبَ مُغَاصِبًا فَظَنَّ أَن لَّنْ نَقْدِرَ
عَلَيْهِ فَنَادَىٰ فِي الظُّلُمَاتِ أَن لَا إِلَهَ إِلَّا أَنْتَ
سُبْحَانَكَ إِنِّي كُنْتُ مِنَ الظَّالِمِينَ ﴿٢١﴾

89. われら彼の祈りを聞きたれば、その不幸か
ら彼を救いたり。かくの如く、われらは信
仰する者を救いだす。

فَاسْتَجَبْنَا لَهُ وَنَجَّيْنَاهُ مِنَ الْغَمِّ وَكَذَلِكَ
نُنَجِّي الْمُؤْمِنِينَ ﴿٢٢﴾

8章18節、Enc. Brit “ソロモン” 参照）ここでは風について使われている形容詞がアシファ（烈しい）であるのに反して、38章37節では、ルカー（穏やかな）という形容詞が使われている。このことは、風は、早く吹いたが、穏やかで、ソロモンの船にはなんら損害を加えなかったことを示している。

注 25 ズール・キフルの正体は、不確定さに包まれている。イスラム教のクルーアーン注釈者は、彼を数人の人物、主に聖書の預言者たちと同一視している。しかしながら、この名前が知られる預言者は、アラブ人にズール・キフルと呼ばれているエゼキエルであると思われる。ズール・キフルとエゼキエルという語は、形においても、意味においても非常に類似しているようである。前者の語は、“豊富な分け前を所有している”という意味を持ち、後者は“神は力を与える”という意味を持つ。

注 26 本節では、ズル・ヌーンの怒りの原因は細かに記されていない。明らかに彼は、神に対して腹をたてはしなかったし、腹をたてるはずもなかったのだ。彼を立腹させたメッセージを受け入れることは、人々がかくに拒否してきたにちがいない。なぜならば預言者が神に対して怒りを抱くなどとは、思いもよらぬことだからなのだ。神の選民は神の命令が与えられるまでは、話しすらもしなければ、行動もしないのである（21章28節）。「彼はわれらが決して彼を苦しめまいと考え」というのは、“我々は、彼を苦しめはしないだろう”または“我々は、彼にいかなる悩みをも与えることはないであろう”という意味である。

90. また、ザカリヤがその主に声をあげて「主よ、我を独りで捨て置き給うな、汝は最も優れた相続者にましますものを」と云いし時を思い起せ。

وَذَكِّرْنَا إِذْ نَادَى رَبَّهُ رَبِّ لَا تَذَرْنِي فَرْدًا
وَأَنْتَ خَيْرُ الْوَارِثِينَ ﴿٩٠﴾

91. われら彼の祈りを聞きたれば、ヨハネを授け、また彼のためにその妻の不妊症を治癒したり。彼等は互いに競って善行を積み、希望と恐懼とを以てわれらに祈り、われらが前に常に謙りぬ。

فَاسْتَجَبْنَا لَهُ وَوَهَبْنَا لَهُ يَحْيَىٰ وَأَصْلَحْنَاهُ
وَوَجَّهْهُمْ كَانُوا يُسْرِعُونَ فِي الْخَيْرَاتِ
يَدْعُونََنَا رَغَبًا وَرَهَبًا وَكَانُوا لَنَا خُشِعِينَ ﴿٩١﴾

92. 而して、彼女その純潔を守りたれば、われらは彼女の体内に福音を吹き入れ、彼女とその息子を萬民への神兆となせり。(注27)

وَالَّتِي أَحْصَنَتْ فَرْجَهَا فَنَفَخْنَا فِيهَا مِنْ رُوحِنَا
وَجَعَلْنَاهَا وَابْنَهَا آيَةً لِلْعَالَمِينَ ﴿٩٢﴾

93. げにお前たちのこの宗派は、一つの宗派なり。而して、われはお前たちの主なれば、われを崇めよ。(注28)

إِنَّ هَذِهِ أُمَّتُكُمْ أُمَّةً وَاحِدَةً وَأَنَا رَبُّكُمْ
فَاعْبُدُونِ ﴿٩٣﴾

94. 然るに、彼等は、自分たちの事情で互に分裂せり。されど、皆いずればわれらの許に歸るべし。(注29)

وَتَقَطَّعُوا أَمْرَهُمْ بَيْنَهُمْ كُلُّ إِلَهِنَا رَجُوعٌ ﴿٩٤﴾

第七項

95. されど、善行を積み且つ信者なれば、何人であれ、その努力は決してなおざりにせらるることなし。われらはそれを必ず記録せん。

فَمَنْ يَعْمَلْ مِنَ الصَّالِحَاتِ وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَلَا
كُفْرَانَ لِسَعِيدٍ وَإِنَّا لَهُ كَاتِبُونَ ﴿٩٥﴾

注27 本節では、ユダヤ人がマリアに向けた中傷的な非難に反駁している。本節はまた、公正かつ正直な生活を営む人になら誰にでも、当てはまるものである。66章13節では、ある層の有徳な信者たちは、マリアにたとえられている。そのような有徳な信者は全て、言わば、マリアなのである。そして、神が信者に神の精神を吹き込むと、その信者は“マリアの息子”となるのである。すなわち、彼はイエスが所有する神の特質を獲得するのである。

注28 先行の数節において、神の預言者数人と、他の有徳なる人物数人についてが同時に述べられてきた。これは単なる偶然ではない。これらの預言者について同時に述べられるということは、ある明確な目的にかなうのである。彼らは全て、ある事柄を共有していたのだ。彼らは皆、なんらかの形の困難、災難を経験し、その厳しい試練のもとで彼らは、最高の立派な忍耐、我慢を示したのだ。彼らはまた、全ての宗教の基本的原則、つまり神の唯一性を教えたのである。

注29 ある階層の人々、すなわち神の有徳なるしもべたちについては、先行の数節で述べられてきた。本節では、もうひとつの階層、つまり、神の預言者を拒否し、その結果、自分たちの間での不和、論争の犠牲となってしまう、お互いに、相いれない信念や教義を持つに至る人たちのことに、言及している。

96. われらが絶滅せし邑^{まち}の住民には冒^{おか}しがたい禁忌あり、すなわち、彼等世に戻るることなかるべし、(注30)
97. ゴグとマゴグが(注31)解き放たれて、諸丘より奔り下り来るその時までは。(注32)
98. 而して、その間違いない約束が近づくと、(注33) 見よ、不信心者どもは瞠目して(注34) 云わん、「悲しいかな！げに我等はこの事を軽視せり。否、我等は誤りたり」と。
99. 「げにお前たち、並びにお前たちがアッラーの外に崇めるものは、地獄の薪なり。その地獄に、お前たちは皆落ち行かん」
100. お前たちが云い張る如く、もし彼等が神々ならば、彼等は地獄には落ちざるべし。然るに、彼等は皆その中に永久に住まん。
101. その中でうごめき苦しむことは、彼等の運命とならん。然れども、彼等はその中で何事も聞かざるべし。(注35)

وَحَرَّمَ عَلَى قَرْيَةٍ أَهْلَكْنَاهَا أَنَّهُمْ لَا يَرْجِعُونَ ﴿٩٦﴾

حَتَّىٰ إِذَا فُتِحَتْ يَأْجُوجُ وَمَأْجُوجُ وَهُمْ مِنْ كُلِّ حَدَبٍ يَنْسِلُونَ ﴿٩٧﴾

وَاقْتَرَبَ الْوَعْدُ الْحَقُّ إِذْ أَخَذَ الْأَبْصَارُ الَّذِينَ كَفَرُوا يَوْبِلْنَا قَدْ كُنَّا فِي غَفْلَةٍ مِنْ هَذَا بَلْ كُنَّا ظَالِمِينَ ﴿٩٨﴾

إِنَّكُمْ وَمَا تَعْبُدُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ حَصَبُ جَهَنَّمَ أَنتُمْ لَهَا وَرِدُونَ ﴿٩٩﴾

لَوْ كَانَ هَؤُلَاءَ إِلَهًا مَّا وَرَدُّوهُمَا وَكُلَّ فِيهَا خُلِدُوا ﴿١٠٠﴾

لَهُمْ فِيهَا زَفِيرٌ وَهُمْ فِيهَا لَا يَسْمَعُونَ ﴿١٠١﴾

注30 死者は、2度とこの世に送り変えされることはないということ、犯しがたい神の法である。

注31 18章95節参照

注32 先の数節に関連して読むと、この節では、威厳と栄光の全盛ののち、ひとたび、死や破滅の犠牲となれば、再度、失われた栄光を取り戻すことができないという具合に、自然法は作用すると言わんとしている。ゴグとマゴグですら、その偉大なる物質的崇高、栄光にもかかわらず、同じ法の犠牲となることであろう。彼らは衰退し、再び栄えることはないだろう。ゴグとマゴグ、つまり西洋のキリスト教国家の民はすでに、政治的権力の全ての高みに昇り、世界じゅうに広がったのだ。クルアーンの表現は、彼らが全ての有利な点を独占し、全世界を支配するだろうということを意味している。

注33 ゴグとマゴグの支配ののちには、破滅的なできごとが世界に起こるであろう。そしてその結果、最終的にはイスラムの勝利が到来し、ゴグとマゴグにより代表された虚偽の力、物質主義の敗北に終わることであろう。

注34 ゴグとマゴグの完全なる破滅ののち、イスラムが、以前の偉大さ、栄光を再び取り戻すときは、イスラムの再生の望みを全く失ってしまった人たちは、自分の目が信じられないことであろう。

注35 彼らは、慰めや安楽を与えてくれるようなものを耳にすることはしないであろう。つまり、地獄では、叫び声、悲鳴、泣き叫ぶ声の壮絶さゆえに、そこに収容された人たちは、お互いの声を聞くことはしないであろうということである。

102. 然れども、すでにわれらから良い褒美を賜りたる者は、地獄から遙か遠くへ移されん。

إِنَّ الَّذِينَ سَبَقَتْ لَهُمْ مِنَّا الْحُسْنَىٰ أُولَٰئِكَ عَنْهَا مُبْعَدُونَ ﴿١٠٢﴾

103. 彼等は地獄からののかすかな物音すら聴かざるべし。(注36) 而して、自分たちの魂が念願するところに、永久に留まらん。

لَا يَسْمَعُونَ حَسِينَهَا ۖ وَهُمْ فِي مَا اسْتَهْت أَنفُسُهُمْ خَالِدُونَ ﴿١٠٣﴾

104. 絶大な恐怖も彼等を悩まさざるべし、而して、天使たちは彼等を出迎えて云わん、「これは約束せられたる、お前たちの日なり」と。

لَا يَخْزُهُمُ الْفَرَقُ الْأَكْبَرُ وَتَتَلَقَّاهُمُ الْمَلَائِكَةُ هَٰذَا يَوْمُكُمْ الَّذِي كُنْتُمْ تُوعَدُونَ ﴿١٠٤﴾

105. 走り書きした巻物を巻き上げる如く、(注37) われら諸天を巻き上げるその日を思え。われら最初の創造をなした如く、われらは再び之を繰り返さん—(注38) われらが履行すべき約束を。われらは必ず之を果さん。

يَوْمَ نَطْوِي السَّمَاءَ كَطَيِّ السِّجِلِّ لِلْكُتُبِ ۚ كَمَا بَدَأْنَا أَوَّلَ خَلْقٍ ثَعْنِيدَهُ وَعَدَّا عَلَيْهَا بِآرَائِنَا كُنَّا فَاعِلِينَ ﴿١٠٥﴾

106. われらはすでに、訓戒を与えたる後、詩編の中にかく記せり、「わが義しい僕等は必ずやその地を(注39) 継がん」と。

وَلَقَدْ كَتَبْنَا فِي الزُّبُورِ مِن بَعْدِ الذِّكْرِ أَنَّ الْأَرْضَ يَرِثُهَا عِبَادِيَ الصَّالِحُونَ ﴿١٠٦﴾

注36 本節および次節では、神の有徳なるしもべが、地獄から遠ざけられ、なんらその音を耳にすることもなく、ましてや、19章72節から一般に誤解されているように、地獄へ入るなどということは決してないことを示している。

注37 「巻物を巻き上げる」とは、偉大なる帝国が一掃され、強大な国家が破壊され、別の民が、その代わりに、勢力を得るようになることを意味する。また、聖なる預言者を通じて、大いなる変遷がもたらされ、古い天が巻き上げられ、その代わりに新しい天、新しい地上が創造されるであろうという意味ともとれる。古き秩序がくずれ、その代わりに、新しき、より良き秩序が生まれるのだ。聖なる預言者の時代におけるほどの完全なる変化を、かつて世界は、目のあたりにしたことはなかったのだ。

注38 「我々は再びこれを繰り返さん」という表現は、聖なる預言者により生み出された秩序が、不信心で機械主義の西洋文明により創造されたイスラム教徒の生活に対する物質的な見方を通じて、妨げを受けるであろうことを含意している。しかし、この妨げは一時的なものであり、イスラムは、新しい精神的目覚めを経験し、再び勝ち誇って現れるのである。

注39 “その地”とは、パレスチナを意味する。その地は、我々の時代に、いわゆる民主主義キリスト教強国の悪のもくろみにより、パレスチナという名の国が、存在をやめ、その荒れ跡に、イスラエル共和国が築かれるまで、十字軍にその所有権が移った92年の短い期間を除いて、約1350年間、イスラムの所有のもとにあったのだ。ユダヤ人は、約2000年間、荒地地をさまよったのちに、本領を発揮するようになったのだ。しかし、この大きな歴史的できごと、クルアーンの預言の成就として、起こったものなのである(17章105節)。しかしながら、これは単なる一時的な形勢にすぎないのだ。イスラム教徒が、勝利を奪回する運命となっているのである。遅かれ早かれ—遅かれというよりはむしろ早かれ—パレスチナは、イスラムの手中に戻るであろう。これは神の天命であり、誰も神命を変えることはできないのである。

107. げにこの中には、神を崇拝する者への御神託あり。

إِنَّ فِي هَذَا لَبَلَاغًا لِّقَوْمٍ عِبَادِينَ ١٥

108. われらはただ万民への慈悲として汝を遣わしたるのみ。(注40)

وَمَا أَرْسَلْنَاكَ إِلَّا رَحْمَةً لِّلْعَالَمِينَ ١٦

109. 云え、「我に啓示されたるは、お前たちの神は独一なる神なりということ。然らば、お前たち帰依し奉るか？」と。

قُلْ إِنَّمَا يُدْعَىٰ إِلَىٰ آثَارِ الْهَكْمِ إِلَهٌ وَاحِدٌ ١٧
فَهَلْ أَنْتُمْ مُّسْلِمُونَ ١٨

110. 然しながら、もし彼等背を向けなば、云え、「我はお前たちすべてに等しく警告したれども、お前たちが約束されしことが、果して近きにあるか、遠きにあるか、我それを知らず。(注41)

وَإِنْ تَوَلَّوْا فَقُلْ آذَنْتُكُمْ عَلَىٰ سَوَاءٍ وَإِنْ أَدْرِي أَقْرَبُ أَمْ بَعِيدٌ مَّا تُوعَدُونَ ١٩

111. げに神は、声高に云うことも、お前たちが密に隠すことも知り給う。

إِنَّهُ يَعْلَمُ الْجَهْرَ مِنَ الْقَوْلِ وَيَعْلَمُ مَا تَكْتُمُونَ ٢٠

112. また、我は、この猶子がお前たちへの試練なのか、ただ束の間の享楽に過ぎぬのか、それを知らず」と。

وَإِنْ أَدْرِي لَعَلَّهُ فِتْنَةٌ لَّكُمْ وَمَتَاعٌ إِلَىٰ حِينٍ ٢١

113. 預言者は更に云えり、「主よ、真理を以て裁き給え。我等の主は慈悲の神なり、お前たちが主張することに対して、お助けが期待できる」と。

قُلْ رَبِّ احْكُم بِالْحَقِّ وَرَبُّنَا الرَّحْمَنُ الْمُسْتَعَانُ ٢٢
لَقَدْ يَدْعُ عَلَىٰ مَا تُصِفُونَ ٢٣

注40 聖なる預言者は、そのメッセージが特定の国や人間に限定されていないがゆえに人類全体にとっての恵みだったのだ。彼を通じて、世界の国家が、かつてなかったほどの祝福を与えられてきたのである。

注41 神は、その約束の成就のため、日毎、時間毎に束縛されているわけではない。神はある預言が成就されるべき場合と時を最もよく心得ているのである。

سُورَةُ الْحَجِّ مَدِينَةٍ (٢٢)

アルハッジ
(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 人々よ、主を畏れよ。審判の日の地震はげに恐ろしきかな——

يَا أَيُّهَا النَّاسُ اتَّقُوا رَبَّكُمُ إِنَّ زَلْزَلَةَ السَّاعَةِ شَيْءٌ عَظِيمٌ ②

3. その日到らば、すべての乳飲み子を抱えた女はその哺乳を忘れ、すべての妊婦はその荷を早産せん。また、汝は、人々が酔うに非ざるに、酔えるが如くなるを見ん。そはアッラーの懲罰が激烈なればこそ。(注1)

يَوْمَ تَرَوْنَهَا تَذْهَلُ كُلُّ مُرْضِعَةٍ عَمَّا أَرْضَعَتْ وَتَضَعُ كُلُّ ذَاتِ حَمْلٍ حَمْلَهَا وَتَرَى النَّاسَ سُكَارَىٰ وَمَا هُمْ بِسُكَارَىٰ وَلَٰكِنَّ عَذَابَ اللَّهِ شَدِيدٌ ③

4. 人々の中には、知識もなしに、アッラーについて反駁し、反逆心を抱く悪魔に従う者あり。

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يُجَادِلُ فِي اللَّهِ بِغَيْرِ عِلْمٍ وَيَتَّبِعُ كُلَّ شَيْطَآنٍ مَّרِيدٍ ④

5. 悪魔と親しくなる者は、(注2)邪道に導かれ、以て業火の刑に誘われん。

كَبِبَ عَلَيْهِ أَنَّهُ مَن تَوَلَّاهُ فَأَنَّهُ يُضِلُّهُ وَيَهْدِيهِ إِلَىٰ عَذَابِ السَّعِيرِ ⑤

6. おお、人々よ、復活について疑うならば、考えて見よ。われらはお前たちを土から創り、次に一滴の精液、次に凝結した血、次に少しは形をなしたものの、また少しも形をなさぬ肉塊より創れり。こはお前たちにわ

يَا أَيُّهَا النَّاسُ إِن كُنْتُمْ فِي رَيْبٍ مِّنَ الْبَعْثِ فَإِنَّا خَلَقْنَاكُمْ مِّن تَرَابٍ ثُمَّ مِّن نُّظْفَةٍ ثُمَّ مِّن عَلَقَةٍ ثُمَّ مِّن مُّضْغَةٍ مُّخَلَّقَةٍ وَغَيْرِ مُخَلَّقَةٍ لِّنَبَيِّنَ

注1 この節では前節で示された「審判の日の地震」がいかに厳しいものであるかを3つの比喩を用いて表している。母親にとって自分の乳を吸う赤ん坊ほどかわいいものはない。それだけに母親が乳飲み子を見捨てるほどの恐ろしさというのがいかにすさまじいものかは、想像を絶するほどである。この究極の恐ろしさが、あまりにも突然に容赦なく人々に降りかかるために、乳飲み児を胸に抱いた母はその子を捨て、妊婦はその荷を早産し、人は恐ろしさのあまり、泥酔しているかのごとく、自分を見失い、何をしているのかわからない乱心状態になってしまうと述べられている。

注2 これは、サタンと親しくなり、それに従ってしまったために、正しい道を踏みはずした人々のことのみを指す。クルアーンの他の箇所でも述べられているように、サタンは、高潔な人々に対しては無力である。サタンが墮落させることができるのは、彼の邪悪の誘いに自ら応じる人々のみなのである(16: 100 - 101, 17: 66)。

れらが^{ちから}権能を証明せんがためなり。而して、われらは、欲する者^しを或る期間胎内に留ましめ、然る後、嬰兒^{どうご}としてお前たちを出生せしめ、次いで成年に達するまで養育す。されど、お前たちの中には夭折^{ようせつ}する者もあれば、また或る者は、知りたることを悉く忘却するほどに年老いるまで留めおかれる者もある。また、汝、枯渴した大地を見よ。されど、われらが一たび水^{みづ}を降り注げば、大地は忽ち生き返り、膨張^{くわうちやう}みて、あらゆる種類の美しい草木が萌え出づる。

7. こは、アッラーが真理にして、死者を蘇生^{よみがえ}らせ、万物の上に権能を持ち給うが故なり。
8. そは、また、審判の日が疑いの余地なく必ず来るべき故なり。そは、また、墓中の徒輩^{ともがら}を覚醒^{めざめ}させ給うが故なり。
9. 然るに、人々の中には、知識もなければ嚮導^{きやうどう}もなく、また光明を投ずる經典も持たずして、アッラーについて反駁^{はんぱく}し、
10. 尊大にその脇腹を向け、人々をアッラーの道から迷わしめんとする者あり。そのような者は、現世に於て屈辱^{くつじやく}あり。而して、復活の日に於ては、われら之に火炙りの刑を當めさせん。(注3)
11. こは汝の手が先に送りしものに対する応報にして、アッラーはその僕等^{しもべら}を不当に迫害する者に非ず。

第二項

12. また、人々の中には、いわば境目でアッラーに仕える者あり。(注4) 幸運来れば満足し、試練に遭遇すれば元の流儀に戻る。このよ

لَكُمْ وَنَقَرُ فِي الْأَرْحَامِ مَا نَشَاءُ إِلَىٰ أَجَلٍ مُّسَمًّى
ثُمَّ نَخْرِجُكُمْ طِفْلًا ثُمَّ لِنَبْلُغَ أَشُدَّكُمْ وَمِنْكُمْ
مَنْ يَتَوَفَّىٰ وَمِنْكُمْ مَنْ يُرَدُّ إِلَىٰ أَذَلِّ الْأَعْمُرِ لِنَكَلِّ
يَعْلَمَ مِنْ بَعْدِ عِلْمٍ شَبَّاهُ وَتَرَى الْأَرْضَ هَامِدَةً
فَإِذَا أَنْزَلْنَا عَلَيْهَا الْمَاءَ اهْتَزَّتْ وَرَبَتْ وَأَنْبَتَتْ
مِنْ كُلِّ زَوْجٍ بَیْجٍ ⑦

ذَلِكَ بِأَنَّ اللَّهَ هُوَ الْحَقُّ وَأَنَّهُ يُحْيِي الْمَوْتَىٰ وَ
أَنَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ⑧

وَأَنَّ السَّاعَةَ آتِيَةٌ لَا رَيْبَ فِيهَا وَأَنَّ اللَّهَ
يَبْعَثُ مَنْ فِي الْقُبُورِ ⑨

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يُجَادِلُ فِي اللَّهِ بِغَيْرِ عِلْمٍ وَ
لَا هُدًى وَلَا كِتَابٍ مُّنِيرٍ ⑩

ثَأْنِي عَظْفِهِ لِيُضِلَّ عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ لَهُ فِي
الدُّنْيَا خِزْيٌ وَنَذِيقُهُ يَوْمَ الْقِيَمَةِ عَذَابُ
الْحَرِيقِ ⑪

ذَلِكَ بِمَا قَدَّمْتَ يَدَكَ وَأَنَّ اللَّهَ يَكْسِرُ بَطْلَامِ
اللَّعِينِ ⑫

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَعْْبُدُ اللَّهَ عَلَىٰ حَرْفٍ فَإِنْ
أَصَابَهُ خَيْرٌ إِطْمَأَنَّ بِهِ وَإِنْ أَصَابَتْهُ فِتْنَةٌ

注3 眞実を拒む人々には、2種類の罰が用意されている。一つは、現世における敗北、挫折、そしてもう一つは、来世における恥辱、不名誉である。現世において罰を受ける者は、来世においても確實に罰を受けることとなる。

うな者は現世も来世も失う者なり。そは明白なる損失なり。

إِنْقَلَبَ عَلَىٰ وَجْهِهِ خَسِرَ الدُّنْيَا وَالْآخِرَةَ
ذَلِكَ هُوَ الْخُسْرَانُ الْمُبِينُ ⑮

13. このような者は、アッラーの外に、毒にも薬にもならぬ者を祈る。そは甚だしき迷誤なり。

يَدْعُوا مِنْ دُونِ اللَّهِ مَا لَا يَنْفَعُهُ وَ مَا لَا يَنْفَعُهُ ذَلِكَ هُوَ الضَّلَالُ الْبَعِيدُ ⑯

14. このような者は、己れを利するよりも、己れを害せんとする者を祈る。げに悪しき庇護者なり、げに悪しき仲間なり。(注5)

يَدْعُوا لَكِن صَرَّهُ أَقْرَبُ مِنْ نَفْعِهِ لَيْسَ الْمَوْلَىٰ وَلَيْسَ الْعَشِيرُ ⑰

15. 信仰し、善行を積む者は、アッラー之を河川流るる樂園に入らしめん。げにアッラーは欲することを為し給う。

إِنَّ اللَّهَ يُدْخِلُ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ إِنَّ اللَّهَ يَفْعَلُ مَا يُرِيدُ ⑱

16. 現世に於ても来世に於ても、アッラーは預言者を助けざるべしと思う者あらば、その者をして天まで綱を張らしめ、而して、之を断ち切らしめよ。而して、己れの計画が、自分を怒らしているものを除去し得るかどうか、その者に見せしめよ。(注6)

مَنْ كَانَ يَطْمُنُ أَنْ لَنْ يَنْفَعَهُ اللَّهُ فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ فَلْيَمْدُدْ بِسَبَبٍ إِلَى السَّمَاءِ ثُمَّ لْيَقْطَعْ فَلْيَنْظُرْ هَلْ يُذْهِبَ كَيْدَهُ مَا يَغِیْظُ ⑲

注4 「境目でアッラーに仕える」という表現で示されているのは、神に仕えていながら宗教心が薄く、敵陣の場末にいるように、気持ちがちぐらちぐらしている人のことである。戦っていて勝たそうだと確信するとそこに居すわり、負けそうだと思うと逃げってしまう人のようだとたとえている。この「境目でアッラーに仕える」という表現はすぐあとの「幸運来れば満足し、試練に遭遇すれば元の流儀に戻る」という表現で説明されている。またこの表現は、信仰が薄い人がいつも疑心を捨てられない状態にあるということを象徴している。真の神を受け入れることで物質的恩恵にあずかることができると思っている時には信者として行動し、一旦、何らかの試練を与えられるとくるときびすをかえして信仰を捨ててしまうという人々のことである。

注5 偽りの神をあがめる信奉者たちは、時を経ずして明らかに墮落していき、自分自身の尊厳と自信をひどく害してしまうことになる。彼らは自分の信仰から恩恵を受けたいと望んでいるが、その信仰が偽りの神に対するものである限り、無理な望みである。

注6 この表現は、モハムマド預言者に対してできる限りの悪行をしかける不信者に挑みかけるものである。モハムマド預言者は常に、神に助けられているし、今後も変わることなく救われるものである。それを不信者であるお前たちが妨げることなどできるものか。イスラムが着実に発展し続けるということは神より定められている紛れもない天意であり、なんびとも神の命を変えることはできない。イスラムのめざましい発展を目にする不信者たちは自らを幸い、つらい思いにさいなまれるであろうが、死より他に彼らをこのつらさから逃がれさせてくれるものはない。

「天まで綱を」の「天」という語を「屋根」あるいは「天井」と解釈すると、この節は次のような意味にとれる。その場合「もし、モハムマド預言者に敵対する不信者たちが、彼の使命が果たされてイスラムが繁栄していくのを目にして激しく怒っているのなら、彼を天井に綱でつるし、そのあとで綱を切って見よ。そんな時も

17. 故にわれらは、明白な神兆としてクルアーンを降したり。而して、アッラーは、己れの欲する者を必ず導き給う。

18. 信ずる人々、ユダヤ教徒、サービ教徒、キリスト教徒、拝火教徒、並びに偶像崇拜者たちについては、復活の日に於て、アッラーは必ず彼等に判決を下すべし。げにアッラーは一切をみそなわし給う。

19. 汝、天にあるもの地にあるもの、日月星辰、群山、樹木、禽獣並びに沢山の人間が、アッラーに対して服従するを見ざりしか？然れども、懲罰に値する者もまた多し。而して、アッラーが貶め給う者は、何人も之を尊敬し得ず。(注7)げにアッラーは己れの欲することを為し給う。

20. これ等は、主について争う二派の(注8)論争者たちなり。信ぜざる者どもには業火の衣裳が仕立てられ、その頭上には煮え滾る湯が浴びせられん。

وَكَذَلِكَ أَنْزَلْنَاهُ آيَاتٍ بَيِّنَاتٍ وَأَنَّ اللَّهَ يَهْدِي مَنْ يُرِيدُ ⑩

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَالَّذِينَ هَادُوا وَالصَّابِئِينَ وَالنَّصَارَى وَالْمَجُوسَ وَالَّذِينَ أَشْرَكُوا ۚ إِنَّ اللَّهَ يَفْصِلُ بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيَمَةِ ۚ إِنَّ اللَّهَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ شَهِيدٌ ⑪

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ يَجْعَلُ لَهُ مَنْ فِي السَّمَوَاتِ وَمَنْ فِي الْأَرْضِ وَالشَّجَرِ وَالشَّجَرِ وَالْأَبْ وَكَثِيرٌ مِنَ النَّاسِ وَكَثِيرٌ حَقَّ عَلَيْهِ الْعَذَابُ وَمَنْ يُهِنِ اللَّهُ فَمَا لَهُ مِنْ مُكْرِمٍ ۚ إِنَّ اللَّهَ يَفْعَلُ مَا يَشَاءُ ⑫

هَذَيْنِ خَصَصْنَاهُ فِي رِيبِهِمُ الَّذِينَ كَفَرُوا قُطِّعَتْ لَهُمْ ثِيَابٌ مِنْ نَارٍ يُصَبُّ مِنْ فَوْقِ رُءُوسِهِمُ الْحَمِيمُ ⑬

彼は必ず神により助けられるのだ。」という意味になる。

3章 120 節でも、不信者たちは次のようにけん責されている。「怒りのうちに滅びよ。げに、アッラーはすべて汝らの胸中を知り給ふ。」

注7 神は、自然界のさまざまな法を定められたお方であり、神により創造された森羅万象のもの、すべて、生物であれ無生物であれ、その法に従わねばならない。誰一人、何一つたりとも法に従わずして存在することはできない。すべての秩序を定めているこの根本的な法に加え、神が人々を導くものとして顕示された法—シャリヤ(戒律)が存在する。人はこの法—戒律に従うこともそむくこともできる。(この点が上記の法と異なる。)しかし、当然、戒律に従わなければ自業自得で、その報を受け、苦しむこととなる。この節は、さらに偶像崇拜者たちに、アッラー以外の自然物を崇拜、信仰の対象としていることがいかにむなしく愚かなことであるかをはっきり悟らせるものである。ここで述べられているように、万物は、皆、まさにその存在自体を神に依存しているのである。すべては神が、万物、万民のために定められた法に従って存在し、機能しているのであり、一時たりとも神なくしては存在すらし得ないのである。

それゆえに、神が定められた法に従うことにより初めて存在し得るものを崇拜の対象とすることは、愚かで浅はかなことなのである。

注8 この「二派」が示しているのは、信者と不信者という2つに分類されている人々のことである。

21. それによって臓腑も皮膚も溶かされん。

يُصْهِرُ بِهِ مَا فِي بُطُونِهِمْ وَالْجُلُودَ ③①

22. 更に彼等は、鉄矛をみまわれん。

وَلَهُمْ مَقَامِعٌ مِنْ حَدِيدٍ ③②

23. 苦悶より逃れんとする度に、またもや火の中に突き落され、「汝等火炙りの罰を味わえ！」と云われん。

كُلَّمَا أَدُودُوا أَنْ يَخْرُجُوا مِنْهَا مِنْ عَمِّ أُعِيدُوا فِيهَا وَذُقُوا عَذَابَ الْحَرِيقِ ③③

第三項

24. されどアッラーは、信じて善行を積む人々には河川流るる楽園に入らしめん。彼等はそこで、黄金の腕環や真珠で身を飾られ、絹の衣裳をまとわん。

إِنَّ اللَّهَ يُدْخِلُ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ جَنَّاتٍ تَجْرَى مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ يُجْلُونَ فِيهَا مِنْ أَسَاوِرَ مِنْ ذَهَبٍ وَلُؤْلُؤًا وَلِبَاسُهُمْ فِيهَا حَرِيرٌ ③④

25. 彼等は純潔な言葉に導かれ、讃美し奉る神の道に導かれん。

وَهُدُوا إِلَى الصَّيِّبِ مِنَ الْقَوْلِ وَهُدُوا إِلَى صِرَاطِ الْحَيِّدِ ③⑤

26. 人々をアッラーの道から誘惑し、その居住者たると砂漠からの来訪者たるとを問わず、われらが万人のために設けたる聖殿に参詣に来る人を妨害する者、また聖殿内で正しい道から不法に逸脱せんとする不信心者どもについては一われらは必らず之に痛刑を當めさせん。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا وَيَصُدُّونَ عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ وَالْمَسْجِدِ الْحَرَامِ الَّذِي جَعَلْنَاهُ لِلنَّاسِ سَوَاءً لِمَا كُفٍ فِيهِ وَالْبَنَاءِ وَمَنْ يُرِدْ فِيهِ بِالْحَادِ يُظْلَمْ تَذِقْهُ مِنْ عَذَابِ أَلِيمٍ ③⑥

第四項

27. われらがアブラハムに聖殿の位置を選定し、(注9)かく云いたる時のことを思い起せ。「何者もわれに配するなかれ。而して、巡周する者、(注10)立礼する者、お辞儀す

وَأَذِّنَا لِلْإِبْرَاهِيمَ مَكَانَ الْبَيْتِ أَنْ لَا تُشْرِكْ بِي شَيْئًا وَطَهِّرْ بَيْتِيَ لِلطَّائِفِينَ وَالْقَائِمِينَ

注9 この節からわかるように、カーバはアブラハムの時代よりずっと以前にすでに存在していたのである。事実、カーバはアダムにより建設された。3章97節にあるように、それは有史初の聖なる神殿であった。アブラハムの時代までに、崩壊してしまっていたが、神のお告げによりアブラハムは、その聖殿の位置を知り、モハammad預言者の偉大なる祖先である彼(アブラハム)とその息子のイシュマエルが、カーバ神殿を再建したのである。2章128節参照。

注10 この節は、本章(第22章)の中心となる主題—巡礼についての導入部を成している。聖なるモスク(カーバ神殿)のまわりを廻ることが巡礼の儀式で一番の要である。そのため、カーバ神殿の神聖さ、尊厳性を簡潔に述べることは、メッカ巡礼(ハジ)の主題へのふさわしい導入部となり得る。

る者、平伏す者のために、わが聖殿を常に
浄めよ。(注 11)

وَالرُّكَّعِ السُّجُودِ ⑤

28. 而して、人々に向って巡礼を宣言せよ。(注
12) 彼等は汝のところへ歩いて来るもあり、
またそれぞれ遠路疲れた駱駝に乗って
来るもあり、

وَأَذِّنْ فِي النَّاسِ بِالْحَجِّ يَأْتُوكَ رِجَالًا وَعَلَى
كُلِّ ضَامِرٍ يَأْتَيْنِ مِنْ كُلِّ فَجٍّ عَبِيبٍ ⑥

29. こは彼等のためにその功德を体得させ、定
められた日数の間、授け賜りたる四足獣の
上にアッラーの御名を唱えさせんがためなり。
然る後、汝等はそれを食ひ、且つ困窮
者並びに貧者を養え。

لِيَشْهَدُوا مَنَافِعَ لَهُمْ وَيَذْكُرُوا اسْمَ اللَّهِ فِي
أَيَّامٍ مَّعْلُومَاتٍ عَلَى مَا رَزَقَهُمْ مِنْ بَيْهِيمَةِ الْأَنْعَامِ
فَكُلُوا مِنْهَا وَأَطِيعُوا أَمْرَ الْفَقِيرِ ⑦

30. 然る後、彼等にその欠くべからざる浄化の
行為を終らしめ、その誓いを全うさせ、而
してこの由緒古い聖殿を巡周せしめよ」

ثُمَّ لِيَقْضُوا تَفَثَهُمْ وَلِيُوفُوا نَدْوَهُمْ وَلِيَنْطَوُّوا
بِأَلْبَتِ الْغَيْثِ ⑧

31. こは神の掟なり。アッラーの神聖なる儀礼
を尊重する者は、主の見るところでは嘉し
とせられん。クルアーンの中で、お前たち
にすでに告げられたものを除いて、家畜の
肉を食するは合法なり。されば偶像神の穢
れを避け、嘘 偽の言葉を避けよ。

ذَلِكَ وَمَنْ يُعْظِمِ حُرْمَتَ اللَّهِ فَهُوَ خَيْرٌ لَهُ عِنْدَ
رَبِّهِ وَأُحِلَّتْ لَكُمْ الْأَنْعَامُ إِلَّا مَا يُتْلَى عَلَيْكُمْ
فَاجْتَنِبُوا الرِّجْسَ مِنَ الْأَوْثَانِ وَاجْتَنِبُوا قَوْلَ
الزُّورِ ⑨

32. お前たちの崇拜と服従をアッラーに捧げま
つり、彼に如何なるものも配するなかれ。
アッラーと偕に他 神を併せ祀る者は、恰も
高さより落下せる者の如し。鳥之を掠め去
るか、また風之をさらって遙か彼方へ吹き
飛ばす。(注 13)

حُنْفَاءَ لِلَّهِ غَيْرَ مُشْرِكِينَ بِهِ وَمَنْ يُشْرِكْ
بِاللَّهِ فَكَأَنَّمَا خَرَّ مِنَ السَّمَاءِ فَتَخْطَفُهُ الطَّيْرُ
أَوْ تَهْوِي بِهِ الرِّيحُ فِي مَكَانٍ سَحِينٍ ⑩

注 11 「わが聖殿を常に浄めよ」というのは、命令と預言の両方を兼ね備えている。命令としては、カーバ
神殿は唯一の眞の神を崇拜するべく建立されたので、偶像崇拜により汚してはならない、というもの。預言と
しては、この命が無視されて聖なる神殿が偶像崇拜の館と化することがあろうが、それらは結局のところ、す
べて一掃されるであろう、というものである。

注 12 巡礼の習慣が設けられたのはアブラハム預言者の時であり、「人々に巡礼するよう告げよ」という言葉
で示された。巡礼は、決して偶像崇拜的なものではない。キリスト教の著者の中には、偶像崇拜を習慣として
いたアラブ人を懐柔するためにモハムマド預言者がイスラムに組み入れたものだというように考えている者が
いるが、それは明らかに誤っている。アブラハム預言者の時代から、巡礼は休みなく今日まで続けられている。
遠隔の地からおびただしい数のムスリムが毎年メッカ巡礼のために集まってきているという事実はこの預言が
成就されているという反ばく不可能な証となっている。

注 13 人は、最も高貴な神の創造物である。宇宙、全世界に存在するすべてのもの—太陽・月・星・地球・
大洋・山々などは皆、人間に役立つよう、人間のために存在している。人間は、神の属性を自らに反映できる

33. 事実はかくの如し。アッラーの聖なる神兆^{しるし}を尊重するということは、要するに、心の義^{いぎ}しさから出るものなり。(注14)

ذَلِكَ وَمَنْ يُعْظِمَ شَعَائِرَ اللَّهِ فَإِنَّهَا مِنْ تَقْوَى الْقُلُوبِ ﴿٣٣﴾

34. お前たちは定められた期限まで、これらの家畜から幾多の利益を受け、然る後、彼等家畜は由緒古い聖殿に犠牲として供えらる。(注15)

لَكُمْ فِيهَا مَنَافِعُ إِلَىٰ أَجَلٍ مُّسَمًّى ثُمَّ مَحِلُّهَا إِلَىٰ الْبَيْتِ الْعَتِيقِ ﴿٣٤﴾

第五項

35. われらは、人々に授けたる四足獣の上に、アッラーの御名を唱えさせんがため、すべての人々に、犠牲の儀礼を定めたり。(注16) お前たちの神は独一なる神なり。(注17) されば、汝等みな彼に帰依し奉れ。汝は謙虚な徒輩に朗報を伝えよ。

وَلِكُلِّ أُمَّةٍ جَعَلْنَا مَنْسَكًا لِّيَذْكُرُوا اسْمَ اللَّهِ عَلَىٰ مَا رَزَقَهُمْ مِنْ بَهِيمَةِ الْأَنْعَامِ فَإِلَهُكُمُ إِلَهُ وَاحِدٌ فَلَهُ أَسْلِمُوا وَبَشِّرِ الْمُخْبِتِينَ ﴿٣٥﴾

ほどに道徳的、精神的に向上することができる。もし、人間が、生命なきものを崇拝の対象としてしまうと自らを墮落させるなら、卓越した精神の高みから、一気に道徳的、知的退廃の深みへまっさかさまに落ちてしまうようなものである。

注14 イスラム教で、心の正しきや清らかさを人々に教えこむために定められているきまりや恒例の儀式がもつ目的について、この節で述べられている。イスラムの儀式や礼拝のきまりはそれ自身が“目的”のではなく、正しく清らかな心を鍛練するための“手段”にすぎない。

注15 メッカに捧げ物をして持ち込まれる動物は、献上されるまでに、荷を運搬したり、さく乳したりするのに用いてもよい。その他にもいろんな形で人間のために役立てることができれば、捧げる前に利用することが許されている。

注16 この節から、捧げものに関する主題に移る。それは、ハジ(巡礼)とジハード(聖戦)と並び、この章の3つの重要なテーマを成している。この節ではさらに、献上が定められているのはイスラムに限ったことではない、と述べられている。すべての宗教は、さかのばれば皆同じ神に端を発しているので、このような共通部分を有しているのである。また、この節で示されているように、もともと、捧げ者として信者に申しつけられたのは、“動物”(四足獣)なのであり、人間をいけにえにするなどという残酷な行為は決して定められてはいない。そういう残酷行為は、後になって改変されてイスラム以外の宗教で勝手に行われたものである。「犠牲」の語源となっているアラビア語のナサカには、いくつかの意味があることから、真の献上は次の3つを本質的特質として有しているといえる。

(1) 自発的に行われるものであること。(2) 純粋な動機からささげられるものであること。(3) 物質的^{しじつてき}斟酌から、ささげられるものではないこと。

注17 この節は、2重に重要な意味を持つ。(1) 宗教によってその場所や時は大きく異なるものの、すべての宗教に共通して捧げものをするという儀式が存在しているということは、もともとすべての宗教が、同じ神から端を発しており、どの国家においても、実は神は唯一なのであるということを示している。(2) 献上のもつ目的は、人が自分の大志、願望、すべての考えや理想、そして命も誇りも、神のためにささげることにより、神の唯一性を公然と示す、ということである。イスラムにおいて献上の概念は、他の宗教に見られるように、怒っている神をなだめるとか、自分の罪の償いとして行うというのではなく、自分の有するすべてを神にゆだねるという概念なのである。

36. 彼等の心はアッラーの名を耳にするや、畏怖に満つ。而して、彼等は何が起ころうと耐え忍び、礼拝を遵守し、われらが授けしものを惜しみなく費やす。

الَّذِينَ إِذَا ذُكِرَ اللَّهُ وَجِلَتْ قُلُوبُهُمْ وَالصَّابِرِينَ
عَلَى مَا أَصَابَهُمْ وَالْبَاقِينَ الصَّلَاةَ وَمِمَّا رَزَقْنَاهُمْ
يُنْفِقُونَ ﴿٣٦﴾

37. われらは特に、アッラーの聖なる神兆として、お前たちに犠牲の駱駝を定めたり。彼等はお前たちに多大の利益になるものなり。されば、並び立てる時に、彼等の上にアッラーの御名を唱えよ。而して、彼等が横に斃れたならば、これを食ひ、また貧困者ながら満足してゐる者や、哀願する者にも食わしめよ。(注18) かくの如く、われらが彼等をお前たちの用に供せしは、お前たちに感謝の気持を抱かせしめんがためなり。

وَالْبُدْنَ جَعَلْنَاهَا لَكُمْ مِنْ شَعَائِرِ اللَّهِ لَكُمْ فِيهَا خَيْرٌ ۖ فَاذْكُرُوا اسْمَ اللَّهِ عَلَيْهَا صَوَافٍ ۚ فَإِذَا وَجِيتَ جُنُوبَهَا فَكُلُوا مِنْهَا وَأَطْعِمُوا الْقَانِعَ وَالْمُعْتَرَّ ۚ كَذَلِكَ سَخَّرْنَاهَا لَكُمْ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿٣٧﴾

38. それらの肉はアッラーに達せず、その血もまた然り。されど、お前たちの敬虔はアッラーに達せん。(注19) かくの如く、それらをお前たちの用に供せしは、お前たちに、その嚮導に対して、アッラーを讃美せしめんがためなり。されば、善行を積む人々に朗報を伝えよ。

لَنْ يَنَالَ اللَّهُ لُحْمُهَا وَلَا دِمَاؤُهَا وَلَكِنْ يَنَالُهُ
التَّقْوَى مِنْكُمْ ۚ كَذَلِكَ سَخَّرَهَا لَكُمْ لِتُكَبِّرُوا اللَّهَ
عَلَى مَا هَدَيْكُمْ ۚ وَبَشِّرِ الْمُحْسِنِينَ ﴿٣٨﴾

注18 メッカに連れていったラクダを捧げ物として屠殺したのは、丁度ラクダが主人のために命を投げ出すのと同様に人が自分の創造主であり主である神のために自分の命をも投げうつつもりであるという意志を、象徴したのにすぎない。献上の究極的な目的は、そこにあり、この節に示されている他の目的は、付随的なものである。巡礼者は、動物が屠殺される時、献身の大切さを思い、心に刻むのである。またこの節では、屠殺された動物の肉は無駄にしてはならず、正しく配分されねばならないと述べられている。

注19 この節では、献上の本質、真の目的に光を浴びせかけている。神が喜ばれるのは、献上という行為のうわべではなく、その献上を行う人の動機や献上をする時の心の中味なのである。屠殺される動物の肉や血は、神には直接届かない。しかし、献上者の心の内は神に受けとられるのである。我々にとって身近で大切なものすべて、それを献上するように要求され、神はそのすべてをお受けとりになる。物質的所有物、崇高な理想、誇り、そして命そのもの。実際、神が要求しているのは、動物の血や肉でなく、それを献じる人の心なのである。しかし、重要なのは心であり、外部から見ることのできる献上という行為ではないのだからといって、献上が重要でないという誤解をしてはならない。献上の行為は、精神という本質である中味をとりかこんでいる殻のようなものであり、献上する人の心という本質と共に殻である献上の行為も大切なもののなのである。肉体なくして精神は宿ることができないのと同様、殻なくして中味が存在することはできないからである。

39. げにアッラーは信じる人々を守護し給う。
(注20) げにアッラーは思知らずの裏切り者²⁰を愛で給わす。

第六項

40. ^{いゝ}戦を仕掛けた者への戦いは許可す。(注21) なんとすれば、彼等の方が間違っている—げにアッラーは彼等を助ける力あり—
41. 「我等の主はアッラーなり」と云いしが故に不当にも家郷を逐われた人々を—もしアッラーが或る人々を用いて他の者どもを撃退せざれば、修道院、キリスト教会、^{ゴゴ}納太教会、並にイスラームの礼拝堂など、不断にそこでアッラーの御名が唱念されているところは、必ずや悉く破壊されたり。アッラーは必ず、御自分に手伝う者を助け給う。(注22) げにアッラーは強大にして、偉大にまします—

إِنَّ اللَّهَ يُدْفِعُ عَنِ الَّذِينَ آمَنُوا إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ
كُلَّ خَوَّانٍ كَفُورٍ ﴿٢٠﴾

أَنَّ لِلَّذِينَ يُقَاتِلُونَ بِأَنَّهُمْ ظُلُمُوا وَإِنَّ اللَّهَ عَلَىٰ
نَصْرِهِمْ لَقَدِيرٌ ﴿٢١﴾

الَّذِينَ أُخْرِجُوا مِنْ دِيَارِهِمْ بِغَيْرِ حَقٍّ إِلَّا أَنْ
يَقُولُوا رَبَّنَا اللَّهُ وَلَوْلَا دَفْعُ اللَّهِ النَّاسَ بَعْضَهُمْ
بِبَعْضٍ لَهْذَمَتْ صَوَامِعُ وَبِيْعٌ وَصَلَوَاتٌ وَ
مَسْجِدٌ يُذَكِّرُ فِيهَا اسْمُ اللَّهِ كَثِيرًا وَلَيَنْصُرَنَّ
اللَّهُ مَنْ يَنْصُرُهُ إِنَّ اللَّهَ لَقَوِيٌّ عَزِيزٌ ﴿٢٢﴾

注20 この節からジハード（聖戦）について導入される。献上について語られたのはこの非常に重要な主題に入るための序奏としてまことにふさわしいことである。まず、前節までで、ムスリムは、自衛戦をすることを許可される前に献身の大切さを教えられた。そして今この節ではイスラムのジハードという概念に光が当てられている。ジハードというのはこの節で述べられているように真実を守るための戦いのことである。イスラムは自ら攻撃をしなくてはならない。しかし、自分の尊厳、国家、信仰を守るためであれば、美德とされる。人は最も高貴な神の創造物である。人は神の創造の頂点に位置し、神はすべてを人のために創られた。人は、地球において神の代理人としての役わりを任せられ、すべての神の創造物にとっての王とされた(2:31)。これが、人は宇宙の中で高き所に存在するというイスラムの概念なのである。

注21 学者たちの意見が一致しているところでは、この節が啓示されて初めて、ムスリムは自衛のために武器をとることが許されるようになったのだということである。次節にも続いていくが、武器も持たずにメッカでの迫害に耐え、自らを守るべく戦っていた一握りのムスリムに武器をとることが許された理由もあわせて述べられている。まず最初の理由・前提としてムスリムが不当に取り扱われていたということがあげられている。

注22 ムスリムが武器を手にしてもよいという理由を述べられたあと、当節でイスラムの戦いの目的が述べられている。それは決して他人の家や所有物を奪うことではない。また彼らの国家の自由を奪い、他国の支配下に服従させるというものでもない。また西洋の大国がしているように、その国を新たな市場として利用したり植民地化することでもない。それは、自衛のために、イスラムを撲滅から救うために、そして良心の自由と思想の自由を確立するために戦われるものなのである。また、他の宗教に属する祈りの場、教会や寺などは守られなければならない。たとえ戦っている敵であってもその人たちの宗教の自由を妨げてはならないことになっている。相手の祈りの場を尊重し、決して破壊したり攻撃したりしないということは他の宗教に見る戦いとは異なり、特にジハードにおいてみられるイスラムの特長である。他国の礼拝堂であっても、イスラム教徒はそれを守るのである(2:194、2:257、8:40、8:73)。イスラムの戦いの最も重要な目的は、信仰と礼拝の自由を確立することであり、国や誇りや自由を不当な攻撃から守ることにある。これに優る戦いの理由など存在するであろうか。

42. これらの人々は、もしわれらが彼等にこの国に安住せしむると、礼拝を遵守し、喜捨を惜しまず、正しくあることを命じ、悪しくあることを禁ぜん。(注23) 何事によらず、最後の断はアッラー次第なり。

الَّذِينَ إِنْ مَكَّنَّاهُمْ فِي الْأَرْضِ أَقَامُوا الصَّلَاةَ
وَأَتَوْا الزَّكَاةَ وَأَمَرُوا بِالْمَعْرُوفِ وَنَهَوْا عَنِ
الْمُنْكَرِ وَاللَّهُ عَاقِبَةُ الْأُمُورِ ﴿٢٣﴾

43. 彼等は汝を嘘つきと非難するが、彼等以前にも、ノアの民も、アード並びにサムード族も、その預言者たちを嘘つきと非難せり。

وَإِنْ يَكُذِّبُوكَ فَقَدْ كَذَّبَتْ قَبْلَهُمْ قَوْمُ نُوحٍ
وَعَادٌ وَثَمُودٌ ﴿٢٤﴾

44. アブラハムの民や、ロトの民もまた然り。

وَقَوْمُ إِبْرَاهِيمَ وَقَوْمُ لُوطٍ ﴿٢٥﴾

45. マドヤンの住民も然り。モーゼの民もまた然り。されど、われは不信心者どもに獅子を与え、然る後、彼等を襲いたり。われを否定すれば、その結果や恐ろしぞかし！

وَأَصْحَابُ مَدْيَنَ وَكَذَّبَ مُوسَى فَأَمَلَيْنَا لِلْكَافِرِينَ
ثُمَّ أَخَذْتَهُمْ فَكَيْفَ كَانَ نَكِيرِ ﴿٢٦﴾

46. われらは如何に多くの邑を、悪事をなせる間に滅ぼせることか。そは屋根の上に落ち崩れたり。また、見捨てられし井戸、廃墟と化せる高樓の数々！

فَكَأَيِّنْ مِنْ قَرْيَةٍ أَهْلَكْنَاهَا وَهِيَ ظَالِمَةٌ فِيهَا
خَاوِيَةٌ عَلَى عُرُوشِهَا وَيَبْنِي مَعْظَلَةً وَقَصْرٍ
مَشِيدٍ ﴿٢٧﴾

47. 物がわかる心と聴く耳を持つべく、彼等は諸国を遍歴せざりしか？盲なるはその眼に非ず、その胸にある心なり。(注24)

أَفَلَمْ يَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَتَكُونُ لَهُمْ قُلُوبٌ
يَعْقِلُونَ بِهَا أَوْ آذَانٌ يَسْمَعُونَ بِهَا فَإِنَّهَا لَا
تَعْمَى الْأَبْصَارُ وَلَكِنْ تَعْمَى الْقُلُوبُ الَّتِي فِي
الصُّدُورِ ﴿٢٨﴾

48. それ故に、彼等は汝に懲罰を急がす。アッラーはその約束を決して破りはせぬ。ただ、時には、主の一日はお前たちの勘定で千年にも相当す。(注25)

وَيَسْتَعْجِلُونَكَ بِالْعَذَابِ وَلَنْ يُخْلِفَ اللَّهُ وَعْدَهُ
وَإِنَّ يَوْمًا عِنْدَ رَبِّكَ كَأَلْفِ سَنَةٍ مِمَّا تَعُدُّونَ ﴿٢٩﴾

注23 この節で示されているように、ムスリムは武力を手にしても、それを利己的な目的に用いるべきではないとされている。貧しい人々や踏みにじられている人々の状況を改善したり、所領の平和と安全を確立したり、礼拝の場を尊重し、守るために用いられるべきである。

注24 この節から、クルアーンのこの箇所及び他の箇所述べられている死人、盲人、ろうあ者というのは、精神的に死んでいる人、見えない人、聞こえない人、話せない人のことを指しているということは明らかである。

注25 モハammad預言者は次のように告げたと記録されている。今後の3世紀は、イスラムの最盛期であり、その後、誤った考えが広まるために、暗黒時代に入り、それは千年にも及ぶであろう。この長い暗黒時代は一

49. われはどれほど多くの悪事に狂奔する^き邑を
猶予したことか。然る後、われそれを急に
襲いたれば、帰するところはわが許なり。

第七項

50. 云え、「人々よ、我はただお前たちの公然た
る警告者にすぎず」と。

51. 信じて善行を積む人々には、寛怒と光栄あ
る給養あり。

52. なれど、われらの神兆に逆らって、われら
の目的を挫折せんと謀る者どもは—業火の
住人たらん。

53. 汝以前にわれらが遣わした使徒や預言者
が、何かを得ようと欲すると、悪魔は彼が
欲しがるもので妨害せり。されどアッラー
は、悪魔が妨害せるものを取り除く。その
上、アッラーは己が神兆を堅固にす。アッ
ラーはすべてを知り、賢哲にまします。

54. これアッラーが悪魔に妨害させて、その心
に病ある者、(注26)並びにその心が頑固
な者を試さんがためなり。げに不義なる
徒輩は反抗して遙か遠くに隔たり存す。

55. すでに知識を賜りたる者は、こは主よりの
真理なることを知り、以て之を信じ、その
心を謙虚ならしめん。げにアッラーは、信
ずる人々を正しい道に導き給う。

وَكَايْنٍ مِّنْ قَرْيَةٍ أَمَلَيْتَ لَهَا وَهِيَ ظَالِمَةٌ ثُمَّ
أَخَذْنَاهَا وَإِلَى الْمَصِيرِ ﴿٤٩﴾

قُلْ يَا أَيُّهَا النَّاسُ إِنَّمَا أَنَا نَذِيرٌ مُّبِينٌ ﴿٥٠﴾
فَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَهُمْ مَغْفِرَةٌ وَ
رِزْقٌ كَرِيمٌ ﴿٥١﴾

وَالَّذِينَ سَعَوْا فِي آيَاتِنَا مُعْجِزِينَ أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ
الْجَحِيمِ ﴿٥٢﴾

وَمَا أَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ مِنْ رَّسُولٍ وَلَا نَبِيٍّ إِلَّا
إِذَا تَنَسَّى الْآلُ الشَّيْطَانُ فِي أُمْنِيَّتِهِ فَيَنسَخُ اللَّهُ مَا
يُلْقِي الشَّيْطَانُ ثُمَّ يُحْكُمُ اللَّهُ آيَتَهُ وَاللَّهُ عَلِيمٌ
حَكِيمٌ ﴿٥٣﴾

لِيَجْعَلَ مَا يُلْقِي الشَّيْطَانُ فِتْنَةً لِلَّذِينَ فِي
قُلُوبِهِمْ مَّرَضٌ وَالْقَاسِيَةِ قُلُوبُهُمْ وَإِنَّ الظَّالِمِينَ
لَفِي شِقَاقٍ بَعِيدٍ ﴿٥٤﴾

وَلِيُعَلِّمَ الَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ أَنَّهُ الْحَقُّ مِنْ رَبِّكَ
يُؤْمِنُوا بِهِ فَتُخْبِتَ لَهُ قُلُوبُهُمْ وَإِنَّ اللَّهَ
لَهَادِ الَّذِينَ آمَنُوا إِلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿٥٥﴾

日にたとえられている (32:6)。この時代に、青い目の人々が興隆し、世界中に広がるであろう (20:103 — 104)。物質的繁栄と政治力にうねばれ、横へいになっているこれらの青い目の人々のことが、モハammad預言者への挑戦、ムスリムの人々への試練として描かれているが、約束の時がくれば、彼らは倒されイスラムの繁栄が到来するであろう。

注26 この節でまた、我々が前節で施した解釈が支持されている。無知な注釈者がこの節に加えた根拠のない話は取るに足らない。この節が意味しているのは、不信者たちがモハammad預言者の使命が著及し果たされていこうとするに對し、ありとあらゆる障害を設けて妨げようとしている、ということである。彼らは、「その心に病ある者」が誤った方向へ導かれて行くように、あるいは、イスラムの発展が遅らされるように望んでこのような悪だくみをなすのである。しかし神はそのような障害をすべて取り除いて下さり、真実は一時仮そめに妨げられ勢いをそがれるかのごとく見えても、かならずや発展の途をたどるのだと主張されている。

56. 然るに、信ぜざる^{やから}徒輩は、審判の日が突如として彼等を襲うか、潰滅^{かいめつ}の日の罰がその身に降りかかるまでは、それについて疑うことを止めざるべし。

وَلَا يَزَالُ الَّذِينَ كَفَرُوا فِي مِرْيَةٍ مِّنْهُ حَتَّىٰ تَأْتِيَهُمُ السَّاعَةُ بَغْتَةً أَوْ يَأْتِيَهُمْ عَذَابٌ يَوْمُ

عَقِيمٌ ﴿٥٦﴾

57. その日、(注 27) 大権はアッラーの掌中にあり。彼は彼等の間を裁き給わん。されば、信じて善行を積む者は、至福の園に入るべし。

الْمَلِكُ يَوْمَئِذٍ لِلَّهِ يَحْكُمُ بَيْنَهُمْ وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ فِي جَنَّاتِ النَّعِيمِ ﴿٥٧﴾

58. 然れども、不信心者にして、われらの神兆^{しるし}を拒否する者は、恥ずべき罰を受けん。

وَالَّذِينَ كَفَرُوا وَكَذَّبُوا بِآيَاتِنَا فَلَوْلِكَ لَهُمْ عَذَابٌ مُّهِينٌ ﴿٥٨﴾

第八項

59. また、アッラーの道のために家郷を捨て、その後敵に殺されたり、又は死んだ者は、(注 28) アッラー必ず之に立派な給養を賜わらん。げにアッラーは最上の給養者なり。

وَالَّذِينَ هَاجَرُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ ثُمَّ قُتِلُوا أَوْ مَاتُوا لَيَرْزُقَنَّهُمُ اللَّهُ رِزْقًا حَسَنًا وَإِنَّ اللَّهَ لَكَبِيرُ الرَّزَاقِينَ ﴿٥٩﴾

60. アッラーは必ず彼等が喜ぶところに彼等を入らしめん。げにアッラーはすべてを知り、寛容にまします。

لَيُدْخِلَنَّهُمْ مُّدْخَلًا يَرْضَوْنَهُ وَإِنَّ اللَّهَ لَعَلِيمٌ حَلِيمٌ ﴿٦٠﴾

61. そは必ずかくの如くあるべし。誰であれ自分が被むりたるものと同様の報復をしたのに、規則違犯された場合には、アッラーは必ずその者を助け給わん。(注 29) げにアッラーは赦免者にして、寛大なり。

ذَلِكَ وَمَنْ عَاقَبَ بِمِثْلِ مَا عُوقِبَ بِهِ ثُمَّ بُغِيَ عَلَيْهِ لَيَنْصُرَنَّهُ اللَّهُ إِنَّ اللَّهَ لَغَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٦١﴾

注 27 「その日」が意味するのは、イスラムの最後の勝利のことである。それはまた同時に不信者のクライシュ族の勢力がついに完全に倒されるメッカ陥落をも言及している。メッカ陥落の時、クライシュはムスリムの軍隊がまさにすぐ近くへ攻め入ってくるまで、全くそれに気づいていなかったのだ。

注 28 自分の心、家、そして大切にしているすべてのものを神にささげ、神のために一生を費やし、死んでいった者は、神のために実際に戦って命を落とした者たちと同様に分類されるに値する。なぜならば、彼らの神への献身は、実際の殉教者の献身と同様に偉大なものであるからである。

ここでの「死んだ者」は、神への献身に一生を捧げていった価値ある人たちを指す。

注 29 この節は2重に重要性を有する。一つは、ムスリムが救われるという約束、もう一つは、ムスリムが究極的には勝利をおさめ繁栄するという預言が含蓄されている。前者の意味において、実際ムスリムが圧迫され、被害をうけてきていることが明白であり、被害に対し報復が許されているが、自分の受けた以上に相手に害を及ぼしてはならないとされている。後者の意味において、ムスリムは、敵を自分の支配下におさめるであろうが、その時でも受けた以上の害を与えてはならず、さらに寛容にも、神が慈悲と許しという美德を備えていらっしやるように、ムスリムが敵の人々を許し、謝罪してあげることがより良いことであると告げられている。

62. そはアッラーが、夜を昼の中に入らしめ、また昼を夜の中に入らしめるが故なり。(注30) なんとすれば、アッラーはすべてを聴き、すべてをみそなわし給うが故なり。

ذَٰلِكَ بِأَنَّ اللَّهَ يُولِجُ اللَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَيُؤَلِّجُ النَّهَارَ فِي اللَّيْلِ وَأَنَّ اللَّهَ سَمِيعٌ بَصِيرٌ ﴿١٧﴾

63. そはアッラーが真理にして、彼等がアッラー以外に祈るものは偽りの神なるが故、アッラーは至尊者、至大者にまします故なり。

ذَٰلِكَ بِأَنَّ اللَّهَ هُوَ الْحَقُّ وَأَنَّ مَا يَدْعُونَ مِنْ دُونِهِ هُوَ الْبَاطِلُ وَأَنَّ اللَّهَ هُوَ الْعَلِيُّ الْكَبِيرُ ﴿١٨﴾

64. 汝、アッラーが天から水を降せば大地が緑となるを、(注31) 見ざるか? げにアッラーは細かに気を配り、すべてを承知し給う。

لَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ أَنْزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَتُصْبِحُ الْأَرْضُ مُخْضَرَّةً إِنَّ اللَّهَ لَطِيفٌ خَبِيرٌ ﴿١٩﴾

65. 天にあるもの地にあるもの、一切はアッラーに属す。げにアッラーは自立自存し、讚美に値する御方なり。

لَهُ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ وَإِنَّ اللَّهَ لَهُ الْغَنَى الْغَنِيُّ ﴿٢٠﴾

第九項

66. 汝、アッラーが地上にあるすべてのものをお前たちに従属させたるを見ざるか、またアッラーの命に依って海を渡る船を見ざるか? 更に彼は、天を引き止め、己が許しなしに地上に落ちざらしめ給う。げにアッラーは人間に哀れみ深く、情け深くまします。

لَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ سَخَّرَ لَكُمْ مَّا فِي الْأَرْضِ وَالْفُلَ تَجْرِي فِي الْبَحْرِ بِأَمْرِهِ وَيُنْسِكُ السَّمَاءَ أَنْ تَقَعَ عَلَى الْأَرْضِ إِلَّا بِإِذْنِهِ إِنَّ اللَّهَ بِالنَّاسِ لَكَرِيمٌ ﴿٢١﴾

67. 而して、お前たちに生命を与え、次いで死なせ、再び甦らしむるは彼なり。(注32) まことに、人間というものは思知らずの最たるものなり。

وَهُوَ الَّذِي أَحْيَاكُمْ ثُمَّ يُمِيتُكُمْ ثُمَّ يُحْيِيكُمْ إِنَّ الْإِنْسَانَ لَكَفُورٌ ﴿٢٢﴾

注30 この節では、前節ではめかされている事実が比喩を用いて示されている。ムスリムが悲惨な状況で圧政下にある長い期間は「夜」にたとえられ、それが今や終わりを告げ、ムスリムの栄光のH々である「昼」が訪れようとしていることが示されている。

注31 この節は不信者たちの注意を彼らの目の前で展開される自然現象に向けようとしている。お前たちには見えないのか? 神が天から雨を降らせ、荒涼とした不毛の地、精神的に死んだ状態にあるアラブの土地に水の恵みを与えるのを。そして新しい生命が芽生え、新緑があたりいっばいに広がるのを。そして全世界が精神的に目覚め、イスラムが深く根をおろしていくのを。以上のことがこの節で述べられている。

注32 生と死の現象は同時に起こるものである。死するたびに新しい生命が望まれる。バドルの戦いやウハドの戦いの戦場で殺されたムスリムは、アラブ全土に精神的復興をもたらしたのである。

68. われらはすべての人々にその守るべき儀礼を定めたり。(注33)されば、彼等にイスラームの儀礼について汝に反駁せしめるなかれ。唯だ彼等を汝の主^{きようどう}に招け。げに汝は正しい嚮導^{きようどう}の上にあり。

69. もし彼等が汝に論争を起しなば、云え、「アッラーはお前たちがなせることを最もよく知り給う。

70. 復活の日には、お前たちが意見を異にしたことについて、アッラーはお前たちを審判すべし」と。

71. アッラーが天地間の一切を知り給うことを、汝知らざるか？そは、すべて記帳されて存す。また、そは、アッラーにとりて容易なり。

72. 彼等は、アッラーが如何なる權威も降したまわざる者、またこれについて如何なる知識も有せぬ者を、アッラー以外に崇敬す。然れども、悪事を仿ら^{やから}く徒輩には、助け手はなし。(注34)

73. われらの明瞭な神兆^{めいりょう}が彼等^{しんし}に読誦^{どくしやう}されると、汝はそれら信ぜざる者どもの顔面に拒否の色が浮かぶを認めん。彼等は、われらの神兆を誦える者に向つて、攻撃を加えんとす。云え、「我はお前たちに、これより更に悪しきことを告げようか？そは業火なり！アッラーは信ぜざる者どもにそれを約束せり。そは恥ずべき行き先なるかな！」と。

لِكُلِّ أُمَّةٍ جَعَلْنَا مَنَسَكًا هُمْ نَاسِكُوهُ فَلَا يُبَاغِتُكَ
فِي الْأَمْرِ وَادْعُ إِلَىٰ رَبِّكَ إِنَّكَ لَعَلَىٰ هُدًى
مُّسْتَقِيمٍ ﴿٦٨﴾

وَإِنْ جَدَلُوكَ فَقُلِ اللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا تَعْمَلُونَ ﴿٦٩﴾

اللَّهُ يَحْكُمُ بَيْنَكُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ فِيمَا كُنْتُمْ فِيهِ
تَخْتَلِفُونَ ﴿٧٠﴾

أَلَمْ تَعْلَمْ أَنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا فِي السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ
إِنَّ ذَلِكَ فِي كِتَابٍ إِنَّ ذَلِكَ عَلَى اللَّهِ يَسِيرٌ ﴿٧١﴾

وَيَعْبُدُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ مَا لَمْ يَنْزِلْ بِهِ سُلْطَانٌ
وَمَا لَيْسَ لَهُمْ بِهِ عِلْمٌ وَمَا لِلظَّالِمِينَ مِنْ نَصِيرٍ ﴿٧٢﴾

وَإِذَا تَنَزَّلْنَا بَيْنَتْنِ تَعْرِفُ فِي وُجُوهِ
الَّذِينَ كَفَرُوا التَّنَكُّرُ يَكَادُونَ يَسْطُونَ بِالَّذِينَ
يَتْلُونَ عَلَيْهِمْ آيَاتِنَا قُلْ أَفَأُنَبِّئُكُمْ بِشَرِّ
ذَلِكَ النَّارِ وَعَدَهَا اللَّهُ لِلَّذِينَ كَفَرُوا وَإِنَّ
الْمَصِيرَ ﴿٧٣﴾

注33 神への礼拝は、すべての国家やその国民のうちにいろんな形で見うけられる。このことから、イスラームがあらゆる宗教の中で最も早くに、人々のうちに神の使者が降り、人々にいろんな形態の礼拝を教えるであろうと宣言したことが偉大な事実であるとわかる。

注34 ここでは偶像崇拜に対し3つの議論が提示されている。(1) 今までに著された神の本の中で偶像崇拜に言質を与えそれを認めているものは何一つとしてない。(2) 人間の理性や良心に従えば、偶像崇拜には抵抗を示すのが当然であり、偶像崇拜者たちは偶像崇拜を支持する個人的経験や考察に基づくようなまともな議論をすることが全くできない。(3) 偶像崇拜者と信者が反目しあっていた時代に、信者は大勝利を得た。以上のように神の啓示、人間の理性、勝利を定めた歴史上の評決、すべてが偶像崇拜は正しくないとしている。

第十項

74. 人々よ、一つの譬を述べるが故に、之を聞け。お前たちがアッラーの代わりに拝する者どもは、よしやその目的のために相寄り協力しようとも、蠅一匹だに創造し得ず。また、その蠅が彼等から何物かを奪い去るも、彼等は之を取り戻す能わず。縋る者も、縋られる者も、ああ、無力なるかな。(注 35)

75. 彼等はアッラーの権能について正しい概念を形成し得ず。(注 36) アッラーは強力にして、偉大にまします。

76. アッラーは、諸天使並びに人間の中より使徒を選ぶ。げにアッラーはすべてを聴き、すべてをみそなわし給う。

77. 彼は皆の前にあるものを知り、またその後にあるものを知る。而して、万事はアッラーの決定に帰着す。

78. 汝等信ずる者よ、礼拝に於ては頭をたれ、叩頭して主を崇めまつり、栄えんために善行を積み。

79. お前たち、アッラーの道のために、本分を尽して戦え。彼はお前たちを選びたれど、宗教に関しては、お前たちに如何なる艱苦も課せざりき。されば、お前たちの父祖アブラハムの信仰に従え。彼は以前にも、またこの經典の中でも、(注 37) お前たちを

يَا أَيُّهَا النَّاسُ صُورِبْ مَثَلٌ فَاسْتَعُوا لَهُ إِنَّا
الَّذِينَ تَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ لَنْ يَخْلُقُوا ذُبَابًا
وَلَوْ اجْتَمَعُوا لَهُ وَإِنْ يَسْلُبْهُمُ الذُّبَابُ شَيْئًا
لَا يَسْتَنْقِذُوهُ مِنْهُ ضَعُفَ الطَّالِبُ وَالْمَطْلُوبُ ③٥

مَا قَدَرُوا اللَّهَ حَتَّى قَدَرَهُ إِنَّ اللَّهَ لَقَوِيٌّ عَزِيزٌ ③٥

اللَّهُ يَصْطَفِي مِنَ الْمَلَائِكَةِ رُسُلًا وَمِنَ النَّاسِ
إِنَّ اللَّهَ سَمِيعٌ بَصِيرٌ ③٦

يَعْلَمُ مَا بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ وَإِلَى اللَّهِ تُرْجَعُ
الْأُمُورُ ③٧

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا ارْكَعُوا وَاسْجُدُوا وَاعْبُدُوا
رَبَّكُمْ وَأَفْعَلُوا الْخَيْرَ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ③٨

وَجَاهِدُوا فِي اللَّهِ حَقَّ جِهَادِهِ هُوَ اجْتَبَاكُمْ
وَمَا جَعَلَ عَلَيْكُمْ فِي الدِّينِ مِنْ حَرَجٍ مِلَّةَ
إِبْرَاهِيمَ هُوَ سَمَّاكُمُ الْمُسْلِمِينَ ③٩

注 35 この節は不信者たちに彼らが完全に無力であり、決して彼らの偽りの神によっては救いは得られないということ、そして、彼らが偽りの神を崇拝していることはいかに愚かなことであるかを明示している。

注 36 偶像崇拝者が、木や石で作られた神を偶像として拝むほど自らを落としてしまうという事実から、真の神の属性に関する彼らの概念の貧困さがうかがわれる。事実、多神教徒があれこれ複数の神を拝んだり、偶像崇拝者が偶像を拝んだりするのは、彼らが、真の神の御力に限りがありその属性が人間のもののように不完全だと考えている、その概念の貧困さに起因しているのである。

注 37 「この經典の中で」という表現は、暗に、クルアーンの中で引用されているアブラハムの祈りをほのめかしている(2章 129節参照)。

ムスリムと名づけたり。(注 38) これ使徒をしてお前たちの証人たらしめ、お前たちをして人類の証人たらしめんがためなり。故に、礼拝を遵守し、喜捨を惜しまず、しっかりとアッラーにお縋り申せ。彼こそはお前たちの愛護者なり。なんと素晴らしい愛護者、なんと素晴らしい援助者にましますかな！

قَبْلُ وَفِي هَذَا لِيَكُونَ الرَّسُولُ شَهِيدًا عَلَيْكُمْ
وَتَكُونُوا شُهَدَاءَ عَلَى النَّاسِ ۚ فَأَقِيمُوا الصَّلَاةَ
وَآتُوا الزَّكَاةَ وَاعْتَصِمُوا بِاللَّهِ هُوَ مَوْلَاكُمْ فَنِعْمَ
مَوْلَايَ وَنِعْمَ النَّصِيرُ ۝٤٩

注 38 「彼は以前にも、またこの経典の中でもお前たちをムスリムと名づけたり」というのは、イザヤの預言にふれた表現である（イザヤ書 62：2、65：15 参照）。

سُورَةُ الْمُؤْمِنُونَ مَكِّيَّةٌ

アル・モーメヌーン

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く^{أَكْثَرُ}アッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. 信者たちは必ず幸運を得る。(注1)

قَدْ أَفْلَحَ الْمُؤْمِنُونَ ﴿١﴾

3. 彼等は、礼拝の時^{هَرِيقًا}は謙り、(注2)

الَّذِينَ هُمْ فِي صَلَاتِهِمْ خُشْعُونَ ﴿٢﴾

4. 下らぬことは一切避け、(注3)

وَالَّذِينَ هُمْ عَنِ اللَّغْوِ مُعْرِضُونَ ﴿٣﴾

5. 進んで喜捨を行い、(注4)

وَالَّذِينَ هُمْ لِلزَّكَاةِ فَاعِلُونَ ﴿٤﴾

6. 貞節を守る

وَالَّذِينَ هُمْ لِفُرُوجِهِمْ حَافِظُونَ ﴿٥﴾

7. 但し、その妻たち並びにその右手が所有するものは除く。その場合は罪なし。(注5)

إِلَّا عَلَىٰ أَزْوَاجِهِمْ أَوْ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُهُمْ فَإِنَّهُمْ غَيْرُ مَلُومِينَ ﴿٦﴾

8. なれど、これらを超えて何かを求める者は、罪人^{ظالمين}なり。

فَمَنِ ابْتَغَىٰ وَرَاءَ ذَلِكَ نَأْوَلِيكَ هُمْ الْعَدُوْنَ ﴿٧﴾

9. 信託や約束に忠実で、

وَالَّذِينَ هُمْ لِأَمْتِهِمْ وَعَهْدِهِمْ رِعُونَ ﴿٨﴾

10. 礼拝を厳守する者。(注6)

وَالَّذِينَ هُمْ عَلَىٰ صَلَاتِهِمْ يُحَافِظُونَ ﴿٩﴾

注1 この節では、高い精神力を備えた信者について述べられており、その特質は後節に書かれてある。この様な信者たちは神の救いのみならず、幸運を得るであろうが、それは幸運を得ることが救いを得ることよりも遙かに高い精神過程のものだからである。

注2 人生で成功を治め、人間を創り賜うた神の崇高な御意志を成就したいと願うなら、信者はまず様々な条件を満たさなければならず、それについての記述がこの節より始まる。この条件とは、幾重にも重なる人間の精神的発達段階の事であろう。第一に、信者は悔い改め、謙虚な気持ちで神を崇めなければならない。

注3 第二に、全ての無駄な言葉・思考・行動を慎まなければならない。人生は厳しいものであり、信者は上記の教えを守らねばならない。常に人生を有意義に過し、無用なことを避けねばならないのである。

注4 喜捨の目的は、苦しみを取り除き、あるいは社会の貧民層を救い上げるのみならず、金銭と物質を貯え、それを盛んに循環させる事で、健全な経済調整を計るものである。

注5 4章4節参照

注6 この節では、信者の精神的に最も成長した状態について述べられている。神の記憶は信者にとり第二の天性となり、我身の一部と化し、魂の救いとなる。この段階に至れば、信者は集団への帰属心が強まり、個より地域・国家の利益を重んじる為集団での礼拝を特に心掛けるようになる。

11. かかる人々こそ相続人、
 12. 樂園を継ぐ者なり。彼等はそこに永久に住み留まらん。(注7)
 13. われらは泥の精粹から人間を創り、
 14. 次いでわれらは之を一滴の精液として安全な保管所におさめたり。
 15. 次いでわれらは、その精液から凝血を創り、次いでその凝血から無形の塊を創り、その塊から骨を創り、更にその骨に肉をまわさせ、然る後にわれらは之を新たな創造物に発達させり。されば、最も優れた創造主アッラーを讃美し奉れ。
 16. こうしてその後、お前たちは必ず朽ち果てん。(注8)
 17. 而して、復活の日に、再び甦らしめらる。(注9)
 18. われらはお前たちの頭上に七層の天を創れり。(注10) 而して、われらは、その創造を等閑にはせず。
 19. またわれらは、適量の水を空から降し、それを地中に留まらしめり—われらはまたその水運び去る力も有す—(注11)
- أُولَٰئِكَ هُمُ الْوَارِثُونَ ﴿١١﴾
 الَّذِينَ يَرِثُونَ الْفِرْدَوْسَ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿١٢﴾
 وَلَقَدْ خَلَقْنَا الْإِنْسَانَ مِنْ سُلَالَةٍ مِّنْ طِينٍ ﴿١٣﴾
 ثُمَّ جَعَلْنَاهُ نُطْفَةً فِي قَرَارٍ مَّكِينٍ ﴿١٤﴾
 ثُمَّ خَلَقْنَا النُّطْفَةَ عَلَقَةً فَخَلَقْنَا الْعَاقَةَ مُضْغَةً فَخَلَقْنَا الْمُضْغَةَ عِظًا ﴿١٥﴾
 فَكُنُوسًا الْعِظَمَ لَحْمًا ثُمَّ أَنشَأْنَاهُ خَلْقًا آخَرَ ﴿١٦﴾
 فَتَبَارَكَ اللَّهُ أَحْسَنُ الْخَالِقِينَ ﴿١٧﴾
 ثُمَّ إِنكُمْ بَعْدَ ذَلِكَ لَنَيُّونَ ﴿١٨﴾
 ثُمَّ إِنكُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ تُبْعَثُونَ ﴿١٩﴾
 وَلَقَدْ خَلَقْنَا فَوْقَكُمْ سَبْعَ طَرَائِقَ ۖ وَمَا تَأْتِيَنِ الْغَيْبِينَ ﴿٢٠﴾
 وَأَنزَلْنَا مِنَ السَّمَاءِ مَاءً بِقَدَرٍ فَأَسْكَنْتَهُ فِي الْأَرْضِ ۖ وَإِنَّا عَلَىٰ ذَهَابٍ بِهِ لَفَاعِلُونَ ﴿٢١﴾

注7 前節に述べた信者達はあらゆる徳を身に付け、野にある物全てを備えた樂園に住む様になる。死を望めば、むしろ神より永遠の命を賜わり、望みは全てかなえられるであろう(50-36)。

注8 人は成長を終えた後、衰え死に致る。生きとし生けるもの全てが死を迎えるのは、不変の摂理である。神のみが不滅なのである。

注9 死後人が甦るのは、魂の成長を続け永遠を知る為である。現世における歩みはその前段階であり、言わば母親の胎内に宿る赤子の様なものである。死後に新たな世に生まれ変わり、終りなき成長を始めるのである。

注10 この章の初め10節で述べた6段階の精神的成長は、天国(当章12節参照)も含めると7段階となる。同様に、精子形成の前段階(13節)を胎児成長過程に加えれば、7段階となる。この様に、この章で述べてきた精神的成長の7段階という数は、13節～15節で述べた人間の肉体的成長の7段階と奇しくも一致する。

注11 この節では、人が肉体的、精神的に要する物を如何に神より賜わったか、その一例が示されている。全ての命は、雨・雪・霰として空から降り落ちる水無くしては生存できない。同じく、魂も又、神の啓示という精神的恵無くしては存在し得ない。

20. われらはその水でお前たちのために^{なつめやし}棗椰子や葡萄園を設けたり。園内には沢山の果物ありて、お前たちそれを食す。

فَأَنشَأْنَا لَكُمْ بِهِ جَنَّتٍ مِّنْ نَّخِيلٍ وَأَعْنَابٍ لَّكُمْ فِيهَا فَوَاقِهِ كَثِيرَةٌ وَمِنْهَا تَأْكُلُونَ ﴿٢٠﴾

21. また、シナイ山中に生える一樹あり。油を産し、食者のために調味料にもなる。(注12)

وَشَجَرَةً تَخْرُجُ مِنْ طُورِ سَيْنَاءَ تَنْبُتُ بِالدِّهْنِ وَصَيِّغٍ لِلْأَكْلِينَ ﴿٢١﴾

22. 而して、^{しか}家畜に於てもまた、お前たちへの教訓あり。われらは彼等の腹の中のものをお前たちに飲ましめ、お前たちは多くの利益を彼等から得る上に、その肉をも食す。(注13)

وَرَأَى لَكُمْ فِي الْأَنْعَامِ لَعِبَةً سَتَعْلَمُونَ مِمَّا فِي بُطُونِهَا وَلَكُمْ فِيهَا مَنَافِعُ كَثِيرَةٌ وَمِنْهَا تَأْكُلُونَ ﴿٢٢﴾

23. お前たちは彼等の背に乗って、また船に乗って運ばれる。

وَعَلَى الْفُلْكِ تُحْمَلُونَ ﴿٢٣﴾

第二項

24. われらはノアをその民に遣わしたり。彼は云えり、「我が民よ、アッラーに仕えまつれ。アッラー以外に神なし。お前たち、アッラーの加護を求めざるか？」と。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا نُوحًا إِلَىٰ قَوْمِهِ فَقَالَ يَغُورُ عِبُدُوا اللَّهَ مَا لَكُمْ مِّنْ إِلَهِ غَيْرِهِ أَفَلَا تَتَّقُونَ ﴿٢٤﴾

25. すると、その民の中の信仰なき長老たちは云えり、「彼は我等同様ただの人間にすぎず。彼は我等が上に立たんとす。もしアッラー欲しなば、彼と共に必ず天使らを遣わさん。我等はいまだかつて、遠い先祖にかくの如きことありしを聞かず。(注14)

فَقَالَ الْمَلَأُ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ قَوْمِهِ مَا هَذَا إِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُكُمْ يُرِيدُ أَنْ يَفْضَلَ عَلَيْكُمْ وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ لَأَنزَلَ مَلَائِكَةً مَّا سَمِعْنَا بِهَذَا فِي آبَائِنَا الْأَوَّلِينَ ﴿٢٥﴾

26. 彼はただ狂気に病んでいるにすぎず。されば、待てしばし、彼に關しては」と。

إِنْ هُوَ إِلَّا رَجُلٌ بِهِ جِنَّةٌ فَاذْكُرُوا يَوْمَهُ حِينَ ﴿٢٦﴾

注12 シナイ山中と言う言葉から、我々は聖書の偉大な預言を思い起こす。「主はシナイから来られ、セイルから彼等を照らし、パランの山から光を放ち、一万の聖者らとともに来られた。その右手からは、彼等に稲妻がきらめいていた(申命記33章2節)。H. F. プレスコットによる“Once to Sinai”も参照の事。

注13 「無知から知へと人を変える証し」という意味をもつ、「教訓」は、動物の内蔵で牧草がミルクに変わる微妙な過程を暗示している。この事を深く掘り下げて考えれば、神の偉大なる力及び神の啓示の為されるその巧みな方法に、人は気付くのである。

注14 不信者達は優越感に捕われ、「我々同様ただの人間にすぎ」ない指導者を受け入れる訳にはいかないという理由で、神の使者を拒む。天使の存在が大昔から信じられて来た事を、この節は偶然にも示している。遙か遡るノアの時代に、彼に刀向かう者達は、天使が自分たちのもとへ降りて来るのを見たいと願った。

27. 彼は云えり、「我が主よ、助け給え、彼等は我を喰つきと見なす」と。

28. されば、われらは啓示によって彼に命じたり。「われらの啓示に従って、われらの眼前で箱舟を造れ。われらが命下りて地中から沢山の泉が噴出する時、あらゆる生きものを雄雌^{ひとつがい}一番ずつ、並びに汝の家族をその舟の中に乗り込ませよ、但しすでに裁断^{しか}が下された者どもは除く。而して、不義をなせる者どものことで、われに請願するなかれ。彼等は必ず溺死せん。(注15)

29. 而して汝、すなわち、汝並びに汝と一緒にの者たちが箱舟の中に落ちついたなら、唱えよ、『悪人どもから我等を救い給うたアッラーに讃えあれ』と。

30. また云え、『主よ、恵まれた地点に上陸させ給え、汝ほど最善に上陸させ給うお方はあらざるほどに』と。

31. げにこの中には種々な神兆^{しきし}あり。われらはノアの民を試みたるなり。

32. 然る後、彼等の後に、われらは別の一族を興したり。(注16)

33. 而して、われらは彼等の中より選べる一人の使徒を彼等に遣わし、云わしめたり、「アッラーに仕えまつれ。アッラー以外に神なし。お前たち神を畏敬せざるか?」と。

第三項

34. すると、その民の長老で、信仰をもたず、来世での対面を否定し、しかもわれらが今生で安楽を与えたる者が云えり、「これなる者は、我等同様ただの人間にすぎず。彼は我等が食べるものを食べ、飲むものを飲む。

قَالَ رَبِّ انصُرْنِي بِمَا كَدَّ بُونٌ ﴿١٥﴾

فَأَوْحَيْنَا إِلَيْهِ أَنْ اصْنَعْ الْفُلَكَ بِأَعْيُنِنَا وَوَحْيِنَا
فَإِذَا جَاءَ آمُرْنَا وَفَارَ التَّنُورُ فَاسْلُكْ فِيهَا مِنْ
كُلِّ نَوْجٍ ائْتَيْنِ وَأَهْلَكَ إِلَّا مَنْ سَبَقَ عَلَيْهِ
الْقَوْلُ مِنْهُمْ وَلَا تَخَاطِبْنِي فِي الَّذِينَ ظَلَمُوا إِنَّهُمْ
مُغْرَقُونَ ﴿١٦﴾

فَإِذَا اسْتَوَيْتَ أَنْتَ وَمَنْ مَعَكَ عَلَى الْفُلِكَ فَقُلِ
الْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي نَجَّيْنَاكَ مِنَ الْقَوْمِ الظَّالِمِينَ ﴿١٧﴾
وَقُلْ رَبِّ انزِلْنِي مُنزَلًا مُبَارَكًا وَأَنْتَ خَيْرُ
الْمُنزِلِينَ ﴿١٨﴾

إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ وَإِنْ كُنَّا لَمُبْتَلِينَ ﴿١٩﴾
ثُمَّ أَنشَأْنَا مِنْ بَعْدِهِمْ قَوْمًا آخَرِينَ ﴿٢٠﴾

فَأَرْسَلْنَا فِيهِمْ رَسُولًا مِنْهُمْ أَنْ اعْبُدُوا اللَّهَ مَا لَكُمُ
مِنْ إِلَهٍ غَيْرُهُ أَفَلَا تَتَّقُونَ ﴿٢١﴾

وَقَالَ الْمَلَأُ مِنْ قَوْمِهِ الَّذِينَ كَفَرُوا وَكَذَّبُوا بِإِفْقَائِ
الْآخِرَةِ وَاتَّرفَهُمْ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا مَا هَذَا إِلَّا بَشَرٌ
مِثْلُكُمْ يَأْكُلُ مِمَّا تَأْكُلُونَ مِنْهُ وَيَشْرَبُ مِمَّا
تَشْرَبُونَ ﴿٢٢﴾

注15 11章41節参照。

注16 「別の一族」アード族、つまりフードの一族を指す。それはこの節及び次の数節に書かれた「次の世代」の置かれる状況が、7章66~70節のアード族に関する記述と実に良く似通っているからである。

35. お前たち、自分自身と同じ人間に従わば、
お前たち必ず損失者とならん。
36. 彼はお前たちが死んで土と骨になりたる
後、お前たちは再び甦らしめらる、と云う
か？
37. ばかばかしい、お前たちが約束されたこと
は真実からほど遠い。
38. 我等にはただ現世の生活あるのみ。我等は
死に、我等は生く。されど、我等は断じて
再び甦らしめらることなかるべし。
39. 彼はアッラーに対して嘘を捏造するただの
人間にすぎず。されば、我等は彼を信じたり
はせぬ」と。
40. 彼は云えり、「主よ、我を助け給え。彼等は
我を嘘つきと見なす」と。
41. 神は云えり、「やがて、彼等は必ず後悔せん」
と。
42. まさにその時、天罰が下り、われらは彼等
を激流に浮ぶ浮きかすの如くなしたり。不
義な^{ふか}徒輩よ^{たぐ}懺りあれ！
43. 然る後、われらは彼等の後に別の多くの世
代を興したり。
44. 如何なる民も、その定め^{あた}の期限を早める能
わず、また遅らす能わず。(注17)
45. 然る後、われらは使徒等をあいついで遣わ
したり。なれど、いずれの民も彼等の使徒
が登場するや、彼等は使徒を嘘つきとして
遇したり。されば、われらは次々に彼等を
滅亡へと^{たど}辿らせ、以てすべてを伝説たらし
めたり。信ぜざる徒輩よ、懺りあれ！(注
18)
- وَلَيْنَ اطَّعْتُمْ بَشَرًا مِّثْلَكُمْ اِذَا الْخِمْزُ وَنُ
اَيَعِدْكُمْ اِذَا امِشْتُمْ وَكُنْتُمْ تَرَاكِبًا وَعِظَامًا
اَنْتُمْ مُخْرَجُونَ ﴿٣٥﴾
- هِيَ هَاتِ هِيَ هَاتِ لِمَا تُوْعَدُونَ ﴿٣٦﴾
- اِنْ هِيَ اِلَّا حَيَاتُنَا الدُّنْيَا مَمُوتٌ وَنَحْيَا وَمَا نَحْنُ
بِنَبْعُوْثِيْنَ ﴿٣٧﴾
- اِنْ هُوَ اِلَّا رَجُلٌ اِفْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا وَمَا نَحْنُ
لَهٗ بِمُؤْمِنِيْنَ ﴿٣٨﴾
- قَالَ رَبِّ اَنْصُرْنِيْ بِمَا كَذَبُوْنِ ﴿٣٩﴾
- قَالَ عَمَّا قَلِيْلٍ لِّيُصِحَّحَ نُدَمِيْنَ ﴿٤٠﴾
- فَاَخَذَتْهُمُ الصَّيْحَةُ بِالْحَقِّ فَجَعَلْنَاهُمْ غَشَاءً
فَبَعْدًا لِّلْقَوْمِ الظَّالِمِيْنَ ﴿٤١﴾
- ثُمَّ اَنْشَأْنَا مِنْۢ بَعْدِهِمْ قُرُوْنًا اٰخَرِيْنَ ﴿٤٢﴾
- مَا تَسْبِقُ مِنْ اُمَّةٍ اِجْلَآهَا وَمَا يَنْتَظِرُوْنَ ﴿٤٣﴾
- ثُمَّ اَرْسَلْنَا رُسُلَنَا تَتْرًا كُلَّمَا جَاءَ اُمَّةٌ رَّسُوْلُهَا
كَذَّبُوْهُ فَاَتَّبَعْنَا بَعْضَهُمْ بَعْضًا وَجَعَلْنَاهُمْ اَحَادِيْثًا
فَبَعْدًا لِّلْقَوْمِ لَا يُؤْمِنُوْنَ ﴿٤٤﴾

注17 誰も神の定められた運命を変える事はできない。神の預言者を拒めば、必ずや罰せられる。神を信じていない者についてどのような形で罰を御与えになるかは、神御自身がお決めになる。

注18 彼等は壊滅した為、後生の人々は、彼等を、かつてこの世にあったが、今やその存在の跡形も無い人々と表現した。

46. 然る後、われらはモーゼとその兄を、数々のわれらの奇跡と明白なる権能と共に遣わしたり、
47. ファラオとその長老たちのところへ。然るに彼等は横柄な民なれば、尊大に振舞いたり。
48. 彼等は云えり、「我等と等しいただの人間二人を、我等に信ぜよとな、而も彼等の同族は我等の奴隷に非ざるか？」と。
49. そこで、彼等は二人を嘔つき呼ばわりしたれば、彼等もまた滅ぼされた者どもの仲間に入りたり。
50. 而してわれらは、モーゼに彼等を導かしめんと、經典を授けたり。
51. われらはまた、マリアの子とその母を一つの神兆となし、二人の安全のための隠れ場として、泉が湧き出る緑の谷間の小高いところを、与えたり。(注19)

ثُمَّ أَرْسَلْنَا مُوسَىٰ وَآخَاهُ هَارُونَ بِآيَاتِنَا
وَسُلْطَانٍ مُّبِينٍ ﴿٤٦﴾

إِلَىٰ فِرْعَوْنَ وَمَلَئِهِ فَاسْتَكْبَرُوا وَكَانُوا قَوْمًا
عَالِينَ ﴿٤٧﴾

فَقَالُوا أَنُؤْمِنُ بِبَشَرَيْنِ مِثْلِنَا وَقَوْمُهُمَا لَنَا
عِبَادُونَ ﴿٤٨﴾

كَذَّبُوهُمَا فَكَانُوا مِنَ الْمُهْلَكِينَ ﴿٤٩﴾

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ لَعَلَّهُمْ يَهْتَدُونَ ﴿٥٠﴾

وَجَعَلْنَا ابْنَ مَرْيَمَ وَأُمَّهُ آيَةً وَآوَيْنَاهُمَا إِلَى
رَبْوَةٍ ذَاتِ قَرَارٍ وَمَعِينٍ ﴿٥١﴾

注19 イエス・キリストの死は、彼の出生と同様に論議的となっている。彼が亡くなれる頃、どこですごしたか、今までも論じられてきた。クルアーンや聖書は歴史的な確かな裏付けを持ち、イエス・キリストは十字架によってなくなられたのではないことを明らかにする。この論点を支持する学説を以下に記す。

(1) 1877 年ころ中東を旅したロシアの旅行家ニコラス・ノトビッチは、著書「イエスの知られざる生活」の中で、「イエスはカシミールとアフガニスタンを訪れた。」と書いている。ニコラス・ノトビッチがカシミールを訪れた当時、カシミールのマハラジャ宮殿に起居していたイギリス人サー・フランシス・ヤングハズバンドは、ゾジラ峠近くでノトビッチと会った。イエスの東洋への旅に関する最近の研究はノトビッチの著作を強力に裏付けている。「イエスによる東洋訪問という珍しい話をスリナガルに見つけたのは我々が初めてだ。」と、ニコラス・ローリッチ博士は著書「Heart of Asia (アジアの心)」に書いている。ローリッチ博士は更に続ける「イエスが、インド、ラダック、中央アジアにまで足跡を残している事を我々は後に知った。カシミール、ラダック、チベット、更にその北部地域も含め、中央アジア全域で、イエス来訪は未だ信じられている。」(Jawahar Lal Nehru著“Glimpses of World History”)

学者の中には、ノトビッチの作品にあるあいまいな箇所を指して、イエスが神の預言者になる前にインドを訪れたとする説に異を唱える者もある。イエスがインドを訪れたと言われているのは彼がまだ13才か14才の頃であり、遠隔地への長く苦しい旅、しかも道中我身を死の危険にさらすかもしれない旅をその様な若者が考えたはずがない。では、何が若きHのイエスをインドへ駆り立てたのか？ もしイエスが当時インドを訪れたとすれば何故インドやカシミールの人々が13才か14才の少年の行動をわざわざ記録に残したのであろうか？ 史実では、ユダヤ人に追われ、パレスチナでの暮らしも危なくなったイエスは、パレスチナを去り、“イスラエルの失われた10支族”の為に、旧約聖書に書かれた預言成就を求めて旅に出た。そして長く危険な旅の後インド及びカシミールに着き、その地で120才の高齢に至るまで波瀾に満ちた人生を送ったイエスの行動が記されているのはそこまでである(Kanzal-Ummal, 6章参照)。アッシリア人やバビロニア人に追われた“イスラ

第三項

52. 汝等使徒たちよ清潔なものを食し、善行をなせ。げにわれはお前たちの所業を熟知す。

يَا أَيُّهَا الرُّسُلُ كُلُوا مِنَ الطَّيِّبَاتِ وَاعْمَلُوا صَالِحًا
إِنِّي بِمَا تَعْمَلُونَ عَلِيمٌ ﴿٥٢﴾

53. 而して、お前たちの教団は同一不二にして、われはお前たちの主なることを知れ。されば、われをお前たちの守護者として敬え。

وَأَنَّ هَذِهِ أُمَّتُكُمْ أُمَّةً وَاحِدَةً وَأَنَا رَبُّكُمْ
فَاتَّقُونِ ﴿٥٣﴾

(注 20)

エル^①の失われた支族^②は、イラン及びイラクに住み着いた。後に、ダリウス、サイラスの元にイラン人がアフガニスタンやインドまで領土を拡大した時、これ等の支族は共にインド、アフガニスタンに入植したのであった。(2) カシミール人、アフガニスタン人は“イスラエルの失われた支族”の末裔である。この事は両種族の習慣・歴史・記録からも明らかである。町名・種族名・習慣・生活様式・服装・身体的特徴等あらゆる点で、カシミール人・アフガニスタン人はイスラエル人と酷似している。古代の碑文も又、それを示している。両種族の民話にはイスラエルの話が多く含まれる。カシミールという名それ自体、実は“シリアの様な”という意味の語がカシミールに由来している。又、ノアの孫であるカッシュあるいはクッシュにちなんで名付けられたとも考えられる。これらの事実からすれば、アフガニスタン人及びカシミール人が“イスラエルの失われた支族”の末裔であるという見解は間違いない。(3) イエスがカシミールにきた事、カシミール人が“イスラエルの失われた 10 支族”の末裔である事は上記の事実で十分に証明しているが、イエスがカシミールを訪れ、彼の地で暮し、没した事柄の最大の証は、カシミール地方にあるスリナガール市カンヤール町に現存するイエスの墓である。ラウザバルと呼ばれるこの墓に葬られている人物としては、ユーズ・アシフ、ナビー・サヘブ、シャハザダー・ナビー、イサー・サーヘブ等様々な名が挙っている。信頼でき得る歴史的記述によれば、ユーズ・アシフは 1900 年余前にカシミールに来て、福音書に書かれた比喻を多く用いて説教したらしい。歴史書では、ユーズ・アシフは、ナビー（預言者）と記されている。一方聖書には“人を集める人”を意味するヤサーという名で記されているが、このヤサーはイエスの記述名である。イエスの使者がイスラエルの失われた十支族を主の囲いに集めた時、イエス自身がこう語った。「私にはまた、この囲いに属さない他の羊があります。私はそれも導かなければなりません。彼等は私の声に聞き従い、一人の牧者、一つの群れとなるのです。」(ヨハネ 10 章 6 節)

次の史実もこの問題をある程度解明している。その墓はある預言者のものとして良く知られている。彼は皇子であり外国からカシミールに来て、カシミールの人々に説教を聞かせた。その名をユーズ・アシフと言った。(Tarikh Azami, pp82- 85)。ユーズ・アシフはカシミールと呼ばれる国に来るまで幾つかの地を彷徨った。そして遙か遠い彼の地を訪れ、死ぬまでそこで過ごした。(Ikmat al-Din, pp358-359)。前述の如く、カシミール伝説にはある預言者を語った作りがある。彼はカシミールに住み、イエスの様に比喻、小話を用いて人々に説いて聞かせた。それ等の比喻小話は今もカシミールに伝わっている(John Noel's article in Asia, Oct. 1930)。だから、イエスがインドに行きスリナガールで没したのは合理的、歴史的観点からして真実と見て間違いない。

この問題を更に詳しく調べるには、救世主アハマドによる書“Masih Hindustan Main”（インドのイエス）を編くのが良い。又、“Nazarene Gospel Restored”も参考になろう。この書の著者達は、西暦 30 年に十字架にかけられたイエスが復活後数十年生存したと主張している。十字架から救出された後、イエスはどこで峠と共に平穏に暮し、永遠の眠りに就いたのか。それに関する最も詳しい記述はクルアーンに見られる。「緑と谷と泉のある高地」これは美しいカシミール渓谷を語ったものである。ニコラス・ノトピッチはカシミールを“永遠の樂園の谷”と呼んだ。

注 20 神の使者は、人々を同一不二と成した。それは、彼等が同じ神を崇め、同じ教えに従い、この世に慈愛に満ちた神の国を造るという同じ目的を以ていたからである。

54. 然るに、人々は自らの都合で分裂し、いろいろなる宗派を創りてそれぞれ自分の奉ずるものに歓喜す。(注 21)
فَنَقَطُوا أَمْرَهُمْ بَيْنَهُمْ زُبُرًا كُلُّ حِزْبٍ بِمَا لَدَيْهِمْ فَرِحُونَ ⑤④
55. されば、暫らく、彼等を混乱のままに捨ておけ。
فَذَرُهُمْ فِي غُرَّتِهِمْ حَتَّىٰ حِينٍ ⑤⑤
56. 彼等は、富と子宝をわれらが授けるために、
أَيَحْسَبُونَ أَنَّنَا نُمِدُّهُمْ بِهِ مِنْ قَالٍ وَبَيْنٍ ⑤⑥
57. われらが進んで彼等に好いことをなすとしても考えているのか？然らず、されど、彼等は之を悟らず。(注 22)
نُسَارِعُ لَهُمْ فِي الْخَيْرَاتِ بَلْ لَا يَشْعُرُونَ ⑤⑦
58. げに主を畏れて尊敬する者、
إِنَّ الَّذِينَ هُمْ مِنْ خَشْيَةِ رَبِّهِمْ مُشْفِقُونَ ⑤⑧
59. 主のさまざまなる神兆を信ずる者、
وَالَّذِينَ هُمْ بِآيَاتِ رَبِّهِمْ يُؤْمِنُونَ ⑤⑨
60. 主とならべて如何なる他神も祀らぬ者、
وَالَّذِينَ هُمْ بِرَبِّهِمْ لَا يُشْرِكُونَ ⑥①
61. 主の許に帰るべきことを想うてその胸を畏敬に満たし、施すべきものは惜しみなく施す者、
وَالَّذِينَ يُؤْتُونَ مَا آتَوْا وَقُلُوبُهُمْ وَجِلَةٌ أَنَّهُمْ إِلَىٰ رَبِّهِمْ رَاجِعُونَ ⑥②
62. これ等の者こそ進んで善行を競い、その先頭を争う者なり。
أُولَٰئِكَ يُسْرِعُونَ فِي الْخَيْرَاتِ وَهُمْ لَهَا سَابِقُونَ ⑥③
63. われらは如何なる者にもその能力以上に負担を課せず。(注 23) またわれらの許に真実を語る帳簿あるなれば、(注 24) 人々は不当に遇せられることなかるべし。
وَلَا نُكَلِّفُ نَفْسًا إِلَّا وُسْعَهَا وَلَدَيْنَا كِتَابٌ يَنْطِقُ بِالْحَقِّ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ⑥④
64. なれど、彼等の心はこの帳簿に全くうかつなれば、その所業は悪事ばかりなり。
بَلْ قُلُوبُهُمْ فِي غَمْرَةٍ مِنْ هَٰذَا وَلَهُمْ أَعْمَالٌ مِّنْ دُونِ ذَٰلِكَ هُمْ لَهَا عَمِلُونَ ⑥⑤

注 21 すべての預言者の死後、彼の弟子達は分裂し、それぞれに自らこそ真の後継者であると主張し、他者を真実を持たざる者と非難する。

注 22 何をもって成功したと見なし、又何をもって神の御慈愛を得たと見なすのか。人はそれを富・権力・名声で量ろうとするが、これは誰もが犯し易い誤りであり、前節及びこの節ではこの誤りを正す様求めている。

注 23 人の道徳的・精神的成長の為に神がクルアーンに示された律法は、力の及ぶ範囲でこれに従わねばならない。その律法はどのような状況にも、又どのような気質の人々にも適したものである。

注 24 クルアーンに示された教えは英知に基づくものであり、あらゆる状況、あらゆる人々に適しており、正義・公正・英知の求めに応じている。この事が「真実を語る帳簿」という言葉の意味する処である。

65. われら彼等の中の奢り^{うち}にふける者を懲らしめんと捕えると、見よ、彼等はその時になって、助けを求めて泣き叫ぶ。
حَتَّىٰ إِذَا أَخَذْنَا مُتْرَفِيهِمْ بِالْعَذَابِ إِذَا هُمْ يَجْعَرُونَ ﴿٦٥﴾
66. 「今となって、泣き叫ぶな。お前たち断じてわが助けを受けざるべし。
لَا تَجْعَرُوا الْيَوْمَ إِنَّكُمْ مِنَّا لَا تَنْصُرُونَ ﴿٦٦﴾
67. 数々のわが神兆^{しんし}はすでにお前たちに読誦^{よみ}されたるものを、その都度お前たちは踵を廻らして去り、
قَدْ كَانَتْ آيَاتِي تُتْلَىٰ عَلَيْكُمْ فَكُنْتُمْ عَلَىٰ أَعْقَابِكُمْ تَنْكِصُونَ ﴿٦٧﴾
68. 傲慢にも、クルアーンを埒^はもない夜話しの種となせり」(注25)
مُسْتَكْبِرِينَ ۖ بِهِ سِيرُوا الْهَجْرُونَ ﴿٦٨﴾
69. 彼等は神の言葉をとくと思案せざるか、それとも、古の祖先に起らざりしものが彼等には生じたとでもいうのか？
أَفَلَمْ يَذَّبُوا الْقَوْلَ أَمْ جَاءَهُمْ مَا لَمْ يَأْتِ آبَاءَهُمُ الْأَوَّلِينَ ﴿٦٩﴾
70. 或いは、己が使徒を悟らず、之を拒むや？(注26)
أَمْ لَمْ يَعْرِفُوا رَسُولَهُمْ فَهُمْ لَهُ مُنْكَرُونَ ﴿٧٠﴾
71. はたまた、彼は狂人なりと云うのか？然らず、彼は人々に真理を携えり。なれど、世人の多くは真理を忌避す。
أَمْ يَقُولُونَ بِهِ جِنَّةٌ بَلْ جَاءَهُمُ الْحَقُّ وَآكَرَهُمْ لِلْحَقِّ كِرْهُونَ ﴿٧١﴾
72. もし真理が彼等の望み通りに従ったならば、天も地も、またその間にあるものは悉く墮落せり。然らず、われらは彼等に訓戒をもたらしたれど、彼等はそれから脇へそれたり。
وَلَوْ اتَّبَعَ الْحَقُّ أَهْوَاءَهُمْ لَفَسَدَتِ السَّمَوَاتُ وَالْأَرْضُ وَمَنْ فِيهِنَّ ۚ بَلْ أَتَيْنَهُم بِذِكْرِهِمْ فَمِنْهُمْ عَنْ ذِكْرِهِمْ مُعْرِضُونَ ﴿٧٢﴾
73. それとも、汝は彼等に報酬を求むるか？汝の主の報酬こそ最上なり。彼こそは最上の供給者なり。(注27)
أَمْ تَسْأَلُهُمْ خَرْجًا فَقَرْجُ رَبِّكَ خَيْرٌ ۖ وَهُوَ خَيْرُ الرَّازِقِينَ ﴿٧٣﴾

注25 傲慢という語は次の様な意味を持つ。意志の弱い愚かな者にとり、クルアーンの啓示が余りにも偉大過ぎると不信心者は考える。又、彼等は、クルアーン朗唱を耳にすれば、傲慢な態度でその場を立ち去る。

注26 この節では、モハammad預言者の良識と、彼に敵対する者達の無分別が示されて来た。モハammad預言者の生活は彼等の前に開かれた本の様なものであり、彼等は預言者の生活が如何なる物か良く心得ている。それは非の打ち所無いものである。モハammad預言者の誠実で高潔な人と成りを熟知しているにもかかわらず、彼等は預言者に偽り有りと言い張る(10章17節参照)。

注27 モハammad預言者の行いは全ての誠意に基づくもので、自らの無私無欲の奉仕活動に如何なる報酬をも求めなかったが、それを端的に示す事柄がある。モハammad預言者は、心優しい伯父アブ・タリブに、偶像崇拜者への説教を諄めて彼等と妥協してはどうかと勧められた時、次の様に答えた。「もし彼等が私の右に太陽を

74. 確かに、汝は彼等を正しい道に導く。

وَأَنَّكَ لَتَدْعُوهُمْ إِلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿٧٤﴾

75. されど、来世を信ぜざる者どもは、その道から逸脱す。

وَأَنَّ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ عَنِ الصِّرَاطِ لَنُكَيِّبُونَ ﴿٧٥﴾

76. たといわれらが彼等に慈悲を垂れ、彼等の災難を取り除くとも、彼等は盲目的にさまよい、なお罪を重ねん。

وَلَوْ رَحِمْنَاهُمْ وَكَشَفْنَا مَا بِهِمْ مِنْ ضُرٍّ لَلَجُوا فِي طُغْيَانِهِمْ يَعْمَهُونَ ﴿٧٦﴾

77. われらすでに彼等に罰を加えしも、彼等はその主の御前でへりくだることなく、また謙虚に哀願することもなかりき。

وَلَقَدْ أَخَذْنَاهُم بِالْعَذَابِ فَمَا اسْتَكَانُوا لِرَبِّهِمْ وَمَا يَتَضَرَّعُونَ ﴿٧٧﴾

78. されど、われらが恐ろしい罰の扉を彼等の前に開くとき、見よ、彼等はその時初めて絶望す。(注28)

حَتَّىٰ إِذَا فَتَحْنَا عَلَيْهِم بَابًا ذَا عَذَابٍ شَدِيدٍ إِذْ هُمْ فِيهِ مُبْلِسُونَ ﴿٧٨﴾

第五項

79. 彼こそはお前たちに、耳や眼や心を創り給うたお方なり。然るに、お前たちは殆ど感謝せず。(注29)

وَهُوَ الَّذِي أَنشَأَ لَكُمُ السَّمْعَ وَالْأَبْصَارَ وَالْأَفْئِدَةَ قَلِيلًا مَّا تَشْكُرُونَ ﴿٧٩﴾

80. また、お前たちを地上に殖やし給うたお方は、彼なり。而して、お前たちいずれは彼の許へ召し寄せられん。

وَهُوَ الَّذِي ذَرَأَكُمْ فِي الْأَرْضِ وَإِلَيْهِ تُحْشَرُونَ ﴿٨٠﴾

81. 生死を与うるも彼なり。昼夜の交替を支配するもまた彼なり。お前たちまだわからざるか？(注30)

وَهُوَ الَّذِي يُحْيِي وَيُمِيتُ وَلَهُ اخْتِلَافُ اللَّيْلِ وَالنَّهَارِ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ﴿٨١﴾

82. 然るに、彼等は昔の人々が云えると同じことを云う。

بَلْ قَالُوا امِثْلَ مَا قَالِ الْأَوَّلُونَ ﴿٨٢﴾

左に月を置いて、偶像崇拜者への説教を諦める様促したとしても、私は使命を果たすまでは決してその要求に応じない。使命を果たすか、あるいは使命のために人生をささげて終わるかどちらかだ。」この預言者の言葉は忘れてはならない(Taloari, 巻)。

注28 事が順調に運んでいる時、人の気持ちは四方に散り、悪事にふける様になる。しかし自らの愚かな行為の末不幸な結末を迎えた時、人は絶望に陥る。

注29 「感謝」という語の持つ意味の一つに贈り物の正しい使い方というものがあるが(14:8)、この節では神からの贈り物について述べられてある。我々は神より授けられた目、耳、心を正しく用いて、身体的、精神的に神のしるしを見、神の言葉に耳を傾け、それについて深く考えねばならない。

注30 この節では国家の栄枯盛衰が暗示されている。一度権力の座に付き栄華を極めた人々は、その悪業の結果衰退し、死に至るのである。

83. 彼等は云えり、「なんと^{いかに}な！我等死んで、土と骨とに歸したる後、再び甦らしめられるとな？」
قَالُوا إِذَا مِتْنَا وَكُنَّا تُرَابًا وَعِظَامًا إِنَّنَا لَنَبْعُوهُنَّ ﴿٨٣﴾
84. 以前にも我等や我等が父祖たちが約束されたることは、これなり。こは古の伝説にすぎず」と。
لَقَدْ وَعِدْنَا نَحْنُ وَآبَاؤُنَا هَذَا مِنْ قَبْلُ إِنَّ هَذَا إِلَّا آسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ﴿٨٤﴾
85. 云え、「大地とそこにある一切は誰の所有なるか、お前たち^こ之を知るや？」と。
قُلْ لَيْسَ الْأَرْضُ وَمَنْ فِيهَا إِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٨٥﴾
86. 彼等は云わん、「アッラーなり」と。云え、「お前たちまだ留意せざるか？」と。
سَيَقُولُونَ لِلَّهِ قُلْ أَفَلَا تَذَكَّرُونَ ﴿٨٦﴾
87. 云え、「七つの天の主、偉大なる玉座の主は誰ぞ」と。
قُلْ مَنْ رَبُّ السَّمَوَاتِ السَّبْعِ وَرَبُّ الْعَرْشِ الْعَظِيمِ ﴿٨٧﴾
88. 彼等は云わん、「そはアッラーなり」と。云え、「お前たちそれでも彼を自分たちの守護者と敬うざるか？」と。
سَيَقُولُونَ لِلَّهِ قُلْ أَفَلَا تَتَّقُونَ ﴿٨٨﴾
89. 云え、「一切の支配権を掌握し、他を庇護すれど、自らは庇護されざる者は誰ぞ、お前たち^こ之を知るや？」と。
قُلْ مَنْ بِيَدِهِ مَلَكُوتُ كُلِّ شَيْءٍ وَهُوَ يُجِيرُ وَلَا يُجَارُ عَلَيْهِ إِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٨٩﴾
90. 彼等は云わん、「すべてはアッラーの所有なり」と。云え、「ならば、何故にお前たちは惑わされるか？」と。
سَيَقُولُونَ لِلَّهِ قُلْ فَأَنَّى تُسْحَرُونَ ﴿٩٠﴾
91. それどころか、われらは彼等に真理をもたらししたれど、彼等は確かに嘘つきなり。
بَلْ آتَيْنَهُم بِالْحَقِّ وَإِنَّهُمْ لَكَاذِبُونَ ﴿٩١﴾
92. アッラーは子を設けず、また彼の外に如何なる神もなし。もしそのような場合は、それぞれの神が己が創りしものを選び去り、その或る者は必ず他の者を支配せん。彼等が主張するものより遙か高くなりますアッラーに讃えあれ！（注 31）
مَا اتَّخَذَ اللَّهُ مِنْ وَلَدٍ وَمَا كَانَ مَعَهُ مِنْ إِلَهٍ إِذَا لَذَهَبَ كُلُّ إِلَهٍ بِمَا خَلَقَ وَلَعَلَّ بَعْضُهُمْ عَلَى بَعْضٍ سُبْحَنَ اللَّهُ عَمَّا يُصِفُونَ ﴿٩٢﴾

注 31 イエスが神の子であるというキリスト教義が偽りである事を、この節で論証している。人が事を成就する際息子の手助を必要とするが、神は天地の創造主であり、全宇宙の唯一の支配者である。神に、他の者や息子の助力は不要である。又、全宇宙は一定の法則に支配されており、宇宙の創造・目的・支配の統一は創造主と支配者の一致を示している。支配の二元性は混乱を無秩序を示すものである。

93. 見えざるものも、見えるものも知り給うお方！故に彼は、彼等が彼に配する者の上に高くいまし給う。

عَلِيمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ فَتَعَلَّاهُ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿٩٣﴾

第六項

94. 云え、「主よ、汝我に、彼等が約束されたことを、示し給うならば。

قُلْ رَبِّ إِنَّمَا تُرِيدُنِي مَا يُوعَدُونَ ﴿٩٤﴾

95. 主よ、我を不義者の仲間に加え給うな」と。
(注 32)

رَبِّ فَلَا تَجْعَلْنِي فِي الْقَوْمِ الظَّالِمِينَ ﴿٩٥﴾

96. げにわれらは、彼等に約束せしことを汝に示す能力あり。

وَأَتَا عَلَى أَنْ تُبَيِّنَ مَا نَعِدُهُمْ لَقَدْ رَوْنُ ﴿٩٦﴾

97. 善行で悪を撃退せよ。われらは、彼等の主張することを熟知す。(注 33)

إِذْفَعْ بِالَّتِي هِيَ أَحْسَنُ السَّيِّئَةِ نَحْنُ أَعْلَمُ بِمَا يَصِفُونَ ﴿٩٧﴾

98. 而して、云え、「主よ、悪党どものそそのかしに乗せられぬよう、我を護り給え。(注 34)

وَقُلْ رَبِّ أَعُوذُ بِكَ مِنْ هَزْبِ الشَّيْطَانِ ﴿٩٨﴾

99. 彼等が近づかぬよう、汝、我が主よ、我を護り給え」と。

وَأَعُوذُ بِكَ رَبِّ أَنْ يَحْضُرُونِ ﴿٩٩﴾

100. 死が彼等の一人に臨む時、その者は懇願して云う、「主よ、我を還らしめよ、

حَتَّىٰ إِذَا جَاءَ أَحَدَهُمُ الْمَوْتُ قَالَ رَبِّ ارْجِعُونِ ﴿١٠٠﴾

101. 正しい行為をするために、置き去りし我が命に」と。決して然らず。そは口先だけの出まかせにすぎず。彼等の背後には、再び甦らしめられるまで障壁が立ち塞ぐ。
(注 35)

لَعَلِّي أَعْمَلُ صَالِحًا فِيمَا تَرَكْتُ كَلَّا إِنَّهَا كَلِمَةٌ هُوَ قَائِلُهَا وَمِنْ وَرَائِهِمْ بَرْزَخٌ إِلَى يَوْمِ يُبْعَثُونَ ﴿١٠١﴾

注 32 この章はメッカ時代末期に現れた。モハammad預言者はメッカを去ろうとしていた。クライシュはモハammad預言者を迫害し、メッカより追放した為、彼等に將に天罰が下ろうとしていた。天罰の下る時モハammad預言者はメッカ退去の許しを得る為神に祈る様教えを受けている。

注 33 メッカで不信心者と共に有る限り、あらゆる迫害に耐え、悪に善で報いなければならないと、モハammad預言者は此処で申し渡されている。

注 34 「悪党ども」は、モハammad預言者に敵対する者の内、指導的役割を果たす者を指す。「そそのかし」とは、モハammad預言者を中傷し、その実像を歪めて伝える事により、人々の間に預言者への反感を育む動きの事である。

注 35 「障壁」とは二者間の障害物という意味を持つが、教義上は死亡した日から復活した日までの中間期間を指す。天国へいけるのか地獄に落ちて罰を受けるのかはまだ定まってない状態を表わす。クルアーンではこれを未発達の状態とし、一方復活を完全に発達した魂の誕生と位置付けている。

102. 而してその日、喇叭が吹き鳴らされれば、
彼等の間の血縁の絆は絶たれ、互に安否を
問うこともなかるべし。(注36)
فَإِذَا نُفِخَ فِي الصُّورِ فَلَا أَنْسَابَ بَيْنَهُمْ يَوْمَئِذٍ
وَلَا يَتَسَاءَلُونَ ⑩
103. その時、秤り重い人々これ等は栄えん。
فَمَنْ ثَقُلَتْ مَوَازِينُهُ فَأُولَئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ⑪
104. されど、秤り軽い者どもは、その魂は滅
び、地獄が彼等の住居とならん。
وَمَنْ خَفَّتْ مَوَازِينُهُ فَأُولَئِكَ الَّذِينَ خَسِرُوا
أَنْفُسَهُمْ فِي جَهَنَّمَ خَالِدُونَ ⑫
105. 業火は彼等の面を焦がし、その中で苦悶
に齒をむき出さん。
تَلْفَحُ وُجُوهَهُمُ النَّارُ وَهُمْ فِيهَا كَالِحُونَ ⑬
106. 「わが神兆はお前たちに、読誦せられざ
りしか、而してお前たち之を虚偽なりと
看做さざりしか？」
أَلَمْ تَكُنْ أَيْتِي تَتْلَىٰ عَلَيْهِمْ كُنُوزَهَا
تُكَذِّبُونَ ⑭
107. すると、彼等は云わん、「主よ、悲運に我
等は打ちのめされり。我等は迷誤の民なり
き。
فَالْوَارِثُ عَلَبْتَ عَلَيْنَا شَقَوْتَنَا وَكُنَّا قَوْمًا
ضَالِّينَ ⑮
108. 我等の主よ、ここから我等を出し給え。
もし再び違犯を繰り返さば、その時こそ本
当の悪人たるべし」と。
رَبَّنَا أَخْرِجْنَا مِنْهَا فَإِنْ عُدْنَا فَإِنَّا ظَالِمُونَ ⑯
109. 神は云わん、「火の中へ立ち去れ。われに
物云うことなかれ。(注37)
قَالَ اخْسَوْا فِيهَا وَلَا تُكَلِّمُونِ ⑰
110. わが僕等の中には、『主よ、我等は信ず。
故に、我等の罪を赦し給え。而して、我等
に慈悲を垂れ給え。汝はいと慈悲深き御方
にまします故に』と云いし一団あり。
إِنَّهُ كَانَ فَرِيقٌ مِّنْ عِبَادِي يَقُولُونَ رَبَّنَا آمَنَّا
فَاغْفِرْ لَنَا وَارْحَمْنَا وَأَنْتَ خَيْرُ الرَّاحِمِينَ ⑱
111. 然るに、お前たちは彼等をあざ笑ひ、嘲
笑し続けてる間にわれを念ずることを忘れ
たり。(注38)
فَاتَّخَذُوا لَهُمْ سَخِرًا حَتَّىٰ اسْتَوَلَتْ دَرَكِيُّ وَلَكِنَّهُمْ
مِّنْهُمْ تَصْحَكُونَ ⑲

注36 ある人物に罰が下される時、彼の家系・家柄は全く考慮されない。裁きの日評価されるのはその人物の善行であって、血縁及び交友関係は何の役にも立たない。

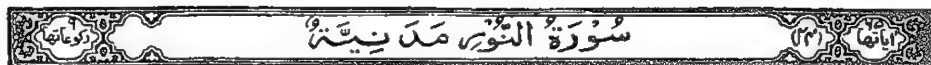
注37 神の使者を見下し、否定する者は、裁きの日に地獄へ落ち、憎しみと軽蔑を受ける。生前の悪事に対する弁解は許されない。神は全てを御存知なのだから。

注38 この節は次の様な意味を持つ。信心者は貧しく弱いので、不信心者は信者の意にかかわらず彼等を雇い、搾取し、報酬無しに労働を強要する。

112. われは今日、彼等が耐え忍びしことに對し報いたり。至福を成就せるは、げに彼等なり」と。
113. 神は問わん、「お前たち、地上に何年留まりたるか？」と。
114. 彼等は答えん、「一日か、否、その何分の一かにすぎず。(注39) なれど、数えていた者に之を問い給え」と。
115. 神は云わん、「お前たちが地上に留まりたるは、僅かなり。もしお前たち此の意を知らば！」
116. ならばお前たち、われらは意味もなくお前たちを創れりと思えるか？また、われらが許に連れ戻されることなるべし、と思えるか？」と。(注40)
117. 崇高なり真実の王者アッラー。栄光の玉座の主たる彼以外に神なし。
118. なんの証明もなしにアッラーと共に他神を祈る者を、主はいずれ必ず清算せん。げに不信心者どもは栄えざるべし。
119. 云え、「主よ、赦し給え。慈悲を垂れ給え。汝は最上の慈悲者なり」と。
- إِنِّي جَزَيْتَهُمُ الْيَوْمَ بِمَا صَبَرُوا إِنَّهُمْ هُمُ الْفَائِزُونَ ﴿١١٢﴾
- قُلْ كَمْ لَكُمْ لَيْتُمْ فِي الْأَرْضِ عَدَدَ سِنِينَ ﴿١١٣﴾
- قَالُوا لَيْتَنَّا يَوْمًا لَّأَوْبَعُصَ يَوْمٍ فَتُكَلِّمَ الْعَادِينَ ﴿١١٤﴾
- قُلْ إِنْ لَّيْتُمْ إِلَّا قَلِيلًا لَّوَأَنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿١١٥﴾
- أَفَحَسِبْتُمْ أَنْتَابَا خَلَقْنَاكُمْ عَبَثًا وَأَنْتُمْ تُبَالَا تُرْجَعُونَ ﴿١١٦﴾
- فَقُلْ اللَّهُ الْمَلِكُ الْحَيُّ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ رَبُّ الْعَرْشِ الْكَرِيمِ ﴿١١٧﴾
- وَمَنْ يَدْعُ مَعَ اللَّهِ إِلَهًا آخَرَ لَا بُرْهَانَ لَهُ بِهِ لَا فَاِتِّمَاءَ لِحِسَابِهِ عِنْدَ رَبِّهِ إِنَّهُ لَا يُفْلِحُ الْكَافِرُونَ ﴿١١٨﴾
- يَقُ ۖ وَقُلْ رَبِّ اغْفِرْ وَارْحَمْ وَأَنْتَ خَيْرُ الرَّحِيمِينَ ﴿١١٩﴾

注39 安楽な生活というものは、後に罰を受けた時、それが如何に短く、又、悔恨と無念を作うものであるかが明らかになる。人生の快樂とはむなく短命であることが、不信心者を例にとれば良く分かる。

注40 人間は、神の屬性を自らに育み、再現するという偉大な目的成就の為に創り出された。神の特性を授けられ、全創造物少なくともこの宇宙に存在する創造物の中心的役割を担っている。神の御意志を成就するという偉大な目標を授けられている為、人間の一生は、この世を離れ、魂が肉体を離れても終わる事はないであろう。人間の魂は、新たな世界へ新たな形を取り、新たな肉体へと永遠の旅を続けるであろう。肉体が滅びれば魂も共に滅びるという考え方は、宇宙創造における神の栄知・御計画・目的に反するものである。



アル・スール
(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. こはわれらが降せる一章にして、義務として課せられた掟なり。(注1)われらはお前たちに注意せしむがために、その中に明白なる戒律を降したり。(注2)

سُورَةٌ أَنْزَلْنَاهَا وَفَرَضْنَاهَا وَأَنْزَلْنَا فِيهَا آيَاتٍ بَيِّنَاتٍ لِّكُلِّ مَن تَذَكَّرُونَ

3. 淫婦並びに姦夫には、各自百回の笞打を科せ。アッラーの裁きを執行するに当り、お前たち、もしアッラーと審判の日を信するならば、兩名に対して哀れみをかけるは不用なり。而して、数名の信者にその仕置きに立合せよ。(注3)

الزَّانِيَةُ وَالزَّانِي فَاجْلِدُوا كُلَّ وَاحِدٍ مِّنْهُمَا مِائَةً جَلْدَةٍ وَلَا تَأْخُذْكُمْ بِهِمَا رَأْفَةٌ فِي دِينِ اللَّهِ إِنْ كُنْتُمْ تُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ وَلَشَهِدُ عَلَيْهِمَا كَلِيفَةٌ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ

注1 この節で「義務として課せられた掟」と示されているように、ここでは、この章の戒律の重要性を強調している。それは、クルアーン全章が神により啓示され、そこに示された戒律は全て守る事を義務付けられているからである。

注2 遺憾ながら、愚かにも他教徒の慣習を模倣して、イスラム教徒はクルアーンの他の章にある規律以上に、この章の戒律に背いてきた。

注3 イスラム法典において、男女間の貞節は、徳目として非常に重要なものである。この章では、貞節を守る為の広範に渡る戒律が定められている。イスラム教はこの法を犯す事を固く禁じている。イスラム教の貞節に関する厳しさは、次に述べる姦通・姦淫に対する罰則に良く表われている。罰として「各自百回の笞打」が科されており、罪を犯した男女共に既婚か未婚か、あるいは一方が既婚で他方が未婚等、様々な場合が想定できるが、それにより懲罰に差異が加えられる訳ではない。この節では、笞刑を用いるとなっており、姦通・姦淫や他の重罪に対して投石にする死刑を行なうとはクルアーンでは定められていない。姦通罪より遙かに極悪非道な殺人罪、強盗罪、反逆罪、あるいは治安を乱す罪に対してすら、イスラム教では死刑を規定していない。これ等の罪に科す極刑は死刑であるが、第一級犯罪(2:179)に対しては慰謝料支払いが、その他の犯罪(5:33-34)に対しては禁固・流刑が定められている。既婚の奴隷女が姦通罪を犯した場合クルアーンの別の章(4:26)に書かれてある様に、自由な身分の既婚女性と比べると、罰は半減される。投石のように死に至らせるような刑はどうやって半分にできようか? だから、不貞節の罰は死刑ではあり得ないのだ。

クルアーンは、姦通罪に対して笞刑を課す事が明記されており、その適用は罪人の既婚・未婚を問わなかった。又、この節及び他の関連する節には、モハammad預言者の高潔な配偶者アイシャに関して彼女自身既婚であったにもかかわらず、謂われ無き中傷の在った事も記されている。これ等の事実にもかかわらず、イスラム教の神学の学派の中には正当な理由無く、言語学者の手を経ずして、「この節では、姦通罪に対する罰則として、未婚者には笞刑を、既婚者には投石による死刑を規定している。」という誤った解釈を教えている所もある。この誤認は、既婚の姦通罪者がモハammad預言者の命により投石による死刑を科せられたと書かれたハディースにある二・三の例を拠り所としている様である。この内の一例は、ユダヤ人男女に関するもので、彼等はモーゼ

4. 姦夫は、淫婦か多神教徒の女以外結婚してはならぬ。淫婦も、姦夫が多神教徒の男以外結婚してはならぬ。このことは信者に堅く禁ぜられる。

الَّذِينَ لَا يَنْكِحُوا إِلَّا زَوَاجَهُمْ أَوْ مَا بَيْنَ يَدَيْهِمْ زَوَاجًا
لَا يَنْكِحُهَا إِلَّا زَانٍ أَوْ مُشْرِكٌ وَحُرْمٌ ذَلِكَ عَلَى
الْمُؤْمِنِينَ ⑤

5. 貞節なる女を中傷し、^{しか}而も四人の証人を挙げ得ざる者には、八十回^{むらうち}の笞打を科せ。(注4) 今後そのような者の証言は決して受け入れるなかれ。彼等は違犯者なり。

وَالَّذِينَ يَزُمُونَ الْمَحْصَنَاتِ ثُمَّ لَا يَأْتُوا بِلَايَةٍ
شَهَادَةٍ فَاجْلِدُوهُمْ ثَمَانِينَ جَلْدَةً وَلَا تَقْبَلُوا
لَهُمْ شَهَادَةً أَبَدًا وَأُولَئِكَ هُمُ الْفَاسِقُونَ ⑥

の律法に基づき投石刑を受けた(ブハリ)。モハammad預言者の行いは不変であり、新しい戒律が啓示されるまでは、旧約聖書に基づき罪を裁いた。投石刑の科せられた記録が一・二あるが、その罪の犯されたのが、当節が啓示された前か後かは定かではない。この節の啓示前に犯罪が行われた場合でも、記録者の誤りで、啓示後に起こされたものと誤記されている可能性もある。ハディースにはその様な記事錯誤の部分が発見されている。あるいは当時、世の中が深刻な状況で、その為モハammad預言者が姦通罪人以外にも死刑を科したか、又記録者がその状況を考慮し損じたのかもしれない。さもないければ、モハammad預言者が明確な神の戒律に背く事は不可解である。

姦通罪に対する罰則の誤解を生み出す事となったもう一つの原因は、モハammad預言者の後継者オマルとアリーにあると言える。オマルは次の様に語ったと記録されている。「律法には、投石刑についての一節があった。我々はそれを読み、理解し、覚えた。モハammad預言者は姦通罪者に投石刑を科し、我々も又彼に従った。人々が律法に書かれてない事を付け加えたのはオマルだと言っているではないか。」(Kashf al-Ghummah, 2巻、P・111) ハディースは全くの偽文書か、良くてオマルの言葉を誤解したものと思われる。オマルがクルアーンの一部であると言っているものを書き忘れることなどあり得ない、そして、オマルが正しいことをするのに人々を、おそれてそれをしなかったという事は考えられない。もしオマルが本当に言ったのならクルアーンに必ず書き入れるはずである。又、姦通罪を犯した女性を笞打した後投石死に追いやったアリーは、次の様に語ったと記されている。「私は戒律に基き彼女を笞打ち、モハammad預言者の行いに従い彼女に投石死を科した。」(ブハリ) これ等の言葉から、二つの推論が導き出される。(1)姦通者を罰する際、モハammad預言者は、クルアーンに規定された神の戒律に反する刑を科した。しかしこれは有り得ない。(2)一方、ウマルは、姦通者に投石刑を科すべしという戒律がある。」と語っている。又アリーは「その様な戒律は無いが、モハammad預言者に習い、私も姦通者に投石刑を科した。」と述べている。両者の言は相矛盾するのみならず、神の戒律に背くものであり、それ由、偽造か、よしんば誤って伝えられたものとして否定せざるを得ない。

注4 姦通罪に次ぐ社会悪は、潔白な人に対する誹謗行為である。文明化されたいわゆる近代社会でよく見られるこの誹謗行為をイスラム教は戒め、無実の人を中傷する者に対して厳罰を持って処する。罰則には3種類のものがある。(a)体罰 (b)偽証者という烙印を押す事により、証言の法的効力を失くする。(c)罪人として扱う事で精神的恥辱を与える。告訴内容が真実か否かという点は、ここでは触れられていない。告発者は必要な証拠を提出しない限り偽証者とみなされ、規定の罰則を科せられる。姦通罪で告発された女性も、事実はどうであれ、証拠が揃わなければ無罪となる。法の意図する所は名誉毀損行為防止である。「貞節なる女」という語が用いられているが、この節の戒律は男女双方を対象としたものである。アラビア語では、男女両性に等しく関わる事柄を述べる時、男性の性が用いられる。しかし男性よりむしろ女性に関する事柄の場合は女性の性が用いられる。ここに書かれた戒律は名誉毀損に対する罰則に関するもので、被害者は男女両性であるとは言うものの、女性の方が一般的により被害は大きいので「貞節なる女」という語を用いているのである。同じく「中傷」する者」という語はアラビア語本文では男性語ではあるが、男女両性に適用される。

6. 但し、その後、悔悟して行状を改めたる者は除く。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。(注5)
7. 自分の妻を中傷し、しかも自分以外証人を挙げ得ざる者には、アッラーに誓って己れの言葉が真実なることを四度誓わしめよ。(注6)
8. ^{しか}而して、五度目には、もし自分が嘘つきなら、アッラーの呪詛を受けん、と誓わしめよ。
9. 男が嘘つきなることを、女がアッラーに誓って四度証言するなら、彼女は刑罰を免れん。
10. ^{しか}而して、五度目の誓いは、(注7)もし彼の言葉が真実ならば、アッラーの怒り我が上に降らんことをと誓わしめよ。
11. もしアッラーの恩恵と慈悲なかりせば、^{しか}然るに事実はあわれみ深く賢明なり、お前たちは災難に遭えり。
- 第二項
12. げにこの偽りを捏造せし者は、(注8)お前たちの中の一部の者どもなり。この事件
- إِنَّ الَّذِينَ تَابُوا مِنْ بَعْدِ ذَلِكَ وَأَصْلَحُوا إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ①
- وَالَّذِينَ يَرْمُونَ أَزْوَاجَهُمْ وَلَمْ يَكُنْ لَهُمْ شُهَدَاءُ إِلَّا أَنْفُسُهُمْ فَشَهَادَةُ أَحَدِهِمْ أَرْبَعُ شَهَدَاتٍ بِاللَّهِ إِنَّهُ لَمِنَ الصَّادِقِينَ ②
- وَالْخَامِسَةُ أَنَّ لَعْنَتَ اللَّهِ عَلَيْهِ إِنْ كَانَ مِنَ الْكَذَّابِينَ ③
- وَيَذَرُوهَا عَنْهَا الْعَذَابُ أَنْ تَشْهَدَ أَرْبَعُ شَهَدَاتٍ بِاللَّهِ إِنَّهُ لَمِنَ الْكَذَّابِينَ ④
- وَالْخَامِسَةُ أَنَّ غَضَبَ اللَّهِ عَلَيْهَا إِنْ كَانَ مِنَ الصَّادِقِينَ ⑤
- وَلَوْلَا فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهُ وَأَنَّ اللَّهَ تَوَّابٌ حَكِيمٌ ⑥
- إِنَّ الَّذِينَ جَاءُوا بِالْإِفْكِ عُصْبَةٌ مِّنْكُمْ لَا تَحْسَبُوهُ شَرًّا لَّكُم بَلْ هُوَ خَيْرٌ لَّكُمْ لِكُلِّ امْرِئٍ مِّنْهُمْ مَا أَكْتَسَبَ

注5 名誉毀損の場合、罪人が悔い改めれば刑罰の免除もあり得る。第①の体罰に関しては、有罪が確定次第施行されるので別として、後の二つの罰則は罪人の態度如何で免除もある。

注6 夫婦間に疑惑が生じ、家族関係がこじれる事もあるので、その様な場合に備えた特別の規定がある。

注7 妻が夫に告訴された時、4人の証人が妻を無罪と認めれば、残る一人の証人が夫を支持しても、妻は無罪となり、又夫も妻を告発した廉で裁かれる事はない。しかし、夫婦仲がこの様にこじれてしまえば最早纏りを戻す事もできず、夫婦関係は維持できないであろう。

注8 この節に述べられている痛ましい出来事が起きたのは、ヒジラ暦5年モハammad預言者がハニ・ムスタリク討伐を終えた帰路の最中であつた。イスラム軍はメディナの近くに夜営しなければならなかつた。この討伐の旅に、モハammad預言者は賢夫人アイシャを伴っていた。アイシャは用足しにキャンプを離れた。戻つた時、彼女はどこかにネックレスを落して來た事に気付いた。ネックレス自体は高価な物ではなかつたが、友人からの借り物だったので、彼女はそれを捜しに再び出かけた。戻ってみると、軍隊は、それまで彼女の乗っていたラクダと共に立ち去つた後だつた。彼女は当時まだ若く、体重も軽かつたので、召使い達は彼女が笠に

を自分たちへの禍いと思うなかれ。否、それはお前たちのために幸いなり。彼等各自、自らが稼いだ罪の責めを負う。中でも、張本人は重刑に処せらるべし。(注9)

13. お前たちそれを聞いた時、何故信者の男もまた女も自分たち仲間に対して善意に推測し、「こは明白なる虚偽なり」と云わざりしか?

14. 何故に彼等は之を立証すべく四人の証人を挙げざりしか? 彼等が必要なる証人を立て得ざりし以上、アッラーの目に彼等は確かに嘘つきなり。(注10)

15. もしお前たちにアッラーの恩恵と、現世並びに来世に於ける彼の慈悲がなかりせば、お前たちは、その没入した中傷のために、重刑を科せられたり。

16. お前たちは互に舌先でそれを知り、己れの知らざることを口から出まかせに語れり。而して、アッラーの目には重大なることを、軽視せり。

17. お前たち、それを聞いた時、何故に云わざりしか、「こは我等の口にすべきことに非ず。おお、神よ、汝に讃えあれ、こは悲しむべき中傷なり!」と。

مِنَ الْإِثْمِ وَالَّذِي تَوَلَّى كِبْرَهُ مِنْهُمْ لَهُ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿١٣﴾

لَوْلَا إِذْ سَمِعْتُمُوهُ ظَنَّ الْمُؤْمِنُونَ وَالْمُؤْمِنَاتُ بِأَنْفُسِهِمْ خَيْرًا وَقَالُوا هَذَا إِفْكٌ مُّبِينٌ ﴿١٤﴾

لَوْلَا جَاءُوا عَلَيْهِ بِأَرْبَعَةِ شُهَدَاءَ فَإِذْ لَمْ يَأْتُوا بِالشُّهَدَاءِ فَأُولَئِكَ عِنْدَ اللَّهِ هُمُ الْكَذِبُونَ ﴿١٥﴾

وَلَوْلَا فَضَّلَ اللَّهُ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتَهُ فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ لَمَسَّكُمْ فِي مَا أَفَضْتُمْ فِيهِ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿١٦﴾

إِذْ تَقَوُّنَ بِالْأَيْدِيكُمْ وَتَقُولُونَ بِأَفْوَاهِكُمْ مَا لَيْسَ لَكُمْ بِهِ عِلْمٌ وَتَحْسِبُونَهُ هَيِّئًا وَهُوَ عِنْدَ اللَّهِ عَظِيمٌ ﴿١٧﴾

وَلَوْلَا إِذْ سَمِعْتُمُوهُ قُلْتُمْ مَا يَكُونُ لَنَا أَنْ نَتَكَلَّمَ بِهَذَا سُبْحَانَكَ هَذَا بُهْتَانٌ عَظِيمٌ ﴿١٨﴾

乗り込んでいるものと思っていた。彼女はなす術も無く座り込み泣き、やがて眠りに落ちた。後から来た難民のサフワーンが彼女を見つけた。まだベールをつけることが規定される以前にサフワーンは彼女を目にした事があったので、一目でアイシャであるとわかり、サフワーンは彼女を自分のラクダに乗せ、自らはラクダの後ろを徒歩でメディナへ行った(ブハリ; ニカー書参照)。アブドゥラ・ビン・オバイ・ビン・サルールを首領とするメディナの偽善者達はこの出来事を利用しようと企み、アイシャに対しての悪意ある醜聞を触れ回った。残念ながら、イスラム教徒の中にこの企みに加わる者もあった。しかしアイシャの無実神の啓示により証明された。流言を広めた者達は罰せられ、以後この様な醜聞を禁じる啓示が与えられた。

注9 「張本人」とはメディナの偽善者達の首謀者であるアブドゥラ・ビン・オバイを指してゐる。彼こそが例の虚言を思い付き、人々に触れ回った張本人である。彼はイスラム教に刈向かい、メディナの王になる野望を抱いていたが、志を遂げずして不名誉な死を迎えた。

注10 イスラム教徒の男女を姦通罪で告訴する者は、四人の証人の裏付けを必要とする。姦通の目撃者を3人までしか集められなければ、告発者はイスラム法に基づき偽証者として扱われる。他人の姦通現場を目撃したからといって、その醜聞を触れ回る事は許されない。

18. アッラーはお前たちに、信者ならば、決して再びこのようなことを繰り返すべからず、と戒め給う。

يَعِظُكُمُ اللَّهُ أَنْ تَعُودُوا لِمِثْلِهِ أَبَدًا إِنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ١٨

19. アッラーは、お前たちに戒律を解きあかし給う。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَيُبَيِّنُ اللَّهُ لَكُمُ الْآيَاتِ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ١٩

20. 醜聞が信徒の間に広まることを喜ぶ者は、現世に於ても来世に於ても痛刑を受けん。(注 11) お前たちは知らざるも、アッラーは知り給う。

إِنَّ الَّذِينَ يُحِبُّونَ أَنْ تَشِيعَ الْفَاحِشَةُ فِي الَّذِينَ آمَنُوا لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ وَاللَّهُ يَعْلَمُ وَأَنْتُمْ لَا تَعْلَمُونَ ٢٠

21. もしお前たちの上にアッラーの恩恵と慈悲なかりせば、しかし事實はあわれみ深く慈悲深くまします、お前たちは滅亡させられたり。

وَلَوْلَا فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهُ وَأَنَّ اللَّهَ وَدُودٌ لَكُمْ لَنَفَذَ إِلَهُ الْأُمُورَ ٢١

第三項

22. 汝等信仰する者よ、悪魔の足跡に従うなかれ。悪魔の足跡に従う者は、悪魔が必ず醜行と悪事を強いることを知るべし。(注 12) もしお前たちの上にアッラーの恩恵と慈悲なかりせば、お前たちの一人として清浄なるはなかりしなり。されど、アッラーは、その嘉する者を清め給う。アッラーはすべてを聴き、知悉し給う。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَتَّبِعُوا خُطُوَاتِ الشَّيْطَانِ وَمَنْ يَتَّبِعْ خُطُوَاتِ الشَّيْطَانِ فَإِنَّهُ يَأْمُرُ بِالْفَحْشَاءِ وَالْمُنْكَرِ وَلَوْلَا فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهُ مَا زَكَا مِنْكُمْ مِنْ أَحَدٍ أَبَدًا وَلَكِنَّ اللَّهَ يُزَكِّي مَنْ يَشَاءُ وَاللَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ٢٢

23. お前たちの中の裕福な資産家に、親類縁者、貧者並びにアッラーの道のために家郷を捨てた人々のために、今後一切なにもやらぬと誓わしむるなかれ。(注 13) 彼等を赦し

وَلَا يَأْتِلْ أُولَؤُلَ الْفَضْلِ مِنْكُمْ وَالسَّعَةِ أَنْ يُؤْتُوا أُولَى الْقُرْبَىٰ وَالْمَسْكِينِ وَالْمُهَاجِرِينَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ

注 11 イスラム教は、姦通罪に関する偽証の流布を厳しく戒めて来た。姦通を犯した者だけでなく、その醜聞を広めた者も罰せられたが、むしろ後者の方がより重い刑を科せられた。散発的に起こる姦通よりも、世の中に性的不道德の蔓延する方が遙かに深刻な問題を引き起こすからである。もし真偽の定かでない醜聞の流布を見逃せば、地域社会の不徳行為に対する嫌悪感も薄れ、やがては不徳行為がはびこるようになるであろう。未来に対する悲観論が世に広まり、道徳基盤は根底から覆されるであろう。

注 12 人間は、明らかに悪いと分かる事には手を出さないし、又それを嫌らう。そこで悪魔はいきなり不徳な行いをする様に人間をそそのかすのではなく、たわい無い事から始めて徐々に人間の道徳観を麻痺させて行く。初め悪口を言いふらす程度だった者が次第にそれを他人に押し付ける様になり、結局は大罪を犯す事となる。

注 13 これはアブー・バクルの事を指す。彼は貧しい親族のミスターに小遣いを与えていたが、ミスターが不運にもアイシャ誹謗の件に巻き込まれてしまった為、それを打ち切ってしまった。

て、その違犯を見のがしてやれ。お前たちは、アッラーがお前たちを赦すことを望まざるか？アッラーは寛大にして、慈悲深くします。

24. 軽率なれど、貞節なる純真な信者の女を（注14）中傷する者は、現世に於ても来世に於ても呪詛せらる。彼等には厳罰あり。

25. 自分が爲したる所業に対して、己が舌や手や足が不利なる証言をする日、（注15）

26. その日アッラーは、彼等が受くべき応報を存分に支払わん。されば、彼等は、アッラーこそが明白なる真理なることを悟らん。（注16）

27. 悪いことは悪い性格の人のためにありて、悪人の心は悪事に傾く。また、善いことは善い性格の人のためにありて、善人の心は善事に傾き、彼等は人々の申し立てるすべての中傷から無垢なる者なり。容赦と榮譽ある給養は、彼等のためにあり。（注17）

第四項

28. 汝等信徒たちよ、許可を求めず、家人に挨拶もせずして、己れの家以外に入ることな

وَلْيَعْفُوا وَلْيَصْفَحُوا أَلَا تُحِبُّونَ أَنْ يَغْفِرَ اللَّهُ لَكُمْ
وَاللَّهُ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٢٣﴾

إِنَّ الَّذِينَ يَرْمُونَ الْمُحْصَنَاتِ الْغَافِلَاتِ الْمُؤْمِنَاتِ
لُعِنُوا فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ وَلَهُمْ عَذَابٌ
عَظِيمٌ ﴿٢٤﴾

يَوْمَ تَشْهَدُ عَلَيْهِمْ أَلْسِنُهُمْ وَأَيْدِيهِمْ وَأَرْجُلُهُمْ
بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٢٥﴾

يَوْمَ يَدْعِيهِمُ اللَّهُ دِيْنَهُمُ الْحَقَّ وَيَقُولُونَ
أَنَّ اللَّهَ هُوَ الْحَقُّ الْمُبِينُ ﴿٢٦﴾

الَّذِينَ نَسُوا اللَّهَ يَلْحَقُوا بِهِمُ الْعَذَابُ الَّذِي نَسُوا
وَالَّذِينَ نَسُوا اللَّهَ يَلْحَقُوا بِهِمُ الْعَذَابُ الَّذِي نَسُوا
مُبَرَّدُونَ وَمَا يَقُولُونَ لَهُمْ مَغْفِرَةٌ وَرِزْقٌ
كَرِيمٌ ﴿٢٧﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَدْخُلُوا بُيُوتًا غَيْرَ بُيُوتِكُمْ
حَتَّى تَسْتَأْذِنُوا وَاسْتَأْذِنُوا عَلَى أَهْلِهَا ذَلِكُمْ خَيْرٌ لَكُمْ

注14 アイシャ誹謗の件で「純真」という語が使われているのはこれは彼女の潔白を示すものである。徳を備えた人は、誤ちを犯す等、考えもしないものである。

注15 近年の科学的研究によりこの節が真実であると証明された。様々な機械が開発され、それを設置すれば、話声はもちろんの事、人の手・足や内臓の動く音まで保存できる。この機械は、警察が犯人を逮捕し取り調べる上で非常に役立っている。機械を通じて捕えられた犯人の舌・手・足の動きは、有罪の証拠となる。言葉や行動は現場に痕跡を残すことが科学の力で立証されている。クルアーンによれば、これ等の痕跡は必ず具体化するものであり、良しにつけ悪しきにつけ人の為した行いは後に手足の動きとなって現れ、その人の過去の動かぬ証拠となる。

注16 真実は全て相対的なものである。ある観点からすれば真実である事柄も見方を変えれば偽りとなる。絶対の真実は神のみである。

注17 「悪事」という語は不徳な行為・不快な発言を意味しており、この節では、悪人は悪事を行い不快な言葉を発し、悪口を言い触らすと主張している。一方、善人は行い発言共に正しいとも述べている。

かれ。(注18) その方がお前たちのためには良く、その中おそらくそれを悟らん。

29. 家に人なき時は、許しがあるまでは中に入ることなかれ。またもし、「帰ってくれ」と云われたる時は、帰るように。その方がお前たちのためにはより潔し。げにアッラーはお前たちの行為を熟知し給う。

30. お前たちの品物がある無人の家に入ることは、罪なし。アッラーは、お前たちが表わすことも隠すことも知り給う。

31. 男の信者たちに、その眼を抑え、(注19) 陰部を護れと云え。その方が彼等のためにより潔し。げにアッラーは彼等の行為を熟知し給う。

32. 女の信者たちに、その眼を抑え、陰部を護り、やむを得ず外に露^{あらわ}れたるところ以外はその美しさや飾り物を人目に触れさせてはならぬと云え。而して、そのヴェールを胸まで垂れ、己れの夫、又は父、又は夫の父、又は己れの子供たち、又は夫の子供たち、又は兄弟、又は兄弟姉妹の子供たち、又は行儀正しい女たち、又は己れの右手が所有する奴婢、又は性欲なき子供の下僕、又は女の恥部に関心を持たぬ幼児を除き、その美しさや飾り物を人目に触れさせることなかれ。また、彼女たちの隠れたる飾り物を人目に触れるほどに、その脚を印象づけるなかれ。汝等信徒たちよ、相い集いてアッラーにお縋り申せ、栄えんがために。
(注20)

لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُونَ ﴿٢٨﴾

فَإِنْ لَمْ يَجِدْ وَأَنْفِيهَا أَحَدًا فَلَا تَدْخُلُوهَا حَتَّىٰ يُؤْذَنَ لَكُمْ ۚ وَإِنْ قِيلَ لَكُمْ ارْجِعُوا فَارْجِعُوا هُوَ أَزْكَىٰ لَكُمْ ۗ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ عَلِيمٌ ﴿٢٩﴾

لَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ أَنْ تَدْخُلُوا بُيُوتًا غَيْرَ مَسْكُونَةٍ فِيهَا مَتَاعٌ لَّكُمْ ۗ وَاللَّهُ يَعْلَمُ مَا تُبْدُونَ وَمَا تَكْفُمُونَ ﴿٣٠﴾

قُلْ لِلْمُؤْمِنِينَ يَغُضُّوا مِنْ أَبْصَارِهِمْ وَيَحْفَظُوا أَرْوَاحَهُمْ ذَٰلِكَ أَزْكَىٰ لَهُمْ ۗ إِنَّ اللَّهَ بَخِيلٌ بِمَا يَصْنَعُونَ ﴿٣١﴾

وَقُلْ لِلْمُؤْمِنَاتِ يَغْضُضْنَ مِنْ أَبْصَارِهِنَّ وَيَحْفَظْنَ فُرُوجَهُنَّ وَلَا يُبْدِينَ زِينَتَهُنَّ إِلَّا مَا ظَهَرَ مِنْهَا ۚ وَلَا يَضْرِبْنَ بِخِبْرَتِهِنَّ عَلَىٰ جُيُوبِهِنَّ ۚ وَلَا يُبْدِينَ زِينَتَهُنَّ إِلَّا لِبُعُولَتِهِنَّ أَوْ آبَائِهِنَّ أَوْ آبَاءِ بُعُولَتِهِنَّ أَوْ أَبْنَائِهِنَّ أَوْ أَبْنَاءِ بُعُولَتِهِنَّ أَوْ إِخْوَانِهِنَّ أَوْ بَنِي إِخْوَانِهِنَّ أَوْ بَنِي أَخَوَاتِهِنَّ أَوْ نِسَائِهِنَّ أَوْ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُهُنَّ أَوِ التَّابِعِينَ غَيْرَ أُولِي الْإِرْبَةِ مِنَ الرِّجَالِ أَوِ الطِّفْلِ الَّذِينَ كَمْ يَظْهَرُونَ عَلَىٰ غُرَابٍ النِّسَاءِ وَلَا يَضْرِبْنَ بِأَرْجُلِهِنَّ لِيُعْلَمَ مَا يُخْفِينَ ۚ مِنْ زِينَتِهِنَّ ۗ وَتُوبُوا إِلَى اللَّهِ جَمِيعًا أَيُّهَا الْمُؤْمِنُونَ

注18 職場や家庭での会見を申し込む際、相手が受け入れてくれるかどうかを知るには、名刺や紹介状を取り次ぎに出すのが良いし、これは先に述べたクルアーンの教えにも添ったやり方である。

注19 先に示された通り、クルアーンは物事を外見で判断するのではなく、本質に迫るべきだと説いている。人物の評価はその本質によって決まる。良い性質は育てて行くべきであり、悪い性質は根絶しなければならない。邪まな考えは目を通して心に入り込む。それ故、この節ではイスラム信者の男女が出会う際視線を交える事を禁じて来た。

لَكُمْ تَفْلُحُونَ ﴿٥٠﴾

33. お前たちの中で、独り身の女、及び男の奴隷並びに女の奴隷で結婚に適する者は、結婚させよ。(注21) 彼等もし貧しくあらば、アッラーはそのお恵みを以て彼等を富ます。アッラーは慈悲深く、すべてを知悉し給う。

وَأَنْكِحُوا الْأَيَامَىٰ مِنْكُمْ وَالصَّالِحِينَ مِنْ عِبَادِكُمْ
وَأَمَّا بَكُمْ إِنْ يَكُونُوا فُقَرَاءَ يُبَيِّنَ اللَّهُ مِنْ فَضْلِهِ
وَاللَّهُ وَاسِعٌ عَلِيمٌ ﴿٥١﴾

注20 イスラム教におけるヴェールの持つ意味に関しては、イスラム信者の間にも甚だしい誤解があり、詳しい説明が必要である。此処にヴェールに関する節を全て記す。(1)イスラム教の女性信者は顔や膚を露わにせず、装飾品を除き自らの美しさを表に出さず、胸まで覆うヴェールをまとう。(当章24、32節参照)(2)預言者よ、貴人方の妻、娘、女性の信徒に告げよ。「ゆったりした長衣を身に付けなさい。そうすれば見分けが付き、不快な言葉をかけられる事もない。」(33:60) この節(33:60)で使われているアラビア語はジャラバーズ、単数形がジルバーズで長くゆるやかな外衣という意味を持つ。(3)預言者の妻達よ、貴女方が高潔であれば並の女達と同じではない。「甘い言葉でささやいてはいけない……。」(33章33-34節参照)(4)信者達よ、既婚者も未成年者も、日に三度許しを請いなさい。朝の祈りの前、夏の正午に衣を脱ぐ時、そして夜の祈りの後に(24:59)。

上記の四つの節から以下の推論がなされる。(a)イスラム教の女性は外出時にジルバーズという長衣をまとい、それは頭から胸まで覆うものでなければならぬ。これは重要な事でクルアーン 33章60節に記されている。長衣をまとうのは、イスラムの女性が所用で外出する際、いかがわしい人々による擬祝やみだらな言葉に苦しめられない為である。(b)イスラムの男女は出会った際互いに顔を見つめるのを避ける。(c)第三の戒律は明らかにモハムマド預言者の妻達に科せられたものであるが、クルアーンの教えとして、他のイスラム女性にも適用される。「家に留まれ」(33:34)という語は所用で外出する場合も含んでおり、イスラム女性の主な行動範囲は家庭内である。(d)三つの時間帯には、子供達すら両親の部屋へ入る事は許されないし、召使いや女奴隷は主人の寝室に入ってはならない。第一の戒律は女性が外出する際守らなければならないものである。彼女等は全身を覆う長衣を身に付けねばならない。第二の戒律はヴェールに関するもので、主に家庭内で、頻繁に訪れる男性の近親者と同席する際着用する。この時、男女互いに顔を合わす事を禁じているが、女性は更に、自らのそして衣服や装飾品の美しさを表に出さない様気遣わなければならない。近親者が時構わず頻繁に訪ねて来る度に長衣を着用するのは大変で実行し難いのでこれは不要である。家庭内でヴェールを着用するのは同席者が近親者だけの場合であるが、それ以外に、行儀正しい女たち、年老いた召使い、女奴隷、未成年の男子(思春期を迎えていない男の子)もその範ちゅうに入ると推論される。第一の戒律は屋外でヴェールを着用する場合、第二の戒律は屋内でヴェールを着用する場合であるが、関連する節33章60節およびこの節には2種類のベールの表現がある。33章60節には、女性は外出時長衣を家庭内で親族と同席する際は頭部を覆うヴェールを着用すべしとある。更に30章60節に外出時の長衣着用を定めている(これらの衣服についての詳細は33:60参照)。この節では頭部を覆うヴェールを胸まで着用する様定めてある。前者の場合、長衣は頭・顔・胸全てを覆っているが、後者の場合は頭と胸のみで顔は出しても良い。女性が外出時に着用する長衣の形は、慣習・社会的地位・家庭の伝統・イスラム社会の階級等により様々である。家庭内で着用するヴェールも又、女性がイスラム社会のどの階級に属し、どの様な仕事を持つかにより形が変わる。家庭内では顔を覆う必要はない。唯、男性の近親者が訪ねて来る時だけ、顔や装飾品を覆えば良いのである。第三の戒律は見知らぬ男性に話しかける時、威厳ある態度で臨む様女性に求めている。又家事・育児・一族の問題等女性としての役目を十分に果たす様求めている。第四の戒律は、夫婦に出来る限り家族の他の者達と離れて寝室を持つ様に、又幼児ですら脚注にて先に述べた(当章59節)時間帯には寝室に入れてはならないと命じている。

注21 寡婦や未婚者にも、イスラム教では結婚を強く勧めている。イスラム教は未婚を良しとせず、結婚こそ正常で自然な状態とみなす。モハムマド預言者は、次の様に語ったと伝えられている。「結婚は私のスンナ(慣習)であり、私のスンナを非難し捨てる者は私に属さない。」(ムスリム；ニカー書)

34. 結婚の手だてが見つからぬ者は、アッラーがその恵みを以て富ませるまで、純潔を保つべきなり。また、お前たちの右手の所有にかかる者で、解放証明書を欲しがる者あらば、(注22) 彼等に何か美点を認めたらば、^ひ之を書いて彼等に与え、更にアッラーがお前たちに賜える富の一部を与えよ。また、お前たちの奴婢が操正しく生きようと望むなら、現世の利得を求めて淫行を彼女たちに強いるなかれ。然しながら、誰かが無理強いした場合は、アッラーは彼女たちを赦し、慈悲を垂れ給わん。

وَلَيْسَتَعْفِيفَ الَّذِينَ لَا يَجِدُونَ نِكَاحًا حَتَّىٰ يُغْنِيَهُمُ
اللَّهُ مِنْ فَضْلِهِ وَالَّذِينَ يَبْتَغُونَ الْكِتَابَ مِنْكُمْ
أَيُّهَا أَنْتُمْ فَكَأَيُّهُمْ إِنْ عَلِمْتُمْ فِيهِمْ خَيْرًا وَأَتَوْهُمْ
مِنْ قَالِ اللَّهُ الَّذِي أَنْتُمْ وَلَا تَكْرِهُوا فَتَيَلُّكُمْ
عَلَى الْبُعَاءِ إِنْ أَرَدْتُمْ تَحَصُّنًا لِنَبْتَعُوا عَرَضَ الْحَيَاةِ
الدُّنْيَا وَمَنْ يَكْرِهْهُمْ فَإِنَّ اللَّهَ مِنْ بَعْدِ الْكَرَاهِيَةِ
غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٣٤﴾

35. われらはすでに数々の明白なる神兆をお前たちに降し、お前たち以前に逝ける人々の例と、神を畏れる者への訓戒を物語りたり。

وَلَقَدْ أَنْزَلْنَا إِلَيْكُمْ آيَاتٍ مُبِينَاتٍ وَمَثَلًا مِنَ الَّذِينَ
خَلَقْنَا مِنْ قَبْلِكُمْ وَمَوْعِظَةً لِلْمُتَّقِينَ ﴿٣٥﴾

第五項

36. アッラーは天地の光明なり。その光りを譬うれば、灯火^{あめつち}おける壁龕^{へきがん}の如し。灯火は玻璃の中にあり。玻璃は燦然たる星の如し。その輝きは聖なる一樹より射す。すなわち橄欖樹^{かんらん}にして、東国の産に非ず、また西国の産に非ず。その油は、火がそれに触れずとも、燃え出さんばかりなり。光の上に光を加うるなり！アッラーは、己れの嘉みするものをその光明へ導き給う。かくの如く、アッラーは数々の比喻を人々のために明示し給う。(注23) アッラーは一切を深知し給う。

اللَّهُ نُورُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ مِثْلُ نُورٍ يُشْكُوهُ فِيهَا
مُصْبِحًا يَصْبَحُ فِي زُجَاجَةٍ الزُّجَاجَةُ كَأَنَّهَا كَوْكَبٌ
دُرِّيٌّ يُوقَدُ مِنْ شَجَرَةٍ مُبْرَكَةٍ زَيْتُونَةٍ لَا شَرْقِيَّةٍ
وَلَا غَرْبِيَّةٍ لَا يَكَادُ زَيْتُهَا يُضَيُّ وَلَوْ لَمْ تَمْسَسْهُ
كَأَنَّ نُورَهُ عَلَى نُورٍ يَهْدِي اللَّهُ لِنُورِهِ مَنْ يَشَاءُ
وَيَضْرِبُ اللَّهُ الْأَمْثَالَ لِلنَّاسِ وَاللَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ
عَلِيمٌ ﴿٣٦﴾

注22 奴隷の「解放証明書」とは一種の契約書で、これにより、奴隷達は主の意にかかわらず、働いて自由の身になることができる。契約書には奴隷の解放に必要な金額あるいは労働が書かれてある。

注23 この節は美しい比喻で、明かり・ガラス球・壁龕龍の話である。神の光が届くのはこの三品に限り、この三品が結び付く事で明かりは完成する。明かりは光源。ガラス球は風で消えぬ様明かりを覆い、明るさを増す。壁龕龍は明かりを守る。直喩法で電氣ランプを語れば、電線が光源、電球が光を守り、笠が光を広げ方向付ける。しかし、明かり・ガラス球・壁龕龍は、宗教用語としてそれぞれ神の光・神の預言者を指すと言えよう。神の預言者は光が消えぬ様に守り、明るさを増す。東にカリファー(預言者の後継者)は神の光を広げ、方向付け、世の人々の啓蒙に努める。又、この節では、明かりに使う油は純度が高く、火を付けなくとも燃え上がる程、引火性の強いものでなければならないと述べられている。その油は、東の国にも西の国にも属さず、特定の人の有利にも不利にもなる事のない一本の木より抽出されたものである。この節にはもう一つの解釈がある。この節で述べられる光はクルアーンに述べられている様に、モハammad預言者を指すとも言える。この

37. この灯火は、アッラーの命によって建てられ、その尊名が唱念せらるる御堂の中に灯る。そこに人々は、朝な夕なアッラーを讃美し奉る。(注24)
38. 商売や交易のためにアッラーを憶うことを忘れたり、礼拝や喜捨をなすことを忘れたりすることなく。彼等は、心も目も苦悶撓拌されるべき日を怖る。(注25)
39. アッラーは彼等の行為の中の最善なことに對して報い、且つ恵みにより報奨を加増し給う。アッラーは己れが嘉し給う者には限りなく賜給し給う。
40. 然れども、無信仰の徒輩に於ては、その行為すべて砂漠の蜃気楼の如し。渴したる者水と思い、行きてそこに到れば何も見いだし得ず。かわりに彼は、アッラーの傍近くにあり、己が勘定をすっかり頂戴させられんことを知る。アッラーは清算の時は速やかなり。
41. 又は、彼等の行為は、大海原の深い水の中の暗闇の如し。浪の上に浪たちさわぎ、暗雲その上を覆い、闇また闇と層をなす。手をさし伸ぶれば、その手も見えぬ程。アッラーが光明を与えざる者には、如何なる光明もなし。

فِي بُيُوتٍ إِذْنُ اللَّهِ أَنْ تَرْفَعَ وَيَذْكُرَ فِيهَا اسْمُهُ
يُسَبِّحُ لَهُ فِيهَا بِالْغُدُوِّ وَالْآصَالِ ٢٤

رِجَالٌ لَا تُلْهِهِمْ تِجَارَةٌ وَلَا بَيْعٌ عَنْ ذِكْرِ اللَّهِ
وَإِقَامِ الصَّلَاةِ وَإِيتَاءِ الزَّكَاةِ ۚ يَخَافُونَ يَوْمًا
تَتَقَلَّبُ فِيهِ الْقُلُوبُ وَالْأَبْصَارُ ٢٥

لِيَجْزِيََهُمُ اللَّهُ أَحْسَنَ مَا عَمِلُوا وَيَرْزُقَهُمْ مِنْ
فَضْلِهِ ۗ وَاللَّهُ يَرْزُقُ مَنْ يَشَاءُ بِغَيْرِ حِسَابٍ ٢٥

وَالَّذِينَ كَفَرُوا أَعْمَالُهُمْ كَسَرَابٍ بِقِيَعَةٍ يَخْشِبُهَا
الظَّمْآنُ مَاءٌ خَرُّ إِذَا جَادَهُ لَمْ يَجِدْهُ شَيْئًا وَوَجَدَ
اللَّهُ عِنْدَهُ قَوْفَهُ حِسَابَهُ ۗ وَاللَّهُ سَرِيعُ الْحِسَابِ ٢٦

أَوْ كَظُلُمٍ فِي بَحْرٍ لَيْلِي يَخْشِبُهُ مَوْجٌ مِنْ تَوْفِهِ مَوْجٌ مِنْ قَوْفِهِ
سَحَابٌ ظَلَمْتُ بَعْضَهَا فَوْقَ بَعْضٍ إِذَا أَخْرَجَ يَدَهُ
لَمْ يَكَدْ يَرِيهَا وَمَنْ لَمْ يَجْعَلِ اللَّهُ لَهُ نُورًا فَمَا
لَهُ مِنْ نُورٍ ٢٧

場合整合龍はモハammad預言者の心、明かりは最上の特質を備えた彼の潔白な特性、ガラスは彼の特性に備わる神の光の透明感と明さを表している。天の啓示の光がモハammad預言者の特性の光の上に降りて来る時、クルアーンに「光の上に光を加うるなり」と記されている様に、輝きは倍加する。モハammad預言者の光は神木から抽出された油で燈されている為、明るく安定しており、永遠に輝き続ける。「聖なる一樹」という語がこれを示している）又、その光は東方・西方共に照らす。モハammad預言者の心は澄み、彼の特性は素晴らしい特質を備えている為、神の啓示が下される以前から、彼は偉大な使命を与えられる相応しい人物であった。これは次の言葉に示されている。「その油は火がそれに触れずとも、燃え出さんばかりなり。」

注24 この節には立証と預言が書かれてある。クルアーンに書かれた光に照らされた家々は栄え、そこに住む人々は常に神を賛え、この節は預言している。これは彼等が神の光に照らされた事を立証するものである。

注25 モハammad預言者の友の正義と彼等の神への愛がこの節で立証されている。彼等は肉と骨から成る人間であり、世俗的な野心を持ち、本業・副業に従事する。僧侶でもなければ、俗世を離れた隠者でもない。しかしながら世俗の雑事の中にあっても彼等は決して神と他人への努めを怠らない。

第六項

42. 汝、天地のすべてのもの（注26）がアッラーを讃美し、鳥たちでさえ（注27）その翼を拡げてまた讃えまつるを見ざるか？皆それぞれに礼拝と讃美のすべを知る。而して、アッラーは彼等の為せることを熟知し給う。
43. 天地の経綸はアッラーの掌中にありて、萬物はアッラーに帰り行かん。
44. 汝、アッラーが雲を駈り、次いて之を集め、その中から雨が降り出すように更に雲を積み重ねるを見ざるか？而して、彼は、雲まじりの山なす雲を天より降し、之を以て己れの欲する者を強打し、或いは追い払う。その稲妻のきらめきは目くらむばかりなり。（注28）
45. アッラーは夜と晝を交替し給う。げにその中には、見る目持つ者への教訓あり。（注29）
46. また、アッラーは水よりあらゆる動物を創り給えり。その或るものは腹にて歩み、その或るものは二脚で立ち、その或るものは四つ足で歩む。アッラーは望みのものを創り給う。（注30）げにアッラーは全能なり。

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ يَسْجُدُ لَهُ مَنْ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ
وَالْكَوْكَبُ صَافً كُلُّ قَدْ عَلِمَ صَلَاتَهُ وَتَسْبِيحَهُ
وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِمَا يَفْعَلُونَ ﴿٢٦﴾

وَاللَّهُ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَإِلَى اللَّهِ الْمَصِيرُ ﴿٢٧﴾
أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ يُرْسِئُ سَحَابًا ثُمَّ يُؤَلِّفُ بَيْنَهُ ثُمَّ
يَجْعَلُهُ رُكًا فَتَرَى الْوَدْقَ يَخْرُجُ مِنْ خِلَالِهِ وَ
يُنَزِّلُ مِنَ السَّمَاءِ مِنْ جِبَالٍ فِيهَا مِنْ بَرَدٍ فَيُصِيبُ
بِهِ مَنْ يَشَاءُ وَيَصْرِفُهُ عَنِ مَنْ يَشَاءُ يَكادُ سَنَا
بَرْقِهِ يَذْهَبُ بِالْأَبْصَارِ ﴿٢٨﴾

يُقَلِّبُ اللَّهُ اللَّيْلَ وَالنَّهَارَ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَعِبْرَةً
لِأُولِي الْأَبْصَارِ ﴿٢٩﴾

وَاللَّهُ خَلَقَ كُلَّ دَابَّةٍ مِنْ مَاءٍ فَمِنْهُمْ مَنْ يَمْشِي
عَلَى بَطْنِهِ وَمِنْهُمْ مَنْ يَمْشِي عَلَى رِجْلَيْنِ وَمِنْهُمْ مَنْ
يَمْشِي عَلَى أَرْبَعٍ يَخْلُقُ اللَّهُ مَا يَشَاءُ إِنَّ اللَّهَ عَلَى كُلِّ
شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٣٠﴾

注26 天使（天にあるもの）、人間・動物・植物・鉱物等、地上の生物・無生物（地にあるもの）

注27 空飛ぶ鳥。精神世界において三つの意味を持つ。(a)精神的に高められた地位にある人物。(b)物質獲得に全身全霊をかけ、精神的向上に全く関心を示さない俗人。(c)精神的状況が上記二者の中間に位置する人物。

注28 この節には、律法が、ある者にとっては利益をもたらす恵みの雨であり、又別の者にとり破壊を招く嵐となると書かれてある。

注29 この節には次の事が述べられている。前節で述べられた人間の精神的発達は、必ずしも一様に、しかも継続的に為される訳ではない。時には速く、時には遅く、そして又時には停止する事もある。この人間の精神的発達における後退・進歩は、宗教用語で夜と昼に例えられる。世の全ての物は加速と遅滞の法則に支配されており、人間の精神的発達も例外ではない。

注30 精神的にさすらう者が目標に向いどの様に発達を遂げるかがこの節に記されてある。ある者は非常にゆっくり進歩する。彼等は目標に向かい這って進む。ある者は二足動物の様により速く進む。更にある者は四足動物の様により一層速く進む。此処に暗示されているのは速さであって、進み方ではない。一般に四足動物は、二足動物や爬行動物より速く進む。同じ事は精神的旅人にも当てはまる。

47. 事實、われらは、明白なるさまざまなる神兆^{しるし}を降したり。アッラーは己が嘉^{よみ}する者を正しい道に導き給う。
48. 彼等は云う、「我等はアッラーと使徒^{しか}を信じ、之に服従す」と。然るにその後、彼等の或る者どもは背き去れり。かかる徒輩^{やから}は信者に非ず。
49. 而して、彼等は、どちらが正しいか裁きを受けるためアッラーと使徒の前に召喚せらるや、見よ、彼等の一部は之を忌避^{ひき}す。
50. もし正義自分の側にありと思わば、彼等は喜んで彼の御前に走り来るなり。
51. 彼等の心には病気でもあるのか、それとも疑心を抱くか、或いはアッラーとその使徒が不公平に自分たちを裁かんことを恐るか？ 然らず、彼等こそ不義者なり。(注31)

第七項

52. どちらが正しいか裁きを受けるためアッラーとその使徒の前に召喚された時、信者の応答はただ「我等は聴き、且つ服従す」と云うのみ。彼等こそ榮える者なり。(注32)
53. アッラーとその使徒に服従し、アッラーを畏れ敬い、守護者しとしやと崇める者、これ等は必ず好結果を得る者なり。
54. 汝もし命を下さば、我等ただちに出で征いさんと彼等はアッラーにかけてその強固なる誓いを立てる。云え、「誓うなかれ。必要なのは道理にかなった服従なり。げにアッラーはお前たちの為すことを熟知し給う」と。

لَقَدْ أَرْسَلْنَا آيَاتٍ مُبِينَاتٍ وَاللَّهُ يَهْدِي مَنْ يَشَاءُ إِلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿٢٤﴾

وَيَقُولُونَ آمَنَّا بِاللَّهِ وَبِالرَّسُولِ وَأَطَعْنَا ثُمَّ يَتَوَلَّى فَرِيقٌ مِّنْهُم مِّنْ بَعْدِ ذَلِكَ وَمَا أُولَٰئِكَ بِالْمُؤْمِنِينَ ﴿٣٩﴾

وَإِذَا دُعُوا إِلَى اللَّهِ وَرَسُولِهِ لِيَحْكُمَ بَيْنَهُمْ إِذَا فَرِيقٌ مِّنْهُمْ مُّعْرِضُونَ ﴿٩٩﴾

وَأِنْ يَكُنْ لَهُمُ الْحَقُّ يَأْتُوا إِلَيْهِ مُذْعِنِينَ ﴿٥٠﴾

أَوَىٰ قُلُوبُهُمْ مَّرَضٌ أَمْ ارْتَابُوا أَمْ يَخَافُونَ أَنْ يَحِيفَ
اللَّهُ عَلَيْهِمْ وَرَسُولُهُ ۚ بَلْ أُولَٰئِكَ هُمُ الظَّالِمُونَ ﴿٥﴾

لَئِنَّمَا كَانَ قَوْلَ الْمُؤْمِنِينَ إِذَا دُعُوا إِلَى اللَّهِ وَرَسُولِهِ لِيُخْرِجَهُمْ مِنَ الْبُيُوتِ وَيَقُولُوا سَمِعْنَا وَأَطَعْنَا ۚ وَأُولَٰئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ﴿٥٩﴾

وَمَنْ يُطِيعِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ وَيَتَّقِ اللَّهَ فَالَّذِي
هُمُ الْفَائِزُونَ ﴿٢٧﴾

وَأَقْسُوا بِاللَّهِ جَهْدَ آيَاتِهِمْ لِيُنْزِلَ آمْرَهُمْ بِخُرُوجِ
قُلْ لَا تَقْسِمُوا بِمَا عَمَرْتُمْ مَعْرُوفَةً إِنَّ اللَّهَ يَخْتَارُ
بِمَا تَعْمَلُونَ ﴿٥٩﴾

注 31 この節では以下の事が書かれてある。不信心者は三つの精神的病の一つあるいは全てに苦しむ。ある者はある病に、他の者は他の病に苦しむ。人の精神的発達をはばむ三つの物は、疑い・恐れ・妬みである。

注 32 この節及び次の節では、イスラム教の原理が示されている。イスラム法典は完全無欠であり、その教義は人間の生活全てに及ぶ。モハムマド預言者はイスラム教徒の生活に係わる全ての事柄の最高權威である。

55. 云え、「アッラーの命を遵奉し、使徒に従え」と。然れども、お前たちもし背き去りたる時は、彼は彼の責任を負い、お前たちはお前たちの責任を負う。されど、お前たちもし彼に従わば、お前たちは正しく導かれん。使徒はただ神託を伝達するが務めなり。

قُلْ أَطِيعُوا اللَّهَ وَأَطِيعُوا الرَّسُولَ فَإِنْ تَوَلَّوْا فَإِنَّمَا عَلَيْهِ مَا حُمِّلَ وَعَلَيْكُمْ مَا حُمِّلْتُمْ وَإِنْ تُطِيعُوا تَهْتَدُوا وَمَا عَلَى الرَّسُولِ إِلَّا الْبَلْغُ الْبَيِّنُ ﴿٥٥﴾

56. アッラーは、お前たちのうち信仰に入り善事を為す者に、彼等以前の者に継がしめたる如く必ず地を継がし、彼等のために自分が選びたるものを彼等の宗教となし、今までの不安恐怖の代りに平安と無事を与えん、と約束せり。彼等はわれを崇め、われに何者をも配せざらん。されど、その後、不信心者になる者は、反逆者なり。(注33)

وَعَلَى اللَّهِ الَّذِينَ آمَنُوا مِنْكُمْ وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لِيَسْتَخْلِفَنَّهُمْ فِي الْأَرْضِ كَمَا اسْتَخْلَفَ الَّذِينَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ وَبَيَّنَّ لَهُمْ ذِي الرِّضَى الَّذِي ارْتَضَى لَهُمْ وَلَيُبَدِّلَنَّهُمْ مِنْ بَعْدِ خَوْفِهِمْ أَمْنًا يَعْبُدُونَنِي لَا يُشْرِكُونَ بِي شَيْئًا وَمَنْ كَفَرَ بَعْدَ ذَلِكَ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الْفَاسِقُونَ ﴿٥٦﴾

57. お前たち慈悲に浴せんがために、礼拝を遵守し、施しをなし、使徒に従え。

وَأَقِيمُوا الصَّلَاةَ وَآتُوا الزَّكَاةَ وَأَطِيعُوا الرَّسُولَ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ﴿٥٧﴾

58. 汝、不信心者どもが地上でわれらの計画を挫折し得る、と思うなかれ。彼等の住居は地獄なり。そは実に悪しき帰り所なり。

لَا تَحْسَبَنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا مُعْجِزِينَ فِي الْأَرْضِ يَغِيغُ وَمَا لَهُمُ النَّارُ وَلَيْسَ الْمَصِيرُ ﴿٥٨﴾

第八項

59. 汝等信徒たちよ、お前たちの右手が所有する者、並びに思春期に達せざる者といえども、次の三つの場合は、入室に際し、彼等にお前たちの許可を求めさせよ。すなわち、早朝の礼拝の前、暑さのためにお前たちが

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لِيَسْتَأْذِنَكُمْ الَّذِينَ مَلَكَتْ أَيْمَانُكُمْ وَالَّذِينَ لَمْ يَبْلُغُوا الْحُلُمَ مِنْكُمْ ثَلَاثٌ مَرَّاتٍ مِنْ قَبْلِ صَلَاةِ الْفَجْرِ وَحِينَ تَضَعُونَ ثِيَابَكُمْ

注 33 この節はカラファト（預言者の後継者の地位）を記す序文として、52 節から 55 節までにアッラーと神の使者に従う様繰返し強調されている。これはイスラム教におけるカリファ（預言者の後継者）の地位を暗示するものである。イスラム教徒が現世において宗教的指導者の地位を与えられるという約束がこの節に書かれている。この約束は全てのイスラム民族に対し為されたものであるが、彼等の指導者、そしてモハम्मド預言者の後継者にとり、カラファトの法は明白な形を取るであろう。カラファト制定の約束は明白である。モハम्मド預言者は常に人の精神的指導者であり、彼のカラファトはこの世の終わりまで様々な形を取りつつ存在し続けるであろう。他のカラファトは全て消滅する。これは、モハम्मド預言者が、他のいかなる神の預言者・使者より優れている事を示すものである。我々の世代は、アハマディーヤ運動の創始者に最高の宗教的カリファを見出してきている。

お昼どき着物を脱いでいるとき、及び夜の礼拝以後なり。これ等はお前たちの三度の私事なり。それ以外なら、必要に応じて互に自由に往き来しても、お前たちにも彼等にも罪なし。かくの如く、アッラーはお前たちに神兆を解明し給う、すべてを知り賢哲にましますが故に。

60. 而して、お前たちの子供たちが思春期に達したならば、彼等以前の年上の者が許可を求めた如く、入室に際し許可を求めせしめよ。かくの如く、アッラーはその戒律をお前たちに明瞭に述べ給う。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

61. もはや結婚を願わざる年嵩の女の場合は、その美を見せびらかすのでなければ、外衣を脱ぐことも罪にはならぬ。されど、それさえも慎むことは、彼女等のために更に好し。アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

62. 盲でも、跛でも、病人でも、又お前たち自身でも、自分の家、又は父の家、又は母の家、又は兄弟の家、又は姉妹の家、又は父方の叔父叔母の家、又は母方の叔父叔母の家、又はお前たちがその鍵を持っている家、又はお前たちの友達の家で食事することは差し支えなし。一緒に食べようが、別々に食べようが、差し支えなし。然れども、家に入るに際しては、主よりの祝福された清浄な挨拶を述べよ。かくの如く、アッラーはその戒律をお前たちに解らせしめんと明瞭に述べ給う。

فَمِنَ الظَّاهِرَةِ وَمِنْ بَعْدِ صَلَوةِ الْعِشَاءِ ثَلَاثُ عَوْدَةٍ
لَكُمْ لَيْسَ عَلَيْكُمْ وَلَا عَلَيْهِمْ جُنَاحٌ بَعْدَ هُنَّ
طَوُّقُونَ عَلَيْكُمْ بَعْضُكُمْ عَلَى بَعْضٍ كَذَلِكَ يُبَيِّنُ
اللَّهُ لَكُمْ الْآيَاتِ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿٥٩﴾

وَإِذَا بَلَغَ الْأَطْفَالُ مِنْكُمُ الْحُلُمَ فَلْيَسْتَأْذِنُوا كَمَا
اسْتَأْذَنَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ كَذَلِكَ يُبَيِّنُ اللَّهُ لَكُمْ
آيَاتِهِ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿٦٠﴾

وَالْعَوَاقِدُ مِنَ النِّسَاءِ الَّتِي لَا يَرْجُونَ نِكَاحًا
فَلَيْسَ عَلَيْهِنَّ جُنَاحٌ أَنْ يَضَعْنَ ثِيَابَهُنَّ غَيْرَ
مُتَبَرِّجَاتٍ بِزِينَةٍ وَأَنْ يَسْتَعْفِفْنَ خَيْرٌ لَهُنَّ
وَاللَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٦١﴾

لَيْسَ عَلَى الْأَعْمَى حَرَجٌ وَلَا عَلَى الْأَعْرَجِ حَرَجٌ وَلَا
عَلَى الْمَرْيُوفِ حَرَجٌ وَلَا عَلَى أَنْفُسِكُمْ أَنْ تَأْكُلُوا مِنْ
بُيُوتِكُمْ أَوْ بُيُوتِ آبَائِكُمْ أَوْ بُيُوتِ أُمَّهَاتِكُمْ أَوْ
بُيُوتِ إِخْوَانِكُمْ أَوْ بُيُوتِ أَخَوَاتِكُمْ أَوْ بُيُوتِ أَعْمَالِكُمْ
أَوْ بُيُوتِ عَمَّاتِكُمْ أَوْ بُيُوتِ أَخَوَاتِكُمْ أَوْ بُيُوتِ خَالَاتِكُمْ
أَوْ مَا مَلَكَتُمْ أَيْمَانَكُمْ أَوْ صَدِيقَكُمْ لَيْسَ عَلَيْكُمْ
جُنَاحٌ أَنْ تَأْكُلُوا جَمِيعًا أَوْ أَشْتَاتًا إِذَا دَخَلْتُمْ
بُيُوتًا فَسَلِّمُوا عَلَى أَنْفُسِكُمْ هَٰذَا مِنْ عِنْدِ اللَّهِ
مُبَارَكَةٌ طَيِّبَةٌ كَذَلِكَ يُبَيِّنُ اللَّهُ لَكُمْ الْآيَاتِ لَعَلَّكُمْ
تَعْقِلُونَ ﴿٦٢﴾

第九項

63. 真^{まこと}の信者とは、アッラーとその使徒を信じ、公共の用件で人々が集って使徒と共にある時、使徒の許可なしに立ち去らざる者、これ等の者のみなり。げに汝に許可を求むる者こそは、真にアッラーとその使徒を信ずる者なり。されば、彼等が自分の用事で汝に許可を求めた場合は、汝が良いと思った者には許可を与え、更にその者のためにアッラーの寛容を祈れ。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。(注34)

إِنَّمَا الْمُؤْمِنُونَ الَّذِينَ آمَنُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ وَإِذَا كَانُوا مَعَهُ عَلَى أَمْرٍ جَامِعٍ لَمْ يَذْهَبُوا حَتَّى يَسْأَلَوكَ
إِنَّ الَّذِينَ يَسْأَلُونَكَ أُولَئِكَ الَّذِينَ يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ فَإِذَا أَسْأَلْتُكَ يَعْضُ شَأْنِهِمْ
فَإِذَا لَمْ يَنْتَ مِنْهُمْ وَاسْتَغْفِرْ لَهُمُ اللَّهُ إِنَّ
اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿٣٤﴾

64. 使徒の召喚をお前たち相互の召喚と同一視するなかれ。(注35) アッラーはお前たちの中で、こっそり抜け出る者を知り給う。されば、命令に従わざる者に、災難^{わざはひ}が降りかからぬよう、また恐ろしい天罰に遭わぬよう用心させよ。

لَا تَجْعَلُوا دَعَاءَ الرَّسُولِ بَيْنَكُمْ كَدَعَاءِ بَعْضِكُمْ بَعْضًا
قَدْ يَعْلَمُ اللَّهُ الَّذِينَ يَتَسَلَّلُونَ مِنْكُمْ لِوَاذٍ فَلْيَحْذَرِ
الَّذِينَ يُخَالِفُونَ عَنْ أَمْرٍ أَنْ تُصِيبَهُمْ فِتْنَةٌ أَوْ
يُصِيبَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٣٥﴾

65. 汝等耳を傾けよ！天地^{あめつち}の一切はアッラーに帰属す。彼は、お前たちが如何なる状態にあるかを知り給う。而して、彼等が彼の許に連れ戻される日、彼は彼等に彼等のしたことを告げ知らせん。アッラーはあらゆることに通曉し給う。

إِلَّا أَنْ لِلَّهِ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ قَدْ يَعْلَمُ مَا أَنْتُمْ
عَلَيْهِ وَيَوْمَ يُرْجَعُونَ إِلَيْهِ فَيُنَبِّئُهُمْ بِمَا عَمِلُوا وَاللَّهُ
بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿٣٦﴾

注34 前記の数節において、イスラム教徒が社会の重要な問題に対して如何に身を処すべきか、その指針が示されてあった。この節では国家の重要性を論じている。国家の重要な問題に携わるモハammad預言者と共にある限り、イスラム教徒は彼の許可無くして集団を離れる事は出来ない。又、国家や社会全体に係わる問題において、彼等が別個に行動する事を禁じている。モハammad預言者、あるいは彼の後継者が彼の推す指導者の指導の下に開かれたイスラムの会合での決定に、イスラム教徒は従わねばならない。

注35 預言者や指導者の声は、軽んぜられてはならない。常に重要事に関わるので、ふさわしい尊厳を有してなくてはならない。モハammad預言者やカリファのプライバシーを侵害してはならない。貴重な時間に不必要な要求をしてはならない。彼らと話すときは、彼らの地位をふまえ、尊敬の念を持って接すること。

سُورَةُ الْفُرْقَانِ مَكِّيَّةٌ

アル・フルカン

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 万民への警告者たらしめんとし、その僕に識別を降し給うたお方に祝福あれ。

تَبَارَكَ الَّذِي نَزَّلَ الْفُرْقَانَ عَلَى عَبْدِهِ لِيَكُونَ لِلْعَالَمِينَ نَذِيرًا ②

3. 天地の主権は彼に属す。彼は御子を設け給わず、主権を分担する者としてなく、一切を創造し、且つ規則正しく定め給う。

إِلَٰهَ الَّذِي لَهُ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَلَمْ يَتَّخِذْ وَلَدًا وَلَمْ يَكُنْ لَهُ شَرِيكٌ فِي الْمُلْكِ وَخَلَقَ كُلَّ شَيْءٍ فَقَدْ يَنْقَذُ ③
تَقْدِيرًا ④

4. それにもかかわらず、彼等は彼以外に神々を崇拜す、己れ自身が創られた者にして、自らはなにも創造せず、己れの利害を左右する力を有せず、生も死も審判の日の復活をも左右する力を持たぬ者を。(注1)

وَاتَّخَذُوا مِنْ دُونِهِ آلِهَةً لَا يَخْلُقُونَ شَيْئًا وَهُمْ يُخْلَقُونَ وَلَا يَمْلِكُونَ لِأَنْفُسِهِمْ ضَرًّا وَلَا نَفْعًا وَلَا يَمْلِكُونَ مَوْتًا وَلَا حَيَاةً وَلَا نُشُورًا ⑤

5. 信ぜざる徒輩は云う、「こは彼が捏造せる偽りに過ぎず。他の人々が彼を助けたり」と。だがしかし、彼等こそが不正と虚偽を犯したり。

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا إِنَّ هَذَا إِلَّا افْكٌ بِأُنْزَالِهِ وَاعَانَهُ عَلَيْهِ قَوْمٌ آخَرُونَ فَقَدْ جَاءُوا ظُلْمًا وَزُورًا ⑥

6. また彼等は云う、「往古の伝説なり。朝な夕な口授せられたるを、彼が書き取りたるなり」と。

وَقَالُوا آسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ اكْتَتَبَهَا فَهِيَ تُمْلَى عَلَيْهِ بُكْرَةً وَأَصِيلًا ⑦

7. 云え、「これらを降し給へたるは、天地の秘密に通曉せるお方なり。げに彼は寛大にして、慈悲深くまします」と。

قُلْ أَنْزَلَهُ الَّذِي يَعْلَمُ السِّرَّ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ إِنَّهُ كَانَ غَفُورًا رَحِيمًا ⑧

注1 全ての物は三段階の発達を遂げねばならない。(1) 不存(無)(2) 成長の特性・力を授けられた可能性ある生 (3) 現実の生 全ての生の創造主・神はこの全段階を完全に支配される。

8. また、彼等は云う、「何たることぞ、(注2)使徒たる者が食物を摂り、且つ往来を散策するとは？何故に天使が彼に降されて、彼と共に警告者にならざるか？

وَقَالُوا مَا لِيَ هَذَا الرَّسُولِ يَأْكُلُ الطَّعَامَ وَيَمْشِي فِي الْأَسْوَاقِ لَوْلَا أُنْزِلَ إِلَيْهِ مَلَكٌ فَيَكُونُ مَعَهُ نَذِيرًا ⑤

9. また財宝が彼に投げ与えられたり、食うべき果樹園を持たざりしか」と。更に、不義なす徒後は云う、「お前たちはただ幻術師に従っているに過ぎず」と。

أَوْ يُلْقَى إِلَيْهِ كَنْزٌ أَوْ تَكُونُ لَهُ جَنَّةٌ يَأْكُلُ مِنْهَا وَقَالَ الظَّالِمُونَ إِنْ تَتَّبِعُونَ إِلَّا رَجُلًا مَسْحُورًا ⑥

10. 見よ、彼等は如何に多くの譬えを造りだすことか！故に迷誤し、道を見出すこと能わず。(注3)

أَنْظُرْ كَيْفَ ضَرَبُوا لَكَ الْأَمْثَالَ فَضَلُّوا فَ لَا يَسْتَطِيعُونَ سَبِيلًا ⑦

第二項

11. 彼もし欲しなば、それよりもはるかに佳きものを汝に賜う彼を祝福せよ。すなわちそれは河川流るる楽園なり、また宮殿なり。

تَبَرَّكَ الَّذِي إِنْ شَاءَ جَعَلَ لَكَ خَيْرًا مِنْ ذَلِكَ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ وَيَجْعَلُ لَكَ فُصُورًا ⑧

12. それどころか、彼等は審判の時を否定す。われらは、審判の時を否定する徒輩のために、燃えさかる火炎を用意せり。(注4)

بَلْ كَذَّبُوا بِالسَّاعَةِ وَأَعْتَدْنَا لِمَنْ كَذَّبَ بِالسَّاعَةِ سَعِيرًا ⑨

13. 火は遙か遠くから彼等を見とめるや、荒れ狂い、咆哮せん。(注5)

إِذَا رَأَوْهُمْ مِنْ مَكَانٍ بَعِيدٍ سَبَّحُوا لَهُمْ تَغِيظًا وَزُفِيرًا ⑩

14. 而して、彼等ひとまとめに縛られ、狭いところに投げこまれると、彼等はそこでひと思いに滅せんことを懇願せん。

وَإِذَا أُلْقُوا مِنْهَا مَكَانًا هَبِيئًا مَقَرَّنِينَ دَعَا هَٰؤُلَاءِ ثُبُورًا ⑪

注2 この使者に何が起こったのか。

注3 不信心者は生命の真価に対する認識が浅い。彼等は独自の方法で神の真理を試そうとする為、真理に近付けず、いつまでも、疑惑と不信心の暗闇を彷徨う。

注4 信者には高位と名誉が授けられる一方、不信心者には恐ろしい罰が用意されてある。裁きは差し迫り、門口まで近付いている。しかし彼等はそれに気付かず、信じようとはしない。

注5 当節及び次節では裁きが真に下されようとしていと述べられている。不信心者の苦しみと屈辱感を増し、それを徹底する為、彼等の目・耳はそれを知覚させられるであろう。彼等は苦しみに耐え兼ねて、逃れようと死を望むであろう。

15. 「今になってひと思いに死なんとするなかれ、宜敷く万死を請え」
16. 云え、「この火獄が^{あが}いいか、それとも^{いへ}義しい人に約束された永遠の楽園がいいか？そは彼等の報奨にして、行き着くところとなる」と。
17. 彼等は永遠にそこに住み、望むものは何なりと得べし。そは、常に請わる汝の主の約束なり。(注6)
18. 最後の審判の日、彼は彼等並びに彼等がアッラー以外に崇めし^{あが}神々を召し寄せ、かく問わん、「わが^{あが}僕らを迷わしめたるは、お前たちか？それとも、彼等自ら道を踏み外したるか？」と。
19. 彼等は云わん、「汝に讃えあれ！我等は汝以外に守護者を求むる者に非ず。然れども、汝は、彼等並びに彼等の父祖に汝の訓戒を忘れるほどに現世の快樂を授けたれば、彼等は^{うんらく}淪落の民となりぬ」と。
20. そこで、われらは偶像崇拜者どもに向って云わん、「今、彼等は、お前たちの言葉を虚偽なりと立証せり。されば、お前たちは懲罰を免れ、助けを得る能わず」と。われらは、お前たちのうち誰であれ罪を犯す者には、恐ろしい罰を味わしめん。
21. われらが汝以前に遣わしたる使徒たちは、一人として食物を^と損らざるはなく、また街路を往き来せざるはなかりき。われらはお前たちの或る者をして、他のものへの試験たらしめたり。されば、お前たち耐え忍べるか？汝の主は一切を照覧し給う。

第三項

22. われらとの会見を期待せぬ徒輩は云う、「何故に天使が我等に降されざるか？又は何故

لَا تَدْعُوا الْيَوْمَ سُورًا وَاحِدًا وَادْعُوا سُورًا كَثِيرًا ﴿١٥﴾
قُلْ أَذِلَّكَ خَيْرٌ أَمْ جَنَّةُ الْخُلْدِ الَّتِي وُعِدَ الْمُتَّقُونَ
كَانَتْ لَهُمْ جَزَاءً وَاصِيَةً ﴿١٦﴾

لَهُمْ فِيهَا مَا يَشَاءُونَ خَالِدِينَ كَانَ عَلَى رَبِّكَ وَعْدًا
مُسَوَّلًا ﴿١٧﴾

وَيَوْمَ يُحْشَرُهُمْ وَمَا يَعْبُدُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ
يَقُولُ أَأَنْتُمْ أَضَلُّتُمْ عِبَادِي هَؤُلَاءِ أَمْ هُمْ ضَلُّوا
السَّبِيلَ ﴿١٨﴾

قَالُوا سُبْحَنَكَ مَا كَانَ يُنْبَغِي لَنَا أَنْ نَتَّخِذَ مِنْ
دُونِكَ مِنْ أَوْلِيَاءَ وَلَكِنْ مَتَّعْتَهُمْ وَآبَاءَهُمْ حَتَّى
نَسُوا الذِّكْرَ وَكَانُوا قَوْمًا بُورًا ﴿١٩﴾

فَقَدْ كَذَّبْتُمْ بِمَا تَقُولُونَ لِمَا تَسْتَطِيعُونَ صَرْفًا
وَلَا نَصْرًا وَمَنْ يَظْلِمِ مِنْكُمْ نُذِقْهُ عَذَابًا
كَبِيرًا ﴿٢٠﴾

وَمَا أَرْسَلْنَا قَبْلَكَ مِنَ الْمُرْسَلِينَ إِلَّا أَنْتَهُمْ
لِيَكُونُوا أَعْيُنًا وَمَيِّسُونَ فِي الْأَسْوَاقِ وَجَعَلْنَا
بَعْضَكُمْ لِبَعْضٍ فِتْنَةً أَتَصْبِرُونَ وَكَانَ
رَبُّكَ بِصِيرَةٍ ﴿٢١﴾

وَقَالَ الَّذِينَ لَا يَرْجُونَ لِقَاءَنَا لَوْلَا أُنْزِلَ

注6 信者が来世に望むものは、神の意志と一体化する事である。それ由この望みは適えられるであろう。

に我等の主はその姿を見せざるのか?」と。
げに彼等は驕り^{おごり}昂^{たかぶ}り、甚だしくその則^{のり}を越
えたり。(注7)

23. 彼等は、天使らと会見する審判の日には、
その犯せし罪故に、如何なる朗報もなき日
とならん。彼等は嘆いて、叫ばん、「頑丈な
障壁あれ!」と。

24. われらは彼等の所業を調べ、塵芥^{ちりあくた}の如く四
散せしめん。(注8)

25. 天国の住み人たちは、その日、その住居と
休息の場所ゆえに、一層安楽とならん。

26. その日、天は雲と共にちりちりに引き裂か
れ、天使の大軍が降臨せしめられん。

27. その日こそ、(注9)真^{まこと}の主権は慈悲深き
神に属し、不信心者どもは多難な日となら
ん。

28. その日、不義^{よから}な徒輩は己が手を噛み、か
く云わん、「ああ、もし我使徒と共に同じ道
を歩みたりなば!

29. ああ、情けなや! かかる者を仲間^{とも}にせざり
せば!

30. お諭^{さとし}が我に達したる後、彼は我を迷^{まよ}わしめ
たり」と。悪魔とは、助けを必要とする時、
いつも人を見捨て^{みはな}てるものなり。

عَلَيْنَا الْمَلِكَةُ أَوْ نَرَى رَبَّنَا لَقَدْ اسْتَكْبَرُوا
فِي أَنْفُسِهِمْ وَتَوَعَّتُوا كِبَرًا ٢٣

يَوْمَ يَرَوْنَ الْمَلِكَةَ لَا بُشْرَى يَوْمَئِذٍ لِلْمُجْرِمِينَ
وَيَقُولُونَ حِجَابًا مَحْجُورًا ٢٤

وَقَدِمْنَا إِلَى مَا عَمِلُوا مِنْ عَمَلٍ فَجَعَلْنَاهُ هَبَاءً
مَّنْثُورًا ٢٥

أَصْحَابُ الْجَنَّةِ يَوْمَئِذٍ خَيْرٌ مُّسْتَقَرًّا وَأَحْسَنُ
مَقِيلًا ٢٦

وَيَوْمَ تَشْقَى السَّمَاءُ بِالنَّعَامِ وَنَزَلَ الْمَلِكَةُ
تَنْزِيلًا ٢٧

أَلَمْ يَكُ يَوْمَئِذٍ الْحَقُّ لِلرَّحْمَنِ وَكَانَ يَوْمًا عَلَى
الْكَافِرِينَ عَسِيرًا ٢٨

وَيَوْمَ يَعْصُ الظَّالِمُ عَلَى يَدَيْهِ يَقُولُ يَلَيْتَنِي اتَّخَذْتُ
مَعَ الرَّسُولِ سَبِيلًا ٢٩

يُونَالِي لَيْتَنِي لَمْ أَتَّخِذْ فُلَانًا خَلِيلًا ٣٠

لَقَدْ أَضَلَّنِي عَنِ الذِّكْرِ بَعْدَ إِذْ جَاءَنِي وَكَانَ
الشَّيْطَانُ لِلْإِنْسَانِ خَدُورًا ٣١

注7 2章 211節参照

注8 彼等の第二の要求は通えられず、彼等の働きは全て無効となり、彼等は破壊され、ちり片の様に空気
の薄い地に追いやられるだろう。

注9 事実、バドル戦の日是不信心者にとり最も苦しい一日となった。その日イスラムが創設され、クライ
シュは自らの敗北と屈辱を悟ったのである。

31. 使徒は云わん、「主よ、我が民はこのクルアーンを廃棄せしものと見なせり」と。(注10)
32. さればわれらはそれぞれの預言者たちに、
つみびと
 罪人の中から、敵を作りたり。而して主は、
 嚮導者、援助者として不足なし。
33. 信ぜざる者どもはまた云う、「何故、クルアーンは彼に全部一度に啓示されざりきか?」と。われらがくなしたるは、汝の心を徐々に堅固ならしめんがためなり。されば、われらは、それを最善な形で整えたり。
34. たとえ彼等が如何なる比喩を以て汝に臨むとも、われらは汝に、真理と遙かに勝る解釈とを与う。(注11)
35. 先導者と共に地獄に引き立てられん者ども、彼等こそ最悪の境遇に置かれ、正しい道から最も速くへ迷い出でん。
- 第四項
36. われらはモーゼに經典を授け、彼と共にその兄アロンを補佐として任命せり。
37. しか
 而して、われらは命じたり、「お前たち兩名、われらの神兆しるしを拒みたる民のところへ往け」と。その後、われらは徹底して彼等せんめつを殲滅せり。
38. また、ノアの民がその使徒らを拒みたる時、われらは之これを溺死させ、もって人類への懲らしめとなせり。われらは不義やがな徒輩わらわには恐ろしい懲罰を用意せり。

وَقَالَ الرَّسُولُ يَرْبِّ اِنَّ قَوْمِي اتَّخَذُوا هَذَا الْقُرْآنَ مَهْجُورًا ﴿٣١﴾

وَكَذَلِكَ جَعَلْنَا لِكُلِّ بَنِي عَدُوٍّ مِنَ الْمُجْرِمِينَ وَكَفَّ بِرَبِّكَ هَادِيًا وَنَصِيرًا ﴿٣٢﴾

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لَوْلَا نُزِّلَ عَلَيْهِ الْقُرْآنُ جُمْلَةً وَّاحِدَةً ۚ كَذَلِكَ لِنُثَبِّتَ بِهِ فُؤَادَكَ وَرَتَّلْنَاهُ تَرْتِيلًا ﴿٣٣﴾

وَلَا يَأْتُونَكَ بِمَثَلٍ إِلَّا جِئْنَاكَ بِالْحَقِّ وَأَحْسَنَ تَفْسِيرًا ﴿٣٤﴾

الَّذِينَ يُحْشَرُونَ عَلَىٰ وُجُوهِهِمْ إِلَىٰ جَهَنَّمَ أُولَٰئِكَ سَرْمَكَا وَأَصْلُ سَبِيلًا ﴿٣٥﴾

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ وَجَعَلْنَا مَعَهُ أَخَاهُ هَارُونَ وَزِيرًا ﴿٣٦﴾

فَقُلْنَا اذْهَبَا إِلَى الْقَوْمِ الَّذِينَ كَذَبُوا بِآيَاتِنَا فَدَرَبْهُمَا تَدْمِيرًا ﴿٣٧﴾

وَقَوْمُ نُوحٍ لَّمَّا كَذَبُوا الرُّسُلَ أَخْرَقْنَاهُمْ وَجَعَلْنَاهُمْ لِلنَّاسِ آيَةً ۖ وَاعْتَدْنَا لِلظَّالِمِينَ عَذَابًا أَلِيمًا ﴿٣٨﴾

注10 この節は、いわゆるイスラム教徒がクルアーンを廃棄した人々に向けたものと言える。過去14世紀に渡りクルアーンはイスラム教徒に無視されて来たが、現在は更にひどい状態にある。これに関してモハムマド預言者の言葉がある。「イスラム教徒にある時代が来る。その時イスラム教は消え失せ名ばかりとなり、クルアーンもその名と言葉のみ残るであろう。」(Baihagui・Shuab al-Iwan) 今、真にその時を迎えている。

注11 数ある黙示録の中にあって唯一クルアーンに見られる特質がある。神の存在、イスラム教の真理、神の始まり、その他宗教上の諸問題全て事実であるとクルアーンは唱え、他の力を借りる事なくそれを実証するに十分な論拠を提示している。

39. またわれらは、アード、サムード、ラスの住民ども並びにその間の幾多の世代を殲滅せり。(注12)
40. そのそれぞれに、われらは実例を以て戒めたり。而して、それぞれを、われらは徹底して殲滅せり。
41. これ等不信心者どもは、災害の雨が降り注ぎしあの邑を訪れたに相違なし。その時、彼等は、それがわからざりしか? 然らず、彼等は復活させられることを期待せざるなり。
42. 彼等汝を見る時は、ただ汝を物笑いの種にするばかり。而して云う、「アッラーが使徒として遣わしたるは、この者なるか?」
43. もし我等がしっかりして之を信奉せざりせば、我等はあやうく彼によって我等の神々を棄てんとす」と。されど、彼等、やがて刑罰を目のあたりに見れば、正しい道から最も外れし者は誰なるかを知らん。
44. 汝は、己れの邪悪な欲望を以て神とする者を、見たるか? 汝はそのような者の守護者たんとするか?
45. 汝は、彼等の大部分の者が聞き且つ物がわかるとも思うか? 彼等はただ家畜の如し。否、彼等の行状は家畜にも劣るなり。
- 第五項
46. 汝は、主が如何に影を伸ばすかを見ざりしか? 主もし欲しなば、その影を静止するも可能なり。(注13) なれど、われらは太陽を以てその案内人となす。(注14)

وَعَادًا وَثَمُودَ وَأَصْحَابَ الرَّيِّ وَقُرُونًا بَيْنَ ذَلِكَ كَثِيرًا ﴿٣٩﴾

وَكُلًّا ضَرَبْنَاهُ الْأَمْثَالَ وَكُلًّا بَتَرْنَا تَنْبِيْهًا ﴿٤٠﴾

وَلَقَدْ أَنَا عَلَى الْقَرْيَةِ الَّتِي أُمِطِرَتْ مَطَرُ السَّوْءِ أَفَلَمْ يَكُونُوا يَرُوءْنَهَا بَلْ كَانُوا لَا يَرْجُونَ نُشُورًا ﴿٤١﴾

وَإِذَا رَأَوْكَ إِن يَخِذُّوْكَ إِلَّا هُزُوًا هَٰذَا الَّذِي بَعَثَ اللَّهُ رَسُولًا ﴿٤٢﴾

إِن كَادَ لَيُضِلَّنَا عَنْ الْهَدْيِ لَوْلَا أَن صَبَرْنَا عَلَيْهَا وَسَوْفَ يَعْلَمُونَ حِينَ يَرُونَ الْعَذَابَ مَنْ أَضَلَّ سَبِيلًا ﴿٤٣﴾

أَرَأَيْتَ مَنِ اتَّخَذَ إِلَهَهُ هَوَاهُ أَفَأَنْتَ تَكُونُ عَلَيْهِ وَكِيلًا ﴿٤٤﴾

أَمْ تَحْسَبُ أَنَّ أَكْثَرَهُمْ يَسْمَعُونَ أَوْ يَعْقِلُونَ إِن هُمْ إِلَّا كَالْأَنْعَامِ بَلْ هُمْ أَضَلُّ سَبِيلًا ﴿٤٥﴾

أَلَمْ تَرَ إِلَى رَبِّكَ كَيْفَ مَدَّ الظِّلَّ وَلَوْ شَاءَ لَجَعَلَهُ سَاكِنًا ثُمَّ جَعَلْنَا الشَّمْسُ عَلَيْهِ دَلِيلًا ﴿٤٦﴾

注12 ラスはタムード族の一部が住んでいたヤマーマの町であるとみなす注釈者もいる。又、他の注釈者はラスとはタムード族の一部を指すと考える。それは彼等が預言者を井戸に投げ込んだからである。彼等はタムードの残存者であった。

注13 この節では比喩的表現を用いて、イスラム教の発生・普及・支配が述べられており、これを自然現象になぞらえて表現している。太陽が物に隠れている時、影が長く伸びる。同様に、神が人々の背後にいる時、人々の力は強まる。神がイスラムの背後にいる時、神の影は、地球の隅々にまで広がり続け、世の人々は皆神を求め、神の下で慰めと安楽を見いだす。この節における太陽とは、イスラム教又はモハammad預言者を指す。

注14 太陽の位置は、影の大きさを左右する。

47. 然る後、われらは徐々に影をわれらの方に引き寄す。(注15) ثُمَّ قَبَضْنَاهُ إِلَيْنَا قَبْضًا يَسِيرًا ﴿١٥﴾
48. お前たちのために、夜を衣となし、眠りを休息となし、昼は起きて働く時と定めたるは彼なり。(注16) وَهُوَ الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ اللَّيْلَ لِبَاسًا وَالنَّوْمَ سُبَاتًا وَجَعَلَ النَّهَارَ نُشُورًا ﴿١٦﴾
49. また、その恵みを垂れる前に、朗報として風を送るは彼なり。而して、われらは清らかな水を天から降し、 وَهُوَ الَّذِي أَرْسَلَ الرِّيحَ بُشْرًا بَيْنَ يَدَيْ رَحْمَتِهِ وَأَنْزَلْنَا مِنَ السَّمَاءِ مَاءً طَهُورًا ﴿١٧﴾
50. これによって枯死せる土地に生命を与え、われらが創りしもの、すなわち、家畜や多くの人間に之を飲料として与う。 لِّنُحْيِيَ بِهِ بَلْدَةً مَّيْتًا وَنُسْقِيَهُ مِمَّا خَلَقْنَا أَنْعَامًا وَأَنَا سَيِّ كَثِيرًا ﴿١٨﴾
51. われらは彼等に注意させんとし、さまざまなる方法で之を説明せり。然れども、世人の多くはすべてを否認し、信ぜざるなり。 وَلَقَدْ صَرَّفْنَاهُ بَيْنَهُمْ لِيَذَّكَّرُوا فَأَبَى أَكْثَرُ النَّاسِ إِلَّا كُفُورًا ﴿١٩﴾
52. もしわれらその気になりたれば、各邑に一人ずつの警告者を遣し得た筈。 وَلَوْ شِئْنَا لَبعَثْنَا فِي كُلِّ قَرْيَةٍ نَذِيرًا ﴿٢٠﴾
53. されば、不信者に従わず、クルアーンを用い、全力を尽くして彼等と戦え。 فَلَا تُطِيعِ الْكَافِرِينَ وَجَاهِدْهُمْ بِهِ جِهَادًا كَبِيرًا ﴿٢١﴾
54. 彼こそは二つの海を流れさせたる者、こちらは甘くしてうまく、あちらは鹹くして苦し。而して、彼は、両者の間に越え難き障壁を置けり。(注17) وَهُوَ الَّذِي مَرَجَ الْبَحْرَيْنِ هَذَا عَذْبٌ فُرَاتٌ وَهَذَا مِلْحٌ أُجَاجٌ وَجَعَلَ بَيْنَهُمَا بَرْزَخًا وَحِجْرًا مَّحْجُورًا ﴿٢٢﴾

注15 この節では、全盛を極めた後のイスラム教の衰退にふれている。前節では影は隆盛を意味したが当節では衰退の意味で用いられている。

注16 この節にある夜は、神からの使者が出現する以前の精神的暗闇の時代を指している。そして昼は使者の出現による精神的曙を示す。

注17 真の宗教と偽りの宗教を表わすのに、この節では“二つの水”という言葉を用いている。真の宗教であるイスラム教と、その他の墮落した宗教は併存を続け、前者は甘い果実となり魂の旅人の渇きを潤すが、後者は不毛で苦く、如何なる成果ももたらさない。この二つの水は又海の水と川の水を示している。後者を甘いと感ずる限り、前者は塩辛く、苦く感じられる。しかし川の甘い水が海に注ぎ込み、塩辛い水と混った時、それも又辛くなる。この二つの水は混ざり合わない限り、それぞれ別の味を持つ。同様に、偽りの宗教の教義は、真の宗教の教義と混ざり合えば、その甘さを失い、役に立たなくなる。しかし神はこうお決めになった。神の庇護の下「イスラム教は、偽りの宗教と隣り合わせていても、その甘さを失わないであらう。」(15:10) 両者の間には越える事の出来ない壁がある。

55. また、水より人間を創り、その者のために血統と婚姻による血族関係を作りたる者は、彼なり。げに汝の主は全能にまします。

وَهُوَ الَّذِي خَلَقَ مِنَ الْمَاءِ بَشَرًا فَجَعَلَهُ نَسَبًا وَصِهْرًا وَكَانَ رَبُّكَ قَدِيرًا ۝

56. 然るに、彼等は、アッラーの外に毒にも薬にもならざる者を崇拜す。不信心者は、その主に敵対する悪魔に味方する者なり。

وَيَعْبُدُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ مَا لَا يَنْفَعُهُمْ وَلَا يَضُرُّهُمْ وَكَانَ الْكَافِرُ عَلَىٰ رَبِّهِ ظَهِيرًا ۝

57. われらは汝を、ただ朗報の伝達者として、且つ警告者として遣わしたに過ぎず。

وَمَا أَرْسَلْنَاكَ إِلَّا مُبَشِّرًا وَنَذِيرًا ۝

58. 云え、「誰もがその主への道をとらんことを希う以外、我はこのためにお前たちから報酬を求めず」と。(注18)

قُلْ مَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ إِلَّا مَنْ شَاءَ أَنْ يَتَّخِذَ إِلَىٰ رَبِّهِ سَبِيلًا ۝

59. 汝、永生にして不死なる御方を信頼し、ひたすら讃美せよ。彼はその僕等の諸々の罪を承知する者として十分なり。

وَتَوَكَّلْ عَلَىٰ الْعَلِيِّ الَّذِي لَا يَمُوتُ وَسَبِّحْ بِحَمْدِهِ وَكَفَىٰ بِهِ بِذُنُوبِ عِبَادِهِ خَبِيرًا ۝

60. 彼は六日で、天地とその間にある一切を創造し、然る後、自ら玉座に鎮座せり。慈悲深き神よ！されば汝、彼に因して、知る者に尋ねよ。(注19)

الَّذِي خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا فِي سِتَّةِ أَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوَىٰ عَلَى الْعَرْشِ الرَّحْمَنُ فَسَلِّ بِهِ خَبِيرًا ۝

61. 彼等に向って「慈悲深き神に服従せよ」と云うと、彼等は云う、「慈悲深い神とは一体誰ぞ？我等は汝が命ずる者に服従すべきとな？」と。而して、ますますその嫌悪の情をつのらせるばかりなり。

وَإِذَا قِيلَ لَهُمُ اسْجُدُوا لِلرَّحْمَنِ قَالُوا وَمَا الرَّحْمَنُ أَنَسْجُدُ لِمَا تَأْمُرُنَا وَزَادَهُمْ نُفُورًا ۝

第六項

62. 天に十二宮を造り、その中に、灯火と暁々たる月を置き給う御方に讃美あれ。(注20)

تَبَارَكَ الَّذِي جَعَلَ فِي السَّمَاءِ بُرُوجًا وَجَعَلَ فِيهَا سِرَاجًا وَنُجُومًا ۝

注18 イスラム教が教義普及の為に力の行使を禁じてある事が、この節に明示されている。

注19 (1)神、(2)モハammad 預言者

注20 この節では、天及び天を照し出す太陽・月・星の創造を語る事で、宗教上の天国に注意を喚起している。そこでの太陽は救世主モハammad 預言者であり月及び星は彼の友を指す。この友人達に関してモハammad 預言者は次の様に語っている。「我友は数ある星の様であり、彼等に従う者は正しく導かれるであろう。」(Razin)

63. また、主を念じたい者や、感謝の念を抱きたい者のために、昼夜を設け、之を循環しむるは彼なり。(注 21)

64. 慈悲深い神の真の僕たちとは、道を歩くにも謙虚に振舞い、無知なる者に話しかけられても「平安あれ!」と云う者なり。(注 22)

65. また、主の御前に平伏し、且つ起立して夜を過ごす者、

66. 「主よ、地獄の懲罰より我等を免れしめよ。あの懲罰は永劫の拷問なり。

67. そは実に悪しき休息の場、悪しき住居なり」と云う者。

68. また、金を使うに当り、浪費せず、さりとて物惜しみするでなく、能く中庸を保つ者。

69. また、アッラーの外に如何なる神も崇めず、正当な理由に非ざれば、アッラーの禁を破って人を殺さず、不義密通を行われざる者、これ等の者たちなり。然れども、之を犯す者は、必ず罪の報を受くべし。(注 23)

70. 復活の日には、その懲罰は倍加せられ、地獄に於て屈辱の日を過ごさん。

وَهُوَ الَّذِي جَعَلَ اللَّيْلَ وَالنَّهَارَ خِلْفَةً لِّمَنۢ أَرَادَ أَنۢ يَذَّكَّرَ أَوْ أَرَادَ سُكُورًا ۝١٣

وَعِبَادُ الرَّحْمٰنِ الَّذِينَ يَتَشَوَّنَ عَلَى الْاَرْضِ هَوْنًا وَإِذَا خَاطَبَهُمُ الْجَاهِلُونَ قَالُوا سَلَامًا ۝١٤

وَالَّذِينَ يَبِيتُونَ لِرَبِّهِمْ سُجَّدًا وَقِيَامًا ۝١٥

وَالَّذِينَ يَقُولُونَ رَبَّنَا اصْرِفْ عَنَّا عَذَابَ جَهَنَّمَ إِنَّ عَذَابَهَا كَانَ غَرَامًا ۝١٦

إِنَّهَا سَاءَتْ مُسْتَقَرًّا وَمُقَامًا ۝١٧

وَالَّذِينَ إِذَا أَنفَقُوا لَمْ يُسْرِفُوا وَلَمْ يَقْتُرُوا وَكَانَ بَيْنَ ذَلِكَ قَوَامًا ۝١٨

وَالَّذِينَ لَا يَدْعُونَ مَعَ اللَّهِ إِلَٰهًا آخَرَ وَلَا يَقْتُلُونَ النَّفْسَ الَّتِي حَرَّمَ اللَّهُ إِلَّا بِالْحَقِّ وَلَا يَزْنُونَ وَمَن يَفْعَلْ ذَلِكَ يَلْقَ أَثَامًا ۝١٩

يُضَاعَفْ لَهُ الْعَذَابُ يَوْمَ الْقِيَامَةِ وَيَخْلُدْ فِيهِ مُهَانًا ۝٢٠

注 21 物質界において夜の後昼が訪れる様に、精神界においても、闇が世を覆う時神は世を照らすべく使者を使わす。

注 22 天国における太陽・モハammad 預言者の出現により為された偉大なる道德改革に関する記述がこの節より始まる。人々は闇の子から寛大で慈悲深き下僕へと変わった。この節及び次節において、寛大なる神の下僕の特質が述べられてあるが、それはモハammad 預言者と共にある人々を苦しめて来た悪徳の対極となる。

注 23 偶像崇拜・殺害・姦通は三大罪であり、個々の悪業及び社会的性的不徳の根源である。クルアーンはこれらの罪に繰返し言及して来た。

71. 但し、改悛して、(注24) 信仰に入り、善行を積む者は除かれる。アッラーは彼等のために、その諸悪を善行に替え給う。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

إِلَّا مَنْ تَابَ وَآمَنَ وَعَمِلَ عَمَلًا صَالِحًا فَأُولَٰئِكَ يُبَدِّلُ اللَّهُ سَيِّئَاتِهِمْ حَسَنَاتٍ وَكَانَ اللَّهُ غَفُورًا رَحِيمًا ﴿٤١﴾

72. 改悛し、而して、善行を積む者は、本当に後悔してアッラーに帰依し奉る者なり。

وَمَنْ تَابَ وَعَمِلَ صَالِحًا فَإِنَّهُ يَتُوبُ إِلَى اللَّهِ مَتَابًا ﴿٤٢﴾

73. また、虚偽の証言をせず、くだらぬことにあえればその傍を威厳を以て通り過ぎる者。

وَالَّذِينَ لَا يَشْهَدُونَ الزُّورَ وَإِذَا مَرُّوا بِالْغُلُوبِ مَرُّوا كِرَامًا ﴿٤٣﴾

74. 主の神兆の話が出ると、聾か盲のように倒れざる者。(注25)

وَالَّذِينَ إِذَا دُرُّوا بِآيَاتِ رَبِّهِمْ لَمْ يَخِرُّوا عَلَيْهَا صَنِاعًا وَاعْيَانًا ﴿٤٤﴾

75. 「主よ、我等に日を楽しませる妻子を授けたまえ。我等を義しい人の模範たらしめよ」と云う者。

وَالَّذِينَ يَقُولُونَ رَبَّنَا هَبْ لَنَا مِنْ أَزْوَاجِنَا وَذُرِّيَّتِنَا قُرَّةَ أَعْيُنٍ وَاجْعَلْنَا لِلْمُتَّقِينَ إِمَامًا ﴿٤٥﴾

76. これ等の者は、その堅忍不拔き故に、天国に於て至高なる場所を賜わり、そこに歓迎と平安とを受けん、

أُولَٰئِكَ يُجْزَوْنَ الْغُرْفَةَ بِمَا صَبَرُوا وَيُلَقَّوْنَ فِيهَا تَحِيَّةً وَسَلَامًا ﴿٤٦﴾

77. 永久に。そは素晴らしき休息処なり、素晴らしき住居なり。

خَالِدِينَ فِيهَا حَسَنَتْ مُسْتَقَرًّا وَمُقَامًا ﴿٤٧﴾

78. 不信心者に向って云え、「お前たち、我が主に祈らずば、主はお前たちのことを考慮せざるべし。然るに、今お前たちは、その神託を拒みたり、天罰お前たちを必ず断ち割らん」と。

قُلْ مَا يَعْبُودُ بِكُمْ رَبِّي لَوْلَا دُعَاؤُكُمْ فَقَدْ كَذَّبْتُمْ فَسَوْفَ يَكُونُ لِزَامًا ﴿٤٨﴾

注24 「改悛」とは、全ての悪を避け善行を為す為に、固い決意を持って過去の不徳を真実悔い改め、更に、被害者に対して償う事である。過去を省みる事で、人生は大いなる変革を遂げることができる。

注25 彼等は目を見開き神の言葉に耳を傾ける。彼等の信仰は風聞ではなく確信に基づくものである。



アルショアラール

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 ① بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
2. ター・スィーン・ミーム ※ (注1) ② طَسْمَ
※恵み深く、すべてを聴き、すべてを知る神！
3. これは明瞭なる經典の諸節なり。 ③ يٰلَآ اَيُّ الْكِتٰبِ الْبَيِّنِ
4. 彼等信ずるを背んぜぬが故に、恐らく汝は心を痛め己が身を殺すに至らん。(注2) ④ لَعَلَّكَ بَآخِعٌ نَّفْسَكَ اَلَّا يَكُونُوا مُؤْمِنِيْنَ
5. もしわれら欲しなば、われらは彼等の首をその前にぬかずかしむる奇跡を天より降すべし。(注3) ⑤ اِنْ تَشَا نُنَزِّلْ عَلَيْهِم مِّنَ السَّمَآءِ اَيَةً فَظَلَّتْ اَعْنَاقُهُمْ لَهَا خٰضِعِيْنَ
6. 然るに、彼等は、慈悲深き神より新しき訓戒が下るたびに、(注4)それより顔をそむけるなり。 ⑥ وَمَا يَأْتِيهِمْ مِّنْ ذِكْرِ مِّنَ الرَّحْمٰنِ مُحَدَّثٍ اِلَّا كَانُوْا عَنْهُ مُعْرِضِيْنَ
7. 事実、彼等は、それを虚偽として遇せり。されど、やがてその嘲りしものの到来を告げる知らせが彼等に到らん。 ⑦ فَقَدْ كَذَّبُوْا فَسَيٰلِيْهِمْ اَبْوَابُ مَا كَانُوْا يَسْتَعْجِلُوْنَ
8. 彼等は大地を眺めざるか、われらはそこで、如何に多くの立派な種を発生せしめたるかを？ ⑧ اَوَلَمْ يَرَوْا اِلَى الْاَرْضِ كَمَا اَبْتَنَّا فِيْهَا مِنْ كُلِّ رَوْحٍ
- ⑧ كَرِيْمٌ

注1 この章及び次章は、ター・スィーン・ミーム群として知られる特異な章で、両者の主題は酷似している。これ等はほぼ同じ時期にメッカで啓示された。この章群はモーゼの生涯をかなり詳しく取り上げており、この省略された文字がシナイ山及びモーゼを表わしているとみなす注釈者も居る。ター・スィーンはトゥール(シナイ山)を、ミームは、モーゼを表わす。

注2 18章7節参照

注3 モハammad預言者の苦悩が無駄に終わる事はない。人々は、彼に対する妨害を止めなければ、裁きを下されるであろう。それは彼等の指導者を辱める事となる。「首」は指導者を意味する。

注4 「新しき」という語は、此処では「新しい表現で」あるいは「新たに詳細な記述で」という意味で用いられている。事実、神の律法は全て、基本的教義は似通ったものである。相違点は細部にのみ見られる。そこで、新しい律法は、時代の要求・考え方に見合った形に変えて啓示される。預言者達も、この新しい律法に従う者、従来律法に従う者様々である。

9. げにこの中には神^し兆^しあり。然れども、彼等の大半は之を信じたがらず。
10. げに、汝の主、彼は偉力者、慈悲者にまします。(注5)
11. 主がモーゼを呼びて、かく宣^{のたま}いしことを思い起せ。「不埒^{ふち}を仿く民衆のところへ行け。
12. すなわち、ファラオの民のところへ。彼等は神を畏れざるか?」
13. 彼は答えり、「主よ、我は彼等が、我を嘘つきと看^み做^しすを恐る。
14. 加えて、我が胸はせばまり、舌も滑らかならず。(注6) されば、アロンにも御言葉^{ごごんご}を降し給え。
15. また我は、彼等にとがめられることをなしたれば、彼等が我を殺さんことを恐る」と。(注7)
16. 神は云えり、「断じて然らず。お前たち兩名われらの奇跡^{しし}を携えて行け。われらはお前たちと偕^{とも}にありて、その祈りを聞き入れん。
17. されば、ファラオのところへ行きて、云え、『我等は万物の主よりの使徒なり、
18. イスラエルの子らを我等と共に去らしめよ』と。
19. すると、ファラオは云えり、「汝が幼少の時、ここで育てたるは我等でなかりしか? しかも、汝は長年我等の中で生活を過ぎざりしか。

إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَةً وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُؤْمِنِينَ ⑨

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ⑩

وَإِذْ نَادَى رَبُّكَ مُوسَىٰ إِنَّ أَنْتَ الْقَوْمُ الظَّالِمِينَ ⑪

قَوْمَ فِرْعَوْنَ أَلا يَتَفَكَّرُونَ ⑫

قَالَ رَبِّ إِنِّي أَخَافُ أَنْ يُكَذِّبُونِ ⑬

وَيُضِيقُ صَدْرِي وَلَا يَنْطَلِقُ لِسَايَ فَأَرْسِلْ إِلَىٰ هَارُونَ ⑭

وَلَهُمْ عَلَىٰ ذَنْبٍ فَأَخَافُ أَنْ يَقْتُلُونِ ⑮

قَالَ كَلَّا فَادْهَبْ بِآيَتِنَا إِذَا مَعَكُمْ مُسْتَعِينُونَ ⑯

فَأَيْنَا فِرْعَوْنَ فَقُولَا إِنَّ رَسُولَ رَبِّ الظَّالِمِينَ ⑰

أَنْ أَرْسِلَ مَعَنَا بَنِي إِسْرَءِيلَ ⑱

قَالَ أَلَمْ نُرَبِّكَ فِينَا وَلِيدًا وَلَبِثْتَ فِينَا مِمَّنْ عَمُرِكَ سِنِينَ ⑲

注5 「まことに汝の主、彼は偉大者、慈悲者にまします」という言葉は、預言者の置かれた状況がこの章で述べられる預言者達のものと同様である事を示す。しかし、他の預言者の敵を捕らえ滅した強大なる神が、モハammad預言者においては彼を勝利と繁栄に導きその力を示すのみならず、彼の一族に慈悲を与えるであろう。モハammad預言者の一族において滅びるのはわずかであり、大多数の者は神の許しと慈悲を授けられ、遂には神のお告げを受けるであろう。

注6 モーゼは、委ねられた偉大なる事業を成し遂げられるかと案じていた様だ。預言者としての任は事実非常に重い。モハammad預言者も又、最初の啓示を受けた時、不安に駆られた。

注7 この話は、ファラオの人々がモーゼを、エジプト人殺害の嫌で告発した事を示している。この出来事は、出エジプト記2:11-15及びクルアーン28:16-21に記されているが、そこにはこの殺害が故意のものではなかったと書かれてある。モーゼは、エジプト人に打たれていたイスラエル人を助けようとしたのであり、その争いの最中、エジプト人は亡くなったのである。

20. 然^{しか}に、汝が為したることは何んたることぞ、汝は全く恩を知らざる者なり」と。(注8)
21. モーゼは云えり、「我、それを為せるは、いまだ我迷える者でありし時なり。(注9)
22. されば、我はお前たちを怖れて逃げ去れり。されど、我が主は正しい判断力を我に授け、しかも使徒の列に加えたり。(注10)
23. イスラエルの子らを奴隷にしておきながら、幼少時の恩顧を以て我をなじるか?」と。(注11)
24. ファラオは云えり、「万物の主とは何者か?」と。(注12)
25. モーゼは云えり、「天地^{あかつち}並びに天地間の一切のものの主なり、(注13)もしお前たち信ずるならば」と。
26. ファラオは側近に向つて云えり、「お前たち、聞きたるか?」と。(注14)

وَفَعَلْتَ فَعَلْتَكِ الْبَرِّ وَأَنْتَ مِنَ الْكَافِرِينَ ①

قَالَ فَعَلْتُهَا إِذَا وَأَنَا مِنَ الضَّالِّينَ ②

فَقَرَرْتُ مِنْكُمْ لَمَّا خِفْتُكُمْ فَوَهَبَ لِي رَبِّي حُكْمًا
وَجَعَلَنِي مِنَ الْمُرْسَلِينَ ③

وَتِلْكَ نِعْمَةٌ تَمُنُّهَا عَلَيَّ أَنْ عَبَدْتُ بَنِي إِسْرَءِيلَ ④

قَالَ فِرْعَوْنُ وَمَا رَبُّ الْعَالَمِينَ ⑤

قَالَ رَبُّ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا إِنْ كُنْتُمْ
مُوقِنِينَ ⑥

قَالَ لَنْ حَوْلَ إِلَّا نَسْتَعِينُ ⑦

注8 この節では、モーゼにより死に至らしめられたエジプト人の事が述べられている。ファラオは自らを、そしてエジプト人をイスラエル人の恩人と自負しており、エジプト人を殺害した事で、モーゼを恩知らずと非難している。

注9 イスラエル人がエジプト人から逃れようとモーゼに助けを求めた時、彼は為す術を知らなかったが、貧しく弱いイスラエル人を救おうとしてモーゼが拳を振り下ろすと、運悪くエジプト人は亡くなってしまった。一打で人の命を奪う事は常識的に有り得ず、この死は事故であった。又、見方を変えれば、モーゼの抑圧された人々にたいする愛由に、彼はイスラエル人を助けようとしてエジプト人に一撃を見舞い、その命を奪う事となったのである。モーゼはその結末を予期せずして行動したと言えよう。

注10 モーゼがエジプト人を殺害し、逃亡した後に神が自ら彼を預言者に任じたのはモーゼの行為が瞬時の予期せぬものであった事の証しといえよう。

注11 ファラオ(エジプトの王)はモーゼ族(イスラエル人)を何代にも渡り奴隷として拘束し、彼等の尊敬、決断力、活力を奮って米たにも拘らず、自らの行為を善行であると述べた。このファラオの憤り無き言葉を、モーゼは恥ずべきものと語った事が記されている。

注12 前節に書かれたモーゼのファラオに対する返答はファラオを困惑させた様である、直ちにファラオは話題を変え、神の存在、属性に関する難解な問題をモーゼに突き付けた。

注13 「天地間の一切のもの」という語は、神の支配の及ぶ範囲が如何に広大であることを示している。

注14 この節には、ファラオがエジプト人を扇動し、モーゼに刃向かう様、し向けた事が書かれている。モーゼは、天地創造はアッラーの為せる業であると主張した。全宇宙は自らの神の支配下にあると信ずるエジプト人にとり、このモーゼの主張はエジプトの神々に対する侮辱ではないか。この様に語ってファラオはエジプト人の、モーゼに対する敵愾心を扇動したのである。

27. モーゼは云えり、「そはお前たちの主にし
て、またお前たちの父祖の主なるぞ」と。
(注 15)

قَالَ رَبُّكُمْ وَرَبُّ آبَائِكُمُ الْأَوَّلِينَ ﴿٢٧﴾

28. ファラオは云えり、「お前たちに遣わされた
この使徒は、間違いなく狂人なり」と。(注
16)

قَالَ إِنَّ رَسُولَكُمُ الَّذِي أُرْسِلَ إِلَيْكُمْ لَمَجْنُونٌ ﴿٢٨﴾

29. モーゼは云えり、「そは東西並びにその間に
ある一切の主なり、(注 17) お前たち思慮
があるなら解るのだから」と。

قَالَ رَبُّ الشَّرْقِ وَالْمَغْرِبِ وَمَا بَيْنَهُمَا إِنْ كُنْتُمْ
تَعْقِلُونَ ﴿٢٩﴾

30. ファラオは云えり、「汝、もし我以外に神を
信ずれば、我は必ず汝を獄に投げ込まん」
と。

قَالَ لَنْ اتَّخَذْتَ إِلَهًا غَيْرِي لِأَجْعَلَكَ مِنَ
الْمَسْجُونِينَ ﴿٣٠﴾

31. モーゼは云えり、「何とな、我たとえ明白な
る証拠を汝に携えたとしてもか!」と。

قَالَ أَوَلَوْ جِئْتُكَ بِشَيْءٍ مُبِينٍ ﴿٣١﴾

32. ファラオは云えり、「汝の云うことが本当な
ら、直ちにそれを出してみよ」と。

قَالَ فَأْتِ بِهِ إِنْ كُنْتَ مِنَ الصَّادِقِينَ ﴿٣٢﴾

33. されば、モーゼはその杖を投げたり。見よ、
そは明らかな蛇となれり。

فَأَلْقَى عَصَاهُ فَإِذَا هِيَ ثُعْبَانٌ مُبِينٌ ﴿٣٣﴾

34. 次いで、その手を懷から引き出せば、見よ、
誰の目にもそは白く映じたり。(注 18)

وَنَزَعَ يَدَهُ فَإِذَا هِيَ بَيْضَاءُ لِلنَّظَرِينَ ﴿٣٤﴾

第三項

35. ファラオは側近の長老たちに云えり、「この
者は卓越した妖術師なり。

قَالَ لِلْمَلَاحِقَةِ إِنَّ هَذَا السَّحَرُوعَلِيمُ ﴿٣٥﴾

36. 彼はお前たちを、その妖術によって、国外
に追い出さんと謀るなり。さて、お前たち
の見解や如何に?」と。

يُرِيدُ أَنْ يُخْرِجَكُمْ مِنْ أَرْضِكُمْ بِسِحْرِهِ ۖ فَمَاذَا
تَأْمُرُونَ ﴿٣٦﴾

37. 彼等は答えり、「暫らく彼とその兄を待た
せ、その間に^{まちまち}邑々に召喚者を遣わし、

قَالُوا أَرْجِهْ وَأَخَاهُ وَأَبْعَثْ فِي الْمَدَائِنِ حِشْرِينَ ﴿٣٧﴾

注 15 第 25 節では、神の支配圏の広大さをモーゼは述べているが、当節においては、神の支配が時にも及ぶ事が示されている。

注 16 ファラオはモーゼが他人の言葉に耳を傾けず、己の主張を繰り返すばかりでまるで狂人の様だと考え、その思いを語った。

注 17 この節では、神の王国があらゆる方位に広がっている事を示している。

注 18 7 章 109 節参照

38. 国中の卓越した魔術師をおそばに召し給え」と。

يَا ثُؤُوكَ بِكُلِّ سَحَّارٍ عَلَيْهِمْ ③٨

39. かくて、定められた日の定められた時刻に、多くの魔術師たちは集められり。

فَجِئَ السَّحَرَةُ لِبَيْعَاتِ يَوْمٍ مَّعْلُومٍ ③٩

40. また、民衆^{ひとびと}に向って云えり、「お前たちも募集せぬか？」と。

وَقِيلَ لِلنَّاسِ هَلْ أَنْتُمْ مُجْتَبِعُونَ ④٠

41. 「もし魔術師たちが勝たば、我等は彼等に従わん」

لَعَلَّنَا نَتَّبِعَ السَّحَرَةَ إِنْ كَانُوا هُمُ الْغَالِبِينَ ④١

42. さて、魔術師たちは来着するや、(注 19) ファラオに云えり、「我等もし勝たば、褒賞を得べきや如何ん？」と。

فَلَمَّا جَاءَ السَّحَرَةُ قَالُوا لِفِرْعَوْنَ أَإِنَّا لَنَأْجُرُكَ إِن كُنَّا نَحْنُ الْغَالِبِينَ ④٢

43. ファラオは云えり、「よろしい、もし勝たば、お前たちを我が側近のうちに加えん」と。

قَالَ نَعَمْ وَإِنَّكُمْ إِذَا لَبِثَ الْمُفْرَبِينَ ④٣

44. モーゼは魔術師たちに云えり、「さて、汝等、投げたいものを投げよ」と。

قَالَ لَهُمْ مُوسَى الْقَوْمَا أَنْتُمْ مُلْقُونَ ④٤

45. そこで、魔術師たちはその縄や杖を投げて、云えり、「ファラオの御威光により、勝利を得るは我等なり」と。

فَالْقَوْمُ ابْجَالَهُمْ وَعَصِيَهُمْ وَقَالُوا بَعْدَ فِرْعَوْنَ إِنَّا لَنَحْنُ الْغَالِبُونَ ④٥

46. 次いで、モーゼがその杖を投げるや、見よ、そは彼等のまやかしを呑み込み。 (注 20)

فَأَلْفَى مُوسَى عَصَاهُ فَإِذَا هِيَ تَلْقَفُ مَا يَأْفِكُونَ ④٦

47. 因って、魔術師たち地に平伏して、

فَأَلْفَى السَّحَرَةُ سَجِدِينَ ④٧

48. 云えり、「我等は万物の主、

قَالُوا أَمَّا رَبُّ الْعَالَمِينَ ④٨

49. モーゼ並びにアロンの主を、信じ奉る」と。

رَبِّ مُوسَى وَهَارُونَ ④٩

50. ファラオは云えり、「お前たちは、我が許しなしに、モーゼを信じたり。彼こそはお前たちに魔術を教えし張本人なり。お前たち、

قَالَ امْنُتُمْ لَهُ قَبْلَ أَنْ أَدْنِ لَكُمْ إِنَّهُ لَكَبِيرُكُمُ الَّذِي عَلَّمَكُمُ السِّحْرَ فَلَسَوْفَ تَعْلَمُونَ هَ لَا قِطْعَنَ

注 19 魔術師とは職業として呪術を行う者で、その道徳性は非常に低いものであった。

注 20 モーゼの杖が飲み込んだのは魔術師の杖やヘビではなく、彼等の作り上げた物全てであった。モーゼの杖が彼等の欺満を徹底敵に打ち砕いたとこの節には明示してある。魔術師に悪わされて、見物人が本物のヘビと思い込んでいた物を粉々に砕く事で、魔術師の虚構を暴いたのはこのモーゼの杖であった。

いずれ必ず思い知らせん。お前たちの手足をたか^{はりつけ}いちがいに切り落とし、一同悉く磔に処す」と。

أَيَّدِيَكُمْ وَأَرْجُلَكُمْ مِنْ خَلْفٍ وَلَا وَصَلْنَكُمْ أَجْعِينَ ⑤

51. 彼等は云えり、「我等を害する能^{あた}わず、我等主の許に帰り行くなれば。(注21)

قَالُوا لَا ضَيْرَ إِنَّا إِلَىٰ رَبِّنَا مُنْقَلِبُونَ ⑥

52. ただ我等が願わんことは、我らが最初の信者なれば、主が我等の数々の罪を赦し給わんことを」と。

إِنَّا نَطْمَعُ أَنْ يَغْفِرَ لَنَا رَبُّنَا خَطِيئَاتِنَا أَنْ كُنَّا أَوَّلَ الْمُؤْمِنِينَ ⑦

第四項

53. かくて、われらはモーゼに啓示して、命ず、「わが僕^{しもべ}らを連れ、夜陰に乗じて立ち去れ。お前たち必ず追跡せられるべし」と。

وَأَوْحَيْنَا إِلَىٰ مُوسَىٰ أَنْ أَسْرِ بِعِبَادِي إِنَّكُمْ مُتَمَعُونَ ⑧

54. ファラオは急使を邑々に遣わし、云わしめたり、

فَأَرْسَلَ فِرْعَوْنُ فِي الْمَدَائِنِ حَاشِرِينَ ⑨

55. 「彼等は寡^{かしよう}少なれど、

إِنَّ هَؤُلَاءِ لَشِرْذِمَةٌ قَلِيلُونَ ⑩

56. 我等に怒り、恨みを抱く。(注22)

وَلَهُمْ لَنَا لُغَا يُطَوِّنُ ⑪

57. 然れども、我等は油断なく防備整いたる大軍なり」と。

وَأِنَّا لَجَبِيعٌ حَذِرُونَ ⑫

58. かくて、われらは彼等を、果樹園並びに泉水から、

فَأَخْرَجْنَاهُمْ مِنْ جَنَّتٍ وَعَيْوُونَ ⑬

59. 財宝並びに名誉ある地位からも、追い立てり。

وَكُنُوزٍ وَمَقَامٍ كَرِيمٍ ⑭

60. そはかくなる次第なりき。而して、われらは之^{これ}をイスラエルの子らに遺産として与えたり。(注23)

كَذَلِكَ وَأَوْرَثْنَاهَا بَنِي إِسْرَءِيلَ ⑮

61. さて、追跡せるファラオの軍勢は、日出づるころ彼等に追いつけり。

فَاتَّبَعُوهُمْ مُشْرِقِينَ ⑯

注21 つい先程まで悪銭を得ようと策略をめぐらしていた魔術師達が、信仰を得、死を恐れなくなった。

注22 神の預言者の出現は、彼の言葉を受け入れ、彼に従う者に輝ける未来を約束するものである。預言者は人々に新たな生命を与え、人生観を変える新しい希望と確信を彼等の内に生じさせる。モーゼ出現の後、イスラエル人の間に大きな変化の起きた事をファラオは感じ、これは彼の感情を著しく害した。

注23 ファラオやエジプト人の泉・庭園・財宝がイスラエル人に与えられたのではない。イスラエル人はエジプトを去り、ミルクと蜂蜜の流れる約束の地カナンへ向かった。その地で新たに彼等は泉・庭園・財宝を与えられたのである。事実、パレスチナは、庭園と泉の豊富な点でエジプトに似ている。

62. 両軍相見えたる時、モーゼの同志らは云えり、「ついに捕まりたるか」と。(注24)

63. モーゼは云えり、「断じて然らず、そのようなことを云うなかれ！主は我と偕にあり。主は我を無事に導かん」と。

64. その時、われらモーゼに啓示して、命ず「汝の杖で海を打て」と。(注25)すると、海忽ち分れ、両側はさながら峨々たる山嶽の如くなりぬ。

65. 而して、われらは追手の軍勢をそこに誘き寄せり。

66. かくして、われらはモーゼ並びに彼と共にありし人々を救いたり。

67. 然れども、その他の者どもは悉く溺死せしめたり。

68. げにこの中には、一つの神兆あり。然れども、彼等の多くは信ぜざるなり。

69. げに汝の主は、偉大にして、慈悲深くまします。

第五項

70. アブラハムの物語を彼等に読誦せよ。

71. すなわち、アブラハムがその父とその一族に向って、「貴方がた何を拝すか？」と訊ねし時のことを。(注26)

72. 彼等は答えり、「我等は偶像を拝す。これからもそのために専心せん」と。

73. アブラハムは云えり、「貴方がたが祈る時、偶像能く貴方がたに耳を貸すか？

74. 或いは、貴方がたを益するなり害するなりなし得るか？」と。

قُلْنَا تَرَاءُ الْجَمْعِينَ قَالَ أَحَبُّ مَوَاطِنَ إِنَّا لَنَدْرُكُونَ ﴿٢٢﴾

قَالَ كَلَّا إِنَّ مَعِيَ رَبِّي سَيَهْدِينِ ﴿٢٣﴾

فَأَوْحَيْنَا إِلَى مُوسَى أَنْ اضْرِبْ بِعَصَاكَ الْبَحْرَ
فَانْفَلَقَ فَكَانَ كُلُّ فَرٍ كَالظُّورِ الْعَظِيمِ ﴿٢٤﴾

وَأَرْفَعْنَا ثَمَرُ الْخَرِبِينَ ﴿٢٥﴾

وَأَنْجَيْنَا مُوسَى وَمَنْ مَعَهُ أَجْمَعِينَ ﴿٢٦﴾

ثُمَّ أَعْرَفْنَا الْأَخْرِبِينَ ﴿٢٧﴾

إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَةً وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿٢٨﴾

وَلَئِنْ رَدَّكَ لَهُوَ الْعَوْدُ الرَّحِيمُ ﴿٢٩﴾

وَاتْلُ عَلَيْهِمْ نَبَأَ إِبْرَاهِيمَ ﴿٣٠﴾

إِذْ قَالَ لِأَبِيهِ وَقَوْمِهِ مَا تَعْبُدُونَ ﴿٣١﴾

قَالُوا نَعْبُدُ أَصْنَامًا فَنَظَّلُ لَهَا عَافِينَ ﴿٣٢﴾

قَالَ هَلْ يَسْعَوْنَ كُمْ إِذْ تَدْعُونَ ﴿٣٣﴾

أَوْ يَنْفَعُونَكُمْ أَوْ يَضُرُّونَ ﴿٣٤﴾

注24 「モーゼの同志ら」は信仰心が弱かった様である。これは5:22-23、7:149、20:87-92に示されてある。

注25 この言葉は「民を海へ導け」という意味も持つ。

注26 アブラハムが反偶像崇拜を訴え続けた事がクルアーン全編に示されている。彼は、聖像破壊者として史上に残る最初の人物である。

75. 彼等は云えり、「否、されど、我等は父祖たちがかくの如くなすを見たり」と。
 76. アブラハムは云えり、「汝等考えざるか、貴方がたがこれまで崇めしものを、
 77. すなわち貴方がた並びに貴方がたの先祖が。
 78. それ等の偶像はすべて我が仇敵なり、但し万物の主を除いて。
 79. 我を創り、^{しか}而して、導き給うお方は、主なり。
 80. 我に食物並びに飲水を授け給うお方。
 81. 我病めば、之を癒すは主なり。(注 27)
 82. 我を死なしめ、再び甦らしめるお方。(注 28)
 83. 審判の日に、我、我が罪を赦し給わんことを乞い願うお方。
 84. 主よ、我に知恵を授け、義しき人々の列に加え給え。
 85. 後の世まで、真実不変の名声を我に授け給え。(注 29)
 86. 我をして至福の園を継ぐ者の一人たらしめよ。
 87. また、我が父を赦し給え、誤れる者の一人なれば。
 88. 人々が甦らされる日。(注 30) 我が面目を汚すなかれ。
- قَالُوا بَلْ وَجَدْنَا آبَاءَنَا كَذٰلِكَ يَفْعَلُوْنَ ④⑤
 قَالَ اَفَرَأَيْتُمْ مَا كُنْتُمْ تَعْبُدُوْنَ ④⑥
 اَنْتُمْ وَاٰبَاؤُكُمْ اِلَّا قَدَمُوْنَ ④⑦
 فَاِنَّهُمْ عَدُوٌّ لِّيْٓ اِلَّا رَبَّ الْعٰلَمِيْنَ ④⑧
 الَّذِيْ خَلَقَنِيْ فَهُوَ يَهْدِيْنِيْ ④⑨
 وَالَّذِيْ هُوَ يُطْعِمُنِيْ وَيَسْقِيْنِيْ ④⑩
 وَاِذَا مَرِضْتُ فَهُوَ يَشْفِيْنِيْ ④⑪
 وَالَّذِيْ يُبَيِّنْ لِّيْٓ اَثَمَ يُحْيِيْنِيْ ④⑫
 وَالَّذِيْ اَطْعَمَ اَنْ يَّغْفِرَ لِيْ خَطِيْئَتِيْ يَوْمَ الدِّيْنِ ④⑬
 رَبِّ هَبْ لِيْ حُكْمًا وَّ اَلْحِقْنِيْ بِالصّٰلِحِيْنَ ④⑭
 وَاجْعَلْ لِّيْ لِسَانَ صِدْقٍ فِى الْاٰخِرِيْنَ ④⑮
 وَاجْعَلْنِيْ مِنْ وَّرَثَةِ جَنَّةِ النَّعِيْمِ ④⑯
 وَاعْفُ عَنِّىْ اِنَّهٗ كَانَ مِنَ الصّٰلِحِيْنَ ④⑰
 وَلَا تُخْزِنِىْ يَوْمَ يُنْعَمُوْنَ ④⑱

注 27 アブラハムは、病の原因は自らにあり、治癒は神のおかげと考えている事がこの節に書かれてある。事実、人に降り懸かる災いは全て、人が自然の法に触れた為に起きたのであり、それ由、その者自身に責任があるのである。4章80節も参照の事。

注 28 アブラハムは病の原因は自らにあるとしているが、一方、死を神の恩恵と捕らえている。死は恐れるものでも避けるものでもない。事実、死は人生の自然にして必要なる終わりであり、それは生命と共に、神の偉大なる賜物である。

注 29 アブラハムはその良き名を後世に残した。後の世の三大宗教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教はアブラハムを偉大なる先祖、精神の祖と仰ぎ、崇めている。

注 30 死後に人が新しくより良い権利を授けられ、精神的に成長する道が開かれていること。

89. その日、富も子女も何ら助けとならざらん。

يَوْمَ لَا يَنْفَعُ مَالٌ وَلَا بَنُونَ ﴿٨٩﴾

90. ただ健全な真心をアッラーに捧げまつる者のみ救われん」と。

إِلَّا مَنْ آتَى اللَّهَ بِقَلْبٍ سَلِيمٍ ﴿٩٠﴾

91. 樂園は義しき者の近くにもたらされん。
(注 31)

وَأُولَئِكَ الْجَنَّةُ الَّتِي كُتِبَ لَهُمُ

92. 迷える者どもには、地獄が開かれん。

وَبُرَزَتِ الْجَحِيمُ لِلْغَايِينَ ﴿٩١﴾

93. 而して、彼等は問われん、「お前たちがアッラー以外に崇めしものは、今何處に在るぞや？」

وَقِيلَ لَهُمْ أَيْنَمَا كُنْتُمْ تَعْبُدُونَ ﴿٩٢﴾

94. 彼等はお前たちを助け得るか、或いは自らを助け得るか？」と。

مِنْ دُونِ اللَّهِ هَلْ يَنْصُرُونَكُمْ أَوْ يَنْصَرُونَ ﴿٩٣﴾

95. かくの如くにして、その者どもは地獄にまっさかさまに投げ込まれん、彼等並びに迷いたる者ども、

فَكُبِّرُوا فِيهَا هُمْ وَالْغَاوُونَ ﴿٩٤﴾

96. 及びイブリースの軍勢も、皆同時に。

وَجُنُودَ إِبْلِيسَ أَجْمَعُونَ ﴿٩٥﴾

97. 彼等は其處で互いに争いて、云わん、

تَالْوَأَلَاؤِ هُمْ فِيهَا يَخْتَصِمُونَ ﴿٩٦﴾

98. 「アッラーに誓って云う、我等は明白なる迷誤なりき、

تَاللَّهِ إِنْ كُنَّا لَبِئْسَ فِئْتًا مُبِينِينَ ﴿٩٧﴾

99. 我等がお前たちを万物の主^{ひげん}に比肩したるは。

إِذْ نُسَوِّيكُمْ بِرَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٩٨﴾

100. 我等を迷わしめたる者は、ただ罪人^{つみびと}のみ。

وَمَا أَضَلَّنَا إِلَّا الْمُجْرِمُونَ ﴿٩٩﴾

101. 而して、今、我等には如何なる弁護者もなく、

فَمَا لَنَا مِنْ شَافِعِينَ ﴿١٠٠﴾

102. また、同情を寄せる友もなし。

وَلَا صَدِيقِينَ حَبِيبِينَ ﴿١٠١﴾

103. 我等現世に戻り得るなら、必ず信者となるべきものを！」と。

فَلَوْ أَنَّ لَنَا كَرَّةً فَنَكُونُ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١٠٢﴾

104. げにこの中には神兆^{しんし}あり。然れども、彼等の大半は信ぜざるなり。

إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَةً وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿١٠٣﴾

注 31 正義なる者は天国に入いる新たなより良い権利を与えられるとここに書かれてある。

105. げに汝の主、すなわち彼は、偉大にして、
慈悲深くまします。

第六項

106. ノア一族も使徒たちを嘔つきとして遇
したり、

107. 彼等の兄弟ノアが彼等に向って、かく云
いし時。「お前たち神を畏れざるか？」

108. げに我は、お前たちへ遣わされたる忠実
なる使徒なり。

109. されば、アッラーを畏み奉り、而して、
我に従え。(注 32)

110. 我はこの為に如何なる報酬もお前たちに
請いはせぬ。我が報酬はただ万物の主の許
にあり。

111. されば、アッラーを畏み奉り、而して、
我に従え」

112. 彼等は云えり、「汝に従うは卑賤最たる者
のみなのに、我等に汝を信ぜよとな？」と。

113. ノアは云えり、「我、彼等がして来たこと
について、何の知るところあらんや？」

114. 彼等の勘定はただ主の許に在り。もしお
前たちが理解するならば！(注 33)

115. ともあれ、我は信仰する者たちを追ひ払
わんとする者に非ず。(注 34)

116. 我はただ一介の警告者にすぎず」と。

117. 彼等は云えり、「ノアよ、汝やめぬなら、
汝は必ず石を以て打たる身とならん」と。

118. ノアは云えり、「主よ、我が民は我を嘔つ
きとして遇したり。

وَرَأَىٰ رَبَّكَ لَهْوَ الْعَزِيزِ الرَّحِيمِ ﴿١٠٥﴾

كَذَّبَتْ قَوْمُ نُوحٍ الْمُرْسَلِينَ ﴿١٠٦﴾

إِذْ قَالَ لَهُمْ أَخُوهُمْ نُوحٌ أَلَا تَتَّقُونَ ﴿١٠٧﴾

إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ﴿١٠٨﴾

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَاطِيعُونَ ﴿١٠٩﴾

وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ ۚ إِن أَجْرِي إِلَّا عَلَىٰ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١١٠﴾

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَاطِيعُونَ ﴿١١١﴾

قَالُوا أَنْتُمْ لَكُمْ وَاتَّبَعَكَ الْأَرْذَلُونَ ﴿١١٢﴾

قَالَ وَمَا عَلَيَّ بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١١٣﴾

إِن حِسَابُهُمْ إِلَّا عَلَىٰ رَبِّي لَوْ تَشْعُرُونَ ﴿١١٤﴾

وَمَا أَنَا بِطَارِدِ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١١٥﴾

إِن أَنَا إِلَّا نَذِيرٌ مُّبِينٌ ﴿١١٦﴾

قَالُوا لَئِنْ لَّمْ تَنْتَهِ يَنُوحَ تَكُونَ مِنَ الْبَرَجِينَ ﴿١١٧﴾

قَالَ رَبِّ إِنِّي قَوِيٌّ كَذِبُونٍ ﴿١١٨﴾

注 32 「アッラーを畏み奉り、而して、我に従え。」という言葉は、この章で全ての預言者が人々に告げて来たものであるが、これは、神の啓示にある一般的な戒律とは別に、その時々々の預言者の教えに従う様人々に示されたものである。

注 33 クルアーンは、異なる地域で五つの異なる語に訳され、内容もそれぞれの地域の特異性に沿い、理解され易い様に書かれて来た。それ等は基本的には同じものだが、意味の細い点に違いがある。

注 34 神の預言者と一般の人々では、人生の価値判断の基準が異なる。前者は人をその行いで、又後者は財産及び社会的地域で判断する。

119. されば、汝、我と彼等との間に断固たる
裁きを下し給え。而して、我並びに我と偕
にある信者たちを救い給え」と。

فَأَفْتَحْ يَنبِيَّ وَبَيْنَهُمْ نَحْحًا وَنُجِّنِي وَمَنْ فَعِيَ مِنْ
الْمُؤْمِنِينَ ﴿١١٩﴾

120. そこでわれらは、ノア並びに彼と偕にあ
る者たちをみな箱舟に積み込んで救いた
り。

فَأَنْجَيْنَاهُ وَمَنْ مَّعَهُ فِي الْفُلِّ الشَّاحُونَ ﴿١٢٠﴾
ثُمَّ أَعْرَقْنَا بَعْدَ الْبَاقِينَ ﴿١٢١﴾

122. げにこの中には神兆あり。然れども、彼
等の大半は信ぜざるなり。

إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَةً وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿١٢٢﴾

123. げに汝の主、すなわち彼は、偉大にして、
慈悲深くまします。

يَعْلَمُ إِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ﴿١٢٣﴾

第七項

124. アード族も使徒たちを拒みたり、

كَذَّبَتْ عَادُ الْمُرْسَلِينَ ﴿١٢٤﴾

125. 彼等の兄弟フードが彼等に向って、かく
云いし時。「お前たち神を畏れざるか？

إِذْ قَالَ لَهُمْ أَخُوهُمْ هُودُ أَلَا تَتَّقُونَ ﴿١٢٥﴾

126. まことに我は、お前たちへ遣わされたる
忠実なる信徒なり。

إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ﴿١٢٦﴾

127. されば、アツラーを畏み奉り、而して、
我に従え。

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُوا ﴿١٢٧﴾

128. 我はこの為に如何なる報酬もお前たちに
請いはせぬ。我が報酬は万物の主の許にあ
り。

وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَى
رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١٢٨﴾

129. お前たちあらゆる高处に記念碑を建つ
は、虚しい榮華を求めてか、

أَتَبْنُونَ بِكُلِّ رِيعٍ آيَةً تَعْبَثُونَ ﴿١٢٩﴾

130. また豪華な館を築いて、永久に生くるつ
もりか？ (注 35)

وَتَتَّخِذُونَ مَصَانِعَ لَعَلَّكُمْ تَخْلُدُونَ ﴿١٣٠﴾

注 35 当節及び前、後の節には、アードの人々が強力でしかも高い文化を備えた民族であつたと記されてある。彼等は当時科学を非常に進歩させた。要塞・宮殿・大規模な貯水池を建設した。避暑地・工場・機械製作所を所有した。建設技術は特に優れていた。新兵器・戦法を編み出し、巨大な記念碑を建造した。つまり、今日の西側諸国の様に、最進技術を駆使したあらゆる設備を所有していた。彼等は学問において大いなる進歩を遂げたが、しかし歴史の最大の教訓を忘れていた。国家の真の強さは物質によるのではなく、高い特性によりもたらされるのである。彼等は道徳的・精神的に退廃し、行いを改めると告げる預言者の警告に耳を貸さなかつた為、神の警告を無視する者の逃がれ得ない恐しい運命に彼等も又陥つたのである。11 章 51 節も参照のこと。

131. 更に、誰かを襲うとなると、暴虐者の如く之を襲う。
وَإِذَا بَطَشْتُمْ بَطَشْتُمْ جَبَّارِينَ ﴿١٣١﴾
132. されば、アツラーを畏み奉り、而して、我に従え。
فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُوا ﴿١٣٢﴾
133. お前たち知つての通り、さまざまなるものを授け給うたお方を畏み奉れ。
وَاتَّقُوا الَّذِي أَمَدَّكُمْ بِمَا تَعْلَمُونَ ﴿١٣٣﴾
134. 彼はお前たちに家畜と子女らを授け、
أَمَدَّكُمْ بِالْعَالَمِ وَبَنِينَ ﴿١٣٤﴾
135. また、果樹園と井泉も授けたり。
وَجَنَّاتٍ وَعُيُونٍ ﴿١٣٥﴾
136. げに我はお前たちのために、恐ろしい日の懲罰を恐る」
إِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ﴿١٣٦﴾
137. 彼等は云えり、「汝が我等に警告するもせざるも、そは我等には同じことなり。
قَالُوا سَوَاءٌ عَلَيْنَا أَوَعَضْتَ أَمْ لَمْ تَكُنْ مِنَ الْوَعَّاطِينَ ﴿١٣٧﴾
138. そは往古の作り話にすぎず。
إِنْ هَذَا إِلَّا خُلُقُ الْأَوَّلِينَ ﴿١٣٨﴾
139. 我等は罰せられざるべし」と。
وَمَا نَحْنُ بِمُعَذِّبِينَ ﴿١٣٩﴾
140. かくて、彼等はフードを拒みたれば、われらは彼等を滅ぼしたり。げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の大半は信ぜざるなり。
فَكَذَّبُوهُ فَأَهْلَكْنَاهُمْ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَةً، وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿١٤٠﴾
141. げに汝の主、すなわち彼は、偉大にして、慈悲深くまします。
وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ﴿١٤١﴾
- 第八項
142. サムート族も諸使徒を拒みたり、
كَذَّبَتْ ثَمُودُ الْمُرْسَلِينَ ﴿١٤٢﴾
143. 彼等の兄弟サーリフが彼等に向つて、かく云いし時。「お前たち邪惡に対してその身を守らざるか？
إِذْ قَالَ لَهُمْ أَخُوهُمْ صَالِحٌ أَلَا تَتَّقُونَ ﴿١٤٣﴾
144. げに我は、お前たちへ遣わされたる忠実な使徒なり。
إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ﴿١٤٤﴾
145. されば、アツラーを畏み奉り、而して、我に従え。
فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُوا ﴿١٤٥﴾
146. 我はこの為に如何なる報酬もお前たちに請ひはせぬ。我が報酬は万物の主の許にあり。
وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَىٰ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١٤٦﴾

147. お前たちは、ここに持つてゐるものの間で、
永く安泰なり得べしと考えるか、
148. すなわち果樹園や井泉、
149. 麦畑や枝もたわわに実をつける棗椰子の
間で？
150. また、巧みに山を切り開いて家を造ると
も。
151. されば、アッラーを畏み奉り、^{かしこ}而して我
に従え。
152. ^{のり}則を越える者の命令に従うなかれ。
153. 彼等は地上に騒動を引きおこし、改善せ
ざる者なり」
154. 彼等は云えり、「汝はただ愚かれたる者に
すぎず。
155. 汝は我等同様ただの人間にすぎず。もし
汝のことばが真実なら、一つの奇跡を現出
せよ」と。
156. サーリフは云えり、「ここに一頭の牝駱駝^{めすらくだ}
あり。駱駝もお前たちも、それぞれ定めら
れた日に水を飲むべし。
157. ^{しか}而して、恐ろしい日の罰^{こいつ}を彼らぬよう、
駱駝を害するなかれ。
158. 然るに、彼等はその腦^{ひやがみ}を切断せり。然る
後、彼等は後悔せり。
159. 懲罰彼等を襲えるが故なり。げにこの中
には神兆^{しるし}あり。然れども、彼等の大半は信
ぜざるなり。
160. げに汝の主、すなわち彼は、偉大にして、
慈悲深くまします。
- 第九項
161. ロトの民も諸使徒を拒みたり、
162. 彼等の兄弟ロトが彼等に向つて、かく云
いし時。「お前たち神を恐れざるか？

أَتُرَوْنَ فِي مَا هَهُنَا آمِينَ ﴿١٤٧﴾

فِي جَنَّتٍ وَعَيْوُنٍ ﴿١٤٨﴾

وَرُودُوعٍ وَذَخْلٍ طَلْعُهَا هَضِيمٌ ﴿١٤٩﴾

وَتَنْجُوتُونَ مِنَ الْجِبَالِ يَبُوتًا فَرِهَيْنَ ﴿١٥٠﴾

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُوا نَصِيحَتَهُ ﴿١٥١﴾

وَلَا تُطِيعُوا أَمْرَ الْمُسْرِفِينَ ﴿١٥٢﴾

الَّذِينَ يَفْسِدُونَ فِي الْأَرْضِ وَلَا يُصْلِحُونَ ﴿١٥٣﴾

قَالُوا إِنَّمَا أَنْتَ مِنَ الْمُسَحَّرِينَ ﴿١٥٤﴾

مَا أَنْتَ إِلَّا بَشَرٌ مِثْلُنَا فَأَبِئْ بِإِذْنِ إِنْ كُنْتَ

مِنَ الصَّادِقِينَ ﴿١٥٥﴾

قَالَ هَذِهِ نَاقَةٌ لَهَا شِرْبٌ وَلَكُمْ شِرْبُ يَوْمٍ

مَعْلُومٍ ﴿١٥٦﴾

وَلَا تَسْوَوْهَا بِسَوَىٰ فَيَأْخُذْكُمْ عَذَابٌ يَوْمٍ عَظِيمٍ ﴿١٥٧﴾

فَعَقَرُوهَا فَاصْبَحُوا نَدِيبِينَ ﴿١٥٨﴾

فَأَخَذَهُمُ الْعَذَابُ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَةً وَمَا كَانَ

أَكْثَرَهُمْ مُّؤْمِنِينَ ﴿١٥٩﴾

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ﴿١٦٠﴾

كَذَّبَتْ قَوْمُ لُوطٍ الْمُرْسَلِينَ ﴿١٦١﴾

إِذْ قَالَ لَهُمْ أَخُوهُمْ لُوطُ أَلَا تَتَّقُونَ ﴿١٦٢﴾

163. げに我は、お前たちへ遣わされたる忠実なる使徒なり。

إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ﴿١٦٣﴾

164. されば、アッラーを^{かしこ}畏み奉り、^{しか}而して、我に従え。

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُوا عَمَلَكُمْ

165. 我はこの為に如何なる報酬もお前たちに請いはせぬ。我が報酬は万物の主の許にあり。

وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَىٰ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١٦٥﴾

166. お前たち、男にのみ近づいて、

أَتَأْتُونَ الذُّكْرَانَ مِنَ الْعَالَمِينَ ﴿١٦٦﴾

167. 主がお前たちのために創りたまひし妻を捨て置くか？いや、全くお前たちは則を越えたる人々なり。」

وَتَذَرُونَ مَا خَلَقَ لَكُمْ رَبُّكُمْ مِنْ أَزْوَاجِكُمْ بَلْ أَنْتُمْ قَوْمٌ عَادُونَ ﴿١٦٧﴾

168. 彼等は云えり、「ロトよ、汝やめぬなら、汝は必ず追放せらるべし」と。

قَالُوا لَيْنَ لَمْ تَنْتَهُ يَلْبُوطَ لَتَكُونَ مِنَ الْمُخْرَجِينَ ﴿١٦٨﴾

169. ロトは云えり、「我は心からお前たちの行状を憎む。

قَالَ إِنِّي بِعَمَلِكُمْ مِنَ الْقَائِلِينَ ﴿١٦٩﴾

170. 主よ、我と我が家族を彼等の所業より救い給え」と。

رَبِّ نَجِّنِي وَاهْلِي مِمَّا يَعْمَلُونَ ﴿١٧٠﴾

171. かくて、われらはロト並びにその家族のすべてを救いたり、

فَنَجَّيْنَاهُ وَاهْلَهُ أَجْمَعِينَ ﴿١٧١﴾

172. あとに残れる者の中に入りたる一老女を除いて。

إِلَّا عَجُوزًا فِي الْغَدِيرِ ﴿١٧٢﴾

173. 然る後、われらはその^{のこれら}残餘者をみな滅ぼせり。

ثُمَّ دَمَرْنَا الْأَخْرِينَ ﴿١٧٣﴾

174. 而して、われらは彼等の上に雨を降らせたり。警告を受けたる者どもに降りかかりしその雨や、苛酷なりき。

وَأَمْطَرْنَا عَلَيْهِمْ مَطَرًا فَسَاءَ مَطَرُ النَّذِيرِينَ ﴿١٧٤﴾

175. げにこの中には^{しか}神兆あり。然れども、彼等の大半は信ぜざるなり。

إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَةً، وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿١٧٥﴾

176. げに汝の主、すなわち彼は、偉大にして、慈悲深くまします。

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ﴿١٧٦﴾

第十項

177. 森に住む人々も諸使徒を拒みたり、

كَذَّبَ أَصْحَابُ لَيْكَةِ الْمُرْسَلِينَ ﴿١٧٧﴾

178. シュアイブが彼等に向って、かく云いし時。「お前たち神を恐れざるか？

إِذْ قَالَ لَهُمْ شُعَيْبٌ أَلَا تَتَّقُونَ ﴿١٧٨﴾

179. げに我は、お前たちへ遣わされたる忠実なる使徒なり。
إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ﴿١٧٩﴾
180. されば、アッラーを^{かしこ}畏み奉り、^{しか}而して、我に従え。
فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُوا نِعَايَ ﴿١٨٠﴾
181. 我はこの為に如何なる報酬もお前たちに請いはせぬ。我が報酬は万物の主の許にあり。
وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَى رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١٨١﴾
182. ^{すめ} 枘目は十分に与え、ごまかす者となるなかれ。
أَوْفُوا الْكَيْلَ وَلَا تَكُونُوا مِنَ الْمُخْسِرِينَ ﴿١٨٢﴾
183. ^{なしか} 正確な秤を以て計量し、
وَزِنُوا بِالْقِسْطِ أَلْسُنَ السُّتْقِيمِ ﴿١٨٣﴾
184. 他人の物を減少し、不正をなして地上を攪乱するなかれ。
وَلَا تَبْخَسُوا النَّاسَ أَشْيَاءَهُمْ وَلَا تَعُوا فِي الْأَرْضِ مُفْسِدِينَ ﴿١٨٤﴾
185. ^{しか} 而して、お前たち並びに前代の^び諸民族を創れる彼を^{かしこ}畏み奉れ
وَاتَّقُوا الَّذِي خَلَقَكُمْ وَالْجِيلَ الْأَوَّلِينَ ﴿١٨٥﴾
186. 彼等は云えり、「汝はただ憑かれたる者にすぎず。
قَالُوا إِنَّمَا أَنْتَ مِنَ الْمُسَحَّرِينَ ﴿١٨٦﴾
187. 我等同様ただの人間にすぎず。我等は汝を嘘つきと看做す。
وَمَا أَنْتَ إِلَّا بَشَرٌ مِثْلُنَا وَإِنْ نُنْظِرُكَ لِنَ الْكَذِبِينَ ﴿١٨٧﴾
188. もし汝の言葉が真実ならば、天の断片を我等の上に落下せしめよ」と。
فَأَسْقِطْ عَلَيْنَا كِسْفًا مِّنَ السَّمَاءِ إِنْ كُنْتَ مِنَ الصَّادِقِينَ ﴿١٨٨﴾
189. シュアイブは云えり、「我が主は、お前たちのなせることを最もよく知り給う」と。
قَالَ رَبِّيَ أَعْلَمُ بِمَا تَعْمَلُونَ ﴿١٨٩﴾
(注 36)
190. かくて、彼等はシュアイブを嘘つきとして宣したり。されば、陰惨な日の懲罰彼等を襲えり。そはまことに恐ろしい懲罰の日なりき。
فَكَذَّبُوهُ فَأَخَذَهُمْ عَذَابُ يَوْمِ الظُّلَّةِ إِنَّهُ كَانَ عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ﴿١٩٠﴾

注 36 自らに科せられる裁きを取り除こうとする人々の傲慢な態度に対し、シュアイブ預言者は次の様に答えた。不完全な知識しか持ち合わせない者が、裁きを科すべきか否か、又裁きがいつ科せられるべきであるか決める事はできない。それができるのは天地創造の神のみである。彼等の行いを全て熟知された神のみが、各々にふさわしい裁きを下されるのである。

191. げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の大半は信ぜざるなり。

إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَةً وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿١٩١﴾

192. げに汝の主、すなわち彼は、偉大にして、慈悲深くまします。

وَأَنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ﴿١٩٢﴾

第十一項

193. まことにこれは、万物の主よりの啓示なり。(注 37)

وَأَنَّهُ لَنَزِيلُ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١٩٣﴾

194. かの忠誠なる聖霊之を携えて

نَزَلَ بِهِ الرُّوحُ الْأَمِينُ ﴿١٩٤﴾

195. 汝の心に降りたるは、汝をして警告者たらしめんがためなり、(注 38)

عَلَى قَلْبِكَ لِتَكُونَ مِنَ الْمُنذِرِينَ ﴿١٩٥﴾

196. 平明にして明快なるアラビア語において。

بِلِسَانٍ عَرَبِيٍّ مُبِينٍ ﴿١٩٦﴾

197. この事はすでに、昔の人々の経典の中で言及す。(注 39)

وَأَنَّهُ لَفِي زُبُرِ الْأَوَّلِينَ ﴿١٩٧﴾

198. イスラエルの子孫の学者が之を知るは、彼等にとりて明証に非ざるか？

أَوَلَمْ يَكُنْ لَهُمْ آيَةٌ أَن يَكْلَمَهُ الْكَلَمُ بِآيٍ
إِسْرَائِيلَ ﴿١٩٨﴾

199. もしわれら之をアラブ以外の者に降し、

وَلَوْ نَزَّلْنَاهُ عَلَى بَعْضِ الْأَعْجَمِينَ ﴿١٩٩﴾

200. その者がアラブの彼等に読誦するとも、彼等はそれを信ぜざるべし。

فَقَرَأَهُ عَلَيْهِمْ مَا كَانُوا بِهِ مُؤْمِنِينَ ﴿٢٠٠﴾

201. 故にわれらは、罪深い者の心に不信を植え付けり。(注 40)

كَذَلِكَ سَلَكْنَاهُ فِي قُلُوبِ الْمُجْرِمِينَ ﴿٢٠١﴾

注 37 先に述べた預言者のお告げと同じく、クルアーンのお告げも又神により啓示されたものである。唯、違いは、先の預言者達が一族の長である人々に使われたのに対し、クルアーンは世界中の人々に啓示されたものである。これは次の一文から明かである。「まことにこれは、万物の主よりの啓示なり。」

注 38 「汝の心」という語は次の事を示している。クルアーンのお告げはモハammad預言者が、授けられた啓示を自らの言葉で表現したのではなく、カブリエルを通してモハammad預言者の心に下された神御自身の言葉であった。

注 39 モハammad預言者の出現及びクルアーンの啓示の予告がそれ以前の諸経典に記されている。あらゆる宗教の経典に見られるが、特に聖書がクルアーン前に、よく知られ、読まれていた経典であったので、その中にモハammad預言者の出現についての部分があるので示す(中命記 18 章 18~33 節イザヤ 21 章 13~17 節詩篇 1 章 5・6 節、ハブワーク 3 章 3~5 節、マタイ 21 章 42~45 節、ヨハネ 16 章 12~14 節)。

注 40 不信者の悪習は自らの心に根差し、悪事によける中で生じるものであり、外から入って来るものではない。事実この節である一般的な真実が述べられている。人が悪事によける時、罪の意識は鈍り、やがては悪事を好む様にすらなる。この様に、悪は人の心を蝕んで行くのである。

202. 彼等は痛刑を目の当たりに見るまでは、
之を信ぜざるべし。 ①
203. 然れども、刑罰は、彼等が気付かぬ間に、
突然襲わん。 ②
204. すると、彼等は云わん、「我等は猶子を与
えられざるか？」と。 ③
205. なんと！彼等はわれらの懲罰を急ぎ求
めんとな？ ④
206. 汝は如何に思うか？たといわれらが彼等
をこの世で長年楽しませようとも、 ⑤
207. 約束された懲罰に見舞われなば、 ⑥
208. 楽しめることは、彼等にとりて、益する
ところ何ものなし。 ⑦
209. されど、われらは、警告者を遣わさずし
て、いまだかつて如何なる邑も滅ぼさざり
き。(注41) ⑧
210. こは警告なり。われらは不当に処罰を施
す者に非ず。 ⑨
211. 悪魔は、それを携えて降りたることなし。 ⑩
212. 彼等はその任にふさわしからず、またか
かる能力もなし。(注42) ⑪
213. 彼等は、天上の話を聴くを禁じられてい
るなり。 ⑫
214. されば、処罰されざるように、アッラー
以外に如何なる他神も祈るなかれ。(注
43) ⑬

لَا يُؤْمِنُونَ بِهِ حَتَّى يَرَوْا الْعَذَابَ الْأَلِيمَ ①

فَيَأْتِيهِمْ بَغْتَةً وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ②

فَيَقُولُوا هَلْ نَحْنُ مُنْظَرُونَ ③

أَفِعَذَابِنَا يَسْتَعْجِلُونَ ④

أَفَرَأَيْتَ إِنْ مَتَّعْنَاهُمْ سِنِينَ ⑤

ثُمَّ جَاءَهُمْ مَا كَانُوا يُوعَدُونَ ⑥

مَا أَغْنَىٰ عَنْهُمْ مَا كَانُوا يَسْعَوْنَ ⑦

وَمَا أَهْلَكْنَا مِنْ قَرْيَةٍ إِلَّا لَهَا مُنْذِرُونَ ⑧

ذُرِّيَّتُهُ وَمَا كُنَّا ظَالِمِينَ ⑨

وَمَا تَكُنَّ لَهُ الشَّيْطَانُ ⑩

وَمَا يَنْبَغِي لَهُمْ وَمَا يَسْتَطِيعُونَ ⑪

إِنَّهُمْ عَنِ السَّمْعِ لَمَعَرُونَ ⑫

فَلَا تَدْعُ مَعَ اللَّهِ إِلَهًا آخَرَ فَمَنْ مِّنَ الْمُعَذِّبِينَ ⑬

注41 この節には、神の啓示の一つが示されている。預言者が遣わされた時、彼を拒否する事で裁きを逃がれ様としなければ、裁きが下される事はない。17章16節、28章60節、35章38節も参照のこと

注42 クルアーン製作にあたりサタンは如何なる働きもできなかったとする主張を指示する文が三つ、この節に含まれている。(a)クルアーンの教えは、サタンの表わす物全てを断固として非難する。(b)クルアーンは高い特性をを備え、サタンの力を上回る崇高な真実を記している。(c)クルアーンには、イスラム教の究極的な勝利が預言されている。サタンは未来に対する見識を持たない為、預言を行う力がない。

注43 クルアーンが悪魔の成せる業であるはずがない。悪魔の手になる物であれば、クルアーンに見られる様に唯一神に重きを置く事は有り得ない。

215. 而して、一番身近な同族の者に警告せよ。
(注 44)

وَأَنْذِرْ عَشِيرَتَكَ الْأَقْرَبِينَ ﴿٢١٥﴾

216. また、汝に従う信者たちに慈悲の翼を低く垂れよ。

وَأَخْفِضْ جَنَاحَكَ لِمَنِ اتَّبَعَكَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٢١٦﴾

217. もし彼等汝に背かば、その時は云え、「我はお前たちの為すことに一切関りなし」と。
(注 45)

فَإِنْ عَصَوْكَ فَقُلْ إِنِّي بَرِيءٌ مِمَّا تَعْمَلُونَ ﴿٢١٧﴾

218. 汝の信頼を、偉力者、慈悲者に託せ。

وَتَوَكَّلْ عَلَى الْعَزِيزِ الرَّحِيمِ ﴿٢١٨﴾

219. 彼は汝が礼拝に立つを見、

الَّذِي يَرَبُّكَ جُنَّ تَقُومُ ﴿٢١٩﴾

220. また、アッラーの前で平伏す者たちの中にある汝の動作をみそなはし給う。

وَتَقَبَّلَكَ فِي السَّجْدَيْنِ ﴿٢٢٠﴾

221. げに彼は、すべてを聴き、すべてを知り給う。

إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿٢٢١﴾

222. 誰が上に悪魔たちが降るかを、われお前たちに教えようか？

هَلْ أُنَبِّئُكُمْ عَلَىٰ مَا تَنْزَلُ الشَّيَاطِينُ ﴿٢٢٢﴾

223. 彼等は、あらゆる大嘘つきと犯罪者どもの上に降る。

تَنْزَلُ عَلَىٰ كُلِّ آفَاكٍ أَثِيمٌ ﴿٢٢٣﴾

224. 彼等はその聴きたることを復唱すれど、彼等の大半は嘘つきなり。

يُلْقُونَ السَّعْ وَكَثُرَ هُمْ كَذِبُونَ ﴿٢٢٤﴾

225. 而して、詩人たちはどうかと云えば、彼等に従うは誤る者のみ。

وَالشُّعْرَاءُ يَتَّبِعُهُمُ الْغَاوُونَ ﴿٢٢٥﴾

226. 汝は彼等が、いたるところの谷間で、取り乱しさまよう姿を、

الْمَرْتَرَانَهُمْ فِي كُلِّ وَادٍ يَهَيَّيْنُونَ ﴿٢٢٦﴾

227. また己れのやりもせぬことを云うのを見ざるか？ (注 46)

وَأَنَّهُمْ يَقُولُونَ مَا لَا يَفْعَلُونَ ﴿٢٢٧﴾

注 44 記録によれば、この節が啓示された時、モハammad 預言者はサファーに立ち、全てのクライシュ族の名を呼び、モハammad 預言者の言葉を受け入れ悪業を断たねば神の裁きが下ると彼等に警告した。(ブハリ)

注 45 私は貴人から自由だ。貴人の行いとは無関係だ。貴人の行為に対して一切責任を負わない。

注 46 この節には、モハammad 預言者が詩人であるという非難に対する反論が告かれてある。その三つの反証とは次の様なものである。(1)詩人に従う者は高い徳性を備えてはいないが、モハammad 預言者に従う者は高尚な考えと高い徳性を持つ。(2)詩人は人生に対する確固たる考えや計画を持たない。言わば、あてどなく谷を

228. 但し、信じて義^{ただ}しい行いにいそしみ、大いにアッラーを念じ、不当な取り扱いをされた時のみ報復する者は除^{しか}かれる。而して、不義なす徒^{やから}輩は、やがて如何なところ^{そこ}に帰り行くかを知るに至らん。

إِلَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَذَكَرُوا اللَّهَ
كَثِيرًا وَأَتَصَرَّوْا مِنْ بَعْدِ مَا ظَلَمُوا وَسَيَعْلَمُ
الَّذِينَ ظَلَمُوا أَيَّ مُنْقَلَبٍ يَنْقَلِبُونَ ﴿٢٢٨﴾

さまよう様なものである。しかし、モハammad預言者は偉大で崇高なる人生の使命を持つ。(3)詩人は自らの言葉を行爲に移さない。しかしモハammad預言者は最高の説教者であると共に、最高の実行者であり、模範である。



アル・ナマル

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 إِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①
2. ター・スーン。(注1)こはクルアーンにして、人々を啓発する經典の諸節、 طَسَّ تِلْكَ آيَةُ الْفُرْآنِ وَكِتَابٍ مُبِينٍ ②
3. 信仰する人々への嚮導と朗報なり、 هُدًى وَبُشْرَى لِلْمُؤْمِنِينَ ③
4. 礼拝を遵守し、喜捨をなし、来世について毅然たる信念を持つ者への。 الَّذِينَ يُقِيمُونَ الصَّلَاةَ وَيُؤْتُونَ الزَّكَاةَ وَهُمْ بِالْآخِرَةِ هُمْ يُوقِنُونَ ④
5. 来世を信ぜざる徒輩については、われら彼等をして己れの所業を立派なことと思わしめたれば、彼等は惑いさまよう。(注2) إِنَّ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ زَيَّنَّا لَهُمْ أَعْمَالَهُمْ فَهُمْ يَعْمَهُونَ ⑤
6. 恐ろしい責苦を受くるは彼等にして、来世に於ては最も大なる損失者たらん。 أُولَئِكَ الَّذِينَ لَهُمْ سُوءُ الْعَذَابِ وَهُمْ فِي الْآخِرَةِ هُمْ الْخَسِرُونَ ⑥
7. げに汝は、このクルアーンを、賢哲にして深知なる御方より授けられたる者なり。(注3) وَإِنَّكَ لَتَلَقَّى الْفُرْآنَ مِنْ لَدُنِّ حَكِيمٍ عَلِيمٍ ⑦
8. モーゼがその家族の者に、「我燃ゆる火を認めたり。(注4)我行きて、其処より消息を إِذْ قَالَ مُوسَى لِأَهْلِهِ إِنِّي آنَسْتُ نَارًا سَآتِيكُمْ

注1 恵み深く、すべてを聴く神！

注2 人に悪行をそそのかすサタンが人の目に美しく映る事が6：44及び8：49に明示されている。しかし当節では、不信心者の行為が当人に良く見える様神が仕向けられていると書かれてある。人が、自らの行為に責任を感じないまま悪の道を進む時、彼がその行為を正しく適切だと思い始めるのは当然であり、こうして彼はその誤った考えに捕らわれる様になるのである。これは、実の所彼自身の行為の所産と言うよりは、神の法に沿った出来事であり、神に起因するものである。

注3 モハammad預言者が自らの言葉を書き綴った本をクルアーンと名付けたという非難に対し、この節はそれを明確に否定している。更に、彼が全智全能の神より直接にクルアーンを授けられたと明示している。

注4 モーゼが目にしたのは現実の火ではない。もしそうであれば「我燃ゆる火を認めたり。」という表現をせずに「我、その燃ゆる火を認めたり。」と言ったであろう。クルアーンに書かれたモーゼに関する主な出来事の多くは、物質界で現実起きた事ではなく、モーゼの精神的発達途上における出来事を象徴しており、預言としての意味を持つ。クルアーンには、杖に関する幻以外にも重要な例が挙げられており、当節も又その一つである。

もたらさん。或いは、燃えさしを持ち帰らん、さすればお前たち暖を得べし」と云える時を念え。

9. 彼そこに到るや、声ありて、仰せられり、「火を求める者並びにその周囲におる者に祝福あれ。(注5)万物の主、アッラーに讃えあれ。
10. モーゼよ、げにわれこそは偉大にして、賢哲なるアッラーなり。
11. 汝の杖を投げよ」と。モーゼ投げたる杖が蛇の如く動くを見るや、(注6)背を向けてあとをも見ずに逃げだせり。「モーゼよ、恐れるなかれ。われ汝と偕にあり。使徒たるものは、わが前で恐れる必要なし。
12. 罪を犯せし者でも、その後、善を以て惡に替へたる者には、われまことに慈悲深く寛大なり。
13. 汝の手を懷中に入れよ。そは病に非ざるに、白くなりて出でん。こはファラオとその民に示す九種の奇跡の一つなり。彼等は実に罪深き徒輩なり」(注7)
14. 然るに、われらの明瞭なるさまざまな奇跡が彼等の前で生じても、彼等は「こは明白なる妖術なり」と云えり。
15. 彼等は心の裡でそれが眞実なるを悟れども、その無理驕傲を以て之を認めざりき。然れども、これ等墮落せし徒輩の末路が如何に不幸なりしかを見よ！

مِنْهَا بِخَيْرٍ أَوْ آتَيْنَاكُمْ بِشِهَابٍ قَبَسٍ لَعَلَّكُمْ تَصْطَلُونَ ①

فَلَمَّا جَاءَهُ نُودَى أَنْ بُورِكَ مَنْ فِي النَّاسِ وَمَنْ حَوْلَهَا وَسُبْحَنَ اللَّهُ رَبِّ الْعَالَمِينَ ②

يُوسَى إِنَّهُ أَنَا اللَّهُ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ③

وَأَلْقِ عَصَاكَ فَلَمَّا رَآهَا تُهْتَزُّ كَانَهَا جَانٌ وَلَّى مُدْبِرًا وَلَمْ يُعَقِّبْ يَٰيُوسَى لَا تَخَفْ إِنِّي لَا يَخَافُ لَدَى الْمُرْسَلِينَ ④

إِلَّا مَنْ ظَلَمَ ثُمَّ بَدَّلْ حِسًّا بَعْدَ سَوْءٍ فَأَلَّيَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ⑤

وَأَدْخِلْ يَدَكَ فِي جَيْبِكَ تَخْرُجْ بَيْضًا مِنْ غَيْرِ سَوْءٍ فِي ثِيَابٍ آتِ إِلَى فِرْعَوْنَ وَقَوْمِهِ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمًا فَاسِقِينَ ⑥

فَلَمَّا جَاءَهُمْ آيَاتُنَا مُبْصِرَةً قَالُوا هَذَا سِحْرٌ مُبِينٌ ⑦

وَجَحَدُوا بِهَا وَاسْتَيْقَنَتْهَا أَنْفُسُهُمْ ظُلْمًا وَعُلُوًّا ⑧
فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُفْسِدِينَ ⑨

注5 この言葉は次の様な意味を持つ。(a)火を捜し求め、それに近付く者。(b)火の中に居る者、あるいは火に入ろうとしている者。処所での火は、神の愛の火、又は災難の火を象徴している。この節に書かれた火とは神の事ではなく、又火の中に神が居られたのでもない。それは唯、囲りのもの全てに光を投げかける神の出現であった。

注6 7章108節参照

注7 「九種の奇跡」については17:102参照。

第二項

16. またわれらは、ダビデ並びにソロモンに知識を授けたれば、(注8)彼等は云えり、「彼を信ずる多くの僕らに優りて、我等を高めたるアッラーに讃えあれ」と。

وَلَقَدْ آتَيْنَا دَاوُدَ وَسُلَيْمَانَ عِلْمًا وَقَالَ الْخَصَدُ
لِلَّهِ الَّذِي فَضَّلَنَا عَلَى كَثِيرٍ مِّنْ عِبَادِهِ
الْمُؤْمِنِينَ ⑬

17. ソロモンはダビデの継承者なりき。彼は云えり、「汝等人人々よ、我等は鳥の言葉を教えられ、(注9)且つすべてのものを授けられり。これこそ神の明白なる恩寵なり」と。

وَوَرِثَ سُلَيْمَانُ دَاوُدَ وَقَالَ يَا أَيُّهَا النَّاسُ عَلِمْنَا
مَنْطِقَ الطَّيْرِ وَأَوْتَيْنَا مِنْ كُلِّ شَيْءٍ إِنَّ هَذَا لَهُوَ
الْفَضْلُ الْبَیِّنُ ⑭

18. 妖霊と人間(注10)と鳥類(注11)からなる軍勢がソロモンのもとに集められ、それぞれの部隊に編成されて、(注12)

وَحُشِرَ لِسُلَيْمَانَ جُنُودُهُ مِنَ الْجِنِّ وَالْإِنسِ
وَالطَّيْرِ فَهُمْ يُوزَعُونَ ⑮

注8 ダビデは優れた武人であり、又強力にして賢明な政治家でもあった。彼はユダヤ王朝の創設者であり、ヘブライ王国の真の建国者であった。ダンからビールジエバに至るまで、イスラエルの全支族は彼の下に統一し、ユーフラテスからナイルに至る広大な地域を支配する強力な王国を築き上げた。父のダビデの後を継いだソロモンは、この王国をより強力なものにした。彼も又、優れた君主であった。彼は自国の商業を大いに発展させた。彼はイスラエルの王の中の王であり、エルサレムに有名な寺院を建てた事で良く知られている。エルサレムは後に、イスラエルの祈りの方角となった。

注9 言葉とは、意志を表す音声と文字のことである。それは外的には口語、内的には理解となる。又トウクという語は動物や鳥が抽象的な意味で扱われる時にも用いられる。鳥や昆虫は独自の意志伝達手段を持つ。渡り鳥は季節の移り変わりと共に地域から地域へと移動する。彼等は群れをなして整然と飛ぶ。同じ様に、蟻は共同体の中で生活し、蜂は統制された支配系統を持つ。彼等の間に意志伝達手段がなければ、このような事は不可能である。この伝達手段は、彼等の言葉と言えるであろう。預言者ダビデ及びソロモンが鳥の言葉を学んだとここに書かれてあるが、それは、彼等が鳥の利用法を知った事を示しているのかもしれない。伝言を送るのに鳥を利用する方法はソロモンが考え出したもので、この方法を多用して広大な国を統治したのである。

注10 ジンは此の節では、山又は未開の部族を指す。当節は21:83, 34:13, 38:38と併読すれば良い。処々では、ソロモンの軍勢の統率者について述べられている。ジン、インス、タエルこの三つの言葉は、彼の軍隊の三部門を示す。当節及び34:13にあるジンは軍隊の特殊部隊を示しているが、21:83, 38:38ではシャヤーティーンが同様に使われている。ソロモンは未開部族を征服したが、ジンとシャヤーティーンはほぼ同じ意味で使われており、軍の中核部隊を形成し、ソロモンの為に様々な難事業を為した者達を指している。足の速い馬という意味の語タエル(鳥)は、ソロモンの騎兵隊を示している。これは38:32・34で裏付けられており、そこには、ソロモンが馬を非常に可愛がっていたと書かれてある。以上の通り、ジン(遊民)とインス(庶民)はソロモンの歩兵隊の二部門を指し、タエルは騎馬隊を指す。しかし、もしタエルを実際の鳥という意味にとるなら、ソロモンが通信に使った鳥を指すだろう。この様に彼等はソロモンの軍隊にとり、無くてはならない存在であった。また、この三語を隱喩的に解釈すれば、それぞれ「高位の人」「俗人」「高潔な人」を指す。

注11 タエルは、鳥という意味の他に、馬の様に足の速い動物も指す。タエルの強意形であるタヤールは、機敏で足の速い馬を指し、走る速度が非常に速く、まるで飛んでいる様に見えるのである。

注12 この表現は(1)彼等が二つの隊を形成していたことを表す。(2)彼等は秩序ある軍隊の様に行進した。(3)先頭部隊が停止したので、後継部隊は追いつけたのかもしれない。この文から分かる様に、ソロモンの軍隊はよく訓練され規則正しく、数部隊に分かれていた。

19. 彼等が^{ナマル}蟻の谷にさしかかると、(注13)一人の^{ナマル}蟻族の女が「^{ナマル}蟻族よ、自分の住居に入れ、ソロモンの率いる軍勢が、それとは知らず、お前たちを踏みつぶさぬように」と云えり。(注14)

20. そこでソロモンは、彼女の言葉に笑いながら、微笑^{ほほえ}んで云えり、(注15)「主よ、汝が我並びに我が父母に垂れ給うた恩寵に感謝すべく、我を振り起し給え。而して、御慈悲によりて、汝の嘉し給う善い行いに我を導き給わんことを。我を汝の義しい僕らの中に加わらしめ給え」と。

21. さて、ソロモンは鳥たちを聞^きいて、云えり、「フドフドが見えざるは何故ぞ？彼は故意に参加せざるか？(注16)

22. 我は必ず厳しい懲罰を以て彼を処罰せん。或いは、彼がその不在の明白なる釈明をもたらすに非ずば、我必ず彼を殺さん」と。(注17)

كَهَّ إِذَا أَكْوَا عَلَى وَادِ النَّمْلِ قَالَتْ نَمْلَةٌ يَا أَيُّهَا
النَّمْلُ ادْخُلُوا مَسْكِنَكُمْ لَا يَحْطِمَنَّكُمْ سُلَيْمُنُ
وَجُنُودُهُ وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ⑮

فَتَبَسَّمَ ضَاحِكًا مِّن قَوْلِهَا وَقَالَ رَبِّ أَوْزِعْنِي
أَنْ أَشْكُرَ نِعْمَتَكَ الَّتِي أَنْعَمْتَ عَلَيَّ وَعَلَىٰ وَالِدَيَّ
وَأَنْ أَعْمَلَ صَالِحًا تَرْضَاهُ وَأَدْخِلْنِي بِرَحْمَتِكَ
فِي عِبَادِكَ الصَّالِحِينَ ⑯

وَتَفَقَّدَ الطَّيْرَ فَقَالَ مَا لِيَ لَا أَرَى الْهُدَّ هُدًى
أَمْ كَانُ مِنَ الْغَائِبِينَ ⑰

لَا عَذْبَ بَنَةِ عَذَابًا شَدِيدًا أَوْ لَأَذْبَحَنَّهُ أَوْ
لَيَأْتِيَنِّي بِسُلْطَنِ مُّبِينٍ ⑱

注13 「ナマルの谷」の代名詞ナマルは一般に誤解されている様な蟻の谷という意味ではなく。ナマルという名の支族の住んだ谷を指す。

注14 ソロモンの兵士達の信心深さは善く知られていた様だ。彼等が故意に人を傷付ける事はなかった。これは、「それとは知らず」という文が示しており、次節で明示されている様に、それはソロモンを喜ばせた。

注15 ソロモンや彼の軍隊の力、信仰心を称えたナマルの人々の言葉に、ソロモンが感嘆したと、この節に書かれてある。

注16 軍隊と、国の高官・おそらくは將軍であったフドフドが、緊急時に不在であった事実を、ソロモンは再検討した様だった。

注17 フドフドは、伝説上一般に信じられている様な、ソロモンが通信に使った鳥ではなかったその根拠として次の様な事が挙げられる。(a)偉大な王であり神の預言者であるソロモンの高潔さからして、彼が一羽の小鳥に腹を立て、厳罰を下し、あるいは死に至らしめたとは考えられない。(b)フドフドは国の掟に詳しく、神の唯一性に精通していた様で(25-26節)、鳥ではそうはならない。(c)渡り鳥でないフドフドが長い距離を飛べる訳はなく、シュバ(またはサバ)までの往復飛行に使われたはずはない(23節)。以上の点からしてフドフドは鳥ではなく人間であり、しかも国の高官あるいは將軍で、ソロモンより重要な使命を受けシュバの女王の元へ赴いたのである。使者の交換は、ソロモンの時代によく行われていた様である。又、人が鳥や動物に因んで名付けられるのは知られた事だ。フドフドはソロモンの国民によくある名前だった。聖書にある名前フダードのアラビア形がフドフドの様だ。数人のエドムの王の名がフドフドで、イシュマエルの息子もそうである。又、ヤコブの虐殺を恐れてエジプトへ逃がれたエドムの皇子も同じ名を持っていた(列王上11:14)。この名は一般的で、旧約聖書にも度々使われているので、限定語が付いていない限り、エドム家の男を意味する事となっている。(Jew. Enc.)フドフドは又、シュバの女王ビルキースの父の名でもある(Muntaha al-Irab)。

23. だが、待つほどもなく、フドフドが飛来して、云えり、「我は、汝が知らぬことを知り得たり。確実なる消息を持つてサバより飛び来たりぬ。(注18)

فَمَكَثَ غَيْرَ بَعِيدٍ فَقَالَ أَحَطْتُ بِمَا لَمْ نَحُطْ بِهِ
وَجِئْتُكَ مِنْ سَبَإٍ بِنَبَأٍ يَقِينٍ ③

24. 我は、その国を治めるは女性なるを見たり。彼女はすべてのものを賜わりて、燦然たる玉座を有せり。(注19)

إِنِّي وَجَدْتُ امْرَأَةً تَمْلِكُهُمْ وَأُوتِيَتْ مِنْ كُلِّ
شَيْءٍ وَلَهَا عَرْشٌ عَظِيمٌ ④

25. 彼女もその民も、アッラーの代りに、太陽を崇拜するを見たり。(注20) 而して、悪魔、彼等をしてその所業を立派なりと思わしめ、正しい道を歩まぬよう彼等を妨げたれば、彼等は正しく導かれていず。

وَجَدْتُهَا وَقَوْمَهَا يَسْجُدُونَ لِلشَّمْسِ مِنْ دُونِ
اللَّهِ وَزَيْنَ لَهُمُ الشَّيْطَانُ أَعْمَالَهُمْ فَصَدَّهُمْ عَنِ
السَّبِيلِ فَهُمْ لَا يَهْتَدُونَ ⑤

26. これはつまり、天地の奥秘を光明に持ち顯し、人が隠すことも顯すこともすべて知るアッラーを拜すなかれ、と悪魔が彼等に命じたるが故なり。

أَلَّا يَسْجُدَ لِلَّهِ الَّذِي يُخْرِجُ الْخَبْأَ فِي السَّمَوَاتِ
وَالْأَرْضِ وَيَعْلَمُ مَا تُحْفُونَ وَمَا يُغْنُون ⑥

27. アッラー！彼の外に神なく、莊嚴なる玉座の主なり」と。

اللَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ رَبُّ الْعَرْشِ الْعَظِيمِ ⑦

28. そこで、ソロモンは云えり、「我等は見ん、汝果して真実を語りたるか、或いは偽る徒輩の一人なるかを。(注21)

قَالَ سَنْنَظُرُ أَصَدَقْتَ أَمْ كُنْتَ مِنَ الْكَاذِبِينَ ⑧

29. 我が書翰を持ち行き、之を彼等の前に投じ、然る後退きて彼等の返答を見よ」と。(注22)

إِذْ هَبْ بِكِشْيَ هَذَا فَأَلْقِيهِ إِلَيْهِمْ ثُمَّ تَوَلَّ عَنْهُمْ
فَانْظُرْ مَاذَا يَرْجِعُونَ ⑨

注18 フドフドが国の重要な使者として、派遣され、ソロモンの代理で重要書類を運んだ事がこの節から分かる。サバとは、聖書に書かれたシバの事であろう(列王上10章)それはイエメンにある都市でサナアの町から三日程かかりシエバの女王の行政府の所在地であった。又、サバはカタール族の有名な一支部でもある。

注19 シエバの女王が治めた人々は非常に裕福であり、高い文明を備えていた。女王は、強力な君主と成るに必要な物全てを所有していた。

注20 サバの人々は太陽・星を崇拜していた。おそらくこの宗教は、海やペルシャ湾を頻繁に往き来していたイエメン人により、イラクからイエメンへもたらされたのであろう。サバの人々を2:63, 5:70, 22:18で述べたサービたちと混合してはならない。サービたちに関しては様々な記述がある。(1)イラク在住の星を崇拜する人々。(2)ユダヤ教、キリスト教、ゾロアスター教を取り混ぜた様な宗教を信じる人々。(3)イラクのムール近くに住み、唯一神を信じるが、何の律法も持たない人々。(4)イラク周辺に住み、全ての神の預言者を信じる人々。

注21 鳥が真実を語るか、虚言を吐くかは全く分からない。しかし、この節でも、フドフドが鳥でなく、ソロモン政府の高官であった事を示すもう一つの根拠が挙げられている。

注22 たとえダビデとソロモンが鳥の言葉を理解するとしても、シエバの女王もそうであったという記述は

30. 女王は云えり、「汝等族長たちよ、妾に貴い書翰^{てがみ}が投ぜられたり。

قَالَتْ يَا أَيُّهَا الْمَلَأُ أَلَيْسَ الْكِتَابُ كَرِيمًا ③

31. そはソロモンより寄せられたものにして、かく認められり、「慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

إِنَّهُ مِنْ سُلَيْمَانَ وَإِنَّهُ بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ④

32. 我に傲慢にも抗せず、服従悦服して我に米たれ」と。

أَلَا تَعْلَمُونَ عَلَىٰ وَأَنُؤِنِّي مُسْلِمِينَ ⑤

第三項

33. 女王は云えり、「汝等族長たちよ、この件に関して妾に建議せよ。お前たちの助言を得るまでは、妾は何事も決せざるべし」と。

قَالَتْ يَا أَيُّهَا الْمَلَأُ أَفْتُونِي فِي أَمْرِي مَا كُنتُ قَاطِعَةً أَمْرًا حَتَّىٰ شَهِدُوا ⑥

34. 族長たちは答えり、「我等は力量もあり、戦場^{いくさば}にては勇猛なれど、命を下すは汝の務めなり。されば、命ぜんことを熟慮されよ」と。(注 23)

قَالُوا نَحْنُ أَوْلُوا قُوَّةً وَأُولُوا بَأْسٍ شَدِيدَةٌ وَالْأَمْرُ إِلَيْكَ فَانْظُرِي مَاذَا تَأْمُرِينَ ⑦

35. 女王は云えり、「諸王が都府^{おとし}を陥れたる時は、之れを掠奪し、その民の貴賤を卑賤なる者となすを常とす。彼等のなすことは常にかくの如し。

قَالَتْ إِنَّ الْمُلُوكَ إِذَا دَخَلُوا قَرْيَةً أَفْسَدُوهَا وَجَعَلُوا أَعِزَّةَ أَهْلِهَا أَذِلَّةً وَكَذَلِكَ يَفْعَلُونَ ⑧

36. 然れども、妾は彼等に進物を送らん。而して、使節が如何なる返事を持ち帰るかを見るつもりなり」と。

وَأَرْسِلْ رُسُلًا إِلَيْهِمْ يَهْدِيكَ فَنَظَرَةٌ بِسْمِ يَرْجِعُ الْمُرْسَلُونَ ⑨

37. かくて、女王の使節ソロモンの許^{もと}に到るや、ソロモンは云えり、「お前たちは、その財宝を以て、我を助けんとするか？然しながら、アッラーが我に賜わりたるものは、お前たちが賜わりたるものよりはるかに優る。否、然るに、お前たちはその贈物を誇る。(注 24)

فَلَمَّا جَاءَ سُلَيْمَانَ قَالَ أَتُمِدُّوَنِ بِمَالٍ فَمَا آتَيْنَ اللَّهُ خَيْرٌ مِمَّا أَنَكُمُ بَلْ أَنْتُمْ يَهْدِيكُمْ تَفْرَحُونَ ⑩

クルアーンのどこにも示されていない。にもかかわらず、フドフドは、使者としてソロモンの手紙をシェバの女王に渡し、更にソロモンの代理として彼女と会見する様命ぜられたのである。

注 23 シェバの女王は強力な君主であり、多くの物を所有し、国民の愛情・協力・自発的な服従を得、彼等の運命の裁定者であった。サバの権力と栄光は、紀元前 1100 年ごろに極った。女王の治世は紀元前 950 年まで続いた。この年に、彼女はソロモンに王位を譲ったと伝えられている。彼女の禪譲は次の様な聖書の言葉に従ったものであった。「シェバ（あるいはサバ）の王達は貢を納めよう。」(詩篇 72: 10)

注 24 ソロモンは、彼に贈り物を送って寄越した女王の態度に、明らかに腹を立てた様だ。彼はそれを侮辱と捕えた。彼が女王の降服を求めているのに対し、わずかな贈り物がなされただけであった。サバの人々は当

38. 急ぎ帰れ。我等は必ず抗し難い大軍を以て彼等に臨み、彼等をはずかしめて国外に放逐し、卑賤なる状態に陥らしめん」と。

ارْجِعْ إِلَيْهِمْ فَلَنَأْتِيَنَّهُمْ بِجُودٍ لَا قَبْلَ لَهُمْ بِهَا
وَلَنُخْرِجَنَّهُمْ مِنْهَا أَذِلَّةً وَهُمْ صَاغِرُونَ ﴿٣٨﴾

39. ソロモンは云えり、「族長たちよ、お前たちのうち、先方が屈服して我に来る前に、彼女の玉座を我にもたらす者は果たして誰か?」と。(注 25)

قَالَ يَا أَيُّهَا الْمَلَأُ أَيُّكُمْ يَأْتِينِي بِعَرْشِهَا قَبْلَ أَنْ
يَأْتُونِي مُسْلِمِينَ ﴿٣٩﴾

40. すると、妖霊の仲間^{ジン}に勇猛なる首領^{キヤンブ}ありて、云えり、「我、汝が野营地を引き払う前に、それを汝にもたらさん。げに我はよくその能力を持つ者なれば、信頼されるに足る者なり」と。(注 26)

قَالَ عِفْرِيتٌ مِنَ الْجِنِّ أَنَا آتِيكَ بِهِ قَبْلَ أَنْ
تَقُومَ مِنْ مَقَامِكَ وَإِنِّي عَلَيْهِ لَقَوِيٌّ أَمِينٌ ﴿٤٠﴾

41. また、經典の知識ある者ありて、云えり、「我、一瞬の間に、それを汝にもたらさん」と。而して、ソロモン、玉座がその前に置かれるを見て、云えり、「こは我が主のお恵みにして、我之に感謝するかせざるかを主我に試めさんとす。感謝するものは、己れ自身の幸福のために感謝す。感謝せざる者ありても、我が主は自ら足りて、寛大なり」と。

قَالَ الَّذِي عِنْدَهُ عِلْمٌ مِنَ الْكِتَابِ أَنَا آتِيكَ بِهِ
قَبْلَ أَنْ يَرْتَدَّ إِلَيْكَ طَرْفُكَ فَلَمَّا رَآهُ مُسْتَقِرًّا عِنْدَهُ
قَالَ هَذَا مِنْ فَضْلِ رَبِّي لِيَبْلُوَنِي ءَأَشْكُرُ أَمْ
أَكْفُرُ وَمَنْ شَكَرَ فَإِنَّا يَشْكُرُنَفْسِهِ وَمَنْ كَفَرَ
فَإِنَّ رَبِّي عَزِيزٌ كَرِيمٌ ﴿٤١﴾

42. ソロモンは更に云えり、「女王の玉座を彼女が識別し得ないように改めよ。而して、彼女が見分けがつくかつかぬか試してみよう」と。

قَالَ تَكُونُوا لَهَا عَرْشُهَا نَنْظُرُ أَنِغْدِي أَمْ تَكُونُ
مِنَ الَّذِينَ لَا يَهْتَدُونَ ﴿٤٢﴾

43. 女王が到着するや、ソロモンは訊ねり、「汝の玉座はかくの如きものなりや?」と。女王は答えり、「同じ様に思う。我等はこれよ

فَلَمَّا جَاءَتْ قِيلَ أَهَكَذَا عَرْشُكِ قَالَتْ كَأَنَّهُ هُوَ

初ソロモンの領土を攻撃したり、そこで不安をかき立て様とした。だからこそ、ソロモンは女王が贈り物を寄越した事に腹を立てたのである。平常ならば彼は喜んで贈り物を受けたはずである。

注 25 一国の王が他国の王を訪れる時、国賓の歓迎会に王座を設ける事が当時流行っていた様である。ソロモンも又、女王歓迎の席に王座を作る様命じた。それは彼女の為に特別に作られた物なので、「彼女の王座」と呼ばれている。この言葉には又「彼女の王座にふさわしい人」という意味もある。

注 26 上述の「勇猛なる首領」(イフリート)は巨大な権力を振るう高官であり、それ由、定められた時間内で主の命を主の十分に満足できる様に遂行できると確信していた。「信頼されるに足る」とはこの様な事を示している。「野营地」は、ソロモンがサバへ向う途中留まった所で、シェバの女王の返書^{あはじ}を携えて戻る使者を、彼は処所で待っていた。

り以前に知識を授かり、(注27)すでに服従帰依した者なり」と。

44. されど、彼女がアッラー以外に拝したる神々が、彼女の信心を阻害せり。なんとなれば、彼女の出自は不信の民なるが故に。

45. 女王は「宮殿に入れ」と告げられたり。然るに、女王宮殿を見れば、そは広大なる水而しすそと思ひて裳裾しすそをまくつて脛を露にせり。(注28)ソロモンは云えり、「こは瑠璃板るりにて敷きつめた宮殿なり」と。女王は云えり、「主よ、げに姿は誤れり。妾ソロモンと共に万物の主なるアッラーに服従帰依す」と。

第四項

46. 先にわれらは、サムードの民にその兄弟サーリフを遣わし「アッラーを崇拝せよ」と云えり。然るに、見よ、彼等二派に分かれて争えり。
47. サーリフは云えり、「我が民よ、何故お前たちは善をさし措いて悪を急ぎ求めるか?何故にアッラーの宥恕ゆうじよを求めて、その慈悲に浴せんとせざるか?」と。
48. 彼等は云えり、「我等は汝と汝と偕にある者をト占うらな官いたるに、凶と出たり」と。彼は云えり、「お前たちの不幸の真の原因は、アッラーの許にあり。それどころか、お前たちは試みられている民なり」と。

注27 「我等はこれより以前に知識を授かり」というのは、女王が既にソロモンの偉大な権力と富に精通し、彼に忠誠を尽くす決心をしていた事を表わす。

注28 ソロモンは、女王が偶像崇拝を止め、真の信仰を受け入れる様望んだ。その為、彼はこの高貴で賢明な婦人に、自らの誤りを悟らせ様とした。ソロモンが彼女用に作成させた王座は、この目的の為であった。それは彼女が誇る彼女自身の王座より遙かに美しく、あらゆる点で優れていた。ソロモンがそうしたのは、彼が神の寵児であり、彼女よりも物質的・精神的に遙かに多くのものを与えられている事を、彼女に悟らせる為であった。当節にある宮殿も又、同じ目的で建てられた。本文にある通り、宮殿の入口には厚いガラス板が敷かれ、その下には透き通った水が流れていた。女王が宮殿に足を踏み入れた時、透明なガラスを水と思ひ、脚を露わにした。しかし、すぐに間違ひであるとわかり、戸惑ってしまった。ソロモンはこの装置を用いて彼女がガラスを水と取り違えたと同じ様に、彼女の崇める太陽や他の神聖なる物が真の光源ではない事を気付かせた。それ等は単に光を放つが、生命の無い物である。それ等の放つ光を与えているのは全能の神である。この様にしてソロモンは意を遂げた。この高貴な女性は自らの誤ちを告白し、木や石の偶像崇拝を離れ、唯一神の熱心な信者となったのである。

وَأُوتِينَا الْعِلْمَ مِنْ قَبْلِهَا وَكُنَّا مُسْلِمِينَ ﴿٢٧﴾

وَصَدَّهَا مَا كَانَتْ تَعْبُدُ مِنْ دُونِ اللَّهِ إِنَّهَا كَانَتْ مِنْ قَوْمٍ كَافِرِينَ ﴿٢٨﴾

قِيلَ لَهَا ادْخُلِي الصَّرْحَ فَلَمَّا رَأَتْهُ حَسِبَتْهُ لُجَّةً وَكَشَفَتْ عَنْ سَاقَيْهَا قَالَ إِنَّهُ صَرْحٌ مُّمَرَّدٌ مِنْ قَوَارِيرَ قَالَتْ رَبِّ إِنِّي ظَنَنْتُ نَفْسِي رَاسِلَةً مَعَ سُلَيْمَانَ يَلُوحِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٢٩﴾

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا إِلَى ثَمُودَ أَخَاهُمْ صَارِحًا أَنْ عِبُدُوا اللَّهَ فَإِذَا هُمْ فَرِيقَيْنِ يَخْتَصِمُونَ ﴿٣٠﴾

قَالَ يَقُومُ لِمَ تَسْتَعْجِلُونَ بِالسَّيِّئَةِ قَبْلَ الْحَسَنَةِ لَوْلَا تَسْتَغْفِرُونَ اللَّهَ لَعَذَابُكُمْ تَرْحُونُ ﴿٣١﴾

قَالُوا أَظْهَرْنَا بِكَ وَبَيْنَ مَعَكَ قَالَ طَرِّقُوا عِنْدَ اللَّهِ بَلْ أَنْتُمْ قَوْمٌ تُفْتَنُونَ ﴿٣٢﴾

49. さて、この^④邑に九人の一味ありて、国中に災いを及ぼせり。而して、改心することなし。
50. 彼等は云えり、「アッラーに誓って約束す、我等必ず夜に乗じて彼と彼の家族を襲わん。而して、その後、被害者の遺族に告げん、『我等は彼の家族の殺害を目撃せざりき、げに我等の言葉は真実なり』と。
51. かくて、彼等は一計を案じたれば、われらも策せり。然れども、彼等そのことに気づかざりき。(注29)
52. 見るがいい、彼等の企み^⑤が如何に不幸な結末になりしかを！げにわれらは、彼等並びにその民を同時に悉く滅ぼせり。
53. あれなるは、その不義のために倒壊せる彼等の家なり。げにこの中には、道理を弁えた人々への神兆あり。
54. 而して、われらは、神を信じ且つ畏れ敬いたる人々を救いたり。
55. またわれらは、ロトを使徒として遣わしたり。時に彼は、己が一族に云えり、「お前たち、それを悪いと知りながら、敢て醜行を犯すや？
56. 何たることぞ！お前たち女よりもむしろ男に欲情を抱いて近づくと？お前たちは本当に無知なる徒輩なり」と。
57. 然るに、彼の一族の答えは「ロト一家をこの^⑥邑から放逐せよ。彼等は高潔ぶる一門なり」とだけ云えり。
- وَكَانَ فِي الْبَلَدِ ثَلَاثَةٌ يَفْسِدُونَ فِي الْأَرْضِ وَلَا يُصْلِحُونَ ﴿٤٩﴾
- قَالُوا تَقَاسَمُوا بِاللَّهِ لَنُبَيِّتَنَّهُ وَأَهْلَهُ ثُمَّ لَنَقُولَنَّ لِوَلِيِّهِ مَا شَهِدْنَا مَهْلِكَ أَهْلِهِ وَإِنَّا لَصَادِقُونَ ﴿٥٠﴾
- وَمَكْرُؤُهُمْ مَكْرًا وَمَكْرَانَا مَكْرًا وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٥١﴾
- فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ مَكْرِهِمْ أَنَّا دَمَّرْنَاهُمْ وَقَوْمَهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٥٢﴾
- فَتِلْكَ بُيُوتُهُمْ خَاوِيَةٌ بِمَا ظَلَمُوا إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَةً لِّقَوْمٍ يَعْلَمُونَ ﴿٥٣﴾
- وَأَنْجَيْنَا الَّذِينَ آمَنُوا وَكَانُوا يَتَّقُونَ ﴿٥٤﴾
- وَلَوْ طَآءِذُ قَالَ لِقَوْمِهِ إِنَّا أَنْتُونَ الْفَاحِشَةَ وَأَنْتُمْ تُبْهِمُونَ ﴿٥٥﴾
- أَيُنْكِهُمُ لَتَأْتُنَّ الرِّجَالَ شَهْوَةً مِنْ دُونِ النِّسَاءِ ۚ بَلْ أَنْتُمْ قَوْمٌ تَجْهَلُونَ ﴿٥٦﴾
- فَمَا كَانَ جَوَابَ قَوْمِهِ إِلَّا أَنْ قَالُوا أَخْرِجُوْهُ أَلْ لَّوْطُ مِنْ قَرْيَتِكُمْ إِنَّهُمْ أَنَاسٌ يَّتَطَهَّرُونَ ﴿٥٧﴾

注29 モハammad預言者はメッカから逃れたが、結局クライシュの軍勢は全滅した。彼等は、モハammad預言者をメッカから追放する事が自らの滅亡につながろうとは思ひもしなかったのである。

注30 モーゼ、ダビデ、ソロモン、サーレ、ロトに関する話はこの節で終わる。ここには神の平和への願い、人類に世の全ての善徳において恩恵を与える神の預言者及び選民への祝福が述べられてあった。この後の章は神の存在・神の偉大なる力と唯一性を示す主題へと移る。

58. かくてわれらは、ロトの妻を除き、ロトとその家族を救いたり。われらは彼女を後に残る者の中に加えたり。

59. 而してわれらは、彼等の上に或る種の雨を降らしたり。その雨は、警告を受けたる徒輩には禍なりき。

第五項

60. 云え、「アッラーに讃えあれ、その選び給うた僕らに平安あれ。優位なるはアッラーなりや、はたまた彼等がアッラーと併せ祀る神々なりや？」と。(注30)

61. 天地を創造し、お前たちのために水を天空から降し、(注31)以て美しい果樹園を繁茂させるは誰ぞ？それ等の樹木を成育させるは、お前たちの能くするところに非ず。アッラーに此肩し得る神在りや？否、彼等は正しい道から逸れ行くばかり。

62. 大地を安息所となし、河川をその中に引き、不動なる山々をその上に置き、二つの海の間に隔壁を設けたるは誰ぞ？(注32)アッラーに此肩し得る神在りや？否、彼等の大半は知らざるなり。

63. 困窮せる者の祈りに応えてその不幸を取り除き、お前たちをして地を嗣しめる者は誰ぞ？(注33)アッラーに此肩し得る神在りや？お前たちは殆ど之を熟慮せず。

64. 陸海の暗黒の中でお前たちを導き、また、慈悲の先駆として朗報の風を送るは誰ぞ？アッラーに此肩し得る神在りや？アッラーは、彼等がアッラーに併せ祀る者より遥か高くにおわします。

فَأَنجَيْنَاهُ وَأَهْلَهُ إِلَّا امْرَأَتَهُ قَدَّرْنَاهَا مِنَ الْغَابِرِينَ ﴿٥٨﴾

وَأَمْطَرْنَا عَلَيْهِمْ مَطَرًا مَّسَاءً مَطَرُ الْمُنْذَرِينَ ﴿٥٩﴾

قُلِ الْحَمْدُ لِلَّهِ وَسَلَامٌ عَلَى عِبَادِهِ الَّذِينَ اصْطَفَى
اللَّهُ خَيْرٌ مِمَّا يَشْرِكُونَ ﴿٦٠﴾

أَمَّنْ خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ وَأَنْزَلَ لَكُمْ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَأَنْبَتْنَا بِهِ حَدَائِقَ ذَاتَ بَهْجَةٍ
مَا كَانَ لَكُمْ أَنْ تُشْبِتُوا شَجَرَهَا ۗ إِنَّهُ مَعَ اللَّهِ
بَلْ هُمْ قَوْمٌ يَعِدُونَ ﴿٦١﴾

أَمَّنْ جَعَلَ الْأَرْضَ قَرَارًا وَجَعَلَ خِلَالَهَا أَنْهَارًا
وَجَعَلَ لَهَا رَوَاسِي وَجَعَلَ بَيْنَ الْبَحْرَيْنِ حَاجِزًا
ۗ إِنَّهُ مَعَ اللَّهِ ۗ بَلْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٦٢﴾

أَمَّنْ يُجِيبُ الْمُضْطَرَّ إِذَا دَعَاهُ وَيَكْشِفُ السُّوءَ
وَيَجْعَلُكُمْ خُلَفَاءَ الْأَرْضِ ۗ إِنَّهُ مَعَ اللَّهِ ۗ فَلْيَبْلُوا
مَا تَدَّكُرُونَ ﴿٦٣﴾

أَمَّنْ يَهْدِيكُمْ فِي ظُلُمَاتِ اللَّيْلِ وَالْبَحْرِ وَمَنْ يُزِيلُ
الْرِّيحَ بُشْرًا لِّبَنِي رَحْمَتِهِ ۗ إِنَّهُ مَعَ اللَّهِ ۗ
فَعَلَى اللَّهِ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿٦٤﴾

注31 前節で触れた主題に沿い、まずは自然に関する話題から始まる。それは、大地の創造、不毛の地に降りる雨と生命、そして山と川。

注32 前節に始まる主題は、処所で更に深く広くなる。

注33 神の偉大なる力は自然の法則の素晴らしさに表されており、人が苦しみの中で神に救いを求め、神がその声をお聞きになられた時、それは人の心に表される。

65. 始原の創造をなし、然る後之を生殖せしめ、
(注 34) 天と地からお前たちを扶養するは
誰ぞ？アッラーに比肩し得る神在りや？云
え、「もしお前たちの言葉が真実ならば、そ
の証拠を出してみよ」と。

66. 云え、「天地の間、アッラーの外には何人も
霊界を知らず。また、彼等は、甦らしめら
れるその時を知らず」と。

67. 否、来世に関する彼等の知識には限界あり。
というより、彼等はそれについて疑いを抱
く。いや、それどころか、盲なり。

第六項

68. 不信心者どもは云う、「なんととな！我等や我
等の祖先が上に帰したる後、本当に再び甦
らしめられるというのか？

69. 我等は、つまり、我等も父祖も以前この事
を約束せられたり。されど、こは、住古の
物語にすぎず」と。

70. 云え、「地上を巡りて罰当りどもの惨めな
末路如何なるものなりしかを見よ」と。

71. 汝、彼等のために哀むなかれ、又彼等の策
謀の故に心を痛めるなかれ。

72. 彼等は云う、「もしお前の言葉が真実なら
ば、その約束が履行されるのは何時なる
か？」と。

73. 云え、「お前たちが催促することの一部は、
お前たちのすぐ後に接近しているやも知れ
ぬ」と。

74. げに汝の主は、人々に対して慈悲深くまし
ます。然るに、彼等の大半は感謝の念なし。

أَمَّنْ يَبْدَأُ الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ وَمَنْ يَرْزُقُكُمْ
مِّنَ السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ ۚ إِنَّ اللَّهَ قُلُّ هَٰؤُلَاءِ إِنَّكُمْ
إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٥٥﴾

قُلْ لَا يَعْلَمُ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ الْغَيْبَ
إِلَّا اللَّهُ ۚ وَمَا يَشْعُرُونَ أَيَّانَ يُبْعَثُونَ ﴿٥٦﴾

بَلِ ادَّسَرَكَ عَلَيْهِمْ فِي الْآخِرَةِ قَبْلَ هُمْ فِي شَكٍّ
مِّنْهَا أَتَقْبَلُ هُمْ فِيهَا عَمَوْنَ ﴿٥٧﴾

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا إِذَا كُنَّا تُرَابًا وَآبَاءُنَا إِنَّا
لَكٰۤخِرُونَ ﴿٥٨﴾

لَقَدْ وُعِدْنَا هٰذَا نَحْنُ وَآبَاؤُنَا مِن قَبْلُ ۚ إِن
هٰذَا إِلَّا أَسَٰطِيرُ الْأَوَّلِينَ ﴿٥٩﴾

قُلْ سِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَانظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ
الْمُجْرِمِينَ ﴿٦٠﴾

وَلَا تَحْزَنْ عَلَيْهِمْ وَلَا تَكُنْ فِي ضَيْقٍ مِّمَّا يَمْكُرُونَ ﴿٦١﴾

وَيَقُولُونَ مَتَىٰ هٰذَا الْوَعْدُ ۖ إِنَّكُمْ مُّدْرِكُونَ ﴿٦٢﴾

قُلْ عَنِّي أَن يَكُونَ دَرَبٌ لَّكُمْ بَعْضُ الَّذِي
تَسْتَعْجِلُونَ ﴿٦٣﴾

وَإِنَّ رَبَّكَ لَذُو فَضْلٍ عَلَى النَّاسِ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَهُمْ
لَا يَشْكُرُونَ ﴿٦٤﴾

注 34 創造と出産を表わす。

75. げに汝の主は、人々の胸に秘めたることも、
また顯わすことも知り給う。

وَأَنَّ رَبَّكَ لَيَعْلَمُ مَا تُكِنُّ صُدُورُهُمْ وَيُخْفُونَ ٥٥

76. 天地に於て、秘密なるものは一つとしてな
く、すべて明瞭なる經典に記されているな
り。

وَمَا مِنْ غَائِبَةٍ فِي السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ إِلَّا فِي كِتَابٍ
مُبِينٍ ٥٦

77. げにこのクルアーンは、イスラエルの子孫
のために、彼等が相争う大概の事柄を明示
するものなり。(注 35)

إِنَّ هَذَا الْقُرْآنَ يَفْضُ عَلَى بَنِي إِسْرَءِيلَ أَكْثَرَ
الَّذِي هُمْ فِيهِ يَخْتَلِفُونَ ٥٧

78. げにこは、信徒たちにとり嚮導であり、慈
悲なり。

وَرَأْنَهُ لَهْدًى وَرَحْمَةً لِلْمُؤْمِنِينَ ٥٨

79. げに汝の主は、自らの判断によって彼等の
間を裁くべし、全能、全知にましますが故
に。

إِنَّ رَبَّكَ يَقْضِي بَيْنَهُم بِحُكْمِهِ ٥٩ وَهُوَ الْعَزِيزُ
الْعَلِيمُ ٦٠

80. されば汝、アッラーを信頼せよ。汝は確か
に、明白なる真理の上に立つ故に。

فَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ إِنَّكَ عَلَى الْحَقِّ الْمُبِينِ ٦١

81. げに汝は、死者を(注 36)聴かしむる能わ
ず、また背を向けて退く聲に汝の呼ぶ声を
聴かしむる能わず。

إِنَّكَ لَا تَسْمِعُ الْمَوْتَى وَلَا تُسْمِعُ الضُّمَمَ الدُّعَاءَ إِذَا
وَلَّوْا مُدْبِرِينَ ٦٢

82. また汝は、盲を迷誤から導く能わず。汝は
ただわれらが神兆を信する者に聴かしめ得
るのみ。さすれば彼等は服従帰依す。

وَمَا آتَتْ يَهْدَى الْعُمْيَ عَنْ صَلَاتِهِمْ إِنْ تَسْمِعُ
إِلَّا مَنْ يُؤْمِنُ بِآيَاتِنَا فَهُمْ مُسْلِمُونَ ٦٣

83. だが、判決が彼等に下される時は、われら
は大地から或る種の微菌を彼等にもたらさ
ん。(注 37) そは彼等を害すべし、なんと
なれば、われらの神兆を信ぜざりしが故に。

وَإِذَا وَقَعَ الْقَوْلُ عَلَيْهِمْ أَخْرَجْنَا لَهُمْ دَابَّةً مِّنَ
الْأَرْضِ تُكَلِّمُهُمْ أَنَّ النَّاسَ كَانُوا بِآيَاتِنَا

لَا يُوقِنُونَ ٦٤

注 35 この節ではソロモンの事が述べられている。ユダヤ人達は、ソロモンがシェバの女王の心を奪う為に偶像崇拜を利用した、と彼を非難した。女王に対するソロモンの態度を巡っては、ユダヤ人の間に意見の相違があったので、クルアーンはこの不明瞭な出来事の真相を明かしたのである。

注 36 当節の「死者」とは精神的に死んだ者であり、同じく次節の「盲」とは精神的盲人のことである。

注 37 これは、末日にペストが発生することを預言したものである。当節はモハammad 預言者自らが解釈した。しかし、もしここに示されているような「ばい菌(虫)」を現世の富・物質的安楽をのみ追い求める超唯物論者と解するなら(34:15)、当節における「彼等」というのは、現世に関わりある物のみを求め続ける西洋の唯物論者を指す事になる(18:105)。

第七項

84. その日、われらは、それぞれの民からわれらの神兆を拒否せる徒輩をひとまとめに集め、之を別個の一団となさん。
وَيَوْمَ نَحْشُرُ مِنْ كُلِّ أُمَّةٍ فَوْجًا مِمَّنْ يُكَذِّبُ بِآيَاتِنَا
فَهُمْ يَوْرَعُونَ ﴿٨٧﴾
85. 彼等御前に至るや、アッラーは云わん、「お前たち浅薄な知識を以て、われらの神兆を拒みたるか？お前たちの為したることは何事ぞ？」と。
حَتَّىٰ إِذَا جَاءَ وَقَالَ أَلْذَّبْتُمْ بِآيَاتِي وَلَمْ تُحِطُوا بِهَا
عِلْمًا أَمَّا ذَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٨٨﴾
86. かくて、自らの悪行ゆえに、判決は彼等の上に下るべし。然るに、彼等弁明する能わず。（注38）
وَوَقَعَ الْقَوْلُ عَلَيْهِمْ بِمَا ظَلَمُوا أَنَّهُمْ لَا يُطْفِقُونَ ﴿٨٩﴾
87. 彼等悟らざるか、われらが彼等の休息のために夜を創り、光を以て照らすべく昼を創りたることを？げにこの中には、信ずる人々へのさまざまな神兆あり。
أَلَمْ يَرَوْا أَنَّا جَعَلْنَا اللَّيْلَ لَيْسَكُنَا فِيهِ وَالنَّهَارَ
مُبْصِرًا إِن فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِّقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ﴿٩٠﴾
88. 喇叭が吹き鳴らされるその日、（注39）アッラーが嘉し給う者の外は、天にある者、地にある者、悉く恐怖におののかん。而して、謙りてアッラーの前に出でん。
وَيَوْمَ يُنْفَخُ فِي الصُّورِ فَتَخْرُجُ مِنْ فِي السَّمَوَاتِ وَ
مَنْ فِي الْأَرْضِ إِلَّا مَنْ شَاءَ اللَّهُ وَكُلٌّ أَتَوْهُ دُجُرِينَ ﴿٩١﴾
89. 汝は連なる山々を見て、（注40）それがしっかりとゆるがざるものと思うなれど、そは雲の飛び去る如く消えうせん。こは万物を総覧するアッラーの御業なり。彼はお前たちの所業を悉く知ろしめし給う。
وَتَرَى الْجِبَالَ تَحْسِبُهَا جَامِدَةً وَهِيَ تَمُرُّ مَرَّ
السَّحَابِ صُنِعَ اللَّهُ الَّذِي لَيْسَ أَتَقَنَ كُلَّ شَيْءٍ إِنَّهُ خَبِيرٌ
بِمَا تَفْعَلُونَ ﴿٩٢﴾
90. 誰であれ善事を行える者は、それより更に優る褒賞を賜わり、かかる者はその日の恐怖に動じざるべし。
مَنْ جَاءَ بِالْحَسَنَةِ فَلَهُ خَيْرٌ مِنْهَا وَهُمْ مِنْ فَدَجٍ
يَوْمَئِذٍ أَمُونُونَ ﴿٩٣﴾

注 38 彼等は己れの罪を弁解できないだろう。彼等に対する告発は事実明白で、翻す事はできず、有罪の判決が彼等に下されるであろう。

注 39 「らっぱが吹き鳴らされるその日」というのはキリストの復活を指す他、トランペットの吹奏のごとく、モハammad 預言者により導かれた新たな秩序を示す。

注 40 山のごとく深く根付いていたと思える古い理念や法は、モハammad 預言者の出現と共に、雲が流れる様に、溶け、消え去った。「山々」とは強大なローマ及びペルシャ帝国を指すが、この両国も、圧倒的な勝利を治めたイスラム軍を前にして、もみ殻の様に四散させられた。

91. なれど、悪事を行える者は、業火^{さうか}の中に逆様に投げ込まれん。「お前たちは自らの行為に対して賞罰されざるか？」

وَمَنْ جَاءَ بِالسَّبِيحَةِ فُكِّتَ وَجُوهُهُمْ فِي النَّارِ هَلْ تُجْزَوْنَ إِلَّا مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٩١﴾

92. 云え、「我はただ、主が聖域となされしこの町の主に仕えよと命ぜられているのみ。
(注41) 万物は彼の掌中にあり。而して、我は、神に甘心服従する者の一人たるべしと命ぜらる。

إِنَّمَا أُمِرْتُ أَنْ أَعْبُدَ رَبَّ هَذِهِ الْبَلَدَةِ الَّذِي فِي حَوْصِمِهَا وَلَهُ كُلُّ شَيْءٍ وَأُفِرْتُ أَنْ أَكُونَ مِنَ الْمُنَافِقِينَ ﴿٩٢﴾

93. また、クルアーンを誦誦^{きやうどう}することと。されば、誰であれ嚮導に従う者は、己れ自身の幸福追求となり、迷誤する者には「我は一警告者にすぎず」と云え。

وَأَنْ أَتْلُوا الْقُرْآنَ فَمَنْ اهْتَدَىٰ فَإِنَّمَا يَهْتَدِي لِنَفْسِهِ ۖ وَمَنْ ضَلَّ فَقُلْ إِنَّمَا أَنَا مِنَ الْمُنذِرِينَ ﴿٩٣﴾

94. 而して云え、「アッラーに讃えあれ。彼はお前たちにそのさまざまなる神兆^{しるし}をやがて示すべし。而して、お前たちは之を認めん」と。汝の主は、お前たちの所業を閑却せず。

وَقُلِ الْحَمْدُ لِلَّهِ سَيُرِيكُمْ آيَاتِهِ فَتَعْرِفُونَهَا ۚ وَمَا رَبُّكَ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿٩٤﴾

注41 偶像崇拜がアラビアから無くなれば、カーバ神殿はその重要性を失い、それと共に自らの保管者としての威信も失われるのではないかとメッカの人々は恐れた。(カーバ神殿には、イスラム教以前の当時にメッカの人々により偶像が祭られていた) この節では、彼らの誤った考えを正し、世界の活力の中心であり、全人類に向けられた神託の中心地として、メッカはその重要性を失う事なく、むしろその威信は深まり、終わりの時まで崇められると説いている。



アル・カサス

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. ター・スイーン・ミーム。(注1)

طسّم ②

3. こは明瞭なる經典の諸節なり。

تِلْكَ آيَاتُ الْكِتَابِ الْمُبِينِ ③

4. われらは信ずる人々のために、モーゼ並びにファラオの正確な話を汝に復誦す。

نَتْلُو عَلَيْكَ مِنْ نَبَأِ مُوسَى وَفِرْعَوْنَ بِالْحَقِّ لِقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ④

5. げにファラオはかの国において横柄に振舞い、その民を幾多の党派に分ちたり。彼は民の一部を虐げ、その息子らを殺し、婦女子のみを容赦せんと謀れり。(注2)彼は確かに離間者なりき。

إِنَّ فِرْعَوْنَ عَلَا فِي الْأَرْضِ وَجَعَلَ أَهْلَهَا شِيَعًا يَسْتَضِعُّ طَائِفَةً مِنْهُمْ يَتَّبِعُ أَبْنَاءَهُمْ وَيَسْتَكْبِي نِسَاءَهُمْ إِنَّهُ كَانَ مِنَ الْمُسْهِدِينَ ⑤

6. われらはかの国において抑圧された人々に恵みを与え、彼等を指導者となし、われらが恩恵の後継者となすべく、

وَنُرِيدُ أَنْ نَمُنَّ عَلَى الَّذِينَ اسْتُضِعُوا فِي الْأَرْضِ وَنَجْعَلَهُمْ أَئِمَّةً وَنَجْعَلَهُمُ الْوَارِثِينَ ⑥

7. 彼等の勢力をかかゝるに確立し、ファラオとハーマンとその軍勢にその危惧せることを示さんと欲したり。(注3)

وَنُفِخَ لَهُمْ فِي الْأَرْضِ وَنَرَى فِرْعَوْنَ وَهَامَانَ وَجُنُودَهُمَا مِنْهُمْ مَا كَانُوا يَحْذَرُونَ ⑦

注1 恵み深く、すべてを聴き、すべてを知る神！

注2 20世紀において、西洋の植民地化政策による分断と統治が行なわれたが、ファラオも同じ政策をとり、成功を治めていた様である。彼はエジプト人を分割し、その間に不公平な差別を作った。引立てられる者もあれば、搾取され抑圧される者もあった。モーゼ一族は後者の不幸な人々だった。「その息子らを殺し、婦女子のみを容赦せん」という言葉は、イスラエル人支配の為、ファラオがその男達を殺し、女のみ生かした事を外見的に示しているが、今一つの意味をこの語は持つ。ファラオは、搾取と冷酷な抑圧を持って、イスラエルの男達の力を奪い、女のような臆病者にした。

注3 エジプトにおけるイスラエルの民の退廃は絶望的となり、ファラオとエジプト人の非道ぶりは最悪のものであった。全智の神は、抑圧者を罰し、被抑圧者を解放する様命じ、そのとき神はモーゼをお遣いになった。全ての神の使者の時代に起きたこの出来事は、イスラムのモハammad預言者の時に全て明かにされた。

8. かくて、われらは、モーゼの母に默示を以て、云えり、「彼に乳を飲ませよ。嬰兒の身に危険を感じたら、ただちに彼を河に捨てよ、而して、案じ悲しむなかれ。なんとなれば、われらは彼を汝につれ戻し、而して、使徒の一人たらしめん」と。
9. ファラオの家人は、後日己れらの敵となり、憂慮の因となるべき嬰兒を拾いあげたり。げにファラオとハーマン並びにその軍勢は罪深い徒輩なりき。
10. ファラオの後は云えり、「この子は、妾と汝の眼の喜びとならん。殺すなかれ。多分将来、我等のために役に立つやも知れぬ。或いは、養子とするもよし」と。彼等はその成り行きに気づかざりき。(注4)
11. モーゼの母の心は不安を免れたり。もしわれらが彼女の心を強固ならしめ、毅然たる信者たらしめざりせば、彼女は危うくその真相を明らかにするところなりき。(注5)
12. 母はモーゼの姉に向って云えり、「彼の後を追え」と。姉は遠くよりモーゼを見守りしが、彼等はそれに気づかざりき。
13. われらはモーゼにあらかじめ、すべての乳母を拒むべく定めたり。そこで、姉来たりて云えり、「あなたがたに代わってこの子を育て、この子のために幸いを祈る人たらんとなる家政婦一家を教えましょうか?」と。
14. かくしてわれらは、モーゼをその母に返し、彼女の眼を喜ばしめ、その悲しみを除いて、アッラーの約束が真実なることを知らしめたり。されど、彼等の多くは知らざるなり。

وَأَوْحَيْنَا إِلَىٰ أُمِّ مُوسَىٰ أَنْ أَرْضِعِيهِ فَإِذَا اخْتَفَتْ عَلَيْهِ فَلَبِيقِيهِ فِي الْيَمِّ وَلَا تَحْزَنِي إِنَّا رَازِدُوهُ لَإِنَّا إِلَيْكَ وَجَّعَلُوهُ مِنَ الْمُرْسَلِينَ ④

فَالْتَقَطَهُ آلُ فِرْعَوْنَ لِيَكُونَ لَهُمْ عَدُوًّا وَحَزَنًا إِنَّ فِرْعَوْنَ وَهَامَانَ وَجُنُودَهُمَا كَانُوا خَاطِئِينَ ⑤

وَقَالَتِ امْرَأَتُ فِرْعَوْنَ قُرْتُ عَيْنِي وَإِنَّكَ لَا تَقْتُلُوهُ ۖ عَسَىٰ أَنْ يَتَّخِذَنَا أَوْ نَتَّخِذَهُ وَلَدًا وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ⑥

وَأَصْبَحَ فُؤَادُ أُمِّ مُوسَىٰ فَرِحًا إِنَّهَا كَادَتْ لِتَنبِئَنِي بِهِ لَوْلَا أَنَّ رَبَّنَا عَلَّمَ قَلْبَهَا لَيَأْتِيَنَا مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ⑦ وَقَالَتِ لَأُخْتِيهِ قُصِيَّةٌ بُصِرَتْ بِهِ عَنْ جُنُبٍ وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ⑧

وَحَرَّمْنَا عَلَيْهِ الْمَرَاضِعَ مِنْ قَبْلُ فَقَالَتْ هَلْ أَدُلُّكُمْ عَلَىٰ أَهْلِ بَيْتٍ يَكْفُلُونَهُ لَكُمْ وَهُمْ لَهُ نَاصِحُونَ ⑨

فَرَدَدْنَاهُ إِلَىٰ أُمِّهِ كَيْ تَقَرَّ عَيْنُهَا وَلَا تَحْزَنَ ۚ وَنَبَعَلَّمَ لِقَائِهِ إِنَّهُ يُعَلِّمُونَ ⑩

注4 神の下される手段は実際計り知れない。ファラオに深く愛されていた子が、ある日神の手でファラオを裁くものとなろうとは、彼が気付くはずもなかった。この裁きは、ファラオが神の戒律を否定し、長い間イスラエルの民を抑圧し、虐げて来た為に下されたのである。

注5 モーゼの母親は自分の手もとにモーゼが戻ってきたとき、何と喜んだ事であろう。余りの喜びに、彼女は全ての事、彼女が神の啓示を受け、それに従い息子を川に入れた事等、を人々に話してしまう所だった。

第二項

15. 而して、モーゼが成人して、分別盛りに達したるを機会に、われらは彼に知恵と知識を与えたり。かくの如く、われらは善事を行う人々に報ゆ。
16. 或る時、モーゼは、住民がうっかりしていた隙に町に入りたり。そこで、彼は二人の男が争うのを見たり。一人は彼の仲間であり、他方は敵なりき。彼の仲間は彼に助勢を求めたり。されば、モーゼは握りこぶしにて敵を強打せり。(注6)よって、その男は死す。モーゼは云えり、「こは悪魔の仕業なり。げに彼は人を迷わせる明白なる敵なり」と。(注7)
17. 更に云えり、「主よ、我、己が魂を損なえり。願わくは我を赦し給え」と。(注8)されば、主は彼を赦したり。主は寛大にして、慈悲深くまします。
18. 更に言葉を続け、「主よ、汝は我に慈悲を垂れ給えし故に、我は決して罪を犯す者の味方とならざるべし」と。(注9)

وَلَنَّا بَلَّغَ أَشُدَّهُ وَاسْتَوَىٰ آيَاتُهُ حُكْمًا وَعِلْمًا
وَكَذَلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ⑩

وَدَخَلَ الْمَدِينَةَ عَلَىٰ حِينٍ غَفْلَةٍ مِّنْ أَهْلِهَا
فَوَجَدَ فِيهَا رَجُلَيْنِ يَقْتَتِلَانِ هَٰذَا مِنْ شِيعَةِ
وَهَٰذَا مِنْ عَدُوٍّ فَاسْتَعَاثَهُ الَّذِي مِنْ شِيعَتِهِ
عَلَى الَّذِي مِنْ عَدُوٍّ فَوَكَرَهُ مُوسَىٰ فَقَضَىٰ عَلَيْهِ
قَالَ هَٰذَا مِنْ عَمَلِ الشَّيْطَانِ إِنَّهُ عَدُوٌّ مُّضِلٌّ مُّبِينٌ ⑪

قَالَ رَبِّ إِنِّي ظَلَمْتُ نَفْسِي فَاغْفِرْ لِي فَغَفَرَ لَهُ
إِنَّهُ هُوَ الْغَفُورُ الرَّحِيمُ ⑫

قَالَ رَبِّ بِمَا أَنْعَمْتَ عَلَيَّ فَلَنْ أَكُونَ ظَهِيرًا
لِلْمُجْرِمِينَ ⑬

注6 高い特性を備え、高度な理念を抱いていたので、モーゼは常に弱く虐げられた者に対する助力を心掛けていた。その為、貧しいイスラエル人が傲慢で残酷なエジプト人から救ってくれる様頼んだ時、モーゼは直ちに救出に向かった。

注7 「こはサタンの仕業なり」とは、アラブの成句によれば、悪い事が起きたという意味である。つまり「サタンが一人のエジプト人とイスラエルの民の一人とを戦わせたので、私は虐げられたイスラエル人を助けに来なければならなかったが、悪い結果(相手の死)となってしまった。」のである。又、冒頭の言葉は亡くなったエジプト人に向けられたものとも言える。「これは、お前の悪魔の様な行為がもたらした。」言い換えれば、「お前の死は、その悪行・犯罪に端を発するものである。」モーゼが武器を使った訳ではなく、唯エジプト人から身を守る為拳を振るったという事実は、エジプト人の死が事故であった事を示している。当然、モーゼに彼を殺す意図はなかった。クルアーンは、モーゼがこの節で述べているエジプト人の悪行については触れていない。が、このエジプト人が、イスラエル女性に姦淫を強いたという記録がある。それ由に、この節にある争いが起き、モーゼによる干涉、そしてエジプト人の死となった事は明白である。

注8 貧しいイスラエル人を助けようとして、モーゼはエジプト人を殺してしまい、我身を危険にさらし、背負いきれない重荷を自らに科してしまったとモーゼは悟った。そこで彼は、支配階級の者を殺してしまった事で起きるであろう災いから我身を守り賜えと神に祈った (Jew. Enc. Moses参照)。

注9 この節では、モーゼが神に語りかけている。「主よ！ あなたは常に寛大であられます。それ由、貴人の御好意に感謝して、私は約束致します。私はあの時と同じく、常に抑圧される者を助けましょう。そして決して抑圧する側には立たないでしょう。」あるいは次の様な意味にもとれる。「神よ、貴人は常に私に寛大であられます。ですから、抑圧する者に味方する等この私にどうしてできましょうか？」

19. 翌朝、モーゼ町中に在りて、恐れを抱きつつ警戒すると、見よ、前日彼に助けを求めし男が、再び彼に援助を乞えり。モーゼは男に向つて云えり、「汝は明らかに誤り導かれしやつなり」と。(注10)

فَأَصْبَحَ فِي الْمَدِينَةِ خَائِفًا يَتَرَقَّبُ فَإِذَا الَّذِي
اسْتَنْصَرَهُ بِالْأَمْسِ يَسْتَصْرِحُهُ قَالَ لَهُ مُوسَى
إِنَّكَ لَغَوِيٌّ مُبِينٌ ①٩

20. 共同の敵たる男(注11)を制せんとした時、その男は云えり、「モーゼよ、汝は昨日人を殺した如く、我を殺さんと欲するや? 汝はこの国に於てただ暴君たらんと欲し、仲裁者たることを欲せざるか?」と。

فَلَمَّا أَنْ أَرَادَ أَنْ يَنْبَطِشَ بِالَّذِي هُوَ عَدُوٌّ لَهُمَا
قَالَ يَمُوسَى أَتُرِيدُ أَنْ تَقْتُلَنِي كَمَا قَتَلْتَ نَفْسًا
بِالْأَمْسِ إِنْ تُرِيدُ إِلَّا أَنْ تَكُونَ جَبَّارًا فِي الْأَرْضِ
وَمَا تُرِيدُ أَنْ تَكُونَ مِنَ الْمَصْلُحِينَ ②٠

21. 折しも、一人の男が町の外より走り来たりて、云えり、「モーゼよ、実は、長老たちが汝を殺さんと協議中なり。されば、逃げよ。げに我は、汝のためを思う者なり」と。

وَجَاءَ رَجُلٌ مِنَ أَقْصَا الْمَدِينَةِ يَسْعَى قَالَ يَمُوسَى
إِنَّ الْمَلَائِكَةَ يَتَرَوْنَ بِكَ لَيَقْتُلُوكَ فَاخْرُجْ إِلَىٰ لَكَ
مِنَ الْمُنْصَحِينَ ②١

22. かくて彼は、用心且つ警戒しながら町を後にせり。彼は云えり、「主よ、不義なる徒輩から我を守り給え」と。

فَخَرَجَ مِنْهَا خَائِفًا يَتَرَقَّبُ قَالَ رَبِّ نَجِّنِي مِنَ
الْقَوْمِ الظَّالِمِينَ ②٢

第三項

23. モーゼはその顔をマドヤンの方に向け、云えり、「主は我を正しき道に導かん」と。

وَلَمَّا تَوَجَّهَ تَلَقَّاهُ مَدْيَنَ قَالَ عَسَىٰ رَبِّي أَنْ
يَهْدِيَ بَنِي سَوَاءَ السَّبِيلِ ②٣

24. 而して、マドヤンの水場に来てみると、そこに羊の群に水飼いする一団の男等あり。男等の傍に二人の女ありて、自分たちの羊の群を控えているを彼は見たり。彼は問えり、「何事ぞや?」と。(注12) 彼女た

وَلَمَّا وَرَدَ مَاءَ مَدْيَنَ وَجَدَ عَلَيْهِ أُمَّةً مِنَ
النَّاسِ يَسْقُونَ هُوَ وَوَجَدَ مِنْ دُونِهِمُ امْرَأَتَيْنِ
تَذُدَانِ قَالَ مَا خَطْبُكُمَا قَالَتَا لَا نَسْقِي حَتَّىٰ

注10 モーゼは、彼に助けを求めたイスラエル人を咎めた様である。「お前は愚かだ。自らの行為がどの様な事態を招くのかに思い及ばずして、忽ちの内に災難に巻き込まれてしまった。」この言葉は一般的に誤解されているが、モーゼはその男を犯罪者とみなした訳ではない。

注11 「共同の敵たる男」という言葉から男はエジプト人だった事が分かる。聖書にある様に、もし彼がイスラエル人なら、彼はエジプト人達と結託し、先日の一件を当局に通報したはずだ。だからこそ、彼は、モーゼやモーゼに助けを求めたイスラエル人にとり共通の敵だったのである。

注12 何をお困りですか?

ちは答え、「牧童たちが羊を連れ去るまでは、我等の群に水飼いするを得ず。そは我等の父甚だ老いたればなり」と。

يُصَدِّرُ الرِّعَاءَ وَأَبُونَا شَيْخٌ كَبِيرٌ ﴿١٧﴾

25. されば、モーゼは彼女等のために、その群に水飼いをしたり。然る後、樹陰に退いて云えり、「主よ、我は何であれ我に降り賜える善きものを必要として受くる」と。

فَسَقَّ لَهُمَا ثُمَّ تَوَلَّى إِلَى الظِّلِّ فَقَالَ رَبِّ إِنِّي رِسَاءٌ أَنْزَلْتَ إِلَيَّ مِنْ خَيْرٍ فَقِيرٌ ﴿١٨﴾

26. 彼女等の一人羞しげにモーゼのところへ歩み寄りて云えり、「我等のために羊の群に水飼いたることに對し、我が父が汝を招き之にお礼をなさんとす」と。されば、モーゼは老人の所へ行き、己が身の上を語れり。老人は云えり、「恐るるなかれ。汝はすでに不義なる徒輩より免れたり」と。

وَجَاءَتْهُ إِحْدَاهُمَا تَمْشِي عَلَى اسْتِخْيَارٍ قَالَتْ إِنَّ أَبِي يَدْعُوكَ لِيَجْزِيَكَ أَجْرَ مَا سَقَيْتَ لَنَا فَلَمَّا جَاءَهُ وَقَصَّ عَلَيْهِ الْقِصَصَ قَالَ لَا تَحْزَنْ جَاءَتْهُ مِنَ الْقَوْمِ الظَّالِمِينَ ﴿١٩﴾

27. 二人の女のうち一人が「我が父よ、彼を雇い給え。汝のために最適なる仕用人は、頑健にして信用のおける者なり」と云えり。

قَالَتْ إِحْدَاهُمَا يَا أَبَتِ اسْتَأْجِرْهُ إِنَّ خَيْرَ مَنِ اسْتَأْجَرْتَ الْقَوِيُّ الْأَمِينُ ﴿٢٠﴾

28. 老人はモーゼに云えり、「汝もしわしのために八年間働かば、わしは二人の娘のどちらかを汝と妻わさんと欲す。もし期限を十年とせんと欲しなば、これまた汝の意にまかせん。わしは汝に難儀を課するつもりなし。もしアッラー欲しなば、汝はわしが公正な人間なることを知るべし」と。

قَالَ إِنِّي أُرِيدُ أَنْ نَمُنَّكَ إِحْدَى ابْنَتَيَّ هَاتَيْنِ عَلَى أَنْ تَأْجُرَنِي ثَمْنِي حَبْجٍ فَإِنْ أُنْسَتْ عَشْرًا فَمِنْ عِنْدِكَ وَمَا أُرِيدُ أَنْ أَمْسُقَ عَلَيْكَ سِجْدُنِي إِنْ شَاءَ اللَّهُ مِنَ الصَّالِحِينَ ﴿٢١﴾

29. モーゼは云えり、「これ汝と我との間の取り決めなり。我二つの期限のいづれを履行するとも、我に非はなし。アッラーは我等が云えることを見證す」と。

قَالَ ذَلِكَ بَيْنِي وَبَيْنَكَ أَيَّمَا الْأَجَلَيْنِ قَضَيْتُ فَلَا عُدْوَانَ عَلَيَّ وَاللَّهُ عَلَى مَا نَقُولُ وَكِيلٌ ﴿٢٢﴾

第四項

30. かくて、モーゼはその期限を満了し、家族と共に旅立ち、山の此方に一つの火を認めたり。彼は家人に云えり、「ここにて待て、我は燃ゆる火を認めたり。我行きて其処より消息をもたらさん。或いは、燃えさしを持ち帰らん。さすればお前たち暖を得べし」と。(注13)

فَلَمَّا قَضَىٰ مُوسَى الْأَجَلَ وَسَارَ بِأَهْلِهِ آنَسَ مِنْ جَانِبِ الطُّورِ نَارًا قَالَ لِأَهْلِهِ امْكُثُوا إِنِّي آنَسْتُ نَارًا لَعَلِّي آتِيكُمْ مِنْهَا بِخَبَرٍ أَوْ جَذَرَةٍ مِنَ النَّارِ لَعَلَّكُمْ تَصْطَلُونَ ﴿٢٣﴾

注13 瞑想や神との靈的交わりには、独居が必要である。モーゼは神との靈的交流を授かる為、家族と離れ、世俗の繋がりを一切断った。モーゼは神聖なる魂の谷の縁に立つただけであつたが、モハammad預言者は實際

31. 彼火の傍^{そば}に至ると、谷間の右側の聖なところにある木から声ありて、呼びかけられたり、「モーゼよ、われこそは万物の主、アッラーなるぞ」と。
32. 而^{しか}して、また云えり、「汝の杖を投げよ」と。彼その杖が蛇の如く動くを見たれば、退いて逃れ、後ろを振り向かざりぎ。「モーゼよ」と声ありて、仰せられり、「もそつと近う、恐るるなかれ。げに汝は無事なる者の一人なり。
33. 汝の手をその懐^{ふところ}に入れよ。そは病^{やまい}に非ざるに、白くなりて出でん。汝の恐怖を静めるために汝の腕を自分の方に引っ込めよ。これ等は、ファラオとその長老たちに主から示された二つの奇跡なり。げに彼等は邪悪な民なり」と。
34. モーゼは云えり、「主よ、我はかつて彼等の一人を殺したり。故に我は、彼等が我を殺さんことを恐る。(注14)
35. また、我が兄アロンー彼は我よりも言葉巧みなれば、真実の証人となるために彼を補佐として我と共に遣わし給え。我は、彼等が我を嘘つきと非難せんことを恐る」と。
36. 神は云えり、「われらは汝の兄の助けを用いて、汝の腕^{うで}を強くせん。また、お前たち兩名に権能^{ちから}を与えるが故に、彼等はお前たちに危害を加え得ざるべし。われらの奇跡を携えて行け。お前たち兩名並びにお前たちに従う者は勝利者たらん」と。
37. かくて、モーゼがわれらの明白なる奇跡を携えて彼等に至るや、彼等は云えり、「こはただの考案せる魔術にすぎず。我等は御先
- فَلَمَّا أَتَاهَا نُودِيَ مِنْ شَاطِئِ الْوَادِ الْأَيْمَنِ فِي الْبُقْعَةِ الْمُبَارَكَةِ مِنَ الشَّجَرَةِ أَنْ يَتَوَلَّى إِلَيَّ أَنَا اللَّهُ رَبُّ الْعَالَمِينَ ﴿٣١﴾
- وَأَنْ أَلْقِ عَصَاكَ فَلَمَّا رَآهَا تُهْتَزُّ كَانَهَا جَانٌّ وَلَّى مُدْبِرًا وَلَمْ يُعَقِّبْ يَوتِرَهُ أَقْبَلَ وَلَا تَخَفْ إِنَّكَ مِنَ الْأَمِينِينَ ﴿٣٢﴾
- أَسْلَكَ يَدَكَ فِي جَيْبِكَ تَخْرُجُ بَيْضَاءَ مِنْ غَيْرِ سُوءٍ وَاضْمُمْ إِلَيْكَ جَنَاحَكَ مِنَ الرَّهْبِ فَذَرْكَ بُهَانٍ مِنْ رَبِّكَ إِلَى فِرْعَوْنَ وَمَلَئِهِ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمًا فَاسِقِينَ ﴿٣٣﴾
- قَالَ رَبِّ إِنِّي تَوَلَّيْتُ مِنْهُمْ نَفْسًا فَأَخَافُ أَنْ يَقْتُلُونِ ﴿٣٤﴾
- وَإِخِي هَارُونَ هُوَ أَفْصَحُ مِنِّي لِسَانًا فَأَرْسَلْهُ مَعِيَ رِدْءًا يُصَدِّقُنِي إِنِّي أَخَافُ أَنْ يُكَذِّبُونِ ﴿٣٥﴾
- قَالَ سَنَشُدُّ عَضْدَكَ بِإِخْيِكَ وَنَجْعَلُ لَكَ سُلْطَانًا فَلَا يَصِلُونَ إِلَيْكَ مَا بِإِيتِنَا أَنْتُمْ وَمَنْ اتَّبَعَكُمُ الْغَالِبُونَ ﴿٣٦﴾
- فَلَمَّا جَاءَهُمْ مُوسَى بِآيَاتِنَا بَيِّنَاتٍ قَالُوا مَا هَذَا إِلَّا سِحْرٌ مُفْتَرًى وَمَا سَمِعْنَا بِهَذَا فِي آبَائِنَا

谷へ入っていった。(53:14, 15)。モーゼは、モハammad預言者につけておかれた様な神のお側近の所まで行く事はできなかった。

注14 モーゼは、誤って殺してしまった男の事に少し触れているが、故意の殺人と間違えられて有罪になることは認めてはいない。

祖の物語りの中で、これに似たことを聞いたためしなし」と。

38. モーゼは云えり、「主は誰にその御導きを与え給うたか、また誰が終の住処すみかの恩賞を得べきかを一番よく知り給う。げに、悪人は決して栄えず」と。

39. ファラオは云えり、「長老たちよ、我は我以外にお前たちのために神あるを知らず。されば、ハーマーンハムンよ、我がために泥で煉瓦しかどを焼き、而して高殿たかどのを築け。然すれば、我、モーゼの神をのぞき見ん。なんととなれば、我は彼を嘘つきと考える故に」と。

40. かくて、ファラオとその軍勢は、その国に於て、むやみやたらと横暴を極めたり。彼等は、われらの許もとにつれ戻されることなど断じてあるべき筈なしと思えり。

41. されば、われらはファラオ並びにその軍勢を捕え、彼等を海中に投じたり。見よ、悪人どもの末路が如何に悲惨なりしかを！

42. われらは彼等を、業火ごうかに誘う先達となせり。復活の日には、彼等は助けられざるべし。

43. 彼等は現世に於ては、われらが呪詛のろいで追い廻され、而して復活の日には、すべての慈悲を拒まれる者とならん。

第五項

44. われらは古の世代を次々と滅ぼしたる後、人類のために啓発のよりどころとして、また嚮導きやうどう並びに慈悲として、モーゼに經典を授けたり、彼等に反省させんがために。

45. 汝は、昔われらがモーゼに命令めいを降せし時、シナイ山の西側に居らず、また目撃者の一

الرَّادِّينَ ﴿٣٨﴾

وَقَالَ مُوسَى رَبِّي أَعْلَمُ بِمَنِ جَاءَ بِالْهَدْيِ مِنْ عِنْدِهِ وَمَنْ تَكُونُ لَهُ عَاقِبَةُ الدَّارِ إِنَّهُ لَا يُفْلِحُ

الظَّالِمُونَ ﴿٣٩﴾

وَقَالَ فِرْعَوْنُ يَا أَيُّهَا الْمَلَأَ مَا عَلِمْتُ لَكُمْ مِنْ إِلَهٍ غَيْرِي فَأَوْقِدْ لِي يَهُامَّنُ عَلَى الظِّلِّينِ فَاَجْعَلْ لِي صَرْحًا لَعَلِّي أَطْلُعُ إِلَى إِلَهِ مُوسَى وَإِنِّي لَأَظُنُّهُ

مِنَ الْكَذِبِينَ ﴿٤٠﴾

وَاسْتَكَبَرَهُ وَجُنُودُهُ فِي الْأَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ وَظَنُّوا أَنَّهُمُ الْبَيْنَا لَا يُرْجَعُونَ ﴿٤١﴾

فَأَخَذْنَاهُ وَجُنُودَهُ فَنَبَذْنَاهُمْ فِي الْيَمِّ فَاُنْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الظَّالِمِينَ ﴿٤٢﴾

وَجَعَلْنَاهُمْ آيَةً يَذْعُونَ إِلَى التَّارِ وَيَوْمَ الْقِيَمَةِ لَا يُنصَرُونَ ﴿٤٣﴾

وَاتَّبَعْنَاهُمْ فِي هَذِهِ الدُّنْيَا لَعْنَةً وَيَوْمَ الْقِيَمَةِ هُمْ مِنَ الْمَقْبُوحِينَ ﴿٤٤﴾

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ مِنْ بَعْدِ مَا أَهْلَكْنَا الْقُرُونَ الْأُولَى بَصَائِرَ لِلنَّاسِ وَهُدًى وَرَحْمَةً لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُونَ ﴿٤٥﴾

وَمَا كُنْتَ بِجَانِبِ الْغُرِيِّ إِذْ قَصَيْنَا إِلَى مُوسَى

員でも非ざりき。(注 15)

الْأَمْرَ وَمَا كُنْتَ مِنَ الشَّاهِدِينَ ﴿٣٥﴾

46. 然れども、われらはモーゼの後に幾多の世代を興し、彼等のためにその生命を長くせり。汝はまたマドヤンの民と共に住み、われらの神兆を彼等に物語りし者に非ざりき。されど、諸使徒を遣わしたるは、われらなり。(注 16)

وَلَكِنَّا أَنشَأْنَا قُرُونًا فَتَطَاوَلَ عَلَيْهِمُ الْعُمُرُ وَمَا كُنْتَ ثَابِتًا فِي أَهْلِ مَدْيَنَ تَتْلُو عَلَيْهِمْ آيَاتِنَا وَلَكِنَّا كُنَّا مُرْسِلِينَ ﴿٣٦﴾

47. また汝は、われらがモーゼに呼びかけし時も、シナイ山の山腹には居らざりき。然るに、われらが汝を、主の慈悲として遣わしたは、(注 17) 未だかつて一度も警告者至らざりし民に、警告せしめんがためにして、彼等にも反省せしめんがためなり。

وَمَا كُنْتَ بِجَانِبِ الطُّورِ إِذْ نَادَيْنَا وَلَكِنْ رَحِمَهُ مِّنْ رَبِّكَ لِشَدِيدِ قَوْمًا مَّا أَتَاهُمْ مِنْ نَذِيرٍ مِّنْ قَبْلِكَ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُونَ ﴿٣٧﴾

48. もしそうせざれば、彼等の手が先に送りし行いのために、災難が彼等の身に降りかかる時、彼等は云わん、「主よ、何故に汝は我等に使徒を遣わさざりしか? 我等は汝の神兆に従い、信者となりしものを」と。

وَلَوْلَا أَن تَصِيْبَهُمْ مُّصِيبَةٌ بِمَا قَدَّمَتْ أَيْدِيهِمْ فَيَقُولُوا رَبَّنَا لَوْلَا أَرْسَلْتَ إِلَيْنَا رَسُولًا فَنَتَّبِعَ آيَاتِكَ وَنَكُونَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٣٨﴾

49. 然るに、今、真理がわれらの許より彼等に至ると、彼等は云えり、「何故彼に、モーゼに与えたる如き奇跡を、与えざりしか?」と。彼等は以前、モーゼに与えたるものを信ぜざりしに非ずや? 彼等は云えり、「律法もクルアーンも、両者とも互に助け合う魔術にすぎず」と。更に彼等は「我等は両者とも信ぜず」と云えり。

فَلَمَّا جَاءَهُمُ الْحَقُّ مِنْ عِنْدِنَا قَالُوا لَوْلَا أُوتِيَ مِثْلَ مَا أُوتِيَ مُوسَىٰ أَوْ لَمْ يَكْفُرُوا بِمَا أُوتِيَ مُوسَىٰ مِنْ قَبْلُ قَالُوا سِحْرَانِ تَظَاهَرَا وَقَالُوا إِنَّا بِكُلِّ كَفِرُونَ ﴿٣٩﴾

50. 云え、「ならば、お前たちの言葉が真実ならば、両者(注 18)に勝る導きの經典をアッラーの許よりもたらししてみよ、然らば我それに従わん」と。

قُلْ فَأْتُوا بِكِتَابٍ مِّنْ عِنْدِ اللَّهِ هُوَ أَهْدَىٰ مِنْهُمَا أَتَّبِعُهُ إِن كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٤٠﴾

注 15. この節は、モーゼによるモハammad預言者出現の預言が明らかに成就されたと示している。更に、モーゼが預言を行なう時、傍らにモハammad預言者その人が居たのである(中命記 18 章 18 節)。

注 16. この言葉はモハammad預言者とモーゼの類似点を述べている。モーゼはマドヤンの見知らぬ人々の中で 10 年暮した後、ファラオの圧政に苦しみイスラエル人を救う為エジプトに戻った。同様にモハammad預言者もメディナに 10 年住んだ後、メッカを支配しに戻った。

注 17. 預言者が自分自身に関する預言を(中命記 18:18) モーゼに強い、その成就を求めた等有り得ないとこの節は示している。

注 18. 「両者」とはクルアーンとトーラのこと。

51. 然るに、彼等もし汝の要求に応じ得ざる場合は、彼等はただ自分の妄想に従っているにすぎぬことを知れ。アッラーのお導きなくして自分の妄想に従う者にも増して身を誤る者は誰ぞ？ げにアッラーは、悪をなせる人々を導き給わず。

第六項

52. われらは彼等に次々と啓示を降したり、それは彼等に訓戒を受け入れさせんがために。
53. われらがクルアーン以前に經典（注19）を与えたる者は、クルアーンを信ず。
54. その彼等に向って読誦せらるるや、彼等は云う、「我等は之を信ず。げに、こは主よりの真理なり。げに我等は、それが降る以前からすでに神に甘心服従の者なりき」と。
55. これ等の者はその報奨を倍加せられるべし。なんとなれば、彼等はよく耐え忍び、善を以てて悪を斥け、われらが授けしものを惜しみなく他人に施し与えたるが故に。
56. また彼等は、くだらぬ話を耳にすると、それから顔をそむけていう、「我等には我等の仕事あり、お前たちにはお前たちの仕事あり。いざさらば。我等は愚人に関心をもたず」と。
57. げに汝は、自分の好みのままに誰でも導くことを得ず。然るに、アッラーは、誰であれその欲する者を導き給う。アッラーは、導きを受け入れる者を誰よりもよく知り給う。
58. 彼等は云う、「もし我等が汝と共に嚮導に従わば、我等はこの地より叩き出されん」と。われらは彼等のために安全なる聖域を確立し、其処に、われらからの給養として各種の果物を輸送せしむるに非ずや？ 然るに、彼等の大半は之を知らず。

فَإِنْ لَّمْ يَسْتَجِيبُوا لَكَ فَاعْلَمْ أَنَّهُ لَا يُتَّبَعُونَ أَهْوَاءَهُمْ
وَمَنْ أَضَلُّ مِمَّنِ اتَّبَعَ هَوَاهُ بِغَيْرِ هُدًى مِنَ اللَّهِ
إِنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ٥١

وَلَقَدْ وَصَّلْنَا لَهُمُ الْقَوْلَ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُونَ ٥٢
الَّذِينَ آمَنُوا مِنْ قَبْلِهِمْ بِالْكِتَابِ مِنْ قَبْلِهِمْ بِهِ يُؤْمِنُونَ ٥٣
وَإِذَا يُنْطَلَّ عَلَيْهِمْ قَالُوا آمَنَّا بِهِ إِنَّهُ الْحَقُّ مِنْ رَبِّنَا
إِنَّا كُنَّا مِنْ قَبْلِهِ مُسْلِمِينَ ٥٤

أُولَئِكَ يُؤْتَوْنَ أَجْرَهُمْ مَرَّتَيْنِ بِمَا صَبَرُوا
وَيَذَرُونَ بِالْحَسَنَةِ السَّيِّئَةَ وَمِمَّا رَزَقْنَاهُمْ يُنفِقُونَ ٥٥
وَإِذَا سَأَعُوا النَّاسَ عَرَضُوا عَنْهُ وَقَالُوا لَنَا أَعْمَالُنَا
وَلَكُمْ أَعْمَالُكُمْ سَلَمُ عَلَيْكُمْ لَا تُبْغَى الْجَهْلِيْنَ ٥٦

إِنَّكَ لَا تَهْدِي مَنْ أَحْبَبْتَ وَلَكِنَّ اللَّهَ يَهْدِي مَنْ
يَشَاءُ وَهُوَ أَعْلَمُ بِالْمُهْتَدِينَ ٥٧

وَقَالُوا إِنْ تَتَّبِعِ الْهُدَى مَعَكَ تَخْطِفُ مِنْ أَرْضِنَا
أَوْ لَمْ تُكِنِّ لَهُمْ حَرَمًا أَمَّا يُجْبَى إِلَيْهِ لَمَرْتُ
كُلِّ شَيْءٍ رِزْقًا مِنْ لَدُنَّا وَلَكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ٥٨

注19 ここていう「經典」は、トーラを指す。

59. われらは如何に多くの榮華を誇れる^{まほ}邑を滅ぼせしことか！ これ等は彼等の居住地なりしが、彼等の後に殆ど住む者となし。
(注 20) 故に、その相続者に成りたる者は、われらなり。

60. 然れども、主は、その啓示を人々に誦み聞かすべくその首都に使徒を挙げずして、決して如何なる首都も滅ぼせることなし。またわれらは、その住民が不義不正に非ずば、如何なる首都も滅ぼせることなし。

61. お前たちが今与えられているものすべては、たんに東の間の現世の楽しみであり、それを飾るものにすぎず、然しながら、アッラーの許にあるものは、はるかに勝りて、不変なり。それでもお前たちわからざるか？

第七項

62. われらが善美なる約束をなし、やがてその約束が実現される者と、われらが現世に於てのみ愉樂を享受させた後、復活の日に神の前に曳き出して糾弾する者と、同一なりや？

63. その日神は、彼等と呼ばひて問わん、「お前たちが主張せるわれに匹敵する神々は、いま何処にありや？」と。

64. すると、天罰の宣告通りになりたる彼等は、云わん、「主よ、我等が誘惑せる者どもは、これ等なり。我等は己れ自身が迷った如く彼等を迷わせり。我等はいま彼等とは関係なく、汝を頼る。彼等が崇めしは、我等に非ざりき」と。

65. また、かく云われん、「お前たちが神と併せ祀りたる神々に祈れ」と。されば、彼等は神々に祈らん。然れども、神々は応えざる

وَكَمْ أَهْلَكْنَا مِنْ قَرْيَةٍ بَطَرَتْ مَعِيشَتَهَا فَبِئْسَ مَسْكِنُهُمْ لَمْ تُسْكَنْ مِنْ بَعْدِهِمْ إِلَّا قَلِيلًا ۚ وَكُنَّا نَحْنُ الْوَارِثِينَ ﴿٥٩﴾

وَمَا كَانَ رَبُّكَ مُهْلِكَ الْقُرَىٰ حَتَّىٰ يَبْعَثَ فِي أُمِّهَا رَسُولًا يَتْلُو عَلَيْهِمْ آيَاتِنَا ۚ وَمَا كُنَّا مُهْلِكِي الْقُرَىٰ إِلَّا وَأَهْلُهَا ظَالِمُونَ ﴿٦٠﴾

وَمَا أَوْتَيْتُمْ مِنْ شَيْءٍ فَمَتَاعُ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا ۚ زِينَتُهَا ۚ وَمَا عِنْدَ اللَّهِ خَيْرٌ وَأَبْقَىٰ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ﴿٦١﴾

أَفَنَنْتَ وَعَدْنَاهُ وَعَدًا احْسَنًا لَهُمْ لَاقِيَهُ لَكِن مَّتَّعْنَاهُ مَتَاعَ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا ثُمَّ هُوَ يَوْمَ الْقِيَامَةِ مِنَ الْخَاسِرِينَ ﴿٦٢﴾

وَيَوْمَ يُنَادِيهِمْ فَيَقُولُ أَيْنَ شُرَكَائِيَ الَّذِينَ كُنْتُمْ تَزْعُمُونَ ﴿٦٣﴾

قَالَ الَّذِينَ حَقَّ عَلَيْهِمُ الْقَوْلُ رَبَّنَا هَؤُلَاءِ الَّذِينَ أَغْوَيْنَا ۖ أَغْوَيْنَهُمْ كَمَا غَوَيْنَا ۖ تَبَرَّأْنَا إِلَيْكَ مَا كَانُوا إِيَّانَا يَعْبُدُونَ ﴿٦٤﴾

وَقِيلَ ادْعُوا شُرَكَاءَكُمْ فَادْعُوهُمْ فَلَمْ يَسْتَجِيبُوا

注 20 以前住んでいた人々は、力もあり、優秀な文明を誇っていたにもかかわらず、神の真理を否定したことによって地上の上から払い去られた。弱いものと思われていた人々が、彼らにとってかわってやってきた。

べし。彼等はただ懲罰を見るのみ、而して、
嚮導に従っていたならば、と思う！

لَهُمْ وَرَأَوُا الْعَذَابَ لَوْ أَنَّهُمْ كَانُوا يَهْتَدُونَ ﴿١٥﴾

66. その日神は、彼等と呼ばて問わん、「お前たちは使徒らに如何に答えたのか？」と。

وَيَوْمَ يُنَادِيهِمْ فَيَقُولُ مَاذَا أَجَبْتُمُ الْمُرْسَلِينَ ﴿١٦﴾

67. その日、すべての消息は彼等に不明瞭となり、お互いに訊くことすらかなわざるべし。

فَعَيَّيْتُ عَلَيْهِمُ الْآيَاتِ يَوْمَئِذٍ فَهُمْ لَا يَتَسَاءَلُونَ ﴿١٧﴾

68. 然れども、改悛して信仰し、正義を行う者は、成功者の仲間に加えられん。(注 21)

فَأَمَّا مَنْ تَابَ وَآمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا فَعَسَىٰ أَن يَكُونَ

مِنَ الْمُفْلِحِينَ ﴿١٨﴾

69. 汝の主は、己れの欲することを創造し、己れの欲する者を選び給う。されど、彼等は選択することを得ず。アッラーを讃えよ。彼こそは、彼に併せ祀る神々の上に高くいまし給う。

وَرَبُّكَ يَخْلُقُ مَا يَشَاءُ وَيَخْتَارُ مَا كَانَ لَهُمُ الْخِيَرَةُ

سُبْحَانَ اللَّهِ وَتَعَالَىٰ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿١٩﴾

70. 而して、汝の主は、彼等が胸に秘めるもの、また、外に顯わすものを知り給う。

وَرَبُّكَ يَعْلَمُ مَا تُكِنُّ صُدُورُهُمْ وَمَا يُعْلِنُونَ ﴿٢٠﴾

71. 彼は、アッラーなり。彼の外に神なし。現世並びに来世の一切の讃美は、彼に属す。審判は彼の掌握するところにして、お前たちは彼の許に連れ戻されん。

وَهُوَ اللَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ لَهُ الْخِصْمُ فِي الْأُولَىٰ وَالْآخِرَةِ

وَلَهُ الْحُكْمُ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٢١﴾

72. 云え、「我に告げよ、もしアッラーが復活の日までお前たちの上に永続的に夜を拈げなば、お前たちに光明をもたらす者は、アッラーに非ずして如何なる神ぞ？ お前たち耳を傾けざるつもりか？」と。

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ جَعَلَ اللَّهُ عَلَيْكُمُ اللَّيْلَ سَرْمَدًا

إِلَىٰ يَوْمِ الْقِيَامَةِ مَنْ إِلَهٌ غَيْرُ اللَّهِ يَأْتِيكُمْ بِضِيَاءٍ

أَفَلَا تَسْمَعُونَ ﴿٢٢﴾

73. 云え、「我に告げよ、もしアッラーが復活の日までお前たちの上に永続的に昼を拈げなば、お前たちに休息すべき夜をもたらす者は、アッラーに非ずして如何なる神ぞ？ お前たちこれでもわからざるか？」と。(注 22)

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ جَعَلَ اللَّهُ عَلَيْكُمُ النَّهَارَ سَرْمَدًا

إِلَىٰ يَوْمِ الْقِيَامَةِ مَنْ إِلَهٌ غَيْرُ اللَّهِ يَأْتِيكُمْ بِكُلِّ

تَسْكُونٍ فِيهِ أَفَلَا تُبْصِرُونَ ﴿٢٣﴾

注 21 イスラム教では、悔い改めた者に対し扉は常に開かれている。罪人が今はのきわに悔い改める事さえ許される。救われない者は無い。ただし、神をあくまでも否定する者は、自ら悔根の扉を閉ざす事となる。

注 22 不断の労働、不断の休息は人の身体を蝕む。夜間の休息と昼間の労働、これは神の大きい恵みである。夜、疲れた四肢は休められ、翌日の労働への新たな活力が湧く。そして昼間働き、生活の糧を得る。この繰り返しが神の恵みである。

74. 彼が、その慈悲によって、昼夜を設けたるは、お前たちを休息させ、且つお前たちにその恩恵を求めせしめんがため、並びにお前たちに感謝の気持ちを抱かせしめんがためなり。

75. その日、彼は、彼等と呼ばて問わん、「お前たちが主張せる、われに匹敵する神々はいま何処にありや？」と。

76. 而して、われらはそれぞれの民から一人の証人を擧げて、問わん、「お前たちの証拠を持ち来れよ」と。すると、彼等は、真理はアッラーに属することを悟らん。而して、彼等が捏造せる神々は、みな彼等を捨てて去らん。

第八項

77. げにクアールーンは、(注23) モーゼの民の一人なりしが、彼はその民に対して傲慢しく振舞いたり。われらが彼におびただしい財宝を与えたれば、その宝蔵の鍵は一群の大力なる男たちにもなお担い難きほどなりき。その民は彼に向って云えり、「有頂天になるなかれ。げにアッラーは、有頂天になる者を愛で給わぬ

78. アッラーが汝に授けしもので来世の住居を求めよ。この世に於ける汝の取り分を忘却するなかれ。アッラーが汝によくした如く、汝も他人によいことをせよ。而して、この世で悪を為さんと謀るなかれ。げにアッラーは、悪を為す徒輩を愛で給わぬ」と。

79. 彼は云えり、「我、これを授かりたるは、我が持てる知識のせいなり」と。彼は、アッラーが彼より力も富もありし彼より前の多くの世代を滅ばせることを、知らざりし

وَمِنْ تَحِبَّتِهِ جَعَلَ لَكُمُ اللَّيْلَ وَالنَّهَارَ لِتَسْكُنُوا فِيهِ وَلِتَبْتَغُوا مِنْ فَضْلِهِ وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿٤٧﴾

وَيَوْمَ يَنَادِيهِمْ فَيَقُولُ أَيُّ شُرَكَائِيَ الَّذِينَ كُنْتُمْ تَزْعُمُونَ ﴿٤٨﴾

وَنَزَعْنَا مِنْ كُلِّ أُمَّةٍ شَهِيدًا فَقُلْنَا هَاتُوا بُرْهَانَكُمْ فَعِلْوا إِنَّا الْحَقُّ لِلَّهِ وَضَلَّ عَنْهُمْ فَأَكَايِفُ عِتْرُونَ ﴿٤٩﴾

إِنَّ قَارُونَ كَانَ مِنْ قَوْمِ مُوسَى فَبَغَى عَلَيْهِمْ وَآتَيْنَاهُ مِنَ الْكُتُوبِ مَا إِنَّ مَفَاتِحَهُ لَتَنُوءُ بِالْعُصْبَةِ أُولِي الْقُوَّةِ إِذْ قَالَ لَهُ قَوْمُهُ لَا تَفْرَحْ إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ الْفَرِحِينَ ﴿٥٠﴾

وَابْتَغِ فِيمَا آتَاكَ اللَّهُ الدَّارَ الْآخِرَةَ وَلَا تَنْسَ نَصِيبَكَ مِنَ الدُّنْيَا وَأَحْسِنْ كَمَا أَحْسَنَ اللَّهُ إِلَيْكَ وَلَا تَبْغِ الْفَسَادَ فِي الْأَرْضِ إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ الْمُسْرِفِينَ ﴿٥١﴾

قَالَ إِنَّمَا أُوتِيتُهُ عَلَىٰ عِلْمٍ عِنْدِي أَوَلَمْ يَعْلَم أَنَّ اللَّهَ تَدَاهَكَ مِنْ قَبْلِهِ مِنَ الْقُرُونِ مَنْ هُوَ أَشَدُّ

注23 クアールーンは非常に裕福であった。彼はファラオに高く引き立てられ、ファラオの財政管理者の様な立場にあった。彼はファラオの金鉱を管理する役人で、金採掘技術者であった様だ。南エジプトのカルーの領地は、良質の金鉱があることで有名だった。彼はイスラエルの民の一人であり、モーゼの信奉者だったと言われている。しかしファラオの引きを得んが為、彼は同胞を虐げ、彼等に傲慢に振る舞った。その為天罰が降り、彼は死んだ。

か？ およそ罪を犯せし者は、自分の立場を弁護する機会を与えられざるべし。(注24)

مِنْهُ قُوَّةٌ وَآكُثْرَجَعَاءٌ وَلَا يُسْأَلُ عَنْ ذُنُوبِهِمُ
الْمُجْرِمُونَ ﴿٢٩﴾

80. クアールーンは、あらん限りきらびやかに飾り立てて、その民の前に出て行きぬ。現世の生活に執心する徒輩は云えり、「ああ、我等もクアールーンが授かりたる如きものがいただけたならば！げに彼こそは、素晴らしい幸福者よ」と。

فَجَرَجَ عَلَى قَوْمِهِ فِي زِينَتِهِ قَالَ الَّذِينَ يُرِيدُونَ
الْحَيَاةَ الدُّنْيَا يَلِيتَ لَنَا وِشَلٌ مَا أُوتِيَ قَارُونُ
إِنَّهُ لَدُوٌّ حَظِيظٌ عَظِيمٌ ﴿٣٠﴾

81. 然れども、真の知識を授けられたる者は、云えり、「情けなや、信仰して善行を積む者にとっては、アッラーの褒賞こそ最勝なり。但し、耐え忍ぶ者のみがそれを与えられん」と。

وَقَالَ الَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ وَيُكَلِّمُكُمُ ثَوَابُ اللَّهِ خَيْرٌ
لِمَنَ آمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا وَلَا يُلْقَاهَا إِلَّا الصَّابِرُونَ ﴿٣١﴾

82. かくて、われらは大地に、彼とその屋敷とを呑み込みしめり。彼にはアッラーに抗して助けてくれる味方とてなく、また自ら防衛し得る力も非ざりき。

فَخَسَفْنَا بِهِ وَبِدَارِهِ الْأَرْضَ فَمَا كَانَ لَهُ مِنْ فِئَةٍ
يَنْصُرُونَهُ مِنْ دُونِ اللَّهِ وَمَا كَانَ مِنَ الْمُنتَصِرِينَ ﴿٣٢﴾

83. 前日まで、彼の身分を切望せし徒輩は、云い始めり「アッラーは自分の欲する僕等に給養を賜い、或る者には之を増し、或る者には之を減ずるなり。もし我等にアッラーの御慈悲なかりせば、我等もまた大地に呑み込まれたるべし。ああ、忘恩の徒は決して栄えず」と。

وَأَصْبَحَ الَّذِينَ تَمَنَّوْا مَكَانَهُ بِالْأَمْسِ يَقُولُونَ وَيَكَذِّبُ
اللَّهُ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَن يَشَاءُ مِنْ عِبَادِهِ وَيَقْدِرُ
لَوْ لَا أَنَّ مَنَّ اللَّهُ عَلَيْنَا لَخَسَفَ بِنَا وَيَكَانَهُ لَا نَفْعَ
لِلْكَافِرِينَ ﴿٣٣﴾

第九項

84. こは、米世の住居なり。われらは之を、この世で高慢なることを欲せず、また墮落を欲せざる者に与う。善果は、義しい人のために存す。

ظَلَّكَ الدَّارُ الْآخِرَةُ نَجْعَهَا لِلَّذِينَ لَا يُرِيدُونَ عُلُوًّا
فِي الْأَرْضِ وَلَا فُسَادًا وَالْعَاقِبَةُ لِلْمُتَّقِينَ ﴿٣٤﴾

85. 善行を為す者は、功德に勝る報奨を受けん。されど、悪事を為せる者は、その行為に応じてそれなりの報いを頂載せん。(注25)

مَنْ جَاءَ بِالْحَسَنَةِ فَلَهُ خَيْرٌ مِنْهَا وَمَنْ جَاءَ بِالسَّيِّئَةِ
فَلَا يَجْزِيهِ الَّذِينَ عَمِلُوا السَّيِّئَاتِ إِلَّا مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٣٥﴾

注24 不信心者の有罪は明らかであり、これ以上の吟味は不要だ。あるいは次の様な意味にもとれる。有罪を宣告された者はその罪が明白であり、弁明の機会を与えられないであろう。

注25 神の報酬の掟は次の様である。善行に対する報酬は何倍にもなり、悪行に対する罰は、当然受けるべきものより減らされ、悪くともその罪相当のものである。

86. クルアーンの教えを汝に授け給うた彼は、必ず汝を帰るべき故郷に連れ戻さん。云え、「我が主は、嚮導をもたらしたるは誰か、また迷誤にあるは誰かを熟知し給う」と。

إِنَّ الَّذِي فَرَضَ عَلَيْكَ الْقُرْآنَ لَرَادُّكَ إِلَى مَعَادٍ
قُلْ رَبِّي أَعْلَمُ مَنْ جَاءَ بِالْهُدَىٰ وَمَنْ هُوَ فِي
ضَلَالٍ مُّبِينٍ ﴿٨٦﴾

87. 経典が汝に啓示せられるとは、全く汝の予期せざりしことにして、そは偏えに主の慈悲による。されば、断じて不信心者を手助けする者となるなかれ。

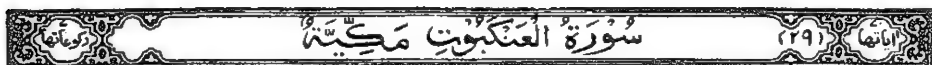
وَمَا كُنْتَ تَرْجُو أَن يُلْقَىٰ إِلَيْكَ الْكِتَابُ إِلَّا رَحْمَةً
مِّن رَّبِّكَ فَلَا تَكُونَنَّ ظَاهِرًا لِلْكَافِرِينَ ﴿٨٧﴾

88. アッラーの数々の神兆が汝に降されたるからには、それから顔をそむけることなかれ。人々を主の御許に呼び寄せよ。而して、主に他神を配する徒輩の中に加わるなかれ。

وَلَا يَصُدُّكَ عَنْ آيَاتِ اللَّهِ بَعْدَ إِذْ أُنْزِلَتْ إِلَيْكَ
وَادْعُ إِلَىٰ رَبِّكَ وَلَا تَكُونَنَّ مِنَ الشَّرِيعِينَ ﴿٨٨﴾

89. アッラー以外に如何なる神も祈るなかれ。彼の外に神なし。すべてのものは、彼を除いて、みな消滅す。審判は彼の掌握し給うところにして、お前たちは彼の許に連れ戻されん。

وَلَا تَدْعُ مَعَ اللَّهِ إِلَهًا آخَرَ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ قَدْ
نَزَّلَ فِي هَٰذَا الْقُرْآنِ الْهُدَىٰ وَالْكَافِرُ لَيْسَ
بِعَاقِلٍ ﴿٨٩﴾



アル・アンカブート

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. アリフ・ラーム・ミーム。(注1)

أَلَمْ ②

3. 人はただ、「我等信ず」と云うだけで、試されることなかるべし、と考えるか?

أَحْسِبَ النَّاسُ أَنْ يُتْرَكُوا أَنْ يَقُولُوا آمَنَّا وَهُمْ لَا يُفْتَنُونَ ③

4. われらは、彼等以前の者も試したり。なんとなれば、アッラーは誠実なる者は誰なるか、また虚言者は誰なるかを必ず識別せん。(注2)

وَلَقَدْ فَتَنَّا الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَلَيَعْلَمَنَّ اللَّهُ الَّذِينَ صَدَقُوا وَلَيَعْلَمَنَّ الْكَاذِبِينَ ④

5. それとも、悪事を行う者は、われらから逃れられ得るとでも思うか? 禍なるかなその判断。

أَمْ حَسِبَ الَّذِينَ يَعْمَلُونَ السَّيِّئَاتِ أَنْ يَسْفِقُونَهُمْ سَاءَ مَا يَحْكُمُونَ ⑤

6. アッラーとの会見を希う者には、アッラーの定められた時が必ず来るべきことを準備させよ。彼は全聴者、全知者にまします。

مَنْ كَانَ يَرْجُوا لِقَاءَ اللَّهِ فَإِنْ أَجَلَ اللَّهُ لَاحِقًا لَهُ وَهُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ⑥

7. 信仰のために努力する者は、(注3)ただ己れ自身のために努力するなり。げにアッラーは一切の衆生を頼むことなく、独り自ら存す。

وَمَنْ جَاهَدَ فَإِنَّا يُجَاهِدُ لِنَفْسِهِ إِنَّ اللَّهَ لَغَنِيٌّ عَنِ الْعَالَمِينَ ⑦

8. 信じて善行を積む者は、われらは必ず彼等の諸々の罪を帳消しにして、而して、彼等の最善なる行いに対して褒賞を与えん。

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَنُكَفِّرَنَّ عَنْهُمْ سَيِّئَاتِهِمْ وَلَنَجْزِيَنَّهُمْ أَحْسَنَ الَّذِي كَانُوا يَعْمَلُونَ ⑧

注1 われはアッラー、全知者なり(2章2節を参照)。

注2 信者は苦難・窮乏を経験しなければならず、彼等の信仰は厳しく試される。彼等が真実神の下僕となるのは、厳しい試練に耐えた後である。

注3 この節では、ムジャヒド(「信仰のために努力する者」)について短くも適切な説明がされてある。実際の行動に移すべき高い理想と不変の努力をイスラム用語でジハートと言う。そして、この高い理想を持ち、それを実現する人物が、真の意味でのムジャヒドである。

9. 人間たるもの父母に孝養を盡すべくわれらは命じたり。されど、もし父母が汝の知らぬ神々をわれと併せ祀れと強いるなら、彼等に従うなかれ。お前たちは皆われに帰る。その時われは、お前たちの行いしことを語り知らせん。

10. 信じて善行を積む者は、われら必ず義しき者の中に加えん。

11. 人々の中には「我等アッラーを信ず」と云いながら、一たびアッラーが原因で苦難に遭遇すると、人為の迫害を恰も天罰の如く看做すものあり。然るに、もし助けが主から至るなば、彼等は必ず云う、「我等は確かにお前たちと一緒にき」と。萬人が胸中に抱くものを一番良く知るは、アッラーに非ざるか？（注4）

12. 然り、アッラーは誰が信者かを確実に知り、誰が偽善者なるかを確実に知り給う。

13. 不信心者どもは信者等に云う、「我等の教えを奉ぜよ。我等必ずお前たちの罪を負わん」と。（注5）されど、彼等は、己が罪すらも負う能わず。げに彼等は嘘つきなり。

14. されど、いずれ彼等も己れ自身の重荷を負い、加うるに、自らの重荷と共に他人の重荷まで背負わせられん。而して、復活の日には、その捏造せることについて糾問せらるべし。

وَوَضِعْنَا الْإِنْسَانَ بِالْإِدْنِ حَسَنًا ۚ وَإِنْ جَاهِلْكَ
لِيُشْرِكَ بِي مَا لَيْسَ لَكَ بِهِ عِلْمٌ فَلَا تُطِعْهُمَا ۚ إِنِّي
مَرْجِعُكُمْ فَأُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٩﴾

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَنُدْخِلَنَّهُمْ فِي
الصَّالِحِينَ ﴿١٠﴾

وَمِنَ النَّاسِ مَن يَقُولُ آمَنَّا بِاللَّهِ فَإِذَا أُوذِيَ فِي
اللَّهِ جَعَلَ فِتْنَةً النَّاسَ كَعَدَابِ اللَّهِ وَلَئِنْ جَاءَ
نَصْرٌ مِّنْ رَبِّكَ يَقُولُوا إِنَّا كُنَّا مَعَكُمْ أَوَلَيْسَ اللَّهُ
بِأَعْلَمَ بِمَا فِي صُدُورِ الْعَالَمِينَ ﴿١١﴾

وَلَيَعْلَمَنَّ اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا وَلَيَعْلَمَنَّ الْمُنَافِقِينَ ﴿١٢﴾

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِلَّذِينَ آمَنُوا اسْتِعِزُّوا بِآلِهَتِنَا
وَلَنَحْمِلَ خَطِيئَتَكُمْ وَمَا هُمْ بِمُحْمِلِينَ مِنْ خَطِيئَتِهِمْ
مِّنْ شَيْءٍ إِنَّهُمْ لَكَاذِبُونَ ﴿١٣﴾

وَلَيَحْمِلُنَّ أَثْقَالَهُمْ وَأَثْقَالًا مَّعَ أَثْقَالِهِمْ وَلَيَسْئَلُنَّ
يَوْمَ الْقِيَامَةِ عَمَّا كَانُوا يَفْتَرُونَ ﴿١٤﴾

注4 初期のイスラム教徒は、厳しい試練の下で不動の信仰を示したし、又真の信者も常にそうであった。これとは対照的に信仰心の弱い者が、いつの世にもいる。彼等は並みの試練にうろたえ、苦しみに耐えられず信仰を捨てようとする。又一方で、神の救いが信者にもたらされ、神の目的が進むのを目の当たりにすれば、彼等は信者の輪に加わろうとする。

注5 偽善者とは別に、不信心者の攻撃的な指導者がいる。彼等はの高い社会的地位を利用して、地位の低い者を蹠った方向に導こうとする。彼らは自分たちの指導を受け入れるよう主張し、同時に新しい（真の）宗教を拒む事で彼らがこうむる損失には自分たちが責任を持つと主張する。

第二項

15. われらは昔、ノアをその民に遣わしたり。彼その民の中にとどまること、千歳より五十年を除く。その民悪事にふける最中に、突如洪水襲いたり。(注6)

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا نُوحًا إِلَىٰ قَوْمِهِ فَلَبِثَ فِيهِمْ أَلْفَ سَنَةٍ إِلَّا خَمْسِينَ عَامًا فَأَخَذَهُمُ الطُّوفَانُ وَهُمْ ظَالِمُونَ ﴿١٥﴾

16. われらは、ノアとその方舟に乗りたる人々を救いたり。而して、われらは之を萬人への徴となせり。

فَأَنْجَيْنَاهُ وَأَصْحَابَ السَّفِينَةِ وَجَعَلْنَاهَا آيَةً لِّلْعَالَمِينَ ﴿١٦﴾

17. また、アブラハムがその民にかく云いたる時を念え。「アッラーを崇め、且つ畏こみ奉れ。そは、お前たちの身のためとならん、もしお前たち思慮分別があるならば。

وَإِبْرَاهِيمَ إِذْ قَالَ لِقَوْمِهِ اعْبُدُوا اللَّهَ وَاتَّقُوهُ ذَلِكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ إِن كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿١٧﴾

18. お前たちはアッラーをさしおいて、偶像のみを拝み、且つ虚偽を捏造す。お前たちがアッラーをさしおいて拝する神々は、お前たちに日々の糧を供給する能力なし。されば、アッラーに糧を請い求め、彼を崇め、彼に感謝せよ。お前たち皆、いずれは彼の許に連れ戻されん」

إِنَّمَا تَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ أَوْثَانًا وَتَخْلُقُونَ إِفْكًا إِنَّ الَّذِينَ تَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ لَا يَمْلِكُونَ لَكُمْ رِزْقًا فَابْتَغُوا عِندَ اللَّهِ الرِّزْقَ وَاعْبُدُوهُ وَاشْكُرُوا لَهُ ۚ إِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿١٨﴾

19. もしもお前たちがこの真理を認めぬのなら、今までにも信用せざりし民は多かりき。さもあればあれ、使徒の責務は、ただ神託を明確に伝えるのみ。

وَإِن تَكْذِبُوا فَقَدْ كَذَّبَ أُمَمٌ مِّن قَبْلِكُمْ وَمَا عَلَى الرَّسُولِ إِلَّا الْبَلْغُ الْبَيِّنُ ﴿١٩﴾

20. 彼等は見ざるや、アッラーが如何に創造を起し、再び之を繰返し給うかを？ そは、アッラーにとりてまことに容易なり。(注7)

أَوَلَمْ يَرَوْا كَيْفَ يُبْدِئُ اللَّهُ الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ ۚ إِنَّ ذَٰلِكَ عَلَى اللَّهِ يَسِيرٌ ﴿٢٠﴾

注6 ノアの時代は 950 年間続いたと処々に書かれてある。聖書ではそれを 952 年間としている。ノア、フード、サーレ等、古代の預言者が生きた時代や、その生存期間について、正確な数字を挙げるのは難しい。「彼等を知る者は、神の他誰一人いない。」とクルアーンは述べている (14: 10)。950 年という期間は、ノア個人の生存期間ではなく、彼の律法が行われた時代を指すのであろう。アブラハムがノアの末裔である事から、これはアブラハムの世に繋がる時の流れの始まりだったと言える (37: 84)。次にヨセフの時が来、そしてモーゼの時へと移る。事実、預言者の年令とは、彼の律法と教義が行なわれた年数の事である。ノアの年令の区切りを示すのに、サナーとアームという二語が用いられている。前者は本来「悪意を持つ」という意味で、後者は「善意を持つ」という意味である。ノアの律法の初めの 50 年間は、精神的成長と回心の時であった。その後には道德の退廃が始まり、彼の一族は次第に道德的に墮落して行き、この事態は 900 年の間続いた。

注7 この節には、神の創造と再生の律法がどの様に行なわれるかが示されている。神は、モハammad 預言者を通して、古き者が滅びた後に、新たな人々と、新たな秩序を創造されるであろう。

21. 云え、「国々を遍歴せよ。而して、アッラーが如何に最初の創造を起したるかを見よ。次いで、アッラーは第二の創造を生じさせん」と。(注8) げにアッラーは萬能にまします。

قُلْ سِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَانظُرُوا كَيْفَ بَدَأَ الْخَلْقَ ثُمَّ اللَّهُ يُنشِئُ النَّشْأَةَ الْآخِرَةَ إِنَّ اللَّهَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٢١﴾

22. 彼は、欲する者を罰し、また、欲する者に慈悲を垂れ給う。(注9) 而して、お前たち皆、いずれは彼の許に引き戻されん。

يُعَذِّبُ مَنْ يَشَاءُ وَيَرْحَمُ مَنْ يَشَاءُ وَإِلَيْهِ تُقْلَبُونَ ﴿٢٢﴾

23. お前たちは、天に於ても地に於ても、アッラーの意図を挫折せしむる能わず。またお前たちには、アッラーの外に如何なる味方も、助け手もなし。(注10)

وَمَا أَنْتُمْ بِمُعْجِزِينَ فِي الْأَرْضِ وَلَا فِي السَّمَاءِ وَمَا لَكُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ مِنْ وَلِيٍّ وَلَا نَصِيرٍ ﴿٢٣﴾

第三項

24. アッラーの神兆を信ぜず、その会見を信ぜざる者は一わが慈悲を断念したる徒輩なり。彼等は痛罰を受けん。

وَالَّذِينَ كَفَرُوا بِآيَاتِ اللَّهِ وَلِقَائِهِ أُولَٰئِكَ يَئِسُوا مِنْ رَحْمَتِي وَأُولَٰئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٢٤﴾

25. その民の答えは、ただかくの如きなりき。「彼を殺せ、さもなくば火炙りにせよ」。然れども、アッラーは彼を火中より救いたり。この中には、信ずる人々への歴然たる神兆あり。

فَمَا كَانَ جَوَابَ قَوْمِهِ إِلَّا أَنْ قَالُوا اقْتُلُوهُ أَوْ حَرِّقُوهُ فَأَنْجَاهُ اللَّهُ مِنَ النَّارِ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ لِّعَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ﴿٢٥﴾

26. アブラハムは云えり、「げにお前たちは、アッラーの外に偶像を奉ずれども、お前たちと神々はただ現世に於けるよしみによつて結ばれるのみ。(注11) されば、復活の

وَقَالَ إِنَّا اتَّخَذْنَاكُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ آلِهَةً مَوَدَّةَ بَيْنِكُمْ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا ثُمَّ يَوْمَ الْقِيَامَةِ يَكْفُرُ

注8 この言葉は、クルアーンに何度か取り上げられており(6:12, 12:110, 30:10, 35:45, 40:83)、そのほとんどの箇所には、「一つの国家が減び、新たな国家が生まれる」事を示す記述が続く。当節では、死後の復活ではなく、唯、国の栄枯盛衰について述べられている。

注9 クルアーンの数ヶ所で述べられている通り、神は根拠無くして罰せられる訳ではなく、裁きは罪に比して下される。この節は唯一この事を強調している。

注10 神意が現れ、イスラム教が広まり勝利を得る時、不信心者は神の御計画を妨げたり、定められた恐しい運命を逃がれる事はできない。不信心者はこの様に厳しく警告されている。

注11 「よしみ」という言葉は次の様な意味を持つ。(1)相思相愛の関係や、それを望む気持ちは、偶像崇拝の理想や行為に基づくものである。(2)貴人方は、偶像崇拝の理想や行為を互いの愛の基盤としてしまった。つまり、偶像崇拝の一致により、社会の均質性を保とうとしたのである。

日に於ては、互に否認し、互に呪いあうべし。お前たちの住居は業火なるべし。而して、お前たちを救う者なかるべし」と。

بَعْضُكُمْ بِبَعْضٍ وَيَلْعَنُ بَعْضُكُمْ بَعْضًا وَمَأْوَاهُمُ النَّارُ وَمَا لَكُمْ مِنْ نَاصِرِينَ ﴿٢٧﴾

27. ロトはアブラハムを信じたり。されば、アブラハムは云えり、「我、主の許へ避難せん。まことに彼は、偉大にして賢哲にまします」と。

فَأَمِنَ لَهُ لُوطٌ وَقَالَ إِنِّي مُهَاجِرٌ إِلَى رَبِّي إِنَّهُ هُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿٢٨﴾

28. われらはアブラハムに、イサクとヤコブを与え、預言者としての能力を授け、彼の子孫に經典を授けたり。また、彼には、現世に於て報奨も与えたり。彼は来世に於て、必ずや義しき人々の仲間に加えられん。

وَوَهَبْنَا لَهُ إِسْحَاقَ وَيَعْقُوبَ وَجَعَلْنَا فِي ذُرِّيَّتِهِ النُّبُوَّةَ وَالْكِتَابَ وَآتَيْنَاهُ أَجْرَهُ فِي الدُّنْيَا وَرَأَيْنَاهُ فِي الْآخِرَةِ لِمَنِ الصَّالِحِينَ ﴿٢٩﴾

29. われらはまたロトを遣わしたが、時に彼はその民にかく云えり、「お前たちは、お前たち以前の如何なる民も行わざりし忌まわしい行為を犯す。

وَلُوطًا إِذْ قَالَ لِقَوْمِهِ إِنَّكُمْ لَتَأْتُونَ الْفَاحِشَةَ مَا سَبَقَكُمْ بِهَا مِنْ أَحَدٍ مِنَ الْعَالَمِينَ ﴿٣٠﴾

30. なんとることぞ！ 男に色情を抱いて近づき、大道で旅人を襲い、集会の席ですら忌まわしい行為をするのか？！」と。(注12) 然るに、その民はかく答えたのみ、「もし汝の言葉が真実なら、アッラーの罰とやらここにもたらせ」と。

إِنَّمَا لَتَأْتُونَ الذِّكْرَ وَالْتَقَطُوهَا مِنَ السَّبِيلِ ۗ وَتَأْتُونَ فِي نَادِيَكُمُ الْمُنْكَرُ فَمَا كَانَ جَوَابَ قَوْمِهِ إِلَّا أَنْ قَالُوا اقْتَبِلْ بِعَذَابِ اللَّهِ إِنْ كُنْتَ مِنَ الصَّادِقِينَ ﴿٣١﴾

31. ロトは祈りたり、「主よ、この邪惡な民から我を守り給え」と。

قَالَ رَبِّ انصُرْنِي عَلَى الْقَوْمِ الْمُفْسِدِينَ ﴿٣٢﴾

第四項

32. かくて、われらの使者たちは朗報を携えてアブラハムに來たりて、云えり、「我等はこの邑の住民を滅ぼさんとす。げにこの邑の住民は、不義なす徒輩なり」と。

وَلَمَّا جَاءَتْ رُسُلُنَا إِبْرَاهِيمَ بِالْبُشْرَى قَالُوا إِنَّا مُهْلِكُوا أَهْلَ هَذِهِ الْقَرْيَةِ إِنَّ أَهْلَهَا كَانُوا ظَالِمِينَ ﴿٣٣﴾

33. アブラハムは云えり、「されど、邑にロトあり」と。使者たちは云えり、「我等は、そこに住む者を熟知す。我等は必ず、後に残る

قَالَ إِنَّ فِيهَا لُوطًا قَالُوا نَحْنُ أَعْلَمُ بِمَنْ فِيهَا إِنَّهُ لَنَجِيَّتُهُ وَاهْلَهِ إِلَّا امْرَأَتَهُ كَانَتْ مِنَ

注 12 三つの惡徳は、この節のロト一族によるもので、それは次の様なものである。(1)極惡な犯罪 (2)路上強盜 (3)公衆の面前で恥もなく罪を犯す事

者の仲間に入るロトの妻を除いて、ロトとその家族を救わん」と。

الْغَيْرِينَ ﴿٣٣﴾

34. 而して、われらの使者たちがロトのところに到ると、彼は人々のために自分の無力さを感じ、心を痛めたり。(注13) されば、使者たちは云えり、「恐れるなかれ、悲しむなかれ。我等は必ず、後に残る者の仲間に入る汝の妻を除き、汝と汝の家族を救わん。

وَلَمَّا أَنْ جَاءَتْ رُسُلُنَا لُوطًا سَتَىٰ بِهِمْ وَضَآئِ بِهِمْ
ذُرْعًا وَقَالُوا لَا تَخَفْ وَلَا تَحْزَنْ إِنَّا مُنْجُونَكَ وَأَهْلَكَ
إِلَّا أَمْرًا تَكُ كَانَتْ مِنَ الْغَيْرِينَ ﴿٣٤﴾

35. 我等はこの^{この}邑の住民に、彼等の不埒きわまる振舞い故に、天罰を降さんとす」と。

إِنَّا مُنْزِلُونَ عَلَىٰ أَهْلِ هَذِهِ الْقَرْيَةِ رِجْزًا مِنَ السَّمَاءِ
بِمَا كَانُوا يَفْسُقُونَ ﴿٣٥﴾

36. われらは思慮ある人々のために、明白なる徴として、それを今に遣したり。

وَلَقَدْ شَرَكْنَا مِنْهَا آيَةً بِّنَّةً لِّقَوْمٍ يَعْقِلُونَ ﴿٣٦﴾

37. また、われらは、マドウヤンの民にその兄弟シュアイブを遣わしたり。彼は云えり、「我が民よ、アッラーを崇め、最後の日を忘れず、地上を乱す邪悪を犯すなかれ」と。

وَالِئِذَا مَدَيْنَ أَخَاهُمْ شُعَيْبًا فَقَالَ يَوْمَ اعْبُدُوا اللَّهَ
وَارْجُوا الْيَوْمَ الْأَخْرَجُوا لِي تَعْتَوُوا فِي الْأَرْضِ مُفْسِدِينَ ﴿٣٧﴾

38. 然るに、彼等は、シュアイブを嘘つきと呼べり。因って、激震彼等を襲い、彼等己が家の下敷きとなれり。

فَكَذَّبُوهُ فَأَخَذَتْهُمُ الرَّجْفَةُ فَأَصْبَحُوا فِي دَارِهِمْ
جُثَيَيْنَ ﴿٣٨﴾

39. われらはまた、アード並びにサムードの民を滅ぼせり。そは、彼等の廢墟によって、お前たちにはすでに明白なり。悪魔は彼等に、己が所業を立派なものだと思わしめれば、彼等慧眼なれど、正しき道より離反せり。(注14)

وَعَادًا وَثَمُودًا وَقَدْ يُنَبِّئُكَ لِكُلِّ مَسْجِدٍ وَرِزْنٍ
لَّهُمُ الشَّيْطَانُ أَعْمَالَهُمْ فَصَدَّهُمْ عَنِ السَّبِيلِ وَكَانُوا مُسْتَبْصِرِينَ ﴿٣٩﴾

40. またわれらは、クアールーンとファラオとハーマーンを滅ぼせり。モーゼがその使命の証^{あかし}を持って彼等に至りしも、地上に於て傲然^{ごうぜん}と振舞えり。されど、彼等は、われらを凌駕^{りやうが}し得ざりき。

وَقَارُونَ وَفِرْعَوْنَ وَهَامَانَ وَلَقَدْ جَاءَهُمْ مُّوسَىٰ
بِالْبَيِّنَاتِ فَاسْتَكْبَرُوا فِي الْأَرْضِ وَمَا كَانُوا سَاقِقِينَ ﴿٤٠﴾

注13 使者がどの様な人物かはこの節に述べられており、彼等の使命に関しては11:70-71, 15:68-72に書かれてある。彼等の訪問はロト預言者を悲しませた。見知らぬ者が街へ来るのを嫌い、ロトによそ者を受け入れない様禁じていた。彼は一族の者達が客の前で彼に恥をかかせるのではないかと恐れた。

注14 このクルアーンの言葉は次の様な意味を持つ。(1)彼等は、自ら選んだ道が誤りであった事に気付いた。(2)彼等は、どの様な結末を迎えるか知りつつも、故意に一つの道を選んだ。

41. 要するに、われらは、彼等の各々をその罪にてらして罰したり。或る者には石混じりの嵐を送り、或る者は怒号を似て之を襲い、或る者は大地に呑み込ませ、或る者は溺死せしめたり。アッラーが彼等を虐待したに非ず、虐待したるは彼等自らなり。

فَكَلَّا أَخَذْنَا بِذُنُوبِهِمْ فَنَسْفَعُ مِمَّنْ أَرْسَلْنَا عَلَيْهِ عَاكِفًا
وَمِنْهُمْ مَّنْ أَخَذَتْهُ الصَّيْحَةُ وَمِنْهُمْ مَّنْ خَفَّاهُ
بِهِ الْأَرْضُ وَمِنْهُمْ مَّنْ أَغْرَقْنَاهُ وَمَا كَانَ اللَّهُ
لِيُظْلِمَهُمْ وَلَكِنْ كَانُوا أَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ ﴿٤١﴾

42. アッラー以外に守護者を求むる者は、譬うれば、己れの家を造る蜘蛛の如し。すべての家の中で、最も脆弱なものは、蜘蛛の家なり、彼等この事を知りたりせば！(注15)

مَثَلُ الَّذِينَ اتَّخَذُوا مِنْ دُونِ اللَّهِ أَوْلِيَاءَ كَمَثَلِ
الْعَنْكَبُوتِ إِذَا أَخَذَتْ بُيُوتًا وَإِنْ أَوْهَنَ الْبُيُوتُ لَبِثُتِ
الْعَنْكَبُوتُ لَوْ كَانُوا يَعْلَمُونَ ﴿٤٢﴾

43. げにアッラーは、彼等がアッラー以外に祈るものは、何であれ、知り給う。彼は偉大にして、賢哲にまします。

إِنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا يَدْعُونَ مِنْ دُونِهِ مِنْ شَيْءٍ وَهُوَ
الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿٤٣﴾

44. これ等は、われらが人間のために示したる比喩なれども、知識を持てる者以外は之を理解せぬなり。

وَتِلْكَ الْأَمْثَالُ لَضَرِبُهَا لِلنَّاسِ وَمَا يَعْقِلُهَا إِلَّا
الْعَالِمُونَ ﴿٤٤﴾

45. アッラーは真理を以て、天地を創造し給えり。げにこの中に在るものは、信者への神兆なり。

خَلَقَ اللَّهُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ بِالْحَقِّ إِنَّ فِي ذَلِكَ
لَآيَةً لِلْمُؤْمِنِينَ ﴿٤٥﴾

第五項

46. 汝に啓示されたる經典を読誦し、礼拝を遵守せよ。げに礼拝は、人をみだらな行為と悪事から防止す。而して、最も肝要なことは、アッラーを唱念することなり。アッラーはお前たちの所業を知悉し給う。

أَتْلُ مَا أُرْحَى إِلَيْكَ مِنَ الْكِتَابِ وَأَقِمِ الصَّلَاةَ إِنَّ
الصَّلَاةَ تَنْهَى عَنِ الْفَحْشَاءِ وَالْمُنْكَرِ وَلَذِكْرُ اللَّهِ
أَكْبَرُ وَاللَّهُ يَعْلَمُ مَا تَصْنَعُونَ ﴿٤٦﴾

47. 立派な態度を以てするに非ずば、經典の民と論争するなけれ。されど、不義な徒輩の場合は別なり。而して云え、「我等は、我等並びにお前たちに啓示されたものを信ず。我等の神も、お前たちの神も、一つな

وَلَا تُجَادِلُوا أَهْلَ الْكِتَابِ إِلَّا بِالَّتِي هِيَ أَحْسَنُ إِلَّا الَّذِينَ
ظَلَمُوا مِنْهُمْ وَقُولُوا آمَنَّا بِالَّذِي أُنْزِلَ إِلَيْنَا وَأُنْزِلَ

注 15 イスラム教の主題である神の不変性についてはこの節で終わる、処々では美しい陰喩が用いられて、偶像崇拜の愚かさ、誤りを多神論者に痛感させている。それらは蜘蛛の巣の様にろく、知的な批判には対抗できない。

り。されば、我等はその神に服従帰依し奉る」と。(注16)

48. われらは汝にも同じように經典を降したり。されば、われらが真実の知識なる經典を授けたる者は、クルアーンを信ず。また、メッカ人の中にもクルアーンを信ずる人々あり。不信心者の外は何人もわれらの神兆を拒まず。

49. 汝はクルアーンを賜わる前に、如何なる經典も読誦せず、また汝の右手で如何なるものをも書かざりき。もしそうであったとすれば、嘘つきどもは疑心を抱いたに相違なし。(注17)

50. 然らず、そは知識を賜わる者の心の中に於ける明瞭なる神兆なり。不義なす徒輩の外は、何人もわれらの神兆を拒まず。(注18)

51. 彼等は云えり、「何故主より奇跡が彼に降されざるか?」と。云え、「奇跡はアッラーの許にあり。我はただの警告者にすぎず」と。

52. われらが彼に經典を降せしは、彼等に誦み聞かせんがため、彼等それでも足れりと思わざるか? げにこの中には、信ずる人々への慈悲と訓戒あり。(注19)

إِلَيْكُمْ وَالْهَذَا إِلَهُكُمْ وَإِذْ وَخَّ نَ لَهُ مُسْلِمُونَ ﴿١٦﴾

وَكَذَلِكَ أَنْزَلْنَا إِلَيْكَ الْكِتَابَ فَالَّذِينَ آمَنُوا بِهِ يُؤْمِنُونَ بِهِ وَمِنْ هَؤُلَاءِ مَنْ يُؤْمِنُ بِهِ وَمَا يَجْحَدُ بِآيَاتِنَا إِلَّا الْكَافِرُونَ ﴿١٧﴾

وَمَا كُنْتَ تَتْلُو مِنْ قَبْلِهِ مِنْ كِتَابٍ وَلَا تَخُطُّ بِمِثْقَلِ ذَرَّةٍ مِنْهُ إِذْ أَرْسَلْنَاكَ بِالْبُطُحُونَ ﴿١٨﴾

بَلْ هُوَ آيَةٌ بَيِّنَةٌ فِي صُدُورِ الَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ وَمَا يَجْحَدُ بِآيَاتِنَا إِلَّا الظَّالِمُونَ ﴿١٩﴾

وَقَالُوا لَوْلَا أُنْزِلَ عَلَيْهِ آيَةٌ مِنْ رَبِّهِ قُلْ إِنَّمَا الْآيَاتُ عِنْدَ اللَّهِ وَإِنَّمَا أَنَا نَذِيرٌ مُبِينٌ ﴿٢٠﴾

أَوَلَمْ يَكْفِهِمْ أَنَّا أَنْزَلْنَا عَلَيْكَ الْكِتَابَ يُتْلَى عَلَيْهِمْ ۚ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَرَحْمَةً وَذِكْرَى لِقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ﴿٢١﴾

注16 自分の宗教を他の人々に説く際の適切な法則がこの節に示されている。我々はまず、自分と相手が共通点のある信仰を持つという点を強調する事で説教を始めるべきだ。例えば、「經典の民」について語る時は、永遠なる神と神の啓示という二つの基本的教義を基にしなければならないと我々は教えられている。

注17 読み書きの出来ない一人の男がある国に生まれ育ち、文明人との接触もなく、おそらく他の黙示録に関して何の知識も無かったであろう。その男にクルアーンを作る事などできたであろうか? 否、クルアーンは永遠に価値あるもの全てを備えただけでなく、人類が常に必要とする道德的・精神的なものを満たす様に作られているのである。これ等の事柄は、クルアーンが神に啓示されたものであり、モハムマド預言者が神の教えを伝える師である事を確証する。

注18 前節では、クルアーンが神の啓示である事を示す外的証拠に言及しているが、当節では、クルアーンに精通する者の心から神の光が湧き出るといふ内的証拠を挙げている。

注19 神の神兆を求める不信心者に対し(前節参照)、この節は哀れみを込めて答えている。神は既にクルアーンを通して慈悲の印をお与えになっており、クルアーンに従えば高位を得、世の人々に敬われるであろうに。にもかかわらず、なぜ罰の印を求めるのか、と答えている。

第六項

53. 云え、「我とお前たちとの間のことは、アッラーお独りの証言でこと足りる。彼は天地に通曉す。されば、虚妄を信じてアッラーを信ぜざる者、斯かる者は失敗者なり」と。

قُلْ كَفَىٰ بِاللَّهِ بَيِّنًا وَبَيْنَكُمْ شَهِيدًا ۚ يَعْلَمُ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ ۚ وَالَّذِينَ آمَنُوا بِالْبَاطِلِ وَكَفَرُوا بِاللَّهِ ۖ أُولَٰئِكَ هُمُ الْخَاسِرُونَ ﴿٥٣﴾

54. 彼等は汝に懲罰を催促す。もし定められたる時期なかりせば、たちどころに罰は降つたに相違なし。げに懲罰は、彼等の気づかぬ中に、突然襲いかかるべし。(注20)

وَيَسْتَعْجِلُونَكَ بِالْعَذَابِ وَلَوْلَا أَجَلٌ مُّسَمًّى لَّجَاءَهُمُ الْعَذَابُ وَلَيَأْتِيَنَّهُمْ بَغْتَةً وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٥٤﴾

55. 彼等は汝に懲罰を催促するが、地獄はすでに、不信心者どもを取り囲めり。(注21)

يَسْتَعْجِلُونَكَ بِالْعَذَابِ وَإِنَّ جَهَنَّمَ لَكُيُطْرَقُ بِالْكَافِرِينَ ﴿٥٥﴾

56. 懲罰が彼等の頭上から足の下まで埋めつくす(注22) その日、主は云わん、「汝等の所業の報いを味わえ」と。

يَوْمَ يَغْشَاهُمْ الْعَذَابُ مِنْ فَوْقِهِمْ وَمِنْ تَحْتِ أَرْجُلِهِمْ وَيَقُولُ ذُوقُوا مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٥٦﴾

57. ああ、信ずるわが僕らよ！ わが大地は広大なり、されば、われのみを崇めよ。

يَعْبُدُوا إِلَٰهَ الَّذِينَ آمَنُوا إِنَّ أَرْضِي وَاسِعَةٌ فَإِنِّي أَفْعِدُونَ ﴿٥٧﴾

58. 人は皆死する者なり。然る後、お前たちはわれらに連れ戻されん。

كُلُّ نَفْسٍ ذَٰئِقَةُ الْمَوْتِ ثُمَّ إِلَيْنَا تُرْجَعُونَ ﴿٥٨﴾

59. 信仰し、正しい行いをする者には、われらは必ず楽園の高殿に宿らせん。その下には河川流れ漂う。彼等はそこに永久に住み留まらん。善いことに精を出せし者の報奨は実に素晴らしい。(注23)

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَنَسْبِقَنَّهُمْ مِنَ الْجَنَّةِ غُرَفًا تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا نِعْمَ أَجْرُ الْعَامِلِينَ ﴿٥٩﴾

60. よく耐え忍んだ者たちや、信頼をその主に置き奉りし者たちもまた。

الَّذِينَ صَبَرُوا وَعَلَىٰ رَبِّهِمْ يَتَوَكَّلُونَ ﴿٦٠﴾

注20 この節は、不信心者の罰の神兆を求めるのに対し、次の様に率直に答えている。クルアーンを通じて与えられた慈悲の印に恵まれるより、この不幸な者達はあくまで罰を求めている。それゆ、彼等はこの印を得、突然思い掛かない所で彼等に罰が下るであろう。しかし彼等は定められた時まで待たねばならない。

注21 前節に述べられた罰とは、現世で不信心者に下されるものである。この節にある罰は、来世に彼等に科せられるものである。

注22 神の罰が下る時、それは突然・急激に、滝の様に四方から彼等を襲う。

注23 信者はここで、明確な言葉で約束されている。心の拠り所を神の道に置く者は、信仰が揺がず、行いが正しい為、神の為に失うものより遙かに多くの報酬を与えられるであろう。

61. 己が食糧をまかなえざる動物が如何に沢山いることか！ アッラーはそれ等を養い、またお前たちを養い給う。(注24) 彼はすべてを聴き、すべてを知り給う。
62. もし汝、彼等に向つて「天地を創造し、太陽と月とを抑えて役立たしめたるは誰か？」と問わば、(注25) 彼等は必ずや答えん、「アッラーなり」と。然らば、何故彼等は真理から離反しているのか？
63. アッラーは、その僕らの中で、欲する者に給養を増し、欲する者に給養を減ずる。げにアッラーは、萬事を深知し給う。
64. もし汝、彼等に向つて「天から水を降し、それによって枯れ死んだ大地に生を与える者は誰か？」と問わば、彼等は必ず答えん、「アッラーなり」と。云え、「すべての賞讃はアッラーに属す」と。されど、彼等の大半は解らざるなり。
65. 今生は、氣晴らしか慰みにしかすぎず。(注26) 来世の安息所こそ真の生活なり、彼等この事を知りたりせば。
66. 船の中では、彼等は誠実且つひた向きにアッラーを祈る。然るに、アッラーが彼等を無事上陸させてやると、見よ、彼等はアッラーに再び他神を併せ祀る、
67. われらが彼等に授けたるものを忘れて。而して、彼等は当座の享樂にふける。されど、彼等はやがて己が行状の結果を知るべし。
68. その周辺で強奪がほしいまに行われているとき、われらが彼等のためにメッカの安

وَكَايَتٍ مِّن دَابَّةٍ لَا تَحْمِلُ رِقْلَهَا ۚ اللَّهُ يَرْتَفِئُهَا
وَرَأَيْتُمْ كَمْ ۖ وَهُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿٦١﴾

وَلَيْن سَأَلْتَهُمْ مَّنْ خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ وَخَلَقَ
الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ لَيَقُولُنَّ اللَّهُ ۚ فَأَلَّىٰ يُفْكَوْنَ ﴿٦٢﴾

اللَّهُ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَن يَشَاءُ مِنْ عِبَادِهِ وَيَقْدِرُ
لَهُ ۚ إِنَّ اللَّهَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿٦٣﴾

وَلَيْن سَأَلْتَهُمْ مَّنْ نَزَّلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَأَخْيَا بِهِ
الْأَرْضَ مِّن بَعْدِ مَوْتِهَا لَيَقُولُنَّ اللَّهُ ۚ قُلِ الْحَدُّ
ۖ لِلَّهِ بَلْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْقِلُونَ ﴿٦٤﴾

وَمَا هَذِهِ الْجَبُوتُ الدِّنْيَا إِلَّا لَهُمْ وَلِجِبُوتٍ وَإِنَّ
الدَّارَ الْآخِرَةَ لَإِىَّ الْحَيَوانُ لَوَكَانُوا يَعْلَمُونَ ﴿٦٥﴾

فَإِذَا رَكِبُوا فِي الْفُلِكِ دَعَوْا اللَّهَ مُخْلِصِينَ لَهُ الدِّينَ
فَلَمَّا نَجَّاهُمْ إِلَى الْبَرِّ إِذَا هُمْ يُشْرِكُونَ ﴿٦٦﴾

لِيَكْفُرُوا بِمَا آتَيْنَهُمْ ۚ وَاسْتَعَاذَ قُفُوسٌ يَعْلَمُونَ ﴿٦٧﴾

أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّا جَعَلْنَا حَرَمًا أَمِنًا وَنُحَظِّفُ النَّاسَ مِنْ

注24 動物や鳥ですら食物に恵まれている時に、神の最も優れた創造物であり、頂上を極める人間が飢える事などあろうはずがない。

注25 神は生命ある全ての創造物及び自然現象を人間の役に立つように、与えられた。

注26 崇高な目的の為に生じる艱難辛苦や、神の為に耐える犠牲の無い人生は娯樂と同じく無益なものである。

全な聖域を設けたることを、彼等は見ざりしか？ それでも彼等は虚妄を信じて、アッラーの恩恵を拒否するつもりか？

حَوْلِهِمْ أَفْيَالٌ بَاطِلٌ يُؤْمِنُونَ وَبِعِصَةِ اللَّهِ يَكْفُرُونَ ﴿٦٨﴾

69. アッラーについて偽りを捏造する者、或いは真理が来れる時に之を否認する者以上の不義者は誰か？ 地獄には不信心者どもの住居は非ざるか？

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنْ افْتَرَى عَلَى اللَّهِ كَذِبًا أَوْ كَذَّبَ

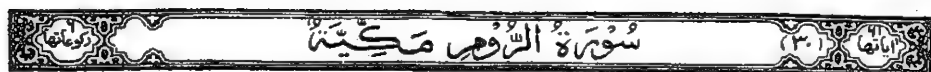
بِالْحَقِّ لَمَّا جَاءَهُ أَلَيْسَ فِي جَهَنَّمَ مَثْوًى لِّلْكَافِرِينَ ﴿٦٩﴾

70. されど、われらのために励む者は、(注 27) われらは之をわれらの道に導かん。げにアッラーは、常に善人と偕にあり。

وَالَّذِينَ جَاهَدُوا فِينَا لَنَهْدِيَنَّهُمْ سُبُلَنَا وَإِنَّ اللَّهَ

لَمَعَ الْحَسِينِينَ ﴿٧٠﴾

注 27 イスラム教に定められたジハードとは、殺害の加害者及び被害者になる事ではなく、神の御意志に沿う様努力する事にある。



アル・ルーム

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. アリフ・ラーム・ミーム。(注1)

الْمِ ②

3. 羅馬人は破れたり、

غُلِبَتِ الرُّومُ ③

4. この国に隣接する地(注2)に於て。然しながら、彼等はいずれ勝利せん、

فِي أَدْنَى الْأَرْضِ وَهُمْ مِنْ بَعْدِ عَلَيْهِمْ سَيُغْلِبُونَ ④

5. 数年の~~後~~には一前の敗北も後の勝利も、アッラーの御意志なり—その日、信者たちは喜ばん、(注3)

فِي بَضْعِ سِنِينَ هَ لِلَّهِ الْأَمْرُ مِنْ قَبْلُ وَمِنْ بَعْدُ وَيَوْمَئِذٍ يَفْرَحُ الْمُؤْمِنُونَ ⑤

注1 われはアッラー、全知者なり(2節2章参照)。

注2 パレスチナ

注3 当節及び前二節の趣旨を十分理解する為には、イスラム教のモハammad預言者の出現直前に、アラビアに領土を持つ二大帝国、ペルシャ及びローマの政治状況がどの様であったか、その概略を知る必要がある。両国は交戦中であった。初めペルシャが勝利をもにした。ペルシャによる征服の始まりは西暦602年で、この年、フォーカスに殺害された恩人モリスの仇討ちの為、チオスロス二世はローマと開戦した。20年後ローマ帝国はペルシャ軍に敗れたが、これはかつてない事であった。ペルシャはシリアやアジアの小国を奪い、西暦608年にはチャルセドンに進攻した。ダマスカスが613年に陥落した。建国以来ペルシャ人が足を踏み入れない周辺諸国は、ことごとく荒廃した。614年6月、エルサレムも又落ちた。キリスト教徒は皆、ペルシャ人が総大司教と共にキリストの十字架を取り払ったと聞き、脅えた。キリスト教は權威を失った。ペルシャ人による征服は、エルサレム占領では終わらなかった。次にエジプトがそしてアジアの小国が再び征服され、ペルシャ軍はコンスタンチノーブルのすぐ側まで近付いた。ローマは抵抗する事もできたのだが、内紛が災いし、それを行わなかった。ヘラクレスは徹底的に屈辱を受けた。チオスロスは、鎖で繋がれ王座の足元に引き立てられたヘラクレスに会い、ヘラクレスが十字架にかけられた彼の神を捨て、太陽崇拝を受け入れるまで、彼を放しよとしないかった(Historians History of the World, 7巻P159: 8巻P94-95, Enc. Brit. "Chosroes II"と"Heraclius"参照) この事はイスラム教徒を非常に悲しませた。それは彼等がローマ人と同じく經典の民だったからである。メッカのクライシスは、ペルシャ人の様に偶像崇拝者であり、キリスト教徒軍の敗北に、イスラム教打倒の契機と考え、喜んだ。このローマ軍崩壊の直後、西暦616年にモハammad預言者に神の啓示が為されたが、当節及び前二節ではこれが主題となっている。この三節には、重要な事が二つ述べられている。八・九年の短期間に形勢は逆転し(3~9年を表す。)かつて勝利を治めたペルシャ軍が、当時徹底的に痛めつけられたローマ人の手で、今度は完敗に追いやられるであろうと、当時思いもよらない預言が、この三節に記されてある。この様な短期間にイスラム教が勝利を治め、不信心者の敗北が決定的となる所にこの預言の重要性がある。この預言は、人間の予測を越えて現実のものとなった。ペルシャが勝利を治めている最中、モハammad預言者は、ローマ人は再び勝利を得ると何年も先の事をあえて預言した。この預言が為され

6. アッラーの助けを。彼は己れの欲する者を助け給う。彼は偉大にして、慈悲深くまします。
7. こはアッラーの約束なり。アッラーはその約束を破らず。(注4)然るに、世人の多くは之を知らず。
8. 彼等はただ今生の外観を知るも、来世については全く意に介さず。(注5)
9. 彼等はその心の中に、アッラーが天地並びにその間に在るすべてのものを真理を以て、且つ一定の期間を定めて創造し給うたことを、考えざりしか？(注6)然るに、人々の多くは、主との対面を信ぜず。
10. 彼等は各地を遍歴して、彼等より前の者、その末路たるや如何ばかりなりしかを見ざるや？昔の人は、その力において、この者たちよりも強く、地を耕し、且つこの者たちよりも繁栄せり。而して、使徒たちはさまざまなる明証を携えて彼等のところへ至りしなり。アッラーが彼等を害するに非ず、害するは彼等自身なり。
11. されば、悪事を働く者の末路は悲惨なり。なんととなれば、アッラーの徴を否認し、嘲弄したるが故に。

يَنْصُرِ اللَّهُ يَنْصُرُ مَنْ يَشَاءُ وَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ①

وَعَدَ اللَّهُ لَا يُخْلِفُ اللَّهُ وَعْدَهُ وَلَكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ②

يَعْلَمُونَ ظَاهِرًا مِّنَ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَهُمْ عَنِ الْآخِرَةِ هُمْ غَفْلُونَ ③

أَوَلَمْ يَتَفَكَّرُوا فِي أَنفُسِهِمْ مَّا خَلَقَ اللَّهُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا إِلَّا بِالْحَقِّ وَأَجَلٍ مُّسَمًّى وَإِنَّ كَثِيرًا مِّنَ النَّاسِ بِلِقَائِي رَبِّهِمْ لَكَاذِبُونَ ④

أَوَلَمْ يَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَيَنْظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ كَانُوا أَشَدَّ مِنْهُمْ قُوَّةً وَأَثَارُوا الْأَرْضَ وَعَمَرُوهَا أَكْثَرَ مِمَّا عَمَرُوهَا وَجَاءَتْهُمْ رُسُلُهُم بِالْبَيِّنَاتِ فَمَا كَانَ اللَّهُ لِيَظْلِمَهُمْ وَلَكِن كَانُوا أَنفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ ⑤

ثُمَّ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِينَ آسَأُوا الشُّوَايَ أَن كَذَّبُوا بِآيَاتِ اللَّهِ وَكَانُوا بِهَا يَسْتَهْزِءُونَ ⑥

たとされる当時、ヘラクレスの治世当初12年はローマ帝国が崩壊に向かうという預言以降、如何なる預言も成就されなかった(ギボン著、Rise, Decline & Fall of the Roman Empire, 25巻、P 74)。さらに詳しくは、英版の脚注参照。

注4 この約束は8:43に書かれている。

注5 不信心者の知識では、物事を表面的に理解する事しかできないが、ペルシャ人及びクライシュの敗北の因は、物的面ではなく、その精神面にあった。

注6 もし不信心者が、現世における人の寿命が限られたものである事に思い及んでいれば、彼等は、この世における生が人の全ではないと悟ったであろう。更に、死後により良い生があり、そこにおいて人の精神的発達に止まる事はないのであり現世は来世の前段階に過ぎない事に気付いたであろう。

第二項

12. アッラーは創造を起し、次いで、それを反復し給う。然る後、アッラーの許にお前たちは連れ戻されん。
13. 審判の時が到来する日、罪を犯せし者は絶望に襲われん。
14. 彼等は、アッラーと併せ祀りし神々のうち、一人として、彼等のために執成してくれる者となるべき者なきを知るべし。また彼等も、アッラーに併せ祀りし神々を否認すべし。
15. 審判の時が到来する日、その日こそ彼等は、相互に分離せらるべし。
16. その時、信じて善行を積みたる者は、礼遇され、楽園に於て幸せを得べし。(注7)
17. されど、信ぜずして、われらの神兆並びに来世の対面を否認せし者、これ等は懲罰に処せらるべし。
18. されば、朝な夕なアッラーを讃美せよ。
19. 天地の一切の賞賛はアッラーに属す。されば、午後に、また日が傾く頃、アッラーを讃美せよ。(注8)
20. アッラーは、死者から生者を生じ、生者から死者を生ず。また、彼は、枯死せる大地を甦らせ給う。かくの如く、お前たちも墓より曳き出さしめらるるなり。

اللَّهُ يَبْدَأُ الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ ثُمَّ إِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿١٢﴾

وَيَوْمَ يَقُومُ السَّاعَةُ يُبْلِسُ الْمُجْرِمُونَ ﴿١٣﴾

وَلَمْ يَكُنْ لَهُمْ مِنْ شُرَكَائِهِمْ شُفَعَاءُ وَكَانُوا بِشُرَكَائِهِمْ كَافِرِينَ ﴿١٤﴾

وَيَوْمَ يَقُومُ السَّاعَةُ يُبْمِذُّ يَتَفَرَّقُونَ ﴿١٥﴾

فَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ فَهُمْ فِي رَوْضَةٍ يُحْبَرُونَ ﴿١٦﴾

وَأَمَّا الَّذِينَ كَفَرُوا وَكَذَّبُوا بِآيَاتِنَا وَلِقَاءِ الْآخِرَةِ فَأُولَئِكَ فِي الْعَذَابِ مُحْضَرُونَ ﴿١٧﴾

فَسُبْحَنَ اللَّهِ حِينَ تَسْرُونَ وَحِينَ تَضِعُونَ لَهْ الْإِصْبَعِ فِي السَّمَوتِ وَالْأَرْضِ وَعَشِيًا وَحِينَ تُظْهِرُونَ ﴿١٨﴾

يُخْرِجُ الْحَيَّ مِنَ الْمَيِّتِ وَيُخْرِجُ الْمَيِّتَ مِنَ الْحَيِّ وَيُحْيِي الْأَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا وَكَذَلِكَ تُخْرَجُونَ ﴿١٩﴾

注7 アラブ人が、イスラム教を通して、如何にして退魔の深淵より精神的物的最高峰に登り至ったかは、史上に明記されてある。

注8 人が、人間創造の崇高な目的に思い及び、更にモハammad預言者に従ったアラブ人の様に、道德的退魔から立ち直り、精神的最高峰に至った人々に思い至る時、彼は自ら叫ぶ。「全てを有する天地創造の神に栄光あれ。」

第三項

21. 彼の神兆の一つはかくの如し、すなわち、彼はお前たちを土より創造したりき。されば、お前たち人間となりて、地上に拡散す。

(注 9)

وَمِنْ آيَاتِهِ أَنْ خَلَقَكُمْ مِنْ تُرَابٍ ثُمَّ إِذَا أَنْتُمْ بَشَرٌ تَنْتَشِرُونَ ﴿٢١﴾

22. また、彼の神兆の一つはかくの如し、すなわち彼がお前たちのために、お前たちの中から妻を創り、以てお前たちに安らぎを得せしめ、且つお前たち相互に愛慕の情を起せしめたることなり。げにこの中には、熟慮する人々へのさまざまなる神兆あり。

(注 10)

وَمِنْ آيَاتِهِ أَنْ خَلَقَ لَكُمْ مِنْ أَنْفُسِكُمْ أَزْوَاجًا لِتَسْكُنُوا إِلَيْهَا وَجَعَلَ بَيْنَكُمْ مَوَدَّةً وَرَحْمَةً إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يَتَفَكَّرُونَ ﴿٢٢﴾

23. その神兆の中には、天地の創造並びにお前たちの言語や肌色の多様性あり。げにこの中には、知識ある者へのさまざまなる神兆あり。(注 11)

وَمِنْ آيَاتِهِ خَلْقُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَالْخَلْقُ فِي السِّنِّكُمْ وَالْوِلْدَانِ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِلْعَالِينَ ﴿٢٣﴾

24. またその神兆の中には、お前たちが夜も昼も眠れること、主の恩恵を求められるということがある。げにこの中には、耳を傾ける人々へのさまざまなる神兆あり。

وَمِنْ آيَاتِهِ مَنَامُكُمْ وَأَيْتِلُ وَالنَّهَارُ وَانْتَبَاحُكُمْ مِنْ فَضْلِهِ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يُسْعَوْنَ ﴿٢٤﴾

25. また彼の神兆の一つはかくの如し、すなわち、彼は恐れと希望の源たる雷電をお前たちに示し、天から水を降して枯死せる大地

وَمِنْ آيَاتِهِ يُرِيكُمْ الْبَرْقَ حَوَافًا وَطَعْمًا وَيَنْزِلُ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَيُخْرِجُ بِهِ الْأَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا

注 9 この節には「彼は、お前たちを土(トゥラフ)より創造したりき。」とあるが他所には人は粘土(ティン)から作られたとある(6:3, 17:62, 23:13, 32:8, 37:12, 38:72)。土つまり乾燥した土から作られた人間は、粘土から作られた人間に先立つ訳で、言い換えれば、これは人間の糧となる食物が土から作られた事を示すものである。当節には、神の存在を示す三つの論拠が挙げられている。(1)神は、生命と何ら係りのない、生命を生み出す特性を持たない所の土より人間をお作りになった。(2)神は人間に鋭い感情を授けられ、向上心をその特質に加えられ、目標達成の能力をお与えになった。(3)神は人間に勢力拡大と世界支配の欲望を植え付けられ、この欲望達成に必要な力をお与えになった。

注 10 男女の愛は出産に繋がり、地上において人類は生き続ける事となる。これは、背後にある計画があり、計画者が存在し、又、来世により良き生のある事を示している。

注 11 人間の進歩は、言語や人類の多様性と密接な係りを持つ。この多様化も、ある計画とその計画者の存在を示している。この計画者とは天地創造の神であられる。言語・人種の多様性により生じた様々な文明の中にありながらも、人類としてのまとまりがある。この人類の統一性は、必然的にその創造主が御一人であられる事を示す。

を甦らしむることなり。げにこの中には、
恩恵ある人々へのさまざまなる神兆あり。

(注 12)

إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِّقَوْمٍ يَعْقِلُونَ ﴿٢٥﴾

26. 更にその神兆の一つはかくの如し、すなわち、天地は主の命によって屹立することなり。(注 13) 然る後、主一声お前たちに呼びかけるや、見よ、お前たちは、大地から出現せん。

وَمِنْ آيَاتِهِ أَنْ تَقُومَ السَّمَاءُ وَالْأَرْضُ بِأَمْرِهِ ثُمَّ إِذَا دَعَاكُمْ دَعْوَةً مِّنَ الْأَرْضِ إِذَا أَنْتُمْ تَخْرُجُونَ ﴿٢٦﴾

27. 天地に於ける一切は、彼に属す。皆 悉く彼に従う。(注 14)

وَلَهُ مَن فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ كُلٌّ لَهُ فِتْنَةٌ ﴿٢٧﴾

28. 衆生を最初に生起し、次いで之を反復する者、そは彼なり。彼にとりて、そはいと易し。天地に於ける至高の地位は、彼のものなり。彼は偉大にして、賢哲にまします。

وَهُوَ الَّذِي يَبْدَأُ الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ وَهُوَ أَهْوَنُ عَلَيْهِ وَلَهُ النُّجُومُ الْأَعْلَىٰ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ

第四項

وَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿٢٨﴾

29. 彼は、お前たち自身に関する一つの比喩を示し給う。お前たちは、お前たちの右手が所有する者の中で、その誰かを、われらが お前たちに与えしものを同等に分配し、お前たちお互い同士が気遣う如くその者に気兼ねせねばならぬ仲間として付き合うか？ かくの如く、われらは思慮ある人々にさまざまなる神兆を説き明かす。(注 15)

ضَرَبَ لَكُمْ مَثَلًا مِّنْ أَنْفُسِكُمْ هَلْ لَّكُمْ مِّنْ مَّا مَلَكَتْ أَيْمَانُكُمْ مِنْ شُرَكَاءَ فِي مَارَزَقْنَاكُمْ فَأَنْتُمْ فِيهِ سَوَاءٌ تَخَافُونَهُمْ كَخِيفَتِكُمْ أَنْفُسَكُمْ كَذَلِكَ نَفْصِلُ الْآيَاتِ لِقَوْمٍ يَعْقِلُونَ ﴿٢٩﴾

注 12 光は、肥沃をもたす雨を予告するだけでなく、様々な病原菌を殺し、穀物を荒らす害虫を駆除する。この様に、光は畏怖の念を引き起こすと共に、人間に様々な恩恵を与えてくれるものである。自然のあらゆる要素が、神の御計画の中に定められた役割を果たすのである。以上の事柄は、神の存在、神の偉大なる知恵として力の証となっている。

注 13 太陽系ができて以来長い時間が経ったが、微塵も狂いは生じていない。惑星が何の支えもなく軌道を維持できるのは、それが神の業によるものだからである。

注 14 大宇宙がいつ誕生したかの推測は、人間の理解力の及ばない所のものである。知られざる過去の時から、太陽は惑星や天体と共に、一定の軌道を逃れる事なく規則正しく動いてきた。何百万という衛星がありながら、それ等が衝突する事もない。完全なる法と秩序が宇宙全体を支配しているのである。この事は次の言葉で表されている。「皆悉く彼に従う。」

注 15 主と奴隷は共に人間でありながら平等でなく、主は富を奴隷に分け与えようとしなのに、全ての物の唯一創造主であり支配者である神が、宇宙の支配を他の者に分け与える事などどうして出来ようか？ 神は、唯一、すべての支配を司っているのである。

30. 否、然らず。不義の徒輩は、知識なくして己れの低級な欲望に従うのみ。アッラーが迷わしめた者を、誰が導き得るや？彼等には如何なる救助者もなかるべし。
31. されば、汝の顔をひたすら宗教に向けよ。アッラーによって創られた本性、すなわち人間を創り給うた本然の姿に従え。アッラーの創造に変更なし。それは正しき宗教なり。されど、世人の多くは之を知らず。
(注16)
32. お前たちの顔を神に向け、悔悟し、神を畏れ、礼拝を遵守せよ。(注17) 而して、他神を神と併せ祀る徒輩の一人となるなかれ。
33. その宗教を分裂させて、各宗派を成した徒輩は、己れの宗派にのみ喜び満足す。
(注18)
34. 人は不幸に見舞われると、悔悟して主の方に向き直り、嘆願す。されど、一度慈悲に浴せしめると、見よ、彼等の或る者は主に他神を配し、
35. われらが彼等に授けしものを否定し始める。ならば暫く楽しめ、いまに思い知るべし。
36. われらは彼等に、神と併せ祀ることに賛成する何等かの権威を降したとでも云うのか？ (注19)
- بَلِ اتَّبَعَ الَّذِينَ ظَلَمُوا أَهْوَاءَهُمْ بِغَيْرِ عِلْمٍ فَمَنْ يَهْدِي مَنْ أَضَلَّ اللَّهُ وَمَا لَهُمْ مِنْ تُصْرِيحٍ ③٠
- فَأَقِمْ وَجْهَكَ لِلدِّينِ حَنِيفًا فِطْرَتَ اللَّهِ الَّتِي فَطَرَ النَّاسَ عَلَيْهَا لَا تَبْدِيلَ لِخَلْقِ اللَّهِ ذَلِكَ الدِّينُ الْقِيمُ ③١ وَلَكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ③٢
- مُتَّبِعِينَ إِلَيْهِ وَاتَّقُوهُ وَأَقِيمُوا الصَّلَاةَ وَلَا تَكُونُوا مِنَ الْمُشْرِكِينَ ③٣
- مِنَ الَّذِينَ فَرَّقُوا دِينَهُمْ وَكَانُوا شِيعًا كُلُّ حِزْبٍ بِمَا لَدَيْهِمْ فَرِحُونَ ③٤
- وَإِذَا مَسَّ النَّاسُ ضُرٌّ دَعَا رَبَّهُمْ مُنِيبِينَ إِلَيْهِ ثُمَّ إِذَا أَذَاهُمْ مِنْهُ رَحْمَةً إِذَا فَرِيقٌ مِنْهُمْ يَرْتَدَّ لِلْإِسْكِتُونِ ③٥
- لِيَكْفُرُوا بِمَا آتَيْنَاهُمْ فَتَمَتَّعُوا فَسَوْفَ تَعْلَمُونَ ③٦
- أَمْ أَمْرُنَا عَلَيْهِمْ سُلْطَانًا فَهُوَ يَتَكَلَّمُ بِمَا كَانُوا بِهِ يُشْرِكُونَ ③٧

注16 神は一つ、人類も又一つである。これがアッラーによって創られた天性つまり、人間の本質に根差す宗教であり、人間は本能的にこれに従う。人間は生まれた時この信仰の中にあるが、育つ環境や、親の考え、信仰、親から受けた教育等が、彼をユダヤ教徒や、魔術師、キリスト教徒に変えてしまうのである(ブハリ)。

注17 唯一全能なる神を信じる事は真の宗教の基本的原理ではあるが、それだけでは不十分である。真の宗教は一定の戒律を備えなければならない。その中でも最も重要な戒律は礼拝することである。

注18 過去において、真の宗教から逸脱した者達は分裂して対立し、争いを起こした。

注19 前数節では、全宗教の基本原理解である唯一神について述べて来たが、当節及び次の三節ではシルク、つまり、偽神をアッラーに結びつける事について書かれてある。多神教徒は、その偽りの宗教を支える物全てに論拠を持たない。人間の本性、理性、良識は全て、偶像崇拜を嫌悪する。

37. われら人々を慈悲に浴せしむれば、彼等は之を喜び。然るに、彼等の手が先に送れるもののために、災難が降りかかると、見よ、彼等はたちまち絶望す。

وَإِذَا أَذَقْنَا النَّاسَ رَحْمَةً فَرِحُوا بِهَا وَإِنْ تُصِيبُهُمْ سَيِّئَةٌ مِمَّا قَدَّمَتْ أَيْدِيهِمْ إِذَا هُمْ يَقْنَطُونَ ﴿٣٧﴾

38. アッラーは誰であれ、その欲するものに給養を増し、或いは減ずることを、彼等は見るか？ げにこの中には、信ずる人々へのさまざまなる神兆あり。

أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّ اللَّهَ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَشَاءُ وَيَقْدِرُ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِّقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ﴿٣٨﴾

39. されば、親類縁者に相当なものを与えよ、また貧しい者や旅人にも。そはアッラーの恩寵を求める者のためには、最もよし。かかる者は、必ず栄えるべし。

فَأْتِ ذَا الْقُرْبَىٰ حَقَّهُ وَالْيَسِيرَ وَالْبَيْنُوتَ ذَٰلِكَ خَيْرٌ لِّلَّذِينَ يُرِيدُونَ وَجْهَ اللَّهِ وَأُولَٰئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ﴿٣٩﴾

40. 他人の財産で得とろうとて、利息を以て貸付けしても、アッラーの見解からすれば、そは殖えるに非ず。然るに、アッラーの恩寵を求めて喜捨した者、これ等の者こそその富は倍加されん。

وَمَا آتَيْتُم مِّن رَّبًّا لِّيَرْبُوَ فِي أَمْوَالِ النَّاسِ فَلَا يَرْبُو عِنْدَ اللَّهِ وَمَا آتَيْتُم مِّن زَكَاةٍ تُرِيدُونَ وَجْهَ اللَّهِ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الْمُضْضِعُونَ ﴿٤٠﴾

41. お前たちを創造し、之を養い、次いで之を死なしめ、而して之を甦らしむるはアッラーなり。お前たちの神々のうち、誰がこれ等の一つでも能くする者あるか？ 讃えよ、彼と併せ祀る神々とは比較にならぬ高みにいまし給う彼を。(注20)

اللَّهُ الَّذِي خَلَقَكُمْ ثُمَّ رَزَقَكُمْ ثُمَّ يُمِيتُكُمْ ثُمَّ يُحْيِيكُمْ هَلْ مِنْ شُرَكَائِكُمْ مَن يَفْعَلُ مِثْلَ ذَٰلِكُمْ مِّن شَيْءٍ سُبْحَانَهُ وَتَعَالَىٰ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿٤١﴾

第5項

42. 人間の手が行いしことのために、陸にも海にも腐敗生じたり。こは彼等をしてその所業の報いを幾分か味わしめんため、さすれば彼等も悪より立ち直るかもしれぬ。

ظَهَرَ الْفَسَادُ فِي الْبَرِّ وَالْبَحْرِ بِمَا كَسَبَتْ أَيْدِي النَّاسِ لِيُذِيقَهُمْ بَعْضَ الَّذِي عَمِلُوا لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ﴿٤٢﴾

(注21)

注20 神は我々の創造主にして、維持者・供給者でもあられる。神は生死を完全に支配され、前述の三つの重要な特性を備えられている。それは、我々の崇拜を求められる最高の御方に有するものである。

注21 前節の主題は、全生命を創造し、管理し、導かれる全能の神への信仰心を人間に教え込む事にあった。当節では、「闇が地表を覆い、人が神を忘れ、自ら作り出した神を崇める時、神は、罪深い群れより神の元へ引き戻す為、預言者をお遣いになる。」と述べられている。詳しくは、英版脚注を参照の事。

43. 云え、「地上を遍く旅して、お前たち以前の者どもの末路が如何に惨なりしかを見よ！ 彼等の多くは多神教徒なりき」と。
44. されば、避け難きその日がアッラーより来る前に、汝の顔を正しい教えに向けよ。その日、人間は二群に分けられるべし。
45. 不信心者どもはその不信の責任を負うべし。また、正しい行為をする者は、自らの後生安樂を準備す。
46. こは主が恩寵を以て、信じて正義を行いたる者を賞せんがためなり。げに彼は、不信心者どもを愛で給わぬ。
47. 主の神兆の一つは、朗報の伝達者として風を送り、お前たちにその慈悲を味わせ、その命令によって船を帆走らさせ、お前たちをして主の恩寵を求めしめ、以って感謝の氣持を抱かせしめんがためなり。(注 22)
48. げにわれらは、汝以前にも幾多の使徒をその民に、明証を携えて、遣わしたり。然る後、われらは罪を犯せし者を罰したり。なれど、信ずる者を助けるは、われらの務めなり。
49. 雲をわき起らせるために風を送りたるはアッラーなり。次いで彼は、雲を思うがままに大空にうち上げ、之を幾層にも積み重ね給う。されば汝は見ん、その只中より降り下る雨を。彼、その僕等の中の欲する者の上に之を降り注がしむと、見よ、彼等は欣喜雀躍す、

قُلْ سِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَانظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ
الَّذِينَ مِنْ قَبْلُ كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُشْرِكِينَ ﴿٤٣﴾
فَاقْمُوا وَجْهَكُمْ لِلدِّينِ الْقَيِّمِ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَأْتِيَ
يَوْمٌ لَا مَرَدَّ لَهُ مِنَ اللَّهِ يَوْمَئِذٍ يُصَدِّقُونَ ﴿٤٤﴾
مَنْ كَفَرَ فَعَلَيْهِ كُفْرُهُ وَمَنْ عَمِلَ صَالِحًا فَلَا نُغْنِي
عَنْهُ شَيْئًا ﴿٤٥﴾
لِيَجْزِيَ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ مِنْ فَضْلِهِ
إِنَّهُ لَا يُوَبِّخُ الْكَافِرِينَ ﴿٤٦﴾
وَمِنْ آيَاتِهِ أَنْ يُرْسِلَ الرِّيحَ مُبَشِّرَاتٍ وَلِيُذِيقَكُمْ
مِنْ رَحْمَتِهِ وَلِتَجْرِيَ الْفُلُكُ بِأَمْرِهِ وَلِتَبْتَغُوا مِنْ
فَضْلِهِ وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿٤٧﴾
وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ رُسُلًا إِلَى قَوْمِهِمْ فَجَاءَهُمْ
بِالْبَيِّنَاتِ فَانْتَقَمْنَا مِنَ الَّذِينَ أَجْرَمُوا وَكَانَ حَقًّا
عَلَيْنَا نَصْرُ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٤٨﴾
اللَّهُ الَّذِي يُرْسِلُ الرِّيحَ فَتُثِيرُ سَحَابًا فَيَبْسُطُهُ
فِي السَّمَاءِ كَيْفَ يَشَاءُ وَيَجْعَلُهُ كِسْفًا فَيَكْرِي الْوُدُقَ
يَخْرِجُ مِنْ خِلَالِهِ قَاذًا أَصَابَ بِهِ مَنْ يَشَاءُ مِنْ
عِبَادِهِ إِذَا هُمْ يَسْتَبِشِرُونَ ﴿٤٩﴾

注 22 この言葉は、神の律法が、精神界のみならず物質界においても行われる事を示している。雨が降る前にそれを知らせる風が吹く様に、神の預言者が出現するに先立ち、彼の教えが広まるに適した状況が作られ、その善良なる人々が現れ、地を固め、彼の為に真直ぐな道をつけるのである。

50. それ以前、雨が彼等に降り注ぐ前までは絶望にうちひしがれていたことも忘れて。

وَأَن كَانُوا مِن قَبْلُ أَن يَنزَلَ عَلَيْهِم مِّن قَبْلِهِ
لُسُلُوسِينَ ﴿٥٠﴾

51. されば見よ、アッラーの慈悲の跡を、如何にして枯死せる大地を生き返らしむるかを。死者を甦らしむるは彼なり、なんとなれば、げに彼は全能にまします故に。

(注 23)

فَانْظُرْ إِلَىٰ أَثَرِ رَحْمَتِ اللَّهِ كَيْفَ يُحْيِي الْأَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا إِنَّ ذَٰلِكَ لَمَعِزُ الْمَوْتَىٰ وَهُوَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٥١﴾

52. 然しながら、われら風を送りて収穫物が黄ばみでもせば、以後彼等は必ず、われらの恩恵を認めざる者とならん。

وَلَئِن أَرْسَلْنَا رِيحًا فَرَأَوْهُ مُصْفَرًّا لَّظَلُّوا مِن بَعْدِهِ
يَكْفُرُونَ ﴿٥٢﴾

53. 汝は死者に聴かしむる能わず、また背を見せて逃げ去る輩に汝の呼び声を聴かしむる能わず。

فَأَنَّكَ لَا تَسْمِعُ الْمَوْتَىٰ وَلَا تَسْمِعُ الضُّمُّرَ الدَّاعِيَ إِذَا
وَلَّوْا مُدْبِرِينَ ﴿٥٣﴾

54. また、盲を迷誤より導き出すこと能わず。汝はただわれらの神兆を信じて帰依する者に聴かしめ得るのみ。(注 24)

第六項

وَمَا أَنْتَ بِهَادٍ الْعُيَيْنِ عَنْ ضَلَالَتِهِمْ إِن تَسْمِعُ إِلَّا
مَنْ يُؤْمِنُ بِآيَاتِنَا فَهُمْ مُّقْسِمُونَ ﴿٥٤﴾

55. アッラーは初めにお前たちを弱く創り、然る後之を強健にし、強健の後に衰えと老いを生ぜしむ。彼はその欲する者を創造し給う。彼は全知全能におわします。

اللَّهُ الَّذِي خَلَقَكُمْ مِن ضَعْفٍ ثُمَّ جَعَلَ مِن بَعْدِ
ضَعْفٍ قُوَّةً ثُمَّ جَعَلَ مِن بَعْدِ قُوَّةٍ ضَعْفًا وَشَيْبَةً
يَخْلُقُ مَا يَشَاءُ وَهُوَ الْعَلِيمُ الْقَدِيرُ ﴿٥٥﴾

56. 復活の時が到来する日、(注 25) 罪を犯せし者は、墓中に在りたるは一刻にすぎず、と断言せん。かくの如く、彼等は正道から背き去れり。

وَيَوْمَ تَقُومُ السَّاعَةُ يُقْسِمُ الْمُجْرِمُونَ مَا لَبِثُوا
غَيْرَ سَاعَةٍ كَذَٰلِكَ كَانُوا يُؤْفَكُونَ ﴿٥٦﴾

注 23 厳しい日照りの後に恵みの雨が降り、干からびた地面に新しい生命が宿る。前二節には上記の自然現象が書かれてあったが、当節では、道徳的に退廃した者達の魂の復活にも同じ様な処法がとられると述べられてある。死人同然の者は、神の預言者を通じ、新たな生命を与えられるのである。

注 24 運命の良し悪しは、己自身に依る。人が真実に耳を傾けない限り、預言も神の啓示もその者を神に導きはしない。自らが一步前へ踏み出せば、神も又近付いて来られる。

注 25 イスラムの勝利の時。

57. 然しながら、知識と信仰とを賜われる人たちは云わん、「お前たちはアッラーの經典に従って、復活の日まで留まれり。而して、今日が復活の日なり。(注26)されど、お前たちはそれを知ろうとも思わざりき」と。

وَقَالَ الَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ وَالْإِيمَانَ لَقَدْ لَبِثْتُمْ فِي كِتَابِ اللَّهِ إِلَى يَوْمِ الْبَعْثِ فَهَذَا يَوْمُ الْبَعْثِ وَكَيْتَكُمْ كُنْتُمْ لَا تَعْلَمُونَ ﴿٥٧﴾

58. されば、その日、悪人どもの云い訳はその身を益するところなからん。また、改心せんとすれども許されざるべし。(注27)

فَيَوْمَئِذٍ لَا يَنْفَعُ الَّذِينَ ظَلَمُوا مَعَذَرَتُهُمْ وَلَا هُمْ يُسْتَعْتَبُونَ ﴿٥٨﴾

59. げにわれらは、クルアーンの中で、人々のためにさまざまな比喩を明示せり。なれど、たとい汝が神兆を携え行くと、信ぜざる者どもは必ず云わん、「お前たちは嘘つきにすぎず」と。

وَلَقَدْ صَرَبْنَا لِلنَّاسِ فِي هَذَا الْقُرْآنِ مِنْ كُلِّ مَثَلٍ وَلَنْ جَسَّتْ لَهُمْ بِآيَةٍ يُقْبَلُونَ الَّذِينَ كَفَرُوا إِنْ أَنْتُمْ إِلَّا مُبْطِلُونَ ﴿٥٩﴾

60. アッラーは知識なき者どもの心をかくの如く封じ給う。(注28)

كَذَلِكَ يَطْبَعُ اللَّهُ عَلَى قُلُوبِ الَّذِينَ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٦٠﴾

61. されば、汝、耐え忍べ。アッラーの約束は必ず実現す。堅き信仰を持たぬ者どもをして汝を軽んじせしめるなかれ。

فَاصْبِرْ إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ وَلَا يَسْتَخِفُّكَ الَّذِينَ لَا يُوقِنُونَ ﴿٦١﴾

注26 「復活の日」とは、処々では死後の復活を指すのではなく、人々が魂の復活により立ち上がった時、新たな神の指導者が現れる事を示す。

注27 本文になるアラビア語は次の様な意味を持つ。(1)彼等は神の入口に近づく事を認められないであろう。(2)彼等は犯した罪の償いを許されないであろう。(3)彼等が弁論の中でどの様な言い逃れをしようとも、それは容れられないであろう。(4)彼等が神の引き立てを得る事はないであろう。

注28 神の指導者を通してもたらされる神の知識を拒否する者は、その心を堅く閉ざされる。不信心者の心が閉ざされるのは、彼等が神の知識を受け入れることを拒んだ当然の成り行きである。

سُورَةُ لُقْمَانَ مَكِّيَّةٌ

ルクマーン
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 إِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①
2. アリフ・ラーム・ミーム。(注1) الْم ②
3. こは知恵に満ちたる經典の諸節にして、 تِلْكَ آيَاتُ الْكِتَابِ الْحَكِيمِ ③
4. 善行にいそしむ人々への嚮導と慈悲なり、 هُدًى وَرَحْمَةً لِّلْمُحْسِنِينَ ④
5. 礼拝を遵守し、定め^{きまり}の喜捨を納め、米世を堅く信じ奉る者への。 الَّذِينَ يَقِيمُونَ الصَّلَاةَ وَيُؤْتُونَ الزَّكَاةَ وَهُمْ بِالْآخِرَةِ هُمْ يُوقِنُونَ ⑤
6. そは主の導きに従う者、幸いあるべし。 أُولَٰئِكَ عَلَىٰ هُدًى مِّن رَّبِّهِمْ وَأُولَٰئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ⑥
7. 然れども、世の中にはお導きと引き替えにくだらぬ物語を信じ、知識もないくせに、人々をアッラーの道から邪道に導き、之をからかう者あり。(注2)かかる者には恥ずべき懲罰下るべし。 وَمِنَ النَّاسِ مَن يَشْتَرِي لَهْوَ الْحَدِيثِ لِيُضِلَّ عَن سَبِيلِ اللَّهِ بِغَيْرِ عِلْمٍ وَيَتَّخِذَهَا هُزُوًا ⑦
أُولَٰئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ مُّهِينٌ ⑧
8. かかる者にわれらの神兆を誦み聞かすと、彼はさながら聴かざる如く、また両耳が活動らかざる如く、傲然たる態度でよそを向く。されば彼に痛罰を告知せよ。 وَإِذَا نُنَادِيهِمْ أَنِيْنَا وَلِي مُّسْتَكْبِرًا ⑨
كَانَ فِي أَذُنِهِ وَقْرًا ⑩ فَجَشَعَهُ بِعَذَابٍ أَلِيمٍ ⑪
9. げに信じて善行を積む人々——彼等は歓喜の御園に入り、 إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَهُمْ جَنَّاتُ النَّعِيمِ ⑫

注1 われはアッラー、全知者なり(2章2節参照)。

注2 生命は非常に大切なものである。人間は高尚にして崇高なる目的を果たす為に作られた。しかし心の浮付いてしまった者は、愚かな気晴らしに貴重な時と労力を費やしてしまうのである。(23:116)。

10. その中に末長く住み留まらん。アッラーの約束は確実なり。彼は偉大にして、賢哲にまします。

11. 彼は目に見得る柱なくして諸天を創り、また地上に牢固たる山々を配してそれがお前たちと共に揺れ動かざらしめ、その上にさまざまなる生物を播き散らし給えり。またわれらは雲より水を降り下し、各種のすばらしい種類を生ぜしめ給えり。

12. こはアッラーの創造なり。さて、アッラー以外の者で、創造したるものあらば、今われに見せよ。否、不義なす輩は明らかに迷誤の中にあり。

第二項

13. われらはルクマーンに知恵を授けて「アッラーに感謝せよ」と云えり。誰であれ感謝する者は、ひたすら己れ自身のために感謝するなり。然るに、思知らずは、ままよ、アッラーは満ち足り給う御方、讃美されるべき御方なり。

14. またルクマーンが(注3)その息子に訓戒して、かく云いし時を念え。「我が愛する息子よ、アッラーと他神らを併せ祀るなかれ。神と他神を併せ祀るは、重大なる不正なり」(注4)

15. われらは人間に、その父母に対して孝養をつくすべく命じたり(注5)——特に母は、弱りやつれて子供を産み、更に離乳させるまで二年を要する(注6)——「われ並びに

خَلْدَيْنَ فِيهَا وَعَدَ اللَّهُ حَقًّا وَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ①

خَلَقَ السَّمَوَاتِ بِغَيْرِ عَمَدٍ تَرْوْنَهَا وَاللَّهُ فِي الْأَرْضِ رَوَاسِي أَنْ تَمِيدَ بِكُمْ وَبَثَّ فِيهَا مِنْ كُلِّ دَابَّةٍ وَأَنْزَلْنَا مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَأَنْبَتْنَا فِيهَا مِنْ كُلِّ زَوْجٍ كَرِيمٍ ②

هَذَا خَلَقَ اللَّهُ فَأَرُونِي مَاذَا خَلَقَ الَّذِينَ مِنْ دُونِهِ
كُلِ الظَّالِمُونَ فِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ③

وَلَقَدْ آتَيْنَا لُقْمَانَ الْحِكْمَةَ أَنْ اشْكُرْ لِلَّهِ وَمَنْ
يَشْكُرْ فَإِنَّمَا يَشْكُرُ لِنَفْسِهِ وَمَنْ كَفَرَ فَإِنَّ اللَّهَ غَنِيٌّ
حَمِيدٌ ④

وَإِذْ قَالَ لُقْمَانُ لِابْنِهِ وَهُوَ يَعِظُهُ يَبْنَىٰ لَا تَشْرِكْ
بِإِلَهِهِ إِنَّ الشِّرْكَ لَظُلْمٌ عَظِيمٌ ⑤

وَوَضَيْنَا لِلنَّاسِ الْإِسْكَانَ بِالْإِدْنِ حَكَمَتُهُ أُمَةٌ وَهَنًا
عَلَىٰ وَهْنٍ وَفِصْلُهُ فِي عَامَيْنِ أَنْ اشْكُرْنِي وَلِوالِدَيْكَ

注3 ルクマーンはアラブ人ではない人、おそらくはエジプト人を指すのだろう。彼はエジプトかヌビアに従う様命じられている。又、彼がギリシア人のイソップだという説もある。当節及び次の二節にある様に、ルクマーンが息子に語る立派な道德的教訓から判断すれば、彼が神の預言者である事が分かる。

注4 全ての宗教の基本的な教義は、唯一神にある。全ての高尚なる原理は、この教義に基付く。神以外のものを崇めたり、神を離れる事で、人は自らを卑め、その人格を損なうのである。

注5 この節及び次節は挿入節で、神への義務に次ぎ重要な人間の務めを説いている。それは、両親及び同僚に対する義務である。

注6 この文と46:16の間の明らかな矛盾は、子供達の中には他より早く生まれた為、体質が弱く、離乳に時間がかかるものもあるという点から生じている。

汝の父母に感謝せよ。わが許へ終の帰趨あり。

إِلَى الْمَصِيرِ ⑩

16. されど、もし父母が汝の知らざる者をわれと併せ祀るべく強いなば、彼等に従うなかれ。されど、俗事に於ては、優しくいたわりの気持で交われ。(注7)而して、宗教上の事柄は、われに頼る者の道に従え。いずれお前たちの帰趨はわが許となる。その時われはお前たちが常々行いたることを語り聞かせん。

وَإِنْ جَاهَدَكَ عَلَى أَنْ تُشْرِكَ بِي مَا لَيْسَ لَكَ بِهِ عِلْمٌ فَلَا تُطِعْهُمَا وَصَاحِبُهُمَا فِي الدُّنْيَا مَعْرُوفًا
وَالَّتِيغ سَيِّئٌ مَنْ آتَاكَ إِلًا ثُمَّ إِلَىٰ مَرْجِعِكُمْ
فَأَنْتَبِهُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ⑪

17. 我が愛する息子よ、たといそれが芥子の種子の一粒の重さなりとも、或いは巖の中に在ろうとも、または天に在ろうとも地に在ろうとも、アッラーは必ずそれを持ち出し給う。(注8)げにアッラーは妙知者、知悉者なり。

يُبْنَىٰ إِنَّهَا إِنْ تَكُ مِثْقَالَ حَبَّةٍ مِنْ تَرْدٍ فَتَكُنْ فِي
صَخْرَةٍ أَوْ فِي السَّمَوَاتِ أَوْ فِي الْأَرْضِ يَأْتِ بِهَا اللَّهُ
إِنَّ اللَّهَ لَطِيفٌ خَبِيرٌ ⑫

18. 我が愛する息子よ、礼拝を遵守し、他人に善を勧め、悪を禁じ、身に降りかかるものは根気よく耐え忍べ。こは崇高なる決意が要求される事柄なり。

يُبْنَىٰ أَقِمِ الصَّلَاةَ وَأْمُرْ بِالْمَعْرُوفِ وَانْهَ عَنِ الْمُنْكَرِ
وَاصْبِرْ عَلَىٰ مَا أَصَابَكَ إِنَّ ذَلِكَ مِنْ عَمَلِ الْأَوْرَ ⑬

19. 而して、汝、他人に対して生意気な態度を取るなかれ、また地上を我が物顔に歩くなかれ。げにアッラーは横柄なうぬばれやを愛で給わぬ。

وَلَا تَصْعَجْ خَدَّكَ لِلنَّاسِ وَلَا تَنشِ فِي الْأَرْضِ فَحًا
إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ كُلَّ مُخْتَالٍ فَخُورٍ ⑭

20. 穏やかな歩調で歩め、汝の音声^{あしどろ}を低く抑えよ。最も不愉快な声は驢馬の嘶きなり」

وَاقْصِدْ فِي مَشْيِكَ وَاعْغِضْ مِنْ صَوْتِكَ إِنْ
أَنْكَرَ الْأَصْوَاتِ لَصُوتُ الْحَبِيرِ ⑮

第三項

21. お前たち、アッラーが天にあるもの地にあるものすべてをお前たちに利用せしめ、また見えるもの見えざるもの^{あき}つながらその恩寵をお前たちに浴せしめたことを、知

أَلَمْ تَرَوْا أَنَّ اللَّهَ سَخَّرَ لَكُمْ مَّا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي
الْأَرْضِ وَأَسْبَغَ عَلَيْكُمْ نِعَمَهُ ظَاهِرَةً وَبَاطِنَةً ⑯

注7 もし両親に対する義務が神への義務と対立する場合は、自らの創造主であられる神への忠誠を優先させなければならない。しかし、神への忠誠に相反する命令や要求を両親がした時、それを無視して両親に横柄に振舞ってはならず、彼等に、変わらぬ礼儀と愛・優しさを示し続けるべきである。

注8 良きにつけ悪しきにつけ、行動は無駄ではない。それは永遠の痕跡を残す。この偉大な真実については50:19でも述べられている。

らざりしか? (注9) 然るに、人々の中には、知識も導きもなく、光明を投ずる經典も有せず、アッラーについて論駁する者あり。(注10)

22. かかる徒輩に「アッラーが啓示せしものに従え」と云えば、彼等は云う、「否、我等は我等の先祖が奉じたる教えに従わん」と。
(注11) なんと! 悪魔が彼等を火炙りの刑に誘ふともか?

23. アッラーにすべてを任せておすがりする者、而して善をなす者は、堅牢なる把っ手をひしと握れる者なり。萬事おちつくところはアッラーに帰着す。(注12)

24. 信ぜざる者の不信について汝悩むなかれ。彼等はわれらが許へ帰る。その時、われらは彼等の所業を語り聞かせん。げにアッラーは胸に秘めたるものを熟知し給う。

25. われらは彼等をしばし楽しません。然る後、嚴刑酷罰へと駆り立てん。

26. もし汝、彼等に「誰が天地を創造したるか?」と問わば、彼等は必ず「アッラーなり」と答えん。(注13) 云え、「すべての讚美はアッラーの帰属なり」と。然れども、彼等の大半は知らざるなり。

مِنَ النَّاسِ مَنْ يُجَادِلُ فِي اللَّهِ بِغَيْرِ عِلْمٍ وَلَا هُدًى
وَلَا كِتَابٍ مُبِينٍ ٢١

وَإِذَا قِيلَ لَهُمُ اسْبِعُوا مَا أَنْزَلَ اللَّهُ قَالُوا بَلْ نَنْتَعِلُ
مَا وَجَدْنَا عَلَيْهِ آبَاءَنَا أَوْ لَوْ كَانَ الشَّيْطَانُ
يَدْعُوهُمْ إِلَىٰ عَذَابِ السَّعِيرِ ٢٢

وَمَنْ يُسْلِمْ وَجْهَهُ إِلَى اللَّهِ وَهُوَ مُحْسِنٌ فَقَدِ
اسْتَمْسَكَ بِالْعُرْوَةِ الْوُثْقَىٰ وَإِلَى اللَّهِ عَاقِبَةُ
الْأُمُورِ ٢٣

وَمَنْ كَفَرَ فَلَا يَحْزَنُكَ كُفْرُهُ إِنَّا نَأْتِيهِمْ فَنُنَبِّئُهُمُ
بِمَا عَمِلُوا إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ٢٤

نَسْتَعْتُهُمْ قَلِيلًا ثُمَّ نَضْطَرُّهُمْ إِلَىٰ عَذَابِ غِلَظٍ ٢٥

وَلَيْن سَأَلْتَهُمْ مَنْ خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ لَيَقُولُنَّ
اللَّهُ قُلِ الْحَمْدُ لِلَّهِ بَلْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ٢٦

注9 この言葉は、肉体的、精神的、物質的、知的、即知、未知如何にかかわらず、人間の必要とする物全てを指している。

注10 人間の理性、吟味、神の啓示この三つが合わされば、多神教の愚かさが証明される。

注11 古い考えや信仰を捨てよと言われても、人間は容易にはそれに応じない。神の預言者達が不信心者から受けた不断の妨害とは、後者が先祖代々の慣習や信仰をどうしても手放そうとしなかった事である。これが、「知識も導きもなく、光明を投ずる經典も有せず」の意味する所である。

注12 結果を生み出すすべての行動は神のみがひきおこす。

注13 宇宙の創造及び宇宙の構造と理法を知的に研究してみれば、この宇宙には創造主がおられるという推論に必然的に達する。ラーヤクターランナという言葉は、不信心者が、望まざとも、宇宙の創造主が神であると認めざるを得ない事を示している。

27. 天地における一切は挙げてアッラーに帰属す。げにアッラーは自主自足にして、讃美すべき御方にまします。

يَلَهُ مَا فِي السَّمُوتِ وَالْأَرْضِ إِنَّ اللَّهَ هُوَ الْعَزِيزُ
الْحَمِيدُ ﴿٢٧﴾

28. たとい地上の樹をすべて筆となし、海が墨汁で、そこへ更に七つの海を増し加えたとして、(注14) アッラーのお言葉を書き尽し難し。げにアッラーは偉大にして、賢哲にまします。

وَلَوْ أَنَّ مَا فِي الْأَرْضِ مِنْ شَجَرَةٍ أَقْلَامٌ وَالْبَحْرُ
يَمْدُهُ مِنْ بَعْدِ سَبْعَةِ أَبْحُرٍ مَا نَفِدَتْ كَلِمَاتُ
اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٢٨﴾

29. お前たちの創造と復活は、一個の魂の創造と復活に相似たり。(注15) げにアッラーはすべてを聴き、すべてをみそなわし給う。

مَا خَلَقَكُمْ وَلَا يَعْزُبُ عَنْكُمْ الْإِفْكُ وَإِنَّ اللَّهَ
سَمِيعٌ بَصِيرٌ ﴿٢٩﴾

30. 汝は知らずや、アッラーは夜を昼に変え、昼を夜に変え、また太陽と月とをそれぞれ定められた期限までその軌道を走るべく服従せしめたことを、(注16) 並びにアッラーはお前たちの所業に通曉し給うことを?

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ يُولِجُ اللَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَيُولِجُ النَّهَارَ
فِي اللَّيْلِ وَسَخَّرَ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ كُلٌّ يَجْرِي إِلَى آخِلٍ
مُسَمًّى وَأَنَّ اللَّهَ بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرٌ ﴿٣٠﴾

31. これすなわち、アッラーこそが真の神なるが故、それ以外に彼等が祈るものはすべて偽物、而してアッラーのみが至高者、無比なる至大者なるが故なり。

ذَٰلِكَ بِأَنَّ اللَّهَ هُوَ الْحَيُّ وَأَنَّ مَا يَدْعُونَ مِنْ دُونِهِ
الْبَاطِلُ وَأَنَّ اللَّهَ هُوَ الْعَلِيُّ الْكَبِيرُ ﴿٣١﴾

第四項

32. 汝、アッラーの恵みによりて船が海上を航行するを見ざるか? (注17) こは彼がお前たちにその神兆を示さんがためなり。げにこの中には堅忍感恩の徒へのさまざまな神兆あり。

أَلَمْ تَرَ أَنَّ الْفُلَّكَ تَجْرِي فِي الْبَحْرِ بِنِعْمَتِ اللَّهِ لِيُرِيَكُمْ
مِّنْ آيَاتِهِ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ لِّكُلِّ صَبَّارٍ شَكُورٍ ﴿٣٢﴾

注14 7や70という数は、アラビア語で大きな数を示し、通常の7や70という数字そのものを指してはいない。

注15 この節は、人間は全て同じ自然の法則の下にある事を示している。又、この同じ自然の法則の下で、人が進歩・後退する様に、国や社会も栄枯盛衰を繰り返すとも書かれてある。

注16 夜の後に昼が、又は昼の後に夜が来るという自然の法則は、個人のみならず、国家の運命をも左右する。

注17 航海は偉大なる神の恵みである。人類の繁栄の多くが航海によってもたらされる。概して、最大の海運力を持つ国が、世界で最大の富と力を誇る。

33. 屋根の如き大浪にのみ込まれんとする時には、彼等もアッラーに対し奉り全く裏表なきが如く念じ祈る。然るに、彼等が無事上陸せしむれば、たちまち、中庸の道を歩むは、その中の僅かばかりとなるなり。(注18) 而して、われらが神兆を否定する者は、二心ある忘恩者に外ならず。

34. 人々よ、主に庇護を求めよ、而して、父は子のために、子は父のために何事もなし得ざるその日を恐れよ。げにアッラーの約束は必ず実現す。されば、現世の生活に欺かれるなかれ、またアッラーのことで詐欺師に欺かれるなかれ。

35. げにアッラーのみが審判の時を知り給う。彼は雨を降らせ、胎内に宿るものを知り給う。然れども、何人も明日何が起るか、またいずこの地で死するかを知らず。げにアッラーは深知者、通曉者なり。

وَإِذَا غَشِيَهُمْ مَوْجٌ كَالظَّلِيلِ دَعَا اللَّهَ مُخْلِصِينَ لَهُ الدِّينَ ۚ فَلَمَّا نَجَّاهُمْ إِلَى الْبَرِّ فَمِنْهُمْ مُقْتَصِدٌ ۚ وَمَا يَجْحَدُ بِآيَاتِنَا إِلَّا كُلُّ خَتَّارٍ كَفُورٍ ﴿٣٣﴾

يَا أَيُّهَا النَّاسُ اتَّقُوا رَبَّكُمُ وَأَخْشَوْا يَوْمًا لَا يَجْزِي وَالِدٌ عَنْ وَلَدِهِ وَلَا مَوْلَىٰ ذُو حَاجَةٍ عَنْ وَالِدِهِ سَيِّئًا ۚ إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ فَلَا تَغُرَّكُمْ الْحَيَاةُ الدُّنْيَا ۖ وَلَا يَفْرَحَتْكُمْ بِاللَّهِ الْغُرُورُ ﴿٣٤﴾

إِنَّ اللَّهَ عِنْدَهُ عِلْمُ السَّاعَةِ وَيُرْسِلُ الْغَيْثَ وَيَعْلَمُ مَا فِي الْأَرْحَامِ ۚ وَمَا تَدْرِي نَفْسٌ مَّاذَا تَكْتُمُ عَدَا ۚ وَمَا تَدْرِي نَفْسٌ بِأَيِّ أَرْضٍ تَمُوتُ ۚ إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ

خَبِيرٌ ﴿٣٥﴾

注 18 この節には、ムシュリク（多神教徒）に共通の特徴が挙げられている。多神教徒は信仰が弱く、非常に迷信深い。彼の信仰は、偽りの風聞や迷信の混じったものなので、些細な不幸にすら動じてしまうのである。



アル・サジュダ
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く^{あまね}アッラーの御名^{あな}において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. アリフ・ラーム・ミーム。(注1)

الْم ②

3. この經典の啓示は、疑いもなく、^{ばんぶつ}万物の主より降る。

تَنْزِيلُ الْكِتَابِ لَأَرْبَبَ فِيهِ مِنْ رَبِّ الْعَالَمِينَ ③

4. 彼等は、「彼がそれを偽作せり」と云うか？否、こは汝をして、汝以前にいまだかつて警告者来らざりし民^{たみ}に向って警告を与え、彼等を導かしめんがために主より降されたる真理なり。

أَمْ يَقُولُونَ افْتَرَاهُ بَلْ هُوَ الْحَقُّ مِنْ رَبِّكَ لِتُنذِرَ قَوْمًا مَّا أَتَهُمْ مِنْ نَذِيرٍ مِنْ رَبِّكَ لَعَلَّهُمْ يُهْتَدُونَ ④

5. ^{あめつち}天地とその間のすべてのものを六日のうちに(注2)創造せるはアッラーにして、^{しか}然る後その玉座に登り坐す。お前たちに、アッラー以外、他に助ける者も執り成す者もなし。お前たち、それでも反省せざるか？

اللَّهُ الَّذِي خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا فِي سِتَّةِ أَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوَى عَلَى الْعَرْشِ مَا لَكُمْ مِنْ دُونِهِ مِنْ وَلِيٍّ وَلَا سَفِيحٍ أَفَلَا تَتَذَكَّرُونَ ⑤

6. 天より地に至るまで、アッラーは一切を統^{すべ}たもう。然る後、そは一日にして彼の許へ昇り行くが、その一日はお前たちが数える一千年に相当す。(注3)

يَذَرُ الْأَمْرَ مِنَ السَّمَاءِ إِلَى الْأَرْضِ ثُمَّ يَعِجُّ إِلَيْهِ فِي يَوْمٍ كَانَ مِقْدَارُهُ أَلْفَ سَنَةٍ مِمَّا تَعُدُّونَ ⑥

7. この御方こそ見えざるものと見えるものを知悉^{ちしつ}し、偉大にして慈悲深くまします。

ذَلِكَ عِلْمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ⑦

注1 われはアッラー、全知者なり(2章2節参照)。

注2 6:194 参照

注3 この節では、イスラム教の波乱に富んだ歴史の中で、起こると定められた深刻な危機について述べられている。イスラム教は、初めの三世紀の間不断の前進と繁栄の時を迎える事となっていた。モハammad預言者は、この事実について次の様に語ったと記されている。「私の生きている今世紀、そしてそれに続く二世紀が最良の時である(テルマディ、ブハリーシャハダート書)」。最初の三世紀に不断の勝利を得た後、イスラム教は衰退を始めた。この衰退はその後千年の間続いた。当節後半は、この千年間を示したものである。又、モハammad預言者は次の様に語ったとも記されている。イスラム教義がアレアデス星団に登り、ペルシャの末裔の男がそれを地上に戻すであろう(ブハリータフシール書)。ヒジラ14世紀に約束されたメシヤ(救世主)が現れ、衰退は止められ、イスラム教の復活が始まったのである。

8. 彼は、その創造せるすべてのものを完璧ならしめたる者なり。而して彼は、土塊を以て人間の創造に着手せり。

الَّذِي أَحْسَنَ كُلَّ شَيْءٍ خَلَقَهُ وَبَدَأَ خَلْقَ الْإِنْسَانِ
مِنْ طِينٍ ①

9. 然る後、彼は、わずかな液体の精粹から子孫を造り、

ثُمَّ جَعَلَ نَسْلَهُ مِنْ سُلَالَةٍ مِّنْ مَّاءٍ مَّهِينٍ ②

10. 之に形を与え、己が魂を吹き込みたり。また、耳や目や心をお前たちに与えたり。然るにお前たち、ほんのわずかしき感謝せぬとは。

ثُمَّ سَوَّاهُ وَنَفَخَ فِيهِ مِنْ رُّوحِهِ وَجَعَلَ لَكُمُ السَّمْعَ
وَالْأَبْصَارَ وَالْأَفْئِدَةَ قَلِيلًا مَّا تَشْكُرُونَ ③

11. 彼等は云う、「なんとな！我等地中に消え失せた後、再び新たな被造物となりて甦るとな？」と。否、彼等は主との対面を信ぜざるものどもなり。

وَقَالُوا إِذَا ضَلَلْنَا فِي الْأَرْضِ أَإِنَّا لَفِي خَلْقٍ جَدِيدٍ
بَلْ هُمْ بِلِقَاءِ رَبِّهِمْ كُفِرُونَ ④

12. 云え、「お前たち担当の死の天使が、お前たちから命を取り去らん。然る後、お前たちは主の許へ連れ戻されん」と。

قُلْ يَتَوَفَّكُم مَّلَكُ الْمَوْتِ الَّذِي وُكِّلَ بِكُمْ ثُمَّ
إِلَىٰ رَبِّكُمْ تُرْجَعُونَ ⑤

第二項

13. 罪を犯せし者が主の前で頭を垂れ、「主よ、我等は見たり、聴きもせり、願わくは我等を生に歸し給え。さすれば必ず善行を為さん、真実を悟らされたが故に」と云う様を汝目睹し得なば。

وَلَوْ تَرَىٰ إِذِ الْمُجْرِمُونَ نَاكِسُوا رُءُوسِهِمْ عِندَ رَبِّهِمْ
رَبَّنَا أَبْصَرْنَا وَسَمِعْنَا فَارْجِعْنَا نَعْمَلْ صَالِحًا إِنَّا
مُقِرُّونَ ⑥

14. われらもし敢て欲しなば、すべての人間にその嚮導を与え得べし。されど、「妖霊と人間一緒にして地獄を満たさん」(注4)とわが口から出でし言葉は、必ず実現す。

وَلَوْ شِئْنَا لَآتَيْنَا كُلَّ نَفْسٍ هُدًى وَلَكِنْ حَقَّ الْقَوْلُ
مِمَّا لَا مَلَكْتَ جَهَنَّمَ مِنَ الْخَيْرِ وَالنَّاسِ أَجْمَعِينَ ⑦

15. されば、お前たちの悪行の報いを味わえ、この日の対面をお前たちが忘れたが故に。われらもお前たちを忘れたり。されば、お前たちが重ねたる悪行ゆえに永劫の刑を味わえ。

فَذُوقُوا بِمَا نَسِيتُمْ لِقَاءَ يَوْمِكُمْ هَٰذَا إِنَّا نَسِينَاكُمْ
وَذُوقُوا عَذَابَ الْخُلْدِ بِمَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ⑧

16. われらの神兆を本当に信ずる者というは、その話が出ると地にひれ伏して主を讃美し奉り、驕りたかぶらぬ者のみ。

إِنشَاءً يَوْمٍ مِّنْ بَالِغِنَا الَّذِينَ إِذَا ذُكِّرُوا بِهَا خَرُّوا سُجَّدًا
وَسَبَّحُوا بِحَمْدِ رَبِّهِمْ وَهُمْ لَا يَسْتَكْبِرُونَ ⑨

注4 この文は、15章43節及び44節と同様に罪深い者のみが地獄へ落ちる事を示している。妖霊は黒幕、人間は庶民を表わしている。

17. 彼等その臥所^{ふしど}より離れるや、畏れと願いを抱いてその主に祈り、われらが授けしものを惜しみなく費す。
تَجَّافَى جُنُوبَهُمْ عَنِ الْمَضَاجِعِ يَدْعُونَ رَبَّهُمْ خَوْفًا وَطَمَعًا وَمِمَّا رَزَقْنَاهُمْ يُنفِقُونَ ﴿١٧﴾
18. 何人も、その善行の報奨として、目を喜ばすものがひそかに用意されてあるを知らず。
فَلَا تَعْلَمُ نَفْسٌ مَّا أُخْفِيَ لَهُمْ مِنْ قُرَّةِ أَعْيُنٍ جَزَاءً بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٨﴾
19. されば、信者は罪を犯す者と同類なりと見なされるべきか？ もとより両者は等しからず。
إِنَّمَنْ كَانَ مُؤْمِنًا كُفِّنَ كَانَ فَاسِقًا إِلَّا يَتُونَ ﴿١٩﴾
20. 信じて善行を積む者には永遠の宿りの樂園あり、そは彼等がなせることに対する響應として。
أَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ فَلَهُمْ جَنَّاتُ الْمَأْوَى نُزُلًا بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٢٠﴾
21. 罪を犯す徒輩^{たぐわい}には、その宿りは業火^{さうお}たるべし。彼等はそこより出でんとする度に、その中に突き戻され、かく云われん、「お前たちが常に否定せる業火の刑を味わえ」と。
وَأَمَّا الَّذِينَ فَسَقُوا فَمَأْوِيهِمُ النَّارُ كُلَّمَا أَرَادُوا أَنْ يَخْرُجُوا مِنْهَا أُعِيدُوا فِيهَا وَقِيلَ لَهُمْ ذُوقُوا عَذَابَ النَّارِ الَّتِي كُنتُمْ بِهِ تُكَذِّبُونَ ﴿٢١﴾
22. われらはこの大刑罰の前に、手近な罰を彼等に味わしめん、(注5)そは彼等が悔い改め、われらが許に回歸^{かへき}すために。
وَلَنَذِيقَنَّهُمْ مِنَ الْعَذَابِ الْأَدْنَى دُونَ الْعَذَابِ الْأَكْبَرِ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ﴿٢٢﴾
23. 主の神兆^{しるし}によって戒められながら、後に之に背き去るより大なる罪あるべきか？ われらは必ずその罪を犯せる者に報復す。
وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنْ ذُكِّرَ بِآيَاتِ رَبِّهِ ثُمَّ أَعْرَضَ عَنْهَا إِنَّا مِنَ الْمُجْرِمِينَ مُنتَقِمُونَ ﴿٢٣﴾
- 第三項
24. われらはかつて、モーゼに經典を授けたり。されば、汝も經典を受けることを疑うなかれ。われらはそれを、イスラエルの子らへの嚮導^{きやうどう}とせり。
وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ فَلَا تَكُنْ فِي مِرْيَةٍ مِنْ لِقَائِهِ وَجَعَلْنَاهُ هُدًى لِبَنِي إِسْرَءِيلَ ﴿٢٤﴾
25. われらは彼等の中から、われらが命令によって人々を導く導師を任命せり。なんとすれば、彼等はよく耐え忍び、われらの神兆を堅く信じるが故なり。
وَجَعَلْنَا مِنْهُمْ إِبْرَاهِيمَ يَهْدُونَ بِأَمْرِنَا لَمَّا صَبَرُوا وَكَانُوا بِآيَاتِنَا يُوقِنُونَ ﴿٢٥﴾

注5 「大刑罰」と「手近な罰」は次の様な意味を持つ。(1)現世における苦悩と来世における苦悩。(2)バドルの戦いにおけるクライシュの敗北とメッカの陥落。(3)小さな不幸、そして決定的な破滅を忠告されながらそれに耳を貸そうとしない者に起こる不幸。

26. げに汝の主は、彼等が互に争うことについて、復活の日に彼等の間を審判すべし。

إِنَّ رَبَّكَ هُوَ يَفْصِلُ بَيْنَهُم يَوْمَ الْقِيَمَةِ فِيمَا كَانُوا فِيهِ يَخْتَلِفُونَ ﴿٢٦﴾

27. われらが彼等以前に幾多の世代を滅ぼせること、そは彼等を導かざるか？ 今日、人々はその廢墟に歸したる住居跡^{سُكُونِ}を往来す。げにこの中にはさまざまなる神兆あり。それでも彼等は敢て聴かざるか？

أَوَلَمْ يَهْدِ لَهُمْ كَمْ أَهْلَكْنَا مِنْ قَبْلِهِمْ مِنَ الْقُرُونِ يَمْشُونَ فِي مَسْكِنِهِمْ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ أَفَلَا يَسْمَعُونَ ﴿٢٧﴾

28. 彼等いまだ見ざるか、われら乾燥ける大地に水を駆り、之によって家畜並びに彼等自身が食する穀物を生育せしむるを？ それでも彼等は敢て見ざるか？

أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّا نَسُوقُ الْمَاءَ إِلَى الْأَرْضِ الْجُرُزِ فَنُخْرِجُ بِهِ زَرْعًا تَأْكُلُ مِنْهُ أَنْعَامُهُمْ وَأَنْفُسُهُمْ أَفَلَا يُبْصِرُونَ ﴿٢٨﴾

29. 彼等は云う、「お前の言葉が真事^{حَقِّ}なら、その勝利とやは何時来るか？」と。

وَيَقُولُونَ مَتَى هَذَا الْفَتْحُ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٢٩﴾

30. 云え、「勝利のその日には、(注6) 信ぜざる者どもの信仰は役立たず、また猶予もされざるべし」と。

قُلْ يَوْمَ الْفَتْحِ لَا يَنْفَعُ الَّذِينَ كَفَرُوا إِيْمَانُهُمْ وَلَا هُمْ يُنْظَرُونَ ﴿٣٠﴾

31. されば汝、彼等を顧みるな。而^{شَا}して、待て。彼等もまた待つ。

فَاعْرِضْ عَنْهُمْ وَانْتَظِرْ إِنَّهُمْ مُنْتَضِرُونَ ﴿٣١﴾

注6 バドルの戦いの日(8:42)。

سُورَةُ الْأَحْزَابِ مَدَنِيَّةٌ

アル・アフザーブ
(メディナ啓示)

- 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
- 汝、預言者よ、アッラーに加護を求めよ。不信心者並びに偽信者の要請に従うなかれ。げにアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。
- 主が汝に啓示されたとところに従え。げにアッラーはお前たちの所業を知悉し給う。
- アッラーを信頼せよ。アッラーは守護者たるに足る。
- アッラーは如何なる人にも、その胸の中に二つの心を創らず。また母と呼んで離別する妻がお前たちの生母にはならぬ。またお前たちが養子とせるものをお前たちの実子とせず。これはただお前たちの口より出づる言葉にすぎず。(注1)然るに、アッラーの言葉は真実であり、正しい道に導き給う。
- 実父の名によって彼等と呼ば。その方が、アッラーの目には一層公平なり。たといお前たち彼等の父を知らずとも、彼等は信仰においてお前たちとは兄弟であり且つ友なり。而して、故意に之をなすに非ざれば、この件に関する誤りは罪なし。然しながら、お前たちの心に意図ある場合はその責任を問う。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ اتَّقِ اللَّهَ وَلَا تُطِعِ الْكَافِرِينَ وَالنَّفَقِينَ
إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلِيمًا حَكِيمًا ②

وَاتَّبِعْ مَا يُوحَىٰ إِلَيْكَ مِنْ رَبِّكَ إِنَّ اللَّهَ كَانَ بِمَا
تَعْمَلُونَ خَبِيرًا ③

وَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ وَكِيلًا ④

مَا جَعَلَ اللَّهُ لِرَجُلٍ مِنْ قَلْبَيْنِ فِي جَوْفِهِ وَمَا جَعَلَ
أَزْوَاجَكُمْ أُمَّهَاتِكُمْ وَمَا جَعَلَ
أَدْعِيَاءَكُمْ أَبْنَاءَكُمْ ذَلِكَ قَوْلُكُمْ بِأَفْوَاهِكُمْ وَاللَّهُ
يَقُولُ الْحَقَّ وَهُوَ يَهْدِي السَّبِيلَ ⑤

أَدْعَوْهُمْ بِأَبَائِهِمْ هُوَ أَقْسَطُ عِنْدَ اللَّهِ فَإِنْ لَمْ
تَعْلَمُوا آبَاءَهُمْ فَإِخْوَانُكُمْ فِي الدِّينِ وَمَوَالِيكُمْ
وَلَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ فِيمَا أَخْطَأْتُم بِهِ وَلَكِنْ مَا
تَعْمَدْتُمْ فَلُوْبُكُمْ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَحِيمٌ ⑥

注1 この節では、モハammad預言者の時代に広範に、しかも深く根付いていた二つの慣習の廃止を求めた。この二つの内、より醜悪なのは、ズィハールのものであった。夫は腹を立てると妻を母と呼んだ。哀れな妻は婚姻権を取り上げられており、夫に束縛されるままて、他の男と結婚する事もできなかった。イスラム教は女性の権利を擁護するものであり、この様に残酷な慣習を許容できなかった。今一つの慣習とは、他人の息子を

7. 預言者は信者自身よりも信者に近く、その妻たちは信者らの母の如し。またアッラーの經典によれば、血縁者は信者並びにメッカからの移住者よりもその間柄は近し、但しお前たちが友に見せる親切はこの限りに非ず。これまた經典の中に示さる。(注2)

الَّتِي أُولَىٰ بِالْمُؤْمِنِينَ مِنْ أَنْفُسِهِمْ وَأَهْوَاجُهُمْ
أَهْلَتْهُمْ وَأُولُوا الْأَرْحَامِ بَعْضُهُمْ أَوْلَىٰ بِبَعْضٍ
فِي كِتَابِ اللَّهِ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ وَالْمُهَاجِرِينَ إِلَّا أَنْ
تَفْعَلُوا إِلَّا أُولَئِكَ مَعْرُوفًا كَانَ ذَلِكَ فِي الْكِتَابِ
مَسْطُورًا ﴿١٠﴾

8. また思い起せ、われらが預言者たちから、汝から、ノアから、アブラハム、モーゼ並びにマリアの子イエスから誓約を取りし時のことを。われらは彼等から実に厳肅なる誓約を取り。

وَإِذْ أَخَذْنَا مِنَ النَّبِيِّينَ مِيثَاقَهُمْ وَمِنْكَ وَمِنْ
نُوحٍ وَإِبْرَاهِيمَ وَمُوسَىٰ وَعِيسَى ابْنِ مَرْيَمَ
وَأَخَذْنَا مِنْهُم مِّيثَاقًا عَلِيمًا ﴿١١﴾

9. こは主が誠実なる者に、その誠実を^{たゞ}さんがためなり。而して、主は、不信心者どものために痛刑を準備せり。

لَيَسْأَلَنَّ الَّذِينَ عَنِ صِدْقِهِمْ وَأَعَدَّ لِلْكَافِرِينَ
عَذَابًا أَلِيمًا ﴿١٢﴾

第二項

10. 汝等信徒たちよ、アッラーがお前たちに垂れたる恩恵を念え。お前たちに大軍が攻め寄せて来た時、(注3)われらは彼等に対して烈風とお前たちには見えざる大軍を送り

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اذْكُرُوا نِعْمَةَ اللَّهِ عَلَيْكُمْ إِذْ
جَاءَكُمْ جُنُودٌ فَأَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ رِيحًا وَجُنُودًا لَمْ

養子にする事だった。この慣習は、血縁に混乱をもたらす事は別としても、浅薄な事であった。これ等の慣習廃止の理由は次の文に示されている。「アッラーは如何なる人にも、その胸の中に二つの心を創らず」人間の心は感情の中枢と考えられている。心は一度に一つの感情しか抱けない。つまり、様々な感情が同時に心を占める事は有り得ないのである。更に、人間関係が変われば感情も変わる。単に妻を母と、あるいは他人を息子と呼んだからと言って、人の気持ちにそれが対応できる訳ではない。妻は決して母とは成り得ないし、他人が息子に成る事もできない。口から出た言葉が、その発言者の心を変えられる訳ではなく、又血縁という厳然たる事実を変える事もできないのである。

注2 精神上の父としてのモハammad預言者を通して生じるイスラムの兄弟関係は誤解され、イスラム教徒は互いの資産を相続できると受け取られて来た。この節では、この誤解を解く為に、次の様に述べている。相続できるのは血縁者であり、しかも信者のみである。不信心者は、肉親の信者から相続を受ける事はできない。更にこの節には、メッカからの移住者と、彼等がメディナに着いた時に手助けした者達の間に結ばれた兄弟関係を廃止したとある。この関係が続けば、移住者は支援者の残した財産まで相続したであろう。この兄弟関係は、しかし一時的な措置で、メッカからの移民の更生を目的として結ばれた血縁関係で、単なる誓約ではなかったが、相続権決定や同様の事態に際し、決定的な要因となっていた。しかし、イスラムのこの広い意味での兄弟関係は存続し、イスラム教徒は互いに実の兄弟の様に接する事を求められたのである。

注3 この節から「堀りの戦い」の話が始まる。これは、ヒジラ5年に起こり、イスラム教徒が遠征した最も激しい戦いだった。アラビア全体が一団となりイスラムに對した。メッカのクライシュ、その同盟国であるガトファーン、アシュジャヤ、ムッラ、ファラーラ、スライム、バスナーサード、バスアサド中央アラビアの砂漠

たり。(注4)アッラーはお前たちが為せることをみそなわし給う。

11. その時彼等は、上方からも下方からもお前たちを襲い、お前たちの眼は惑乱し、その心臓は喉もとまで上り、お前たちはアッラーについてさまざまな憶測をなせり。
(注5)

12. かくて信者は猛烈な試練を受け、彼等は激しくゆすぶられたり。
13. その時、偽信者どもと並びに心に病のある徒輩は云う、「アッラーとその使徒の約束は惑わしなりきか」と。

14. 時に彼等の中の一部の者は云えり「ヤスリブ(注6)の衆よ、お前たちは敵に抵抗し得ざれば、すみやかに引き返せ」と。(注7)而して、彼等の或る者たちは「我等の家は無防備なり」と云い、預言者に許可すら求めたり。実は、無防備に非ざりき。彼等はただ離脱遁走を謀りたり。

تَرَوْهَا وَكَانَ اللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرًا ①

إِذْ جَاءَكُمْ مِنْ فَوْقِكُمْ وَمِنْ أَسْفَلَ مِنْكُمْ مُدْرِكٌ
زَاغَتِ الْأَبْصَارُ وَبَلَغَتِ الْقُلُوبُ الْحَنَاجِرَ وَنَظَرُوا
بِاللَّهِ الظُّنُونَا ②

هَذَا إِلَهُكَ ابْنَى الْمُؤْمِنُونَ وَزُلْزِلُوا زَلْزَالًا شَدِيدًا ③
وَإِذْ يَقُولُ الْمُنَافِقُونَ وَالَّذِينَ فِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ
مَا وَعَدَنَا اللَّهُ وَرَسُولُهُ إِلَّا غُرُورًا ④

وَإِذْ قَالَتْ طَائِفَةٌ مِنْهُمْ يَا أَهْلَ يَثْرِبَ لَا مُقَامَ
لَكُمْ فَارْجِعُوا وَيَسْتَأْذِنُ فَرِيقٌ مِنْهُمُ النَّبِيَّ يَقُولُونَ
إِنَّ بُيُوتَنَا عَوْرَةٌ وَمَا هِيَ بِعَوْرَةٍ إِنْ يُرِيدُونَ
الْإِفْرَارَا ⑤

の民族、裏切者ユダヤ教徒に扇動された者達、メディナの裏切者の偽善者達、左記の者達が徒党を組んでモハammad預言者に向かった。一万から二万の強力な軍隊がわずかに1200(一説には、堀を作るのに従事した女性・子供を含めて3000人のイスラム教徒がいたとされる。)ばかりの準備不足のイスラム教徒に対し派遣された。メディナの包囲攻撃は15日から4週間も続いた。イスラム教徒はこの厳しい試練を境に、次第に強くなって行き、クライシュに不審を抱く者達は、二度とイスラム教徒に軍隊を向ける事はなかった。

注4 不信心者を挫き、彼等の戦意を損ったのは、雨・風・寒さという大自然の力だった。この言葉は又、不信者を恐怖に陥し入れ、イスラム教徒を勇気付けた天使達を表してもいる。ウィリアムシュアは次の様に述べている。「えさは手に入らず、貯えは減って行き、ラクダや馬が毎日何頭も死んで行った。戦意の弱まった時、夜になり、冷たく激しい風雨が無防備のキャンプを無情に打った。嵐はハリケーンとなった。火は消え、テントは飛ばされ、料理道具や他の用具も吹き飛ばされた("Life of Mohammed")。

注5 不信心者達が突然イスラム教徒の前に、あらゆる方向から、メディナの高台からも平原からも現れた。当節最後の言葉は偽善者達に向けられたもので、誠実で不変のイスラム教徒に対するものではない。

注6 これはヒジラ(移住)の前に使われたメディナの名前だった。

注7 この言葉は次の様な意味である。「古い宗教に戻れ」又は、「家へ帰れ。」

15. もし敵が四方から邑に入り、彼等が叛逆するべく要求されなば、彼等は必ず之に應えたりしなり。彼等は殆んど之を躊躇せざりしならん。(注8)

16. 而も彼等はすでにアッラーに、断じて背を見せじと誓いたり。アッラーとの約束は必ず糾問せらるべし。

17. 云え、「逃走は、たとい戦死や虐殺から免れたとしても、お前たちを益せざるべし。そはただ暫時の楽しみにすぎず」と。

18. 云え、「アッラーがお前たちに禍を下さんとした場合、また慈悲を垂れんとした場合、一体誰がそれを妨げ得るものぞ？」と。彼等はアッラー以外に、如何なる味方も援助者も見出し得ざるべし。

19. げにアッラーはお前たちの中の邪魔だてする者や、仲間に向つて「我等のところへ来れ」と云いながら、自らは戦いに加わらざる徒輩をよく知り給う。

20. 彼等のお前たちへの助力は僅少なり。すなわち、危険に襲われれば、汝は彼等が瀕死の人の如く目玉をぐるぐるまわして汝を凝視するを見る。然るに、恐怖過ぎ去れば、鋭い舌先で戦利品を貪らんとしてお前に喰つてかかる。これ等の徒輩は信仰などせざりき。されば、アッラーは彼等の仕業を甲斐なからしめたり。そはアッラーには容易なことなり。

21. 彼等は聯合軍が敗退せざることを希望し、聯合軍再び来ることあらば、砂漠の遊牧民の中に在りて、お前たちの消息を問わんことを望む。また、たとい彼等がお前たちと偕にありといえども、殆んど戦いに加わらざるべし。

وَلَوْ دَخَلَتْ عَلَيْهِمْ مِنْ أَطْوَافِهَا تَمْسِلُ الْفِتْنَةُ لَا تَوْهَا وَمَا تَلَبَّثُوا بِهَا إِلَّا يَسِيرًا ⑤

وَلَقَدْ كَانُوا عَاهِدُوا اللَّهَ مِنْ قَبْلِ لَا يُؤْلُونَ الْأَذْيَارَ وَكَانَ عَهْدُ اللَّهِ مَسْئُولًا ⑥

قُلْ لَنْ يَنْفَعَكُمْ الْفِرَارُ إِنْ قَرَرْتُمْ مِنَ الْمَوْتِ أَوْ الْقَتْلِ وَإِذَا لَا تَشْعُونَ إِلَّا قَلِيلًا ⑦

قُلْ مَنْ ذَا الَّذِي يَعْصِمُكُمْ مِنَ اللَّهِ إِنْ أَرَادَ بِكُمْ سُوءًا أَوْ أَمَرَ بِكُمْ رَحْمَةً وَلَا يَجِدُونَ لَهُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ وَلِيًّا وَلَا نَصِيرًا ⑧

قَدْ يَعْلَمُ اللَّهُ الْمُعَوِّقِينَ مِنْكُمْ وَالْقَائِلِينَ لِإِخْوَانِهِمْ هَلُمَّ إِلَيْنَا وَلَا يَأْتُونَ الْبَاسَ إِلَّا قَلِيلًا ⑨

أَشْجَعًا عَلَيْكُمْ ۖ فَإِذَا جَاءَ الْخَوْفُ سَرَّابَهُمْ يَنْظُرُونَ إِلَيْكَ تَدُورُ أَعْيُنُهُمْ كَالَّذِي يُغْشَى عَلَيْهِ مِنَ الْمَوْتِ ۚ فَإِذَا ذَهَبَ الْخَوْفُ سَلَقُوكُمْ بِأَلْسِنَةٍ حِدَادٍ أَشْجَعًا عَلَى الْخَيْرِ ۚ أُولَئِكَ لَمْ يُؤْمِنُوا فَأَحْبَطَ اللَّهُ أَعْمَالَهُمْ ۚ وَكَانَ ذَلِكَ عَلَى اللَّهِ يَسِيرًا ⑩

يَحْشَبُونَ الْإِخْرَابَ كَمْ يَذْهَبُوا ۚ وَإِنْ يَأْتِ الْإِخْرَابُ يَوْمَذُوا لَوْ أَنَّهُمْ بَادُونَ فِي الْأَعْرَابِ يَسْأَلُونَ عَنْ أَنْبَائِكُمْ وَلَوْ كَانُوا فِيكُمْ مَا قَتَلُوا إِلَّا قَلِيلًا ⑪

第三項

22. げにアッラーの預言者は、アッラーとの対面と審判の日を切望し、不斷にアッラーを念ずる者にとり、立派な模範なり。

لَقَدْ كَانَ لَكُمْ فِي رَسُولِ اللَّهِ أُسْوَةٌ حَسَنَةٌ لِّمَن كَانَ يَرْجُوا اللَّهَ وَالْيَوْمَ الْآخِرَ وَذَكَرَ اللَّهَ كَثِيرًا ﴿٢٢﴾

23. 信徒たちが聯合軍を見たる時、彼等は云えり「こはアッラー並びにその使徒が我等に約束せるものなり。されば、アッラー並びにその使徒は眞実を語れり」と。そはただ彼等の信仰と帰依の念を深めたるのみなりき。

وَلَمَّا رَأَى الْمُؤْمِنُونَ الْإِخْرَابَ قَالُوا هَذَا مَا وَعَدَنَا اللَّهُ وَرَسُولُهُ وَصَدَقَ اللَّهُ وَرَسُولُهُ وَمَا زَادَهُمْ إِلَّا إِيمَانًا وَتَسْلِيمًا ﴿٢٣﴾

24. 信徒たちの中にはアッラーと結べる約束に忠実なる者あり。その或る者はすでにその誓いを全うし、また或る者は今も待機す。彼等はいささかもその節を変えざりき。

مِنَ الْمُؤْمِنِينَ رِجَالٌ صَدَقُوا مَا عَاهَدُوا اللَّهَ عَلَيْهِ فَمِنْهُمْ مَّنْ قَضَىٰ نَحْبَهُ وَمِنْهُمْ مَّنْ يَنْتَظِرُ وَمَا بَدَّلُوا تَبْدِيلًا ﴿٢٤﴾

25. アッラーは、信義ある者にはその信義に報い、また御心のままに偽信者を罰し、或いは思い直して容赦す。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

لِيَجْزِيَ اللَّهُ الصَّادِقِينَ بِصِدْقِهِمْ وَيُعَذِّبَ الْمُنَافِقِينَ إِن شَاءَ أَذْ يُتُوبَ عَلَيْهِمْ إِنَّ اللَّهَ كَانَ غَفُورًا رَّحِيمًا ﴿٢٥﴾

26. アッラーは不信心者どもをしてその憤怒のうちに徹退せしめたり。(注9)彼等は何の利益も得ざりしなり。この戦いに於て、アッラーは信徒たちを満足せしめたり。アッラーは力強く、偉大なり。

وَرَدَّ اللَّهُ الَّذِينَ كَفَرُوا بِغَيْظِهِمْ لَمْ يَنَالُوا خَيْرًا وَكَفَى اللَّهُ الْمُؤْمِنِينَ الْقِتَالَ وَكَانَ اللَّهُ قَوِيًّا عَزِيزًا ﴿٢٦﴾

27. アッラーは聯合軍を助けたる經典の民を城塞より降らしめ、その心中に恐怖を投じたり。お前たちはその或る者を殺し、また他の者を俘虜となせり。

وَأَنْزَلَ الَّذِينَ ظَاهَرُوا لَهُمْ مِنْ أَهْلِ الْكِتَابِ مِنْ صَاحِبِهِمْ وَقَدْ فِى قُلُوبِهِمُ الرُّعْبُ فَرِيقًا تَقْتُلُونَ وَتَأْسِرُونَ فَرِيقًا ﴿٢٧﴾

注8 もし敵が一人別の方からメディナに入り込み、彼と協力してイスラム教と戦う様求められれば、偽善者達は喜んで従うだろうし、又即にそうしている。以上の事がこの節に書かれている。

注9 神は連合軍の攻撃を防いだ。彼等は包囲を解かなければならず、自らの邪悪な企てを果たせなかった事に腹を立てた余り、家に戻り、二度とメディナを攻撃しには来なかった。以降、主導権はイスラム教徒の手に移ったのである。堀の戦いは、イスラム史上の分岐点となった。弱く、常に侵略されて来たイスラム教が、アラビアの一大勢力となったのである。

28. 而して、アッラーは、彼等の土地、家屋、財産、並びにお前たちが未だ足を踏み入れざりし土地までもお前たちに継承せしめたり。アッラーは万事を支配し給う。

第四項

29. 預言者よ、汝の妻たちに云え、「お前たち、現世の暮らしとその栄華とを望まば、来れ。我はお前たちに物を贈って、立派に離別せん。(注10)

30. されど、お前たちもしアッラーとその使徒並びに来世の住居とを望むならば、お前たちのうち善事を行う者にはアッラーが立派な報奨を備え給えり」と。

31. 預言者の妻たちよ、お前たちの中で明白なる醜行(注11)を犯したる者は、その罰は倍加せられん。そはアッラーにとりて容易なり。

32. 然れども、アッラーとその使徒を遵奉し、善行を積む者には、われらは報奨を倍加し、光栄ある給養を備えたり。

33. 預言者の妻たちよ、お前たちは世間一般の子女とは同じからず、もし、お前たち義しくありたしと思うならば。されば、心に病ある者を挑発せぬよう、甘い言葉で囁くなかれ。ただ上品に物云え。(注12)

وَأَوْرَثَكُمْ أَرْضَهُمْ وَوَيَارَهُمْ وَأَمْوَالَهُمْ وَأَرْضًا
تَمْ تَطْوُهَا ۖ وَكَانَ اللَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرًا ﴿٢٨﴾

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ قُلْ لِّأَزْوَاجِكَ إِن كُنْتُمْ تُرِيدْنَ الْحَيَاةَ
الدُّنْيَا وَرَبِّتِهِنَّ مُتَعَالِينَ أُمِّقْنَ وَأَسْرَحْنَ
سَرَاحًا جَبِيلًا ﴿٢٩﴾

وَأِن كُنْتُمْ تُرِيدْنَ اللَّهَ وَرَسُولَهُ وَالذَّارَ الْآخِرَةَ
فَإِنَّ اللَّهَ أَعَدَّ لِلْمُحْسِنِينَ مِثْنَ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿٣٠﴾

يُنِسَاءَ النَّبِيِّ مَن يَأْتِ مِنْكُنَّ بِفَاحِشَةٍ مُّبِينَةٍ
يُضَعَفْ لَهَا الْعَذَابُ ضِعْفَيْنِ ۖ وَكَانَ ذَلِكَ عَلَى
اللَّهِ يَسِيرًا ﴿٣١﴾

وَمَنْ يَفْعَلْ مِنْكُمْ لِيٍّ وَرَسُولِهِ وَتَعْمَلْ صَالِحًا
تُؤْتِيهَا أَجْرَهَا مَرَّتَيْنِ ۖ وَأَعْدَدْنَا لَهَا زُفَارًا كَرِيمًا ﴿٣٢﴾

يُنِسَاءَ النَّبِيِّ لَسْتُ كَأَحَدٍ مِنَ النِّسَاءِ إِنِ اتَّبَعْتِ
فَلَا تَخْضَعْنَ بِالْقَوْلِ فَيَطْمَعَ الَّذِي فِي قَلْبِهِ مَرَضٌ
وَقُلْنَ قَوْلًا مَعْرُوفًا ﴿٣٣﴾

注10 モハammad預言者の妻達は、その品行において世の手本となるべきだとされているので、彼女達は無私の模範となるにふさわしい人物だった。彼女達はお金を使ったり楽しく暮らす事を全く禁じられていた訳ではないが、高度な献身を求められていた事は事実だ。当節及び次の数節に述べられているのは、物質的な恩恵や豊かで安楽な生活を自制するこの厳しい規範についてである。モハammad預言者と交わるにはこの犠牲的行為が必要とされ、彼の妻達は安楽な暮らしとモハammad預言者との交わりのどちらか一方を選ぶ嫌命じられた。

注11 高い信仰に達し得ない行為のことで、物質的に満たされる事でありもし彼女達がこれを望む様であれば、悪い見本を示す事となる。そして、モハammad預言者の妻として他の女性の手本であるべき立場にあるので、彼女達は非常に重大な責任を負う事となり、その罪は倍加するであろう。他方、もし彼女達が神と神の使者に身を捧げ、他の者の模範となるべく無私の気高い例を示すなら、その報いも又倍加しよう。

注12 モハammad預言者の妻達は、男性と話す時、自らの高位にふさわしい威厳を保ち、十分に礼儀を弁えて振る舞う事を処々に命じられている。イスラム教徒の女性たちもこれに準ずる。

34. 而して、淑やかに家におれ。(注13) かつて無明時代のように飾りたてて、お前たちの美しさを見せびらかすなかれ。而して、礼拝を遵守し、定め^{しか}の喜捨をなし、アッラーとその使徒の命^{じゆんぼう}を遵奉^{つかさど}せよ。家事^{つかさど}を司る者^{はら}たちよ、アッラーはお前たちから不浄を祓^{はら}い、徹底^{きよ}して浄めんと欲す。

35. お前たちの家で読誦せらるるアッラーの神兆^{しるし}と知恵とを銘記^{しるし}せよ。げにアッラーは敏感にして、すべてに通曉^{しるし}し給う。

第五項

36. 神に帰依した男と女、信心深い男と女、忠順な男と女、誠実な男と女、信仰に於て耐え忍ぶ男と女、控え目な男と女、慈善を惜しまぬ男と女、断食を守る男と女、貞節な男と女、断えずアッラーを念ずる男と女、これ等の者のためにアッラーは素晴らしい褒賞を用意せり。

37. アッラー並びにその使徒がすでに事を決したる時、自分勝手に事を行なわんとするは、男女の信者のなすべきことに非ず。(注14) アッラーとその使徒の命に背く者は、明らかに迷誤の中にさまよう者なり。

وَقَرْنَ فِي بُيُوتِكُنَّ وَلَا تَبَرَّجْنَ تَبَرُّجَ الْجَاهِلِيَّةِ الْأُولَىٰ وَأَقِمْنَ الصَّلَاةَ وَآتِينَ الزَّكَاةَ وَأَطِعْنَ اللَّهَ وَرَسُولَهُ إِنَّمَا يُرِيدُ اللَّهُ لِيُذْهِبَ عَنْكُمُ الرِّجْسَ أَهْلَ الْبَيْتِ وَيُطَهِّرَكُمْ تَطْهِيرًا ﴿٣٤﴾

وَأَذْكُرْنَ مَا يُتْلَىٰ فِي بُيُوتِكُنَّ مِنْ آيَاتِ اللَّهِ وَالْحِكْمَةِ ۚ إِنَّ اللَّهَ كَانَ لَطِيفًا خَبِيرًا ﴿٣٥﴾

إِنَّ الْمُسْلِمِينَ وَالْمُسْلِمَاتِ وَالْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ وَالْقَنَاتِ وَالْقَنَاتِ وَالصَّادِقِينَ وَالصَّادِقَاتِ وَالصَّابِرِينَ وَالصَّابِرَاتِ وَالْخَاشِعِينَ وَالْخَاشِعَاتِ وَالْمُتَصَدِّقِينَ وَالْمُتَصَدِّقَاتِ وَالصَّائِمِينَ وَالصَّائِمَاتِ وَالْحَافِظِينَ فُرُوجَهُمْ وَالْحَافِظَاتِ وَالذَّاكِرِينَ اللَّهَ كَثِيرًا وَالذَّاكِرَاتِ أَعَدَّ اللَّهُ لَهُمْ مَغْفِرَةً وَأَجْرًا عَظِيمًا ﴿٣٦﴾

وَمَا كَانَ لِمُؤْمِنٍ وَلَا مُؤْمِنَةٍ إِذَا قَضَىٰ اللَّهُ وَرَسُولُهُ أَمْرًا أَنْ يَكُونَ لَهُمُ الْخِيَرَةُ مِنْ أَمْرِهِمْ وَمَنْ يَعْصِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ فَقَدْ ضَلَّ ضُلًّا مُّبِينًا ﴿٣٧﴾

注13 この言葉は、女性の主な活動範囲が家庭にあることを示しているが、女性に外出が認められない訳ではない。理にかなった用向きの為であれば、必要なだけ何度でも出かけて構わない。但し、異人種や様々な職業の者の集まりに加わったり、男性と肩を並べたり、外出する事で主婦としての義務を怠る様であれば、イスラムの有るべき女性の道からはずれる事となる。モハammad預言者の妻達は、特に家に留まる様に求められていたが、それは、信徒の母たる高位の尊厳がこれを要求していたからであり、又イスラム教徒がしばしば挨拶に訪れ、宗教上の重要な問題で彼女達に教えを請うたからである。この戒律はイスラム教徒の全女性に等しく適用する。イスラム教では、モハammad預言者に為された挨拶は、同時に全イスラム教徒に向けられたものとみなされる。同様に、モハammad預言者の妻達に科せられた戒律は、又全イスラム女性に向けられたものである訳である。

注14 この節が啓示された直接の原因は、モハammad預言者がザイナブを彼の解放奴隷ザイドに娶わせたいと強く望んだ際、ザイナブがそれをためらった事にある。自らの意志に反し、モハammad預言者の望み通りに

38. アッラーが恩顧を垂れ、汝も目をかけた男に、汝が、「妻を汝の許に留めおけ、^{しか}而して、アッラーを畏れよ」と云いし時を念え。而して汝はアッラーが^{おし}発かんとすることを心中に隠し、他人の^{おし}噂を恐れたり。汝が恐るべきはアッラーの筈。されば、ザイドが離婚に必要な手続^{おし}を了えた時、(注 15) われらは彼女を汝に^{めあわ}妻せり。こは、使徒は、養子の嫁でも離婚の手続が了えているなら、之を^{おし}娶ることなり。されば、アッラーの命令は履行されねばならぬ。(注 16)

39. 預言者がアッラーの命じたることを行うに(注 17)、何んの障害あるべきや。そは過ぎ

وَرَأَوْ قَوْلَ الَّذِي أُنْعِمَ اللَّهُ عَلَيْهِ وَأَنْعَمْتَ عَلَيْهِ
أَمْسِكَ عَلَيْكَ زَوْجَكَ وَاتَّقِ اللَّهَ وَخُفْيَ فِي نَفْسِكَ
مَا اللَّهُ مُبْدِيهِ وَتَخْشَى النَّاسَ وَاللَّهُ أَحَقُّ أَنْ
تَخْشَاهُ فَلَمَّا قَضَى زَيْدٌ مِنْهَا وَطَرًا زَوَّجْنَاهَا لَكَ
لَا يَكُونُ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ حَرَجٌ فِي أَزْوَاجِ أَدْعِيَائِهِمْ
إِذَا قَضَوْا مِنْهُنَّ وَطَرًا وَكَانَ أَمْرُ اللَّهِ مَفْعُولًا ⑤

مَا كَانَ عَلَى النَّبِيِّ مِنْ حَرَجٍ فِيمَا فَرَضَ اللَّهُ لَهُ سِنَّةَ
اللَّهِ فِي الَّذِينَ حُلُوا مِنْ قَبْلُ وَكَانَ أَمْرُ اللَّهِ قَدَرًا

ザイナブがザイドと結婚したのは立派な事である。モハammad預言者は、ザイドを夫として受け入れる様に彼女に強いた訳ではない。彼女が自発的にモハammad預言者の願いに従ったのである。

注 15 モハammad預言者の若い解放奴隷ザイド・ビン・ハリスを指す。養子縁組がイスラム教で不法行為と示されるまでモハammad、預言者は彼を養子としていた。

注 16 ザイナブはモハammad預言者のお婆の娘であったので、生粋のアラブ女性で、その家柄や高い社会的地位を誇りとしていた。イスラム教は、階級制・階級の世襲・財産譲渡の無い文明を世にもたらしたいと目指していた。神の前に、人は皆自由で平等であった。モハammad預言者は、イスラム教のこの高尚な理想の実現を、まず自らの家庭において始めようとした。彼はザイナブにザイドと結婚する事を望んだ。ザイドはモハammad預言者の手で自由の身となったとはいえ、ある人々の心には、まだ彼を奴隷とみなす意識が根強く残っていた。奴隷の烙印という、自由人と奴隷との間の不公平な差別があり、モハammad預言者はザイナブをザイドに娶す事で、これを取り除こうとしたのである。モハammad預言者の望みに従い、ザイナブはこの申し入れを受けた。モハammad預言者の願いは通えられた。この結婚は、基本的な階級制度を徹底させる事となった。しかし残念な事に結婚自体は失敗に終わった。ザイナブとザイドの階級の違いは二人の好みの不一致をもたらし、ザイドは劣等感にさいなまれたのである。この結婚の失敗は当然モハammad預言者を悲しませた。しかし同時に良い結果をも生み出した。当節の後半に述べられている様に、神の命に従い、モハammad預言者が自らザイナブと結婚することで養子の妻を娶るのは神への冒瀆だとする、アラブに深く根付いた不快な慣習を根絶できたのである。養子制度は廃止され、それと共に、この愚かな考えも亡くされた。この様に、ザイナブとザイドの結婚は、一つの高尚な目的の爲になされ、その失敗も、又一つの目的を達したものである。「アッラーを畏れ」とは、ザイドがザイナブと別れたがった事を示す。イスラム教では離婚は神の目に非常に不快なもの^{つり}と、モハammad預言者はザイドに思い直す様熱心に説いた。「汝が恐れるべきはアッラー」という箇所はザイド、モハammad預言者双方に向けられたものと言えよう。ザイドの場合、彼がザイナブとの別離の原因が明るみに出るのを望まなかった事を意味しよう。それは、「アッラーを畏れ」の言葉が示す様に、非がザイナブより彼自身に多くあったからである。しかし先述の文がモハammad預言者に適用される時、ザイドとザイナブの結婚がモハammad預言者の意を汲んで行なわれたので、当然彼が離婚を望まなかった事を示すものと言えよう。この文は又次の事も示している。この結婚の破綻は、イスラムの同胞愛における試みが明らかに失敗に終わった事を意味し、これにより、信仰の弱い者達に不安と混乱が起るのではないかとモハammad預言者は恐れた。この懸念はモハammad預言者の心に重くのしかかった。「他人の噂を恐れ…」という言葉が彼のこの不安を言い表しているようだ。

注 17 この言葉は、モハammad預言者がザイナブと結婚した事を示している。又、彼の結婚が神の命に従ったものであった事も表している。

逝く人々に対するアッラーのやり方なり
き。アッラーの命令は不動の掟なり。

مَقْدُورًا ﴿٢٩﴾

40. 彼等はアッラーの御告げを伝え、アッラーを畏れ、それ以外の何者も畏れざりき。アッラーは清算者として十分なり。

الَّذِينَ يَبْلُغُونَ رِسَالَاتِ اللَّهِ وَيَخْشَوْنَهُ وَلَا يَخْشَوْنَ

أَحَدًا إِلَّا اللَّهَ وَكَفَى بِاللَّهِ حَسِيبًا ﴿٣٠﴾

41. ムハンマドはお前たちの中の誰の父にも非ず。然しアッラーの使徒であり、諸預言者の印璽なり。(注18) アッラーは萬事を知悉し給う。

مَا كَانَ مُحَمَّدٌ أَبَا أَحَدٍ مِّن رِّجَالِكُمْ وَلَكِن رَّسُولَ

اللَّهِ وَخَاتَمَ النَّبِيِّينَ وَكَانَ اللَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمًا ﴿٣١﴾

第六項

42. 汝等使徒たちよ、不断にアッラーを唱念せよ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اذْكُرُوا اللَّهَ ذِكْرًا كَثِيرًا ﴿٣٢﴾

注18 カータムは「刻印する」という意味の語カタマに由来する。この語の第一義は上記したが、第二義としては次の様なものが挙げられる。(1)物事を終える。(2)物を覆う。(3)粘土に刻印を押したり、他の方法で押印をして書類を保護する。カータムは、印の付いた指輪の事であり、つまりは物事の結末を意味する。この語には装飾品という意味もあり、言い換えれば最上・完全を表わす。カーティム、カトゥム、カータム、はほぼ同義語と言える。この点からして、カータム・ナビーーンは、預言者達の印、つまりは預言者の中で最高にして完全なる人物を指す。又第二義的には、預言者達の装飾品、すなわち預言者の内最後に来る者を意味する。メッカでモハammad預言者の息子達が全て幼児期に亡った時、彼の敵は彼をアブタル(息子を持たない者)となじった。彼の跡を継ぐ息子がなければ、彼の活動は早晚終わるであろうとの意味がそこには込められていた。不信者によるこの非難に対して、スーラカウサル(108章)にモハammad預言者ではなく彼の敵こそ子孫を持たぬであろうと明示された。スーラカウサルが啓示された後、そこに示された事が初期のイスラム教徒にとり喜ばしいものである事が自ずと明らかになった。それは、モハammad預言者に息子が授かり、その子は立派に成人するであろうというものだった。モハammad預言者は過去・現在・未来において成人に至る息子の父とはなれないとする誤解があったが、当節はそれを取り払った。当節は、子孫の根絶を恐れるのは、モハammad預言者ではなく、彼の敵であると記すスーラカウサルと対立している様に見えるが、実際は、この外見上の矛盾を解決しようと試みているのである。モハammad預言者はラスूलルッラー(神の使徒)であり、又カータム・ナビーーン(預言者達の精神的な父)であると当節は述べている。彼が全使徒及び預言者の父であるなら、何故彼はアブタル(子孫無き者)と言われる得よう? 又、もしこの言葉の意味を「彼は最後の預言者であり、彼の後に現れる預言者はいない。」と捕らえるなら、当節はその内容と一致せず何ら関連が無くなってしまふ。そして、モハammad預言者は子孫に恵まれないとする不信心者の愚弄に反駁する所か、それを認める事となってしまう。

上記されたカータムの意味から推察して、カータム・ナビーーンには四つの意味が考えられる。(1)モハammad預言者は、預言者達の封印であった。つまり、モハammad預言者の印が無い限り、真の預言者とは認められない。モハammad預言者以前の預言者はだれでもその地位をモハammad預言者に承認されなければならず、又彼以降の預言者はモハammad預言者の弟子にならなければ、預言者の地位を得る事はできない。(2)モハammad預言者は預言者の中で最も優れた完全なる人物であり。預言者達にとり装飾源でもあった(Zurqani, Sharah Mawahib al-Ladunniyyah)。(3)モハammad預言者は啓示を受けた最後の預言者であった。この解釈は、イブン・アラビー、シャワリーウッラー、イマーム・アリー・カーリー、ムジャディディッド・アリフ・サーニー等の著名なイスラム教の理論家、聖徒、学者に受け入れられて来た。これ等の偉大な学者や聖人によれば、モハammad預言者の教義を廃する者、彼の教団(ウンマ)に属さない者の中には、モハammad預言者の後を継げる預言者は居ない。(Futuhāt, Tafhimat, Maktubat & Yawaqit wal Jawahir)。モハammad預言者の賢妻アイシャ

43. 朝な夕なアッラーを讃え奉れ。

وَسَبِّحْهُ بُكْرَةً وَأَصِيلًا ﴿٤٣﴾

44. お前たちを暗黒から光明へ導き出さんとして、天使らと同様お前たちを祝福するは彼なり。彼は信ずる人々には慈悲深くまします。

هُوَ الَّذِي يُصَلِّيْ عَلَيْكُمْ وَمَلَائِكَتُهُ لِيُخْرِجَكُمْ مِنَ الظُّلُمَاتِ إِلَى النُّورِ وَكَانَ بِالْمُؤْمِنِينَ رَحِيمًا ﴿٤٤﴾

45. 彼等がアッラーに会い奉る日の挨拶は、「平安あれ」の一語なるべし。而して、アッラーは、彼等のために光荣ある報奨を準備せり。

تَحِيَّاتُهُمْ يَوْمَ يَلْقَوْنَهُ سَلَامٌ وَأَعَدَّ لَهُمْ أَجْرًا كَرِيمًا ﴿٤٥﴾

46. 預言者よ、げにわれらは汝を証人として、朗報の伝達者として、警告者として遣わしたり。

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ إِنَّا أَرْسَلْنَاكَ شَهِيدًا وَمُبَشِّرًا وَنَذِيرًا ﴿٤٦﴾

47. またアッラーの命を奉じて人々をアッラーの許へ召喚する者として、光明を与える燈火として。(注19)

وَدَاعِيًا إِلَى اللَّهِ بِإِذْنِهِ وَسِرَاجًا مُنِيرًا ﴿٤٧﴾

48. されば、信者たちに向って、アッラーから素晴らしい賜物をたまわるべしとの朗報を伝えよ。

وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِينَ بِأَنَّ لَهُمْ مِنَ اللَّهِ نِعْمًا كَبِيرًا ﴿٤٨﴾

49. 而して、不信心者並びに偽信者の徒輩に従うなかれ。彼等の騒ぎはそのままだに捨て置き、ひたすらアッラーに頼れ、守護者として十分なるが故に。

وَلَا تُطِيعِ الْكُفْرَانَ وَالنَّفِيقِينَ وَدَعْ أَذْهَبَهُمْ وَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ وَكَفَى بِاللَّهِ وَكِيلًا ﴿٤٩﴾

50. 汝等信徒たちよ、女の信者と結婚し、体に触れざる前に之を離婚する場合は、お前たちは彼女に規定の期限を待たせる権利を有

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا نَكَحْتُمُ الْمُؤْمِنَاتِ ثُمَّ طَلَقْتُمُوهُنَّ مِنْ قَبْلِ أَنْ تَمْسُوهُنَّ فَمَا لَكُمْ عَلَيْهِنَّ مِنْ عِدَّةٍ

は次の様に語ったと記されている。「彼(モハammad預言者)はカータムルナビーーンであると言いなさい、しかし彼の後に続く預言者がいないと言ってはならない。」(4)預言者としての特性を全て、その身に完全に表していたという意味において、モハammad預言者は最後の預言者であった。カータムは優秀さを表す最高の言葉として、一般的に使われる。又、クルアーンは、モハammad預言者の後に預言者が現れると明示している(7:36)。モハammad預言者自身、彼の後にも預言者の職分は続くものと心に刻んでいた。彼は次の様に語ったと記されている。「もしイブラーヒム(彼の息子)が生きておれば、彼は預言者となったであろう(マジヤー-アルジャナイズ書)。」又以下の様に述べた。「アブー-バクルは、私の後に現れる者たちのうち、預言者を除けば最初の人物である。」

注19 太陽が物質界の中心に位置する様に、モハammad預言者は精神界の要である。彼は天空の太陽であり、他の預言者、神の指導者達は星や月の様にその回りを回り、彼から光を与えられる。彼は次の様に語ったとされる。「私の弟子は数ある星の様であり、その後に従う者は正しく導かれるであろう。」

せず。されば、彼女にながしかの品物を与え、きれいに暇を出すべし。(注20)

51. 預言者よ、われらが汝に妻として許した者は、汝が婚資を払った者、戦利品としてアッラーが汝に与えたもののうち汝の右手が所有する者、汝の父方の叔父の娘と父方の叔母の娘、母方の叔父の娘と母方の叔母の娘で汝と共に移住し来たる者、並びに女の信者で自らその身を預言者に捧げんと欲し、預言者も彼女との結婚を望む場合なり。但し、こは汝のみに許された特権にして、他の信徒たちには許されぬ。われらはすでに信徒たちに、信者の妻やその右手が所有する者に関するわれらの命じたことを知らせたり、汝が信徒たちにその規定を説明する上に支障なからしめんがために。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

52. 汝は妻たちのうち欲するものを退け、欲する者を迎え入れるを得べし。また、汝は、退けし者のうち、汝の欲する者を連れ戻すとも差し支えなし。その方が彼女たちの気持は落ちつき、悲しまず、汝が彼女たちに与えたもので皆満足するであろうからより一層妥当なり。(注21) アッラーはお前たちが心に抱くものを知り給う。アッラーは全知者、寛容者にまします。

53. なれど汝は、今後他の女を娶ることを許されず、またたといその美貌が汝を魅すとも、他の女を以て現在の妻に替えることも許されず、但し汝の右手が所有する者は除

تَعْتَدُ وَنَهَا^① فَمَتَّعُوهُنَّ وَسَرَّحُوهُنَّ سَرَاحًا جَمِيلًا^②

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ إِنَّا أَعْلَمْنَا لَكَ أَزْوَاجَكَ الَّتِي أَتَيْتَ
أُجُورَهُنَّ وَمَا مَلَكَتْ يَمِينُكَ وَمِمَّا أَفَاءَ اللَّهُ عَلَيْكَ
وَبَدَتِ عَيْتِكَ وَبَدَتِ عَمَّتِكَ وَبَدَتِ خَالَكَ وَبَدَتِ
خَلَّتِكَ الَّتِي هَاجَرَتْ مَعَكَ وَامْرَأَةً قَوْمِيَّةً إِنْ
وَهَبْتَ نَفْسَهَا لِلنَّبِيِّ إِنْ أَرَادَ النَّبِيُّ أَنْ يَنْتِكَحَهَا
خَاصَّةً لَكَ مِنْ دُونِ الْمُؤْمِنِينَ قَدْ عَلِمْنَا مَا
فَرَضْنَا عَلَيْهِمْ فِي أَزْوَاجِهِمْ وَمَا مَلَكَتْ أَيْمَانُهُمْ
لِيُكَلِّلَ بِكَ اللَّهُ عَلَيْكَ حَرْجٌ وَكَانَ اللَّهُ غَفُورًا رَحِيمًا^③

تُرِيحِي مَنْ تَشَاءُ مِنْهُنَّ وَتُؤَيِّ إِلَيْكَ مَنْ تَشَاءُ
وَمَنْ ابْتَعَيْتَ مِنْ عَزَلْتَ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْكَ ذَلِكَ
أَدْنَى أَنْ تَقْرَءَ عِنْهُنَّ وَلَا يَحْزَنَ وَيَرْضَيْنَ بِمَا
أَتَيْتَهُنَّ كُلَّهُنَّ وَاللَّهُ يَعْلَمُ مَا فِي قُلُوبِكُمْ وَكَانَ
اللَّهُ عَلِيمًا حَلِيمًا^④

لَا يَحِلُّ لَكَ النِّسَاءُ مِنْ بَعْدُ وَلَا أَنْ تَبَدَّلَ بِهِنَّ
مِنْ أَزْوَاجٍ وَلَوْ أَعْجَبَكَ حُسْنُهُنَّ إِلَّا مَا مَلَكَتْ

注20 「きれいに暇を出すべし。」は、次の様な意味を持つ。(1)離婚した女性を責めてはいけない。(2)離婚女性には通常規定の婚資以上のものを支払われるべきだ。(3)離婚後、女性の行動の自由を束縛してはならない。

注21 モハammad預言者の妻達が、彼と添い遂げるか、物質的に豊かな生活つまり世俗のものを選ぶかその選択権を与えられた一方、モハammad預言者は、いずれの妻と添い遂げ、又、別れるかの選択権を与えられた。妻達は即座に意を表した。彼女達は彼と運命を共にする方を選んだ。モハammad預言者は全てに等しく思いやりがあった。彼女達皆を選ぶと示した。モhammad預言者の決意は彼女達を大変喜ばせた。「あなたが彼女達に与えたもので彼女たちは皆、喜んだ、」という意のことが文中にも示されている。

く。(注22) アッラーは萬事を監視し給う。

第七項

54. 汝等使徒たちよ、許しなくば、食事の支度が整うまで待てずに預言者の家に入るなかれ。しかし、招かれた時には入り、食事がすめば無駄話に長居することなく、直ちに辞去せよ。(注23) 預言者は長居されて迷惑するも、お前たちに帰れとも云い出しかねるがためなり。されどアッラーは、真実を告げるに遠慮せず。また、お前たちが、預言者の妻たちに何かを頼む場合は、帳の背後からそれを頼め。(注24) かくするは、お前たちの心のためにも、また彼女たちの心のためにも汚れることなし。而して、お前たち、アッラーの使徒に迷惑をかけるようなことをするなかれ。また彼亡き後、その妻たちと結婚すべからず。(注25) げにそはアッラーの目には大罪なり。

55. お前たち、事を表に現わすとも、或いはそれを隠そうとも、アッラーは一切萬事を深知し給う。

56. 彼女たちがヴェールなしに接して差し支えない相手は、自分の父、息子、兄弟、兄弟の子等、姉妹の子等、家の女たち、並びに彼女たちの右手が所有する者たちなり。預言者の妻たちよ、アッラーを畏れ敬え。げにアッラーは萬事を検証し給う。

يَبِينُكَ وَكَانَ اللَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ رَقِيبًا ۝٥٤

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَدْخُلُوا بُيُوتَ النَّبِيِّ إِلَّا أَنْ يُؤْذَنَ لَكُمْ إِلَى طَعَامٍ غَيْرِ نَظِيرٍ لَهُ وَلَكِنْ إِذَا دُعِيتُمْ فَادْخُلُوا إِذَا طَعِمْتُمْ فَانْتَشِرُوا وَلَا مُسْتَأْنِسِينَ لِحَدِيثٍ إِنَّ ذَلِكُمْ كَانَ يُؤْذِي النَّبِيَّ فَيَسْتَجِيبُ مِنْكُمْ وَاللَّهُ لَا يَسْتَجِيبُ مِنَ الْحَقِّ وَإِذَا سَأَلْتُمُوهُنَّ مَتَاعًا فَسْأَلُوهُنَّ مِنْ وَرَاءِ حِجَابٍ ذَلِكُمْ أَطْهَرُ لِقُلُوبِكُمْ وَقُلُوبِهِنَّ وَمَا كَانَ لَكُمْ أَنْ تُؤْذُوا رَسُولَ اللَّهِ وَلَا أَنْ تَنْكِحُوا أَزْوَاجَهُ مِنْ بَعْدِهِ أَبَدًا إِنَّ ذَلِكُمْ كَانَ عِنْدَ اللَّهِ عَظِيمًا ۝٥٥

إِنْ تُبْدُوا شَيْئًا أَوْ تُخْفُوهُ فَإِنَّ اللَّهَ كَانَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمًا ۝٥٦

لَا جُنَاحَ عَلَيْهِنَّ فِي آبَائِهِنَّ وَلَا أَبْنَائِهِنَّ وَلَا إِخْوَانِهِنَّ وَلَا أَبْنَاءَ إِخْوَانِهِنَّ وَلَا نِسَائِهِنَّ وَلَا مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُهُنَّ وَالتَّقِيْنَ ۝٥٧ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ شَهِيدًا ۝٥٨

注22 この節がヒジラ7年に啓示されモハammad預言者はこれ以上、結婚しないことが定められた。彼は又、当時の妻のいずれとも離婚してはならないとされていた。それはおそらく、信徒の母たる彼女達の尊厳を重んじるからであり、又、彼女達が世俗の快楽よりも、モハammad預言者の家庭における厳しさを選んだからであろう。神は彼女達の犠牲的行為を認められ、モハammad預言者に、それ以上の結婚と当時の妻達との離婚を共に禁じられた。

注23 招かれざる家を訪れてはならない。招かれた時は約束の時間を守らねばならない。遅れるのは早過ぎるのと同じく良くない事だ。食後は無駄話に、自らのそして他人の時間を浪費する事無く、辞去すべし。

注24 この戒律は、異性間の過度の親交を戒めたものである。これは、全ての女性に向けられている。

注25 モハammad預言者に残された寡婦との婚姻は重罪であると、この節に示されていた。モハammad預言者の妻であるが故の信徒の母という立場上、宗教上の息子が彼女達と結婚するのは、彼女達の宗教上の尊厳を犯す事となるからであった。

57. アッラーとその天使たちは預言者を祝福す。汝等信徒たちよ、お前たちも彼を祝福し、平安の言葉を以て挨拶せよ。

إِنَّ اللَّهَ وَمَلَائِكَتَهُ يُصَلُّونَ عَلَى النَّبِيِّ يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا صَلُّوا عَلَيْهِ وَسَلِّمُوا تَسْلِيمًا ﴿٥٧﴾

58. げにアッラーとその使徒を非難する者、(注26) アッラーは彼等に現世にても来世にても呪いをかけ、恥づべき懲罰を用意せり。

إِنَّ الَّذِينَ يُؤْذُونَ اللَّهَ وَرَسُولَهُ لَعَنَهُمُ اللَّهُ فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ وَأَعَدَّ لَهُمْ عَذَابًا مُهِينًا ﴿٥٨﴾

59. 故なくして信徒の男女を非難する者は、中傷と明白な罪に対する責めを負うべし。

وَالَّذِينَ يُؤْذُونَ الْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ بَغَيْرِ مَا كَسَبُوا فَتَعَذِّبُ اللَّهُ بَهُنَّ وَأَعْتَابًا مُبِينًا ﴿٥٩﴾

第八項

60. 預言者よ、汝の妻たち及び娘たち、並びに信徒の女たちにゆつたりした長衣をまといと告げよ。(注27) かくすれば識別され易く、またからかわれずにすむ。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ قُلْ لِّأَزْوَاجِكَ وَبَنَاتِكَ الْمُؤْمِنَاتِ يُدْنِينَ عَلَيْهِنَّ مِنْ جَلَابِيبِهِنَّ ذَلِكَ أَدْنَى أَنْ يُعْرَفْنَ فَلَا يُؤْذَيْنَ وَكَانَ اللَّهُ غَفُورًا رَحِيمًا ﴿٦٠﴾

61. もしも偽信者や、心に病のある者、並びに邑に流言蜚語を流して人心を動揺させる徒輩が、その行為をやめぬのなら、われらは必ず汝を激励して彼等と戦わせしむべし。(注28) さすれば彼等が汝の隣人として邑に住むのは、ただ暫時の間となるべし。

لَئِنْ لَّمْ يَنْتَهِ السُّفْقُونَ وَالَّذِينَ فِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ وَالْمُرْجِفُونَ فِي الْمَدِينَةِ لَنُغْرِيَنَّكَ بِهِمْ ثُمَّ لَا يُجَاوِرُونَكَ فِيهَا إِلَّا قَلِيلًا ﴿٦١﴾

62. 彼等は呪われるべし。何処にても彼等は見つけられ次第捉えられ、殲滅されん。(注29)

مَلْعُونِينَ أَيْنَمَا ثَقِفُوا أَخْدُوا وَقْتُلُوا قَتْلًا ﴿٦٢﴾

注26 「アッラーを非難する」とは神の目的遂行を妨げる事であり「使徒を非難する」とは神の使徒に対する誹謗を意味する。

注27 イスラム教のベールには二つの目的がある。それは閑居を命じ、礼儀をわきまえ、威厳ある振舞を勉めるものである。女性にはむやみに男性と出会う事を許されず、外出時の服装に関する規定に従う様求められている。ベールについての詳細は、24章32節の脚注参照の事。

注28 メディナの偽善者及びユダヤ教徒は、イスラム教徒に対してあらゆる妨害を行ったが、彼等の主なやり方は、イスラム教に関する偽りの話を広める事であった。しかし彼等の権力と威信が失われた時、この悪事は完全に敗北を喫した。「必ず汝を激励して」というのは次の様な意味でもある。「我々は必ずや貴方をして彼等を抑えさせるであろう。さもなくば彼等の上に君臨する権限を授けよう。」

注29 不幸なユダヤ人達は代々屈辱感にさいなまれて来た。彼等がパレスチナに帰還し、イスラエル国家を設立したのは一時的な局面でしかない様だ。

63. 過ぎ去りし人々に対するアッラーの流儀はかくの如くなりき。而して、汝は、アッラーの流儀に決して変更なきことを知らん。

سُنَّةَ اللَّهِ فِي الَّذِينَ خَلَوْا مِنْ قَبْلُ وَلَنْ يَجْدَ لِسُنَّةِ
اللَّهِ تَبْدِيلًا ﴿٣٧﴾

64. 人は最期について汝に問う。云え、「それは独りアッラーのみぞ知る」と。而して、その最期が近くか否かを誰が汝に語り得るか？

يَسْأَلُ النَّاسُ عَنِ السَّاعَةِ قُلْ إِنَّمَا عِلْمُهَا عِنْدَ
اللَّهِ وَمَا يُدْرِيكَ لَعَلَّ السَّاعَةَ تَكُونُ قَرِيبًا ﴿٣٨﴾

65. げにアッラーは不信心者どもを呪詛し、彼等のために燃え盛る火を用意せり。

إِنَّ اللَّهَ لَعَنَ الْكَاذِبِينَ وَأَعَدَّ لَهُمْ سَعِيرًا ﴿٣٩﴾

66. 彼等は永劫にその中に住み留まらん。そこでは味方もなければ助け手もなし。

خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا لَا يَجِدُونَ وَلِيًّا وَلَا نَصِيرًا ﴿٤٠﴾

67. 彼等の顔が火の中でぐるぐる廻される日、彼等は初めて云わん、「ああ、我等もアッラーの命に従い、その預言者の命に従いたりせば！」と。

يَوْمَ تُقَلَّبُ وُجُوهُهُمْ فِي النَّارِ يَقُولُونَ يَلَيْتَنَّا
أَطَعْنَا اللَّهَ وَأَطَعْنَا الرَّسُولَ ﴿٤١﴾

68. 而して、更に云わん、「主よ、我等は首長たちやお偉方に順えり。然るに彼等は、正しい道より我等を邪道に導けり。(注30)

وَقَالُوا رَبَّنَا إِنَّا أَطَعْنَا سَادَتَنَا وَكُبَرَاءَنَا فَأَضَلُّونَا
السَّبِيلَا ﴿٤٢﴾

69. 主よ、彼等に二重の罰を加え、重き呪いを以て彼等を呪いたまえ」と。

رَبَّنَا آتِهِمْ ضِعْفَيْنِ مِنَ الْعَذَابِ وَالْعَنَهُمُ لَعْنًا

第九項

70. 汝等信徒たちよ、モーゼを誹謗せる輩の如くなるなかれ。(注31) 然しながら、アッラーは、彼等のモーゼについて語れる疑いを晴らしたり。モーゼはアッラーに大いに尊重された者なりき。

كَبِيرًا ﴿٤٣﴾

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَكُونُوا كَالَّذِينَ آذَوْا مُوسَى
فَبَرَّاهُ اللَّهُ مِمَّا قَالُوا وَكَانَ عِنْدَ اللَّهِ وَجِيهًا ﴿٤٤﴾

71. 汝等信徒たちよ、アッラーを畏れ、正直に話せ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللَّهَ وَقُولُوا قَوْلًا سَدِيدًا ﴿٤٥﴾

72. さすればアッラーはお前たちの所業を矯正し、そのもろもろの罪を宥恕せん。而して、アッラーとその使徒の命を遵奉する者は、必ずや素晴らしい幸運をものにせん。

يُصْلِحْ لَكُمْ أَعْمَالَكُمْ وَيَغْفِرْ لَكُمْ ذُنُوبَكُمْ وَمَنْ
يُطِيعِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ فَقَدْ فَازَ فَوْزًا عَظِيمًا ﴿٤٦﴾

注30 前節の言葉は不信心者達の指導者に向けられたものであった。当節では粗野で狡猾な人物について述べてある。他人に対する悪行の責めから逃れ様とするのは人間の性である。

注31 モーゼは様々な中傷を受けたが、それには次の様なものもあった。(1)クアールーン(コラ)という男は、ある女性に、彼女との姦通の罪で彼を告発する様説いた。(2)アールンが民衆の信望を集める様になった事に嫉妬し、モーゼは彼を殺害しようとした。(3)彼はハンセン病と梅毒を病んでいた。(4)サムリは彼を偶像崇拜のかどで告発した。(5)彼の妹は彼にいわれ無き非難を浴びせた。

73. われらは初め、諸天と大地と山々にこの神聖な掟の保管を求めたり。然るに彼等は之を担うことを辞退し、且つ之を恐れたり。然るに、人類は之を担えり。然しながら人類は敢て不義をなし、且つ愚昧なり。(注32)

74. この故に、アッラーは偽信者並びに多神教徒に、男女の別なく刑罰を科さん。されど、アッラーは、信仰する者には、男女の別なく憐れみを垂れ給う。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

إِنَّا عَرَضْنَا الْأَمَانَةَ عَلَى السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَالْجِبَالِ فَأَبَيْنَ أَنْ يَحْمِلْنَهَا وَأَشْفَقْنَ مِنْهَا وَحَمَلَهَا الْإِنْسَانُ إِنَّهُ كَانَ ظَلُومًا جَهُولًا ﴿٣٢﴾

لِيُعَذِّبَ اللَّهُ الْمُنَافِقِينَ وَالْمُنَافِقَاتِ وَالْمُشْرِكِينَ وَالْمُشْرِكَاتِ وَيَتُوبَ اللَّهُ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ ۗ وَكَانَ اللَّهُ غَفُورًا رَحِيمًا ﴿٣٣﴾

注32 人間は、神の特性を習得し、創造主の姿に似る為に、大いなる天性の力を授けられている(2:31)。これは事実重大な義務であり、全宇宙にあって人間のみが遂行できると知らされた。他は、天使・天・地・山全てその能力を持たない。それ等はその義務の負担を拒んだ。人間がこの義務を受け入れたのは、それを履行できるのが人間しか無かったからである。人間以外の生物は全てこの義務にそむく事を拒んだ。つまり彼等は皆課せられた全ての法を忠実に履行したのである(16:50, 51)。決断力を持つ人間のみ、自らの義務を履みず、神の律法にそむいた。当節のこの解釈は41:12で裏付けされている。

سُورَةُ سَبَأٍ مَكِّيَّةٌ

サバー

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 天地の一切を統べ給うアッラーに讃えあれ。
来世の讚美もまた彼の所有なり。彼は賢哲にして、すべてに通曉し給う。
3. 彼は大地に入るもの並びにそれより出づるものを知り、天より降るもの並びにそこへ立ちのぼるものを知り給う。而して、慈悲深く、寛大にまします。
4. 信ぜざる徒輩は云う、「審判の如きは、我等決して出会うざるべし」と。云え、「断じてさにあらず。見えざるものを知り給う我が主にかけて、それは必ずお前たちを不意に襲わん。天地に於ける一微塵の重さでも、またそれより小なるものも大なるものも、一つとして彼より免れるはなし。そは載せてすべて明快なる經典にあり。(注1)」
5. こは信じて善行を積む者を主が賞せんがためなり。彼等は宥恕を賜り、且つ光榮ある給養も賜るべし」と。
6. 然れども、われらの神兆に抵抗し、その計画を妨げんとする者は、厳しい懲罰に遭はせん。
7. 知識を賜れる者は、主より汝に啓示されるものは真理であり、偉大にして讚美され

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

أَلْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي لَهُ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ
وَلَهُ الْحَمْدُ فِي الْآخِرَةِ وَهُوَ الْحَكِيمُ الْخَبِيرُ ①

يَعْلَمُ مَا يَلْجُ فِي الْأَرْضِ وَمَا يَخْرُجُ مِنْهَا وَمَا
يَنْزِلُ مِنَ السَّمَاءِ وَمَا يَعْرُجُ فِيهَا وَهُوَ الرَّحِيمُ
الْعَفُودُ ②

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لَا تَأْتِينَا السَّاعَةُ قُلْ بَلَىٰ وَ
رَبِّي لَتَأْتِيَنَّكُمْ عَلِيمُ الْغَيْبِ لَا يَعْرِبُ عَنْهُ مِثْقَالُ
ذَرَّةٍ فِي السَّمَوَاتِ وَلَا فِي الْأَرْضِ وَلَا أَصْغَرُ مِنْ
ذَلِكَ وَلَا أَكْبَرُ إِلَّا فِي كِتَابٍ مُبِينٍ ③

لِيَجْزِيَ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ أُولَٰئِكَ لَهُمْ
مَغْفِرَةٌ وَرِزْقٌ كَرِيمٌ ④

وَالَّذِينَ سَعَوْا فِي آيَاتِنَا مُعْجِزِينَ أُولَٰئِكَ لَمْ يَكُنْ لَهُمْ
عَذَابٌ ⑤

مِنْ رَبِّهِمْ ⑥
وَيَرْسِئَ الَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ الَّذِي أُنْزِلَ إِلَيْكَ مِنْ
رَبِّكَ هُوَ الْحَقُّ لَا يَهْدِي إِلَىٰ صِرَاطٍ الْعَزِيزِ

注1 前節の主題は、当節で更に詳しく述べられており、善悪に係わらず行動を伴わなければ報いも得られないと示されている。イスラム教に敵対し、イスラム教徒を迫害すれば必ずや罰を受けるであろうと、不信心者は警告されている。

るべき御方への道に導くものなることを知る。

④ الْحَيْدُ

8. されど、信ぜざる者どもは云う、「我等はお前たちに、お前たちが粉々に砕けた後、再び新たな創造物として甦らされんと説く者を、教えようか？

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا هَلْ نَدُكُمْ عَلَىٰ رَجُلٍ يَمِينُكُمْ
إِذَا مَرِئْتُمْ كُلَّ مَرْجِيٍّ إِنَّكُمْ لَفِي خَلْقٍ جَدِيدٍ ④

9. 彼はアッラーの御意思に反対して嘘をつきたるか、それとも気が狂れたるか？」と。然らず、懲罰を被り且つ迷誤の中に遠のくは、来世を信ぜざる彼等なり。

أَفَتَرَىٰ عَلَىٰ اللَّهِ كَذِبًا أَمْ بِهِ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ
بِالْآخِرَةِ فِي الْعَذَابِ وَالضَّلَالِ الْبَعِيدِ ④

10. 彼等は、天地に於ける己が前後にあるものによって如何に取り囲まれているかを、知らざるか？もしわれら欲しなば、大地をして彼等を呑み込ましめ、或いは天の一角を彼等の上に墜落せしめ得べし。(注2)げにこの中には、悔い改めることごとくの僕への神兆あり。

أَفَلَمْ يَرَوْا إِلَىٰ مَا بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ مِنَ السَّمَاءِ
وَالْأَرْضِ إِنْ نَشَأْ نُخَسِّفْ بِهِمُ الْأَرْضَ أَوْ نُسْقِطْ
عَلَيْهِمْ كِسْفًا مِنَ السَّمَاءِ إِنْ فِي ذَلِكَ لَآيَةٌ لِّكُلِّ عَبْدٍ
مُّنِيبٍ ④

第二項

11. われらは、ダビデに恩寵を垂れて、云えり、「汝等山々よ、(注3)ダビデと共にアッラーの讃美の歌を歌え、(注4)汝等鳥たちも」と。而して、われらはダビデのために鉄を軟かにして、(注5)

وَلَقَدْ آتَيْنَا دَاوُدَ مِنَّا فَضْلًا يُجِبَالٍ أَوْيَٰ مَعَهُ
الطَّيْرَ وَآتَيْنَاهُ الْحَدِيدَ ⑤

12. 云えり、「鎧を作れ、身動きを考えその鎖帷子の環を小さく整えよ。而して、善行にいそしめ。げにわれはお前たちのすることを照覧す」と。

أَيُّ أَعْمَلٍ سَيُفَعِّقُ وَقَدْ رَفَعْنَا السُّرُورَ وَأَعْمَلُوا صَالِحًا
إِنِّي بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ⑥

13. またわれらはソロモンに風を服従せしめたり、朝のひと吹きで一箇月の道程を旅し、夕のひと吹きで1箇月の道程を旅する風

وَلِسُلَيْمَانَ الرِّيحَ عُدُّوْهَا شَهْرٌ وَرُدَّوْهَا شَهْرٌ
أَسْأَلُكَ عَنْ الْقِطْرِ وَمِنَ الرِّجِّ مَنْ يَعْمَلْ بَيْنَ

注2 「大地をして彼等を呑み込ましめ」という箇所は、地上のしるしを述べており、「天の一角を彼等の上に墜落せしめ」は、天のしるしに言及したものである。

注3 山岳民族の事。12:83にも類似表現がある。

注4 21:80 参照。

注5 「鉄を軟かにして」は、次の事を指す。鉄製兵器製造技術がダビデにより開発され、次節に述べられている様に彼はその技術を応用してよろいを作り上げた。

を。(注6)またわれらは、ソロモンのため
に溶銅の泉を湧き出せしめたり。また妖靈
の或る者には、主の命を奉じてソロモンの
もとで働かさせり。而して、われらは彼等
に云えり、われらが命令に背く者あらば、
その者に火焙^{ひあぶり}の懲罰を味わしめんと。

يَكِدْهِ بِأَذْنِ رَبِّهِ وَمَنْ يَرْغُ مِنْهُمْ عَنْ أَمْرِنَا نَذَرُهُ
مِنْ عَذَابِ السَّعِيرِ ⑬

14. かくて彼等は、ソロモンの欲するもの、宮
殿や彫像や貯水池の如き鉢や固定した大鍋
を作りたり。(注7)而して、われらは云え
り、「汝等ダビデの家の子らよ、感謝に満ち
て働け」と。されど、わが僕らの中には、
感謝するものは僅かなり。

يَعْمَلُونَ لَهُ مَا يَشَاءُ مِنْ مَخَابِلَ وَتَمَاثِيلَ وَحِفَانٍ
كَالْجَوَابِ وَقَدْ وَرُسِيَتْ أَعْمَلُوا آلَ دَاوُدَ شُكْرًا
وَقَلِيلٌ مِّنْ عِبَادِيَ الشَّاكِرِينَ ⑭

15. 而して、われらがソロモンの死を定めたる
時、一匹の地虫がソロモンの杖を噛めるこ
とを除けば、その死を示すものは何ものな
かりき。ソロモンが地に倒れるに及んで、妖靈
たちは、不可視なるものを知りたりせば、
この恥ずべき苦役に長く服しはせざりしも
のを、と痛切に悟りたり。(注8)

فَلَمَّا قَضَيْنَا عَلَيْهِ الْمَوْتَ مَا دَلَّهُمْ عَلَى مَوْتِهِ إِلَّا
دَابَّةُ الْأَرْضِ تَأْكُلُ مِنْسَاتَهُ فَمَا خَزَّ تَجَنَّبَتْ
الْحِجْنَ أَنَّ لَوْ كَانُوا يَعْلَمُونَ الْغَيْبَ مَا لَبِثُوا فِي
الْعَذَابِ الْمُهِينِ ⑮

16. 昔サバのために、その故国に神兆あり。す
なわち二つの果樹園が、一つは右に、一つ
は左にありて、われらは彼等に云えり、「お
前ちの主が授けたる食物を食し、主に感謝
し奉れ。国麗しく、主は慈悲深くまします」
と。(注9)

لَقَدْ كَانَ لِسَبَإٍ فِي مَسْكِنِهِمْ آيَةٌ جَنَّتِ عَنْ يَمِينٍ
وَشِمَالٍ هُ كُلُوا مِنْ رِّزْقِ رَبِّكُمْ وَاسْكُرُوا لَهُ بَلْدَةً
كُتِبَ عَلَيْهَا ذِكْرٌ غَفُورٌ ⑯

注6 ソロモンの領土はシリア北部から、地中海東岸沿いに紅海におよび、アラビア海に沿ってペルシャ湾
にまで拡大した。事実、ソロモンの時代に、イスラエル王国は富と権勢は絶頂にあった。当節にある「風」と
いう語は、権勢という意味を持つ。又、ソロモンは商隊を保有し(列王上；9章26-28節、Jew. Enc. 11巻、
P 437)彼の下に産業と技能は非常に発達し、彼は野蛮で反抗的な山岳民族を征服し配下に入れたと示されて
もいる(歴代志略下2章18節及び4章1、2節)。

注7 栄華を極め、権力と教養を備えた君主であると同時に、ソロモンはイスラエル建国者の子息でもあつ
た。彼は建築に、殊の他、関心を持ち、彼の下で建築技術は大幅に向上した。イスラエルの寺院は、彼の建築
における趣味の良さを良く表している。

注8 ソロモンの無能な息子で後継者でもあったレハベアムの支配力は弱く、ソロモンが作り上げた強大な
王国は分裂してしまった(列王上；12、13、14章とJewish. Enc. "Rehoboam")。

注9 27：23で述べられたサバは、サナー又はマアーリブとも呼ばれる地から旅程にして三日かかるイエメ
ンの町であった。この町の名は旧約聖書、ギリシャ、ローマ、アラビア文学、特に南アラビアの碑文によく見
られる。サバの住民は豊かで教養も高く、神により人生のあらゆる快適さをふんだんに与えられていた。国全
体がダムと灌漑設備により豊饒で、そこには庭園や小川が見られた。防壁やダムの様な農業振興の為の公共設
備が施されてあったが、中でもマアーリブのダムは最も素晴らしいものであった(Enc. of Islam, 巻, P 6)。

17. 然るに彼等背きたれば、われらは彼等にすさまじい洪水を浴せたり。(注10) 而して、われらは、その素晴らしい二つの果樹園の代わりに苦い実を結ぶ御柳と少しばかりのハマナツメの二園を与えたり。

18. かくの如くわれらが彼等に報復したるは、その忘恩なるが故なり。われらがかくの如く報復するは、ただ忘恩者だけなり。

19. またわれらは、サバとわれらが祝福せる邑々との間に目につきやすい幾つかの邑を設け、それらの間に楽な旅程を定めて云えり、「これらの邑々を通して、昼夜をとわず安心して旅せよ」と。(注11)

20. 然るに、サバ人は神に感謝する代りに云えり、「主よ、我等の旅程を更に長くなし給え」と。(注12) かくて、彼等自らその身を誤りたれば、われらは彼等を徹底して粉砕分散し、後の世の語り草となせり。げにこの中には、堅忍不拔にして感謝の念あつき人々へのさまざまなる神兆あり。

21. 而して、イブリースは、一部の真の信者を除いて、彼等が自分に従えるが故に、彼等に対する自分の判断が正確なりしことを知る。(注13)

فَاعْرَوْضُوا فَاَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ سَيْدَ الْعَرِمِ وَبَدَّ لَهُمْ
يَجْنَتِيهِمْ جَنَّتَيْنِ ذَوَاتِىْ اُكْلِ خَطِطٍ وَ اُنْثٰى وَ شَىْ
مِنْ سِدْرٍ قَلِيلٍ ⑩

ذٰلِكَ جَزَيْنٰهُمْ بِمَا كَفَرُوْا وَ اَوْهَلْ نُجْزِى الْكَافِرِيْنَ ⑪
وَ جَعَلْنَا بَيْنَهُمْ وَ بَيْنَ الْقَرْىِ الْاَلْبِيْ بَرَكْنَا فِيْهَا
قَرْىً ظَاهِرَةً وَ قَدَرْنَا فِيْهَا السَّبْءَ سَبْعًا فِيْهَا
لِيَالٍ وَ اَيَّامًا اَمِيْنِيْنَ ⑫

فَقَالُوْا رَبَّنَا بُعِدْ بَيْنَ اَسْفَارِنَا وَ ظَلَمُوْا اَنْفُسَهُمْ
فَجَعَلْنٰهُمْ اَحَادِيْثَ وَ مَوْقِفٰتُهُمْ كُلُّ صَرْفٍ اِنْ فِى
ذٰلِكَ لَايَةٍ لِّكُلِّ صَبَّارٍ شٰكُوْرٍ ⑬

وَ لَقَدْ صَدَّقَ عَلَيْهِمْ اِبْلِيسُ ظَنَّهُ فَاتَّبَعُوْهُ اِلَّا
قَرِيْنًا مِّنَ الْمُؤْمِنِيْنَ ⑭

注10 サバの住民達の富を守っていたマアールブのダムが大洪水で決壊し、全土が水に漬かり、被害は広範囲に及んだ。美しい庭園、小川、芸術作品に満ちた国土は廃墟と化してしまった。ダムはおよそ長さ2マイル、高さ120フィートあった。それは西暦一世紀あるいは二世紀に破壊の目にあった。

注11 「祝福せる邑々」とは、ソロモン王国の中心地であるパレスチナの町を指している。サバの住民はソロモン王国と盛んに貿易を行っていた。「目につきやすい幾つかの邑」とは、互にすぐ見える程近接した二つの町という意味である。又、主要な町という意味もあり、イエメンからパレスチナ及びシリアへ抜ける道がよく使われ、安全で好まれていた事を示す。ミュールによれば、イエメンからシリアへ向かう街道沿いのハダラムウトからマイラーまでに70の宿があった。この道は人通りが多く安全であり、両側には並木が植えられていた。

注12 この言葉はサバの住民の語ったものとされているが、事実、神の戒律に従わない為窮地に陥った当時の彼等の様子が示されている。人通りが多く栄えた街道はさびれてしまった。「我等が旅程を更に長くなし給え」という言葉は次の事を示す。街道沿いの町の多くがさびれてしまい、宿から宿への距離が長くなり、安全性も失われた。サバの住民は絶滅し、その痕跡は何も留められなかった。彼等は唯、語り難がれるのみとなった。

注13 サタンは、サバの住民達をうまく堕落させられるだろうと見ていたが、彼等の悪事により、このサタンの思惑は当たる事となった。この悪人達やその悪事に対するサタンの判断は17:63に述べられており、サタンが、アダムの子孫をわずかな例を除いて滅ぼすと語ったとそこに書かれてある。

22. されどイブリースは、彼等を支配せざりしなり。(注14) ただわれらは、来世を信ずる者と、^{これ}之を疑う者とを識別せんがためなり。汝の主は萬事を監視し給う。

第三項

23. 云え、「お前たちがアッラー以外に神々ありと主張せる者に訴えよ。(注15) 彼等は天地に於ける一微塵の重さだに左右する能わず、また天地の創造に於て如何なる役割も果たさず、またアッラーは彼等の中に如何なる補佐も有せず」と。

24. アッラーが許せる者(注16)を除いて、どんな執り成しもアッラーに対して無益なり。やがて彼等の心(注17)から恐怖が消えた時、彼等(注18)は問わん、「主は何んと言いたるか?」と。使徒たち(注19)は答えん、「真理なり」と。主は至高にして、偉大なる御方にまします。

25. 云え、「天地からお前たちに食物を与えるは誰ぞ?」と。云え、「アッラーなり。我等か、お前たちか、そのどちらかが正道の上にある、どちらかが明白なる迷誤の中にあるなり」と。(注20)

26. 云え、「お前たちは我等の罪について問われず、我等もまたお前たちの行為について問われざるべし」と。

وَمَا كَانَ لَهُ عَلَيْهِمْ مِنْ سُلْطَانٍ إِلَّا لَنَعْلَمَ مَنْ يُوَفِّي
بِالْآخِرَةِ مِمَّنْ هُوَ مِنْهَا فِي شَكٍّ وَرَبُّكَ عَلَى كُلِّ
شَيْءٍ حَفِيفٌ ﴿٢٣﴾

قُلِ ادْعُوا الَّذِينَ رَعَيْتُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ لَا يَمْلِكُونَ
مِثْقَالَ ذَرَّةٍ فِي السَّمَوَاتِ وَلَا فِي الْأَرْضِ وَمَا لَهُمْ
فِيهِمَا مِنْ شِرْكٍَ وَمَا لَهُ مِنْهُمْ مِنْ ظَهِيرٍ ﴿٢٤﴾

وَلَا تَنْفَعُ الشَّفَاعَةُ عِنْدَهُ إِلَّا لِمَنْ أَذِنَ لَهُ حَتَّى
إِذَا فُزِعَ عَنْ قُلُوبِهِمْ قَالَ أَمَّا مَاذَا قَالَ رَبُّكُمْ فَالَوْ
الْحَقُّ وَهُوَ الْعَلِيُّ الْكَبِيرُ ﴿٢٥﴾

قُلْ مَنْ يَرْزُقُكُمْ مِنَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ قُلِ اللَّهُ
وَإِنَّا أَوْ إِيَّاكُمْ لَعَلَى هُدًى أَوْ فِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ﴿٢٦﴾

قُلْ لَا تَسْأَلُونَنَا عَنْ آجِرْمَنَا وَلَا نَسْأَلُ عَنْكُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٢٧﴾

注14 サタンは人間に対して如何なる權威も持ち合わせていない。人間が精神的に墮落するのは、自らの誤った信仰や、悪事によるものである。

注15 不信心者は、彼等の偽りの神にイスラム発展の疎止を求めてみよと挑まれ、偽の神にはそれができないと告げられている。事実、この世の如何なる力を持ってしても、真実が広まるのを疎止する事はできないのである。

注16 モハammad預言者。この言葉は又、執り成しがその者の有利になる様行われても良いと神の認める人物を指す。

注17 執り成し手の心。

注18 裁かれる罪深き人々。

注19 執り成し手又は神の使徒。

注20 確かに我々(信者)は正しく、貴方達(不信心者)は誤っている。

27. 云え、「主は我等を皆同時に召し給い、然る後、事实に基いて審判し給う。アッラーこそは最も有能な裁判官、能く百事を知り給う」と。(注 21)
28. 云え、「お前たちが、同僚として彼と併せ祀りし神々を我に示せ。否、お前たちは示し得ず。なんとなれば、彼は偉大にして、賢哲なるアッラーなり」と。
29. われらが汝を全人類に遣わしたは、ただ朗報伝達者並びに警告者としてのみ。然るに、世人の大半は之を知らず。(注 22)
30. 彼等は云う、「もしお前の言葉が事実なら、その約束が実現せらるるはいつの日ぞ?」と。
31. 云え、「お前たちは或る日を以て約束されているが、その日をばお前たちは一瞬たりとも遅速し得ざるなり」と。(注 23)

第四項

32. 信ぜざる者どもは云う、「我等はこのクルアーンとこれに先だつ經典も信じはせぬ」と。汝もし不義者が主の御前に連行せられ、互に罪をなすり合っているところを見得るならば。現世で弱者と見なされし者が、驕慢なりし者に向つて云わん、「もしお前たちなかりせば、我等は必ず信者たりしものを」と。(注 24)

قُلْ يَجْمَعُ بَيْنَنَا رَبُّنَا ثُمَّ يَفْتَحُ بَيْنَنَا بِالْحَقِّ وَهُوَ الْفَاتِحُ الْعَلِيمُ ﴿٣٤﴾

قُلْ أَرُونِي الَّذِينَ ادَّعَوْتُمْ بِهِ شُرَكَاءَ ۚ كَلَّا بَلْ هُوَ اللَّهُ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿٣٥﴾

وَمَا أَرْسَلْنَاكَ إِلَّا كَافَّةً لِّلنَّاسِ بَشِيرًا وَنَذِيرًا ۚ لِّكُنْ أَكْثَرُ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٣٦﴾

وَيَقُولُونَ مَتَى هَٰذَا الْوَعْدُ إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ﴿٣٧﴾

قُلْ لَّكُمْ مِيعَادُ يَوْمٍ لَا تَسْتَأْذِنُونَ عَنْهُ سَاعَةً ۚ قُلْ وَلَا تَسْتَقْدِرُونَ ۚ ﴿٣٨﴾

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لَن نُّؤْمِنَ بِهَٰذَا الْقُرْآنِ وَلَا بِالَّذِي بَيْنَ يَدَيْهِ وَلَوْ تَرَىٰ إِذِ الظَّالِمُونَ مَوْقُوفُونَ عِندَ رَبِّهِمْ ۖ يَرْجِعُ بَعْضُهُمْ إِلَىٰ بَعْضٍ لِّلْقَوْلِ يَقُولُ الَّذِينَ اسْتَضَعِفُوا لِّلَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا لَوْلَا أَنْتُمْ لَكُنَّا مُؤْمِنِينَ ﴿٣٩﴾

注 21 この節はメッカの陥落について述べたものと一般的に受け取られている。イスラム教徒と不信者いづれが正しいいづれが誤りであるか、疑惑の影はこの時払われた。この後、イスラム教徒と敵の心は一つになり、大いなる勝利がもたらされた。

注 22 モハammad 預言者が、この世の終わりまで全人類に神の使者として遣わされたと、クルアーンに繰り返し述べられて来た。21: 108 及び 25: 2 も参照の事。イスラム教のお告げは普遍的であり、クルアーンは究極の啓示書として決定的なものであると主張して来た。

注 23 バドルの戦いの H、又は 32: 6 に述べられた日。この時より一千年は同じ状態が続き、その後、イスラム教が世界的な宗教として受け入れられる時代が始まるであろう。

注 24 罪人が裁きを前にして、自分の罪を他人になすりつけて罰を逃れようとするのは人間の性である。当節及び次の二節にはこの人間の習性が述べられている。

33. すると、驕慢なりし者は弱者と見なされし者に向って云わん、「導きがお前たちに達したる後、お前たちをその導きから邪魔だてしたるは我等だというのか？ 然らず、罪を犯せし者は、お前たち自身なり」と。

34. 弱者と見なされし者再び驕慢なりし者に向って云わん、「然らず、お前たちこそ日夜陰謀をめぐらし、我等にアッラーを信ぜず、アッラーに同位者を配せよと命じたり」と。彼等は刑罰を目のあたりにして初めて自責の念を表明せん。われらは不信心者どもの首に首枷をかけん。彼等はただそのなせることのために罰せられん。

35. われらがいずれかの邑に警告者を遣わすたびに、その邑の裕福な者たちは云えり、「我等はお前の使命を信ぜず」と。(注 25)

36. 彼等は云う、「我等は富と子宝により恵まれており、また懲罰にも遭わざるべし」と。

37. 云え、「げに我が主は御心のままに、或る者にはその給養を殖やし、また或る者には之を減らし給う。されど、世人の大半は之を知らざるなり」と。

第五項

38. お前たちをわれらに近づけせしむるは、お前たちの富や子宝に非ず。然れども、信仰し、善行を積む者は、己れの行為のために二倍の報奨を賜わるべし。而して、安らかき高樓の住居が保証されん。(注 26)

39. 然れども、われらの神兆の目的を挫折させんとして抵抗する者は、必ず刑罰に服せしめられん。(注 27)

قَالَ الَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا لِلَّذِينَ اسْتَضَعِفُوا أَن تَحْنُ
صَدَدُكُمْ عَنِ الْهُدَىٰ بَعْدَ إِذْ جَاءَكُمْ بَلْ كُنْتُمْ
مُجْرِمِينَ ﴿٣٣﴾

وَقَالَ الَّذِينَ اسْتَضَعِفُوا لِلَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا بَلْ مَكْرُ
الْأَيْلِ وَالْتِهَارِ إِذْ تَأْمُرُونَنَا أَنْ نَكْفُرَ بِاللَّهِ وَنَجْعَلَ
لَهُ أَندَادًا وَأَسْرُوا الدَّمَامَةَ لَنَا رَأَوْا الْعَذَابَ وَ
جَعَلْنَا الْأَغْلَاسَ فِي أَعْنَاقِ الَّذِينَ كَفَرُوا أَهْلَ يَجْرُونَ
إِلَّا مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٣٤﴾

وَمَا أَرْسَلْنَا فِي قَرْيَةٍ مِّنْ نَّذِيرٍ إِلَّا قَالَ مُتْرَفُهَا
إِنَّا بِمَا أُرْسِلْتُمْ بِهِ كَافِرُونَ ﴿٣٥﴾

وَقَالُوا نَحْنُ أَكْثَرُ أَمْوَالًا وَأَوْلَادًا وَمَا نَحْنُ بِمُعَذَّبِينَ ﴿٣٦﴾
قُلْ إِن رَّبِّي يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَشَاءُ وَيَقْدِرُ وَلَكِنْ
بِأَكْثَرِ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٣٧﴾

وَمَا أَمْوَالُكُمْ وَلَا أَوْلَادُكُمْ بِالَّتِي تُقَرَّبُكُمْ عِنْدَنَا
زُلْفَىٰ إِلَّا مَنْ آمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا فَلَاُولَٰئِكَ لَهُمْ
جَزَاءٌ الْوَعْدِ الضَّعِيفِ بِمَا عَمِلُوا وَهُمْ فِي الْغُرُفِ آمِنُونَ ﴿٣٨﴾
وَالَّذِينَ يَسْعَوْنَ فِي آيَاتِنَا مُعْجِزِينَ أُولَٰئِكَ فِي
الْعَذَابِ مُخَضَّرُونَ ﴿٣٩﴾

注 25 神の預言者達は、虐げられた人々を社会の正当な地位まで引き上げ、彼等に当然の権利を戻す為遣わされる。それは、ついでに世にも、神のお告げに背くのが富と権力ある者達だからである。

注 26 富と権力が神に近付く手段ではない。むしろ、それが人を神から遠ざける傾向がある。正しい信仰と善行こそが人を真に豊かにし、神の救いと喜びをもたらすのである。

注 27 神の大義がひろまるのを疎止し、神の目的を妨害しようと不信心者達が陰謀を企てても、それは無駄

40. 云え、「げに我が主は御心のままに、その僕らの或る者には給養を殖やし、また或る者には之を減らし給う。而して、何であれお前たちが費せし分は、主は必ず埋め合わすべし。主は無上の供給者なり。

قُلْ إِنَّ رَبِّي يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَن يَشَاءُ مِنْ عِبَادِهِ وَ يَقْدِرُ لَهُ ۖ وَمَا أَتَقَفْتُمْ مِنْ شَيْءٍ فَهُوَ يُخْلِفُهُ ۖ وَ هُوَ خَيْرُ الرَّازِقِينَ ﴿٤٠﴾

41. 主が同時に彼等を召し寄せる日、主は天使たちに向って訊ねん、「これ等の者はお前たちを崇拜したるか？」と。

وَيَوْمَ يُحْشَرُ هُمْ جَمِيعًا ثُمَّ يَقُولُ لِلْمَلَائِكَةِ أَهَؤُلَاءِ ۖ إِنِّي كُنْتُ بِكُمْ شَهِيدًا ۚ وَإِنَّا لَنَعْلَمُ مَا تُكَلِّمُونَ ﴿٤١﴾

42. 天使たちは答えん、「汝に栄光あれ。我等の守護者は汝におわします。否、彼等は妖霊を拜み、その多くは妖霊を信じたり」と。

قَالُوا سُبْحَانَكَ أَنْتَ وَلِيِّنَا مِنْ دُونِهِمْ بَلْ كَانُوا يَعْبُدُونَ الْجِنَّ ۚ أَكْثَرُهُمْ بِهِمْ مُؤْمِنُونَ ﴿٤٢﴾

43. 不信心者どもはかく云われん、「されば、この日、お前たちは互に相手を益することも害することもなし得ざるべし」と。而して、われらは罪を犯せし者どもに云わん、「お前たちが否定せる業火の罰を味わえ」と。

فَالْيَوْمَ لَا يَسْئَلُكَ بَعْضُكُم بَعْضٌ نَفْعًا وَ لَا ضَرًّا وَ نَقُولُ لِلَّذِينَ ظَلَمُوا ذُوقُوا عَذَابَ النَّارِ الَّتِي كُنْتُمْ بِهَا تُكَذِّبُونَ ﴿٤٣﴾

44. われらの明白なる神兆が彼等に誦誦される時、彼等は云う「この男は、お前たちをして、お前たちの父祖が崇めしものから背かしめんと謀る者にすぎず」と。而してまた云う、「こは捏造せる偽りにすぎず」と。而して不信心者どもは、自分たちに来れる真理について、「こは魔術以外の何ものにも非ず」と云う。

وَ إِذَا تَنَزَّلْنَا عَلَيْهُمْ آيَاتُنَا يَنظُرُونَ ۖ وَإِنَّا لَنَظُنُّهُمْ كَافِرِينَ ۚ يَرِيدُونَ أَن يُصَدِّقُوا مَا كَانُوا يَعْبُدُونَ آبَاءَهُمْ وَ كُفْرًا قَالُوا مَا هَذَا إِلَّا إِنْفِكٌ مِّمَّنْ قَبْلُ ۖ وَ قَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِلْحَقِّ لَمَّا جَاءَهُمْ ۖ إِنَّ هَذَا إِلَّا سِحْرٌ مُّؤْتَمِنٌ ﴿٤٤﴾

45. われらは彼等に、研究させるべく經典を与えざりき、また汝より先に如何なる警告者も遣わさざりき。

وَ مَا آتَيْنَاهُمْ مِنْ كُتُبٍ يَدْرُسُونَهَا وَ مَا أَرْسَلْنَا إِلَيْهِمْ قَبْلَكَ مِنْ نَذِيرٍ ﴿٤٥﴾

46. 彼等に先だつ者も真理を拒みたるが、これ等の者はわれらが彼等に与えたるものの十分の一にも及ばざるに、わが使徒たちを嘘つきとして遇したり。されば、彼等はやがて知るべし、われを否定せる結末が如何に恐ろしいことかを。

وَ كَذَّبَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ ۖ وَ مَا بَلَغُوا مِعْشَارَ ۙ مَا آتَيْنَاهُمْ فَكَذَّبُوا رُسُلِي ۖ فَكَيْفَ كَانَ نَكِيرِ ﴿٤٦﴾

な事であり、必ずや彼らは報いを受ける。

第六項

47. 云え、「我は一言だけお前たちに勧告す。お前たち二人ずつ、または独りでアッラーの前に立ち、とくと考えよ。さすればお前たちの仲間が狂気に非ざることを悟らん。その仲間はただ切迫した厳刑についてお前たちに警告する者にすぎず」と。(注28)

48. 云え、「我はお前たちに如何なる報酬をも求めず、そはお前たちのものなり。わが報酬はただアッラーの許にあり。アッラーは萬事を照覽し給う」と。

قُلْ إِنَّمَا أَعْطِيكُمْ بِوَاحِدَةٍ أَنْ تَقُومُوا لِلَّهِ مَشْئِ
وَقُرْأَى ثُمَّ تَتَفَكَّرُونَ مَا بِصَاحِبِكُمْ مِنْ جِنَّةٍ
إِنْ هُوَ إِلَّا نَذِيرٌ لَكُمْ بَيْنَ يَدَيْ عَذَابٍ شَدِيدٍ ④

قُلْ مَا سَأَلْتُكُمْ مِنْ أَجْرٍ فَهُوَ لَكُمْ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا
عَلَى اللَّهِ وَهُوَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ شَهِيدٌ ⑤

قُلْ إِنْ رَبِّي يَقْذِفُ بِالْحَقِّ عَلَـمُ الْغُيُوبِ ⑥

50. 云え、「真理は来りぬ、されば虚偽は何も創らず、またその復活もなるまじ」と。(注29)

قُلْ جَاءَ الْحَقُّ وَمَا يُبْدِيُ الْبَاطِلُ وَمَا يُعِيدُ ⑦

51. 云え、「我もし誤らば、誤りて我自身を害するのみ。我もし正しく導かるとすれば、そは我が主の啓示のお蔭なり。げに主はすべてを能く聴き、身近にまします」と。

قُلْ إِنْ ضَلَلْتُ فَإِنَّمَا أَضِلُّ عَلَى نَفْسِي وَإِنِ اهْتَدَيْتُ
فِي سَبِيلِ رَبِّي إِنَّهُ سَمِيعٌ قَرِيبٌ ⑧

52. 汝もし彼等の恐れ戦くさまを見るならば、逃れるすべなく、近い場所にて捕わるる彼等を。

وَلَوْ تَرَى إِذْ فِرْعَوْنُ كَلِمَاتٍ وَأُخَذُوا مِنْ مَكَانٍ
قَرِيبٍ ⑨

53. 彼等は云わん、「我等はそれを信ず」と。然れども、彼等如何にして遠き場所から信仰を受容し得んや？(注30)

وَقَالُوا آمَنَّا بِهِ وَأَنَّى لَهُمُ التَّنَازُعُ مِنْ مَكَانٍ
بَعِيدٍ ⑩

注28 この節は、モハammad預言者の主張を、客観的かつ公平に検討してみる様勸めている。不信心者は、モハammad預言者が精神異常であったか否か、先入観や世間的考え方に捕らわれる事なく考察してみる様提言されている。

注29 「何も創らず」という言葉は、偶像崇拜がアラビアに根付く事は無いと強く預言するものである。偶像崇拜は永遠にその国から姿を消すであろう。

注30 「遠き場所」は死後を意味し、不信心者は必ずや死後自らの誤ちを悟るとこの節は示している。彼等は、モハammad預言者の使命が現実とは懸け離れたもので、その実態は根拠の無いものだと思ふ様な憶測をめぐらしている。

54. 彼等は以前、遠方より不可視なるものについてさまざまなる憶測にふけれども、それを信ぜざりき。

وَقَدْ كَفَرُوا بِهِ مِنْ قَبْلُ وَيَقْدِرُونَ بِالْغَيْبِ مِنْ
مَكَانٍ بَعِيدٍ ﴿٥٤﴾

55. 昔の彼等の同類がなされた如く、彼等と彼等の熱望するものとの間には障害が据えられるべし。げに彼等は不安なる疑惑の中にありしなり。(注31)

وَجِلَّ بَيْنَهُمْ وَبَيْنَ مَا يَشْتَهُونَ كَمَا فُعِلَ
بِأَشْيَاءِهِمْ مِنْ قَبْلُ إِنَّهُمْ كَانُوا فِي شَكٍّ مُذِيبٍ ﴿٥٥﴾

注31 イスラム教に敵対する者は、往時の預言者に対抗した者と同じく、自らの魂の叫びに気付く事なく。モハammad預言者の使命を正しく理解できないであろう。



アル・ファーティル

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く^{あま}アッラーの御名^なにおいて。

2. 讚美はすべてアッラーのもの、そは^{あかつち}天地の創造主にして、二翼、三翼、四翼^{しか}の天使を使者として用う。(注1)而して、彼はその創れる者に己れの欲するものを増す。げにアッラーはすべての事に権能を持ち給う。

3. アッラーが人間に授与する慈悲は、(注2)何人も之を抑止する能^{あた}わず。なれど、アッラーが抑止するものは、何人も後に之を開放する能^{あた}わず。げにアッラーは偉大にして、賢哲にまします。

4. 人々よ、お前たちに授与せるアッラーの恩恵^{あはれ}を念え。アッラー以外に、天地^{あめつち}からお前たちに必要物を供給する創造主ましますや? アッラー以外に崇拜するに足る者はなし。然るに、お前たち何処へ顔をそむけるぞや?

5. たとい彼等が汝を拒むとも、げに汝以前にも神の使徒たちは拒まれたり。なれど、物事はすべて、裁決のためにアッラーの許^{いと}へ戻さるるなり。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

الْحَمْدُ لِلَّهِ فَاطِرِ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ جَاعِلِ الْمَلِكَةِ رُسُلًا أُولَىٰ أَخْبَرَةٍ مِثْنَىٰ وَتِلْكَ وَرُبَّ يَزِيدُ فِي الْخَلْقِ مَا يَشَاءُ إِنْ اللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿١﴾

مَا يَفْتَحُ اللَّهُ لِلنَّاسِ مِنْ رَحْمَةٍ فَلَا مُمْسِكَ لَهَا وَمَا يُمْسِكُ فَلَا مُرْسِلَ لَهُ مِنْ بَعْدِهِ وَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿٢﴾

يَا أَيُّهَا النَّاسُ اذْكُرُوا نِعْمَتَ اللَّهِ عَلَيْكُمْ هَلْ مِنْ خَلْقٍ غَيْرِ اللَّهِ يَرْزُقُكُمْ مِنَ السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ فَأَنَّى تُؤْفَكُونَ ﴿٣﴾

وَإِنْ يَكْذِبُوا بِكَ فَقَدْ كَذَّبَتْ رُسُلٌ مِنْ قَبْلِكَ وَإِلَى اللَّهِ تُرْجَعُ الْأُمُورُ ﴿٤﴾

注1 天使達は物質界における諸事の扱いを任されている(79:6)。これは彼等に課せられた任務の一つである。これより更に重要な任務は、神の御意志を神の使者に伝える事だ。啓示を携えた天使達は、一度に二つから四つの神の特性を表し、又それ以上の特性を伝える者もある。アジニハは力の象徴であり、天使はそれぞれ託された任務の重要性に応じた力を持つ事がこの節に示されている。最高位の天使ガブリエルは天使達の長であり、神の使者に啓示を伝授する任務の中でも最も重要なものを託され、それは彼の指揮の下で、成い遂げられるのである。

注2 前節において、神が天地を創造され、人間の物質的、精神的要求に万全の備えをされたと言われているが、当節では、クルアーンの啓示を通して、神が人間に慈悲を授けると定められた事が示されている。

6. 汝等人々よ、アッラーの約束は必ず実現す。
されば、現世に欺かれるなかれ、またアッ
ラーについて欺瞞者に欺かれるなかれ。

يَا أَيُّهَا النَّاسُ إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ فَلَا تَغُرَّنَّكُمُ
الْحَيَاةُ الدُّنْيَا ۖ وَلَا يَغُرَّنَّكُم بِاللَّهِ الْغَوْرُ ①

7. げに悪魔はお前たちの敵なり。されば、敵
として之を扱え。悪魔は、彼等をして燃え
盛る火の住人たらしめんがためにのみ己が
信奉者を誘惑す。

إِنَّ الشَّيْطَانَ لَكُمْ عَدُوٌّ فَاتَّخِذُوهُ عَدُوًّا إِنَّمَا يَدُّو
حَزْبَهُ لِيَكُونُوا مِنْ أَصْحَابِ السَّعِيرِ ②

8. 信ぜざる徒輩には厳しい罰あり。されど、
信じて善行を積む者には、宥恕と素晴らしい
報奨あり。

الَّذِينَ كَفَرُوا لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيدٌ وَالَّذِينَ آمَنُوا
بِح ۖ وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَهُمْ مَغْفِرَةٌ وَأَجْرٌ كَبِيرٌ ③

第二項

9. 己れの悪事が粉飾され、そのために之を善
事と考える者が、信じて善行を積む者と同
じであり得るや？ げにアッラーは己れの
欲する者を迷わし、また欲する者を導き給
う。されば、彼等のために嘆いて、汝の心
をすりへらすなかれ。げにアッラーは彼等
の行動を知り給う。(注3)

أَفَمَنْ زُيِّنَ لَهُ سُوءُ عَمَلِهِ فَرَاهُ حَسَنًا فَإِنْ اللَّهَ
يُضِلْ مَنْ يَشَاءُ وَيَهْدِي مَنْ يَشَاءُ ۖ فَلَا تَذْهَبُ
نَفْسُكَ عَلَيْهِمْ حَسْرَتٌ إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ بِمَا يَصْنَعُونَ ④

10. アッラーこそは風を吹き送り、雲を起し給
う御方。而して、われらは之を枯死せる地
域へと駆り、それによって死せる大地を生
き返らしむ。復活もまたかくの如し。(注4)

وَاللَّهُ الَّذِي أَرْسَلَ الرِّيحَ فَتُثِيرُ سَحَابًا فُسِّفُهُ إِلَى
بَلَدٍ مَيِّتٍ فَأَحْيَيْنَا بِهِ الْأَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا ۚ كَذَلِكَ
النُّشُورُ ⑤

11. 榮譽を希う者は、一切の榮譽がアッラーに
属することを知れ。善言は登りてアッラー
に達し、義しい行いはアッラー之を賞揚す。
されど、悪事を謀る徒輩、彼等には厳しい
刑罰あり。されば、かかるたくらみは空無
に帰さん。

مَنْ كَانَ يُرِيدُ الْغَزَا فَلِلَّهِ الْغَزَا جَمِيعًا ۖ إِلَيْهِ
يَصْعَدُ الْكَلِمُ الطَّيِّبُ وَالْعَمَلُ الصَّالِحُ يَرْفَعُهُ ۚ
وَالَّذِينَ يَمْكُرُونَ السَّيِّئَاتِ لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيدٌ
وَمَكْرُ أُولَٰئِكَ هُوَ يُجَوِّرُ ⑥

注3 モハammad預言者は、人々が精神的幸福を得られる様に願ひ、彼等が真理に刃向かえば深く悲しむと、この節は雄弁に表している。18：7も参照の事。

注4 此処にある復活とは、人が精神的に墮落した状態から立ち直る事を示しており、雨が振れば潤れた地が生氣を取り戻す様に、悪に染まり道德的に退廃した人も、神の啓示という天からの水により蘇るとこの節は述べている。

12. アッラーはお前たちを土より創り、次に一滴の精液より、次にお前たちを夫婦となせり。如何なる女もアッラーに知られずして妊娠し、また子供を分娩することなし。寿命を延ばされて長生きする者も、また命を縮められる者も、一人として天の帳簿に記載せられざるはなし。そは実にはアッラーにはたやすきことなり。(注5)

وَاللّٰهُ خَلَقَكُمْ مِنْ تُرَابٍ ثُمَّ مِنْ نُطْفَةٍ ثُمَّ جَعَلَكُمْ
أَزْوَاجًا وَمَا تَحْمِلُ مِنْ أُنْثَىٰ وَلَا تَضَعُ إِلَّا بِعِلْمِهِ
وَمَا يُعْمَرُ مِنْ مُّعْتَمِرٍ وَلَا يُفْنَىٰ مِنْ عُمُرٍ إِلَّا
فِي كِتَابٍ إِنَّ ذَلِكَ عَلَى اللَّهِ يَسِيرٌ ﴿١٢﴾

13. 二つの海は等しからず。一つは甘くて味がよく、飲んで気持ちよし。もう一方は鹹くて苦し。而して、お前たちは、その両方より新鮮な魚を食し、且つ身につける装飾品を採る。また汝は、船が波を切って海上を走るを見る。そはアッラーの恩恵をお前たちに求めさせるためであり、併せて感謝の念を起させるためなり。(注6)

وَمَا يَسْتَوِي الْبَحْرَانِ هَذَا عَذْبٌ فُرَاتٌ سَالٍ
شَرَابُهُ وَهَذَا مِلْحٌ أُجَاجٌ وَمِنْ كُلِّ تَاكُلُونَ
لَحْمًا طَرِيًّا وَتَسْتَخْرِجُونَ حِلْيَةً تَلْبَسُونَهَا وَ
تَرَى الْفُلَ الْكَبِيرَ فِيهِ مَوَاجِرُ يَتَّبِعُونَ مِنْ فَضْلِهِ
لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿١٣﴾

14. アッラーは夜を昼に溶け込ませ、昼を夜に溶け込ませ給う。而して、彼は、太陽と月を服従させて動かせしむ、各々定めされた期間にその軌道を走るべく。かくなすはお前たちの主アッラーなり。すなわち、主権は彼のものなり。されば、お前たちがアッラー以外に祈るものは、一微塵だに左右する力なし。

يُولِجُ اللَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَيُولِجُ النَّهَارَ فِي اللَّيْلِ
وَسَخَّرَ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ كُلٌّ يَجْرِي لِأَجَلٍ
مُسَمًّى ذَلِكُمُ اللَّهُ رَبُّكُمْ لَهُ الْمُلْكُ وَالَّذِينَ تَدْعُونَ
مِنْ دُونِهِ مَا يَمْلِكُونَ مِنْ قِطْعٍ ﴿١٤﴾

15. たといお前たちが彼等に祈願すると、彼等はお前たちの願いを聴かざるべし。よしや聴くとも、お前たちの願いに応ずることを得ず。而して、復活の日には、彼等は、お前たちが彼等をアッラーと併せ祀りしことを否認すべし。汝にかく告げ得る者は、一切を知悉す独一なる御方あるのみ。

إِنْ تَدْعُهُمْ لَا يَسْمَعُوا دَعَاءَكُمْ وَلَا وَسِعُوا
اسْتِجَابًا لَكُمْ وَيَوْمَ الْقِيَامَةِ يَكْفُرُونَ بِشِرْكِكُمْ
وَلَا يُنَبِّئُكَ مِثْلُ خَبِيرٍ ﴿١٥﴾

注5 小さな精子から均整がとれた完全な人間が育つ様に、地位が低く貧しいイスラム教徒達もいつか強力な社会を作り上げるであろう。この様に当節は預言している。女性が何を宿し、産むのか、又男性の生命の長短について書かれてあるが、これは、モハammad預言者に対抗する者の子孫は滅び、イスラム教徒の子孫は増えて行くと言言するものである。「天の帳簿に記載せられ」と文中に訳された言葉は「それは神の律法に沿ったものである。」という意味でもある。

注6 二つの海とは、真の宗教と偽りの宗教を象徴している。隠喩の続くこの節では、海水は飲み水や灌漑には適していないが、他の用法があると述べている。海からは、魚貝類や装飾品が採れる。同様に、現在イス

第三項

16. 汝等人々よ、お前たちはアッラーの御心次第なり、されどアッラーは自ら満ち足りて、讃美されるべき御方にまします。

يَا أَيُّهَا النَّاسُ أَنْتُمُ الْفُقَرَاءُ إِلَى اللَّهِ وَاللَّهُ هُوَ الْغَنِيُّ الْحَمِيدُ ⑮

17. もし彼欲しなば、お前たちを撲滅し、之に代って新らしい者を創造せん。

إِنْ يَشَاءُ يُدْهِبْكُمْ وَيَأْتِ بِخَلْقٍ جَدِيدٍ ⑯

18. そはアッラーにとりていささかも難しからず。(注7)

وَمَا ذَلِكَ عَلَى اللَّهِ بِعَزِيزٍ ⑰

19. 荷を背負える者は他人の荷を背負うこと能わず。たとひ重荷を背負う者が、その重荷ゆえに他人を呼ぶとも、之を担うこと得ざるべし、親戚縁者たりといえども。汝はただ、密かに主を畏れ、礼拝を遵守する者のみを警告し得るにすぎず。而して、身を清める者は、己れの利益のために清めるなり。いずれ行き着く先は、アッラーの許なるべし。

وَلَا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِزْرَ أُخْرَىٰ وَإِنْ تَدْعُ مُثْقَلَةٌ إِلَىٰ جُنْدٍهَا لَا يُحْمَلُ مِنْهُ شَيْءٌ وَلَوْ كَانَ ذَا قُرْبَىٰ ⑱
إِنَّمَا تُنذِرُ الَّذِينَ يَخْشَوْنَ رَبَّهُمْ بِالْغَيْبِ وَأَقَامُوا الصَّلَاةَ وَمَنْ تَزَكَّىٰ فَإِنَّمَا يَتَزَكَّىٰ لِنَفْسِهِ ⑲
وَالِى اللَّهِ الْمَصِيرُ ⑳

20. 盲人と目明きとは同じからず、

وَمَا يَسْتَوِي الْأَعْمَىٰ وَالْبَصِيرُ ㉑

21. 闇と光も、

وَلَا الظُّلُمُتْ وَلَا النُّورُ ㉒

22. 日陰と炎熱も、

وَلَا الظِّلُّ وَلَا الْحَرُورُ ㉓

23. 而して、生と死もまた。(注8)げにアッラーはその嘉する者に聴かしむるも、汝は墓中にある輩に聴かせること能わず。(注9)

وَمَا يَسْتَوِي الْأَحْيَاءُ وَلَا الْأَمْوَاتُ إِنَّ اللَّهَ يُسْمِعُ ㉔
مَنْ يَشَاءُ ۚ وَمَا أَنْتَ بِسَمِيعٍ مِّنْ فِي الْقُبُورِ ㉕

ラム教に刃向かう者は、海水のごとく苦く役に立たない。しかし彼等の子孫の中で、熱心に神の言葉を伝える者も出て来るだろう。25章54節参照。

注7 神はモハammad預言者を通じて新たな世界と秩序の誕生を命じられた。神にとってはこれを実現する事は決して困難ではない。

注8 信者が「生」きている人と呼ばれているのは、彼等が真実を受け入れる事で新たな生を得るからである。一方、不信心者が「死」んでいる人と呼ばれるのは、永遠の命をもたらず真実を拒む事で、精神的な死を我身にもたらずからである。

注9 神の預言者が、故意に自らの心や耳を塞ぎ、神のお告げを避ける事はできない。その様な人物は、墓の下に眠る死人と同じく魂の死んだ者である。

24. 汝はただ一介の警告者なり。

إِن أَنْتَ إِلَّا نَذِيرٌ ⑩

25. げにわれらは、汝を朗報伝達者として、また警告者として真理と共に遣わしたり。如何なる民も、警告者が遣わされざりし民はなし。(注10)

إِنَّا أَرْسَلْنَا بِالْحَقِّ بَشِيرًا وَنَذِيرًا وَإِنْ مِنْ أُمَّةٍ إِلَّا خَلَا فِيهَا نَذِيرٌ ⑪

26. たとい彼等が汝を嘘つきと呼ぶとも、彼等以前の徒輩もまたその使徒たちを虚言者として扱い、明証と、聖典と、光明を投ずる經典を携えて彼等に至れる使徒たちを。

وَإِنْ يَكْذِبُوكَ فَقَدْ كَذَّبَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ جَاءَتْهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنَاتِ وَالْزُكُورِ وَالْيَكْتَبِ الْمُنِيرِ ⑫

27. されば、われはこれ等の不信心者どもを突然ひっ捕えたり。われを否定する結果の何んと恐ろしきことかな！

ثُمَّ أَخَذْتُ الَّذِينَ كَفَرُوا فَكَيْفَ كَانَ نَكِيرِ ⑬

第四項

28. 汝は見ざるか、アッラーが空から水を降し、之によって色とりどりの実を生らせることを。また、山々は、白や赤やその他真つ黒とさまざまな色合いの縞模様があることを。(注11)

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ أَنْزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَأَخْرَجْنَا بِهِ ثَمَرَاتٍ مُخْتَلِفًا أَلْوَانُهَا وَمِنَ الْجِبَالِ جُدَدٌ بَيَضٌ وَحُمْرٌ مُخْتَلِفٌ أَلْوَانُهَا وَغَرَابِيبُ سُودٌ ⑭

29. 人間も獣も家畜も同様に多種多様なり。アッラーの僕等のうち、ただ知識ある者のみアッラーを畏れ奉る。(注12) げにアッラーは偉大にして、寛大にまします。

وَمِنَ النَّاسِ وَالْأَنْعَامِ مُخْتَلِفٌ أَلْوَانُهُ كَذَلِكَ إِنَّمَا يَخْشَى اللَّهَ مِنْ عِبَادِهِ الْعُلَمَاءُ إِنَّ اللَّهَ عَزِيزٌ غَفُورٌ ⑮

注10 この節では、ある偉大なる真理が述べられている。その真理は、クルアーンが示すまで世には知られていなかった。言い換えれば、この真実のお告げを伝える為に、ある神の伝導者が世に遣わされたのである。この高尚な原理は、あらゆる宗教の源たる神、そして神の使者たるそれぞれの宗教の創始者への信仰に結び付くものである。それは、イスラム教徒にとり、信じ崇めなければならない教義の一つである。この崇高なる真理を世に広める事で、イスラム教は、異なる宗教間に友好関係を作り出すと共に、世界中の異教徒間の関係を悪化させて来た敵意を取り除こうと努めて来た。

注11 雨が乾いた大地に降れば、様々な色・味・形・種類の穀物・花・果実が育つとこの節では語っている。しかし、雨は同じでも、育つ穀物・花・果実はそれぞれ非常に異なる。この違いが、土壌や種子の質によるのは明らかだ。同様に、神の啓示はクルアーンを通じて、水の様に様々な地で人々に届くが、受ける側の心の状態や、その受け取り方で効果も違って来る。

注12 前節ののべられた形・色・種類の多様さは、花・果実・石に限らず、人・獣・家畜にも見られる。アンナース（人）、アッダヴァーブ（獣）、アル・アンアーム（家畜）は又、能力・地位・本能の異なる人物を表している。「アッラーの僕のうち、ただ知識ある者のみアッラーを畏れ奉る。」先述の三語が三種の人物を指

30. げにアッラーの經典に従い、礼拝を遵守し、われらが賜えるものをひそかに、また公に施す者は、決して失敗せざる取り引きを期待する者なり。(注13)

إِنَّ الَّذِينَ يَتْلُونَ كِتَابَ اللَّهِ وَأَقَامُوا الصَّلَاةَ وَأَنْفَقُوا مِمَّا رَزَقْنَاهُمْ سِرًّا وَعَلَانِيَةً يَرْجُونَ تِجَارَةً لَّنْ تَبُورَ ۝

31. アッラーは彼等に十分なる報奨を与えた上、更にその恵みを加増せん。げに彼は宥恕者にして、頒賞者なり。

لِيُؤْفِقَهُمْ أَجْرَهُمْ وَيَرْزِقَهُمْ مِنْ فَضْلِهِ إِنَّهُ غَفُورٌ شَكُورٌ ۝

32. われらが汝に啓示せる經典は、それ以前の經典を確証する真理なり。げにアッラーはその僕等を熟知し、且つ照覧し給う。

وَالَّذِي أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ مِنَ الْكِتَابِ هُوَ الْحَقُّ مُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيْهِ إِنَّ اللَّهَ بِعِبَادِهِ لَخَبِيرٌ بَصِيرٌ ۝

33. その後、われらは、選びし僕等にこの經典を継がしめたり。而して、彼等の中には自分自身を破滅する者あり、また中庸を守る者あり、また或る者はアッラーの許しのもとに善行に於て他をぬきんでる者あり。(注14) こはアッラーよりの大なる恩恵なり。

ثُمَّ أَوْرَثْنَا الْكِتَابَ الَّذِينَ اصْطَفَيْنَا مِنْ عِبَادِنَا فَمِنْهُمْ ظَالِمٌ لِّنَفْسِهِ وَمِنْهُمْ مُقْتَصِدٌ وَمِنْهُمْ سَابِقٌ بِالْخَيْرَاتِ إِذْنُ اللَّهِ ذَلِكَ هُوَ الْفَضْلُ الْكَبِيرُ ۝

34. 彼等の報奨は永遠の樂園なるべし。彼等はそこに入り、黄金と真珠の腕環に飾られ、その衣裳は絹なるべし。

جَنَّاتٍ عَدْنٍ يَدْخُلُونَهَا يُحَلَّوْنَ فِيهَا مِنْ أَسَاوِرَ مِنْ ذَهَبٍ وَلُؤْلُؤًا وَلِبَاسُهُمْ فِيهَا حَرِيرٌ ۝

35. 而して、彼等は云わん、「我等から災いを取り除き給えるアッラーに讃えあれ。げに我等の主は、宥恕者にして、頒賞者なり。

وَقَالُوا الْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي أَذْهَبَ عَنَّا الْحَزْنَ إِنَّ رَبَّنَا لَغَفُورٌ شَكُورٌ ۝

36. その恩恵によって、我等は苦勞もなければ疲勞も覚えざる永遠の住居に住まわしめら

إِلَّا الَّذِي أَحْضَانَا دَارَ الْمَقَامَةِ مِنْ فَضْلِهِ لَا يَسْتَأْذِنُ

し、その内正しい知識を持つ者のみ神を畏れ敬うと強調している。この場合の知識とは宗教上のものではなく、自然の法に関するものである。自然とその法則を謙虚に学べば、自ずと神の偉大なる力を悟り、神に対して畏敬の念を持つ様になる。

注13 この節は、先節に述べられたウルマー（知識を授かった人）について記述している。

注14 信者は、厳しい精神的修養の様々な段階を経て行く。初めに、彼は自らの低俗な欲望と真剣に戦い、厳しい自制を实践する。その後徐々に目標に近付き、遂には精神的に完全な発達を遂げ、その崇高なる目標に向かい一定の速い速度で進んで行く。

る」と。(注15)

37. されど、不信心者どもに対しては、地獄の火あり。彼等には死は許されず、また刑罰を軽くせられざるべし。このように、われらはすべての忘恩者に返報す。

فِيهَا نَصَبٌ وَلَا يَسْنَأُ فِيهَا لُغُوبٌ ﴿٣٧﴾

وَالَّذِينَ كَفَرُوا لَهُمْ نَارُ جَهَنَّمَ لَا يُقْضَىٰ عَلَيْهِمْ فِيمَوْلَاوَا لَا يُخَفَّفُ عَنْهُمْ مِنْ عَذَابِهَا كَذَلِكَ نَجْزِي كُلَّ كَفُورٍ ﴿٣٨﴾

38. 彼等は火の中で泣き叫ばん、「主よ、我等を出し給え、さすれば、これまでなしたるようなことはせず、必ず義しい行動をなさん」と。アッラーは彼等に云わん、「われらはお前たちに、思慮ある者なら反省し得た十分なる寿命を与えざりしか？ その上、警告者まで遣わせり。されば汝等、刑罰を味わえ。不義なす徒輩には救助者はなし」と。

وَهُمْ يَصْطَرِخُونَ فِيهَا رَبَّنَا أَخْرِجْنَا نَعْمَلْ صَالِحًا غَيْرَ الَّذِي كُنَّا نَعْمَلُ أَوَلَمْ نُعَمِّرْكُم مَّا يَتَذَكَّرُ فِيهِ مَنْ تَذَكَّرَ وَجَاءَكُمُ النَّذِيرُ فَذَوْقُوا مَا لِلظَّالِمِينَ مِنْ نَصِيرٍ ﴿٣٩﴾

第五項

39. げにアッラーは、天地に於ける隠されたることのすべてを知り給う。げにアッラーは、人が心に宿るものを熟知し給う。

إِنَّ اللَّهَ عَلِيمُ غَيْبِ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ إِنَّهُ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿٤٠﴾

40. 彼こそはお前たちを、過ぎ逝ける人々の地上に於ける代理者たらしめたり。されば、信ぜざる者は、その不信の結果を甘受すべし。不信は彼等に、主の憎しみの増加以外なにももたらさず、ただ自らの損失を増すのみなるべし。

هُوَ الَّذِي جَعَلَكُمْ خَلَائِفَ فِي الْأَرْضِ فَمَنْ كَفَرَ فَعَلَيْهِ كُفْرُهُ وَلَا يَزِيدُ الْكَافِرِينَ كُفْرُهُمْ إِلَّا دَرَجَةً إِلَّا مُقْتَنَاءَ وَلَا يَزِيدُ الْكَافِرِينَ كُفْرُهُمْ إِلَّا خَسَارًا ﴿٤١﴾

41. 云え、「お前たちは、アッラー以外に、アッラーと併せ祀る神々を見たことがあるのか？ ならば、神々が地上で創造せるものを我に示せ。それとも、神々は天の創造に加わりたるや？ またわれらは、神々に經典を与え、それによって彼等を立証せしめたるか？」と。然らず、不義者はただ欺くために互に約束す。

قُلْ أَرَأَيْتُمْ شُرَكَاءَ الَّذِينَ تَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ أَرُونِي مَاذَا خَلَقُوا مِنَ الْأَرْضِ أَمْ لَهُمْ شِرْكٌ فِي السَّمَوَاتِ أَمْ آتَيْنَهُمْ كِتَابًا فَمَنْ عَلَىٰ بَيِّنَةٍ مِنْهُ بَلْ إِنْ يَتَّبِعُ الظَّالِمُونَ بَعْضُهُمْ بَعْضًا إِلَّا غُرُورًا ﴿٤٢﴾

注15 あらゆる恐怖や苦悩から完全に解放たれ、神の喜びを伴う心の平安魂の充足を得る事は、天国における最高の段階であり、当節及び前節に示してある通り、クルアーンは、これ信じ来世を信じる者に、この至福が授けられると約束している。

42. げにアッラーは天地^{あめつち}をしかと抑えて、之^{これ}を動かさせじ。もし天地^{あめつち}が動きなば、アッラーを惜^おいて一体誰^{あめつち}が天地を抑え得ようぞ。
(注16) げにアッラーは寛厚^{かんこう}にして、寛大にまします。

إِنَّ اللَّهَ يُنْصِتُ لِلْأَرْضِ وَالسَّمَوَاتِ أَنْ تَرْوُلَا وَ
لَنْ زَالَتَا إِنْ أَمْسَكْتُمَا مِنْ أَحَدٍ مِنْ بَعْدِهِ إِنَّهُ
كَانَ حَلِيمًا غَفُورًا ﴿٤٢﴾

43. 彼等は、警告者が来たりなば、他の如何なる民に勝りて御指導に従い奉る、とアッラーの御名^{みな}にかけて堅く誓^{ちか}たり。然るに、警告者来たるや、彼等はただ嫌悪を増すばかりなり、

وَأَقْسَمُوا بِاللَّهِ جَهْدَ أَيْمَانِهِمْ لَنْ جَاءَهُمْ نَذِيرٌ
لِيَكُونُوا أَهْدَى مِنْ إِحْدَى الْأُمَمِ فَلَمَّا جَاءَهُمْ
نَذِيرٌ مَّا زَادَهُمْ إِلَّا نِفُورًا ﴿٤٣﴾

44. 地上に於て傲慢^{ごうまん}を事とし、悪事を策謀^{さくぼう}するために。されど、悪事の策謀は、ただその策謀の張本人^{おとし}を陥^{おとし}いれるにすぎず。されば彼等は、昔の人々の慣例^{しきたり}以外に何を期待し得るか? 汝はアッラーの慣例^{しきたり}に如何なる変更も見ざるべし。またアッラーの慣例^{しきたり}には如何なる交替^{かぎ}も見ざるべし。

اسْتَكْبَارًا فِي الْأَرْضِ وَمَكْرَ السَّيِّئِ وَلَا يَجِئُ
الْمَكْرَ السَّيِّئِ إِلَّا بِأَهْلِهِ فَهَلْ يَنْظُرُونَ إِلَّا سُنَّتَ
الْأَوَّلِينَ قُلْ نَجِدَ لِسُنَّتِ اللَّهِ تَبْدِيلًا وَلَنْ نَجِدَ
لِسُنَّتِ اللَّهِ تَحْوِيلًا ﴿٤٤﴾

45. 彼等は国々を経巡りて、往古の民の末路が如何に悲惨なりしかを見ざりしか? それ等の人々は、彼等より栄えたりき。アッラーは、天地にある何かによって、その考えを妨げられる者に非ず。
(注17) げにアッラーは全知全能にまします。

أَوَلَمْ يَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَيَنْظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ
الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ وَكَانُوا أَشَدَّ مِنْهُمْ قُوَّةً وَمَا
كَانَ اللَّهُ لِيُعْجِزَهُ مِنْ شَيْءٍ فِي السَّمَوَاتِ وَلَا فِي
الْأَرْضِ إِنَّهُ كَانَ عَلِيمًا قَدِيرًا ﴿٤٥﴾

46. もしアッラーが人々をその所業によって罰しなば、この地上には一人の人間もとり残されざるべし。されど、アッラーは、一定の期限まで人間を猶予し給う。だが、その定めの時^{とき}到らば、彼等は知るべし、アッラーがその御前にすべての僕等を召し寄せることを。
(注18)

وَلَوْ يُؤَاخِذُ اللَّهُ النَّاسَ بِمَا كَسَبُوا مَا تَرَكَ عَلَى
ظَهْرِهَا مِنْ دَابَّةٍ وَلَكِنْ يُؤَخِّرُهُمْ إِلَى أَجَلٍ
مُتَسَيِّئٍ فَإِذَا جَاءَ أَجْلُهُمْ فَإِنَّ اللَّهَ كَانَ بِعِبَادِهِ
بَصِيرًا ﴿٤٦﴾

注16 天・地の機構は、一定の進路をそれる事なく、完全なる調和をもって作動を続けている。この調和は、背後に聡明にして全能なる存在のある事を示している。この最高のそして知性ある存在とは、我々の崇拜をお求めになれる神である。

注17 モハammad預言者を亡き者にしようとする不信心者達の企みは全て失敗に終わりイスラムの大義が勝利を得る事は、不変の神意である。

注18 慈悲深き神は容易には罰を下されない。邪悪で反抗的な者に対して、その態度を改めさす為に、神は猶予をお与えになる。もし神が時を経ずして罰を下されるなら、罪人達は即刻滅び、世の終わりを迎え、地上の全生命は絶滅するであろう。それは、人類絶滅の後、動物・鳥類等が生存すべき理由が無いからである。又、この節は、神が、この世の忌まわしい虫けら共、つまり不信心者に対する裁きを厭われないとも意味している。

سُورَةُ يُسٍ مَكِّيَّةٌ

(۳۶)

ヤー・スィーン

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. ヤー・スィーン。(注1)

يُسٍ ۝

3. 知恵に満ちたるクルアーンにかけて誓う、

وَالْقُرْآنِ الْحَكِيمِ ۝

4. 汝は確かに使徒の一人なり、

إِنَّكَ لَمِنَ الْمُرْسَلِينَ ۝

5. 正しき道を守る者。(注2)

عَلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ۝

6. こは偉大にして慈悲深き主よりの啓示なり、

تَنْزِيلَ الْعَزِيزِ الرَّحِيمِ ۝

7. 父祖からいまだ警告されたことがなく、無思慮なる人々を汝が警告するための。

لِتُنذِرَ قَوْمًا مَّا أُنذِرَ آبَاؤُهُمْ فَهُمْ غَافِلُونَ ۝

8. げに、すでに、彼等信ぜざるが故に、彼等の大部分に御言葉は実証されたり。

لَقَدْ حَقَّ الْقَوْلُ عَلَىٰ أَكْثَرِهِمْ فَهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ۝

9. われらは、顎までとどく首枷(注3)を彼等の首に嵌めれば、彼等は頭を上向けざるを得ず。(注4)

إِنَّا جَعَلْنَا فِي أَعْنَاقِهِمْ أَغْلَالًا تَمُرُّ بِالْأَذْقَانِ فَهُمْ مُقْبَحُونَ ۝

10. われらは彼等の前後に障壁を設け、且つ覆いたれば、彼等は何も見ることが得ず。(注5)

وَجَعَلْنَا مِنْ بَيْنِ أَيْدِيهِمْ سَدًّا وَمِنْ خَلْفِهِمْ سَدًّا فَأَعْشَيْنَهُم فَهُمْ لَا يُبْصِرُونَ ۝

注1 おお、完全なる指導者

注2 モハammad預言者の道は、今や神の下に繋がる唯一の正しい道である。この節は、預言者と哲学者の差異を明確に述べている。哲学者は真理を見出すのに長い時を必要とし、追求最中に迷う事も度々ある。しかし、神の預言者は、最少の時で、最短距離を経て真理に到達する。哲学者の様に抽象的で難解な思考にさまよう事もなく、預言者は神の啓示に導かれて直接真理に到達するのである。

注3 慣習、しきたり、偏見に捕らわれる事。不信心者はこれに束縛され、真理の受け入れを阻まれ、改心の努力を無にされるのである。

注4 人が知性を働かせ、慣習の束縛から逃がれようと努力する時ですら、彼はあらゆる方面からの圧力を受け、正しく洞察する事はほとんどできない。

注5 しきたり、偏見、うねぼれが災いし、イスラム教を受け入れれば得られたであろう輝ける壮大な未来を、不信心者達は予期する事ができなかった。又、真理を拒み、神に罰せられた過去の人々の歴史を振り返る事もしなかった。

11. 汝、彼等に警告するもせざるも、彼等には同じなり。すなわち、彼等は信ぜざるべし。
(注6)

وَسَوَاءٌ عَلَيْهِمْ أُنذِرْتَهُمْ أَمْ لَمْ تُنذِرْهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ⑪

12. 汝が警告し得るのは、訓戒に従い、密かに慈悲深き神を畏れる者のみ。されば、その者に、宥恕と素晴らしい報奨の朗報を伝えよ。

إِنَّمَا تُنذِرُ مَنِ اتَّبَعَ الذِّكْرَ وَخَشِيَ الرَّحْمَنَ الْغَيْبَ فَبَشِّرْهُ بِسَعْفَةٍ وَاجِرٍ كَرِيمٍ ⑫

13. げにわれらのみが死者を甦らせ、彼等が前に送るものも後に遺すものも記録す。われらは一切を明瞭なる原簿に記録す。

إِنَّا نَحْنُ نُحْيِي الْمَوْتَى وَنَكْتُبُ مَا قَدَّمُوا وَآثَارَهُمْ وَكُلُّ شَيْءٍ أَحْصَيْنَاهُ فِي إِمَامٍ مُّبِينٍ ⑬

第二項

14. 使徒たちが邑に來たれる時、その邑の人々の例を彼等に述べよ。

وَأَضْرِبْ لَهُمْ مَثَلًا أَصْحَابَ الْقَرْيَةِ إِذْ جَاءَهَا الْمُرْسَلُونَ ⑭

15. 初めわれらは、彼等に二人の使徒(注7)を遣わしたところ、彼等はこの兩名を拒みたり。されば、われらは更に一人を加えて之を強めたり。(注8)而して、彼等使徒たちは云えり、「げにわれらは使徒としてお前たちのところへ遣わされたる者なり」と。

إِذْ أَرْسَلْنَا إِلَيْهِمُ اثْنَيْنِ فَكَذَّبُوهُمَا فَعَزَّزْنَا ثَالِثًا فَقَالُوا إِنَّا إِلَيْكُمْ مُّرْسَلُونَ ⑮

16. すると、彼等は答えり、「お前たちは我等と同じ人間にすぎず、また慈悲深き神は何も啓示を降さず。お前たちはただ偽るのみ」と。

قَالُوا مَا أَنْتُمْ إِلَّا بَشَرٌ مِثْلُنَا وَمَا أَنْزَلَ الرَّحْمَنُ مِنْ شَيْءٍ إِن أَنْتُمْ إِلَّا تَكْذِبُونَ ⑯

17. 彼等使徒たちは云えり、「主は、我等が確かにお前たちに遣わされたる者なることを、知る。

قَالُوا رَبَّنَا يَعْلَمُ إِنَّا إِلَيْكُمْ لَمُرْسَلُونَ ⑰

18. 我等の務めは、ただ明白なる神託を伝達することのみ」と。

وَمَا عَلَيْنَا إِلَّا الْبَلَاغُ الْمُبِينُ ⑱

注6 2章7節参照

注7 モーゼとイエス、又はアブラハムとイシュマエル。

注8 モハammad預言者は、モーゼとイエスが預言した彼の到来を実現する事でこの二人を力づけた(申命記18:18及びマタイ21:33-46)。更に2:129-130に述べられたアブラハムとイシュマエルの祈りを身をもって成就する事で、この二人を力づけたのである。

19. 不信心者どもは云えり、「お前たちは、我等にとりては凶兆なり。お前たち、もし止めずば、我等必ず石もてお前たちを撃たん。我等の手で必ずお前たちの身に痛刑を降さん」と。

قَالُوا إِنَّا تَطَيَّرْنَا بِكُمْ لَئِن لَّمْ تَنْتَهُوا لَنَرْجِمَنَّكُمْ
وَلَنَبْنِيَنَّكُمْ مِمَّا عَدَابُ الْيَمِّ ①٩

20. 彼等使徒は答えり、「お前たちの凶兆は、己れ自身のせいなり。お前たちは訓戒されたので、かく云うか？ 否、お前たちは掟を悉く違犯する民なり」と。

قَالُوا طَائِرُكُمْ مَعَكُمْ إِنَّكُمْ لَمُتُونَ قَوْمٌ
مُتَسِرُّونَ ②٠

21. 時に、^{まち}昌の端より（注9）走り来たる（注10）一人の男あり。男は云えり、「^ち邑の人々よ、この使徒たちに従え。

وَجَاءَ مِنْ أَقْصَا الْمَدِينَةِ رَجُلٌ يَسْعَى قَالَ يَوْمِ
أَسْعَوْا الْمُرْسَلِينَ ②١

22. お前たちに報酬を求めず、正しき道を歩むこの方々に従え。

أَسْعَوْا مَنْ لَا يَسْأَلُكُمْ أَجْرًا وَهُمْ مُهْتَدُونَ ②٢

23. 何故に我は、我を創りし御方を崇めざるべきや？ その御方の許へお前たちもいずれ連れ戻されん。

وَمَا لِيَ لَا أَعْبُدَ الَّذِي فَطَرَنِي وَالَّذِي تُرْجَعُونَ
إِلَيْهِ ②٣

24. 我は彼以外に他神^{あだしがみ}を拝すべけんや？（注11）もし慈悲深き神が我に禍を下さんと思わば、彼等他神^{あだしがみ}たちの執り成しは何んの役にも立たず、また我を救うこと能わず。

مَا آتَاخُذُ مِنْ دُونِهِ إِلَهًا إِنْ يُرِدْنِ الرَّحْمَنُ بِضُرٍّ
لَا تُغْنِي عَنِّي شَفَاعَتُهُمْ شَيْئًا وَلَا يُنْقِذُونِ ②٤

25. 然る時は、我は紛れもない明白なる迷誤の中にあり。

إِنِّي إِذَا لِنَفِيٍّ مُبِينٍ ②٥

26. 我はお前たちの主を信じ奉る。されば、お前たち、我に耳傾けよ」と。

إِنِّي آمَنْتُ بِرَبِّكُمْ فَاسْمَعُونِ ②٦

27. すると声ありて、云えり、「汝、樂園に入れ」と。男は云えり、「ああ、我が民が知りたれば、

قِيلَ ادْخُلِ الْجَنَّةَ قَالَ لَيْلَتٌ قَوْفِي يَعْلَمُونَ ②٧

28. ありがたくも主が我が罪を赦し、荣誉ある者のうちに我を入れ給うたことを！」と。

بِمَا عَفَرَ لِي رَبِّي وَجَعَلَنِي مِنَ الْمُكْرَمِينَ ②٨

注9 「昌の端」とは、イスラム教の本山から最も離れた地を指す。

注10 「走り来たる」の同義語は、モハammad預言者が約束された救世主について語る時にも用いられた。その言葉の中で、彼はイスラムの前進の為に辛抱強く賢明に務めたと述べている。

注11 人々は約束されたメシヤ（救世主）の時代に様々な神—富の神、物質的権力、偽りの政治哲学、実現不可能な経済理論等を崇めるであろう。

29. 而して、男の死後、われらはその民に対して天から軍勢を差し向けざりき。またそのようなことは一切せざりき。

وَمَا أَرْسَلْنَا عَلَى قَوْمِهِ مِنْ بَعْدِهِ مِنْ جُنْدٍ مِّنَ السَّمَاءِ وَمَا كُنَّا مُنْزِلِينَ ﴿٢٩﴾

30. ただ一陣の突風のみ。見よ、 彼等は消滅せり。(注 12)

إِنْ كَانَتْ إِلَّا صَيْحَةً وَاحِدَةً فَإِذَا هُمْ خِيدُونَ ﴿٣٠﴾

31. ああ、悲しいかなわが僕たち！ 使徒が彼等に来るたびに、彼等は之を嘲笑す。(注 13)

يَحْسِرَةٌ عَلَى الْعِبَادِ مَا يَأْتِيهِمْ مِّن رَّسُولٍ إِلَّا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِئُونَ ﴿٣١﴾

32. 彼等は、われらが彼等よりも前の幾多の世代を打ち滅ぼしたること、然も滅ぼされた人々は二度と帰らざることを、見ざるか？(注 14)

أَلَمْ يَرَوْا كَمْ أَهْلَكْنَا قَبْلَهُمْ مِنَ الْقُرُونِ أَنَّهُمْ إِلَيْهِمْ لَا يَرْجِعُونَ ﴿٣٢﴾

33. 彼等は皆、一緒に集められて、われらの前に必ず連れて来られん。

وَإِنْ كُلُّ لُتَّا جَمِيعٌ لَّدَيْنَا مُحْضَرُونَ ﴿٣٣﴾

第三項

34. 彼等への一つの神兆は、死せる大地なり。われらは之を生き返らせ、之より穀物を生ぜしめ、彼等はそれを食す。

وَأَيُّهُمُ الْأَرْضُ الْمَيْتَةُ ۖ أَحْيَيْنَاهَا وَأَخْرَجْنَا مِنْهَا حَبًّا فَمِنْهُ يَأْكُلُونَ ﴿٣٤﴾

35. また、われらは、そこに棗椰子と葡萄の園とを設け、泉水を湧き出せしむ、(注 15)

وَجَعَلْنَا فِيهَا جَنَّاتٍ مِّنْ نَّخِيلٍ وَأَعْنَابٍ وَفَجْرْنَا فِيهَا مِنَ الْعُيُونِ ﴿٣٥﴾

36. 彼等にその果実を食せるように。されどそれは彼等の手で育てたものに非ず。これでも彼等は感謝せざるか？

لِيَأْكُلُوا مِنْ ثَمَرِهِ وَمَا عَمِلَتْهُ أَيْدِيهِمْ أَفَلَا يَشْكُرُونَ ﴿٣٦﴾

注 12 この言葉は、砲弾、焼夷弾、原子爆弾が爆音と共に落下する時の模様を指している様だ。爆弾が落下、炸裂し、辺りの生命ある者は全て死に絶え炎が全てを焼き尽くす。クルアーンは 18 章 9 節ははじめ、到る所でこの間について述べている。

注 13 この節の言葉は哀感に満ちている。全能の神自ら、モハammad 預言者が人々に拒まれ嘲笑される事に深く悲しまれている様だ。モハammad 預言者は人々の為に悲しんだが、彼等は悔慮と嘲笑をもってしてそれに答えた。

注 14 この言葉は万物にふさわしい神の罰について述べている様だ。

注 15 前節の陰喩は此処でも続いている。アラビアの湿いた大地から精神的知識の泉がわき出て、精神的果実を付けた木々が当たり一面に育つであろうと当節は述べている。

37. 彼を讃えよ、大地に育つもの、人間も、それから人間が知らぬものも、皆対にして創造し給うた御方を。(注16)

سُبْحَنَ الَّذِي خَلَقَ الْأَزْوَاجَ كُلَّهَا مِمَّا تَنْثِبُ
الْأَرْضَ وَمِنْ أَنْفُسِهِمْ وَمِمَّا لَا يَعْلَمُونَ ﴿٣٧﴾

38. 夜そのものもまた彼等への神兆なり。われらがそれから昼を剥ぎ取ると、見よ、彼等は暗闇の中にとり残される。

وَأَيُّهُ لَهْمُ اللَّيْلِ ۖ نَسْلَخُ مِنْهُ النَّهَارَ فَإِذَا هُمْ
مُظْلَمُونَ ﴿٣٨﴾

39. また、太陽は、その定められた軌道进行を走る。こは全知全能なる神の定めるところなり。

وَالشَّمْسُ تَجْرِي لِمُسْتَقَرٍّ لَهَا ۚ ذَٰلِكَ تَقْدِيرُ
الْعَزِيزِ الْعَلِيمِ ﴿٣٩﴾

40. 月に対しては、われらが各宿宮を定めれば、再び干からびた椰子の細枝の如くなりて戻る。

وَالْقَمَرَ قَدَرْنَاهُ مَنَازِلَ حَتَّىٰ عَادَ كَالْعُرْجُونِ
الْقَدِيمِ ﴿٤٠﴾

41. 太陽は月に追いつくわけには行かず、夜もまた昼を追い越す能わず。それ等皆軌道の上を浮遊す。(注17)

لَا الشَّمْسُ يَنْبَغِي لَهَا أَنْ تُدْرِكَ الْقَمَرَ وَلَا
الْبَلَدُ سَابِقُ النَّهَارِ ۚ وَكُلٌّ فِي فَلَكٍ يَسْبَحُونَ ﴿٤١﴾

42. われらが彼等の子孫を満載した舟にて運べることも、また彼等への神兆なり。

وَأَيُّهُ لَهِمُّ آتَا حَمَلْنَا ذُرِّيَّتَهُمْ فِي الْفُلِكِ النَّاشِئِ ﴿٤٢﴾

43. われらはまた、彼等のために、その上に乗れる舟に似たものを造れり。(注18)

وَخَلَقْنَا لَهُمْ مِنْ مِثْلِهِ مَا يَرْكَبُونَ ﴿٤٣﴾

注16 植物界や無生物をも含む全ての物には対があるという事実を、科学は発見した。いわゆる元素ですから、個々では成り立たない。それらも又、存在を維持する為に相互依存している。この科学の真理は人間の知性にも当てはまる。天の光が降りて来るまでは、神の啓示と人間の知性が結び付いて生まれる真の知識を人間は手にする事ができない。

注17 当節は宇宙空間を天体が漂う様に触れている。宇宙の構造は固定化されていると長らく考えられて来た概念をクルアーンははっきりと否定した。クルアーンの特徴は、科学や哲学における誤った考えを否定するだけでなく、新しい発見を予測する事にある。当節では更に、全宇宙の優れた構造と理法についても言及している。天体は全て、互いの領域を侵害する事なく、規則正しく、正確に任務を遂げる。太陽系は何億という天体系の一つであるが、中には太陽系とは比較にならない程火きいものもある。しかし、果てない空間に散らばる膨大な数の太陽や星は、互いに安全を保ち、到る処調和と美を作り出す様に配慮されている。天体はそれぞれ互いの軌道に影響を及ぼしつつも、一定の道筋を無事に進み、全体として構造と運行のみごとな調和を形作っている。

注18 クルアーンは、神が新たな輸送手段を作り出される、とずっと以前に預言していた。蒸気船、大型船、飛行船、飛行機等今日多用されている物は、クルアーンの預言が成就した事をはっきりと示している。

44. 而して、われらもし欲しなば、彼等を溺れさせ得るなり。さすれば、誰も彼等を助ける者もなく、彼等は救われじ、
 وَإِنْ شَاءَ نَفْقَهُمْ فَلَا صَرِيحَ لَهُمْ وَلَا هُمْ يُنْقَذُونَ ﴿٣٦﴾
45. われらの慈悲によって暫く楽しむ以外。
 إِلَّا رَحْمَةً مِنَّا وَمَتَاعًا إِلَىٰ حِينٍ ﴿٣٧﴾
46. 「祈りによってお前たちの前にあるもの、(注19)並びに悔悟によってお前たちの後にあるもの(注20)を警戒せよ、お慈悲にあずかるために」と告ぐるも、彼等は之を意に介せず。
 وَإِذَا قِيلَ لَهُمُ اتَّقُوا مَا بَيْنَ أَيْدِيكُمْ وَمَا خَلْفَكُمْ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ﴿٣٨﴾
47. 主の神兆が彼等に来る毎に、彼等は一つとして之に背を向けざるはなし。
 وَمَا تَأْتِيهِمْ مِنْ آيَةٍ مِنْ آيَاتِ رَبِّهِمْ إِلَّا كَانُوا عَنْهَا مُعْرِضِينَ ﴿٣٩﴾
48. 彼等に向って「アッラーがお前たちに授けたるものを施し与えよ」と云えば、不信心者どもは信ずる人々に向かって云う、「アッラーもし欲しなば、自ら之を養い給うものを、何ぞ我等が之を養うべきや? お前たち、心得違いもはなはだしい」と。
 وَإِذَا قِيلَ لَهُمُ اتَّقُوا مَا دَرَكَكُمْ اللَّهُ لَا تَالَّذِينَ كَفَرُوا هَلْ يَنْظُرُونَ إِلَّا الَّذِينَ آمَنُوا أَنْطَعِمُ مَنْ لَوْ يَشَاءُ اللَّهُ أَطْعَمَهُ إِنْ أَنْتُمْ إِلَّا فِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ﴿٤٠﴾
49. 而して、彼等は云う、「もしお前たちの言葉が真なら、審判の約束が果たされるはいつなるぞ?」と。
 وَيَقُولُونَ مَتَىٰ هَذَا الْوَعْدِ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٤١﴾
50. 彼等はただ、互いに論争している間に突如襲い来る霹靂を待つにすぎず。(注21)
 مَا يَنْظُرُونَ إِلَّا صَيْحَةً وَاحِدَةً تَأْخُذُهُمْ وَهُمْ يَخِصِّسُونَ ﴿٤٢﴾
51. その時彼等は、遺言もなし得ず、家に帰ることすら適うまじ。
 فَلَا يَسْتَطِيعُونَ تَوْصِيَةً وَلَا إِلَىٰ أَهْلِهِمْ يَرْجِعُونَ ﴿٤٣﴾

注19 貴人方が今後犯すであろう悪事によりもたらされる悪い結末。

注20 過去に貴人方が為した悪事の結末。

注21 此处に述べられた罰は、空から落ちる稲妻の様なものであろう。それは余りにも突然に下されるので、次節に書かれてある様に、罪人は遺言を残す事すらできないのであろう。

注22 「らっば吹き鳴れば」という言葉は、裁きの日にトランペットが吹き鳴らされる他、偉大なる神の指導者が現れ、クラリオンを吹く事を示している。魂の死んだ者達はこの音に呼び覚まされ、墓から出て(魂が生き返って)神の呼びかけを聴きに集まり、それに応じるのである。

第四項

52. 而して、喇叭吹き鳴れば、見よ彼等、墓場からあわてふためき主の許へ急ぎ行かん。
(注 22)
53. 彼等は云わん、「ああ、禍なるかな！ 我等を臥処より喚び起したるは誰ぞ？ こはしたり、慈悲深き神が約束した通りなり。使徒たちは真実を語りぬ」と。
54. 霹靂起らば、(注 23) 見よ、彼等は一齊にわれらの前に召し寄せられん。
55. この日、何人も些かだに不当に遇せらるることなし。ただお前たちがなせることに對して、応報あるのみ。
56. げに樂園の住み人たちは、その日、己が仕事を楽しまん。(注 24)
57. 彼等は妻ともども、涼しい木蔭の下で寝椅子に凭れ、身を横たえん。(注 25)
58. 彼等はそこで、さまざまなる果実を食し、且つその望むものを悉く獲ん。
59. 「平安あれ」こは慈悲深き主よりのお言葉なり。(注 26)
60. 神は云わん、「汝等罪人よ、今日は義しい人たちから離れて控えよ。
61. 汝等アダムの子孫よ、われはお前たちに申しつけざりしか、悪魔を拜むでない、あの者はお前たちにとりて仇敵なり。
- وَنُفِخَ فِي الصُّورِ فَإِذَا هُمْ مِنَ الْأَجْدَاثِ إِلَىٰ رَبِّهِمْ يَنسِلُونَ ﴿٥٢﴾
- قَالُوا يٰوَيْلَنَا مَنْ بَعَثَنَا مِنْ مَرْقَدِنَا سَئِئًا هَذَا مَا وَعَدَ الرَّحْمَنُ وَصَدَقَ الْمُرْسَلُونَ ﴿٥٣﴾
- إِن كَانَتْ إِلَّا صَيْحَةً وَاحِدَةً فَإِذَا هُمْ جَمِيعٌ لَّدَيْنَا مُحْضَرُونَ ﴿٥٤﴾
- فَآيَوْمَ لَا تُنظَّمُ نَفْسٌ شَيْئًا وَلَا تُجْزَوْنَ إِلَّا مَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٥٥﴾
- إِنَّ أَصْحَابَ الْجَنَّةِ الْيَوْمَ فِي شُغْلٍ فَاكُهُونَ ﴿٥٦﴾
- هُمْ وَأَزْوَاجُهُمْ فِي ظِلِّ عَلَىٰ الْأَرَاكِ مُتْكِئُونَ ﴿٥٧﴾
- لَهُمْ فِيهَا فَاكُهُةٌ وَلَهُمْ مِمَّا يَدْعُونَ ﴿٥٨﴾
- سَلَامٌ قَوْلًا مِنْ رَبِّ رَحِيمٍ ﴿٥٩﴾
- وَأَمَّا أَزْوَاجُ الْيَوْمِ أَيْهَا الْبُحْرُمُونَ ﴿٦٠﴾
- أَلَمْ أَعْهِدْ إِلَيْكُمْ يٰبَنِي آدَمَ أَنْ لَا تَعْبُدُوا الشَّيْطَانَ إِنَّهُ لَكُمْ عَدُوٌّ مُّبِينٌ ﴿٦١﴾

注 23 数節の中で繰返し述べられる「霹靂」という語について、当章では神の罰が一瞬の風となって下される時の事だと示している。この語は、一瞬にして町全体を破壊する原子爆弾投下を指しているのかもしれない。

注 24 来世における生とは、一般に知られている様な無為のものではなく、絶えず精神的に成長し続けて行くものである。

注 25 喜びや幸せは、愛する者と分かち合う程に大きくなる。

注 26 天国における様々な恵み、神と共にある平安、自らの安らぎつまり心の平穩、これら全てを当節では平安(サラーム)の一語に要約している。

62. われを敬い崇めよ。それこそが正しい道なり。

63. 然るに悪魔は、お前たちの大勢を迷わし行きぬ。それなのに、お前たちなぜ悟らざりしか？

64. これはお前たちに約束せられたる地獄なり。

65. 今日こそそこに入れ、お前たち信ぜざりしが故に」と。

66. その日われらは、彼等の口に封印を施さん。されど、彼等の手はわれらに物云い、その足は為せることを証言せん。(注27)

67. 而して、我らもし欲しなば、彼等の視力を消し得るなり。そうなれば、道を見出さんと焦り急ぐとも、彼等如何にして見るを得べきか？(注28)

68. また、われら欲しなば、彼等をその場にくぎ付けすべくその形を変えることも可なり。(注29) そうなれば、彼等は進むも退くも適うまじ。

第五項

69. また、われらは、長寿を授ける者には、その者を昔の弱い状態に逆行せしむ。(注30) これでも彼等悟らざるか？

وَأَنۢ اٰبَعِدُوْنِيْ هٰذَا صِرَاطٌ مُّسْتَقِيْمٌ ﴿١٣﴾

وَلَقَدْ اَصَلَّ مِنْكُمْ جِبَلًا كَثِيْرًا ؕ اَفَلَمْ تَكُوْنُوْا تَعْقِلُوْنَ ﴿١٤﴾

هٰذِهِ جَهَنَّمُ الَّتِي كُنْتُمْ تُوعَدُوْنَ ﴿١٥﴾

اِصْلُوْهَا الْيَوْمَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْفُرُوْنَ ﴿١٦﴾

اَلْيَوْمَ نَخْتِمُ عَلٰۤى اَفْوَاهِهِمْ وَتُغْلَقُ اَنْۢبُۡۤىۡۡۢهُمۡ وَتَشْهَدُ اَرْۡجُلُهُمۡ بِمَا كَانُوْا يَكْسِبُوْنَ ﴿١٧﴾

وَلَوْ نَشَاءُ لَطَمَسْنَا عَلٰۤى اَعْيُنِهِمْ فَاسْتَبَقُوا الصِّرَاطَ فَاَنۢۢىۡ يَّبۡصِرُوْنَ ﴿١٨﴾

وَلَوْ نَشَاءُ لَنَسَخْنَاهُمْ عَلٰۤى مَّكَاتِهِمْ فَمَا اسْتَطَاعُوْا مُضِيًّا وَّلَا يَرْجِعُوْنَ ﴿١٩﴾

وَمَنْ تُعٰۤىۡرِهُ نٰۤىٔكِسَٰهُ فِى الْخَلْقِ اَفَلَا يَعْقِلُوْنَ ﴿٢٠﴾

注27 不信心者の有罪が彼等が驚く程完全に証明される時、彼等の口は閉じられ、一言も抗弁する事ができず、人間が行動する際の主要部分である手足は彼等の善悪を示す。今や人間の発言や行動は、テープレコーダーを使って正確に再生され、テレビにより遠く離れた画面に写し出される事ができる。これは、この世において、人間の舌や手足が如何にしてその者の有罪、無罪の決め手となり始めたのかを示している。

注28 人間は自由意志を授けられているので、自らの行動には責任を負わなければならない。不信心者達は真実に目を向ける事を頑強に拒んだ為、それを見極める力を取り上げられてしまった。これは前節の「彼らの口に封印を施さん。」の意味でもある。

注29 イブン・アパースによれば、この言葉は、「我々は家に居る彼等を滅ばしたであろう。」という意味となり、又、ハサンによれば、「彼等の体力、知力は全て失われたであろう。」という意味になる。あるいは、「我々は彼等に屈辱を与えたであろう。」という意味にもとれる。

注30 生命ある物は全て衰えて行く。この法則は個々人のみならず国家にも当てはまる。人間と同じく、国家も又、成長し、成熟した後、衰え滅びる。

70. われらは^{ムハマッド}彼に詩を教えた覚えなし、そは^{ムハマッド}彼に相応しからず。(注31) こは訓戒にして、物事を明白にし、且つ詳細に説くクルアーンに外ならぬ、
71. 心^{こころ}有る者のすべてを戒め、(注32) 不信心者に対するアッラーの宣告が実現されることを説く。
72. 彼等は^{きと}悟らざるか、われらが手で形造りしものの中から^も彼等のために家畜を創り、それを彼等に^も所有しめたことを？ (注33)
73. ^{しか}而して、われらは^{こゝ}之を彼等に服従せしめればこそ、彼等の或る者は乗るために利用し、また或る者は食用となす。
74. またそのほかにもさまざまな用途があり、飲みものもまた取れるなり。それでも、彼等は感謝せざるか？
75. ^{しか}然るに、彼等は、アッラー以外に^{あだしがみ}他神らを選び、之に^{これ}救いを求めんとす。
76. 邪神どもは彼等を助けること^{あた}能わず、逆に彼等の方が邪神どもを護る軍勢として神のおん前に召し出されん。
77. されば、彼等の言うことに汝の心を悩ますなかれ。げにわれは、彼等が胸に隠すこと、また明かすことも知る者なり。
78. ^{ひと}人間は、われらが一滴の精液から彼を創造せることを、知らざるか？ ^{ひと}然るに、見よ、人間は公然とわれらに刃向かうとは！
- وَمَا عَلَّمْنَاهُ الشَّعْرَ وَمَا يَنْبَغِي لَهُ إِنْ هُوَ إِلَّا ذِكْرٌ وَقُرْآنٌ مُبِينٌ ﴿٧٠﴾
- لِيُنذِرَ مَنْ كَانَ كَافِرًا وَيُحَقِّقَ الْقَوْلَ عَلَى الْكَافِرِينَ ﴿٧١﴾
- أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّا خَلَقْنَا لَهُمْ مِمَّا عَمِلَتْ أَيْدِينَا أَنْعَامًا فَهُمْ لَهَا مَالِكُونَ ﴿٧٢﴾
- وَذَلَّلْنَاهَا لَهُمْ فَمِنْهَا رَكُوبُهُمْ وَمِنْهَا يَأْكُلُونَ ﴿٧٣﴾
- وَلَهُمْ فِيهَا مَنَافِعُ وَمَشَارِبُ أَفَلَا يَشْكُرُونَ ﴿٧٤﴾
- وَاتَّخَذُوا مِنْ دُونِ اللَّهِ آلِهَةً لَعَلَّهُمْ يَنْصَرُونَ ﴿٧٥﴾
- لَا يَسْتَطِيعُونَ نَصْرَهُمْ وَهُمْ لَهُمْ جُندٌ مُقْحَضُونَ ﴿٧٦﴾
- فَلَا يَخْزِيكَ قَوْلُهُمْ إِنَّآ نَعْلَمُ مَا يَسْرُونَ وَمَا يُعْلِنُونَ ﴿٧٧﴾
- أَوَلَمْ يَرَ الْإِنْسَانُ أَنَّا خَلَقْنَاهُ مِنْ نُطْفَةٍ فَإِذَا هُوَ خَصِيمٌ مُبِينٌ ﴿٧٨﴾

注31 詩人はいてい夢や空想に耽っているものなので、神の預言者は詩人に違いないという考えは、彼の尊厳に相反する。神の預言者には非常に崇高な目的がある。しかし、この節は、全ての詩は有害であり、詩人は全て夢想家であると述べている訳ではなく、神の預言者は、単に詩人とするには余りにも崇高な精神の持ち主であると語っている。

注32 「心有る者」という言葉は、魂の滅びていない人という意味である。言い換えれば、神のお告げを受け入れる事が出来、神命に応じられる素養のある人を指す。

注33 神が人間の物質的欲望を満たされるなら、その精神的要望には応じられないという訳ではない。当節及び次節において、人間が日常最も必要とする事柄について述べてある。

79. また人間は、われらと相い似たものを虚構し、自分の創造を失念す。人間は云う、「朽ち果てたる骨に誰が生き返らせ得るぞ？」と。
80. 云え、「最初に彼等を創れる者が彼等を生き返らせん。なんととなれば、彼は一切の被造物を知悉し給う。
81. 彼はお前たちのために生の木より火を生じ、見よ、お前たちそのおかげで火を燃やすなり。(注 34)
82. 天地を創造せる者が之に類するものを創造する能力を持たざることありや？ 然り、彼は最高の創造者にして、一切を知る者なり。
83. げにその支配力は、何事かを欲し給う時、ただ「在れ」と仰せになれば、すなわち、そのものは存す。(注 35)
84. されば、彼の栄光を讃えまつれ、その御手の中に萬物を統べ給う大権あり。而して、彼の許へ、お前たち皆いずれ連れ戻されん。

وَضَرَبَ لَنَا مَثَلًا وَنَسِيَ خَلْقَهُ قَالَ مَنْ يُعْطِي
الْعِظَامَ وَهِيَ رَمِيمٌ ④

قُلْ يُحْيِيهَا الَّذِي أَنْشَأَهَا أَوَّلَ مَرَّةٍ وَهُوَ بِكُلِّ
خَلْقٍ عَلِيمٌ ⑤

الَّذِي جَعَلَ لَكُم مِّنَ الشَّجَرِ الْأَخْضَرِ نَارًا فَإِذَا
أَنْتُمْ مِنْهُ تُوقِدُونَ ⑥

أَوَلَيْسَ الَّذِي خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ بِقَدِيرٍ
عَلَىٰ أَنْ يَخْلُقَ مِثْلَهُمْ بَلَىٰ وَهُوَ الْخَلَّاقُ الْعَلِيمُ ⑦

إِنَّمَا أَمْرُهُ إِذَا أَرَادَ شَيْئًا أَنْ يَقُولَ لَهُ كُنْ فَيَكُونُ ⑧

فَسُبْحَانَ الَّذِي بِيَدِهِ مَلَكُوتُ كُلِّ شَيْءٍ وَإِلَيْهِ
تُرْجَعُونَ ⑨

注 34 「生の木」とは、風による摩擦で枝に火の付易い樹脂性の木を指す様だ。枝の摩擦で火事が起こるといふ事は、言外に次の様な事を示している。信仰心の薄い者が神の預言者や神の指導者と接する時、彼等の魂は新たに蘇るのである。

注 35 「何事か欲し給う時、ただ「在れ」と仰せになればすなわち、そのものは存す。」が、クルアーンに表される時、常に次の意味を示すものである。非常に重大な出来事が起き、特に、神の指導者を通して重大なる道徳的、宗教的改革が実現するであろう。当節では更に、モハammad 預言者の手で大いなる変革がもたらされたとも述べている。



アッサー・ファート

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において、
 2. 列を詰めて整列する者たちにかけて、(注1)
 3. また勢よく敵を撃退する者たちにかけて、
 (注2)
 4. 並びに訓戒のクルアーンを読誦する者たち
 にかけて誓う、(注3)
 5. げにお前たちの神は唯一にして、(注4)
 6. 天地の主、並びに天地の間の萬物の主、
あめつち 旭日昇天の地の主なり。(注5)
- بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①
 وَالضُّحَىٰ ②
 فَأَلْزَمْتَ زُجُرًا ③
 فَالْتَلَيْتَ ذِكْرًا ④
 إِنَّ إِلَهَكُمْ لَوَاحِدٌ ⑤
 رَبُّ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا وَرَبُّ
 الْمَشَارِقِ ⑥

注1 (1)ワオという言葉は、当節及び次の二節では、「～により」「私は誓う」「私は証人として召喚する。」の意味で使われている。クルアーンにおいて、神はある人物や物の宣誓を受け、彼等を証人として召喚した。通常、人が神の名の下に宣誓する時、それは、証拠の不足を補う為であり、彼の証言に信憑性を加える為である。こうする事で、他に彼の証言を立証する人物がない時、その発言の正しさを神に証を預こうとするのである。しかしクルアーンの宣誓はその様なものではない。クルアーンは、陳述の真实性を証明するには、単なる主張ではなく、確固たる議論が必要だとしている。時には、これ等の宣誓は明白な自然の法則を指している事もあり、暗に、明白なものから暗示的なもの、つまり精神的な法へ注意を喚起するものである。クルアーンの宣誓の今一つの目的は、預言の真实性実証にある。当節はこれに当てはまる。

(2)戦いに加わるイスラム教徒達は、指揮者の背後で一日五回の礼拝を続けていた。

注2 イスラム教の敵と過酷な戦いを交え、彼等を撃退する事。

注3 クルアーンの朗誦者。

注4 2～5節には預言と事実が共に書かれてある。事実とは次の様なものである。いつの世にも数多居る中に、高潔にして神を畏れる人々があり、彼等は言葉や行動で、神は一つであるという真理を証明する。又預言とは次の様なものである。現在アラビア全土は偶像崇拜と道徳の退廃に陥っているが、やがて信心深い社会が生まれ、そこでは人々は神を崇め、神への賛美を歌い国中に人々の賛美の音が響き渡り、更にはその地に神の唯一性を維持する事ができるであろう。それ故、モハムマド預言者の仲間達は、その特徴が少しこの節に述べられているが、神の唯一性の証人として召喚されるのである。しかしこの節には別の解釈もある。もし、様々な宗教の賢人の集う代表者会議が平和裏に催され、法と秩序の元、基本教義が冷静にして公明正大に討議されるなら、その当然の帰結として、神は一つという教義を確認する事となろう。

注5 この言葉は、イスラム教が初めに東方諸国に、次いで世界中に広まった事を示す。

7. われらは星辰^{せいしん}を以て下天^{げてん}を飾り、(注6)
8. あらゆる背逆^{サタン}の悪魔^{サタン}に対する守りとせり。
(注7)
9. 彼等は高貴なる天使^{あたま}らの会議^{つよて}を盗み聴きする能^{あた}わず。すなわち八方より磔^{つよて}を浴せられ、
10. 撃退^{えいごう}され、且つ永劫^{えいごう}の刑罰^{えいごう}を受けん。
11. 而^{しか}して、もしひそかに盗み聴きする者あらば、突き刺す火焰^{こえ}が之を追う。(注8)
12. 彼等に問え、彼等が造れるものと、われらが創れるほかのものと、いずれが優りて堅牢^{けんろう}なるか、と。われらは腰の強い粘土^{けいろう}を以てそれ等を創りたり。
13. 汝は驚^{あや}き異^いしむも、彼等は嘲^{あや}り笑う。(注9)
14. 訓戒^{しんけい}されるとも、意に介せず。
15. 神兆^{しんし}を目のあたりに見ても、之^{これ}を嘲^{あや}り笑う。
16. 而^{しか}して、彼等は云う、「埒^{らち}もない、こは幻術^{げんじゆつ}にすぎず。
- إِنَّا زَيْنَّا السَّمَاءَ الدُّنْيَا بِزِينَةِ الْكَوَكِبِ ①
وَحِفْظًا مِّنْ كُلِّ شَيْطَانٍ مَّارِدٍ ②
لَّا يَسْمَعُونَ إِلَى الْمَلَأِ الْأَعْلَىٰ وَيُقَذَّفُونَ مِّنْ كُلِّ جَانِبٍ ③
دُحُورًا وَلَهُمْ عَذَابٌ وَاصِبٌ ④
إِلَّا مَن خَطِفَ الْخَطْفَةَ فَأَتْبَعَهُ شِهَابٌ ثَائِبٌ ⑤
فَاسْتَفْتَيْهِمْ أَهْمُ اشْدُ خَلْقًا أَمْ مَن خَلَقْنَا إِنَّا خَلَقْنَهُمْ مِّنْ طِينٍ لَّازِبٍ ⑥
بَلْ عَجِبْتَ وَيَسْخَرُونَ ⑦
وَإِذَا ذُكِّرُوا لَا يَذْكُرُونَ ⑧
وَإِذَا رَأَوْا آيَةً يَسْتَسْخَرُونَ ⑨
وَقَالُوا إِن هَٰذَا إِلَّا سِحْرٌ مُّيْنٌ ⑩

注6 この節は、身心並行論について述べている。つまり、物理的な空が惑星や星に支えられる様に、精神的な天空は預言者や神の指導者という精神的な存在により支えられるのである。両者はそれぞれ、精神的天空に光彩を添え、それは丁度、星や惑星が物理的な空を飾るのと同じである。

注7 サタンは二種類に分かれる。(1) 偽善者の様に、イスラム社会に内在する敵。当節では彼等を“背逆のサタン”と呼ぶ。(2) 外敵つまり不信心者。彼等は“拒絶されたサタン”と呼ばれている(15章18節)。

注8 神の世が天に在る限り、窃盗、強奪等の妨害を受ける事もなく安全である。しかしそれが預言者に啓示されれば、サタンや神の預言者の敵共は、預言者に誤った引用をさせてみたり、啓示から一節を抜き去ったり、啓示に多くの偽りを加える事で、啓示が誤り伝えられる様画策する。あるいは、預言者の教えを我が物として伝えようとすら試みる。しかし彼等の欺瞞は、神の指導者の手で啓示の真の姿が伝えられる時、暴かれるのである。

注9 モハammad預言者、及びアラビアに強く根付いたイスラム教を通して、真に高潔にして神を畏れる人々が現れた事は、実際モハammad預言者自身にとっても驚嘆すべき事柄である。

17. 何んとな！我等は死んで、土と骨とに化した時、再び甦らされるというか？

إِذَا مِتْنَا وَكُنَّا تُرَابًا وَعِظَامًا إْنَا نَبْعُثُّنَّ ۚ

18. いにしえの父祖たちもまた左様とな？」と。

أَوْ أَبَاؤُنَا الْأَوَّلُونَ ۚ

19. 云え、「然り。その時お前たちは恥辱をこうむらん」と。

قُلْ نَعَمْ وَأَنْتُمْ دَاخِرُونَ ۚ

20. そはただ一喝なり。而して見よ、彼等たちまち瞠目せん。

وَأَنسَاهِي زَجْرَةً وَاحِدَةً فَإِذَا هُمْ يَنْظُرُونَ ۚ

21. 而して、云わん、「ああ、情けなや！こは審判の日なるぞ」と。(注10)

وَقَالُوا يَا وَيْلَنَا هَذَا يَوْمُ الدِّينِ ۚ

22. アッラーは云わん、「これこそ、お前たちが否認し続けた最後の判決の日なり」と。

هَذَا يَوْمُ الْفَصْلِ الَّذِي كُنْتُمْ بِهِ تُكَذِّبُونَ ۚ

第二項

23. 天使たちは命ぜられん、「悪いことをした者、その伴侶もともども、並びに彼等がアッラー以外に崇めていたもの、

أُحْشِرُوا الَّذِينَ ظَلَمُوا وَأَزْوَاجَهُمْ وَمَا كَانُوا يَعْبُدُونَ ۚ

24. これ等を集めて、地獄へ導け。

مِنْ دُونِ اللَّهِ فَأَهْدُوهُمْ إِلَى صِرَاطِ الْجَحِيمِ ۚ

25. まて、彼等をとどめよ、彼等に訊ねたき儀あり。

وَقِفُّهُمْ إِنَّهُمْ مَسْئُولُونَ ۚ

26. お前たち、互に相い助けざるは何故ぞ？」と。(注11)

مَا لَكُمْ لَا تَنصَرُونَ ۚ

27. 否、この日、彼等はただ服従する以外に途なきなり。(注12)

بَلْ هُمْ الْيَوْمَ مُسْتَسْلِمُونَ ۚ

28. 彼等の或る者は、互に訊ね合うべく他の者に話しかけん。

وَأَقْبَلَ بَعْضُهُمْ عَلَى بَعْضٍ يَتَسَاءَلُونَ ۚ

29. 一方は云わん、「お前たちは常に右側から我等に来たりたり」と。(注13)

قَالُوا إِنَّا كُنْكُمْ تَاوِنًا عَنِ الْيَمِينِ ۚ

注10 おそらくメッカ陥落の日を指すのであろう。

注11 罪深き人々が互いに助け合う力が無いと悟れば、彼等は家へ戻るであらう。

注12 罪人は、互いの弁護を申し出る事はなく、唯非難し合うばかりであり、この事は次節に示されている。

注13 “右側”とは宗教を指し、当節は次の事を意味する。「貴人方は、宗教の名を借りて、我々を悪くそうと偽りを語った。」あるいは、“右側”は力を表しており、「貴人方は力を持ってして我々に近付いた。」という意味にもとれる。又、「貴人方は、正しい者だと標いつつ我々に近付いた。」とも解釈できる。

30. 他方は答えん、「然らず、お前たちこそ信者に非ざりき。
قَالُوا بَلْ لَّمْ تَكُونُوا مُؤْمِنِينَ ﴿٣٠﴾
31. しかも、我等はお前たちを自由にし得る者に非ざりき。要するにお前たち自身が則を逸脱たる民なりき。
وَمَا كَانَ لَنَا عَلَيْكُمْ مِنْ سُلْطَانٍ بَلْ كُنْتُمْ قَوْمًا طَٰغِينَ ﴿٣١﴾
32. 今、主のお言葉が事実となりて、我等にふりかけり。されば我等、天罰を味わねばなるまい。
فَحَقَّ عَلَيْنَا قَوْلُ رَبِّنَا ۖ إِنَّا لَذَٰبِقُونَ ﴿٣٢﴾
33. 確かに我等はお前たちを迷わせり。したが、我等とて迷いしなれば」と。
فَآغَوَيْنَاكُم بِمَا كُنَّا غَوِينَ ﴿٣٣﴾
34. かくてその日、彼等みな等しく刑罰を受けん。
وَأَنَّهُمْ يَوْمَئِذٍ فِي الْعَذَابِ مُشْتَرِكُونَ ﴿٣٤﴾
35. げにわれわれは、かくの如く、罪人を処罰す。
إِنَّا كَذٰلِكَ نَفْعَلُ بِالْمُجْرِمِينَ ﴿٣٥﴾
36. なんととなれば、彼等「アッラーの外に神なし」と告げられたる時、尊大にも、
إِنَّهُمْ كَانُوا إِذَا قِيلَ لَهُمْ لَا إِلَهَ إِلَّا اللَّهُ يَسْتَكْبِرُونَ ﴿٣٦﴾
37. 云えり、「我等の神々をこの氣狂い詩人のために捨てよとな」と。
وَيَقُولُونَ إِنَّا لَنَأْكُلُ الْهَيْتَنَا لِشَاعِرٍ مُّخْنُونٍ ﴿٣٧﴾
38. 然らず、彼は真理をもたらし、造わされたるすべての使徒の事実を証明する者なり。
بَلْ جَاءَ بِالْحَقِّ وَصَدَّقَ الْمُرْسَلِينَ ﴿٣٨﴾
39. お前たち、厳刑酷罰を味わせてやるぞ。
إِنَّكُمْ لَذَٰبِقُوا الْعَذَابِ الْآلِيمِ ﴿٣٩﴾
40. お前たちは自分が為せることに対してのみ返報されるべし、
وَمَا تَجْزُونَ إِلَّا مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٤٠﴾
41. 但し、アッラーに選ばれた僕等は除く。
إِلَّا عِبَادَ اللَّهِ الْمُخْلَصِينَ ﴿٤١﴾
42. それ等の者は特別なる給養を賜わるべし。
أُولَٰئِكَ لَهُمْ رِزْقٌ مَّعْلُومٌ ﴿٤٢﴾
43. すなわち、さまざまなる果物（注14）を。加えて、栄譽を与えられん、
فَوَالِئِهِ وَهُمْ مُّكْرَمُونَ ﴿٤٣﴾
44. 至福の園にて、
فِي جَنَّاتِ النَّعِيمِ ﴿٤٤﴾
45. 互に相い対して榻に坐す。
عَلَى سُرُرٍ مُّتَقَابِلِينَ ﴿٤٥﴾

注14 信者が受けるであろう恩恵は、彼等の信仰と善行の賜物である。

46. 湧き出る泉から汲める盃は一同にめぐり、
47. その白き泡立ち、飲むと実に旨し、
48. その中には酩酊するものを含まず、体を疲れさすものもなし。
49. 彼等のそばには、眼すずやかにして臍^{うろ}たけた女性ら慎ましく侍るべし、(注15)
50. さながら日射しを厭う卵の如きその美しさ。
51. やがて、彼等は互に話しかけ、訊ね合う。
52. 中に一人の発言者ありて、云う、「我一人の友ありき、
53. その彼いつも口癖のように『お前までそれが真と信ずる類なるか？
54. 我等死に、土と骨とに帰したる後、我等は必ず返報せらるるとな？』と云いたり」と。
55. 更に彼の発言者は左右を見まわして、云わん、「皆の衆、その男を見て御覧じろ？」と。(注16)
56. 彼は下を見て、地獄の火の中にその友を認めん。
57. 彼は云わん、「アッラーの御名にかけて、汝は我を危うく滅ぼさんとせり。
58. もし我が主の恩恵なかりせば、我は必ず地獄に引き立てられる者の一人なりしならん」と。

يُطَافُ عَلَيْهِمْ بِكَأْسٍ مِنْ مَعِينٍ ﴿٣٧﴾

بِضَاءٍ لَذَّةٍ لِلشَّيْبَانِ ﴿٣٨﴾

لَا فِيهَا غَوْلٌ وَلَا هُمْ عَنْهَا يُنْفَوْنَ ﴿٣٩﴾

وَعِنْدَهُمْ قَاصِرَاتُ الطَّرْفِ عِينٌ ﴿٤٠﴾

كَأَنَّهُنَّ بَيْضٌ مَكْنُونٌ ﴿٤١﴾

فَأَقْبَلَ بَعْضُهُمْ عَلَى بَعْضٍ يَتَسَاءَلُونَ ﴿٤٢﴾

قَالَ قَائِلٌ مِنْهُمْ إِنِّي كَانَ لِي فَرِيضٌ ﴿٤٣﴾

يَقُولُ أَفَرَأَيْتَ لِمَنِ الْمَصَدِّقِينَ ﴿٤٤﴾

إِذَا أَمْتَنَا وَكُنَّا تَرَابًا وَعِظَاءً إِنَّا لَبَدِيدُونَ ﴿٤٥﴾

قَالَ هَلْ أَنْتُمْ مُطْلِعُونَ ﴿٤٦﴾

فَأَطَّلَعَ فَرَأَاهُ فِي سَوَاءٍ الْجَحِيمِ ﴿٤٧﴾

قَالَ تَأَلَّاهُ إِنْ كَذَّبَتْ لَتَرْدِينَ ﴿٤٨﴾

وَلَوْلَا نِعْمَةُ رَبِّي لَكُنْتُ مِنَ الْمُحْضَرِينَ ﴿٤٩﴾

注15 イスラム教徒が、前節に書かれた恩恵を全て賜った事は、歴史が証している。彼等は楽園を手にした。彼等は王座に座り、権力を享受した。人生の汚れ無き楽しみを全て味わった。美しく貞淑な妻を娶った。そしてこの上更に「神は彼等を御気に召し、彼等は神に喜びを感じた」(58章23節)。これは彼等の最大の偉業であった。

注16 話し手は52節で述べられた天国の人の事である。彼は、天国の他の人々に、彼の以前の不信者仲間を見たいかと尋ねるであろう。

59. 「我等は再び死なざるか、

أَفَمَا نَحْنُ بِمَيِّتِينَ ۚ

60. 先の死は別として、^{しか}而して刑罰を受けざるか？（注 17）

إِلَّا مَوْتَتَنَا الْأُولَىٰ وَمَا نَحْنُ بِمُعَذِّبِينَ ۝

61. げにこは最上の歓喜なり。（注 18）

إِنَّ هَذَا لَهُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ۝

62. されば、努力する者には、かくの如きことのために努力せしめよ」

يُثْبِلُ هَذَا فَلْيَعْمَلِ الْعَامِلُونَ ۝

63. このように歓待されるがいいか、それともザククームの木か？（注 19）

أَذَلِكَ خَيْرٌ تُرَلًّا أَمْ شَجَرَةُ الزَّقُّومِ ۝

64. げにわれらは悪人どもを試みんがためにこの樹を創れり。（注 20）

إِنَّا جَعَلْنَهَا فِتْنَةً لِلظَّالِمِينَ ۝

65. げにそは地獄の底に生える樹なり。（注 21）

إِنَّهَا شَجَرَةٌ تَخْرُجُ فِي أَصْلِ الْجَحِيمِ ۝

66. ^{しか}而して、その果実は恰も蛇の頭の如し。

طَلْعُهَا كَأَنَّهُ رُءُوسُ الشَّيَاطِينِ ۝

67. 彼等はそれを食わされて、腹は満たされるべし。

فَأَنَّهُمْ لَا يَكُونُ مِنْهَا قَائِلُونَ وَمِنْهَا الْبُطُونَ ۝

68. その上更に煮えたぎる汁を飲まされん。

ثُمَّ إِنَّ لَهُمْ عَلَيْهَا لَشَوْبًا مِّنْ حَمِيمٍ ۝

69. ^{しか}然る後、彼等は地獄に必ずや帰還させられん。

ثُمَّ إِنَّ مَرْجِعَهُمْ لَا إِلَىٰ الْجَحِيمِ ۝

70. 彼等は迷誤する先祖を見て、

إِنَّهُمْ الْقَوَا أَبَاءَهُمْ ضَالِّينَ ۝

71. 自分たちもまたその足跡を急ぎ追ひ行けり。（注 22）

فَهُمْ عَلَىٰ أَثَرِهِمْ يُهْرَعُونَ ۝

注 17 天国の信者は、人間の大きいなる運命、即ちその永遠なる生命に言及している与此処に述べられている。人間は、この世を離れた後には死を迎える事はないであろうと、彼は語る。永遠への彼の魂のさすらいは、終わり無きものであろう。

注 18 人間にとり最高の運命成就是、永遠の生命を享受し、絶えず精神的発達を遂げて行く事にある。

注 19 それを、死に到らしめる有害な食物という意味にとれば、当節は、「不信心者の呪われた木の果実を食べれば、精神的な死を被る」という意味になる。

注 20 不信心者の有害な木は、常に人々に害を与えて来た。

注 21 不信心者の木から食物を得る者は地獄の底へ落ちる。

注 22 人は古い慣習に捕らわれがちである。古臭い考えや偏見は容易には無くならない。人々が真実を受け入れる際の最大の障害は、クルアーンに繰り返し述べられている様に、新しい考えを拒む彼等自身の姿勢にある。

72. 彼等以前の昔の人々も大方は罪を犯したり。

وَلَقَدْ صَلَّ قَبْلَهُمْ أَكْثَرُ الْأَوَّلِينَ ﴿٥٧﴾

73. されば、われらは彼等に警告者を遣わせり。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا فِيهِمْ مُنْذِرِينَ ﴿٥٨﴾

74. 見よ、警告された者の末路が如何に悲惨なりしかを、

فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُنْذَرِينَ ﴿٥٩﴾

75. アッラーに選ばれた僕らを除いて。

بَعْدَ الْإِبْرَاهِيمَ الْمُخْلِصِينَ ﴿٦٠﴾

第三項

76. 昔、ノアがわれらに救いを求めた時、われらは彼の嘆願のすばらしき聴取者なりき。

وَلَقَدْ نَادَيْنَا نُوْحَ فَلْيَعْمَلِ الْمُجِيبُونَ ﴿٦١﴾

77. われらは彼とその家族を大難から救い、

وَنَجَّيْنَاهُ وَأَهْلَهُ مِنَ الْكَرْبِ الْعَظِيمِ ﴿٦٢﴾

78. その子孫を唯一の生存者たらしめたり。
(注 23)

وَجَعَلْنَا ذُرِّيَّتَهُ هُمُ الْبَاقِينَ ﴿٦٣﴾

79. 更にわれらは、後の世代の人々にまで、彼を讃えせしめたり、

وَتَرَكْنَا عَلَيْهِ فِي الْآخِرِينَ ﴿٦٤﴾

80. すなわち、「諸民族のうち特にノアの上に平安あれ」と。

سَلَامٌ عَلَى نُوْحٍ فِي الْعَالَمِينَ ﴿٦٥﴾

81. かくの如く、われらは善行を積む者を賞す。

إِنَّا كَذَلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ﴿٦٦﴾

82. げにノアは、篤信なるわれらの僕らの一人なりき。

إِنَّهُ مِنْ عِبَادِنَا الْمُؤْمِنِينَ ﴿٦٧﴾

83. 而して、われらは、その他の者どもをば溺死せしめたり。

ثُمَّ أَغْرَقْنَا الْآخَرِينَ ﴿٦٨﴾

84. げにアブラハムもまたノアと同じ信仰を有せり。

وَأَنَّ مِنْ شَيْعَتِهِ كَوْبُرُهُمْ ﴿٦٩﴾

85. アブラハムが純粹な心を以てその主の許に来たりし時を思え。

إِذْ جَاءَ رَبَّهُ بِقَلْبٍ سَلِيمٍ ﴿٧٠﴾

86. アブラハムはその父並びにその民に向って云えり、「お前たちが拝むもの、そは何ぞや？」

إِذْ قَالَ لِأَبِيهِ وَقَوْمِهِ مَاذَا تَعْبُدُونَ ﴿٧١﴾

注 23 ノアは人類の文明の礎を築いた。文明が発達する一族はその人口も増えその逆に、文明の後退する社会では、その周辺域においてまで人口は減って行く傾向にある。ノアの末裔は、高い文明を備え、豊富な資源を有していた為、他域へ領土を拡大し、文明の低い人々を支配した様である。低文明の人々は時の流れと共にノアの子孫に吸収され、果ては滅びてしまった。

87. お前たち、アッラーの外に虚妄の神々を求むるか? (注 24)

أَفَيْفَا إِلَهَةٌ دُونَ اللَّهِ تُرِيدُونَ ⑧٨

88. ならば万物の主を、お前たちなんと考えるか?」と。

فَمَا ظَنُّكُمْ بِرَبِّ الْعَالَمِينَ ⑧٩

89. アブラハムは天を仰ぎて星辰を眺め、(注 25)

فَنَظَرَ نَظْرَةً فِي النُّجُومِ ⑨٠

90. 而して、云えり、「気分がすぐれぬ」と。(注 26)

فَقَالَ إِنِّي سَقِيمٌ ⑨١

91. 故に彼等はアブラハムに背を向けて、去れり。

فَتَوَلَّوْا عَنْهُ مُدْبِرِينَ ⑨٢

92. そこで、アブラハム密かに彼等の神々のところに行きて、云えり、「お前たち食ぬか?

فَرَاغَ إِلَى إِلَهِهِمْ فَقَالَ أَلَا تَأْكُلُونَ ⑨٣

93. 如何がした、何故もの云わぬ?」と。(注 27)

مَا لَكُمْ لَا تَنْطِقُونَ ⑨٤

94. アブラハムは神々に飛びかかり、右手を以て之を打てり。(注 28)

فَرَاغَ عَلَيْهِمْ ضَرْبًا بِالْيَمِينِ ⑨٥

95. そこで、人々は急いでアブラハムのところへ来たれり。

فَأَقْبَلُوا إِلَيْهِ يَرْعُونَ ⑨٦

注 24 人は人間の姿をした偽りの神を崇め易いものである。彼は、神の力、太陽、月、星等自然の物体、神々が木や石から切り出した無生物、更には彼自身の古臭い習慣、偏見、迷信、願望、感情等が、その偽りの神に起因すると考える。

注 25 アブラハムと彼の聴衆の間で行なわれた論争は、夜更けまで続き、この話し合いが無益だと見たアブラハムは、それを早く打ち切りたいと願っていた様だ。そこで、話し合いが夜まで長引き、もう潮時であると悟らせる為に、彼は星に一瞥をくれたのである。

注 26 話し合いが無駄であると考えたアブラハムは、気分がすぐれないので一人にしてくれないかと人々に告げた。又、「気分がすぐれぬ」は次の様な意味がある。(1)貴人達が偽りの神を崇拝する為、私の気分はすぐれない。(2)貴人達が偽りの神を崇めるので、私は非常に悲しい思いをしている。(3)私は貴人達の偽りの神崇拝を嫌う。

注 27 生ける神の最大の特性ととは、神がそのお選びになった下僕に語りかけられ、又彼等の祈りに耳を傾けられ、そしてそれにお答えになる事である。信者に語りかけたり、その声に耳を傾け、その祈りを受ける力が無ければ、それは死んだ神である。

注 28 右手は力と強さを象徴しており、アブラハムが全力を持って偶像を打ち、粉々に砕いてしまったと、この節は示している。又、右とは誓いを意味しているので、当節は、「アブラハムが自らの誓いを果たす為に偶像を打ち砕いた」ことを表しているともいえよう (21 章 58 節)。

96. アブラハムは云えり、「お前たちは己れが^{きざ}刻んだものを拝するか、
قَالَ أَتَعْبُدُونَ مَا تَنْجِتُونَ^{٩٦}
97. お前たちを創り、またお前たちがこしらえたものも本来創造せるお方は、アッラーに非ざるか?」と。(注 29)
وَاللَّهُ خَلَقَكُمْ وَمَا تَعْمَلُونَ^{٩٧}
98. 彼等は云えり、「彼のために小屋を建て、その火の中に彼を投げ込め」と。
قَالُوا ابْنُوا لَهُ بُيُوتًا فَأَلْقُوهُ فِي الْجَحِيمِ^{٩٨}
99. かくの如く、彼等はアブラハムに悪^{だく}みを策したれば、われらは彼等を痛烈に辱^{はづか}しめたり。(注 30)
فَأَرَادُوا بِهِ كَيْدًا فَجَعَلْنَاهُمُ الْأَسْفَلِينَ^{٩٩}
100. アブラハムは云えり、「我は主の^{もと}許に行かん。主は必ずや我を導かん」と。
وَقَالَ إِنِّي ذَاهِبٌ إِلَىٰ رَبِّي سَيَهْدِينِ^{١٠٠}
101. 而して、彼祈りて云えり、「主よ、我に義^{なだ}しい息子を授けたまえ」と。
رَبِّ هَبْ لِي مِنَ الصَّالِحِينَ^{١٠١}
102. 故にわれらは、寛容なる一男児の朗報をアブラハムに伝えたり。
فَبَشَّرْنَاهُ بِغُلَامٍ حَلِيمٍ^{١٠٢}
103. さて、その子が、アブラハムと共に走り廻れる年頃に成長した時、アブラハムは云えり、「愛する息子よ、我は汝を犠牲に供えることを夢に見たり。されば、汝、之をどう思うか?」と。息子は答えて、云えり、「父上よ、命ぜられた如くなしたまえ。アッラーの思召しなら、我よく耐え忍ぶ者なることを父上に証明せん」と。(注 31)
فَلَمَّا بَلَغَ مَعَهُ السَّعْيَ قَالَ يَبْنَئِي إِنِّي أَرَىٰ فِي الْمَنَامِ أَنِّي أَذْبَحُكَ فَانْظُرْ مَاذَا تَرَىٰ قَالَ يَٰأَبَتِ افْعَلْ مَا تُؤْمَرُ سَتَجِدُنِي إِن شَاءَ اللَّهُ مِنَ الصَّادِقِينَ^{١٠٣}
104. かくて、兩名は神意に従い、アブラハムが息子の額を地に伏せし時、
فَلَمَّا أَسْلَمَا وَتَلَّهُ لِلْجَبِينِ^{١٠٤}
105. われらはアブラハムに声かけて、云えり、「アブラハムよ、
وَنَادَيْنَاهُ أَنْ يَأْتِ بِهِيْمٍ^{١٠٥}

注 29 貴人方の道具となる手、足。

注 30 アブラハムの敵達は、彼に刃向かった為にその計画を妨害され、深い屈辱を味わった。

注 31 アブラハムが、神の命令に従い、二人の息子イシュマエルとイサクのどちらを生けにえに捧げたかという点で、クルアーンと聖書は意見を異にしている。聖書はイサクであったと述べ(創世記 22 章 2 節) 一方クルアーンはイシュマエルであったと明記している。(詳細は英語版参照のこと)

106. 汝はすでにその夢の約束を履行せり」と。
かくの如く、われらは善事をなすものを賞
す。

107. げにこは明らかな^{こころみ}試練なりき。

108. われらはすばらしい犠牲を以て彼の息子^{あな}
を贖いたり。(注 32)

109. 而して更に、われらは後の世代の人々に
まで彼を讃えせしめたり、(注 33)

110. すなわち、「アブラハムの上に平安あれ」
と。

111. かくの如く、われらは善行を積む者を賞
す。

112. げにアブラハムは、篤信なるわれらの僕
の一人なりき。

113. またわれらは、アブラハムに、義しい人
間の一人たる預言者イサクの朗報を伝え
たり。

114. その上われらは、アブラハムとイサクを
祝福せり。然れども、彼等の子孫の中には
善行者もあれば罪人もあり。(注 34)

第四項

115. げにわれらは、モーゼとアロンに恩恵を
施したり。

116. すなわち、われらは、彼等兩名とその民
を大難より救い出したたり。

قَدْ صَدَقْتَ الرَّؤْيَا إِنَّا كَذَلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ﴿١٠٦﴾

إِنَّ هَذَا لَهُوَ الْبَلَاءُ الْبَيِّنُ ﴿١٠٧﴾

وَقَدْ يَنْبَغُ عَظِيمٌ ﴿١٠٨﴾

وَتَرَكْنَا عَلَيْهِ فِي الْآخِرِينَ ﴿١٠٩﴾

سَلَامٌ عَلَىٰ إِبْرَاهِيمَ ﴿١١٠﴾

كَذَلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ﴿١١١﴾

إِنَّهُ مِنْ عِبَادِنَا الْمُؤْمِنِينَ ﴿١١٢﴾

وَبَشَّرْنَاهُ بِإِسْحَاقَ نَبِيًّا مِنَ الصَّالِحِينَ ﴿١١٣﴾

وَبَرَكْنَا عَلَيْهِ وَعَلَىٰ إِسْحَاقَ وَمِنْ ذُرِّيَّتِهِمَا

﴿١١٤﴾ مُحْسِنٌ وَظَالِمٌ لِّنَفْسِهِ مُبِينٌ ﴿١١٥﴾

وَلَقَدْ مَنَّآ عَلَىٰ مُوسَىٰ وَهَارُونَ ﴿١١٦﴾

وَنَجَّيْنَاهُمَا وَقَوْمَهُمَا مِنَ الْكَرْبِ الْعَظِيمِ ﴿١١٧﴾

注 32 イシュマエルを生けにえとして捧げる為のアブラハムの準備は、ハジ(巡礼)の儀式に欠かせないイスラムの生けにえの法に従い行われた。この節では、アブラハムの時代に流行っていた人間の生けにえを廃し、代わりに動物の生けにえを捧げたと暗示しているのであろう。

注 33 アブラハムをして後世に名を残せしめたのは、三大宗教であるイスラム教、キリスト教、ユダヤ教の弟子達よりも、遥かに偉大な教訓を授けられたからであり、この事は、この偉大なる創始者を先祖と仰ぐ人々にとり誇りとなっている。

注 34 “われらは、アブラハムとイサクを祝福せり。”この言葉は、神がイシュマエルを通して、アブラハムの子孫にお与えになった祝福を示している。イサクは、別に、その名前前で書かれてある。

117. 而して、われらは彼等を援け、勝利者たらしめたり。
118. その上わられは、事理を明らかにする経典を彼等に授けたり。
119. 而して、彼等を正しい道に導けり。
120. 而して更に、われらは後の世代の人々にまで彼等を讃えせしめたり、
121. すなわち、「モーゼとアロンの上に平安あれ!」と。
122. かくの如く、われらは善事をなす者を賞す。
123. げに彼等兩名とも篤信なるわれらの僕なりき。
124. 次にエリアもまた確かに、使徒の一人なりき。(注 35)
125. エリアはその民に向って云えり、「お前たち神を畏れざるか?
126. パールを拝んで、最高の創造者、(注 36)
127. すなわち、お前たちの主であり、祖先の主たるアッラーを捨てての気か?」と。
128. 然るに、彼等、エリアを嗤つきとして遇したれば、そのなせることの申し開きのため、いずれ神の御前に曳き出されん、
129. 但しアッラーに選ばれた僕らは除く。
130. 而して、われらは、後の世代の人々にまで彼を讃えせしめたり、

وَنَصَرْنَاهُمْ فَكَانُوا هُمُ الْغَالِبِينَ ﴿١١٧﴾

وَأَتَيْنَاهُمَا الْكِتَابَ الْمُسْتَقِيمَ ﴿١١٨﴾

وَهَدَيْنَاهُمَا الصِّرَاطَ الْمُسْتَقِيمَ ﴿١١٩﴾

وَتَرَكْنَا عَلَيْهِمَا فِي الْآخِرِينَ ﴿١٢٠﴾

سَلَامٌ عَلَى مُوسَى وَهَارُونَ ﴿١٢١﴾

إِنَّا كَذَلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ﴿١٢٢﴾

إِنَّهُمَا مِنْ عِبَادِنَا الْمُؤْمِنِينَ ﴿١٢٣﴾

وَرَأَى الْيَاسَ لَيْسَ الْمُرْسَلِينَ ﴿١٢٤﴾

إِذْ قَالَ لِقَوْمِهِ أَالَأْتُمُوتُونَ ﴿١٢٥﴾

أَتَدْعُونَ بَعْلًا وَتَذَرُونَ أَحْسَنَ الْخَالِقِينَ ﴿١٢٦﴾

اللَّهُ رَبُّكُمْ وَرَبُّ آبَائِكُمُ الْأَوَّلِينَ ﴿١٢٧﴾

فَكَذَّبُوهُ فَأَنَّهُمْ كُضُّرُونَ ﴿١٢٨﴾

إِلَّا عِبَادَ اللَّهِ الْمُخْلَصِينَ ﴿١٢٩﴾

وَتَرَكْنَا عَلَيْهِ فِي الْآخِرِينَ ﴿١٣٠﴾

注 35 エリヤは紀元前 900 年頃存在した。彼はヨルダンの東岸にあるギリードで生まれた。(Jew. Enc, 列王上; 17 章 1 節)

注 36 パールは、預言者エリヤの聴衆の崇拜するひとつの偶像の名であった。この人々は太陽を崇めた。パールは太陽神でありシリアのある町の人々は、それを崇めていた又、その町は、現在はシリアにありパーラ・ベックと呼ばれる。

131. すなわち、「エリアとその民の上に平安あれ」と。

سَلَامٌ عَلَىٰ آلِ يَاسِينَ ⑬①

132. かくの如く、われらは善事をなす者を賞す。

إِنَّا كَذَلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ⑬②

133. げに彼は篤信なるわれらの僕らの一人なりき。

إِنَّهُ مِنْ عِبَادِنَا الْمُؤْمِنِينَ ⑬③

134. 次に、ロトもまた確かに、使徒の一人なりき。

وَأَنَّ لُوطًا لَيْسَ الْمُرْسَلِينَ ⑬④

135. われらはロトとその家族を救いたり、

إِذْ نَجَّيْنَاهُ وَأَهْلَهُ أَجْمَعِينَ ⑬⑤

136. 但し後に残れる連中の中に入りし一老女を除いて。

إِلَّا عَجُوزًا فِي الْغَابِرِينَ ⑬⑥

137. 然る後に、われらは他の者を悉く滅ぼせり。

ثُمَّ دَمَّرْنَا الْآخَرِينَ ⑬⑦

138. げにお前たちはその廢墟のそばを、朝な、

وَأَنْتُمْ تَسْمُرُونَ عَلَيْهِمْ مُّصْبِحِينَ ⑬⑧

139. 夕なに、往き来す。それでも、なぜお前たちわからざるか？ (注 37)

وَيَايَلَيْلُ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ⑬⑨

第五項

140. 次に、ヨナもまた確かに、使徒の一人なりき。 (注 38)

وَأَنَّ يُونُسَ لَيْسَ الْمُرْسَلِينَ ⑬⑩

141. 彼貨物を満載せる船に逃れし時、(注 39)

إِذْ أَبَقَ إِلَى الْفُلِ الْكَاسِ الْشَّحُونِ ⑬⑪

142. 水夫と共に籤を抽き、負けたり。

فَسَاهَمَ فَكَانَ مِنَ الْمُدْحَضِينَ ⑬⑫

143. 自責の念にかられている時、一魚ありて彼を吞めり。

فَالْتَقَمَهُ الْخُوتُ وَهُوَ مُلِيمٌ ⑬⑬

注 37 ロトが伝道に歩いた町ソドムそしてゴモラは、アラブの隊商が昼夜通った、シリアからアラビアへ抜ける街道沿いにあった。クルアーンの他の箇所では、これ等の町は、今でも存在している道にある (15 章 77 節) と記されている。

注 38 ヨナはイスラエルの預言者で、ジェロボム二世、又はジェホハズの治世であった九世紀に存在した。6 章 87 節及び 88 節も参照の事。

注 39 聖書によれば、ヨナは神よりニネベに呪いをかける様命ぜられたにもかかわらず彼は神の意に従わずタルシーシへ逃れた (ヨナ書：1 章 3 節)。クルアーンは、この聖書の記述は神の預言者を非難するものだとし、異議を唱えている。むしろ、クルアーンはヨナの人々に対し怒りを表しており、彼等が神のお告げを拒んだ為に、ヨナは彼等から逃れたのである。

144. 彼もし神を讃える者ならざりせば、
 145. 必ずや審判の日まで魚腹の中に居たりし
 ならん。
 146. 然るに、われらは、彼を荒涼たる岸边に
 打ち上げたり。而して、彼病みぬ。
 147. されば、われらは、彼の上に瓢の木を繁
 らせり。
 148. 而して、われらは、彼を使徒として、十
 万人、いやそれ以上の人々のところへ遣わ
 したり。
 149. 而して、彼等みな信じたれば、われらは
 彼等に暫時生を楽しむことを許したり。
 150. 彼等（注40）に尋ねよ、彼等の主は娘を
 有し、彼等は息子を有すと云うかと。（注
 41）
 151. また、われらは天使たちを女性に創りし
 か、彼等之を目撃したと云うかと。
 152. 彼等の云うところは、歴然たる作りごと
 なり、
 153. 「アッラーが子を生めり」とは。彼等は
 間違いなく嘘つきなり。
 154. アッラーは息子よりもむしろ娘を選びた
 るか？
 155. 如何がした？ 汝等どう判断するか？
 156. お前たちまだ反省せざるか？
 157. それとも、明らかな証拠でもあるのか？
 158. もしお前たちの言葉が本当なら、お前た
 ちの經典を出して見せよ。

فَلَوْلَا أَنَّهُ كَانَ مِنَ الْمُسَبِّحِينَ ﴿١٤٤﴾
 لَكِثَ فِي بَطْنِهِ إِلَى يَوْمِ يُبْعَثُونَ ﴿١٤٥﴾
 فَجَدَدْنَاهُ بِالْعَرَاءِ وَهُوَ سَقِيمٌ ﴿١٤٦﴾
 وَأَنْبَتْنَا عَلَيْهِ شَجَرَةً مِنْ يَقْطِينٍ ﴿١٤٧﴾
 وَأَرْسَلْنَاهُ إِلَى مِائَةِ أَلْفٍ أَوْ يَزِيدُونَ ﴿١٤٨﴾
 فَأَمَّاؤَا فَمَتَّعْنَاهُمْ إِلَى حِينٍ ﴿١٤٩﴾
 فَاسْتَفْتِهِمُ الرِّبَّاءُ الْبَنَاتُ وَلَهُمُ الْبَنُونَ ﴿١٥٠﴾
 أَمْ خَلَقْنَا الْمَلَائِكَةَ إِنَاثًا وَهُمْ شَاهِدُونَ ﴿١٥١﴾
 إِلَّا أَنَّهُمْ مِنْ أَفْكَهٍ يُقْوَلُونَ ﴿١٥٢﴾
 وَلَدَّ اللَّهُ إِنَّهُمْ لَكَذِبُونَ ﴿١٥٣﴾
 أَصْطَفَى الْبَنَاتِ عَلَى الْبَنِينَ ﴿١٥٤﴾
 مَا لَكُمْ كَيْفَ تَحْكُمُونَ ﴿١٥٥﴾
 أَفَلَا تَذَكَّرُونَ ﴿١٥٦﴾
 أَمْ لَكُمْ سُلْطَانٌ مُبِينٌ ﴿١٥٧﴾
 فَأَنُؤَا بِكِتَابِكُمْ إِن كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿١٥٨﴾

注40 不信心者のメッカの人々。

注41 アラブの人々は、神の力を天使の為せる業とし、天使達が神の娘であると信じた。この事が此所で偶像崇拜として非難されている。

159. 彼等は、アッラーと妖靈^{ジン}との間に血縁ありと主張す。然るに、妖靈^{ジン}は審判のため神の御前に曳き出される身なることを承知す。
160. 聖なるかなアッラー、彼等が彼のせいにするものから超越する御方。
161. なれど、アッラーに選ばれた僕らは、かくの如きことはなさず。
162. お前たち、並びにお前たちが崇拝するのは、
163. アッラーに逆らって何人も迷わすことを得ず、
164. 地獄の火で焼かれる者を除いて。
165. 天使たちは云う、「我等のうち一人として定めされた部署を持たざる者はなし。(注42)
166. 我等は列をなして整列し、
167. アッラーの栄光を讃え奉る」と。
168. 彼等は常々かく云えり、
169. 「もし我等が古代の人々のように聖典を有したならば、
170. 我等は確かにアッラーの選ばれた僕になりしものを」と。
171. ところが、いざクルアーンが彼等に降ると、彼等は之を信ぜず。されど、彼等はやがて思い知らん。
172. げにわれらの言葉はすでに使徒たるわれらの僕らに告げ知らせたり、
173. 使徒たちが救援されるのは確かなり、

وَجَعَلُوا بَيْنَهُ وَبَيْنَ الْجَنَّةِ نَسَبًا وَلَقَدْ عَلِمَتِ
الْجَنَّةُ إِنَّهُمْ لَكَاخِصُونَ ﴿١٥٩﴾

سُبْحَنَ اللَّهِ عَمَّا يُصِفُونَ ﴿١٦٠﴾

إِلَّا عِبَادَ اللَّهِ الْمُخْلَصِينَ ﴿١٦١﴾

فَاتَّكُمُ وَمَا تَعْبُدُونَ ﴿١٦٢﴾

مَا أَنْتُمْ عَلَيْهِ بِفِتْنِينَ ﴿١٦٣﴾

إِلَّا مَنْ هُوَ صَالِ الْجَحِيمِ ﴿١٦٤﴾

وَمَا مِنَّا إِلَّا لَهُ مَقَامٌ مَعْلُومٌ ﴿١٦٥﴾

وَأِنَّا لَنَحْنُ الصَّافُونَ ﴿١٦٦﴾

وَأِنَّا لَنَحْنُ السُّبُّوحُونَ ﴿١٦٧﴾

وَأِنْ كَانُوا لَيَقُولُونَ ﴿١٦٨﴾

لَوْ أَنَّ عِنْدَنَا ذِكْرًا مِنَ الْأَوَّلِينَ ﴿١٦٩﴾

لَكُنَّا عِبَادَ اللَّهِ الْمُخْلَصِينَ ﴿١٧٠﴾

فَكْفُرُوا بِهِ فَسُوفَ يَعْلَمُونَ ﴿١٧١﴾

وَلَقَدْ سَبَقَتْ كَلِمَتُنَا لِعِبَادِنَا الْمُرْسَلِينَ ﴿١٧٢﴾

إِنَّهُمْ لَهُمُ الْمَنْصُورُونَ ﴿١٧٣﴾

注 42 この言葉は、ある人々の言う様に、天使を指すのかもしれない。他の人々によれば、それは信者について述べている事になる。

174. また勝利するはわれらの軍勢なりと。

وَأَنَّ جُنْدَنَا لَهُمُ الْغَلَبُونَ ﴿١٧٢﴾

175. されば、汝、しばらく彼等を顧みるな。

فَتَوَلَّ عَنْهُمْ حَتَّىٰ جِيئَ ۖ ﴿١٧٣﴾

176. 而して、彼等を見守れ、彼等に己が末路を見せしめんがために。

وَأَبْصِرْهُمْ فَسَوْفَ يُبْصَرُونَ ﴿١٧٤﴾

177. なんと、彼等はわれらが刑罰を催促するか？

أَفِعْدَابِنَا يَسْتَعْجِلُونَ ﴿١٧٥﴾

178. されど、いざそれが彼等の中庭に降る時、そは警告された人々には禍なる朝なるべし。(注43)

فَإِذَا نَزَلَ بِسَاحَتِهِمْ فَسَاءَ صَبَاحُ الْمُنْذَرِينَ ﴿١٧٦﴾

179. されば、汝、しばらく彼等を顧みるな。

وَتَوَلَّ عَنْهُمْ حَتَّىٰ جِيئَ ۖ ﴿١٧٧﴾

180. 而して、見守れ、彼等に己が末路を見せしめんがために。

وَأَبْصِرْهُمْ فَسَوْفَ يُبْصَرُونَ ﴿١٧٨﴾

181. 聖なるかな汝の主、栄光の主、彼等が主張するものの上に超在す。

سُبْحَنَ رَبِّكَ رَبِّ الْعِزَّةِ عَمَّا يَصِفُونَ ﴿١٧٩﴾

182. 使徒たちの上に平安あれ！(注44)

وَسَلَامٌ عَلَى الْمُرْسَلِينَ ﴿١٨٠﴾

183. 讃えあれアッラー、万物の主。

سُبْحَانَكَ اللَّهُمَّ وَالْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١٨١﴾

注43 この言葉はメッカの人々にとり最悪の日となった、メッカ陥落の日を指している様だ。この時、総勢一万のイスラム軍がメッカの郊外に押し寄せた。メッカの人々による反イスラムの企ては悉く失敗に終わり、信者の側に輝かしい勝利がもたらされた為、彼等の屈辱の器は溢れんばかりになった。

注44 この言葉は、全預言者及び神の使者を代表するモハammad預言者を指している様だ。

سُورَةُ صَ مَكِّيَّةٌ

(۳۸)

サード
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. サード。※訓戒に満ちたるクルアーンにか
けて誓う、そはわれらが啓示の言葉なり。
※ 真の神
3. 信ぜざる者どもは間違ったうぬぼれと憎し
みに深く染まる。
4. 彼等以前に、われらは如何に多くの世代を
滅ぼしたことか！ 彼等は慈悲を嘆願した
けれど、すでに遅く、逃れる間なかりき。
5. 彼等は自分たちの中から警告者が登場せる
ことを驚き怪しむ。而して、不信心者ども
は云えり、「こは大山師の妖術つかいなり。
6. あの男は諸々の神々を、唯一の神となすと
な？ こはまことに奇怪なことなり」と。
7. 彼等の長老たちは触れ歩けり、「住け、お前
たちの神々をあくまでも護持せよ。こは企
まれたることなり。
8. 我等は今までの宗教に、かくの如きことあ
るを聞かざるなり。こはただの作り話にす
ぎず。
9. 我等のうちあの男にのみ訓戒が降りたる
か？」と。否、彼等はわが訓戒を疑う。彼
等はまだわが懲罰を味わざるが故に。
10. 偉力者、厚施者たる汝の主、その慈悲の宝
庫は彼等のものなるか？

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

ص وَالْقُرْآنِ ذِي الذِّكْرِ

بَلِ الَّذِينَ كَفَرُوا فِي عَذَابٍ وَشَقَاقٍ

كَمْ أَهْلَكْنَا مِنْ قَبْلِهِمْ مِنْ قَرْنٍ فَنَادَ ذَاوَلَاتِ
جَيْنٍ مَنَاصٍوَعَجِبُوا أَنْ جَاءَهُمْ مُنْذِرٌ مِنْهُمْ وَقَالَ الْكَافِرُونَ
هَذَا اسِحْرُ كَذَّابٍأَجْعَلِ الْإِلَهَةَ إِلَهًا وَاحِدًا إِنَّ هَذَا لَشَيْءٌ
عَجَبٌوَإِن طَلَّقَ الْمَلَائِكَةُ مِنْهُمْ أَنْ أَمْسُوا وَاصْبِرُوا عَلَى
الْهَيْكَلِ إِنَّ هَذَا لَشَيْءٌ يُرَادُمَا سَبَعْنَا بِهَذَا فِي الْإِلَهِ الْأُخْرَى إِنَّ هَذَا إِلَّا
اِخْتِلَافٌء أَنْزَلَ عَلَيْهِ الذِّكْرَ مِنْ بَيْنِنَا بَلْ هُمْ فِي شَكٍّ
مِنْ ذِكْرِي بَلْ لَمَّا يَدْعُونَ عَذَابٌ

أَمْرٌ عِنْدَهُمْ خَزَائِنُ رَحْمَةِ رَبِّكَ الْعَزِيزِ الْوَهَّابِ

11. また、^{اَرْضُ}天地とその間にある一切の大権は彼等のものなるか？ 果して然らば、彼等をして勝手に手だてをさせて、登らしめよ。
(注1)

أَمْ لَهُمْ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا
فَلْيَرْتَقُوا فِي الْأَسْبَابِ ⑪

12. 彼等は、そこにて敗退せん同盟軍なり。(注2)

جُنُودٌ مَّا هُمْ إِلَّا مَهْزُومٌ مِنَ الْأَحْزَابِ ⑫

13. 彼等以前にも、ノアの民、アード並びに強大なるファラオの民が使徒たちを偽り者として遇したり。

كَذَّبَتْ بَنِي إِسْرَافِيلَ قَوْمُ نُوحٍ وَعَادٌ وَفِرْعَوْنُ
ذُو الْأَوْتَارِ ⑬

14. またサムード族やロトの民、並びに森の住人たち、これらはみな使徒たちに敵対せる同盟者なりき。

وَتُؤُودُ وَقَوْمُ لُوطٍ وَأَصْحَابُ الْأَيْكَةِ أُولَئِكَ
الْأَحْزَابُ ⑭

15. 彼等は皆、使徒たちを偽り者として遇したれば、わが懲罰は当然彼等に襲いかかりたり。

إِنَّ كُلَّ إِلَّا كَذَّبَ الرُّسُلَ فَحَقَّ عِقَابُ ⑮

第二項

16. 而して、これ等の者どもはただ一声を待つばかり、もはや一瞬の猶予もありはせぬ。

وَمَا يَنْظُرُونَ إِلَّا صَيْحَةً وَاحِدَةً تَأْخُذُهُمْ قُتَابٍ ⑯

17. 彼等は云う、「主よ、清算の日に先立ちて、我等の頂戴する分を急いで下したまえ」と。

وَقَالُوا رَبَّنَا عَجِّلْ لَنَا قِطْعَانًا قَبْلَ يَوْمِ الْحِسَابِ ⑰

18. 彼等が何を云おうと耐え忍べ、而して、われらの僕、実力者ダビデを憶い起せ。げに彼は常に神に頼りたり。

إِصْدِرْ عَلَيَّ مَا يَقُولُونَ وَادْكُرْ عَبْدَنَا دَاوُدَ ذَا الْأَيْدِ
إِنَّهُ آوَابٌ ⑱

19. われらは山々をダビデに従わせしむ。すなわち、山々はダビデと共に、朝な夕な神の讃美を賛し奉りたり。

إِنَّا سَخَّرْنَا الْجِبَالَ مَعَهُ يُسَبِّحْنَ بِالْعَشِيِّ وَالْإِشْرَاقِ ⑲

20. また、鳥たちも呼び集めてダビデに従わせしむれば、皆群れ来たりて、神に頼りたり。

وَالطَّيْرَ مَحْشُورَةً كُلٌّ لَهُ آوَابٌ ⑳

注1 不信心者達が、モハammad預言者に逆らうため財産を集めて増やしても無駄である。

注2 この節には、預言と挑戦が同時に示されている。挑戦とは悪の勢力に向けられたものである。彼等は、イスラム軍の前進を阻もうと、富をかき集め、強力な連合軍を作った。又、預言とは次の様なものである。もし不信心者の連合軍がイスラム軍を阻止するなら、不名誉な完敗を喫すであろう。この明白な預言は、堀りの戦いで文字通り成就された。

21. 更にわれらは、ダビデの王権を強化し、知恵と断固たる判断とを与えたり。

22. 汝は、論争者がダビデの私室の壁を乗り越えて入り来たる物語を、聞きたることあるか？

23. ダビデは彼等が入り来たるを見て、驚けり。彼等は云えり、「心配めさるな。我等兩名は訴訟の当事者なり。いずれかが相手に不正をなしたれば、我等の間を公正に裁きたまえ、不公平なきよう、我等を正道に導き給え。

24. これなるは我が兄なり。彼は九十九頭の牝羊を所有す。然るに、我が牝羊はただの一頭なり。にもかかわらず、兄は『その牝羊を我に委ねよ』と横車を押せり」と。

25. ダビデは云えり、「自分の牝羊に汝の牝羊を併せ加えんとする彼の要求は、確かに不当なり。げに共同で仕事する者の多くは、互に非をなす。ただ神を信じて善行を積む者を除いて。然るに、そのような者は実に少し」と。時に、ダビデはわれらが彼を試みたることに気づき、主に宥恕を請い、礼拝にひれ伏し、主にお縋りせり。

26. されば、われらは彼の怠慢を教したり。げに彼はわれらの側近の高位階と素晴らしい帰処を得たり。(注3)

27. かくてわれらはダビデに云えり、「ダビデよ、われらは汝を、地上に於けるわれらの代理者となせり。されば、人と人の間を公平に裁判し、アッラーの道を踏みはずさぬようくだらぬ欲望に従うなかれ」と。げに

وَسَدَدْنَا مُلْكَهُ وَأَتَيْنَهُ الْحِكْمَةَ وَفَصَّلَ
الْخِطَابَ ①

وَهَذَا أَمْرُكَ نَبِيُّ الْخَصْمِ إِذْ تَسَوَّرُوا الْحَرْبَ ②

إِذْ دَخَلُوا عَلَى دَاوُدَ فَفَزِعَ مِنْهُمْ قَالُوا لَا تَخَفْ
خَصَمَيْنِ بَنِي بَعْضُنَا عَلَى بَعْضٍ فَأَخَظَمْنَا بَيْنَهُمَا
بِالْحَقِّ وَلَا تَسْطِطُ وَاهِدِنَا إِلَى سَوَاءِ الصِّرَاطِ ③

إِنَّ هَذَا أَخِي لَهُ تِسْعٌ وَتِسْعُونَ نَعْجَةً وَلِيَ
نَعْجَةً وَاحِدَةً فَقَالَ أَكْفُلْنِيهَا وَعَزَّنِي
فِي الْخِطَابِ ④

قَالَ لَقَدْ ظَلَمَكَ بِسُؤَالِ نَعْجَتِكَ إِلَى نِعَاجِهِ
وَإِنَّ كَثِيرًا مِّنَ الْخُلَطَاءِ لَيَبْغِي بَعْضُهُمْ عَلَى بَعْضٍ
إِلَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَلَئِلَّا فَاهُكُمْ
وَلَقَدْ دَاوُدُ أَنشَأَ فَتَنَّهُ فَاسْتَعْفَرَ رَبَّهُ وَخَرَّ رَاكِعًا
وَأَنَابَ ⑤

فَعَفَرْنَا لَهُ ذَلِكَ وَإِنَّ لَهُ عِندَنَا لَزُنْفٍ وَحَسَنَ
مَا يَأْتِي ⑥

يَا دَاوُدُ إِنَّا جَعَلْنَاكَ خَلِيفَةً فِي الْأَرْضِ فَاحْكُمْ
بَيْنَ النَّاسِ بِالْحَقِّ وَلَا تَتَّبِعِ الْهَوَىٰ فَيُضِلَّكَ
عَن سَبِيلِ اللَّهِ إِنَّ الَّذِينَ يَضِلُّونَ عَن سَبِيلِ

注3 この言葉は、ダビデには道德上の欠点や精神的弱さのなかった事を示しており、聖書が彼に負わせた姦通の罪を事実上否定している (サムエル書下、11章4節、5節)。

アッラーの道を踏みはずす者は、清算の日を忘れたが故に、必ず酷い罰を被らん。

第三項

28. われらは天地とその間に在る一切を、徒に創造したに非ず。そは不信心者どもの考えなり。禍なるかな不信心者ども、業火の罰故に。

29. われらが、信じて善行を積む者とこの世で不正を働く者とを、同じように遇すると思うか？ 義しい人を、邪悪な者と同じように遇すると思うか？

30. こは汝に啓示せる經典なり、祝福に満ちて、人々をしてその諸節を瞑想せしめ、また理解力を賦与せられた人々をして之に心を留めしめんがための。(注4)

31. われらはソロモンをダビデに与えたり。優れたる僕なりき。彼は常にわれらに頼る。

32. 或る日の夕まぐれ、駿馬がソロモンに献上せられたる時、

33. 彼は云えり、「我は主を思うが故に、馬を好む」と。彼それらの馬に夢中になりたれば、馬が垂幕の背後に隠れたる時、云えり、(注5)

34. 「馬を連れ戻せ」と。かくて、ソロモンは駿馬の脚や頸筋を撫で始めたり。(注6)

35. また、われらはソロモンを試みて、その王座に見せかけの肉体を据えたり。やがて、

اللَّهُ لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيدٌ بِمَا نَسُوا يَوْمَ الْحِسَابِ ﴿٢٨﴾

وَمَا خَلَقْنَا السَّمَاءَ وَالْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا بَاطِلًا
ذَلِكَ ظَنُّ الَّذِينَ كَفَرُوا فَوَيْلٌ لِلَّذِينَ كَفَرُوا
مِنَ النَّارِ ﴿٢٩﴾

أَمْ نَجْعَلُ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ كَالْفَسِدِينَ
فِي الْأَرْضِ أَمْ نَجْعَلُ الْمُتَّقِينَ كَالْفُجَّارِ ﴿٣٠﴾

كَيْتَبُ أَنْزَلْنَاهُ إِلَيْكَ مُبَارَكٌ لِيَدَّبَّرُوا آيَاتِهِ وَ
لِيَتَذَكَّرُوا أَلْوَالِ الْأَلْبَابِ ﴿٣١﴾

وَوَهَبْنَا لِدَاوُدَ سُلَيْمَانَ نِعْمَ الْعَبْدُ إِنَّهُ
أَوَابٌ ﴿٣٢﴾

إِذْ عَرَضَ عَلَيْهِ بِالْعِثِّيِّ الصَّفِيحَتُ الْجَدِيدُ ﴿٣٣﴾

فَقَالَ إِنِّي أَحْبَبْتُ حُبَّ الْخَيْرِ عَنْ ذِكْرِ رَبِّي
حَتَّى تَوَارَتْ بِالْحِجَابِ ﴿٣٤﴾

رُدُّوْهَا عَلَيَّ فَطَفِقَ مَسْحًا بِالشُّرُوقِ وَالْأَغْنَاقِ ﴿٣٥﴾

وَلَقَدْ فَتَنَّا سُلَيْمَانَ وَأَلْقَيْنَا عَلَى كُرْسِيِّهِ

注4 クルアーンには、全宗教の基本的、普遍的教義、及び永遠不滅の教えが表されており、人間の必要とするものを十二分に備えている。

注5 神はソロモンに力と富を授けられた。彼は広大な王国を支配し、その為強力な軍隊を持たねばならなかった。騎兵隊が彼の軍の主力だったので、当然彼は血統の良い馬を愛好した。ソロモンの馬を愛する気持は、競馬の愛好者や馬の繁殖のプロのそれとは違った。神の大義の戦いに馬は用いられたのであり、それは唯創造主への彼の愛から生じるものであった。

注6 ソロモンは馬の行進を眺め、馬をはめるため、自分の馬の首や足をさわった様だ。

ソロモンは赦しを求めて神にお縋りせり。
(注7)

جَسَدًا تُمْ أَنَابَ ③

36. ソロモンは云えり、「我が主よ、我を赦し給え、而して、後世の何人も有ち得ざる王国を我に授け給え。げに汝は素晴らしい施与者にまします」と。(注8)

قَالَ رَبِّ اغْفِرْ لِي وَهَبْ لِي مُلْكًا لَا يَبْتَغِي أَحَدٌ
مِّنْ بَعْدِي إِنَّكَ أَنْتَ الْوَهَّابُ ④

37. されば、われらは風をソロモンに従わせしめ
たれば、風はソロモンの命ずるまま、その
欲するところへ静かに吹き行く。

فَسَخَّرْنَا لَهُ الرِّيحَ تَجْرِي بِأَمْرِهِ رُحَاءَ حَيْثُ
إِصَابَ ⑤

38. また巨人たちを従わせしめたれば、その中
には各種の建築家や潜水夫たち、

وَالشَّيْطِينَ كُلِّ بَنَّاءٍ وَعَوَّاصٍ ⑥

39. その他足かせをかけられた者もありき。(注
9)

وَأُخَرِينَ مُقَرَّنِينَ فِي الْأَصْفَادِ ⑦

40. 「こはわれらの贈物、大まかに振舞うもよ
し、控え目にするもよし、汝の随意たるべ
し」

هَذَا عَطَاؤُنَا فَامْنُنْ أَوْ أَمْسِكْ بِغَيْرِ حِسَابٍ ⑧

41. かくして、ソロモンの位階はわれらの側近
くに占めて、素晴らしい帰処を得たり。

وَأَن لَّهُ عِندَنَا لُزْلِفٌ وَحُسْنٌ مَّآبٍ ⑨

第4項

42. われらの僕ヨブが主に向って「悪魔は我を
艱難辛苦によって悩ませり」と訴えたる時
を思え。

وَأَذْكُرْ عَبْدَنَا أَيُّوبَ إِذْ نَادَى رَبَّهُ أَنِّي مَسْرُورٌ
الشَّيْطَانُ يَنْصُبُ وَعْدًا ⑩

43. われらはヨブに命じたり、「汝の馬を汝の足
で駆り立て、すみやかに出発せよ。然らば
彼処に、身を净め、飲める清涼な水あり」
と。

أَرْكُضْ بِرِجْلِكَ هَذَا مُغْتَسَلٌ بَارِدٌ وَشَرَابٌ ⑪

注7 34章15節では、「一匹の地虫」という語が使われている。この語は、ソロモンの息子であり後継者のレハベアムあるいはダビデ一族に反旗を翻した無能な家来ジェロボアムを指している様だ。ソロモンは、自分の死後、その王国が無能な後継者の下では、その領土を維持できないであろうと悟った。そこで、彼は神に向かい祈った。この祈りは次節に述べられている。列王上：12章28節参照のこと。

注8 ソロモンのつかの間の王国も、彼の死後、息子の無能さにより崩壊するであろうと彼が予知した事は、前節に示されており、そこで彼は、神が彼の一族に授けられた魂の王国が続く様に祈った。「なんびとも持ち得ざる有る王国を我に授け給え」この言葉を文字通りの意味に取るなら、ソロモンの祈りは、「彼の死後、彼の権力と栄光を継ぐ王国はイスラエルの目にできない。」と解釈されたであろう。

注9 21章83節、34章13節14節に述べられた様に、ソロモンは、領土内の未開人、野蛮人や反抗的な山岳民族を支配下に治めた。彼は彼等を入隊させ、彼の為に様々な働きをさせた。前節の巨人、34章13節のジン(選良)は、この人々を指し、彼等がソロモンに与えられた仕事も同種のものであった(歴代志略下2章1節、2節)。

44. 而して、われらは慈悲によって、また思慮ある人々への訓戒たらしむるため、ヨブに家族と多くの眷族けんぞくとを授けたり。

وَوَهَبْنَا لَهُ أَهْلَهُ وَمِثْلَهُمْ مَعَهُمْ رَحْمَةً مِنَّا
وَذِكْرًا لِّأُولِي الْأَلْبَابِ ④④

45. 而して、われらはヨブに命じたり、「ひとつかみの乾いた小枝を握り、それにて打て。汝の約束を破るなかれ」と。われらは彼が忍耐強く立派な僕なるを知れり。げに彼は常に神に頼りたり。(注 10)

وَخَذَ بِيَدِكَ ضَعْفًا فَاضْرِبْ بِهِ وَلَا تَحْنُثْ
إِنَّا وَجَدْنَاهُ صَابِرًا نِعْمَ الْعَبْدُ إِنَّهُ أَوَّابٌ ④⑤

46. また、実力と識見を有する人々、われらの僕たちアブラハムとイサクとヤコブを思え。

وَادْكُرْ عَبْدَنَا إِبْرَاهِيمَ وَاسْحَقَ وَيَعْقُوبَ أُولِي
الْأَيْدِي وَالْأَبْصَارِ ④⑥

47. われらは特別なる目的のために彼等を選びたり、すなわち、来世の住居の人々を連想させるために。

إِنَّا أَخْلَصْنَاهُمْ بِخَالِصَةٍ ذِكْرًا لِّلدَّارِ ④⑦

48. まことに彼等は、われらの日から見ても、選良且つ最良の徒類ともがらなり。

وَرِثَهُمْ عِنْدَنَا لَكِنَ الْمُصْطَفَيْنَ الْإِخْيَارِ ④⑧

49. またイスマイルとエリシア (注 11) とズー・ル・キフルのことを思え。彼等はみな最良の徒類なりき。

وَادْكُرْ إِسْمَاعِيلَ وَالْيَسَعَ وَذَا الْكِفْلِ وَكُلٌّ مِّنَ
الْإِخْيَارِ ④⑨

50. こは訓戒なり。義しい人は必ずや素晴らしき帰処を得べし。

هَذَا ذِكْرٌ وَإِن لِلتَّقِيْنَ لِحُسْنِ مَّآبٍ ⑤①

51. すなわち、永遠の御園なり。諸門は彼等のために開かれ、

جَنَّتٍ عَذْنٍ مَّفْتَحَةٌ لَهُمُ الْبُوابُ ⑤②

52. その中でゆったりと身をもたせて、沢山の果物や飲物を望みのままに注文せん。

مُتَّكِئِينَ فِيهَا يَدْعُونَ فِيهَا بِفَاكِهَةٍ كَثِيرَةٍ
وَشَرَابٍ ⑤③

注 10 「汝の約束を破るなかれ」が意味する語は、偽りを受け入れない、つまり、偶像崇拜や多神教と妥協する事なく、確固として唯一神を信じ続けるようにということである。この言葉が、「誓いを破ってはならない」という意味なら、この節は、「ヨブは一族の者達の怠慢が元で彼等と袂を分かつたので、彼等に合流した後は、その怠慢を罰すると誓った。」事を示すものとなる。しかし、彼は、彼等に合流した時、当節に示されている通り、次の様な神の命を受けた。喜びと感謝の時に彼等を厳しく罰してはならず、彼等の苦しみが最少で済む様に誓いを果たさなければならない。

注 11 エリシアはエリヤの弟子であり後継者であった。彼は紀元前 938 年から 828 年まで存在した。 6 章 87 節も参照の事。

53. ^{しか}而して、彼等のそばには、同じ年頃の伏目
がちな乙女^{はべ}ら侍らん。
54. こは清算の日のために、お前たちに約束せ
らるるものなり。(注12)
55. げにこは尽きることなきわれらの給養な
り。
56. 信ずる人々はかくの如し。されど、邪悪な
徒輩^{ヤカ}には悪しき帰処あり。
57. すなわち、地獄なり。彼等はその中にて焼
かれるべし。ああ、なんと無惨な臥処^{ふしど}かな！
58. 邪悪な徒輩^{ヤカ}が得るものは、かくの如し。さ
れば、彼等はこれを味わえ、すなわち煮え
たぎる液体と猛烈に冷たい悪臭を放つ飲物
を。(注13)
59. その他にも、これに類するさまざまなる
責苦^{さめく}あり。(注14)
60. 不信心者どもの首領^{かしら}は告げられん、「こはお
前たちと共に無鉄砲に突き進める一軍な
り」と。彼等は歓迎せらるべくもなし。彼
等は業火に焼かれるべし。(注15)
61. 彼等は首領^{かしら}たちに向つて云わん、「お前たち
こそ歓迎せられざる者なり。我等を邪道に
導き、これを準備せるはお前たちなり。な
んと無惨な臥処^{ふしど}かな！」と。(注16)

وَعِنْدَهُمْ فُصْرَتٌ الظَّرْفِ اَتْرَابٌ ﴿٥٣﴾

لَقَدْ هَذَا مَا تُوعَدُونَ لِيَوْمِ الْحِسَابِ ﴿٥٤﴾

إِنَّ هَذَا لِرِزْقِنَا مَالَهُ مِنْ نَفَادٍ ﴿٥٥﴾

هَذَا وَإِنَّ لِلطَّغْيِينَ لَشَرَّ مَا بٍ ﴿٥٦﴾

جَهَنَّمَ يَصْلَوْنَهَا فَيُسَّ الْإِهَادُ ﴿٥٧﴾

هَذَا فَلْيَذُقُوهُ حَيْبِمُ وَعَسَاقُ ﴿٥٨﴾

وَأُخَرُ مِنْ شَكْلِهِ أَرْوَاجٌ ﴿٥٩﴾

هَذَا فَوْجٌ مُقْتَرِمٌ مَعَكُمْ لَا مَرْجَأَ لَهُمْ إِنَّهُمْ
صَالُوا النَّارِ ﴿٦٠﴾

قَالُوا بَلْ أَنْتُمْ لَأَمْرَجِبَ إِيكُمْ أَنْتُمْ قَدْ مَشَوْهَ
لَنَا فَيُسَّ الْقَرَارُ ﴿٦١﴾

注12 全ての人々が、その行いに応じ報酬を賜るか、さもなくば罰を下されるかが決められる日。判決の日
は、この世の全人類、社会、国家に訪れる。

注13 地獄にある人々は、熱湯が冷水を飲む事になろう。彼等は、神より授かった能力を適度に用いる事な
く、極端に走り、中庸を重んじなかった為、極度に熱い水か、さもなくば冷たい水を飲む事になるのである。

注14 本文に示された意味以外に、当節には次の意味もある。「彼等と同じ経歴を持つ人々がいるであろう。」

注15 不信心者の指導者達は、従者の一団が地獄に落ちて来るのを見る時、大勢の従者が彼等と共に火の中
に入ると告げられるであろう。盲目的に指導者に従った者達は、真実を拒んだ為、まさかさまに地獄へ落ち
るのである。

注16 不信心者の指導者に従った者達は、それぞれの言葉で指導者を呪うであろう。指導者、従者相方互い
に罵り合う事となる。人は自らの行いが招く悪い結末に直面する時、その非を他人に転嫁しようとするのは、
人間の性である。これは、罪深き者が、その悪行の恐るべき結末に直面した時にとる行動そのものである。

62. 彼等は更に云わん、「主よ、我等のためにこの事を準備せる者に、業火の刑を倍加し給え」と。(注17)

قَالُوا رَبَّنَا مَنْ قَدَّمَ لَنَا هَذَا فَزِدْهُ عَذَابًا ضِعْفًا
فِي النَّارِ ﴿٦٢﴾

63. 地獄の住人たち(注18)はまた云わん、「我等が常々悪人の類とみなせる者を、ここで見ざるとは、一体如何がした？」

وَقَالُوا مَا لَنَا لَا نَرَى رِجَالًا كُنَّا نَعُدُّهُمْ مِنْ
الْأَشْرَارِ ﴿٦٣﴾

64. 我等が不当にも彼等を笑いぐさにしたためか、それとも、我等が見落ししたのではあるまいか」と。(注19)

أَتَخَذْنَهُمْ سِحْرِيًّا أَمْ رَاغَتْ عَنْهُمْ الْأَبْصَارُ ﴿٦٤﴾

65. げに、こは真相なり、つまり、業火に陥ちた連中の互に相い争う姿なり。

﴿٦٥﴾ إِنَّ ذَلِكَ لَحَقٌّ تَخَاصُمُ أَهْلِ النَّارِ ﴿٦٥﴾

第5項

66. 云え、「我は一介の警告者にすぎず。唯一、至高のアッラー以外に神なし。

قُلْ إِنَّمَا أَنَا مُنذِرٌ وَمَا مِنْ إِلَهٍ إِلَّا اللَّهُ
الْوَاحِدُ الْقَهَّارُ ﴿٦٦﴾

67. そは天地とその間の萬物の主、偉力者、宥恕者にまします」と。

رَبُّ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا الْغَنِيُّ
الْغَفَّارُ ﴿٦٧﴾

68. 云え、「こは重要な声明なるぞ。(注20)

قُلْ هُوَ نَبَأٌ عَظِيمٌ ﴿٦٨﴾

69. 然るに、お前たちは之を忌避す。

أَنْتُمْ عَنْهُ مُعْرِضُونَ ﴿٦٩﴾

70. 我は、天上の最高会議で論議される事柄については、何も知らざりき。

مَا كَانَ لِي مِنْ عِلْمٍ بِالْمَلَأِ الْأَعْلَى إِذْ يَخْتَصِمُونَ ﴿٧٠﴾

71. ただ我は、公然の警告者たることを啓示されたる者なり」と。

إِنْ يُؤَخِّرْ إِلَى إِلَّا أَنَا نَذِيرٌ مُبِينٌ ﴿٧١﴾

注17 不信心者の指導者に従う者は、かつての指導に天罰の下る事を願うであろう。

注18 此所での“住人たち”は、信者を指す。

注19 地獄の人々は、この様に言葉をかわすであろう。「現世において、取るに足りない者と我々がみなしていた人々が此所にいないとは、どうした事か。彼等は嘲笑に値する人物ではなく、真の信者だったのか、それとも、彼等も又地獄に落ちたが、唯我々がその姿を見かけないだけなのか。」

注20 “重要な声明”はクルアーンの啓示という偉大な出来事、又は、モハムマド預言者の出現を指している様だ。

72. 汝の主が天使たちに向って「われは土塊^{つちくさ}を以て人間を創らんとす。
 ①② **إِذْ قَالَ رَبُّكَ لِلْمَلَكَةِ إِنِّي خَالِقٌ بَشَرًا مِّنْ طِينٍ ①②**
73. 完成せし暁に、わが霊^{あたま}を之に吹き込まば、汝等地に伏して之に服従せよ」と云いたる時を思え。(注 21)
 ①③ **فَإِذَا سَوَّيْنَاهُ وَنَفَخْتُ فِيهِ مِن رُّوحِي فَقَعُوا لَهُ سَاجِدِينَ ①③**
74. されば、天使たちは皆服従せり。(注 22)
 ①④ **فَسَجَدَ الْمَلَكَةُ كُلُّهُمْ أَجْمَعُونَ ①④**
75. 然るに、イブリースはせざりき。彼は高慢に振舞い、信ぜざる手合いとなりぬ。
 ①⑤ **إِلَّا إِبْلِيسَ اسْتَكْبَرَ وَكَانَ مِنَ الْكَافِرِينَ ①⑤**
76. 神は訊ねり、「イブリースよ、われがこの双手で創りしものに、汝は何故従わざるか？そは増長心のなせる業か、それとも、汝はほんとにわが命を無視する気か？」と。(注 23)
 ①⑥ **قَالَ يَا إِبْلِيسُ مَا مَنَعَكَ أَنْ تَسْجُدَ لِمَا خَلَقْتُ بِإِيْدِي اسْتَكْبَرْتَ أَمْ كُنْتَ مِنَ الْعَالِينَ ①⑥**
77. イブリースは答えり、「我は彼より優る。汝は火を以て我を創り、土塊を以て彼を創れり」と。(注 24)
 ①⑦ **قَالَ أَنَا خَيْرٌ مِنْهُ خَلَقْتَنِي مِنْ نَّارٍ وَخَلَقْتَهُ مِنْ طِينٍ ①⑦**
78. 神は云えり、「然らば、ここから出て行け、汝は追放なり。
 ①⑧ **قَالَ فَأَخْرِجْ مِنْهَا فَإِنَّكَ رَجِيمٌ ①⑧**
79. されば、審判の日まで、汝、わが呪詛を負うべし」と。
 ①⑨ **وَأَنَّ عَلَيْكَ لعْنَتِي إِلَى يَوْمِ الدِّينِ ①⑨**
80. イブリースは云えり、「主よ、ならばせめて皆が喚び起されるその日まで、我に猶予を与え給え」と。(注 25)
 ①⑩ **قَالَ رَبِّ فَأَنْظِرْنِي إِلَى يَوْمِ يُبْعَثُونَ ①⑩**

注 21 預言者が世に現れる時、天使達は彼の目的が進められる様支援し、敵の陰謀を全て取り除く様命じられる。

注 22 天使、又は天使の様な人々。

注 23 “われらがこの双手で”とは「私は、神の全ての美德を表す様に人間を作った。」という意味である。

注 24 預言者に刃向かう者は、常に権力と威信をもって彼の優位に立とうとする。同等か、さもなくば下等とみなされる者に忠誠を尽くす事は、彼等の誇りを傷付ける事となる。

注 25 人間の魂の再生。“魂の安らぎ”の段階に至れば、人は精神的墮落から逃がれられる。15 章 37 節も参照の事。

81. 神は云えり、「汝は確かに猶予されたる者のうちに加えらる、

قَالَ فَإِنَّكَ مِنَ الْمُنْظَرِينَ ①

82. 定めの際のその日まで」と。(注 26)

إِلَى يَوْمِ الْوَقْتِ الْمَعْلُومِ ②

83. イブリースは云えり、「汝の威光にかけて誓わん、必ずや皆 悉く誘い惑わさん、

قَالَ فَبِعِزَّتِكَ لَا غَوِيَهُمْ أَجْمَعِينَ ③

84. 彼等の中の汝に選ばれた僕等を除いて」と。

إِلَّا عِبَادَكَ مِنْهُمْ الْمُخْلَصِينَ ④

85. 神は云えり、「そは真実なり、われは真実のみを語る、

قَالَ فَالْحَقُّ وَالْحَقُّ أَقُولُ ⑤

86. われは汝と汝に従うすべての徒輩を以て、必ず地獄を満たさんことを」と。(注 27)

لَأَمْلَأَنَّ جَهَنَّمَ مِنْكَ وَمِمَّنْ تَتَّبِعُكَ مِنْهُمْ

أَجْمَعِينَ ⑥

87. 云え、「我はこのために如何なる報酬もお前たちに求めず、また我は矯飾者にも非ず。

قُلْ مَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ وَمَا أَنَا مِنَ الْمُتَكَلِّفِينَ ⑦

88. クルアーンはすべての人々への訓戒に外ならぬ。

إِنْ هُوَ إِلَّا ذِكْرٌ لِلْعَالَمِينَ ⑧

89. 而して、暫くすれば、お前たち必ずその真実なるを知らん」と。(注 28)

وَلَتَعْلَمَنَّ نَبَأَهُ بَعْدَ حِينٍ ⑨

注 26 真実が偽りを凌駕し、偽りを追い求める者が制圧される時。

注 27 神とサタンの問答は、現実の出来事に触れているのではなく、預言者出現時の状況について、陰喩的に表されている。72 節に述べられた男は、各時代の預言者を指しており、又、イブリースとは、彼に刃向かい、その使命の推進を阻もうとする、悪意ある者達を表している。

注 28 モハammad 預言者は、不信心者達に対し、彼の布教が真実であると彼等が遠からず悟ると告げたことが、此所に示されている。

سُورَةُ الزُّمَرِ مَكِّيَّةٌ

(۳۹)

アル・ズマロ

(メッカ啓示)

- 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
- この經典の啓示は、偉大にして賢哲なるアッラーから降る。
- すべての真理を包含するこの經典を汝に啓示せるは、確かにわれらなり。されば、アッラーを崇め、誠を尽して彼を遵奉せよ。
- 至誠の遵奉は、ただアッラーに対してのみ行われるべきものなり。アッラー以外に守護者しゆごしやを求める者は、云う、「我等が彼等に仕えるは、彼等が我等をアッラーのおそば近くに導いてくれるかも知れぬ、と思うからなり」と。(注1) アッラーは必ず、彼等が意見を異にすることに関して、彼等の間を審判すべし。げにアッラーは忘恩の嘘つきを導かず。
- もしアッラー子を持たんと欲しなば、己れが創りしものの中から好きな者を選ぶこと可なり。聖なるかな！彼はアッラー、唯一、至高なる御方おんかたにまします。
- 彼は真理を以て天地を創造せり。彼は昼を覆うために夜を造り、夜を覆うために昼を造る。また彼は、日月を服従させ、定められた時期までその軌道きどうをそれぞれ運行せしむ。聞け、偉力者、宥恕者ゆうじょしやなるは、彼のみなるぞ。
- 彼は一個の存在からお前たちを創り、次いでそれよりその妻たちを創れり。而して、

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

تَنْزِيلُ الْكِتَابِ مِنَ اللَّهِ الْعَزِيزِ الْحَكِيمِ ②

إِنَّا أَنْزَلْنَاهُ إِلَيْكَ الْكِتَابَ بِالْحَقِّ فَاعْبُدِ اللَّهَ مُخْلِصًا لَهُ الدِّينَ ③

أَلِلَّهِ الدِّينُ الْخَالِصُ وَالَّذِينَ اتَّخَذُوا مِنْ دُونِهِ أَوْلِيَاءَ مَا نَعْبُدُهُمْ إِلَّا لِيُقَرِّبُونَا إِلَى اللَّهِ زُلْفَىٰ إِنَّ اللَّهَ يَحْكُمُ بَيْنَهُمْ فِي مَا هُمْ فِيهِ يَخْتَلِفُونَ ۚ إِنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي مَنْ هُوَ كَاذِبٌ كَفَّارٌ ④

لَوْ أَرَادَ اللَّهُ أَنْ يَتَّخِذَ وَلَدًا لَأَصْطَفَىٰ مِمَّا يَخْلُقُ مَا يَشَاءُ ۚ سُبْحَانَهُ هُوَ اللَّهُ الْوَاحِدُ الْقَهَّارُ ⑤

خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ بِالْحَقِّ يَكُونُ اللَّيْلُ عَلَى النَّهَارِ وَيَكُونُ النَّهَارُ عَلَى اللَّيْلِ وَسَخَّرَ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ كُلٌّ يَجْرِي لِإِجَالٍ مُّسَمًّى ۚ إِنَّ هُوَ الْعَزِيزُ الْغَفَّارُ ⑥

خَلَقَكُمْ مِنْ نَفْسٍ وَاحِدَةٍ ثُمَّ جَعَلَ مِنْهَا زَوْجَهَا

注1 人間は、聖者のごとき自らの想像の産物である偽りの神々、富、権力、情感、父祖伝来の信仰と慣習等を崇める傾向にあり、これ等を通して神を悟ることができると信じている様に常に装う。

彼は八頭の家畜を、番として降し給えり。(注2)彼はまた、お前たちを母の胎内に創る。そは三重の暗闇に於ける創造につぐ創造なり。(注3)かくなせる御方が、お前たちの主アッラーなり。大権はアッラーの有なり。彼の外に神なし。然るにお前たち、いずこへ顔をそむけるか？

8. たといお前たちが感謝せずとも、アッラーはお前たちの世話にならず、自ら足りる。なれど、彼はその僕等の忘恩を喜び給わず。しかし、もしお前たち感謝するならば、彼はお前たちを嘉し給う。而して、荷を負える者は、他人の荷を負う能わず。お前たちの帰り行く先は主なり。その時彼は、お前たちにそのなせることを告げ知らせん。げに彼は胸中に秘することも熟知し給う。

9. 人は災難が降りかかると、主に祈り、悔悟して之に随う。されど、一たび恩寵を施すや、人は先に祈りしことを忘れ、同位者をアッラーに配して人々をアッラーの道から誘い惑わさんとす。云え、「束の間の不信心な生活を楽しめ。汝等は確実に業火の住人なり」と。

10. 夜間も、或いは叩頭し或いは立ちて一心に神に祈り、来世を恐れ主の慈悲を請い願う者が、不信心者と同じであるべきか？ 云え、「ものの分った人間と、わからぬ人間とが同じであるべきか？ げに思慮ある人間のみが注意せん。

وَأَنْزَلَ لَكُمْ مِنَ الْأَنْعَامِ ثَلَاثَةَ أَنْفُسٍ أَنْ يَخْلَقَكُمْ فِي بُطُونِ أُمَّهَاتِكُمْ خَلْقًا مِّنْ بَعْدِ خَلْقٍ فِي ظِلْمٍ ثَلَاثٍ ذَلِكُمْ اللَّهُ رَبُّكُمْ لَهُ الْمُلْكُ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ فَأَنَّى تُصَرِّفُونَ ①

إِنْ تَكْفُرُوا فَإِنَّ اللَّهَ غَنِيٌّ عَنْكُمْ وَلَا يَرْغَبُ بِعِبَادِهِ الْكَافِرَةَ وَإِنْ تَشْكُرُوا يَرْضَهُ لَكُمْ وَلَا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِزْرَ أُخْرَىٰ ثُمَّ إِلَىٰ رَبِّكُمْ مَرْجِعُكُمْ فَيُنَبِّئُكُم بِمَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ إِنَّهُ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ②

وَإِذَا مَسَّ الْإِنْسَانَ ضُرٌّ دَعَا رَبَّهُ مُنِيبًا إِلَيْهِ ثُمَّ إِذَا خَوَّلَهُ نِعْمَةً مِّنْهُ نَسِيَ مَا كَانَ يَدْعُو إِلَيْهِ مِنْ قَبْلُ وَجَعَلَ لِلَّهِ أَنْدَادًا لِّيُضِلَّ عَنْ سَبِيلِهِ قُلْ تَمَتَّعْ بِكُفْرِكَ قَلِيلًا إِنَّكَ مِنْ أَصْحَابِ النَّارِ ③

أَمَّنْ هُوَ قَانِتٌ آنَاءَ اللَّيْلِ سَاجِدًا وَقَائِمًا يَحْذَرُ الْآخِرَةَ وَيَرْجُوا رَحْمَةَ رَبِّهِ قُلْ هَلْ يَسْتَوِي الَّذِينَ يَعْلَمُونَ وَالَّذِينَ لَا يَعْلَمُونَ إِنَّمَا يَتَذَكَّرُ أُولُوا الْأَلْبَابِ ④

注2 (ア)「八頭の家畜」とは、山羊、羊、駱駝、及び6：144—145で述べられた牛のつがいを指しており、此所で特に言及しているのは、それ等が人間にとり日々役立つ動物だからである。

注3 (イ)「三重の暗闇」は、胎児成長の三段階、ストッフア(精子の半)、アラカ(血の固まり)、ムドウガ(一魂の肉)を指している様だ。あるいは、86：7—8、3：7、16：79に述べられた三つの状態、又は妊娠期間中の三つの重要な時期を表しているとも言える。この妊娠期間中の時期とは具体的には、次の通りである。
(a)妊娠2ヶ月から3ヶ月目 (b)3ヶ月から5ヶ月目 (c)8ヶ月目の初め。妊娠中この三時期に流産し易いのである。

第二項

11. 云え「汝等信ずるわが僕等よ、お前たちの主を畏れ敬え。この世で善をなす者には、幸いあり。アッラーの大地は広大なり。げに堅忍不拔なる者は、限りなく賞せられん」と。(注4)
12. 云え、「げに我は信仰に於て、一心不乱にアッラーを崇拝せよ」と命ぜられたり。
13. 而して、アッラーに帰依する者たちの魁たれと命ぜられたり」と。
14. 云え、「もし我、主に背かば、大変な日の刑罰を恐る」と。
15. 云え、「我が信仰に於て、一心不乱に崇拝するは、アッラーなり。
16. お前たちはアッラー以外に好きなものを崇拝せよ」と。云え、「げに真の失敗者とは、復活の日に自分も家族も破滅する者なり」と。用心せよ！ げにそは明らかな失敗なり。
17. 彼等の頭上には火の天井あり、足下にも同じ床あらん。アッラーはかくの如くその僕等等に警告す。「わが僕等よ、さればわれをお前たちの守護者と奉れ」
18. されど、邪神を崇めることを避け、改悔してアッラーの許へ帰る者一彼等には朗報あり。されば、わが僕等に朗報を伝えよ、
19. 神託に耳を傾け、その最善なところに従う人々に。(注5)アッラーが導くは彼等なり、彼等は思慮ある人々なり。

قُلْ يٰعِبَادِ الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اتَّقُوا رَبَّكُمُ الَّذِيْنَ اَحْسَنٰ
فِيْ هٰذِهِ الدُّنْيَا حَسَنَةً ۖ وَارْضُ اللّٰهُ وَاسِعَةً
اِنَّمَا يُوَفِّي الصّٰبِرِيْنَ اَجْرَهُمْ بِغَيْرِ حِسَابٍ ⑪

قُلْ اِنِّيْٓ اُمِرْتُ اَنْ اَعْبُدَ اللّٰهَ خُلُوصًا لَهُ الدِّيْنُ ⑫
وَ اُمِرْتُ لِاَنْ اَكُوْنَ اَوَّلَ الْمُسْلِمِيْنَ ⑬

قُلْ اِنِّيْٓ اَخَافُ اِنْ عَصَيْتُ رَبِّيْ عَذَابَ يَوْمٍ
عَظِيْمٍ ⑭

قُلِ اللّٰهُ اَعْبُدْ خُلُوصًا لَهُ دِيْنِيْ ⑮

فَاَعْبُدْ وَاِمَّا شِئْتُمْ مِّنْ دُوْنِهٖ قُلْ اِنَّ الْخٰسِرِيْنَ
الَّذِيْنَ خَسِرُوْا اَنْفُسَهُمْ وَاَهْلِيَهُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ
اِلَّا ذٰلِكَ هُوَ الْخٰسِرَانِ الْمُبِيْنُ ⑯

لَهُمْ مِّنْ فَوْقِهِمْ ظُلَلٌ مِّنَ النَّارِ وَ مِنْ تَحْتِهِمْ
ظُلَلٌ ذٰلِكَ يُخَوِّفُ اللّٰهُ بِهٖ عِبَادَهٗ يٰعِبَادِ فَاتَّقُوْا ⑰

وَالَّذِيْنَ اجْتَنَبُوا الطَّاغُوْتَ اَنْ يَّعْبُدُوْهَا وَاَنۢ اَدۡبُوْا
اِلَى اللّٰهِ لَهُمُ الْبَشٰرُۙ فَبَشِّرْ عِبَادِ ⑱

الَّذِيْنَ يَسْتَمِعُوْنَ الْقَوْلَ فَيَتَّبِعُوْنَ اَحْسَنَهٗ اُوْلٰٓئِكَ
الَّذِيْنَ هَدٰىهُمُ اللّٰهُ وَاُوْلٰٓئِكَ هُمُ الْاٰدِبٰٓي ⑲

注4 信者は苦難に会い、神の為に自らの家庭をすらも去らねばならないであろうと、この節は警告している。彼等は厳しい試練に遭遇した時、全世界が彼等にとり如何に広大であるかを知り、神より、過ぎたるほうびを賜れるであろう。

注5 信者の前に、等しく許された二本の道がある時、彼は、最上の結果をもたらす方を選ぶ。

20. されど、すでに天罰の宣告がなされた者を、如何にムハンマドといえども救えまい？
汝は業火の中に居る者を救い出し得るか？

أَفَسَنْ حَقَّ عَلَيْهِ كَلِمَةُ الْعَذَابِ أَفَأَنْتَ تُنْقِذُ
مَنْ فِي النَّارِ ⑩

21. されど、主を畏れる人々のためには、相い重なりそびえ立つ高楼ありて、河川脚下を流る。(注6)これアッラーの約束なり。アッラーはその約束を破らず。

لَكِنَّ الَّذِينَ اتَّقَوْا رَبَّهُمْ لَهُمْ غُرَفٌ مِنْ فَوْقِهَا
غُرَفٌ مَبْنِيَةٌ لَا يَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ وَعَدَ
اللَّهُ لَا يَخْلِفُ اللَّهُ الْوَعْدَ ⑪

22. 汝は見ざるか、アッラーが天から水を降らせ、それを大地に浸み込ませて泉となし、それによって色とりどりの作物を萌え出させ給うことを？ やがて枯れなば、そは黄色に変ず。次いでアッラーは、これを藁くずとなし給う。げにこの中には、思慮ある者たちへの訓戒あり。

الْمُرْتَأْنَ اللَّهُ أَنْزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَسَلَكَهُ
يَنْبِيعٌ فِي الْأَرْضِ ثُمَّ يُخْرِجُ بِهِ زَرْعًا مُخْتَلِفًا
أَلْوَانُهُ ثُمَّ يَهْبِيجُ فَتَرَاهُ مَصْفًى أَلَمْ يَجْعَلْهُ
حُطَمَاءً ⑫

第三項

23. アッラーがその胸を開かしてイスラームを受け容れさせ、ためにその御光を受けた者と、(注7)不信仰の暗闇で模索する者と同一視すべきか？ 災いなるかな、その心頑固にしてアッラーを念わざる者！ 彼等は明らかに迷誤の中にあり。

أَفَسَنْ شَرَحَ اللَّهُ صَدْرَهُ لِلْإِسْلَامِ فَهُوَ عَلَى نُورٍ
مَنْ رَبِّهِ فَوَيْلٌ لِلنَّفْسِيفَةِ قُلُوبُهُمْ مَنْ ذَكَرَ اللَّهُ
أُولَئِكَ فِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ⑬

24. アッラーは經典の形式で最上の説教を降したり。その經典の諸節は相互に支えあい、さまざまなる形を反復す。(注8)主を畏れる者はその朗唱に総毛立ち、然る後、肌も心もアッラーの憶いに和らぐ。アッラーの嚮導はかくの如し。アッラーは之を以て己れの欲する者を導き給う。されど、アッラーが迷わしむる者には、如何なる嚮導者もなかるべし。

اللَّهُ نَزَّلَ أَحْسَنَ الْحَدِيثِ كِتَابًا مُتَشَابِهًا مَثَابًا
تَتَشَابَهُ مِنْهُ جُلُودُ الَّذِينَ يَخْشَوْنَ رَبَّهُمْ ثُمَّ تَلِينُ
جُلُودُهُمْ وَقُلُوبُهُمْ إِلَى ذِكْرِ اللَّهِ ذَلِكَ هُدَى
اللَّهُ يَهْدِي بِهِ مَنْ يَشَاءُ وَمَنْ يُضِلِلِ اللَّهُ
فَمَا لَهُ مِنْ هَادٍ ⑭

注6 天国における信者の位の相違は、各々の働きに違いのある事を表しており、これは、来世が非活動的で物憂いものではなく、絶えず努力と向上の続くものである事を暗示している。

注7 イスラムの教義は非常に奥深く広大であり、信者の心を開き、神の知恵と愛で満たす。それは、必ずや、思索、知識、真実の新たにして永遠の展望を開くであろう。

注8 神の啓示はクルアーンにおいて最も完全な形となった。当節では、クルアーンを「相互に支えあう經典の諸節」と表しているが、これは、クルアーンが相矛盾する事なく、互いに補充し合う異なる解釈を受け入

25. 復活の日に、恐ろしい刑罰をその顔で防がねばならぬような者が、(注9)全く心配ない者と同一視せらるべきか? 不義なす徒輩はかく云われん、「お前がいつも稼いでいたものの報いを味わえ」と。

أَمَّنْ يَتَّقِي بِوَجْهِهِ سُوءَ الْعَذَابِ يَوْمَ الْقِيَمَةِ
وَقِيلَ لِلظَّالِمِينَ ذُوقُوا مَا كُنْتُمْ تَكْسِبُونَ ﴿٢٥﴾

26. 彼等以前の者どももまたわれらの神託を拒みたれば、懲罰が彼等を不意に襲いたり。

كَذَّبَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَأَتَاهُمُ الْعَذَابُ
مِنْ حَيْثُ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٢٦﴾

27. されば、アッラーは彼等に現世でも屈辱を味わせ給うが、来世の罰は更に苛酷なるべし。と云ったとて、彼等にはわかるまいが!

فَأَذَاهُمُ اللَّهُ الْجَزَى فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَ
لِعَذَابِ الْآخِرَةِ الْكَبِيرِ لَوْ كَانُوا يَعْلَمُونَ ﴿٢٧﴾

28. われらは彼等に注意せしめんがために、さまざまなる比喩を明らかにせり。(注10)

وَلَقَدْ ضَرَبْنَا لِلنَّاسِ فِي هَذَا الْقُرْآنِ مِنْ
كُلِّ مَثَلٍ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُونَ ﴿٢٨﴾

29. われらは彼等を義しい人になさんとして、正確無比なるアラビア語でクルアーンを啓示せり。

فَرَأَانَا عَرَبِيًّا غَيْرَ ذِي عِوَجٍ لَعَلَّهُمْ يَتَّقُونَ ﴿٢٩﴾

30. アッラーはここに一比喩を明らかにす。つまり、多くの仲間いれど互いに仲たがいがばかりするような者と、ただ一人に完全に傾倒する者。この両者の事情は同じかるべきか? (注11) 讚美の詞は挙げてアッラーのものなり。然れども、大半の者は之を知らず。

ضَرَبَ اللَّهُ مَثَلًا رَجُلًا فِيهِ شُرَكَاءُ مُتَشَاكِسُونَ
وَرَجُلًا سَلَمًا لِرَجُلٍ هَلْ يَسْتَوِينَ مَثَلُ الْاِحْمَدِ
لِلَّهِ بَلْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٣٠﴾

れた神の書である事を示している。クルアーンのどの箇所にも矛盾は見られない。これが、クルアーンの無比の美点の一つとなっている。クルアーンの今一つの長所は、比喩を用いている事である。これは、文体に優美さと貴品を添え、最少限の言葉で広大な事柄を表す。又、クルアーンは「反復する」諸節とも呼ばれている。これは、クルアーンが、基本理念の重要性、目的を強調する為に、様々な形でそれを繰り返し述べている事を表している。この言葉は又、クルアーンの教義には、他の啓示書と類似するものもあれば、その優雅さにおいて新しく比類無いものもある事を示している。

注9 この言葉は、裁きの日に不信心者に下される罰の重さを示している。彼等は厳罰にうらたえる余り、体の最も敏感な部分である顔を覆いもせず、面を露にするであろう。

注10 24節において、クルアーンは人類にとり最上の啓示書であり、人間の精神的向上に深く係わる全ての教義、又人生を有意義で喜びあるものにする主題全てを包括的に論じている。クルアーンは、信仰と行動に指針を与えている。

注11 多神教徒とは、互いに利害の対立する幾つかの主仕え、悪質で短気な人である。この様な人々は実に哀れである。彼等が、唯一神アッラーに仕え、気に入られる真の信者になれるだろうか。

31. げに汝はいずれ死す、彼等とてまた然り。

إِنَّكَ مَيِّتٌ وَإِنَّهُمْ مَيِّتُونَ ﴿٣١﴾

32. 而して、復活の日に、お前たちはその主の前で互に論争すべし。

ثُمَّ إِنَّكُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ عِنْدَ رَبِّكُمْ تَخْتَصِمُونَ ﴿٣٢﴾

第四項

33. アッラーについて偽りを述べ、真理が降れば之を拒否する者に優る不義者はあろうか？ 不信心者どもの住居は地獄になしとな？

فَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنْ كَذَبَ عَلَى اللَّهِ وَكَذَبَ بِالْصِّدْقِ إِذْ جَاءَهُ الْيَسَىٰ فِي جَهَنَّمَ مَثْوًى لِّلْكَافِرِينَ ﴿٣٣﴾

34. されど、真理をもたらし、之を証明する者、かかる人々は義しい者なり。

وَالَّذِينَ جَاءُوا بِالْصِّدْقِ وَصَدَّقَ بِهِ أُولَٰئِكَ هُمُ الْمُتَّقُونَ ﴿٣٤﴾

35. それ等の者は、主の許て、己れの欲するものを得ん。そは善行を積む者への報奨なり。

لَهُمْ مَا يَشَاءُونَ عِنْدَ رَبِّهِمْ ذَلِكَ جَزَاُ الْمُحْسِنِينَ ﴿٣٥﴾

36. されば、アッラーは彼等がなせる諸悪を祓い浄め、その所業の最善なるものに準じて報奨を与えん。(注 12)

لِيَكْفِرَ اللَّهُ عَنْهُمْ أَسْوَأَ الَّذِي عَمِلُوا وَيَجْزِيَهُمْ أَجْرَهُمْ بِأَحْسَنِ الَّذِي كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٣٦﴾

37. 僕等はアッラーでは満足し得ざるか？ 彼等はアッラー以外の神々を以て汝を脅さんとする。アッラーが迷誤のまみに見捨てる者には、如何なる導きもなし。

أَلَيْسَ اللَّهُ بِكَافٍ عَبْدَهُ وَيُخَوِّفُونَكَ بِالَّذِينَ مِنْ دُونِهِ وَمَنْ يُضِلِلِ اللَّهُ فَمَا لَهُ مِنْ هَادٍ ﴿٣٧﴾

38. 而して、アッラーが導く者は、何人も之を誘い惑わしむる能わず。アッラーは偉力者、応報の主に非ざるか？

وَمَنْ يَهْدِ اللَّهُ فَمَا لَهُ مِنْ مُّضِلٍّ أَلَيْسَ اللَّهُ بِعَزِيزٍ ذِي انْتِقَامٍ ﴿٣٨﴾

39. 汝彼等に「天地を創造せるは誰か？」と問わば、彼等は必ず「アッラーなり」と答へん。(注 13) 云え、「もしアッラーがこの我

وَلَيْنَ سَأَلْتَهُمْ مَنْ خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ لَيَقُولُنَّ اللَّهُ قُلْ أَفَرَأَيْتُمْ مَا تَدْعُونَ مِنْ دُونِ

注 12 神は信者の善行に、その程度に係わらず報いられる。神はそれぞれの最善の行いに報いられるのであるから。

注 13 偶像崇拜者は、迷信や伝統的な愛着から、偽りの神を崇めるが、もしこの点を彼等に納得させるなら、彼等は、神が天地創造主であられ、真の力は全て神に属する事を、常に認めなければならない。

を傷つけんと欲しなば、お前たちがアッラー以外に拝する神々はその災難を除き得るか？ また、アッラーが我に慈悲を垂れんと欲しなば、彼等神々それを阻止し得るや？」と。云え、「我はアッラーのみにて満足なり。頼る者は、アッラーのみを頼る」と。

40. 云え、「我が民よ、お前たち最善をつくせ。我もつくす。やがて、お前たち思い知るべし、(注14)

41. 恥ずべき刑罰が何者に科せられ、永劫の罰が何者に下るかを」と。

42. げにわれらは人類の幸福のために、すべての真理から成る経典を汝に降したり。されば、嚮導に従う者は己れを益し、邪道に陥る者は己れを損なうのみ。而して、汝は彼等の保護者に非ず。(注15)

第5項

43. アッラーは人間の死に臨んで、その魂を召し寄せ給う。また、いまだ死なざる者も、その睡眠の間に、而して、アッラーが死を決定せる者の魂は之を抑留し、然らざる者の魂は定め期限まで之を還付す。げにこの中には、反省する人々へのさまざまなる神兆あり。(注16)

44. 彼等はアッラー以外に執り成す者を求めるか？ 云え、「邪神どもはなんの権限もなく、なにもわからなくても、それでもいいのか？」と。(注17)

اللَّهُ إِنْ أَرَادَنِيَ اللَّهُ بِضُرٍّ هَلْ هُنَّ كَاشِفَاتُ
ضُرِّيهِ أَوْ أَرَادَنِيَ بِرَحْمَةٍ هَلْ هُنَّ مُمْسِكَتُ رَحْمَتِهِ
قُلْ حَسْبِيَ اللَّهُ عَلَيْهِ يَتَوَكَّلُ الْمُتَوَكِّلُونَ ﴿٣٩﴾

قُلْ يَقَوْمِ اعْمَلُوا عَلَى مَكَانَتِكُمْ إِنِّي عَامِلٌ فَسَوْفَ
تَعْلَمُونَ ﴿٤٠﴾

مَنْ يَأْتِيهِ عَذَابٌ يُخْزِيهِ وَيَحِلُّ عَلَيْهِ عَذَابٌ
مُقِيمٌ ﴿٤١﴾

إِنَّا أَنْزَلْنَا عَلَيْكَ الْكِتَابَ لِلنَّاسِ بِالْحَقِّ فَمَنِ
اهْتَدَى فَلِنَفْسِهِ وَمَنْ ضَلَّ فَإِنَّمَا يَضِلُّ عَلَيْهِ
وَمَا أَنْتَ عَلَيْهِمْ بِوَكِيلٍ ﴿٤٢﴾

اللَّهُ يَتَوَفَّى الْأَنفُسَ حِينَ مَوْتِهَا وَالَّتِي لَمْ تَكُنْ
فِي مَتَابَعَةٍ فَيُسِّسُكَ الَّتِي قَضَىٰ عَلَيْهَا الْمَوْتَ
وَيُرْسِلُ الْأُخْرَىٰ إِلَىٰ أَجَلٍ مُّسَمًّى إِنَّ فِي ذَٰلِكَ
لَآيَاتٍ لِّقَوْمٍ يَتَفَكَّرُونَ ﴿٤٣﴾

أَمْ آتَاخُذُوا مِنْ دُونِ اللَّهِ شُفَعَاءَ قُلْ أَوَلَوْ كَانُوا
لَا يَمْلِكُونَ شَيْئًا وَلَا يَعْقِلُونَ ﴿٤٤﴾

注14 当節は、イスラム教を倒す為に持てる力、富を全て使って最悪の行いをする様に、不信心者達に挑んでいるが、彼等の邪悪な企ては決して成功しないだろう。イスラム教は人類究極の希望であり運命なので、その大義は必ず勝利を治めるのである。

注15 人間は、良きにつけ悪きにつけ、自らその運命を作り出す。

注16 死を迎えても、人の魂は死滅する事なく、肉体を離れ、生前の行為を順を追って説明する為に、別の所で生き続ける。

注17 魂は不滅であり、それを汚す様な行いをしてはならないと人間は教えられている。最悪の行為は自分を神と同等だと主張する事である。

45. 云え、「すべて執り成しは、アッラー次第なり。天地の大権はアッラーに属す。いずれ、お前たちはアッラーの御許へ召し寄せられん」と。(注18)

46. アッラーの唯一なることを聞くと、来世を信ぜざる者どもの心は嫌悪に縮みあがる。然るに彼等は、アッラー以外の邪神どもの名を聞くや、見よ、欣然たり。

47. 云え、「おお、アッラー！ 天地の創造主よ、目に見えざる世界と目に見える世界をともに知悉し給う御方、汝はその僕等の間で論争することについて、審判を下すべし」と。

48. 悪事を働く徒輩が、たとえ地上のあらゆるものを、更にそれに加うるものを所有したとて、復活の日の恐ろしい罰を免れんとて、必ず之を以て購わんとすべし。されどその時、アッラーの御許から、彼等がいまだかつて考え及ばざることが示されん。

49. 己れが稼ぎし悪事の数々が彼等に見えて来て、今まで嘲笑せることに彼等は包囲されん。

50. 人は災難に遭うと、われらに祈る。されど、一たび恩恵を施すと、「これ我が知識にて得たり」と云う。然らず、そは一種の試練なり。されど、彼等の多くは之を知らず。(注19)

51. 彼等以前の者も、同じことを云えり。されど、彼等の稼ぎしものは、彼等に益するところなし。

قُلْ لِلَّهِ الشَّفَاعَةُ جَمِيعًا لَهُ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَ
الْأَرْضِ ثُمَّ إِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٤٥﴾

وَإِذَا ذُكِرَ اللَّهُ وَحْدَهُ اشْبَاَّتْ قُلُوبُ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ وَإِذَا ذُكِرَ الَّذِينَ مِنْ دُونِهِ إِذَا هُمْ يَسْتَبْشِرُونَ ﴿٤٦﴾

قُلِ اللَّهُمَّ فَاطِرَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ عَلِمِ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ أَنْتَ تَحْكُمُ بَيْنَ عِبَادِكَ فِي مَا كَانُوا فِيهِ يَخْتَلِفُونَ ﴿٤٧﴾

وَلَوْ أَنَّ لِلَّذِينَ ظَلَمُوا مَا فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا وَمِثْلَهُ مَعَهُ لَافْتَدَوْا بِهِ مِنْ سُوءِ الْعَذَابِ يَوْمَ الْقِيَامَةِ وَبَدَأَ اللَّهُ مِنَ اللَّهِ مَا لَمْ يَكُونُوا يَحْتَسِبُونَ ﴿٤٨﴾

وَبَدَأَ اللَّهُ سَيِّئَاتِ مَا كَسَبُوا وَحَاقَ بِهِمْ مَا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِءُونَ ﴿٤٩﴾

فَإِذَا مَسَّ الْإِنْسَانَ ضُرٌّ دَعَانَا ثُمَّ إِذَا خَوَّلْنَاهُ نِعْمَةً مِّنَّا قَالَ إِنَّمَا أُوتِيتُهُ عَلَىٰ عِلْمٍ بَلْ هِيَ فِتْنَةٌ وَلَكِنَّا أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٥٠﴾

قَدْ قَالُوا الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ مَا أَغْنَىٰ عَنْهُمْ مَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ﴿٥١﴾

注18 2章49節参照

注19 人は逆境に在る時神に祈るが、順境においては神を忘れ、人生における成功は全て自らの力と知恵によるものとするのが常である。

52. されば、彼等は、己が稼ぎし悪事の数々に襲いかかれたり。されば、これ等不信心者の不義を行う者もまた、己が稼ぐ悪事の数々に襲われん。彼等は逃れること能わず。

فَأَصَابَهُمْ سَيِّئَاتُ مَا كَسَبُوا وَالَّذِينَ ظَلَمُوا مِنْ هَؤُلَاءِ سَيُجْزَوْنَ ٥٢

53. 彼等は、アッラーがその嘉する者に給養を増し、またその嘉するものに之を制限し給うことを、知らざるか？げにこの中には、信ずる人々へのさまざまなる神兆あり。

أَوْ لَمْ يَعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَشَاءُ وَيَقْدِرُ ۚ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ٥٣

第六項

54. 云え、「己れ自身に不行跡をなしたるわが僕等よ、アッラーの慈悲を諦めるなかれ。(注20) 事実アッラーは、諸々の罪を赦し給う。げにアッラーは、寛大にして慈悲深くまします。

قُلْ يٰۤأَعْدَىٰ الَّذِينَ أَسْرَفُوا عَلَىٰ أَنْفُسِهِمْ لَا تَقْنَطُوا مِنْ رَحْمَةِ اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ يَغْفِرُ الذُّنُوبَ جَمِيعًا ۚ إِنَّهُ هُوَ الْغَفُورُ الرَّحِيمُ ٥٤

55. 汝等懲罰が下る前に、主にお縋りし、その意に従え。罰が下る時は、助からざるべし(注21)

وَأَنِيبُوا إِلَىٰ رَبِّكُمْ وَأَسْلَبُوا لَهُ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَأْتِيَكُمْ الْعَذَابُ ثُمَّ لَا تُنصَرُونَ ٥٥

56. 主よりお前たちに啓示されたる最善の教えに従え、思いがけぬ懲罰が突然降りかかる前に」と。

وَاتَّبِعُوا أَحْسَنَ مَا أُنْزِلَ إِلَيْكُمْ مِنْ رَبِّكُمْ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَأْتِيَكُمْ الْعَذَابُ بَغْثَةً وَأَنْتُمْ لَا تَشْعُرُونَ ٥٦

57. 「ああ、情けなや、我義務を忘れてアッラーをなおざりにせり！ げに我は嘲弄者一人なりき。

أَنْ تَقُولَ نَفْسٌ يَحْسَرُنِي عَلَىٰ مَا ضَلَّْتُ فِيْ جَنْبِ اللَّهِ وَإِنْ كُنْتُ لَمِنَ السَّخِرِينَ ٥٧

58. もしアッラー我を導きたりせば、我は敬虔な信者たりしものを」

أَوْ تَقُولَ لَوْ أَنَّ اللَّهَ هَدَانِي لَكُنْتُ مِنَ الْمُتَّقِينَ ٥٨

59. また、懲罰を目のあたりにして、「もし我再び世に戻り得るならば、我は必ず善い行いをなす者の一人たらん」と悔やまぬために云え。

أَوْ تَقُولَ حِينَ تَرَىٰ الْعَذَابَ لَوْ أَنَّ لِيْ تَوْرَةً فَاَلْتَوَنَ مِنَ الدَّحِيزِينَ ٥٩

注20 この節は、罪人に希望と励ましの言葉を与えている。物事を楽観視する様に勧め、悲観的な考えを否定する。人生における大部分の罪や犯ちの根底には悲観論が在り、当節はこれを非難している。クルアーンは、重ねて神の慈悲、許しの約束を与えており(6:55、7:157、12:88、15:57、18:59)、悲しみに暮れ、重荷を負った者にとり、このお告げは何にも勝る慰めとなろう。

注21 前節は罪人に希望と励ましを与えたが、当節は、神の法に従う事で自らの運命を切り開いて行かなければならないと彼等に警告している。

60. 神は答えん、「然り、わが^{しかり}神兆^{しるし}が汝に至れる時、汝はこれ等を虚偽なりとし、傲慢にも不信者の仲間となれり」と。(注 22)

بَلَا قَدْ جَاءَكَ آيَاتِي فَكَذَّبْتَ بِهَا وَاسْتَكْبَرْتَ
وَكَنتَ مِنَ الْكَافِرِينَ ٦٠

61. 汝は、復活の日に、アッラーに対して偽りを云いたる者どもの顔が暗くなるを見ん。地獄には驕慢なる者の住むべきところなしと云うか？

وَيَوْمَ الْقِيَامَةِ تَرَى الَّذِينَ كَذَبُوا عَلَى اللَّهِ وُجُوهُهُم
مُسْوَدَّةٌ أَلَيْسَ فِي جَهَنَّمَ مَثْوًى لِّلْمُتَكَبِّرِينَ ٦١

62. されど、敬虔なる者は、アッラーが諸々の災難から守り給ひ、幸運を授けるべし。彼等は禍に遭うことなく、悲しみもなかるべし。

وَيُنَجِّي اللَّهُ الَّذِينَ اتَّقَوْا بِمَفَازَتِهِمْ لَا يَمَسُّهُمْ
السُّوءُ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ٦٢

63. アッラーは万物の創造主にして、そのすべてを管理し給う。

اللَّهُ خَالِقُ كُلِّ شَيْءٍ وَهُوَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ وَكِيلٌ ٦٣

64. 天地の鍵はその掌中にあり。されば、アッラーの神兆^{あめつち}を信ぜざる者は、必ず失敗者とならん。

لَهُ مَقَالِيدُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَالَّذِينَ كَفَرُوا
بِآيَاتِ اللَّهِ أُولَٰئِكَ هُمُ الْخَاسِرُونَ ٦٤

第七項

65. 云え、「この我にアッラー以外の邪神どもを崇めよとな、汝等無知なる徒輩^{せから}よ」と。

قُلْ أَغْفِرِ اللَّهُ تَأْمُرُونِي أَعْبُدُ أَيُّهَا الْجَاهِلُونَ ٦٥

66. 汝には、汝以前の人々に啓示せる如く「もし汝が^{あだしがみ}アッラーに他神を配しなば、汝の所業は必ず無に帰し、失敗者の類いとならん」と確かに啓示せり。

وَلَقَدْ أَوْحَىٰ إِلَيْكَ وَإِلَى الَّذِينَ مِنْ قَبْلِكَ لَئِنْ
أَشْرَكَتَ لَيَحْبَطَنَّ عَمَلُكَ وَلَتَكُونَنَّ مِنَ الْخَاسِرِينَ ٦٦

67. 左様、アッラーを崇敬し、謝恩の念厚き輩^{ともがら}たれ。

بَلَىٰ اللَّهُ فَاَعْبُدْ وَكُنْ مِنَ الشَّاكِرِينَ ٦٧

68. 彼等は、アッラーの権能について、正確な概念を形成し得ざるなり。復活の日には、この広大な大地は完全にアッラーの支配下となり、諸天は彼の右手にて捲かるべし。ありがたや、アッラーは彼等が配する他神^{あだしがみ}とは比較にならぬ高みにまします。(注 23)

وَمَا قَدَرُوا اللَّهَ حَتَّىٰ قَدَرِهِمُ جَبِينًا
فَبَصَّطَهُ يَوْمَ الْقِيَامَةِ وَالسَّمَوَاتُ مَطْوِيَّاتٍ بِيَمِينِهِ
سُبْحَنَهُ وَتَعَالَىٰ عَمَّا يُشْرِكُونَ ٦٨

注 22 悪に染まった者に、数々の再生の機会が与えられている。しかし、繰り返し神を拒み、悪事を働いて法を犯し、裁きが下される時になって、最早悔い改めても無駄である。

注 23 当節では、神の偉大なる力と尊厳に触れ、木や石でできた偶像や愚かな人間を崇める事は、何にも増して神の偉大なる属性を傷付けると述べている。

69. 而して、喇叭^{ラッパ}一たび鳴り渡れば、アッラーが容赦せん^{シカ}と欲する者を除き、天にある者地にある者みな悉く昏倒^{こんとう}せん。次いで二度目に鳴る時は、見よ、彼等起き上り、審判を待ち受ける。

70. 大地は主の御光^{みひかり}によって光り輝き、天の帳簿が彼等の前に開き置かれ、預言者たちや証人たちが召喚され、公平な審判がなされ、決して不当には遇せられざるべし。

71. 各人ともそのなせることに對して存分に報いられるべし。主は彼等がなせることを熟知し給う。

第八項

72. 而して、不信心者どもは群をなして地獄に驅り立てられ、そこに到着するや、諸門たちまち開かれ、門番が彼等に向って云わん、「お前たちの中から出でたる使徒が来て、主の神兆をお前たちに読誦せざりしか？ また、今日のこの対面をお前たちに警告せざりしか？」と。彼等は答えん、「然り、されど不信心者に対する刑罰の宣告は、すでになされたり」と。

73. かく云われん、「汝等地獄の門^{えいごう}に入りて、その中に永劫に住め。禍なるかな驕慢なる者の住居は」と

74. 主を畏れる人々は、群をなして樂園へと案内されん。而して、樂園に着けば、忽ち諸門は開かれ、門番が彼等に向って「お前たちに平安あれ！ 汝等に幸福あれ、中に入りて永遠に住め」と云う。

75. 彼等は云わん、「賞讃は挙げてアッラーのもの、彼は我等との約束を果たしたり。彼は我等に大地を継がせ、樂園の何処なりと我等の好きなところに住ましむ」と。正義に

وَنُفِخَ فِي الصُّورِ فَصَبَقَ مَنْ فِي السَّمَوَاتِ وَمَنْ فِي الْأَرْضِ إِلَّا مَنْ شَاءَ اللَّهُ ثُمَّ نَفَخَ فِيهِ أُخْرَىٰ فَإِذَا هُمْ قِيَامٌ يَنْظُرُونَ ﴿٦٩﴾

وَأَشْرَقَتِ الْأَرْضُ بِنُورِ رَبِّهَا وَوُضِعَ الْكِتَابُ وَجَاءَتْ بِالتَّبِيعِينَ وَالشَّهَدَاءَ وَنُفِخَ بَيْنَهُم بِالْحَقِّ وَهُمْ لَا يَظْلُمُونَ ﴿٧٠﴾

وَوُفِّيَتْ كُلُّ نَفْسٍ مَّا عَمِلَتْ وَهُوَ أَعْلَمُ بِمَا يَفْعَلُونَ ﴿٧١﴾

وَسَيِّقَ الَّذِينَ كَفَرُوا إِلَىٰ جَهَنَّمَ زُمَرًا ۖ إِذَا جَاءُوهَا فَفُتِحَتْ أَبْوَابُهَا وَقَالَ لَهُمْ خَزَنَتُهَا أَلَمْ يَأْتِكُمْ رُسُلٌ مِّنْكُمْ يَتْلُونَ عَلَيْكُمْ آيَاتِ رَبِّكُم وَيُنذِرُونَكُمْ لِقَاءَ يَوْمِكُمْ هَٰذَا قَالُوا بَلَىٰ وَلَٰكِن حَقَّتْ كَلِمَةُ الْعَذَابِ عَلَى الْكَافِرِينَ ﴿٧٢﴾

قِيلَ ادْخُلُوا أَبْوَابَ جَهَنَّمَ خَالِدِينَ فِيهَا فَبِئْسَ مَثْوًى لِّلْمُتَكَبِّرِينَ ﴿٧٣﴾

وَسَيِّقَ الَّذِينَ اتَّقَوْا إِلَىٰ الْجَنَّةِ زُمَرًا ۖ ۖ إِذَا جَاءُوهَا وَفُتِحَتْ أَبْوَابُهَا وَقَالَ لَهُمْ خَزَنَتُهَا سَلَامٌ عَلَيْكُمْ طِبْتُمْ فَادْخُلُوهَا خَالِدِينَ ﴿٧٤﴾

وَقَالُوا الْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي صَدَقَنَا وَعْدَهُ وَأَوْرَثَنَا الْأَرْضَ نَتَبَوَّأُ مِنَ الْجَنَّةِ حَيْثُ نَشَاءُ ۖ فَنِعْمَ

精進せる者の報奨はなんと素晴らしきかな！

أَجْرُ الْعَالِينَ ⑤

76. 而して、汝は、諸天使が玉座を囲み、主の栄光を讃美するを見ん。彼等は皆公平に裁かれん。而して、「賞讃は^{しか}挙げて万物の主、アッラーのものなり」と唱えられん。(注24)

وَتَرَى الْمَلَائِكَةَ حَافِّينَ مِنْ حَوْلِ الْعَرْشِ يُحَمِّدُونَ

بِحَمْدِ رَبِّهِمْ وَقُضِيَ بَيْنَهُمُ بِالْحَقِّ وَقِيلَ

لَهُمُ الْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ⑥

注 24 神の属性は、裁きの日に最も完全な形で表され、天使達が神への賛美歌合唱の勤めを果たすであろう。又当節は次の様な意味を持つとも言える。神の唯一性はアラビアにもたらされ、地上における真の神の下僕が天の天使と共に神を賛美するであろう。

سُورَةُ الْمُؤْمِنِينَ مَكِّيَّةٌ

アル・モメン
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. ハー・ミーム。(注1)
3. この經典の啓示は、アッラーより降る。それは偉大にして全知全能、
4. 罪を赦し、改悔を容れ、罰するに厳しく、賜物の所有主なり。彼の外に神なし。最後に帰り着くところは、彼なり。
5. 不信心者以外は、何人もアッラーの神兆について反駁せず。されば、汝は、不信心者どもの闊歩するを見て欺かれるなかれ。(注2)
6. 彼等以前にも、ノアの民並びにその他の宗派の者が、使徒たちを捕えんと企て、偽りの証明によって真理を論破せんとせり。されば、われは彼等を捕えたり。わが懲罰の如何に恐ろしかりしことか！
7. かくの如く、不信心者どもに対する主のお言葉は履行されり。すなわち、彼等は業火の住人なり。
8. 玉座を担う諸天使(注3)並びにそれを取りまく天使たちは、主の栄光を讃え、主を

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

حَمْ ②

تَنْزِيلُ الْكِتَابِ مِنَ اللَّهِ الْعَزِيزِ الْعَلِيمِ ③

غَافِرِ الذَّنْبِ وَقَابِلِ التَّوْبِ شَدِيدِ الْعِقَابِ ④
ذِي الطَّوْلِ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ إِلَهُ الْمَصِيرِ ⑤

مَا يُجَادِلُ فِي آيَاتِ اللَّهِ إِلَّا الَّذِينَ كَفَرُوا فَلَا يَغْرُرُكَ ⑥
تَقَلُّبُهُمْ فِي الْبِلَادِ ⑦

كَذَّبَتْ قَبْلَهُمْ قَوْمُ نُوحٍ وَالْأَحْزَابُ مِنْ بَعْدِهِمْ ⑧
وَهَمَّتْ كُلُّ أُمَّةٍ بِرَسُولِهِمْ لِيَأْخُذَهُ وَجَدُوا ⑨
بِالْبَاطِلِ يُدْخِلُونَ فِيهِ الْحَقَّ فَأَخَذْتُهُمْ فَكَيْفَ ⑩

كَانَ عِقَابِ ⑪

وَكَذَلِكَ حَقَّتْ كَلِمَتُ رَبِّكَ عَلَى الَّذِينَ كَفَرُوا ⑫
أَنَّهُمْ أَصْحَابُ النَّارِ ⑬

الَّذِينَ يُحْمَلُونَ الْعَرْشَ وَمَنْ حَوْلَهُ يُسَبِّحُونَ بِحَمْدِ ⑭

注1 賞賛すべき榮譽の主

注2 信者達は、物力は月日が経てば必ず失われるものであるから、不信心者のそれに惑わされてはならないと命じられている。

注3 「玉座」は神の屬性を意味しており(7章55節及び10章4節参照)、「玉座を担う諸天使」とは、その身を通じて神の屬性を表す人を指す。自然の法は天使を通して作用し、預言者は神のお告げが人々にもたらされる媒介の役割を果たす為、この「玉座を担う諸天使」とは天使と神の使者双方を指し、「それを取りまく天使

信じ、信ずる人々のために赦しを求めて、云う、「主よ、汝は慈悲と知識を以て萬物を包含す。されば、悔悟し、汝の道に従う人々を赦し給え。而して、彼等を地獄の刑から守り給え。

رَبِّهِمْ وَيُؤْمِنُونَ بِهِ وَيَسْتَغْفِرُونَ لِلَّذِينَ
آمَنُوا رَبَّنَا وَسِعْتَ كُلَّ شَيْءٍ رَّحْمَةً وَعِلْمًا
فَاغْفِرْ لِلَّذِينَ تَابُوا وَاتَّبَعُوا سَبِيلَكَ وَقِهِمْ
عَذَابَ الْجَحِيمِ ⑨

9. 主よ、かねて汝が約束せる永遠の樂園に彼等を入らせ給え、彼等の父や妻や子供らの中の高潔な者たちも同じように。(注4)げに汝は偉大にして賢哲なり。

رَبَّنَا وَأَدْخِلْهُمْ جَنَّاتٍ عَدْنٍ الَّتِي وَعَدْتَهُمْ
وَمَنْ صَلَحَ مِنْ آبَائِهِمْ وَأَزْوَاجِهِمْ وَذُرِّيَّاتِهِمْ
إِنَّكَ أَنْتَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ⑩

10. 而して、彼等を諸悪より護り給え。かの日のために、汝が諸悪より護ってやる者、げにその者は汝の慈悲に浴したるなり。そは素晴らしい大成功なり」と。

وَقِهِمُ السَّيِّئَاتِ وَمَنْ تَقِ السَّيِّئَاتِ يَوْمَئِذٍ
فُكِّدَ رَحْمَتَهُ ⑪ وَذَلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ⑫

第二項

11. 不信心者どもは告げられん、「お前たちが自分自身を憎悪するよりも、お前たちが信仰を勧められて之を拒んだ時のアッラーの憎悪ははるかに激しかりき」と。(注5)

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا يُكَذِّبُونَ لَقَدْ أَكْبَرُ
مِنْ مَقْتِكُمْ أَنْفُسَكُمْ إِذْ تُدْعَوْنَ إِلَى الْإِيمَانِ
فَتُكْفَرُونَ ⑬

12. 彼等は云わん、「主よ、汝は我等を二度死なせ、二度生命を与え給えり。(注6)我等は己が罪の数々を認む。されば、逃げるすべなきか?」と。

قَالُوا رَبَّنَا آمَنَّا أَثْنَتَيْنِ وَأُحْيَيْتَنَا اثْنَتَيْنِ
فَاعْتَرَفْنَا بِذُنُوبِنَا فَهَلْ إِلَى خُرُوجٍ مِنْ
سَبِيلٍ ⑭

たち」というは、地上の諸事を取り仕切る首位の天使を補佐する下位の天使、あるいは、預言者の教えを広める預言者の真の弟子を示すと言えよう。7章55節も参照の事。

注4 この節には重要な原理が述べられてある。この世の何人たりとも独力で事を成すことはできない。意識するしないにかかわらず、他人の助力を得ているものである。この意識的あるいは無意識の内の援助者とは、主に両親・妻・子供達である。それ由、業績を成した暁に信者に授けられる天恵に、これ等の親族達も又浴する事を許されるであらう。

注5 自らの悪行が招いた不幸な結末を突き付けられた時、我身を呪い始めるのが人の常である。不信心者達は、罰が下される時我身を嫌悪すると告げられている。しかし、慈悲深き神は、彼等が神のお告げを拒み、神の使者を迫害した時、彼等に対し遂かに強い嫌悪の情を抱かれた。

注6 誕生以前の状態は一種の死であり、この世における生の終わりは第二の死である。誕生と復活は二つの生である。

13. 彼等は告げられん、「お前たちは、アッラーが唯一なるものと宣下せんげされると、之これを信ぜず、他あだしがみ神しんらをアッラーに配する時は之これを信じたが故なり。裁定はアッラー次第なり、そは至高者、比類なき至大者なり」と。

14. さまざまなる神兆しるしをお前たちに示し、お前たちのために天から滋養を降すはアッラーなり。(注7)然しかるに、神にお縋すがりする者以外は、何人なんひとも之これに留意せず。

15. されば汝等、不信心者どもが如何いかにに嫌忌けんきするとも、アッラーに祈願して随順ずいじゆんの誠を尽せ。

16. アッラーは至尊者なり、玉座の主なり。(注8)彼は僕等のうちその欲する者にかの日の会見を警告すべく、御言葉を降し給う。

17. だれもが御前まへにまかり出る日、何事もアッラーから隠かくすこと能わざるべし。「その日、大権を握るは何者ぞ？」そはアッラー、唯一にして至高なる御方。

18. その日、各人は己れの稼うぎ高に應じた報いを受けん。如何なる不公平も行われず。げにアッラーの清算は迅速なり

19. 迫り来るその日のことを彼等に警告せよ。その時彼等の心臓は痛恨の余り、喉元まで上つて息を止めん。不義な輩は一人だに忠実な友もなく、また聞いて貰える執り成し手もなからん。

20. アッラーは目の欺瞞ぎまん(注9)を看破し、胸中に秘めるものを洞察す。

ذِكْمُ بَآئِهِ إِذَا دُعِيَ اللَّهُ وَحْدَهُ كَفَرْتُمْ
وَأَنْ يَشْرَكَ بِهِ تُوْمِنُوا فَالْحُكْمُ لِلَّهِ الْعَلِيِّ
الْكَبِيرِ ⑬

هُوَ الَّذِي يُرِيكُمْ آيَاتِهِ وَيُنْزِلُ لَكُمْ مِنَ
السَّمَاءِ سَرِقَاتُ مَا يَدْكُرُونَ إِلَّا مَنْ يُتَذَكَّرْ
فَادْعُوا اللَّهَ مُخْلِصِينَ لَهُ الدِّينَ وَلَوْ كَرِهَ
الْكَافِرُونَ ⑭

رَفِيعُ الدَّرَجَاتِ ذُو الْعَرْشِ يُلْقِي الرُّوحَ مِنْ
أَمْرِهِ عَلَى مَنْ يَشَاءُ مِنْ عِبَادِهِ لِيُنْذِرَ يَوْمَ
التَّلَاقِ ⑮

يَوْمَ هُمْ بَرْزُورٌ لَا يَخْفَى عَلَى اللَّهِ مِنْهُمْ
شَيْءٌ لِمَنِ الْمُلْكُ الْيَوْمُ لِلَّهِ الْوَاحِدِ الْقَهَّارِ ⑯

الْيَوْمَ تُجْزَى كُلُّ نَفْسٍ بِمَا كَسَبَتْ لَا ظُلْمَ
الْيَوْمَ إِنَّ اللَّهَ سَرِيعُ الْحِسَابِ ⑰

وَأَنْذِرْهُمْ يَوْمَ الْأَرْفَةِ إِذْ يُلْقَى الْقُلُوبُ لَدَى
الْحَنَاقِرِ كَظْمِينَ هُمْ مَا لِلظَّالِمِينَ مِنْ حَسِيمٍ
وَلَا لَشَافِعٍ يُطَاعُ ⑱

يَعْلَمُ خَائِنَةَ الْأَعْيُنِ وَمَا تُخْفِي الصُّدُورُ ⑲

注7 肉体的のみならず精神的にも、生を支える物は、全て天より下される。全生命の拠り所である水(21:31)は天より降り、人の魂の拠り所となる神の啓示も同じ天より授けられる。

注8 「玉座の主」は、慈悲の主と同様、「王座」が物質的なものであるという巷の誤解に反論するものである。

注9 怒り・蔑み・欲望の眼差し。

21. アッラーは真理を以て審判すれど、アッラーの他に彼等が祈る者は、何事も裁き得ず。げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知る御方でおわします。

第三項

22. 彼等は各地を遍歴^{へんれき}りて、彼等以前の人々の末路が如何になりたるかを見ざりしか？あの者どもは彼等よりも力ありて、現に地上に彼等の遺跡^{いしき}を残す。然れども、アッラーは彼等の諸悪故^{しよあくこ}に之を捕えたるなり。彼等はアッラーに対する防護者^{かごしや}を持たざりき。

23. そは、彼等の使徒^{ししと}が明白なる神兆^{しんしやう}を携えて彼等に来たりし時、彼等之を信ぜざりしが故に、アッラー彼等を捕らえたり。げにアッラーは力強く、罰するに苛厳^{かれん}なり。

24. われらはモーゼを、われらの神兆^{しんしやう}と明らかな権能^{けんなん}を与えて遣わしたり、

25. ファラオとハーマーンとクアールーンのところへ。然るに、彼等は云えり、「この男は大嘘^{うそ}つきの妖術師^{まじないし}なり」と。

26. 而して、モーゼがわれらからの真理を彼等にもたすや、彼等は云えり、「モーゼと共に信ずる者たちの息子等を殺し、婦女子のみを生かしておけ」と。されど、不信心者どもの策謀^{さくぼう}はいつも必ず失敗す。

27. ファラオは云えり、「モーゼを殺すのは余にまかせよ。モーゼに、自分の主に祈らせよ。余はモーゼがお前たちの宗教を変え、この國を攪乱^{かくらん}せんことを恐る」と。

28. モーゼは云えり、「我は清算の日を信ぜぬすべての驕慢^{きやうまん}なる者から、我が主にして且つお前たちの主なるアッラーの許^{もと}へ避難^{ひなん}す」と。(注10)

وَاللّٰهُ يَفْضَحُ بِالْحَقِّ وَالَّذِينَ يَدْعُونَ مِنْ دُونِهِ لَا يَفْضَحُونَ شَيْئًا إِنَّ اللَّهَ هُوَ السَّمِيعُ الْبَصِيرُ ﴿٢١﴾

أَوَلَمْ يَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَيَنْظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِينَ كَانُوا مِنْ قَبْلِهِمْ كَانُوا هُمْ أَشَدَّ مِنْهُمْ قُوَّةً وَآثَارًا فِي الْأَرْضِ فَأَخَذَهُمُ اللَّهُ بِذُنُوبِهِمْ وَمَا كَانَ لَهُمْ مِنَ اللَّهِ مِنْ وَاقٍ ﴿٢٢﴾

ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ كَانَتْ تَأْتِيهِمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنَاتِ فكَفَرُوا فَأَخَذَهُمُ اللَّهُ إِنَّهُ قَوِيٌّ شَدِيدُ الْعِقَابِ ﴿٢٣﴾

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مُوسَىٰ بِآيَاتِنَا وَسُلْطَانٍ مُّبِينٍ ﴿٢٤﴾ إِلَىٰ فِرْعَوْنَ وَهَامَانَ وَقَارُونَ فَقَالُوا سِحْرٌ كَذَّابٌ ﴿٢٥﴾

فَلَمَّا جَاءَهُمْ بِالْحَقِّ مِنْ عِنْدِنَا قَالُوا اقْتُلُوا أَبْنَاءَ الَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ وَاسْتَحْيُوا نِسَاءَهُمْ وَمَا كَيْدُ الْكَافِرِينَ إِلَّا فِي ضَلَالٍ ﴿٢٦﴾

وَقَالَ فِرْعَوْنُ ذَرُونِي أَقْتُلْ مُوسَىٰ وَلْيَدْعُ رَبَّهُ ۚ إِنِّي أَخَافُ أَنْ يُبَدِّلَ دِينَكُمْ أَوْ أَنْ يُظْهِرَ فِي الْأَرْضِ الْفَسَادَ ﴿٢٧﴾

وَقَالَ مُوسَىٰ إِنِّي عُذْتُ بِرَبِّي وَرَبِّكُمْ مِنْ كُلِّ مُتَكَبِّرٍ لَا يُؤْمِنُ بِيَوْمِ الْحِسَابِ ﴿٢٨﴾

注10 神は、預言者の選民の究極の拠り所である。彼等は周りを闇に囲まれ、彼等の説く真理を悪の勢力が根絶しようと企む時、神の扉をたたく。

第四項

29. ファラオの一族の中で、密かに信仰する者ありて、(注11)云えり、「あなた方は『我が主はアッラーなり』と云うだけで、人を殺すか？その方があなた方の主より明白なる証拠をもたらし来たるというに。もし彼が嘘つきならば、その偽りの罪は彼の身に降りかからん。されど、もし彼の云うことが真実ならば、彼があなた方に警告するいくつかは、必ずやあなた方の身に降りかからん。げにアッラーは則を越える者や嘘つきを導き給わぬ。

وَقَالَ رَجُلٌ مُؤْمِنٌ مِّنْ آلِ فِرْعَوْنَ يَكْتُمُ إِيمَانَهُ أَتَقْتُلُونَ رَجُلًا أَنْ يَقُولَ رَبِّيَ اللَّهُ وَقَدْ جَاءَكُمْ بِالْبَيِّنَاتِ مِنْ رَبِّكُمْ وَإِنْ يَكُ كَاذِبًا فَعَلَيْهِ كَذِبُهُ وَإِنْ يَكُ صَادِقًا يُصِيبْكُمْ بَعْضُ الَّذِي يَعِدْكُمْ إِنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي مَنْ هُوَ مُسْرِفٌ كَذَّابٌ ٢٩

30. みな衆、今主権はあなた方のもの、あなた方はこの国で優位を占めるも、もしアッラーの罰が我等に降らば、之に対して我等を護る者は、果して誰か？」と。ファラオは云えり、「余は自分が納得することをお前たちに指示するのみ。余がお前たちを導く道こそが、正確な道なり」と。

يَقَوْمُ لَكُمْ الْمُلْكُ الْيَوْمَ ظَهَرْنَا فِي الْأَرْضِ فَمَنْ يَنْصُرُنَا مِنْ بَأْسِ اللَّهِ إِنْ جَاءَنَا قَالَ فِرْعَوْنُ مَا أُرِيكُمْ إِلَّا مَا أَرَى وَمَا أَهْدِيكُمْ إِلَّا سَبِيلَ الرَّشَادِ ٣٠

31. かの信者は云えり、「みな衆、我は、過去の高度な民族が滅亡したあの日のようなことが、あなた方に起りはせぬかと心配す。

وَقَالَ الَّذِي آمَنَ يَوْمَ يَقَوْمِ إِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ مِثْلَ يَوْمِ الْأَحْزَابِ ٣١

32. ノアやアードやサムードの民、並びに彼等以後の者どもの場合と同じように。

مِثْلَ دَابِ قَوْمِ نُوحٍ وَعَادٍ وَثَمُودَ وَالَّذِينَ مِنْ بَعْدِهِمْ وَمَا اللَّهُ يُرِيدُ ظُلْمًا لِّلْعِبَادِ ٣٢

33. みな衆、我はあなた方のために、人々が助けを求めて互に呼び合うその日を心配す。(注12)

وَيَوْمَ إِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ يَوْمَ التَّنَادِ ٣٣

34. その日あなた方は、背を向けて遁走せん。アッラーの激怒からあなた方を護る者はなかるべし。アッラーが一たび邪道へ導かんとした者には、如何なる嚮導者もなかるべし。

يَوْمَ تَوَلَّوْنَ مُدْبِرِينَ مَا كُمْ مِنَ اللَّهِ مِنْ عَاصِمٍ وَمَنْ يُضْلِلِ اللَّهُ فَمَا لَهُ مِنْ هَادٍ ٣٤

注11 この信者は、ふさわしい時に表明しようと思い、その信仰を隠し続けた。彼が自らの信仰を表し、ファラオの臣下に語りかけたその勇気ある態度は、それまで信仰を隠して来たのが恐れのためではなかった事を裏付けている。

注12 人々が四散する日、又は彼等が互いに反目し合い分裂する日、あるいは、彼等が互いに助けを求める日。

35. かつてヨセフが明証をもたらし来たる時も、あなた方は彼のもたらしたもののについて疑い続け、彼が死するに及んで、『彼の後にはアッラーも使徒を遣わさざるべし』と云えり。アッラーはかくの如く、則を越える者どもや懷疑者を迷わしむ。(注13)

وَلَقَدْ جَاءَكُمْ يُوسُفُ مِنْ قَبْلُ بِالْبَيِّنَاتِ فَمَا زِلْتُمْ فِي شَكٍّ مِمَّا جَاءَكُمْ بِهِ حَتَّىٰ إِذَا هَلَكَ قُلْتُمْ لَنَ يَبْعَثَ اللَّهُ مِنْ بَعْدِهِ رَسُولًا كَذَلِكَ يُضِلُّ اللَّهُ مَنْ هُوَ مُسْرِفٌ مُرْتَابٌ ﴿٣٥﴾

36. これ等の者どもは、アッラーより如何なる權威も与えられておらぬくせに、アッラーの徴をあれこれと論ずる徒輩なり。こは、アッラー並びに信徒たちにとって、甚だしく憎んで余りある者、故にアッラーは、すべての驕慢なる者の心を封印し給う」と。

إِلَّذِينَ يُجَادِلُونَ فِي آيَاتِ اللَّهِ بِغَيْرِ سُلْطَانٍ أَتَاهُمْ كَبُرَ مَقْتًا عِنْدَ اللَّهِ وَعِنْدَ الَّذِينَ آمَنُوا كَذَلِكَ يَطْبَعُ اللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ قَلْبٍ مُنْكَرٍ جَبَّارٍ ﴿٣٦﴾

37. すると、ファラオは云えり、「ハーマーンよ、我がために高樓を築け、接近する途を得んために、

وَقَالَ فِرْعَوْنُ يَهْمُنُ ابْنُ بَنِي صَرَحَاءَ لَعَلِّي أَبْلُغُ الْأَسْبَابَ ﴿٣٧﴾

38. すなわち、天に接近する途を得て、モーゼの神とやらを熟視せん。ま、嘘に違いなかろうか」と。かくの如く、ファラオには己れの悪業が立派に見え、正しい道から閉め出されたり。而して、ファラオの策謀は滅び去りぬ。(注14)

أَسْبَابَ السَّمَوَاتِ فَأَطَّلَعَ إِلَىٰ إِلَهِ مُوسَىٰ وَإِنِّي لَأَظُنُّهُ كَاذِبًا وَكَذَلِكَ دُرَيْنَ فِرْعَوْنَ سَوْعَدٍ وَلَصَّدَ عَنِ السَّبِيلِ وَمَا كَيْدُ فِرْعَوْنَ إِلَّا فِي تَبَابٍ ﴿٣٨﴾

第五項

39. 信仰せる者は云えり(注15)「人々よ、我に従え。我はお前たちを清廉な道に導かん。

وَقَالَ الَّذِينَ آمَنُوا يَقَوْمِ اتَّبِعُونِ أَهْدِيكُمْ سَبِيلَ الرَّشَادِ ﴿٣٩﴾

40. 人々よ、この世の生活は束の間の快樂にすぎず。げに来世こそ永遠の住まいなり。

يَقَوْمِ إِنَّمَا هِيَ دُنْيَا مَتَاعٌ وَإِنَّ الْآخِرَةَ هِيَ دَارُ الْقَرَارِ ﴿٤٠﴾

注13 預言者は先史時代からこの世に存在したが、人間とは頑固なもので、新たな預言者が現れれば必ず彼を拒み、彼の死後彼を信じた人々は、もう預言者が出現する事は無く、啓示の扉は永遠に閉じられたと語った。

注14 ファラオは、モーゼの神を盗み見る為天国に上りたいものだと皮肉混じりに語ったが、神は海の底で彼にその力をお示しになった。

注15 「信仰せる者」という言葉は、真の信者がその大儀の正しさを確信している事を示すものである。彼等にあらゆる困難辛苦を甘受させる事が可能なのは、この岩の様に固い信仰の成せる業である。

41. 誰であれ悪事を行う者は、それ相応に返報されようぞ。然れども、善事を行う者は、信者なれば、男女の別なく楽園に入り、そこに限りない給養を賜わらん。(注16)

مَنْ عَمِلَ سَيِّئَةً فَلَا يُجْزَى إِلَّا مِثْلَهَا ۖ وَمَنْ عَمِلَ صَالِحًا مِمَّنْ ذَكَرُوا أَنَّنِي وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَلَا يَكُلُ يَدُ خُلُونِ الْجَنَّةِ يُرْزَقُونَ فِيهَا بِغَيْرِ حِسَابٍ ۝

42. 人々よ、我お前たちを救いに呼びかけるに、お前たちは我を業火に招かんとするは不思議なり。

وَيَقُولُ مَا لِيَ أُدْعَوُكُمْ إِلَى التَّجْوَةِ وَتَدْعُونَنِي إِلَى النَّارِ ۝

43. 我お前たちを、偉力者、宥恕者に招く時、お前たちは我にアッラーを棄てさせ、我に、我が知らざる者をアッラーに配せしめんとす。

تَدْعُونَنِي لِأَكْفُرَ بِاللَّهِ وَأُشْرِكَ بِهِ مَا لَيْسَ لِي بِهِ عِلْمٌ ۖ وَأَنَا أَدْعُوكُمُ إِلَى الْعَزِيزِ الْغَفَّارِ ۝

44. お前たちが我に勧める神々は、現世にても来世にても何んの権能も有せざる者なり。
(注17) 我等の帰所は必ずアッラーにして、罪人が業火の住人たらんこともまた間違いなかべし。

لَا جَرَمَ أَنَّنَا تَدْعُونَنِي إِلَيْهِ لَيْسَ لَهُ دَعْوَةٌ فِي الدُّنْيَا وَلَا فِي الْآخِرَةِ ۖ وَأَنْ مَرَدَّنَا إِلَى اللَّهِ وَأَنَّ الْأُسْرَفِينَ هُمْ أَصْحَابُ النَّارِ ۝

45. されば、お前たち、我が云いしことをその中思い出さん。我は、我がことをアッラーに委ぬ。げにアッラーはその僕等を照覧す」と。

فَسْتَذْكُرُونَ مَا أَقُولُ لَكُمْ وَأَفْئُضُ أَمْرِئِي إِلَى اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ بَصِيرٌ بِالْعِبَادِ ۝

46. かくてアッラーは、彼等が策謀せる邪惡の数々から彼を護りたり。而して、ファラオの民を嚴刑で包圍せり、

فَوَقَّهَ اللَّهُ سَيِّئَاتٍ مَا مَكُرُوا وَحَاقَ بِالْفِرْعَوْنَ سُوءُ الْعَذَابِ ۝

47. すなわち、業火なり。彼等は朝な夕な業火にさらされん。(注18) 而して、審判の時至れば、「ファラオの民を極刑に投ぜよ」と云われん。

النَّارُ يُعْرَضُونَ عَلَيْهَا غُدُوًّا وَعَشِيًّا ۖ وَيَوْمَ تَقُومُ السَّاعَةُ أَدْخِلُوا آلَ فِرْعَوْنَ أَشَدَّ الْعَذَابِ ۝

注16 不信心者の悪行の報いがその行いに比して与えられる一方、信者の善行に対するほうびは際限の無いものである。これが、イスラム教における天国と地獄の概念である。

注17 求められるにふさわしくない。求められるべきでない。求められる資格がない。

注18 「朝な夕な業火にさらされん。」という言葉は、不信心者が、苦しみと喜びを判別できない中間の状態であるバルザフにあって苦しむ罰を指している様だ。天国か地獄の判定は裁きの日に下されるのであろう。

48. 彼等は業火^{ごうか}の中で口論し、現世で弱くありし者が驕慢^{きようまん}なりし者に向って云わん、「我等はお前たちに従^{したが}ふたり。さればお前たち、我等のために、多少なりとも業火^{ごうか}を軽減したまえ」と。

49. 驕慢^{きようまん}なりし者どもは云わん、「我等は今、みな火の中に在り、アッラーすでにその僕等を裁きたり」と。

50. 業火^{ごうか}の中の者どもは、地獄の番人に云わん、「我等のために、なにとぞ主に、せめて一日その刑を軽減せんことを請いたまえ」と。

51. 番人たちは云わん、「使徒たちが明らかな神兆^{しんしほ}を携えてお前たちのところに來たらざりしか？」と。彼等は答えん「然^{しか}り」と。番人たちは云わん、「然^{しか}らば、祈れ」と。されど、不信心者の祈りは効^{かい}なし。(注19)

第六項

52. われらは必ず、われらの使徒並びに信ずる人々を、現世に於ても、また証人たちが立ち上る日に於ても之を佑助せん。(注20)

53. その日、悪事をなせる者の云い訳は何んの役にも立たず、彼等は呪詛^{じゆそ}され、ただおどましき住まいあるべし。

54. われらはモーゼに嚮導^{きやうどう}を与え、イスラエルの子らを經典の相統者たらしめたり、

55. すなわち、思慮ある人々への嚮導^{きやうどう}と訓戒のために。

56. されば、汝も耐え忍べ。アッラーの約束は真実なり。汝の過失の赦しを請い、朝な夕な、主の栄光を讃えよ。

وَأَذِّنَا الْجُنُودَ فِي النَّارِ يَقُولُ الضُّعْفُ الَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا إِنَّا كُنَّا لَكُمْ تَبَعًا فَهَلْ أَنْتُمْ مُغْنُونَ عَنَّا نَصِيبًا مِنَ النَّارِ ﴿٤٨﴾

قَالَ الَّذِينَ اسْتَكْبَرُوا إِنَّا كُلٌّ فِيهَا إِنَّ اللَّهَ قَدَّ حَكَمَ بَيْنَ الْعِبَادِ ﴿٤٩﴾

وَقَالَ الَّذِينَ فِي النَّارِ لِخَزَنَةِ جَهَنَّمَ ادْعُوا رَبَّكُمْ يُخَفِّفْ عَنَّا يَوْمًا مِنَ الْعَذَابِ ﴿٥٠﴾

قَالُوا أَوَلَمْ تَكُنْ تَأْتِيكُمْ رُسُلُكُمْ بِالْبَيِّنَاتِ قَالُوا بَلَى قَالُوا فَادْعُوا وَمَا دَعَا الْكَافِرِينَ إِلَّا فِي ضَلَالٍ ﴿٥١﴾

إِنَّا لَنَنْصُرُ رُسُلَنَا وَالَّذِينَ آمَنُوا فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَيَوْمَ يَقُومُ الْأَشْهَادُ ﴿٥٢﴾

يَوْمَ لَا يَنْفَعُ الظَّالِمِينَ مَعَذَرَتُهُمْ وَلَهُمُ اللَّعْنَةُ وَلَهُمْ سُوءُ الدَّارِ ﴿٥٣﴾

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْهُدَى وَأَوْرَثْنَا بَنِي إِسْرَءِيلَ الْكِتَابَ ﴿٥٤﴾

هُدًى وَذِكْرًا لِّأُولِي الْأَلْبَابِ ﴿٥٥﴾

فَاصْبِرْ إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ وَاسْتَغْفِرْ لِذَنْبِكَ وَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ بِالْعَشِيِّ وَالْإِبْكَارِ ﴿٥٦﴾

注19 神の預言者は刃向かう不信心者の努力や祈りは適いとはいえないが、その様な祈りが受け入れられない訳ではない。信者・不信心者にかかわらず、苦しむ者が神を求めれば、神はその祈りに答えられる (27:63)。

注20 この節は、神の使者とその弟子達に向けられており、神の援助は常に彼等の側にあり、例え不信心者が彼等に刃向かう企みを起こそうともそれは無に帰すという強い約束が示されている。

57. 如何なる權威も与えられていないくせに、アッラーの徴をあれこれと論ずる徒輩、彼等の胸中にあるものは、自分自身でも手の届かぬ程の大野心以外のなにものにも非ず。されば、アッラーの加護を求めよ。げにアッラーはすべてを聴き、すべてをみそなはし給う。

إِنَّ الَّذِينَ يُجَادِلُونَ فِي آيَاتِ اللَّهِ بِغَيْرِ سُلْطَانٍ
أَتَتْهُمْ إِنْ فِي صُدُورِهِمْ إِلَّا كِبْرًا هُمْ بِآيَاتِنَا
فَاسْتَعِذْ بِاللَّهِ إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْبَصِيرُ ﴿٥٧﴾

58. げに天地の創造は人間の創造より偉大なり。されど、世人の多くは之を知らず。

لَخَلْقُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ أَكْبَرُ مِنْ خَلْقِ النَّاسِ
وَلَكِنْ أَكْثَرُ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٥٨﴾

59. 言と目明きは同じからず。同様に、信仰し、善行を積む人々と悪事をなす徒輩は同じに非ず。之を熟慮する者の如何に少きことか。

وَمَا يَسْتَوِي الْأَعْمَى وَالْبَصِيرُ وَالَّذِينَ آمَنُوا
وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَلَا النَّاسِ قَلِيلًا مِمَّا
تَتَذَكَّرُونَ ﴿٥٩﴾

60. げに終末の時は近づけり。そは疑うべくもなし。されど、世人の多くは之を信ぜず。

إِنَّ السَّاعَةَ لَأْتِيَةٌ لَا رَيْبَ فِيهَا وَلَكِنْ أَكْثَرُ
النَّاسِ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿٦٠﴾

61. 而して、お前たちの主は云う、「われを崇めよ。然らば、われお前たちに応えん。されど、驕慢の余りわれを崇めざる者どもは、必ず辱められて地獄に陥ん」と。

وَقَالَ رَبُّكُمْ ادْعُونِي أَسْتَجِبْ لَكُمْ إِنَّ الَّذِينَ
يَسْتَكْبِرُونَ عَنْ عِبَادَتِي سَيَدْخُلُونَ جَهَنَّمَ دُخْرِينَ ﴿٦١﴾

第七項

62. お前たちの休憩のために夜を、また見るために昼を設けたるはアッラーなり。げにアッラーは人間に慈悲深くあらせられる。然るに、世人の多くは感謝せざるなり。

اللَّهُ الَّذِي جَعَلَ لَكُمْ آيَاتٍ لَتَسْكُنُوا فِيهَا وَالنَّهَارَ
مُبْجِعًا إِنَّ اللَّهَ لَذُو فَضْلٍ عَلَى النَّاسِ وَلَكِنْ
أَكْثَرُ النَّاسِ لَا يَشْكُرُونَ ﴿٦٢﴾

63. こはアッラー、お前たちの主、万物の創造者なり。彼以外に神なし。然るに、お前たち顔をそむけるとは如何なることぞ？

ذِكْرُ اللَّهِ رَبِّكُمْ خَالِقِ كُلِّ شَيْءٍ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ
فَأَنَّى تُؤْفَكُونَ ﴿٦٣﴾

64. アッラーの徴を拒む徒輩は、かくの如く背き去らしめらる。

كَذَلِكَ يُؤْفَكُ الَّذِينَ كَانُوا بِآيَاتِ اللَّهِ يَحْدُثُونَ ﴿٦٤﴾

65. アッラーこそはお前たちのために大地を休憩所となし、蒼穹を天蓋となし、お前たち

اللَّهُ الَّذِي جَعَلَ لَكُمْ الْأَرْضَ قَرَارًا وَالسَّمَاءَ

に形を与えて之を美事に形造り、さまざまなる佳きものを以てお前たちを扶養する者なり。お前たちの主、アッラーとはかくの如き御方。されば、万物の主、アッラーに感謝せよ。

يَسَاءَ وَصُورُكُمْ فَأَحْسَنَ صُورَكُمْ وَرَزَقَكُمْ
مِنَ الطَّيِّبَاتِ ذَلِكُمْ اللَّهُ رَبُّكُمْ فَتَبَارَكَ اللَّهُ
رَبُّ الْعَالَمِينَ ①⑨

66. 彼は永生者なり。彼の外に神なし。されば彼に祈り、信仰一筋の誠をつくせ。讚美は挙げて万物の主アッラーに帰属す。

هُوَ الْحَيُّ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ فَادْعُوهُ مُخْلِصِينَ لَهُ
الدِّينَ الْأَحَدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ②①

67. 云え、「我はお前たちがアッラー以外に拝する者を崇拜するを禁ぜらる、主より数々の明証が我に降されたる上は。而して、万物の主に服従帰依することを命ぜられたり」と。

قُلْ إِنِّي نُهِيتُ أَنْ أَعْبُدَ الَّذِينَ تَدْعُونَ مِنْ
دُونِ اللَّهِ لَمَّا جَاءَنِي الْبَيِّنَاتُ مِنْ رَبِّي وَأُمِرْتُ
أَنْ أَسْلِمَ لِرَبِّ الْعَالَمِينَ ②②

68. 彼こそはお前たちを土から、次いで一滴の精液から、次いで凝血から創り給ひ、次いで嬰兒として生れ出でせしめた御方なり。次に彼は、お前たちに能力を得さすべく成長せしめ、次いで老いせしめ、或る者はその前に死ぬるも、定められた寿命にお前たちを達せしむるは彼なり、お前たちがその知恵を学ぶために。

هُوَ الَّذِي خَلَقَكُمْ مِنْ تُرَابٍ ثُمَّ مِنْ نُطْفَةٍ
ثُمَّ مِنْ عَاقَةٍ ثُمَّ يَجْعَلُكُمْ طِفْلًا ثُمَّ لِيَبْلُغُوا
أَشَدَّكُمْ ثُمَّ لِيَتَكُونُوا شُيُوخًا وَمِنْكُمْ مَنْ يَتَوَفَّى
مِنْ قَبْلِ وَلِيَبْلُغُوا أَجَلَ مُّسَمًّى وَلَعَلَّكُمْ
تَعْقِلُونَ ②③

69. 彼こそは生を与え、死を賜う御方。彼、或る事を決定するや、ただ「在れ！」と云えば、そは在るなり。(注21)

هُوَ الَّذِي يُعْطِي وَيُخَيِّتُ فَإِذَا قَضَىٰ أَمْرًا فَإِنَّمَا
يَقُولُ لَهُ كُنْ فَيَكُونُ ②④

第八項

70. 汝は見ざりしか、アッラーの徴についてあげつろう徒輩を？ 彼等如何に真理より背き去りたるか！

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ يُجَادِلُونَ فِي آيَاتِ اللَّهِ أَنْ
يُصْرَفُونَ ②⑤

71. これ等の者は、經典とわれらが使徒たちに携えさせたものを否認する徒輩なり。されどやがて、彼等は思い知らん、

الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا وَبِمَا أَرْسَلْنَا بِهِ رُسُلَنَا
فَسَوْفَ يَعْلَمُونَ ②⑥

注21 死者と同様に道徳的・精神的に衰退していたアラブ民族は、今やモハammad預言者を通して新たに生まれ変わるべきである。これが生と死を司る神の御意志であり、何人たりともアッラーの御意志を妨げる事はできない。

72. 鉄の首輪をその頸にかけられ、鎖につながれる時。彼等は引きずり込まれん、

إِذِ الْأَعْلَىٰ فِي أَعْنَاقِهِمُ وَالسَّلْسِلُ يُسْحَبُونَ ﴿٤٧﴾

73. 煮えたぎる湯の中に。次いで業火^{じょうか}が彼等を焼かん。

فِي الْحَمِيمِ ثُمَّ فِي النَّارِ يُسْجَرُونَ ﴿٤٨﴾

74. その時、彼等はかく問われん、「お前たちの神々は、いま何処^{いずこ}にありや、

ثُمَّ قِيلَ لَهُمْ إِنَّ مَا كُنْتُمْ تُشْرِكُونَ ﴿٤٩﴾

75. アッラーに配せる神々は？ 彼等は答えん、「彼等消え去りぬ。否、我等は以前、アッラーの外に何も拝せざりき」と。かくの如く、アッラーは不信心者どもを困惑せしむ。

مِنْ دُونِ اللَّهِ قَالُوا ضَلُّوا عَنَّا بَلْ لَمْ نَكُنْ مَدْعُوًّا مِنْ قَبْلُ شَيْئًا كَذَلِكَ يُضِلُّ اللَّهُ الْكَافِرِينَ ﴿٥٠﴾

76. 「そはお前たちが地上に於て不当に驕慢^{きょうまん}なりしが故なり、また横柄に振舞いたるが故なり。

ذَلِكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَفْرَحُونَ فِي الْأَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ وَبِمَا كُنْتُمْ تَمْرَحُونَ ﴿٥١﴾

77. 汝等地獄の門に入り、中に住め。驕慢^{きょうまん}なる者の住まいは禍いなるかな」

أَدْخُلُوا أَبْوَابَ جَهَنَّمَ خَالِدِينَ فِيهَا فَبِئْسَ مَثْوًى لِّلْمُتَكَبِّرِينَ ﴿٥٢﴾

78. されば、汝も耐え忍べ。アッラーの約束は必ず間違いなし。われらが彼等に約束せしことの一端を汝に見せるにせよ、またその前に汝を死なしむるとも、いずれにしても、彼等はわれらの許に連れ戻されるべし。
(注 22)

فَأَصْبِرْ إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ فَإِمَّا نُرَبِّيكَ بِعُصَّ الدِّينِ نَعْلُ هُمْ أَوْ نَوَفِّيكَ فَإِنَّا يَرْجِعُونَ ﴿٥٣﴾

79. われらは汝以前に幾多の使徒を遣わしたり。その或る者についてはすでに汝に語り、或る者についてはいまだ汝に告げず。されど、如何なる使徒といえど、アッラーの許しなしに神兆をもたらしこと能^とわず。されど、アッラーの天命一たび下れば、ことは公正に裁かれ、虚妄なりと云いし徒輩は消滅す。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا رُسُلًا مِنْ قَبْلِكَ مِنْهُمْ مَنْ قَصَصْنَا عَلَيْكَ وَمِنْهُمْ مَنْ لَمْ نَقْصُصْ عَلَيْكَ وَمَا كَانَ لِرَسُولٍ أَنْ يَأْتِيَ بِآيَةٍ إِلَّا بِإِذْنِ اللَّهِ فَإِذَا جَاءَ أَمْرُ اللَّهِ قُضِيَ بِالْحَقِّ وَخَسِرَ هُنَالِكَ الْبَاطِلُونَ ﴿٥٤﴾

注 22 この節には二つの教義が含まれている。(1) 眞実は長い時を経て広まって行くが、勝利が神の民にもたらされるまで、彼等は幾つかの試練に耐えねばならず、彼等の信仰は試され、基準に達していると証明されなければならない。(2) 不信心者に向けられた処問の警告を含む預言は、延期、又は取り消しまでも考慮されている。預言の「一端」という語は、脅迫の意味合を持つ預言全てが実行される訳ではない事を示している。それは、不信心者が態度を改めれば、それに応じて変わるものである。

第九項

80. お前たちのために家畜を創り、それにお前たちを乗せ、またそれを食わしむるはアッラーなり。

اللَّهُ الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ الْأَنْعَامَ لِتَكُونُوا فِيهَا وَمِنْهَا
تَأْكُلُونَ ﴿٨٠﴾

81. このほか、お前たちはさまざまなる利益を彼等より得る。すなわち、彼等を用いて、お前たちが胸に宿す望みをかなえることも可能なり。船に乗る如く彼等の背に乗って、お前たちは運ばれる。

وَلَكُمْ فِيهَا مَنَافِعُ وَلِتَبْلُغُوا عَلَيْهَا حَاجَةً فِي صُدُورِكُمْ وَعَلَيْهَا وَعَلَى الْفُلْكِ تُحْمَلُونَ ﴿٨١﴾

82. アッラーはさまざまなる徴しるしをお前たちに見せているのに、お前たちは一体アッラーのどの徴しるしを否定せんとするか？

وَيُرِيكُمْ آيَاتِهِ فَأَيَّ آيَاتِ اللَّهِ تُنْكِرُونَ ﴿٨٢﴾

83. 彼等は国々を遍歴へんれきりて、彼等以前の者の末路が如何なるものなるかを見ざりしか？ 彼等はこれ等の者どもよりその数はるかに優り、且つ有力なる者にして、地上に壮大なる遺跡を遺す。されど、彼等が稼いだすべてのものは、彼等のためには無益なりき。

أَفَلَمْ يَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَيَنْظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ كَانُوا أَكْثَرُ مِنْهُمْ وَأَشَدَّ قُوَّةً وَأَثَارًا فِي الْأَرْضِ فَمَا أَعْنَى عَنْهُمْ تَأْكُلُوا يَكْسِبُونَ ﴿٨٣﴾

84. 彼等の使徒が明らかな神兆しるしを携えて彼等に來たりし時、彼等は持てる浅薄な知識に大得意なりき。されど、彼等の嘲笑せることが、遂に彼等を取り囲みぬ。

فَلَمَّا جَاءَهُمْ رَسُولُهُمْ بِبَيِّنَاتٍ مِنْ حُجُومِائِهِمْ عِنْدَهُمْ مِنَ الْعِلْمِ وَحَاقَ بِهِمْ تَأْكُلُوا بِهِ يَسْتَخِفُّونَ ﴿٨٤﴾

85. 彼等はわれらの懲罰を見るに及んで、云えり、「我等はただアッラーを信じ、今までアッラーに配したる神々のすべてを否認す」と。

فَلَمَّا رَأَوْا بَأْسَنَا قَالُوا آمَنَّا بِاللَّهِ وَحَدَّثَهُ وَكُفَرْنَا بِمَا كُنَّا بِهِ مُشْرِكِينَ ﴿٨٥﴾

86. されど、われらの懲罰を目の当りにしてなせる契約は、彼等を益せざりき。こはアッラーの僕等しもべに対する、彼の慣例なぐさしなり。されば、不信の徒輩たかは消滅せり。(注23)

فَلَمْ يَكُ يَنْفَعُهُمْ رَبُّنَا رَبُّنَا رَأَوْا بَأْسَنَا سَأَلْتُ اللَّهَ الَّذِي قَدْ خَلَقْتُ فِي عِبَادِهِ خَسِرَ هُنَاكَ الْكَافِرُونَ ﴿٨٦﴾

注 23 不信心者の悪の器が満つる時、彼等は処罰されるべきだとの神の命は施行され、彼等が如何に信仰を告白しようともそれは効を奏せず、悔恨は遅きに失するのである。

سُورَةُ الْحَمِّ السَّجْدَةِ مَكِّيَّةٌ

ハーミーム アッサジュダ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く^{あまね}アッラーの御名^{あな}において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. ハー・ミーム。(注1)

حَمِّ ②

3. こは慈悲深く、恵み遍く^{あまね}アッラーの啓示にして、

تَنْزِيلٍ مِنَ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ③

4. 知識ある人々のために、詳細に説明された諸節、明快且つ感銘的な言葉で表言された経典、すなわち、クルアーンなり。

كِتَابٌ فَضَّلْتَ آيَاتَهُ قُرْآنًا عَرَبِيًّا لِقَوْمٍ يَعْلَمُونَ ④

5. 朗報と警告を伝えるものなり。されど、彼等の大半は顔をそむけて、之^{これ}を聴かず。

بَشِيرًا وَنَذِيرًا فَأَعْرَضَ أَكْثَرُهُمْ فَهُمْ لَا يَسْمَعُونَ ⑤

6. 而して、彼等は云う、「我等の心は汝が要求することに対して拒否する覆いにおおわれ、耳も聞こえず、我等と汝の間には仕切りあり。されば、汝すきなようにせよ。我もまたすきにせん」と。

وَقَالُوا قُلُوبُنَا فِي أَكْثَةٍ مِمَّا تَدْعُونَا إِلَيْهِ وَفِي آذَانِنَا وَقْرٌ وَمِنْ بَيْنِنَا وَبَيْنِكَ حِجَابٌ فَلْنَعْمَلْ إِنَّا غَيْرُ مُنْقَرِفِينَ ⑥

7. 云え、「我はお前たち同様ただの人間なり。されど我は、お前たちの神が独一なる神なることを啓示せられたり。されば、よそみをせず、主に向って真直に進み、赦しを請え」と。禍なるかな偶像崇拜者ども、

قُلْ إِنَّمَا أَنَا بَشَرٌ مِثْلُكُمْ يُوحَىٰ إِلَيَّ أَنَّمَا إِلَهُمُ اللَّهُ وَاحِدٌ فَاسْتَقِيمُوا إِلَيْهِ وَاسْتَغْفِرُوهُ وَوَيْلٌ لِلْمُصْرِكِينَ ⑦

8. 彼等は喜捨を行わず、来世を否定する徒輩なり。

الَّذِينَ لَا يُؤْتُونَ الزَّكَاةَ وَهُمْ بِالْآخِرَةِ هُمْ كَافِرُونَ ⑧

9. されど、信仰して善行を積む者は、必ずやつきることなき報奨あり。

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَهُمْ أَجْرٌ غَيْرُ مَمْنُونٍ ⑨

第二項

10. 云え、「げにお前たちは、二日の間で(注2)大地を創れる彼を信ぜざるか? 剩え、彼

قُلْ إِنَّمَا لَكُمْ لَنُكْمٌ وَنَالِدُنِي خَلَقَ الْأَرْضَ فِي مَمْنُونٍ ⑩

注1 賞賛すべき榮譽の主

注2 「二日の間」の長さを推測する事はできない。それは数千年を上まわるかもしれない。クルアーンでは、ヤウム(一日)は千年(22:48)あるいは五千年(70:5)に匹敵して述べられている。地球が二日間て

に同位者を配するか？ 彼の御方こそ、万物の主なるぞ」と。

11. 彼は大地の上に堅固なる山々を置き、それを祝福し、さらに、四日の間でいろいろな食物を適当に設け、(注3)求める者すべてに之を等しく供給せり。(注4)

12. 然る後、彼は、いまだ蒸気体にすぎざりし天に向つて、また大地に向つて云えり、「好むと好まざるとをとわず、汝等兩名来たれ」と。天地は云えり、「我等喜んで参上す」と。(注5)

13. そこで彼は、二日の間に之を七層の天となし、各天にその役割りを黙示せり。而して、われらは、最下層の天を照明と守護のために星屑で飾りたり。こは偉力者、全知者の定むるところなり。

14. なれど、もし彼等背を向けなば、云え、「アードやサムードが被れる如き破壊的懲罰をお前たちに警告す」と。

يَوْمَيْنِ وَتَجْعَلُونَ لَهُ أَسَدًا ۖ ذَٰلِكَ سَبُّ
الْعَالَمِينَ ⑪

وَجَعَلَ فِيهَا رَوَاسِيَ مِنْ فَوْقِهَا وَبَارَكَ فِيهَا
وَقَدَرْنَا فِيهَا أَقْوَاتَهَا فِي أَرْبَعَةِ أَيَّامٍ ۖ سَوَاءً
لِلنَّاسِ يَلِينٌ ⑫

ثُمَّ اسْتَوَىٰ إِلَى السَّمَاءِ وَهِيَ دُخَانٌ فَقَالَ لَهَا
وَلِلْأَرْضِ ائْتِيَا طَوْعًا أَوْ كَرْهًا ۖ قَالَتَا أَتَيْنَا
طَائِعِينَ ⑬

فَقَضَّاهُنَّ سَبْعَ سَلَوَاتٍ فِي يَوْمَيْنِ ۖ وَأَوْحَىٰ
فِي كُلِّ سَاءٍ أَمْرَهَا ۖ وَزَيَّنَّا السَّمَاءَ الدُّنْيَا
بِمَصَابِيحَ ۖ وَحِفْظًا ۖ ذَٰلِكَ تَقْدِيرُ الْعَزِيزِ
الْعَلِيمِ ⑭

فَإِنْ أَعْرَضُوا فَقُلْ أَنْذَرْتُكُمْ ضِغَّةً ۖ مِثْلَ
ضِغَّةِ عَادٍ وَثَمُودَ ⑮

作られたという表現は、地球が冷却・凝縮した後、無形から徐々に形作られた過程を暗示するものと言える。

注3 「二日の間」つまり、前節に述べられた地球が現在の形に至るまでの形成過程は、当節に記されている「四日の間」に含まれる。追加された「二日の間」は、地表に山河等ができ、動植物の育つ二段階を指す。13節も参照の事。「いろいろな食物を適当に設け」というのは、地球が、そこに生存する全生物を十分賄える食物を現在及び未来において供給し続ける事が可能だと示している。

注4 「求める者すべてに等しく」という言葉は、神が地上にもたらされた食物は、自然の摂理に従いそれを求める者に等しく分け与えられる事を示している。又、上記の言葉は地球で採れる食物に関しては、人間の必要全て満たされるという意味でもある。それ故、地球が将来、急激な人口増加の為に、十分な食糧供給ができなくなるのではないかという不安は、根拠の無いものである。地球は、現在の世界の人口の6倍に相当する280億人を賄えるだけの食糧・繊維・その他の農産物の供給が可能である。(オックスフォード大学農業経済研究所所長、コリン・クラーク教授による)

ごく最近、国連食糧農業機関が「1959年度食糧農業状況」に掲載した報告によれば、世界の食糧供給は人口増加の二倍の速度で増えているという事である。

注5 当節は、宇宙の万物が一定の法則に支配されている事を示している。此所に選択の余地は無い。神の律法に従うか否かの意志を授けられた唯一の存在は、人間である。この事は33:73にも述べられている。

15. 使徒たちが、彼等の前後より来たり、「アッラー以外に何者も崇めるなかれ」と云いたる時、彼等は云えり、「もし我等の主欲しなば、天使等を降せるものを。故に我等は、お前たちが遣わされたその使命を信ぜず」と。

16. アードのごときは、何んの理由もなしに地上で傲慢に振舞い、「我より力強き者は誰ぞ?」と云えり。自分たちを創り給うたアッラーの方がはるかに力優れることをわからざるか? 彼等は常にわれらが神兆を否定す。

17. かくてわれらは、彼等に怒り狂う風を吹きつけ、不吉な日々を送らせ、現世に於て屈辱の刑罰を味わしめたり。されど、来世の懲罰は更に酷なり、しかも助けられざるべし。

18. またサムードについて云えば、われらは彼等に嚮導きようどうを与えたれど、彼等は導きよりも無知盲目を選びたり。されば、己が稼いだ行いのために、屈辱の刑罰の災難が彼等を襲いたり。

19. されど、われらは、信仰深く且つ義ぎしく行動せる者を救いたり。

第三項

20. アッラーの敵が数珠つなぎになって業火ごうかへと追ひ立てられ、苦しめられんその日を、彼等に警告せよ。

21. 彼等地獄に到着すると、彼等の耳や目や肌が、自分自身にそむいて、自分がなせることを証言せん。(注6)

إِذْ جَاءَ تَهُمُ الرُّسُلُ مِنْ بَيْنِ أَيْدِيهِمْ وَمِنْ خَلْفِهِمْ أَلَّا تَعْبُدُوا إِلَّا اللَّهَ قَالُوا لَوْ شَاءَ رَبُّنَا لَأَنْزَلَ مَلَائِكَةً فَأَنَّا بِمَا أُرْسِلْتُمْ بِهِ كَافِرُونَ ⑮

فَأَمَّا عَادُ فَاسْتَكْبَرُوا فِي الْأَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ وَقَالُوا مَنْ أَشَدُّ مِنَّا قُوَّةً أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّ اللَّهَ الَّذِي خَلَقَهُمْ هُوَ أَشَدُّ مِنْهُمْ قُوَّةً وَكَانُوا بِآيَاتِنَا يَجْحَدُونَ ⑯

فَأَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ رِيحًا صَرْصَرًا فِي أَيَّامٍ نَحْسَاتٍ لِنَنْذِرَهُمْ عَذَابَ الْخِزْيِ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَلَعَذَابُ الْآخِرَةِ أَكْرَهُ وَهُمْ لَا يُصْخَرُونَ ⑰

وَأَمَّا ثَمُودُ فَهَدَيْنَاهُمْ فَاسْتَحَبُّوا الْعَمَى عَلَى الْهُدَى فَأَخَذَتْهُمُ صُوقَةُ الْعَذَابِ الْهُونِ بِمَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ⑱

وَنَجَّيْنَا الَّذِينَ آمَنُوا وَكَانُوا يَتَّقُونَ ⑲

وَيَوْمَ يُحْشَرُ أَعْدَاءُ اللَّهِ إِلَى النَّارِ فَهُمْ يُوزَعُونَ ⑳

حَتَّىٰ إِذَا مَا جَاءُوهَا شَهِدَ عَلَيْهِمْ سَعُهُمْ وَأَبْصَارُهُمْ وُجُودُهُمْ بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ㉑

注6 罪人の耳と目は、三つの形態を取り、不信心者に不利な証拠を提供する。(1)彼等の悪行は、結果として身体上に表れるであろう。(2)彼等の身体各所は悪用の為、震えており、その震えは彼等に不利な証拠となるであろう。(3)彼等の身体全体の動きは保存されており、裁きの日に再生されるであろう。

22. 彼等は自分の肌に向って云わん、(注7)「何故汝等は我等に不利なる証言をするか？」と。彼等の肌は云わん、「万物を語らしむるアッラーは、我等にも語らしむ。彼こそは最初にお前たちを創りたる御方。されば、お前たちは彼の許に連れ戻されたり。

وَقَالُوا الْجُودُورُ هُمْ لَمْ يَشْهَدُوا عَلَيْنَا قَالُوا أَنْطَقَنَا اللَّهُ الَّذِي أَنْطَقَ كُلَّ شَيْءٍ وَهُوَ خَلَقَكُمْ أَوَّلَ مَرَّةٍ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٧٧﴾

23. お前たちは現世で罪を犯せし時、己が耳や目や肌が自分に不利な証言をするとは思わざりけり。否、お前たちは、自分たちのしていることをアッラーはよく知るまい、とすら考えたり。

وَمَا كُنْتُمْ تَسْتَعِيرُونَ أَنْ يَشْهَدَ عَلَيْكُمْ سَمْعُكُمْ وَلَا أَبْصَارُكُمْ وَلَا جُودُودُكُمْ وَلَكِنْ ظَنَنْتُمْ أَنَّ اللَّهَ لَا يَعْلَمُ كَثِيرًا مِمَّا تَعْمَلُونَ ﴿٧٨﴾

24. 己が主にお前たちが抱いた考えが、身を滅ぼしたり。されば今、お前たちは失敗者となれり」と。(注8)

وَذِكْرُكُمْ ظَنُّكُمُ اللَّيْلِ ظَنَنْتُمْ بِرَبِّكُمْ أَذْذِكُمْ فَأَصْبَحْتُمْ مِنَ الْخَاسِرِينَ ﴿٧٩﴾

25. 今となつては、彼等如何に辛抱するとも、業火が彼等の永劫の住まいなり。また、たとえ赦しを請うとも、恩赦に浴する者のうちに入れられざるべし。(注9)

فَإِنْ يَصْبِرُوا فَالنَّارُ مَثْوًى لَهُمْ وَإِنْ يَسْتَعْتِبُوا فَمَا لَهُمْ مِنَ الْمُعْتَبِينَ ﴿٨٠﴾

26. われらは彼等に、自分の前のことや後のことを魅惑的に思わしめる仲間を当てがいたり。(注10) 過ぎた昔の妖霊や人間どもに下したる宣告が事実となって証明されたり。げに彼等は失敗者なりき。

وَقَيَّضْنَا لَهُمْ قُرَنَاءَ فَزَيَّنُوا لَهُمْ مَا بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ وَحَقَّ عَلَيْهِمُ الْقَوْلُ فِي أُمِّ قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِهِمْ مِنَ الْجِنَّةِ وَالنَّاسِ إِنَّهُمْ كَانُوا خَاسِرِينَ ﴿٨١﴾

注7 人間が行動する際に、皮膚は最も重要な役割を果たす。それは、触覚のみならずあらゆる感覚を保持する。目や耳の罪人は視覚・聴覚を遮られるが、皮膚の罪人は身体的全機能を制限される。

注8 事実、あらゆる罪は信仰の欠如がもたらす。

注9 不信心者の罪は実に忌まわしきものであり、彼等は神の恩恵を授かる事も、再びその恩恵によくする事もないであろう。又、不信心者は神の慈悲を求めて神の座のお側に近付く事すら許されないであろう。

注10 不信心者の悪の仲間は、その悪業が彼等にとり賞賛に値する事を示そうとして、その行為を讃える。これ等悪の共謀者達は、彼等が欺く者達と罪を分かち合わねばならないであろう。「自分の前のことや後のことを魅惑的に思わしめる仲間」という言葉は、彼等が悪の仲間と共謀して犯した行為、及び祖先の悪業を真似た者達を指す。妖霊は選良、人間は庶民を表わしている。

第四項

27. 不信心者どもは云う、「クルアーンに耳傾けるなかれ。読誦中に騒ぎたてよ、さすれば圧倒できよう」と。(注 11)

28. ならばわれらは、不信の徒輩に厳しい刑を味わしめ、彼等が行える最悪なことに対して報復せん。

29. アッラーに仇なす者の褒美はこれなり、すなわち業火なり。その中が彼等の永劫の住まいなるべし。われらの神兆を常に否定した報いとして。

30. 不信心者どもは云わん、「主よ、妖霊と人間の中で、(注 12) 我等を邪道に迷わしめた者どもに会わせ給え。足で踏みつけ、辱しめてやりとうございます」と。

31. 「我等の主はアッラーなり」と云って、耐え忍んで来た者には、天使たちその上に降り、かく安心させる。(注 13) 「恐れるなかれ、悲しむなかれ。お前たちに約束されていた楽園の朗報を喜ぶがよい。

32. 我等は現世でも来世でもお前たちの友だちなり。彼処では、お前たちが欲するものはすべて得られ、請うものはすべて叶えられん。

33. こは宥恕者、慈悲者よりのもてなしなり。

第五項

34. 人々をアッラーへと誘い、善事をなし、「げに我は帰依者の一人なり」と云う人の言葉に優る善言あるか？

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لَا تَسْعَوْا هَذَا الْقُرْآنَ
وَالْعَوَافِينَ لَعَلَّكُمْ تَغْلِبُونَ ﴿٢٧﴾

فَلَنْ يُقَيِّقَ الَّذِينَ كَفَرُوا عَذَابًا شَدِيدًا وَ
لَنَجْزِيَنَّهُمْ أَشْوَأَ الَّذِي كَانُوا يَعْلَمُونَ ﴿٢٨﴾

ذَلِكَ جَزَاءُ عَذَابِ اللَّهِ النَّارُ لَهُمْ فِيهَا دَاسِرُ
الْخُلْدِ جَزَاءُ بِمَا كَانُوا بِآيَاتِنَا يَجْحَدُونَ ﴿٢٩﴾

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا رَبَّنَا أَرِنَا الَّذِينَ
أَصْلَحْنَا مِنَ الْجِنِّ وَالْإِنسِ نَجْعَلُهُمْ تَحْتَ أَقْدَامِنَا
يَكُونُوا مِنَ الْآسَفِينَ ﴿٣٠﴾

إِنَّ الَّذِينَ قَالُوا رَبُّنَا اللَّهُ ثُمَّ اسْتَقَامُوا تَتَنَزَّلُ
عَلَيْهِمُ الْمَلَائِكَةُ الْكَافُّوْنَ وَلَا تَحْزَنُوا وَابْشِرُوا
بِالْجَنَّةِ الَّتِي كُنتُمْ تُوعَدُونَ ﴿٣١﴾

نَحْنُ أَوْلَىٰ بِكُمُ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَفِي الْآخِرَةِ
وَلَكُمْ فِيهَا مَا تَشْتَهَىٰ أَنْفُسُكُمْ وَلَكُمْ فِيهَا مَا
تَدْعُونَ ﴿٣٢﴾

يَعْنِي نَزْلًا مِّنْ عَفْوٍ رَّحِيمٍ ﴿٣٣﴾

وَمَنْ أَحْسَنُ قَوْلًا مِّمَّنْ دَعَا إِلَى اللَّهِ وَعَمِلَ
صَالِحًا وَقَالَ إِنِّي مِنَ الْمُسْلِمِينَ ﴿٣٤﴾

注 11 闇の信奉者は常に叫びを上げて神の声を消そうとし、あらゆる企みを用いて人々の心を惑わそうとして来た。

注 12 2種類の人々。一方は、ジン（選良）であり、他方は普通の人間である。

注 13 信者が厳しい試練の只中で努力を続ける時、この現実の世において天使は、彼等を慰める為に降りて来る。

35. 善悪は一律に非ず。善を以て悪を撃退せよ。
しからば、そら、対立する間柄でも親友と
なるに至らん。(注14)

وَلَا تَتَّبِعُوا الْحَسَنَةَ وَلَا السَّيِّئَةَ ۖ رُدُّعُ بِالْأَيْ
مِي أَحْسَنُ ۚ فَإِذَا الَّذِي بَيْنَكَ وَبَيْنَهُ عَدَاوَةٌ
كَانَتْهُ وَلِيًّا حَمِيمٌ ﴿٥٥﴾

36. されど、之を授かる者は堅忍不拔な者のみ
か、或いは大へん幸運な者のみなり。

وَمَا يُلْقِيهَا إِلَّا الَّذِينَ صَبَرُوا ۖ وَمَا يُلْقِيهَا
إِلَّا ذُو حِظٍّ عَظِيمٍ ﴿٥٦﴾

37. 而して、もし悪魔からの誘惑が汝を悪に駆
りたてなば、アッラーに加護を求めよ。げ
に彼はすべてを聴き、すべてを知り給う。

وَأَمَّا يَنْزِعُكَ مِنَ الشَّيْطَانِ نَزْعٌ ۖ فَاسْتَعِذْ
بِاللَّهِ ۚ إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿٥٧﴾

38. 昼夜日月、これ等はアッラーの神兆の一つ
なり。日月の前で叩頭くなかれ。もし本当
に拝む気持があるなら、それ等を創れる
アッラーを崇めよ。

وَمِنْ آيَاتِهِ اللَّيْلُ وَالنَّهَارُ وَالشَّمْسُ وَالْقَمَرُ
لَا تَسْجُدُوا لِلشَّمْسِ وَلَا لِلْقَمَرِ وَاسْجُدُوا لِلَّهِ الَّذِي
خَلَقَهُنَّ إِن كُنتُمْ إِيَّاهُ تَعْبُدُونَ ﴿٥٨﴾

39. たとえ彼等が傲慢にも顔をそむけるとも、
それは彼等自身の損失、主と偕に在る者たち
は夜も昼も彼の栄光を讃えまつり、倦むこ
となし。

فَإِنْ اسْتَكْبَرُوا فَالَّذِينَ عِنْدَ رَبِّكَ يُسَبِّحُونَ لَهُ
بِالْأَيْلِ وَالنَّهَارِ وَهُمْ لَا يَسْأَمُونَ ﴿٥٩﴾

40. 彼の神兆の中にはかくなるものもあり、す
なわち、大地がしおれかかっている時、わ
れらがその上に雨も降らせば、大地は忽ち
生気を得て、動き且つふくれる。げに大地
を甦らせる者は、死者を甦らせることも可
なり。げに彼は万事を能くす。

وَمِنْ آيَاتِهِ أَنَّكَ تَرَى الْأَرْضَ خَاشِعَةً ۖ فَإِذَا أَنْزَلْنَا
عَلَيْهَا الْمَاءَ اهْتَزَّتْ وَرَبَتْ ۖ إِنَّ الَّذِي أَحْيَاهَا
لَمُتَّى النُّوْتَى ۚ إِنَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٦٠﴾

41. われらの神兆を曲解する徒輩は、われらか
ら隠れることを得ず。されば、業火に投ぜ
られる者がよいか、それとも安心してわれ
らの許に出づるを望むか？ お前たちの好
きにせよ。げにアッラーはお前たちの所業
をみそなはし給う。

إِنَّ الَّذِينَ يُلْحِدُونَ فِي آيَاتِنَا لَا يَخْفَوْنَ عَلَيْنَا
أَفَمَنْ يُلْقَى فِي النَّارِ خَيْرٌ ۖ أَمْ مَنْ بَاتَى آمِنًا يَوْمَ
الْقِيَامَةِ ۚ اعْمَلُوا مَا شِئْتُمْ ۚ إِنَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿٦١﴾

注14 伝道は伝道者に苦難をもたらす為、当節は彼に毅然として苦難に耐え、迫害者による悪行にも善行で
応じよとすら命じている。

42. 訓戒至れる時、(注15) 之^{これ}を信ぜぬ徒輩^{わかち}は、失敗者なり。げにそは偉大なる經典なり。

43. 虚偽は前からも後からも之^{これ}に近づくことを得ず、そは賢哲にして、讚美すべき御方よりの啓示なり。(注16)

44. 汝に対して云われることは、すべて汝以前の使徒たちが云われたことなり。汝の主は実に寛大ではあるが、また嚴罰の主なるぞ。

45. われらもし之^{これ}を異國の言葉のクルアーンとなしなば、彼等は必ず云わん、「何故その諸節を明りようにせざるか? 何んと、アラブの預言者に外国語とは?」と。云え、「そは信ずる者には導きであり癒やしなり」と。されど信ぜざる徒輩^{わかち}は、その耳が聞こえず、且つ彼等にそれが見えざるなり。(注17) 彼等は、いわば、遠くから呼ばれる者の如し。(注18)

第六項

46. われらはかつてモーゼに經典を授けたところ、之^{これ}に関して論争生じたり。もし前に発せられたる主の言葉(注19) なかりせば、事はすでに決せられたり。なれど事實は、彼等は今もそれを疑い動揺す。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا بِالذِّكْرِ لَمَّا جَاءَهُمْ وَإِنَّهُ لَكُنْزٌ عَزِيزٌ ﴿٣٧﴾

لَا يَأْتِيهِ الْبَاطِلُ مِنْ بَيْنِ يَدَيْهِ وَلَا مِنْ خَلْفِهِ تَنْزِيلٌ مِنْ حَكِيمٍ حَمِيدٍ ﴿٣٨﴾

مَا يُقَالُ لَكَ إِلَّا مَا قَدْ قِيلَ لِلرُّسُلِ مِنْ قَبْلِكَ إِنَّ رَبَّكَ لَذُو مَغْفِرَةٍ وَذُو عِقَابٍ أَلِيمٍ ﴿٣٩﴾

وَلَوْ جَعَلْنَاهُ قُرْآنًا عَجَبًا لَقَالُوا آلَؤُلَآءِ لَمْ يَصْلُكْ أَتَيْتُهُمْ أَهْجَئِي وَعَرَبِيٌّ قُلْ هُوَ الَّذِي أَنْوَاهِدَ شِفَاءً وَالَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ فِي آذَانِهِمْ وَقُرْ وَهُوَ عَلَيْهِمْ عَمًى أُولَٰئِكَ يُنَادَوْنَ مِنْ مَكَلٍ ﴿٤٠﴾

بَعِيدٍ ﴿٤١﴾

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ فَخْتَلَفَ فِيهِ وَلَوْلَا كَلِمَةٌ سَبَقَتْ مِنْ رَبِّكَ لَقُضِيَ بَيْنَهُمْ وَإِنَّهُمْ لَفِي شَكٍّ مِنْهُ مُرِيبٍ ﴿٤٢﴾

注15 クルアーンは、ズィクル(訓戒)と呼ばれてきたが、その理由として次の三つが挙げられる。(1)クルアーンはその教義を人々に覚えさせる為に、様々な表現を用いて繰返し述べている。(2)クルアーンは、それ以前の啓示書に記された高尚な教義を施した人物を思い出させる。(3)その教義に従う事により、人々は精神を高める事ができるのである。(ズィクルには名誉という意味もある。)

注16 クルアーンは非常に優れた神の書であり、そこに述べられた偉大なる真実、教義・規範のどれとして考古学や近代科学と矛盾するものはない。

注17 クルアーンの内容は彼等にとり不明瞭で、その教義の素晴らしさ、有効性が彼等には見えない。

注18 「遠くから呼ばれる者の如し。」という言葉は次の事を示している。裁きの日に、不信心者は全能の神の御座に近づく事を許されず、その悪事の申し開きをせよと遙か彼方より呼ばれるであろう。又、次の様にも解釈できる。不信心者はクルアーンの教えに耳を貸さず、それについて熟考する事を拒んだ為、それは彼等にとり、遠くから聞こえる不明瞭な声の様に理解できないものとなった。

注19 7章157節にある、「私の慈悲は、すべてを包括する。」という神の言葉を指している。

47. 善行を積む者、そは己れ自身を益す。悪事をなす者、そは己が重荷とならん。而して、主はその僕等に対していささかも公平を欠くことなし。
48. 審判の日のことは、ひとり彼のみぞ知る。(注20) 彼が知らずして、一個の果実もその花苞より出でず、また一人の女も懐胎し分娩することなし。その日彼は、彼等に向つて云わん、「わが同輩とやら、今何処に在りや?」と。彼等は答えん、「我等は断言す、我等の中であの神々の証人となる者は一人もなし」と。
49. かくて、彼等がかつて拝みたる神々は彼等を捨て去り、彼等は逃げ場のないことを思い悟らん。
50. 人間とは幸運を求めて倦むことなし。されど一たび災難に遭えば、忽ち絶望してすべての望みを断念す。
51. しかも、難儀の後にわれらが情けをかけなば、人は必ず云わん、「こうなるは当然なり。審判の日なぞ決して来るものか。たとい主の許に召し戻されるとも、我は主のおそばで幸いを得ん」と。(注21) されば、われらは必ず不信心者どもにその行いしすべてを語り聞かせ、厳しい刑を味わしめん。
52. われら人間に恩恵を施せば、人忽ちよそを向いて立ち去る。されど、一たび災難に遭えば、こは如何に、長々と祈る。

مَنْ عَمِلَ صَالِحًا فَلِنَفْسِهِ وَمَنْ أَسَاءَ فَعَلَيْهَا
وَمَا رَبُّكَ بِظَلَّامٍ لِلْعَبِيدِ ④

إِلَيْهِ يُرْدُّ عِلْمُ السَّاعَةِ وَمَا تَخْرُجُ مِنْ ثَمَرَاتٍ
مِّنْ الْأَشْجَارِ وَمَا تُحْمَلُ مِنْ أُنْثَىٰ وَلَا تَضَعُ
إِلَّا بِعِلْمِهِ وَيَوْمَ يُنَادِيهِمْ إِبْنُ شَرَكَاؤِهِمْ قَالُوا
أَذْنَابُكَ مَا مَنَّا مِنْ شَيْءٍ ⑤

وَضَلَّ عَنْهُمْ مَا كَانُوا يَدْعُونَ مِن قَبْلُ وَطَوَّأُوا
مَا لَهُمْ مِنْ فَيْصٍ ⑥

لَا يَسْمُرُ الْإِنْسَانُ مِنْ دُعَاءِ الْخَيْرِ وَإِن مَّسَّهُ الشَّرُّ
فَيُيَوِّسُ قَبْضًا ⑦

وَلَكِن أَدْقَنَهُ رَحْمَةً مِّن مَّا بَعْدَ صَرَائِهِ مَسْنَهُ
يَقُولُونَ هَذَا لِي وَمَا أَظُنُّ السَّاعَةَ قَائِمَةً وَلَكِن
رَّجَعْتُ إِلَىٰ رَبِّي إِنَّ لِي عِنْدَهُ لَلْخُسْرَاءَ فَلَنَسْئَلَنَّ
الَّذِينَ كَفَرُوا بِمَا عَمِلُوا وَلَنُذِيقَنَّهُمْ مِنْ عَذَابٍ
غَلِيظٍ ⑧

وَإِذَا أُنْمِتْنَا عَلَى الْإِنْسَانِ عُرْضًا وَنَايَجَانِيَةً
وَإِذَا مَسَّهُ الشَّرُّ فَيَدْعُو دُعَاءً عَرِيضًا ⑨

注20 モハammad預言者がアラブの地に蒔いた種が如何に育ち、どの様な実を結ぶかは神のみが御存知である。その実が腐れば破棄され、美味であれば大事に保たれるであろう。

注21 苦境にある時絶望し、順境においては傲慢の権化となり、苦悩の欠けらも無いのかのごとく振る舞い、成功は全て自らの努力と能力によるものとうぬばれ始めるのが人の性である。

53. 云え、「これがアッラーより降^{くだ}されたるものにして、而^{しか}も之^{これ}をお前たち信ぜずとすれば、真理よりはるか彼方に漂流させられた者よりも更に迷う者は誰か、云ってみよ？」と。

54. われらは、われらの神兆^{しるし}が真理なることが彼等にわかるまで、遠隔の地^{こゝ}に於ても、また彼等自身の中に於ても、常に之^{これ}を彼等に示さん。汝、汝の主が万物の立証者なること、それでも不足なるか？（注22）

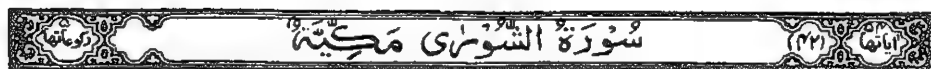
55. 彼等はなお主との対面を疑うか。げにアッラーは一切を包圍し給う。

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ كَانَ مِنْ عِنْدِ اللَّهِ ثُمَّ كَفَرْتُمْ بِهِ مَنْ أَضَلُّ مِمَّنْ هُوَ فِي شِقَاقٍ بَعِيدٍ ﴿٥٣﴾

سَنُرِيهِمْ آيَاتِنَا فِي الْآفَاقِ وَفِي أَنْفُسِهِمْ حَتَّىٰ يَتَبَيَّنَ لَهُمْ أَنَّهُ الْحَقُّ أَوَلَمْ يَكْفِ بِرَبِّكَ أَنَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ شَهِيدٌ ﴿٥٤﴾

إِلَّا أَنَّهُمْ فِي مِرْيَةٍ مِنْ لِقَاءِ رَبِّهِمْ أَلَا إِنَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ مُّحِيطٌ ﴿٥٥﴾

注22 イスラム教はアラブの地のみならず、地上の最果てまで広まるであろうと、当節は明確にして強い語調で預言している。



アル・シューラ
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. ハー・ミーム。(注1)

حَمْدٌ

3. アイン・スイン・カーフ。(注2)

عَسَقٌ

4. かくの如く偉大にして賢哲なるアッラーは、汝に先だつ人々に啓示した如く、今ここに汝に啓示を降す。

كَذَلِكَ يُوحِي إِلَيْكَ وَإِلَى الَّذِينَ مِنْ قَبْلِكَ
اللَّهُ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ

5. すべて天に在るもの地に在るものは悉くアッラーの有なり。彼は至高く、至大なる者にまします。

لَهُ مَا فِي السَّمُوتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ وَهُوَ الْعَلِيُّ
الْعَظِيمُ

6. 諸天はその上空より割れ裂けんばかり。天使らはその主の讃美を唱え、地上の人々のために赦しを請う。(注3) ああ、げにアッラーこそは寛大にして、仁慈なる者にまします。

تَكَادُ السَّمُوتُ يَتَفَطَّرْنَ مِنْ فَوْقِهِنَّ وَالْمَلَائِكَةُ
يُسَبِّحُونَ بِحَمْدِ رَبِّهِمْ وَيَسْتَغْفِرُونَ لِمَنْ فِي
الْأَرْضِ إِلَّا أَنْ اللَّهُ هُوَ الْغَفُورُ الرَّحِيمُ

7. アッラー以外に守護者を求める徒輩については、アッラー之を監視す。されば、汝は彼等の監視者に非ず。(注4)

وَالَّذِينَ اتَّخَذُوا مِنْ دُونِهِ أَوْلِيَاءَ اللَّهُ حَفِيفٌ
عَلَيْهِمْ وَمَا أَنْتَ عَلَيْهِمْ بِوَكِيلٍ

8. かくの如く、われらがアラビア語で汝にクルアーンを啓示せるは、汝をしてすべての邑の母並びにその周辺の人々に警告せしめんがため、また疑念の余地なきかの集合の

وَكَذَلِكَ أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ قُرْآنًا عَرَبِيًّا لِتُنْذِرَ أُمَّ
الْقُرَى وَمَنْ حَوْلَهَا وَتُنْذِرَ يَوْمَ الْإِجْمَاعِ لَا رَيْبَ

注1 賞讃すべき栄誉の主。

注2 全知全能者。

注3 人間の罪は大きい、神の慈悲はそれにも増して大きく、これは神の全ての属性を超えたものである。神の慈悲と、人間を許す様にとの天使の願いが一つになり、彼は神の罰から救われたのであり、悔い改める為の猶予を授けられているのである。

注4 神は人間の不敬や不信仰を見つめ、それを記録しておられ、もし彼等が悔い改めなければ処罰されるであらう。

日の人々に警告せしめんがためなり、或る者たちは樂園に入り、また或る者たちは燃えさかる業火に陥ちんその日を。

9. アッラーもし欲したりせば、彼等を一つの民族になし得たり。されど彼は、己れの欲する者のみその慈悲のうちに招き入れ給う。而して、悪をなす徒輩には、守護者もなければ助け手もなかるべし。

10. 彼等はアッラー以外に守護者を求めたるか？ されど、アッラーこそ真の守護者なり。彼は死者を甦らせ、全能にまします御方。

第二項

11. 何事によらず、お前たちに争論ある時、その最後の裁きをつける者はアッラーなり。云え、「こはアッラー、我が主、我はただ彼を信頼し、常に悔悟して彼に心を向ける」と。

12. 彼は天地の創始者なり。彼はお前たちのためにお前たち自身の中から妻女を創り、また家畜にも雌雄を創り、之によってお前たちを殖し給う。(注5)彼の如き御方はほかになし。彼はすべてを聴き、すべてをみそなはし給う。

13. 天地の諸鍵は彼の有なり。彼は己れの欲する者に給養を拵げ、また欲する者に之をひき締め給う。げに彼は一切を熟知し給う。

14. 彼がお前たちに規定せる教えは、かつてノアに申しつけたるもの。われら今汝に之を啓示せり。こはアブラハムやモーゼやイエスに命じたるものなり、すなわち、「信仰を堅守し、宗派に分裂するなかれ。汝が人々に呼びかけるこの教えは、偶像崇拜者どもには至難なり。アッラーは欲する者を己れのために選び、悔悟して心を主に向ける者を己れの道に導き給う」と。

فِيهِ فَرِيقٌ فِي الْجَنَّةِ وَفَرِيقٌ فِي السَّعِيرِ ⑤

وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ لَجَعَلَهُمْ أُمَّةً وَاحِدَةً وَلَكِنْ يُدْخِلُ مَنْ يَشَاءُ فِي رَحْمَتِهِ وَالظَّالِمُونَ مَا لَهُمْ مِنْ وَبِيلٍ وَلَا نَصِيرٍ ⑥

أَمَّا اتَّخَذُوا مِنْ دُونِهِ أَوْلِيَاءَ فَأَلَّهُ هُوَ الْوَلِيُّ وَهُوَ يُحْيِي الْمَوْتَى وَهُوَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ⑦

وَمَا اخْتَلَفْتُمْ فِيهِ مِنْ شَيْءٍ فَحُكْمُهُ إِلَى اللَّهِ ذَرِكُمُ اللَّهُ رَبِّي عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ وَإِلَيْهِ أُنِيبُ ⑧

فَاطْرُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ جَعَلَ لَكُمْ مِنْ أَنْفُسِكُمْ أَزْوَاجًا وَمِنَ الْأَنْعَامِ أَزْوَاجًا يَذُرُكُمْ فِيهِ لِيُبْسِلَبَهُمْ شِعَىٰ وَهُوَ السَّمِيعُ الْبَصِيرُ ⑨

لَهُ مَقَالِيدُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَشَاءُ وَيَقْدِرُ إِنَّهُ يُكَلِّمُ سُلَيْمًا عَلَيْهِ ⑩

شَرَعَ لَكُمْ مِنَ الدِّينِ مَا وَصَّىٰ بِهِ نُوحًا وَالَّذِي أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ وَمَا وَصَّيْنَا بِهِ إِبْرَاهِيمَ وَمُوسَىٰ وَعِيسَىٰ أَنْ أَقِيمُوا الدِّينَ وَلَا تَتَفَرَّقُوا فِيهِ كَبُرَ عَلَى الشُّرِكِينَ مَا تَدْعُوهُمْ إِلَهُ اللَّهِ يُخَيِّبُ إِلَيْهِ مَنْ يَشَاءُ وَيَهْدِي إِلَىٰهِ مَنْ يُنِيبُ ⑪

注5 神は夫婦の結び付きにより人類の子孫を増やされる。

15. 然るに彼等は、知識が降りたる後、互に妬み合い、分裂せり。もし定められた時限に関し主のお言葉なかりせば、事はすでに決濟せり。なれど、彼等の後に經典を受け継いだ者たちは、今も之に関して疑心を抱き動揺す。
16. されば汝は、人々をこの教えに召せ。汝が命ぜられた如く堅忍不拔であれ。彼等の思惑に乘せられるな。而して、云え、「我はアッラーが降せる經典を信ず。我は公平にお前たちを裁断することを命ぜられたり。アッラーは我等の主にして、且つお前たちの主なり。我等のすることは我等の責任、お前たちのすることはお前たちの責任なり。我等とお前たちの間には何も論争することなし。いずれ皆アッラーに召集され、彼の許へ歸るべし」と。(注6)
17. されど、アッラーの呼びかけに応えた後、アッラーをあげつらう者、彼等の論議はアッラーから見れば無益なり。(注7)天罰彼等に降りて厳しい罰を受けん。
18. アッラーこそは真理を以て經典を降し、且つ秤を授け給える御方なり。而して、終末の日の近づけることを汝に知らしめるは誰か？
19. 終末の口を信ぜぬ徒輩は之を催促するが、信ずる人々はその必ず来ることを知るが故に心配す。油断するな！ 終末の日をあげ

وَمَا تَفْقَرُوا إِلَّا مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَهُمُ الْعِلْمُ
بَغْيًا بَيْنَهُمْ وَلَوْلَا كَلِمَةٌ سَبَقَتْ مِنْ رَبِّكَ
إِلَى أَجَلٍ مُّسَمًّى لَّفُضِيَ بَيْنَهُمْ وَإِنَّ الَّذِينَ
أُورِثُوا الْكِتَابَ مِنْ بَعْدِهِمْ لَنَنْصُرُكُمْ مِنْهُ مُّؤَيَّدِينَ ⑮
فَلِذَلِكَ فَادْعُ وَاسْتَقِمْ كَمَا أُمِرْتَ وَلَا تَتَّبِعْ
أَهْوَاءَهُمْ وَقُلْ أَمَنْتُ بِمَا أَنْزَلَ اللَّهُ مِنْ كِتَابٍ
وَأُمِرْتُ لِأَعْدِلَ بَيْنَكُمُ اللَّهُ رَبُّنَا وَرَبُّكُمْ
لَنَا أَعْمَالُنَا وَلَكُمْ أَعْمَالُكُمْ لَا حِجَّةَ بَيْنَنَا وَ
بَيْنَكُمُ اللَّهُ يَجْمَعُ بَيْنَنَا وَالْيَهُ النَّصِيرُ ⑯

وَالَّذِينَ يُجَاجِلُونَ فِي اللَّهِ مِنْ بَعْدِ مَا اسْتَجِيبَ
لَهُ حُجَّتُهُمْ دَاحِضَةٌ عِنْدَ رَبِّهِمْ وَعَلَيْهِمْ
غَضَبٌ وَلَهُمْ عَذَابٌ شَدِيدٌ ⑮

اللَّهُ الَّذِي أَنْزَلَ الْكِتَابَ بِالْحَقِّ وَالْيُسْرَىٰ وَأَمَا
يُذَرِّيكَ لَعَلَّ السَّاعَةَ قَرِيبٌ ⑯

يَسْتَعْجِلُ بِهَا الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِهَا وَالَّذِينَ
أُْمِنُوا مُشْفِقُونَ مِنْهَا وَيَعْلَمُونَ أَنَّهَا الْحَقُّ

注6 モハammad預言者は、彼が現れる前の全啓示書に記された中で、彼の信じる預言者の弟子となる様処所に命じられている。それ故、他の預言者が彼と反目するいわれは全くない。

注7 イスラム教が起こされ、多くの人々が信者となり始めた為、不信心者がイスラムの神の由來に異議を唱え続けても、それは無駄な事である。

注8 不信心者は裁きの日信じないので、それを恐れず、その日が早く来る様求める。しかし、信者はその恐怖の日自らの行為に申し開きをしなければならないと知っており、當時その日に備えと共に、その日が訪れるのを恐れている。

つらう者ははなはだしき迷誤の中にあり。
(注8)

أَلَا إِنَّ الَّذِينَ يُمَادُّونَ فِي السَّاعَةِ لَفِي ضَلَالٍ

بَعِيدٍ ①٩

20. アッラーはその僕等^{しもべ}に対して優しくまします。彼は^{いとつよ}その欲する者を養う。彼は至強く、至偉大なり。

اللَّهُ لَطِيفٌ بِعِبَادِهِ يَرْزُقُ مَنْ يَشَاءُ وَهُوَ

الْقَوِيُّ الْعَزِيزُ ②٠

第三項

21. 来世の収穫^{こいねが}を希う者には、われらはその収穫を増さん。現世の収穫^{こいねが}を希う者にもわれらはそれを与えん。されど、来世に於ては、その者の分けまはなかるべし。(注9)

مَنْ كَانَ يُرِيدُ حَرْثَ الْآخِرَةِ نَزِدْ لَهُ فِي حَرْثِهِ

وَمَنْ كَانَ يُرِيدُ حَرْثَ الدُّنْيَا نُؤْتِهِ مِنْهَا وَ

مَا لَهُ فِي الْآخِرَةِ مِنْ تَصِيبٍ ②١

22. 彼等にはアッラーの同位者ありて、アッラーが許さざりし教えを彼等に許可したるか？ されど、われらの最後の決定の言葉なかりせば、事はすでに片づきたりなり。不義者は必ず苛酷な罰を被らん。

أَمْ لَهُمْ شُرَكَاءُ اشْرَعُوا لَهُمْ مِنَ الدِّينِ مَا لَمْ يَأْذَنْ

بِهِ اللَّهُ وَلَوْلَا كَلِمَةُ الْفَصْلِ لَفُضِيَ بَيْنَهُمْ وَ

إِنَّ الظَّالِمِينَ لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ②٢

23. 汝は自分で稼ぎためたもののために悪果がその身に降りかかり、戦慄する不義者どもを見ん。されど、信じて善行を積む者は、楽園の草原に住まん。彼等は主の御許で、己が欲するものを得べし。こはいとも大なるアッラーの賜物なり。

تَرَى الظَّالِمِينَ مُشْفِقِينَ مِمَّا كَسَبُوا وَهُمْ لَا يَتُوبُونَ

بِهِمْ وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ فِي رَوْضَةٍ

الْجَنَّةِ لَهُمْ مَا يَشَاءُونَ عِنْدَ رَبِّهِمْ ذَلِكَ هُوَ

الْفَصْلُ الْكَبِيرُ ②٣

24. こは信じて善行を積む僕等^{しもべ}に与えるアッラーの朗報なり。云え、「我はお前たちへの奉仕のために如何なる報酬も求めず。ただ近親を愛するが故にお前たちを神へ導く」と。(注10) 誰であれ善行を積む者には、われらはそれに対して善福を増さん。げにアッラーは寛大にして、すぐ感激なさる御方にまします。

ذَلِكَ الَّذِي يَبَشِّرُ اللَّهُ عِبَادَهُ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا

الصَّالِحَاتِ قُلْ لَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ أَجْرًا إِلَّا الْبُودَةَ

فِي الْقُرْبَىٰ وَمَنْ يَقْتَرِفْ حَسَنَةً نَّزِدْ لَهُ فِيهَا

حُسْنًا إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ شَكُورٌ ②٤

注9 この世のはかない物を手に入れる事にのみ努める人は、来世における永遠の命の恵みを与えられない。しかし、来世に備える人は、過分な神の恵みを授かるであろう。

注10 この言葉は又次の様な意味にもなる。(1)私は貴人を神の法の下へ呼び寄せた事で、貴人から報酬を得るつもりはない。唯、親族として、貴人が精神的安らぎを得ていないのではないかと案ずる余り、そうするの

25. 彼等は「彼ムハンマドがアッラーについて虚偽を捏造せり」と云うか? もしアッラー欲しなば、汝の敵の心を閉じたる如く、汝の心を閉じること可なり。されど、アッラーは、汝の口を通して虚偽を吸い取り、主の言葉を以て真理を立証す。げに主は、人が胸中に抱くことを熟知し給う。
26. 僕等からの悔悟を容れ、もろもろの罪を赦すは彼なり。而して、彼はお前たちの所業を知悉し給う。
27. 彼は信じて善行を積む人々の祈願に応え、彼等にその慈悲を加増す。されど、不信心者どもには、厳しい罰を下し給う。
28. もしアッラーがその僕等に対する給養を殖し過ぎなば、彼等は地上に於てほしいままに振舞わん。されど、主は、欲する時、之をほどほどに下し給う。げに彼はその僕等を熟知し、之を監視し給う。
29. 而して、彼等が絶望せる時、雨を降らせてその慈悲を展開するは彼なり。彼は守護者なり、讃美せらるべき御方なり。
30. 彼の神兆の中には、天地の創造とそこに彼が撒き散らした生きとし生けるものあり。而して、彼は、その欲する時に彼等を召集する能力あり。

第四項

31. お前たちにふりかかる不幸は、お前たちの手が稼いだこと。されど、彼は、お前たちの数々の罪を宥恕し給う。

أَمْ يَقُولُونَ افْتَرَى عَلَى اللَّهِ كَذِبًا فَإِنْ يَشَأْ اللَّهُ يَحْتَمِلْ عَلَى قَلْبِكَ وَيَمْحُ اللَّهُ الْبَاطِلَ وَيُخَيِّطُ الْحَقَّ يَكَلِّمُتُهُ إِنَّهُ عَلَيْهِ يَدَاتِ الصُّدُورِ ⑮

وَهُوَ الَّذِي يَقْبَلُ التَّوْبَةَ عَنْ عِبَادِهِ وَيَعْفُو عَنِ السَّيِّئَاتِ وَيَعْلَمُ مَا تَفْعَلُونَ ⑯

وَيَسْتَجِيبُ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَيَزِيدُهُمْ مِنْ فَضْلِهِ وَالْكَافِرُونَ لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيدٌ ⑰

وَلَوْ بَسَطَ اللَّهُ الرِّزْقَ لِعِبَادِهِ لَبَغَوْا فِي الْأَرْضِ وَلَكِنْ يُنْزِلُ بِقَدَرٍ مَّا يَشَاءُ إِنَّهُ بِعِبَادِهِ خَبِيرٌ بَصِيرٌ ⑱

وَهُوَ الَّذِي يُنْزِلُ الْغَيْثَ مِنْ بَعْدِ مَا قَنَطُوا وَيَنْشُرُ رَحْمَتَهُ وَهُوَ الْوَلِيُّ الْحَمِيدُ ⑲

وَمِنْ آيَاتِهِ خَلْقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا مِنْ دَابَّةٍ وَهُوَ عَلَى جَمْعِهِمْ إِذَا يَشَاءُ قَدِيرٌ ⑳

وَمَا أَصَابَكُمْ مِنْ مُصِيبَةٍ فَمَا كَسَبَتْ أَيْدِيكُمْ وَيَعْفُوا عَنْ كَثِيرٍ ㉑

である。(2)私は、貴人の精神に利する様にと私が為した大事業の報酬を貴人に求めはしない。唯、貴人は、血族としての身の処し方を知るべきだ。(3)私の貴人に対する気遣いや愛に報いて欲しいのではない。唯、私に反論するなら、少なくとも私が貴人に示す様な親族としての心配を貴人もするべきだ。(4)私は貴人に如何なる報酬をも求めないが、唯、神に近付きたいと願うべきである。この最後の内容は、25:58と一致し、その箇所には、モハammad預言者が次の様に語ったと記されている。「我はお前たちへの奉仕のために……。 (文中)」

32. お前たちは、地上に於て神の計画を挫折すること能わず、(注11) またアッラー以外に如何なる友も助け手もなし。
33. また、山の如き巨船が海を渡るのも、彼の神兆の一つなり。(注12)
34. 彼もし欲さば、風を止めて船を海面に停止せしめることも可なり。げにこの中に含有されることは、耐え忍び感謝する人々への神兆なり。
35. 或いは彼は、彼等人間が稼いだことのために、船を沈めることも可なり。されど、彼は、彼等の罪の数々を宥恕し給う。
36. されど、アッラーの神兆をあげつらう者は、自分たちには逃げ場の無いことを思い知らん。
37. お前たちが与えられたものはこの世の暫しの享樂なれど、アッラーの御許にあるものこそなお勝りて永続す、信じてその主を頼る者にとっては、
38. 大罪や醜行を避ける者にとっては、憤怒を抑えて寛恕する者にとっては、(注13)
39. 主に耳を傾け礼拝を遵守する者にとっては、互に相談して事を行う者にとっては、(注14) われらが授けたものを惜しみなく施す者にとっては、

وَمَا أُنْتُمْ بِمُعْجِزِينَ فِي الْأَرْضِ وَمَا لَكُمْ
مِنْ دُونِ اللَّهِ مِنْ وَلِيٍّ وَلَا نَصِيرٍ ﴿٣٢﴾

وَمِنْ آيَاتِهِ الْجَوَارِ فِي الْبَحْرِ كَالْأَعْلَامِ ﴿٣٣﴾

إِنْ يَشَأْ يُسْكِنِ الرِّيحَ فَيَظْلَلْنَ رَوَاكِدَ عَلَى ظَهْرِهِ
إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِكُلِّ صَبَّارٍ شَكُورٍ ﴿٣٤﴾

أَوْ يُوقِعْهُنَّ بِمَا كَسَبُوا وَيَعْفُ عَنْ كَثِيرٍ ﴿٣٥﴾

وَيَعْلَمُ الَّذِينَ يُجَادِلُونَ فِي آيَاتِنَا مَا لَهُمْ مِنْ
مُجِيبٍ ﴿٣٦﴾

فَمَا أُوتِيتُمْ مِنْ شَيْءٍ مَتَاعِ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا
وَمَا عِنْدَ اللَّهِ خَيْرٌ وَأَبْقَى لِلَّذِينَ آمَنُوا وَعَلَى
رَبِّهِمْ يَتَوَكَّلُونَ ﴿٣٧﴾

وَالَّذِينَ يَجْتَنِبُونَ كَبِيرَ الْإِثْمِ وَالْفَوَاحِشَ وَإِذَا
مَا غَضِبُواهُمْ يُعْفَوْنَ ﴿٣٨﴾

وَالَّذِينَ اسْتَجَابُوا لِرَبِّهِمْ وَأَقَامُوا الصَّلَاةَ وَأَمْرُهُمْ
شُورًا بَيْنَهُمْ وَمِمَّا رَزَقْنَاهُمْ يُنفِقُونَ ﴿٣٩﴾

注11 イスラム教が勝利を得、不信心者は神の命にそむく事はできず、イスラムの前進を遮る如何なる妨害も許されない。不信心者は、神がこの様に命じられたと告げられている。

注12 当節及び他の数節において、クルアーンは、船が国際交流において重要な役割を果たすと指摘している。1400年前に砂漠に住む子孫に啓示されたこの真実は、クルアーンが神に由来するものである事を十分に証明している。

注13 この言葉は、あらゆる種類の罪、道徳上の過ちに言及したもののだが、個々の罪については怒りが引き金となっている。怒りが限度を超える時、様々な罪が犯されるのであるから。

注14 この節は、イスラム教徒が国事を司る際の指針として、シュウラ(相互協議)について述べてある。この一語は、西側諸国の誇る政府の代表制の本質を表している。イスラム国家の指導者であるカリフは、国の重要問題について決断を下す時、国民の代表と協議する事を義務付けられている。4章59節も参照の事。

40. 迫害された時その身を護る者にとっては。

وَالَّذِينَ إِذَا أَصَابَهُمُ الْبَغْيُ هُمْ يَنْتَصِرُونَ ﴿٤٠﴾

41. 危害に対する報復は、それと同じ危害なり。されど、寛恕して和解する者には、アッラーの許に報賞あり。げにアッラーは不義者を愛で給わぬ。(注 15)

وَجَزَاءُ سَيِّئَةٍ سَيِّئَةٌ مِّثْلُهَا فَمَنْ عَفَا وَأَصْلَحَ فَأَجْرُهُ عَلَى اللَّهِ إِنَّهُ لَا يُحِبُّ الظَّالِمِينَ ﴿٤١﴾

42. 迫害された時、防御するは、罪に非ず。(注 16)

وَلَمَنِ انْتَصَرَ بَعْدَ ظُلْمِهِ فَأُولَٰئِكَ مَا عَلَيْهِمْ مِّنْ سَبِيلٍ ﴿٤٢﴾

43. 罰せらるべきは、人を迫害し、地上に於て不当に則を越える者どものみ。

إِنَّمَا السَّبِيلُ عَلَى الَّذِينَ يَظْلِمُونَ النَّاسَ وَيَبْغُونَ فِي الْأَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ أُولَٰئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٤٣﴾

44. されど、耐え忍び、赦してやるなら、そは崇高な裁断なり。

وَلَمَن صَبَرَ وَغَفَرَ إِنَّ ذَلِكَ لَمِنْ عَزْمِ الْأُمُورِ ﴿٤٤﴾

第五項

45. アッラーが邪道に導こうとした者には、以後如何なる守護者もなし。而して、汝は、不義者どもが刑罰を目の当たりにして、「どこかに引返す道なきか？」と叫ぶを見ん。

وَمَن يُضِلِلِ اللَّهُ فَمَا لَهُ مِن وَلِيٍّ مِّنْ بَعْدِهِ وَتَرَى الظَّالِمِينَ لَمَّا رَأَوْا الْعَذَابَ يَقُولُونَ هَلْ إِلَىٰ مَرَدٍّ مِّنْ سَبِيلٍ ﴿٤٥﴾

46. 汝は、彼等が業火の前に連れて来られると、恥てうなだれ、盗み見するを見ん。(注 17) 而して、信徒たちは云わん、「復活の日に、家族もろとも我が身を破滅する者は、本当の失敗者なり」と。見よ、不義者どもは永劫の懲罰の中に留まらん。

وَتَرَاهُمْ يُعْرَضُونَ عَلَيْهَا خَشِيعِينَ مِنَ الدَّلِّ يَنْظُرُونَ مِنْ طَرْفٍ خَفِيٍّ وَقَالَ الَّذِينَ آمَنُوا إِنَّ الْخُسِيفَ الَّذِينَ خَسِرُوا أَنفُسَهُمْ وَأَهْلِيَهُمْ يَوْمَ الْقِيَمَةِ الْآلَاءُ الظَّالِمِينَ فِي عَذَابٍ مُّقِيمٍ ﴿٤٦﴾

注 15 この節は、イスラムの刑法の根幹をなしている。イスラム教義に基づく罪人の処罰の真の目的は、罪人の道徳的更生にある。もし許す事でその者が幾分なりとも道徳的に向上するなら、彼は許されるべきである。しかし、処罰が彼を更生に向かわせるなら、彼は罰せられなければならない。しかし、その罰は、犯した罪より重いものであってはならない。イスラム教は、もう一方の頬を出すという厳しい教えや、「目は目を」のユダヤ教の教義いずれをも信じず、常にその中庸を重んじている。

注 16 処罰に関するイスラム教義は、非現実的理想主義者の心には響かないかもしれないが、現実的な宗教として、イスラム教は、法・経済・道徳の諸問題に最も有益にして現実的な解決策を定めている。イスラム教は自己防衛を信者の道徳上の義務とみなす。モハammad 預言者は、次の様に語ったと記されている。財産と名誉を守るべくして命を落とす者は殉教者である（ブハリ、マザーリム・ワル・ガザブ著）。

注 17 こそこそした目付きは、犯罪の為召喚され、判決が下されるのを待つ罪人のものである。

47. アッラー以外彼等を助ける守護者なし。
アッラーが邪道に導こうとした者には、も
はや指導の方途なし。
وَمَا كَانَ لَهُمْ مِنْ أَوْلِيَاءٍ يَتَصَدَّقُونَ بِهِمْ مِنْ دُونِ
اللَّهِ وَمَنْ يَتَّبِعِ اللَّهَ فَمَا لَهُ مِنْ سَبِيلٍ ⑮
48. 汝等、避け難い日がアッラーより来る前に、
主に耳を傾けよ。その日お前たちは遅れる
ところなく、否認する機会もなし。
اسْتَجِيبُوا لِلَّذِينَ يَدْعُونَكُمُ إِلَى اللَّهِ أَنْ يَنْتَهِىَ عَنْكُمْ يَوْمَ لَا مَرَدَ
لَهُ مِنَ اللَّهِ مَا لَكُمْ مِنْ مَلْجَأٍ تَوَمَّدُونَ وَمَا لَكُمْ
مِنْ تَذَكُّرٍ ⑯
49. されど、たとい彼等顔をそむけるとも、わ
れらは汝を彼等の守護者として遣わしたに
非ず。汝の務めはただ神託の伝達のみ。見
よ、人間は、われらが恩恵を味わせてやる
と大喜びするが、己が手が先に送れるもの
のために災難に遭うと、忽ち恩を忘る。
فَإِنْ أَعْرَضُوا فَمَا أَرْسَلْنَاكَ عَلَيْهِمْ حَفِظًا أَنْ عَلَيْكَ
بِالْبَلَاغِ وَإِنَّا إِذَا أَذْنَا الْإِنْسَانَ مِنَّا رَحْمَةً فَجَحَّ
بِهَا وَإِنْ تَوَلَّيْتُمْ سَبَّيْنَاهُ بِمَا قَدْ مَتَّ أَيْدِيَهُمْ
فَإِنَّ الْإِنْسَانَ كَفُورٌ ⑰
50. 天地の大権はアッラーのものなり。彼は己
が欲するものを創造す。彼は己が欲する者
に女兒を与え、また己が欲する者に男児を
与え給ふ。
لِلَّهِ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ يَخْلُقُ مَا يَشَاءُ
يَهْبُ لِمَنْ يَشَاءُ إِنَآثًا وَيَهْبُ لِمَنْ يَشَاءُ
الذُّكُورَ ⑱
51. 或いは、アッラーは、女兒、男児、共に与
え給ふ。或いは子宝の恵みを与え給わず。
げに、アッラーは、万事を知り、万事を能
くす。(注 18)
أَوْ يُزَوِّجَهُمْ دُكْرَانًا وَإِنَآثًا وَيَجْعَلُ مَنْ يَشَاءُ
عَقِيْبًا إِنَّهُ عَلِيمٌ قَدِيرٌ ⑲
52. アッラーは啓示によるか、帷の背後から、
或いは使徒を遣わして己れの欲することを
啓示する以外は、人間に直接語りかけ給わ
ず。(注 19) げに彼は至高く、賢哲にまし
ます。
وَمَا كَانَ لِبَشَرٍ أَنْ يُكَلِّمَهُ اللَّهُ إِلَّا وَحْيًا أَوْ مِنْ
وَرَاءِ حِجَابٍ أَوْ يُرْسِلَ رَسُولًا فَيُوحِيَ بآذَانِهِ
مَا يَشَاءُ إِنَّهُ عَلَىٰ حَكِيمٍ ⑳

注 18 当節及び前節において、不信心者は神が次の様な命令を下されたと告げられている。イスラム教徒がその数を増す一方、不信心者は減り、彼等の子孫がイスラム教となる為、絶えてしまうであろう。

注 19 当節は、神が下僕に語りかけ、啓示を表す三通りの方法について述べてある。(1) 神は媒介を通さず、直接彼等に語りかけられる。(2) 神は彼等に幻想をお見せになるが、それが理解されるか否かは定かでない。又、時には目覚めた状態の時に彼等に声をお聞かせになられるが、その時彼等には語りかけるお姿が見えない。これが「帷の背後」という語の意味する所である。(3) 神は使者、すなわち神のお告げを運ぶ天使をお遣しになる。

53. かくわれらは、われらの命によって汝に神の言葉を啓示せり。汝は經典が如何なるものかを知らず、また信仰が如何なるものかも知らざりき。されど、われらは、之によってわれらが嘉する僕等を導く光明となせり。げに汝は人間を正しい道へ導く。

وَكَذَلِكَ أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ رُوحًا مِّنْ أَمْرِنَا مَا كُنْتَ تَدْرِي مَا الْكِتَابُ وَلَا الْإِيمَانُ وَلَكِن جَعَلْنَاهُ نُورًا نَّهْدِي بِهِ مَن نَّشَاءُ مِنْ عِبَادِنَا وَإِنَّكَ لَتَهْدِي إِلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿٥٣﴾

54. すなわち、天地に在るもの一切を統べ給うアッラーの道へ。(注 20) 見よ！ 万物は悉くアッラーの御許へ帰り行く。(注 21)

صِرَاطَ اللَّهِ الَّذِي لَهُ مَا فِي السَّمُوتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ ۚ أَلَا إِلَى اللَّهِ تَصِيرُ الْأُمُورُ ﴿٥٤﴾

注 20 イスラム教は、人間を神のもとへ導き、人間の創造の偉大にして崇高なる目的を悟らせる生命・光・道である。

注 21 全ての物の始まりと終わりは、アッラーの手に委ねられている。



アル・ゾフロフ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. ハー・ミーム。(注1)
3. われらはこの明瞭なる經典を証拠として引証す。
4. われらはそれを、お前たちが理解し得るよう、清潔且つ感銘的な言葉のクルアーンとなせり。
5. 而して、その内容は、われらが許にある至高にして知恵に満ちたる母典の中に記されたものなり。(注2)
6. お前たちが放縱なるが故に、われらこの訓戒をお前たちから取り上げるべきか?(注3)
7. われらは如何に多くの預言者を昔の民へ遣わしたることか!
8. 然るに、預言者が現れるたび、彼等は之を嘲笑せり。
9. それ故に、われらはこの者どもより力優る民を打滅ぼしぬ。古人の先例すでにあり。
10. もし汝、彼等に向って「天地を創造せる者は誰か?」と問わば、彼等は必ず答えん、「万能全知なる神これら兩者を創造せり」と。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

حَمْدٌ

وَالْكِتَابِ الْبَيِّنِ

إِنَّا جَعَلْنَاهُ قُرْآنًا عَرَبِيًّا لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُونَ

وَإِنَّهُ فِي أُمِّ الْكِتَابِ لَدِينًا عَلِيٌّ حَكِيمٌ

أَفَنْصُرُ عَنْكُمُ الدُّكْرَ صَفْحًا أَنْ كُنْتُمْ تَوَكَّمُ مُسْرِفِينَ

وَكَمْ أَرْسَلْنَا مِنْ نَبِيِّ فِي الْأَوَّلِينَ

وَمَا يَأْتِيهِمْ مِنْ نَبِيٍّ إِلَّا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِؤْنَ

فَأَهْلَكْنَا أَشَدَّ مِنْهُمْ بَطْشًا وَجَعَلْنَا مَثَلُ الْأَوَّلِينَ

وَلَيْنَ سَأَلْتَهُمْ مَنْ خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ

يَقُولُونَ خَلَقَهُمُ الْعَزِيزُ الْعَلِيمُ

注1 賞讃すべき榮譽の主。

注2 戒律の原理という意味の語、母典は、クルアーンが神の栄知によるものであり、律法(シャリヤ)の原理となる事を示している。又、クルアーンが究極の神の律法の根本原理となる様、永遠の御命令が下されたと意味しているともいえる。

注3 この言葉の意味は次の様である。「貴人から、警告(神からの忠告)を取りあげ、貴人に背を向けて、何の導きも与えぬまま貴人から離れて行ってしまうとも思っているのか。」

神のしるしの形をとる天の警告は途絶える事はない。天のしるしを拒む最もな理由があったなら、初めの預言者に続いて他の預言者が出現する事はなかったであろう。しかし、預言者は現れ続けたのである。

11. 彼は大地をお前たちのために臥所となし、お前たちが迷わず歩けるようにその中に道筋を開き給えり。

الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ الْأَرْضَ مَهْدًا وَجَعَلَ لَكُمْ فِيهَا سُبُلًا لَعَلَّكُمْ تَهْتَدُونَ ﴿١١﴾

12. また彼は、程よく空から雨を降し、以て枯死せる大地を甦らしむ。お前たちもそのようにして甦らしめられん。(注4)

وَالَّذِي نَزَّلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً بِقَدَرٍ فَأَنْشَرْنَا بِهِ بَلْدَةً مَيِّتَةً كَذَلِكَ تُخْرَجُونَ ﴿١٢﴾

13. また彼は、万物の雌雄を創り、お前たちが乗る船や家畜とを創れり。

وَالَّذِي خَلَقَ الْأَزْوَاجَ كُلَّهَا وَجَعَلَ لَكُم مِّنَ الْفُلْكِ وَالْأَنْعَامِ مَا تَرْكَبُونَ ﴿١٣﴾

14. こはお前たちをその背に安坐せしめんがためなり。お前たちがその背に乗るたびに、主の恩恵を憶い起して「これ等のものを我等に従わしめ給える彼に栄光あれ。我等自身では出来得ざりしことなり。

لِيَسْتَوُوا عَلَى ظُهُورِهِ ثُمَّ تَذْكُرُوا نِعْمَةَ رَبِّكُمْ إِذَا اسْتَوَيْتُمْ عَلَيْهِ وَتَقُولُوا سُبْحَنَ الَّذِي سَخَّرَ لَنَا هَذَا وَمَا كُنَّا لَهُ مُقْرِنِينَ ﴿١٤﴾

15. 主の御許へ我等は必ず帰り行かん」と云うためなり。

وَأَنَّا إِلَىٰ رَبِّنَا لَمُنْقَلِبُونَ ﴿١٥﴾

16. 然るに彼等は、彼の僕の或る者を御子と主張す。(注5)げに人間は明らかに忘恩なり。

وَجَعَلُوا لَهُ مِنْ عِبَادِهِ جُزْءًا إِنَّ الْإِنْسَانَ لَكَفُورٌ

第二項

17. アッラーはその創れるものから女兒を取り、お前たちには男児の名誉を与えとな?

مَبِينٌ ﴿١٦﴾
أَمْ آتَاكَ مِنَّا بِمِثْلٍ بَنِتٍ وَاصْفُكُم بِالْبَيْنِينَ ﴿١٧﴾

18. 彼等の誰かに娘が生まれたと聞くと、その男の顔は蒼白となり、激怒する。

وَإِذَا بُشِّرَ أَحَدُهُم بِمَا ضَرَبَ لِلرَّحْمَنِ مَثَلًا ظَلَّ وَجْهُهُ مُسْوَدًّا وَهُوَ كَظِيمٌ ﴿١٨﴾

19. 装身具の間で育てられはしても、議論を明確に表明し得ざる者を、アッラーに押しつけるのか? (注6)

أَوْ مَن يُنَشَّؤُا فِي الْحُلِيِّةِ وَهُوَ فِي الْخِصَامِ غَيْرُ مَبِينٍ ﴿١٩﴾

注4 雨が降れば乾いた大地に新たな生命が生じる様に、魂の死人も神の啓示を通して蘇ると、この言葉は示している。

注5 この言葉は、イエスが神の子だとするキリスト教の教義を指す。

注6 この言葉は、装飾品で飾り立てた偶像を指しているようだ。当節は、偶像崇拜者を厳しく非難している。彼等は、語りかけたり彼等の祈りに答える事ができず、敵の攻撃から彼等を守る事もできない偶像を崇めている。

20. 彼等は慈悲深い神の僕なる天使を女性と考
える。彼等はその創造に立ち会いたるか？
彼等の証言は記録せられ、必ず糾問され
ん。

21. 彼等は云わん、「もし慈悲深き神欲したりせ
ば、我等は天使等を崇めはせざりき」と。
彼等はこの事について何んの知識もなし。
彼等はただ憶測するのみ。

22. クルアーンより以前、われらは彼等に經典
を授けたりや、彼等それを護持するや？(注
7)

23. 否、彼等は云う、「我等は父祖たちが或る教
えを奉ずるを見て、我等はその足跡に導か
れる」と。

24. 汝以前に、われらが警告者を邑に遣わすた
びに、その邑のよこしまな有力者たちは云
えり、「我等は父祖たちが或る教えを奉ずる
を見て、我もその足跡を辿るのみ」と。

25. 警告者は云えり、「何とな！ お前たちの父
祖が奉じたるものより優る導きをもたらす
ともか？」と。彼等は云えり、「我等は断じ
てお前の使命を信ぜず」と。

26. 故にわれらは、彼等を罰せり。見よ、預言
者を拒否せる徒輩の末路が如何なるものな
りしかを！

第三項

27. アブラハムが父とその一族にかく云える時
のことを念え。「我はお前たちが崇めるもの
と全く係わりなし、

28. 我を創り給い且つ必ず我を導かん御方を除
いて」

وَجَعَلُوا السَّكِينَةَ الَّتِي بَيْنَ هُمُ عَبْدُ الرَّحْمَنِ إِنَّا نَأْتِيهِمْ
أَشْهَدُ وَأَخْلَقَهُمْ سَكَنَتْ شَهَادَتُهُمْ وَيُسَلَوْنَ ①

وَقَالُوا لَوْ شَاءَ الرَّحْمَنُ مَا عَبَدْنَاهُمْ مَا لَهُمْ
بِذَلِكَ مِنْ عِلْمٍ إِنْ هُمْ إِلَّا يَخْرُصُونَ ②

أَمْ آتَيْنَاهُمْ كِتَابًا مِنْ قَبْلِهِ فَهُمْ بِهِ مُتَسِسُونَ ③

بَلْ قَالُوا إِنَّا وَجَدْنَا آبَاءَنَا عَلَى أُمَّةٍ وَإِنَّا عَلَى آثِهِمْ
مُقْتَدُونَ ④

وَكَذَلِكَ مَا أَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ فِي قَرْيَةٍ مِنْ نَذِيرٍ
إِلَّا قَالَ مُتَرَفُّوهَا إِنَّا وَجَدْنَا آبَاءَنَا عَلَى أُمَّةٍ وَإِنَّا
عَلَى آثِهِمْ مُقْتَدُونَ ⑤

قُلْ أَوَلَمْ جِئْتُكُمْ بِآيَاتٍ مِمَّا وَجَدْتُمْ عَلَيْهِ
آبَاءَكُمْ قَالُوا إِنَّا بِمَا أُرْسِلْتُمْ بِهِ كَافِرُونَ ⑥

فَأَنْتَقَمْنَا مِنْهُمْ فَأَنْظِرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ
الْمُكَذِّبِينَ ⑦

وَإِذْ قَالَ إِبْرَاهِيمُ لِأَبْنَيْهِ وَقَوْمِهِ إِتْنِي بَرَاءً
مِمَّا تَعْبُدُونَ ⑧

إِلَّا الَّذِي فَطَرَنِي فَإِنَّهُ سَيَهْدِينِ ⑨

注7 偶像崇拜者は、その不合理な教義を支える論拠を持たないばかりか、自らの教義を支える經典すら提示できないでいる。

29. 而して、アブラハムは、之をその子孫に永代存続の遺訓となし、彼等を神に頼らしめんとせるなり。(注8)
30. 否、われは、彼等並びにその父祖に、真理とその神託を明らかにする使徒が来るまで、暫しの楽しみを許したり。
31. 然るに、その真理彼等に來たるや、彼等は云えり、「こは妖術なれば、我等之を信ぜず」と。
32. 更に彼等は云う、「何故このクルアーンは二都のお偉方に降らざりしか?」と。(注9)
33. 主の恵みを頒布する者、そは彼等なりや? (注10) 彼等の間に現世の生活の資を頒ち、或る者に他の者を使えるようにその地位を高からしめるはわれらなり。汝の主の恵みは、彼等が蓄財するものよりはるかに優る。
34. 全人類がみな一種類の集団となるおそれなかりせば、われらは慈悲深い神を信ぜざる徒輩のために、住む家の屋根を銀板で葺き、その登る階段を銀造りとなし、
35. すべて戸は銀製、臥するには銀の搦牀を与えたり、
36. 黄金の装飾をほどこせる。されど、これ等はみなこの世の儚い楽しみにすぎず。(注11) 主の許に於ける来世の安樂こそ、敬虔な信者のためにあり。

وَجَعَلَهَا كَلِمَةً بَاقِيَةً فِي عَقِبِهِ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ﴿٢٩﴾

بَلْ مَتَّعْتُ هَؤُلَاءِ وَآبَاءَهُمْ حَتَّىٰ جَاءَهُمُ الْحَقُّ وَرَسُولٌ مُّبِينٌ ﴿٣٠﴾

وَلَمَّا جَاءَهُمُ الْحَقُّ قَالُوا هَذَا سِحْرٌ وَإِنَّا بِهِ كَافِرُونَ ﴿٣١﴾

وَقَالُوا لَوْلَا نُزِّلَ هَذَا الْقُرْآنُ عَلَىٰ رَجُلٍ مِّنَ الْقَوَائِمِ عَظِيمٍ ﴿٣٢﴾

أَهُمْ يَقْسِمُونَ رَحْمَتَ رَبِّكَ نَحْنُ قَسَمْنَا بَيْنَهُمْ مَّعِيشَتَهُمْ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَرَفَعْنَا بَعْضَهُمْ فَوْقَ بَعْضٍ دَرَجَاتٍ لِّيَتَّخِذَ بَعْضُهُم بَعْضًا مَّخْرُجًا وَرَحْمَتُ رَبِّكَ خَيْرٌ مِّمَّا يَجْمَعُونَ ﴿٣٣﴾

وَلَوْلَا أَن يَكُونَ النَّاسُ أُمَّةً وَاحِدَةً لَّجَعَلْنَا لِنِ يَكْفُرُ بِالزَّحْنِ لِبُيُوتِهِمْ سُقْفًا مِّنْ فِضَّةٍ وَمَعَارِجَ عَلَيْهَا يَظْهَرُونَ ﴿٣٤﴾

وَلِبُيُوتِهِمْ أَبْوَابًا وَسُرَرًا عَلَيْهَا يَتَكَلَّمُونَ ﴿٣٥﴾

وَرُحُفًا وَإِن كُنَّا لَنَآ مَتَاعَ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا ۖ وَالْآخِرَةُ عِنْدَ رَبِّكَ لِلْمُتَّقِينَ ﴿٣٦﴾

注8 アブラハムは唯一神を固く信じ、それを誠意と忍耐をもって子孫に説いた為、この信仰は末長く彼等の間に広まった。

注9 この「二都」はメッカとタイフを指すと一般に考えられている。それ等は、モハammad預言者の時代には、アラブの社会的・政治的に重要な二大都市であった。

注10 この節は、次の様に不信心者を厳しく非難している。「彼等は、自らを神の慈悲を伝える役割を担う者と称しているが、それはいつからなのか? 又、誰にその様な決定を下す権利があると言うのか?」

第四項

37. 然しながら、慈悲深き神を念ずることをな
おざりにする者には、われら悪魔をつけて、
親密なる友たらしめん。
وَمَنْ يَفْشُ عَنْ ذِكْرِ الرَّحْمَنِ نُقِيضْ لَهُ شَيْطَانًا
هُوَ لَهُ قَرِينٌ ③⑦
38. これ等の友は彼等を神の道より妨げても、
彼等は正しく導かれていると考える。
وَالَّذِينَ يَصِدُّوهُمْ عَنْ السَّبِيلِ يَسْتَحِبُّونَ أَنَّهُمْ
مُهْتَدُونَ ③⑧
39. 而して、かくの如き者われらが許に來るに
及んで、その友に向つて云わん、「我と汝等
の間に東西程の距りがあらんことを！」と。
なんたる悪しき友なるかな！（注12）
حَتَّىٰ إِذَا جَاءَنَا قَالَ لَيْتَ بَيْنِي وَبَيْنَكَ بُعْدُ
الْمَشْرِقَيْنِ فَيُخْسِ الْقَرِينَ ③⑨
40. 而して、彼等は云われん、「そは、かの日に
於てはお前たちに何にも役立つところなか
らん、お前たちが不義なりしが故に。お前
たちは刑罰をともに味う者なり」と。
وَلَنْ يَنْفَعَكُمْ الْيَوْمَ إِذْ ظَلَمْتُمْ أَنْفُسَكُمْ فِي الْعَذَابِ
مُسْتَرِكُونَ ④①
41. なれば汝は聾を聞こえるようにし、盲や明
白なる迷誤の中にある者を導くこと可能な
りや？（注13）
أَفَأَنْتَ تُسْمِعُ الصُّمَّ أَوْ تَهْدِي الْعُمْى وَمَنْ كَانَ
فِي ضَلَالٍ مُّبِينٍ ④②
42. たといわれら汝を召し上げるとも、われら
は必ず彼等に報復せん。
فَأَمَّا نَذَهَبَنَّ بِكَ فَأَمَّا فِئْتَانُهُمْ مَّتَّقِمُونَ ④③
43. 或いは、われらが彼等に約束せしことを、
われらは汝に証明せん。なんとなれば、わ
れらは彼等を完全に支配するが故に。
أَوْ نُرِيَّتَكَ الَّذِي وَعَدْنَاهُمْ فَإِنَّا عَلَيْهِمْ مُّقْتَدِرُونَ ④④
44. されば、汝は、啓示されたるものを護持せ
よ。汝正しき道を辿るが故に。
فَأَسْمِعْكَ بِأَلْفَىٰ أَوْحَىٰ إِلَيْكَ إِنَّاكَ عَلَىٰ صِرَاطٍ
مُسْتَقِيمٍ ④⑤
45. げにクルアーンは汝とその民のために氣品
のよりどころなり。（注14）而して、お前
たちは、之に関して尋ねられん。
وَأَنَّهُ لَئِنْ كُرِّكَ لَاقُومِيكَ وَسَوْفَ تُسْأَلُونَ ④⑥

注11 財産と「地位」の差異が無くなっていれば、人は全て似通い、人間社会は機能なくなっていたであらう。神は、金製の扉と階段の付いた銀製の家を不信心者に与えた事であらう。これ等の物は神の目からすれば何の価値もないものであるから。

注12 人は、自らの悪行の結果を突き付けられる時、旧友を避け、知らない振りをする。

注13 不信心者が故意に目と耳を塞ぎ神の言葉を拒む時、彼等の罪は深まり、遂に彼等は完全に滅びてしまうのである。

注14 ギクル（「氣品」）は、高位を意味する語であり、クルアーンを通して、モハammad預言者とその弟子達が高位と名声を手にするであらう、と当節は述べている。

46. 汝以前にわれらが遣わした使徒たちに尋ねよ、「われらは慈悲深き神以外に、崇めるべき他の神々を定めたるか？」と。

第五項

47. われらはかつて、モーゼを、ファラオとその族長たちのところへわれらの神^{しん}兆を携えて遣わしたり。而して、モーゼは云えり、「我は正しく万物の主の使徒なり」と。
48. モーゼがわれらの奇跡^{しし}を携えて彼等のところへ来たるも、見よ、彼等は之を嘲笑せり。
49. さればわれらが示せる奇跡は、それに先立つ奇跡よりはるかに見事なりき。而して、われらは、彼等をわれらに頼らしめんがために、刑罰を以て彼等を懲らしめたり。
50. すると、彼等は云えり、「汝妖術使いよ、主が汝と結びし約束に従って、我等のために主に祈願せよ。もし主が我等から禍をそらし得るなら、その時は、我等は必ず導きに従わん」と。
51. 然^{しか}しながら、われらが彼等から罰を取り除くや、見よ、彼等は忽ちその契約を破る。
52. 而^{しか}して、ファラオはその民に布告して、云えり、「我が民よ、エジプトの国土並びに余が脚下^{あしもと}を流れるこれ等の河川は、挙げて余の有^{しん}に非ざるか？ お前たちわからざるか？
53. 余は、この卑しく、しかも何を云っているのか定かにわからない者よりはるかに優れり。
54. 黄金の腕環が何故に彼に授けられざりしか、また一群の天使たちが彼に付き添って同行せざりしか？」と。
55. かくの如く、ファラオは己が民を軽はずみに鼓舞したれば、民はファラオに従いぬ。げに彼等は邪悪な人々なりき。

وَسَأَلَ مَنْ أَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ مَنْ رُسُلِنَا أَجَعَلْنَا
مِنْ دُونِ الرَّحْمَنِ إِلَهَةً يُعْبَدُونَ ﴿٤٦﴾

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مُوسَى بِآيَاتِنَا إِلَىٰ فِرْعَوْنَ وَمَلَئِهِ
فَقَالَ إِنِّي رَسُولُ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٤٧﴾

فَلَمَّا جَاءَهُمْ بِآيَاتِنَا إِذَا هُمْ مِنْهَا يَضْحَكُونَ ﴿٤٨﴾

وَمَا نُرِيهِمْ مِنْ آيَةٍ إِلَّا هِيَ أَكْبَرُ مِنْ أُخْتِهَا
وَإِذَا هُمْ بِالْعَذَابِ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ﴿٤٩﴾

وَقَالُوا يَا أَيُّهَا الشُّجْرَادُ لَنَا رَبٌّ كَمَا بَاعَدَ عِنْدَكَ
إِنَّا لَمُهْتَدُونَ ﴿٥٠﴾

فَلَمَّا كَشَفْنَا عَنْهُمْ الْعَذَابَ إِذَا هُمْ يَنْكُتُونَ ﴿٥١﴾

وَنَادَىٰ فِرْعَوْنُ فِي قَوْمِهِ قَالَ يُقَوْمُ الْاِنْسَ إِلَىٰ
مُلْكِي مِصْرَ وَهَذِهِ الْأَنْهَارُ تَجْرَىٰ مِنْ تَحْتِي أَنَا
كَبِيرٌ وَنُورٌ ﴿٥٢﴾

أَمَّا أَنَا خَيْرٌ مِنْ هَذَا الَّذِي هُوَ مِثْلِي وَلَا يُكَادُّ
يُنِينَ ﴿٥٣﴾

فَلَوْلَا أُلْقِيَ عَلَيْهِ أَسْوِرَةٌ مِنْ ذَهَبٍ أَوْ جَاءَ مَعَهُ
الْمَلَكُ الْمُقَرَّبِينَ ﴿٥٤﴾

فَأَسْتَفْ قَوْمَهُ فَاطَاعُوهُ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمًا فَاسِقِينَ ﴿٥٥﴾

56. かくの如く、彼等がわれらを怒らせたれば、われらは彼等に報復し、彼等のすべてを溺死せしめたり。

فَلَمَّا أَصْفَوْنَا انْتَقَمْنَا مِنْهُمْ فَأَغْرَقْنَاهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٥٦﴾

57. かくてわれらは、彼等を後世の人々への見せしめとなせり。

فَجَعَلْنَاهُمْ سَلَفًا وَمَثَلًا لِلْآخِرِينَ ﴿٥٧﴾

第六項

58. マリアの息子が一例として挙げられると、見よ、汝の民は声を上げて笑いたり。

وَلَمَّا خُزِبَ ابْنُ مَرْيَمَ مَثَلًا إِذَا قَوْمُكَ مِنْهُ يَصِدُّونَ ﴿٥٨﴾

59. 而して、彼等は云えり、「我等の神々が優るか、それともイエスが優るか？」と。彼等が汝に之を云うは、ただ論争のためのみ。然り、彼等は論争好きな徒輩なり。

وَقَالُوا إِلَهُنَا خَيْرٌ أَمْ هُوَ مَا ضَرَبُوكَ لَكَ الْإِجْدَلُ بَلْ هُمْ قَوْمٌ خَصِمُونَ ﴿٥٩﴾

60. イエスは、われらが恩寵を授けたわれらの僕にすぎず。而して、われらは、イエスをイスラエルの子孫への鑑となせり。(注15)

إِنَّ هُوَ إِلَّا عَبْدٌ أَنْعَمْنَا عَلَيْهِ وَجَعَلْنَاهُ مَثَلًا لِّبَنِي إِسْرَائِيلَ ﴿٦٠﴾

61. もしわれらその気になれば、地上に於て後継者となるべき天使等をお前たちの間に生じさせることも可なり。(注16)

وَلَوْ نَشَاءُ لَجَعَلْنَا مِنْكُمْ مَلَائِكَةً فِي الْأَرْضِ يَخْلُفُونَ ﴿٦١﴾

62. げにイエスは、その時機の前兆なり。されば、之について疑心を抱かず、(注17) われに従え。これこそ正しい道なるぞ。

وَرَأَيْتَهُ لِعِلْمِ السَّاعَةِ فَلَا تَمْتَرُنَ بِهَا وَاتَّبِعُونِ هَذَا صِرَاطٌ مُسْتَقِيمٌ ﴿٦٢﴾

63. 而して、お前たち、悪魔に迷わしめられるなかれ。げに悪魔は、お前たちの公然の敵なり。

وَلَا يَصْدَقُكُمْ الشَّيْطَانُ إِنَّهُ لَكُمْ عَدُوٌّ مُبِينٌ ﴿٦٣﴾

注15 メシアの到来とは、ユダヤ民族が屈辱を受け、永遠に預言者としての地位を奪われる事を示すものであった。「鑑」は他に匹敵する物を意味し(6:39)、当節は本文の意味の他、次の事を示しているともいえる。イエスの様な人物が、彼等を蘇らせ、失われた魂の恵みを戻す為に彼等の中から起こされるが、彼等はこの古報を喜ぶどころか、怒号を上げるのだ。当節は、この様にイエスの再来を語ったものとも言える。

注16 天使は人間の手本とはなり得なかったので、神は常に、神の御意志を人間に伝え人間の模範となる事を、人間自身に託された。

注17 「その時機」とはモーゼの時代の終末を表す。文中「之」というのは、イエスあるいはクルアーンを指す。当節は、イエスの後イスラエルの民は預言者の職を与えられないと述べている。又、クルアーンの時がモーゼの時に取って変わる事を示しているとも言える。

64. イエスはさまざまなる明証をもたらして、
公えり、「我はお前たちに知恵をもたらし
ぬ。而して、お前たちが意見を異にするも
ののいくつかを解明せん。されば、アッラー
を畏れ、我に従え。

وَلَمَّا جَاءَ عِيسَىٰ بِالْبَيِّنَاتِ قَالَ قَدْ جِئْتُكُمْ بِالْحِكْمَةِ
وَلِأُبَيِّنَ لَكُمْ بَعْضَ الَّذِي تَخْتَلَفُونَ فِيهِ ۖ
فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُوا ۝٦٤

65. げにアッラーこそは我が主にして、お前た
ちの主なり。されば、彼を崇拜せよ。これ
こそ正しき道なるぞ」と。

إِنَّ اللَّهَ هُوَ رَبِّي وَرَبَّكُمْ فَأَعْبُدُواهُ هَذَا صِرَاطٌ
مُسْتَقِيمٌ ۝٦٥

66. 然るに、諸派ありて、意見を異にし、相争
いぬ。哀れなるかな不義なす者ども、悲し
むべき日のその刑罰ゆえに。

فَاخْتَلَفَ الْأَحْزَابُ مِنْ بَيْنِهِمْ فَوَيْلٌ لِلَّذِينَ
ظَلَمُوا مِنْ عَذَابٍ يَوْمَ الْيَوْمِ ۝٦٦

67. 彼等は、知らぬ間に突如襲いかかる最後の
審判、それ以外待つべきものなし。

هَلْ يَنْظُرُونَ إِلَّا السَّاعَةَ أَنْ تَأْتِيَهُمْ بَغْتَةً وَ
هُمْ لَا يَشْعُرُونَ ۝٦٧

68. その日には、義しい人々を除いて、友とい
えども互に敵とならん。(注18)

الْأَخِلَاءُ يَوْمَئِذٍ بَعْضُهُمْ لِبَعْضٍ عَدُوٌّ إِلَّا
الْمُتَّقِينَ ۝٦٨

第七項

69. 「わが僕たちよ、この日お前たちは、何も
恐れることなし、またお前たちを悲しい目
に遭わせはせぬ。

يَعْبَادُ لَا خَوْفَ عَلَيْكُمُ الْيَوْمَ وَلَا أَنْتُمْ تَخْزَنُونَ ۝٦٩

70. われらの神兆を信じ、服従したお前たち、

الَّذِينَ آمَنُوا بِآيَاتِنَا وَكَانُوا مُسْلِمِينَ ۝٧٠

71. いざ樂園に入れ、お前たち並びにその伴侶
も、欣然として」

ادْخُلُوا الْجَنَّةَ أَنْتُمْ وَآزْوَاجُكُمْ تُخْبَرُونَ ۝٧١

72. つぎつぎと黄金の鉢や杯が彼等に廻され、
しかもそこには、欲しいものや目を楽しま
せるものがすべてあるべし。お前たち、そ
こにて永久に住まん。

يُطَافُ عَلَيْهِمْ بِصَفَافٍ مِنْ ذَهَبٍ وَأَكْوَابٍ
وَفِيهَا مَا تَشْتَهِيهِ الْأَنْفُسُ وَتَلَذُّ الْأَعْيُنُ وَأَنْتُمْ
فِيهَا خَالِدُونَ ۝٧٢

73. 「こは、お前たちがなせることのために、
お前たちに継がしめた樂園なり。

وَتِلْكَ الْجَنَّةُ الَّتِي أُورِثْتُمُوهَا بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ۝٧٣

注18 苦境において友情は忘れ去られる。友は互いを見放し、敵に回る事さえある。クルアーンは他の箇所
で、罪人がその悪業の結末を突き付けられた時の状況を鮮やかに描いている。(70:11-15; 80:35-38)

74. そこには、お前たちのために果物が豊富にあるなれば、食べるがよい」
 كَمْ فِيهَا فَالْكَهْلُ كَثِيرٌ مِنْهَا تَأْكُلُونَ ③
75. 罪を犯せし者は、地獄の責苦が永久の住居なり。
 إِنَّ الْعَجْرِمِينَ فِي عَذَابٍ جَهَنَّمَ خَالِدُونَ ④
76. 刑罰は彼等のために軽減されず、されば彼等はその中で絶望せん。
 لَا يَفْتَرُ عَنْهُمْ وَهُمْ فِيهِ مُبْلِسُونَ ⑤
77. われらが彼等に不当な仕打ちをしたに非ず、彼等自身が不義者なり。
 وَمَا ظَلَمْنَاهُمْ وَلَكِنْ كَانُوا هُمُ الظَّالِمِينَ ⑥
78. 彼等は叫ばん、「看守さま！ 汝の主にお願ひして、我等の命を終らしめ給え」と。看守は云わん、「お前たちここに留まらねばならぬ」と。
 وَنَادَا يَمْلِكُ لِيَقْضِ عَلَيْهِمَا رَبُّكَ قَالَ إِنَّكُمْ لَقَاتِلُونَ ⑦
79. 神は云わん、「げにわれらはお前たちに真理をもたらせり。然るに、お前たちの大半は真理を忌避せり」と。
 لَقَدْ جِئْنَاكُمْ بِالْحَقِّ وَلَكِنْ أَكْثَرُكُمْ لِلْحَقِّ كَرْهُونَ ⑧
80. 彼等はまたも悪だくみをし始めたか？ 然らば、われらもまた彼等の滅亡を決定せん。
 أَمْ أَمْرُكُمْ أَمْ أَمَرْنَا فَإِنَّا مُبْرِمُونَ ⑨
81. 彼等は、われらが彼等の秘密や密談を聴かず、と考えるか？ 然らず、われらの使者たちは彼等のそばにありて、一切を記録す。
 أَمْ يَحْسِبُونَ أَنَّا لَا نَسْمَعُ سِرَّهُمْ وَنَجْوَاهُمْ بَلَىٰ وَرُسُلْنَا لَدَيْهِمْ يَكْتُبُونَ ⑩
82. 云え、「もし慈悲深い神に御子ありなば、我は最初の崇拜者なり」と。(注19)
 قُلْ إِنْ كَانَ لِلرَّحْمَنِ وَلَدٌ فَأَنَا أَوَّلُ الْعَابِدِينَ ⑪
83. 聖なるかなアッラー、天地の主、玉座の主、彼等が彼に帰するものより超絶し給う。
 سُبْحَنَ رَبِّ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ رَبِّ الْعَرْشِ عَمَّا يَصِفُونَ ⑫
84. されば、約束されたその日に彼等が直面するまで、彼等を無益な談論と喜戯にふけるにまかせよ。
 فَذَرُهُمْ غُصُوضًا وَیَلْعَبُوا حَتَّىٰ يُلَاقُوا يَوْمَهُمُ الَّذِي يُوْعَدُونَ ⑬

注 19 当節は次の様に解釈される。(1) もし寛大なる神が御子を持たれたのなら、私が初めて彼(神の子)を崇めたであろう。私は神の最も忠実なる下僕であり、彼(神の子)に対し義務を怠る事はない。(2) もし寛大なる神が御子をお持ちになれたとするなら、私こそ、その地位にふさわしい。私は誰よりも神を崇め、神にお仕えて来たのであるから。(3) 寛大なる神は御子をお持ちでない。神の崇拜者は証人であるから、私が初めてこの事実を証明する。(4) 寛大なる神は御子をお持ちではなく、神に御子がいらっしゃるという主張を私が初めて否定する。

85. 彼こそは天にまします神にして、また地にまします神なり。彼は賢哲にして、すべてを知悉し給う。

وَهُوَ الَّذِي فِي السَّمَاءِ إِلَهٌُ وَفِي الْأَرْضِ إِلَهٌُ وَهُوَ الْحَكِيمُ الْعَلِيمُ ﴿٨٥﴾

86. 天地の大権並びにその間の万物を悉く統べ給う御方を祝福せよ。最後の審判の時の知識は彼の御許にあり、お前たちは必ず彼の御許へ連れ戻されん。

وَتَبَارَكَ الَّذِي لَهُ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا وَعِنْدَهُ عِلْمُ السَّاعَةِ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٨٦﴾

87. アッラー以外に彼等が祈るものは、執り成しする力なし。但し真理の証人となる者(注 20)は除く。彼等はこの事をよく承知す。

وَلَا يَمْلِكُ الَّذِينَ يَدْعُونَ مِنْ دُونِهِ الشَّفَاعَةَ إِلَّا مَنْ شَهِدَ بِالْحَقِّ وَهُمْ يَعْلَمُونَ ﴿٨٧﴾

88. もし汝彼等に「お前たちを創れる者は誰か？」と問わば、彼等は必ず云わん、「アッラーなり」と。然らば、彼等が顔をそむけてばかりいるは何故ぞ？

وَلَيْنَ سَأَلْتَهُمْ مَنْ خَلَقَهُمْ لَيَقُولُنَّ اللَّهُ فَالْتَوُوْهُمْ فَيَكُونُوا ﴿٨٨﴾

89. われらは預言者が再三再四「主よ、これ等は信ぜざる民なり」と云うを見る。(注 21)

وَقِيلَ لَهُ يَرْبِّ إِنَّ هَؤُلَاءِ قَوْمٌ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿٨٩﴾

90. されば、汝は彼等をよけて、「平安あれ」と挨拶せよ。彼等もやがて己が愚を思い知らん。(注 22)

فَاَصْفَحْ عَنْهُمْ وَقُلْ سَلَامٌ فَسَوْفَ يَعْلَمُونَ ﴿٩٠﴾

注 20 モハammad 預言者。

注 21 モハammad 預言者が一族の魂の平安を安じている事は、神の御言葉が何よりの証しとなった。モハammad 預言者は一族の拒絶を悲しむ余り、危く命を失う所であった。(18: 7)

注 22 我々は今は迫害されているが、間もなく敵は敗北し、イスラム教がアラビア全土に広まり平和がもたらされるのだ、とモハammad 預言者は励まされている。その時が来れば、彼は敵を許すであろう。



アル・ドゥハーン
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み^{あまら}遍くアッラーの御名^{あな}において。
2. ハー・ミーム。(注1)
3. この明快な経典にかけて。
4. げにわれらは祝福された夜に^{ليلة}之を啓示せり。
(注2) げにわれらは邪惡に対して絶えず警告せり。
5. その夜は、すべての物事が知恵もて決定される、(注3)
6. われらより出づる命令によって。げにわれらは絶えず使者を遣わす、
7. 汝の主よりの慈悲として。げに彼はすべてを聞こし召し、且つすべてを知り、
8. 天地^{あめつち}とその間の万物の主にまします、もしお前たち信仰心を持ちさえすれば。
9. 彼の外に神なし。彼は生殺与奪の權を司り給う。彼はお前たちの主にして、且つお前たちの父祖の主なり。
10. 然るに、彼等は^{かれ}之を疑^{あやま}って嬉戲す。
11. されば、大空^{けんぜん}が顯然たる煙を生ぜんその日を見守れ。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

حَمْدٌ ②

وَالْكِتَابِ الْمُبِينِ ③

إِنَّا أَنْزَلْنَاهُ فِي لَيْلَةِ مُبَرَكَةٍ إِنَّا كُنَّا مُنْذِرِينَ ④

فِيهَا يُفْرَقُ كُلُّ أَمْرٍ حَكِيمٍ ⑤

أَمْرًا مِّنْ عِندِنَا إِنَّا كُنَّا مُرْسِلِينَ ⑥

رَحْمَةً مِّنْ رَبِّكَ إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ⑦

رَبِّ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا إِنْ كُنْتُمْ مُّوقِنِينَ ⑧

لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ يُحْيِي وَيُمِيتُ رَبُّكُمْ وَرَبُّ آبَائِكُمُ ⑨

الْأَوَّلِينَ ⑨

بَلْ هُمْ فِي شَكٍّ يَلْعَبُونَ ⑩

فَارْتَقِبْ يَوْمَ تَأْتِي السَّمَاءُ بِدُحَانٍ مُّبِينٍ ⑪

注1 賞讃すべき榮譽の主

注2 クルアーンの他の箇所、それは「運命の夜」と呼ばれている (97: 2)。モハammad預言者の確かな伝承によれば、「運命の夜」は通例ラマダーンの最後の十夜に当たる。クルアーンはラマダーンの第二十四夜に、その存在を現し始めた。

注3 運命の夜、つまり偉大な神の使者到来の時は人類の未来が定まる新たな時代、新たな秩序を予告する。クルアーンが啓示された時とは、その後の人類の運命の基礎が築かれた時であり、人類にとり最高の運命の夜となった。

12. そは人々を覆い包まん。こは痛烈なる天罰なり。

يُنْفِثُ النَّاسُ هَذَا عَذَابَ آيَمٍ ⑫

13. その時、人々は叫んで云わん、「我等の主よ、この責苦を我等から取り除き給え。げに我等は信者なり」と。

رَبَّنَا اكْشِفْ عَنَّا الْعَذَابَ إِنَّا مُؤْمِنُونَ ⑬

14. かつて使徒が彼等に來たりて、もの事を明りように説明した時、如何にその警告は彼等を益したりや？

أَلَيْسَ لَهُمُ الذِّكْرَى وَقَدْ جَاءَهُمْ رَسُولٌ مُبِينٌ ⑭

15. 彼等はすなわち、使徒から顔をそむけて云えり、「彼奴は狂人なり、憑かれたる者なり」と。

ثُمَّ تَوَلَّوْا عَنْهُ وَقَالُوا مُعَلَّمٌ مَجْنُونٌ ⑮

16. われらが懲罰を暫しても取り除かば、お前たちは必ず不信に逆戻りせん。(注4)

إِنَّا كَاشِفُو الْعَذَابِ قَلِيلًا إِنَّكُمْ عَائِدُونَ ⑯

17. われらが猛攻撃でお前たちを急襲する日、(注5) われらは間違いなく厳正に報復せん。

يَوْمَ نَبْطِشُ الْبَطْشَةَ الْكُبْرَى إِنَّا مُنتَقِمُونَ ⑰

18. われらは彼等以前に、ファラオの民を試みたり。その時、一人の立派な使徒が彼等に來たりて、

وَلَقَدْ فَتَنَّا قَبْلَهُمْ قَوْمَ فِرْعَوْنَ وَجَاءَهُمْ رَسُولٌ كَرِيمٌ ⑱

19. 云えり、「アッラーの僕等を我に引き渡せ。げに我はお前たちへの忠実なる使者なり。

أَنْ أَدْأُو إِلَىٰ عِبَادِ اللَّهِ إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ⑲

20. アッラーに逆って傲慢なるなかれ。げに我は明白なる権能を授かりてお前たちに來たれり。

وَأَنْ لَا تَعْلُوا عَلَى اللَّهِ إِنِّي آتِيكُمْ سُلْطٰنٌ مُبِينٌ ⑳

21. お前たちが我を右もて打たざるよう、我は、我が主にしてお前たちの主に、加護を請い願う。

وَالَّذِي عُدَّتْ بِرَبِّي وَرَبِّكُمْ أَنْ تَرْجُمُون ㉑

22. お前たちもし我を信ぜずば、我に近づくな」と。

وَأَنْ لَّمْ تُوْصُوا لِي فَاعْرِزُوا لَكُمْ ㉒

23. かくて、モーゼは主に祈り、「この者どもは実に罪深い民なり」と云えり。

فَدَعَا رَبَّهُ أَنْ هَؤُلَاءِ قَوْمٌ مُّجْرِمُونَ ㉓

注4 信頼できる伝承によれば、モハammad預言者が祈り、この飢饉は終った。しかしクライシュはそれにより利を得た訳ではなく、モハammad預言者に刃向い続けた。

注5 「猛攻撃」とは、バドルの戦いにおけるクライシュの敗北又はメッカの陥落を指すのであろう。

24. アッラーは云えり、「夜陰に乗じてわが僕等を連れ去れ。なんととなれば、お前たちは追跡せらるべし。

فَأَسْرِ بِعِبَادِي لَيْلًا إِنَّكُمْ مُتَّبَعُونَ ﴿٢٤﴾

25. 汝、割れた海をそのままにうち捨て、行け。げに彼等は溺死すべき軍勢なり。(注6)

وَأَتْرَكِي الْبَحْرَ هَوًّا إِنَّهُمْ جُنْدٌ مَغْرُوقُونَ ﴿٢٥﴾

26. 如何に多くの果樹園や泉を後に遺し彼等逝きたることか！

كَمْ تَرَكُوا مِنْ جَنَّاتٍ وَعُيُونٍ ﴿٢٦﴾

27. 沢山の畑や立派な住居を！

وَزُرُوحٍ وَمَقَامِرٍ كَرِيمٍ ﴿٢٧﴾

28. その中で驕り喜べる数々の安楽をも！

وَنَعْمَةٍ كَانُوا فِيهَا فُلْهينَ ﴿٢٨﴾

29. そはかくの如し。而してわれらは、他の民をしてこれ等を継がしめたり。

كَذَلِكَ تَقْذِرُهَا قَوْمًا آخَرِينَ ﴿٢٩﴾

30. 天も地も彼等のために嘆き悲しまず、のみならず彼等は猶予も与えられざりき。(注7)

فَمَا بَكَتْ عَلَيْهِمُ السَّمَاءُ وَالْأَرْضُ وَمَا كَانُوا مُنظَرِينَ ﴿٣٠﴾

第二項

31. われらはイスラエルの子らを屈辱の苦痛より救えり、

وَلَقَدْ جَئْنَاهُمْ بِبَنِي إِسْرَءِيلَ مِنَ الْعَذَابِ الْبَهِينِ ﴿٣١﴾

32. ファラオによって課せられたる。彼ファラオは、放縦な者の中でもとびぬけて傲慢なりき。

مِنْ فِرْعَوْنَ إِنَّهُ كَانَ عَلِيلًا مِنَ السَّرِيفِينَ ﴿٣٢﴾

33. われらは承知の上で、イスラエルの子らを当時の諸民族の上に選びたり。(注8)

وَلَقَدْ اخْتَارْنَاهُمْ عَلَىٰ عِلْمٍ عَلَىٰ الْعَالَمِينَ ﴿٣٣﴾

34. 而して、彼等に、その中に明白なる試練が含む数々の奇跡を与えたり。

وَأَتَيْنَهُمُ مِنَ الْآيَاتِ مَا فِيهِ بَلَاءٌ مُبِينٌ ﴿٣٤﴾

35. さて、この者どもは云う、

إِن هَؤُلَاءِ لَيَقُولُونَ ﴿٣٥﴾

36. 「我等にはただ一度の死あるのみ。再び生返る筈なし。

إِنْ هِيَ إِلَّا مَوْتَتُنَا الْأُولَىٰ وَمَا نَحْنُ بِنُنشَرِينَ ﴿٣٦﴾

注6 モーゼとイスラエルの民が紅海の北端に着いた時、潮が引き始めた。水が後退して、徐々に砂地が現れ、海の中に窪地ができた。その時イスラエル人は渡った。20:78も参照の事。

注7 彼等は、涙を流される事も敬意を表される事もそして歌を歌われる事もなく、屈辱の中で滅びた。傲慢にも自らを神と呼んだ不幸な王は、「イスラエルの子孫が信じる神以外にこの世に神は無いと私は信じる」この様な注目すべき言葉を残し、海の中へ入って行った(10:91)。

注8 神はその御計画において、神の使命を果たすには当時のイスラエル人が最もふさわしいと御気付きになり、彼等を選ばれた。

37. お前たちの言葉が事実なら、我等の父祖を死より連れ戻せ」と。

فَأْتُوا بِآبَائِنَا إِن كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٣٧﴾

38. 彼等はトッバアの民や彼等以前の者どもより優れる者たちか？ 彼等は罪深き者ども故に、われらは之を滅ぼせり。

أَهُمْ خَيْرٌ أَمْ قَوْمُ تُبَّعٍ وَالَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ أَهْلَكْنَاهُمْ إِنَّهُمْ كَانُوا مُجْرِمِينَ ﴿٣٨﴾

39. われらは天地及びすべてその間におけるものを戯に創造したるに非ず。(注9)

وَمَا خَلَقْنَا السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا لَإِغْوٍ ﴿٣٩﴾

40. われらは之を永遠の真理のために創れども、彼等の大半は之を理解し得ざるなり。

مَا خَلَقْنَاهُمْ إِلَّا بِالْحَقِّ وَلَكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٤٠﴾

41. げに判決の日こそ、彼等のすべてに定められたる期限なり。(注10)

إِنَّ يَوْمَ الْفَصْلِ مِيقَاتُهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٤١﴾

42. その日、友はその友のために少しも役立たず、また彼等は誰からも助けられざるべし、

يَوْمَ لَا يُغْنِي مَوْلًى عَنْ مَوْلَى شَيْئًا وَلَا هُمْ يُنصَرُونَ ﴿٤٢﴾

43. 助けらるるはアッラーが慈恵を垂れ給わん人々のみ。げにアッラーは偉力者、慈悲者にまします。

إِلَّا مَنْ رَحِمَ اللَّهُ إِنَّهُ هُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ﴿٤٣﴾

第三項

44. げにザククームの木こそは、

إِنَّ شَجَرَتَ الزَّقُّومِ ﴿٤٤﴾

45. 罪深い者の食物。

طَعَامُ الْأَثِيمِ ﴿٤٥﴾

46. そは溶銅の如く腹の中で沸騰し、

كَالْمُهْلِ يَغْلِي فِي الْبُحُونِ ﴿٤٦﴾

47. 恰も熱湯の煮えたぎるが如し。

كَغَلِيِّ الْحَبِيمِ ﴿٤٧﴾

48. われらは天使等に命ぜん、「彼を捕え、燃えさかる業火の真只中に曳きずり込め。

حُدُودُهُ نَاعِتِلُوهُ إِلَى سَوَاءِ الْجَحِيمِ ﴿٤٨﴾

49. 而して、熱湯の責苦を彼の頭に浴せよ。

ثُمَّ صُبُّوا فَوْقَ رَأْسِهِ مِنْ عَذَابِ الْحَبِيمِ ﴿٤٩﴾

50. とくと味わえ！ 汝は偉力者、高貴な者と見なされたりき。(注11)

ذُقْ إِنَّكَ أَنْتَ الْعَزِيزُ الْكَرِيمُ ﴿٥٠﴾

注9 人生には妥協のない目的と大いなる使命がある。人間の優秀な能力と天性の才能は、人生が見せかけではなく厳肅なものである事を示している。天地創造が私々の注意を強く引きつけるのは、この偉大な原理の出である。

注10 未知の秘密が全て明るみに出され、人の行為に最終的判定の下される最後の裁きの日以外にも、この世において全ての預言者の時代には、真実が勝利を治め、偽りが滅びる裁決の日がある。

注11 この言葉は反語法を用いて述べられている。

51. これこそお前たちが疑いたりしものなり」と。

إِنَّ هَذَا مَا كُنْتُمْ بِهِ تَمْتَرُونَ ﴿٥١﴾

52. 然るに義しい人は、安全な場所に待らん、

إِنَّ السَّاعِينَ فِي مَقَامٍ آمِنٍ ﴿٥٢﴾

53. 花園と噴泉の間で、

فِي جَنَّتٍ وَعَيْنٍ ﴿٥٣﴾

54. 絹や錦をまとい、互に相向い合って。

يَلْبَسُونَ مِنْ سُنْدُسٍ وَإِسْتَبْرَقٍ مُتَقَابِلِينَ ﴿٥٤﴾

55. そはかくの如し。われらは彼等につぶらな瞳の麗しき處女等を妻せん。

كَذَلِكَ وَزَوَّجْنَاهُمْ بِحُورٍ عِينٍ ﴿٥٥﴾

56. 彼等はそこで、如何なる種類の果物でも安んじて意のままに得べし。

يَدْعُونَ فِيهَا بِكُلِّ فَاكِهَةٍ آمِنِينَ ﴿٥٦﴾

57. 彼等はそこで、最初の死以外は、再び死を味わうことなかるべし。(注12) 神は、燃えさかる業火より彼等を救わん、

لَا يَذُوقُونَ فِيهَا الْمَوْتَ إِلَّا الْمَوْتَةَ الْأُولَىٰ وَوَقَّعَهُمْ عَذَابَ الْجَحِيمِ ﴿٥٧﴾

58. こは汝の主よりの恩恵なり。(注13) 至上の歓喜の成就なり。

فَضْلًا مِّن رَّبِّكَ ذَٰلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿٥٨﴾

59. われらはクルアーンを汝の言葉でわかりやすく制定せり、彼等をして留意せしめんがために。

فَأَنشَأْنَا يَسْرَتَهُ بِلسَانِكَ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُونَ ﴿٥٩﴾

60. されば汝、しばらく様子を見よ。彼等も様子を見つつあり。

فَارْتَقِبْ إِنَّهُمْ مُّرْتَقِبُونَ ﴿٦٠﴾

注12 来世における生は永遠で、絶えず前進し、無為なものではない事を当節は明示している。

注13 救いは神の恵みである。

سُورَةُ الْجَاشِيَةِ مَكِّيَّةٌ

(٢٥)

アル・ジャーシャ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. ハー・ミーム (注1)

حَمْدٌ

3. この經典の啓示は、偉大にして賢哲なるアッラーより降る。

تَنْزِيلُ الْكِتَابِ مِنَ اللَّهِ الْعَزِيزِ الْحَكِيمِ

4. げに天地には、信ずる人々への数々の神兆あり。

إِنَّ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ لَآيَاتٍ لِّلْمُؤْمِنِينَ

5. また、お前たち自身の創造や彼が地上にまき散らした一切の生物の中に、信心堅固な人々への数々の神兆あり。

وَفِي خَلْقِكُمْ وَمَا يَبُثُّ مِنْ دَابَّةٍ آيَاتٌ لِّقَوْمٍ يُوقِنُونَ

6. また、夜と昼の交替にも、アッラーが天から下し給う糧によって死せる大地を甦らせることにも、更に風向きの変化にも、思慮ある人々への数々の神兆あり。(注2)

وَاجْتِلَافِ اللَّيْلِ وَالنَّهَارِ وَمَا أَنْزَلَ اللَّهُ مِنَ السَّمَاءِ مِنْ رِزْقٍ فَأَحْيَا بِهِ الْأَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا وَتَصْرِيفِ الرِّيحِ آيَاتٌ لِّقَوْمٍ يَعْقِلُونَ

7. これ等は、われらが真理によって汝に読誦するアッラーの神兆の数々なり。然るに、アッラーの言葉とその神兆をしりぞけて、彼等是如何なる言葉を信ぜんとするか？

تِلْكَ آيَاتُ اللَّهِ تَتْلُوهَا عَلَيْكَ بِالْحَقِّ فِيمَا بَيَّحْتُمْ بَعْدَ اللَّهِ وَآيَاتِهِ يُؤْمِنُونَ

8. 罪深き嘘つきどもに禍あれ、

وَبُئِيَ لِكُلِّ أَفَّاكٍ أَثِيمٍ

9. アッラーの神兆をよんで聞かせても、恰も聞かざるが如く依然として傲慢にその不信心を固執する徒輩よ。されば、そのような者には痛刑を告知せよ。

يَسْمَعُ آيَاتُ اللَّهِ تَنْتَلِي عَلَيْهِ ثُمَّ يُصِرُّ مُسْتَكْبِرًا كَأَن لَّمْ يَسْمَعْهَا فَبَشِّرْهُ بِعَذَابٍ أَلِيمٍ

10. 而して、そのような者は、われらの神兆のいくつかを知ると、忽ち之を嗤いものとなす。かかる者には恥すべき懲罰あり。

وَإِذَا عَلِمَ مِنْ آيَاتِنَا شَيْئًا اتَّخَذَهَا هُزُوًا أُولَئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ مُهِينٌ

注1 賞讃すべき榮譽の主。

注2 闇の後、光が訪れる様に、精神の闇が地上を覆う時、神は預言者又は神の使者という新たな光をお作りになり、彼等を通して御自身を表される。そして雄の木から雌の木へ風が花粉を運び交配させるのと同様、神の使者から出た精神的に高い思想は、信者の心に根付き、彼等に精神上の変革をもたらす。

11. 彼等の行く手には、地獄あるのみ。^{しか}而して、彼等が稼いだものは、彼等に少しも役立たず、アッラー以外に彼等が守護者と信じたものもまた然り。而して、彼等は恐ろしい懲罰をうけん。

مِنْ دَرَائِهِمْ جَهَنَّمَ وَلَا يُغْنِي عَنْهُمْ مَا كَسَبُوا
شَيْئًا وَلَا مَا اتَّخَذُوا مِنْ دُونِ اللَّهِ أَوْلِيَاءَ وَلَهُمْ
عَذَابٌ عَظِيمٌ ⑪

12. こは真の嚮導^{きようどう}なり。主の神兆^{しるし}を信ぜざる者には、痛刑の責め苦あり。

هَذَا هُدًى وَالَّذِينَ كَفَرُوا بِآيَاتِ رَبِّهِمْ لَمْ يَأْتِ

第二項

مِنْ رَحْمَةِ الْيَمِّ ⑫

13. 海をお前たちに従わしめたるはアッラーなり。そはアッラーの命令によって、船舶を海上に走らしめ、お前たちにアッラーの恩恵を求めしめ、以てお前たちを感謝せしめんがためなり。

اللَّهُ الَّذِي سَخَّرَ لَكُمْ الْبَحْرَ لَتَجْرِيَ الْفُلُكُ فِيهِ بَآفِرِهِ
وَلِتَبْتَغُوا مِنْ فَضْلِهِ وَلِعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ⑬

14. 彼はまた、天にあるもの、地にあるもの、そのすべてをお前たちに従属させり。(注3) こはすべてアッラーより出づ。げにこの中には、熟慮ある人々へのさまざまなる神兆あり。

وَسَخَّرَ لَكُمْ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا
مِنْهُ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يُتَفَكَّرُونَ ⑭

15. 信ずる者に、信ずる者を迫害しアッラーの日を恐れぬ者どもを赦せ、と告げよ。こは、アッラーが彼等の稼ぎに応じて返報を行わんがためなり。

قُلْ لِلَّذِينَ آمَنُوا يَغْفِرُوا لِلَّذِينَ لَا يَرْجُونَ أَيَّامَ اللَّهِ
لِيَجْزِيَ قَوْمًا بِمَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ⑮

16. 義^{ただ}しいことをする者は己れを利し、悪いことをする者は己れを害す。いずれにしても、お前たちはみな主の御許^{ごしよ}へ連れ戻されん。

مَنْ عَمِلَ صَالِحًا فَلِنَفْسِهِ وَمَنْ أَسَاءَ فَعَلَيْهَا ثُمَّ
إِلَىٰ رَبِّكُمْ تُرْجَعُونَ ⑯

17. かつてわれらは、イスラエルの子らに經典と主權と預言の能力を授けたり。またわれらは、さまざまなる佳きもので彼等を養い、当時の諸民族の上に彼等を選びたり。

وَلَقَدْ آتَيْنَا بَنِي إِسْرَءِيلَ الْكِتَابَ وَالْحُكْمَ وَالتَّوْبَةَ
وَرَزَقْنَاهُمْ مِنَ الطَّيِّبَاتِ وَفَضَّلْنَاهُمْ عَلَى الْعَالَمِينَ ⑰

18. またわれらは、この事に関して明白^{しるし}なる徴を彼等に与えたり。而して、彼等は、真の知識が彼等に至りて後、互に妬み合うまでは、意見を異にすることなかりき。(注4)

وَاتَّبَعْنَاهُمْ بِبَيِّنَاتٍ مِنَ الْأَمْرِ فَمَا اخْتَلَفُوا إِلَّا مِنْ
بَعْدِ مَا جَاءَهُمُ الْعِلْمُ بَعِيًّا بَيْنَهُمْ إِنَّ رَبَّكَ

注3 全宇宙は人間の為に作られた。これは、人間に成就すべき偉大な使命が課せられている事を示す。

注4 文頭の「この事」とはモハammad預言者到来の事を指し、当節は次の事を示している。モーゼの律法にモハammad預言者の到来の預言が数多く記されており、イスラエル人が彼を拒まなかったのは、彼の主張を

げに汝の主は、復活の日において、彼等が論争したことに關して彼等に審判を下すべし。

19. そこでわれらは、宗教の大道を汝に委ねたり。されば汝この道を辿れ。何も知らざる者どもの虚しい欲望に従うなかれ。(注5)

20. げに彼等は、アッラーに逆らつては、汝のために少しも役立たざるべし。不義なす徒輩は互に他の友なれど、義しい者の友はアッラーなり。

21. この經典は、人類への明証であり、固い信仰を持つ人々への嚮導であり慈悲なり。

22. 悪事を働く者は、われらが、信じて善行を積む者と彼等を同等に遇し、その生死を等しからしむると、考えるか？ 悪しきかな彼等の判断は。

第三項

23. アッラーは真理によって天地を創造せり。各人はその稼ぎに応じて報償され、何人も決して不当に遇せらるることなし。

24. 汝は、己が空想に従つて神を考える者、アッラーが故意に邪道に導き、その耳と心を封じ、その目を覆いたる者のことを、どう考えるか？ アッラーに見捨てられた後、一体誰がその者を導かん？ これでもまだお前たち訓戒を受入れざるか？

25. 彼等は云う、「あるものはただこの世の生活のみ。我等はそこで生き、而して死す。我等を滅ぼすものは時間あるのみ」と。され

يَقْضَىٰ يَنَّهُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ فِيمَا كَانُوا فِيهِ
يَخْتَلِفُونَ ①

ثُمَّ جَعَلْنَاكَ عَلَىٰ شَرِيعَةٍ مِّنَ الْأَمْرِ فَاتَّبِعْهَا وَ
لَا تَتَّبِعْ أَهْوَاءَ الَّذِينَ لَا يَعْلَمُونَ ②

إِنَّهُمْ لَن يُّغْنُوا عَنْكَ مِنَ اللَّهِ شَيْئًا وَإِنَّ الظَّالِمِينَ
بَعْضُهُمْ أَوْلِيَاءُ بَعْضٍ وَاللَّهُ وَلِيُّ الْمُتَّقِينَ ③

هَذَا بَصَائِرُ لِلنَّاسِ وَهُدًى وَرَحْمَةٌ لِّقَوْمٍ
يُّؤْتُونَ ④

أَمْ حَسِبَ الَّذِينَ اجْتَرَحُوا السَّيِّئَاتِ أَن نَّجْعَلَهُمْ
كَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ سَوَاءً مِّمَّنْ هُمْ
بِأَعْيُنِنَا ⑤ وَمَا لَهُمْ سَاءَ مَا يَحْكُمُونَ ⑥

وَخَلَقَ اللَّهُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ بِالْحَقِّ وَلَيُجْزَىٰ
كُلُّ نَفْسٍ بِمَا كَسَبَتْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ⑦

أَفَرَأَيْتَ مَنِ اتَّخَذَ إِلَهَهُ هَوَاهُ وَأَضَلَّهُ اللَّهُ
عَلَىٰ عِلْمِهِ وَخَتَمَ عَلَىٰ سَمْعِهِ وَقَلْبِهِ وَجَعَلَ عَلَىٰ
بَصَرِهِ عَشْرَةَ غَشَاهٍ فَمَنْ يَهْدِيهِ مِنْ بَعْدِ اللَّهِ
أَفَلَا تَذَكَّرُونَ ⑧

وَقَالُوا مَا هِيَ إِلَّا حَيَاتُنَا الدُّنْيَا نَمُوتُ وَنَحْيَا
وَمَا يُمِيزُنَا إِلَّا الدَّهْرُ وَمَا لَهُمْ بِذَلِكَ مِنْ

裏付ける論拠（預言）があったからではなく、「互いに妬み合う」すなわち、モハammad預言者がイスラエル人ではないという考えを好まなかったからである。

注5 前節に述べられた「この事」とは、モハammad預言者の到来及びクルアーンの啓示を指すと当節は示している。

ど、彼等はこのことについて如何なる知識も有せず。彼等はただ憶測するのみ。(注6)

26. 而して、われらの明白なる神兆を彼等に誦み聞かせると、彼等の逃げ口上は、「お前たちの言葉が本当なら、我等の先祖を連れ戻せ」と云うにすぎず。

27. 云え、「お前たちに生命を与え、次いで之を召し上げ給う御方、そはアッラーなり。而して、復活の日、アッラーはお前たちを召集せん。こは疑うべからざることなり。されど、世人の多くは之を知らず」と。

第四項

28. 天地の大権はアッラーのものなり。而して、審判の時来りなば、虚妄に従う者は失敗者とならん。

29. 汝はあらゆる民が跪坐するを見ん。あらゆる民は己が記録の前に召喚されん。(注7) 而して、彼等は云われん、「今日お前たちは、自分がなせることに對する報いを受けん。

30. これがわれらの帳簿なり。(注8) こはお前たちに反して真実を語る。われらはお前たちの所業をすべて残らず記録せり」と。

31. さて、信じて善行を積みたる者、主は彼等をその慈悲の中に入れん。こは明らかなる幸福の成就なり。

32. されど、不信心者どもは云われん、「お前たち、わが神兆を誦読せられざりしか? 然るに、お前たちは傲慢にして、罪惡の民となれり。

عَلِمَ إِنْ هُمْ إِلَّا يَظُنُّونَ ٢٥

وَإِذَا تُلِيَتْ عَلَيْهِمُ آيَاتُنَا بَيِّنَاتٌ مَّا كَانَ حُجَّتَهُمْ إِلَّا أَنْ قَالُوا اتُّرِثُوا بِآبَائِنَا إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ٢٦

قُلِ اللَّهُ يُحْيِيكُمْ ثُمَّ يُمِيتُكُمْ ثُمَّ يَجْمَعُكُمْ إِلَى يَوْمِ الْقِيَمَةِ لَا رَيْبَ فِيهِ وَلَكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ٢٧

وَلِلَّهِ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَيَوْمَ تَقُومُ السَّاعَةُ يُومِئِدُ يَخْسِرُ الْبَاطِلُونَ ٢٨

وَتَرَى كُلَّ أُمَّةٍ جَائِيَةٌ تَشْكُرُ كُلَّ أُمَّةٍ تَدْعِي إِلَى كَثِيرٍ يَوْمَ يُجْزَوْنَ مَّا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ٢٩

هَذَا كِتَابُنَا يُطِيقُ عَلَيْكُمْ بِالْحَقِّ إِنَّا كُنَّا نَسْتَنْبِئُ مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ٣٠

فَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ فَيُدْخِلُهُمْ رَبُّهُمْ فِي رَحْمَتِهِ ذَلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْبَيِّنُ ٣١

وَأَمَّا الَّذِينَ كَفَرُوا أَفَلَمْ تَكُنْ آيَاتِي تُلَىٰ عَلَيْكُمْ فَاسْتَكْبَرْتُمْ وَكُنْتُمْ قَوْمًا مُّجْرِمِينَ ٣٢

注6 来世において、神の前で自らの行為の中し開きをしなければならぬと告げられる時、不信心者は来世の存在容認を拒否すると、当節は述べる。むしろ彼等は、ある民族が滅びれば他の民族がそれに取って変わると主張し、この事態は、時の移ろいと共に全てが滅びるまで続く。これは人類にとり最も重要な事で、この先如何なる生命も存在しない。

注7 「あらゆる民は己が記録の前に召喚されん。」という言葉は、前節に述べられた「審判の時」が、この世における裁きの時を表していることを示す。それは、この世においても人はその行為で裁かれ、それに応じて罰やほうびを与えられるからである。

注8 前節にある「己が記録」が当節で「われらの帳簿」に置き換えられたのは、国家及び個人の行動が神に記憶され、それに応じた裁決が神より下されるからである。

33. また、『アッラーの約束は必ず履行される。審判の到来は疑うべくもなし』と云われし時、お前たち『我等審判の何んたるかを知らず、そは憶測にすぎずと思う。故に我等は納得せず』と答えり』と。

وَإِذَا قِيلَ إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ وَالسَّاعَةُ لَا رَيْبَ فِيهَا قُلْتُمْ مَا نَدْرِي مَا السَّاعَةُ إِنَّ نُظُنَّ إِلَّا طَمَنًا وَمَا نَحْنُ بِمُسْتَيقِينَ ③٣

34. かくて彼等は、己が諸悪を目の当たりにせん。而して、彼等は、日頃嘲笑せるものに包圍されん。

وَبَدَأَ لَهُمْ سَيِّئَاتُ مَا عَمِلُوا وَحَاقَ بِهِمْ مَا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِءُونَ ③٣

35. 而して、彼等は云われん、「お前たちがかつて、お前たちのこの日を忘れたる如く、(注9) 今日^{しか}はわれらが^{しか}お前たちを忘れる番なるべし。お前たちの落ち行く先は業火^{うき}にして、如何なる助け手もなかるべし。

وَقِيلَ الْيَوْمَ نَنْسِكُمَا نَسِيتُمْ لِقَاءَ يَوْمِكُمْ هَذَا وَمَا وَكُمُ النَّارُ وَمَا لَكُم مِّنْ نَّصِيرِينَ ③٣

36. これお前たちがアッラーの神兆^{しるし}を嘲笑し、現世^{うつし}の生活に欺かれたが故なり』と。かくして、彼等そこより出づるを得ず、また主の恩恵の中に連れ戻されざるべし。

ذَلِكُمْ بِأَنكُمْ اتَّخَذْتُمْ آيَاتِ اللَّهِ هُزُوًا وَعَرَّضْتُمُ الْحَيَاةَ الدُّنْيَا فَالْيَوْمَ لَا يُخْرِجُونَ مِنْهَا وَلَا هُمْ يُسْتَعْتَبُونَ ③٣

37. されば、諸天の主、大地の主、万物の主アッラーに讃えあれ。

قُلْ لِلَّهِ الْحَمْدُ رَبِّ السَّمَوَاتِ وَرَبِّ الْأَرْضِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ③٣

38. 天地^{あめつち}の尊嚴は彼のものなり。彼は偉大にして、賢哲にまします。

وَلَهُ الْكِبَرِيَاءُ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ③٣

注9 約束された処罰の日。

سُورَةُ الْأَخْقَافِ مَكِّيَّةٌ

アル・アハクアーフ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. ハー・ミーム。(注1)

حَمْدٌ

3. この経典は、偉大にして賢哲なるアッラーより降る。

تَنْزِيلُ الْكِتَابِ مِنَ اللَّهِ الْعَزِيزِ الْحَكِيمِ

4. われらは真理に基づかず、且つ一定の期限を定めることなく、天地並びに天地の間の萬物を創造せざりき。されど、信ぜざる者どもは、警告せられたることを忌避す。(注2)

مَا خَلَقْنَا السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا إِلَّا بِالْحَقِّ وَأَجَلٍ مُّسَمًّى وَالَّذِينَ كَفَرُوا عَمَّا أُذُنُوا مُعْرِضُونَ

5. 彼等に云え、「アッラー以外にお前たちが崇めるもの、そのなんたるかを知るか? この大地に彼奴らが創れるものがあるなら、見せてみよ。(注3)はたまた彼奴ら諸天の創造に参与したとでもいうか? お前たちの言葉が本当なら、このクルアーンより以前に啓示されたる経典か、その聖智の遺れるものをわれに示せ」と。(注4)

قُلْ أَرَأَيْتُمْ مَا تَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ أَرُونِي مَاذَا خَلَقُوا مِنَ الْأَرْضِ أَمْ لَهُمْ شِرْكٌ فِي السَّمَوَاتِ إِيْتُونِي بِكِتَابٍ مِّنْ قَبْلِ هَذَا أَوْ أَثَرَةٍ مِّنْ عِلْمٍ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ

6. アッラーの代わりに、最後の審判の日まで応えず、且つ彼等の祈願に気づかざるものを崇める者ども、これ等よりなお罪深き者ども、そは何人か?(注5)

وَمَنْ أَضَلُّ مِمَّنْ يَدْعُوا مِنْ دُونِ اللَّهِ مَنْ لَا يَسْتَجِيبُ لَهُ إِلَى يَوْمِ الْقِيَامَةِ وَهُمْ عَن دُعَائِهِمْ غَافِلُونَ

غَافِلُونَ

注1 賞讃すべき榮譽の主。

注2 宇宙は誕生したが、又終わりの時を迎えるのであろう。55章27、28節参照。

注3 崇拜を命じ、宇宙の創造主として我々の運命を左右されるが故に崇められるのは、神のみである。それに反し、偶像崇拜者の崇める偽りの神は、何一つ造り出さないばかりか、それ自身存在しないものであった。(25:4)

注4 事実、神の啓示書を除く如何なる典拠、及び人間の科学・理性も信仰の是非を決め兼ねる。

注5 イスラム教は、信者の祈りを受け入れる事でその存在を現し、苦境にある信者に慰めの言葉をかける実在の神に拝謁される(2:187)

7. 彼等は人間が復活させられたとき、人間の敵となり、崇められたることを否認せん。

وَإِذَا أَحْيَا النَّاسُ كَانُوا لَهُمْ أَعْدَاءً وَكَانُوا بِعِبَادَتِهِمْ كَافِرِينَ ⑤

8. われらの明白なる啓示が彼等に読誦せられたるとき、信ぜざる者どもはその真理について云う、「こは明らかに妖術なり」と。

وَإِذَا تُتْلَىٰ عَلَيْهِمْ آيَاتُنَا بَيِّنَاتٍ قَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِلْحَقِّ لَنَا جَاءَهُمْ هَذَا سِحْرٌ مُّبِينٌ ⑥

9. また彼等は云う、「彼、これを^{おつぞう}捏造せり」と。云え、「もし我これをつくりなば、お前たちの力では、アッラーの罰から我を護ること^{あた}能わず。アッラーはお前たちの、クルアーンについて語るくだらぬはなしを、よく知り給う。我とお前たちのことは、アッラーの証言で充分なり。アッラーは寛大にして、慈悲深くします」と。

أَمْ يَقُولُونَ افْتَرَاهُ قُلْ إِنِ افْتَرَيْتُهُ فَلَا تَمْلِكُونَ لِي مِنَ اللَّهِ شَيْئًا هُوَ أَعْلَمُ بِمَا تُفِيضُونَ فِيهِ ⑦
كُفِيَ بِهِ شَرِّبَدَائِي بَيْنَكُمْ وَهُوَ الْغَفُورُ الرَّحِيمُ ⑧

10. 云え、「我は新奇な使徒に非ず、また自分に何が起き、お前たちに何が起るかを知らざる者なり。我はただ、啓示されたることに従うのみ。而して我は、ただ一介の警告者にすぎぬ」と。

قُلْ مَا كُنْتُ بِدَعَا مِنَ الرُّسُلِ وَمَا أَدْرِي مَا يُفْعَلُ بِي وَلَا بِكُمْ إِنْ أَتَيْتُ إِلَّا مَا يُوحَىٰ إِلَيَّ وَمَا أَنَا إِلَّا نَذِيرٌ مُّبِينٌ ⑩

11. 云え、「もしこのクルアーンがアッラーより降^{くだ}されたるものなるも、お前たちは之を信ぜず、而して、イスラエルの子孫の中からも証人ありて、自分に似た者の到来を証言し、信ずるも、お前たちが驕^{こつかり}慢にも信ぜずとは何事か？」と。げにアッラーは、不義なす徒輩を導き給わず。

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ كَانَ مِنَ عِنْدِ اللَّهِ وَكَفَرْتُمْ بِهِ وَشَهِدَ شَاهِدٌ مِّنْ بَنِي إِسْرَءِيلَ عَلَىٰ مِثْلِهِ ⑪
فَأَمِنَ وَاسْتَكْبَرْتُمْ إِنْ اللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ⑫

第二項

12. 信ぜざる者どもは、信ずる人々について云う、「もしクルアーンに良きことありなば、彼等がそれを我等に先んじて得る理なし」と。而して、彼等はそれによって導かれざるが故に、かく云わん、「こは古の謠言なり」と。

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِلَّذِينَ آمَنُوا لَوْ كَانَ خَيْرًا مَّا سَبَقُونَا إِلَيْهِ وَإِذْ لَمْ يَهْتَدُوا بِهِ فَسَيَقُولُونَ هَذَا إِنْشَاءُ قَدِيمٍ ⑬

13. クルアーン以前にも、嚮^{きやうどう}導にして且つ慈悲なるモーゼの經典あり。このアラビア語の

وَمِنْ قَبْلِهِ كَتَبَ مُوسَىٰ إِمَامًا وَرَحْمَةً وَهَذَا

經典は、先の諸預言を実証し、惡事を行う徒輩に警告し、善人には朗報を伝えるものなり。

14. げに「我等の主はアッラーなり」と云い、しかも鋭意精進する者には、なんの怖れも、憂いもなからん。(注6)

15. これ等は樂園の住人にして、永久に住み留まらん。こは彼等が所業に対する報賞なり。

16. われらは人間に、父母に孝養をつくさんことを命じたり。母なるもの、懐胎に苦しみ、且つ分娩に苦しむ。胎に子を宿してから乳離れさせるまで、実に三十カ月を要す。(注7)而して分別盛りとなり、齢四十にも達する頃となれば、「主よ、我に、自分並びに我が父母に垂れたる汝の恩寵に、感謝せしめよ。汝を喜ばすべく、我に善行をなさしめ給え。而して我がために、我が子孫を義しき者となし給え。我は汝に帰依す。げに我は、汝に甘心悦服する者の一人なり」と云う。

17. これ等の者は、われらその所業の最善なるものを受け容れ、その諸惡を大目に見る者たちなり。彼等は樂園の住人とならん。こは彼等になしたる真実の約束の履行なり。

18. 然るに、その父母に向つて、「笑止かな！父母よ、この身が甦らしめられると恫喝するか。我が前に幾多の世代逝きて再び帰らざるに非ずや？」と云う者あり。両親はアッラーに助けを求めて、云う、「汝なさけな

كِتَابٌ مُّصَدِّقٌ لِّسَانِكَ عَرَبِيًّا لِّبَنِي الدِّينِ طَلَمُوا
وَبُشْرَى لِلْمُحْسِنِينَ ﴿١٤﴾

إِنَّ الَّذِينَ قَالُوا رَبُّنَا اللَّهُ ثُمَّ اسْتَقَامُوا فَلَا خَوْفٌ
عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿١٥﴾

أُولَئِكَ أَصْحَابُ الْجَنَّةِ خَالِدِينَ فِيهَا جَزَاءً بِمَا كَانُوا
يَعْمَلُونَ ﴿١٦﴾

وَوَصَّيْنَا الْإِنْسَانَ بِوَالِدَيْهِ إِحْسَانًا حَمَلَتْهُ
أُمُّهُ كُرْهًا وَوَضَعَتْهُ كُرْهًا وَحَمْلُهُ وَفِصْلُهُ
ثَلَاثُونَ شَهْرًا حَتَّىٰ إِذَا بَلَغَ اَشُدَّهُ وَبَلَغَ أَرْبَعِينَ
سَنَةً قَالَ رَبِّ أَوْزِعْنِي أَنْ أَشْكُرَ نِعْمَتَكَ الَّتِي
أَنْعَمْتَ عَلَيَّ وَعَلَىٰ وَالِدَيَّ وَأَنْ أَعْمَلَ صَالِحًا
تَرْضَاهُ وَأَصْلِحْ لِي فِي ذُرِّيَّتِي إِنِّي بُتُّ إِلَيْكَ
وَأِنِّي مِنَ الْمُسْلِمِينَ ﴿١٧﴾

أُولَئِكَ الَّذِينَ نَقَبَلُ عَنْهُمْ أَحْسَنَ مَا عَمِلُوا وَ
نَجَّوْهُمْ عَنْ سَيِّئَاتِهِمْ فِي أَصْحَابِ الْجَنَّةِ وَعَدَ
الصِّدْقِ الَّذِينَ كَانُوا يُوعَدُونَ ﴿١٨﴾

وَالَّذِينَ قَالُوا لِلَّهِ إِلَهٌ لِّكُلِّ أَتْعِدْنِي رَبِّ
أُخْرِجْ وَقَدْ خَلَيْتَ الْقُرُونُ مِنْ قَبْلِي وَهِيَ
يَسْتَغِيثُ اللَّهَ وَيَلِيكَ أَمِنْ ثِقَانٍ وَعَدَ اللَّهُ حَقًّا

注6 全宇宙の神アッラーに支持され、ゆるぎない信仰を持つ真の信者は、如何に過酷な試練のもとでも、恐れや悲しみで心の平安を乱される事はない。

注7 31:15で赤子の乳離れには二年かかると述べられているが、当節では、妊娠と授乳の期間として三十ヶ月、その内六ヶ月を懐胎期間としている。それは、妊婦が妊娠を負担に感じる時期を示している様で、四ヶ月目からそう感じ始めるからである。

や！ 信ぜよ。アッラーの約束は真実なり」と。然るに彼は云う、「それは往古の物語にすぎず」と。

19. これ等の者は、彼等以前に逝りし妖霊や人間どもと一緒に、天罰を蒙るのが当たり前の徒輩なり。彼等は紛れもない失敗者なり。

20. 而して、人はみなその所業に応じて、位階に違いあり。そはアッラーが人の所業に応じて報奨せんがためなり。また何人も決して不当に遇せらるることなし。(注8)

21. 而して、信ぜざる者どもが業火にさらされる日、彼等は云われん、「お前たちは現世において結構なものを蕩尽し、存分に楽しめり。されば今日お前たちは、この世で真理を無視して傲慢且つ放埒なりしことのために、恥すべき懲罰を以て報いられん」と。
(注9)

第三項

22. アードの同胞について話してやれ。フードが砂丘のあたりでその民にかく警告した時のことを——警告者は彼以前にも以後にも来る——「アッラー以外に何者も崇めるなかれ。お前たちがあの重大の日に如何なる罰をうけるか、我それを恐る」

23. 彼等は云えり「汝は我等を、神々から背かしめんがために来たりしや？ ならば、汝の云うことが真実なら、我等を恫喝するものを、いま起してみよ」と。

يَقُولُ مَا هَذَا إِلَّا أَسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ①

أُولَئِكَ الَّذِينَ حَقَّ عَلَيْهِمُ الْقَوْلُ فِي أُمَمٍ قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِهِمْ مِنَ الْجِنِّ وَالْإِنْسِ إِنَّهُمْ كَانُوا خَاسِرِينَ ②

وَلِكُلٍّ دَرَجَاتٌ مِمَّا عَمِلُوا وَلِيُوَفِّيَهُمْ أَعْمَالَهُمْ وَهُمْ لَا يَظْلَمُونَ ③

وَيَوْمَ يُعْرَضُ الَّذِينَ كَفَرُوا عَلَى النَّارِ أَلَذَّهَبُكُمْ طَبِيبُكُمْ فِي حَيَاتِكُمُ الدُّنْيَا وَاسْتَسْتَعْتَمُ بِهَا فَأَيُّوْمَ تُجْزَوْنَ عَذَابَ الْهُونِ بِمَا كُنتُمْ تَسْتَكْبِرُونَ ④ فِي الْأَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ وَبِأَنكُمُ تَفْسُقُونَ ⑤

وَإِذْ أَخَا عَادٍ إِذْ أُنذِرَ قَوْمَهُ بِالْأَحْقَافِ وَقَدْ خَلَتْ التَّنْذِيرُ مِنْ بَيْنِ يَدَيْهِ وَمِنْ خَلْفِهِ أَلَّا تَعْبُدُوا إِلَّا اللَّهَ إِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ⑥

قَالُوا اجْتَنِبْنَا إِنَّا وَكُنَّا عَنْ إِلَهِنَا قَاتِلِينَ ⑦ بِمَا نَعْبُدُنَا إِنْ كُنْتَ مِنَ الصَّادِقِينَ ⑧

注8 裁きが下される前に、人の行為は全て厳密に審査され、その時々状況が考慮されるであろう。良い行いに対するほうびは、行為自体の何倍にも増やされ、悪業への処罰はその罪に応じたものである。神の報酬の法は、この様にして施行される。

注9 裁きの日に、自ら犯した悪業を突き付けられて、不信心者達は次の様に言い渡されるであろう。神が授けられた贈り物をつまらない事で浪費し、良い目的の為ではなく、自らの卑しい望みを適える事に利用した為、彼等は、その悪事の報いとして屈辱を被るであろうから、今からその心積りをしておかなければならない。

24. フードは云えり、「その知識は、アッラーのみ^みを有す。我はただ、託されたることをお前たちに伝えるのみ。それにしてもお前たち、なんたる無知なる民ぞ」と。(注10)
25. その時黒雲湧き起りて、彼等のいる谷間に流れ迫りたり。それ見て彼等は云えり、「あの雲、一雨くるぞ」と。「然らず、これお前たちが催促せのものにして、それに伴う暴風こそ恐ろしき天罰なり。
26. そは主の命を奉じて一切を潰滅せん」翌朝、彼等の住居以外なにも残らざりき。われらかくの如く罪深い者どもを罰す。
27. われらはお前たちに与えざりし力を彼等に備えさせ、耳、目、心を与えたり。然るに、彼等がアッラーの神兆^{しんしほ}を認めざりしが故に、その耳と目と心は彼等のために役立たざりき。而して彼等は、その嘲笑せるものに包囲されたり。

第四項

28. げにわれらは、お前たちの周辺諸都市を滅ぼしたり。而して、われらは、彼等をわれらに頼らしめんがために、さまざまなる手段で神兆^{しんしほ}を明示せり。
29. だがその時、アッラーに近づくんとしてアッラーの他に彼等が常々崇めし神々は、何故彼等を助けざりしか？ 然り、神々は彼等を見捨てたり。そはすべて、彼等の虚言と捏造せるものにすぎざりしが故なり。
30. クルアーンに耳傾けんと思う妖霊たちを、(注11) われらが汝のところへ赴かしためた時のことを思い起こせ。彼等読誦の場に臨むや、互に「謹聴」と云えり。その終るや、

قَالَ إِنَّمَا الْعِلْمُ عِنْدَ اللَّهِ وَإِنَّمَا كُنَّا نُبَيِّنُ لَكُمْ مَا كُنَّا نُبَيِّنُ
لَكُمْ وَلَئِن كُنْتُمْ تُحِبُّونَ ۝۱۳

فَلَمَّا رَأَوْهُ عَارِضًا مُسْتَقْبِلَ أَوْدِيَّتِهِمْ قَالَ هَٰذَا
عَارِضٌ مُّسْطَرَّنٌ بَلْ هُوَ مَا اسْتَعْجَلْتُمْ بِهِ رِيحٌ
فِيهَا عَذَابٌ أَلِيمٌ ۝۱۴

تَذَكَّرُ كُلُّ شَيْءٍ بِأَمْرِ رَبِّهَا فَأَصْحَوْا وَلَا يُرَىٰ
إِلَّا مَسْكَنُهُمْ كَذَٰلِكَ نَجْزِي الْقَوْمَ الْكَافِرِينَ ۝۱۵
وَلَقَدْ مَكَّنَّهُمْ فِينَا رَانَ مَكَّنَّاكُمْ فِيهِ وَجَعَلْنَا
لَهُمْ سَمْعًا وَأَبْصَارًا وَآفِدَةً ۖ فَمَا أَغْنَىٰ عَنْهُمْ
سَمْعُهُمْ وَلَا أَبْصَارُهُمْ وَلَا آفِدَتُهُمْ مِنْ شَيْءٍ
إِذْ كَانُوا يَجْحَدُونَ بِآيَاتِ اللَّهِ وَحَاقَ بِهِمْ كَاوَدًا

۝۱۶ يَسْتَهْزِءُونَ ۝۱۷

وَلَقَدْ أَهْلَكْنَا مَا وَكَّلَكُمُ مِنَ الْقَرْيَةِ وَاصْرَفْنَا
الْآيَاتِ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ۝۱۸

فَلَوْلَا نَصْرُهُمُ الَّذِينَ آمَنُوا مِنْ دُونِ اللَّهِ قَوَانَا
إِلَهُهُ بَلْ صَلَّوْا عَنْهُمْ وَذَٰلِكَ أَفْكُهُمْ وَمَا كَانُوا
يَقْتَرُونَ ۝۱۹

وَإِذْ صَرَفْنَا إِلَيْكَ نَفَرًا مِنَ الْجِنِّ يَتَمَوَّنُ الْقُرْآنَ
فَلَمَّا حَضَرُوهُ قَالُوا أَنْصِتُوا فَلَمَّا قُضِيَ وَلَّوْا إِلَىٰ

注10 善悪にかかわらず、人が行動する時の背景については神御一人が御存知であり、それ故、人が処罰されるか否かは神のみが知っておられる。又、処罰の時、形態についても御存知である。

注11 当節に書かれた「逆良たち」は、ナシービーンのエダヤ人達を指し、又、イラクのムーサルカニネバダという説もある。メッカの人々の敵意を恐れて、彼等は夜モハammad預言者と会ったが、クルアーンやモハammad預言者の言葉に耳を傾けた後、彼等はイスラム教に改宗し、進んでイスラム教を受け入れた人々にこの新たなお告げを伝えた。(Bayan、8巻) 72:2も参照の事。

警告を伝えんがために仲間のところへ帰ったり。

31. 彼等は云えり、「仲間たちよ、我等はモーゼの後に降されたる經典を聴聞せり。そは以前の經典を確証し、真理と正道に導くものなり。(注12)

32. 仲間たちよ、アッラーの召喚者に応じて、アッラーを信ぜよ。アッラーはお前たちのもろもろの罪を赦し、お前たちを痛刑より救わん。

33. されど、アッラーの召喚者に応えざる者は、この世でアッラーの罰からのがれられず、またアッラーの外に如何なる守護者もたざるべし。かかる者は明らかに邪道にはまりたり」と。

34. 彼等は見ざるか、天地を創造し、しかもそのことに疲れを知らぬアッラーが、死者を甦らせる力あることを？(注13) 然り、げにアッラーは全能なり。

35. 信ぜざる者どもが業火に晒される日、彼等は云われん、「これでも真実に非ずというか？」と。彼等は答えん、「否、真実なり。主の御名にかけて」と。主は云わん、「然らば不信に対する懲罰を味わえ」と。

36. されば、諸使徒が毅然として耐え忍びたる如く、汝も耐え忍べ。彼等に対する懲罰を催促するなかれ。彼等その恫喝されしことを日の当たりにする日、彼等は想わん、この世に留まりたること一刻にしかすぎずと。(注14) この警告はすでに伝えられたり。滅ぼされる者はただ不従順なものどものみ。

قَوْمِهِمْ مُنْذِرِينَ ﴿٣١﴾

قَالُوا يَقَوْمَنَا إِنَّا سَمِعْنَا كِتَابًا أُنْزِلَ مِنْ بَعْدِ مُوسَىٰ مُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيْهِ يَهْدِي إِلَى الْحَقِّ وَإِلَىٰ طَرِيقٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿٣٢﴾

يَقَوْمَنَا أَجِيبُوا دَاعِيَ اللَّهِ وَآمِنُوا بِهِ يَغْفِرَ لَكُمْ مِنْ ذُنُوبِكُمْ وَيُجْزِلْكُمْ مِنْ عَذَابِ إِلِيمٍ ﴿٣٣﴾

وَمَنْ لَا يُجِبْ دَاعِيَ اللَّهِ فَلَيْسَ بِعَجِزٍ فِي الْأَرْضِ وَلَيْسَ لَهُ مِنْ دُونِهِ أَوْلِيَاءُ أُولَٰئِكَ فِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ﴿٣٤﴾

أَلَمْ يَرَوْا أَنَّ اللَّهَ الَّذِي خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ وَلَمْ يَتَّخِذْ لِنَفْسِهِ وَلَدًا وَلَمْ يَكُنْ لَكُمْ مِنْ دُونِهِ كَافٍ وَكَانَ نَجْحِي الْمَوْتِ بَلَا إِنَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٣٥﴾

وَيَوْمَ يُعْرَضُ الَّذِينَ كَفَرُوا عَلَى النَّارِ أَلَيْسَ هَٰذَا بِالْحَقِّ قَالُوا بَلَىٰ وَرَبِّنَا قَالَ فَذُوقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْفُرُونَ ﴿٣٦﴾

فَأَصْبَحُوا كَمَا صَبَّ أُولُوا الْعَزْمِ مِنَ الرُّسُلِ وَلَا تَسْتَعْجِلْ لَهُمْ كَأَنَّهُمْ يَوْمَ يَرَوْنَ مَا يُوعَدُونَ لَمْ يَلْبِسُوا إِلَّا سَاعَةً مِّنْ نَّهَارٍ بَلَّغَ نَهْلُ جَهَنَّمَ لَا إِلَهَ إِلَّا الْقَوْمُ الْفَاسِقُونَ ﴿٣٧﴾

注12 前説に述べられた「選良たち」は、彼等がクルアーンを「モーゼの後に降された經典」と呼んでいる所から、ユダヤ人だと当節は示している。

注13 新たな天地創造の過程は、まだ終ってはいない。それは確証なき主張ではない。偉大なる神の使者の到来と共に、古い秩序は崩れ、新たなものがそれに取って換わる。これは新たな天地の創造を示すものである。

注14 不信心者に対する神の罰は余りに厳しく突然であり、それに比べれば安楽であった一生が、彼等には「一刻にしかすぎず」と思えるであろう。

سُورَةُ مُحَمَّدٍ مَدِينَةٍ

(٢٤٦)

ムハンマド
(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 信仰せず、人々をアッラーの道より背かしむる者は、アッラーがその所業を空無に帰せしめん。(注1)
3. 然れども、信じて義しきを行い、ムハンマドに啓示されたるものを主よりの真理として信ずる者は、アッラーによってそのもろもろの罪を払拭され、その境遇を改善される。
4. そは信ぜざる者は虚妄に従い、信ずる者はその主の真理に従うが故なり。かくの如く、アッラーはさまざまなる比喻を以て人々を戒め給う。
5. さてお前たち、不信心者輩と合戦するとき、彼等の首を斬り落せ。大殺傷により彼等に打ち勝ったときは、その繯縄を強固にせよ。しかる後、情をかけて放免するもよし、身のしろ金を取るもよし、戦いがその荷をおろすまで。こは掟なるぞ。(注2)も

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

الَّذِينَ كَفَرُوا وَصَدُّوا عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ أَضَلَّ
أَعْمَالَهُمْ ②وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَآمَنُوا بِمَا نُزِّلَ
عَلَيْهِمْ هُوَ الْحَقُّ مِنْ رَبِّهِمْ لَكَفَّرَ عَنْهُمْ
سَيِّئَاتِهِمْ وَأَصْلَحَ بَالَهُمْ ③ذَلِكَ بِأَنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا اتَّبَعُوا الْبَاطِلَ وَأَنَّ الَّذِينَ
آمَنُوا اتَّبَعُوا الْحَقَّ مِنْ رَبِّهِمْ كَذَلِكَ يَضْرِبُ اللَّهُ
لِلنَّاسِ أَمْثَالَهُمْ ④فَإِذَا لَقِيتُمُ الَّذِينَ كَفَرُوا فَضَرْبَ الرِّقَابِ حَتَّى إِذَا
أَخْتَضَمْتُمُوهُمْ فَشُدُّوا الْوُثَاقَ فَإِمَّا مَتَابِعُ وَإِمَّا
فِدَاءٌ حَتَّى تَضَعَ الْحَرْبُ أَوْزَارَهَا ذَٰلِكُمْ وَلَوْ يَشَاءُ

注1 不信心者は、イスラム教徒の前進を阻もうとする彼等の試みが、何の成果も上げず、むなしいものだと告げられている。

注2 当節には、一言で言えば、戦争の倫理と実戦時の行為に関する重要な原則がいくつか述べられており、付随的に、奴隷制度に痛烈な一撃を加えている。要約すると次の様になる。

(1)イスラム教徒が、その信仰・名誉・生命・財産を守る正規の戦いに加わる時、勇敢に戦う様命じられている(8:13-17)。(2)一旦、戦が始まれば、平和が確立され、自由が確保されるまで、それは続くべきである(8:40)。(3)敵の捕虜を引き立てることが許されているのは、徹底的に戦う正規の合戦の時のみである。この様に、正規の戦いにおいては捕虜を捕る事が許されると明言されているが、それ以外も如何なる理由をもってしても、人から自由を奪う事はできない。(4)戦いが終れば捕虜は解放されなければならない。その方法としては、見返りを求めない、身代金と引き換え、互いの捕虜交換の三通りがある。彼等を永遠に拘束したり、奴隷として扱ってはならない。モハammad預言者は、パニー・ムスタリークの百家族を、又ハワーズインの数千人に及

しアッラー欲しなば、彼は自ら彼等を罰すること可なり。されど彼は、お前たちの或る者を以て他の者を試みんと欲す。(注3)而して、アッラーの道に死せる者は、決してその所業を空しくせらるることなかるべし。(注4)

6. アッラーはそれ等の人々を導き、その境遇を改善し、

7. 常々告げおきたる樂園に入らしむべし。(注5)

8. 汝等信徒たちよ、もしアッラーを助けなば、アッラーもまたお前たちを助け、その地歩を堅固ならしめん。

9. されど信ぜざる者どもには、ただ破滅あるのみ。その所業は空無に帰さん。(注6)

10. そは彼等が、アッラーが啓示せるものを嫌悪したるが故なり。よってアッラーは、彼等の所業を徒勞に終わらしめたり。

11. 彼等は国々を遍歴^{ハムラ}りて、彼等以前に栄えし人々の末路が如何なるものになりしかを見ざりしか? アッラーは彼等を撲滅せり。今ある不信心者輩^{カフール}にも同じこと起らん。(注7)

اللَّهُ لَا تَنْتَصِرُ مِنْهُمْ وَلَكِنْ لَيَبْلُوَنَّكُمْ بِبَعْضِ مَا كُنْتُمْ تَكْسِبُونَ ⑤
الَّذِينَ قُتِلُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ فَلَنْ يُضِلَّ أَعْمَالُهُمْ ⑤

سَيَهْدِيهِمْ وَيُصْلِحُ بَالَهُمْ ⑥

وَيُدْخِلُهُمُ الْجَنَّةَ عَرَفَهَا لَهُمْ ⑥

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِن تَصْرُوا اللَّهَ يَنْصُرْكُمْ وَ يُثَبِّتْ أَقْدَامَكُمْ ⑦

وَالَّذِينَ كَفَرُوا فَتَعْسًا لَهُمْ وَأَضَلَّ أَعْمَالُهُمْ ⑧

ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ كَرِهُوا مَا أُنْزِلَ اللَّهُ فَاحْبَطَ أَعْمَالُهُمْ ⑧

أَفَلَمْ يَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَيَنْظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ دَمَّرَ اللَّهُ عَلَيْهِمْ وَلِلْكَافِرِينَ أَمْثَلُهَا ⑩

ぶ捕虜を、兩種族が戦いで惨敗した後解放した。パドルの戦いの後、捕虜から賠償が支払われた。彼等は金銭で賠償できなかったが、教養ある人々だった為、イスラム教徒に読み書きを教える事で償った。この様に、当節は奴隷制度を事実上根絶し、永久にこの世から取り除いた。

注3 信者の善性が衰え、不信心者の悪性が暴かれる様にと、アッラーは前者と後者と戦わされた。敗北した敵を処遇する際、モハammad預言者側の道徳上の卓越は、何にも増して明らかにされた。

注4 戦死したイスラム教徒の犠牲的行為は、無駄にはされないであろう。事実、彼等の犠牲があればこそ、アラビアにイスラム教が固く根付いたのである。

注5 不信心者は、現世において、天国のめぐみを味わってしまった。つまり、来世に約束されたものとクルアーンに書かれてある精神的恵みを全て彼等は物質的に享受してしまったのである。又、別の解釈としては、クルアーンに記された天国についての約束がこの世で成就されるのをその目で確かめた為、不信心者は「樂園」を精神的に早まって、味わってしまったのである。

注6 不信心者の「所業は空無に帰さん」という言葉は、先述の数節で三度述べられている。これは、不信心者が、イスラム教の崩壊という彼等の究極の目標を達成する為に、全力を傾けた事を示している。しかし、イスラム教は勝利を治めた。イスラム教は繁栄し、不信心者は意を遂げられなかった。

注7 モハammad預言者を信じない者は、世界中を歩いて、かつての預言者を拒んだ者が迎えた悲惨な最期をその目で確かめよと、クルアーンに15回も告げられている。

12. そはアッラーが信ずる者の守護者にして、不信心者輩には如何なる守護者もなきが故なり。

第二項

13. げにアッラーは、信じて善行を積む者には、木陰に河川流るる樂園へ入らしめ給う。されど、不信心者輩には、現世の生活を楽しませ、獸の如く食わしめ、(注8)しかる後地獄の火を彼等の住処となさん。

14. 汝を追放せるあの邑よりもはるかに榮えし諸都市の住民を、われらは如何に多く滅ぼしたか！ されどそこには、誰一人彼等を助くる者なかりき。(注9)

15. その主より載きし明らかな証拠の上に立てる者と、自分のよからぬ行いを善しと思いつてその悪性に従う者と、これ同じなりや？

16. 義しき者に約束せる樂園の情景を述べるなら、そこには腐らぬ水の河川あり、味の変わぬ乳の川あり、いと旨き美酒の川あり、清く澄める蜜の川あり。彼等そこにて各種の果物と、主からの有恕を賜わらん。かかる至福を享受する者が、永劫の業火の中に住み、煮えたぎる熱湯を飲ま強められ、臟腑を引き裂かれる者と、これ同じなりや？

17. 彼等の中には汝に耳傾ける者あるも、汝の前よりされば、知識を授けられたる者たちに向つて、「彼がいま語りしことは何か？」

ذَٰلِكَ بِأَنَّ اللَّهَ مَوْلَى الَّذِينَ آمَنُوا وَأَنَّ الْكَافِرِينَ لَا مَوْلَى لَهُمْ ⑫

إِنَّ اللَّهَ يُدْخِلُ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ وَالَّذِينَ كَفَرُوا يَتَنَبَّهُونَ وَيُكُلُونَ كَمَا تَأْكُلُ الْأَنْعَامُ وَالنَّارُ مَثْوًى لَهُمْ ⑬

وَكَأَيِّنْ مِنْ قَرْيَةٍ هِيَ أَشَدُّ قُوَّةً مِنْ قَرْيَتِكَ الَّتِي أَخْرَجْتَكَ اهْلَكَهُمْ فَلَا نَاصِرَ لَهُمْ ⑭

أَفَمَنْ كَانَ عَلَىٰ بَيِّنَةٍ مِنْ رَبِّهِ كَسِرَ زِينَةً لَهُ سُوًى عَلَيْهِ وَاتَّبَعُوا أَهْوَاءَهُمْ ⑮

مَثَلُ الْجَنَّةِ الَّتِي وُعِدَ الْمُتَّقُونَ فِيهَا أَنْهَارٌ مِنْ مَاءٍ غَيْرِ آسِنٍ وَأَنْهَارٌ مِنْ لَبَنٍ لَمْ يَتَغَيَّرَ طَعْمُهُ وَأَنْهَارٌ مِنْ خَمْرٍ لَذَّةٍ لِلشَّارِبِينَ وَأَنْهَارٌ مِنْ عَسَلٍ مُصَفًّى وَلَهُمْ فِيهَا مِنْ كُلِّ الثَّمَرَاتِ وَمَغْفِرَةٌ مِّنْ رَبِّهِمْ كُنْ هُوَ خَالِدٌ فِي النَّارِ وَسُقُوا مَاءً حَمِيمًا فَقَطَّعَ أَمْعَاءَهُمْ ⑯

وَمِنْهُمْ مَّنْ يَسْتَعِذُّ إِلَيْكَ إِذَا خَرَجُوا مِنْ عِنْدِكَ قَالُوا لِلَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ مَاذَا قَالَ أَنِفًا

注8 信者は神や人間に仕える為に生きようとして食べるが、不信心者は食べる為に生き、何等高尚な目的を持たない。彼等は人生を全く唯物論的に捕えており、その意味で「獸」と変わらない。

注9 当節は、モハammad預言者が懸賞金をかけられて要する地メッカを追われ、メディナへ向う途中啓示された。メディナは遠く、辺地には、彼を殺すか生け捕りにして望みの懸賞金を手にしたいと願う山師が群がっていた為、彼は捕まりはしないかと絶えず脅えていた。モハammad預言者は安全な旅を神より約束された。

と訊ねる者あり。彼等はアッラーがその心を封じたる者にして、ただ己が悪性に従うのみ。

18. されど教えを守る者には、主は更に指導を増し、畏懼の念を高め給う。

19. 不信心者どもは、突如襲う審判の時を待つばかりか。その前兆はすでに現れたり。(注10) それが現実に自分の身に起きてからでは、警告を容れんとしてもすでに遅し。

20. されば汝、アッラーの外に神なきを知れ。もろもろの赦罪を乞い奉れ、而して男と女の信者の過ちのためにも、アッラーはお前たちの現世の場所も、来世の場所も知り給う。

第三項

21. 信ずる者は云う、「何故神託が降らざるか?」と。然るに、断固たる神託が降り、こと聖戦に及ぶや、心の病める輩は正に死に臨みたる如く憔悴して汝を見ゆ。なんと情けなや!

22. 望むらくは服従と時宜にかなった言葉なり。而して、事一たび決しなば、アッラーに忠誠なることが彼等のために幸いなり。

23. お前たち、この命令に背いて地上に騒乱をひろめ、血縁の絆を断たんとねがうのではあるまいな? (注11)

24. かかる者は、アッラーの呪詛により、その耳は聾、その目は盲となる。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ كَبَعَ اللَّهُ عَلَىٰ قُلُوبِهِم وَاتَّبَعُوا أَهْوَاءَهُمْ ⑩

وَالَّذِينَ اهْتَدَوْا زَادَهُمْ هُدًى وَآتَاهُمْ تَقْوَاهُمْ ⑪

فَهُلْ يَنْظُرُونَ إِلَّا السَّاعَةَ أَنْ تَأْتِيَهُمْ بَغْتَةً فَقَدْ جَاءَ أَشْرَاطُهَا فَأَنَّى لَهُمْ إِذَا جَاءَتْهُمْ ذِكْرُهُمْ ⑫

فَاعْلَمْ أَنَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا اللَّهُ وَاسْتَغْفِرْ لِذَنْبِكَ وَلِلْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ وَاللَّهُ يَعْلَمُ مُتَقَلَّبَكُمْ وَمَثْوَاكُمْ ⑬

وَيَقُولُ الَّذِينَ آمَنُوا لَوْلَا نُزِّلَتْ سُورَةٌ ⑭ فَإِذَا أُنْزِلَتْ سُورَةٌ مُحْكَمَةٌ وَذُكِرَ فِيهَا الْقِتَالُ رَأَيْتَ الَّذِينَ فِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ يَنْظُرُونَ إِلَيْكَ نَظَرَ الْمَغْشِيِّ عَلَيْهِ مِنَ الْمَوْتِ فَأُولَٰئِكَ لَهُمْ ⑮

طَاعَةٌ وَقَوْلٌ مَّعْرُوفٌ ⑯ فَإِذَا عَزَمَ الْأَمْرُ فَلَوْ صَدَقُوا اللَّهَ لَكَانَ خَيْرًا لَّهُمْ ⑰

فَهُلْ عَسَيْتُمْ إِنْ تَوَلَّيْتُمْ أَنْ تُفْسِدُوا فِي الْأَرْضِ وَتَقَطَّعُوا أَرْحَامَكُمْ ⑱

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ لَعَنَهُمُ اللَّهُ فَأَصَمَّهُمْ وَأَعَمَّى أَبْصَارَهُمْ ⑲

注10 「前兆」という言葉は、モハンマド預言者のメッカからの逃亡を示している様だ。

注11 もし、不信心者達の勢力が倒されていなければ、彼等は地上に混乱を引き起こし、あらゆる血族を分断し、正義の主張を踏みにじっていた事であろう。それ故、イスラム教徒は戦いを許されたのであった。

25. 彼等はクルアーンを^{しあんじゆつこう}思案熟考せんとせざるか？ それとも彼等の心は、鍵かけられたるか？
26. ^{きようどう}嚮導が^{さいてん}明示されたる後、退転する者は、^{さたん}悪魔が之を誑かし、^{たふら}幻想を抱かせたる者なり。

أَفَلَا يَتَذَكَّرُونَ الْقُرْآنَ أَمْ عَلَى قُلُوبٍ أَقْفَالُهَا ﴿٢٥﴾
 إِنَّ الَّذِينَ ارْتَدُّوا عَلَى أَدْبَارِهِمْ مِنْ بَعْدِ مَا تَبَيَّنَ لَهُمُ الْهُدَى الشَّيْطَانُ سَوَّلَ لَهُمْ وَأَمْلَأَ لَهُمْ ﴿٢٦﴾

27. そは彼等が、アッラーが^{くだ}降し賜えるものを嫌う者どもに「事の次第ではお前たちに従わん」と云えるが故なり。されど、アッラーは、彼等の秘密を知り給う。(注12)

ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ قَالُوا لِلَّذِينَ كَرِهُوا مَا نَزَّلَ اللَّهُ سَنُطِيعُكُمْ فِي بَعْضِ الْأَمْرِ ۖ وَاللَّهُ يَعْلَمُ إِسْرَارَهُمْ ﴿٢٧﴾

28. 時至り、諸天使に死に召し寄せられ、その顔や背を強打されなば、彼等如何に成り行くか？

فَكَيْفَ إِذَا تَوَفَّتْهُمُ الْمَلَائِكَةُ يَضْرِبُونَ وُجُوهَهُمْ وَأَدْبَارَهُمْ ﴿٢٨﴾

29. これ彼等が、アッラーを怒らすことに従い、^{ようこ}悦ばすことを^い忌み避けたが故なり。さればアッラーは、彼等の所業を^{こう}効なからしめ給う。

ذَلِكَ بِأَنَّهُمُ اتَّبَعُوا مَا أَسْخَطَ اللَّهَ وَكَرِهُوا رِضْوَانَهُ فَأَحْبَطَ أَعْمَالَهُمْ ﴿٢٩﴾

第四項

30. 心に^{やまい}病を宿す者は、アッラーが^{えんこん}彼等の怨恨を^{おとし}明るみに持ち出し給わぬと想うか？

أَمْ حَسِبَ الَّذِينَ فِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ أَنْ لَنْ يُخَيِّجَ اللَّهُ أَضْغَانَهُمْ ﴿٣٠﴾

31. われらもし欲しなば、われら彼等を汝に示し、汝はその特徴により彼等を知り得べし。また汝は、彼等の曖昧なる表現によって必ず^{これ}之を識別せん。(注13) アッラーはお前たちのなすことはすべて知り給う。

وَلَوْ نَشَاءُ لَارِئِينَاكَهُمْ فَلَعرَفْتَهُمْ بِسِيمَاهُمْ وَتَعَرَّفْتَهُمْ فِي لَحْنِ الْقَوْلِ ۚ وَاللَّهُ يَعْلَمُ أَعْمَالَكُمْ ﴿٣١﴾

32. われらは、お前たちのうち誰が神のために努力し、誰が耐え忍びたるかを見極めるまで、お前たちを試みん。またわれらは、お前たちの行状をもたしかめん。

وَلَنَبْلُوَنَّكُمْ عَلَىٰ نَعْلَمٍ الْمُجْهِدِينَ مِنْكُمْ وَالصَّابِرِينَ وَنَبْلُوَنَّكُمْ أَخْبَارَكُمْ ﴿٣٢﴾

注12 メディアの偽善者は公然と不信心者の味方をした訳ではない。偽善者という者は悪賢く、背水の陣をしいたりはしない。彼は双方に等しく顔を向ける。

注13 偽善者という者は、決して真意を露わにはしない。彼は、ある者にはある考えを述べ、別の者にはそれと異なる考えを述べ、常に曖昧な態度を取る。この偽善者の不正な言動については、2:105にも記されている。

33. 信ぜずして、人々をアッラーの道より背かしめ、嚮導^{しうどう}すでに明示されたる後に使徒に反抗する者、彼等はいささかもアッラーを害さざるべし。されどアッラーは、彼等の所業を無に帰せしめん。
34. 汝等信徒たちよ、アッラーに従い、その使徒に従い、己が所業を空しうするなかれ。
35. げに信ぜずして、人々をアッラーの道より背かしめ、不信心者として死ぬる者は、アッラー断じて之を赦さざるべし。
36. されば弱気を起すなかれ、和平を求めるなかれ。お前たちは必ず勝利せん。アッラーはお前たちと偕にありて、その旁に対する報奨を拒み給わぬ。(注14)
37. 現世の暮らしは、娯楽が気晴らしにすぎぬ。なれど、信じてその身義^{みぎ}しかれば、アッラーはお前たちに報奨をあたえ、お前たちの財産のすべてを求めざるべし。(注15)
38. もしアッラーが之^{これ}を求めて強要しなば、お前たちは吝^{りんしよく}者となり、またお前たちに恨みを惹起させるに至らん。(注16)
39. 見よお前たちは、アッラーの道のために費やすことを求められた者なり。然るに、お前たちの中には、吝^{りんしよく}者なる者あり。吝^{りんしよく}者な
- إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا وَصَدُّوا عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ
سَأَلُوا الرَّسُولَ مِنْ بَعْدِ مَا تَبَيَّنَ لَهُمُ الْهُدَى
لَنْ يَضُرَّ وَاللَّهِ شَيْئًا وَسَيُحِطُ أَعْمَالُهُمْ ﴿٣٣﴾
- يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا أَطِيعُوا اللَّهَ وَأَطِيعُوا الرَّسُولَ
وَلَا تَبْطُلُوا أَعْمَالَكُمْ ﴿٣٤﴾
- إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا وَصَدُّوا عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ ثُمَّ
مَاتُوا وَهُمْ كُفَّارٌ فَلَنْ يَغْفِرَ اللَّهُ لَهُمْ ﴿٣٥﴾
- فَلَا تَهِنُوا وَتَدْعُوا إِلَى السَّلَامِ وَأَنْتُمْ الْآخِلُونَ
وَاللَّهُ مَعَكُمْ وَلَنْ يَتْرَكَ أَعْمَالَكُمْ ﴿٣٦﴾
- إِنَّمَا الْحَيَاةُ الدُّنْيَا لِبَهِ وَلَهُوَ وَإِنْ تُؤْمِنُوا
وَتَتَّقُوا يُؤْتِكُمْ أَجْرَكُمْ وَلَا يَسْأَلْكُمْ أَثْمَالُكُمْ ﴿٣٧﴾
- إِنْ يَسْأَلْكُمْ فِي حُفْمِكُمْ تَبَحَّلُوا وَبِخْرَجِ
أَصْعَاقَكُمْ ﴿٣٨﴾
- هَآأَنْتُمْ هَؤُلَاءِ تَدْعُونَ لِنُتَّقُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ
فَسَنْكُمْ مَنْ يَبْخُلُ وَمَنْ يَبْخُلْ فَإِنَّمَا يَبْخُلْ عَنْ

注14 戦いが一度始まれば、それが如何なる展開を繰り広げ様とも、平穩を求めてはならないと、イスラム教徒は命じられている。彼等は勝利を得るかさもなくば殉教者となる運命にある。彼等には、他に採るべき道はない。

注15 イスラム教徒はアッラーの為に戦う様命ぜられており、戦の犠牲を払わねばならず、又この目的の為に金銭の負担も払わねばならないと、当節は示している。しかし、アッラーは彼等の金銭を必要とはしない。命や金銭を捧げる様求められるのは、それ無しに勝利は得られないからであり、それは彼等自身の利となる。眞の信者は、この崇高な教えを理解しなければならない。

注16 この節は、特に偽善者に向けられたものである。

者は、自分自身が損をするのみ。(注17)
 アッラーは独り満ち足りてましますが、貧
 しきはお前たちなり。而して、たとえお前
 たちが背き去るとも、アッラーは他の民を
 以てお前たちに代えん。さすれば彼等は、
 お前たちの如き者に非ざるべし。(注18)

نَفْسِهِ وَاللَّهُ الْغَنِيُّ وَأَنْتُمُ الْفُقَرَاءُ وَإِنْ تَتَوَلَّوْا
 يَسْتَبْدِلْ قَوْمًا غَيْرَكُمْ ثُمَّ لَا يَكُونُوا أَمْثَالَكُمْ ﴿١٨﴾

注17 けちな心は、人を蝕む致命的な病いである。クルアーンは他の箇所でもその様な人々を強く非難している。(9:35)

注18 「他の民を以てお前たちに代えん。」という言葉は、誰に向けられたものなのかとモハammad預言者が尋ねられた時、彼はこう答えたと記されている。「もし、信仰がアレアデスに届くなら、ペルシアの男がそれを地上に戻すであろう。」

سُورَةُ الْفَتْحِ مَدِينَةُ

アル・ファタ
(メディナ啓示)

- 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
- げにわれらは明確なる勝利を汝に与えたり。
- そはアッラーが、汝の過去と将来（注1）の過ち（注2）を赦し、汝への恩寵を全うし、汝を正道に導き給わんがためなり。
- またアッラーが力強い援助をもって、汝を佑助せんがためなり。（注3）
- 信仰心を更に増さしめるために、信者たちの心に安静を降せる者はアッラーなり。なんととなれば、アッラーは、天地の全軍を統率し、すべてを知り、賢哲にまします故に。
- こは信ずる男と信ずる女を河川流れる楽園に入らせ、その中に永久に住ましめ、彼等のもろもろの罪業を取り除き給わんとせんがためなり。そは、アッラーの目には、大勝利なり。
- こはアッラーが、自分に対して邪心を抱くにせ信者の男や女ども、並びに偶像教徒の

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

إِنَّا فَتَحْنَا لَكَ فَتْحًا مُبِينًا ②

يَغْفِرُ لَكَ اللَّهُ مَا تَقَدَّمَ مِنْ ذَنْبِكَ وَمَا تَأَخَّرَ
وَيُثَمِّرْ نَعْمَةً عَلَيْكَ وَيَهْدِيكَ إِلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ③

وَيَنْصُرَكَ اللَّهُ نَصْرًا عَظِيمًا ④

هُوَ الَّذِي أَنْزَلَ السَّكِينَةَ فِي قُلُوبِ الْمُؤْمِنِينَ
لِيُذْكَرُوا بَأْسَ اللَّهِ تَمَعًا لِمَا بَعَثَ اللَّهُ مِنْ بَنِي إِسْرَءِيلَ
وَلِيُجْزِيَ السَّمُوتَ وَالْأَرْضَ وَكَانَ اللَّهُ عَلِيمًا حَكِيمًا ⑤

لِيَدْخُلَ الْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ جَنَّاتٍ تَجْرِي
 مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا وَكَفَّرَ عَنْهُمْ
 سَيِّئَاتِهِمْ وَكَانَ ذَلِكَ عِنْدَ اللَّهِ فَوْزًا عَظِيمًا ⑥

وَيُعَذِّبُ الْمُنَافِقِينَ وَالْمُنَافِقَاتِ وَالْمُشْرِكِينَ وَ

注1 かつてモハammad預言者はクライシュに非難されたが、今後彼がその敵に非難され、追われ、モハammad預言者の名譽は完全に回復されるであろう。「過去と将来」は以上の事を示している。

注2 卑劣の極みにまで落ちた人、全ての精神を最高位にまで高めた、モハammad預言者の様な高い徳を備えた人物が、彼を中傷する者が軋転しようとした道徳上の過失で有罪になるはずがなかった。無邪氣を表す語ザンプ（当節の「過ち」）は、彼を誹謗するのに使われた。この語は、人間の本性であり、数々の誤りを犯す元となる性格の弱さを示すものである。前節に述べられた約束された勝利の後に起こる悪い出来事から、神はモハammad預言者を守られる。それは、非常に多くの人々がイスラム教徒となり、彼等の宗教教育が望みの水準に達しないからである。以上の事を当節は志している。

注3 フダイビヤ協定が結ばれた後、神はイスラム教がアラビアに急速に広まる様に力を添えられ、モハammad預言者は独立国の指導者に承認された。

男や女どもを罰せんがためなり。アッラー激怒し給えば、彼等の上に必ず悲惨な禍が降りかからん。アッラーは彼等を呪い、彼等のために地獄を準備せり。そは禍なる帰所なり。

8. アッラーは^{あめつち}天地の全軍を統率し、偉大にして、賢哲にまします。
9. われらが汝を証人として、朗報伝達者として、また警告者として遣わしたるは、
10. お前たちに、アッラーを信じ、その使徒を信じ、ムハンマドを助け、尊敬し、以て朝な夕なアッラーを讃えしめんがためなり。
11. まことに、汝に忠誠を誓う者は、すなわちアッラーに忠誠を誓う者なり。アッラーの御手は彼等の上にあり。されば、己が誓約を(注4)破る者は、自分自身を損なうのみ。されど、アッラーとの約束を履行する者は、アッラーその者に素晴らしい報奨を与えん。

第二項

12. 後に居残ることを策せしベドウィンどもは、汝に云わん、「我等は財産や家族のことで忙殺せられたり。されば我等のために、赦免を乞え」と。彼等は心に在らざることをその舌を以て云う。云え、「もしアッラーがお前たちを害さんと欲し、また福ならしめんと欲しなば、何人^{なんびと}がアッラーの御意向^{みこころ}を阻止し得るや? 然り、アッラーはお前たちの所業^{としつ}を知悉し給う。
13. 否、お前たちは使徒並びに信者たちが再び家族の許へ還らざるべしと考え、その心に之を害^{これ}べり。お前たちは邪念^{りんらく}を抱きぬ。お前たちは淪落^{りんらく}の民なるぞ」と。

الْمُشْرِكِ وَالظَّالِمِينَ بِاللهِ طَمَعُ السَّوءِ عَلَيْهِمْ دَائِرَةٌ
السَّوءِ وَغَضَبُ اللهِ عَلَيْهِمْ وَلَعْنُهُمْ وَأَعَدَّ لَهُمْ
جَهَنَّمَ وَسَاءَتْ مَصِيرًا ⑤

وَاللهُ جُودُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَكَانَ اللهُ غَنِيًّا
حَكِيمًا ⑧

إِنَّا أَرْسَلْنَاكَ شَاهِدًا وَمُبَشِّرًا وَنَذِيرًا ⑨

لِتُؤْمِنُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ وَتُعَزِّرُوهُ وَتُوَقِّرُوهُ وَ
تُسَبِّحُوهُ بُكْرَةً وَأَصِيلًا ⑩

إِنَّ الَّذِينَ يُبَايِعُونَكَ إِنَّمَا يُبَايِعُونَ اللَّهَ يَدُ اللَّهِ
فَوْقَ أَيْدِيهِمْ فَمَنْ تَكَثَّرَ فَأَنَّمَا يَبْئُتُكَ عَلَى
نَفْسِهِ وَمَنْ أَوْفَى بِمَا عَاهَدَ عَلَيْهِ اللهُ فَيُؤْخِرْهُ
أَجْرًا عَظِيمًا ⑪

سَيَقُولُ لَكَ الْمُخَلَّفُونَ مِنَ الْأَعْرَابِ شَغَلَتْنَا
أَمْوَالُنَا وَأَهْلُونَا فَاسْتَغْفِرْ لَنَا يَقُولُونَ بِالسِّنْتِمِ
مَا لَيْسَ فِي قُلُوبِهِمْ قُلْ فَمَنْ يَبْتَئِزُّكُمْ مِنَ اللَّهِ
شَيْئًا إِنْ أَرَادَ بِكُمْ ضَرًّا أَوْ أَرَادَ بِكُمْ نَفْعًا بَلْ
كَانَ اللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرًا ⑫

بَلْ ظَنَنْتُمْ أَنْ لَنْ يَنْقَلِبَ الرَّسُولُ وَالْمُؤْمِنُونَ
إِلَى أَهْلِيهِمْ أَبَدًا وَزُيِّنَ ذَلِكَ فِي قُلُوبِكُمْ وَ
ظَنَنْتُمْ ظَنَ السَّوءِ وَكُنْتُمْ قَوْمًا بُورًا ⑬

注4 この語は、フダイビヤの木の下でモハammad預言者に向けられた信者の誓いを指す。

14. アッラーとその使徒を信ぜざる者ども、これ等不信心輩^{ばい}には、われらすでに燃え盛る烈火^{ととの}を調えおきぬ。

وَمَنْ لَّمْ يُؤْمِنْ بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ فَإِنَّا أَعْتَدْنَا لِلْكَافِرِينَ سَعِيرًا ⑬

15. 而^{しか}して、天地の大権はアッラーの有^{あつ}なり。彼は欲する者を赦し、欲する者を罰し給う。アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَلِلَّهِ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ يَغْفِرُ لِمَن يَشَاءُ وَيُعَذِّبُ مَن يَشَاءُ وَكَانَ اللَّهُ غَفُورًا رَحِيمًا ⑭

16. 後に居残りを策した者どもも、お前たちが出て往きて戦利品を得るやも知れぬとなれば、「我等にも供させよ」と云わん。彼等はアッラーの掟を変えんとす。云え、「お前たちは米てはならぬ。アッラーすでにかくのたまえり」と。すると彼等は云わん、「そうではあるまい、お前たちは我等を妬^{ねた}む」と。さに非ず、彼等は殆んど理解し得ざるなり。

سَيَقُولُ الْكَافِرُونَ إِذَا أَطْلَقْنَاهُمْ إِلَى مَعَانِمَ إِنَّا أَخَذْنَاهُمَا ذُرُوءًا نَتَّبِعُكُمْ يَرْيِدُونَ وَنَ أَنْ يُبَدِّلُوا كَلِمَ اللَّهِ قُلْ لَنْ تَتَّبِعُونَا كَذَلِكُمْ قَالَ اللَّهُ مِنْ قَبْلُ فَسَيَقُولُونَ بَلْ تَحْسَدُونََنَا بَلْ كَانُوا لَا يَفْقَهُونَ إِلَّا قَلِيلًا ⑮

17. 後に居残りたるベトウィンに云え、「お前たちはいずれ、強壮勇武なる民と戦うために召集されん。アッラーはお前たちに、敵が降参するまで戦わしめん。その時、もし命に従わば、アッラーは素晴らしい報奨をお前たちに与えん。されど以前の如く命に背かば、アッラーは痛刑を以てお前たちを懲らしめん」と。

قُلْ لِلَّذِينَ خَلَفِينَ مِنَ الْأَعْرَابِ سَتُدْعُونَ إِلَى قَوْمٍ أُولِي بَأْسٍ شَدِيدٍ تُقَاتِلُونَهُمْ أَوْ يُسْلِمُونَ فَإِنْ تُطِيعُوا يُؤْتِكُمُ اللَّهُ أَجْرًا حَسَنًا وَإِنْ تَتَوَلَّوْا كَمَا تَوَلَّيْتُمْ مِنْ قَبْلُ يُعَذِّبْكُمْ عَذَابًا أَلِيمًا ⑯

18. 盲人^{びつこ}や跛^{なんびと}や病人は、戦いに出征せずとも、罪なし。何人であれアッラーとその使徒の命に従う者は、アッラー之を河川流れる楽園に入らしめん。然れども、その背を向ける者は、アッラー痛刑を以て之を懲らしめん。

لَيْسَ عَلَى الْأَعْمَى حَرَجٌ وَلَا عَلَى الْأَعْرَجِ حَرَجٌ وَلَا عَلَى الْمَرِيضِ حَرَجٌ وَمَنْ يُطِيعِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ يُدْخِلْهُ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ وَمَنْ يَتَوَلَّ يُعَذِّبْهُ عَذَابًا أَلِيمًا ⑰

第三項

19. げに信者たちがあの樹の下で汝に忠誠を誓いし時、(注5)アッラーは大いに之を喜び。故に、アッラーは皆の心中を知りて、

لَقَدْ رَضِيَ اللَّهُ عَنِ الْمُؤْمِنِينَ إِذْ يُبَايِعُونَكَ تَحْتَ الشَّجَرَةِ فَعَلِمَ مَا فِي قُلُوبِهِمْ فَأَنْزَلَ السَّكِينَةَ

注5 神がイスラム教徒に平安を授けられた事の何よりの証しがある。イスラム教徒は総勢わずか1500名、遠く故郷を離れ、寄るべ無く敵に取り囲まれ、要塞で固められた強力な敵と向い合っていたが、和解案を受け入れず戦いに備えた。

やすらぎ くだ
 安靜を降し、更に手近な勝利を以て之に報
 いたり。(注6)

20. 而して信者たちは、夥しい戦利品を得たり。
 アッラーは偉大にして、賢哲にまします。
 (注7)

21. アッラーはお前たちに、夥しい戦利品を手
 にすることを約束し、はやばやと之を与え、
 且つお前たちに敵対する者どもの手を抑え
 たり。(注8)そは、之を以て信者たちへの
 徴たらしめ、且つお前たちを正しい道に導
 かんがためなり。

22. アッラーは他にも、お前たちがいまだ手に
 せざる勝利を約したるが、(注9)そはアッ
 ラーがすでに囲い込みたり。アッラーは全
 能にまします。

23. もしあの時、不信心者どもがお前たちと
 戦ったとしても、彼等は必ず敗北せり。そ
 の時彼等には、如何なる守護者も援助者も
 なかりし故に。

24. これが、昔からのアッラーの慣例なり。さ
 れば汝は、アッラーの慣例にいささかの変
 更もなきことを知らん。

25. また、メッカの谷において、お前たちを彼
 等に勝たしめたる後、お前たちも彼等も抑
 え、互に手を引かせたるはアッラーなり。

عَلَيْهِمْ وَأَنَا بِهِمْ فَتَحْتُ قَرِيْبًا ١٥

وَمَغَانِمَ كَثِيْرَةً يَأْخُذُوْنَهَا وَكَانَ اللّٰهُ عَزِيْزًا
 حَكِيْمًا ١٦

وَعَدَكُمْ اللّٰهُ مَغَانِمَ كَثِيْرَةً تَأْخُذُوْنَهَا فَعَجَلَ
 لَكُمْ هَذِهِ وَكَفَّ أَيْدِيَ النَّاسِ عَنْكُمْ وَلِتَكُوْنَ
 آيَةً لِّلْمُؤْمِنِيْنَ وَيَهْدِيَكُمْ صِرَاطًا مُّسْتَقِيْمًا ١٧

وَأَخْرَجْتُم مِّنْ قَدِيدٍ رَّوَّاعِيْهَا قَدْ أَحَاطَ اللّٰهُ بِهَا
 وَكَانَ اللّٰهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرًا ١٨

وَلَوْ فَتَحْنَاكُمْ اِلَْيَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لَوَلَّوْا اِلَ الدَّخٰلِ اَثَرًا
 يَّجِدُوْنَ وِلِيًّا وَلَا نَصِيْرًا ١٩

سُبْحٰنَ اللّٰهِ الَّذِيْ تَدَّخُلَتْ مِنْ قَبْلِهِ السَّمٰوٰتُ وَلَنْ تَجِدَ
 اِلٰسُبْحٰنَ اللّٰهِ تَبْدِيْلًا ٢٠

وَهُوَ الَّذِيْ كَفَّ اَيْدِيَهُمْ عَنْكُمْ وَاَيْدِيَكُمْ
 عَنْهُمْ بِضَرْبِ مَّكَّةَ مِنْ بَعْدِ اَنْ اَظْفَرَكُمْ عَلَيْهِمْ

注6 「手近な勝利」はハイバルにおける勝利を示している。フダイビヤからの帰路、モハammad預言者は、フダイビヤで彼と行動を共にしたイスラム教徒と共に、ハイバル（ユダヤ人による陰謀の一大温床地）のユダヤ人遠征を行った。

注7 「おびただしい戦利品」とは、前節に約束された「手近な勝利」の結果、イスラム教徒が手にしたし大きな利益を指すようだ。

注8 当節に述べられた「戦利品」は、アラビアの隣国ハイバルで勝利を治めた後、イスラム教徒が手にした戦利品を指しているようだ。しかし、「はやばやとこれを与え」という言葉は、明らかにハイバルで手に入れた戦利品を指している。「敵対する者どもの手を抑えたり。」という語は、フダイビヤ協定が、イスラム教徒に平和の時代の到来を告げるものである事を示している。

アッラーはお前たちの所業のすべてをみそ
なはし給う。(注10)

وَكَانَ اللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرًا ⑩

26. 彼等是不信心者にして、お前たちの聖殿参詣を阻みたるばかりか、供物が犠牲所に達するを妨げたる者なり。メッカの中にも、お前たちが知らぬあまたの男女の信者あり。お前たちがそれ等信者を踏みにじって、知らぬまに罪を犯すおそれなかりせば、(注11) アッラーはお前たちに戦いを許可せり。されどアッラーは、自分の欲する者にその慈悲を垂れんがため、お前たちを抑えたり。もし彼等が明らかに不信心者どもと分れて住みたれば、われらは彼等不信心者輩を痛刑を以て懲らしめたり。

هُمُ الَّذِينَ كَفَرُوا وَصَدُّوكُمْ عَنِ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ وَالْهَدْيِ مَعْكُوفًا أَنْ يَبْلُغَ حِمْلَهُ وَلَوْلَا رِجَالُ مُؤْمِنُونَ وَنِسَاءُ مُؤْمِنَاتٌ لَمْ تَعْلَمُوهُمْ أَنْ تَطَّوَّهُمْ فَيُضِيبَكُمْ مِنْهُمْ مَعَرَّةٌ يَغْيِرُ عَلَيْهِمْ يُدْخِلُ اللَّهُ فِي رَحْمَتِهِ مَنْ يَشَاءُ لَوْ تَرَى كَيْلُوا لَعَذَّبْنَا الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْهُمْ عَذَابًا أَلِيمًا ⑪

27. 不信心者どもがその心に驕暴を、すなわち無道時代の憤怒を宿せし時、アッラーはその使徒と信者たちの上に安静を降し、彼等に正義の原則を堅持せしめたり。そは彼等がそれを受けるに値し、またそれに叶えるが故なり。アッラーは一切を知悉し給う。

第四項

28. げにアッラーはその使徒のために、「アッラー欲しなば、お前たちは頭を剃り、また髪を短く刈りて、恐れることなく安全に聖殿に入るを得ん」との夢を実現せり。(注12) すなわちアッラーはお前たちが知らざることを知る。アッラーはこの事の外にも、お前たちのために手近な勝利を定めたり。

إِذْ جَعَلَ الَّذِينَ كَفَرُوا فِي قُلُوبِهِمُ الْحَمِيَّةَ الْجَاهِلِيَّةَ فَأَنْزَلَ اللَّهُ سَكِينَتَهُ عَلَى رَسُولِهِ وَعَلَى الْمُؤْمِنِينَ وَالَزَمَهُمْ كَلِمَةَ التَّقْوَى وَكَانُوا أَحَقَّ بِهَا وَأَهْلَهَا وَكَانَ اللَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمًا ⑫

لَقَدْ صَدَقَ اللَّهُ رَسُولَهُ الرُّؤْيَا بِالْحَقِّ لَتَنَّ عَلَيْنَا الْمَسْجِدَ الْحَرَامَ إِنْ شَاءَ اللَّهُ آمِينَ فَخَلَقْنَاهُ مِنْكُمْ وَمُقَصِّرِينَ لَا تَخَافُونَ فَعَلِمَ مَا لَمْ تَعْلَمُوا فَجَعَلَ مِنْ دُونِ ذَلِكَ فَتْحًا قَرِيبًا ⑬

注9 当節はイスラム教徒がハイバルでの勝利に次いで今一つ勝利を治めると預言している。

注10 イスラム教徒が当時置かれていた状況、及び広範に渡る成果を考慮すれば、フダイビヤ協定は実に大きな勝利であった。この言葉は又、イスラム教徒がフダイビヤに米る前、神が彼等に授けられた様々な勝利をも指すといえる。つまり、バドルにおける勝利。難局にあったモハammad預言者とイスラム教徒が、オハドからメデアに無事帰還した事。“堀の戦い”で大打撃を受け、イスラム教徒を崩壊しようとするメッカ人の陰謀がくじかれた事等。ある意味で、これ等は全て不信心者に対する信者の勝利であった。

注11 メッカはイスラム教徒の中心地であり、もし逃亡が起きていれば、イスラム軍は、知らずに信者仲間を殺し、それにより彼等自身の大儀を傷つけ、非難を浴びていたであろう。

注12 当節は、モハammad預言者が仲間と共にカーバの巡回を行なう自らの姿を見た幻想について述べている。彼は小巡礼(ウムラ)の為、約1500の仲間とメッカへ向った。モハammad預言者の幻想は真実であり、イ

29. アッラーこそは嚮導^{きやうどう}と真実の教えを持たせてその使徒を遣わしたる御方、こはすべての宗教の上に之を勝利させんがためなり。(注13) アッラーは証人として、万全なり。

30. ムハンマドはアッラーの使徒なり。彼と偕にある者たちは、不信心者に対しては容赦なく、信者同志では、優しく親切なり。(注14) 汝は、彼等が平身低頭し、アッラーの恩寵^{かのう}と嘉納^{かのう}とを求めるを見ん。彼等の印はその面上にあり。そは叩頭の痕。こは律法における彼等の描写なり。また福音における描写も、新芽が芽吹き、力を増し、丈夫な莖に成長し、種まく人を喜ばせる一粒の種の成育の如しとある。種まく人々の喜ぶありさまが、また不信心者どもの憤怒の原因とならん。アッラーは信じて善行を積む人々に、宥恕^{ゆうじょ}と素晴らしい報奨とを約束せり。

هُوَ الَّذِي أَرْسَلَ رَسُولَهُ بِالْهُدَىٰ وَدِينِ الْحَقِّ
لِيُظْهِرَهُ عَلَى الدِّينِ كُلِّهِ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ شَهِيدًا ﴿٣٠﴾

مُحَمَّدٌ رَسُولُ اللَّهِ وَالَّذِينَ مَعَهُ أَشِدَّاءُ عَلَى الْكُفَّارِ
رُحَمَاءُ بَيْنَهُمْ تَرَاهُمْ رُكَّعًا سُجَّدًا يَبْتَغُونَ فَضْلًا
مِّنَ اللَّهِ وَرِضْوَانًا سِيَّاهُمْ فِي وُجُوهِهِمْ مِّنْ
أَثَرِ السُّجُودِ ذَٰلِكَ مَثَلُهُمْ فِي التَّوْرَةِ مِثْلُ
فِي الْإِنْجِيلِ قَدْ كَرَّجَ أَخْرَجَ شَطَطَهُ فَآزَرَهُ فَاسْتَظَلَّ
فَاسْتَوَىٰ عَلَى سَوْفَةٍ يُعْجَبُ الزَّرَّاعُ لِيَكْبِتَ بِهِمْ
الْكُفَّارُ وَعَدَ اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ
مِنْهُمْ مَّغْفِرَةً وَأَجْرًا عَظِيمًا ﴿٣١﴾

スラム教徒は必ずカーバに入り、小巡礼の儀式を執り行なうであろうと当章に明示されているにもかかわらず、モハammad預言者はクライシュに、カーバに入る事を拒まれた。モハammad預言者の旅は、先述の他の実質的な目的をかなえるだけでなく、偉大な神の預言者ですら、時に、その幻想の解釈を誤る事の重大な前例となった。

注13 当節は、イスラム教が最終的に他の全ての宗教に勝ったとはっきりと預言する。

注14 これは、世にその足跡を残そうとする、進歩的で裕福な人の二つの本質である。クルアーンの他所(5:55)に、イスラム教徒は信者に優しく謙虚であり、不信心者に厳しく決然と振る舞うと記されている。



アル・フジュラート

(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く^{あまね}アッラーの御名^みにおいて。
2. 汝等信徒たちよ、アッラーとその使徒の面前で勝手な振舞をするなかれ。(注1)アッラーを畏れよ。げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。
3. 汝等信徒たちよ、お前たちが互に声高に喋る如く、お前たちの声を預言者の声より高く揚げなかれ、お前たちの所業が知らぬまに無に帰せざるために。(注2)
4. げにアッラーの使徒の前でその声を低める者は、(注3)アッラーがその者の心を正しく浄化せり。彼等には宥恕と素晴らしい報奨あり。
5. 汝が室内にいる時、外から大声で汝を呼ぶ者、そのような者は概ね思慮なき者なり。(注4)
6. 汝が出て来るまでじっと待つなら、その方が彼等のためにはるかに良し。されどアッラーは、寛大にして、慈悲深くまします。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَقْدُوا بَيْنَ يَدَيِ اللَّهِ وَرَسُولِهِ وَاتَّقُوا اللَّهَ إِنَّ اللَّهَ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ①

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَرْفَعُوا أَصْوَاتَكُمْ فَوْقَ صَوْتِ النَّبِيِّ وَلَا تَجْهَرُوا لَهُ بِالْقَوْلِ كَجَهْرِ بَعْضِكُمْ لِبَعْضٍ أَن تَحْبَطَ أَعْمَالُكُمْ وَأَنتُمْ لَا تَشْعُرُونَ ②

إِنَّ الَّذِينَ يَغْضُّونَ أَصْوَاتَهُمْ عِنْدَ رَسُولِ اللَّهِ أُولَئِكَ الَّذِينَ امْتَحَنَ اللَّهُ قُلُوبَهُمْ لِلتَّقْوَى لَهُمْ مَغْفِرَةٌ وَأَجْرٌ عَظِيمٌ ③

إِنَّ الَّذِينَ يَبْكَدُونَكَ مِنْ ذُرَاةِ الْحُجُرَاتِ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْقِلُونَ ④

وَلَوْ أَنَّهُمْ صَبَرُوا حَتَّى تَخْرُجَ إِلَيْهِمْ لَكَانَ خَيْرًا لَهُمْ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَحِيمٌ ⑤

注1 信者はモハammad預言者に敬意を払い、彼に全面的に従い、彼の命令を先取りしたり己れの欲望を彼の意志よりも優先させたりしてはならないと命ぜられている。

注2 当節は、モハammad預言者に最大の敬意を払う様に強調している。イスラム教徒は、モハammad預言者の前で大声で話したり、彼に声高く話しかけてはならない。この様な物腰は単に不法法だけでなく、指導者に敬意を払わないといった相手の品位を傷つける行為とみなされる。

注3 モハammad預言者の前での物静かな語り口は、彼への敬意や自分自身の謙虚さを表し、声高な話し声は傲慢を示す。

注4 モハammad預言者に屋外より大声で呼びかける事は、彼の私生活に立ち入る事となり、彼自身やその貴重な時を尊重しない表れである。唯不法な者のみが、その様な愚かな振る舞いをする。

7. 汝ら信徒たちよ、よこしまな人間がお前たちに何か情報をもたらしたなら、その真偽を十分に確かめよ。そはお前たちが知らずに或る民を害し、後で己が行為を悔むことないように。(注5)
8. お前たちの中に、アッラーの使徒あることを知れ。彼ムハンマドもし多くの事柄においてお前たちの意^{かんがえ}に従うならば、お前たちは必ずめ^{なん}どうな事になる。(注6)アッラーはお前たちに信仰を慕わせ、気に入らせ、且つ無信仰と邪悪と不従順を憎ましむ。かくなす者が正しい道を歩む者、
9. アッラーの慈悲と恩寵によりて。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。
10. もし信者同志が二派に分れて争^{しや}わば、汝、彼等の間に入って仲裁せよ。而る後、彼等の一方が違反する場合は、アッラーの命令にたち帰るまで違反者と戦え。もし彼等がたち帰えらば、公明正大に両者の仲を調停せよ。(注7)げにアッラーは正しい行いを愛す。
11. げに信者はみな兄弟なり。されば、お前たち慈悲に浴せんがために、兄弟融和して

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِن جَاءَكُمْ فَاسِقٌ بِنَبَأٍ فَتَبَيَّنُوا أَن تُصِيبُوا قَوْمًا بِمَهَالَةٍ فَتُصْبِحُوا عَلَى مَا فَعَلْتُمْ نَادِمِينَ ④

وَأَعْلَمُوا أَن فِيكُمْ رَسُولَ اللَّهِ لَوْ يُطِيعُكُمْ فِي كَثِيرٍ مِّنَ الْأَمْرِ لَعَنِتُمْ وَلَكِنَّ اللَّهَ حَبَّبَ إِلَيْكُمُ الْإِيمَانَ وَزَيَّنَهُ فِي قُلُوبِكُمْ وَكَرَّهَ إِلَيْكُمُ الْكُفْرَ وَالْفُسُوقَ وَالْعِصْيَانَ أُولَٰئِكَ هُمُ الرَّشِدُونَ ⑤

فَضَّلًا مِّنَ اللَّهِ وَرِعْمَةً ⑥ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ⑦

وَإِن طَائِفَتَيْنِ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ اقْتَتَلُوا فَأَصْلَحُوا بَيْنَهُمَا ⑧ فَإِن بَنَتْ أَحَدُهُمَا عَلَى الْآخَرَىٰ فَقَاتِلَا ⑨ الَّتِي تَبْقَىٰ كَهَ تَبْقَىٰ إِلَىٰ أَمْرِ اللَّهِ فَإِن فَاءَتْ فَأَصْلَحُوا بَيْنَهُمَا بِالْعَدْلِ وَأَقْسِطُوا ⑩ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُقْسِطِينَ ⑪

إِنَّمَا الْمُؤْمِنُونَ إِخْوَةٌ فَأَصْلَحُوا بَيْنَ أَخَوَيْكُمْ ⑫

注5 メッカ陥落後、アラビアのほぼ全域がイスラムの配下に下ったが、中には未だこの新しい秩序を受け入れず、断固とイスラム教徒と戦い、無惨な結果を迎えた者達もあった。又、隣接するビザンチン・イラン両帝国も、彼等の権力・威信に対する挑戦に気付いた。彼等は、この挑戦がアラビアで起こり、イスラム教との戦いが避けられないと考えた。それ故、この命令は必要であった。戦争が迫り、敵軍の動きに対し、機敏な行動が必要とされる時ですら、戦時下にはびこる流言を信じてはならないと、イスラム教徒は命じられている。彼等は十分に試され、行動が起こされる前に、彼等の正しさが確かめられなければならない。

注6 モハammad預言者は、イスラム教徒に関する諸問題の助言を求めている様だが、必ずしも、神の御指導を受ける時の様に、その助言に従う必要はない。それは、彼が最終的な責任を負っているからである。イスラム教徒は処所に、以上の事を告げられている。

注7 イスラム国家の団結にとり大きな脅威となるのは、イスラム教徒間に生じる論争である。当節は、その様な論争を調停する効果的な方策が示されている。それは元来イスラム団体間の紛争処理を扱ったものであるが、国家及び国際組織が同盟を結ぶ際の原則ともなり得る。当節は、国際平和維持に関し、適切な原則を提示している。

アッラーを畏れ敬え。(注8)

وَاتَّقُوا اللَّهَ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ⑪

12. 汝等信徒たちよ、他人を嘲るなかれ。相手側が優るかも知れぬ。女の場合にも、ほかの女を嘲るなかれ。相手側が優るかも知れぬ。また、互に中傷するなかれ。仇名で呼び合うなかれ。信仰を告白した後の悪評は、不善なり。而して之を悔い改めざる徒輩は、悪人なり。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَسْخَرُوا قَوْمًا مِنْ قَوْمٍ عَسَى أَنْ يَكُونُوا خَيْرًا مِنْهُمْ وَلَا نِسَاءً مِنْ نِسَاءٍ عَسَى أَنْ يَكُنَّ خَيْرًا مِنْهُنَّ وَلَا تَلْمِزُوا أَنْفُسَكُمْ وَلَا تَنَابَرُوا بِالْأَلْقَابِ بِئْسَ الْإِسْمُ الْفُسُوقُ بَعْدَ الْإِيمَانِ وَمَنْ لَمْ يَتُبْ فَأُولَئِكَ هُمُ الظَّالِمُونَ ⑫

13. 汝等信徒たちよ、やたらと猜疑するなかれ。猜疑も場合によっては罪なり。また、互に探り合い、陰口をきくことなかれ。お前たちのうち誰が死せる兄弟の肉を食するを欲すや？ お前たちは必ず之を忌み嫌う。アッラーを畏れ敬え。げにアッラーは幾たびとなく憐れみに翻り、慈悲深くまします。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اجْتَنِبُوا كَثِيرًا مِمَّا ظَنُّوا أَنَّ بَعْضَ الظَّنِّ رِثْمٌ وَلَا تَجَسَّسُوا وَلَا يَغْتَبَ بَعْضُكُم بَعْضًا أَيُحِبُّ أَحَدُكُمْ أَنْ يَأْكُلَ لَحْمَ أَخِيهِ مَيْتًا فَكَرِهْتُمُوهُ وَاتَّقُوا اللَّهَ إِنَّ اللَّهَ تَوَّابٌ رَحِيمٌ ⑬

14. 人びとよ、われらは一人の男と一人の女からお前たちを創り、而して之を部族と支族とに分ちたり。これお前たちをして互に認識せしめんがためなり。アッラーの目に最も高貴なる者は、最も公正なる者なり。げにアッラーはすべてを知悉し、あらゆることに通曉し給う。

يَا أَيُّهَا النَّاسُ إِنَّا خَلَقْنَاكُمْ مِنْ ذَكَرٍ وَأُنْثَى وَجَعَلْنَاكُمْ شُعُوبًا وَقَبَائِلَ لِتَعَارَفُوا إِنَّ أَكْرَمَكُمْ عِنْدَ اللَّهِ أَتْقَاكُمْ إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ خَبِيرٌ ⑭

15. 砂漠のベトウィンたちは云う、「我等は信ずる」と。云え、「お前たちは未だ信ぜず。イスラームを受け入れはしたが、真の信仰は未だその心に浸みわたらざるなり」と。されどお前たち、アッラーとその使徒に従うならば、アッラーは、お前たちの努力をい

قَالَتِ الْأَعْرَابُ آمَنَّا قُلْ لَمْ تُؤْمِنُوا وَلَكِنْ قَوْلُوا أَسْلَمْنَا وَلَمَّا يَدْخُلِ الْإِيمَانُ فِي قُلُوبِكُمْ وَإِنْ تُطِيعُوا اللَّهَ وَرَسُولَهُ لَا يَلِفَنَّكُمْ مِنْ أَعْمَالِكُمْ

注8 この節は、イスラム教徒の親交について特に述べている。もし、二人のイスラム教徒、あるいは二つのイスラム団体に争いが生じた時、他の信者は、両者の調停の為、直ちに行動せねばならないと命じられている。イスラムの真の強さは、階級・人種・国の違いを越えた、この兄弟愛の理想にある。

ささかも減じざるべし。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。(注9)

شَيْئًا إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ⑮

16. 信者とは、ただアッラーとその使徒^{なげう}を信じ、決して疑わず、財産と生命を擲^{なげう}ってアッラーの道のために奮闘する者なり。かかる者こそ真の信者なり。

إِنَّمَا الْمُؤْمِنُونَ الَّذِينَ آمَنُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ ثُمَّ لَمْ يَرْتَابُوا وَجَاهَدُوا بِأَمْوَالِهِمْ وَأَنْفُسِهِمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ أُولَٰئِكَ هُمُ الصَّادِقُونَ ⑯

17. 云え、「お前たちは己れの宗教をアッラーに教えんとするか、天地間の一切を知り、あらゆることに通曉せる御方に？」と。

قُلْ أَعْلِمُونَ اللَّهَ بِدِينِكُمْ وَاللَّهُ يَعْلَمُ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ وَاللَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ⑰

18. 彼等はイスラームを信奉したことで、汝に恩を施したる如く思う。云え、「イスラームを信奉したからといって、恩にきせるなかれ。お前たちに恩を施せるは、むしろアッラーなり。お前たちを真の信仰^{まこと}に導きたるが故に、もしお前たちが正直な者なら」と。

يَسْتَوُونَ عَلَيْكَ إِنْ أَسْلَمُوا قُلْ لَا تَسْتَوُونَ عَلَىٰ أَسْلَامِكُمْ بَلِ اللَّهُ يُنْزِلُ عَلَيْكُمْ أَنْ هَذَا كُمْ لِلْيَبَانِ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ⑱

19. げにアッラーは天地^{あめつち}の秘奥^{ひおう}を知る。アッラーはお前たちの所業をみそなはし給う。

إِنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ غَيْبَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَاللَّهُ بَصِيرٌ بِمَا تَعْمَلُونَ ⑲

注9 イスラム教徒は全て、イスラム同胞主義の中心的役割を果たす。イスラム教は、都市部の文明人に対すると同じく、砂漠の非文明人に対しても同等の権利を与える。唯、後者は、イスラム教義を学び、それを生活に取り入れる為には、一層の努力を要すると告げられている。



クアーフ
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①
2. カーフ。(注1)栄光あるクルアーンにかけて誓う。
قُلْ وَالْقُرْآنِ الْمَجِيدِ ②
3. 彼等は、自分たちの中から警告者が現れ来たことに驚く。不信心者どもは云う、「こは奇怪なるかな！
بَلْ يَجْعَلُونَ أَن جَاءَهُمْ مُنْذِرٌ مِنْهُمْ فَقَالَ الْكَاذِبُونَ هَذَا شَيْءٌ عَجِيبٌ ③
4. なんととな！死して土に化したる後、我等甦るべしとな？そはなす能わざる遙遠なる復帰なり」と。
عَرَاذِمُنَا وَكُنَّا تَرْابًا ④ ذَلِكَ رَجْعٌ بَعِيدٌ ⑤
5. われらは大地がどれほど彼等の軀を減らすかを知る。われらが許にすべてを記録する帳簿あり。
قَدْ عَلِمْنَا مَا تَنْقُصُ الْأَرْضُ مِنْهُمْ ⑥ وَعِنْدَنَا كِتَابٌ حَفِيظٌ ⑦
6. 彼等は真理が下された時、之を拒みたれば、いま混乱の状態にあるなり。
بَلْ كَذَّبُوا بِالْحَقِّ لَمَّا جَاءَهُمْ فَهُمْ فِي أَمْرٍ مَّرِيجٍ ⑧
7. 彼等は頭上の天を仰ぎ見て思わざるか、われらが如何にそれを創り、飾り立てたか、またそこに毛ほどのきずもないことを？
أَفَلَمْ يَنْظُرُوا إِلَى السَّمَاءِ فَوْقَهُمْ كَيْفَ بَنَيْنَاهَا وَزَيَّنَّاهَا وَمَا لَهَا مِنْ فُرُوجٍ ⑨
8. また大地を、われら之をうち拵げて、その上にゆるぎない山々を据え、もろもろの美しき草木を成長せしめたり、
وَالْأَرْضَ مَدَدْنَاهَا وَأَلْقَيْنَا فِيهَا رَوَاسِيَ وَأَجْبَلْنَا فِيهَا مِنْ كُلِّ زَوْجٍ بَهِيجٍ ⑩
9. そは神に頼るすべての僕等への啓蒙並びに訓戒として。(注2)
تَبَصَّرَةٌ ⑪ وَذُكِّرُوا لِكُلِّ عَبْدٍ مُنِيبٍ ⑫

注1 万能の主。

注2 自然界の存在理由を仮定する事は、理に違っている。神が万物の創造主であられるとの概念は、起源及び目的を完全に解き明かす。創造に目的があるということは、死後に生のある事を示す。肉体が減じれば魂も死すという概念は、神の計画・英知及び宇宙創造における神の目的に反するものだからである。

10. またわれらは、天より祝福を以て水を降らせ、これによりて果樹園と穀^{くの}多き穀物とを育成す。

وَنَزَّلْنَا مِنَ السَّمَاءِ مَاءً مُبَارَكًا فَأَنْبَتْنَا بِهِ جِبْتًا
وَحَبَّ الْحَصِيدِ ⑩

11. また鈴^{すずな}生りの実をつけた丈^{たけな}高き棗^{なつめやし}椰子の樹も、

وَالنَّخْلُ بِسِقَتِهَا طَلْعٌ نَضِيدٌ ⑪

12. われらが僕等^{しもべら}の糧^{かて}として。さればわれらは死せる大地を生き返らしむ。復活もまたかくの如し。(注3)

رِزْقًا لِلْعِبَادِ وَأَحْيَيْنَا بِهِ بَلْدَةً مَّيْتًا كَذَلِكَ الْخُرُوجُ ⑫

13. 彼等以前に、ノアの民は真理を拒みたり。
ラッスの民※やサムード族もまた然り。
※アラブの古い部族

كَذَّبَتْ قَبْلَهُمْ قَوْمُ نُوحٍ وَأَصْحَابُ الرَّسِّ وَثَمُودُ ⑬

14. アード、ファラオ、並びにロトの徒輩^{わか輩}も。

وَعَادٌ وَفِرْعَوْنُ وَإِخْوَانُ لُوطٍ ⑭

15. 森の住人どもやトツバアの民も。彼等はいずれも己が使徒を拒みたるが故に、われらの威嚇せる罰がその身にふりかかりたり。

وَأَصْحَابُ الْأَيْكَةِ وَقَوْمُ تُبَّعٍ كُلٌّ كَذَّبَ الرُّسُلَ فَحَقَّ وَعِيدُ ⑮

16. 最初の創造でわれら倦み疲れたるや？ 然らず、されど彼等は新らしき創造について疑惑^{うたがい}を抱く。(注4)

أَفَعَيِينَا بِالْخَلْقِ الْأَوَّلِ بَلْ هُمْ فِي لَبْسٍ مِّنْ خَلْقٍ جَدِيدٍ ⑯

第二項

17. われらは確かに人間を創造せり。さればわれらは、人間の魂^{たま}が彼に囁くことを知る。われらは人間の頸^{くび}静脈よりもその人間に近し。

وَلَقَدْ خَلَقْنَا الْإِنْسَانَ وَنَعْلَمُ مَا تُوَسَّسُ بِهِ نَفْسُهُ وَنَحْنُ أَقْرَبُ إِلَيْهِ مِنْ حَبْلِ الْوَرِيدِ ⑰

18. 二天使が左右に坐して人の行為を記録する時、

إِذْ يَتَلَقَّى السَّاتِفِينَ عَنِ الْيَمِينِ وَعَنِ الشِّمَالِ قَعِيدٌ ⑱

19. 彼は一言も発せざるに、彼の傍にはすでにそれを記録せんと準備を整えたる監視の天使あり。

مَا يَلْفُظُ مِنْ قَوْلٍ إِلَّا لَدَيْهِ رَقِيبٌ عَيْنِدُ ⑲

注3 神は、天より雨を降らせ、乾いた地を肥やし、新たな息吹きをもたらし、地上にあらゆる種類の花や実をお育てになる。同様に、神は、死後の人間に新たな生命をお与えになる事ができ、そうなるであろう。

注4 これ等の節にある「創造」は、文字通りの意味の他、モハammad預言者が人々にもたらした魂の日覚めを示す。

20. 而してそのうち、死の昏睡に臨むは必定なり。「こはお前たちが常々避けんと欲したることなり」

وَجَاءَتْ سَكْرَةُ الْمَوْتِ بِالْحَقِّ ذَلِكَ مَا كُنْتَ مِنْهُ تَحِيدُ ⑳

21. やがて喇叭が吹き鳴らされん。「こは約束の日なり」

وَنُفِخَ فِي الصُّورِ ذَلِكَ يَوْمُ الْوَعِيدِ ㉑

22. どの魂も之を驅り、且つ立証する天使に伴われて来たり進まん。

وَجَاءَتْ كُلُّ نَفْسٍ مَّعَهَا سَائِقٌ وَشَهِيدٌ ㉒

23. そこでわれらは云わん、「汝はこの事を輕視せり。されど今、われら汝の目隠しをはずしたれば、今日汝の視力は鋭し」と。

لَقَدْ كُنْتَ فِي غَفْلَةٍ مِّنْ هَذَا فَكَشَفْنَا عَنْكَ غِطَاءَكَ فَبَصَرُكَ الْيَوْمَ حَدِيدٌ ㉓

24. 而して、彼の同伴者の天使は、云わん、「この通り記録はすでに整えり」と。

وَقَالَ قَرِينُهُ هَذَا مَا لَدَيَّ عَتِيدٌ ㉔

25. われらは彼の二人の天使に云わん、「汝等兩名、真理に敵対したすべての忘恩の徒を地獄に投ぜよ、

أَفِقِيَانِي جَهَنَّمَ كُلَّ كَفَّارٍ عَنِيدٍ ㉕

26. 善を阻む者、罪とがを犯す者、真理に疑心を抱ける者、

مَتَّاعٍ لِلْخَيْرِ مُعْتَدٍ مُّرِيبٍ ㉖

27. 並びにアッラーの他に他神を奉ずる者を。汝等兩名にてその者をば、あのもの凄い責苦の中に投げ込め」と。

الَّذِي جَعَلَ مَعَ اللَّهِ إِلَهًا آخَرَ فَأَلْقِيَهُ فِي الْعَذَابِ الشَّدِيدِ ㉗

28. 彼の仲間の悪魔は云わん、「主よ、彼を背かしたるは我に非ず、彼自身が勝手にどこまでも迷いたり」と。(注5)

قَالَ قَرِينُهُ رَبَّنَا مَا أَطْغَيْتُهُ وَلَكِنْ كَانَ فِي ضَلَالٍ بَعِيدٍ ㉘

29. 神は云わん、「わが面前で云い争うなかれ。われらはあらかじめお前たちに警告せり。

قَالَ لَا تَخْتَصِمُوا لَدَيَّ وَقَدْ قَدَّمْتُ إِلَيْكُمْ بِالْوَعِيدِ ㉙

30. わが宣言は不変なり。而してわれは、わが僕等に決して不公平なる者に非ず」と。

مَا يَبْدُلُ الْقَوْلُ لَدَيَّ وَمَا أَنَا بِظَالِمٍ لِّلْعَالَمِينَ ㉚

第三項

31. その日、われらは地獄に問わん、「充滿せるか?」と。(注6) すると、地獄は答えん、

يَوْمَ نَقُولُ لِجَهَنَّمَ هَلِ امْتَلَأْتِ وَتَقُولُ هَلْ ㉛

注5 悪事を働く者がその行為の結末を突き付けられた時、責任を他人に転嫁しようとするのは、人間の性だ。この不信心者の心の有り様が当節に述べられている。彼は、己れの罪をサタンのせいだと思うだろう。

注6 この対話は比喩である。地獄は処所で擬人化され、その口を通して自らの状況を表しているが、実際

「まだ来る者あるか？」と。(注7)

مِنْ مَّزِيدٍ ③١

32. 一方、^{なほ}義しい者には樂園が近くにもたらされ、もはや遠からず。(注8)

وَأَزَلَّتِ الْجَنَّةُ لِلْمُتَّقِينَ غَيْرَ بَعِيدٍ ③٢

33. ^{しか}而して、云われん、「こはお前たちに約束されたるものなり。すなわち、常日頃神に頼り、慎重な行いを旨とし、

هَذَا مَا تُوْعَدُونَ لِكُلِّ أَزَافٍ حَفِيفٍ ③٣

34. 密かに慈悲なる神を畏敬し、悔悟の心もて神前に出でたる者たちのために。

مَنْ خَشِيَ الرَّحْمَنَ بِالْغَيْبِ وَجَاءَ بِقَلْبٍ مُنِيبٍ ③٤

35. 汝等安じてここに入れ。こは永遠の日なり」と。(注9)

إِذْخُلُوهَا بِسَلَامٍ ذَلِكَ يَوْمُ الْخُلُودِ ③٥

36. 彼等はそこで、もろもろの欲するものを得ん。われらが許^{もと}には更に彼等への加増あり。(注10)

لَهُمْ مَا يَشَاءُونَ فِيهَا وَلَدَيْنَا مَزِيدٌ ③٦

37. われらは彼等以前に、彼等より強大なる如何に多くの世代を滅ばせしてことか。天罰下るや、彼等逃れんと努めたり。然れども、何処に避難所ありたるか？(注11)

وَكَمْ أَهْلَكْنَا قَبْلَهُمْ مِنْ قَرْنٍ هُمْ أَشَدُّ مِنْهُمْ بَطْشًا فَنَقَّبُوا فِي الْبِلَادِ هَلْ مِنْ مَّخِيسٍ ③٧

38. げにこの中には、心ある者や耳傾けて謹聴する者への訓戒あり。

إِنَّ فِي ذَلِكَ لَذِكْرَ لِمَنْ كَانَ لَهُ قَلْبٌ أَوْ أَلْقَى السَّمْعَ وَهُوَ شَهِيدٌ ③٨

に語っている訳ではない。あるいは、その事に関しては話せるのであろう(擬人法は、4:12にも使われている。)。そこには、天地が進んで神の法に従うと述べたと記されている。擬人法は、アラビア語の特色であり美点の一つである。当章57章及び18章78節も参照の事。

注7 この言葉は、人間には際限なく罪を犯す可能性があり、又現世の快樂に対する飽くなき欲望を有すると示している。この為、人は地獄に落ちるのである。

注8 心の病いを除く為に、今後増々多くの人が地獄へ落とされると前節で述べられたが、当節は、天国が正義ある者・神を畏れる者によく近くなると告げている。

注9 クルアーンによれば、罰が如何に恐ろしいものであろうとも、地獄は一時の懲治の場、それに引き換え、天国は永遠の住み処、その祝福は終り無きものである(11:109)。

注10 高潔な人々は天国において、その心を満たされるであろう。しかし、人の望みは限られており、求める以上の、また値するより遙かに多くのものを与えられるであろう。

注11 本文の言葉は文字通り解釈すれば、「身を守る為に地下に潜った」となるが、爆撃を避ける為の現代の地下壕を指している様だ。

39. げにわれらは、天地並びにその間にあるすべてのものを六日のうちに(注12)創造せるも、いささかの疲労も覚えざりき。(注13)

وَلَقَدْ خَلَقْنَا السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا فِي
سِتَّةِ أَيَّامٍ ۖ وَمَا مَسَّنَا مِنْ لُغُوبٍ ﴿١٣﴾

40. されば汝、彼等になんといわれようとも耐え忍び、日の出前と日没前に主の栄光を讚美せよ。

فَاصْبِرْ عَلَىٰ مَا يَقُولُونَ وَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ قَبْلَ
طُلُوعِ الشَّمْسِ وَقَبْلَ الْغُرُوبِ ﴿١٤﴾

41. また夜間にも、定められた礼拝の後に主を讚美せよ。

وَمِنَ اللَّيْلِ فَسَبِّحْهُ وَأَدْبَارَ السُّجُودِ ﴿١٥﴾

42. 而して耳傾けよ、召集者が(注14)近いところから(注15)呼ぶその時に。

وَاسْتَمِعْ يَوْمَ يُنَادِ الْمُنَادِ مِنْ مَّكَانٍ قَرِيبٍ ﴿١٦﴾

43. その日彼等は、実際に一声の響くを聞かん。(注16) そは墓より出て来る日なり。

يَوْمَ يَسْعَوْنَ الصَّيْحَةَ بِالْحَقِّ ذَٰلِكَ يَوْمُ الْخُرُوجِ ﴿١٧﴾

44. げにわれらこそは生を与え、死なしめる者なり。而してわれらの許こそ、終の帰所なり。

إِنَّا كُنْ نَحْنُ وَلِيُّكَ وَإِنَّا الْمَصِيرُ ﴿١٨﴾

45. 彼等の上で大地が割れ裂けるその日、彼等はあわてふためきて、出て来たらん。(注17) こはわれらにとりてはいと易き召集なり。

يَوْمَ تَشَقَّقُ الْأَرْضُ عَنْهُمْ سِرَاعًا ذَٰلِكَ حَشَمٌ عَلَيْنَا
يَسِيرٌ ﴿١٩﴾

46. われらは彼等のいうことをよく承知す。ともあれ汝は、彼等に強いる立場に非ず。されば、わが警告を恐れる者に、クルアーンによって訓戒せよ。

نَحْنُ أَعْلَمُ بِمَا يَقُولُونَ وَمَا أَنْتَ عَلَيْهِمْ بِجَبَّارٍ
يَعْلَمُ فَذَكِّرْ بِالْقُرْآنِ مَنْ يَخَافُ وَعِيدِ ﴿٢٠﴾

注12 41:10-13 参照。

注13 聖書で負わせられた不道德の汚名を、神の高尚な預言者から取り除くだけでなく、神の尊厳・神聖と相矛盾する欠点を神より切り離しているのが、クルアーンの特徴である。聖書には、「神は第七日に、なさっていた全ての業を休まれた」(創世記2:2)とあるが、クルアーンに、神がお疲れになったという記述は何処にもない。

注14 「召集者」とはモハammad預言者の事を指しているようだ。次の数節には、彼の指図のままに、いわばその墓場より出でた人々に、彼の手で魂の再生がもたらされたと書かれてあり、この内容は、前記の推測を裏付けている。

注15 「近いところから」とは又、モハammad預言者の声が荒野や遠隔の地にはまだ届いていないが、やがては受け入れられる事を示している。

注16 「一声」とは、モハammad預言者による大きな声で呼びかけという意味でもある。

注17 本章に書かれた再生は、クルアーンがもたらしているものである。



アル・ザーリヤート

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 ① بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
2. 種をまき散らす風にかけて、(注1) ② وَالذَّرِيَّةِ ذُرُّوْاْ
3. 荷を運ぶ雲にかけて、 ③ فَالْحِجْلِ وَقُرَّاْ
4. 静かに流れる川にかけて、 ④ فَالْجَرِيَّتِ يَسْرًاْ
5. われらの命を奉じて之を頒布する諸天使にかけて、(注2) ⑤ فَالْمُقَسَّبِ اَمْرًاْ
6. げにお前たちが約束されることは真実なり。 ⑥ اِنِّشَاْ تُوعَدُوْنَ لَصَادِقٌ
7. 審判の日は必ず起るべし。 ⑦ وَاِنَّ الدِّيْنَ لَوَاقِعٌ
8. また幾多の軌道を有す天にかけて誓う、(注3) ⑧ وَالسَّمَآءِ ذَاتِ الْحُبُكِ
9. 全くお前たちのいうことは不一致なり。(注4) ⑨ اِنَّا كُمْ لَبِفِ قَوْلٍ مُّتَنَفِّئٍ

注1 37章2節参照。注2も参照の事。

注2 2～5節の四節では、自然界・物質界の現象に対応する精神界の現象に口を向けている。この対比は非常に際立っている。四つの語「まき散らす」「運ぶ」「流れる」「頒布する」を自然現象に当てはめてみた場合、風を指すのであろう。風は海から立ち昇る水蒸気を四方へ散らし、雨雲を運び、穏やかに吹き、干からびた地に雨を降らせる。そしてその地を、草木・美しい花・甘い果実のあふれる豊かなものに変える。又、精神面に置き換えてみれば、この四語は高潔な人々の一団を表しているようだ。彼等は、モハammad預言者から出る魂の泉で多く飲み、素晴らしい生気を与えるクルアーンの教えを身に付けた後、アラブの僻地へ、その後、東に遠隔の地へ赴き、彼等の祝福された荷を運び、多神教徒や不道德な人の群がる国々で神の啓示を広めた。彼等は剣を手にする事なく、愛と平和をもって説いて回った。それは一度、優しく吹き、枯れた地に雨をもたらす風の様であった。

注3 幾多の軌道とは、天空に散らばる惑星・彗星・恒星の軌道を指す。これ等の天体は、割り当てられた役割を寸分違わず果たしながら、各々の軌道上を漂う。互いの領域を侵す事なく、全てが一致して構造と運動の素晴らしい調和を形作る。天空がその様な惑星・恒星の軌道に満ちていると世に知らせたのはクルアーンであり、當時空は固定したものと信じられていた。

注4 前節に示された偉大な天文学的事実は、クルアーンが神の啓示書であり、神の為せる業に目的と調和の一貫性のある事を示すものである。しかし、唯物論社は無理な理論を作り出し、根拠の薄弱な推測にあがき、神の御言葉やモハammad預言者を信じようとはしない。

10. 背きさるべく定められた者のみが、(注5)
真理から背き去るなり。

يُؤْفِكُ عَنْهُ مَنْ أُفِكَ^①

11. 呪われよ、嘘つきども、

قَتِيلَ الْخَوْصُونَ^②

12. 無知の深みで真理を意に介せぬ徒輩よ。

الَّذِينَ هُمْ فِي غَمْرَةٍ سَاهُونَ^③

13. 彼等は訊く、「審判の日はいつなるか?」と。

يَسْأَلُونَ أَيَّانَ يَوْمُ الدِّينِ^④

14. そは彼等が、火獄における受難の日なり。

يَوْمَ هُمْ عَلَى النَّارِ يُفْتَنُونَ^⑤

15. 而して彼等は云われん、「汝等、己が責苦を
とくと味わえ。これお前たちが催促せるも
のなり」と。

ذُوقُوا فِتْنَتَكُمْ هَذَا الَّذِي كُنْتُمْ بِهِ تُسْتَعْجَلُونَ^⑥

16. されど義しき人々は花園と泉の間に住ま
ん、

إِنَّ الْمُتَّقِينَ فِي جَنَّاتٍ وَعُيُونٍ^⑦

17. 主が彼等に賜わんものを拝受しながら。現
世にて善行を積みたるが故に。

أَجْزِينَ مَا آتَاهُمْ رَبُّهُمْ إِنَّهُمْ كَانُوا قَبْلَ
ذَلِكَ مُحْسِنِينَ^⑧

18. 彼等は口頃夜も余り眠らず、

كَانُوا قَلِيلًا مِنَ اللَّيْلِ مَا يَهْجَعُونَ^⑨

19. 黎明には赦しを請い求めたり。

وَبِالْأَسْحَارِ هُمْ يَسْتَغْفِرُونَ^⑩

20. 彼等の富は、助けを求めし者と之を求めざ
りし者に(注6)頒布されたり。

وَفِي أَمْوَالِهِمْ حَقٌّ لِلْسَّائِلِ وَالْمَحْرُومِ^⑪

21. また地上には、信心深い者たちへのさまざ
まな神兆あり。

وَفِي الْأَرْضِ آيَاتٌ لِلْمُوقِنِينَ^⑫

22. お前たち自身の中にもまた然り。お前たち
それがわからざるか?

وَفِي أَنْفُسِكُمْ أَفَلَا تُبْصِرُونَ^⑬

23. 而して天上には、お前たちの糧とお前たち
に約束せられたるものあり。(注7)

وَفِي السَّمَاءِ رِزْقُكُمْ وَمَا تُوعَدُونَ^⑭

注5 この言葉は、「己に背を向ける人」という意味でもある。

注6 イスラム教によれば、富裕な信者の財は、それを欲しがる者にも、それを言えないもの同様、正当な理由があれば分け与えられる。この様にイスラム教徒の財産は、貧しき者にも与えられる手当を贈う義務がある。それ故、彼が同胞の必要を満たす時、それは好意から出たものではなく、唯、相手に対して負った義務を果たす事になる。「助けを求めざりし者」という語は、言外の意味として、自尊心・恥じる心・施しを求めない(2: 274)という点において貧しい者を指し、今一つ、口のきけない動物という意味もある。この言葉は此所では、病弱等の理由で働けない人を指すのに使われている。

注7 信者に向けられた勝利と繁栄の約束、及び不信者に対する警告。

24. 天地の主にかけて誓う、それは真実なり。お前たちの言葉が事実である如く（注8）

فَوَرَبِّ السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ إِنَّهُ لَحَقٌّ مِّثْلَ مَا أَنَّكُمْ
تَنْطُقُونَ ﴿٢٤﴾

第二項

25. 汝、アブラハムの貴客の物語を聞かざりしか？
26. その客たちアブラハムの許に來たりて、云えり、「平安あれ」と。アブラハムは彼等が未知の人々と思ひながらも、答えて云えり、「あなたがたの上に平安あれ」と。（注9）

هَلْ أَتَاكَ حَدِيثُ ضَيْفِ إِبْرَاهِيمَ الْمُكْرَمِينَ ﴿٢٥﴾
إِذْ دَخَلُوا عَلَيْهِ فَقَالُوا سَلَامًا قَالَ سَلَامٌ قَوْمٌ مُنْكَرُونَ ﴿٢٦﴾

27. アブラハムは静かに立って奥に入り、肥えた仔牛を持ち來たり、
28. 客人の前にそれを置き、云えり、「召し上らざるか？」と。

فَرَاغَ إِلَى أَهْلِهِ فَجَاءَ بِعِجْلٍ سَمِينٍ ﴿٢٧﴾
فَقَرَّبَهُ إِلَيْهِمْ قَالَ أَلَا تَأْكُلُونَ ﴿٢٨﴾

29. アブラハムは彼等に対して畏怖の念を抱けり。すると彼等は、云えり、「怖れるなかれ」と。而して、賢い男子が生まれるという朗報をアブラハムに伝えたり。（注10）

فَأَوْجَسَ مِنْهُمْ خِيفَةً قَالُوا لَا تَخَفْ وَبَشِّرُوهُ
بِغُلَامٍ عَلِيمٍ ﴿٢٩﴾

30. するとそこへ、アブラハムの妻出で來たりて叫び、（注11）その顔を打ちて云えり、「妾は石女の老婆なのに！」と。

فَأَقْبَلَتِ امْرَأَتُهُ فِي صَرَخٍ فَصَكَتَ وَجْهَهَا وَ
قَالَتْ عَجُوزٌ عَقِيمٌ ﴿٣٠﴾

31. 客人たちは云えり、「たといそうであろうとも、こは主の思し召しなり。げに主は賢哲にして、すべてを知り給う」と。

قَالُوا كَذَلِكَ قَالَ رَبُّكَ إِنَّهُ هُوَ الْحَكِيمُ
الْعَلِيمُ ﴿٣١﴾

32. アブラハムは云えり、「ところで、汝等使徒たちよ、あなた方の用向きや如何ん？」と。

قَالَ فَمَا خَطْبُكُمْ أَيُّهَا الرُّسُلُونَ ﴿٣٢﴾

注8 前節に述べられた出来事は、モハammad預言者の願望でもなければ、彼の想像の産物でもない。それは、「お前たちの言葉」が真実である様に、紛れもない事実である。又、当節は、あなたたちが言うようにクルアーンが正真正銘神の啓示書であると示しているともいえる。

注9 11：70～71 参照。

注10 15：54 同様、当節においても、約束された息子は、「賢い男子」として記されている。一方37：102では「寛容な息子」と呼ばれている。前節の記述はイサクを、後節はイシュマエルを指すものである。

注11 この節にある「叫び」というのは、最も激しい叫び、激しい悲しみ・怒り・苦悩・嫌悪や恥辱に顔面が引きつる事、引き付け等を意味する。

33. 彼等は云えり、「我等はさる罪深い民のために遣わされたり。

فَاُولَٰئِكَ اُرْسِلْنَا اِلَىٰ قَوْمٍ مُّجْرِمِيْنَ ۝۳۳

34. 我等が派遣されたるは、その罪人どもを飛礫^{つばき}もて打ちすえんがためなり。

لِنُرْسِلَ عَلَيْهِمْ حِجَارَةً مِّنْ طِيْنٍ ۝۳۴

35. 主自らその者どもの不行跡^{つばき}を印せし飛礫^{つばき}によりて」と。

مُسَوَّمَةً عِنْدَ رَبِّكَ لِلْمُسْرِفِيْنَ ۝۳۵

36. われらそこに住む信者を救出せんとせしも、

فَاَخْرَجْنَا مَن كَانَ فِيْهَا مِنَ الْمُؤْمِنِيْنَ ۝۳۶

37. その邑^{まち}で信者^{ムスリム}たりし者はただの一家あるに過ぎざりき。

فَمَا وَجَدْنَا فِيْهَا غَيْرَ بَيْتٍ مِّنَ السَّالِمِيْنَ ۝۳۷

38. さればわれらは、そこに、天罰を恐れる人々のために、確かな跡を残したり。

وَتَرَكْنَا فِيْهَا آيَةً لِّلَّذِيْنَ يَخَافُوْنَ الْعَذَابَ الْاَلِيْمَ ۝۳۸

39. われらはモーゼにも、明白なる権威を与えてファラオのところへ遣わした時、奇跡を授けたり。

وَفِيْ مُوسَىٰ اِذَا ارْسَلْنَاهُ اِلَىٰ فِرْعَوْنَ بِسُلْطٰنٍ مُّبِيْنٍ ۝۳۹

40. 然るにファラオは、己が威勢^{しか}を怙恃^{こし}する余り、(注12)モーゼに向って「妖術使いか、或いは狂人なり」と云えり。

فَتَوَلَّىٰ بِرُكْبٰهٖ وَقَالَ سِحْرٌ اَوْ يَحْنُوْنَ ۝۴۰

41. さればわれらは、ファラオとその軍勢をひつ捕え、海中に投じたり。そはみな身から出た鎗^{きり}なり。

فَاَخَذْنَاهُ وَجُودَهُ فَنَبَذْنَاهُمْ فِي الْيَمِّ وَهُوَ مُلَيَّمٌ ۝۴۱

42. アード族にもまた然り。その時われらは暴風を彼等に吹きつけたり。

وَفِيْ عَادٍ اِذَا ارْسَلْنَا عَلَيْهِمُ الرِّيْحَ الْعَقِيْمَ ۝۴۲

43. その襲いかかるや、何ものも残さず、すべてをぼろぼろの骨の如くになせり。

مَا تَذٰرُ مِنْ شَيْءٍ اَتَتْ عَلَيْهِ اِلَّا جَعَلَتْهُ كَالرِّمِيْمِ ۝۴۳

44. サムード族にもまた然り。その時彼等は告げられたり、「束の間を楽しむがよい」と。

وَفِيْ ثٰوْدٍ اِذْ قِيْلَ لَهُمْ تَسْعُوْا حَتّٰى جِيْنَ ۝۴۴

45. 然るに彼等は主の命^{しか}に逆らいたり。されば驚き見つめる間に、雷^{いかづち}彼等を襲いたれば、

فَعْتَوْا عَنْ اَمْرِ رَبِّهِمْ فَاَخَذَتْهُمُ الصَّعِقَةُ وَهُمْ يَنْظُرُوْنَ ۝۴۵

注12 ここでの「威勢」は、支え又は援助、権力と抵抗、親族・仲間、援助と力を与える人、高貴な人等の意味がある。

注13 神は万物を対^{たい}にしてお作りになった。この対は動物だけでなく、植物や無生物にも存在する。又精神的なものにも対はある。天地さえも対になっている。

46. 彼等起つ能わ^{あた}ず、またその身を守り得ざ^りき。

47. 往古^{おうこ}のノアの民もまた然^{しか}り。彼等は不従順な民なりき。

第三項

48. われらは偉力を以て天を創りたり。げにわれらは広大なる力を有す。

49. われらはまた大地をうち広げたり。そのなんたる素晴らしきよ！

50. われらはまたお前たちに熟慮せしめんがために、すべてのものを雌雄の番に創造せり。
(注 13)

51. されば汝等、アッラーに加護を求めよ。げに我はアッラーよりの明白なる警告者なり。

52. アッラー以外に他^{あだしがみ}神^{はうし}を奉祠するなかれ。げに我はアッラーよりの明白なる警告者なり。

53. 彼等以前に遣わされた使徒も、一人として、「妖術使い、さもなくば狂人」よと云われざる者はなかりき。

54. 彼等はこの態度を世々継承したるか？ 然^{しか}り、彼等はみな不正不遜な民なり。(注 14)

55. されば彼等を顧みるな。汝は彼等の所業に責任なし。

56. ただ訓戒し続けよ。げに訓戒は信ずる人々のためになる。

57. われ、妖霊^{あや}と人間を創りしは、われを崇敬せしめんがためなり。(注 15)

فَمَا اسْتَطَاعُوا مِنْ قِيَامٍ وَمَا كَانُوا مُتَعِمِّينَ ﴿٢٦﴾

وَقَوْمَ نُوحٍ مِنْ قَبْلُ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمًا فَاسِقِينَ ﴿٢٧﴾

وَالسَّمَاءَ بَنَيْنَاهَا بِأَيْدٍ وَإِنَّا لَمُوسِعُونَ ﴿٢٨﴾

وَالْأَرْضَ فَرَشْنَاهَا فَنِعْمَ الْمُهَيِّدُونَ ﴿٢٩﴾

وَمِنْ كُلِّ شَيْءٍ خَلَقْنَا ذَوْجَيْنِ لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُونَ ﴿٣٠﴾

فَقِهِمْ إِلَى اللَّهِ إِنِّي لَكُمْ مِنْهُ نَذِيرٌ مُبِينٌ ﴿٣١﴾

وَلَا تَجْعَلُوا مَعَ اللَّهِ إِلَهًا آخَرَ إِنِّي لَكُمْ مِنْهُ نَذِيرٌ مُبِينٌ ﴿٣٢﴾

كَذَلِكَ مَا آتَى الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ مِنْ رَسُولٍ إِلَّا قَالُوا سَاحِرٌ أَوْ مُجُنُّونٌ ﴿٣٣﴾

اتَّبَاعُوا بِهِ بَلْ هُمْ قَوْمٌ طَاغُونَ ﴿٣٤﴾

فَقَوْلٍ عَنْهُمْ فَمَا أَنْتَ بِمُلُومٌ ﴿٣٥﴾

وَذِكْرٍ لَكَ الْذِّكْرُ لِيَنْفَعُ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٣٦﴾

وَمَا خَلَقْتُ الْجِنَّ وَالْإِنْسَ إِلَّا لِيَعْبُدُونِ ﴿٣٧﴾

注 14 いつの世にも、神の使者に向けられる非難は似通っており、ある世代の不信者が、同じ非難を繰り返す様に、次の世代に申し送っているのではと思わされる程である。

注 15 ここで妖霊は遊霊、人間は庶民を表わしている。「崇敬」という語の第一義は、神の戒律に従い、それと完全に一体となる中で、持てる力を最大限に発揮し、正しい宗教の規律に従う事である。その目的は、神の

58. われは彼等に糧^{かて}を求めず、われを養はんことを求めず。(注16)

مَا أَرِيدُ مِنْهُمْ مِّنْ رِّزْقٍ وَمَا أَرِيدُ أَن يُطْعَمُوا ﴿٥٨﴾

59. げにアッラー御自身こそ偉大な養い手、力と威力の主なり。

إِنَّ اللَّهَ هُوَ الرَّزَّاقُ ذُو الْقُوَّةِ الْمَتِينُ ﴿٥٩﴾

60. 今よからぬことをなす徒輩^{たか}は、昔、彼等の仲間がなめし悲運と同じ運命と相成らん。されば彼等をして、われに懲罰を催促せしむるなかれ。

وَإِنَّ الَّذِينَ ظَلَمُوا ذُنُوبًا مِّثْلَ ذُنُوبِ أَصْحَابِهِمْ فَلَا يَسْتَعِجِلُونَ ﴿٦٠﴾

61. 災いなるかな不信心者輩^ば、そは彼等に約束せられたるその日があるが故に。

فَوَيْلٌ لِلَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ يَوْمِهِمُ الَّذِي يُوعَدُونَ ﴿٦١﴾

影響を受け、我身に神の属性を表す事である。これは、当節に述べられている通り、人間が作り出された偉大にして高尚な目的であり、これを成し遂げる事が真の神への崇拝となる。神を求める様自らを駆り立て、神の御意志に完全に従いたいという高尚な願望をその身に起こす事のできる能力こそ、神より授った力の内最も高度なものであり、人間は外的内的才能を駆使すれば、この事を理解できる。

注16 もし魂の旅人が、自らの人生の高い目的に向い忍耐強く歩みを進めるなら、彼の行為は神や他の如何なる人の為でもなく、唯、彼自身に潤い、望みを達成する事となる。



アル・トゥール

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 ① بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
2. かの山にかけて。(注1) ② وَالطُّورِ
3. 書かれたる經典によりて(注2) ③ وَكُتِبَ مُسْطُورٍ
4. うち広げられたる羊皮紙に。 ④ فِي سَرَقٍ مَّنْشُورٍ
5. 盛況をさわめる聖殿にかけて。(注3) ⑤ وَالْبَيْتِ الْمَعُورِ
6. 高々と持ち上げられたる天蓋^{てんがい}にかけて。 ⑥ وَالسَّقْفِ الْمَرْفُوعِ
7. 漲る海^{みなぎ}にかけて。(注4) ⑦ وَالْبَحْرِ الْمَسْجُورِ
8. 主の懲罰は必ず起こる。 ⑧ إِنَّ عَذَابَ رَبِّكَ لَوَاقِعٌ
9. 何人も之^{なんびと}を避^{これ}けること能^{あた}わず。 ⑨ مَا لَهُ مِنْ دَافِعٍ
10. その日天はうち震え、(注5) ⑩ يَوْمَ تَمُورُ السَّمَاءُ مَوَدًّا
11. 山々はぐらぐらと揺れ動かん。(注6) ⑪ وَتَسِيرُ الْجِبَالُ سَيْرًا

注1 宣誓の哲学及び重要性については37：2を参照の事。

注2 クルアーン又は、モーゼの律法を指すが、おそらくクルアーンの事であろう。

注3 エルサレムの寺院、又はいずれかの礼拝堂、この言葉はクルアーンの中で、人の集まる所(2：126)、聖地(5：3)、聖なる寺院(17：2)、血緒ある所(22：30)、安全な街(95：4)と記されたカーバ神殿を指すものであろう。

注4 「みなぎる海」とは、ファラオと彼の強力な軍がイスラム人を追跡中に沈んだ紅海、又はクライシュの全ての指導者が殺害された、アル・バハル(海)として知られている、バドルの戦場を指しているようだ。

注5 その日、天の軍勢は揃ってモハammad預言者の味方となるであろう。そして、バドルの日に、それは実現した。

注6 神の審判の下される日、不信心者の指導者達は恐しい結末を迎えるであろう。彼等は風の前のもみ殻の様に吹き飛ばされる。あるいは当節は、当時の大帝国が崩壊すると述べているともいえる。当節及び前節は、古く墮落した制度が一掃される前に、新たな秩序が生まれる事を暗示している。これらの節は、裁きの日を指すとも受け取れる。

12. その日、真理を拒否せる者どもに災いあれ、

فَوَيْلٌ لِلْيَوْمِذِ لِلَّذِينَ كَفَرُوا ⑬

13. くだらぬ議論を事とせる徒輩よ。

الَّذِينَ هُمْ فِي خَوْضٍ يُلْعَبُونَ ⑭

14. その日彼等は、地獄の火の中に容赦なく突き落されん。(注7)

يَوْمَ يُدْعَوْنَ إِلَىٰ نَارِ جَهَنَّمَ دَعَاً ⑮

15. 「これはお前たちが、日頃虚偽なりとせる業火なり。

هَذِهِ النَّارُ الَّتِي كُنْتُمْ بِهَا تُكَذِّبُونَ ⑯

16. これは妖術か、それともお前たちこれが見えざるか？

أَفَسِحْرُ هَذَا أَمْ أَنْتُمْ لَا تُبْصِرُونَ ⑰

17. 汝等この火で焚かれよ。お前たちが之を忍ぶも忍ばざるも、そは同じなり。お前たちはただそのなしたることの報いを受けるのみ」

إِصْلَوْهَا فَاصْبِرُوا أَوْ لَا تَصْبِرُوا سَوَاءٌ عَلَيْكُمْ ⑱

إِنَّمَا تُجْزَوْنَ مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ⑲

18. げに義しい者は、花園と至福の中に住み、

إِنَّ الْمُتَّقِينَ فِي جَنَّاتٍ وَنَعِيمٍ ⑳

19. 主が彼等に賜えるものを楽しまん。而して主は、業火の責苦から彼等を救わん。

فَلَهُمْ فِيهَا أَنْهَارٌ مِنْ مَّاءٍ غَيْرِ مُلْحَقٍ وَوَقْعُهُمْ مِنْ نَعِيمٍ ㉑

عَذَابٍ الْجَحِيمِ ㉒

20. 「これはお前たちの行為に対する報いなれば、食いつくめ、

كُلُوا وَاشْرَبُوا هَنِيئًا بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ㉓

21. 並べられたる搦牀に身を横たえながら」われらは彼等に、麗しき瞳もゆ処女をめあわせん。(注8)

مُتَّكِئِينَ عَلَىٰ سُرُرٍ مَصْفُوفَةٍ وَزَوَّجْنَاهُمْ حُورٍ ㉔

عَيْنٍ ㉕

注7 当節は、不信心者の有罪が確定し、悔恨の時が過ぎた後の彼等の状況を描いている。

注8 ここでの「めあわせる」という語に対応するアラビア語は、「彼はある物を別の物と組み合わせた。」又は「彼はそれを同種の物に結び付けた。」という意味である。フル（処女）は白口の部分があくまで白く、黒口があくまで黒く、身体他の部分も非常に白く美しい人を指す。

死後の生活とは、現在の生活をそのまま表したに過ぎず、来世における報酬や罰は、現世の行為の反映である。天国や地獄は、別の新たな物質界を意味するのではない。知覚できるのは事実なので、そうしたければ、それ等を物質的なものと称しても構わないが、それ等は、現世における精神的事実を具体化しただけである。この世での係わりが来世には足かせと写るであろう。現世の嫉妬は炎となって鮮やかに見え、信者が神に捧げる愛は来世でワインとなって表わされる。この様に、天国には、庭・小川・ミルク・蜂蜜・鳥の肉・ワイン・果実・玉座・仲間その他色々な物があるが、それ等はこの世にあるのと同じ物ではなく、現世の生活における精神面を表したものである。上記された「めあわせる」、「処女」「瞳」は、天国で、神の高潔なる下僕が、顔がまばゆい程の心の美しさで輝く清らかな友と暮せるようになると示している。又、彼等は美しい娘、つまり妻を得るという意味でもある。

22. 信仰する者、並びにその先祖の信仰を継承する子孫は、われら^{こども}之を樂園で一緒にさせん。(注9) またわれらは、彼等の功勞をいささかも減らさざるべし。人はみな己がなせることに對して責めを負う。(注10)

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَاتَّبَعَتْهُمْ ذُرِّيَّتُهُمْ بِإِيمَانٍ
أَلْحَقْنَا بِهِمْ ذُرِّيَّتَهُمْ وَمَا أَلَتْنَاهُمْ مِنْ عَمَلِهِمْ
مِنْ شَيْءٍ كُلُّ امْرِئٍ بِمَا كَسَبَ رَهِينٌ ﴿٢٢﴾

23. われらは彼等に、彼等の望む果物や肉を与えん。

وَأَمَدَدْنَاهُمْ بِمَا كَانُوا يَاسْتَعِينُونَ ﴿٢٣﴾

24. 彼等はそこで互に盃のやりとりをすれども、^{らんぱうろうぜき}乱暴狼藉なし。

يَتَنَازَعُونَ فِيهَا كَأْسًا لَا لَغْوٌ فِيهَا وَلَا تَأْسِيمٌ ﴿٢٤﴾

25. 童子^{こども}ら行き巡りて彼等に給仕せん。その無垢なること秘藏されたる真珠の如し。

وَيُطَوَّفُ عَلَيْهِمْ غُلَامَانُ لَهُمَا كَتَابُهُمَا وَهُوَ يُكْنَى ﴿٢٥﴾

26. 彼等相い寄りて、訊ね合う。

وَأَقْبَلَ بَعْضُهُمْ عَلَى بَعْضٍ يَتَسَاءَلُونَ ﴿٢٦﴾

27. 彼等は云わん、「以前、我等家族と共にありし時、アッラーの審判を恐れたり。(注11)

قَالُوا إِنَّا كُنَّا قَبْلُ فِي أَهْلِنَا مُشْفِقِينَ ﴿٢٧﴾

28. ^{しか}然るにアッラーは我等に慈悲を垂れ、熱風の懲罰より我等を救いたり。

فَمَنْنَ اللَّهُ عَلَيْنَا وَفُتِنَا عَذَابَ السَّوْمِ ﴿٢٨﴾

29. そは以前、我等がアッラーを祈りたればこそ。げにアッラーは恵み深く、情け深い御方にまします」と。

إِنَّا كُنَّا مِنْ قَبْلُ نَدْعُوهُ إِنَّهُ هُوَ الْبَرُّ الرَّحِيمُ ﴿٢٩﴾

死後の世における報酬や罰の本質を理解するには、来世が現世に続くものである事を心に留めておかねばならない。人の魂が肉体を離れるや新たな身体が授けられる。それは、身体無くして魂は向上せず、至福を受けられず、又痛みを感じずる事もできないからである。新たな身体は、この世の魂のごとく優れて美しいものである。新しい身体^のの形や特質は、現世の我々のものとは全く異なるので、来世における報酬や懲罰の本質も、我々の想像を越えるものである。この事をクルアーンは32章18節で述べている(32:18)。又、モハammad預言者は次の様に語ったとされる。如何なる目も天の恵を見た事はなく、如何なる耳もそれを聞いた事はなく、又、如何なる人の心もそれを感じずる事はできない(ブハリ)。天国には、罪、軽率で無意味な会話、又我々の知る肉体の快樂というものはないが、平安と神の喜びに満ちており、この事が、クルアーンにより正義ある者に伝え、約束された通り、天国を光り輝かせるのである。32章18節も参照の事。

注9 前節において、高潔なる者に純潔にして美しい妻が授けられると述べられているが、当節では、彼等に子供が授けられ、それにより彼等の喜びは完全なものとなると書かれている。

注10 正義ある者に係わる事実は、不信心者には全く当てはめられない。自らの善行があつてこそ、天国にその場所を得る事ができるのである。

注11 本分の意味の他、当節は次の様な事も示している。「敵に包囲されれば、相手の脅しが時として我々を脅かす事もあろう。しかし、今我々は、ゆるぎない平安を得ている。」

第二項

30. さればさとしてやれ。主の恩寵^{おんちよう}によりて、
汝はト筮者^{しや}に非ず、また狂人に非ず。

فَذَكِّرْ فَمَا أَنْتَ بِنِعْمَتِ رَبِّكَ بِكَاهِنٍ وَلَا كَاهِنَةٍ ۝۳۰

31. 彼等は云う、「彼は詩人なり。我等は、時が
彼にもたらす災難を待たん」と。

أَمْ يَقُولُونَ شَاعِرٌ تَتَّبِصُّ بِهِ رَيْبَ الْبُنُونِ ۝۳۱

32. 云え、「ならば汝等待つがよい。我またお前
たちと共に待たん」と。(注12)

قُلْ تَرَبَّصُوا فَإِنِّي مَعَكُمْ مِنَ الْمُرِصِينَ ۝۳۲

33. 彼等に之を命じたるは、己が思慮のなせる
業^{わざ}か、はたまた彼等は邪曲^{じやくまよく}の民か?(注13)

أَمْ تَأْمُرُهُمْ أَحْلَاءُهُمْ بِهَذَا أَمْ هُمْ قَوْمٌ
طَاعُونَ ۝۳۳

34. 彼等は云う、「彼それを捏造^{ねつぞう}せり」と。然^{しか}ら
ず、彼等は信仰心をもたざるなり。

أَمْ يَقُولُونَ تَقَوَّلَهُ بَلْ لَا يُؤْمِنُونَ ۝۳۴

35. もし彼等のいうことが真^{まこと}なら、彼等をして
かくの如きお告げをもたらさしめよ。

فَلْيَأْتُوا بِحَدِيثٍ مِثْلِهِ إِنْ كَانُوا صَادِقِينَ ۝۳۵

36. 彼等は無意味に創られたるか、それとも彼
等自身が創造者なるか?

أَمْ خُلِقُوا مِنْ غَيْرِ شَيْءٍ أَمْ هُمُ الْخَالِقُونَ ۝۳۶

37. 彼等は天地を創造せるか? 否、彼等は創
造者を信ぜず。

أَمْ خَلَقُوا السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ بَلْ لَا يُؤْمِنُونَ ۝۳۷

38. 彼等は主の宝を所持するか、それとも、そ
の守護者なるか?

أَمْ عِنْدَهُمْ خَزَائِنُ رَبِّكَ أَمْ هُمُ الْمُصِيطِرُونَ ۝۳۸

39. 彼等には天に登る梯子^{はしご}があり、それで登つ
て神の言葉を窃み聴きし得るというか?
然らば、その聴取者に確かな証拠^{しやうこ}をもたら
さしめよ。(注14)

أَمْ لَهُمْ سُلُمٌ يَنْصِبُونُ فِيهِ فَلْيَأْتِ مُسْتَقَرَّهُمْ
يُسْلُطُنَ مُبِينٌ ۝۳۹

40. アッラーは娘で、お前たちは息子がいると
な?(注15)

أَمْ لَهُ الْبَنَاتُ وَلَكُمْ الْبُنُونَ ۝۴۰

注12 不信心者はモハammad預言者を、未来に関して空想にふける詩人、無邪気な人のだまされ易きにつけ込む古い師、あるいは大ばら吹きと呼び、早晚彼が悲惨な結末を迎えたと期待している。しかし彼等は最後の審判の口を迎えるまで、その期待が無駄である事に気が付かないであろう。時の流れのみが、彼等とモハammad預言者の間の問題を解決し得るのである。以上の事を当節は暗示している。

注13 彼等が道を誤ったり、自制を失いそ言にふけったり、神の御言葉を拒んで全ての法にそむいたのは、彼等自身に咎めがあるのだろうか。

注14 もし不信心者が天国の秘密を知っているなら、モハammad預言者が神に任命された使者でないという彼等の主張を立証させてみようではないか。

注15 神が息子をお持ちだという事ですら唯一神に矛盾すると当節は述べているが、不信心者は大胆にも神の娘を存在するとして特定化する。彼等は、娘の出生を、不名誉の烙印とみなしているからである。

41. 汝が彼等に報酬を求めるあまり、彼等はその債務の重荷で打ちひしがれたるか？ (注16) أَمْ سَأَلْتَهُمُ أَجْرًا فَمِنْ مَغْرَمٍ مُثْقَلُونَ ﴿١٦﴾
42. 彼等は天地の秘儀に良く通じ、之を書き記し得る知識を有すか？ أَمْ عِنْدَهُمُ الْغَيْبُ فَهُمْ يَكْتُبُونَ ﴿١٧﴾
43. 彼等は策謀せんとするか？ されど、その策にかかるものは、信ぜざる彼等自身なり。 أَمْ يُرِيدُونَ كَيْدًا فَالَّذِينَ كَفَرُوا هُمْ الْمَكِيدُونَ ﴿١٨﴾
44. 彼等は、アッラー以外に神を奉ずるか？ 彼等がアッラーと共に合祀せんとする者の上に超然たるアッラーに栄光あれ！ أَمْ لَهُمْ آلِهَةٌ غَيْرُ اللَّهِ سُبْحَانَ اللَّهِ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿١٩﴾
45. 彼等はたとい天の一角が崩落するを見ても、「こはただの密雲なり」と云わん。(注17) وَأَن يَرَوْا كِسْفًا مِنَ السَّمَاءِ سَاقِطًا يَقُولُوا سَحَابٌ مَّرْكُومٌ ﴿٢٠﴾
46. されば、雷に打たれるその日まで彼等をすておけ、 فَذَرَهُمْ حَتَّى يُلَاقُوا يَوْمَهُمُ الَّذِي فِيهِ يُصْعَقُونَ ﴿٢١﴾
47. 彼等の策謀がすこしも彼等に役立たず、且つ助けられざるその日まで。 يَوْمَ لَا يُغْنِي عَنْهُمْ كَيْدُهُمْ شَيْئًا وَلَا هُمْ يُنصَرُونَ ﴿٢٢﴾
48. 悪事を行う徒輩には、この外にも、懲罰あり。されど、彼等の大半は之を知らず。 وَأَنَّ الَّذِينَ ظَلَمُوا عَدَاوًا بَيْنَ دُونِ ذَلِكَ وَلَكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٢٣﴾
49. されば汝、忍びて主の審判を待て。汝はまさしくわれらの眼前にあり。眠りから醒めた時、主の栄光を称揚し奉れ。(注18) وَاصْبِرْ لِحُكْمِ رَبِّكَ فَإِنَّكَ بِأَعْيُنِنَا وَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ جُنُودًا نَّاتِقَةً ﴿٢٤﴾
50. 而して夜半にも、また星落つる時にも、汝アッラーを讚美し奉れ。 وَمِنَ اللَّيْلِ فَسَبِّحْهُ وَإِدْبَارَ النُّجُومِ ﴿٢٥﴾

注16 当節は不信心者の良識に訴え、彼等の道德的・精神的幸福を心から願って、モハammad預言者が彼等を正義の道に招じ、しかもその労苦に何ら見返りを求めないでいる時、何故彼等は彼を受け入れないのかと問いている。

注17 不信心者は、例え自らの頭上に空が落ちて下るのを事実日の当たりにしても、それを「密雲」の形をした神の恵と己れに都合の良い解釈をするであらう。それ程までに不注意で油断している彼等の事だから、神の時機を得た警告を得るところもないのである。

注18 我々の保護の下(5:68)。



アル・ナジム

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 沈み行く星にかけて、(注1)

وَالنَّجْمُ إِذَا هَوَىٰ ②

3. お前たちの仲間は誤らず、また惑うことなし。(注2)

مَا ضَلَّ صَاحِبُكُمْ وَمَا غَوَىٰ ③

4. また思惑で語るに非ず。

وَمَا يَنْطِقُ عَنِ الْهَوَىٰ ④

5. そは神より啓示されたるお告げに外ならぬ。(注3)

إِنْ هُوَ إِلَّا وَحْيٌ يُوحَىٰ ⑤

6. 偉力の主が彼に教え授けたり。(注4)

عَلَّمَهُ شَدِيدُ الْقُوَىٰ ⑥

7. そは智力衆にすぐれたる御方なり。されば主は、一切を支配す。

ذُو مِرَّةٍ فَاسْتَوَىٰ ⑦

8. その時、主は、地平線の高さところに立ちて、啓示せり。(注5)

وَهُوَ بِالْأُفُقِ الْأَعْلَىٰ ⑧

9. 次いで預言者はアッラーのそば近く引き寄せられ、アッラーいよいよ近づきて来臨したまい、(注6)

ثُمَّ دَنَا فَتَدَلَّى ⑨

注1 アナジウムは恒星又は茎の無い植物という意味である。しかし固有名詞として用いられる時は、プレイアデス星団を指す。

注2 モハammad預言者の語る理想や原理は間違っておらず(彼はこれまでに間違いを犯した事がない)、又、彼はそれ等の原理からそれた事もない。この様に、彼の高尚な理想及びその実現方法に關して、彼はそれを身をもって表した確かな指導者である。

注3 当節は、モハammad預言者の啓示が神から出たものであると述べているが、先の二節では、彼の啓示が、決して狂った心に生じる幻影や、人の欲望及び悪意のそのおかしによって生じる考えではないということを示している。

注4 クルアーンは強力な啓示書であり、それ以前の啓示書は全てクルアーンを前にしてその重要性は薄らぐ。

注5 神が、栄光と尊厳をもって、モハammad預言者を遣わした時、彼の精神は最高位に達した。あるいは当節は、イスラム教の光が、全世界を照らす事ができる様に非常に高い所に上げられたと述べているともいえる。10節も参照の事。

注6 「来臨」というのは、「彼、又はそれが降りて来た」、あるいは「彼に近付いた」を意味する。当節は、モハammad預言者が神に近付き、神が彼の方へ身がかがめられたと示している。又、モハammad預言者は神の

10. その隔たることわずかに弓の弦二つ。いやそれよりも近きところなり。(注7)
11. かくてアッラーは、その僕^{しもべ}に向って、啓示^{おしえ}の旨^{めい}を降し授けたり。
12. 預言者の心は、己れの見たものを偽らざりき。(注8)
13. お前たちは預言者が見たることについて、彼と論争せんとするか?
14. 而して、彼は再度主を見たり、(注9)
15. 遙かなるシドラ樹^{じぶ}のそば近くに。(注10)
16. そは終^{つい}の住居^{かた}の樂園^{らん}の傍らなり。

كَانَ قَابَ قَوْسَيْنِ أَوْ أَدْنَىٰ ۚ

فَأَوْحَىٰ إِلَىٰ عَبْدِهِ مَا أَوْحَىٰ ۖ

مَا كَذَبَ الْفُؤَادُ مَا رَأَىٰ ۚ

أَفَتُمَارُونَهُ عَلَىٰ مَا يَرَىٰ ۚ

وَلَقَدْ رَآهُ نَزْلَةً أُخْرَىٰ ۖ

عِنْدَ سِدْرَةِ الْمُنْتَهَىٰ ۚ

عِنْدَهَا جَنَّةُ الْمَأْوَىٰ ۖ

ごくお側へ行き、神の精神的知識の泉で多く飲んだ後、その知識を人々に伝える為に降りて来たという意味も当節にはある。

注7 アラブの格言にある「彼等は我々に一つの弓から矢を放った」というのは、彼等が挙って我々に反対したという意味である。この様に、この言葉は完全なる合意を示している。「弦」の意味がどの様であっても、「弓二つの弦」は密接にあわさった二つの弓の弦のように、二者間の非常に強い結び付きを示す。モハammad預言者が精神的な上昇を続け、神のお側に近付き、神との隔りが失せた時、彼はいわば「二つの弓」を合わせた一つの「弦」となったのである。当節はこの事を表している。先述の格言は、古代アラブの習慣を我々に思い起こさせる。その習慣によれば、二人の人間が固い友情を誓う時、二人が一つである事を示す為に互いの弓を結び付け、その結び付けられた弓から一本の矢を放つ。こうして、彼等がいわば一人の人間となり、一方への攻撃はもう一方への攻撃となる事を示した。もし「米臨」という話が神について使われているのなら、モハammad預言者が神に近付き、神は彼の元へ降りて来られ、両者は一人の人間のように結び付いたと、当節は示す事になる。しかし、この言葉には今一つの美しく神秘的な意味がある。すなわち、片やモハammad預言者が神に完全に吸収された為、彼は神の生き写しとなり、又一方で、彼は人々の下へ降りて行き、彼等への愛・同情・心配に心を占められていたので、神性と人間性が彼の中で結び付き、彼は神性と人間性の二本の弓の弦の中心点となったのである。「いやそれより近きところ」とは、モハammad預言者と神の関係が想像できない程緊密になった事を示している。

注8 モハammad預言者は実際に見たのであり、それは事実で想像の産物ではないと示している。

注9 モハammad預言者の見た幻想は、二重の意味を持ち精神的経験であった。

注10 精神の高まりの中で、モハammad預言者は人の想像を上まわる程に神のお側近くまで登って行った。又、シドラ樹は海という意味の語根から派生したもので、その段階で、神の知識の果てしない海と永遠の真実が彼の前に広がった」と、この節は示しているのかもしれない。あるいは、当節は、モハammad預言者に授けられた神の知識が、シドラ樹の様に、魂の旅人の疲れた四肢に安らぎの場を与える事を、象徴的に示しているとも言える。更に、シドラ樹葉は死人の腐敗を防ぐ効能があるので、当節は、モハammad預言者に啓示された教義は、それ自体に免疫があるだけでなく、人が墮落するのを防ぐ力があるとも意味しているのだろう。又、フダイピヤの停戦協定の時、モハammad預言者の友が忠誠の誓いを手にしたのはこの木の下であったという預言も当節には含まれている。

17. シドラ樹^{じどら}の葉かげがこんもりと茂れる時なり。(注11)

إِذْ يَفِثُ السِّدْرَةُ مَا يَفِثُ ⑭

18. 預言者の目はそこにすいつけられたり。

مَا زَاغَ الْبَصَرُ وَمَا طَغَى ⑮

19. げに彼は主^しの徴の至高なるものを見たり。

لَقَدْ رَأَى مِنْ آيَاتِ رَبِّهِ الْكُبْرَى ⑯

20. さて、ラート※とウッザー※について告げよ、※メッカのクライシュ族の偶像。

أَفَرَأَيْتُمُ اللَّاتَ وَالْعُزَّىٰ ⑰

21. また第三番目の女神マナート※についても。※メッカのクライシュ族の偶像。

وَمَنْوَةَ الثَّالِثَةِ الْاُخْرَى ⑱

22. なんとな、お前たちは男の子を持ちながら、アッラーには女の子というか！

أَلَكُمُ الذَّكَرُ وَلَهُ الْاُنثَىٰ ⑲

23. げにこは不公平なる分配なり。

تِلْكَ اِذَا قَسَمْتَ فِئْرَتَهُ ⑳

24. これ等は、お前たちやその父祖がつけし名前にすぎぬ。アッラーは彼等に如何なる許可^{くだ}も降さざりき。すでに主よりの嚮導^{きやうどう}が彼等に至れりというに、彼等はただ己が空しい憶測や好むところに従うのみ。(注12)

إِنْ هِيَ اِلَّا اَسْمَاءٌ سَبَّيْتُمُوهَا اَنْتُمْ وَاَبَاؤُكُمْ
مَا اَنْزَلَ اللهُ بِهَا مِنْ سُلْطٰنٍ اِنْ يَشْعُرُونَ اِلَّا
الظَّنَّ وَمَا تَهْوٰى اِلْاَنفُسُ وَلَقَدْ جَاءَهُمْ مِنْ
رَبِّهِمُ الْهُدٰى ㉑

25. 人間は、その望むものを得らるべきや？

اَمْ لِلْاِنْسَانِ مَا يَكْتُمُ ㉒

26. 否、来世も現世もアッラーのものなり。

بَعْدُ فَلْيَحْزَنْ الْاٰخِرَةُ وَالْاُولٰٓى ㉓

第二項

27. 天上に如何に多くの天使ありといえども、彼等の執り成しは役立たざるべし、アッラーが思召し且つ嘉したものに許可を与えざる限りは。(注13)

وَكَمْ مِنْ مَّلَكٍ فِي السَّمٰوٰتِ لَا تُغْنِيْ شَفَاعَتُهُمْ
شَيْئًا اِلَّا مِنْ بَعْدِ اَنْ يَّأْذَنَ اللهُ لِمَنْ يَّشَآءُ وَ
يَرْضٰهُ ㉔

注11 「こんもりと茂れる」という言葉は、神の出現を指す。

注12 真の信者は、確かな知識に基づいているが、偶像崇拜者は、その偽りの信仰及び教義に論理的根拠も啓示による権威も有しない。彼は推測や迷信という救いのない事態に陥り、自らの欲望の奴隷となる。29節と同じく、当節も又、折れた革の上に立つ偶像崇拜者の不安定な状況を述べている。

注13 本文中の意味の他、この言葉は、「アッラーの御意志に従う者と、アッラー自身が認めた者を除いて」という意味もある。

28. 来世を信ぜざる者どもは、諸天使に女性の名を付して呼ぶ。

إِنَّ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ لَيُسَمُّونَ الْمَلَائِكَةَ تَسْمِيَةً لَّأُنْثَى ۚ

29. 然しながら、彼等はこの事について何んの知識も有せず、ただ憶測に従うのみ。憶測は真理にとって代ること能わず。

وَمَا لَهُمْ بِهِ مِنْ عِلْمٍ إِنْ يَتَّبِعُونَ إِلَّا الظَّنَّ وَ إِنَّ الظَّنَّ لَا يُغْنِي مِنَ الْحَقِّ شَيْئًا ۚ

30. されば汝、われらが訓戒に背を向け、現世の生活のみを希う者を、願みるな。

فَاعْرِضْ عَنْ مَنْ تَوَلَّىٰ هَٰ عَن ذِكْرِنَا وَلَمْ يُرِدْ إِلَّا الْحَيَاةَ الدُّنْيَا ۚ

31. 彼等の知識の限界は、現世の内なり。げに主は誰が正道を踏みはずし、誰が嚮導に従うかを最も良く知り給う。

ذَٰلِكَ مَبْلَغُهُم مِّنَ الْعِلْمِ إِنَّ رَبَّكَ هُوَ أَعْلَمُ بِمَنْ ضَلَّٰ عَنْ سَبِيلِهِ وَهُوَ أَعْلَمُ بِمَنِ اهْتَدَىٰ ۚ

32. 天にあるもの地にあるもの、挙げてアッラーのものなり。故にアッラーは、悪事を行える者にはそのなせることに応報し、善行を積む者にはその最善なるものを以て報奨し給う。

وَلِلَّهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ لَيَجْزِيَنَّ الَّذِينَ أَسَاءُوا بِمَا عَمِلُوا وَيَجْزِيَنَّ الَّذِينَ أَحْسَنُوا بِالْحُسْنَىٰ ۚ

33. 重大な罪悪やふしだらな行為を避けるならば、僅に微罪を犯すとも、(注14) 主の赦しは宏大なり。主はお前たちを土より創れる時より、また母の胎内にありし時より、お前たちを良く知り給う。されば、己れの純潔をおごりたかぶるなかれ。主は、誰が真の義しき人か、誰れよりも良く知り給う。

الَّذِينَ يَجْتَنِبُونَ كَبِيرَ الْأَثْمِ وَالْفَوَاحِشِ ۚ أَلَمْ نَكْنِزْ لَّكَ رِزْقًا رَّحِيمًا ۚ إِنَّ رَبَّكَ وَاسِعُ الْغَفْرِ ۚ هُوَ أَعْلَمُ بِكُمْ إِذَا أَنْشَأَكُمْ مِّنَ الْأَرْضِ وَإِذَا أَنْتُمْ أَعْتَدُ فِي بُطُونِ أُمَّهَاتِكُمْ ۚ فَلَا تُزَكُّوا أَنْفُسَكُمْ هُوَ أَعْلَمُ بِمَنِ اتَّقَىٰ ۚ

第三項

34. 汝、嚮導から顔をそむけ、
35. 施すものは僅少、それも不承不承出す者を
見ざるか？ (注15)

أَفَرَأَيْتَ الَّذِي تَوَلَّىٰ ۖ
وَءَعْطَىٰ قَلِيلًا وَأَكْدَىٰ ۚ

注14 「微罪」の意味には、悪に傾きかけること、一時の墮落、心を過ぎり跡を残さぬ瞬時の悪意、女性に対する偶然の一瞥、等ある。語源的には(アラビア語で)、一時、急速、不定期、何気ない行為という意味がある。

注15 「不承不承出す」という語が鉱物について使われる時、「ダイヤモンドや宝石を出すのを拒んだ。」という意味となり、坑夫に用いられる時、「採掘の途中で硬い岩床に出くわし、彼はそれ以上掘り進めなかった」となる。

36. そういう者は、見えざるものについて知識を有し、故に見得るか？
37. そういう者はモーゼの書の中にある話を聞かされたことがないのか、
38. また、アブラハムが命令を履行した話を？
39. 重荷を負う者は、決して他人の重荷を負わざるべし。(注16)
40. 人間はただ己れが努力したことのみに得べし。(注17)
41. 而してその成果は、やがて必ず認められん。
42. その時、之に対して十分に報いられるべし。
43. 汝の主は、万物の帰趨なり。(注18)
44. 人を笑わせ、また泣かしむるは彼なり。
45. 死なしめ、生ましむるも彼なり。
46. 彼は男女両性を創り給う、
47. ほとぼしり出た一滴の精液より。
48. 二度目の創造を生むのも、彼なり。
49. 人を富ましめ且つ満足させるのも、彼なり。
50. 彼こそは狼星の主なり。(注19)

أَعِنْدَهُ عِلْمُ الْغَيْبِ فَهُوَ بِرَأْسِهِ ③٦

أَمْ لَمْ يُنَبِّأْ بِمَا فِي صُحُفِ مُوسَى ③٧

وَأَبْرَاهِيمَ الَّذِي وَفَّى ③٨

أَلَا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِزْرَ أُخْرَى ③٩

وَأَنْ لَّيْسَ لِلْإِنْسَانِ إِلَّا مَا سَعَى ④٠

وَأَنْ سَعْيَهُ سَوْفَ يُرَى ④١

ثُمَّ يُجْزَاهُ الْجَزَاءُ الْأَوْفَى ④٢

وَأَنْ إِلَى رَبِّكَ الْمُنْتَهَى ④٣

وَأَنَّهُ هُوَ أَضْحَكَ وَأَبْكَى ④٤

وَأَنَّهُ هُوَ أَمَاتٌ وَأَحْيَا ④٥

وَأَنَّهُ خَلَقَ الرُّوحَيْنِ الذَّكَرَ وَالْأُنثَى ④٦

مِنْ نُّطْفَةٍ إِذَا تُمْنَى ④٧

وَأَنْ عَلَيْهِ النَّشْأَةُ الْأُخْرَى ④٨

وَأَنَّهُ هُوَ أَعْزَزٌ وَأَقْضَى ④٩

وَأَنَّهُ هُوَ رَبُّ الشَّعَرَى ⑤٠

注16 人は皆己れの十字架を背負い、重荷に絶えねばならないであろう。

注17 高い理想と教義を伴う不断の努力の後に、人はその目的を達成する事ができる。当節は、人が額に汗して生計を得るべきだとも示している。

注18 あらゆる因果関係は神に帰する。神は、全ての原因の源、つまり造物主であられる。因果の自然の理法は全宇宙に広まっている。それ事態が始まりではない原因は全て他の原因に起因し、これは又別のものに起因し、この過程が続くのである。

注19 アラブ人はシリウスが彼等の運命を左右すると考え、それを崇拜した。

51. その昔、アードを滅ぼし、(注 20)

وَأَنَّهُ أَهْلَكَ عَادًا الْأُولَى ⑤①

52. またサムードを一人だに容赦せず滅ぼした
は、彼なり。

وَسَمُودًا فَمَا أَغْنَىٰ ⑤②

53. 彼等以前のノアの民を滅ぼせるも、彼なり。
げに彼等は悪逆暴戾^{あくぎやくぼうれい}を極めたり。

وَقَوْمَ نُوحٍ مِّن قَبْلُ إِنَّهُمْ كَانُوا هُمْ أَظْلَمَ وَأَطْغَىٰ ⑤③

54. 彼は破壊せるロトの邑々^{まちまち}を転覆せり。

وَالْمُؤْتَفِكَةَ أَهْوَىٰ ⑤④

55. 故に抵抗し難い懲罰が彼等を覆いたり。

فَغَشَّاهَا مَا عَنَّ ⑤⑤

56. されば主の恩恵のいづれについて、人は汝
に反駁するか? (注 21)

فَيَا أَيُّ آلَاءِ رَبِّكَ تَكْذِبُ ⑤⑥

57. この者は、往古の警告者たちと同じ警告者
なり。

هَذَا نَذِيرٌ مِّنَ النَّذِيرِ الْأُولَى ⑤⑦

58. 審判の日は近づけり。(注 22)

أَرَأَيْتِ الْآزِفَةَ ⑤⑧

59. アッラーに非ずば、何人もそれをそらすこ
と能わ^{あた}ず。

لَيْسَ لَهَا مِنْ دُونِ اللَّهِ كَاشِفَةٌ ⑤⑨

60. お前たちこの言葉に驚くか?

أَفَيْنَ هَذَا الْحَدِيثِ تَعْجَبُونَ ⑤⑩

61. 笑って、泣かざるか?

وَتَضْحَكُونَ وَلَا تَبْكُونَ ⑤⑪

62. いつまでも浮かれ遊ぶか?

وَأَنْتُمْ سِمْدُونَ ⑤⑫

63. アッラーの御前^{おんまへ}にひれ伏して、崇め奉れ。
(注 23)

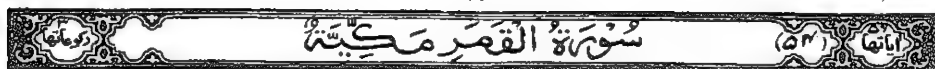
سَبِّحْ فَاسْجُدْ وَاقْبُدْ لِلَّهِ ⑤⑬

注 20 人間がまだ取るに足りない存在であった始まりの頃から、唯一神を支持する論議が為されて来たが、当章は、当節より、この命題立証の歴史を紹介し始めている。

注 21 モハammad 預言者の主張を支持し立証する論拠や神のしるしが、数多く明示されて来た後、当節では、皮肉混じりの哀れみの口調で、「いつまで真実を否定し、不信心の荒野を彷徨い続けるのか」と、強情な不信心者達に告げている。

注 22 当章は、モハammad 預言者の任期のごく初期、神命が下された五年目に啓示された。この時、嘲笑・脅迫・迫害の中で、イスラム教は重大な局面に直面していた。その時、この章の中で、クライシュ族の力を排する預言がなされ、次節にはより強い口調でそれが述べられている (54:46)。

注 23 イスラム教徒と不信心者の混在する前で、モハammad 預言者は当章を暗唱し終え、従者と共に地面にひれ伏したので、不信心者達も又、神の尊厳と栄光のみならずクルアーン暗唱の厳しさに深く打たれ、平伏したかもしれない。以上の事をこの言葉は表している様だ。これは、彼等が神を至高者そして創造主とみなし、彼等の神は神への仲介者に過ぎないと考えた為とも言える (10:19)。このもつともらしく思える出来事は、しかし、20~22 節で、ねつ造者により作り上げられた根拠の無い言い伝えと同じく、モハammad 預言者を中傷する人々が、その出来事の中にモハammad 預言者の過失を見つけ出せると勝手に信じて来たものである。



アル・クアマル

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. その時は近づけり、月も裂けたり。(注1)

إِقْتَرَبَتِ السَّاعَةُ وَالْقَمَرُ ②

3. されど、彼等奇跡を見ても、顔をそむけて云う、「相変わらずの妖術か」と。

وَأَن يَرَوْا آيَةً يُعْرَضُوا وَيَقُولُوا سِحْرٌ ③

4. 彼等は真理を拒否し、己れの幻想に従う。
然しながら、神の決定はすべて必ず実現す。

مُتَسْتَقِرٌّ ④
وَكَذَّبُوا وَاتَّبَعُوا أَهْوَاءَهُمْ وَكُلٌّ أُمَمٌ مُّتَقَنَةٌ ⑤

(注2)

注1 月の分裂が肉眼で見えるか否かいずれにしても、それはあらゆる自然の法則に反する。この出来事に関して確固たる歴史上の確証はないとする意見を否定するのは難しい。他方、神の神秘を全て推し測ったり、自然のなぞを完全に理解できる者はない。地球のかなりの地域に影響を及ぼす様な出来事が、世界の天文台で観測されなかったり、歴史書に記されなかったとは考えられない。しかしこの出来事は、モハammad預言者の言葉を集録した信頼するに足るブハリやムスリムに記されており、信頼できる筋の伝承に語り継がれ、イブン・マスードの様なモハammad預言者の学のある友人に記録されているので、並はずれて重大な自然現象が幾つかモハammad預言者の時代に起きた事を示すものである。ラズイーを含むクルアーンの注釈者達は、この出来事は月食だとして難問を解決しようと試みた。イマーム・ガザーリ、シャー・ワリウッラーも、月は実際に分裂したのではなく、神が見物人にその様に見える様計られたという見解をとった。イブン・アバース、シャー・アブトゥルアズィーズによれば、それはある種の月食となっている。しかしクルアーンに述べられた力強い言葉を考慮すれば、この出来事は単なる月食以上のものの様である。不信心者に執拗に要求された時、モハammad預言者が素晴らしい奇跡を行ってみせたのは事実だ(ブハリとムスリム参照)。ヘビに変わった杖が呪術師に向けられたモーゼの幻だったように、この出来事は、友人や不信心者に向けられたモハammad預言者の幻だったようである。あるいは、引き潮と同時にモーゼが杖を使って海水を打つ事で、奇跡とは如何なるものかを示した様に、いずれかの天体が月の前にあって、見物人には月が割れた様に見える時、神がモハammad預言者に月を割る奇跡を見せる様にお命じになったのかもしれない。しかし深い宗教的意義を備えた最も説得力ある解釈は、太陽がペルシャ人の国の象徴である様に、月はアラブ国家の紋章であり、その政治力の象徴だという事実もある。カイバルのユダヤの指導者ホイヤビン・アクタブの娘サフィヤが月がひびの上に落ちて来る夢を見たとき父親に告げた時、彼は、「お前は、アラブの指導者との結婚を望んでいるのであるまいな。」と言い、その顔を打った。カイバル墮落の後、サフィヤがモハammad預言者に嫁いだ時、彼女の夢は実現した。同じく、アイシャは、三つの月が彼女の部屋に落ちる夢を見たが、これは、モハammad預言者、アブーバクル・オマルが次々にそこに葬られた時に成就した。カマル(月)のこの象徴的な意味からすれば、53:58で不信心のアラブ人が強迫に用いたその政治力が、既に崩壊の時を迎えていたと、当節は示している事になる。この場合の「その時」という語は、クライシュの指導者の大方が死に、彼等の勢力撲滅のきっかけとなったバトルの戦を指しているのだらう。この様に当節には、宣告後八・九年して見事実現した強力な預言が収められている。更に数人の作家の言を借りれば、「月も裂けたり」というアラビア語は、「その出来事は明らかになった」と意味するのである。この意味からすれば、「クライシュ族の力の崩壊の時が来た。モハammad預言者が真の神の使者である事が明白となろう。」ということを当節を表している事になる。7:108も参照の事。

注2 クライシュの政治力崩壊は神により命じられたものであり、神の命は実現するに違いない。

5. その中に警告を含めるさまざまな消息は、すでに彼等に伝えられたり。
6. そは完全無欠の智慧なり。されど、その警告は彼等を益せず。
7. されば汝、彼等を顧みるな。^{しか}而して待て、召喚者が彼等をいやなところへ呼び出すその日まで。
8. その日彼等は、^{うなだ}項垂れ日を伏せ、^{いご}蝗の飛び散る如く墓より出て、(注3)
9. 召喚者の許へ^{ほと}急ぎ行かん。「こは^{かんなん}艱難の日なり」と嘆きながら。(注4)
10. 彼等以前にも、ノアの民が真理を拒否したり。然り、彼等はわれらの僕を認めず、「狂人なり」と罵りて、排斥せり。
11. 故に彼はその主に「我は敗れたり。汝、来て我を助けたまえ」と祈りたり。
12. 故にわれらただちに天の水門を開きたれば、水は滝の如く降り下りたり。
13. われらまた地上のいたるところに突然泉を噴出させたり。されば二つの水は命ぜられた目的のために合流せり。
14. われらはノアを、板と釘もて造れるものの上に乗すれば、
15. その船はわれらの眼下に浮びたり。こはみなから排斥された者への報奨なり。
16. われら^{これ}之を後の世の人々のために、一つの^{しるし}神兆として遣したれど、果たしてこの種の警告を甘んじて受くる者ありや？

وَلَقَدْ جَاءَهُمْ مِنَ الْأَنْبَاءِ مَا فِيهِ مُزْدَجَرٌ ⑤

حِكْمَةٌ بَالِغَةٌ فَمَا تُغْنِ التَّذْذِرَ ⑥

فَتَوَلَّ عَنْهُمْ يَوْمَ يَدْعُ الدَّاعِ إِلَى شَيْءٍ تُكْرَهُ ⑦

خُشْعًا أَبْصَارُهُمْ يَخْرُجُونَ مِنَ الْأَجْدَاثِ كَأَنَّهُمْ جَرَادٌ مُنتَشِرٌ ⑧

مُهْطِعِينَ إِلَى الدَّاعِ يَقُولُ الْكَافِرُونَ هَذَا يَوْمٌ عَاسِرٌ ⑨

كَذَّبَتْ قَبْلَهُمْ قَوْمُ نُوحٍ فَكَذَّبُوا عَبْدَنَا وَقَالُوا مَجْنُونٌ وَازْدَجَرُوا ⑩

فَدَعَا رَبَّهُ أَنِّي مَغْلُوبٌ فَانْتَصِرَ ⑪

فَفَتَحْنَا أَبْوَابَ السَّمَاءِ بِمَاءٍ مُنْهَرٍ ⑫

وَفَجَّرْنَا الْأَرْضَ عُيُونًا فَالْتَقَى الْمَاءُ عَلَى أَمْرٍ قَدْ قُدِرَ ⑬

وَحَمَلْنَاهُ عَلَى ذَاتِ أَلْوَاحٍ وَدُسْرٍ ⑭

تَجْرِي بِأَعْيُنِنَا جَزَاءَ لِمَن كَانَ كُفِرَ ⑮

وَلَقَدْ تَرْكَنَّا إِلَىٰ آيَةٍ هَٰذِهِ مِن مَّا دَكَّرَ ⑯

注3 此所にある「墓」は不信心者の家を指す。不信心者は精神的な生活を全く欠いているので、クルアーンの数箇所において、彼等は死人に例えられて来た (27:81, 35:23)。

注4 クライシュがほんの二・三年前にメッカから追放し、その首に懸賞金をかけた召喚者(モハammad預言者):を、彼等の首都の門前に見た時、彼等が驚きうろたえた様子を、当節及び前二節は、鮮やかに描いている。

17. あの時のわが懲罰のもの凄さよ、わが警告の確かさよ！

فَكَيْفَ كَانَ عَذَابِي وَنُذْرِي ⑮

18. げにわれらは、クルアーンを理解し易く且つ記憶し易いようにつくりたり。されど、この警告に留意する者果たしてありや？

وَلَقَدْ يَسَّرْنَا الْقُرْآنَ لِلذِّكْرِ فَهَلْ مِنْ مُدَكِّرٍ ⑯

19. アード族も真理を拒否せり。あの時のわが懲罰のもの凄さよ、わが警告の確かさよ！

كَذَّبَتْ عَادٌ فَكَيْفَ كَانَ عَذَابِي وَنُذْرِي ⑰

20. うち続く災厄の日に、われらは荒れ狂う暴風を彼等に吹きつけば、(注5)

إِنَّا أَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ رِيحًا صَرْصَرًا فِي يَوْمٍ نَحْسٍ مُسْتَمِرٍّ ⑱

21. 根こそぎにされた椰子の幹の如く、人々を引き裂けり。

تَنْزِعُ النَّاسَ كَأَنَّهُمْ أَعْجَازُ نَخْلٍ مُنْقَعِرٍ ⑲

22. あの時のわが懲罰のもの凄さよ、わが警告の確かさよ！

فَكَيْفَ كَانَ عَذَابِي وَنُذْرِي ⑳

23. げにわれらは、クルアーンを理解し易く且つ記憶し易いようにつくりたり。されど、この警告に留意する者果たしてありや？

وَلَقَدْ يَسَّرْنَا الْقُرْآنَ لِلذِّكْرِ فَهَلْ مِنْ مُدَكِّرٍ ㉑

第二項

24. サムードも警告者を拒めり。(注6)

كَذَّبَتْ ثَمُودُ بِالنُّذُرِ ㉒

25. 彼等は云えり、「何んと、我等の中の一人の男に、それもただの人間の云うことに従えとな！ そは明らかな誤りなり、狂気の沙汰なり。

فَقَالُوا أَبَشَرًا مِثْلًا وَاحِدًا تَتَّبِعُهُ إِنَّا إِذَا تَفَتَّى ضَلَلٍ وَسُعُرٍ ㉓

26. 我等の中で彼にのみ訓戒が啓示されたというか？ 否、彼は太嘘つきなり」と。

إِنَّمَا الذِّكْرُ عَلَيْهِ مِنْ بَيْنِنَا بَلْ هُوَ كَذَّابٌ أَشِرُّ ㉔

27. 「明日彼等は、誰が大嘘つきなるかを知るべし。

سَيَعْلَمُونَ غَدًا مَنِ الْكَذَّابُ الْأَشِرُّ ㉕

28. われらは彼等を試みんがために牝駱駝を送らん。さればサーリフよ、じつと堪えて彼等を監視せよ。

إِنَّا مُرْسِلُوا النَّاقَةِ فَتَنَّهُ لَهَا فَا مَرُّ تَقْبِهُمُ وَاضْطِرُّ ㉖

注5 当節は、好运・不運という特定の時があると意味しているのではなく、アード族にとりその日は不運であったと示しているのである。

注6 全ての預言者は神に任じられ、彼等の啓示は神より生じ、類似した永遠の基本的真実を含んでいるので、一人の預言者を拒めば、預言者全てを拒絶する事となる。ノアの一族アード、ロトの一族サムードは、実際はそれぞれの預言者のみを拒んだだけであったが、全ての預言者を排したと当節に書かれてあるのは、上記の理由からである。

29. 而して彼等に、水は人間と駱駝で共通に使用し、それぞれ交替に飲めと告げよ」

وَيَسِّرْ لَهُمُ أَنَّ الْمَاءَ قِسْمَةٌ بَيْنَهُمْ كُلٌّ شَرْبٍ
مُّحْتَصِرٌ ⑳

30. 然るに彼等は仲間を呼びよせたとれば、その男は刀を以て駱駝の臍を切り之を不具となす。

فَنَادُوا صَاحِبَهُمْ فَتَعَاطَى فَعَقَرَ ㉑

31. あの時のわが懲罰のもの凄さよ、わが警告の確かさよ！

كَيْفَ كَانَ عَذَابِي وَنُذْرِي ㉒

32. われら彼等に一声の轟音を送れば、彼等はいけがきを作る枯木の如くなり果てり。(注7)

إِنَّا أَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ صَيَّةً وَاحِدَةً وَكَانُوا
كَهَشِيمِ الْحِثْيِ ㉓

33. げにわれらは、クルアーンを理解し易く、且つ記憶し易いようにつくりたり。されど、この警告に留意する者果してありや？

وَلَقَدْ يَسَّرْنَا الْقُرْآنَ لِلذِّكْرِ فَهَلْ مِنْ مُدَكِّرٍ ㉔

34. ロトの民も警告者を拒めり。

كَذَّبَتْ قَوْمُ لُوطٍ بِالنُّذْرِ ㉕

35. さればわれらは、彼等に石の嵐を送り、黎明にロトの家族のみを救いやりぬ、

إِنَّا أَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ حَاصِبًا إِلَّا آلَ لُوطٍ نَجَّيْنَاهُمْ
بِسَحَرٍ ㉖

36. われらが恩寵によりて。われらはかくの如く、感謝する者に報ゆ。

نِعْمَةٌ مِّنْ عِنْدِنَا كَذَلِكَ نُجْزِي مَنْ شَكَرَ ㉗

37. 彼は確かにわれらの懲罰を彼等に警告せり。されど彼等はその警告を疑えり。

وَلَقَدْ أَنْذَرَهُمْ بَطْشَتَنَا ثُمَّ تَرَدُّوا بِالنُّذْرِ ㉘

38. それどころか、彼等は策略を用いて、彼をその賓客から引き離さんと謀りぬ。さればわれらは、彼等の目をつぶし、「わが懲罰と警告を、とくと味わえ」と告げたり。(注8)

وَلَقَدْ رَاوَدُوهُ عَنْ ضَيْفِهِ فَطَسَّأْنَا أَعْيُنَهُمْ
فَذُوقُوا عَذَابِي وَنُذْرِي ㉙

39. 而して、翌朝早く、彼等の上にやむことなき懲罰が下りたり。

وَلَقَدْ صَبَّحَهُمْ بُكْرَةً عَذَابٌ مُّسْتَقَرٌّ ㉚

注7 不信心者は完全に鎮圧された。あるいは、生け垣をつくる際、職人の手で削り落とされ、刈り株を押しつぶされ、集められた枯木の様に、彼等は神の目には価値の無いものとなった。

注8 ロトの一族は彼の客を捕らえようとしたが、客は隠れて見つけれなかったようだ。又は、神のお計いで、ロト一族の注意は彼等からそれたと意味する。

40. 「汝等、わが懲罰と警告を、とくと味わえ」

فَذُوقُوا عَذَابِي وَنَذِيرِي ﴿٤٠﴾

41. げにわれらは、クルアーンを理解し易く、
且つ記憶し易いようにつくりたり。されど、
この警告に留意する者、果してありや？

وَلَقَدْ يَسَّرْنَا الْقُرْآنَ لِلذِّكْرِ فَهَلْ مِنْ مُدْكِرٍ ﴿٤١﴾

第三項

42. げに警告者は、ファラオの民にも来たり。

وَلَقَدْ جَاءَ آلَ فِرْعَوْنَ النَّذِيرُ ﴿٤٢﴾

43. 彼等は、われらの神兆をすべて認めざりき。
さればわれらは、強力な全能の神の懲らしめ方で彼等を襲いたり。(注9)

كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا كُلِّهَا فَأَخَذْنَاهُمْ أَخَذَ عَزِيزٌ مُقْتَدِرٌ ﴿٤٣﴾

44. お前たち不信心者ども、あのものどもより
優れるというか？ それとも、お前たちだ
けは免除されると經典に記されているとで
もいうか？ (注10)

أَلْقَارُكُمْ خَيْرٌ مِنْ أُولَئِكَ أَمْ لَكُمْ بَرَاءَةٌ فِي
الزُّبُرِ ﴿٤٤﴾

45. はたまた「我等は常勝軍なり」というか？

أَمْ يَقُولُونَ نَحْنُ جَيِّعٌ مُنتَصِرٌ ﴿٤٥﴾

46. いまに見ておれ、彼の軍勢は必ず潰滅し、
敗走せん。(注11)

سَيُهْزَمُ الْجَمْعُ وَيُوَلُّونَ الدُّبُرَ ﴿٤٦﴾

47. 然り、審判の日こそ彼等の約束された期限
なり。その時こそ苛烈苦汁^{がれつくじはう}を味わわん。

بَلِ السَّاعَةِ مَوْعِدُهُمْ وَالسَّاعَةُ أَذًى وَأَمْرٌ ﴿٤٧﴾

48. げに罪人どもは、迷誤と狂妄の中にあり。

إِنَّ الْجَحِيمِينَ فِي ضَلَالٍ وَسُعُرٍ ﴿٤٨﴾

49. その日彼等は、俯きて業火へと引きずられ、
「地獄の感触を味わえ」と云われん。

يَوْمَ يُسْجَبُونَ فِي التَّارِ عَلَى وُجُوهِِهِمْ ذُوقُوا
مَسَّ سَقَرٍ ﴿٤٩﴾

注9 ファラオは非常に強力な君主であった。彼は自らをイスラエル最高の君主とみなした(79:25)。その為、モーゼとアロンの神・全能の神の力がこの自称君主に振るわれ、彼は完全に滅ばされた。

注10 当節は、形を変えて偶像崇拝者クライシュへの警告を繰り返している。「ノア、フード、ロトあるいはモーゼを拒んだ者より、お前たちは幾分なりともましなのか」と彼等に尋ねている。又は次の様に述べている。「啓示書に記された神の約束を受け入れるなら、お前たちは、預言者モハammadを拒む事で罰せられる事はないであろう。」

注11 当節に含まれる強い預言は、メッカの軍隊がバドルの戦いで喫した徹底的な敗北に関するものである。イスラム教徒は全く劣勢だったので、戦いが始まった時、預言者モハammadは自分のテントの中で、謙そんと苦悩の中に、次の様に注目すべき言葉で神に祈った。「神よ、どうか御約束が成就されますように。このイスラム教徒の小隊が全滅すれば、この世に二度と神を崇める者は生じませんまい。」(ブハリ) 祈り終えた後、モハammad預言者はテントから出、戦場に向いて当節を朗唱した。

50. げにわれらは、一切を、限定された規準のもとに創りたり。(注12)

إِنَّا كُلَّ شَيْءٍ خَلَقْنَاهُ بِقَدَرٍ ﴿٥٠﴾

51. しかもわれらの命令はただ一言にして、瞬きの如し。(注13)

وَمَا أَمْرُنَا إِلَّا وَاحِدَةٌ كَلَمْحٍ بِالْبَصَرِ ﴿٥١﴾

52. げにわれらは、かつてお前たちと同じ徒輩を滅ぼせり。されど、この警告に留意する者果してありや?

وَلَقَدْ أَهْلَكْنَا أَشْيَاءَكُمْ فَهُمْ مِنْ مُدْكِرٍ ﴿٥٢﴾

53. 彼等の所業はすべて帳簿に記載せらる。(注14)

وَكُلُّ شَيْءٍ فَعَلُوهُ فِي تَرْتِيبٍ ﴿٥٣﴾

54. 大小一切のこと、悉く記載せらる。

وَكُلُّ صَغِيرٍ وَكَبِيرٍ مُسْتَطَرٌ ﴿٥٤﴾

55. げに義しい者は、花園と河川との間に住み、

إِنَّ الْبُتَقِينَ فِي جَنَّتٍ وَنَهْرٍ ﴿٥٥﴾

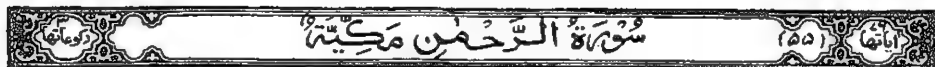
56. 全能の王者の御前で永遠且つ栄誉の住居を賜わらん。

مَعَ فِي مَقْعَدِ صِدْقٍ عِنْدَ مَلِكٍ مُقْتَدِرٍ ﴿٥٦﴾

注12 何事にも断固たる基準がある。それには定められた時と場所が含まれる。

注13 バドルの戦場におけるメッカ人の敗北は青天の霹靂であつた為、それは覆しようのないものであつた。敵の力は、またたく間に失せた。

注14 人の最小限の行為は、良きにつけ悪きにつけ、因果関係による不可避の結果を生み出し、消す事の出来ない印象を跡に残す。



アル・ラフマーン

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 إِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①
2. そは慈悲深き神なり、 الرَّحْمَنُ ②
3. クルアーンを教えたるは。 عَلَّمَ الْقُرْآنَ ③
4. 彼は人間を創造し、(注1) خَلَقَ الْإِنْسَانَ ④
5. 之に言葉を教えたり。 عَلَّمَهُ الْبَيَانَ ⑤
6. 日月は一定の計算に従いその軌道を走る。 الشَّمْسُ وَالْقَمَرُ بِحُسْبَانٍ ⑥
7. 草木は神の御旨に恭順す。(注2) وَالنَّجْمُ وَالشَّجَرُ يَسْجُدَانِ ⑦
8. 彼天を高く揚げ、権衡を据えたるは、(注3) وَالسَّمَاءَ رَفَعَهَا وَوَضَعَ الْمِيزَانَ ⑧
9. お前たちが権衡を不正に扱うことなからしめんがためなり。(注4) أَلَّا تَطْغَوْا فِي الْمِيزَانِ ⑨
10. されば、公明正大に計量し、決して少く計るなかれ。 وَأَقِمْوْا الْوِزْنَ بِالْقِسْطِ وَلَا تُخْسِرُوا الْمِيزَانَ ⑩
11. 彼は大地をその被造物のために備えたるは、 وَالْأَرْضَ وَضَعَهَا لِلْأَنَامِ ⑪

注1 「人間」という語は、一般的な意味以外に、此所では完全なる人、モハammad 預言者を指す。彼の身には、神の属性が最も完全な形で表されている。この様に、人間が魂の向上の頂点に達し、その身に神の属性を表す様、神の慈悲で人間をお作りになったと、当節は示している。

注2 前節と共に読まれる当節は、最大の天体から最小の茎のない植物に至るまで、万物は一定の法則に支配され、寸分違わずその役割を果たすと示している。無数にある天体系の一つ、巨大な太陽系において、全ての天体は定められた軌道を安全に運行し、そこからはずれる事は決してない。

注3 全宇宙は一定の法則に支配され、それを構成する各部は、構造と動きのみごとな調和を遂げ一つに結びついている。この異物間の調和と均衡が少しなりとも乱れれば、全宇宙はばらばらになってしまうであろう。しかし神は、人間の及ばぬ、唯一神の支配の下で、世界を統制する法、全てを維持されて来られた。

注4 全宇宙に、全てを包括する調和があるように、万物の盛長である人間もまた、均衡を保ち、すべての人を公平に扱い、極端を避け、創造主への義務を果たして中庸を重んじる様命じられている。

12. そこにはさまざまな果物あり、^{きや}葵かぶる
^{なつめやし}蜜椰子あり、

فِيهَا فَاكِهَةٌ مِّمَّا الْخَلْ ذَاتُ الْاَكْمَامِ ١٢

13. 穀かぶる穀物あり、^{ふくいく}馥郁たる草木あり。

وَالْحَبُّ ذُو الْعَصْفِ وَالرَّيْحَانُ ١٣

14. 然らばお前たち両者、人間と^{じん}妖霊ども、主
^{おんちよう}の恩寵のいずれを否むか？（注5）

يَا أَيُّ الْاِءِ رَبِّكُمَا تُكْذِبِينَ ١٤

15. 彼は人間を陶器を焼くが如き粘土より創造し、（注6）

خَلَقَ الْاِنْسَانَ مِنْ صَلْصَالٍ كَالْفَخَّارِ ١٥

16. 妖霊をば^{じん}炎より創造せり。（注7）

وَخَلَقَ الْجَانَّ مِنْ مَّارِجٍ مِنْ نَّارٍ ١٦

17. 然らばお前たち両者、主の^{おんちよう}恩寵のいずれを
^{いん}否むか？

يَا أَيُّ الْاِءِ رَبِّكُمَا تُكْذِبِينَ ١٧

18. 彼は二つの東の主、二つの西の主なり。（注8）

رَبُّ الشَّرْقَيْنِ وَرَبُّ الْغَرْبَيْنِ ١٨

19. 然らばお前たち両者、主の^{おんちよう}恩寵のいずれを
^{いん}否むか？

يَا أَيُّ الْاِءِ رَبِّكُمَا تُكْذِبِينَ ١٩

注5 「否む」の主語は、庶民と妖霊の両者であるが、この「両者」は、又、二種類の人、信者と不信心者、主と従者、富める者と貧しき者、白人と有色人を指すのかもしれない。（アラビア語ではこの「否む」は、両数形という2つの主語をとる形で、書かれておりそれは、様々な節に含まれる戒律の威厳を示す為、それを強調するのに用いられたともいえる。この様な両数形はアラビア語でよく使われる。）50：25も参照の事。モハッマド預言者は、当節が啓示される時、居合わせた信者が次の言葉を口にする事で返答すべきだと述べたとされる。「主よ、我々は、あなたのいかなる恩寵も否むことなどいたしません。」と。

注6 天空の創造と太陽・月の配置、そして地球とそこに育つ植物の成長について語った後、当章は、当節において、人間の事に触れている。乾いて沓のする土から人間が作られたという事は、人間が会話の能力を潜在的に持つものから作られたと示しているのかもしれない。「粘土」は異質な物で打たれた時にのみ音を出すので、この言葉は、人間の応答力には神命を受けられる事が必要だと示すのに、処所で使われている。クルアーンでは、人間の創造及び精神発達異なる段階を示すのに、三つの言葉が使われて来た。第一段階は「ちりからつくられた」（3：60）、第二段階は「粘土からつくられた」（6：3）、これは、神の言葉を受けた後、人間は識別力を得、これにより善・悪の判断ができる様になったと意味するものである。第三段階は「陶器」の段階と呼ばれ、人間は試され、試練の炎をくぐり抜ける様定められているのである。あらゆる試練に耐え、魂の成熟が完全の域に達して初めて、人は神に受け入れられるのである。

注7 15：28 参照。

注8 地上のどの地点を取ってみても、他の地点との関連で言えば東と西である。この事は、「二つの東」と「二つの西」として書かれてある。又、地球は丸いので、東半球の東は西半球の西であり、西半球の東、すなわち東半球の西である。この為、二つの東と二つの西が存在するのである。現代の政治用語では、二つの東は中近東と極東を、二つの西はヨーロッパとアメリカを指している。全世界の主は神であられる為、クルアーンの光はまず東に広まり、次いで西を照らす。この様にして39章70節に記されている「全地球が、神の光で照らされるであろう」という預言が成就される。

20. 彼は二つの海を流れさせり。二つの海はいつの日か相い見えん。(注9)
21. いま二つの海の間には隔壁ありて、互に浸食することを得ず。
22. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？
23. どちらの海からも真珠と珊瑚出づ。(注10)
24. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？
25. 山の如く海面に聳え立つ船も、また彼の有なり。(注11)
26. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？
- 第二項
27. この世にあるものはすべて消滅す。(注12)
28. 独り莊嚴かつ栄誉の主のみ永遠に存在す。(注13)
29. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

مَرَجَ الْبَحْرَيْنِ يَلْتَقِيَانِ ١٩

بَيْنَهُمَا بَرْزَخٌ لَا يَبْغِيَانِ ٢٠

فَيَايَا آلَاءَ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ٢١

يَخْرُجُ مِنْهُمَا اللُّؤْلُؤُ وَالْمَرْجَانُ ٢٢

فَيَايَا آلَاءَ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ٢٣

لَهُ الْبُحَارُ الْأُنْشَلُتُ فِي الْبَحْرِ كَالْأَعْلَامِ ٢٤

فَيَايَا آلَاءَ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ٢٥

كُلُّ مَنْ عَلَيْهَا فَانٍ ٢٦

وَيَبْقَى وَجْهُ رَبِّكَ ذُو الْجَلَالِ وَالْإِكْرَامِ ٢٧

فَيَايَا آلَاءَ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ٢٨

注9 「二つの海」とは、紅海と地中海、又は大西洋と太平洋が考えられるが、特に前者を指しているようだ。当節には偉大な預言が含まれているが、これはスエズとパナマ両運河の建設により成就された。前者は紅海と地中海を、後者は大西洋と太平洋を結び付けた。世界はこの預言の成就を見る為に、13世紀もの間待たねばならなかった。あるいは、「2つの海」は、自然科学と精神科学を示しているのかもしれない。又、相反すると誤認された自然の法と神の啓示は、片や神の業であり、他方が神の言葉であるので、互いに確証し合うものである。

注10 不思議な事に、真珠も珊瑚もスエズ・パナマ両運河に見られる。

注11 この言葉は、山と同じく海を支配する、現代のレビ族の人を指している様だ。当章は、貿易拡大に海路を利用して手にした、西側諸国の進歩と繁栄に言及しているのかもしれない。

注12 全宇宙は衰退と死を避ける事はできず、いつかは衰びる運命にある。神のみがとどまれるであろう。それは神が独自に存在し、何に頼ることもなく存続できる存在だからである。

注13 地球、天体、物質界は全て無に帰す事となっているので、なおさら人間の理性は不死身の存在を求める。それは、全宇宙を創造され、万物の始まりであり、終わりでもある、神である。当節及び前二節は、同時に働く二つの不変の法則を示している。(1)万物は滅び死に行く運命にある。(2)神の法に従えば、生命の継続は保証される。

30. ^{あめつち}天地にあるすべてのものは、彼に訴え請う。
日々彼は異なる状態で自らを表わす。
يَسْأَلُهُ مَنْ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ كُلَّ يَوْمٍ هُوَ فِي شَأْنٍ ٣٠
31. ^{しか}然らばお前たち両者、主の恩寵^{おんちよう}のいずれを
否^{いな}むか？
فَيَا أَيُّهَا الَّذِينَ كَفَرُوا ۖ كَذِبٌ ۖ ٣١
32. やがてわれらはお前たちを審判すべく時を
つくらん、汝等二つの重荷よ！（注14）
سَنَفْرُغُ لَكُمْ أَيَّهَ الثَّقَلَيْنِ ٣٢
33. ^{しか}然らばお前たち両者、主の恩寵^{おんちよう}のいずれを
否^{いな}むか？
فَيَا أَيُّهَا الَّذِينَ كَفَرُوا ۖ كَذِبٌ ۖ ٣٣
34. ^{ジン}妖霊と人間^{ともがら}の輩よ、天地^{あめつち}の限界を越え得る
ならば、越えてみよ。されど主の権能の助
けなしには、お前たち之^{これ}を越える能わず。
يَعِشَرَ الْحِجِّ وَالْإِنْسِ إِنْ اسْتَطَعْتُمْ أَنْ تَنْفُذُوا مِنْ أَقْطَارِ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ فَانْفُذُوا ۚ لَا تَنْفُذُونَ إِلَّا بِسُلْطَانٍ ٣٤
35. ^{しか}然らばお前たち両者、主の恩寵^{おんちよう}のいずれを
否^{いな}むか？
فَيَا أَيُّهَا الَّذِينَ كَفَرُوا ۖ كَذِبٌ ۖ ٣٥
36. 火焰と溶銅がお前たちに浴びせられん。お
前たちは自らを守り得ざるべし。（注15）
يُرْسَلُ عَلَيْكُمَا شُوَاظٌ مِّنْ نَّارٍ وَنُحَاسٌ فَلَا تَنْتَصِرُونَ ٣٦
37. ^{しか}然らばお前たち両者、主の恩寵^{おんちよう}のいずれを
否^{いな}むか？
فَيَا أَيُّهَا الَّذِينَ كَفَرُوا ۖ كَذِبٌ ۖ ٣٧
38. 天が裂け割れて、赤皮^{あか}の如く赤くなるとき
あらん。（注16）
فَإِذَا انشَقَّتِ السَّمَاءُ فَكَانَتْ وَرْدَةً كَالدِّهَانِ ٣٨
39. ^{しか}然らばお前たち両者、主の恩寵^{おんちよう}のいずれを
否^{いな}むか？
فَيَا أَيُّهَا الَّذِينَ كَفَرُوا ۖ كَذِبٌ ۖ ٣٩

注14 二つの重要な物を意味する「二つの重荷」は、本文が示す通り、人とジンを指すと見えよう。又次の様な解釈もある。アラブ人と非アラブ人。現代政治用語に言う二大主要圏、つまり一方が、ソ連・中国とその同盟国、もう一方がアメリカ合衆国とその同盟国。資本階級と労働者階級。これ等二大連合が行動するやり方では、彼等は常に道徳的な争いから抜け出る事ができず、科学技術開発分野で何世紀にも渡って積み上げられた人々の業績を完全に打ち壊し、地上の生命をほぼ絶滅させてしまうかもしれない。当節には、この事への警告が含まれているようだ。

注15 当節は、二つの対立する陣営にふりかかる、最も破壊的で恐ろしい罰を示している。全人類の文明を焼き尽くす恐れのある、恐ろしい大火に世界は瀕している様だ。

注16 恐ろしい罰を如何にありありと描いている事か。

40. その日、人間も^{ジン}妖霊もその罪について問われることなからん。(注17)

فَيَوْمَئِذٍ لَا يَسْأَلُ عَنْ ذُنُوبِهِ إِنْسٌ وَلَا جَانٌّ ۝

41. 然^{しか}らばお前たち両者、主の恩寵^{いんおん}のいずれを否^{いな}むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبِينَ ۝

42. 罪を犯せし者はその印^{しるし}でわかり、前髪と両足を捕えられん。

يَعْرِفُ الْمُجْرِمُونَ بِسِينِهِمْ فَيُؤْخَذُ بِالنَّوَاصِي وَالْأُقْدَامِ ۝

43. 然^{しか}らばお前たち両者、主の恩寵^{いんおん}のいずれを否^{いな}むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبِينَ ۝

44. こは罪を犯せし者が認めざりし地獄なり。

هَذِهِ جَهَنَّمُ الَّتِي يُكَذِّبُ بِهَا الْمُجْرِمُونَ ۝

45. 彼等は煮えたぎる熱湯の中をめぐりさまよわん。

يَطُوفُونَ بَيْنَهَا وَبَيْنَ حَبِيبٍ ۝

46. 然^{しか}らばお前たち両者、主の恩寵^{いんおん}のいずれを否^{いな}むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبِينَ ۝

第三項

47. されど、主の御前^{みまへ}に立つことを畏れる者には、二つの樂園あり。(注18)

وَلِمَنْ خَافَ مَقَامَ رَبِّهِ جَنَّتٌ ۝

48. 然^{しか}らばお前たち両者、主の恩寵^{いんおん}のいずれを否^{いな}むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبِينَ ۝

49. そこにはうっそうと茂れる樹木あり。(注19)

ذَوَاتًا أَفْكَانٌ ۝

注17 犯罪者の悪事は、彼等がその行為を犯したか否か聞かれないうちに、その顔に大書きされるであろう。クルアーンの他所(41:21)で示されている通り、不信心者の身体の諸器官ですら、彼等に不利な証言をするであろう。

注18 「二つの樂園」とは次の様の事を意味する。(1)善良なる人生のもたらす心の平安。(2)物質快樂を追い求める人生に生じる苦しみからの解放。「樂園」は、現世で神の為に自らの欲望を捨て去る事であり、今一つは、来世で神の喜びを与えられる事である。真の信者は絶えず現世において神の恩恵に浴し、苦しみにかき乱れる事もない。これは地上の樂園であり、神を畏れる者に授けられ、彼は常にそこに住まうのである。来世に約束された天国とは、現世の樂園の映像でしかなく、現世でその様な人が享受する精神的恵を具現化したものである。クルアーンが10:65及び41:32で述べているのは、真の信者のこの樂園にいる様な状態である。「二つの樂園」は又、二本の川からの灌漑で土壌豊かな二つの谷、ジャイハーンとサイハーンを指してもいよう。フラートとナイルは、ハデイスによれば天国の川となっている(ムスリム)。この二つの谷はオマルの時にイスラム教徒の手に陥た。

注19 現世において、真の信者は神の為に様々な辛苦に耐え、あらゆる善行を行うので、来世で、その試練や善行は、様々な色・味を持つ花や果実に形を変えるであろう。

50. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَيَا أَيُّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكْذِبَانِ ⑤

51. 両園には二つの流泉あり。(注 20)

فِيهِمَا عَيْنَانِ تَجْرِيَانِ ⑥

52. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَيَا أَيُّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكْذِبَانِ ⑥

53. そこにはあらゆる種類の果物が二種あり。(注 21)

فِيهِمَا مِنْ كُلِّ فَاكِهَةٍ زَوْجَانِ ⑦

54. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَيَا أَيُّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكْذِبَانِ ⑥

55. 彼等は、敷物の上の錦の裏つけたる臥榻に身を横たえん。両園の熟れた果実は手の届くところにあらん。(注 22)

مُتَّكِئِينَ عَلَى فُرُشٍ بَطَآئِنُهَا مِنْ إِسْتَبْرَقٍ ⑧
جَنَّاتٍ الْبُحْتَيْنِ ⑨ دَانِ ⑩

56. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَيَا أَيُّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكْذِبَانِ ⑥

57. そこには、いまだかつて人間も妖壺も触れざりし嬌羞の処女あらん。(注 23)

فِيهِنَّ قُصُورَاتُ الظَّرْفِ لَمْ يَطْمِثْهُنَّ إِنْسٌ قَبْلَهُمْ
وَلَا جَانٌّ ⑪

58. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを否むか？

فَيَا أَيُّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكْذِبَانِ ⑥

59. 彼女らは紅玉や真珠の如し。(注 24)

كَأَنَّهُنَّ الْيَاقُوتُ وَالْمَرْجَانُ ⑫

注 20 「二つの流泉」とは、ホーククラー（神への義務）やホーククルエバード（イスラム教徒の同胞への義務）の精神の具象化であろう。イスラム教徒は現世でこれ等を完全に果たせなければならない。この二つの義務の履行が、来世で二つの泉と形を変えるのであろう。真の信者は、絶えずこの義務を遂行し続けるので、泉は流れ続けるものとして描かれたのである。

注 21 再び書かれている「二種」は陰喩的に信者の二種類の善行を表している様だ。(1)彼等自身の精神的向上の為のもの。(2)彼等の同胞の為に尽くすもの。

注 22 「二つの楽園」は、この章に三度用いられている。これは、来世の楽園における至福とは別に、信者は現世においても良き物を全て手にすると強調しているのである。

注 23 「嬌羞の処女」というのは、羞恥心のある女性を指し、彼女等の注意は全て神に向けられ、彼女等は主であり創造主であられる御方以外に何物にも目を向ける事すらないと示すものである。イスラム教の概念では、天国の恵みは地上の生活における喜びと似ている事がここで再び述べられている。天国には、宮殿・庭・川・木・果実・妻・子・友・等があり、唯これ等の性質は、現世のものとは違うのである。事実それ等は、正義ある者がこの世で為す善行の精神的描写なのである。

注 24 57 節には、天国における信者仲間の心の清らかさが述べられてあったが、当節は、彼等の姿形の美しさに触れている。

60. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを
否むか？

فَيَا أَيُّهَا الَّذِينَ رَبِّكُمْ تَكْذِبُونَ ﴿٦٠﴾

61. 善の報いは、善に非ずして何ぞや？

هَلْ جَزَاءُ الْإِحْسَانِ إِلَّا الْإِحْسَانُ ﴿٦١﴾

62. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを
否むか？

فَيَا أَيُّهَا الَّذِينَ رَبِّكُمْ تَكْذِبُونَ ﴿٦٢﴾

63. これ等二つの樂園の外に、他の二つの樂園
あり。(注 25)

وَمِنْ دُونِهِمَا جَنَّاتٌ ﴿٦٣﴾

64. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを
否むか？

فَيَا أَيُّهَا الَّذِينَ رَبِّكُمْ تَكْذِبُونَ ﴿٦٤﴾

65. そこは緑したたるばかりなり。(注 26)

مُدْهَامَّتِينَ ﴿٦٥﴾

66. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを
否むか？

فَيَا أَيُّهَا الَّذِينَ رَبِّكُمْ تَكْذِبُونَ ﴿٦٦﴾

67. そこにも二つのほとばしり湧き出る泉あ
り。(注 27)

فِيهِمَا عَيْنٌ نَضَّاجَتَيْنِ ﴿٦٧﴾

68. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを
否むか？

فَيَا أَيُّهَا الَّذِينَ رَبِّكُمْ تَكْذِبُونَ ﴿٦٨﴾

69. どちらにもさまざまなる果物あり、棗椰子
の実も、柰榴もあり。

فِيهِمَا فَاكِهَةٌ وَنَخْلٌ وَرُفَاعٌ ﴿٦٩﴾

70. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを
否むか？

فَيَا أَيُّهَا الَّذِينَ رَبِّكُمْ تَكْذِبُونَ ﴿٧٠﴾

注 25 47 節で述べられた「二つの樂園」は天国の庭であり、当節の「二つの樂園」は現世の庭を指すようだ。イスラム教徒は来世の庭を約束されており、この神の約束が成就される証しとして、彼等はこの世の庭をも約束された。それは、彼等がエジプトとイラクの豊饒な谷を征服した時、実際に彼等のものとなった。しかし、47 節にある「二つの樂園」の描写は当節のものとは異なる。これは、この章に二種類の信者が描かれている事を示している。47 節の樂園が約束された信者は、当節の庭を約束された信者より、精神的な位が高いようだ。関連の節をよく吟味してみれば、この事は明らかになる。この信者の二階級は、次の 56 章の 11 節・28 節にそれぞれ述べられている。

注 26 先の 49 節の樂園には様々な木々があると書かれているが、これは約束された信者の善行に色々なものがある事を示している。一方、当節の樂園は「緑したたる」と書かれてあり、これは、信者の行いが非常に素晴らしいことを示すものである。

注 27 当節及び前述の 51 節には、信者に約束された泉について、二つの異なる描写がなされている。51 節の約束された泉は、豊かに絶えず流れると書かれている。これは、その節の泉を約束された信者が、当節の泉を約束された信者より精神的に高位にある事を示している。それは、前者が報われる事を期待せずして常に他者に善行を施すのに対し、後者は自然の衝動から善行を為すが、その行為が主に自身の事に限られているからである。

71. そこには麗しき美女あまたあり。(注 28)

فِيهِنَّ خَيْرٌ حَسَنٌ ﴿٥٨﴾

72. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを
否むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبِينَ ﴿٥٩﴾

73. 美しい瞳の乙女等は、天幕の奥にひき
こもりて待す。(注 29)

حُورٌ مَّقْصُورَاتٌ فِي الْخِيَامِ ﴿٦٠﴾

74. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを
否むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبِينَ ﴿٦١﴾

75. 彼女等はいまだ人間も妖霊も手を触れざり
し乙女等なり。

لَمْ يَطِئْتُهُنَّ إِنْسٌ قَبْلَهُمْ وَلَا جَانٌ ﴿٦٢﴾

76. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを
否むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبِينَ ﴿٦٣﴾

77. 緑の褥や美しい敷物の上に身を横たえるな
り。(注 30)

مُتَكِينٍ عَلَى رَفْرَفٍ خُضْرٍ وَعَبَقَرٍ حَسَنٍ ﴿٦٤﴾

78. 然らばお前たち両者、主の恩寵のいずれを
否むか？(注 31)

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبِينَ ﴿٦٥﴾

79. 莊嚴にして栄光にみつる汝が主こそ祝福し
奉るべきものなるかな。

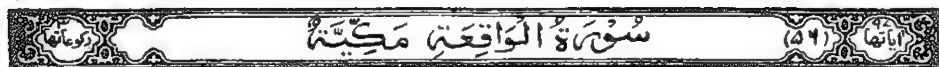
يَعْلَمُ تَبَارَكَ اسْمُ رَبِّكَ ذِي الْجَلَالِ وَالْإِكْرَامِ ﴿٦٦﴾

注 28 当節で少女に関して使われる「麗しき美女」という語は一般的な意味しか持ち合わさないが、これと比べると、59 節の「ルビーや真珠のごとく」には特別の意味があり、特に秀でた美しさを表している。

注 29 57 節の「嬌羞の」は、当節の「天幕の奥にひきこもりて」よりも、明らかに遙かに上品な様を表している。

注 30 信者に関して 55 節に前述された言葉は、彼等が当節の人々より威厳・敬意・権威を持つ事を示している。当節と共に、次の 56 章において、この二種類の信者の比較が特に述べられている。「先頭の人々」(56: 11)、「右手の人々」(56: 28)

注 31 当節がこの章で 31 回にも渡って用いられて来たという事は、意味の無い事ではあない。この章では特に、神が人間に授けられた素晴らしい恩恵について述べているようだ。この多種多様な恩恵を考えれば、当節が繰り返し用いられたのはと実に適切な事に思える。しかし同時にこの章は、もし人間が悔い改め態度を変えなければ、核戦争の様の形で空前の破壊的な神の罰が人間に科せられると語っている。この差し迫った危機の警告も又、姿を変えた恩恵である。



アル・ワークィア
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①
2. 不可避なること起る時、(注1)
إِذَا وَقَعَتِ الْوَاقِعَةُ ①
3. 何人もその到来を嘘なりと云う能わず。
لَيْسَ يُوَفِّيهِمْ كَاذِبَةٌ ②
4. すなわち、或る者は貶降され、ある者は賞揚されん。(注2)
خَافِضَةٌ رَّافِعَةٌ ③
5. 大地が激しく震撼する時、(注3)
إِذَا رَجَّيَتِ الْأَرْضُ رَجًّا ④
6. 山々はこなごなになり、
وَبُسَّتِ الْجِبَالُ بَسًّا ⑤
7. 塵埃の如くなりて四散せん。
فَكَانَتْ هَبَاءً مُتَّبَثًّا ⑥
8. その時お前たちは、三つの組みに分けられん。
وَكُنْتُمْ أَزْوَاجًا ثَلَاثَةً ⑦
9. 最初に右手の人々、彼等は何んと幸せなるかな！(注4)
فَأَصْحَابُ الْمَيْمَنَةِ مَا أَصْحَابُ الْمَيْمَنَةِ ⑧
10. 次に左手の人々、彼等は何んと不幸なるかな！(注5)
وَأَصْحَابُ الشِّمَالِ مَا أَصْحَابُ الشِّمَالِ ⑨

注1 (1)万人の復活(のH)。(2)アラビアにおける偶像崇拜の絶滅と偶像崇拜者であるクライシュの完敗。(3)偉大なる宗教改革者、モハammad預言者の出現。

注2 2節の「不可避なること」は、人生に大いなる変革をもたらすであろう。新たな世界が生じるであろう。高位にして権力ある者は地に落ち、虐げられ踏みにじられた者が高められるであろう。

注3 アラビア全土は、その基盤まで揺らぐであろう。古い信仰、概念、道徳基準、習慣、生活様式等は根本から変わるのである。つまり古い秩序は絶え、全く新しいものに取って代わられるのである。前節・後節と共に、当節は死後の再生に当てはまるものである。

注4 他所(75:3)で、クルアーンはこの不信心者たちを表すのに「自責の念」という語を用いている。

注5 悪に向かい易い魂(12:54)。

11. 先頭の人々は、一番義^{ひがひ}しかりし信者たち。
(注6)

وَالسَّابِقُونَ السَّابِقُونَ ۝

12. 彼等は神のそば近くに席を占めん。

أُولَٰئِكَ الْمُقَرَّبُونَ ۝

13. 彼等は至福の樂園に住まん。

فِي جَنَّاتِ النَّعِيمِ ۝

14. そは初期のムスリムに多く、

ثُلَّةٌ مِنَ الْأَوَّلِينَ ۝

15. 後世の者は少く、

وَقَلِيلٌ مِنَ الْآخِرِينَ ۝

16. 金や宝石をちりばめた榻^{とうしょう}の上に、

عَلَى سُرُرٍ مَّوْضُونَةٍ ۝

17. 相對して倚座^{いざ}す。

مُتَّكِئِينَ عَلَيْهَا مُتَقَابِلِينَ ۝

18. 年とらぬ少年たちが給仕にまわる、(注7)

يُطَوِّفُ عَلَيْهِمْ وَلَدَانٌ مُّخَلَّدُونَ ۝

19. 高杯^{たかつき}や水差しや流泉から汲みたての盃をさ
さげて。

بِأَكْوَابٍ وَأَبَارِيقَ ۖ وَكَأْسٍ مِّن مَّعِينٍ ۝

20. 彼等之を飲むとも頭痛せず、また泥酔する
ことなく、

لَا يُصَدِّعُونَ عَنْهَا وَلَا يُنْزِفُونَ ۝

21. 果物はお好み次第、

وَفَاكِهَةٍ مِّمَّا يَتَخَيَّرُونَ ۝

22. 種々の鳥肉も望みのまま。

وَلَحْمِ طَيْرٍ مِّمَّا يَشْتَهُونَ ۝

23. また目もとすずやかな美しい処^{おとめ}女らは、

وَحُودٍ عَيْنٍ ۝

24. 恰も秘蔵の真珠の如し。

كَأَمْثَالِ اللُّؤْلُؤِ الْمَكْنُونِ ۝

25. こは彼等の善行の報いなり。

جَزَاءٌ بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ۝

26. 彼等のはもはや無益な話も、罪つくりな話も
聞かざるべし。

لَا يَسْمَعُونَ فِيهَا لَغْوًا وَلَا تَأْثِيمًا ۝

注6 先頭の人々（この章の11～27節に述べられた、特に神のお側に近付く恩恵を施された好運な信者達）に施された天国における恩恵は、55章の47～62節に書かれた神の贈り物と非常に似ている。これは、55章47～62節の信者達が、この章の先頭の人々（特に神のお側に行く事を許された者）と同じ位にある事を示している。

注7 当節は、信者に仕える召し使いの無邪気さと変わる事のない初々しさを示している。

27. ただ「平安、平安」と云うを聞く。

إِلَّا قِيلًا سَلَامًا سَلَامًا ⑫

28. 右方の人々はといえば、彼等はなんと幸せなるかな！

وَأَصْحَابُ الْيَمِينِ ۖ مَا أَصْحَابُ الْيَمِينِ ⑬

29. 彼等は、^{トゲ}刺なしの灌木の間、

فِي سِدْرٍ مَّخْضُودٍ ⑭

30. 枝もたわわなバナナ、

وَأُطْلُجٍ مَّنْضُودٍ ⑮

31. うっそうたる樹蔭、

وَأَشْجَلٍ مُّندُودٍ ⑯

32. ^{こんこん}滾々たる清泉のほとりに住まん。

وَمَاءٍ مَّسْكُوبٍ ⑰

33. 豊富な果実は

وَفَاكِهَةٍ كَثِيرَةٍ ⑱

34. 断えることなく、(注8)

لَا مَقْطُوعَةٍ وَلَا مَمْنُوعَةٍ ⑲

35. その上高貴な^{はんりよ}伴侶を得ん。(注9)

وَفُرُشٍ مَّرْقُوعَةٍ ⑳

36. こはわれらが特に彼等のために創造せる者、

إِنَّا أَنشَأْنَهُنَّ إِنْسَاءً ㉑

37. みな処女ばかり、

وَجَعَلْنَهُنَّ أَبْكَارًا ㉒

38. かれんにして年も頃合い、(注10)

عُرُبًا أَتْرَابًا ㉓

39. 右方の人々とは。

لَا أَصْحَابُ الْيَمِينِ ㉔

第二項

40. そは初期のムスリムに多く、

ثُلَّةٌ مِّنَ الْأَوَّلِينَ ㉕

41. 後世の者もまた多し。

وَثُلَّةٌ مِّنَ الْآخِرِينَ ㉖

注8 クルアーンのこの章及び他の章で天国の住人に約束された恩恵は、次の様な特質を備えている。(1)それ等はある余程のものであろう。(2)容易に手にする事ができ、取捨選択は信者に任されている。(3)減る事も尽きる事も無い。(4)不快感や疾病を起こすものではない。

注9 心の平安を遂げる為に、信者は高貴な家柄で品位の高い純潔にして美しい配偶者を伴侶として持つのであろう。

注10 美しく、貞淑にして信心深い妻は、夫と同じ人生観を持ち、人が受ける事のできる最大の神の恩恵である。天国には高潔な男性がいる様に、又、徳の高い女性がいるいと、クルアーンは述べている。人生を幸福で完全なるものにするのは、良き交わりである。

42. 然るに左方の人々はといえば、彼等はなんと不幸なるかな！

وَأَصْحَابُ الشَّالِ ۚ مَا أَصْحَابُ الشَّالِ ۚ ﴿٢٢﴾

43. 熱風と沸湯の間、（注 11）

فِي سَمُومٍ وَحَمِيمٍ ۚ ﴿٢٣﴾

44. 黒煙の蔭、

وَظِلٍّ مِّن يَّحْمُومٍ ۚ ﴿٢٤﴾

45. 涼ならず快ならざるところに住まん。

لَّا بَارِدٍ وَلَا كَرِيمٍ ۚ ﴿٢٥﴾

46. 想えば彼等は、現世で驕奢に耽り、

إِنَّهُمْ كَانُوا قَبْلَ ذَلِكَ مُتْرَفِينَ ۚ ﴿٢٦﴾

47. 大罪を事とせり。

وَكَانُوا يُصِرُّونَ عَلَى الْحِنثِ الْعَظِيمِ ۚ ﴿٢٧﴾

48. しかも常々かく云えり、「何んとな！我等死して土と骨とに化したる後、再び甦らしめらるというか、（注 12）

وَكَانُوا يَقُولُونَ ۚ أَيُّذَا مِتْنَا وَكُنَّا تُرَابًا ۚ وَعِظًا مَا ءَاَنَّا لِنَبْعُثُونَ ۚ ﴿٢٨﴾

49. 我等の遠い先祖もまた然りとな？」と。

أَوْ آبَاؤُنَا الْأَوَّلُونَ ۚ ﴿٢٩﴾

50. 云え、「然り、昔の人も、今の人も

قُلْ إِنَّ الْأَوَّلِينَ وَالْآخِرِينَ ۚ ﴿٣٠﴾

51. 定められたる日の決められたる時刻に必ず召集せらるべし。

لَنَجْجُوعُونَ ۚ إِلَىٰ مِيقَاتِ يَوْمٍ مَّعْلُومٍ ۚ ﴿٣١﴾

52. その時は汝等、迷える者、真理を拒否せる者よ、

تُمرَاتِكُمْ أَيُّهَا الضَّالُّونَ الْمَكِيدُونَ ۚ ﴿٣٢﴾

53. 必ずやザククームの木を食わされ、

لَا يَكُونُ مِن شَجَرٍ مِّن زَقُّومٍ ۚ ﴿٣٣﴾

54. 以て満腹にさせられ、

فَمَا لَكُم مِّنْهَا الْبُطُونُ ۚ ﴿٣٤﴾

55. 更に熱湯を

فَسَرِبُونَ عَلَيْهِ مِنَ الْحَمِيمِ ۚ ﴿٣٥﴾

56. 恰も渴きに喘ぐ駱駝の如く飲まされん」と。
（注 13）

فَسَرِبُونَ شَرِبَ الْهَيْمِ ۚ ﴿٣٦﴾

注 11 感情の虜となる不信心者は、あらゆる悪事に身を任せる。感情の激しさは、湯や焼けつくような熱い形をとるであろう。

注 12 復活や来世の否定は、それが言葉によるものであれ行為で表されるものであれ、世のあらゆる罪の根源となる。死後の生における真の信仰無くして、罪を止め善行に励む事はできない。

注 13 当節及び前節は、来世で罪人に科せられる罰を、現世における彼等の罪の非道さに見合った言葉で述べている。彼等は、他人が額に汗して得た物をむさぼり、強欲に取り憑かれ、手段を問わず財を蓄積し、それを誇り、そして神の言葉を拒んだ。罰として、彼等はザククームの木を食用として宛てがわれるが、それは彼

57. こは審判の日の彼等への饗応なり。

هَذَا نَزْلُهُمْ يَوْمَ الدِّينِ ٥٧

58. われらはお前たちを創造せり。然るに何故真理を容認せざるか？

نَحْنُ خَلَقْنَاكُمْ فَلَوْلَا تَصَدَّقُونَ ٥٨

59. 汝等、己れの射撃するものについて、何と考えるか？

أَفَرَأَيْتُمْ مَا تُمْنُونَ ٥٩

60. それを創れるはお前たちか、それとも創造者はわれらなるか？

أَمْ أَنْتُمْ خَالِقُوهُ أَمْ نَحْنُ الْخَالِقُونَ ٦٠

61. われらはお前たちすべてに死を定めたり。而して之は妨げられじ、

نَحْنُ قَادِرُونَ بِبَيْتِكُمُ الْمَوْتِ وَمَا نَحْنُ بِمُسْبِقِينَ ٦١

62. お前たちを換えるにお前たち同類を以てし、今お前たちが知らざるものにお前たちを改造することは。(注14)

عَلَى أَنْ يُبَدِّلَ أَمْثَالَكُمْ وَنُنشِئَكُمْ فِي مَا لَا تَعْلَمُونَ ٦٢

63. お前たちにも最初の創造はわかる。然るに何故熟考せざるか？

وَلَقَدْ عَلِمْتُمُ النَّشْأَةَ الْأُولَى فَلَوْلَا تَذَكَّرُونَ ٦٣

64. お前たち、種蒔きについて考えたるか？(注15)

أَفَرَأَيْتُمْ مَا تَحْرَثُونَ ٦٤

65. 育てるのはお前たちか、それともわれらなるか？

أَمْ أَنْتُمْ تَرْزَعُونَهُ أَمْ نَحْنُ الرَّازِعُونَ ٦٥

66. もしわれら欲しなば、われらはそれを枯れた刈株ならしむるを得べし。その時お前たちは嘆き悲しみ続けん。

لَوْ نَشَاءُ لَجَعَلْنَاهُ حُطَامًا فَظَلْتُمْ تَفَكَّهُونَ ٦٦

67. 「我等は負債者となれり！

إِنَّا لَمُغْرَمُونَ ٦٧

68. 否、すべてを奪われたり」

بَلْ نَحْنُ مَحْرُومُونَ ٦٨

69. お前たち、飲む水について考えたるか？

أَفَرَأَيْتُمُ الْمَاءَ الَّذِي تَشْرَبُونَ ٦٩

70. 雲からそれを降らすはお前たちか、それともわれらなるか？

أَمْ أَنْتُمْ أَنْزَلْتُمُوهُ مِنَ الْمُزْنِ أَمْ نَحْنُ الْمُنْزِلُونَ ٧٠

等の体内で火を吹くであらう。更に渴きを癒すには熱湯しかなく、病んで喉の渴いた駱駝の様に、彼等はいつまでも満たされないでいるだろう。

注14 人間の肉体の崩壊は、命の終焉を意味するものではない。死は、唯、形を変えるだけである。肉体を離れた後、人の魂はもう一つの身体を与えられる。それは成長発達し、人が知る事も又想像すら出来ない形をとる。

注15 64～72節では、この世で人の生命の握り所となる物が、簡潔に述べられている。その三つの主要な物とは、食物・水・火である。

71. もしわれら欲しなば、その水を苦くならしむるを得べし。然るに何故お前たちは感謝せざるか？

لَوْ نَشَاءُ جَعَلْنَاهُ أَجَاًا فَلَوْلَا تَشْكُرُونَ ﴿٥٤﴾

72. お前たちは燃やす火について考えたか？
(注 16)

أَفَرَأَيْتُمُ النَّارَ الَّتِي تُورُونَ ﴿٥٥﴾

73. 燃やす木を生ぜしむるはお前たちか、それともわれらなるか？

ءَأَنْتُمْ أَنْشَأْتُمْ شَجَرَتَهَا أَمْ نَحْنُ الْمُنْشِئُونَ ﴿٥٦﴾

74. われらは之をもつて訓戒となし、且つ砂漠の旅人のためならしめたり。(注 17)

نَحْنُ جَعَلْنَاهَا تَذْكِرَةً وَمَتَاعًا لِلْمُقِيمِينَ ﴿٥٧﴾

75. されば、偉大なる主の御名を讚美し奉れ。

فَسَبِّحْ بِاسْمِ رَبِّكَ الْعَظِيمِ ﴿٥٨﴾

第三項

76. 我群星の落つるを指して誓う。

فَلَا أَقْسِمُ بِمَوَاقِعِ النُّجُومِ ﴿٥٩﴾

77. もしお前たち知識あらば、げにそは重大なる誓言なり。

وَأِنَّهُ لَقَسَمٌ لَّوْ تَعْلَمُونَ عَظِيمٌ ﴿٦٠﴾

78. こは誠に尊きクルアーンなり、

إِنَّهُ لَقُرْآنٌ كَرِيمٌ ﴿٦١﴾

79. そは載せて秘蔵の天の原簿の中にあり。

فِي كِتَابٍ مَّكْنُونٍ ﴿٦٢﴾

80. 清められたる者に非ずば、何人も之に触れるべからず。(注 18)

لَا يَسْطُرُ إِلَّا لِلطَّاهِرِينَ ﴿٦٣﴾

81. そは万物の主よりの啓示なり。

تَنْزِيلٌ مِّنْ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٦٤﴾

82. お前たち、この神の講話を拒否するか？

أَفِيهِذَا الْحَدِيثِ أَنْتُمْ مُدْهِنُونَ ﴿٦٥﴾

83. また拒否することで、日々の生業とするか？(注 19)

وَتَجْعَلُونَ رِزْقَكُمْ أَنَّكُمْ تُكَذِّبُونَ ﴿٦٦﴾

注 16 火は、人間の生活の中で、最も重要な役割を果たす。人の生活を快適にするのに、多くを火に頼っている。それは非常に有益なものであるが、同時に使い方を誤れば破壊をもたらすものでもある。工業・商業・運輸業全て、それ無しには成り立たない。

注 17 貧しく飢えた人々。砂漠の旅人、あるいは荒れ果てた地に降り立った人々。

注 18 正しい生活を送る事で心が浄められる好運な人のみが、クルアーンの真意を理解し、不浄な心を持つ者が受入を拒む、神の知識の精神的神秘を明かされる。加えて言うならば、肉体が汚れた者は、クルアーンに触れる事も読む事もすべきではない。

注 19 不信心者は、真実を受け入れる事で生計の手段を奪われるのではないかと恐れる。それ故、不正利得の為に、彼等は神の言葉を拒むのである。又は、彼等は真実を拒否することを生きがいにしてしまったと、当節は意味しているかもしれない。彼等は、どうあってもそれを受け入れないであろう。

84. 然らば、瀕死の人の魂が、その咽喉もとまで上り来る時、

فَلَوْلَا إِذَا بَلَغَتِ الْحُلُقُومَ ۙ

85. その時お前たちは見守っているながら、

وَأَنْتُمْ جُنُودٌ تَنْظُرُونَ ۙ

86. われらがお前たちよりもその人の近くににいるのに、お前たちにはそれが見えざるなり。

وَنَحْنُ أَقْرَبُ إِلَيْهِ مِنْكُمْ وَلَكِنْ لَا بُدَّ مِنْكُمْ ۚ

87. もしお前たちが責任を問われざる身なれば、

فَلَوْلَا إِنْ كُنْتُمْ عَلِيمَ مَذْيَبِينَ ۙ

88. 而してお前たちの言が本当なら、何故その魂を連れ戻し得ざるか？

تَرْجِعُونَهَا إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ۙ

89. さて、その者がアッラーの側近くに召されるべき人々の一人ならば、

فَأَمَّا إِنْ كَانَ مِنَ الْمُقَرَّبِينَ ۙ

90. 彼は安楽と幸せの芳香と至福の樂園とをものにせん。

فَرَوْحٌ وَرَيْحَانٌ وَجَنَّتْ نَعِيمٌ ۙ

91. 而して、その者が右方の組の一人ならば、

وَأَمَّا إِنْ كَانَ مِنَ أَصْحَابِ الْيَمِينِ ۙ

92. 「汝の上に平安あれ」と右方の仲間から挨拶せられん。

فَسَلَامٌ لَّكَ مِنَ أَصْحَابِ الْيَمِينِ ۖ

93. されど、真理を拒否し、迷える者ならば、

وَأَمَّا إِنْ كَانَ مِنَ الْكَافِرِينَ الضَّالِّينَ ۙ

94. 煮えたぎる熱湯の饗応を受け、

فَنُزْلٌ مِنْ حَيْمٍ ۙ

95. 地獄で燐かれん。

وَنَصْلٌ بِجِجِيمٍ ۙ

96. げにこは間違いない事実なり。

إِنَّ هَذَا لَهُوَ حَقُّ الْيَقِينِ ۚ

97. されば、偉大なる主の御名を讃美し奉れ。

فَسَبِّحْ بِاسْمِ رَبِّكَ الْعَظِيمِ ۝

سُورَةُ الْحَدِيدِ مَدَنِيَّةٌ

(154)

アル・ハディード

(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 天にあるもの、地にあるもの、すべてはアッラーを讃美し奉る。彼は偉大にして、賢哲にまします。(注1)

سَبَّحَ لِلَّهِ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ②

3. 彼は天地の大権を掌握し給う。彼は生を与え、死を生ぜしむ。彼は萬事を支配し給う。(注2)

لَهُ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ يُحْيِي وَيُمِيتُ ③
وَهُوَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ④

4. 彼は始原にして(注3)最後なり、(注4)顯なるもの(注5)隱なるもの、(注6)而して萬事を熟知し給う。

هُوَ الْأَوَّلُ وَالْآخِرُ وَالظَّاهِرُ وَالْبَاطِنُ وَهُوَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ⑤

5. 天地を六日間で創造し、然る後玉座に登り給うたは、彼なり。彼は地に入るもの、地より出づるものを知り、天より降るもの、天に昇るものを知り給う。而して彼は、お前たちが何処にあるとも、常にお前たちと偕にまします。さればアッラーはお前たちの所業のすべてをみそなはし給う。(注7)

هُوَ الَّذِي خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ فِي سِتَّةِ أَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوَى عَلَى الْعَرْشِ يُعَلِّمُ مَا يَلِجُ فِي الْأَرْضِ وَمَا يَخْرُجُ مِنْهَا وَمَا يَنْزِلُ مِنَ السَّمَاءِ وَمَا يَعْرُجُ فِيهَا وَهُوَ مَعَكُمْ أَيْنَ مَا كُنْتُمْ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ⑥

注1 宇宙の万物は、定められた役割を規則正しく実行し、神より授けられた能力を駆使して、見事な様式でその創造の目的を果たしている。その為、宇宙の設計者にして創造主が、真に強力で賢明であられるという結論に、人は否応なく導かれるのである。又、全宇宙は集会的に、創造物は個々に、それぞれの定められた領域において、神の業には全く欠ける所が無いという紛れもない真実の証しとなっている。以上の事を当節は示している。

注2 建設と破壊の過程は、宇宙の万物に常時平行に行われている。

注3 神は万物の始まりである。

注4 神は万物の帰する所である。

注5 神は何よりも神の業に御自身を表される。

注6 神から隠される物はない。又は、神は全てを理解なさるが、神御自身は理解され得ない。

注7 ある特定の神の教義がある人々にいつ必要となるか。又それを(1)天に戻すべきか、つまり廃すべきか。その教義が、授けられた人々の魂の必要を満たさなくなるのはいつか。この事を御存知なのは神のみであると示している。そして、神のみが、新たな教義の啓示の時を知っておいでになる。

6. 彼は天地の大権を掌握し給う。されば萬事はアッラーに帰趨す。

لَهُ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَإِلَى اللَّهِ تُرْجَعُ
الْأُمُورُ ③

7. 彼は夜を昼に変えさしめ、昼を夜に変えさしむ。彼は胸中に秘めたるものを熟知し給う。

يُولِجُ اللَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَيُؤَلِّجُ النَّهَارَ فِي
الَّيْلِ وَهُوَ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ④

8. アッラーとその使徒を信じ、アッラーがお前たちに継がしめたるものの中からアッラーの道のために施しをせよ。お前たちのうち信じて施しをする者は、いずれ素晴らしい報奨を手に入れん。

آمِنُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ وَأَنْفِقُوا مِمَّا جَعَلَكُمْ
مُسْتَخْلِفِينَ فِيهِ فَالَّذِينَ آمَنُوا مِنْكُمْ وَأَنْفَقُوا
لَهُمْ أَجْرٌ كَبِيرٌ ⑤

9. 使徒が主を信ずるよう勧めているというに、何故お前たちは信ぜざるか？ もしお前たちが真の信者なら、主はすでにお前たちと契約を結びたり。(注8)

وَمَا لَكُمْ لَا تُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالرَّسُولِ يَدْعُوكُمْ
تُؤْمِنُوا بِرَبِّكُمْ وَقَدْ أَخَذَ مِيثَاقَكُمْ إِنْ كُنْتُمْ
مُؤْمِنِينَ ⑥

10. お前たちを暗黒より光明へ導かんとて明白なる神兆を已が僕に降せるは、彼なり。アッラーはお前たちに実に親切、且つ情け深くまします。

هُوَ الَّذِي يُنَزِّلُ عَلَى عَبْدٍ آيَاتٍ يَبَيِّنُ لِيُخْرِجَكُمْ
مِنَ الظُّلُمَاتِ إِلَى النُّورِ وَإِنَّ اللَّهَ بِكُمْ لَرَءُوفٌ
رَحِيمٌ ⑦

11. 天地の相続権はアッラーの所屬だというに、何故お前たちアッラーの道に財を惜しむか？(注9) お前たちのうち、勝利の前に献金し戦った者は、後からそれをなした者と同列に非ず。彼等は勝利の後に寄与せる者より高位を占む。アッラーは、どちらにも、すべての者に善賞を約束せり。(注10) アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

وَمَا لَكُمْ أَلَّا تُنْفِقُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَلِلَّهِ مِيرَاثُ
السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ لَا يَسْتَوِي مِنْكُمْ مَنْ أَنْفَقَ
مِن قَبْلِ الْفَتْحِ وَقَتْلٍ أُولَئِكَ أَعْظَمُ دَرَجَةً مِنَ
الَّذِينَ أَنْفَقُوا مِنْ بَعْدِ وَقْتِهَا وَلَا وَعَدَ اللَّهُ
إِلَّا الْحُسْنَىٰ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرٌ ⑧

注8 当節の「契約」は、人間の本質に植え付けられた神への信仰と、神のお側へ近付きたいという願いを表している。

注9 人は、物質的所有物を全て、それは本来神に帰するものであり、現世に残さねばならないであろう。

注10 メッカ陥落、あるいはフダイビヤ協定。

第二項

12. アッラーに立派な貸付をする者は誰ぞ？
アッラーはその者のためにそれを倍加し、
且つ沢山の報奨を与えん。

مَنْ ذَا الَّذِي يُقْرِضُ اللَّهَ قَرْضًا حَسَنًا فَيُضْعِفُهُ
لَهُ وَلَهُ أَجْرٌ كَرِيمٌ ﴿١٢﴾

13. その日汝は、男や女の信者の前や右側に光
が走るを見ん。而して彼等はかく云われん、
「今日はお前たちへ朗報あり。お前たちは、
河川流る楽園に、永遠に住まん。そは大成
功なり」と。

يَوْمَ تَرَى الْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ يَسْعَى نُورُهُمْ
بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَبِأَيْمَانِهِمْ بُشْرَاكُمُ الْيَوْمَ
جَنَّاتٌ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا
ذَلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿١٣﴾

14. その日、似非信者どもの男や女は、信者に
向って云わん、「しばし待たれよ。我等にも
あなた方の明りを貸してくださるぬか」と。
(注 11) 彼等は云われん、「引き返して、明
りを求めよ、もし可能なら」と。而してた
ちまち、信者と似非信者との間に扉の付い
た壁が立ちはだかるべし。(注 12) 扉の内
側は慈悲、外側は懲罰あるべし。

يَوْمَ يَقُولُ الْمُنِفِقُونَ وَالْمُنِفِكَاتُ لِلَّذِينَ آمَنُوا
انْظُرُوا مَا فَتَقْتَسِمُ مِنْ نُورِكُمْ فَبُذِلَ أَرْجَعُوا
وَمِرَاءَكُمْ فَأَلْتَمِسُوا نُورًا فَضُرِبَ بَيْنَهُمُ سُورٌ
لَهُ بَابٌ بَاطِنُهُ فِيهِ الرَّحْمَةُ وَظَاهِرُهُ مِنْ قِبَلِهِ
الْعَذَابُ ﴿١٤﴾

15. 似非信者は信者に向って叫ばん、「我等はか
つてあなた方と偕にあらざるか？」と。信
者たちは答えん、「然り、されどお前たちは、
自分を誘惑に陥れ、ためらい、疑い、己れ
の妄想に騙されているうちに、アッラーの
大命が降りたり。(注 13) 欺瞞者が、アッ
ラーについてお前たちを欺きぬ。

يُنَادُونَهُمْ أَلَمْ نَكُنْ مَعَكُمْ قَالُوا بَلَى وَلَكِنَّكُمْ
فَتَنْتُمْ أَنْفُسَكُمْ وَتَرَبَّصْتُمْ وَارْتَبْتُمْ وَغَرَّتْكُمُ
الْأُمُورُ حَتَّى جَاءَ أَمْرُ اللَّهِ وَغَرَّكُمْ بِاللَّهِ الْغَوْرُ ﴿١٥﴾

16. さればお前たち、今となりては最早その罪
を贖い得ざるべし。不信心者もまた然り。
お前たちの終の住居は業火なり。そはお前
たちの仲間なり。(注 14) げにそは悪しき
行き先なり」と。

فَالْيَوْمَ لَا يُوَفِّدُكُمْ فِدْيَةٌ وَلَا مِنَ الَّذِينَ
كَفَرُوا مَا أَوْفَكَ السَّارُّ هِيَ مَوْلَاكُمْ وَبِئْسَ
الْمَصِيرُ ﴿١٦﴾

注 11 「あなた方の明り」とは、貴人の信仰と善行の光、又は、神を悟り、現世で神の喜びを求めそれを手にできる能力の光。

注 12 ここの「壁」は、イスラム教、又はクルアーンの壁を指す。不信心者はこの壁の外に止まる為、彼等のこの行為は来世に壁の形を取るであろう。

注 13 神の間、天間

注 14 「そはお前たちの仲間なり。」この言葉は反語的に用いられたようだ。又、次の事を示しているのかも

17. 信ずる者がその心を謙^{へうかく}ってアッラーを念じ、降し賜わりたる真理を順奉する時は、未だ到らざるか？ 彼等以前に經典を授けていたがながら、アッラーの慈悲の授与を延期されたために、その心がかたくなになり、多くの者が背逆者となり果てり。あの者どもの轍^つを踏まざらしむる時は、未だ到らざるか？

أَلَمْ يَأْنِ لِلَّذِينَ آمَنُوا أَنْ تَخْشَعَ قُلُوبُهُمْ لِذِكْرِ اللَّهِ وَمَا نَزَلَ مِنَ الْحَقِّ وَلَا يَكُونُوا كَالَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ مِنْ قَبْلُ فَطَالَ عَلَيْهِمُ الْأَمَدُ فَقَسَتْ قُلُوبُهُمْ وَكَثِيرٌ مِنْهُمْ فَسِقُونَ ﴿١٧﴾

18. アッラーが能くその死せる大地を甦らしむることを知れ。われらはお前たちを悟らしめんがために、さまざまなる神兆^{しんし}を明示せり。

إِذْ عَلَّمْنَا أَنْتَ اللَّهُ يُحْيِي الْأَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا قَدْ يَتَنَبَّأُ لَكُمْ الْآيَاتِ لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُونَ ﴿١٨﴾

19. 喜捨を行う男女、並びにアッラーに立派な貸付をする者は、それを倍加され、且つ光榮ある報奨を受けん。

إِنَّ الْمَصَدِّقِينَ وَالْمَصَدِّقَاتِ وَأَقْرَضُوا اللَّهَ قَرْضًا حَسَنًا يُضَاعَفْ لَهُمْ وَلَهُمْ أَجْرٌ كَرِيمٌ ﴿١٩﴾

20. アッラーとその使徒を信ずる者、彼等は誠実者なり、主の眼前において証人たるべき者なり。彼等は報奨と光明^{しん}とをものにせん。されど、不信心者並びにわれらの神兆^{しんし}を拒否する者、彼等は地獄の住人なり。

وَالَّذِينَ آمَنُوا بِاللَّهِ وَرُسُلِهِ أُولَٰئِكَ هُمُ الصَّادِقُونَ وَالشَّهَادَةُ عِنْدَ رَبِّهِمْ لَهُمْ أَجْرُهُمْ وَنُورُهُمْ وَالَّذِينَ كَفَرُوا وَكَذَّبُوا بِآيَاتِنَا أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ

الْجَحِيمِ ﴿٢٠﴾

- 第三項
21. 現世の生活は、ただの慰み、女晴らし、虚飾、己惚れ、富^こと子女を殖やすことの競争にすぎぬことを知れ。現世とは、譬^{たと}うれば慈雨の如し。作物は生長し、耕作者を喜ばしむ。次いでそれは枯れ、色褪せ、終には藁屑^{わうせつ}の折れはしとなるを汝は見ゆ。而して来世では、不義者にはアッラーの厳しい懲罰あり。義しい者には彼の有恕^{ゆうじよ}と嘉賞^{かしやう}あり。まことに現世の生活は、束の間の詐りの楽しみにすぎず。

إِذْ عَلَّمْنَا أَنَّهَا الْحَيَاةُ الدُّنْيَا لَعِبٌ وَلَهُمْ زِينَتُهُمْ وَتَفَاخُرٌ بَيْنَكُمْ وَتَكَاثُرٌ فِي الْأَمْوَالِ وَالْأَوْلَادِ كَمَثَلِ غَيْثٍ أَعْجَبَ الْكُفَّارَ نَبَاتُهُ ثُمَّ يَهْبِيجُ فَتَرَاهُ مُصْفَرًّا ثُمَّ يَكُونُ حُطَامًا وَفِي الْآخِرَةِ عَذَابٌ شَدِيدٌ وَمَغْفِرَةٌ مِنَ اللَّهِ وَرِضْوَانٌ وَمَا الْحَيَاةُ الدُّنْيَا إِلَّا مَتَاعُ الْغُرُورِ ﴿٢١﴾

22. されば、主^{はうど}の有恕^{ゆうじよ}と、天地^{ちのつち}と同じ広さのある樂園を求めて互に競い合え。そはアッ

سَائِقُونَ إِلَىٰ مَغْفِرَةٍ مِّن رَّبِّكُمْ وَجَنَّةٍ عَرْضُهَا

しれない。「地獄の炎のみが、現世に不信心者の犯した罪の汚れを取り除き、彼等を魂の向上に適した者にし、この様にして彼等の友となるであろう。」

ラーとその使徒を信ずる人々のために設けられたり。こはアッラーの恩寵なり。アッラーは己れの欲する者にそれを授け給う。アッラーは限りなき恩寵の主にまします。

23. この世に起るいかなる災厄も、またお前たちの身に降りかかる災難も、われらがそれを生ぜしむる前に、すでに經典の中に記されざるはなし。そはアッラーにはいと易きことなり。

24. そはお前たちをして、失えるが故に悲しまず、与えられたが故に大得意にすることなからしめんがためなり。アッラーはうぬぼれ強いほら吹きを愛し給わぬ。

25. かかる徒輩は自ら吝嗇りんしやくにして、他人にも吝嗇りんしやくを勧む。たとい誰が背を向けようと、アッラーは自足者なり、讚美せらるる御方なり。

26. げにわれらは、明らかな神兆しるしを授けて使徒を遣わし、また人々が正しく振舞うために使徒と共に經典と正邪はかりの權衡を降したり。われらはまた鉄を授けたり。そは猛烈なる力あり、また人間のためにいろいろと便利を供す。こはアッラーが密かに、御自分とその使徒を助ける者を知らんがためなり。げにアッラーは強大にして、偉大なり。

第四項

27. またわれらは、ノアとアブラハムを遣わしたり。而して彼等の子孫の中に、預言者と經典きんげんとを授けたり。されば彼等の中には、嚮導きやうどうに従いたる者もあれば、背逆せる者も多かりき。

28. その後もわれらは次々と使徒を遣わしたり。更にわれらは、マリアの子イエスを遣わし、之に福音を与えたり。而してわれらは、イエスを受け容れし人々の心に親切と

كَعَرْضِ السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ أَعَدَّتْ لِلَّذِينَ آمَنُوا
بِاللَّهِ وَرُسُلِهِ ذَلِكَ فَضْلُ اللَّهِ يُؤْتِيهِ مَنْ يَشَاءُ
وَاللَّهُ ذُو الْفَضْلِ الْعَظِيمِ ٣٧

مَا أَصَابَ مِنْ مُصِيبَةٍ فِي الْأَرْضِ وَلَا فِي أَنْفُسِكُمْ
إِلَّا فِي كِتَابٍ مِنْ قَبْلِ أَنْ نَبْرَأَهَا إِنَّ ذَلِكَ عَلَى
اللَّهِ يَسِيرٌ ٣٨

لِكَيْلَا تَأْسَوْا عَلَى مَا فَاتَكُمْ وَلَا تَفْرَحُوا بِمَا آتَاكُمْ
وَاللَّهُ لَا يُحِبُّ كُلَّ مُخْتَالٍ فَخُورٍ ٣٩

الَّذِينَ يَخْلُونُ وَيَأْمُرُونَ النَّاسَ بِالْبُخْلِ وَمَنْ
يَتَوَلَّ فَإِنَّ اللَّهَ هُوَ الْغَنِيُّ الْحَمِيدُ ٤٠

لَقَدْ أَرْسَلْنَا رُسُلَنَا بِالْبَيِّنَاتِ وَأَنْزَلْنَا مَعَهُمُ
الْكِتَابَ وَالْمِيزَانَ لِيَقُومَ النَّاسُ بِالْقِسْطِ وَأَنْزَلْنَا
الْحَدِيدَ فِيهِ بَأْسٌ شَدِيدٌ وَمَنَافِعُ لِلنَّاسِ
وَلِيَعْلَمَ اللَّهُ مَنْ يَنْصُرُهُ وَرُسُلَهُ بِالْغَيْبِ إِنَّ
اللَّهَ قَوِيٌّ عَزِيزٌ ٤١

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا نُوحًا وَإِبْرَاهِيمَ وَجَعَلْنَا فِي
ذُرِّيَّتِهِمَا النُّبُوَّةَ وَالْكِتَابَ فَمِنْهُمْ مُهْتَدٍ وَ
كَثِيرٌ مِنْهُمْ فَاسِقُونَ ٤٢

ثُمَّ قَفَّيْنَا عَلَى آثَارِهِم بِرُسُلِنَا وَقَفَّيْنَا بِعِيسَى
ابْنِ مَرْيَمَ وَآتَيْنَاهُ الْإِنْجِيلَ وَجَعَلْنَا فِيهِ

慈悲とを宿らしめたり。されど、禁欲的修道生活は、アッラーの嘉賞を求めて彼等自身が編み出せるもの。そはわれらが命じたものに非ざるなり。而も彼等は之を正しく遵守せざりき。われらは彼等の中の信ぜし者に当然の報奨を与えたれど、彼等の多くは背逆者なり。

قُلُوبِ الَّذِينَ اتَّبَعُوهُ رَافَةً وَرَحْمَةً وَرَهَابِيَّةٍ
إِتِّدَعُوهَا مَا كَتَبْنَاهَا عَلَيْهِمْ إِلَّا ابْتِغَاءَ
رِضْوَانِ اللَّهِ فَمَا دَعَوْهَا حَقَّ رِعَايَتِهَا فَآتَيْنَا
الَّذِينَ آمَنُوا مِنْهُمْ أَجْرَهُمْ وَكَثِيرٌ مِنْهُمْ
فُسِقُونَ ﴿٢٨﴾

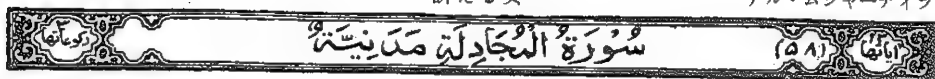
29. 汝等信ずる者よ、アッラーを畏れ敬い、その使徒を信ぜよ。さすればアッラーはお前たちに、二倍の慈悲を垂れ、足許を照らす光明を賜い、且つ宥恕せん。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللَّهَ وَآمِنُوا بِرِسُولِهِ
يُؤْتِكُمْ كَفْلَيْنِ مِنْ رَحْمَتِهِ وَيَجْعَلْ لَكُمْ
نُورًا تَمْشُونَ بِهِ وَيَغْفِرْ لَكُمْ وَاللَّهُ غَفُورٌ
رَحِيمٌ ﴿٢٩﴾

30. 経典の民はすべからく知るべし、彼等にもアッラーの恩寵はいささかも左右し得ざることを。その恩寵はただアッラーの御手のうちにありて、己が欲する者に与え給う。アッラーは限りなき恩寵の主なり。(注15)

لَيْسَ لَكَ يَٰعَلَمُ أَهْلُ الْكِتَابِ إِلَّا يَقْدِرُونَ عَلَى شَيْءٍ
مِنْ فَضْلِ اللَّهِ وَأَنَّ الْفَضْلَ بِيَدِ اللَّهِ يُؤْتِيهِ
مَنْ يَشَاءُ وَاللَّهُ ذُو الْفَضْلِ الْعَظِيمِ ﴿٣٠﴾

注15 神の恩恵はキリスト教徒だけに与えられるという彼等の誤りを正し、今や神は別の人々、イスラム教徒にそれを移されたと知らしめよ。



アル・ムジャーディラ
(メディナ啓示)

- 慈悲深く、恵み遍く^{あまね}アッラーの御名^なにおいて。
- アッラーは、夫について汝に訴え、なお之^{これ}をアッラーに愁訴^{こぼ}する女の言を聴きたり。またアッラーは、お前たち両人の対話も聴きたり。げにアッラーはすべてを聴き、すべてをみそなはし給う。(注1)
- お前たちの中には妻を自分の母と呼び、故にその妻に近づかぬ者あり。母とは自分を生みたる者のみ。されば彼等の云うことは明らかに邪悪且つ正しからず。されどアッラーは赦免者にして、寛容者にまします。
- 妻を母と呼び、後でその言^{ことば}を撤回せんとする者は、(注2)互に肌を触れ合う前に、奴隷を一人開放せねばならぬ。これはお前たちへの訓戒なり。アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。
- されど、一人の奴隷ももたざる者は、肌を触れ合う前に、二カ月継続して断食せよ。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
قَدْ سَمِعَ اللَّهُ قَوْلَ الَّتِي تُجَادِلُكَ فِي زَوْجِهَا
تَشْتَكِي إِلَى اللَّهِ وَاللَّهُ يَسْمَعُ تَحَاوُرَكُمَا إِنَّ اللَّهَ
سَمِيعٌ بَصِيرٌ
الَّذِينَ يُظْهِرُونَ مِنْكُمْ مَنْ نِسَائِهِمْ مَا هُنَّ
أُمَّهَاتُهُمْ إِنَّ أُمَّهَاتُهُمْ إِلَّا الْآلَى وَلَكِنْ نُهُمْ
وَأَنَّهُمْ لَيَقُولُنَّ مُنْكَرًا مِنَ الْقَوْلِ وَذُورًا
وَإِنَّ اللَّهَ لَعَفُوٌّ غَفُورٌ
وَالَّذِينَ يُظْهِرُونَ مِنْ نِسَائِهِمْ ثُمَّ يَعُودُونَ
لِئْسَ قَالُوا فَتَحْرِيرُ رَقَبَةٍ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَتَنَاسُوا
ذَلِكَ تُوَعِّظُونَ بِهٖ وَاللَّهُ يَتَعَلَّمُ الْخِيبَةَ
فَمَنْ لَّمْ يَجِدْ فَصِيَامُ شَهْرَيْنِ مُتَتَابِعَيْنِ مِنْ

注1 アウスピンサーミットの妻であり、タラバの娘ハウラは、夫が彼女を「母」と呼んだ為、彼から離されてしまった。正確には、彼は次の様に語った。「あなたの背は、私にとって母の背のようだ。」(だから、もはや、触れることはできない。)古いアラブの慣習では、この様にして夫婦関係は停止された。この哀れな女性は、再婚する為に離婚を請求する事も、婚姻上の権利を享受する事もできず、中途半端な状態におかれ、面倒を見てもらえなかった。彼女はモハムマド預言者のもとに行き、彼女の置かれた困った状況を彼に訴え、この事で彼の助言と助けを求めた。彼は、啓示に導かれなければこの種の問題には決定を下さない事にしていたので、彼女に何かしてあげる力が自分ないと認めた。啓示が下り、この不可思議な習慣は違法であると言明された。

注2 「その言葉を撤回せん」というのは、妻を「母」と呼ぶ事で、彼等が妻との夫婦関係を取り戻したいと願っている事を示しているようだ。又、一度妻を「母」と呼んだ後、再び同じ言葉を繰り返したともされる。後者の意味にとれば、それはふとしたはずみの言葉ではなく、故意に不快な言葉を繰り返したもので、発言者はそれにより、当節及び次節に定められた罰を負わねばならない。

これを能くせざる者は、六十人の貧者に食を与えよ。これお前たちをして、アッラーとその使徒を衷心より信ぜしめんがためなり。これ等はアッラーによって規定された掟なり。而して不信心者輩には痛罰あり。

(注3)

6. アッラーとその使徒に逆う者は、彼等以前の者が卑しめられたる如く、必ず卑められん。われらはすでに明白なる種々の神兆を降せり。されば不信心者輩は屈辱的な懲罰を受けん。(注4)

7. アッラーは、彼等を一緒に魅らしめんその日、彼等に告げん、彼等のなせる所業を。彼等はそれをすでに忘れたれど、アッラーはそれを記録せり。アッラーは万事を検証し給う。

第二項

8. 汝は、アッラーが天地の一切を知ることを見ざるか？ 三人密かに相い語れば、彼は第四者なり。五人で語れば、第六者なり。それより多くとも少なくとも、彼等の在るところには何処にも彼は彼等と偕に坐し給う。然る後、復活の日に、彼は彼等の所業を告知せん。げにアッラーは一切を熟知し給う。

9. 汝は見ざるか、密談を禁ぜられたる徒輩がその禁を犯し、使徒に対して、罪と、違犯と、不服従を謀議するを？ しかも彼等は、汝の前に来たりて、アッラーが汝に挨拶せる言辞とは違った言辞で挨拶し、呟いて云

قَبْلِ أَنْ يَنْشَأَ مَنْ لَمْ يَسْتَطِعْ فِإِطَاعِمْ
سَيِّئِينَ وَسَيَّئِينَ ذَلِكَ لِيُؤْمِنُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ
وَتِلْكَ حُدُودُ اللَّهِ وَلِلْكَافِرِينَ عَذَابٌ أَلِيمٌ ⑤

إِنَّ الَّذِينَ يُجَادُونَ اللَّهَ وَرَسُولَهُ كُنْتُمْ كَمَا كُنْتُمْ
الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ وَقَدْ أَنْزَلْنَا آيَاتٍ بَيِّنَاتٍ
وَلِلْكَافِرِينَ عَذَابٌ مُهِينٌ ⑥

يَوْمَ يَبْعَثُهُمُ اللَّهُ جَمِيعًا فَيُنَبِّئُهُمْ بِمَا عَمِلُوا
أَحْصَاهُ اللَّهُ وَنُصُوهُ وَاللَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ شَهِيدٌ ⑦

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا فِي السَّوَابِ وَمَا فِي الْأَرْضِ
مَا يَكُونُ مِنْ نَجْوَى ثَلَاثَةٍ إِلَّا هُوَ رَاسِعُهُمْ وَلَا
خَمْسَةٍ إِلَّا هُوَ سَادِسُهُمْ وَلَا أَدْنَى مِنْ ذَلِكَ
وَلَا أَكْثَرَ إِلَّا هُوَ مَعَهُمْ إِنْ مَا كَانُوا ثُمَّ
يُنَبِّئُهُمْ بِمَا عَمِلُوا يَوْمَ الْقِيَامَةِ إِنَّ اللَّهَ لِكُلِّ
شَيْءٍ عَلِيمٌ ⑧

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ نُهُوا عَنِ النَّجْوَى ثُمَّ يَعْوَدُونَ
لَهَا أَنُهَا عَنْهُ وَيَتَّخِذُونَ بِالْإِثْمِ وَالْعُدْوَانِ
وَمَعْصِيَةِ الرَّسُولِ وَإِذَا جَاءُوكَ حَيَّوْكَ بِمَا

注3 これ等の節に述べられた懲罰は、妻を「母」と呼ぶ事が大罪だと示すものである。母との結び付きは非常に強く、軽くあしらう事はできない。

注4 妻を「母」と呼んで、夫婦関係をあいまいにすることは神に背くに等しく、その罪は憎むべきものである。ユダヤ人及び偽善者による真実への敵対という主題が、当節で適切に導入されている。

う、「何故にアッラーは我等の言辭^{ことば}に対して、我等を罰せざるか？」と。彼等には地獄が適處なり。彼等その中にて燐かれん。禍^{わざい}なるかなその落ち行く先は！（注5）

لَمْ يُجِبْكَ بِهِ اللَّهُ وَيَقُولُونَ فِي أَنْفُسِهِمْ لَوْلَا يُعَذِّبُنَا اللَّهُ بِمَا نَقُولُ حَسْبُهُمْ جَهَنَّمُ بِمَا بَصُلُوهُمْ ۖ فَبِئْسَ الْمَصِيرُ ⑩

10. 汝等信徒たちよ、密談をする時は使徒に対する罪や、違犯や、不服従を奨励する謀議をするなかれ。徳行と正義を達成することについて相談し、而してアッラーを畏れ敬え。お前たちは彼の許へ召し寄せられん。（注6）

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا تَنَاجَيْتُمْ فَلَا تَتَنَاجَوْا إِلَّا نِعْمَ وَالْعُدْوَانَ وَمَعْصِيَتِ الرَّسُولِ وَتَنَاجَوْا بِالْبِرِّ وَالتَّقْوَىٰ وَاتَّقُوا اللَّهَ الَّذِي إِلَيْهِ تُحْشَرُونَ ⑩

11. 邪悪を目的とする密談は、信者たちを悲しましめんとする悪魔^{サタン}の業なり。されどアッラーの許^ししなしには、悪魔といえど何人も害する能わず。されば信者たる者、その信をアッラーに託すべし。

إِنَّمَا التَّجْوِي مِنَ الشَّيْطَانِ لِيَحْزَنَ الَّذِينَ آمَنُوا وَكَيْسَ بَضَائِرِهِمْ شَيْئًا إِلَّا بِإِذْنِ اللَّهِ وَعَلَى اللَّهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُونَ ⑪

12. 汝等信徒たちよ、集会の時、「広く場所をあげよ」と云われなば、ただちに広く場所をあげよ。アッラーはお前たちのために広い場所を設けん。また、「起て」と云われなば、ただちに起て。アッラーはお前たちの中の信者並びに知識を授けられたる者を、高い位階に登らしめ給う。アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا قِيلَ لَكُمْ تَسَعَّحُوا فِي الْمَجْلِسِ فَأَسْعُوا يَفْسَحَ اللَّهُ لَكُمْ وَإِذَا قِيلَ انْشُرُوا فَانْشُرُوا يَرْفَعِ اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا مِنْكُمْ وَالَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ دَرَجَاتٍ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرٌ ⑫

13. 汝等信徒たちよ、使徒に私的なことで相談する時は、それに先だち喜捨をせよ。それはお前たちのためになり、清廉^{せいれん}なり。されど施すもの持たざる場合は、アッラーは寛大にして慈悲深くまします。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا تَنَاجَيْتُمُ الرَّسُولَ فَقُولُوا بَيْنَ يَدَيْ نَجْوَاكُمْ صَدَقَٰةٌ ذَٰلِكَ خَيْرٌ لَّكُمْ وَأَظْهَرُ ۚ فَإِنْ لَمْ تَجِدُوا فَإِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ⑬

注5 この節は、イスラム教徒に対する、ユダヤ人及びメディナの偽善者の陰謀に触れ、彼等の悪事を咎めている。ユダヤの三部族のメディナからの追放は、彼等がイスラム教に対して、又モハammad預言者の命を狙って背信行為や陰謀を繰り返した為である。

注6 当節及び次の節では、秘密の会合が非難されているが、この咎めは制限なく行われているのではない。信者は、正義を推し進める為に、秘密の会合を催す事は許されている。

14. お前たち、相談する前に喜捨を行うことを憚るか？ お前たち之をなさぬともアッラーがお前たちに寛大なる時は、礼拝を遵守し、定め^{コレ}の喜捨をなし、アッラーとその使徒に従え。アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

第三項

15. 汝は見ざるか、かのアッラーの怒りにふれたる者どもを友とする徒輩を？ 彼等はお前たちの仲間^{やから}に非ず、また彼等の仲間^{やから}に非ず。彼等はそれと知りつつ虚偽の誓言をなす。

16. アッラーは彼等のために厳しい懲罰をすでに用意せり。彼等が日頃なせることは実に邪悪なり。

17. 彼等は悪行を隠さんがために誓いを立て、(注7)アッラーの道より人々を背かしむ、それ故に彼等は屈辱的な懲罰を受けん。

18. その財も子女も、アッラーに対してはいささかも役に立たざるべし。彼等は業火^{こうか}の住人、その中に永劫^{えいこく}に留まらん。

19. アッラーが彼等を一斉に召集する日、彼等は今お前たちに誓いを立てる如くアッラーに誓いを立て、以て何事かを得んと想わん。彼等こそはげに嘘つきどもなり。(注8)

20. 悪魔^{サタン}が彼等を支配し、彼等にアッラーを念ずることを忘れさしめたり。彼等はいま悪魔^{サタン}の仲間なり。悪魔の仲間こそはげに失敗者なり。

ءَاشْفَقْتُمْ أَنْ تُقَدِّمُوا بَيْنَ يَدَيِ نَجْوَاكُمْ
صَدَقْتُ فَإِذْ لَمْ تَفْعَلُوا وَكَابَ اللَّهُ عَلَيْكُمْ
فَاقْبِسُوا الصَّلَاةَ وَآتُوا الزَّكَاةَ وَاطِيعُوا اللَّهَ وَ
رَسُولَهُ وَاللَّهُ خَبِيرٌ بِمَا تَعْمَلُونَ ﴿١٤﴾

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ تَوَلَّوْا قَوْمًا غَضِبَ اللَّهُ عَلَيْهِمْ
مَا هُمْ مِنْكُمْ وَلَا مِنْهُمْ وَيَحْلِفُونَ عَلَى الْكَذِبِ
وَهُمْ يَعْلَمُونَ ﴿١٥﴾

أَعَدَّ اللَّهُ لَهُمْ عَذَابًا شَدِيدًا إِنَّهُمْ سَاءَ مَا
كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٦﴾

إِنَّ خَدَّيْ أَبَا نَهْمٍ جُنَّةً فَصَدَّوْا عَنْ سَبِيلِ
اللَّهِ فَالَهُمْ عَذَابٌ مُهِينٌ ﴿١٧﴾

لَنْ تُغْنِيَ عَنْهُمْ أَمْوَالُهُمْ وَلَا أَوْلَادُهُمْ مِنَ
اللَّهِ شَيْئًا أُولَئِكَ أَصْحَابُ النَّارِ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿١٨﴾

يَوْمَ يَبْعَثُهُمُ اللَّهُ جَمِيعًا فَيَحْلِفُونَ لَهُ كَمَا
يَحْلِفُونَ لَكُمْ وَيَحْسَبُونَ أَنَّهُمْ عَلَى شَيْءٍ أَلَّا
إِنَّهُمْ هُمُ الْكَاذِبُونَ ﴿١٩﴾

اسْتَحْوَذَ عَلَيْهِمُ الشَّيْطَانُ فَأَنسَاهُمْ ذِكْرَ اللَّهِ
أُولَئِكَ حِزْبُ الشَّيْطَانِ أَلَا إِنَّ حِزْبَ الشَّيْطَانِ
هُمُ الْخَسِرُونَ ﴿٢٠﴾

注7 偽善者は、宣誓により、その信仰が真実であると大声で言明し、その偽りの誓いを隠そうとする。

注8 人が常習的なうそつきとなった時、彼にはそのうそが真実に思えてくる。偽善者は裁きの日に、神の御前にあってさえ、無実を主張するであろう。

21. アッラーとその使徒に逆らう者は、最も卑賤なる類いとならん。

إِنَّ الَّذِينَ يُحَادُّونَ اللَّهَ وَرَسُولَهُ أُولَئِكَ فِي

الْأَذَلِّينَ ﴿٢١﴾

22. アッラーは、「最後の勝利はわれと使徒たちのものなり」と定め給えり。げにアッラーは強力にして、偉大なり。(注9)

كَتَبَ اللَّهُ لَأَعْلَيْنَ أَنَا وَرُسُلِي إِنَّ اللَّهَ قَوِيٌّ

عَزِيزٌ ﴿٢٢﴾

23. 汝は、アッラーと末日を信ずる人々が、アッラーとその使徒に逆らう徒輩と仲良くするを見ざるべし。たとい相手が父であり、子であり、兄弟又は親族であろうとも。アッラーはこれ等の人々の心に真の信仰を刻みつけ、御自ら聖霊を以て之を強めたり。而してアッラーは、彼等を河川流るる楽園に入らしめ給わん。彼等そこに永遠に住むべし。アッラーは彼等に満悦し、彼等もアッラーに満悦す。彼等こそアッラーの党の者なるかな！ 本願成就するは、アッラーの党の者なり。(注10)

لَا تَجِدُ قَوْمًا يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ

يُوَادُّونَ مَنْ حَادَّ اللَّهَ وَرَسُولَهُ وَلَوْ كَانُوا آبَاءَهُمْ

أَوْ أَبْنَاءَهُمْ أَوْ إِخْوَانَهُمْ أَوْ عَشِيرَتَهُمْ أُولَئِكَ

كُتِبَ فِي قُلُوبِهِمُ الْإِيمَانُ وَأَيَّدَهُم بِرُوحٍ

مِّنْهُ وَيُدْخِلُهُمْ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا

الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا رَضِيَ اللَّهُ عَنْهُمْ وَرَضُوا

عَنْهُ أُولَئِكَ حِزْبُ اللَّهِ أَلَا إِنَّ حِزْبَ اللَّهِ هُمُ

الْمُقْلِحُونَ ﴿٢٣﴾

注9 最後には真実が偽善を打ち負かす事は、歴史にも大書されている。

注10 信者と不信心者の間に、真の友情も愛情も有り得ない事は明らかである。両者の概念・主義・信仰は相反し、真に親しい関係に不可欠な利益の共有が無い為、信者は不信心者と親交を結ばない様に求められている。信仰の絆は全ての結び付きに優り、血縁をもしのぐ。当節は一般に当てはまるものであるが、特にイスラム教徒と争う不信心者に向けられている。

سُورَةُ الْحَشْرِ مَدَنِيَّةٌ

﴿٥٩﴾

アル・ハシユル

(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 天にあるもの、地にあるもの、すべてはアッラーの栄光を讃え奉る。アッラーは偉人にして、賢哲にまします。
3. 最初の追放の時、經典の民の中の不信心者どもをその住居より追い出したのは、アッラーなり。お前たちは、彼等が出て行くとは思わざりき。(注1)彼等にしても、その城塞が能くアッラーの攻撃に対して耐え得べしと思ひたり。然るにアッラーは、予想せざりしところより攻撃し、彼等の心中に恐怖を投じたり。かくて彼等は信者たちと共に、自らの手で己が家を破壊せり。(注2)されば汝等眼ある者よ、之を教訓とせよ。
4. もしアッラーが彼等に対して追放を命ぜずば、アッラーは彼等を他の手段で、必ず現世で罰したりき。而して来世でも、彼等は必ず業火の罰を受けん。(注3)
5. これ彼等が、アッラーとその使徒に逆らうが故なり。誰であれアッラーに逆らわば、アッラーの応報は厳罰なり。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

سَبَّحَ لِلَّهِ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ وَهُوَ
الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ①

هُوَ الَّذِي أَخْرَجَ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ أَهْلِ الْكِتَابِ
مِنْ دِيَارِهِمْ لِأَوَّلِ الْحَشْرِ مَا ظَنَنْتُمْ أَنْ يَخْرِجُوا
وَقَلَّوْا أَنَّهُمْ مَانِعَتُهُمْ حُصُونُهُمْ مِنَ اللَّهِ فَأَتَهُمُ
اللَّهُ مِنْ حَيْثُ لَمْ يَحْتَسِبُوا وَقَذَفَ فِي قُلُوبِهِمُ
الرُّعْبَ يُخْرِبُونَ بُيُوتَهُمْ بِأَيْدِيهِمْ وَأَيْدَى
الْمُؤْمِنِينَ فَاغْتَبَرُوا يَنْبَؤًا وَلِيَ الْأَبْصَارِ ②

وَلَوْلَا أَنْ كَتَبَ اللَّهُ عَلَيْهِمُ الْجَلَاءَ لَعَذَّبَهُمْ فِي
الدُّنْيَا وَلَهُمْ فِي الْآخِرَةِ عَذَابُ النَّارِ ③

ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ شَاقُّوا اللَّهَ وَرَسُولَهُ وَمَنْ يُشَاقِقِ
اللَّهَ فَإِنَّ اللَّهَ شَدِيدُ الْعِقَابِ ④

注1 メディナのユダヤ人の物力及び政治同盟を考慮すれば、両軍の人命の犠牲無くして、ユダヤ人が容易にメディナから追放されるとは、イスラム教徒には考えられなかった。

注2 メディナを離れる前に、バヌー・ナズィールはイスラム教徒の面前で、彼等の家や動産を自らの手で壊した。モハammad預言者は、思い通りに物事の始末がでる様にと、彼等に10日間を与えた。こうして、第二次世界大戦でロシアが採択した何世紀も前に、メディナのユダヤ人が初めて焦土政策を採ったのである。

注3 バヌー・ナズィールのメディナ追放は、非常に軽い罰であった。彼等はずっと重い罰を科せられて当然であり、もし彼等が追放されていなければ、いつの日か厳罰に処されていた事であろう。

6. お前たちが彼等の^{なつめやし}菓椰子の木を伐採せることも、またその根の上に立たせておいたことも、そはアッラーが罪を犯せし者を辱めんとして、アッラーの許しによってなされたることなり。(注4)
7. アッラーがその使徒に^{ろかくひん}彼等からの^{ろかくた}鹵獲品として与えしものは、お前たちが馬や駱駝を駆^{よみ}つて捕獲せるものに非ざるなり。アッラーはその嘉する者に、使徒の権能を授け給う。アッラーは一切を支配し給う。
8. アッラーがその使徒に、諸邑の住民からの^{ろかくひん}鹵獲品として与えしものは、アッラー並びにその使徒、近親、孤児、貧者及び旅人のものなり。そはお前たちの中の富める者の手に入らざらしめんがためなり。何であれ使徒が与えるものは之を取り、使徒が禁ずるものは之を避けよ。げにアッラーの応報^{げんこく}は厳酷なり。
9. ^{ろかくひん}鹵獲品はまた貧しい移住者たちのものなり。彼等はアッラーの恩寵^{かしよう}と嘉賞を求める余り、家郷を追われ財産を失いたり。されどアッラーとその使徒を助けたり。これ等の者の信仰は、誠実なり。
10. 移住者以前にすでにこの^{ほん}邑に家を持ち、入信せる者で、移住者を愛し、移住者に分配されるものについて心に如何なる欲望も抱かず、たとい自ら貧するとも自分のことより移住者を気遣う者、而してその心から貪欲を取り除く者は、いずれ必ず成功せん。

مَا قَطَعْتُمْ مِنْ لَبَنَةٍ أَوْ تَرَكْتُمُوهَا قَائِمَةً عَلَى
أَصُولِهَا فَبِإِذْنِ اللَّهِ وَلِيُخْرِىَ الْفَسِيقِينَ ④

وَمَا آفَاءَ اللَّهِ عَلَى رَسُولِهِ مِنْهُمْ فَمَا أَوْجَفْتُمْ
عَلَيْهِ مِنْ خَيْلٍ وَلَا رِكَابٍ وَلَكِنَّ اللَّهَ يُسَلِّطُ
رُسُلَهُ عَلَى مَنْ يَشَاءُ وَاللَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ⑤

مَا آفَاءَ اللَّهِ عَلَى رَسُولِهِ مِنْ أَهْلِ الْقُرَى فَلِلَّهِ
وَالرَّسُولِ وَلِذِي الْقُرْبَىٰ وَالْيَتَامَىٰ وَالْمَسْكِينِ
وَابْنِ السَّبِيلِ كَى لَا يَكُونَ دُولَةٌ بَيْنَ الْأَغْنِيَاءِ
مِنْكُمْ وَمَا أَتَاكُمْ الرَّسُولُ فَخُذُوهُ وَمَا نَهَىٰكُمْ
عَنْهُ فَانْتَهُوا وَاتَّقُوا اللَّهَ إِنَّ اللَّهَ شَدِيدُ الْعِقَابِ ⑥

لِلْفُقَرَاءِ الْمُهَاجِرِينَ الَّذِينَ أُخْرِجُوا مِنْ دِيَارِهِمْ
وَأَمْوَالِهِمْ يُبْتَغُونَ فَضْلًا مِنَ اللَّهِ وَرِضْوَانًا
وَيُبْصِرُونَ اللَّهُ وَرَسُولَهُ أُولَٰئِكَ هُمُ الصَّادِقُونَ ⑦

وَالَّذِينَ تَبَوَّءُوا الدَّارَ وَالْإِيمَانَ مِنْ قَبْلِهِمْ يُحِبُّونَ
مَنْ هَاجَرَ إِلَيْهِمْ وَلَا يَجِدُونَ فِي صُفْدِهِمْ
حَاجَةً مِمَّا أَوْتُوا وَيُؤْتِرُونَ عَلَىٰ أَنْفُسِهِمْ وَلَوْ
كَانَ بِهِمْ خَصَاصَةٌ وَمَنْ يُوَفِّقْ شَيْخَ نَفْسِهِ
قَالَ لَيْكَ هُمُ الْمُبْلَغُونَ ⑧

注4 この言葉は、モハammad預言者の命により、バヌー・ナズィール^{ナズィール}のヤシの木を切り倒した事を指している。3節に述べられた通り、バヌー・ナズィールは要塞に籠もり、明け渡す様というモハammad預言者の命令を無視した。包圍攻撃が数日続いた後、モハammad預言者は彼等を降服させる為、彼等のなつめやしを切り倒す様命じた。ほんの数本が切られた後、彼等は降服した。モハammad預言者の命令は、近代戦争の法にのっとり、非常に軽く寛大なものであった。

11. 移住者と援助者より後に入信せる者は、(注5)

云えり、「主よ、我等並びに我等以前に入信せる兄弟たちを赦し、信者たちに対する如何なる怨恨も我等が心に許すことなかれ。主よ、げに汝は憐憫にして、慈悲深くまします」と。

وَالَّذِينَ جَاءُوا مِنْ بَعْدِهِمْ يَقُولُونَ رَبَّنَا اغْفِرْ
لَنَا وَلِإِخْوَانِنَا الَّذِينَ سَبَقُونَا بِالْإِيمَانِ وَلَا
تَجْعَلْ فِي قُلُوبِنَا غِلًّا لِلَّذِينَ آمَنُوا رَبَّنَا إِنَّكَ
رَءُوفٌ رَحِيمٌ ⑪

第二項

12. 汝はかの似非信者どもを見ざりしか？ 彼等は經典の民の中の信ぜざる兄弟どもに云えり、「もしお前たちがメディナより追放されなば、我等もお前たちと共に去らん。また我等は、お前たちに敵対する者は、断固従わぬ。お前たちが攻撃せられなば、我等は必ずお前たちを援助せん」と。されどアッラーは、彼等が偽つきなることを立証す。
(注6)

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ نَافَقُوا يَقُولُونَ إِخْوَانُهُمُ الَّذِينَ
كَفَرُوا مِنْ أَهْلِ الْكِتَابِ لَئِنْ أُخْرِجْتُمْ لَنَخْرُجَنَّ
مَعَكُمْ وَلَا نَطِيعُ فِيكُمْ أَحَدًا أَبَدًا وَإِنْ قُوتِلْتُمْ
لَنَنْصُرَنَّكُمْ وَاللَّهُ يَشْهَدُ إِنَّهُمْ لَكَايُونَ ⑫

13. 彼等が追われるとも、彼等は共に去りはせぬ。攻撃されるとも、援助などせじ。たとい援助するとも、必ず背を見せて敗走せん。その時彼等は誰の援助も得ざるべし。

لَئِنْ أُخْرِجُوا لَا يَخْرُجُونَ مَعَهُمْ وَلَئِنْ قُوتِلُوا
لَا يَنْصُرُوهُمْ وَلَا يَنْصُرُوهُمْ يُوَلُّونَ الْأَدْبَارَ
ثُمَّ لَا يَنْصُرُونَ ⑬

14. 実は彼等の心の中は、アッラーよりもお前たちをより一層恐れるなり。そは彼等がなにもわからぬ民なるが故なり。

لَا أَنْتُمْ أَشَدُّ رَهْبَةً فِي صُدُورِهِمْ مِنَ اللَّهِ ذَلِكَ
بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَا يَفْقَهُونَ ⑭

15. 彼等は強力に防塞された邑又は城壁の背後よりならでは、一団となって、お前たちと戦わざるべし。彼等同士の戦いは熾烈なり。汝は彼等が団結していると思えども、彼等の心は四分五裂なり。そは彼等が思慮なき民なるが故なり。(注7)

لَا يُقَاتِلُونَكُمْ جَمِيعًا إِلَّا فِي قُرَى مُحَصَّنَةٍ أَوْ
مِنْ وَرَاءِ جَدِيدٍ بَأْسُهُمْ بَيْنَهُمْ شَدِيدٌ تَحْسِبُهُمْ
جَمِيعًا وَفُلُوبُهُمْ شَتَّى ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَا يَعْقِلُونَ ⑮

注5 この言葉は、メディナに後からやって来た避難民、又はイスラム教徒の新しい世代全体を指すようだ。

注6 偽善者達は、モハammad預言者を拒み、必要な時に手が差し伸べられると偽りの約束をしたとして彼との契約を破る様に、メディナのユダヤ人を煽った。彼等の言葉を信じて、ユダヤ人がモハammad預言者を拒み、彼に向い進撃した時、彼等はユダヤ人を見捨てた。

注7 不信心者、特にユダヤ人とメディナの偽善者は、反イスラムで結び付いている様に見えるが、戦いの共通の動機が無く、利害も異なるので、彼等の間に真の団結は有り得ないと、当節は示している。アラビアには、イスラム国家に対抗して団結している様に見える三つの勢力、ユダヤ人、メディナの偽善者、メッカの偽

16. 彼等は、彼等より少し前の者ども、己が所業故に悪果を嘗めさせられた徒輩と、相似たり。而して、彼等には痛罰あり。(注8)

كَشَلِ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ قَرِيبًا ذَاتُوا بَالٍ أَنفِهِمْ
وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ⑮

17. そは人に向って「信仰を棄てよ」と云う悪魔に似たり。その人不信心者となれば、悪魔は云う、「我は汝と関わりなし。我は万物の主アッラーを畏敬し奉る」と。

كَشَلِ الشَّيْطَانُ إِذْ قَالَ لِلْإِنْسَانِ اكْفُرْ فَلَمَّا كَفَرَ
قَالَ إِنِّي بَرِيءٌ مِنْكَ إِنِّي أَخَافُ اللَّهَ رَبَّ الْعَالَمِينَ ⑯

18. されば、彼等両者の末路は業火の中となり、末長くそこに住み留まらん。不義者への応報はかくの如し。

فَكَانَ عَاقِبَتُهُمَا أَنَّهُمَا فِي النَّارِ خَالِدِينَ فِيهَا وَ
ذَلِكَ جَزَاءُ الظَّالِمِينَ ⑰

第三項

19. 汝等信徒たちよ、アッラーを畏れ敬え。而して各人に、明日にそなえて何をなすかを留意せしめよ。アッラーを畏れ敬え。げにアッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللَّهَ وَلْتَنْظُرْ نَفْسٌ مَا قَدَّمَتْ
لِحَدِّهِ وَاتَّقُوا اللَّهَ إِنَّ اللَّهَ خَبِيرٌ بِمَا تَعْمَلُونَ ⑱

20. アッラーを忘れたるが故に、アッラーが彼等に己が魂を忘れせしめたる者、かかる徒輩になるなかれ。邪悪なる者とは、彼等なり。

وَلَا تَكُونُوا كَالَّذِينَ نَسُوا اللَّهَ فَأَنْسَاهُمْ أَنفُسَهُمْ
أُولَئِكَ هُمُ الْفَاسِقُونَ ⑲

21. 業火の住人と樂園のそれとは等しからず。勝利者とは、樂園の住人なり。

لَا يَسْتَوِي أَصْحَابُ النَّارِ وَأَصْحَابُ الْجَنَّةِ أَصْحَابُ
الْجَنَّةِ هُمُ الْفَائِزُونَ ⑳

22. もしわれらこのクルアーンを山の上に降したりせば、汝は、山が畏まり、アッラーを

لَوْ أَنزَلْنَاهُ الْفُرْقَانَ عَلَى جَبَلٍ لَّرَأَيْتَهُ خَاشِعًا

像崇拜者クライシュがいる。クライシュは、イスラム勢力の高まりに、彼等の覇権に対する危機を読み取り、偽善者達（アブドゥラ・ビン・オバイがその指導者であった）はメディナの支配権を、そしてユダヤ人は彼等の組織と民族の優越をそれぞれ脅かされると考えた。共通の目的がないので、彼等の上辺の団結は確固たる基盤を持たず、危機に瀕すれば実現しないであろう。

注8 この言葉は、バドルで不名誉な敗北を喫したメッカのクライシュあるいは、バドルの後謀略のかどで罰せられたバヌー・カイヌカのことを示すようだ。後者は、バドルの戦いの一ヶ月後、イスラエル三部族の中で最初にメディナより追放されたが、それは彼等がモハammad預言者との誓約を破ったからであった。最終的に彼等はシリアへ落ち着いた。

注9 イスラム教以前の教義はいずれも、尊大な異教徒であるアラブ人から多神教信仰及び偶像崇拜行為を引き離す事ができず、彼等は硬い岩の様にベドゥウィンの慣習に固執し、隣接するキリスト教文明の華やかさに惑わされていたが、イスラム教の崇高なお告げの前にへりくだり、かつてのかたくなな心からは、知識の泉がほとばしるであろう。当節は以上の事を示している。

恐れて粉碎四散するを見ん。われらがこれ等の比喩を述べるは、人間に反省を促さんがためなり。(注9)

23. 彼はアッラーなり、彼の外に神なし、見えざるものも、見えるものも知悉し給う。彼は仁慈者、慈悲者なり。
24. 彼はアッラーなり、彼の外に神なし、至高者なり、天主なり、平安の源なり、安全の授与者なり、守護者なり、偉力者なり、征服者なり、至尊者なり。神聖なるかなアッラー、人々が彼と併せ祀る神々とは比較にならぬ高みにまします御方。
25. 彼はアッラーなり、創造者なり、造形者なり。最高の美名は挙げて彼の有なり。天にあるもの、地にあるもの、挙げて彼を讃美し奉る。彼は偉大にして、賢哲にまします。

مُتَصَدِّعًا مِّنْ خَشْيَةِ اللَّهِ وَتِلْكَ الْأَمْثَالُ
نَضَرِبُهَا لِلنَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَتَفَكَّرُونَ ﴿٢٣﴾

هُوَ اللَّهُ الَّذِي لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ عِلْمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ
هُوَ الرَّحْمَنُ الرَّحِيمُ ﴿٢٤﴾

هُوَ اللَّهُ الَّذِي لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ الْمَلِكُ الْقَدُّوسُ
السَّلَامُ الْمُؤْمِنُ الْمُهِيمُ الْعَزِيزُ الْجَبَّارُ الْمُتَكَبِّرُ
سُبْحَنَ اللَّهِ عَمَّا يُشْرِكُونَ ﴿٢٥﴾

هُوَ اللَّهُ الْخَالِقُ الْبَارِئُ الْمُصَوِّرُ لَهُ الْأَسْمَاءُ الْحُسْنَىٰ
يُسَبِّحُ لَهُ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَهُوَ الْعَزِيزُ
الْحَكِيمُ ﴿٢٦﴾

سُورَةُ الْمُتَجِنَّةِ مَدَنِيَّةٌ

アル・ムムタヘナ

(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み^{あまね}遍くアッラーの御名^{ごな}において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 汝等信徒たちよ、わが敵にして且つお前たちの敵たる者を友とするなかれ。お前たちは、お前たちに降^{くだ}されたる真理を信ぜず、お前たちが主アッラーを信ずるというだけの理由で使徒並びにお前たちを家郷から追い出したるあの者どもに、友誼を示さんとするか？た^{かし}いとお前たちがわがために出て奮戦し、嘉^か賞を得んと欲しても、心ひそかにあの者どもに好意を寄せては、われはお前たちが隠^{かく}すことも顕^あすこともよく承知している 故、彼等を友とするなかれ。お前たちのうち誰であれそのようなことをなさば、正しい道を踏みはずしたことになるぞ。(注1)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَتَّخِذُوا عَدُوِّي وَعَدُوَّكُمْ
أَوْلِيَاءَ تَلْقَوْنَ إِلَيْهِمْ بِالْمُودَّةِ وَقَدْ كَفَرُوا بِمَا
جَاءَكُمْ مِنَ الْحَقِّ يُخْرِجُونَ الرَّسُولَ وَإِيَّاكُمْ أَنْ
تُؤْمِنُوا بِاللَّهِ رَبِّكُمْ إِنْ كُنْتُمْ حَرَجْتُمْ جِهَادًا
فِي سَبِيلِي وَابْتِغَاءَ مَرْضَاتِي تُسْرِوْنَ إِلَيْهِمْ
بِالْمُودَّةِ ۖ وَأَنَا أَعْلَمُ بِمَا أَخْفَيْتُمْ وَمَا أَعْلَنْتُمْ
وَمَنْ يَفْعَلْهُ مِنْكُمْ فَقَدْ ضَلَّ سَوَاءَ السَّبِيلِ ②

3. もし彼等がお前たちより優位に立たば、彼等は必ずお前たちの敵とならん。而して彼等は悪意を以て、その手とその舌をお前たちに差し伸べ、お前たちが不信心者にならんことを熱望す。

إِنْ يَتَفَقَّهُوْكُمْ يَكُونُوا آعْدَاءُ وَيَ سْطُوا إِلَيْكُمْ
أَيْدِيَهُمْ وَأَلْسِنَتُهُمْ بِالسُّوءِ وَوَدُّوا لَوْ
تَكْفُرُونَ ③

4. 親族の絆も、子女も、復活の日にはなんの役にも立たざるべし。アッラーはお前たちに判決を下すべし。アッラーはお前たちの所業をみそなはし給う。

لَنْ تَنْفَعَكُمْ أَرْحَامُكُمْ وَلَا أَوْلَادُكُمْ يَوْمَ الْقِيَمَةِ
يَفْصِلُ بَيْنَكُمْ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ④

5. お前たちのために、アブラハムと彼に従いたる人々のよい手本あり。彼等はその民に

قَدْ كَانَتْ لَكُمْ أُسْوَةٌ حَسَنَةٌ فِي إِبْرَاهِيمَ وَالَّذِينَ

注1 この禁止令は非常に厳しいものである。イスラム教徒は、神の敵と公言する者、その家庭から預言者やイスラム教徒を追い払い、イスラム教を滅ぼそうとする者と親交をもってはならない。イスラム教の妨げになる近親者との縁に配慮しなくとも良いという事も、この禁止令に含まれている。イスラム教の敵は、それが誰であれ、神の敵である。

向って云えり、「我等は、お前たち並びにお前たちがアッラー以外に崇める神々と何んの関わりもなし。我等はお前たちが崇める神々のすべてを信ぜず。お前たちがアッラーのみを信ずるに至るまで、我等とお前たちの間には永久に敵意と憎悪が生じたり」と。但し、アブラハムはその父に向って云えり、「我は汝のためにアッラーを説き伏す能力をもたざれど、必ず汝のために宥恕を請わん」と。彼等は神に向って祈りて、云えり、「主よ、我等はひたすら汝にお縋りし、汝に悔い改め、汝に帰趨す。(注2)

6. 主よ、我等を以て信ぜざる者どもへの試練とするなかれ、而して我等を赦し給え、主よ。偉大にして賢哲にましますは、ただ汝お独り」と。
7. お前たち、これこそよい手本に非ざるか、アッラーに拝謁する最後の審判に望みを託している者たちにとりては。されどたとえ顔をそむける者あるとも、アッラーは自足し給う御方、すべての讚美に価する御方なり。

第二項

8. アッラーはお前たちと、今お前たちが敵とする者どもとの間に、好意の情を生ぜせしむることあらん。アッラーに全能なり、而して寛大にして慈悲深くまします。(注3)
9. アッラーは、宗教上のことでお前たちと戦わざりし者、またお前たちを家郷より逐わざりし者にお前たちが親切と公正を以て交わることを禁じ給わぬ。げにアッラーは公正なる者を愛で給う。

مَعَهُ إِذْ قَالُوا لِقَوْمِهِمْ إِنَّا بُرَآءُ مِنْكُمْ وَمِمَّا تَعْبُدُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ كَفَرْنَا بِكُمْ وَبَلَا بَيْنَنَا وَبَيْنَكُمُ الْعَدَاوَةُ وَالْبَغْضَاءُ أَبَدًا حَتَّى تُؤْمِنُوا بِاللَّهِ وَحْدَهُ إِلَّا قَوْلَ إِبْرَاهِيمَ لِأَبِيهِ لَسْتَغْفِرُكَ لَكَ وَمَا أَمْلِكُ لَكَ مِنَ اللَّهِ مِنْ شَيْءٍ رَبَّنَا عَلَيْكَ تَوَكَّلْنَا وَإِلَيْكَ أَنَبْنَا وَإِلَيْكَ الْمَصِيرُ ⑤

رَبَّنَا لَا تَجْعَلْنَا فِتْنَةً لِلَّذِينَ كَفَرُوا وَاعْفُ عَنَّا رَبَّنَا إِنَّكَ أَنْتَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ⑥

لَقَدْ كَانَ لَكُمْ فِيهِمْ أُسْوَةٌ حَسَنَةٌ لِّمَن كَانَ يَرْجُوا اللَّهَ وَالْيَوْمَ الْآخِرَ وَمَن يَتَوَلَّ فَإِنَّ اللَّهَ هُوَ الْغَنِيُّ الْحَمِيدُ ⑦

عَسَى اللَّهُ أَن يَجْعَلَ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَ الَّذِينَ عَادَيْتُمْ مِنْهُمْ مَوْدَّةً وَاللَّهُ قَدِيرٌ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ⑧

لَا يَنْهٰكُمُ اللَّهُ عَنِ الَّذِينَ لَمْ يُقَاتِلُوكُمْ فِي الدِّينِ وَلَمْ يُخْرِجُوكُمْ مِنْ دِيَارِكُمْ أَن تَبَرُّوهُمْ وَتُقْسِطُوا إِلَيْهِمْ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُقْسِطِينَ ⑨

注2 ある者又は人々が真実に敵意を持って向い、それを根絶しようとするのが分かれば、彼等の親交は断ち切られる事となる。アブラハムの例は、この事を強調する為に、処所で述べられた。

注3 当節は預言を含む。モハammad預言者の仲間、彼等の信仰の敵が例え近親者であれ、その者との親交を断ち切る様命じられたが、この禁止令はごく短命に終わる運命だと告げられた。かつての敵が彼等の愛する友となる日は急速に近付きつつあった。次節が示す通り、この戒律は、イスラム教徒と戦う不信心者に対してのみ適用される。イスラム教徒でない普通の人々との友好は禁じられているわけではない。

10. アッラーがお前たちに禁ずるは、宗教上のことでお前たちと戦い、お前たちをその家郷から逐い出した者並びにその放逐に手を貸した者と友誼を結ぶことのみなり。何人であれ彼等を友とする者、そは罪人なり。
11. 信徒たちよ、女性の信者がお前たちの許へ逃げて来た時は、まずよく調べよ。アッラーは彼女たちの信仰の度合いをよく知り給う。而して、彼女たちが真の信者なりとわかれれば、不信心者の許へ帰すなかれ。彼女たちが不信心者の妻たることは合法に非ず、また不信心者が彼女たちの夫たることも合法に非ず。但し、婚資として費せるものは、その不信心者の夫に返還せよ。而して、お前たちが彼女たちに婚資を与うれば、彼女たちと結婚するも罪に非ず。不信心者の女との絆を、固持するなかれ。されど、お前たちが費せるものの返還を求め、不信心者にもその費せるものの返還を求めしめよ。これアッラーの審判なり。アッラーはお前たちを審判す。アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。(注4)
12. もしお前たちの妻たちのうち、お前たちを棄てて不信心者の許へ走り、お前たちが報復して、不信心者どもから爾獲品を獲た場合は、その中から妻に逃げられた男に、そ

إِنَّمَا يَنْهَكُمُ اللَّهُ عَنِ الَّذِينَ قَتَلُواكُمْ فِي الدِّينِ وَأَخْرَجُواكُمْ مِنْ دِيَارِكُمْ وَظَهَرُوا عَلَىٰ إِخْرَاجِكُمْ أَن تَوَلَّوْهُمْ وَمَنْ يَتَوَلَّهُمْ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الظَّالِمُونَ ⑩

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا جَاءَكُمُ الْمُؤْمِنَاتُ مُهْجِرَاتٍ فَامْتَحِنُوهُنَّ ۚ إِنَّهُنَّ أَعْلَمُ بِأَيْسَرِهِنَّ ۚ وَإِنْ عَلِمْتُمُوهُنَّ مُؤْمِنَاتٍ فَلَا تَرْجِعُوهُنَّ إِلَى الْكُفَّارِ لَا هُنَّ حِلٌّ لَّهُمْ وَلَا هُمْ يَحِلُّونَ لَهُنَّ وَآتُوهُنَّ مَا نَفَقُوا ۚ وَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ أَنْ تَنْكِحُوهُنَّ إِذَا آتَيْتُمُوهُنَّ أَجُورَهُنَّ ۚ وَلَا تَنْسِكُوا بِعَصَمِ الْكُوفَرِ وَاسْأَلُوا مَا أَنْفَقْتُمْ وَلَيْسَ لَكُمْ أَنْ تَنْفَقُوا ذِكْرُكُمْ ۚ اللَّهُ يَحْكُمُ بَيْنَكُمْ ۚ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ⑪

وَإِنْ فَاتَكُمْ شَيْءٌ مِنْ أَزْوَاجِكُمْ إِلَى الْكُفَّارِ فَعَقَبْتُمْ فَاتُوا الَّذِينَ ذَهَبَتْ أَزْوَاجُهُمْ مِثْلَ

注4 イスラム教徒が激しく迫害され、メッカを去りメディナのイスラム社会に加わるのも危うい時ではあったが、信者の絶え間ない流れは、メッカに近親者を残したままで、メディナに殺到した。これ等避難民の中には、相当数の女性が含まれていた。当節はその様な難民のイスラム女性について語っている。メッカから流れて来た女性は調査を受け、その信仰が真実のものであり、イスラム教を受け入れた動機に不純なもの無い事を証さねばならない。それができなければ、如何なる女性もイスラム社会へは受け入れられない。此所にモハammad預言者の苦悩の様がよく表されている。当節は更に、信者の女性と不信心者の夫の婚姻関係は、彼女がイスラム社会に加わる時自動的に解消され、ある信者が二つの条件を満たせば、彼女との結婚が認められる、と述べている。(1)彼は、彼女の夫が彼女の為に使った費用を払い戻さねばならない。(2)彼は彼女の婚資も用意し、支払わなければならない。イスラム教徒とイスラム教を捨てた妻との婚姻も同様に続かず、もしその様な背教者の女性が不信心者と結婚するなら、イスラム教徒が難民の女性信者と結婚する時と同じ手続きがとられるであろう。当節のこの相互協定は、個人間の問題だけでなく、これ等の節が特に取り上げる戦時の慣例として国により実施されるものである。個々の信者と不信心者間の社会的関係は継続し得ないし、又してはならない。

の者が婚資に費せるものと同額のものを与えよ。而して、お前たちが信ずるアッラーを畏敬せよ。(注5)

مَا أَنْفَقُوا وَاتَّقُوا اللَّهَ الَّذِي أَنْتُمْ بِهِ مُؤْمِنُونَ ﴿١٣﴾

13. 預言者よ、女性の信徒が汝に來たりて、アッラーと偕に何者も併せ祀らず、盜まず、姦通せず、子女を殺さず、自ら捏造せる嘘を云いふらさず、正しいことにおいて汝に背かず、と誓わば、彼女たちの忠誠の誓いを納れて、彼女たちのためにアッラーの宥恕を請え。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ إِذَا جَاءَكَ الْمُؤْمِنَاتُ يُبَايِعْنَكَ عَلَى أَنْ لَا يُشْرِكْنَ بِاللَّهِ شَيْئًا وَلَا يَسْرِقْنَ وَلَا يَزْنِينَ وَلَا يَقْتُلْنَ أَوْلَادَهُنَّ وَلَا يَأْتِينَ بِهَتَّانٍ لِقَاتِنَهُ بَيْنَ أَيْدِيَهُنَّ وَأَرْجُلِهِنَّ وَلَا يَعْنِيَنَّ فِي مَعْرُوفٍ فَبَايِعْهُنَّ وَاسْتَغْفِرْ لَهُنَّ اللَّهُ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿١٤﴾

14. 汝等信徒たちよ、アッラーの怒りを蒙れる徒輩を友とするなかれ。彼等は、不信心者どもが墓中の者に絶望する如く、来世に絶望する者なり。(注6)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَتَوَلَّوْا قَوْمًا غَضِبَ اللَّهُ عَلَيْهِمْ قَدْ يَسْأَلُونَ الذِّكْرَ كَمَا يَسْأَلُ الْكَافِرُونَ أَصْحَابَ الْقُبُورِ ﴿١٥﴾

注5 もし、イスラム教徒の妻が不信心者のもとへ走り、不信心者の女性がイスラム教徒達に捕らわれるか、彼女が不信心者達から逃れてイスラム社会へ加わるなら、信者の夫が逃亡した妻に支払った婚資と、妻がイスラム社会へ入った不信心者の夫へ払う金額が同じ場合、信者の夫の損失はそれで相殺される事となる。しかし、不足があるとすれば、信者達がそれを補うか、あるいは、他の説によると、国の戦利品で埋め合わされた事になる。不信心者が、彼のもとへ走った女性にその夫が支払った婚資の返還を拒むであろうから、この協定は必要なものであった。

注6 最後の文は、彼等は死がいつか生に訪れると信じない様に、来世も信じない事を示している。「アッラーの怒りをこうむれる」という言葉が、クルアーンの数節でユダヤ人に関して使われているので、ここでの「不信心者」は特にユダヤ人を指しているようだ。

سُورَةُ الصَّفِّ مَدَنِيَّةٌ

アル・サッフ
(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く^{あまわ}アッラーの御名^{みな}において。
2. 天にあるもの、地にあるもの、^{あげ}挙げてアッラーを讃美し奉る。彼は偉大にして、賢哲にまします。
3. 汝等信徒たちよ、何故に行わざることを口にするのか？(注1)
4. 行わざることを口にするのは、アッラーが最も憎むべきことなり。
5. げにアッラーは、堅固なる建物の如く、隊伍を組んでアッラーの道のために戦う者を愛て給う。(注2)
6. モーゼがその民に向ってかく云いたる時を^{おも}念え。「我が民よ、何故にお前たちは我を中傷するか？お前たち、我がお前たちに遣わされた使徒なることを知りながら」されど、彼等が正道を逸脱したれば、アッラーは彼等の心を歪^{ひがひ}させたり、アッラーは邪悪な人々を導かざるが故に。(注3)

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

سَبَّحَ لِلَّهِ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ وَهُوَ
الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ②

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لِمَ تَقُولُونَ مَا لَا تَفْعَلُونَ ③

كَبُرَ مَقْتًا عِنْدَ اللَّهِ أَنْ تَقُولُوا مَا لَا تَفْعَلُونَ ④

إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الَّذِينَ يُقَاتِلُونَ فِي سَبِيلِهِ مَقَاتًا
كَأَنَّهُمْ بُنْيَانٌ مَرْصُورٌ ⑤

وَإِذْ قَالَ مُوسَى لِقَوْمِهِ يُقَوْمِ لِمَ تَقُولُونَ وَقَدْ
تُعْلَمُونَ أَنَّ رَسُولَ اللَّهِ إِلَيْكُمْ فَلْيَاذَعُوا أَرْأَعُ
اللَّهُ قُلُوبَهُمْ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْفَاسِقِينَ ⑥

注1 イスラム教徒の行いは発言と一致していなければならない。自慢や実質の無い言葉は何の役にも立たない。行為の伴わない口先だけの発言は、偽善と不実の包合を帯びる。

注2 イスラム教徒は、彼等が無条件に従わねばならない指導者の指揮の下、悪の勢力に対し堅固な前線となる様期待されている。しかし一つに強く結び付く社会を求める人々は、生活規準、概念、目的、目的達成の為の宣伝活動の一つにしなければならない。

注3 モーゼ程に従者の手で精神的苦痛を味あわされた神の預言者は、おそらくいまい。モーゼの一族は、目の前でファラオの強力な軍隊がおぼれて行くのを見たが、彼等は海を渡り切るとたちまち偶像崇拝に戻ろうとし、誰かが偶像を崇めるのを見て、自分達にもその様な偶像を作るようにモーゼに頼んだ(7:139)。神が彼等に与えると約束された地カナンへ行く様求められた時、彼等はモーゼに、モーゼがそれ程までに信じる彼の神と行けば良いではないか、自分達は、落ち着いたこの場所から一寸たりとも動くつもりはないと、恥知らずにもばかにした様な口調で告げた(5:25)。この様に、モーゼは、彼がフォラオの厳しい束縛から解放してやった人々から何度も侮辱され、彼等を偶像崇拝から立ち直らせようとする努力を踏みにじられた。彼等はモーゼを誹謗すらした。

7. またマリアの子イエスがかく云いたる時を念え。「イスラエルの子孫よ。我はお前たちに遣わされたる使徒なり。我は、我以前に降されたる律法を確証し、我が後に来る一人の使徒の朗報を伝えに來た者。その使徒の名は、アフマドなるべし」然るに、イエスが種々の明証を携えて彼等に來ると、彼等は云えり、「これ明らかに妖術なり」と。
(注4)

8. 誰が、イスラームに帰依することを勧められながら、アッラーに対して嘘を捏造する者にもまして罪を犯し得ようか？アッラーは罪人どもを導き給わず。(注5)

وَإِذْ قَالَ عِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ يَدْعُو إِسْرَءِيلَ إِنِّي رَسُولُ اللَّهِ إِلَيْكُمْ مُصَدِّقًا لِمَا بَيْنَ يَدَيَّ مِنَ التَّوْرَةِ وَمُبَشِّرًا بِرَسُولٍ يَأْتِي مِنْ بَعْدِي اسْمُهُ أَحْمَدُ فَلَمَّا جَاءَهُمْ بِالْبَيِّنَاتِ قَالُوا هَذَا سِحْرٌ مُبِينٌ ④

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرَى عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ وَهُوَ يُدْعَى إِلَى الْإِسْلَامِ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ⑤

注4 精霊の到来に関するイエスの預言は、ヨハネの福音書12:13、14:16~17、15:26、16:7を参照の事。その内容からは、次の事が推論される。(1)もしイエスがこの世を去らない限り、安らぎを与える、真の精霊は現れるはずがなかった。(2)彼は永遠にこの世に止まり、イエス自身が語れなかった多くの事を述べるはずであった。それは、当時世界の人々がそれ等に、耐え得る能力を持ちあわせていなかったので多くは語られなかった。(3)彼はあらゆる真実への導き手であろうとした。(4)彼は自身の事は語らないが、耳にする事は全て話そうとした。(5)彼はイエスを賛え、彼の真実を証そうとした。この聖霊に関する記述は、クルアーンに与えられたモハammad預言者の地位や使命と完全に一致する。モハammad預言者は、イエスがこの世を去った後に現れた。彼は啓示を伝える最後の預言者であり、クルアーンは、終りの時まで全人類に向けられた神の律法を、最後に啓示した(54)。モハammad預言者は自らの事には触れなかったが、神に告げられた事は全て話した(534)。彼はイエスを賛えた(2254、356)。ヨハネの福音書にある上記の預言は、アハマドという名がパラクレートとなっている他は、当節の預言と酷似している。キリスト教徒の作家達は、聖書とクルアーンに一致する特質を無視して、二つの名の違いを根拠に、クルアーンの正当性を疑う。事実、イエスはアラム語、ヘブライ語の両方を話した。アラム語は彼の母の言葉であり、ヘブライ語は彼の宗教用語であった。現存の聖書は、アラム語及びヘブライ語をギリシャ語に翻訳したものである。翻訳では、当然、元の内容の美しさを完全に伝える事はできない。言語には限りがある。同じ事は、それを話す人にも当てはまる。彼等の眼界は、その作品に表れる。ギリシャ語には、アラビア語のアハマドによく似た意味のペリクルトスという語がある。高名なキリスト教の神学者Jack Finganは、その作品'The Archaeology of World Religions'の中で次の様に述べている。「ギリシャ語でパラクレートス(聖霊)はペリクルトス(高名な)と非常に似ており、後者はアハマドやムハマドという名を意味する。」

当節の預言はモハammad預言者に適用されるが、必然的に約束された救世主、アハマディーア協会の創始者にも当てはまる。その理由は、彼が神の啓示の中でアハマドと呼ばれたからであり(パラヒーン・アハマディーヤ)、その身にモハammad預言者の第二の出現又は再来が起きたからである。このモハammad預言者の第二の出現に関しては、62章3節が明確に述べている。モハammad預言者についての預言はバルナバの福音書にも明示されている事が、加えて述べられている様だ。この福音書は、キリスト教に、にせ物として扱われているが、四つの福音書と同じく本物と認められるべきだと主張している。

注5 当節は不信心者の事を述べている。モハammad預言者は彼等にお告げを発したが、それは彼が招待主であり、彼等が招待客だったからである(20:109、33:47)。又、彼等はクルアーンの中で、神に対し虚偽を捏造する者と烙印を押されている(6138、141)。しかしこの預言が約束されたメシヤに適用されるとすれば、

9. 彼等は息を吹きかけてアッラーの光明を吹き消さんとす。(注6)されど、不信心者どもが^{いかに}強く嫌悪すると、アッラーはその光明を完うせん。

يُرِيدُونَ يُظْفِقُوا نُورَ اللَّهِ بِأَفْوَاهِهِمْ وَاللَّهُ مُتِمُّ
نُورِهِ وَلَوْ كَرِهَ الْكَافِرُونَ ⑨

10. アッラーこそはその使徒に、^{まこと}真の宗教と嚮導^{きやうどう}をもたせて遣わした御方なり。神と共に他神を併せ祀る徒輩が^{いかに}嫌悪すると、彼はすべての宗教の上に真の宗教を普及させん。(注7)

هُوَ الَّذِي أَرْسَلَ رَسُولَهُ بِالْهُدَى وَدِينِ الْحَقِّ
لِيُظْهِرَهُ عَلَى الدِّينِ كُلِّهِ وَلَوْ كَرِهَ الْمُشْرِكُونَ ⑩

第二項

11. 汝等信徒たちよ、お前たちが痛罰から救われる取引を、われはお前たちに伝授しようか？(注8)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا هَلْ أَدُلُّكُمْ عَلَى تِجَارَةٍ تُجْنِبُكُمْ
مِنْ عَذَابِ أَلِيمٍ ⑪

12. そはアッラーと使徒を信じ、アッラーの御為に生命も財産もなげうって戦うことなり。もしお前たち^{これ}を知らば、そはお前たちのために最善なり。

تُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ وَتُجَاهِدُونَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ
بِأَمْوَالِكُمْ وَأَنْفُسِكُمْ ذَلِكَ خَيْرٌ لَّكُمْ إِنْ كُنْتُمْ
تَعْلَمُونَ ⑫

13. さればアッラーはお前たちの諸悪を赦し、お前たちを河川流る樂園に入らしめ、エデンの樂園の汚れない楽しい家に住ましめん。そは最高の幸福なり。

يَغْفِرْ لَكُمْ ذُنُوبَكُمْ وَيُدْخِلْكُمْ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ
تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ وَمَسْكِنٌ طَيِّبَةٌ فِي جَنَّاتٍ
عَدْنٍ ذَلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ⑬

14. アッラーはまた、お前たちが好きな他の恩恵を賜うべし。すなわち、アッラーの佑助と目前の勝利なり。されば汝、信者たちにこの朗報を伝えよ。

وَأُخْرَى يُحِبُّونَهَا نَصْرٌ مِنَ اللَّهِ وَفَتْحٌ قَرِيبٌ
وَبَشِيرُ الْمُؤْمِنِينَ ⑭

「イスラムへ招かれる」という言葉は次の事を示す。約束されたメシヤが、いわゆるえせのイスラムの守護者達より、悔い改め、彼等の様なあいまいなイスラム教徒になるように、と招かれるということである。

注6 モハammad預言者は、クルアーンの中で、繰り返し「アッラーの光明」と声をあげた(4:175、5:17、64:9)。

注7 クルアーンのはとんどの注釈は、当節が約束されたメシヤに適用されると認めている。その理由として、彼の時が来れば、全ての宗教が現れ、それ等に対しイスラム教の優位が確立されるからである。

注8 貿易や商業が栄え、非常に有利な取引を求めて異常な状態となる、約束されたメシヤの時代を、当節は語っている様だ。

15. 汝等信徒たちよ、アッラーを助ける者たれ。
 マリアの子イエスがその弟子たちに向つて
 「アッラーの道のために我を助ける者は誰
 か？」と云える時、「我等アッラーを助ける
 者たらん」と弟子たちは答えたり。而して、
 イスラエルの子孫の一部は信じ、一部は之
 を信ぜざりき。さればわれらは信じたる者
 を佑助けてその敵に抗せしめ、勝利を得せ
 しめたり。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا كُونُوا أَنْصَارَ اللَّهِ كَمَا قَالَ
 عِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ لِلْحَوَارِيِّينَ مَنْ أَنْصَارِي إِلَى
 اللَّهِ قَالَ الْحَوَارِيُّونَ نَحْنُ أَنْصَارُ اللَّهِ فَأَمْنَتْ
 طَائِفَةٌ مِّنْ بَنِي إِسْرَءِيلَ وَكَفَرَتْ طَائِفَةٌ
 فَأَيَّدَْنَا الَّذِينَ آمَنُوا عَلَىٰ عَدُوِّهِمْ فَأَصْبَحُوا
 ظَاهِرِينَ ﴿١٥﴾

سُورَةُ الْجُمُعَةِ مَدَنِيَّةٌ

(٧٢)

アル・ジュムア

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 天にあるもの、地にあるもの、挙げてアッラーを賛美し奉る、至高なるかな、聖なるかな、偉大なるかな、賢哲なるかな。(注1)

يُسَبِّحُ لِلَّهِ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ الْمَلِكِ
الْقَدُّوسِ الْعَزِيزِ الْحَكِيمِ ②

3. 無知蒙昧な民に、(注2)その同族から使徒を興し、彼等にさまざまな神兆を誦み聞かせ、彼等を浄め、且つ經典と知恵を教えしむる者はアッラーなり。彼等それまで明らかに迷誤の中にありし者なれど。(注3)

هُوَ الَّذِي بَعَثَ فِي الْأُمِّيِّينَ رَسُولًا مِنْهُمْ يَتْلُو
عَلَيْهِمْ آيَاتِهِ وَيُزَكِّيهِمْ وَيُعَلِّمُهُمُ الْكِتَابَ وَالْ
حِكْمَةَ وَإِنْ كَانُوا مِنْ قَبْلُ لَفِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ③

4. またアッラーは、まだ彼等の仲間入りせぬ人々にまで。アッラーは偉大にして、賢哲にまします。(注4)

وَأَخْرَجَ مِنْهُمْ لِمَا يُلْحِقُوا بِهِمْ وَهُوَ الْعَزِيزُ
الْحَكِيمُ ④

注1 この四つの神の特性は、次節に述べられたモハammad預言者の四つの使命に係るものである。

注2 3 76、7 158 参照。

注3 モハammad預言者に下された神の使命は、当節に書かれた四つの宗教上の義務を果たす事から成る。これは彼にゆだねられた偉大で高尚な任務であつた。それは、アブラハム預言者が、息子とカーバの基盤を起こした数千年前に祈った内容が、無知のアラブ人の中からモハammad預言者が現れる事だつたからである(2:130)。事実、如何なる神の使者も、自ら高尚で清い手本となり、誠実に献身的そして高潔な弟子達の社会を準備しなければ、その使命を真に果たす事はできないのである。彼はまず弟子達に、お告げの理想と教義、その原理と重要性を教え、その後このお告げを他の人々に説く為に彼等を海外へ送り出す。彼が弟子達に与える訓練は彼等の知性を研ぎ、彼の教養の哲学が彼等に信仰の確信をもたらし、彼の高尚な手本は彼等の内に心の純化を生じさせる。当節が語るのは、宗教のこの基本要素である。

注4 モハammad預言者のお告げは、彼がその中から立ち上がったアラブ人だけでなく、非アラブ人にも向けられたものであり、又彼と同時代の人々だけでなく、終りの時が来るまで幾世代にも渡って引き継がれるものであつた。あるいは、モハammad預言者が、彼の最初の弟子達にまで加わっていない他の人々の中から立たせる、と当節は示しているのかもしれない。当節のこの言葉は、モハammad預言者の有名な言葉にも出て来るもので、後日約束のメシヤの身にモハammad預言者が再度現れる事を示している。アブー・フライラは次の様に語っている。「ある日我々がモハammad預言者と座っていると、アル・ジュムア(当章)が啓示された。私はモハammad預言者から尋ねられた『この言葉は誰に向けられているのか。述べてみよ!』ペルシア人のサルマーンが我々の中に居た。私が同じ質問を彼は繰り返すと、モハammad預言者はその手をサルマーンの上に置き、

5. これアッラーの恩寵なり。彼はその欲する者に之を与え給う。アッラーは限りなき恩寵の主なり。

ذَٰلِكَ فَضْلُ اللَّهِ يُؤْتِيهِ مَنْ يَشَاءُ وَاللَّهُ دُوَّ الْفَضْلِ
الْعَظِيمِ ⑤

6. 律法の戒律の義務を負わされ、しかも之を耐え忍べざる者は、譬うれば經典の重荷を運ぶ驢馬の如し。アッラーの神兆を拒否する徒輩もまた災いなるかな。アッラーは不義の徒輩を導き給わぬ。

مَثَلُ الَّذِينَ حُمِّلُوا التَّوْرَةَ ثُمَّ لَمْ يَحْمِلُوهَا
كَمَثَلِ الْحِمَارِ يُحْمَلُ أَثْقَالًا بِئْسَ مَثَلُ
الْقَوْمِ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِ اللَّهِ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي
الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ⑥

7. 云え、「汝等ユダヤ教徒よ、お前たちは、他のすべての民を超えてアッラーのお気に入りだと主張するならば、而してその言本当ならば、ただちに死を希え」と。(注5)

قُلْ يَا أَيُّهَا الَّذِينَ هَادُوا إِنْ زَعَمْتُمْ أَنَّكُمْ أَوْلِيَاءُ
لِلَّهِ مِنْ دُونِ النَّاسِ فَتَمِتْ أَلْسِنَتُهُمْ أَنْ يَكُونَ
لَهُمْ ⑦

8. しかし彼等は、己が手が先に送りしことのために、決して死を希わざるべし。アッラーは不義な徒輩を熟知し給う。

وَلَا يَسْتَوُونَ أَبَدًا بِمَا قَدَّمَتْ أَيْدِيهِمْ
وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِالظَّالِمِينَ ⑧

9. 云え、「お前たちが死から逃れんとしても、死は必ずお前たちに追いつかん。而してお前たちは、不可視なる世界も可視なる世界も知る主に帰らん。その時主は、お前たちが日頃なせることをお前たちに語り告げん」と。

قُلْ إِنَّ الْمَوْتَ الَّذِي تَفِرُّونَ مِنْهُ فَإِنَّهُ مُلْقِيكُمْ
ثُمَّ تَرَدُّونَ إِلَىٰ عِلْمِ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ فَيُنَبِّئُكُمْ
بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ⑨

第二項

10. 汝等信徒たちよ、金曜日の礼拝に召される時は、アッラーを念ずることに急ぎ、すべ

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا نُودِيَ لِلصَّلَاةِ مِنْ يَوْمٍ

語った。『もし信仰がブレイアデス星団に届くものなら、サルマーンの故郷(ペルシヤ)の人のうち、だれかが、必ずそれを取り戻すであろう。』このモハammad預言者の言葉は、当節がペルシヤ人の男に向けられたものである事を示している。アハマディーア教会の創立者は、ペルシヤの子孫であり、約束されたメシヤだと主張している。モハammad預言者の別の言葉はメシヤの到来を述べたもので、その時、クルアーンは残らないがその言葉が、イスラム教ではなく、その名が残るのである。つまり、イスラム教義の真の精神は失われるのである。この様にクルアーンとハデイスは共に、当節が約束されたメシヤの身に起こるモハammad預言者の再来に触れている事を認めている。

注5 約束されたメシヤは、いわゆるイスラム教徒(偽りのイスラム教学者)に挑むが、彼はムナバハラーの要求を拒むであろう。このムナバハラーは祈りを競い合うもので、これにより、神に対し虚偽を捏造する者に神のろいがかけられる(3:62)。

ての仕事をやめよ。お前たちわかりさえすれば、その方がお前たちのためには最良なり。(注6)

الْجُمُعَةِ فَاسْعَوْا إِلَىٰ ذِكْرِ اللَّهِ وَذَرُوا الْبَيْعَ ذَلِكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ إِن كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿١٠﴾

11. 礼拝が終らば方々に散り、アッラーの恩恵を求め、自分たちが栄えるように不断にアッラーを唱念せよ。(注7)

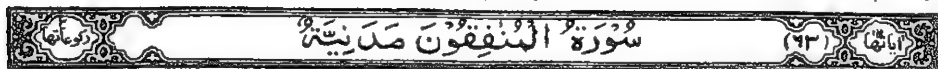
فَإِذَا قُضِيَتِ الصَّلَاةُ فَانْتَشِرُوا فِي الْأَرْضِ وَابْتَغُوا مِن فَضْلِ اللَّهِ وَاذْكُرُوا اللَّهَ كَثِيرًا لَّعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿١١﴾

12. 然るに彼等は、儲け口や娯楽を見ると、集礼を解散し、汝独りを残して去る。云え、「アッラーの許にあるものの方が、娯楽や商売よりはるかに優る。而してアッラーは最上の供給者なり」と。

وَإِذَا رَأَوْا تِجَارَةً أَوْ لَهْوًا انفَضُّوا إِلَيْهَا وَتَرَكُوكَ قَائِمًا قُلْ مَا عِنْدَ اللَّهِ خَيْرٌ مِنَ اللَّهْوِ وَمِنَ التِّجَارَةِ وَاللَّهُ خَيْرُ الرَّازِقِينَ ﴿١٢﴾

注6 前数節には、モハammad預言者を拒み、その安息日を活用し、ひいては神の不興を招く事となったユダヤ人達の事が述べられている。しかし当節では、イスラム教徒は義務的な金曜礼拝に特に注意するよう命じられている。人には皆安息日があり、イスラム教徒の安息日は金曜日である。この章は特に約束されたメシヤの事を取り上げているので、金曜礼拝に対する要求は、同時に、イスラム教徒が彼のお告げに耳を傾けるようにと彼が、らっぱのごとく呼びかけている事を示しているようだ。

注7 ユダヤ教徒やキリスト教徒の安息日とは異なり、イスラム教徒の安息日は休日ではない。金曜礼拝の前後に、イスラム教徒はいつも通りに日常業務に携って構わない。「アッラーの恩恵」とは、一般的に、「仕事をし生計を立てる」という意味に解されている。



アル・ムナーフィクーン

(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. 似非信者どもが汝に来て云う、「我等は、汝が真のアッラーの使徒なることを証言す」と。されどアッラーは、汝が確かに使徒なることを知り、また似非信者は間違いなく嘘つきなることを証言す。(注1)

إِذَا جَاءَكَ الْمُنَافِقُونَ قَالُوا نَشْهَدُ إِنَّكَ لَرَسُولُ اللَّهِ وَاللَّهُ يَعْلَمُ إِنَّكَ لَرَسُولُهُ وَاللَّهُ يَشْهَدُ إِنَّ الْمُنَافِقِينَ لَكَاذِبُونَ

3. 彼等はその誓いを隠れみのとなし、人々をアッラーの道から妨げる。彼等のなしたることはげに罪惡なり。

إِذَا خَذُوا آيَاتَهُمْ جَتَّةً فَصَدُّوا عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ إِنَّهُمْ سَاءَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ

4. そは、彼等一旦は信じたれど、後に之を棄てたるが故なり。されば彼等の心は封じられ、それ故に彼等は理解し得ざるなり。(注2)

ذَلِكَ بِأَنَّهُمْ آمَنُوا ثُمَّ كَفَرُوا فَطُبِعَ عَلَى قُلُوبِهِمْ فَهُمْ لَا يَفْقَهُونَ

5. 汝、彼等を見る時、彼等の風采が汝を感心させる。また彼等もの云えば、汝は彼等の言葉に耳傾ける。彼等は恰も支えられて立つ材木の如し。彼等は、それぞれの叫びが自分に敵対するものの如く思う。(注3) 彼等こそ敵なれば用心せよ。アッラーの呪詛が彼等の上にあれ！なんと彼等の真理から離反せることぞ！

وَإِذَا رَأَيْتَهُمْ تُعْجِبُكَ أَجْسَامُهُمْ وَإِنْ يَقُولُوا تَسْمَعُ لِقَوْلِهِمْ كَأَنَّهُمْ خُشُبٌ مُسْنَدَةٌ يُحَسِبُونَ كُلَّ صَيْحَةٍ عَلَيْهِمْ هُمُ الْعَدُوُّ فَاحْذَرْهُمْ قُلْتُمْ لَهُمُ اللَّهُ أَلَىٰ يُؤْفَكُونَ

6. 彼等に向って「いざ来れ、アッラーの使徒がお前たちのために宥恕を請わん」と云え

وَإِذَا قِيلَ لَهُمْ تَعَالَوْا يَسْتَغْفِرْ لَكُمْ رَسُولُ اللَّهِ

注1 信仰を大声で告白し、心中の背信を隠そうとするのが、偽善者の特性である。

注2 ごまかしや口先だけの話して、アッラーやアッラーの預言者をだませるという誤解にあえぎ、偽善者達は理性と分別を全て失ってしまったようだ。

注3 偽善者は自信がない。彼はいつも頼る者を求めている。又は、当節は、彼の内面が外見と一致しないと示しているのかもしれない。彼は外に向かつては、理性と威厳があり、誠実な人に見える様に振る舞うが、その内面はうつろで、心まで腐っている。口先だけの言葉で人を喜ばそうとするが、臆病で、全てを疑ってかかる。

ば、彼等はわきを向く。汝は彼等が傲然として背を向けるを見ゆ。

لَوْ وَارَوْسَهُمْ وَرَأَيْتَهُمْ يَصُدُّونَ وَهُمْ مُسْتَكْبِرُونَ ①

7. 汝、彼等のために宥恕を請うも請わざるも、それは同じなり。アッラーは断じて彼等を宥恕せざるべし。げにアッラーは邪悪な徒輩を導かず。

سَوَاءٌ عَلَيْهِمْ أَسْتَغْفَرْتَ لَهُمْ أَمْ لَمْ تَسْتَغْفِرْ لَهُمْ لَنْ يَغْفِرَ اللَّهُ لَهُمْ إِنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْفَاسِقِينَ ②

8. 「アッラーの使徒に従う者に喜捨するなかれ。彼等はいずれムハンマドを離れて四散する故に」と云う者は、彼等なり。天地の宝はすべてアッラーの有りなり。されど似非信者にはそれがわからぬ。(注4)

هُمُ الَّذِينَ يَقُولُونَ لَا تُنْفِقُوا عَلَى مَنْ عِنْدَ رَسُولِ اللَّهِ حَتَّى يَنْفَضُوا وَ لِلَّهِ خَزَائِنُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَلَكِنَّ الْنَافِقِينَ لَا يَفْقَهُونَ ③

9. 彼等は云う、「もし我等メディナに帰らば、身分の高い者が必ず卑しい者を邑から放逐せん」と。(注5) 然るに真の栄誉は、アッラーにあり、その使徒にあり、信徒たちにあり。されど似非信者にはそれがわからぬ。

يَقُولُونَ لِنْ رَجَعْنَا إِلَى الْمَدِينَةِ لَيُخْرِجَنَّ الْأَعَزُّ مِنْهَا الْأَذَلَّ وَلِلَّهِ الْعِزَّةُ وَلِرَسُولِهِ وَلِلْمُؤْمِنِينَ وَلَكِنَّ الْنَافِقِينَ لَا يَعْلَمُونَ ④

第二項

10. 汝等信徒たちよ、お前たちの財産と子女に氣をとられて、アッラーを念ずることをおろそかにするなかれ。かくなさん者は、必ず失敗者とならん。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تُلْهِكُمْ أَمْوَالُكُمْ وَلَا أَوْلَادُكُمْ عَنْ ذِكْرِ اللَّهِ وَمَنْ يَفْعَلْ ذَلِكَ فَأُولَئِكَ هُمُ الْخَاسِرُونَ ⑤

11. 死がお前たちの各自を不意に襲う前に、われらがお前たちに賜えるもののうちから喜

وَأَنْفِقُوا مِنْ مَّا رَزَقْنَاكُمْ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَأْتِيَ أَحَدَكُمُ

注4 自信が不誠実なので、偽善者は他人も自分と同じだと考える。メディナの偽善者達は、モハammad預言者の仲間目的の誠実さに対し全く愚かで誤った評価を下していた。モハammad預言者の仲間が彼の周囲に集まるのは、物的利益を求めての事であり、彼等の期待がかなわなければ、その時彼等は彼を見放すであろう、と偽善者達は考えた。時には、彼等の一人よがりむなしい期待を完全に裏切った。

注5 戦闘(おそらくはバヌー・ムスタリークに対するもの)の最中、メディナの主になりたいという期待がモハammad預言者の到来で挫かれてしまった、メディナの偽善者達の指導者アフリドゥラ・ビン・オバイは、メディナに戻る途中次の様に語ったとされる。住民の中で「最も高潔な者」は彼自身であり、それ故「最も卑しい者」とはモハammad預言者を指す事になる。アブドゥの息子は、父親のこの不愉快な自慢を耳にし、軍隊がメディアに到着した時、剣を抜き、父親こそがメディアの住民の中で最も卑しく、モハammad預言者が最も高潔であると認めるまで中に入らせなかった。この様にして、彼の自慢はその身に報いをもたらした。

捨をせよ。そは、「主よ、暫しの猶予をお与えくださるなら、我は喜捨を行い必ず義しい人間とならん」と云わざらんがためなり。

الْمَوْتُ يَقُولُ رَبِّ لَوْلَا أَخَّرْتَنِي إِلَىٰ أَجَلٍ
قَرِيبٍ فَأَصَّدَّقَ وَأَكُنْ مِنَ الصَّالِحِينَ ⑩

12. されど、定められたる時至れば、(注6)アッラーは何人にも猶予を与えざるべし。アッラーはお前たちの所業を熟知し給う。

وَلَنْ يُؤَخِّرَ اللَّهُ نَفْسًا إِذَا جَاءَ أَجَلُهَا ۚ وَاللَّهُ
بِخَيْرٍ بِمَا تَعْمَلُونَ ⑪

注6 良い目的の為に働くという、神から与えられた機会を逸する時。

سُورَةُ التَّغَابُنِ مَدَنِيَّةٌ

アル・タガーブン
(メディナ啓示)

- 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
- 天にあるもの、地にあるもの、^{あげ}奉てアッラーを讃美し奉る。(注1)大権を掌握し、讃美を一身に集める彼は、萬事を支配し給う。
- お前たちを創造したるは彼なり。然るにお前たちの中には、信者もあれば、不信者もあり。(注2)アッラーはお前たちの所業をみそなはし給う。
- 彼は真理に^ふ因って天地を創造し、お前たちを造形するにあたって美しい姿を与えたり。而して、最後の帰りどころは、彼の許なり。(注3)
- 彼は天にあるもの、地にあるもの一切を知り、お前たちが隠すことも^{あら}顯わすことも知り給う。アッラーは人々が胸に^{いだ}抱くことまで熟知し給う。(注4)
- 昔の信ぜざりし者どもの消息が、お前たちに達せざりしか？彼等は己が行状の悪果を味わい、痛罰を蒙りたり。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

يُسَبِّحُ لِلَّهِ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ لَهُ الْمُلْكُ وَلَهُ الْحَمْدُ وَهُوَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ

هُوَ الَّذِي خَلَقَكُمْ فَمِنْكُمْ كَافِرٌ وَمِنْكُمْ مُؤْمِنٌ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ

خَلَقَ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضَ بِالْحَقِّ وَصَوَّرَكُمْ فَأَحْسَنَ صُورَكُمْ وَإِلَيْهِ الْمَصِيرُ

يَعْلَمُ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَيَعْلَمُ مَا تُسْرُونَ وَمَا تُعْلِنُونَ وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِدَايَاتِ الصُّدُورِ

أَلَمْ يَأْتِكُمْ نَبُؤُا الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ قَبْلُ فَذُاقُوا وَبَالَ أَمْرِهِمْ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ

注1 万物は、定められた任務を規則正しく遂行し、その創造の目的を果たす事で自らの欠点を補い、自身の主・創造主・支配者となると神に告げる。これが「讃美」の真意である。

注2 神は人間に素晴らしい天性の力を授けられ、道徳的・精神的進歩を遂げる機会をお与えになったが、人間の中にはそれ等を正しく用いる事ができず、特に神の恩恵を知るのを拒む者もいれば、それ等を同胞の為に用い、神の喜びを受ける者もいる。これが「不信者」と「信者」の意味する所である。

注3 宇宙は一定の自然法に支配され、人間が偶然の犠牲となる事はない。むしろ、地上における神の代理として高位に据えられ、それにふさわしい力を授けられている。人間は神に自らの行為の申し開きをしなければならぬであらう。

注4 神は宇宙の創造主にして支配者であられ、神が御気付きになられない事はない。それ故、人間が自らの行為の責任を取らなくとも良いと考えるのは無意味である。

7. そは使徒たちが明らかな神兆^{しるし}を携えて彼等に来るたびに、彼等は、「ただの人間が我等を導かんとするか?」と云い、信ぜず、背きしが故なり。されどアッラーは彼等を必要とせざりき。アッラーは自足して、讚美されるべき御方なり。

8. 不信心者どもは復活はあり得べからずと断言す。云え、「主にかけて云う、そはあり。お前たちは必ず甦らしめらるべし。その時、お前たちはそのなせることを告知されん。そはアッラーにはいと易きことなり」と。

9. さればアッラー並びにその使徒と、われらが降したる光明^{あきつ}とを信ぜよ。(注5) アッラーはお前たちの所業を知悉し給う。

10. アッラーがお前たちを集合日に集め給う時、そは相互の損得明示の日となるべし。
(注6) アッラーを信じ、善行をなす者だけが、その諸々の罪を浄められ、河川流るる楽園に入らしめられ、その中に永遠に住ましめられん。そは最高の大成功なり。

11. されど、不信心者にしてわれらの神兆^{しるし}を拒否する者は、業火^{うが}の住人にして、その中に永遠に住み留まらん。行き着く先の災いなるかな!

第二項

12. 如何なる災難も、アッラーの許しなく生ずることなし。(注7) 而してアッラーを信ず

ذَٰلِكَ بِأَنَّهُ كَانَتْ تَأْتِيهِمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنَاتِ
فَقَالُوا أَبَشَرٌ يَهْدُونَنَا فَكَفَرُوا وَتَوَلَّوْا
اسْتَغْنَى اللَّهُ وَاللَّهُ غَنِيٌّ حَمِيدٌ ⑤

نَعَمْ الَّذِينَ كَفَرُوا أَن لَّنْ يُبْعَثُوا قُلْ لَّي وَرَنِي
لَتُبْعَثُنَّ ثُمَّ لَتُنَبَّيُنَّ بِمَا عَمِلْتُمْ وَذَٰلِكَ عَلَى
اللَّهِ يَسِيرٌ ⑥

فَأْمِنُوا بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ وَالنُّورِ الَّذِي أَنزَلْنَا وَاللَّهُ
بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرٌ ⑦

يَوْمَ يَجْمَعُكُمْ لِيَوْمِ الْجَنَّةِ ذَٰلِكَ يَوْمُ التَّغَابُنِ
وَمَنْ يُؤْمِنْ بِاللَّهِ وَيعْمَلْ صَالِحًا يُكْفَرْ عَنْهُ
سَيِّئَاتِهِ وَيُدْخِلْهُ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ
خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا ذَٰلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ⑧

وَالَّذِينَ كَفَرُوا وَكَذَّبُوا بِآيَاتِنَا أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ النَّارِ
خَالِدِينَ فِيهَا ۚ وَ يَسُ الْبُصِيرُ ⑨

مَا أَصَابَ مِنْ مُّصِيبَةٍ إِلَّا بِإِذْنِ اللَّهِ وَمَنْ

注5 「光明」はモハammad預言者が特に賜った、啓示・知恵・魂の啓発・洞察・神の知識と認識の光を指す。

注6 「損得明示の日」という言葉には、次の様な様々な解釈がなされる。(1)喪失と獲得の日。つまり、信者は手にした物を知り、不信心者は失った物に気付く時。(2)喪失が示される日。その日、不信心者は、神と人間に対する自身の義務を如何に怠ったかを悟り、この様にして失った物が彼等に表示されるのであろう。(3)不信心者の欠点は、信仰よりも不信仰を選ぶ彼等の無知によるものだと信者が考える日。

注7 神は一定の法則により宇宙を支配する。人間がそれ等の法のいずれかを犯す時、彼は災難に巻き込まれる。しかし神は全ての自然の法則の創造主であり、人間の苦悩はこれ等の法のいずれかに、又は神の特命の一つに背く為であり、困難は神から発するか、あるいは神の認知のもとに生じるものである。

る者は、彼その人の心を正しく導く。アッラーは萬事を熟知し給う。

يُؤْمِنُ بِاللّٰهِ يَهْدِي قَلْبَهُ ۚ وَاللّٰهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿١٣﴾

13. さればアッラーに従え、使徒に従え。されどたといお前たちが背き去るとも、われらの使徒はただ明白に神託を伝達するのが務めなり。

وَاطِيعُوا اللّٰهَ وَاطِيعُوا الرَّسُولَ ۚ فَإِن تَوَلَّيْتُمْ فَأِنَّمَا عَلَىٰ رَسُولِنَا الْبَلَّغُ الْبَيِّنُ ﴿١٤﴾

14. アッラー、彼の外に神なし。されば信者たちをアッラーに頼らしめよ。

اللّٰهُ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ ۚ وَعَلَىٰ اللّٰهِ قَلْبُتَوَكِّلِ الْمُؤْمِنُونَ ﴿١٥﴾

15. 汝等信徒たちよ、げにお前たちの敵は、その妻女や子女の中にもあり。されば彼等に用心せよ。されどお前たちが之を看過し、赦免し、寛恕するなら、然らばアッラーも寛大にして、慈悲深くまします。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِن مِّنْ أَرْوَاحِكُمْ وَأَوْلَادِكُمْ عَذَابًا لَّكُمْ فَاحْذَرُوهُمْ ۚ وَإِن تَعْفُوا وَتَصْفَحُوا وَتَغْفِرُوا فَإِنَّ اللّٰهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿١٦﴾

16. お前たちの財産や子女は、たんなる試練にしか過ぎず。アッラーの御許にのみ莫大なる報奨あり。

إِنَّمَا أَمْوَالُكُمْ وَأَوْلَادُكُمْ فِتْنَةٌ ۚ وَاللّٰهُ عِنْدَكَ أَجْرٌ عَظِيمٌ ﴿١٧﴾

17. されば全力を盡してアッラーを畏敬し、聴き、従い、喜捨をせよ。そはお前たちのためとならん。また己れの食欲を除き去る者、かかる者は必ず栄ゆべし。

فَاتَّقُوا اللّٰهَ مَا اسْتَطَعْتُمْ وَأَسْمِعُوا وَأَطِيعُوا ۚ وَأَنْفِقُوا خَيْرًا لِّأَنْفُسِكُمْ ۚ وَمَنْ يُوقِ شَخَّ نَفْسِهِ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ﴿١٨﴾

18. もしお前たちがアッラーに善き貸付けを行えば、彼は之をお前たちのために倍加し、且つお前たちを宥恕せん。(注8)アッラーは頒賞者にして、大度者、

إِن تَقْرِضُوا اللّٰهَ قَرْضًا حَسَنًا يُّضْعِفْهُ لَكُمْ ۚ وَيَغْفِرْ لَكُمْ ۚ وَاللّٰهُ شَكُورٌ حَلِيمٌ ﴿١٩﴾

19. 不可視なる世界と可視なる世界の(注9)能知者、偉大にして賢哲にまします。

يَعْلَمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿٢٠﴾

注8 神の為に財を費やす事は、寛大で御理解ある神にいわば貸しを作る事であり、神は様々な形でそれを払い戻される。

注9 見えざる物と見える物。

سُورَةُ الطَّلَاقِ مَدَنِيَّةٌ

(٦٥)

アル・タラーク

(メディナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 預言者よ、お前たちが妻を離別する場合は、
(注1) 定められた期間が過ぎてから之を
離別し、その期間をよく数え、(注2) アッ
ラーを畏れ敬え。明らかに醜行を犯した場合
は別として、彼女たちを家から追い出し
たり、出で行かせたりするなかれ。こはアッ
ラーによって課されたる掟なり。誰であれ
アッラーの掟を破る者は、必ず己れ自身を
そこなう。汝は知らねども、アッラーが後
で何か新しい事態を惹き起すやも知れぬ。

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ إِذَا طَلَقْتُمُ النِّسَاءَ فَطَلِّقُوهُنَّ
عِندَ تِهْنٍ وَأَحْصُوا الْعِدَّةَ وَاتَّقُوا اللَّهَ رَبَّكُمْ
لَا تَخْرُجُوهُنَّ مِنْ بُيُوتِهِنَّ وَلَا يَخْرُجْنَ إِلَّا أَنْ
يَأْتِيَنَّ بِمَا جِئْتُمُ بِهِ مِنْهُنَّ وَإِنَّ اللَّهَ
مَنْ يَتَعَدَّ حُدُودَ اللَّهِ فَقَدْ ظَلَمَ نَفْسَهُ لَا تَدْرِي
لَعَلَّ اللَّهَ يُحْدِثُ بَعْدَ ذَلِكَ أَمْرًا ②

3. 定められた期間が過ぎなば、親切を以て彼
女たちを家に留めるか、離別せよ。而して
お前たちの中から二名の公正な証人を立
て、アッラーに向って正しく証言せしめよ。
こは、アッラーと末日を信ずる者への訓戒
なり。而してアッラーを畏れ敬う者には、
アッラーは出口を設え、(注3)

فَإِذَا بَلَغْنَ أَجَلَهُنَّ فَأَمْسِكُوهُنَّ بِمَعْرُوفٍ أَوْ
فَارِقُوهُنَّ بِمَعْرُوفٍ وَأَشْهَدُوا ذَوَى عَدْلٍ
مِنْكُمْ وَأَقِيمُوا الشَّهَادَةَ لِلَّهِ ذَلِكَ يُوْضِعُ اللَّهُ
لَكُمْ أَمْرَكُمْ وَاللَّهُ عَلِيمٌ خَبِيرٌ ③
يَجْعَلُ لَهُ مَخْرَجًا ④

注1 当節は、モハammad預言者に向けられた様でいて実は信者に発せられた言葉を含む、クルアーンの(数)節の一つである。モハammad預言者は、いずれの妻とも離婚する事を禁じられていたので(33:53)、この禁止令は明らかに彼に従う者に適用される。

注2 離婚の宣言は二度の月経期間を経た後なされるべきで、その間夫と妻は関係を持つてはならない。これにより、離婚の決定は怒りやその他一時の感情で急ぎなされる事はなく、冷静・慎重な思慮の後下されるのである。又、離婚した妻はイッダ(待機期間)が切れるまで、婚家に留まる事になっている。離婚のこの過程は、待機期間中に不和の原因が徐々になくなり、仲たがいでいた夫婦の間に和解が成立する事もあるので、言い渡されているのである。

注3 もし夫と妻の不和が夫の貧しさによるものであり、彼が神を畏れ、この困難な状況を乗り切る誠実な努力をしていれば、神は彼に思いがけない所から富をお与えになるであろう。

4. 予期せざるところより給養を賜わらん。アッラーにその信頼を託す者は、アッラーのみで満ち足りる。アッラーは必ずその目的を成し遂げん。アッラーはすべてのものに限度を定めたり。
5. お前たちの妻のうち月経の望みなき者を離別せんとする場合、もしお前たち疑心を抱かば、(注4)その守るべき期間は三カ月と定む。未だ月経なき者もまた然り。また女が妊娠している場合は、その期間は、胎の荷を産み落すまでと定む。誰であれアッラーを畏れ敬う者には、アッラーはその者の事情を容易ならしむべし。
6. こはアッラーがお前たちに降せる掟なり。而してアッラーを畏れ敬う者には、(注5)アッラーその罪を払拭し、その報奨を加増せん。
7. お前たちその資力に応じて、離別せる妻を自分の家に規定された期間住ましめよ。(注6)されど彼女を窮迫に陥れて、苦しめるなかれ。もし彼女が妊娠中ならば、その重荷を産みおとすまで面倒をみてやれ。また、彼女がその子のために授乳する場合は、彼女にその報酬を与えよ。お互に好意を以て商量せよ。されど話がまとまらぬ場合は、その子の授乳は他の女にさせよ。
8. 資産の裕福な者には、裕福なりに費やさせよ。生計が苦しい者には、アッラーがその者に賜えしものの中より費やさせよ。アッラーは何人にも、賜えしもの以上の負担を課し給わず。アッラーは苦の後に必ず安樂を与えん。

وَيَرْزُقُهُ مِنْ حَيْثُ لَا يَحْتَسِبُ وَمَنْ يَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ فَهُوَ حَسْبُهُ إِنَّ اللَّهَ بَالِغُ أَمْرِهِ قَدْ جَعَلَ اللَّهُ لِكُلِّ شَيْءٍ قَدْرًا ④

وَالَّذِي يَكْنُسُ مِنَ الْحَيْضِ مِنْ نِسَائِكُمْ إِنْ رَأَيْتُمْ فَعِدَّتُهُنَّ ثَلَاثَةَ أَشْهُرٍ وَالَّذِي لَمْ يَحِضْ وَأُولَاتُ الْأَحْصَالِ أَجَلُهُنَّ أَنْ يَضَعْنَ حَمْلَهُنَّ وَمَنْ يَتَّقِ اللَّهَ يَجْعَلْ لَهُ مِنْ أَمْرِهِ يُسْرًا ⑤

ذَلِكَ أَمْرُ اللَّهِ أَنْزَلَهُ إِلَيْكُمْ وَمَنْ يَتَّقِ اللَّهَ يَكْفُرْ عَنْهُ سَيِّئَاتِهِ وَيُعْظِمَ لَهُ أَجْرًا ⑥

أَسْكِنُوهُنَّ مِنْ حَيْثُ سَكَنْتُمْ مِنْ وَجْدِكُمْ وَلَا تُضَارَّوهُنَّ لِتُضَيِّقُوا عَلَيْهِنَّ وَإِنْ كُنَّ أُولَاتٍ حَمِلْنَ فَلْيَضْحَكُوا عَلَيْهِنَّ حَتَّى يَضَعْنَ حَمْلَهُنَّ فَإِنْ أَرْضَعْنَ لَكُمْ فَارْزُقُوهُنَّ أَجُورَهُنَّ وَأَنْسَرُوا بَيْنَكُمْ بِعُرُوفٍ وَإِنْ تَعَاَسَرْتُمْ فَمُتْرَضِعٌ لَهُ أُخْرَى ⑦

لِيُنْفِقَ ذُو سَعَةٍ مِنْ سَعَتِهِ وَمَنْ قُدِرَ عَلَيْهِ رِزْقُهُ فَلْيُنْفِقْ مِمَّا آتَاهُ اللَّهُ لَا يَكْلِفُ اللَّهُ نَفْسًا شَيْئًا إِلَّا مَا أَتَاهَا سَيَجْعَلُ اللَّهُ بَعْدَ عُسْرٍ يُسْرًا ⑧

注4 「疑心を抱かば」という言葉は、更年期が訪れてもいないのに、子宮異常かその他の原因で閉経が起さる事もあり、付け加えられた。

注5 先の五節で不信者は神を畏れる様に繰り返し命じられている。これは、離婚の際、一般的に男性は妻を不公平に扱い、彼女達の権利を奪おうとする事を示している。

注6 離婚した女性は、婚家を出、自由に生き方を選べる様になるまでは、夫の最善の努力により、その家の主婦であった時と全く同じ状況の下、そのイッダの間、夫に養われる事となる。

第二項

9. 神とその使徒の命に背ける^{まが}邑がどれほどありしことか！さればわれらは厳しい計算を以て清算し、恐ろしい刑罰を以て懲らしめたり。(注7)

10. さればその行状の悪果を味い、最後は破滅なりき。

11. アッラーは彼等のために厳しい懲罰を用意せり。さればアッラーを畏れ敬え、汝等思慮ある者よ、信仰する者よ。げにアッラーはお前たちに一つの注意を降したり、

12. そはすなわち、信じて善行を積む人々を暗闇から光明へ導かしめんと、アッラーの明らかな神兆をお前たちに誦み聞かす一人の使徒なり。アッラーを信じ、善行を積む者は、アッラー^をを河川流れる楽園に入らしめ、その中で永遠^{とこしえ}に住ましめん。アッラーはその者のために素晴らしい給養を準備せり。

13. 七層の天を創り、(注8)またそれに相似する地を創造せるはアッラーなり。神命は天地の間に降る。そはお前たちをして、アッラーが萬物を支配し、その知恵の中に萬物を包み込むことを知らしめんがためなり。

وَكَأَيِّنْ مِنْ قَرْيَةٍ عَتَتْ عَنْ أَمْرِ رَبِّهَا وَرُسُلِهِ
فَحَاسِبْنَهَا حَسَابًا شَدِيدًا وَعَذَّبْنَاهَا عَذَابًا ثَقِيلًا ⑩

فَذَاقَتْ وَبَالَ أَمْرِهَا وَكَانَ عَاقِبَةُ أَمْرِهَا
خُسْرًا ⑪

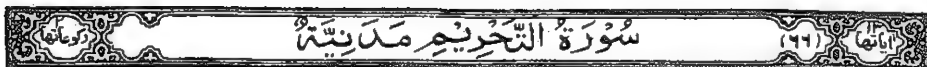
أَعَدَّ اللَّهُ لَهُمْ عَذَابًا شَدِيدًا فَاتَّقُوا اللَّهَ يَا أُولِي
الْأَلْبَابِ الَّذِينَ آمَنُوا قَدْ أَنْزَلَ اللَّهُ إِلَيْكُمْ
ذِكْرًا ⑫

رَسُولًا يَتْلُو عَلَيْكُمْ آيَاتِ اللَّهِ مُبَيِّنَاتٍ لِيُخْرِجَ
الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ مِنَ الظُّلُمَاتِ إِلَى
النُّورِ وَمَنْ يُؤْمِنْ بِاللَّهِ وَيَعْمَلْ صَالِحًا يُدْخِلْهُ
جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا
قَدْ أَحْسَنَ اللَّهُ لَهُ رِزْقًا ⑬

اللَّهُ الَّذِي خَلَقَ سَبْعَ سَمَاوَاتٍ وَمِنَ الْأَرْضِ مِثْلَهُنَّ
يَتَنَزَّلُ الْأَمْرُ بَيْنَهُنَّ لِتَعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ عَلَى كُلِّ
شَيْءٍ قَدِيرٌ وَأَنَّ اللَّهَ قَدْ أَحَاطَ بِكُلِّ شَيْءٍ عِلْمًا ⑭

注7 前節に取り上げられた離婚の主題から、当節は神の戒律に対する挑戦へと移っている。それは、神の戒律に反抗する者は神の恩恵から我身を切り離す事になるからである。

注8 「七層の地」とは、クルアーンの他の箇所(23:18)に述べられている様に、太陽系の七つの主な惑星とその軌道を指す。又「七層の天」の宗教的な意味は、人の魂の七つの発達段階であり、「七層の地」は肉体の発達の七段階を指す。



アル・タフリーム

(メデイナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 預言者よ、何故に汝はアッラーが合法となせることを禁止して、汝の妻たちを悦ばせんとするか？(注1)アッラーは寛大にして、慈悲深くします。

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ لِمَ تُحَرِّمُ مَا أَحَلَّ اللَّهُ لَكَ تَبْتَغِي مَرْضَاتَ أَرْوَاحِكَ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَحِيمٌ ②

3. アッラーはお前たちに、その誓いを解消することを許し給えり。(注2)アッラーはお前たちの味方なり。彼はすべてを知り、賢哲にします。

قَدْ فَرَضَ اللَّهُ لَكُمْ تَحِلَّةَ أَيْمَانِكُمْ وَاللَّهُ مَوْلَاكُمْ وَهُوَ الْعَلِيمُ الْحَكِيمُ ③

4. 預言者が妻たちの一人に秘密を打ち明けた時、彼女は之を漏らしたり。アッラー之を預言者に知らしめれば、預言者は彼女にその一部を告げ、他は告げざりき。預言者がこの事を彼女に告げたる時、彼女は問えり、「誰がその事を汝に告げたるか？」と。(注3)預言者は答えり、「深知にして、知悉する神が之を我に告げたり」と。

وَإِذْ أَسْرَأْتُكَ إِلَى بَعْضِ أَرْوَاحِهِ حَدِيثًا فَلَمَّا نَبَّأَتْ بِهِ وَأَظْهَرَهُ اللَّهُ عَلَيْهِ عَرَفَ بَعْضَهُ وَأَعْرَضَ عَنْ بَعْضٍ فَلَمَّا نَبَّأَهَا بِهِ قَالَتْ مَنْ أَنْبَأَكَ هَذَا قَالَ نَبَّأَنِيَ الْعَلِيمُ الْخَبِيرُ ④

注1 ある日モハammad預言者の妻の一人が、彼の好物らしい、蜂蜜から作られた飲み物を彼に与えたと書かれている。他の妻の何人かは、腹立ちから、彼の息はマガフィールの臭いがすると言った。このマガフィールとは、蜂蜜とは似ているが悪臭を放つ飲み物の事である。モハammad預言者は思いやりある人だったので、以後二度と蜂蜜を食べないと約束した。当節は、一般的には、このできごとが述べられていると解してよい。しかし、唯、妻あるいは妻達の怒りを静める目的で、クルアーンに「病に効く」(16:70)、と書かれた正当な物の使用を、自らに永久に禁じる様な思い切った手段をモハammad預言者が採る等有り得ない。ある伝承によれば、モハammad預言者がザイナブの家から蜂蜜を取った時、アイシャとハフサは彼に前述の約束をさせた。ある。又別の伝承では、モハammad預言者はハフサの家で蜂蜜を振る舞われ、それに反対した妻がアイシャ、ザイナブ、サフィヤであった事になっている。この出来事の語り手は、幾つかの誤認、精神的動揺、とりわけ上記の伝承のくい違いに苦しんだ事が示されている。

注2 モハammad預言者は、生活を楽しみたいという妻達の願いにひどく苦しみ、彼の非常な苦しみを示す為、一ヶ月間彼女達から離れると誓った。法で認められた所有物は、それを使わないと宣言しただけで所有者の権限が無効となる訳ではない、と当節は述べている。この様な不慮の出来事に際しては、破られた誓いの償いをする事だけが求められるのである。

注3 当節が述べる出来事が、事実如何に特異なものかを伝えるのは難しい。文脈から判断すれば、アイシャ自身が語った出来事を指すようであり、内容は次の様なものである。33:29が啓示された時、快楽を求める妻

5. 今もしお前たち兩名(注4)悔い改めアッラーに頼るなば、すなわち一度は心が傾きたるが故、それに越した事なかるべし。されど、互に助け合い預言者に抗する場合は、アッラーが預言者の味方なり、ガブリエルや正義の信徒たちもまた然り。更に、他の諸天使も預言者の味方なり。

6. 預言者もしお前たちを離別しなば、主はお前たちの代りにはるかに優る妻を彼に与えん。そは従順にして、信心深く、敬虔にして、常々神にお縋りし、礼拝に専念し、断食をする者にして、既婚者もあれば、処女もあらん。

7. 汝等信徒たちよ、人間と石をその燃料とする業火から、お前たち自身とお前たちの家族を護れ。業火の上には厳格にして猛烈なる諸天使が番をし、彼等はアッラーの命に背かず、ただ命ぜられた通りに行く。

8. 汝等不信心者どもよ、今日は弁解するなかれ。お前たちはそのなせることのために報いられる。

第二項

9. 汝等信徒たちよ、心から悔い改めてアッラーにお縋りせよ。主はお前たちの諸々の罪を

إِنْ تَتُوبَا إِلَى اللَّهِ فَقَدْ صَغَتْ قُلُوبُكُمَا ۖ وَإِنْ تَظَاهَرَا عَلَيْهِ فَإِنَّ اللَّهَ هُوَ مَوْلَاهُ وَجِبْرِيلُ وَصَالِحُ الْمُؤْمِنِينَ وَالْمَلَائِكَةُ بَعْدَ ذَلِكَ ظَهِيرٌ ۝

عَلَى رَبِّهِ إِنْ طَلَغْتُمْ أَنْ يُبْدِلَهُ أَزْوَاجًا خَيْرًا فَمِنْكُمْ مُسْلِمَةٌ مُؤْمِنَةٌ تَتَّبِعُ عِدَّتِ سَبْعٍ تَتَّبِعُ وَأَبْكَارًا ۝

يَأْتِيهَا الَّذِينَ آمَنُوا فَأَنفَسِكُمْ وَأَهْلِيكُمْ نَارًا وَقُودُهَا النَّاسُ وَالْحِجَارَةُ عَلَيْهَا مَلَائِكَةٌ غِلَظٌ شِدَادٌ لَا يَعْصُونَ اللَّهَ مَا أَمَرَهُمْ وَيَفْعَلُونَ مَا يُؤْمَرُونَ ۝

يَأْتِيهَا الَّذِينَ كَفَرُوا لَا تَعْتَدُوا الْيَوْمَ ۚ إِنَّمَا تُجْزَوْنَ مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ۝

يَأْتِيهَا الَّذِينَ آمَنُوا تَوْبُوا إِلَى اللَّهِ تَوْبَةً نَصُوحًا عَنْهُ رَبُّكُمْ أَنْ يَكْفُرَ عَنْكُمْ سَيِّئَاتِكُمْ وَيُدْخِلَكُمْ

達の要求に答える中で、モハammad預言者は、彼と共にいるか彼から離れるかの選択を彼女達にせまり、彼はまずアイシャの一件を切り出した(ブハリ、マザーリム・ワル・ガサブ書)。モハammad預言者がこの様な手段をとったのは、アイシャがハフサと共に要求の口火を切ったからであり、アイシャがモハammad預言者の秘密の話をはフサに伝えた事が考えられるからである。この件の事実がどうであれ、秘密をもらしてはならないと制限された人の義務を当節は強調している。特に当事者が夫と妻で、秘密が家庭内の個人的な事に関する場合、更に、神の預言者とその弟子の一人のあいだに秘密があげられる。

注4 「お前たち兩名」とは、家庭生活における世俗的快楽を率先して求めたマイシャとハフサを指しているようだ。しかしモハammad預言者の他の妻達は、彼の同僚の間で最も尊敬される二人、アブーバクルとオマルそれぞれの娘だった為、先導役はアイシャ、ハフサの二人に任じたものの、彼女達も又この要求に加わった。当節に述べられた出来事は非常に重大なものではあるが、妻の家から蜂蜜を取る事は、モハammad預言者を一ヶ月間妻達から引き離す程深刻なものではない。又、アッラー、ガブリエル、及び正義の信徒たちが、モハammad預言者の味方となるという訳がこの節の終わりにあるが、これも蜂蜜のことにしては重すぎる表現であり、そのことを示すのではないとわかる。

払拭し、河川流るる樂園に入らしめん。そのロアッラーは、預言者並びに彼と信仰を共にせし人々を辱しめざるべし。彼等の光明はその前方に馳せ、またその右方に馳せん。彼等は云わん、「主よ、我等のためにこの光明を完うし給え。(注5)我等を赦し給え。(注6)げに汝は万物を支配し給う」と。

10. 預言者よ、不信心者や似非信者とは断固戦い、(注7)手厳しく之を懲らしめよ。彼等の住居は地獄なり。その行く着く先の悲惨きかな！

11. アッラーは不信心者どものために、ノアの妻並びにロトの妻の例を示し給う。(注8)彼女等はわれらの正しき二人の僕のもとなりしが、その両夫に背きたり。されば両夫は、アッラーに反抗して、その妻たちのために何もなし得ざりき。而して、「業火に入れ、汝等兩名業火に入る徒輩と共に」と云われたり。

جَدَّتْ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ لَا يَخْزِي
اللَّهُ النَّبِيَّ وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ نُورُهُمْ يَسْعَى
بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَبِأَيْمَانِهِمْ يَقُولُونَ رَبَّنَا أَنْتُمْ
لَنَا نُورٌ وَآغْفِرْ لَنَا إِنَّكَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ⑤

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ جَاهِدِ الْكُفَّارَ وَالْمُنَافِقِينَ وَاغْلُظْ
عَلَيْهِمْ وَمَا لَهُمْ بِهِمْ جَهَنَّمَ وَبِئْسَ الْمَصِيرُ ⑥

صَرَبَ اللَّهُ مَثَلًا لِلَّذِينَ كَفَرُوا امْرَأَتَ نُوحٍ وَ
امْرَأَتَ لُوطٍ كَانَتَا تَحْتَ عَبْدَيْنِ مِنْ عِبَادِنَا
صَالِحَيْنِ فَخَانَتَهُمَا فَلَمْ يُغْنِ عَنْهُمَا مِنَ اللَّهِ
شَيْئًا وَقِيلَ ادْخُلَا النَّارَ مَعَ الدَّاسِينَ ⑦

注5 「主よ、我等のためにこの光明を完うし給え」という言葉に表される、天国の信者の完全を求めて止まない願いとは、天国における生が不動のものでない事を示している。むしろ、天国での精神的発達には止まる所を知らないであろう。それは、信者がある段階の優秀な特質を獲得してもそこで止まる事なく、その前に更に優れた段階があるのを見て、自分が到達した段階が最高位ではない事を知り、又前進を続け、この様に終り無く突き進んで行くからである。

注6 天国に入った後、信者は「戦い」を請う。彼等は神の光の中に完全に浸される様に祈り続け、より高い者と比べて己れの至らなさを知り望みの高さまで上り続け、より高い段階に到達したいが為に、短所の隠べいを神に祈るのである。これがイステイグファールの真意だが、この話の文字通りの意味は「過失の許しを請う事」である。

注7 不信心者や偽善者達が仕掛けなければ、イスラム教徒が戦うことはあり得ない。当節は、付随して「懸命なる努力」という意味の語であるジハード（本文中では「戦い」という言葉で書かれている）の真意を説明している。ここに書かれている「戦い」というのは剣を交えるという意ではない。イスラム教徒は、広い意味でのジハードで、偽善者達に対するのである。又、偽善者達は、表面上、イスラム教徒とみなされていて、イスラム教徒が偽善者と剣で戦うことは許されていない。

注8 高潔な人との交わりは、神の預言者とのものであっても、真実を拒む悪に染った者のためにはならないと示す目的で、不信心者はノアやロトの妻達と比較されている。罪から逃れたいと懸命に願い祈るが、ファラオに象徴される悪の勢力と離れられず、自虐的になり、時に心がくじける信者を、ファラオの妻(12節)は表している。イエスの母マリア(13節)は、罪の道を断ち、神と和解した為に、神の霊感を与えられた、神の正しき下僕を表す。

12. アッラーはまた信ずる人々のために、ファラオの妃の例を示し給う。すなわち、彼女は云えり、「主よ、楽園の中に、汝のおそばに我がために家を建て給え。而して、我をファラオとその所業より救い給え。また不義を行う徒輩から救い給え」と。

وَضَرَبَ اللَّهُ مَثَلًا لِّلَّذِينَ آمَنُوا امْرَأَتَ فِرْعَوْنَ
إِذْ قَالَتْ رَبِّ ابْنِ لِي عِنْدَكَ بَيْتًا فِي الْجَنَّةِ وَ
نَجِّنِي مِّنْ فِرْعَوْنَ وَعَمَلِهِ وَنَجِّنِي مِنَ الْقَوْمِ
الظَّالِمِينَ ﴿١٢﴾

13. またイムラーンの娘マリアの例を示し給う。すなわち彼女はその貞操を守りたれば、われらは彼女に聖霊を吹き入れたり。彼女は經典に盛られた主の言葉を実証せり。彼女は敬虔なる僕の一人なりき。

وَمَرْيَمَ ابْنَتَ عِمْرَانَ الَّتِي أَحْصَنَتْ فَرْجَهَا
فَنَفَخْنَا فِيهِ مِن رُّوحِنَا وَصَدَّقَتْ بِكَلِمَاتِ رَبِّهَا
وَكُتِبَ عَلَيْهَا ذِكْرٌ وَإِسْمٌ ﴿١٣﴾



アル・ムルク

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 大権を掌握し給う御神を讃美せよ。彼は万物を支配し給う。
3. 彼はお前たちを試みんがために、すなわちお前たちのうち誰が一番立派な振舞いをするか試さんがために、生と死とを創造せり。
(注1) 彼は偉力者、寛容者にまします。
4. 調和する七層の天を創造せるは、彼なり。汝は、慈悲深き神の創造にいささかの不調和も見^みる能^{あた}わず。改めて観察せよ。汝、なんらかの欠陥を見るか?
5. 然^{しか}り、改めてとくと見なおしてみよ、さらに再び。汝の視力は困惑し疲^{つか}れはて、ただ己れに帰^{かへ}るのみなるべし。(注2)
6. 而^{しか}してわれらは、燈明^{こゝろ}を以て最下層の天を飾り、之^{これ}を以て惡魔^{サタン}を追い払う流星となせり。われらは彼等のために火炎の刑を用意せり。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

天啓
の
書

تَبَارَكَ الَّذِي بِيَدِهِ الْمُلْكُ وَهُوَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ
قَدِيرٌ ②

الَّذِي خَلَقَ الْمَوْتَ وَالْحَيَاةَ لِيَبْلُوَكُمْ أَيُّكُمْ
أَحْسَنُ عَمَلًا وَهُوَ الْعَزِيزُ الْغَفُورُ ③

الَّذِي خَلَقَ سَبْعَ سَمَاوَاتٍ طِبَاقًا مَا تَرَى فِي
خَلْقِ الرَّحْمَنِ مِنْ تَفَوُّتٍ فَارْجِعِ الْبَصَرَ هَلْ
تَرَى مِنْ فُتُورٍ ④

ثُمَّ ارْجِعِ الْبَصَرَ كَرَّتَيْنِ يَنْقَلِبْ إِلَيْكَ الْبَصَرُ
خَائِبًا وَهُوَ حَسِيرٌ ⑤

وَلَقَدْ زَيَّنَّا السَّمَاءَ الدُّنْيَا بِمَصَابِيحٍ وَجَعَلْنَاهَا
رُجُومًا لِلشَّيَاطِينِ وَأَعْتَدْنَا لَهُمْ عَذَابَ السَّعِيرِ ⑥

注1 生と死の法則は全宇宙で作用する。万物は衰え死す事になっている。死は2:29及び53:45にも書かれているが、当節では生の前に述べられている。これは、死又は非実在が生の前段階である為の様だが、あるいはおそはらく、死が人に、永遠の生命と終わり無き魂の向上に向かう入口を開き、他方この世の生は一時的なもので、死後の永遠の生命をひかえた前段階でしかなく、死が生より遙かに重要な意味を持つからかもしれない。

注2 神の創造はまことに素晴らしいものである。小さな一員にしか過ぎない我地球が属する太陽系は、广大で変化に豊み整然としているが、この太陽系も又、何億とある天体系の一つに過ぎず、その中には太陽系とは比較にならない程大きなものもある。しかし無数の太陽や星は、いたる所で調和と美をかもし出す様に、互いにうまく位置付けられている。宇宙に広がる秩序は、普通の肉眼でも明らかで、科学技術が生み出した器具を総動員して観測できる視界の遙かなたまで広がっている。

7. 主を信ぜざる者どもには地獄の刑罰あり。
そは悲惨^{いたまし}き行先かな！

وَالَّذِينَ كَفَرُوا بِرَبِّهِمْ عَذَابُ جَهَنَّمَ وَ يُنْسِ
النَّصِيرُ ①

8. 彼等その中に投げ込まれるや、恰も煮えた
ぎるが如き怒号を聴かん。

إِذَا الْقَوَا فِيهَا سَبَعُوا لَهَا سَهيقًا وَ هِيَ تَقُورُ ②

9. そは憤怒の余りまさに破裂せんとす。不信
心者どもがその中に投げ込まれるたびに、
看守等は「お前たちのところへ警告者が行
かざりしか？」と彼等に問わん。

تَكَادُ تَنزِلُ مِنَ الْغَيْظِ كُلَّمَا أَلْقَى فِيهَا فَوْجٌ
سَأَلَهُمْ خَزَنَتُهَا أَلَمْ يَأْتِكُمْ نَذِيرٌ ③

10. 彼等は答えん、「然り、確かに一人の警告者
来たれども、我等は之を嘘^{これ}つきとみなし、
『アッラーは何も啓示せず。お前たちはは
なはだしき迷誤の中にあり』と我等は云え
り」と。

قَالُوا بَلَى قَدْ جَاءَنَا نَذِيرٌ فَكَذَّبْنَا وَقُلْنَا مَا
تَزَالُ اللَّهُ مِنْ شَيْءٍ إِن أَنْتُمْ إِلَّا فِي ضَلَالٍ
كَبِيرٍ ④

11. 彼等はまた云わん、「我等もし聞く耳を持
ち、良心に従いたれば、(注3)我等火獄の
住人どもの仲間に加わらざりしものを」と。

وَقَالُوا لَوْ كُنَّا نَسْمَعُ أَوْ نَعْقِلُ مَا كُنَّا فِي أَصْحَابِ
السَّعِيرِ ⑤

12. かくして彼等は、諸々の己が罪を認めん。
されど火獄の住人どもは、神の容赦からへ
だたることはるかなり。

فَاعْتَرَفُوا بِذَنبِهِمْ فَسُحْقًا لِأَصْحَابِ السَّعِيرِ ⑥

13. げに密かにその主を畏れ敬う人々には、容
赦と素晴らしき報奨あり。

إِنَّ الَّذِينَ يَخْشَوْنَ رَبَّهُم بِالْغَيْبِ لَهُمْ مَغْفِرَةٌ
وَ أَجْرٌ كَبِيرٌ ⑦

14. お前たち密かに云うも、また声高に語るも、
主はお前たちが胸に抱けることを熟知し給
う。

وَ أَسِرُّوا قَوْلَكُمْ أَوِ اجْهَرُوا بِهِ إِنَّهُ عَلِيمٌ بِذَاتِ
الصُّدُورِ ⑧

15. 彼、己が創りしものを知らざらんや？彼は
すべての靈妙を知る者、知悉^{ちしつ}者なり。

عَلَيْهِ إِلَّا يَعْلَمُ مَنْ حَقَّقَ وَ هُوَ الْلطِيفُ الْخَبِيرُ ⑨

第二項

16. お前たちのために大地を平坦ならしめたる
は彼なり。さればお前たちその諸地域を旅
し、(注4)彼の給養^{しか}を食せよ。而して、彼
の許に復活せらるべし。

هُوَ الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ الْأَرْضَ ذَلُولًا فَامْشُوا فِي
مَنَاكِبِهَا وَكُلُوا مِنْ رِزْقِهِ وَ إِلَيْهِ النُّشُورُ ⑩

注3 もし我々がシャリヤ(律法)か良心の命令に従っていたなら。

注4 クルアーンでは世界を旅する様、繰り返し推めている。それは、家を離れ他国へ旅行する事が、人の知識や経験を増やす為、大いに役立つからである。

17. お前たち、天上にまします御方が（注5）大地をしてお前たちを呑み込ましむることなし、と安心し得るか？見よ、それは振動し出す。
18. お前たち、天上にまします御方がお前たちに激しい砂嵐を送ることなし、と安心し得るか？いまに思い知らん、わが警告の恐ろしさよ。
19. 彼等以前にもわが使徒を拒否せる者どもあり。あの時のわが懲罰の如何に凄惨なりしことか！
20. 彼等は頭上に翼を拡げ、またそれをつぼめて獲物に舞い降りる鳥たちを見ざるか？慈悲深き神に非ずして、誰が鳥たちを空中に保持し得ようぞ。（注6）げに彼はすべてをみそなはし給う。
21. 慈悲深き神以外に、誰がお前たちに味方して軍兵たらん？不信心者どもは自己欺瞞の犠牲者にすぎず。
22. 彼もしその給養を止むれば、（注7）お前たちを養う者は果して誰ぞ？然るに彼等は、反抗と忌避を固執す。
23. なに、その顔を俯きながら歩く者は、真直ぐな道を正直に歩く者より良く導かれるとな？（注8）
24. 云え、「お前たちを生み、耳と目と心とを創れるは彼なり。然るにお前たちは殆んど感謝せず」と。

أَمِنْتُمْ مَنْ فِي السَّمَاءِ أَنْ يَخْسِفَ بِكُمْ الْأَرْضَ
فَإِذَا هِيَ تُنْفَرُ ⑤

أَمِنْتُمْ مَنْ فِي السَّمَاءِ أَنْ يُرْسِلَ عَلَيْكُمْ حَاصِبًا
فَسَتَعْلَمُونَ كَيْفَ نَذِيرِ ⑥

وَلَقَدْ كَذَّبَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَكَيْفَ كَانَ نَجِيرِ ⑦

أَوَلَمْ يَرَوْا إِلَى الطَّيْرِ فَوْقَهُمْ صَفْتٍ وَيَقْفِضُنَّ
مَا يُبْسِلُ لَهُنَّ إِلَّا الرَّحْمَنُ إِنَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ بَصِيرٌ ⑧

أَمَنْ هَذَا الَّذِي هُوَ جُنْدٌ لَكُمْ يَنْصَرُّكُمْ مَنْ
دُونِ الرَّحْمَنِ إِنَّ الْكَافِرِينَ إِلَّا فِي غُرُورٍ ⑨

أَمَنْ هَذَا الَّذِي يُرْزَقُكُمْ إِنْ أَمْسَكَ رَبُّكَ
بَلْ لَئِنْ أَرَادَ عِتْوٌ وَنَفْوَ ⑩

أَفَمَنْ يَتَّبِعْهُ مَكْبَأٌ عَلَى وَجْهِهِ أَهْدَى أَمَنْ يَتَّبِعْهُ
سَوِيًّا عَلَى صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ⑪

قُلْ هُوَ الَّذِي أَنْشَأَكُمْ وَجَعَلَ لَكُمْ السَّمْعَ
وَالْأَبْصَارَ وَالْأَفْئِدَةَ قَلِيلًا مَّا تَشْكُرُونَ ⑫

注5 当節及び次節に神は天におられると記されてるのは、クルアーンで一般に罰は天より下されると告げられているからである。神は、どこにでもおわします。

注6 もし不信心者達が神に反抗し続けるなら、彼等は飢饉、地震、特に戦争により滅ぼされ、空の鳥達が彼等の死体をついばむであらう。

注7 この言葉は、メッカを数年間襲った恐ろしい飢饉を指している様だ。この飢饉は、メッカ人が、その苦しみから逃れられる様に祈ってくれとモハammad預言者に請うた時まで続いた。

注8 不信者は、首を垂れ、疑いと不信の間を這いつつ、悪の道を歩む、他方、信者は信仰の確信の中で、顔を上げ、神の道を突き進んで行く。この両者が平等であり得るだろうか？

25. 云え、「大地にお前たちを繁殖させたるは彼なり。而してお前たちは彼の許に召し寄せられん」と。

قُلْ هُوَ الَّذِي ذَرَأَكُمْ فِي الْأَرْضِ وَإِلَيْهِ تُحْشَرُونَ ﴿٢٥﴾

26. 彼等は云う、「もしお前たちの言葉が事実なら、その約束は何時実現せん？」と。

وَيَقُولُونَ مَتَى هَذَا الْوَعْدُ إِن كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٢٦﴾

27. 云え、「之を知るはアッラーのみ。我はただ一介の警告者にすぎず」と。

قُلْ إِنَّمَا أَعْلِمُ عِنْدَ اللَّهِ وَإِنَّمَا أَنَا نَذِيرٌ مُّبِينٌ ﴿٢٧﴾

28. されど、彼等その近づくを見るに及んで、不信心者どもの顔は悲嘆にくもらん。(注9) 而して彼等は云われん、「こは常々お前たちが求めしことなり」と。

فَلَمَّا رَأَوْهُ زُلْفَةً سَيِّئَتْ وُجُوهُ الَّذِينَ كَفَرُوا وَقِيلَ هَذَا الَّذِي كُنْتُمْ بِهِ تَدْعُونَ ﴿٢٨﴾

29. 云え、「もしアッラーが我並びに我に従う者を滅ぼすにせよ、また慈悲を垂れるにせよ、不信心者どもを痛刑から護るは誰か、我に告げよ」と。

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ أَهْلَكْنِي اللَّهُ وَمَنْ مَعِيَ أَوْ رَحِمَنَا فَمَنْ يُجِيرُ الْكَافِرِينَ مِنْ حَذَابِ إِلِيمٍ ﴿٢٩﴾

30. 云え、「彼は慈悲深き神なり。(注10) 我等は彼を信じ、彼に頼る。やがてお前たちは誰が明らかに迷誤の中にいるかを知らん」と。

قُلْ هُوَ الرَّحْمَنُ أَمَّنٌ بِهِ وَعَلَيْهِ تَوَكَّلْنَا فَتَعْمَلُونَ مِنْهُ هَوًى ضَلِيلٍ مُبِينٍ ﴿٣٠﴾

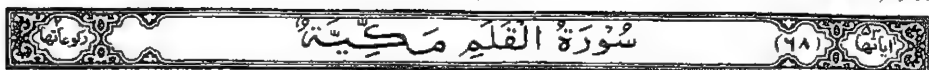
31. 云え、「もし水がすべて地中深く消え去りなば、お前たちのために水を湧き出させてくれるは誰か、我に告げよ」と。(注11)

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ أَصْبَحَ مَاؤُكُمْ غَوْرًا فَمَنْ يَأْتِيكُمْ بِمَاءٍ مَعِينٍ ﴿٣١﴾

注9 罰が下されない限り、不信心者は自慢し、信者にあざけりやからかいの言葉を投げ付けるが、いざ罰に直面すると、極度の挫折感に捕われる。これが不信心者の特徴である。

注10 神の特性アル・ラフマーン(慈悲深き)は、クルアーン他所と同じく、この章でも繰り返して述べられて来たが、それは、そこに書かれた神の恩恵全てが、人の肉体維持に係わるか、その精神向上に係わるかを問わず、神の慈悲深さによるからである。

注11 全生命は、肉体・精神の別無く、水に頼っている。前者は雨水であり、後者は神の啓示の水である。



アル・クアラム

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. 硯、筆並びに彼等が書くものによって誓う。
(注1)

ن وَالْقَلَمِ وَمَا يَسْطُرُونَ

3. 主の恩恵によりて、汝は狂人に非ず。(注2)

مَا أَنْتَ بِنَجْمٍ رَئِكَ يَجْنُونَ

4. 汝には必ず尽きせぬ報奨あり。(注3)

وَأَنَّ لَكَ لَأَجْرًا غَيْرَ مَسْنُونٍ

5. げに汝は、崇高なる美德を有す。(注4)

وَرَأَيْكَ لَعَلَّ خُلُقٍ عَظِيمٍ

6. やがて汝は見るべし、彼等もまた見るべし、

فَسَتُبْصِرُ وَيُبْصِرُونَ

7. お前たちのいずれが狂人なのか。(注5)

بِأَيِّكُمْ الْمَقْتُولُ

注1 当節で、硯、筆、全ての筆記用具は、次の三節の記述を実証する証拠として引用されている。

注2 モハammad預言者の主張が如何なる知識をもって試されたとしても、彼は、不信心者の言う様に狂気じみていることはなく、最も良識と知恵の備った人物だと確認されるであろう。当節は以上の事を示している。又、次節には、この非難が事実無根であるだけでなく、愚かてとりとめないものだという事の原因を挙げている。

注3 次節と共に当節は、狂気の非難の不合理を、非常に効果的に暴露している。狂人の行為は不変で有益な結果を何も生み出さないが、モハammad預言者は、神の使命の目的を果たし、墮落した人々の生命に素晴らしい変革をもたらす事に成功しつつあると表明している。この変革は彼の死で終わるものではない。将来彼の弟子達が正しい道からそれる事があれば、必ず神は、彼等を再生させ、彼等に新たな生命を吹き込む神の使者を、彼等の間に起こされるであろう。そして、この過程は終りの時まで続くのである。

注4 当節は、愚か者としてモハammad預言者にあびせられた狂気の非難について、より雄弁な注釈を与えている。モハammad預言者は狂人ではなく最も高潔な人物であり、あらゆる道徳上の美点を十二分に備え、それにより彼の創造主の完全像をその身に表わすことができる、と当節は述べている。彼は人間が持ち得る全ての道徳上の長所の完全なる化身である。高尚な道徳的特質全てが彼の内で完全に調和して総体となっている。モハammad預言者の有能な配偶者アイシャが、モハammad預言者の道徳を解明する様かつて求められた時、彼女はこう答えた。「彼は、神の真の下僕の特質としてクルアーンに述べられた道徳上の美点を全て備えていた。」

注5 当節は、モハammad預言者を非難する者達に対し形勢を一変し、挑発的な口調で彼等に次の事を告げている。狂気に苦しむのはモハammad預言者かそれとも彼等か、神の使者であるという彼の主張は興奮から思わず出て来たものなのか、彼等自身は時のしるしを示すものを読み取れない程に、気がふれていたでモハammad預言者を信じる事を拒んだのか、これ等の問いに対する答えは時が示すであろう。

8. げに主は己が道より迷う人々を良く知り、
また嚮導きやうどうに従う人々を良く知り給う。

إِنَّ رَبَّكَ هُوَ أَعْلَمُ بِمَنْ ضَلَّ عَنْ سَبِيلِهِ وَهُوَ

أَعْلَمُ بِالْمُهْتَدِينَ ⑤

9. されば、真理を拒否する者どもの願望に
応ずるなかれ。

فَلَا تُطِيعُ السَّكَّادِينَ ⑥

10. 彼等は汝が妥協せんことを望み、さすれば
彼等も汝と妥協せんことを望む。(注6)

وَدُّوا لَوْ تُدْهِنُ فَيُدْهِنُونَ ⑦

11. 汝、卑劣な宣誓者に屈服するなかれ、

وَلَا تُطِيعُ كُلَّ حَلَّافٍ مِّمَّهِينَ ⑧

12. 陰口をたたく者、悪口に狂弄する者、(注7)

هَمَّازٍ مَشَّاءٍ مَبِينٍ ⑨

13. 善事を妨げる者、掟に背く罪深い者、

مُنَاجٍ لِلتَّخَالُفِ مُعْتَدٍ لِآيْمِهِ ⑩

14. 不作法でしかも素性のいかがわしい者に。

عَصِيَ بَعْدَ ذَلِكَ زَنِيمٌ ⑪

15. こはその者が裕福で子女に恵まれているが
故なり。(注8)

أَنْ كَانَ ذَا مَالٍ وَبَنِينَ ⑫

16. そのような者にわれらの神兆を誦み聞かす
と、彼は云う、「前人ぜんじんの故事なり」と。

إِذَا نَسَّاهُ عَلَيْهِ آيَاتُنَا قَالَ أَسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ⑬

17. われらは必ずその者の鼻の上に烙印を押さ
ん。(注9)

سَنَسِيحُهُ عَلَى الْخُرْطُومِ ⑭

18. げにわれらは果樹園の持主を試した如く、
彼等をも試すべし。すなわち、その時果樹
園の持主は翌朝すべての果実を摘まん約
束せしが、(注10)

إِنَّا بَلَوْنَهُمْ كَمَا بَلَوْنَا أَصْحَابَ الْجَنَّةِ إِذْ أَقْسَمُوا

لَيَكُونَنَّ مِنْهَا مَضِيغِينَ ⑮

注6 当節は、モハammad預言者をその不動の目的からそらす為、メッカのクライシユが彼にした申し出に、特に触れているようだ。又、真実は岩のごとく固く、他方偽りは足場を持たず、圧力や誘惑に屈し、常に妥協に傾きやすいという、一般的な意味も当節は有する。

注7 当節及び前三節は、特にワリード・ビン・モギーラ又はアブ・ジャハルを、そして又偽りの指導者全てを語ったものと言える。

注8 神に対する罪・不徳・抵抗は全て、慢心から生じ、いかがわしい手段が巨万の富を貯え、膨大な権力を得ようとする者の道徳上の病いである。あるいは、卑しき者は、唯富と権力を手にしたというだけで敬意を表されるべきではない、と当節は意味しているともいえよう。

注9 「鼻の上に烙印を押さん」とは、人に恥をかかせる事の比喩である。

注10 此所では、卑しく強欲で思い上った不信心者が、ある果樹園の所有者に例えられている。彼はそこで採れる果実全てをむさぼり食い、それを汗水流して育てた者と分かち合わず、彼等の果実に対する権利を奪ってしまうのである。

19. 「もし神欲しなば」と保留をつけ加えざりき。(注11)

وَلَا يَسْتَنْوُونَ ⑩

20. それ故彼等が眠れる間に、主の災いが果樹園を襲いたり。

فَطَافَ عَلَيْهَا طَافٌ مِّن رَّبِّكَ وَهُمْ نَائِمُونَ ⑪

21. されば朝には、それは刈り取られた如くなれり。

وَأَصْبَحَتْ كَالضَّرِيحِ ⑫

22. 彼等は朝早く互に呼び合いて、

فَنَادَوْا مُصْبِحِينَ ⑬

23. 云う、「収穫せんとせば、急ぎ畑に出て行け」と。

أَيُّنَا أَعْدُوا عَلَىٰ حَرْثِكُمْ إِن كُنْتُمْ صَادِقِينَ ⑭

24. 道すがら、彼等声を低めて相い語りて、

فَانْطَلَقُوا وَهُمْ يَخْفَوْنَ ⑮

25. 云う、「今日は一人の貧者も我等の果樹園に入らせまいぞ」と。(注12)

أَن لَّا يَدْخُلَهَا الْيَوْمَ عَلَيْكُمْ مِّنْكُمِ ⑯

26. 彼等かく決心して早朝に家を出たりしが、(注13)

وَعَدُوا عَلَىٰ حَرْدٍ قَدِيرِينَ ⑰

27. 果樹園を見て、云えり、「我等は道に迷いたり！」

فَلَمَّا رَأَوْهَا قَالُوا إِنَّا لَضَالُّونَ ⑱

28. 否な、さに非ず、我等は果実をみな奪われたり」と。

بَلْ نَحْنُ مَحْرُومُونَ ⑲

29. 彼等のうち最も心掛けの良い者は云えり、「我はお前たちに、何故神を讃美せざるか、と云わざりしか？」と。

قَالَ أَوْسَطُهُمْ أَلَمْ أَقُلْ لَّكُمْ لَوْلَا تُسَبِّحُونَ ⑳

30. そこで直ちに彼等は云えり、「我等の主に讃えあれ。げに我等は不義者なりき」と。

قَالُوا سُبْحَانَ رَبِّنَا إِنَّا كُنَّا ظَالِمِينَ ㉑

31. 而して彼等向きをかえ、互に詰め寄り責めたり。

فَأَقْبَلَ بَعْضُهُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ يَتَلَوْهُمْ ㉒

注11 この果樹園の持ち主達は、他人の手で育てられた果実を欲深く奪取り、彼等と分かち合う事なく、一人占めに食べた。彼等は、自分達の努力が実り、災害もなく高い収穫を確信していたので、神を忘れ、「もし、神欲しなば、と言葉に出して神の保護を求める事もしなかった。

注12 この比喩にある果樹園の金持ちの所有者は、利己的で無慈悲・強欲な者に例えられている。彼等は他人の労働を食物にする他、非常にけちで、貧しい者の必要を満たす為、彼等が不正に得た物を使おうとは決してしない。

注13 他者の労働の搾取者は、彼等だけで一つの階級を成す。彼等は、額に汗してかせぐ者が当然手にすべき利益から後者を締め出す。彼等は豊を享受し、他方その貧しき同胞は、彼等の眼前で、汚れの中を這い進むのである。

32. 彼等は云えり、「我等は災いなるかな！げに我等は背逆者なりき。

33. 主は之に代るより良き國を我等に賜わるやも知れぬ。されば我等は、謙虚に主に嘆願す」と。

34. かくの如きは現世の罰なり。而して来世の罰は更に重し。(注14) 彼等之を知らば。

第二項

35. 義しき者には、必ず主と御一緒できる至福の國あり。

36. われら帰依者を遇すること、罪人を遇する如くあるべきか？

37. 如何がした？汝等どう判断するや？

38. お前たち学ぶべき經典を有し、

39. その中でお前たちが選ぶものを必ず獲られるのか？

40. それともお前たち、復活の日までわれらを拘束する誓約をわれらから手に入れたとて、もいうか、自分が欲するものは必ずすべて獲られんその誓約を？(注15)

41. 彼等に問え、彼等のうち之を保証するは誰なるか、と。

42. それとも彼等は、神に仲間があるというなら、その仲間を提示せよ、その言葉が真実なる証拠に。

43. 真実が露になる日、彼等は叩頭平伏せよと要求められるも、之をし得ざるべし。(注16)

قَالُوا يٰوَيْلَنَا اِنَّا كُنَّا طٰغِيْنَ ۝

عَنِ رَبِّنَا اَنْ يُّبَدِّلَنَا خَيْرًا مِنْهَا اِنَّا اِلٰى رَبِّنَا رٰغِبُوْنَ ۝

كَذٰلِكَ الْعَذَابُ وَلَعَذَابُ الْاٰخِرَةِ الْكَبِيْرُ لَوْ كَانُوْا يَعْلَمُوْنَ ۝

اِنَّ لِلْمُتَّقِيْنَ عِنْدَ رَبِّهِمْ جَنَّتِ النَّعِيْمِ ۝

اَفَجَعَلَ السُّلٰىمِيْنَ كَالْمُجْرِمِيْنَ ۝

مَا لَكُمْ سَتِفَ تَعْمَلُوْنَ ۝

اَمْ لَكُمْ كِتٰبٌ فِيْهِ تَدْرُسُوْنَ ۝

اِنْ لَكُمْ فِيْهِ لَمَآ تَخَيَّرُوْنَ ۝

اَمْ لَكُمْ اَيْمَانٌ عَلَيْنَا بِالْعَقَةِ اِلٰى يَوْمِ الْقِيَمَةِ اِنْ لَكُمْ لَمَآ تَعْمَلُوْنَ ۝

سَلِّمُوْا اِيْنَهُمْ بِذٰلِكَ رٰعِيْمٌ ۝

اَمْ لَهُمْ شُرَكَآءُ فَلَْيَا تَوٰشِرُوْا بِهِمْ اِنْ كَانُوْا صٰدِقِيْنَ ۝

يَوْمَ يَكْفُ عَنْ سَآقٍ وَيُدْعُوْنَ اِلَى السُّجُوْدِ فَلَا يَسْتَطِيْعُوْنَ ۝

注14 遅かれ早かれ天罰がこの搾取者に下り、他者からその労働による果実を奪うという彼等の計略は、その邪悪な目的を達成しない。

注15 当節は不信心者に次の事を尋ねる。彼等は望み通りの生き方の選択が許され、しかもその悪業の結果から逃れられると、いずれかの啓示書に認められているのか？あるいは、彼等は揃って裁きの日まで、望みの物全てを手に入れ、望む事を全て為し、しかもその行為の結果に苦しむ事も無いと神から約束されているのか？

44. 彼等はその目を伏せ、屈辱が彼等を覆わん。
そは彼等が無事なる時叩頭平伏を要求められしが、之に従わざりしが故なり。

خَاشِعَةً أَبْصَارُهُمْ تَرْهُقُهُمْ ذِلَّةٌ وَقَدْ كَانُوا
يُدْعَوْنَ إِلَى السُّجُودِ وَهُمْ سَلِيمُونَ ④

45. されば、われらの言葉を拒否する者どもお
ば、われに委ねよ。彼等のわからざるところから、われらは彼等を滅亡に近づけん。
(注 17)

فَذَرْنِي وَمَنْ يَكْذِبْ بِهَذَا الْحَدِيثِ سَنَسْتَدْلِي
مِنْ حَيْثُ لَا يَعْلَمُونَ ⑤

46. われは彼等に当分猶予を与えん、わが計画
の確かさ故に。

وَأْمِلْ لَهُمْ إِنْ كُنْ دِي مَتِينٌ ⑥

47. 汝、その負担に彼等が打ちひしがれる程の
報酬を彼等に求めるか？

أَمْ تَسْأَلُهُمْ أَجْرًا فَهُمْ مِنْ مَقْرُمٍ مُتَقَلِّونَ ⑦

48. それとも、彼等不可視なる世界の知識を持
つが故に、それを記録し得るか？

أَمْ عِنْدَهُمُ الْغَيْبُ فَهُمْ يَكْتُبُونَ ⑧

49. されば汝忍耐して、主の命が成就されるを
待て。深い悲しみの余り主を叫べる魚の人の
如くなるなかれ。

فَاصْبِرْ لِحُكْمِ رَبِّكَ وَلَا تَكُنْ كَصَاحِبِ الْخُوَيْتِ
إِذْ نَادَى وَهُوَ مَكْظُومٌ ⑨

50. もし主の恩恵があの方に達せざりせば、あ
の者はその民に罪を負わされ、不毛の荒野
に追放されたり。(注 18)

لَوْلَا أَنْ تَدْرَكَهُ نِعْمَةُ رَبِّهِ لَنَسِيْدَ بِالْأَعْرَافِ
وَهُوَ مَذْمُومٌ ⑩

51. されど、主はあの方を選びて、義しき人の
中に加えたり。

فَاجْتَبَاهُ رَبُّهُ فَجَعَلَهُ مِنَ الصَّالِحِينَ ⑪

52. 不信心者どもは訓戒を聞くたびに、もの凄
い行相で汝を追ひ払う。(注 19) 而して云
う、「彼は確かに狂人なり」と。

وَأِنْ يَكَادُ الَّذِينَ كَفَرُوا لَيُزْلِقُونَكَ بِأَبْصَارِهِمْ
لَنْ يَأْسِعُوا الدِّكْرَ وَيَقُولُونَ إِنَّهُ لَمَجْنُونٌ ⑫

53. 否、この訓戒こそ、世界中の人々の節義の
よりどころなり。

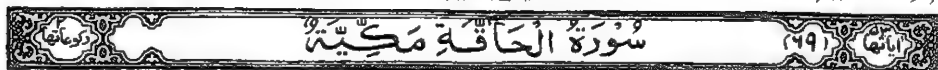
يٰٓأَيُّهَا آلَ ذِكْرٍ لِلْعَالَمِينَ ⑬

注 16 当節は、復活の日の厳しさに触れ、又、全ての神秘のベールをはがし、裁きの日の秘密を明るみに出している。27 章 48 節も参照の事。

注 17 神の罰は徐々に不信者に下される為、彼等には、クルアーンのお告げを受け入れる事で悔い改める機会が数多くある。

注 18 当節には、モハammad 預言者のメディナへのヒジラ (移住) を巧みに暗示している。

注 19 不信心者は、能力の無い者を脅してその使命を放棄させるのではないかと、モハammad 預言者に厳しい見方をするが、モハammad 預言者には伝えるべき神のお告げがあり、彼等におびえることはなく、おだてられたり、買収されたりして、その様な圧力戦術に屈することは有り得ないことだ。



アル・ハークア

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く^{あまわ}アッラーの御名^{ひな}において。
 2. 必然の運命。(注1)
 3. 必然の運命とは何ぞや?
 4. 必然の運命の何たるかを汝に知らしめるものは何か?
 5. サムード並びにアードの手合いは、突然襲う災難を虚偽なりとせり。
 6. さればサムードは猛烈な突風により滅ぼされり。
 7. アードもまた荒れ狂う怒風により滅ぼされり。
 8. 主は七夜八日絶えまなく彼等に吹きつけ給えば、彼等は恰も倒れた^{なつめやし}棗椰子樹の如く地に倒れたり。
 9. 汝見得るや、何か彼等の遺物を?
 10. またファラオ及びファラオ以前の人々、並びに転覆せる^{よちよち}邑々の住民も、常に罪を犯したり。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

الْحَاقَّةُ ①

مَا الْحَاقَّةُ ②

وَمَا أَدْرَاكَ مَا الْحَاقَّةُ ③

كَذَّبَتْ ثَمُودُ بِالنَّارِ ④

فَأَمَّا ثَمُودُ فَهَدَيْنَاهُ إِذِ ابْتَلَيْنَاهُ ⑤

وَأَنفَعَادُ فَاهْلِكُوا بِرِيحِ صَرْصَرٍ عَاتِيَةٍ ⑥

سَخَّرَهَا عَلَيْهِمْ سَبْعَ لَيَالٍ وَثَنِيَةً أَيَّامٍ ⑦

حُسُومًا فَتَرَى الْقَوْمَ فِيهَا صَرْعَى كَأَنَّهُمْ أُجِاجٌ ⑧

نَخْلٍ خَاوِيَةٍ ⑨

فَهَلْ تَرَى لَهُمْ مِنْ بَاقِيَةٍ ⑩

وَجَاءَ فِرْعَوْنُ وَمَنْ قَبْلَهُ وَالْمُؤْتَفِكَاتُ بِالْكَافِرَةِ ⑪

注1 既定の避けられない事柄。必ずや起こる不幸。不信心者の最終的打倒。

注2 当節はノアの大洪水に触れている。

注3 モハammad預言者のメッカへの進軍は素早くかつ突然であった為、メッカ人達は完全に意表を突かれた。それは、いわば、彼等にとり青天の霹靂であった。当節は又、復活の日にも当てはまる様だ。その日、らっぱか鳴りひびくと共に、正しき者・悪しき者双方は、神の偉大なる裁判席の前に、自らの行為の申し開きをするため立たねばならないであろう。

11. 彼等は主の使徒に従わざれば、主は彼等を厳しく懲らしめたり。
12. げに洪水が起りし時、われらがお前たちを舟に乗せたるは、(注2)
13. 之を以てお前たちへの訓戒となし、また留意する耳に之を記憶せしめんがためなりき。
14. 喇叭ひとたび鳴りひびき、(注3)
15. 大地と山々は隆起し、(注4)而して粉々に碎かれる時、
16. その日こそ一大事が起るべし。
17. その日天は脆弱となり、ばらばらに割れん。
18. 天使たちは天の境に立たん。而してその日、主の玉座を頭上に捧げまつるは八天使なり。
19. その日お前たちは、神の御前^{まへ}に出で拝謁させられん。その時隠し得るものは、一つもなかるべし。(注5)
20. その時、己が記録をその右手に渡される者は、(注6)云わん、「来たりて、我が記録を読め。
21. げに我は、必ず我が清算に満足させられんと信じたり」と。
22. されば彼は楽しい生活をすごさん、
23. 高尚な樂園の中で。

فَعَصَوْا رَسُولَ رَبِّهِمْ فَأَخَذَهُمْ أَخَذَةً رَابِعَةً ۝

إِنَّا لَنَّا طَغَا الْمَاءَ حَمَلْنَاكُمْ فِي الْجَارِيَةِ ۝

لِنَجْعَلَهَا لَكُمْ تَذْكِرَةً وَتَعِيَهَا أذُنُكُمْ فَامْنِ ۝

فَإِذَا نُفِخَ فِي الصُّورِ نَفْثَةٌ وَاحِدَةٌ ۝

وَحُمِلَتِ الْأَرْضُ وَالْجِبَالُ فَدُكَّتَا دَكَّةً وَاحِدَةً ۝

فَيَوْمَئِذٍ وَقَعَتِ الْوَاقِعَةُ ۝

وَالسَّمَاءُ فُتِقَتْ يَوْمَئِذٍ فَاهِيَةٌ ۝

وَالْمَلَائِكَةُ عَلَىٰ أَرْجَائِهِمْ وَبَحِمِلُ عَرْشِ رَبِّكَ قَوْمٌ ۝

يَوْمَئِذٍ ثَمَرَةٌ ۝

يَوْمَئِذٍ تَعْرَضُونَ لَا تَخْفَىٰ مِنْكُمْ خَافِيَةٌ ۝

فَأَمَّا مَنْ أُوتِيَ كِتَابَهُ بِيَمِينِهِ فَيَقُولُ هَؤُلَاءِ أَوْفُوا

كُتُبِهِ ۝

إِنِّي ظَنَنْتُ أَنِّي مُلَىٰ حِسَابِي ۝

فَهُوَ فِي عِيشَةٍ رَاضِيَةٍ ۝

فِي جَنَّاتٍ عَالِيَةٍ ۝

注4 アラビア全土は大きく揺れ動いていた。アラブの貴族階級の指導者達や一般民衆は、イスラム教の征服、及びイスラム教が彼等の生活にもたらした激しい変化に強い衝撃を感じた。「大地」は民衆を「山々」は人の指導者を、それぞれ指す。

注5 本文の文字通りの意味以外に、メッカ陥落の日、偶像崇拜信仰の偽り及びメッカ人の行状が完全に露かれると当節は示している。

注6 「己が記録をその右手に渡される者」とは、試練を無事くぐり抜ける者という意味の、クルアーンの比喩である。

24. そは鈴なりの果実がたやすく手の届くところなり。

قُطُوفُهَا دَانِيَةٌ ⑤

25. 「満悦して食い且つ飲め。これ過ぎし日の己が善行の報いなり」

كُلُوا وَاشْرَبُوا هَنِيئًا بِمَا أَسْلَفْتُمْ فِي الْأَيَّامِ

الْحَالِيَةِ ⑥

26. されどその左手に己が記録を渡された者は、(注7)云わん、「我この記録を渡されざりせば！」

وَأَمَّا مَنْ أُوتِيَ كِتَابَهُ بِشِمَالِهِ ⑦ فَيَقُولُ يَلَيْتَنِي

لَمْ أُوتَ كِتَابِيَةَ ⑧

27. 我が清算の如何なるものなるかを知らざりき！

وَلَمْ أُدْرِمَ حِسَابِيَةَ ⑨

28. 死がすべての終りなりせば！(注8)

يَلَيْتَهَا كَانَتِ الْقَاضِيَةَ ⑩

29. 我が富はついに役立たざりき。

مَا أَغْنَىٰ عَنِّي مَالِيَهُ ⑪

30. 我が威勢は消え去りしか」と。

هَلَاكَ عَنِّي سُلْطَانِيَهُ ⑫

31. 天使たちは命ぜられん、「彼を捕えて縛り、

خُذُوهُ فَغُلُّوهُ ⑬

32. 地獄に投ぜよ。

ثُمَّ اَلْبِسْهُ صَلَوةً ⑭

33. 然^{しか}る後七十尺の鎖で彼を縛れ。(注9)

ثُمَّ فِي سِلْسِلَةٍ ذَرْعُهَا سَبْعُونَ ذِرَاعًا فَاسْلُكُوهُ ⑮

34. げに彼は至尊者アッラーを信ぜず、

إِنَّهُ كَانَ لَا يُؤْمِنُ بِاللَّهِ الْعَظِيمِ ⑯

35. また進んで貧者を養わざりき。

وَلَا يَخْضُ عَلَىٰ طَعَامِ الْيَسِيرِينَ ⑰

36. されば今日、彼はここに如何なる友とてな
く、

فَلَيْسَ لَهُ الْيَوْمَ هُنَا حَبِيمٌ ⑱

注7 「左手に己が記録を渡された者」は、クルアーンの専門用語で、試練に耐えられない者を示す。

注8 不信心者は、全てを終えるに当たり、他の生命も、又神の前での自らの行為の申し開きをしたくはないので、死を願うであろう。

注9 死後の生命は新たなものではなく、唯、現世の事実の象徴に過ぎない事が、クルアーンに繰り返して述べられて来た。当節では、現世における魂の苦悩が来世での体罰として表されている。例えば、首の回りに巻かれた鎖は、この世の欲望を表し、この願望が来世で足鎖の形を取るであろう。同様に、現世の恋愛問題も足鎖として示されるであろう。又、この世の恨みは災となって現れるであろう。人の平均寿命は、幼児期・老齢期を含めておよそ70年である。この70年を、不徳な不信心者は、恋愛問題や世俗の係わりや肉欲を満たす事に浪費する。彼は肉欲の隷属から逃れようとはしない為、70年間享樂して来たこの一連の肉欲は、来世に70尺の鎖となって表わされるであろう。この鎖一つ一つは一年を表し、悪者はこれによりつながれるであろう。

37. 水を混ぜた血の外に食物もなく、

38. 之を食するはただ罪人のみ」と。

第二項

39. われはお前たちの目に見えるものすべてに
かけて誓う、

40. またお前たちの目に見えぬものすべてにか
けて。(注 10)

41. そは実に高貴なる使徒によってもたらされ
た言葉なり。

42. そは詩人の言葉に非ず、されどお前たちは
ほとんどそれを信ぜず。

43. そは古い師の言葉にも非ず。されどお前た
ちはほとんどそれを注意せず。

44. そは万物の主よりの啓示なり。

45. もし使徒がわれらに関して虚偽の言を弄し
たりとすれば、

46. われらは必ず使徒の右手を捕え、

47. 而してその頸動脈を切断せん。

48. さすればお前たち誰一人われらの懲罰から
彼を守り得ざるべし(注 11)

49. げにそは義しき人々への訓戒なり。

50. われらは知るなり、お前たちのうちわれら
の神兆を拒否する者あることを。

51. げにそは不信心者どもの悔恨の因たるべ
し。

52. げにそは完全無欠なる真理なり。

53. されば至尊者たる汝の主の御名を讃え奉
れ。

وَلَا طَعَامٌ إِلَّا مِنْ غَسِيلٍ ۝

لَا يَأْكُلُهُ إِلَّا الْخَاطِئُونَ ۝

فَلَا أُفِيضُ بِمَا تُبْصِرُونَ ۝

وَمَا لَا تُبْصِرُونَ ۝

إِنَّهُ لَقَوْلُ رَسُولٍ كَرِيمٍ ۝

وَمَا هُوَ بِقَوْلِ شَاعِرٍ قَلِيلًا مَّا تُؤْمِنُونَ ۝

وَلَا بِقَوْلِ كَاهِنٍ قَلِيلًا مَّا تَذَكَّرُونَ ۝

تَنْزِيلٌ مِنْ رَبِّ الْعَالَمِينَ ۝

وَلَوْ تَقَوَّلَ عَلَيْنَا بَعْضُ الْأَقَاوِيلِ ۝

لَاخَذْنَا مِنْهُ بِالْيَمِينِ ۝

ثُمَّ لَقَطَعْنَا مِنْهُ الْوَتِينَ ۝

فَمَا مِنْكُمْ مِنْ أَحَدٍ عَنْهُ حَاجِزِينَ ۝

وَأَنَّهُ لَتَذَكُّرَةٌ لِلْمُتَّقِينَ ۝

وَأِنَّا لَنَعْلَمُ أَنَّ مِنْكُمْ مُكَذِّبِينَ ۝

وَأَنَّهُ لَحَسْرَةٌ عَلَى الْكَافِرِينَ ۝

وَأَنَّهُ لَحَقُّ الْيَقِينِ ۝

فَ فَسَبِّحْ بِاسْمِ رَبِّكَ الْعَظِيمِ ۝

注 10 我々が物質界で作用するのを口撃できる物。つまり、我々の視界から隠された生物・無生物の明白な事実。すなわち、クルアーンの神の由来を確証するものとして、39 と 40 節に述べられた人間の理性と分別。モハammad 預言者の時代に不信心者がその目で確かめた神のしるしと、未だ成就を待ち受けるイスラム教の輝ける未来についての預言は、クルアーンが、神が神の高潔な預言者モハammad に表した神御自身の世界であるという、反論の余地の無い主張となっている。当節はこの事を示しているとも言える。当節が取り上げているのは、人生の過酷な事実であり、詩人の甘い夢でもなければ、古い師の閑の徘徊でもない。

注 11 もしモハammad 預言者が偽りの捏造者であれば、偽りの預言者がたどる運命通りに、神の力強い腕が彼の喉を捕え、彼は必ずや苦しみ抜いて死に到り、彼の業及び使命は全て崩壊するはずである、と当節及び前三節は主張する。当節のこの言葉は、聖書の申命記 18:20 を、そのまま再現したものの様である。



アル・マアーリジ
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 尋ねる者ありて、(注1)降りかかる天罰について問う、
3. 不信心者どもの身に。そは何人も忌避する能わず。
4. 天罰は登昇の主アッラーより出づ。(注2)
5. 諸天使並びに聖霊は、この世の五萬年に相当する一日で、(注3)主の許へ登り行く。
6. されば汝、立派な忍耐をもって忍耐せよ。
7. 彼等は天罰を遼遠と見なすが、
8. われらは之を近しと見る。
9. 蒼穹が溶銅の如くなる日、
10. 山々が羊毛の如く飛び散る日、(注4)
11. 親しい友とて友の安否を問わざるべし、

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

سَأَلَ سَائِلٌ بِعَذَابٍ وَاقِعٍ

لِلْكَافِرِينَ لَيْسَ لَهُ دَافِعٌ

مِّنَ اللَّهِ ذِي الْمَعَارِجِ

تَعْرُجُ الْمَلَائِكَةُ وَالرُّوحُ إِلَيْهِ فِي يَوْمٍ كَانَ

مِقْدَارُهُ خَمْسِينَ أَلْفَ سَنَةٍ

فَأَصْبَحَ صُورًا جَبِيلًا

إِنَّهُمْ يَرَوْنَهُ بَعِيدًا

وَنَرَاهُ قَرِيبًا

يَوْمَ تَكُونُ السَّمَاءُ كَالْهَيْلِ

وَتَكُونُ الْجِبَالُ كَالْعِهْنِ

وَلَا يَسْأَلُ حَبِيبٌ حَبِيبًا

注1 当節の「尋ねる者」は、ナザル・ビン・ハリス又はアブ・ジャハルの事を述べる為に、数人の注釈者が用いている。しかしこの語は特定の人物に当てはめる必要はなく、不信心者全てを指すと考えられる。それは、彼等が、その身に下される恐しい罰を減じる様、繰り返しモハammad預言者に求めたからである(8:33, 21:39, 27:72, 32:29, 34:30, 36:49, 67:26)。

注2 神は信者に高い地位を授けられる。

注3 当節は、神の御計画が成就されるには、何千年という月日がかかる、と示している。あるいは、特に大きな変化が起きると定められた、五万年という一定の周期を指すとも言える。それは、神の預言が成就されるのに一定の期間を要するからである。

注4 原水爆が存在する現代は、羊毛の様に山が吹き飛び散る事は大いに有り得る。

12. たとい互に顔を見合せたとて。罪を犯せし者は、此の日の罰を免れんがために、己が子を、
يَوْمَئِذٍ يَبِينُهُ ⑤
13. 己が妻を、己が兄弟を、
وَصَاحِبَتِهِ وَأَخِيهِ ⑥
14. 庇護してくれた親戚も、
وَفَصِيلَتِهِ الَّتِي تُؤْوِيهِ ⑦
15. 更に地上の人間すべてを差出して贖わんと欲す、もしそれで己れを救い得なば。(注5)
وَمَنْ فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا ثُمَّ يُنْفِخُهُ ⑧
16. されど能わす。げに地獄の炎は、
كَلَّا إِنَّهَا لَنَظٍّ ⑨
17. 体の末端の皮まで剥ぎとるなり。
نَرَاةً لِلشَّوْىِ ⑩
18. 地獄の炎は、背を見せて背き去りし者を呼ぶべし、
تَدْعُوا مَنْ أَدْبَرَ وَتَوَلَّى ⑪
19. 富を貯え之を出し洩る者を。
وَجَمَعَ فَأَوْعَى ⑫
20. 人間は性急且つ欲張りに創られたり。(注6)
إِنَّ الْإِنْسَانَ خُلِقَ هَلُوعًا ⑬
21. 災難に見舞われれば嘆き悲しみ、
إِذَا مَسَّهُ الشَّرُّ جَزُوعًا ⑭
22. その身が幸せになれば人は吝嗇とる。
وَإِذَا مَسَّهُ الْخَيْرُ مَنُوعًا ⑮
23. されど礼拝する人々は然らず、
إِلَّا الصَّالِتِينَ ⑯
24. すなわち常に礼拝を遵守し、
الَّذِينَ هُمْ عَلَى صَلَاتِهِمْ دَائِمُونَ ⑰
25. 正当と認められたる己が財産すら、(注7)
وَالَّذِينَ فِي أَمْوَالِهِمْ حَقٌّ مَّعْلُومٌ ⑱
26. 乞い求める者並びに羞ぢて乞わざる者のために施す者は。
لِلسَّائِلِ وَالْمَحْرُومِ ⑲

注5 これ等の節に描かれた裁きのHの描写の、何とすさまじい事であろうか。人は不幸に直面した時、もしそうする事で自身が助かるなら、全てを、そして最愛の肉親をすら切り捨てる覚悟がある。

注6 人間とは、本来、忍耐に欠け、欲深いものである。「性急」のこの意味に関しては、21：38、30：55を参照の事。

注7 宇宙の万物は全人類の共有財産であり、誰もその絶対の所有権を授けられてはいない。貧しき者は、権利として、富める者の財の分け前を与えられる。

27. また審判の日を固く信じて疑わず、(注8) وَالَّذِينَ يُصَدِّقُونَ بَيُّومَ الدِّينِ ۝
28. 主の懲罰を恐れる者— وَالَّذِينَ هُمْ مِنْ عَذَابٍ رَبِّهِمْ مُتَّقُونَ ۝
29. げに何人も主の懲罰を免れて安全無事なる者なし— إِنَّ عَذَابَ رَبِّهِمْ غَيْرُ مَأْمُونٍ ۝
30. 貞潔を守る者— وَالَّذِينَ هُمْ لِأَعْوَابِهِمْ حَفِظُونَ ۝
31. 但し妻並びにその右手の所有する者と偖なる場合は罪なし。 إِلَّا عَلَىٰ أَزْوَاجِهِمْ أَوْ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُهُمْ فَإِنَّهُمْ غَيْرُ مَلُومِينَ ۝
32. されどこれを越えて求める者は、罪人なり— فَسَبِّحْ بُنَىٰ وَرَاءَ ذَلِكَ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الْعَادُونَ ۝
33. また信託や約束に慎重なる者— وَالَّذِينَ هُمْ لَا مُنْتَهِيَّ وَعَهْدِهِمْ رَعُونَ ۝
34. 証言に際しては正しくする者、 وَالَّذِينَ هُمْ بِشَهَادَتِهِمْ قَائِلُونَ ۝
35. 礼拝を厳格に遵守する者。 وَالَّذِينَ هُمْ عَلَىٰ صَلَاتِهِمْ يُحَافِظُونَ ۝
36. かくの如き人々は榮譽を得て、樂園の中に住まん بِحَبْلِ أُولَٰئِكَ فِي جَنَّاتٍ مُّكْرَمُونَ ۝
- 第二項
37. 不信心者どもが汝の方へ急ぎ馳せ来るはど うしたわけか、 فَمَالِ الَّذِينَ كَفَرُوا قِبَلَكَ مُهْطِعِينَ ۝
38. 右からも左からも、さまざまに異なる集団 が? (注9) عَنِ الْيَمِينِ وَعَنِ الشِّمَالِ عِزِينَ ۝
39. 彼等は皆至福の園に入ることを希うか? أَيْطَعَ كُلُّ أَمْرٍ مِنْهُمْ أَنْ يَدْخُلَ جَنَّةً يَكِيمُ ۝
40. 断じてなし得ず。われらは、彼等が知れる ものにて彼等を創れり。 كَلَّا إِنَّا خَلَقْنَاهُمْ مِنْ مَّتَا يَعْلَمُونَ ۝

注8 来世を真に信じずして、真の義務感等あろうはずがない。この確信は、神の存在に対する信仰に次ぎ、二番目に重要なイスラム教の信仰である。

注9 当節及び前節は、来たるべきイスラム教の勝利の預言を記している。その時、アラブの異教徒達は、イスラム教徒に加わりたいたいと願いつつ、モハammad預言者の代理を待ち受ける為、全土より急ぎ集まった。あるいは、モハammad預言者はクライシュの偶像を非難する説教を止めてはどうかという、彼に対するクライシュの指導者の誘いに、当節は触れているのかもしれない。しかし、さる権威筋によれば、当節は、形や方向を変えて、敵対者によりモハammad預言者に加えられた危険な攻撃を指すと受け止められている。

41. 否、われは、われらが統べ給う東西の主にかけて誓う、

فَلَا أَقْسِمُ بِرَبِّ الْمَشْرِقِ وَالْمَغْرِبِ إِنَّا لَقَدِيرُونَ ﴿٤١﴾

42. 彼等より優るものを以て彼等に代えることを。而して、われらは之を妨げられることなし。(注10)

عَلَىٰ أَنْ يُبَدِّلَ خَيْرًا مِنْهُمْ وَمَا عُنَّا يُسَبِّحُونَ ﴿٤٢﴾

43. されば約束されたるその日が来るまで、彼等をむだ話にふけらせしめよ。

فَذَرَهُمْ يَخُوضُوا وَيَلْعَبُوا حَتَّىٰ يُلَاقُوا يَوْمَهُمُ الَّذِي يُوعَدُونَ ﴿٤٣﴾

44. その日彼等は、的に向って競い合う如く、急ぎあわててその墓穴より出て来るべし、

يَوْمَ يُخْرَجُونَ مِنَ الْأَجْدَاثِ سِرَاعًا كَانُوا إِلَيْهَا يُوقِضُونَ ﴿٤٤﴾

45. その目を俯け、恥ずかしくも恐れ入って。かくの如きが、すなわち彼等が約束せられたる日なり。(注11)

خَاشِعَةً أَبْصَارُهُمْ تَرْهُفُهُمْ ذِلَّةٌ ذَٰلِكَ الْيَوْمِ الْبَاقِ الَّذِي كَانُوا يُوعَدُونَ ﴿٤٥﴾

注10 モハammad預言者に刃向う者達は、古い秩序が失せ、そこに新たにより良い秩序が生まれ、他の人々によってその地位をとって替えられると告げられている。

注11 当節及び前節には、メッカ陥落後のクライシュの指導者達が生々しく描かれている。その時、彼等は完全に気落ちしてモハammad預言者の所へやって来たが、彼等は目を伏せ、失望と罪悪感が顔面に広がっていた。

سُورَةُ نُوحٍ مَكِّيَّةٌ

ヌーフ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. われらはノアをその民に遣わし、「痛烈なる懲罰が降る前に汝の民を警めよ」と命じたり。

إِنَّا أَرْسَلْنَا نُوحًا إِلَىٰ قَوْمِهِ أَنْ أَنْذِرْ قَوْمَكَ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَأْتِيَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ

3. ノアは云えり、「我が民よ、げに我はお前たちに遣わされたる明白なる警告者なり。

قَالَ يَقَوْمِ إِنِّي كُنْتُ نَذِيرٌ مُبِينٌ

4. お前たちはアッラーに仕え、之を畏れ、我に従え。

أَنِ اعْبُدُوا اللَّهَ وَاتَّقُوهُ وَأَطِيعُوا أَمْرًا

5. さすればアッラーはお前たちの諸々の罪を赦し、定め、期限までお前たちを猶予せん。げにアッラーによって定められたる期限は、一度到来すれば、引延すこと能わず。
(注1) お前たち之を知ることこそ望まされしけれ」と。

بِقُدْرَتِهِمْ مِنْ ذُنُوبِكُمْ وَيُؤَخِّرْكُمْ إِلَىٰ أَجَلٍ مُّسَمًّى إِنْ أَجَلَ اللَّهِ إِذَا جَاءَ لَا يُؤَخَّرُونَ وَلَكُمْ نِعْمُ الْمَوْتُونَ

6. ノアは云えり、「主よ、我は日夜我が民に喚びかけたり。

قَالَ رَبِّ إِنِّي دَعَوْتُ قَوْمِي لَيْلًا وَنَهَارًا

7. されど喚べば喚ぶほど彼等は我より逃れ去るばかりなり。

فَلَمْ يَزِدْهُمْ دُعَائِي إِلَّا فِرَارًا

8. 我彼等を喚びて、汝が彼等を赦さんと告げること、彼等は己が指を以てその耳を塞ぎ、且つその心を閉じ、(注2)邪悪に固執し、傲岸不遜なりき。

وَإِنِّي كُلَّمَا دَعَوْتُهُمْ لِتَغْفِرَ لَهُمْ جَعَلُوا أَصَابِعَهُمْ فِي آذَانِهِمْ وَاسْتَغْشَوْا ثِيَابَهُمْ وَأَصْرُوا وَاسْتَكْبَرُوا

9. されば我は声を大にして、彼等に公正たれと喚びかけたり、

ثُمَّ إِنِّي دَعَوْتُهُمْ جَهَارًا

注1 天命が実施されるその時に至っては、全く後悔は役に立たない。

注2 「指を以てその耳を塞ぎ」というのは、比喩で、「彼等は神のお告げに耳を傾けるのを拒んだ」事を示す。彼等は神のお告げに対し、全く心を閉じてしまったのである。

10. 公然と語りかけたり密に説教したりして。
(注3)

ثُمَّ إِنِّي أَعْلَنْتُ لَهُمْ وَأَسْرَرْتُ لَهُمْ إِسْرَارًا ⑩

11. また我は云えり、『主の赦しを請いまつれ、
主は寛大なる御方なれば。

فَقُلْتُ اسْتَغْفِرُوا رَبَّكُمْ إِنَّهُ كَانَ غَفَّارًا ⑪

12. 主はお前たちのために沛然と雨を降らせ
ん。

يُرْسِلِ السَّمَاءَ عَلَيْكُمْ مِدْرَارًا ⑫

13. またお前たちに富や子女によって勢力を増
さしめ、畑を与え、河川を流れしめん。

وَيُمِدُّكُمْ بِأَمْوَالٍ وَأَبْنٍ وَيَجْعَلُ لَكُمْ جَنَّاتٍ

وَيَجْعَلُ لَكُمْ أَنْهَارًا ⑬

14. お前たち何故に偉大さと知識をアッラーよ
り獲んと望まざるか？

مَا لَكُمْ لَا تَرْجُونَ لِلَّهِ وَقَارًا ⑭

15. アッラーはさまざまなる形と状態にお前た
ちを創り給えり。(注4)

وَقَدْ خَلَقْنَا أَطْوَارًا ⑮

16. お前たちは見ざるか、アッラーが七層の天
を完全な調和を以て創造せるかを、

الَمْ تَرَوْا كَيْفَ خَلَقَ اللَّهُ سَبْعَ سَمَوَاتٍ طِبَاقًا ⑯

17. そこに月を据えて明りとなし、太陽を据え
て炬火となし給えしことを？

وَجَعَلَ الْقَمَرَ فِيهِنَّ نُورًا وَجَعَلَ الشَّمْسُ

سِرَاجًا ⑰

18. またアッラーは草木の生える如く、お前た
ちを土より生ぜしめたり。

وَاللَّهُ أَنْبَتَكُمْ مِنَ الْأَرْضِ نَبَاتًا ⑱

19. 而して再び土に歸らしめ、然る後新たにお
前たちを生ぜしめん。

ثُمَّ يُعِيدُكُمْ فِيهَا وَيُخْرِجُكُمْ إِخْرَاجًا ⑲

20. またアッラーはお前たちのために大地を
広々と展げ給えり、

وَاللَّهُ جَعَلَ لَكُمُ الْأَرْضَ بِسَاطًا ⑳

21. お前たちにその広々とした道を往来せしめ
んがために』と。

﴿يَسْأَلُكُمُ مِنْهَا سُبُلًا فِجَاجًا﴾ ㉑

第二項

22. ノアはまた云えり、『主よ、彼等は我に背き、
その富も子女も徒らに身の破滅をまねくば
かりの者に従えり。

قَالَ نُوحٌ رَبِّ إِنَّهُمْ عَصَوْنِي وَاتَّبَعُوا مَنْ لَمْ

يَزِدْهُ مَالَهُ وَوَلَدَهُ إِلَّا خَسَارًا ㉒

注3 ノアは、あらゆる手を尽して、一族の者が神のお告げに耳を傾ける様試みた。しかし、彼等は皆、断固としてそれを拒んだ。

注4 神は、人それぞれに異なる能力を授けられ、人間社会の存続・発展は、この能力及び体調の相違に負っている。神は、形・状態の異なる人々をお創りになった。又は、神は段階に応じて形や性質の異なる人を作られた。この事を当節は示している。

23. 而して彼等は重大なる策謀^{くわ}を企^{しか}だてたり。
 وَمَكْرُؤًا مَكَرًا كَبِيرًا ⑤
24. 彼等は互に云えり、『お前たち、断じてお前たちの神を棄てるなかれ。ウッドやスワー、ヤグースやヤウークやナスルを棄てるなかれ』と。(注5)
 وَقَالُوا لَا تَدْرِكُ الْهَيْكَلُ وَلَا تَدْرِكُ وَدَّاءُ لَا سُوَاعًا وَلَا يَغُوثَ وَيَعُوقَ وَنَسْرًا ⑥
25. 彼等は多くの人を迷わしめたり。されば悪人どもには、迷誤以外に何も加え給うなかれ』と。
 وَقَدْ أَضَلُّوا كَثِيرًا وَلَا تَزِدِ الظَّالِمِينَ إِلَّا ضَلًّا ⑦
26. 彼等はその数々の罪ゆえに溺死させられ、次いで業火^{ごうか}に投ぜられたり。而して彼等は、アッラー以外に如何なる救援者も見つけざりき。
 وَمَا حَاطَتْ لَهُمْ أُغْرُؤُومًا فَادُّخُولًا نَارًا فَلَمْ يَجِدُوا لَهُمْ مِنْ دُونِ اللَّهِ أَنْصَارًا ⑧
27. ノアは云えり、「主よ、地上に一人の不信心者も残し給うな。
 وَقَالَ نُوحٌ رَبِّ لَا تَذَرْ عَلَى الْأَرْضِ مِنَ الْكَافِرِينَ دَيَّارًا ⑨
28. もし残さば、彼等は必ず汝の僕等^{しもべ}を迷わしめ、ただ罪人と不信心者のみを産まん。
 إِنَّكَ إِنْ تَذَرَهُمْ يُضِلُّوا عِبَادَكَ وَلَا يَلِدُوا إِلَّا فَاكِهًا كَافِرًا ⑩
29. 主よ、我を赦し給い、我が^{うち}父母^{はは}を赦し給い、信者として我が家に入る者を赦し給い、男女の別なくすべての信者を。而して悪人どもには破滅以外に何も加え給うなかれ』と。(注6)
 رَبِّ اخْفِضْ لِي وَلِإِخْوَتِي وَلِإِخْوَتِي دُخُلَ بَيْتِي مُؤْمِنًا وَ لِلْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ وَلَا تَزِدِ الظَّالِمِينَ إِلَّا تَبَارًا ⑪

注5 いずれもアラブの偶像神。

注6 神の預言者は、人の優しさに満ちている。ノアの祈りは、彼に対する抵抗が続き、一族の者を正義へ導こうとする彼の努力が全て無に帰し、彼に従う者が増える可能性は無く、彼に刃向う者が彼やその弟子達を苦しめ、悪事にふけて法を犯したに違いない事を示している。事態がこうであったからこそ、ノアのごとく最も哀れみ深い人が、一族の者の不利になる祈りを強いられたのである。同じ状況の下で、モハammad預言者の、その対抗者に対する態度は、非常に対照的である。オハドの戦いで、彼は二本の歯を折り、大怪我をし、大量に出血したが、その時彼の口を突いて出た言葉は次の様であった。「罪も無い預言者を傷付け、その顔を血だらけにした人々を、しかし彼は神のもとへ呼び寄せる。嗚々、如何にすれば彼等は救われるのだろうか。神よ、我民を救い賜え。彼等は為すべき事を知らないのです。」

سُورَةُ الْجِنِّ مَكِّيَّةٌ

アル・ジン

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 云え、「我はかくの如く啓示されたり。一群の妖靈たちが(注1)耳を欬そばてて聴き入り、かく云えり、「我等が聴けるものは、驚くべきクルアーンなり。
3. そは直き道に導くものなり。されば我等はそれを信じ、何者をも我等が主に配せざるべし。(注2)
4. 我等は信ず、崇高なる主の御稜威そばたけよ。主は妻もなければ、子もなし。
5. 我等の中の愚かな者は、アッラーについて、常々途方もない嘘を云いふらしおることは事実なり。
6. 我等は、一般庶民と妖靈はアッラーについて決して嘘を云うまいと思いたりき。
7. 確かに、庶民の中には、(注3)妖靈の或る者たちに常々庇護を求め、之がために妖靈たちにその傲慢さを助長せしめたり。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

قُلْ أُوْحِيَ إِلَيَّ أَنَّهُ اسْتَمَعَ نَفَرٌ مِّنَ الْجِنِّ فَقَالُوا
إِنَّا سَمِعْنَا قُرْآنًا عَجَبًا

يَهْدِي إِلَى الرُّشْدِ فَآمَنَّا بِهِ وَلَنْ نُشْرِكَ بِرَبِّنَا
أَحَدًا

وَأَنَّهُ تَعَلَّى جَدُّ رَبِّنَا مَا اتَّخَذَ صَاحِبَةً وَلَا وَلَدًا

وَأَنَّهُ كَانَ يَقُولُ سَفِيهُنَا عَلَى اللَّهِ شَطَطًا

وَأَنَّا ظَنَنَّا أَن لَّنْ نَقُولَ الْإِنسَ وَالْجِنُّ عَلَى اللَّهِ
كَذِبًا

وَأَنَّهُ كَانَ رِجَالٌ مِّنَ الْإِنسِ يَعُوذُونَ بِرِجَالٍ
مِّنَ الْجِنِّ فَزَادُوهُمْ رَهَقًا

注1 46章30節参照。

この言葉は、ナスィービーンのエダヤー族を指している様だ。彼等はアラブ人ではなく、他人という意味の語「ジン」と呼ばれた異邦人であった。当節の出来事は、40:30-33に述べられた事と異なる様に思えるが、当節の「一群の選良たち」の言葉と、46:30-33の「選良たち」の言葉が、一見した所似ているので、当節は46:30-33に言及したものと取る向きもある。

注2 「一群の選良たち」は、ユニテリアン派のキリスト教徒か、彼等と結び付きの深いユダヤ教徒、あるいは彼等の影響を受けている者、更にはキリスト教に詳しい者。当節から、これ等の事が推察される。

注3 リジャール(庶民)という語は人間に関してのみ使われるので、当節及び46章の「一群の選良たち」は人間以外のものではない、と当節は示している。此所にあるアラビア語のジンは、地位が高く有力な者を指し、インスは、前者に従いその保護を求める事で慢心を深める低い位の卑しい者を表している。

8. 彼等は、お前たちが考える如く、アッラーは如何なる使徒も甦らしむることなしと思えり。(注4)
9. 我等は天上に達せんと謀る。されど、強力な護衛と流星が天に満つるを見たり。(注5)
10. 我等は盗み聴きするために、天上の席に坐するを常とせり。されど盗み聴きする者は今、(注6)彼を待ち構える流星あるを見ん。
11. されば、主が地上の者どもに災いを加えんとするのか、それとも嚮導を授けんとするのか、我等は之を知らざるなり。
12. 我等の中には義しき者あり、また然らざる者あり、すなわちそれぞれ別れて違った道を奉ず。
13. 我等は、地上において、アッラーの計画を失敗させること能わず、またアッラーより逃避すること能わざるを知る。
14. されば我等は、嚮導の呼びかけを聴くや、之を信じたり。主を信ずる者は、損失の心配なく、他人に不当に遇せられることもなし。
15. 我等の中には、神に帰依する者もあれば、正道から逸脱せる者もあり。」と。而して神に帰依する者、そは正しい道をもとめる者なり。

وَأَنَّهُمْ ظَنُّوا كَمَا ظَنَنْتُمْ أَن لَّن يَبْعَثَ اللَّهُ أَحَدًا

وَأَنَّا لَنَسْتَأْتِي السَّمَاءَ فَوْجَدْنَهَا مِلَّتْ حَرَسًا
شَدِيدًا وَشُهَبًا ①

وَأَنَّا كُنَّا نَقْعُدُ مِنْهَا مَقَاعِدَ لِلسَّمَجُوتِ فَنَنْسِفُ
الَّذِينَ يَحِدُّ لَهُ شِهَابًا رَصَدًا ②

وَأَنَّا لَا نَدْرِي أَشَرُّ أَرِيدُ يَمْنُنَ فِي الْأَرْضِ أَمْ أَزَلَدُ
بِهِمْ رَبُّهُمْ رَشَدًا ③

وَأَنَّا مِنَّا الصَّالِحُونَ وَمِنَّا دُونَ ذَلِكَ كُنَّا طَرَائِفَ
قِدَادًا ④

وَأَنَّا ظَنَنَّا أَن لَّن نَعْمَازَ اللَّهَ فِي الْأَرْضِ وَلَن نُّعْزِرَهُ
هَرَبًا ⑤

وَأَنَّا لَمَّا سَمِعْنَا الْهُدَى آمَنَّا بِهِ فَمَنْ يُؤْمِنُ
بِرَبِّهِ فَلَا يَخَافُ بُخْسًا وَلَا رَهَقًا ⑥

وَأَنَّا مِنَّا الْمُسْلِمُونَ وَمِنَّا الْقَاسِطُونَ فَمَنْ أَسْلَمَ
قَالُوا لَيْكَ تَعَزَّ وَارْشَدًا ⑦

注4 ユダヤ人は、後に続く神の使徒がまた現れない、預言者ヨセフの時代に、既に信仰を捨て去った(40:35)。

注5 「天上に達せん」とは、「未知の秘密を嗅ぎ取ろうとする」を意味する。神の使徒がこの世に真に現れようとする時、星の異常な動きが起きる。当節に述べられているのは、この予期せぬ自然現象である。

注6 神の使徒が現れる前に超自然現象を予告する者は、そのいかがわしい技で未知の神秘に近付けるふりをし、その巧みな詐欺の術を使って、民衆をだまそうとし、彼等の単純さにくまなく付け入る。しかし神の使者が出現すれば、彼等のうそは暴かれ、その未知に対する偽りの知識は、占星術の上辺だけの不完全なものに過ぎないと暴露される。「今」という語は、此所では特にモハammad預言者の時代に関して用いられているが、同時に、全ての偉大な神の使徒の時代をも示していると言える。37:7-10も参照の事。

16. されど正道から逸脱する者どもは、地獄の薪^{なまき}とならん。
17. もし彼等が正道を守らば、われらは必ず彼等に豊かな飲料水を供給し、(注7)
18. 之^{これ}によって彼等を試さん。されど主を念ずることを顧みない者は、主はその者をば抗し難い苛酷な刑に追いやらん。
19. すべての礼拝堂はアッラーの^{もの}有なり。さればアッラーの外に如何なる者も祈るなかれ。(注8)
20. アッラーの僕^{しもべ}が礼拝のために起てる時、(注9)彼等は僕に押し寄せて、窒息させるほどなりき。

第二項

21. 云え、「我は主のみを祈り、何者をも主に配せず」と。
22. 云え、「我はお前たちを害し、または益する能力^{ちから}を有せず」と。
23. 云え、「^{なんびと}げに何人もアッラーに抗して我を護る^{あた}能^{あた}わず、また我はアッラーの外に^{いづこ}何処にも避難所を見いだす能^{あた}わず。
24. 我が^{つとめ}責務は、ただアッラーより我に降る啓示並びに神託を伝達するにあり」と。而してアッラーとその使徒に従わざる者どもには、地獄の火ありて、その中に永劫に住み留まらん。

وَأَمَّا الْقِيسِرُونَ فَكَانُوا لِجَهَنَّمَ حَطَبًا ⑤

وَأَن لَّوِ اسْتَقَامُوا عَلَى الطَّرِيقَةِ لَأَسْقِينَهُمْ مَّاءً غَدَقًا ⑥

لِنَفْتِنَهُمْ فِيهِ وَمَن يُضِرْ عَن ذِكْرِ رَبِّهِ يَسْكُ ⑦
عَذَابًا صَعَدًا ⑧

وَأَنَّ الْمَسَاجِدَ لِلَّهِ فَلَا تَدْعُوا مَعَ اللَّهِ أَحَدًا ⑨

وَأَنَّهُ لَمَّا قَامَ عَبْدُ اللَّهِ يَدْعُوهُ كَادُوا يَكُونُونَ عَلَيْهِ لِبَدًا ⑩

قُلْ إِنَّمَا أَدْعُوا رَبِّي وَلَا أُشْرِكُ بِهِ أَحَدًا ⑪

قُلْ إِنِّي لَا أَمْلِكُ لَكُمْ صَرًا وَلَا رَشَدًا ⑫

قُلْ إِنِّي لَن يُغَيِّرَنِي مِنَ اللَّهِ أَحَدٌ وَلَن أَجِدَ مِن دُونِهِ مُنْتَصَدًا ⑬

إِلَّا بَلَاغًا مِّنَ اللَّهِ وَرِسَالَةً وَمَن يَعْصِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ فَإِنَّ لَهُ نَارَ جَهَنَّمَ خَالِدًا فِيهَا أَبَدًا ⑭

注7 水は全生命の根源であり、「豊かな飲料」とは、財産やその他物的所有の豊富さを示している。

注8 前節には、モハammad預言者の出現と共に、唯一神確立という神の御計画が示されたと言われている。当節は、イスラム教寺院（モスク）が以後中心となり、そこから神の光が全世界へ広がる、と述べている。

注9 「アッラーの僕」という別称は、モハammad預言者が一段と優れた神の下僕である為に、彼を示しているのだが、同時に、神の使徒全てを指してもいるようだ。

25. 彼等はその約束されたるものを目のあたりにするまで信ぜざるべし。而してその時に及んで、彼等初めて助力において弱く、しかも数において少きは誰なるかを知るべし。
26. 云え、「お前たちに約束されたることは、近く起きるのか、それとも主がそれを遠い先のことに定めたるか、我はそれを知らず」と。
27. 主は不可視なるものを知る者なり。されど主は、その秘密を何人にも漏らさず、
28. 己れが選べる使徒の外には。而してその場合は、使徒の前後を諸天使に護衛せしむ。
(注 10)
29. そは、使徒たちが主のお告げを伝えたか否かを知らんがためなり。主は使徒たちと共にあるすべてを取り囲み、すべてを数え給う。(注 11)

كَذَٰلِكَ إِذَا دَاوَّ مَا يُوعَدُونَ فَسَيَعْلَمُونَ مَنْ
أَضْعَفُ نَاصِرًا وَأَقَلُّ مَدَدًا ﴿٢٥﴾

قُلْ إِنْ أَدْرِي أَقْرَبُ مَا تُوعَدُونَ أَمْ يَجْعَلُ لَهُ
رَبِّي أَمَدًا ﴿٢٦﴾

عِلْمُ الْغَيْبِ فَلَا يُظْهِرُ عَلَى غَيْبِهِ أَحَدًا ﴿٢٧﴾

إِلَّا مَنِ ارْتَضَىٰ مِنْ رَسُولٍ فَإِنَّهُ يَسْلُكُ مِنْ بَيْنِ
يَدَيْهِ وَمِنْ خَلْفِهِ رَصَدًا ﴿٢٨﴾

لِيَعْلَمَ أَنْ قَدْ أَبْلَغُوا رِسَالَاتِ رَبِّهِمْ وَأَحَاطَ بِمَا
لَدَيْهِمْ وَأَخْبَتْ كُلُّ شَيْءٍ عَنَّا ﴿٢٩﴾

注 10 神の使徒に啓示される未知の神秘の本質及び領域と、他の高潔な信者に示されるものとを区別する明白な基準が、当節に含まれる。この差異は次の様なものである。神の使徒達は、他の正しき人々に示される未知の神秘より優位に立つ。更に、神の使徒に授けられる啓示は、神の特別な保護のもとにあるので、邪悪なものにこれに手を付ける事はできないが、他の高潔な人々に示される神秘は、必ずしも保護されてはいない。

注 11 神の使徒への啓示は、不正な干渉から守られているが、それは、彼等が成就すべき神の偉大な使命を帯び、伝えるべき神の偉大なお告げを賜っているからである。



アル・ムッザムミル

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 汝外套をまとう者よ、(注1)

يَا أَيُّهَا الْمُزَّمِّلُ ②

3. 暫時の間を除き、夜も起きて礼拝せよ。

فَمِنَ اللَّيْلِ إِلَّا قَلِيلًا ③

4. 夜の半分か、それより僅かに減じるか、

نِصْفَهُ أَوْ انْقُصْ مِنْهُ قَلِيلًا ④

5. 或いは少しそれに加えて、ゆつくりとよく考えながらクルアーンを誦読せよ。

أَوْزِدْ عَلَيْهِ وَرَتِلِ الْقُرْآنَ تَرْتِيلًا ⑤

6. げにわれらは重大なる言葉を(注2)汝に説示せんとす。

إِنَّا سَنُلْقِي عَلَيْكَ قَوْلًا ثَقِيلًا ⑥

7. 礼拝のために夜起きることは、(注3)己れを抑制する最も効果ある方法であり、また礼拝の言葉を最も効果的に。

إِنْ نَاشَأَ الْبَيْتَ هِيَ أَشَدُّ وَطْأً وَأَثْوَمُ قِيلًا ⑦

注1 神の天使が、ヒラーの洞窟に、神の啓示を携えてモハammad預言者を訪ねた時、これはモハammad預言者にとり初めての精神的な体験であり、その後彼は驚いて家へ急ぎ戻った。この驚きは、その体験が見聞きした事のないものであった為、ごく当然である。モハammad預言者はマントで覆ってくれる様頼んだ。「覆う」とは、「共に加わり一つになる」とも意味するので、当節は次の様な事を示すものであろう。「おお、一つの旗の下に世界中の人々が一つになる様命ぜられた御方!」モハammad預言者は、「世界の盾を一つに結び付ける人」という意味の語アル・ハーシル(統率者)として、ハディースに記されている(ブハリ)。当節は又次の様な意味もある。(1)モハammad預言者が人類を目覚めさせ、その高度な宿命を悟らせるまでには、まだ長い道のりを行かねばならず、その為彼は急がなければならない。つまり、懸命に、休む事なく、急ぎ事を為さなければならないのである。(2)彼は、重荷、つまり、神のお告げを世に伝えるという重責を担った人である。モハammad預言者は、神を畏れ従う者の社会を準備するという重責に気付いていたであろう。この従者達は、彼と同じ高尚な理想を持ち、同様の不断の熱意に奮い立ち、彼を助けてイスラム教のお告げを人類に伝えなければならないのである。此所に述べられてるのはモハammad預言者のこの重責であって、マントに身を包む事ではない。

注2 「重大なる言葉」は、「クルアーンの教義は最高の意味に満ちている。それは余りに重く、動かす事のできないものである。」と示しているようだ。クルアーンの一文字一句たりとも変える事はできない。しばしば引用されるハディースによれば、モハammad預言者に啓示が下された時はいつも、どんなに寒い日でも大粒の汗が額から落ち、自身の身体の重みを感じられる様にと、彼は忘我の境地に至り、独特の感覚に触れたのである。(ブハリ)。クルアーンの啓示は「重大なる言葉」であり、モハammad預言者の発作はこの感覚によるものである。

注3 祈りの為に夜起きるのは、自己を抑制し、自身の悪へ傾きがちな性癖を抑えるのに強力な手段である。夜の祈り程魂を向上させるものではなく、神の高德な人々の全ての体験がこれを証明している。夜の静寂と孤独

8. げに汝は、昼の間、絶えまなき用事あり。

(注4)

إِنَّ لَكَ فِي النَّهَارِ سَبْحًا طَوِيلًا ④

9. されば主の御名を唱念し、一意専心主におすがりせよ。

وَادْكُرْ اسْمَ رَبِّكَ وَتَبْتَغِلْ إِلَيْهِ تَتِمَّلًا ⑤

10. 彼は東西の主なり。彼の外に神なし。されば彼を汝の守護者とせよ。

رَبُّ الشَّرْقِ وَالْمَغْرِبِ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ فَاتَّخِذْهُ
وَكَيْلًا ⑥

11. 彼等が云うことはすべて耐え忍び、上品に彼等から身を退け。

وَاصْبِرْ عَلَى مَا يَقُولُونَ وَاهْجُرْهُمْ هَجْرًا جَمِيلًا ⑦

12. 真理を認めざる富裕な者どものことはわれに任せ、暫く彼等を猶予せよ。

وَذَرْنِي وَالْمُكَذِّبِينَ أُولِيَ النَّفْسَةِ وَمُتَمَلِّئِي الْقِيَارِ ⑧

13. げにわれらがところには重い足かせ、燃え盛る業火あり。

إِنَّ لَدَيْنَا أَنْكَالًا وَجَحِيمًا ⑨

14. 喉につかえる食物も、痛刑もあり。

وَطَعَامًا ذَا غَصَصٍ وَعَذَابًا أَلِيمًا ⑩

15. すなわちその日、大地も山々も震撼し、山はさながらもろく崩れる砂丘の如くならん。

يَوْمَ تَرُجُّهُمُ الْأَرْضُ وَالْجِبَالُ وَكَانَتِ الْجِبَالُ
كَغَيِّبٍ مُهْمِلًا ⑪

16. げにわれらはかつてファラオに一使徒を遣わした如く、お前たちの証人たるべき一人の使徒をお前たちに遣わしたり。(注5)

إِنَّا أَرْسَلْنَا إِلَيْكَ رَسُولًا شَاهِدًا عَلَيْكُمْ كَمَا
أَرْسَلْنَا إِلَى فِرْعَوْنَ رَسُولًا ⑫

17. されどファラオがその使徒に従わざるが故に、われらは彼を捕え、厳罰に処せり。

فَخَصِمْتُمْ بِهِ الرُّسُلَ فَآخَذْنَاهُ أَخَذًا وَيْلًا ⑬

18. もしお前たち信ぜずば、童が白頭に化さんその日、(注6)如何にその身を護るべきや?

فَكَيْفَ تَسْقُونَ إِنْ كَفَرْتُمْ يَوْمًا يَجْعَلُ الْوِلْدَانَ
شِيبًا ⑭

の中で、独特の平安が支配する。万物は静まり返り、人はその創造主と向き合い、神との特別の対話を享受し、彼が他人に伝える特別の天の光に照らし出される。人が徳性を高め、その言葉を思慮あるものにするには、真にこの時を置いてはない。難業の為の感銘を与える演説と無限の包容力が、神の使者がその使命を果たすのに求められる二つの不可欠な特質である。自らの心と言葉を自制できてこそ、他人を支配できる様になる。

注4 当節は、モハammad預言者が機敏に遂行し、そうする事で大きな喜びを得た、彼の多くの義務を述べている。これが「用事」の意味する所である。

注5 当節は聖書の預言を述べている。「私は彼等の同胞の内から、彼等の為に貴人の様な一人の預言者を起こそう。私は彼の口に私の言葉を授けよう。彼は私が命じる事を皆、彼等に告げる。私の名によって彼が告げる私の言葉に聞き従わない者があれば、私が彼に責任を問う。」(申命記 18: 18-19)。

注6 当節の「わらべが白頭に化さん」、次節の「天は崩壊」、その他クルアーンで用いられた同様の言葉(21: 105、82 2、84 2)は、不幸な変化を引き起こす最も悲惨な出来事の比喩である。

19. その日、天は崩壊し、主の約束は履行されん。(注7)

20. げにこは訓戒なり。されば欲する者には主への道を辿らしめよ。

第二項

21. 主は、汝が夜の三分の二近く、時には半分が三分の一を起きて礼拝するを知る。(注8) 汝に従う人々の一団もまた然り。アッラーは夜昼の長さを測定す。アッラーはお前たちがその時間を正確に算定し得ざることを知りて、(注9) 慈顔をお前たちに向けたり。さればクルアーンを、お前たちに無理にならざる程に誦め。アッラーは、お前たちの中には病人あり、アッラーの恵みを求めて処方方を旅する者あり、またアッラーの道のために戦う者あるを知る。さればお前たちに無理にならざる程にクルアーンを誦み、礼拝を遵守し、定め^{しか}の喜捨をなし、アッラーに立派な貸し付けをせよ。お前たち、己が魂のために何か善いことをしておけば、アッラーの御許でそれを見ん。そはより良く、より立派な報奨として。而してアッラーに赦しを請い奉れ。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くします。

إِنَّ السَّاعَةَ مُفْطِرٌ بِهِ كَانَ وَعْدُهُ مَفْعُولًا ①

إِنَّ هَذِهِ تَذَكُّرَةٌ ۖ فَمَنْ شَاءَ اتَّخَذْ إِلَىٰ رَبِّهِ سَبِيلًا ②

إِنَّ رَبَّكَ يَعْلَمُ أَنَّكَ تَقُومُ أَدْنَىٰ مِنْ ثُلُثَيِ اللَّيْلِ

وَنِصْفَهُ ۚ وَثُلُثُهُ وَطَائِفَةٌ مِّنَ الَّذِينَ مَعَكَ

وَاللَّهُ يُقَدِّرُ اللَّيْلَ وَالنَّهَارَ ۚ عَلِمَ أَن لَّكَ تُخْصُوهٗ

فَتَأْتَابُ عَلَيْكُمْ فَاقْرَءُوا مَا تَيَسَّرَ مِنَ الْقُرْآنِ ۚ

عَلِمَ أَن سَيَكُونُ مِنكُم مَّرْضَىٰ ۖ وَآخَرُونَ يَضْرِبُونَ

فِي الْأَرْضِ يَتَّبِعُونَ ۚ مِنْ فَضْلِ اللَّهِ ۚ وَآخَرُونَ

يَقَاتِلُونَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ ۚ فَاقْرَءُوا مَا تَيَسَّرَ مِنْهُ ۚ وَ

آتُوا الصَّلَاةَ وَآتُوا الزَّكَاةَ وَاقْرَءُوا اللَّهَ قُرْآنًا

حَسَنًا ۚ وَمَا تَقَدَّرَ مِنَّا ۖ وَلَا أَنفُسِكُمْ مِّنْ خَيْرٍ تَعِدُّوهُ

عِنْدَ اللَّهِ ۚ هُوَ خَيْرٌ ۖ أَوْ أَعْظَمُ ۚ اجْعَلُوا وَاسْتَعِينُوا

بِاللَّهِ ۚ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ③

注7 当節の約束とは、メッカ陥落と共に悪の勢力が壊滅する事であった。

注8 この章の第一節で、モハammad預言者は夜の祈りを続ける様命じられた。それにより、間もなく彼に託される神のお告げの伝道という重責を果たすに必要な強さが、彼に備わってであろう。当節で、彼は神の喜びを保証され、夜の祈りについての神の御命令を、彼のみならず信者たちも忠実に遂行する様、命じられている。この命令はモハammad預言者の弟子達にだけ向けられているのではなく、彼を踏襲したいと願う者全てが対象であり、この意味からも、彼等は彼という手本をまねるのである。

注9 「アッラーは夜昼の長さを測定す。」この言葉は、夜が、時には長く、時には短かく、又ある時は昼と同じ長さになる事を示している。「お前たちがその時間を正確に算定し得ざる」という言葉は、全イスラム教徒に向けられているようだ。彼等は、その全てが規則正しく夜の祈りをできるとは言えない、と告げられている。



アル・ムッダッスイル

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
2. 汝外套をかぶる者よ、(注1) يَا أَيُّهَا الْمَدَّثِرُ
3. 起て、而して警告せよ。 فُمْ فَأَنْذِرْ
4. 汝己が主を讚美し奉れ。 وَرَبِّكَ فَكَبِّرْ
5. 汝己が衣を潔め、(注2) وَتِيَابَكَ فَطَهِّرْ
6. 不浄を避けよ。(注3) وَالرِّجْزَ فَاهْجُرْ
7. より多き返礼を日当てに親切を施すなかれ。 وَلَا تَسْنُنْ تَسْكُرْ
8. 主の御為に耐え忍べ。 وَلِرَبِّكَ فَاصْبِرْ
9. 喇叭が吹き鳴らされる時、(注4) فَإِذَا نُفِخَ فِي النَّافُورِ
10. その日は悲惨な日とならん。(注5) فَذَلِكَ يَوْمُ مِئِدٍ يَوْمُ عَسِيرٍ

注1 「外套をかぶる者」は、その語源の様々な意味から判断して、次の様な意味が考えられる。消し去る人、改良者、又は物事を整理する人。征服者。馬に跳び乗ろうとしている人。この語は又、神の預言者の重責を授けられた人とも解釈できる。更には、最善の生来の力・特質・預言者の高潔さを備った人をも意味する。これ等の別称は全て、モハammad預言者にそのまま当てはまる。

注2 モハammad預言者は、その使命遂行に先駆けて、心・品行・風評いずれも汚れの無い弟子の一群を用意せよ、と命じられている。あるいは、彼自身が、敬神・高潔・品行方正の模範となるべきだ、と当節は示しているともいえる。

注3 偶像崇拜撲滅の為、労をいとわない様にと、当節はモハammad預言者に命じているようだ。

注4 神が人々を御前に呼ばれる際に用いられる神のらつばであり、当節は、彼が現れ、神のもとへ行く様人々に呼びかける時を示している。又は、モハammad預言者自身が一族の者達に呼びかけているのかもされない。

注5 「悲惨な日」とは、復活の日、又は、不信心者が最終的な敗北を喫し、真実が完全に勝利を治める日を指す。

11. 不信心者どもにとりては容易ならざる日なり。
 عَلَى الْكَافِرِينَ غَيْرُ يَسِيرٍ ﴿١١﴾
12. わが創れるあの男を、われに任せよ、(注6)
 ذَرْنِي وَمَنْ خَلَقْتُ وَحِيدًا ﴿١٢﴾
13. われはあの男にあり余る富を与え、
 وَجَعَلْتُ لَهُ مَالًا مَمْدُودًا ﴿١٣﴾
14. 偕に住む子女を与え、(注7)
 وَبَيْنَ شُهُودًا ﴿١٤﴾
15. 必要なるすべてのものを授けたり。
 وَمَهَّدْتُ لَهُ تَنْهِيدًا ﴿١٥﴾
16. 然るにあの男は更にわが賜与を望む。
 ثُمَّ يَطْمَعُ أَنْ أَزِيدَ ﴿١٦﴾
17. 断じて可ならず！われらの神兆に頑なに反抗したるが故に。
 كَلَّا إِنَّهُ كَانَ لِإِتِينَا عِينَدًا ﴿١٧﴾
18. われはあの男に、必ず抗し難い責苦を課せん。
 سَأَرْهِقُهُ صَعُودًا ﴿١٨﴾
19. 見よ、あの男は熟慮せり、而して策謀せり。
 إِنَّهُ فَكَرَ وَقَدَّرَ ﴿١٩﴾
20. 没落があの男を突然襲う。よくも策謀することよ！
 فَتَقَاتِلُ كَيْفَ قَدَّرَ ﴿٢٠﴾
21. かさねて没落があの男を襲う。よくも策謀することよ！(注8)
 ثُمَّ قَاتِلْ كَيْفَ قَدَّرَ ﴿٢١﴾
22. その時、あの男は己が周囲を見まわし、
 ثُمَّ نَظَرَ ﴿٢٢﴾
23. 眉をひそめ、顔をしかめ、(注9)
 ثُمَّ عَلَسَ وَبَسَرَ ﴿٢٣﴾

注6 この言葉は次の事を意味する。「私が作り出した者の事は、私に任せなさい。」あるいは、「その大いなる富・権力・地位は、神が彼に授けたにもかかわらず、彼は、それが為、己を同胞の及ぶべくもない存在と考えている。彼の処置は私に任せなさい。」とも解せる。

当節及び前数節は、傲慢で思い上った不信心者全てに向けられたものであるが、中でもワリード・ビン・ムギーラを指しているようだ。彼はクライシュの間で目立つ存在で、「類いまれなる人物」あるいは「クライシュの香気」といった大げさな敬称で、当方に知られていた。彼は端正な容姿をし、その優雅な詩やその他の教養で有名であった。彼には10才から13才までの息子がおり、非常に裕福であった。

注7 当節は、ワリードの息子達も又、彼と同じく人の尊敬を集めていたことを示している。彼の加わる会合では、彼等も又賓席を提供された。あるいは、ワリードは非常に豊かであり、彼の息子達は常に彼と行動を共にし、生計を得る所へは、どこにでもついて行った。

注8 この話は、特にワリード・ビン・ムギーラを指している。彼の通った跡は破壊が付いて回った。彼の息子の内、ワリード、カーリッド、ヒシャームの三人はイスラム教を受け入れたが、他の息子達は、彼の目の前で亡くなった。彼の財産は大幅に減り、最後には、彼は貧困と不名誉の中で死んだ。

注9 クルアーンがワリードに読み聞かせられた時、彼は尊大な態度で顔をしかめ、腹を立てて立ち去った。

24. 顔をそむけて輕蔑し、

ثُمَّ أَدْبَرَ وَاسْتَكْبَرَ

25. 而して云えり、「こはむかしからある妖術に外ならず。

فَقَالَ إِنَّ هَذَا إِلَّا سِحْرٌ يُؤْتَرُ

26. こは人間の言葉にすぎず」と。

إِنَّ هَذَا إِلَّا قَوْلُ الْبَشَرِ

27. われはあの男を必ず地獄の火に投げ込まん。

سَأُصْلِيهِ سَقَرَ

28. 業火^{こうか}の何んたるかを汝に知らしむるものは何か？

وَمَا أَدْرَاكَ مَا سَقَرُهُ

29. そは何ものも余さず、何ものも残さず。

لَا يُبْقَى وَلَا تَذَرُ

30. そはその顔を焼く。

لَوَاحَةٌ لِلْبَشَرِ

31. 業火^{こうか}の上には十九の諸天使あり。(注10)

عَلَيْهَا تِسْعَةَ عَشَرَ

32. われらは天使のみを業火^{こうか}の番人とせり。われらがその数を限定したるは、不信心者を試みんがため、また聖書を授けられた人々に確信を得せしめんがため、また信ずる人々の信仰心を強めんがためなり。すなわち、信ずる人々同様聖書を授けられたる人々が疑心を抱くことがないように、また心に病ある者と不信心者に「アッラーはこの譬喩を以て何を論さんとするか？」と云わしめんがためなり。かくの如くアッラーは己れの欲する者を迷わしめ、また欲する者を導き給う。而して主の軍勢を知る者は、主御自身の外になし。これすなわち人類への訓戒に外ならず。

وَمَا جَعَلْنَا أَصْحَابَ النَّارِ إِلَّا لِكَيْ يُعَذِّبَ الْمُكْفِرِينَ
وَمَا جَعَلْنَا إِلَّا فِتْنَةً لِلَّذِينَ كَفَرُوا لِيَسْتَيْقِنَ الَّذِينَ
أُوتُوا الْكِتَابَ وَيُزَادَ الَّذِينَ آمَنُوا إِيمَانًا وَلَا يَرْتَابَ
الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ وَالْمُؤْمِنُونَ وَلِيَقُولَ الَّذِينَ فِي
قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ وَالْكَافِرُونَ مَاذَا أَرَادَ اللَّهُ بِهَذَا
مَثَلًا كَذَلِكَ يُضِلُّ اللَّهُ مَنِ يَشَاءُ وَيَهْدِي مَنْ
يَشَاءُ وَمَا يَعْلَمُ جُنُودَ رَبِّكَ إِلَّا هُوَ وَمَا يَهْدِي إِلَّا
بِغِ وَكَرَى لِلْبَشَرِ

第二項

33. 否、月にかけて、

كَلَّا وَالْقَمَرِ

注10 人には九つの主要な感覚が授けられている。それは、七つの外界感覚と、体内からの刺激を伝える一感覚と飢えや渇き等の感覚に関係する臓器から起こる内界感覚である。制御感覚、つまり人間の諸機能を支配する意志力、を伴う九つの精神的対応物とそれぞれ結びついたこれ等の感覚は、地獄の19人の守護者である。あるいは、19という数は、經典の民に特に関係ある、偉大な神の神秘かもしれない。この經典の民の意義や本質は、神御自身が望む時に明かされ、彼等にクルアーンの教義の真実を知らせる事となり、信者の信仰の確信を大いに増すであろう。全ての神の神秘を知りたいとあえて求める者がいようか？

34. 退き逝く暗やみにかけて、
وَالْيَلِ إِذْ أَدْبَرُ ۖ
35. 白み来るあけぼのにかけて誓う、(注 11)
وَالضُّبُحِ إِذَا أَصْفَرُ ۖ
36. げに地獄は最大の災いの一つなり。
إِنَّهَا لِأَحَدَى الْكِبَرِ ۖ
37. そは人間への警告なり、
نَذِيرًا لِلْبَشَرِ ۖ
38. お前たちの中の前進を望む者にも、しり込みする者にも。
لِمَنْ شَاءَ مِنْكُمْ أَنْ يَتَقَدَّمَ أَوْ يَتَأَخَّرَ ۖ
39. 人はみなその所業を質に置く、(注 12)
كُلُّ نَفْسٍ بِمَا كَسَبَتْ رَهِينَةٌ ۖ
40. 但し右側の人々は除く。
إِلَّا أَصْحَابَ الْيَمِينِ ۖ
41. 彼等は樂園に入り、互に相い問わん
فِي جَنَّاتٍ شَتَّىٰ شَاءَ لَوْ ۖ
42. 罪人どもについて。
عَنِ الْمُجْرِمِينَ ۖ
43. 「お前たちを地獄の業火におとし入れたるものは何んぞや？」
مَا سَأَلَكُمْ فِي سَقَرٍ ۖ
44. 彼等は答えん、「我等は礼拝を捧げざりし者、
قَالُوا لَمْ نَكُ مِنَ الْمُصَلِّينَ ۖ
45. また貧者を養わざりき。
وَلَمْ نَكُ نُطْعِمِ الْيَسْكِينِ ۖ
46. また我等は、ふらちな徒輩とふらちなお喋りに耽りたり。
وَكُنَّا نَخُوضُ مَعَ الْخَائِضِينَ ۖ
47. 而して常々審判の日を否認せり、
وَكُنَّا نَكْذِبُ يَوْمَ الدِّينِ ۖ
48. 死が我が身に襲いかかりしその時まで」と。
حَتَّىٰ أَتَيْنَا الْيَقِينَ ۖ
49. されば如何なる仲裁者の執り成しも、彼等には役立つものとならざらん。
فَمَا تَنْفَعُهُمْ شَفَاعَةُ الشُّفَعَاءِ ۖ
50. 彼等いったい如何がした、訓戒より背を向けるとは？
فَمَا لَهُمْ عَنِ التَّذْكِرَةِ مُعْرِضِينَ ۖ

注 11 「あけぼの」は又、モハammad 預言者の偉大な代理である、約束されたメシヤを指し、前節の「退き逝く暗やみ」は、メシヤの出現する前の精神の闇夜を示しているようだ。

注 12 魂は、それが犯した罪の償いをしなければならぬ。いつかは、罰に苦しんで罪を洗い流さなければならない。

51. さながら彼等は恐れ戦く驢馬の如し、

كَأَنَّهُمْ خِرَافٌ فَسْفَرَةٌ ⑤

52. 獅子より逃れる。

فَوَتْ مِنْ قُورَةٍ ⑥

53. 否、彼等はそれぞれ、開かれた啓示の書が
己れに授けられんことを希う。(注13)

بَلْ يُرِيدُ كُلُّ امْرِئٍ مِنْهُمْ أَنْ يُؤْتَى مِنْ حِمْفٍ
مَنْشَرَةٍ ⑦

54. 否、彼等は来世を恐れざるなり。

كَلَّا بَلْ لَا يَخَافُونَ الْآخِرَةَ ⑧

55. 否、このクルアーンは警告として足るべし。

كَلَّا إِنَّهُ تَذْكِرَةٌ ⑨

56. されば欲する者をして、肝に銘じせしめよ。

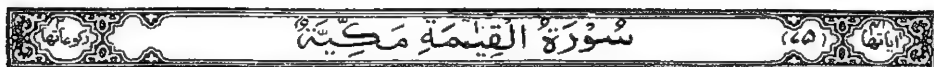
فَمَنْ شَاءَ ذَكِّرْهُ ⑩

57. されどアッラーが欲すに非ずば、彼等は留意警戒せざるべし。(注14) アッラーこそは畏れ多い御方、而して罪を容赦する御方なり。

وَمَا يَذْكُرُونَ إِلَّا أَنْ يَشَاءَ اللَّهُ هُوَ أَهْلُ التَّقْوَى
وَأَهْلُ الْغَفْوَةِ ⑪

注13 不信心者達は、モハammad預言者が天国から神の書を持って来るのでなければ、読んだ内容を信じない、と厚かましく求めた事が、クルアーンの他所に書かれてあり、本文の言葉はこの事を指しているようだ。(17:94)

注14 不信心者達は、その意志を神の御意志に添わせない限り、つまり、神の御意志を自らの願望に優先させない限り、クルアーンの恩恵に浴する事はないであろう(76:31)。



アル・クイヤーマ
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 否、われは復活の日にかけて誓う。
3. 否、われは審判の日が確実なることを自責の念にかけて誓う。(注1)
4. 人間は、われらが人間の骨を集め得ず、と考えるか？
5. 然らず、われらは人間の指先の骨まで復原する能力あり。(注2)
6. 然るに人間はこれからも悪行をし続けんと欲す。
7. 人間は問う、「復活の日は何時なるべし？」と。
8. 目がくらみ、
9. 月が蝕けり、
10. 日月が合体する時、(注3)

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

لَا أَقْسِمُ بِيَوْمِ الْقِيَمَةِ

وَلَا أَقْسِمُ بِالنَّفْسِ اللَّوَّامَةِ

أَيْحَسِبُ الْإِنْسَانُ أَنْ نَجْمَعَ عِظَامَهُ

بَلَىٰ فَيَدْرِينِ عَلَيَّ أَنْ تُسْوَىٰ بَنَانُهُ

بَلْ يُرِيدُ الْإِنْسَانُ لِيَفْجُرَ أَمَامَهُ

يَسْأَلُ أَيَّانَ يَوْمُ الْقِيَمَةِ

فَإِذَا بَرِقَ الْبَصَرُ

وَحُصِفَ الْقُمْرُ

وَجُمِعَ الشَّمْسُ وَالْقَمَرُ

注1 クルアーンは、人間の魂の三つの発達段階を述べている。第一段階はナフス・アンマーラ（抑制できない魂）と呼ばれ、獣性が人を支配する。第二段階はナフス・ラッヴァーマ（自責の魂）で、人の日覚めた良心が、悪行を働いた事で自らを責め、自己の感情や欲望を規制する。この段階に至れば、人間性が人の中で優勢となる。これが人の道徳的再生の始まりで、それ故、処所に「審判」の証拠としてあげられているのである。もし人に責任がなく、死後自らの行為の責任をとらないとすれば、なぜこの様な罪の意識にさいなまれるのか？ 第三段階は、人間の魂が最高に発達した段階で、ナフス・ムトゥマイナ（静止した魂）と呼ばれる。この段階に至ると、人の魂は、特に誤ちに対して抵抗力を持ち、その創造主と共に安らかになる。

注2 物事の一部が時として全体を表わす事もあるので、この語は人間の身体全体を指すのであろう。人間、あるいは完全に死んだ状態の人々でさえ、その全能力を復活させる力か神にお有りだ、と当節は示している。

注3 「日月が合体する時」という言葉は、太陽系全体が完全に崩壊すると示しているようだ。あるいは、月はアラブ諸国の、そして太陽はイスラエル帝国の政力権力の象徴である為、当節は両権力の崩壊を示しているのかもしれない。又、この言葉が異常な自然現象を表している為ハディースによれば、ラマダーンの月、約束

11. その日に及んで、人間は云わん、「何処へのがれるべきや?」と。

يَقُولُ الْإِنْسَانُ يَوْمَئِذٍ إِنَّ النَّفْرَ ۝

12. 否、何処にも逃げ場なし!

كَلَّا لَا وَدَرَ ۝

13. その日、安息所は、ただ汝の主の許のみなり。

إِلَىٰ رَبِّكَ يَوْمَئِذٍ الْمُسْتَقَرُّ ۝

14. その日、人間は、自分がすでに前に送りしもの、並びにし残せしものについて告げられん。(注4)

يُنَبِّئُوا الْإِنْسَانَ يَوْمَئِذٍ بِمَا قَدَّمَ وَأَخَّرَ ۝

15. 否、実を云うと、人間は己れ自身に対して証人なり、

بَلِ الْإِنْسَانُ عَلَىٰ نَفْسِهِ بَصِيرَةٌ ۝

16. たといいろいろと弁解しようとも。

وَلَوْلَا لَنَّا مَعَادِيرُهُ ۝

17. 預言者よ、クルアーンの啓示を催促するために汝の舌を動かすなかれ。

لَا تَحْزِنُكَ بِهِ لِسَانُكَ لَتَتَعَجَّلَ بِهِ ۝

18. 之を集め、之を誦むは、われらの仕事なり。(注5)

إِنَّ عَلَيْنَا جَمْعَهُ وَقُرْآنَهُ ۝

19. されば、われら之を誦まば、汝復誦せよ。

فَلَمَّا قَرَأْنَاهُ فَاتَّبِعْ قُرْآنَهُ ۝

20. 然るに後之を解きあかすことも、われらの仕事なり。

ثُمَّ إِنَّا عَلَيْنَا بَيَانَهُ ۝

されたメシヤ(マハディ)の時に起こる事になっていた月食と日食を指しているとも言える。不思議な事に、1894年のラマダーンの月に、日食と月食が同時に起こったが、この時、既に、アハマディーヤ運動の創始者は、自らが約束された救世主マハディであると断言していた。

注4 この言葉は次の事を意味する。人が、犯すべきではないのに犯してしまった悪行、そして、為すべきでありながら為さなかった善行。つまり、不作為の罪と作為の罪。

注5 初めてクルアーンの一部がモハammad預言者に啓示された時、それを忘れてはならないと案じて、彼は急いでそれを復唱しようとした、とブハリは言っている。前節で、あわてて、繰り返そうとするのはよくないとされている。神の啓示は消えるものではないので、落ちついて正確に受けとられねばならない。それは、後の三節に述べられてある様に、神の御計画がクルアーンの聖句に手が加えられるのを避けるだけでなく、それが誤りない聖典(‘Introduction of the Study of the Holy Quran’参照)として集大成され、そのお告げが全世界へ伝えられるのを確かめる事にあったからである(15:10)。又、前節が不信心者処罰の日に触れているので、モハammad預言者は、約束の罰に関する啓示が間もなく下されると、当然案じていた事を、当節は示しているようでもある。いつ適切な啓示が下され、罰がどのような形をとるかは、神がお決めになる事で、モハammad預言者がその事で案ずる必要はなく、又、クルアーンが集大成され、全世界の人々に読まれ、明らかにされなければならない、とモハammad預言者は此所で告げられている。本文の意味の他、当節は次の解釈もなされる。「貴人の口を通してクルアーンの啓示を明らかにするのが、我々の任務だ。」これは、クルアーンに次ぎ、モハammad預言者のスンナ(行い)が、確かな導き手として、犯すべからざるものであり、必要不可欠であると強調するものである。

21. 否、お前たちは現世を愛し、
 22. 来世をおろそかにす。
 23. その日、或る者の^{おもて}面は輝きて、
 24. 主を仰ぎ見ん。(注6)
 25. また或る者の^{おもて}面は陰に曇りて、
 26. 一大不幸が今にも降り懸からんとするを知らん。
 27. 然り！まさに死なんとする者の魂が^{のど}喉元まで上り来る時、
 28. 云われよう、「彼を救う呪術師は何処にありや？」と。(注7)
 29. 彼は臨終の近きを悟り、
 30. 苦しみもだえて脚と脚とをからみ合う。(注8)
 31. 彼はその口、主の御許へ^{みもと}駆り立てられん。
 第二項
 32. これ彼が真理を受入れず、礼拝を捧げざりしが故なり。(注9)
 33. そればかりか、彼は真理を拒否し、その背を向け、
 34. 而して自分の一族の^{しか}ところへ傲然とそりかえって帰りたり。
- كَلَّا بَلْ تُحِبُّونَ الْعَاجِلَةَ ۖ
 وَتَذَرُونَ الْآخِرَةَ ۚ
 وَجْوهُ يَوْمَئِذٍ تَأْضِرُّهُ ۖ
 إِلَىٰ رَبِّهَا نَاطِرَةٌ ۖ
 وَوَجْوهُ يَوْمَئِذٍ بَاسِرَةٌ ۖ
 تَظُنُّ أَنْ يُفْعَلَ بِهَا فَاقِرَةٌ ۖ
 كَلَّا إِذَا بَلَغَتِ الشَّرَاقِیَ ۖ
 وَقِيلَ مَنْ مَّحْرَاقٍ ۖ
 وَظَنَّ أَنَّهُ الْفِرَاقِیَ ۖ
 وَالتَّقَىٰ السَّاقِیَ بِالسَّاقِیَ ۖ
 یُعِیْ إِلَىٰ رَبِّهِ یَوْمَئِذٍ الْإِنْسَاقِیَ ۖ
 فَلَا صَدَقَی وَلَا طَعَمَ ۖ
 وَلَکِنَّ کَذَّبَ وَتَوَلَّىٰ ۖ
 ثُمَّ ذَهَبَ إِلَىٰ أَهْلِهِ یَسْتَعْطِیٰ ۖ

注6 高潔なる信者は、その善行が報われる事を期待して、神の方を向くであらう。あるいは、彼等は、神を見る特別な心眼を与えられるであらう。神の御姿は、現世の衣を脱ぎ捨てた、人の魂に示される神の特別な明示である。

注7 当節は次の事を意味する。(1)死に行く者の魂と共に昇り、彼を天国へ連れて行くのは慈悲の天使であり、彼を地獄へ引きずり落とすのは、罰の天使なのか？ (2)近付く死を避け、瀕死の者からその苦しみを取り除く魔術師はどこにいるのだ？

注8 一つの苦悩が、死に対するもう一つの苦悩に加えられるであらう。近親者を後に残す苦しみが、死と、来世で不信心者を待ち受ける罪の苦しみに加えられるであらう。当節は以上の事を示している。

注9 当節は、不信心者の心と身体が共に神に反発した、と示している。

35. 「汝に災いあれ！幾度も災いあれ！

أَوَّلَىٰ لَكَ فَأَوَّلَىٰ ۝

36. 更に汝に災いあれ！幾度も災いあれ！」
(注 10)

ثُمَّ أَوَّلَىٰ لَكَ فَأَوَّلَىٰ ۝

37. 人間は、自分が勝手放題に放任せられると、
思うか？ (注 11)

أَيَحْسَبُ الْإِنْسَانُ أَنْ يُتْرَكَ سُدًى ۝

38. 人間はもと、射出せられたる一滴の液体に
非ざりしか？

أَلَمْ يَكْ نُطْفَةٍ مِنْ مَتْنِي يَتْنِي ۝

39. それか^{かたき}血の凝りとなりたる時、主が^{これ}之を
形づくり、而して完成せり。

ثُمَّ كَانَ عَلَقَةً فَخَلَقَ فَسَوَّىٰ ۝

40. 次いで主は、^{これ}之を男女の両性となせり。

فَجَعَلَ مِنْهُ الذَّكَرَ وَالْأُنثَىٰ ۝

41. 斯かる御方でも、死者を生き返らす能力な
しと云うか？ (注 12)

يَا أَيُّسَ ذَلِكَ بِقَدِيرٍ عَلَىٰ أَنْ نَحْيِيَ الْمَوْتَىٰ ۝

注 10 「汝に災いあれ」という言葉の繰返しは、現世及び来世における精神的苦悩と肉体に科せられる罰を示している。又、この言葉は、強調の意味で使われている。

注 11 神は、微々たるもの・すなわち精子から人をお作りになり、彼を神の全創造物のかなめとする為に、この様に大きい力と能力を彼に授けた。もし、その後、彼が食べ・飲み・楽しむがままにしてておかれたとしたら、それは神の栄知と矛盾する。

注 12 さ程にも小さきものから人間をお作りになった神は、彼が死に、砕けた骨とちりになる時、終りの無い魂の向上の為、彼に新たな生命を授ける力を持たれる。



アル・ダフル

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. 人間は言うに価しない一時期を経過す。

هَلْ أَتَى عَلَى الْإِنْسَانِ حِينٌ مِّنَ الدَّهْرِ لَمْ يَكُنْ
شَيْئًا مَّذْكُورًا

3. われらは人間を試みんがために、混合せる一滴の精液より之を創りたり。故にわれらは、人間にも物を見、ものを聴く能力を授けたり。(注1)

إِنَّا خَلَقْنَا الْإِنْسَانَ مِنْ نُّطْفَةٍ أَمْشَاجٍ نَّبْتَلِيهِ
فَجَعَلْنَاهُ سَيْبًا بَصِيرًا

4. 人間がその恩に感謝するか、しないかはともかく、われらは人間に道を示したり。

إِنَّا هَدَيْنَاهُ السَّبِيلَ إِنَّا شَاكِرًا وَإِنَّا كَفُورًا

5. げにわれらは不信心者どものために、鎖と、枷と、燃え盛る業火とを用意せり。(注2)

إِنَّا أَعْتَدْنَا لِلْكَافِرِينَ سَلَاسِلًا وَأَغْلَالًا وَسَعِيرًا

6. されど義しい人々は、薄荷の香る器をかたむけん、(注3)

إِنَّ الْأَبْرَارَ يَشْرَبُونَ مِن كَأْسٍ كَانَ مِزَاجُهَا
كَافُورًا

7. アッラーの僕等が飲む泉で。そはこんこんと湧き出ずる。(注4)

عَيْنًا يَشْرَبُ بِهَا عِبَادُ اللَّهِ يُفَجِّرُونَهَا تَفْجِيرًا

注1 人間は精子から作られるが、精子自体は幾つかのものの混合体であり、これは、精神的向上の為、人間が様々な力・能力・特性を授けられた事を示すものである。この過程は、人間誕生の一般原則のみを指しているものであり、他には当てはめられない。

注2 人の行為は全て、対応する神の行為に伴われる。不信心者の俗事のもつれは、来世で鎖の形をとる。現世の不安は鉄製の衿となり、強欲・肉欲は地獄の炎となる。69章33節も参照の事。

注3 はっかの香る飲み物を飲むことは、肉欲を静める効果がある、と当節は示している。高潔な信者の心からは、不純な思いは全て洗い流され、彼等は深い神の知識に静められるであろう。

注4 高潔な信者は、苦勞して掘り出した泉で満たされた器を飲むであろう。彼等が現世で為した行いは、来世で泉の形となって現れる。これは、精神的発達的第一段階であり、人間は抑制しその惡の性癖に齒止めをかけなければ、魂を向上させる事ができない為、信者は懸命のたゆまぬ努力を求められている。当節の「泉」は、神の愛と悟りの泉である。

8. 彼等^{たが}義しい人々は誓いを果たし、(注5)災厄の広がる日を恐る。
9. 而して^{しか}彼等は、アッラーを敬愛するが故に、^{みなしごとらわれびと}貧しき者、孤児、俘虜に食物を恵む。(注6)
10. 「我等はアッラーのお喜びを願ってしままでのこと。あなたがたの報酬も感謝も求めはせぬ。
11. げに我等は、主の不機嫌な厄災の日が主よりもたらせられることを恐る」
12. さればアッラーはその日の厄災から彼等を護り、快活と幸福とを彼等に与えん。
13. アッラーはまた樂園と絹の衣とを以て、彼等の堅固なる信念に報いん。
14. 彼等は樂園^{とうしやう}で榻^{とく}にねそべり、暑熱を知らず、また酷寒を知らず。
15. その樹陰は濃く彼等を覆い、その鈴なりの果物は垂れて摘むに易し。
16. 銀の器や、^{はり}玻璃の高盃が彼等の間に^{ききま}献げ巡されん。
17. ^{はり}玻璃の如く見えて実は銀にて作られたり。彼等は自らの量に合せて盃を満たす。

يُؤْمِنُونَ بِالْغَدْرِ وَيَخَافُونَ يَوْمًا كَانَ شَرُّهُ مُسْتَطِيرًا ⑤

وَيُطْعِمُونَ الطَّامِعَ عَلَى حُبِّهِ مِسْكِينًا وَيَتِيمًا وَأَسِيرًا ⑥

إِنَّا نَطْمَعُ لَكُمْ لَوْجَهُ اللَّهِ لَا نُرِيدُ مِنْكُمْ جَزَاءً وَلَا شُكْرًا ⑦

إِنَّا نَخَافُ مِنْ رَبِّنَا يَوْمًا عَبُوسًا قَتَطِيرًا ⑧
فَوَقَّعَهُمُ اللَّهُ شَرَّ ذَلِكَ الْيَوْمِ وَلَقَّاهُمْ نَضْرَةً وَسُرُورًا ⑨

وَجَزَاهُمْ بِمَا صَبَرُوا جَنَّةً وَحَرِيرًا ⑩
مُتَّكِئِينَ فِيهَا عَلَى الْأَرَائِكِ لَا يَرَوْنَ فِيهَا شَمْسًا وَلَا زَمْهَرِيرًا ⑪

وَدَانِيَةً عَلَيْهِمْ ظِلُّهَا وَذُلَّتْ قُطُوبُهَا تَذَلُّلًا ⑫
وَيُطَافُ عَلَيْهِمْ بِإِينِيَةٍ مِنْ فِضَّةٍ وَأَكْوَابٍ كَانَتْ قَوَارِيرًا ⑬

قَوَارِيرًا مِنْ فِضَّةٍ قَدَرُوهَا تَقْدِيرًا ⑭

注5 「誓いを果たし」は、人間の神に対する義務からの解放を表している。人の同胞への義務は、次節に述べられている。

注6 当節は次の事を示している。(1)高潔なる信者は神を敬愛しているのに、神に喜ばれる様に、貧しき者や捕虜を養う。(2)彼等は自らを向上させる為に、貧しき者を養う。つまり、彼等は、その行為の見返りを求めずして善行を為す為に、貧しき者を養うのである。(3)彼等自身、自分に費やす分を押さえて、貧しき者の為に金銭を費やし、彼等を養う。(4)「食物」(ターム)は「健康に良く、好みに合った」と意味するので、彼等が、貧しき者に、身体に良くその好み通りの食事を提供した事になる。

18. 彼等はそこで生姜をほどよく混ぜた盃のもてなしをうけん、(注7)

وَيُسْقَوْنَ فِيهَا كَأْسًا كَانَ مِزَاجُهَا زَنْجَبِيلًا ۝

19. サルサビールと呼ばれる楽園の泉より汲まれしもの。(注8)

عَيْنًا فِيهَا تُسَمَّى سَلْسَبِيلًا ۝

20. 年とらぬ小姓たちありて、彼等に給仕せん。その小姓たちは散らばれる真珠と見まごうばかり。

وَيُطَوَّفُ عَلَيْهِمْ وَلَدَانٌ عَجَلُونَ ۖ إِذَا رَأَيْتَهُمْ

حَسِبْتَهُمْ لُؤْلُؤًا مَنثُورًا ۝

21. 汝これを見る時、至福と偉大なる神の国をそこに見ん。(注9)

وَإِذَا رَأَيْتَ ثَمَرًا رَأَيْتَ نَعِيمًا وَمُلْكًا كَبِيرًا ۝

22. 彼等は緑の紗綾、金欄の衣を身にまとい、白銀の腕環もて飾られん。而して主お手ずから淨き飲物を賜わらん。(注10)

عَلَيْهِمْ نِيَابٌ سُنْدُسٍ خُضْرٌ وَإِسْتَبْرَقٌ وَحُلُوفٌ

أَسَاوِرٌ مِنْ فِضَّةٍ وَسَقْلُهُمْ رَبَّهُمْ شَرَابًا طَهُورًا ۝

23. 「これぞお前たちへの報奨なり。お前たちの精進は認められたり」

إِنَّ هَذَا كَانَ لَكُمْ جَزَاءً وَكَانَ سَعْيَكُمْ مَشْكُورًا ۝

第二項

24. げにわれらは、少しずつ汝にクルアーンを啓示せり。(注11)

إِنَّا نَحْنُ نَزَّلْنَا عَلَيْكَ الْقُرْآنَ تَنْزِيلًا ۝

注7 カフル（はっか）とザンジャビール（生姜）が述べられているこの二節は、二つの段階への注意を喚起している。感情の奴隷の低い地位から、徳の最高位へと魂の向上を果たす為には、信者はこの段階を経ねばならない。有害な事が廃され、感情の渦が静められる第一段階はカフル（はっか）の段階と名付けられている。それは、はっかが感情の強い力を抑える効力を持つと同様に、この段階では、唯・有害な事が抑えられるだけだからである。しかし、ザンジャビール（生姜）の段階と呼ばれる第二段階においては、あらゆる困難克服に必要な精神力が獲得される。精神構造に強壮剤の効果がある魂の生姜は、魂に栄養を与える神の美と栄光の現れである。この明示に力付けられた魂の旅人は、その魂の旅の途上に出くわした、荒涼とした砂漠を横切る事も、険しい山を登る事もできるのである。

注8 「サルサビール」というのは「道を尋ねる」という意味である。ザンジャビールの段階では、魂の旅人は神の愛に酔いしれる為、神にお会いしたいという尊大な願いの中で、神の入口へ如何にすれば早く近付けるかと、あちこちで会う人毎に尋ねまわる、と当節は示している。

注9 高潔なる信者が来世に約束された魂の王国に加えて、モハammad預言者の仲間達は、現世で、当時の大帝国の支配権を与えられた。

注10 魂の旅のカフルの段階で、神に夢中になった旅人は、神の愛のワインを飲みたがると記されているが(当章6節)、ザンジャビールの段階になれば、彼は他人から元気づける飲み物が与えられ(8節)、最後のサルサビールの段階に至れば、神御自身が永遠の命の秘薬を彼に授けられる。これは、この三種の飲料の重要な格付けとなる。はっかは冷やし、生姜は暖める効果があり、サルサビールは自ずと定められた針路を進み続ける事を意味する。第一の飲料は、はっかで加減されており、感情を静めるのに役立つ。生姜を加味した第二の飲料は、正義を求める気持ちを起こさせる。そしてサルサビールの段階に至れば、信者は自ずと正義の道を行くのである。

注11 クルアーンは徐々に啓示された。その啓示は23年にも及んだ。このゆるやかな過程には二つの目的があった。それは、信者がクルアーンを学び・覚え・自分のものにし、その教義に従い彼等の生活を作りあげる

25. されば耐え忍びて、主の審判を待て。^{しか}而して、罪人^{つみびと}や忘恩^{やから}の徒輩^{たぐひ}に従うなかれ。

فَاصْبِرْ لِحُكْمِ رَبِّكَ وَلَا تَطِعْ مِنْهُمْ أَحَدًا
وَلَا تَكُ مِمَّنْ سَاءَ مَا يَحْكُمُونَ

26. 而して、朝な夕な主の御名^{おな}を讃え奉れ。

وَاذْكُرْ اسْمَ رَبِّكَ بُكْرَةً وَأَصِيلًا

27. また、夜半に起きて、主の御前^{みまへ}にぬかずき、長き夜に主を讃美し奉れ。

وَمِنَ اللَّيْلِ فَسَبِّحْهُ لَهُ وَسَبِّحْهُ لَيْلًا طَوِيلًا

28. げにこれ等の者どもは現世^{かんざやく}のくらしを愛し、来るべき重大な日を閑却^{かんかく}す。

إِنَّ هَؤُلَاءِ يُحِبُّونَ الْعَاجِلَةَ وَيَذَرُونَ وَرَاءَهُمْ
يَوْمًا ثَقِيلًا

29. 彼等を創り、その四肢^{しし}五体を堅牢^{こなん}ならしめたるは、われらなり。われらもし欲しなば、いつでもわれらは彼等に似たる者を以て、彼等の代りとすること可なり。(注12)

مَنْ خَلَقَهُمْ وَشَدَدْنَا أَسْرَهُمْ وَإِذَا شِئْنَا بَدَّلْنَا
أَمْثَلَهُمْ تَبْدِيلًا

30. げにこは訓戒なり。されば望む者には主への道を辿らしめよ。

إِنَّ هُدًى تَذَكُّرٌ مِّنْ شَاءِ أَتَىٰ إِلَىٰ رَبِّهِمْ سَبِيلًا

31. されどアッラー欲すに非ずば、お前たちはその気が起こるまいか。げにアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَمَا تَشَاءُونَ إِلَّا أَنْ يَشَاءَ اللَّهُ إِنَّ اللَّهَ كَانَ
عَلِيمًا حَكِيمًا

32. アッラーは御心にかなう者はその慈悲に浴せしめ、不義^{ふぎ}な徒輩^{たぐひ}には苛^やき懲罰^{ちやうばつ}を用意せり。(注13)

يُدْخِلُ مَنْ يَشَاءُ فِي رَحْمَتِهِ وَالظَّالِمِينَ أَعَدَّ
لَهُمْ عَذَابًا أَلِيمًا

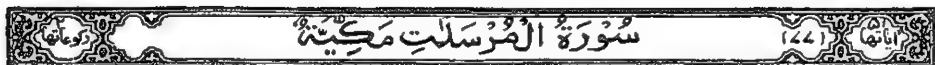
助けとなった。この漸進的な過程は又、状況の変化により増して行く必要に応じる為であり、更には、その間に、初期にクルアーンに記された預言の成就を目撃する機会がイスラム教徒に与えられる為、彼等の信仰が強められる事を意図していた。クルアーンのこの漸進的な啓示は又、次の聖書の預言を成就した。

『戒めに戒め、規則に規則、ここに少し、あそこにも少し』と。誠に主は、もつれた舌で、外国の言葉で、この民に語られる。(イザヤ書 28 : 10)

注12 神は、向上し、その身に神の属性を表すに最も適した様に、人間をお作りになられた(95 : 5)。それ故、もし不信心者がクルアーン教義の恩恵に浴する事を拒めば、彼等は他の人々に取って代られるであろう。

注13 (ア)本文中の意味の外、当節は次の事を示す。(1)神のもとへ向い、神の恵みを授けられたいという貴人方の意志を実行に移す事が、神の御意志である。(2)もし神の御意志に沿わなければ、貴人方は神のもとへ向うことはできない。(3)貴人方の意志より神の御意志を優先させるべきだが、貴人方はそれをしなかったようだ。

(イ)神の戒律に従い、神の恩恵に浴したいと自ら願う者に、神は恩恵を授けられる、と当節は示しているようだ。



アル・ムルサラート

(メッカ啓示)

- | | |
|---|---------------------------------------|
| 1. 慈悲深く、恵み遍く ^{あまわ} アッラーの御名 ^{みな} において。 | بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ |
| 2. 正義を広めんために遣わされたる者にかけ
て、(注1) | وَالْمُرْسَلَاتِ عُرْفًا |
| 3. 強く押す者にかけて、(注2) | فَالْعَصْفِ عَصْفًا |
| 4. 真理を普及し、公正を広めるその力にかけ
て、(注3) | وَالنَّشْرِ نَشْرًا |
| 5. そは善悪を完全に区別する者。(注4) | فَالْفَرْقِ فَارْقًا |
| 6. 彼等は訓戒 ^{あまね} を遍く運ぶ、 | فَالسَّلَاقِ ذِكْرًا |
| 7. 容赦のため、または戒めのために。(注5) | عَذْرًا أَوْ تَذْرًا |
| 8. げにお前たちに約束されたることは、必ず
起らん。 | إِنَّمَا تُوعَدُونَ لَوَاقِعٌ |
| 9. あまたの星がその光りを消される時、(注6) | وَإِذَا النُّجُومُ طُمِسَتْ |
| 10. 天がばらばらに引き裂かれる時、(注7) | وَإِذَا السَّمَاءُ فُرِجَتْ |

注1 当節及び次の四節に述べられている物は、その働き・存在の如何を問わず、風・天使・神の使者・その弟子を、特にモハammad預言の仲間を語る為に、様々な典拠により取上げられて来た。モハammad預言者の仲間に関して言えば、彼等は初め、ゆるやかにイスラム教義を広める、と当節は示しているのだらう。

注2 伝道に伴う初期の困難が克服された後、モハammad預言者の仲間達は、より速く歩を進め、精力的にイスラムのお告げを伝えるであらう。あるいは、クルアーンの教義に支えられ、折れたわらが風に吹き飛ばされる様に、彼等は、その前に立ちはだかる偽りや悪の勢力を追い散らす、と当節は意味するといえる。

注3 彼等は、神のお告げを誉め称え、遙かかなたへ広める。又は、善の種子を到る所にまく。

注4 クルアーンのおつげ普及に伴い、真実は虚偽と、善なる者は悪なる者と区別されるであらう。

注5 彼等が伝え、託された任務を十二分に果たした事を、事実は証明するであらう、と当節は示している。

注6 当節は、様々な災難が人々にふりかかろうとする時を意味する。アラブの人々は、星の消失を、惨事が差し迫っている徴候とみなした。

注7 大惨事が世に起こる時。

11. 山々が塵の如く吹きとばされる時、(注8)

وَإِذَا الْجِبَالُ نُسْفَتٌ ⑧

12. 使徒たちが時を定めて召集される時、(注9)

وَإِذَا الرُّسُلُ أُدِّتٌ ⑨

13. その定めの時はいつまで延期されるや？

لَا يَأْتِي يَوْمٌ أُجِّلَتْ ⑩

14. 判決の日までなり。

لِيَوْمِ الْفَصْلِ ⑪

15. 判決の日の何んたるかを汝に知らしむるものは何か？

وَمَا أَدْرَاكَ مَا يَوْمُ الْفَصْلِ ⑫

16. すなわち真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيَلَّ يَوْمَئِذٍ لِلْكَافِرِينَ ⑬

17. われらは昔、いくたの民を滅ぼしたに非ずや？

أَلَمْ نُهْلِكِ الْأَوَّلِينَ ⑭

18. 而して今、われらは後の世の民に彼等の後を継がしめん。

ثُمَّ نَتَّبِعُهُمُ الْآخِرِينَ ⑮

19. われらはかくの如く罪人を裁く。

كَذَلِكَ نَفْعَلُ بِالْمُجْرِمِينَ ⑯

20. 真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيَلَّ يَوْمَئِذٍ لِلْكَافِرِينَ ⑰

21. われらはお前たちをとるに足らぬ一滴の液体から創り、

أَلَمْ خَلَقْنَاكُمْ مِنْ مَّاءٍ مَّهِينٍ ⑱

22. それを安全な場所に置きしに非ずや、

فَجَعَلْنَاهُ فِي قَرَارٍ مَكِينٍ ⑲

23. 定められたる期限まで？

إِلَى قَدَرٍ مَعْلُومٍ ⑳

24. これみなわれらの計らいなり。われらの計らいのなんと見事なことよ！(注10)

فَقَدَرْنَا فَنِعْمَ الْقَدَرُونَ ㉑

25. 真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيَلَّ يَوْمَئِذٍ لِلْكَافِرِينَ ㉒

注8 大変革が生じる時、又は、権力ある者が失脚する時。あるいは、古くからある制度が完全に崩壊する時。つまり、腐敗した秩序が全て絶える時。

注9 偉大なる神の指導者が、いわば神の使者達全てのマントをまとうかの様に、彼等の力と精神を身に付けて現れる時。

注10 子宮の中で精子が発達し、一人の人間へと育って行く、実に創造の驚異とも言うべき神秘的な過程を、当節及び前三節は述べている。この創造の過程は、復活を支持する論拠として提示されている。それは、母親の子宮が現世における人の生命に例えられ、人の誕生が復活に例えられておりこの両者の間にみごとな対比が存在するからである。

26. われらは大地を容器となさざりしか、

أَلَمْ نَجْعَلِ الْأَرْضَ كِفَاتًا ۝

27. 生者並びに死者のために？（注11）

أَحْيَاءَ وَأَمْوَاتًا ۝

28. 而してわれらは大地の上に山々を聳えせしめ、また飲むべき甘泉をお前たちに与えたり。（注12）

وَجَعَلْنَا فِيهَا رَوَاسِيَ شَجَنٍ وَأَسْقَيْنَاكُمْ مَاءً
فُرَاتًا ۝

29. 真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيَذَّيْبُ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ۝

30. 彼等は命ぜられん、「さてお前たち、虚偽なりとみなせるものに向って行け。

إِنظِرُوا إِلَى مَا كُنتُمْ بِهِ تُكَذِّبُونَ ۝

31. 然り、三つ股に分れた陰に向って行け。（注13）

إِنظِرُوا إِلَى ظِلٍّ ذِي ثَلَاثِ شُعَبٍ ۝

32. そは陰の役には立たず、焰を防いではくれはせぬ」と。（注14）

لَا ظِلِيلٌ وَلَا يُبْنِي مِنَ اللَّهَبِ ۝

33. 焰の火花は巨大な城郭の如し、（注15）

إِنَّهَا تَرْمِي بِشَرَرٍ كَالْقَصْرِ ۝

34. さながら黄褐色の駱駝^{らくだ}の如し。（注16）

كَأَنَّهُ جُمِلَتْ صُفُرًا ۝

35. 真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيَذَّيْبُ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ۝

注11 人は皆この世に生き、死すれば、その亡骸はそれぞれこの世に残る。当節は又、重力の法則、あるいは、地球の自転と公転を示しているとも言える。前節の「容器」という語は、人間が肉体的に必要なものは全て、地上で満たされる、と示している。

注12 山は自然の巨大な貯水池として役立つ。

注13 不信心者の誤った信仰・愚かな慣習は、次第で、三つ又の影の形を取っている。あるいは、イブナバスによれば、これはキリスト教の三位一体説を指している。又、不信心者が左右から、そして上からも罰せられる事を、当節は示しているとも言える。更には、徳育の教師達は、人の義務の認識を阻もうとする三つの要素、感受性の無さ、思慮の欠除、判断の無さ、を指摘する。同様に、三つの要素は、向上したいと願う道徳的な衝動を阻止するもの、恐れ、傲慢、肉欲にも当てはまる。心理学用語では、三つの要素は、人を地獄へ送り込む原因となる、認識と理性の誤り、性の過失、意志の弱さ、を指すとも言える。

注14 56：43-45 参照。

注15 不信心者達は安楽を求め、城や堂々たる建物を誇ったので、彼等の罪は、巨大で城の様に高く燃え上る炎の形を取るであろう。

注16 アラブ人達は、彼等の富を最大に生み出す自分達の駱駝を誇った。

36. この日は彼等もの云うことを許されざる日なり。(注17)

هَذَا يَوْمٌ لَا يَنْطِقُونَ ①

37. 弁解も許されざるべし。(注18)

وَلَا يُؤْذَنُ لَهُمْ فَيَعْتَذِرُونَ ②

38. 真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな!

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ③

39. 「こは判決の日なり。われらはお前たちや遠い昔の人々を召集せり。

هَذَا يَوْمُ الْفَصْلِ جَعَلْنَاكُمْ وَالْأَوَّلِينَ ④

40. お前たちに策略あらば、われに対してそれを用いよ」(注19)

فَإِنْ كَانَ لَكُمْ كَيْدٌ فَكِيدُوا ⑤

41. 真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな!

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ⑥

第二項

42. 義しき人々は木陰と泉の間でくらさん、

إِنَّ الْمُتَّقِينَ فِي ظِلِّ وَعُيُونٍ ⑦

43. 好きな種々の果物に囲まれて。

وَقَوَائِكُمْ مِمَّا يَشْتَهُونَ ⑧

44. 「楽しく食ひ且つ飲め、こはお前たちの所業に対する報いなり」

كُلُوا وَاشْرَبُوا هَنِيئًا بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ⑨

45. かくの如く、われらは善行を積む人々を報奨す。

إِنَّا كَذَلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ⑩

46. 真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな!

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ⑪

47. 「真理を拒否する者どもよ、東の間の現世で食ひ且つ楽しめ。げにお前たちは罪人なり」

كُلُوا وَتَسْعَوْا قَلِيلًا إِنَّا كُمْ مَجْرُمُونَ ⑫

48. 真理を拒否する者どもにとりて、その日は災いなるかな!

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ⑬

49. 「ぬかずいて崇めよ」と告げられるも、彼等はぬかずかず。

وَإِذَا قِيلَ لَهُمُ ارْكَعُوا لَا يَرْكَعُونَ ⑭

注17 36章66節参照。

注18 不信心者の有罪は確定したので、最早如何なる中し開きも許されないであろう。

注19 モハammad預言者の敵共は、彼に対し悪事の限りを尽して挑んだ。

50. 真理を拒否する者どもにとりて、その日は
災いなるかな！

وَيَوْمَئِذٍ يُؤْمِنُ الْمَكْذِبِينَ ﴿٥٠﴾

51. ならばこの後、彼等是如何なる説教を信ぜ
んとするか？（注 20）

فَيَأْتِيهِمْ حَدِيثٌ بَعْدَهُ يُؤْمِنُونَ ﴿٥١﴾

注 20 この不運な不信心者達は、クルアーンの様な正しい聖典の受け入れを拒んだので、神の御声を耳にする事も、又正しい道を見出す事もないであろう。



アル・ナバ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
 2. 彼等は互に何について相問うか？
 3. 重大なる知らせなり、(注1)
 4. 彼等はそれについて意見を異にす。(注2)
 5. 否、そのうちわかるべし。
 6. 否、われら再び云う、彼等そのうちわかるべし。
 7. われら大地を臥所となし、
 8. 山々を天幕の綱を張る杭となさざりしか？
 9. またわれらは、お前たちを番に創り、
 10. 休息のために睡眠を定め、
 11. 夜を衣となし、
 12. 昼を生業の時と定めたり。
 13. またわれらは、お前たちの頭上に堅固な七層の天を築き、(注3)
 14. 太陽を以て燦然たる燈明となせり。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

عَمَّ يَتَسَاءَلُونَ

عَنِ النَّبَاِ الْعَظِيمِ

الَّذِي هُمْ فِيهِ مُخْتَلِفُونَ

كَلَّا سَيَعْلَمُونَ

ثُمَّ كَلَّا سَيَعْلَمُونَ

أَلَمْ نَجْعَلِ الْأَرْضَ مِهْدًا

وَالْجِبَالِ أَوْتَادًا

وَخَلَقْنَاكُمْ أَزْوَاجًا

وَجَعَلْنَا نَوْمَكُمْ سُبَاتًا

وَجَعَلْنَا اللَّيْلَ لِبَاسًا

وَجَعَلْنَا النَّهَارَ مَعَاشًا

وَبَنَيْنَا فَوْقَكُمْ سَبْعًا شَدِيدًا

وَجَعَلْنَا سِرَاجًا وَهَّاجًا

注1 重大なる知らせ、又は出来事を意味する語、アンナバに、修飾語アル・アズィーム（力強い）を付けたという事は、此所に述べられた出来事が非常に重要であることを示している。

注2 不信心者達は、裁きの日のある事を信じない。

注3 太陽が中心となる太陽系の七つの主要惑星。又は、23章に述べられた、人の精神的発達七つの段階。

15. またわれらは、雨雲より沛然たる水を降し、
 16. 之によって穀物と草木を生ぜしめたり、
 17. 木々繁る果樹園も。(注4)
 18. げに判決の日は定められたり。
 19. その日、喇叭が鳴りひびくや、お前たち群
 をなして集り来るべし。(注5)
 20. 天は開かれ、悉く門となり、(注6)
 21. 山々は移し去られて、恰も蜃気楼と化さん。
 (注7)
 22. げに地獄は待ち伏せ場所に在り、
 23. 背逆者の行先にして、
 24. 彼等永劫にその中に住みとどまらん。
 25. 彼等はそこにて涼を知らず、飲むべきもの
 もなし。
 26. ただ煮えたぎる熱湯と悪臭を放つ液体ある
 のみ。(注8)
 27. これすなわち応報なり。
 28. げに彼等は清算を恐れず、

وَأَنزَلْنَا مِنَ الْمُعْصِرَاتِ مَاءً ثَجَّاجًا ۝

لِّنُخْرِجَ بِهِ حَبًّا وَنَبَاتًا ۝

وَجَنَّاتٍ أَلْفَافًا ۝

إِنَّ يَوْمَ الْفَصْلِ كَانَ مِيقَاتًا ۝

يَوْمَ يُنْفَخُ فِي الصُّورِ تَنُوتُونَ أَفْوَاجًا ۝

وَفُتِحَتِ السَّمَاءُ فَكَانَتْ أَبْوَابًا ۝

وَسُيِّرَتِ الْجِبَالُ فَكَانَتْ سَرَابًا ۝

إِنَّ جَهَنَّمَ كَانَتْ مِرْصَادًا ۝

لِّلطَّاغِيَةِ مَأْبًا ۝

لِّلْسِينِ فِيهَا أَحْقَابًا ۝

لَّا يَذُوقُونَ فِيهَا بَرْدًا وَلَا شَرَابًا ۝

إِلَّا أَحْمِيئًا وَغَسَّاقًا ۝

جَزَاءً وَفَاقًا ۝

إِنَّهُمْ كَانُوا لَا يَرْجُونَ حِسَابًا ۝

注4 7-17節には、人の肉体を維持する上で必要な、基本的な神の恵みのいくつかが取り上げられているが、人の肉体的維持に適切な配慮をなされた神が、一方でその精神維持には同様の準備を怠られた、とは有り得ない事だと暗示している。

注5 裁きの日、つまりメッカ陥落の日に、クライシュはらっぱの音で呼び出されたかの様に、モハammad 預言者の前に集められ、罪の許しを請うた。

注6 その時、正義なる者を支持し、悪なる者を混乱させる神のしるしが、数多く示された。

注7 当節は次の事を示す。(1)権力と地位のある者は、その権威と力を失うであろう。(2)イスラム教による征服の突撃を前にして、巨大で強固な帝国は、もろい岩山の様に崩壊し、完全に消失する為、その往時の存在は唯の幻と思えるだろう。

注8 有徳者に対する、背徳者の冷淡で不法行為は、熱湯と、極めて冷たく悪臭を放つ飲料の形を取るだろう。

29. われらの神兆を悉く拒否せり。

وَكَذَّبُوا بِالآيَاتِ كَذَّابًا

30. われらはそのすべてを帳簿に記載せり。(注9)

وَكُلَّ شَيْءٍ أَحْصَيْنَاهُ كِتَابًا

31. 「されば汝等罰を味わえ。われらは呵責以外に何ものものお前たちにふやさず」

يَعِزُّ قَدْ وَقُوا فَلَنْ تُزِيدَكُمْ إِلَّا عَذَابًا

第二項

32. げに義しい人には本願成就あり、

إِنَّ لِلْمُتَّقِينَ مَفَازًا

33. すなわち囲まれた果樹園や葡萄畑、(注10)

حَدَائِقَ وَأَعْنَابًا

34. 年も頃合の乙女たち、(注11)

وَكُوعِبَ أَرْبَابًا

35. 溢れこぼるる酒盃なり。(注12)

وَكَأْسًا دِهَاقًا

36. そこではもはやくだらぬ話や嘘いつわりを聴かざらん。

لَا يَسْمُونَ فِيهَا نَعْوًا وَلَا كِدْبًا

37. こは主よりの報奨なり、彼等の所業に応じた恩賜なり、

جَزَاءٌ مِنْ رَبِّكَ عَطَاءٌ حِسَابًا

38. 天地並びにその間の万物の主にして慈悲深い神よりの。彼等は主と言葉を交すこと得ざるべし。

رَبِّ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا الرَّحْمَنُ لَا يَمْلِكُونَ مِنْهُ خِطَابًا

39. 聖霊や(注13) 諸天使が起立して整列する日にも、慈悲深い神が許したもう者、且

يَوْمَ يَقُومُ الرُّوحُ وَالْبَلِكَةُ صَفًّا لَا يَتَكَلَّمُونَ

注9 テレビ・ラジオ・テープレコーダー等の機器の発明により、人の行為のみならず言葉も保存・再生される様になった。

注10 天国の恵みの中でも、ブドウの木は、クルアーンに幾度も記されている。これは、ブドウが美味で重要な食物だからである。それは長期保存が可能であり、酔いをもたらす。タクワ(正義)にも、この三つの特徴がある。それ故、ブドウの木は、正義ある者にふさわしいほうびである。

注11 高潔なる者は、初々しく生氣あふれる友や妻たちを有し、高位を享受するであろう。彼等は高貴な家柄で、大望に奮い立つであろう。クルアーンの他の箇所(56:35)で、高潔なる信者の同胞は、高貴な配偶者と記されている。天の恵みの特質と意義に関しては、52章、55章、56章を参照の事。

注12 心が、あふれんばかりに神の愛で満たされている、神に酔いしれる巡礼者は、醒める事のない精神的陶酔に加えて、当然、器に満たされた飲物を与えられるであろう。

注13 此処にある「聖霊」とは完全なる魂、すなわちモハammad預言者を、又「整列する日」とは、復活の日を表しているようだ。

つ正しいことのみを云う者を除いて、彼等はもの云うことを得ず。

40. その日は必ず来る。されば欲する者をして、主におすがりせしめよ。

41. げにわれらは懲罰の近からんことをお前たちに警告せり。(注14) その日、人は己が手が先に送れるものを目の当りに見て、不信心者どもは叫ばん、「願わくは我塵埃に帰せんことを！」と。

إِلَّا مَن أَذِنَ لَهُ الرَّحْمَنُ وَقَالَ صَوَابًا ﴿٤٠﴾

ذَٰلِكَ الْيَوْمُ الْحَقُّ فَمَن شَاءَ اتَّخَذْ إِلَىٰ رَبِّهِ مَا بَاءَ ﴿٤١﴾

إِنَّا أَنْذَرْنَاكُمْ عَذَابًا قَرِيبًا يَوْمَ يَنْظُرُ الْمَرْءُ مَا قَدَّمَتْ يَدَاهُ وَيَقُولُ الْكَافِرُ يَلَيْتَنِي كُنْتُ تُرَابًا ﴿٤٢﴾

注14 「懲罰」とは、現世で罪深い不信心者に下される罰を指すようだ。クルアーンの他所(32:33)では、この罰はより近いと記されており、一方来世の罰はより大きい罰となってる。



アル・ナーズィアート

(メッカ啓示)

- | | |
|--------------------------------|---|
| 1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 | بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ① |
| 2. 荒々しく引き抜く者にかけて、 | وَالْقَزَعِ عُرْقًا ② |
| 3. その結び目をしっかりと結ぶ者にかけて、 | وَالشَّطِّ نَشْطًا ③ |
| 4. 迅速に滑空する者にかけて、 | وَالسَّيْحِ سَبْحًا ④ |
| 5. 他を追い抜き、 | فَالسَّيْقِ سَبْقًا ⑤ |
| 6. 事を見事に処理する者にかけて誓う。 | فَالدَّيْرِ بِرَبِّ أَمْرًا ⑥ |
| 7. その日、大地は震えおののき、(注1) | يَوْمَ تَرْجُفُ الرَّاجِفَةُ ⑦ |
| 8. 第二の震動が之に続かん。(注2) | تَتَّبِعُهَا الزَّادِفَةُ ⑧ |
| 9. その日、人々の心はおののき、 | قُلُوبٌ يَوْمَئِذٍ وَاجِفَةٌ ⑨ |
| 10. その目は伏すべし。(注3) | أَبْصَارُهَا خَاشِعَةٌ ⑩ |
| 11. 彼等は云う、「我等は以前の状態に復原せられるのか？」 | يَقُولُونَ إِنَّا لَسَرْدُودُونَ فِي الْحَافِرَةِ ⑪ |
| 12. なんとな！我等朽骨となり果てりというに」と。 | إِذَا كُنَّا عِظَامًا نَخِرَةً ⑫ |
| 13. 彼等はまた云う、「然らばそは失敗の帰環なり」と。 | قَالُوا تِلْكَ إِذًا كَرَّةٌ خَاسِرَةٌ ⑬ |

注1 「震えおののき」は戦争に備える、という意味である。前節に布告された預言は、神の正しき下僕と悪の勢力の間で戦いが起き、その結果後者が根絶される形で成就される、と当節は示している。

注2 イスラム教徒と不信心者の間に一旦戦いが始まれば、悪の勢力が次から次へと打撃を受け、徹底的に打ち碎かれるまで、それは続くであろう。

注3 不信心者が次々に敗北を喫し、イスラム教が勝ち続けるのを目の当たりにする時、不安が彼等を襲い、「復活」はあるのではないかという恐怖が、その心を苦しめ始めるであろう。

14. ただ一声の叫びあらば、
 15. 見よ、彼等は地上に出て来たらん。
 16. モーゼの物語はすでに汝に達したるか？
 17. 主が聖なるトゥワーの谷でモーゼにお言葉をかけ、命じたり、
 18. 「ファラオの所へ行け。彼は反抗せり。
 19. 而してファラオに云え、『汝その身を淨めんと欲するや？
 20. 然らば我は、汝をして主を畏れ敬わしめんがために、汝を主の許へ導かん』と。
 21. かくしてモーゼは偉大なる奇蹟をファラオに示したり。（注4）
 22. されどファラオはモーゼを拒否し、従わざりき。
 23. 而してファラオはモーゼから顔をそむけ、陰謀をたくらめり。
 24. ファラオはその民を集め、かく宣言せり。
 25. 「余はお前たちの主にして、至高者なり」
 26. さればアッラーはファラオを捕え、来世並びに現世の懲罰を加えたり。
 27. げにこの中には、畏敬する者への教訓あり。
 28. お前たちを創ることと、天を創ること、果していずれか難事なるか？アッラーはその天を創りたり。（注5）

فَأَنصَحَىٰ رَجْرَةً وَاجِدَةً ۝

فَإِذَا هُمْ بِالسَّاهِرَةِ ۝

هَلْ أَتَاكَ حَدِيثُ مُوسَىٰ ۝

إِذْ نَادَاهُ رَبُّهُ بِالْوَادِ الْمُقَدَّسِ طُوًى ۝

إِذْ هَبَّ إِلَىٰ فِرْعَوْنَ إِنَّهُ طَغَىٰ ۝

فَقُلْ هَلْ لَكَ إِلَىٰ أَن تَزْكَىٰ ۝

وَأَهْدِيكَ إِلَىٰ رَبِّكَ فَتَخْصَىٰ ۝

فَأَرَاهُ الْآيَةَ الْكُبْرَىٰ ۝

فَكَذَّبَ وَعَصَىٰ ۝

ثُمَّ أَدْبَرَ يَسْعَىٰ ۝

فَحَشَرَ فَنَادَىٰ ۝

فَقَالَ أَنَا رَبُّكُمُ الْأَعْلَىٰ ۝

فَأَخَذَهُ اللَّهُ نَكَالَ الْآخِرَةِ وَالْأُولَىٰ ۝

يَعْلَمُ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَعِبْرَةً لِّمَن يَخْشَىٰ ۝

وَأَنتُمْ أَشَدُّ خَلْقًا أَمِ السَّمَاءِ بَنَاهَا ۝

注4 「偉大なる奇蹟」は、モーゼにより示された他の全てのしるしに先立つ杖のしるしであった。

注5 複雑だが完全な、太陽系の創造は、事実、死後の生を支持する不可侵な論拠となっている。つまり、その様に広大な宇宙を無からお創りになった神は、その中でほんの小さな点にしか過ぎない人間に、死後新たな生命を与えることもお出来になられた。これが当節及び次の六節の主旨である。

29. 彼は高々と天を挙げ、(注6) 次いで之を完全なものとなせり。

رَفَعَ سَنَكَهَا فَسَوَّيْنَاهَا ۝

30. 而して夜を暗くし、それより朝を生ましめたり。(注7)

وَأَعْيَضَ بَيْنَهَا وَخَاجَ ضُحَاهَا ۝

31. 次いで大地をのべ広げたり。(注8)

وَالْأَرْضَ بَعْدَ ذَلِكَ دَحَاهَا ۝

32. 彼はそれより水と牧草とを生ぜしめ、

أَخْرَجَ مِنْهَا مَاءَهَا وَمَرْعَاهَا ۝

33. 更に山々をしっかりと据えたり。

وَالْجِبَالَ أَرْسَاهَا ۝

34. こはすべてお前たちとその家畜のための給養なり。

مَتَاءً لَكُمْ وَلِأَنْعَامِكُمْ ۝

35. されど、大災厄来たる時、

فَإِذَا جَاءَتِ الظَّامَةُ الْكُبْرَى ۝

36. そは人がその努力せることを想起する日なり。

يَوْمَ يَتَذَكَّرُ الْإِنْسَانُ مَا سَعَى ۝

37. また、地獄が、日ある者の前に出現する日なり。

وَبُورِثَ الْجَحِيمُ لِمَنْ يَرَى ۝

38. その時、反抗して、

فَأَمَّا مَنْ كُفَّ ۝

39. この世を選びし者、

وَأَثَرَ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا ۝

40. その住まいは地獄の業火たるべし。

فَإِنَّ الْجَحِيمَ هِيَ الْمَأْوَى ۝

41. されど主の御前に立つことを畏れ、その魂をよこしな欲望より守りし者、(注9)

وَأَمَّا مَنْ خَافَ مَقَامَ رَبِّهِ وَنَهَى النَّفْسَ عَنِ الْهَوَى ۝

الْهَوَى ۝

42. その住まいは必ず楽園たるべし。

فَإِنَّ الْجَنَّةَ هِيَ الْمَأْوَى ۝

注6 屋根、天井、物の高さ、深さ、厚さを意味する。

注7 地球につきものの、夜と昼の現象は、我々が昼・夜を持つのが太陽系のしくみによるものである事から、当節ではこれを天に起因するものとしている。

注8 本文中の意味以外に、当節は、地球がより大きい集合体から漂流して来た事を示す。

注9 罪人の様に、神の前に立つのを恐れる者。又は(2)神の尊厳を恐れる者。

43. 人々は汝に、「そはいつ起こる?」とその時について訊ねん。

يَسْأَلُونَكَ عَنِ السَّاعَةِ أَيَّانَ مُرْسَاهَا ۖ

44. されど汝はそれについて教えられるか?

فَلَيْمَ آتَتْ مِنْ وَكْرِهَا ۖ

45. それを知るは、ただ主あるのみ。

إِلَىٰ رَبِّكَ مُنْتَهَاهَا ۖ

46. 汝はただ、それを恐るる者への警告者にすぎぬ。

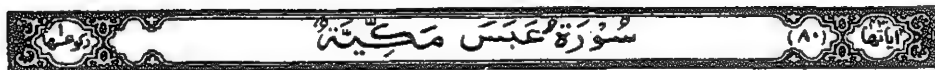
إِنَّمَا أَنْتَ مُنْذِرُ مَنِ يَخْشَاهَا ۖ

47. その日、人はそれを目の当たりにする時、この世に滞在せるは、恰も一晚か一朝にすぎざりき、と思わん。(注10)

كَأَنَّهُمْ يَوْمَ يَرَوْنَهَا لَمْ يَلْبِسُوا إِلَّا عَشِيَّةً أَوْ

فُجْرًا ۖ

注10 問題は、処罰の時・場所・形ではない。神の罰が下される時、それが余りにも早く、突然で、厳しい為、不信心者の現世における繁栄と快樂が、つかの間の、わずか一昼夜の出来事の様に思えるだろう事を、彼等が悟る事こそ、重要なのである。



アバサ
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く^{あまねく}アッラーの御名^なにおいて。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. ムハンマドは肩をひそめ、顔をそむけたり、
(注1)

عَبَسَ وَتَوَلَّى ②

3. そは盲人来たりし故なり。

أَنْ جَاءَهُ الْأَعْمَى ③

4. されど汝は知り得るか、盲人^{あまた}がその身を淨めんとし、

وَمَا يُدْرِيكَ لَعَلَّهُ يَزَكِّي ④

5. または警告^{いましめ}に留意し、その訓戒^{しとく}が彼を益するかもしらぬことを。

أَوْ يَذَّكَّرُ فَتَنْفَعَهُ الذِّكْرَى ⑤

6. 冷淡で尊大なる者には、

أَفَأَمِنْ أَتَعْمَلُ ⑥

7. 汝関心を示す、

فَأَنْتَ لَهُ تَصَدَّى ⑦

8. たとい淨められずとも汝に責任ない者に。

وَمَا عَلَيْكَ أَلَّا يَزَكِّي ⑧

(注2)

注1 当節は、有名な史実を述べている。モハammad預言者が、ある日、数人のクライシュの指導者と信仰の本で話をしていて、アブドゥラ・イブン・ウンメ・マクトゥームがそこにやって来た。彼は、モハammad預言者の貴重な時と活力が、頑固な不信心者の指導の事で浪費されていると考え、モハammad預言者の注意を引こうとし、幾つかの宗教問題の説明を請うた。モハammad預言者は干渉を嫌い、アブドゥラから顔をそらす事で、不快を示した。モハammad預言者がクライシュの指導者達と会話を続け、アブドゥラの干渉に注意を払わなかった事は、クライシュの指導者達の精神的福利を、彼が願っていた事を示し、同時に、この出来事は、盲人の鋭い感受性に対する彼の大いなる配慮を表している。それは、彼は唯アブドゥラから顔をそ向けただけで、つまり後者が盲目だと行為で示しただけで、後者の時宜を得ない、唐突な中断を咎める言葉は一口も口にせず、その自尊心や鋭い感受性を傷つけない様に、慎重に配慮をしたからである。当節は、この様に、モハammad預言者の高い徳性に、あふれんばかりの光を投げかけている。そして、幾人かの注釈者達が考える様な、神の非難の暗示ではなく、貧しき者、卑しき者の鋭い感受性に十分配慮する様に、モハammad預言者に、そして彼を通してその弟子達に命じているのである。

注2 当節は、アブドゥラ・イブン・ウンメ・マクトゥームに対するモハammad預言者の態度が正しかったと示している。クライシュの指導者がモハammad預言者の話に何ら得る所がなかったとしても、それは彼の責任ではないと当節は述べている。アブドゥラに対する彼の一見冷淡な態度、又、クライシュの指導者への敬意を表する振る舞いは、個人的な利害を一切廃した所から生じたものであった。戒律では、唯、来訪者に対して親切に礼儀正しく接しなければならないとだけ命じられてあった。

9. 然るに汝は、熱意を以て汝に来たる者を、
 10. しかも神を畏敬する者を、
 11. 軽視す。(注3)
 12. かくあるべからず！げにそは訓戒なり。(注4)
 13. されば欲する者をして、之を留意せしめよ、
 14. すなわち尊き原簿の載せられたものを、(注5)
 15. 気高く、浄きものを、
 16. 書記たちの手になるもの、
 17. 高貴にして高潔な。(注6)
 18. 人間に災いあれ！そはなんたる恩知らず
 よ！(注7)
 19. 何から神に創られし身か？

وَأَمَّا مَنْ جَاءَكَ يَسْعَىٰ

وَهُوَ يَخْشَىٰ

فَأَنْتَ عَنْهُ تَلَهَّىٰ

كَلَّا إِنَّمَا تَذَكَّرُ

فَسَنْ شَاءَ ذِكْرُهُ

فِي صُحُفٍ مُّكْرَمَةٍ

فَرُفُوعَةٍ مُّطَهَّرَةٍ

بِأَيْدِي سَفَرَةٍ

كِرَامٍ بَرَرَةٍ

قِيلَ الْإِنْسَانُ مَا أَكْفَرًا

مِنْ آيِ شَيْءٍ خَلَقَهُ

注3 6-11節は「汝が、尊大で冷淡な彼に配慮したり、神を恐れ汝のもとへ急いで来る者を無視する等、あるはずがない。」と解釈される。しかし、これ等の節はクライシュの指導者に向けられたとも言え、ある注釈者達の言を借りれば、彼は、モハammad預言者の所へ盲人が来た為に、眉をひそめ顔をそ向けたのである。この場合、これ等の節は、モハammad預言者に転嫁された弱点に触れる事なく、彼を酷評する者達に彼等自身の気持をはっきり悟らせる様に、反語的に用いられたと解される。

注4 当節は、冷淡だという非難は間違いだと示している。クルアーンが富める者にも貧しき者にも等しく向けられているのに、一体、モハammad預言者が、盲人に邪険な態度を取る事があるだろうか？ その様な行為は、彼自身の高い徳性と矛盾するのみならず、人間の理性にも反するものである。この特殊な場面でのモハammad預言者の行為は、事態がそうさせたのであり、彼のした事は正しかった。

注5 クルアーンは、様々な啓示書に含まれる永遠不滅の教義全てを要約したもので、いわば、全ての聖典の集大成と言える。これが「尊き原簿の載せられたもの」の意味である。当節は更に、クルアーンが聖典として誓かれ、崇められ、あらゆる改ざんや干渉から守られるであろう、と述べている。

注6 先の14-15節で述べられたクルアーンの三つの主要な特性に対し、そのお告げの伝道者の三つの等しく際立った特質が、当節及び前節に述べられている。クルアーンのお告げを伝える者は、高潔である事に加え、善く旅をして、それを明らかにし広める。

注7 クルアーンは、そのお告げを受け入れるだけで、不信心者が徳の卑しきから魂の重みの高まりへと引き上げられるように啓示されたものである。しかるに、クルアーンのごとき偉大にして高尚な聖典を拒むとは、不信心者は何と恩知らずなのだろう。

20. 一滴の精液より。神は人間を創り、而して
その形体を整え、

مِنْ نُطْفَةٍ خَلَقَهُ فَقَدَرَهُ ۝

21. 次に体外への道を容易ならしめ、

ثُمَّ السَّيْلَ يَسْرَهُ ۝

22. 然る後之を死なしめ、墓に歸し、(注8)

ثُمَّ أَمَاتَهُ فَأَقْبَرَهُ ۝

23. 次いでその欲する時に、之を再び甦らしむ。

ثُمَّ إِذَا شَاءَ أَنشَرَهُ ۝

24. 否！人間は神が命ぜしことをいまだに果さ
ざるなり。

كَلَّا لَنَا يَقِضُ مَا أَمَرَهُ ۝

25. 人間をして己が食物をとくと見せしめよ。

فَلْيَنْظُرِ الْإِنْسَانُ إِلَى طَعَامِهِ ۝

26. われらは沛然たる雨を降らせ、

أَنَّا صَبَبْنَا الْمَاءَ صَبًّا ۝

27. 次いで大地を裂きて之を剖き、

ثُمَّ شَقَقْنَا الْأَرْضَ شَقًّا ۝

28. そこに穀物を生ぜしむ、

فَأَنْبَتْنَا فِيهَا حَبًّا ۝

29. 葡萄や野菜、

وَعِنَبًا وَقَضْبًا ۝

30. 橄欖や椰子の木を。

وَزَيْتُونًا وَنَخْلًا ۝

31. 囲いめぐれる庭園は樹木茂り、

وَحَدَائِقَ غُلَبًا ۝

32. 果物と牧草は、

وَفَاكِهَةً وَأَبًّا ۝

33. お前たちやその家畜のための食料なり。

مَتَاعًا لَّكُمْ وَلِأَنْعَامِكُمْ ۝

34. されど、耳を聳する一声とどろくとき、

فَإِذَا جَاءَتْ الصَّاعَةُ ۝

35. その日、人間は己れの兄弟、

يَوْمَ يَفِرُّ الْمَرْءُ مِنْ أَخِيهِ ۝

36. 己れの父母、

وَأُمِّهِ وَأَبِيهِ ۝

37. 己れの妻や子を棄てて逃げ去らん。(注9)

وَصَاحِبَتِهِ وَبَنِيهِ ۝

注8 肉体を離れた後、人の魂は、現世の行状に応じ、新たな身体を得る。それこそ、人の真の墓である。それは、遺体が肉親の手で葬られる穴ではなく、魂の状態に応じて幸福にも不幸にもなる住居である。

注9 裁きの日の何と恐ろしい凶であらうか。

38. みなそれぞれ自分のことを心配し、他人の
ことには無関心。(注10)

لِكُلِّ امْرِئٍ مِنْهُمْ يَوْمِيذٌ شَأْنٌ يُغْنِيهِ ﴿٣٨﴾

39. その日、或る者の顔は輝き、

وَوَجْهُ يَوْمِيذٍ مُسْفِرٌ ﴿٣٩﴾

40. 笑い且つ喜ばん。

ضَاحِكٌ مُسْتَبْسِرٌ ﴿٤٠﴾

41. また或る者の顔は埃にまみれ、

وَوَجْهُ يَوْمِيذٍ عَلَيْهَا غَبَرٌ ﴿٤١﴾

42. 暗黒が之を覆わん。

تَرْهَقُهَا قَتَرٌ ﴿٤٢﴾

43. これ等の者どもは不信心者なり、悪人なり。

سُبْحٰٓةٌ اُولٰٓئِكَ هُمُ الْكَفَرَةُ الْفَجَرَةُ ﴿٤٣﴾

注10 苦しみや悲しみの時、人は近親者のことさえ忘れがちとなる。彼は余りにも多くの問題を抱え込み、手が開かないのである。



アル・タクウィール

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①
2. 太陽が包まれる時、(注1) إِذَا الشَّمْسُ كُوِّرَتْ ②
3. 星々が落ちる時、(注2) وَإِذَا النُّجُومُ انْكَدَرَتْ ③
4. 山々が吹き飛ばす時、(注3) وَإِذَا الْجِبَالُ سُيِّرَتْ ④
5. 懐胎十ヵ月目の雌駱駝がうち捨てられる時、
(注4) وَإِذَا الْعِشَارُ عُطِّلَتْ ⑤
6. もろもろの野獣が一緒に集められる時、(注5) وَإِذَا الْوُحُوشُ حُشِرَتْ ⑥
7. 海洋が澎湃たる時、(注6) وَإِذَا الْبِحَارُ يُجْرَتْ ⑦

注1 この章は、我々が知る様に、自然の法則及び過程が作用しなくなる最後の復活を扱うと、一般的に言われている。しかし、その全体の趣旨は、物質界の状況を明確に示す事にあり、もし最後の復活のみを語ると取れば、数節は全く意味をなさなくなる。事実、この章は、モハammad預言者の時以降、特に現代において物質界、人間の生活の中で既に起こった大いなる変革に触れている。当節は次の事を示しているのであろう。世界中を精神的な闇が覆う時、すなわち、精神の太陽(モハammad預言者)の光が薄れ消える時。あるいは、モハammad預言者の有名な言葉によれば、ラマダーンの月にマハディの時に起きた、世にもまれな出来事、すなわち、日食と月食を指しているのかもしれない。この日食と月食は、預言通り1894年に起きた。

注2 この意味はモハammad預言者の有名な言葉に裏付けられている。「我友は星の様だ。貴人達が誰に従おうとも、正しく導かれるであろう。」それ故、当節は、「宗教の指導者達が墮落し、力を行使できなくなる時」を意味する。この言葉は又、神の指導者の時に、まれに見る数多くの星が落ちて来る事をも指す様だ。

注3 山がダイナマイトで吹き飛ばされ、そこに道が通される時。比喩的には、統治者の権威が徐々に失われて行く時。ジャンバル(山)という語は、人々のリーダーを意味する。

注4 雌の駱駝がアラビア人にとってさえ、価値が無くなるであろうことを当節は預言する。この言葉は、駱駝がより速い交通機関、鉄道・蒸気船・自動車・飛行機等に取り替わられる宿命にある事を示している。モハammad預言者の発言の中に、駱駝が次の交通機関に置き換えられるという旨の、適切な言葉がある。「駱駝は見捨てられ、場所から場所への移動に使われなくなるであろう。」(ムスリム)

注5 「集まる」(ホシエラ)の語源の様々な意味を考慮すれば、当節は次の事を指すといえよう。獣が動物園に集められる時。あるいは、未開人が組織化された文明社会に移住させられる時。又、彼等が生地を離れる様強いられる時。

注6 当節は次の事を意味する。川の水が灌漑その他の目的で抜かれる時。あるいは、海戦で大型船に火が

8. もろもろの民が一緒に連れて来られる時、
(注 7)

وَإِذَا النُّفُوسُ زُوِّجَتْ ۝

9. 生理にされし女兒が

وَإِذَا النُّوءُودَةُ سِيلَتْ ۝

10. 「如何なる罪にて殺されしか？」と問われる時、(注 8)

بِأَيِّ ذَنْبٍ قُتِلَتْ ۝

11. 書籍が広く普及する時、(注 9)

وَإِذَا الصُّحُفُ نُشِرَتْ ۝

12. 天が剥き出しにされる時、(注 10)

وَإِذَا السَّمَاءُ كُشِطَتْ ۝

13. 業火が燃え立つ時、(注 11)

وَإِذَا الْجَحِيمُ سُعِرَتْ ۝

14. 天国が近づく時、(注 12)

وَإِذَا الْجَنَّةُ أُزْلِفَتْ ۝

15. それぞれの魂は己れのなせることを知らん。(注 13)

عَلِمَتْ نَفْسٌ مَّا أَحْضَرَتْ ۝

16. 否、われは沈み行く星々に誓う、

فَلَا أَقْسِمُ بِالْخُنُوسِ ۝

17. 瞬に急ぐ星々に。(注 14)

الْجَوَارِ الْكُنُوسِ ۝

18. われはまた夜の終りに誓う、

وَالْيَلِ إِذَا عَسَسَ ۝

付き、海が燃えている様に見える時。又は、大洋が運河で結ばれる時。更には、地方の人口が都会へ流れ込み、町が住民で溢れる時。

注 7 交通及び通信手段が非常に発達すれば、遠隔地に住む人間の往来が容易で頻繁になり、彼等は一つに結び付けられる。当節は又、類似した社会観・政治思想を持つ人々が党派をなす、とも示している。

注 8 少女を生き埋めにしたり焼き殺せば、死罪となるであろう。

注 9 この言葉は、新聞・雑誌・書物の普及、図書館の制度、読書室・その他の知識を広める設備や手段が、後世に生じると告げている様だ。

注 10 当節は、後世に起こる宇宙科学の著しい発達を示している様だ。過去 10 年間における科学のこの分野の進歩は、世界を驚かせた。

注 11 人の罪深く非道な行為がもとで、神の怒りに火が付き、真の地獄が壊滅的な戦争の形を取り、世に放たれるであろう。

注 12 後世に、悪が巷にあふれ、人は悪事と富の神への崇拜にふける為、ささやかな善行ですら、それを為す者は大きなほうびを授けられ、神により近付くであろう。

注 13 神の特命が下され、人の悪事の罰は広範囲に及ぶ自然災害の形をとるであろう。

注 14 後世において、イスラム教徒はその高位から落ち始めるであろう。それは、彼等が軽率にも自ら意図した計画を実行しようと走り、あるいは失意の内に前向きな努力を放棄する為である。

19. 夜明けが息づき始める時、(注15)

وَالصُّبْحُ إِذَا تَنَفَّسَ ⑮

20. げにこは貴き使徒の啓示の言葉なり、(注16)

إِنَّهُ لَقَوْلُ رَسُولٍ كَرِيمٍ ⑯

21. 力の所有者、玉座の主の御前で高い地位を占め、

وَمِن قُوَّةٍ عِنْدَ ذِي الْعَرْشِ مَكِينٍ ⑰

22. 忠順と称され、且つその信託に忠実なる使徒の。(注17)

مُطَاعٍ ثَمَّ أَمِينٍ ⑱

23. お前たちの仲間は狂人に非ず。

وَمَا صَاحِبُكُمْ بِمَجْنُونٍ ⑲

24. ムハンマドは確かに明るい地平線上にガブリエルを見たり。

وَلَقَدْ رَآهُ بِالْأُفُقِ الْمُبِينِ ⑳

25. ムハンマドは不可視なることについて告ぐるを吝む者に非ず。(注18)

وَمَا هُوَ عَلَى الْغَيْبِ بِضَنِينٍ ㉑

26. そはまた拒否されるべき悪魔の言葉に非ず。

وَمَا هُوَ بِقَوْلِ شَيْطَانٍ رَجِيمٍ ㉒

27. 然らばお前たち、何処へ行くか？

فَأَيْنَ تَذْهَبُونَ ㉓

28. こは世界中の人々への訓戒以外の何ものにも非ず、

إِنْ هُوَ إِلَّا ذِكْرٌ لِلْعَالَمِينَ ㉔

29. お前たちのうち正しい道を歩まんと欲する者への。

لِمَنْ شَاءَ مِنْكُمْ أَنْ يَسْتَقِيمَ ㉕

30. されど万物の主アッラー欲すに非ずば、お前たちは之を欲せざるべし。(注19)

وَمَا تَشَاءُونَ إِلَّا أَنْ يَشَاءَ اللَّهُ رَبُّ

الْعَالَمِينَ ㉖

注15 後世の神の指導者出現と共に、イスラム教徒の道徳的退廃の夜は去り始め、イスラムの偉大にして輝かしい未来の夜明けが取って代わるであろう。

注16 「貴き使徒」とはモハンマド預言者の事で、一般に誤解されている様に天使長ガブリエルを指しているのではない。

注17 五つの特性、すなわち高潔な神の使徒、力ある者、神の座の前の高位を享受する者、忠順を与えられた者、神の目に信仰に忠実と与る者、これ等は全てモハンマド預言者にそのまま当てはまる。

注18 神は、モハンマド預言者の口を通して、未知の偉大なる神秘を世にお示しになられた。

注19 神の御意志を求め、自らの意志に優先させる者のみが、正義の道に導かれるであろう。



アル・インフィタール

(メッカ啓示)

- | | |
|---|--|
| 1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 | بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ① |
| 2. 天がばらばらに割れる時、(注1) | إِذَا السَّمَاءُ انْفَطَرَتْ ② |
| 3. 星々が追ひ散らされる時、(注2) | وَإِذَا الْكَوَاكِبُ انتَثَرَتْ ③ |
| 4. 諸方の海が流れ出て合一する時、(注3) | وَإِذَا الْيَحَارُ فُجِّرَتْ ④ |
| 5. 墳墓が発かれる時、(注4) | وَإِذَا الْقُبُورُ بُعْثِرَتْ ⑤ |
| 6. その時、それぞれの魂は己れが先に送りしものと、引き止めしものとを知らん。(注5) | عَلِمَتْ نَفْسٌ مَّا قَدَّمَتْ وَأَخَّرَتْ ⑥ |
| 7. 人間よ、慈悲深い主について、汝を欺きたるは何者ぞ、 | يَا أَيُّهَا الْإِنْسَانُ مَا غَرَّبَكَ رَبِّكَ الْكَرِيمُ ⑦ |
| 8. 汝を創り、形を整え、而して正しく釣り合せたる主について？(注6) | الَّذِي خَلَقَكَ فَسَوِّكَ فَعَدَلَكَ ⑧ |

注1 この章は、キリスト教が非常に優勢で、三位一体、神の子イエス、贖罪、このキリスト教の三教義が至高を際める時を、特に取り上げている。偽りのキリスト教の教義のこの優勢に対し、クルアーンは非常に厳しい言葉を述べている。19章91, 92節参照の事。当節はこの二節に言及し、その時キリスト教の偽りの教義が世を支配し、その結果、神の怒りが下され、天罰が様々な形で世に迫る、と述べている。

注2 当節は比喩的に語り、後世において、真の魂の知識と導きを持つ者は無くなるか又は希となる、と示している。

注3 その時大海は運河を通じて繋がるだろう。あるいは、その入り口は、大船が往来できる様に、幅広く掘り下げられるであろう。この言葉は、パナマ・スエズ両運河を指している様だ。

注4 後世において、古代エジプトの墓同様に、墓は掘り出されるであろう。又、当節は、水中に沈み長い間忘れ去られた町や遺跡が発掘される、と示しているのかもしれない。

注5 当節及び次の二節では、偽りのキリスト教教義の主唱者に向けて声明が出されている。彼等は、その偽りの教えの非道を悟るであろう。

注6 神は、人間に、精神の最高峰へ登り詰める様にと、素晴らしい力と才能を授けられた。

9. 主は己が欲する形に汝を形造りたり。

فِي أَيِّ صُورَةٍ مَا شَاءَ رَكَّبَكَ ⑨

10. 然るにお前たちは、審判を否定す。

كَلَّا بَلْ شَكَكْتُمُونِ بِالذِّينِ ⑩

11. 然しながら、お前たちの上には監視者あり、

وَأَنَّا عَلَيْكُمْ لَحَافِظِينَ ⑪

12. 貴き記録者にして、(注7)

كِرَامًا كَاتِبِينَ ⑫

13. お前たちの所業を知悉す。

يَعْلَمُونَ مَا تَفْعَلُونَ ⑬

14. げに高潔な者は天国に入り、

إِنَّ الْأَبْرَارَ لَفِي نَعِيمٍ ⑭

15. 邪惡な者は地獄に落ちん。

وَأَنَّ الْفُجَّارَ لَفِي جَحِيمٍ ⑮

16. 審判の日には、彼等はその中で身を焼かれ、

يَصْلَوْنَهَا يَوْمَ الذِّينِ ⑯

17. そこより逃れること得ざるべし。

وَمَا هُمْ عَنْهَا بِغَائِبِينَ ⑰

18. 審判の日のなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？

وَمَا آذْرَكَ مَا يَوْمُ الذِّينِ ⑱

19. 重ねて云う、審判の日のなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？

تُمْ مَا آذْرَكَ مَا يَوْمُ الذِّينِ ⑲

20. その日こそ、如何なる魂も他の魂のために一事をもなし得ざるべし。その日こそ、すべての命令はアッラーの御手に握られるべし。

يَوْمَ لَا تَمْلِكُ نَفْسٌ لِّنَفْسٍ شَيْئًا وَالْأَمْرُ

لِلَّهِ يَوْمَئِذٍ ⑳

注7 人は生まれながらにして自由行為者であり、自らの決断と行為に責任を持つ。この事が「貴き記録者」の手で記されている。



アル・ムタフィフーン

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 量目をごまかす徒輩に災いあれ。
3. あの徒輩は、他人に量らせる時は量目を十分にさせ、
4. 自分が他人に量り、または秤量する時は之を減ず。
5. かかる徒輩は再び甦らしめらるることを知らざるか、
6. 恐ろしい日に、(注1)
7. 人みな万物の主の御前に立つその日のことを？
8. 然り、悪人の記録はシッジーンの中にあり。
9. シッジーンがなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？
10. そは永久不変の書冊なり。(注2)
11. その日を虚偽なりとせる徒輩に災いあれ。
12. 審判の日を否定する徒輩よ。
13. 之を虚偽なりと云う者は罰当たりな罪人なり、

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

وَيْلٌ لِّلْمُطَفِّفِينَ ②

الَّذِينَ إِذَا أَكْتَالُوا عَلَى النَّاسِ يَسْتَوْفُونَ ③

وَإِذَا كَالُوهُمْ أَوْ وَزَنُوهُمْ يُخْسِرُونَ ④

أَلَا يَطْنُ أُولَٰئِكَ أَنَّهُمْ مَبْعُوثُونَ ⑤

لِيَوْمٍ عَظِيمٍ ⑥

يَوْمَ يَقُومُ النَّاسُ لِرَبِّ الْعَالَمِينَ ⑦

كَلَّا إِنَّ كِتَابَ الْفُجَارِ فِي يَدَيْ رَبِّينَ ⑧

وَمَا أَذْرُبُ مَا سِجِّينَ ⑨

كِتَابٌ مُّرْقُومٌ ⑩

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ⑪

الَّذِينَ يُكَذِّبُونَ بِيَوْمِ الدِّينِ ⑫

وَمَا يُكَذِّبُ بِهِ إِلَّا كُلُّ مُعْتَدٍ أَثِيمٍ ⑬

注1 来世には、人が自らの行為の申し開きを主に対ししなければならない、裁きの日がある。しかし、人々の悪行が法を犯した時、この裁きの日は現世においてもその者達に訪れ、彼等はそれぞれの復しゅうの女神と出会うのである。

注2 シッジーンという名は、邪悪な不信心者に対する罰が、厳しく長く続く事を示している。あるいは、当節は、邪悪な者は屈辱の中に置かれ、これは廃棄できない決定である、と意味するのかもしれない。

14. 彼等はわれらの神兆^{しるし}を諦^{あきら}み聞かされるとも、「昔の物語よ」と云う者なり。
 إِذَا تَتْلَى عَلَيْهِ آيَاتُنَا قَالَ أَسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ⑩
15. 断じて然らず、彼等はその稼^{しか}ぎしもののために、己が心を腐食せり。
 كَلَّا بَلْ رَانَ عَلَى قُلُوبِهِمْ مَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ⑪
16. 然り、げに彼等は、その口、主を拝するを禁じられん。(注3)
 كَلَّا إِنَّهُمْ عَنْ رَبِّهِمْ يَوْمَئِذٍ لَمَحْجُوبُونَ ⑫
17. それどころか、彼等は必ず地獄で焼かれ、
 ثُمَّ إِنَّهُمْ لَصَالُوا الْجَحِيمِ ⑬
18. あまつさえかく云われん、「お前たちが日頃否認せるものは、これなり」と。
 ثُمَّ يُقَالُ هَذَا الَّذِي كُنْتُمْ بِهِ تُكَذِّبُونَ ⑭
19. 然るに、義^{しか}しい者の記録は、イルリイーンの中にあり。(注4)
 كَلَّا إِنَّ كِتَابَ الْأَبْرَارِ لَفِي عِلِّيَّينَ ⑮
20. イルリイーンがなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？(注5)
 وَمَا أَدْرَاكَ مَا عِلِّيُّونَ ⑯
21. そは永久不変の書冊なり。
 كِتَابٌ مَرْقُومٌ ⑰
22. 神の側近く伺候する天使らがそれを証明せん。
 يَشْهَدُهُ الْمَلَائِكَةُ ⑱
23. げに義^{ただ}しき者は至福にひたらん、
 إِنَّ الْأَبْرَارَ لَفِي نَعِيمٍ ⑲
24. 楊^{とう}牀^{しょう}に坐してあたりを眺めながら。
 عَلَى الْأَرَائِكِ يَنْظُرُونَ ⑳
25. 汝は彼等の面上に歡喜^{かがやき}の光輝を見ん。
 تَعْرِفُ فِي وُجُوهِهِمْ نَضْرَةَ النَّعِيمِ ㉑

注3 神への拝謁は、二段階に分けて信者に許される。第一段階は、信じる段階であり、この時信者は神の特質を確信する。第二段階、つまりより高い段階になると、神の悟りを授けられる。罪人は、その罪故に、裁きの日に神の悟りを与えられないままに、神のお顔を拝見できないであろう。

注4 イルリイーンは、「高かった」あるいは「高くなった」という意味の語、派生したものと考える人もおり、高潔なる信者が享受する最高位を意味する。ムフラダート辞典によれば、イルリイーンというのは他者より精神的な優位を享有するのは、この様な高潔な信者の高みのことである。この言葉は又、信者の大いなる向上と繁栄についての預言を含むクルアーンの箇所をも指す。イブン・アパースによれば、この語は天国を意味し一方イマーム・ラーギズは、それは天国の住人の名であると考える。

注5 シジーンが単数形でありイルリイーンが複数形である事から、悪者の罰は動きの無いもの、つまり一箇所に留め置かれるもので、他方正義なる者の魂の向上は、形を変えつつ、絶えず続いて行く、と示している。彼等是一个の位からより高位へと上って行くであろう。

26. 彼等は封印^{じゆんしゆ}されたる醇酒^{じゆんしゆ}をすすめられん。
(注6)

يُسْقَوْنَ مِنْ رَحِيقٍ مَخْمُومٍ ۝٦

27. その封印^{じやこう}は麝香^{じやこう}なり、さればその酒が欲しいなら、大いに努めをはげめ。

خَمِيئَةٍ مُسْكٍ ۚ وَفِي ذَلِكَ فَلْيَتَنَافَسِ الْمُتَنَافِسُونَ ۝٧

28. そはタスニームの水で割られん、

وَمِزَاجُهُ مِنْ تَسْنِيمٍ ۝٨

29. 神の側近く伺候する天使らが飲む泉の。

عَيْنًا يَشْرَبُ بِهَا الْمَقَرُّونَ ۝٩

30. 罪人^{つみびと}どもは信心深い人々を日頃嘲笑せり。
(注7)

إِنَّ الَّذِينَ أَجْرَمُوا كَانُوا مِنَ الَّذِينَ آمَنُوا يَضْحَكُونَ ۝١٠

31. 信徒らが彼等のそばを通りすぎると、互に目くばせし、

وَإِذَا مَرُّوا بِهِمْ يَتَغَامَرُونَ ۝١١

32. 家族のところへ戻るや、嘲り笑いたり。

وَإِذَا انْقَلَبُوا إِلَىٰ أَهْلِهِمْ انْقَلَبُوا فَكِهِينَ ۝١٢

33. また、彼等は信者を見ると、「げにこの者たちは邪道^{やから}にはまりし輩なり」と云えり。

وَإِذَا رَأَوْهُمْ قَالُوا إِنَّ هَٰؤُلَاءِ لَضَالُّونَ ۝١٣

34. 然れども彼等は、信者たちの監視人として遣わされたるに非ず。

وَمَا أَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ حَفِظِينَ ۝١٤

35. さればその日、信者たちは不信心者どもを笑わん、

فَالْيَوْمَ الَّذِينَ آمَنُوا مِنَ الْكُفَّارِ يَضْحَكُونَ ۝١٥

36. 榻^{どうしやう}に坐してあたりを眺めながら。(注8)

عَلَىٰ الْأَرَآئِكِ يَنْظُرُونَ ۝١٦

37. 不信心者どもはその所業に対して返報されるか？

هَلْ ثَوَابَ الْكُفَّارِ مَا كَانُوا يَفْعَلُونَ ۝١٧

注6 「醇酒」がクルアーンを指すとすれば、タスニームは、神の選民、モハammad預言者の高潔なる弟子達に授けられる啓示と考えられるであろう。この「醇酒」は、精神的飲みものを意味し、飲んで酔う実際の酒を意味していない。

注7 イスラム教が、その存続の為に、一見負け戦を戦っていた時になされた、イスラム教の急速な普及と勝利の預言を、不信心者達は内心あざ笑ったものだった。

注8 この言葉は次の事を意味する。(1)高位の座につくので、信者達は、傲慢な不信心者の哀れな運命を目撃するであろう。又は、(2)彼等は権力の座にある為、人々を裁くであろう。あるいは、(3)彼等は他人の要求に十分配慮するであろう。



アル・インシクアーク

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①
2. 天が粉々に破裂し、(注1) إِذَا السَّمَاءُ انشَقَّتْ ②
3. 主の命に耳を傾ける時(注2) —これすなわち天の務めなり— وَإِذْ نَتُ لِرَبِّهَا وَحُقَّتْ ③
4. 大地が伸べ広げられ、(注3) وَإِذَا الْأَرْضُ مُدَّتْ ④
5. 地の中にあるすべてを吐き出し、空虚となり、(注4) وَالْقَتْ مَا فِيهَا وَنَخَلَتْ ⑤
6. 主の命に耳を傾ける時—これすなわち大地の務めなり— وَإِذْ نَتُ لِرَبِّهَا وَحُقَّتْ ⑥
7. 汝人間よ、主への道を辿ることは実に辛い
が、汝は必ず主に見えん。 يَا أَيُّهَا الْإِنْسَانُ إِنَّكَ كَادِحٌ إِلَىٰ رَبِّكَ كَدْحًا
فَمُلَاقِيهِ ⑦
8. その時、右手に、己が行状の記録簿を渡さ
れる者は、 فَأَمَّا مَنْ أُوْتِيَ كِتَابَهُ بِرَيْبِنِهِ ⑧
9. 必ず楽な清算を受け、 فَسَوْفَ يُجَاسَبُ جِاسَابًا ⑨
يَسِيرًا ⑩
10. 喜んでその家族のところへ帰らん。 وَيَقْلِبُ إِلَىٰ أَهْلِهِ مَسْرُورًا ⑪

注1 天国の門が開かれ、クルアーンを支持する天のお告げが数多く現れ、高位の人々が、啓示された手本について思索を始める時。当節は、この時の事を述べている。

注2 新たに一人のアダムが生まれ、天国の天使達は、彼の神の使命推進及び伝達を助けようと、彼の側に立つてであろう(69:18)。それは、この事こそ、彼等が作り出された主な目的であり、彼等の義務だからである。

注3 地球は寿命が延び、人の罪故に受けるべき崩壊は引き延ばされるであろう。そして、そこに住む人々の魂の向上の為に、新たな手段が与えられるであろう。当節は又、天に属するとみえる惑星の幾つかが、地球のある地域で発見され、人がロケット等を使ってそこへ行こうとするだろう、とも示している。

注4 地球は隠された財宝を余りにも多く取り除く為、地球自体が「空虚」の様に見えるであろう。

11. 然るに、背後に、己が行状の記録簿を渡される者は、(注5)

وَأَمَّا مَنْ أُوْتِيَ كِتَابَهُ وَرَاءَ ظَهْرِهِ ⑪

12. いっそ死をと叫びながら、(注6)

فَسَوْفَ يَدْعُوا ثُبُورًا ⑫

13. 燃え盛る業火に焼かれるべし。

وَيَصْلَىٰ سَعِيرًا ⑬

14. げに彼は、すぎし日々、家族と偕に楽しく暮らしたり。

إِنَّهُ كَانَ فِي أَهْلِهِ مَسْرُورًا ⑭

15. 神の御許に帰ること決してあるまじ、と彼は思いたり。

إِنَّهُ ظَنَّ أَنْ لَنْ يَحُورَ ⑮

16. 然らず、主は彼をつぶさに照覧せり。

بَلَىٰ إِنَّ رَبَّهُ كَانَ بِهِ بَصِيرًا ⑯

17. われは黄昏に誓う、

فَلَا أَقْسِمُ بِالْشَفَقِ ⑰

18. 夜とその帳に、

وَالَيْلِ وَمَا وَسَقِ ⑱

19. また満月の月に、(注7)

وَالْقَمَرِ إِذَا اتَّسَقِ ⑲

20. お前たちを必ず一層から他層へ通過せしめんことを。(注8)

لَتَرْكَبُنَّ طَبَقًا عَنْ طَبَقِ ⑳

21. 然るに彼等信ぜざるは、如何なることか？(注9)

فَمَا لَهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ㉑

22. クルアーンを彼等に誦み聞かせるとも、彼等は叩頭服従せず、

وَإِذَا قُرِئَ عَلَيْهِمُ الْقُرْآنُ لَا يَسْجُدُونَ ㉒

23. それどころか、クルアーンを虚偽なりとす。

بَلِ الَّذِينَ كَفَرُوا يَكْذِبُونَ ㉓

注5 クルアーンを廃棄された物の様に扱う人々。(25:31)

注6 人は非常な苦しみの中にある時、死がその生命を終わらせる様に願う。

注7 17-19節には、イスラム教徒の一時的な退廃と、モハammad預言者の偉大なる代理、約束されたメシヤを通じての復活に関する預言が含まれている。この約束されたメシヤは、月の様に、太陽(モハammad預言者)の輝ける光を、完全にして忠実にその身に映し出す事となっていた。

注8 イスラム教徒は、先の数節に書かれたあらゆる状況を体験するであろう。

注9 不信心者達は、この預言の初めの二箇所が成就されたのを目撃した後、何故三箇所目が成就されないとききめたのか？ 彼等は、精神の闇夜の後、イスラム教の日の出の朝焼けを目にした。しかし、彼等は、満月の夜に月が闇を追い払う為に現れるとは信じない。

24. されどアッラーは彼等が胸中に隠すことを
熟知し給う。(注 10)

وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا يُوعُونَ ﴿١٧﴾

25. されば、^{から}辛き懲罰の通知を彼等に伝えよ。

فَبَشِّرْهُمْ بِعَذَابٍ أَلِيمٍ ﴿١٨﴾

26. されど信じて善行を積む人々には、つきる
ことなき報奨あり。

إِلَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَهُمْ
أَجْرٌ غَيْرُ مَمْنُونٍ ﴿١٩﴾

注 10 不信心者達は、神の使徒に対して、彼等が心中に隠し持つ敵意を、神はよく御存知である、と警告されている。神は又、神の目的を推し進める為の、神の使徒の使命と努力を無にしようとする彼等の陰謀にも、気付いておられる。



アル・ブルージ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. 幾多の星座を有す大空にかけて、

وَالسَّمَاءِ ذَاتِ الْبُرُوجِ

3. 約束の日にかけて、(注1)

وَالْيَوْمِ الْمَوْعُودِ

4. 証人と被証者にかけて誓う、(注2)

وَشَahِدٍ وَمَشْهُودٍ

5. 火坑の徒輩は呪われよ、(注3)

قَتِيلَ أَصْحَابِ الْأُخْدُودِ

6. 薪を燃やせし。

النَّارِ ذَاتِ الْوُوقُودِ

注1 「約束の日」は、約束された救世主が、イスラム教復活を成し遂げる為に立たされる日を指しているようだ。事実イスラム教の歴史には、約束の日と呼ばれるHが数多くあった。バドルの戦いの日、堀の戦いが輝かしい結末を迎えた日、メッカ陥落のH、等がそれに当たる。しかし約束の日はその中でも特に抜きん出ており、ヒジラ14世紀に、モハammad預言者の再来が、彼の代理の身に起こった日を指す。この時、イスラム教は新たな命を得、他の全ての宗教に勝つ事となっている。約束のHは又、正義なる者が、その主との出会いという至福を享受するHでもあるようだ。

注2 全ての預言者又は神の指導者は、彼等が神の存在の生き証人である為、シャーヒッド(証人)、つまり証明する人となる。又、神が彼等の手にしるしや奇跡をお示しになる事で、彼等の真実を証されるため、彼等はマシュフード(「被証者」)でもある。しかし此所では、本文の示す通り、「証人」は約束された救世主であり、「被証者」はモハammad預言者を指す。そして当節は、約束された救世主が、説教や謗物で、又神が彼の手にお示しになるしるしにより、モハammad預言者の真実を証明するであろう、と示している。彼は又、ヒジラ14世紀の約束された救世主およびマハディの到来に関するモハammad預言者の預言が、その身に成就されるという意味において、立証するであろう。モハammad預言者自身が約束された救世主を証明したという意味では、彼も又被証者である。この様に、モハammad預言者及び約束された救世主は、共に証人(シャーヒッド)であり、又、被証者(マシュフード)でもある。

注3 あるクルアーンの注釈者は、当節が、イエメンのイスラエルの王ズー・ヌワースによるキリスト教徒の火刑を示している、と解釈している。又別の注釈者によれば、バビロンの王ネブガドネザルが、イスラエルの指導者達を、燃えさかる炉に投げ入れた事を指すと解される(ダニエル書3:19-22)。当節は、更に、真実の敵にもあてはめられる。彼等は、全ての神の指導者の時に、信者に激しく対立し、迫害する。此所では、過去の、真偽の程が定かでない出来事を述べようとしているのではない。クルアーンのどの箇所にも、神が過去の事実により誓われた事実はなく、第三節で、神は「約束の日」の名の元に証言されておられる。当節及び次の数節では、約束された救世主の弟子達は、その大いなるHの到来をつげる為に、非常に苦しみを味わわねばならないであろう、と暗示されている。

7. その時彼等は火坑^{かこう}の傍に坐し、(注4)

إِذْ هُمْ عَلَيْهَا قُعُودٌ ۝

8. 信者たちになせる己が仕打ちを眺めたり。
(注5)

وَهُمْ عَلَىٰ مَا يَفْعَلُونَ بِالْمُؤْمِنِينَ شُهُودٌ ۝

9. 彼等が信者たちを憎みしは、信者たちが全能にして讃美すべきアッラーを信じたるが故なり、(注6)

وَمَا نَقْبُوا مِنْهُمْ إِلَّا أَنْ يُؤْمِنُوا بِاللهِ الْعَزِيزِ
الْحَمِيدِ ۝

10. 天地^{かみつち}の大権を掌握するアッラーを。アッラーは萬事を照覽す。

الَّذِي لَهُ مُلْكُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَاللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ شَهِيدٌ ۝

11. 男女の信者を迫害し、しかも後悔せざる徒輩^{たぐわい}には、必ず地獄の罰あり、火責めの罰あり。

إِنَّ الَّذِينَ فَتَنُوا الْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ ثُمَّ لَمْ يَتُوبُوا فَلَهُمْ عَذَابُ جَهَنَّمَ وَلَهُمْ عَذَابُ الْحَرِيقِ ۝

12. 然るに信じて善行を積む人々には、河川流るる樂園あり。これ最上の成就なり。

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَهُمْ جَنَّاتٌ تَجْرَىٰ مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ ذَلِكَ الْفَوْزُ الْكَبِيرُ ۝

13. げに猛烈なるは、汝の主の急襲なり。

إِنَّ بَطْشَ رَبِّكَ لَشَدِيدٌ ۝

14. 創造し、復活させる者は、主なり。(注7)

إِنَّهُ هُوَ بَدِئُ وَيُعِيدُ ۝

15. 而して主は、寛容者にして慈愛者なり。

وَهُوَ الْغَفُورُ الْودُودُ ۝

16. 光荣ある玉座の主なり。

ذُو الْعَرْشِ الْمَجِيدُ ۝

17. 己が欲することは必ず実行す。

فَعَالٌ لِّبِأَيِّدٍ ۝

注4 5-9節では、真実の敵に触れている。彼等は、いつの世でも、高潔なる信者に対し迫害の火を付け、常にそれを燃やし続ける。彼等の結末は11節に預言されている。

注5 真実の敵は、彼等の妨害が残酷かつ不当なものであり、彼等の残虐行為の犠牲者が無実である事を、実は知っているのである。

注6 当節は哀感に満ちている。神への信仰は、それを持つ者が残虐な迫害を受けねばならない程に、極悪非道な罪なのであろうか、と問いかけている。

注7 神は、信者に対する残酷で専制的な迫害者を、現世で、また来世においても罰せられるであろう。

18. かの軍勢の物語は汝に達せざりしか、

هَلْ أَتَاكَ حَدِيثُ الْجُنُودِ ١٨

19. ファラオとサムードの？

فِرْعَوْنَ وَثَمُودَ ١٩

20. 否、信ぜざる者どもは真理を否認し続ける。

بَلِ الَّذِينَ كَفَرُوا فِي تَكْذِيبٍ ٢٠

21. さればアッラーは、彼等を前後から取り囲む。

وَاللَّهُ مِنْ وَرَائِهِمْ مُحِيطٌ ٢١

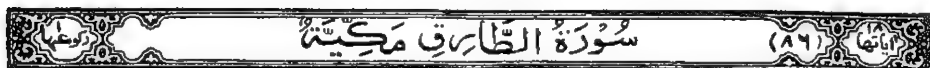
22. 否、そは光栄あるクルアーンなり、

بَلْ هُوَ قُرْآنٌ مَجِيدٌ ٢٢

23. 大事に保管された書板に銘記されたる。(注8)

فِي لَوْحٍ مَحْفُوظٍ ٢٣

注8 当節は、クルアーンがあらゆる干渉、歪曲から守られるという、預言を述べている。15章10節も参照の事。



アル・ターリク

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 ① بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
2. 大空と明けの明星にかけて誓う。(注1) ② وَالسَّمَاءِ وَالطَّارِقِ ③
3. 明けの明星の何たるかを汝に知らしむるものは何んぞや？ ④ وَمَا أَدْرَاكَ مَا الطَّارِقُ ⑤
4. そはきらめき輝く星なり。 ⑥ النَّجْمُ الثَّاقِبُ ⑦
5. 何人も己が守護者を持たざる者はなし。(注2) ⑧ إِنَّ كُلُّ نَفْسٍ لَنَا عَلَيْهَا حَافِظٌ ⑨
6. されば人に、己れが何より創られしかを考えさせよ。 ⑩ فَلْيَنْظُرِ الْإِنْسَانُ مِمَّ خُلِقَ ⑪
7. 人は噴出する液体より創造せらる、(注3) ⑫ خُلِقَ مِنْ مَّاءٍ رَافِقٍ ⑬
8. 腰と胸骨の間から出るところの。(注4) ⑭ يَخْرُجُ مِنْ بَيْنِ الصُّلْبِ وَالتَّرَائِبِ ⑮
9. げに主は、人の生命を甦らせる能力を有す、 ⑯ إِنَّهُ عَلَى رَجْعِهِ لَقَادِرٌ ⑰

注1 当節には、モハammad預言者の代理の事が述べられているようだ。明け方の星のごとき彼の到来は、イスラム教を覆う精神の闇夜が過ぎた後、イスラム教の勝利と普及の夜明けを告げるものであった。しかし、注釈者の中には、当節はモハammad預言者自身を指すと解する人もいる。彼等によれば、モハammad預言者が現れた時、精神の闇夜が全世界を覆い、彼の到来地アラビアは闇に包まれていた。

注2 神は、「明けの明星」すなわちモハammad預言者の代理、そして「きらめき輝く星」すなわちモハammad預言者を守られるであろう。

注3 人の魂の向上は、噴出の後勢いの弱まる精液の様に、前進と後退の時期を交互に繰り返しがちである。

注4 クルアーンの文体の特徴は、厳しくそっけない言葉ではなく、穏やかな表現を用いている事である。「腰と胸骨の間から出るところの」というのは、クルアーンに使われる婉曲表現の一つである。当節は、人が父親の腰から出る水より生まれ、母の胸で育てられると意味するようだ。ほとぼしりその後勢いの弱まる液体から人間が作り出されたという事は、彼が急激な進歩を遂げる大いなる力を生まねがらにして備わったが、同時にもしこの神より授かった力を適切に用いなければ墮落の深みへ落ちる可能性もある事を示している。噴出しその後勢いが弱まる精液の様に、人の魂の向上も前進と後退の時期を交互にする、と当節は示している。

10. すべての秘密が暴露される日。 يَوْمَ تُبْلَى السَّرَائِرُ ﴿١٠﴾
11. その時、人は、力もなく助け手もなき者たらん。 فَمَالَهُ مِنْ قُوَّةٍ وَلَا نَاصِرٍ ﴿١١﴾
12. くり返して雨を降らす雲にかけて、 وَالسَّمَاءِ ذَاتِ الرَّجْعِ ﴿١٢﴾
13. また、牧草が広がる大地にかけて誓う。(注5) وَالْأَرْضِ ذَاتِ الصَّدْعِ ﴿١٣﴾
14. げにクルアーンは決定的な言葉なり。 إِنَّهُ لَقَوْلُ فَصْلٍ ﴿١٤﴾
15. そは空論に非ず。 وَمَا هُوَ إِلَّا هَزْلٌ ﴿١٥﴾
16. げに彼等は策謀をめぐらす。 إِنَّهُمْ يَكِيدُونَ كَيْدًا ﴿١٦﴾
17. されどわれも ^{はかりごと} 謀を策す。 وَأَكِيدُ كَيْدًا ﴿١٧﴾
18. されば不信心者どもに猶予を与えよ。然り、
彼等に暫く時を与えよ。(注6) فَقِيلَ الْكَافِرِينَ أَمَهْلُهُمْ رُؤُودًا ﴿١٨﴾

注5 地上の草木に欠かせない雨は、空から降り、それが止まれば、地上の水は徐々に干上がる。同様に、天の啓示が無ければ、人の理性は、その純粋さ、強さを失う。当節及び前節ではこの事を示している。

注6 不信心者は、イスラム教やモハムマド預言者に対し、持てる力と財を全て使って悪計を試みる猶予期間を与えられている、と当節では述べている。彼等の計略やその自慢の力を持ってしても、イスラムの勝利は、ゆるぎなく、イスラム教が神からのものであり、神の支持を得ている事を立証するであろう。

سُورَةُ الْأَعْلَى مَكِّيَّةٌ

(八七)

アル・アーラー
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. いと高き汝の主の御名を讃えよ。

سَبِّحْ اسْمَ رَبِّكَ الْأَعْلَى ②

3. 彼は人間を創り、之を整え給う。

الَّذِي خَلَقَ مُسَوِّىً ③

4. 彼はまた人間の能力を限定し、且つ之を導き給う。

وَالَّذِي قَدَّرَ فَهَدَى ④

5. また彼は牧草を生み、

وَالَّذِي أَخْرَجَ الْمَرْعَى ⑤

6. 次いでそれを黒い刈り株となす。

فَجَعَلَهُ غُثَاءً أَحْوَى ⑥

7. われらは汝にクルアーンを教えん、されば汝は之を忘れざるべし、(注1)

سَنُقَرِّئُكَ فَلَا تَنْسَى ⑦

8. アッラーの思召しに非ざる限りは。(注2)
げにアッラーは現われたるものと隠れたるものを知り給う。

إِلَّا مَا شَاءَ اللَّهُ إِنَّهُ يَعْلَمُ الْجَهْرَ وَمَا يَخْفَى ⑧

9. われらは汝のためにすべてを容易ならしめん。(注3)

وَنُيَسِّرُكَ لِلْيُسْرَى ⑨

注1 モハammad預言者は人間であり、日常の事に関する限り、よく物事を忘れた。しかし、絶対に正しい知恵を備えられた神がよく御準備なさった為、モハammad預言者には学がなかったにもかかわらず、又時には長い章が一度に彼に啓示される事があったにもかかわらず、啓示は彼の心にしっかりと刻み付けられ、その啓示された部分を暗唱する時、彼は忘れたりつかえたりする事は決して無かった。第2章、第3章、第4章、の様に非常に長い章は少しずつ啓示され、啓示の間隔が数年にも及んだが、モハammad預言者は、啓示された節を正しい位置に据えるのに、一瞬たりとも躊躇しなかったとは、実に驚くべき事だ。これは、クルアーンを最も激しく非難する者でさえ、反論できなかった事実である。

注2 「アッラーの思召しに非ざる限り」という言葉は日常の事にのみ関するものである。すなわち、忘れることがあってもそれは日常の事のみで、宗教など大切なことは決して忘れることはなかったということ。

注3 当節は次の事を示す。(1)クルアーンを覚えるのは易しい。(2)クルアーンの教義は、状況の変化に応じ、気質の異なる人々の必要に見合う様それぞれに融通性を備えている。(3)クルアーンの禁止礼は独断的ではなく、賢明で理に達したものである。以上の要素がクルアーンを学び易く、従い易いものになっている。これ等はとり分け、神がクルアーンの聖句及びその意味を永遠に守られるように用意したからである。

10. されば人々を訓戒せよ。げに訓戒は有益なり。
11. 畏敬者は之^{これ}を心に留めん。
12. されど神に見放された者は之^{これ}を避けん。
13. その者は恐ろしい業火^{さうか}に入らん。
14. その中で、死ぬもならず、生きるもならざらん。
15. その身を浄める者は成功疑いなし、
16. 主の御名^{あな}を念じて礼拝する者よ。
17. 然るにお前たちはこの世の生活を好む、
18. 来世の方がはるかに優り、恒久^{こうきゅう}なれども。
19. げにこの事は古の諸聖典^{いにしよ}にあり、
20. すなわち、アブラハムやモーゼの聖典にあり。(注4)

فَذَكِّرْ إِنْ نَفَعَتِ الذِّكْرَى ⑩

سَيَذَكِّرْ مَنْ يَشَاءُ ⑪

وَيَتَجَنَّبُهَا الْأَشْقَى ⑫

الَّذِي يَصِلُ النَّارَ الْكُبْرَى ⑬

ثُمَّ لَا يَمُوتُ فِيهَا وَلَا يَحْيَى ⑭

قَدْ أَفْلَحَ مَنْ تَزَكَّى ⑮

وَذَكَرَ اسْمَ رَبِّهِ فَصَلَّى ⑯

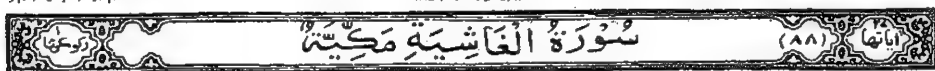
بَلْ تُؤْثِرُونَ الْحَيَاةَ الدُّنْيَا ⑰

وَالْآخِرَةُ خَيْرٌ وَأَبْقَى ⑱

إِنَّ هَذَا لَفِي الصُّحُفِ الْأُولَى ⑲

صُحُفِ إِبْرَاهِيمَ وَمُوسَى ⑳

注4 全ての宗教の根本原理は基本的には同じであるが、これまでの節に述べられた教義はモーゼとアブラハムの書にも見られる。世に最後の神のお告げと最も完全なる教義をもたらす宿命にあった、偉大なる預言者到来の預言が、モーゼの書とアブラハムの書に見られる、と当節は示しているようだ。(申命記 18:18-19、33:2)



アル・ガーシヤ
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 圧倒的災難の話は汝に達したるか? (注1)

هَلْ أَتَاكَ حَدِيثُ الْغَاشِيَةِ ②

3. その日、或る者どもの顔はうちしおれん、

وُجُوهُ يَوْمٍ ذُو نَارٍ ③

4. 労苦に疲れはて。

عَامِلَةٌ تَأْسِبُ ④

5. 彼等は燃え盛る業火に入れられ、

تَصِلُ نَارًا حَامِيَةً ⑤

6. 煮え湯の泉水を飲ましめられん。

تُسْقَى مِنْ عَيْنٍ أَثِيمَةٍ ⑥

7. 食物といえ乾いた苦い荆棘ばかり。

لَيْسَ لَهُمْ طَعَامٌ إِلَّا مِنْ ضَرِيعٍ ⑦

8. 之を食うとも太らず、飢を癒さず。

لَا يُسْمِنُ وَلَا يُغْنِي مِنْ جُوعٍ ⑧

9. また、その日、或る人々の顔は欣然として、

وُجُوهُ يَوْمٍ ذُو نَارٍ ⑨

10. 己が過去の精進を喜び、(注2)

لَسَعِيهَا رَاضِيَةٌ ⑩

11. 至高の樂園にありて、

فِي جَنَّةٍ عَالِيَةٍ ⑪

12. 無益な話を聞かず。

لَا تَسْمَعُ فِيهَا لَاغِيَةً ⑫

13. 園内には泉が流れ、(注3)

فِيهَا عَيْنٌ جَارِيَةٌ ⑬

14. 高欄おかれて、

فِيهَا سُرُرٌ مَرْفُوعَةٌ ⑭

注1 (1)裁きの日、又は恐ろしい災難。(2)モハammad預言者の時代に、およそ7年間メッカを襲った深刻な飢饉は、クルアーンに「圧倒的災難」として記されている(44:11, 12)。

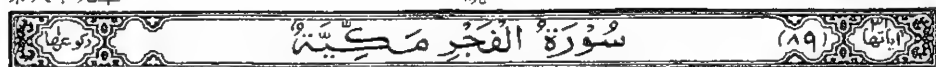
注2 高潔なる信者は、イスラム教の目的の為に払った犠牲のもたらす素晴らしい結果に喜ぶであろう。

注3 湧き出る泉の様に、彼等の善行は、絶えず流れ出るだろう。

15. 酒杯そばにあり、
 16. 樽は並べられ、
 17. 風雅なる敷物広げ敷く。
 18. 彼等は駱駝を見ざるか、そは如何に創られるかを？（注4）
 19. また大空を、そは如何に高々と揚げられるかを？
 20. また山々を、そは如何に据えられるかを？
 21. また大地を、そは如何に広々と拡げられるかを？（注5）
 22. されば訓戒せよ、汝は訓戒者に外ならず。
 23. 汝は彼等の監督者に非ず。
 24. されど背を向ける者や信ぜざる者は、
 25. アッラー重刑を以て之を罰せん。
 26. 彼等がわれらが許に帰るは必定、
 27. その時彼等に責任を問うのはわれらの務めなり。
- وَٱلْكَوَءِبُ مَوْضُوعَةٌ ۖ
 وَنَبَارِقُ مَصْفُوفَةٌ ۖ
 وَزُرَابٍ مَّبْنُوتَةٌ ۖ
 أَفَلَا يَنْظُرُونَ إِلَى ٱلْإِبِلِ كَيْفَ خُلِقَتْ ۖ
 وَإِلَى السَّمَآءِ كَيْفَ رُفِعَتْ ۖ
 وَإِلَى ٱلْجِبَالِ كَيْفَ نُصِبَتْ ۖ
 وَإِلَى ٱلْأَرْضِ كَيْفَ سُطِحَتْ ۖ
 فَذَكِّرْ ۚ إِنَّمَا أَنْتَ مُذَكِّرٌ ۚ
 لَسْتَ عَلَيْهِمْ بِمُصْطَفِرٍ ۚ
 إِلَّا مَنْ تَوَلَّى وَكَفَرَ ۚ
 فِعْلَبُهُ ٱللَّهُ ٱلْعَذَابُ ٱلْأَكْبَرُ ۚ
 إِنَّ ٱلْيَنَابِلَ أَيَّا بِهِمْ ۚ
 ثُمَّ إِنَّ عَلَيْنَا جِسَابَهُمْ ۚ

注4 駱駝が導くものの後を一行に並んで進むように、信者達は彼等の指導者に完全に従う。あるいは、暑い砂漠を水無しに何日も進む駱駝の様に、彼等は試練の中で無限の忍耐力を持ち、不平も言わずに魂の旅を続ける。イビル（「駱駝」）には雲という意味もあるので当節は、神が全土を覆う魂の水であるクルアーンの教義を広められるであろう、と示しているのかもしれない。

注5 この四節（18-21）は、イスラム教徒に次の様な至高の道德上の教訓を示している。(1)イスラム教徒は雲の様に寛大で、(2)天のごとく気高く、(3)山の様に不屈の決意を持ち、(4)土の様に優しく謙虚でなければならない。



アル・ファジル
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①
2. 暁にかけて、(注1) وَالْفَجْرِ ②
3. 十夜にかけて、(注2) وَلَيَالٍ عَشْرٍ ③
4. 偶数と奇数にかけて、(注3) وَالشَّفْعِ وَالْوَتْرِ ④
5. 逝り行く夜にかけて誓う。(注4) وَالْبَيْلِ إِذَا يَسِرُّهٗ ⑤
6. この中には思慮ある者への誓言あらざるか？ هَلْ فِي ذَلِكَ قَسَمٌ لِّذِي حِجْرِ ⑥

注1 「暁」とは、メッカにおける迫害の暗夜に終止符を打つ事となった、モハammad預言者のメディナへの移住を指しているようだ。又、何世紀にも及ぶイスラム教徒の墮落の後、彼等への希望と明るい未来のお告げをもたらす事となっていた、約束されたメシヤの到来を示しているようだ。

注2 「十夜」とは、イスラム教徒がメッカで受けた厳しい迫害の最後の10年、あるいは、約束されたメシヤ出現前の、イスラム教徒腐敗の十世紀間を表しているようだ。この約束されたメシヤ到来により、イスラム教徒の精神的、政治的退廃の暗黒時代は終わりを告げ、イスラム教の輝ける未来の夜明けを告げる事となった。この「十夜」、あるいは、イスラム教退廃の10世紀を示す箇所は、他にもクルアーンに見られる(32:6)。イスラム教徒が道徳的に退廃したこの十世紀間(千年)は、モハammad預言者がイスラムの最高の三世紀間と呼ぶ(ブハリ、リカーク書)、彼等の名譽と威嚴の全盛期である初期の三世紀間の後に来たものであった。イスラム教の退廃はヒジラ三世紀末に始まった。この時、スペインのウマイヤカリフは、バクダードのアッバシー帝国に対し、法王と相互援助条約を結び、他方バクダードのカリフは、スペインのウマイヤカリフに対し、ローマのシーザーと友好条約を結んだ。

注3 比喩を続けながら、「偶数」という語は、モハammad預言者と、彼のかつての信心深い仲間アブー・バクルをそれとなく指しているようだ。ヒジラの苦難の時に二人だけで(偶数で)逃れたが、彼らと共におられた神がそれを奇数になさった。この「偶数と奇数」の数に関しては、9:40に適切な記述が見られる。あるいは、モハammad預言者と約束されたメシヤは偶数を、アッラーは奇数を表す。又「偶数と奇数」は、モハammad預言者と約束された救世主は別人であったが、後者は前者と同一化する程に前者に心酔していた事を示しているようだ。

注4 「夜」は、モハammad預言者の悩みの種が尽きなかったヒジラの最初の年を表しているようだ。メディナへの移住の後、イスラム教徒に朝が訪れたが、彼等ははまだ完全に困難を脱していた訳ではなかった。彼等はもう一晩苦難に耐えねばならなかった。つまり、更に一年の苦難を経て、バドルの戦いでクライシュが完敗を喫し、イザヤ預言者の預言(21:16)は文字通り成就したのである。

7. 汝は、主がアードの民を如何に処分せしかを見ざるか、
8. すなわち聳え立つ建造物の所有者、イラムの支族を？
9. これに類するものは未だかつてこの地方で造れる者なかりしなり。
10. また溪谷で岩を切り出したるサムード族や、
11. 大軍勢の支配者ファラオを如何に処分せしかを？
12. 彼等はその邑々^{まちまち}において不行跡な行いをなし、
13. その地に腐敗をもたらせり。
14. されば汝の主は、彼等の上に懲罰^{しかり}の筈を加えたり。
15. げに汝の主は常に油断なく人間を監視す。
16. 人間というものは、主が試さんとして栄誉や恩恵を授けると、「主は我を礼遇せり」と云う。(注5)
17. されど、主が試さんとしてその生活を苦しめると、「主は我を辱しめたり」と云う。
18. 然らず、されどお前たちは孤児^{あなは}を礼遇せず、
19. また互に相い^{あひ}促して貧者を養わず、
20. 而して他人^{ほか}の遺産^{ふたひ}を貪り食いて飽くことを知らず。

أَلَمْ تَرَ كَيْفَ فَعَلَ رَبُّكَ بِعَادٍ ۖ

إِرمَ ذَاتِ الْعِمَادِ ۚ

الَّتِي لَمْ يُخْلَقْ مِنْهَا فِي الْبِلَادِ ۚ

وَتَمُودَ الَّذِينَ جَابُوا الصَّخْرَ بِالْوَادِ ۚ

وَفِرْعَوْنَ ذِي الْأَوْتَادِ ۚ

الَّذِينَ طَعَوْا فِي الْبِلَادِ ۚ

فَاكْثُرُوا فِيهَا الْفَسَادَ ۚ

فَصَبَّ عَلَيْهِمُ رَبُّكَ سَوْطَ عَذَابٍ ۚ

إِنَّ رَبَّكَ لَبَاصِرٌ ۚ

فَأَمَّا الْإِنْسَانُ إِذَا مَا ابْتَلَاهُ رَبُّهُ فَأَكْرَمَهُ وَ

نَعَّمَهُ ۖ فَيَقُولُ رَبِّي أَكْرَمَنِ ۚ

وَأَمَّا إِذَا مَا ابْتَلَاهُ فَقَدَرَ عَلَيْهِ رِزْقَهُ ۖ فَيَقُولُ

رَبِّي أَهَانَنِ ۚ

كَلَّا بَلْ لَا تَكْرُمُونَ الْيَتِيمَ ۚ

وَلَا تَحْضُرُونَ عَلَى طَعَامِ الْيَسِيرِينَ ۚ

وَتَأْكُلُونَ التَّرَاثَ أَكْلًا لَمَّازًا ۚ

注5 恩恵は、時に人の気概を試す為に、又ある時はその善行に報いる為に、人に授けられる。同様に、人は困難に巻き込まれ、その結果試され、報いられるか応分の処罰を受ける事となる。しかし、人は豊かな時、それは自身の働きと知恵の賜物であるとみなし(28:79)、逆に不幸に襲われれば、それは神のせいだとするのが常だ。

21. お前たちの富への執着は異常なり。(注6)

وَيُحِبُّونَ الْمَالَ حُبًّا جَنًّا ۝

22. 断じて然らず、大地が粉々に砕かれる時、

كَلَّا إِذَا دُكَّتِ الْأَرْضُ دَكًّا دَكًّا ۝

23. 主は列をなす数多の天使等を従えて出御し給う。(注7)

وَجَاءَ رَبُّكَ وَالْمَلَكُ صَفًّا صَفًّا ۝

24. その日、地獄は身近に出現す。而して人間は己が所業を想起せん。されど、想起したとて、何の益するところぞ。

وَجَاءَ يَوْمَئِذٍ بِجَهَنَّمَ يَوْمَئِذٍ يَتَذَكَّرُ الْإِنْسَانُ وَأَنَّى لَهُ الذِّكْرُ ۝

25. 人間は云わん、「この日を知らば、善行を積みたりしものを！」と。

يَقُولُ يَلَيْتَنِي قَدَّمْتُ رِحَابِي ۝

26. その日何人も、主が罰する如く罰し得る者なし。

يَوْمَئِذٍ لَا يُعَذِّبُ عَذَابَهُ أَحَدٌ ۝

27. また何人も、主が縛る如く縛り得る者なし。(注8)

وَلَا يُوثِقُ وَثَاقَهُ أَحَدٌ ۝

28. おお、汝魂よ、安んじて、

يَا أَيَّتُهَا النَّفْسُ الْمُطْمَئِنَّةُ ۝

29. 主の許へ帰れ、自ら満悦し、且つ主に嘉されつつ。(注9)

انْزِعِي إِلَىٰ رَبِّكِ رَاضِيَةً مَرْضِيَّةً ۝

30. されど汝、わが選びし僕等の中に入れ、

فَادْخُلِي فِي عِبَادِي ۝

31. わが樂園の中に。

إِنِّي وَأَدْخُلِي جَنَّاتِي ۝

注6 当節は、富を貯える者に、蓄積の悪をよく理解させる。金錢に対する極端な執着は、良い目的の爲には使わず、唯、ひたすら自分の財産を増やしたいという節度のない欲望を、人の心に生じさせる。それは、財産獲得の爲には手段を選ばない様に人を変え、人の道徳的退廃をもたす。イスラム教は、個人と同様、社会の道徳の健全さにも非常に配慮を示す。社会が健全である爲には、物が広く行き渡り、富がゆるやかに循環する事が必要である。

注7 天使達が随行する「出御」とは、クルアーンの成句で、差し迫った破壊的な神の罰を表す。

注8 神のひき白は、ゆつくりしかし非常に細かくひく。神は、すぐには罰を下されないが、神の罰が下れる時、それは最も破壊的なものである。74章29節も参照の事。

注9 これは、人が神を喜び、神が人に満足なさる、精神発達の最高の段階である(58:23)。天の段階と呼ばれるこの段階に至れば、人は道徳的な弱さに免疫を持つ様になり、独特の精神的な強さで支えられる。人は神と一体になり、神無しには存在し得ない。この素晴らしい精神的变化が人に生じるのは、現世においてであり、来世ではない。又、天国へ入る許可が与えられるのは、どこでもない、この現世においてである。



アル・バラド
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①
2. われはこの邑にかけて誓う、(注1)لَا أَقْسِمُ بِهَذَا الْبَلَدِ ②
3. 汝はこの邑に住む、وَأَنْتَ حِلٌّ بِهَذَا الْبَلَدِ ③
4. われは父と子にかけて誓う、(注2)وَوَالِدٍ وَمَا وَلَدٌ ④
5. げにわれらは、人間を、苦難に立ち向かわせるよう創りたり。(注3)لَقَدْ خَلَقْنَا الْإِنْسَانَ فِي كَبَدٍ ⑤
6. 人間は、何人もこの自分を支配せず、と思うか？(注4)أَيَحْسَبُ أَنْ لَنْ يُقَدِّرَ عَلَيْهِ أَحَدٌ ⑥
7. 人間は云う、「我は莫大なる富を費せり」と。(注5)يَقُولُ أَهْلَكْتُ مَا لَا بَدَأُ ⑦
8. 人間は、何人もこの自分を見ず、と思うか？أَيَحْسَبُ أَنْ لَمْ يَرِكْ أَحَدٌ ⑧
9. われらは人間に、両眼と、أَلَمْ نَجْعَلْ لَهُ عَيْنَيْنِ ⑨
10. 舌と、上下の唇とを与えたるに非ざるか？وَلِسَانًا وَشَفَتَيْنِ ⑩

注1 当節は次の事を意味する。「お前達はイスラム教に対して悪い企みを抱いている。ああ不信者達よ、お前達が何を心に抱いているか私は知っている。しかし、お前達の望み通りにはいかないと告げておく。私は、この事実の証人、としてこの町を挙げる。」

注2 カーバの基礎が作られる間に、アブラハム預言者とその息子イシュマエルは、メッカの人々の中から神の使者を立たされるように、神に祈った(2: 129, 130)。この様に「父と子」は、モハammad預言者の真実を証明する。

注3 モハammad預言者はメッカを追放され、勝利者としてそこへ戻り、メッカは彼に屈服し、その住民はイスラム教の輪に加わるであろう。上記の預言は、モハammad預言者とその民が非常な困難をぐぐり抜けて初めて成就されるであろう。つまり、彼等が目標を達成するには、激しく続く戦いが求められるであろう。

注4 神は不信心者の悪の企てに気付かれています。神はその力を持たれており、彼等の計画を無効にされるであろう。

注5 イスラム教の普及を阻止しようと、対抗者はあらゆる手を尽くし、多額の金を使うが、そのままやりたい様にさせなさい。彼等の企みは成功せず、イスラム教が、精神的、政治的勝利を治め続けるであろう。当節はこの様に述べている。

11. またわれらは、人間に善と惡の二つの道を
指摘せり。(注6) وَهَدَيْنَاهُ الْجَدَيْنِ ⑪
12. されど人間は嶮岨な道を採ろうとせじ。(注7) فَلَا اقْتَحَمَ الْعَقَبَةَ ⑫
13. 嶮岨の何たるかを汝に知らしむるものは何
ぞや? وَمَا أَدْرَاكَ مَا الْعَقَبَةُ ⑬
14. そは奴隷を解き放すことなり。 فَكَ رَقَبَةً ⑭
15. 或いは飢饉の時に إِذَا طَعِمَ فِي يَوْمٍ ذِي مَسْغَبَةٍ ⑮
16. 近親の孤児や、 يَتِيمًا ذَا مَقْرَبَةٍ ⑯
17. 地面に臥す貧者を養うことなり。(注8) أَوْ مَسْكِينًا ذَا مَتْرَبَةٍ ⑰
18. 而して信者の仲間に入り、互に忍耐すべく
励まし合い、且つ情けをすすめ合うことな
り。(注9) ثُمَّ كَانَ مِنَ الَّذِينَ آمَنُوا وَتَوَصَّوْا بِالْأَصْبِرِ وَأَوَّصُوا بِالْأَنْصِرِ ⑱
19. これ等はすなわち、右側の衆なり。 أُولَئِكَ أَصْحَابُ الْمَيْمَنَةِ ⑲
20. されどわれらの神兆を信ぜぬ徒輩、彼等は
左側の衆なり。 وَالَّذِينَ كَفَرُوا يَأْتِيَانَهُمُ أَصْحَابُ الشُّمَّةِ ⑳
21. 彼等の周囲には業火が覆いかぶさるべし。
(注10) عَلَيْهِمْ نَارٌ مُّؤَصَّدَةٌ ㉑

注6 人が正しい道を見出し、悪から正義へ、偽りから真実へと変わる為の手段を全て、神は人に与えられた。人は、善悪の区別をつける為に精神的そして肉体的にも日が与えられ、導きを求める為に、舌と二枚の唇を授けられた。とりわけ、持てる力を全て注いで成就する様にと、神は人の前に至高の目的を置かれた。

注7 モハammad預言者を通して、神は、人が精神的、物質的に最大の進歩を遂げる為の方法、手段を全て示されたが、人はこの目的を成し遂げる為に、必要な犠牲を払う事を拒んだ。

注8 14-17節は、人の道徳性を向上させる二つの方法を述べている。(1)奴隷解放。つまり、社会の抑圧された階層をこの世で同等の仲間になで引き上げる事。(2)孤児や貧しい人々が、自立し、社会に役立つ一員となる様手助けする事。

注9 先の数節で述べられた善行だけでは、社会全体が向上するにはまだ不十分である。道徳の正道に対する絶えざる忠誠と徳を他の人々に伝える行為が伴った、優れた理想と正しい主義も又、前途の高い目的を達成する為には欠かせないのである。

注10 四方から迫る火が最も破壊的となる。



アッシャムス

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. 太陽、(注1) その朝の輝きにかけて、(注2)

وَالشَّيْسِ وَضُحَاهَا

3. その太陽に追隨する月にかけて、(注3)

وَالْقَمَرِ إِذَا تَلَّهَا

4. 太陽がその壯觀さを見せる真昼にかけて、
(注4)

وَالنَّهَارِ إِذَا تَجَلَّىٰهَا

5. 太陽の光の上に帷を引く夜にかけて、(注5)

وَاللَّيْلِ إِذَا يَغْشَىٰهَا

6. 天と之をうち建て給える者にかけて、

وَالسَّمَاءِ وَمَا بَنَاهَا

7. 大地と之をうちあげ給える者にかけて、

وَالْأَرْضِ وَمَا طَحَاهَا

注1 当節の「太陽」は精神界の太陽、モハammad預言者を指す。彼は魂の光の源であり、終わりの時まで世を照らし続けるであろう。

注2 クルアーンの誓いは、その奥に深い意味を含む。神の戒律は神の業の二面、明白なものと推定によるものを表す。前者は理解し易いが、後者の理解には誤りの可能性がある。神はその宣誓の中で、明らかなものよりも推測されるものに注意を向けられた。2-7節の誓いにある、太陽と月、昼と夜、天と地は明白なものに属し、その属性は広く知られている事、とそれ等の節に述べられている。しかし、人の魂に見られるこの同じ属性は明白ではない。人の魂にこれ等の属性が存在するという推論を導く為に、神は神の明白なる業を証言する様命じられた。37章2節も参照の事。

注3 「月」も又モハammad預言者を指す。それは彼が神より光を授かり、それを精神の闇の世に伝えたからである。あるいはこの言葉は、聖職者や宗教の指導者達、特にモハammad預言者の偉大な代理である約束されたメシヤを指すともいえる。彼はモハammad預言者より真実の光を借り受け、道德と精神退廢の闇を払う為に、それを世に伝える事となっていた。

注4 「真昼」とは、イスラム教のお告げとその創設者の実在が確証され、それを世に伝える為に基盤が築かれた時を指しているようだ。当節のこの言葉は、イスラム教の光がきらびやかに輝いていた、モハammad預言者によって正しく導かれたカリフの時代を特に示しているのかもしれない。

注5 「夜」は、イスラム教の光が覆い隠され、世の人々の目から見えなくなったイスラム教徒の退廢の時を指しているようだ。この四節(2-5)は、イスラム教の波乱に富んだ歴史の内の四時期に触れている。(1)精神の太陽(モハammad預言者)が精神の空に燃える様に輝く、モハammad預言者自身の時代。(2)モハammad預言者から発する光が闇の世に照り映える、約束されたメシヤの時代。(3)イスラム教の光がまだ輝いていた、

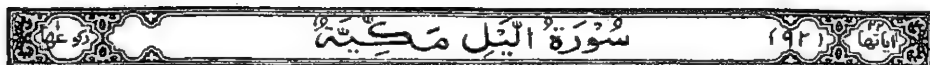
8. 魂と之^{これ}を完成し給える者にかけて、
 9. すなわち、何が不正で何が公正なるかを魂
 に示唆し給える御方^{おんかた}にかけて誓う。(注6)
 10. げに魂を清める者は栄え、
 11. 之^{これ}を汚す者は亡ぶ。
 12. サムード族はその邪悪さ故に真理を拒みたり。
 13. 彼等の中で最も卑劣な者どもが起ち上りし時、
 14. アッラーの使徒は云えり、「アッラーの
 雌駱駝^{めすらくだ}なれば、水飲むことを妨げるなかれ」
 と。(注7)
 15. 然^{しか}るに彼等は使徒の言を拒み、雌駱駝^{めすらくだ}の 膺^{ひかがみ}
 を切りたれば、主はその罪ゆえに彼等を
 抹殺^{まつせつ}し、皆一同ひとしく懲罰せり。
 16. 主はその結果^{こりよ}を顧慮せず。(注8)
- وَنَفْسٍ وَمَا سَوَّاهَا ﴿٥﴾
 فَأَلْهَمَهَا فُجُورَهَا وَتَقْوَاهَا ﴿٦﴾
 قَدْ أَفْلَحَ مَنْ زَكَّاهَا ﴿٧﴾
 وَقَدْ خَابَ مَنْ دَسَّاهَا ﴿٨﴾
 كَذَّبَتْ ثَمُودُ بِطَغْوَاهَا ﴿٩﴾
 إِذِ انْبَعَثَ أَشْقَاهَا ﴿١٠﴾
 فَقَالَ لَهُمْ رَسُولُ اللَّهِ نَاقَةَ اللَّهِ وَسُقْيَاهَا ﴿١١﴾
 فَكَذَّبُوهُ فَفَقَرُوا هَاهُنَا ذُلٌّ عَلَيْهِمْ فِي يَوْمٍ نَزُومُ بِقُؤُوتِهِمْ فُسُوهُهَا ﴿١٢﴾
 وَلَا يَخَافُ عُقْبَاهَا ﴿١٣﴾

モハammad預言者直後の後継者の時代。(4)イスラム教が栄光の極みにあった初めの三世紀間の後、精神の闇が世を覆った時代。

注6 神は人間の本质に善と悪の感覚を植え付けられ、悪を避け善を選ぶ事で魂の完成に到達できる事を、人間に示された。

注7 サーレ預言者は、神のお告げを伝える為に雌の駱駝にまたがり各地へ廻いた。駱駝の自由な動きを妨げる事は、サーレ自身を妨害し、神より彼に託された神聖な義務の遂行を妨げるに等しいことであった。ある意味で、サーレは、全ての神の指導者と同じく、神の雌の駱駝なのであった。

注8 ある民族が神の罰を受け滅ぼされる時、その破壊を生き延びる者には、構われない。又は、神は、彼等が如何に悲惨な状況に置かれるかには留意されない事を意味する。



アル・ライル

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名にかけて。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. 夜、すべてを覆い包む時にかけて、(注1)

وَالْيَلِ إِذَا يَغْشَىٰ

3. 昼、光り輝く時にかけて、(注2)

وَالنَّهَارِ إِذَا تَجَلَّىٰ

4. また雄雌を創り給える者にかけて誓う。(注3)

وَمَا خَلَقَ الذَّكَرَ وَالْأُنثَىٰ

5. げにお前たちの精進は種々様々なり。(注4)

إِنَّ سَعْيَكُمْ لَشَتَىٰ

6. されど、アッラーのために施しをなし、且つ公正なる者、

فَأَمَّا مَنْ آعْطَىٰ وَآتَقَىٰ

7. 而して正義を実証する者のために、(注5)

وَصَدَقَ بِالْحُسْنَىٰ

8. われらは幸福への道をすべて容易ならしめん。(注6)

فَسَيَسِّرُهُ لِيُيسِّرَ

注1 先の章において、主な主題は「太陽」つまり、あらゆる光の源であるモハammad預言者であった。太陽や昼が月や夜より先に語られるのは、この為である。しかし当章では、信者と不信心者の対比が始められる。後者は一般に人数が多く、より大きな権力を振うので、不信心者を表す夜が、信者を表す昼より前に述べられる。

注2 先の章の対応する節に用いられた「壮观さを見せる」に代えて、当節では「光り輝く」と言う語を使っている事から、先の章では、神の指導者の高い精神の発達に重きを置かれたが、当章では、神の教義を学び吸収する為、弟子達の素晴らしい能力を強調している事が示されている。

注3 人の誕生は、二個の異性の結び付きによるものである。一方の性(男性)の特質は与える事であり、他方(女性)のそれは受ける事である。物質界同様、精神界にも男性、すなわち、教え導く神の偉大なる預言者及び神の指導者と、精神界の女性、すなわち、神の教義に得るところある彼等の弟子達、が存在する。当節は、完全なる指導者、モハammad預言者と、その最善の弟子達、すなわち彼の仲間が力を合わせる事により、新たな世が真に生まれようとしている、と暗示している。

注4 当節は、信者と不信心者の大きく異なる目標、及びそれぞれの目標達成に向かう努力の相違に、目を向けている。信者の努力は真理の普及に向けられ、他方不信心者のそれは、真理の普及を阻止する事にある。この両者の努力の結果は、当然異なるに違いない。

注5 当節及び前節には、人生で成功を治める人々の三つの特質が述べられている。かいつまんで言えば、彼等は行い感情、思考の正しい者で、これ等の特質を信者は十二分に有する。

注6 先の二節に述べられた三つの特質を持つ人は、自らの行為が望ましい結果を生み出すと気付くであろう。あるいは、善行を為す事はこの様な人には容易になり、彼は又それを喜んで、と当節は意味するのかもしれない。

9. されど強欲で、尊大且つ冷淡な者、

وَأَمَّا مَنْ بَخِلَ وَاسْتَغْنَىٰ ⑨

10. 而して正義を拒む者には、(注7)

وَكَذَّبَ بِالْحُسْنَىٰ ⑩

11. われらは苦難への道を容易ならしめん。(注8)

فَسَيُسِّرُّهُ الْعُسْرَىٰ ⑪

12. 墮落する時、その財宝はその者に役立たざるべし。

وَمَا يُغْنِي عَنْهُ مَالُهُ إِذَا تَرَدَّىٰ ⑫

13. 導くは、げにわれらの務めなり。

إِن عَلَيْنَا الْهُدَىٰ ⑬

14. 而して、来世も現世もわれらの所有なり。(注9)

وَأَنَّ لَنَا الْآخِرَةَ وَالْأُولَىٰ ⑭

15. さればわれは、燃え盛る業火をお前たちに警告す。

فَأَنْذَرْتُكُمْ نَارًا تَلَظَّىٰ ⑮

16. 最も性悪な者を除いて、その中に入れられざるべし、

لَا يَصِلُهَا إِلَّا الْأَشْقَىٰ ⑯

17. そは真理を拒否し、その背を向けし者なり。

الَّذِي كَذَّبَ وَتَوَلَّىٰ ⑰

18. されど義しい者は、業火に近づけられざるべし、

وَسَيُجَنَّبُهَا الْأَتْقَىٰ ⑱

19. そは清廉潔白ならんがために、己が財産を擲つ者なり。

الَّذِي يُؤْتِي مَالَهُ يَتَرَكُ ⑲

20. 誰かに恩義があるためでなく、また恩返しを当にするわけでもなし。

وَمَا لِأَحَدٍ عِنْدَهُ مِنْ نِعْمَةٍ تُجْزَىٰ ⑳

21. ただひたすらに至高き主の喜びを求めんがために。(注10)

إِلَّا ابْتِغَاءَ وَجْهِ رَبِّهِ الْأَعْلَىٰ ㉑

22. されば主は、かかる者を必ず嘉すべし。

وَلَسَوْفَ يَرْضَىٰ ㉒

注7 先の二節(6, 7)に述べられた三つの善なる特質とは対照的に、人の精神的破滅をもたらす三つの悪なる特質が、この二節(9, 10)に述べられている。

注8 前節で触れた人の行為は、的をはずし、望みとは逆の結果をもたらす。あるいは、このような者にとり、善行を為すのは難しくなる、と当節は意味しているともいえる。

注9 邪悪な不信心者は、現世で敗北を喫し、来世で罰を受けるであろう。それは、現世、来世共に神の支配下にあるからである。当節は又、「万物の始まりと終わりはわれらに属する。」とも意味しているのだらう。

注10 高潔なる信者は他の人々に善行を施し、それに対する見返りを受ける事無く、唯、神の創造物の役に立ち、天主の喜びを得たいと願うのである。



アル・ドゥハー
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①
2. 朝の輝きにかけて、(注1) وَالضُّحَىٰ ②
3. 並びに夜の静寂にかけて誓う。(注2) وَاللَّيْلِ إِذَا سَجَىٰ ③
4. 汝の主は汝を見棄てざりき、また汝に立腹せず。(注3) مَا وَدَّعَكَ رَبُّكَ وَمَا قَلَىٰ ④
5. げに汝の後の状態は、先の状態よりも良し。(注4) وَلَلْآخِرَةُ خَيْرٌ لَّكَ مِنَ الْأُولَىٰ ⑤
6. しかも主はやがて汝に慈悲を垂れ給わば、汝は満足せん。 وَلَسَوْفَ يُعْطِيكَ رَبُّكَ فَتَرْضَىٰ ⑥
7. 孤児の汝を拾うて庇護を賜いしは、主に非ずや？(注5) أَلَمْ يَجِدْكَ يَتِيمًا فَآوَىٰ ⑦

注1 「朝の輝きにかけて」は、イスラム教の勃興を指すようだ。又、モハammad預言者が、万人の信心深い聖なる戦上からなる軍隊の先頭に立ってメッカに入り、カーバガ偶像を廃された特別の「朝」を述べてもいるようだ。

注2 「夜」は、イスラム教退廃の長期間を示しているようだ。更には、闇が訪れた後、モハammad預言者が家を出て、アブー・バクルとソール洞窟に避難した、特別の夜を指してもいるようだ。事実、モハammad預言者がメッカを去った夜、そして闇が訪れた日は、モハammad預言者の全生涯における様々な浮き沈みを、一言で表したものである。

注3 モハammad預言者の全ての昼と夜、彼の大いなる成功と一時的な敗北、彼の喜びと苦難、彼の夜の礼拝と昼の活動、これ等全ては、神が彼と共にあられる事を証している。

注4 モハammad預言者の人生のあらゆる瞬間は、それ以前より更に良いものであった。

注5 モハammad預言者は、比喩のみならず、事実孤児であった。彼の孤児の身の上は、非常に過酷なものであった。父親は彼が生まれる前に、母親は彼が六才になるかならないかのうちに亡くなり、母親の死後彼の世話をした祖父アブドル・ムッタリブは、貧しい伯父に彼を託して二年後に死んだ。この様にモハammad預言者は、幼くして父母の保護と愛を奪われた。しかし彼は、目下の者、目上の者から、彼の仲間や同胞から、後には彼の弟子達から、一女性から生まれた者誰もが(人間誰もが)、これまで受けることがなかった。又今後とも受ける事が無いであろう程の多くの愛を受けたのであった。

8. 主は迷える汝を見つけ、己が手許に導けり。

(注6)

وَوَجَدَكَ ضَالًّا فَهَدَىٰ ۝

9. 而して、貧乏ぐらしを富^{とみさか}榮えしめ給いしに
非ずや? (注7)

وَوَجَدَكَ عَائِلًا فَأَغْنَىٰ ۝

10. されば孤児を虐げるなかれ。

فَأَمَّا الْيَتِيمَ فَلَا تَقْهَرْ ۝

11. また助けを請う者^{しか}を叱るなかれ。

وَأَمَّا السَّائِلَ فَلَا تَنْهَرْ ۝

12. 而して主の恵み深さを宣言せよ。(注8)

وَأَمَّا بِنِعْمَةِ رَبِّكَ فَحَدِّثْ ۝

注6 「迷う」には、一般的な意味として様々な意味がある。道に迷う、という意。進むかどうかためらう意。また、物事の追求に努めている際の無我夢中の状況を示す意がある。当節は、道に迷ったり、ためらったりする意ではなく、あるものを求めて夢中になっている意と、解される。(1)モハammad預言者は神に到達する手段を求めてさ迷ったが、神は、彼を望みの目的地へ導く戒律を彼に示された。(2)モハammad預言者は、彼が追求するものへ達する道を、如何にして見つけたら良いか分からなかったが、神が彼をそこへ導かれた。(3)彼が心から一族の人々の事を思っていたので、神は彼に、彼等に対する完全な手引きを与えられた。(4)彼は世の人々の目から隠されていたが、神が彼を見出し、神へ導く者としての任務の為に彼を選ばれた。この様に、「迷う」という言葉は、モハammad預言者を非難するのではなく、賞め誉える為に用いられている。道に迷ったという意味では、この言葉はモハammad預言者に当てはまらない。それは、クルアーンの他の箇所(53:3)によれば、彼は誤りを犯したり、道をそれる事はなかったからである。更に、この章の第6節は、ある相続いで起こる出来事を表している。第7、8、9節は第10、11、12節にそれぞれ対応し、深く結びついている。第8節。「迷う」は第11節で「請う」に置き換えられ、「神の下へ導かれる様にと神の助けを求めた人」、又は「神の手引を授けられる様求めた人」、と後者は前者の意味を説明している。当節は又、「神は汝が神を求めている事に気付かれ、汝を神の元へ導かれた」とも意味しているようだ。

注7 モハammad預言者は、孤児としてその人生を始め、アラビア全土のまぎれもない支配者となりその生涯を閉じた。

注8 第7、8節は、モハammad預言者に授けられた神の恩恵について語り、第10、11、12節では、モハammad預言者は、同様の恩恵をその仲間^{仲間に}に施す事で、神への謝意を示す様命ぜられている。この戒律は彼の弟子達へも等しく向けられたものである。



アル・インシラーフ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. われらは汝のためにその心を開き、

الْمَ نَشْرَحْ لَكَ صَدْرَكَ ②

3. 汝より重荷をとり除けたるに非ずや、

وَوَضَعْنَا عَنْكَ وِزْرَكَ ③

4. 汝の背にのしかかれるその重荷を? (注1)

الَّذِي أَنْقَضَ ظَهْرَكَ ④

5. 前してわれらは、汝の名声を高からしめたり。(注2)

وَرَفَعْنَا لَكَ ذِكْرَكَ ⑤

6. げに苦勞の後には樂あり。(注3)

فَإِنَّ مَعَ الْعُسْرِ يُسْرًا ⑥

7. 然り、げに苦勞の後には樂あり。

إِنَّ مَعَ الْعُسْرِ يُسْرًا ⑦

8. されば手隙のときは、懸命に努力し、

وَإِذَا فَرَغْتَ فَانصَبْ ⑧

注1 モハammad預言者は、これまで誰も託された事のない様な、神経がすり減り忍耐を要する任務、すなわち、墮落した人々を、道德的退魔の深みから、道德的卓越の頂点へと引き上げ、その後彼等を通して、正道と無知と迷信のあかにまみれた全人類を浄化する任務を、課せられていた。これは、事実、彼をほとんど押しつぶそうとする程に重い責任であったが、神は彼の重荷を軽くされた。

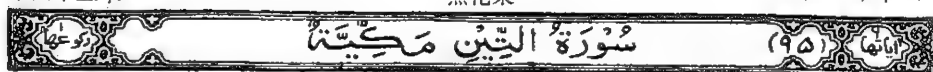
注2 この章はモハammad預言者の出現の二年目又は三年目に啓示された。この時はまだ、モハammad預言者は近隣以外ではほとんど知られていなかったが、間もなく彼は、宗教の指導者の中で、最も有名で、かつ愛され、尊敬され、成功を治める者となった。宗教界においても、又俗界においても、モハammad預言者程、従う者の愛と尊敬を集めた指導者は、他に見られなかった。

注3 「げに、苦勞の後には樂あり」というのは、二度繰り返されている。これは次の事を示している。イスラム教は非常に苦しい時を経ねばならず、二度に渡りその存在の危機に直面する。一度日は、イスラム教創始の数年間、二度日が「末H」である。このどちらの時にも、イスラム教は苦難の中から新たな力を身に付け立ち上がるであろう。これ等の節は又、モハammad預言者やイスラム教徒が直面する苦難は一時的のものであるが、彼等の成功は永遠に且つ常に拡大されると示している。

وَالْيَرْبِكُ فَارْعَبْ ۝

9. ひたすら主に仕え奉れ。(注4)

注4 精神的発達の終わり無き展望がモハammad預言者の前にあり、彼の行く道を遮る困難を克服した後、成し遂げた成功に満足して休む事なく、一つの峰を登り終え、次の峰に向かわなければならない。そして彼の注意は全て、墮落した人類の再生へと、又、地上に神の王国を築く事へと向けられるべきである。以上の事に、モハammad預言者は確信を持って従う。当節は又、次の事も示している様だ。モハammad預言者は、弟子への説教や他の俗事の処理という日々の業を終え、心をこめて神に向かわなければならない。それは、彼の精神的な旅が終わりのないものだからである。



アル・ティーン

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. 無花果と橄欖にかけて、(注1)

وَالَّتَيْنِ وَالزَّيْتُونِ

3. シナイ山にかけて、

وَكُورِ سَيْنِينَ

4. また安全なるこの邑にかけて誓う。

وَهَذَا الْبَلَدِ الْأَمِينِ

5. げにわれらは、人間を最上の形態に創りたり。

لَقَدْ خَلَقْنَا الْإِنْسَانَ فِي أَحْسَنِ تَقْوِيمٍ

6. されど、もし悪行をなさば、われらは之を最も卑き者に落とす、(注2)

ثُمَّ رَدَدْنَاهُ أَسْفَلَ سَافِلِينَ

注1 「無花果」「橄欖(オリーブ)」「シナイ山」「安全なる邑」左記の言葉は、モハammad預言者はその使命を果たす、という当章に述べられた主張を証す証拠として用いられて来た。「無花果」「橄欖」はイエスを、「シナイ山」はモーゼを、「安全なる邑」はモハammad預言者をそれぞれ象徴している。この三節は共に、次の有名な聖書の言葉を示している。「主はシナイから来られ、セイルから彼等を照らし、パランの山から光を放たれた。」(中命記33:2)。だが、注釈者の中には、「無花果」は仏教を、「橄欖」はキリスト教を、「シナイ山」はユダヤ教を、そして、「安全なる邑」はイスラム教をそれぞれ指す、と解する人々もいる。しかし、これ等の節で用いられた象徴的表現の最善の解釈は次のものである。この四つの言葉は、人間の精神発達史における四つの時代を表す。「無花果」はアダムの時代を、「橄欖」はノアの時代を、「シナイ山」はモーゼの時代を、そして「安全なる邑」はイスラム教の時代を象徴している。この解釈は、聖書やクルアーンが十分に裏付けている。アダムとイブが禁断の実を食べ、自分達が裸である事に気付いた時、彼等はいちじくの葉をつづり合わせて、自分達の腰の被いを作った。(創世記3:7)。ノアについては次の様である。「鳩は夕方になって、彼のもとに帰って来た。すると見よ、むしり取ったばかりのオリーブの若葉がそのくちばしにあるではないか。それで、ノアは水が地から引いたのを知った。」(創世記8:11)。又、モーゼがシナイ山で神の啓示を受けた事、更には、イスラム教誕生の地メッカは、有史以前より「安全なる邑」と認められて来た事は、衆知の事実である。この四時代は、人が完全な進歩を遂げるまでに通り抜ける四つの時代を表す。アダムの時代に人間の文明の基礎が築かれた。ノアは律法の創始者であった。モーゼの時代には、律法の詳細が啓示され、モハammad預言者の出現と共に、神の啓示はあらゆる面で完成された。こうして、人間は、知的、社会的、道徳的、そして精神的に完全な発達を遂げたのである。「無花果」は又、モーゼの律法を、「橄欖」はイスラム教の律法の象徴でもある。この直喩は、「シナイ山」「安全なる邑」の語に、より具体的に表されている。

注2 人間は、自ずと善行に向かう純粋な性質を持って生まれたが、同時に、意志と行動の自由裁量を大幅に与えられた。人間は、究極の道徳的発達を遂げ、神の属性が写し出される鏡となる様精神的に高まる為に、大いなる力と創造力を生まれながらにして授けられた。しかし、もし人間が神に賜った能力や特質を誤って使

7. 但し信じて善行をなす者は除く。彼等には
尽きせぬ報奨あり。

إِلَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ فَلَهُمْ أَجْرٌ
غَيْرٌ مَمْنُونٍ ⑦

8. さればこの後、審判について汝に、そは虚偽
なりと云い得る者ありや? (注3)

فَمَا يَكْذِبُكَ بَعْدُ بِالذِّينِ ⑧

9. アッラーは最もすぐれたる審判者に非ざる
か?

أَلَيْسَ اللَّهُ بِأَحْكَمِ الْحَاكِمِينَ ⑨

えば、獣よりも卑しくなり、次節が示す通り、悪魔の化身となるのである。つまりは、人間には、善行をも、
又同時に悪行をも為す可能性があるのである。

注3 人間は、非常に高度な精神的運命を遂げる為に作り出され、この偉大な目的達成を助ける為に、神は、
アダム、ノア、モーゼ、モハammad預言者のごとき神の使徒を送り出された。もし人間が生来の能力を適切に
用いず、神のお告げを拒み、神の使徒に刃向かうならば、人間は罰せられる事となる。この様な時に、現世に、
又来世にも裁きの口があり、最高の審判長であられる神の戒律が罰を下さざるを得ず、人間の行為が報い無し
では済まないのは当然であり、これを否定する事など誰にできようか?



アル・アラク

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く^{あまね}アッラーの御名^{あな}において。
2. 汝、創造者なる主の御名^{あな}において伝えよ、
3. 一凝血より人間を創り給える。(注1)
4. 伝えよ、主は最も慈悲深き者にましまして、
(注2)
5. 人間に筆の妙用^{みようよう}と、(注3)
6. その知らざることを教えたり。
7. 然るに、人間は必ず罪を犯す、
8. 他に頼らずとも暮らしてゆけると思う故に。
9. 帰還は必ず主の御許^{みもと}なり。
10. 汝妨げる者を見たるか、
11. われらの一人の僕が礼拝を捧げる時? (注4)

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

اقْرَأْ بِاسْمِ رَبِّكَ الَّذِي خَلَقَ ②

خَلَقَ الْإِنْسَانَ مِنْ عَلَقٍ ③

اقْرَأْ وَرَبُّكَ الْأَكْرَمُ ④

الَّذِي عَلَّمَ بِالْقَلَمِ ⑤

عَلَّمَ الْإِنْسَانَ مَا لَمْ يَعْلَمْ ⑥

كَلَّا إِنَّ الْإِنْسَانَ لِرَبِّهِ لَكَنَّا ⑦

أَن رَّاهُ اسْتَفْنَى ⑧

إِنَّ إِلَىٰ رَبِّكَ الرُّجْعَى ⑨

أَرَأَيْتَ الَّذِي يَنْهَى ⑩

عَبْدًا إِذَا صَلَّى ⑪

注1 神の愛は人の本質に深くしみ込まれており、この生得^{うづりつ}の衝動により神の愛が現れるのに気付いた人がいたとしても当然であった。と当節は示している。この人こそ、その創造主を心から愛した、モハammad預言者であった。当節の「人間」は、本文中に与えられた意味以外に、完全なる人、モハammad預言者を指す。

注2 クルアーンがより多く読まれ世に示される程、神の神聖と人間の尊厳はより良く理解される。

注3 クルアーンを書き記し、紛失や歪曲から守る為に、「筆」は非常に重要な役割を果たすであろう、との預言が当節に含まれている様だ。クルアーンに啓示された精神科学と神秘、クルアーンの研究が刺激を与える自然科学、「筆」はこれ等の普及に大いに貢献した、とも当節は述べている。敬意を払うでもなく、ほとんど使用する事もない人々の間で啓示され、しかも啓示された人自身が読み書きも出来なかったという、その聖典の中に「筆」が多用されているのは、非常に重要な意味を持つ。

注4 この語は、祈りをささげるイスラム教徒全てに、特にモハammad預言者に向けられている。

12. もしわれらの僕が嚮導に従い、
 13. 或いは公正なることを命じなば、妨害者の
 末路や如何に、我に告げよ。
 14. もし妨害者が真理を拒否し、之に背を向け
 なば、彼如何に暮らさんとするかをわれに
 告げよ。
 15. 彼はアッラーがすべてを照覧することを知
 らざるか？
 16. 然り、彼もし止めずば、われらは彼の前髪
 をとって必ず引っ捉えん、
 17. 罪深い前髪を掴んで。
 18. かくて彼にその仲間を呼び集めさせよ。
 19. われらもまた彼を罰する天使たちを呼ば
 ん。
 20. 断じて然らず、汝彼に従うなかれ、平伏し
 て神に近づけ。

أَرَأَيْتَ إِنْ كَانَ عَلَىٰ الْهُدَىٰ ۝١٢

أَوْ أَمَرَ بِالتَّقْوَىٰ ۝١٣

أَرَأَيْتَ إِنْ كَذَّبَ وَتَوَلَّىٰ ۝١٤

أَلَمْ يَعْلَم بِأَنَّ اللَّهَ يَرَىٰ ۝١٥

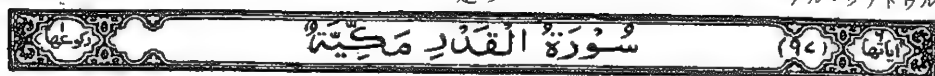
كَلَّا لَئِنْ لَمْ يَنْتَهِ لَنَسْفَعًا بِالنَّاصِيَةِ ۝١٦

نَاصِيَةٍ كَاذِبَةٍ خَاطِئَةٍ ۝١٧

فَلْيَدْعُ نَادِيَهُ ۝١٨

سَنَدْعُ الزَّبَانِيَةَ ۝١٩

كَلَّا لَا تُطِعْهُ وَاسْجُدْ وَاقْتَرِبْ ۝٢٠
 السَّجْدَةِ ۝٢١



アル・クアドウル
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く^{あまね}アッラーの御名^{あな}において。بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①
2. げにわれらは之^{これ}を定め^たの夜に(注1)降^{くだ}したり。(注2)إِنَّا أَنْزَلْنَاهُ فِي لَيْلَةِ الْقَدْرِ ②
3. 定め^たの夜のなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや?(注3)وَمَا أَزِيدُكَ مَا لَيْلَةُ الْقَدْرِ ③
4. 定め^たの夜とは、千の月にもまさるもの。(注4)لَيْلَةُ الْقَدْرِ خَيْرٌ مِنْ أَلْفِ شَهْرٍ ④
5. その夜、諸天使並びに聖霊は、その主の命を奉じ、すなわち一切の神命を携えて降臨し給う。(注5)تَنْزِيلُ الْمَلَكِ وَالرُّوحِ فَيُنْزِلُ بِهِمُ ⑤
مِنْ كُلِّ أَمْرٍ ⑥

注1 この語は、クルアーンが啓示された夜の莊重さ、重大さを示している。

注2 「定め」と「夜」の様々な意味を考慮すれば、当節は次の様に解釈さる。クルアーンが啓示されたのは、神の特別な力を表す為に取っておかれた夜であった。又は、他の全ての夜が合わさったのに等しい価値を持つ夜であった。あるいは、おごそかな夜。満ち足りた夜、つまり、クルアーンは、道徳的・精神的な人間の要求を全て十分に満たすのである。又、神は「定め^たの夜」にそれを啓示された、とも意味する。つまり、人の運命が定められ、世界の未来像が決定され、人類を導く正しい教義が来るべき時に、向けて制定された時に、クルアーンは啓示された。ある偉大な神の指導者が現れた時は、「定め^たの夜」とも呼ばれる。それは、当時罪と非行が満延し、悪の勢力がはびこっていたからであった。又、クルアーンが啓示され始めたラマダーンの、最後の10日間の異常な夜の中でも、際立った夜を指すとも解せる。あるいは、クルアーンが徐々に啓示されつつあった、モハammad預言者の23年の任期全てを指すとも言えよう。

注3 「定め^たの夜」の恩恵は、計り知れないものである。

注4 アラビア語で最大の数であるアルフ(千)は、数えきれない数字を表し、当節は、「定め^たの夜」が無数の月を合わせたよりも素晴らしいものである、と示している。つまり、モハammad預言者の時代は、他の時代全て合わせたものに遥かに勝るのである。当節は、イスラム教徒が苦難の中にあった時、彼等の間から神の指導者が現れた事を暗示している。千ヶ月はおおよそ一世紀に当たり、モハammad預言者は、次の様に語ったとされる。各世紀の初頭に、イスラム教を甦らせ、新たな生命と活力を与える神の指導者を、神はモハammad預言者の弟子達の中から立たせ続けられるであろう。

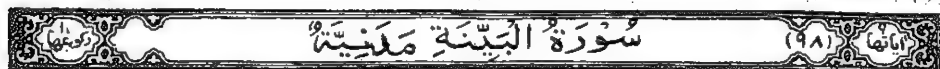
注5 「定め^たの夜」に、神の天使達が、神の使徒又は神の指導者が神の目的を推し進める手助けをしに降りて来る。そして、彼の弟子達は、神のお告げを広める為に、新たな命、新たな目覚めをもたらされるのである。

6. 黎明の光りたち昇るまで（注6）夜は平安
なり。（注7）

قَدْ سَلَّمَ فِي حَتَّىٰ مَطْلَعِ الْفَجْرِ ④

注6 「黎明の光りたち昇る」とは、苦難の夜が過ぎ去り、神の目的が優位に立つ夜明けを表す。

注7 ある預言者又は、神の指導者の時代に、困窮にあるイスラム教徒達に、特別の心の平安がもたらされる。その時彼等を奮い立たせるこの天の喜びは、あらゆる物質的、感覚的な喜びに勝るものである。



アル・バイイナ
(メダイナ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 經典の民の中の信ぜざる徒輩、並びに偶像崇拜者どもは、明証が彼等に至るまでは信用せざりき。(注1)
3. 明証とは、すなわち、アッラーの使徒が淨き聖典を彼等に誦述することなり、
4. 不変の掟がその中にある聖典を。(注2)
5. また經典を授かりし人々は、明証が彼等に至るまでは、諸宗派に分れざりき。
6. 彼等に命ぜられたることは、ただアッラーに仕え、遵奉の誠をつくし、公正で、礼拝を遵守し、且つ定め of 喜捨を納めることのみ。これすなわち真正の宗教なり。
7. げに經典の民の中の信ぜざる徒輩、並びに偶像崇拜者どもは、必ず地獄の火の中に落ち、永劫にその中に住みとどまらん。彼等は最悪の被造物なり。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

لَمْ يَكُنِ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ أَهْلِ الْكِتَابِ وَالشَّارِكِينَ مُنْفَكِينَ حَتَّى تَأْتِيَهُمُ الْبَيِّنَةُ ۝١

رَسُولٌ مِنَ اللَّهِ يَتْلُو صُحُفًا مُطَهَّرَةً ۝٢

فِيهَا كُتِبَ قِسْمَةٌ ۝٣

وَمَا تَفَرَّقَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ إِلَّا مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَتْهُمْ الْبَيِّنَةُ ۝٤

وَمَا أُمِرُوا إِلَّا لِيَعْبُدُوا اللَّهَ مُخْلِصِينَ لَهُ الدِّينَ ۚ حُنَفَاءَ وَيُقِيمُوا الصَّلَاةَ وَيُؤْتُوا الزَّكَاةَ وَذَلِكَ دِينُ الْقِسْمَةِ ۝٥

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ أَهْلِ الْكِتَابِ وَالشَّارِكِينَ فِي نَارِ جَهَنَّمَ خَالِدِينَ فِيهَا ۚ أُولَٰئِكَ هُمْ شَرُّ الْبَرِيَّةِ ۝٦

注1 クルアーンは、不信心者を二種類、キリスト教徒と偶像崇拜者（如何なる啓示書をも信じない人々）に分けた。

注2 クルアーンは、それ以前の啓示書の教義の中で、優れてしかも永遠に残るもの全てを要約し、更には、それ等の啓示書に欠け、しかも人の道徳的・精神的向上に無くてはならないより多くの教義を備えている。永遠に人の役に立つ、正しい規範・法則・法令・戒律全てが、それに含まれる。クルアーンは、いわば、それ等の啓示書の後ろ立てとなり、しかもそれ等にみられる欠陥や不純物を避けて来た。

8. げに信じて善行を積む人々―彼等は最良の被造物なり。

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ أُولَٰئِكَ هُمْ
خَيْرُ الْبَرِيَّةِ ⑤

9. 彼等の報奨は主の御許、すなわち河川流るエデンの園なり。彼等はその中に永劫に住まん。アッラーは彼等に満悦し、彼等はアッラーを賀し奉る。こは主を畏れ敬う者への報奨なり。(注3)

جَزَاؤُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ جَنَّاتٌ عَدْنٍ تَجْرِي مِنْ
تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا رَضِيَ اللَّهُ
عَنْهُمْ وَرَضُوا عَنْهُ ⑥ ذَٰلِكَ لِمَنْ خَشِيَ رَبَّهُ ⑥

注3 精神発達最高の段階は、人の意志が神の御意志と完全に一つになる時、達する事のできるものである。

سُورَةُ الزَّلْزَالَةِ مَكِّيَّةٌ

(49)

アル・ズィルザール

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み^{***}遍くアッラーの御名^{***}において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 大地が激しく揺れ動き、(注1)

إِذَا زُلْزِلَتِ الْأَرْضُ زِلْزَالَهَا ②

3. その中の荷を吹き上げる時、(注2)

وَأُخْرِجَتِ الْأَرْضُ أَثْقَالَهَا ③

4. 人間は云う、「大地に何が起りたるか?」と。
(注3)

وَقَالَ الْإِنْسَانُ مَا لَهَا ④

5. その日こそ、大地は諸々の消息を語らん、
(注4)

يَوْمَئِذٍ تُحَدِّثُ أَخْبَارَهَا ⑤

6. 主が大地に命じたるが故に。(注5)

يَا أَيُّهَا الْأَرْضُ أُولِي هَذَا ⑥

7. その日、(注6)人々はさまざまな集団に分れて、(注7)過ぎし日の己が所業を見せられるために現われ来たらん。

يَوْمَئِذٍ يَصْدُرُ النَّاسُ أَشْتَاتًا لِّيُرَوْا أَعْمَالُهُمْ ⑦

注1 世界中が、外的のみならず内面的にも、あらゆる激変を経験するであろう。

注2 (1)地球の内部が切り開かれ、鉱物資源が取り出されるであろう。❖精神科学のみならず、自然科学、特に地質学及び考古学に関して、あらゆる種類の膨大な量の知識が発表されるだろう。

注3 変化が何度も広範囲に及んで起きるであろう。そして余りにも広大な発見が為された為、人は驚きうろたえこう叫ぶ。「地球に何が起こったのだ?。」

注4 当節の意味を尋ねられた時、モハammad預言者は、「密に行なわれた事は全て、明るみに出されるであろう。」と述べたと記されている。(テルマディ)

注5 神がそう命じられた為、地球はその財宝を出すだろう。

注6 「末H」に人々は、その政治的・社会的・経済的利益を守る為に、政治的・経済的な基盤の上に、それぞれ集団を形成するであろう。そして、強力なギルド・カルテル・シンジケートが生じるのであろう。

注7 個々人が共同出資し、集団の努力が個々の努力に取って代わるであろう。それは集団をつくることの重要性を感じそれが良い結果をもたらすと考えるからである。

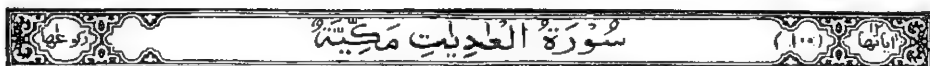
8. 極く僅かでも善を行える者はその善を見、

فَمَنْ يَعْمَلْ مِثْقَالَ ذَرَّةٍ خَيْرًا يَرَهُ ⑧

9. また極く僅かでも悪を行える者はその悪を見る（注8）べし。

وَمَنْ يَعْمَلْ مِثْقَالَ ذَرَّةٍ شَرًّا يَرَهُ ⑨

注8 人の行為は、良しにつけ悪しきにつけ、無駄ではない。それは、それなりの結果を生み出すに違いなく、又、事実そうである。



アル・アーディヤート
(メッカ啓示)

- | | |
|------------------------------|--|
| 1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 | بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ① |
| 2. 鼻息あらく疾駆して、 | وَالْعُدِيَّتِ صَبْحًا ② |
| 3. 蹄に火花を散らしつつ、(注1) | فَالْمُورِيَّتِ قَدْ حَا ③ |
| 4. 黎明に急襲し、(注2) | فَالْمُعِيرَتِ صُبْحًا ④ |
| 5. 砂塵をまき揚げ、(注3) | فَأَثَرَنَ بِهِ نَقْعًا ⑤ |
| 6. 敵陣深く突入する軍馬にかけて誓う。(注4) | فَوْسَطَنَ بِهِ جَمْعًا ⑥ |
| 7. げに人間は、その主に対して忘恩なり。 | إِنَّ الْإِنْسَانَ لِرَبِّهِ لَكَنُودٌ ⑦ |
| 8. げに人間は、その行状によって、そのことを証明す。 | وَرَأَيْتَهُ عَلَىٰ ذَٰلِكَ لَشَّهِيدٌ ⑧ |
| 9. またその物欲はすさまじい限り。 | وَأَنَّهُ لِحُبِّ الْخَيْرِ لَشَدِيدٌ ⑨ |
| 10. 人間は知らざるか、墓中の者が生き返られ、(注5) | أَفَلَا يَعْلَمُ إِذَا بُعْثِرَ مَا فِي الْقُبُورِ ⑩ |

注1 イスラム兵士の軍馬は余りにも速く走るため、地面にひづめを打ち付ける時、火花が生じる。この引喻は、神の為に戦うイスラム兵士の熱意を示している。

注2 勇敢なイスラム兵士達は、夜討ちをかけて敵の隙に乗じる様な不法な真似はしない。

注3 イスラム軍の猛攻はすさまじく、彼等の馬の素速い動きに舞い上がる砂ばかりで、当たり一面闇となる。

注4 イスラム兵士は、一人一人を、あるいは、弱い女・子供や年寄りを襲ったりはしない。彼等は一丸となって、敵の総戦力を攻撃し、敵軍の中枢部へ深く切り込む。

注5 不信心者の中に、生き残った者はいないようだ。彼等は、その墓場、すなわちその家に、死んで横たわっている。しかし、すぐに彼等はイスラム教に対する敵意の中で甦り、メディナのモハムマド預言者を攻撃する為、長い道のりを行軍するであろう。

11. 胸中に秘めたるものも露見する時あるを、
(注6)

وَحُصِّلَ مَا فِي الصُّدُورِ ۝

12. げにその日は、主が人間どものことをすべて御承知なることを。(注7)

إِنَّ رَبَّهُمْ بِهِمْ يَوْمَئِذٍ لَّخَبِيرٌ ۝

注6 イスラム教の敵の陰謀は、明るみに出るであろう。

注7 神は彼等の企みをよく御存知であり、その悪業故に彼等を罰せられるであろう。



アル・クアールィア

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 大災難！

الْقَارِعَةُ ②

3. 大災難とはなんぞや？ (注1)

مَا الْقَارِعَةُ ③

4. 大災難のなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？ (注2)

وَمَا أَذْرَكَ مَا الْقَارِعَةُ ④

5. その日、人間は四散する蛾の如く、

يَوْمَ يَكُونُ النَّاسُ كَالْفَرَاشِ الْمَبْثُوثِ ⑤

6. 山々も梳かれた羊毛の抜け毛の如くならん。
(注3)

وَتَكُونُ الْجِبَالُ كَالْعِهْنِ الْمَنْفُوشِ ⑥

7. 秤量重き者は、(注4)

فَأَمَّا مَنْ ثَقُلَتْ مَوَازِينُهُ ⑦

8. 楽しい生活あり。

فَهُوَ فِي عِيشَةٍ رَاضِيَةٍ ⑧

9. されど秤量軽き者は、

وَأَمَّا مَنْ خَفَّتْ مَوَازِينُهُ ⑨

注1 接頭辞をつけて大災難としていることでこの惨事を特殊化し、その恐ろしさを増している。アラビア語の表現ではより悲惨で破壊的な、ニュアンスが含まれている。

注2 この惨事は余りにも悲惨であり、その恐ろしさを想像する事も、ましてや言葉に表すなどできる訳がない。類似の効果を及ぼす同じ表現が使われている 69：2-5 も参照の事。「大災難」とは、大惨事という意味の他に、突然下される罰をも意味する。

注3 その惨事の恐ろしきは想像を絶するものであるが、その恐ろしい結果が二・三述べられている。当節及び次節では、それのもたらす混乱や苦悩の状況が描かれている。恐ろしく悲惨な出来事は、クモの子を散らす様に人々を四散させ、彼らは逃げ場を失うであろう。

注4 「秤量」は、一個人に関して使われる時は、人の仕事を意味するが、一同に関する時は、その国の物の財産を表す。現代の戦争用語で、軍艦のトン数を表すトンネッジは、国の物的財産の特有の表現のようだ。後者の意味において、物的財産を多く持つ国、又は、汽船や飛行機の積量の重い国は、相手国に対して優位に立ち、この事がその国の威信や勢力を強め、ひいては国の幸福につながると、当節は意味するようだ。

10. 母の胎内に宿る如く地獄に宿らん。(注5)

قَائِمُهُ هَاوِيَةٌ ①

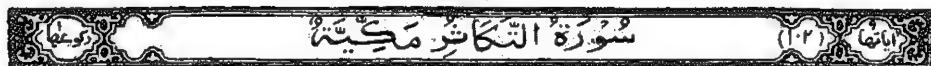
11. されど、地獄のなんたるかを汝に知らしむ
るものはなんぞや?

وَمَا أَذْرِكُ مَا هِيَ ②

12. そは燃え盛る業火なり。

نَارٌ حَامِيَةٌ ③

注5 罪深き人々と地獄との係わりは、赤子と母親の結び付きに似ている。胎児が子宮の中で様々な発達の段階を経て、完全な人間の形で生まれて来る様に、罪人は様々な段階の苦悩の後、彼等の魂は罪の痕跡を完全に洗い流され、彼等は新たな生を受けるのである。この様に、地獄の間は、彼等の罪を悔い改めさせ、彼等を更生させる事を目的としている。イスラム教の概念では、地獄は更生監である。



アル・タカースル

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. お前たちは財産を殖やすことを競い合う余り、遂に神を失念す、(注1)

الْهَيْكَلُ الْكَائِنُ ②

3. 墓に入るまで。

حَتَّى زُرْتُمُ الْمَقَابِرَ ③

4. 不可なり！お前たちやがて真実を知らん。

كَلَّا سَوْفَ تَعْلَمُونَ ④

5. 重ねて云う、不可なり！お前たちやがて知らん。(注2)

ثُمَّ كَلَّا سَوْفَ تَعْلَمُونَ ⑤

6. 不可なり！お前たち確かな知識で之を知らば、

كَلَّا لَوْ تَعْلَمُونَ عِلْمَ الْيَقِينِ ⑥

7. 必ずその目で地獄を見ん。(注3)

لَتَرَوُنَّ الْجَحِيمَ ⑦

8. 然り、お前たち必ず確かにその目で地獄を見ん。(注4)

ثُمَّ لَتَرَوُنَّهَا عَيْنَ الْيَقِينِ ⑧

9. 而してその日、お前たちは授けられし現世の恩寵に対して釈明を求められん。

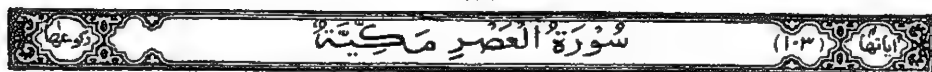
ثُمَّ لَتَسْأَلُنَّ يَوْمَئِذٍ عَنِ النَّعِيمِ ⑨

注1 物欲、つまり、富・地位・名誉において他人を凌駕したいという、人間の法外な欲望から、人は様々な問題を引き起こし、人生のより重要な事柄を看過してしまう。世俗的な物を得たいという感情には限りがなく、神や来世の事を思う時を人から奪ってしまう。人は死ぬまでこれ等の事に心を奪われ、死後に初めて、貴重な人生を無駄に過ごしたと気付くのである。

注2 当節の繰り返しは、この章に含まれる警告を強調し、より効果的にする為のものである。あるいは、現世で世俗的な物の獲得にふけた後、もたらされる因果応報を、当章は示しているのかもしれない。

注3 もし人が常識を働かせれば、どんなにわずかな知識しか持ち合わせないとしても、必ず人は、現世で目の前に大きく口を開く真の地獄を見るだろう。つまり、一時的な華やかさ、仰々しさ、物的優越を求める事に夢になれば、道德的退廃を招いてしまうと、人は悟るであろう。

注4 第5-8節は、現世で地獄のような生活が始まる事に疑いを差しはさまない。来世の地獄は現世で準備されており、それは人の目から隠されているが、それを考える者には確信を持って認識される。これ等の節には、地獄に関する認識を確かなものにする三段階が述べられている。イルムル・ヤキーン（推論による確信）、アイナル・ヤキーン（視覚による確信）、ハックル・ヤキーン（悟りによる確信）、以上の段階である。悪の本質を表す者を見れば、この世でも地獄の存在を推測できるが、死後に、人は自分の目で地獄を確かめる事となる。一方、復活の日に、人は実際に地獄に落ち、確信していた事は真実だったと完全に悟るのである。



アル・アスル

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. いつしか過ぎ行く時間にかけて誓う。

وَالْعَصْرِ

3. 人間は常に損をする、(注1)

إِنَّ الْإِنْسَانَ لَقَفٍ خُسْرٍ

4. 信ずる人々や善行を積む人々、並びに真理を伝えるために励み且つ忍耐を励む人々のほかは。(注2)

إِلَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَتَوَّصَوْا
بِالْحَقِّ وَتَوَّصَوْا بِالصَّبْرِ

注1 この世で授けられる機会を有効に使わず、人間の運命を左右する永遠の自然の法則を拒む人又は国家は、必ず災難に会うと、歴史は証明する。この様な人又は国家は、時間に対して敗者（時を経るごとに衰退していくもの）であり、当章では、特に「損をする人間」という言葉があげられている。神の法は罰を下さざるを得ないのである。

注2 当章及びクルアーンの他の数箇所において、信者達は正しい教義を受け入れるだけでなく、それ等を他の人々に伝えなさい、そうする事が固りに健全な環境を作る助けとなる、と告げられた。彼等は更に、その非常に困難な任務を遂行する際、直面するであろう抵抗や迫害にひるんではならず、不屈の精神でそれに耐える様、申し渡されている。この様に、当章は、短い一節の中で、人は、幸福で、満ち足り、栄えて、しかも前向きな人生を送る事ができると述べる事により、行動規範を定めている。



アル・フマザ
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 災いなるかな陰口や中傷を事とする者、(注1)
3. そは富を蓄積してひまさえあれば銭勘定。
(注2)
4. 彼はその富が、己れを不死ならしむべしと考える。(注3)
5. 然らず！彼は必ず粉碎の罰の中に投ぜられん。(注4)
6. 粉碎の罰のなんたるかを汝に知らしむるものはなんぞや？
7. そはアッラーが燃やし給う火にして、
8. たちまち断罪されたる者どもの心を焼きつくす。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

وَيْلٌ لِّكُلِّ هُمَزَةٍ لُّمَزَةٍ ②

الَّذِي جَمَعَ مَالًا وَعَدَّدَهُ ③

يَحْسَبُ أَنَّ مَالَهُ أَخْلَدَهُ ④

كَلَّا لَيُنْبَذَنَّ فِي الْحُطَمَةِ ⑤

وَمَا أَزْذِرُكَ مَا الْحُطَمَةُ ⑥

نَارُ اللَّهِ الْمَوْقَدَةُ ⑦

الَّتِي تَطَّلِعُ عَلَى الْإِفْكِدَةِ ⑧

注1 「陰口を事とする者」は、陰で他人の悪口を言う人を指し、「中傷を事とする者」は、陰でも、又本人の目の前でも悪口を言う人の事である。二つの基本的な善の本質前章に述べられた寛容と忍耐、に対し、社会の平和と秩序を根底からくつつがえす、二つの悪の本質が当章に述べられている。陰口をきく事と中傷を言いふらす事、この二つの主な悪に、いわゆる文明社会は今日非常に被害を被っている。

注2 当節は、世欲的な富に対する人の欲望に、悲しい注釈を付けている。富（物欲）の神を崇拝することは、今日の物質文明を破滅に迫りやめるものである。

注3 不幸な守銭奴は、手段を選ばず手を尽くしてお金を稼ぎ、それを貯える。その富を誇り、しかも正しい目的の為に使おうとはしない。そして、それが彼を不滅にし、彼の名が消え去るのを防ぎ、永遠に繁栄をもたらすものだと考える。しかし、彼は大きな誤解に悩むのである。

注4 人が全力で戦い、力を尽くしてつぼうとした大義が、前進し栄えるのを目の当たりにする事程、人にはなほだしい屈辱感や苦悩を与えるものは他にはない。クライシュの指導者達の目前で、イスラム教の弱々しい苗木が大木に育つを見て、彼等が感じたのが、この心の燃える様な痛みであった。

9. そは彼等の上にかぶさり、(注5)

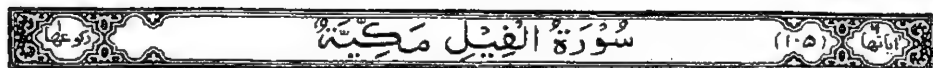
إِنَّهَا عَلَيْهِمْ مُّوَصَّدَةٌ ⑨

10. 長大な火柱の如くなるべし。(注6)

فِي عَمَدٍ مُّمَدَّدَةٍ ⑩

注5 取り囲まれた炎の熱は、どんどんと上って行く。

注6 「長大な火柱」とは、不信心者の人生を有益な規範に従わせない、悪習を指す。



アル・フィール

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
2. 汝は、主があゝの象(注1)の徒輩を如何に処分せしかを見ざりしか?
3. 主は彼等の企みを失敗せしめ給わざりしか?
4. 主は彼等に対して鳥の群れを遣わせり、(注2)
5. 彼等の屍を喰い、彼等に飛礫を打ち当てるその鳥の群れを。(注3)
6. 而して彼等を、喰い荒された藁くずの如くなし給えり。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

أَلَمْ تَرَ كَيْفَ فَعَلَ رَبُّكَ بِأَصْحَابِ الْفِيلِ ۝

أَلَمْ يَجْعَلْ كَيْدَهُمْ فِي تَضْلِيلٍ ۝

وَأَرْسَلَ عَلَيْهِمْ طَيْرًا أَبَابِيلَ ۝

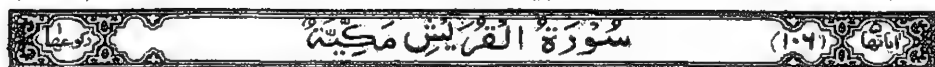
تَرْمِيهِمْ بِحِجَارَةٍ مِّن سِجِّيلٍ ۝

فَجَعَلَهُمْ كَعَصِفٍ مَّا كُوِلَ ۝١

注1 アブラハーキリスト教徒。アビシニア王国のイエメン総督。エチオピア皇帝の支配するイエメンで、国王の代理を務めるアブラハは、西暦 570 年、モハammad 預言者誕生の年に、カーバ討伐の為、大軍を率いてメッカへ向かった。彼はたくさんの象を連れて行つた。天然痘の自然発生が彼の軍を壊滅させ、彼等の腐った死体は鳥の大群についばまれた。詳しくは英版参照の事。

注2 「鳥の群れ」とは、それぞれに群れをなす鳥、季節ごとに群れをなす鳥、一羽ずつ又は一群ずつ並んだ鳥を指す。

注3 鳥の大群は、侵入者の死体の肉片を、石に打ち付けながら食べた。これは、動物の死体の小さな肉片を食べる時に、鳥がよくやる方法である。



アル・クライシュ

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. クライシュ族への愛情のために、(注1)

لَا يَلْفِ قُرَيْشٌ

3. アッラーは彼等クライシュ族に冬と夏の隊商旅行を定め給えり。(注2)

إِنْفِهِمْ رِحْلَةَ الشِّتَاءِ وَالصَّيْفِ

4. さればクライシュ族は聖殿の主を拝すべきなり、

فَلْيَعْبُدُوا رَبَّ هَذَا الْبَيْتِ

5. 飢えたる時に彼等を養い、恐れたる時に彼等を安じたる御方をば。(注3)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ أَنْعَمَ اللَّهُ عَلَيْهِمْ مَنْ جُوعًا وَآمْنًا مِنْ خَوْفٍ

注1 「クライシュ」という語は、その語源「カラシャ」から派生しりものである。この「カラシャ」は、彼はそれをあちこちから集めた、又は、彼は一部を別のものに付けた、ということの意味する。クライシュの一族がそう呼ばれたのは、彼等の祖先の一人、ケラーブ・ビン・ナザルが、彼等が遊牧民として暮らしていたアラビア全土から、メッカへ移住しそこで定住する様に説き伏せた為であった。パヌー・カーナーナの内、メッカに定住したナズルの子孫達だけが、彼等は小集団であった為に、小さな集団があちこちから集まった、という意味のクライシュと呼ばれたのであった。

注2 当節は、二様に解釈ができる。わかりやすいものから述べると、「おおモハammadよ、神がその心に夏と冬の旅への愛をもたられたクライシュに対する、神のたいなる恩恵に、汝は驚くのか？」神の恩恵は次の事実にあった。冬にはイエメンへ、夏にはシリアやパレスチナへ隊商を組むことで、クライシュはメッカに生活必需品をもたらしした。この商業活動により、彼等は町の繁栄に加えて、ある種の信望を得た。又、アラビアに偉大な預言者が現れるという預言も知った。それは既にこの預言を知っていた、イエメンのユダヤ教徒や、シリアのキリスト教徒との交流がもたらしたものであった。クライシュはその地に深く根付き、カーバに非常に愛着を感じていたので、その地を例え片時も離れるぐらいなら飢え死にを選んだであろう。彼等がこの呼びかけに応じたのは、モハammad預言者の偉大な祖父、ハーシムの熱心な勧告によるものであった。彼等は、これ等の旅により利益を得ただけでなく、これ等の地を旅する事で、間もなく到来が期待されるモハammad預言者受け入れの準備をさせられていたが、これこそ、彼等に対する偉大な神の恩恵であった。文脈に添った、あるいはより適した、当節のもう一つの解釈がある。それは次の様である。「おお、モハammadよ。汝の主は象の所有者達を滅ばされた。それは、彼等が、冬と夏自由に出る為のクライシュの要所を攻撃したからである。これが、クライシュに対する偉大な神の恩恵であった。」もしアブラハが滅ばされていなければクライシュは彼の地への旅を好まなかったであろうし、彼等の旅は安全ではなかったはずで、上記の解釈はもっともらしく思える。このアブラハの滅亡は、クライシュの貿易路を開いただけでなく、カーバは、既に聖地であったが、アラブ人の目には、より一層神聖不可侵なものとなった。そしてこれが又、クライシュの貿易に対しはずみを

付ける事となった。「主はクライシュをまもる為に、象の所有者達を滅ぼされた。」

注3 クライシュは恐怖から守られていたが、彼等の周囲は全て、恐怖と不安が押し寄せていた。更に、彼等は一年中あらゆる種類の果実や食物に恵まれていた。これは全て単なる偶然ではなく神の御計画の遂行であり、2500年前にアブラハム預言者が行った預言の成就であった(2 127,130、14:36, 38)。彼等に偉大な恩恵を授け、飢えや恐怖から彼等をお守りになった寛大なる神よりも、木や石で出来た神を崇めた忘恩の罪を、当節は不信心者のクライシュにはっきり悟らせるのである。



アル・マーウーン
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 汝はかの審判を否定する者を何と思うか？
(注1)

أَرَأَيْتَ الَّذِي يَكْذِبُ بِالَّذِينَ ②

3. かかる者は、孤児を邪慥に追い払い、(注2)

فَذَلِكَ الَّذِي يَدْعُ الْيَتِيمَ ③

4. 貧者を養うことに気乗りうすなり。

وَلَا يُخْصُ عَلَى طَعَامِ الْيَسِيرِينَ ④

5. されば災いなるかな、礼拝するも、(注3)

قَوْلِيٍّ لِلْمُصَلِّينَ ⑤

6. その礼拝をおろそかにする者。

الَّذِينَ هُمْ عَنْ صَلَاتِهِمْ سَاهُونَ ⑥

7. 彼等は見られることは好きなれど、(注4)

الَّذِينَ هُمْ يُرَاءُونَ ⑦

8. 施しは差し控える。

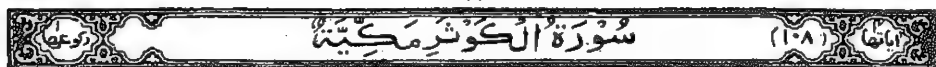
وَيَسْتَعُونُ الْمَاعُونَ ⑧

注1 神の罰を信じず、あるいは、全ての道德の源であるイスラム教を信じないとは、彼は実に罪深い者だ。

注2 当節及び次節は、二つのはなはだしい社会的罪惡を述べている。これ等の罪は、もし周到に防がれなければ、社会を完全に崩壊すると推測される。孤児に対する適切な世話を怠れば、犠牲の精神を人の心から抹殺する事となる。又、貧しき者の放置は、社会の有益な部門から、彼等の運命を変えようとする意志や決断を奪い取ってしまう。

注3 祈りとは、我々が神に負う義務を表す。神の創造物への義務を果たさない偽善者の祈りは、魂の無い肉体、中身の無い殻である。

注4 偽善的な人々は、魂のこもらない慈善行為を示すのみである。



アル・カウサル

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. げにわれらは汝に潤いを与えたり。(注1)

إِنَّا أَعْطَيْنَاكَ الْكَوْثَرَ

3. されば主に祈り、犠牲を捧げよ。

فَصَلِّ لِرَبِّكَ وَانْحَرْ

4. 汝を害する者には、子女なかるべし。(注2)

إِنَّ شَانِئَكَ هُوَ الْأَبْتَرُ

注1 カウサー（「潤い」）は多量の善を意味する。又、豊かな徳を備えた人、何度も多くの物を与える人、をも意味する。当章は、神が豊かな徳を授けた人として、モハammad預言者の事を語っている。それは、モハammad預言者が何も持たず、又与える物を持たなかった時に啓示された。彼はその時非常に貧しく、預言者だという彼の主張は、軽べつを持って、まじめに取り合う価値の無いものとして受け取られた。この章が啓示された後何年もの間、彼はあざけられ、迫害され、ついには、その首に賞金がかけられたまま、逃亡者として生地を去らねばならなかった。メディナでの数年間も又、彼は絶えず危険にさらされ、彼の敵は、(人間的見地からすればごくもっともな事だが) 悲劇を、イスラム教の早期終焉を目にしようと待ち望んでいた。彼の命が消えようとしたその時、多量の善があらゆる形を取り、滝の様に彼に注ぎ始めた。そして、この章に含まれる約束は、忠実に成就されたのであった。メッカからの追放者は、アラビア全土の運命の裁定者となり、破漠の文官の息子は、全人類にとり永遠の指導者となったのである。神は彼に、以後永遠に人類の絶対の指導書となる神の書を授けられ、神の属性を受け入れる事で誰にでも可能な様に、主のお側近くの高みにまで上ったのである。彼は、比類無い忠誠を備えた、献身的な弟子の一同に恵まれた。この世を去れという主のお召しがあった時、彼は、自分に託された聖なる務めを十分に果たし終えた事に、満足した。要約すれば、物質的・道徳的な、あらゆる種類の善が、十二分に、モハammad預言者に授けられたのであった。それ故、彼は最も成功を治めた預言者と呼ばれるにふさわしい人物であった(Enc. Brit)。

注2 当節で、モハammad預言者の敵が「子孫なき者」(男の子を持たない)として述べられてるのは、非常に重要な事である。一方、この章の啓示前後に相次いで生まれたモハammad預言者の息子は全て亡くなり、彼には、男の後継者がいなかった事は、事実である。これは、処所での「後継ぎなし」が「いわゆる息子ではなく、精神的なものを奪われた者」という意味でしかない、と示している。モハammad預言者は、終わりの時までには、いつの時代にも、多くの息子達の精神的な父親であり、この息子達は、どの父親の実子よりも、遥かに忠実であると運命づけられていたので、モハammad預言者は男の後継者を残してはならないというのが、事実神御自身の御計画であった。この様に、男の後継ぎを残さず亡くなったのは、モハammad預言者ではなく、彼の敵の方であった。彼等の息子達は、イスラム教徒の輪に入り、モハammad預言者の精神的な息子となって、実の父親との血のつながりを恥じたからである。



アル・カーフィルーン

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. 云え、(注1)「汝等不信心者どもよ！(注2)

قُلْ يَا أَيُّهَا الْكَافِرُونَ

3. 我はお前たちが崇めるものを崇めず。

لَا أَعْبُدُ مَا تَعْبُدُونَ

4. お前たちも我が崇めるものを崇めず。

وَلَا أَنْتُمْ عِبُدُونَ مَا أَعْبُدُ

5. 我はまたお前たちが崇めるものを崇めず。

وَلَا أَنَا عَابِدٌ مَا عَبَدْتُمْ

6. お前たちもまた我が崇めるものを崇めず。
(注3)

وَلَا أَنْتُمْ عِبُدُونَ مَا أَعْبُدُ

7. お前たちにはお前たちの生き方あり、我には我が生き方あり」と。(注4)

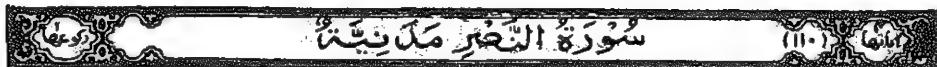
لَكُمْ دِينُكُمْ وَلِيَ دِينِ

注1 「云え」と言う言葉で表された神の御命令は、全てのイスラム教徒に向けられたものである。この章以外にも、第72、112、113、114章の始めにこの言葉が書かれ、クルアーン全体で306節程使われている。この言葉は、つかわれる全ての箇所、主題の重要性を強調する。この様に、信者は、この章に示されたイスラムの偉大な教義を、繰り返し声高く宣言し、又この教義を明確な言葉で不信心者に伝えよ、と命じられている。

注2 「～よ」という言い方は、当章の主題へ注意を引き付け、その重要性を強調する為に用いられている。この言葉は、上記の目的でクルアーンによく使われている。

注3 当節及び前三節は、注釈者の手で、様々な解釈が為されている。ある人々は、多神教徒であるメッカ人が二種の表現を使って質問したので、それに答える時二つの表現が用いられた、と主張する。他の人々は、この繰り返しは強調の為だ、と言う。又別のザジャージの様な学者は、初めの二文は現在の崇拜否定を示し、後の二文は未来におけるその否定を指す、とみなす。これに対し、ザマハシャリの様な学者は、前者の二文が未来における崇拜拒否で、後者の二文が現在のその拒否だ、と述べる。

注4 信者の生き方と不信心者の生き方の間に共通の土壌は全く無いと当節は示している。両者は、宗教の基本理念のみならず、その細かい部分において、又他の面でも全く意見が合わない為、歩み寄りとは不可能である。



アル・ナスル

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍く^{あまわ}アッラーの御名^{みな}において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. アッラーの助けと勝利が来たりて、(注1)

إِذَا جَاءَ نَصْرُ اللَّهِ وَالْفَتْحُ ②

3. 人々が続々とアッラーの教門を叩くのを見
る時、

وَرَأَيْتِ النَّاسَ يَدْخُلُونَ فِي دِينِ اللَّهِ أَفْوَاجًا ③

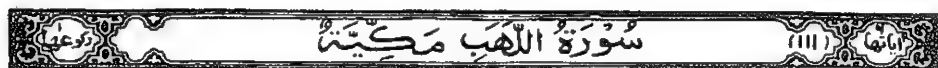
4. 汝主の栄光を讃えて、(注2)主に有^{ゆう}怨^{じよ}を請
え。げに主は幾たびとなく容赦し給う。(注3)

فَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ وَاسْتَغْفِرْهُ إِنَّهُ كَانَ تَوَّابًا ④

注1 約束された勝利。

注2 モハammad預言者は、神の約束が成就され、多くの人々がイスラム教の輪に加わり始めたので、彼は主に、約束の成就を感謝し、主の賛美を歌うべきだ、と処所に命じられている。

注3 モハammad預言者は処所で次の様に命じられている。勝利がモハammad預言者にもたらされ、イスラム教がこの国で地上で、優位に立ち、彼の従米の敵は彼の忠実な弟子となったのであるから、過去において彼等が彼に爲した容易ならぬ悪事の数々の許しを、彼等に代わり彼が神に請うべきである。これが、神の許しを求めよという、モハammad預言者への命令の意味である様だ。あるいは、次の様な意味にもとれる。新たなイスラムへの回心者は、適切な訓練や教育を欠いたが為に、イスラム社会に道を見出したのであり、彼等の弱さや欠点を守って頂けるように、神に祈る事を、モハammad預言者は命じられている。クルアーンの中において、モハammad預言者にもたらされる勝利及びその他の大なる成功を記述した全ての個所で、彼が、神の許しを請い、神の保護を求めよと告げられているのは、非常に重要な事である。これは、当節においても、彼が、神の許しを請い、神の保護を求め、しかもそれは彼自身の為ではなく、他者の為にそうする様にと命じられた事を、はっきりと示すものである。つまり、彼の弟子達がイスラム教義からそれる恐れのある時はいつも、神がその様な危機から彼等をお守り下さる様にと、彼は祈る事を命じられているのである。この様に、モハammad預言者が、自身の行為のいずれかに関して許しを請うたという可能性は、此所には全くない。クルアーンによれば、彼は、正道からそれて道徳的退廃に陥る事のない様、完全に守られていたのであった。40章56節及び48章3節も参照の事。



アル・ラハブ
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. 腐ってしまえアブー・ラハブの両の手よ、
而して彼も滅ばんことを！(注1)

تَبَّتْ يَدَا أَبِي لَهَبٍ وَتَبَّ

3. その富は彼に役立たざるべし、儲けし金も
また然り。(注2)

مَا أَخَذَ عَنْهُ مَالُهُ وَمَا كَسَبَ

4. やがて彼は、必ず燃えさかる業火で焼かれ
ん。(注3)

سَيَصْلَى نَارًا ذَاتَ لَهَبٍ

5. 悪口を云いふらす彼の妻また然り。(注4)

وَأَمْرَأَتُهُ حَمَّالَةَ الْحَطَبِ

注1 アブー・ラハブ(炎の父)は、モハammad預言者の伯父、彼の執念深い敵であり迫害者である、アブダール・ウッザのあだ名であった。彼がそう呼ばれたのは、彼の肌の色と髪が赤味がかったからか、あるいは、その激しやす性格の爲であった。本章は、モハammad預言者の初期の頃の説教の途中に起きた出来事を、思い起こさせる。親戚の者を集めて、彼等に神のお告げを伝えよとの神の命を受け、モハammad預言者は、あるロサファア山に立ち、様々なメッカの部族、ラヴィ、ムッラ、ケラブ、クサイの名を呼び、更に彼の近親者を呼び寄せた。そして彼等に、彼が神の使者であり、もし彼のお告げを受け入れなければ、彼等は悪の道から抜けられず、神の罰が彼等に下されるであろう、と告げた。モハammad預言者が説教を終えようとした時、アブー・ラハブが立ち上がってこう言った。「なんて奴だ、こんなことのために呼んだのか。」(ブハリ)。この「炎の父」というあだ名は、特にアブー・ラハブを指すが、同時に、イスラム教の短気な敵全てを、あるいは、原子爆弾や核爆弾を持ち、支配する、後世の西側諸国を指すと言った方が良いかもしれない。彼等の内、ある集団は完全に神を拒絶し、又別の集団は唯一神を否定しているが、両者共にイスラム教に対立している。この意味では、「両の手」はこの二つの集団を意味しており、当節は次の事を示す事となる。イスラムの敵、特に西側勢力のこの二集団とその衛星国による謀略は全て失敗に終わり、彼等の邪悪な企てはその頭上にはね返るであろう。彼等は、イスラムが前進し、彼等自身の富と権力が目の前で消滅して行くのを目撃し、怒りに燃えるであろう。

注2 彼の「富」は、自身の国で生み出した富を意味し、「儲けし金」は、弱小国を搾取し、そこから奪い取った富を表す。

注3 アブー・ラハブという語は又、火を作り出す物を発明した人、あるいは、自ら炎に焼き尽くされる人、をも意味する。後者の意味にとると、当節は、現代の二人政治圏が、原子爆弾や他の核爆弾のような火を吹く自らの兵器により、壊滅する事を預言したものと、解釈され得る。又、当節は、これ等の国々にとり裁きの日が遠からず訪れる、とも示している様だ。

注4 当節の言葉は、アブー・ラハブの妻、ウム・ジャミールを語っているようだ。彼女はモハammad預言

6. 彼女の頸には椰子の皮で擦られし縄かけら
るべし。(注5)

فِي جِيدِهَا حَبْلٌ مِّن مَّسَدٍ ⑤

者の通り道にとげをまき散らし、彼の悪口をふれ回った。当節は又、イスラム教およびモハammad預言者にたいする中傷や偽りの非難を広める人にも、当てはまるようだ。

注5 …見自由なようでいて、これらの国民は、それぞれの政治的イデオロギーや体制に強く拘束されるので、それから逃げられないであろう。あるいは、薪を持ち去った為に絞殺されたと伝えられるウム・ジャミールのようにこれ等の国民は、他を滅ぼそうとした為に、同じ方法で滅びるであろう。



アル・イフラス

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. 云え、「彼こそはアッラー、(注1) 独一者にして、(注2)

قُلْ هُوَ اللَّهُ أَحَدٌ ①

3. 自存者、(注3) もろ人の依り纏る御方なり。

اللَّهُ الصَّمَدُ ②

4. 彼は産み給わず、また生まれ給わず。(注4)

لَمْ يَلِدْهُ وَلَمْ يُولَدْ ③

注1 「アッラー」は、神にもちいられるクルアーン特有の言葉である。アラビア語では、この言葉は他の物には一切使われない。それは、神の実質的な名であり、属性を表したり説明を加えるものではない。1章1節も参照の事。

注2 「独一者」は、神のみに用いられる形容語句であり、唯一の方、比類無き方、これまでもそしてこれから唯一の方、その地位と属性を分かち合う者の無い御方、を意味する。「独一者」は、神の存在の唯一、第二の存在は考えられない事を示し、神の属性が比類無き事を神が万物の源・天帝であられる事を示す。「独一者」アッラーは、我々がその御方の事を思う時、我々の心から他の全てが消え去るという意味において、唯一の存在であられる、と示している。神は全ての意味で唯一であられる。神は如何なる連鎖の初まりでもなければ終わりでもない。神に代わるものはなく、又、神は如何なるものとも似ておられない。この御方が、クルアーンに記されたアッラーである。

注3 「自存者」とは、頼られる人、従われる人、その人無くして何事も遂げられない人、その上には如何なる人も物も存在しない人、等を意味する。神の属性である「自存者」は、必要の成就を求められる天帝、如何なるものの影響も受けず、しかも全てのものが必要を頼る御方万物が絶えた後永遠に存在される御方、その上に存在するものの無い御方、を示す。前節では、神が唯一であられるとの主張が為された。当節は、その主張を立証する。万物は神に依存するが、神御自身は独自であられ、しかも全てを求められる方である。万物は神を必要とするが、神は何ものをも必要とされない。神は宇宙を創造されるに当り、如何なる助けも必要とされなかった。事実、宇宙の万物は一つとして、最小の原子ですら、それ自体は完全ではない。独自に存在できるものは無い。万物は、その生存の為に他に依存する。何ものにも依存しないのは、神御一人である。神は概念や推測を越えた方である。神の属性には限りがない。

注4 神の属性「自存」は、アッラーが「唯一」であられるという主張を立証する為に、前節で述べられた。そして、当節では、神の属性「産み給わず」「生まれ給わず」が、神が「自存」(他のものを必要とされない)であられる事を示す為に述べられている。それは、もし神に必要が存在するとすれば、その前提として、神は何者かの援助を必要とされ、神はそれ無くして業を遂げられず、その者が彼の死後神の業を引き継ぐ事となるからである。万物は、他者が死に支配されるが為に、継ぎ、継がれる者となるのである。アッラーは誰の後継でもなく、又誰にも後を継がれない。神はその全ての属性において完全であり、永遠にして、絶対であられる。

5. 彼と^{ひけん}比肩し得る者、何処^{いすこ}にも非ず」と。(注5)

وَلَمْ يَكُنْ لَهُ كُفُوًا أَحَدٌ ﴿٥﴾

注5 前節の内容に対して起こり得る疑いを、当節は取り除く。仮にアッラーが「唯一」絶対であり、「自存」であるとしても、又、仮に「産み給わず」「生まれ給わず」だとしても、アッラーの様に、アッラーの持たれる全ての属性を備えた今一つの存在があるかもしれない。当節はこの疑惑を払いのける。アッラーの様な存在はない、とそれは告げる。人の理性も又、全宇宙の唯一の造物主であり支配者をもとめている。そこに広がる完全なる秩序は、唯一一定の法がそれを支配しなければならないという必然的な結論にたどり着き、法と計画の一致は、唯一の創造主を立証する (21:23)。この様に、当章は、他の宗教に見られる多神信仰、二神・三神あるいはより多くの神への信仰、魂と物質がアッラーと共存するという信仰、を根底から覆す。これが、クルアーンに与えられた、神の崇高な定義であり、他の如何なる啓示書にも、この定義の美・崇高・荘嚴の周辺にすら触れたものはない。



アル・ファラク

(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ ①

2. 云え、「我は黎明の主にお縋り申す、(注1)

قُلْ أَعُوذُ بِرَبِّ الْفَلَقِ ②

3. 主が創り給える悪を逃れて、

مِنْ شَرِّ مَا خَلَقَ ③

4. 覆い広がる暗闇の災厄を逃れて、(注2)

وَمِنْ شَرِّ غَاسِقٍ إِذَا وَقَبَ ④

5. 結び目に息吹きかける巫女の災厄を逃れて、
(注3)

وَمِنْ شَرِّ النَّفَّاثَاتِ فِي الْعُقَدِ ⑤

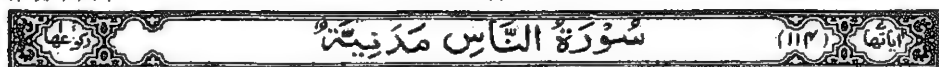
6. 嫉む嫉妬者の災厄を逃れて」と。

وَمِنْ شَرِّ حَاسِدٍ إِذَا حَسَدَ ⑥

注1 「黎明」は、夜明け、地獄、万物を意味しているの、イスラム教徒は次の事を祈る様に告げられている。(1)イスラム教を覆う闇夜がさり、イスラムの輝ける未来の朝が訪れる時、イスラムの太陽が真上に来るまで輝き続けますように。(2)遺伝や伝統悪い環境、教育の欠如等による悪影響を含み、神が創り出されたものの、隠れた悪と明らかな悪より、彼を守り給え。(3)神が、現世及び来世において、地獄の苦しみから彼を救い出されますように。

注2 当節は、神の光が消され、罪の闇が地上を覆い尽くす時の悪事に触れている様だ。あるいは、人が貧困に押しつぶされ、彼を闇が取り囲み、最後の希望の光が消えた時の悪事を述べているのかもしれない。

注3 当節のこの言葉は、悪い考えを吹き込む者達、を指している様だ。彼等は、重大な契約や友情が壊れる様画策し、既成の権威に対する反抗精神や、忠誠の誓いの破棄を人々に吹き込む。この様に、彼等は、イスラム社会に不和が生じるのを望み、人々の間に分裂傾向を煽る。次の章が人生の精神面を扱うのに対し、本章はその物的側面に触れている。人は、人生において様々な危機や困難に直面させられる。人は非常に重要な任務に携わる時、特に、神の光を広める任を負う時、闇の勢力が彼を四方から取り囲む。そして、彼が成功している様に見える時、悪意ある者達が彼の道を塞ぎ、彼に対しあらゆる妨害を為す。しかし、最後に彼に成功がもたらされる時、嫉妬深い人々は、努力の結晶を彼から奪い取ろうとする。人生におけるこれ等全ての妨害・困難・危機から身を守る手段として、闇が覆う時、その身を照らし、中傷する者の悪企みや嫉妬深い者の陰謀から守って下さいと、黎明の主に助けを祈願する様、信者は告げられている。



アル・ナース
(メッカ啓示)

1. 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

2. 云え、「我は人類の主にお縋りもうす、

قُلْ أَعُوذُ بِرَبِّ النَّاسِ

3. 人類の王に、

مَلِكِ النَّاسِ

4. 人類の神に、(注1)

إِلَهِ النَّاسِ

5. 卑劣な私語者の災悪を逃れて、

مِنْ شَرِّ الْوَسْوَاسِ الْخَنَّاسِ

6. 人の心にささやきかける

الَّذِي يُوسِّسُ فِي صُدُورِ النَّاسِ

7. 「妖霊と人間の輩から逃れて」と。(注2)

مِنَ الْجِنَّةِ وَالنَّاسِ

注1 当章には、神の三つの属性、ラッブ（「人類の主」）、マリク（「人類の王」）、イラーフ（「人類の神」）、が、前章の一つの属性、「黎明の主」に対して、呼びかけられている。それは後者の一つの属性が、前者の三つの属性を含むからである。一つの神の属性、黎明の主が、前章で四つの危害に対する庇護を求めて呼びかけられたのに対し、当章では、三つの神の属性が、害悪、悪魔のささやきに対する「庇護」を求めて呼びかけられている。これは、サタンの暗示が考え得る限りの悪を含むからである。この三つの神の属性は、人の肉体的・精神的状態と微妙に結び付いている。人の身体的・道徳的発達には「人類の主」の属性の元起こり、人の思考・発言・行為は「人類の王」により罰せられるかあるいは報いられ、「人類の神」の属性は、神が人の愛と崇拜の対象であり、人の目標である事を示している。この章で、三つの神の属性が述べられているという事は、あらゆる罪が三つの原因から生じる事を暗に示すものである。それは次の様な時に起こる。ある者が、他者を彼の主、又は神の王と崇める時、すなわち、前者が後者を人生における主な支援者とみなす時。あるいは、後者の不当な権威に卑屈に身を委ねる時。又は、後者を自らの愛と崇拜の対象にする時。信者は、人生の真の支援者として神のみを崇め、神のみに真実絶対の従順を捧げ、神御一人を真の愛と崇拜の対象とするよう命じられている。あるいは、だまされやすく単純な人々を不当に利用し、彼等を非情にも搾取する、悪賢い聖職者達や、不正な資本家、暴君からの保護を絶えず求める様、これ等の節で信者は告げられているのかもしれない。

注2 サタンは、「妖霊」（偉い人）や「人間の輩」（一般の人、普通の人）の心に悪意をささやくが、誰をも助けはしない。あるいは、悪意をささやく者は、「妖霊」にも「庶民の輩」にも見られる、と当節は示しているのかもしれない。

あ

アイシャ(A'ishah)

中傷 24 : 12 支持 24 : 17

愛情(Affection)

信仰者間 5 : 55、48 : 30、59 : 10~11 兄弟愛参照

悪魔(Satan)

アダムとイブの欺き 2 : 37、7 : 21 人間の支配 17 : 63、17 : 66、22 : 5、37 : 163 非信仰者 3 : 176
悪意 17 : 54、22 : 53、25 : 30、36 : 61 邪悪な誘い 7 : 21 神の意図 22 : 53~54 保護 7 : 202 地獄
38 : 86 表示 2 : 15、2 : 37、7 : 23 人間への誤った指導 17 : 65 承認された猶予 38 : 80~82 人間の
進歩の遅れ 7 : 28 行動 4 : 118~122 崇拜 19 : 45、34 : 21~22 イブリス参照

アザル(Azar)

アブラハムの父 6 : 75

アダム(Adam)

服従する天使 2 : 35、7 : 12、15 : 29~30、17 : 62、38 : 72~74 悪魔の欺き 2 : 37、7 : 23、20 : 121~122
選ばれた者 3 : 34 文明生活の付随物 20 : 119~120 創造 3 : 60 アダムとアッラー 38 : 76 住まい
2 : 36 移住 2 : 37、39 : 328、7 : 25、20 : 124 イブと禁断の木 2 : 36、7 : 20、20 : 118~122 イ
ブリスの服従への拒否 15 : 32、17 : 62 表示 2 : 31 イエス 3 : 60 神の知識 2 : 32 過失と救済 20 :
121~123 必要性 2 : 34 後悔 2 : 38、7 : 24 恥辱 7 : 23 潔白 20 : 116 精神的機能 15 : 29~30、
38 : 72~73 存在の時 7 : 12 二人の息子 5 : 28 イブリスへの警告 20 : 118

アッラーの息子の身分(Sonship of Allah)

理論 2 : 117、6 : 102

アード(Ād)

破壊 29 : 39、54 : 19~22、69 : 5 偉大な文明 26 : 129~131 ノアの人々の継承者 7 : 70 フードの代
理 11 : 51 表示 7 : 66、11 : 50~61 真理の拒絶 50 : 13~14 話 7 : 66~73

歩み寄り(Compromise)

信仰者と非信仰者 109 : 2~7 イスラムとその他の信仰 3 : 65 真実と偽り 68 : 10

新しい世界秩序(New World Orger)

確立 18 : 52、21 : 105

アビシニア(Abyssinia)

イスラム教の移住者 5 : 84

アブ アーミル(Abū Āmir)

イスラムの最大の敵 9 : 107

アブ ジャハル(Abu Jahl)

与えられた罰 8 : 33

アブドッラー イブン ウンメ マクトゥム(Abd Allāh ibn Umme Maktūm)

聖なる預言者 80 : 2

アブドッル ウzza(Abd al-Uzza)

111 : 2

アブ バクル(Abū Bakr)

精神的卓越 9 : 40

アッラー(Allah)

受けいれやすき 29 : 70 唯一の価値ある崇拜 2 : 256、3 : 3、3 : 19 祈りへの返答 2 : 187、3 : 196、8 : 10、11 : 62、12 : 35、21 : 85、21 : 89、27 : 63 人類の統合者 3 : 10、3 : 26、4 : 88、45 : 27 特質 1 : 1、1 : 4、1 : 7、2 : 256、7 : 181、20 : 9、112 : 2~5 恩恵 17 : 21 授与者 3 : 9 使者の選択 2 : 131、3 : 34、7 : 145、22 : 76 哀れみの人 2 : 144、3 : 31 統制者 10 : 4、10 : 32、13 : 3、32 : 6 創造者 6 : 15、6 : 96、19 : 36 即位 7 : 55、10 : 4、20 : 6、35 : 5、40 : 16 包圍者 2 : 20 存在 2 : 29、2 : 165、2 : 187、6 : 74、7 : 173、10 : 32、25 : 3~4、27 : 61~67、30 : 21~28 恩寵 17 : 21、31 : 32、56 : 64~74、78 : 7~17 懸念 14 : 15、35 : 29~30、55 : 47、79 : 41 最初で最後の源 53 : 43~55、55 : 27~28、57 : 3~4 忍耐の人 2 : 226 寛容 2 : 226 後悔者 9 : 104 うそつき 6 : 22、10 : 18、11 : 19、61 : 8 忘却 19 : 65、20 : 53 眠り 2 : 256 疲労 2 : 256、50 : 39 親交 2 : 258 慈悲 1 : 1、10 : 108 神の栄光 17 : 45、24 : 42、59 : 25、61 : 2、62 : 2、64 : 2 悲嘆 36 : 31 保護者 11 : 58、16 : 3、17 : 3、17 : 69、22 : 79、34 : 22、42 : 7 指導 2 : 143、10 : 36、14 : 11、22 : 55、33 : 5 神聖 2 : 33、6 : 101、17 : 44、39 : 68 認識のための人間の衝動 13 : 29 内在性 7 : 8 無作法 7 : 29 無比の偉大さ 13 : 10、42 : 12 不可解 6 : 104 人間との仲介者 5 : 36 光 24 : 36 生命ある者 2 : 256、3 : 3 主 1 : 2 愛 2 : 196、2 : 223、3 : 32、3 : 77、3 : 147、3 : 160、5 : 43、5 : 55、9 : 7、11 : 91、61 : 5 忠誠 29 : 9 尊厳 34 : 2~4 創造者 6 : 15、12 : 102、14 : 11、35 : 2 現れ 11 : 8 支配者 1 : 4、1 : 7 慈悲 1 : 1、6 : 13、10 : 59、11 : 120、20 : 130、42 : 6 全知 2 : 34、2 : 78、2 : 256、3 : 30、10 : 62、20 : 8、20 : 111 創始者 2 : 118、6 : 15、35 : 2、39 : 47、42 : 12 仲間 4 : 37、4 : 49、6 : 152、13 : 37、18 : 39、22 : 27、25 : 3、30 : 29~31、31 : 14、31 : 16 完全 16 : 4 力 2 : 21、4 : 86、12 : 22、16 : 71、22 : 15、22 : 19 死者の再生 16 : 66、22 : 7、30 : 51、45 : 6 審判 4 : 87、13 : 42 思い出 3 : 192、4 : 104、8 : 46、19 : 11~12、62 : 11 心の封印 2 : 8、4 : 156、6 : 26、6 : 47、7 : 102、10 : 75、16 : 109、45 : 24、83 : 15 独立した存在 2 : 256、3 : 3 自給自足者 2 : 268 しるし 3 : 200、7 : 134、18 : 110、30 : 21~28、31 : 28 にせのしるし 4 : 141 懲罰の遅滞 10 : 12、18 : 59、35 : 46 善悪の源 4 : 79~80 法の源 13 : 40 生命の源 29 : 62、55 : 28 統治権 3 : 27、20 : 115、25 : 3 服従 13 : 16、22 : 19 アブラハムの祈願 2 : 125~130、14 : 36~42、26 : 84~88、37 : 101 アダムの祈願 2 : 24 祈りの承認 2 : 187 新しい町へ入る 17 : 81 許し 2 : 286~287、3 : 17、3 : 193~196、7 : 152、23 : 110、23 : 119、40 : 8~10、59 : 11、16 : 5~6 良きこと 2 : 202、28 : 25 良き生活を送るために 46 : 16 正しい指導 1 : 6~7、18 : 11 不信心者に対する救済 2 : 251、3 : 148、10 : 86~87、21 : 113 抑圧された者に対する救済 4 : 76 イエス 5 : 115 ヨブ 21 : 84、38 : 42 ヨナ 21 : 88 ヨゼフ 12 : 102 旅の開始 43 : 14~15 知識 20 : 115 ロト 26 : 170、29 : 31 モーゼ 5 : 26、7 : 152、7 : 156~157、10 : 89、20 : 26~36、28 : 17~18、28 : 22 モハammad 9 : 129 ノア 11 : 42、11 : 48、23 : 27、86 : 118~119、54 : 11、71 : 27~29 両親 17 : 25 強情 3 : 9 ファラオの魔術師 7 : 127 権力 3 : 27~28 保護 40 : 45 罰の回避 3 : 192~193、7 : 48、25 : 66 サタンの誘惑 23 : 98~99 シュアイブ 7 : 90 ソロモン 27 : 20、38 : 36 善実 7 : 127 従順な態度 12 : 102 精神的進歩 3 : 54、66 : 9、66 : 12 作り方 7 : 56~57、17 : 111 妻と子どもたち 25 : 75 知恵 26 : 84~86 ザカリヤ 3 : 39、19 : 4~7、21 :

90 全ての支え 2 : 256、3 : 3、11 : 7、29 : 61 卓越 7 : 55 信頼 5 : 12、9 : 129、11 : 57、12 : 68、65 : 4 真理 24 : 26 統合 2 : 164、2 : 256、3 : 19、4 : 172、13 : 17、13 : 34、14 : 15、16 : 52、17 : 24、21 : 23~24、30 : 29~31、37 : 5、52 : 40、110 : 2~4 日に見えない 7 : 144 復讐 3 : 5 意志 2 : 285 行為 2 : 23、3 : 191~192、13 : 3~4、13 : 13、20 : 54、27 : 62、43 : 11、51 : 48~50、71 : 20、78 : 7~17 崇拜 2 : 22、3 : 44、4 : 37、5 : 73、16 : 37、17 : 24、22 : 78、41 : 38、51 : 57、96 : 20 無悪 4 : 41、9 : 70、10 : 45、18 : 50

アブラハ(Abraha)

メッカの侵入 2 : 151、105 : 2~6

アブ・ラハブ(Abu Lahab)

111 : 2 妻 111 : 5~6

アブドッラー イブン オバイ(Abd Allah ibn Ubayy)

自慢 63 : 9 ウハドの戦いでての喪失 3 : 122~123 ウハドの戦いでての不名誉 24 : 12

アブドッラー イブン ジュバイル(Abd Allah ibn Jubair)

勇敢 3 : 153

アブドゥル ムッタリブ(Abd al-Muttalib)

105 章

アブラハム(Abraham)

鎮火 21 : 69~71、29 : 25、37 : 98~99 召集 2 : 126 不信仰者からの離脱 9 : 114、60 : 5~6 正との論争 2 : 259 移住 21 : 72 聖なる家を清らかに保つ命令 2 : 126、22 : 27 神への服従の命令 2 : 133、43 : 29 子孫の賞賛 3 : 34 模範 16 : 121、60 : 5 唯一性信奉者 43 : 28~29 神の友 4 : 126 イサクとヤコブへの授与 6 : 85 喜ばしい息子の便り 15 : 54~57、51 : 29~31 名声 37 : 109 立法の知識の下賜 6 : 76 神の導き 21 : 52 もてなし 11 : 70~74、15 : 52~61、51 : 25~35 偶像崇拜反対 21 : 58~68、37 : 92~97 父 6 : 75 イシュマエルの祈り 2 : 130 イシュマエルとのカーバの再建 2 : 128 イシュマエルとの聖なる預言者の真実の立証 90 : 4 国の再興 2 : 260~261 偶像崇拜者 21 : 53、26 : 72 巡礼の始まり 22 : 28 ロトの人々のための懇願 11 : 75~76 父の許しのための祈り 9 : 114、19 : 48 息子の認可のための祈り 37 : 101~102 永続する名声のための祈り 26 : 85 メッカの安全と繁栄のための祈り 14 : 36、14 : 38 子孫の神への服従のための祈り 2 : 129 預言者の地位 2 : 125、2 : 131、16 : 121~123、19 : 42、21 : 72~74、38 : 46~48 子孫の間での預言者の地位 29 : 28、37 : 114、38 : 46~48、57 : 27 子孫の盛衰 2 : 161 話 19 : 42~49、21 : 53~59、21 : 63~65、26 : 70~83、37 : 86~97

アロン(Aaron)

ファラオへの使者 10 : 76、26 : 16 神の恩寵 37 : 115~121 モーゼの従者と代理人 7 : 143、20 : 30~37、26 : 14~16、28 : 35~36 モーゼの祈り 7 : 152 預言者の地位 4 : 164、6 : 85、10 : 76、19 : 54、21 : 49、23 : 46、25 : 36 モーゼの叱責と弁解 7 : 151、20 : 93~94 弁明 20 : 91

アラビア語(Arabic)

美しき 50 : 31 特異性 12 : 3、43 : 4

アラビア(Arabia)

精神的知識 36 : 35

アラブ人(Arabs)

聖なる預言者以前 3 : 104 偶像 71 : 24 継母との結婚 4 : 23 おこり 40 : 69 迷信的な習慣 5 : 104 、
6 : 138~141 、 9 : 37

アンサール(Ansars)

メッカの移住者との兄弟愛 59 : 10~11

安息日(Sabbath)

日とく 2 : 66、 4 : 48、 7 : 164

い

イエス・キリスト(Jesus)

名誉 3 : 46 昇天 2 : 37 誕生 3 : 46、 3 : 48、 4 : 157、 4 : 172、 19 : 19~26 十字架上の死 2 :
73~74、 3 : 55、 4 : 158~160、 5 : 111 独特な名前 19 : 35 神性 3 : 3、 3 : 7、 5 : 18、 5 : 76~77、
21 : 22、 43 : 16、 43 : 82 賞賛 4 : 159 預言の実現 3 : 51、 5 : 47 慈愛 19 : 16 メアリーの純潔 19 :
30~31 友人の靈感 5 : 112 カシュミール 3 : 46、 23 : 51 トーラの知識 3 : 49 奇跡 3 : 50、 5 :
111、 19 : 33 伝道 3 : 50~51 自然死 3 : 56、 3 : 145、 5 : 76、 5 : 117~120、 7 : 26 責任 19 :
32~33 祈り 5 : 115 再臨 43 : 58~59 アッラーのしもべ 4 : 173 時のしるし 43 : 62 アダムとの
類似 3 : 60 神の息子 19 : 36、 19 : 91~94、 23 : 92 ゆりかごと老年時の説教 3 : 47、 19 : 30~34 聖霊
2 : 88、 2 : 254 三位一体 3 : 52、 5 : 73、 5 : 118

いけにえ(Sacrifice)

イシュマエル 37 : 103 お金 47 : 37~39、 63 : 10~12

イサク(Isaac)

2 : 134、 4 : 164、 6 : 85、 11 : 72、 21 : 73~74

遺産(Bequests)

慈悲深いもの 2 : 18

意志(Will)

変化 2 : 182

イシュマエル(Ishmael)

子孫への祝福 37 : 114 身分 19 : 55~56 忍耐 21 : 86 安住の地 14 : 38 犠牲 37 : 103~108 地
位 19 : 50 アブラハム参照

イスラエル(Israel)

ダビデの統治 38 : 23 つかの間の制度 33 : 62、 17 : 105 イスラム教徒による占領 21 : 106

イスラム(Islam)

善への感謝 2 : 220 基本的原則 2 : 4~6 慈悲 18 : 80 信仰の問題への妥協 3 : 65 安易な方法
2 : 186、 5 : 7、 22 : 79 敵 111 : 2~6 永続 5 : 98、 25 : 54 権力の行使 10 : 100 良心の自由 2 :
257、 8 : 40 無敵 22 : 16 正義 5 : 9 伝道の性質 9 : 122 その他の宗教 25 : 54、 35 : 13 楽園と地
獄 11 : 109 全ての預言者の認識 2 : 137、 3 : 85 アブラハムの宗教 6 : 162 実行の報い 4 : 70 高

潔 22 : 33 興亡と復興 32 : 6 安全 31 : 23 重要性 2 : 113、2 : 209、4 : 126、6 : 163 罪の回避
6 : 121 政治的犯罪者の待遇 5 : 35 勝利 9 : 33、13 : 42、17 : 82 普遍と安全 2 : 22、3 : 20~21、
3 : 97、5 : 4 背教者への警告 2 : 210

一夫多妻(Dolygamy)

許可 4 : 4、4 : 130

祈り(Prayer)

沐浴 5 : 7 恩恵 清浄力 29 : 46 不信仰者 23 : 2~3、70 : 35~36、40 : 51 恐れ 2 : 240 不誠実
107 : 5~7 自然さ 10 : 13 必要性 25 : 78 夜 17 : 80、73 : 7 怠慢 19 : 60 遵守 2 : 4、2 : 239、
17 : 111 禁止 4 : 44 短縮 4 : 102~103 時 17 : 79、20 : 131

イブ(Eve)

アダム参照

イブリス(Iblis)

神との対話 7 : 13~19 身分 2 : 35、7 : 12、15 : 31~42、17 : 62、18 : 51、20 : 117 悪魔参照

移民(Emigration)

アッラーのために 4 : 101 聖なる預言者 9 : 40

イムラン(Imran)

身分 3 : 34、3 : 36

イリアス(Elias)

身分 6 : 86

イドリス(Idris)

身分 19 : 57

隠遁(Monostacism)

非難 57 : 28

う

宇宙(Universe)

創造 2 : 165、6 : 102、7 : 55、14 : 33~34、21 : 31、32 : 5、41 : 13 破壊 46 : 4、55 : 27 アッラー
の神聖化 57 : 2、59 : 2、64 : 2 支配の法 41 : 12、55 : 6~8 アッラーへの指示者 29 : 45、31 : 26、
36 : 41、67 : 4~5 理解できない性質 55 : 34 虚栄心 3 : 191~192、21 : 17、38 : 28、44 : 39~40、
45 : 14

売りこみ(Exploitation)

結果 83 : 226

うわさ(Rumours)

ひろがり 49 : 7

運命(Destiny)

人は自分の運命の創造者 39 : 42、42 : 31、45 : 16 夜 44 : 4 ~ 5、97 : 2 ~ 6

え

エジプト人(Egyptians)

罰 7 : 134 ~ 135

エズラ(Ezra)

神の息子 9 : 30

エゼキエル(Ezekiel)

身分 21 : 86 予見 2 : 260

エリシャ(Elisha)

身分 6 : 87

エルサレム(Jerusalem)

崩壊と復興 2 : 260 ソロモンの寺院 17 : 2

お

オハド(Uhad)

戦い 3 : 122、3 : 141、3 : 153 ~ 155、3 : 162、3 : 168

女(Bondwomen)

偶像を崇拜する女とその信仰 2 : 222 不義に対する罰 4 : 26 地位と結婚 4 : 4、24 : 33

か

解釈(Interpretation)

規則 3 : 8

カイバル(Khaibar)

遠征 48 : 16、48 : 19 ~ 20

カウラー(Khaurar)

ジリール 58 : 2 ~ 6

賭けごと(Gambling)

2 : 220、5 : 91 ~ 92

カタコンベ(Cave)

仲間 18 : 10、18 : 12 ~ 17、18 : 19 教会の建物 18 : 22 教 18 : 23 迫害 18 : 26 状態 18 : 18 キリスト教徒参照

カディアン(Qadian)

楽園の墓地 36 : 27

カーバ(Ka'bah)

古き 2 : 128 、 3 : 97、22 : 30 アダムによる建設 22 : 27 崇拝の中心 2 : 126 、 2 : 143 、 3 : 98 巡回 48 : 27~28 神聖冒とく 9 : 28、22 : 30 高台 22 : 27 侵略 105 : 2~6 不滅 2 : 126 、 2 : 151 浄化 22 : 27 キブラ 2 : 145 再建 2 : 128 尊敬 5 : 3、5 : 98、22 : 27、29 : 68、52 : 8 奉仕 9 : 19~22 メッカ参照

寡婦(Widows)

扶養 2 : 241 再婚 2 : 235~236

カーブ(Ka'b)

(1)アシュラクの息子 2 : 74 (2)マーリクの息子 9 : 106

ガブリエル(Gabriel)

天使長 2 : 98

神々(God(s))

罵倒 6 : 109 理解の段階 2 : 113 神の息子の理論 2 : 117 、 19 : 91~93 アッラー参照

カーリド(Khalid)

ワリドの息子 イスラムへの参加

カリフ (後継者) (Khilafat)

協議 3 : 160 約束 24 : 56

環境(Environment)

人間の行動 13 : 24~25 改善 8 : 26

寛大(Tolerance)

イスラム 2 : 115 、 2 : 257 、 3 : 62、9 : 6

姦通(Adultery)

証拠 24 : 14 禁止 17 : 33、25 : 69~70、60 : 13 極悪 24 : 4 防止方法 24 : 28~32 罰 4 : 26、24 : 3 その他の不道徳への罰 4 : 16~17

き

奇跡(Miracles)

イエス 3 : 50 モーゼ 7 108 ~109 聖なる預言者 8 : 18、17 : 91~94

偽善者(Hypocrites)

タブークの戦い 9 : 45~59 自慢 63 : 9 状態 9 : 74~87 矛盾する傾向 47 : 27 告発 4 143 ~144 不和 59 : 15 まぎらわしい言葉 47 : 17 邪悪な願い 48 : 13 カイバルの遠征 48 : 16 野ざらし 2 : 18 誤った評価 63 : 8 偽りの約束 59 : 12 病の増大 2 : 16 種類 2 : 20~21 自信の欠如 63 : 5 うそつき 63 : 2 喪失 9 : 67~69 陰謀 9 : 107~108 聖なる預言者に対するあざけり 9 : 64 罰 57 : 14~16 反乱 37 : 8 待遇 4 : 64、4 : 89 オハド 3 155 、 3 : 168

キブラー(Qibla)

変化 2 : 143~146

教育(Education)

子ども 17 : 32

兄弟愛(Brotherhood)

真意を促す要因 10 : 88 イスラム教 8 : 73、8 : 76、9 : 71~72、49 : 11~13、49 : 15

協定(Agreements)

履行 5 : 2、9 : 4、9 : 7 廃止 8 : 59

強制(Compulsion)

イスラム 2 : 257、9 : 6、18 : 30、25 : 58

行政(Government)

イスラム式 4 : 59~60、42 : 39 責任 20 : 119~120

キリスト教徒(Christians)

アッラーの集会 5 : 15~16 優越 82 : 2~20 覚醒 18 : 20~21 祈りの競技への挑戦 3 : 62 イエスの神聖化 4 : 172、9 : 30 ゴグとマゴグ 18 : 111 良き人 5 : 84 勧誘 3 : 65 陰謀 9 : 32 物質的繁栄と破滅 18 : 19、18 : 33、18 : 41~43 物質的繁栄の時代 20 : 103~104 迫害 18 : 10 破滅に関する預言 18 : 9、19 : 41 繁栄 5 : 113~115 待ち構えた罰 3 : 197~198、5 : 116 興亡 18 : 19、18 : 33~44 救済 2 : 63 創造の秘密 18 : 110 イスラム教徒に対するあざけり 18 : 35 2つの派閥 18 : 13 戦争 18 : 54 警告 18 : 5、19 : 99、20 : 103~108

禁欲(Abstinence)

夫婦関係 2 : 188、2 : 223 食物参照

く

偶像崇拜(Idolatry)

反討論 2 : 259、3 : 152、6 : 2、6 : 20、19 : 45、20 : 90、21 : 53、22 : 14、22 : 19、22 : 31~32、22 : 72、22 : 74~75、29 : 42、30 : 36、30 : 41、31 : 21、37 : 87、37 : 93、37 : 150、39 : 4、39 : 30、39 : 68、43 : 19、46 : 5~6、53 : 24 基本 10 : 19 赦罪の宣言 9 : 1~4 赦し 9 : 113~114 無力 22 : 74 無能 6 : 72 イスラム教寺院 9 : 17~19 アラビアにおける再現 34 : 50 聖なる寺院 9 : 28

苦難(Calamities)

予言 17 : 59 神の法 6 : 132、7 : 95、26 : 209

クルアーン(Qur'an)

縮約 2 : 2 廃止 2 : 107 時代錯誤 3 : 36 無関心 25 : 31 整理 17 : 107 天文学的現実 51 : 8~9 聖書 2 : 36、2 : 55、2 : 244、2 : 248~252、6 : 75 詩の分類 3 : 8、11 : 2 特徴 87 : 9 明瞭 6 : 115、12 : 2、54 : 18 収集 75 : 18 広範囲 17 : 90、21 : 51、98 : 4 矛盾 4 : 83 批判 12 : 50 神の特性 112 : 2~5 消滅 17 : 87 要約 1 : 1~7 優秀 2 : 24、8 : 32、10 : 38~40、11 : 14 賞賛 21 : 25、80 : 14~17 神のおくりもの 55 : 3 神の保護 18 : 3 アブラハム 19 : 42 イシュマエル 19 : 55 マリア 19 : 17 モーゼ 19 : 52 聖なる預言者 87 : 7~8 構成における人間の助け 16 : 104、26 : 212~213

人間の性質 20 : 3 権威の源 21 : 25、43 : 45 知識 15 : 22 光 29 : 50 無比 11 : 14~15、17 : 89 神の慈悲 29 : 51~52 聖書の母 43 : 5 誓い 52 : 6 寓話 2 : 18、13 : 18、14 : 25~28、16 : 76、16 : 113、17 : 13、24 : 41 完全性 5 : 4、6 156、14 : 25~26、15 : 2、39 : 24、39 : 28、73 : 6 クルアーンに関する預言 2 : 42、2 : 90、2 : 102、26 : 197 クルアーンの中の預言 101 : 2~9 保護 15 : 10、15 : 18~19、26 : 194、37 : 11、56 : 79、85 : 23 読書の範囲 12 : 3、27 : 2 暗唱 16 : 99 復唱 17 : 42、46 : 28 敬意 7 : 205 時の啓示 2 : 186 言葉の性質 26 : 194~195、27 : 7 断片的啓示 25 : 33、76 : 24 神の源 10 : 38~39、17 : 71、42 : 30、42 : 33、52 : 34~35、69 : 40~41 運命の夜の啓示 44 : 4~5 科学 21 : 31~32、24 : 25、41 : 43 その他の聖典 5 : 49 重要性 2 : 186 精神的病 10 : 58 勝利 13 : 32 真実 21 : 11、25 : 34 理解 56 : 80 普遍性 26 : 193、38 : 30 知恵 4 : 167、6 : 92~93、10 : 2、10 : 58、11 : 2、15 : 2、21 : 51、23 : 63、25 : 2、31 : 3~4、36 : 3

クレイシュ(Quraish)

祖先 106 : 2 神の恩寵 106 : 3~4

軍隊(Military)

戦略と集会 8 : 59 戦い方 8 : 16、8 : 46~49、8 : 57~58 平和 8 : 62~63、47 : 36 準備 3 : 201、8 : 61 罰 16 : 127 退却 8 : 17 正義 8 : 66~67 国家機密 60 : 2

け

経済(Economy)

イスラム教 59 : 8

継承(Inheritance)

イスラムの法 2 : 181~183、4 : 8~14、33 : 7 カラー 4 : 177

啓示(Revelation)

継続性 7 : 149、35 : 28、43 : 12 降下 2 : 98 影響 6 : 100、7 : 59、10 : 3 種類 16 : 69~70、42 : 52 安全な法 87 : 2 預言者 4 : 164~165、72 : 27~29 真実 36 : 5

契約(Contract)

偽善者 2 : 17 書 2 : 283 預言者 3 : 82、33 : 8

月経(Menstruation)

夫婦関係 2 : 223

結婚(Marriage)

契約 4 : 22 解約 60 : 11~12 偶像崇拜の人々 2 : 222 目的 2 : 188、4 : 4 聖書の人々 5 : 6 哲学 2 : 224 はかなさ 4 : 25 寡婦と処女 24 : 33 女囚 4 : 4、24 : 33 禁じられた階級の女性 4 : 23~25

獣(Animals)

イスラム教の富の分かちあい 51 : 20

権力(Power)

一時的 40 : 5

権力(Force)

利用 2 : 257、7 : 89 強制参照

こ

行為(Actions)

影響 5 : 6、35 : 9、54 : 53 信仰 16 : 98、17 : 20 記録 45 : 30、82 : 11~13 報復 3 : 196、4 : 41、34 : 3~6、46 : 20、47 : 5 報い 6 : 161、28 : 85、53 : 40 重要視 7 : 9

貢献(Contributions)

従うべき良きこと 2 : 268、3 : 93 繁栄への導き 2 : 4~6 増加 2 : 246、2 : 262、2 : 273 吝
嗚 3 : 182 アッラーの方法 2 : 220

後悔(Repentance)

背教 3 : 91 受容性 4 : 18~19 許し 4 : 111、5 : 40、6 : 55、25 : 71~72 遅延 40 : 86、71 : 5

合議(Conferences)

倫理 58 : 12 悪のために禁じられたもの 58 : 9~11 目的 4 : 115

国家(Nations)

評価 38 : 54 興亡 10 : 25、11 : 102、14 : 22、29 : 21、29 : 25、31 : 30、35 : 10、36 : 69、70 : 42、90 :
14~18 非イスラム国との同盟 3 : 29~30 首長 3 : 160 義務 20 : 120

国家の進歩(National progress)

方法 2 : 245~246、2 : 262、2 : 270、3 : 140 法則 3 : 27~28、21 : 97

国連(U.N.O)

原則 49 : 10

ゴグとマゴグ(Gog and Magog)

身分 18 : 95、18 : 98~100 物質的栄光と滅亡 18 : 41~43、18 : 48~49、21 : 97~98 陰謀への祈り 21 :
113 キリスト教徒参照

孤児(Orphans)

結婚 4 : 4、4 : 128 財産 4 : 3、4 : 7、4 : 11、17 : 35 福祉 2 : 221

子供(Children)

高潔の願望 3 : 39 両親に対しての寛大な待遇 6 : 152、17 : 24、29 : 9、31 : 15、46 : 16 祈りの遵守
20 : 113 殺害 6 : 152、17 : 32 乳離れ 31 : 15、46 : 16 ㊦ 2 : 190、9 : 36、10 : 6 (Calendar)

コラー(Korah)

崩壊 28 : 77~83、29 : 40

婚資(Dowry)

夫婦関係前に離婚した女性 2 : 237~238 没収 2 : 230 意味 2 : 230 支払と解決 4 : 5、4 : 25 返
却 4 : 21~22

さ

最後の審判の日(Doomsday)

支持の議論 95 : 8 不信仰者の運命 52 : 10~17 救済 2 : 255 重要性 6 : 41~42

財産(Property)

取得 2 : 189、4 : 30 恩恵 4 : 6 贈与 4 : 6 ~ 7 所有権 16 : 72 試み 8 : 29

サイラス(Cyrus)

バビロンのユダヤ人 2 : 103 エルサレムの再建 2 : 260

ザカート(Zakat)

施し参照

ザカリヤ(Zacharia)

ゼガリヤの項参照

殺人(Homicide)

4 : 93~94 極悪 5 : 33、6 : 152

サービ(Sabians)

身分 2 : 63、5 : 70

サムード(Thamud)

文明 15 : 83、26 : 142 拒絶者 7 : 74~80、7 : 102、11 : 62~68、15 : 81、25 : 39、51 : 44~46、54 : 24~32 サーレ 26 142~159 サーレ参照

サームリ(Samiri)

身分 20 : 86 イスラエル人の墮落への導き 20 : 89、20 : 97~98 罰 20 : 96~98

サーレ(Salih)

アブラハムと同時代 7 : 74 人々 15 : 81~89、26 : 142 ~159、91 : 14~15 らくだ 7 : 74、7 : 78 サムード 11 : 62~69

産児制限(Buth-Control)

禁止 6 : 152、17 : 32

三位一体(Trinity)

非難 4 : 172、5 : 74

山脈(Mountains)

機能 31 : 11 地震 16 : 16

し

死(Death)

死の祝福 26 : 82 不可避 3 : 186、4 : 179、23 : 16 重要性 67 : 3 二重の生誕 40 : 12

詩 預言(Poetry)

26 225~228、36 : 70

シア 告発(Shia)

9 : 100

寺院 (モスク) (Mosques)

無礼 2 : 115

シェバの女王(Shaba Queen of)

設けられた王座 27 : 39~43 アッラーへの服従 27 : 45

死刑(Death-penalty)

殺人の後悔 17 : 34

死者(Dead)

再生 21 : 96、23 100~101 精神的再生 2 : 57、6 : 37 預言者の真実の証明 6 : 112

ジズヤ (税) (Jizya)

徴収 9 : 29

慈善(Charity)

聖なる預言者との話し合い以前 58 : 13~14 人を貧しくしない慈善 2 : 269 開放と秘密 2 : 272、2 : 275 視野 2 : 273、2 : 274 あざけりと損傷 2 : 263~268

指導(Guidance)

付随する法 13 : 28

シナイ山(Sinai-Mount)

イスラエル人 2 : 64

ジハード (聖域) (Jihad)

重要性 22 : 39~40、22 : 79 ビザンティウムとイラン 48 : 17 戦いの状況 2 191~194、4 : 76、9 : 8~13 防戦の性質 22 : 40 免除の認可 9 : 91~92 殉教者 2 : 155、3 : 170 意味 29 : 7、29 : 70、66 : 10 金銭的貢献 8 : 73 目的 2 252、5 : 34~35 イスラムの普及 2 : 257、6 : 105、8 : 40、9 : 6 略奪品 8 : 2、8 : 42 クルアーン 25 : 53 軍隊参照

邪悪(Evil(s))

理由 4 : 18、16 : 120 結果 2 : 82、4 : 124 不信心者の固執 7 : 29 悪人 27 : 5 許し 3 : 32、3 : 136、4 : 111 基本的な友情 16 : 87 人間自身の理由 4 : 80 解放と秘密 6 : 121、6 : 152、7 : 34 罰 6 : 161、10 : 28、28 : 85 罪のあが³ない 11 : 115、13 : 23、16 : 126 善と悪の報い 28 : 85 社会 49 : 13 姦通 17 : 33、25 : 69 不正直 4 : 108 殺人 25 : 69 奇書 4 : 38 誇り 38 : 3、40 : 57 浪費 17 : 27~28 盗み 5 : 39 容疑 17 : 37 うそつき 22 : 31 むだ話し 23 : 4

ジャールート(Jalut)

2 251~252

社会的関係(Social relations)

促進 4 : 149、5 : 3、6 : 109

社会的変化(Social change)

法律 8 : 54

社会法(Social laws)

抑圧 28 : 7

借金(Loans)

記録 2 : 283~284 返済の延期 2 : 281

シャリア(Shari'ah)

基本 5 : 102

シュアイブ(Shu'aib)

身分 7 : 86 人々 7 : 89~92、11 : 85~96、26 177~190

自由(Freedom)

重要性 13 : 16

習慣(Customs)

メッカの不信仰者 5 : 104

十字架(Crucifixion)

イエス 4 : 158 モーゼの時代 7 : 125 イエス・キリスト参照

宿命 (予定説) (Pre-destination)

重要性 11 : 102、23 : 44、25 : 3、26 : 81、53 : 40

縮約, (ムカッタアート) (Abbreviations)

意味 2 : 2、7 : 2、19 : 2、20 : 2、26 : 2、27 : 2、28 : 2、29 : 2、30 : 2、31 : 2、40 : 2

ジュディ((al)Judi)

ノアの箱舟の上陸 11 : 45

狩猟(Hunting)

鳥獣の訓練 5 : 5

殉教者(Martyrs)

永遠の生命 2 : 155、3 : 158、3 170~172 成功 47 : 6~7

巡礼(Pilgrimage)

元祖 22 : 28 狩猟 5 : 3、5 : 9、6~97 種類 2 : 159 義務性 3 : 98 目的 5 : 98 儀式 2 : 159、
2 197~201、2 : 204、22 : 29

商業(Commerce)

公正な取り引き 17 : 36

証拠(Evidence)

不義 24 : 14 法律 2 : 283、4 : 7、4 : 16、4 : 136、5 : 107~109

昇天(Ascension)

イエス 2 : 37、7 : 26、20 : 56 イエス・キリスト参照

贖罪(Atonement)

論破 2 : 287、3 : 3、3 : 26、4 : 29、5 : 75、6 : 165、17 : 16、53 : 39

食物(Food)

禁止と合法 2 : 169、2 : 173~174、5 : 2、5 : 5~6、5 : 88~89、5 : 94、6 : 119 ~120、6 : 122、6 : 143~147、7 : 33 人間の行動 7 : 32、16 : 116~119、23 : 52 大量 41 : 11

ジョシュア(Joshua)

5 : 24

女性(Woman)

男性との平等 3 : 196、4 : 125、16 : 98、33 : 36 役割 2 : 188 待遇 4 : 20

書物(Book)

啓示をうけた者の特性 14 : 25~27

ジョン(John)

バプティスト 3 : 40 無比 19 : 8 性質 19 : 13~16

しるし(Signs)

否定 6 : 110~111

進化(Evolution)

神への信仰 1 : 2

信仰(Belief)

来世への信仰 2 : 5、6 : 93、27 : 4、31 : 5、70 : 27 基本 12 : 109、25 : 74 要素 2 : 63、2 : 286、5 : 70、13 : 22 神と人間の性質への信仰 7 : 173、57 : 9 神の律法の遵守 10 : 101 実行 4 : 125、30 : 32、40 : 41、61 : 3~4 全ての預言者 2 : 5、2 : 137、2 : 286、29 : 47 正しい行いと報い 2 : 26 不信仰 11 : 25、13 : 17、35 : 20~23、40 : 59、67 : 23 肉親 9 : 23~24 隠匿 40 : 29 要素 2 : 137、3 : 180、4 : 171、7 : 159 増大 3 : 174 審判 6 : 117~118 軽そつなとりあつかい 4 : 141、6 : 69 しるし 2 : 4~6、2 : 166、2 : 286、4 : 151 ~153 撤回 16 : 107、16 : 111 光の源 2 : 258 信仰者参照

信仰者(Believers)

分類 4 : 96、29 : 11、57 : 11 移民の状態 4 : 98、4 : 101 アッラーの友人 2 : 258、3 : 69、45 : 20 努力の豊かな実り 4 : 125 アッラーの助け 10 : 104、40 : 52、58 : 22 アッラーによる名誉 4 : 176、30 : 16 信頼の増大 8 : 3、9 : 124 真実のしるし 3 : 18、3 : 135~137、8 : 3~5、8 : 75、21 : 20~21、23 : 2~12、24 : 38、24 : 52、24 : 63、76 : 8~11、60 : 2~5 恐れと悲しみの皆無 2 : 63、5 : 70、6 : 49、10 : 63、46 : 14 中腑の遵守 55 : 9~10 報い 2 : 26、3 : 134、3 : 199、4 : 14、4 : 58、5 : 13、5 : 86、7 : 33、7 : 44、7 : 47、8 : 75、9 : 20、9 : 89、10 : 10、15 : 24、16 : 31~32、

17：10、25：16～17、29：59、30：46、40：9、47：16、55：47～59、55：63～79、56：16～41、76：6
～7、76：12～23 楽園の売却 4：75、9 111～112、61：11～12 確かな知識の基礎 6：58、12：109 裁
判 29：3～4、39：11 意志の勝利 5：57、9：20 アッラーの崇拜 39：3 楽園参照

真実(Truth)

勝利 8：8～9、13：18 統一 10：77

神性(Divinity)

試練 10：35～37

信頼(Trusts)

待遇 2：284

ジン(Jinn)

神格化 6：101 情熱的な気性 15：28 人間／男性 46：30～31、72：2～7 重要性 6：113、6：129

人類(Mankind)

共同体 23：53

す

ズイハル(Zihar)

非難 3：5、58：2～6

ズール クルナイン(Dhul Qarnain)

身分と仕事 18：84～99

救い(Salvation)

ユダヤ人とキリスト教徒の主張 2：112、2：141、3：25 非イスラム教徒 22：18 予言者の出現以前
の人々 20：52～53 前提条件 2：63、44：58 取得 2：255

せ

正義(Justice)

遵守 4：106、4：136、6：153 敵 5：9

成功(Success)

法律 2：149、2：154、3：201、8：30、13：15

聖書(Bible)

クルアーンに関して異なる解釈 2：107 アブラハムの父 6：75 アブラハムの正直 19：42 アロン
20：91 イエスの生死 19：26 禁断の木 2：36、7：20～23 エジプト人によってイスラエル人に与えら
れた金 20：88 ジャルト 2 251～252 ヨゼフ 12：5 マリア 19：17 イスラエル人の殺しあい 2：
55 出エジプトのイスラエル人の数 2：244 ファラオ 10：93 子牛崇拜への罰 2：55 アロンの姉妹
19：29 タブート 2：249 タルト(ギデオンの) 2：248 挿入 2：76、2：80、3：79、4：47、5：
42 イスラムについての預言 2：150、7：158、9：111、23：21、48：30、61：7

精神的進歩(Spiritual progress)

意味 6 : 97~98、7 : 176~177、11 : 115、36 : 72 途上の障害 8 : 25~26、10 : 29、24 : 51、77 : 31 段階 5 : 94、11 : 4、11 : 24、16 : 91、16 : 129、23 : 2~12、24 : 45~46、35 : 33、51 : 17~20

聖地(Holy land)

至福 7 : 138 継者 21 : 106~113 イスラエル人 5 : 22、7 : 130

生命(Life)

水への依存 67 : 31 類似 18 : 46~47 はかなさ 46 : 36 虚栄心 23 : 114~115

西洋(West)

崩壊 111 : 2~6

精霊(Spirit of holiness)

2 : 88

ゼガリヤ(Zacharia)

息子の誕生 19 : 3~12 身分 3 : 38 祈り 3 : 39~42、19 : 6~7

責任(Accountability)

人間の思考と行為 2 : 285、6 : 63、21 : 48、64 : 5、68 : 40、99 : 8~9 個人の性質 2 : 140、10 : 42、42 : 16 使者と人々 7 : 7

善(Good)

定義 10 : 5、19 : 61 アッラーから生じる善と悪 64 : 12 善と悪の知識を与えられた人間 90 : 11 善と悪の報い 10 : 28

戦争の捕虜(Prisoners of war)

解放 4 : 4、24 : 34 結婚 24 : 33 とらえる 8 : 68~69 待遇 47 : 5

専門化(Specialization)

宗教的訓練 9 : 122

そ

装飾(Adornment)

認可 7 : 33

創造(Creation)

多様性 16 : 14 地球 41 : 10~11 新しい天と地 46 : 34 対 13 : 4、36 : 37、51 : 50 過程 16 : 41 目的 64 : 4 六つの期間の宇宙の創造 7 : 55

相談(Consultation)

イスラムの基本的性質 3 : 160、42 : 39

ゾロアスター教(Zoroastrianism)

反論 6 : 2

ソロモン(Solomon)

祖先 6 : 85 軍隊 27 : 18~28 芸術の発達 21 : 83、27 : 16~18 言語の知識 27 : 17 エダヤ人の陰謀
2 : 103 政策 21 : 79~81 シェバの女王 27 : 23~45 啓示 4 : 164 主題 21 : 83 貿易 21 : 82 申し
開き 27 : 77 知恵 21 : 80、27 : 16

た

タールート (ギデオン) (Talut-Gideon)

身分 2 : 248 ジャールートの殺害 2 : 252

代禱(Intercession)

承認 2 : 49 義務 4 : 86 不信仰者 6 : 52 許可 2 : 256、34 : 24

多神論(Polytheism)

非難 4 : 49、4 : 117 誤り 6 : 4

タッジャール(Dajjal)

身分 18 : 111 罰の時 22 : 48

ダビデ(David)

殺害の企て 38 : 22~25 神の恩寵 2 : 252、4 : 164 イエスに呪われたヘブライ人 5 : 79 政策 21 : 79
権力と栄光 21 : 80~81、27 : 16、34 : 11~12、38 : 18~21 ノアの子孫 6 : 85 申し開き 38 : 26

タブーク(Tabuk)

遠征 9 : 38、9 : 42

魂(Soul)

人間の魂参照

断食(Fasting)

承認 2 : 186 処方せん 2 184~187 断食の月のクルアーンの啓示 2 : 186

ち

誓い(Oaths)

責任 5 : 90 破棄 2 : 225 贖罪 66 : 3 神聖 16 : 93、52 : 2 裏切りへの罰 2 : 226、58 : 17~20 重
要性 37 : 2、91 : 2

地球(Earth)

食物生産量 41 : 11 数 65 : 13 所有権 7 : 129

地獄(Hell)

信仰者 19 : 72、21 102~103 永遠性 2 : 40、11 107~108、21 : 48 燃料 2 : 25 被収容者 2 : 168 罰
4 : 57 叫びと怒声 11 : 107 悲惨 13 : 19

知識(Knowledge)

模索 9 : 122 予言者 72 : 9~13 価値 2 : 270

中傷(Slander)

結果 24 : 22、104 : 2 罰 24 : 5 ~ 6、24 : 20 配偶者 24 : 7 ~ 9

みづ

手水(Ablution)祈りの前のタヤムム 4 : 44、5 : 7

貯蔵(Hoarding)

非難 104 : 3 ~ 5 罰 9 : 34 ~ 35

つ

月(Months)

数 2 : 190、9 : 36 神聖 9 : 37

月(Moon)

欠け 54 : 2

罪(Sin)

理由 41 : 24、56 : 48 許し 39 : 54 ~ 56 人間の性質 7 : 43 意味 4 : 113 大きなものと小さなもの 4 : 32、53 : 33 告白と秘密 6 : 121、6 : 152 多神論 4 : 49、4 : 117 ~ 118 回避 12 : 34

て

抵当(Mortgage)

2 : 280

哲学(Philosophy)

真実 36 : 5

天(Heaven)

拡がり 51 : 48 機能 2 : 23、21 : 33 ~ 34 惑星の軌道 51 : 8 創造の目的 16 : 4 指導と生命の源 14 : 11、40 : 14 精神的 25 : 62 独立性 13 : 3 創造の時 7 : 55、10 : 4、11 : 8

天使(Angels)

信心 2 : 178、2 : 286、4 : 137 義務 6 : 112、33 : 57、35 : 2、38 : 73 ~ 74、39 : 76、42 : 6 神の罰の前兆 6 : 9、6 : 159、15 : 9 信仰者の救済 2 : 221、3 : 124 ~ 127、8 : 10、41 : 31 ~ 32 地獄 43 : 78 無知 2 : 31、2 : 33 精神の鎖のつなぎ 2 : 99 記録 50 : 18、50 : 22 神の特質の影響 2 : 33 ~ 34 アダムへの追従 2 : 35、7 : 12、15 : 30、17 : 62、18 : 51、20 : 117 神の不変と使者の真実の証明 3 : 19、4 : 167

伝道(Preaching)

方法 16 : 126、20 : 45、26 : 215、29 : 47、41 : 35、51 : 56

と

同棲(Concubinage)

非難 4 : 4、4 : 26

統治(Administration)

相互合議 3 : 160、42 : 39 正義 4 : 59、4 : 136

道徳性(Morality)

段階 16 : 12~14

富(Wealth)

貧困の分かちあい 51 : 20 精神的発達 34 : 38、102 2 ~ 9

トラー(Torah)

ユダヤ人の指導 5 : 45、6 : 155 支持者へのいざない 5 : 66~67、5 : 16、5 : 20 イスラム教徒 48 : 30 聖なる預言者についての預言 45 : 18~19 クルアーン 5 : 44~46 啓示 3 : 4

奴隷制度(Slavery)

廃止 24 : 34、47 : 5 非難 4 : 4

に

二元論(Dualism)

反論 4 : 79、6 : 2

乳児(Suckling)

規則 2 : 234

人間(Man)

アッラーとの関係 8 : 25 天使の助け 7 : 12 神との親交 15 : 27、15 : 30 大地とのつながり 7 : 26 創造 3 : 60、6 : 3、7 : 12~13、15 : 27~28、21 : 17~18、23 : 13~15、23 : 116、51 : 57、55 : 15、95 : 5~6 運命 17 : 16、30 : 54、39 : 42、43 : 39、52 : 22、53 : 39~42、87 : 3 神の慈悲 11 : 111 賞賛 17 : 71、19 : 59 邪悪 7 : 20 自由 6 : 108、6 : 150、7 : 12 成長 5 : 94、6 : 96 女性に対する保護者 2 : 229、4 : 35 種類 6 : 37 性質 30 : 31、30 : 37、33 : 68、34 : 32、38 : 61~62、39 : 50、40 : 11 おごり 41 : 51~52 論争好き 16 : 5、18 : 55 軽薄 31 : 7 性急 21 : 38 不滅 37 : 59~61 悲慘 17 : 101、70 : 20~22 死すべき運命 21 : 35 迷信 31 : 22 恩知らず 10 : 13、11 : 10~12、17 : 68 権力 33 : 73、64 : 3、91 : 9 興亡 57 : 23 優越 17 : 71 縮小した宇宙 91 : 8 決意 41 : 12 自身に対する日撃者 41 : 21~23 仕事 17 : 14~15

人間の進歩(Human progress)

希望と恐れとの結びつき 10 : 8

人間の性質(Human nature)

原則 6 109~111 純粋 15 : 43

人間の魂(Human soul)

創造 32 : 10 永遠性 2 : 118 発展 56 : 61~62、70 : 5 不滅 39 : 43 性質 10 : 13 責任 35 : 19 発展の段階 75 : 3、76 : 6~7、76 : 18~19、76 : 22、89 : 28~29 警告 39 : 44

人間の名誉(Human honor)

尊厳、17 : 37

人間の理性(Human reason)

神の理解 6 : 104 宗教 2 : 171~172、5 : 105、7 : 180 啓示 16 : 12、16 : 67

ぬ

盗み(Stealing)

罰 5 : 39

ね

ネグス(Negus)

イスラム教徒に与えられた避難所 5 : 83~84

ネブカドネザール(Nebuchadnezzar)

エルサレムの破壊 2 : 260、21 : 86

の

ノア(Noah)

その生涯における聖なる預言者への言及 11 : 50 箱舟 11 : 38~45 大洪水 11 : 41、11 : 49、23 : 28 子孫 6 : 86~87、37 : 76~78 神との対話 11 : 46~49 神の配慮 29 : 15 息子の溺死 11 : 43~44 人々 7 : 60~65、10 : 72~74、11 : 26~49、23 : 24~31、54 : 10~17 祈り 11 : 35~37、71 : 27~29 地位 3 : 34

は

バール(Ba'l)

偶像の名前 37 : 126

背教(Apostasy)

後悔により容赦 3 : 90~91 教義の主義には無害 3 : 145、5 : 55 罰 2 : 218、3 : 87、4 : 138、16 : 107

廃止(Abrogation)

聖典 2 107 クルアーン 2 : 181、5 : 98、16 : 102

ハガル(Hagar)

身分 37 : 103

迫害(Persecution)

信仰者 2 : 215 目的 3 : 168、3 : 180、3 : 187

箱舟(Ark)

ノア 7 : 65、10 : 74、11 : 38~39、23 : 28

罰(Punishment)

不義 4 : 26、24 : 3 無秩序の創造 5 : 34 不信仰 29 : 41 著しい不適切 4 : 16 殺害 2 : 179～180、
4 : 93～94 盗み 5 : 39 中傷 24 : 5～6 残酷な犯罪 4 : 17 回避 10 : 99 原子爆弾 36 : 30、36 :
50～51、36 : 54 来世 11 : 104 種類 6 : 66、10 : 14、32 : 22 性質 29 : 56 犯罪とのつりあい 10 : 28
中断 16 : 62 避難所 8 : 34 警告 17 : 16、20 : 135、26 : 209、28 : 60 神 11 : 102、21 : 16、26 : 189、
46 : 24

ハデイス(Hadith)

信頼性 3 : 65

バドル(Badr)

戦いへの信者の嫌悪 8 : 6 敵対する傾向 8 : 43～45 イスラム教の喪失 3 : 166 第2回遠征 3 : 173
重要性 25 : 27 信者の勝利 2 : 211、3 : 14、3 : 124、8 : 8～13、8 : 18、32 : 30

派閥主義(Sectarianism)

非難 6 : 160

バラム イブン バウーラ(Bal'am ibn Ba'ura)

威信の喪失 7 : 176～177

ハールート と マールウト(Harut and Marut)

2 : 103

バルザク (障害) (Barzakh(barrier))

罰 23 : 101、25 : 54、40 : 47

バルナバス(Barnabas)

福音書における聖なる預言者についての預言 61 : 7

燔祭(Burnt-offering)

聖なる預言者 3 : 184

ひ

必要性(Necessity)

非合法事の合法化 5 : 4、6 : 146

秘密(Secrets)

暴露 66 : 4

平等(Equality)

全ての人間 17 : 71、49 : 14 男性と女性 4 : 33

ふ

ファラオ(Pharaoh)

ごう慢 28 : 39 軍の崩壊 10 : 91、44 : 30 屈辱 40 : 38 奇跡 7 : 108～109 モーゼと魔術師 7 :

105～128 人々 7 131～137、11:98～100 死体の保存 10:92～93 僧侶の身分 28:7 イスラエル
人の追跡 2:51 政治的権力の象徴 40:25 政治的手腕 28:5

フード(Hud)

拒否者の運命 7:66～73、11:51～61 人々 26 124～140

夫婦関係(Marital relations)

緊張 4 129 多妻 4:130

福音書(Gospel(s))

イスラム教に関する記述 48:30 指導 3:4、5:47～48 予言 1 360、7:158、61:7

復讐(Requital)

善と悪 6:161

服従(Obedience)

アッラー 3:32、3:133、3:173、4:65、4:81 法的権威 4:60 関連 4:70

負債(Debts)

返済 4:13

不信仰者(Disbelievers)

攻撃的 29:13～14 導きに対する無関心 41:6 イスラムへの態度 6:126 盲目と聴覚障害 11:25、
17:73 驚き 39:25、42:23 預言者の身分の継続 40:35 目と耳のおおい 17:47 墮落 15:15～16
敗北 12:111、16:34～35 安全の誤った意味 52:45 見えない好意 41:25～26 仕事の無だ 7:9
～10、47:2、47:9～10 挫折 34:39 信仰への無害 6:22 屈辱 16:28～29、16:40 預言者の告発
10:77 聖なるクルアーンへの類似の無能 2:24、8:32、10:39、11:14～15 獣との類似 11:107、
47:13 しるし 4 151～153、7:46 神の声の忘却 36:53 洞窟のある理解 10:44 悲観主義 10:3
偏見 36:9～11 罰 6:43～48、7:41、11:20、25:12～15、29:54～55、46:21 真実の拒絶 11:6、
41:27 情熱のとりこ 16:76 心の状態 50:28 優越感 23:25 苦痛 17:98 罪 18:58 イスラム教
徒であったらという願望 15:3 自身に対する目撃者 36:66

フダイビヤ(Hudaibiyah)

忠誠の誓い 48:19 協定 48:2、48:25、48:27

復活(Resurrection)

使者の集会 5:110 現実 4:88 死者 8:25、50:4～16、56:2～7、69:14～17 現世 2:57、6:
37、7:15、8:25 復活の日の判断 78:3～5、78:18～21 しるし 75:4

物質(Matter)

創造 6:19 いわゆる永遠性 2:118

フナイン(Hunain)

イスラム教の勝利 9:25

フロイト(Freud)

モーゼ 20:10

へ

平和(Peace)

国際平和の原則 49 : 10 源 13 : 29 条約 8 : 62~63

ヴェール(veil) (おおい) (Purdah)

要素 24 : 31~32、24 : 59~61、33 : 60

ヘジラ(Hijaz)

浄化 9 : 3

ペスト(Plague)

預言 27 : 83

ヘブライ人(Israelites)

アッラーの理解 2 : 56~57、4 : 154 サルとブタ 2 : 66、5 : 61、7 : 167 根拠のない理論 20 : 78 牛の崇拜 2 : 52、2 : 94、4 : 154、7 : 149 雲 2 : 58、7 : 161 自治的な生活 10 : 88 神と預言者の
のろい 5 : 13~14、5 : 79、17 : 61 解放 10 : 86~87、28 : 6~7 神の恩寵 20 : 81 天罰 5 : 80 飲用
水 2 : 61、7 : 161 イシュマエル族への憎悪 5 : 28 約束の地への入場 2 : 244~245、5 : 23、5 : 25
戦い 2 : 247 偶像崇拜 7 : 139~141、7 : 151 いざない 2 : 42 王国と預言者の地位 5 : 21 マン
ナとサルワ 2 : 58 エジプトからの移住 2 : 244 道徳的遺産 2 : 249 神の言葉の誤用 2 : 80 ファラ
オの残酷 14 : 7、28 : 5~7 約束の地 26 : 60 預言 2 : 90 罰 2 : 81、17 : 5~7、17 : 8 反抗的な
人々 2 : 62 紅海 2 : 51 後悔 7 : 150 パレスチナでの再植民 17 : 105 苦悩 2 : 50、7 : 142 警告
5 : 78 荒野 20 : 81

ほ

法(Law)

基礎 5 : 104 奇跡と自然 7 : 108~109 性質 6 : 35、6 : 116、35 : 44~45、48 : 24 自然とシャリア
の法 22 : 19 神性の必要性 4 : 29 刑法 42 : 41 精神と形 9 : 19

貿易(Trade)

規則 4 : 30、9 : 24

報復(Retaliation)

存続のための方法 2 : 180 トーラ 5 : 46

施し(Alms)

徴収と分配 2 : 274、9 : 60 浄化の方法 9 : 103

城の戦い(Trench(Battle of))

偽善者 33 : 11、33 : 20~21 重要性 33 : 10、33 : 26

ま

マディアン(Midian)

人々 7 : 86~94、11 : 85

マリア(Mary)

祖先 3 : 36 イエスの誕生 3 : 46、19 : 21~24、19 : 27 純潔 21 : 92 神の奉仕への献身 3 : 36~37 い
わゆる神性 5 : 117 賞賛 3 : 43 神の恩寵 3 : 38 アロンの姉妹 19 : 29 話 19 : 17~28 真実 5 : 76
処女性 3 : 48、19 : 21~24 エルサレムへの航海 19 : 28 ゼガリヤ 3 : 38 イエス・キリスト参照

まぼろし(Vision)

誤った解釈 48 : 28 辛らつ化 50 : 23

み

見えないもの(Unseen)

知識 27 : 66~67

ミカエル(Michael)

ユダヤ人の気に入りの天使 2 : 99

蜜(Honey)

人間の治療剤 16 : 70

む

無神論(Atheism)

アッラー参照

ムスリム (イスラム教徒) (Muslims)

征服 2 : 116 食欲 20 : 132 アッラーへの献身 2 245~246、9 : 88 平等 3 : 116 賞賛 2 : 153
信仰 9 : 124 非イスラム教徒との友情 3 : 29、3 119~121、3 : 150、5 : 3、5 : 52~53、5 : 58、
60 : 9 ~ 10 目標 17 : 10 有益 8 : 73 ユダヤ人とキリスト教徒 3 : 101、3 197~1 98 正義 4 :
136、5 : 3、5 : 9、6 : 153 イスラムのあいさつ 4 : 87、4 : 95 多数派 5 : 101 伝道機構 3 :
105 非イスラム教国 8 : 73 法的権威への服従 4 : 60 義務 2 : 137、2 : 144、2 : 166、2 : 178、
2 : 196、3 : 111、3 138~139、6 : 166、11 : 113、47 : 23 迫害 3 : 196 繁栄 18 : 32 罰 17 :
8、17 : 105 自然の探究 18 : 8 クルアーン 6 : 156、7 : 3 戦争への反感 2 : 217 報い 10 :
64~65、37 : 42~50 殺りく 4 : 93 心の状況 17 : 110 着実 2 154~158 契約 9 : 4 統一 3 :
104、6 : 160、61 : 5 勝利 48 : 25 仕事 51 : 2 ~ 5

め

メシヤ (救世主) (Messiah)

出現 イスラムの勝利 2 : 261、9 : 33

メッカ(Mecca)

アブラハムの侵略 2 : 151 アブラハムの祈り 14 : 36~38 新しい宇宙の創造 14 : 49 卓越 27 : 92 衰
退 14 : 49、34 : 27、54 : 8 ~ 9、70 : 43~45 飢餓 44 : 11 指導の源 3 : 97 聖なる預言者 6 : 116、9 :
1 ~ 2、17 : 81 神聖 2 : 192 母なる町 6 : 93、42 : 8 イスラム教の征服 2 150~151 平和 2 : 126
安全 28 : 58~59 人々への警告 7 : 99

も

モーゼ(Moses)

成就 28 : 15 アロン 20 : 30~31 昇天 18 : 61~83 大志 7 : 144 非難 33 : 70 神との共存 28 : 30~36
 出国 2 : 51, 7 : 139, 10 : 91, 20 : 78 フロイト 20 : 10 聖地 7 : 129~130 聖なる預言者 11 : 18, 46 :
 11 イスラエル人 10 : 84~94 結婚 28 : 28 殺人 28 : 16 神との邂逅 2 : 52, 7 : 143, 27 : 8~10 メ
 ディアン 20 : 41 奇跡 2 : 61, 7 : 108~109, 7 : 118, 7 : 134, 17 : 102, 20 : 19~24, 27 : 13 ファ
 ラオ 2 : 50, 7 : 105~119, 10 : 76~83, 11 : 97~98, 10 : 89, 17 : 102~103, 20 : 40, 26 : 11~68, 51 :
 39~41 服従する預言者 2 : 88 啓示 6 : 92, 6 : 155, 23 : 50 むち 27 : 11 神託の範囲 7 : 106 魔
 術師 7 : 114~127, 20 : 71 ユダヤ人による中傷 61 : 6 地位 7 : 145 話 28 : 8~47 姿 20 : 11

モハammad (聖なる預言者) (Muhammad)

アブドゥラ イブン マクトゥム 80 : 2 出現 2 : 90, 2 : 130, 14 : 36~38 昇天 17 : 2, 17 : 61,
 53 : 8~19 権威 24 : 52~55, 33 : 37 祈りの競技への挑戦 3 : 62 仲間 5 : 23, 9 : 100, 9 : 117,
 24 : 38~39, 26 : 220, 33 : 24, 47 : 5, 77 : 2~7, 79 : 2~6, 92 : 4, 100 : 2~12 イシュマエ
 ルの子孫 2 : 130 アッラーへの献身 6 : 163 神の保護 5 : 68, 47 : 14 移民 9 : 40, 28 : 86 敵 9 :
 61, 13 : 11~12, 27 : 49~51 イスラム教の精神的父 33 : 7 神の恩寵 93 : 2~12, 108 : 2~4 戦い
 4 : 85 最後の預言者の身分 33 : 41 堅固 68 : 52 支持者 2 : 144, 3 : 111, 25 : 11 神への愛 3 : 32
 ゴグとマゴグ 21 : 113 保護者の任務 6 : 108 ヘラクレス 3 : 65 脚注 人間性 6 : 51, 7 : 189,
 10 : 50, 46 : 10 文盲 7 : 159, 29 : 40 非威圧者 42 : 25 仲介 43 : 87 正義 5 : 43, 5 : 50 神の王国
 6 : 74 墮落 22 : 53, 53 : 21, 53 : 63 光 5 : 16, 24 : 36 ユダヤ人の陰謀 2 : 103 メッカの人の陰謀
 8 : 31 人間への愛 18 : 7, 26 : 4~5, 35 : 9, 43 : 89~90 人間への模範 33 : 22 結婚 33 : 37~38,
 33 : 51~53 メッカの人々 8 : 34 慈悲深さ 3 : 160, 9 : 128, 21 : 108, 26 : 216 奇跡 8 : 18, 10 :
 21, 13 : 8 道徳的達成 80 : 2, 80 : 12 モーゼとイエス 36 : 15 新しい世界の秩序 27 : 88~89, 29 : 20,
 35 : 18 服従 3 : 32, 4 : 65~66, 4 : 70, 42 : 24 異論 6 : 9, 6 : 38, 7 : 204, 16 : 104, 17 : 91~94,
 25 : 5~10, 25 : 33, 34 : 47, 52 : 34~35, 68 : 3~7, 69 : 45~48 忍耐 6 : 35 完成 33 : 73, 36 : 2,
 36 : 14, 53 : 2~6, 55 : 4, 74 : 2~6 詩 26 : 225~228, 36 : 70, 52 : 31~32 進歩 22 : 16 預言 5 :
 82, 7 : 144, 7 : 158, 11 : 50, 12 : 10, 12 : 25, 12 : 93, 12 : 103, 28 : 45~47, 33 : 2, 46 : 11, 61 : 7
 ~8, 73 : 16 イエスとの間の預言者 5 : 20 純粹 23 : 76 キブラ 2 : 144~145 クルアーン 2 : 98,
 10 : 16, 11 : 13, 15 : 88 復活 8 : 25, 50 : 42~46 尊敬 2 : 105, 24 : 63, 49 : 2~6 無私無欲 52 :
 41 潔白 48 : 3 身分 13 : 5, 17 : 80, 20 : 2, 25 : 62, 33 : 41, 33 : 47, 91 : 2~5, 95 : 2~3 政
 治的手腕 3 : 160 真実への努力 9 : 88 成功 94 : 2~9 師 2 : 130, 3 : 165 真実 3 : 82, 10 : 17,
 11 : 18, 21 : 6, 36 : 3 神託の普遍性 2 : 214, 3 : 85, 4 : 80, 6 : 93, 7 : 159, 14 : 5, 34 : 29 中
 し開き 9 : 1~2 仕事 11 : 113, 62 : 3, 73 : 2 アッラーの崇拜 73 : 21

や

矢(Arrows)

予言 5 : 4, 5 : 91

ヤコブ(Jacob)

2 : 137, 12 : 7, 12 : 85, 12 : 94~97, 12 : 100 ヨゼフの運命 12 : 14, 12 : 19, 12 : 69, 12 : 87~88,
 12 : 97

ゆ

友情(Friendship)

苦惱 43 : 68

輸送(Transport)

新しい方法 16 : 9

ユダヤ人(Jews)

流浪 59 : 3 ~ 6 集会 33 : 16 呪われた者たち 17 : 61 不信心 4 154-157 神の恩寵の非独占 57 : 30
永遠の宣告 3 : 113 イスラムの敵 5 : 83 利子 4 : 162 現世への愛 2 : 97 陰謀 2 : 103、2 : 109、
9 : 32 裏切り 33 : 27、33 : 61~62 描写 5 : 13~14 キリスト教徒の優越 61 : 15 焦土政策 59 : 3
モーゼに対する中傷 61 : 6 りんしょく 5 : 65 罪 4 : 161

許し(Forgiveness)

尋ねることの意味 40 : 56 尋ねることによってもたらされる神の慈悲 4 : 65、8 : 34、11 : 4、11 : 53 偶
像崇拜者には求められないもの 9 : 113

よ

酔い(Intoxicants)

禁止 2 : 220、5 : 91~92

養子(Adoption)

アラブの習慣 33 : 5

欲ばり(Covetousness)

非難 20 : 132 倫理と邪惡参照

預言(Prophecies)

取り消し 10 : 47 実現 6 : 68、11 : 34、13 : 39、40 : 78 種類 3 : 8 性質 6 : 116 目的 17 : 60 偉大
な変化 22 : 2 ~ 3 キリスト教徒 18 : 9 聖なる預言者 10 : 72、28 : 86、38 : 11~12、46 : 11~13 2つ
の海のつながり 55 : 20 ペン (筆) 96 : 5 ペルシア湾 30 : 35、54 : 46~49 ペスト 27 : 83 追放 16 :
9、36 : 43 イスラムの勝利 2 : 116、17 : 82、33 : 23、35 : 12、38 : 2、41 : 54、48 : 22、48 : 29、79 :
710、84 : 17~21、90 : 2 ~ 3 世界大戦 18 : 48

預言者(Prophets)

信頼 4 : 151 兄弟愛 23 : 53 服従 2 : 105 敵 6 : 113 模範 14 : 12 偽り 10 : 18、10 : 83、21 : 30
役割 5 : 100、6 : 49、10 : 73 19 : 52、21 : 31、25 : 11 許し 14 : 42 人間性 13 : 39、17 : 94、18 :
111、21 : 8 ~ 9 正直 3 : 162 地獄の一員 7 : 47~50 全ての民族間 10 : 48、13 : 8、14 : 10、16 : 37、
16 : 85、35 : 25 言語 14 : 5 神の現れ 40 : 8 クルアーンの中での言及 4 : 165 不変性 21 : 9、21 :
35 服従 26 : 109 反感 21 : 42、22 : 53、34 : 35 苦難 2 : 215 出現 30 : 42、30 : 47 階級 2 : 254、
17 : 56 避難 40 : 28、40 : 52 拒否 23 : 45、25 : 32、54 : 24 復興 45 : 6 無私無欲 11 : 30、11 : 52 潔
癖 21 : 28 殺害 2 : 62、3 : 113、4 : 156 真実 10 : 17、21 : 4 ~ 6、69 : 45~48 日に見えない啓示
3 : 180 日撃者 21 : 57

預言者の地位(Prophethood)

授与 6 : 125 分類 2 : 254、4 : 65、4 : 70、6 : 90 要求者 6 : 22、69 : 45~48 継続性 7 : 36、22 :
76 役割 19 : 52 必要性 20 : 135、28 : 48

ヨゼフ(Joseph)

12 : 70~80 信者仲間 12 : 6 ~ 21、12 : 59、12 : 77、12 : 90、12 : 93 財政家 12 : 55~56 純粹 12 : 51~52
夢の解釈 12 : 37~38 王の夢の解釈 12 : 47~50 高潔 12 : 32~34 ポティファの妻 12 : 25 牢獄

12:36~40、12:43 生活の中での預言者のほのめかし 12:9~10、12:49、12:103 購入品 12:22 ア
ブラハムの子孫 12:7 卓越した美 12:32 唯一性 12:40~41 姿 12:5

ヨナ(Jonah)

4:164 神への怒り 21:88 ニネベからの逃避 37:140~141 身分 10:99 高潔な預言者 6:87

ヨブ(Job)

4:164、6:85 不幸 38:42~45 忍耐 21:84~85 歴史 21:84~85 忍耐の模範 6:85

夜(Night)

役割 10:68

ら

来世(After-life)

論争 2:29、15:86、17:50~52、19:67~68、22:6、23:116、29:65、30:9、79:28 信者の信念 2:5 信者への報い 2:26、10:5 信者だけが受ける恩恵 17:73 努力する信者 17:20 確実性 2:29、11:8、16:39~40、17:50~53、23:17 現世との比較 3:15、17:22、40:40 永遠性 44:57 報いられるすべての行為 18:50、20:16 罪に対する寛容 2:49 分別のない不信者 17:73、20:125-127 神の現れ 39:76 報いの性質 36:56~59 異議 6:30、19:67、23:38、36:79、44:35~36、45:25 契約 2:29 罰 17:11、22:10、41:17、69:33、79:47 現世との関係 17:14、17:73、29:65、57:12~13、102:2~9 復活 39:69~71 人知 27:67

楽園(Paradise)

至福 2:26、3:16、9:72、13:24、13:36、55:47~59、55:63~79、56:16~41、78:32~37 永遠性 11:109、50:35 神の賛美 10:11 等級 5:66 性質 57:22 平和 10:11、10:26 現世 47:7 賞賛に値する特質 3:134、13:23、26:91 真実の理解 10:31、20:91 報い 15:48~49、18:32、19:62~64、32:18~20、35:36、40:41、47:16、50:36、52:18~22、52:25 仕事 15:49、39:21、66:9

ラマダン(Fasting)(Ramadan)

断食参照

ラムセス2世(Rameses II)

身分 2:50

り

離婚(Divorce)

憎悪 4:131 イッダ 2:229、2:235 イスラムの法律 2:228~233、65:2~8 婚資支払いの寛大な待遇 2:242、4:21~22、33:50 離婚解除への工夫 2:227 請求 2:230

利子(Interest)

耽溺^{ひんてき} 2:279~281、3:131 禁止 2:276~277、30:40

理神論(Deism)

告発 6:104

略奪品(Spoils)

分配 8 : 42、59 : 8 ~ 9

流星(Meteors)

落下 15 : 19 ~ 20

両親(Parents)

親切な待遇 6 : 152、17 : 24 ~ 25、29 : 9、31 : 15 ~ 16

旅行(Tourism)

イスラム教徒 67 : 16

倫理(Morals)

誠実の要素 23 : 6 ~ 8、24 : 31 ~ 32、24 : 34、24 : 61 潔癖の要素 2 : 223、22 : 30 協力の要素 5 : 3
善の実行 2 : 149、2 : 196、3 : 111、23 : 97 許し 24 : 23 儉約 17 : 27 約束の実行 2 : 178、17 :
35、23 : 9 寛大 3 : 145 もてなし 11 : 70、15 : 69、17 : 27 謙虚 25 : 64、31 : 19 正義 6 : 153、16 :
91 親切 2 : 84、4 : 37、17 : 24 ~ 25、17 : 29、30 : 39 穏健 7 : 32、25 : 68 調停 2 : 225、4 : 115 不
屈 2 : 46、2 : 154、2 : 156、11 : 113、13 : 23 博愛 2 : 178 報復 22 : 61 犠牲の精神 3 : 93 着
実 2 : 178、3 : 187、11 : 12 怒りの抑圧 3 : 135 神への信頼 14 : 13、25 : 59 信頼性 2 : 284、4 :
59、23 : 9 真実性 22 : 31、25 : 73 統一 3 : 104 発達 16 : 12 ~ 14 精神的発達 16 : 91 報い 10 : 27

る

ルクマン(Luqman)

道徳的認識 31 : 13 ~ 20

ろ

労働ルクマン(Labor)

搾取 68 : 18 ~ 28

ロット(Lot)

信仰 29 : 27 娘 11 : 79 ~ 80 崩壊 7 : 81 ~ 85、11 : 90、15 : 74 ~ 75 移住 21 : 72 訪問者の接待 15 : 71
使者 11 : 78、15 : 62 ~ 71 人々 11 : 78 ~ 84、27 : 55 ~ 59、29 : 31 ~ 35、54 : 34 ~ 40 人々の邪悪 29 : 30

ローマ人(Romans)

預言 30 : 3 ~ 5

わ

わいろ(Bribery)

非難 2 : 189

和解(Reconciliation)

配偶者間 4 : 36、4 : 129

この刊行にあたって、ご支援とご尽力とをいただいた多くの方々に対して、深く謝意を表します。また、全面的に諸費用をご援助くださったシャハナワーズ (SHAHNAWAZ) 家の皆様に、満腔の深謝の意を表明するとともに、ご一同にアッラーのご嘉賞賜わらんことを祈念いたします。

日本語版クルアーン刊行を機に、一人でも多くの人々が、至高なる神アッラーのお言葉に触れ、慈悲に浴し、^{なだ}義しく導かれますように。

聖クルアーン

1988年12月1日 発行

©ISLAM INTERNATIONAL PUBLICATIONS

翻訳者 モハマッド・オウェース・小林 淳

監修者 マグフル・アハマド・ムニープ

発行者 イスラム・インターナショナル・パブリケーションズ

照会先 〒465 名古屋市名東区貴船2丁目1602

アハマディア・ムスリム・センター

(052)703-1868

印刷所 いろは株式会社

The Holy Qu'ran (Japanese)

1988 December 1

Printed in Japan

Translated by Mohammad Owais Kobayashi

Revised by Maghfoor Ahmad Muneeb

Published by Islam International Publications

Address ●Vakalat-Ishat, 16 Gressenhall Road,
London U.K.

●Ahmadiyya Muslim Center,
2-1602 Kifune, Meito-ku, Nagoya,
JAPAN 465

Tel. (052)703-1868

Japanese

聖クルアーン

The Holy Qur'ān

JAPANESE TRANSLATION

ISLAM INTERNATIONAL PUBLICATIONS